俺氏、ループ系TS聖女様をいつの間にかメス堕ちさせていた模様

弐目

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちょっと頭おかしい主人公がパートナーの聖女様から糞デカ感情を向けられつつ、たまに大怪我したり血反吐を吐いたりしながら送るアフター転生ライフ。

小説家になろうでマルチ投稿してます。

目次

帰還編
導入という名の諸々説明回 ―― 2
聖女のみる夢 ―― 18
言うべきか、言わざるべきか。（前編） ―― 43
言うべきか、言わざるべきか。（後編） ―― 70
なにも起きないわけがない（前編） ―― 98
なにも起きないわけがない（後編） ―― 124
聖都へ走れ ―― 152
ごめんなさいと、ただいま。 ―― 175
治療編
駄犬の一日 ―― 201
幕間：刃衆の長・後輩の少女 ―― 232
隊長ちゃん、襲来 ―― 268
アンナの受難 ―― 289
復活の〇〇 ―― 311
ぽんこつ聖女 ―― 339
霊峰編
師、師姐、師弟。 ―― 361
霊峰へ ―― 389
閑話：長旅前の一日。前日 ―― 423
閑話：長旅前の一日。当日 ―― 448

登山（発射風 487
其は《報復》に非ず 506
霊峰での各々（前編） 529
霊峰での各々（後編） 564
龍の姫はかく語りき 590
聖女の猟犬 625
三枢機卿 668
帰り道　前編 701
帰り道　中編 721
帰り道　後編 741
帰り道　顛末 776
界樹編
呼び出し 827
人類種首脳会談（前編） 844
人類種首脳会談（後編） 862
顔合わせ 881
聖地到着 904
サルビアの懊悩、聖女の本気。 929
界樹へ 974
お仕事二つ。 1018
除染完了 1046
聖者（笑）宣言する 1072
大戦・老兵編（過去編）
老兵の残照　出会い 1120
老兵の残照　白い少女 1150

老兵の残照　友人 ―――
老兵の残照　師弟 ―――
老兵の残照　師弟の口論 ―――
老兵の残照　御守り ―――
老兵の残照　悲嘆（カレンデュラ）
1287
老兵の残照　わたしのともだち
1317
老兵の残照　魔鎧 ―――
老兵の残照　頂点の片割れ ―――
老兵の残照　決意 ―――
老兵の残照　母と娘 ―――
幕間・閑話
銀麗と白百合と時々駄犬（前編）
1491
銀麗と白百合と時々駄犬（後編）
1513
ぽんこつ聖女の日記 ―――
嘗ての邂逅　魔族領（前編） ―
嘗ての邂逅　魔族領（後編） ―
帝国編
祭りに向けて ―――
各国各々（教国、帝国） ―――
各国各々（大森林） ―――
各国各々（魔族領） ―――
祭りの準備　帝国へ ―――

1258123111981173　1419138913661338　158915651549　17011679166016361617

祭りの準備　侯爵親子 ―――― 1722
祭りの準備　闘技会予選のお手伝い 1754
迷子の白百合 ―――― 1787
祭りの準備　悪縁奇縁、転じて良縁（前編） ―――― 1809
祭りの準備　悪縁奇縁、転じて良縁（後編） ―――― 1830
再会　筋肉の場合（前編） ―――― 1858
再会　筋肉の場合（後編） ―――― 1880
再会　駄犬の場合（前編） ―――― 1911
再会　駄犬の場合（後編） ―――― 1931
斯くして少女達は一堂に会する ―――― 1967
その頃、猟犬と戦乙女 ―――― 2001
Q：何が始まるんです？ ―――― 2040
大豊穣祭 ―――― 2078
不穏の影・其々の邂逅 ―――― 2095
裏方仕事はツラいよ。 ―――― 2120
闘技大会・不穏の胎動 ―――― 2147
道交わる各々　1 ―――― 2192
道交わる各々　2 ―――― 2194
道交わる各々　3 ―――― 2218
動き出す者達　1 ―――― 2248
動き出す者達　2 ―――― 2288
犬と子獅子とイケメンと ―――― 2335

動き出す者達　3・拳士と剣士　2357
Q：イヌ科に属する傭兵の駄犬率を求めよ　400
隠し刃の一手　322
準決勝・第一試合　424
準決勝・第二試合　245
急転　82
キチ○イ、起動。　72
日没前、其々の時間　50
帝都の一番長い夜　1　34
帝都の一番長い夜　2　25
帝都の一番長い夜　3　62
帝都の一番長い夜　4　53
帝都の一番長い夜　5　126
夜明け前（前編）　03
夜明け前（後編）　26
誰でもない男（ジャック＝ドゥ）　31
《報復》対《栄光》　2842
我は報復に非ず（Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｍｙ　ｓｕｎｓｈｉｎｅ）　2885
明くる日　2812
月明かりの下で　274
祭りの後に　927
幕間・閑話　122
　　689
　　904
　　829
　　295
　　300

霊峰の日々（前編）――――
霊峰の日々（後編）――――
いっかのあの日を、また。――
ゆめみるせいじょとりゅう、ときどきゆき――――
白百合と愉快な仲間達（前編）3184
白百合と愉快な仲間達（中編）3210
白百合と愉快な仲間達（後編）3247
アンナの受難・再び（ぜんはんせん）3308
アンナの受難・再び（はーふたいむ）3338
アンナの受難・再び（こうはんせん）3374
魔族領編
魔族領幹部会議（物理）――――
いざ、南方へ――――
濃すぎる奴らの挨拶――――
夏だ、海だ、水着だ！（前編）3483
夏だ、海だ、水着だ！（中編）3513
夏だ、海だ、水着だ！（後編）

帰還編
導入という名の諸々説明回

「控えめに言って頭おかしいんじゃないですかね？」
Ｑ：真っ白すぎて距離感狂う謎空間で、金髪オッパイのどエラい美人に開口一番にディスられた気持ちを述べよ
Ａ：解せぬ
「そういうとこですよ！　なに謂われの無い罵倒を受けたみたいな顔してるんですか！」
実際身に覚えがないからね、仕方ないね。
というかこの声って俺を転生させた神様だかその使いだかの人やん、初見のときは超然とした口調＆眩しい発光体で完璧な超越者ムーブしてたのに。
「……私の姿を正確に認識できるのは、貴方がわずかなりとも神格に手が届く領域に踏み込んだからです。っていうかやっぱり見えるんですね……」
え、マジで？　俺知らない内に神様に片足突っ込んでんの？　まったくそんな感じしないんですけど。

「あくまで単純に存在の総合力が私たちを正しく認識できる基準に達した、というだけです――というか神格を得る適性が欠片もないのに単純な力の総量だけでその域に至る生命体とか高位のドラゴンくらいしか聞いたことないんですけどね！」

バッカじゃねーのお前、といった眼つきを隠すことなく額に手を当てて嘆息する女神様（仮称）

さっきからボロクソに言われてるけど、貴女様のご要望には可能な限り沿ったと思うんですけど……なんぞ手落ちでもありましたかねぇ？

「ええ、文句無しの仕事っぷりでしたね！　最初の頃は消極的を通り越して邪神の関わる全てから全力で逃げ続けてたのに聖女と出会って以降、危険を度外視して最大効率の行動を取り始めたときは何事かと思いましたよ！　本当に!!」

それを言われると気恥ずかしいものがあるね。

俺としては甘酸っぱい感情とかは一切ないのだが、傍からみたら超美少女に一目惚れして一念発起したようにも見えなくもないのがまた悩ましいところだ。

あいつらが大事だというのは今さら口にするまでもない事ではあるが……なんというか、言語化させるのが難しい感情なのである。

「安心なさい、貴方があの子に向けるものが色恋の類いだとは思ってません。あれはもっとダメな方向に極まったナニかです」

さっきから罵倒しかされてないような気がするんですけど、死後に転生人生の採点あるとか聞いてないんですけど。

ダメだしばっかやん、なんでやん。ちゃんと邪神の端末はブッ●したやろ、極力犠牲無しで。

「その点に関しては紛れもなく感謝しています――私の管理する世界から叩き出してくれるだけでも十分だったのですが、討滅までしてのけるとは思いませんでした。えぇ、ほんとに感謝してますよ？　あの子の世界回帰に何度か魂を同調させてその末に掴み取れると思った結末を最初の同行で一発クリアした挙げ句、私のもとに還る筈だった多くの人間たちまで存命してますからね!!」

お陰で死後の貴方の魂を此処に喚ぶ羽目になりましたよ！　と、一気に言い切る女神様（仮称）。

えーと、つまりどういうことだってばよ？

「やりすぎだよ！　数回の世界の回帰で消費される予定のリソースが丸ごと浮いたおかげで調整が死ぬほど面倒になりましたよ！　嬉しい悲鳴ですけど！」

ヒートアップする超絶おっぱい美人も見ていて眼福だが「私を視認して出てくるのがその感想っていうのも大概おかしいですからね、人の子だったら普通、魂格の差で視覚が潰れますからね？」それはいいんだ、重要な事じゃない。

世界回帰っていうのはアレだろ、アイツのループ能力の事だろ？
初めて会ったときのアイツはループする直前――酷くボロボロで傷ついた状態だった。身体ではなく、メンタルが、だ。
一回、一回を邪神を倒すという目的に辿り着く為の消化世界と思うことなく、全力で多くを助けられるようにと糞ったれな状況に挑み続けてきた奴やぞ？
何度も繰り返していい加減、限界を迎えてもおかしくないだろ。見ていて不憫過ぎるわ。
「……そうですね、そんな優しい子であるからこそ私の権能の一部……時間回帰を世界規模で発動させるに足る聖女となったわけですが」
だから初回クリアするのも仕方ないね。アイツらに負担かかるからね。
「混じりっ気無しの本気で其れを言う上に実現してるから頭おかしいんですよ」
１００点満点を１２０点とった筈なのに、肝心の出題者が俺に優しくない。なんでや。
「最後の最後でマイナス５０点くらいにはなりましたよ、なんですかアレ」
アレっつーと……邪神ヤったときのか。ソロで討伐するにはあれくらい必須だと思ったんですけど。
「あの桁の狂った自己強化にも色々言いたい事はありますが、その結果が問題です――

あの娘達、泣いてましたよね？　それも酷く」

あ～……。

まぁ、ね。気のいい奴等だから後で泣くだろーなーとは思ってたけど、邪神の隔離空間ぶち抜いて現場までやってくるとは思ってなかったんだよな。

あとから結果が伝わればえぇわ、って思ってたのによりにもよってくたばる瞬間をお見せしてしまったのは痛恨のミスだったわぁ……。

「まともな遺体すら残ってない処か、魂まで酷く損傷してましたからね。此処に喚び寄せる前に最低限の修復を行うのもかなりの手間でした……分かってます？　下手すると輪廻にも乗らずに消滅するところでしたよ？」

折り込み済みやぞ？　魂くらい焚べないとソロ討伐可能な強化倍率にならんかったんや、しゃーないね。

全部ぶっ込む前に倒しきれたのはラッキーだったわ。最悪、自己因果まで燃料逝きにするプランもあったし。

「ブフゥッ!?」

うぉ、顔に女神汁（仮称）がぁっ!?

ちょ、なに吹き出してんの女神様（仮称）、さっきから――っていうか割と最初から威厳とか超然感が行方不明すぎない？

「因果って、ちょっと！　自身のものとはいえ基盤概念情報にまで干渉可能とか――あぁ、そうですね、神格を認識できるわけです」

頭を抱えて唸る姿もふつくしい……まぁ、原因は俺っぽいけどね！

流石に手ぇつけたらヤバい領域だっていうのは分かってましたよ？　ただ、聖女（アイツ）らを筆頭にあの世界の英雄やら伝説の存在やらが勝利できてない神格（バケモン）を凡庸凡才（オレ）がどうにかしようと思ったら、とれる手段がそれくらいしかなかったんや、つまり不可抗力ぅ。

「もしソレまで焚べていたら、どうなるか分かってるでしょうに……やっぱり頭おかしいこの子……！」

ここまで神様に散々狂人認定されまくる人類とかあんまりいない気がする、一周回ってちょっと凄くない？

「あぁ……もう、さっきから会話をするだけで疲れるような気がします。私の精神の安寧の為にも本題に入るとしましょう」

一呼吸挟むと、疲労感漂う美貌が一気に引き締まって厳かな雰囲気が――あ、やっぱ無理だわ、さっきまでの砕けすぎて粉末状になった態度のせいで厳かまではいかねーわ。うん。

「邪神の端末の討滅、見事なものでした。更に、多くの死にゆく運命にあった生命を救い上げた行いも評価に値します」

女神様（仮称）は早くもスルー技能を習得したらしい。超絶美人の軽妙なツッコミというのも味わい深いものがあったんだけど残念だ。

「何より、あと数回は行われる筈だった世界の時間回帰。これを省略して勝ち取った未来はより豊かに、力強く紡がれてゆくことになることでしょう――故に救世の英雄よ、今回の貴方の功績は余りにも大きい」

あ、はい、恐縮です。なんか茶化してすみません。

「貴方には今の貴方のまま、再度、私の管理するかの地へと転生して頂きます。勝ち取った平和と未来が紡がれていく世界を、今度は使命とは関係無しに望むように謳歌なさい」

おぉ？　マジで!?　使命とはいうけどやりたいようにやった結果だし、これでこの報酬とか逆に申し訳ないくらいだ。

とはいえ、やり残したことも多いしこのご褒美は渡りに船ってやt「ただし！」

「貴方の魂は未だに疲弊したまま――基幹と器の修復は行いましたが、消耗した部分までは取り戻せてはいません。以前のような無茶は到底できないと留意なさい」

え、ちょっと待って。それって放っておくと死ぬとかは無くなったけど、糞程弱体化してません？

最悪、前の最初期よりはなんぼかマシ、程度になりかねないやん。残党狩りしようと

思ってたのにどーすんだよ。
「だから！　残党狩りとかそういうのをやるなと言ってるんです!!　やっぱり残業染みた真似する気満々だったわこの子！」
　いや、ラスボス倒して万事解決なんてのはゲームの中だけでしょ。寧ろ大変なのは後の復興とかだろうし、それなら余計な真似しそうな邪神側の残存戦力とか潰して回った方が人類側も楽かなーって。
「以前こちらに招いた魂で転生前の死因が過労死だった人物もいたのですが……同じ感じが……いえ、違いますね」
　ふと、気付いたように呟くと不思議な光彩を放つ瞳が呆れたように細められる。
「徹頭徹尾あの子達の為ですか」
　いや、自分の為ですけど？（真顔
　綿密に立てた邪神●害フローチャートに味噌つけちゃったし、最期にひでぇ死に様見せちゃったし……大泣きさせちゃったし、それくらいはしないと後味シュールストレミングすぎてアフター転生ライフを謳歌できないんですよ。
「最後の理由が一番でしょうに。　なんていうんですかね、ソレ。貴方の世界でつんでれ？　とかいうのでしょう？」
　ないわー。イケメンでもなんでもない男のツンデレとか何処に需要があんだよ。

「貴方の感情の発露法についてはこの際なんでもいいですが、どうしても戦いを続けたいというのならまずは心魂を癒しなさい。手早く治療したいというのなら……言わずとも分かるとは思いますが、あの子達の手を借りることですね」

……話の流れからしてそう言われるとは思ってたよ！　畜生！

そりゃね、肉体精神どころか魂の消耗なんて世界最高の回復・治療のスペシャリストでもない限り手が出ないから自然と相手は限定されるよ、少なくともパッと思い付くのは俺も五指に満たない。

だからって会えるわけねーだろ！　申し訳なくて会わす顔がないから残党プチプチで負債を清算しようとしてるんですけどぉ!!

思わず叫んだわけだが、女神様（仮称）は唐突に真顔になった。え、なに急に怖い。

「これは助言です。英雄よ、地上に降りたなら可能な限り直ぐにあの子達のもとへと向かいなさい。貴方は貴方が思っているよりも自身の存在が大きかったと知るべきです――っていうか後回しにすると絶対後悔しますよ、いいですか？　よく聞きなさい」

たっぷりと溜めを作って噛んで含める様言ったのは、人差し指を立て、一言のみ。

「女の子は待たせると怖い」

おいい、フルチャージ感出しておいてそれだけっスか。

言ってることは分からんでもないけど、アイツらは半分例外みたいなもんでしょう

に。女神様（仮称）だって知ってるでしょ？　転生前は性別逆だったんやであいつら。

「処置無し、と言ってしまいたいですが重ねて言いましょう。早めに会って素直に謝罪なさい、どうなっても知りませんよ本気で」

むぅ、転生人生に幕を引いた筈なのに、再度機会をくれるような神様が再三忠告してくるということは何かあるんだろうか。

確かに、何か厄介な事が起こるというのなら直ぐに聖女（アイツら）に接触してでも全盛期を取り戻せるように覚悟きめておかねばならんね。

「絶対分かってないですが……まぁ良いでしょう。人の営みに多く口を出すのも私の立場的には憚られるものですし、数々の苦難を切り抜けてきた手腕に期待、ということで」

なら今回の問題はまったく別の類ではありますが、とか呟かないで下さいよ。クッソ不安になるんですけど。

「では、新たな肉体の構築も終わったのでそろそろ彼の地へと送るとしましょう。再三言いますがくれぐれも無茶をしないように。下手に限界を越えようとすれば、反動で前回から魂に刻まれているダメージが肉体に再度反映されてしまいますからね」

あ、スルーですか……そして仕事はええ。さらっと消滅した人体を魂の情報を元に健康体として再構築するあたり、女神様（仮称）は女神様だったらしい。

反動ってのがちょい怖いが、ダメージが癒えるまではそういった場面に陥らんように

立ち回るしかないわな。
「世界の未来を切り拓いた英雄よ、新たな門出に祝福を。三度目の貴方の生が未知と希望、喜びに満ちているよう祈っていますよ――あと身の安全の為にお腹にジャ〇プを仕込んでおいた方が良いでしょう」
おいちょっと待って！　急に待って!!　なんでジ〇ンプやねん!?
っていうか女神様ジ〇ンプ知ってんの!?　最後の最後で滅茶苦茶気になること言ったよこの神様！　そもそもなんd
聞き返す前に白い世界がさらに光を放って眼を灼き、視界が真っ白に染まる。
明滅する瞼の裏と遠くなる意識。
そこに「おしあわせにー」と、どこか適当感ある声が届いた気がした。
……やっぱ（仮称）は最後まで必要だったわ！

――で、だ。

眼が覚めると行きなり衛兵の詰め所だった。

装備からして聖都と呼ばれるこの大陸の宗教国家の中心地の兵と思われる衛兵さんに、説教混じりで説明される事数十分。

早朝に門番が開門作業を行った処、門脇の壁に座り込んで鼻提灯に船を漕いでいたのが俺らしい。

大方、閉門時間前に街に到着しそこねた旅人なんだろうが幾ら邪神討伐後、治安も良くなってきたとはいえ不用心が過ぎるとのことです、ハイ。

暖かくなってきたとはいえそのまま放置もできんと、揺すっても小突いても起きやしない不審人物を牢じゃなくて備品の長椅子に転がしてくれる衛兵さんマジ良心的。

諸々の注意と説教、あと余所者が街に入る際の税金――無一文だったらどうしようかと思ったが普通に着てる旅装に財布が入ってた――を払ってなんとか詰め所を後にする。

うむ、良い天気だ。昼過ぎってとこか？

先ずは空と太陽を見て大雑把に時間帯を把握すると、次いで視線を下ろして町並みを眺める。

まぁ先に挙げた様に衛兵の装備からして分かってた事だが、やはり聖都……アイツらのお膝元だな。

あの女神様（仮称）は余程さっさと再会させたいらしい。お願いですから心の準備をさせて下さい（白目

会いたい気持ちは勿論ある、おおいにある――が、黙って出ていった挙げ句にラスボスと相討ちみたいな感じで死に別れした身としては会いづらいってレベルじゃない。

糞バカ野郎と罵られてブン殴られても仕方ない。俺ならそうしてる。

う～ん、女神様（仮称）もはよ会えとは言ってたしなぁ……でも何か起こるっていうなら暫く潜って情報収集に徹するのもアリなんだよな。経験上、対処にするにしてもその方が楽な場合が多い。

でもなぁ……。

アレコレごちゃごちゃと考えて悩むが、取りあえずは街を散策することにした。

現実逃避とは言わないで欲しい。衛兵さんも治安が良くなったとは言ってたので気にはなっていたのだ。

前の俺は、立場的には聖女が直接雇った傭兵みたいなポジションだったので、あちこちに情報収集に出向く事も多かったがそんでも基本的な拠点は聖都だった。

なので目に映るのは勝手知ったるといった光景なのだが、所々に気になる箇所がある。

なんつうか、これ……結構時間経ってない？

以前は破損したのを応急補修した外壁とか、崩れた箇所が多くて立ち入り禁止になってた狭い街路とか。

そういったものが修理されていたり、後回しになってた筈の瓦礫の撤去が終わってたり。

ポツポツと見かける空き家だった場所に新たな住人や店舗が入ってたり。

大戦中に壊れ、麻痺した街の各所機能が完全復活してるって訳では無さそうなので、5年も10年も経ってるってわけでは無さそうだが……。

1年か2年か。前に居たときからそれくらいは経過してる気がするな。

とはいえ、やはり明確な差があるのは建物より住人や行き交う人々の表情だわ。

活気や笑顔が多い。　聞こえてくる声や会話も穏やかだったり陽気だったりと陰が殆ど無い。

どうやっても、街の何処にいても存在してた張り詰めた空気や無理にでも士気を保とうとする気勢が無い。

毎日聞いていた、誰かの無事を祈る声が、喪った誰かを悼む声が、無い。

……勝ったんやなぁ、俺達。

やばい、ちょっとグッと来てる。泣きそう。

最後の戦いでどうやっても御命終了（使い切る）チャートしか組めなかった俺が、見れる筈も無い

と思っていた光景が街中に広がっていた。
世界中とは言わないが、きっと多くの国、街、村に増えた光景なんだろう。
誰を、何を守るか、誰を倒すか。優先順位や区切りは明確につけているつもりだ。
それでも自分が関わってきた戦いの結果が良い形で現れているのを見ると、気分が上向きになってくるね。テンション上がってきた。
女神様が見てきなさいと言った、俺達が切り拓いた未来の一つってやつは間違いなくこれなんだろう。
本格的に情報収集に移る前に、暫く街でゆっくり過ごしてみるのも悪くないかもしれんなぁ。冒険者とかは今更やる気もしないし、なんなら将来は街の探偵みたいな事をやるのもいいかもしれん。
平和な街の空気に癒されたせいか、大分緩い思考のままフラフラと人混みを歩き続ける。
完全に気が抜けていたのか、完治には遠い身体のせいか。
ポケットに突っ込んだままの手を誰かに掴まれるまで、俺は全く反応ができなかった。
両の手ですがるよう掴んで引かれた腕の感触に、驚いて振り返る。
――視界に飛び込んできたのは透けるような銀糸の髪。

個人的には女神様に匹敵してると思う可憐な美貌は、余程慌てていたのか息を切らして頬が上気していた。

空色の瞳にはアホ面を晒した黒髪の男――俺が映り込んで揺れている。

休日なのか、見慣れていた祝福したローブや戦闘用に調整したシスター服ではなくて、シンプルな白地の服と黒いスカートの上下だ。

――エンカウントすんの早すぎやない？

俺が一番会いたいけど、一番会い難い相手――聖女姉妹（きょうだい）の片割れにきつく腕を捕まえられた状態で、これも仕込みだったりしません？と、天を仰いで女神様に問いかけたくなった。

聖女のみる夢

「アリア！　傷の浄化はまだか!?」
「やってるよ！　もう殆ど終わってる筈なのになんで……！」
焦る気持ちのまま、妹(おとうと)につい怒鳴り声をあげてしまう。
焼け焦げた大地に穿たれた巨大なクレーター。
その中心でオレとアリアは死に物狂いで馬鹿野郎の治療を行っていた。
空間ごと隔離されていた其処は吐き気を覚える程に邪神の気配が濃かったが、アリアの浄化で殆どが散っている。
大本である邪神自体が霊核を半身ごと吹き飛ばされて消滅したせいだろう。浄化自体はスムーズに行われ、辺り一帯の凄惨な破壊痕はそのままに周囲は清浄な空気に入れ替わっていた。
この状態なら回復魔法だって万全に起動する筈なのに、一向に治療は進まない。
どうしてだよ！　オレとアリア――癒しに関しては世界最高峰と言える聖女の称号持ちが二人揃ってるのに……！
「クソッ、なんでだよ……！」

焦燥感で灼け付く胸中を押し殺して、傷口に精査の為の魔力を走らせる。
四肢はボロボロ――特に右側の手足が消失してるのに、出血が異様に少ない……いや、これは……。
「出血するだけの血液が、無い……？」
ゾッとした。
既に流れ尽くしたとでもいうのか？　ふざけるな。
こいつはまだ生きてる。脈も呼吸もわずかだけどある、血だけが無くなって生きてるなんてことはどんな呪法の反動でも有り得ない。
肉体の衰弱を押し止める為に回復魔法を注ぎ続けながら、精査も同時に行って原因を探る。身体の状態さえ把握できればオレ達なら治せる。治してみせる。
でも、何時だって現実は残酷で。
まるでお前達の行為は無駄だといわんばかりに、理不尽に終わりはやってくる。
――パキン、という音が響いた。
「こ……れって……」
残りの浄化と回復魔法の循環、補助をこなしながらも、必死に呼び掛けていたアリアの目が愕然と見開かれる。
返答してる余裕はオレにも無い。オレも、それに目を奪われていたからだ。

肘から消失していた傷口が、白くヒビ割れて硬質化している。
白灰化。
魂を燃料にして爆発的な強化を行って死んだ者達の、心臓や核部分に起こる現象。
それが四肢部分に発生したということは、まさか――血が流れないのも、回復魔法の通りが悪いのも、これが、身体中に――
「う、あ……」
喉から、何かが漏れた。
そんな、ちがう。ダメだ。嫌だ。
だって、最初に白灰となるのはその生物の中心部分だ。だから短時間しか使えないし、心臓のみがそうなって力尽きるのだ。
だから違う、四肢の白灰化なんて聞いたこともない。別の理由がある筈だ。
違う、はずなのに。
決壊が始まったみたいに、耳を塞ぎたくなる悪夢のような音が断続する。
最初は腕からだったそれは、同じく欠損した腿や抉れた肩、胴から次々と発生して薪が爆ぜるような音を立てていく。
回復魔法は発動させ続けたままなのに、それを嘲笑うように全身の白灰化――いや、崩壊は進んでいった。

あり得ない光景に、信じたくない事実に硬直していると、一際大きな音を立て、首元から頬にかけてヒビが走る。

「――い、ぁっ」

その光景にアリアが耐えきれなくなった。

「い、嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

浄化も回復の補助も、手に握っていた大聖杖(神器)すら放り出してその胸元に取りすがる。

「起きてよ、にいちゃん！　起きて！　お願いだよ！」

それは懇願というより、嗚咽混じりの悲鳴だった。

「ボクをおいていかないで！　ボクをひとりにしないでよぅ……!!」

アリアにダダ甘だった、いつだってアリアのお願いならアホみたいな条件反射で即座に応えていた馬鹿は、ピクリとも反応しない。

必死の形相で呼び掛けながらぼろぼろと涙をこぼす妹(おとうと)の姿に。

「――ンな」

あぁ、いつもだったらどんなときだって、オレが呼べば応えてくれた、動かない馬鹿野郎に。

「――けんな」

懸命に冷静さを保とうとしていたオレの自制心にも亀裂が入る。

「ふざけんなよ……！」

一度あふれてしまえば止まらない。疑問と怒りが次々に湧いてくる。

なんで何も言わずに出て行った。

なんで一人であんな神格（バケモノ）と戦おうと思った。

なんで、オレを置いて逝こうとしてるんだよ……!!

認めないぞ。オレを――オレ達を置いて一人勝手に逝ってしまおうとする馬鹿の理屈なんて、それがどんなものであれ認めるものか……！

アリアが手放した大聖杖を拾い上げると、硬く握りしめる。

込められた聖性と自身の魔力を同調させて一気に励起・増幅したそれを、崩壊の進む馬鹿の身体へと注ぎ、細心の注意を払って高速循環させ始めた。

擬似的な魔力暴走（オーバーロード）。

まがりなりにも聖女のオレがこの状態で魔法を行使すれば、条件付きだが死者蘇生だって可能になる。

魂の器が損壊して回復の為の魔力が溢れるというのなら、溢れた傍から注いで此方で体内をブン回してやる。

それでも尚、回復には至らない。けど崩壊は止まった。

ならばあとはこの状態を維持する。どこまで魔力が保つか分からない、時間との勝負

だ。最悪、生命力を代替にしてでも保たせてみせる……！

手ならある。アリアに聖都への連絡と転移を頼んで、時空凍結の封印を準備するのだ。

時間の流れすら極限まで遅滞させるアレならば、今は直せなくても終わってしまうのを避けられる。

封印が有効な間に、治療の為の魔法や儀式を探す――無いのであれば新たに作る。

全ての行程が綱渡りの連続みたいな作業だ。何度も、幾度も繰り返す中で様々な無茶をしたが、その記憶を根こそぎひっくり返してもこんな難易度の魔法行使は行ったことがない。

どういう形になっても、オレにも少なからず反動が残るだろう。

でもいい、構わない。置いていかれるより、ずっといい。

そんな思いと共に、大馬鹿野郎のツラを強く睨み付けて――。

その閉じられていた瞼が、うっすらと開かれてオレを見つめ返した。

「――――」

咄嗟に出る言葉も無くお互いの視線が交わり、ここにいる筈のない人間を見たかのように奴の眼が軽く見開かれる。

普段は騒がしく変わる表情が、いつもはやぶ睨みの目付きが、穏やかにオレだけを映

して。

バツが悪そうに、ちょっとだけ笑った。

なんで笑うんだよ、こっちは怒ってるんだぞ。かつてなく本気だぞ、そんな風に笑うなよ。

こんなときなのに、眼が離せなくなって息が詰まる。

意識が戻っただけだ。決して安堵できるような状況じゃない。

それでも笑いかけてくれたことがひどく嬉しくて、さっきまでの怒りと混ぜ合わされた感情に胸の中がかき乱される。

睨み付けていた筈の視界が滲む。喉が腫れ上がったように痛んで、しゃくり上げてしまいそうだ。

「――！　に〝いち〟ゃん!!」

眼を覚ました事に気付いた、涙で濡れた顔をくしゃくしゃに歪めたアリアの声。

奴は残った腕を億劫そうに持ち上げると、既にボロボロの手の平でぎこちなく、泣いている妹の艶やかな銀髪を撫でて。

その手をアリアは大事そうに抱え、頬に擦りよせた。

オレがこらえてしまった感情を代わるように、何度も何度も息を詰まらせながら、にいちゃん、にいちゃん、と抱えた手を大切な壊れ物のように抱きしめる。

――こんなとき、素直に自分の気持ちを、心を言葉にできる妹(アリア)が少しだけ羨ましかった。

ロクに動かないであろう指で、それでも優しくアリアの頬をなぞると馬鹿野郎は再び瞼を閉じる。

また意識を失ったのかと、不安に声をあげそうになるが直ぐに理由は知れた。

オレの行使している回復魔法が奴の身体から弾かれたのだ。

「――ッ！　なにしてんだお前!?」

そんな状態で回復を耐魔(レジスト)するとか馬鹿なのか!?

思わず怒鳴ると、困ったように眉根をよせながらひび割れた唇が動く。

もうやめとけ、いみないから。

声帯が機能してないのか、掠れたような音しかでてこない。けど唇の動きからそう言ったのは簡単に分かった。

怒りと衝撃で、思考が一瞬白く染まる。

けど反論は思考なんて関係無しに、即座に口から飛び出した。

「アホなこと言ってんな!!　まだ手はある!!」

「にぃちゃん、耐魔(レジスト)をとめて！　身体が！」

オレの怒声とアリアの悲鳴が重なる。

それでも流し込もうとする回復魔法は身体から弾かれるままだ。
口論になったときだって、オレ達二人が意見を変えなければ大抵は自分から折れていたのに。
どんなに言っても、怒鳴りつけても泣き出したとしても、決まりが悪そうに口をへの字にしたまま話を聞かないときがあった。
一目みて、此方の魔力暴走（オーバーロード）に気づいたのだろう。この後に何をしようとしているのかも察した筈だ。
オレ達に負担がかかる、オレ達に危険が及ぶ。そう判断すると絶対に意見を変えないんだコイツは……！
今までもそうだった。いつだってそうだった。
普段はふざけた言動ばかりの癖に、こっちがキツいときやしんどいときはいつの間にか傍にいて。
何度繰り返してでも、例えそれで自分自身が磨り減っていくとしても救いたかった人達を、オレだけでは救えなかった人達を——オレだけでは失うしかなかった大切な妹（きょうだい）を。
シレっとした顔で現れては救ってきたのが、目の前の大馬鹿野郎だった。
オレが心底望んだ結末へと、届かなかった一歩を届かせてくれる。

オレの相棒。オレのヒーロー。

前にも、その前にも、失われていた……ずっと助けられずにいた人達が、欠けてしまっていた大切なピースが欠けないままに増えていって。

何度も経験した辛い別れと終わりの記憶は、まるでいつか見た夢の続きのような。

誰一人欠けていない、そんな出来すぎな未来へと繋がって、新たな思い出と新たな笑顔で上書きされていく。

助けられた多くの人達がコイツを認めて、慕って――オレだけのヒーローじゃなくなったことが少し不満だけど。

その何倍も嬉しかった。誇らしかった。

オレのヒーローは凄いだろう、そんな子供染みた、自分の一等大事な宝物を自慢するような気持ち。

心地よくて、どこか気恥ずかしいそれはオレの新たなピース（欠けてはいけないもの）になった。

でも絶対調子に乗るから本人には言わない、言ってやらない。

そんな建前と変な意地を張って、もう一つの気持ちには蓋をし続けた。

転生前はオレも男だったから、アリアも同じ気持ちだろうから、今は戦争中だから、今の関係が心地よいから。

自分でも白々しいと思うような言い訳は幾らでもできた。

今回はきっとうまくいく、もう失敗するような不安要素はない。この感情に関してはそれから考えればいい。

もし、もし何か最悪な出来事が起こってもう一度繰り返すことになったとしても――

コイツならきっと、何度だってオレと一緒に……。

当人がソレをさせたくないが為に、何度も無茶をしてきた事も忘れ。

此処までの道程を否定するような、愚かな薄甘い考えを一瞬でも抱いた罰だとでもいうのか。

欠片というには余りにも大きくなりすぎたオレの大切な存在は、手の届かない場所に逝ってしまおうとしている。

回復魔法を拒み続けた身体は再び崩壊をはじめ、もう、どうにもならない処まで来てしまっていた。

アリアもそれを分かっているのか、大粒の涙がこぼれるに任せたまま嗚咽をこらえている。

白く灰化してしまった腕を抱き締め続けている小さな身体は、直ぐに来るであろう大きな喪失に怯えて震えていた。

魂の殆どを邪神を滅ぼす為の糧にしてしまった大馬鹿は、死どころか輪廻の環にすら乗れずに消えてしまうかもしれないのに。

ちっとも堪えた様子も見せずに、ひたすらバツが悪そうにいやマジスンマセンと、既に音を発しない唇を動かした。

泣かせたかった訳じゃない。ただ、もうしんどい思いなんてせずに笑っていて欲しかっただけ。

圧縮言語ですらない、ふざけた謝罪の中に隠した本音は手に取るように分かった。

――最期の最期までコイツはこんな感じかよ。

怒りと、呆れと、哀しみと――愛しさで。

ぐちゃぐちゃになった感情はとっくに制御なんて利かないまま、涙になってあふれだしていた。

いいだろう、もう分かった。もうゴチャゴチャ考えるのはやめだ。

お前がそういう態度なら、こっちにだって考えがあるからな。

このまま一人勝手に、満足して逝かせるなんてさせるかよ。最後に特大の告白(ぼくだん)をぶつけてやる……!

深呼吸一つすると、声が震えないよう、いつも通りの語調になるように努めながら口を開いた。

「ふざけんなよ……この極馬鹿野郎が!」

分かってないだろう、お前がどれだけオレの心を救ってくれていたのかなんて。

「毎度毎度、勝手に無茶して勝手にボロボロになって！　極めつけがこれかよ!!」
知らないだろう、いつからか、オレがどういう気持ちでお前を眼で追っていたかなんて。
「オレは！　オレは、た、だ……！」
さぁ、言うぞ。聞いたあとで後悔したって文句は受け付けないからな、精々驚きやがれ。
「おまえと……！　ずっと一緒に居たかっただけなの、に……!!」
……あれ？
勢いで思いの丈をぶちまけてやろうとした叫びはみるみる失速して、やっと出てきたのはどうしようもなく泣いて震えて、みっともなく裏返った声で。
肝心な言葉が何一つ含まれていやしない、そんな一言だった。
こんなときになってまで、本当に伝えたい事も言葉にできない自分に愕然とする。
なのに。それなのに。
盛大に滑ったはずのオレの一世一代の告白に、奴は照れ臭そうに、けど本当に嬉しそうに笑ったのだ。
そうだな……できればおれも、ずっと……おまえらと……。
そんな風に、既に聞こえる筈のない声が聞こえた気がした。

待ってくれ、待っ――。

――そうして。

オレのヒーロー（すきなひと）は真っ白な灰になって、崩れて消えた。

あ……あぁ。嫌だ……嫌だ！　逝かないでくれ、オレをおいていかないで。

まだ何も言えていない、まだ一緒にしたかったこともできてない。

もっとずっと一緒にいたかった。もっともっとお前のことを知りたかった、オレのことを知ってほしかった。

お前が変えてくれたこの世界で、お前と――。

わずかに残った灰の欠片を胸にかき抱いて、泣き叫んで、喉が嗄れても涙は止まらず。

アリアと、オレ自身の慟哭が焼け焦げた大地に吸われて消えていった。

「……久しぶりにみたな」

見慣れた寝室の天井をぼんやりと眺めながら、呟いた。

泣き過ぎて腫れぼったい瞼を手の甲でぬぐいながら寝台から身を起こす。
ここ数ヵ月は夢みることもなかったアイツの最期は、相も変わらず強烈にオレの情緒を揺さぶってくれる。
どうやら2年足らずでは薄れることすら無い程度には、惚れていたらしい。
元より、一生忘れてやるつもりは無いけどな。
邪神の軍勢から世界を救った聖女、なんて肩書きのせいか無駄に広くて華美だったオレの私室だが、聖職者たるもの清貧に努めるべきだ、と理屈を捏ね回してなんとか落ち着いた内装になった。
最初の1年くらいは部屋の内装なんて意識すら出来ないような状態だったので、意見を通したのは最近なんだけどな。
まぁ、それでも部屋自体はだだっぴろいままなんだけど。
裸足のままベッドから降りて、ペタペタと音を立てて備え付けの机に歩み寄る。
机に置かれた魔法の掛かった宝石箱を手に取ると、蓋を開けて質素なペンダントを取り出して。
いつものように首からそれを下げると、真っ白な灰を押し固めた中央の石に静かに口付けを落とす。
「おはよう」

日課の挨拶を終えると、ほころんだ頬にぬぐいそこねた涙が少しだけ流れた気がした。

さぁ、今日も一日が始まる。

「おはようございます、レティシア様。よくお休みになられましたか？」

「あぁ、おはようヒッチンさん。よく眠れたよ、やっぱり部屋が豪華すぎるよりは寝心地がいいみたいだ」

せっかく聖都の総本山にいるのだから、と周囲の同僚達の声に推されて始めた大聖堂（朝のルーチンワーク）でのお祈り時間を終えて食堂へと向かう。

その途中で顔を会わせたシスター・ヒッチンと朝の挨拶を交わすと、そのまま連れだって食堂を目指すことにした。

教皇の同期で枢機卿の教育係も兼ねていたという、現職の聖職者の中では最古参に近いシスター・ヒッチンは自他共に厳しいお人柄なので、浮わついた若い連中なんかには大層恐れられている。

朝のお祈りからアイドルの追っかけみたいに遠巻きで眺めていた連中が、そそくさと散っていくのが頼もしい。

悪気があるわけじゃないんだろう。でも毎度毎度、聖堂から食堂まで大名行列みたいになるのは勘弁してほしい。

朝飯くらいは静かに食わせて欲しいのだ。彼女と合流できたのは幸いだった。

「それは良いことです。とはいえ、レティシア様のお立場を考えるとある程度の調度品は揃えませんと示しがつきません。本来は教会の権威、などというものはこの様な形で見せるものではないとはいえ、何事も形式というものは必要です」

「う〝っ……仰るとおりです。留意しておきます……」

勿論、清貧を良しとする旨は素晴らしいお考えですが。と、年齢を感じさせない背筋を伸ばした姿勢で、真っ直ぐに前方を見つめたまま仰るシスター・ヒッチンに、首を竦めて返答するオレ。

ちなみに聖女という称号は、立場的には枢機卿とほぼ同格といっていい肩書きなんだけど。

目の前の御婦人はその枢機卿が頭の上がらない人物なので、オレが逆らえる筈も無かった。

ちなみにそのこわーい御婦人を「尼さん帽取ったら髪がトグロ巻いてそうw」「背筋に太い針金入ってそうｗｗ」「三角眼鏡がアホ程似合いそうｗｗｗ」と評して、真冬に素足のまま石畳の上で正座させられたキングオブ馬鹿もいたな。

その後、懲りずに本当にプレゼントした三角の細眼鏡は、意外にも気に入ったのかシスターの愛用品となっている。贈った当人は真夏に石畳の上で石を抱いて正座することになったが。

数年前の、だけど遠く懐かしく感じる記憶に苦笑しながらペンダントに触れる。

こちらを横目でちらり、と見たシスター・ヒッチンが自身の鼻梁に乗った眼鏡に軽く触れ、少しだけ穏やかな口調で続けた。

「最近はお顔も血色が戻られたようでなによりです。尤も、夢見が悪い日々が続くようでしたらハーブティー等を用意する事もできますが」

どうやら夢の中で泣きはらしたことまでお見通しらしい。顔を洗ったときに軽く回復魔法を掛けて目の周りの腫れはさっさと治したんだけどな。

「大丈夫だよ、久しぶりにちょっと夢を見ただけだし――悪い夢なんかじゃないんだ」

夢に見る度に――いや、今でも思い出すだけで胸が痛いけど。

それでもアイツとの最後の時間が、悪い夢な訳がない。

「そうですか」

「うん、そうなんだよ」

お互いにアイツの残した品に触れながら言葉少なにやり取りする。

共通する思い出をシスターも思い返しているのかもしれない。

二人して食堂に到着すると、オレは中をぐるりと見渡す。本日の朝のお祈りはオレだったので、この時間、いつもだったら先にアリアが来てる筈なんだけど。

「アリア様なら、夜明け頃に執務室前でお見かけしましたので休暇を取って頂きました」

ピシャリと、いつもの厳しい口調に戻ったシスター・ヒッチンが言ってのける。

「あいつ、また徹夜で仕事してたのか……？」

「御本人曰く、ちゃんと寝たとのことでしたが、ここ数日同じようなやり取りを繰り返し行っていますので」

アリア様の本日の予定は全てキャンセルし、執務室の出入りを一日禁止させていただきました、と眼鏡をキラリと光らせるシスターが怖い。

どうやら妹（おとうと）がやらかしたので、姉（オレ）のほうも無理をしてないか確認するために大聖堂に寄ったらしい。

仕事をしているほうが気が紛れる、と言われてしまうとその気持ちが分かるオレとしては注意もし難いので少し困っていたのだが・・・・・流石はシスター・ヒッチン。上の人間が休まないと下も休めないとバッサリ切って捨てたようだ。

「仮眠を取った後に、街へとお出掛けになると仰っていましたので騎士アンナに護衛と監視をお願いしておきました」

おもいっきり監視って言っちゃってるよこの人。

まぁでも、最近のアリアは働き過ぎだ。街をブラつくと称して視察とかになりかねないしな。
アンナがいればあちこち引きずり回して結果的に気晴らしになるだろう。
オレの方はいつも通りに、朝食を取って仕事に向かうとしよう。
「アリアが今日はいないのは分かったよ。それじゃヒッチンさん。朝飯を頂くとしよう」
「えぇ、よろしければご一緒させて頂きます」
何はともあれ、まずは腹ごしらえだ。
飯が食えるなら人間簡単には死にはしないってアイツも言ってたしな。

執務室に籠って書類と格闘すること数時間。
枢機卿と同じくらい偉いといっても、名誉称号みたいな扱いである聖女には本来実務なんてものはないらしい。
が、大戦中に戦地で実績を積み上げまくったオレとアリアにはそれ相応の実権と、それに付随して仕事が付いてくる。
各地をひたすら転戦していた頃はそれも極々最低限だったが、本拠を聖都に移してか

らは結構な量の書類を捌かねばならないのだ。
政を司る元老院のようなものはあるが、司教以上は就任と同時にそこに席ができるようなものなので実質高位の坊主＝為政者みたいな事になってるけどな。
ちょっとガバガバな制度ではなかろうかと思わなくもない。
けど延々と邪神の勢力と戦争やってたこの世界では、これくらい適当じゃないと人員の損耗とそれに伴うポスト異動の回転が追い付かないんだろう。戦争も終わったし、これからは変わっていくことに期待だ。
高位の聖職者ほど前線で引く手数多で、実際に政務なんてブッチして戦場で暴れてる人も結構いたので先は長そうだけど……。
そんな事をつらつらと考えながらひたすら書類に目を通してはサインをする作業を繰り返していると、執務室の扉の向こうからなにやら押し問答する声が聞こえて顔をあげる。
「いや、ですから今は聖女様は執務中でして……」
「急用だっていってるでしょ！　アリア様にも話は通ってるんだって！」
「でしたら御本人かそれに類する判紙が……」
「そんなことやってる場合じゃないの！　ほんとに大事な用件なんだから通して！」
「しかし、そ「あぁ、もういい！　レティシア！　入るよ！」ちょっ!?」

ドバーン！　と派手な音を立てて扉が開かれ、守衛の僧を引きずりながらズカズカと部屋に入ってきたのはプラチナブロンドの髪を纏めて横に垂らした少女だ。
「あー……アンナ、一応言っておくけどノック位はしろよ？」
「そんな事いってる場合じゃないんだって！　大変なのよ！」
守衛を無視して部屋に飛び込んでくる時点で、実際はノックも糞もないのだが必死に背にしがみついて止めようとしている衛兵さんが気の毒なので、やんわりと注意する。
軽装の騎士服を纏った少女――アンナは興奮しているようで、どこ吹く風といった様子だが。
アリアと並ぶと髪色が似てるせいか、オレより姉っぽくみえるんだよなこいつ……ちょっと複雑だ。
もっとも、精神年齢は絶対アリアのほうが上だろうけど。他国から招かれてる騎士って立場なのに、しょっちゅうシスター・ヒッチンに正座させられてるし。
「……で、何が大変なんだ？　前みたいに屋台の串焼きが全品半額だったとかいう話だったらこの場に即ヒッチンさんを呼ぶけど？」
「ヒェッ」
興奮しすぎて暴れ牛のような雰囲気だったアンナは一瞬で鎮火した。大方、石畳の感触でも思い出したんだろ。

苦手を通り越して天敵になりつつある人物を呼びつけると聞いて大いに怯んだ様子だったが、それでも引き下がる気はないようでこちらに顔を寄せる。
「そもそもお前、今日はアリアの護衛（と監視）があっただろ。なんでこんなとこで油売ってるんだよ」
「そのアリア様に頼まれたの、急いで伝えてきてって」
アリアに……？
というか前から思っていたけど、なんでこいつアリアにはもの凄い丁寧に接してるのにオレにはこんなに砕けてるんだろうな。いや、全然嫌じゃないし、寧ろ気安い態度は有りがたいくらいなんだけど。
「だってアリア様はもう如何にも聖女様！って感じじゃない？　レティシアも外見はそうだけど中身までしっかりレティシアだし」
「ぶっ飛ばすぞお前」
なんだよ中身レティシアって。オレは金太郎飴か何かか。
「って、そんな事はどうでもいいの！　大変なんだから！」
「マジでぶっ飛ばすぞお前」
ちょっと笑顔で凄んでみるが、続く言葉におちゃらけた雰囲気は吹き飛んだ。
「アリア様が、黒髪黒目の男を見つけたの。多分、ニホンジンよ」

「……！」

一瞬、瞠目すると、直ぐにアンナの背中にしがみついていた衛兵を下がらせる。機密って程でもないが念の為だ。

邪神討伐後、オレ達の世界からの転移・転生者は確認されていなかった筈だ。

黒髪黒目ということは、おおよそ2年ぶりの転移者、ということになる。

もっともそれは各国の報告が真実ならば、という前提だ。

実際には今回の転移者の男というのが、2年間で最初でもなんでもなかった、という可能性だってある。

オレも含め、こちらの世界にやってきた地球の人間は何かしら特典のような下駄が履かされる。

囲い込もうとしている国もあるので、隠蔽は十分にあり得るのだ。

最悪、それらの国の間者だったというオチだって有りうる。

「今はアリアがそいつを見てるのか……危なそうな奴じゃないんだな？」

「……そんな感じはしなかったかな。言ってる事はちょっと分かんなかったけど」

「うん？　そいつは何て言ったんだ？」

「えーと確か、『この世界にジャ○プってあるか？』って」

異世界に来て最初に欲しがるのがジ○ンプかよ！

一気に気が抜けた。これだけで気を許すのは早計だが、確かにそんなに危険な感じはしなさそうだ。

「とにかく、オレも一度会ってみるかな。折角の転移者だ、囲い込むってわけじゃないができれば聖都に定住して欲しいし」

軽い口調で言ってみると、アンナは珍しく迷うように眉根をよせて視線を泳がせた。

「その……驚かないでね？　私も最初に見たときビックリして……いや、アリア様もなんだけど……」

「なんだよ、奥歯にモノが挟まったような言い方して？」

本当に珍しいな。アンナがこんな風に言い淀むのは。

普段とは正反対の、メチャクチャ歯切れの悪いその様子にやはり何かあるのかと警戒感を持ち直す。

けど――。

「よく見たらちょっと若いし、傷とかもないんだけど……でも、『アイツ』にそっくりで――ううん、私も、多分アリア様も、『アイツ』にしか見えない。こうしてる今でもそう、思ってる」

――え……？

言うべきか、言わざるべきか。（前編）

――どうしようこれ。

まさか再転生して小一時間で捕獲されるとか完全に予想外なんですけど。

俺の腕を抱え込んだままの銀髪美少女――アリアと視線を合わせること十数秒。

見上げてくるその表情は、なんというか親を見つけた迷子の子供のようだ。

酷く動揺してるのが丸分かりな空色の瞳には、期待やら喜びやらの他にも脅えや不安もぐるぐると渦巻いているように見えた。

いやどういう感情やねん。ごった煮か。

ものすごいガン見されてるけど、アレか、にらめっこ的なやつなのか。

それとも鏡とか見てないので気づいてないだけで、今の俺には脳天から触手でも生えたりしてるんだろうか。

だとしたら深刻なクレーム案件だ。女神様のでっぱいを左右3回ずつくらいは揉ませてもらわないといけない（決意

そう思った瞬間、抱え込まれた腕がメキィ！と音を立てた。なんでアームロックにシフトするんですかねぇ!?

おニューのボディは前の終盤と違って痛覚がちゃんと仕事してるので、久しぶりの感覚に思わず呻き声が漏れる。

「あっ――ご、ごめん！」

慌ててアリアが手をはな――さねぇのかよ、力緩めるだけかい。

これは本格的に捕獲ですわ。もう素直に土下座するしかないのか（白目

とはいえ、何時までもこのままお見合い状態というのも問題ある。ぶっちゃけ周りの視線が痛い。刺さりすぎてハリネズミになりそう。

どうしたもんかと困惑した視線をアリアに向けると、ほんの少し顔を伏せた後、思い切ったように再びこちらに視線を合わせて口を開いた。

「あ、あの――！」

「アリア様ぁ！　急に走り出さないで下さいよぉ――！」

やや遠間から聞こえた声にそちらに首を向けると、人を掻き分けて一人の少女が飛び出てきた。

プラチナブロンドの豊かな髪は、アリアと並ぶと普通に姉妹っぽい。これを言うと本物の姉（アニキ）がむくれそうだが。

――副官ちゃん！　副官ちゃんじゃないか！

教国の同盟国の一つに精強な武力国家があるんだが、そこの対邪神眷属部隊を仕切っ

てるのが俺達の同郷だったりする。

まぁー今どき素直な良い子で、聖女姉妹（金銀ブラザーズ）にくっついて戦地を転々としていた俺を先輩扱いしてくれるお嬢さんだった。

育ちが良いっていうのはあぁいうのを言うんやろな。剣腕のほうは下位のドラゴンくらいなら1秒で頭割ってのけるような人外予備軍だったけど。

目の前の少女はその娘の副官だった子だ。だから副官ちゃん。

前に見たまま、騒がしいのと元気印を足して2で割らない感じでなによりだ。

「必要ないかもしれないですけど、一応私は護衛なんです！　急に離れてはぐれでもしたらまた私が鬼シスターに怒られちゃいますよ――って男と手ぇ繋いでる!?　一体だ……れ……」

慌てたようにアリアに詰めよって俺の腕を抱え込んでいるのに気付き、眦を吊り上げたと思ったらこちらの顔を見て急速に呆気にとられた表情に移行。

相変わらず百面相すぎる。ワロタ。

「アンタ……」

それだけ呟くと、あとは絶句したようにお口をパクパクする副官ちゃん。

どうもお久しぶり。と言いたいが、なんだろうな、これ。二人の様子から見るになんか俺だって気づかれてなくない？

なんというか、死んだ人間のそっくりさんをみてめっちゃ驚いた、みたいな空気を感じる。

ということは、だ。

今からでも誤魔化せるのではなかろうか？

……いやいや、女神様も言ってたやん「はよ謝れ」って。

対面までしちゃったのにこの期に及んで他人のフリとかイカンでしょ。

なんとか真実を話すタイミングが欲しい。ちょっと話しづらい雰囲気だし。

あともう周囲の視線がヤバい。転移者の流れ者っぽい男の相手が美少女二人で、片方は世界で知らない奴のほうが少ないであろう聖女様の片割れやぞ。

視線が針から槍に進化してるわ。視線に攻撃力があるならハリネズミどころじゃなくて惨殺死体だよこれ。

「……」

「……」

なにこの無言な空間。めっちゃ気不味いんですけど、ここだけボリュームミュートに設定されてない？

腕を捕獲したまま無言でチラチラと視線を送ってくるアリアに、なんと切り出したものかやはり無言で悩む俺。くっそ、前にはこんな変な空気になったことないから対処の

仕方が分からないんですけど。いっそ寄声をあげながら土下座しようか。

「あー……とりあえずアリア様。その……彼、の腕を離してあげてはどうでしょうか？」

割と真剣に土下座五段（自称）の華麗な所作を披露しようかと検討していると、救いの手は近くから差し出された。

副官ちゃん！　信じてたよ副官ちゃん！

控えめに提案された言葉に「でも……」と小さな声で拒絶の意を示すアリアの顔が、今にも泣き出しそうになる。

おいやめろ、その表情は俺に効く。やめてくれ（懇願

「――では、近くに冒険者がよく利用する宿があるのでそちらに部屋をとってお話をする、というのはどうでしょう？　ねぇアンタ。そのまま部屋の宿代は出すし、暫くはそこに宿泊できるように取り計らうわ。だから、少しだけ私達に付き合ってくれない？」

アリアの表情と、可愛い妹（おとうと）分の泣き顔にメンタルを抉られてもう一回死にたくなってきている俺を見比べ、副官ちゃんは即座に代案を出してきた。

やだ頼もしい。普段アホの子っぽいけど地頭の回転はいいのよねこの娘。

提示された代案に数秒ほど黙考すると、アリアの頭がこっくりと縦にふられた。ついでにと渋々といった感じで腕も解放される。

勿論俺に否は無い。全く知らない相手となら警戒もする場面なんだろうが、実際は全

員親しい人間しかいないしね。

――ただ、これだけは聞いておかなくてはならない。

「……何よ？」

表情を意識的に引き締めて宣言する俺に、副官ちゃんはちょっと警戒したように身構える。

何、ちょっとした――だが重要な質問が一つあるだけだ。

――この世界にジャ○プってあるか？

女神様のお告げだからね、仕方ないね。

副官ちゃんの先導で件の宿屋件酒場に着くこと小一時間。

後に俺が泊まる予定の部屋は、２階の最奥になる一番上等な部屋だった。

これ、高ランクの冒険者が泊まる部屋じゃない？　あとからやっぱ宿代請求とかされるとかないよね？　そうなると素寒貧通り越して借金持ち確定なんですけど。

「それでね、女神様の降臨祭っていうのがあるんだけど、転移してきた人たちが色々吹き込んだみたいでクリスマスと混ざってる感じなんだ！　ちょっと変なとこもあるけど楽しかった！」

こっちのイベント魔改造しすぎだろ。これは間違いなく日本人の仕業すぎる。

最初の躊躇いや怯えのような雰囲気はどこへやら。

始まりこそおずおすと話しかけ始めたと思ったら、妹分がめっちゃ上機嫌でグイグイくるでござる。

ちなみに副官ちゃんは早々に用ができたとか言って、この国の王城にあたる、聖教会の本拠地――大聖殿に戻っていった。護衛がそれでええんか……。

いや護衛の必要が無い、という点ではその通りではあるんだけどね。

俺が何か聖女に対してよからぬことを考える輩だったとしても、アリアは個人としても最高位の実力者だ。なんならタイマンで姉よか上かもしれん。

それこそ魔族領の上位陣や高位のドラゴンでもない限り、普通にぶっ飛ばされて終わる。弱体化とかの搦め手も女神様の直な加護のお陰で基本通りづらいし。

そこら辺は俺も同じだが、俺の場合は体質と武装が関係してるので弱体化どころか他者強化も回復も一律で効きにくいんだけど。

ベホ〇かけてもベ〇イミか下手すりゃやくそうくらいしか効果がない有り様なので、大戦中は目の前の聖女様には大変お世話になりました、ハイ。

ちと話が逸れたが、アリアはとにかくよく喋る。

まるで会話に飢えていたかのように、ひっきりなしの怒濤の勢いだ。普段ちゃんと話

してんのかと姉妹（きょうだい）仲を心配になるね。
相槌を打ちながら適度に突っ込みを入れてやると、ますます嬉しそうにして次の話題に移るのだ。寂しがりか。
……いや結構寂しがり屋だったわ、そういえば。
話の内容を順に思い返して、〝ある事〟に気付く。
一見、過去にあったことを矢継ぎ早に、楽しい思い出と笑えるエピソードごちゃ混ぜで話してるようだが全部俺の知らない内容――この2年足らずの間にあった出来事だ。
一つ一つ、俺の反応を喜んでいるのは確かなんだろう。だが、それと同時に何かを避けるような、それでいて探るような……。
じわり、と脇の下に嫌な汗が滲んだ気がした。
これ、やっぱ俺だって気づかれてるのか？　いや、でもなぁ・・・・・・。
アリアがあんまり嬉しそうに話すから、ついつい本当の事を告げるのを後回しにしてしまっているが……悪手だったかもしれん。
しかし、副官ちゃんも一緒だと打ち明けたときの反応が俺のキャパオーバーになる可能性があった、耐久力的な意味で。
ぶっちゃけ前衛型の二人に同時に凹（殴られる回数）られると、今の俺だとマジで女神様の元にとんぼ返りしかねないので普通に二の足踏んでましたすいません。

「正月と新年祭も変な風に合体してて、今年のパーティーに振り袖姿の人まで見かけたときはびっくりした！」

振り袖あるんかこの世界……ア――えーと、聖女様が着たらめっちゃ似合いそうだけど、その辺どうなのか詳しく。

「――えぇ？　ボクがぁ？　きっと似合わないって！」

見た目、なに着てもファッション雑誌の表紙飾りそうな反則的な超美少女がなにか言っておるわ。

ころころと鈴を転がすような笑い声をあげるアリアが楽しそうなので、話すにしてももうちょい場をあっためてからでもいいかなーとか思っていると、不意にトーンダウンしてこちらを覗き込むように見上げてくる。

「あの、さ。さっきからボクの事『聖女様』って呼んでるけど、名前でいいよ」

あー……じゃぁ……アリア様？

「様もいらないって――ッ、そうだ！　愛称とかで呼んでみてよ、いいやつだったら採用で！」

おい近い近い、ステイ、ステイしなさい。

最初は備え付けの椅子に座ってたっつーのに、いつの間にやら俺が腰を下ろした寝台の上に同じく座ってジリジリと距離を詰めてくるアリア。

いうてお前、そんなに長い名前じゃないだろうに。前のときも急に「レティシアばっかりズルい」とか言い出して愛称呼びしろって騒ぎだしたやろ。

会ったばっかり――形の上では、だが――の奴にアダ名考えろとか、距離感近すぎてにいちゃん心配になるんですけど。

でも聞いちゃう、お目々を期待に輝かせる妹（おとうと）分には逆らえないからね、仕方ないね。

だが俺にセンスあふれるネーミングなど無理なので、結局は前回と同じものになるんですが。ですが。

じゃぁ、一文字削って『リア』でどや？

――ってか前回も全く同じこと言った気がするが、愛称要求から1秒で即答したせいか「適当すぎる」「もうちょっと考えろ」と姉妹（きょうだい）揃ってブーイングをかまされた記憶があるぞ。ちょっと迂闊だったかこれ……ファッ!?

答えた瞬間、アリア――リアの瞳が見開かれ、大粒の涙が盛り上がってぼろっと零れる。

何で泣いてんの!?　そんなにダメでした!?　捻りもなくてスイマセンでしたマジ勘弁してください！

ハンカチは無いかと服のポケットを慌てて探っていると、リアは指摘を受けて目を瞬かせ、初めて自分が涙を流してる事に気付いた様で慌てて目元をぬぐう。

おいい、そんな乱暴に目をこするんじゃありません、ハンカチあったからこれ使いなさい。

「う、ぁ……ご……めん……！　ちょと……りぃ……きょう、は……！」

ハンカチを顔に押し当てると、そのまま俯いてしまい、何事かを呟くリア。

途切れ途切れで押し殺すような声に、嗚咽のようなものが混ざってるのを聞いて俺は呆然となる。

ガチ泣きじゃねぇか。どうしてこうなった。

愛称が嫌なだけでこんなにはならんだろ。何があった。

何か原因があるのか？　なら言ってくれ、俺に。――相手が神代の龍だろうが復活した邪神だろうが丹念に丁寧に潰しにいってやる。

泣き止まないちいさな背中を擦ってやろうと手を伸ばすと、そのまえに立ち上がったリアがハンカチで顔を押さえたまま、何度も謝罪を小さく呟いて部屋の出口に向かって駆け出してしまった。

そのままドアにぶつかりそうな勢いだったので慌てて制止の声をあげるが、無意識に強化魔法でも使ったのかドアをぶち抜いてそのまま走り去っていく……豪快イ!!

普段のリアからは想像もできないダイナミックなフェードアウト方法に、思考がショートした俺はあんぐりと口を開けたまま立ち尽くすしかなかった。

……これ、俺が弁償するとかないよね？

蝶番が外れるどころか人間大サイズで風穴の空いたドアがプラプラ揺れるのを眺めながら、思わず呟いたのは仕方ないと思うんだ（白目

そのまますっかり風通しのよくなったお部屋で一晩明かして、次の朝。

1階の酒場に降りると、モヤモヤとした気分を抱えたままではあるが腹ごしらえをすることにする。

とりあえず朝食はしっかり食わきゃな。飯食って寝る事ができれば人間早々にどうにかなることは無い。

どうにもならん方法でおっ死んだ奴がいうなと何処からか文句が入りそうだが、知らん知らん。そんな事より朝飯だ。

落ち着いて食えそうな壁際の端席が空いてたので、そこに座ると根菜たっぷりのスープと腸詰めの盛り合わせに乾酪をトッピングしたものを注文する。

飯はしっかり食うべきと言った口でどうかと思うが、昨日はどうしても夕飯食うような気分になれなかったんでそのまま寝てしまったから腹ペコなんじゃぁ。

料理を待つ間にちょいと黙考。

結局話しそびれた俺の正体、というか経緯をどうやって説明する場にもっていくか。
真実を話すと言ってもリアがダイナミック退場してしまったので、無職無頼の今の俺では大聖殿に立ち入ることも難しい。
だからと言ってあんな顔を見たあとでなんもせんというのも無理だ。
ならば、いっそ忍び込むか？
――無いな、いくらなんでも混乱を招きすぎやろ。アイツらには勿論の事、内部の大勢の知人にもクッソ迷惑をかけてしまう。
リアがもう一度訪ねてきてくれるかは正直、分からん。宿を手配してくれた副官ちゃんあたりが様子を見に来てくれるのを待つしかないんだろうか。
黙して思考するつもりがいつの間にかウンウンと唸って悩んでいると、注文した品がトレイに載せられてやってきた。
よし、モヤっとした胸中は一度忘れて飯を食う。食って、万全になってから考えよう。
スープの入った器を掴むと、浮かんでいる具材にフォークを刺して口に放り込み、汁を啜る。んむ、おいちぃ。
腸詰めの方もまた、美味い。パキっと弾ける歯応えと乾酪のとろけっぷりが最高だね。
――たまに朝食でこいつを食ってると、朝から重いもん食い過ぎだろと必ず突っ込み

入れるやつがおったわ、そういえば。

そんで、朝にタンパク質とるのは身体の理に適ってるんだよ、ほっとけ、と返して、俺もアイツも笑うのだ。

定番のやり取りというか、お約束の応酬というか。最後にそんな会話をしたのは何時だったか。

くたばる直前といい、再度転生してからといい、見るのはなんか泣き顔ばかりだな……。

笑っていて欲しいだけなんだがなぁ。

……アカン、一旦忘れて飯食おうとしたのに思考がマイナス方向に偏りすぎている。これはよろしくない。

気をとり直してフォークを腸詰めに向けると、横から延びた細指がひょいと摘まんで、俺が食おうとしていたそれを取り上げた。

「ん。美味いけど、朝から食うには重いだろコレ。よくそんなに食えるな」

おい、横取りしておいてそれか。朝からたんぱく質とるのは理に適ってるんだぞオォ……ン？

聞こえた言葉に反射的に返したあとに違和感に気付いて顔を上げると、リアと同じ空色の瞳と眼が合った。

妹(リア)に負けず劣らずの美少女っぷりと、女神様のそれとはまた違う、どこか儚さを思わせる金糸の髪。

此方を見据える眼と浮かべた笑みが、視線が絡まった瞬間に強張ったようにも見えたが……。

それも一瞬の事で、俺の腸詰めをつまみ食いした指の腹をペロリと一舐めして、すぐに悪戯っぽい笑顔に変わる。

「よう。ここ、相席いいか？」

いや、朝っぱらから冒険者(こんなとこ)の酒場で何してんねんレティシア(オマエ)。

アンナからの報告を受けたオレは呆然としたのも束の間、即座に二人がいるという宿に向かおうとした。

衛兵の声もアンナの声も、聖殿を走り抜ける際に掛けられた様々な声も、全て振りきって一心に屋外を目指す。

「レティシア様！　何処へ向かうおつもりですか！」
中庭へと飛び出してそのまま飛行魔法を発動させようとすると、鋭い声と共にシスター・ヒッチンが立ち塞がった。
どいてくれ、今は話を聞いてる余裕がない。
脇をすり抜けて宙へ飛び立とうとすると、ズン！　という音と共に地面が踏み込まれ、飛行の為に展開した魔力が散らされて魔法が不発に終わる。
一言の詠唱も無しに、脚を振り下ろした振動だけでオレの魔法を散らしたシスターは厳しい表情のままこちらの肩を掴んで固定した。
「落ち着きなさい！　飛行魔法の発動は都市内では許可が必要な筈ですよ！」
「――なら走っていく、離してくれ」
「いいえ、離せません」
「――ッ！　シスター！」
オレをアイツの処へと行かせてくれない彼女に、つい声を荒げてしまう。
どうしてだよ、オレがアイツに会うのをなんで邪魔するんだよ。
「――件の転移者の事でしたら、私の耳にも入ったばかりです。今朝方に城門脇で発見され、暫くの間詰め所にいたとの報告がありました」
「分かってるなら……！」

「今はアリア様が監視しているのでしょう？　ならばレティシア様まで向かう必要はありません」
　監視ってなんだよ!?　アリアがそんなつもりで一緒に居る訳がないだろ！　オレ達は……！
「まだ『彼』だと決まった訳ではありません！」
　雷鳴の様に轟いた一喝に、息を呑む。
「落ち着いてください、レティシア様。まだ、その転移者の背景の有無すら分からないのです」
　背景――どこかの国の紐付きが、アイツに化けてるってことかよ。
　そんなの、オレやアリアに通じるわけがないだろ。
　ずっと一緒にいたんだ。ずっと見てきたんだ。
　ガワを被っただけの偽物に、オレ達が気付かない訳がないだろ――！
「――正直に言えば、私もお二方が見抜けないとは思いません。ですが、背後に某かの影があった場合――それがもっとおぞましい者達である可能性すらあるのです」
「……邪神の信奉者達の残党だって？　それこそあり得ない」
　連中にとってアイツは自身の『神』を滅ぼした最悪の凶人だ。姿を真似るなんていうのは最も忌避される行いで、最大の禁忌の筈だ。

「あの者共が狂信の輩ばかりとは限りません。再びあの混迷の時代を招かない為にも、最悪を想定する必要があります」

故に御二人が同時に所属不明の不審な転位者と接触するのは看過できません。

そう、決然と言うシスター・ヒッチンを堪えきれずに睨み付けてしまう。

彼女だってアイツとは親しかった筈だ。傍目には怒って怒られてばかりの関係だったけど、二人にしか分からない信頼みたいなものがあった筈なんだ。それを見て、ついつい面白くないと感じてしまった事だってあるんだから。

オレの視線を受けても小揺るぎもしないまま、シスターはそっと眼鏡を押し上げる。

「……あの子が全てを賭けて拓いた平和の始まりを、後の者達に繋げていく。私達にはあらゆる努力を惜しまずに其を行う義務がある」

噛み締めるように漏らした言葉とその声色には、どこか悔恨が含まれているようで。

冷や水を浴びせられたように、オレの頭も冷えてしまう。

……なんだよ、それ。

そんなのズルいじゃないか。そんなこと言われたら、オレが我が儘で我慢の効かないガキみたいで、堪えるしかないじゃないか。

「若い者達を大勢見送り、生き残ってしまった老人が、最後に為すべき事でもあると思っています」

力が抜けて中庭に腰を落としてしまったオレに、シスター・ヒッチンは静かに呟くと膝を折って手を差しのべる。
「本日の執務は一切中止と致しましょう。お休みになりながら、アリア様をお待ちになるとよいかと」
後でお茶をお持ちします。と、いつもの厳しさからは想像もつかない、ひどく優しい声で告げる彼女の手を握り返しながら、なんとか立ち上がった。
「……分かったよ。でもヒッチンさん、一つだけ言わせてくれ」
「何でしょう？」
「最後とか縁起でも無いことは言わないでくれよ、オレもアリアも、ここの皆だって、教えて欲しいことはまだまだ山程あるんだからさ」
「……そうですね、私としたことが気弱な発言でした」
「それにヒッチンさんがいなけりゃ、誰がアンナを叱りつけるんだよ」
「そうでした。今回のレティシア様への勇み足な報告についても、騎士アンナにはお話をせねばなりませんね」
そういって、少しだけオレたちは笑い合った。
親しい相手がいつの間にかいなくなるのは、もう沢山だ。
それはオレだけじゃなくて、あの大戦を経験した者達の共通の思いのはずだから。

今にでも飛び出したくなる焦燥と逸る気持ちをなんとか圧し殺して自分の部屋に戻り、暫しの後。

オレはシスター・ヒッチンが手ずから淹れてくれたハーブティーを口にしていた。

……アリアは今ごろ、アイツと好きなだけ喋っているんだろうか。

それとも、やはりよく似た別人だったのか？

まさかシスターが想定した最悪が当たった、なんてことは無いと思いたい。

アリアが羨ましい、けど心配だ、会いたい。不安で仕方ない、どうして最初にオレじゃ、万が一危険な奴だったら、――会いたい。

会いたい。一目でいい、顔を見たい。一言でもいい、声が聞きたい。

お茶の味なんて全く分からなくて、ぐるぐると渦を巻いて纏まらない思考は結局同じ場所に戻ってくる。

だってアイツがいる。いるのかもしれない。もう何処にもいないと思っていたオレの相棒が。もう手が届かない場所に逝ってしまったはずのオレのヒーローが。

飛び出せば直ぐにでも手が届く場所に。

なんでこんな処で茶なんて飲んでるんだ。行け、走り出せ。後の事なんて知ったこと

か、誰が何を言おうが知ったことか。

今度こそ手の中から零れ落ちないように、今度こそ傍から居なくならないように。

行って、抱きしめて、捉えて、自分の内に閉じ込めてしまえ。

無理矢理に押し込めた気持ちが胸の中で暴れ、吠えたてる。

今こうして我慢を重ねていることが過ちで、直ぐにでもアイツの処へと向かうのが正しい事なのだと。

ドクン、ドクンと鼓動が早鐘を打ち、動き出さない事に抗議するように身体は熱を放つようで。

もし、この場にシスター・ヒッチンとアンナがいなければ、コレを我慢することが出来ずに結局は飛び出していたかもしれない。

「あのぅ……シスター・ヒッチン?」

「なんですか、騎士アンナ」

「……なんで私はレティシアの部屋で正座させられているんでしょう」

「今、レティシア様を御一人にはできませんので、消去法で御説教の場がここになりました」

「わざわざ聖女の自室で!?」

「おや、ご不満でしたか?　ならば仕方ありません。中庭へと移動することにしましょ

うか」
「アッ、いえ石畳の上は結構です。ふかふかの絨毯最高。わたし絨毯大好き」
傍らに控えてくれるシスターと、寝台の脇に正座させられたアンナの平常運転なやり取りに、少しだけ気分が落ち着く。
もしかして、これを見越してわざわざアンナへの説教をここですることにしたのかもな。
「だって、アリア様に頼まれたんですよ!?　レティシアだって早く知りたい情報だっただろうし！」
「あのような伝え方をすれば混乱が発生するのは目に見えているでしょう。先に私やガンテスに伝える等して段階を踏みなさい、と言っているのです」
「その人選だとどっちに報告しても御説教されそうじゃないですか！」
「レティシア様、中庭で岩を取ってまいりますので少々席を外してもよろしいでしょうか？」
「岩!?　石ですらなくて!?」
――うん。まぁ、あれだ。
「考えすぎかも」
必死に弁明するアンナと、気のせいか何処かイキイキしてみえるシスター・ヒッチン

を見ながら思わず呟いた。
おかげで腹の底を突き上げるような焦燥と衝動は、幾分もマシになったけど。
それでも――いつもなら嬉々として混ざる面白愉快な日常の光景に『あぁ、この場にアイツがいたらな』なんて思ってしまう。

なぁ、おまえに会いたいよ。
あの日から、ずっと。
会いたくて、触れたくて、名前を呼んでもらいたくて。
胸が痛くて苦しくて、堪らないんだ。

2年間、消えるどころか降り積もるばかりだった想いに。
もう叶う筈が無いソレから眼を逸らしておかないと、潰れてしまいそうだったから。
だから見ないように、気付かないようにしていたのに。
今日の出来事で、それはあっという間にオレの心を埋め尽くしてしまった。
祈るような気持ちで、オレは胸元のペンダントを握りしめる。
どうか、アリアが何事も無く戻ってきます様に。会っているという転移者が、本当にアイツでありますように。

――あいたいよ。オレのヒーロー（すきなひと）に。

――そうして。

オレ達は、アイツがアイツのまま、だけど嘗てのアイツではないのだと、知ることになった。

泣き腫らして、取り乱して、要領を得ないまま『あれはにいちゃんだ』と告げるアリアの言葉に一つの可能性を提示したのはシスター・ヒッチンだった。

極めて高位の位階に達した魂が、自我を保ったまま転生する伝承がある、と。

それは最高位のドラゴンであったり、その時代における最優の魔力保持者であったり。

創造神たる女神のもとへ還った際に、相応しき位階に到達したと認められた魂は新たな生を、かつての姿のままに与えられるのだと。

しかし人の身でそれが行われたという記録は、少なくとも確認できる歴史上には存在

しない、とも。

けれど、アイツは単騎で邪神を滅ぼした――本人はそう呼ばれるのを嫌がるかもしれないが、正真正銘の英雄だ。

先に挙げた資格を持ちうる存在が、誰一人として成し得なかった事をやった人間なのだ。

可能性は十分にあって、寧ろそうでないとおかしいくらいの偉業の持ち主で。

――だけど、その魂は邪神を滅ぼす為に殆どが擦り切れ、失われていた。

大きく欠けた魂のまま、再度この世界へと転生したのか。

かろうじて輪廻の輪へと乗ったあと、魂に刻まれた自我を保って地球から転位したのか。

どちらにせよ、この世界で過ごした記憶は存在しない。

それがオレ達が出した――どれほど認めたくなくても、そうであるとしか思えない、結論だったのだ。

オレは、気付いてしまったオレの中の渇望（ねがい）が、本当の意味では叶うことがないのだと叩きつけられて。

――それなのに、気がつけば聖殿を抜け出してアイツのいる宿へと向かっている。

会ってどうするんだとか、一体どう話をしようってんだとか、アイツにとっては既に

関係の無い前世（過去の話）なのにとか。
悩んで、考えて、答えなんて出なくて。
でも、それでも。
会いたいよ。
おまえに会いたいんだ。
おまえが覚えてなくても。
オレが覚えているから。
戦いばかりで、だけど輝く様な日々を覚えているから。
今だって、この扉の向こうにおまえが居るって思うだけで、胸が高鳴るから。
息を整えて、うるさい心臓に酸素を送ってやる。
扉越しに聞こえる喧騒がひどく大きく聞こえる。
朝も早いのに、聖都一の冒険者の宿というだけあって盛況なようだ。
そっと扉を押し開けて中に入った。
酒場の中は多くの人がいたけど、探すまでもない。
端の席が落ち着くと言っていたアイツは、記憶を失ってもやっぱり同じような場所で、難しい顔をして朝食をつついていた。
オレを初めて庇ったときの額の傷も、最後の別れの時の白灰化の頬傷もなくて。

終わらない戦いの中で刻み付けられていった、眉間の皺も睨み付けるような相貌もなくて。

まるで初めて出会った頃のアイツのようだったけど。

乾酪が好きで、朝から腸詰めにたっぷりとかけて食べてる処なんかはそのままで。

泣きたくなるような嬉しさと、笑みが零れてしまう胸の痛みで顔が強張ってしまう。

あぁ、クソ。この馬鹿にとっては初対面なんだから、威厳(良)のある先達(女)として振る舞いたいのに。

それが出来ているのか、自信がない。

それでも精一杯に、嘗て一緒にそうしたように笑みを浮かべて言った。

「よう。ここ、相席いいか？」

言うべきか、言わざるべきか。（後編）

――あぁ、楽しいな。

テーブルを挟んで、向かい合う。

２年ぶりの馬鹿野郎との会話は相変わらず馬鹿なやり取りばかりで、だけど切なくなるほどに懐かしくて。

まるであの頃に戻ったように。

或いは、最後のループ前に二人だけで旅をしていたときの続きのように。

不思議なくらいに自然に、会話が弾み、転がる。

合間にコイツが注文した料理を摘まんで、それに一々憤慨するのをからかって。

２年間欠けていたそれを、望んで押し殺して諦めて、それでも忘れられなかった時間を取り戻すように。

オレは相棒との会話に夢中になっていた。

まるで記憶が無いなんて嘘みたいに、あの頃のままで。

余裕を持って異世界での先輩として振る舞ってやろう、なんていうちょっとした悪戯心はとっくに何処かにいってしまって。

お前がいない間に、こんなことがあったんだ、あんなこともあったんだ。
そんな風に、2年の空白を埋めるように興奮と歓びを隠して話し続けるオレは、それこそやっと飼い主に再会した迷子のワンコのように見えただろう。
多分――いや、間違いなくアリアもこんな感じだった筈だ。
だって仕方ないだろ？
待ち望んでいた奇跡のような時間が、これからもずっと欠けたままだった筈のオレの宝物が、今ここにあるんだ。
過去の――こいつにとっては前世の因縁を持ち出して、それにすがるなんて健全じゃないのは分かってる。
それでも、交わす言葉と過ごす時間が心地良くて、懐かしすぎた。
だからだろうか。
打てば響くように相槌を返していたコイツが、ふと神妙な顔になって何かを切りだそうとする度に
「――そうだ。お前、ウチのアリアを泣かせたんだって？」
遮るように言葉を被せて、次に発せられるであろうソレを遠ざけてしまうのは。
こちらの言葉を聞いた瞬間、眼を泳がせて挙動不審になった相棒に、席から身を乗り出して覗き込むように顔を寄せる。

「本来ならブン殴ってやる処だけど、正直に経緯を話せば酌量の余地はあるぞ？　ん？」
オレに話してみ？　とニヤニヤ笑いながら尋問じみた空気を出してやると、語ろうとしていた『何か』なんて吹っ飛んだように、歯軋りしながらオレを恨めしげに見るその姿に内心で胸を撫で下ろす。
あぁ、そうだ。オレは怖いんだ。
こいつの口から「なぜ、自分に構うのか？」とか「どこかで会ったことあるのか？」なんて言葉が飛び出すのが。
オレの事なんて知らないと、初対面だと言われるのが、怖くて堪らないのだ。
頭では理解したつもりでも、今のコイツには何の責もないのだと分かっていても。
相棒だった男の、今だって大切な男の口からそれが出てくるのが、嫌で嫌で仕方ないのだ。
――もし、もしも万が一。
その言葉に、迷惑そうな響きや、拒絶するような意志が含まれていたら。
自分がどうなってしまうか、どうしてしまうか分からない。
そんな事を想像するだけで身が凍るようで。
だから奴が何かを言い淀む度に、咄嗟にそれを飲み込ませるか押し退けて。
そんな綱渡りみたいな会話をしながら、それでもこの時間が楽しくて話を止められな

い。

我ながら重症だ。どうしてこんなになるまで放っておいたんだ。

あんな風に死別する前に自分の気持ちに素直になっていたら、違う未来もあったんだろうか。

そんな益体もないことを考えてしまう。

オレの心中なんて気付く訳もなく、観念して気まずそうな表情のまま語り出した内容は、要約すれば『愛称考えてと言われて呼んだらガチ泣きをはじめた』というものだった。

――そうだろうな。

アリアの奴は最初、コイツがオレを呼ぶ度にどこか面白く無さそうに見ていた。

その視線が変わっていって、羨ましそうな色が混ざり出したのはいつの頃だったっけ。

ちょっと可哀想だとは思ったが、オレもなんとなく自分だけが愛称で呼ばれてるのが気分が良くて、ついついそのままにしていたら、ついにアリアが爆発したのだ。

オレばかりズルいと。自分も愛称で呼べと。

珍しく我儘をいうアリアに、もう殆ど即答で『じゃあリアでええやろ』で終わらせた馬鹿たれを二人掛かりで非難したものだ。

その後直ぐに、アリアがコイツを『にいちゃん』と呼び出してオレのほうがちょっと面白くない気分を味わうことになったんだけど。

なんとなく、想像がつく。

多分、おんなじ様な感じで『リア』と呼んだのだろう。

オレの事はこうして対面してる今でも、まともに呼んで無い癖にさ。

かつての焼き直しって訳じゃないけど、ちょっと面白くないぞ。

「――まぁ、大体の事情は分かった。情状酌量の余地はあり、ってとこだな」

わざとらしくため息を漏らして、仕方無いと言った感じで言ってやると、馬鹿たれはへへーっ感謝しやす、お代官様！　なんて言いながら、献上するように腸詰めにフォークを刺して拝むように両手で差し出してくる。

うむ、くるしゅうないぞ。なんて返しながらも、俺の目はフォークに釘付けになった。

これは、アレだ。ひょっとしたらアーンというヤツなのではないだろうか。

……。

ま、まぁ折角こいつが感謝の気持ちとして差し出してきた物だしな。うん、仕方ない。

ちょっと悩んだけど、思いきってそのままフォークに噛みついて貢ぎ物を一息に頬張ると下降した自分の機嫌が急上昇するのを感じる。

……なんだか頬が熱い。オレってこんなにチョロかったっけ。

保護者のオレからお許しが出た事でホッとしたのか、明らかに緩んだ様子で息を吐いたヤツは自身も上機嫌で腸詰めを刺して頬張る――っておい。　オイ。

おまっ、何して……あぁ、もう、クソッ。

頬どころか顔が一気に熱くなって、変な汗が出てくる。咄嗟に額に両手を当ててテーブルに肘をつき、項垂れて考え込むようなポーズをとった。

……気付かれてないよな？　そんな風に思っているとそのまま呑気そうにボイルされた腸詰めをかじるアホの声が聞こえる。

眠いの？　朝早く起きすぎじゃね？　じゃねーよ。ちげーよ。

気取られなかった事にホッとする気持ちと、全く気にもしないアホにイラっとする気持ちで、頭の中は大混線渋滞中だ。

お前ほんっといい加減にしろよ、そういうトコだぞ？　しまいには押し倒すぞ？

視線を合わせられないまま、茹だった思考で目の前のアホに負けないくらいアホなことを考える。

……。

「なぁ」

耳まで赤くなっているであろう顔を上げないまま、努めて平静を装って声を掛けた。

スープを啜りながら、なんじゃらほい、と応える相棒になんでもないことように続け

る。

「アリアには愛称付けたんだろ？　――なら、オレに付けるとしたらどんな感じになるんだ？」

んぐ、と喉に詰まらせるような声が聞こえた。

慌てたように水を飲み干す音のあと、えぇ～……と露骨に難色を示した声が尻すぼみに消える。失礼なヤツだな、おい。

アリアだって以前に不公平だとゴネたんだ。

ならオレだって、まともに名前も呼ばれていない現状に不満を唱えたっていいだろ。

そう、これはアレだ。姉妹間の公平性を保つ為には必要なことなのだ。

決してオレも『前』と同じ様に呼んでもらいたいとかそういう欲求があってのことでは無い。無いったら無いのだ。

無言で先を促すオレに根負けしたのか、軽く咳払いが聞こえた。

――じゃぁ、レティシアだから『シア』って呼ぶわ。

……あぁ。

白状すると。

そう呼ばれても、我慢できると思っていた。

あの頃と同じ呼び名がこいつの口から出てきたとしても、喜んで、浮き足立って、け

どそれ以上の感情は押し込めて、話の続きができると思っていた。
けど、出てきた言葉はいつかの大切な思い出と全く同じで。
顔を下に向けて、声だけを聞いていたせいで却って強烈にそのときの光景を思い出してしまう。
……あぁ……あぁ！
そうだ、そうだよ。シアだ。オレはおまえのシアだ。
やっぱりそうか。そう、呼んでくれるのか。
あの日々の記憶を失っても、お前は、オレを呼んでくれるのか。
歓喜と懐古と、ほんの少しの痛みとおおきな愛しさ。
我慢なんて出来なかった。こらえるなんて、無理だった。
あぁ、ダメだ。色々な想いが、胸からあふれて止まらない。

朝も早よから聖女姉（レティシア）が凸してきたと思ったら、妹（リア）と同じ様に愛称呼びを要求してきた

でござる。

昨日、迂闊に答えてやらかしたばかりなので出来ればお断りしたい案件だったんですけど。

両の手で顔隠して俯いたまま、無言で催促するのやめてくれませんかねぇ！

圧が凄いんですよォ！　怖いんですけど！

さっきから俺が事情をカミングアウトしようとするたんびにカット掛けてくるわ、リアを泣かせた地雷案件を推してくるわ、何か俺に恨みでもあるのかお前ぇ！

……心当たりしかねぇわ！　いっぱいあったねごめんなさい!!

胸中でひとしきり逆ギレしたが、別に愛称呼びが嫌って訳ではないのだ。なんだかんだ言って慣れた呼び方だからそのうち咄嗟に呼んじゃいそうだし。

ただ、リアの嗚咽が耳に残って思い出すだけでちょっと発作的に死にたくなるだけなんや（白目

――まぁ、何か外的原因があるっていうなら、俺が死ぬ前にきっちり消すが。

それはそれとして、愛称ね。

昨日と同じく、前からの呼び方しか思い付かんな……というか今さら他の呼び方とか俺が嫌だわ。

なので、レティシアは自然とシア、という呼称になる。

シアとリアで語呂も似てるからね、聖女姉妹（金銀ブラザーズ）・二人はシアリア！　今になって変えるとか違和感が凄い。

お望み通りに呼び名を告げるが、シアは深めのゲ〇ドウポーズのまま動かない。

え、どうしたん？　処理落ちした？　ＣＰＵ足りてる？

そんな風に話しかけるが、やはり無言。

こちらの軽口にも反応しないので、流石に心配になって肩に手を伸ばそうとすると――。

肩口が震え、微かにだが鼻を啜るような音が聞こえた。

――お　ま　え　も　泣　く　ん　か　い　。

その場で白目を剥いて倒れ込みたくなった俺がおかしいんだろうか。

姉妹（きょうだい）揃って琴線に触れるような要素がどこにあったのか見当もつかないんですけどォ！

ハンカチは昨日、リアが持っていってしまったので無い。おしぼりなんて気の利いたものが冒険者の宿で出るわけも無い。

なので、俺に出来るのは震える肩にそっと手を添える位だった。

おい、大丈夫か？　結局お前も泣いとるやないけ。

「――ないてない」

そんな鼻声で言っても説得力ゼロやぞ。ハンカチないんか？

「ないてないし」

分かった分かった、泣いてないから。とりあえず何か顔拭くものみつけんとな。

なんとなく、出会ったばかりの頃のメンタルボロボロで情緒不安定だったシアを思い出してらしくもなく優しい声が出る。

席をたってシアの背中を軽くたたいて、撫でてやると昔を思い出して懐かしい気分になるわ。

「――ッ」

一際大きく、シアが肩を震わせた。

「――フっ、く……かぇ、る」

うん？　なんだって？

「きょうはかえる……また、くる」

――唐突ぅ!!

なんだか昨日見たような流れに既視感を覚えていると、止める間もなくシアが立ち上がって足早に宿の出入り口に歩き出した。

だんだんとスピードが上がっていって、どんどん扉との距離が近づいてついには小走りに――ってオイまた既視感が・・・・・・。

ドゴォ！　という音と共に、弾け飛ぶ蝶番。吹き飛ぶ扉。

しってた（諦観

二人揃ってこの宿のドアになんか恨みでもあるの？

帰るお前らはいいけど、残される俺が晒される視線を考えてくれよ。どうすんだよ静まり返った酒場の空気。

半ばから粉砕された扉の残りが、ゴトッっと音を立てて床に落ちるのが嫌に大きく響いた。

店中の冒険者達から、なんともいえない視線が注がれる。

もうやだ、お部屋帰って二度寝したーい……でも部屋の方のドアも風穴空いたまんまだわ。

いっそ視線を振り切って俺も宿から飛び出そうか。夜まで時間潰してあとでこっそり戻ってくるんや。

現実逃避気味にそんなことを考えていると、遠巻きに俺を注視していた人垣の中から数人の冒険者がこちらにやってきて座っている席を取り囲んだ。

なんやねん、今度は。もう朝からお腹いっぱいやぞ、二重の意味で。

「よう、兄ちゃん。ちっとツラかせや」

なんで頼まれる側の俺が腰を上げなきゃなんねーんだよ。ここで話せや。

不機嫌さを隠さずに即答してやると怖面のおっさん共の顔が一斉に引きつり、直ぐにより物騒な表情になる。

声を掛けてきた中心のスキンヘッドだけは愉快そうに笑うと、シアが座っていた椅子を引いてケツを下ろし、俺と向かい合う。

「とっぽいナリして肝が据わってんな兄ちゃん。その髪の色からして、転移者だからか？」

知らんがな。扉ぶっ壊した事についてなら直ぐには修理代なんて払えないぞ。ちょっと待ってくださいお願いします。

そう応えると、いよいよ面白そうに声をあげて笑うスキンヘッド。

「安心しろよ、ソイツはここのマスターの仕事であって俺らにゃ関係の無い話さ。ただ、坊やに教えてやろうと思ってな」

ギシリ、と椅子に体重をかけてデカい図体を傾かせると、夜に子供がみたら泣き出しそうな凶悪なツラを俺に寄せて下から睨め上げてくる。

「兄ちゃんがさっきまで話し込んでたお嬢さんは、この辺――いや、世界中で有名な人でな。金の聖女なんて呼ばれてるんだ」

うん、まぁ。知ってるけど。

首肯すると、まぁ知ってるわな、と禿頭に照明光を反射させてスキンヘッドも頷く。

「お前さんも邪神戦争には参加してたかもしれねぇが、聖女様は長いこと大戦で戦い続けてきたこの国の英雄だ。俺達冒険者だけじゃなくて、国の兵隊や傭兵、街の住人皆に慕われてんだ」

それも分かるわ。

本来、複数の司祭以上の高位神官が触媒使って行うような、部位欠損すら癒す範囲回復をボコボコ乱射しながら辻ヒールをかますあいつを時に背に乗せ、時にリアと一緒に大八車に載せ、戦場を駆けずり廻ったこともある。

シアの魔力制御は魔族や竜、エルフの人外級の連中と比較しても頭一つ抜けているので、混戦になっても敵味方をきっちり分けて回復可能だからな。

同じ戦場に居れば、即死さえしなけりゃ確実に生き残れるとなればそりゃぁ人望も集まる。

このオッサンもそれで助かったクチなのか、しみじみと語るその表情には単なる雲の上の立場にいる小娘に向けるモノとは違う、本物の敬意が滲んでいた。

「俺たち一市民にゃ詳細は伝わっちゃこねぇが、最後の戦いで御身内を亡くされたとかで最近まで塞ぎこんでいてなぁ……以前みてぇに街に降りて笑顔をみせてくれたときにゃぁガラにもなくホッとしたもんだ」

目を瞑って感慨深く言うスキンヘッドに、酒場にいる相当数の人間が同意したように

頷くのが見えた。謎の一体感やめーや。ファンクラブか何かか。
「大勢を助けて、あのロクでもねぇ戦争を終わらせたお人だ。そんな方に幸せになってもらいてぇって思うのは当然の人情ってもんだろ？」
まぁ、そうだね、うん。全面的に同意するわ。
「そんでよ、そんな我らの国が誇る聖女様をよ――泣かせるような野郎がいたら俺達がどう思うかってのも、分かるよな？」
そうですね、全面的に同意するっていうかその通りですマジすいません。
特段凄んだりはしてない。
寧ろこちらに言い聞かせるような口調のおっさんのド正論にぐうの音もでない。
だが、それも次の言葉を聞くまでだった。
「だからよ、兄ちゃん。聖女様にもう近づかねぇように街を出な」
……あ〟ぁ〟？
なんだぁ…テメェ（真顔
「兄ちゃんばかりが悪いって訳じゃねぇのかもしれねぇがよ、それが通じねぇくらいには血の気の多い奴等もいる」
したり顔で続けるスキンヘッドの言葉にイラっとするが、黙って先を促す。
「俺だって今回はこうやって話をしてやってるがよ、次に聖女様を泣かせている野郎を

みつけたらどうするか分からねぇ」

酒場を見渡すと、他の連中も当然といったように頷いている奴等が結構いるようだ。

ほーん。そんで、街を出ていかないとこの場でリンチにでも掛けられるのかよ？

「そいつは勘繰りってもんだぜ――ただ、お前さんが街を歩いていたら、つい義憤にかられちまう『誰か』はいるかもな？」

ニヤリと笑って言うスキンヘッドに、追従するように笑う取り巻き連中。

吊し上げに近い雰囲気に不愉快そうに顔をしかめる奴もいるが、概ね『聖女様をたぶらかす怪しい転移者』に対するスタンスは同じようだ。

そうか、そうか。

つまりお前ら、俺に売ってきてんだなオイ。

「だからよ、悪いこたぁ言わねぇ。荷物まとめて直ぐにでも聖都を――」

オッケー分かったわ。買ったるわい糞が。

手のひらを卓に叩きつけると、勢いよく立ち上がり。

ベチャクチャ喋り続けてるハゲを黙らせる為に足を振り上げ、ブーツに包まれた踵を眼の前に叩きつける。

乾いた音を立ててテーブルは真ん中からへし折れ、載せていた物を派手にぶちまけて木端材にジョブチェンジした。

俺は唖然としている冒険者共を睨み付けると、卓の残骸に片足を乗せ、中指おっ立てて一言だけ告げてやる。

――おウチ帰って糞して寝ろ。

大乱闘スマッシュ冒険者ズ、勃☆発。

「調子に乗ってんじゃねぇぞ若造がぁぁぁぁっ！」

うるっせぇボケェェェェェッ！

掴み掛かってきた奴に逆に踏み込んで顔面に膝をぶち込む。

鼻血撒き散らして崩れ落ちる男を踏みつけるようにして別の奴が殴りかかってきたので、突きだされた拳を捌いてそのまま一本背負いで床に叩きつける。

直ぐに後ろから羽交い締めにされると、待ってましたといわんばかりに前から集ってきた連中に殴られた。

即座に拘束してくる奴の鼻っ柱に後頭部を叩き込んでのけ反らせると、脚を跳ね上げて前の奴らを蹴り飛ばす。

そいつらが吹っ飛んで他の奴を派手に巻き込んだその先で、新たな怒号と殴り合いが発生する。

一度乱闘が始まれば後はもう敵も味方もない。お前の肩がぶつかった、俺が殴るのをお前が邪魔したで血の気しかない馬鹿がそこかしこで新たに喧嘩をおっぱじめた。

それでも最初にカマした挑発のせいか、俺は集中的に狙われていたが。

「おい、こいつ結構やるぞ！　囲め囲め！」

「くそ、転移者は日和見野郎が多いとか嘘じゃねぇか！」

ピーチクパーチクやかましいわぁ！　とっととかかってこいやぁ！　タマついてんのか糞ァ！

手近な一人に飛び蹴りをブチ込んで昏倒させると腰が引けてる奴の脚を払って転倒させ、そのまま全力のジャイアントスイングに移行。

「うおぉぉぉっ!?　あぶねぇ!?」

「イカれてんのかこいつ!?」

誰がイカレだゴラァ！

そのまま声のした方にブン廻していた奴を投擲する。

発射された男は前方を薙ぎ払いながらテーブルと椅子も巻き込んでドミノ倒しを作っていった。

俺だってなぁ！　言われなくても分かってんだよォ！
「転移者だからってこんな若造に舐められたままで・・・・・・ヘブオッ!?」
アイツらが泣くような原因が俺だってんならなぁ！　俺居ない方がいいんじゃないかとか思ってんだよぉ！
「のし掛かれ！　大勢で押し潰すんだ！」
「いや無理だろ!?　こいつはっえゴッフ」
でも他人に言われるとなんかムカつくんだよぉぉぉ!!
大体なんなんだよアイツらもよぉ！
リアはあんなにちんまかったのにちょっと背が伸びてるしよぉ！
もう肩に載せて散歩したりとか出来そうにねぇじゃねぇか残念だけど嬉しいわボケが！
「くそ、正面からはダメだ！　テーブルもってこい！　盾にすんぞ！」
「さっき隠れた奴がテーブルぶち抜かれてそこでノびてるっつーの！」
シアは相変わらず絶壁の癖にますます綺麗になってるしよぉ！
あとなんでちょっと艶っぽくなってんだよキョドるわ糞が！
心臓によろしくねぇんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！
「うぉぉぉっ、ダメだこいつ止まらねぇ!?」

「っていうか速すぎだろ!?　まさか噂に聞くＮＩＮＪＡ!?　ＮＩＮＪＡなの!?　すげぇ！」

ジャ○プもねぇし、俺はどうすれば良かったんだよオラァァァァン!?

「えー……そんな感じで、私が見に行ったときには宿屋《武器掛け棚亭（ウェポンズ・ラック）》は半壊してました」

「……そうですか。本来の仕事では無いにも関わらず、報告書の作成、ありがとうございます騎士アンナ」

オレがアイツと話をして、そのまま宿から飛び出してしまって後日。

執務室でそう厚くもない紙束をめくりながら事の顛末を告げるアンナに、シスター・ヒッチンが頭痛を堪えるように頭を押さえて礼を言う。

普段は説教する側される側の二人しか見ていないので、珍しい光景だ。

――オレとアリアが揃って正座させられている状況も加味すると尚更に。

今日も聖殿を抜け出して、アイツの宿へと向かおうとしたオレは途中でシスター・ヒッチンに捕まり。

アンナの報告を聞いて、『にいちゃんが怪我した！』と飛び出そうとしたアリアも同じく捕縛された。

「まったく……会いに行くまでは予想していましたが……彼方の建物を壊していたとは聞いていませんよ？」

宿の店主はなんと？　と問うシスターに特に問題ないみたいです、とアンナはヒラヒラと手を振った。

「冒険者が酒場で喧嘩するのなんて日常茶飯事ですから。修理費出してもらえるなら、含むものは何もないって言ってましたよ」

「そうですか……店主にはそのうち礼とお詫びを出さなければいけませんね」

どうも店が半壊するレベルの乱闘が起こったのは、オレがちょっと取り乱して飛び出してしまったのが切っ掛けのようで非常に居心地が悪い。

縮こまって大人しく正座しているオレの隣で、そわそわと落ち着かない様子だったアリアが「あの！」と二人の会話に割って入る。

「それで、にいちゃんは大丈夫だったの？　怪我してない？」

「私が見たときには馬乗りになって殴られてましたけど、全然元気そうでしたよ。むし

ろ乗ってる相手のほうがボコボコに顔を腫らしてました」
　下にいるのに１０倍くらい殴り返してましたし。と続けるアンナだが、アリアは気が気では無い様子でシスター・ヒッチンに懇願の眼差しを向けた。
「あの、シスター。にぃちゃんのお見舞いに……」
「駄目です」
「か、回復魔法をかけるだけでも」
「駄目です」
「……借りたハンカチ、返さないと」
「駄目です」
「う、う〟う〟う〟う〟う〟ぅ――！」
　涙目になって上目づかいで睨み付けるアリアだが、オレやアイツ、アンナなら一発で降参するその視線にもシスター・ヒッチンは全く動じな……い、訳でもなさそうだ。少しだけ身じろぎしたし。
　シスターの鉄のメンタルを崩したアリアの可愛さに戦慄すべきか、それだけで済ませたシスターが凄いのか。
　少し緩んだ空気を整えるように、シスター・ヒッチンは一つ大きく息を吐いた。
「騎士アンナ。帝国とこちらの共同での調査任務が入ったそうですね」

「え？　あ、はい。といっても帝国側からは遠いのでこっちに出向してる私にお鉢が回ってきた、っていうだけの簡単なやつですけど」

殆ど聞き取り調査みたいなもので、本来騎士の仕事じゃないんですけど……とこぼすアンナに、シスターは大きく頷いた。

「こちらの枠で捩じ込みますので、『彼』を連れて行くことは出来ますか？」

「――うぇ？」

とんでもないことを言い出したシスターに、アンナが変な声を上げて固まる。

ちょっと待ってくれ、アイツを騎士の任務に連れて行くだって？

「待て待て、待ってくれ。ヒッチンさん、一体どういうつもりだよ!?」

「そうだよシスター！　にいちゃん怪我したばかりなんだし、何かあったらどうするんだよ！」

オレとアリアの抗議が飛ぶが、シスター・ヒッチンはやはり全く動じないままだ。

「聖教国としては転移者に対して積極的な取り込みは行わず、自由意思に任せるべき、という方針です。帝国を主導にした共同任務であれば、囲い込む事を各国に危惧されることもありません」

そういう問題じゃないだろ！

アリアのいう酒場で負った怪我は軽傷みたいだし、そこまで心配するようなものでも

ないだろうさ。

だけど、あいつの身体――厳密には魂は最悪の場合、転生前と同じく酷く損傷している可能性だってある。

何があるか分からない聖都の外に出すなんて、認められる訳がない。

今回みたいな人間同士のただの喧嘩程度なら兎も角、強力な魔獣や――それこそ邪神の信奉者のような危険な奴等と相対することになったら……。

2年前のアイツの最後の姿を思い出して、氷柱を背筋に差し込まれたような感覚に身を竦める。

無意識に、胸元のペンダントをキツく握りしめた。

「――駄目だ、認めない。聖女としての権限で正式に却下するからな」

「ボクも同感。絶対だめ」

アリアも同意し、きっぱりと否定する。

――本来なら、聖女二人が反対している任務なんてそれでたち消えになる筈なんだけど。

「御二人が反対した場合に猊下から『頭を冷やしなさい』と仰る様、言付かっています」

――！　よりにもよって教皇の差し金かよ！　話が急過ぎると思ったんだ。

あの昼行灯気取りの爺さん、なんでこんなときに限って嘴突っ込んでくるんだよ!?

「教皇就任以前から、託宣にて創造主と言葉を交わしてきた御方です・・・・・・我々の及びもつかない深慮があるのかもしれませんね」
疑問と驚愕がオレの表情に出ていたのか、シスターがそれに応えるように呟くが……彼女自身も心底納得してる訳ではないんだろう。出てきた言葉はいつになく歯切れが悪い。
背後でアンナが「――あれ？　っていうことはこの任務、教皇猊下の勅命みたいなものじゃ……」と呟いて胃の辺りを押さえているが、それを心配してやる余裕はオレ達には無かった。
「そ、それならボクとレティシア――せめてどっちかだけでも同行者に出来ない？」
教国の聖女が加わる時点で主導権が帝国のモノで無くなってしまうのはアリアも分かっているだろうが、それでも、と食い下がる。
「――仮に、主導権の問題が無くとも御二人の参加は難しいと思われます」
「どうして!?」
「御二人と『彼』を一時的にでも引き離すことが、おそらくは今回の件の要だからです」
――やっぱり、か。
任務自体は、危険度さえ低ければなんでもよかったのだ。
都市外で、かつ多少なりとも時間の掛かることが重要だった。

一週間か、十日か。長ければ半月か。
アイツを聖都から――オレとアリアのいる場所から離すことが目的の、任務同行だった。
教皇（あの爺さん）が言う『頭を冷やせ』とは、つまりそういう事なんだろう。
ぐらり、とアリアの頭が揺れたように見えた。
なん、で。と呟くその顔は驚愕と動揺、少しの恐れで青ざめている。
シスター・ヒッチンは固く瞼を閉じると、少しの間――本当に珍しいことだけど、躊躇ったように見えた。
けれど、結局は眼を開けて、正面からしっかりとこちらを見据える。
「――別人である、と。そう思えますか？」
誰が、なんて言うまでも無かった。
「魂を同じくしていても、今の『彼』とは関係の無い話です」
「……」
「これからも関わるのならば、過去を重ねることをしないと、胸を張って言えますか？」
「……やめて」
「黙っていても、其れを続けてしまえば――何れは『彼』の方が気付くはずです」
「……やめてよ……!!」

そう、今はそれでいいかもしれない。
でも、これからずっとアイツと関わりを持つというのなら。
そのうち気付くだろう。オレ達が、自分を通して過去を見ているのだと。
そんな奴と、そんな残酷な事をする人間と、誰が仲良くやれると思うのか。
囁くような、けど悲鳴のような声を漏らして、アリアは執務室から飛び出してしまう。
「騎士アンナ――アリア様をお願いできますか？」
「……分かりました、でも――あんまり憎まれ役ばっかり引き受けるのはどうかと思いますよ？」
横目でこちらをチラリ、と見ながら最後にそんな言葉を掛けて。
アンナは走り去っていく小さな背中を追いかけていった。
無言で立ち尽くすシスター・ヒッチンに、椅子へと座るように促す。
失礼します、と小さく呟いて力無く椅子へと体重を預けるその姿は、一気に老け込んだようにもみえた。
「……誰かが言わなきゃならない事だった。けど、オレには言えなかった」
慰める訳ではないが、そんな風に声をかける。
そう。
オレに言えるわけが無いのだ。

ともすれば、アリアよりも今のアイツと過去のアイツを重ねて見ている、オレに。
会えたことの喜びと、話をしていて感じる心地好さに浸って。
どうしたってシスターが言ったことから眼を逸らしてしまう、オレに。
――なら、もう会わないようにすればいいのか？
そんなの、尚のこと無理だ。
一度会って、話をして。
その想いは益々強く、確信になった。
だって、覚えてる。オレは覚えてる。
オレはオレのヒーローを、どうやったって忘れられない。
記憶がなくたって、その魂はどこまでもアイツのままだった。
ひどい矛盾だ。過去を重ねて見てはいけないのに、それをすることに心地好さを感じて、それに罪悪感を覚える。
「どうすればいいんだろうな」
途方に暮れた感情が行き場を失くしたように、唇からこぼれる。
そっと触れた胸元のアイツの欠片は、答えてはくれなかった。

なにも起きないわけがない（前編）

「と、言う訳でアンタは私と同行して近隣の村に行くことになったから」

いや、どういう訳やねん。

盛大に暴れてぶっ壊した宿の片付けを手伝っていると、突然やってきた副官ちゃんに『４０秒で支度しな！』されて困惑する。

我ながらもうどうしようもない感じで盛大にキレ散らかした訳だが、流石に落ち着いた。

呪いや精神干渉・精神汚染に対してはちょっと自信あるくらいに耐性高いんだが、アイツら関連で詰まりだすと全部貫通して多大な負荷が掛かるのって我がオツムながらちょっと酷いと思うの。無属性の全耐性貫通魔法か何か喰らったの？

俺のストレス発散くらいしか意味がないと思われた大喧嘩だったが、あの場で乱闘に加わった冒険者達とそこそこに交流ができたのは幸いだった。

喧嘩したら仲直りしてあとはダチ――ってほど単純でもないが、腕っぷしをみせたのが好評価に繋がったようだ。脳筋か。脳筋だったわ。

壁が砕け、床が抜け、天井に椅子の足がぶっ刺さった元酒場だった廃墟みたいな空間

で殆どブチ転がした筈の奴等に囲まれて『腕は認めてやるが聖女様を泣かせたのはまた別の話だぞゴラァ』と懇々と説教されたのは一昨日の話です、ハイ。

脳筋理論で行くなら、あの場で最後まで立ってた俺が正座させられるのはおかしいと思うんだが……いやね、絡み方こそ嫌な感じだったけどね、皆シアを心配しての言動だったからどうにも怒りが長続きしなくて。元々半分くらい八つ当たりだったし。

それに混じって一人だけニンジャニンジャ煩いのがいたけど、あれはなんだったんやマジで。

あと、こんだけ自分の宿が酷い有り様になったのに、平然とした顔で　終わったか？　なら片付けだ。　とか言っちゃうマスターのメンタルが強すぎる。男前か。いや……慣れてるだけだわコレ。

そのあとは軽口を叩きながら全員で片付けを始めたんだが、皆妙に手際が良くて笑うしかない。普段から何回店ぶっ壊してんねん。

んで、やはり色んな人間から話を聞くのは悪いこっちゃない。

情報に疎い奴は冒険者なんかやれんだろうし、片付けの傍ら様々な情報を耳にいれられたのは掛け値無しに収穫だった。

特に聖都廻りでの噂は重要だ。キナ臭いモノがあるなら探ってみようかと思ったが、今のところはそういった話は無くてなによりだわ。

そんな訳で、数日は宿泊先で片付けに精を出そうと思ってたんだが――。

壁から椅子を引っこ抜いて床に下ろすと雑巾をバケツに浸け、いつもの軽装騎士服に旅装の外套を羽織った副官ちゃんから事情を聞く。

要は、住所不定の転移者へのお仕事斡旋みたいなものらしい。

――対応早いな、まだ俺が聖都入りして三日目やぞ？

近隣の村で発生したちょっとした陳情や村人の嘆願なんかを、聞き取り調査して上に報告するのだとか。

騎士の仕事じゃないだろそれ、連絡員とか派遣された役人のするやつやん。

とはいえ、報酬は悪くない――というか多少遠出して聞き込みするだけの仕事内容としてはかなり良い。

女神様の用意してくれた財布の中身も無限ではないので、ここらで稼いでおくのもアリといっちゃアリなんだが……。

シアがまたくる、って言ってたからなぁ。せめてもう1回来るまでは待っておきたいんですけど。

「レティシア――あー、姉君様もアリア様も、宿が半壊する切っ掛けが自分達の事だって聞いて、暫く自重するらしいよ」

なんか取って付けた感がある台詞だが、まぁアイツらなら言いそうだし、副官ちゃん

の言うことだしね。

一度会って話をしたかったんだが……。

わざわざ女神様が聖都に俺を下ろしたというのに、再転生したことを話すこともないまま街を離れるのは抵抗がある。

なんだかんだと先伸ばしにしてるのは事実だしな……。話しづらさに後ろめたさまで加わってもうアカンことになりそうや……そういえばなったわ、一昨日。

が、副官ちゃんに「アンタの身分証明も兼ねた報酬だから、これに限ってはほぼ強制だと思って」とか何時になく真剣に言われちゃうとなぁ。

下手に断ると冒険者達に叩き出される事すらなく、普通に法的に都市外退去とかになったりするかもしれん。

店主に断りを入れると、いいから行ってこい、片付け要員が一人減る位はなにも変わらん。というそっ気ないお答えが帰ってきたので、素直に厚意に甘えようかね。

魔獣の餌にでもなったら、出てきた糞に花くらいは添えてやる。等と抜かす片付け要員共にうるせー、死ぬか馬鹿。と絞った雑巾を投げつけ、準備を行うことにした。

いうても大して荷物も持ってない。2階の部屋に戻って、外套羽織りーの、水と携帯食料が入った袋を担ぎーの。後はさっさと1階に戻って、さぁ準備完了やぞ、と言うと

こで副官ちゃんが小振りな短刀を差し出してくる。なんぞこれ？
「聖女様達からのお守りだそうよ。失くさないように持っときなさい」
守り刀的なヤツか。嬉しいやら有り難いやら。
いまいちやる気の出ない話ではあったが、二人からのお守りと聞いてちょっと仕事に前向きになっちゃう。
渡された短刀を手に取ると、鞘から軽く引いてみた。
――ヒェッ、なにこれ。パねぇ。
モノ自体は品質こそ良いが、ありふれた数打ちだ。
でも、込められた聖性があたまおかしい（白目
最低限に彫られた魔力導線に、パンクしないギリギリに聖なる魔力が込められている。
普通、数打ち品の浅い線にこんな量の魔力通したらすぐに駄々漏れになってただの鋼に戻るやろ、どういう精度で注ぎ込んだんだよ。
元がただのナイフだし、流石に半月もすれば魔力だって抜けてしまうだろうが、逆を言えば半月の間は相当な退魔の業物となる。
なんという技術の無駄遣い。注ぎ込んだ聖性にも、使われた魔力制御にもほんの少しでも性能をあげようという執念すら感じるんですけど（戦慄

こんなモン渡される聞き取り調査とか本当に聞き取りだけで終わるんですかねぇ！
不安になってきたんですけどォ！
素直な感想を述べると、副官ちゃんも短刀のエグさは理解しているのか、そっと目を逸らす。
アカン、これぜったいなにかおきるやつや、おれはくわしいんだ（
無茶の出来なくなった身としては、転ばぬ先の杖は欲しい。
――街を出る前に武器屋に寄っていこう。
急ぎだとしても、これだけは副官ちゃんを説得せねば。

財布に多大なダメージを負う覚悟で準備を整えて出発し、はや数日。
巻き進行というなかれ、拍子抜けするくらいに村への移動は順調に進んだ。
スムーズな移動が叶った理由で一番大きかったのは、俺が馬に乗れたことやな。
乗馬の技術がどうこうとかいう以前に、前の俺は殆ど馬に乗れたことがない。
触ると嫌がる程度なら可愛いもので、下手すると暴れだすからね、仕方ないね（血涙
俺が動物にアホ程嫌われている、という事じゃぁない。ホントだぞ？

前に体質と武装がどうこう言った気がするが、同じ理由なのよ。
使ってるメイン装備がちょっと物騒な代物で、その気配を察知した動物には基本避けられるんや。
大丈夫な乗り物といえば、箱モノである馬車か、生物ですらない魔法像（ゴーレム）か、本能を押さえて行動できるレベルの知性がある幻獣・魔獣くらいだった。
――最後のは乗せてくれはするものの、クッソ嫌そうな空気だしてくるけどね。泣きたい。
おかげで皆が馬や飛竜で移動する際、走って追いかけるかロープで結んだ魔法かけた浮遊板（フロート）で引っ張られるかの二択だったんですよハハッ。
鞍に股がって視点が高くなっても1秒後に渾身のロデオが始まらないって素晴らしい。素晴らしくない？
久々のまともな騎乗にやや手こずったが、お馬さんがカッポカッポと普通に走ってくれる感動の前には些細な事だった。
幸先がいいね。これならお仕事の方も何事もなく終わるかもしれない（フラグ

馬の背に揺られて着いたのは、帝国と聖教国を繋ぐ街道から少し外れた先にある農

村。

４０人弱程の村人が暮らすその村で、さっそく住人に話を聞く事になったんだが――。

「それでさぁ、おれもぼうけんしゃになったらドラゴンをたおすんだよ！」

おう。そうか。夢はでっかくドラゴンスレイヤーか、先は長いな。

「なんだよ、あんただってぼうけんしゃだろ！　しってるんだぞ！　黒いかみはてんししゃだって母ちゃんがいってたんだからな！」

転移者、な。それだと死んでんだか女神様の使徒なんだか分からんで。

今の俺だと逆に当たってそうなのがアレだが。

村にいるお子様の一人に絡まれて調査が進まねぇ。普通に困った。

家畜を放牧するための丸太柵に腰掛けながら、元気に話題を振ってくるちっこいのについ生返事を返してしまう。

副官ちゃん相手だと頬を染めて母親の後ろに隠れてしまったチビすけは、何故か俺の後をついて回るようになった。

長閑な村だ、子供の数も少ないみたいだし、外からやってくる転移者と騎士とか、さぞかし刺激のある話相手なんだろうね。

とはいえ、村人への聞き取りを副官ちゃんばかりに任せている現状は如何ともし難

い。

俺の同行なんて実質おまけみたいなもんだし、帝国からの随行者が追加でやってくるらしいので本格的な調査は彼らが行うみたいだが。

本来、副官ちゃんは教国に出向してきてる帝国騎士なので、立場的には纏め役――教国に雇われた俺と帝国から来る随行者の人達を仲立ちする役割だったりする。

それでも随行員の到着を待たずに聞き込みを始めているのは、本人の気質によるものだ。

何かしらのトラブルや不安があるってんなら、騎士がきちんと話を聞いて回るっていうのはさぞかし頼もしいことだろう。

その辺分かってるから、手ずから聞き込みに精を出してるんやろな。

すごいちゃんと騎士してて関心するわ。俺はお子様一人に手を焼いてご覧の有り様だけど。

「おい！　きいてるのかよ！　人のはなしはきかないとダメなんだぞ！」

おう、聞いとる聞いとる。蜂蜜飴くうか？

「！　たべる！」

道中が順調だったので余った保存食の飴ちゃんをやると、チビすけは嬉しそうに口の中で転がしはじめる。

ふはは、ちょろいちょろい。不機嫌そうに膨らませていた頬が既に緩んでおるわ、まぁ子供はこのくらい素直で単純なほうが健全だけどな。

なぁ、坊主。ついでに聞いとくが、最近変わったこととかあるか？　母ちゃんがなんか言ってたとかでもええねん。

「ん～？　……森に入ってるおっちゃんがちょっとまえから森にちかづいちゃだめだって。あとかあちゃんは早くかえってきなさいってよくおこる」

そうか。かあちゃんに心配かけんように暗くなる前には帰らんとな。

「ん！」

飴を舐めながら上機嫌に頷くお子様を眺めながら村外れの奥――森の方へと視線を飛ばす。

森ねぇ。野生動物が近づいてきた、程度の話なら楽に終わるんだが。

さて、もっと他にも聞き込みをしたいがこの坊主をどうするか。と悩んでいると、副官ちゃんがやってきた。

よっす、お疲れ。なんぞ進展あった？

「今のところ、具体的なトラブルがどうこうって話は聞かないかな。でも――」

一旦言葉を切ると、副官ちゃんの姿が見えた途端に丸太から飛び降りて俺の後ろに隠れてしまった坊主に、膝を折って優しく話しかける。

「ごめんね、この人とお話があるからちょっとだけ借りていいかな？」
「う、うん。あの、きしさま？」
　おう、顔が赤いぞ坊主。さっきまでの元気はどこにお散歩にいったんや。
「うん？　なにかな？」
「きしさまも……せんそーにいったの？」
「……うん、そうだね。それがどうかしたの？」
　首を傾げる副官ちゃんの返答に、チビは赤らんでいた顔をパッと輝かせた。
「それなら《せいじょさまのきし》となか良い!?　おれあってみたいんだ！」
　俺が内心でオッフ、と呻くのと副官ちゃんがブフッっと小さく吹き出すのは大体同時だった。
「そ、そうだね。会ったことあるよ」
「ほんと!?　やっぱりつよいの!?　かっこいい!?」
　おいい、仕事の話するんちゃうんかい。なんで笑い堪えながら話題に乗ってんねん。
　おチビは興奮しながら身振り手振りで、いかに聖女様の騎士（）とやらがスゴいのか熱弁をふるいだす。
　副官ちゃんは肩を震わせて小刻みに吹き出しながらチラチラ俺を見るのやめーや。気づいてんぞ。

記憶があることを話してないせいで、突っ込むこともできずに黙って話を聞くハメになった。自業自得とはいえ、ひでぇ羞恥プレイを強要された気分だ。

ひとしきり喋って会話を終えると、最初に副官ちゃん相手にモジモジしてた様子はどこへやら、チビすけはニコニコしながらご機嫌で手を振って村の広場の方へと駆け出していった。

そしてあー、と散々腹筋を酷使してご満悦な吐息をもらすアホの子。ロクに聞き込みできんかった俺が言うことでもないが、いい加減話題を戻そうよ。ねぇ。

村のまとめ役にも話を聞いてきたんやろ？　何かトラブルの種はあったんか？

そう問うと、流石に副官ちゃんも顔を引き締めてお仕事のテンションに復帰した。

「村長さんと村の人達の話に食い違いは無かった。具体的な被害は無い、って段階だった」

けど、なんか引っ掛かるんだよね。と呟く。

曰く、夜中に奇妙な影をみた。曰く、陽が落ちると何かに見られているような気がする。曰く、夜が明けるまで不思議な圧迫感のようなものを感じた。

気のせいだと切り捨てることも出来るような内容ばかりだが、先程おチビから聞いた森の一件とも合わせると短絡的な判断はしたくなくなるな。

というか陳情の内容に〝夜〟が必ず含まれている。絶対なんかあるやつやこれ。

副官ちゃんに森の件についても報告してみるが、難しい顔で頭を振られた。
「村の猟師さんの話だね。森にいる夜行性の猛獣や魔獣が村の近くにきた、っていうなら話は分かりやすいんだけど・・・・・・実際には〝逆〟みたい」
なんでも、普段から狩りをしている範囲で獲物が全く取れなくなり、少し奥に入らなければならなくなったとか。
こんなことは今まで無かったので、猟師は念の為に森の入り口近くで遊ぶ子供達や薪や木の実、果物を拾いに行く村の女性達には近づかないように言い広めたらしい。
「森の中で何か異変が起きて、大規模な縄張りの変動とかが起こったっていうならちょっと長丁場になるかもね。森林に慣れた斥候も必要になるし、合流する帝国の随行者にそういった技能持ちがいればいいんだけど」
てっとり早く、村に浄化結界でも張ることが出来ればなぁ……と続ける副官ちゃんだが、森の縄張りの変動が原因だとするなら、村人が夜に見たり聞いたり感じたりしている謎の違和感の説明がつかなくね？
そうなんだよねぇ……とボヤく副官ちゃんと一緒になって頭を捻ろうとして、ふと思い付いた。
いや待て、順序が逆や。異変の中心地が森で、そのせいで村に何か起こったんじゃなくて。

村人が夜に感じると言う〝何か〟から遠ざかる為に、村近辺を縄張りにしていた動物が一斉に森の奥へと逃げ出した、という事なら辻褄が合うんじゃね？

言った後で、二人してしかめ面になった。森に原因があるほうがまだ楽そうな話だったからしゃーない。

「そっちの方があり得るかも。でもそうなると……思ったより厄介な話になるかもしれない」

だろうね。これが正解だった場合、どう考えてもただの害獣問題とかじゃねぇもん。

案の定、面倒な仕事になりそうだし、もうちょい人手が欲しいな。帝国の連中はいつ頃こっちに着くんや？

「早くて明後日の朝……ちょっと待ってられないわ」

夜の問題は日に日に増えてきているらしい。既に俺らという〝ソレ〟にとって不都合な存在が来てしまっているし、あと二日あれば〝何か〟がアクションを起こさないとも限らんなコレ。

実質、副官ちゃんと俺の二人か。戦力的にはそう悪くない気はするが手札が不安だな。村の住人達のガードに廻る事も考えると特に。

「……私が村に結界張ってみる、あんまり得意じゃないけど」

そんな事を言い出した副官ちゃんに、待ったをかける。

いや待って。騎士――バリバリ前衛型の君が小さな村とはいえ丸ごとカバーする結界なんて張ったら消耗半端ないやん。

それを嫌がって出てきた〝何か〟と戦う事になったら洒落にならんて。

「でも、それなら術者（わたし）が最初に狙われる筈でしょ。村の人に危害が及ぶ可能性は減らせるし」

副官ちゃんがリスク全被りって時点でちょっと頷けないなぁ。

民を護るべし、という騎士の本懐に準じてるのはふつーに尊敬できるし立派だと思うが、もうちょい周りを頼る道もチョイスすべき。

「ッ、アンタが言う……！　あぁ、もうっ。なんでもない――もしかしてアンタが結界張れたりするの？」

一瞬、ちょっと本気で怒った様な気配を感じてビビった（泳ぎ目

あ、ちなみにワタクシ、結界魔法はおろか魔法の類いはまともに扱えるのは自己強化くらいです（キリッ

じゃぁ何で頼れとか言った、といわんばかりにヒエッヒエの視線を向けてくる副官ちゃん。やだ、ここだけ極寒。

まぁ解答はシンプルやで。村丸ごとじゃなくてデカい建物1件なら消耗も押さえられるやろ。

村長宅とか、集会所的な建物とか。大きさによっては寿司詰めになるかもしれんが、帝国の人員と合流する迄の二日――2回だけなら村の住人も納得してくれるんじゃないかね。

〝何か〟がその状況に我慢できずに現れるなら、本人が言ったように術者の副官ちゃんを狙うだろうから消耗を極力減らした状態で、かつ避難場所から離れたところで迎え撃てる。

警戒して籠るってんなら、二日後に合流してきた面子と協力して本格的な結界を村に構築。封殺するか村に近づけないようにする。

術者スルーして、こっちが妨害する間も無く結界を叩き壊せるような奴が隠れてる、というのは無いと言っていいやろ。そのレベルなら――言いたか無いがこの村は手遅れになってた筈だし。

俺がパッと思い付いたのはこんな感じだけど、どうでしょうねアンナ先生。

少しおどけて先生呼びなんてして見せると、副官ちゃんはちょっと呆れたような目で俺を見た後、

「仕方ないわね、それでいこうか」

なんて言ってニヤリと不敵に笑ってみせた。

おk、なら早速準備を始めよう。

まずは、今から結界強化の為の触媒作りや。幸い材料には事欠かんしな。

出来る限りの準備を整え、あとは日暮れを待つのみとなった。

幸い住民は聞き分けの良い連中ばかりで、大人しく村の集会所になってる大きな平屋に避難してくれている。

祈るようにこちらの武運を願ってくれる姿は、過去にもあちこちで見た光景だ。

全員集まって建物の中に入っていく中、昼間にくっ付いてきていた坊主が、不安そうに母親の腰にしがみついてこちらをみつめていたので、残ってた飴を全部放り投げて食ったら歯ぁ磨いて寝ちまえ、と言っておいた。

今日、事態が動くというなら夜明けには終わっとる。そうしたら何時もの朝や。そのうち森でだってまた遊べるぞー。

触媒作りにギリギリまで時間を割いたので、結界自体は副官ちゃんが短時間かつ突貫で構築することになったけど、ジャブジャブつぎ込んだ高性能触媒のお陰で彼女自身も消耗を殆どせず、より強化されたモノに仕上がった。

昼間に打ち合わせをした放牧用のスペースを借り、火を起こして二人とも静かにその時を待つ。〝何か〟が動かないなら、このまま月夜の下でキャンプして終わるんだけど

ね。

「……アンタには村の人達の護衛をしてもらいたかったんだけど」

ポツリ、と火を見つめながら副官ちゃんが呟く。

なんでやねん、散々話したやろ。

事の元凶が動くなら、真っ先に危険に晒されるのはお前さんやぞ。

人手が足りてるならまだしも、戦力が二人しかいない現状、一緒に対処するのが一番ローリスク・ハイリターンだってばＹＯ。

「戦力ねぇ……今更だけどアンタ、この世界に来たばっかりなんでしょ？　戦えるの？」

こ、故郷では空手を嗜んでいたので（震え声

「カラテ……聞いたことあるわ。邪神に魂を穢された狂える巨人の王を打ち倒した古の拳豪が使ってた武術ね・・・・・・アンタとんでもないもの修めてるんだ」

ごめんなさい、嘘です。体育の授業でちょっとやったことある程度です。

しょーもないホラを吹くな、と睨み付ける副官ちゃんに平身低頭で謝る。

っていうかなんだよ、初耳だよ。巨人殴り倒したって。俺も１回戦った事あるけど、一度は試運転必須だったとはいえクソ邪神に使う切り札を躊躇なく切るハメになった相手やったぞ。

王とか言ってたし、アレの上位互換を素手でやったとか頭おかしすぎて草しか生えな

い。

この世界での空手家のハードル上がりすぎワロタ。もはやＫＡＲＡＴＥやろソレ。ＳＵＭＯＵとかも存在しそう。

地球の武術が軒並みＢＵＪＹＵＴＵと化した魔界のような環境を想像していると、副官ちゃんの冷たい視線が刺さったままなので慌てて引き抜きにかかる。

まぁ、あれです。ＫＡＲＡＴＥは修めてないけどそこそこはヤれるつもりです。足は引っ張らないんで共闘オナシャス！アンナ先生！

長ぁい溜め息を漏らしながら、副官ちゃんは納得――はしてなさそうだが諦めてくれた。

私にはアンタも護る義務（やくそく）があるんだけどね……なんて小さく愚痴ってるけどなんやそれ、おかしいやろ。

なんで副官ちゃんが俺を守るんだよ。それはアカンやろ。ありえちゃダメなヤツゥ！

どんな約束か誰としたのかはしらんが、普通にダメなのでスルーする。アーキコエナイキコエナーイ。

強引に話題転換しようと口を開こうとして、警戒を続けていた知覚網に引っ掛かった感触を覚えた。

来ちゃったかー。随行員さん達がくるまでヒキっててくれたら楽だったんだけど。

静かに立ち上がった副官ちゃんに合わせ、俺も立ち上がって最後に武装をささっと目視点検。

焚き火が不自然に揺れ、ボ、ボッ、と消えそうな吐息を吐き出す。

生ぬるい風――いや、これは鬼気か――が吹いて頬を撫で上げて過ぎていった。

やがて、消えかけの炎から延びた影が不自然に伸び上がり――一つの人影を生み出した。

「――貴様らか。あの下らん仕切りを作ってくれたのは」

不機嫌そうに吐き捨てて影の中から立ち上がったのは、ダークブルーの髪を伸ばした青白い顔の男だ。

貴族が着てそうな装いに長いマント、血の気の通ってない顔と口元から伸びる発達した犬歯。

どうみてもきゅ「よりにもよって吸血鬼(ヴァンパイア)……！」です副官ちゃんアンサー本当にありがとうございました。

吸血鬼(ヴァンパイア)は俺に視線を寄越して０．５秒で通過させると、副官ちゃんにピタリと固定さ

せて「ほう」とか言って笑う。
「中々に見目の良い娘ではないか。こんなひなびた村で餌同然の連中を見繕う必要は無くなったな」
　上から下まで舐めるように視線でセクハラして上機嫌に笑う男に、副官ちゃんは心底嫌そうな顔をして腰を落として構えた。
　じりじりと距離を図りながら、隙を伺いつつ男に疑問を向ける。
「なんで吸血鬼（ヴァンパイア）が人間種の都市圏にいるのか――いや、それよりも魔族領の公爵様はご存じなのか聞きたいんだけど？」
　その言葉に一転して不機嫌そうに歯を剥き出すと、男の身体から威嚇するように鬼気が垂れ流された。
「我が身はあのような不遜な女に仕える者ではない、違えるなよ娘。私は尊い御方――真の神に選ばれた真なる貴族よ」
「やっぱり信奉者ね……」
　はた目にも分かる自尊心を溢れさせながら傲然と胸を張る吸血鬼（ヴァンパイア）に、副官ちゃんは予想通り、と顔を歪める。
　まぁ、人間種とそこそこに良好な関係を保ってるあの女公爵の配下なら、わざわざ人間の村で隠れて食料になる人物を物色するわけないわな。

自然、大戦で邪神側についた負け犬共の一人ということになる。
それはそれで疑問が残るけどな。こんなやつ大戦末期の最後の戦いでも見たことないんですけど。
単に俺が見てない、覚えてないという可能性だって無い訳じゃないが、独自で情報あつめた上にシアのコネまで借りて揃えた優先してナイナイすべきリストに載ってた記憶もないんだよなぁ。本人曰く、爵位持ちの吸血鬼（ヴァンパイア）なのに。
アレ互いに総力戦だったやろ。爵位級吸血鬼（ハイ・ブラッド）が参加しないとか敵側でも味方側でもありえねーよ。
ふむ……ようは、アレか。窓際族か。
思わず呟いた瞬間にこちらを見ないままに吸血鬼（ヴァンパイア）の腕が上がり、手の平がこちらに向けられた。
「意味は分からんが侮辱したのは知れたぞ、羽虫。死ね」
言葉と共にマントから伸びた影がムチのようにしなり、俺の頭に向けて横薙ぎに振るわれる。
切れすぎワロタ。見た目若いのに更年期かな？
魔力の放出動作で動きは読めていたので、軽く屈んで避けると生白いイケメン顔が驚愕と共にはじめてまともに向けられた。

うーん、この実戦経験皆無感。

目の前に臨戦態勢の騎士がおるのに視線を切る阿呆がどこにおんねん、おったわ、目の前に。

月光を受けて煌めく銀髪が翻る。

吸血鬼（ヴァンパイア）が自分を視線から外した瞬間に、副官ちゃんは一瞬で距離を潰して肉薄していた。

両の掌には既に愛用のダガーとショートソードが握られ、銀閃を残して敵の首元に振るわれる。

慌てて飛びすざって距離を取ろうとした真の貴族様（）の首に、浅い朱線が奔った。

傷をつけられた事に憤怒の表情を見せる吸血鬼（ヴァンパイア）が、罵倒でも浴びせようとしたのか口を開き――そこにすらりと伸びた脚が跳ね上り、靴底が顔面にめり込む。相変わらず騎士なのに足癖が悪いね副官ちゃん。

並の魔獣なら頭蓋を砕かれる蹴りを喰らい、ボウリングのピンよろしく撥ね飛ばされた痩躯は丸太柵をへし折って地面に叩きつけられ、数回バウンドしてやっと止まった。

追撃を狙って俺と副官ちゃんが走り寄ろうとすると、鬼気を纏う魔力が吹き荒れて四方八方に伸びた影が男の周囲を薙ぎ払う。

威力だけは大したものなので、脚を止めて回避に専念。その間に立ち上がった吸血鬼（ヴァンパイア）

の顔は、なんかもう今にも憤死しそうなくらいに歪んでつり上がっていた。
「き、貴様らぁぁぁぁぁっ、殺す！　羽虫の方は挽き肉に変えて地虫どもに喰わせてやる！　女ぁ!!　貴様は手足をもいで這いつくばって死を懇願するまで餌として嬲ってやるぞ!!」
頬骨砕けて鼻もひん曲がったまま、ご自慢の牙までへし折れてるのによく流暢に罵倒がでてくるもんだ。言ってる間にみるみる再生してくのは流石吸血鬼（ヴァンパイア）って感じだが。
はいはいワロスワロスってなもんで、流してあげる俺だが副官ちゃんは俺ほど優しくなかった。
「――ハッ、だっさ。その体たらくでよく爵位級吸血鬼（ハイ・ブラッド）なんて胸を張って言えたもんね」
辛辣ゥ！
普段の元気溌剌！といった表情とは真逆の、静かな闘志を湛えた面差しのまま、口からは割とえげつない煽りが飛び出した。
面と向かって侮辱された経験が少ないのか、吸血鬼が一瞬呆けた様なツラを見せたあと、凄まじい形相になる。
「――!!　貴さ」
「私は！　――あの大戦で吸血鬼（ヴァンパイア）と肩を並べて戦ったこともある」
怒りか、某かの決意か。

相手の罵倒を遮って叩きつけられた言葉には、幾多の戦場を駆け抜けた騎士の重みがあった。

少なくとも、何か喚こうとした生白イケメンが黙る程度には。

「爵位級吸血鬼（ハイ・ブラッド）は高慢ちきが多いって聞いてたけど、その通りだった。傲慢で、鼻っ柱が高くて、偉そうで」

アンナ先生、それ大体全部同じ意味じゃないでしょうか？

「――人の１０倍プライドが高くて、人の２０倍の責務を果たそうとする。そんな奴らばかりだったわ」

愚痴のように続いたそれは。

失われた、或いは遠く離れた戦友を称え、悼む、戦士の声だった。

「口を開けば貴族の義務、貴族の義務ばかりで。それに殉じていったあいつらと、こそこそ隠れて罪のない村人を餌扱いして物色してるお前が、同じ？　笑わせないでよ」

両手に携えた刃を握り直し、決然と敵へと向ける姿は凛として、彼女が憧れる彼女の上司を思わせ。

「帝国麾下、邪神討伐部隊《刃衆（エッジス）》アンナ＝エンハウンスよ。叩き潰してやるから掛かってきなさい藪蚊野郎（モスキート）」

……どうにも、俺の周りにはとびっきりの女傑（イイ女）しかいなくて困る。綺麗で、眩しくて

――その魂は輝くようで。

直視するのが、やっぱつれぇわ（白目

なにも起きないわけがない（後編）

「こ……の、アバズレがぁっ……！」

副官ちゃんにヤブ蚊扱いされたのが余程腹に据えかねたのか、歯を剥き出して食い縛りながら視線だけで呪い殺せそうな目付きで彼女を睨み付ける吸血鬼（ヴァンパイア）。こいつらの種族にとってはほぼ最大級の侮辱だから当然といえば当然か。

戦闘経験は殆ど無さそうだが、副官ちゃんの所属部隊のヤバさ位は知ってたらしい。怒りも殺意も山盛りの眼光のまま、表情に明らかに強張り――警戒感が滲んだ。事実、直ぐにでも襲いかかってくると思っていたが離れた距離を詰めてはこない。

ならこっちから行ったろ！　はいポーイ！

小瓶に詰められた聖水――結界強化に使った触媒の残りを投擲する。

吸血鬼（ヴァンパイア）の視線が一瞬小瓶を追うが、取るに足らないと判断したのか無造作にマントが蠢いてそれを打ち落とそうとして――。

――追加でポイした小瓶と先に投げた物が空中でぶつかり、派手に中身をぶち撒けて降り注ぐ。

「うぐぉ!?」

マントや吸血鬼自身に降りかかった聖水が白煙をあげ、予想を遥かに超えるダメージに奴は苦悶の声をあげる。

おう、効いとる効いとる。立ち回りが粗雑に過ぎるとはいえ、まがりなりにも爵位級吸血鬼（ハイブラッド）だ。通常の聖水なんぞ多少の牽制になれば上等すぎる、といった程度なんだろうが。

聖女様の聖性が籠った代物は流石に堪えるみたいだな。まぁ当たり前か。

作り方は簡単だ。

まず、出発前に渡された守り刀を用意します。鞘からは抜いておきましょう。

村人に大きな桶を用意してもらいます。なるべく大きな物がよいでしょう。

水を桶一杯に張ったら市販の聖水を混ぜ、撹拌します。

そこに守り刀を沈めます。制作者のシアとリアに感謝の気持ちを忘れずに。

桶の蓋――なければ厚手の布でも構いません。蓋に類する物の裏側に市販の聖水の残りを塗り、しっかりと桶に封をしましょう。

数時間経てば――なんということでしょう！　ただの極薄の聖性の混ざった水が、刀身から漏れ出した聖気を受けて極上の聖水に！

うん。物は数打ち、中身はギチギチに聖性を注ぎ込まれた準聖遺物擬き、というアンバランス過ぎる逸品だからこそ出来た反則技ですわ。

とはいえ、こうしてメチャクチャ役に立ってるので、やはりお守りとして渡されたのは正解だったのだろう。あいつらには頭が上がらなすぎて地面にめり込ませるくらいしか選択肢が無くなる（確信

殆どは結界の強化に使ったが、元の量が大桶一杯分だ。小瓶に小分けで詰めれば結構な数になった。

相手が邪神共の次くらいには特効対象の吸血鬼――しかも邪神の信奉者として加護を受けているから効果倍率ドン！

俺の聖水投擲は１０８式まであるぞオラァ！

おかわりをポイしながら、副官ちゃんと挟み込むようにして背後に回り込もうとする俺に心底ウザそうにガン飛ばしてくる生白イケメン。

「この羽虫がぁっ！　《刃衆（エッジス）》の小娘の陰に隠れて屑の様な真似しかできんのかぁっ!!」

ヤブ蚊に羽虫扱いとかこれもうわかんねぇな（煽り

実際、今の俺の戦い方は最初期――シアの後ろから全力で相手に嫌がらせを繰り返す直接戦闘力皆無だった頃のスタイルだ。これを戦い方と言って良いのかは分からんが。

シアお手製の聖水を投げ、投げ、たまにナイフとか拾った石まで投げ、挑発が効きそうな相手なら煽りいれながらそこらに落ちてる馬糞牛糞だって投げ。

敵がブチ切れてシアから意識を外したところで、俺が殺される前にシアが大火力を叩

き込む。

途中から俺が多少なりとも戦えるようになったのと、出会った当初の塩対応が軽減されたシアが囮戦法を嫌がり出したことで自然と消えていったスタイルではあるが、おかげで投擲技術だけは早々に実戦レベルになった。

久しぶりにやるが、うん。すげぇ馴染むわ！　必要に駆られて直接戦闘の術を手にしたけど本来の俺ってこんなもんよねフゥーハハハフハハ！

俺の安い挑発にあっさりと副官ちゃんへの警戒を下げてこちらに腕を向ける吸血鬼（ヴァンパイア）。

マントから伸びた影が無数の槍のように突き出され、地面を抉りながら足元から俺を串刺しにしようとする。

真横にステップしながら、これにも聖水をバシャー。日に照らされた影のように萎んで消えた槍群の消失部分に身を捻り込む。

その間にも副官ちゃんは吸血鬼（ヴァンパイア）と斬り結び、肩口を深々と抉った。

それに怯みながらも、再生力に物をいわせて強引に踏みとどまり、鉤爪のように伸ばした指の爪が騎士服に包まれた身体を引き裂こうとする。

その頭上に聖水を投擲するが、流石に警戒されていたかあっさりと影に打ち落とされて不発。

代わりに小瓶に続いて最速で抜き打ち投げしていた投擲刃（スローイングダガー）が、延髄辺りにスコンと

刺さった。
威力も無いし、特に祝福もされてない、ただのナイフだがそれでも狙う場所を選べば一瞬動きを鈍らせるくらいは出来る。例え再生しようが人型なら尚更に、だ。
そして、その一瞬があれば副官ちゃんには十分だった。
振り下ろされた爪と掬い上げるように振るわれたショートソードが交差し、打ち負けた爪が斬り飛ばされた指ごと宙を飛ぶ。
身を低くしたまま副官ちゃんは吸血鬼（ヴァンパイア）の懐に飛び込み、そのどてっ腹に強烈な肘を打ち込んだ。
撃ち込まれた身体が吹き飛ぶ瞬間に着弾点の肘が内側に捻られ、連動して返した手首によって握ったダガーが下腹へとぶっ刺さる。
身も世も無い絶叫が吸血鬼の喉からあがった。
本来なら最初の蹴りと同等に吹っ飛ぶ筈が、股間ぶっさして強制ブレーキだ。そら痛い。
タマ蹴られたときの痛みは他の箇所をつねったりした痛みで紛れると聞いたことがある。じゃけん、聖水おかわりで全身に痛みを散らしてあげましょうねぇ～。
副官ちゃんごと水濡れにするつもりで小瓶を複数投げつけ、追い聖水をキメる。おうタマの痛みから救ってやるよ。感謝して、どうぞ。

「……!……!」

夜の農村に小瓶が割れる音が連続で響き渡り、沸騰した蒸気のように白煙が吹き上がる、悲鳴すらなく崩れ落ちる吸血鬼（ヴァンパイア）。

副官ちゃんが下腹から引っこ抜いたダガーをくるりと手の中で回し、逆手に持ち変えてトドメといわんばかりに心臓を狙って突きをブチ込こもうとして。

白煙の向こうで、血の様な色をした瞳が爛と輝いた。

死の間際に立たされてようやっと形振り構わなくなったらしい男が、自身を巻き込む勢いで影から触手染みたものを放出し、一気に広範囲を薙払う。

先程迄の影とは似てるが、違う。こりゃ邪神の加護によるものか。ひでぇ代物だ、俺の視覚によろしくない。

投擲が有効なギリギリの距離を保っていたこちらにも多少だが触手の暴威が向けられ、低い体勢のまま身を捌いてそれの隙間を抜けた。

一方、ほぼ密着距離だった副官ちゃんだが。

彼女は吸血鬼（ヴァンパイア）の放つ死に物狂い——窮鼠の気配を感じとると、即座に攻撃を中断。

膝を突いた吸血鬼の肩を蹴って、空中でとんぼを切っていた。

触手の範囲と密度は大したものだったが、高さだけは其ほど無かった。それを攻撃が来る前に感覚で察知する辺り、俺とは違う本物の前衛職の凄みを感じるね。

とはいえ、空中では良い的なので俺が隙を潰す必要がある。
防がれるの前提で聖水を投擲。攻撃後は殆どが影に沈んだ触手だが、残った数本が個別の生き物のように蠢き、小瓶を全て撃墜する。だがこれで良い、着地までの僅かな時間は稼げた。
自分の頭上に差した影で、吸血鬼（ヴァンパイア）はやっと空中の副官ちゃんに気づいた。気付くのが流石に遅すぎて草。スペックは確かに爵位級吸血鬼（ハイブラッド）に相当するのに、こうまで戦闘経験の無さが露骨に出てるのを見るに、女公爵の下にいた頃は余程箱入りだったのかね。
咄嗟に顔を挙げた窓際吸血鬼の顎に、鋼で補強されたブーツの爪先が捻り込まれる。トドメを刺し損ねた分の魔力を脚に回して宙を舞った副官ちゃんは、その強化された脚力を存分に生かして着地前に相手の顔を豪快に蹴り上げた。
血飛沫と砕けた歯を撒き散らしながら、縦に5回転くらいして吹き飛ぶ元イケメン。
今？　顔面大惨事だよ。
十分に練られた攻性の魔力が籠った一撃だ、吸血鬼（ヴァンパイア）の不死性からして死にはすまいが早々に回復もしないだろ。
「は……馬鹿、な……人間（エサ）2匹風情に、私が……なぜ」
ガクガクと小刻みに痙攣しながら、這いつくばっている己の現実を否定するように言葉を溢す血みどろフェイス。

どうでもいいけど、下顎砕けて歯も殆ど吹き飛んでるのに相変わらず流暢な発音やな。特技ですか？

油断せずに仕留めようと、残った聖水と投げナイフを構えてゆっくりと距離を詰める。

対して副官ちゃんは蹴りを放った位置から動かず、苛立ったように短く告げた。

「遅い」

ギリギリと締め上げるような怒気と相反するような静かな闘志。

それにまともに晒された半死半生の吸血鬼（ヴァンパイア）は、怯えたようにビクリと震えた。

「咄嗟の判断も、魔力の展開も、戦いで腹をくくるのも」

普段の彼女を知る者からすれば冷たさすら感じる口調だが、押込められた赫怒は抑えつけた分、強烈な圧となって漏れ出ている。

「基礎能力の高さだけに頼りきって何一つ練られてない、どれ一つとして研がれていない」

激発するのを堪えるように、副官ちゃんは二剣の柄を軋む程に握りしめていた。

この程度の力を振りかざして、村の人たちを餌扱いして殺そうとしたのか？

この程度の死地で竦む奴が、己の戦友を差し置いて、真の貴族なんて嘯くのか？

言いたい事は色々あったんだろう。

だがそれを言葉にする価値も無いと判断したのか、彼女は静かに、明確に構えを変えた。

猫科の猛獣の様に足幅を広く取り、体勢は低く、刀身は傾げた身体の脇へ。

「ふざけんな、ド三流」

胸の怒りを吐息と一緒に吐き出すように、一言だけを吐き捨てて突貫しようとする副官ちゃんに自身の☒☒死☒☒を強烈に幻視したのか、吸血鬼（ヴァンパイア）は短い悲鳴を挙げると自身の影を広げ、その中に手を沈み込ませた。

影でも渡って逃げる気か、と少々慌てたがちと違う。

ずるり、と半身を引きずり出されたのは、一人の女性だ。

質素な衣類に、ひっつめの赤髪、意識を失っているのかぐったりと力なく手足は投げ出されている。

――！　おい、ふざけんな。その人は。

俺にひっついていた坊主が、最後に見たときに腰に抱きついていた女性――坊主の母親だった。

既に手頃な補食対象を自身の魔力でマーキングでもしてたってのか。

それにしたって、結界で保護された人ひとりを手元に引っ張り出すなんぞ、相当な消耗を強いられるだろうに。

「こ、この女の命が惜しいのならば、今すぐ武器を捨てて膝をつけ!!」

うーわ（呆れ

なけなしの余力をぶっこんでやらかすのが人質作戦かよ……今の副官ちゃんにニトロでもぶち込みたいのかコイツ。

とはいえ、腹に据えかねているのは俺も同じだ。やっぱ邪神（クソ）を信仰する奴とか同じく糞だわ。

「……」

黙したままの副官ちゃんの瞳に、怒りと闘争心以外にも冷々とした何かが灯る。

打倒すべき敵ではなく、駆除すべき害として認識を移行したのか。

表情もストンと抜け落ちて、実に怖い。

《刃衆（エッジス）》の名を聞いて警戒しておきながら、そこのＮｏ．２をガチ切れさせるとか実は吸血鬼（ヴァンパイア）じゃなくて自爆芸人か何かなんだろうか。

「は、ははっ。早く武器を捨てて這いつくばれ！　この餌の手足が落ちるのを見たいのか!?」

動かないままだが、武器を捨てもしない副官ちゃんに引きつった笑みを向けながら再度武器を捨てるように促す残念吸血鬼。

それでも彼女は動かない。

ふむ。こりゃ待ってるな。初めて共闘する根無し草の転移者を随分と信頼してくれるもんだ。

それじゃ、ご期待に沿う様になんとかしてみようかね。

吸血鬼（ヴァンパイア）の脅しに従うように、ゆっくりと両手を挙げる。

視界の端にそれを納めた奴が、喜悦に顔を歪めながら副官ちゃんに貴様も武器を捨てろ！　とわめき散らすのを尻目に、ゆっくりと小瓶を取りだし、見せつけるように後ろに一つ、一つと放り捨てていく。

大人しく武装解除を進めるように見える俺より、武器を捨てない副官ちゃんへと警戒の度合いが傾いていくのを確認しながら、じっくりと相手を観察。

最後の一つを放り捨てる直前、業を煮やした吸血鬼（ヴァンパイア）が乱暴に人質の髪を掴みあげた。

それを見て副官ちゃんから怒気が吹き上がり、血みどろの大惨事顔面に張り付いた引きつった笑いは一瞬で凍る。

副官ちゃんと人質。二つに完全に意識が割かれた瞬間、小瓶を放り捨てた手を戻す動作で腰の得物を指に引っ掛けた。

よーし、気付くな気付くなー。そのままビビってろ。

武装解除を終えて再び手を挙げるように見せ、指の裏手に挟んだソレを、指と手首だけを使って静かに上空へと放る――っしゃ、成功だ。

くるくると回転しながら、闇夜に紛れて高く舞うソレに。

力を殆ど使い果たし、副官ちゃんの放つ威圧に飲まれかけている吸血鬼（ヴァンパイア）は気付かない。

――3

「ならっ――ならばっ、この餌の耳が落ちるのを指をくわえて見ているがいいっ！　次は目、次は指だ！　コレが欠け者になるのは貴様のせいだ！　女ぁ！」

――2

脅えた己を無かったことにするように、殊更に勝ち誇るように喚いて爪を人質に向ける。

――1

「守るべきを守れぬ騎士であることに耐え切れなくなれば、即座に剣を捨てて這いつくばれ！　慈悲を――！」

――0、はいドンピシャ。

トン、と。

軽い音を立てて人質の女性が囚われている影に、一振りの短刀が落ちる。

見た目はただのナイフ、中身は聖女様謹製のエグい退魔の刃であるそれは、吸血鬼（ヴァンパイア）の――引いてはその奥に蠢く邪神の加護（呪い）を感じとり、その聖性を一気に放出した。

それはさながら、音の無い閃光手榴弾（フラッシュ・バン）か。

圧倒的な光量が刀身から飛び出し、周囲を一時的に白く染め上げる。

俺たちにはただの強烈な光だが、吸血鬼（ヴァンパイア）にとっては真昼の太陽に等しい。足元に拡げた影は一瞬で破裂するように消え失せ、人質が放り出される。

坊主の母ちゃんの髪を掴んでいた腕は、炸裂する光に一番近かった為か消し飛び、全身を聖光で滅多打ちにされて大きくのけ反る奴の前に。

光の壁を突き破り、副官ちゃんが一気呵成に踏み込んだ。

めっちゃ速い。その直線速度は、彼女の上司――隊長ちゃんと同じ領域に達している。2年間の鍛練の賜物ってやつか。

ロクに反応すら出来ない吸血鬼（ヴァンパイア）は、その瞳だけを大きく見開かせ。

「ブッ散れ」

端的に告げられた死の宣告は、二刀の形となって突撃の加速のままに心臓を突き破り、左右にかき開くように振るわれる。

心臓ごと胸部から両断された上半身が、先程の短刀のようにくるくると回って月を背後に浮かび。

思い出したように血を吹き上げて崩れ落ちる下半身を尻目に、副官ちゃんは人質の女性が地面にたたきつけられる寸前、それを抱き止めた。ナイスキャッチ。

――☒☒信奉者☒☒の吸血鬼（ヴァンパイア）、討伐完了だ。

いやぁ、なんとかなるもんだわ。本来なら爵位級吸血鬼（ハイブラッド）にこの戦力で無傷で勝利とか無理ゲーだし。

遭遇したときは最悪を想定して腹を括ったが、蓋を開けてみれば副官ちゃん単独でも普通に勝てていただろう相手だったのは不幸中の幸いか。

いうて、俺のやったことなんて嫌がらせに聖水投げつけてるだけだったけどね。戦力（笑）

数秒の滞空時間を経て地べたに叩きつけられた吸血鬼（ヴァンパイア）の骸に、一応の警戒を払いながら人質だった女性を抱えている副官ちゃんに歩み寄る。

で、坊主の母ちゃんは無事かい？　なんともない？

「ざっと見ただけだけど、気絶してるだけだと思う。幸い、噛まれた痕跡も無いよ」

女性の状態を軽く確認したアンナ先生から、なんとも安心するお言葉を頂いた。

そいつは何より。もし噛まれているなら、治療には高位の聖職者が必須だ。拘束して聖都まで担いでいくハメになるからね。

坊主も一安心だろう、と思っていると広場の方からバタバタとせわしない足音が聞こえてくる。

「――かあちゃん!!」

戦闘が終わって静まり返った夜に響いたのは、甲高い子供の声だ。
母親譲りであろう赤毛を振り乱して、半べそをかきながら走りよってきたのはいうまでもなく、あの坊主だった。
――悪ガキめ、建物から出るなと散々言い含められただろうに。
大人達を振りきって飛び出してきたんか。
タイミングが悪けりゃ、人質が二人になっていたかもしれん。
鼻を鳴らして嘆息する俺に、副官ちゃんが肩をすくめて笑う。
「まぁ、仕方ないよ。多分、目の前でお母さんが影に呑まれて消えちゃったんだろうし――ちゃんと守れて、良かった」
……せやな。結果オーライか。
副官ちゃんの腕に抱かれた意識のない母親に大泣きしながらとりすがるチビすけに、寝てるだけだから安心しろや、と声を掛けて赤髪をかき混ぜてやろうとして。
――地べたに転がっていた骸が、ゆっくりと身を起こすのが視界に入って咄嗟に坊主の襟首を掴む。
俺が坊主を引っ掴んで横っ飛びに身を投げ出すのと、副官ちゃんが母親を抱えて全力

で後方に跳躍したのはほぼ同時だった。
そこに、影――いや、粘性を湛えた泥のような黒い『ナニか』が、叩きつけられる。
強酸でもぶちまけたように嫌な音を立てて地面が灼け、飛び散ったソレが辺りの草木を枯らす……いや、侵食した。
……あぁ、この現象といい、背筋を這いずり回るような重圧と嫌悪感といい、うんざりする程覚えがあるわクソッタレが。
吸血鬼（ヴァンパイア）の両断された胴の下から、泥がズルリ、と滑り落ちるように出てきて、無数の触手になってその上半身を持ち上げる。
「あｑぎあえｒほばふぉいｈ……エ、サ……ヂェｊｖっっｔｙゴロ、ス、ヒヒッ」
死にかけでも流暢だった発音はどこへやら、不明瞭な雑音が混じったような呻き声をあげながら顔を上げた吸血鬼（ヴァンパイア）に、表情は無い。
正確には、顔に空いてる穴の全てから泥が溢れ出て、表情なんてものを浮かべる隙間は存在していなかった。
何が起きたかなんて明白だ。
邪神の欠片の発芽。容量を遥かに越える呪を注ぎ込まれていた身体が、当人の死後に加護（呪い）に乗っ取られて暴走しとる。
……窓際族ですらない、使い捨ての爆弾みたいな扱いだったか。

本来の用途として使われる前に戦争が終わった、ってオチかよ。分かりきったことではあるがロクでもねぇ連中だ。

見ているだけでＳＡＮ値直葬な光景に、抱え直した坊主はとっくに気を失っている。精神の防衛反応としては至極真っ当だ。パニックになって暴れられるよりは随分マシだしね。

とにかく、一旦距離を取ろうと魔力を脚に巡らせようとして――泥の吹き出る穴となった瞳と、目があったような気がした。

クッソが!?　魔力の放出に反応するタイプかよ！

どぷ。と間抜けな音を立てて、下半身代わりの泥から無数の触手が吐き出される。

先刻の戦闘で振るわれた影と同じで軌道は丸わかりだが、単純に速さが桁違いだった。

今の俺じゃ無理だ、捌き切れん。

このままだと坊主がただでは済まない。そう判断して力一杯その小さな身体を副官ちゃんの方へと放り投げ――。

そこに触手が殺到し、人様の胴体と手足に散々にブチかましてくれた。

かろうじて急所は避けた。が、咄嗟の魔力防御はあっさりぶち抜かれ、衝撃で身体が軋み、意識が飛びそうになる。

触手が鋭利さや貫通力を求めた形に変形していなくて助かった。最悪、達磨になってるトコだ。

胃から競り上がってくる嘔吐感をこらえながら、なんとか受け身をとって地面を転がる。

大分吹っ飛ばされたおかげで距離は離せたが、状況はよろしくない。

副官ちゃんを見れば上手いこと坊主を受け止めてくれたようだが、先の一撃で俺との距離は随分と開いてしまっている。

おまけに彼女の後ろには意識を失った親子が二人。庇う以外の選択肢を持たない副官ちゃんは迂闊に動けない。

聖水が残っていれば最大級の特効を発揮して、牽制として役に立ってくれただろうが既に品切れ。

朝まで粘れば本体である吸血鬼（ヴァンパイア）の骸が耐えきれずに消滅し、芋づる式に泥も消えるだろうが、夜明けはまだまだ先だ。

――どうする、どうすればいい？

考えろ。何かある筈だ。何か。

とにかく合流しようと3人の元へと駆けながらも、焦燥のままに思考を走らせるが、吸血鬼（ヴァンパイア）――いや、邪神の極小の欠片である泥は俺が妙案を閃くのなんて待ってはくれな

かった。
カクカクと糸繰り人形みたいな動作で、骸の首が副官ちゃんとその後ろにいる親子に向けられる。
「gでよじあｒｈじょいひｈくぇｊ　オン、ナほペｒじぇｑ」
「　　ジ　ネ゛　　」
泥に埋め尽くされた筈の顔が、ニタリ、と歪み。
俺に吐き出されたものとは比較にならない量の触手が、奴の腹から飛び出した。
まるで横向きに落ちる黒い滝だ。
本来なら回避に専念するであろうソレに。
後ろの二人を守るために、一歩も引かずに副官ちゃんは二刀を構える。
脅えなんぞ微塵もない。ただ、決死の覚悟だけを相貌に浮かべ、黒い瀑布を迎え撃つのが見えて――。
――すまん、無理だ。

俺は、その瞬間に誰に詫びたのか。
泣かせたままに離れたのに、守り刀まで用意してくれた二人にか。
再三に渡って忠告してくれた女神様にだったのか。
ひょっとしたら両方だったのかもしれないし、他にもいたのかもしれない。
結局、俺は勝手に好きにやって勝手にくたばった馬鹿のまんまで。
自分が眩しいと、綺麗だと、勝手に焦がれた魂(誰か)が傷つくのを、どうやっても我慢できない糞拗らせ野郎なのだ。
その癖、一番に焦がれている魂(やつ)を泣かせて、その輝きを曇らせているんだからね。マジで救えねぇ。死ねばいいのに。
そんでも。
こんなどうしようもない、ロクな輝きも持たない、シケた石ころみたいな魂の俺でも。
それでも、この瞬間。俺が、俺だけが手を届かせる事が出来る奴がいる。
なら、迷う必要は無かった。

――《起動(イグニッション)》。

単文の起動詠唱。

女神様に身体を再構成されて以降、俺の魂の内で眠ったままだった武装（相棒）を叩き起こす――！

――俺が女神様に与えられた下駄――俗にいう転生特典は二つだ。

視覚レベルにまで認識強化された魂の感知。

精神への外部からの干渉や汚染、負荷への超耐性。

後から気づいた事ではあるが、多分、シアのループに同道する適性なんて欠片も持たない俺の為にわざわざ耐えうる為のものを選んでくれたんだと思う。

それに関してはマジで感謝しかないが、如何せん両方とも直接的な戦闘力には殆ど関係が無いのが難点だった。

だから俺は探した、俺に致命的に足りないソレを補うための武器を。

本来なら俺が１００万回挑んだって足元にすら届く筈もない怨敵（邪神）の喉笛に、牙を届かせる方法を。

これが、その答えの一つだ。

《報復（ヴェンジェンス）》。

正式な銘を持たず、ただ通称でそう呼ばれた魔鎧は長らく続いた邪神戦争の負の遺産——その一つに数えられる。

制作者は大戦で全てを失った名工のドワーフとも、万の知識を邪神への復讐に注ぎ込んだ魔導師とも言われ、果ては邪神への報復心に呑まれた転生者の魂が、鎧に乗り移って生まれた産物なんて与太話もあるくらいだ。

圧倒的な自己強化能力を主軸に、戦闘機能継続の為の負荷分配、直接殺傷した相手からの魔力奪取、ｅｔｃ。

使用者の精神を蝕み、血肉を食い潰す代わりに、文字通り人外級のスペックを与えてくれる特級呪物。

憎悪・復讐・殺意で構成された、邪神への悪意を凝り固めたようなその武装は、俺にとっての天恵だった。

本来なら一番のデメリットであろう、使用者への精神の侵食。

それを俺の特典ならば殆ど無効化できるからね。

シアもリアも、なんなら殆どの知り合いは「そんな呪いのアイテムはとっとと捨てろ」と口を揃えて言ってきたものだがとんでもない。

こいつのお陰で、シアが救いたいと望み、俺が焦がれた多くの魂達（者）に手が届いた。

こいつがあったから、絶対に殺すと、この世界から消してやると常々思っていた邪神（クソヤロウ）へと届く算段がついたのだ。

周りがどう言おうが、こいつは俺にとって必須の存在で、最後の最期まで共に戦った相棒だ。

鎧ちゃんマジラブリーマイバディ、ｐｒｐｒしたい。すこ。ってなもんである（真顔）。

久方ぶりの起動にも、鎧ちゃんはスムーズに応えてくれた。

――女神様の言っていた反動のせいか、稼働率自体は最低限――籠手部分のみだが、それでも十分だ。

腕に励起した魔力導線が喰い込む――主観的には数日ぶりなのに酷く懐かしく感じる感触に、頼もしさしか感じない。

副官ちゃんに迫る、クッソ汚い触手の群れに手を向け、知覚を開始。

起動時に額や頬、身体のあちこちが裂ける感触があったが、俺にも鎧ちゃんにも動作に問題はない。

触手が副官ちゃんに届く直前、掌握が間に合ったので根刮ぎソレを掴む。

そのまま流して、地に叩きつけた。

空中で軌道を曲げて地面の汚い染みになった触手群に、副官ちゃんは一瞬呆気に取られ――次いでこっちを見て驚愕した。

――まぁ、気づくよね。俺が俺だって。

今更だ。

鎧ちゃんを使うと決めた瞬間に、腹なんて括ってる。

不義理の謗りも、身勝手への罵倒も、全部受けるわ。なんならジャ○プなんぞ無くたって構わない。刺されるの上等、彼女にも――あいつらにも、その権利がある。

――でも、その前に殺ることがあるんだよなぁ。

一足飛びに跳躍して、副官ちゃんと泥の骸の間に割って入る。

膨大な魔力を垂れ流してる俺、というか鎧ちゃんに泥は即座に反応し、今までで最大級であろう量の触手が水音をたてて飛び出し、槍のように、鞭のように、こちらを覆い尽くす勢いで振るわれた。

加速された知覚で全て捉えると、籠手に包まれた両腕で螺旋を描き、その動作で渦を巻くように一纏めにして再度触手を地面の染みに変える。

これも、鎧ちゃんのお陰で手に入れた技術の一つだ。

歴代使用者の有用な技術を現使用者に焼き込む(インストールする)機能は、俺の乏しい才では殆ど使えず、意味の無い物だったが一つだけ有効な代物があった。

《三曜の拳》と呼ばれるその技術は、所謂異世界特有のマジカル武術だ。
力の流れ――魔力でも聖気でも、生命エネルギーでも、元は魂から派生する根っこは同じモノ。
ざっくり言えばこれを知覚し、特定の方向性を持って操作する技術や。
本来なら、これだって俺には到底手の届かない――ごく一部の達人とかそういうジャンルの連中が修行の果てに手にする業なんだろう。
でも、俺には特典その1、視覚レベルにまで認識強化された魂探知がある。
魂の放つ様々な力の波動の知覚という、最初の難関をほぼ無条件でクリアした事で、粗だらけの下手糞ではあるが真似事くらいは可能になった。
嘗ての鎧ちゃんの使用者と違って、基礎くらいしか使えないけどな！
俺のレベルキャップが糞低いからね、仕方ないね。
触手を全部流してやったというのに、懲りもせずに再び腹からゴポォして汚いものを飛ばしてくる泥に向かって、俺は一直線に突き進む。
こちらに雪崩れ込んでくる無数の黒い流線を《流天》をもって掴み、流し。
打ち払った際に鎧ちゃんが『喰った』魔力を《地巡》で大地に巡らせ、浄化。正常な魔力として己の身体へと再循環させ。
蓄積された魔力を《命結》でもって結び、拳に命を宿らせる。

魂より零れた力は天を流れ、地を巡り、やがて命に結び付き――又魂へと。
天・地・命。
是、三曜を以て魂と為す――！
正面から触手の津波を捩じ伏せ、拳を泥の中心部へと叩き込んだ。

打点の中心からさざ波の様に衝撃が伝わり、一瞬の後、泥は力を失った様に、ただの液体になって地面にぶち撒けられる。
邪神の欠片に呑まれた哀れな吸血鬼（ヴァンパイア）は、朝を待たずにその骸を灰に変え、消えていった。
なんとかなったか……クッソ疲れた……。
久々のまともな戦闘の緊張感から解放され、そのまま地べたに寝転がりたくなる。
が、そういう訳にもいかんのよね。
寧ろ俺にとってはここからが本番だ（震え声
スーッ、ハーッと。深呼吸一つして、ゆっくり後ろを振り返る。

「そう……そういうことね、そういうオチだったワケ」

そこには、泥なんぞ目じゃない夜叉がいた（白目

据わりきった眼で俺を見つめる副官ちゃんに、自然と背筋が伸びる。

今更言い訳なんぞ不可能だし、するつもりもない。

俺に出来ることは、怒れる鬼神様の沙汰を粛々と待つことだけや。でも怖すぎてう○こチビりそう。

「……一応、確認しといてあげるわ、《聖女の猟犬》さん。身体は大丈夫なの？」

あ、はい。疲労感は酷いけど、意外とダメージはないっぽいです。

女神様があれだけ言ってたんだし、最悪ここで終わるのも覚悟してたんだけど。

起動時こそ、あちこち裂傷が走ったみたいだが、その出血も止まってるし、痛みも殆ど無い。

なんやろ、古傷が開いてすぐ閉じた、みたいな。

鎧ちゃんと融合してた両腕も何時もみたいにザックザクになっとらんし、逆に不安になるレベルでダメージは軽かった。

自己診断した限りでは全然問題ない、という結論を伝えると副官ちゃんは一つ頷き。

「色々と言いたいことも聞きたいこともあるし、もう正直こんがらがってワケ分かんないけど」

輝くような笑顔を浮かべ、拳をゴキゴキッっと鳴らした。

「先ずは一発、殴らせろ」

ｄｓｙｎ！。

とんでもなく気合いの入った拳が腹に突き刺さり、俺はくの字に身体を折り曲げてお空へと吹っ飛んだ。

わぁ、おほしさま、きれい（白目

俺たちの戦いやその後の喧騒なぞ知ったこっちゃ無いといわんばかりに。

お月さまとお星さまは優しく夜の地上を照らしていた。

聖都へ走れ

最初は出会う気も、関わる気すらこれっぽっちも無かった。
戦線を押し込まれて狭まり続ける人類圏の中でも、比較的マシな後方都市で隠れ住んでいたときにたまたま噂で聞いたのだ。
――金色の聖女様が街に訪れる、と。
ちょっと見てみよう、と思ったのは単なる気紛れだ。
こんなクソみたいな、終末に片足突っ込んだ血生臭いファンタジー世界で。
赤の他人の為に血を流して、あまつさえ繰り返してるらしいイカれた奴がどんなもんなのか、顔を見てみるくらいはいいだろう、と。
万が一にも目に留まる事が無いように、遠目から人に囲まれているそいつを見て。
流石に遠すぎたか、と双眼鏡代わりくらいのつもりで、ロクに使ったこともなかった糞の役にも立たない特典を使って『視た』。
――圧倒された。

息を呑んだ。
その魂の大きさに、美しさに。傷ついているであろう心身をものともしない太陽のような輝きに。
世界にはこんなに綺麗なものがあったのかと、涙が出た。初めての経験だった。
だけど、その強烈な輝きを放つ、綺麗な魂はどこか疲弊してるように『視え』て。
本来の光を遮るように、薄い帳を何枚も掛けたように、どこか曇っているようにも思えた。
呆然としながら見惚れたまま、ふと思ったのだ。
――この帳を取り除けたなら、この曇りを晴らせたのならどんなに綺麗なんだろう。どれほどに輝くのだろう。
見てみたい。
どうしようもなく、見てみたくなった。叶うのなら、もっと近くで。
安易にあの神とやらの提案に乗ってこの世界にやって来て。
滅びが静かに迫りつつある人類に愕然とし、馬鹿げた妄想や主人公気取りの勘違い気分が吹き飛ぶのに時間はかからなかった。
こんなに酷いなんて知らなかった、俺のいた世界に返してくれ、なんてガキの様に喚き散らし。

いっそ元の世界で死んだときにそのままくたばっておけば良かったのだと、後悔して。

半ば腐る様にして過ごしていた此処での生き方が、変わった瞬間だった。

副官ちゃんにシバき倒されて、夜が明け。

村の住人全員の安否を確認して、簡単な事情説明と解決の報せを伝えてミッションコンプリート。

そのまま疲労感に押されて来客用に使われている家屋で仮眠を取らせてもらうと、既に中天を迎えていたでござる。

ここで顔を洗うために桶に汲まれた水に映った自分のツラを改めて見たのだが――

なんか大分前に近づいた面構えになってる気がするわ。

額とか耳とか、もっと細かなところまであげればキリがないが、前にあった傷跡がまた復活してるんだよね。

多分、確認はしてないが身体中こんな感じなんじゃなかろうか。鎧ちゃん起こしたときに裂けた感触があったトコが、大体以前に大怪我して傷残った場所っぽいし。

これが女神様の言ってた反動ってやつなのかねぇ。

戦闘直後にも思ったが、覚悟してたより全然軽くてちょっと首を傾げたくなるけど……。

まぁ、それより何より副官ちゃんに折檻されたツラが一番見た目酷いことになってるけどな！

数ラウンド殴られ続けたボクサーみたいになっとるわ。最初桶覗き込んだときビクッてなったもん。

最初のボディ以外は派手に腫れ上がるだけで内部にダメージ残らないように配慮してくれたのは、なんだかんだいって彼女の優しさなんだろう。

殴られてる最中は恐ろしすぎて全くそんな感じしなかったけど。

過去に俺が話したことある漫画談義だけでフ〇ッカーを再現するのやめーや。スターン、スターンってステップ踏みながらデトロイトスタイルでゆっくりとにじり寄ってこられるのマジで怖かったんですけどォ！

自業自得？　ハイ、そうですね（白目

顔を洗って、起きたら直ぐに予定が詰まっている。

寝入る前――戦闘に巻き込まれた親子二人を避難所に運ぶ最中に副官ちゃんと話し合った結果、俺一人で一足先に聖都に帰還することになっとるんや。

「今は聖教国に出向してるけど、私は帝国の騎士よ――《猟犬》が戻ってきたなんていう重要事項、本国に報告しない訳にはいかないの」

住人たちが待つ長屋への道で。

母親の方を背負って先を歩いていた副官ちゃんは、振り向かずに前を向いたまま独り言のように俺に告げた。

「明後日やってくる帝国の人員と合流して、私は一旦本国に戻る。だからアンタは明日にでも聖都に戻りなさい。言わなきゃいけない事を、言うべき相手に伝える為に」

それくらいは譲歩してあげる、と呟いた彼女の背に、俺は黙って頭を下げるしかなかった。

言いたいことも聞きたいこともある、と身バレしたときに副官ちゃんは言っていた。

個人としても国に仕える騎士としても、山ほどあるだろう思いを飲み込んで出てきた言葉が、あいつらを優先してくれるものであったことに感謝しかない。

坊主を背負ってなきゃ、両手を合わせて拝んだって足りなかっただろう――やっぱり俺の周りはカッコいい女ばっかりだ。

荷物を纏めて建物を出ると、そのまま村の入り口にある馬屋へと向かう。

行き交う村の住人が、口々に礼を言ってくれるのがむず痒い。
こういうの本気で苦手なんや……勘弁して。
なんとなく居たたまれなくなって、人目を避けるようにそそくさと馬屋に走った。不審者っぽいとか言うな。
村への入り口が見えてくると、既に俺の馬を連れ出して待ってくれていた副官ちゃんと――あのときの親子が待ち構えていた。
おー、見送りに来てくれたんか。
なにやらこそばゆいが、村人全員で送り出してくれるとか嬉しいけど羞恥プレイみたいなことされるよりはまぁ、いいか。
腕を組んで木柵に寄りかかっていた副官ちゃんがこちらに気付いてゆっくりと腕を解いて柵から背を離すと、彼女となにやら話しこんでいた坊主が、パッとこちらを振り向いた。
俺の姿を見つけると、同じく此方に気付いて会釈をする母親の後ろに隠れてしまう。
なんだなんだ、昨日と反応対象が逆転しとるやんけ。一体どうした坊主。
会釈を返しながら不思議に思って坊主の方を眺めていると、お袋さんに背を軽く叩かれてチビすけはおずおずと前に出てくる。
俯きがちな表情は少し暗い影が見えるようで、思わずしゃがみこんで覗きこんでしま

う。

なんや、腹でも痛いのか。昨日やった飴一気に食い過ぎたのか？

目線を合わせて問いかけると、坊主は躊躇いがちに口を開いた。

「……にいちゃん、きのうはごめんなさい」

呼ばれ方のせいだろうか。

なんとなく被る姿があって、俺も無言になってしまう。

「にいちゃんときしさまは、かあちゃんを助けてくれたのに……おれ、にいちゃんにずっとなまいきなこと言ってて……にいちゃんはいっぱいケガしたのに……おれ……」

言葉を続けるうちに鼻の頭が赤くなって眼が潤んでくるその姿に、今日一番のいたたまれなさを味わう事になった。

すまん坊主、これ半分は無茶の反動（ただの自爆）で、もう半分はお前の後ろで微妙に眼ぇ泳がせてる騎士様に凹られて出来た怪我なんや（懺悔

詳細を話す訳にもいかんので、肩に手を置いて言い含めるようにゆっくりと話す。

ええか、坊主。確かに騎士様はお前らを守る為に身体張って戦ってくれた。それに感謝を忘れちゃいかん。

けど、俺は雇われの傭兵みたいなもんだ。

言っちまえば、金の為に仕事しただけの人間やぞ。

自分が欲しいもんの為に、勝手に戦って、勝手に怪我しただけなんだよ。
なんも気にせんでええねん、忘れてええねん。お前が気に病む必要とかいっこも無いの。
そう締め括ると、坊主はなんでか、益々泣きそうな顔になってしまう。
「そんなの、おかしいじゃんか」
肩に置かれた俺の手を、ちいさな手で力一杯に握りしめながら、ポツリと漏らされた言葉に――
「だってにいちゃんだって、そんなにケガして、それでもたたかったのに」
――泣いてる誰かの姿が重なるようで、胸を衝かれたような気がした。
「わすれるなんて、できないよ」
俯いたままの赤毛の頭に向けて、そう、か。と辛うじて返せはしたが、今、自分がどんなツラをしているのか分からない。
沈黙が痛い。子供をますます落ち込ませるような態度とって、何やってんだ俺は……。
「あー、もう。変なとこで面倒くさい男ね」

なんて、ホントに心底面倒くさそうな声が聞こえて、横から伸びた手が胸ぐらを掴んだ。

完全に虚を突かれた形で成すが侭だった俺の横ッ面に、割と容赦のない平手が叩き込まれる。

魔力強化などはしていないが本気で張られたビンタにヘブォ！と首を傾げて仰け反る俺を、副官ちゃんは襟元を掴んだまま、無造作に引っ張り寄せる。

額がくっつく程の距離で合わさった視線は、真っ直ぐに俺の眼を捉えて離さない。

「アンタが何を見て、何を見ないようにしてるのかなんて知ったこっちゃないけどね」

そのまま頭突きでもかましそうな強い口調のまま、碧眼が睨み付けるように俺を見据えた。

「あの娘達はずっと待ってる。２年前からずっと」

「この意味すら分かんないなら、アンタが行くのは聖都とは逆方向よ。帝国でも他の国でも好きな処に行って――二度とあの娘達と会おうなんて思うな」

――――！

紛れもない怒りと共にたたき込まれた言葉が、脳味噌に染み込むと同時に。

自分が自覚してすらいなかった『怯え』を指摘された事に気付いた。我ながらなんとも鈍い話だ。

そうか――そうやな。腹を括ったと思ってたが、まだビビリが入ってたとか情けないにも程があるわ。

力強く頷き返すと、副官ちゃんは鼻を鳴らして手を放してくれた。

ここぞというときの行動がいちいちイケメンすぎる。これがオッパイのついたイケメンという奴か（違

いきなり騎士様がバイオレンスに走った事に眼を白黒させている坊主の前に、改めて屈み込む。

戦闘後に回収していた守り刀を腰から鞘ごと外すと、それを小さな掌に握らせた。

込められた膨大な聖性を解放したそれは、既にただのナイフでしかない。

だけど、験を担ぐという点ではこれ以上の品は無いだろう。なにせ坊主にとって家族を、故郷を守った一振りだ。

この場でくれてやったって、あいつらだって怒りはしない――いや、同じことをするんじゃないかね。

おう坊主。コイツはここに来る前に、俺の大事な仲間から渡されたお守りだ――お前にやるわ。

将来冒険者になるって言っとったやろ。なら、大きくなったらそいつを持って聖都に来ると良い。

そんときゃ、俺の仲間をお前に紹介してやる。多分クッソ驚くぞ（確信

呆気に取られたままの坊主にニヤリと笑ってみせ、赤毛の髪をくしゃくしゃとかき混ぜてやると勢いよく立ち上がった。

もう迷いはないと、真っ直ぐな足取りで馬の元へ向かうと鞍に手をかけ、颯爽と飛び乗る。

ちょっくらアイツらのとこに言って土下座してくるわ。

そう、副官ちゃんに笑いかけて俺は前を見据え。

――お馬さんに高々と後ろ脚を跳ね上げられ、顔面から落馬した。

ヘブォ!!（2回目

くうきが、しんだ。

……ちょっと待って、リテイク。リテイクさせて。

ヨロヨロと起き上がると、垂れる鼻血を見なかったことにして何事も無かったように馬の鞍に手をかける。

勢い良く尻が振られ、ベシッと音を立てて尻尾で顔をたたかれた。

……馬にも表情あるってホントなんやなぁ……。

『うっわ、寄るんじゃねぇよ。エーンガチョ！』って副音声が聞こえたような気がするわぁ……。

心が折れそうだ（鼻血血涙

「そういえば来るときは馬に乗れてたっけ……今はいつも通りみたいだけど」

思い出したように呟く副官ちゃんの声を背に受け、そこで漸く俺も思い至った。

――そういえば俺、鎧ちゃんにモーニングコールしたばっかやん。

行く道は相棒が未起動状態だったので普通に乗れていた馬も、起動させた今となってはガチ目の拒絶不可避になるのを忘れてたわ……。

がっくりと肩を落とす俺に、坊主が寄ってきて怪我を心配してくれるのに少し癒される。鼻血も止めたし、心以外はダメージ無いから安心してくれ。

そんな俺達を眺めながら、副官ちゃんはふむ、と一息洩らすと空を見上げる。

真上に登っている太陽を見ていたかと思うと、目線を下ろして俺に問いかけてきた。

「改めて聞くけど、体調は本当に大丈夫なんだよね？」

え、おう？　副官ちゃんが事後処理してくれてる間に仮眠まで頂いちゃったし、問題無いです。

より厳密に言えば、怪我が無い代わりに疲労感がちょっと抜けてないけど。

以前なら、これだけきちんとした環境で寝れば体力的には大体回復してたんだが、回復力が落ちてる気がする。

或いはこれが女神様の言う反動なんだろうか。それにしたって症状が軽い気がする

が。

「それなら、方法は一つね」

うんうん、と言った感じで頷くと、昨日見たものと同じ、輝くような極上の笑顔で彼女は宣った。

「走れ。死ぬ気で」

そんな訳でワタクシ、現在聖都への道を必死こいて走ってる真っ最中でございます。

完全に素の状態でマラソンとか久しぶりすぎる。ツラすぎワロタ。

馬で三日くらいかかった距離を、二本のあんよでひたすら走る。

大して多くもない自前の魔力まで脚と心肺に回して、走る。走る。

いっそ鎧ちゃんを起動して一気に加速しようか。

――いや、止めといたほうがいいな。妙に疲労を引きずった感覚があったし、やはり

無理は利かない身体なんだろう。

初回こそなんとかなったが、次はどうなるか分からんしな。

というか鎧ちゃんの攻性特化した魔力を放出しながら一直線に聖都に向かって爆走とか普通にねーよ。考えるまでもなく都市の迎撃対象だよ。迎撃部隊とか出されて顔見知りが居たら一発でバレて大騒ぎになるわ。

他の連中にも会いたくない訳ではないが、先に会っておきたい奴が二人ほどおる。

なので、走る。頑張って普通に走る。

気分は走れメ〇スだ――友人を待たせているという点では同じだけど、メ〇スと違って俺の場合は冤罪でもなんでもない自業自得の有罪だけどな！

魔力強化しているので、速度はそれなりに出る。

街道に戻ったあとはぽつぽつと人も見かけるようになったが、皆、必死こいて走る顔面がボコボコに腫れた男をみて何事かと二度見してくる人ばかりだ。視線が痛い。

商人のものらしき馬車も見かけたが、同乗を交渉する気にもなれず、そのまま追い越した。

副官ちゃんに走れ、とは言われたが、なんだって馬鹿正直に走り続けてんだかな、俺は。

息があがって、酸欠気味になりそうな頭で考える。

鈍った思考でも、答えはあっさりと出た。
馬車が急行で全力で飛ばしてくれるなら、大枚叩いてでも乗っただろう。
だが普通に移動してるなら、魔力が続く限りは走ったほうが早い。
要するに、俺は待っていられない――今許される限りの速さでシアとリアのもとに向かうべき――いや、違うな。向かいたい、会いたいと思っているわけだ。
あんだけ色々と理由をつけて経緯を話す事を引き伸ばしていた癖に、副官ちゃんにケツを蹴り上げられた途端にこれだ。
我が事ながら単純すぎて苦笑いがでるね。
……待ってると言っていた。2年前から、ずっと。
俺が女神様に再転生させてもらう前から、おそらくは俺がくたばってから、ずっとだ。
結果的にはこうやって二度目であるアフター転生ライフを得られたが、そりゃ結果論だ。
還ってくるはずも無い奴を、目の前で最後を見届けた人間を、それでも待ち続けるなんてのは――どんな気分なんだろうな。
置き去りにした側である俺には想像もつかない……想像できるなんて思ってはいけない辛さがあったはずだ。
ホントは真実を伝える機会なんて幾らでもあったのに。

再会したときに二人の話を強引に遮ってでも、言うべき言葉を一言だけでも言えていれば――それだけでよかったのに。

ぐちゃぐちゃと考えたまま走り続けていたせいで、普通に石ころに躓いてすっ転んだ。

魔力はまだ余力があるが、息が限界だ。

丁度良いのでそのまま大の字になって、喘ぐように酸素を取り込む。

2年越しに戻ってきてから、俺は聖都では一度も女神様の特典を使っていない。

以前はほとんど視覚と大差無いレベルで、常に『視て』いたってのに、だ。

息を整えながら、寝転んだままぼんやりと沈みかけの夕陽を眺める。

――多分、怖かったんだろうな。

ループに同道して、戦いを重ねる内。

恐らくはシアが何度も喪っていたのであろう様々な戦友や、親しい者達と、なんとか共に生き延びる事に成功する度。

二人の――特にシアの魂は、輝きを増していった。

幾重にも重ねられた帳が、溶け落ちるように。過去の痛みに因って出来た曇りが、吹き払われるように。

魂の輝きに合わせるように、張り詰めていた雰囲気は鳴りを潜め、笑顔が増え、一緒

になって馬鹿やることだって増えてきた。
『視る』度に、一緒の時間を過ごし続けるごとに、ガラにもなくはしゃいだわ。なんなら人目が無いときにアホみたいにガッツポーズした事だってある。
コレだ。俺が見たかったのはコレなんだと。
誰に言うような事でもないが、一種の誇らしさすら感じていたと思う。
だけど、俺は最後の最後で――やらかした。
ボロボロと大粒の涙を零す二人は……まるで出会った当初のように、その魂の輝きを鈍らせていて。
そんなつもりじゃなかった、笑っていて欲しかったのだと、言い訳にもならない考えしか頭に巡らなかった自分に乾いた笑いすら漏れた。
その癖、最期にシアが「もっと一緒にいたかった」と言ってくれたことに、俺は滅茶苦茶に喜んで――それと同じくらいに安堵していたのだ。
最後の最期に、大事な奴らを手酷く傷つけた畜生野郎でも、かつて傍に居た事くらいは、赦されたのだと。
こんなクッソ情けない奴、他におる？（反語
女神様が会うべきだと、口を酸っぱくして言ってくれても疑念は拭えなかった。
いや無理やろ、また傷つける前にあいつらの前から消えた方がいいんじゃないか。

大恩ある女神様の助言は信じたいが、自分の事なんて信じられない。シアとリアの魂をあんな風に陰らせた己（テメエ）なんぞ信用できるか。

――もし、二人と再会して、その魂を『視て』。

2年前の最後に『視た』ままに、曇って、傷ついたままであったなら。

俺のやったことは全部無駄で、俺の居た意味は無くて、やっぱりあいつらの傍にいるべきじゃ無いんじゃないか。

寧ろ誰とも会わずに、信奉者や生き残りの眷族共相手に首狩りでもしてるほうが余程あいつらの為になるんじゃないのか。

そんな風にビビリかましていたのだ。

だけど、副官ちゃんが教えてくれた。

待ってると。あいつらが待ってくれていると。

戦友にして、俺の焦がれた輝きの一つである魂の持ち主がそう言ってくれたのだ。

なら俺が俺を信じられるか、なんてのは些細な事でしかない。

二人に、会おう。

会って、伝えるのだ。言わなきゃならないことを、伝えたい言葉を。

メタクソに怒られるだろう。副官ちゃんより手酷く凹ってくるかもしれん――また、泣かせてしまうのかもれない。

それでも、俺に出来る精一杯を伝えなあかん。
アイツらが納得してくれるまで、何度も、何度も、何度だってだ。
2年も待たせたんだ。
その位はしなきゃ、最低限の帳尻すらあわんやろ。
日が落ちて、空の端に星が瞬き始めたのを見ながら身を起こした。
コケた際に付着した砂埃を軽くはたき落とすと、水筒で喉を湿らせる。
――おし、急ぐか。
脚に魔力を叩き込んで、俺は再び駆け出した。

なんとか聖都の城壁が見えてきたのは、沈んだ日がまた上って更に落ちてからだった。
副官ちゃんならそれこそ1日と掛からないで走り抜けられただろうが、ぼくにはこれでせいいっぱいです（白目
途中で何度か休憩を挟んだとはいえ、流石に魔力も底をついた。
むしろよく保った方か……ペース配分とか考えんでブン回したけど意外となんとか

なるもんだ。

しかし、着いたは良いがすっかり日も沈んじまったし、もう城門は閉まってる、か。

副官ちゃんが持たせてくれた報告書があれば、緊急の報告扱いで通れるか？　ほぼ解決済みとはいえ、吸血鬼（ヴァンパイア）の件もあるし。

――無理やな。城門は通れても大聖殿には入れん。多分途中で別の誰かに手渡して終わりや。

明日になったら普通に城門通って、通常の報告書扱いで依頼人に提出にしきた、って形が一番スムーズに聖殿に入れる、か。

折角到着したのにもどかしいなオイ。

自分でも気が急いてるのが分かるが、強引な方法は取りたくないし取って上手くいくとも思えんしな。

ここは身体を休めて、素直に夜が明けるのを待つしかないだろう。

となると、あそこで夜を明かすのが良いか。

城郭の外周に、古い物見塔がある。

もう使われていない其処は、以前は一人で考え事したり、拳の修練するのにうってつけなのでこっそり出入りしていた場所だ。

ついつい没頭して日が昇るまで居ることも多かったので、アレコレ持ち込んだ中には

毛布とかもあった筈だし、取り壊されてなけりゃ休息とるには丁度よかろ。
走り通しですっかり重たくなった足を動かして、城郭を周る。
目的の塔は物見が用途なだけあって、高さがあるので直ぐに見えてきた。
壊されてないようでなによりだ。こういう自分だけの秘密基地みたいなのって、男の子の憧れみたいなとこあるからね。
入り口は閉まっているので、横手の壁に空いた穴からいつものように潜り込む。
上階への螺旋階段を登りきると、大きく欠けた壁から綺麗なお月様が出迎えてくれた。
これを最初に見てから、ここにちょくちょく入り浸るようになったんだよなぁ、懐かしいわ。
最上階に積まれた木箱に放り込んでいた物資を漁ると、毛布もでてきた。
最後に来たときから2年以上は放置されているのに、持ち込んだものは意外と痛んでないな。流石に酒と保存食は怖くて手がつけられんと思ってたのに、空になっとるし。
俺が居なくなった後、誰かここを使ってたんだろうか？
いや秘密基地の継承とかそれはそれで浪漫があるので全然構わんけど。
なんか妙に良いにおいのする毛布を床に敷くと、そのまま寝転がる。
……うむ、疲れてるから直ぐにでも眠くなるかと思ったけど……無理やな！　やっぱ

気が逸ったままだわ。

会ってどうしようか。やはり開幕土下座が有効だろうか。

なるべくなら3人だけで話せる場所があるといいが、聖殿内でそれは難しいだろうしな。

とにかく、まず俺が俺であることを伝えるしかない。

まず間違いなく怒るだろうし、どんな目に合うかちょっと怖くはあるが……。

完全に俺が悪いからね。それであいつらの気が済むなら我が身の事はあとは野となれ山となれ、ってやつだ。

……これ以上うだうだ考えていてもしゃーないな、寝るか。

相変わらず落ち着かない気分ではあるが、目を瞑る。

あいつらは2年待ったのだ、俺が一晩くらい待てなくてどうする。

そう思って、深く息を吐いて心を落ち着けようとして——誰かが階段を上がってくる気配に気付いた。

やっぱりここに出入りしてる奴がいたみたいだ。鉢合わせるとか間が悪いなぁ。

ん～……二代目秘密基地の主には申し訳ないが、一晩だけ先代に貸してもらおう。相手が嫌がらないなら、夜通し話をするのもいいかもしれん。どうせ寝ようとしても眠れるかどうか分からんし。

そんな風に思考を纏めて、身を起こして気配の主を待ち受けていると。
「あれ、先客か？」
なんて、とっても聞き覚えのある声が聞こえた。
マジか。
こういう事ってあるんか。
偶然にしちゃ出来すぎてる。
俺は所詮、この世界の異物で端役だ。運命なんて大層なものは背負ったことも、信じたことも無い。
それでも、この時ばかりは、ちょっとだけそういったモノを感じざるを得なかった。
階段を昇って来て、見えたのは月明かりを受けてきらきらと輝く淡い金糸の髪だ。
２年前よりちょっとだけ大人びた面差しは、酒場で見たときと変わらない美少女っぷりで。
お陽様の昇った空と同じ色をした瞳は、俺の姿を見つけると少しだけ見開かれた。
それも僅かな間で、直ぐに我に返るとレティシア――シアは、右手にぶらさげた酒瓶を振って俺に悪戯っぽく問いかける。
「よう、いい夜だな――一緒にどうだ？」
そんな風に、数日前の焼き直しの様にこちらに笑いかけたのだった。

ごめんなさいと、ただいま。

俺が呆気にとられたまま見つめていると、シアは答えを待つこともなくやってきて隣にドカっと腰を下ろした。

ジッと無言のままに覗き込んでくる視線に、なんとなく落ち着かない気分になる。

「……顔」

何？　顔??

「顔どうしたんだよ、ボコボコじゃねーか」

ちょっと不機嫌そうに言うが、これは心配してるやつや。素直じゃないようにみせて結構分かりやすいよねお前。

名誉の負傷、といえたら格好付くんだろうけど、ただの自業自得なので気にせんでいいやつですコレは。

副官ちゃんの怒りの折檻から丸二日は経ったので、多少は腫れも引いてるのだが、未だに試合後の拳闘士みたいな顔の俺を、シアは面白くなさそうにふーん、と言って眺めた。

酒瓶が床に置かれると、唐突に手がのばされて此方の顔を撫で上げる。

一撫でして掌が離れていったと思うと、瞬きした次の瞬間には顔に溜まった熱と腫れぼったい感触は消えていた。

何か言う前に一瞬で治されてしまった。俺に対する罰みたいなもんだったのでそのままで良かったんだけど。

「オレが嫌なんだよ。なんでボコボコに顔腫らした奴を眺めながら酒飲まなきゃならないんだ」

ブスっとした様子で唇を尖らせたまま、シアは懐から杯を取り出すと無造作に瓶の中身を注ぐ。

「とりあえず――呑めよ。ここはオレのお気に入りの晩酌の場なんだ、飲まないとか無粋だぞ」

聖殿抜け出してここで晩酌しとるんかい、不良聖女。

まぁ月見酒には絶好の場所だから、分からなくは無いが。

杯に満たされた透明な液体を眺めながら、俺はそれを軽く手で押し返した。

月見酒も悪くはないが、まずは言わなきゃならん事がある。聞いてくれ。

「まずは飲めって。酒の席で一度も杯を空けないで喋るとかねーよ。下戸かお前？」

いや、お前より強いわ。でもそれは後でえぇねん、先ずは俺の話を……。

強引に話を切り出そうとした俺を更に遮って、シアは押し返した杯を更に強く押し付

けて来た。
「いいから飲め――それとも、オレの酒が飲めないっていうのかよ？」
絡み酒の面倒くさい上司かお前は!?
しかも酒入る前からコレとか性質悪いぞ！
ぐいぐいと杯を押し付けてくるアルハラ聖女様に、俺は根負けして杯をひったくった。
一杯だけな！　これ飲んだら無理矢理でも話聞いてもらうぞ。
かけつけ一杯という訳ではないが、いっそ酒の力も借りるつもりで中身を一気に干す。
「おぉ、いい飲みっぷりじゃん」
やかましいわ――って強いなコレ！　お前普段飲んでるのワインとかやろ、なんで今日に限って火酒の類持ってきてんの!?
予想より遥かに強烈な酒精と喉を灼く感触に、危うく噎せる処だった。
とはいえ、俺もザルって程でもないがそれなりに強い部類なので、普通に飲み切る。
うぉぉ……美味いけど空きっ腹＆疲労困憊だとめっちゃキく……かなり良い酒なんだからもっと違うタイミングで飲みたかった。
杯を空けて一息つく俺に、何故かチッと口惜しそうな顔をするシア。おい、なんで今

舌打ちした??　ん？
「――まぁ、いいや。それよりさ」
よくねぇよ。サラっと自分の話題に持ってこうとするのやめーや。
先ずは俺の話を聞いてくれ。いいか？　俺は――。
「お前、まだあんな呪いの装備使ってんの？　いい加減解呪して封印しちまえよあんな呪物（モン）」

あんぐりと、
言いたかった事は開いた口から言葉にならずに零れ落ち、俺は大口開けたままアホ面で絶句した。
シアは、綺麗な――酷く凪いだ表情で薄く微笑んで俺を見つめている。
あの、シアさん？
「ん～？」
……ひょっとして気付いてます？
「はは。お前はホント馬鹿だなぁ――あの腹の立つ鎧まで使っておいて、なんでオレが気付かないと思ったんだ？」

胸元にある何かを撫でる様な仕草をみせながら、膝立ちになって手を床に突き、シアは静かににじり寄ってくる。
静かな空気に気圧された俺は、座ったままじりじりと尻を擦らせて後ずさりする事しか出来ない。
「――別にさ、黙ってた事をそんなに怒ってるわけじゃないんだ」
シアが膝を進めて、俺が後ろに退がる。
「こっちも勝手に勘違いしてた部分もあったし、お互い様な処もあったんだと思うし」
進む、退がる。
「おまえのことだから、変に悩んで言い出し難かったんだろうけど」
シアが進んで、俺は退がろうとして――背中が木箱にぶつかって止まった。
「――でもさ、それでもさ」
逃げ場の無くなった俺の襟元を、上から覆い被さる様な体勢になって、両の手で掴み上げ。
「帰ってきてたんなら、言えよ……！　ばか、やろぉ……！」
くしゃり、と。

静かな面持ちがくずれて、泣き笑いの様な表情で言うシアの頬から大粒の涙が伝って俺の頬に落ちた。
俺は、息を呑んで――それでも何か言わなければならないと、必死に言葉を絞り出す。
――すまん。
「謝るの、おそいんだよバカ」
待たせた。
「うるさい。おまえなんか、きらいだ、ばか」
……すまん。
アホか俺は。もっと他に言うことあるやろ。
襟を掴んだまま、俺の首元に顔を埋めるようにして嗚咽を漏らすシアに、性能低いＢＯＴみたいな単語しか返せない自分にうんざりする。
また、泣かせてるな、俺は。
強烈な罪悪感と共に、自分への根強い不信感が鎌首をもたげてくる。
やっぱり俺は……。
――既に癒された筈の頬に、平手打ちの衝撃と熱が迅った気がした。
……あぁ、そうだ。そうだったな。
傷つけたというなら、すべきなのは距離を取ることじゃなくて。

また、笑えるように傍で全力を尽くすのが、俺のやるべきことなんだと、戦友（副官ちゃん）が教えてくれたんだったわ。

忘れるの早すぎやろ、鳥頭か俺。

そっと柔らかな淡金の髪を撫でながら、俺はシアを改めて『視た』。

その魂が、前の最後に『視た』ままに、陰ってしまっているとしても。

何年掛かってでもそれを晴らせるように、そんな風に強く決心して、しっかりと見つめた。

そして、

その強烈な輝きに――呆然と魅入った。

抱え込んだ腕の中で、シアは変わらず泣き続けている。

だけど、その魂には一切の陰りなく。

まるで、幸福な今日に、それが続いていくのだと、信じられる明日に――未来への希望に、きらきらと光っているようで。

一目『視て』、確信した。

これだ。

これが、俺の見たかったものだ。
最初に見たいと、心の底から望んで。最後に見れないと、それでも構わないと諦めたものだ。
――嗚呼、ちくしょう。
やっと、みれた。

切望、歓喜、安堵、憧憬、罪悪感と。
いつぞやのリアの事を言えない位に、ぐっちゃぐちゃになった感情のごった煮が、胸をかき混ぜる。
この期に及んで、自分の望みが叶った事に喜んで、目頭が熱くなって喉がじんじんと痛くなった。
阿呆が。自分の事より目の前のシアやろ。もっと言うべきことが、掛けるべき言葉があるだろうに。
しっちゃかめっちゃかになった頭の中はエラー吐き出したみたいに、情けない本音だけしか出てこない。
――あぁ、きれいだなぁ。
なんて、馬鹿みたいに震えたみっともない声が、意識せずに喉から零れる。

思わず漏らした一言に、シアは驚いたように顔を上げて――半泣きになっているであろうアホ面の俺と、目があった。
「――なんだよ、それ」
そう言って、呆れた様に笑うシアの瞳にもまだ涙が光っていて。
互いにガキみたいに半べそをかいたまま、それでも俺達は笑いあった。
「ずっと、待ってたんだ」
――うん。
「おまえに会いたかった」
ごめん。
「おまえが、オレを覚えてないのかと思うと、すごく怖かった」
ごめんよ。
「それでも、会いたかったんだよ」
ごめんなさい。
ひとつずつ、言葉を交わし合う。
言葉少なに、けれど2年の空白を埋めるように。
身を寄せて、穏やかに気持ちを吐露するシアに、俺はその手を取って、謝り続けた。
何度も何度も、それを繰り返して。

それが途切れた頃に、俺は静かに、だけど精一杯の想いを込めて大切な友人の名前を呼ぶ。

――レティシア。

「……うん？」

ただいま。

「うん――おかえり」

そういって、シアは嬉しそうに笑い返してくれた。

「――ところでさ」

静かな月夜の下で、再会の余韻に浸っていると唐突にシアが声色を変えて切り出した。

「帰ってきたことを言わなかった事については、もう怒ってないけど」

俺の胸元から顔を上げると、ものっそい綺麗な笑顔を浮かべる。

「2年前、勝手に居なくなった上にあんな無茶をしたことについては、また別だよな？」

――ヴェッ!?

二日前くらいに同種の笑顔を見た記憶が蘇り、とっさに身を離そうとして――。

――妙に力の入らない身体のせいで、ずるずると木箱の側面を背が滑って、横倒しになった。

ちょｗｗｗなんやこれｗｗｗｗんんｗｗｗｗ力が入らないでござるｗｗｗｗｗｗ

……って草生え散らかしとる場合ちゃうわ！

「おー……効いてるな。一杯だけだからもっと時間かかるかと思ったけど」

そんな声が聞こえて、案山子みたいになった俺をシアが上から覗き込んでくる。

……あの、シアさん？

「ん～？　何かな？」

さっきのお酒、何か盛りました？（震え声

「失礼な奴だなぁ、毒の類いなんて一切盛ってないぞ？」

なんか盛ったことは否定しないんですね（白目

艶然と微笑むシアに、謎の危機感を覚えながら身体の調子をチェックする。

……あかん、なんか頭までボーッとしてきた。マジでどうなってんだこれ。

一番近いのは酩酊感だろうか。

まるでぬるま湯に浸ってるような奇妙な心地良さと、脱力感。

何より解せないのは、明らかに何か身体に入ってるのに鎧ちゃんが反応しないことだ。

酒にしろ、薬にしろ、鎧ちゃんの対毒防御を完全に抜けてくる代物とか聞いたこともないんですけどォ！

鎧ちゃんが動かない時点で、現状、俺に出来ることなんぞほとんど無い。

やだ、詰んでるこれ（愕然

焦りのせいか、盛られた何かのせいか分からんが、汗が吹き出てじっとりと服が張り付く感触がする。

首に掛けた半分欠けたような白石のペンダントを片手で弄びながら、シアは空いた手で俺の頬を撫でた。

「お前が勝手に無茶して怪我するのなんて、いつもの事だけど――限度ってものがあるよな？」

俺の頬からそっと離された白魚のような指先が、自身の頬をツツーっと掠め、唇へ。

「何回言っても聞きやしないし。いい加減、オレもアリアも説得は諦めたんだよ」

ペロリと、赤い舌先が飛び出て指先を舐めとると、艶やかな笑みを一層に深めてシアは本当に楽しそうに、嬉しそうに笑った。

「言って分からない奴には、別の方法で分からせてやればいい――そう思うだろ？」

分から聖女。

そんなアホなフレーズが脳内を駆け抜けた。

アカン、マジでアカンやつやこれ。

理由は分からない。分からないが。

ただ、怒られて折檻されたりするだけならこんな焦燥感は無い筈だ。

だが、何故か――異世界生活を得て磨かれた俺の危機察知能力が、全力で警鐘を鳴らしている。

なにか、何か言わなければならない。

このままで非常によろしくない――！

酩酊感が酷くなる。

いよいよもって霞掛かってきた思考を何とか繋ぎ止め、もつれそうになる舌に渇をいれてなんとか言葉を捻り出す。

えー、その件に関しましてはー当方が心労をお掛けしましたことを非常に心苦しく思っておりましてー。

「うん」

い、以後、このような事が起こらぬよう、厳に慎む所存であり――。

「うん」

……えーと。

「続けて？」

すいませんごめんなさい。許して下さい。

どうしようも無くなってぶっちゃけて謝るしかない俺に、シアは。

燦然と輝く魂に負けないくらいに、今日一番の綺麗な笑みを、大輪の花の如く咲かせた。

「ふふっ――だぁめ♥」

ｄｓｙｎ！。

その笑顔を脳みその重要フォルダに丁寧に焼き付けると。
もう限界だったので、諦めて白目を剥いて意識を手放した。

意識を失った馬鹿野郎を、オレはそっと抱きかかえるとその頭を自身の膝の上に乗せる。
酔い潰れるように気絶した馬鹿は、酒と薬が回りきって赤らんだ顔のまま、ごめんよーゴメンヨーなんて、うなされる様に呟き続けていた。
なんだろうなこれ。
今までコイツと何かある度に感じていた感情とは違う。
ドキドキするのでもなく、腹立たしいのでもなく。
――ああ、そうか。かわいいなこいつ。

ストンと、何かがハマるような感じに、今の感情を理解する。
うん。いいなこれ、これは新感覚だ。
なんだか嬉しくなって、膝上の馬鹿の頭をぎゅーっと抱え込む。自然と笑みが零れて止まらない。
――火酒と前のコイツの欠片を調合して作った霊薬は、思いの外効果があったみたいだ。
あのムカつく鎧も、流石にこの薬の効果は防げない、防がない筈だと予測していたけど正解だった。
なにせ、今のコイツにとって一番必要な魂の快癒がこの霊薬の肝だ。
おまけに材料は元のコイツの一部――そもそも毒として認識する訳が無い。
色々な手間が省けたのは良いが、一杯でここまで効くってことはそれだけこの馬鹿の魂が疲弊しているという証左なので、手放しには喜べないけど。
ゆっくり『治療』していけば良い。時間ならこれからたっぷりある。
硬めの黒髪を手ですいてやりながら、じっくりと顔を眺めてみた。
「……傷、前と同じになっちゃったな」
任務先で、今の身体であの鎧を使うような無茶をしたせいだろう。
酒場では無かった筈の――オレの回復魔法でも癒しきれなかった嘗ての傷痕が、浮き

出るように再び表れていた。
その殆どを、オレは知ってる。覚えてる。
まだまだ弱っちかった癖に、オレを庇ったとき。
アリアを助け出して、オレとアリアを背にして真っ向から敵の攻撃を受けたとき。
呪われた巨人との戦いで勝負を決めてみせたとき。
ひとつ、ひとつ。
お前が積み重ねていった傷痕の理由を今でも鮮明に覚えてる。
意識した訳でもなく、自然と身体が動いていた。
額に、頬に、耳に、首筋に。
慈しむように、啄むようにその痕に口付けを落とす。
もうかつての欠片に口付ける必要は無い。
本当にそうしたいものが、ここにあるんだから。
本当は全部にしてしまいたいが――お楽しみは後にとっておいてもいいだろう。
流石にそろそろ大聖殿に戻らないと、アリアが痺れを切らして突撃してくるかもしれない。
素直なアリアではコイツの顔を見たら演技なんて出来っこないだろうし、盛る前に泣き出してすがり付いてしまうだろうと、相当に無理を言って留守番させてしまったから

な。

……まぁ、あれだ。捻くれてるが故にオレに美味しい思いが回ってきたってことで、うん。

とはいえ、姉妹間で片方ばかりが独占も良くない。

今頃、寝室で今か今かと待ちわびているであろう妹の気持ちを汲んでやるのも、最初の時間を独り占めさせてもらった姉の義務ってやつだ。

身体強化を発動させると、意識の無い馬鹿をお姫様抱っこする。

――次は逆がいいな。

そんな事を考えつつ、陸揚げされたタコみたいにぐったりしてる奴を運びながら、もう一度笑いかけた。

「おかえり、オレのヒーロー」

――聖都大聖殿、巨大なその建造物の内部にある奥院にて。
一人の老人が本を片手に、机上に盤と駒を広げてのんびりと差し込む日差しを満喫していた。
白髪を後ろに撫で付け、同じく真っ白な髭をたっぷりと伸ばしたその人物は、小柄な体躯を一際豪奢な僧服に包み、揺り椅子をゆったりと前後させながらふむ、と呟いた。
その手で捲られる本には日本語で『猿でも分かる将棋初級講座～これで駄目なら回り将棋でもやってろ編～』と書かれている。
老人は首を傾げながら駒を拾いあげ、将棋盤に乗せる。
パチン、と軽快な木を打ち合わせる音が響く。
その音の隣へと、静かに紅茶のカップが置かれたソーサーが添えられた。
「あぁ、済まないね。ミラ」
「いえ、お気になさらず」
老人の感謝に、眉一筋動かさずに応えたのは修道服姿の老年の女性だった。
鉄仮面のような硬い表情に、その纏う空気を補強するような細いフレームの眼鏡が鼻梁に乗せられている。
歳の頃は日向ぼっこを楽しむ老人とそう差は無いのだろうが、棒が入ったように伸び

た背筋と如何にも自他に厳しい、といった雰囲気のせいで、彼女のほうが一回りは若々しく見えた。
　再び軽快な音が奥院に響き、老人はカップを手に取るとゆっくりと紅茶を味わう。
　不動のままその背後に控えていたシスターは、一段落ついたと判断したのか静かに老人の背へと声を掛けた。
「猊下」
「うん、何かな？」
「《猟犬》が彼女達のもとへと戻ったそうです」
「それは朗報だ、雨降って地固まる、というやつだね」
　目の前の老人が、聞きなれない慣用句を好んで使うのは今に始まったことではない。
　語用が正しいのかそうでないのかも判別が付かないが、慣れている事もあってミラと呼ばれた女性はそれをスルーした。
　パチン、と三度軽快な音が響く。
「猊下」
「なんだい？」
「どこまで『見えて』いらっしゃったのです？」
「全部という訳では無いよ。ただ――これが一番早くて確実で、ついでに面白い事にな

りそうと判断しただけさ」

なにせ、我らの偉大なる創造主からの御神託だからねぇ、と、老人は朗らかに笑う。

「やはり、大戦以降は精度が上がっておられるようですね」

「宝の持ち腐れ、というものだよ。どうせならあの戦の時にこの精度が欲しかった」

「創造主の加護あってこその未来視（御力）、ということでしょう。邪神によって世に帳を掛けられていた時代では、大きく力を弱めるのは仕方が無い事かと」

「一番必要な時代に、その原因のせいで満足に使えないというのだから――儘ならないものだねぇ」

今となっては、若者の恋路に茶々を入れる程度がお似合いの能力さ。

そうボヤいて頁をめくる老人に向けて、女性は僅かに目を細めた。

「猊下」

「うん、どうしたのかな？」

「結果的には猊下の描いた図となりましたが――その過程で、私はアリア様を泣かせてしまいました」

ベヂ、と。

軽快だった駒を打つ音が乱れ、なんとも言えない空気が暖かな日差しに満ちた空間を上書きする。

心なしか首を竦めたような動きをみせた老人は、恐る恐ると言った様子で背後に控える古馴染みの友人を振り返った。
「それは……災難だったねぇ。君にとっても、彼女にとっても」
「いえ、全ては私の愚かな推論が招いた結果です。アリア様には後でお詫びの機会を頂かねばなりません」
「うん、そうだね。僕に出来ることがあるなら、手伝わせてもらうよ」
「有り難うございます」
――パチン。と元に戻った音が響く。
「猊下」
「はい、なんでしょう」
「奥院に閉じ籠っているだけでは御体に障ります。たまには中庭で身体を動かすというのは如何でしょう」
「……いや、今このショーギの教本も良い処だし、また今度にしたいなぁ」
後ろを振り向かない様に努めつつ、老人は控えめに女性の意見を拒む。
だが、その襟首を女性は無造作に掴んで持ち上げた。
「遠慮なさる事はありません――ええ、久しぶりに稽古をつけてあげましょう、ヴェティ」

「強制じゃないか」
颯爽と中庭に向かう友人に子猫の様に運ばれながら、老人は諦めたように嘆息する。
「やっぱり教皇なんて、なるものじゃ無い」
「貴方の苦労の大半は、その悪戯気質のせいでしょう」
愚痴混じりでこぼした呟きは、女性によって一刀両断された。

ここ二日くらいはテンションとか勢いとか、諸々に任せて大分アレな行動をとった気がする。
目が覚めると、知らない天井でした。
起きたら簀巻きにされて火炙りにされてるくらい覚悟してたんだけど、そういった事は無いようだ。

だがそんなのはいい、それは重要な事じゃない。
問題なのは俺が昨日、散々にやらかしたこっ恥ずかしい言動だ。
いやね、言った事に嘘はないよ。掛け値無しの本心だよ。
でもさ、そういうのってこう、あるじゃん？　あんまり外に晒け出すようなモノじゃないじゃん？
ずっと見たかったモンが見れて、シアと本当の意味で再会して、こうね、ついつい感情の振り幅的なものがね？
あぁ、思い出すだけで恥ずかしい。どういうテンションやねん昨日の俺。後悔とかは微塵もないけどそれはそれとして恥ずかしいんだよあああああああああああ!!
昨日の記憶を反芻するともう駄目だった。
やたら豪奢なベッドの上で、沸き上がる羞恥心とこそばゆさで俺は内心悶絶する。
うあぁぁぁぁぁぁっ！　消せぇぇぇぇぇぇっ！　誰か俺の昨日の記憶を消してくれぇぇぇぇっ!!
ホントはもうベッドから発射されてお外に飛び出したい。
七転八倒しながらその辺の地面に穴掘って埋まって、土の中にアー！　ウアー！　ってしたい。
――でもそれも出来ない。っていうか動けない。

何故なら、シアとリアが左右で俺をガッチリホールドして寝てるから（白目

右のシアは俺の頭を抱え込むようにして抱き枕みたいにしてるし、寝巻きからはみ出た艶かしい白い足が、胴に絡み付いている。

左のリアは此方の腕を枕にして、寝巻きを豪快にはだけさせて四肢全部を使って俺にへばりついていた。

ほんと、どういうことなの、だれかせつめいして。

恥ずか死しそうな心中に加え、この状況だ。

もういっぱいいっぱい過ぎてどうしようもない、俺はどうすればいいの（切実

かろうじて首を動かして、原因の二人を交互に見やって――。

――二人とも、あんまり幸せそうに寝ているもんだから、なんかもう全てがどうでも良くなった。

なんでこんなにくっ付いてんのとか、なんで二人ともそんなスケスケのネグリジェみたいなの着てんの目に毒ってレベルじゃないんですけどというかちょっといいにおい

して非常によろしくないんですけどなんかやわらかいものがあたってるしうあああああとか、そもそもなんで俺はパンツ一丁で寝てるんだよとか。

まぁ、色々と言いたい事や疑問は沢山あったんだけど。

――寝直すか。

全てを明日の自分に丸投げして――多分、幸せといっていい優しい空気の中で、俺は再び目を閉じた。

治療編

駄犬の一日

なんだか楽しい夢を見た。

こっちにきて出来た知り合いや友人と、酒飲んだり飯食ったりしてどんちゃん騒ぎをする夢だった。

普段だったら顔突き会わせたらノータイムで殺し合い始めそうな奴らとか、知ってる奴の隣に知らない奴が並んでたりとか。

色々とおかしな光景もあったが、夢特有のふわっとした感じで違和感無く楽しんでいたと思う。

まぁ夢は夢だ。

予知夢の能力持ちでもない限り気にするようなもんではない。

良い夢なら見る分には全然オッケーだしね。

「あ、起きた？」

鳥の囀ずりが窓の外から聞こえ、瞼ごしに柔らかな朝の光を感じて目が覚めた。

瞼を開くと、ここ数日ですっかり見慣れた天井――ではなく。

天井よりもよっぽど見慣れた銀髪の超絶美少女が、満面の笑みでこちらを覗き込んでいたでござる。

しかし、超絶美少女を見慣れてるって字面にするとすげぇ贅沢だな。同じこと言ってる奴がいたら普通に粛清対象ですわ（非モテ感

「おはよう、にいちゃん」

はい、おはよう。

寝る前は普通に寝床で横になったと記憶してるんだが、いつの間にやらリアに膝枕されとる。

銀の聖女様に膝枕で起こされるとか超贅沢――贅沢じゃない？　大丈夫これ？　聖殿内の若い衆に知られたら闇討ちとかされない？

ニコニコしながら俺の髪を手櫛ですいている妹（おとうと）分を眺めながら、割としょーもない心配事に思いを馳せる。

まぁ、それはいいとして。

アリアさんや。

「なぁに？　起きる？　朝ごはん食べにいく？」

ナイススマイル。あ〝ぁ〝～ニ〇ラムされたゾンビみたいになるんじゃぁ～アッアッアッアッ……。

すげぇご機嫌だ。笑顔から特殊な癒しの粒子が放出されてると言われても信じるぞこれ。

ご機嫌すぎて何時もよりちょっと幼く見えるくらいだ。天使かな？

――だがにぃちゃんはお前に聞かねばならぬ事がある。

起き抜けだがキリッとした表情を作って宣う俺に、リアは不思議そうに小首を傾げた。天使だわ（確信

うん、膝枕してくれるのはいいんだが――いつからしてた？

「つ、ついさっきだよ？」

大天使スマイルが微妙に引きつり、目が泳いだ。はい、ダウトー。

サッと布団を撥ね飛ばして飛び起きると、リアの小柄な身体を抱えあげてそのまま俺の寝ていたベッドにシュゥート！

専用の『治療』とやらをしてくれるのは有り難いし感謝もしとるが、徹夜はやめろっつーたやろうが。寝ろ。

「だ、大丈夫だって。ちょっと寝てないだけだし、むしろ朝から全然元気だし」

そら徹夜のテンションでアガっとるだけや、寝ろ。

「今日の朝のお祈り、ボクが当番なんだけど……」

ンなもんシアに代打でやってもらうか、いっそ中止でもええわ。徹夜明けの聖女様に

無理をおしてやってもらって喜ぶような不心得者はおらんやろ。寝ろや。
「別に無理じゃないんだけどなぁ……」
ミラ婆ちゃんにチクられるか、素直に寝るか、好きな方を選べ。
「はい、寝ます。徹夜してごめんなさい」
寝床の上で抵抗するように身じろぎしていたリアは、スン・・・となって大人しく布団を被った。
一緒の朝ご飯がぁ・・・・・とか嘆いてるが、一旦起きたらお前なし崩しで仕事しようとするだろーが。却下だ。
ご機嫌なテンションも平常になったと思ったが、それも束の間。
布団を口許まで引き上げ、深呼吸したと思うとふにゃふにゃとした表情になって目尻が緩む。
「へへっ……」
すぐに上機嫌に戻った妹（おとうと）分を見届けると、俺は両腕を上げて大きく背筋を伸ばした。
ついでに生欠伸一つして、首をゴキゴキと回す。着替えたら顔洗って、飯食いにいこうかねぇ。
のんびりと後の予定を考えていると、布団から伸びた手がちょいちょいと俺の寝巻きがわりの麻のズボンを引っ張った。

「ん」
上目使いで、手を差し出してくる。
はいはい。少しと言わず、寝るまでお付き合いしますよおぜうさま。
手を握ってやると、緩んだ表情を更にふにゃっとさせて夢心地のような顔になるリア。
「えぇー、そこまではいいよ。にいちゃんお腹空いちゃうじゃん」
俺の腹具合を心配するなら、直ぐにでも眠りに落ちれば良いと思うよ。
重ねて言うが、俺の治療に時間を割いてくれるのは嬉しい。だけど睡眠時間削るような真似はやめんしゃい。
「……うん、ごめんなさい」
数日前のきちんとした再会の挨拶のときとは逆に、リアが俺に謝ってくる。
まぁ、俺の方が１００倍くらい回数多かったけどね（自業自得
握った手がきゅっと握り返される。
「ねぇ、にいちゃん」
おう、なんですかアリアさん。
「眠くなるまで、おしゃべりしてもいい？」
最初からそのつもりやぞ？

「うん……ありがとう」
お安い御用ですとも。
朝の光が微かに差し込んできた寝室で。
穏やかな時間を楽しみながら、俺たちはのんびりと笑い合って他愛の無い話に興じた。

「――で、こんな時間に朝飯食ってるって訳か」
リアが夢現になってきたのを見計らい食堂に向かったが、やっぱりちょっと時間が半端だったせいか殆どのメニューは品切になっていた。
なので、どんな時間でも大抵はあるサンドイッチを注文し、ついでにオレンジジュースも頼む。
朝はしっかり食わんとな。妹（おとうと）分とおしゃべりしてる間は腹が鳴らんようにしとったが、なんだかんだいって腹ペコだ。

頬杖ついて俺の対面に座ったシアに頷きながら、もりもりとサンドイッチを食う。
お、タマゴサンドの卵の味付けが塩胡椒じゃなくてマヨネーズになっとるやん。この2年で素晴らしい進化やな。
「朝から……っていうにはちょっと遅いけど、良く食うなぁ……1個もらうぞ」
もっしゃもっちゃと頬を膨らませていると、サンドイッチの山からひょいっと一つ取り上げて、トマトサンドっぽいやつを口にするシア。お前も朝飯済ませた後なのに食っとるやんけ。
「他人が美味そうに食ってるのみると、なんとなくオレも食べたくなる」
あー……。まぁそれはある。よくある。
聖職の坊主といえば生臭禁止なイメージがあるが、大戦初期に時の教皇が吠えた「葉っぱだけ食ってて邪神ブン殴れる訳がねーだろうが！　パンも肉も魚も野菜も食えや！」的な一喝で宗教的な食事の縛りは大分緩くなった、とかなんとか。元から大して厳しくは無かったようだが、英断だね。
そういえば、今日の大聖堂でのお祈りタイムは代打でシアが入ったらしい。すまんな、俺が無理くりリアを寝かしつけたせいなので、怒らんでやってくれ。
「いや、怒る気はねーよ。というか徹夜してそのまま来る方がよっぽど駄目だから。寧ろよくやったと言っておく」

そっか、それなら良かったわ。
ひと安心してオレンジジュースをぐびーっと飲み干すと、コップが一瞬で空になった。ピッチャーで欲しい。もしくは1リットル紙パック。異世界にそんなもん無いけど。
次はコンビーフっぽい肉が挟まったサンドイッチを手に取る。これもマヨネーズとオニオンで和えてある、出来もいうまでもなく素晴らしい。
「お前も戻ってきたし、アリアも確り眠れるようになったと思ったんだけど……今度は別の理由で徹夜するようになるとはなぁ」
チビチビとトマトサンドをかじりながら、ボヤくシア。
え、あいつ不眠気味とかそんな感じだったの？　今は大丈夫なの？
「今は問題ない筈だな。尤も、結局はあんまり寝てない事が増えてるみたいだけど……まぁ、オレも最近はちょっとそんな感じだし」
ええ……なんで姉妹揃って不健康そうな生活してんねん。睡眠不足は健康への大敵だぞ。
聖女としての仕事忙しいのか？　書類なんかは公的な立場は外様の雇われでしかない俺には手伝えないし……なんぞやれることがあるといいんだが。
コンビーフサンドを飲み込むと、次はハムチーズサンドを手に取る。これもシンプル

ながら美味い美味い。

俺の疑問に、シアは何故かちょっと歯切れが悪そうな感じで明後日の方に視線をやった。

「いや、まぁ。仕事はそうでもないな。寧ろ健康にはいいかもしれない可能性があるというか、いつの間にか朝になってたというか……ちょっとハッスルしすぎたというか……」

尻すぼみで最後はゴニョゴニョと口ごもるその顔は、なんでかちょっと赤らんでいる。

なんだか分からんが、忙しい様なら俺の治療とやらはもっと期間を空けてもいいんじゃないか？　別に逃げやしないぞ。

「それは駄目だ」

ほぼ即答で、バッサリと俺の意見は切り捨てられてしまった。

いや、だって今朝のリアの事といい、思ったんだけどさ。

お前らの睡眠不足って俺の『治療』が大きな原因じゃね？　タイムリミットがあるって訳じゃないんだし、目の下に隈作られるくらいなら時間かかっても一向に構わないですけど。

大抵は最初に飲まされた酒――というか霊薬だったらしい――を飲んだあと、強烈に

酔っぱらって前後不覚のまま眠ってしまうので詳細は分からんのだが、状況からして夜を徹して俺の治療に励んでくれてるのは察しがついた。

早く治るにこしたことは無いが、それで二人への負担が大きくなるというなら、いうまでも無く俺的にはＮＧである。

此方の言い分にムッとしたような顔をすると、トマトサンドの残りを一気に咀嚼して紅茶で流し込んで、シアは強い口調で反論した。

「とにかく駄目なもんは駄目だ。お前の魂の状態を早く安定させるのは最優先事項だし、最近のおたの――ん〝ん〟っ、しゅ、趣味……そう、お前の『治療』は実益と趣味も兼ねてるから、このまま続けるからな！」

趣味。

「そ、そう。趣味」

三度の飯より、患者の執刀（オペ）してる方が好き、みたいなワーカーホリックの医者か何かかな？

回復魔法に突出した聖女だからといって、ソレが趣味になるのはどうなんだ。というか初耳なんですけど。

「う、うるせー！　とにかく昨日はアリアの番だったんだから、今日はオレだからな！ちゃんと部屋にいろよ！」

言い負かされた、といって良いのか分からんがシアはそう思ったのか、席を立って顔を真っ赤にして叫ぶと、俺の脳天にペシっと手刀を入れてそのまま足早に食堂を出ていってしまった。

いや、言われんでも治してもらってる立場なんで、ちゃんと待機してるつもりではあるが。

すっかり静かになった人気の無い食堂で、なんとなく釈然としない気持ちのまま、俺は残りのサンドイッチの攻略に取りかかることにした。

――お、この薄切りのチキン、ひょっとして照り焼きか？　すげぇ。コッチにきて初めて食った。

やや遅めの朝食を済ませて、少し食休みを取ると中庭に向かう。

渡り廊下を挟んで左右に別れた相当に広い空間であるそこは、片方はゆっくりと休む憩いの場、片方は身体を動かす練兵場擬き、みたいなざっくりとした区切りがある。
片や、見目の良い観葉植物や小綺麗な鉢植え、木作りの素朴なベンチや丁寧に切り揃えられた植え込みの木々が並ぶのに対し。
片や短く刈り揃えられた芝と最低限の植え込み、端に無数に並んだ打ち込み用の鎧冑を被せた木製人形や、積み上げられた石畳に何故か転がっている巨岩。
訪れるタイミングによっては、熱の入りすぎた稽古のせいで地面がでかでかと陥没していたり壁にヒビやクレーターが出来ていたりする。
相変わらず落差が酷すぎワロタ、片側だけみると絶対宗教施設じゃないぞコレ。
ディスっといてなんだが、俺が用があるのは色々と酷い方だ。
ちらほらと見掛ける修練に精を出す僧達の邪魔にならんよう、隅っこに陣取って気息を整え、眼を閉じた。
暫しの間、魔力を緩やかに体内で巡らせ、集中力を高める。
――《流天》。
周囲の魂や魔力の流れを『視』ながら、ゆっくりと知覚したそれを自分の周囲へと流そうと試みる。
ゆっくり、じっくりとだ。焦るな。

――《地巡》。
丁寧に『掴み』、取り込んだ流れを、心臓から丹田を経由させて足裏から大地へと巡らせ、樹木が地中の水分を吸い上げるイメージで巡らせた流れを再び体に引き上げる。
――《命結》。
最初とは逆の手順で循環を終わらせた力を、腕へと伝えて拳で結実させ――打つ。
風切り音と共に、拳の先端が空気の壁を叩く音が響いた。
おぉ、一発成功。これは今日はいけそうな感じじゃないか？
なんて、ちょっと調子に乗ったのがマズかったのか。
二度目は《地巡》の途中で制御をミスって地面に足がめり込み、力の流れが霧散してしまった。
くそう……やはり素だとこんなもんか……。
慢心いくない（確信
「鍛練ですかな！　いやはや身体の調子が宜しくないと聞いておりましたが、杞憂であったなら実に良き事！」
あーでもない、こーでもないと修練を続けていると、ぬぅっと大きな影が音も無く背後に現れ、穏やかな気配とは裏腹の、馬鹿デカい声量で挨拶される。
角ばった禿頭に、同じく角ばった厳つい顔面。

みっちみちに詰まった弾性のある金属塊みたいな筋骨隆々の体躯を僧服に包んだ大男は、以前からの顔見知りだった。

ガンテス＝グラッブス。

教会でも最古参に近いと言われる僧の一人だが、若い頃から職務をブッチして最前線で延々邪神の軍勢をブン殴り続けていたせいで未だに司祭止まりという聖教会の脳筋勢を代表するようなおっさんだ。

もう見たまんまのブルファイターで、ふざけたレベルの肉体強化＆硬化でラッセル車みたいに敵を掻き分けて突き破っていく力こそパワーみたいな戦い方は、見ていて突き抜けた爽快さすらある。

構築した陣を濡れたティッシュみたいにブチ破られる方は悪夢だろうけど。

とはいえ、戦場に入り浸ってるから、聖職者としての信仰心が薄いのかといえばそうでもなく。

「うむ！　相も変わらず《猟犬》殿から感じられる創造神への信仰は素晴らしいものがありますな！　茫洋としたものではなく明確な感謝――実に良い！」

自身のつるりとした頭部をベシンと叩いて――いや、当人にとってはその程度でも実際には鞭で岩塊をぶったたいた様な音がしたが――おっさんは上機嫌に大笑した。耳がキツゥイ！　爆笑だけで音圧を発生させるのをヤメロォ！

まぁ、これだよ。

俺の場合は信仰というより、諸々を含めた感謝なんだがそこら辺も割と具体的に察してくる謎の嗅覚よ。

既に聖女として頭角を表していたシアに招かれる形で大聖殿に入った俺は、当然の如く懐疑的な目で見られる事が多かった。

この手の評価は結果でひっくり返すしかない、と思っていたんだが、ガンテスがあっさりと俺の信仰心？　を認めてくれたおかげで初期から大分風当たりは良くなったと思う。

なんせ眼前の生体肉弾戦車は戦線に関わる者からの信頼度は絶大だ。豪快すぎるが人当たりも良いので後方の人員からだって評価は高いし。

良く思わない人間がいても、表だって言える奴はいない。

「練武は戦士にとって重要ではありますが、傷ついた身体を癒すことも重要な練りと言えるでしょう！　《猟犬》殿が無事快癒したのならば、是非とも又、共に修練に励みたいものです！」

やめてください死んでしまいます。

これだよ（白目

本人に一切悪気は無い、馬鹿正直な求道者気質とでも言えばいいのか。

このオッサンは一緒に厳しい修行をこなすのが、コミュニケーションの一貫と考えてる節がある。
同じ釜の飯を食う、なんて言葉も俺達の世界にはあったし、強ち間違いでは無いんだろうけど……。
下手に反感や皮肉を本人の前で飛ばそうものなら、
――よし、じゃあ一緒に修行しようぜ！　並んで（血の）汗と（血の）小便と（血）反吐ぶち撒ければ大体友達！
と、善意と好意だけで構成された地獄に招待されることになる。
枢機卿の一人が引きずられて修行に同行させられた事もある。断れる奴がいるならやってみて、どうぞ。
そんなガンテスの実力は言うまでもなく、人外級だ。
才能というより、長年の修練と実戦での練磨で人類の到達限界をぶち抜いたタイプなので、才能無しの俺からすればリスペクトすべき点は多い。多いんだが。
「察するに、《三曜》の修練の最中でしたかな！　ミラ殿がおれば一番の適任なのでしょうが……よろしければ愚僧がお相手を努めますぞ！」
両手をバァン！　と打ち合わせ、衝撃波を撒き散らしながら妙案だとばかりに顔を輝かせるガンテスに、俺は必死になって謝辞の言葉を捻り出す。

気持ちは嬉しいけど、マジで勘弁してください。
ほんとに死ぬのでやめてくださいお願いします。
シアとリアから鎧ちゃんの使用を完全禁止されているので、今の俺だと《三曜の拳》の基礎すらおぼつかない状態なんです。
これであの火薬過多の砲撃みたいな拳を捌けるわけがねぇ。バラバラになるわ、普通に。
どうやったのか、鎧ちゃんの起動にロックの様なものがかかってる感触がある。
『治療』以降に感じるようになったものなので、間違いなくシアとリアの仕業だ。
そんなにガッチリした感じではないので、強引に起動させれば装甲の展開も可能だろうが、ロックが破れたら直ぐにでも二人に気付かれると思う。
やらかしたら二人から一緒になって怒られる旨を伝えると、おっさんは肩を落として見るからにしょんぼりしながら諦めてくれた。
「むぅ……そうでしたか。己の業を思うように振るえぬもどかしさ、戦士として想像するに余りある物。《猟犬》殿が牙を十全に振るえるようになる日が近く訪れる事、創造神に祈りを捧げるとしましょう」
……セェフッ！
削り出した岩みたいな両の掌を緩やかに組んで祈りを捧げるガンテスを見て、俺は思

いっきり胸を撫で下ろした。

「――では、傷が癒えたなら是非修練に同行して頂きたいものですな！　実は最近になって良い修行の場をみつけたのです！」

完治したら絶対顔を会わせないようにしないとアカン（白目

修練に熱中しすぎて、日が暮れるまで中庭に居座ってしまった。

前は時間的余裕も無かったので最低限に修めて終わらせたが、出来ることなら素の状態でも《三曜の拳》を扱えるようになりたいもんだ。

素養が無いと言っても、鎧ちゃんのアシストで技は使えてるわけだから、どうにかそ

の感覚を俺自身の身体に擦り合わせることができればいいんだが。

現状だと使えはしても、実戦レベルにはほど遠い。といった処で足踏みしてる感じがある。

以前に鎧ちゃん使用状態での技の精度を上げるべく、短期師事した半龍姫――お師匠は最初に目の前で使って見せたときに絶句してたけど、あれ絶対良い意味じゃないよね。

凄いオロオロしてたけど「え、マジで？　この子本気でやってこれなの？　こんな才能ねぇやつみたことねぇ！」みたいな顔だったわ、絶対。

そらアンタのとこに稽古つけてもらいにくる人なんて大抵は上澄みも上澄みの達人連中ばっかりでしょうねぇ！

これが普通なんだヨォ！　一般人は鎧ちゃんって下駄があっても大体こんなもんなの！

背伸びした幼児を見るような、生温い目付きで頭を撫でられた記憶は未だに色濃く残っている。

それを改めて思い出して、アフターライフの密かな目標には完全な自力で《三曜》の初伝を習得してお師匠に糞ほどドヤってやるというのも最近追加された。何年掛かるか分からんけど。

行水して汗を流して、食堂で軽く夕食を摘まむと、あとはここ最近の日課――即ち『治療』のお時間である。

と言っても、何か特別なことしたりとかは無い。

シアかリアが来て――二人が一緒にくる事もあるが、のんびりと喋ったり、酒飲んだり。

夜も更けて来たら件の霊薬を俺が飲みはじめて、酔いというか薬効がでてきて寝る、というか意識が飛ぶ。

あとは気がついたら朝だった、という流れだ。

長く苦しいリハビリとか欠片も無いので、これでいいもんなのかと首を捻ったりもしたが……二人曰く、「絶対に目を覚まさない様、魂ごと深い休眠状態にした後、欠乏している部分を埋める作業を行っている」との事なので、治癒魔法に関してはスペシャリストの二人に任せて、俺は酒飲んで寝るだけという非常に楽な内容なんだよね。

夜を徹しての治療なのか、大抵は俺の部屋でそのまま寝てるので、非常に申し訳ない気分になる。

あんまり無理をして欲しくないので、今朝も食堂で治療の間隔を空ける相談をしたが、結局は却下されちゃったしなぁ……。

まぁ、こうなった以上、俺にできるのは『治療』に入る前の時間を気分良く過ごしてもらう位しかない。

なんか接待してるみたいだが、俺にとっても悪くない時間なので損する奴は誰もいないし、えぇやろ。

片付ける程の物もないので、大人しく待っていると、酒瓶片手にシアがやって来た。

「よう、邪魔するぞ」

あいあい、いらっさい。

何時もの軽いやり取りの後、ちびちびと普通の酒を飲みながら最近の近況について語る。

２年の空白がある以上、些細な事まで含めたら語ることなんて早々に尽きないからね。そういう意味ではこの時間も大切なものといえるだろう。

そういえば、リアが新年祭で振り袖姿の人を見かけたって言ってたがマジか？

「あー、そういえば見た。そこまで注視しなかったけど確かにあれはちょっと驚いたなぁ」

着てる人も転移者ってワケじゃないんだろ？　この世界の街並みで和服全般は違和感やばそうだな。

「一概にそういう訳でもないんじゃねーの？　去年の豊穣祭のときに何故か浴衣姿の奴

を見かけた記憶があるぞ」
夏祭りと秋の豊穣祭が悪魔合体しとるやんけ。日本の文化侵略が酷すぎワロタ。
「……お前はどうなんだよ、祭りの時は浴衣着たりしないのか？」
野郎が浴衣着ても目の保養にならないでしょ（真顔
まぁ、浴衣じゃなくて俺はもっぱら甚平だったなぁ。
「甚平か……それも悪くないな……それなら、今度街に降りて作ってもらいに行くか？」
マジで。というか城下の服屋さんで甚平作れる店あんの？
「振り袖織れる店なんだから、デザインだけでも書いて渡せば再現できそうじゃね？」
……確かに！　なら今度案内してくれー。甚平欲しいわ。
「おう、任せろ。今度一緒に出掛けようぜ」
上機嫌で笑うシアに、俺も笑いながら杯に酒を注ぐ。
いやぁ、明日の心配や将来の誰かの生死とか全く考える必要無く飲む酒はうまいな！
気心の知れたダチと飲むと更にうまい！
タダ酒なのも素晴らしい。最高かよ。
二人ともテンション上げながら、ぱかぱかと杯を空けていく。
あ～……以前に綺麗なお姉ちゃんのいっぱいいる店に二人で繰り出したときも、シアはこんなテンションだったな。

あれは……いつの話だっけ……まぁなんでもええか！

こういうとき、女だと便利だぜヒャッホーイ、とおねえちゃん達のおっぱいにダイブして柔らかな感触を楽しんでいた聖女様（）を思い出して、一人爆笑する。

「あ〟〜ん、ンだよひとりでわらいだしてぇ……なんか楽しいことでもあったのかよぉ」

顔を真っ赤にしてグネグネになったシアがしな垂れかかってくるので、真面目な顔を作ってグビリと一杯。

うむ。おっぱいを思い出していた（キリッ

なんか間違えた気もするが多分大体あってる（泥酔感

その途端、俺の胡座の上にシアが乗っかって、頬を引っ張ってきた。

「おい、オレがいるのにおっぱいとはなにごとだ。つねるぞこら」

いでででで。もうやっとるがな。人の頬はそんなに伸びないやめろ。おっぱいおっぱい。

「まだいうかぁ、このやろぅ」

どっすんばったん。と、部屋の中で酔っぱらい同士の見苦しいマウントの取り合い（物理）が始まる。

でも楽しいから問題ないな！　あー、おっぱいおっぱい（煽り

「ふんにゃろっ、どうだコラー、おっぱいがなんだってんだばかやろー」

おい、魔力強化すんのは反則だろーが、ノーカン！　ノーカン！　降りろやぁ。
レギュレーション守れや！　と、床に倒れた俺に馬乗りになって勝ち誇るシアにブーイングを飛ばすも、どこ吹く風といわんばかりに笑う。くそう、これだから酔っぱらいはよぉ。
「鏡をみろぶわぁーか、おしおきだぞぉこらぁ」
赤ら顔でヒック、としゃっくり一つすると、覆い被さって首筋に顔を埋めてくる。
おーい、何して・・・・・・あいでででででっ!?　耳たぶを噛むなうぉーい。そっちがその気なら反撃すんぞおらぁ！
酔いが回っておぼつかない手つきで、寝巻き姿のシアの脇に手を突っ込んで擽る。ほれほれぇ、はよどけやぁ。
「うひゃっ、なにしてんだてめー、うひ、ふひひひひ」
おっさんみたいな笑い声をあげて身を捩るシアに、同じように爆笑しながら攻め続ける。フヒヒッ、なにこれたーのちぃー。
お互い覆い被さり、擽ったまま、譲らない迷勝負を繰り広げる聖女（笑）と猟犬（笑）。
俺の耳から口を離してしまったシアが、反撃とばかりに首筋に舌を這わせて舐め上げてくる。
「ふふっ――ちょっとしょっぱいなー」

うひゃひゃひゃ、ちょっ、それもレギュ違反やろー、やめーや。
手足をばたつかせてはね除けようとするが、魔力強化を継続してるのかビクともしない。
これは……アレだな！　シアの反則敗けで実質俺の勝利や！
やっほーい、勝ったぞーい。と手足を投げ出して、勝利の余韻に浸る俺。
あー、気持ちえぇな。こんなになんも考えんで酒飲んで騒いだの何時ぶりやろか。
なんか首筋でピチャピチャ音がしてこそばゆい感触が続いてるが、それすらも気分が良くて気にならん。
こんな日々が続くなら……そら幸せっていって良いんだろうなぁ……。
なんか眠くなってきた……なんか忘れてる気がするが……まぁえぇかぁ。
「お～……？　なんだよー、寝るのかー？」
ん、おー……そんな感じっぽいわぁ……。
「おいい、ちゃんとれーやく飲んでから寝ろよーったくよー」
おぅ……そうだった……のむ、て……。
「しかたねーなー、ヒック。オレがいないとだめなあかちゃんかよおまえはよー」
酒瓶を直に呷ったシアが、たのしそうに、かおをちかづけ、て……。
なんだかえらく心地よい感触が口内に滑り込んできたのは覚えてるが、意識があった

のはそこまでだった。

くっっっっそ頭痛い（白目

朝起きたら、強烈に酒臭いシアと絡み合ったまま、床の上で転がっていた。

多分、酒臭さという点では、俺もおんなじようなモンだろう。

うぉぉ……気持ち悪ぃ……。

辛うじてベッドの上に這い上がりはしたが、起き上がれる程に回復はせず、そのまま芋虫のように寝台の上でのたうってます（後悔

ちなみにシアも起きた直後はゾンビみたいな顔色だったが、魔法でアルコールを解毒でもしたのかそのまま水浴びにいってしまった。なにあれずるい。

完全に解毒は出来なかったのか、妙に赤い顔のままだったのできっとミラ婆ちゃんあたりに怒られるぞアレ。

俺も鎧ちゃんがほんの最低限でも起動できれば、ある程度は血中のアルコールを毒物判定で分解してくれるんだが……完全使用禁止令が出ているのでそれも出来ない。つらい。

並の回復魔法では俺の体質&鎧ちゃんの耐魔(レジスト)性能が自動反応してしまうので、手近な知り合いに頼んで解毒、という手も使えない。

いっそリアにお願いしようか……いや、アカンわ。以前にシアと飲みに繰り出して二人でデロッデロになって帰ってきたときのやわらかいゴミを見るような視線は未だにトラウマや。

あんなお目々をもう一回向けられたら、にぃちゃんメンタルブレイクしちゃう。それなら二日酔いを耐えた方がなんぼかマシや。

いつまでもベッドの住人と化しとる訳にもいかんので、ふらつく足腰を叱咤してなんとか立ち上がる。

部屋に置いてあった水差しの中身を全部飲み干すと、多少は気分がマシになった。

飯は……無理だ。今まともな食い物の臭い嗅いだら胃の中のもん口から発射する自信しか無い。

時間ずらして……リゾットかオートミールでもあったら、なんとか食ってみよう。

ふらりふらりと、我ながら幽鬼の様な足取りで部屋を出る。

明らかに調子悪い足取りの俺を心配してくれる奴等もいたが……酒臭い俺に気づくと呆れた様子で軽く注意をされてしまった。

ぐぅ……分かっとる、酒が過ぎたのは自分の落ち度だけど、今はホンマ勘弁してくれ。つらい。

底値に近い精神ゲージを更に削られながら、なんとか食堂の裏手――大井戸の設置された水場にたどり着くと、頭から水を被ってついでにアルコールを薄める為に水分を枯渇させた身体に追加で水を補給する。

あー、しんど。でも少しはマシになったか……。

井戸に背を預けて、ぐったりと座り込む。

酒は飲んでも呑まれるなって、至言やなぁ……。

登ってきたお日様にあぶられながら、ぼーっとお空を眺めていると、ふと思い付いた。

帰ってきたことを告げて、きちんと再会の挨拶をして謝って――それはいい。

だがそれ以降の俺の生活を振り返ると、どうだろう。

朝起きて飯食って、鍛練して昼飯食って、適当に時間潰したり鍛練して夕飯食って、合間に糞垂れて夜に治療という名目で酒飲んで寝る。

――半引き籠りのヒモじゃねぇか!?　駄目だこれ!?

療養中と言って良い状態とはいえ、現状の生活サイクルを思い返して頭を抱えた。

おかしい、前は割と精力的にあれこれ動いていたというのに、何でこんな様を甘受しとるんや俺は。
なんか仕事貰おう。無理なら冒険者連中の酒場にいって街中の簡単なお使い依頼とかやってもいい。
治療がいつまでかかるか分からん以上、延々この環境に居たら脚が根腐れを起こしてしまう。
そこまで考え、頭に響く鈍痛に顔をしかめた。
まずは酒を抜かんとなぁ。やっぱり同じくやらかしたシアに頼むのが無難か。
「ここに居たか。部屋に戻ったらいないから探したぞ」
そこに狙い済ましたように、声が頭上から響く。
座り込んだまま上を振り仰ぐ前に、ポン、と頭が軽く叩かれ――嘘のように頭の鈍痛と気持ち悪さが消えてなくなった。
「悪かったな――ちょっと慌ててたから、お前の酒を抜くの忘れてた」
バツが悪そうに頬をかいたシアが俺を上から見下ろしている。
いや、助かったわ。正直今から探そうと思ってた。
一気に回復した体調を確認するため、立ち上がって身体を伸ばす。
いよしっ、二日酔いさえ無ければ調子は悪くないな。

昨日、あんだけ泥酔してたのに治療を行ってくれたらしいシアには感謝だ。ありがとな。

「おう、まぁ……うん。それはいいんだけど、さ」

何やら、歯切れが悪いと言うか、モジモジしてるというか、珍しく上目使いでこちらを伺うような表情をする友人に、俺は首を傾げる。

「その、昨日の事なんだけど……どこまで覚えてるかなー、って」

昨日の、か……ハイ、おっぱいおっぱい連呼してたのは覚えてます（白目

大変申し訳ありませんでした、と真摯に頭を下げる俺に、シアはホッとしたような、残念そうな、なんとも複雑な表情を浮かべて両手を軽く挙げて横に振った。

「いや、覚えてないならいいんだよ！　お互い大分酔ってたしな！　仕方ない仕方無い！　――それより、帝国に戻ったアンナから手紙が届いたんだ！　その内またこっちに出向するってよ！」

おぉ？　副官ちゃん戻ってくるのか。大分世話になったし、なんか奢る算段でも立てておくとするかな。

脳内で財布の中身を計算する俺に、シアが懐から便箋を取りだして手渡してくる。

「こっちもアンナから、お前宛だった――なんて書いてあるか聞いてもいいか？」

純粋に気になったのだろう、不思議そうな顔で俺が受け取った手紙を覗き込んでく

る。まぁ、確かに。副官ちゃんが俺に手紙書くとかどういう状況でもイメージ沸きづらいよね。

封を開けて、ささっと中の紙を広げると――俺は思わず顔を引きつらせた。

オッフ……これは……。

「？　なんだよ、何が書いてあったんだ？」

小首を傾げるシアに、俺はギギギと錆び付いた機械の如く、首をゆっくり向けて告げる。

――隊長ちゃん、来るってよ。

ある意味で、シアとリアよりも会い難いと思っていた――最後に喧嘩別れしたような形で終わってしまった後輩のような友人の到来に、嫌な汗が額を伝うのを感じた。

幕間：刃衆の長・後輩の少女

帝国首脳部への情報伝達を終えた俺は、そのまま魔族領への道を急いでいた。
今の処、戦争はこちらに優勢に進んでいるが、今度は総力戦に近いものになる。
重要な情報のやり取りは魔法を用いた遠話だけでは心許ないので、ここ最近はもっぱら各国への飛脚みたいな事ばっかりしていた。
鎧ちゃんを起動させて走る俺なら下手な伝令よかよっぽど早いし、情報を狙ってくるような連中がいても全部返り討ち――は無理だが、逃げるだけなら余裕だしね。
なんなら周囲の目を気にしなくて良い分、戦うにしろ逃げるにしろやり易いまである。
強化された身体能力で砂利拾って投げるのって結構有効なのに、皆に受けが良くないんだよなぁ……解せぬ。
鎧ちゃんのパワーアシストで長射程の散弾みたいになるんやぞ。屋外なら弾はほぼ無限だし、質より数でくる連中とかにすごい便利なのに……。
本日の天気は雨。
降りしきる滴にけぶる街道に、励起状態の鎧ちゃんの駆動音だけが静かに響いてい

る。

雨粒を弾き飛ばしながら疾駆する事、数十分。

街道沿いにある大きな運河に掛けられた橋に差し掛かると、石造りのソレの中程に誰かが立っているのが見えてブレーキを掛けた。

――んん？　……ひょっとしてあれ隊長ちゃんじゃね？

対邪神部隊《刃衆（エッジス）》。

帝国の誇る生え抜きの刃達を集めて作られた、人類側でも有数の戦闘集団の隊長殿がそこに居た。

背まで伸びた綺麗な黒髪を後ろで束ねた、女性としては長身に入る背丈。

要所を高密度の魔力導線が刻まれた魔装で補強した軽装の騎士鎧に身を包んでいる。

腰には愛用の湾刀がぶら下げられ、大体いつも通りのフル装備。

刀塚（たなづか）　京（みやこ）。

俺と同じ、日本からの転移者だ。

邪神の信奉者共やその軍勢には、冷酷無慈悲な殺し屋集団の一番やべーやつみたいな扱いを受けているが、本人は極めて善良かつ育ちの良さが伺えるお嬢さんやぞ。

基本、聖女にくっついてる金魚の糞か、戦場のキ○ガイ魔鎧野郎という極端な二択の評価しかされない俺を、色眼鏡無しで転移者としての先輩と呼んでくれる貴重な癒し枠

だ。
いや、まぁそんなことより、だ。
俺は慌てて近づくと、俯いたままの隊長ちゃんの手をとった。
「せん、ぱい……」
なんだか深刻そうな表情で顔をあげて俺を見上げてくるけど、取り合えず後だ後。
めっちゃ冷えてるやんけ。こんな雨の中、なんで傘も外套も無しに突っ立ってんの隊長ちゃん。
手を引っ張って、手近な樹の下へと連れていく。
傍目にも元気の無い隊長ちゃんは為すが儘だが、今はそれでもええわ。
背負っていた荷を下ろすと、タオルをひっぱりだして隊長ちゃんの濡れそぼった髪をわしわしと拭いていく。
俺に濡れた女の子の髪を繊細に拭き取るとかいう高等技術は搭載されてないので、そこら辺は勘弁して欲しい。
流石に身体を拭くとなるとセクハラになるので、他のタオルも引っ張り出して彼女に押し付けた。
取り合えず、それで取れる水気とっておきんしゃい。今から予備の外套探すから。
確か荷袋の下の方に入れてた様な気がする。最悪、俺が着てるのを渡せばいいや、俺

には鎧ちゃんがあるし。
隊長ちゃんに背を向けて、荷袋をひっくり返していると。
「先輩……先輩は、若草色が好きですよね」
なんて、エラく唐突な言葉が背に掛けられた。
いや、本当にいきなりだね――まぁ合ってるけど。
「緑系統の色が好きで、ピンクとか可愛い系の色は自分で使うのはちょっと嫌で」
そして更に唐突に始まる、俺の好みの色談義（困惑
えー。急にどうした。なんで今？　なんでここで??
「――一番に好きなのは空色なのに、自分では絶対に使おうとしない、ですよね」
……マジでよく見てるなぁ。ちょっと気恥ずかしいんですけど。
「はい……よく見てますから」
ザァザァと。
雨音が強くなった気がした。
「――先輩」
隊長ちゃんの声が、五月蝿いくらいの雨の中で奇妙に通って聞こえる。
「渡してくれたタオル、どんな色か分かりますか？」

ｏｈ……。

思わず、動きが止まる。

問いかける形だったが、明らかな確信をもって彼女はそれを口にした。

ウッソやろ、なんで気づいたんや。シアやリアにもバレてないのに。

背を向けたままだったが、少なからず驚愕の気配が漏れていたのか。

隊長ちゃんは「よく、見てますから」と再度繰り返した。

……これは、アレかぁ。下手をせんでも他の症状も把握しとるって思った方がいいか。

雨音が、無言になった二人の鼓膜を静かに揺らす。

沈黙を破ったのは、やはり隊長ちゃんの方だった。

「先輩――次の戦い、降りてください」

その一言で。

彼女がそれを言うためだけに、ここで俺を待っていたのだと漸く気付いた。

やっぱり良い娘だよなー。

まぁー俺みたいなのを先輩扱いして敬意払ってくれてる時点で分かりきったことではあるけど。

でも、申し訳ないけど……ほんっとうに申し訳ないけど。

俺はゆっくりと振り返ると、隊長ちゃんの顔を極力見ないようにして――。

――両の手と膝を土につけて、深々と頭を下げた。

ごめん無理ッス、あと誰にも言わんでくださいお願いします（迫真

俺のＤＯ・ＧＥ・ＺＡは却って腹立つくらいに見事な所作だと、各方面から太鼓判押されるレベルだ。

数少ない特技に、しっかりと謝意と懇願を込めて地面と隊長ちゃんの爪先をみつめ続ける。

息を呑む気配が、伝わってきた。

もうホント申し訳ない。こんな良い娘に損な役回りを押し付けてるようで罪悪感が半端ない。

でも、実際問題俺が次の戦い――ほぼ決戦になるであろう総力戦に参加しないというのは無理だ。

鎧ちゃんありきとはいえ、主力メンバーの一人に数えられている程度の自覚はある。

だけど、もしシアとリアに知られてしまえば、あいつらは隊長ちゃんと同じく俺を降ろそうとするだろう。

それじゃ意味無い。ここまでなんとか予定通りにやってこれた俺の目的もご破算だ。

いやね、あとちょっとなんですよ。
次の戦いをあいつらや、他の仲間達が無事に抜けられさえすれば、あとは最後の相手を残すのみってトコまで来てるんですよ。
切り札も用意した、勝ちの目はあると思う。
1対1の状況に持っていければ、届く筈だ。
その為には、前提として次の戦いに大勝利する必要がある。
万が一にもあいつの廻りの人間を取り零す訳にはいかん。
それは、目の前の彼女だってそうだ――目的の為にも、俺自身の望みとしても、絶対に死なせる気は無い。
単純な機動力だけなら、フル起働した鎧ちゃんより上の奴は滅多にいない。
その脚を生かして戦場を駆けずり回り、劣勢なとこに突っ込んで手強そうな奴をチョンパすれば、極力犠牲を減らして大勝にもっていけると踏んでる。
元から優勢な戦いではあるんだ。味方のフォローに全振りすればいけるって（脳筋感
そんな訳で、1回休みはちょっと無理なんです。勘弁して下さい。
「――ッ！　やめてください！　そんなことして欲しいわけじゃない！」
ぬかるんだ地べたに額を擦り付けてお願いを続けると、隊長ちゃんが膝をつき、声を荒げて俺の肩を掴んだ。

「レティシアとアリアちゃんに話して、直ぐに治療を受けて下さい！」
そんな身体で戦ったら最悪の事も有り得るんですよ!?　と、怒りすら滲ませて伏した俺の身を起こそうする隊長ちゃんに、地べたに額をつけたまま、静かに反論する。
そりゃ違う。そんなの俺だけの話じゃぁないよ隊長ちゃん。
長く続いてきた大戦だ。
ずぅっと昔にも、今の時代にも、この瞬間にも。
傷をおして戦ってる人なんて、ごまんといる。
死を覚悟して、それでも立ち向かおうとしてる奴なんて沢山いるんや。
シアやリア、隊長ちゃん達みたいな力が無くても。
邪神の上位眷族や加護を受けたような連中と戦えば、一薙ぎでまとめて殺されてしまうような――実際にそうなってしまった人達だって、小さくとも確かに輝いていた魂だった。
そうなることが決まってるような、彼らにとっては地獄同然の戦場でも、それでも彼らは戦うことを選んだ。
彼らにとっての最悪は、自分がそうなる事じゃなかった。
俺にとっての最悪は、自分がそうなる事じゃない。
ただ、それだけの話なんだよ。

この解釈についてはかなり自信がある、なんせシアリアにくっついて何年も戦場で色んな魂を《視て》きたんや。

魂フェチを舐めるなよ、割と筋金入ってる自負があるぞ（早口

極論、俺は鎧ちゃんがなければ彼らの――所謂雑兵や一般兵と呼ばれて一括りにされてしまう者達の側で。

だからこそ、この一点に関しては隊長ちゃんよりも理解が深いと言えた。

力も、才能も、時間も、なんもかんも足りてない奴が、それでも大事なもんを守ろうとしたり、何かを掴もうというのなら。

出来ることなんて、覚悟くらいなのだ。

そうして、相手と力の差がありすぎて釣り合いなんぞ取れてない天秤に少しでも乗せるものを、と。

乗っけられるもんは全部乗せていった結果、それに自分の命も含まれていた。というだけで。

幸いにも俺は相棒に恵まれた。命以外にも、天秤に乗せることが出来る特大の重りが手に入った。

だから、腹を括って挑む以外にもほんのちょっぴり出来る事が増えて、ここに居る。

今も戦えている。

本来ならどうにもならん相手や、生き延びる・生き延びさせることも難しいであろう状況をいくつも越えておいて、ちょっと欠け落ちる程度で済んでるんだから、寧ろ安いくらいじゃなかろうか。

なので、お願いします。俺からその『ちょっぴり』を取り上げないで欲しいんです。

長々と語ってしまった。我ながらちょっと痛い（自爆

でも大体言いたいことは言ったので、あとは隊長ちゃんが折れてくれるか、だ。

いうても、翻意出来なかったからといって俺に隊長ちゃんをどうこう出来る筈がない。

最悪、問答無用で二人に知らされてしまったら、戦いが始まるまでどこかに雲隠れして開戦と同時に乱入するしかない……女公爵あたりなら面白がって匿ってくれるだろうか。

あいつらから離れて戦闘開始となると難易度がちょっとあがるので、出来れば説得されて欲しい。

地に額をつけたまま不動で返答を待っていると、隊長ちゃんはゆっくりと立ち上がった。

「……分かり、ました……」

震える声でそう言ってくれた事に、安堵と感謝を感じて顔をあげようとして。

――雨音に混じって微かに聞こえた鯉口を切る音に首筋が総毛立ち、咄嗟に後方へと地面を蹴飛ばした。

掠めることすら無かったのは、単に運が良かったのに加え、迷って悩んでブレまくった太刀筋だったからだ。

それでも尚、雨粒と風を裂いて迅る刃は、疾い。

俺の右腕があった場所に振り抜かれた湾刀は、曇天の下でも目が覚めるような冷たい輝きを放っていた。

泥塗れになるのも無視して、二転三転と後方へと転がって距離を取る。

そこで俺は、話し始めてからやっとまともに彼女の顔を見た。

その瞳には、覚悟を決めた者特有の鋭い光があった。

だけど、眼光とは裏腹にその表情は悲痛、の一言でしか表せず。

敵でもない人間へと刃を振るった自身への呵責か、常ならば静かに整えられた気息は乱れ、小刻みに吐息が洩れている。

あぁ、クソッ……だから見たくなかったんだ。

幾ら腹を括ろうが、所詮は俺の事だ。

隊長ちゃんのこの表情をみてしまえば、ぐらつく事は無くても鈍る可能性は否定できない。

実際、現在進行形で効いてるわ。精神をノミでごりごり削られてるような気分になる。見てるのめっちゃしんどい。つらたにえん。

「……先輩は、そう言うだろうと思っていました……だから……」

震えた声のまま、乱れに乱れた呼吸を噛み殺し、隊長ちゃんは八双に構える。

迷いも躊躇も苦悩も振りきれないまま、それでも彼女は本気だった。

「――無理矢理にでも降りてもらいます。二人の処へ引き摺ってでも連れていくので、覚悟して下さい」

（逃げないように手足の一、二本斬り飛ばしてから治療も兼ねて）あいつらのトコに引き摺って行くんですね、分かりたくありません。

この子、こんなに物騒思考だったっけ（戦慄

兎に角、場所が悪い。

雨のせいでぬかるんだ足元では、思いきった踏み込みが出来ない。

ただでさえ基礎スペックに差があるのに、この足場では技量差までモロに出る。
先程隊長ちゃんが立ちつくしていた橋まで、なりふり構わず後退する。
構えたまま動かない隊長ちゃんを視界に入れたまま、二度、三度と地を蹴って、石作りのそこへと脚が着いた瞬間に。
カメラのズームアップ機能を使ったみたいに、瞬きの間に隊長ちゃんの姿が目の前に現れた。
速すぎワロタ。動作の起こりが全く分からん。
寝かせた刃が、足を狙って突き込まれる。
軸足を無理くりに回して半身になり、これを回避。
空を裂いた刃が天に向かって立てられ、切っ先が跳ね上がって俺の腕に向かい、銀光が閃く。
あくまで俺の無力化が目的なので、狙いはほぼ手足のみ。
おまけに心技体の内、心がガタガタの状態で技にまで影響を及ぼしている。
そういった諸々を差し引いて尚、素の俺と隊長ちゃんでは隔絶した差があった。
なんでかこうやって相対する羽目になって、つくづく理解したわ。
一度でも回避できたなら上等。
二度なら出来すぎ。

三度目ならば、奇跡というより何かの間違い。

そして、これが三撃目だ。

奇跡なんぞこの局面で起きる筈もなく、湾刀の刃が俺の左腕に吸い込まれるように迅り――。

――ギリギリで励起状態だった鎧ちゃんの装甲展開が間に合い、金属同士が擦れる音と共に火花を散らした。

そのまま戦闘時の起動状態にまで一気にもっていくと、両の手足を黒い鎧が覆い、皮膚を突き破って肉に喰い込むと同時に深紅の魔力導線が装甲の上を走る。

あっぶねぇ……マジでギリギリだった。

これで取り合えず、何も出来ずに手足飛ばされてシアとリアのトコに配達される、という結末だけは回避できそうや。

籠手と刃でジリジリと競り合いを行うと、迷いや躊躇いに溢れていた隊長ちゃんの表情が一変した。

「《報復（ヴェンジェンス）》……！」

親の仇か全ての元凶かといわんばかりに、険しい表情で俺の腕――を包む黒色の籠手を睨み付ける。

ちょ、怖い怖い。そんなに睨まんであげて。

確かに今の体調は鎧ちゃんの長期使用も一因ではあるけど、症状が急速に進んだのは切り札の試運転が原因だ。寧ろこれに関してはマイラヴリーバディのおかげで最低限の反動で済んだまである。

鎧ちゃん自体は悪い子じゃ……いや悪い子だけど。なんならツンとデレの比率が１０：０の氷河期絶頂のツンドラだけど。

俺の相棒なの。こいつのおかげで俺は戦えてるの。あんま嫌わないであげて（懇願

「……ッ、レティシアの気持ちが分かった気がしますっ！」

見たことのない――歯軋りしそうな表情で叫ぶと、隊長ちゃんから躊躇いが消えた。

剣を握っていた腕がぶれるように高速で動き、一際甲高い音と大きな火花を散らして籠手と噛み合っていた刃が引かれる。

相棒を起動中の痛みとは別種の、鋭い感触が薄皮一枚ぶんだけ腕に走った。

嘘やん、密着状態から引きの動作だけで鎧ちゃんの装甲斬ったの!?

唖然とする俺に、先程までとは比べ物にならない斬撃が連続で繰り出された。

狙いこそ変わらず手足のままだけど、太刀筋から完全に迷いが消えとる。なんなら絶対に斬り飛ばしてやるこの野郎という断固たる決意すら感じる（白目

彼女が鎧ちゃんにすごい敵愾心を抱いてるのはなんとなく分かったが……これ中身俺の手足なんですけど。受ける度に装甲と一緒に俺の腕もちょっと削られてるんです

けど。

隊長ちゃんの目がガン開きになってる。こわい。

嵐のように激しく振るわれる剣は、それでいてこっちの装甲を抜いてくるだけの鋭さも併せ持っていた。

流石に今のままだとジリ貧だ。ちと仕切り直すか。

右脚に向けて振り抜かれた高速の一刀を、膝を畳んだまま上げ、装甲の厚い外腿の部分で受ける。

瞬時に切り返される前に、鎧の凹凸部分に引っ掻ける形で膝を外に開いて刀身を外側に流した。

微かに身体が前方に泳ぐ隊長ちゃんだが、それで体勢を崩してくれるようなら《刃衆（エッジス）》のトップなんてやってない。

水面を滑るような足捌きで前に出ると、半身になって強烈な踏み込みと共に、肩を打点に体当たりが繰り出された。

それは予測済みだったので隊長ちゃんの肩が触れる前に、掌を身体との間に差し込んで受け止める。

そのまま肩を掴んで互いの体の位置を入れ換えると、身体が交差する瞬間に湾刀が振るわれ、掬い上げるような軌道で再度右足を強襲した。

それを知覚すると同時、鎧ちゃんのアシストを受けて右脚の各関節部から魔力を放出、動作の加速を行う。

避けるでも受けるでもなく、狙われた足を一瞬で振り上げ、斜めから振り下ろす。

鈍い音が響き、刃は石畳と擦れて雨天に在っても粉塵を巻き上げた。

湾刀の腹を踏んづけるようにして地面に縫い止めた俺を見て、流石に予想外だったのか隊長ちゃんの目が見開かれる。

ここで本来なら追撃を入れる処だが、隊長ちゃんが俺の無力化を狙うように、俺も彼女をなるべく怪我させずに止めたいので後方に跳躍して距離を取って、これで仕切り直し。

斬り傷が幾つも付けられた籠手と脚甲に魔力を回し、装甲の修復をささっと行う。

ベキベキと音を立てて復元される鎧ちゃんに、忌々しい、といわんばかりの視線を向けてくる隊長ちゃん。

なんだろうこれ。さっきから、図書委員とか似合いそうだなーとか個人的に思っていた、物静かで優しい後輩みたいな女の子の新たな一面ばかり発見してる気がする（白目

今にも舌打ちでもしそうな表情でこちらへ向き直って正眼に構える姿に、清楚系黒髪美少女への儚い理想を粉砕された気分になった。いや、勝手なイメージ押し付ける気は無いんで、いいんだけど。ひとのゆめってはかないものだし（童貞感

２０メートル程の距離を挟み、俺達は静かに対峙する。
初動の切っ掛けは特に無い。
隊長ちゃんの姿が一瞬ブレたかと思うと、橋に出来た水溜まりが踏み込みの軌跡をなぞるように、小さな水柱を噴き上げ。
迎え撃つ俺も、石畳を踏み砕きながら前方へと直進した。
刀身を担ぐように振り上げた体勢から、小細工無しの縦一文字の一閃が振り下ろされる。
助走と加速が充分に乗ったそれは、今までのように受ければ鎧ちゃんごと腕を両断されかねない。
なので、反らす。
刃を掠めるような軌道でアッパーを打ち、拳が削られる感触がすると同時に、縦に捻る。
本来ならこの程度でどうにか出来る一撃じゃないが、捻りと同時に肘と手首から内向きに魔力を全開で噴かした。
強烈な回転が掛かり、打った腕が軋みをあげて嫌な音を立てるが、そのまま強引に振り抜くと軌道を逸らされた刃の切っ先が石畳に喰い込んだ。
喰い込んだ湾刀を抜くにしろ、手放すにしろ、一瞬の間がある筈だ。

その一瞬に隊長ちゃんの首筋に手刀でも落として、鎮圧する。
そう思っていたのだが――彼女の対応はその上を行った。
「――ハァッ！」
短いが気迫の籠った息吹が吐き出され、石畳ごと刀身が引っこ抜かれる。
先端に冗談みたいな石塊が付いたままだってのに、先の打ち下ろしに匹敵するような速度で、拳を振り抜いた俺の腕へと斬り上げが放たれた。
マジかよ、これは完璧に予想外。
正統派の技量型、といった立ち回りの普段の彼女からは程遠い、強引さを前面に押し出した反撃は俺の意表を見事に突いてのけた。
うん、ホントにお見事だわ。違う局面ならマジで腕を飛ばされていたかもしれない。
両手足の装甲から魔力を噴射して全身を加速する。
ヨーヨーよろしく、空中で身体を丸めるように回転して跳ね上げられた刃を回避。同時に刃の先端――に食い込んだままの石畳へと脚を着けると。
――そのままそれを蹴り砕いた。
至近距離で弾け飛んだ無数の礫に、隊長ちゃんの動きが一瞬鈍り、
礫の隙間を縫って、俺の拳が彼女の額に軽く触れた。
――《命結》。

魔力を込めた衝撃が、貫通する。
打突としては威力は無いも同然だが、込めた魔力はしっかり『通った』。
打ち込んだ《命結》の効果は氣脈断（けみゃくだち）の一種――読んで字の如く、体内の氣や魔力の流れを断ち切る技だ。
本気で打つと色々と危ないが、軽く通しただけなので暫くは立てなくなる程度だろう。
決着だ。
怪我させずに終わってほんっと良かった……。
内心で安堵しながら、膝から崩れ落ちる隊長ちゃんを受け止めようと、手を差しのべようとして。

「――――ま、だっ、です……！」

それを振り払うように、隊長ちゃんは落ちようとする膝を強引に支え、湾刀を地に突き立てて倒れる事を拒否する。
いや、待って。無理しちゃアカンって。あんだけきっちり入ったんだから身体ロクに動かんでしょ。

「な、らっ……戦いを降りると、言ってください……！」
それなら今すぐにだって安心して気絶できます、と動かない身体とは真逆の、固めた意思を宿した眼光が俺を射抜く。
頑固な娘や――そして、強い娘でもある。
でも無理はいくない。首と胴を繋ぐ氣脈が一時的に細くなってるので、立ってるのもしんどい筈だ。
これ以上は戦闘とかどうやっても無理だろうし、俺の手足をすっ飛ばすのは諦めてくれると助かるんだけど。
「先輩は、もし私が二人に身体の事を話したら、一旦どこかに隠れてでも次の戦に参加しようとするでしょう……！」
ギシリ、と満足に動かない四肢を酷使して、無理矢理にでも立ち上がろうとする隊長ちゃん。
「今しかない……この場でしか、止める機会が無いんです……!!」
ウボァ、完全にバレてる……俺ってそんなに分かりやすいかなぁ……。
……なぁ、あと1回か2回だけだし、なんとか見逃してくれない？　これ先輩のお願い。
「……嫌です」

オッフ。嫌て。無理はしない――とは言えないけど、次の戦いでは皆で無事に帰る気満々なんで信じて欲しいんだけど。

「信用、できません」

グフッ（吐血

普段は優しくて人当たりの良い後輩からの実も蓋もない評価に、地味にダメージが入る。

い、いや、実際身体の事黙ってたわけだし、信じられないのも無理はないけどホラ、いきなり俺が抜けるとか各国の上が納得しないトコも多いだろうし。隊長ちゃんのとこの皇帝陛下だって多分俺と同じような結論に……。

「嫌です――絶対に嫌っ!!」

俺の言葉を遮るように放たれたのは、普段の彼女からは想像も付かない、駄々を捏ねるような絶叫だった。

無理矢理にでも立ち上がろうとする態勢のまま、肩で息をする隊長ちゃんの顔は伏せられたままで、表情を伺い知ることはできない。

それでも、その表情が酷く辛そうなものであることは――想像がついた。

咄嗟に返す言葉も持たず、無言のままアホみたいに立ち尽くした俺に対し、隊長ちゃんは俯いたまま、剣の柄を軋むほどに握りしめて言葉を零す。

「……分かってるんです、あの子達の為だと判断したら、先輩は止まらない。口でなんて言っても、結局はあの子達の――あの子の為にだけ、戦っている。そんなのは――分かってる！」

堰を切ったように、嘆くような、怒りをぶち撒けるような、半ば裏返った叫びが雨の中響き渡った。

「見てきたから！　ずっと見てきたから！　そんな事は最初から分かってるんです！――でも、それならせめて、眼を見て話をして下さい!!」

顔を上げた隊長ちゃんの瞳には涙が浮かび、盛り上がって大粒になったそれは雨粒と混じって頬を流れた。

「土下座なんてされたって、ちっとも嬉しくない！　ちゃんといつもみたいに私を見て話をして欲しかった！　私を見て欲しかった!!」

癇癪を起こしたように叫び尽くして。

それが終わると力が抜けたように、支え続けていた膝が落ちてしまう。

「わたし……が、さきに……たの、に……」

橋の上で力無く座り込んでしまった彼女は、泣きながら、ちいさく、何事かを呟いた。

……きっついな。

彼女の言う通り、俺は自分の目的を諦めることが出来ない。

その俺が、今、何を言ったところでおためごかしにもなりゃしない。
何より、俺は――そんな風に隊長ちゃんが泣いてくれるような価値のある奴じゃないんだよ。
戦う理由も、誰かを救った理由も、最後に向けた準備の仕方に至るまで。
勝手、勝手、勝手尽くしの普通にロクデナシやぞ。
現在進行形で泣かせてるしな――自分のお粗末なプランのせいで、本末転倒な光景を見るハメになってるんだから笑えもしない。
……とりあえず、隊長ちゃん抱えて最初の樹の下に戻るか。戦場にいるって訳でもないのに、女の子が長時間雨に打たれっぱなしとか良くないわ。
返すべき言葉も思い付かず、とにかく雨に打たれて泣いてる彼女をなんとかしたくて手を伸ばそうとして……。

――隊長ちゃんの体内で吹き荒れる魔力に気が付いて、動きを止める。
とんでもねぇ密度の魔力が、圧縮して渦巻いている様に眼を剥いた。
そして、更に気付く。
圧縮された魔力が、一時的に細ったソレを押し広げるようにして首と胴の氣脈を繋

げ、頭部へと――いや、全身へ満ちていく。

「……せない……！」

ゴウッ、と彼女を中心として過剰に放射された魔力が、物理現象となって風圧を発生させる。

うぉい、まさか《命結》の打効を、強引に押し流した!?

隊長ちゃんは確かにめっちゃんこ強いけど、そのレベルには流石に達してなかった筈だ。

修練の最中、同じ事をやってみせた戦友の筋肉戦車な武僧の姿が脳裏をよぎる。

本家のガンテスと違って打たれたと同時に一瞬で行った訳では無い。

それでも、似たような事をやってのけたっつーことは……！

「――絶対に、行かせません!!」

彼女が、壁を破って新人外領域に踏み込んで来たという事――！

刃が、迅雷の如く閃く。

咄嗟に後方に跳躍した俺の知覚にも、その一閃は殆ど認識出来ず。

コマ落としの様に振りきられた湾刀が隊長ちゃんの手の中に現れたと思った瞬間、二

人の間に線を引くように、橋が斜めに『ズレた』。
一泊置いて、爆風が発生して俺は橋からたたき飛ばされる。
手足の装甲から魔力を噴射して姿勢制御すると、地面を抉りながら橋下へと着地して頭上を振り仰ぐ。
両断された石造りの大橋が運河に降り注いで、巨大な水柱を天へと突き上げた。
雨と混じって上空に打ち上げられた運河の水が、土砂降りになって降り注ぐ。
その水柱を真っ二つに斬り裂いて、隊長ちゃんが放たれた矢の様に一直線に此方に向かってきた。
速い、なんてもんじゃねぇ……！
戦闘起動状態の鎧ちゃんによる知覚加速があっても、ギリギリ反応できるかどうかという超高速。
そして、その速度から繰り出される斬撃は高速を超えた神速だ。
防御は不可能。どうやっても受けた箇所ごと両断される。
粟立つ背筋に押され、躊躇なく《流天》を発動。かろうじて剣とそれに纏わりつく風の刃の殺傷圏を逸らす。
駆け抜け様に振るわれた一閃は、逸らされた先にある大地を削り飛ばしながら巨大な爪痕を穿った。

その一撃だけで終わる筈もない。
雨粒を弾き飛ばし、濡れた黒髪が翻る。
凄まじい速度で駆け抜けて行ったと思った隊長ちゃんは、既に俺の背後に踏み込んで湾刀を横手に構え、身を捻って剣を打ち込もうとしていた。
全力で魔力噴射を行って加速。高速旋回しながら彼女の斬撃を逸らそうとして――。
雷の様な一閃が、ほぼ直角に折れ曲がって俺ではなく、その足元を打ち据える。
ぬかるんだ大地が冗談のように爆発して、衝撃に押されて両脚が宙に浮いた。
――やっべ。
そう、思考した瞬間。
低い姿勢から、カチ上げるように弾丸の如き速度の体当たりが繰り出され、俺は上空に高々と打ち上げられた。
魔力噴射で地に降りる暇なんぞ、寸毫たりとも無い。
――左側から大気を蹴って駆け抜けていく隊長ちゃんの一閃をかろうじて捌く。
流しきれずに削り取られた装甲が、黒い破片になって宙を舞った。
吹き飛ばした大地と一緒に舞い上がった岩塊を足場に、右から神速の一撃。
これもギリギリでしのぐが、右脚の魔力噴射を行う部位が削り切られて機能不全を起こす。

また右、左、斜め上、左、右下、左上。
稲妻の様に空中を縦横無尽に駆け抜ける少女に、どんどんと高度を上げながらお手玉よろしく滞空フルボッコにされる。
――格ゲーの無限コンボかよ！　はよ修正しろォ！（錯乱
真下から天に昇る龍の牙の如く、刃が突き上げられ。
それをなんとか《流天》で流すと同時に、最後に残った右腕の装甲に大きく亀裂が走る。
閃光の様に真っ直ぐに上空に突き抜けていった隊長ちゃんの姿を視界に再度捉える前に、キン、という涼やかな音が嫌に大きく耳に届いた。
全身の皮膚が粟立ち、魔力放出機能を失ったせいで極端に不自由になった空中でなんとか身を捻って上空を見上げる。
雨の降りしきる空を背に、彼女は身を捻って最速の一撃への溜めを行っていた。
刀身は鞘に納められ、刃に纏っていた風の魔力はその中で解放を待つかのように渦を巻いている。
薄く閉じられた、両の瞳と削ぎ落とされた表情――極限の集中だ。
その姿に、なんとも呑気な事に、俺は。
あぁ、やっぱこの娘、かっけぇな。

なんて、しみじみと思ってしまった。
閉じられていた眼が、見開かれる。
真っ直ぐに、此方を射抜いたその瞳には、涙の名残りが浮かんでいて。
「――――――ッ、アアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」
隊長ちゃんの喉から烈迫の気合いが迸り、居合いの構えのまま神風となって俺に肉薄した。
ほんの半瞬だけ眼を閉じ、強く記憶に刻み込む。
俺を止めようと自身の限界すら打ち破って、必死に手を伸ばしてくる少女の姿をせめて眼に焼き付け、忘れないように。
そして――。
――《起動（イグニッション）》
相棒を完全起動。鞘から放たれた超神速の白刃に合わせ、カウンターで切って落とした。

と、まぁ、ハイ。そんなことがありました。と、正座しながら居心地悪そうに締め括る馬鹿を仁王立ちで見下ろしながら、オレは溜め息を漏らした。

ミヤコが来る、と聞いてから明らかに挙動不審になったコイツを問いただす為、アリアと一緒になって馬鹿を捕縛して、オレの部屋に放り込んで尋問を開始する事、小一時間。

――この馬鹿たれが煮え切らない態度を取るのは、大抵親しい人間相手に何かやらかしたときだ。

オレとアリアとの再会の時もそれでゴタゴタした部分があったし、相手は普段大人しいのに妙に直情的な処もあるミヤコだ。

変に拗れて刃傷沙汰にでもなったら笑えない、と詳細を聞き出そうと思ったのだが……。

「刃傷沙汰どころか1回ガチで戦り合ってたとか、予想外にも程があるわ馬鹿たれ」
ベッドの上で正座したまま小さく身を縮こまらせている相棒を見て、額に手を当てて再度嘆息する。
まぁ、聞く限りミヤコも大概物騒な対応ではあったけど……。
馬鹿の隣に座って話を聞いていたアリアと目を合わせ、示し合わせたようにお互い頷く。
「有罪だな」
「有罪だと思う」
「ちくわ大明神」
誰だ今の!?　と変な世迷言を叫びだした相棒は放っておいて、薄々感じてはいたが――予想より遥かに強力だった伏兵の登場に頭を悩ませる。
――あのミヤコが、ね。
正直に言えば、色々と胸中穏やかではいられない。
嘗て、こいつが身体の不調を隠していたこと。
オレもアリアも気づくことが出来なかったこと。
それにミヤコだけが気づいたこと。
おそらく、オレ達には絶対に気付かれない様に細心の注意を払っていた処に、普段か

らコイツを見ていたミヤコが違和感を感じた、という事なんだろうが。
それでも面白くないものは面白くない。
気付かなかった自分にも、気付いたミヤコにも、何とも言えないモヤモヤとしたものを感じてしまう。
「にいちゃんは悪くない――って言ってあげたいけど、ちょっと無理。ミヤコさんが可哀そう、かな」
こと『にいちゃん』に関しては滅多に聞かないアリアの辛辣な意見に、ゴッフ!? と呻くと、胸を押さえて踞る馬鹿。
――あ、これ何時ものようにふざけた反応だけど、割と本気で凹んでる奴だ。
元より、自分を心配して――かなり物騒な方法ではあったが――止めようとしてくれた女の子をぶっ飛ばした、というのは大分負い目になっていたのだろう。
ベッドに横倒しになって、貝になりたぁい……アサリになってお味噌汁に浮かんでしまいたぁい……と涙目で呟きだした相棒を見て、取り合えず自身の思考を打ちきる。
……よし、ここはオレの出番だろう。珍しくアリアが鞭担当になったのだから、飴はオレが与えてやるべきだ。
いそいそとアリアと反対側の相棒の隣に腰を下ろし、頭でも撫でてやろうとすると。
ひょいっと、アリアが奴の頭を膝に乗せて、そのまま優しく抱え込んでしまった。

「よしよし。大丈夫だよ、にいちゃん。ちゃんと謝ればミヤコさんも許してくれるよ。ダメだったらボクも一緒に謝ってあげるから、元気だそ？」

そういって、あやすようにその黒髪を何度も撫でると、アリアの腕の中にいる馬鹿の顔は多少明るくなり、てんすや、てんすがおる……！　と一人感激を始めた。

え～……それは無いんじゃないか妹（おとうと）よ。

そこは姉（オレ）に譲ってくれるべきだろ。普段は逆なんだから、滅多に無い機会なのに。

飴と鞭を一人でこなして馬鹿野郎とくっついてるアリアをちょっと恨めしく思いながら、伸ばした手をそっと引っ込める。

おいしい役処を取られてしまったが仕方ない。気を取り直して、話題を変える事にした。

「に、してもだ。よく勝てたな。お前のことだから身内にはどうやっても本気なんて出せないと思ってたけど」

最後の一撃、それも無力化に止めたとはいえ、ミヤコ相手にこいつが本気の拳を向けた、というのは予想外な話だ。

もし戦ったらなんだかんだと迷って、本気を出し渋って押し負ける、というイメージの方が圧倒的に強かったんだけど。

アリアに頭を抱きすくめられたまま、ちょっと決まりが悪そうに奴は呟いた。

区切っただけだ、と。
区切ったって……どういう事だよ？
視線だけで問いかけると、アリアも同じことを思ったのか不思議そうに抱え込んだ馬鹿の顔を覗き込む。
――いや、相手がお前かリアだったら普通に負けとるわ。
オレが最初に視たのはお前で、視ていたいと思ったのはお前らやし。
なんて、何でもない事のように。
ミヤコへの申し訳なさを感じさせる口調で、目の前のアホは口走った。
――おまっ……ふざけんなアホ野郎。
言葉が脳に染み渡ると同時に、頬に熱が集まるのを感じた。
不意打ちにも程があるだろ、ホントふざけんなよ。
もうこれアレだろ。こいつこの場で押し倒しても絶対合法だろ……！
スイッチが入ってしまったのか、抱きしめるのを通り越してがっちりと頭をロックして抱き潰してくるアリアに目を白黒させているアホを、睨み付ける。
くそ、顔が熱い。最初はミヤコとの話を聞くだけのつもりだったのに。
顔だけでなく、熱を持ったあちこちを誤魔化すように立ち上がった。
「アリア、そのままそのアホを押さえてろ」

「……うん」
「霊薬をとってくる――これから『治療』を始めるぞ」
「……うん」
返事こそしているが、アリアは聞いちゃいない。
熱に浮かされたような顔で、ひたすら腕の中のアホの顔にほっぺたをくっ付け――1ミリでも隙間を無くそうといわんばかりに身を寄せている。
え、これから!?　急スギィ!　なんてがっちり捕獲されたまま喚いてるアホを無視して、オレは霊薬を保管してある部屋へと足早に向かうことにした。
――アイツの魂の回復が進むのは悪いことじゃないし、丁度良い。
強敵（ミヤコ）も近いうちに来るというなら、たっぷりとマーキング（牽制）を行っておくのも、悪くない。
どうしようもなく浮き立つ心を押さえながら、軽い足取りでオレは歩き出した。

隊長ちゃん
愛が重くなってしまった子、3号。
実は転移前のマジキチと同じ学校だった。一度だけ会話もしたことがある。
なんとなく気になっていた高校の先輩が異世界で全方位曇り止めに精を出してるのを見て拗らせてしまった可哀そうな娘。
尚、何かの間違いで転移前に二人が付き合ったとしても、魂フェチに覚醒する前の駄犬はただのロクデナシなので一月とかからず自然消滅する。
地金に気づく前に曇り止めスプレー缶になった先輩を見て想いが昇華されてしまいました、責任とって下さい。

ちくわ大明神
あらゆる世界、あらゆる物語に存在し得る現象。
時間や場所、第三の壁すら越えて、某かのメッセージを届ける。
言葉を飾る事に意味はない。
たった6文字のなかにも、確かに伝わる想いはあるだろう。

隊長ちゃん、襲来

手に取った果物にかじりつく。

梨っぽいけどリンゴの風味がするソレは、自分の世界の果物を覚えている身には脳がバグってるような不思議な感覚を与えてくれる。美味いけど。

或いは俺が知らないだけで、似たようなモンがあっちにもあったのかもしれんけどね。

二人の献身的な『治療』のおかげで、やっとこ聖殿で缶詰状態から聖都内なら外出が許可されるようになってはや数日。

俺は街に降りて、久方ぶりに市場巡りをして道行く人々を眺めながらぶらぶらと歩いていた。

我ながら、今までいい子にして勝手にお外に出ないようにしてたと思うの。

いや、一回だけ街の酒場に行こうとしたらシアに凄い剣幕で止められた上に、凄い綺麗に笑ってるのに何故か全く笑ってないように見える不思議なスマイルを披露されて、それ以降はすっぱり諦めたんだけど。

酒は夜になったら『治療』がてら飲む場合も多いし、中途半端になってしまった

《武器掛け棚亭（ウェポンズ・ラック）》の片付けや修繕経過が知りたかっただけなので、人伝でもどうにかなる事だったしね。

決して懐に突っ込まれた手の中からジャラッて音を聞いたからではない。くさりなんておれはみていない（白目

それにしても、一人で行動するのは久しぶりな気がする。

外出許可が出てからも、必ずシアかリアのどっちかが付いて来てたし。

一緒に出掛けるのは構わないし、それはそれで楽しめるんだが、どうやっても注目を浴びるし自然と『お出掛け中の聖女様とそのお供』になるので、気侭なブラリ時間とは言い難い。

昨日一緒に街を歩いたリアが「これも楽しいけどもっと気軽に一緒に散歩したい」とブーたれてたので、そのうち変装でもしてお忍びのお出掛けとかに付き合わされそうな気がする。

そうなったらそうなったで、ちょっと面白そうなので俺的には問題無いけど。

そんな二人も、今日は帝国から出向してくる人員の受け入れ準備の最終チェックでどうしても抜けることが出来ないと、渋々俺を送り出す事になったわけですが。

変なことに首を突っ込まない、日が暮れる前には帰ってくること、人気の少ない処には行かない、安易に誰かに喧嘩を売らない、困ってる人が居たらまず衛兵を呼ぶ、あと

厄介事に首を突っ込まない。
はじめてのお使いをする幼児か、俺は。
もう二人揃って口を酸っぱくして言うわ言うわ。信用なさすぎワロタ。特に最初と最後なんて同じやろ。
とはいえ、俺の体調を心配しての怒濤の注意喚起なので無下にするつもりはない。
本日の予定は人通りの多い場所をのんびり散歩するのみとなっております。
オススメの穴場を開拓して二人を連れていくとかもしたいが、それは追々でええやろ。
謎の果物を味わいながら、改めて二年前と今との違いをあちこち見つけては感心したり、首を捻ったり。
これはこれで小さな発見の連続で、良い暇潰しになる。
だが、それも心置きなく、という訳にもいかんかった。
先にも触れたが、帝国からの出向員が近々――それこそ早ければ明日にでも到着する予定だ。
派手にぶっ飛ばした後、抱き上げると意識を失っているのに此方の外套を掴んで離さなかった黒髪の少女の事がどうしても頭を過る。
あー……どんな顔して会えばええんじゃぁ……。

果物を食いきると、並ぶ露店の隙間に置かれた樽に腰掛け、唸り声をあげた。
ただ商売の邪魔になるのも悪いので、樽の持ち主らしい串焼きの露店のおっちゃんに二本ほど肉串を注文して、ちょっと硬い塩味のソレをガジガジと噛みながら頭を悩ませる。
あの時、あの瞬間。
俺は隊長ちゃんの決意に応じる形で、一瞬とは言え本気になって彼女を打倒した。
来るべき邪神との戦いの前に、明確に区切りを入れたのだ。
彼女に、では無く、シアとリアに。
元から優先順位という点では不動の同率一位のつもりではあったが、同じように輝いた魂を持つ仲間や戦友の間に越えられない線を引いた。
アイツらの為――というか二人を優先したいと思う俺の勝手な気持ちの為に、立ち塞がる者は誰であろうと――焦がれた彼ら彼女らであっても力尽くで押し退けると。
勿体つけずに言うと、こちらの身を心配して隊長ちゃんが伸ばしてくれた手をひっ叩いて、俺は二人が笑ってるであろう結末を選んだのだ。
――まぁ、それも最後の特大ガバで目の前でくたばって大泣きさせるというアホ極まりないオチになったわけですが（白目
誤解を恐れず言ってしまえば、手酷くフった女の子の前にノコノコ現れる糞野郎に

なった気分である。生まれてこの方、そんな浮いた話はひとっつも無いが……無いが……!!

どの道、聖女であるシアとリアのもとに戻った以上、帝国の要人である隊長ちゃんとは関わる事になるのは確定事項だ。

再会するのが遅いか早いかの違いなだけで、心証的には早いほうが良いに決まってる。

本当なら土下座を通り越して五体倒地で地面にめり込むまで謝罪したい処ではあるが……土下座されても嬉しくないって言ってたからなぁ……止めておいた方がいいか。その程度の学習は俺でもするのだ。

肝心の謝罪の方は、しっかり眼を見て、謝って、あとはお詫びの品でも贈るくらいしか思い付かないけど。

許してくれるのなら、また以前の様な良好な関係に戻りたい。

良い奴等だけど尖った個性の持ち主ばっかの周囲の人間の中で、彼女は本当に貴重な癒し枠なのだ。最後の大喧嘩のときに大分尖った部分も見えた気もしたけど。

うん、良し。大体方針は固まった気がするぞ。

今日に限っては、外出すんの一人で良かったかもな。気分転換しつつ、明日以降の行動も決められた。

シアとリアとの再会で学んだ。こういうのは勢いと早さが大事なのだ。
なんなら、明日以降は城門近くで出待ちしてもいい。きちんとした品は後日選ぶとしても、再会時に渡す詫びの品でも見繕ってみるか。
そんな風に思い立ち、何か良さげな物を探そうと樽の上から飛び降り、串を一気に頬張って刺さった肉を空にした。
よし、いくべ。花や食い物は……日持ちしないからダメだな。何が良いかね？
手近な処を廻ってみるかと、記憶からそれらしい店を引っ張り出して歩き出すと。
――背後から、相当な速度で突進してくる気配を探知して瞬時に振り返る。
すわ、逃走中の物盗りか何かか、と腰を落として身構え――

「――――――先輩っ!!」

叫びながら、一気に飛び付いてきた懐かしい姿と声に思わず硬直して、その突進を正面から受け止めるハメになった。
ウゴッフ!?　み、鳩尾に……!?
飛び込んできた黒髪の頭部が、いい具合に腹に入ってたたらを踏む。
あ、アカンこれ、踏ん張れない。

衝撃を逃がす意味もあって、そのまま受けきるのは諦め、飛び付いてきた人物ごと後ろに倒れ込んだ。

うぉー……痛てて……倒れた先に小石とか無くて良かった……アレ地味に痛いねん。

仰向けになったまま、腹にタックルしてきた人物――隊長ちゃんを改めて見ようとして、

ガバっと顔をあげた彼女は、そのまま馬乗りになって俺の顔を両手で挟んで、至近距離で覗き込んでくる。

お人形さんみたいに整った顔が間近で瞬き一つせずに俺を見据え、それに鼻白んでいると頬を挟んでいた両の掌が、ペタペタと俺の顔や首、肩を触りはじめた。

うーむ。元から和風正当派美少女！　って感じの女の子ではあったが、この二年で更に磨きが掛かった感じがする。

前からスタイルも良かったが、更に出るとこ出て引っ込むとこは引っ込んでグレードアップしてるので、現状の体勢はあんまりよろしくないのだが、それより何より驚いた点があった。

長く綺麗だった濡れ羽の様な黒髪が、ばっさりと肩の辺りで切り揃えられている。

こちらでは貴重な黒髪ロングが失われてしまった、超勿体ない（童貞感

髪型なんて個人の好みだし、これはこれでめっちゃ似合ってるし、可愛いけど。

何処か不安気な面持ちで俺をペタペタしていた隊長ちゃんは、最後にもう一度俺の頬を挟み込んで持ち上げると。

「……あったかい……」

そう、ポツリと洩らして、その顔をくしゃりと歪めた。

「夢じゃ、ない……！　生きてる……！　せんぱい、い、き……っ」

黒曜石みたいな綺麗な瞳からボロボロと涙が零れ落ち、呆気に取られた俺の顔を濡らした。

必死に何かを我慢する様な表情のまま、涙をあふれさせていた隊長ちゃんだが、こらえきれなくなったのか眼をきつく閉じると、そのまま俺の胸元に顔を埋めて声を押し殺して泣き出してしまう。

思わずその頭を撫でて、あやす様に軽くポンポンとしてしまって……そこでハタと思い至った。

——今は真っ昼間、ここは市場の通り道のど真ん中やん。

周囲の視線に今さらながら気付いて、顔から身体からブワっと汗が吹き出すのを感じた。

いや、悪い視線じゃないのよ。寧ろ温いというより、暖かというか、優しいモノが多い。

多分、二年前から今にかけて、あちこちで散見された光景の一種と思われたのだろう。
戦後、生死不明だった家族や親しい人間がひょっこり戻ってきた、みたいな感動エピソード的なアレだ。
お互い黒髪黒目の転移者同士だし、大戦中に生き別れた冒険者のパーティーメンバーとか、そんな感じだと思われたのかもしれない。
誰だって暖かい眼で見る。俺だってそーする。
だが自分がそういった眼で見られるのがＯＫかどうかは――また別の話だ。
気恥ずかしさに頬に血の気が集まるのを感じながら、俺は慌てて隊長ちゃんごと起き上がると、泣いたまま動こうとしない彼女を抱き上げて、市場からダッシュで離脱を開始した。
――駆けろ俺、雷の如く！（必死
そんな俺の背に、「おめでとう！」とか「お幸せにな！」とか「彼女さんを泣かすんじゃないよ！」とか「末長く爆発しろ！」とか。
口笛付きで幾つもの声が掛けられ、内心で羞恥の悲鳴を上げながら市場を駆け抜ける。
まさか一人一人にそーいう関係じゃねぇから！　と説明する訳にもいかず、只ひたすらに走るしかない。

この恥ずかしさを分かち合ってくれるべき隊長ちゃんは、抱えた腕の中でぐすぐすとしゃくりあげている真っ最中。

なにこの羞恥プレイ。新手の拷問かよ、しにたい（白目

逃げ出すように市場を抜け出して、噴水の設置された広場へとやってきた。

この辺りまで来ると流石に人波も減り、隊長ちゃんも落ち着いて来たので噴水側に置かれたベンチに彼女を下ろすと一息つく。

「すみません……」

さっきの状況を思い返して、流石に恥ずかしくなったのか小さな声で肩を竦めながら謝ってくる隊長ちゃん。

いやまぁ、確かに悶死しそうなこっぱずかしい状況ではあったが、元はといえば喧嘩

別れ同然でそのままおっ死んだ俺に原因があるので、ハイ。気にしないで下さい。
死んだ、と言った辺りで彼女の肩がビクリと震え、恐る恐るといった様子で隣に座った俺に手を伸ばしてくる。
「先輩……身体は、もう大丈夫なんですか？」
おう、もう大丈夫ですよ。ちゃんとタオルの色だって分かるし、隊長ちゃんが今つけてる髪留めの色もしっかり見える。翠掛かった落ち着いた良い色だね、ソレ。
正確には、魂の消耗に引きずられてまだ不調な箇所はいくつかあるのだが、それもシアリアのおかげで段々と回復してきている。
この分なら、そう遠くない内に完治も見えてくるだろう。ありがたいことだ。いやホントにね。
俺の目元に触れるか触れないかといった近さで彷徨っていた指先が、安堵したように下ろされる。
いや、実際に安堵したんだろう。明らかにホッとした様子で、肩から力が抜けるのが見てとれた。
到着の報は来てないのに、なんで聖都にいるのかとか、副官ちゃんはどうしたのとか、色々と疑問はあるが。
まずは言うべき事があるよな。

――隊長ちゃん……じゃねぇな、ミヤコちゃん。

何気に名前呼んだの久しぶりな気がする。といっても、名前呼び自体が過去に一回か二回した位だけど。

もの凄い反応があった。

ババッと電光石火で顔を上げた彼女は、よっぽど驚いたのか目を見開いて顔が朱に染まっている。

予想外に大きなリアクションが返ってきたが、それは今は気にない事にして、言葉を続けた。

あのときも、今も、心配してくれてありがとう。心配掛けてごめん――そして、ブッ飛ばして本当に申し訳ありませんでした。

土下座はＮＧなので、軽く頭を下げた後はしっかりと隊長ちゃんと目を合わせて謝意を口にする。

恥ずかしながら、こうやって戻ってくる事ができました。もし許して貰えるなら、また仲良くしてやってくれませんか？

割と真剣に、嘗ての友好関係に戻りたい。君は俺の貴重な癒し枠なので（真顔

内心の懇願が通じたのか、隊長ちゃんは暫し呆けたように此方を見つめた後。

何処か照れ臭そうな、だけど華が咲くような笑顔を浮かべて、俺の手をとってくれた。

「はい――おかえりなさい、先輩」

無事に関係修復が叶った俺達は、ベンチに腰を下ろしたまま、積もる話のまま二年ぶりのやり取りを続けていた。

暖かな日差しの下、噴水の周りを駆け巡る子供達や、今日の予定を楽しげに語りながら道行く街の人々の声をＢＧＭにして、穏やかに会話は続く。

――そういえば、まだ出向人員が到着するっていう先触れも来てなかったんだけど、なんで隊長ちゃんは聖都にいるんだろう？

最初に頭を掠めた疑問を改めて彼女に問いかけてみると、少し恥ずかしそうにして答えてくれた。

「その……馬であと一日という処で、夜営をする事になりまして……その位なら走れば

直ぐだと思ったので、夜が明けてからアンナちゃんにお願いして私だけ先行させてもらいました」

走れば直ぐ（馬で一日掛かり

うん、まぁ。隊長ちゃんの脚ならそうだね。

しかし、来てくれたこと自体は嬉しいけど、《刃衆（エッジス）》のトップとその補佐が揃って帝国を抜けるって、良く皇帝陛下が許可したよなぁ。戦が終わったとはいえ、国防の観点から言っても難色を示しそうな人は多そうだけど。

馬二頭を引きながら、今ごろ聖都にえっちらおっちらと向かっているであろう副官ちゃんに、たらふく奢ってやろうと思いつつ、素朴な疑問が追加で生まれたので更に質問する。

隊長ちゃんはニコニコしながら、あぁ、それなら。となんでもない事のように口を開く。

「大丈夫です。ヒゲ（陛下）には直接お願いして短期ですけど、出向許可を貰ってきました」

へぇ～……いや、ちょっと待って。今、自分の国の皇帝をすごい呼び方しなかった？

思わず隊長ちゃんの顔を二度見するが、相変わらず上機嫌なまま、凝視してきた俺を不思議そうに見つめ返してくる。

気のせいかな……うん、そうだ。気のせい、気のせい、聞き違い。

お、そうだ（震え声

一連の出来事のお詫びも兼ねて、何か隊長ちゃんに贈り物がしたいんだけど……なんか欲しい物ってある？

「え!?　いえ、そんな。先輩が無事でしたし、こうしてまたお話が出来るようになっただけで、私は」

控えめに謝辞するであろう事は予想出来ていたので、恐縮した様子で竦められたその肩を軽くたたいて、俺はまぁまぁ、と彼女の言葉を遮った。

俺としても隊長ちゃんの事を気絶させた事は未だにモヤモヤしてるし、ここは俺の気持ちを救うと思って受け取ってくれると助かるんだよなぁ。

「でも……それをいうなら私は先輩の、その、手足を斬ってしまえ、なんて思ってた訳ですし……」

いうて、隊長ちゃんが斬ったもんなんて皮膚を薄皮1枚程度だし、決戦前なのに鎧も破損させて気絶までさせた俺の方が圧倒的に有罪なので、天秤に乗せるまでもないやん。

現状、収入の無い身なのであまりお高いものは無理ですが、俺を助けると思って何かリクエストして頂けるとありがたいです。

当時の行動にうしろめたさを感じているのか、ちょっと歯切れの悪い隊長ちゃんの言

葉をやんわりと否定しながら、言い募る。
俺の屁理屈のゴリ押しでも納得してくれたのか、少し笑ったあと上目使いでこちらをみて、それなら、と彼女は続けた。
「どうしても……という訳では無いんですけど、ついさっき欲しくなった物がありまして」
ほう、ついさっきとな。何なのか聞いても？
「はい――櫛です」
櫛？　ヘアブラシとかじゃなくて、日本のアレ？
「はい。また、髪を伸ばそうかと思って」
それは――うん、いいな。いい。実に良い判断だと思います（食い気味
「そうですか？　それなら、良かったです――でも、この世界に日本みたいな櫛があるかどうか分かりませんし」
残念そうに言う隊長ちゃんだが、俺には心当たりがある。
以前、シアとも話したが、振り袖を織っているという服屋さんなら、日本風の櫛もあるのではなかろうか。
女性の服飾なんてさっぱり分からんが、髪を纏めるワンセットとしてありそうな気がする。

渡りに船という奴だな。丁度良いので、今度シアに連れていってもらったときに探してみるか。

アテがあるのでなんとかなるかも、とだけ隊長ちゃんに告げると、彼女も予想外だったのか眼を輝かせて喜んでくれた。

確定では無いので、ぬか喜びになったら申し訳ない。が、件の店なら他にもよさげな物がありそうだし、完全空振りになるという事はなさそうだ。良かった良かった。

そのまま、会話が盛り上がって互いの近況について話すことになる。

といっても、俺の方は大枠ではそんなに話すことは無いんだけど。

俺達がこっちに来る前に会った、神様っぽい人にもうワンチャンあるで、とアフターライフを貰ったこと。

帰ってきたことを言い出せずにゴタついたこと。

なんとか再会を経て、現在は半分療養生活みたいになってること。

纏めるとこんなもんだしね。

穏やかに、互いの事を話合ってたんだけど。

「……『治療』ですか？」

おう、詳細は分からんが、魂の消耗を直すとかいう大仕事を毎夜やってもらってるおかげで、大分体調は良い感じやで。

「毎夜……？　先輩、差し支えなければ詳細を聞いてもいいですか――あ、教会の秘技が関わるというのであれば、無理にとはいいませんが」

慌てたように付け足す隊長ちゃんだが、安心して欲しい。先に言ったように俺にも詳細はガチで分からんから。

なんせ、霊薬飲んで朝まで寝てるだけだからね！　世の長く苦しいリハビリに耐えて復帰を目指す人々に申し訳なくなるレベルの温さやぞ。

「――――――――――は？」

なんか隊長ちゃんの口から聞いたことのない低い声が漏れた。

「先輩」

はい。

謎の圧力に押され、居住まいを正して背筋を伸ばし、神妙に答える。

「朝まで寝てるって、霊薬とやらを飲んで、ずっと、ですか？」

はい。そんな感じです。良い具合に酩酊感が来て、あとはぐっすりです。

「それを毎晩？」
毎日って訳ではないです、たまにお休みの日もあります。
シアが昨日は頑張りすぎたから今日は無しとかいうと、中止になったりする感じです。滅多にないけど。
「――まとめましょう。先輩はほぼ毎晩、朝まで眼を醒まさず、その間、レティシアが好き放題に『治療』とやらを行っている、と？」
あ、いや。シアだけじゃなくてリアも手伝ってくれてるし、治療行為なんで別に好き放題って訳ではないかと、思うん、ですが。
治療開始まえに酒盛りしたりもするけど、アレは俺も楽しんでるし。
メキィっと。
座ったベンチから嫌な音が響いて、なんでかビビってしまって俺は首を竦める。
金属で出来た肘掛け部分が、ねじり切るようにしてむしり取られ、地面に落ちた。
わぁ、すごい。鉄作りのパーツが絞った雑巾みたいになってる（白目
「先輩」
はい。
隊長ちゃんが恐い。
なんなら二年前の大喧嘩のときより遥かに恐い。どうなってんのこれ。何が起きた

の。

さっきまでとっても楽しそうにしていた彼女は――今は能面のような無表情だった。

「出向してきた身として、大聖殿に挨拶に伺わないといけません。なので、名残惜しいですがお話の続きはまた今度、ということでいいでしょうか？」

はい、全く問題ないです。いってらっしゃいませ。

立ち上がって、ビシッと敬礼する。

「ありがとうございます、では」

言葉短かに、一つ頷くと、隊長ちゃんは静かに立ち上がってそのまま足早に聖殿の方向へと歩き出した。

俺は将官を見送る新兵の如く、不動のままその背を敬礼状態で見送る。

「――あぁ、そうでした」

１０メートル程進んでピタリ、と、その歩みが止まる。

「贈り物、楽しみにしてますね。先輩」

振り返った隊長ちゃんは、それはそれは綺麗な笑顔で。

はい！　粉骨砕身で良いものを選ばせて頂きます！（迫真

と、もう殆ど条件反射みたいな速度で俺は返答した。

ふふっ、なんですかソレ。なんて、ちょっと可笑しそうに吹き出して。

今度こそ、振り返らずに隊長ちゃんは広場から歩き去って、人混みの中に消えていった。

敬礼したまま、動かずに一分経ち、二分経ち。

三分経った時点で、噴水近くで遊んでいた子供達の使っていたボールが足元に転がってきて、ようやっと俺は動き出した。

緩慢な動作でボールを拾い上げて、此方へ手を振っている子供の処へ放ってやる。

力無く転がっていくボールを拾って元気よく礼を言ってくるおチビ達に軽く手を振り返して、肘掛けが片方無くなったベンチへと崩れ落ちるように座り込んだ。

――どうしてこうなった（白目

もうお家帰って寝たい。

でも今のおっかない隊長ちゃんが向かった先は、俺の今のお家である。

もう一度、言おう。

どうしてこうなった。いやマジで。

ぐったりとした心持ちでベンチに背を預けて、空を見上げる。

先刻までは清々しい快晴だと思っていた空が、今は腹立つくらいに青いなコンチクショウ、と感じた。

アンナの受難

アンナ＝エンハウンスは騎士である。
守るべき民と、背を預ける戦友と、尊敬する愛しの隊長と、あとついでに皇帝陛下の為に、剣を執り戦う事を生業とした戦士である。
大戦が終わったからといって騎士の仕事が終わる訳ではない。
先の一件の吸血鬼（ヴァンパイア）然り、邪神の軍勢の残党達も各地に潜み、存在している。
憧れであり、目標である隊長の隣に立って戦う為にも、日々精進あるのみであった。
幸い、出向先である聖教国には猛者も多い。
聖女姉妹を筆頭とした高名な聖職者の他にも、あの戦争を生き残った腕利きが多数在籍しており、腕を磨く機会は多く、充実していると言えた。
そして今回。急に捩じ込まれた話ではあったが、己の上司であるミヤコ隊長も聖都に出向する事になったのだ。
あの困った駄犬（ゆうじん）に振り回される形で一度帝国に戻る事にはなったが、おかげで隊長が一緒に来てくれたと考えれば寧ろ感謝しても良い位である。
修練は捗るし、ご飯は美味しいし、聖都は良いところだ。

隊長がいない事だけはアンナちゃんポイント的に大きくマイナスだったのだが、これで唯一と言ってもいい不満は無くなった。

自分と違って短期出向なのは残念だが、己と隊長が所属している部隊の事を考えれば贅沢は言えない。

一緒に過ごせる時間を大切にしつつ、先に出向していた経験を生かし、良い処を見せて褒めてもらおう。

嘗て駄犬は、副官ちゃんは身体の必須栄養素にミヤコニウムが入ってる人類だから仕方ないね、等と言っていたのを思い出す。

珍しく良い事を言うものだ。と、素直に礼を述べたのだが、何故か奴は処置無しィ！と天を仰いで叫んでいた。とりあえず馬鹿にされてるのは分かったので蹴っておいた。

尊敬できる上司を敬愛する事の何が悪いのか、まったくもって失礼な奴だ。

美人で優しく、穏やかで普段は控え目ですらありながら、いざ戦場ともなれば圧倒的な武力を持って並み居る敵を斬り伏せる。

黒髪黒目は転移者によく見かけるカラーではあるが、隊長ほどの美しい黒髪と黒瞳はアンナは他にお目にかかった事が無かった。

スタイルも抜群で、とくに大きなお胸とほっそいお腰のくびれの生み出す曲線はアン

ナちゃんポイント＋１０００でも足りないげーじゅつひんである。
あのくびれを眺めながらであれば、自分はパンを無限に食べれる。お腹一杯になるまでくびれだけでいける。
こちらに出向して間も無い頃、聖女姉妹の片割れ――妹御であるアリア様にそう力説していた処を鬼シスターに見つかって正座させられた事も、今となっては懐かしい思い出だ。
やや話が逸れた。
とにかく、アンナは隊長を尊敬している。
こちらに転移してきて二年足らずで《刃衆（エッジス）》が作られる切っ掛けを作ったその武力も、穏やかな中にも強固な芯を感じさせる内面も、敬愛するには十分過ぎる程の要素が揃っていた。
聖都への出向で会えない時間が長かった分、共に仕事ができる喜びも一入である。
そして、今。アンナの推して止まない隊長は――。
いつもの優しい微笑みを浮かべた穏やかな立ち振舞いは何処へやら、物凄い無表情で愛刀の手入れをしていた。

今二人が居るのは、大聖殿内にある来客用の応接室だ。
先行して走っていってしまった隊長の馬を引きながら、聖都に戻ってきて明くる日。
短期出向の挨拶を兼ねた聖女との会談、という形での友人との再会に、立場上、アンナも当然同席する事になった。
予め、決められていた会談の場所――即ち此処で、隊長はソファに腰を下ろすとテーブルの上に道具を広げだしたのだ。
目釘こそ抜いていないが、打ち粉に拭紙、各種油に油紙と、刀身の手入れに余念が無い。
勿論、帝国のお抱えの鍛冶師に定期的に調整はしてもらっている。アンナの双剣もそうだ。
それでも以前から、隊長は自らが行う手入れを欠かしたことは無い。
「命を預ける得物（パートナー）ですもの。本職の人に比べれば拙いでしょうけど、自分で感謝を込めて綺麗にしてあげるのは良いものよ？」
と、にっこり笑うその表情は、アンナちゃんポイント＋３００ものだった。
優しく、丁寧に愛刀を拭き上げるその姿に、おい、ちょっとそこ代われ。と隊長の手の中の湾刀に嫉妬したのは秘密である。
そんなワケで、彼女が己の剣を労る光景自体は、そう珍しいものでは無い。

だが、いつもの笑顔が、今は無い。
表情筋が1ミリも仕事をしていない。感情が抜け落ちたような面持ちで、無言のままソファに腰かけて手入れを続けている。
そんな彼女の背を眺めて暫く経つが、とうとう堪え切れずにアンナは声を掛けることにした。
「あの……隊長(たいちょー)？」
「なぁに、アンナちゃん？」
いつも通りの優し気な声だ。
――ただし、表情筋が死んでいる。
どうしよう、隊長が怖い。
黙り込みたくなるが、一度声を掛けてしまった手前、アンナはなんとか疑問を声にして絞りだす。
「これから、聖女様――レティシアと出向挨拶を兼ねた、会談ですよね？」
「ええ、そうね。もうそろそろ来る頃だと思うわ」
じゃぁ何で今、剣の手入れをしてるんですか？　というのが本当の疑問なのだが、言える訳が無かった。
疑問を飲み込んで結局黙ってしまったアンナを他所に、隊長は手慣れた様子で油紙で

最後の一拭きを行うと、静かに刃を鞘に納める。
「やっぱり、直前に手入れをしてあげた方が、なんとなく刃筋が滑らかに通る気がするの」
そう呟いて、此方を振り向いた彼女は――いつも通りの笑顔だった。
先程までの虚無顔は幻だったのではないかと思うほどの、いつもの優しい笑顔なのだが……アンナは何故かそれに引きつった笑顔を返してしまう。
――直前ってなんですか。この後、抜く予定があるんですか。
当然、この疑問も口にだせる訳が無かった。

いつもなら至福であろう隊長と二人っきりの時間を何故か重苦しく感じていると、遠慮のないノックが応接室の扉から響き、お～い、開けてくれー。なんていう、友人の声が聞こえてきた。
立ち上がろうとする隊長を押し止め、私がやります、とアンナが扉に向かう。
ドアノブを捻ると、その向こうにはティーセットの載ったトレイを抱えた金糸の髪の聖女――レティシアが居た。
「やぁ、悪い悪い。見ての通り両手が塞がってるからさ」
「いや、自分で持ってこないで誰かに淹れさせなさいよ、立場ってもんがあるでしょ」

というか、足でノックするの見られたら後でアンタも中庭行きじゃないの？　と呆れた目を向けるアンナに、そこは黙っていてくれると助かる、と笑いながら返してレティシアは応接室に足を踏み入れた。

聖女という肩書きも殆ど気にしていない明け透けな態度は、アンナ的には好ましい。

なので、出会った当初から二人は良い友人関係を築けている。

さっきまで湾刀の手入れ道具が広げられていたテーブルに、今度は緩やかに紅茶の香りを立ち上らせるティーセットが置かれる。

レティシアが手ずから茶を淹れるのを眺めながら、アンナは隊長の後ろにそっと控え、手を後ろに組んで直立した。

「？　なんでそんなとこに立ってるんだよ、こっちに座ったらどうだ？」

「そうよアンナちゃん。そんなに堅苦しい場でもないでしょう？」

不思議そうに首を傾げる二人に、いえ、一応会談という形なんでこのまま控えてます。とソファに座る事を固辞する。

決して座ることによって逃げ場が失われる、逃げるのが遅れる事を危惧した訳ではない。

そもそも何から逃げるというのか。あくまで聖女と《刃衆》の長が会談を行う場に侍る立場として、立ち位置を弁えたに過ぎない。座ることに何故か生存本能を刺激された

りはしていない。断じてしてない。
「まぁ、アンナがいいっていうなら、そのままでもいいけどさ」
レティシアが軽い口調でそう言って、直後。
「――さて」
「えぇ」
異口異音で、金色の聖女と、黒髪の戦乙女は同時に頷いた。
「久しぶりだな、ミヤコ。元気そうで良かった」
「お久しぶり、レティシア――変わり無いようで安心したわ」
視線が交わり、お互いに笑顔を浮かべて互いの壮健を喜ぶ言葉を交わす。
何気ない、再会の挨拶だ。
だというのに、何故か応接室にカーンというゴングの音が響き渡った気がした。

「あとでアリアにも会ってやってくれよ、アイツもミヤコに会いたがってたし」
「ええ、勿論。私もアリアちゃんに会うのは楽しみですもの」
ニコニコと笑顔で穏やかな会話を続けるレティシアと隊長に、何故かただならぬ圧迫感を覚えながらアンナは密かに息を飲んだ。
おかしい。自分が知る限りでは、二人はそこそこ以上に気安く、良好な関係を築いていた筈だ。
間に駄犬（あのバカ）が挟まると妙な緊張感を走らせる事もあったが、今回のソレは今までの比では無かった。
額に汗を浮かべるアンナの胸中など置き去りに、表面上は穏やかなやり取りの中、レティシアが何気ない様子でジャブを打つ。（会話を切り出す。）
「そういえば一昨日、一人で先行して聖都入りしてたんだって？　あんまりアンナに負担を掛けてやるなよ？」
「それは昨日の内に謝ったわ――でも、確かにそうね、ごめんねアンナちゃん？」
こちらを振り向いて申し訳なさそうに眉をひそめる隊長に、いえ！　あのくらいなんでもないです！　とついつい鼻息も荒く返してしまう。
これは本心だ。酷く焦燥に駆られた様子だった隊長のお顔が晴れ渡るなら、アンナ的にはあの程度、負担の内にも入らない。

憂いに満ちた横顔も素敵なのでアンナちゃんポイント＋５０なのだが、やはり何時ものような優しい微笑みのほうがポイント５倍なのである。

力強い返答に、安心した様子で頷いた隊長は笑顔に戻ってカウンター（同じく何気ない様子で呟く）を叩き込んだ。

「そう言ってもらえて、とっても助かるわ――だって……フフッ、先行したおかげで先輩と大切な約束ができたんだから」

「――へ、へぇ」

胸に手を当てて、記憶を丁寧に噛み締める様に微笑む隊長に、レティシアが頬の端をヒクつかせて反応した。

約束とやらについてはアンナも気になる処ではあるが、正直今はそれどころではない。

謎の圧迫感はいよいよもって強くなり――明確に二人の放つ圧となって部屋を満たさんとしていた。

「オレは聞いてないなぁ……ちなみにどんな約束をあの馬鹿としたんだ？」

「それは勿論――秘密よ。先輩と私だけの、ね？」

膨れ上がり、応接室に限界以上にまで詰め込まれた圧力（プレッシャー）が空気を軋ませたような気がする。

まさか、この二年鍛練を欠かさなかった己を呪うことになるとは思わなかった。

二年前の自分なら、この時点で気絶出来てたかもしれないのに。

二人の放つ空気に、深海に沈んで圧縮された瓶になったような気分で遠い目をするアンナ。

「まぁ、なんだ。市場で派手な再会劇をやらかしたみたいだけど、人のモンに手エ出してんじゃねぇぞコラ」

「あら、大丈夫よ。先輩は赦してくれたし、何よりは？　そもそも貴方のモノじゃないでしょう」

会話で殴り合っている両者の放つ重圧に耐えきれなくなったのか、紅茶のカップにピシッと音をたててヒビが走る。

――もうやだ、おうちかえりたい。

今の二人の意識が間違っても自分に向かない様、必死に気配を殺して石ころと化そうとしながらアンナは内心で悲鳴を上げた。

会話の流れから、なんとなく察した。これは本来自分が味わうべき修羅場ではない。

脳裏に駄犬のアホ面がよぎり、おまえちょっとこっち来い、すぐに変われ。と呪詛を飛ばす。

「ははは、祝福かぁ。アイツはオレの相棒だから、街の人達はちょっと変な勘違いをしちゃってるみたいだなぁ……あとで変な噂にならないよう、火消ししといてやるよ」

「ふふふっ、いいのよ、別に？　そのままでも――それに私、思うんだけど」
レティシアも隊長も、ずーっと笑顔のままではあったが、ここで隊長が更に笑みを深め、華やかに、楽しそうに宣った。
「アイドルの追っかけって、あちらでもあったでしょう？　――熱心な人でも、推しのアイドルと実際に家庭を持つ相手って、大抵は別なものだと、そう思わない？」
ピシリ、と空気に致命的なヒビが入った。
今の応接室は、まともな生存本能の持ち主なら近づく前に全力でできびすを返すであろう重苦しい空気が、膨れ上がった風船より酷いレベルの過圧状態で詰め込まれている。
――ここが地獄だ。アンナは静かに確信した。
「そうかー、アイドルの追っかけかぁ。ユニークな視点って言った方がいいか？　ふ、は。はははははははははははは」
「無理に褒める必要は無いわ、だって私がそう思ってるだけだもの、ね？　うふ、ふふふふふふふふふ」
もう勘弁して、おうちにかえして。ねるならゆかじゃなくておへやのべっどがいいの。
ギャリゴリと悲鳴と軋みを上げて空間が捻れて歪んでいくような、そんな錯覚を覚えながらアンナが意識を手放そうとしていると、空気を変えるような一言を放ったのは、

やはり隊長だった。

「――前置きはこの辺りにしておきましょう、レティシア。先輩の治療について聞きたいの」

その一言がもたらした反応は、劇的だった。

笑顔のまま、ドラゴンだって腹を見せて恭順の鳴き声をあげそうな重圧を発生させていたレティシアが、一瞬顔を強張らせ、次に頬を赤らめて、そしてそのまま目を大きく泳がせる。

そんなレティシアを見て、隊長は目を細め、表情がストンと抜け落ち、最後に口元が何かを我慢するように引きつった。

霧散した応接間の重苦しい空気に、気絶しなかった事を喜べばいいのか、気絶出来なかった事を嘆くことにすれば良いのか。

どちらにしても地獄、といった風情ではあったがそれよりも気にかかる事がある。

その治療とやらもそうだが、アンナが気になったのは、その前。

（いや、ちょっと待って前置き!?　アレが前置きなんですかたいちょー!?）

私それで失神しかけたんですけど!?　という思いと、じゃぁ本題は!?　という恐怖

で、どこぞの馬鹿の様に白目を剥きたくなる。
　戦々恐々としているアンナを他所に、一気に勢いが失われたレティシアが、目を逸らしたままごにょごにょと呟いた。
「いや、それに関しては一応、最上位の治癒魔法技術も関わってるし、聖教会の秘に掠める部分もあるからちょっと詳細は言えないというか……」
「先輩は、自分は寝ているだけだから、全く内容は知らないと言ってたけどナニをしているのか聞いても良いのかしら？」
　口ごもるその言葉をばっさりと切り捨て、隊長は単刀直入に切り込んでゆく。
　傍から見ていれば、レティシアにある何らかのうしろめたい点を突いた隊長が、彼女を追い詰めている様にも見えるが――
　――どうにも嫌な予感がして、アンナの背筋に悪寒が走る。というか現在進行形で止まること無く走っていた。
（あ、これ駄目なやつだ。このまま話を進めると絶対酷いことになる）
　持ちたくもない確信をはっきりと抱くハメになり、さりとて口を出せる訳もなく、大嵐を木陰で必死にやり過ごす小動物のような心持ちで祈るのみである――ホントふざけんなあの駄犬。あとで覚えてろ。
「術式や魔力操作の説明は別に聞かなくてもいいの。ただ――そうね、見学でもさせて

もらえると嬉しいのだけれど？」

「良いわけねーだろ！　できるかそんな事！」

顔を真っ赤にして反射的に、といった様子で叫んだレティシアが直後に己の失態に気付いたように口を噤むが、その時点で隊長は何かを確信したのか、数秒、顔を俯かせて

再び面をあげたとき、そこには本日一番の美しい笑顔があった。

こんな状況でなければ即座に脳に丁寧に丹念に焼き付け、永久保存したくなるようなアンナちゃんポイント＋１０００オーバーの女神様を思わせるスマイルである。

なお、今保存すると思い返す度に状態異常：恐怖が付与されるトラウマ映像になってしまうので泣く泣く断念した。

威圧も喧嘩腰の雰囲気も無い、只々美しい笑顔に、怯んだようにレティシアがソファの上で身を仰け反らせる。

気持ちは分かる、先程までの笑顔と違って一切重圧が無いのが逆に怖い。怖いが、完璧にただの巻き添えな分、味わっている理不尽度はアンナの方が遥か上である。駄犬共々、悔い改めろ聖女。

そのレティシアは気圧されたまま、隊長の様子を伺いながら歯切れ悪く言葉をぶつ切りで零した。

「あー……ミヤコ。さっきのは、その、なんというか、そういう意味じゃなくて、だな?」
「なんですか何か言いたいことがありやがるんですかぇぇ聞くだけなら聞いてあげますよこの性女」
句点は全てレティシアにくれてやった、と言わんばかりにワンブレスでぶった切る隊長。
というか今、その口からとんでもない罵倒が聞こえた気がする。
こんな新たな一面知りとうなかった、でもそんな隊長も素敵。とアンナは現実逃避気味に思考した。
進退窮まった、といった感じのレティシアだったが――
ふーっと。大きく息を吐くと、唐突に落ち着いた様子で無言でテーブルの上の茶器を――自分のだけでなく隊長の分まで片付け始める。
カチャカチャと小さな音を立ててトレイに一纏めにされてゆくそれを、同じく無言で待つ隊長。
アンナはそれを怪訝な気持ちで眺めていたが……なんとなく。そう、なんとなく巨大な火薬庫に繋がっている導火線に、火がつけられたイメージが湧いて、ごくりと、唾を飲み込む。
やがて、綺麗にティーセットがトレイの上に片付けられ、レティシアはそれをそっと

テーブルの脇に寄せた。
静かに立ち上がると、意を決した表情で、一言。
「――そうだな。この際、言っておくことがある」
「そう。辞世の句は決まったの？」
いつの間にやら、脇に立て掛けていた愛刀を握りしめている隊長の女神スマイルにも今度は一切怯む事なく、通り名の由来である美しい淡い金の髪を見せつけるようにかきあげて。
片足を振り上げると、ダァン！　と空いたテーブルの上に叩きつけて威風堂々と笑い、親指で自身を指し示して宣言した。

「――よく聞け小娘共！　アイツの『初めて』はお前らではない！　このオレ、レティシア＝ディズリングだ!!」
「ぶっころす」

それを聞いた瞬間――。

アンナはこれまでの人生最速と言っていい速度で魔力を足に装填し、渾身の力をもって窓に向かって跳躍した。

この二年、必死に鍛えた足腰は彼女の意思に応え、一瞬で凄まじい加速を生み出す。

窓を突き破るまでの刹那、極限まで集中・加速された知覚によって、隊長から大戦中でも聞いたことのないドスの利いた声が聞こえたとか、小娘共ってなんで私までカウントされてんのよとか、ここから脱出したら美味しいご飯を食べにいこうそうしようとか。まるで走馬灯の様に、様々な思考が脳裏を過ぎ去り――。

無事、窓をブチ破って外へとダイナミック・エスケープを果たした。

たなびくサイドテールの銀の尾が窓枠を越えたギリギリ、間一髪のタイミングで応接室に結界が張られ、強固なそれは外界との物理的一切を遮断する。

死地からの脱出を果たし、受け身をとって柔らかな芝の上へと着地すると、アンナは大きく息を吐き出した。

「た、助かった……生きてる……私生きてる……！」

生きてるって素晴らしい……！　と、中天の太陽を仰ぎながら、致命レベルの危機を脱した喜びを噛み締める。

あぁ、空気が美味しい。と胸一杯に平穏なソレを吸い込むと、先程脱出したばかりの窓へと目を向けた。

応接室と他を隔てるように張られた――おそらくはレティシアの魔法であろう結界は、薄青い光を放つ障壁となり、部屋の中を伺い知る事は出来ない。

聖女が本気で構築した結界は、内部で起きているであろう痴話喧嘩という名の人外級同士の激突も音一つ、魔力の波動一つ洩らさず、建物の外周部に当たるこの場所は、穏やかな静寂を保っていた。

恐る恐る窓に近づいてみると――衝撃がちょっと結界を突破したのか、音を立てて壁にヒビが入った。

「ヒィッ!?」

思わず悲鳴を上げながら、5メートルほど一気に後ずさる。

幸い洩れたのはそれだけであったのか、以降は何も起こる事なく、再び静寂が戻ってきた。

どこからか鳥の囀ずりが届き、長閑な空気を助長する様だ。

それでも警戒を解かず、アンナは窓と応接室の外壁に視線を固定したまま、じりじりと後ろ足で後退を始める。

まるで音を立てれば死ぬと言わんばかりに、ひっそりと、息を殺すようにしてゆっくりと下がって――建物の角を曲がって完全に視界から応接室の外壁が消えると、そこでようやっと、止めていた呼吸を再開させた。

「あぁ……疲れた……なんで私がこんな目に……」

壁に背を預けて、ズルズルと座り込む。

極限状態から一気に解放された反動か、脱力感とセットで猛烈にお腹が空いてきた。

ご飯食べに行きたい。けど虚脱感が酷い、動きたくない。

ぐったりと壁際に座ったままのアンナに、あれ、副官ちゃんやんけ、何してんのこんなトコで？　なんて声が掛けられる。

のろのろと顔を上げると――そこには能天気そうなアホ面（事の元凶）が居た。

消耗し尽くした精神が、沸き上がる感情で急激に回復してゆく。

――あぁ、なんだろう、この気持ち。私は今、無性に目の前のこの男を……。

「ブン殴りたい」

何故!?　と叫んで距離を取る馬鹿を横目に、嘆息して立ち上がる。

「冗談よ。いや、殴りたいのはホントだけど」

原因はこの男だろうが、流石に本人の預かり知らぬ処で起きた事で殴られるのはたまったものでは無いだろう。ブン殴りたいという気持ち自体は嘘偽りの無い純粋な本心だが。

ええ……なんでやん……と納得行かなさそうにしている奴に、アンナは真面目くさった表情を作って疑問に答えてやることにした。

「――うん。私、さっきまでちょっと地獄っぽい場所にいたんだけど」
え、なにそれこわい。という呟きは無視して、にっこり笑って続ける。
「あそこにいるべきなのって、私じゃなくてアンタだと思うの。だからつい、ね」
ちょっと待って俺、暗に地獄に落ちろって言われてる!? と悲鳴を上げて騒ぎ出した男に、多少溜飲の下がったアンナは小さく吹き出した。
「まぁ、それはともかく。お腹ぺこぺこだからご飯食べに行きたいのよ。アンタと遊んであげてる暇は無いの」
だからホラ、散った散った、と。手をシッシッと振って男を追い払おうとすると、それならば、と手を打って下がらずに逆に切り出してきた。
――この間は色々世話になったし、なんか奢ろうと思ってたんや。街の屋台でもここの食堂でも、どっちでもご馳走するぞい。
全方位トラブルメーカーのこの男にしては殊勝な心がけだ。特別の特別に、アンナちゃんポイントを＋１０してやってもいい。
「それじゃ、お言葉に甘えて奢ってもらうとしますか――近いから食堂で」
降って沸いたタダ飯の機会に、ちょっと良い気分になりながらアンナは男と連れだって食堂に向かう。
「とりあえず、ここ一年の新メニューは全部制覇したい処だね」

ちょっとは手加減してくれませんかねぇ!?　なんて文句を抜かす駄犬(ゆうじん)に、なんだか可笑しくなって意地悪く笑ってみせた。

「知らないわよ、バーカ」

復活の〇〇

――今日は、朝から身体の調子が良い。
治療が進み、なんとなくだが予感があった。
最近では珍しい事だが、一人で目を覚ますとベッドから身を起こし、体調をチェックする。
うむ、大分良好――治ってるな。
流石に完治とはいかないが、あと一息、といった処か。
あんまり自覚なかったけど、前の戦争終盤といい、戻ってきてからの今までといい、やっぱ調子は良くなかったんやなぁ。
健康体に近づいてきた今なら分かる。以前の俺は相当にガタガタだった。
今思えば、再構成された肉体は味覚がほぼ完全に回復した状態だったのは幸いだったな。食が進まないと治療も進まないのは道理ってもんだ。
うん……一区切りついた、というべきか。
自身の状態を確認し終えて、しばし考える。

結論は直ぐに出た。
そうだ、お祝いに行こう。
そうと決まれば、早速シアとリアに会いに行くか。
完治祝いとはまた別だが、二人あっての快癒だからね。時間空いてるなら一緒に飲みに繰り出そう。
あまりハメを外すのは良くないだろうが、こんな日くらいは外出して祝ってもええやろ。
そう思い立って、意気揚々と寝床から飛び出すと部屋の窓を開け放ち、新鮮な朝の空気を胸いっぱいに吸い込んだ。

――今日に限って、二人とも、お出掛けできませんでしたァ!!
盛大に肩透かしを食った気分で、トボトボと一人、街を歩く。

治療に注力してくれたのはいいが、そのせいで少し溜まり気味になっていたお仕事を今日中に一気に片付けるつもりらしい。

そら邪魔できんわ。原因俺やし。

いっそ隊長ちゃんや副官ちゃんを誘おうかとも一瞬考えたが――すぐに却下した。

治療の功労者が本日は仕事漬けだし、今日予定していた祝いの趣旨は、隊長ちゃん達にはそぐわないだろうし。

今日はやめておいて、後日でいいか。一人でお祝いとかソロのクリスマスパーティーの如き辛さだし。

とりあえず、普通に街をブラつく感じでいいかな。と、俺は《武器掛け棚亭（ウェポンズ・ラック）》へと足を伸ばすことにした。

「おう、いつぞやの兄ちゃんじゃねぇか。真っ昼間っから飲みに来たのか？」

扉を押し開けて店に入ると、出迎えたのは前に俺に絡んできたスキンヘッドのおっさんだった。

とはいえ、派手に喧嘩したら後は引きずらないのは冒険者の流儀らしいので、お互いに含むものは無い。

まぁ、そのつもりではあったんだけど……無理そうだなコレ。

質問に答えながら、店内を見渡す。

おっさんは脚の無い椅子を複数抱えていて、その背後に広がる店内は――前に俺が乱闘騒ぎを起こした時と同等か、それ以上にぶっ壊れていた。

ええ……この間、内装直ったばっかりじゃなかったっけ。また喧嘩で壊れたの？

「おう。昨日は丁度、高ランクのパーティー同士が同席してなぁ……あんまり仲の良い連中じゃなかったからよぅ」

よりにもよって高ランク冒険者が複数で乱闘したんかい。店が倒壊しなかったのは奇跡だな。

「度が過ぎたら店主（マスター）から出禁食らっちまうからな。その辺は連中も塩梅を弁えてたんだろうさ」

椅子というより折れた薪みたいになってる木切れを、店の片隅に纏めると嘆息しながら肩をぐるぐると回すスキンヘッド。

「店主（マスター）も元は冒険者らしくてよぉ。現役引退したのは大分前だっつーのに、これまた腕っぷしが強くてなぁ……ここらで冒険者やってる奴は、店主（マスター）には頭の上がらん奴ばっかりよ」

なるほど。如何にも古強者って感じの貫禄あるし、実際立ち振舞いに隙は無いし。元

はさぞ腕利きの冒険者だったんやろな。
俺は黙々と店内を片付ける厳の様な背中に視線を向けると、得心がいったと頷いた。
うん。でもその頭の上がらない人のお店を破壊し過ぎじゃね？
酒と喧嘩は街での冒険者のスタンダードではあるんだろうが・・・・・・多いときは月イチのペースで店が悲劇的ビフォーアフターされてるって相当やぞ。
なんということをしてくれたのでしょう。雑然としながらも活気に溢れていた酒場が、みるも無惨な廃墟のような有り様に！
――いうても、一回は俺も関わってるのでそんなに強くは言えないんですけど。けど。
「まぁ、そんな訳だからよ。今日はここで飲むのは諦めて別の場所を探した方がいいぜ？　今回、兄ちゃんは喧嘩に関わってねぇし、片付けを手伝う義務もねぇだろ？」
モップを掴んで柄に顎を乗せると、恐面のおっさんは、俺達ぁ思いっきり混ざっちまったから暫くは片付け要員よ。と愚痴のようにこぼした。
ご愁傷さまと言っておこう――しかし、面子は集まらんし、出かけた先での店も修繕中だし、今日は日和が悪いのかねぇ。
スキンヘッドに張り合う訳ではないが、俺も愚痴混じりで盛大に嘆息してしまう。
「なんでぇ、今日は予定でもあったのかい？」

おうともさ。今日はちょっとした快気祝い的なつもりだったのよ――人も場所も決まらんで諦めたけどね。

大雑把に、以前は体調がよろしくなかった事と、大分復調したので軽くお祝いでもしようと思った事を説明すると、いつの間にやら片付けの手を止めて集まっていた冒険者連中から、揃って同情的な視線を向けられてしまった。

「そうかぁ、アンタも苦労してんだなぁ――若いのに」

「聖女様の従者ってのは正直羨ましいが……戦争中はさぞ激務だったんだろうな」

「一杯奢ってやりてぇ処だが、店がこんなんだしなぁ」

「そんな事よりＮＩＮＪＹＵＴＵ教えてくれない？」

なにこれ唐突に暖かい（困惑

重要な部分はばっさりカットして、適当に経緯を語っただけなんだが、彼らの琴線に触れる部分があったらしい。

正確には俺の立場は従者ではなく傭兵なんだが……まぁ、周囲からみたらあんまり変わらんのだろ。戦争が終わった今は、特にね。

あと最後の奴、俺はＮＩＮＪＡじゃねぇっつってんだろ。

「お前ら、半分は捌けていいぞ――そこの坊主に良い店でも紹介してやれ」

やたら低くて渋い声で言ってのけたのは、店主（マスター）だった。
深い皺と共に古い傷跡が無数に刻まれている、如何にも歴戦の強者と言った顔は仏頂面で固定されたままだったが、不機嫌というよりはこれがデフォルトっぽい。
俺達が話し込んでいる間に破損した木材をさっさと片付け終えた店主（マスター）は、両手の埃を払いながらギョロリと俺に眼を向けた。
「坊主、お前はミラの弟弟子だな――あまりアレに心配をかけてやるなよ」
うぇ？
店主（マスター）の口から予想外も予想外な名前が出てきた。マジか、ミラ婆ちゃんと知り合いだったんか。
素でびっくりしてる俺に、鼻を鳴らしながら「古馴染みだ」とだけ答えると、片付けに戻ってしまう。
元冒険者が、聖教会の御意見番と古馴染みかー。なんか面白いエピソードがありそうだし、今度、機会があったらもっと話をしてみたいもんだ。
奇妙な繋がりの発見に関心していると、冒険者の一人が「それなら」と手を挙げた。
「このあと行こうと思ってた店があるんだが、一緒にどうだ？」
紹介だけかと思ったが、一緒に飲もうとまで言われるとはちょっと意外。乱闘の一件

以来、多少認められた感はあったけど酒の席に誘われる程とは思ってなかった。
俺はよっぽど意外そうな顔をしていたのか、声を挙げた男は頭をかきながらだってなぁ……と続ける。
「店主（マスター）と関わりがあるって時点で、そう悪い奴じゃないってのは保証されたようなもんだし――聖女様の話とか聞いてみてぇし」
あ、テメエ自分ばっかきたねぇぞ！　という声が上がって納得がいく。
店主（マスター）の信頼度もそうだが、シアとリアの人気もあってのお誘いね。従者と思われてる俺なら、色々な聖女様のエピソードを聞けるかも、という感じか。
目の前のいかつい連中が夢想する金銀の聖女様像からは斜め４５度にぶっ飛んだ話ばっかりなんだが……夢を壊さない範囲で当たり障りの無い話くらいなら、まぁいいか。
聖女様方の話を聞かせてくれるなら、奢るぜ。と期待に目を輝かせて言う男共――いや、女も混ざってるけど――に、奢りという言葉にも後押しされ、俺はこっくりと頷いた。

――そして、翌日。

朝も早よから、俺は4人の女傑に囲まれて中庭に居る。

「えー、それではこれより、裁判を始めます」

右には厳粛な面持ち――とは程遠い、微妙にやる気の無さそうな声で号を発する副官ちゃん。

その隣では、リアがそわそわと何度も手を組み直している。珍しく、不機嫌そうな、何か言いたそうな表情だ。

左には隊長ちゃん。こっちは笑顔ではあるが……纏う雰囲気からしてご機嫌とは程遠いのは一目で分かる。親指で刀の鍔を押したり戻したりして音鳴らすの怖いのでやめてください（白目

そして正面。

腕を組んで仁王立ちしたシアが、隊長ちゃんと同質の笑顔を浮かべながら俺を見下ろ

していた。

ここだけ戦力の過密が酷すぎる。邪神軍の残党共の殲滅でも始めるの？

「――さて、極刑に処される覚悟は出来たか？」

おいちょっと待って。この状況にも物申したいけど、ちょっと待って。

始めるっていうたばっかりやん、なんで極刑って結論がもう出てんねん。

「被告人は許可があるまで口を開くな。事この場において、お前に発言権なんてものは存在しない」

辛辣ぅ!!

抑揚に欠けた声で淡々と述べるシアが放つ空気に、勝手にお口がチャックされてしまう。

ちらりと周囲に視線を巡らせれば、他の皆も程度の差こそあれ、概ね同じ意見っぽい。いや、副官ちゃんだけは割とどうでも良さげだけど。

大聖殿内部、中庭という名の修練場にて。

石畳の上に正座させられて後ろ手に縛られ、膝の上に重石を乗せられた俺は、唯一まともに動かせる首を上に向けて天を仰いだ。

――どうしてこうなった。

最近、この台詞を吐き出す回数が増えてる気がする（白目

「ではまず、罪状のせつめーからしまーす」

クッッッソどうでもいい。といった様子を隠しもせず、副官ちゃんが今回の謎の裁判（）とやらの内容が書かれているらしき紙っぺらを読み上げる。

「まず、昨日。アンタは一人で街に出掛け、《武器掛け棚亭（ウェポンズ・ラック）》に入店。その後、中にいた冒険者と一緒に出掛けた先が高級娼館だった事は既に判明してるわ」

娼館という単語が出た瞬間に、他の三人から実戦時みたいな物騒な空気が放出される。近辺の木々に止まっていた小鳥達が凄い勢いで空に一斉に飛び立った。

あ、何匹か逃げ遅れて地面に落っこちた。遠巻きに眺めてる他の連中、暇なら拾ったれよ。

半ば現実逃避気味にそんな事を考えていると、副官ちゃんがめんどくせーといった様子で紙切れをひらひらと振った。

「たいちょー、もう面倒だから有罪で良くないですか？　わたし朝御飯まだなんです」

「ごめんね。もうちょっと我慢してね、アンナちゃん――刑を執行するにしても、手順は必要でしょう？」

おいい、それは流石に異議を申し立てるぞ！　今はっきりと面倒って言ったやろ!?

あと隊長ちゃんが怖い。鍔を押し上げてちょっと刀身だしたまま笑顔で応えないで下さい。

「隊長がそう言うならまぁ……それじゃ、被告人は言いたい事があるなら言ってみなさい」

空きっ腹らしいお腹を擦りながら此方に向けて顎をしゃくる副官ちゃんに、俺はやっと自己弁護の機会が回ってきたと力強く頷く。

――はい！　そもそも昨日行った店が娼館だって知りませんでした！

「アンナ、重石を追加しろ」

「あらほらさっさー」

間髪入れずに告げられたシアの言葉に、副官ちゃんが気の抜けた声で応じて、俺の膝の上に石板を追加する。なんでや（白目

「今の流れでその台詞を信じる奴がいるわけねーだろうが！」

ビシィ！　っと俺を指差して声を荒げるシアの迫力に思わずハイスイマセンと言いたくなるが、ここで認めてしまってはホントに極刑になりそうなので、頑張って抗弁する。

いや、マジだって。何年か前にお前と飲みにいった店やぞ！　あのときだって娼館って知らなかったし、そのまま帰って来たじゃないですか！

これはマジだ。冒険者連中に『イイトコ』紹介してやるって言われてホイホイ着いていった先は、前の大戦が激化する手前くらいの時期に、二人で突撃した綺麗なおねえちゃん達がいる店だったのだ。

その直前に起こった大規模な都市防衛戦は、シアにとっての重要な起点――ループする毎に少なくない数の知り合いをどうやっても喪う最初の難所だったらしく、どれだけそれを少なく出来るか、と言うのが今まで必死に繰り返して得た結論だったらしいのだが……。

ループに同道してきてそう時間も経っておらず、心身共に好調だった俺は張り切った。ここが最初のコイツの魂が陰る場所だというなら、まずはここからだ、と。それはもう張り切った。

鎧ちゃんを初手から完全起動して敵陣に先行してカッ飛んでいくと、魔力探知かけて強そうな奴を強襲しては首をスパーンして走り抜け、別の強そうな奴をスパーンする。

途中、騎士っぽい名乗りを挙げて出てきた信奉者の幹部らしき奴を、名乗りを無視してうるせぇ死ねしてそのまま勢いに乗って首狩りを続行。

ある程度続けていると囲まれてヤバそうになったので、敵の頭を足場にして踏み砕きながらぴょんぴょん跳び移って、そのまま包囲網を突破して。

そのまま背中から魔力噴射しながら華麗な短距離走フォームで追撃をブッちぎってスタコラさっさと逃げ出した。

そんで防衛陣を敷いていた都市に戻ってきて――そこで延々と完全起動してた反動で失血死しそうになってぶっ倒れたのだ。

テンションに任せて無茶をした感はあったが、負荷分配機能があっても完全起動してれば継戦能力に難があるというのを体感できたので、結果的には悪くない――と思っていたのだが、後からシアとリアに鬼気迫る様子でガチ説教されたのは未だに覚えている。

曰く、「皆が無事だったのに、お前がいきなり死にそうになってどうするんだ馬鹿」との事だ。

どうやら、敵方の指揮官級は大体俺がチョンパしていたらしく、特に軍勢を率いていた総大将やその周辺は根刮ぎしていた様で、辛うじて集団の体を為していた烏合の衆を蹴散らす形で、防衛戦は大勝に終わった。

犠牲者も流石にゼロではないが、殆どおらず、少なくともシアの知己は全員無事だったと知って、俺も第一段階の完全クリアに小躍りしたくなったものだ。

もう防衛軍と都市は沸きに沸いたね。『聖女のもたらした奇跡の勝利』だって。

凱旋パレードなんて派手なことする余裕は当時の人類側には無かったが、それでも聖

都に戻ってきたときは多くの喝采と明るい称賛の声に街中が沸き立っていた。
なんかシアが俺の事を功労者として押しだそうとしてたけど、それは却下した。聖女様の奇跡に因ってもたらされた大勝って方が聞こえも見映えも良いしね。
俺が実際に敵の総大将っぽいのを獲ったときにやった方法といえば、名乗りガン無視からの首チョンパ。
後は、その首がやたら頑丈な魔装の兜を被ってたもんで、頭飾りを掴んでフレイルの如く振り回し、邪神の軍勢の癖に慕われていたっぽい大将の首を打ち落とすことも出来ず、躊躇いで動きが鈍かった他の将らしき連中の頭を兜（中身入り）で爆砕して廻った。
人類側が聞いたら士気が下がりそうな畜生戦法なので仕方ないね（残当

――うん、話が逸れた。
兎に角、防衛戦が終わってからのシアは……もう凄いテンションが高かった。
はしゃいで、喜んで、俺の部屋に突撃してきて、此方の首に腕を引っ掻けて上機嫌に言ったのだ。
「よし、良いトコに飲みに行くぞ！」ってね。
そのまま引きずられる様にして連れていかれたのが、件の高級娼館――と、先刻知った店だった。

お店では、シアは大人気だったわ。
風俗関連の職業は、俺達の世界ほど下げた眼で見られたりはしてないが……それでも偏見などが無い訳じゃない。
そういった類いの店でも「日々、戦う者達の心の潤いになっている立派な職業だろ」と公言していた金色の聖女様は、それはもう下にも置かぬ扱いでちやほやされていた。
なんか立派な事言ってる風にしとるが――お前これアレやろ、中身男だから綺麗なおねーちゃん達に囲まれてウハウハできるのを喜んでるだけやろ。
違うと言うなら肉体的には同性なのを利用して、おねーちゃん達のおっぱいの間でパスされているその締まりの無い顔をどうにかしろ。気持ちは分かるが。おっぱいおっぱい。
視察に来て下さった聖女様に同伴してきた護衛さん、みたいな感じで俺も割と丁寧な扱いを受けつつ、二人でハメを外して痛飲したのは懐かしい思い出だ。
まぁ、普段はあそこまではっちゃけないので、よっぽど嬉しかったんだろう。

以上の事柄を要点をつまんで主張すると、シア以外の三人から、呆れたような視線が当人に注がれる。
リアが「あぁ……あのときの……」と呟けば、

副官ちゃんに至っては「おぉ…もぅ……アンタ馬鹿なの？」と普通にストレートな罵倒が飛び出す。

「うぐっ……し、仕方ないだろ！　あのときはほんっと嬉しかったし……当時は信頼できるダチと飲みに行く、って感じだったし……クソッ、あの頃のオレを殴りたい……！」

一転して矢面に立たされたシアが、頭を抱えて悔恨の表情で呻く。

それを横目で見ながら、隊長ちゃんが平坦な口調で話を差し戻した。

「……まぁ、そこの残念聖女の自業自得な話はいいんです――それより先輩」

ずいっと、俺に顔を近づけて

「聞いていると、先輩も相応にその店で楽しんだ様ですが、今回はその先にまで及んでいない、という確証が欲しいんですが」

しょ、証拠っスか。

参ったぞ――口でどういっても悪魔の証明にしかならんし……いや、あるにはあるんだが、それをこの場で言っていいものか悩むし、困る。

口ごもっていると、リアがそぉっと寄ってきて、正座させられてる俺の前にしゃがみ込んで上目使いで見上げてきた。

「――あの、にぃちゃん？」

……おぉう？　最初から何か言いたそうにしとったがなんやろか。

暫しの間、見つめ合うとやがてリアはちょっと目を逸らして、言い難そうにポソリ、と呟いた。

「……その、やっぱりにいちゃんも……おっぱいが大きい女の人の方がいいの？」

おい、カメラ止めろ（錯乱

誰だぁ!?　うちの妹（おとうと）分に変な事吹き込んだ奴ぁ！　鎧ちゃんフル起動でお話してやるから出てこいやぁオラァ!!

あんまりにも予想外な台詞がリアの口から飛び出して発狂した俺は、虚空に向かって雄叫びを上げる。

下手人がいたら――あまつさえソイツが男だったりしたら、俺はそいつの腹をかっさばいて腸で縄跳びをしてやる自信しか無い。

叫んだ後に、首を巡らせて皆の同意を得ようと顔を見ると――何故か全員、興味あります！　といった感じで俺の顔を見返していた。

……アルエー!?　ちょっと待って、コレ俺が答えなきゃダメな流れ!?

４対の視線に突き刺され、逃げ場の無い状況に嫌な汗が吹き出す。

いや、これ何て答えてもダメな質問じゃない？　大丈夫？　終わった後で俺生きてる？

再度皆を見渡すが……質問のスルーは無理そう。（女）神は死んだ（白目

何を言っても地獄なら……せめて正直に言うか！　虚偽では無い分ワンチャンあるかもしれん。
リアさんや……まず大前提として……おっぱいに貴賤は無い！
「」
目を点にして絶句する妹分に、俺は力強く持論を唱える。
ちいさくとも大きくても、おっぱいというだけでそれは尊いものなのです。はい。
――だが！　だがしかし！　である！
大きなおっぱいが重力に引かれる様、男の魂は大きなおっぱいに惹かれる様に出来ているのもまた事実……！
例えちっぱいが好きと公言している男であっても、林檎が樹から落ちるのと同じ様に、そこにでっぱいがあるなら視線が向いてしまうのは……摂理っ……！　圧倒的な現実っ……！　否、法則と言い換えても良いっ……！
「アンナ、重石を追加しろ」
「アンナちゃん、重石を減らしてあげて」
「分かりました、隊長！」
俺が語り終えると同時に、シアと隊長ちゃんからオーダーが掛かり、副官ちゃんが即答して俺の膝上から石板を一枚取り除く。

「おいコラ、アンナ！　お前どっちの味方だよ！」
「愚問ね、私はいつでも隊長の味方よ！」
一瞬と掛からずに切り捨てたシアに悪びれもせず、副官ちゃんは「隊長の為なら陛下のおヒゲだって毟ってみせらぁ！」と胸を張って断言する。皇帝は泣いて良い。
「ちぃッ、アンナを審判役にしたのは人選ミスだったか……！」
これだから富める丘の連中は……！　と歯軋りしてシアが二人の胸部を睨み付けている傍らで、リアが自身の胸元をふにふにと押しながら「今からマッサージすれば望みはあるかなぁ……」なんて呟いている。
本来なら目を瞑って耳を塞いで、後に訪れる自身への惨劇を回避するであろう話題も、後ろ手に縛られた今では黙って聞き入れるしかない（白目
心を無にしろ、と己に念じながら、一連の会話を努めて聞かなかったフリをして平静を保つ。
知ってるよ、この手の話題に迂闊に口出すと、きけんがあぶないんだ、おれはくわしいんだ。
「――えぇい、もういい！　じっくり聞き取りしてやろうと思ったけど・・・・・本題にいくぞ！」
透明な心と表情を保って四人の会話を右から左に受け流していると、シアが焦れたよ

うに叫んで俺の顔を両手でぐわしっ！　と掴んで自身の顔を近づけ、迫真の表情で凄んだ。

「単刀直入に聞いてやる――ヤったのか？」

額がくっつく程の距離で問われた質問は、ひでぇ内容だった。

えぇ……と思わず呟いた俺に、シアは何故か必死さすら感じる様子で怒声をあげる。

「すっとぼけた反応してんじゃねー！　娼館に行って、他の女とシたのか聞いてんだ!!」

掴んだまま俺の頭を激しく揺さぶって、シアは頭に血が上ったままに言葉を続ける。

「ざっけんな！　そんなモン利用しなくても、オレが……オレがいるだろうが！　オレもまだなのに、何処の馬の骨とも知れない奴に先を越されるなんてあってたまるか!!」

興奮か、怒りか。俺を揺さぶって喚くシアの顔は赤く紅潮し、瞳にはうっすらと涙が滲んでいた。

表情は見てとれるが、生憎何いってるかは耳に入ってこない――人の頭をガチでシェイクしすぎなんだよォ！　オップ、ちょ、やめ朝飯食って無いから胃液でちゃオブッフ。

ヒートアップして俺をがっくんがっくん揺さぶり続けるシアに、耳から脳味噌が飛び出しそうな危惧を抱いた俺は相手の言うことも聞こえないままに必死に身の潔白を訴える。

ヤってねーって！　酒だけ飲んで帰ってきたって！

「ッ！　本当なんだろうな！　嘘だったら本気で怒るからな！」
変わらず揺さぶられながら目眩がしてきた視界の中で、シアが涙目で歯を食いしばってるのが見えて――

――嘘じゃねーって！　なんぼ回春祝いっていってもまだ実戦使用出来るまで回復しとらんわっ!!

咄嗟に叫び返してしまった。
「……はぇ？」
「え」
「――」
「んん??!?!?」
四者四様の、どこか間の抜けたリアクションが返ってくる。
オッフ……つい言ってしまった。元は同性だったシアとリアはともかく、他の二人がやべぇ。セクハラにならないよねこれ？

「……え、は？　え、と……え？」

先ほどまでの激情がどっかにすっぽ抜けたように――顔だけは紅潮したままだったが――呆けた様子で俺をまじまじと見つめてくるシア。

「……え……か、回春祝い？」

おう。

「……誰の？」

俺です。

もうぶっちゃけてしまったので、諦めて普通にカミングアウトする。

端的に言ってしまえば、治療が進んだお陰で長らくストライキを起こしていた俺のジョンが通常勤務を開始しました。

これに関してはまぁ、しゃーない。前の割と初期の方からの症状だったので、再構成されて新調された身体でも影響があったままだったんだろう。

鎧ちゃんの負荷分配機能は、保持すべき優先事項の為に肉体に掛かった負担や負傷を別の箇所に転化させる――所謂《傷移しの呪法》に近い。

当然、戦闘機能の保持が最優先されるので、戦力の低下を招く様な不具合が身体に生じた場合、戦闘に関係の薄い箇所へとその負担が転化され、代わりにその部位機能が削ぎ落とされていく。

純粋な戦闘力の維持という名目だけで判断すれば、生殖機能なんてほぼ真っ先に転化の対象だからね、仕方ないね。

昨日の朝は懐かしい感覚を感じて、思わず感動したものだ。朝の『生理現象』なんて久々でした。

という訳で、そもそもヤろうにも無理なんです。なんせ辛うじて朝だ「ぅぴゃあああああああああああああああああああああ!?!!?」

訥々と語っていた処で、シアが聞いた事も無いカン高い奇声をあげて飛びすざった。

「ば、ばばば馬鹿野郎、朝っぱらからなんて話してんだこのアホーーーーッ!!」

紅潮した顔からブワっと汗が噴き出し、滅茶苦茶挙動不審になりながら視線がせわしなく上下左右に泳ぐ。

はは。もうセクハラ案件なのは確定なので、今さら恐れるものはありませんよ（諦観にしても、お前まで下ネタにそんな反応なのは予想外やなぁ。以前は何度か馬鹿話で盛り上がった事もあるだろうに。

「う、うるさい！　誰がいつキョドってるってんだよいつだよ証拠みせてみろよ勝つぞ！　オレは！」

おーい、落ち着けー、何言ってるか全然分からんぞ。

「……ぅ……！」

んん？　こ？

「これで勝ったと思うなよいつかみてろこのアホ野郎ーーーーッ！」

何故か負け惜しみの如き捨て台詞を吐きながら、シアが中庭から走り去って行った。

いや勝ったって何にやねん――あ、すっ転んだ。

なんだかよく分からんが、ひどく動揺しているらしいシアは、中庭から渡り廊下に入る段差で蹴躓いて派手に顔面から転倒していた。

遠巻きにしていたギャラリーが心配そうに近づいてるが……おぉ、すげー勢いで立ち上がってまた走り出した。

その背が見えなくなるまでなんとなく見送ると――残った三人に声を掛ける。

えーと……そんな訳でワタクシの無罪は証明されたかなーとか思うんですが……如何でしょうお嬢さん方。

じゃあ次はセクハラ発言についてだ、と言われないかビクビクしてたんだが、隊長ちゃんは極めて冷静な様子でふーっと深く息を吐いた。

「そう、ですね。変な疑いを掛けて申し訳ありませんでした、先輩」

解散して、朝食にしましょう。と続けると隊長ちゃんはシアが走り去った方向――渡り廊下に向けて歩き出す……ナンバ歩きで。

ギクシャクと右手右足、左手左足を同時に出しながら歩いていた彼女は、そのまま渡

り廊下の段差を丁寧に乗り越え――

――腰にぶら下げた剣の鞘がガンッ！と手摺にぶつかって引っ掛かり、そのままシアと同じように顔から床にダイブした。

おーい、すげー良い音したけど大丈夫かー？

ちょっと心配になるレベルで派手に顔面からいったので、正座して身動きの取れない俺は、倒れたままの隊長ちゃんへと声を張り上げる。

うぉ、声をかけたら一瞬で跳ね起きた――さすが人外級の前衛。床の方が凹んどる。

「――大丈夫です！　平気です！　ぜんぜん問題ありません！　はい、わたしならいつでも大丈夫ですから！」

シアに続いて芸人の天丼ネタみたいな転び方をしたのがよっぽど恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてこちらに声を張り上げると、隊長ちゃんは普通の歩き方に戻って今度こそ渡り廊下の奥へと消えていった。

で、残る二人なんだが。

リアが副官ちゃんに抱きついてそのお胸に顔を埋めたまま、唸り声をあげていた。

「うぅ～……」

ちらっと俺を見て、また直ぐに顔をうずめてしまう。

オッフ……そういえばこんな露骨な下ネタはリアの前では話したことなかったな

……す、すまんな。嫌だったよな？　今度から気を付けるから……。
「いや、多分違うと思うけど」
リアの頭を撫でながら、副官ちゃんが呆れた様な口調で呟く。
「まぁ、とにかく。これで裁判も終わりって事でいいんじゃない？　やっと朝ご飯食べにいけるわ」
おう、そうか。無事、身の潔白を証明できて何よりだ。
「代わりに私は、朝からひっどい内容の話を聞かされるハメになったけどね」
それに関してはまっこと申し訳ありません。いやホントに。
正座で固定されたまま、平身低頭で謝る俺に、副官ちゃんはリアを撫で続けたまま肩を竦めた。
「結果的には無罪だったし、アンタも今回は災難だったわね――私もいい加減、食堂に行くとするわ」
アリア様も、朝ご飯たべに行きましょう？　と優しくアリアの肩を抱いて、二人は仲良く並んで歩き出す。
二人とも綺麗な銀髪なので、その光景は、まるで本物の姉妹の様――おーい、シアさんやーぃ、姉力で副官ちゃんに負けとるぞー。
そのまま歩き去るかと思われたが、数歩進んで副官ちゃんは歩みを止め、ちょっとだ

けこっちを振り返った。
「うん、まぁ――一応、おめでとうとは言っておいてあげる」
あ、はい。なんかスイマセン。ありがとうございます。
微かに頬を赤らめてぶっきらぼうに告げる副官ちゃんに、微妙に気恥ずかしい心地を味わいながら俺は返答した。
そのまま二人を見送り、なんとか穏便に終わったことに安堵のため息を漏らす。
あー……何事も無く終わって良かった。
この手のパターンって、大体無事に終わらないからね。肩の力が抜けたわ。
やれやれ、なんてこぼしながら、俺も朝飯を食いにいこうかと考え――。

――あれ、俺ひょっとしてこのまま？

人気の無くなった中庭で、自分が拘束正座のままだということを思い出して白目を剥いたのだった。
どうしてこうなった（天丼

ぽんこつ聖女

「――今度アイツのパンツを下ろしてみたい」

執務中に呟いた一言に、向かいの机で同じく執務に精を出していたアリアがピタリと動きをとめた。

ややあって再起動した妹（おとうと）は、怪訝さと心配が半々になった表情でオレの顔をマジマジと見つめてくる。

「大丈夫レティシア？　回復魔法掛ける？　頭に」

手酷い反応ありがとう妹（おとうと）よ、お前たまに辛辣だよな。

「仕事中にいきなり姉貴（あにき）が妄言を唱え始めたら、誰でも同じ反応すると思うけど」

「……本当に辛辣だなぁ！　別に唐突に思い付いた訳じゃなくて、この間から考えてた事なんだぞ？」

「なお悪いでしょ、それ。頭が」

半目になって馬鹿を見る様な目付きでこちらを眺めてくるアリアの視線がつらい。

普段はにこにこしていることが多い奴なだけに、冷えた視線は倍増しで心に刺さるの

だ。
「変なこと言ってる余裕があるなら、こっちの今年の豊穣祭についての陳情をまとめてよ。ボクはこの中庭の修繕予算についてチェックするから」
「あ、はい」
厚い紙束を此方に差し出すと、アリアはそれ以上に高く積まれた自分の机の書類を引き寄せる。
一方でオレはというと珍しい妹の塩対応に怯んでしまい、それを大人しく受けとると書類内容の確認を行う事にした。
暫くの間、ペン先を走らせる音と判を押す音だけが執務室に小さく響く。
「……なぁ、アリア」
「んー？」
「さっきの話の続きなんだけど……おい、やめろって。無言で回復魔法かけてくるなよ」
書類を片付けながら話題の続きを切りだそうとすると、自分が手をつけていた書面からオレへと視線を移し、アリアは真顔で回復魔法を発動させてきた。頭に。
「話を聞いてくれ、アリア。オレはただ――あいつのパンツの中身が見てみたいだけなんだよ」
「レティシアって普段にいちゃんのことバカバカいってるけど、たまににいちゃんみた

いになるよね」
　褒められてるのか貶されてるのか分からない――いや、暗にバカ扱いされてるんだろうが、悪い気はしないので前者だと思っておこう。
「わぁ。手遅れ」
「お前、今日はほんっとに容赦無いな」
　両手を挙げてお手上げのポーズを取るアリアに、恨みがましい視線を送ってやると、「だってレティシアがにいちゃんっぽくなってもにいちゃんみたいに可愛くないし」とシレっとした表情で言ってのける。お前も大概手遅れだよ。
　中途で止めていた書類に再び手をつけて、サインを最後に書き添え判を押して処理済みの紙束の上に載せると、アリアは漸く話を聞いてくれる気になったのか、机に頬杖をついて小首を傾げた。
「なんで急に変なこと言い出したのか知らないけど――無理じゃない？　『治療』の初日のときだって、散々迷って結局触れもしなかったじゃん……ボクもだけどさ」
「むぅ」
　最後にちょっと恥ずかしそうにして呟く妹（おとうと）に、痛い処を突かれたオレは言葉を詰まらせた。
　初回に限らず、『治療』の際には昂る気持ちのままに、色々とスゴい事をしてしまって

いる自覚はあるが……それに関しては本当に治療としての側面もあるし、なによりアイツの魂に《枷》を填めておくのに必要な行為なので微塵も後悔は無い。寧ろ日々のお楽しみになっているまである。

本気になれば力尽くで外せてしまう代物ではあるが、どちらかというと外れた瞬間にオレやアリアにそれが伝わる事が重要なので、《枷》が存在する事自体が大事だ。より頑丈なのに越したことは無いが。

……だが、アリアが言うように、最後の一線、最後の一枚だけは羞恥が勝ってしまってどうしても手を出せていない。

それでも、ボロボロになっているアイツの一番深い部分に触れ、其をこの手で癒している、という充足感もあって十分に満足していたのだが……状況が変わった。

ミヤコの事もそうだが……昨日のアイツの回春云々についてである。

「いや、ミヤコさんについてはレティシアの自業自得でしょ。へんな見栄張るからバレて後で煽られるんだと思う」

「け、牽制も必要だと思ったんだよ……それにしたってミヤコの挑発だって相当に強烈だったんだぞ」

短期出向期間を終えて、帝国に帰還したミヤコではあるが、別れの挨拶とは別にオレに一通の手紙を残していった。

応接室での一件について――態と誤解させるような言い回しの宣言と挑発を兼ねた言が、半分ハリボテであったのがこの間の騒動でバレてしまったので、それについてチクチクと書かれているのだろう、と覚悟して丁寧に畳まれた紙片を開いてみると。

エ性女（笑）。

とだけ、デカデカと無駄に達筆の日本語で書かれていた。

見た瞬間に、手紙を掌で押し潰してそぉい！　とゴミ箱に叩き込んだのも宜なるかな。

お前だって大概だろうが！　アイツの前ではやたらしおらしく振る舞ってあざといんだよエ清純系め！

いつかミヤコとは決着を付けねばなるまい……だが、それは今はいいのだ。

今重要なのは、アイツの……その、アレだ。男性機能が復活した、という事だ。

「考えても見ろ、今までは《治療》中は深い眠りについてたから、そういうモンだと思って気にもしなかったけど、不具合が治ったって事は……ひょっとしたらこれからは治療の最中に……あ、アレがアレする可能性も出てきたんだぞ」

「何言ってんのレティシア!?」

思わず、といった様子で叫びながら、椅子の上で仰け反るアリア。慌てて口を押さえるが、会話が始まる前に防音を兼ねた結界は構築済みなので安心していいぞ。

分かってる、自分で言っててオレも相当恥ずかしい。だがこれは重要な事なのだ。

オレもノってる時は大分アレな事になっていると思うが、アリアもスイッチ入ってしまうと特にそうだろう？

お互い、くっついてる程度じゃ飽き足らず、色々としてしまっている訳で。

そんな状態で、アイツがこう……元気になってる状態を見てしまったら平静を保てるか？　オレには多分無理だ。

――なので、変に暴走したり、失敗したりしない為に予めパンツの中身を見慣れておく必要があると思うんだよ。

「うん……うん？」

一度は頷いたかに見えたアリアだが、間を置いて宇宙猫の如き顔になった。

妹を説得すべく持論を展開したが、ここで冷静になられて却下されては元の木阿弥だ。一気にたたみかける。

「別に中身を見た後にどうこう、って訳じゃないぞ。今は見るだけ、見るだけだから。お前だって興味が無いって訳じゃないだろ？」

「そ、それは……そう、だけど」

頬に林檎の様な鮮やかな朱が差し、アリアは目を逸らしながら小声で同意を返してくれる。

オレは席を立って、アリアの目の前に向かうと、その華奢な両肩に手を乗せて目を合わせた。

なるべく真剣に、且つ真摯に自分の欲求と要求と望みを、妹(おとうと)の想いと重なる部分を強調して伝える。

「なら、気持ちは同じだ。抜け駆けするのも何だし、今度二人で『治療』するときに……実行しよう、いいよな？」

「うー……わ、分かった。分かったってば」

苦手、という訳では無いだろうが、免疫の低い猥談を続けることで羞恥心でいっぱいいっぱいになったアリアは、不承不承ながらに首を縦に振った。

よしっ、説得完了だ。

一人で実行しようとしても——今まで何度もそうだったように、途中で尻込みして失敗に終わる可能性が高い。我ながらちょっと情けないとは思わなくもないけど。

なので、アリアの説得は計画の実行に必要不可欠だったのだ。

一人では無理な事も、二人ならば手が届く。

妹(アリア)と二人でならば、アイツのパンツに手をかけることも出来るだろう。

「……なんだか早まった選択をした気がするなぁ」
未だに赤い頬のまま、アリアがボヤく様に呟いているのが聞こえるが、今は気にしない事にした。
そうと決まれば、さっさと仕事を片付けて準備を始めないとな。先ずは良い酒と良い肴……後はリラックス効果のある香なんてどうだろうか？
ウキウキと、まるで楽しみにしている遠足に思いを馳せる子供の様な心持ちで、オレは目先の課題――書類仕事を攻略する事にした……さぁ、お仕事頑張るか！

数日後、聖殿内の酒保担当に揃えて貰った品々がようやっと届き、オレ達は二人で相棒の部屋に訪れていた。
防音代わりの結界は張っていたのだが、何故か中庭裁判の一件以来、アイツの下半身事情が聖殿内で知れ渡ってしまったようで――皆がなんか急に優しくなった、嬉しいの

に死にたいふしぎ!!　と白目を剥きながら叫んで数日、アイツは街はおろか聖殿内ですら殆ど出歩かず、半ば部屋で引き籠りと化している。
これに関してはオレ達にも責任があるので、悪いと思う気持ちはあった。
ミヤコなんかは、出向最終日ギリギリまで「せめて先輩が部屋から出てこれる様になるまで」と帰還日を延ばそうと躍起になってたしな。
結果的には無理だった様で消沈しながら帰っていったが、まぁ、なんだ。慰める役はオレに任せておくといい。オレの相棒だからな。
目的達成の為も兼ねているので、詫びと言う程ではないが、霊薬以外にも用意した酒と肴はかなり奮発した。貴重な珍味もあるので多少は喜んでくれる筈だ。
「おーい、来たぞー」
「にいちゃん、来たよ。お邪魔しまーす」
勝手知ったる、といった感じでアリアと共に部屋の中にあがり込むと、ベッドの中で布団に包まってカタツムリの様になった相棒が、首だけ出していらっさぁい、と力なく応じる。あまり良いとは言えない目付きが、本日は輪をかけて死んでいた。
「オレ達が来たのにまだヒキってるつもりかよ。ほら、布団から出てこいって」
手をとって引っ張り出そうとすると、嫌や、優しい視線が怖いんや。ワイはこれからは猟犬（去勢済）みたいなおめめでみられちゃうんや、とゴネて出て来ない。

何時もならここらでアリアが上手いこと慰め、布団カタツムリを攻略してくれそうなものだが、妹は片手で持ち込んだ肴を入れた袋を抱え、もう片方の手指で自身の銀糸の髪の一房をくるくると弄んだまま、緩んだ顔で相棒の様子を眺めている。

大方、「いつものにいちゃんと違ってこれはこれで良い」とか思ってるんだろうな……絶対お前の方が手遅れだと姉は思うぞ、うん。

「にいちゃんが布団から出て来たくないなら、別にいいと思うよ」

「いや、そんな訳にはいかないだろ。後から『治療』だってするんだし……アリアさん？何してるの？」

上機嫌に布団カタツムリを支持するアリアに、流石に反対しようとして――するっと近づいたと思ったら布団の隙間に潜り込んで、奴と並んで首だけ出してニコニコしているアリアと眼が合った。

「にいちゃんが出て来ないなら、ボクが布団に入ればいい。これで万事解決だね」

いや、そうはならんやろ。と、オレと相棒の声が重なった。

困惑しているカタツムリ1号とご満悦の2号をどうにかして人間に戻そうと、其々の手を掴んで引っ張る。

「馬鹿な事言ってないで出てこいって。こんな状態で飲み食いしたらベッドが酷いことになるだろ！」

そう叱りつけて二人を引きずり出そうとして。
いーやーでーすーぅ。と子供みたいに反抗する1号（バカ）に対して、2号（アリア）が至極不思議そうに述べた言葉に、オレはピタリと動きを止める事になった。
「汚れはいつも通り、後で浄化魔法で一発だし――レティシアも入ればよくない？」
……。
――一分後。
2号（アリア）と3号（オレ）に挟まれ、1号（あいぼう）はなぁにこれぇ……と益々困惑した表情で首を傾げていた。
「いいからもっと詰めるぞ。普通に入ってると流石に狭いし」
「うん。にいちゃん、くっつくから枕避けちゃっていい？」
三人だと、密着しないと身体が布団からはみ出てしまう。
それではカタツムリとは言えないので、オレ達はしっかりと左右から奴を挟み込むと一つの布団に包まった。
ムフー、と鼻息を漏らして満足気なアリアに、オレも悪い気はせずに頷く。
「うん。これで万事解決だな」
いっこも解決してないんですがそれは。と呆然と呟く相棒の頬に、なんだよーお前が出てこないのが悪いんだろーとグリグリと頭を押し付けてやると、奴は嘆息して分かっ

た分かった、降参します。なんてボヤいて布団から出ようとする。
おい、なんで勝手に出ようとしてるんだよ。折角作った三位一体の布団ツムリが崩れるだろ。
すかさず、オレとアリアが這い出ようとした相棒の足を片方ずつ蟹挟みで拘束して引きずり戻した。
さっきと言ってること逆ゥー！　ワケが分からないよー！　と喚きながら布団に再び収まった奴を間に挟んで、オレとアリアは顔を見合わせて笑いをこらえる。
まるで修学旅行で就寝時間になっても、布団の中で悪ふざけをしている学生になった気分で、これはこれで悪くないな。
「まぁ、いいだろ。たまにはこんな感じでもさ」
どういう状況なのこれ……なんてブツクサ言ってる奴に杯を手渡し、持ってきた酒の封を切ると、一つの布団に包まったまま、オレ達はちょっと狭いけど奇妙に心地良く、あったかい酒盛りを開始した。

――さて、楽しい時間を満喫して、いい具合に場があったまってきた処で、今宵のメインがやってきた。

最初こそ狭い布団の中での酒盛りに、狭苦しそうにしていた相棒だったが、上物の蒸留酒や今回の為に揃えた肴に徐々に機嫌を良くし、俺、明日からは外にでる。普通の生活サイクルに戻るわ、と脱引き籠り宣言して霊薬を呷って眠りについた。

ドラゴンの肝を筆頭に、大型魔亀の首の乾燥肉、蛇竜の血合い肉等、普通に食ったら相当な枚数の金貨が吹っ飛ぶ様なつまみを出してやったからな。すげーすげー言いながら喜んで食ってたので、普段ロクに使いもしない貯金を、ここぞとばかりに放出した甲斐もあったってものだ。

後半になるとアリアを胡座の上に乗せてハイテンションでガバガバ飲んで居たので、『治療』が済んだあとはアルコールを解毒しておいてやらないとな。

「よし、こんなもんか」

机の上で香を焚いて、寝床に大の字にひっくり返った相棒の顔を覗き込む。

来たときは死んだ魚みたいな目付きだったのでちょっと心配したが、今は気持ち良さそうに高鼾をかいて寝ているのでひと安心だ。

「ほ、ほんとにやるの……？」

アリアが落ち着かない様子で、俺と奴を交互に見比べてはせわしなく手を組み替える。

「落ち着けって、やることはいつもの『治療』とそう変わらないだろ。ただ――ちょっと

だけ最後に剥ぎ取る服が一枚増えるだけだ」
それも後で戻すしな、と続けるとアリアは「うん…うん…」と緊張を隠せないまま、何度も頷いては自身を落ち着かせようとしていた。
さて、先ずはいつも通りに奴の寝巻きを取っ払う。
麻で織られた黒い上下の簡素なシャツとズボンを引っぺがすと、鍛え上げられた傷痕だらけの肉体が露になる。
「……当たり前だけど、相変わらず傷だらけだな」
思わず、呟く。
聖女という癒しにかけては世界最高峰の存在の側にいる癖に、治りきらない傷痕がこんなに残るような無茶を延々繰り返しやがって。この馬鹿野郎め。
何度見ても、いや、見る度に胸の奥がキュッっとなるような痛みと――その殆どがオレ達の為に戦って出来た物だという倒錯的とすら言える歓びが湧き上がり、その感情に押される様、そっと胸板の傷に手を這わせる。
視界が狭まり、何時もの様に目の前の馬鹿しか見えなくなる。
息が上がって、奇妙に呼吸がしづらい。
腹の下に溜まった熱を吐き出すように、吐息を吐き出しながら、オレの、オレだけの、相棒（ヒーロー）の、傷痕に、唇を、近づけ――。

「あのー、レティシア？」
……ハッ!?
呆れたような――いや、実際に呆れているのであろうアリアの声に、我に返る。
「あ、あぶねぇ……つい今回の趣旨を忘れる処だった……」
名残惜しさを押し殺して慌てて身を離し、額に浮いた汗を拭いながら呟くオレに、アリアの冷たい視線が容赦なく刺さる。
「そっちの発案の為に、ボクがめちゃくちゃ我慢してる目の前で、いつも通りにお楽しみを始めようとされるとは思わなかった」
「わ、悪い……つい、さ……」
「……今回は止めておいたら？　別に今日じゃなくても……」
「……いや！　このままいくぞ。今日出来ないなら、どのみちずっとオレはこいつのパンツを下ろせない気がする」
決然とした表情でいう事かなぁ……とアリアが遠い目をして言っているが、それは努めて無視して、オレはついに奴の纏った最後の一枚に手を伸ばす。
指先が触れるか触れないか、という近さで手が止まり……緊張と……おそらくは期待で鼓動が早くなった。
アリアの茶々も止まり、代わりに何処と無く荒い息づかいが聞こえてくる。果たして

姉と妹、どちらのものだろうか。
ごくり、と。どちらかの、或いは姉妹同時に喉が鳴り、震えた指先が相棒の腰回りの布地と素肌の間に、滑り込んで――。

しゃきーん。

そんな、どこか間の抜けた音と共に。
寝こける奴の腰を覆う様に、黒塗りの鋼が展開され、隙間なく腰回りを覆った。
――ってこれあの鎧の腰部装甲じゃねぇか！
思わず馬鹿の顔を凝視するが、相変わらず奴は気持ち良さそうに爆睡したままだ。太平楽な寝顔は、なんなら鼻提灯すら膨らませそうなくらいだった。
「……はぁぁぁぁぁぁっ!?　なんで勝手に起動してんだよこの呪物!?」
まさにこれから、という瞬間に目的の光景を遮られ、思わず立ち上がって怒声を上げる。
どういう事だよ！　このムカつく鎧は最悪に性質の悪い呪いの武装ではあるけど、持

ち主の意思を完全に離れた動作なんてした事なかった筈だぞ!?
妹(おとうと)を振り返って見るものの、アリアも完全に予想外だったのか、目を見開いて口をパクパクと開いては閉じてを繰り返している。
再び視線を相棒の下腹に戻すと、普段は闇を飲み込んだ様な光を映さない装甲が、キラリと反射して光ったように見えた。
「こ……こんっのクソ鎧！　上等だ、聖女舐めんなよ！　どっちがコイツの相棒か思い知らせてやる！」
原理や理由は解らないが、今のクソ鎧は明らかに持ち主の手を離れて自律起動している。
だが、本来は存在する機能では無いんだろう。装甲こそ展開しているが、魔力導線が一切励起して無いのがその証拠だ。
魔力の通ってない呪いの魔装なんぞ、ただの薄っぺらい皮鎧と変わらない。
オレは装甲に手を翳すと魔力を走らせ、一瞬で展開部分を解呪してやった。
ハッ、脆いもんだなぁ！　お邪魔虫は引っ込んでろってんだ！
そのまま強化した指先で、無造作に力を失った装甲を引き剥がしてやる。
しゃきーん。
剥がした瞬間に新しい装甲が生えた。

「……」
解呪して、剥がす。
しゃきーん。
装甲が生える。
解呪する。剥がす。
しゃきーん。
……解呪。
しゃきーん。
「アリアァ！　ちょっと手伝え！　こいつこの馬鹿から完全に引っぺがして鋳潰してやる!!」
ブチ切れたオレは、この際本気で完全解呪してやろうとアリアへと協力を求めて振り返って――
「あの……アリアさん？」
「ん？　なに、レティシア」
いそいそと相棒に布団をかけて、その隣に潜り込んでる妹（おとうと）に、怒りも忘れて問いかけた。
「……なんで寝る態勢に入ってるのかな？」

「なんでって……今回は無理そうだし、もういいかなって」
いや、早いよ！　あきらめんなよ！　まだ決着は付いてねーって！
食い下がるオレに、アリアは欠伸をしながらゆるゆると首を横に振った。
「無理だってば。その……えーと、鎧ちゃん？　でいいのかな。レティシアの持ってきた希少食材とか霊薬に含まれた魔力使って装甲展開してるよ？」
「ンなっ……！」
慌てて魔力を走らせて相棒の身体を精査してみると、確かに。装甲の魔力供給源は奴の胃の辺り――つまり飲み食いした魔力を含有する飲食物から直接接種しているって事だ。
今回、精力の付く一級の希少食材を厳選したのが仇になった。これではさっきの攻防を何回繰り返せばいいのか分からないし、下手に尽きるまで解呪すれば、霊薬の効果も薄まる上に、コイツが眼を覚ましてしまう。
一言でいって、詰みだった。
「ば、馬鹿な……オレは負けるっていうのか……こんな無機物なんかに……」
認めがたい敗北に、がっくりと膝をついて項垂れていると、アリアが熟睡を続ける相棒にぴったりとへばり付いて、ほんわかした笑みを浮かべて慰めてくる。
「仕方ないって、今回は諦めようよ。たまにはくっついて普通に寝るのも良いし――明

日は一日、一緒にお出掛けするし、早寝早起きはボク的には大歓迎かな」
ゑっ？
聞き捨てなら無い言葉に、思わず項垂れていた顔を上げた。
「お出掛け……って、コイツとか？」
「うん。この間、にいちゃんが外に出てもいい気分になったら、真っ先に一緒に遊びに行こうって約束したんだ」
だから、外に出るって言ってた明日、一緒に街に行くと思う。と上機嫌に笑うアリアに呆然とするオレ。
「……え、いつの間に？」
「レティシア、酒保で精力剤みたいなおツマミを確保しようと躍起になってたじゃん。その間に」
なん…だと……!?
オレが今日に向けての準備に奔走している間に、アリアはちゃっかり相棒との一日デートの約束を取り付けていたらしい。
ぬ、抜け目ねぇ……アリア、恐ろしい子っ……！
「そんな訳だからさ、もう今日は普通に寝ちゃおうよ。充分楽しかったし」
「……そうですね……」

二重に打ちのめされた気分になって、オレはのろのろと立ち上がると、静かにアリアの反対側の相棒の隣へと身を横たえる。

せめてもの仕返しのつもりで、呑気に寝息を立てている奴の首に手を回して、かじりつく様にしてぴったりとくっついた。

そんな姉（オレ）のささやかな反撃に、妹（アリア）は苦笑いして。

「それじゃ、おやすみ。にいちゃん、レティシア」

「あぁ……おやすみ」

なんだか何時もよりしょっぱい気分になりながらも、オレは抱きついた暖かさをより強く感じるべく、眼を閉じたのだった。

しゃきーん。

「……おい、なんで今わざわざ展開し直した？　おちょくってんだろ、馬鹿にしてんだろこのクソ鎧!!」
「レティシア、うるさい」

霊峰編

師、師姐、師弟。

――俺っ、復・活！

はい。とりあえず、言っておきました。

捻りとかも無い。言葉の通り、完治しました！　ヤッホィ。

いやぁ、長く――は無かったね、別に。うん。

寧ろ魂の損耗の修復なんつー難易度ＥＸな治療が、一ヶ月ちょいで終わったことを考えれば、破格の早さっすわ。

治療に力を尽くしてくれた聖女姉妹（ブラザーズ）には頭が上がりません。落ち着いたら何かお返しを考えないとな……出費の予定ばかり積み上がっているのが怖いが。

うむ、しかし。

健康って素晴らしいね！　飯は美味いし、夜はぐっすりだし、身体のキレが違う感じがするわ。前の二つは治療中の時点で既に達成してた気もするが。

そうそう、心なしか《三曜》に関する修練の方も進展があった気がする。これはお師

匠にドヤりに行く未来も近いかもしれない。フフン。

なーんて、調子こいていたせいでしょうか。

「構えなさい」

ドンッ！　と訓練用の木棍が中庭の地面へと打ち付けられ、分かりやすく戦意が叩きつけられる。

仗を片手に仁王立ちしているのは、老年の――だが、老いなんぞ微塵も感じさせない、背中に針金が入ったようにピンと背筋の伸びたシスターだ。

以前俺がノリで贈った、いつもかけてる三角眼鏡は、訓練の為か外されている。

きつい雰囲気を助長するアイテムが取り外されたのに、訓練モードのテンションのせいで威圧感はむしろ倍増しになってるんですけどォ！

シアとリアの両方から完治のお墨付きを頂いて、即日。

今、ワタクシは敬愛する姉弟子こと、ミラ婆ちゃんにＫＡＷＡＩＧＡＲＩを受けようとしています。

ガンテスのブートキャンプへのお誘いを受けないよう、注意してたらこれだよ。

誰かたすけて（白目

ミラ婆ちゃんことシスター・ミラ＝ヒッチンは聖教会最古参の聖職者の一人にして、嘗ては教会最高戦力とまで言われ、現役を退くまでの数十年以上、その座を譲らなかった人類圏女傑ランキングで三指に入りそうなお人だ。

大戦においても、激戦区で大暴れしまくって教会内の昇進？　知るか、そんなもんより敵を殴らせろ。とばかりに延々現地で戦い続けていたせいで、公的な立場は未だに只のいちシスターという意味分かんない婆さんやぞ。

ガンテスが後ろについて行く形で戦地を共にしてた、という時点であっ（察し　ってなる修羅勢だったのは想像に難くない。

シアやリアが聖女として台頭してきた頃にはとっくに引退していた様だが、ウン十年人類の旗印の一人として戦ってきた武威が早々衰える筈もなく、過去には現教皇の先輩として面倒をみていた事すらあるらしいので、実質の立ち位置は組織の御意見番とか、最高顧問とかそんなポジションだと、個人的には思ってる。

ただのシスターだと思って舐めた口叩けるやつがいるなら、やってみるといいさ！教会の一定以上の年齢、もしくは上の立場にいる人間が大体敵に回るけどな！

枢機卿でも出迎えるときは席を立って折り目正しく腰を折るいちシスターとは一体

（哲学

まぁ、それは外聞的な評価だ。

俺にとって重要なのは、この御仁が俺の姉弟子に当たるという事である。

《三曜の拳》の開祖、神代の龍と人との間に生まれたとされる、《半龍姫》。

永き時を生きた、個としての最高位階に在ると迄いわれる超越者に「最優の弟子」とまで評されたハイパーウーマンなのだ。この人は。

ちなみに「全弟子でぶっちぎりのドベ」認定されとるのは間違いなく俺や（白目

口に出してなくてもなぁ！　そういうのは伝わるんだヨォ！　「言ったらかわいそうだから止めとこ」みたいな空気は分かるんスよ師匠ォ！

……ふーっ、おK、大丈夫、おれはれいせいだ。傷ついたりしてないし（震え声

まぁ、アレだ。長々と姉弟子について語ったが、要するに、だ。

この人、普通にやったら何をどうやっても俺では相手にもならん、という事なんです。

宙を舞いながら、現実逃避気味に考える。

一秒後には、横倒しになった独楽みたいに回転しながら、地べたに叩きつけられた。
オッフｗｗｗもう無理ぽ、勘弁して。
「ふむ……技の精度自体は殆ど変わっていませんね。だがこれは……」
人の乾坤一擲の一撃を、粗末な木製の棍で余裕綽々で流して脚を払ってくれた姉弟子は、なんか考え込む様に呟いていた。
用途を基礎的な身体強化のみに縛っているとはいえ、鎧ちゃんを戦闘起動レベルで使用してもコレとか、ホンマ心折れそうになるんですけど。
「おぉう……すげぇ勢いで回ってたな」
「にぃちゃん、がんばれー」
中庭の隅に転がっている丸太に仲良く並んで腰掛けながら、観戦気分のシアとリアから呑気な声援が飛んでくる。
軽く言うがねキミタチ、ほんま辛いのよミラ婆ちゃんとの稽古って。
肉体的な負担や危険度的なものは、ガンテスの修行に同行する方がよっぽど上だ。
でも、アレはアレで身にはなる。なんだかんだ言って同行者のギリギリ限界を見極めてるとこあるしな、あのオッサン。
組手するにしてもそうだ。今と同じ条件でやっても、一撃一撃ごとに背筋が粟立ってストレスでゲロ吐きそうになる程ギリッギリのやべー攻防になるが、一応、組手の体に

はなるのだ。
だが、目の前の鬼バ……姉弟子相手になると、なんもできん。
同じ流派で、相手が技量的に完全な上位互換のせいもあると思うんだが、マジでなんもできずに地面に転がされ続けるからね！
《流天》を使えば掌握した流れを逆に支配され。
《地巡》で強化率を上げようとすれば、踏み込み一発で巡らせた魔力を散らされる。
結果、練りが半端になった《命結》をあっさりと木の棒で流された挙げ句、打突の勢いを完全に捌かれて地べたと幸せでもなんでもないキスをして終了。
ホンマ心折れそうになるんですけど（二回目
地面と仲良しになるだけで、何か身になってる感が5杯目の水割りし続けたカルピスより薄い。土の味ばっかり噛み締め続けていい加減アースソムリエにはなれそうなんですけど。
戦士としては紛れもなく超一流で、現役を退いた今でもそれは変わらないんだろうけど……教える側としてはイコールじゃないって良く分かる例だよね！（白目
「レティシア様、まだ確認したい事が幾つかありますので、続けても？」
「あぁ。まだそんなに時間も経って無いし、構わないよヒッチンさん」
地に伏せたまま、益体も無い事を考えていると、ミラ婆ちゃんがシアに向かって稽古

続行の可否のお伺いを立てているのが聞こえるが……おかしいだろ！　そこは当人に聞けや！

……いや、分かってはいるんだよ。鎧ちゃん、というか俺の魂にかな。二人が治療の過程で枷の様なモンを掛けているのは。

こうやって稽古を見学しているのも、鎧ちゃんを起動してる間の枷（ロック）がどうなっているのかチェックして、場合によっては稽古が終わったあとに再び掛けなおすか何かするつもりなんだろう。

そういう意味では、二人が俺以上に俺の体調管理の権限を握っている様なもんなので、ミラ婆ちゃんがシアに判断を仰ぐってのも道理なのだ。

散々やらかした末の結果なので、それに関してはまぁ、不満とかは無いんだが……。

なんでやろうな、太い鎖に繋がった首輪を付けられたような、不穏な感じがする。気のせいだと思いたい（願望

「休憩はもう充分でしょう、立ちなさい」

木棍を一閃させると、柄尻で俺を指してスパルタ姉弟子が稽古の続行を促してくる。

逃避代わりの思考の時間は終わりみたいだ。

散々っぱら地面と友好をあたためていたが、切り上げて立ち上がる。

くっそ、こちとら何度も転がされて土塗れだってのに、向こうは汚れどころか額に汗

一つ浮いてねぇ。
直撃は無理でも掠らせるくらいはしたいものだが、さて、どうするか。
摺り足で間合いを図りながら、真っすぐに此方に向けられた棍を睨みつける。
あれが曲者すぎるんだよなぁ。というか、基本無手で使用する筈の《三曜》を長物に適用するって時点でおかしいんだよ。そらお師匠も最優扱いしますわ。
多分、素手で運用するよりは技の精度は落ちてるんだろう。
その分、リーチが圧倒的に伸びてるし、単純な破壊力ならもっと頑丈な得物で振るえば上回るまである。
そもそも、精度が落ちるとかいってもそれでも俺より数段上だからね。
横薙ぎに払われた木棍を普通に籠手で受けた瞬間、そこを支点に身体が縦にスピンして吹っ飛ぶ理不尽感よ（白目
見学してる人間からしたら、ハヴ〇ック神に翻弄された謎挙動をしているゲームキャラみたいな動きをしているように見える事だろう。
何にしても、棍のせいで俺の間合いが遠すぎる。まずは得物をどうにかしてみるかー。
方針を決めると、取り合えず真っすぐ突っ込んでみた。
迎撃に繰り出されるのは鋭い横薙ぎだ。

迂闊に触れると《流天》で荒ぶる物理エンジンの世界に連れ去られてしまうので、地を這う様にして回避する。

軸足の回転動作に《地巡》を挟むが、案の定、木棍に力の流れが『巻き取られて』不発に終わった。

まぁ、分かってたからぇぇわい。振りぬかれた棍が切り返される前に間合いを詰める。

ミラ婆ちゃんの手の中で得物がくるりと回ると、柄尻が肉薄する此方に向けられ、捻りを加えた突きが打ち込まれた。返しが早すぎるんですけど（白目

とはいえ、やっと力の向きが読みやすい攻撃が来た――いや、分かってて打ってくれたのかもしれんけど。

腰溜めに構えていた掌底を、突きの回転とは逆方向に捻りをかけながら繰り出し、柄尻と打ち合った。

今までの感触からして、本来なら俺が押し負けて体勢を崩してたんだろうが……今回は踏み留まり、逆に姉弟子殿が僅かに衝撃に押され、靴底が地を抉る。手にした木棍に、細かな亀裂が入った。

ふはは、これぞなんちゃって寸勁。某格闘漫画で読んだ正拳突きの動作における関節駆動を3カ所抜く的な打ち方を、鎧ちゃんの協力で再現した代物だ。1回成功させれ

ば、あとは反復練習で自力でなんとかなったのでたまに使ってる。
実際にはこれで正しいのかは分らんが、打撃に貫通力が生まれたのでヨシ！
やっと相手を間合いに捉えたので、腰を捻りながら足を跳ね上げ、弧を描くように蹴りを打つ。
顎を狙って放ったそれを、ミラ婆ちゃんは眉一筋動かさずに重心を傾け、首を傾げるような僅かな動作だけで躱してみせた。絶対年寄りのしていい動きじゃねぇ。
そして当然のように棍で刈られる軸足。
今日何度目かも分からん、ふわっとした滞空感を一瞬味わうが――いい加減このパターンも慣れるわ！
全身のバネを使って胴を捩じる。
後ろ脚を刈られて地面と平行になった背中を、空中で反転させ、変則的な胴回転蹴りを打ち下ろした――当たるとは思ってないが、一回くらい驚かせる程度はしたいね！
「判断の速さは良いですが――荒い」
身も蓋もない評価と共に、棍が蹴りを打った足首に添えられると――そこを支点に鉄棒で大車輪したみたいに俺の身体は一回転する。
高速で流れる景色。天地が一瞬でひっくり返り、次の瞬間には地面が視界いっぱいに広がった。

ホンマ心折れそうなんですけど（三回目

今回の攻防も大地と不幸せなキスをして終了である。いい加減、地面の好感度がカンストしそう。つらい。

ダメージはそんなに無いけど、メンタルを削りきられて起き上がりたくない俺を一瞥し、ミラ婆ちゃんは手にした木棍を無造作に地に突き立てた。

「大体は分かりました。次の一手で最後にしましょう――魔鎧を完全に起こしなさい」

……はいぃ？

思わず、ガバッと顔を上げて姉弟子の鉄面皮をまじまじとみつめる。いや、マジで何言ってんのこの人。

「いやいや、ちょっと待ってくれヒッチンさん!?　流石にそれは治療してる側からは許可できないって！」

ほらぁ、案の定シアからクレーム飛んできたやん。戦闘起動させるのも自分たちの監督付きって条件だした位だし、許可出すとは思えないって。

あと基本、完全起動はガチの戦闘の時しか使わないので、俺的にもお断り案件です。身内に鎧ちゃんフル起動の拳を向けるとか、隊長ちゃんのときの一回だけで十分だわ。出来れば二度とやりたくねぇ。

丸太に下ろしていた腰を浮かせて詰め寄るシアに、詰め寄られた当人は微塵も表情を

揺らがせずに淡々と完治はしたのでしょう？　と問いかける。
「したよ、したけどさ。ちょっとした確認や稽古でこいつに要らない負荷が掛かるのは承諾できない」
「ですから、一手のみです。一度だけの攻防ならそこまでの負担にはならないかと」
いや、ちょっとちょっと。本人を放置してバチバチした空気出すのやめなさい。こんな事で喧嘩せんでええから。
そもそもシアがゴーサインだしても俺はやらんぞ。なんなら完全起動したらこの場からの逃亡に使用するまであるわ。
シアとミラ婆ちゃんの意見が割れてる間に、リアが此方に寄ってきて俺の手を取り、黒色の籠手に包まれた腕を触診するように撫でまわした。
「うん、回復魔法は必要ないみたいだ……ねぇ、にぃちゃん。何処か痛い処ある？」
強いていうなら大地と抱擁を繰り返した事で心が痛いです（真顔
「なら後でボクが抱っこしてあげるって――やっぱり、前と違って魔鎧の起動時に出血はしてないんだ」
おう、どうやらそうみたいです。
再転生してからの初の起動時こそ、古傷が浮き出るような形であちこちから血が噴き出したが、あの時も稼働していた腕部自体は古傷以外の外傷は無かった。

今回も同じく、しっかり戦闘レベルでの稼働で四肢が装甲に覆われているのに、特に痛みは感じない。

基本、今までは装甲上に大量に奔ってる魔力導線が励起すると、宿った攻性魔力が皮膚を突き破って肉に食い込むので出血はデフォルトなトコがあったんだけど……どうも今はそれが無くなってるっぽい。

なんでやろな、不思議な事もあるもんだ。

まぁ、標準装備だったスリップダメージが消えたのなら、使い手にはプラス要素にしかならんし、どの道マイラブリーバディとの付き合いは一生モノなので細かいことは気にしない事にしよう（脳死感

「……にいちゃんって自分の相棒の事になると、結構な大事でも凄いおおらかに受け入れるよね」

結論出して自己完結していると、リアが何故か不機嫌そうになった。解せぬ。

「いやちょっと待て、その鎧が相棒とかオレは認めてないぞ！」

おぉっと、ここで姉の方が反応してきた。

ミラ婆ちゃんとの押し問答を放り投げ、鼻息も荒くドスドスと足を踏み鳴らしてやってくるシアの背に、婆ちゃんが「お行儀が悪いですよ」と注意を飛ばす。

それも聞こえていないのか、腰に手を当てて仁王立ちで俺達の前に立った。

「そもそも、順番的にはオレの方が先に出会ってるんだから、相棒といえばオレだろ。呪い云々を差し引いてもただの武装は適用外、はい論破！」

いや、なんでやねん。

ビシッと親指で自分を指して、力強く断言するシアに、思わず平手でツッコミを入れる。

元から鎧ちゃんに対して知人・友人内でもアタリがきつい奴ではあったが、ここ最近は更に露骨になった。何故だ。

ちなみに1番はぶっちぎりで隊長ちゃんです。帰る前にも一回話題にしたときに「解呪したら一番に教えてください、巻き藁代わりに丁度いいので」と笑顔で仰ってました。

大事な相棒を試し斬りの素材にさせる訳にはいかないので、絶対に解呪できん（白目

鎧ちゃんは俺が守護（まも）らねばならぬ。と、決意を新たにしている脇で、今度はシアとリアが口論らしきものを始めてしまった。

「レティシア。ボクはここで一回、全力使用してもらった方がいいと思う」

リアが至極真面目な表情で言うと、シアが露骨な渋面を作って首を横に振る。

「現状の使用率で無傷でも、完全な状態で使ったらどうなるかなんて分からないだろ。最悪、揺り戻しとばかりに反動や負荷が上がってる可能性だってあるんだ――こいつがホイホイ気軽に使ってるから忘れがちになるけど、本来《報復（ヴェンジェンス）》は封印処置が当然の特

級呪物なんだぞ？」

「だから、だよ。安全な状況で、ボク達二人が揃って直ぐに治療に移れるこの場で、前もって使用状態の確認をしておくべきだ――今より悪い状況で、また無茶な戦い方をして発覚するよりずぅっと良いって」

アリアさんや、それ暗に俺がまたやらかすって断言してません？

おい、シアも「確かに…」とか呟くなや。戦争は終わってるんだから、早々無茶する機会なんて無いって……なんだその胡散臭ぇモンを見る眼付きィ！　二人だけじゃなくてミラ婆ちゃんまでそんな眼で見なくてもいいダルルォ！（巻き舌

三人とも、さっきまで意見の食い違いで言い争ってたくせに、いきなり一致団結した。それ自体はいいけど理由が納得いかねぇ。

ややあって、此方を残念なモノを見る様な目付きで見ていたシアが大きく息を吐いて。

「……分かった、この様子だとまたやらかすだろうし、消耗度合いの把握は必要だろうしな。どのみち多数決なら2対1だし」

ただし、なるべく短くな、これは譲れない。そう最後に付け足して、反対意見を引っ込めた。

おいちょっと待って。俺の意見が欠片も反映されないのは酷いと思うの。

完全起動だけなら――まぁいいよ。鎧ちゃんがちょっと変になってるのは俺もなんとなく感じてるので、確認作業に否は無い。

でもそのままミラ婆ちゃんと稽古続けるのは別に必要ないやろ！　この一点がある時点で俺は承諾しないぞ。

なんでただの稽古で敵に向けるのと同じ出力で身内に殴りかからないといかんねん。さっきまでのＫＡＷＡＩＧＡＲＩよりよっぽどメンタル削るんやぞ。あれ。

強弁に反対する俺に、姉弟子殿はちょっと驚いた様に此方を見て「戦いの場で身を心配されるのは……なんというか新鮮ですね」なんて呟いてるが、別に心配はしてねーっス。

目の前の御老体は虚勢を張るような人で無いので、多分本当に問題無いと判断してるんだろう。実際、腕前の程を嫌になる位味わってる身としては、心配するほうが失礼だろコレとか思ってる。

単純に俺が嫌なの。俺の１０倍強かろうが１００倍優れていようが、身内を正真正銘の全力で打つっていうのが嫌なの……あの一回でホンマ身に染みたわ。ほんっとうにどうしようもない理由が無い限り、勘弁して欲しい。

そう主張すると、シアとリアは「まぁ、そこまで嫌がるなら確認だけでも……」と折れてくれたのだが。

残る一人は成程、なんて呟いて。
「貴方のそういった甘い部分は個人的には好ましいですが……姉弟子命令です、本気になって打ち込んで来なさい」
話聞いてたのかＢＢＡ!?　パワハラには断固として立ち向かうぞコラァ！
思わずゼロセコンドで突っ込んだ瞬間に、脳天に木棍が炸裂した。
「女性に対して婆はお止しなさい。礼に欠けていますよ」
おぉぉぉ……め、目から火花が散ったかと思った……。
蹲って煙をあげてそうな額を抑えて悶絶していると、今の一撃で破損が大きくなった棍を打ち捨てて、ミラ婆ちゃんが指を一本立てて妥協案を告げてくる。
「では貴方が攻手、私が防りの一手のみ。正面から此方の正中線を狙う事……軌道が分かっているのなら、対応はより容易です。多少は安心出来るでしょう？」
それはそうかもしれんけど、実際の安全度の話じゃなくて俺の気持ちの問題なんスけど……。
尚もゴネる俺をスルーして、姉弟子は１０メートル程離れて間合いを取り、無手のまま静かに構えを取った。
「望む、望まないに関わらず、貴方は紛れもなく邪神討滅を為した戦士なのです――平和が訪れたからこそ、大戦に力の矛先を向けていた強者たちは貴方に目を向けるでしょ

う」

言われてみればご尤もな事を指摘され、思わず押し黙る。確かにちょっかい掛けてきそうな戦闘狂とか何人か思い浮かぶわ……。

稽古から一段上のギアに上げたのか、ミラ婆ちゃんは力強く大地に足を踏み下ろした。

気合の入った震脚によって大地が揺れ、ビリビリと震える振動が周囲の木々や建物を揺らす。

「再びこの地にやってきた貴方と、貴方の牙たる《報復（ヴェンジェンス）》には変化が起きている。大きな戦いに巻き込まれる前に、此処で自覚しておきなさい」

そう言って、言葉の締め括りに俺も初めて見る――おそらくは現役時代に見せていた顔なのであろう、不敵な笑みを浮かべた。

「――大業を果たした自慢の弟弟子が拳。交える一番手を他の者に譲る気はありません、姉弟子を信用して存分に打ち込んできなさい」

……えぇ……その言い方はずるいなぁ。

尊敬する人物――同じ生き方がしたいとか、できるとは欠片も思わんけど――に、そうまで言われたら、応えなきゃアカンやろ。

今回だけね、うん。後は絶対やらんからね。

溜め息一つ漏らすと、折檻された額を最後に一撫でして、俺も立ち上がって構えを取る。

――《起動（イグニッション）》。

静かに一言、呟いて相棒を完全開放した。

空気を軋ませる様な甲高い音が響き、頭部からつま先まで、漆黒の装甲が全身を覆う。

全身鎧としてはシャープな姿形のソレに、展開から一瞬遅れて深紅の魔力導線が奔り抜け、久方振りの完全起動は為った。

……使った感じ、やっぱ出血とかはしてないな。痛みも前と比べると全然弱い。

変化が起きている、と言っとったな。

それを確認する意味合いも兼ねたのが今回の稽古だったって事か。

――なら、最後の〆くらいは、期待に応えて姉弟子を感心させてやりたいもんだ。

お互い、同じ構えで向かい合う。

「……なんだかんだ言ってヒッチンさんと、仲良いよな」

「同じ流派の師弟の絆ってやつでしょ――なんか良いよね、こういうの」

何処かブスっとした様子のシアと、その反対に喜色に満ちたリアの声が横手から聞こえるが、一旦それは脇に置いて。

丁寧に《地巡》を行使して全身と周囲の魔力を練り上げ、充分に体内で廻したソレを

拳で結ぶ。
完全起動で技の精度は爆発的に上がったとはいえ、ミラ婆ちゃんなら妨害は容易な筈だが――彼女はそれを無粋といわんばかりに、自身も《地巡》で魔力を練って内に撓める。
互いの練りが充分になり、最高の一撃への氣炎が昂まると俺は静かに宣言した。

――んじゃ、行きます師姐。
「――来なさい」

真っ直ぐに、踏み出す。
踏み込んで、地を蹴りだし、半歩で空気の壁にぶち当たり、一歩で音の壁を突き破る。
先の決め事通り、正面から姉弟子の身体の中心に向かって、可視化するまで魔力を圧縮した《命結》の拳を最速で撃ち出し――。
「《日昇》」

加速された知覚の中で、ミラ婆ちゃんの口元がそう動いたのを捉え、同時に打った拳

が両の手掌をもって捌かれた。

「――見事な一撃でした」

総身が流され、お互いが交差する一瞬、真摯な賞賛の声が耳朶を掠める。

その一撃に完璧に対応しておいてよく言うね――まぁ、がっかりはさせなかった様で、何よりです。

宣言通り、此方の本気の一撃を正面から迎え撃ち、打ち破ってのけた姉弟子に、大きな怪我をさせずに済んだ安堵と多大な敬意、あと出鱈目すぎる武力に対する少しの理不尽を感じつつ。

突進と打撃の威力を完全に逸らされ、人間砲弾と化した俺は、中庭に隣接している建物の壁へと頭から突き刺さった。

「一度、受けてみて確信しました。技に良い意味で『遊び』が出来ています」

壁に向かって犬神家になった俺を引っこ抜いて、一応回復魔法を掛けてくれているシアと――何故か此方の頭を抱え込んでだっこしているリアに挟まれたまま地面に座り込んでいると。

俺の一撃を流した反動で削れた掌の表皮を、自前の回復魔法で癒し終えたミラ婆ちゃんがそのように宣ってきた。

遊びとな？　どういう意味じゃろ。

「切れと精度自体はそう変わってはいませんが、《三曜》の発動が素直になっています――貴方というより魔鎧の反応が変わった、という事でしょう」

……あれ？　ちょっと待って。ということは進展があった気がしていた修行の成果は……？

「貴方の技量自体は然して変動していませんね」

オッフｗｗｗｗ成長したと思ってたらただの痛い勘違いでござったｗｗｗｗ死にたいｗｗｗ

「遊びが出来た、と言ったでしょう――言い換えれば余裕、成長の余地が生まれた、という事です」

地味に凹んでいる俺に、鉄面皮のままフォローを入れてくる我が姉弟子。不器用な優しさが逆につらい。

「……おい、アリア。なんで抱きしめたままなんだよ、治療はもう終わってるぞ」
「さっき抱っこしてあげるって約束したから、してあげてるだけだよ？」
「おまっ……またかよ！　ホント抜け目ないな最近！」
おいい、真面目な話してんのに人の頭を巡って奪い合いを始めるな。バレーボールじゃねーんだぞ。
きゃいきゃいと騒ぎ出した聖女二人の脳天にペチンと手刀を落とすと、おうぼうだーぼうりょくはんたいだー、なんて二人揃って棒読みで抗議の声を上げるので、立ち上がると二人とも脇に抱え込んでその場でぐるんぐるんと周ってやる。ふはは、黙らないなら黙らせるまでよ。
「……」
きゃー、だの、うわー、だの叫んで遊びだした俺達を、ミラ婆ちゃんが目を細めて眺めているのに気付いて、咳払いして二人を下ろし、居住まいを正した。
……ん〝ん〝っ、失礼しました。
「……いえ、怒っている訳では無いのです――寧ろ、もう少し見ていても良かったのですが」
あ、そう？　なら続きやるわ！　と言えるほど太い神経はしてないので、お話の続きをしましょう。

再び咳払いして先を促す俺に、ミラ婆ちゃんは大きく頷いた。
「では、これは提案なのですが……一度、師の元へ足を運ぶべきです」
ふむん、お師匠のトコに？
首を傾げる俺の顔を、シアが脇から覗き込んでくる。
「お前らの師匠っていうと……あの龍の御姫様だよな？」
まぁ、そうなるな。一回くらいは挨拶に行きたいとは思ってたけど、急に機会がやってきたっぽいが。
「確か住んでる場所、北西にある霊峰だろ……完治したばかりの出先としては、遠くないか？」
うん、それはちょっとそう思う。
大陸北西にある、峻厳な山々の連なる大地。
一年通して、殆ど雪の絶える事が無いと言われる一際高い山が、霊峰と呼ばれる――お師匠の在住地だ。
大戦の戦火も遠いそこは、人が住み着き、根を張るには厳しい環境というのもあるが……。
単純に、あの辺り一帯がお師匠の『縄張り』認定された地域なのだ。
神格に匹敵するとさえ云われる超存在の機嫌を損ねてでも、そこでドンパチしたいな

んて言うパッパラパーは、人類側は勿論、邪神の勢力にだっていなかったので荒れていた当時の世界情勢からは考えられない位に、あの地域は自然な静謐の保たれた場所だった。

邪神の放つ悪氣の影響で狂暴化した魔獣やらとは違う、厳しい環境の中で真っ当に進化し、生き残ってきた強力な精霊や霊獣が跋扈する、達人ｏｒ人外未満はお断りな魔境やぞ。

お師匠は基本、霊峰に籠ったまま出てこない引き籠りなので、師事した時もミラ婆ちゃんの紹介状を携えて、自力で御山を登頂せねばならんかったのだが、中々大変だった記憶がある。

当時、山登りに時間を割いている余裕の無かった俺は、割と反則的な方法で大幅なショートカットして山頂へと辿りついたのだが、それでも数日掛かったからね。

真っ当な修行者にとっては、あそこをゼロから踏破するのも修行の内なんやろなぁ……。

逆を言えば、本来それが出来るような者でないと半龍姫に教えを乞うに能わず、って事なんだろうが……めっちゃ横着してショトカ使用した身としては申し訳なさを感じる。

「師ならば、貴方の今の状態をより精密に判断できるでしょう。それに、そろそろ接触を

行う様にと話が出ていました。師弟の繋がりを以てかの半龍姫との会合を行うと言うなら、私より適任でしょう――師は貴方を大層気に掛けていましたからね」

それ、ダメな子程可愛い的な奴じゃないですかー。超複雑なんですけど。

話が出た、と婆ちゃんが言うって事は、少なくとも枢機卿以上の上からって事だから……まぁ、多分あのボードゲーム糞雑魚爺さんの発案なんやろな。

愉快犯染みた面もあるが、大事な局面で外した行動は取らない爺なので、今回のお師匠へのアプローチも意味がある事なんだろうが。

しかし、そうなると会いに行くのは俺だけ、って事は無いでしょ？　形式上では俺ってただの傭兵だし。会合っていうならそれなりの地位の人間が向かわんと駄目だろうし。

「そうですね。霊峰に問題なく入れる実力と、教会の重鎮という立場を両立出来る人間……自然、聖女の御二人のどちらかと、追加で護衛が一人、といった処でしょうか」

ミラ婆ちゃんが言い終えるや否や――シアとリアが凄い勢いで前に出た。

「はいはい！　ボクが行くよ！　龍の御姫様とは会ったこと無いから挨拶してみたいです！」

「いや、会合っていうなら顔見知りの方がいいだろ。オレが行くよ、霊峰の登頂ルートもある程度覚えてるし」

全く同時に猛烈なアピールが始まる。どんだけお師匠に会いたいのキミたち。
ちなみに、護衛は誰になるのか、もう決まっとるので？
「ガンテスにお願いしようと思っています。師も大人数での来訪は良い顔をしないでしょうから、かの地の麓までになると思われますが」
お、良い人選。前に霊峰入りした時もあのオッサンと同行したので丁度いいや。
俺とミラ婆ちゃんがサクサクと今後の予定について話を進めている傍らで、よほど今回の遠出に乗り気なのか、聖女姉妹（きょうだい）は丁々発止とやり合っていた。
「お前はこの間、一日中二人で出かけただろうが！　たまには姉貴（アニキ）に譲れよ！」
「北西の霊峰なんて、行きだけで半月以上かかるじゃん！　一日じゃレートが合わないよ！　――っていうかレティシアも出掛ければ良かったでしょ！」
「よし、じゃぁ出発の日になる前にそうする――それはそれとして霊峰にはオレが行く！」
「うわ、なんだよそれきたない！　聖女きたない！」
「お前も聖女だろうが！」
ギャーギャーと喧しく言い争っているのを横目に、俺はそっと立ち上がった。
散々地に転がったり壁にめり込んだりしたせいで汚れ塗れなんで、水浴びしてこよ。
「……私が言うのもなんですが、御二人は放っておいて良いのですか？」

姉弟子殿が、口論では埒が明かないと思ったのか全開で魔力強化した先読み後出しなんでもありの高速ジャンケンを始めた二人をチラリと見やる。

いーのいーの。これ、俺が嘴突っ込むと、じゃぁお前が決めろ。どっちがいいんだ？とか聞かれちゃうやつなんで。君子危うきに近寄らず、ってやつです。

ジャンケンしてるんだから恨みっこ無しで結果も出るっしょ。と、気配を殺してこの場から離脱を図る。

こっそり足音を消して中庭を離れる、俺の背に。

「レティシア様もアリア様も、苦労しますね、コレは。――私の弟弟子は、こういった方面において愚鈍が過ぎる」

そんな、呆れたように呟かれた、溜息交じりの酷評がぶっ刺さったのだった。解せぬ。

霊峰へ

――では、点呼を取りまぁす！　俺がいちぃ！
「ボクがにー！」
「ならば拙僧が三ですな！」
聖都入口の城門前で、俺、リア、ガンテスがノリ良く手を振り上げて各々の番号を叫ぶ。
天気は快晴。広がる青空に、刷毛で刷いた様なうっすらとした雲が僅かばかりに白色を付けている程度。絶好のお出かけ日和、というやつだ。
中庭でのミラ婆ちゃんとの稽古から数日。お師匠の住む霊峰へと出発する日がやってきた。
俺は再転生してきた時に着ていた旅装に、関節や急所に軽く革の防具を付け足した格好だ。
リアとガンテスは巡礼者が着る僧服を、動きやすいように個々に改良した物を身に着けている。

おっさんはあんまり変わらん恰好だけど、妹（おとうと）分は普段より結構イメージ変わるな。うん。普段のストレートロングもいいけど、ポニテも良い文化です（断言

遠地への移動に必要な様々な荷物を背負い。準備は万端だった。

ちなみに、熾烈なジャンケン勝負で百回以上のあいこを繰り返した末に敗れ去った金色の聖女様は、ミラ婆ちゃん監督の元、執務室に封じられている。

こっそりか、なし崩しかは知らんが、付いていく気満々で各種お出かけグッズを自室に準備していたからね、仕方無いね。

留守番が確定した直後は、見て分かる程に凹んでいたので、昨日は丸一日、気晴らしに付き合って街で遊び倒した。

幻惑魔法で髪の色まで変えて、普段の聖女と御付きの従者みたいな感じでは無く、ただのシスター見習いとそのダチとしてあっちこっち歩き回ったので、日が暮れる頃には機嫌も回復してたのは幸いだ。

正直、変装して遊びに行くのはその内リアがやると思ってたが、シアの方ももっと気軽に街で遊びたいとは思ってたみたいだね。

現地にこそ来れはしないが、遠話用の魔道具も持たされているので、帰ってくるまで音沙汰無しになる訳でも無し。途中の街でお土産でも買ってくるから妥協してくれ。

さて、いよいよ出発する訳だが。

お師匠こと半龍姫が引き籠ってる霊峰は、聖都から北上して西寄り、大陸の最北端よりやや下程度の場所に聳え立っている。
当然、距離的にも中々の遠出になるので、各種消耗品や食料は北上中に通過する街々で随時補給する事になるだろう。
とはいえ、戦争中に各地を飛び回っていた忙しないスケジュールに比べれば楽なもんだ。差し迫った話でも無いので、三人仲良く楽しんでいこうじゃないの。
「うん、終戦後には遠出した事もなかったから、楽しみだ」
「霊峰が聳えるかの地は、肥沃な魔力と過酷な環境に適応した生命の溢るる地と聞き及んでおります。素晴らしき修練の場となりそうで――いやはや胸が躍りますな！」
「あははっ、先生はいつもそればっかりだね」
厳つい禿頭を片手で撫で擦りながら、目を輝かせるガンテスにリアは楽し気に笑いかけた。
会話から察せられる通り、この二人師弟関係である。勿論、戦いのね。
これから会いに行くのは俺の師匠だし、奇妙に符合が一致する面子になったな。
基本、ゴリッゴリのステゴロファイターのガンテスだが、本人曰く、『聖職者の嗜み』としてメイスやフレイル、杖棍や旋棍といった打撃武器全般の取り扱いも修めている。
聖女として癒し全般に秀でているが、身体強化も得意なリアが師事する様になったの

は、まぁ……本人の希望もあったらしいし、悪いこっちゃない。
だが。見た目、触れれば折れそうな儚げな銀髪美少女が、神器という名の特大鈍器を小枝みたいに振り回して敵を叩き潰す様になったのは間違いなく目の前のゴリラのせいや。
戦争も終わった今、流石に聖殿から神器を持ち出すのは無理があるので、今は荷物と一緒に背負ってるのは特大サイズの鎚鉾だが……本人とのギャップが酷い光景なのは変わってない。
「往く道で友好を暖めるは旅路での醍醐味、そろそろ出発するとしましょう！」
おう、そうですね。んじゃ、行きますか。
「よーし、行こう！　……って思ったけど馬はどうしたの？　それとも途中まで飛竜便とか？」
上機嫌に拳を天に突き上げたリアが、思い出したように小首を傾げるが、忘れたかね。俺は騎乗全般が難しいのよアリアさん。
「え、それじゃまさか、歩いていくの!?」
違う違う。あれや。
そう言ってガンテスの方を指さすと、丁度、彼は岩塊を削りだしたような体躯を折り曲げて身を屈めた処だった。

野営道具が詰まった一際大きな荷を背負い、その荷の両脇にはがっちりと括りつけられた背負子が二つ。

――あれに乗って行きます。

「まさかの先生タクシー扱いだった！」

はっはっはっは。人聞きが悪いな。

馬代わりに荷車を曳くどころか、馬の倍の速度で二頭立ての幌を担いだまま丸一日爆走しても平然としてる奴が同行者なんだから、利用しない手はないでしょう。

以前、俺が乗ったときのように、揺れが酷いままだというならリアを乗せるのは躊躇われたが、本人曰く「筋トレしてたら上体を一切ブレさせない走法を編み出した」との事なので、安心してくれていいぞ。

「えぇ……いいのかなぁ」

困惑して背負子を眺めるリアに、背中を向けて屈み込んでいたガンテスが、振り向いて実にいい笑顔を見せた。

「お気になさる事は一切ありませんぞ、強いて言うなら、アリア様と猟犬殿では負荷が少々足りないのが問題なだけですからな！」

「うん、それは問題って言わないよね。長旅でデッドウェイト不足を嘆かれるとか聞いたことないよ」

額に手を当て、頭痛を堪えるような仕草をしているリア。俺はその小さな背から馬鹿みたいなサイズのメイスと荷物を取り外すと、ガンテスの背負う荷へと固定し、括りつけていく。

自分の荷物も上に乗せて紐できつく縛ると、岩の如き巨漢が背負う荷物は、本人に負けない小山のようなサイズになった。

最後に、何処か諦めたような表情のリアを抱えて右の背負子の上に乗せると、俺も反対側に乗り込む。

「よろしいですかな？　――では参りましょう」

特に重さを感じている様子も無く、ひょいっと立ち上がったガンテスだったが、

「むぅ」と一言呻くと急に動きを止めた。

なんだなんだ、立った時に腰でもやったのか？　全くそんな感じには見えなかったが。

「いや、御心配には及びませぬぞ。ただ、そうですな……アリア様、予備の鉄棍をあと五本程お持ちになる気はありませんかな？」

いいからはよ出発しろや。

ボッ、ボッ、と規則正しく、空気が破裂するような音が街道に響く。
俺とリアを乗せ、上体を僅かに傾け、真っ直ぐ伸ばしてピタリと固定したまま走る巨漢の脚が発生源だ。
野太い丸太の様な腿を振り上げ、下ろす度に空気の壁を突き破って発生する破裂音は出発してから一切リズムが乱れていない。
景色の流れてゆく速度もまた早い。日本で自動車に乗ってた時と体感的には大差無い気がする。
風防とかは無いので、ダイレクトに風を感じながら特に身体が揺れる事も無く進む様は、下さえ見なければオープンカーに乗ってドライブしている気分になる。エンジン音の代わりにボッ、ボッって聞こえるけどね。
「うむ、良き哉！　穏やかな日の下で鳥の囀りに耳を傾けての旅路も良いものですな。身の引き締まる戦場の空気とは又違い、心洗われるようです！」
「すごいねー、先生。これ、日が落ちる前に最初の街に着いちゃうんじゃないかな」
大気を剛脚でボリながら、ガンテスが呵々大笑し、完全人力オープンカーに慣れてきたリアも目を輝かせて流れていく背景を眺めている。
街道を爆走する大量の荷物と人二人を背負った巨漢の僧に、すれ違う旅人や商人の馬

車を引く御者が目を剥いて此方を二度見する度に、恥ずかしそうに顔を伏せていた妹（おとうと）分だったが、開き直ったのか、慣れたのか、今では道行く人に楽しそうに手を振る余裕まであるようだ。何気に順応性高いよねキミ。

これが俺とガンテスだけだったら、目を剥いた後、慌てて距離を取るか下手をすると悲鳴を上げて逃げ出す奴ばっかりだろうけどね。っていうか前はそうだった。

一度だけだが、誰かが通報でもしたのか、馬に乗った巡回の騎士が追いかけてきた事もあったわ。あの時は急いでるから無視しようぜ、って言ったらノリノリになったガンテスがぶっちぎって置き去りにしていったが。

今はリアがいる上に、ご機嫌で笑顔を振りまいているので、擦れ違う人たちの驚愕度はともかく、警戒度は格段に下がってる気がする。

この分なら、今回は追いかけっことかはせずに済みそうだ。美少女が一人加わるだけでコレだもんなー、浮世の遣る瀬無さよ。

まぁ、同じ光景――強面の筋肉達磨と目付きの悪い男が見たらドン引きするような速度で街道を駆けてたら、俺だって通報するか悩むけどね！

街道沿いにある小川のせせらぎと空気をボる音に耳を傾けながら、のんびりと地図を広げる。

このペースならリアの言う通り、余裕で街に着くなー。一旦休憩して昼飯にしない？

「うん！　水場も近いし、実はお弁当持ってきたんだ。そろそろお昼にしよう」
あー、風に靡く銀髪を抑えながら、ニッコニコで同意する妹（おとうと）分に癒されるぅ――それはそれとして、弁当とな？
てっきり保存食食って終わると思ってた昼食に、思わぬ単語が出てきて反応すると、リアは背負子から身を乗り出してちょっとした内緒話をするように口元に掌を寄せた。
「そうそう、早起きしてレティシアと一緒に食堂の厨房を借りたんだ。簡単なものだけど作って持ってけって、レティシアが言い出したんだよ」
最後に少し意地悪気に、悪戯っぽく笑って姉（あに）にとって気恥ずかしいであろうエピソードを暴露する。わざわざ早起きしてもらって有難いな。遠話の魔具を使うときに感想を述べておくとしよう。そもそもまだ食ってすらいないが。
「多めに作ってきたから、先生もしっかり食べてね！」なんて頭上から笑顔で話を振られ、ガンテスは角張った厳つい顔を角を削り落としたみたいに柔かくして笑う。
「これはなんとも忝い。御二人が手ずから拵えた物を食せるとは……ミラ殿や猊下に自慢できますな！　霊峰に辿り着く前にこうも心躍る機会が訪れるとは、此度の護衛を任された我が身の幸運を創造神に感謝せねば！」
「大袈裟すぎ、そこまで喜ばれると逆にプレッシャーだってば」
そう言って笑い合う師弟を微笑ましい気分で眺めていた俺だったが、遠目に見えた光

景にガンテスの硬い禿頭を軽く叩いた。
二人とも、昼メシの前に厄介事っぽいぞ。右側の方から何かに追われてるっぽい馬車が凄い勢いで走ってきとる。
街道を俺達からみて右前方の緩やかな丘。
その向こうから、馬に出鱈目に鞭を入れながら最大速度で街道に向かってきている馬車と、その奥には馬車を追う巨大な蟲の群れが目に映った。
蜂型の魔蟲（インセクト）の群れかよ。街道から外れた道を強引に突っ切ろうとして巣圏（テリトリー）にでも入ったのかね。
「む。このままだと此方と接触は必至……迂回しますかな？」
基本、人当たりの良いガンテスだが、こういった局面での判断はシビアだ。伊達にベッドより戦地の天幕で寝てる回数の方が多い人生を送ってない。
だよなー。ただ襲われてるってだけなら、助けに入るのも吝かじゃないんだが……あんなモン引き連れて街道に向かってきてる時点で擦る気満々やしなぁ。
個人的にはスルーしてしまいたい処だが、さて。
「待って」
凛とした声が響いて、俺とガンテスは一瞬視線を交差させ、苦笑を浮かべた。
「馬車から迎撃してる冒険者の人達、相当深手の怪我してる人もいる――助けよう」

背負子から今にも飛び降りそうな様子で、そう断言したのはリアだ。
平時は割とぽややんとしてる事も多い妹（おとうと）分の、戦場の貌――否、銀麗の聖女としての貌がそこにはあった。
どれどれ……言われて見てみれば、モンスターデリバリーなんぞやらかそうとしてるにしては、護衛らしき連中はガチで抵抗してるな。随分と、御者側の人間とは意見の食い違いがありそうだこと。
「ボク達が迂回で抜けられても、ほかの街道の利用者に被害が出るかもしれない。馬車が街道に近づく前にこっちから迎え撃ちにいこう」
括りつけた荷を解いて、自身の特大鎚鉾（グレートメイス）を手に取ると、短刀（ダガー）を振るような気軽さで一振りして背に担ぐように構える。
駄目って言っても一人で飛び出して行くだろうし、一人でどうにかできてしまう力量（ちから）もある。困った人を見捨てられないお人好しってのは、同行してる人間にとってはタチが悪い部類なのかもな。
でもまぁ――。
「では、このまま一気に馬車と大蜂の群れの間に入り、接敵しますぞ！　振り落とされぬ様になされませぃ!!」
「ありがと先生！　――にぃちゃんは、来てくれる？」

そういう魂の持ち主だからこそ、すき好んで傍に居るんですけどね。
仰せのままに、Ｄｅａｒ　Ｍｙ　Ｓａｉｎｔ、なんっってな！
ちょっとおどけて言って見せると、リアは花が咲く様な笑顔を浮かべて「うん！」と元気よく頷いた。
背負子の骨組みをしっかりと掴むと同時に、グン、と急激な加速が掛かる。
ガンテスの踏みしめた大地が大きく陥没し、小さなクレーターが足跡変わりに次々と街道を穿った。
街道整備の人員がみたら発狂しそうな光景ではあるが、それも数歩分のみだ。
最後の一歩で深く、大きく踏み込み、巨躯が膝を曲げて沈み込む。
「ぬぅぅぅぅぅぅん!!」
野太い気合の雄叫びと共に、筋肉が宙を飛翔した――自分で言っといてなんだが字面がひでぇ。
弩砲から放たれた大矢の如く、地より発射された俺達は弓なりの軌道を描いて空中を舞い――走り続ける馬車を飛び越え、その背後の魔蟲の群れへと着弾態勢に入る。
「――喝ッッ!!」
文字通りの大喝が、ガンテスの喉から咆哮として飛び出した瞬間、俺とリアが背負子を蹴って飛ぶ。

一秒後、筋肉製の砲弾が群れの中心へと直撃し、耳障りな無数の羽音が爆撃音で消し飛ばされた。

消し飛ばされたのは羽音だけでは無い。着弾点とその周囲にいた魔蟲達が、迫撃砲を食らったように体液と甲殻の破片をまき散らして爆散する。

粉塵と土煙が噴き上がり、群れの中心部は茶色の煙幕を張った様に視界から遮られた。

一気に数が半減した事で、群体として行動している魔蟲の群れの動きが乱れ、その場に停滞して再編成を開始。これで街道には近づけずに済んだ。

「にいちゃん！」

――応よ。

再度統括されるのを待ってやる必要も無いので、群れの外周部にいる個体を潰して、更に数を削る。

リアの鎚鉾が一閃し、数匹纏めて大蜂が弾け飛ぶ。

俺は鎧ちゃんを右腕だけ起動すると、地面の砂利粒を拾い上げてサイドスローで投擲した。

肩、肘、手首と連動して魔力噴射を行い、身体強化と合わせて動作を加速。投げ放たれた無数の礫は弾丸の様に魔蟲共の甲殻に食い込み、体液をぶち撒けた。

群れの再編が終わり、新たな外敵に対して魔蟲が一斉に威嚇の低い羽音を掻き鳴らす。太い棘の様な牙が生え揃った摂食口からギチギチと嫌な音が漏れて鼓膜に嫌な刺激を与えてくる。

ヴゥゥウン、と響く、苦手な奴が聞いたら鳥肌を立てそうな無数の重低音を前に、俺は一瞬視線を後ろに飛ばすと動きを止めた馬車を見やった。

リア。ここは俺とガンテスだけでええわ、馬車の怪我人を見てきて、どうぞ。

「ヤだ」

即行で帰ってきた拒絶に、思わず敵前でズッコケそうになった。いや、なんでやねん。

「馬車の人たちも心配だけど、にいちゃんが怪我する方が嫌なの。だから早く一緒に倒して、そのあと治療する」

過保護か！　なんぼなんでも只の魔蟲に不覚を取る程、にいちゃん弱くないぞぉ！

（沽券感

思わず隣に顔を向けて抗議すると、リアは珍しく――いや本当に珍しく膨れっ面で俺を睨み返した。

「駄目なもんはダメ！　――今度こそ一緒に戦うんだからボクの傍にいてよ」

妹（おとうと）分からの心配が過剰過ぎる。この位の相手なら道具有り、時間制限無しなら素でもやれるんだぞ。泣きたい。

戦闘中だってのに、何処か間の抜けたやり取りをしている俺達に襲い掛かることもせず――それ処か此方を無視するかの様に背を向け、魔蟲の群れは未だに舞う粉塵の中心を包囲する様に飛び回る。

知性と呼べる程の物が無くとも……いや、寧ろ本能で理解したのかもしれない。

少なくとも、この場で一番ヤる気に満ちている危険物が誰なのかを、だ。

「経緯は知らぬ――或いはお主等は巣を不当に荒らされ、故に襲い掛かった身なのやもしれん」

煙の薄まってきた中心部の向こうから、静かな声が届く。

「だとすれば、我らの行いはお主等にとって理不尽なのであろう。節足の類に神への祈りと言葉を届ける事叶わぬは、ひとえに愚僧の未熟よ」

バァン！　と、大口径の空砲を鳴らしたような音が響き渡り、発生した衝撃波で残った土煙が一気に吹き払われる。

大地に穿たれた砲撃痕の如きクレーターの中心には、両の掌を打ち合わせ、祈りを捧げて仁王立ちするガンテスの姿があった。

「故に――赦しを請おうとは思わぬ。存分に恨むと良い」

その言葉に反応したのか、単に目の前の危険極まりない外敵を真っ先に狙ったのか。

残った大蜂達は腹部の大きな針を、或いは牙を。目を閉じ、不動のまま祈りの所作を

崩さない巨漢へと向け、殺到する。

ガンテスの巨体が、一瞬で黒い雲霞の波に飲まれて消えるが、俺もリアも全く動じなかった。

本人が理不尽と称した通り――気の毒な話だが、魔蟲達の持つ攻撃手段ではどうやってもあのゴリラの筋肉を貫ける可能性が存在しない。

単純な肉体強化＆硬化という括りにおいて、人類圏では間違いなくトップのこの男は、戦闘時に比喩でもなんでもなく全身が最低でも鋼鉄以上の強度になる。

表皮どころか、内臓や血管、なんなら金的すら硬度が上がる癖に、生物特有の弾性としなやかさも保つというふざけた強化は、一に鍛錬、二に鍛錬。三四に実戦、五に鍛錬。というネジの外れた人生を送ってきた求道者の修練の結晶だ。

例え相手が蜂じゃなくて飛竜（ワイバーン）だったとしても、結果は同じ。ただ本能の儘に力を振るう獣の類ではガンテスの防御力は貫けない。

「憤ッ！」

短いが、力の籠った息吹と共に、魔蟲の壁が紙屑の様に千切れ飛ぶ。

剛腕（ゴリ）剛脚（ラ）、此処に極まれり。拳を振るう度、蹴りを放つ度、発生した衝撃波で残った群れは吹き散らされ、攻撃の直撃を喰らった個体に至っては、なんか体液と甲殻の色が混ざった血煙っぽいものに変わって消滅する。

――うん、やる事ねぇや。

アリアさんや、二人で馬車の方見に行こうか。

「……そうだね。先生がこうもやる気になっちゃったら、万が一も無いだろうし」

戦いへの気合をスカされた気分になり、お互い、スン……となった面持ちで筋肉蹂躙劇場から背を向けて馬車へと歩き出した。

大体それと同時に、馬車から何人かが飛び出し、こちらに駆け寄ってくる。

「すまん、助かった！　俺達も手伝う……ってなんだありゃ……」

飛び出してきた数人――先ほど、馬車から迎撃を行っていた冒険者らしきメンバーは、大暴れしているガンテスに気付いて唖然とした表情で硬直した。

うん、まぁ気持ちは分かる。

リアをチラリと見ると、妹分は我が意を得たり、とばかりに頷いた。

「此方はもう大丈夫です。とりあえず、怪我をしてる人がいるなら症状が重い人から治療するので、馬車に戻りましょう」

向こうさんの警戒を和らげる為か、聖女スマイルで対応するリアに、半分見惚れたように冒険者達は首をカクカクと縦に振った。

「いやぁ、助かりました。あの数の魔蟲共に追われ、あわや、という処でしたが、御二方の様な腕利きの巡礼者と偶然出会えるとは、まさに創造神の御導きですね」

にこやかな笑顔を浮かべて抜かすのは、恰幅の良い小奇麗な身なりの男――馬車の持ち主である商人だ。

必死こいて迎撃していた四人の冒険者の一人である魔術師と、馬車内にいた小間使いらしき若者が結構な重症だったので、リアがさっさと治療し、次いで軽傷だった他の冒険者と御者も癒したのだが、それを見ていた唯一無傷だった男は、笑顔を浮かべながら露骨にリアにすり寄りだした。

明らかに街道にいる人間に魔蟲を押し付ける為に馬車を走らせていたのに、よう口が回るね。流石商人――と言ったら真っ当な商売人の人に失礼か。

一応、名乗られはしたのだが、正直《視た》感じからしてもあんまり良い印象を抱けなかったので、耳に入っても右から左に抜けて地べたに落っこちてどっかいった。

リアも一見、如才なく対応している様に見えるが――まぁ、営業スマイルって奴だな。

大戦時代からあの手の連中がいなかった訳じゃないし、慣れたモンだろう。適当に流してる感が凄い。

ちなみにこっちも自己紹介したが、向こうも向こうで俺とガンテスの事は殆ど眼中にない――いや、オッサンの方は眼中に無いっていうよりビビって意図的に意識から外してるっぽいが。

妹（おとうと）分の傍には、一緒に話を聞く形でそのガンテスが付いてくれているので、商人も短絡的に妙な考えは起こすまい。

手持ち無沙汰になったので、馬車の近くの木立で荷物の整理をしていると、先ほどリアがささっと癒した冒険者達がやってきた。

「よう。さっきはちゃんと礼を言えなかったから改めて言わせてくれ――最悪の対応を取ろうとしたこちらを助けてくれた事、本当に感謝する」

頭目らしきブラウンの髪を短く刈り込んだ剣士の男が、丁寧に腰を折って深々と一礼する。

他の三人――斥候（スカウト）の弓使いの女性と、女魔導士、聖職者の男も一斉に頭を下げてきた。

「ホント、ごめん。冒険者が一般人を巻き込み兼ねない方法を取るとか……我が事ながら最悪だった」

「私に至ってはそっちの小さな女の子に命を救われた様なものだし……リーダーの言う

通り心から感謝してる」
「貴方たちが助けてくれなければ、無辜の民に魔獣をけしかけて逃げ出した挙句に、仲間まで喪う処でした……今の私に神に感謝する資格があるかは分かりませんが、それでも神と貴方達に感謝を」
神妙な表情で謝罪を述べる一行に、俺は努めて軽い口調でヒラヒラと手を振って応えた。
気にするな、とは言わないがそう深刻なツラをする必要はないと思うよ。大体予想はついてるし。――まぁ、アンタらもババ引いた様なもんやろ。
「そう言ってくれるとは有り難い……本当は、あんた達三人に礼を言いたいが……あっちの二人は俺達の依頼主につかまってる最中だからな」
剣士はそう言って自身の雇い主に目を向けるが、お世辞にもその視線の温度は高いとは言い辛い。
他の三人も似たようなもんだ――まぁ、必死こいて依頼主を守ろうと迎撃に精を出してたらＭＰＫ染みた真似の片棒を担がされそうになったんだから当たり前か。
実際、この冒険者達が商人と一緒になって街道の人間に魔蟲を擦りつけようとしていたのなら、あんなに必死になって矢や魔法を飛ばしてヘイトを稼ぐ必要は無いんだよな。寧ろ街道に近づいたら極力手出ししない方が周囲の人間に狙いも散りやすいだろ

うし。

寧ろ、どうにかして馬車に引き付けようと悪戦苦闘していた様にしか見えない。

依頼主の無茶な要望と、冒険者としての良識に板挟みになった末の苦渋の行動ってやつじゃなかろうか。

状況証拠のみではあるが、あの商人の独断だろうね――俺個人の視点で言えば、目の前の四人組は大戦で一緒に戦った人達と近いモノを感じるのでどうにも悪印象は抱きにくい。

他の二人も大体同じ意見だと思うぞ。と告げると、四人は幾らか肩の荷が下りた、といった様子で表情を和らげた。

改めてお互いに名乗ると、頭目の剣士――アザルというらしい――と、軽く握手を交わす。

簡単な経緯を聞くと、まぁ、大体予想通り。

二つ程向こうの街から、急いで聖都に荷を運びたい商人の馬車の護衛依頼を引き受け、平原に敷かれた街道ではなく、丘を幾つか超えるショートカットにはなるがやや危険なルートで進む事になったらしい。

その途中で、斥候のお姉さんの発見した巣圏を、依頼主である商人はリスクは承知で突破する様に主張。

その為に通常の護衛より高い料金を出している、と言われてしまえば強弁に反対する事も出来ず、やむなく強行で魔蟲の巣の範囲を走り抜けたそうだ。

巣圏に点在していた大蜂達のコミュニティの大きさが、想定より遥か上だった様で、こういうオチになったみたいだが。

きちんとした手続きは踏んでるようだし、依頼料自体も相場より高めだったようだが……やはり最後の選択が腹に据えかねているらしく、彼らの依頼主を見る目は冷え切っていた。

「……あと二日もあれば聖都も見えてくるし、ここまで来たら最後まで仕事はするさ……正直、途中に休息できる村でもあるなら、違約金払ってでも降りていただろうけどな」

一定以上の安全の確保出来ない場所での依頼の解約は、ともすれば依頼主への脅しにもなってしまうので、それをやらかした冒険者には組合から大きなペナルティが課せられる。

腹も立つし、割り切れもしないが、今回限りの付き合いだと思って我慢するさ、とアザルは苦笑いを浮かべていた。

ファンタジー異世界の定番、といった職業ではあるが、夢と浪漫と冒険に溢れてるのはごく稀。あるいは一握りの高ランクの者達がそれを享受する場合が殆ど。

実際は、荒事関連に比重の寄ったちょっと物騒な何でも屋、といった処か。
冒険者には冒険者なりに、気苦労が多いんやなぁ。
アンタは護衛の冒険者じゃないのか？　と驚かれたが、違います。ワタクシ、フリーの傭兵みたいなもんです。いうて、専属契約して長いのでフリーとは言い難いけど。
まぁ、それは良いんだ。それよりなにより――いい加減腹が減った。
おたくらを救助する前に、丁度昼飯を食おうとしてたとこだったんですよ。あの商人、いつまでくっちゃべってんだ。折角のシアとリアの弁当なんだから三人揃って食いたいんだよ。はよ終われ。
リアもガンテスも空腹だろうし、さっさと切り上げてもらうために声を掛けようと腰を上げる。
「あの商人、護衛の傭兵の話なんて聞かないと思うぜ……俺達の方で話題を逸らしてみようか？」
心配顔で提案してくれるアザルやその仲間達に、軽く手を振ってだいじょーぶ、と応えると、揉み手せんばかりの商人と、いい加減笑顔の裏で疲れた感だしてるリアの元に歩み寄った。
「いや、それにしても御美しい。帝国貴族の方々とも懇意にさせて頂いておりますが、貴方程の方はお目に掛かった事がございません――よろしければ、高貴な方々にご紹介す

る事も可能ですが？」
「いえ、そういうのは結構です。ほんと、通りすがりに偶然助ける事が出来ただけなので」
　ぐいぐいと詰め寄ろうとしては、リアの背後に控えるガンテスの視線に気づいて踏みとどまる商人と、げんなりした空気を丁寧に笑顔の裏に畳んで対応しているリアに、空気ガン無視で割って入る。そも、商人が相手にしてない後ろの筋肉ゴリラは一応、教会の司祭やぞ。無知故の無礼とかいうなら向こうも大概なので気にしない。
　ここら辺でお話は切り上げませんかー。お礼とかは本人もお断りしてるんだし、いい加減こっちは昼食とりたいんですけどー。
　商人は一瞬だけ俺に目を向けるが、直ぐに視線を戻してリアと会話を続けようとする。が、肝心のリアと後ろのガンテスは俺の提案に即座に飛びついた。
「そうだね。予定より大分時間過ぎちゃったし、ボク達はこれで御暇します。あ、御礼とかは本当に結構ですので」
「む、では当初の予定通り、昼餉としましょう。いや、運動の後の食事は身に染み入りますからな！」
　二人は慌てて引き留めようとする商人を振り切るように、そそくさとその場を離れて俺が荷物を置いていた木立の下へと向かう。

そこで俺たちのやり取りを心配そうに見ていたアザル一行と改めて挨拶を交わし、一転して和気藹々と会話を始めたのを見て、商人は苛だちを隠そうともせずに振り返って俺を睨みつけた。

「君は余程低ランクの新米冒険者か何かなのかね。依頼人や目上の者同士の会話に割って入るなど、非常識にも程がある。組合への報告は覚悟しておきたまえ」

何言ってんのコイツ。ＭＰＫ（モンデリ）しようとしてた奴が常識語るとか草生えるんですけど。

鼻で嗤って返す俺に、ほんの一瞬怯んだかに見えた商人だったが、太々しい笑みを浮かべて嫌味ったらしく口の端を歪めた。

「先ほどの魔蟲についての事なら酷い誤解だ。私は護衛である彼らの意見に従って街道に向かっただけに過ぎない――下級の冒険者同士、庇い合いの約束でもしたのかね？そんな事をしても私が組合に真実を報告するのは変わらない……君の礼を失した態度も含めてね」

ま、やっぱそういう腹積もりだよね。

街道には俺達以外にもちらほらと人がいた。

遠目からとはいえ、馬車が魔蟲を引き連れて突っ込んでくるのはそれなりの人数の目に止まっただろう。

ようは、理由が欲しい訳だ。あの行いは自分達の本意では無く、冒険者たちの蛮行で

あるという、商人としての看板に泥が付かないそれらしい理由が。
自信たっぷりの様子から見て、どう報告しても組合に我を通せるコネがあるんだろう。アザル達は本当にババ引いたな、流石に気の毒になるわ。
真っ当とは言えないがやり手、肝が太いといえばそうなんだろうさ。だから聖女と偶然遭遇しても咄嗟に擦り寄るくらいはやってのける。
「……ほう、気付いているとはね。私の雇った連中と違って多少は目端が利くようだ」
聖都に荷を運んでるって時点で、あとはあのリアへの食い付き方を見れば大体想像はつくわ。大方遠目に見たことがあるんやろ。
つまらなそうに鼻を鳴らして言ってやると、商人は笑みの質を蔑む対象から、取引を行う格下、程度のモノに変えた。
「ならば話は早い。君がどういうツテを以てかの銀の聖女に雇われたのかは知らないが、御傍に侍る事を許されただけあって、無能ではない様だ――彼女と私の商会の仲を取り持ってくれたまえ。そうすれば、先ほどの無礼は水に流しても良いし、私の方で君に便宜を図ってやる事も吝かではない」
自信満々で、そちらにとっても悪い話ではないだろう？　なんて言ってくる商人に対し――。

――俺は爆笑した。

ゲラゲラと特大のナイスジョークを聞いた笑い上戸の如く、腹を抱えて大笑いする。これは草の草。掌で膝パンパンしたろ！

大声で笑ったせいでリアやアザル達が何事かとこちらを見ているが、それは気にせず、彼らの視線から背を向けるようにして、商人の肩をフレンドリーにたたく。

数秒、呆気にとられていた商人が我に返って不快気に顔を歪め、何かを言おうとするのを遮って、俺は笑いかけた。

まず、勘違い一つ目。俺は冒険者じゃなくて、聖女に雇われたフリーの傭兵だ。

「傭兵……？　組合にすら所属してないならず者擬きが何故、聖女様の護衛など……待て、聖女の、傭兵だと……!?」

何かに気付いた様に、血の気が下に引っ張られて顔色が変わる商人に、さり気なく肩に乗せたままの掌に力を込めながら続ける。

勘違い二つ目、俺がお前さんみたいな類をアイツらに近づける事を良しとしてる人間だと判断してる事――個人的にはコレが一番衝撃だわ。思わず笑って感情を誤魔化しちゃう位には。

殊更にゆっくりと、ベキベキと金属が歪むような音を立てて商人の肩を掴んでいた掌

から、肩、頬に掛けて黒い装甲が展開される。
「――ッ!?　これ、が《報(ヴェン)……》!?」
三つ目。ウチの聖女がお前さん程度の小物の思惑に気付いてねぇ訳ねぇだろ――単に、露払いをするのは傍に控える猟犬の役目ってだけだ。
悲鳴を噛み殺して呟く台詞に被せる様にして、俺は静かに、言い含めるように努めて優しくアドバイスした。
――組合には真実を語る。大いに結構じゃないの。あます事無く、嘘偽りなく全部報告しなよ商人さん。どういう結果になるにせよ、アンタが真実を語ったのかは分かるもんだ――犬は鼻が利く。そういうもんだろ？

――なんて事があったんですよぉ！
『なんで旅の初日から厄介事に首突っ込んでるんだよお前は！』

霊峰に向け、北上するにあたって最初に通過する街の宿にて。

一階の酒場兼食堂で軽く夕飯を済ませて、それぞれの部屋にチェックインすると、俺は早々に寝る準備を整え、最後に一日の報告を兼ねてシアに渡された遠話用の魔道具を取り出して起動させた。

こいつは本来、馬鹿にならない魔力を消費するアイテムで、国家間で使用する場合には専用の発動担当者が付くような代物なのだが、今現在、消耗を担当しているシアにとってはそう大した量ではないので、一日一回は必ず連絡するようにと念を押されている。

なので、起動させた瞬間に反応したシアと挨拶もそこそこに、今日の出来事を語ってたんだけど……怒られてしまった。解せぬ。

『はぁ……普段嫌がってる癖に、《猟犬》の悪名を使うとか……そんなにその冒険者達が気に入ったのか？』

うん、気の良い連中だったしね。あぁいう奴らには壮健で長生きして欲しいよ、やっぱり。

過分な通り名ではあるが《聖女の猟犬》の名は大戦が激化してくると同時に、シアとリアに同行していた俺を見て広まっていった。

といっても、多くの人目に触れる機会は主に戦場で、大抵は鎧ちゃん完全起動モード

だったので、中の人たる俺の認知度はそんなに無いんだけど。

ある程度、こちらと親しかったり、俺がメインで活動してた戦場で何度も顔を合わせるような腕利きは《猟犬》の中身を知ってるんだが、大抵の人間には『聖女達の懐刀にして、彼女らに害を与える者に等しく拳を振り下ろす地獄産の魔犬』みたいなキ○ガイ一歩手前の正体不明なやべー奴として認識されている。

今回の商人の一件もそうだが、シアに粉掛けようとしていた帝国貴族のお坊ちゃんを止めに入った俺が《猟犬》だと知った途端に、顔面蒼白になった父親がお坊ちゃんを張り倒して謝罪してくるなんて事もあった。

あれは御家の為とかいうより、公の場で敢えて殴りつける事で息子を護ろうとする父親の決死の覚悟ってやつを感じたわ……ナンパした位で、いきなり首を刎ねたり脳天から唐竹割りにでもすると思われてるんだろうか。そこまで頭のネジ吹っ飛んでないんですけど。

戦場で首ちょんぱとかひらきとかばっかり作ってるせいだろ、とか言う奴もいるけど、そんなん戦場なんだから当たり前やん、相手は邪神に脳味噌から尻穴まで捧げてる様なウ○コ共やぞ。シアとリアを筆頭に、俺が身内判定だした連中を悉く苦しめている要因になってる連中とか、ブチ撒けようが引き千切ろうがノーカンやろ、解せぬ。

……まぁ、そんな訳で《聖女の猟犬》は、実態とは懸け離れた危険物扱いの悪名が独

り歩きした通り名なのよ。

敵からはまるで死神を見るような目つきで見られる上に、味方からまでドン引きの視線を向けられるのはメンタルにクるので、あんまり声高に主張したい名では無いんだけど――今日の様なケースだとハッタリを利かせるのには丁度良いので、存分に活用させてもらった。

これで、アザル達が不当な悪評を押し付けられるって事も無いだろう。《猟犬》の悪名効果は抜群に効いたらしく、商人も顔を土気色にして首振りこけしになってたから馬鹿な真似はすまい――まぁ一応、後で確認はするが。

『……アンナが以前、全方位トラブルメーカーとか言ってたけど、小さな事に関しては本当にそうだよなお前って』

声のみのやり取りではあるが、頭を押さえて溜息を吐いてるのが目に浮かぶ口調で、シアが言う。酷くない？　今回、俺悪くないよね？　寧ろ周囲の人間に対してファインプレー多かったと思うんだ。

ぶっちゃけ問題なく終わった話ではあるし、俺としては次の話の方が本題なんだけど。

『まだ何かあるのかよ!?』

おう、重要だぞ――なんせお前とリアが何気に初めて持たせてくれた弁当に関してだ

からな！

ガンテスの大跳躍で少し形崩れしてしまっていたが、箱に詰められた大量のサンドイッチは美味しくいただきました。

もの自体はただのサンドイッチだけど、日本での定番の具材になるべく寄せるように工夫して作られたソレは、丁寧に作ったのであろう事も伺え、素晴らしい出来栄えだった。

辛子マヨとかは聖殿の食堂でもまだ使われてない調味料なので、食した際に非常にテンションあがり申した。

別に料理下手とかそういうイメージは無かったが、予想外に丁寧かつ繊細な気配りが随所に見られるお仕事でした。やるやんけ聖女様。

『そ、そうか。まぁ、ホラ、オレも身体的には女だし？　細かな作業とかは転生前より得意になってる自覚はあったし？　ただのサンドイッチでも工夫次第で色々できるからな、うん』

向こうに見える訳では無いが、親指を立ててグッドサインを球体状の魔道具へと向けながら賞賛の感想を届けると、ご機嫌さを押し殺してちょっと上擦った声になりながらシアからの返答が返ってくる。照れるな照れるな、普通に美味かったんで、機会があったらまたオナシャス。

『そ、そっか！　お前がそういうならまた作ってやるよ！　――っ、そうだ、帰ってきたらそれ持って今度はオレと二人でどっかいかないか？』

お、いいね。ピクニックのお誘いか――また、この間みたいに変装して公園とかに行っても良いんじゃないか？

『ははっ、悪くないな。その前にこの間話してた、甚平作れるかもしれない店とかを廻ってみるのもいいかもな』

そういえばまだ行ってなかったな！　いやぁ、楽しみではあるが財布が軽くなりそうなのが怖ぇなぁ！

『多分、高級店だからなー。財布の中身が心許ないなら、聖女様が奢ってやろうか？　ん？』

揶揄う様なトーンで意地悪気に笑いを含んだ声が聞こえてくるが、馬鹿ぬかせ、と同じく笑って返す。弁当まで用意してくれると言ったダチの財布にタカる程、困窮してねーよ。

幸い、前の戦いで得た報奨金とか傭兵として支払われた給金とかは、シアが手つかずのままにして保管しておいてくれたので、単純な資金だけならそこそこ以上にあるのだ……最近は減ってくばかりで増えてない現状に、貧乏性の性が発動して不安になってるだけで。

『あぁ、それじゃレパートリー増やしておかないとな――楽しみだなぁ』
おう、俺も帰ってからのお楽しみにしておくわ。
『――なぁ』
うん？
『なるべく早く――うぅん、遅くなってもいい。無事に帰って来いよ？』
嘗ての別れを思い出したのだろうか。
何処か不安気な声で旅の無事を願うシアに、俺は安心させる様、不敵に笑って応えた。
当たり前やんけ、猟犬は主の元に帰る――そういうもんだろ？
目的地への道程はまだ遠く、辿り着いた先でお師匠との再会がどう転ぶかもまだ分からない。
それでもやるべき事を終わらせたら、皆でちゃんと帰るさ。絶対に。
日が落ち、闇の帳が濃く落ちてきた街並みを窓から眺め。
シアの声に耳を傾け、ときに相槌を打ちながら、霊峰への旅路、その最初の夜は静かに更けていったのだった。

閑話：長旅前の一日。前日

「ハァ……」

自室でベッドに身を投げ出したまま、オレは本日何度目かの溜息を洩らした。

霊峰――正確には其処を住処にしている、半龍の御姫様の元への訪問。

弟子であり、現在の身体の状態を調べてもらう為にも旅のメンバーに確定で入っているアイツに対し、同行できる大使の様な立場の人間は一人のみ。

当然、その席をアリアとの奪い合いになったのだが、接戦の末、ジャンケンに負けてしまった。

最後は前衛寄りの能力のアリアが、身体強化にものをいわせて強引にチョキをパーに変えて持っていった形になる。

くそっ、あそこでパーを出していればまだ勝ちの目はあったんだけどなぁ……。

諦めきれずにこっそり用意していた自分用の旅の荷物は、シスター・ヒッチンに見つかって没収されてしまったし、大人しく留守番するしかないんだろうか。

「……長いよなぁ」

霊峰は大陸の北端近くにある。聖都からだと、馬を必死に飛ばしても余裕で一ヶ月は必要だし、更にそこから強力な原生生物や精霊が跋扈する山脈を登頂となると、相当な時間が掛かるとみて良いだろう。

ベッドの上で転がって、あー、うー、と言葉に為らない不満や不安を呻き声にして溢しながら、無意識にシーツを引っ張って大きな皺を作る。

……そもそも、アイツが帰ってきてまだ二か月も経ってないじゃないか。それなのに、帰ってきてからの時間より長い間、遥か北に出張って酷くないか？

正直に言えば、一年くらいは聖都から出すのだって反対だった。

でも、アイツがあの鎧を手放す気が無い以上、アレに起きている変化の詳細な把握は、アイツの身の安全に直結する。

頭では理解しているんだ――だけど、どうしても感情が追い付いてくれない。

二年も我慢したんだから、その半分くらいは常に近くに居る事を望んだって良いじゃないか、なんて。

我ながら束縛――いや、この場合は独占欲か。が、強いとは思わなくもないけど、この結論に至った理由の半分くらいは怖さも含まれているのだ。

眼の届かない場所に行かせたら、また無茶をするんじゃないか。また、大怪我をするんじゃないか――また、オレをおいていってしまうんじゃないか。

今が間違いなく幸せで、満たされていて、望んでいたものが手の中に確かにあって。
だからこそ、ふと怖くなるときがある。
少しずつ、アイツの戻ってきた日常を積み重ねていく度に、薄れていく恐怖ではあるけど。
それでも完全には無くならない……漠然とだけど、多分、ずっとついて回る感覚なんじゃないかと思っている。
『治療』が終わった事――こんな言い方はすべきじゃないんだろうけど、終わってしまった事も、この感情に拍車を掛けていた。
その……なんだ、お楽しみとか、枷とか、まぁ、副次的なモノもあったけど？
あいつの消耗した魂を戻す事が目的で、何よりも優先すべき最重要事項だったのは確かだ。それは間違いない。
けど……それと同時にオレにとって――おそらくはアリアにとっても、何よりも強い実感が感じられる行為だったのだ。
この二年間、帰ってきたのだと、オレのそばにいるのだと――幾度かそんな夢を見て、目を覚ます度に現実に押し潰されるような気持ちを味わった。
あの馬鹿の傷ついた一番深い場所に触れ、それを直接癒し、魔力を注ぎ、空洞を満たしていく事で。

夢でも自分の生み出した妄想でもなく、此処にいる、オレの隣に。抱きしめた腕の中にいる。

そう強く実感して、この上ない確信と安堵、それ以上の幸福感を得られる。

アイツの『治療』は、オレ達にとって、そんな時間だった。

相棒の魂の疲弊が癒された事は、本当に嬉しい。それを為したのが自分であるということも大きな満足と歓びを与えてくれた。

……けれど、あの夜の時間が終わってしまった事に、一抹の寂しさを感じてしまうのも確かだった。

「はぁ……」

また、溜息が漏れる。

遠話用の魔道具は持たせるつもりだし、ずっと音信不通になる訳じゃないけど。

「……嫌だな……」

数日後には、あいつは聖都にいない。遠く離れた霊峰（ぼしょ）に行ってしまう。

二ヶ月か、三ヶ月か。やっとオレの側に戻ってきてくれたのに、また離れてしまう。

あぁ、くそっ。

嫌だなぁ、本当に嫌だ――離れたくない。

さみしいよ。

下手をすれば季節を一つ跨ぐ間、帰ってくるのを待ち続けねばならないと考えると憂鬱になるけど。

「……アリアにこんな気持ちをさせずに済んだ、と考えれば、いいか……」

そう考えれば、ジャンケンに負けた事にも納得が出来る。

オレは姉貴（アニキ）だからな。妹（おとうと）が寂しがって泣くような事はすべきじゃないし、したくないのだ。

皺くちゃになったシーツを引き寄せ、身体を丸めて包まって、胸に湧き続ける寂寥感を追い払おうと眼を閉じると――。

――レーティシーアくぅぅぅん、あっそびましょぉぉぉぉ！

ドバーン！　と。

部屋のドアを豪快に開け放って、馬鹿が意気揚々と飛び込んできた。

よっす、今ちょっといい？　などと、飛び込んできてから手をシュタッと挙げて宣う相棒に、オレは唖然として――次いで、吹き出した。

あぁ、こいつはホントに、もう。

え、なんでシーツ被って丸まってんの？　カタツムリの次はミノムシ？　と、いつもの惚けた調子で首を捻る馬鹿野郎に「うるせー、何となくだよ、何となく」と笑いながら返して、枕を投げつける。

寂寥感は日に照らされた雪が解ける様に、あっという間に胸中から消え去ってしまった。

お前のその、謎の嗅覚とタイミングは、なんなんだよ。

顔がみたい、会いたいな。会いに来てくれないかな、なんて。

寂しさの中でチラリとでも思うと、出待ちしてたみたいに即座にやってきやがって。

毎度毎度、こんな事ばっかり繰り返されたら、仕方ないだろ。

仲間や親友のままじゃ、満足出来なくなったって、仕方ないだろ。

いつか絶対、オレをこんな風にした責任をとらせちゃる。と、固く決意してシーツを跳ねのけてベッドから身を起こす。

「で、遊ぶってなんだよ。もう夕方だぞ」

おっと、そうだった。正確には明後日遊びましょ！　だった。と笑う相棒に、いや、普通に執務あるから。と、ビシッと平手でツッコミを入れた。

――大丈夫や、ミラ婆ちゃんに頼んで明日――は、急過ぎて無理だったから明後日はまるっと休日にしてもらった！　あとその分の仕事は教皇（じいさん）に押し付けたから問題無し

！

前にオセロで凹ったときの勝ち分、ここで使わせてもろたわ。なんて、ドヤ顔で胸を張る馬鹿野郎に、少しの呆れと大きな嬉しさを感じてその首っ玉にかじりつきたくなるのを堪える。オレに休みを取らせる為に教皇を顎で使おうとするのなんて、この世界広しといえどお前くらいだよ、馬鹿たれ――いつか押し倒されても文句言うなよ。

さっきまでの感情と入れ替わる様に湧き上がる喜びと幸福感に、頬が緩みそうになるのを我慢していると。

まぁ、そんな訳で二日後、お前さんの予定は丸ごと空いたから――一日俺とデートしようず！

そんな、何も考えて無さそうな相棒の発言で、感情も思考もすべて真っ白になって吹っ飛んだ。

そして、翌日。

「という訳で、アンナ！　助けてくれ！　もうお前くらいしか相談できる相手がいない！」

「帰れ」

夜も明けたばかりの早朝、興奮と悩みで寝付けなかったオレは、早々に助けになりそうな人物を求めて部屋を飛び出した。

寝起きの不機嫌そうな表情のまま、一言でぶった切ってすげなく自室のドアを閉めようとする部屋着姿の助っ人に、必死になってしがみつく。

「頼むよ、本当に困ってるんだ！　――デートって何着ていけばいいんだ？　よ、予定とか組んでた方いいのかな？　一日って言ってたし、ま、まさか、お、おおお泊りとかは流石に無いよな!?」

「たまにアンタの、あの馬鹿限定で発動するぽんこつな部分が心配になるわ」

なにがなんでも離さんと、しがみ付いたまま拝み倒すオレを、残念なモノを見るような目つきで眺めながらアンナは溜息をついた。

だって、だって仕方ないだろ！　デートだぞ！

アイツの事だ、深い意味があって言った発言じゃないのは分かってる。
いつもの感じで出掛けよう、って言う誘い文句を、茶化して言っただけなんだろう……けどさ！
あの馬鹿の口から、デートのお誘いなんていうものが出てきたのは初めてなんだぞ！

なら、これはもう何時もの一緒に街をブラつく時間とは別物じゃないか。少なくともオレにとってはそうだ。
「安上りとかチョロいとかってレベルじゃねぇこの聖女」
寝癖であちこち跳ねた髪を押さえる様に頭を掻きながら、アンナはオレをあっさりと引き？がすと、部屋の中に向けて顎をしゃくった。
「はぁ……ま、いいわ。取り合えず中で話聞いてあげる――いっとくけど、こんな朝早くに突撃してくる相手に茶なんて出さないからね」
隊長だったら何時でもウェルカムだけど。と、呟いて自室へ招いてくれる友人に、当然の事だと頷く。本当にスマン、そしてありがとう。今度なにか奢るからさ。
出向してきた他国の騎士、という立場のせいか、アンナの部屋は意外にも片付いていて、目立つ私物もそんなに無い。
精々、備え付けの机に小物が飾られているのと、枕が自前の物らしい程度だ。

適当に座って。という部屋主のお言葉に甘え、机に備えられた椅子へと腰を下ろすと、アンナは立ったまま机上にある水差しからコップに中身を注ぎ、腰に手を当てて豪快に飲み干す。

プハーっと、風呂上がりに一杯やったおっさんみたいな一息を洩らすと、部屋着であるシャツとショートパンツのままベッドに上がって、その上で胡坐をかいて頬杖をついた。

「で、起き抜けに凄い勢いでまくし立ててくれたおかげで、大体事情は把握は出来たけど――レティシアはどうしたいの？」

「どう……って」

オレが言葉に詰まると、アンナは欠伸を噛み殺しながら、頬杖をついたものとは逆の手で自身のプラチナブロンドの髪をかき混ぜる。

「基本方針くらいは自分で決めなよ。一から十までデートプランをアドバイス出来るほど、私も経験豊富じゃないっての。というか出来る事ならデートなんて私がしたいわ、隊長と」

「そ、そうか……そうだな。方針か……」

促されて、自分がどうしたいのかと一晩中悶々と悩み続けていた思考を振り返ってみる。

あぁしたい、こうもっていきたい、という形にも為らない願望が無数に浮かんでは消えて……最後に思いついたのは、我ながら切実な一言だった。
「……あいつに意識してもらいたい。男友達みたいな感じじゃなくて、もっとこう、ちゃんと……」
「あー……まぁ、そこからだよね」
……やっぱり傍から見ていても、同性の友人みたいな間柄に見えるんだろううか？
今の関係が心地良すぎて、崩す為のリアクションが取れてない、程度の自覚はあるけど……。
「レティシアの方は割と分かりやすいって――問題はあの駄犬（アイツ）の方じゃない？　少なくとも、見た感じは完全に同性の親友って扱いだし」
「うぅ……やっぱり、そうだよな……」
まことに遺憾だが、これに関しては――かなり自業自得な部分も多いので、なんとも言えずにオレは頭を抱える。

――最初は、得体の知れない胡散臭い転移者だと思った。
それが、信じてみても良いかもしれない奴に変わり、信用できる恩人に変わり、信頼できる新たな友人に変わっていった。

そして、それ以上の……友人から、オレにとっての特別になる、その間に――オレは相当やらかしてしまった。

今、想い返すと痛恨の極みだ。もう『繰り返す』のはゴメンだが、それでも、この件に関してだけは時間を巻き戻したい、と何度願った事か。

実際に魔法が存在する異世界で、こんな事を言うと陳腐な表現になってしまうけど。御伽噺の魔法使いの様に悲劇を喜劇に変えてのける、繰り返しの果てに得た同郷の友人に、オレは、友人以上の感情を抱く前から大分入れ込んでいたと思う。

独りで『繰り返して』いたオレにとって、戻っても、変わらずオレの事を覚えている、前の出来事を共有できる人物というのは、有り体に言って喉から手が出るほどに渇望した存在だった。

その上、そいつが関わったおかげで、何度繰り返しても拓けなかった展望が、望んだ結末が、冗談みたいに次々と手の中に飛び込んできた、ともなれば……色々と仕方ない面もあったと思うんだよ。絶賛後悔中だけどさ。

同郷だというのも、ガードを大きく下げる要因になってたと思う。嘗ての自分を語ったり、逆にアイツの話を聞いてみたり。

戦いの中で僅かに得られた余暇や休息の時間を使って、オレは時間や予定の許す限り、久々に、本当の意味で対等だと感じた友達と遊び倒した。はしゃいでいた、浮かれ

ていたと言ってもいい。

長年連れ立った、気心しれた旧友の如く、一緒にハメを外したり、一緒に馬鹿騒ぎしたり――一緒になって怒られたり。

或いはその積み重ねも、オレの中の感情が変わっていく理由の一つであったのかもしれないけど。

それでも、もうちょっとやり方があっただろうにと、今では心底思う。

一緒に綺麗なおねぇさんがいる店に飲みにいって、あれこれ堪能したり。

この世界、エロ本とかそっち系のアイテムがあんまり発展してねーよなー、そこが残念だわー、とか学生みたいな下ネタ談義で盛り上がったり。

挙句の果てに、「いつか生やす魔法とか開発したら、一緒に卒業しようぜ！　お互い、抜け駆けしたらブッ飛ばすって事で」なんて、酒の席の勢いでおふざけとはいえ、馬鹿な事を言ったりもしたのだ。

あぁ、過去の自分をブン殴りたい。本当に、真剣に殴りたい。何て事言ってんだオレは。

男同士の結束を高めるには、共通のエロ話で盛り上がるのが手っ取り早いとか聞いたことがあるが――散々にそういった事もやらかしたおかげで、相棒の中のオレは完全に男友達として固着されてしまっている気がする。

余波でアリアにまでその認識が及んでいるのは、正直悪かったと思っているが……勝手な話ながら、妹（おとうと）にスタートダッシュで大きな後れを取る事態にならずに済んで、ホッとしている部分もあった。

後悔先に立たず。

今の関係と距離感も、充分に幸せで、心地良くて――それでもそれだけでは満足出来なくて。

それ以上を望むオレに圧し掛かってくるのが……過去の己の所業である。

頭を抱えたまま、かつての自分の迂闊さを振り返って煩悶していると、アンナは「うん」と一言呟いて――肩を竦めてお手上げのポーズを取った。

「いやー、ちょっと無理だわ。難易度が高すぎる案件です」

「おい、そりゃ無いだろ!?　こっちは切実なんだぞ！」

「あの駄犬に、女の子のそこら辺の複雑な機微を察してもらう――察せられる様に誘導するとか、素手で邪神の眷属の頭割るより難行だってば」

私に手伝えるとしたら、服とか、軽いお化粧のやり方とかその程度ね。と、お手上げ体勢のままで無情にも断言する。

ぐう、元はと言えば自分で撒いた種なので、それを刈り取るのが難しいと言われてし

まえばどうしようも無い。

……いや、デートの服装とか、その辺りを手助けして貰えるだけありがたいよな。あとは、自分でなんとか、こう、一歩踏み出してみるべきなんだろう。

そうだ、怯むなオレ。この程度の窮地、何度だって超えてきたじゃないか。

問題は――今まで窮地を突破するときに、さり気なくやってきては手を引っ張ってくれていた奴が今回、乗り越えるべき相手って事なんだけど。

自身を鼓舞しながらも、不安を打ち消せずに唸り声を洩らしてしまうオレに、アンナはふふん、なんて笑って、普段はまとめてサイドに垂らしている銀髪を片手でかきあげた。

ちょっと格好つけてるつもりなのかもしれないが、寝起きのあちこち跳ねたままの髪のままだと、あんまり決まってない。

「早合点はするもんじゃないわ。私は今言ったこと以上の手助けは難しいけど、他にアテがあるよ」

「……他に相談できそうな人いたっけ？　他のシスターとかだと、オレの立場的に気軽に絡めないんだよ」

聖殿に勤める聖職者は模範的な人物が多いとはいえ、オレ達と同年代の連中なら、それなりにそちらの方面に詳しい子もいるだろうけど……そういった娘達に混ざって気

軽にアドバイスを求めたりするには、聖女（オレ）の立場が足を引っ張る。
オレ自身は気にならないけど、相手はそうもいかないだろう。アイドルみたいな扱いで大騒ぎされるのも困るが、驚かせたり委縮させてしまうのはもっと本意では無い。
そういった諸々を含めて、思い浮かんだ相談出来そうな相手がお前だけだったんだけど……。
オレの疑問に、アンナはベッドの上で立ち上がると腰に手を当て、胸を逸らして自信あり気に笑う。
「ま、私も出向中の交流で、色々とツテが出来た訳よ。うってつけの人材がいるから、このアンナちゃんに任せておきなさい」

聖都中枢区、大聖殿は大まかに五つの区画に分かれている。
大きな聖堂を中心部に据えた、聖職者達の居住区や勤務箇所となっている中央区。

その上部を囲むように設置された、三枢機卿がそれぞれ統括する、壱ノ院、弐ノ院、参ノ院。

参ノ院からのみ道が続く、教皇の住まいにして教会の秘儀が眠るとされる奥ノ院。

大戦中、アリアが振るっていた大神器なんかも、普段は奥ノ院に安置されている。

今回、アンナに先導されて向かったのは、壱ノ院――その主の居室だった。

「そんな訳で、是非とも力を貸して欲しいんです、枢機卿（カーディナル）シルヴィー」

「帰りなさぁい、小娘共ぉ」

早朝のオレとアンナのやりとりの焼き直しの様に、にべもなくアンナのお願いを突っぱねたのは、豪奢なマゼンタの髪を伸ばした、年齢不詳の美女だ。

シルヴィー＝トランカード。

若くして聖教会の最上位と言って良い地位にまで上り詰めた俊英、三枢機卿の紅一点である。

学者気質の弐ノ院、鉄血宰相ならぬ鉄血僧侶と呼ばれる参ノ院の枢機卿二人に比べ、その艶やかな美貌と洗練された立ち振る舞いで、各国との外交を一手に引き受ける政界方面での教会の『顔』ともいえる人物なのだが――。

「なぁんで自分のお尻に火が付いてる状態で、若い子の面倒をみなきゃいけないのよぉ。行き遅れに甘酸っぱい若い恋を応援しろとか、飲まなきゃやってられないわぁ」

執務も行っているのであろう、大きなマホガニーの事務机にうつ伏せに身を伏せながら、言葉の通りやってらんねぇ。という雰囲気を隠しもせずに右手に大きな木杯、左手にワインボトルを握ってくだを巻くその姿は――オブラートに幾重にも厳重に包んで言っても、酔っ払ったダメな大人で、残念な美女を体現した様な有様だった。

「えーと……またお見合い失敗したんですか？」

「……そうよぉ、また失敗よぉ！　事実を振るって死人に鞭打つのはやめなさぁいアンナちゃん」

「お相手の人のこと、めちゃくちゃ褒めてませんでしたっけ？　向こうも満更でも無さそうって話だったのになんでまた」

「酒の飲めない男はお断りよぉ」

「完璧に自業自得じゃないですか。独り身は嫌だって何時も愚痴ってるのに、嗜好で選り好みしすぎだと思います」

「私にとっては重要なのよぉ！」

気安い様子でやりとりする二人に、オレは置いて行かれた気分で所在なさげに佇む。

というか、本当に仲良いな。出向してきた帝国騎士と教会の枢機卿か。どういう繋がりがあって知り合ったのやら。

「中庭仲間ね」

「中庭仲間よぉ」

語尾だけを違えて、異口同音で言ってのけた二人に「あぁ……」と呆れ交じりで得心が行った。

アンナもシスター・ヒッチンの御説教の常連ではあるが、シルヴィーさんの方も大概だったな……。

執務中ですらこっそり酒瓶を隠し持っていると言われてる――実際今もボトル抱えてるし――酔いどれ枢機卿殿は、アルコールをこよなく愛するその性のせいで、シスターによく怒られている。

外交時の外面が隙なく、完璧に熟してる分、ホームである聖殿内だと反動だと言わんばかりに存分に？兵衛の気質を発揮しているせいか、意外と部下や他の僧達との距離は近い。

一緒に並んで説教喰らった仲とか、そんな感じなのだろう――これを自信満々でツテというのはどうかと思うぞ。

そんな思いを込めて、アンナをジトっとした目で見つめるが……おい、目を逸らして口笛を吹き始めるなよ。こっちを見ろ。

……まぁ、アンナとの出会いの経緯は脇に置いておくとしても、シルヴィーさんがこの手の話で頼もしい味方になってくれる、というのは確かだろう。

教会の白百合の中に咲く、紅紫の薔薇。なんて各国貴族のお偉いさん達の間で評判の彼女なら、デートのコースプランなんてお手の物、という訳だ。

「シルヴィーさん、なんとか引き受けてもらえないかな。オレも結構切羽詰まっていてさ、アンナに案内されて藁をも縋る思いで来たんだ」

出来れば、助けてほしい。と、丁寧に頭を下げると、彼女は悩まし気に嘆息して手の中の杯を一気に干す。

「レティシアちゃんが直に頭下げるとか反則よぉ……これ私の中で断る選択肢が発生しないやつじゃないのぉ」

そう言って赤ら顔のまま苦笑するのを見て、申し訳ない気持ちになる。やはり、お見合いが破談になったばかりらしい女性に対して余りにも無体なお願いだっただろうか。

シルヴィーさんは回復魔法を発動させると、アルコールを解毒して一瞬で酔いを覚まして、うつ伏せになっていた机から身を起こした。

「はいはい、そんな顔しなくていいのよぉ。ここで断ったら、お酒が気分良く飲めなくなるから引き受けるだけ……いわば自分の為みたいなものだしねぇ」

そう言って、艶やかに微笑むと、彼女は両手の指を絡ませて机に肘をつき、組んだ手の甲の上に自身のほっそりとした顎を乗せた。

「それじゃ、経緯と、レティシアちゃんのご要望を聞きましょう――多分、猟犬クン（お相手）は強

敵よぉ？」

「まず、結論から言うわぁ。そんなに悩まずに、レティシアちゃんはレティシアちゃんのままでいいの」

オレがなんとか相棒に意識してもらいたい、という点を強調して経緯を話すと、シルヴィーさんは笑ってあっさりと言ってのけた。

「そう、なのかな……だって、今のままだとただの男友達でしかないんじゃ……」

「レティシアちゃんが女の子で、女の子として猟犬クンを見てる時点で、その心配は無意味、杞憂よぉ」

やー、青春ねぇ、お酒が進むわぁ。なんて笑いながら、彼女は先刻は嫌だと言っていたオレのこ、恋模様、というやつを聞いて上機嫌に再びワインを呷り始める。

女の子、か。

やっぱり、そうだよな。

オレはオレのままで、変わって無いつもりだけど。

アイツに向けるこの感情は、オレ自身が自分をどう定義しようと、異性——女として、

男に向けるソレなんだろう。
言葉を交わして、浮足立って。
触れ合って、喜んで。
他の娘に目を向けられると、腹が立って、胸がチクリと痛む。
そして、オレを庇うときに見せる本気の横顔や、オレの為に負った傷痕に――どうしようもなく魂が昂る。
――ハ。今更だよな。それこそ、『治療』の期間の自分の乱れっぷりがとっくにそうであることを証明してる。
思考を整理して、言わずもがなの結論に達したのを見計らった様に、シルヴィーさんが杯を空にし終えてプハッと美味そうに吐息をついた。
「あー……若い子の恋の悩みを肴に飲むお酒も、思ってたより全然いいわぁ。もっと苦くなると思ってたけどぉ……レティシアちゃんの御執心の相手が猟犬クンっていう点でも、話が簡単になると思うのよねぇ」
「そうなのか？　……して、その心は？」
是非とも聞いてみたい答えを、耳を澄まして待ち受けると、悪戯っぽい、揶揄うようなニヤニヤとした笑みが返される。

「だって、感情の向いてる方向が同性寄りってだけよぉ――猟犬クン自体は、レティシアちゃんの事、大好きじゃないのぉ」

……うぇえ!?!?

ちょっと崇拝とかも入ってる気がしなくもないけどねぇ、なんて続く言葉は右から左だ。

耳に入ってきたとんでもない情報に、一瞬で顔が熱くなる。

「だから、最初に言った通り、貴女(アナタ)は貴女(アナタ)のままで良いと思うわぁ。ときどき、アクセントで女の子である事を見せてあげる、程度でいいのよぉ」

そのうち勝手に、猟犬クンの感情の方から進路変更してくれるわぁ、なんて、実に有難いアドバイスを頂いているのだが、先程の衝撃的な情報で熱暴走を起こしたオレは、カクカクと木偶みたいに頷きを繰り返す事しか出来ない。

席を立って、シルヴィーさんは此方にやってくると、両の掌でオレの両頬を挟んでぐにぐにとこねくり回す。

「うーん、腹立つくらいすべすべのお肌ねぇ。これならホント最低限のお化粧と、グロスを塗る程度でいいんじゃないかしらぁ」

「あ、じゃぁ私のをレティシアに貸しますよ。それくらいなら当日にやってあげても良

いし」
「そうねぇ、お願いねアンナちゃん」
「あ、いや……その」
トントン拍子に話を進める二人に、尻込みしながらなんとか声を差し挟む。
首を傾げてオレの顔を見つめてくる二人に――だけど、これは最初に決めていた事だから。と、躊躇いながらも切り出した。
「出来れば、化粧のやり方は教えて欲しいんだ――簡単なのくらいは自分でも出来るように、なりたいから」
さっきの熱の名残もあって、オレの顔は赤らんだままだったと思う。
シルヴィーさんとアンナは顔を見合わせて、楽しそうに笑った。くそぅ、オレが女の子っぽい事言い出したらそんなにおかしいかよ。
「それじゃぁ、折角だから、このままちょっと練習してみましょう？　――こういうのも楽しいわねぇ、若返る気がするわぁ」
「いいですね！　ついでに、髪型も弄ってみましょう！　こう、いつもと違うのを……なんて言うんだっけ？　確か『ぎゃっぷもえ』ってアイツも言ってたし」
ノリノリの二人に押され、「お、お手柔らかに……」なんて尻すぼみで返して。
明日のアイツとの時間を夢想しながら、オレは手を引かれて、部屋の隅に備えられた

化粧台の前に座ったのだった。

閑話：長旅前の一日。当日

待ち合わせ場所は、聖都中央広場にある噴水前。
一緒に出ればええやん、なんていう馬鹿たれを説き伏せて一足先に聖殿から出たオレは、噴水前にある備え付けのベンチに腰掛けて、待ち人が来るまで時間を潰していた。
アイツは意外と時間には几帳面な奴なので、待ち合わせの十五分前くらいにはやってくる筈だ。
朝一から出掛けよう、と約束したのはいいけど……流石にちょっと早かったかもしれない。
今日は良い天気で、朝から穏やかな日差しが優しく降り注いでいる。
それでも、まだまだ人通りはまばらで、ここにやってくる前に通り過ぎた店も、軒並み閉まっているか、よくて開店準備中だった。
うん……やらかしたな。幾ら何でも早すぎだ。
夜明けと共に目が覚めて、落ち着かない気分のままいそいそと準備を終えて……何か

トラブルがあって遅れてもまずいと思っての、早め早めの行動だったけど。
一時間以上前に来るのは流石に間抜けが過ぎるだろう。どれだけ落ち着き無いんだよオレは。
我が事ながらちょっと呆れてしまうが、そうと自覚してもそわそわとした気分が落ち着く訳でも無かった。
ベンチから立ち上がったり、座り直したり、噴水を覗き込んで水面に映った自分の姿をチェックしてみたり。
……最初は、思い切ってお洒落をしてみようかと思ったけど、結局こういった形を選んだのはオレだ。
意外性を狙ったというより、今日のデ……でーとっ、を、心置きなく楽しみたい、という思いからのチョイスだったけど……。
……今更ながら不安になってきた。本当にこれで良かったんだろうか。どうせならもうちょっと、こう……せ、攻めた感じの服装の方が良かったんじゃないか？
でも、あんまり華やかな女の子らしい格好というのも、少しハードルが高いというか……アイツにしか見せないっていうなら全然問題無いんだけど、どうやったって人目には触れるし……。
既に待ち合わせ場所にいるんだ、今更悩んでも仕方ない事ではある。

それでも、一度考えだすと止まらない。
――でも。
ごちゃごちゃと悩んで、頭から煙を吹きそうなくらい考えて。
不安要素ばかり思いついては並べ立てているくせに、どうしたって心が浮き立つ。
だって、デートだ。
いつもの一緒に街へと出かける時間と、本質的には変わらないのかもしれない。
アイツにとっては、特に意識して言った一言ではないのかもしれない。
それでも。
アイツがそう言葉にして、オレがそれを受けて、こうして待ち合わせをしている。
その事実が何処かこそばゆくて、だけど気を抜けば叫びだしたくなる程、嬉しくて。
あぁ、まだまだ人通りが少なくて助かった。
そわそわと落ち着き無いかと思えば、頭を抱えて悩みだし、数秒後には笑みくずれそうになるのを我慢して、ベンチの上で手足をバタバタさせたくなるのを堪えて身を揺する。
傍から見たら、さぞかし不審な人間に見えるだろう。
そうやって一時間を悶々としながら待つと思ったんだけど、オレが広場来てから二十分もしない内にアイツはやってきた。

――朝飯一緒に食おうと思ったらいねーし、まさかと思って来てみたらマジでいるのかよ。早すぎワロタ。

ベンチの後ろから首を突き出し、ひょっこり顔を覗かせて笑う様子はいつも通りで。

いきなり現れた驚きと、変わらない笑顔を見せてくれる喜びで跳ねる胸の鼓動を押し隠して、なんでもない様に返答する。

「なんだよ、いいだろ別に。それに、そういう割にはお前も早かったじゃん」

もし待たせてる様なら悪いから一応早めに出て来たんだよ、正解だったやろ？　と肩を竦めて言う相棒に、オレは肩にかかる栗色の髪をかきあげながら、答えの分かり切ったちょっとした疑問をぶつけた。

「ふーん……ところで、よく一発でオレだって分かったな。気付かなかったら、こっちからネタばらしして笑ってやろうと思ってたのに」

――なんでやねん、髪の色変えたくらいでお前に気付かない訳がねーだろ。

予想通りの言葉と共に、ビシっと、平手でオレに向けて突っ込みを入れるヤツに、だらしなく緩みそうになる表情へと必死に喝を入れる。

そうだよな。お前ならそう言うよな。

欲しかった言葉を違わず与えられ、待ち合わせて合流してから一分もしない内に、気分は最高潮だ。

今のオレは、簡単な幻惑魔法の一種で髪の色を変えている。
金色の聖女、なんて肩書が示す通り、世間一般のオレのシンボルカラー……というか分かりやすい特徴は、本来の淡い金髪だ。
逆を言えば、それを隠してしまえば遠目にオレを見た事のある人達くらいなら、誤魔化す事も可能な筈。
あとは、栗色になった髪をサイドダウンで垂らして、おさげみたいに編み込んで。
顔の輪郭を分かりづらくするため、ちょっと野暮ったい大きめの伊達眼鏡をかけてやれば中々立派な変装になる。
服装も、聖殿にいるシスター見習いの娘達の予備を借りて来たので、どこからどう見てもただの見習いシスター……に、見えると思う。
もっとお洒落して、着飾って。分かりやすく〝女の子〟としてのアピールをしたりとかも考えたけど。
それじゃいつも通りの、『街に視察に来た聖女様と護衛、或いは従者』なんていう空気になってしまうんじゃないかと思って、こういう形に踏み切った。
折角のデートなんだから、肩書やそれに類するものは極力除けて、ただのレティシア（オレ）と大切な相棒（マエ）として、一日を過ごしてみたい。そう、思ったのだ。
あとは……まぁ、コイツの事だから、意外とこういうシンプルな何時もと違う服も刺

さるんじゃないかなー、なんて淡い期待もあった。

――まぁ、変装としては悪くないんじゃね？　あと、普段が白基調の服装だから黒いシンプルなシスター服って新鮮。

……よしっ！

眼福眼福ー、なんて軽い口調ではあるけど、悪くない反応に内心でガッツポーズを決める。

これなら、いけるんじゃないか。

今の処、思い浮かんだ様々な期待や欲求を元に立てた服装や予定は、相棒から良い反応を引き出し続けている。

まだデートは始まったばかりだが、この調子なら、最後には。

最後には、ほんの少しくらい、オレを意識してもらえる感じに……。

夕暮れの中央広場で噴水を前に、良い雰囲気で指を絡め合う様を想像したりして、多幸感でトリップしそうになる。

……っといかんいかん、本番はこれからだっていうのに妄想を捗らせてる場合じゃない。

気を取り直して、ベンチから立ち上がる。

「それじゃ……散歩がてらブラブラして、露店が開く時間になったら市場の方に顔だし

てみようぜ。この恰好なら気軽に行ける場所も多いし、穴場を開拓できそうだし？」
――なるほど。見習いシスターと友達って体ね。代わりにちょっとお高めのトコには入り辛そうだが……まぁそれは普段のときでいいか。
「そういうこと。じゃ、いくぞ！」
本当は、手を繋げれば良かったんだけど。
気恥ずかしさに躊躇ってしまって、腕を掴むに留めて、その腕をぐいぐいと引っ張りながらオレは歩き出した。

朝の清々しい空気の中、人通りもまばらな街を連れ立って歩く。
『大まかな予定くらいなら良いけど、練ったプランとか斜め上に吹っ飛んでいくだけだからやめときなさい』
相手してる男が斜め上上等の生き方してる奴なんだから。と妙に力強く断言していたアンナの言葉に欠片も反論出来なかったので、こうして何となく歩いてるだけになっ

たけど。
それだけで充分楽しくて、馬鹿を言って笑い合うだけで胸が溢れんばかりに満たされる。
安上りと言ってしまえばそうなんだろう。
でも、いいだろ別に。楽しいんだから。幸せなんだから。
いっそ開き直りにも近い気持ちで、デートというにはあまりにも普段通りの、だけど甘やかな幸福に満たされた時間を甘受する。
――シアさんシアさん。あそこのパン屋もう開いてるっぽい。食ってみたい。
「早速か！　朝飯食ってきたんじゃないのかよ」
――食い倒れツアーになる可能性も考慮して、軽くつまんで来ただけなのよ。焼きたてのパンの匂いはこの腹具合には凶器っすわ。
「まぁ、良い匂いなのは確かだけどさ……オレもあんまり朝食は食べなかったし、なにか一つ買っていくか」
正確には、食おうと思ってもロクに喉を通らなかったんだけどさ。
じゃぁ、行こうぜヤッホーイと、意気揚々と店の扉を開ける相棒と一緒に、通りすがりに見つけたパン屋に立ち寄る。
転生・転移者が色んな知識や文化を持ち込んだせいか、ファンタジー世界の割には

色々と見た覚えのあるものを見かけたりするんだよな。特に食い物――食文化関連は、転移者に日本人が多かった事もあって、それが顕著だ。

「いらっしゃい。おや、見ない顔だねぇ、新しいお客さんは歓迎だよ」

恰幅の良い店のおばちゃんが、愛想よく声を掛けてくれるのに二人で挨拶を返して、店内を物色する。

聖殿の食堂は、日本人から持ち込まれた料理の知識や品の再現に熱意を燃やすコック長が厨房を仕切っているので、聖都全域でみてもレベルが高い。

元は日本人だったオレ達が日々、食事をとっていても不満が発生する事が無い、という時点で相当なんだよ。流石に米だけはどうしようもないけど。

でも、こうして街の食品店に入って見てみると……結構侮れないな。

種類こそそこまで豊富では無いが、ソースを絡めた腸詰をブレッドに挟んだ総菜パンみたいな物や、ジャムとバターが切れ込みから覗く菓子パンらしき物など、そこかしこに日本の魔改造ムーヴを感じる品がある。

うん、興味深さという点でもこの店は当たりかもな。覚えておこう。

相棒も関心したように商品を見ていたので、二人でもう少し店内を回っても良かったのだが……もう少しすると仕事場に向かう前の人達が大勢やってくるよ、とおばちゃんに言われ、店がごった返すまえに良さそうなパンを一つずつ購入する。

「お嬢ちゃんはこれから大聖殿でお仕事かい？　若いのに立派だねぇ……彼氏さんはちゃんとお嬢ちゃんを送ってやりなよ！」

「うぇっ!?」

感じのよいおばちゃんだとは思ったが、予想外の言葉（サプライズ）が飛んできてオレは硬直した。

頼んだ品を手渡して、銅貨を受け取りながらおばちゃんは笑ってバシバシと相棒の肩を叩く。

うーっす。なんて、特に大きな反応をする事もなくパンを二つ受け取ると、奴は固まったままのオレの手を引いて店を出た。

ひ、否定しないのかよ、変なトコで面倒くさがりやがって！　なんだよもー仕方ねーなコイツはもぅ！

なんとなく、アンナが「うっわ、この聖女めんどくさ」とか言ってる光景が頭に浮かんだけど、それも直ぐに浮かれた気分で上書きされてしまう。

そのまま店の外に置いてある木造りの長椅子に座ると、相棒は買ったパンのひとつをこちらに差し出してきた。

――変な事言われて驚くのはしゃーないが、変装してる以上、あぁいった事もあるだろ。動揺してたらキリがないぞ？

「わ、分かってるって……っ、次からは余裕だし。なんなら目の前でお前と腕組んだりも

できるし」
というかしてみたい。是非とも次の機会が巡って来てほしい。
そんな事を考えながらオレも長椅子に腰を下ろすと、二人並んでパンにかぶりつく。
「あ、美味い」
――おう、美味いな。
まだ暖かさの残る出来立て、っていうのもあるだろうけど、パンはかなりの物だった。
おばちゃんもとっても良い人だったし、いいなこの店。また来よう。
「もうそろそろ露店も開き始めるだろうし、掘り出し物巡りでもするか？」
――いいね、おもしろ魔道具とか売ってたりしねーかな。
「お前、殆どジョークグッズみたいなネタ魔道具たまに買うよな……何に使うんだよアレ」
――宴会芸、とか？　そもそも作った奴も酔っぱらってんじゃねーかって感じだしな！
だがそこが良い！　と言って笑うお馬鹿に変な無駄遣いは程々にしろよ、と笑い返して買ったジャムサンドをもう一口かじろうとして。
頬に刺さる視線を感じて、そちらに視線を転じると――やや離れた場所でこちらをジッと見つめる小さな女の子がいた。

ちょっと古びてるけど、よく洗濯された寝間着の様な恰好で、片手には小さな犬のぬいぐるみが抱え込まれている。
――なんだなんだ、あのちびっこは？　こんな朝早くに迷子か何か？
相棒も気付いたらしく、手に持ったパンを大きく上げ下げする。
それに合わせて女の子の視線も首ごと上下したので、オレ達というより持ってるパンに視線が固定されているみたいだ。
人通りはまだ少ないままで、周囲に保護者の姿も無し――とりあえずそのままにしておく訳にもいかず、オレは手招きして女の子を呼び寄せた。

仕事場に向かう人々や、開店を始めた店で活気の生まれて来た街の通りを三人で歩く。
思いがけず、デートに闖入者が現れてしまった。
舌足らずな口調で、おふいり、と名乗った少女はやっぱり迷子だったみたいだ。

今は相棒に肩車されて、オレ達に半分ずつ渡されたパンを夢中で頬張っている彼女を横目で見ながら歩く。

最初は目付きの悪い男を怖がってオレの側にくっついてきたオフィリは、能天気な言動の馬鹿にすっかり警戒度を下げたらしく、大人しく肩車されながらジャムパンを攻略している。

食いこぼしたパンくずやら手についたジャムやらが相棒の頭に付着しまくっているが、奴は気にすることも無く肩の上の幼女に問いかけた。

――んで、お嬢ちゃん。とうちゃんかあちゃんはどうした？　どこではぐれたん？

「んー……わかんない。しすたーが、ぱぱとままはお空におでかけしちゃったんだって。だからおふぃーはいいこでおるすばんしてる」

そうかーえらいなー。と返しながらオレに視線を向けてくる奴に、オレは頷き返す。

返答から推測するに、多分、彼女は教会で運営してる孤児院の子だろうな。

大戦が終結したのは、ほんの二年前。戦災孤児というのは、決して少なくない。

遣る瀬無い話ではあるが、長い戦争で下降し続けた人口に歯止めをかける意味も兼ねて、孤児の保護は各国で積極的に行われているのがせめてもの救いか。

宗教国家であり、慈悲や寛容（ただし邪神とその関連者は除く）を美徳として教義の一部に組み込んでいる教国は、特に力を入れている分野だ。

こういった施設は、上からの管理が行き届いていないと腐敗の温床になりがちだけど、この世界の場合はソレが驚くほど少ない。

上も現場も、元は戦場で邪神の軍勢とバチバチにやり合ってた元修羅勢が多いからな。

戦いを続けるのが難しくなり、一線を退いた者達が、せめて別の形で貢献しようと思い立って選ぶ新たな戦場（しょくば）に、孤児院を望んだ者達が殆どを占める。

遠く離れた地方ともなれば嫌な例外も存在するかもしれないが……この聖都では無いだろう。というか無理だ。

万が一、シスター・ヒッチンやガンテス司祭の耳に入ろうものなら、事実確認が取れ次第、あらゆる煩雑な手続きをスッ飛ばして直接殴り込みかねない……というかあの二人は絶対そうする。

そもそも聖殿内の上層部が、二人を制肘する処か何で自分にも声をかけないんだとキレ散らかしそうな修羅坊主揃いなのだ。腹に一物ある奴がいるとしても、自殺志願者でもない限りは大人しくするだろう。

それにしても……オフィリはどうしてこんな朝早くから、あの場所で迷子になってたんだ？　時間帯もそうだが、距離的にも孤児院のある区画とは結構離れてると思うんだけど。

まだまだ幼いと言っていい年頃の子なので説明はいまいち要領を得なかったが、オレと相棒が交互にゆっくりと問いかけていった結果、なんとなくだが事情は分かった。

どうやら、孤児院で特に兄として懐いてる人物が毎日朝早くに出かけてるので、毎朝いつも一緒にご飯を食べていたのにそれができなくなって寂しいオフィリは、今朝、兄の後をこっそり追いかけたらしい。

多分、早朝の配達業の手伝いか何かだろう。小走りであちこち駆けまわる兄に幼い彼女では付いていくことも出来ず、いつの間にか姿を見失って、オレ達と出会った場所で途方にくれていた様だ。

聞き取った内容から咀嚼した、推測混じりの話ではあるけど、本当にただの迷子みたいだな。

「ややこしい話とかも無いみたいで良かったな。これなら普通にオフィリを送り届けるだけで良さそうだ」

――だな。いや一安心した。お前と二人で行動してるから、何かデカいゴタゴタの始まりなんじゃないかと構えちゃったわ。

「おい、ふざけんな。そりゃこっちの台詞だろ。どう考えてもトラブルを引き寄せるのはお前の方だろうが」

――えぇー、聖女様の方がネームバリュー的に絶対厄介事寄ってくると思うんですけ

ど。

「か・が・み・を見て言えっ」

自分を棚にあげて失礼な事を宣う馬鹿野郎に、人差し指を突き付けて頬をグリグリしてやる。

パンを食べ終わって肩車から降りると、手にしていた犬のぬいぐるみを馬鹿から受け取って遊んでいたオフィリが、上機嫌に笑いながらオレと馬鹿の間にぬいぐるみを割り込ませた。

「ケンカはめーなんだよ。おふぃーとわんわんはケンカしたことないの」

あ、はい。すいません。と素直に幼女に頭を下げる相棒に、吹き出しそうになるのを堪える。

けれど、続いた言葉に我慢は容易く決壊した。

「だから、おっきいわんわんもおねえちゃんとケンカしたらめーなんだよ?」

「――ブフッ!?」

顔を背けて、今度こそ吹き出した。

悪気の欠片も無く、ナチュラルに幼女に犬扱いされてなんとも言えない表情をしている奴を見て腹を抱えて爆笑してない分、まだ我慢してると思うんだよ。こんなの絶対笑うだろ。

でも――。

「おねえちゃんも、おっきぃわんわんをイジめたらめーなの。パパとママがなかよしだと赤ちゃんのおふぃーもニコニコしてたから、おねえちゃんの赤ちゃんもニコニコしてないとだよ？」

「」

続くとんでもない追撃に、オレは一瞬で石化した。

お返しの様に、隣からブフォ！なんて吹き出す声が聞こえる。笑ってんじゃねーよ！

他人事みたいな反応しやがって、オフィリの言葉をまんま受け取るなら……そ、そういう事になるんだぞ！　そこはお前も慌てるくらいしろよ！

顔がめちゃくちゃ熱い。耳まで熱を持ってるのを感じる。

相棒を睨みつけるオレの顔は――恥ずかしながら、熟れた林檎みたいな事になってるだろう。

――大丈夫だよ、お嬢ちゃん。俺とシアはちゃんと仲良いから。なんならツーカーのマブダチだから。

「ほんと？　なかよしならしすたーがいい子だねってほめてくれるんだよ！」

よし、俺も褒めておこう。いい子だヨーショショシなんて、三人並んでその真ん中を歩く小さな姿の髪をかき混ぜる相棒と、それにはしゃいだ声をあげて笑うオフィリ。

ちっとも慌ててくれなかった事に対する不満と、否定を一切せずに仲の良さを主張してくれた事への喜び――そんな相反する感情に挟まれて、顔が真っ赤なままのオレ。

くそぉ……二人して平然と別の話題に移るなよ……いつまでも動揺してるこっちが馬鹿みたいじゃないか。

行き交う人々から、微笑ましいものを見る様な視線が向けられるのを感じて、オレは自分の顔の熱が当分は引きそうにない事を確信しながら、孤児院へのある区画へと向かう事を二人に提案した。

孤児院――オフィリの家族も彼女がいなくなった事を心配してるだろうし、早く送り届けるに越した事はないからな。

反対意見なんて出る筈もなく、相棒が再び小さな迷子を肩の上に乗せると、オレ達は足早に目的地に向かう。多少は距離もあるし、歩いてる間に頬の熱も引くだろう。

増えて来た人通りの間を縫うように進み、仕事場へ向かう労働者達の朝の通勤ラッシュを抜け。

露店通りから暫く歩いて、従来の居住区画からは外れた、外壁近くの住民区。

戦時中、戦禍に晒された村や街から避難してきた人達の為に突貫で整えた仮の居住地

が、そのまま正式な区画として認定された地域だ。
そこにある、少し旧さの目立つ大きな長屋の様な建物が、オフィリの住む孤児院だった。
さて、到着したは良いが、どうするか。
……特に捻る必要もないな。普通にお邪魔して、迷子を保護したと伝えればいいか。
相棒も同意見だったらしく、オフィリを連れて皆で孤児院の簡素な門を潜ろうとすると。
「――オフィリ!!」
大きな声――年若い少年のものだ――に、呼び止められた幼女が、パッとそちらのほうに顔を向けて顔を輝かせる。
「ぺとら!」
「この馬鹿!　散々探させやがって……あぁクソッ、見つかってよかった……!」
あっという間に飛び出して、建物の角から現れた少年に、オフィリは飛びつく。
言葉の通り、散々に少女を探し回ったのだろう。息を切らして額に汗を浮かべた少年は、明らかにホッとした様子で帰って来た家族を抱きとめた。
孤児院の敷地に入る前に事が片付いてしまったので、少しばかり所在なさげに相棒と視線を交わし合うと、お互いに苦笑し、相棒は肩を軽くすくめた。

オフィリは、ペトラと呼ばれた少年に雷を落とされて半べそをかいている。
ちょっと可哀想ではあるけど、勝手に孤児院を抜け出して迷子になったのは事実だからな。心配かけた分、おにいさんにたっぷりと怒られるのは仕方ない。
御説教に夢中でペトラ少年はこっちに気付いて無いみたいだし、静かにフェードアウトしてしまおうか。
「大声を出してどうしたのペトラ？　オフィリが見つかったの？」
アイコンタクトで相棒とやり取りすると、オレ達は静かにその場を後にしようとして……入口の扉を開けて現れた聖職者の装いをした女性と、思いっきり鉢合わせして動きを止めた。
おぉう……思ってたより大分若いけど、ここの経営を任されているシスターさんかな？　タイミングがちょっと悪かったな。
「あら……お客様ですか……？　申し訳ありません、今、少々立て込んでまして」
「あ、いえ。用事はもう解決したので、お気になさらず」
オレ達を見て軽く目を見開いた女性は、チラリと御説教中のペトラ少年を見やると、言葉の通り申し訳なさそうに頭を下げてくる。
此方としても、迷子のオフィリを無事送り届ける事が出来た時点で目的は達成してる。後は、行方の分からなくなった家族を無事見つけた人達の時間だ。

まぁ、突然のアクシデントではあったけど、これはこれでデートの良い思い出になった。オフィリには感謝しないとな。

そんな風に結論をだして、再度フェードアウトを試みようとしたんだけど――今度はペトラ少年に叱られていたオフィリが、オレ達の元に走って戻ってきた。

「あっ、おいコラ馬鹿オフィー！　まだ話は終わってないぞ！」

「ふんだ、ぺとらのおこりんぼ！　おふぃーとゴハンたべてくれないのに、おふぃーにおこってばっかり！」

そのまま相棒の後ろに隠れると、追って来たペトラ少年に向かって顔だけ覗かせて舌を出す。

「もとはお前が勝手に外を出歩いたせいだろ！　大人の後ろに隠れるなんてズルするなよ！　――っていうか誰だよこの人達！」

「おねえちゃんとおっきいわんわん、おふぃーとゴハン食べてくれたもん。イジワルぺとらよりやさしい」

「――お前な！　知らない人に食べ物貰ったからって簡単についていくなよ！　変な奴だったらどうするんだ！」

――わんわんの次は変な奴かぁ……。

遠い眼をして相棒が小声で呟いているのを聞き取り、ポン、と肩を叩いてやる。

「元気だせよわんわん」
ニヤニヤしながら慰めてやると、奴はスッっとオレの頭に両手を添えて……痛ダダダッ！　無言でウメボシはやめろよ!?
ヘッドロックされつつ反撃で頬を引っ張るオレと、頬っぺたを引っ張られながらもこっちのこめかみをグリグリするのを辞めない相棒。
そしてその足元を挟んで、幼女と少年が子供らしい舌戦を繰り広げている。
もう大概しっちゃかめっちゃかになった状況を断ち切ったのは、孤児院の運営者である（と思われる）シスターさんだった。
ペトラ少年とオフィリの頭頂に、ゴツン、という鈍い音と共に拳骨が落とされる。
二人は揃って口を閉ざすと、無言で頭を押さえて蹲った。
「お客様の前で粗相どころか、足にしがみついて喧嘩をするなんて、お行儀が悪いですよ二人とも」
細腕に見合わぬ素早い動作で子供達にお仕置きしたシスターは……慈愛に溢れた母の如き笑顔だった。
「失礼しました。ひょっとしたらお二人がオフィリ（この子）を連れて来て下さったのでは……あら、どうかなさいましたか？」
「いえ、なんでもないです」

――同じく、なんでもないです。

何となく、ヒッチンさんに通ずるものを感じる笑顔に、オレと相棒も不毛な争いを即座に中断して、背筋を伸ばして直立する。

そんなオレ達を見て、彼女はくすりと微笑むと丁寧に腰を折ってこちらに頭を下げた。

「当院の子を保護して頂いた様で、感謝に堪えません。私は此処の運営を任されているブランと申します……よろしければお茶をお出しするので、上がっていかれませんか？」

カップに淹れられたお茶を頂きながら、オフィリを見つけた経緯を話す。

院の応接間……というより書類仕事をする部屋に来客用のテーブルと椅子を運び込んだらしき、少しばかり手狭な場所で、オレ達はシスター・ブランの淹れてくれたお茶と茶菓子を御馳走になっていた。

折角のデートだっていうのに、大まかな予定すら段々と明後日の方向に飛び去って行方不明になってる気がするのは如何ともし難い。

とはいえ、彼女も純粋に御礼がしたい、という気持ちからお誘いしてくれた訳であって、それを無下にするのも据わりが悪いのだ。オフィリがオレ達が帰ろうとすると涙目になって服の裾を引っ張ってきた、というのもある。

そんなオレの内心を察したのか、相棒が笑いながら、お前も大概お人好しやなぁ。なんて言って頭を撫でてくれたのは、ちょっと嬉しかったけど。

「なるほど……あの子はペトラに特に懐いていますからね。ペトラも下の子達をよく纏めてくれているのですが……少しでも此処を運営する助けになろうと、背伸びをし過ぎるきらいがあるのです」

早朝の配達業の手伝いも、駄賃を全て私に預けてしまいますし。と、悩まし気にシスター・ブランは溜息を吐く。

オレはお茶請けのクッキーを一枚とって齧ると、一旦お茶で口の中を洗い流してから問いかけた。

「……ひょっとして運営費用に困ってたりとかします？」

多少なら、聖女（オレ）の権限で融通する事も出来るけど、あんまり露骨な贔屓はよろしくないんだよな。孤児院はここだけじゃないし。

でも少しくらいなら、と考えたオレに対して、彼女は笑いながら頭(かぶり)を振った。
「決して余裕がある、という訳ではありませんが、教会からは運営するには充分な費用を頂いています。戦禍に焼かれ、親や住む家を失った子供達がいるのは此処だけではないのですから、出来うる限りの自助努力は欠かすべきでは無い」
――なるほど、天は自ら助くる者を助く。ってやつですね。
「あら、良い言葉ですね――転移者の世界の用句でしょうか？」
――ま、そんな感じです。
シスターの言葉に少しばかり自慢気に笑って答える相棒。
――大勢の子供達にまとわりつかれて顔やら髪の毛やら服やらを好き放題に引っ張られてなけりゃ、格好もついたかもな。
「かみの毛まっくろー、すげー」
「ねぇねぇ、ぼくもくっきー食べていい？」
「にほんじ？　ってほかの国の人なんでしょ？　なんかおはなししてよ！」
「わたしもおひざにすわりたーい」
「ダメー、おっきいわんわんのおひざはおふいーがすわるの」
子供特有の遠慮の無さで頬も瞼もぐいぐいと引っ張られて変顔を晒している奴は、肩に膝に両脇にと乗られるわブラ下がられるわ、もう完全にチビっ子達の玩具と化してい

た。

「……お前って意外と子供に好かれるタイプだったんだなぁ」

――これは好かれるっていうか俺で遊んでるだけな気がする。公園の遊具になった気分。

耳を交互に引っ張られ、ぐいんぐいんと首を左右に傾けて肩に乗る子に操縦されている相棒が、器用にそのままお茶を啜る。

うん、言われて見れば確かに。大人に遊んでもらってるというより、絶対に噛んだりしない大型犬が自分の家にやってきて鎮座してるから、皆、興味津々で群がってる、って感じだ。

「大変だな、わんわん?」

――おう、お前あとで覚えてろよ。

先程と同じネタで弄ってやると、子供達がへばりついてるせいで身動きのとれない相棒は視線と言葉だけで抗議をぶつけてくる。

そう怒るなって。オレ的にはお前の知らなかった面が知る事ができて結構ご満悦なんだ。

お前が子供に好かれる体質や雰囲気だっていうのは、紛れも無くこっちにとって朗報だよ。しょ、将来的なアレやコレやも考えると、こう、さ。色々あるだろ?

いや、そもそも遥かそれ以前の段階なのは分かってるから、流石に気が早すぎるとは思うけど。

「ほら、お客様が困っていますよ。離れなさい、お菓子は一枚だけなら食べて良いですから」

シスター・ブランが手慣れた様子で子供たちを相棒から引き剥がし、その口にお茶請けのクッキーを一枚ずつ放り込む。

おとなしく口を開けてクッキーを待ち受けては、放り込まれた甘味に嬉しそうに頬を綻ばせるチビっ子達。

親鳥と雛鳥の関係の様な光景に、オレも相棒も和んだ気分でそれを眺める。

――こういうの見ると、クソデカいハンバーグとかパンケーキ作って腹が弾けるまで食わせてやりたくなるな。

「どういうチョイスだよ。まぁ、言わんとしてる事は分かるけど」

そんなやり取りをしながら、二人で椅子から立ち上がる。

お茶菓子も頂いたし、そろそろお暇しようとすると、チビっ子達からえー！　という抗議の声が一斉にあがった。

懐かれた、というよりお客さんが滅多に来ないので珍しいんだろうな。

わんわん（笑）だけじゃなくて、オレにまでまとわりついて一緒に遊ぼう、もっと居

てよ、と目をキラキラさせてせがんでくる子供達は、非常に強力な拘束力を発揮していた。

うーん、これは振り切り辛い。普段、聖女なんていう高位の名誉職に就いてるおかげで身内以外からの、過剰な敬意や含みや背後が一切ない、純粋な好意というのは久しぶりだ。シンプルに嬉しい。

でも、折角のデートの時間が惜しい、という気持ちもある。なんとも悩ましいものだ。

――今回は、良いんじゃないか？　予定と大分変わっちまったし……埋め合わせって訳じゃないが、また二人でどっかいこうや。

オレの悩みを汲み取ったのか、再び子供達に群がられて遊具と化した相棒が笑いながら肩をすくめる。

「わー、にいちゃんとねえちゃん、デートだったのかー？」

「デートだデート！　おれしってる！　コイビトがいっしょにするやつだろ！」

「おっきぃわんわんとおねえちゃんは、なかよしなんだよ？　おふぃーおしえてもらったもん」

やんややんやと囃し立てるおチビ共の言葉に、頬に熱が集まるのを感じながら、オレは大きく咳払いした。

「――うぉっほん！　仕方ねーな！　今日はオレとそこのわんわんが一緒に遊んでやろ

う！　だけどちゃんとシスターの言う事は聞けよお子ちゃま共！」
わーっと。提案したこっちが嬉しくなるような、喜びの歓声が上がる。
わんわんやめーや、と抗議してくる奴に、いい加減諦めろ、と返してシスター・ブランに頭を下げた。
「すみません、勝手に話を決めちゃって……今更ですけど、今日一日、此処の手伝いをしてみたいんですけど……大丈夫ですか？」
運営しているシスターの頭越しに、子供達と勢いで約束してしまったので、遅ればせながらの許可を恐る恐る問う。
オレの心配を他所に、シスター・ブランは寧ろ申し訳なさそうな表情を浮かべながら、聖印を切って指を組んだ。
「一日だけでも、大人の手が増えるのはとても有難いお話ですが……よろしかったのですか？　今日は、お隣の彼と逢引の日だったのでは？」
「ブッ――！　あ、逢引って程のモンでもないですから！　……今のところは」
最後の、ゴニョゴニョと口の中で転がした願望混じりの言葉を、彼女だけは耳に拾ったのか。
「では、ご厚意に甘えてさせて頂きます。今日はよろしくお願いしますね。――優しき人達との出会いと、我らの主に感謝を」

一転して微笑ましいものを見る様な目付きに変わると、笑いながら此方に礼を言ってきたのだった。

成り行きで迷子を保護して、お家に送り届けて、送った先の孤児院でガキんちょ共とバタバタと戯れて。

俺にとっても、シアにとっても予定外・予想外だらけではあったが……まぁ、悪くない一日だったんじゃなかろうか。

いやー、しかし子供ってパワフルよね。

俺もシアも振り回されっぱなしだった。年長組は寧ろ下手な大人よりしっかりしてそうな位だったが、年少組はもう一人一人が怪獣だ。エネルギッシュさがしゅごい。

ペトラ君を筆頭とした年長組が手伝っているとはいえ、あの大騒ぎを毎日上手い事まとめてるブランさんマジパねぇ。

夕日が聖都を照らし、斜陽の光で緋色に染め上げられた街壁沿いの道を歩きながら、シアと談笑する。

「オフィリは最後、泊まっていけって半泣きだったな……また来るって約束しちゃったし、今度もあそこに行ってみるか？」

行くのは構わんが、二人で行くのは辞めておこう。体力が保たん。リアや……なんなら副官ちゃんも巻き込んで人海戦術で子供達を迎え撃つべき。

「言えてるな。邪神の軍勢と戦うよりよっぽど大変だった」

全く以て同感なシアの言葉に、二人して笑い合う。

にしても、めちゃくちゃ大変だったのは確かだが……シアも結構楽しんでいたようだ。

遊びに誘っておいて職場体験みたいな感じになってしまったので、疲れさせただけだったら申し訳さがハンパ無かったが、楽し気に孤児院での出来事を語る様子からして、杞憂で済みそうだ。

「お前も代わるがわる色んな子達に集られてたじゃねーか。特にペトラ少年に懐かれてたのは予想外だったぞ？」

あー、アレね。

ペトラ君、冒険者になりたいらしいのよ。で、見た目ソレっぽい俺に色々と聞いてき

た。

俺はフリーの傭兵擬きなので、彼の望む冒険者のイロハやアドバイスは教えてはやれなかったのだが……代わりにちょっとした投擲のコツとかを教えておいた。

いうて、投げ物（スローイング）にしろ投石紐（スリング）にしろ、最後にものをいうのは投げた回数――練習量みたいなトコがあるので、あくまで基礎知識と安全な取り扱いについてだけ、だが。

孤児上がりから冒険者だと、最初は装備を整えるのも維持するのも難しいだろうし、その辺の石ころさえあればお手軽な遠距離攻撃手段になる投擲は、重宝すると思うしね。

「成程なぁ……これで少年が将来冒険者になったら、お前が先生って事になるのかね？」

馬鹿言え、荒事の手札を一つ増やしてやっただけで師匠面なんて出来るかよ。数日後にはお師匠に会いに行くってのに、恥ずかしくて眼も合わせられなくなるわ。

悪戯っぽく問いかけてくるシアに、苦笑いして首を横に振る。

まぁ、あれよ。また会いに行く流れになってるワケだし、次に機会があれば、野営やちょっとした獲物の解体程度なら俺にも教える事ができる――正直、ブランさんが居ればその辺は事足りる気もするが。

物腰柔らかで、たおやかな美人ではあったが……アレ、間違いなく元・修羅勢（戦場帰り）や。立ち振る舞いに全然隙無いし、最後に握手したときの細腕に似合わない掌のタコは、どう

考えても子供の面倒や大量の家事で出来るようなもんじゃなかったし……なんかミラ婆ちゃんと似た空気感じたし！

思いがけず出来た、新たな知人や小さな友人達への話題は尽きず、街壁を辿る様にして歩き続け――シアが足を止めた頃には、日は殆ど落ちて空の端に星が瞬き始めていた。

「さて、ここだな」

ここって……ただの街壁やん。周りも普通の住宅区だし、最後に一緒に行きたいって言ってた場所ってコレなのか？

「ンなわけねーだろ。この上だよ上」

シアは魔力を練って――飛行魔法を発動させるとふわりと飛びあがり、街壁の上に着地する。

ってオイ、都市内で飛行魔法は許可いるやろ。一瞬とはいえ、ふっつーに使うなよ。

「いいからいいから。早くお前も上がって来いよ」

ニシシ、なんて歯を見せて悪戯小僧みたいに笑うシアにこれ以上文句を言う気にもなれず、溜息を付きながら魔力を足に充填した。さてはしょっちゅうやらかしてるな？この不良聖女め。

壁を壊さない様に気を付けながら、街壁を蹴って駆けあがる。

二度、三度と石壁を蹴りつけ、一息にシアの隣へと着地した。
これ、ミラ婆ちゃんやガンテスに知られたら普通に説教コースなんだろーな……。
とはいえ、壁の上の光景は中々壮観だ。昼間なら此処から見下ろす都市外に広がる景色は遠くまで良く見えそうだし、特に、遮る物の無い空は完全に日が落ちたなら、さぞかし星が映えるだろう。
「ここの景色も良いけど……オレ達のお目当てはアレだ」
そう言って、シアが親指でくいっと指さしたのは……壁の直ぐ外に建てられた、今は使われていない、古びた物見塔。
俺が嘗て、こっそり秘密基地にして出入りしていた場所であり――再転生してきて、シアと本当の意味で再会した、あの場所だった。

シアは再度、飛行魔法を使って浮き上がると、俺の腕を掴んでぶら下げながら飛翔し、崩れた上層から塔に入る。
二人で色々な感情をぶちまけて言葉を伝え合ったあの時のまま、幸いにも未だ取り壊されることも無く、物見塔は静かに佇んでいた。

俺を床に下ろして魔法を解除すると、シアは塔の中をぐるりと見渡し……放置されている木箱の縁を、そっと指で撫でる。

「本当は、さ。お前がたまにここで拳の練習したり、メモ帳と睨めっこしたりしてたの、知ってたんだ」

オフィリじゃないけど、何してるのか気になって、こっそり後をつけて覗いてたんだよ、と、ちょっと笑いながらカミングアウト。

マジかー……それ自体は別に構わないけど、全く気付かなかった事がショックだわ。多分、隠蔽の魔法とか使ってたんだろうけど。

「お前は大きな戦いの前には、情報収集だっていってよく居なくなってたけど……帰ってくる前日には、必ず此処で頭を悩ませてたよな」

オッフ。そこまで知ってるならいっそ声を掛けてくれても良かったのに。もう秘密基地でもなんでもないやん。

愚痴っぽく今更な文句を垂れる俺に、シアは笑顔のまま、すまんすまん、と謝ってくる。

「何度か声を掛けようとも思ったけど……普段よりずっと真剣な顔で悩んだり、修行したりしてたからさ。なんか勿体なくて、ずっと見てた」

いや、何時もは手ぇ抜いてるって訳じゃないのよ？　一人になって色々考えてると勝

手に顰めっ面になってたってだけで。

「――知ってるよ」

ふと、真剣な表情になって、シアが真っ直ぐに俺をみつめてくる。

「知ってるんだ、見てたから。お前が、ふざけた態度の裏でどれだけ全力でオレ達を助けようとしていたのか、どれだけ悩んで、その方法を探って、考えていたのか」

そう言葉を零すと、瞳を閉じて微かに微笑む様は、大事な過去を思い返し、噛みしめているみたいに見えた。

「そんなお前を見ていた理由も、見ていた意味も変わっていった事を、今はちゃんと分かってるんだ」

なんか滅茶苦茶気になることを言い出したシアさんだったが、茶々を入れられるような雰囲気でも無いので、黙して続きを促す。

眼を開いて、再び俺を見つめて一つ頷いた友人は――唐突に話題を変えた。

「さて――ここに来た理由だけど、お前に見せたいものがあったんだ」

急激に明後日の方向に吹っ飛んだ話の内容に、思わずズッコケそうになる。

えぇ～……凄い気になる前フリしておいてそれは無いんじゃないスかシアさんや。

まぁまぁ、座れよ。なんて笑う聖女様に半ば押される様に、入って来た大きく崩れた壁面――すっかり陽が落ちて、あの日の様な星空をよく拝める場所に腰を下ろす。

そして、何を思ったのか――シアは伊達眼鏡を外すと、胡坐をかいた俺の股座の間に、その華奢な身体を乗せた。

いや、何してんのお前。ホント何してんの。

「まぁまぁまぁまぁ、ちょっと見てろって」

いやよくねぇよ、近いわ。お前、自分の外身がとんでもねぇレベルの美少女だって自覚ある？　この位置、この体勢非常によろしくないんですけど。

以前は早々に長期休暇を取って引き籠ってしまった我がジョンも、今では元気に社会復帰している。

なので、過去にはそう気にもならなかった筈の、胡坐の上に乗せられた柔らかな、ちょっと高めの熱源は非常によろしくない（二回目

さり気なく《地巡》で魔力と併せて血流も操作していると、俺の胡坐の上に座ったまま、シアは魔力を展開・放出し――大規模な構成の魔法を発動させた。

――塔から覗く空に、大きな、美しい光の華が咲く。

発動した広範囲の幻惑魔法で再現されたのは、夜空に咲き誇る、色とりどりの花火だった。

魔法で再現されたものなので、上がる際の独特の打ち上げ音や、一瞬の火花が散る小気味良い火薬の音はしない。

画竜点睛を欠く、と言ってしまえばそれまでだが……それでも、久方ぶりに見るその光景は、美しかった。

「お前が居なかった二年の間に、戦勝記念で祭りみたいな事をやったって言っただろ――その時の花火を再現した魔法だよ」

感嘆のあまり、大口を開けてアホ面を晒している俺の耳に、シアの何処か自慢げな声が滑り込む。

「そのときはあんまりじっくり見たい気分じゃなくてさ。折角だから、今日お前と見直すのもアリかなって思ったんだ」

――そっか。

視線を下に向けると、これだけの規模の幻惑魔法を使ったせいか自身に掛けた魔法は解除され、様々な光の乱舞に照らされて淡い金髪が輝いている。

この体勢だと、シアがどんな表情をしているのか見る事は叶わないが。

なんとなく、とても穏やかな、幸せそうな顔をしているんだろうと、分かった。

――綺麗だな。

「うん。前にみたときより、ずっと」

言葉少なに、空に散る幻で作られた華に魅入る。
暫し、色とりどりの鮮やかな光景を、二人で静かに眺める時間が続く。
そして、自身の魔法で生み出した花火を見上げ続けていたシアが、ポツリと呟いた。
「やっぱり、そうだよな、うん」
うん？　何が？
「別に。ただ、負けないって決めただけだ――ミヤコにも、アンナにも――アリアにだって」
……どういう面子だ？　え、何、新世代の天下一女傑決定戦？
「ちげーよっ、ははっ……ばーか」
俺のボケに、いつも通りに突っ込みを入れるシアの声は、とても楽しそうで。
勢いよく俺の膝の上から立ち上がると、上がり続ける花火の幻を背に、振り向いた。
「――秘密だっ」
そう言って楽し気に、満面の笑みを浮かべるシアは――その魂の輝きに負けない位に綺麗で。
一際大きな火花が咲き乱れ、その笑顔を照らした。

登山（発射風

初日のトラブル以降、目立った厄介事に巻き込まれる事も無く……いや、補給の為に街に入る度にリアに声掛けてくる奴は結構いたけど、大抵は後ろに控えるガンテスを見て引き下がった。

聞いた話によれば、最近の巡礼者というと、大戦終結後に思い立って旅に出る者が多いらしく、大抵はあの戦争を生き残った腕利きばかりらしい。

冒険者の護衛で固められた馬車を襲う賊はいても、巡礼者を狙う命知らずや馬鹿はいない、というのが昨今の旅人達の認識の様だ。

まぁ、聖殿内でも、普段は穏やかなお坊さんといった振る舞いで、一皮剥くと中身修羅勢は結構いるからね……今更ながら、この世界の宗教坊主は色んな意味でガチ勢が多すぎる。

とにかく、行程が遅れる様な事もなく、順調に北上を続けること半月。

遠目に見える山々に、少しずつ雪化粧が施されるようになり、気温も段々と下がって

きて俺達は大陸の北端に近づいていた。
予定より大分早いペースなのは、ガンテスが「慣れてきた」と言って速度を上げ始めたのが大きな要因やな。
前半は風を感じてドライブ気分だったのに、後半はちょっと風圧がきつくなってきてリアが弱めの障壁を展開しながら移動する事になり、風圧や空気抵抗が減衰されたせいで更に速度が上がるっていうね。
……今思うと、これ、前にリアを肩に乗せて戦場を走り回ってたときの戦法と酷似しとるな。
聖女様のぶっ飛んだ魔力量を生かしたとんでもねぇ強度の障壁を前面に展開して、鎧ちゃんを完全起動させて全力ダッシュするだけの簡単なお仕事です。
うっかり味方にぶつからないようにだけ注意する必要はあったが、高速移動する破城鎚の如く、敵の密集してる箇所に突っ込んで片っ端から撥ねるのはちょっと爽快だった。
まぁ、今俺らを乗せて爆走してるおっさんにとってはいつもやってる戦い方なんだろうが。
霊峰に近づいているせいか、段々と魔獣の強さも上がっている筈なんだが、遭遇してもあっという間に置き去りにしていくか、正面衝突で轢き殺して終わるので全然実感が

無い――以前行ったときもそうだったけどね。

たまに、可食部位の多い奴を轢いたときに足を止めて食料にする位だった。暇を持て余して遠話の魔道具でシアと長話に興じてしまうくらいに平穏な道行きでした。

そんな訳で進行を遮る物も出来事も無く、最後の補給地点である北陸の小さな村を出て、更に走る事二日。

俺達は、無事に霊峰に連なる山脈の麓まで辿り着いていた。

雪化粧の施された雄大な山々に、吸い込むと身が引き締まるような冷たい大気。

山脈に点々と行き交う影は、そこを住処とする飛竜や飛行能力をもった魔獣だろうか。

雪と氷に覆われた地域だというのに、旺盛な生命力と豊潤な魔力をそこかしこから感じる、肥沃な大地。

以前訪れた時も、これだけの土地が一切戦禍に晒される事無く存在していることに驚いたもんだが……改めて見てもやっぱすげぇ景色だなぁ。

「うわぁ……凄いねぇ！」

妹（おとうと）分の感嘆の声に、だよなー、と同意し、ガンテスの負った背負子から飛び降りる。

初見は圧倒されるよなぁ。俺もそうだったし。

単純に、ファンタジーな自然界！　といったイメージをどこまでも力強く体現したよ

うな光景は、見る者の心にダイレクトに感動を与えてくる。
「拙僧は幾度目かの来訪ですが、やはり素晴らしい光景ですなぁ……創造神の創りたもうた世の神秘と生命の力強さ。この地に足を踏み入れれば未熟な我が身であっても、蒙を啓かれた心地になりますれば」
感極まった、といった様子で両の手を合わせて祈りを捧げるガンテスと、背負子に乗ったまま瞳をキラキラさせて景色に見入っているリア。
正直言えば、俺も二人と一緒に暫く景色を堪能していたい処ではある。
だが、肉体的にこの程度の寒さは誤差でしかないおっさんと違って、障壁を解除したんだからリアは早く防寒装備を着なさい。風邪引いたらどうするんや。
俺は最後に寄った村で購入した、この地の暖毛に覆われた獣の革で拵えたコートを羽織った。
前に来た時も同じものを購入したんだが、防寒性高いし、いい感じなのよ。登頂途中の霊獣やら精霊やらとの遭遇で直ぐボロボロになったけど。
生返事で景色に魅入っているリアを抱え上げると、背負子から下ろして腕を上げさせ、同種のコートの袖を通して羽織らせる。
あとは事前に用意してたマフラーを首に巻いてやって、コートと御揃いの手袋にイヤーマフのついた帽子を被せてやれば、防寒対策は完璧や。

「わ、あっという間に終わった……ありがとー、にぃちゃん！」
「ふむ、手慣れておりますな。いやはや猟犬殿とアリア様の仲睦まじき様が伺える様で、これもまたこの地の景観に劣らぬ良きものを見れた思いです」
いやね、これも最後に寄った村で揃えた品なんですけどね、にいちゃんちょっと楽しみだったんですよ。
ぶっちゃけ、村でコート一式のデザインみたときにビビっと来たんスよぉ！　これアリアさんに着せたらクッソ似合いそうだなぁって！
実用性の高さも地元の者達が使ってるので折り紙付きだが、見た目もいい感じだ。袖や襟元についたファーと、同じ素材の手袋と帽子――妹（おとうと）分の銀髪と小柄な体躯も相まって、めんこい雪ん子の精の様だ。
カメラが無いのが悔やまれるね！　帰ったら是非ともシアやミラ婆ちゃんにも見せてやりたい姿だ。
「そ、そうかなぁ？　そんなに似合う？」
「大変良くお似合いですぞ。婦女子の服飾など屯と識らぬ身ではありますが、今のアリア様はこの地に住まう雪精の如きです」
同感や。副官ちゃん辺りが見たら、興奮してホールドからの頬ずり不可避やで。
おっさんと俺でイイ笑顔でサムズアップしてやると、リアは照れ臭そうに笑いながら

自身の恰好を見回して、その場でくるりと回ってみせた。
「そっか！　にいちゃんがそう言うなら、聖都でも冬季になったら着てみるね」
　おー、いいね。あ、帰りにシアの分も買っていこう。土産の一つとしては丁度ええわ。
「そうだね、あっちでは珍しい素材と縫製だし、ちょっと目立っちゃいそうだけど――ボクとレティシアとにいちゃんで御揃いで出掛けてみたいな。きっと家族みたいに見えるよ！」
　俺もかよ。お前ら二人がこの防寒着着て並ぶと絵になりそうだけど、俺が混ざるのはなぁ……嫌という訳ではないが、眼福度が下がりそう。
「んー、眼福とかじゃなくてボクがお揃いで街を歩きたいんだ……ダメ？」
　あ、ハイ。駄目じゃないです……まぁ先の話ではあるから、その時においおい、な。
　じゃぁ、約束ね！　とニコニコしながらわざわざ手袋を外して小指を立ててこちらに差し出してくるリアに、苦笑いしながら小指を絡めて指切りげんまんしてやる。
　……そういえばさっきから、ガンテスが無言やな。
　そう思っておっさんの方に首を向けると、角張った厳めしい面を、こちらもニコニコと相好を崩して小指を結んだままの俺達を眺めていた。
「――む？　此方の事はお気になさらずとも良いですぞ。御二人の心温まる交流に横やりを入れる無粋は致しませぬ――寧ろ、その様な輩がおれば愚僧の拳を以て打ち払って

みせましょう」

両の手を胸元で揃えて拳を握る、一見するとぶりっ子ポーズの様な構えだが、節くれだった太く分厚い握り拳にぶっとい血管を浮かべて力を籠める姿は、発射される寸前の大砲を想起させた。

気軽に笑ってるけどガチで言ってるやつじゃねーか――ミラ婆ちゃんといい、おっさんといい、俺達がじゃれてると凄い気合入った様子で見守り始めるのはなんやねん。何と戦う気やねん。

後方保護者面――とはまた違うんだよな。なんかあったら寧ろ積極的に前に出てきそうな空気を全開で出してるし……ただの保護者だわこれ！

まぁ、アレだ。二人からすれば俺も聖女姉妹（きょうだい）もまだまだ若造だし、脇が甘くて心配になる点とかもあるんだろうな。

とはいえ、今回の件はガンテスが同行できるのはここまで――霊峰への登頂は俺とリアのみで行う事になる。

ゆびきりを終えても中々手を放さずに、さりげなく手繋ぎに移行して何故かご満悦の妹（おとうと）分が、今後の予定を思い浮かべたのか小首を傾げた。いや、首を傾げたいのは俺の方なんですけど。手ぇつないでどうすんのアリアさん。

「そういえば、先生は御山には登らないんだっけ。最後に立ち寄った村で待機してるの

？」

「予定ではそうなっておりますが……ミラ殿にお聞きした処、麓近辺ならば滞在しても問題無いとの事ですので――この好機に、御二人が霊峰から降りるまでこの地で鍛錬に励もうかと！」

「先生、凄いイキイキしてる」

楽しみでしかたねぇ！　と、その場でスキップでも始めそうな様子で瞳を期待に輝かせる修行キチに、相変わらずだなー、とのほほんと笑いながら笑い返すその弟子。

霊峰と比べれば多少はマシとはいえ、その周辺もやべー獣や精霊がごろごろしてる一級危険地帯には変わりないんやぞ。そこはドン引きするとこだよ。

あー……とりあえず、確認をしておこう。持ってきてるか？

意外とタフなメンタルをしているリアに繋がれたままの手を、意味も無く前後に振って遊びながら俺は前回と同じ準備は出来ているのかと、ガンテスに問いかけた。

準備？　と不思議そうな顔をする妹分に、ガンテスは満面の笑みを浮かべて応える。

「うむ、以前我らがこの辺りまで来た際、猟犬殿の発案で登頂時間を大幅に削る為の方法を、互いの合力を以て試したのですが……今回も必要と伺ったのでしっかりと準備をしてきましたぞ！」

背の大荷物を下ろして、野営道具と一緒に大袋に放り込まれていたソレを、おっさん

はどこか自慢気に引っ張り出して天に翳して見せる。
「……バット？」
どっちかというと、細身の羽子板だな。木じゃなくて、高密度の魔装処理された鋼鉄製だけど。
ポカンとして、ガンテスの手に握られた羽子板擬き――霊峰のショートカットに使う道具を眺めて呟くリアに、補足説明してやる。
まず、剛力無双のゴリラ。
そしてその全力のパワーに確実に一回は耐える棒状の得物。
あとはマイラブリィバディこと、完全起動した鎧ちゃん。
以上三点が、ショートカットに必要なアイテムになっております。
「まって、ちょっと待って。もうこの時点で嫌な予感しかしない」
ハッハッハ。――まぁ、待ちたまえ。
顔を引きつらせて離れようとするアリア君の小さなおててを、恋人繋ぎよろしくがっちり指を絡めて捕縛する。
「いや絶対まともな方法じゃないよね!?　先生思いっきり素振り始めたし！」
風切るどころか大気を粉砕して、力強いスイング――以前、俺が教えた振り子打法を練習し始めたおっさんを横目に、リアは悲鳴の様な叫び声をあげる。

大丈夫だいじょーぶ、前は成功したから。今回はその経験もあるからより確実だから。なんなら飛距離の更新狙えるから。

「いま飛距離っていった！　山登りなのに飛距離って！」

はいはい、暴れないでねー。

――《起動（イグニッション）》。

さり気なく鎧ちゃんをシャキーンと完全起動させて、妹（おとうと）分を抱え上げて拘束し――そのままお姫様抱っこで固定した。

「……はぇ？」

リアが唐突に動きを止めて固まり、俺の腕の中で呆けた表情で此方の顔を見上げてくる。

ぶっちゃけ、お前に危険が及ぶ方法とか取るわけ無いぞ。最悪、失敗しても俺の両足がへし折れるだけだ――それもお前がいるから直ぐに治るし。

そもそも骨折くらいなら、回復魔法が無くても鎧ちゃんが装甲を侵食させて接いでくれるからね。

前回も普通にチャレンジして普通に成功したし。

なので、ちょっとこのまま大人しくしてくれてると助かる。

「うぅ～……もう、にいちゃんはホントにもうっ……！」

何故か、両手で顔を隠してうなり声を上げ始めたリアは、ややあって腕の中から上目遣いで見上げて来た。
ちょっと頬が赤いが、流石にお姫様抱っこは恥ずかしかったか？　すまんね、背中におぶるよりは前に抱えた方が飛距離も安全度も上がるので我慢してくれ。
「……じゃぁ、どんな方法なのか具体的に聞いてもいい？」
大体予想してる通りだと思うぞ？
ガンテスの渾身スイングに合わせて、完全起動状態で足裏を〝乗せて〟脚力と魔力放出で全力跳躍するだけや。
飛距離優先なんで、飛行能力もった敵性生物に襲われるのだけ注意しないといかんが、リアがいるなら魔力障壁で全部解決するので、前回よりずっと難易度は低い。
前は四合目あたりまで行けたので、今回は半分は越えられそうだ。
「はぁ、にぃちゃんだしなぁ……ちゃんとボクを落とさないようにしてね？」
勿の論でございますとも、しっかりエスコートさせて頂きます。一応、そっちもしっかりしがみ付いておくれ。
「うん！　良し。切り替えた。それじゃ、お願いします！」
そう言って、にっこりといつも通りに笑うと、リアは一転して上機嫌そうに俺の首に手を廻してしっかりと身を寄せる。

納得してもらえたようで何よりだ――そんじゃ、そろそろ行くとしますか。
装甲の魔力導線を励起させ、知覚と身体をメインに強化率を上げる。
素振りを終えたガンテスがリアの鎚鉾に匹敵するサイズの羽子板擬きを肩に担ぎながら、静かに俺達の後ろに陣取った。
「では、準備はよろしいですかな？　行きますぞ！」
おう、ドンと来い。
ズチャ、と重量ある物体が大地を擦る音が背後から響き。
「それでは御武運を。……ぬぅぅぅん！」
野太い気合の雄叫びと共に、容易く音の壁を越えて巨大な鋼の塊が振り抜かれた。
鋭敏化させた知覚でその軌道を捉えると、軽く地を蹴ってその場で飛び上がり、振りぬかれた鋼棒の打点力がピークになるタイミングを見計らい、衝撃だけを殺しながらそっと足裏を乗せる。
急速に身体にかかる加速に合わせ、曲げた膝から一気に力を解放。スイングの最速地点と同時に背面と脚部から魔力を最大噴射しながら全力で跳躍した。
リアにかかる慣性を《流天》で極力流しながら、万が一にも落とさないようにしっかりとその小柄な体躯を抱える。
「う、わああああああああ!?」

「無事の下山を祈りますぞぉぉぉぉ……」
　マッハコーンを発生させてそれを突き破る様に宙を跳ぶ俺の耳に、障壁を展開しながら悲鳴をあげて――どこか楽しそうに首っ玉にかじりつくリアの声と、ドップラー効果で尾を引きながら遠ざかっていくガンテスの声が同時に届いた。

「――あれ？」
「如何なさいましたか、レティシア様」
「いや、なんかアリアの悲鳴が聞こえた気がしたんだけど……気のせいかな」
「……虫の知らせ、というものでしょうか？　何かあったのか遠話で確認をとっては？」
「いや、なんだろう。なんというか……また抜け駆けされた様な気がする。ちょっと魔道具とってくるよ」
「何の問題も無さそうでようございました。では、こちらの書類もお願いします」
「そんな殺生な」

――いよいしょおおおおっ！

俺、着・艦！

いや、ただの地べたですけど。

リアが何も言わずとも円錐状に魔力障壁を展開してくれた御蔭で、空気抵抗がごっそり減った為か、相当飛距離が伸びた。

以前より遥かに記録更新できた事に、しょーもない満足感を抱きながら霊峰の中腹を優に超えた地点に、大地を削りながら滑るように着地する。

ふむ、魔力を含んだ霧が漂ってるって事は……七合目辺りまで行けたか。予想より大分跳べたな。

な？　大丈夫だったろ？　と、腕の中のリアに問いかけると「すっごく怖かった！」というお返事と共に、俺の首に回された華奢な両腕がぐいぐいと引かれて鉢と面頬（スカルバイザー）が一体化している装甲の上から、頬と頬をくっつけるようにへばり付かれた。

うん、余裕そうで何より。そんじゃ降ろすぞい。

「……えー、怖かったからこのままが良いな」

なんでやねん。まだ師匠のとこまで少しあるし、ここまで来たら可能性は低いけど、棲んでる原生生物（れんちゅう）に襲われる事も考慮せんと駄目やぞ。

「そっかぁ。ちぇっ、残念」

珍しく可愛らしい我儘を言う妹分だが、こればっかりはね。こっから先はあぁいうのばっかりだし。

眼をぱちくりさせて「え？」と疑問符を浮かべるリアに、顎をしゃくって霧の向こう――山中にある断崖の先に視線を飛ばす。

その先には居たのは、この辺りに掛かる靄に溶け込むような白い毛並みの巨狼だ。

崖先に佇んで此方を静かに見つめてくる金の双眸に、リアが息を呑むのが分かった。

まぁ、ここまで近づかれているのに全く探知網に引っかからなかったら驚くわな。

なにより、先程までは全く気配も感じさせなかったというのに、認識した途端にしなやかな巨躯から感じる威風すら纏った重圧。

戦えば、完全起動状態の俺やリアでも手古摺るのが見てとれる――というか実際前はそうだった。

暫く互いを値踏みする様に視線が交差するが、やがて巨狼は此方に興味を失ったかのように首を返すと、音も無く霧の奥へと消えていった。

「……今のすっごいモフモフしてそうな狼は？」

この辺りを縄張りにしてる霊獣やな。霧狼とか呼ばれてるらしいが。

六合目辺りからは、犇めく強力な獣や精霊を纏めるようなボスらしき連中が何体かで

それぞれ縄張りを形成して、霊峰内の野生の秩序を纏めているらしい。さっきのもそのボス格の一頭だ。

前回、山頂まで登った際に霧狼（フォグ・タスク）を筆頭に何匹かと戦り合う羽目になったが、おそらくだが連中の目的は共通していた。

この地域の頂点――即ち、お師匠に会うに能う者か、害意を向ける者か、その品定めである。

俺の場合は、まず鎧ちゃんが物騒な気配を垂れ流しているおかげで相当な警戒対象だったのだが……不完全ながらも《三曜》を使ってみせた所為か、お師匠の関係者と判断されてたらしく途中で矛ならぬ牙を収めてくれたので助かった記憶がある。実際、あんなレベルの奴等を何体も相手にしてられんわ。

最初の番兵である巨狼が見逃した、ということは他のボス格もスルーしてくれるだろうから、後はちょっと厳しめの登山だけになる可能性は高いが……はぐれ者みたいな獣がいる場合だってあるだろうし、一応は警戒しながら進むとしようや。

アレと同格のが何体もいると聞いて、此処が世界最高峰の危険地帯であるという実感が湧いたのか、お姫様だっこのままだったリアは素直に頷いてくれた。

そうして、半日程かけて残りの道程を踏破した俺達は、無事に山頂まで辿り着いた。
行く道々で縄張りが切り替わる度に、そこの主連中から値踏みの視線を向けられたせいか、リアの顔にはやや疲労が浮かんでいる。
「なんだか龍の御姫様に会うのが怖くなってきた……」
人見知りをあんまりしない奴なんだが、流石に今回ばかりは辿ってきた道の物騒さのせいか不安そうだ。
最初の巨狼を皮切りに、高位のドラゴンやら精霊やら、やべーのばっかりだったからね。アレらを全部シめて文字通りの頂点に君臨してる御仁とか、面識のない人間はそら不安になるだろう。
本人は普通に穏やかで良い人なんで、そこまで警戒する必要は無いぞ――怒らせなければだけど。
この辺り――お師匠の住居近くまで来ると、争いはご法度と言わんばかりに山の住民達も静かになるので、鎧ちゃんを解除して妹（おとうと）分に手を差し出す。
ほれ、あと一息だから頑張れ。まずは俺が挨拶してからお前さんを紹介するから、普

通に礼儀正しくすれば何の問題も起こらんて。

「――うん、にぃちゃんがそう言うなら大丈夫だよね。一応、今のボクは聖都からの大使みたいなものだし……しゃんとしないと！」

自分の両頬を軽く叩いて気合を入れると、フンス、と鼻息を洩らして俺の手を握り返し、リアは逆に俺を引っ張る勢いでズンズンと進みだす。

少し進めば幅の広い獣道、といった風だった地面が、馴らされた人の手の入ったものに変わり、岩肌と高地に生える霊木の林の向こうに、そう大きくもない旧い屋敷が見えてきた。

元の世界で言う処の――大陸風な外観であるそれの入口前、丁寧に平らに馴らされた練武場変わりの其処に、今回の目的であるお人は佇んでいた。

背を向けて霊峰の空を見上げていたその人は、ゆっくりと此方を振り返る。

見た目の年の頃は、今の俺とそう変わらない。二十歳前後といった処か。

腰まで届く紺碧の髪に、いっそ人形染みた白皙の美貌。

建物と同じく、どこか大陸風の衣裳――旗袍（チーパオ）というやつだろうか。前にも見た事のある装束で、すらりとした肢体を包んでいる。

不思議な光彩を放つ、瞳孔が縦に割れた眼――龍眼が、俺を視界に映して、穏やかに細められた。

「久しぶりですね、よく、生きて戻りました」

――どうも、お久しぶりです。お元気そうでなによりです、お師匠。

すんません、実は一回死んでます。とか内心で思いつつ。

再会を果たした師――《半龍姫》の嬉しそうなお言葉に、俺は拱手を返しつつ頭を下げたのだった。

其は《報復》に非ず

「二年程前でしょうか。かの神性と接触したのは感じ取れましたが……正直、驚いています……アレを滅ぼしたことも、貴方が生き残っていたことも」

北の高地らしからぬ、穏やかな風が頬を撫でる。

深い碧の長髪を揺らしながら、お師匠は静かに此方に歩み寄り。

その綺麗な龍の瞳で、少しばかり高い位置にある俺の顔を見上げて来た。

「貴方は、貴方の目指した望みを、全て叶えてみせたのですね」

……あー、一番クソ邪神の討滅は片付けましたが、一番大事な奴の笑顔は道半ばです。

此処で終わり、っていうのは無い感じなのでこれからも精進していく予定であります。

「……そうなのですか？」

はい、そうなんです。

不思議そうに小首を傾げるお師匠だったが、やがて得心がいった様子で一つ頷いた。

「そうですか……では、そのめんどくせー目標を越えた分、ということで」

そう言って、ひとたび振るえば万物を引き裂く刃にも爪にもなる繊手を俺の頭上に伸

ばすと、掌を俺の頭にのせる。
「よく頑張りましたね。えらいえらい」
……オッフ、こう来たか。
アンタ前にお世話になったときも何度かやってきたけど、この年齢になって、幼児の如く撫でられるのはちょっとメンタルに来るんですよ師匠ォ！
――いや、嬉しくない訳じゃないんですけどね？　こうね、今はリアも隣にいるし、にいちゃんとしての沽券的なものがね、行方不明になっちゃうとね？
元から無いだろうそんなもの、という幻聴が何処からともなく聞こえた気がしたが、知らん知らん。アーアーキコエナーイ（逃避感
紛れもなく善意で、頑張った弟子を褒めているだけなので文句を言う気にもなれない。面映ゆいやら気恥ずかしいやら。
「……むぅ」
黙って頭を撫でられていると、リアが俺の服の袖を引いてきた。
僅かに漏れた声は、何処か面白くなさそうだ――すまんな、この人も無視してる訳じゃないんや。ただ……阿呆みたいなレベルの長命種なせいか、単に天然なのかは知らんがテンポが独特なのよ。
お師匠の気が済んだら紹介に移るから、ちょっとだけ待ってくれ。

心の中で妹（おとうと）分に謝りながら、少し背伸びをしたお師匠が、俺の頭から掌を離すのを待つ。
「……」
よしよしと言わんばかりに、撫でられる。
「……」
撫でられる。リアがこれ以上不機嫌にならんといいんだが。
「……」
まだまだ優しく、撫でられる。
「……」
撫で――お師匠。
「？　……なんですか？」
ちょっと長いッス。
「……そうなのですか？」
はい。そうなんです。
さっきも言ったが、その長命の所為か、天然な所為か、師匠のテンポは独特だ。或いは両方なのかも知れない。
――でも個人的には後者の割合が高いんじゃないかと思ってます。

取り合えず掌を引っ込めてくれたので、やっとこ連れを紹介できそうや。
お師匠ー、こっちは俺が前に話してた一緒に行動してる二人の片方です。
良い子なんでよろしくしてやって下さい。と、待たせてしまったリアの頭を撫でた後、軽く背を押して前に出してやる。
先程の俺とのやり取りで、逸話の様な怖い人では無いと分かったのか緊張はあっても不安は消えたようだ。実際、普段のおっかなさっていう点だったらミラ婆ちゃんの方がよっぽど上やぞ。
本人にバレたらシバかれそうな事を考えていると、胸を張って師匠の前に出たリアが礼儀正しく頭を下げる。
「初めまして、アリア＝ディズリングです！　聖教国で聖女の号を与えられています。今回は戦争終結後の《半龍姫》様との友好を再確認する為の特使として参りました！」
ハキハキと、少しばかり鯱張った様子で挨拶すると、「こちら、教皇猊下からの書状となっています！」と蜜蝋で封をされた手紙を差し出す。
それを受け取ると、お師匠はリアの顔をマジマジと見つめ――気のせいか、その龍眼が揺れた様に見えた。
「そうですか……貴女が今代の聖女の片割れ……」
そう呟いて、妹分を凝視して……そっと掌をその頭頂に乗せた。

「いらっしゃい。書状は確かに受け取りました、何もない場所ですが……良ければゆっくりしていきなさい」

微かに微笑んで、頭を撫でながら歓迎の意を示すお師匠にリアが「ありがとうございます！」と元気よく返しながら笑顔を浮かべる。

ふむ？　なんというか。

普段から穏やかな人ではあるが、気のせいかリアに対しては、特に当たりが柔らかく見えるな。

いつもの静けさが古から聳える大樹の様な――言ってしまえば何処か植物染みた超然としたものだとしたら、今の師匠は酷く人間くさく見えた。

なんやろな。気に入った、って事なのかね？

二人が仲良くやれそうなら、俺としても万々歳なのでいいけど。

ただ、まぁ。それはそれとして、だ。

師匠、師匠。

「？　……なんでしょうか？」

撫でるのは結構なんですが――長いです。リアが困惑してます。

「……そうなのですか？」

はい。そうなんです。

コテンと首を傾げながら、なんか不思議そうな顔をしてるお師匠に、思わず苦笑する。
以前の見知ったものとは雰囲気がちょっと違っても、やっぱりその独特なテンポはお師匠のままだった。

互いの紹介も済んだので、そのまま屋敷に招かれ、三人で小さな卓を囲んで座る。
お師匠が教皇の爺さんからの書状に目を通している間、俺達は彼女が手ずから淹れてくれた茶を啜ってのんびりと読み終えるのを待っていた。
火炉に焚べられた薪が爆ぜる音だけが時折部屋に響き、その静謐な空間に充てられたのか、リアが顔を寄せて小声になって話しかけてくる。
（ねえ、にいちゃんにいちゃん）
なんだい、アリアくん。
（この花茶？　ってやつ。初めて飲んだけど花の香がはっきりしてて面白いね）
あれ、飲むの初めてだっけ？　転生前にジャスミン茶とか飲んだことないの？
（うん、無かった。これ、お土産にできたりしないかなぁ）
どうだろうなぁ。師匠のお手製っぽいし、そんなに量無いんじゃないか？　――この

辺の植物使ってるだろうし、希少価値って視点からだと霊峰（ココ）の外だと高級品ってレベルじゃねぇし。

（そっかぁ、残念。似たようなお茶、聖都にあるかな？）

探せばあるんじゃね？　此処のは素材からして桁が違うから同じレベルのは厳しそうだが。

二人でヒソヒソと他愛ない話に興じていると、お師匠が「なるほど」と呟いて手元の書状から顔を上げた。

「教皇（あの子）も相変わらず、先を見据えて動いている様ですね。悪神がこの世界から失せた今、力を増した加護によって振り回されていないか少々気がかりでしたが……杞憂だった様で何よりです」

「あの子……」

教皇を幼子みたいに扱う師匠の発言に、リアが目を見開いて驚くが……考えてもみなさい。俺だけじゃなく、ミラ婆ちゃんの師でもあるんやぞ。そらあの爺さんも小僧扱いになるわ。

「――そうだよね、ボクより少し年上のお姉さんにしか見えないからイメージがちょっと湧きづらいけど……」

なまじ、あの爺さんが周囲で『一番年食った大人』という認識だったせいやろな。実

際は教皇よりミラ婆ちゃんの方が年上らしいが、これは口に出すと後が怖いから絶対話には出さないけど。

少し温くなったお茶をくぴくぴと飲んでいる妹（おとうと）分を卓に頬杖ついて眺めていると、お師匠が俺に探る様な視線を向けてくるので、なんぞありましたか？　と、首を捻りながら問いかける。

「――脱ぎなさい」

「ブフーーーーーーッ!?」

リアの口から含んだ茶が豪快に発射された。

「!?　エホッ、げほっ、――ッ!?」

思いっきり噴いた上に、気管に茶が入ったのか咳き込んで身体をくの字に曲げてえずくその背を、慌てて擦ってやる。

おい、大丈夫か。茶が思いっきり入ったか？

「――ケホッ、う、うん……だいじょう、ぶ」

ひとまず安心した俺は、涙目で咳き込むリアの姿をおろおろと狼狽えた様子で眺めていたお師匠に嘆息交じりで突っ込んだ。

お師匠、端折り過ぎです。手紙になんか書いてあったんでしょうけど、スッ飛ばさないで説明してください。

「……そうなのですか……？」

はい、そうなんです。

多分、さっきのやり取りで自分のテンポがゆっくり過ぎるとでも思ったんでしょうが、今度は省略し過ぎだから。無理に会話のギア上げようとしなくていいから。ただでさえで他人と会話する機会が少ないのに、急に難易度高い事に挑戦しなくていいから。

コミュ障という訳では無いんだろうが、稀に来訪者と会話する事があっても、再びその機会がやってくるスパンが致命的に長い師匠は、コミュニケーションにおいて変なとこでポンコツになる事がある。

今も、リアの背中を擦ってやるかどうか迷って結局手を出せなかった感がすごい。すごいっていうか酷い。

以前から割とこんな感じなので、《半龍姫》と畏敬交じりで呼ばれる、世間のイメージとは乖離すること甚だしい訳だが――却って住んでる場所が、人の立ち入らない秘境同然の此処で良かったのかもね。

意外ととっつきやすい……与し易いなんて勘違いした馬鹿が来ることも無いだろうし。

今も、俺に駄目だし食らったせいでちょっと落ち込んでる姿からは想像し難いだろうが、彼女に対する世間の『気性』のイメージは激しいズレがあっても、『力』の逸話については、誇張でも何でもないのだ。

霊峰を自力で踏破出来る人間にはそう大きな問題は無いだろうが、師匠が不快に感じる、又は怒りを覚えるだけで、周囲に非戦闘員が居たらその場でショック死しかねない。

呪いでも、殊更に魔力を放出してる訳でも無い。人ならば、日々を過ごす間に当然起こる情動……嫌な気持ちになる、イラっとする――その程度の感情の動きだけで、力無き者ならば死に瀕するだけの圧を放ってしまう。

会話のテンポがスロウリィ気味でも、実は残念なとこがあっても、彼女は神代の龍――その力を人という鋳型に押し込めた超越者なのだ。

……或いは、その辺も考慮してこんな人里離れた僻地に独りでいるのかもしれんね。

そうだとすると、なんとも遣る瀬無い話ではあるが、実際の処は師匠が何を思って霊峰に居を構え続けているのかなんて誰にも分らない。

……壁という壁を越え尽くし、人外級に到達した者は、純粋な人間種であっても常人よりずっと長い時間を生きるようになる。

そんな相手でも誤差の範囲になってしまう様な時間を生きている――これからもそう在り続けるであろう存在に、軽々と生き方を問う様な真似は憚られる――んだろう

ね、普通は！

どうせ最後は決まってるし、と、物怖じという概念をゴミ箱にシュートしてしまっていた当時の俺は、普通に修行中に根掘り葉堀り、アレコレ聞きまくったけどな！

明確な答えが返ってきた事は殆ど無かったが、今までやってきた――師事を願った者達には居なかったタイプが新鮮だったのか、ウザがる処かちょっと気に入られたっぽいのは僥倖だった。

単に、滅多に巡り合わない沢山会話してくれる人間だったから、という可能性もあるけど（白目

そんな風につらつらと、リアが卓に吹き出した茶を布巾で拭き取りながら前回来たときの記憶に思いを馳せる。

若干へコんだままなのを復調したリアが慌てて慰め、それによって心持ち上機嫌になった師匠。あんまり表情動かない人なんだけど、少し目尻が緩んどるな。ほんとにリアの事気に入ったんやなぁ。

――まぁ、それは一旦置いておくとして、さっきの発言に至った経緯を聞きたいんですけど。

卓を拭き終えて、部屋の隅にある空桶に布巾を放り込むと、俺は棚上げになっていた疑問を取り出して、改めて目の前に下ろした。

いつの間にか仲良しになったっぽい二人の、ほんわかした空気を中断するのは少し心苦しいが、眺めているだけでも話が進まんからね。

「……そうでした、書状に貴方の体調を診て欲しいとも書かれていたので、つい」

手をポン、と打ち合わせて何でもない事のように続ける。

「先程、軽く見た限りでは……おそらく貴方の侵食武装――魔鎧について私に調べて欲しいのだろうと当たりをつけましたが……間違いありませんか？」

さっき見てたのはそういう理由かぁ。つーかあの数秒でそこまで把握したのかよ、相変わらずパねぇ。

「詳細に診るには、素肌に触れる必要があったので衣類を脱ぐように促したのですが……性急過ぎたようですね」

ちょっとバツが悪そうに眼を逸らすお師匠。言葉足らずってレベルじゃねぇぞ。

とりあえず、理由は分かりました。診断って一口に言っても、そんなにパパッと終わるモンなんですかね？

椅子から腰を上げて、自身の旅装束に手をかけながら質問すると「早ければ数分、長くとも三十分はかかりません」というお言葉が返ってきたので、さっさと脱ぐ事にする。

火炉による熱があるとはいえ、北端の高山なので気温はかなり低い。丹田に力を入れ、微量に魔力を巡らせて外気への耐性を上げながら着込んだ装備と衣類を座っていた

椅子に放っていく。

あー寒い寒い。手早くおながいします――上半身だけでいいですよね？

「そうですね、背に触れる事ができれば充分です……火炉の前の方が良いでしょう、そこで此方に背を向けて座る様に」

お気遣いどーも。では、お言葉に甘えて。

剥き出しになった二の腕をさすりながら、そそくさと熱源の前に移動しようとして――ゴクッと何かを嚥下する音が聞こえ、卓から身を乗り出して俺をガン見していたリアと目が合った。

……なんぞ珍しいモンでもあったの？　散々っぱら治療のときに見慣れてると思うが。

数年間、無茶なペースの戦闘と鍛錬を繰り返しては回復魔法や軟気功で癒していたおかげで、それなり以上に鍛えられた身体にはなってると思うが、身近にガンテスがいるせいで大したもんには見えない。というかあのおっさんと比べたら殆どの人型生命体は貧弱に見えるけど。

「――うぇっ、な、なんでもないよ？」

ぐりんっと音が聞こえそうな勢いで顔を真横に逸らすと、さっき師匠に淹れ直してもらっていたお茶をゴクゴクと飲み干す妹（おとうと）分。気に入ったのはいいが、あんまり飲み過

ぎると腹が緩くなるぞ。気温の低い此処で腹を悪くするとしんどいからその辺にしときなさい。

茶碗を乾しながら、チラチラと此方を伺っているリアを横目に、俺は火炉の前に腰を下ろすと結跏趺坐の姿勢をとって瞳を閉じた。

瞼を下ろした暗闇の中に、師匠の声が静かに響く。

「では、始めますよ?」

――いつでも。

背中の中心にひんやりとした掌が当てられ、一拍おいて、暖かな力の流れが注がれると、血潮が巡るように身体の内部をごく自然に走り出す。

深く息を吸い、吐き出す。

精査し易い様に、体内の魔力を鎮め、流れと同調させるように意識して緩やかに巡らせる。この辺りは《地巡》と同じ要領だ。

……十分程、そうしていただろうか。

掌を離したお師匠の「もう良いですよ」という言葉に、眼を開けた。

んむ、あっという間に終わったな……して、診断結果の方は如何でしょうか。

俺が脱ぎ捨てた衣類を抱えて、ちょこちょこと隣にやってきたリアから順序良く服を受け取って袖を通しながら、師に問いかけた。

そうですね、と顎に指を添えて暫し考え込む仕草を見せると、言葉が纏まったのか、俺を診断していた片膝をついた体勢から立ち上がり、卓へと戻る。

手早く着替え終えた俺が、同じく卓を囲む椅子へと座り直すのを見計らい、師匠は精査の結果を語りだした。

「端的に言うと、魔鎧は貴方の魂に半ば食い込む形で存在しています――如何に強力な侵食武装と言えど、此処迄高い融合率は稀です……一体どんな無茶をしたのですか」

最後の一言に、ほんの少し呆れと、無茶を咎めるような響きを感じ取って俺は明後日の方角に首を曲げて、出鱈目に口笛を吹き鳴らす。

アレです、色々っスよ、色々。それも今は治ってるから、ノーカンって事になりませんん？

ジトっとした視線の主が、二人に増えた。なんでや。

「……苦労している様ですね」

「《半龍姫》様も、師として大変だったでしょう？　お疲れ様です」

おい、二人揃って溜息はやめろ。急速に分かり合った感だすのやめやがってください

（懇願

頭痛を堪えるように、人差し指でこめかみを揉み解しながら、師匠は続きを口にする。

「これ程に侵食が進んでいると、嘗ての呪物の儘であれば深刻な副作用が懸念されまし

たが……今はその心配は無いでしょう」

むむ。と、仰ると？

「悪性の呪具としての特性が薄れ、本来の魔道具としての要素が強く出ています……魔鎧の在り方の根源であった、悪意と憎悪。その対象を手ずから討滅したのが原因でしょう。大幅に浄化され、別の”何か”を根源として再構築されている」

彼女はそこで言葉を切ると、すっかり温くなったお茶で唇を湿らせた。

”何か”っつーと……其処までは流石に判断は付かない感じなんだろうか？

確定では無いですが、と、前置きして師匠は自身の推論を語る。

「邪気の薄れ具合や、貴方の身体を精査した際の感触から予想は立てられます。この状態になってから、既に何度か使っていますね？」

え？　あ、はい。戦闘起動も含めればそれなりに——今までと比べて、妙に反動が少ないのが気になって、挨拶がてら診てもらおうってのが今回の事の発端です。

「ならば、それが答えでしょう」

お師匠は確証を得た、といった表情で頷き、眩しいものを見るかの様に目を細めて微笑んだ。

「おそらく、魔鎧は己の意思で自らの根源を再定義した筈です。あれ程の悪性を帯びた業を打ち捨て、主の——貴方の保全を望む存在へと変わった……この身は永く在ります

が、特級の呪詛の塊をこの様な形で昇華させたのは私の知る限り、貴方が初めてです」

あー……これは褒められているんだろうか。

「はい、このうえ無く」

修行を付けてもらっていたときのフォロー感全開にした慰め混じりのお褒めの言葉では無い、混じりっ気無しの賞賛なのだろう。自身の生きた時間の中でも初めて見る出来事を起こした者への、感嘆と敬意が感じられる。

きっちり《三曜》を修めてドヤりたかった身としては、師弟関連とは掠りもしない内容なのがちと残念だが、それが気にならない位には、診察の結果は嬉しいものだった。

この際、細かな事はええねん。とどのつまりは、重要なのは！

鎧ちゃんがデレたって事や。ツンドラだった相棒のデレ期突入やぞ、テンション上がってきた。

「……何故彼は、高速で首を左右に振りだしたのでしょう？」

「発作みたいなものなんで、放っておいて良いと思います」

心底不思議そうなお師匠と、なんか呆れた様な妹（おとうと）分の声が聞こえてくるが喜びに満ち溢れている今の俺は気にならない。

はー、良かった。何かしらの変化とが起きてるって聞いて構えてた部分もあったけど、蓋を開けてみれば朗報も朗報だったわ！

「分類的には未だに呪物のままですよ？　乱用は控えるように――それと、再定義によって魔鎧としての性能に変化が起こっている可能性があります。可能なら、暫く逗留して行きなさい。把握と調整を手伝います」

言われてみればその通りだ。折角師匠の元に来たんだから《三曜》の鍛錬もしたいし、是非ともオナシャス！

――という訳で何日か滞在したいんだけど、どうでしょうかアリアさん？

ちょっとご機嫌ナナメな理由が分からんので様子を伺うつもりで話を振るが、これに関しては特に否は無かったのか、普通にこっくりと頷いてくれた。

「では、二人とも客間に荷物を置いて……あぁ、客人が二人もいるのであれば追加の薪も必要ですね。食事も、山の仔達が持ってきてくれた肉が足りるとよいのですが」

久方ぶりの複数の泊り客でちょっとテンション上がっているのか、お師匠の語尾が若干跳ねている。

薪割りなら俺がやりますよ――リア、此処は五右衛門風呂あるんだがどうする？　今日入浴するか？

「五右衛門風呂！　ちょっと入ってみたいかも！　あ……に、にいちゃんも入るの？」

火の番するから最後になー。前に俺が来た時に、しっかりした仕切りを作ったからその辺も安全安心だぞ。

釜茹でタイム初体験の効果であっという間に機嫌の戻ったリアに、問題無く楽しめる事を追加情報として教える。

「そっかぁ……ざん……んんっ！　にいちゃん、何気にＤＩＹとか得意だよね。じゃぁボクは、ご飯の用意を手伝おうかな……《半龍姫》様、良いですか？」

「ええ、一人でいると食事も疎かになりがちですからね。腕が錆びついていないとも限らないので、手伝って貰えますか？」

はい、頑張ります！　と両拳を胸元で握ってフンス、と気合を入れるリアと、表情こそあまり変わっていないが御機嫌なのが丸分かりなお師匠。

腕が錆びつく、なんて言ってるが、此処で俺に修行を付けてくれている間、飯の面倒をみてくれたのは彼女だ。普通に料理上手だったので、リアの好意に配慮してくれたんだろう。

もう大分仲が良い感じでホント何よりだ。これから数日、お互いに楽しめる時間になりそうで良かったわ。

鎧ちゃんに関する件はあっさりと片付き、リアも大使としての仕事を問題無く片付けた。何事も無いのが一番だよね、うん。

聖教国の聖女と《半龍姫》の会合というより、親戚のお姉さんとのお泊り会みたいな和気藹々とした空気に俺ものんびりした気分になりつつ。

霊峰での初日は過ぎていくのだった。

霊峰に連なる山脈――その内に数えられる山中で、一つの集団が動き出す。

入念に入念を重ねた、隠蔽・隠密の魔法を幾重にも張り巡らせた洞窟の中で、僅かな光源である蝋燭を囲む様にして会話は行われていた。

「一段階目の準備は終えた……これより我らは霊峰に向かう」

二十人程の、魔導士らしきローブや衣服に身を包んだ者達の中で、中心人物らしき老年の男から決然とした声で告げられる。

服装が不揃いなら、言葉に対する反応もまたバラバラだ。意気高く同意する者、不安を露わにする者、反感を込めた目付きで男を見つめる者。

反感を示した者達の中から年若い男が歩み出で、諌める様な口調で男に進言する。
「……おそれながら、師よ、今回の策はあまりにも無謀です。かの龍姫を標的とするなど如何に我らの神の加護あろうと――」
若者が言えたのは其処までだった。
虚空から飛び出た巨大な咢がその胴体に喰らいつき、ベキベキと枯れ木をへし折るような音を立てながら喰い千切り、咀嚼してゆく。
断末魔の声さえ無く、巨大な”何か”の顎に咥えられたまま、若者は絶命した。
「他に反論のある者はいるか？　この期に及んで尻込みする惰弱なぞ、居るだけ無駄よ」
吐き捨てるように投げつけられた言葉に、反意を抱いていた者達は勿論、同意を示していた者達も顔から血の気を引かせて沈黙を選ぶ。
男が鼻を鳴らして手に握った杖を一振りすると、喰い殺した若者ごと、”何か”は再び虚空へと沈み込んだ。
「やぁ、流石は我ら同胞の中でも指折りの《屍使い》だ。見事なものだ」
黙り込んだ集団の中から、一人。陰気と言っていい者達の中で異彩を放つ、明るい雰囲気の青年が拍手をしながら感嘆の声を上げる。
貴族の様な立ち振る舞いと、秀麗な顔立ちの青年は楽しそうに笑いながら何度も頷いた。

「《半龍姫》への接触、可能ならその殺害。貴公の業とそれを補強する入念な準備――揃えばあながち、絵空事ではあるまい」

いっそ不自然ですらあった朗らかな表情に、皮の下一枚捲り上げた様な、歪な笑みが浮かぶ。

「私も可能な限り協力しよう……ククッ、かの龍姫を組み敷いた男なぞ、歴史上におるまい。実に昂る話――」

再び虚空から顎が顕れ、欲望を?き出して語り続けていた頭部を噛み砕く。

鼻梁から上をごっそりと消失した青年は、かろうじて残った中身を地にぶち撒けて膝から崩れ落ちた。

「愚か者が。あの龍の躯は、我らの神が再臨する為の器と成り得る逸品――云わば神の新たなる玉体よ。穢す等以ての外、論外だ」

男が先にも増して吐いて捨てるような口調で呟き、糸の切れた人形のように洞窟に転がった頭部の無い死体を、憤懣遣るかた無し、といった表情で足蹴にし、踏み躙る。

「まだ下らぬ戯言を吐きたい者がいるならさっさと言え。我が屍傀儡への滋養は潤沢である程良い」

三度目の上がる声は無かった。

それに満足したのか、或いは然程興味も無いのか、男は冷笑を浮かべると握った杖を

地に打ち付け、他の者達を睥睨する。
「まずは霊峰に向かい、麓から頂まで、螺旋を描いて進む。――道中の獣共も龍に劣るとはいえ、素晴らしい素材だ。本命を押さえる為の屍の強化にはうってつけよ」
指先でクルクルと螺旋を描きながら、やがて冷笑は怖気が奔る様な狂気的な笑みへと変わる。
「霊峰の力ある獣共の命を余さず喰らい、かの龍姫の命も喰らい、神への供物とする。今一度、この地へと降臨して頂く為の、な」
漏れ出た含み笑いはやがて狂った哄笑に変わり、蝋燭の薄明りに照らされた洞窟に響き渡った。

――邪神の信奉者、その残党である男達が、不可侵である筈の龍の姫君へとその悪意を伸ばす。
尚、現在その姫君のもとには、邪神とその取り巻き絶対殺すマンが滞在している事を、彼らは知らない。

霊峰での各々（前編）

光も音も通さない真っ暗な闇の中で、揺蕩う。
こうなってから、どれだけの時間が過ぎたのか。それとも大して時も経っていないのか。
時間経過すら曖昧な空間で、薄れた身体の感覚と霞掛かった自我をなんとか保ちながら過去を思い返す。
――見た事の無い眷属だった。
ボクの知識は勿論の事、何度も『繰り返して』いたレティシアすら知らない、未知のソレ。
自分と同じくこの空間に封じられているであろうソイツは、聖女であるボク達の結界や耐性をしてやっとギリギリで凌げるであろう程の、膨大な邪気による精神汚染を無作為に垂れ流す、邪神の狂気が形を為した様な悪性の塊だった。
単純な力の格だけで言えば、もっと強力な上位眷属はいたけど。
おそらく『性質』という面だけで見れば、最も大本に近い――この世界の生きとし生

ける者にとって、最悪の猛毒。
辛うじて互角と言える状況だった戦線で、なんとか状況を好転させようと多くの味方が気炎を上げていた中、揺らめく影の様に頼りない姿で顕現したソレは、瞬きの間に地獄を作り出した。
一目見た瞬間、確信した。
コレは放置していてはいけないモノだ。
野放しにしているだけで、人類側の敗北が確定してしまう。
一時代に一人しか現れないとされる聖女が、もう一人いるのなら、それは理由がある筈で。
だから、きっと。今がそうなんだろうって。
『コレ』を止めるのが、ボクの役割なんだろうって、そう思ったんだ。
神器である大聖杖を用いた、結界魔法の極致――時空凍結。
きちんとした準備を以て行えば、ある程度の範囲も確保できるけど、その上位眷属の精神汚染と物理的な攻撃の両方を押さえながら、って事になると、最低限の範囲での発動も難しくて。
だから、最後は殆ど体当たり同然に自分ごと巻き込むようにして発動範囲に押し込んだ。

全てが停滞した空間で、ずっと独りぼっちになる事は怖くて堪らなかったけど。
後悔は無かった。コイツが顕現した理由は、ボクがレティシアの妹として生まれた特殊な今周が原因なのかもしれない、そう思えば、当然の行為だとすら思った。
――でも、それでも。
術が発動して、全ての事象が遮断される帳が視界を遮る瞬間。
大切な姉妹が見せた、悲痛、という言葉では済まされてない表情と、泣き声混じりの悲鳴が、今でも焼き付く様に脳裏に残っている。
ごめん。
ごめんなさい、レティシア。
家族なんだから、ずっと一緒にいようって、そう言ったのはボクだったのに。
髪を振り乱して、顔をくしゃくしゃに歪めながら必死に伸ばしてくれた手に、掴む処か同じ様に伸ばしてあげることすら出来なかった。
その事実が、その記憶が齎す胸の痛みが――皮肉な事に、霧散しようとするボクの自意識を繋ぎ留めている。
それも何時まで保つのか分からないけれど。
その時が訪れるまで、祈らずにはいられなかった。
お願いです、女神様。

どうか、レティシアを。ボクの大切な家族を。
今度こそ、今回こそ、”しあわせなけつまつ”に導いて下さい。
時空ごと凍った空間の中で、この祈りが神様に届くのかは分からない。
それでも願う。それでも想う。

あぁ、でも。
必死に祈る合間にも、思い出した様に、酷く利己的な感情が顔を出してしまう。
聖女として為すべき事を為したのだ、と。どれだけ自分に言い聞かせても。
分かっていても、覚悟を決めたつもりでいても。
どうしても、本来の臆病な、ちっぽけな自分が顔を出す。
このまま独りぼっちで、消えていってしまうのは――怖いなぁ。
一度、弱虫なボクが顔を出すと、後は次々と押し殺した筈の望みが溢れ出て、頭がいっぱいになる。
会いたい。
レティシアに会いたい。
先生に、シスターに、ヴェティおじいちゃん、ミヤコさんや、アンナさん、教会の皆に。

会いたい。
皆に……会いたいよぉ……！

触覚すら曖昧になった頬を、何かが伝った気がした。
そうして、ボクは暗闇を揺蕩う。
そのときが来る、最期まで。

――そう、思っていた。

唐突に、誰かに腕を掴まれる。
全てが曖昧になっていた、ボクが、形を取り戻す。
突然の、そしてあり得ない事態に混乱して眼を白黒させている間に、暗闇の中でしっかりと誰かに抱え込まれた。
――おっしゃぁ捕まえたぁ！　シア！　上げろ!!

音なんて通る筈の無い空間で、そんな声がはっきりと響いて。
急激に、何かに引っ張り上げられるような感覚と共に、ボクの意識は一旦そこで途絶えた。

「――ア――」
こえが、きこえる。
「――リア――」
ずうっと、ききたかった、こえ。
「――アリア！」
あぁ、そうだ。
これは、ボクの、かぞくの。

声に応えたくて、重い瞼をなんとか開く。

久しぶりに感じる光は眼に突き刺さる様で、視界が白んで、明滅する。
どうやら身を横たえているらしいボクを抱きかかえて、必死に名前を呼んでくれる、その声の主の姿もボヤけてしまって分からない。
でも、分かる。
ずっと一緒にいたんだ。
滲んだ視界でだって、キラキラと淡く輝く金色の髪も。
額がくっつく様な距離で、覗き込んでくる不安気な――ボクとお揃いの空色の瞳も。
白く染まった視界が色を取り戻して、ボヤけた焦点が像を結んだ。
――あぁ。
あぁ、あぁ……！
どうして、どうやって、今、封を解いてしまったら、なんて。
そんな浮かんで当然の疑問は、これっぽっちも頭の中にかすめもしなかった。
だって、レティシアがいる。
ずっと会いたいと思っていた家族が、目の前にいるんだ。
「……ぁ、れ、てぃ……」
長らく使っていなかった声帯は、掠れた声しか出してくれなくて。
それでも、ボクが名前を呼ぼうとしたことを理解したのか、レティシアは何時かの様

に、顔をくしゃくしゃにして、その瞳に大粒の涙を浮かべた。

「――ッ、ぅあ……アリ、アぁ……よかっ……た……！」

最期だと思っていた、脳裏に焼き付いていたあのときの姿より、ちょっとだけ大人びた顔立ちになった自慢の姉は。

成長した姿かたちとは真逆の、ちいさな子供に戻ってしまった様に、ボクを抱き締めてぽろぽろと涙を零し続ける。

でも、ボクも人の事は言えなかった。

光に慣れた筈の視界が、再び滲む。

力の入らない腕を持ち上げて、なんとかレティシアの着ている僧服の襟元を掴んで、頭を押し付ける。

もう一度、会えた喜びと安堵に胸を掻き乱され、涙腺は簡単に決壊を始めた。

「……ごめ……な、さぃ……あぃたか……た」

「うん……うん……！　いいんだ、もう、いいんだよ。オレも、会いたかった……！」

お互いに、しゃくりあげる様な嗚咽混じりの声で、言葉を交わし合って。

――いいシーンなんだから、無粋な真似すんなや三下。
そんな声と共に、何かを叩き潰すような水音が聞こえて――ボクは漸く、誰かがボク達の前に立っている事に気付いた。
こっちに背を向けて、前方に対して立ち塞がるその人は、元いた世界ではありふれた、黒髪の男性だった。
「――ッ！　あり、がとう、お前の御蔭で、やっと、オレは……」
――礼は後で聞くわ。おいでなすったぞ。
レティシアの知り合いらしきその人は、涙を拭って感謝の言葉を伝えようとした姉(あに)の言葉を遮ると、半身になって腰を落とす。
黒髪の人の向こうには、封を解かれた時空凍結の名残り。
其処から、ボクが自身諸共に封じたアレが、ゆっくりと這い出ようとしていた。
先程の水音は、アレが伸ばした触腕を彼が打ち落としたものだったみたいだ。
あぁ……そうだ、どうして僅かな間でも忘れてしまったんだろう……！
やっぱり、多少の年月を封印された位では、消滅どころか弱体化すらしていない。
封を解いてしまったら、こうなるってレティシアが理解して無い筈が無いのに……！
動かない全身を叱咤して、なんとか身を起こそうとするけど、長い間封印に巻き込まれていた身体は魔力が枯渇し切って衰弱が激しく、立ち上がろうとする意思にまるで応

えてくれない。
ダメだ、逃げて。ソレは、戦う処か、目視するだけでも危険なんだ。
干上がった喉を震わせて、なんとか男の人に声を掛けようとする。
なのに――。
――雑な影絵みたいなナリしてる癖に、ひっでぇ臭いしてんなぁ。夏場の肥溜めだってもうちょっと慎ましやかな香りじゃね？
おぉ、くせーくせー。なんて、おどける様に肩を竦めるその人は、邪気の影響を受けているようには全く見えなくて、ボクは唖然とする。
「……気を付けろ、ソイツは精神汚染の特性だけじゃない、曲がりなりにも上位眷属だ。なんとかオレもサポートするから、一旦――」
――いらねーよ、いいからそのまま妹ちゃんの治療と自分達の結界だけ維持しとけ。
折角の再会なんだから、もうちょっと浸ればぇぇねん。それくらいは許されて然るべきだろ、お前は。
レティシアの提案を蹴って、なんでもない事の様にそう言うと。
背を向けたまま、手をヒラヒラと振ってその人は肩越しに振り返って――ちょっと笑った。
「……大丈夫なのかよ、手はあるって言ってたけど、お前の力じゃ……」

――妹ちゃんも、言った通りに引っ張りだせたやろ？　ちったぁ信用しろって。いいから姉妹仲良く、再会のお喋りでもしてな――泥の一跳ねも通さねぇよ。

一体、何者なんだろう、この人は。

放っておけば人類を敗北に追い込むとすら思えた、邪神の悪性の具現にも全く怯まない、精神干渉を受けない。

レティシアとも妙に親し気だけど……ボクはこんな人知らない。

次々と疑問と困惑が湧いて、つい、掠れてまともに出ない声のままに、ボクは問いかけていた。

「……だ、れ……？」

――通りすがりの、ただのにぎやかし要員だよ、銀の聖女様。

そう、飄々とした笑みを彼は返して、正面へと向き直る。

――さて、コレが初お披露目……俺の戦いの、号砲だ。首洗って待ってろ邪神と取り巻き共。

――《起動》

静かに、だけれど、これ以上無いくらいに闘志を漲らせた声が、戦場の跡地に響いた。

「……懐かしい夢をみたなぁ」

ここ数日で見慣れてきた天井をぼんやりと眺めながら、つい感慨深い声が洩れる。

ボクとにいちゃんが始めて出会ったあの時――最後の『繰り返し』の前に起こった出来事を思い出して、胸が暖かくなった。

敵ごと封印されていた間の時間は、今思い出しても背筋が寒くなるような、酷く重苦しい記憶だけど。

大切な人との再会と……大好きな人との邂逅の記憶は、その苦しさを塗りつぶして余りある喜びを齎してくれた。

今更だけど、いくら消耗が激しかったと言っても、もうちょっと頑張ってにいちゃんを見ておけば良かった。

今だったら、最初に見せてくれた笑顔も、その後、ボク達を背にしてあの眷属を相手

に一歩も引かずに戦って、勝ったその姿も――全部ぜんぶ、眼に、心に、焼き付けるのに。

あぁ、勿体ないなぁ。なんでもっと良く見ておかなかったんだろう。

余りに懐かしく……今になって思い返すと、甘やかな痺れが身体の芯を奔るような、そんな夢だったせいか、未練がましい想いが湧いて止まらない。

夢に見た感情の名残りが胸に残っているうちに、記憶にある朧気な当時の光景を反芻して、何度も何度も、あのときのにいちゃんの姿を思い出す。

「ふへへっ……」

寝起きの茫とした意識の中で、上機嫌なままに自分の顔がだらしなく笑み崩れていくのが分かった。

あー、いいなぁ。やっぱり好きだなぁ。

もっと早く好きになればよかった。そうしたら、もっといっぱい素敵な思い出が増えてたに決まってるもんね。

寝台の掛け布を胸元にひっぱり上げて、抱き枕代わりにだきしめる。

幸せな気分のまま、そのままうとうとしていると……。

部屋の外で、空気を裂く鋭い音が響き渡り、一気に意識が覚醒した。

「……うわっ、もう始まってる。準備しなきゃ」

寝ぼけ眼を擦って窓を見てみれば、微かに空が白んで、夜明けの太陽が朝焼けを生み出そうとしていた。
あぶないあぶない、二度寝しちゃったら間に合わない処だった。
掛け布を剥ぎ取ると身を起こして、寝台から降りる。
いつもより遅めになっちゃったから、急がなきゃ。
そうしてボクは、《半龍姫》様が用意してくれた客間から、慌ただしく飛び出した。

手早く髪を後ろで纏めると、三角巾を頭に巻いて、前掛けを身に着けて胴紐を腰で結ぶ。
ホントは水で顔を洗いたかったけど、ちょっと寝坊しちゃったので浄化魔法でズルをして。
「――よしっ、始めよう」
軽く頬を両手でたたいて、気合を入れた。
厨に入ると真っ先に竈に向かい、魔法で火を付ける。
薪を何本か追加して、昨日の内に水瓶に汲んでおいた清水を鉄鍋に注ぐと、竈の上に

置いた。

次は米櫃だ。

個人的にはここに来て、これが一番びっくりしたよ。お米が普通にあるんだもん。

香りも味も、かつて元の世界で食べていたものと殆ど遜色ない。

是非ともお土産に――うぅん、種籾を分けてもらって教国で量産体制に入りたかったけど、にいちゃん曰く、米の品質自体は古代米と大差無い。霊峰のアホみたいに肥沃な土地効果あってこその味、らしいので、ボク達の国で育てた処で出来る品はお察しみたい。すっごく残念。

米パワーの効果なのか、にいちゃんがたくさん食べるので、ちょっと多めに笊にあけて、こまめに水を注ぎながらお米を研ぐ。

糠を落としたら陶器に移して水を張り、米粒に水分を浸透させる。

それを待っている間に、火にかけた鉄鍋で汁物の出汁を取っておく。

厨の窓際に吊るされた茸の干し物――は、今日は必要ないかな。昨日多めに作っちゃったから。

棚に置かれた根菜類を幾つか手に取って、手早く刻むと鉄鍋に放り込んで、少し経ってから小瓶に詰めていた作り置きの出汁を注ぐ。

茸の出汁だけだとちょっと味気ないから、干し肉を削って少し追加しよっと。

あとはお米を土鍋に移し替えて、鉄鍋の隣に並べて火にかける。
鉄鍋の方は、食事の直前に温め直しながら味を調えるので、一旦竈から引き揚げて。
あとはご飯が炊きあがるのを待つだけ～。
厨にある床几に腰掛けて、足をブラつかせながら、火にかけた土鍋がぶくぶくと泡を吹いているのを眺める。
待ってる時間は特に長いとは感じない。
耳を澄ませば、外からは鋭い息吹や、小気味良い打撃音。
にいちゃんも、《半龍姫》様との朝稽古を頑張ってるみたい。
二人が早朝から稽古を始める間に、ボクが朝ごはんの準備をしておくのも、大分慣れた。
最初の三日くらいは、《半龍姫》様に厨の使い方を教えてもらったり、妙に土鍋でお米を炊くのが上手だったにいちゃんにコツを聞いたりしたけど、結構上達したと思うんだよね。
ちょっと大変だったけど、かなり本気で、必死になって取り組んだおかげかな。
だって、さ。
こうやって、朝に早起きしてご飯の準備して待ってるのって……なんだかボクが、にいちゃんの……。

竈の薪が弾ける音がして、我に返る。
気恥ずかしい想像を振り払いながら、土鍋の蓋をちょっと開けて中身を確認すると……うん、いい感じだ。
竈から土鍋を下ろすと、蒸らしと保温を兼ねて、風呂敷みたいなサイズの厚手の布で包み込む。
「よーしっ、準備完了！　二人の稽古を見にいこう！」
やっぱり何時もよりは少し遅くなっちゃたけど、今からでも幾らかは見学出来る筈だ。

前掛けだけは外して食卓の椅子に掛けて、屋敷の入口の扉を開ける。
外にでて直ぐの開けた空間は、練武場変わりに使われる広場になっていて、そこで二人は熱心に修練を行っていた。
にいちゃんは既に黒い鎧を纏っていて――本人が言う処の完全起動で、縦横無尽に広場を駆け巡っている。
魔鎧を全身に纏ってるという事は、型稽古や技の確認は終わって、朝稽古の最後の〆

に移ってるって事だ。

相対する《半龍姫》様の背後には、幾つかの魔力球が彼女に追随する様に浮遊していて、にいちゃんが激しく移動を繰り返しながらそれを狙う。

これは、魔鎧を全力で使用して師に拳を向けるのを嫌がったにいちゃんに対して、《半龍姫》様が代替案として提案したものだ。

本人ではなく、その周囲に浮遊させた魔力塊を狙う。師の守りを抜いて、それを破壊すればにいちゃんの勝ち。

逆に、壊されなければ《半龍姫》様の勝ちだ。

なんだかレクリエーションでやるゲームみたいだけど、この二人が本気でやるとなると、ボクの眼からみても見応え処じゃない凄い光景になる。

正面から相対していたにいちゃんが、一瞬で彼女の背後に回り込む。

振り向こうとした《半龍姫》様が身を翻すと、その回転方向に合わせて、にいちゃんは凄い速度でスライド移動した。

瞬きよりも短い間に、音の壁を超える加速を二回。

右、前と魔力噴射で短距離加速し、背後をとった位置関係を維持したまま、魔力球に蹴りを叩き込む。

直撃して、浮かんだ内の一つが四散するかと思われた瞬間、横手からいつの間にか伸

びた繊手が蹴り足を絡め取って優しく逸らす。
それだけで、にいちゃんの身体は明後日の方向へと錐もみしながら吹き飛んだ。
でも、鎧の全力を引き出した今のにいちゃんがその位で止まる訳がない。
空中で魔力を高速放出して、一瞬で静止する。
そのまま身を丸めながらぎゅるりと縦に回転して、天から注ぐ落雷のような速度で踵が振り下ろされた。
頭上から、踵がギリギリ触れる間合いで魔力球を強襲する。
一連の動作が目にも止まらぬ速さで行われたけど、《半龍姫》様は慌てず騒がず、先ほどと同じように掌を蹴りに添え――その瞬間、黒鎧の痩躯が赤い魔力導線の燐光を引きながら、左、前、右とコの字を描いて超高速移動。
今度はお互い、背を向け合う体勢で交差し、振り向きもせずににいちゃんが手刀を振るう。
魔力強化した視覚ですらかろうじて残影が残るくらいの速度で繰り出された、ボクが知りうる限り、どんな名剣よりも鋭い――魔獣も、”信奉者”も、邪神の上位眷属だって一刀両断してきたソレを、《半龍姫》様は特に表情を変えずに逸らす。
……よくよく考えてみれば、どっちも力の収束や操作に長けているとはいっても、にいちゃんが全開で技を振るって周囲に全く被害が出ないっていうのはおかしいんだ

よね。

これ、多分《半龍姫》様が受け流した余波とかも全部散らしてるんだろうなぁ……。

ボクだって同じ事が出来ない訳じゃない――聖殿の見習いの子達や、そう強くない魔獣相手になら、だけど。

けど、魔鎧を完全に起こした状態のにいちゃん相手にそれをやるって……シスターだって一回成功させられるかも怪しいよ。

手刀を流されたにいちゃんはそのまま腕を掴まれて、畑の大根を引っこ抜くような動作で無造作に宙へと投げ出される。

放られたままなら遥か上空まで飛んで行きそうな勢いだったけど、再度魔力噴射して空中制動を掛け――何かを振りかぶる様な動作から、腕を鞭のようにしならせて振りぬいた。

銃弾を遥かに超える速度で飛来して魔力球を壊さんとする無数のソレを、《半龍姫》様が弧を描く軌道で手をかざし、受け流す。

最後の一つだけを掌に掴み取って、彼女は手の中の投擲物の正体をしげしげと眺めた。

「成程、装甲の破片ですか……形状も投擲に適していますね」

わ、これって新技じゃない？　少なくともボクは初めてみた。

下手な金属より硬いし、魔力があれば復元する魔鎧の装甲。確かに弾として運用するのは理に適ってるのかも。

感想が述べられる間に地面に着地したにいちゃんは、そのまま低い姿勢で《半龍姫》様に肉薄して、直前に――ホントにボクの視界から消えた。

うわぁ、稽古なのに本気も本気の速度だ。万が一にも相手に怪我させる様な内容じゃない分、夢中になってるのかな。ちょっとムキになってないこれ？

《半龍姫》様の周囲で、空気を蹴破る様な音と衝撃が連続で響き、まるで空裂音のドームみたいに彼女を覆う。

こうなると、身体強化したボクの知覚でも振り切られてしまうので、その姿を捉える事は出来ない。

「速さは素晴らしいですが、歩の出入りが荒いですよ」

あの速度で攪乱されて、のんびりと感想を述べる《半龍姫》様を見ると、やっぱり言い伝え通りの凄い人なんだろうなぁとしみじみ思う。

その当人は軽く腰を落としたまま、どこか緩やかですらある動きで軸足を使って円を描き、何かを捌き、避ける動作を行っていた。

地面が弾ける光景から察するに、多分にいちゃんは、こっちの視界から消える速度を維持したまま、さっきの投擲を連続で繰り返してるみたい。

うわー、えっぐいなぁ。これ、大人数で四方八方を囲んで散弾銃で撃たれてる様なものじゃない？　なんであんなゆっくりした動きで対応できるんだろう。

投擲の貫通力にもよるけど、ボクだったら全方位の障壁を張って待ちの態勢になるしかないかなぁ。どのみち見えないし。

明らかに余裕みたいだし、この方法は《半龍姫》様には有効じゃないみたいだ――多分、魔力球無しの普通の組手だったら棒立ちで受けっぱなしでも平気なんじゃないかな。

弟子であるにいちゃんがそれを分かって無い訳がないので、本命があると思うんだけど。

そして、その本命は直ぐに来た。

無数に乱れ咲いていた宙を駆け抜ける衝撃音が、一瞬途切れる。

《半龍姫》様がわずかに目を見開いて「あら、上手」と呟くのと同時に、にいちゃんが音も無く彼女の右方に姿を現して――その像が揺らいだかと思うと、次の瞬間には左から膝を跳ね上げていた。

……リアル残〇拳だこれ!?

夢中になって集中してると思ったらこれがやりたかったのかぁ……にいちゃんはやっぱりにいちゃんだったよ。

ちょっとは意表を突かれたみたいだけど、やっぱり《半龍姫》様は対応を間に合わせる。

繰り出された魔力球への廻し蹴りが届く前に受け流し――つま先の軌道の先にあった魔力球が、一つ、音を立てて弾けとんだ。

「うわ!?」

「あら?」

――やったぜ。

三者三様、それぞれの呟きがこぼれると同時。

纏った鎧が突如解除され、生身に戻ったせいで最後の蹴りを捌かれた勢いを殺しきれないにいちゃんは、凄い速度で上空斜め上に発射されていった。

――うぉぉぉぉぉぉっ!? アカン死ぬぅぅぅぅぅぅ!?

「に、にいちゃーーーん!?」

「……流石にあの高さは危険ですね」

この後、無茶苦茶お姫様だっこで助けられた。

むぅ、ボクがしてみたかった。

二人が稽古を終え、準備していた朝餉を手早く仕上げて。
いつもの様に三人で卓を囲んで、ボク達は朝食を摂りはじめた。
ボクと《半龍姫》様は体格もあってか、そんなに量は食べないんだけど、にいちゃんが凄い。猛稽古でお腹を空かせてるのもあって、よく食べた。
何杯もおかわりするので、すぐにご飯や汁物をよそってあげられるように椅子をなるべく寄せて近くで一緒に食べる――色々と、役得だよね。
「これまでの稽古から判断するに、最大出力が多少落ち、代わりに扱い易さが向上している、と言った処でしょうか？」
汁物を啜っていた唇を椀から離し、《半龍姫》様が現状で分かった魔鎧の変化について考察する。
――そんな感じっすねぇ。力の収束全般が楽になったんで、攻撃の威力はそう変わらん感じですけど。
口いっぱいにご飯を頬張りながら、にいちゃんが首肯した。駄目だよ、飲み込んでから喋らないと。
行儀が良くないとは思うんだけど、美味しそうにもりもり食べておかわりを要求してくるのが嬉しくて、ついつい笑顔でご飯をよそって渡してしまう。

「はい、まだおかわりはあるから、慌てないでね」
——おう、ありがとう。あー、うめぇ。やっぱ米はいいよなぁ。
「《半龍姫》様は、おかわりはどうですか？」
「ありがとう。でも、今日は大丈夫ですよ」
しゃもじを置く前におかわりが必要か確認してみたけど、今回は無しみたい。
優しく頷いてくれる彼女に、同じく頷き返すと、ボクも箸を手に取って食事の続きを再開する。
「問題は継戦能力ですね。肉体への反動を大きく減衰させる代わりに、どうやら魔力の消耗が激しい場合は鎧が解除されてしまうようですが？」
——それな。前は魔力切れ起こしても、体力生命力とバーター出来たんですけどねぇ。
何でもない事の様ににぃちゃんが言うけど……そんな機能が無くなったっていうならその方が絶対いいよ。
——いや、そうでもないぞ？　魔力枯渇は撤退の目安の一つだしな。空っけつになったら体力を代替にして鎧ちゃんを維持したまま退くってのが出来なくなったって事だし。
「普通は枯渇する前に撤退するし、そもそもにぃちゃんは生命力に切り替えても戦い続

ける事の方が多かったじゃん……あんなのは、もう嫌だよ」
にいちゃんが戦うところを見るのが嫌いって訳じゃないよ。
寧ろ逆かもしれない。格好良いところを見ればドキドキする、それがボクを――ボク達を守るためだというなら猶更に。
でも、やっぱり自分の血で真っ赤になったり、傷だらけで意識を失うような目に合ってるのを見るのは……辛かった。嫌だった。
自分でも矛盾してると思う。それでも、嫌なんだ。
そんな思いを込めてジッと顔を見つめたせいか、にいちゃんはバツが悪そうに顔を逸らす。
空気が気まずくなる前に、茶碗を空にした《半龍姫》様が、そっと箸を置いて再度口を開いた。
「機能を喪失した、というより魔鎧側の方で制限を掛けた、といった方が正しいのでしょう。主である貴方が強く望むか、危機に陥って必要とすれば嘗ての使い方も可能な筈です」
お茶を淹れた椀を手に取り、それを一口啜ると、一息ついて続ける。
「そちらに気を割くよりも、使用時間自体を延ばす方が賢明でしょう。やはり、貴方の拳の精度を上げる事が重要になりますね」

——あー……鎧ちゃんの魔力奪取と《地巡》で随時燃料補給していく感じになるんですかね。

「そうなりますね。意識して、魔力の循環を合間に挟む立ち回りを身に着けるように」

うぃ、りょーかいしました。なんて渋い顔で頷くにいちゃんに、《半龍姫》様は微かに口の端を引いて目を細めた。

「その魔鎧は既に貴方だけの物です。年月を経れば、貴方の持つ力や技能に合わせて細やかに最適化されてゆく筈——《報復（ヴェンジェンス）》という通称では無く、いずれは正式な銘を与えるべきでしょうね」

——そういえば、そうかぁ。相棒の名前とかプレッシャーやなぁ……ネーミングセンスが問われるとか今まで無かったから、クソ不安なんですけど。

「貴方の発想力は奇妙ですが、悪くないと思いますよ。先ほどの稽古の最後の攻防、つま先の装甲を使った投擲もあのルールの中では妙手でした」

いやぁ、ちょっとやってみたらイケただけですけど。と、食事の手を止めて頭をかくにいちゃん。

けどさ、アレって《半龍姫》様だからちょっとユニークな発想って評価に落ち着くけど、普通に接近戦では厄介極まり無いよ？

拳速や蹴撃の加速を利用して、装甲を魔力噴射で鋭利な破片として飛ばす。シンプル

だけど、これ、全部の攻撃に連動されて散弾とか、大口径の銃弾が追加発射されてくる様なものじゃない？　しかも直接攻撃力は据え置きのままで。下手すると防御の時にも応用できるだろうし。

先生みたいな素の防御が硬い人には効果も薄いんだろうけど……速度型の人がカウンターでくらったらちょっと洒落にならない事になると思うんだ。

にいちゃんの事だから、対人性能寄りの攻撃なんて大して重要視して無いんだろうけど。

「なんにせよ、貴方たちもあまり長期に渡って国を留守には出来ないでしょう。あと幾日かの間に多少なりとも拳の修練を進められる様、何か考えてみましょうか」

そう締めくくった《半龍姫》様の言葉に、食事を再開したにいちゃんは、頬を大きく膨らませてもぐもぐとご飯を咀嚼しながら、大きく頷いたのだった。

「はぁーっ……今日も一日お疲れ様でした」
湯に浸かりながら、大きく伸びをした。
既に日は傾き、霊峰から見下ろせる山々に太陽が隠れようとしてる。
大きな釜を浴槽代わりにして入る五右衛門風呂は、当たり前だけど外に設置してある。
にいちゃんが言っていた、木作りの仕切りと薪をくべる石台を備えられたそれは、思ったよりずっと立派なお風呂だった。
入る度に絶景を背景にした露天風呂気分を味わえるんだよね。世界最高峰と世界最危険を兼ねた秘境の天辺、そこからの景色を眺めながらの入浴ってものすごい贅沢だと思う。
「お疲れ様とは言ったけど……こんなにゆったりした時間は久々だなぁ」
聖都だとなんだかんだと言ってスケジュールがしっかり決まっていたし、にいちゃんが帰って来てからは、一緒に遊んだり出掛けたりする為になんとか時間を捻りだしたりしてたし。
この旅の間は、時間をとらなくてもずっと一緒にいられるし、此処に滞在してる間に至っては、ボクのやってる事なんて家事手伝いのおさんどさん擬きだけだ。
大使としてしっかりしなきゃ、なんて気合を入れていたのは初日だけだったと思う。

実質、長めのリフレッシュ期間みたいになってるなぁ……こうなると、レティシアに対してちょっと申し訳ない気持ちが湧いてくる。

最後には快くボク達を送り出してくれた姉の姿を思い出して、悩まし気に吐息をついて、湯舟に鼻まで沈み込む。

ぶくぶくと気泡を吐き出しながら、ぼんやりと夕焼けの空を見上げた。

魔道具で声は定期的に聞けているけど……やっぱり顔が見たいかな。

考えてみれば、今朝方も夢に見た、あの再会以来、レティシアとこんなに長く離れる事って無かった気がする。

自分から積極的に今回の旅の同行者になった癖に、どうやらボクは早くも姉が恋しくて、ホームシックにも似た感情を抱いてしまっているようだった。

だって仕方ない。

にいちゃんとまた長く離れるなんて、考えたくも無くて、旅に付いていこうって思ったけど。

家族であるレティシアの事だって、大好きだから。

にいちゃんに助け出されて、レティシアの『繰り返し』に一緒に同行するなんて、奇跡みたいな幸運と機会を得られて。

多くの出会いと、戦いを超え、あの戦争を終わらせて――最後の最後に大きな喪失を

味わって、でもそれは再び手の中に戻ってきた。
様々な経験を経て弱虫は卒業出来たと思っていたけど、その分、ボクは我儘になったのかもしれない。
平和になった、なってゆくであろうこの世界で。
このままずっと、三人で過ごせていけたらなぁ、っていつも思うんだ。
「それはそれとして、にいちゃんの隣は欲しいけどね」
湯面に浮いて広がった、自身の髪を掬い上げながら、そこに映った揺らめく自分の姿を見つめる。
「見た目は悪くないと思うんだけどなぁ……」
長年向かい合ってきた姿なので、今いち実感は薄いけど一応美少女の部類には入ってると思うんだ。
でもそれはレティシアも同じだし……やっぱり、差をつけるとしたら……お、おっぱい、なのかな。
ふにふにと、あんまり大きいとは言えないソレを揉んでみる。
……これに関しては、遺憾ながらこの世界の平均値にすら届いていないと言わざるを得ない。姉（レティシア）よりはマシだと思いたいけど。
ちょっとマッサージとかもしてみたりしたけど、あんまり効果がある感じはしなかっ

た。

……揉まれると大きくなる、ってよく言うよね。自分でやっても意味無いのかな。

未練がましくマッサージを試みながら、なんとなく――なんとなく、誰かに揉んでもらう光景をイメージした。

「――にい……」

〜〜〜〜ッ！　ダメだ、ボクは馬鹿かよっ！

一瞬で顔が茹で上がる感覚がして、誤魔化すように頭まで湯舟に沈み込む。

そもそも欲しい相手の為におっきくしたいって思ってるのに、欲しい相手に揉んでもらわないと駄目って破綻してるじゃんか！　酷い穴だらけの理屈だよ！

ひとしきりお湯の中で身悶えすると、勢いよく湯舟から半身を飛び出させて、気を落ち着けるように深呼吸する。

「……ハァ」

なんだか、自分が酷くバカな事で悩んでいるような気分になって、溜息が洩れた。

……そろそろ上がろうかな。

そう思って、釜の縁に手を掛けると。

――おーい、そろそろ薪を追加したいんだが、今大丈夫かぁー？

丸太を組んで作られた仕切りの向こうから、そんな声が聞こえて、慌てて湯舟に肩ま

で沈み込む。

石台のおかげで、釜は地面より高い位置に設置されているので入ってる人間の姿なんて見えやしないんだろうけど……気分の問題だよ！

「だ、大丈夫だよー、どうぞー！」

さっきまでの余韻を引きずっているせいか、声が上擦りそうになるのを、なんとか抑える――落ち着けボク、ほんとに落ち着いて、頼むから。

必死に気持ちを落ち着けようとしていると、薪を抱えたにいちゃんが、律儀に目を瞑ったまま仕切りの向こうから現れる。

――おう、寛いでいるとこスマンな、さっさと終わらせるからちょっと待ってくれ。

そう言って、石台の下に屈み込むと、手慣れた様子で――実際、風呂を沸かしているのはにいちゃんなので手慣れているんだろう――薪を追加して、木筒で息を送り込んで火の勢いを調節する。

――お湯の温度はどうや？　熱くない？

「う、うん、ちょっと温くなってきてたから、少し上がるくらいなら丁度良いよ」

――顔、赤くね？　のぼせる前にちゃんと上がれよ？　あと上がったら水分取りなさい。

こっちの声色からおかしいと思ったのか、閉じていた眼は開かれ、此方を心配そうに

見上げていた。
釜の縁から鼻梁から上だけ覗かせて返答したんだけど、にぃちゃんにはボクの顔色くらいお見通しだったみたいだ。
喜びと気恥ずかしさでますます顔に熱が集まるのを感じながら――お風呂の熱以外から生じた、身体の奥の熱っぽさに押されて。
「うん……でも、ボクまだ髪を洗ってないんだ。だから――洗うの手伝ってくれないかな？」
気付けば、そんな言葉を口にしていた。
――馬鹿言ってんじゃねーですよ。子供じゃないんだから、自分で洗いなさい。
にぃちゃんは、そんな風に、ボクの言葉を笑って受け流す。
うん。そうだね、にぃちゃんならそう言うだろうと思ったよ。
でも、でもね。
「えー、でも、前は洗ってくれた事あったじゃん。いいじゃんかー、今日も洗ってよー」
分かってるんだよ。もう、小さかったままじゃない。外身が変わっても、心は前世の――男の子のつもりでいたあの頃のままじゃない。
――三年以上前の話だろーが。はしたなくってよ、聖女様。
「なら、聖女様のおねがいだ、どうかボクの髪を洗ってください！」

分かってるんだ、だからこんな風に、こんな事を言ってるんだよ。

――聖女様なら御自分の洗髪くらい、自分でしましょう――のぼせる前にな！　ほれ、ハリーアップ！

「ちぇーっ」

そうやって、笑い合いながら。

何時かの暗闇とは違う、綺麗な星空が広がる空の下で、願う。

すぐじゃなくてもいいんだ、でもいつか。

いつか、彼がボクの想いに、気付いてくれますように。

湯舟の中から見上げた星空に、小さな流れ星が一条、輝いて見えた。

霊峰での各々（後編）

苦悶の表情を浮かべた死霊の塊が、雪を穢す様にぶち撒けられる。
白く染まった雪面だけでなく、その下にある大地まで侵食するように、強酸が染み込む様な音を立てて死霊は弾け飛んだ。
――だが、本来狙った相手には掠めもしていない。
霊峰の麓、その雪原を更に白く染めるが如く、色濃く満ちた朝霧の中を霧の一部と見紛う白い四肢が駆け抜ける。
朝靄に同化する様に半ば姿を消しながら、音も無く邪神の信奉者達に爪を叩き付けたのは、真っ白な毛並みの大狼だ。
擦れ違いざまに半身を抉られた男が、鮮血と内臓をばら撒きながら雪の上に転がった。
「おのれ、畜生風情が！」
仲間を殺されたせいか、単に良い様に翻弄されているが故の怒りか、駆け抜ける獣の背に罵声と共に様々な魔法が放たれるが、白い毛並みに覆われた体躯が霧に同化するか

の様にかき消え、悉く不発となる。
「また消えたかっ！　厄介なっ」
「間違いなく高位の霊獣だ！　こちらの障壁を容易く貫いてくるぞ！」
「魔力障壁では駄目だ、繰屍（コープス）か召喚魔法を使って壁とせよ！」
　口々に警戒の怒声をあげながら、男達は手近な者と背中合わせになって死角を消し、様々な生物や死せる繰り形を喚び出す。
「ちっ……霊峰の最上位――主級がこの様な麓をうろついておるとはな……」
　喧々囂々に霊獣――《霧狼（フォグ・タスク）》と呼ばれる白狼の対処に追われる配下を眺めながら、一歩引いた場所で戦闘を俯瞰していた老年の屍使いが、忌々しそうに舌打ちした。
「如何に力に溢れていようが、所詮は獣――そう、思っていたが……」
　無造作に杖を掲げると、足元から飛び出すように、ここ数日の間に傀儡とした《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》の屍が召喚される。
　直後、青白く凍った巨体の右腕が千切れ飛び、それを為した影が軽やかに跳躍して屍使いの頭上を越えて背後へと降り立った。
　食い千切った巨人の右腕を吐き捨てると鋭い視線を向けてくる白狼に、屍使いは寧ろ関心した様な表情をみせた。
「やはり部下共を相手にしながら此方を伺っていたか。儂を群れの長と判断しながら、

直ぐ様に牙を向けるのではなく、隙を晒す瞬間を狙う……此方の役立たず共より余程頭が回るとみえる」

追加の《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》の屍を喚び出して壁を作りながら、屍使いは杖先に魔力を充填させる。

「少々予定外ではあるが、まぁ、よい。大狼よ、貴様の躯があれば他の主級の攻略も容易かろう。我らの神に捧げる贄となれ」

再び霧と同化する白狼へと、風を纏った魔力が叩きつけられた。

既に姿を消した巨躯へと向け、嘲るように鼻を鳴らすと、屍使いは強風によって散らされた霧が再び立ち込める前に、《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》に冷気を操らせ、霧を無数の氷塊へと変える。

「ふん、やはり霧が無ければあの隠形は不可能か」

その間に白狼の強襲が無い事に自身の推測への確信を強めると、男は配下へと一喝した。

「狼狽えるな馬鹿者共が！　この様な早朝にアレが襲撃をかけてきたのは、この時刻こそがアレの得意とする濃霧が辺りに満ちる刻であるからだ！」

さっさと霧を散らせ、愚図め！　という屍使いの言葉に、配下の男達が慌てて風の魔法やこの地で手に入れた氷を操る繰屍（コープス）を用いて周囲の朝靄を払い始める。

「師よ、主級の隠形を潰したお手並みは流石ですが……少々時間を掛け過ぎています。このままこの場での戦闘を続ければ、隠蔽の魔法に綻びが発生するやもしれません」

脇に控えていた配下――弟子の内の一人がそう危惧すると、屍使いは顎髭をしごきながら思案する様に唸る。

「ふん。とはいえ、アレが此方を見逃すとも思えん。短時間で仕留めようにも、その為に伏せ札を使えばどのみち隠蔽は難しくなる――そうなれば頂上にいるであろう、かの龍が気付かぬ筈が無い」

――或いは、既に気付かれていて、この白狼は斥候代わりなのかもしれぬ。

最悪の予想も脳裏を過ったが、口には出さない。己の弟子を含む数名はともかく、他の木っ端共はただでさえ士気が低い。最低限使い潰せるだけの動きは保持させねばならなかった。

周囲の霧が払い除けられると、ゆらり、と、遠間にある空間がゆらぎ、白狼の巨躯が露わになった。

自身の隠形が短時間で見破られた事に警戒を覚えたのか、その金色の瞳には一切の油断は無く、静かに男たちを視界に収めている。

だが、それは屍使い側も同じだった。

「手札を一つ潰したとはいえ、相手は主級の霊獣。甘く見れば即座に喉笛を食い千切ら

れると思え」
　男の声に配下の者達が呼応し、召喚した壁役を前面に押し出して緩やかに包囲網を描く。
「無理に囲み切ろうと思うな、四足の霊獣の脚力は人のソレでは追いきれぬ。死角を消す為の二人組を維持したまま、速さを削ぐ事を優先とせよ」
　男にしてみれば、此処で負けるのは論外だが、折角の主級を逃すのも悪手であった。今の様にある程度有利な盤面で戦える状況、というのなら猶更である。
　背後の弟子に僅かに視線を遣り、当人にしか届かぬ声で小さく指示を呟く。
「貴様は引き続き、隠蔽の範囲結界に注力せよ。維持が難しいのであれば――構わん、役立たず共を何人か『喰って』でも魔力の補填を行え」
「承知しました、師よ」
　言葉少なに頭を下げる弟子に頷きを返すと、屍使いは杖に魔力を込めながら、己も一歩前へと、歩を進めた。
「さぁ、最初の大物狩りよ。汝らの信仰を神に捧げるが良い！」

――信奉者達は、追い詰められた白狼が逃走に徹する事を最大の危惧としていたが、当の彼にはどんなに劣勢となろうとも、逃げ出すつもりは微塵も無かった。

野に生きる獣である彼にとって、逃げる事は決して恥ではない。

霊峰における闘争とは、生きる為の糧を得る手段であり、それ以上の意味は持たない。

だが、何事にも例外は存在する。

――嫌な匂いだ。と、最初に眼前のヒトの群れの匂いをその嗅覚で拾ったとき、まず思った。

性質が合う、合わないというのはたとえ自然界であっても、高い知能、強固な自我を有する霊獣ならば、持ち合わせていて当然の認識だ。

事実、霊峰内で白狼と同じく主級と呼称される個体でも、反りの合わない相手はいる。

だが、コレはそういうレベルの話では無かった。

群れのオス共の多くが放つ、身体に染み込んだ死臭も酷いものだが、もっとその奥――精神か、魂か。

そこから滴るように零れ、大気に乗って届く悪臭は、毛並みが逆立つ悪寒と凄まじい嫌悪を掻き立てる。

ヒトという生き物自体は、何度か見た事があるし、知っている。
だが、コレは違うモノだ。
皮と肉は同じかもしれない。けれど、その奥にあるものが致命的にヒトから――否、この世にあるべき生命から外れていた。
本来ならば、自身の縄張りに踏み込んでこない限り、関わりたくも無い。誰がすき好んで糞塗れの汚泥に鼻先を突っ込みたいと思うのか。
だが、そうもいかない理由が、こうして山を下りて己の有利な朝靄立ち込める刻に強襲を仕掛ける理由が、白狼にもあった。
《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》や《地蛇竜（アスウォーム）》といった、山の麓で暮らしていた者達の屍が、どこかギクシャクとした動きで白狼に襲い掛かる。
元が屍であるが故か、手や足を爪で削いだくらいでは怯みもしない。
四肢を撓め、込めた力を一気に爆発させて手近な一体の懐へと飛び込む。
加速に乗った前脚の爪の一撃は、《地蛇竜（アスウォーム）》の頭部を砕き、腐食の始まった赤黒い血液で地に積もった雪を染めた。
間を置かずに、別の個体へと飛びかかろうとして――頭を失った筈の《地蛇竜（アスウォーム）》が絡みつき、白狼の動きを縫い留める。
頭を潰しても平然と動き続ける――生命の在り方に対してあまりにも埒外、冒涜的と

すら言える繰屍の術。それらの悪意が寄らぬ地であった、霊峰の獣であるからこその隙。

間髪いれず、屍を操る者達から様々な魔法が放たれた。

力尽くで拘束を脱し、押し寄せる魔力の暴威の隙間を縫うように駆け抜ける。

己の種族の得手たる霧化無しでは、絡みついた蛇竜の躯ごと葬らんとする無数の魔法を、全て躱しきるのは困難だ。

幾つかが四肢を掠め、白い体毛と共に血肉が削り飛ばされるが、知った事ではない。

魔力の弾幕を突破し、屍を操る術者の群れへと襲い掛かる。

「ヒッ――く、くるギッ!?」

白狼との間に壁となる様に、幾つかの既知の霊獣と、この地の生物ではない未知の魔獣が立ち塞がるが――その迎撃を全て躱し、最も距離の近かったヒトの形をした汚泥の首へと牙を食い込ませた。

何かを喚こうとしていたが、こんな外法を使う連中だ。呪言の類でないとも限らない。即座に顎を閉じ、無造作に首を振るとぶつんと千切れた首が雪の上を転がった。

――最初に仕留めた分と合わせ、これで二匹。

口元に敵の鮮血、真っ白な毛皮に覆われた体躯には己の血と、あちこちを朱で染めながらも白狼は全く動きを衰えさせず、敵陣に飛び込んだ後に悠々と包囲を離脱する。

死体の相手をするのは初めてなので、思わぬ痛打を受けたが、もう理解した。既に死んでいる物をまともに相手をしていてもキリが無い。

己の脚を以て哀れな屍の攻撃は全て振り切り、それらを操るあのヒトの振りをした汚物共を咬み砕く。

人間の言葉で表すのなら、不退転の覚悟、と評せるであろう意思を金の瞳に漲らせ、白狼は牙を剥いて唸り声を洩らした。

削られた四肢の傷からは、未だに血が滴り、足元の雪を斑に染め上げている。

対して獲物――否、敵は多くが健在。特に奥に控えている二匹は、万全の状態で一対一であろうとも、決して油断できる相手では無い。

だが、それが何だというのか。

白狼は気付いていた。

この者達の悪意は、己の住処である霊峰――特に、その頂上へと向けられている。

ならば、断じてこれより先に進ませる訳にはいかなかった。

己の縄張りをコレらが踏み荒らしてゆく光景など、想像するだけで不快であり、認め難い。

だが、それよりも。
旧くからこの地の主であり、己の”母”と呼べる存在を、この様な連中の悪意に近づける、晒させるなど、自身の矜持が許さなかった。
元より、《霧狼（フォグ・タスク）》は繁殖場所（フィールド）である濃霧の満ちる地以外では、そう厄介な霊獣ではない。
その名の由来である能力の霧化も、獲物を強襲する為というより、より強大な獣と相対したときに回避・撤退を容易とする為のものだ。
故に、より優れた力を持つ強者によって蹂躙される事も、弱肉強食の自然の中において、珍しい事ではない。

――再度、群れの中へと突撃する。
厄介な事に、今度は己を仕留める為では無く脚を止める為に打ち込まれる魔法は、威力より範囲を優先して弾幕というより壁と化していた。
強引に抜けても先程の魔法より負傷は少ないだろうが、その瞬間、動きが鈍るのを狙い打ちにされるだろう。

白狼には両親と呼べる同族はいない。

他の獣に敗れて喰らわれたか、はたまた逃げる途中で己を落としたのか。
幼い、赤子と然して変わらなかった当時の白狼は、必死に、ときに駆け擦り、ときに這いずるように他の獣の匂いが薄れる場所へと逃げ続け――辿り着いたのが。
この山に住まう者達にとって不可侵である、霊峰の主たる”龍”の住処であった。
「――必死に生きようとする赤子に、縄張りやこの場の不可侵を語るのも無粋ですね」
ヒトの形をしながら、ヒトとは余りにも違う――死を冒涜する輩共とは真逆の、生命の根源、その奔流を極めた様な存在は、圧倒的な存在感（匂い）とは裏腹に、酷く優しい手つきで己を抱き上げたのを、今でも覚えている。

――自身より更に巨躯といえる《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》の懐に飛び込み、盾としながらついでにその発達した両腕を爪で抉り、牙で噛み砕く。
腕がなければこの巨人には大した攻撃方法は無い。冷気の放出は、同じくこの地の出身である獣には皆、耐性がある。
屍を喰うでもなく弄ぶ連中と同じ真似をするのは業腹だが――それを一匹残らず咬み殺す為となれば、己の躯を良い様に操られている者達も文句は言うまい。
それから季節がひと巡りか、ふた巡りする間、白狼は”龍”のもとで過ごした。

彼にとっても、”龍”にとっても、瞬きの様な短い時間であったが、それでも。
白狼にとって、”龍”が”母”へと変わるには充分過ぎる程の時間ではあったのだ。

――巨人の影から飛び出し、術者の元へと一気に肉薄。爪を振るうが、壁役の召喚獣の妨害で、肩を付け根から抉り飛ばすに止まった。
悲鳴をあげながら腕を失ったオスが地べたを転がり、のたうち回るが、トドメを刺そうとすれば、諸共に範囲魔法の餌食となるのは目に見えている。
諦めて、再び包囲を抜けて距離を取った。

”龍”にとっては、そんなつもりは無かったのかもしれない。
永い刻を生き続ける間の、ほんの気紛れ……無聊を癒す手慰みであった可能性だってあるだろう。
それでも、白狼にとって”母”と呼べる存在がいるとしたら――それは彼女だけだった。
獣である己に、その想いを伝える術は無いが……元より伝えるつもりもない。
己がただ、そうであると。故に慕い、必要とあれば”母”の為に牙を振るうのだと、己自身が知っていればそれでよい。

幼かった白狼はそう決意し、”母”の元を離れた後も、そうやって生きてきた――後に”龍”の近くに縄張りを置く、主級の霊獣。その一角に昇り詰めるまで。
野生に生きる身としては、己はきっと異端なのだろう。
或いは、そうで在るが故に両親は己を打ち捨てたのかもしれない。
だが、その御陰で”母”と出会えたのであれば、寧ろ感謝しても良いくらいであった。
だからこその、不退転。
それは、野に生きる獣としてはあるまじき《誓い》であった。
何としてでも、この腐臭を放つ忌まわしき者共を此処で仕留める。
その上で、ここで死ぬつもりは無い。
そもそも、新たな季節に入ってから”母”に獲物を届けていないのだ。つい最近、彼女の元を訪れたヒトが二匹、未だ住処にいる事を考えれば肉が足りなくなる事も有り得るだろう。
さっさと片付けて、新鮮な獲物を届けてやらねばなるまい。
戦う理由も、生きる理由も、これ以上無く揃っている。
――ならば、後は只、勝つのみ。
身に負った傷など、知らぬとばかりに気迫を込めて白狼は吠える。
高く、遠く。霊峰の頂まで、届くように。

そして、三度目になる、敵の群れへの突撃を敢行しようとして――。

「弱肉強食は自然の理なれど、暴を働くが邪神に魅入られし悪漢共ともなれば、助力も止む無し」

どこからともなく声が響き渡り、敵の群れと白狼、双方の動きが止まった。

数瞬後、上空から降ってきた影が両者の間に砲弾の如く着弾し、派手に雪の粉塵を巻き上げる。

もうもうと上がる白い煙幕の向こうから現れたのは、やはりヒトだった。

「大自然を生きる野生でありながら、その身から感じる確固たる意志！　感服の至り！　助太刀いたすぞ大狼殿！」

上半身を剥き出しにした、筋骨隆々という言葉ですら生ぬるい、削り出した岩塊の如き体躯を持つその巨漢は、実に良い笑顔で白狼に向かって笑いかけ。

――え、なにこれ、ヒト……ヒト？

スチームの様な蒸気を全身から噴き出して仁王立ちする筋肉（ゴリラ）に、白狼は混乱した。然

もあらん。

「朝の鍛錬に精をだしておれば……いやはや、とんだ鉄火場に遭遇したものですな」
　全身から滝の様な汗と人体から発するとちょっと可笑しいレベルの熱気を放出しながら、ガンテスは争っていた両者――この地の霊獣であろう純白の毛皮の大狼と、邪神の信奉者達を順繰りに眺めた。
「全く、大本が討たれたというのに――何処にでも湧くな、お主等は」
　ここ最近は、穏やかに細められている事の多かった両の瞳をギョロリと見開き、突然の闖入者に警戒を向ける屍使い達を睥睨する。
　ガンテスの身形から、いち早く素性を予測した屍使いの弟子が、師へと小声で伺いを立てた。
「師よ、おそらくこの地にやってきた修験者の様ですが……」

「殺せ。ただの人間でもこの地に修練に来るのならば、多少は足しになる力を持っておるだろう」

即座に命に応える様に、最も近くにいた《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》の繰屍（コープス）がその巨腕を振り上げる。

巨人の白く濁った眼球と、木偶の如き不自然な動きを見たガンテスは痛ましげに表情を顰めた。

「死霊術の類とは……哀れな、この地に生まれながらこの地を穢す尖兵とされるなぞ、さぞ無念であろうに」

両の手を合わせて祈りを捧げる筋肉の脳天へと、太さだけならば彼の胴よりもある巨人の剛腕が叩きつけられる。

巨岩を容易く砕く一撃だ。突如現れた巨漢は、何も為せずにその頭部を砕かれ、哀れんだ屍達の仲間入りを果たす――そう、誰もが思った。困惑中の白狼でさえ、なんか来たと思ったら即座に殺られた……とか考えた。

「――ふんっ」

だが残念、筋肉だ。

普通に棒立ちのまま、巨人の一撃を額で受けると、ガンテスは普通に裏拳を振るって相手をブン殴った。

ちなみに人体の額には表情筋の一種である前頭筋以外に、筋肉は無い。当たり前だが。

大気を砕きながら放たれたバックブローは、巨人の繰屍（コープス）の頬にめり込み、振り抜かれる。

頸椎から破砕音を響かせながら《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》の首が凄まじい勢いで一回転すると、周回遅れでその巨体まで回りだし――宙を舞った。

その場にいたガンテス以外の全員の口が、あんぐりと開かれる。

ぶっ飛ばされた《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》は空中でトリプルアクセルを決め――着地は出来ずに地響きを立てて地面に沈んだ。

「せめてもの供養よ、拙僧の拳にて浄化して進ぜよう。穢されし命、真っ当に巡って創造神の御許へと還らんことを」

再び手を合わせて瞑目する大男に、その場のほぼ全ての人間が「浄化関係ねぇだろ」という突っ込みを堪える。

一方で白狼の方は、己の知識にあるヒトと比べてあまりにも頑丈すぎる目の前の巨漢に、妙な既視感を覚えていた。

稀に”母”の元へとやってくるヒトは、皆、獣の持つ強さとは別の技術（ちから）を持つ強者ばかりであったが、このオスの頑健さと剛力……まるで”母”の様……では、無いな、う

ん。というかコレが”母”と同じ区分とか何か嫌だ。
では何か――と、思考を巡らせて割と直ぐに思い至った。
己と同じ、”母”の住処である頂の周辺を縄張りとする岩の精だ。
山に古くからあった大きな霊岩が、天地の氣を取り込み続ける事で一種の精霊となったソイツは、目の前のオスと同じ、岩を削り出した様な――というか岩そのものな巨大な剛体を誇る。
どちらかというと、こっちの方が近いだろう。どっちもゴツゴツしてるし。
どうやら己に助力しに来たらしいこのヒトのオスっぽい何かが、あの岩の精と同類というのならばこれ程心強い味方もそういない。
そう判断して、白狼は眼前の岩精との共闘を決めた。
浄化（物理）で一撃の下に繰屍（コープス）を鎮めた様に見えたガンテスだったが、屍使いだけは正確にその打撃の性質を見抜いていた。
その剛力も脅威の一言だが、頭を砕かれても動き続ける繰屍（コープス）が、本来首が一回転した程度で止まる筈が無いのだ。
だが、事実として既にその巨体は動かない。
打撃の威力に目を奪われがちだが、よく練り上げられた聖気がその拳に込められていたのを、男は見逃さなかった。

「拳士ではなく修道僧（モンク）――忌々しい教会の狗か」
「如何にも」
苦虫を数匹纏めて噛み潰した様な顔で唸る屍使いに、厳かな表情で告げるガンテス。
「お主らがどんな企みを以て、この地にやって来たのかは知らぬが……未熟なれど、拙僧も神に仕える身。どんな目的であれ、阻止させてもらおう」
シィィィッと、鋭い呼気を吐きながら腰を落とし、前羽の構えを取るその隣に、白狼が並び立つ。
ガンテスの闘気に呼応したかのように、更なる熱波と共に全身から煙の如く蒸気が立ち上る。
現在、霊峰の頂上に居るある男が見れば、どうみても勝〇煙です本当にありがとうございました。などと、戯言を溢しそうな光景だ。
この岩精が放つ蒸気が辺りに満ちれば、己の能力も再び使えるようになるかもしれないが……これと同化するのはなんかヤだな……。
寒冷地帯出身にとっては暑苦しい蒸気を隣で浴びながら、白狼はちょっと悩んだ。
「ほざけ、神とは我らの仕える御方、一柱のみよ。偽りの女神を頂く蒙昧共め」
唾でも吐きそうな口調で吐き捨て、忌々し気に巨漢と白狼を睨みつける屍使いであったが、その頭は冷えたまま、冷静に自陣の不利を悟っていた。

（本当に、忌々しい。よりにもよって何故この機会に教会の特級戦力と遭遇する!?）

両者とも面識がある訳では無かったが、屍使いはガンテスを教会の聖女を筆頭とした最高位の実力者達の一人だと判断しており、ガンテスもまた、屍使いを『信奉者』の幹部に相当する人物だろうとアタリを付けていた。

そしてお互いの予想と真実に、大きな隔たりは無い。

故に、ガンテスは目の前の集団――取り分け中心人物である屍使いを逃がす気は毛頭無く。

屍使いは、一気に不利になったこの状況を、計画に妥協を許してでも突破する必要があった。

「――参る!!」

「殺せ!!」

互いの叫びが号砲となり、激突する。

真っ先に飛び出したガンテスが、壁役の召喚獣や繰屍越（コープス）しから放たれる魔法を正面から蹴散らして進む。

「馬鹿な！」

「この男、本当に人間か!?」

「失敬な！」

魔法が直撃したというのに、ガン、だのゴイン、だの、およそ人体にぶつかったモノとは思えない音と共に全て弾かれ、悪夢を見たかの様に男達が絶叫した。

悲鳴混じりの罵倒に憤慨した巨漢は、大口を開いて自身を？み込もうとする《地蛇竜（アスウォーム）》の上下の顎を引っ掴むと、更に開く様に力いっぱいに引っ張る。

顎どころか胴体の半ばまで裂け、鱗に覆われた長躯から黒色化した血液が雨の様に飛び散った。

「この様な中途なひらきを作っていては、まだまだと笑われてしまいそうですな！」

ビチビチと痙攣しながらも激しく動く大蛇の躯を後方に放り捨て、冷気を吹き付けながら突進してくる《氷霜の巨人（フロスト・ギガント）》に前蹴りを叩き込むと、胴体に風穴――を通り越して胴体そのものが消し飛んで、宙ぶらりんになった両腕と頭部が、衝撃で錐もみしながら四方に弾け飛ぶ。

その後方から、ガンテスの肩を蹴って軽やかに跳躍するのは白狼だ。

行き掛けの駄賃とばかりに、何匹かの召喚獣を前脚で抉ると、ビリヤードの球の如く、互いに叩きつけられて四散した。

そのまま、白色の疾風と化して屍使いの配下達の間を存分に走り抜ける。

何人かが首を抉られて鮮血を噴水の様に吹き出し、辛うじて身を捩った者は肩を噛み砕かれて雪の大地へともんどり打って倒れた。

敵陣に深く切り込み過ぎたか、まだ動ける壁役や配下の男達が白狼を囲むように動き――

ニヤリと――獣でありながら、まるで笑ったかの様に、白狼が口の端を吊り上げて牙を剥きだした。

両腕を交差させた跳躍の態勢のまま、筋肉が降ってくる。

白狼がそちらに向けて跳ぶと、上空で擦れ違うガンテスを再度足場にして一気に離脱。

入れ替わる様に着地した巨漢は、両の腕を高々と掲げて天に向けて叫んだ。

「女神よ！　いと高きにおわす創造神よ！　我が戦武、我が信仰――」

握りしめた拳と腕に、太々しい血管が脈打ち、金属塊を思わせる力瘤が浮かぶ。

「　御　照　覧　あ　れ　ぃ　！　！　！　」

二本の豪腕が全力で振り下ろされた。

――戦場から、音が、消える。

一瞬おいて、火山が大地を灼いて噴き上げるが如き爆音が、周囲を揺らした。

ガンテスを中心として、圧倒的な破壊力を有した衝撃波が地を、空を奔る。

壁となった屍も、魔獣も、何の意味もなかった。
全てを粉々に消し飛ばす純粋な衝撃に、幾人もが飲み込まれる。
最後の悲鳴すら飲み込む破壊の波に晒されながら、或いはソレに呑まれる仲間を目の前にしながら――男たちは心を一つにした。
――ただの腕力（信仰関係ねぇ）だろ。

そして、機を伺っていた屍使いが動く。
「捨て駒とする数は充分揃えてくれたわ――やれ」
傍らの弟子に命じると、己も杖を掲げ、魔力を練る。
一瞬、彼らの背後に巨大な”何か”の顎が浮かび、それが消えると。
ガンテスと白狼によって打倒された者達の躯やその破片から、次々と漆黒の泥が噴きだした。
「――ぬぅっ!?」
大戦中に幾度も遭遇した背中が粟立つ悪寒に、ガンテスが咄嗟に後方に飛びすざる。
「大狼殿！　此方へ！」

言葉が通じたのか、逼迫した声に何かを感じたのか。
瞬時に隣へと駆けて来た白狼の胴へ向けて左手を翳すと、右手の指で聖印を切り、魔力を練って聖性へと変える。
「――喝！」
気合を込めた一声と共に、自身と白狼を覆う様に聖気を纏わせた。
己を囲う馴染みの薄い力の膜に、白狼が不思議そうに身体を見回すが……噴きだした泥がうねる様に纏まり、触手へと形を変えるのを見て瞬時にそちらへと警戒を向ける。
「貴様とそこな大狼を糧に出来ぬは惜しいが……本来の目的成就が優先よ。ここで退かせてもらおう」
信奉者達の魂に刻まれた邪神の加護（呪い）――それらが暴走して悪性の呪詛塊と化した配下の駆越しに、屍使いは薄ら笑いを浮かべた。
「散々に邪魔をしてくれた礼だ。役立たず共の搾り滓の如き加護ではあるが――我らの神の恩寵に見えるがよい」
何某かの隠蔽の術を発動させたか、その姿と気配が急速に薄まってゆく。
生き残った配下達が、慌てて駆け寄り、その範囲に転がり込む様に飛び込むと――信奉者達の姿は完全に見失われた。
今ならそう距離も離されていない筈だ。集中して探知を行えば見つけるのは難しく

ないだろうが……。

「コレを放置する訳にもゆかぬか……！」

既に複数の躯から顕現した泥は一つの塊となり、嫌な水音を立てながら形を変えようとしていた。

まんまと一杯食わされた現状に、ガンテスは歯噛みする。

純粋な実力であれば、後れを取る気は微塵も無いが、戦局を見極め、悪辣な手段を多数駆使するあの屍使いは相当に厄介な相手のようだ。

眼前の泥は多人数の加護（呪い）と肉体を糧に、眷属化の兆候を見せている。

打倒自体は不可能では無いが――時間を取られるのは確かであり、その間にどの様な企みが為されるのか。

今度こそ身命を賭して守護すると誓った、青年の惚けた表情と少女の笑顔が脳裏を過り、らしくも無く焦燥に腹の底を炙られる。

青年ならば、何があろうとも少女を守り抜くであろう。それは信頼というより確信であり、単なる事実であった。

だが――その過程で青年が喪われる様な事が、もし再び起これば。

少女とその姉君に与えられた、過酷な二年の日々がまた繰り返される様であれば。

ガンテスは今度こそ、己を赦す事など出来そうに無かった。

と、その時である。
焦りの見える思考を断ち切るかの如く、隣に立つ白狼が戦意に満ちた咆哮を上げた。
「む……」
視線が交わり……迷いの無い金色の瞳がガンテスを睨み据える。
グダグダと考えている暇があるなら、さっさとコレを片付けて、後を追うぞ。
言葉以上に雄弁な瞳に、そう、言われた気がした。
「……承知！　ならば、全力で推して参るのみ！」
まさにその通りだ。
眼前の眷属擬きを片付け、直ぐに彼奴らを追撃する。
真っ直ぐに、正面からブチ抜く――それが己にとっての最速だ。

そうして、筋肉と獣は不格好な人型となった泥と相対し、渾身の一撃を狙いすまして構える。
《半龍姫》を巡る邪神の信奉者達の策謀と、それを阻もうとする者達。
両者の邂逅を以て、状況は一気に加速しようとしていた。

龍の姫はかく語りき

予定上では、山を下りるまで残り二日、という日の早朝。
今日はいつも聞こえる朝稽古の音が聞こえなくて、どうしたのかと思ったんだけど。
取り合えず、起きて直ぐに練武場を覗いてみると、広場の真ん中でにいちゃんが静かに座禅を組んでいた。
「おはよう、にいちゃん」
おはようさん、といつも通りの感じで挨拶が返ってくる。
何はともあれ朝の挨拶を交わして、今日の朝稽古はどうしたのか聞くとにいちゃん曰く、今日は休み、らしい。
でも、昨日夕飯の席では、後二日だから稽古も詰めに入るって《半龍姫》様と話し合ってたと思うんだけど……どうしたんだろう？
小首を傾げていると、座禅のままのにいちゃんがお師匠の様子を見に行ってやって欲しい、と言ってくる。
――朝からちょっと様子が変でな。師匠はお前の事をかなり気に入っとるから、話を

するなら俺より適任だと思う――頼めるか？

「うん、全然かまわないよ。ここに滞在してる間、すっかりお世話になったしね」

勿論、否は無いので快諾したけど……どうしたんだろう。何かあったのかな？

にぃちゃんも、就寝前に遠話の魔道具で連絡を取ってるレティシアも、ボクが《半龍姫》様に気に入られてるってよく言うけど……そうなのなぁ？　あんまり実感は無いんだけど。

特にレティシアの方は、結構本気で驚いてるのが声から感じ取れた。

なんでも、自分に対して、《半龍姫》様は壁というか――遠慮やうしろめたさがあるせいか、あんまり砕けてくれないから、ボクが羨ましいって。

レティシアは過去に《半龍姫》様に一度、邪神討滅に力を貸して欲しい、と直談判した事があるみたい。

多分、にぃちゃんと出会う以前、前の戦争が激化するより更に過去の話だと思うから、今ならそれもリセットされてると思うんだけど。

姉の嘗ての話も気になるけど、今は《半龍姫》様だ。

屋敷に戻って、一通り見て回るけど……何処にもいない。

自室で休んでるとしたら、お邪魔するのもまずい気がするし、どうしようかな。

一応、彼女の部屋へと足を向けながら屋敷の中を歩いていると渡り廊下の裏手――大

きな樹がある屋敷裏の小さな庭の様な場所に、その姿が見えた。
こちらに背を向けて、樹の根本で佇んでいる姿からは、特に体調が悪そうとかそういった様子は無さそうなんだけど。
何故だろう、何時もより小さく、そしてひどく寂しそうに見えた。
「あのっ、《半龍姫》様」
気のせいかもしれないけど。
その背中に、ほんの数か月前まで毎日見ていた、姉や鏡に映った自分の姿が被ったような気がしてボクは思わず声を掛けていた。
普通に近づいたので、彼女が気配に気づいてない筈も無い。
ゆっくりと振り向いた《半龍姫》様の表情は、少なくとも見た感じはいつも通りに見えた。
ううっ、つい咄嗟に話しかけちゃったけど、何も考えて無かった。
「お、おはようございます?」
「――はい、おはよう。どうかしましたか?」
苦し紛れに朝の挨拶を捻りだすと、ちょっとだけ微笑んで挨拶を返してくれる。
くぅ……これちょっと苦笑も入ってる笑い方だよね。そりゃそうだよ、なんで疑問形なんだよボク。

トークで滑った気恥ずかしさを堪えながら、朝稽古が中止になった事の疑問と――にいちゃんが心配していた事を告げると、《半龍姫》様はほんの少しだけ眉根を寄せて……自嘲する様に一人ごちた。

「ええ、実は少しだけ夢見が悪かったのです。稽古を始めて直ぐに、今日は中止しようとあの子に言われてしまいました……心此処に在らずを弟子に指摘されるとは、なんとも情けない話ですね」

「夢見、ですか？」

なんだろう、《半龍姫》様も怖い夢なんてものをみるのかな。

思いもよらなかった理由を告げられて、少し驚いたけど……でもちょっと納得した。

怖い夢ではなくても――きっと、哀しい夢ではあったんだろう、って。

少し会話をして、改めて思ったけど……やっぱりさっき感じたイメージは気のせいじゃない。

ほんの少しだけど、何かを懐かしむ様な、それでいて哀しそうな。

押し殺している間に、擦り切れてしまった感情の欠片を久しぶりに手に取って眺めている――そんな風に、見えた。

ボクが突っ込んで聞いて良い話なのか、正直迷いはある。

でも、この場所で何日も過ごして、時間と会話を重ねて……龍であること云々を差し

引いても、彼女の事はすっかり身内認識になってしまった。
以前から、にいちゃんに色々な話を聞いてたのもあったしね。なので出来る事なら、抱えている感情が苦しいものであるなら、少しでも楽になって欲しい。その為に力になってあげたい、そう思う。
だから、勇気をだして言ってみる。
少しでも話す事が辛そうに見えたなら、きちんと謝って、もう聞かないようにしよう。
「よかったら……本当に《半龍姫》様がよければですけど、どんな夢だったのか話してみませんか？　話すことで楽になる事って結構ありますよ」
「……そうなのですか？」
「はい、そうなんです」
いつも彼女とにいちゃんがしているやり取りを、態とらしく冗談めかして言ってみる。
そのやり取りのおかげか、ちょっとだけ《半龍姫》様は笑うと、一歩、脇に避けて傍にある木の根元を視線で示した。
そこには、簡素な、だけど丁寧に手入れがされていると分かる、小さな石塚がふたつ並んでいる。
「……お墓、ですか？」

「ええ、父母と――友人のものです」
埋葬したわけではない、形だけのものですが。と、呟く彼女の表情はとても穏やかだった。
「久しぶりに、貴女やあの子……人とまともに交流したせいでしょうか。懐かしい夢を見ました」
そう言いながら、膝を折って。石塚の片方にそっと指を這わせる。
「夢の中とはいえ、もう見る事の叶わない大切な者の姿を見れたのは嬉しい――その筈なのですけど、ね」
何処か力無く感じる言葉に込められた感情は、それとは裏腹に。
郷愁、寂しさ、痛み――そして愛しさ。様々な感情が溢れているように思えた。
霊峰の頂上に似つかわしくない、どこか穏やかな風が、優しく大樹を揺らす。
「……どこか、貴女に似ている子でした」
言い回しからして、御両親じゃなくてお友達の方だよね？
ひょっとして、ボクが気に入られてるっていうのもその友人が関係しているのかも。
「そうなんですか。会ってみたかったなぁ……ボクと似ているっていうならレティシアともそうだろうし」
「いえ」

少し笑って、片膝を付いたまま《半龍姫》様は振り返った。
「似ているというのは、空気や雰囲気、といった面ですね。外見という点であれば、貴女の片割れにも、貴女にも共通点は少ない――あの子は黒髪でしたから」
「……転移者ってことですか？」
「ええ」
もう一度、石塚の方へと向き直ると。
それをジッと見つめたまま、彼女は暫くの間、何かに迷う様に沈黙を続けた。
ボクは、何も言わずにただ彼女が口を開くのを待つ。
大切な、だけど、もう居ない”誰か”のことを。
誰かに話す事で楽になる場合もあるけど、言葉にしてしまう事で自分の傷口を抉ってしまうことだってある。
忘れない様に、敢えて何度も抉って二年間を過ごしたボクには、《半龍姫》様が自分と同じ選択をしたとしても止める資格が無い。
だから、せめて。
その、大切な友達に関わる事を語るのが、彼女の気持ちが晴れる切欠となることを祈って、ボクは《半龍姫》様の言葉を待った。
「……私は」

そして、躊躇いがちに、桜色の唇から言葉が零れだす。
「私は、恐ろしいのです……父や母、あの子と過ごした記憶が、褪せてしまうのが」
それは――。
この世界における、最高位階にあるとまで言われた存在にはあまりにも似つかわしくない言葉で。
だけれど、誰もが当たり前に持っている感情だった。
「我が半身はまがりなりにも龍。物理的な記憶の摩耗とは無縁です――ですが、それ故に、龍であるが故にそちらに傾いてしまったとき、この記憶が、この想いが、己の中で変質してしまうかもしれない――それが何よりも、恐ろしい」
膝の上に乗せられた手が、震える程に握りしめられていて……彼女が本当にソレを恐れている事がありありと分かった。
なんとなく、意味は伺える。

本来、龍とは自然の化身。空の、大地の、世界の意思の代弁者。
あらゆる生命の頂点にして、最も神様に近い超越存在だ。少し魔法をかじった事がある人なら誰だって知ってる。
だから、その在り方に相応しく、本来は人間とは全く異なる価値基準を持っているも

のなんだと思う。
けれど《半龍姫》様はその通称のとおり、半分は人間だ。
持っている力が、本来の龍と比べても遜色無いものだとしても、その在り方と心は、もの凄く人間（ヒト）に近いんだ。
だから、遥か昔に失った大切な人たちを、こうして今でも想い続けている。多分、これからもずっと。
だけど、今の自分の――人間に近い精神構造（こころ）が、龍本来の超越者としての永劫不変（ありかた）に変わってしまったら。
今まで自分にとって何よりも大切であった記憶が、思い出が、そうではなくなってしまうんじゃないか。
彼女にとって、それは何よりも恐ろしくて――忌避すべき事なんだと思う。
話を聞くついでの形ではあるけど、彼女の色々な逸話や、立ち位置に関する疑問が氷解した。
空や海にも、等しく穏やかなときと荒れ狂うときがあるのに、彼女が後者の面を見せた事は歴史上でも数える程しか無く。
また、自然の化身でありながら、世界を穢し、壊そうとする邪神（そんざい）に対してすら不干渉を貫いた、徹底した世捨て人染みた在り方。

《半龍姫》様は、自身が本気で龍としての力を振るう事で、その心が龍のソレへと近しいものに傾くことが嫌だったんだ。

正確には、そうなってしまうことで、自分にとって大事な人達の記憶と想いが、ただの記録という認識に変わるのを恐れた。

それを身勝手という人もいるのかもしれない。世界の危機をどうにかできる力があるのなら、身を粉にして捧げるべきだと主張する人もいるのかもしれない。

けれど、ボクはそうは思わない。

それこそ、にいちゃんならそういった声を聞いても鼻で笑って、負け犬乙。まずは自分で死に物狂いでなんとかしてみるべき。と一刀両断しちゃうのが目に浮かぶ。

実際、無謀でも暴論でも、それで邪神討滅(なんとか)しちゃった人なので、世界中の誰も反論不可能っていうね。多分、分かった上で言うだろうから、滅茶苦茶タチが悪いと思うよ。

何よりも――それこそ世界よりも大切なものがあって、その為に”戦わない”選択をしたというのなら……それだって立派な答えだ。

ただ、《半龍姫》様にとって世界よりも大事な人達が、既に思い出の中にしかいない事が、少しだけ淋しいと思ったけど。

ボクが色々と思い至った事は、察したんだと思う。

《半龍姫》様は、ちいさな声で石塚に向き合った――こちらに背を向けたままの姿勢で呟いた。
「このような臆病な在り方が、それを良しとしたのが、私なのです……失望されても仕方のない事だと思います」
「失望なんてしません」
　それだけはハッキリと否定しておきたくて、殆ど被せる様に即答する。
「大切な人を失くして、残った思い出を護ろうとした人の選択を、臆病だなんてボクは思いたくない。ボクだけじゃないです、レティシアも、にいちゃんも、シスター・ミラだって。《半龍姫》様の事を知れて良かったって思うことはあっても、絶対に失望なんてしないと思います」
　最後に、冗談めかして付け足す。
「レティシアなんて、ボクが《半龍姫》様と仲良くなったって言ったらすごく羨ましがってましたよ？　自分には変に遠慮してるのにーって」
　言い終えるやいなや、《半龍姫》様の反応は劇的だった。
　勢いよくこっちを振り向いて、表情は驚きを隠せないままに。その不思議な光彩に彩られた龍眼が見開かれている。
「羨ましいと、そう、言ったのですか……貴女の片割れの、あの金色の神子が？」

呆然としながら漏れ出た掠れ声は――聞き違いかもしれないけれど、震えてすらいたと思う。

一緒に過ごした十日足らずの時間の中で、見た事もない大きな動揺を見せる彼女に驚きながら、ボクは戸惑いを押し殺して首肯した。

「はい、昨夜も言ってました。以前、助力を断られた事は、自分は全然気にしてないんだからもっと自然体で接して欲しいって」

そう、姉の望みを伝える形で彼女に告げると、《半龍姫》様は目を伏せ、「あぁ……」と、胸に詰まった感情を吐き出すように吐息をつく。

「強いですね、彼女は。本当に……本当に強い。幾度となく世界を回帰させ、その度に多くを失ってきたのでしょうに……その強さに、その真っ直ぐな心根に、敬意を」

その言葉に、今度はボクが驚いて――次いで納得した。

「そっか……《半龍姫》様は知っていたんですね。姉が――レティシアが『繰り返している事を』

「ええ、知っていて尚、私は彼女への助力を拒みました……故に、恨まれていて当然だと、私を憎むのは彼女の権利ですらあると、愚かにも思っていたのです」

侮っているにも程がありましたね……と、恥じ入って小さくなる《半龍姫》様に、ボクは敢えて笑いながらフォローを入れる。

「それなら……今度会うときには、変な遠慮とかは取っ払って普通に対応すれば良いと思いますよ。それが一番本人も喜ぶでしょうし……ふんぎりが付かないなら、ボクも協力するので思い切って全部ぶちまけて謝っちゃいましょう！」

そう、笑顔を向けて提案しながら、膝をついたままだった彼女に手を差し出した。

そんなボクを、どこか眩しそうに、何かを懐かしむ様に、眼を細めて、見つめ返して。

「――そうですね、そのときが来たら、お願いできますか？」

ふんわりと、花がほころぶ様な優しい笑顔を見せて、《半龍姫》様は手をとってくれた。

わ、綺麗な笑顔だなぁ……これ、ひょっとしたらにいちゃんやシスターだって見た事無いんじゃない？　――そうだとしたら、後でちょっと自慢できるかも。

なんにせよ、ちょっとでも元気が出たみたいで良かった。

そのまま、手を引いてあげると彼女は立ち上がって――唐突に表情を厳しいものに切り替え、屋敷の方を……正確には、その遥か向こうを険しい眼で見据えた。

どうしたんだろう、と思ったけど、その背からにいちゃんとの稽古のときでさえ欠片も発していなかった戦意を感じとって、ただ事では無いと意識を切り替える。

「麓の方で、悪性の呪詛の胎動を感じました――微弱ですが、間違いなくかの悪神のものです」

「ッ！　――邪神の信奉者達がいるってことですか!?」

この地の特異性、不可侵性を考慮すれば、あんまりにも予想外だった言葉に、ボクは驚愕した。

もう瓦解して散り散りになった、残党と呼べるかも怪しい戦力なのに、なんで《半龍姫》様のお膝元の霊峰に……いや、違うよね。

「……追い詰められているからこそ、なりふり構わなくなったってことか」

大戦中、健在だった邪神が万が一にも敵対することの無いようにと、人類側と示し合わせた様に不可侵を選んだ、己を打倒しうる超越者、龍の姫君。

命を下した邪神自体が居なくなったことで、何某かの大掛かりな――一発逆転を狙って《半龍姫》様に何か良からぬことをしようとしていると考えれば、納得のいく話だよ。

正直、連中にどんな手札があろうと――それこそ、過去にボクが自分諸共に封印した上位眷属並みの戦力が複数揃っていたとしても、《半龍姫》様をどうにか出来るとは思えない。

でも、ボクは彼女が大きな戦いを拒む理由を知ってしまった。

なら、教会の聖女としても、ボク個人としても、取るべき行動は一つだ。

「《半龍姫》様は、屋敷で待機していて下さい――いつも通り、お茶でも淹れて一息ついてもらえれば、その間にボク達が終わらせます」

連中が何人で行動しているのか知らないけど、《半龍姫》様を標的にしているのなら数

人なんて事はない筈だ。
そして、大人数で邪神の信奉者達が行動しているのを、ボクの先生が気付かない訳が無い。
なんか筋肉の声が聞こえた気がした、とか言って隠れ潜む集団に向けて突撃しているのが目に浮かぶよ。
《半龍姫》様が察知した気配も、先生との戦闘で隠蔽が難しくなったせいと考えれば、納得しかない。
なら、例え先生から逃げおおせたとしても、その戦力は半減……大きく削られている筈だ。あの人ならどんな相手であれ、それくらいはやってのける。
道中のおっかない霊獣や精霊達の事も考えれば、気負う必要すら無い、圧倒的な戦力比の防衛戦。
万が一に備えて、油断だけはしない様に気を引き締めるけど……それも杞憂に終わるんじゃないかって思えてしまう。
――だって、いまボクらの側にはにいちゃんがいる。
例え、想定外や予想外の出来事が起こっても、にいちゃんなら全部引っ繰り返してしまう。
そう信じているというより、今まで全部が全部そうだったっていうだけの、ただの事

実。

そう、後ろにボクが、レティシアがいるなら、にいちゃんは負けない。

その背中に、そんな子供じみた願望を抱いて、いつだってその勝手な期待に応えてくれて。

ときには期待以上にやらかして、悲劇を覆すのではなく、喜劇に置き換えてしまうのが、ボクの、ボクとレティシアのヒーローだ。

「……おそらく、狙いは私でしょう。降りかかる火の粉を払う程度の事は忌避するつもりはありません、私が……」

「大丈夫！　ボクとにいちゃんに任せて、《半龍姫》様はドーンと後ろで構えていて下さい！　大戦中だって、ボクたち二人でこう、連中を千切っては投げ、千切っては投げしてきたんですから！」

「そうなのですか……？　ですが、あの子は既にかの者共の気配に向けて、山を駆け下りている最中の様ですが……」

「はい、そうなんで……なんて???」

「あ、今ちょうど中腹辺りまで下りた処ですね……どうやら麓の気配は囮か、敵対者への置き土産で、本命の者達が居たようです……そろそろ接敵するでしょう」

に、にいちゃーん!?

相変わらず仕事早すぎるよ、せめて気付いたらボク達に一言いってから行動しようよ！

あぁ、もう、にぃちゃんはホントにもうっ！

自分が打って出るから、護りを固めておけって事なんだろうけどさ！

隣にボクがいないと、また無茶をするかもしれないから不安なのに！

帰ってきたらお説教だ、《半龍姫》様にも手伝ってもらうから覚悟しろよ！

やめてください師匠と二人がかりとかこころがしんでしまいます（白目

急に怖い電波を受信した様な気がして、身震いする。

……ちょっと山を下りて害獣を狩ってくる、くらいは言っとけば良かったかもしれん。

でも、うまい事隠れ潜んでるのか何か知らんが、すげー速度で登って来てたからなぁ。
あんまり近寄らせたくも無いし、さっさと迎撃に出たかったのだ、仕方ないね。
さて、なんのつもりか知らんが、霊峰の不可侵ルールガン無視でやってきた邪神の信奉者(アホンダラ共)はあそこか……。
背の高い樹木の上から見下ろすと、そこには魔術師という共通点以外は、バラバラな恰好をした連中が各々浮遊板(フロート)に乗って移動していた。
纏め役らしき若い男を先頭に、十人程度の集団が霊峰の空気におっかなびっくりと言った様子で辺りを見回している。
……なんか先頭の男以外はへっぴり腰だし、明らかに周辺の獣の気配に脅えてるし、とてもじゃないが霊峰を登れるような実力があるとは思えんなぁ……。
その分、トップらしき男の隠蔽の魔法は凄まじい精度だ。俺じゃなきゃ見逃しちゃうね（ガチ
残念ながら、俺の女神様印の特典は連中の御本尊である邪神の隔離空間ですら飛び越えて、奴本体を知覚できる代物だ。
かくれんぼが得意みたいだが、俺は鬼役をやって信奉者(おまえら)を捕まえ損ねた事は無いねんで。
とりあえず、気配を殺したまま樹上で待機し――最後尾の奴が下を通り過ぎると同時

に、背後に音を立てずに着地。
介錯人よろしく、皮一枚残して手刀で首を刎ねる。
絶命した相手を抱えて跳躍し、再び樹木の枝上へ担いだ死体ごと戻った。
死体の乗っていた浮遊板（フロート）が力を失い、音をたてて霊峰の地面を転げ落ちて、乾いた音を立てる。
連中が、一斉に振り返って背後を注視した。
乗っていた男がいないと騒ぎ出すのを樹の上から確認して、鎧ちゃんの静音性を保ったまま起動率を上げ、跳躍。連中の進行方向にある樹の上に着地すると、抱えたままだった死体の脚を適当に毟っておいた蔓を使って括り、枝と結び付けて蹴り落とす。
枝葉をかき分ける落下音に、視線が前方へと戻ると――仲間が首無し死体になって逆さ吊りで降ってきた事で、悲鳴混じりの絶叫が上がった。
んー……これで先頭の奴が動揺して隠蔽を解除してくれたら、霊峰（ココ）の住民達と一緒に囲んで袋叩きに出来たんだが……大して動じてねぇな。
第一印象の通り、あの男だけ突出してる感がある。
逆に言えば、そいつ以外は明らかに場違い――雑魚って訳じゃないんだろうが、少なくとも霊峰に挑めるようなレベルじゃない。
……なーんか腑に落ちねぇな。ヤケクソでお師匠を狙ってるにしては、隠蔽は相変わ

らず滅茶苦茶丁寧だし。

背を向けて山を下りる方へと逃げ出した別の奴の頭に、さっきチョンパした首を投擲する。

ちゃんと鎧ちゃんのアシストも使って放った生首弾丸は、逃げ出した男の後頭部に情熱的なキッスを交わして諸共に爆砕した。

当然、投擲後にすぐに別の樹に飛び移って、射線からの発見は逃れている。

――そろそろ頭上に意識が向くかね？　降りるか。

男たちの進行ルートから外れた、少し奥の木々へと跳び移ってそこから地面へと降りる。

なるべく鬱蒼とした茂みの中へと身を隠しながら、怯えながらゆるゆると登頂を再開した連中と平行して俺も移動する。

チラチラと上ばっかり気にしてるのは危ないぞ。まぁそうなるように布石を打ったのは俺だけど。

全員の視線が上方に向いたタイミングを見計らって、一瞬だけ鎧ちゃんを完全起動。

地面スレッスレの低空で跳躍し、男達を挟んで向こう側の茂みに飛び込む一瞬に、手刀を振るって擦れ違いざまに二ツ胴を腰から下で斬り落とす。

注視していた処で、黒い影が一瞬横切った様にしか見えなかっただろうし、頭上に注

意と視線が向いていたなら何が起こったのかも分からんやろ。
輪切りになって崩れ落ちる同僚二人に、更にぎゃぁぎゃぁと喚きだす残念集団を眺め、さて、詰めをどうするかと思案する。
「ふざけるな！　何が隠形は有効だ、だ！　完全に狙われているではないか！」
「このままでは嬲り殺しだ、壁役を召喚させろ！」
目を血走らせて先頭の男へと詰め寄る他の面子に、男が平坦な口調のままで説き伏せるのが聞こえた。
「落ち着け、現状、確かに我が隠術は機能している。効果が無いなら、今頃この山にいるあらゆる獣共に集られ、我らは骨も残っていない」
おそらく、こちらの隠形を見抜くだけの実力者が一人。此方を陰に紛れて強襲している。と推測を述べる男に、俺は少し感心した。
へぇ、後手後手に回ってるとはいえ、相手が獣じゃなくて人間だと理解はしてるんだな。
まぁ、樹から死体ぶら下げたり、恐怖を煽るやり方で攪乱するなんて、なんぼ知能が高くても霊峰の動物がやる筈もないしな。
それも分からん位に混乱してくれたなら、もっと楽だったんだが……他の奴らはともかく、あの男はこんな小細工じゃ崩れそうにないね。厄介だこと。

隠蔽が効いてないと主張する割には、本当にそうであれば辺りに響き渡るであろうヒステリックな声音で、男達は先頭の纏め役へと食って掛かる。

いいね、そのまま仲間割れでもして殺し合いまでいってくれ、そうすりゃ残った首を落とすだけで済む。是非ともそのままイっちゃって。

「そもそも、屍使い殿ならば兎も角、何故貴様如きの命に従わねばならんのだ！　若造が図に乗りおって！」

「別動隊といっても、中腹で既に半壊しているではないか！　師には申し訳ないが撤退すべきだ!!」

「然り！　ここは捲土重来を期して引くことこそ……！」

おい待てや。

別動隊、師って……こいつら囮かよ。

あー、糞っ。人材はお粗末なのばっかだけど、隠蔽してる奴の技術がホントにガチだから可能性は低いと思ってたんだが……逆張りが正解だったとは。

なんぼ囮っていっても、分割して残した戦力がコレって事は……本命なんて質が高くても片手に余る程度の人数にしかならんだろ、アホか。

こいつらの狙いってお師匠だよな？　そんな人数であの人相手に何ができるんだよ、エキセントリックな自殺か？

とはいえ、そのアホの計画に引っかかって囮に食い付いた間抜けが俺だ。
丁寧に安全重視でやってる暇は無くなった。最速で片付ける。
茂みから飛び出そうと、腰を上げると――。
「愚かだとは思っていたが、ここまでだとは師も私も予想外だった」
反吐でも吐き捨てるような、男の声が響いて。
喧しく囀っていた連中も、背後で案山子のように突っ立っていた連中も、全員纏めて頭部が弾け飛んだ。
周囲に赤黒い破片がバラバラと飛び散ると、一拍置いて赤い噴水がいくつも噴き上がる。
「貴様らの喚き散らした戯言自体が、利敵行為だとも気付けぬ、愚昧め」
鮮血をまき散らしながら崩れ落ちた仲間の躯を、ゴミを見る様な目付きで見下ろすと、男はぐるりと辺りを見回した。
「何者かは知らぬが、見事な手並みだ。本来ならもう少し頂に近づいてからこの木偶共を処置したかったが……」
姿の見えない敵――つまり俺に、味方に向けていた視線とは真逆の、素直な賞賛を述べると手に握った短杖を掲げる。
「此処まで来れば、最低限師の命は果たせるであろう。さぁ――我らの神……」

うるせぇ、死ね。

《起動(イグニッション)》

なんかやらかそうとしていた男の言葉を待つ事も無く、鎧ちゃんを完全起動。

一瞬で間合いを詰めて、その身体を袈裟懸けに両断した。

同行してた連中を木偶扱いして殺す言動といい、身体に染み付いた死臭といい、死屍使い(ネクロマンサー)の類だろ。

わざわざ術が発動するのを待つわけがないよなぁ？

内心で毒づきながら、残心を保って斜めにずれる男の上半身を注視していると――。

台詞の途中で胴を両断されたまま、開きっぱなしだった口から、黒い触手が弾丸の様に放たれる。

おぉっと、生きてんのかい――いや、死んどるわこれ。少なくとも肉体は

此方の額を狙ったそれを首を傾けて躱し、即座に伸びた触手へと掌底を叩き込んで消し飛ばす。

次の瞬間、左右を挟み込むようにして二体、《氷霜の巨人(フロスト・ギガント)》の繰屍(コープス)が高速召喚され、其々にその剛腕を振りかざした。

《流天》を発動させ、左右から迫る打撃を逸らすと、互いにクロスカウンターを決めた様に繰屍(コープス)同士の頬に拳が突き刺さる。

無防備になった二匹の脇腹に、魔力を練った《命結》の拳をねじ込み、気脈を破壊。死屍使い（ネクロマンサー）の魔力で無理やり動かされていた哀れな繰り人形は、真っ当な躯に戻った。

この間、二秒弱。既に男はずれ落ちる身体を泥で補強しながら、後方へと跳躍している。

「ク、ははッ。やはリ、師の慧眼ニハ、おそれイル。更なる不確定ヨウ素を想定シタ囮は正解でアッタ……！　よもや、黄泉路から戻ッテきているとはナ――忌まわしき大敵ヨ!!」

あら、バレた。まぁ、鎧ちゃん完全起動してるし、当たり前か。

にしても――奴の言う師とやらが術を施したのか、自分で行ったのか分からんが……自身を繰屍化（コープス）して操作するとはね。

おまけに、邪神の加護（のろい）を意図的に暴走させておきながら、自我を保ってるときたもんだ。

死体になった自身に、死霊術を用いて保存しておいた自我をコピペみたいに貼り付け、魔力で操作する。

あくまで自我は外側から加えられた情報なので、肉体が泥に侵食されても関係ない、って事か？

……どのみちロクな方法じゃねぇな。加護の意図的な暴走ってのもそうだ、つい最

近、見た覚えがありすぎる。

「キサマが”龍”のモトにいたのハ、大キナ計算違いデハあったガ……師の邪魔ハさせん。我ラの神の恩寵ニ見えるがイイ……！」

危惧した通り、頭部の爆ぜた他の死体からも泥が噴き上がり、うねりながら黒い触手へと姿を変えてゆく。

限定的ではあるが、邪神の加護（のろい）を制御する手並みは――俺の大戦時の記憶にも無い、新たな脅威だ。

いうて、大本がもう存在しないので、先細って消えていくだけの無駄な技術だが。

隠蔽の魔法はとうに消え去り、無数の泥とそれを従える死屍使い（ネクロマンサー）……いや、邪神の眷属擬きは、その邪気を垂れ流しにして霊峰の大地と大気を穢す。

……マズイな。

気配に充てられ、霊峰に棲む獣や精霊達が敵意マシマシで集まってきているが……力は強くても、こいつらへの耐性を持たない此処の連中じゃ、相性が悪すぎる。頂きの近辺にいる奴等ならまた別なんだろうが。

最悪、旺盛な生命力を取り込みまくった泥が高位眷属化しかねん。

本音を言えば、今すぐにでもリアの処に戻りたかったが……癪な話、この状況を放置する訳にもいかず、まんまとその選択肢を潰された形になる。

悲惨な大混戦になる前に、俺が独力で片付けるのが最適解。
上等、つまりいつも通りって事だ。
目の前にいるボットン便所の中身みてーな奴らを始末して、リアとお師匠に今も段々と近づいているであろう、こいつらの本命も追っかけて叩き潰す。
一匹残らず、根こそぎだ。邪神とその金魚の糞共死すべし、慈悲は無い。
大地へと震脚を叩き込み、地を巡る魔力を足裏から吸い上げる。
全力稼働した装甲の魔力導線がより紅く、より強く発光し、唸りをあげて励起した。
鎧ちゃんの魔力も惜しみなく放出し、敵意と戦意を隠すことなく垂れ流す。
こいつは眼前の敵では無く、今にも押し寄せようとしている霊峰の住民達への威嚇だ。
長くは保たんが、暫くは警戒して踏みとどまってくれるはず。
手加減抜きで踏み込む。
鎧ちゃんによって極限まで強化された身体能力は、衝撃波をまき散らしながら音の壁をぶち抜き、地にクレーターを刻んだ。
環境破壊とかあんまりやりたくないが、どの道、邪神の眷属とこの量の泥が顕現した時点でこの周辺の植生は重度の汚染確定だ。後の土地の浄化・回復の補助にもなるし、いっそ更地にするつもりでいく。

眷属化の進む死屍使いの知覚を振り切る速度で間合いに入るが、こちらが視認できなくなった瞬間に、奴は全力で後退しながら泥に呑まれた躯を前に押しだし、壁としてくる。

頭部のあった場所から無数の黒い触手を揺らめかせる躯共から、一斉に泥を用いた攻撃が振るわれるが、《流天》で逸らすまでも無い。

知覚を最大レベルで加速。地を這う様に身を低くし、前にでる。

――０．１秒。

攻撃動作は始まったばかりだ――なので攻撃に移る前の予備動作が終わる一瞬前に、下方から潜りぬける形で突破した。

――０．３秒。

右方の泥の依り代の胴体部分に、掌底を抉り込む。

螺旋軌道を描きながら泥ごと消し飛ぶのを尻目に、《命結》を乗せた手刀を左の個体に叩き込んだ。

魔力噴射も加えて推力を増した一閃は、赤く灼熱しながら脳天から股間まで一気に灼き切り、発生した高熱を伴った真空が後方にいた別個体に直撃して、轟音を響かせて吹き飛ばす。

――０．６秒。

吹っ飛んだ個体に瞬時に追いすがって追撃。縦拳を打ち下ろして地面にめり込ませると、頭部から生えたプ〇ーガみたいになってるキモい触手を踏み砕いて大地の染みに変える。テ　ボイア　マタル!!

――０．８秒。

この時点で、やっとこ相手の一斉攻撃が背後の地を叩いて、盛大に地べたを侵食した。

自身の屍を操作するとは言っても表情までは再現できないのか、男の顔は能面状態の儘だったが、その眼には分かりやすく驚愕が浮かんでいる。

何が起こったか分からんか？　なら分かりやすく言ったるわ――速さが足りない！

別の個体へと一足飛びに間合いを詰め、脚を高々と跳ね上げ、断頭刃の如く振り下ろす。

空中で繰り出した踵落としは、目標ごと大地を爆砕し、飛び散った破片が衝撃に呑まれて消し飛んだ。

依り代ごと黒い染みになって圧潰する泥の向こうから、生き残りが黒い触手を槍衾の様に変化させて打ち込んでくる。

避けても《流天》で流してもいいが――拳を顔の高さにまで上げて構えると、ボクシングスタイルで槍群に向かってジャブを連続で打ち込む。

俺の間合いの外だ。拳打では届かないが……最近開発した鎧ちゃんの装甲を破片化

させて発射する小技で、多数の散弾銃を連射した様なストッピングパワーを発揮し、泥の攻撃を塞き止める。

お師匠との稽古では滅多に有用性を示せず、いまいちだと思った新技だったが……牽制には悪くないなコレ。

元が鎧ちゃんの一部だから、攻性魔力は充分に乗ってるが……《命結》の打効は流石に無理か。ま、しゃーないね。

連打連打連打。魔力噴射で小刻みに音速越えステップを繰り返して回避と間合いの調整を行いながら、左ジャブで虚空を叩き続け、破片散弾をばら撒く。

衝撃で押しやられて何体かの泥がある程度一カ所に固まると、《命結》で魔力を練り上げ続けていた右の手刀で、周辺の樹々や岩ごと纏めて横一文字に両断した。

《三曜の拳》による攻撃は、威力も申し分ないが魂を起点とした力の流れを正しい形――世界にとって自然な形へと導く特性も持っている。

なので、繰屍（コープス）や邪神関連みたいな不自然と歪の塊みたいな相手には耐久性を無視した特効が入るのだ。

邪神の信奉者で死屍使い（ネクロマンサー）とか相性最悪の筈なんだが……なんでこれで《三曜》の開祖であるお師匠にちょっかい出そうとした？

余程の阿呆でない限り、根本的な力の差に加え、相性まで最悪と来たらこんな暴挙に

は及ばない。
新たに大量の繰屍（コープス）を喚び出し、自身の前に盾として配置して、徹底的に時間を稼ぐ態勢の死屍使い（ネクロマンサー）を、腹底を探るつもりで観察する。
ここまで執拗に手を打ってる男とその首魁が、そんな脳足らずとも思えん。
……何かあるのか？　師匠を――《半龍姫》を相手にして、勝ちの目を生み出せる様な”何か”が。
そこまで考えて……思考の愚を悟って考えを打ち切った。
馬鹿馬鹿しい。無駄な事を考えすぎだ。
何の為に此処で戦ってるのか思い出せ。
相手に何らかの鬼札があろうが、例えそれが師匠を害しうるものであろうが関係ない。
何があろうと――それらを全部根こそぎ台無しにしてやるのが俺の仕事だ。
ならば、尚の事ここで時間食ってる場合じゃねぇ。
多少のリスクは無視して、次の一手で盾役ごとぶち抜く。
再度、《地巡》で魔力を巡らせて、鎧ちゃんに注ぎ込んで火を入れる。
腰を落とし前傾姿勢になると、最大出力で突撃を開始しようとして――。

「猟犬殿ぉぉぉっ、助太刀いたしますぞぉぉぉぉっ!!」
ビリビリと樹々を震わせるような大音量が響き渡り、上空が陰ったかと思えば。
空から筋肉(ゴリラ)を背に乗せたデカい大狼(ワンコ)が降ってきた。
ええ……なぁにこれぇ（困惑
ガンテスと――《霧狼(フォグ・タスク)》やんけ、どういう組み合わせだコレ？
も○のけ姫に出てきそうな白狼とそれに乗った半裸のガチムチという眩暈のする光景に、脳がショートしそうになる。
「麓で信奉者の集団と遭遇しましてな！　我らで撃退しようとした処、恥ずかしながら取り逃がしてしまい、こうして追撃に参った次第です！」
騎乗したまま、上からガンテスが手短に経緯を語ってくれるが――下の白狼が身じろぎして唸り声をあげた。
ケモリンガルでも何でもないが、何言いたいのかは俺でも分かるぞ。多分これ「重いからさっさと降りろ」って言っとるやろ。
余程嫌そうな空気を出していたのか、ガンテスも察した様だ。「む、これは失礼」と呟いてひらりと白狼の背から飛び降りて、オッサンは、眼前の泥と繰屍(コープス)の混成軍を睨み据

えた。
「こちらでも疑似的な眷属化を行っているとは……明確に技術化された手法と判断するべきか、厄介な」
――みたいだな。ついでにいうなら、この集団を率いてる後ろの奴……自分を繰屍化（コープス）させて操ってるぞ。
「神をも恐れぬ生命への冒涜ですな。全く以て度し難い」
肩を並べて好き勝手に酷評する俺達に、死屍使（ネクロマンサー）いの男は動かない表情のまま、嘲りと憤慨をない交ぜにした引きつった笑い声を上げる。
「ク、ひ、ヒヒヒハ。神とハ我らの戴ク御方のみ。ソ、ノ祝福ヲより強く、確かニお受けスル為のォgじいr、g、ス、崇高ナ研究の成果ヲ理解セヌ、キ、教会の狗風情ガ」
じりじりと眷属化の進行が深まっているのか、ノイズの混じりの雑音の様な音が、男の喉から粘性を湛えて垂れ落ちる。
……この男、どうやら相当な量の加護を注がれていたらしい。
このまま放置しているだけでも、時間経過で上位眷属化するかもしれん、さっさと片付けよう。
頼もしい加勢が一人と一頭加わり、いざ一気に攻勢・殲滅へと踏み出そうとすると、その助っ人本人から待ったが掛かった。

「ここは我らにお任せを。猟犬殿はアリア様と《半龍姫》様のもとへお急ぎ下さい」

ずいっと前に出て、そのぶっとい腕で俺の前を遮りながらガンテスは危惧を口にする。

「あの男の師……首魁である屍使いは、麓で取り逃がした際に見た手際からして、相当に厄介な手合いである筈――万が一に備え、御二方と一刻も早く合流なされませい」

強い口調で断定するおっさんの隣に、白狼が静かに並び、その金の瞳で此方を睨みつけて来た。

”譲ってやってるんだからさっさと向かえ、あの人が傷でも負ってたらお前を咬み砕く。”

目は口ほどにものを言う、という言葉がピタリとはまる程、明確な意思が込められた視線に押され、俺は即座に決断した。

――任せた。

「――承知！　任された!!」

大地を力強く踏み込んで構えを取るガンテスの返答と、戦意に満ちた白狼の咆哮が重なる。

呪わしき死者の群れと、それに立ち向かう一人と一頭の激突によって生じた轟音を背に、俺は大きく跳躍し、戦線から離脱すると来た道を駆け戻る。

既に早朝から刻が空け、陽が高く登るべき時間だが……。
霊峰の空には不吉な未来を示唆する様に、暗雲が垂れ込めていたのだった。

聖女の猟犬

霊峰中腹にて、ガンテスと白狼が戦闘を開始した同時刻。
僅かな手勢を引き連れた屍使いは、霊峰の頂上へと辿り着こうとしていた。
元より、囮を買って出た男の隠蔽の魔法は、屍使いが仕込んだもの。
自身の魔力を温存する為に弟子に行使させていたものの、彼自身が使用すれば”龍”の住処の周囲にて侍る、主級の霊獣すら欺く事が可能になる。
これより対峙する相手を考えれば極力消耗は避けたかったが、麓での突発的な強敵との遭遇戦の時点で計画は大きく修正を余儀なくされていた。
最悪とは己が”龍”と対峙する前に力尽きる事であり、逆を言えば目の前に立つことさえ出来れば……あとは『切り札』を切る為の余力さえ残っていれば良い。
そう割り切り、手駒を磨り潰す前提で行った強行軍は実を結ぼうとしている。
「……あとわずかで”龍”の住処へと到着する。心構えは良いか？」
「無論です、屍使い殿」
「我らの神の再臨――為すためならば、如何様にもこの身をお使い下さい」

屍使いの両脇に控えた二名が、頭を垂れて意を示す。
囮となった弟子を含め、この二人は烏合の衆であった集団の中でも数少ない使える手駒だ。
自身には遠く及ばぬとはいえ、『神』の再臨の為ならば死すら恐れぬ信仰の持ち主である。
手駒ではあるが、同時に信奉者としての同胞と呼ぶに値する男達の返答に、屍使いは満足気に頷くと、いよいよもって”龍”――《半龍姫》の住む屋敷へと歩を進めた。
獣道が終わると人の手が加えられた踏み固められた道へと変わり、異国風の屋敷が視界に入り――そこで足を止める……止めざるを得なかった。
「……結界だと?」
魔法の一つや二つ、”龍”ならば容易いだろうが、これは違う。
近づくだけで、己の内にある神の加護が焦げ付く様な感覚すら覚えるソレは、忌まわしき教会の者共が構築する聖性を帯びた代物だった。
しかも並みの強度では無い。正面から突破しようと思うならば、最低でも屍使いと同等以上の同胞があと数名は必要であろう超級の浄化結界だ。
「悪いけど、ここから先は通行止めだよ」
鈴を鳴らす様な可憐な声が響き、屋敷の入口から一人の少女が歩み出てくる。

霊峰に積もる雪を陽光で照らしたような銀糸の髪と、蒼穹を写し取ったが如き空色の瞳。

厳しい表情で此方を見据える秀麗な顔立ちの少女は、屍使いの――否、全ての邪神の信奉者達にとって、忌むべき象徴として周知された存在だった。

「よりにもよって教会の聖女とはな。あれ程の修道僧（モンク）がわざわざこの地に一人訪れる筈も無し……納得がいったわ」

つくづく、期が悪かったらしい。あと数日のズレがあれば己の計画は狂う事無く進行したであろうに。

内心で毒づく屍使いだったが、少女に続いて屋敷から現れた女性を見て瞠目した。

紺碧の髪と、聖女に劣らぬ美貌。特徴的な龍眼と何より結界を隔てて尚、感じられる圧倒的な存在感。

「何の目的でこの地を訪れ、この様な行いを働いたのかは分かりませんが……即刻立ち去りなさい、貴方達に与える物など何一つとして在りはしません」

真っ直ぐに、凛とした声を以て速やかな退去を促してくるその女性に、背後の部下共々、恭しく頭を下げる。

「これはこれは……お初にお目にかかる、霊峰に棲まいし〝龍〟よ。御姿を拝見できて光栄だ」

計画が成れば、神の新たな似姿となる存在だ。敬意を払うのは邪神の信奉者にとっても当然の事であった。

「……《半龍姫》様、屋敷で待っていてくださいって言ったじゃないですか。この連中の相手はボク達がします」

「いえ、私の身を狙ってきた輩を貴女達に任せきりでは、あの子の師として立つ瀬がありません。要求を跳ねつける程度の意思表示はさせて下さい」

警戒と戦意に満ちた表情から一転して、ひどく親し気な雰囲気で言葉を交わす聖女と《半龍姫》に、屍使いは厄介な組み合わせだ、と顔を顰めた。

どうやら、今代の聖女の片割れと”龍”は相当に友好的な間柄らしい。自身の陣営にとっては悪報でしかない話だ。

（なれば、尚の事、今回の計画は成就させねばならぬ）

あの口にするのも悍ましい大敵によって、神を弑するという有り得てはならない暴挙が為され、神の軍勢たる信奉者の組織は加速度的に瓦解していった。

それ以前から、聖女に付き従う形で大敵は戦場を闊歩し、様々な妨害と被害を同胞に与えている。

目の上のたん瘤、処ではない。存在すら許し難い怨敵にして悪夢だ。

――だが、その悪夢も既に現世には存在しない。

身の程知らずにも神を手に掛けた代償、当然の報いだ。
（聖女の懐刀は折れ、喪われた――ならば、後は神を再びこの世界へと御招きすれば……今度こそ勝利は我らの手中よ！）
一度崩壊した組織と軍の再編は生半な事では無いが……神さえ再び降臨すれば、全ては些末事。
己の研究成果によって神の齎す加護を、より強く、確実に現世に顕現させる手法は確立された。神の恩寵が戻るのであれば、戦力の補充は容易だ。
厄介な”龍”を消し去り、神の依り代へと変える。
一石二鳥どころでは無い、現状を全て覆す逆転の一手。
それを為す一心で、各国の残党狩りの手より屍使いは落ち延び、雌伏の時を過ごしてきたのだ。
「ふん……我らを見逃す旨の発言……慈悲を掛けられたと思ってよいのですかな？　そこな教会の娘は我らの殲滅を望む立場の筈。銀麗の聖女よ、戦場での逸話に偽りが無いのであれば、結界に籠ってばかりではなく打って出てきてはどうだ？」
「挑発に乗るつもりは無いよ。待ってれば囮を片付けた先生たちも合流してくる……時間が味方になるのはこっちだ」
見透かされている。

屍使いは舌打ちを堪えながら、銀の聖女と《半龍姫》を交互に見やる。
どうやら、どちらも結界を越えてこちらと交戦するつもりは無い様だ。聖女が言う通り、時間経過で不利になるのは屍使いの方だった。
やはり、此方でこの厄介極まりない結界を排除するしかない。
だが、手持ちにある通常の繰屍（コーブス）を全て投入した処で、眼前の障壁は小動（こゆるぎ）もしないだろう。
となれば、切り札の片方を切らねばならない。
「……屍使い殿、これ以上の時間の浪費は悪手。我らの加護をお使い下さい」
「然り。二人分を〝アレ〟に喰らわせれば、小娘の結界を打ち破っても消耗は最小限で済みましょう」
己の出した結論を後押しする配下二人の言葉に黙考し――答えは直ぐ出た。
「……よかろう。貴様達の信仰、たとえ死せども我らの神に届こうぞ」
時間が経てば囮によって散らした戦力がこの場所に集結し、此方が不利になるのは明白。
伏せた札はギリギリまで隠しておきたかったが、こと此処に至っては止む無し。
手にした杖に魔力を注ぎ込み、術を行使する。
迸る力の奔流に、浄化結界越しの二人が警戒を滲ませるが……どの道、結界内に止ま

るつもりならばこちらの術の発動も邪魔出来ない。
僅かなりとも消費を押さえる為に、丁寧に術式を構築し、詠唱を終える。
「さぁ、出でよ。そして我らが神の恩寵を喰らい、その身に蓄えるがよい」
一際強烈な魔力が吹き荒れ、彼の背後に魔法陣が展開される。
其処から飛び出たのは、巨大な顎だった。
邪神の眷属達と同じ泥と、半ば剥げ落ちた腐肉と骨が混ざり合って構成されたソレは、一瞬で配下の男達を噛み砕くと、長首をうねらせ、眼前の浄化結界へと喰らいつく。
大質量と結界が激突し、聖性を宿した障壁が暴威を受け止め、放電の如く火花を散らせて虚空に散った。
拮抗は数秒だ。
強力な破邪の力を宿した結界に泥で構成された部分を激しく灼かれながらも、巨大な”何か”の牙はそれを見事、食い千切ってみせた。
結界が、砕かれる。
破砕されたその断片が、美しい光を放ちながら力を失って降り注ぎ、消えゆく中で。
屍使いは狂気に満ちた笑みを浮かべ、《半龍姫》へと手を差し出した。
「さぁ、”龍”よ。我らが神の新たなる器よ、我らの元へと来るがいい」

（……！　浄化結界が抜かれた、しかも死霊術で）

砕かれた結界の欠片が光となって消えてゆく中で、ボクは驚愕を押し殺しながら背中に負った鎚鉾を掴み、一息に振り落ろして下段に構えた。

一瞬みえた大きな顎は、邪神の欠片（泥）と、”何か”の躯をごちゃ混ぜにして構成された超大型の繰屍（コープス）だった。

召喚陣から覗いた頭部だけで、１０メートルを裕に超えるそのサイズは、全身ともなればどれほどの大きさになるんだろう。

でも、問題なのはその大きさじゃない。

一応、聖女の号を持つボクが全力で構築した浄化結界という、邪神や死霊にとって最高の特効を持つ壁を、そのどちらにも当て嵌まる存在が力尽くで突破した。それも極短時間で。

最大限に警戒すべき、危険な力だけど……何故だろう。

結界を破壊した力に、微かにだけど、とても自然な……まるでにぃちゃんや《半龍姫》様が使う技みたいな、大きな流れを結んで束ねた様な、そんな力を感じた気がした。

眼前の、怖気を誘う狂笑を口の端に湛える死屍使い（ネクロマンサー）が使う事の出来る様な力じゃな

い。あの”何か”特有のものだ。
見えた一部だけでも、大部分を欠損していて、泥で殆どを補填していたので、元の形状が判別しづらかったけど……一体”何”を繰屍（コープス）にしたんだ。
当然の疑問が湧くけど、そんな思考も次の瞬間には打ち切られる事になった。
「……今の召喚術、元となった遺物を何処で手に入れたのですか」
固い、感情を押し殺した声が聞こえて、その言葉に裏に、蓋をされた――けれど隠し切れ無い怒りと威圧を感じ取り、思わずボクは死屍使い（ネクロマンサー）から視線を切って、隣にいる声の主を見上げる。
声の主は言うまでもなく、《半龍姫》様だ。
その顔は、恐ろしい程に無表情――唯一、無数の光を宿して輝く龍眼だけが大きく見開かれ、激発を堪える様に瞳孔が縦に収縮していた。
一歩、彼女が前に出る。
狂信を剥き出しにした筈の男が、冷水を浴びせられたかの様に顔を引きつらせ、一歩下がった。
「く、は。流石は、”龍”。それでこそ我が神の……」
「質問に答えなさい。――その遺骨を何処で手に入れた」
ギチリ、と。噛みしめた口元から音が鳴り、彼女は更に一歩、足を進める。

「――答えろ、下郎」

低く、冷たい声と共に、蓋をされていた筈の威圧がほんの少しだけ洩れた。
煮えたぎる怒りの、ほんの一欠片。蓋の隙間から漏れ出た湯気みたいなものだろう。
でも、それだけでボクの背筋は氷柱を差し込まれたみたいに粟立った。
喉を締め上げられたみたいな圧迫感に、呼吸がしづらくなる。
「――ッ！」
呻き声を上げそうになる唇を、慌てて噛みしめた。
隣にいるだけのボクでさえこれだ。直接怒りを向けられた死屍使い（ネクロマンサー）は、屍を操る処か自分が死人になったんじゃないかと思う程、土気色の顔になっている。
信奉者たちと対峙してから強化していた知覚が、周囲の生物達が一斉にこの周辺から逃げ出しているのを告げていた。
或いは、人間（ボクら）以上に敏感に察知しているんだと思う。
霊峰の主が、《半龍姫》様が、激怒している。
”龍”であるが故に、その思考は人のそれを遥かに上回り。
”龍”であるが故に、その感情の大きさ、深さは天を、または深海を思わせるほどに

膨大で。
だからこそ、ひとたび激すれば、それは全てを焼き尽くすか、押し流してしまう迄、止まらない。
それが”龍”。神代から生きる、自然の化身。生命の極点。
だけど。
その怒りを抱いた理由は、何処までも彼女が”人”であるが故だった。
だから、ダメだ。
あの巨大な繰屍（コープス）が、彼女に所縁のあるものなのだとしたら。
これ以上彼女と対峙させる訳にはいかない——ましてや、戦わせるなんて絶対にさせられない。
だってボクは、知っている。
龍としての力を振るうことで、人から離れた在り方になる事を拒んでいた彼女を。
大切な人との思い出が、自分の中で輝きを失ってしまう事を恐れていた《半龍姫》様を知っているんだ。
ボクにその想いを吐露してくれたときに、握りしめた掌が震えていたのを覚えている。
手を伸ばして、彼女の旗袍（チーパオ）の裾を掴む。

それだけで噴火直前の火口を覗き込む様な、生存本能を炙られるビリビリとした感覚が身体を走る。

「《半龍姫》様、駄目です……！」

でも、それを無理やり押し殺して必死に訴えかけた。

思い出して。貴女が何故、むやみに力を振るうのを厭うのか。

貴女が世界よりも大切だと思った、大事な人達との記憶を、自身の心から遠ざけてしまわないで。

そんな思いを込めて、呼びかけた。

それに気付いてくれたのか、自ら踏み止まってくれたのか。

彼女はハッとした表情を見せて、我に返ったように死屍使い（ネクロマンサー）に向けて伸ばそうとしていた手を止める。

怒りが消えた訳じゃ無いんだろうけど、活火山か大嵐かを思わせる憤激の気配は収まり、先程まで感じていた威圧感はあっという間に霧散した。

「……すみません、助かりました」

バツが悪そうにボクを見つめて礼を述べてくる《半龍姫》様に、ボクは安堵しながら頭を振って笑顔を返す。

ああ、良かった……普段の彼女だ。

正直怖かったけど、なんとか声を掛けることができたのは我ながら頑張った……裾を掴んだ瞬間はちょっと漏れちゃったかと思ったけど。

絶死を予感させる憤怒から解放された死屍使(ネクロマンサー)いが、額に浮いた脂汗を拭う事もせずに歓喜の声をあげる。

「は……ハハハハッ！　素晴らしい……！　その威風、それでこそ”龍”よ。我らが神の器足り得る至高の生命、期待以上だ……！」

器、ね。

未だに死にそうな顔色してるのに、ほんとブレないなぁ、この連中は。

にいちゃんじゃないけど、うんざりした気分で鎚鉾を改めて握り直す。

さっきの大型繰屍(コープス)も考慮すれば、決して油断できる相手では無いけど……ついさっき《半龍姫》様を止めた事に比べたら随分と楽だとすら思える。

それに冷静になって考えれば、あれ程の存在を死屍として操ってるんだ。

邪神の泥で補助しているといっても、召喚・行使は消耗が激しい、なんてレベルじゃない筈。

普通に戦ってもいいけど……ここはやっぱり、当初の予定どおり持久戦かな。相手の魔力切れと、にいちゃんや先生の到着、両方狙えるし。

「私が相手をします……いえ、しなければならない」

兎に角、《半龍姫》様には下がってもらって、後はボクが一人でやろう。
そう思ったんだけど、当の彼女が下がる気が無い。
やっぱり、繰屍（コープス）にされた”何か”は、関わりのある存在なのかな。さっきまでとは違い爆発寸前の怒りは感じないけど、それでも深く、静かに《半龍姫》様は怒っていた。
でも、相手の目的である彼女を前面に押し出すっていうのは戦略的に駄目だよ。当人が最大戦力である、ってことを差し引いてもさ。
なんとか説得して、下がってもらおうと改めて口を開こうとすると、それ遮る様に死屍使いのくぐもった笑い声が響き渡る。
「ク、カカッ、元より一対一は望む処――なにせ、我が秘術はそれが前提であるが故にな」
言葉と同時に、眼前の老人は杖を構えて――その柄頭にはめ込まれていた呪石を叩き割った。
何某かの術を石の中に仕込んでいたのか、膨大な魔力の籠った魔法陣が彼の足元に展開される。
この陣……召喚系だ！
次の瞬間、二十を超える様々な繰屍（コープス）が高速召喚される。
霊峰近辺に生息するものから、そうでないものまで、種類は様々……あの切り札らしき”何か”以外、手持ちの戦力を全て吐き出したって感じだ。

そしてその戦力は……全部ボク狙いかよっ！

「浄化に長けた聖女の横やりなどたまったものでは無いのでな。貴様はそやつらの相手をしておれ」

人の数倍の体躯を持つ巨人や蛇竜の繰屍（コープス）も混ざっているせいで、それらに一気に雪崩れ込まれると《半龍姫》様と引き離されてしまう。

あぁもぅ、そこまで脅威じゃないけど、とにかく数と質量が面倒くさい！

最初に間合いに入って来た氷の巨人の頭部を、聖気を込めた鎚鉾の一撃で砕く。

ぐらり、と聖性で死霊術の操作を断ち切られた巨人の死体が傾き、倒れ込んできたので野球のフルスイングの要領で胴体を殴打して、弾代わりに突っ込んでくる躯の群れへとカッ飛ばす。

弾が錐もみしながら群れに突っ込んで動きを鈍らせると、ボクはそこに範囲魔法を叩きこもうとして――。

スルーされた《半龍姫》様が、横手から無造作に拳で空を打ち、発生した衝撃波で躯達の殆どが粉々に消し飛んだ。

拳から扇状に放たれた破壊力の塊は、敵はおろか、大地を呑み込み、空へと昇って大気を衝撃と轟音で震わせながら消える。

「私の前でこの子に穢れた躯を差し向けるな。不快だ」

言葉の通り、不快気に眉を顰めながら死屍使い（ネクロマンサー）を睨みつける。
多少の損傷などものともしない動く死体の群れも、笊で掬うのも難しいレベルで粉砕されたら動ける訳が無い。
先生の渾身（フルパワー）に匹敵する一撃を、凄い気軽に打ったよこの人。
頭では理解していたつもりだけど、実際に見るとやっぱりとんでもないな。
かろうじて粉砕されなかった繰屍（コープス）へとどめを刺しながら、彼女の力の一端を見て半ば唖然とした気分になった。
「やはり、こうなるか。だが良い、時間は稼げた」
相当な業物であったろう魔杖と戦力の殆どを投入して、十秒掛からずに蹴散らされたというのに、老人は動じる事無く次の手を打ってきた。
僅かに稼げた時間の間に詠唱と構築を終えたのか、彼女の足元を中心に広範囲――《半龍姫》様も効果範囲に入った陣が展開される。
「貴殿と対面するこの状況こそが、我が策が成る前提条件よ！　儂は本来、戦う者では無いのでな！」
どんな魔法であれ、《半龍姫》自身に干渉が可能とは思えなかった。
けど、これは違う。そもそも相手に直接影響を与えるものじゃない！　こいつは……！

「まさか、時空凍結!? なんで邪神の信奉者が!」
「結界魔法と言えど、浄化の概念以外はただの技術よ! 儂ならば再現も改良すら可能であった――我が秘術、刮目するがいい、”龍”よ!」
時空凍結なら、何故自分ごと巻き込む様に発動させるのか。
改良と言っていた以上、何かあるのかもしれない。
慌てて《半龍姫》様に駆け寄って、術に干渉しようとして……静かな瞳で此方を見つめる彼女と、眼が合った。
”大丈夫です、直ぐに戻ります”
言葉の代わりに、込められた意思が綺麗な龍眼から伝わったような気がして――。

――だが残念、俺だ。

そんな声が彼女の真下から響いた。

直後、地面が盛り上がって何故か腕組みをしたにいちゃんが地面から垂直に飛び出してくる。
「なっ!?」
「うぇぇっ!?」
「……ひゃっ?」
その場にいた三者三様、呆気にとられた声が自然と喉から出た。
ちなみに最後のちょっと可愛い声は《半龍姫》様だ。
……それも当たり前だよ!
にいちゃんは文字通り、彼女の真下から出て来たんだ。
ドヤ顔で！　腕を組んだまま!!
《半龍姫》様のお尻に頭から突っ込んで！　彼女をぽーんと上空に高々と跳ね上げたんだよ!!　頭で!!　お尻を押し上げて!!
そして、自分の師匠に盛大にセクハラして登場したにいちゃんは。
やっべ、やっちまった。みたいな引きつらせた顔をしたまま、死屍使い（ネクロマンサー）共々、彼の発動した時空凍結らしき結界に巻き込まれて姿を消した。
下手な大樹より高く宙を舞ったおかげか、結界の発動範囲から逃れた《半龍姫》様が、軽やかに地へと着地する。

さっきまでの怒りを湛えた雰囲気は何処へやら、その顔はちょっと赤らんでいた。
一方ボクはと言うと……もう心配やら腹立たしいやらちょっと《半龍姫》様が羨ましいやらで訳が分からない。なんだよこれ、我ながら情緒が滅茶苦茶だよ。
《半龍姫》様は悪くない。寧ろにぃちゃんのやらかしの被害者なのに、頬を染めて顔を伏せる普通の女の子みたいなその姿に、何故だかとっても納得がいかない。
とりあえず、にぃちゃんが敵の切り札に巻き込まれたのは確かなので、すぐに結界によって閉じられた空間の精査に取り掛かった。
心配なのは確かなんだ。絶対に助ける——その上でじっっっくりとお話する事があるけど。
解析に手を貸してくれると言う《半龍姫》様に力を借りながら、ボクは初めて見る特殊な結界術の解除へと取り掛かった。

颯爽と助けに入ったつもりが速攻でやらかしたでござる（白目

どうしよう、なんか変な空間に閉じ込められたっぽいけど、既にここから出たく無い。

出た後が恐ろしすぎる。自業自得とはいえ、怖い。怒ったリアとお師匠のタッグとかなんなら邪神よかよっぽど怖い。

わざとじゃないんや、ただ、ちょっと急ごうとして霊峰の岩盤をL字にぶち抜いてショトカしてきただけなんや。

一番デカくて分かりやすいのがお師匠の気配だったので、そこを目印に真横から真上に掘りぬいて出て来たら、あんなことになっちゃっただけなんです、信じて（必死

直前で魔力が心許なくなって鎧ちゃんの起動レベルを一段落としたのも不味かった……完全起動状態だったら咄嗟に避けるのも容易だっただろうし、無理だとしてもフルフェイス状態だからまだマシだったのに。

思いっきり頭で尻を押し上げちゃったからなぁ……とってもやわらかかったです。安産型だなとか思っちゃいましたすいません（懺悔

もう最悪、腹を切るしかねぇ。最後に手刀で切り裂く事になるのが自分の腹とか、よもやこの節穴のリ〇クの目を以てしても予測できなんだ……！

一人悶々と頭を抱えていると、背後から馬鹿でかい質量に強襲され、《流天》で咄嗟に

逸らす。

――重(おつつも)ッ!?

ガンテスの打撃を捌いたときと同等。いや、下手すりゃそれ以上の威力に力を流しきれず、後ろに吹き飛ばされた。

空中でとんぼをきって、地を滑って着地する。

「貴様ぁ……我らの悲願に下らぬ方法で横やりを入れおって……何のつもりだ小僧!」

背後に馬鹿でかい繰屍(コープス)の頭部を従えた老人――恐らくは、今回の騒動の首謀者である死屍使い(ネクロマンサー)は額に青筋を浮かべながら、地に片膝を付けたままの俺を睥睨した。

――理由は色々あるが、強いてあげるならお前らの嫌がる顔がみたい(キリッ

割と真面目に返答したつもりだったんだが、凄い殺意マシマシで巨大な躯の首が伸び、横殴りに叩きつけてきた。

今度は流しきれない前提で受け、背後に敢えて飛んで捌き切れなかった衝撃を逃がす。

にしても、シンプルな攻撃なのにすげぇ速度と威力だ。首だけでコレって元は何の繰屍(コープス)なんだよ。

散らし切れない衝撃で痺れる手を開閉させながら、老人の背後に浮かぶデカい生首を観察する。

あれ？

気のせいか、段々と泥で構成されていた部分が減って、死体っぽい血色の悪そうな肉に変わってね？

……いや、絶対気のせいじゃないわコレ！

みるみる内に、泥が泡立つ様にして溶け消えて、その下から骨が、肉が盛り上がってゆく。

挙句の果てには、首の下からボコボコと肉が盛り上がり、骨が飛び出て凄まじい勢いで胴体が、手足が再生……いや復元されていった。

死屍に再生能力がある訳がねぇ。こいつは……まさか、存在の回帰か？

「ほう、気付くか。先程の技から見るに”龍”に師事しているだけあって、無能では無いようだな」

憤怒を捻じ伏せたまま、引きつった歪な笑みを浮かべて此方を嘲笑する死屍使い（ネクロマンサー）。

その短い時間で、あっという間に四肢の再構築を終えた超巨大繰屍（コープス）は、その長大な首をくねらせてゆっくりと身を起こした。

屍となって尚、力に溢れた翼がゆっくりと開かれ、閉ざされたこの空間の中で力強く羽ばたく。

強靭な四肢と、凶悪な形状をしながらも何処か優美な尾。圧倒的な硬度を確信させる

外骨格の甲殻。
節くれだった頭部の角は天を突き、ズラリと生え揃った鋭い牙は、岩どころか山だって噛み砕きそうな程、鋭い。
躯でありながら、嘗ての偉大さを想像させて止まないソレは、巨大なドラゴンだった。
ただし、サイズがおかしい。
端的に言って、羽の生えたゴジ○だ。パねぇ。大戦時に戦った狂える巨人族の末裔の倍以上あるじゃねぇか。
こんなサイズのドラゴンとか見た事もなけりゃ聞いたこともないんですけど。
……すげー嫌な予感がする。こいつぁ本当に竜か？
「この傀儡は、我らの組織に保管されていた秘宝――神代から存在していた牙を元に、我が秘術によって蘇った正真正銘の”龍”の繰屍（コープス）よ」
当たって欲しくない予想ほど的中するのが世の常ってな、糞が。
頂上に戻る途中で、お師匠がガチ切れしてる気配を感じ取って強引な地中ショトカ開通に踏み切ったんだが……理由はコレだろうな。
親御さんか、はたまた兄弟か。
使われているのは、十中八九、お師匠の身内の遺骨――形見だろう。
そらキレるわ、ほんっっとロクな事しねぇなお前らは。

そうと分かれば、この変な空間――時空凍結擬きの正体も察しが付く。
保管されていたのは牙、と言った。
角と並ぶ、龍の力を象徴する部位であるとはいえ、それだけでこうした全身の再現なぞ出来る訳が無い。
恐らくは、大量の邪神の加護を用いて尚、最初に見せた頭部の疑似的な再現が本来の精一杯。
それを補填し、完全な五体を揃えた屍として再現するのがこの結界だ。
時空凍結では無く、限定的な時間回帰。
結界内の存在を最も力を保つ、万全の状態へと時間ごと戻し続ける。
シアの『繰り返す』能力を大幅に劣化させた上に、絞り切った滓を極小規模に縮小させた様な効果を齎すのが、この空間の肝だ。
粗悪品とすら言えない超劣化版とはいえ、女神様の権能の一部だった能力を疑似的に再現する辺り、この爺は結界研究というジャンルにおいてマジで天才・鬼才の類と言って良いだろう。これで邪神にケツ振ってなけりゃ、歴史に名を遺す偉人になっただろうに。
とはいえ、その天才の生み出した結界にも穴はある。
恐らく、事象の中でも確定された強固なモノ……”死”などは回帰出来ない。

それが可能なら、繰屍（コープス）じゃなくて復活した龍が今頃俺の前に立ってる筈だからね。糞ゲーすぎワロタ。いや、今の状況でも充分大概だけど。

そんでもって……この時間回帰の効果は、術者やその使役する存在だけが対象じゃない。

この空間内にいる全ての存在……つまりは俺にも適用されている。

実際、この空間に囚われる前には、《地巡》による充填が必須なレベルにまで消耗していた筈の俺の魔力は、普通に全快状態にまで戻っていた。

要するに、だ。

ＲＰＧで言う処の、触れるだけで全回復する回復の泉に浸かりながら、明確な『死』が確定するまで、お互い最大出力で潰しあうという頭悪い削り合いを可能とした空間なのだ、此処は。

そして、目の前の死屍使（ネクロマンサー）いにとっては、龍の繰屍（コープス）なんていう、反則級の手札を完全な形で扱える場でもある。

成程ね、これがお師匠相手に喧嘩売って、勝ちの目を見出せる。と判断した理由か。

確かに、大抵の相手は一蹴できるだろう。

俺の知りうる限りでも、コレと一対一で相対して全力で潰し合って打ち勝つ、なんて真似が出来そうなのは三人しか思い浮かばない。

……リアが巻き込まれなくて良かったわ、本当に。
ちなみに、先に述べた三人の内に、お師匠は普通に入ってる。
そらそうよ。確かに完全な龍の繰屍（コープス）ともなれば、お師匠とも戦えるだろう。
でも戦えるだけだ。正直、彼女が本気になったら目の前のゴ○ラゾンビが勝てるとは思えん。
ただ、肉親の遺体と戦うって一点でお師匠のメンタルが心配になるが……あの人、身内判定だした相手にはくっそ甘いし。
もう一人に該当する魔族領筆頭――魔王ことロ○コン不死鳥野郎も、普通にゴリ押しの末にぶった斬るだろうな。
以上の推測から、単純な勝敗って意味では、この結界と龍の躯という二つの切り札込みでも、こいつらの目的は頓挫するのは確定してた訳だが……。
「まぁ、良い。貴様を縊り殺し、傀儡へと変える。そのあとは聖女の小娘に嗾けてやろう。そして今度こそ、”龍”を……神の器を手中とするのだ！」
それを指摘してやった処で、認めるような人種じゃないよな、狂信者（こいつら）は。
召喚者の命に応え、凄まじい威圧を放つ龍の躯が魂の籠らぬ咆哮を上げ、虚ろであって尚、圧倒的な威に満ちた五体が俺を圧殺せんと力を漲らせる。
そも、邪神の端末は俺が完全に霊核を潰して消滅させた。

女神様のガチ対応から考えれば、二度と自身の世界に潜り込まれることなんぞ無い様、外界干渉をきっちりばっちり完全にシャットアウトしてる筈だ。

実際、転移・転生者が邪神討滅以降現れて無いってのは、女神様がスカウトを止めた以外にも、一時的外界との繋がりを遮断してるからだと思われる。

つまり、どうやっても邪神の信奉者達の望みは叶わない。ハナっから空回りなんだよなぁ。憐れ過ぎて草生えるわ。

もうね、端から端まで全部滑ってんのよ、お前ら。

計画の実行タイミングから始まって、実際の成功率、成功してもそもそも無意味な事。

おまけに、切り札をぶつけた相手が本来の目標じゃない上に三人目と来たもんだ。

確かに、この空間は不完全な龍の躯を完全にする、この爺の用意した切り札を切り札足らしめる、最適の場だろうよ。

でも、術者本人よりも恩恵のデカい相手を取り込むなんて想定は――してないんだろうね。

ぶっちゃけ俺も、もう一度使う機会があるとは思ってなかった。

前に使った後、盛大に泣かせちまったしな。

《装填（フュウーアル）》

己の内にある炉を開く。

戦闘開始――向こうにとっては蹂躙の手始めのつもりなんだろうが、巨大な顎に絶大な量の魔力が収束し、龍の息吹（ブレス）となって今にも解き放たれんとしていた。
それを睨み見据えながら、腰を落として構える。
邪神のパシリなんぞに良い様に使われている、この世界における最も気高い生命の器へと。
今、解放してやる。なんてガラにもなく胸中で呟いて。
二年前、最後の戦いで使った切り札を、再び切った。

《魂装魄纏（オーバー・イグニッション）》

「――っ、複雑すぎる、なんて面倒な構成してるんだこの結界（コレ）！」
閉じた空間の残滓に、魔力を走らせながらボクは思わず毒づいた。

既に死屍使い（ネクロマンサー）とにいちゃんが、封印された空間に閉じ込められてから、結構な時間が経過してる。

にいちゃんが負ける訳が無い、そう思っているけど……《半龍姫》様を相手にこの空間に取り込めさえすれば勝機はある、とあの老人は判断していた。

正直、相手の誇大妄想、都合の良い思い込みだとしか思えない。

そして実際、その可能性の方が高いはずなんだ。

――でも。

もし、もし本当に、ソレが出来るだけの罠や切り札を、相手が有しているとしたら。

時間が経つにつれ、嫌な想像が頭を過って止まらない。

こうして解析の困難な、強固な空間を精査していると、嫌でも二年前のあのときを思い出してしまう。

あのときも、そうだった。

必死になって焦りと恐怖にお腹を焼き焦がされる様な感覚の中、隔離された空間をなんとか抉じ開けて。

ようやく開けた光景の先には、凄まじく巨大で醜悪な――半身を消し飛ばされて消滅してゆく邪神の本体と……拳を振り抜いた体勢から、四肢が砕けて地に倒れる、にいちゃんの、姿が。

「い、ヤだ……！」
噛みしめた唇から、悲鳴を我慢する様な情けない声が洩れる。
違う、あんな事はもう起こらない。
だって、にいちゃんは帰って来てくれた。
ただいまって言ってくれて、おかえりって伝えることが出来たあの日に。
何度も、何度も、もうおいていかないでって、お願いしたもの。
――泣いて、縋って、懇願するボクに約束してくれた。
もうボク達をおいていかないって！　ボクをひとりにしないって!!
歯を食いしばって、涙が零れそうになるのを堪える。
駄目だ、泣いたってなにも変わらない。一秒でも、一瞬でも早くこの結界を抜ける方法を見つけないと。
そう改めて決意して、魔力を走らせ、結界にとっての微かな鍵穴ともいえる綻びを必死に探す。
ボクと向かい合うように、同じく結界を精査していた《半龍姫》様が、何かに気付いた様に顔を上げる。
どうしたのか、声をかける前に一瞬でこっちに向かって飛び込んできて、ボクを抱えて跳びすざった。

「何を――！」

今はほんの少しでも時間が惜しいのに！

抗議の声を上げようとして――。

「何か、結界の内側から来ます――これは……」

ボクの声を遮って呟かれた彼女の言葉は、あの二つのちいさなお墓の前で会話を交わしたときと同じくらい……ううん、それ以上に驚愕で揺れていた。

「これ、は……あの子……！　なんて無茶を、この様な……！」

「……にいちゃん!?　にいちゃんの事を言ってるの!?」

どういうこと！　無茶って何!?

自分が半ばパニックになりつつあるのを自覚しながらも、それを止められない。

「何があったの！　にいちゃんは無事なの!?　教えて！　答えてよぉ!!」

ボクを抱えた《半龍姫》様の襟元を掴んで、かん高い声を上げて彼女に詰問してしまう。

後で思い返すと物凄く礼を失した態度だったけど、彼女は優しくボクの背を撫でると、閉じた空間の名残り――その上方十メートル辺りをそっと指さした。

ドォン、と壁一枚を隔てて届くような、砲撃みたいな音がそこから聞こえる。

次いで、何かにヒビが入るような音が小さく耳朶に届いた。

再び、砲撃音――今度はよりハッキリと。
そして、気付く。
これは、砲撃じゃない。
ピシリ、と。空間に亀裂が走った。
ドン！　と三度目の衝撃。
これは――打撃音だ。結界の、時空凍結に類する究極の空間閉鎖を、内側から力尽くで叩き割ろうとしている音だ。
上空に浮かんだ亀裂はもう蜘蛛の巣の様に広がって、無数に走る深い打撃痕の隙間から、光が洩れ始めている。
「――あぁ」
まだそうと決まった訳じゃないけど。
それでも、ボクの喉からは奇妙な確信と安堵で、震えた声が零れていた。
四度目の、最後の打撃音。
霊峰の空を貫く衝撃が走り、閉じられていた空間が突き破られる。
真っ先に飛び出て来たのは、結界を破壊したのであろう、真っ直ぐに突き出された拳だ。
内側から強引に突破されたせいだろうか、結界がガラス片の様に内側の景色を宿した

まま、無数の破片となって辺りに降り注ぐ。
その中を、全身に魔鎧を纏ったにいちゃんは拳を打った勢いもそのままに、上空から飛び降りて、足裏と反対の膝、拳を使った、三点着地で大地を陥没させて帰還した。
一瞬だけ判別が遅れたのは、最初に見えた鎧の姿がいつもと違う様子だったから。
普段は鮮血を思わせる深紅の魔力導線は、まるで火山の中で脈打つマグマの様に熱量を灯した光を放っていて。
内側から溢れ出す熱量に炙られたみたいに、全身の装甲は赤熱化していた。
それも地面に着地する間に色を失って、いつもの深紅と黒に戻っていったけど。
それが幻じゃ無い証拠に、微かに融解した後の残る装甲は白煙をあちこちから噴き上げている。
着地の体勢から動かないにいちゃんに、言い知れない不安が湧き上がるけど……直ぐにそれも霧散した。
――全身クッソ痛いのに、スーパーヒーロー着地とかするんじゃなかった。
いつもの、魔鎧の下で白目を剥いて嘆いてそうな声が聞こえて、胸を撫で下ろす。
おぉ、消耗はマジでしてないな……痛みは据え置きだったけど。なんて、ブツクサ言いながら立ち上がるにいちゃんに、駆け寄る。
「にいちゃん！」

安堵と歓びのままに飛びつこうとしたボクに、にいちゃんは手を突き出してストップをかけた。

――待たれよ、アリアさん。今はワタクシは全身熱したホットプレート状態なので近づいてはいけません。

ええ……。

いや、理由は至極納得できるけど。

ここはこう、感激の抱擁とかする場面じゃないの？　絶対そんな空気だったよ。

駄目に決まってんだろ、お前が火傷したらどうするんだ、と至極真面目な声色で言うにいちゃんに肩の力が抜ける。

あぁ、にいちゃんだ。

ボクのお願いを、約束を、やっぱり守ってくれた、ボクの――。

やっぱりその首元に飛びつきたくなって、でもなんとか我慢して。

我ながらそわそわと落ち着き無い様子をみせていると、《半龍姫》様が歩み寄ってきて、そっと魔鎧の装甲に包まれたにいちゃんの肩に触れた。

そのまま埃を払うように掌を水平に切ると、白煙をあげていた鎧に籠った熱量だけが、吹き払われる様に消え飛ぶ。

御礼を言うにいちゃんには反応せず、眩しいものを、けれど痛ましいものを、或いは

認め難いものを見た様に、様々な感情に溢れた瞳を揺らめかせ……彼女は口を開いた。
「……無茶を、しましたね」
魔鎧の、何処か鬼や悪魔を連想させる形状の頭部装甲越しに、優しく掌が添えられる。
「どうやって貴方がかの悪神に単独で勝利したのか、ずっと疑問に思っていました……アレが、貴方の答え。アレが、聖女の苦しみを断ち切る為に手にした、猟犬の牙なのですね」
まぁ、他に手段もなかったもんで。仕方無いね。なんて肩を竦めて言うにいちゃんに、《半龍姫》様は何故か――羨望と、後悔の色をその龍眼に浮かべたみたいに見えた。
「馬鹿な子……貴方が、私達の、時代に……」
顔を伏せて呟かれた、殆ど聞き取れない……口の中で転がした言葉に、どんな想いが込められていたのか。
ボクにも、にいちゃんにも、分からない。
応える言葉を持たず――けれど、にいちゃんは、自身の頬に添えられた《半龍姫》様の手を穏やかに取ると、その掌に自分の掌を重ねて、そっと何かを乗せる。
「これ、は……」
――お師匠にお返ししときます。つーかアナタ以外に持つ資格ある奴いないでしょ、本来。

瞳を見開いて掌にあるそれを凝視して、呆として言葉を詰まらせる《半龍姫》様に、にいちゃんはお道化た調子で返す。
手渡されたのは、何かの牙の破片、かな？
それを、彼女は大切な宝物のように、両の手で抱えて胸元で抱き締めた。
「……なぜ、だ。なぜ、貴様ガ、イ、る……」
しんみりした空気に割って入る様に、か細い、擦過音の混じった呻き声が、さっきの結界の範囲ギリギリの場所から届く。
ボク達が声の発生源へと振り返ると、そこには胸元から下をごっそりと消失させ、息も絶え絶えな死屍使い（ネクロマンサー）の老人が、地に打ち捨てられて転がっていた。
――そういや、トドメを刺し忘れてたな……今回は下手打ってばかりだね、どうも。
自省の色が濃い、苦虫を噛み潰した声色でにいちゃんは一人ごちて、老人の――いや、自身を繰屍化（コープス）させてかろうじて存在を保っている、朽ちる寸前の躯の元に歩み寄る。
近づくにいちゃんに、激昂した躯は最後の断末魔だといわんばかりに、声を張り上げて罵声を浴びせた。
「フ、ざ、けるなアアアッ!!　ナゼ我ラの神ヲ滅ぼしておきナガラ、貴様ガ生きてイル！」

特に反応を示さず、無言で躯の前に立つ。
「あのヨウナ戦い方ガアルカ！　あんな方法ガ在ってたまるカ!!　……この、気狂イめガ!!」
そのまま、無造作に手刀を天に掲げて。
「儂ハ！　我らの神ハ……！」
脳天から残る胴体胸元まで、《命結》の一撃で一刀両断した。
――うるせぇ、黙って死ね。
心底どうでも良さそうに、グズグズに崩れ落ちて地に還る屍を一瞥して。
にいちゃんは鼻を鳴らして、魔鎧を解除したのだった。

襲撃があった日から、空けて二日後。

流石にあんだけゴタついてから、稽古を続行する気にもなれず、最後の一日は荒れた屋敷周辺を整地して、あとはゆっくり休息をとって過ぎていった。

そうそう、あの後直ぐに駆けつけたガンテスは、霊峰を荒らした不届き者と戦ってくれた礼、ということで最後の一日を俺達と同じくお師匠の屋敷で過ごす事になってる。

よろしくないトラブルがあったとはいえ、最終日になって得難い経験が出来た、とオッサンも喜んでたよ。普段の音声ボリュームが最大値にセットされてる人種なので、お師匠が少し押され気味だったのが笑えるけど。

最後の日だからと、リアと師匠が奮発していつもより豪華な食事を振舞ってくれたんだが……足りなくなりそうな肉類を、ガンテスを背に乗せていたあの白狼が届けにきたのは驚いたね。

獲物をお師匠の前に置き、頭を撫でられて喉を鳴らす様は、主級の霊獣というより母親に狩りの成果を自慢しにきた子狼みたいだった。

そして本日、霊峰から去る日。

俺達は、屋敷の前で向かい合って、別れの挨拶を告げていた。

「お世話になりました、《半龍姫》様。――また、お邪魔していいですか？」

「勿論です。そのときは……貴女の姉君も連れて、是非」

リアとお師匠が互いに微笑みあって、握手を交わす。

お師匠は大分リアを気に入ったと思ってたが……リアも懐いたもんだなぁ。身内同士の仲が良いのは俺も嬉しいので、結構な事だ。

ちなみに、ガンテスは「拙僧は最後に飛び入りした身ですからな！　別れの挨拶は長く共に過ごした皆様の時間なれば！」と言って、最初に深々とお師匠に礼をした後、頂上の入口付近で待機してる。豪快を絵に描いたみたいな人柄だけど、そういう処は繊細な気配りが利いたりするんだよね、あのオッサン。

二人が挨拶を終えたようなので、今度は俺が前に進み出てお師匠と向かい合う。

今回も大変お世話になりました、お師匠。

「いえ、私のほうこそ、貴方達には助けられました……その優しさと意思に、感謝を」

胸元から下げた牙飾りに指先を触れ、彼女は柔らかく微笑む。

気のせいか、来た時よりよく笑うようになったんじゃないかね。騒がしくしただけだった気もするが、気晴らしになったってえなら何より。

そう思って笑い返す俺を、師匠はちょっと考え込むような様子で凝視した。

「……師として命じます。あの力、二度と使用する事はなりません」

うん？　あー……切り札の事ですか。

あの特異な結界内部だからこそ躊躇なく切れたんであって、元から二度と使うつもりは無いっスよ？　っていうか普通に使うと死ぬし。

「そうでしょうね。だからこそ、貴方が貴方のまま、再びこの地に生を受けた事はとても幸運な事なのだと、きちんと自覚なさい」

あ、そういえば一回死んだこと言って無かった。と、焦る。

でもお師匠はそんな事はとっくに察していたのか、白い繊手の指先を俺の額に向け、子供を叱る様に、軽く突いてきた。

「無茶をしてばかりの弟子への、仕置きと監督変わりです――真っ直ぐ立って、口を開けなさい」

え、なに急に。こわい。

どこか悪戯っぽい表情で言うお師匠に、逃れることは出来なさそうだと、観念してあー、と口を空ける。

これ、このままビンタとかされないよね？　大口開けたまま師匠に平手打ちとかされたら歯が何本飛ぶか分かんないんですけど（白目

そんな風に戦々恐々としていると……。

お師匠は自身の親指を口に含み、軽く吸うと――噛みしめた。

ガリッ、と音が聞こえ、引き抜いた指には唾液の糸と、指先に鮮やかな赤が滲んでいて。

何をしてるのかと困惑している俺の、開きっぱなしの口へ、その指先がねじ込まれた。

――――

口腔は?!?!??指の腹が擦りつけられ、粘膜に刷り込むように鉄と、唾液の味が広がる。

頭が真っ白になって馬鹿みたいに棒立ちになって硬直する俺の口内を存分に蹂躙すると、唐突に指は引き抜かれた。

「あ、あ！　あああああぁーっ!?」

俺の口元と、師匠の指先にかかる透明な糸を指さして、リアが目を吊りあげて叫び声をあげる。

そのまま、脳味噌がショートしてフリーズした俺を引っ手繰る様に自分の後ろへと隠すと、妹分は先程までの和気藹々とした雰囲気とは真逆の、威嚇するが如き表情を師匠に向けた。

「な、なな何してるんですか！　なんで急にこんなことしてるんですか！　なんか《半龍姫》様ばっかりずるいです納得がいかない！」

「い、いえ。私もこの子に掛かっている枷を強化しようと……そもそも、この枷の強度からして、相当な量の血液か体液を既に交か「うわーっ！　あーっ!!　ふあああああああああっ!?」筈ではないでしょうか」

勢い良く問い詰めるリアに、オロオロとしながらいきなり珍行動に及んだ理由を語る師匠。

その言葉が終わる前に、俺の両耳を目にも止まらぬ速さで塞ぐと、妹（おとうと）分は顔を真っ赤にして大声をあげて彼女の弁を遮った。

「も、もう挨拶は済んだし、これで御暇します！　じゃ、これで！」

そのまま、俺の襟首を掴んだまま引きずって、凄い勢いで帰り道を歩み始める。

呆気に取られたままの師匠の姿がみるみる内に小さくなっていって――ある程度の距離が離れた処で、リアは振り返って声を張り上げた。

「――また来ます！　今度はレティシアも一緒に！　だから、そのときまで御元気で！」

赤らんだままの顔は、どこかやけっぱちの様にテンションが高くて。

けれど紛れも無くその言葉には、隠しきれない親愛が籠っていた。

引きずられたまんまの俺も、それに合わせてお師匠に向けてのんびりと手を振る。

まー、そんときは俺も高確率で一緒だと思うんで、また稽古つけて下さーい。お元気でー。

遠目だったから、はっきりとは分からんかったが。

師匠も、笑顔を浮かべていたんじゃないかと思う。

そうして、俺達は彼女……霊峰に住まうひとりぼっちの優しい龍の姫との別れを終え――しかし必ずの再会を誓って歩き出す。

「……にいちゃん、御機嫌だね。《半龍姫》様、美人だもんね。そりゃ嬉しいよね」
めっちゃ不機嫌な妹分にズルズルと引きずられたまま、俺は抗弁した。
いや、ちょっと待って。あれ俺のせいじゃなくない？　そもそも師匠だって枷を強化するとか言ってたやん、その為だって。お互いに他意とか無いって。
「ふーん……大好きなお師匠様の指の感触はどうだったの？」
ハイ！　めっちゃ柔らかくていい匂いがしました！　……ハッ!?
「……帰ったらレティシアやアンナも交えて、お話しようね。　にいちゃんが《半龍姫》様のお尻に、頭から突っ込んだ件も、含めて、たっぷりと」
い、嫌ァァッ!?　ヤメロォ!!　やめて下さいアリアさん！　その件まで二人に知られたら本気で死ぬゥ!?（迫真

冷たい北の大地には似つかわしくない程の、晴れ渡った空の下。
ぎゃいのぎゃいのと騒がしく掛け合いを繰り返しながら、俺達はガンテスとの合流を目指す。
緩やかな歩みで、けれど止まることなく。
聖都に向かう帰り道への、そして、何時かの未来に再びこの地へ訪れる為への、遥かな道程を進みだしたのだった。

三枢機卿

聖都中枢、大聖殿。
参ノ院と呼ばれる、枢機卿の一人が統括する区画にて、密やかな会合が行われていた。
本来は、各国の重鎮等の賓客を迎えて会談を行う豪奢な作りの部屋は、日除けの窓掛がしっかりと下ろされ、華美な調度品達も影に沈む様に暗がりの中で主張を控えている。
唯一の光源である、卓に備えられた燭台の火が二人の男の姿を薄暗い室内に浮かび上がらせた。
「……遅いな。彼女はまだ来ないのかね」
今回の会合参加者の不在を問うたのは、赤いカソックに身を包んだ壮年の男だ。
白髪の目立つアッシュブロンドの髪を後ろに撫でつけ、片眼鏡（モノクル）を掛けたその顔には、年相応以上の皺が――とりわけ眉間に深く刻まれている。
「今朝方、クソジ……老人に呼び出されていたようです。少々遅れるとの事でしたが

……時間的に頃合いでしょう、直ぐにやってくるかと」

どこか神経質そうな印象を他者に与える男に、宥める様に応じたのは同じく赤いカソックを身に纏った男だった。

先に声を上げた男よりは本来一回り程若い、学者然とした彼は無造作に伸ばした鈍色の髪を後ろで束ねており、分厚い眼鏡と伸ばした髭のせいで外見的には大差無い年齢に見える。

片眼鏡（モノクル）の男が、顰め面だった顔の眉間に、更に皺を寄せて頭を振った。

「時間は有限であり、貴重だ――特に我々の様な立場の者にとっては。どうもあの御老人は、それを理解した上で徒に浪費する事を好む悪癖がある」

「さして得手でも無い盤上遊戯をよく打っていますからな。手慰みとはいえ、あそこ迄不向きであれば駒を並べる事に飽いて然るべきでしょうに」

二人の口に登る老人とやらは、嫌悪や憎悪と称する程では無いが、決して友好的とは言い難い感情を共通して抱く相手のようではあった。

今回の会合は参加者が揃ってこそ、意味の生まれる内容だ。男達が先に情報の交換を行ったところで片手落ちになるのは必定。

故に、という訳では無いが、そのまま延々と老人とやらに対する愚痴を投げ合う空気になりかけたが、部屋の扉がノックされた事で両者ともピタリと口を閉ざす。

素早く二回、間を開けて一回。予め決めておいた、今回の会合に参加する者への符丁だ。
「――杯に満たすは？」
『葡萄酒』
「――地に積み重なるは？」
『歴史と真実』
男達が順に問いかける言葉に、扉の向こうから女性の声で答えが返される。
最後に扉越しの声の方から、符丁合わせの文言が室内に向けて放たれた。
『――訪れるべきはぁ？』
「「未来と、平穏」」
異口同音で男達が答えると、扉が静かに開かれる。
するりと部屋に入り、音も無く扉を閉めたのは艶やかなマゼンタの髪を伸ばした、年齢不詳の美女であった。
当然というか、彼女もまた赤いカソックに身を包んでいる。
「毎回、この符丁合わせするのやめなぁい？　なんだか馬鹿みたいだわぁ」
「なに、様式美というやつだ……それに、万が一という事もある。情報の漏洩を防ぐのに有効なのは、安易な簡略化や省略を良しとせぬ事だよ、限度はあるがね」

「石頭らしいお言葉ねぇ」
肩をすくめながら空いた最後の席に腰を下ろす女性。
卓を囲んだ三方の席が埋まると、片眼鏡（モノクル）の男は両肘を机に立て、腕を組み合わせた。
「では、今回の会合を始めよう……念の為聞いておくが、気取られてはいないな？」
「魔法で確認してるもの。つけられた形跡はないわぁ。猊下の『目』もこの部屋なら届かない――だから此処を会合場所にしたんでしょぉ」
「どのみち、此処で駄目なら私達が不自然無く集える場所は全滅でしょう。最悪、勘付かれる前に目的を達成する心づもりで事に当たるべきかと」
女性と学者風の男の言葉に、三者の中で纏め役らしき片眼鏡（モノクル）の男は一つ頷き――早速とばかりに今回の会合の趣旨を上げる事にした。
「うむ。今回の状況も考えれば、拙速を尊ぶべきか……では確認だが、『彼』が遠方に出掛けるというのは確かなのかね？」
「此方で確認を取った限りでは、事実ですね。しかも『金銀』の御二方の内、片方は間違いなく聖都に留まる事になる様で」
「こっちでも偶然だけど、確認が取れたわぁ。当人――『金』の方からちょっとした相談を受けたものぉ」
最後に声をあげた女性の言葉に、片眼鏡（モノクル）の男は眉間に皺をよせたまま片眉をあげて

「ふむ？」と呟いた。
「相談か。どんな内容なのか聞いても？」
「ここで話すような内容じゃないわぁ。女の子同士の会話を知りたがるとか無粋よぉ」
「尤もだな。忘れてくれ」
「ハハハッ、『金』の彼女はともかく、卿が『女の子』というのは聊か以上に無理がヘブォ!?」
最後に揶揄いを含んだ笑い声をあげた学者風の男の顔面に、無詠唱で発動された魔力弾がめり込む。
椅子ごと仰け反って背後へと倒れ込んだ男に、女性は「ブンブン煩い蚊が居たから潰してあげたわぁ、感謝なさぁい」と吐き捨て、冷え切った目付きのままそれを見下ろした。
「ぬぐ、痛たた……何も魔法まで使う事はないでしょうに」
「今のは卿が迂闊だ。婦女子の年の頃について揶揄するなど、梁から下がった縄輪に首を通して遊ぶのと然して変わらんよ」
赤く腫れた頬を擦りながら、なんとか起き上がって椅子を立て直す学者風の男に、呆れた様な声で片眼鏡（モノクル）の男が先程の言動を咎めた。
防音処理も完璧な部屋だ。多少物音を立てた処で外に漏れることは無いが……先に

述べた通りに、彼らの時間は一般的なソレより遥かに余裕なく、有限である。逸れるばかりの話題をさっさと軌道修正するに越した事は無い。
「しかし、『彼』が戻り、まだ季節を一つ巡ってすらいない。だというのに、今回の一件は片割れが留守番だというではないか……なんというか、大丈夫なのかね」
　自分たちにとっては好都合な状況ではある。あるのだが……それでも、時間の浪費以上に気になる点ではあった。
「その辺りも含めての相談だったけど、向かう場所が場所なのよねぇ……手早く済んでも二ヵ月は掛かりそうなのが問題だわぁ……いや、私達にとっては都合が良いんだろうけど……」
「ふむ、では遠話用の魔道具の手配をしておきましょう。本来なら軽々と使用できるような魔力消費量では無いですが……彼女らであれば大した問題にはならぬでしょう」
「そうだな、それが無難か。ではその様に頼む」
　懸念事項を手早く片付けると、三人はようやっと、本題へと立ち戻る。
「『彼』と司祭が出払い、『金銀』の片方も残る。状況は我らに味方している――例の噂はどうなっているのかね？」
「聞き取りを行いましたが、若い者達を中心に、噂を熱心に支持する層も出て来ている様ですね。妙な暴走だけはしないよう、少数の過激な者達は注視しておく必要はあるかも

しれませんが、概ね問題無いかと」
「猊下や先生も火消しに動いている気配は無し、流れとしては悪くないわぁ」
緩やかではあるが、順調。
彼らの『計画』、その進行状況は、そう評することが出来た。
思案を巡らせながら黙する片眼鏡（モノクル）の男に対し、女性と学者風の男は今後の計画の展開について各々の意見を交換し合う。
「できれば『彼』が戻ってくる前に一段階進めてしまいたい処ではありますね。『金銀』の肯定さえ得られる事ができれば『彼』に関しては一気に問題無くなるでしょうし」
「それはあるわねぇ。先生や司祭もあの三人には相当甘い処があるし、彼らが納得してるなら蒸し返す事も無いと思うわぁ」
これを機に『計画』の前倒しも検討すべきだ。と、暗に主張する二人に対し、片眼鏡（モノクル）の男が出した結論は、やや慎重性を重視した答えだった。
「取り敢えず、噂の浸透と聖殿内の噂の肯定者の推移をもう暫く確認してからにすべきだ。そうで在る事が望ましい、という空気が完成した後ならば、我々が直接干渉してもそう不自然にはなるまい」
勇み足で気取られるのも問題だが、最悪、『彼』に『金銀』への害意あり、等と判定されてはたまったものではない。と男は苦々しく付け足す。

それを言われると二人も積極的な干渉には二の足を踏まざるを得ない。
立場や肩書をガン無視して、判断からノータイムで行動を起こす……起こせてしまう。
そんなネジの外れた人外級とか、着火線に火の気を近づけることすらしたくないのだ。
「幸い、『彼』が戻ってくるまでには二ヵ月近い猶予がある。その間に、じっくりと腰を据えて『計画』を進行させてゆくのはどうだね？」
「少々歯がゆいですが……安全性には代えられませんね。それで行きましょう」
「私も異論は無いわぁ。やっぱり安全第一よねぇ」
あっさりと意見を翻す二人の様子は何処か白々しくも感じたが……片眼鏡（モノクル）の男はそれには言及せず、頷きを返すに留めた。
「では少々駆け足ではあったが、今回の会合は此処迄としよう。この問題に関しては、我らは望みを共通する同士だ。互いの利になるべく、協力して事に当たろうではないか」

聖教会大聖堂。

この世界で唯一、そう称される荘厳な建造物は大聖殿中央区の中心、初めて聖殿内を訪れた者にも容易に見つけることが可能なシンボルマークの如く、圧倒的な存在感を以て聳えていた。

大きな窓には意匠を凝らしたステンドグラスがはめ込まれ、側廊を彩っている。

拝廊から入って頭上を振り仰げば、礼拝や祭事には見事な旋律を響かせるであろう、巨大なパイプオルガンが楽廊に設置されているのが見て取れた。

時刻は早朝。空に昇ったばかりの穏やかな朝日が天窓から降り注ぎ、建物内部の神秘的な雰囲気をより強く、厳かに演出している。

朝も早くから祈りの時間の為にと、敬虔な聖職者やその見習いによって身廊は混雑しており、聖堂内に入り切らない者達は建物周辺に留まり、その時間がやってくるのを静かに待っていた。

そして、聖堂に集まった女神の信徒達が待ち侘びた、その時は訪れる。

聖堂の奥――聖所から現れたのは一人の少女だ。

淡い金糸の髪を薄手のベールで覆い、蒼穹の空を映し取った様な美しい瞳は、今は長い睫毛の下に伏せられている。

少女は、彼女と彼女の妹のみが身に着ける事をゆるされた祭服を身に纏い、ゆっくりと創造神の像が祀られた内陣の前へと歩み寄った。

其処で両膝を折り、聖堂の床へとつけると静かに両の掌の指を絡ませ、組み合わせる。

祈りが始まると、パイプオルガンの重厚かつ、荘厳さを以て伸びやかに響く音が、朝の陽が差し込む大聖堂を更に神秘的に彩った。

始まりの言葉も、祈りの聖句すら無い。

ただ、主の像の御前にて、静かに祈りを捧げるのみ。

それだけの姿、それだけの行為が、何よりも崇高で侵し難く、完璧な光景として大聖堂に集った僧達の胸を打つ。

――救世の聖女。彼女はそう呼ばれていた。

或いは、この場、この刻に祈りを捧げる者達の中には、象徴（イコン）として祀られた神の像では無く、彼女にこそ祈りを捧げる者もいるのかもしれない。

金の髪の聖女が祈りを捧げると、一斉に始まった聖職者達の朝の礼拝は、大聖殿に響き渡る音楽が結びを迎えると同時に、少女の祈りの時間と同じくして終わりを告げる。

ほんの微かにではあるが、感嘆の吐息や声でざわつく聖堂内には頓着せず、少女は再

び聖所――内陣仕切りの扉の向こうへとその姿を消した。
聖女の祈りの時間を初めて眼にした者も、既に何度も訪れた者も、等しく感嘆や軽い興奮、畏敬の念を以て、口の端に先程までの神秘的な時間についての話題を上らせる。
特に若い僧達からは、何処か舞い上がるような、浮ついた空気も感じられたが、其処は曲がりなりにもこの世界の聖職者。側廊の列を乱す事無く、静かに聖堂からの退出が始まった。
朝の特別な時間……聖女と祈りや礼拝を共に出来る、聖殿内に勤める者達にだけ許された得難い時間は終わりである。後は朝食を摂るなり、早朝からの業務に励むなり、いつも通りだ。
そして、多くの者との祈りの時間を共有し、その姿を以て彼ら、彼女らを惹きつけて止まない金の聖女は――。
「……眠っ。朝飯食わなくていいから二度寝したいな」
内陣仕切りの奥、聖所に置かれた備え付けの椅子にどっかりと腰を下ろし、ベールを無造作に剥ぎ取ると、生欠伸をしながら涙の滲んだ瞳を擦っていた。

朝の礼拝から一時間後、食堂にて。

「アンタ、今日は本当に眠そうね……夜更かしでもしたの？」

朝食のハムエッグをつつきながら、プラチナブロンドの髪をサイドで纏めた少女騎士――アンナが怪訝そうな顔で相席の聖女に問いかける。

それに対し、金の髪の聖女……レティシアは、しつこく眠気が残る眼を半分に眇めながら、やや気怠そうに応じた。

「あぁ。昨日はアリア達も街で宿を取ったらしくてさ、ちゃんとした屋内なら長話も出来ると思ってついつい話し込んでたら、いつの間にか深夜になってた」

「遠話の魔道具を何時間使ってたってのよ。簡易版だとしても普通の術者なら干からびるわ」

呆れた様子のアンナではあったが、レティシアとしては睡眠不足以上の疲労は特に感じていないので、その辺りは気にしていなかった。

彼女の相棒と、妹のアリア。護衛のガンテス司祭が霊峰へと出発して、はや数日。

教会内での立場もあり、気軽に絡める人間の少ないレティシアは、こうして帝国から出向して来ている友人と朝食を共にするのがお約束となっている。

此処一年足らずの間で、すっかりルーチンワークと化した朝のお祈りタイムだったが、一仕事終えたあとで食堂に向かうと、集団の若い聖職者達が祈りの時間の空気にあてられたのか、フラフラとついてきたり、場合によっては鯱張って声を掛けてきたりする。

なので、朝はゆっくりと食事を摂りたい身としては、中々心休まらない。

口にこそ出してはいないが、そういったレティシアの心境を察して、お祈りタイムを終えると合流して朝食を共にしてくれるアンナの心遣いは、大変に有難いものだった。

出掛けてしまう前まではほぼ毎回一緒に食事をしていた、レティシアの相棒である人物ほど絶大な防波堤効果を持つ訳では無いが、アンナも他国の騎士――しかも音に聞こえた最精鋭である。

《刃衆（エッジス）》の副官と金の聖女が席を共にしている、というだけで、物怖じするには十分だ。

声を掛けてくる者達は格段に減る。ゼロでは無いが。

が、今日に限ってはその心配も必要無いと思われた。

「やっぱり料理長のご飯は美味しいわねぇ……お酒の持ち込みが不可なのが残念だわぁ」

レティシアの対面に座り、朝食に舌鼓を打ちながら朝っぱらからアル中の如き台詞を吐くのは、マゼンタの髪を伸ばした妙齢の美女である。
「今更だけど……シルヴィーさんが朝から食堂にいるって珍しいな？　朝食は壱ノ院で済ませてるイメージがあったけど」
「だね。なんでまた急にこっちに顔を出したんですか枢機卿（カーディナル）？」
不思議そうに二人が問いかける美女の名はシルヴィー＝トランカード――聖教会最高位、枢機卿の一人でもある女傑であった。
彼女達の言葉通り、普段は自身のテリトリーである壱ノ院で午前中の時間を過ごす事の多いシルヴィーが、朝から中央区の食堂にいるのは珍しい。
「これから参ノ院に顔を出さなきゃいけないのよぉ。丁度良いから大聖堂でのレティシアちゃんの御祈りも見ておこうと思ったワケぇ」
石頭のところはお酒飲めないから長居したくないんだけどねぇ、とボヤく酔いどれ枢機卿殿ではあるが、普通は日も高いどころか昇ったばかりで飲酒ＯＫな場所の方が少ない。
それを態々突っ込む事はせず、レティシアとアンナは生暖かい視線をシルヴィーに向けた。
「あとは……そうねぇ、例のデートの一件がどうなったのか、おねえさん興味あるわぁ」

「んぐっ!?」
　フォークをゆらゆらと揺らしながら、ニヤリと笑う紅紫の髪の美女の言葉に、金糸の髪の少女が朝食のパンを喉に詰まらせる。
「多少なりともお手伝いをした身としては、やっぱり事の成否は気になるのよねぇ」
「あー、そう言われるとそうですね――で、実際の処どうだったのレティシア」
　アンナまで追撃に加わり、二人がかりでニヤニヤとした笑いと視線を向けられ、なんとか口内のパンを紅茶で流し込んだレティシアは微かに頬を赤らめて咳払いした。
「んんっ……ど、どうって言われても、い、いつも通りだったというか、明確にコレっていう事は無かったというか……」
「嘘ね。アンタ、アイツと二人揃って夜中に帰って来たせいでシスター・ヒッチンにお説教されてたじゃない。しかも怒られてるのになんか楽しそうだったし」
「あらぁ?　あらあらあらぁ?　いつもは日が暮れる頃にはちゃんと帰って来ていた聖女様とその猟犬クンは、真っ暗になるまで何処でナニをしていたんでしょう……気になるわぁ」
「は、ハァーッ!?　なんも無かったし!　下衆な勘ぐりはやめろし!」
　女三人寄れば姦しいとは言うが、正にその通りな光景を体現している。
　聖女、帝国有数の騎士、枢機卿と、声を掛けられる様な人間は限られている面子では

あるが、その分、視線の集中率は高い。
自然、声を潜めている訳でも無い会話も食堂を利用している人間にはダダ漏れになってしまいそうなものだが――そこはシルヴィーが気を利かせ、話題を振る前に遮音効果のある魔法を発動させていた御蔭で、聖女のプライベート模様は護られた。
尤も、顔を赤くして百面相を晒している姿までは隠せていないので、完全にという訳では無いが。
「そういえば枢機卿（カーディナル）、あの日、陽が落ちてから居住区の街壁あたりで大規模な幻惑魔法の行使が確認されたらしいですよ？　何だったんでしょうねぇ」
「私のところにも報告が上がってきたわぁ。なんでも、去年の戦勝記念で見た……ハナビ？　というのを再現したものだったらしいの。アレ、綺麗よねぇ、逢瀬の時に二人で見ることが出来たら、とぉーってもロマンチック」
「全部分かってんじゃねーか！　タチわりーぞお前ら!?」
音声が遮られているとはいえ、ぎゃーぎゃーと喧しく騒いで食堂中から視線を集める美少女二人と美女一人ではあったが、その光景に向けて物怖じする事なく歩み寄る人物を見て、多くの人間が驚き、騒めきの声を上げる。
「此処に居たのかね、トランカード枢機卿。一時間後には此方の院で会談の予定だった筈だが、よもや忘れている等ということはあるまい？」

低い男性の声に、三人がピタリと口を閉ざし、振り返ると――其処にいたのは顰めっ面の、片眼鏡（モノクル）を掛けた壮年の男性だった。

シルヴィーが面倒臭そうに鼻を鳴らすと、手をヒラヒラと振ってぞんざいに応対する。

「ご機嫌よう、ストラグル枢機卿。忘れてるわけじゃないわぁ。石頭との堅苦しい仕事の時間になる前に、可愛い女の子達とお喋りして気力を充填させていただけよぉ」

「ふむ、ならば良い。無粋は此方だったか。失礼をした」

面と向かって石頭扱いされた男ではあったが、自覚があるのか懐が広いのか、全く気にした様子も見せずに逆に謝意を述べる。

トイル＝ストラグル。

奥ノ院に唯一繋がる回廊の存在する参ノ院を管理する、三名いる枢機卿の纏め役にも近い立場の人物であり、順当に行けば次代の教皇になるであろう、とも言われている傑物でもある。

象徴として長く在位してはいるが、表立って動くことの少ない現教皇に変わり、戦時中は国と国との緩衝や会談を多く取りまとめ、前線に立つ者達が十全に力を奮える様にと万全の体制を構築してきた、影の功労者、或いは縁の下の力持ち（真）と称しても遜色ない男であった。

その分、限られた物資や戦力・人材を無為に消耗する事をひどく嫌い、国の体面を優先するあまり前線の兵達に消耗を強いる等、”やらかした”国々等からは、鉄血宰相ならぬ鉄血枢機卿、等と恐れ混じりに揶揄され、敬遠されている。

なんにせよ、実質、聖教国の舵取りを行っている人物でもあるので、数少ない例外を除いて対等に話せる人物は少ない。

トイルは神経質そうな目つきでじろり、とレティシアに視線を向けると、顰めっ面のままで口を開く。

「こうして会話をするのは久方ぶりだな、レティシア殿。去年お見掛けしたときより、随分と顔色も良くなられた。良い事だ」

「どうも、お久しぶりですストラグル枢機卿。御蔭様で最近は心身ともに良好だって胸を張って言えますよ」

顔は怖いけど悪い人では無い。そう判断しているレティシアは、表情からは分かりづらいを通り越して全く読み取れない眼前の男の気遣いに、軽く笑って朗らかに返答した。

この場において、唯一、立場と肩書的にトイルと気軽に絡む事が出来ないアンナは口を閉ざしたまま、静かに会話を聞いていたのだが、当の枢機卿が次は彼女の方へと視線を巡らせ、声を掛ける。

「騎士アンナ。聖女の良き話し相手となってくれている様で感謝する――妹御と『彼』が留守の間、いっそう気に掛けて頂くと我ら教会の人間としても愁眉を開く思いだ」
「うぇっ？　あ、し、失礼しました。勿論、そのつもりです」
　まさか声を掛けられるとは思ってなかった、そんな驚きをありありと顔に浮かべて返答してしまうアンナだったが、それを気にすることもなくトイルは満足気に頷いた。相変わらず、愁眉を開く旨の発言とは裏腹に眉間に皺が寄ったままではあったが。
「ちょっとちょっとぉ、いきなりやって来てガールズトークに嘴を突っ込んでくるとか、貴方ヒマなのぉ？」
「暇も糞も、一時間後には卿と顔を突き合わせて仕事だよ。酔っ払いと面倒な書類に挟まれる時間の前に、食事を摂って英気を養いに来た」
　卿と違い、此処のパンケーキを朝に頂くのが私のルーティーンでね、とシルヴィーの皮肉に同じく皮肉で切り返すと、トイルは軽く頭を下げて三人のもとを離れていった。慣れた様子で注文しているのを見るに、鉄血枢機卿殿が毎朝パンケーキを食ってる発言は事実の様だ。
　その後ろ姿を眺めていたアンナが、「あー、びっくりした」と零す。
「話しかけられたときは驚いたけど、おっかない雰囲気と違って意外ととっつきやすい人っぽい？」

「まぁ、そんな感じだな。他国だと一部の連中には毛嫌いされてるらしいけど、教国（ウチ）じゃ肩書き以上に尊敬されてる人だと思うぞ」
「石頭だけどねぇ」
　最後にシルヴィーが混ぜっ返す様に皮肉るが、そう言う彼女もトイルの有能さと糞真面目さには一定以上の信頼を置いている。
　枢機卿という位にある以上、結界や魔法に秀でているのは言うまでも無い事だが……それ以上に、戦時中のトイルは政治力や各国のバランサーとして大きく貢献していた、言うなれば後方支援の鬼だ。
　前線で名を馳せた戦士たちの様な分かりやすい英雄性は皆無だが、その英雄達から高評価を得るタイプの上司である。
「そういえば、帝国（ウチ）の陛下も「昼行燈よりよっぽど付き合いやすい、ウチにきてくんねーかな」とか言ってたっけ……だとすると、噂の方はやっぱデマみたいだね」
　やや温くなったスープを匙でかき混ぜながら呟くアンナの言葉に、レティシアが不思議そうに首を傾げる。
「なんだよ噂って？　オレはそんなの聞いたことないぞ」
「そりゃ聖女様相手にしょーもない噂を垂れる奴もいないって……っていうかアンタはここ最近はずっとアイツにへばり付いてたじゃないの。噂なんて耳にも入らないで

しように」
「へばり付く言うな」
レティシアの突っ込み代わりのチョップを額に受けながら、アンナはチラリとシルヴィーへと視線を飛ばす。
どうやら、彼女の前ではやや話づらい内容の噂らしいが、シルヴィーのほうも既にその話は聞き及んでいたらしく、特段気にすることもなく肩を竦めた。
「別に気にすることじゃないわぁ……単に、現職の枢機卿の内、何人か――或いは全員が退いて、聖女様にその座を譲るべきではないか、なんて話がちょっと広まってるだけよぉ」
「いやちょっと待ってくれ、それ十分に大事だって」
うげぇ。
そうとしか形容しようの無い、心底嫌そうな表情でレティシアが顔を顰める。
「一体誰だよ、そんな噂広めてる奴は。現枢機卿の全員に失礼だろ」
「特定の誰か、というより聖女姉妹（アナタたち）に特に傾倒してる若いコ達を中心にして、そんな話が持ち上がってるみたいねぇ」
「マジかよ……勘弁してくれ……」
頭を抱える当の聖女様ではあったが、アンナがその肩を軽く叩いて「アンタも大変ね」

と笑いながら慰めを入れると、顔を上げて恨めし気な目付きで友人を睨め付ける。
「お前なぁ、他人事だと思って軽く言ってくれやがって」
「実際他人事だしねぇ……にしても、最近聞いた噂だと枢機卿の内の誰か、ってだけじゃなくズィオロ枢機卿が引退するべき、って話もあったんですけど……出所が違うんですかね？」
最後は、シルヴィーに問いかける様な口調で放たれたアンナの言葉に――何故か聞かれた当人は真顔になって考え込む様子を見せた。
予想していなかった反応にアンナが怪訝な顔をしていると、レティシアが馬鹿馬鹿しいといわんばかりに鼻を鳴らして、すっかり冷めてしまった紅茶を一気に飲み干す。
「ズィオロ枢機卿だって、結界魔法と大地の魔力の親和性を高める新理論や、邪神に汚染された大地の除染魔法を開発した人だろ。普通に魔法史の教科書に名前が載るのが確定してるような人の後釜とか、絶対ゴメンだぞオレは」
というか、誰の後釜も無理だ、出来る気がしない。と、自信満々に言い切る聖女に、アンナも呆れ顔だ。とはいえ、気持ちは理解できるのだが。
「……まぁ、そうは言っても、レティシアちゃん達を次代の重職（ポスト）に、っていう声自体はあちこちから定期的に上がるのよねぇ」
なにやら考え込んでいた現職の枢機卿が、ポツリとレティシアにとって寝耳に水であ

ろう事実を告げた。
聖女という教会の看板ともいえる称号。それに見合うだけの外見的な魅力――なにより、大戦で成し遂げた様々な偉業ともいうべき功績。
当人にそのつもりはなくとも、彼女達の放つ輝かしい経歴は、誘蛾灯の様に様々な人々を惹きつける。
それこそ、聖女派、などという本人達にとっては迷惑極まりない派閥を、ともすれば勝手に形成しかねない程に。
――まぁ、それを実際にやってしまうと最悪の場合、害意あり、とカウントした赤光を放つ死神が腰をあげてしまうので、派閥形成にブレーキが掛かっているのが実情だが。
自分を取り巻く現状を知ってか、一気に暗澹とした面持ちとなるレティシアだったが、そんな彼女にシルヴィーが丁寧に期待を押し隠しつつ、傍目には極めて気軽な様子で問いかける。
「今じゃなくても、そうねぇ。将来的にはレティシアちゃん、枢機卿やってみたりしないかしらぁ？　おねぇさんが人脈の受け渡しでも後見人でもなんでもやってあげるけどぉ」
「うえぇ……勘弁してくれよ、シルヴィーさんまで変な事言い出さないでくれ」

酢（ビネガー）でも飲んだ様な表情で顔を顰める金色の聖女だったが、しかして酔いどれ枢機卿が至極真面目な顔を作って悪魔のごとき誘惑を囁いた。

「確かに面倒も多く付きまとうけど、レティシアちゃんにとって悪い話ばかりでもないのよねぇ……例えば、教国は教義の関係もあって一夫一妻だけど、大戦終結の立役者の聖女が、枢機卿まで兼任すれば、その辺りを変えることも難しくないでしょうしい」

「んなっ……！」

頬を林檎の様に染めて絶句する少女であったが、忙しなく視線を上下左右させ――ややあって、目を逸らしながらちいさな声で「お、覚えておきます……」とだけ呟いた。悪くない反応に、シルヴィーが内心、小躍りしそうな心持ちで更に言葉を募ろうとすると――。

「将来の展望を語るのも良いでしょう。ですが、まずは本日の仕事を済ませてからになさい」

鋼を思わせる硬質な声が直ぐ背後から聞こえ、反射的に背筋を伸ばす。

恐る恐る振り向いた先には、聖教会最古参にして最恐の御意見番、シスター・ヒッチンが真っ直ぐな立ち姿で三者を見下ろしていた。

シルヴィーの顔から血の気が引き、頬が引き攣る。
「おはよう、ヒッチンさん。もうこんな時間か、少し話し込み過ぎたかな」
「おはよーございます、シスター。私はちょっと食べ足りないから、ダッシュでおかわりしてくるわ」
食堂に飾られた柱時計の示す時間を見て、少女二人が慌てて予定に合わせた行動に移った。
「はい、おはようございます。騎士アンナ、健啖なのは良い事ですが、食事は慌てず落ち着いて摂る様に」
席を立って、他の面々に挨拶して食堂を出てゆくレティシアと、シスター・ヒッチンの言葉に「はーい、気を付けまーす」と返事をして小走りに厨房の注文口へと向かうアンナ。
二人きりになり、数秒の沈黙が訪れるが……シスターが咳払いをすると、シルヴィーの肩がビクリと震える。
「それで、貴女は朝の挨拶を返してはくれないのですか枢機卿（カーディナル）」
「し、失礼しましたぁ、おはようございます、先生」
慌てたように席を立ち、丁寧に頭を下げる枢機卿とそれに頷いて返すいちシスターという、組織的な視点でみれば珍妙極まりない絵面が展開される。

――が、聖殿(ここ)では割と良くある光景なので、誰も気にしない。
「珍しいですね、朝に弱い貴女がわざわざこちらに来て朝食を摂っているというのは」
「た、偶々、早い内に参ノ院での仕事が入りまして……私もそろそろトイルとの仕事があるので、これで失礼しますわぁ」
「まぁ、待ちなさい。そもそも、そのストラグル枢機卿からしてまだ食事中でしょう。彼が慌ててていないという事は、時間にはまだ余裕がある――違いますか？」
チラリとシスターが視線を向けた先には、首を真横にひん曲げて視線を逸らしてパンケーキを食ってる男の姿がある。
絶対に二人を視界に入れまいとするその表情は、「巻き込むんじゃねぇ！　私は関係ねぇ！」と全力で主張している様に見えた。
役に立たない同僚の姿に内心で毒を吐きながらも、シルヴィーは引き攣った頬のまま、無理やりに笑顔を浮かべて恩師の言葉をやんわり否定する。
「いえいえ、彼に渡す前の資料を軽く確認するのでぇ……彼より先に執務室に入っておく必要があるんですよぉ」
「そうでしたか、それは素晴らしい心がけですね。引き留めてしまってすみませんでした」
何とかこの場の離脱が叶い、「お気になさらず、では失礼しますわぁ」と返して、そそ

くさと食堂を出ていこうとするが。
「ルヴィ」
背に向けて、教え子時代の愛称で声を掛けられ、ギシリ、と音を立てそうな程に身を固まらせ、動きを止める。
「丁度良い機会なので、貴女に言っておきましょう……トイルとスカラにも伝えておくように――おいたも程々にしておきなさい」
「……肝に命じておきますぅ……」
鉄面皮の師より伝えられた言葉に、シルヴィーは項垂れながら、他に返す言葉を持たず。
そんな二人のやり取りを見たトイルが、頭を抱えているのが見えた。

「――そんな訳で、聖女達に枢機卿の席を押し……譲る計画……我々の『目指せ、早期引

退・セミリタイア☆夢と希望のスローライフにレディー・ゴー大作戦』は暗礁に乗り上げた訳だが」
「その作戦名、やめなぁい？　本気で馬鹿みたいだわぁ」
「「喧しいぞ戦犯が」」
　至極真っ当な発言を述べたシルヴィーであったが、男二人ににべもなく切り捨てられ、不貞腐れた様子で顔を逸らす。
　参ノ院、賓客用の会議室にて。
　定期的な密談を行っていた三人の枢機卿達は、計画していた各々の目標がいきなり頓挫しそうな事態に頭を抱えて項垂れていた。
「そもそも、最初は自重しようという意見で纏まっただろうに。抜け駆けした挙句に藪をつついて竜を叩き起こす様な真似をしくさりおって、この酔っ払いめ」
「舌の根乾かぬ内とはこの事ですね、もうコイツ禁酒させた方が良いのでは？」
　いい年した男二人に大人げ無くボロクソに罵られ、涙目で反撃する。
「なによぉ！　それを言うならスカラだって噂の上書きしようとしてたじゃなぁい！　私達の誰か、って話だったのを自分だけに挿げ替え様としてたの、知ってるんだからねぇ！」
「ハァ!?　な、何を言ってるのか分からないですし！　全く身に覚えが無いし！」

お前もか、という目付きでトイルに睨み付けられた髭面の男――スカラが、慌てたように否定するが、もうその反応が既に語るに落ちるを地で行っていた。
それを見たシルヴィーが鼻息も荒く、同じ穴の貉であった同僚をせせら嗤う。
「自分もやらかしてた癖に、私一人を攻め立てて被害者面とか笑っちゃうわぁ。アンタこそ土いじりを禁止しなさいよぉ」
「ざっけんなフィールドワーク出来ないくらいなら死ぬわそっちこそ同罪なんだから禁酒しろ」
「お酒が飲めないくらいなら死ぬわぁ」
「反応が私と同じじゃねーか！　そんなんだから嫁の貰い手が無いんですよヘブォ!?」
「そんなに地面が好きなら一生這わせてやるわよぉ、この地質オタぁ！」
これが数々の実績とそれに裏打ちされた実力を持つ、教会最高位の権威を持つ者達である。
しつこい様だが、バーカバーカ、酒臭い行き遅れぇと罵ったり、それにブチ切れて魔力弾で顔面を殴打したりしてるコイツらが、聖教会の枢機卿である。大事な事だから二度言った。
椅子を蹴倒し、卓をひっくり返して繰り広げられる良い年した男女の子供の様な争いを眺めつつ、トイルが沈痛な面持ちで呟く。

「猟犬が帰って来てくれた事で、凍結していた計画も再始動出来ると思っていたのだが……こんなにも早く頓挫の危機を迎えるとはな」

その言葉に、魔力弾の軌道を操作していたシルヴィーと、卓を盾にしてそれをやり過ごしていたスカラも動きを止めて、揃ってバツが悪そうに天井を仰いだ。

「まぁ……仕方ないわぁ……猟犬クンが帰ってくるまでは、とてもじゃないけどあの子達に重職を押し付けるなんて、出来そうになかったものぉ」

「というか、あの状態の彼女達にそんな無体を働いたら、普通に畜生じゃないですか。有り得ないですよ」

そんな訳で、ほんの二ヵ月程前までは、涙を呑んで生涯現役も覚悟していた彼らだったのだが。

まことにめでたい事に、『彼』は帰って来た。聖女達だけではない、三枢機卿にとっても、その帰還は福音に等しかったのである。

その福音も、即行で暗雲に包まれて聞こえなくなっているのが現状なのだが。

「……諦めるにはまだ早い。聞けば、婚姻の法改正について語った処、悪くない反応だったというではないか」

「そうですね、先生が釘を刺してきた時点で、猊下も気付いているでしょうが……本人が乗り気になってくれたのなら、まだ望みはあります」

前途多難ではある、が、望みが潰えた訳では無い。
そう、己を慰める事にして、ひとまず彼らは自身を納得させた。
「あぁ、折角戦争も終わったんだから、思う存分各地の地質調査をしたい……というか遠話の魔道具貸し出したときに霊峰の土を持ち帰ってくれる様に『彼』に頼めばよかった」
「私はさっさと引退して、小さな醸造所でも買い取ってそこで暮らしたいわぁ……お酒を飲みながら、酒造りの得意な旦那様とのんびり過ごしたぁい」
「醸造所と違って、結婚相手は買い取れないんですよ?」
「今すぐ大好きな土に還してあげましょうかぁ」
再び魔法と卓を用いた攻防に移りそうな同僚二人を眺めながら、トイルは再度、溜息をつく。
二人はまだ良い。自分よりは一回り以上若いし、或いは聖女達以外にも有力な後釜が後年見つかるかもしれない。
だが、自分にはもう後が無い。
あの老人は、戦争終結したからと言って先に下りる気満々なのだ。
冗談ではない。今のままでは、引退どころか新教皇の座までノンストップで真っ逆さまである。
あのクソジジイが胡散臭いくらいに爽やかなスマイルをばら撒く若者であった、数十

年前。

若くして教皇となった、当時はまだ素直に尊敬していた先輩の「未熟な自分を支えて欲しい」という言葉に絆され、教会史上最年少の枢機卿にまで上り詰めた嘗ての己を、出来る事ならブン殴ってでも止めてやりたい。

しかし、現実は残酷。時間が戻せる訳でも無し――ならば、せめて残りの人生を穏やかに、のんびりと過ごしても良いではないか。

同僚二人と違って、堅物の己には聖職者以外の生き方は出来そうにもない。

だから、せめて。枢機卿などという重苦しい肩書を誰ぞに投げ渡して、小さな教会でいち神父として、子供達に勉強を教えたりして過ごすのだ。

どんな仕事でも気苦労や大変さはあるだろう。だが、各国の狸や狐と延々化かし合いをしつつ、膨大な書類や数字と睨めっこする――有り体に言って糞ったれな職場環境と比べれば、天国と言っても良い。

というか、自分を差し置いて早期引退とかふざけんな、お前らもあと十年は現役でいろ。

前回の会合では同士だ協力だと、耳に心地良い言葉を口にしたが……トイルにしても、本音はこんなもんである。

責められる謂れは無い――何故なら、他の二人だっておんなじようなモンだと確信し

ているから。

嗚呼、夢のスローライフはまだ遠く。

残念な本音と本性を、優秀な能力と分厚い外面で押し隠しながら、なるべく早くの引退を夢見て、枢機卿達は今日も多忙な毎日を過ごすのであった。どっとばらい。

帰り道　前編

――街道より外れた鬱蒼とした森林の中。
冒険者らしき装いの四人の男女が、頑丈な作りの馬車を必死に手繰り、先を急いでいた。
「ちょっとアザル！　もっとスピード出ないの!?　いい加減こっちも魔力切れ起こしそうなんだけど！」
「リーダー、こちらも同じく余裕があるとは言えません！　このまま障壁を維持し続けると万が一の際の回復魔法に割く余裕がなくなります！」
仲間である魔導士と聖職者の怒鳴り声に、御者である、アザルと呼ばれた腰に剣を佩いた青年は「やってるわ！　これで精一杯だよチクショウ！」と同じく叫んで返す。
鞭を入れられ、整備されているとは到底言い難い荒い道を馬が必死に走り抜ける。
小石も地面の凹凸も踏み放題だ。乗り心地は控え目に言っても最悪だろう。
しかし、それを気にしている余裕は馬車に乗っている者達には無かった。

御者席に乗った斥候（スカウト）の女性が、横手へと身を乗り出して追手への迎撃を行う仲間二人の背を不安気な様子で見つめ、次いで、隣にいる自身のパーティーの頭目であるアザルへと視線を転じた。
「リーダー、流石にこれ不味いんじゃない？　残りの矢は少ないけど、やっぱりあたしも……」
「いや、あと数本じゃ迎撃の足しにもならん。お前の早射ちは咄嗟のときの保険として取っておきたい」
俺の剣じゃ届かない状況も、お前の弓なら届くだろ？　と全力で馬を操りながらも、アザルが冷静に仲間の案を却下する。
「それより、イルルァ。依頼人達の様子を見てやってくれ、学者さんや貴族のお嬢さんにはこの鉄火場の空気はキツイだろ」
「いや、御者やってるアザルが一番無防備じゃん。連中もお嬢さんがいる馬車自体は狙ってきてないし、今はそんな場合じゃないって」
「俺なら大丈夫だ。だから――」
アザルの言葉を無視して、斥候（スカウト）の女性――イルルァは腰のダガーを抜き放つと、彼に向かって飛来した石片を叩き落とす。
「で、誰が大丈夫だって？」

「……返す言葉もねぇ！」

何処か得意気なイルルァに、顔を顰めて応じたアザルが馬の手綱を引くと、急減速を掛けた。

急制動に馬車が横に勢いよく振られ、車体を傾かせながら横滑りする。

馬車後部で追ってきている者達への迎撃を行っていた女魔導士と聖職者の青年から、慌てる様な悲鳴が上がった。

「あっぶなっ!?　なんでいきなり止まってんのよ!?」

「待ち伏せだ！　伏兵のいる場所に誘い込まれてた！」

女魔導士の悲鳴混じりの抗議に端的に状況を伝えると、アザルは剣を抜いて御者台から飛び降りる。

「中々対応が早いっスねぇ。思ったより良い腕をしてるみたいで」

声と共に樹々の影や藪の中から出て来た部下を引き連れ、現れたのは年若い暗金の髪を短く刈り込んだ男だった。

「とはいえ、これで『詰み』っスよ。ただの雇われた冒険者にあんまり無体な真似をするのも忍びないんで、さっさと馬車の中のお嬢さん達渡してくれると助かるンスけどねぇ」

何処か狐を思わせる細目を更に薄め、男が物騒な空気に満ちたこの場に似つかわしく

ない、気の抜けた声で要求を告げる。
　追いすがって来ていた男の仲間達が馬車の背面を囲む様に陣取り、完全に挟まれた状況を作り上げられ、冒険者――アザル達は歯噛みした。
「こっちの雇い主には見当ついてるンスよね？　なら話は早い。大人しく渡すモン渡してくれたらギルドの評価に影響でないように処理するんで――」
　男が言い終える前にその脳天へと吸い込まれる様に矢が撃ち込まれ、それを彼はいつの間にか抜き放ったダガーの腹で受けて見せた。
「これが返事よ、おとといらっしゃい糸目野郎」
「完璧に頭射貫く軌道だったじゃないスか。おとといらっしゃる処か即死コース」
　御者台の上から早射ちで男を狙ったイルルァが、不発に終わった一射に舌打ちしながら次の矢をつがえる。
　罵られた糸目野郎は「殺意高ぇ……」とボヤきながら天を仰ぐが、配下の男達がそれをみて気色ばんだ。
「イフェクさん、もういいでしょう。コイツらは慈悲を掛けてやろうとしたアンタを真っ先に狙ったんだ、ちょいとばかり痛い眼みてもらいましょうや」
「あの弓使いも悪くねぇが、後ろの女魔導士もイイ身体してやがったからな……ちょーっと楽しむくらいは見逃してくれよイフェクの旦那」

「狙われた当人をダシにして強盗働きを正当化してんじゃねーッスよ馬鹿ども。敵が仁義に溢れた冒険者達でこっちの部下はならず者擬きばっかとか萎えるってレベルじゃねぇ、つらい」

溜息をつきながら、イフェクと呼ばれた、追手側のまとめ役らしき男が軽く手をあげる。

「一応、聞いておくッスよ。やっぱり馬車の中の人間を渡す気は無いと？」

「ウチの斥候が既に答えただろ？　――依頼人をアンタ達みたいな一目で分かるロクデナシ共に売るなんて、冗談じゃないね」

アザルが剣を構え、腹を括った表情で敵方の最後通牒を切って捨てる。

その言葉に「うわぁ……マジやりづれぇ」と顔を顰めてイフェクが呟き……そのまま苦虫を噛み潰した様な表情で、宣言と同時に腕を振り下ろした。

「んじゃ、腕づくって事で。各員、できれば殺さない様にするッスよ」

その号に、多少身形の良い野盗やならず者、といった風情の男達が、暴力と滾る欲望で喜悦に顔を歪めながら、それぞれに既に手に取っていた武器を構える。

「わぁーってらぁ、男は殺すけど、女は用があるからよ。努力するって」

「顔は傷つけんなよ、使うときに萎えちまう」

「バッカ、多少痛めつけてやった方がイイだろ。顔を腫らして睨み付けてくる女をヤっ

たことねーのかお前？」
「絶対分かって無い。マジで糞みたいな部下しかいない。つらい」
何処か間の抜けたやり取りをする追手側の者達ではあったが、その殺意と暴力性は紛れも無く本物であり、そこに冗談は一切無かった。
「反吐が出るわ、この屑野郎共。まとめて去勢してやるっての」
「ウチの斥候も魔導士も、お前らみたいな連中には勿体ないんだよ、生まれ変わって出直してこい」
アザルとイルルァも武器を握り直し――恐らくは馬車の背後の仲間達もそうであろう――いざ、戦いが始まろうとした瞬間。

「――お待ちなさい！」

馬車の中から凛とした声が響き渡り、双方、動きを止める。
一拍おいて、馬車の扉が開け放たれ……ようとして鈍い音と共に途中で止まった。どうやら、散々にデコボコ道を走った上に最後の無茶な急制動がトドメになったのか、何処か壊れたらしい。
「あ、あら？　ちょっ、開きませんわコレ……なんて間の悪い……えいっ……むうっ、こ

のっ……ッシャオラァ!!」

可愛らしい試行錯誤する声がしたと思いきや、最後にとんでもなく気合の入った腹の底からの雄叫びが聞こえると同時、歪んでつっかえていた扉が、くの字に折れ曲がって蝶番を弾き飛ばしながら吹き飛んだ。

樹々の枝葉をへし折り、幹に突き刺さってようやく止まった扉の残骸を尻目に、馬車の中から優雅にブーツのつま先が現れ、緑の大地へと着地する。

指先で髪をかきあげ、現れたのは一人の少女だった。

渦を巻いた特徴的な金髪と、シンプルながらもお嬢様然としたドレス――一見して貴族と分かるであろう容姿と立ち振る舞いだ。

碧眼に強い意志の炎を揺らめかせ、彼女は唯一、その出で立ちに似つかわしくない両の手……鋲（ナックルダスター）拳に包まれた拳を打ち合わせると、決然と告げる。

「私（わたくし）も助太刀いたしますわ！」

「「いや、なんでだよ!!」」

即座に突っ込みをいれたのは、冒険者達――唖然として声の出なかったらしい聖職者の青年以外の三名だった。

「なんで護衛任務の依頼人が前にでて戦おうとしてんのさ！　危ないからあたしたちに任せて馬車にいてよ！」

「というかもう一人の学者さんの方はどうしたのよ！　あのオッサン教え子を止めなさいよ！」
「先生なら、此処を出ていくのなら自分を腕づくでどかしてゆけ、とおっしゃったので、少々眠っていただきましたわ」
「躊躇なくブン殴ったのか……学者先生が気の毒すぎる……！」
「……学士殿に回復魔法を施したほうが良いでしょうか」
　思わず、と言った様子で零したアザルと聖職者の青年に向け、貴族の令嬢らしきは少女は憤慨した様子で抗議の声をあげる。
「まぁ、アザルさんにエクソンさん！　私が先生に怪我をさせる訳が無いでしょう！　ちゃんと正面から抱き着いて絞め落としましたわ！」
　ちがう、そうじゃねぇ。
　元より結束に優れた一党ではあったが、この瞬間、四人の心は一つになった。
「今はそれ処ではありませんわ！　悪漢共にこの拳を打ち下ろす事こそが先決――私がアザルさんと前に出ますので、イルルァさんは援護を！　ウェンディさんとエクソンさんは馬車の扉前で後衛兼先生の護衛をお願いします！」
「なんでアンタが仕切ってんの!?　しかも対応としては間違ってないのが腹立つ！」
　そもそも扉ぶっ壊したのお嬢ちゃんでしょう！　と女魔導士――ウェンディが文句

を言いながらも聖職(エクソン)の青年と共に扉の無くなった馬車の前に立ち塞がり、イルルァが御者台から飛び降り、その傍へ。

最後に先頭のアザルと並んで金髪の令嬢が並び立ち、再度拳を撃ち合わせた。

「いい加減、逃げてばかりも飽き飽きしていた処ですの。貴方達を思う存分ブチのめしてから、悠々と次の街に向かう事にしますわ」

「……何処がかよわい手弱女なんスか……メチャクチャ武闘派じゃないスか」

剣を打ち付けたくらいではビクともしないであろう馬車の扉を、薄っぺらいボロ板と変わらないノリで粉砕した少女は、どうみても素人ではない。構えも堂に入り過ぎている。

己の上司か、或いは雇い主にか。

与えられたあんまりにも適当な情報と現実との乖離に、イフェクが苦々しい表情を隠しもせずに愚痴を溢す。

「うぉ……すげぇイイ女」

「……どうせあの豚のオモチャになるんだろ、なら少しくれぇ、よ?」

上司が上司なら、部下もこれである。

野盗と殆ど変わらない品性なのは最悪、目を瞑るにしても、無傷で連れてこいと厳命された御令嬢にまで手を出そうと相談している部下達の声を耳に拾い、いい加減うんざ

りした気分になってきた。
油断することなく、戦意を漲らせて此方を見据える五人の男女達をいっそ羨まし気な気分で見つめる。
（あっちは良いっスねぇ……華やかな上に、今どき珍しいくらいの筋の通った冒険者……ホント、やり辛いったらねぇや）
取り合えず、さっきアホな相談をしてた部下はこの戦いのどさくさに紛れて殺しておこう。後の『仕事』にも障りしかないし。
そう決めて、改めて号令を下す。
「お嬢さんと――出来れば馬車のもう一人を確保するのが優先ッスよ。下らない”お楽しみ”に気を取られて下手を踏むってんなら……後で処分されると思え」
最後に平坦な、感情を削ぎ落した声で付け足すと、男達が怯えた様に肩を震わせ、女性陣に向けられていた下卑た視線も殆どが収まり、代わりに暴力の気配がより一層、濃厚に満ちた。
――でもなー、すげぇじゃんあの御令嬢。少しくらいは良いと思うんだ。
喉元過ぎれば、というには聊か以上に早く、懲りない声が上がる。
「――ッ、そうだよな、俺達もちっとくらい良い思いする権利くらいあるってもんだ」
「イフェクの旦那、仕事は真面目にやるからよ、少しくらいはいいだろ？　なぁ？」

誰かの上げた声に、学習能力の低さを露呈する様にあっさりと男達の何人かが乗っかった。

――だよな！　あんなスゲェ縦ロール見た事ねぇもん！　是非とも触ってみたいわぁ。

「そうそう！　あの縦ロールが……え、誰？」

声の主に同意するように、更に自らの、欠片も存在しない正当性を主張しようとして……男達は漸く、その場にいる闖入者に気が付いた。

イフェクとその配下達の最後尾にいつの間にか現れた、黒髪の男――やたらと目付きの悪い青年は、にっこりと、威嚇してる様にしか見えない凶悪な笑顔を浮かべる。

ポン、と。青年の掌が手近な男二人の腰に添えられた。

「……え？　うぎゃぃぁぁあっ!?!?!!」

男達――先程、イフェクに処分確定の判断を下されていた連中は、白目を剥いて絶叫しながら地べたを転がり、のたうちまわって泡を吹く。

その手は武器を放り出し、自らの下腹と股間を押さえつける様にしてズボンの生地を握りしめていた。

――○斗無情、去勢拳！　股間の気脈は破壊した！　もはや貴様らのジョンは老後の余生を送る終活間際の老人のソレよ！

顔を掌で半分隠しながら、ビシィ！　と音が鳴りそうなポーズで、気絶して地面に横たわる男達を空いたもう片方の手で指さす。
「な、なんだコイツ!?」
「どっから現れた！　何しやがったてめぇ!?」
慌てふためいた男達に誰何の声と武器を向けられながらも、それには全く頓着せず、青年は彼らの相対してる冒険者――アザル達に向かって軽く手を挙げた。
――よっす、アザルだっけ？　こんなところで奇遇だな！
「あ、あんたは……街道での」
「……お知り合いですの？」
呆気に取られるアザルと、訝し気な令嬢に対して、青年は俺だけじゃないぞー、となんでもない事のように告げる。
その言葉が切欠――というわけでもないだろうが、馬車の背面から包囲を狭めていた追手側の男達が、冗談の様に吹き飛んだ。
「悪漢共への折檻を行うも僧の務め！　さぁ、来るがよい！　拙僧は逃げも隠れもせぬ！」
「あ、先生がやりすぎたらボクが回復魔法かけてあげるから、安心して空を舞ってください、野盗の皆さん」

青年と同じく唐突に乱入してきたのは、凄まじく筋骨隆々な僧服の巨漢と、その肩に乗った栗色の髪の少女だ。
狼狽しながらも流石に荒事慣れしている男達が、直ぐに反撃に転じているが……巨漢の岩塊の如き肉体にあっさりと阻まれ、抵抗むなしく空を強制的に飛翔させられる者が後を絶たない。
アザル達がいつぞやの不本意な仕事で助けられたときと同じ、圧倒的な筋肉蹂躙劇が繰り広げられていた。
「相変わらず、あの坊さんは出鱈目な強さだな……二度も案山子のまんまじゃ俺達の立つ瀬が無い、いくぞ！」
「よく分かりませんが、味方と思って良さそうですわね！　勝機は逃さず、ですわ！」
巨漢の大暴れを見て、出会いの衝撃の光景を思い出す冒険者達だったが、青年が襲い掛かって来た男達を迎撃しているのを見て我に返り、戦闘に加わる。令嬢も細かいことは脇に置いて、手近な相手に殴り掛かった。
剣戟の音が響き、鋭い打撃音が風を切り、矢と魔法が戦場を駆け抜け、強化と回復が施される。
「こりゃ駄目ッスね。撤退で」
一連の流れをみて、イフェクは即座に決断した。

「い、良いのかよイフェクさん！　あの雇い主様が成果なしを許すとは思えねぇぜ！」
「少なくとも此処にいたらぶちのめされて地面に転がるか、最悪死ぬだけッスよ。助太刀にきた三人、知り合いっぽいし――なにより腕が立つってレベルじゃねぇ」
無理無理、絶対無理、と肩を竦めて撤退に移ろうとする彼に、声を上げた男が食い下がる様に未練がましく言葉を掛ける。
「で、でもよ！　あのデカいのの肩に乗ったガキ！　とんでもねぇ上玉だぜ！　あれなら俺達が楽しんでもいいし、あの豚にでもどっかの奴隷市にでも売っぱらうだけでも一山どころじゃ――」
この期に及んで馬鹿な事を言い出す部下に、冷え冷えとした視線をイフェクが向けようとした瞬間だった。
フタエノキワミアーッ！　と謎の呪文を叫びながら敵を殴り倒していた黒髪の青年の首が、ぐりんっと音を立てて此方に振り向く。
いや首の骨どうなってんねん、と思う程にほぼ真後ろに向けて、先ほどの発言をした男を注視したその表情は――瞳孔が収縮し、何より恐ろしい程に真顔だった。
直接その眼を向けられた訳でもないイフェクの全身が、総毛立つ。
――判断は一瞬だ。
彼は竜の尾を踏み抜いたらしい馬鹿の背中を、力いっぱい青年に向けて蹴りだす。

魔力強化までして蹴り飛ばされた男が悲鳴を上げながら吹き飛んでいくと、青年はゆらりとした、むしろ緩慢な動作でそれを迎え撃ち。

獲物が射程に入った瞬間に、目にも止まらぬ速さで捻りを加えた両の掌底でその頭部を挟み込む。

耳から小さな赤い噴水を吹き出して崩れ落ちる男の顔面を鷲掴みにして、躊躇なく曲げた自分の膝へと叩きつけた。

肉と骨が潰れる音が、喧噪激しい鉄火場の中において、奇妙な程に響き渡る。

半死半生を通り越して死体になる寸前といった風情で、今度こそ地面に転がる男を、青年は冷え切った目で見下ろし――最後にその股間を無造作に踏み砕いた。

シン……と、その一帯のみが戦闘中とは思えない静けさに包まれる。

路傍の石ころを見る様な瞳で、自身が破壊した痙攣を始める人体を眺める青年を見て、イフェクは顔を引き攣らせて後ずさりしながら、再度、口を開いた。

「撤退で。残りたい奴は置いてくんで、好きにして、どうぞ」

反対の声は一切上がらず、森の一角で始まった戦いは速やかに終わりを告げた。

「ありがとう、また助けられちまったな」
　静けさを取り戻した森の中で、アザルが乱入してきた三人へと頭を下げる。
「いえいえ、気にしないで下さい。森でちょっと食料を獲ろうとしたら偶然、争ってるのをみつけただけなんで」
　以前もそうだったが、一番年若い少女がこの奇妙な三人連れの代表なのか、手をパタパタと横に振りながら礼を述べるアザルへと気軽に応じた。
　ウェンディが記憶とは違う、艶やかではあるがありふれた色の少女の髪に視線を当て――そこに高度な幻惑魔法が施されているのを見て取り、思わず、といった様子で問いかける。
「相変わらず、凄い腕前だったけど……その髪はトラブル避けか何かかしら？」
「そんな感じです。行く道も帰り道も、ちょっと予想以上にボクのせいで絡まれる事が多かったんで」
「うわ。それなのにあたし達に助太刀してくれたんだ……なんかゴメンね、ホントに」
　イルルァも加わって女性三人で和気藹々とした会話が始まるが、エクソンが軽く咳払

いをしてそれを一旦止める。
「淑女達の談笑を遮るのは心苦しいのですが……御三方とは初対面の淑女が、御挨拶をしたい様ですよ」
そう言って視線で促された金髪の令嬢が、一つ頷いて前に進み出た。
「お初にお目にかかりますわ。私はローレッタ＝カッツバルゲルと申します。先程は助かりました――あなた方の義勇と武勇に、心からの感謝を」
スカートの裾をつまみ上げ、軽く膝を曲げての屈膝礼を行う気品ある所作は、彼女が見目だけではなく貴族としての教育を受けた出自である事を伺わせる。
この様な場所で冒険者に護衛されながらの移動、という時点で訳アリなのは明白であったが、それを危惧するのであればそもそも窮地に助太刀したりしていない。
なので、三人ともその辺りは気にした様子も見せず。丁寧な、謝意と敬意の籠ったローレッタの礼に好意的な感情を抱いた。
「いやはや、御令嬢の危機に駆けつけるなど、物語の騎士の如き振る舞いは拙僧の様な無骨者には過ぎた栄誉ではありましたが……先程の戦いぶりを見る限り、御自身と冒険者の方々のみであってもあの場を切り抜けられたやもしれませんな！　見事な格闘術でしたぞ！」
「まぁ、嬉しい！　御坊様程の益荒男にそう言っていただけるのなら、私の拳も捨てた

ものではありませんわね」
豪快に笑いながら、先刻の戦闘での令嬢の立ち回りを賞賛する巨漢に、彼女は世辞抜きでその表情を輝かせる。
まるでお気に入りのドレスや美しく整えた髪を褒められたかの様に、無邪気に喜ぶ御令嬢を見て、なんか違くね？　といった風な、なんとも言えない表情で雇い主を眺める冒険者達。
一方、黒髪の青年は彼女の笑顔を見て、この娘も修羅勢かー……俺の周りこの手の人種多くね？　と、何かを察したように遠い眼をしていた。
そのまま各々が談笑に移りそうな流れではあったが、此処はまだ森の中――打倒した野盗くずれの如き男達が、そこかしこに転がっている元戦場真っ只中である。
「とりあえず、この場を離れないか？　もう少しで次の街だし、今から向かえば日暮れにはたどり着けそうだしな」
アザルが軽く手をたたきながら注目を集め、一同に向けて提案した。
栗色の髪の少女とエクソンの回復魔法によって死者だけは出ていないが……それ以上をしてやる義理もなく、下手にこの場で時間を過ごして血の匂いにつられた獣がやって来ても面倒だった。
襲われた側からすれば、命はあるんだから後はなんとか動ける奴等で、勝手にどうに

かしろ、といった処である。
「そうですわね、幸い馬車も扉以外は無事ですし……私(わたくし)の連れもそろそろ目を覚ます頃合いだと思います。彼を、御恩人の御三方に紹介したら、直ぐに移動を――」
ローレッタが同意を示したのとほぼ同じくして、馬車の中から声が洩れ出てくる。
「あぁ、ひどい目にあった……なにもノータイムで絞め落としにかかることは無いじゃないかローレッタ」
どこかのんびりとした言葉と共に、よろよろと馬車から降りて来たのは黒髪黒目のひょろりとした壮年期の男性だった。
適当に撫でつけた髪と、この世界における学者然とした、動きやすさを重視したローブ姿のその男は、顔から半ばずり落ちた眼鏡のつるを指先で元の位置に戻すと、辺りの戦闘痕を見回して目を見張る。
「こりゃ凄い。対人戦の痕というより、まるで大型の魔獣が暴れまわったみたいだ……ええと」
襲撃者以外の、初めて見る人間を視界に認めた男は暫しの間黙考すると、やがて結論が出たのか、軽く頭を掻きながら一同の元に歩み寄ってくる。
「――察するに、貴方達が僕らを助けてくれたのかな？　だとしたら、御礼を言わせてもらいたいよ……僕は豆井――コウジ＝マメイ。見ての通り、ニホンからの転移者ってや

つだよ」

穏やかに愛想笑いらしき、ぎこちない笑顔を浮かべながら、彼はそう名乗ったのだった。

帰り道　中編

森での戦闘から、数刻。

あそこ迄大規模な襲撃が失敗した以上、次の街から出るまでは問題無いであろうという判断の元、一行は街道に出ると、街への道を移動していた。

人数が人数なので馬車に全員が乗る事は難しく、女性陣が馬車内、御者台にアザルとコウジと名乗った転移者らしき男性が乗り、馬車を牽く馬の左右にエクソン、巨漢の僧、黒髪の青年が追従する形で歩みを進めている。

冒険者としては生真面目な性質（タチ）であるアザルの一党は、護衛でありながら車内に留まることに難色を示したが……栗色の髪の少女――マリアの「ボクが軽めの結界を張っておくので、奇襲されても大丈夫ですよ」という言葉と、依頼主であるローレッタの一押しもあってこういった形となった。

意図的にではないが男女に分かれる形となったので、ローレッタとコウジがそれぞれに旅に同行する事となった三名に自分達の事情を語る。

「なるほど、マメイ殿は転移者としては比較的新しい部類に入るのですな」
「うん、カク殿のいう通りだけど、それでも十年くらいはいるかなぁ……まぁ僕は転移者といっても、『推薦』じゃなくて『遭難』の方だけど」
カクと呼ばれた巨漢の言葉に頷きながら、照れ臭そうにコウジは笑う。
転移・転生を経てこの世界にやってきた者達には、創造主である女神が直接見出し、この世界へとやってきた者と、元の世界から零れ落ちる形で偶然やってきた者の二種に分けられる。
どちらにしても何某かの加護や強化を得ることにはなるのだが……前者である女神の『推薦』によってやってきた者は、かの神によって融通を利かせてもらえる分、ある程度は自身の望みに沿った能力を得る事ができるらしい。
彼は後者……向こうで事故に巻き込まれた際に、気が付いたらこの世界へとやってきた『遭難』の転移者であった。
「元から、切った張ったなんて出来そうに無かったからね。得られた加護も後方支援向きだったから細々と街で食糧増産に関わってたんだけど、七、八年くらい前にローレッタの祖父にあたる方に拾われてねぇ……彼女の家庭教師と、元の世界の農法や調味料の再現なんかを研究させてもらえる事になったんだ」
――ほう、調味料とな。それは気になる、非常に気になる。

「食いつきが良いな？　やっぱり故郷の味の再現ってなると気になるモンなのか？」

調味料、という単語に反応したのは黒髪の青年だ。

瞳をきらりと輝かせてコウジに首を向けるその様子に、御者台で馬を操るアザルが少し意外そうに首を傾げる。

ちなみに、青年は名乗る際にスケと名乗っているが、それよりは単に『傭兵』と呼んで欲しいと希望していたので基本、その通りの呼び方をされている。

少女の方はありふれた名前であったが、巨漢と傭兵の方は明らかな偽名だ。とはいえ、二度も救われた上にその性根が善良である、と判断した冒険者達は指摘するような野暮はせず、そのまんまの呼び方をしているが。

コウジに至っては「マリア嬢は、越後のちりめん問屋の御隠居ならぬご息女かなぁ」とかボソッと呟いていた。どうやら元ネタを知っているらしい。

元日本人なら当然の反応ではあったが、カクと傭兵（スケ）――特に傭兵の方は、バツが悪そうに顔を背けて聞こえないフリをしていた。

「当然でしょうアザル。こちらの世界にて創造神の子となったとはいえ、生まれた地への郷愁は持っていて当然ですよ。界を隔てているとなれば猶更です」

「ふーん、そんなもんなのかねぇ……？」

聖印を指で切りながら祈りを捧げるエクソンと、いまいち分からん。といった風情の

アザルであるが、こればかりは実際に同じ立場にならないと分からない感覚なのだろう。元の世界、と言われても現地の者からすれば思い浮かぶイメージはどうしてもこの世界が基準になるのだから。

――まぁ、そういう感情も無くはないけど……それよりね、やっぱり気になるものがね。ソウルフード的な意味でね。

そう言ってグイグイと……今にも御者台に飛び移りそうな傭兵に、コウジが彼のイメージというか性格的にそぐわない――どこか自慢気な、ニヤリとした笑みを浮かべた。

「フフフ……分かるよ、傭兵クン。僕もお館様……ローレッタの祖父君が喜んでくれると思って手を付けたジャンルではあるけど、やっぱり自分が食べたいっていう気持ちもあっての成功だったからねぇ」

え、マジで!?　と驚愕の表情を浮かべる青年に、コウジは懐から小さな布包を取り出して中身を摘まみ上げる。

差し出されたソレ……見た目は特に変わった処もない、多少形の悪い暗褐色の飴玉を、期待に満ちた顔で受け取ると傭兵は慎重な手つきで口に運び、丁寧に舌で転がした。

――マジだ……味噌飴だコレ……!

「まともな米があれば米味噌を作れたんだろうけど、麹味噌しか選択肢が無くてねぇ。

とはいえノウハウは出来たから、資金があれば量産してみたいよ……魚醤があるから後回しにしてたけど、次はたまり醤油が欲しいよね」

感激の面持ちで飴をカラコロと口内で転がす青年に、のんびりとした口調で更なる展望を語るコウジ。

一方でミソ？　と、冒険者の二人が首を見合わせて聞き覚えのない単語に目をぱちくりとさせ。

「ミソ……拙僧の記憶が確かなれば、料理長が欲していた調味素材の事ですかな？」

もう一方で聞き覚えのあったらしいカクが、記憶を手繰らせながら傭兵の青年へと問いかける。

その声が聞こえていないのか、聞こえていてもそれ処ではないのか、傭兵は御者台に飛び乗るとコウジに詰め寄った。

――マメイさん！　聖都に行こう！　衣食住も当面の間世話するし、ツテがあるからスポンサーも紹介できる！　研究の続きをしながら、聖都に定住しよう！

両肩に手を乗せ、心なしか目を血走らせながら唐突な勧誘を始める彼に、コウジは苦笑いしながら首を横に振った。

「そう言ってくれるのは有難いし、同じ日本人として味噌と醤油が食べたいって気持ちも分かる……けど、ローレッタが帝国に行きたがってるからね。申し訳ないけど……」

「帝国とはまた随分遠くになるな……俺達の護衛は聖都までって話だったが、そこから更に移動する予定だったのか」
「しかし、傭兵殿のお話が本当ならばかなり良い条件だと思うのですが、それを蹴ってまで、と言う事は帝国でなければならない理由でも？　あ、いえ。依頼主の事情を根掘り葉掘り聞くのも失礼でしたね」
　目的地が帝国である、という言葉に反応してアザルとエクソンが相当な長旅の予定である事に驚くが、エクソンの当然の疑問にも気を悪くする事もなく、馬車の振動でズレてきた眼鏡の位置を直しながら、転移・転生者にとって地味に重要な人物であると評せる男は、教え子との会話を懐かしむ様に思いを馳せる。
「うん。まぁ、僕は武力とかそっち方面はからっきしなんであんまり詳しくないんだけどね。帝国で一番の精鋭部隊への入隊が彼女の夢なんだよ……カッツバルゲル家が実質無くなったも同然の今の状況だからこそ、目指す事が出来る様になったっていうのは皮肉な話だけどね」
「ふむ？　帝国の最精鋭……もしや《刃衆（エッジス）》の事ですかな？」
　あっさりフラれて肩を落とす傭兵を慰めていたカクが、もしやと思って挙げた部隊の名にコウジは「そうそう、そんな名前だったよ」と、自身の曖昧な記憶に少々気恥ずかしそうに笑うが、冒険者二人の方は依頼人の少女が目指す夢の厳しさに、呆れと感嘆が

半々といった声を上げた。
「《刃衆》って……確か冒険者からもスカウトされた人がいたよな？」
「不勉強ですよ、リーダー。帝国の特級冒険者であるネイト＝サリッサ氏を《刃衆》の隊長殿が直々に引き抜きに来た、というのは有名な話です」
「う”っ、悪い……と、ということは、だ。お嬢さんは実質、冒険者の最高ランクを目指してる様なモンなのか」
「国家の最精鋭部隊と冒険者の頂点では武力以外の求められる能力に相当な違いがありそうですが……道の険しさという点ではどちらも劣らぬモノでしょうね」
人類圏における戦闘集団でも間違いなく三指に入る、帝国の誇る対邪神部隊。
大戦が終結したと言ってもその功名と武威は変わらず諸国に轟いており、解体等はされる筈も無く、近衛や帝室特務といった皇帝直属の部隊へとそのままシフトすると言われている。
貴族――話からすると『元』と付く、実質何の後ろ立てもない少女が、拳一つで乗り越えるにはあまりにも高い壁が乱立している夢であった。
――まぁ、あの娘の実力なら門前払いとかは無さそうじゃね？　ところで、話が前後しちゃうけどさ、御家が無くなったっていうのとマメイさん達がゴロツキみたいな連中を嗾けられてるのって、やっぱ関係あんの？

落ち込みモードから復帰した傭兵が、さり気なく味噌飴のお代わりを受け取りながら問いかける。
「そうだね、ちょっと話が逸れていたし……そろそろ恩人に僕達の事情を話すとしようか」
あまり楽しい話ではないんだけどねぇ、と、自身も飴を口に含みながらコウジは語り出した。

元々、カッツバルゲル家は北方の小国群におけるありふれた騎士爵の家だったらしい。
大戦中、功を上げていた一人の転移者を、彼に惚れ込んだ当時の御家の長女が一服盛って入り婿（キメ）させた事から躍進が始まり、男爵の位を得て世襲貴族にまで成り上がった。
ちなみにその入り婿した御仁がローレッタの祖父――コウジの言う『御館様』だそうだ。夜の晩酌に付き合った際に『女って怖いよな……コウジも女とサシで飲むときは気を付けろよ。いやホントに、マジな話』とグラスに浮かぶ氷を眺めながらしみじみと呟いていた顔は今でも覚えている、と彼は笑った。

「御館様と違って僕は男っぷりが良い訳でも腕っぷしが強い訳でもないからねぇ……無用の心配だと笑い飛ばしても心配してくれる、良い人だったよ」

そんな御仁であったが、過去の戦いで負った大小様々な怪我が祟ったのか、大戦終結の直前には体調を崩して床に臥せるようになり、邪神討滅・大戦終結の報せが世界中を駆け巡ると何かに満足したようにあっさりと逝ってしまったらしい。

『くたばる前に最高の土産話が出来た。アイツと娘達にローレッタの生きる未来(これから)は明るいと、教えてやらにゃならん』

ローレッタとコウジに其々、二人っきりで遺言と言えるであろう言葉を残し、昔から仕えてくれる少数の家人達に看取られて、笑顔で眠りについたそうだ。

涙も見せず、気丈に葬儀と新当主としての引継ぎを行う御令嬢であったが、彼女の父母は両名とも大戦で亡くなっている。

家人達はそんな少女を全力で支える腹積もりであったし、コウジも自身の研究成果をカッツバルゲル家主導の名産品として売り出せば、上手くすれば新たに転移・転生者を招くことも出来るかもしれない、と彼なりに奮起していた。

面白くないのはここからだ。

バリッバリの武闘派だった御館様が亡くなると同時、年端も行かぬ小娘を与し易し、と思ったのかロクに顔を見た事もない親戚筋がしゃしゃり出て来てアレコレと口を出

すようになってきたそうだ。
親戚連中のみであれば、ローレッタと、彼女を支えんとする家人達でガッチリとスクラムを組んで叩きだして終わりであったのだが、連中はどうやったのか、隣接する領地の伯爵を引っ張って来た。
曰く、年若いローレッタに当主など務まらぬ。成人するまで全権代理として自分達親戚筋から誰かを立てるか、いっそ伯爵に嫁入りして将来の両家の跡継ぎを作ることに専念し、カッツバルゲル家は自分達に任せるべきだ、と。
暴論ですらない、戯言の類だ。実際ローレッタも一蹴して終わらせるつもりであった。
運が悪かったのか、巡り合わせが良くなかったのか。
ローレッタの祖母や母の面影を色濃く受け継ぐ美貌に、件の伯爵が強い執着を示したのが、不運であった。
元より、あまり良い噂を聞かない――嘗ては武門の家柄でありながら、大戦に参列する事もなく、さりとて後方支援を受け持つでも無く。祖先の功名と遺産を食い潰している悪徳貴族などと囃し立てられていた男だ。
噂は真実であったらしく、伯爵は有形無形の様々な干渉を以てカッツバルゲル家の切り崩しに掛かった。

こうなると真面な爵位も持たない親戚連中など、ローレッタも伯爵も眼中に無く。
頭越しですらない。蚊帳の外に置かれた木偶となって、二年で見る影もなく没落した寄生先を眺めているのみであった。
祖父母の遺した家を護るには、親戚連中の当初の要求通り、伯爵に頭を垂れて嫁入り――相手の性根を考えれば立場の低い妾にも等しかったが――するしかないと、若き当主が、祖父の葬儀でも零さなかった涙を弱音と共に見せたときの、コウジや家人達の心中の荒れ様は如何ほどであったのか。
伯爵領に出向いて、要求を呑む――実質の白旗を挙げる行為である会談の前日。
流れが変わった……というより、ローレッタが変な方向に吹っ切れたのはその日の夜であった。
夜も更けた月明かりが屋敷に差し込む時間に、コウジの居室を訪れた彼女は、幼い頃から恩師と慕ってきた彼と、最後になるかもしれない穏やかな時間を、と望み。
コウジも己の無力を嘆く気持ちを押し殺し、笑顔でそれに応じて、二人きりでワインを酌み交わす時間が始まった。
酒で舌を滑らかにするまでもない。語るべき事と、語りたい思い出は山とあった。
その最中、久しぶりに過ごしたアルコールのせいか、妙に酔いが早く回ったコウジは、うっかり漏らしてしまったのだ。

「――伯爵にとっても、転移者が食い付く故郷の調味料っていうのは興味を惹く代物だったらしくてねぇ。嫁入りさせるときに研究成果を全部寄越せと、直接僕に手紙が来たよ」

ちょっとその伯爵をスパってくる、と馬車から離れようとした傭兵とそれを押さえつけるカクを愉快そうな面持ちで眺めながら、コウジは口の中で小さくなった飴玉を噛み砕く。

そして新たに味噌飴を取り出すと傭兵に向かって放り、オヤツを与えられてそれまでの憤慨を忘れたアホな犬の様に一瞬で食い付いて傭兵（アホ）は大人しくなった。

再び恩人が話を聞く態勢に入ってくれたのを見届けると、彼は改めて続きを語る。

それを聞いた――聞いてしまったローレッタは激怒した。

己の身だけならばまだ良い、先生が心血を注いで進めた研究まであの豚野郎に盗られるなど、我慢が出来ない。何のために自分が嫁入りすると思っているのか。

そんな風に怒り狂った彼女は、飲みかけであったワインの瓶を床に叩きつけ、怒りと決意の炎を瞳に燃え上がらせながら立ち上がり――深夜にも関わらず家人達を叩き起こし、屋敷の広間に集めて宣言したのだ。

「――帝国に行きます。当家の屋敷は手放し、残った私財は貴方達へと分配しますわ。スピード勝負です、あの伯爵（ブタヤロウ）に気取られる前に最速で事に移る為に協力して下さいませ」

元より、祖父の武名を買われて得た爵位だ。彼らの土地といっても通常の地方貴族が治める様な領民が住む領地ではなく、屋敷とその周辺のみ。

実質は官職のみについた、やや特殊な法衣貴族の様な立場であった事も幸いして、夜逃げ――もとい、ローレッタ曰く帝国に向けた一時転進は滞りなく進んだ。

家人達が全力で事を為してくれた事も、成功の要因だろう。

彼ら彼女らからしても、小さい屋敷ながらも仕え甲斐のあった御館様。その当主と亡くなった娘夫婦が唯一残した宝物であり、幼い頃から成長してゆく様を見ていた可愛いお嬢様を糞みたいな豚野郎にくれてやるなど、不本意を通り越して真剣に伯爵（ブタ）の暗殺を考えるレベルで有り得ない選択肢だったのだ。

本音を言えば、ローレッタにとっても思い出深いこの屋敷を手放す事になってでも、彼女には違う選択を取って欲しい。

そんな風に内心で考えていた彼らにとって、可愛いお嬢様が下してくれた最後の命令は、文字通り身命を賭けても成し遂げるべき一事であった。

かくして速やかなる身辺整理を終えたローレッタ＝カッツバルゲルは、住み慣れた小

さな自分の世界を飛び出し、帝国へ向けて一路、馬車を進める事となったのである。
戦時中、音に聞こえた《刃衆(エッジス)》への、これを機に再燃した憧れと、己の恩師を傍らに。

「そうして、馬車で隣の街まで移動して、そこでアザル君達を雇ったって訳さ……道中の襲撃は、まず間違いなく伯爵の追手だろうね。あの男は、気持ち悪いくらいにローレッタに執着してたから」
大まかにではあったが、事情を語り終えたコウジの表情は嘆く様な、自重する様な、複雑なものであった。
「彼女がおよそ最悪な相手との婚姻を結ばずにすんだのは、本当に嬉しいんだよ……でも、僕のせいで御館様の遺した屋敷と、貴族としての立場を捨てさせてしまったんじゃないか、なんて考えも頭から離れなくてね」
「寧ろ誇るべきであると、拙僧は思いますぞ。大切に思う物を手放さぬ為に悪徳に慈悲を乞うのではなく、愛し、愛される者達の心を護る為に困難な道を選ぶ。これを見事と言わずして何を賞賛すればよいのやら」
感じ入った、という表情で深く頷く巨漢と、やっぱり女傑(そっち)系のお嬢さんだったかー。と納得した様に腕を組む傭兵。
冒険者二人も、肝の据わった御令嬢の言動が痛快であったのか、感心することしきり、

といった様子である。
「なるほどなぁ……依頼を受けたときに訳アリだとは思ってたが……うん、悪くないな。アンタ達の為に仕事が出来て光栄だよ」
「全く以て同感ですね。マメイ氏とカッツバルゲル嬢の征く道に、創造神の加護があらんことを」
野郎五人で華やかさには欠けるものの、そこに在るのは間違いなく真摯な――敬意と幸福を祈る、暖かな感情であった。
照れ臭さと嬉しさを誤魔化す様に、頭を掻きながらコウジは「ありがとう」と呟いてぎこちなく笑う。
「勝手な話だけど、ローレッタが僕の為に其処まで怒ってくれた、というのも嬉しかったんだよ……男やもめですらない、独り身の僕がこんな事をいうのも可笑しいけど……あの子は僕にとって大事な教え子で、いや、彼女の御両親には本当に申し訳ないけど……娘みたいに思ったりしてるんだ」
――いいんじゃね？　件の御館様だって、最後の遺言を遺したのはお嬢さんとマメイさんの二人なんだろ？
歯切れ悪く、まるで罪を告白するようにローレッタへの親愛を語るコウジに、あっさりと、至極当然といった感じでその感情を肯定したのは傭兵の青年だ。

――だったらさ、マメイさんにとってお嬢さんが娘みたいな子である様に、御館様にとって、マメイさんがそうだったんじゃねーの？　寧ろマメイさんの考えを草葉の陰で喜んでると思うけど。

その言葉に、コウジは息を呑んだ様に見えた。

「そう、かな。　そうだと、いいな……」

彼がそう言って思い返したのは、この世界で己を拾い上げてくれた恩人であり、仕えていた主人でもあり――或いは父の様な人でもあったのかもしれない人だった。

顔を伏せて、絞り出すように口にした言葉が少しばかり震えていたのを、傭兵は気付かないフリをして進行方向へと視線を向ける。

少々しんみりした空気になった様に思えたが、残る三人がさり気なくアイコンタクトでやり取りを始めた。

（……娘みたいに思ってるって話だけど、どう思う……？）

（私個人としては、話を聞く限りだとカッツバルゲル嬢はその限りではないと思いましたね。道中でも親代わりというには……その、少しばかりマメイ氏に向ける視線が）

（拙僧が思うに、御令嬢は祖母にあたる方の血を良く引いていらっしゃる様ですな！　強敵を攻め落とす手管などは特に色濃く似通っておられるようで！）

（あ、やっぱり御坊さんもそう思うか？　……二人で飲んだ酒って絶対ただのワイン

じゃないよな、話を聞くだけでも分かった）
（……傭兵殿は全く気付いていない様に見えますね。この手の話題は得手では無いのでしょうか）
（私見を忌憚なく述べるなれば、りょ……スケ殿は年季入った朴念仁というやつでありますからな！　マリア様も気苦労が絶えぬ様で、微笑ましいやらなにやら……）
台無しだった。色々と。

「――と、いう訳で。今頃私（わたくし）の事を娘扱いして事情を語っているに違いありませんわ、あのニブちんは」
場所は変わって、扉のもげた馬車内。
マリアの張った魔力障壁によって、外敵からの奇襲だけでなく音声の遮断も可能であると知ったローレッタは、事情を話す傍ら、ガールズトークというには漢前すぎる持論を展開していた。

「今思えば、帝国に向かうことを決意した夜。怒りのあまり即座に家人達を叩き起こして回ったのは失態でしたわね――あと二時間くらい遅くとも、後の身辺整理に影響は無かったでしょうし」

初手から既に生娘の発想ではない。その恋愛観は紛れもなく彼女の祖母の血によるものだ。歴史は繰り返すのである。

「折角の奮発したワインも無駄になりましたわ。あのときキメておけば長年の本懐と伯爵（ブタ）への意趣返しを両方遂げられて、一石二鳥でしたのに」

「悪徳貴族の手から逃れた旅の御令嬢が、ロックにも程がある漢女（おとめ）だった件」

呆れか、感嘆か。

どう反応していいのか困る、といった表情で言葉を溢す栗色の髪の少女――マリアは、なんだか話題に取り残された気持ちになって、ちいさく「いたたまれない。たすけて、にいちゃん」と呟いた。

「長年かぁ……マメイさんが家庭教師になって直ぐだったの？」

「いえ。恥ずかしながら当時の私（わたくし）は評価の価値基準が腕っぷしのみのクソガキでしたの――蒙を拓いてくださった先生を意識するようになったのは二年程あとですわね」

「大体五年越しって訳ね。今のお嬢ちゃんの年から考えても淡い初恋で終わりそうな話だけど……当時十歳をちょっと過ぎた程度の頃から父親みたいな男の貞操を虎視眈々

と狙ってたとか、凄いわね」
「カッツバルゲル家の家訓は『先手必勝、やられる前にやれ』ですわ！　御家を護る闘争で敗北した上に、狙い定めた殿方まで取り逃すなど愚の骨頂！」
イルルァとウェンディも交え、直球に過ぎる会話が続く。
マリアは再度、「たすけて、にいちゃん。つらい」と居辛さのあまり呟いた。
ちなみに、彼女の姉がこの場にいれば「今更だろ、オレ達も限りなく似たようなことやってるじゃねーか」と、開き直って話に参加するだろう。マリアにはそこまで出来る思い切りの良さが無いため、馬車の中で身を縮こまらせて所在無さげに座ってるだけになっているが。
「年の差カップルってやつだねぇ。まぁ、いいんじゃないの？　あたし的には応援してあげたいけど……今の逃避行みたいな状況じゃ進展も難しいんじゃない？」
「流石に現状では下手を打てませんわ。事の済んだあとは動きづらいとも聞きますし、それではいざというとき、先生を護れませんもの」
普通に考えればローレッタの言は男女逆であるが……《刃衆（エッジス）》入りを目指すだけあって、彼女の拳闘術は一級品だ。荒事に対する適正は一切ないと言い切っていたコウジとは、そういった意味でもお似合いなのかもしれない。
「とはいえ、延々と先延ばしにしてしまうのは悪手。帝国に無事辿り着いたならば、初日

の宿は奮発してキメにかかりますわ」
「わぉ、大胆。朴念仁の学者先生もとうとう年貢の納め時ってやつね」
キラリ、というかギラリとした――獲物を定めた肉食獣の如き気配を垣間見せるローレッタの気炎に、ウェンディが煽る様に薪を追加している。
相も変わらず、タフな女性陣の会話についていけてないマリアではあるが。
それでも、色々とド直球の渾身ストレートにも程があるけれど、『先生』のことを語るときのローレッタの表情はとても綺麗で、幸せそうで。
思いの丈を誰憚る事なく語り、彼を自分のモノにすると豪語する彼女が、少しだけ羨ましく感じるのも確かであった。

悲喜交々、様々な事情と数奇な恋愛模様の各者を乗せて、馬車は進む。
前途は多難であり、まだまだトラブルが待ち受けること必至であろう事は、全員が予感していた事ではあったが。
きっと、その結末は良いものであるだろうと。
そんな確信を皆で抱きつつ、逃避行中のご令嬢と愉快な仲間達は、日暮れ前に次なる街へと辿り着く為に先を急ぐのであった。

帰り道　後編

「どういうつもりだイフェク！　あれだけの人数を揃えて失敗だと!?」
豪奢な――見る者によっては華美に過ぎる、金臭い、と眉を顰めそうな部屋で、一人の男が怒声を張り上げた。
「何の力もない小娘と小汚い学者風情にまんまと逃げられておきながらのこのこと戻ってきおって、この役立たずが！」
部屋と同じく、必要以上に飾り立てている作り自体は上等な衣類は、はち切れそうな程にせりでた腹のおかげで窮屈そうなイメージしか他者に与えない。
運動不足の伺える矮躯で地団駄を踏み、肉と皮下脂肪でたるんだ皺の寄った、今は怒りで真っ赤に染まっている顔は――遠慮なく言ってしまえば畜舎でよく見かけそうな面構えであった。
男の名はリュダクロス＝バフナリー。
北方諸国、無数に存在する小国家の中では、比較的古くから存在する名家――バフナ

リー伯爵家の現当主である。
　とはいえ、領民を絞り上げることで私財を蓄えていると専ら噂の統治と、戦時中にどれほど望まれても一度たりとて兵を出さず、王家への献金のみで済ませていた過去の行状が自国のみならず、周辺小国群でも広まっているせいで、絶賛坂道を転げ落ちるが如く落ち目の名家（笑）と化している最中ではあるが。
　曲がりなりにも雇い主であり、貴族でもあるリュダクロス対して、もし気取られたならば激昂して処刑されそうな評価を内心で垂れ流し、何処か狐を思わせる風貌の男――イフェクは表向きは神妙に頭を下げた。
「いや申し訳ないッス。伯爵にお預かりした兵も殆ど失いました――全責任は自分にあります、如何様にも処分なさって下さい」
（まぁ、処刑とか手足の腱切るとか言われたらそっこーでとんずらッスけど）
　内心で舌を出しながら表面上は深刻そうに雇い主に頭を垂れるイフェクであったが、下手に言い訳をしなかったのが功を奏したのか、伯爵は怒りで赤黒くなった顔色を幾分かマシな色合いに変えた。
「ふん、本来なら使えん奴を置いておくほどワシは甘くないが……貴様の後任になりそうな者がいないのも事実だ。今の立場を維持できる事に感謝して、死に物狂いで働くがいい」

「御恩情に感謝します（ふざけんな降格しろや）」
深く頭を下げて隠した表情が、思わず歪む。
リュダクロスの領地以外では、あっという間に賊として斬り捨てられそうなクズしかいない、バフナリー領の私兵団。
ときどきイフェク自身も斬り殺したくなる下衆ばかりの集団のまとめ役など、有り体にいって罰ゲームでしかなかった。
そんな部下の心情を知る由も無く、伯爵は散々に喚き散らして多少は頭が冷えたのか、咳払い一つして自身の第一婦人となるべき娘を迎え入れ損ねた理由を尋ねた。
「それで、護衛の冒険者共の他に妙な闖入者が居たらしいが……部下が殆ど帰ってこなんだのは、そやつらの仕業なのか？」
「ええ、巡礼者らしき男女三人組です――三人とも、相当な腕利きだったッスね」
特に、デカいガタイの僧は強いなんてもんじゃないッス。絶対勝てません。と、イフェクは顔を引き攣らせて断言した。
正確には一番やべー奴なのは黒髪の転移者らしき青年なのだが――ロクに剣も握ったこともない目の前の雇い主にその辺りの感覚を理解できるとも思えないので、黙っておく。
「ふん。その様な下賤はどうでもよい――それより、その三人の中にいた小娘、聞けばワ

シのローレッタに劣らぬ美しさだというではないか」
「……は。確かに中々の器量よしでは、ありました」
好色さを隠そうともしない、涎を垂らさんばかりの締まりのない表情をみせる伯爵に舌打ちしなかった自分を、イフェクは褒めてやりたくなった。
こういった反応が来るのは分かり切っていたから、敢えて伏せていたというのに。
生き残った部下の誰かが、小金欲しさにペラペラと喋ったのだろう。口止めしていてもコレだ。いっそ自分以外はあの場で倒された事にして始末しておくべきだった。
黒髪の隙間から覗く死神の眼光の如き不吉な光を思い出し、背筋が冷える。
「古くより続く名家であるバフナリー家当主――ワシの邪魔をしたことは許されんな。愚かな冒険者共も、邪魔だてした愚か者共も思い知らせてやるのは当然だが……その小娘だけは、神などではなくワシに全てを捧げる事を誓えばローレッタ共々、可愛がってやらんこともない」
考慮してやる、といわんばかりの口ぶりだが、この男の頭の中では既に確定事項なのだろう。まだ見ぬ美しき少女を思う儘に侍らせる様を想像して、欲望と喜悦で歪みに歪んだ見るに堪えない顔を晒している。
イフェクは、冷や汗で服が張り付く感触を背中に覚え――気のせいか、布地だけではなくあの眼光が、あの視線が背に張り付いている様な気分になって身震いした。

黒髪の青年を抜きにしても……いや、あの巨漢や、伯爵が欲望を向ける当の少女であっても、三人の中、一人であっても敵にしてはならない。領内の全兵力を出しても蹴散らされて終わる。

一度でもまともな戦場に出た事があれば、教会の腕利き聖職者という時点で厄介どころでは無い相手だというのは理解できそうなものだが……長らく続いた人類にとって生存競争染みた時代であった乱世で、徹底して鉄火場を避け続けた、ある意味では希少な目の前の貴族は、突き抜けた個人による武力、というものを理解していない。そもそも理解しようともしてない。

腕利きを雇おうにも、本人に全く目利きが出来ず、家令などもゴマをすって甘い汁を啜ることに注力している者達ばかり。

結果、寄ってくるのは外面ばかりが凶悪な三流の賊崩れや他所の国で罪人となって逃げだしてきた様な連中ばかりという、糞で固めた負の螺旋であった。

戦争中はそのなりふり構わない保身と肥やした私財で、なんとか上手い事やれていたようだが……大戦が終結し、世に平和の兆しが見え始めた今となっては、そのやり口に嫌悪を抱く貴族達が露骨に距離を取り出している。

築き上げて来た欲濡れの富と張りぼての権威が静かに崩れ始めているのを愚物なりに理解はしているのだろう。嘗てと比べて癇癪を起こす頻度が増えたと聞く。

とはいえ、ならば行いを改めようという発想にすら行きつかないからこその、愚物なのだが。

私兵団を纏める――正規の軍隊ならば騎士団長の立場にある部下から、腹の中で０点通り越したマイナス扱いでボロ糞にこき下ろされているとは露と知らず、リュダクロスは新たに手に入るであろう美しい少女を夢想しながら、名案とばかりに指輪だらけの手を打ち合わせた。

「今は森を抜けた先……あの猪武者の領地で宿を取っているのだったな？　丁度良い！　未来の夫であり、主であるワシが直々に顔を見に行ってやろう！」

「……あー、直接というと、お隣の伯爵の領地にツスか？　確かあちらの御当主は根っからの武闘派で、こちらと相当険悪な仲と聞いてますが……そもそも領地に入れるツスかね？」

「何が伯爵だ！　あの様な剣を振り回すしか能のない野蛮な田舎者が、ワシと同じ爵位を名乗るなぞそれだけで無礼極まりないわ！　元子爵風情が成り上がった程度で図に乗りおって！」

いや、戦時中にきちんと功を上げたから爵位上がったんでしょ、成り上がりも糞もお前以外の貴族は位上がってるトコの方が多いわ。

反射的に口に出しそうになった突っ込みは、舌を噛みしめる事で口内に留まってくれ

た。

ふー、ふー、と。鼻息も荒く肩をいからせていた伯爵であったが、ややあって呼吸も落ち着くと、口の端をいやらしく吊り上げて笑う。

「あの都市圏の警備隊の長は、以前からワシの手駒よ。小金を握らせて成り上がりの猪の動向を報告させていたのでな――多少奮発してやれば、ワシを都市内に通す事も、その後に娘達を連れてこさせることも造作ない」

「……なるほど」

その警備隊長とやらがどれ程の額を握らされているのかは知らないが、この雇い主の評判を知らぬはずがない。

その上で、使われているのを良しとする人間だ、ロクな奴ではあるまい。

銀貨の輝きに目をくらませて、蜥蜴と竜の区別もつかなくなってる阿呆で無い事を祈るばかりである。

白けた眼で己を眺めているイフェクには相変わらず気付く事もなく、リュダクロスはたっぷりと嫌味を混ぜ込んだ口調で彼を詰る。

「奴の働き如何では、ここの兵団の纏め役をまかせても良いかもしれんなぁ。今の地位が惜しければ、精々必死にワシへと忠を尽くすことだ」

「やったぜ（は。精進します）」

「……何？」

やべぇ間違えた。

舌の根乾かぬ内に前言を翻すリュダクロスではあったが、イフェク的には朗報でしかない。

なのでうっかり本音の方が出てしまった。

「では、かの都市へと移動するための馬車の手配をしておくッス。いえ、向こうさんが街を出てしまう可能性も考慮すれば飛竜便の方が確実でしょう、そちらにしておくッスね。護衛の選出と迎賓館への手配も同時に行うので、伯爵はごゆるりとお待ち下さい」

「う、うむ？　まぁよかろう。さっさと済ませるがいい」

誤魔化す為に口早にまくしたてて、勢いで押し切る――うまくいった様だ。相手が馬鹿で助かった。

ストレスの多い環境にいる為か、つい失言をしてしまった。気を抜かない様にせねば。

訝し気ではあったが、元より部下への気配りなど存在しない男だ、直ぐに忘れるだろう。イフェクは一礼すると速やかに伯爵の私室より退出し、無駄に壺やら絵画が飾られすぎて統一感に欠ける廊下を一人、歩き出す。

「そろそろボロが出てきそうだし、潮時ッスかねぇ」

口に出した後で、周囲に人気が無いかを慌てて確認した――どうやら、本格的に自分は疲弊している様だ。このままだと本当に仕事に影響が出かねない。

今回の一件で、意図せず洒落にならない連中と接触してしまった事であるし、本当に切り上げ時かもしれない。

暗澹とした気分で、私兵団の長として割り当てられた部屋に戻る。

まずは軽く室内に人気が無い事を確認。念の為、何某かの魔法の痕跡もないかチェックする……問題ないようだ。

そのまま真っ直ぐに事務机に進むと机の下にしゃがみ込み、床板の一部を強く押しながら引いた。

僅かに板がずれ、小さな空白のできたスペースに収まっていたのは、細めの小箱だ。

「うーん……これだけあれば充分ッスかねぇ……あとはもう直接……」

『中身』を確認しながら、悩む様に独り言ちる。

――あぁ、見つからないと思ってたらお前さんが持ってたのか。納得。

そんな声が、すぐ真後ろから聞こえてイフェクは硬直した。

退いた筈の背中の冷や汗が、ぶわっと音をたてて吹き出す。

首を捻り、後ろを振り向く――ただそれだけの動作が出来ず、まるで全身が錆びの浮いた絡繰りになった気分だった。

今更ながら、気付く。

先程の、背中に視線が張り付いていた様な感覚は、錯覚では無かった。

最初から聞かれていたのだ、全部。伯爵の末路は決まったものとして、イフェクに関してはどうか、吟味する為に。

急激な緊張に晒されて干上がった口内に、無理やり唾を送り込もうとしてごくり、と喉が鳴った。

冗談ではない。仕事の途中で巻き添えで本来、敵対関係に無い相手に殺されるなぞ、ごめんだった。

自身の立場と、仕事の内容……悩んだのは一瞬で、直ぐに結論は出る。
いっそこの際、全部この場でぶちまける――そうしなければ最悪、この場で首無し死体になりかねない。
覚悟を決め、硬直した身体に喝を入れて、両手を上げながらゆっくりと振り向く。
「提案――というか告白（ネタバレ）があるッス」
赤光を纏った黒い死神に向け、イフェクは引き攣って半泣きになりそうな頬をどうにか笑みの形に吊り上げながら、口を開いた。

朝日が遠い山稜線より顔を覗かせ、緩やかに夜の帳を払いのける時間。
宿の裏手にある広めの庭程のスペースがある水汲み場で、ロックンロールな素手ゴロ令嬢ことローレッタと、筋骨隆々な巨漢の僧、カクは静かに対峙していた。

軽くつま先で地を蹴り、視界に収めた巨躯へと意識を集中させていたローレッタが静かに宣言する。

「――参ります」

「来られよ」

彼女の言葉も、応じる言葉も、また端的であった。

鋭く呼気が吐き出され、訓練用の厚布を巻いた左拳が角張った厳つい顔の鼻下――人中へと奔る。

早朝の冷たい空気を裂いて放たれた拳が皮膚に触れた瞬間、カクの野太い首が捻られ、打撃の威力が頭を振った動作にて流された。

予測していたのか、はたまた経験済みであったのか、ローレッタは驚く事も無く踏み込み、返しの右をその分厚い胴体――左脇腹に捩じり込む。

拳に伝わって来たのは凡そ人体を打った感触ではなかった。

強いて言うならば、皮一枚張り付けた、鋼で出来た巨木であろうか。

互いに魔力強化を制限した状態であるとはいえ、素のままであっても鍛えられた大の男の肋骨をへし折り、内臓を押し上げる彼女の胴打ちに、眼前の巨漢はなんら痛痒を示していないのは彼女が一番理解していた。

ゆるり、と。丸太の如きカクの右腕が持ち上がり、鉤手がローレッタの側頭へと滑ら

かに突き出される。
単純な速さで言うなら寧ろ緩やかな一撃ではあるが、凄まじい勢いで本能が警鐘を掻き鳴らし、ローレッタは本来紙一重で避けるべき其れを大きく身を逸らしたスウェーで以て回避してしまう。
眼前の僧に対し、それはあまりにも悪手であった。
「シィッ！」
伸びきった上体のフォローの為、彼女は咄嗟に片足を跳ね上げて鞭の様にしなる蹴りを大木の根を思わせる脚へと打ち込むが、半身一つ分の間合いを詰めた巨漢の外腿に弾かれ、更に大きな隙を呼び込む結果となった。
岩を削り出した様な鉤手が開かれ、ローレッタの華奢な肩に触れる。
次の瞬間には軸足を優しく、足の甲へと乗せる様にして刈られた彼女の視界は、くるりと一回りした。
「くぅっ」
捉えられた肩を視点に宙を一回転した身体を捻り、膝と掌を地に付きながらもなんとか脚から着地する。
次の瞬間に取るべき選択は――背後へ跳躍するか、敢えて前へと出るか。
思考する迄も無かった。彼女はカッツバルゲルの女である。

今は片膝を付いた体勢だ。立ち上がっている暇など無い。追撃の為に更にこちらへと踏み込んでいた巨躯へと、低い姿勢のまま、殆ど前転するように飛び込み、肉薄する。

転がった際に地を離れた両足が再び大地に着いたときには、両者はほぼ密着距離であった。

ローレッタの位置はカクの足元――彼が脚を振り上げれば、それだけで蹴り飛ばされる。

故に、彼女は即座に大地を踏みしめ、踏み抜き、真っ直ぐに天へと飛びあがった。

「オラァッ!!」

全身のバネを使って上空へと跳ね上がる身体ごと、叩きつけるようにしてアッパーを放つ。

並みの相手であればガードごと叩き潰して顎を砕く一撃が、巌の様な顎裏に向けて吸い込まれ――。

「うむ、勇猛にして果敢。師でもあったという祖父君とも、一度お会いしてみたかったものですな」

顎と拳の間に差し込まれた分厚い左の掌に遮られ、あっさりと止められた。

同時に節くれだった右の縦拳が首筋に添えられる。

寸止めではあるものの、完全なる一本であった。

ローレッタの眼からみても、祖父を上回るであろう強者であるカクへと稽古を申し出てからはや数日。

魔力強化に始まり、闘法や組手の際の決め事など、様々な面で彼女の側に有利であろう条件をつけた組手であったが、清々しいまでの全戦全敗である。

「ハァ……世界は広いですわね……上には上がいるとこの身で実感できたことは喜ばしいですが、夢は遠いと現実を叩きつけられた気分ですわ」

その場に膝を付き、息を整える少女に、カクは莞爾として笑いながら拳を解いた掌を差し出した。

「そう悲観することはありませぬぞ。御令嬢の拳は間違いなく一流――やや実戦経験が不足気味の様ではありますが、逆を申せば経験さえ積めば《刃衆(エッジス)》の末席にならば、既に手が届く域にあるかと」

「まぁ……ひょっとして御坊様はかの部隊の方々と戦地を共にした経験がお有りですの？」

やけに具体的な巨漢の言葉に、その手を取って立ち上がりながらローレッタはもしやと思い至って問いかける。

禿頭を空いた手で撫でさすりながら、カクは笑顔のまま頷いた。

「愚僧は駆けた戦場(いくさば)の数だけは多い無骨者でしてな。帝国の誇る名剣たる御仁達とも幾

度か肩を並べた事がありますれば。御令嬢の技は、彼らにそう見劣りするものではありませぬぞ」

「……そう言って頂けると、俄然やる気も湧いてきますわね！　……処で、御坊様は相当な場数を踏んだ猛者であるご様子。その他にも大戦で活躍した英傑の方々と共に戦った事も？」

「ふむ？　そうですな……帝国以外であっても……凡その国々の最前線で戦う戦士と、共に戦った事があると記憶しております。回数に偏りはありますが」

「クッッッソ羨ましいですわ！」

　両の拳を揃えて握りしめ、くぅー、などと漏らしながら、言葉の通り心底羨まし気な様子をみせるローレッタ。

「故郷を護る為に御祖父様の下で戦場を駆けた事は私の誇りではありますが……それはそれとして、大戦史に残るであろう方々と戦友となれるというのは、滅茶クソに憧れますの」

「はっはっはっは！　戦武の道を志す年頃の若者らしい、素直なご意見ですな！　実に結構！」

　呵々大笑する相当な古強者であろう巨漢を前にして、意外とミーハーというか、戦場での英雄譚好きであったらしい少女がやや興奮気味に指折り名前を上げ始める。

「私(わたくし)と然して変わらぬ年頃らしい、《刃衆(エッジス)》の長たる御二方――《戦乙女》と《銀牙》もそうですが……御坊様の御国の《救世の聖女姉妹》やその守護者たる戦場の生ける伝説、《聖女の猟犬》――あとは魔族領の《災禍の席》の方々……戦士としても、一度は御目通りしてみたいですわねぇ」

まるで理想の王子様を思い浮かべる様にうっとりとした視線を虚空に向けるローレッタではあるが、何かが変だと突っ込みを入れられる人間は、今この場にいない。

北方で大きな戦端が拓かれたのは数える程で、それ以外は散発的な小競り合いが主である。激戦区から離れた地域ではあるが、戦場での高名な戦士の名は意外と知られている様だ――挙げられた名が全て顔見知りであったのもあり、カクは戦友の武名が轟いている事を喜んだ。

「うむ、こちらの地方でもお歴々の名が知られている様で、拙僧としても共に戦った身として誇らしいものです――戦場逸話に詳しいのも、祖父君の薫陶ですかな？」

「ええ、祖父もこの手の話題を好んでいました――と言っても、御祖父様の一押しは聖女様方が現れる一世代前、人類側の旗印であった教国の《四英雄》の方々でしたわね」

「――む」

令嬢の言葉に、カクは唐突に動きがぎこちなくなり、何処か据わりが悪そうにぽりぽりとこめかみを指でかきはじめる。

「私(わたくし)の一番の憧れはやはり《刃衆(エッジス)》ですが、元は御祖父様の《四英雄》の逸話語りを聞いて武の道を進みだした様なものですもの。何度も聞かされたお話も多いので、なんなら今でも大体の逸話を諳んじる事が出来ますの」

えっへん、と豊かな胸を逸らして自慢気に語るローレッタは、困った様に眉根を寄せて空を見上げる巨漢の様子には幸か不幸か、気付くことは無かった。

どことなく面映ゆさを堪えるような表情でカクは軽く手を打ち合わせ、やや強引に話題を変えた。

「――そろそろ他の方々も目を覚ます頃合いでしょう。浄化魔法で汚れを落します故、食堂で皆様を待っといたしましょう」

「あら、もうそんな時間ですの？　少し話し込み過ぎたみたいですわね……では、洗浄の方をお願いいたします」

ともあれ、ここ数日の日課となった朝の稽古は終了だ。二人は身支度を整えると、宿へと戻るのであった。

現在、一行が宿泊している場所は、ある程度大きな宿屋にはよくある構造――一階は酒場兼食堂、二階が宿泊用の各部屋となっている。

全員揃えば冒険者の中規模パーティー程度の人数になる彼らは、他の客とトラブルにならぬ様に端の席に陣取るのが常となっていた。

「おはよー！　先生もローレッタさんも早いね」

「おはよ、二人とも。今日も朝稽古してたの？」

「おはよう。熱心ねぇ……まぁ、目指してる夢が夢だから必死にもなるか」

残った女性陣が一階へと降りて来て、既に起床していた男連中とも挨拶を交わし、食堂の丸テーブルを囲んで席につく。

マリアやローレッタは言わずもがなであるが、冒険者側の二名――イルルァとウェンディも整った容姿をしているが故に、気性の荒い同業や酔客などに絡まれるのは必至かと思われたが……一目で歴戦の武僧と分かるカクと、初日に絡んで来た者達を丁寧に分からせたスケこと傭兵（モンスターペアレンツ）の御蔭か、以降は平穏そのものである。

とはいえその片方は初日以降、不在であった。

――件の伯爵に対して、ちょっとした嫌がらせが出来るかもしれん。

そう言って一時離脱を申し出た傭兵に、ローレッタが「あんちくしょうに吠え面かか

せられるならバッチこいですわ！」と親指立ててゴーサインを出して、はや数日。
　現在逗留している街は武闘派の貴族が治めている為、例のブタ野郎ことバフナリー伯爵とは険悪な関係らしい。
　なので、此処に留まっている限りは連中も手を出し辛いはずである。というコウジの意見もあって、皆で傭兵の帰りを待つことになったのだが――。
「確か、今日辺り帰ってくるって話だったが……傭兵のにいさんは一体何をしてるんだ？　まさかこの数日で伯爵の領まで行き来できるはずもないし」
　皆で朝食を摂りながら、今後の予定について話し合う中、パンを千切って頬張っていたアザルが思い出した様に疑問の声をあげる。
　仲間であるマリアとカクは何やら察しているようだが、他の者達は具体的な内容を知る由も無く、己の思いつく上での予想をそれぞれに語った。
「うーん……自由契約の傭兵っていうなら、伯爵について知ってそうなこの街の情報屋と懇意にしてるとか？　でもそれなら何日も留守にしないよねぇ」
　スープを口に運びながら一番手堅い予想をイルルァが立てるが、彼女自身があまり自身の口にした予測を信じていない。
　対してサラダをつつきながらエクソンが上げた内容は、やや現実味に欠けるがそうであれば大いに助かる、という予想というより希望に近い内容だ。

「この街の領主様と御知り合いという可能性はどうでしょう？　バフナリー伯爵と不仲であるというのなら、こちらの事情を説明すれば協力してくれると判断なされたのかもしれません」

「それならお嬢ちゃんを連れて行った方が説明もし易いし、話は通りやすいと思うけど？　そうなると……駄目だわ、他には思いつかない」

最後に朝に弱いらしく、飲み物だけを頼んでいたウェンディが仲間の希望的観測を冷静に否定して……結局はコレ、という確信をもった予測は立てられずに、お手上げのポーズを取った。

四人の代わるがわるのやり取りを聞いていたカッツバルゲル家の二人も、恩人の言い出した事を疑うことはなくとも『嫌がらせ』とやらの内容は気になっているらしく、答えを知っていそうな二人へと、皆の視線が自然と注がれる。

分厚く大きな手でこじんまりとして見えるナイフとフォークを器用に扱いながら、厚手の燻製肉（ベーコン）が添えられた目玉焼き（ターンオーバー）を丁寧に切り分けて口に運んでいたカクと、ミルクの入ったカップを乾していたマリアが注目されている事に気が付き、顔を見合わせて苦笑した。

「スケ殿はなんというか、他者の予測の斜め上を征く事の多い御仁でしてな。驚くとは思いますが、事態を好転させる場合が殆どであるので心配は無用かと」

「まぁ、大体予想は付くけど……多分、今言っても信じられないと思うので、にいちゃんが帰って来てから本人に聞いた方が良いと思いますよ？」

二人が言うやいなやのタイミングであった。

――呼ばれて飛び出て俺が来ましたよっと。

「うぉっ！　ビックリした!?」

アザルとエクソンの座る席の間から、唐突に首を出して宣ったのは数日振りに見る黒髪の青年――傭兵スケである。

驚いて椅子ごと仰け反るアザルに軽く謝罪しながら、他の面々とも挨拶を交わして、空いた席へと腰を下ろす。

「おかえり、にいちゃん。首尾はどうだったの？」

――おう、ただいま。まぁ、予定外な事もあったけど、悪くない結果になったで。

マリアの言葉にニヤリと笑って返すと、彼は懐から筒状の書状を保存する小箱を取り出した。

――ほい。コレは縦ロールちゃんへのお土産ね。

「縦ロールちゃん!?　スケさん、元とはいえ私（わたくし）、男爵家の令嬢なのですけれど……」

「まぁまぁ、いいじゃないかローレッタ。ちょっとぶっ飛んでる呼び名だけど、君っぽくて可愛らしいニックネームだよ」

「私(わたくし)は今日から縦ロールちゃんですわ」

「アンタそれでいいの、お嬢ちゃん……」

傭兵の独特が過ぎる呼び名に苦言を呈したものの、コウジの言葉を聞いて秒で翻したローレッタをみて、ウェンディが呆れた様に呟く。

兎にも角にも、小箱を受け取って早速中身を取り出す令嬢を見て、マリアが何かを察したのか、無言で簡易な遮音魔法を発動させた。

ローレッタが箱の中身――幾つか入っていた書類らしき紙束に目を通す。

訝し気に書類を読み進めていた表情が固まり、何度も瞬きすると目頭を指で押さえる。

よーく目元を揉み解して、再度、書かれている内容を最初から目で辿り……錯覚でも見間違えでも無いとやっと気付いて、絶叫した。

「……ぬぅわんですのこれぇぇぇぇぇっ!!?」

眼をひん剥いて淑女らしからぬ雄叫びをあげる御令嬢の声量に、発動された遮音空間の内側にいた一同――構えていたマリア、カク、傭兵の三名以外が耳を押さえて悶絶する。

――やぁー良いリアクション。渡した甲斐があるってもんだね。

ニヤニヤと悪い笑みを浮かべながら平然と言う傭兵の言葉に、ローレッタは酸欠になった金魚の如く、口をパクパクとさせながら手の中の数枚の書類と彼の顔を交互に見比べた。

「え、ちょ……マジですのコレ。手の込んだ偽造品とか……いえ、この押印は本物ですわ」

「うぅ……こ、鼓膜が破れたかと思った……どうしたんだい、ローレッタ。いきなりあんな大声をあげて？」

隣の席に居た為、もろに教え子の渾身シャウトを喰らったコウジであったが、凄まじく動揺しているその姿をみて教師としての使命感が鼓膜のダメージを上回ったようだ。いち早く復帰して彼女の肩に手を置いて問いかける。

いつも彼に対して向ける闊達な明るい笑顔ではなく、どことなく引き攣った様な表情でローレッタは無言で手の中の紙束をコウジに手渡した。

教え子から受け取った書類を、師が訝し気に読み進める。

表情が固まり、何度も瞬きすると目頭を指で押さえた。

よーく目元を揉み解して、再度、書かれている内容を最初から目で辿り……錯覚でも見間違えでも無いとやっと気付いて――教え子と同じ様に絶叫した。

「えええええええっ!?　なんだいコレは!?」

ひょろりとした外見からは予想もつかない、中々の大音声であった。

――二人揃って同じリアクションで草。

師弟で天丼ネタとかレベルたけぇ、と腹を抱えて爆笑している傭兵に、つい先程までの穏やかな立ち振る舞いを投げ捨ててコウジは詰め寄る。

「いやいや笑いごとじゃないよ、どうやってこんなもの手に入れたんだい!?　この数日、何をしていたのか今更ながら心配になるんだけど!?」

書類と思われた紙束は、バフナリー家の裏帳簿――の一部と、不正な蓄財を行った際の取引を記した証文であった。

しかもバフナリーの家紋が刻まれた押印と、当主であるリュダクロス＝バフナリーのサイン付き……直接手紙を送られたコウジの眼から見ても、間違いなくどちらも本物と断言できる代物だった。

頑張ったからね。ホラ、俺って出来る傭兵だから。と、何でもない事の様に笑う青年に、カッツバルゲル家の師弟は揃って唖然とした表情で顔を見合わせる。

冒険者組の四人も、そんな反応をされれば気になるのは当然。

代表して、頭目であるアザルがおっかなびっくりと言った風に書類を脇から覗き込む。

「……そんなにヤバい物なのか？」

「これだけでバフナリー（ブタヤロウ）の家は焼け野原になりますわ――不正取引に関わった貴族や商人にも少なからず飛び火しますわね」

こんな特大の爆薬みたいなやべー代物、どうやって手に入れたんですの……と、ポツリと漏らすローレッタを見て予想していたより酷い危険物であると理解したアザルは、即座に首を引っ込めて書類を視界から外した。

「あー、ヤバいもん見ちゃったねリーダー」

「私達は見てないからね、見たのアザルだけだから」

「怖ぇこと言うなよお前ら!?　俺だって殆ど内容は見てねぇよ！」

意地悪気に笑って揶揄うパーティーの女性陣二人に、洒落になってねぇんだよ！　と顔を顰めて怒鳴り返す。

仲間内のじゃれ合いを横目で見つつ、エクソンが混然としてきた場を取りまとめるように、今後の指針を依頼主である少女へと尋ねた。

「傭兵殿の仰った『嫌がらせ』によって得た物が、極大魔法の呪巻物（スクロール）並みの危険物であった訳ですが……それを手にしたカッツバルゲル嬢はどうなさるおつもりですか？」

実際、言う程の効力が書類にあるのならば、これから取れる手段、選べる選択肢は無数にある。
然るべき場所に提出するだけで件の伯爵の家を前言の通りに焼け野原にした後、カッツバルゲル家を取り戻すことだって出来るだろう。相応に時間は掛かるだろうが。
だからこそ、悩ましい。
突如として目の前に広がった、様々な選択肢の数は、小さな男爵家を継いで……直ぐに手放す事になった少女が処理できる情報量を容易く超過していた。
「うぬぬぬぬ……これは難題ですわね……未来が広がったこと自体は喜ばしいですが、広がり過ぎて先が全く見渡せませんわ」
丸卓（テーブル）に突っ伏して、頭から煙を吹きそうになりながら唸るローレッタの手に、そっと掌が重ねられる。
「あまり難しく考える事はないよ、ローレッタ」
そう言って、彼女に笑いかけたのは彼女が先生と慕い、それ以上の関係になることを熱望している人物であった。
「君がカッツバルゲルの屋敷や、仕えてくれた人たちの事を考えて悩んでるのは察しが付くけど……断言しよう。彼らは君が君らしく、思うがままに、一直線に突き進める道を選んでくれることを望んでいる——勿論、僕もね」

「先生……」

ともすれば痩せぎすに見える、お世辞にも逞しさとは無縁の――だが、ローレッタの胸の内を暖かい感情（モノ）で満たして止まない恩師の笑みは、大きく広がり過ぎて見失ってしまった彼女の選んだ道を再び見つけだし、踏み出させるのには充分な切欠となった。

――んじゃ、燃料追加ってことで更に情報を一つ。

腹が据わったらしく、凛とした表情で顔を上げた少女を眩しいモノを見つめる様に眺めていた傭兵が、再び飄々とした笑みに戻って卓に肘をつき、身を乗り出す。

――件の伯爵な、今日の昼前にはこの街にやってくるみたいやで。向こうからしたら、自分の嫁やら妾やらにする相手を迎えにいってやる、程度のノリなんだろうがね。

それは差し詰め、女神の御導きか、或いは悪魔の囁きか。

まるで彼女が望む選択を見越した様な、お誂え向きの”場”を用意しました、と言わんばかりのこの上ないニトロ燃料（じょうほう）であった。

少しの呆れと、大きな感嘆――そして何よりも感謝を感じながらも、令嬢は目の前の奇妙な三人組に問いかける。

「……恩人に向かってこの様な質問はするべきではないのでしょうが……スケさん、貴

方は、貴方達は何者ですの？」

一連の流れが偶然とは思えない。そもそも始まりであるローレッタの手の中にある書類でさえ、普通に考えれば数日でどうこう出来る代物では無いのだ。

当然ともいえる疑問に、傭兵はちらりと隣の巨漢と目配せをして、互いに盛大な悪戯を考えている悪餓鬼の様な表情で笑った。

――俺達が何者かって？　俺はスケ。マリアお嬢さんに雇われた傭兵で。

「拙僧はカク！　マリア様の御付きである、一介の僧でありますれば！」

え？　え？　と狼狽えた様に二人を交互に見る栗色の髪の少女を中心に添え、馬鹿二人がドヤ顔でポーズを決める。

――我ら、越後のちりめん問屋のご息女御一行！　旅のついでに世直し上等仏恥義理!!

「――ですな！」

「ここでそのネタ引っ張るの!?」

愉快な寸劇を見たかの様に、おー、とアザル達のみならず、食堂のメイン客層である冒険者達がまばらに拍手を送った。この宿屋、意外とノリが良い連中ばかりである。

謎のテンションに置き去りにされたらしいマリアが、「恥ずかしいからやめてよ二人

とも！」と羞恥混じりの悲鳴を上げた。
「遮音の魔法、途中で切るんじゃなかった……！」
「いやぁ……ははっ。賑やかでいいねぇ」
頭を抱えて唸るマリアであったが、元ネタを知っているらしきコウジには好評なようで、非常に楽し気である。
はぐらかされた形にはなったが、恩師が喜んでいるのを見てローレッタもこれ以上の追及は無粋と、苦笑しながら恩人たちへの疑問を引っ込めた。

好事魔多し、というべきか。
或いは、お誂え向きに、というべきなのかもしれない。
大きすぎる手札を手に入れ、その持ち主となった少女が覚悟を決めた途端であった。

宿の扉が乱暴に押し開かれ、十人前後の武装した兵士が無遠慮に雪崩れ込んでくる。
ドカドカと乱雑な足音を立てて、驚きの声や悲鳴をあげる宿の客を押し退けて進む兵士達は端の丸卓――ローレッタ達の前に立ち塞がると、抜刀こそしていないが彼女らを取り囲むように散って半円形に陣取った。
静まり返った食堂の静寂を割り進むように衛兵の壁の間から進み出たのは、鎧の上に

サーコートを着込んだ兵士の中でも上役らしき、大柄の男だった。
「貴様らがここ数日、街に滞在しているという怪しい連中か」
誰何というにはあまりにも適当な言葉ではあったが、男の中では既に断定された事実であるらしい。有無を言わせぬ口調で矢継ぎ早に告げる。
「お前達には、隣領の領主殿の兵団を襲撃した嫌疑が掛けられている。この場で斬り捨てられたくなければ、大人しく縄を受ける事だ」
ちらりとローレッタとコウジ――最後にマリアを順繰りに視界に収めると、今にも舌なめずりをしそうな、およそ衛兵には似つかわしくない表情で嫌らしく笑う。
「そこの三名には、代表として取り調べを受けてもらおう……たっぷりとな。下らん抵抗はするなよ、此方の言う事に大人しく従ってさえいれば、お前達の身の安全は保障してやろう」
他の連中は貴族様の兵を多数殺めた襲撃犯だ、極刑か奴隷落ちは確実だがな。と、嘲りを隠さずに断言する男ではあったが。
「……なんともまぁ、図ったようなタイミングで来ましたわね……これもスケさんの仕込みだったりしますの？」
――いや、タイミングに関しては偶然だけど、詳細は知ってる。コイツ、例の伯爵に金貰ってあれこれやらかしてる、所謂銅臭役人って奴だわ。こっち来る前に捕縛しとけ

とか言われたんやろ。
「この地を治めているのは同じ伯爵でも武闘派の、質実剛健な御方なのですが……そんな方の部下でもこの手の輩はいますのねぇ」
怯える処か慌ても焦りもせずに、平然と会話を続ける令嬢と傭兵。
特に声を潜めていた訳でもない会話の内容を聞いた衛兵達と――固唾を飲んで緊迫した場を遠巻きに眺めていた宿の客から騒めきが洩れる。
「ッチ！　下らん戯言をぬかすな犯罪者が！　今すぐ斬り捨てられたいのか！」
二人の――特に傭兵の言葉を濁声を上げて遮った男が、剣を抜いて躊躇なく切っ先を突き出す。
言葉は恫喝であったが、見せしめのつもりなのだろうか、避けるそぶりもなければ、視線すら男に向けない傭兵の喉元へと明らかな殺意をもって刃が届こうとして――。
「ふむ。こうなった以上、ここでゆるりと件の悪漢の到着を待つ事もできませぬな――どう動くべきか、御令嬢が改めて指針を示すべきかと」
横手からカクが無造作に伸ばした指先に剣先を摘まみ取られ、衛兵の上役らしき男の剣は宙に固定されたかの如く、その場でピシリと止まった。
男と、周囲の人間の驚愕の声には頓着せず、一行は次なる行動について各々に意見を語りだす。

「ボク的には冤罪で牢屋に入ったりするのはゴメンかなぁ。後で面倒になるのも嫌だし、禍根は絶っておくべきだと思いまーす」
「マリア君の意見に同意するよ。ここで大人しく捕まった処で、下手をしなくても書類も取り上げられるのがオチだろうし」
はいはーい、とのんびりと手を挙げて言うマリアの言葉に、コウジが深く頷き。
「――で、あたし達はどうすんのリーダー？　ここで下手を打つと、組合除名からの反逆罪でおたずね者コースだけど」
「そこの汚職役人が言ってたろ、大人しく捕まったってどの道、冤罪確定で奴隷落ちだよ。なら、一発かまして逆転してやるさ、冒険者らしくな」
イルルァの答えが分かり切っているであろう質問に、アザルが腹を括った様子で笑いながら立ち上がる。
「暴威を振るう悪に義を以て敢然と立ち向かう――私的には、大戦以来の聖職者の本懐ですので、何の問題もありませんね」
「長丁場になりそうねぇ……無理やりにでも朝食食べておくんだったわ、今更な話だけど」
エクソンが本懐である、と。この状況に気炎を上げれば、朝が苦手なウェンディは、下手をすれば今日一日、空きっ腹を抱えそうな己の腹具合を後悔と共に愚痴った。

――で、後は縦ロールちゃんの判断待ちだ。どうする？

椅子から腰を上げることもせず、喉元で仲間によって固定された剣先を眺めて、笑いながら傭兵（スケ）が首を傾げ。

「――決まっていますわ」

ギシリと、懐から取り出した鋲（ナックルダスター）拳を装着した手を握りしめ、ローレッタが不敵に笑い返す。

「き、貴様ら、抵抗する気なら容赦ぐげべっ!?」

巨漢の指先で固定され、空中でぴくりとも動かなくなった己の剣を四苦八苦しながら引っ張っていた男が何某かを喚く前に顔面に拳を叩きつけられ、その場で半回転して床を破砕しながら上半身をめり込ませた。

犬神家のポーズで床に埋まった警備隊長を見て、衛兵達が慌てて抜剣し、それを為した下手人――一見たおやかな金髪巻き毛の少女に刃を突き付ける。

一切怯まず、己の武器たる両の拳を打ち合わせ、ローレッタは宣言した。

「わざわざ来てくれるというのなら、此方から迎えにいってやりますわ！　立ち塞がるものは全て蹴散らしてあの野郎をぶっ飛ばしますの！　真っ直ぐいってぶっ飛ばす！」

屋敷を追われ、家族同然の家人達と離され――何より愛する恩師の研究と、両親と祖

父の思い出に後ろ脚で砂をかけられた少女の、燃え盛るような怒りと共に、反撃の狼煙は上がった。

帰り道　顛末

ローレッタが警備隊の隊長らしき男をワンパンで床に埋めると同時に、様子を見ていた周囲の宿客から歓声が上がる。

喧嘩を囃し立てるものというより、賞賛が込められている声が大きいことから察するに、ブン殴られた男は街の人間からも良い眼で見られてはいなかったらしい。

部下からも慕われているとは言い難かったのか、剣を抜いて御令嬢と愉快な仲間達を包囲する衛兵達も見るからに士気が低かった。

或いは、単にカクの剛力やローレッタの一撃を見て怖気づいているだけなのかもしれなかったが。

闘志を漲らせて前に踏み出す金髪巻き毛の少女と、後に続く仲間達にあっさりと蹴散らされ、衛兵達は悉く床に這う結果となった。

単に上の命令による職務として一行を捕縛しにきた衛兵に罪は無いので、最初に殴られた男以外は精々たんこぶや打ち身程度で気絶しているだけなのは、貧乏くじを引いた衛兵達にとってせめてもの救いか。

「さて、例の伯爵をとっちめるって話だったが……領地からやってくるっていうなら、北の城門で待ち受けりゃいいのかね？」
　衛兵の一人を昏倒させたアザルが、鞘に入れたまま相手を殴り倒した剣を肩に担いで依頼主である少女に尋ねる。
「ええ。馬車にしろ、飛竜を使った早便にしろ、北側の貴族用の検問で待ち構えれば外れはない筈ですわ」
「昼前とは言っても、今すぐにやってくる訳じゃないだろうしねぇ。事が荒立ってしまった以上、伯爵には寧ろ早くやってきてもらいたいものだね」
　首肯する教え子の言葉に、補足する様にコウジが付け足す。
　のんびり時間を潰せる状況でも無くなった訳だが、そこに関しては杞憂であると、傭兵とマリアが横から声を挟む。
　――ま、今から真っ直ぐ北の城門に向かっても、着く頃には頃合いの時間になってるでしょ。
「みたいだね。宿の外に待機してた衛兵の人達、応援を呼びにいったみたいだし」
　宿の外で待機していた気配の幾つかが、慌てて離れていくのを感知していた傭兵とマリア――二人の言葉にウェンディとイルルァが嫌そうに眉を顰めた。
「職務熱心ねぇ。どれくらいの規模の追加人員を呼んで来るのやら」

「てーか、森で襲ってきたみたいなゴロツキ擬きなら容赦なく射貫けるけど、この街の衛兵相手だと迂闊に弓を使えないんだけど。あたしだけメイン武器縛りとかキツイわ」
「ふむ。よろしければ拙僧が矢じりを潰しますが……如何なさいますかな？」
あ、じゃぁお願い、全部やっちゃって。とカクに矢筒を渡す仲間の斥候を横目で見つつ、エクソンが小振りな鎚鉾（メイス）を右手にぶら下げたまま、戦意を緩めること無く宿の入口周辺に探知の魔法を発動させる。
「妙ですね。衛兵以外でも、害意を持った者もちらほらと宿の外に見受けられる様ですが……」
「豚さんに小金貰ってる連中でしょ。この街に着いた時点でちょこちょこいたし……監視のつもりだったんだろうけど、露骨過ぎてお粗末だったわ」
所詮はゴロツキよねー、と。矢じりを握り潰されて非殺傷用に早変わりした矢の調子を確かめながらイルルァが鼻で笑う。
大方、賄賂漬けの衛兵隊長殿が失敗した令嬢の確保を自分たちが成功させれば、代わりに報酬が貰えると皮算用を弾いた者達であろう。或いは、単純にバフナリー伯爵が懸賞金でも掛けているのかもしれない。
目論見自体はそう的外れではないが、致命的に難易度を見誤っている点についてはご愁傷様としか言いようが無かった。

「街の衛兵に加え、襲撃してくる豚伯爵の私兵やら破落戸も相手にするのか……いよいよ以て大立ち回りって感じになってきたな」

「どの道、衛兵を殴り倒した時点で摂るべき選択は一つですわ。あの伯爵（ブタ）を公衆の面前でブチのめせば、此処の領主様も出張ってくる筈です」

アザルの呟きを拾って反応し、あとは領主様に書類をお見せしてフィニッシュですわ。と、楽観的ともいえる発言をするローレッタ。

短い付き合いではあるものの、これ迄の彼女の言動を知る面子からすればそれが楽観論から出た言葉では無く、その言葉を実現してみせる、という覚悟と共に吐かれた気炎である事は容易に知れた。

衛兵達を打ち負かした際に荒れた店内を颯爽と進み、カツン、とブーツの踵から音を立て、宿の扉前で立ち止まると令嬢は背後を振り返る。

己の仲間達――その背後で事の成り行きを眺めている、食堂にいた客や二階の階段からこちらを覗き込んでいる宿泊客を見渡し、優雅にスカートの裾を摘まみ上げて一礼した。

「お騒がせして失礼いたしましたわ――所用により、この場を離れさせて頂きます。皆様の穏やかな朝を乱した謝罪は後日、必ず」

たとえ身一つ同然になったとしても、彼女は民の為に戦う貴族であり、戦士である。

守護の対象である者達に、無用な不安や騒乱の空気を感じさせた事に対し、真摯に謝意を告げた。

市井では滅多にお目にかかることのないレベルの美しい少女。

美しさには棘があると言わんばかりに、圧倒的な腕っぷしを衆目に披露した後の、気品に満ちた所作に多くの者が目を奪われた。

祖父の血を引くが故か、或いはローレッタ自身の才覚か。

未だ若く、未熟なれど。

ただそれだけの立ち振る舞いで他者を惹きつけ、歓声を呼び起こす様は――間違いなく憧れた英傑達に劣らぬ資質を、彼女が有している証でもあった。

『場』の状況も味方した、といえる。

既に、断片的な会話の内容から御令嬢一行と衛兵を引き連れた警備隊長、どちらに非があるのか察していた者も多かったのだろう。

無実の罪を着せられた、旅する貴族のお嬢様が、これから下手人である貴族(あくとう)を打ち倒しに征く。

まるで物語か、歌劇に謡われる勧善懲悪か。

奇しくも自身もその登場人物になったかのように思える現状は、常ならぬ昂揚と熱狂をその場の者達に齎した。

割れんばかりの歓声と拍手、口笛つきの声援が宿に響き渡る。
「上手いわね。元とはいえ、貴族なだけはあるわ……差し詰め劇的な人心掌握術ってところかしら」
――いやぁ、多分アレは天然やろ。よく見たらちょっとキョドってるわ。
感心した様子で頷いたウェンディの言葉に、傭兵が笑いを堪えながらこっそり指摘する。
事実、鷹揚に頷きを返して余裕を崩さぬかに見えるローレッタだが――何故いきなり大歓声で称えられたのか理解できず、その眼は若干泳いでいた。
――才覚も、本人の意思も十分。ちょっとした可愛気もある。こりゃ将来が楽しみな逸材だね。
「うん。自慢の教え子だよ」
転移者二人の、笑いを噛み殺した台詞が聞こえたのだろうか。
ほんのりと赤らんだ頬を誤魔化す様に、ローレッタは殊更に威勢よく仲間達に問いかける。
「さぁ、皆さん！　準備はよろしくて？　目指すは北の城門、バフナリーの野郎がやってくる検問前ですわ！」
羞恥を隠す為でもあったとはいえ、その闘志に偽りなく。

準備も覚悟も万端と、意気を以て返す一行と、更なる歓声に推され、令嬢は宿の扉を豪快に開け放った。

宿を飛び出て、北門へと一同は進む。

小走りに進む一団を遮るように、ガラの悪い連中――恐らくは、バフナリー伯爵の命で監視をしていた私兵が立ち塞がるが、最前列に並び立ったステゴロお嬢様と筋肉製人型要塞に二秒で蹴散らされ、地べたにたたきつけられた。

幾らも進まぬうちに、宿を見張っていた衛兵の呼んだ増援とカチ合う。

「おどきなさい！　職務を全うしている者達に拳を向けるのは本意ではありませんが、立ち塞がるならば容赦なく押し通りますわよ！」

「はっはっはっは、いや痛快！　街の治安を守る兵の皆々様には申し訳ありませぬが、今の拙僧は御令嬢に合力する『ちょいわるおやじ』なるモノなのでご容赦をば！」

「先生、それ多分違う」
マリアの若干呆れた様な突っ込みが最後に入るが、それはさておき。
ローレッタの一喝と、何より一目で歴戦の聖職者と分かるカクの姿に衛兵達が怯む。
単純な迫力に押されたというのもあるが、それよりも。
巨漢の隣に並ぶ令嬢と、肩に乗る栗色の髪の少女は明らかに高貴な出自と察せられる容姿なのに加え、これ程の威容を誇る武僧が下らない犯罪者の類であるとは、にわかには信じ難い。
街の防衛の為に、幾度も聖教国の派遣してくれた聖職者達と戦場を共にしたことのある兵達からの、僧職に就く者達への信頼度は高い。
ただでさえ、自身の仕える領主とは不仲とされる隣地の伯爵のかけた嫌疑というだけで胡散臭いのに、容疑者とされる一団に聖職者が多数在籍しているのである。
これで士気高く任に当たれという方が酷であった。
「なにをしているきしゃまらぁ！　しゃっしゃとソイツらを斬りしゅてろ!!」
及び腰の兵達を怒鳴りつける声が宿の方向から響き、一斉に視線が転じられると。
ローレッタの開幕右ストレートで床に埋まった警備隊長が、顔を押さえながらフラフラと宿から現れ、怒りで顔を赤く染めながら怒鳴り散らしていた。
鼻が潰れてひん曲がり、前歯は埋まった床下に全部置いてきたらしき男は、怒り心頭

といった様子で生まれたての小鹿の様に震える膝を叱咤して、再度部下に命じようと口を開き――。

開けた大口に剛速球で投擲された石ころが直撃し、おかわりといわんばかりに鳩尾に矢じりを潰された矢がぶち当たって一瞬で昏倒した。

石を咥えたまま地面に大の字にぶっ倒れる警備隊長殿ではあるが、みるみる内にズボンの生地に染みが広がって微かに異臭が漂い出す。

どうやら失禁したらしい、泣きっ面に蜂である。実際は蜂ではなく石だが。

「傭兵さん、容赦ないねぇ。アレじゃ年単位で硬いもの食べれないでしょうに」

――いやいや、そっちこそ。人通りの多い道の真ん中で漏らして失神とかもう街にいられんでしょ、ワロス。

「どっちもどっちね、変な部分で譲り合いしてんじゃないわよ」

傭兵とイルルァの追い打ちコンボを見たウェンディがばっさりと言い切り、右手の建物の屋根へと杖を向けて雷撃の魔法を発動させる。

迸る稲光と、上がる短い悲鳴。

弓を構えていたらしき、数人のガラの悪い男達――おそらくはバフナリーの私兵であろう連中が、煙と軽く焦げた匂いをあげながら膝からくずれ落ちた。

「――エクソン！」

「お任せを！」

槍を構えた衛兵を押し返したアザルの声に応え、エクソンが左方へと手を翳し、魔力障壁を展開させる。

高所からの複数の弓兵による奇襲は、左右同時がセオリーだ。

その予測に違わず、魔法によって打ち倒された私兵達の居た建物の反対――左手屋上から、無数の矢が降り注ぐ。

障壁に敵の矢が遮られると同時、文字通り矢継ぎ早に返礼された非殺の矢が屋上の襲撃者達の脳天へと命中、次々と失神させた。

頭目の一声で流れる様に行われた息の合ったコンビネーションに、傭兵が口笛を吹いて楽し気に笑う。

――おぉーいいね、これぞ冒険者って感じの戦い方だわ。

「そりゃどうも。尤も、こんなに圧倒出来てるのはおたくのトコのマリア嬢さんの御蔭だけどなっ！」

アザルは賛辞の声に笑い返して応え、噛み合っていた衛兵の槍を柄ごと叩き折ると、剣の柄尻で兜越しに頭部を打って意識を奪う。そうして、ちらりと巨躯の肩に乗せられた少女へと目を向けた。

視線に気付いて少しばかり自慢げにピースサインを返すマリアに、苦笑する。

「この人数にこのレベルの身体強化とか、とんでもないお嬢さんだよ、ったく」
「初めてお会いしたときに見せて頂いた回復魔法からして、既に私とは格が違うと分かってはいましたが……ここまで段違いだと笑うしかありませんねぇ」
　パーティーの頭目が少女を絶賛すれば、エクソンが衛兵の持つ盾ごと相手を吹き飛ばせるまで強化された自身の腕力を確認して、いっそ清々しいといわんばかりの笑みを浮かべた。
「ふむ……想像以上に件の伯爵の手勢が多いですな。街の警備を担う者達を纏める者が手駒とされていた事から鑑みても、相当な数の私兵が街中に散っているようですが」
　優しく、それこそ撫でる様な手加減っぷりで衛兵達を気絶させたカクが思案する様に呟くが、同じく加減して衛兵をノックアウトしたローレッタが好都合とばかりに不敵に笑う。
「では、騒ぎを起こしてしまったせめてもの償いですわ。決着ついでに街のお掃除と参りましょう」
「教え子が頼もしく育って何よりだよ……僕はこういうときに役立たずだから、ちょっと歯がゆいけどね」
　一行の中心で護られるようにして歩みを進めるコウジの自嘲の混じった賞賛の言葉を、当のローレッタが呆れたように師を振り返り、否定する。

「何を仰るのかと思えば……先生らしくも無い。鉄火場で武を振るう者と、探求の場で知を深める者、得意とする戦場が異なるのですから当然ですわ」

一旦言葉を切り、敬愛する師を、思慕を向ける男をジッと見つめて――少女は淡く微笑んだ。

「出来る事が無いなどと嘆かず、どうか私(わたくし)を見ていて。先生が見ていてくださるのなら、私(わたくし)は何者にも負けません」

見つめ合う師弟。

教え子の笑顔を見たコウジは、少しばかり呆けた後、照れ臭そうに頷いた。

――やだ、なんだかとっても甘酸っぱい。

「駄目だよにいちゃん、茶化さないの」

キュンデス！　と心境を実況する傭兵に、妹分からの手厳しい注意が飛んだ。

微妙にストロベリってる空気を出しつつも、一直線に北の城門に向け、進む。進む。騒ぎが大きくなり、各詰め所から応援に出て来た衛兵達が立ち塞がり、交戦中に漁夫の利を得ようとバフナリーの私兵達も散発的に手を出してくる。

当然、街の衛兵からすれば私兵団も違法な武力行使の現行犯として、捕縛の対象だ。

其処かしこで両者の衝突も発生し、いよいよ以て場は混沌とした状況になって来てい

る。

　街を上げた大捕物といった様相を呈してきた中、騒ぎの中心である一同は、元気に大暴れしながら大通りを駆け抜けていた。

　マリアの反則的なレベルの回復と強化もあって、忙しく敵を相手取り、蹴散らしながらも各々どこか余裕すら伺える始末である。相手をしている側――とりわけ、仕事に真面目に取り組んでいるだけの街の衛兵からすると帰って酒飲んで不貞寝したくなるレベルの理不尽さであった。

「まるでお祭り騒ぎだな！　遠巻きに眺めて喜んでる連中までいないかこれ！」

　路地の隙間から飛びかかって来たゴロツキ風の男に蹴りをぶち込んで、再び隙間に送り返したアザルが周囲を見回して叫ぶ。

「どうも聞こえる限りでは、宿場でのカッツバルゲル嬢の宣言が広まってるようですね！　祭りというのは言い得て妙かもしれません！」

　直接的な戦闘では埒が明かないと思われたのか、投げ込まれた複数の投網を障壁を展開して阻むエクソンが叫び返す。

「民衆が味方に付きそうな流れは助かるけど……どんだけノリが良いのよこの街の連中は！　暇人だらけか！」

「でも、悪い気はしなくない？　思い描いていた冒険とは違うけど……あたしは今、冒険譚の真っ只中にいる、って感じがしてる！」

追いすがってくる兵や、高所から此方を狙う者達を魔法と弓矢で牽制しながら、ウェンディとイルルァも負けじと声を張り上げた。

「……正直、ちょっと俺もそう思ってる！」

何度目かの兵の増援を迎え撃ちながら、冒険者達は顔を見合わせて、笑った。

あの酷い戦争が終わって、戦力として各地で戦う冒険者と傭兵の区別も付かないような混沌とした状況が変わり、二年。

これで幼い頃に夢見た様な、真っ当な冒険者稼業に精を出せると喜んだものの、子供ながらに憧れた『冒険』とはどうしたって縁遠い、堅実ではあるが代り映えのしない仕事の日々。

自身のみならず、仲間の生活だって掛かっている以上、なんとか上手くやれている現状に不満を唱えるのは贅沢だとは分かっていたが。

知られていない手つかずの遺跡や、未開の地に遠征するだけの実力を持った高ランクの冒険者達の冒険譚を耳にする度に、どうしたって思ってしまうのだ。

折角平和な世になったのだ。いつか、自分達も彼らの様な、多くの人達に語られる様な『冒険』を。心躍る様な、常には無い挑戦と物語を。

仲間達だって大なり小なり、そう思っている事だろう。というか、そうでなければ冒険者なぞやってない。

古代の遺跡でもなければ、未踏破の秘境でもない。大勢の人が住む、街のど真ん中ではあるものの。

常ならぬこの状況に、どこかワクワクしているのを彼らは自覚していた。

「何も不自然な事ではありませんわ！」

騒動の中心人物、彼らの依頼人でもある少女が物陰より奇襲してきた私兵を胴打ち一発で沈め、返す拳で衛兵の顎を打ち抜いて意識を飛ばす。

「大きな悪意や暴威に立ち向かい、打ち下す――冒険者であれ、国に仕える者であれ、これに昂るは戦士の性というものですの！」

――へー、そうなのかー。

「なんでスケさんがその反応なんですの!?　御坊様に次ぐ実力者に初耳みたいな顔された私の立場！」

――いうて、今まさに俺達が張り倒してる衛兵さん達も暴威に立ち向かってる最中だからね、仕方ないね。

「士気が下がりそうな発言!?　いえ事実ですが、事実ですが！　自重してくださると嬉しいですわ！」

漫才の如き掛け合いを続けながら、前方で待ち構える私兵達が弓を構える姿を見て即座にポジションをスイッチ。

避難済みとはいえ、周囲の一般人に全く配慮しない水平射撃の斉射は、傭兵が両腕で弧を描いた軌道の延長上に合わせ、全て巻き取るように一纏めになって地に落ちる。

魔力の展開が無いことから魔法ではなく、体術の延長であることが伺えるが……アザル達は勿論の事、ローレッタから見ても意味の分からない謎の超技巧であった。

住民にとっても危険な攻撃を行った連中に対して、ローレッタとカクが少しばかり手加減を忘れて突撃し、一息に叩きのめす。

追って来ていた衛兵達も街の人間に被害が出そうな行動をとったごろつきが見えたのか、此方はそっちのけで捕縛に掛かりだした。

先程から幾度か繰り返された光景は、特に意図した訳ではないが当初のローレッタの言葉通り、街の大掃除に繋がっている様だ。

衛兵が騒動の原因たる御令嬢一団を追いかけることで、皮肉にも街に巣食う賊の予備軍の如き連中に対する検挙率はうなぎ登りに上昇し続けていた。

進撃スピードを緩める事も無く、障害を押し退けながら街中を走り抜け、真っ直ぐに突き進み続けると。

「見えたよ、城門だ！」

マリアの指さした先には、分厚い木材と鋼板で補強された頑健な門構えが見えた。
全員の視界にそれが入ると同時、開かれていた開口部から格子がゆっくりと下がり始める――逃亡者（こちら）の予想以上の速度に慌てて出入り口の封鎖にかかったようだ。
「先生！」
「承知！　スケ殿、マリア様をお任せしますぞ！」
巨漢の肩から少女が飛び降り、傭兵の青年の腕の中に飛び込む。
いやちょっと待って、これ俺が受け止める意味あった？　などと首を捻る青年の声はスルーし、カクは先行して一気に飛び出した。
そのまま、地面にゆっくりと降りようとしていた巨大な格子の下に潜り込み、気合一声。筋骨隆々の巨躯が比喩抜きで一回周り大きく膨れ上がる。
「ぬうぅん！」
門の閉鎖を押し留めるを通り越し、常識外れの剛腕によって鉄作りの格子が持ち上がると、人が悠々と通れる高さのまま動きを止めた。
「さ、皆様！　今の内にお進みください！」
「分かっていたけど、三人とも出鱈目すぎるなアンタ達は！」
ニッカリ笑って余裕のアムズアップを決めるカクの脇を、呆れた様子でまずはアザルがすり抜ける。

伏兵は無し！　という彼の言葉に、ローレッタとコウジが門を潜り抜け、冒険者達、少女を抱えたままの傭兵と続く。
最後に巨漢自身が頭を潜らせ、門の機構を破損させぬように、ゆっくりと優しく地に下ろした。
追いついた衛兵達が降りた城門の格子に阻まれる形となり、慌てて開門の要請を叫んでいる。
それを横目で見ながら、令嬢は軽く息を吐きだした。
「取り合えず、第一段階はクリアですわね。あとは――」
「なんの騒ぎだ！　名家たる貴族が来訪したというのに喧しく埃をたておって！　どこの下民共が騒ぎ立てているのだ無礼者が！」
どうやら、第二段階は一気にすっ飛ばして、事は一気に最後の詰めへと入るようだ。
ガラの悪い無数の護衛に囲まれ、憤慨で顔を赤くしている腹の突き出た小男が、居丈高に喚き散らしている。
男の名はリュダクロス＝バフナリー。
美しい少女達が自身の所有物となる未来を疑っていなかったが故か、随分と急ぎ足でやってきた黒幕――というには小物が過ぎる人物との、邂逅であった。

手駒である警備隊責任者による事前の手引きもあって、意気揚々と街に入ろうとしていたリュダクロスであったが、いざ潜ろうとしていた北門で騒ぎが発生していると知り、不快感も露わに罵声を上げる。

これだから成り上がりの猪が治める街など、ロクなものではないのだ。己の領地であれば貴族を前にして騒ぎを起こす不届き者など、即座に処刑か財産没収の上、奴隷落ちである。

名門たるバフナリー家当主の己に頭を垂れるという当たり前の義務すら知らぬ慮外者へと、身の程を教えてやろうとその矮躯を乗り出して。

騒ぎをおこした下手人達を睨みつけると――そこにリュダクロスが求めてやまなかった少女の姿を認め、不機嫌だった表情はあっという間に反転してだらしなく歪んだ。

「おぉ、ローレッタではないか！　ワシを迎えにくるとは中々に可愛らしい真似をする。全く、初めからそう素直であれば手間もかからぬであったというに！」

涎を垂らさんばかりに口で幅広の弧を描き、舐め廻すように金髪巻き毛の少女へと視線を這わせる肥えた小男に、視線を向けられた当人のみならず、女性陣全員から小さく「うげぇ」という声が洩れる。

「ブタブタいってたけど……これは豚さんにごめんなさいしないといけないヤツだわ」

「そうね、お世話になってるものね、燻製肉（ベーコン）とか、串焼きで」

ひそひそと小声でやりとりするイルルァとウェンディ。

（全く以て同意ですわ、豚さんにごめんなさいですの）

心底後ろの冒険者達に同意しつつ、ローレッタは素早く周囲を確認した。

城門越しではあるが、背後には無数の衛兵と、何故だか大勢集まって事の成り行きを見守っている、多くの住民達。

前方にはリュダクロスが押し退けたと思われる、都市に入ろうとしていた順番待ちの商人や旅人。

衆目は多く、且つ門の前は開けた街道となっており、荒っぽいことになっても部外者が戦闘に巻き込まれる心配も無い。

「――うん、場としては良いね」

背後で自身と同じ結論に至ったらしき恩師の言葉に、頷きを以て返し、一歩前へと進み出た。
「お久しぶりですこと、バフナリー伯爵……相も変わらず、殴り甲斐の有りそうなだるんだるんの面構えで、安心しましたわ」
「ははははっ、何、妻となる者を迎えにいってやるのも男の度量と……え？　だるん……なに？」
見目麗しい、深窓の令嬢。己に手折られるのを待つばかりの手弱女。
一目視たときに固定されたイメージのままに、その美しさのみに囚われ、執着していた男にとって、形の良い唇から放たれた剛速球の罵倒は予想外に過ぎた。
言葉は右耳を突き破って左耳から抜け、理解する前に彼方へと飛び去っていく。
混乱している伯爵を尻目に、彼が自身の脳裏で幾度も弄び、遠からぬ未来に実際そうなると疑っていなかった少女は、鋲（ナックルダスター）拳に包まれた両拳を打ち合わせ、花が咲くような綺麗な笑顔を浮かべた。
「察しの悪い伯爵様にも理解できる様、簡潔に言って差し上げあげますわ――私（わたくし）、テメェをボコボコになるまでブン殴りにきましたの」
「――なんだ、何を言っている？　どうしたというのだローレッタ」
この期に及んで理解を拒むリュダクロスに、散々に辛酸を舐めさせられ、ついに反撃

を開始した御令嬢は、小箱より取り出した書類を高々と掲げ、宣言する。
「リュダクロス＝バフナリー！　戦時中の物資横領及び、戦後の復興資金を不正に蓄財した所業。その他諸々合わせて証拠の書状を以て、此処で告発いたしますわ！」
よく通る少女の凛とした声に、衛兵、街の住人、商人、旅人――職種人種を問わず、その場にいた様々な者達から大きな騒めきが広がる。
リュダクロスが初見でのイメージに囚われた様に、見目麗しい令嬢と、絵に描いた様な悪徳貴族といった風貌の伯爵。並べてみれば多くの人間が心情的にどちらに傾きやすいか、論ずるまでもなかった。
一般人のみならず、先程までローレッタ一行を捕縛しようと必死に頑張っていた衛兵の皆さんまで、本来、雲の上の存在である筈の伯爵を屠殺場に連れていかれる豚を見る様な眼で見つめだす。
伯爵を囲む賊崩れの様な見た目の私兵達も、流石に冷えた視線の集中砲火は居心地が悪いのか、顔を見合わせて身じろぎする。
ここまで来ると察しの悪いリュダクロスであっても、流石に言葉の意味と――何より周囲から注がれる視線によって、嫌でも現状を理解させられた。
当然というか、その反応は怒り一色であった。
「な、ふ、ふざ、ふざけるな!!　見目の良さ故に眼をかけてやったというのに、世迷言を

吐きおって！　何が書状だ、そんなもの――」
「去年の春と冬に二件、今年に入って二件――あら、一番新しい取引はつい最近でしたのね。他の名家の方々に愛想を尽かされているというのに、変わらず腐臭のする銅貨を抱え込もうとするとは、筋金入りですこと」
顔を赤黒く染めあげた憤激は、間髪入れずに読み上げられた書状の内容を聞いて、反転したように血の気を引かせて鎮火する。
ひらひらと手の中の書類を振りながら、ローレッタはシレっとした顔で致命打となる言葉を続けた。
「納得が行かないのであれば、取引先の名前をここで列挙してもよろしくてよ？　ついでに、書類にはほぼ全て、そちらの家紋の押印と貴方の直筆サインが記されていますわ」
「そんな馬鹿な……」
その書類が、こんな場所にある筈が無い。
口を開閉させ、驚愕に打ちのめされた表情からは、ありありとそんな言葉が読み取れた。
もう完全に観戦モードに入った背後の仲間達は、片膝ついたり城門に寄りかかったりしながら、口々に二人のやり取りについて語る。
「もう決着ついたろこれ。御貴族様の司法関連とかさっぱり分からないけど、お嬢さん

とあの伯爵じゃ役者が違うってのは分かるぞ」
「まだ分かんないんじゃない？　あの手の男って見苦しさと諦めの悪さをはき違えてるタイプが多いし」
「ふむ。では最後のひと暴れがあるやもしれませんな。事が始まるまで、御令嬢の大岡裁きを特等席で眺めるとしましょう」
「カク殿は時代劇ネタにハマってるのかな。ネタの出所は傭兵クンかい？」
――ノーコメントでござる。帰り道にヒマこいて時代劇や池●正太郎先生の著作について語ったりしてないでござる。
会話の中で上がった内容の通り、リュダクロスは諦めが悪い様であったようだ――無論、悪い方に。
「――ッ、違う、何が告発だ！　そんなものは出鱈目だ！　ワシは認めんぞ!!　そもそも、発言を聞き入れる司法に関わる第三者がおらぬではないか、こんなものは無効だ!!」
「では、騒ぎを聞きつけてやってくるであろう、この街の領主様に宣言を改めて聞いて頂くとしましょう、丁度、罪人を捕らえる為に武装して此方に向かっているはずですわ」
その罪人というのは、街で大騒ぎを起こしたローレッタ達だったりするのだが、リュダクロスがそんな事を知る由も無い。
寧ろ、ここまでの流れから判断すれば己と忌み嫌い合っているこの街の領主が、目の

前の少女と結託して自分に政治的な致命傷を与えようとしているとしか思えなかった。
「あの成り上がりの猪なぞに、このワシが裁かれるだと……!?　そのような理不尽、あってなるものか！　貴様ら、その小娘から書状を取り上げろ！　為した者には金貨を袋ごとくれてやる！」
「予想通りの反応過ぎて草も生えませんわ――ですがまぁ、これで最低限『場』は整いましたの」
周囲の眼があるにも関わらず、金貨と聞いて脊髄反射の様に目を欲望にギラつかせるチンピラくずれの私兵団を見据え、ローレッタは拳をゴキリと鳴らして不敵に微笑む。
既に不特定多数の衆目に致命的な醜態を晒し、どうやっても全員に口封じは不可能な状況での無粋な実力行使。
ここまで来れば、正当防衛の名の下に思う存分、このふざけた下衆をぶちのめせるというものである。
後は、やってきた領主に書類と共にリュダクロスを引き渡せば、丸く収まる。
これだけの騒ぎを起こしたのだ、此方の面子全員とは言わなくとも、騒動の中心であるローレッタくらいは投獄される可能性があるが――己の我儘に付き合ってくれた者達が放免されるというなら、特に文句は無かった。
唯一、不安があるとすれば……没落令嬢を通り越して前科者（ふだつき）にまで落っこちた自分

を、恩師がどう思うかであるが……。
未練にも似た感情を断ち切る様に、ローレッタは拳を打ち合わせた。
「細けぇ事はいいんですの！　取り合えず殴ってから考えますわ！」
此処までは、令嬢の描いた絵図の通りであった。
だから、これより先は全く予想の埒外なのだろう。
ある意味ではお約束でもあり、同時に、僅かでも悲劇の要素を嫌う者にとっては喝采を以て迎えるべき特大のネタばらし。
決意と共に拳を構える令嬢と、彼女の動きに呼応して最後の大立ち回りに助力せんとする冒険者達。そんな令嬢を静かに見つめる彼女の恩師。
脂汗を顔中から滴らせ、目を血走らせながら自身の窮地を無かったことにしようと足掻く悪徳貴族と、報酬に釣られ、欲望を剥きだして剣を抜く配下の悪漢共。
そして、そんな騒動の顛末を見届けようとする、北方に住む様々な人々。
その全ての視線を集め、一人の少女が進み出た。
美しい少女だ。ともすれば、この場にいる誰よりも。
これだけの多くの人間が居ながら、つい先程まで何故注目されていなかったのか。
いっそ不思議な程に、その娘は強烈な存在感を放っていた。
「――その告発、ボクが立会人となり、聞き届けました」

鈴を鳴らすような声での宣言。
静かな、なれど耳朶に染み入るような響きをもって、静まり返った場で少女の言葉は続く。
「告発者であるカッツバルゲル家当主、ローレッタ＝カッツバルゲルの提示した証拠の有効性を、ここに認めるものとします」
言い終えるや否や、艶やかな栗色の髪が淡い光を放ち――少女が自身に施していた高度な幻惑の魔法が解除される。
顕れたのは、陽光を受けて煌めく、目の覚める様な美しい銀髪だ。
同時に、抑え込まれていた膨大な魔力――聖性を帯びた、陽炎すら立ち上らせそうな圧倒的なソレを解き放つ。
「聖教国所属、聖女アリア＝ディズリングの名に於いて、告発者の正当性と――容疑者であるバフナリー伯爵への嫌疑を追認します！　色んな人に長年迷惑を掛けた分、たっぷりと反省しなさい！」
ビシッと、音を立てそうなくらいの勢いでリュダクロスへと指を突き付けるマリア――否、銀麗の聖女の姿に。
突如として現れた救世の英雄に、一瞬、真偽を疑うも……視認すら出来そうなその膨大な聖気を目の当たりにして、本物であると誰もが確信して。

黄色い悲鳴混じりの、爆発的な歓声が北門一帯に響き渡った。

「……馬鹿な！　こんな場所に教会の聖女が居る筈があるか！」

周囲の熱狂的な歓声に推し潰されそうになりながらも、尚も己にとって都合の悪い現状を徹底して否定する腹積もりのリュダクロス。

「で、ですが伯爵、あの魔力、俺達にも分かりますぜ。あれはどう見たって……」

「喧しい！　あんなものはまやかしだ！　そうだ、何かの間違いだ……！　そうでなければおかしいのだ……！　ワシが……このワシがこのような屈辱を浴びるなど有り得てなるものか!!」

見るからに怖気づいた部下の声を口角泡を飛ばして遮り、目を血走らせて今にも尻をまくって逃亡しそうな配下達を睨みつける。

「ワシが失脚すれば、貴様らの過去の行いも連座で裁かれるぞ！　なんとかして書状だけでも取り戻すのだ！　この際金に糸目は付けぬ、この場を切り抜けられたのならワシの資産を一部切り崩して報酬をくれてやる、貴様らの三代先まで遊び惚けていられる額をな！」

常にない、必死の叫びに本気であると感じ取ったのか。

目も眩む――それでも、邪神を打倒したとすら謡われる英雄と事を構えるには不足だと言わざるを得ないが――量の金貨の輝きを思い浮かべ、全員とはいわなくとも、私兵団の半数程度が戦意を取り戻した。

地獄の沙汰も金次第とは言うものの、敵に回す相手の質を鑑みれば、阿呆を通り越して脳味噌が耳から垂れていないかを深刻に心配するレベルの愚かさである。指摘してくれる親切な人間はこの場にいないが。

未だ周囲の歓声冷めやらぬ中、呆気に取られてアリアを見つめるローレッタとコウジ、冒険者四人を尻目に、最後の悪あがきとしか言い様の無い暴挙に移ろうとするバフナリー私兵団。

そこに立ち塞がったのは、ノリツノリの表情した傭兵（バカ）と筋肉（ゴリラ）であった。

期待に満ちた表情でアリアを振り返る二人に、彼女は少しばかり苦笑しながらも、凛とした声でお約束のアレを口にする。

「スケさん、カクさん――懲らしめてやりなさい！」

――合点！

「承知ぃ！」

ご満悦の表情で、二人の人外級がヒャッハー！　とばかりに私兵団へと襲い掛かる。どっちがゴロツキなのか分かったものではない。

時代劇の殺陣というより、ギャグ漫画みたいな吹っ飛び方をして宙を舞うバフナリーのチンピラ達の悲鳴をバックに、漸く驚愕から復帰したローレッタが慌てて地に片膝を着こうとして――アリアに止められる。

「わ、待って待ってローレッタさん。服が汚れちゃうよ、膝なんて着かなくていいから」

「マリ……いいえ、アリア様。知らぬ事とはいえ、御身に我が家の恥を晒したばかりか、この身の事情に巻き込んだ醜態……祖父の言うセップクの作法を学んでおきませんでしたこと、今ほど後悔したことはございませんわ」

「鎌倉武士みたいな発想やめよう!?　素性を隠してたのはこっちなんだから、気にしなくていいって！　ホントに！」

押し問答の末に、なんとか令嬢を立たせる事に成功したアリアは、未だにぼっけもんばりの恥の濯ぎ方を実践したがる彼女に、指を突き付けて強く言い募る。

「気にしなくていいの！　そもそもボクが正体を明かしたのはローレッタさんの介錯するためじゃないよ！」

そう言うと、ちらりと此方を心配そうに見守るコウジをみて、少しだけ悪戯っぽく笑った。

「全部ハッピーエンドで終わらせて、二人が帝国に無事に辿り着く――そんな結末を見たいんだ、だから」

金髪巻き毛の御令嬢の両肩を掴んで、くるりと身を反転させると、銀の聖女はその背を軽く押し出した。

「決着、着けてきなよ。ローレッタさんが望んだ、ローレッタさんらしい方法で」

回った視界の先にあったのは、悉く配下を蹴散らされて、既に周囲には部下の一人も残らず、ぽつねんと佇むリュダクロスの姿であった。

「あぁ、全く。敵いませんわね……それが聖女様の御注文（オーダー）というのならば、是非も無し、ですわ」

「――ヒッ!?」

敬意と、感謝と、喜びと、僅かばかりの照れ臭さ。

聖女の暖かな指先と、胸に湧き上がる様々な正の感情に背を押され、ローレッタが歩を進める。

対して、顔を引き攣らせて腰を退かせたリュダクロスが、顔面を蒼白にして辺りを見回した。

「だ、誰ぞ、誰ぞおらんのか!?　い、イフェク！　イフェクはどうした！　早くワシを守らんかぁ!!」

「この期に及んでまだ他人任せですの。マジに救えない野郎ですわね」
ボキボキッっと指を鳴らして、視認出来そうな程の闘気を全身から立ち昇らせる少女の姿に、完全に気圧された肥え太った小男の悲鳴が響く。
「ま、待てローレッ――」
「馴れ馴れしく……私(わたくし)の名を呼ぶなっ！　このクソったれ!!」
後ずさりしようとした、リュダクロスの突き出た段腹に、理想的な体重移動(シフトウェイト)からの左胴打ちが突き刺さった。
「オギェ!?」
潰れた蛙の様な悲鳴を上げて宙に浮きあがる肥満体。
おそらくはリュダクロスの人生で初めてであろう殴打の衝撃――しかもとびっきりの代物を喰らい、悲鳴に劣らず拉げた蛙の如き表情を晒す顔面に向け、間髪いれずに右の打ち下ろしが炸裂する。
頬骨を砕き、顎を割り、歯という歯を口内から発射させた一撃は、二度三度とその身体をゴム毬の如く跳ねさせ、最後は白目を剥いて顔面から涙鼻水涎血液とあらゆる体液を垂れ流した顔をお天道様の下に晒したまま、リュダクロスの意識を遠い彼方へと連れ去った。
拳を振り切った体勢のまま、残心を行っていた少女がややあって、息を吐き出す。

「――すっきりしましたわ！」
満足気に、晴れやかな表情をみせて。
ローレッタは心からの笑顔を浮かべたのであった。
かくして、街中で繰り広げられた大捕物からの、一転しての物語の如き勧善懲悪の一幕は〆を迎え。
渦中にあった当事者たちと、それを見届ける事となった多くの人々に、様々な感情を齎しつつも、終幕となったのである。

と、思われた矢先であった。
「――追ひぃ詰めひゃしょ、こひょ、はんさいしゃともが!!」
やたらスカスカと空気の洩れてそうな発音の、怒りに満ちた声が響き渡る。
城門に降りた格子の向こう。
そこに居たのは、顔に幾重にも包帯の巻かれた、サーコートを着込んだ鎧姿の男――逃走劇という名の令嬢の進撃序盤において、失神＆失禁の失笑コンボを決めて見せた警備隊長殿であった。

「うわ、アレで追いかけて来たんだ……タフねぇ」
「身体が？　それともメンタル？」
「両方」
　思わず、と言った様子でやり取りするイルルァとウェンディではあるが、彼女たちの言葉は中々に的を得ている。
　二度に渡ってブチのめされ、散々な目にあったというのによくもまぁ立ち上がって追いかけてきたものだ。流石に染みの広がったズボンは変えたようだが。
　とはいえ、男も流石に考え無しに追って来た訳では無いようであった。
　鎖を使った機構が動き出し、遅ればせながら北門が再び解放される。
　集まっていた住民の人垣と、衛兵達の壁を割って進み出てきたのは、騎馬に乗った鎧姿の騎士達であった。
　街の衛兵とは一線を画する、歴戦の強者としての空気――街を治める領主が直接指揮する、生え抜きの戦団であると伺える。
　先頭の一際優れた体躯の軍馬に跨った、傷痕夥しい魔装の鎧を纏った老年の騎士が、静かに馬を進めて前に出る。
「――あの一行が、お前の言う貴族襲撃犯の凶悪な犯罪者集団とやらか？」
「ひゃい、しょのとほりでございます、閣下！　どうか閣下のおひからで、ふぁたしや部

下のむねんひょ！」
嬉々とした様子でローレッタ達を指さす警備隊長に。
閣下、と呼ばれた、おそらくはこの街の領主であろう、如何にも古強者然とした老騎士は、伸ばした白髪の髭をひと撫でして頷いた。
「うん、まぁアレだ。ちょっと黙れ。何喋ってるか分かんねーんだよ馬鹿」
「――へ？」
呆けた様な表情で、男が馬上の領主を見上げ。
その殆ど歯の残ってない口に、捻じ込まれる様にして鞘付きのままの長剣が叩きこまれた。
憐れ三度目のダウンを迎えた男は、残った僅かな歯すら地面にばら撒きながらまたもや大の字にひっくり返って失神する。
一応、部下であった男を容赦なく殴り倒した老年の騎士は、背後に控える自身によく似た雰囲気の青年騎士へと振り返って告げた。
「息子。ちょっと父さんコイツぶっ殺したあとあの人達の前で腹掻っ捌いてくるから。領地の事は任せた、頑張れ」
「大体予想通りでしたけど、やめて下さい父上。今死なれたら色々洒落になりません」
知ってた。と言わんばかりの跡取りの青年に向け、至極真顔のまま、リュダクロスに

猪と呼ばれた領主は断言した。
「いや、アレどうみても銀の聖女様じゃん。その奥にいる方、グラッブス司祭じゃん。戦場で助けられて以来、何十年儂がミラ様と司祭を推してると思ってんの？　あの方に冤罪着せるとか絶許案件なんだけど。今すぐこの馬鹿ぶっ殺したいんだけど。ミラ様に嫌われたらどうしてくれんの？　マジで殺したい」
「父上」
「何、もう殺して良い？」
「推しだの絶許だの、無理して若者の使う言葉を使わないで下さい。気持ち悪いです」
「息子が辛辣すぎる。泣きそう」
はっちゃけたトークを繰り返しているこの地の伯爵親子を見ながら、アリアがカク――改め、聖教会司祭、ガンテス＝グラッブスへとそっと声を掛けた。
「……あの人、この街の領主様？　先生の知り合いなの？」
「御顔に見覚えがありますな。何度か戦場で肩を並べた方です……ご子息生誕の際に聖都にお越しになって、わざわざ愚僧による祝福を指名して下さったのもよく覚えております」
「ガチ勢じゃん。先生、人気あるんだねぇ」
「いやはや、なんともお恥ずかしい」

はっはっは。などと照れ臭そうに笑うガンテスと、のんびりと笑うアリア。
事情は把握できていないものの、どうやら領主と直接事を構えずに済みそうだと、胸を撫で下ろすアザル達。
あとは、ガンテスの本名を知り、「くっそヤベーですわ！　いい加減キャパオーバーですの！」と叫んでひっくり返りそうになり、慌ててコウジに支えられているローレッタ。
それらを眺めていた未だに名称不詳な青年、傭兵スケは、満足した様に頷いて、一声張り上げる。

――んむ。これにて一件落着！

「いや、流石に混ぜすぎだと思うなぁ」
何処か幸せそうに腕の中で目を瞑る教え子を抱えたまま、コウジが呆れたように呟いた。

あれよあれよと言う間に、事の片づけは進んだ。
多数の証拠ありということで、リュダクロスは一時的にではあるがこの街の牢に叩き込まれ。
衛兵隊長を筆頭とした、街に潜んでいた彼の私兵も多くが御用となり、後に余罪を追及されて裁かれる――殆どが犯罪奴隷落ちか、極刑だろう。
街を騒がせた件について、改めて直接領主へと謝罪したローレッタであったが、肝心の領主はそれを笑い飛ばした。
曰く、「律儀なのは儂が右腕として迎え入れたかった男にそっくりで、見た目はそいつを掻っ攫っていった女にそっくりだ」と。
ちなみに全員軽傷であったが、一連のゴタゴタで怪我をした衛兵達は、アリアが手ずから範囲魔法を行使し、治療を行っている。
聖女様に癒してもらった傷をドヤ顔で自慢する同僚をみて、折角無傷だったのに即座に壁に頭をたたきつけて額から派手に出血したまま、治療の現場に向かおうとした者が多数、という珍事が発生したが、それは余談である。
領主の強い要望と、その息子である青年の「来ていただかないとウチの父上が腹を切

ろうとするので助けて下さい」という言葉に押し切られ、聖女一行とカッツバルゲル家の二人、アザル達冒険者パーティーも含め、揃って伯爵家の屋敷で数日の歓待を受ける事となった。

――隣領で民を苦しめる悪徳貴族を成敗したのが、嘗ての領主様の戦友のご息女と、聖女様の御一行だった。

街はそんな噂で持ち切りであり、酒場や宿場といった人の集まる場所では吟遊詩人が早速新たなネタに飛びつき、各々にその武勇伝を謡いあげて一山儲けている。

冷え込む日の多い北方の街は、ちょっとした騒動から起きた英雄の絡む冒険譚、というホットな話題を提供され、戦後一番の賑わいを見せていた。

そんな、どこか熱気に包まれた、喧噪広がる街とは打って変わり。

衛兵詰め所の地下にある、犯罪者を一時的に拘留しておく地下牢で、リュダクロスは痛む顔面と腹を押さえ、粗末な寝床で寝返りを打っていた。

「あぁっ、クソっ。痛い、痛いぃ……何故ワシがこんな理不尽な仕打ちを受けねばならんのだ……！」

そのまま放置してると死にそうだったので、一応回復魔法である程度の治療は施されているのだが……聖女であるアリアの行使する魔法ならばともかく、並みの術者の回復

魔法ではローレッタの打撃を癒しきる事は難しく、赤黒く腫れあがった顔面と腹部は、熱を持って心臓の鼓動と共に鈍痛を響かせる。

「クソッ、くそぉっ、おのれ、何が聖女だ、あの詐欺師の小娘が……！　ローレッタもそうだ、ワシのモノになるに相応しい美貌を持っていながら……ワシにこの様な屈辱を与えるとは……!!」

未だにアリアを偽物と断じ、根本的に心得違いにも程がある思考を自覚することもなく、自身をぶっ飛ばした少女へと怨嗟を募らせる。

此処を出たら、絶対に思い知らせてやると、傍からみれば滑稽とすら言える決意で、襲い来る痛みを押し殺すリュダクロス。

いざとなれば、アテがある……深く関わる気はなかったが、あの小娘達を這いつくばらせ、己に赦しを乞わせる事が出来るのならば、本格的に関係を深めるのも考慮に値した。

妄想じみた未来を思い浮かべ、暗い笑みを浮かべる彼の耳に、何者かが地下への階段を降りてくる靴音が届く。

ゆっくりと、踏みしめる様に階段に音を響かせ、現れたのは……はたして彼のよく知る人物であった。

「やぁ、凄い顔ッスねぇ。うっかりオークが蛙と合体事故起こした様な有様で」

「貴様、イフェク……!?」
　ヘラヘラと笑いながら鉄格子越しに歩み寄って来たのは、どこか狐を思わせる面持ちの青年――リュダクロスの配下の中で随一の腕利きであるイフェクであった。
「今更ノコノコやってきてなんのつもりだ、この役立たずが……！　いや、それよりも、鍵は持っておらんのか？　さっさとワシを此処から連れ出してバフナリーの領地へと連れてゆけ！」
　肝心なときに居なかった部下に、たっぷりの苛立ちと侮蔑を込めて罵るが……これは好機だ。財産を没収される前に資産を纏めて隠すことができれば、いずれ返り咲くことも、いつか小娘共に正当なる報復を下してやる事も容易となるだろう。
　そんな皮算用を脳内で弾き、さっそく部下へと鍵の捜索を命じる。
「再会して早々に注文が多いッスねぇ。まぁ、鍵ならもう持ってるンスけど」
「おぉ、でかしたぞ……！　では早速――」
　リュダクロスの言葉を皆まで聞くまえに、イフェクは彼の捕らえられた牢のカギを開け――僅かに開いた格子扉の隙間に滑り込むようにして牢屋の中に入り込んだ。
「――ハァ？　何を遊んでいるのだ、この間抜けが！　さっさと……！」
「いやいや、これで合ってるンスよ――なんせ、こっからが自分の本業なんで」
　何を言ってるのだ、コイツは。

困惑と苛立ちを覚え、いつも通りに眼前の青年を罵倒しようとして。
無造作に伸ばされた手がリュダクロスの肩を掴み、その腕を捻り上げると薄汚れた牢の床へと彼の身体は転がされた。
「なんっ――!?」
「ハーイ、動かないで欲しいッスねー、動くと痛い思いするッスよー」
反射的に口から飛び出そうとした悪罵は肩と肘から走る激痛で蓋をされ、口内で呻き声に変わる。
相も変わらず、どこか軽薄な印象すら感じる口調のまま、イフェクはリュダクロスの弛んだ顎下へと、冷たく硬い、何かを押し付けた。
「伯爵にはちょーっと聞きたい事があるんッスよね、なので、素直に教えてもらえるとお互い嫌な思いをせずに済むッス」
顎下の肉に鋭い痛みが走り、熱を伴った何かが首へと伝う。
部下の突然の暴挙に、リュダクロスの頭は混乱したままではあったが、
本能が危機を察知したのか、声を噛み殺しながら、反射的に身体は頷いていた。
「おぉ、思ったより素直な反応、有難いッスね。んじゃま、早速――」
ヘラヘラと、お道化た調子のままであった声が、一瞬で平坦になった。
「伯爵の領地で匿ってる連中の具体的な隠れ場所を知りたいンスよ――複数あるなら、

一つ残らず話せ」
リュダクロスは息を呑んだ。
何故、どうしてコイツが。そんな疑問が脳裏を過るが、話せば身の破滅に直結する内容だ――当然、シラを切るしか彼に選択肢は無かった。
「な、なんの事だか分からんナ〟、グァ……ッ！」
「はーい、あと九本っすよー。まぁ、やっぱ素直にはいかないッスよね、内容が内容だし」
捻り上げられた腕の末端部分――小指に灼熱感が走り、ジクジクと肉と骨に響く激痛を訴えてくる。
耐えきれずに叫び声をあげるリュダクロスを冷ややかな目で見ながら、イフェクは軽薄さを取り戻した口調で宥める様に声を掛けた。
「これ、完全に親切心で言うんスけど、〝旦那〟が来る前に全部ゲロった方が良いッスよ。全部話してくれたと判断すれば、自分も旦那も無駄に苦しめたりはしないッスからね」
そもそも旦那の逆鱗踏み抜いたのは伯爵ッスからねー、巻き添え喰らいかけた自分はたまったもんじゃねぇッスよ。と、弓なりに反った目を僅かに開き、遠い眼をして牢の天井を見つめる青年。
悲鳴を上げても、衛兵が気付きもしない――あるいは気付いていても降りてこない事

を理解したリュダクロスが、絶叫して荒れた呼吸のまま、おそるおそるイフェクを、自分の部下であった筈の男を地に伏せた態勢のまま、見上げた。
旦那とは誰の事だ、一体何が目的なのか。そして……この男は本当に己の部下であったイフェクか？
腕こそ立つが、他の部下と比べて甘っちょろいと言っても良かった男の、表面だけは一切変わらぬ冷たい刃の如き空気を、今更ながらに、漸く感じ取る。
「おま、おまえは……何者だ？　本当にイフェクなのか？」
「ん～？　……まぁ、本来は自分みたいなのが堂々と名乗りを上げるのはどうかと思うんスけど」
『裏方だろうが汚れ仕事担当（ウェットワーク）だろうが、アンタもウチの部隊の騎士よ。名乗るべきときが来たのなら、胸を張って名乗りなさい――誰にも文句は言わせないわ』
かつて、自分にそう言ってくれた本来の職場の上司を思い出し、青年は苦笑する。
「ま、副長も騎士の名乗りは忘れるなって言ってたし……いっちょ自己紹介しておくッスよ」
くるくると、手の中で血の付いた短剣（ダガー）を廻しながら、少しだけ気取った様に。
牢内の蝋燭の光を刃に翳して見せる。
「イフェク改め、帝国麾下、対邪神討伐部隊《刃衆（エッジス）》所属、トニー＝レイザー。本名では

短い付き合いになると思うッスけど、よろしく」
絶句する偽りの雇い主へと、にっこりと――表面上はフランクな笑顔をみせたトニーは、再度仕事に取り掛かった。
「んじゃ、さっきの質問の続きッス。おたくの匿ってる”信奉者”達の隠れ家、ちゃんと教えて欲しいッスよ。聞き終わったら現地へ旦那と一緒にパーティーしに行く予定なんで」

領主の惜しみない歓待を受け、街に逗留すること数日。
聖都への道を再び歩み出すために、街を出るのは聖女一行のみであった。
「――それじゃ、お屋敷は取り戻せそうなんだね」
「ええ、此処の御領主様の御蔭で、そう時間もかからずに家人達も呼び戻せそうですの」
聖都へと南下する道程――南門へと集まったこの数日間で結成された奇妙な一団は、

今は旅立つ側と見送る側へと別れ、再会の約束と共に別れの挨拶を告げていた。
良かった良かった、と喜ぶアリアに、ローレッタも微笑みを返す。
素性をバラしてからというもの、やはり始めは敬意と緊張の為か対応が硬かった令嬢ではあったが、元より肝っ玉の太さに定評があるのがカッツバルゲル家の女である。
数日もあれば硬さも取れ、かつてに近い砕けたやり取りを行うようになって、こっそりアリアを安堵させていた。
「とはいえ、夢を諦めた訳ではありませんわ。お屋敷の買戻しと家財の再整理が終われば、留守を家人に任せて今度こそ帝国を目指しますの」
次に帰宅するときは、華々しい凱旋ですわ、と瞳に意気を燃え上がらせるローレッタに、三人はそれぞれに激励を返す。
「ローレッタさんなら、《刃衆》にだって入れるよ、頑張ってね！」
「御令嬢の拳なれば、長ずれば憧れる御二方に迫ることができるやもしませぬ。精進ですぞ」
――縦ロールちゃんが将来有望だって、帝国の知り合いに伝えといたからさ。とっかかりにはなると思うから後は縦ロールちゃん次第さね。
お偉いさんの歓待とか苦手だからパス。という書置きを遺して、街の酒場を飲み歩いていたという傭兵の青年が、少しばかり眠たげに令嬢にとって重要な情報を告げる。

その様子を苦笑しながら見ているアリアとガンテスに少しばかり怪訝な気持ちを抱きつつも、別れの時間にそれを指摘するのも無粋と思い直し、ローレッタは優雅に屈膝礼（カーテシー）を行うと名残惜しさを堪えて微笑んだ。

「皆さんには、本当にお世話になりました……何時かまた、再会できる時を女神様にお祈りいたしますわ」

――いやいや、マメイさんの味噌と醤油の為にも、関係を切らす気とか全くないよ？

寧ろたまに帝国に進捗状況確認しにいくまである。

「ははは。いやぁ、そこまで食い付いてもらえると嬉しいねぇ。研究者冥利に尽きるよ」

「傭兵のにいさん、どんだけそのミソとショーユってのを楽しみにしてるんだよ……そこまで反応されると俺も気になってきたな」

やはり照れ臭そうに自身の頭をかくコウジと、傭兵の調味料への執着っぷりに興味を掻き立てられた様子のアザル。

アリアが両者に視線を転じると、改めて彼らの予定も確認がてらに問いかける。

「皆さんにもお世話になりました！　……皆もローレッタさんの予定に合わせて行動するんだっけ？」

「うん、もとから一緒に行こうという約束だったしね。何より――僕自身がローレッタが夢を掴む瞬間をなるべく近くで見てみたいんだよ」

「こっちは乗り掛かった舟って奴ですね。ま、屋敷の整理で力仕事も必要になるだろうし、のんびり手伝って、時期が来たら護衛として同行しますよ」

コウジの言葉には笑顔で頷いたアリアであったが、領主宅に逗留中も、とうとう敬語が取れなかったアザルに対しては、少しばかり不満そうな表情をみせた。

「むう、敬語……ボクは気にしないんだけどなぁ」

「勘弁してください。知った今となっちゃ、タメ口とか無理ですって——俺らはごく普通の冒険者なんですから」

これでも充分砕けてるつもりですよ、と。アザルが苦笑いする。

「ま、一連の騒動も含めて、得難い経験ってヤツだったわよね」

「あー、最後には聖女様と知り合いになれた、なんていうとんでもないコネも出来ちゃったしねぇ」

「アリア様に失礼ですよ、二人とも——聖都へと無事の帰還を祈らせて頂きます。どうか、お元気で」

ウェンディとイルルァ、エクソンがそれぞれにこの数日間について思い返し、滅多にない希少な冒険譚に加わる事が出来た、と感謝と歓びの念と共に、別れの挨拶を交わした。

「この場で行く道が別れること、本当に名残惜しいですわ……アリア様は、私(わたくし)たちの帝

国までの旅路を見届けたいと、そう仰って下さったのに……」
「予定が変わるのは仕方ないよ。それに、嫌な理由とかじゃないんだし、家族の思い出が詰まったお屋敷を取り戻せたって事は素直に祝福したいし――あ、でも」
どこか申し訳なさそうなローレッタにアリアは何かを思いついた様に表情を輝かせ、こっそりと内緒話をするように耳元へと顔を寄せた。
（帝国に着いたら、マメイさんとのアレやコレやがどうなったのか、今度会ったときに教えてね。他の皆……特に、にぃちゃんには内緒で！）
（まぁ……心得ましたわ！　先生との甘美なる時間は、微に入り細に穿ち、余すことなく記録してアリア様に自慢いたします！）
（待って、そこまで全力じゃなくていいから。お願い待って）
ふんす、と気合を入れて了承の意を示す令嬢に、頬を染めながら慌てて追加注文を入れる聖女。
なんとなく見つめ合い……やがて二人は同時に吹き出した。
「それじゃ、ボク達はそろそろ行くよ……皆またね！」
「同じ大地の下、平和となった世なれば、また道が交わる事もありましょう。それまでの御壮健を祈りますぞ！」
――じゃーねー、今度聖都に遊びにきてーな。色々案内するぞい。

「はい――皆さん、どうかお元気で！」

三人の其々の言葉に、ローレッタが代表して笑顔で答え、他の者達も各々に手を振り――お嬢様と愉快な仲間達は一時解散と相成った。

暫しの間、のんびりと三人並んで街道を歩く。

――良い縁も繋げたし、終わり良ければ総て良しって感じだったな。

「まさしく。拙僧としては、猟犬殿に道すがら聞かせて頂いたミトの御老公の如き世直し事に加われたこと、まっこと感無量でありますれば」

――おう、オッサンも気に入った？　じゃぁ次は俺のイチオシ、三〇が斬るの神回を……。

「そろそろ自重しようね二人とも!?　ボクはもう乗らないからね！」

えー、と不満そうにブーイングを飛ばす野郎二人を、少女がぷりぷりと怒った声で叱り飛ばす。

彼らの故郷、彼らの家と呼べる地まで、あと少し。

帰れば、会いたかった仲間や家族、友人が待っている。

魔道具で定期的にやり取りしてるとはいえ、直接会って話したい事は山とあるのだ。

味噌と醤油の発見か。
或いは、ガンテスが時代劇語りにハマった故の面白エピソードか。
旅先で出会った、鉄拳お嬢様を筆頭とした、新たな戦友達について語るのも良いだろう。
大切な想い出と、大切な約束。
そう言えるだけの、新たな出会いを積み重ね、聖女と猟犬、筋肉は家路への道を進むのであった。

界樹編
呼び出し

フラグというか、何かの前触れ的なものだったんだろうか。
街中に出て、たまたま一緒になった副官ちゃんとくっちゃべりながら、食い歩きをしていたときである。
「なんか、本国の方でバタバタしてるらしいんだよね」
彼女が屋台の串焼きをもりもり頬張りながら、思い出した様に唐突に切り出した。
霊峰から帰って来て、暫しの後。
帰って来た当初は土産話だけではなく、きちんとした報告やら何やらもあって、暫くバタバタしていたんだが、今ではすっかり落ち着いてのんびりとした日々を過ごしている。
シアや副官ちゃんにも道中で仕入れた土産や、新たな友人に関する話は喜んでもらえたのは何よりだ。話の途中、お師匠へのやらかしについてとかで俺が正座させられたり

正座させられたり正座させられたりしたけど。

あれは怖かった……何が酷いってこの手のパターンだと普段は関わって来ないミラ婆ちゃんまで加わってきたのがひどい。

膝の上に積み上げられた石板が高くなりすぎて、後半は御説教してる面子の顔が遮られ、目の前の石板側面しか見えないっていうね。容赦なく積みすぎだと思うの。

まぁお師匠相手にやらかしたのは姉弟子的にはアウトだったんだろう。我ながら残当だった（白目

……命があっただけ幸運だと思っておこう。

あんまり鮮明に思い出すとそれだけで足が痺れてきそうなので、その話は一旦脇に置いておくとして。

副官ちゃんの言に、俺は咥えていた串を空にすると口の中のものを飲み込んだ。

バタバタとな。まぁ、露店巡りしてる最中にぽろっと漏らすくらいだから、深刻な話じゃないんだろうけど。

こちらの予想通りだったのか、うん。と、軽く頷いて屋台の側にある屑籠に串を放り込む副官ちゃん。

「部下の定期報告では隊長も忙しくしてるみたいだけど、《刃衆（ウチ）》だけじゃなくて王城全体が慌ただしいみたい。きな臭い感じはしないらしいから、何か終戦記念のイベントで

も予定してるのかも」

あー。二年経って、戦後処理も方々で落ち着いて来ただろうしねぇ。こっちでも何か動きがあるとしたら、合同でデカいお祭りとかになるんだろうか？

だとしたら楽しみだな、うん。異世界でのデカい祭りとか何気に初めてだわ。別に俺だけじゃなく、近年の転移者とかは基本戦時中だったせいでこっちでの明るいイベントとか殆ど経験無いだろうし。

何気にこっちのお祭りとか未体験な俺のワクワクした様子に気付いたのか、確定って訳じゃないっての、と、副官ちゃんは軽く笑って肩をすくめた。

「ま、実際には何があるのかなんて、まだ分からないけどね。祭りだとしたら、教国の戦勝記念日の出店は美味しいものばっかりだったから、そこは楽しみだけど」

相変わらず腹ペコキャラやなぁ。まぁ、副官ちゃんらしいっちゃーらしいけど。

帝国は現皇帝の開明的な性質もあって、新しいモンをガンガン取り入れてるけど、こと食文化に関しては数世代前から熱心に転移者の知識を取り込んでいた教国が一歩先んじてるってイメージがある。

最近まで戦争やってる最中だったのだ、あくまで可能な限り、ってレベルではあるけどね。

でもなぁ、元の世界――とりわけ、俺やシアリアの故郷である日本の食文化に関して

は……帝国にブーストかかりそうなんだよなぁ。下手すりゃ数年後には教国が後塵を拝しているかもしれん。

「あぁ、例の学者さんだっけ？　調味料二種類でそんなに変わるの？」

小首を傾げる彼女の不思議そうな質問に、力強く頷いた。

俺達の故郷だと、基礎というか根本というか……和食というカテゴリにおいては何作るにしても味噌と醤油は付いて回る代物だったぞ。特に醤油。

こっちだと魚醤くらいしかないけど、たまり醤油とかやべーぞ。具体的には、聖殿の食堂でたまに出る照り焼き擬きの味が二段はあがる。

「うわなにそれ、めちゃくちゃ食べてみたい。料理長が聞いたらなんとしても欲しがりそうね」

欲しがるだろうなぁ……気持ちは分かる。俺も欲しい。

料理長は基本、寡黙な職人って感じの人だけど、料理に関してはネジ外れてるからなぁ……生産主とは個人的に知り合いでもあるし、なんとか優先してもらって手に入れるつもりではあるから、味噌と醤油のために帝国に行くのは辞めて欲しい、マジで。

「料理長が帝国に入ったら、陛下が全力で引き抜きにかかりそうだねぇ……将来的には帝国にとって良い事なんだろうけど、今の私の食事の質が下がるのは勘弁してほしいわ」

聖殿(ウチ)にとっても阿鼻叫喚だよ。俺や聖女姉妹(ブラザーズ)どころか、トイルのおっさん辺りも腰を上げる事態になりかねんぞ。あの人、朝に料理長のパンケーキ食わないと仕事の能率落ちるとか言ってたし。

真面目くさった顔で言う俺に、副官ちゃんは半分呆れた様な、だけど、もう半分は理解できなくも無いといった様な、複雑な表情を浮かべた。

「食事は大事だけど、ストラグル枢機卿まで動き出すとかおおごと過ぎるでしょ……そんなアホな理由で帝国と教国の間に緊張が走るとか想像したくないんだけど」

人間、飯が関わるとガチになるのは昔からのあるあるやろ。特に転移・転生者の元・日本人組はその気が強いと思う。

「マジか。隊長もそうなのかなぁ……あんまり想像つかないけど」

全員が全員って訳じゃないだろうけど、味噌と醤油があるって知ったら大なり小なり反応するのは間違いない（断言

他愛もないお喋りに興じながら、互いの買い込んだ串焼きを片付けると空の串をくずれに放り、俺達は次のメニューを物色しにかかった。

「う～ん、屋台も悪くないけど、なにか甘味が欲しい感じねぇ」

屋台通りに並ぶ店舗をざっと見渡しながら、副官ちゃんが腹具合を確かめているのか、軽くお腹を擦りながら呟いた。

ふむ。甘いモノか……ちょいと歩くが、パンなんてどうよ？　この間、ジャムサンドとか置いてある良さげなパン屋を発見したんだが。
「おぉ、アンタ達のいう処の菓子パンってやつね。いいじゃない、行ってみましょう」
目をキラーンとさせて興味深そうに首肯した副官ちゃんの食い付きの良さもあって、俺達は食欲の赴くままに目的地を決定する。
おｋ、じゃぁ行こうか。ついでにシアとリアに何か買って行ってやるべ。
「良い品があるなら、私も今日の夜食用に多めに買っていこーっと……手ぶらじゃ心許ないわね、バスケットも売ってくれるかな？」
どんだけ買う気やねん、そんなに買っても今日の内に食いきれないでしょ。
「女の子は甘いモノを食べると幸せに変換されるから問題ないのよ」
幸せ（熱量（カロリー））。
「やかましいわ駄犬」
顰め面になった副官ちゃんにビシっと脳天にチョップを入れられながら、俺は彼女を先導してパン屋への道を歩き出したのだった。

思ったよりパンを買い込むことになったので、街の散策を切り上げてそのまま聖殿に戻って来たんだが。

入って直ぐに、此方を待っていたらしきミラ婆ちゃんにつかまる事となった。

「帰って来ましたか――遅ければ迎えに人を送ろうと思っていましたが、丁度良かったですね」

相も変わらずの鉄面皮で、鼻梁に乗った眼鏡の位置を指で調節する。

迎えって……何かあったんかな？　シアリアにお土産あるんだけど……渡してからでも大丈夫なやつだろうか？

「いえ。レティシア様とアリア様、御二方とも同じ要件で貴方を待っている筈です。急ぎ、奥ノ院へ向かう様に」

姉弟子殿のお言葉に、無意識に眉間に皺が寄る。

うえぇ……奥ノ院って……。

聖女が揃って大聖殿の最奥に呼び出されてるとか、絶対めんどくさい案件確定じゃな

いですかやだー。

そもそも、ミラ婆ちゃんが此処にいる時点で、奥院で聖女を呼びつける人物って一人しかいねーじゃん。

「あ、込み入った話になりそうだから私は先に部屋に戻らせてもらうから、じゃ」

面倒事たっぷりな気配を放つ呼び出し場所を耳にして、直ぐに察した副官ちゃんがシュタッと手を挙げて、即行でこの場からの離脱を図る。

いやまぁ、気持ちは分かるけどさ。実際、他国の出向人員である彼女は関わってはいけない類の話な可能性だってあるし。

部屋に戻るといいつつ、食堂の方へ向かう――おそらく、茶でも淹れて買って来たパンに舌鼓を打つんだろう――副官ちゃんの背を見送ると、俺は溜息を噛み殺してパン屋のおばちゃんから借りて来たバスケットを持ち上げた。

正直言えば俺一人ならブッチしたい呼び出しではあるんだけど、二人が既に待ってるという時点で行かないという選択肢は無い――この辺りの采配もほんっとやらしいんだよなあの教皇（ジイさん）。

ごねた処でどうしようもないので、ミラ婆ちゃんに買って来たパンのお土産を渡し、二人の部屋に届けてくれるようにお願いするとさっさと参ノ院に向けて歩き出す。

教皇の居住区であり、聖教会における数々の秘が眠るとされる奥ノ院は、トイルが管

理してる参ノ院にある回廊からしか入れない。
回廊には参ノ院側と奥ノ院側、及び中間地点に警備の人員が配置され、枢機卿や聖女といった役職でもない限り、基本、通過に厳しい制限とチェックが入る。
当然、警備の僧兵だって一定以上の実力を持つ連中しかいない。具体的には全員、大戦でバリバリ戦ってた猛者揃いだ。
「おや、猟犬殿。聖女様方はもう奥ノ院で御待ちですよ。早く向われた方がよろしいかと」
うーっす、いつもご苦労様でーす。んじゃ、急ぐとしますか。
「ええ、ではまた帰りに」
その厳重な奥ノ院への唯一の回廊を普通に顔パスな傭兵ってどうなんだろうね、ほんと（白目
参ノ院の回廊入口を守護する僧と軽く挨拶を交わし、彼らが手ずから開けてくれた扉を通って真っ直ぐに進む。
待たせてるみたいなので、ややペースをあげて石造りの廊下を歩むこと二、三分。
回廊の中間と出口の警備の連中とも挨拶して奥院へと続く大きな扉を開ければ、高い天井とそれを左右側面に屹立する石柱で支える、全体的に白を基調とした石造りの大広間だ。

まぁー、大昔からあるこの世界最大の宗教の最重要区画なだけあって、荘厳な感じが半端無い。

最初に訪れたときは静謐な空間にちょっと気圧されたのが懐かしい。今はそこそこに慣れたもんだけど。

「お、来たか」

「にいちゃん、こっちだよー」

大広間の奥……御神体である女神様の天井まで届きそうなでっかい像がどーんと置かれた場所。その足元にいたシアとリアが、振り返ると揃って手招きしてくる。

こちらも手を挙げて応じ、二人へと歩み寄ると、女神像が設置された足元――そこに備えられた厳かなデザインの座に、今回俺達を呼び出したであろう老人が座っていた。

「やぁ、来たね。時間的にも丁度よい頃合いだよ」

そう言うと、豪奢な白の僧服に身を包んだ爺様は、真っ白な髭を伸ばした顔に柔和な笑みを浮かべた。

尤も、ある程度この人の素を知ってる人間からすると、相変わらず腹の底が読めないうさんくせースマイルにしか見えないんですけど。

ヴェネディエ＝フューチ＝ヘイロウ

聖教会の主権である教皇の座に就く人物であり、大戦において未来を見通すとまで言われた千里眼じみた見識を以て、人類の勝利への布石を示してきた御仁だ。

近年はもっぱら三枢機卿に実務を放り投げ、奥ノ院で半引き籠りと化してるらしいが……若い頃はミラ婆ちゃんやガンテスと前線で活躍してた事もあると聞く。

愛用の揺り椅子と同化してるんじゃねーかって言う位の今のインドアっぷりからすると、どうにも想像がしにくいが。

「急に呼び出してすまないね。とはいえ、君も関わる事だからこの場に居てもらった方が良いと思ってね」

普段使いしてる揺り椅子ではなく、広間に設えられた……通常の国家ならば玉座に相当する石造りのソレに腰掛けた老人は、顔見せもあるからねぇ、と意味深な事を呟いた。

「それで、猊下。呼びだした面子も揃ったことですし、いい加減招集した理由を教えて欲しいんですけど」

言葉遣いこそ丁寧だが、割とぞんざいなのが分かるトーンで今回俺達を揃って呼び出した件の趣旨を教皇へと尋ねるシア。

この分だと、俺だけじゃなくて二人のことも唐突に呼び出したなこの爺さん。明らか

に面倒そうな話なんだから事前に話通しとけや。
「二人はともかく、君は本気で嫌がりそうな話なんでね。ギリギリまで伏せておいた次第だよ」
　俺の内心を読み取ったかの如く、のんびりとした口調のまま教皇は告げる。
「にぃちゃんがそこまで嫌がるって……やっぱり政治絡みですか？　それなら枢機卿のどなたかも居たほうが良いんじゃ？」
『偶には自分で事の手綱を取れ』と、けんもほろろに断られてしまったよ。いやぁ、この間、こっそり僕の処に廻って来た仕事を流したのを根に持ってるみたいでねぇ」
「えぇ……またやったんだ……いい加減本気で怒られますよ？」
「あぁ。次はもう少し間を置いてからとするよ。特にトイルは怒ると怖いからねぇ」
　好々爺然とした顔で笑いながら言うセリフは、普通にクソ爺のソレだった。
「揺り椅子を焼却処分してやろうか狸爺……！」と歯ぎしりしながら仕事を捌いている苦労人の姿が思い偲ばれる。
　まぁーこの通り、教皇なんて立場の癖に仕事はサボるわ部下にさり気なく押し付けるわ他人を揶揄って遊ぶのが好きだわと、色々とアレなとこも多い爺さんなんだが、我が妹（おとうと）分は結構仲良いんだよね。今は仕事中って意識があるのか多少取り繕った態度だけど、普段は親戚のお爺ちゃんみたいな感じで接してるし。

いや、俺もたまーにボードゲーム全般の勝負相手になったりしてるけど。

座に深く座り直して、珍しく少しばかり居住まいを正した爺さんは、遅ればせながらシアの言葉に応じ、語りだす。

「そろそろ時間だし、趣旨を説明するとしようか――今日は人と話をする予定があってね。端的にいえば、君たち三人にも同席して欲しいのさ」

そう言って懐から小さなベルを取り出すと、指先で摘まんで静かに揺らす。

広々とした空間に澄んだ音が響き渡ると、それに応えて大広間の右手奥にある通路から、大きな鏡の様な物を乗せた台車を押して二人の僧が現れた。

「うぇ……大型の遠話用魔道具に通信官……他の国の高官と会談でもするんですか？」

「うん、まぁそのようなモノだね」

若干嫌そうな表情を隠す事もないシアの言葉に、相変わらず底の読めない笑顔のままで頷く教皇。

霊峰に向かった際に借り受けた物は掌サイズの水晶玉――簡易型だったが、これは姿見より更に大きい巨大な鏡……音声だけではなく、相手と自分の姿を互いに向けて投影可能な代物だ。

まぁ、アレよ。ざっくり言ってしまえば前者が通話オンリーの携帯電話、後者が大画面ライブチャットみたいなもんよ。

当然動力となるのは電気・電波では無く魔力。特に大型の方はその消費量が馬鹿にならんので、起動する際には専門の担当者が付く。それが通信官だ。

お勤め中は黒子の如く、顔を隠して魔道具の発動・維持にのみ集中する通信官が教皇の合図を受けて静かに一礼すると、鏡を載せた台の両脇に陣取り、丁寧に魔力を注ぎ込む。

早速か。外国のお偉いさん相手だ、いつもの身内ノリも不味かろうと、俺達は多少の緊張を以て魔道具の発動に備える。

今更だけど外交関連の問題だってんなら、爺さんがきちんと謝って酔いどれ枢機卿殿を同席させた方が良かったんじゃないのか。

内心の疑問をまたまた読んだのか、それとも俺達がよっぽど顔に出していたのか。

伸ばした長い白髭を片手でしごきながら、教皇は何でもない事の様に――だがどこか、悪戯が成功した子供の様な表情を見せた。

「君たちは議題に直接関わるから招集したのさ。枢機卿（ルヴィ）は頼もしい子だけど、今回の一件だと舵を取るには対外的な格が足りてないよ――何せ、面子が人類種の各首脳だからね」

――はい？

最後にとんでもない台詞が聞こえた気がして、俺……というかシアとリアも、三人並んで仲良くアホ面で上座にある教皇の顔を見上げた処で、魔道具が起動した。

鏡面が光を放ち、飛び出した光は虚空に複数の像を結ぶ。

『――時間通りか。アンタにしては珍しいな昼行燈』

魔力によって投影された、遠く離れた場所を映し出した景色。

幾つかに分けて映し出された光景の中、真っ先に口を開いたのは壮年の精悍な男だった。

肩口あたりまで伸ばした灰色の髪と、蓄えられた顎髭。

浅黒い肌を包むのは、一目で最高級と分かる豪奢な貴族の装いと、帝国の紋章が刻まれた真紅の円套（マント）だ。

ふてぶてしい笑みを浮かべて玉座で肘突くその後ろには、軽装の騎士鎧を纏った黒髪の少女――隊長ちゃんが控えている。

『初手から皮肉を飛ばすもんじゃないよ、帝国の。アタイ達としては教国にゃ世話になってるからね、多少の遅参は目を瞑るさ』

男の言葉を軽く咎めたのは、赤毛に褐色肌の小柄な女性だ。

若々しい見た目とは裏腹に、振る舞いから感じられる印象は老獪の一言。長命種が持

つ独特の雰囲気を色濃く漂わせている。
武具に刻む魔力導線を模した刺青を入れた二の腕はむき出しで、多少は飾り気があるものの、まるでつい先程まで鍛冶場か何かに出入りしていたかの様な恰好だった。
玉座や椅子の類でなく、艶のある魔獣の革らしき敷物の上に胡坐をかき、頬杖をついて教皇……ではなく、俺達の方を愉快そうに注視している。
『兎に角、この場を設けられた事は喜ばしい。互いにとって実りある会談になる事を望みますよ』
最後に口を開いたのは、映像越しの者達を含めて一際に異彩を放つ、男性と思わしき人物だった。
判然としないのは、あくまで声が男性のものであるからであり、その顔は黒塗りの兜で覆われている。
上質の鋼と魔獣の角や甲殻を組み合わせて鍛え上げられた装甲は頭部だけでなく全身を覆い、肩には金糸で縁取られた――これまた黒の円套（マント）。
眉庇（バイザー）のスリットから覗く目は獲物を狙う狩人の様に鋭く、一見した印象は国の重鎮というより、凄腕の戦士――或いは暗殺者。
全員、見知った顔だ。
というか、その辺にいる子供でも知ってる比率の方が多いであろう面子だった。

「……こんの爺、やりやがった……！」

隣でシアが苦虫を噛み潰した様な表情で毒づくのが聞こえる。

全く以て同感だよ。前情報抜きのドッキリで紹介する面子としては過剰に過ぎるだろ、権力的な意味で。

微妙に顔を引き攣らせる俺達を見て、満足そうに頷いた教皇が掌を打ち合わせて音頭を取った。

「では問題無く面子も揃った事だし、始めようか。戦後初の《人類種首脳会談》を」

問題しかねぇよ、後でミラ婆ちゃんにチクったるからな……！

絶対ロクな話にならねぇ。

そんな確信を抱きつつ、俺は空を見上げたくなって上方を振り仰ぐ。

当たり前だが、大広間の染み一つない天井が視界に広がるばかりであり、溜息が洩れた。

人類種首脳会談（前編）

教皇の宣言の後、口火を切ったのは赤髪の女性だった。
『ま、全員が全員、見知った顔だ。今更畏まった挨拶も無いだろうよ――それより』
宙に映し出された映像へと顔が近づけられ、その視線は俺へと固定される。
『よお、久しぶりだね猟犬の！　くたばったと聞いてたが本当に蘇ってくるとは……やっぱり面白い奴だねアンタは！』
……まぁ、事ここに至って変に緊張したり、鯱張ったりしても無意味、か。
ニヤリと笑う女性に軽く会釈を返して、開き直りにも似た心境で今回の会談とやらに臨む事にした。
それはそれとして悪戯爺のいらん茶目っ気については後で姉弟子に報告する。絶対にだ（決意
彼女が前述した通り、魔道具によって映し出されたこの場の面子は全員顔見知りだ。
其々、個々によって友好関係の差異や度合いはあるけどね。

今も座った敷物から身を乗り出して笑う赤髪褐色肌の彼女の名は、ファーネス＝マイン。

俺達現代日本人の若い世代が、異世界と聞いてパっと思い浮かべる種族の一つ――ドワーフと呼ばれる長命種達を代表する人物だ。

この世界におけるドワーフの特徴は、日本人が思い浮かべそうなフワっとしたイメージからそこまで乖離することは無い。

種族として全体的に小柄で、男性は立派なお髭が自慢とされる。

老若男女、無類の酒好き。手先が器用で鍛冶や細工物、工作全般を得意としていて、特に鍛冶仕事に秀でている氏族は、代々人生の殆どを鍛冶場で過ごしてきた為か、高炉の熱に炙られた様な灼けた肌の色を持つ者達が多い。

ファーネスの一族であるマイン氏族も、彼女の褐色肌から察せられる通り、武具に関連した鍛冶仕事を生業としている。

ドワーフ自体がそれほど数の多い種族ではなく、其々の氏族ごとに様々な国で得意な産業に関わっている、という体なんだが……長年の戦争の御蔭で、需要の高い高品質の武具の生産に携わり、帝国や教国、魔族領といった強大な国力を有する国との太いパイプを維持してるマインの氏族が、ドワーフの代表となっている形だ。

なので、正確には彼女は国家の首脳、という訳では無いのだが……ファーネスが一声

あげれば様々な国の生産業に深く食い込んでいるドワーフ達が一斉にそっぽを向くも、逆に一丸となって協力するのも有り得る。

下手な小国の王族なんぞより影響力があるのは確実だ。なので『種族』の首脳、人類種としての発言力という点においてこの場にいるのは当然と言えた。

しかし、だ。

声をあげれば影響力が云々、とは言ったものの――少なくとも俺の知りうる限りでは、ドワーフという種族は自分達の得意な仕事に関してひたすら没頭出来ていれば幸せ、という連中ばかりだ。

使い潰す気満々の悪辣な職場でもない限り、勝手に環境を整えてガンガン物作りに励みだすので、ドワーフを最大限に働かせたいなら資金と資源だけ用意して、必要なとき以外は本人達に丸投げしておけ。なんていうのがこの世界での共通認識だったりする。

そんな種族総員、職人という名の物作りキチみたいなドワーフが自分たちの代表と認める女傑だ。ファーネスに鍛えられた武具は、神器などの古の時代からの霊具を除けば最高峰の逸品であり、この場にいる何人かも彼女に制作を依頼した装備を愛用している。

シアが杖代わりに魔法の発動体にしてる指輪や、隊長ちゃんの湾刀なんかもそうだ。翻って、俺は特に何かを作ってもらった、という事は無いのだが……。

『アンタがクソったれ共の首魁を仕留めたって聞いたときにゃ、アタイもらしくもなく胸をときめかせたもんだよ――なぁ、やっぱりアレかい？　アンタの魔鎧（あいぼう）の力あってこそ、ってやつかい？　あぁ、やっぱり一度じっくり見てみたいねぇ、呪物とは言っても邪神を討伐したとくればソイツはもう神器に匹敵する伝説の武具そのものだ、是非とも間近で見たい、駄目かい？』

近い近い。画面に近い。もうぐいぐい来過ぎて彼女の居る場所を映す魔力の虚像には、顎下と小柄な体躯に反して大変ご立派である双丘しか映ってない。

見えていないが、多分その眼は、欲しくてたまらないトランペットをショーウインドウ越しに眺める少年の如き輝きを灯しているのだろう。

或いは極上の美女の艶姿を目の前にした禁欲中の中年親父の眼かもしれんが。

うん、まぁ。

ここまで言えば既に察せられるだろうが、ファーネス……というかマイン氏族にとって、鎧ちゃんは特級呪物という凶悪なラベルを加味しても『刺さる』武装らしく、完全に起動しても呪詛に引きずられて暴れることもない俺は長年の氏族の欲求を叶えてくれるかもしれない人物と認定されてしまっている。

毎回毎回会うたびに、鎧ちゃんを見せてくれとせがまれていたんだよね。のらりくらりと躱し続けてはいるけど。

ちょっと見せてやるくらい良いだろって？　だってなぁ……。

『何度頼んでも目の前で見せてくれないってんだから、アンタも大概いけずだよ。あぁ、あの機動性の高そうなフォルム……イカれてるとしか思えない量の魔力導線……図面に起こしてみたいよぉ……あとちょっとだけでいいから舐めたりかじったりしてみたい』

こわい（白目

気のせいか、俺の内で待機状態にあるラブリーマイバディも嫌がってる感じすらある。

少しだけ画面から身を離して、めちゃくちゃ早口で鎧ちゃんについて語りだすファーネスの顔は、頬が赤らんで恍惚としていた。

艶っぽい吐息を洩らしながら身をくねらせるその姿は……本来、男なら思わず前のめりに凝視してしまうほどに色っぽい姿なんだろうが……こわい（二度目

顔を引き攣らせながらも、どうにか後ずさりするのを耐えていた俺の前にシアとリアが壁になるように立ち塞がってくれる。

「ファーネス、その話は何度も断ってるだろ？　精神侵食を無視できても、肉体にかかる負荷は据え置きなんだ。徒にコイツにあの鎧を使わせるのは止めてくれ。あと相棒はオレだから」

「会談の趣旨とは外れた話だろうし、ここまでにしておこうよファーネスさん。他の参加者の方も苦笑いしてるよ？」

『……どうしても駄目か？　引き受けてくれるなら、猟犬の坊相手ならちょいとイイコトしてやっても――』

「絶対に駄目」

もう殆ど被せるようにして笑顔で断言した二人の言葉に、ファーネスは『いけずだねぇ……』とショボくれた様子で敷物に座り直した。

なにやら魅力的なお誘いもあったが、正直捕食される感が強くて怖さが勝る。

二人がカット掛けてくれて助かった……鎧ちゃんの変化については絶対気取られないようにしないとアカンな。

そんな事を考えつつ、皇帝の後ろで何故か力強く頷いている隊長ちゃんが見えたので、挨拶代わりに軽く手を振った。

彼女もそれに気付いてちょっと恥ずかしそうに手を振り返してくれる。

『おいおい、猟犬。目の前の余を放っておいて、後ろにいる部下とイチャコラすんのはどうなんだ？　余ってば、一応皇帝なんだが』

おぉう、そりゃそうだ。大変失礼しました。

壮年の男性が揶揄いを多分に含んだ声色と共に、顔をずずいっと近づける。

隊長ちゃんが頬を赤らめて『陛下っ』と文句を飛ばしているが、それには頓着せず男性――帝国の現皇帝陛下は、そのままマジマジと俺の姿を頭からつま先まで眺めまわした。

『ふぅん……マジで復活したのか。報告によれば、まともな死体も残ってなかったって話だったが……伝承にあった神による復活なんぞ、眉唾だと思っていたんだがな。人間の身で体現するヤツが顕れるとはいやはや……』

感心した様子で珍獣を眺める様な視線を向け続ける皇帝ではあるが、死体うんぬんの下りでシアとリアが俺の衣類の裾に手を伸ばし、キュッと掴んだのを目にとめると、彼は肩を竦めた。

『ふむ。ちと迂闊な発言だったな、許せ』

「いえ……壮健そうで何よりです、陛下」

怒ってる、という訳では無いんだろうが、少しばかり硬い声と共にシアが頭を下げ、妹分もそれに倣う。ついでに俺も挨拶がてら黙礼しておいた。

略式ですらない、簡易な挨拶を気にする事も無く、鷹揚に頷く皇帝ではあるが……後ろの部下が先程の発言の瞬間に無表情になったのには気付いていないみたいだ。

『……陛下、あとでお話があります』

『え”っ？　いや、謝ったじゃん。判定辛くない？』

『右側と左側、どちらを剃り落とされるのが良いか、決めておいて下さい』

『おいやめろ、やっと伸びて来たばっかりなんだぞ!?』

笑ってるのに笑ってない笑顔を向ける隊長ちゃんに、悲鳴混じりの抗議の叫びをあげる皇帝をみて聖女二人も溜飲が下がったのか、俺の服から指を離してくれた。

スヴェリア＝ヴィアード＝アーセナル。

元より精強な武力国家として、教国と並んで長らく邪神戦争の矢面に立ってきた帝国の頂点に立つ男だ。

広大な勢力圏を東西南北、四方のうち西以外を資源豊富な山々に囲まれ、唯一開けた西側は大きく拓かれた平原が続き――教国や北方へとつながる大街道が敷かれている。

大きくなるべくしてなった、という好条件の揃った帝国であるが、その版図の広さ故に王家と貴族の派閥が別れ、完全な一枚岩とは言い難い状況が歴史上でも長く続いていたのだが……。

即位と同時――いや、おそらくはそれ以前から着々と準備を進め、皇帝となってから十年と掛けずに国内の殆どを纏めきって、自国を名実ともに人類最大国家として盤石の位置に押し上げたガチの傑物が目の前の御仁だ。

自身の顎髭を庇う様に両手で押さえながら、部下を必死に宥めている様からは想像しづらいだろうが、マジで歴史の教科書に長々と載るレベルの偉人なんだよ。というか、

此処に居る大体の面子はそうだろうけど。
歴史に記されるような大層な人物ではなさそうなのは、俺と――この会談で最初の顔見せ以外で口を開いてないこの男くらいだろう。
そんな風に考えながら、この場で最後となった再会の挨拶を黒兜の男へと向けた。
――おひさ、《亡霊》。相変わらず常時フルフェイスなんだな、あんたは。
『久しぶりですね、《猟犬》殿。私もそれなりに長く生きてますが、死んだと確信した人間と再会したのは初めての経験ですよ』
各国のガチのお偉いさんが集まる場であっても、頑なに兜を外さない男に少しばかりの呆れと感心を含んだ言葉を投げかけると、映像越しに丁寧に一礼した黒兜は穏やかに返答してきた。
魔族領、最高幹部《災禍の席》の第二席。
筆頭補佐《亡霊》――それが目の前の黒塗りフルフェイスマンの肩書きだった。
通称以外にもきちんとした名前もあるらしいが……基本、魔族は他者に名前を明かすという事をしない。
例外も無いわけでは無いらしいが、自身の名――それこそ真名と呼んでもいい程の重要視しているソレを明かすのは、多くの場合伴侶に選んだ相手のみだそうだ。
この辺りの風習は、遥か古代から残っているものである為、外交相手の国でも問題視

してくる奴は殆どいない。

というか、この風習を引き継いでる一番の古株がお師匠――《半龍姫》だからね。これにいちゃもんつける＝お師匠を遠回しにｄｉｓってるって事になりかねないので、まともなオツムがあれば出来る訳が無いんだけど。

『聖女の御二方も、お元気そうで何より。彼が生きて貴女方の側に在るのは魔族領としても大変に喜ばしい――どうか末永くそうであって欲しいものです』

全身黒塗り鎧の、凄腕の殺し屋みたいな見た目の癖に、めちゃくちゃ腰が低くて丁寧な《亡霊》の挨拶に、先程からちょっとテンションが低かったシアとリアも機嫌を上向きにした様だ。

「あぁ、久しぶり《亡霊》。機会があればウチのストラグル枢機卿とも話をしてやってくれよ――確か仲良かったよな？」

「こんにちわ、《亡霊》さん。にいちゃんとはこれからもずっと一緒にいるから、心配しなくても大丈夫だよ」

穏やかに交わされる挨拶……対外的には、一番喧嘩っ早くて血の気が多いと言われてる種族の代表との挨拶が一番無難に終わるってどういうことやねん（白目

『挨拶は終わったか？　なら余としても魔族領には聞いておきたいことがある』

隊長ちゃんの説得を無事終えたのか、それとも自身の髭を諦めたのか。

皇帝が表情を引き締めて、《亡霊》へと向かい、厳しい視線を投げかけた。
『此度の会合は人類種のトップが集う会談だ。余は勿論の事、各参加者もその認識でいる――そうだな？』
『えぇ、魔族領としてもその認識で会談に臨んでいます』
詰問に近い皇帝の口調にも動ぜず、あくまで穏やかに、紳士的な振る舞いを崩さずに頷く《亡霊》。
余裕を保った態度が気に障ったのか、舌打ちを堪えてそうな表情で皇帝は僅かに声を荒げた。
『ならば、何故第二席（オマエ）がこの場にいる。補佐として立つならばともかく、だ。筆頭は――《魔王》の奴はどうした？』
『それに関しては、アタイも気になっていた処だねぇ』
ファーネスも同調し、探るような視線を映像越しに黒兜へと向ける。
『アタイだって面倒な会議なんざ誰かに放り投げて鍛冶場に籠って居たかったさ。他の参加陣営がしっかりと頭を揃えてくるっていうから、筋を通すためにも出張って来たんだ。アンタ達の処だけ名代が務めるってのはどうにもケツの据わりが悪い話だよ』
人類種の代表二名に、誤魔化しは許さんとばかりに強い眼差しで見据えられ、《亡霊》は束の間、考え込むように無言になった。

会談が始まって直ぐのバチバチした空気に、うへぇ、といった表情のシア。
剣呑な雰囲気のやり取りに、ハラハラとした様子でそれを見守るリア。
皇帝の背後に控える隊長ちゃんも、手を後ろに組んで不動のままではあるが、会合の雲行きを案じているのか、微かに眉間に皺が寄っている。
平然としていつも通りにニコニコと笑ってるのは、教皇の爺さんくらいだった。
一方で俺はと言うと――ぶっちゃけ魔族領が《亡霊》を代表としてきた理由に察しがついている。
いや、だってさぁ……。
あの《魔王（ロ○コン）》に座って大人しく会議とか無理じゃね？
ぶっちゃけた思考を脳裏に走らせたと同時だった。
《亡霊》の執務室を映したらしき映像から豪快に扉をあけ放つ音が届き、次いで慌てた様な誰かの声が響いてくる。
『筆頭補佐ぁ！　大変です！　筆頭が拘束を破壊して抜け出しました！』
『――！　ちょ、ちょっと失礼、直ぐに戻ります』
泰然とした態度を崩さなかった《亡霊》が動揺した様子を見せ、席から立ち上がって画面から姿を消した。
残された者達はそれぞれに困惑した顔を見合わせて、バタバタとした喧噪と共に聞こ

える音声に耳を傾ける。

『あと半日は動けないと思いましたが……見積りが甘すぎたか……！　対竜兵装を全て起動しろ！　必要なら区画ごと灰にして構わん！』

『もうとっくに起動しましたけど、全部ぶっ壊されましたぁ！　城を出て街に出ちまいそうです！』

『行先は!?』

『昨日と同じ、孤児院の視察（）です！　可愛い幼女が入園したとかクソ嬉しそうにほざいてました!!』

『……あの腐れロ○コンフェニックスがぁぁぁぁぁっ!!　こうならない様に大型魔獣の致死量六十倍の麻痺毒を打ち込んでおいたというのに、台無しだよ糞ァ!!』

『補佐！　医務室から急伝です！　第五席（狂槍）殿と第六席（赤剣）殿が足止めに出てくれました！』

『……ッ！　無理をさせますね！　他の《災禍》は!?』

『第三席（万器）が首都外周から王城に向け、現在猛ダッシュで向かっているそうです！　殲滅級の極大魔法を用意しろと指示が来ましたが……如何なさいますか!?』

『速やかに用意を！　あの三名なら足止めも可能です！　城門前で動きを止めさせて、城門周辺ごと消し飛ばすつもりで撃ち込め！　それなら鎮圧できる筈！』

キレ散らかした《亡霊》の怒声混じりの指示が、遠話ごしに暫し響き。

『――大変お待たせしました、重要な会談だというのに身勝手な中座の程、まことに申し訳ありません』

数分後、画面越しでも空気が震える様な轟音が聞こえると、ようやく戻って来た《亡霊》が再度、席に着く前に深々と頭を下げた。

『あ、うん。なんというか、お疲れ』

先程までの苛立ちが遥か彼方に消し飛んだ様子で、下げられたままの黒兜に包まれた頭部へと、どこか優しい口調で声をかける皇帝陛下。

ファーネスが目頭を押さえながら、もし互いが同じ場所にいれば軽く肩でもたたいてやりそうな慈愛に満ちた所作と共に、《亡霊》へと暖かな眼差しを向ける。

『アタイに出来る事なんて鍛冶仕事くらいだけど、まぁ、なんだ……今度アンタの武具を見てやるよ。今は帝国の工房にいるから、そのうち魔族領にも顔を出してやるさ』

『は、はぁ……どうも、お気遣いありがとうございます?』

急に軟化した二人の態度に面食らったのか、困惑した様子で《亡霊》が礼を述べた――先程漏れ聞こえたドタバタは、おそらく彼にとっては日常的な事なのだろう。こんな

んファーネスじゃなくても目頭が熱くなるわ。

トイルと仲が良いらしい筆頭補佐殿だが、その理由に大いに納得が行った。

遠く離れた聖都からでは応援することしか出来んが……うん、無理のない範囲で頑張ってくれ。魔族は頑丈だとよく聞くけど、必要なら胃薬とかも処方してもらってな？

一連のやり取りを眺めていた教皇が、満足そうに一つ頷き、「さて」と切り出す。

「各々の挨拶も終わった事だし、今回の議題に入っても良いかな？　――あぁ、一応確認しておくけど、帝国とドワーフ氏族の御二人も今の顔触れに不服は無いということでよいだろうか？」

『無いな。むしろ《亡霊（コイツ）》で良かった……いやマジで』

『アタイも無いよ。文句がある奴がいるなら黙らせてやるさ』

その会話を聞いていたリアが、ちょいちょいと俺の袖を引っ張った。

「ねぇ、にいちゃんにいちゃん」

なんだい、アリアくん。

「さっきの《亡霊》さんのとこのゴタゴタ……《魔王》様って普段からあんな感じなのかなぁ？」

あぁ、リアは会った事無かったな……うん、まぁあんな感じです。それほど深い交流ある訳じゃ無いけど、以前会ったときもマジでさっき漏れ聞こえた内容のままの言動

だったぞ。

「いや、ボクが《魔王》様と会った事ないのって、にいちゃんとレティシアが二人して魔族領に連れて行ってくれなかったからじゃん……今日、なんとなく理由がわかったけど」

おう。まぁ今のお前さんなら、顔を会わせても大丈夫だと思うけどな。年齢的な意味で。

大戦中にもし奴とリアが顔を会わせていたら――最悪の場合、俺は邪神の前に《魔王》を命がけで討伐せねばならなかったかもしれない（真顔

あの野郎の理不尽な不死身っぷりとバグキャラっぷりは人外級の中でも更に飛びぬけている。殺るなら切り札の運用を視野にいれないといけないレベルで。

なので、何としてでも俺とシアは《魔王》と可愛い妹（おとうと）分を会わせる訳にはいかなかったのである。

「……《亡霊》も大変だよな。あの変態の代わりに魔族領を仕切って、定期的な奴の暴走を鎮圧してるんだから」

俺とリアの会話を聞いていたシアが、ぼそりと呟いて話に加わって来た。

魔族領のお偉いさんといえば、女侯爵もそうだったが……あそこの連中はとにかく濃ゆい。だからこそ、比較的常識人な《亡霊》みたいな奴が苦労するポジションにはめ込

まれるんだろうね。

「……やっぱり、オレとしてはアリアを魔族領には連れて行きたくないな。前にお前と領内に入ったときも、「ちょっとコレ飲んでみないか？」とかいって若返りの薬とやらを渡されたし……本物かどうか分からなかったし、その場で地面に捨てて魔法で焼き払ってやったけど」

よーし、あのクソ鳥、いつか●す。自分の腸で縄跳びさせた後に樹の枝から《ぶら下がり運動》させてやる。

遠く離れた変態から庇おうと無意識に二人を抱き寄せようとして――はたと気付いて慌てて身を離した。危ねぇ、会談の真っ最中だよそういえば。

何故か不満そうな顔になった二人から、会談の進行役である爺様へと視線を向ける。

偶然か、それとも此方を見ていたのか。

俺と教皇の視線が一瞬交差し、いつもののんびりとした――だが、腹の底の読めない笑顔のまま、爺さんは本日の議題……今回の会談の発端となったらしき書面を取り出し、前置きを一つ。

「さて、本日こうして人類種の代表枠たる方々に集まってもらったのは他でもない――この場に唯一、揃っていない種族、エルフについてだよ」

そうして、書状――おそらくはエルフ達から送られた親書の類であろうソレの内容

を、端的に告げた。

「戦時中に彼らの聖地たる大陸中央の大森林に引っ込んでしまったエルフだけど、最近、動きがあった。聖地の中心……嘗て女神が降臨されたと言われる界樹の異変を、可能なら止めて欲しい、との事だ」

人類種首脳会談（後編）

エルフの聖地、ねぇ。

彼らについては、俺はそんなに詳しくない。

いや、他の種族に関してだって造詣が深いって訳では無いんだけど、単純に関わる事が少なかった為、特に知ってる事の少ない種族だと言って良いだろう。

なにせ俺――というか近年にこの世界にやってきた転移・転生者にとっては、『偶に個人で戦争に加わってるのは見るけど、集団としては昔から引き籠ってるらしい連中』って感じの認識だからね。

なんでも、彼らが自分達の聖地たる大森林に籠ったのはウン十年も前――ミラ婆ちゃんがバリバリ現役だった頃の話らしい。当人が以前そう言ってた。

元から種族を越えた連携や、遠地への助力に消極的だったらしいが、ある一件を切欠に参戦していた森林周辺の戦地からまで兵を退いて、種族的、組織的な繋がりはほぼ完全に途切れたそうだ。

今では、大森林から個人的に出て来た者や、外でお相手を作った者の子孫であるハー

フエルフなどをたまーに見かける程度である。
『議論に入る前に言っておくぞ。余はぶっちゃけ無視するべきだと思ってるからな』
「ふむ、スヴェリア殿はエルフ（かれら）への助力は反対、と――一応理由を聞いてもよいかな？」
議題自体は、各代表ともに周知済みだったみたいだが、それでも嫌な事を聞いた、と言わんばかりの顰めっ面で皇帝が拒絶の意を示す。
『ハッ、分かり切ったことを聞くなよ教皇。ロクでもない生存競争が終わって、やっと内政に注力を始めた時期に、あんな面倒くさい連中と関わっていられるか。時間の無駄だ』
『まぁ、アタイも消極的反対、ってやつだねぇ。というか、連中だってアタイらドワーフを自分のお膝元に招くのは嫌がるだろうしね。助けに向かって別の火種を撒いてくるなんてオチはごめんだよ』
エルフとドワーフの仲がよろしくない、というのはファンタジーではお約束なところだが……この世界でもそれは適用されるらしい。
露骨に嫌そうな皇帝と違って、興味が薄いと言うか、関わりを持ちたがらないというか……ファーネスの態度は酷く冷めたものですらあった。
『連中が戦線を放棄したせいで、当時、ドワーフは大分しんどい思いをしたからね。ヴェティ坊が教国から人員を追加で送ってくれなかったらどうなっていたことやら……今

更困ってます、なんて言われても『だから？』で終わっちまうよ』
「なるほどねぇ……まぁ、ファーネス殿は立場上、反対するのは当然と言えるね……して、魔族領はどういった意見なのか伺ってもよろしいかな？」
教皇に水を向けられ、《亡霊》が思案する様に腕を組んだ。
『我らとしては、嘗ての一件に同族が関わっていたという負い目もありますからね。あちらが受け入れる度量があるというのであれば、協力も吝かでは無い、とだけ』
『連中に一番毛嫌いされているのは魔族（オマエたち）だろうに。律儀も過ぎると弱腰と取られかねんぞ？』
意外にも、消極的ながらも助力に賛成の意を示した《亡霊》に、呆れと忠告をブレンドした言葉を差し挟む皇帝陛下。
シアさん、シアさん。
俺はシアの僧服の裾をちょいちょいと引っ張って耳打ちする。
エルフ達が引き籠った一件って、魔族が関わってたの？　何気に初耳なんですけど。
声量を押さえた内緒話っぽく問いかけると、シアも同じように声を押さえて教えてくれる。
「あぁ、お前は知らないのか。その一件に関しての詳細は、魔族への風評被害が酷くなるって事で、ある程度伏せられてるらしいんだよ。オレも人づてに聞いただけなんだけ

どさ」

俺の知ってる内容だと、エルフの御神木的なものが、邪神の軍勢の工作で酷い汚染を受けたとかなんとか。それで除染と解呪に全ブッパしようとしたエルフが、前フリも事前の連絡も無しにいきなり投入してた人員を引き上げたって聞いてるけど……。

「うん、その御神木が今回の議題にも上がった”界樹”だな。で、当時、大森林に襲撃をかけた邪神の信奉者達を主導したのが、魔族領に属さない野良やはぐれの魔族の集団だったらしい」

俺達は当事者では無いが、その後の時代の人間としてゴタゴタの皺寄せを喰った側だ。苦々しい過去でも思い出したのか、此方の耳元に口を寄せて囁くシアの顔は、どこか遠い眼をしていた。

「その一件が尾を引いて、結局大戦が終わるまで魔族領が殆ど孤立してたんだから、情報規制とやらもあんまり意味無かったよなぁ……」

以前俺達が魔族領に向かったのも、総力戦に向けての協力依頼以外に、各国との連携を復活させる狙いもあったって事か。教国が仲立ちして聖女が主導したともなれば、他の国も多少なりとも襟元を開くだろうしね。納得のいく話だ。

シアの言う通り孤立しているにも関わらず、何十年もの間、同族の信奉者達の手によって散発的なテロや内乱じみたゴダゴタをひっきりなしに起こされていたらしい嘗

ての魔族領の惨状を思い返す。
魔族領は人口という点で見れば、北方に無数にある小国と大差無いが、種族として人間より魔力体力に秀でている者が多い為、戦力という点では決して侮れない。
というか、最高幹部の連中が全員人外級というぶっ壊れ集団だ。侮れない処の話じゃないんだよね。
だからこそ、という事なんだろう。
邪神の上位眷属とだって単騎で戦える奴を多く抱え込む集団は、邪神の軍勢にとってはさぞ目障りで、警戒すべき脅威だったに違いない。
なので、様々な手を打って人類種の連合から、魔族を切り離しにかかった。
更に領内を適度に荒れさせる事で、治安と国力の維持の為に最大戦力を自陣から動けなくさせる――嫌らしいが、有効な手ではある。
邪神と直接対峙し、戦った今なら分かる。
おそらく、奴は《魔王》にフリーハンドを与えるのを徹底的に避けたのだ。
終わってるレベルのロリ○ン野郎ではあるが、自身の縄張りであると認識した領内と、そこに住む民の為ならばどんな相手であれ叩き斬る、という気概を持ち合わせた男であるのも確かである。ロ○コンだけど。
自分の住処とその周辺がちょっかいを出されたのなら、なんだかんだといってそれを

治める為に奔走するだろう。

一方で、あの邪神(クソ)は神格の癖に、お師匠との争いを避ける為に人間が作り出した不可侵ルールに乗っかって、霊峰周辺を非戦区域としたような臆病者だ。

師、《半龍姫》と同じく、自身と戦って勝利し得る突出した力を持つ超越者(そんざい)を知り、ソレと自分が相対する事になる可能性を念入りに排除した、といった処だろう。

企み通り、警戒対象の二人を自身から遠ざける事に成功した邪神も、或いは安堵してたのかもしれんね。

結果的には、警戒どころか道端の雑草程度にも認識してなかった凡骨(俺)に唐突に殺られたけどな！　ざまぁ（笑）。

……話が逸れたな、うん。

大体の事情は分かった。要は魔族領は元は同族って以外は特に関りもない連中のやらかしのせいで、つい最近まで各国からハブられてた上に、エルフには下手人共といっしょくたの最悪の戦犯扱いされてるって訳だ。

……どっちかというと被害者側じゃね？　これを叩くのは無理があると思う。

そもそも、信奉者の大部分は人間だぞ。同じ理屈で言うなら人間が他の種族から敬遠される事になる。

人類種で一番数が多いのが人間だから、排除されるマイノリティ側にはならないって

だけやろ。

やや長考になったが、考えを纏めきってシアに伝えてみると「だよなぁ、オレもそう思う」というお言葉と共に我が友人もこっくりと頷いてくれた。

『おーい、そこでくっついてる三人。仲良く内緒話するのは結構だが、少しはこっちも気にしろ。後ろで余の部下の機嫌が悪くてかなわん』

皇帝陛下の呆れた様な声で、シアとこそこそ話に興じてる間に、リアが背中側にぴたりとくっついてるのに漸く気が付いた。いや、なにしてんのアリアさん。

「うん？　二人だけ仲良くおしゃべりしてるから、ずるいなーって。なのでにいちゃんにくっついてみました」

「い、いつの間に……お前ほんっと抜け目なくなったよな」

シアのツッコミもなんのその、えっへんと何故か胸を張る妹分（おとうと）はとても可愛らしくて結構なんですが……周りの目も気にしようね！

会談が始まった最初のうちこそ緊張した様子をみせていたリアだったが、全員顔見知りな上に、割とくだけた雰囲気であると判断して身内ノリに戻ったらしい。相変わらず順応性タカァイ！

『別に良いじゃないか帝国の。こいつらは三人揃うといつもこんな感じだろ？　初々しくて微笑ましいじゃないか』

『和気藹々としたボディタッチ程度で済むのなら何も問題ないのでは？　会議・会合というと会場が消し飛んで数回、場が変わることも多いですし』

『国内でも三指に入る腕っこき部下の不機嫌丸出しのプレッシャーを、背中に浴び続ける余の身にもなれって話だよ。あと《亡霊》、お前の言うそれは絶対会議じゃない』

皇帝陛下の言うことも御尤もなんだが、危険物扱いされてる隊長ちゃんの機嫌が更に下降してるのは指摘してやったほうがいいんだろうか。

声にこそだしてないが、唇の動きからして「両側……」って呟いたよね絶対。

各種族の代表者三名による漫才染みたやり取りが交わされている訳だが、相変わらずの胡散臭いスマイルで眺めていた爺様が、改めて逸れた話を修正した。

「教国としては《亡霊》殿の意見に近い。なので、賛成と反対が二票ずつとなった訳だけど……少々切り口を変えてみようか。一同、エルフからの親書に対する反応は二通目に対するもの、ということで宜しいのかな？」

理由は分からんが、教皇の問いかけは劇薬の類だったらしい。

全員、一斉に無言になった。

皇帝陛下は半笑いだが、その笑みの質は物騒な類のソレだし、ファーネスに至っては普段の快活な姉御肌といった雰囲気が完全に行方不明――怒りを押し殺した無表情になっとる。

助力に賛成した《亡霊》ですら、兜越しでも分かる苦々しさを堪えた空気を出して、頭を振っていた。

めっちゃ空気悪い。なぁにこれぇ。

俺と同じ気持ちだったのか、困惑した声色でリアがおそるおそる切り出した。

「えぇと……二通目ってことは、一通目もあるってことですよね……？　そんなに内容に差があったんですか？」

「まぁ、ユニークというか、独創的な内容だったのは確かだねぇ」

唯一、笑顔のままであった教皇がのんびりとした口調で応えるが……これ、微妙に爺さんも不機嫌になってない？　自分から切り出した話題でセルフでキレはじめるって何書いてあったらそうなるんだよ。

『少なくとも一通目が親書と呼べる類では無かったのは確かだな。訂正と謝罪の文面が載った二通目が即座に送られてこなければ、そもそもこの会談自体が開かれていないだろうよ』

半笑いのまま言葉を吐き捨てるという器用な真似をしてのけた皇帝に、無言のままではあるが他の二名も同意している様だ。

玉座に勢いよく背を預けるとその一通目の親書とやらの内容を思い出していたのか、虚空を睨みつけながら彼は再度口を開く。

『どうせ最初の親書もこの場に持ち込んでいるんだろう？　この際だ、アンタのトコの聖女とその猟犬にも見せてやったらどうだ？』

初見は笑えるぞ。少なくとも余は笑った。と、たっぷりの皮肉が籠った笑みを浮かべて言う皇帝の言に、爺さんがちょっと考え込んで動きを止めた。

答えは割かし直ぐに出た様だ。

「そうだね。どちらの書状にせよ、彼女達には関りのある話だ。エルフ達の現状をこれ以上無く示してる良い例でもあるしね」

そういうと、懐から別の書状――一通目の親書とやらを取り出して、こちらに差し出してくる。

代表してシアが受け取り、何が書いてあるのかと首を傾げながら俺達は揃って書かれている内容を覗き込んだ。

――各種族代表者三名に倣うが如く、思わず無言になる。

ざっと目を通すと、俺達三人は何度も瞬きし、目頭を軽く揉み解して再度書面に眼をやって……絶句した。するしかなかったと言い替えてもいい。

まず文体からして、困窮しているが故の懇願や嘆願ではなく、要請。ともすれば命令に近い上から目線だった。

もうこの時点で曲がりなりにも国相手に送る書状としては０点なんだが、書かれてる

内容も凄い。

彼ら曰く、偉大なる界樹の浄化という崇高な使命に協力『させてやる』為の代償として、以下のような条件が挙げられていた。

・教国はエルフ陣営へ聖女二人を移籍させる事。

・帝国には只の人間を聖地に招きいれる対価として、森では入手困難な物資の融通と、大森林及びその周辺での邪神の軍勢の残党狩りを要求する。

・ドワーフを聖地に入れるなど有り得ないので、潤沢に揃えた武具を用意して供出すべし。

・魔族領は過去の同族のやらかしの責任を問い、最高幹部全員の首級を以て贖いとする。

あ　か　ん（白目

物凄く控え目に、かつオブラートに十重二十重に包んで、なるべく穏便な感想を言わせてもらう。

馬鹿じゃねーの？（真顔

親書じゃなくて全力で中指立てた宣戦布告だろこれ。え、マジでこれを送って来たの？　ドッキリとかじゃなくて？

『マジなんだよ、これがエルフの――とりわけ、森に籠って外に出た事の無い奴らの

基本姿勢(デフォルト)なんだ――笑えるだろ？』

笑えねーよ、欠片も。

皇帝の濃度高すぎて結晶化すら起こしそうな高密度の皮肉の籠った言葉に、思わず素で返してしまった。

我ながら流石に礼に欠けていた態度だと思ったんだが、寧ろ彼はその気持ちは分かるぞ、と言わんばかりに大きく頷いて過去に思いを馳せる。

『外に出て来たエルフは、多少鼻っ柱が高いが至極まともなのばっかりだからな。それを基準にすると痛い目を見る』

一瞬、懐かし気に細められた双眸は、直ぐに不快な記憶で塗り潰されたのか険しいものに変わった。

『余が国内を纏める際に、協力を得ようと大森林の連中と交渉を持ったこともあったが……言葉が通じているのに会話が成立しないという摩訶不思議を味わうハメになったぞ』

『魔族領(ウチ)に至っては、一通目を読んだ筆頭どころか幹部の殆どがウッキウキで「よっしゃ、次はエルフと喧嘩だな！　これから毎日大森林を焼こうぜ！」とか言い出してフル武装で出撃しようとしましたよ……』

『もしアンタのトコが真っ先に連中と事を構えだしたら、アタイ達は魔族領に武器を『供

出』していただろうねぇ』

魔族領といい、ドワーフといい、対応がガチだけどエルフの行いが残当過ぎて何も言えない。

ドワーフから武装全般の支援を受けた、超越者の領域に片足突っ込んだロリコンが率いる十人近い人外級とか、数日とかけずにエルフが森ごと消滅する未来しか見えないんですけど。

此処で会談してるってことは、火の付いた幹部連中を何とか止めたってことだよな？

頑張ったんだな《亡霊》ェ……。

「まぁ、最初はこんな感じでね。教国としても無視しようとしたんだけど、数日としない内に二通目の親書が届いてねぇ……最初の書状の非礼を丁寧に詫びると共に、ごく真っ当な文と内容だったから、こうして同じモノが届いた国同士で会談と相成った訳さ」

爺様が珍しく苦味を含んだ笑いで締めくくるが……交渉テクの一環として敢えて時間差で二通送って来たって訳ではないんだよな？　こう言っちゃなんだが、一通目は馬鹿のフリしてるだけのまともな人間には書けない真性感が滲み出てたし。

親書を眺めたまま、考え込んでいた様子のシアがポツリと零した。

「……察するに、派閥の違いってヤツか？」

「うん、御明察」

あっさりと、教皇――否、彼だけでなく他の首脳陣も答えをとうに知っていたのか、揃って頷いた。

その後に語られた事をざっくりと纏めると――現在、エルフ達は二つの派閥に分かれている。

考えや行動方針の大きな違いにより、少なからず軋轢が生じているらしい。

一通目を送ってきた、所謂、古からのしきたりや思想を受け継ぐ保守派。

界樹を中心とする聖地こそが世界の始まりであり、創造神にかの地の管理を任されたエルフが最も神に愛された種である。という思想の下に、大森林を生誕と終の場所としてそこで生き続ける者達。

尤も、保守派と呼ばれる現在のエルフの長老衆の考え自体に相当偏りがあるらしく、しきたりや掟自体には選民思想の類は無いらしい。老害ェ……。

んで、一通目が送られると、慌てて二通目のまっとうな親書を送って来たのが開明派。

これは森の外にでた経験のあるエルフや、外界に出た事がなくとも入ってくる知識や情報、自身の知見を以て外の人類種に近い感性を有するに至った者達――比較的若い集団によって形成された派閥としては近年形成されたばかりの集団だ。

当初は派閥と呼べるような人数では無かった様だが、件の信奉者による大森林襲撃の後、森に引き籠る間に急速に数を増やしたのだそうだ。

界樹が邪気によって汚染される前は、保守派も消極的ではあったが一応大戦に参加していた。

そこで派遣されることになった保守派のエルフの戦士達が、近隣ではあるが森の外に出て、外の世界に触れ、其処に生きる者達を知り、ときとして共に戦ったことで長老衆の主張に違和感を覚え、開明派に迎合。

結果として、両派閥が互いを無視できない程度には危うい力関係を持つに至った、ってね。

……正直に言わせてもらおう、面倒くさっ。

保守派はまともな外交感覚を有していないので論外としても、開明派とやらも今回の一件を利用してエルフ内でのパワーバランスを自分達に傾けようとする思惑が透けて見える。

いや、人類種を代表するお歴々にとっては、それなり以上に重要な議題だろうよ。個々のエルフに向ける感情は置いておくとして。

――そんじゃ、俺とシアリアが呼ばれた理由は何だよって話だ。まさか俺が再転生してきたのを今回の首脳陣三人に確認させる為だけじゃあるまいに。

「今回の一件で、エルフ――正確には開明派の彼らに力を貸す事になった場合、教国からはキミ達を派遣しようと思ってたからね。現状、賛成二と反対二で膠着してるけど」

俺が渋い顔をしていたことで察したのか、あっさりと教皇が俺達三人を今回の会談に巻き込んだ理由を告げてくる。

『そこの珍しく仕事をしてる昼行燈は、これを機にエルフの老害連中にテコ入れしたいんだろうが――余はまっぴらごめんだ。界樹に関しては神代から存在する天然の貴重な遺物だ、助力してやらんこともないが……それも連中の内輪揉めが、自分達の手で片付いたらの話だな』

『ドワーフの意見は最初にいったまんまさ。協力するって決が出たってんなら、派遣される人員の装備の面倒くらいは見るけど、直接参加する気は無いよ』

魔族領が連中に喧嘩売るってんなら尻馬に乗るまである、と言ってのける皇帝陛下と、火も金気も無い場所に長期遠征なぞごめんだしね、と肩をすくめるファーネス。

一方で、その喧嘩の勃発を必死こいて止めたと思われる《亡霊》が「売らないから。唆すような言動やめてくださいね？　お願いですからマジでやめろよ、フリじゃねぇからな!?」と、ちょっとキャラが崩れるレベルのガチトーンで叫んでいる。

経緯も語り終え、各自の意見もしっかりと示された。

教皇の爺さんは、その上で、と前置きし。

「うん。各国、皆々の立場も思惑もあるとは思う。だけど、敢えて言わせて貰おう――今回の一件、エルフに、開明派に協力すべきだ、とね」

胸に手をあて、珍しく真面目な表情を以て紡がれた言葉に、特に驚きの声や反発する声は上がらなかった。

寧ろ予想が付いていた、といわんばかりに皇帝が鼻を鳴らす。

『ハッ、珍しくアンタが音頭を取ると言い出した時点で、察しはついていたとも――一つだけ、聞かせろ。未来視したのか？』

その問いかけに、最初からこの会談の結果を予期していたのであろう狸爺は、いつもの腹の底の読めない笑顔ではなく、ニヤリと、特大の悪戯をしかける小僧っ子の如き笑みを浮かべて応えた。

「そうだね、スヴェリア殿が好みそうな言葉でいうのなら……最高にスカっとする絵面ではあったよ」

『――なら、決まりだな』

同じくニヤリと悪い笑みを返して、皇帝陛下が力強く頷き返す。

『帝国からは《刃衆》を何振りか出そう。いけるな？』

最後の問いかけに答え、背後に控えていた隊長ちゃんが頷いた。

『了解しました陛下。人選はこちらで判断しても？』

『一応、有用な人材を送ったと対外的に示す必要がある。お前は確定だ。あとは好きにしろ』

あっさりと賛成に乗り換えたらしき帝国を見て、ドワーフ代表たるファーネスは苦笑いと共にそれを受け入れる。

『ま、これで三対一。決が出たってんならアタイに文句はないさ――全員、無事に戻って来れるようにしっかり武具を整備してやるから気張りなよ』

『……魔族領は《災禍の席（幹部連中）》から人員を出すと、保守派の神経を逆撫でしかねませんからね。向こうがある程度受け入れ易いであろう人員を選出しますよ』

おそらく、会談の結果如何によっては困った身内共による大森林カチコミパーティーが開催される可能性もあったのだろう。

界樹に関する一件の助力を兼ねた使者を送る事が決まると、《亡霊》は露骨に安堵した様子で肩から力を抜いていた。

「では、先程言った通り。教国からはキミ達三人が使者と助力の為の人員として送られることになる……引き受けて貰えるかな？　《金色の聖女》殿に《銀麗の聖女》殿。そして《聖女の猟犬》よ」

会談の〆とばかりに順繰りに此方の顔を見渡して、相変わらずの人をくった笑みを浮かべている教皇（ジイさん）に、俺達は顔を見合わせて苦笑し、応えた。

「あぁ、分かりましたよ、これも聖女のお勤めってね」

「三人で遠出も久しぶりだね、正直、ボクは楽しみ！」

――仕事だっていうなら報酬出してください、現状俺ってヒモかプー太郎に近いんで。

そんなこんなで。

霊峰から戻ってそう日も置かぬ内ではあるが、俺達は大陸中央にあるエルフ達の聖地へと向かうことになったのである。

顔合わせ

さて、会談から数日。早々に準備を終えた俺達は、聖都城門前にて各国の使者と合流していた。

最初はそれぞれの国から大陸中央へ向けて出発し、途中の街で合流するもんだと思っていたが、エルフ達の保守派のアレっぷりを考えればトラブルが起こるのは必至だ。

今回参加する面子同士で協力して事に当たる為にも、移動までの時間でしっかりコミュニケーションを深めるべしと、聖都に集合の後、皆で仲良く出発ってことになった。

今回の遠出は他国も絡む事だし、てっきり時間の節約を兼ねて飛竜便で移動するのかと思ったんだけど……そうなると、騎乗生物に拒絶されるマンな俺は飛竜の脚に長い縄をぶら下げてそこにしがみ付くという、罰ゲームみたいな移動方法になるんだよね。

戦時中は移動方法で贅沢言ってられる状況じゃなかったので、別に構わなかったんだが……今回はシアとリア、あと隊長ちゃんも、俺一人が空中ブランコ物理的ぶらり旅なのはＮＧと主張した為、馬車での移動になる。なんだか有難いやら申し訳ないやら。

あ、そうそう。今回の遠征の間だけだが、副官ちゃんは帝国に戻ることになったらしい。

隊長ちゃんがこっちに参加する間、トップが不在になる《刃衆（エッジス）》を纏める為だそうだ。

『隊長とすれ違いで顔も合わせられないとか、世界が私に優しくない――この際だし、帰ったら部隊（ウチ）の奴らが腑抜けてないかしっかり確認してやるわ』

据わった目で帰国の準備を進めながら、低い声で呟いていた彼女を思い出して思わず刃衆（エッジス）の連中へと合掌した。強く生きてね！　頑張れ最精鋭！

なんて事を考えつつ、城門脇に止めた馬車に積み込んだ旅の荷をチェックしていると、帝国からの面子――隊長ちゃんと彼女の部下である青年一人が到着した。

二人か。思ったより人数絞ったね。いうて俺達も三人だし、魔族領も二人らしいから、特段少ないって訳でも無いけど。

取り敢えずは挨拶だ。俺は荷の確認を一時中断して、二人に向けて軽く片手をあげて振る。

おっすおっす。遠話の魔道具で顔は合わせたけど、生身ではお久しぶりだね隊長ちゃん。

「はい、お久しぶりです先輩。今回はよろしくお願いしますね」

こちらこそよろしく。一緒に仕事するのは久しぶりだけど、頼りにしてるよ。マジ

で。

任せて下さい、二年前より少しは腕をあげたつもりなんですよ？　と悪戯っぽく笑う隊長ちゃんではあるが、副官ちゃんがかなり鍛え込んでいた事も加味すれば、彼女の上司である隊長ちゃんも少し処じゃなく強くなってそうやなぁ。元から転移・転生者組の中でもウチの聖女二人（シアリア）に匹敵するレベルの才能マンだし。

まぁ、今回の件はどう考えても厄介事になりそうな話だし、その腕前を見せてもらう機会はあるだろう。

取り敢えず、二人とも馬車の中に入る？　シアとリアは魔族領の人員を迎えに行ってるから直ぐに戻ってくると思うし。

「直ぐに戻ってくるというのなら、このまま外で待たせて頂きます……できればアンナちゃんに挨拶しておきたかったんですけど」

残念。今日、朝一の飛竜便で出ちゃったよ。自分が聖都（こっち）にいる間に部隊の奴等が鈍ってないか、確認してやるってめっちゃ気合入ってたで。

「……帰って来て早々、遠征任務も酷いと思ったッスけど、残ったら残ったで副長のシゴキが待ってるンスか……あ、こっちの方がマシだわ」

おぉっと、言うね。これは後で副官ちゃんに報告せざるを得ない。

「やめてください旦那、本気でやめて!?」

茶化した俺の言葉に割とマジな悲鳴をあげたのは、暗金の髪を短く刈り込んだ青年――どこか狐を思わせる細目は、今は見開かれて俺を翻意させようとする必死な意思に溢れていた。

今回、隊長ちゃんと一緒に大森林へと同行することになった彼の名はトニー＝レイザー。

霊峰からの帰路で起こった、ちょっとしたドタバタ劇の際に面識を得る事となった人物で《刃衆（エッジス）》での裏方に近い仕事を務めているらしい。

以前出会ったときは、邪神の信奉者達と繋がりのある貴族への内偵を進めていた最中で、格好も質の低い私兵団に合わせた硬革（ハードレザー）の軽装だったんだが、今は部隊の正式装備である魔装処理が施された騎士鎧とコート――隊長ちゃんの装備をちょっとグレードダウンさせたような装備に身を包んでいる。

ちなみに隊長ちゃんは、前に聖都に短期出向してきたときと同じ装備にトニーと同じコートを羽織っていた。赤いラインが一本奔ったデザインなのは部隊のトップ仕様ってことかね。

しっかし、戦闘より潜入や調査が得意らしいトニー君を今回の任務にチョイスしたってことは、場合によってはエルフの弱みやつつける箇所を調べさせる気満々やなぁ。

隊長ちゃんの人選というより、皇帝の意を彼女が汲んでの結果だろう。どんだけエル

フが嫌いやねんあの人。
「トニー君が北方で先輩に仕事を手伝ってもらったって聞いてはいたけど、仲が良いのね。これなら問題無く協力できそうで安心したわ」
「いや、待って下さい隊長。潜入先の伯爵家であわやジェノサイドパーティーになりかけたって自分言ったツスよね？　旦那絡みだと好感度フィルター掛かり過ぎじゃないツスか!?　残党狩りは確かに楽ちんだったツスけど！」
「こ、好感度とか何言ってるのトニー君！　先輩、あまり気にしないで頂けると助かります」
「あっれー!?　どうしよう隊長から普段感じないポンコツ臭が漂ってる!?」
流石は同じ部隊なだけあるね、テンポ良いやり取りだ。
俺が感心して頷いていると、何故だか褒めた筈の片方が頭を抱えて唸りだした。
「旦那も旦那で目の付け処がおかしいくないツスか？　似た者夫婦か何かかアンタら！」
「……トニー君の遠征お手当、奮発してくれる様に経理の人にお願いしなくちゃ」
「わぁい、嬉しいけど素直に喜べない、不思議！」
騒がしく会話を続けていると、シアとリアが魔族領の人員らしき連中を連れて戻って来た。

「お、なんだ。ミヤコ達はもう到着してたのか。これで全員揃ったって事でいいのかな？」
「ミヤコさんお久しぶりー……あ、北方で潜入員してたっていう……えーと、イフェクさん？　だっけ」
「あ、そっからなんスね……自分の本名はトニー＝レイザーです、今回はよろしくお願いします聖女さま方」
こん中では一番下っ端なんで、是非とも呼び捨てにして下さい。自分の胃の為にも。と、至極真顔で挨拶するトニーに首を傾げながらも、まぁ本人が望むのならと聖女二人は頷いた。
実は結構仲が良いらしい隊長ちゃんとリアが、ちいさな声でイェーイとか言いながら軽くハイタッチしてるのを横目に、シアが一歩脇にずれ、後ろの二人に道を譲る。
「こっちの二人が、今回同行する魔族領の使者だ。なんでも、新婚の夫婦らしいからあんまり変な事吹き込むなよ？」
俺がやらかすの前提な発言するのをやめーや。失礼しちゃうわ全く。
進み出た新婚さんらしい二人の内の片方――旦那さんの方は、魔族でもポピュラーな獣の特徴を身体の各所に備えた種族、所謂獣人だった。
ふむ。頭部から生えたケモ耳や、腰の後ろから覗く尻尾からしてネコ科の獣人かね？

鍛え上げられた体躯と、隙の無い立ち姿。魔族として持って生まれた身体性能に驕らず、自らを丁寧に研磨してきた戦士の威風ってやつを感じる。

「……《虎嵐》という……以後、よろしく頼む」

錆の浮いた重低音な声で名乗り、丁寧に頭を下げるその姿は寡黙にして無骨。基本、騒がしい人間に囲まれている俺的には、新鮮だが同時に頼りになる男として映った。

「じゃ、次は私だな」

《虎嵐》に並び立った、彼の嫁さんである女性は……なんとも予想外。エルフだった。

エルフはこれまたテンプレというか、種族的に慎ましやかな体系が多いらしいんだが、胸当て越しでも分かる立派な双丘からして目の前の彼女は例外の様だ。

背中には彼女の種族が好んで使う様な物とは真逆の――重厚な大型の弓を担いでいる。

旦那と同じ様な簡易な旅装に身を包んだ、金髪ポニーテールの女性はニヤリと笑う。

そうして、種族特有の整った顔立ちにやたら漢らしい笑みを浮かべながら、名乗りを上げた。

「名はシグジリアだ。氏族名は捨てたが、一応今回の出先で保守派って呼ばれてる爺婆共の血縁に当たるってことでお呼びがかかった――まぁ、私自身は元・日本人って意識の方が強くてな。そこら辺も踏まえて、旦那共々よろしく頼むよ」

なんともまぁ、数奇な出会いもあったものである。
オレはアリア共々、巡り合わせの妙と言うやつを噛みしめる事となった。
あれから全員の面通しを終え、早速大陸中央に向け出発となったのだが、道行は頗る順調かつ穏やかなものだ。
それも当然。なにせオレ達七人が乗る大型の馬車は、外観は質実剛健な作りではあるが、ドワーフの職人が手掛けた最高級品だ。
下手な馬車だと尻が痛くなるような荒れた道でも、中世じみたファンタジー世界にあるまじき走破性とクッション性を発揮して実に快適に進む。
おまけに、今回一緒に大森林へと向かうことになった三国の紋章が記された小旗が車体の脇で風を受けてはためいている。
乗ってる面子の実力も考慮すれば、馬車を襲うやつなんて皆無だ。精々が襲い掛かる

相手を選ばない、知性の存在しないタイプの魔獣くらいのものである。その程度の相手なら、そもそもオレとアリアが簡易な結界を張るだけで近づけすらしないしな。

オレが貴重な出会いといったのは――魔族領から旦那さんと共にやってきたエルフ、シグジリアの事だ。

彼女は転生者……オレ達と同じ、日本から転生してエルフとなった人物だ。

交流を深める意味も兼ねて、今回の一件の中心であるエルフ達と同族である彼女の簡単な生い立ちを、オレ達は聞く事となった。

といっても、今馬車内にいるのはオレとアリア、ミヤコにシグジリアと、女衆だけなんだけどな。

御者をトニーが買って出て、一人で延々手綱を握るのもなんだろうと、相棒が御者席の隣へ。まぁ、アイツは手綱自体は握れないので、あくまで話し相手のみとしてだろうけど。

《虎嵐》はそもそも車内に腰を下ろすつもりが無いらしく、馬車の屋根にひらりと飛び乗ると、どっかりと胡坐をかいてそのまま不動となった。

密談も可能とした遮音性も高い馬車は、窓を開けない限り内外の声も殆どを遮る。

それでも、微かに御者台と屋根から届くやり取りが聞こえる事から、連中も連中でコミュニケーションは順調な様だ。

氏族名を捨てたといった……この世界での生まれ故郷を捨てたと明言したも同然のシグジリアではあるが、特に気負った様子も無く、己の半生を語る。

「まぁ、挨拶のときにも言ったけど、エルフの中で血筋だけは古いトコの出でな。小さい頃は皆、優しくて敬意を払って接してくれる立派な人達だ、なんて思ってたものさ」

それも長老共の『教育』とやらで外の世界への考えや認識を知るまでだったけどね、と。何処か皮肉気に彼女は笑った。

長老の直系として生まれ、更に転生者――女神の加護を一際強く受けて生まれた子という事で、エルフの里内では何不自由無く暮らせていたこと。

とはいえ、あくまでそれはエルフ達にとっての基準。現代日本からやってきた価値観では、森暮らしは段々と窮屈になってきたこと。

当然、保守派の教えとやらに強い反発を抱いたというのもあるらしい。嘗ての世界での価値観抜きにしても到底受け入れられない年寄りの妄言に、段々とシグジリアの心は生まれた地から離れていったそうだ。

折角異世界に来たというのに、爺婆の教えとやらに唯々諾々と従って一生樹々の中だけで過ごすなどアホらしい、と考えるのは当然の帰結だった。

エルフとして生まれ、その種族特性を強化するような野伏技能（レンジャー）に類する加護を得ていたシグジリアは、あっさりと同胞達の眼を掻い潜り、森の外へ出た。

当時、まだ大戦の真っ只中だ。優れた力を持つ彼女は当然引く手数多。例え当人が拒んだとしても、情勢的にトラブルのほうが進んで彼女を巻き込みにやってくる。

なんだかんだといって、シグジリア自身も民を背に必死に戦う人類側の兵士や戦士達に絆されてしまった事もあって、なし崩しに大戦の渦中へと飛び込んでゆく事となった。

彼女が得意とする、大弓を用いた長距離狙撃を有効に発揮できる戦線を転々としている内に、後方まで陣を押し込まれた戦場にて窮地に陥り、そして。

「夫(アイツ)と出会ったのは、その戦場で助けられたときだった。そのときは、全然意識とかしてなかったんだけど素直に恰好良い、とは思ったよ」

後に彼女の相棒にして夫となる《虎嵐》と出会い、今に至る。という訳だ。

最後に旦那さんの事を語るシグジリアの表情は照れ臭そうで、だけど隠しようもない位に、惚れた男への想いに溢れていて。

馬車の中、その横顔を見て。とても自然に、あぁ、綺麗だな。本当に旦那さんの事が好きなんだな。と思った。

うん、やっぱりこの出会いは奇縁にして良縁だ。

なにせ、転生したら性別が逆になってたという点からしてオレ達と同じだし、その後に戦いの中で唯一無二の相棒と出会ったという処なんて、オレとしてはシンパシーを感

じずにはいられない。

そして何より、何より、だ。

彼女は、自身の相棒として選んだ《虎嵐》と、結ばれるに至っているのである……！

もうこれだけでオレの中でシグジリアは偉大な先達と呼ぶべき人物にカテゴライズされた。

なんだったら肩でも揉んで姐さんと呼びたい位だ。肩凝りの原因になってるぶら下った巨乳（モノ）についてだけは認め難いが。

これはもう是非とも色々と話を聞きたい。正直言えばエルフのゴタゴタなんかより、オレにとってはシグジリアの体験談を聞く方がよほど重要だった。

「うわぁ……いいなぁ、カッコいいね！　シグジリアさんはそのときの事、しっかり覚えてるの？　どんな感じだった？　少しくらいはドキドキしてない？」

アリアも似たようなものだと思う。人懐っこくて大抵の相手と仲良くお喋り出来る奴ではあるけど、今回は話への食い付き方が違うし。

矢継ぎ早にシグジリアに質問を繰り出しながらも眼は虚空に向けられ、その意識は半ば夢想の世界へと旅立っている。

あの馬鹿との過去のやり取りか、出会いでも思い出しているんだろう。気持ちは分かる。なにせオレが現在進行形でそうだからな。

「……帝国でも、戦場で生まれた恋物語を題材にした本や歌劇があるけど、やっぱり本当の体験談となるとリアリティが違うものね」

そんなオレ達を少し苦笑いしてミヤコは見ていたけど、彼女自身もシグジリアの語る、中々にドラマチックな夫婦の馴れ初めには興味津々みたいだ。

結果、馬車内にいる四人は顔を寄せ合い、年長者たるエルフのお姉さんの惚気混じりの赤裸々トークに前のめりになって聞き入る事となった。

……男女で分かれる形の交流になってしまったけれど、まぁ、まだ初日だ。

全員とのしっかりとした意思疎通は明日以降からでも十分に間に合う。なので、今日は女子会、男子会と言う事で、うん。

大森林――エルフの聖地へと向かう道行も、始まりである今日は全く以て平和であり。

穏やかに進む馬車の内と外で、其々に会話を楽しみながら行程と時間は過ぎてゆくのであった。

大森林への旅路の初日。

良く言えば何事もない、穏やかで。

悪く言えば、代り映えのしない退屈な時間は終わり、街道の直ぐ横手にある樹の側に馬車を寄せた俺達は、そのまま野営の準備を始め、そこで夜を明かす事となった。

火を熾して皆で焚火を囲み、軽く雑談しながら簡単な食事を手早く済ます。

旅の中での食事中の団欒といえば、まぁ、仲良くなる為の王道ではあるんだけど……道中で散々にくっちゃべったからね。一日で話題が尽きる訳でも無いが、先は長いんだ。そう急ぎ足でお喋りする必要も無い。

トニーが結構ノリ良く話せるのは既に知っていたが、《虎嵐》の方も話を振れば、短い言葉ながらもきちんと考えて返答してくれるので、意外にも野郎三人でそこそこに話は弾んだ。

特に《虎嵐》は向こうの世界の格闘技とかについてだと、食い付きが良かった気がする。初見のイメージの通り、無骨な戦士といった風であった彼には刺さる話題だった模様。

ま、それも大森林に着くまでに適度に話していくわ。馬車旅の程よい時間の消化にな

るしね。

そんな訳で、明日、日が昇ったら早々に移動を開始しようということで、本日はさっさとお休みの時間となった。

馬車は元より十人程度を載せる事を前提とした大型だ。

おまけに転移者の知識を仕入れているドワーフ達によって、座席にリクライニング機能やスライド変形でソファーベッドになる機能まで追加されている。お高い新幹線のグリーン席かよ。

ベッドに変えると席数は半減するので、寝床は女性陣が使い、俺達は外で野営して地面に毛布を引き、寝っ転がる。

いうて、《虎嵐》は傍にある樹にするするっと登ると、太い幹の上で目を瞑って動かなくなったけどな。流石はネコ科というべきか。

馬車内で眠る面子と、外で寝る面子、各々に就寝の挨拶を交わすと、俺達は全員で普通に夜明けまで眠る事となった。

見張り？　聖女が二人がかりで結界張ったのに必要な訳ねーから。野生の飛竜の群れが襲ってきても朝まで無視して寝ていられるわ。

とはいえ、やはり万が一を考えると全員が熟睡というのもマズイ。大きく動きのある気配があれば眼が覚める程度には浅い眠りを維持して、俺は身体を休めていた。

多分、トニー君や《虎嵐》もおんなじような感じだったと思う。こりゃ明日以降は話し合って交代制にするべきかね。

夜も更けた頃、馬車から出てくる気配を感じで目を覚ましたけど、気配の主――シグジリアは《虎嵐》と同じように音も立てずに樹に登ると、樹上で眠る旦那に覆い被さるように抱き着いて眠り始めたので見ないフリをした。ネコ科の旦那とエルフの嫁。樹の上をベッドにするのはお手の物ってか。

ま、新婚っていってたしね、仕方ないね。

この世界に新婚旅行なんて概念があるとは思えんが、夫婦になってからの初めての遠出先がブッチして出て来た割と本気で捨てた故郷とか、気が滅入る話だろうしな。そら夫とくっついて眠りたくもなるでしょ。

うとうとと微睡みの中で過ごしていたが、微かに空の端が白んで来たのを目に留め、そっと身を起こす。

寝入っている面子を起こさないように結界の外へと出ると、俺は思いっきり伸びをして、欠伸を一つ零し、次いで軽くその場で柔軟体操を始めた。

適度に身体を解すと、次に気息を整え、静かに目を瞑る。

鎧ちゃんを起動させる――訳では無く、だが、その感覚だけを身体から掘り起こし。

呼び起こした感覚と、実際に振るう手足の感覚、それらを擦り合わせるように意識し

ながら、丁寧に魔力を全身に巡らせ、左の足裏から地へ、地を循環させ、右の足裏へ。
植物の根が大地の水を吸い上げるイメージで、静かに、循環させた魔力を心臓へと送り込み全身へ。
そうやって、夜明け前の涼やかで静かな空気の中、《三曜の拳》の自己鍛錬を静かに行っていると背後から唐突に声を掛けられた。
「……先輩の技、《報復（ヴェンジェンス）》が無くても振るえるようになったんですね」
おはよう、と言っていいのかな。まだ夜明けまで時間があるで？
振り向けば、結界の内側から俺の自主練を見ていたらしい隊長ちゃんの姿があった。
正確には、鎧ちゃんが無くても振るえるようになったんじゃなくて、鎧ちゃん使用時に使える技の感覚を引き出せるようになった、って感じなんだよね。
寧ろ、鎧ちゃんの魔鎧としての性能をより深く引き出せる様になったからこそ、待機状態でも感覚を呼び起こせる様になったんだよなぁ……この辺りの進歩はホンマお師匠様々だわ。一月足らずの駆け足修行でよくここまで調整を手伝ってくれたもんだ。
「そうですか……残念です」
静かに呟かれる言葉に、何が、とは聞き返さなかった。
彼女が滅茶苦茶にラブリーマイバディを敵視しているのは知ってるからね。下手に聞くと返事の内容怖い事になるから聞けません（白目

隊長ちゃんは手近に転がっている岩の上に腰を下ろすと、立てた膝の間に顔を埋める――所謂三角座りの体勢になって、首を傾げて横手から俺の顔を見上げてくる。

「……もう、戦争は終わったんです」

合わさっていた視線が伏せられ、隊長ちゃんはどこか拗ねたような口調で独り言の様に言葉を続けた。

「先輩が無理に戦ったり、危ない真似をする必要、無いじゃないですか」

せっかく、元気になって戻って来てくれたのに……と小さく呟く彼女に、俺は苦笑でもって返すことしか出来なかった。

うんまぁ、そうかもしれんけど。

弱っちい癖に、鎧ちゃんにおんぶにだっこのまんまで、いつまで馬鹿やってんだって言う意見も御尤もなんだけど。

俺は、なるべく今の俺のままで居たいんだよ。

シアやリア、ガンテスやミラ婆ちゃん、この世界で出会った戦友達――勿論、副官ちゃんや、隊長ちゃんも。

本当なら、俺じゃどうやっても助けにもなれないような凄い連中が、いつか本当に困ったり、助けが必要になったとき。

直ぐにでも駆けつけられる、手を伸ばして、届かせることが出来る、それが出来る儘

でいたいんだ。
我ながら拗らせたもんだとは思ってるけど――すまんね。多分治らん。
二年前、派手に喧嘩しながら考えてる事を互いにぶちまけあった隊長ちゃんが相手なせいか。
普段はこっぱずかしくて丁寧に腹の中に畳んで仕舞っている本音を、なんとは無しに漏らしてしまう。
「……先輩は、そういうと思ってました」
いつぞやに聞いたセリフを、膝に顔を埋めながら再び零す彼女は、やっぱりどこか拗ねた様な感じで。
御機嫌取りという訳では無いが、俺はこの旅の間に渡そうと思っていた物を、胸のポケットに入れっぱなしであった事を思い出して、それを取り出した。
縦長の、ペンが一本入る程度の頑丈なケース。
心配してくれる事への感謝と、それを無下にしてしまう生き方を選んだ事への謝意を込めて、それを差し出す。
顔を上げた隊長ちゃんは、ケースを受け取り……蓋を開いて中身を見ると、その黒曜石みたいに綺麗な瞳をまぁるくした。
「せんぱい……これ……」

以前に櫛が欲しいって言ってたやん？　あるかもしれん、って言ってた店を覗いてみたんだけど、生憎見つからなくてさぁ……。

予てから行きたいと思っていた、日本の振袖や着物などの服飾を再現している店。シアに案内されて、二人でいざ繰り出してみたは良いものの、隊長ちゃんと約束した品は扱っていなかった。幸い、もう一つ目的であった甚平は作ってくれるみたいなんで、採寸して制作をお願いしてきたんだけどね。

お店の経営者が転移者か、その子孫なのか。

店に出している日本の品々についてもきちんとした知識を持っているらしく、相談に乗ってもらいはしたんだが、肝心の梳き櫛が在庫に無くてね。

で、代わりというか、代替というか。近しい用途でかつ女性へのプレゼントに成りうる品として選んだのが、隊長ちゃんの手の中にある簪だ。

櫛や簪に限らず、女の子の服やその他小物に関する知識なんて殆ど無いも同然ではあるが、店員さんが「簪はその形状から、護り刀にも似た意味のお守りとして渡す場合もある」と教えてくれた事もあって、購入に踏み切った。

俺にそういった小物選びのセンスは皆無だが、隊長ちゃんの綺麗な黒髪に銀細工の本体部分と、桃の花を模した頭部分の鮮やかな玉飾りはさぞ映えるだろうと思ってこのチョイスにしました。

ちなみにアドバイスを貰う為に黒髪の娘に贈る用ですって説明したら、店員さんが凄い真顔で「一緒に来たお嬢さんの分も買っておきましょう」と言ってきたので、圧に負ける形でシアの分も購入している。

いっそその場でどんなデザインが良いか当人に聞こうとしたんだが、圧が三倍増しになった店員さんに止められ、結局自身の足りてないセンスを総動員して二本目も選ぶ羽目になったわい。

隊長ちゃんと違って約束した訳でもなし。渡す機会も見当たらずに、自室の机の肥やしになってるけどね。

無粋だとは思うが、どっちも良いお値段でした……ペン位のサイズなのに、下手な大剣より高いとかやっぱ女性のお洒落ってお金かかるんやなぁ（童貞特有の偏見感

渡すタイミングがこんな時期、こんな時間だったせいか、隊長ちゃんが呆然として銀の輝きを放つ簪を凝視している。

うぅむ……反応が薄くて怖い。や、やっぱり代替品的なものじゃ駄目だったんだろうか。それとも帰って来てから渡した方が良かったのか……!?

なにか重大な失敗をしたのかと、我ながら内心では冷や汗ダラダラものである。

「……レティシアの気持ちが分かった気がします」

暫しの沈黙のあと、彼女の唇から零れた言葉は、やはり二年前のあのときをなぞる様

な台詞で。
けれど、あの時とは違い「そういうトコですよ」と少しだけ意地悪気に付け足すその表情は、とても嬉しそうだった。
……よく分からんが、喜んでもらえたのならオッケー！　勝ったな朝風呂入ってくる！　風呂とか無いけど！
隊長ちゃんは大事そうに簪をひと撫ですると、静かにケースの蓋を閉じてそっと懐にしまう。
ふむ？　今髪に刺したりはしないんだ？　まぁ、旅の空の下で飾るようなモンでもないか。
「ええ、今はちょっと勿体なくて――折角だから、もう少し伸ばしてからにしたいですし」
そう言って、彼女は俺が霊峰に出掛ける前よりも、少しだけ伸びた艶やかな黒髪をかき上げる。
そのまま、軽く反動をつけて岩の上から飛び降りた。
話をしている間に、徐々に街道の地平線から夜の帳を押し退けて来ていた太陽が、辺りを朝焼け色に染め始め。

「だから、先輩――いつかその時がきたら、私の髪にこの簪を刺してくれますか？」

そう言って微笑む、穏やかな朝日に照らされた隊長ちゃんの笑顔はびっくりするほど綺麗だった。

聖地到着

旅は順調、通過する街でも進む道程であっても殆どトラブルらしいトラブルも無く。
大陸中央は大森林、エルフの聖地と呼ばれる地まであと僅か、という処まで俺達はやってきた。
途中、魔獣に襲われていた旅人やら冒険者やらを遠目に見たが、現場に駆け付ける事すら無くシグジリアの狙撃で魔獣が爆砕されて終了である。
彼女は優れた弓手であると同時に、中々に魔法も使える様だ。
本人曰く「一番得意な弓に合わせて魔法を特化させた」というだけあって、凄まじい剛弓を引くための身体強化と、魔力で形成された巨大な矢、この二種のみに絞っているっぽい。
ほぼ純正の魔力で構成された大矢は物理現象による飛距離と威力の減衰が極めて少ない。
矢自体も魔力製なので着弾と同時に炸裂させるも、硬度重視で貫通力をあげるもお手

の物だ。

高所からの援護射撃等に徹する事が出来る環境があれば、そらもうえげつない事になるやろなぁ……。

いやしかし、平和な道行きだった。あんまり何事も無さ過ぎて馬車の上で揺られてるだけなので、身体が鈍らないか心配になった位だった。

順調な旅路とは裏腹に、大森林に近づく内にシグジリアの顔が微妙に険しくなっているのは、まぁ彼女の生い立ちを考えれば仕方ない。そこは旦那さんの《虎嵐》に頑張ってメンタルケアをしてもらうしか無かった。

そういう意味では、彼は道中、十分に仕事をしてくれたと言える。やり過ぎな位に。

最初は初対面の面子に囲まれている旅路ということもあってか、新婚さんという割にはサバサバした距離感だと思ってたが……半月程ほど一緒に旅をしてガードが下がったのか、単に我慢できなくなったのか。

今では砂糖吐きそうな甘い空気でべったりくっついてるのをよく見かける様になった。

今も馬車の屋根の上で座っている《虎嵐》の首にシグジリアが手を廻し、その胡坐の上に横向きに腰掛けてくっついてる。

甘い言葉を囁いたりとかは無いんだよ、ただし距離がめっちゃ近い。お互いの体温を

擦りつけて移し合うような密着加減で、しかも夫婦共に照れるそぶりもなく、素面でそのまま会話に参加してくるっていうね。

女性陣には何故か好評な様で「男ならこういう相手を受け止める度量も要るよな」とか言って、シアの奴までうんうん頷いていた。

俺をチラ見しながら言うのをヤメロォ！　煽りか!?　包容力なんてもんが無いのは自分でも分かってんだよォ！

ベタ甘い空気に薬草茶を水筒に常備するようになったのは、俺とトニーだけである。

大森林に向かう道中で通過した都市にて購入したものだ。かなり苦味が強いが、身体に良い――特に胃腸に効果のあると言われているお茶を気に入ったらしく、毎回早朝の出発準備の度に湯を沸かし、一日分の薬草茶を淹れていたトニー君にはちょっと笑った。健康マニアとかそんな気があるんだろうか。

小器用というかなんというか、水の魔法で手ごろな氷を作り出して水筒を冷やしていたので、俺の分もついでに冷やしてもらったりね。

単独で潜入調査とかやってるだけあって、個人で動く際に便利な技能や小技なんかを多く身に着けているようだ。

《刃衆（エッジス）》に席を置いてるだけあって、腕も充分に立つし、こら確かに有能だわ。

「――見えて来たな、界樹が」

馬車の屋根から少しばかり硬い調子のシグジリアの声が聞こえた。
野伏（レンジャー）として遠見に優れた彼女ではあるが、ここまでくれば俺達でも分かる。
とうに整備された街道は途切れ、でこぼことした荒れた道が続く地平線の向こうには、広大な森。
端から端までどんだけの規模なんだっていうレベルの広い森林群の中心に、縮尺が狂ってるんじゃねーかと思う様な、天を突く巨大な樹木が屹立している。
その周りの樹々も他の樹より相当に背が高い――それこそ、霊峰に生えていた霊樹に匹敵するレベルの巨木なんだが、中心のソレは縦横共にその数倍を優に超え、雲に届かんばかりの威容を見せている。
「うわー……あれが界樹かぁ……凄いねぇ……」
「自分は遠目で何度か見てはいるンすけど、やっぱ何回みても遠近感ぶっ壊れそうなサイズっスねぇ」
馬車の窓から身を乗り出して感嘆の声を上げるリアの言葉に反応し、手綱を握りながら同じく呆れ混じりの感嘆を洩らすトニー。
単純な高さやスケールってだけなら、迫力も合わせて霊峰の景色のほうが上だったが……一本の『樹』単品であのデカさっていうのは浪漫を刺激されるよな。天辺に生えてる葉使ったら死人が蘇ったりしないだろうか。

葉を浸した液体が凄い回復液になったりもしそうだが……そっちは別にいらんか。ベホ〇ズンをボコスカ乱射できるのが身内に二人もいるし。

「凄い景色なのは確かだから、ただの観光なら心から感動できたのでしょうけど……」

「あそこに住んでるのが例の親書とは名ばかりの怪文書を送り付けてきた連中だと考えると、折角の絶景も素直に見れないよなぁ」

リアとは反対側の窓から揃って顔を覗かせた隊長ちゃんとシアが、渋柿を齧ったみたいな表情で界樹を眺めている。

「私からすれば、あそこの連中が一部とはいえまともになったっていうのが信じられないな……記憶にあるのはどいつもこいつもエルフ至上主義なお花畑共ばかりだ」

二人が渋柿なら、シグジリアは苦虫を口いっぱいに噛み潰したが如く、だ。

氏族としての名を捨てた、と言っているだけあって、大森林にいる同族に対する拒絶感は根が深いみたいだね。

無言で《虎嵐》が膝の上に乗った嫁さんを抱きすくめ、その逞しい腕に包まれた彼女の表情が少しだけ柔らかくなる。口の中がジャリジャリしてきたので俺とトニー君は黙って水筒に口を付けて薬草茶を呷った。

何はともあれ、大森林も目の前――あと少しで到着だ。

ここから見る限りでは、何か大きな異常があるようには見えない超巨大な樹木を見据

えながら、何事もなく事が進みますように、と俺達は祈るのであった。
……まぁ、無理なんだろうけどさ。うん。
ここ数日、お茶を飲み過ぎたせいだろうか。
溜息の代わりに、薬草臭いゲップが漏れた。

大森林に入れば、直ぐにでもエルフの歓迎があるやもしれないと、構えていたオレ達だったが意外や意外。
森の入口まで精々あと半刻、といった辺りまで近づくと、段々と増えて来た背の高い樹々の内の一つ……その樹上から声を掛けられた。
「そこの御一行、我らが書状を送った三国の使者の方々だろうか？」
構えていたらしき弓を下ろし、樹の上からではあるが丁寧に誰何の声を上げたのは尖った耳を持つ、年若い青年二人――大森林のエルフと思われる者達だった。

　といっても、長命種である彼らに外見上からの年齢の推測はあまり意味が無い。森の外に出て出迎え兼見張りみたいな事をしているってことは種族の重鎮って訳ではないんだろうけど、そこそこの古株って可能性はある。
　すぐ近くとはいえ、森の外で出迎えの人員が待っているとは思わなかった。向こうの態度がどうあれ、取り合えず国家の使者としては最低限の礼儀というものがあるので、馬車に乗っている面子は直ぐに扉を開け、外に降り立つ。
「あぁ、そうだ。いきなりで失礼だけど……貴方がたはどっちのお迎えか聞いても良いかな？」
　一応、この使節団の代表ということになっているオレが樹上の彼らを見上げて応えると、青年達は一瞬目配せを行い、直ぐに樹から飛び降りた。
　そのまま並び立つと、深く丁寧に腰を折り、頭を下げる。
「……『二枚目』の方となります。我らの同胞が道理を弁えぬ文を不躾に送り付けた事、心より謝罪申し上げる」
　忸怩たる思いを隠せない、と言わんばかりの恥じ入った様子で告げられた謝罪は、少なくともオレには本心から言ってる様にみえた。
「……驚いたな。言動が『外』のエルフと見分けが付かない。開明派というのは名前だけじゃなかったのか」

少なからず驚いた様子の声が馬車の上から届き、エルフの青年二人は頭を上げると声の主を視界に収めて――二人とも驚愕でその眼を見開いた。
「……シグジリア様……!?」
「おぉ……！　まさか御無事だったとは……もしや此度の使者の方々の一人にお嬢様も!?」
望外の吉報を得た、と表情を輝かせて再度深々と礼をする青年達に、当のシグジリアは予想外にも程がある、といった表情でやりづらそうに顔を顰めた。
記憶にある聖地のエルフの言動とはどうやら相当に乖離しているらしい――逆にオレ達にとってはごく普通に思える彼らの言動に、流石に屋根の上から見下ろしたままでは礼に欠けると判断したか、シグジリアは《虎嵐》と共に地面に飛び降りる。
そのまま二人に歩み寄ると、きまり悪そうに改めて声を掛けた。
「あー……私はとうに森から出て野良となった身だ。とっくに氏族からも席を外されているだろう？　そう畏まらないでくれ」
「長老衆の取り決めなど、我らにとっては然して重要ではありませぬ」
「高く飛ぶ事を誇りとしながら、鳥籠で羽を繕うばかりである鳥獣の生に何の意味がありましょう。幼き身で、己の意思一つを胸に外界へと羽ばたいたお嬢様の決断。当時は理解の及ばなかった己の不明を恥じ入るばかりです」

「……よもや故郷の同族に持ち上げられて面映ゆさを覚えるとはね」
頬をかきながら毒気を抜かれた様子で呟く嫁さんに対し、《虎嵐》が優しく掌を頭に置き、くしゃくしゃと髪をかき混ぜる様に撫でる。
言葉こそ無いが、あからさまに距離の近い二人の様子に、エルフ二人も察したようだ。
「……もしや、そちらの魔族の御仁はシグジリア様の？」
「……あぁ、私の旦那だ」
彼女にとって、《虎嵐》が悪しざまに罵られる事が一番の懸念事項なんだろう。
青年達のごく真っ当な対応にガッチガチに固めていたガードも少し下がった様に見えたんだけど、夫だと紹介したときは警戒を取り戻したかの如く、再び声が硬くなっていた。
しかし、その警戒も杞憂に終わった――少なくとも、今は。
「おぉ、なんとも喜ばしい！」
「界樹の癒しも遅々として進まず、更に此度の異変――気の滅入る報ばかりでしたが、ここに来て飛び切りの慶事とは……女神に感謝を捧げましょう……！」
なんか普通に良い人達だね、とアリアと相棒が小声で話し合ってるのが聞こえるが……同感だな。
彼らは出迎えの人員だ。ひょっとしたら、特に人当たりの良い者達を選んだのかもし

れない。

それでも、保守派のイメージばかりが先行して、警戒感を抱いていたオレ達にとって、拍子抜けする位に彼らはまともで、善良だった。

……オレも『繰り返して』いる間、どうにか人類側の大規模な戦力の拡充が出来ないかと、大森林のエルフ達と接点を持とうとしたことがある。

結果は当然ながら失敗。実際に交渉に移る前に、森から出て来て個人で大戦に参加していたエルフや、かつてかろうじて交流があった時期を知ってる教皇の爺さんに話を聞いてみたりと色々と参考になりそうな意見を集めてみたんだけど。

全員に「絶対上手く行かない処か厄介事になるからやめておけ」と力強く断言され、腑に落ちない気分になりながらも諦めた記憶がある。

魔族との確執を知ったのもその時で、オレの生まれるずっと前の話だし、当時を知ってる人間にしか分からない事情とかもあるんだろうな、なんて思ってたんだけど。

例の『一通目』のインパクトの御蔭で、以前からのエルフに関する疑問が氷解すると同時に妙な先入観を抱いてしまっていたようだ。

エルフだからといって全員が全員、がちがちの排他的思考って訳じゃ無い。

保守派は厄介な連中が多いだろうけど、皆が皆、会話も成り立たない位にやばい奴等って訳でもないだろう。

開明派だって同じだ。目の前の二人は凄く真っ当に思えるけど、眉を顰めるような輩だっているかもしれない。

考えなくても当たり前の話だった。警戒は怠るべきじゃないけど、構え過ぎていても相手に不信感を与えるだけだな、うん。

『二通目』の内容を考えたと思われる長老衆ってのだけは、会うなら気を緩めるのは悪手だろうけどな。これに関してはシグジリアが何度も言っていたし。

しかし、そうなると『二通目』の送り主である開明派のトップであろう人物が気にかかるな。

ある程度長老衆と渡り合えるような立場と血筋の者は、ガッチガチの保守派ばかりで簡単に宗旨替えする様な奴は思い浮かばないって話だしなぁ。

タイミングとしては偶然だが、オレのそんな疑問も直ぐに解消される事となった。

「では、早速聖地――我らの里へと向かいましょう。さ、皆様も。サルビア様も今頃待ち侘びておいでです」

「姪御が御婚約者と共に使者として参られたともなれば、さぞお喜びになる。急ぎ参りましょう」

「ちょ、ちょっと待て。今、サルビアと言ったか？　私の、伯母の？」

同族との会話が始まってから動揺しっぱなしであったシグジリアだが、ここにきて最

大級に狼狽えた様子を見せた。
余程驚いたんだろう、《虎嵐》の服の端を強く握りしめ、彼の旅装には思いっきり皺がよってしまっている。
出迎えの青年達は、顔を見合わせてきょとんとした表情を見せると、特段慌てるも、隠すも無しに頷く。
「はい。エルダの氏族にして、嘗ては次代の長老衆の一人と呼ばれた御方――シグジリア様の伯母上であるサルビア様が、我ら開明派の長です」
「内に籠るばかりではなく、外の世界に眼を向けるべしと、派閥を立ち上げた御方でもあります」

森の入口へと辿り着くと、そこには樹々と岩で形作られた天然の門構えが聳えていた。
普段は魔法で隠されているという緑葉の屋根で覆われた空間へと、馬車を牽いて入る。
開明派の長であるそのサルビア、という人物についてオレ達は知る由も無いのだが、

シグジリアにとっては予想外にも程がある名前だったようで。
　出迎え兼聖地への案内役であるエルフ達に先導されて進むオレ達ではあったが、未だにショックを受けた様子でブツブツと複雑そうに呟いている。
「……信じられん、あの伯母上が開明派の頭とは……長老連中の張ったブラフという方が余程しっくりくる」
「……その様子だと、貴女の伯母さんは保守派に近い考えの人だったのかしら？」
　ミヤコの不思議そうな問いに、「そんなレベルじゃないな」と過去を思い返したのか、顔を顰めて頭を振った。
「長老衆のコピーロボットかと思う程のガッチガチの石頭でエルフ至上主義。少なくとも私の知る伯母上はそういう人物だった」
「そう……次代の長老の一人なんて言われていたようだし、まだ大戦に参加していた時期に、エルフの戦士達を率いて外に出る立場だった、という事かしら？　そこで外界に触れて蒙を拓いた、とか？」
「有り得るとすればソレが一番可能性としては高いのだろうが……あの伯母がその程度の事で宗旨替えするとは思えんなぁ……」
　殆ど唸る様に疑念の声をあげるシグジリアに、《虎嵐》が諌める響きを持った言葉をかける。

「……人は変わる。良くも悪くも。出会いが奇貨であれば、尚更に」
「……そうだな、取り敢えず開明派の主導者だというのなら、会うのは確定だ。会って話してみれば良いか」
旦那と見つめ合い、表情から力が抜ける嫁さん。
夫婦であるから、ではなく、こうやって通じ合っているからこそ夫婦になったのだと、そんな風に思える二人の空気に何度目になるか分からない羨望を覚える。
いいなぁ……オレも、いつかこんな風になれるんだろうか。
ちらりと後ろ隣りを歩く相棒に視線をやるけど、奴は真っ直ぐに前を見て――何故だか顔を顰めた真っ最中だった。
どうしたんだ？　と声を掛ける前に、先んじて相棒は全員に聞こえる様に少し声を張る。
――もう片方のお迎えもあったみたいだな……なんともまぁ、勿体ねぇなぁ……。
酷く惜しいモノか、或いは価値ある物がその価値を失ったのを目にした様な、切な気ですらある声でボヤくその言葉に従い、全員が前方を注視すると。
樹々の間から数人の武装したエルフ達が現れ、オレ達の征く道を塞ぐ。
弓をつがえたまま、もしくは剣の柄に手を置いたままで進路を遮る者達に、案内役であった二人の青年が怒りも露わに彼らを怒鳴りつけた。

「なんの真似だお前達！　我らが招いた客人に向かって無礼であろう！」
「下がれ！　我らはサルビア様の命でこの方達を案内するお役目を受けた！　妙な真似をするのであれば我らが相手になるぞ……！」
今にも腰の短剣を抜かんばかりの青年達だったが、向こうのエルフ達の背後から進み出た人物を見て苦々しさを隠せない表情を見せた。
現れた人物はなんというか、これぞエルフ、といった感じの妙齢の美人だ。
緑に染めた絹らしき布と森の植物を組み合わせた装束。
蔓と草木で編んだらしき頭冠と、美しい金髪と碧眼。
うん、これで弓でも背負ってれば、日本人がエルフと聞いてイメージしそうな映像と大体一致しそうだな。
とはいえ、あくまで見た目だけだ。
こちらを不躾に品定めする視線は、およそ他国の使者に対する敬意や礼儀といったものは感じられず、硬質な光を宿す瞳は友好的とは程遠い目付きである。
「サルビアからそんな話は聞いていない――なれば私がお前達の言を受け入れる必要は感じられんな」
薄い唇から出て来た言葉は、瞳に負けず劣らず硬質だ。声と眼光、両方に気圧されながらも案内役の青年達は役目を全うしようと眼前の美人を睨みつける。

「コニファ様、この方達は我らが――」
「くどいぞ、私が言葉を掛けに来たのは後ろの者達だ。下がれ」
抗弁をあっさりと断ち切ると、コニファと呼ばれたエルフはもはや青年達には一瞥もくれずに、その背後……使者団の先頭を歩いていたオレに視線を固定させた。
「よくぞ来たな、女神の愛し子よ。我が名はコニファ＝エルダ。始原の民たるエルフにおいて、長老の位に席を置く者の一人だ」
ニコリともせず、女性としては長身に入る背丈の彼女は、オレを見下ろして名乗りを上げた。

「……出たな時代遅れの年寄りめ」
忌々し気な口調を隠しもせずに毒付くシグジリアの声に、オレから視線をずらしたコニファはそこで初めて表情らしきものを面に浮かべた。
微かに片眉をあげ、意外なものを見た、といった様子で使者の中で唯一の同族に声を掛ける。
「……まさか、お前はシグジリアか？　女神より祝福を受けた身で有りながら聖地を離

れた不出来な孫が、今更何の用だ？　とうにお前は氏族から名を外されている。はぐれ者が聖地に戻ろうなどと夢を見るな」

「頼まれても戻るか。仕事で来ただけだ」

吐き捨てるように返された言葉に、ふむ？　と口の中で呟くと、コニファは得心がいったと言わんばかりに頷いた。

「外の国の使いか――はぐれ者とはいえ、只の人間を聖地に立ち入らせるよりは良いな。殊勝な判断であると言ってやろう」

う　わ　ぁ。

なんだこのナチュラルな上から目線……。

いや、そういったヤツが知り合いにいない訳じゃなんだよ。

魔族領の吸血鬼（ヴァンパイア）達の頭領――女公爵なんかは、ナチュラルボーン・傲岸不遜を体現したような女だし。

ただ相手の立場や思惑、思慮などを全て把握した上で女王様な言動を一貫して崩さない女公爵とは違い、眼前のエルフはそもそも相手が不快に感じる・反発を覚えるという思考にすら至ってない様に見える。

エルフが最上位。他の種族は忖度・配慮が当然である。

そんな前提で会話しているんだろうか？『一通目』の内容のアレさ加減からして覚

悟はしていたが……実際に目の前でやられると眩暈を覚えそうになるな。見た目が凄い美人のエルフなだけに余計に。

初手からげんなりしつつあるオレ――多分、後ろの他の皆も似たり寄ったりだろうと思うけど――の、気持ちなど全く汲む気配も無く、エルフの長老の一人である女性は、久しぶりに再会する血縁にも既に興味を失ったかの如く視線を外し、次は個人ではなく全体、使者の一団をざっと見渡した。

「愛し子には劣るとはいえ、女神の加護を受けた者もいるか。只人も混ざっている様だが……まぁ、よかろう。分を弁え、礼を尽くすならば聖地に踏み入る事も許可を与えよう――だが」

そこで言葉を切ると、コニファは明確に嫌悪と拒絶の感情を顔に貼り付け、《虎嵐》――と、相棒を睨みつける。

「貴様らが我らの聖地に踏み入ること、罷りならん。魔に生まれた穢れ者の半獣と、女神の加護を受けながら矮小な魔力しか持たぬ呪物憑き風情が。分際を弁えよ痴れ者が」

「「は？」」

自然と漏れた低い声は、こちらの女性陣全員のものだった。

何故かトニーと……槍玉にあげられた当人である相棒から「ヒェッ」という短い悲鳴の様な声が発せられたが、今はそれ処では無い。

「――！　コニファ様、お言葉を撤回して頂きたい！　この方達は正式な三国の――！」
「お前達には返答を求めていない」
　案内役の青年が堪らず、といった様子で口を挟もうとするが、コニファが軽く片手を上げると配下のエルフ達が同族である筈の青年達に向けて武器を構え、殊更に威圧する。
　敵対派閥であるとはいえ、向こうに派閥のトップがいて、こちらには不在の状態で武器を抜くわけにもいかないのか、歯噛みしながら開明派のエルフ達は口を閉ざした。
「そもそも、お前達が最初からこやつらを森に招くなどという愚挙を起こさねば我らも愛し子を同胞として迎えるだけで済んだのだ」
　相も変わらず、こちらの空気――明らかに不穏になったオレ達の気配に気づく様子も見せず、看過できない発言をした若作り婆はちらりと横目で青年達を見て、如何にも彼らに責があると言わんばかりに嘆息してみせた。
「そこな穢れ者二匹は、魔族どもの使いであろう？　使者といっても彼奴等の長の首を届けるだけの禊役だ。何故聖地に迎え入れよう等と思った？」
　理解の悪い子供に言い聞かせる様な口調で言うエルフの長老に、怒りは消えぬままに困惑する。コイツは何を言ってるんだ？
　後ろの皆も同じ気持ちだろう。魔族領の夫妻だけは只管に不快と怒り一色――特に

《虎嵐》は、自国のトップの首を献上しにきた、なんていう酷い侮辱に文字通り猛獣の如き威嚇の唸りを喉から零していた。
あの怪文書にあった通りの交渉ですらない妄言を、オレ達が呑んでこの場にやってきたと本気で思っているらしい。
会談の際に皇帝が愚痴り、道中でシグジリアが再三言っていた『言葉は通じてるのに会話が成立しない』というのはマジみたいだな……。
まぁ、いい。
会話が成立しない、させる努力もしないというのであれば、それに応じた態度をとってやるだけだ。
先程の不愉快極まりない発言からこっち、静かに煮えたままの腹の怒りを堪えたまま、最後通牒のつもりでオレは相棒の腕を取り、傍に引き寄せた。
「アンタ達の主観だけでものを言うなよ。こいつは教国からの使者で、オレの相棒だ。オレのもんにケチを付けるってんならアンタらとこれ以上話す事は無い。そこをどいてくれ」
「サラっとにいちゃんの所有権を主張しないでよ」
「レティシア。屋上」
アリアとミヤコから即座に文句が飛んで来るが、無視だ無視。

コニファと、彼女の背後に控える保守派エルフの戦士達の怪訝そうな視線に晒され、相棒が居心地悪そうに身じろぎしているが――コケにされてる本人なんだからお前はもうちょっと怒れよ！　自分の事なんだぞ！

しっかりと相棒の腕を抱え込み、馬鹿でも分かる様にオレ達の仲睦まじさってやつをアピールしてやったんだけど。

「……愛し子よ、まさかとは思うが、そこな呪物憑きに何某かの呪を受けているのか？　だとすれば――女神の加護厚き存在を穢した罪、貴様の首一つで贖えると思うなよ穢れ者」

嫌悪に怒りと軽蔑を混ぜ込んだ、長老の斜め上どころではない発言に同調し、保守派の戦士達が相棒に向かって武器を突き付ける。

ええ……なんて口の中で呟いて、呆れたように突き付けられた切っ先を眺める自身への侮辱に無頓着すぎる馬鹿の腕を、俺は更に強く抱きすくめた。

痛ダダダダ、痛い、痛いってシアさん。なんて言う、いつもの軽口にも、応える余裕が無い。

そう、か。

どうあっても、発言を撤回するつもりは無いのか。

あまつさえお前らは、オレの相棒に、オレのヒーローに、オレの大切なモノに、そん

なふざけた理由で刃を向けるのか。
何も知らない癖に。オレ達が過ごしてきた時間を、乗り越えて来た戦いを知りもしない癖に。
コイツを侮辱して、オレの気持ちを呪いにかけられた、なんて抜かすのか。
何度も何度も『繰り返して』来た身の上ではあるけど。
正直に言えば、初めてだ。
邪神の軍勢に属する連中以外で――殺したいと思った奴らは。
俯いて臓腑の底から突き上げる粘性を伴った嚇怒を押し殺す。
――シア？　大丈夫か？
直ぐにこちらの様子に気付いた相棒が、酷く心配そうな声でオレを呼ぶ声が聞こえて、それが嬉しくて。
こいつのこんなときの察しの良さや、ぶきっちょな優しさを知りもしないで、穢れ者なんて呼ぶ眼前の連中に、益々怒りが湧いてくる。
あぁ、どうしようか。
教皇の爺さんには「好きにやってよい」と事の次第を一任されている。
極論、こいつらをこの場で消し飛ばして、そのまま回れ右して帰るって選択だってその気になれば可能なんだ。

どの道、三国とエルフとの干渉・交渉が失敗に終われば《亡霊》が自領の喧嘩っ早い連中を抑え込むのに匙を投げる筈だ。

失敗前提で動くなら、エルフが大森林ごと消し飛ぶのはこの場か、後で起こる戦争ですらない蹂躙戦かと言った処だ。

アリアもミヤコも、旦那を侮辱されたシグジリアだって、オレがこの場で開戦代わりの号砲を上げたって責めやしないだろう。寧ろ笑顔で肯定するまである。

そういう意味では、聖地とそこに住む連中の破滅への引き金を止められるのは、保守派の連中が穢れ者と呼んだ二人と、軽視している只人扱いのトニーだけなんだろうけど……このお花畑共にそれが分かる訳ないよな。

うん、もう、いいよな？

ごちゃごちゃと考えて、我慢しようとしたけど。

やっぱり無理だ。もう魔法ブッパ（ゴール）してもいいよな？

取り敢えず、相棒に武器を向けてる連中を吹き飛ばそうと、オレは静かに相棒の腕を抱えたのとは逆の手を挙げた。

焼くか、凍らせるか、切り刻むか、叩き潰すか。

――全部でいいか。オレの男（モン）にふざけた真似をした対価を、払ってもらうとする。

そのまま魔力を練り上げようとして――。

「――お、お待ちなさい！　ウェップ、われら、の、客人への非礼極まる行為、ッ、ハァ、それ、以上は長老衆と、言えど、ゼェッ、ゆ”る”じま”せ”ん”よ”っ”！」

息も絶え絶えと言った様子の、鬼気迫る絶叫に意識を遮られ、オレ……というかその場にいた全員が声の上がった方へと首を向ける。

そこに居たのは、やはりエルフだ。

背後に数人の戦士達を従えたその人物は、コニファと同じような服装の女性だ――心なしか、その整った顔立ちも似通っていた。

余程急いでこの場に駆け付けたのか、肩で大きく息をして額には玉のような汗が浮かび、酸欠気味の顔色は悪く、今にも吐きそうだと言わんばかりに歪んでいる。美人が台無しだ。

彼女の供らしきエルフの戦士達も、長距離を全力疾走してきたかのような惨々たる有様だった。

「伯母上……」

呆気に取られた様子のシグジリアの声を耳に拾い、咄嗟に案内役の青年二人組に眼を向けると、彼らは安堵した様子で肩から力を抜き、ゼヒゼヒ言って部下に背中を擦られ

ている女性を見つめていた。
　十秒程、思い切り呼吸を繰り返し。まだまだ息が荒いままではあったが、彼女は胸を逸らして名乗りを上げる。
「エルフにおける『開明派』の長を務めております、サルビア＝エルダと申しますっ！
我らの願いに応じて聖地を訪れて下さったこと、同胞が礼を弁えぬ真似をしたこと、三国の使者の皆様には心より感謝と謝罪を申し上げますお願いですから回れ右だけは勘弁してくださいなんでもしますから!!」
　切実、という言葉では生温い程に真剣な懇願の声が、森に響き渡ったのであった。

サルビアの懊悩、聖女の本気。

「……次代の長老候補から外れたとはいえ、お前もまたエルダの血筋であろう。そのような醜態を衆目へと晒すのは感心せんな」
「誰の、せいだと……思って、いる、の、ですか……！」
呆れを含んだ台詞に、荒れたままの呼吸を繰り返しながら汗だくのエルフのお姉ちゃん――開明派の長を名乗ったサルビアという女性が、言を発した長老を恨みがましい目線で睨めつける。
俺と《虎嵐》がイチャもんつけられて、さてどうしようかと悩んだのも束の間。
シアが切れた。
いやびっくりした。俯いたまんまでちょっと様子がおかしいから心配したんだが、顔を上げたと思ったらマジギレしてるんだもんよ。
いや、割と酷い罵倒された俺達の為に怒ってくれたっていうのは流石に分かってるし、嬉しいしありがたいんだけどね。

邪神の信奉者連中と相対したとき並みのガチモードだったのは流石に驚いたけど。

下手すりゃ本気で目の前のエルフ達を消し飛ばす気だったシアも大概激おこだったが、後ろの女性陣も相当にあったまってるのがもう気配だけで分かる。怖くて振り向けない（白目

リアとシグジリアも不機嫌丸出しの威圧に近いプレッシャーを隠そうともしなかったけど、隊長ちゃんが何気に一番ヤバかった。

俺の隣の聖女様が怒ったのと同タイミングくらいで長老――コニファの首に『意』とでもいうべきものを当てだしたからね。

一応、相手に対して隠す気はあったみたいだけど、うっかり気付いてしまった俺は気が気じゃなかった。険悪な雰囲気になっていた相手とはいえ、眼前の人間の首がまるで斬線目印みたいに線を引かれた様を幻視する状況、想像したことある？

想像するとちょっと怖いんだけど、シアが俺に武器を突き付けている連中へと魔法を叩き込むと同時に、残ったコニファの首を刎ねる気だったんじゃないだろうかコレ。

初っ端から喧嘩売られた様なものとはいえ、即座に殲滅で応じようとするとかバーバリアンかい。魔族領の《災禍》の連中じゃないんだから。

舐められたら取り敢えず殺してから死体に聞いてみる。とか真顔で言っちゃう何人かの特に好戦的な奴らを思い出しつつ、エルフの保守派と開明派、揃った二人の代表者

のやり取りを眺める。
「……とにかく、この場は引いて頂きますよコニファ様。彼らは私達の客人です、貴女達ではない」
「ふむ？　外の者共に文を出したのは我らが先である筈だが？」
「童の駆けっこでもあるまいし、書状の先着などで決める話ではないでしょう。大事なのは先方がどういった判断で此方に来訪したのか、です」
聞いてる限りだと、外交……というか対人関係において至極真っ当な事を言ってるサルビアの言葉に、コニファは眉を顰めるという反応で返した。
「……お前達の他種族にへり下る様は、エルフの誇りを損なう。開明派、などと言う若い者達の火遊び程度は多めに見てやっていたが此度は――」
「それは此方の台詞ですよコニファ様――エルフの未来が掛かっているので、これ以上貴女方の言動を客人に向けさせる気はありません」
額の汗を拭い、決然と宣言するサルビアの言葉に応じ、背後にいた彼女の供である開明派の戦士達が躊躇なく武器を構え、剣先と矢を保守派へと向けた。
保守派の連中が先程、案内役の青年達に武器を向けたときのようなただの脅し・ポーズとは違う全員が全員、本気の眼だ。この場で戦いになっても止む無しという決意に満ちている。

連中は俺に向けていた武器を慌てて開明派の集団に向け直すが……気位が斜め上に天元突破しているとはいえ、同族とのガチ闘争には躊躇いがあるのか、その動きは鈍い。

「……本気か？」

「正気ですよ。少なくとも、数十年前のあのとき、あの日から。私は正気を得ることができました」

暗にテメーらは気狂いだよ馬鹿野郎、と言ってるも同然のサルビアの真剣な眼光に射竦められ、保守派の長老殿も眼前の開明派（若い衆）が揉める事を厭うていない事をやっと理解した様だ。

それでも、あくまで若い者の火遊びという認識なのか。

コニファは溜息を一つ付くと無造作に片手を上げて合図し、自派閥の部下達に武器を下げさせる。

「……この場はお前に譲ってやろう。だが、お前達の戯れで穢れ者まで聖地に入れるとなれば、何かあればお前に責を問うことになるぞ」

「元より覚悟の上です――それが真っ当な責の問い方であれば、喜んで受けて立ちましょう」

これまた暗に、テメーらのちょっかいが原因ならトコトンまでやったんぞコラという宣言でもあると思うのだが、理解しているのかいないのか。

あっさりと踵を返したコニファは、首だけを少し此方に向けて最後にもう一度、シアへと話しかける。

「後ほど、人を遣ろう。女神の愛し子よ、我らの同胞に加わる前に知るべき掟や歴史があるのでな。心身を引き締めておく様にせよ」

「二度とツラを見せんな」

おい、シア。唾でも吐きそうな面構えで中指おっ立てるのやめなさい、一応聖女やろお前。

流石に品が無いので諌めつつ、後ろの面子にも同意を得ようと振り向いたが、女性陣は概ねシアに賛同するスタンスっぽい上に、男性陣は視線を逸らして彼女たちの怒りに触れないようにしている。

いや気持ちは分かるけどね。シグジリアは背中の大弓に手を掛けたままだし、一番穏当なリアですら立ち去る保守派連中の背中に舌をだしてさっさと帰れと言わんばかりだ……隊長ちゃん、この場でのドンパチは回避されたんだから、コニファの首から視線外そう、なっ？

そうしてエルフの長老とその御供達の姿が森の奥へと消えると、漸く辺りから緊迫した空気が霧散し、緑に覆われた昼下がりの森林本来の穏やかな空間が戻って来た。

しっかし、聞きしに勝るというか、想像以上に想像以下だったというか……マジで会

話が噛み合わなかったなぁ。

《視た》感覚からして、もう酷かった。あんなん初めてだよ。

エルフ達は、生来優れた魔力や聖性を有した種族であるので、元は間違いなく大きくて立派な魂なのだ。

といっても種族単位での優性程度の話なので、俺が人生で一番衝撃を受けた輝く魂の持ち主であるシアとリアには比ぶべくも無いけどね（身内自慢

まぁとにかく、生来のスペックが人類種の中では魔族と並んで高く、驕らず研磨すれば魂の大きさに負ける事の無い輝きを放つであろう事は容易に知れる。そこにプライドを持つっていうのは、分からん話でもない。

だというのに、当人達が己の意思で変に捻じれさせてるというか、どこか歪さが目立つというか……本来なら見ていて心動かされる景色や風景のど真ん中に、特大のとぐろを巻いた野グソが湯気を上げて鎮座しているようなガッカリ感がある。

同行しているシグジリアや、後からやって来たサルビア達なんかは普通に《視た》感じフェチ的に推せる人達な分、感動と落胆の乱高下が酷い。酔いそう。

一部の者達に出会っただけでこれだ。聖地――エルフ達の集落に入って保守派と開明派が入り乱れて生活している空間に入ったら酷い船酔いみたいなことになる気がする……魂知覚はちょっと控えておこう。精神的なもんだから酔い止めとか効かないだ

ろうし。

邪神やその配下みたいなレベルで糞を汚物に漬け込んだみたいな酷い物体Ｘだったら、いっそ気合が入るんだけどね。欠片も残さず消毒しなくちゃ（使命感

ともあれ、大森林入りして１００メートルも進まん内に血煙と肉片が舞う殺伐大劇場の開幕は回避された。

全速力で駆けつけて来たらしい開明派の人達にはお疲れ様といってあげたいね。

そんな彼らは、保守派の姿が見えなくなると疲れた様に武器を収め、改めてこちらの一団に向き直る。

俺達の案内をしていた青年達が申し訳なさそうに進み出て、サルビアへと頭を垂れた。

「我らが居ながら、老人たちの強引な行いを止める事も出来ず、面目次第もございません……」

「サルビア様が急ぎ駆けつけてくださらなければ、どうなっていた事か……如何様にも罰を受けます」

ほっといたら自刃しそうな位にヘコんでる二人に、サルビアが優し気な表情で頭を振り、肩に手を置く。

「咎める事などありません、寧ろ長老が直接出向く事を予想できなかった私にも落ち度

があります」
「サルビア様……」
感激した面持ちで彼女を見つめる案内役のエルフ達であったが、良い感じのシーンだったのはそこまでだった。
うっすらと微笑みを浮かべていた開明派の長の動きが唐突に止まり、次の瞬間――。
「オボァ」
あ、吐血した。
「サ、サルビア様ァァァァァッ!?」
「ちょっ、伯母上!?」
緊迫した場面を切り抜け、自省激しい部下にフォローを入れて、一段落したせいだろうか。
サルビアの肩からフッと力が抜けたと思った瞬間、その口からトプっと赤い液体が噴き出て、彼女は笑顔のままで白目を剥いて失神した。
悲鳴を上げて介抱を始めるエルフ達。それと流石に身内が血ぃ吐いてぶっ倒れたのを看過できなかったシグジリアが、慌てて傍に駆け寄る。
本人達からすれば阿鼻叫喚なのだろうがシリアスな空気とは程遠い展開に、皆、保守派のせいで煮えた腹もすっかり冷めたみたいだ。

毒気を抜かれた様子でシアが俺と顔を見合わせ、呟く。
「あー……取り敢えず、回復魔法かけてあげた方がいいよなアレ」
その方が良いと思うなぁ……まだ会話してすらいないけど、物凄く苦労してる人だっていうのは何となく察せられたし。丁寧に治したれよ。
「ボクはにぃちゃんに賛成かな。開明派の人達ってさっきの連中より全然まともだし」
「……妻が己の伯母を案じている。ならば是非も無い」
「侮辱を受けた先輩と《虎嵐》さんがそう仰るなら、私からは特に異は有りません。元凶は引き下がりましたし」
「自分的には帰ろうが留まろうがどっちでも良いっスすけど、あの開明派のトップの人は治療してもらいたいッスねぇ。現時点で既に親近感が半端ねぇ」
全員、特に反対意見は無い様だ。
シアはこっくり頷くと、「じゃ、ちょっくら治してくる」と一言告げて、大騒ぎしながらブッ倒れたサルビアを囲んでいるエルフ達の下へと歩み寄った。

「……お客人の前で意識を失うなどと言う粗相をした上に、手ずから癒しを施して頂いた事、どれほど礼と謝罪を重ねれば良いのか」

「あぁ、良いですって。ささっと済んだ事ですし、そこまで気に病まないで下さい」

木造りの床に深々と額をつけるシグジリアの伯母さんに、オレは努めて軽い口調で手を振って応える。

軽く診た結果、急性のストレス性胃炎か潰瘍って感じだったので、彼女の胃を丸ごと再生させる位のつもりで丁寧に癒したその後。

意識を失ったままのサルビアをエルフの住居へと運ぶついでになった感はあったが、オレたちは開明派のエルフに案内され、いよいよ彼らの郷――聖地へと足を踏み入れた。

通常の森の樹々より遥かに高く、立派な樹木の群れを利用したツリーハウスやウッドハウス。

中には大樹同士が絡まり合い、その木の根の隙間や、古木自体の空洞を利用したらしき御伽噺に出てきそうな外観の家も並んでいる。

開明派がオレ達の宿泊施設として用意してくれていたのは、比較的大森林の外で普及

しているログハウスやコテージに近い外観の、丸太組の大きめの建物だった。
なるべく馴染みのある建物を選んでくれた彼らの気遣いというやつなんだろうが……アリアなんかは妖精が住んでいそうな古木の空洞を丸ごと改装した家を見て、ちょっと羨ましそうにしてた。正直、オレもそっちに興味があったけど、向こうも親切心や配慮で選んでくれた訳だしな。
部屋数の問題で宿泊場所は男女別にした、ということで相棒達と一旦分かれて荷物を運び入れ、馬車を外に繋いで馬達は開けた場所に放牧。
やや狭いながらも寝所は個室に分けられているので、パパっと部屋割りなんかを決めていると意識を取り戻したらしい伯母上殿がやってきた、という訳だ。
供に付いて来た者達をログハウスの入口に待たせ、一人屋内に招かれた彼女は、今この建物内にいる全員――使者として来た七人の内、女衆四人が中央の大部屋に集まると、まずは丁寧な謝罪を以て口火を切った。
それが冒頭のやり取りという訳である。腰の低さといい、真摯な態度といい、あの若作り婆と引き連れた子分共とは別物すぎて同じエルフだとは信じがたいな。
下げていた頭を上げた彼女――サルビアはオレ達の顔を見回して言葉の通り、気にしている者はいない事を確認すると、安堵した様子で息をついた。
「愛し子殿……いえ、聖女殿の慈悲に感謝を。改めて名乗らせて頂きます、エルフ達の間

で開明派と呼ばれる集団のまとめ役をしております、サルビア＝エルダです。急な嘆願に応じて頂いたばかりか、長老衆の非礼の数々、なんとお詫びしてよいものか……」

「私としては爺婆の老害っぷりなぞ見慣れたものだ。それより伯母上の変わり様の方が余程衝撃的なんだが……」

シグジリアがボソリと呟いた言葉をサルビアが拾い、姪御と伯母殿は改めて目線を合わせて再会の言葉を伝え合う。

「……本当に久しぶりですねシグジリア。貴女が伴侶を得て再び我らの前に姿をみせてくれたのは望外の喜びです……立派になりましたね」

「あぁ、うん。ありがとう……正直、こうして話してる今でも『誰だお前』って感じが止まらないが……」

聞いていた話だと、自身の伯母には決して良い印象を持っている訳ではなかったシグジリアだが、経緯は知らずとも保守派のエルフ然としていた肉親が大きく変わった事自体は、喜ばしいらしい。

困惑も大きいみたいだけど、面映ゆそうに頬を緩めながら再開の挨拶を交わしていた。

「あの……ところでサルビアさん？」

「はい？　なんでしょうか銀の聖女殿」

おずおずと言った様子で切り出したアリアの言葉に、首を傾げる開明派の長殿だが、妹から放たれた疑問の言葉はオレもさっきから地味に気になっている内容であった。

「その、服がさっきの吐血で凄い血糊が付いたままだけど……良かったらボクが浄化魔法を掛けましょうか？」

「……？　あぁ！　も、申し訳ありません。見苦しい姿をお見せしました……！」

そう。彼女は先程の服装のまま、襟から胸元にかけて赤斑の染みが点々と広がったままの姿である。

最初は不思議そうに首を傾げていたが、指摘されてやっと気付いたみたいで、サルビアは恥じらいに頬を染めながら自身で浄化魔法を発動させ、あっという間に血の染みを消し去った。エルフのお偉いさんというだけあって中々に手際の良い魔法行使だ。

「恥ずかしながら普段はどうせまた吐血するし、このままでも良いか。と放置してしまうこともしばしばありまして……客人を前にしてそのままにしてよい格好ではありませんでしたね」

「伯母上ェ……！」

照れた様にちょっと笑いながら言うあんまりなその言葉に、目頭が熱くなったのかシグジリアが目元を押さえながら俯いていた。

（どうしましょうレティシア。保守派の連中は正直今でも斬って捨てたいけれど、この

人はちょっと嫌いになれないわ）

（……同感だ。トニーじゃないけど、不憫過ぎて悪感情が湧きづらい）

ヒソヒソと、ミヤコと小声でやり取りする。

森の入口で彼女の身体に魔力を走らせて診た結果、病巣や疾患の類は見受けられなかった。

にも拘わらず頻繁に吐血しているということは、先程の症状と同じくストレスや心因性によるものである可能性が高い。

先程の浄化の手際からして、本人も相当な回復や補助の魔法の使い手なのだろう。

意識を失うようなレベルでない限り、自分でさっさと癒してしまっているから大事にはなっていない様だが……本来ならベッドに叩き込まれて当分の間はストレスフリーの環境で安静にしていなければいけないと思う。

……ストラグル枢機卿や《亡霊》みたいな苦労人枠か。エルフにもいるんだな……。

オレ達の生暖かさを伴った視線に気付いたのか、バツの悪さと羞恥を半々にした表情でサルビアはぱたぱたと顔の前で手を振った。

「あ、いえ、ここ最近の話ですよ？　前からちょっとお腹痛いなーとか思うときはありましたが、血が口からでたりお花を摘むときになんか赤いなーとか思う様になったのは、長老衆が例の書状を皆様の国元に送り付けたと知って以降なので、それほど長期間とい

う訳では……」

――もういい……休め……っ！　休めっ……!!

何故かこの場にいない相棒の声で幻聴が聞こえた気がした。

シグジリアの話では、目の前の彼女はあの長老やその同輩達と似たり寄ったりの言動と思考だったという話だが、一体何があったらここまで変わるんだろうな。正直、滅茶苦茶気になるぞ。

「……サルビア殿は現在のまとめ役というだけではなく、長らく保守派のみだったエルフ達の間で開明派を立ち上げた当人だとお伺いしましたが……差し支えなければ経緯などをお伺いしても？」

おぉ、ナイスだミヤコ。

全員が気になって仕方なかった事を、さり気ない形で質問にしてのけた友人に内心で喝采を送る。

今回の主題である界樹については、相棒達がこちらにやってきて全員揃ってから話すべきだろうし、待つ間の時間を潰す話題としては丁度良い。

この場に居る皆――特にシグジリアの興味津々といった視線に晒されて、サルビアは困惑しながらも頷いてくれた。

「え、えぇ。我が事ながら、少々お恥ずかしい話でもあるのですが……それでも宜しいの

であれば……」

言葉の通り、何処か恥ずかし気な様子を見せながら咳払い一つすると、彼女は居住まいを正して語りだした。

――数十年前、大戦真っ只中であった……界樹が信奉者達によって穢されておらず、エルフが僅かではあるが外界と関りを保っていた時代――とは言っても、長命種にとってはそう昔の話でも無いんだろうが。

各国の要請を受け、大森林の周辺や近辺の都市を主としてエルフの戦士達が派遣され、次世代の長老衆の一人として育てられていたサルビアはその戦士団を纏める立場として戦線に加わっていたんだそうだ。

今でこそ言える話だが、当時のサルビアは聖地から出奔したばかりのシグジリアを、可能なら発見・連れ戻す役目も担っていたらしい。

長らく女神の強い加護を受けた存在が現れず、そこに産まれたとびっきりの転生者（加護持ち）。外界などに触れさせず、囲っておきたいというのが長老連中の意向だったそうだが……当のシグジリアは、エルフ達が既に当時からあまり良い目で見ていなかった魔族達

の勢力圏にまで移動していたらしいので、そんな場所まで手を伸ばすつもりが全くなかったエルフにはどうやっても見つけるのは不可能だったみたいだな。

だが、それはあくまで副次的な話。

あくまで、邪神の軍勢と矛を交える為、ひいては大森林と界樹に近づけさせない為の防衛線を保つのが彼女たちの目的だった。

種族的な平均値、という視点でみれば他種族より魔力に秀で、生まれながらに聖気を宿したエルフ達は、少ない戦線の中ではあるものの、大きな役割を担い、活躍していたそうだ。

サルビア自身もその戦果を当然のものと認識していたし、優れた始原の民たるエルフが外界の哀れな他種族に慈悲の手を差し出してやるのも、まぁ悪くない事だ、なんて思っていたらしい。

「故郷を、民を護る為に生命すら投げ捨てて戦う。そこに種族の違いや貴賤など無いにも関わらず、愚かにも私は『女神の寵愛篤きエルフが、大した魔力も聖性も持たぬ劣った種族に慈悲と寛容、威を示してやろう』などと思っていたのです……」

当時、というか嘗ての自分は冗談抜きの黒歴史扱いらしい。

独白するサルビアの顔は、羞恥心を通り越して暗澹とした面持ちですらあった。

シグジリアが、「うん、前の伯母上だな」と納得したように首肯している事からみても、

長老衆のコピーロボット扱いも的を射た評価だったみたいだ。今の彼女の様子からはマジで想像つかないけどな。

そんな彼女の価値観にヒビが入ったのは、順調に戦線を維持し、僅かながら押し上げてすらいたとある戦場での事だ。

邪神の上位眷属が顕現した。

信奉者達を贄として現界したソイツは、何体かの下位の眷属を引き連れて戦場を蹂躙して回ったらしい。

初めて相対する、邪神の性質と力を色濃く宿した最悪の呪と暴威の塊に、戦場においてすら『エルフの中でも指折りの力を持つ己が不覚をとる筈も無し』と妄信を抱いていたサルビアの精神に亀裂が走った。

多くの信奉者を薙ぎ払ってきた己の魔法が、大した痛痒にもなっていない。

持って生まれた優れた聖性をして、かろうじて精神の均衡を保つのがやっとの、存在するだけで無作為にばら撒かれる呪詛汚染。

既に何度か打倒していた下位眷属も、上位眷属相手に防戦が精一杯の自分では相手にする余裕が無く、ともに戦場に立っていたエルフ達が次々と犠牲になってゆく。

背に、足元に。敗北と――魂さえ呪詛に侵され尽くした末に訪れる最悪の死の予感が、恐怖となって這い寄り、心と身体を鷲掴みにし、その場に縛り付ける。

その戦場において最も優れた聖気によって護られている身でありながら。
膝を折り、悲鳴を上げて幼子の様に身を丸めてしまいそうになった彼女を救ったのは――彼女が劣っていると見なしていた他種族の戦士達であった。
有効打を与える為の魔力も、邪神の呪より身を護る聖性も。
上位眷属と戦う術がエルフ達より圧倒的に不足している筈の彼らは、呪詛を受けて助からぬ者が出ることすら前提にした戦法・戦術を以て、文字通り死にもの狂いで邪神の眷属達に喰らいつく。
既に全身を汚染され、手遅れとなった剣士が身体中の穴という穴から赤黒い血をまき散らしながらも、雄叫びをあげて眷属へと突撃、剣を叩きつけ。
一矢報いることすら出来ずに全身を触腕によって串刺しにされ――剣士は己を串刺しにした触手を抑え込み、そこに躊躇なく彼ごと巻き込む最大火力の魔法が叩きこまれる。
右腕を付け根から捥がれ、腹に空いた風穴から飛び出る腸を押さえた魔導士が、死相に決死の表情を浮かべ、魔力暴走（オーバーロード）を起こした状態で息絶える瞬間まで魔法を連発し続けていた。
魔法行使に反応した眷属が後衛の魔導士達を薙ぎ払おうとするのに対し、大盾を構えた壁役の者達が立ち塞がり、一撃で盾を粉砕され、腕を潰されながらも詠唱までの数秒

を稼ぎ。
それでも尚、足りない時間を弓兵達が矢を打ち込むことで補填し、視線を向けられた弓使いが放たれた触手で頭部を抉られ、物言わぬ躯に変わる。
酸鼻極まる、地獄の様な光景だ。
だというのに、其処で戦う他種族の戦士達の瞳に絶望など無く。
ただひたすらに、か細い希望（しょうり）の光を手繰り寄せようと、全てを賭けて邪神の眷属へと挑み掛かる。
その姿に。己の死すら厭わずに、背にした街を、故郷を、人々を護ろうとする、燃え上がる意思の炎を宿した瞳に。
サルビアは呑まれた。
その炎（意思）の放つ熱に、恐れに凍り付いていた精神（こころ）を炙られたが如く、震える手足を叱咤し、未だ纏わりつく恐怖を振り払いながら立ち上がる。
これまでは同族にのみ行使していた、聖性による補助魔法をその場にいた全ての戦士達へとばら撒き、負傷や呪詛汚染を負っても助かる可能性のある者には回復魔法を飛ばす。
何かを言葉にする事がなくとも、彼女が味方内で最大の魔力の持ち主であると察した人類側の者達は、サルビアが最大限に力を奮える様に陣形を整えつつ、攻勢に転じる為

の機会を探り続けた。
何時しか彼女だけではない、戦場にいた全てのエルフ達が他種族の戦士達と肩を並べ、手を貸し合い、眼前の圧倒的な暴威に抗うべく意思を一つにして。
――そうして、犠牲を積み上げ、か細い望みを繋げ続けた果てに。

『――死地において屈することなく、よくぞ耐えられた！　皆々様の勇威と戦武が確かな希望を繋げた事、我が身を以て示しましょうぞ!!』

待ち望んだ希望はやってきたのだ。

「……凄まじい戦いでした。その御方が邪神の眷属達の苛烈な攻めをものともせず、拳一つで立ち向かう雄姿は今でも目に焼き付いています」
後半からはなるべく感情を挟まないように、努めて冷静に語っていたらしいサルビアの表情に、微かな色が灯る。
「あの圧倒的な剛力もさることながら、丹念に、丁寧に磨き上げ、鍛えられたであろう聖

気――あれ程に真摯に己の聖性と向かい合い、練磨された方を、私は他に知り得ません」

色付いた感情のままに溜息を洩らしたサルビアの表情を見て、シグジリアが「お、伯母上が雌の顔をしている……」と、戦慄したように呟いていた。

最後の最後でちょっとした恋バナみたいな空気になったのは、オレ達も気になるところだ。特に瞳を輝かせて聞き入っていたアリアが、身を乗り出して彼女に問いかける。

「それで、その助けに入った人とはそれからどうなったんですか？　上位眷属を倒せるってことは、間違いなく何処かの国の最精鋭だと思うんだけどなぁ」

「……御名前すら聞けませんでした……暫く同じ戦場に留まるとの事でしたので、後日御礼に伺おうと思っていたのですが……予定が合わなくて……」

ずぅん、と沈み込んでいきそうな重い口調で、ぼそぼそと質問に答えるサルビア。その恩人とやらの名前すら聞けなかった事は、彼女の中で痛恨の記憶として焼き付いているらしい。

彼女にどれだけ自覚があるのかは分からないが、明らかにそういった感情が見て取れるしな。こんな事を言うのは残酷だが、その人が大戦を終えた今も生き残っているのかも分からないし……。

命の恩人で、己の蒙を開く切欠にもなった人で――多分だけど、初恋の人。

そんな相手の名すら分からないっていうのは、確かにしんどい話だろう。

「それから季節が幾つか過ぎた頃、邪神の軍勢による界樹の汚染が起こり、長老衆の厳命により我らは聖地へと戻ることになりました」

気持ちを切り替えたのか、サルビアが思い切り俯いていた顔を上げたときには、最初に顔合わせをしたときのような強い意志を宿した光が再び眼に灯っていた。

『これだから外界の種族など野蛮で愚かで救えぬ』そう、断じて界樹の穢れを払う事のみに執心する長老達や、それに賛同する者達をみて、私は酷い違和感を覚えたのです」

大部屋の窓から覗く外の景色へと目を遣る彼女の視線は、森の中ではなく更にその先にある外界か――或いは、彼女にとっての分岐点（ターニングポイント）となった、嘗ての戦場へと思いを馳せているのだろうか。

「あのとき、あの場所で共に戦った者達は、間違いなく私達にとっての戦友でした……種族が違う、魔力や聖気の大小、それのみで優劣を語り、見下げる。それはあのとき恐怖に凍り付いていた私を立ち上がらせた、あの意思（ほのお）を否定することになる――それが、どうしても納得できなかった」

少しだけ過去へと意識を飛ばしたらしきサルビアは、なんだか初めて見るちょっとドロっとした感じの色で眼光を上書きして、低い声で付け足す。

「そもそも、それを言うならば生まれ持った素質に胡坐を掻いて鍛錬を重要視しない聖地のエルフこそ怠惰・怠慢たる愚かな種族です……知りもしない癖にあの御方を侮辱し

やがってあの老害どもがぁ……！」

……怖っ。

最後に呟かれた、やたら低くてドスの利いた声にオレ達が少し引いていると、彼女はハッと気づいた様に表情を改め、咳払い一つして語りの〆を終えた。

「オホン。そのような事がありまして、私は新たに郷の中で派閥を作るに至ったのです……幸いにして、私が居た戦場以外でも、多くの同胞達が近い結論に至ったようで。現在ではそれなりの数を開明派として迎え入れる事になっています」

オ～ッ。と。オレ達全員の口から感嘆混じりの吐息が漏れる。

うん、聞いて良かったな。まさに人に歴史ありってやつだ。

こうして話を聞いてしまうと、現金な話ではあるが開明派に協力してやりたくなってしまう。

ひょっとしたら、その辺りも考えてサルビアも敢えて詳しく過去を語ったのかもしれないけど。

それだって、オレたちに理解してもらいたい、味方になってもらいたいという、此方を対等以上と見なしてるが故の『交渉』の一貫ってやつだ。

もう片方の論外っぷりと比べると、どうしたって好印象になる。

「……良い話を聞けました。ありがとうございますサルビア殿――帝国としての今後の

協力体制は、まだ確約出来ませんが……私個人としては開明派の皆さんに助力する事に異はありません」

事実、その通りなんだろう。話を聞き終えたミヤコの表情は、心なしか柔らかい。

「そうだね、今後のエルフの事を考えるなら、サルビアさんに協力した方が良いんじゃないかなって、ボクも思えたよ」

「……私としては、旦那を除けばまともに会話できるようになったほぼ唯一の『身内』だからな。やってる事がまともな以上、特に否は無いさ」

笑顔でミヤコに相槌を打つアリアと、縁切りした筈の血縁を再び身内と公言する事が気恥ずかしいのか、そっぽを向いて肯定の意思だけは示すシグジリア。

勿論、オレにも否は無い。結果がどうなるにしろ、最悪、開明派のエルフ達だけは助かる様に立ち回っても良いと思えるくらいには。

全員が揃った状況では無いとはいえ、皆から好意的な反応があったことが余程嬉しかったのか、サルビアが心底安堵した、といった様子で一息ついた――撫で下ろしてるのが胸じゃなくて腹……胃の辺りなのがまた涙を誘う。

「さて、取り敢えずオレ達は協力しても良い。という感じで意見が纏まったけど、男性陣にも意見を聞かないとな――こっちに合流してくる様に言っておいたんだけど……遅いな？」

「……確かにそうですね、我らが用意した宿泊所は、此処と近所にある場所の二つです。そう時間は掛からない筈なのですが……」

オレの言葉にサルビアが答え、二人で軽く小首を傾げていると。

ログハウスの玄関扉がノックされ、アリアがどうぞー、と声を上げると木造りの分厚い扉を押し開けて入って来たのは――相棒達ではなく、入口で警備員の如く控えていたエルフの一人だった。

「御歓談中、失礼致します――男性の使者の方々に用意した住居で、何かあったようです」

「――！　何か、とは？　皆さんは無事なのですか？」

瞬時に引き締まった表情となったサルビアに、部下の青年は少し困惑した様子で詳細を告げる。

「その、こちらに後ほど合流するというお話でしたので、荷解き等に時間が掛かっているのであればお手伝いしようかと、人を向かわせたのですが……我らの確保していた建物自体が無人で、人が立ち入った形跡自体がなかったそうで」

おい。

どういうことだそりゃ。

話が不穏になって来たのを感じたオレ達は、揃って腰を浮かす。

「そんな馬鹿な事が……！　歩いて二分と掛からぬ距離ですよ、そんっ――！」
声を荒げかけたサルビアが、ふと気づいた様に沈黙し、数秒経って再び部下へと疑問の声を投げかける。
「……彼らを案内していた者達は、少し前にこちらの派閥へと移った者達でしたね？」
「は、はい。エルダ氏族以外の長老衆の血縁という事ですが、そもそも血筋で派閥入りを拒むのも我らの理念に反するということで……っ、まさか……!?」
「確実ではないですが、可能性はあります――皆さん」
そこまで聞けば十分だった。
サルビアがオレ達に声を掛けるより早く、立ち上がるとズカズカと大部屋を横切り、ログハウスのテラス部分に出る。
近場に三人の魔力は感知出来ない。時間的にそう遠くに移動した訳ではないだろうから、隠蔽の魔法でも使っているのか。
――舐められたモンだな、オイ。あっさり引いたように見せかけて、しつこく相棒や《虎嵐》を排除しようとでもしてたのか。
ぶっちゃけて言ってしまえば、エルフ達にあの三人をどうこう出来るとは思っていない。
《虎嵐》もトニーも、例え大勢に囲まれても逃げるくらいなら余裕でやってのけるだろう

し、相棒に至っては、自重をやめれば襲ってきたエルフ達を一人残らず返り討ちにすることだって容易だろう。

再び煮え滾って来た怒りを押さえつけながら、今度は怒りに流されずに冷静に思考する様に努める。

だからといって、こうまで舐め腐った態度を取られてまで、紳士的に対応してやる義理は此方にはない。

「……サルビアに感謝しろよ、保守派共（お花畑）」

協力しよう、と言ったばかりだしな。

今は殺すのだけは勘弁してやる――後になっても学習できないようなら、その限りでは無いが。

そうして、オレは普段は押さえつけている魔力を、本気も本気で全開にした。

自分を中心に、爆風が発生する。

丸太作りのテラスが軋み、悲鳴を上げ。

飾られていたテーブルや椅子は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられて廃材へと変わった。

突風が収まった後も、魔力の過剰放出によって起きる物理現象は止まず、周囲の建物や樹々を薙ぎ倒しかねない圧を放射しながら、オレはその場に佇んでいた。

「――ッ、これ、が、金色の聖女……世で最も神の加護厚き、女神の愛し子……ッ」
オレを追ってテラスに出て来たサルビアが、呆けた様に呟いてペタンと床に座り込む。
初見はこういった反応も珍しくは無いけど……やっぱり何度見ても大袈裟だよな。
だって、本気になれば似たような事になる奴が、オレの家族にいる。
苦笑いしながら、その家族――アリアに声を掛けた。
「悪いな、アリア。今回はオレが行くから、我慢してくれ」
「……まぁ、いいよ。その代わり、帰ったらにぃちゃんとボクでお出かけ一回ね」
「ホント抜け目無いよなお前」
不満を我慢してます、といった表情で頬を膨らませている妹（おとうと）のちゃっかりした要求に、苦笑が深くなった。
「――レティシア、先輩達の居場所は分かるの？」
「あぁ、オレになら分かる」
一応、下手な魔獣くらいなら失神するレベルの魔力を放出している程度の自覚はあるのだが、平然とミヤコはオレの側に並び立ち、相棒達の現在地を訪ねて来た。
「……隠蔽魔法を突破してどうやって探知しているのか、今は聞かないでおいてあげる――詳細な位置は？」

アイツの魂を治療する際にかけた『枷』に関して、薄々は気付いているのであろうミヤコだが、一旦はそれを棚上げしてやる、と言ってくれた。

状況も手伝っての判断だろうが……悪いな、貸し一つってことにしておいてくれよ。

オレは、相棒へと施した『枷』を逆探知する形で、魔法によって隠蔽されたその位置を割り出す。

元より、こういった時の為の『枷』だ。それこそ邪神の手による閉鎖空間越しであっても、その場所を正確に割り出すことを可能にする為に、アリアと二人がかりで作り上げたモノ。

――今度こそ、二度と失くさない為に。

その為だけに持てる魔力も、技術も、ちょっとアレな手段もなりふり構わず注ぎ込んだ代物だ。隠蔽魔法程度、突破は造作も無かった。

「距離３００、北西。高低差は無し」

「そう、北西に３００ね」

ミヤコは軽く頷くと、その場で腰を落とし――静かに抜刀の構えを取った。

「進路上は民家から離れ、人の気配は無し――丁度良いわ、２８０まで直線路を作るから、真っ直ぐに進みなさい」

言うや否や、その構えた湾刀の鞘内で暴風の如き魔力が圧縮され、数秒と掛けずに刀

身に馴染み、一体化した。
抜き打ちの居合は、オレの眼には映らない。
しゃりんと、涼やかな音だけが響き渡り、いつの間にかミヤコの手の中には振り切られた形で剣が握られている。
流れる様な動作を以て、静かに納刀が為され――一連の動作の結果は、すぐに訪れた。
ボコッと、軽い音を立てて、北西に向けてテラスの手すりが斬り落とされ、地に転がる。
そのあとは轟音響くドミノ倒しだ。
相棒の現在地とオレを一直線に結ぶ様に、立ち並んでいた樹々が次々と両断されて順々に倒れ込んでゆく。
前世で日本に居た頃、林業の伐採作業とかでこんな感じの動画を見た事があるな。スケールが１００倍くらい違うけど。
幅数メートル程の範囲にある、大森林の大木が横一文字に全て切り倒され、居住地からやや離れた森の奥へと一直線に道が出来た。
オレはミヤコに一つ頷きを返すと飛行魔法を発動させ、宙に浮かび上がる。
これだけド派手な大伐採をしたんだ、音に釣られて多くのエルフ達が事の次第を見に来るだろう。

だからこそ、ミヤコが言う様に丁度良い。
エルフ達に――取り分け、保守派の連中に。自分達がどんな相手を顎で使おうとしているのか、最も優れている、なんて思いこんでる自分達の立ち位置が本来は何処にあるのかを、叩き込む。
最初に言った様に殺しはしない――だが、御自慢の無数に伸びた鼻は何本か折らせて貰うぞ。
シグジリアに肩を貸されてなんとか立ち上がったサルビアに、オレは空中からとびっきりの笑顔を向けて。
それを見た彼女が何故か顔を引き攣らせ、何かを言う前に。
「待っ――」
「ちょっとアイツを迎えに行ってくる！」
最大出力で飛行魔法を展開させ、テラスから矢のように一直線に飛び出した。

いやぁ、参ったね。オツムもやべーが、それを起点にした行動力もやべー連中だったとは。

エルフの郷の中でも、外れにあるクッソボロい廃墟みたいな小屋の中。

俺と《虎嵐》、トニーは額を突き合わせ、どうしたもんかと其々に頭を捻っていた。

「だから言ったじゃないッスか、案内役の奴ら、なんか怪しいって」

「……だが、保守派を刺激しない為と説明されてしまえば、敵視されている原因である我らに選択肢は無い」

だよねー、ちょうど男女に分けられた形だったから、トニー君はご愁傷様って感じになったけど。

「完璧自分巻き添えじゃないッスかヤダー！」

男女に分けられているという宿泊施設へと案内される事、数分。

明らかに郷の端っこへと移動する案内役にトニーが強い違和感を主張したものの、保守派を刺激しない為であると申し訳なさそうに言う案内役の少年エルフ達に、子供に甘いらしい《虎嵐》が折れる形で付いてゆく事に決め、そのままなし崩しでって感じだ。

待っていたのは、武装した敵意――というか拒絶感バリバリの保守派らしきエルフの集団と、とっくに棄てられて廃屋と化しているボロ屋。

武器を突き付けられ、とっとと入れと言わんばかりに背を突かれてボロ小屋に放り込まれると、壁の穴から見える限り、お代わりで人員がやってきてここを取り囲んでいるようで。

案内役であった少年達が、最後まで申し訳なさそうにしてたのはせめてもの救いかもね。手の平返して唾でも吐かれたら《虎嵐》のメンタルダメージが地味に酷いことになりそうだったし。

おうおう、小屋自体にも隠蔽系の魔法が掛けられているみたいだし、ガチで排除しに来てる感があるね、こりゃ。

もう一回、いやー参った。と呟いて笑う俺に、トニーが半眼で文句を垂れる。もとから閉じてるように見える目付きをわざわざ開けて半眼にするとはこれ如何に。

「放っといて下さいよ。それより、どうするンスか？　これ、下手したらそのまま小屋に火矢でも撃ち込まれそうな空気ッスけど」

「……聖地のエルフが食の煮炊き以外で火を扱うことは稀……基本、忌避される行為であると、聞いた」

嫁さん情報か。それならこのまま焼き討ち掛けられてこんがり肉になるのは避けられそうだわな。

「……そもそも、待ち伏せされてた時点で悪意があるのは明らかだったし、なんで応戦し

なかったンスか？　ぶっちゃけ鎮圧は大して難しくも無いし」

まぁ、あの場で全員を畳んでこの廃屋に寿司詰めパック５８０円にしてやってもよかったんだけどね。

こうして要求を呑んで、待っていれば指示した奴が釣れるんじゃないかなーとか思ったのよ。こなけりゃ来ないでさっさと外の連中張り倒してシア達の処に戻れば良いし。

最初の接触での、長老の言動とウチの女性陣達のキレっぷりを見たやろ？　またあんなことになる前に、連中が俺達にちょっかいかけてくるならそれを期に逆にお掃除しておくのもアリかなーって。

勿論、流石に殺すつもりは無い。相当ヤベー言動の集団ではあるが、シアやリア、隊長ちゃんに対しては女神様の加護厚い存在として、最低限の礼儀は以て接してるしね。

ただ、ちょっと数日、ベッドから起き上がれないようにしてやるだけだ。なんなら顔に恥ずかしい落書きでもしてやるのも良い。油性で。

まぁマッキーなんて持ってないけどな！　と胸を張る俺であるが、元の世界のネタを絡めた冗談は意味が通じなかったのか、スルーされた。

「……遥か格下と見做す三人に、大勢が打ち倒されたとは公言し難い、か……」

「殺してないってだけで、結構エグい手ッスね。お鼻が霊峰みたいになってる連中には良く効きそうなのは確かだけど」

せやろ？　そうそう長くウチの女性陣達を誤魔化せる筈も無いし、そろそろ向こうからリアクションがあると思うんだけどなぁ。

苔むした椅子やら机の残骸やらに腰掛けたまま、特に緊張感を持つこともなく。

ダラダラと旅の最中と変わらん感じのテンションでくっちゃべること数分――外を見張る者達に動きがあった。

更なる追加の人員を引き連れてやって来たのは、先程森の入口でシアと隊長ちゃんに気付かぬままに殺されかけていたコニファとその御供である。

あちゃー……なんか俺がシアに呪いをかけたーとか言ってたし、穢れ者ゆるすまじーみたいな感じで来ちゃった感じかな……あんだけの美人をぶっ飛ばしたあとに恥ずかし固め掛けるとか考えると心がぴょ……痛むなぁ！

「すげーイイ笑顔じゃないスか旦那。恥ずかし固めとか隊長に報告せざるを得ない」

「……あの様な者でも妻の血縁だ。辱めるのは感心しない……」

おいやめろ、ゴミを見る様な目付きはやめろ下さい。冗談に決まってるだルルォ！

さっきからコニファが「穢れ者共よ、小屋ごと火を掛けられたくなければ頭を垂れ、出てくるがよい」とか呼びかけてるのが聞こえるが、普通に無視して馬鹿話を続ける俺ら。

最初は怯えて出てこないとでも思ったのか、閉所に逃げ込んだネズミかゴキブリでも見る様な視線で小屋を眺めていた長老様ではあるが、俺達が持っていた荷物から干し肉

を取り出してくっちゃくっちゃ頬張りながら壁の穴から彼女達を眺めているのがバレたのか、凄い勢いで穴に矢が飛び込んで来た。
カリカリしてんなぁ、小魚食えよ（煽り
「……肉を喰うのが気に障ったのだろうか？　……乾し葡萄にするか……」
「自分は干し肉食ってたから、いい加減酒が欲しいっスねぇ……お茶しか無いけど」
壁に矢がぶっ刺さりまくる音が連続するが、それには頓着せず、ごそごそと荷物を漁る《虎嵐》とトニー君。君らも大概いい根性してると思うんだ。
「で、どうするんスか旦那？　いい加減、あちらさんも痺れを切らして矢じゃなくて魔法ぶっぱなして来そうッスけど……あ、意外と合うなコレ」
水筒を取り出して中身を啜るトニー君が、薬草茶と干し肉がマリアージュしたことに気付いてちょっと嬉しそうにしてる。やっぱり健康マニアかな？
でっかい掌に小粒の乾した葡萄を載せ、無言で摘まんでいる《虎嵐》も、視線のみでそろそろ出た方が良いんじゃないかと訴えかけてくる。
そうだなぁ……いっそ俺が鎧ちゃんを完全起動させて地面を掘り抜くから、そこから外に脱出して、連中があったまって小屋をぶっ壊すのを背後から眺めてみようか？　終わったら声かけてあげよう（親切心
「よくもまぁ、そう相手を煽る為の手段をぽんぽん思いつくもんッスねぇ……おっかな

い部分も含めてマジでタチわりぃッスよ旦那」
「ふむ……だが、幼き頃、友と悪戯を繰り返した時期を思い出す……悪い気は、しない」
「マジっすか。意外とヤンチャだったんスね《虎嵐》サン」
薬草と葡萄の香りが廃屋に漂う中、いよいよ以て外の連中のボルテージが上がって来たので、先に上げた手段を実行することにする。
とりあず、鎧ちゃんを完全起動させようとして――離れた場所で凄まじい魔力の放射が始まったのを感じて、全員が硬直した。
俺達だけではなく、廃屋を囲むエルフ達もだ。彼らの種族で間違いなく最高の魔力を有するであろう二人――コニファやサルビアであっても比較対象にすらならない、圧倒的な大瀑布の如き聖性を宿した魔力。
あー……ちょっと引き延ばし過ぎたかぁ……。
考えるまでもない。ウチの聖女様がお怒りである。
「うへぇ……戦場では何度か見た事があるッスけど、レティシア様、本気ッスね。こりゃ今回のエルフとの交渉は物別れで終わるかも」
シアの自重無しの本気を見た事があるらしきトニーが、怖い怖い、と呟きながら肩を竦め、《虎嵐》が無意識に逆立った二の腕のモフモフ虎毛を撫でながら「凄まじいな……」と零す。

あいつがこうまでガチになった以上、俺達に出来る事は無い……精々が、保守派に死人が出ないように祈ってやる程度だ。正直、大して熱心に祈る気もしないが。

轟音が響き渡り、森の一角にある樹々が将棋倒しみたいに次々とぶっ倒れる。

ありゃぁ、シアの魔法じゃないな。高密度の魔力で範囲を延長された飛ぶ斬撃――この場で出来そうなのは隊長ちゃんしか思い当たらない。

「ちょぉぉおい、何やってんスか隊長ぉぉぉぉっ!?」

「見事な絶技……!」

突っ込み混じりの悲鳴を上げるのが一名、技を称えて感心するのが一名。

そして、伐採された大量の樹々の道を辿る様、真っ直ぐに。

圧倒的な魔力を惜しげもなく放出しながら、我らが聖女様は一直線に廃屋に向かって飛翔してきた。

この場所は保守派によって魔法で隠蔽されてる筈なんだが、その空色の瞳は迷うことなくこの場所を――否、俺を見据えていて。

壁穴ごしに、どんどんと近づいてくるその姿を見つめる俺とシアの視線が交わり、聖女様はその超美人なかんばせの片頬を持ち上げ、漢前にニヤリと笑ってみせる。

――っておい、減速しねーのかいっ、そのまま飛び込んでくるつもりかアイツ!?

慌てて《流天》を発動させて構えを取り、ジャスト一秒後。

彗星の如く魔力の尾を牽きながら、シアは俺達が遊び半分で籠城していた廃屋に向け、飛び込んだ。

半分倒壊しているようなモンだったボロ小屋だ。

障壁を張って砲弾と化した人間の激突を受け止められる筈も無く、派手な着弾音と粉砕された木片をまき散らし、廃屋は爆散する。トニー君の悲鳴が聞こえた気がした。

もうもうと上がる土埃と、舞い上がる粉塵にかび臭い家屋の匂い。

ひでぇ状況に咳き込みそうになりながら、俺は腕の中に飛び込んで来た聖女様を睨みつける。

「よう、迎えに来たぞ」

飛行魔法で突撃してきたシアは、《流天》で勢いを捌いてそのままお姫様抱っこに移行された態勢のまま、妙に満足気に笑ってアホな事を言ってのけた。

両手はこの聖女様を抱き上げているので、塞がっている。

なので俺は、そぉい！　と掛け声一発、シアの脳天に頭突きを叩き込んだ。

「痛ってーな！　なにすんだよ!?」

それはこっちのセリフぅ！　助け――が要る状況でも無かったが、心配して来てくれたのは分かる。だが小屋を吹き飛ばす必要が何処にあった!?　言え！　家だけに！

見ろ、トニー君とかあそこで犬神家になってるじゃねーか！

同じく、埃塗れになった《虎嵐》が半分埋まったトニーを引っ張り出してる様を見て、シアはバツが悪そうに目を逸らす。
「ちょ、ちょっと加減を間違えただけだし。ついテンションに任せてお前に向かってダイブしたくなったりしてないし」
ほーぅ、そうか……俺の眼を見てもう一回行ってみろオラァ！
お姫様だっこというより、ホールドに近い状態へ再度移行。そのままシアを振り回し、ぐるんぐるんとその場で回ってやる。
「うぉぉぉぉ!?　おいやめろ馬鹿！　あぶねーだろ！」
危なかったのは俺達じゃぁ！　この人間砲弾聖女様が！
周りの状況や視線もなんのその。
全てをブッチしてギャーギャーと言い争いを続ける俺とシアに、やや気後れした様子ながらも声をかける存在があった。
「ま、待て、愛し子よ。如何に女神の加護厚き存在とはいえ、この様な暴挙は……」
「うるさい、邪魔だ」
俺の腕の中で、声の主――コニファに振り向くことすらせず。
シアは後方……保守派の連中が遠巻きに眺めている方向に向け、彼らを弾き飛ばすように魔力障壁を展開した。

ただの障壁と言うなかれ。聖女様の全開の魔力と、それを完璧に制御する精度を以て最速で展開されたその発生速度は、音速を優に超える。

邪神の上位眷属の攻撃だって正面から受け止める硬度の無音透明の壁が、音越えの速度で叩きつけられるんやぞ。

俺や《虎嵐》を排斥しようと集っていた保守派のエルフ達は、シアの視界に入る事すら無く車●先生飛びで吹っ飛ぶ。セイ●トかな？

こちらに近寄って来ていたコニファは一番酷かった。山なりではなく、縦回転でぎゅるんぎゅるん回りながらぶっ飛んで、隊長ちゃんの斬撃によって倒れ込んだ樹に叩きつけられ、めり込み、一瞬で昏倒する。

アホやなぁ……シアの『本気』の姿を見た時点で、種族だの立場だの関係なく、本能レベルで格付けチェックは済んでいただろうに。聖性や魔力を重視するエルフなら猶更に。

掘り返されたウチのトニー君の代わりとばかりに、地べたやら倒壊した樹木の間に埋まった犬神家の集団を眺め、ナンマンダブーと唱えておいた。誰も死んではいないみたいだけど、気分の問題だ。

「待ってぇぇぇ、お願いだがらま”っ”でえ”ぇ”ぇ”ぇ”っ”」

二、三時間程前にも聞いた、切羽詰まった女性の声が伐採された直線コースの向こうから届き、俺達はそちらに眼を向ける。

初遭遇の焼き直しよろしく、汗だくになりながら必死こいて走って来たのか、フラフラと頼りない足取りで現れたのは開明派の長――サルビアだった。

酷く息を切らしたまま、彼女はバラバラに吹っ飛んだ廃屋痕を最初に見て唖然とし、次いで総員地面に半分埋まったオブジェと化した保守派の下半身をみて目を剥き、最後にパンツ丸出しで樹にめり込んでいる自分達の長老を見て顎が外れそうなくらいに口をかっ開いた。

「あ～……ちょっと勘違いさせちゃったかコレ」

ちょっと後ろめたそうに独り言を洩らすシア。どういうつもりだったのか知らんが、ついさっき吐血した胃痛持ちの人の胃に更なる負担をかけるような事はやめたれよ。マジで。

「お、お待ちを聖女殿……！　長老たちの暴挙も、それを止められなかった我らの不手際も、心から謝罪いたします、ですから帰るのだけは――いえ、この際全面戦争だけはホント勘弁してください……!!」

相変わらず魔力全開状態のままのシアにビビリ散らかしながらも、サルビアは必死の

形相で俺に横抱きされたままのシアに向けて懇願する。
友人の決まり悪そうな顔を見れば、なんとなく察しがついた。彼女を――開明派を見捨てるつもりなんてないのに、説明不足で勘違いさせちゃったやつやろこれ。
なんかもう、その場で土下座すら始めそうなサルビアに、いたたまれなくなったのかシアは――。
特に何かを言うでもなく、ただ極上の聖女スマイルを浮かべ、ぎゅっと一際強く、俺に抱き着いた。
これ公の場とかでたまに見るやつぅ！
名付けて『なんか説明が難しいし色々めんどくさくなったから取り敢えず笑っとけスマイル』！
聖女様の美少女フェイスも手伝い、こうかはばつぐんだ！　今回は悪い方にな！
笑顔とは本来、威嚇の表情である。
サルビアがそれを知っている訳でもあるまいが、結果的には似たような意味で受け取った様だ。
顔を真っ青にすると、また吐血するんじゃなかろうかと心配になる表情で、身も世もない絶叫を上げる。
「い、嫌ァァァァァッ!?　死にたくなーい！　処女のままでシニタクナァァァイ!!　ま

だあの御方の名前だって知らないのにぃぃっ!!」

立て続けに起こった轟音と、一直線に切り開かれた森。そして何より、膨大な魔力を垂れ流したままのシアの存在に。

聖地に住まうエルフ達が遠巻きながらにこの場に集い始めている。

そんな中、大量の犬神家の集団と、プライドの高いエルフとしては自殺モンの醜態を晒して失神する長老、同じく後で悶絶確定のカミングアウトを大声で絶叫して嘆き続ける開明派の長。

大体全ての元凶と言える我が麗しの聖女様は、混沌とした状況のままでも、やっぱり笑顔のままであったが。

流石にやべーと思ったのか、その頬に一筋の汗が伝ったのを俺は見逃さなかった。

俺の事をトラブル誘因係みたいに言うけど、お前も大概やぞ。絶対。

界樹へ

さて、我らが聖女様による自重無しの魔力全開ムーヴで、鼻の伸びた連中に格の差を強制分からせしてから、はや数日。

あの場に様子を見に来たエルフも、距離的にそれが難しかった者達も、嫌でも理解したことであろう。

特に保守派はね。『女神に愛されながらも人間なぞに産まれた哀れな愛し子を、エルフの同胞として迎え入れてやろう』なんつー頭ハッピーセットな思考も、シアの本気モードをみて粉微塵になったやろ。

山猫の群れが、上から目線で猫を群れに加えてやろうとしたら猫じゃなくて超大型の剣歯虎（サーベルタイガー）だったでござる（白目

感覚としては、そんな感じではなかろうか。

あの場に駆けつけて半ば自爆するように色々と叫んでしまったサルビアも、後の説明でなんとか落ち着くことが出来た。

デカい声で処女だなんだと大騒ぎした件については気の毒としか言い様がないが、保守派の動きが緩慢になるであろう今が好機と、気持ちを切り替えて事に臨んでいる。

ざっと聖地に住む者達を見た感じでも、コニファとサルビアが突出して優れた魔力と聖気を保有しているのは事実だ。

その片方であり、現長老衆の一人であり、バリバリの保守派であるコニファが部下諸共シアに秒でぶっとばされて昏倒させられたという事実は、『いざとなれば腕尽くで』という選択肢が保守派の中から消し飛んだ事を意味する。

なんともお花畑ではあると思うが、立場も種族も実力も上であるという前提で動くのが当たり前であった者達からすれば、今の状況は非常に息苦しいもんだろうね。

逆に開明派のエルフ達は、ここぞとばかりに精力的に動き出した。

俺と《虎嵐》、トニーの男三人衆を危険に晒した（実際には危ない状況でもなんでもなかったが）事を丁寧に詫びた後、保守派との交渉をすっ飛ばして使者の面々を最速で界樹の下へと連れて行く計画を練っている。

動きの鈍い保守派の隙を突く様に、速やか且つ静かに派閥内の連絡を密とし、近い内に大規模に人員を動かす予定みたいだ。

これ以上、客人である俺達に妙な真似をさせない為、それによって俺達が激昂するのを避ける為。

シアの全力を見て、聖女二人の助力があれば界樹の異変とやらも解決――そうでなくとも大幅な改善が見込めると確信したのもあるだろう。

とにかく、保守派の反応に配慮した充分な根回しなどよりスピード重視。聖女の協力を得て界樹を癒したのが開明派であるという実績をもぎ取る。

同族からの文句だの突き上げは後で対応する、この数日の動きにエルフの未来が掛かってんだよぉ！

そんな鬼気迫る様子であった。

で、俺達はというと。

現在、開明派が準備を進めている最中なので、それを待ってる――つまり特にやる事は無い。

なので、保守派の干渉を跳ねつけるために此方を護衛してくれているエルフの案内の下、ちょこっと郷の中を見回って見たり、逆にエルフにカードゲームやボードゲームを教えてみたり。

つーても、やはり郷の中を見て回ると俺や《虎嵐》なんかは嫌な目付きで見られることも多いし、なんなら出自が普通の人間であるトニーもあまり良い目で見られない。

この間の強制分からせで格の違いを見せつけたシアやその同格であるリア、森をさっくり大伐採してのけた隊長ちゃんに向けられるのは、畏敬交じりの視線なんだけどね。

男性陣が下げた眼で見られると、女性陣がイライラする。
なんだかこのパターンが多いので、自然と揉め事を避ける為に、拠点にしてる宿泊施設近辺でのんびり過ごす感じになった。
拠点周辺は開明派が中心となって在住してる場なので、嫌な眼も無し。無難に過ごし易い。エルフの郷をロクに観光出来ないのは残念だが、まぁ森林浴しにきたと思えばええやろ。
そう思っていたんだが、馬鹿は打たれ強いというかなんというか。
一日に一回か二回。保守派のエルフがやって来て、シア達に何某かの話を持ちかけようとする。
シアが大爆発した次の日に別の長老筋の血族とやらが来たのには半笑いになったわ。普通もっと間を置こうとするやろ。
丁度ログハウス前の丸太に腰掛け、トランプを使ったゲームを護衛のエルフに教えていた俺は真っ先に連中の眼に止まり、お約束の穢れ者うんたらというお言葉を浴びせられ――罵倒を聞きつけてログハウスから出て来たシアによって保守派のお偉いさんはまたもや揃って犬神家になった。
次の日は別のお偉いさんが何事もなく建物の中に入って来て、ウチの聖女達に話しかけようとして――やっぱり俺と《虎嵐》がその場にいるのが気に食わず、うっかり口に

だしてテラスから放り出される。

日替わりで身体を張ったコントでもしにきてんのかね？

とはいえ、連中がエルフをして圧倒的と言わしめる魔力と聖性を有する聖女二人に眼を惹かれ、開明派の動きに対して察知が鈍くなっているのは好都合ではあるんだが。

意図せず囮みたいな扱いになってしまったことをサルビアは土下座せんばかりに謝罪していたが、気にしなくていいからその分手早く事を進めてくれとウチの面子から言われ、頑張って日程の調整に奔走している。

三日目に至ってはリアも交えて護衛のエルフ達と外の広場でババ抜きしてたんだけど、ズカズカと無遠慮に近づいてくる見た事無い顔の集団を見つけた瞬間、リアが問答無用で魔力障壁ホームランを決めていた。

最初は族長筋の者ということでぶっ飛ばされた相手を丁寧に掘り起こして馬車に載せ、元居た場所に送り返していた開明派のエルフ達も今では変に慣れてしまったのか、単に愛想も尽きたのか。

溜息を付きながら大根抜くみたいに足を掴んで保守派連中を収穫し、まとめて大八車に載せて運んで放り捨ててくる有様である。

で、送った奴らが悉くノータイムで作物・大根エルフになって送り返されて来たことでやっと学習したのか。

四日目。早くもオセロで護衛のあんちゃん達に勝てなくなってきた俺が、四隅の内二つを取られた局面をどうしようかと頭を捻っていたときだった。

「――遊戯の最中に失礼します。愛し子様に取り次いでいただけませんか」

もはやお決まりの場所となったログハウス前の広場で声を掛けられ、その場でオセロに興じていた面々が振り向くと……そこに居たのはエルフの少女であった。

見た目の年の頃はリアより更に三つ四つ下、いった処か。エルフの年齢なんて見た目からは全く推測できんのでアテにならんが。

おそらく保守派の使いであろうその娘は、供を連れる事も無く、この場にいる穢れ者(俺)に特に反応する事も無く。非常にフラットな態度のままで。

「リリィはリリィ＝エルダと申します。長老様(祖母)の使いで愛し子様達にお言葉を伝えに参りました」

ピンクブロンドの髪をポニーテールにしたちびっ子エルフは、表情に乏しい顔のまま、丁寧に開明派のエルフ達に頭を下げた。

「――成程、散々に失敗して漸く老人達も学習して来た、という事ですね……初手から性

質の悪い手段ですが」
　計画の進行状況を伝えに来たサルビアが、複雑そうな表情のままエルフの少女――リリィを横目で視界に収めて唸り声を洩らす。
　淡々というか、機械的というか……感情の起伏が少ない少女は、今の処は特に問題のある言動を取っていないということで、お望み通りシアとリアが相手をしている。
　他の面子は、サルビアを加えたメンバーで大広間のやや離れた場所で円を描いて座り込み、本日やってきた小さな保守派の使いについて話あっていた。
　シグジリアが伯母に負けず劣らず複雑な顔で、躊躇いがちに問いかける。
「伯母上、あのリリィとかいう娘……エルダの氏族らしいが……」
「ええ。あの子は貴女が森を出たあとに産まれた、貴女の従妹にあたる者です」
　古い氏族だけあって、血族図は相当に広いエルダであるが、シグジリアとリリィは特に近い血縁にあたるらしい。
　転生者では無いが、リリィもまたエルフの中でかなり強い魔力を持って生まれた娘であり――出奔したシグジリアの二の舞をおそれた長老衆は、父を大戦で失い、母は自身を産み落とす際に亡くなった彼女を文字通り籠の鳥として『教育』していた様だ。
　リリィの母と親交のあったサルビアとしては、自分が引き取る事も視野に動いていた様だが……長老衆の一人であり、エルダの氏族の纏め役であるコニファが手ずから引き

取ると主張してしまえばそれも難しく、結局はリリィが保守派の意向を受けたまま育てられている様を眺めるしかない、という嫌な状況だったらしい。
「……あの子の情緒が未発達であるのは、おそらく老人達の意向によるものでしょう。自己の欲求や認識が薄い状態のまま、ある程度成長した後に自分達の信じる『始原の民たるエルフ』の在り方で染める……派閥だのなんだのと言う前に、二親を失くした幼子に行って良い行為では無い」
「……あの娘があぁなったのは、私が森を出たせい、か……」
淡々と、感情の起伏少なくシアとリアの質問に応えるちびっ子を見て、思う処があるのか。
苦々しい表情で呟くシグジリアに、サルビアは姪っ子の肩に手を置き、力強く否定の言葉を唱える。
「貴女とリリィ。どちらかが我慢すれば良い、犠牲になれば良い、という話ではありません――そうであることが最善で、最もエルフにとって幸せな生き方である。そんな風に疑っていない老人達の思考こそ、是正されなければならないのです」
「同感です。あんな小さい子に洗脳教育みたいな真似を……やっぱり斬った方がいいのかしら」
「隊長、落ち着いて下さい。お願いですから落ち着いて下さい」

据わった目付きで湾刀の鍔を押し上げてる隊長ちゃんを、トニー君が割とマジな必死さ加減で押し留めている。
隊長ちゃんは前っから戦災孤児とかに対して思う処があったみたいだしね。教国の孤児の保護を主張する動きにも積極的に賛成してるらしいし。
やっぱ、転移・転生組の価値観からするとリリィの置かれた現状はかなり不快に感じるよなぁ。肉体的に傷つけられてないってだけで虐待のカテゴリに充分入るやろ。
貴族教育などでも厳しい育て方とかはあるだろうし、世界観が違い過ぎる異世界同士でどっちかだけの意見を殊更に振りかざすのはよろしくない事なんだろうが……個人的に腹が立つのはどうしようも無い。
特に近しい血縁であり、自身が森を出た事が一因となっているシグジリアには忸怩たる思いがあるんだろう。
やや俯きがちになった嫁さんに、《虎嵐》がそっと寄り添ってその手を握っている。
無言で嫁さんが旦那の肩に頭を乗せ、更に密着する魔族領の夫婦だったが、流石にここで薬草茶をイッキできる程、俺もトニー君も図太くなかった。
サルビアは俺達を順繰りに見回し、居住まいを正すと深々と頭を下げた。
「皆さんには現状、保守派の目を引いて頂くような役柄を押し付けている状態ですが……この上恥知らずにもお願いします。どうか、あの子を。リリィを受け入れるという

旨を、老人達に伝えて頂けないでしょうか」

おぉっと、みなまで言うない。

どうにか自分達の派閥の者を聖女の側に潜り込ませたい保守派と、自身の手から離れた血族の幼子を、再び保護出来るかもしれない機会が巡って来たサルビア。

奇しくも両者の思惑が一致した、という訳だ。

保守派にしても、今まで送った面子が残らずぶっ飛ばされて返却されたが故の苦肉の策、というやつなんだろう。単純に子供なら手を挙げられないだろうとか考えた可能性もあるが。

どちらにせよ、リリィなら傍に置いてやる。とシア達が言えば、これ幸いと滞在許可を出してくる可能性が高ぇ。

ならば、後は簡単だ。

此処にいる間に俺達が散々にリリィに構い倒し、あの無表情・無感情な綾〇系キャラを崩してやれば良いんダヨォ！

情緒なんてもんは一度生えちまえば取り消すことなんて出来ないからね。芽吹かせるだけでも出来ればこっちの勝ちよ。

幸いといって良いのか分からんが、使者としてやってきた奴らはどいつもこいつも濃ゆい面子ばっかりだ。

あっさり薄味な人間関係だけで育てられてきたお嬢さんに、濃厚濃口の色物による情感の発達という物を味わってもらおうじゃないか皆の衆。

俺がドヤ顔で一席打ってやると、概ね賛成であったのか、皆も頷いてくれた。

「そうですね。どの道、開明派の準備が終わるまでは私達も時間を持て余す訳ですし、その間にリリィちゃんとお話をしてみましょう――それはそれとして一番キャラが濃いのは先輩だと思います」

「私にとっては寧ろこっちからお願いしたいくらいの話だ……リリィを受け入れてくれた事、皆に感謝するよ。それはそれとして猟犬殿に色物扱いされるのは不本意だが」

「……妻が気に掛ける従妹なれば、我が身内も同然……猟犬殿ほど強烈な印象を持たぬ我が身ではあるが、力を尽くそう……」

「なんか言いたい事は大体皆サンが言ってくれたッスけど、取り敢えず自分も言っとくっスね。旦那、アンタが言うな」

賛成で纏まったはずなのにフルボッコにされた気分。解せぬ（白目

さて、日も傾き、エルフの郷たる聖地にも夕焼けと、その向こうに夜の帳が下りて来

る時間となった。

リリィに関して纏まった意見を、当人であるリリィを相手にしていたシアとリアにも伝えてみた処、言うまでも無く二人ともＯＫを出してくれた。

単純に、リリィが留まることで他の保守派がやってくることも無くなる……最低でも頻度が下がると考えれば、こっちからすれば渡りに船な話だしね。

「他のお花畑共と違って不快な言動は無いけど、酷く大人しいというか、気配が希薄な子だと思ってたらそういう事情があったのか」

「……なんだか嫌な話だね。あんまり言いたくないけど、やっぱりボクは保守派の人達って好きになれそうにないや」

安心したまえアリア君、この場にいる全員、好きな奴なんていねーから。

本日から追加された拠点の人員――リリィがシグジリアに構われているのを見ながら、夕飯の準備にとりかかる。

これまたエルフのお約束というかなんというか、種族的にあまり肉や魚を好まない者が多い様だが、完全に食わない、という訳でも無いらしい。

食わなくても平気な身体らしいが、食った方がやはり血肉を効率よく育てる事ができる。なので戦士達は食事に取り入れる事も多い。少数ではあるが好む者もいる。との事。

使者として来た俺達に、サルビア達がこの土地独自の料理などを振舞ってくれるのは有難い。

豆や野菜メインで全体的に薄味気味だが、独自の工夫が凝らされた、森の滋養豊かな食事は旅先で食うものとしては物珍しさも手伝い、中々に美味い。

けど、やはり肉気が足りない。

それは向こうさんも察してくれていたのか、狩りで獲って来てくれた新鮮な獲物を精肉して届けてくれるのは大変に有難かった。特に《虎嵐》なんかは種族的にエルフの正反対――肉メインの食生活だろうし。

「……リリィの家族は祖母様だけだと聞いていました。父様と母様が亡くなって、リリィを引き取ってくれたと」

「……エルダの氏族はエルフ内でも特に数が多い。私は血縁関係としてはお前の従姉に当たるし、伯母上――サルビアだってお前にとっては遠縁だがエルダの氏族だ。なにより、伯母上はお前の母と友人だった」

相変わらず淡泊な反応のちびっ子に手を焼いているのか、どうにか会話から親しくなる切り口を掴もうとシグジリアは奮闘しているみたいだ。

ま、お話の方は今日は彼女に任せておこう。俺は飯の用意だ。

サルビアの部下が届けてくれた肉の塊を抱えると、外に出る為に立ち上がる。

シアー、これ丸ごと炙り焼きにしたいから手伝ってくれー。
「昼間に塩擦り込んでたやつか。ここ最近は野菜メインの食生活だったから楽しみだな」
だよな。《虎嵐》なんかも顔だけは平静保ってたけど、尻尾が忙しなく動いてたし。
「あ、じゃぁボクは盛り付ける大皿とか出してくるね。葉物を敷いて彩りもつけよう！」
おうおう、よろしく頼む。
リアがパタパタと食器棚の方へと向かい、俺とシアはそのまま外にでると、ログハウスの横手にある炊事場に向かった。
そこで俺達の食事を準備してくれている開明派のエルフ達に軽く挨拶し、彼女たちの邪魔にならない様に隅っこの方で肉を焼く準備を整える。
某狩猟ゲームの肉焼きよろしく、肉塊から突き出た骨を軸に乗せ、取っ手付きの器具で骨を挟み込めば、準備は完了である。
よし、シアさん。火力調整よろしく。
「はいよ。こうしてお前と肉焼くのも久しぶりだなぁ」
そのぶっ飛んだ魔力制御を存分に生かし、表面を焦げない様にぱりっと焼き上げつつ、中にもしっかりと火を通すという、世界でも最高クラスに無駄で贅沢な火魔法の使い方をしている聖女様が、懐かしそうに眼を細める。

前の周――リアを封印から引っ張り出すより以前の旅の最中は、こうして二人で飯をこさえてたりしたな、そういえば。

あの頃のシアはループの繰り返しで色々と限界だったのに加え、いきなり現れて妹（おとうと）をどうにか助けられるかもしれんと宣った胡散臭い転移者――俺の事も半信半疑で扱っていたので、結構な塩対応だったのだが。

こと飯に関してはお互い元・日本人だった事もあって、妥協できない点が多くてなぁ。

飯に関してだけは、微妙にあった壁や不信感も忘れた様に、日々改善案を出し合った。

ループ前に揃えなければならない、いくつかの条件や要素――時空凍結に封じられてたリアの救助なんかその最重要の一つだ――を満たす過程での旅で。

二人揃って変な凝り性を発揮して、魔法を用いた美味い肉の焼き方とかいう、戦時中になにやってんのお前らと突っ込みが来そうな事を熱心に話し合ったりしたのだ。

リアを無事に引っ張り出して、二人旅が三人旅になった後で、完成した俺達の肉焼きに関する魔法理論を披露して、妹（おとうと）分に馬鹿を見る目付きで見られたのも懐かしい思い出だ。

といっても実行の際には俺はテンポ良く、ぐるぐると肉を廻してるだけで良い。

あとは肉に対する熱の貫通性とかを調整してるシアが良い感じに焼いてくれるからね。

例のゲームの肉焼き歌でも歌おうかと思ったが、炊事場にいるエルフ達の視線もあるし、大人しく肉を廻し続ける。

十分程そうしていると、シアさんが「そろそろ良い具合だな」と仰ったので軸から肉をあげて、焼き上がりだ。

うむ、美味そう。理想のマンガ肉って感じ。

かぶりつきたくなるのを堪え、葉物野菜で彩りをつけた大皿をリアが持ってきてくれたので、その真ん中にでんっと肉塊を載せる。

そして最後にっ、取り出しますはコレ。乾酪であります！

「うわ、小さめだけどホールじゃん。こんなの荷物にあったっけ？」

小首を傾げるリアに胸を張って応える。

俺の私物です。ちょっとお高めのモッツァレラ系やで。

「トニーに氷出してもらってなんか冷やしてもらってるとは思ったけど……お前乾酪好きだよなぁ」

仮にトニー君がいなくとも、キミタチがおる時点で保存は楽勝だと踏んだので思い切って持ってきました。持つべきものは魔法に秀でた友人だね！

呆れを含んだ聖女姉妹（ブラザーズ）の視線を華麗に受け流しつつ、切り分けた欠片（ピース）を削ぎ切りにしてじゅうじゅうと音を立てるお肉に振りかける。

俺は好きだけど、苦手な人がいるかもしれないから半分だけね。唐揚げにレモン。キノコタケノコ戦争に類する凄惨な争いは身内で起こしてはならない（戒め

炊事場で調理するエルフ達の用意も大体終わったみたいだ。

グッドタイミングってな、さぁ、飯にしよう！

新たに加わったリリィの歓迎会、という訳でも無いんだろうが。

サルビアが気を利かせてくれたのか、エルフ達が用意してくれた食事もいつもよりちょっと豪華な気がした。いや、お客様用ってことで元からかなり手の込んでる品々ではあったんだけどね。

ログハウスの広間にある卓に彩り豊かな食事が並び、最後に真ん中に俺達の焼いた肉の皿が置かれる。

「さぁさ、今日のメインディッシュはオレと相棒の合作だ。心して味わい給え諸君」

「合作って……お肉を焼いただけでしょう。確かに美味しそうだけど」

「ふふん。そうでもないぞミヤコ？　なにせ、火の通し方や表面の食感まで二人っきりで旅をしてるときに話し合って生み出したモンだ。焼き肉の妙ってやつだな」

「……へぇ、そう」

ヘイ、そこの二人。飯時に謎のバチバチした感じを出すのはやめたまへよ。折角の出

来立ての飯を静いで冷ますなぞ、食に対する冒涜やぞ？

二人とも元・日本人だ。食に関する俺の理屈は理解できるようで。

お互いに穏やかならぬ視線を交わしあったままではあるが、大人しく食卓の席に着く。

「やぁ、やっぱ真ん中に肉がドカンと鎮座してると食卓の幸福度が上がる気がするッスねぇ。今までの飯も美味かったッスけど、やっぱ人間、肉を食わないと」

「……同意する……肉は、良い……」

トニーも嬉しそうだが、この場で最も肉食に近い種族である《虎嵐》の喜びっぷりは顕著だ。

いや、顔には出さないように努めてるのか、表面上はいつも通りなんだけど尻尾が凄い。動いて埃を立てない様に、席に着くと尻の下に尾を挟み込んで荒ぶる喜びを押さえている。

「さぁ、食事にしようリリィ。何か苦手な物はあるか？」

「……特に無い筈です。ありがとうございます、従姉様」

最後に座ったのは、シグジリアとリリィだ。

手を引いて《虎嵐》と自分の間の席に少女を導いたシグジリアの声と表情は、ひどく優しい。

従姉様、なんて呼ばれてる処をみるに、初日ではあるが良い感じに距離を詰めてるっぽいな、うむ、良き哉。

魔族である《虎嵐》の隣に座っても、特に反応を示さない辺り、リリィに保守派としての本格的な『教育』が施されていないのは確実だ。

真っ白なキャンパスってやつかね。いい年した大人達が子供を自分達の色に染め上げる為に、無垢に保つってのもゾッとしねぇ話だよ、遣る瀬無いったらねぇ。

気が滅入る話ばかりしても仕方ないな。飯だ飯。

一応、代表と言う事でシアが祈りの言葉を手短に済ませる。

というか日々短くなってきてない？　今日に至っては「全略！　いただきます！」だったんですけど。祈り何処にいった？

それでいいのか聖女。と思わなくも無いが、この場にガンテスやミラ婆ちゃんみたいに信心深かったりマナーに厳しい人はいないので、普通にスルーされて皆で「いただきます」と唱和して、本日の夕餉は始まった。

「にぃちゃん、箸削ってみたりしたんだけど、使う？」

お、マジか。使う使う。

隣に座ったリアからお手製の箸を受け取りつつ、やはり気になるのは本日からの拠点の新顔――リリィの様子だ。

彼女は普段の自分の食生活には無いのであろう、今夜のメインディッシュ……でっかいマンガ肉みたいな炙り焼きの肉塊を興味深そうに眺めていた。
「これはお肉ですか……？　上に何か掛かってるみたいですが……」
「こいつは乾酪（チーズ）と言ってな。羊や牛の乳なんかを加工した食材だよ――エルフにはこの匂いが駄目だという奴も多いんだが……食べれそうか？」
「はい、リリィは大丈夫だと思います。嫌な感じはしないです……初めて見る大きさのお肉なので気になりました」
じゃぁ取り分けてやろう、と嬉しそうに言うシグジリアに、小さく礼をいうリリィの目線は、相変わらず肉に固定されている。
ふっ――やはり俺の目に狂いは無かった。
（えぇ……何か目算があってお肉焼いたの？）
ヒソヒソと小声で左隣のリアと会話しつつ、言葉を続ける俺は我ながらドヤ顔だったと思う。
いやね、初めてリリィを見たときになんとなく……本当に何となくだけど、思ったのよ。
あれ？　なんかこの娘、副官ちゃんに似てね？　って。
（アンナに……？　特に共通点なんて見受けられないと思うけど。見た目も、性格的な

部分も）

会話に加わって来た右隣のシアの疑問も尤もだ。確かに外見や内面、リリィと副官ちゃんに類似する点を探すのは難しい。強いてあげるなら二人とも結構な美少女だという事くらいか。

何故だか二人の視線の温度が下がった気もしたが、変な事をいった記憶もないので、気のせいだろう。気にせずに続ける。

そこでピンと来たのだ。おそらく、俺が二人を似ていると感じたのは――嗜好の面なんじゃなかろうかと。

綺麗に小皿に盛り付けられた肉に、リリィが躊躇うことなくフォークを突き刺し、持ち上げる。

「……わぁ」

トロリと伸びる乾酪（チーズ）とジューシーに焼けた肉の断面を見て、小さく声をあげる姿は今までになく感情が色付いて見えるように思えた。

その小さな口が開かれ、えいやとばかりに肉にかぶりつく。

「……！」

はっきりと、驚きを映した様に目が見開かれた。

そう、彼女達の共通点。それは――。

「……おいふぃいれす」

二人とも食いしん坊の気――即ち腹ペコキャラの素養があるという点である！

発言からして、肉を食った事が無い、という訳では無いだろう。

だがそれは、なまぐさ全般を苦手とするスタンダートなエルフの味覚に合わせた、極力脂や肉汁を落とした物だった筈だ。

副官ちゃんの如く、リリィが実は健啖であるのなら、シアの反則的な手法で作られた日本の大型低温調理器顔負けの魔法のお肉は強烈なインパクトを齎すであろう。

そこに初めて口にする乾酪（チーズ）によるブースト効果も相まって、破壊力倍増しドン！　未成熟な少女の味覚を濃厚な口当たりと風味で蹂躙すること間違いなし！

いや、散々ドヤったけど、普通に外れて肉を嫌がる可能性も無かった訳じゃない。

でも別に問題ないやん？　それならそれで俺達が美味しく頂けばいいだけだし。

予想が外れようが外れまいが、俺に良し！　リリィに良し！　誰も損しないなら全ブッパするのは当然だよなぁ？

とはいえ、その心配も杞憂だった。

リリィは口いっぱいに肉と乾酪（チーズ）を頬張ると、眼を輝かせて一生懸命に顎を動かしている。

どことなく、その姿に頬袋に食料をため込んだ栗鼠（リス）が思い浮かんだ。

シグジリアはそんな少女を見て、相好を崩して彼女の頭を撫でているし、他の面子もほっこりとした表情でリリィを眺めている。

ふはは、賭け……というほど博打の要素も無かったが、俺達の勝ちだな。これで保守派の処に帰ってもリリィは今夜の強烈な記憶を忘れられず、出される食事に不満を覚えるに違いない。

人間――というか人類種全般、飯がマズけりゃ心も荒む。そうなりゃどんなご高説も思想もストンと胸に落ちる筈も無しってなぁ！

なんなら開明派の方に肉焼き魔法のノウハウや乾酪（チーズ）の仕入れ先を教えておいても良いな。

用途の割に難易度が無駄に高いのだが、サルビアなら習得も可能だろう。彼女もリリィを引っ張り込める可能性があるとなれば習得を躊躇いはしないだろうし。

完全に飼い慣らしたと思っていたチビっ子に、飯を理由にそっぽ向かれる保守派とか想像しただけでクッソ笑えるんですけど。

暫くは夢中で初めての味覚の暴力を味わっていたリリィだが、幾らか胃に収めて落ち着いたようだ。

口端に付いた食べかすを優しく拭うシグジリアに、彼女は困惑した様子で問いかける。

「……従姉様、このお肉を作った人はあの黒髪の人なのですか？」
「あぁ、そうだ。上に掛かってる乾酪も彼の持ち込み品だと聞いた」
「……困りました。リリィは祖母様に魔族の方と黒髪の男性の方とはお話をしないよう、言い含められているのです……美味しい物を作ってくれたお礼が言えません」
それを聞いたシグジリアの顔が、なんか凄い事になった。
口汚く罵り声を上げたいのに、それを我慢してるような、可愛らしいものを見て喜びを覚えている様な……矛盾が同居する、なんとも複雑怪奇な面相である。
メンタルがガタつくと《虎嵐》にくっ付いていた彼女だが、リリィを間に挟んだ状況ではそれも躊躇われるようで「うぐぅ」という珍妙な鳴き声を上げていた。
俺はそんな二人を見て苦笑すると、チラリとシアの方を見やる。
我が友人はこちらの意図を即座に察した様だ。食事の手を止めて軽く咳払いすると、シアはリリィに向けて話しかけた。
「あ～……リリィ？　君は長老連中から、出来るだけオレやアリアの機嫌を損ねないように指示を受けている――そうだったな？」
その問いに、チビっ子も食事を一時中断し、フォークを置いてこっくりと頷く。
「はい、愛し子様。リリィはこちらに伺う際、くれぐれも御二人の怒気に触れぬようにと、祖母様や他の長老衆の方から再三言い含められています」

「うむ。言いつけられた内容は、それが最重要な訳だ――ここで少し意地悪な言い方をさせてもらうけど、リリィが《虎嵐》やオレの相棒とお話をしないというのは、オレ達にとって大変に面白くない状況と言える」

「――！　困りました……それではリリィは祖母様の言いつけを破ってしまう事になります」

　途方に暮れた様に、従姉とシアの顔を交互に眺める少女に、金の聖女様は顰めっ面を作って尤もらしく頷いた。

「うんうん。なんでな？　一番大事な言いつけを守るために、三番目、四番目に廻るようなこの二人とお話をしない、なんていう内容は……棚上げしてしまっても問題無いんだよ。なにせ一番大事な事を優先する為なんだから」

　ハッとして、まるで天啓を得たかの如く自分を見つめるリリィに、優しく微笑みかけるシア。

「そういう訳で、言いたい事があるなら遠慮せずに二人に話しかけると良い。そうすればオレとアリアも嬉しいし、リリィも気兼ねなくお礼が言えて嬉しい。誰も損しない素敵な『仕方がない』というやつだ」

（誰も損しないっていう処で、さり気なく保守派を省いてる時点で詭弁の類ッスけどね）

（あら、トニー君は彼らに配慮すべきだって意見なのかしら？）

（御冗談を。とはいえ、リリィ嬢。将来的にはそこに気付いて突っ込み入れられるくらいにはなって欲しいもんっスね）

（……そうね。誰かの意思を挟まずに、自分だけの意思で、自分の言葉を伝えられる。そんな当たり前の事すら制限されてきたんですもの）

帝国の二人が先程の俺達の様にヒソヒソと会話しているが、それは一旦置いといて。

リリィは少しだけ迷っていたが、直ぐに答えは出たみたいだ。

俺に視線を向けると、何度か息を吸って、吐いてを繰り返し、思い切った様に口を開く。

「……美味しいご飯を作ってくれてありがとうございます。こんなお肉を食べたのは初めてでした」

あいよー。そう言って貰えると嬉しいね。まだまだあるから、食べ過ぎない程度に食うと良いさね。

手を振って返してやりながら、努めて軽い調子で言ってやると、長老連中の言いつけとやらを『仕方なく』とはいえ、破る形となったリリィの肩から、力が抜けた。

そのままの勢いでと言わんばかりに、次いで隣の《虎嵐》に向き直り、お話をしても良いかと問いかける。

元より、保守派に拉致られた際に子供に甘いことが発覚した男だ。断る筈も無かっ

た。
反射的にリリィの頭に手を伸ばした《虎嵐》が気付いた様に動きを止め、「……触れても良いだろうか？」と、慎重に質問を返すと、リリィは不思議そうに「リリィにですか？　……どうぞ？」と返し。
どこかぎこちない動作で少女の頭を撫でる虎の獣人と、反対側から手を伸ばして同じように撫でる笑顔のエルフ。両者に挟まれて頭を撫でられながら、よく分かって無い感じのちびっ子エルフという、奇妙だが心温まる光景が展開された。
「……なんだか家族みたいだね」
リアがそんな風に呟くのが聞こえるが……いや、家族やろ。夫婦の間にいるのが親戚の子ってだけで、身内なのには変わりないやん。確かな情があるなら猶更に。
「そっか……そうだよね」
何処か感慨深い様子のリアだが、お前さんの場合は聖都に家族に近いノリのおっさんや年寄り連中がゴロゴロいるじゃないの。姉貴（アニキ）も含め、ほぼ全員人外級というひでぇ戦力過多なファミリーになりそうだけど。
しかし、なんだな。
末っ子ポジで猫っ可愛がりされてるリアだが、将来誰かと付き合う事とかになったら、その相手は魔力カンストの姉（あに）と技量カンストの婆ちゃん、筋力カンストのゴリラと

腹黒カンストの爺の壁を越えねばならんのか。

無理ゲーすぎワロタ、まだ見ぬ相手に同情するわ。

……それはそれとして俺も壁として参加するけどな！　理想を言うなら、切り札込みの俺くらい超えて貰わないと安心して妹（おとうと）分を任せられんし。

割としょーもない事を考えつつ、止まっていた食事の手を再開させる。

ついつい肉ばかりにフォークを伸ばしてシグジリアにやんわりと怒られているリリィを眺めながら、さて、明日の朝食はどうしてやろうかと考えたり。

……取り敢えず、朝一で山羊のミルクを貰って羊酪（バター）でも作ってみるか。鎧ちゃんを起動して本来攻撃に使うレベルの高振動をミルクに与えてやれば直ぐよ直ぐ（体験済み）。

蜂蜜も保存食として持ってきてるし、たっぷりのバターと合わせたパンケーキ（もどき）とか良いかもしれんな。

食いしん坊な小動物への餌付けを計画してる気分になりつつ、俺は夕食に舌鼓を打って箸を進めるのだった。

ちびっ子への更なる食いしん坊化計画を進めたり、やたらオセロに強くなった護衛の

あんちゃんに一度も勝てなくなったり。
隊長ちゃんが簪を眺めてニコニコしているのに気づいたシアとリアが、大騒ぎしてひと悶着あったり。
あわや金の聖女と黒髪侍ガールの大激突になりかけ、巻き込まれたトニー君が「自分は石自分は石自分は石自分は石」とか呟きだしていきなりその場で死んだフリ始めたり。
《虎嵐》とシグジリア夫妻がどうにかしてリリィを引き取れないかと真剣に相談を始めたりと。
細々とした――というにはお腹いっぱいになりそうなイベントが発生しつつ、更に数日が経過した。
再びサルビアが拠点となっている宿泊地を訪れ、準備が整ったと、告げる。
いよいよ今回の一件の肝、界樹の異常についての調査と相成った訳だ。
開明派に所属している者達をほぼ全て動員して、今回の事に当たる、と。サルビアは腹を括った様子で話していた。
なんでも、邪神の信奉者達の手によって界樹が汚染を受けてからというもの、長老衆を筆頭に優れた魔力を持つエルフ達の手によって、界樹の周辺や到着するまでの道程に十重二十重に結界や警報代わりの魔法が多数仕込まれているらしい。

ウチの聖女達なら突破は容易だろうが、エルフ以外が解けば即座に察知され、保守派が大挙してやってくるとのこと。

なので、道中の仕掛けられた魔法はサルビアが解き、物理的な罠や警報はシグジリアを筆頭に随伴するエルフの戦士達が解除に当たる。

それで時間は稼げるだろうが、ある程度経てば保守派に気取られるのは必至だ。全員で行く訳だから拠点だって空になってるしね。

界樹の除染や浄化中になりふり構わず雪崩れ込まれて失敗しては元の木阿弥。

なので、俺達の行き先に気付いた保守派連中が追いすがってくるのを、開明派の人員を持って足止めする。殆どの者達はこれに専念するらしい。

できれば同胞の血を見る様な事は避けたかったらしいが、今回の一件を長引かせる方が色々エルフの未来的にヤバいと判断したみたいだ。

全て終わった後、派閥を問わずに治療を行うとシアとリアが明言したのも彼らを後押しする一因だろう。聖女が治療に当たる＝腕が捩げようが脚が千切れようが眼球が零れ落ちようが死んでさえいなきゃどうとでもなる。って事だしな。

一応、立場的には保守派から派遣された事になってるリリイも連れて行く事になっている。というか、置いていくのを魔族領の夫婦が嫌がった。まぁ、反対意見も無かったんだけど。

これに関しては、寧ろ好都合だとサルビアも頷いていたし。
何かをさせる、という訳では無いが、開明派が主導となって行った界樹の浄化に一応保守派であるリリィが立ち会っていた、ということで最低限の面子は長老衆に持たせることが出来るだろう、との事だ。
一から十まで蚊帳の外で面目丸つぶれ、引くに引けない、なんて状況に追い込むよりはマシだという判断らしい。種の存続と、派閥の長としての立場。板挟みで大変そうだね。
そんな訳で、ほぼ夜明けと同時に俺達はひっそりと拠点を抜け出し、界樹の聳える大森林の中央へと歩みを進めていた。
開明派のエルフ達はこっちよりやや遅れてなるべく不自然にならん様に郷を抜け出し、界樹への到達経路を遮る箇所に配置されるらしい。
三国の使者に同行しているのは、サルビアと初日に俺達を出迎えた青年エルフを含めた数人のみである。
「しっかし、こうやって根本に近づいていくとぶっとんだサイズがより実感できる様になるッスね」
人間にとっちゃ鬱蒼とした道なき道も同然な森のなか、特に苦戦している様子も無くひょいひょいと進みながら、トニーがぐるりと周囲を見渡す。

この場にいる面子で森の中を歩くのに苦労する奴なんていないのだが、それは基礎スペックの高さだったり、身体強化の恩恵在りきだ。彼の場合は、単純にエルフに見劣りしないレベルで森林地帯での移動法を心得ているのだろう。

分かってはいたが、多芸だねトニー君。伊達に《刃衆(エッジス)》で単独の潜入任務に従事してないってことか。

実際、言う通りだ。森の中心に進むにつれて、段々と樹々の背丈が高くなってきている。

女神様が直接降りて来たのが界樹だが、その周辺の樹もいくらか恩恵的なものを受けたという事だろう。幹の太さからして樹齢何千年だよってレベルの大木が、森を形成するレベルで生え揃ってる訳だし。

既に朝日が昇り切った時間帯とはいえ、こうも巨大な樹木に囲まれた緑の天井の下では、日の光はまだまだ届かない。

あちこちに生える光を放つ苔や植物、樹々自体が放つ聖気混じりの薄っすらとした光のおかげで、意外と暗くはないんだけどね。

「肝心の界樹は、除染や浄化自体は殆ど終わってるって話だよな?」

シアの確認の声に、眼前にあった人除けの結界を解除し終えたサルビアが振り向き、首肯した。

「はい。完全な浄化まであと一息、という処まで来ているのですが……根や幹の中心部分といった物理的に距離のある箇所は難航しているのが現状です。或いは界樹自体が呪詛を特定の箇所に集中させることで、本体の大部分を護っているのかもしれませんが」

話を聞く限り、おそらく上位眷属が直接内部に潜り込む事で大規模な汚染を引き起こしたようだが……腐り落ちたり瘴気をまき散らす魔樹の類にもならず、時間こそ掛かっているが持ち直しているってのは凄いよな。流石は女神様印の古木だ。

完治にはまだ掛かるとはいえ、古来からそうであった様に、薄っすらと消える事の無い聖気を放出し続けていた界樹だが。

ある日を境に突如として光を失い、聖なる気の波動が止まったらしい。

大慌てで派閥も何も関係なく、エルフ総出で状態を確認したところ、本体そのものには以前と変わった処は無し。

聖性自体も喪われた訳ではなく、ただ周囲への放出が止まり、樹の体内で奇妙な循環をみせているそうだ。

呪詛汚染を受けた直後ですらこんな状態にはならなかったらしく、内側のみで聖気が巡っているために干渉が難しくなり、残った浄化も更に難易度が上がるという悪循環。

大戦を終結に導き、大本の邪神を討滅したとされる聖女に合力を願うのは、ある意味

では既定路線だったのかもしれんね。頼み方に問題があって散々ゴタゴタした訳だけど。

「何にせよ、樹木自体に何かが干渉して異常を引き起こしている、という事で無いのなら、《刃衆》に出来ることはあまりなさそうですね。レティシアとアリアちゃんにお任せすることになりそうです」

「……帝国に限らず、我ら魔族領としても同じ事……歯がゆいが、聖女殿に委ねるが最善だろう」

「自分は楽に終わるならソレに越した事は無いと思うッスけどねぇ……」

隊長ちゃんと《虎嵐》が不甲斐なさを恥じる様に、眉を顰めて言うが……トニー君の言う通り、適材適所って奴やろ。それを言うなら俺だってただのにぎやかし要員で終わる可能性大やぞ。

そんでも、未だに界樹に残留している呪詛……内部に融けた上位眷属の一部が悪さをしないとも限らない。

シアとリアが除染・浄化にかかりきりになるのなら、万が一の為に二人をカバーする位置に控えてるのが俺達の仕事になるやろ。油断せずに行こう。

そんな風に、各々が改めて気合を入れ直して進み続け、二時間ほど経っただろうか。

界樹に近づいたせいか、デカい日陰に入ったようで高く上った日も全く差し込まぬ森

の中を進んでいると。
先導役のエルフ達が幾つ目かの罠を解除すると同時に、俺達の先頭を行くシグジリアとサルビアが顔を見合わせ、頷いた。
「伯母上」
「えぇ――皆さん、到着しましたよ。あれが、界樹です」
まるで壁の様に無数の枝葉が絡み合う、魔法によって作られたのであろう最後の防壁は、サルビアが手を翳すと意思を持っているかのように動き、道を開けた。
その先に広がっていたのは、開けた空間。そして大きな湖だ。
遠目からでも分かる程、おそろしく透明度の高い水で満たされたそのほとりには、大森林に棲む動物達が集い、穏やかな憩いの場を形成している。
更にその奥、広々とした湖が小さく見えるようなサイズ比で、界樹は天に向かって屹立していた。
当たり前だが、ここまで近づくと首を真上に向けたって天辺は見えない。
本体の太さ自体が広場いっぱいだしな。ざっとみても幅２００メートル以下って事はあるまい。高さに関しては言わずもがな、というやつだ。
遠目から――それこそ大森林の外からみてもその威容は大したもんだったが……こうやって目の前にするとすげぇな。もうすげぇしか出てこないわ。すげぇ。

「おぉう……ふぁんたじー……」
「レティシア、語彙力が死んでる。気持ちは分かるけどさ」
俺と並んで界樹を見上げていたシアの口からアホっぽい言葉が零れ、同じく上を見上げているリアが即座に突っ込みを入れる。
ぶっちゃけ、エルフ以外は皆同じようなリアクションだ。揃って口を半開きにして、この世界最大の超ド級の大樹を見上げ、感嘆の声を上げていた。
「……私も此処のエルフですから、皆さんが界樹を見て感動して下さるのは、正直、誇らしい気持ちがあります」
サルビアがちょっと自慢気に微笑んで、ちらりと《虎嵐》が背負ったリリィに眼を向ける。
軽く手招きされると、彼女は素直に《虎嵐》の背から降りてサルビアの下に歩み寄った。
「リリィ。これからこの方達は、ここで大きな仕事を為さねばなりません。私達は案内役なので、あとは邪魔にならない様に下がって応援しましょうね？」
「……分かりました、リリィは皆さんがお仕事を終えるのを、待っています……頑張ってください」
ペコリと頭を下げて、サルビアに手を引かれて二人は湖の方へと移動してゆく。

最後に開明派の長殿が「御武運を」と、祈る様に呟くと、随伴してきたエルフ達も口々に激励の言葉を残し、同じく湖のほとりへと向かった。

残された俺達は顔を見合わせ、誰ともなく一斉に頷く。

「さて、先ずはオレとアリアが界樹に魔力を走らせてみるか……こんだけデカいと精査に全振りしないと時間掛かるし、フォローは任せた」

おう、任された。

今回は、聖女様以外の面子はそれがお仕事になるからね。

シアの言葉に皆が力強く応え、俺も同じく応じながら静かに鎧ちゃんを起動したのだった。

界樹の根本へと移動し、シアとリアが二人がかりで精査を始める事、二十分。

事前情報の通り、やはり本体の幹――中心部分と地中深くの根の部分に汚染が残っている様だ。

調査の結果、根は時間がかかりそうだが、幹の方はなるべく近くに二人が回復魔法をたたきこめば、分厚い樹皮と幹を貫通して届く可能性が高い、との事。

呪詛汚染の方は前もって立てていた予想とそう大差ない結果が出た、と言える。

問題は、界樹に発生したという異常の方だ。

「分からない？　貴女達が？」
予想外の言葉を聞いた、という表情で、やや呆気に取られた隊長ちゃんが二人に聞き返す。
シアの方も歯切れ悪く、どうにも明確な答えが出ないとばかりに頭をかいた。
「あぁ。ここからだと距離があるせいかもしれないけど……界樹の天辺あたりにかな？　何か空白みたいなものがあるというか……嫌な感じはしないんだけど、判然としないというか」
「なんとなくだけど、その空白が界樹の異変に関係してるんだと思う。でも、ボクにもレティシアにも、害あるものとは思えないんだよね……どういう事なんだろう」
姉の言葉を引き継いで、リアが漠然とした予想を立てるが……この二人が精査しても分からんって時点で十分に異常なのは間違いないんだよなぁ。
ふむ……天辺か。いっそ二人を抱えて俺が登ってみるか？　近くで調べれば詳細も分かるかもしれんが……リスクが未知数過ぎるな。俺だけなら兎も角、二人にリスクが降りかかる可能性がある。却下却下。
手詰まり、という訳ではないが、異常とやらに対して明確な解決法が出て来ていないのも確かだ。
どうしたもんかと、全員で首を捻っていると、シアが俺を見つめて一つ、案を上げた。

「……お前なら別の切り口で調べられるんじゃないか？　確か、気脈や地脈に干渉する技術があったよな？」

……《地巡》の事か？　まぁ、確かに。そのままだと身体に流せない魔力とかを地脈に循環させたりするけど……。

正直、干渉という点だけで見るとこんなデカいモン、まともに接続できる気がしないぞ。鎧ちゃんを完全起動したって焼け石に水だ。

ミラ婆ちゃんならワンチャン可能だったかもしれんが、俺の《三曜》の精度じゃなぁ……。

「現状、明確な精査が難しいってんなら、なんでも試してみるのもアリじゃないッスか？

別に駄目だったら駄目で、次々試して行けば良いってことで」

「……だな。手をこまねいているよりはトライ＆エラーを繰り返した方が進展もある筈だ」

トニーとシグジリアが特に気負うこともなく「まずは試してみたら？」といった感じで俺に調査をする様、勧めてくる。

……そうだなぁ。結果が出る処か、そもそも上手く調べられるかも分からんが、とりあえず、やるだけやってみるか。

なんか進展でもあったらめっけもの、って事で。

――《起動（イグニッション）》。

鎧ちゃんを完全起動し、界樹の前へと立つ。

その場で腰を落とし、深く息を吸い、吐き。気息を整える。

軽く掌を樹の表面へと当て――知覚を開始。

……うん、植物だからか、人や動物、邪神の眷属なんかよりは大分素直で魔力を通しやすい。

けど、やっぱでけぇよ。デカすぎ（白目

どう考えても俺の《三曜の拳》で聖気の流れを知覚し切れるサイズじゃねぇ。ここから天辺までとか無理だろコレ。

早々に音を上げたくなるが、取り敢えずいけるとこまで頑張ってみようと、更に感覚を尖らせ、樹の表面から微かに漏れて来た聖気を多少なりとも足しにしようと身体に循環させて――。

……あれ？　そういえば界樹って聖気が全く放出されなくなったって言ってなかったっけ？

そんな風に思い立った瞬間だった。

水道管が破裂したみたいに、ドパァ。と音すら立てて莫大な聖性が掌が触れた部分から溢れ出す。

何か反応する暇すら無い。
頭からひっかぶるように界樹の聖気を浴びた俺の意識が、引っ張られる。
瞼が明滅し、視界が白んで、気が遠くなって。

最後にシアとリアの叫び声を聞いた気がしたが、声を返すことすら出来ず、俺の意識はブラックアウトした。

――で、だ。
気が付いたら、酷く既視感のある謎空間にひっくり返っていたでござる。
身を起こし、先ずは自身の状態をチェック。
いつの間にやら、鎧ちゃんも解除されている……逆を言えば、それ以外に異常や負傷なんかは無いみたいだが。

次いで、辺りをぐるりと見回してみた。
……やっぱ見覚えがあるな、この真っ白過ぎて距離感も糞も無い不思議空間。
嫌な予感がして、腰に括りつけていたポーチを漁ると……非常食として入れておいた干し肉が出て来た。
取り敢えず齧ってみる。うむ、塩気がきつい。
食い物まできちんと持ってきてるということは、今の俺はちゃんと肉体が在るって事だ。以前似たような場所にいた状況とは違う。怖い予想は外れてくれたみたいで何よりだわ。
ガジガジと干し肉を齧りながら、方角も分からん純白の空間を適当に歩き出す。
完全に当てずっぽうではあるが、なんとなく予感があった。
程なくして、俺はお目当ての人物——否、神物を見つける。
久しぶりにみたその人は、相変わらずのナイスバディで、シアリアに匹敵するレベルの超美人だった。
癖の無いサラッサラの金髪に、白い絹をベースにしたっぽい装束。
以前お会いしたときに見た、不思議な光彩を宿した瞳は今は閉じられ、桜色の唇からは静かな吐息が漏れている。
……うん、取り繕う表現は止めよう。

目の前の御方は寝てた。それもかなりガッツリ。
真っ白謎空間に不釣り合いな位に生活感のある、しっかりとした寝台と、やわらかそうなお布団に包まれて、スピースピーと寝息を立てて爆睡していた。
……えぇ（困惑
どうしよう、話を聞きたいけど起こして良いものなんだろうかコレ。
悩むが答えは出ず、とりあえず干し肉をお代わりしてかじってみる。
半ば現実逃避代わりにガジガジしていると、あちらの方から反応があった。
「うぅ～ん……なんだかお肉の匂いが……んん……ぇ、アレ？」
眼を擦りながら起き上がった御方と、ばっちり目線が合う。
寝起きで眠た気だった目が、一瞬で見開かれ、やっぱり何度見ても不思議な光彩の瞳が驚愕の光を宿して煌めく。
「……えぇ!?　なんで此処にいるっ……まさかもう死んだんですか!?　今度はどんな無茶をしたんです貴方は!?」
初手からいきなりご挨拶ぅ!?
思ってたより大分早いものとなった、大恩ある女神様との再会は。

初っ端からひでぇ勘違いで叫び声をあげる女神様に、俺がビシィッ！　と平手でツッコミを入れるというグダグダな始まりであった。

お仕事二つ。

「し、失礼。取り乱しました……考えてみれば此処は天上ではありませんでしたね」
初っ端からかましてくれた女神様だったが、そこは流石というかなんというか。
俺が魂や精神だけ、みたいな状態ではなく、生身でこの場にいる事を直ぐに察した様だ。
軽く咳払いすると寝台から身を起こし、無造作に手を一振り。
熟睡していたベッドが消え、代わりにお洒落な感じの椅子と小さなテーブルが現れ、彼女は優雅な動作で席に着いた。
「貴方も座りますか？」と言ってくれたが、流石に同じ席に着くというのも失礼と言うか不敬な感じがするので、謹んで辞退させてもらう。
「……へんな処で敬意を払おうとしますねぇ……この様な会話をしている時点で今更な気がしますが」
トークが気安いのは自覚があるけど、まぁ、その辺は多めにみてもらえると助かりま

す、ハイ。

しかし、思いもよらない場所で思いがけない再会をしたもんだ。

「まぁ、そうですね。まさか此処で貴方に会うことになるとは思いませんでした」

ふむ……界樹の内部を走る巨大な気脈と同調したときに、強烈に引っ張られた感覚があったんだけど……女神様がなにかした訳では無いみたいだ。まぁ、自分でやったんならあぁやって寝てる筈も無いか。

「あの娘達と共にエルフの郷へと来ていたのは把握していましたが、この樹に接触する為に訪れていたとは……貴方が引っ張られたのは、私が再構成した肉体のせいもあるのでしょう」

女神様の話によると、彼女のお手製であるマイボディは彼女所縁の聖遺物――今回の場合は界樹だな――と、波長が合い易いらしく、同調した際に界樹の一部だと誤認されて引っ張り込まれたんだろうって話だ。

「それだけならこういった事も起こらなかったのでしょうが……私はここ最近、この樹に滞在していまして……この空間を起点に内部の力を循環させている最中なので、引っ張られた後、肉体を持つ貴方はここに放り出された形になったのでしょうね」

そんな風に俺の現状を纏める女神様の表情は、ちょっとバツが悪そうだった。

別になんか危害があったって訳でもないし、そんなに気にすることは無いと思うんで

すけど。

というか、何気に界樹の異変とやらの原因も分かっちゃったな。女神様が滞在して内部の聖気を循環オンリーに絞ってたのか。

「ええ。ようやっと戦後のリソース管理も一段落ついたので、永らく放置気味だった中継点の調整（メンテナンス）を行おうかと……邪神の欠片に汚染されているのは承知してましたし、調整と浄化と、あとはちょっとした贅沢を兼ねての滞在だったんですよね」

勿論、女神様が実際に手を出せば上位眷属の呪詛だろうが一瞬で浄化も終わるだろう。

だが、界樹という聖遺物の内部であっても、下界の問題に直接手を出すのは神様的なルールに引っかかるらしい。

なので、樹の天辺に自身が滞在する為の空間を作って『なんもしてないよ、ただ居るだけだよ』という状態を作り、自身が意識しなくても放出してる莫大な聖気によって勝手に浄化されるのを待っていたのだとか。

内部の循環については除染には関係の無い『調整』に関する事なのでセーフらしい。さっき界樹を中継点とか言ってたし、この世界の管理に関係する事なんだろうね。

しかし、最後に言っていた贅沢……神様の贅沢か。

俺の貧困な想像力では、高級リゾートとかで寛ぐイメージくらいしか思い浮かばんけ

ど……死んでるときに会話したあの天上らしき場所と大差ない真っ白空間で、何を贅沢するってんだろう。ちょっと気になるわ。

よっぽど顔に出ていたのか、それとも思考を読んだりしたのか。

女神様はきょとんとした顔になると、ややあって、「あぁ」と納得した様に頷いた。

「貴方達と神性では色々と基準が違いますからね――私の言う贅沢とは、所謂生物でいう処の『睡眠』です」

すいみん。

「ええ。あの腐れ外道がこの世界に端末を送り込んでからというもの、そのような嗜好に現を抜かす暇などありませんでしたが……久しぶりに満喫してみようかと」

照れ臭そうに笑いながら、ちょっと頬を染めるその姿は……ただ『寝る』というだけの行為をマジで至高の贅沢であると確信しているようであった。

「思考を分割も並行化もせず、分霊も扱わずに完全に意識を遮断して休息のみに費やす――久しぶりにやってみると背徳感も手伝って、ちょっと悪い事をしてる気分になりますね」

おぉ……もう……。

何故だろう、目頭が熱くなった。

「この世界でも羽毛布団などの寝具はありますが……貴方の居た世界の寝具の進歩具合

は素晴らしい……！　ウォーターベッドという概念を知ったときは目から鱗でした……！」

――もういい……休め……っ！　休めっ……!!

目を輝かせて力説するその姿に、何故だか最近言ったような言ってないような気もする台詞が、つい口から出てしまう。

不思議そうな顔で「え、えぇ。だから、さっきまで休んでましたよ？」とか言っちゃう女神様に、猛烈に土下座したくなる。

貴重な貴重な御休みの時間を今も削らせている事、まっこと申し訳なく……！

「うえっ……なんで急に土下座を!?　意味が分からなくて怖いんですが!?」

床……が存在するのかも怪しい謎空間ではあったが、取り合えず土下座して立っていた場所に額をたたきつける俺の後頭部に、ドン引きしてる女神様の声が突き刺さったのだった。

「えーと……では、貴方達の方で浄化の作業を行ってくれると言う事でよいのですね？」

はい。こっちで全部片づけるんで、心置きなく予定の日までお休み下さい（迫真

いつになく気合を入れて返答する俺ではあるが、女神様の顔には『解せぬ』とデカデカ書いてあった。

「まぁ……正直、有難いのは確かです……では、浄化のついでにもう一つお願いしちゃったりしても？」

シアやリアに負担が掛からず、俺に出来る事ならなんでもやります（即答

「……なんでしょうこれ。真摯な信仰と一緒に何か生暖かくて優しい感情が流れ込んでくる……長らく神性をやってますが初めてなんですけどこの感覚」

嫌ではないが、複雑。

そんな表情のまま、女神様はブツクサ言いながら掌に眩い光球を生み出した。

とんでもねぇ量の聖気を圧縮した塊の様なソレは、ふよふよと浮いて彼女の手から離れると、俺の前に漂ってきてピタリと止まる。

見る限り光量が激し過ぎて光の玉にしか見えんが……なんぞこれ？

「私の力を大地に巡らせる中継点が、この樹だけというのもいい加減効率が悪いと思いまして。ここ最近、循環のみに注力させた成果というやつですね」

なるべくこの地から離れた場所に埋めて下さい、余程の荒れ地でもなければ何処でもいいので。と仰るお言葉に了解の意を示しながら、取り敢えず目の前の光球を掴むと、腰のポーチの中に押し込んだ。

しっかりポーチのボタンを留めて、渡されたモンを収めたのをお互いに確認すると、女神様は一つ頷き。

「最後にこの樹の浄化作業を行ってくれる我が英雄に、少しばかりの加護を」

土下座こそ止められたが、彼女の前に正座したままであった俺の額に、その繊手が伸ばされ、指先が触れる。

「この位なら天上の法にも引っ掛からないでしょう。浄化にほぼ使い切るとは思いますが、余った分の使い道は貴方に一任します」

貴方の武装に溜めておいたので、有効活用するように。という言葉から察するに、おそらくは聖気の類を一時的に俺に宿してくれたっぽい。手伝うと豪語しながら助力してもらうとか情けないやらありがたいやら。

先程とは立場が逆転した、複雑な表情をしているであろう俺と何処か優しい目付きで此方を眺める女神様ではあるが、切り替える様に彼女はパン、と掌を合わせて叩いた。

「では名残惜しいですが、そろそろ貴方を元居た場所に戻すとしましょう――準備は良いですか？」

ウッス。任された仕事は二つともきっちりこなすんで、御安心を。

しっかりと頷いて、お世話になりましたと頭を下げる俺に、彼女は微笑んで。

「またいつか、会いましょう英雄よ。次の再会は貴方が三度目の生を充分に生き抜いて

からであることを、願っていますよ」

最後にそんな言葉と共に手が翳され、眼前に強烈な光が走ると共に俺の意識は暗転した。

ちょいとキツめの立ち眩みの様な感覚から、一気に意識が通常状態へと覚醒する。

白んだ視界が色を取り戻し――目の前には俺が掌を押し付けた状態の界樹。

おぉ、別に女神様の言う事を疑ってた訳でもないが、あっさり戻って来れたな。

とりあえず、ホッと一息ついた瞬間だった。

凄まじい勢いで飛びついて来たシアに横っ腹へとタックルを喰らい、その当人と一緒に俺は吹っ飛んで地面に転がる。

うごっふ!?　え、ちょ、何……!?

戻った直後なのもあって、混乱具合が酷い。転がったまま腰にかじりついているシア

の頭頂部を見下ろすと、その顔がガバっと上げられた。
俺が何か言う前に掌が伸ばされ、肩やら頬やらを触診する様にペタペタと撫でまわされる。
「……無事か!?　身体はなんともないのか！　怪我は!?」
強いて言うなら、今さっき君に頭突き同然のタックルを喰らった横っ腹が痛いんですけど。
「ッ!?　怪我してるのか!?　見せてみろ！　直ぐに治す！」
やだこの子。皮肉が通じない。
ちょっと呆れた気分になったのも一瞬――見慣れた空色の瞳に必死さと……怯えすら宿っているのを見て、即座に意識を切り替える。
あの空間は女神様謹製の代物で、半分天上に片足突っ込んだ様な場所だ。時間の経過自体にこちらと大きなズレがある。
おそらく、こっちで俺が消えていた時間は一瞬から数秒といった程度なんだろうが……考えてみると、界樹の聖気を浴びたと思ったら、溶けて消えた。みたいに見えても可笑しくないんだよね。そら心配しますわ。
ごめん、心配かけたな。大丈夫だから、と。
脇腹に回復魔法を発動させるシアに声を掛けようとして――同じく駆け寄って来た

リアと隊長ちゃんに覆い被さるように飛びつかれ、俺は潰れた蛙みたいな声を上げる羽目になった。
「にいちゃん！　大丈夫なの!?　なんともない!?」
「急に界樹から聖気が放出されたと思ったら、先輩の姿が消えて……！　無事なんですよね!?」
うぉっぷ、ちょ、待って待って、この体勢は色々当たってよろしくない、一旦待って!?
そもそも三人に押し潰された様な状態で返事できる訳ねぇだるぉ！　先ずはどいてくれない!?
「――ッ、どこか異常があるかもしれない……調べるぞ、手伝えアリア、ミヤコ！」
「わかった！」
「ええ！」
無理にでも返答をしなかったのが選択ミスだったのか。
シアの焦燥に駆られた声に二人は一も二も無く頷き、三人揃って抜群の連携を発揮して俺の服を剥ぎ取りにかかる。
わぁ、手際がいい――じゃねぇ！　おい、大丈夫だから手を止めてくれ、なんともないから！　怪我も異常もないから！　おい待て、ズボンはやめろ！　なんでこんな事に

なってんの!?

そもそも魔力で精査すればいいだけの話だろーが！

何故か背を向けて此方を見ない様にしてる魔族領の夫妻とトニー君に助けを求めながら、シャツとズボンだけになった俺は必死こいてズボンを押さえつけるのだった。どうしてこうなった（白目

結局、危うく剥かれそうになった俺の窮地を救ってくれたのは、湖の方から俺達の様子を見ていたサルビアだった。

水滴ほどにも放出されていなかった界樹の聖気がいきなり鉄砲水みたいに発射されたのを見て、何か大きな進展があったのかとハラハラしながら見守って居たら、いきなり女衆三人が野郎一人を押し倒して衣服を剥ぎ始めたんだからね、そら驚くよね。

「界樹の下で何をやらかそうとしているんですか！　というかリリィの教育に良くないのでやめて下さい！」

基本、敬うべき客人、みたいな感じで常に俺達に配慮した言動である開明派の長殿だったが、流石に種族が代々祀って来た御神木の下での強制剥ぎ取りストリップ――し

かも男やぞ――にはツッコミを堪えきれなかった様だ。
続くリリィに関する事も当然すぎて反論の余地が無いので、このときばかりは立場や力関係などぶん投げ、サルビアは俺達を並べて正座させるとプリプリと怒りながら説教を始めた。
シア達も心配が過ぎて暴走したという自覚があるのか、大人しく正座したまま怒られている。
なんで俺まで、俺被害者やん。と、思わなくもないが……この手の話題でそれを主張した処で、下手すりゃ相手の怒りに燃料投下するだけだ。沈黙は金というやつである。
ちなみにリリィに関してはサルビアと同じか、それ以上の反応を示しそうなシグジリアは、今回は目を逸らして明後日の方向を眺めている。
そらアンタ、ここ数日の間に散々あの娘の前で旦那とイチャコラしてたもんね。寧ろそれがバレたら俺達の隣に参加するハメになるまである。貴公、眼を逸らしてないでこちらに来たまえよ（道連れ
当のリリィは随伴してきたエルフの一人に掌で目を覆われ、しっかり視界を塞いだ上で手を引かれてやってきた。
「真っ暗です。リリィはいつまでこうしていれば良いのでしょうか」
「そんなに長くはないと思うッスよ？　あんまり時間かけるとリリィ嬢の御祖母さんや

そのお友達が顔真っ赤にして此処にやってくるッスからねー」
飴ちゃんいるッスかー、と言って小さな袋に入った蜂蜜飴を取り出すトニーの言葉に食い気味で「欲しいです」と応えるリリィ。
えぇい、完全に他人事みたいなムーヴで二人並んで飴玉を口でカラコロさせ始めるんじゃない。というかトニー君。リリィに頻繁に飴をやりすぎだって《虎嵐》にこの間注意されてただろうが。
とはいえ、おそらくは意図的に保守派の事を仄めかしたトニーの言で、サルビアもヒートアップしたテンションが冷却されたみたいだ。
俺が界樹にブシャーされてから僅かな間、この場から消えていたということをシアの口から説明され、こちらに心配そうな視線を向けて来る。
「何が起きたのかは気になる処ですが……まず、身に異常は無いのですよね？」
あ、ハイ。なんともないです。というか、界樹の異変に関しては諸々含めて全部判明した感じやで？
「そうですか、それは良かっ……え”っ？」
彼女が素っ頓狂な声を上げるのと同時、他の皆からも一斉に視線が集中した。
「全部分かったって……さっきお前の姿が一瞬消えた事と何か関係あるのかよ？」
俺の隣で正座していたシアが、驚きを隠せない様子でこっちの顔を見上げて来る。

うん、まぁ。なんというか。
そう言葉を濁して、俺は上方……ここからでは無数の巨大な枝葉に遮られて見えない界樹の天辺を指さした。
あそこで色々と説明を受けました。あとついでに幾つか頼まれ事も。
指さしたのとは逆の手で、腰のポーチに触れながらあっさりと言う俺に、シアは訝し気な表情をしていたが――ややあってハッとした様子で目を見開いた。
「説明って……おい、まさか……？」
おう、大体お前が想像してる通りだと思うぞ。
「マジかよ……いや、お前が帰って来た経緯を考えれば、有り得る話なのか……？」
唖然としてる友人に向けて大仰に肩をすくめてやると、俺は立ち上がった。
ついでにシアの手をとって引っ張り、同じように立たせてやりながら、いまいち分からん。といった感じのサルビアに顔を向ける。
結論からいうと、現在界樹に起こってる『異変』は悪いもんじゃないです。寧ろ長い目でみれば良い事なんじゃないかね？
どちらにしろ、もう少し日を置けば元の状態に戻る筈なんで安心してよいと告げる。
全部が全部信じたという訳でも無いんだろうが、サルビアや一緒にきたエルフ達は安堵した様子で胸を撫で下ろしていた。

リアと隊長ちゃんも立ち上がったのを確認すると、この場に居る全員をぐるりと見渡し、先程の御説教の間に纏めておいた考えを述べる。

界樹の異変についてはぶっちゃけ解決したも同然なので、あとは呪詛汚染に関してだけだ。

シアとリアの精査によれば地中深くの根の部分にある汚染箇所が厄介って話だが……これに関しても手段が出来た。

女神様から聞いた話と、ウチの聖女二人の精査結果を合わせて考えると、呪詛の中心点は幹の奥深くの方――そこに、界樹の内部へと融けた邪神の眷属達の集合意識の様なものが屯している。

界樹自体はその宿した聖性と巨大な植物という性質の御蔭で、大地への循環を用いた高い自浄能力を有しているのだが……根の部分に深く潜り込んだ呪詛が、大地との繋がりを鈍くし、除染を遅らせている。

こんだけデカい樹だ。根っこだって一番下に伸びてるもので地下ウン百メートルってレベルだろう。根を傷つける訳にもいかない事を考えれば、聖女をして厄介といわしめる難易度の解呪なのも納得だ。

根に干渉するのが面倒。

なら答えは簡単だ。上に、幹の方に上がってきてもらえば良い。
追い立てる為の方法はある。根にいられなくなった呪詛は、幹にある汚染の中心点に合流しようと這い上がってくる筈だ。
そこを叩く。界樹を囲む様に陣取って待ち受け、比較的樹皮に近いであろう幹の表層を移動してくる霊的汚物共を、全員で袋叩きにして消毒する。
幹の奥深くに隠れ潜んだ呪詛も、眷属の自我が残ってるならそれに焦って出てくる可能性が高いし、残ってないならあとで幹の中心を丁寧に浄化してやればよい。

「……成程、理に沿っている……猟犬殿には根への対処法があるのだな？」
《虎嵐》の言葉に、俺は力強く頷きを以て返した。
おう、有効な札が手に入ったのはついさっきだけどね。まぁ、獲物を追い立てるのは猟犬の得意とする処ってな。
女神様に会ってどうこう、なんて話は口に出すにはあんまりにもぶっ飛んでるので、具体的には話してないんだが……やはり《虎嵐》だけでなく、他の面子にもいまいち分からん部分があるのだろう。なんとなく気付いてそうなのは、女神様との縁が深い聖女たる二人だけだ。
それでも、俺の言う事ならば信じよう、と言ってくれた皆には頭が上がらない。独特

だけど良い奴らばっかりだよ全く。

提示した作戦が採用されると、簡単な打ち合わせの後、俺達は界樹を取り囲む様に散って各々の配置に着いた。

湖に面した界樹正面には《虎嵐》とシグジリア夫妻――と、リリィだ。二人がちびっ子を絶対にこの手で護ると強く主張し……喜ばしいことに、リリィが控え目ながらも二人と一緒が良いと主張した結果、正面はこの三人となった。

彼らの役目は、シグジリアを主体とした大弓による狙撃。根から上がって来た呪詛が無数に分かれていた場合、それを出来るだけ多く撃ち抜く。

呪詛、と一口に言っても邪神の眷属共の身体の一部だ。反撃が飛んでくる可能性が高いので、《虎嵐》がそれを迎撃し、最後尾のリリィは出来る範囲で良いので魔法で二人をサポート。

《虎嵐》達から見て裏手――界樹背面はサルビアを筆頭とした、開明派のエルフの戦士達。シグジリア程では無いとはいえ、彼らも弓の名手だ。サルビアの支援魔法を受けた状態ならば、心強い戦力として呪詛を射貫いてくれる事だろう。

迎撃役にはトニー。この役を任された際、彼は「一応持ってきておいて良かったッス」と言って荷物から金属盾（カイトシールド）を取り出して装備していた。

逆の手にはスタンダートな長剣。斥候や潜入が得意なトニー君ではあるが、武装自体

は騎士の王道っぽいな。なんにせよ盾持ちが迎撃役というのは頼もしい。
そして残った四人――これは界樹の周辺を移動しながら、這い上がって幹の中心を目指してくる呪詛を排除する遊撃役だ。
俺と隊長ちゃんが樹木の表面を駆け回って直接攻撃を行う近接遊撃。
シアとリアが飛行魔法で界樹の周囲を旋回しながら、目につく標的に魔法を叩き込んでいく中距離遊撃である。
以上の配置で女神様から請け負ったお仕事に当たる。最良――と断言までは出来んが、個々の能力や相性も加味したベターな布陣じゃなかろうか。
さて、まずは根っこに溜まってる呪の塊を引きずりださにゃならん。
最初は俺の仕事だと、前に進み出ると、背後のシアが何故か悟った様な表情で「大体予想が付くな……」とか呟いてるのが聞こえたが……どういうことじゃろ？
まぁ女神様と会ってきた事には気付いてるみたいだし、俺が一時的にバフ的なものをもらってきた、くらいは考えつくか。
そう思い直して湧いた疑問を一旦しまうと、鎧ちゃんを起動する。
《起動（イグニッション）》
――次の瞬間。
全身から噴き上がった、界樹の全高すら超えそうな勢いで立ち昇る量の聖気に俺は白

目を剥いた。

なぁにこれぇ（呆然

うん、知ってた。

比喩抜きで天まで届きそうな圧倒的な聖気。

下手をすれば界樹本体のもつソレの総量に匹敵しかねない、聖性を宿した巨大な光の柱に、オレは呆れて視線をやった。

その視線の先――光柱の発生源である相棒の表情は、全身に纏った魔鎧のせいで窺い知る事は出来ないが……なんとなく呆然としてるのは分かる。

大方、創造神から界樹を除染する為の聖気を分け与えられた、って処なんだろうけど……コイツの事だから、オレやアリアに強化を施されたときより更に上、くらいを想像していたんだろう。

知りうる限りの最上の強化（バフ）より数段上の想定――相手が同じ地上の存在ならそう的外れな判断でもないけど……お前に力を注いだのは神様だぞ？

オレやアリアのみならず、この世界の全ての転移・転生者に加護を与えた、オレ達の力の大本と言える存在だ。スケールが違うのは当然だろうに。

聖女であるオレですら目を見張る、およそ個が保有しているとは思えない量の聖気。

それに影響を受けているのか、普段は血みたいな色合いの魔鎧の魔力導線は輝くような金色に変わり、火の粉みたいな光の粒子が溢れて立ち昇っている。

普通、聖気だろうと、聖性を帯びてないただの魔力だろうと、他者から注がれたこんな膨大な量の力を身体に留めておくなんて出来ない。あっという間に垂れ流しで大気に霧散してしまうだろう。

それがこの世界の神様なんていう、高次元の存在から齎されたものなら猶更だ。だというのに、相棒と魔鎧に蓄えられた力はこうやって発動するまでしっかりと身に収まっていた。

……創造神に身体を再構成してもらってた、というアイツの言葉に嘘偽りは無かった訳だ。いや、元から疑ったりはしていないけどさ。

神様本人が手ずから作り上げたお手製の肉体だ。そりゃぁその力だって馴染みやすいだろうさ――一緒に戦い続けて来た、傍で相棒を癒し続けて来たオレやアリアの魔力

より、更に、ずっと。

……不敬というやつなんだろうけど、やっぱり少し面白くないな。魔力の波長という特定のジャンルではあるが、アイツとぶっちぎりで相性の良い女がいるってのは……。

そんな事を悶々と考えていると、オレ達から見て左手側――サルビア達の後衛陣から殆ど絶叫みたいな悲鳴が上がった。

「アイエエエッ!?　聖者！　始原の聖者ナンデ!?」

「ちょ、落ち着くッスよサルビアさん！　先ずは深呼吸、深呼吸しましょう！　ね!?

……あ、駄目だこれ……旦那ァ！　色々その状態についてツッコミはあるんスけどそれよりサルビアさんが泡吹いて失神しましたァ！」

何故!?　じゃねーよ、当たり前だよ馬鹿。エルフの歴史を考えれば当然だろうが。

サルビアだけでなく、界樹背面に陣取ったエルフの戦士達は揃って混乱し、腰を抜かしたり、跪いて祈り……多分相棒に向かってだなこれ――を、捧げたりと、既に作戦を開始する前から半壊状態だ。

慌てて彼女達のもとに駆け寄ろうとする馬鹿たれを、オレは押し留める。今のお前が直接近づいて声を掛けたらトドメになりかねないから、やめて差し上げろ。マジで。

「アリア、サルビア達を診てやってくれ」

「分かったー。にしても、予想以上にひどいことになったなぁ……」

死屍累々だー、なんて言いながら向かう妹に、思わず苦笑い。縁起でもないからそれもやめてやれよ。

他の皆もとんでもない状態になった相棒の姿に眼を剥いていたが……ミヤコとシグジリアはやはりその中でもいち早く察した様だ。

そりゃそうだ。なにせほんの一欠片でさえこの膨大な聖性と魔力。

その大本である神様に、オレ達、『推薦』の異世界人はこの世界に来る前に一度会ってる訳だしな。

相棒の言う様に金髪でスタイルの良い美人かどうかなんて定かではない、発光激しい光の人型の様な姿ではあったが……この強烈かつ高純度の聖気は一度知覚したら死ぬまで忘れる訳も無い。

「……こうして見ると、先輩が創造神の御蔭で戻って来たという話がリアルに感じるわね……」

サルビア達が復帰するまで所在無さげに佇む馬鹿を眺め、ミヤコが呆れた様に呟くが――直ぐにその表情はどこか意地悪気な笑みを浮かべた。

「差し詰め、今の先輩は聖女の猟犬じゃなくて女神の猟犬、という処かしら」

「おう、戦争したいならそう言え。受けて立ってやるぞコラ」

いつぞやの勝負はシスター・ヒッチンとグラッブス司祭に怒られて有耶無耶になった

が、再戦したいってんならやってやるぞ。例え神様だろうが譲れないモンは譲れないのだ。

こっちは色々とミヤコに問い詰めたい事は増えているのだ。必要ならお話（物理）への移行に躊躇いは無い。

そもそもなんだ、あの簪は。いつの間にあんな物強請ったんだよ、ふざけんなよオレだって貰ったこと無いのに……！

「先輩と私、二人の約束なの。話す気は無いわね」

極上、と言っても良い笑顔で抜かすミヤコに、オレも同じように飛び切りの笑顔で反撃してやる。

「そうか、じゃぁオレもアイツとプレゼント交換でもするかな。アイツ基礎体温高めだし、薄手の甚平なんか良いだろうなぁ」

暗にアイツの体温を知ってるぞ、と。態とらしく煽ってやるとミヤコの顔からストンと笑顔が抜け落ちる。

二秒程お互いに沈黙すると、全く同時に互いの口から「エ性女」、「エ清純派」と、我が事ながら酷い罵倒が飛び出した。

「……は？」

「……あァ？」

自分の声が酷く低くなっているのが分かる。

手持ち無沙汰になったせいで話が妙な方向に進みそうになったが、アリアの「もう大丈夫だってー！」という声に、二人揃って我に返った。

お互いに舌打ちでもしそうな表情で元の位置に戻るが……まぁ、こんなものはじゃれ合いみたいなものだ。そこはミヤコだって同じ事だろう。

一応、サルビア達を確認してみれば、アリアの回復魔法によって心身を完全な状態に戻された彼女達は、半ば強制的に意識を取り戻して復活していた。

アリアか、或いはトニーが何か吹き込みでもしたのか、先程までの混乱は何処へやら、今では凄まじい士気の高さでやる気に満ち満ちている。

距離があるので仔細は聞き取れないが、上げる気炎の声には『界樹』、『聖者』、『我らの未来が』などと、中々に重々しいワードも混ざっているようだ。

とはいえ、士気が高い事自体は頼もしい。二人が何を言ったのかは分からないけど、良い方向に焚き付けたと思っておこう。

相棒の方も、作戦の前から半壊したと思われた後衛陣の片方が、無事復活したのを見て安心したみたいだ。

改めて界樹に向き直ると、静かに呼気を吐き出し、未だ衰える気配が欠片も無い莫大な聖気を収束させる。

元々、相棒の魔力に聖性は宿っていない。使い慣れない性質の力で、その量は膨大、という言葉ですら足りない。

なので、やっぱり少しばかりぎこちないというか、扱いに四苦八苦しているのが見て取れる。

それでも、アイツの拳は力の流れを把握・操作する事に長けた流派のものだ。

天へと噴き上がるばかりであった強大な聖気がうねる様に形を変え、大河の如き流れを生み出す。

流れが向かい、結ばれる一点は握り込まれた拳だ。

黄金の光を放つ腕が、界樹が根差す大地へと撃ち込まれる。

音は無い。

けれど、打ち込んだ一撃の効果は直ぐに顕れた。

界樹を中心として、オレ達の足元に生い茂っていた草花が光を放ち――動画の早送りみたいな速度で成長し、色鮮やかな花を開かせる。

季節や時間も関係ない、ありとあらゆる植物が瑞々しく輝き、爆発的な勢いで一面花畑となった。

美しく、神秘的な光景にそれを為した当人以外、全員が感嘆の籠った歓声を上げる。

「わぁ……こんな広いお花畑、リリィは初めて見ました……！」

余程衝撃的な光景だったのだろう。
最近では腹ペコキャラが板に付いて来たリリィだったが、食べ物に関係が無い今回の景色に、どこか興奮した様子で大きな声をあげている。
瞳をキラキラさせて色とりどりの花々に魅入るその姿は、オレの目から見ても大層に可愛いものだけど……そこの夫婦は前を向け。後ろの娘っ子ばかり見てないで。これから一仕事だぞ。
にしても、流石は神様印の聖気だ。界樹の根に向かって大地を貫通したソレは、僅かに零れた分だけでも、この辺り一帯の土に浄化を超えた『祝福』をもたらした。
そして、その聖気を撃ち込まれた根――そこに潜む邪神の眷属の呪詛がどうなるかなど、言うまでも無い。
遥か地下深くであっても、硝子を擦り合わせるような耳障りな悲鳴が上がり、地上へと届く。
「――来たな」
「ええ、やはり分裂して昇ってくるみたいね」
オレは飛行魔法を発動させ、宙に浮かび上がる。
返答したミヤコも、静かに抜刀すると腰を落として構えた。
「頑張ろうね、にいちゃん」

――無理はせんようにね。怪我しちゃ駄目よ？

同じく飛行魔法を使い、相棒の肩に留まる様に腰を落ち着けるアリア……お前も以前よりは背が伸びたんだから、いつまでも肩に乗ろうとするなよ、うｒ……けしからんぞ。

後衛として配置された面々も弓に矢をつがえ、或いは迎撃の為に武器を構える。

地下から響く地鳴りの様な音は段々と近づいてきていた。

いよいよ以て音が地上へと溢れる、その直前に。

あれだけの聖気を放出したにも関わらず、未だ黄金の燐光衰えぬ魔鎧を纏った相棒の腕が、合図の様に掲げられる。

全員がその腕を注視して、示し合わせた様に頷くと同時――。

祝福された大地から逃げ出すように、粘性を湛えた大量の黒い泥が界樹の根より溢れ出し、無数に細分化すると一斉に幹の中心へと向かって樹の表皮を走りだす。

――作戦開始イ！

振り下ろされた腕と共に、相棒の声が聖地へと轟き。

『応!!』

声に籠った気迫に押される様、オレ達は力強く応じ、一斉に界樹の浄化へと動き出し

たのだった。

除染完了

「一番槍は貰うとしよう……！　リリィ、ちゃんと私の後ろに下がってなさい」
「はい、従姉様」
号砲となったのは、シグジリアの一射だった。
界樹を傷つける事のないよう、純粋な魔力だけで構成された大矢が得物である大弓へとつがえられ、即座に放たれる。
ロクに狙いも付けないで撃った様に見えた一撃は、幹を這い上がる呪詛の中でも特に大きな塊へと直撃し、物理的衝撃を伴わない魔力の爆発を引き起こした。
爆発に巻き込まれた周囲の呪詛――眷属の破片達もいくつかが吹き飛ぶ。
反射的な動作なのか、被害を受けた中でも無事だった破片から弾丸の様に泥の礫が放たれ、シグジリアを襲う。
「……やらせん……」
それに立ち塞がるは彼女の旦那様、《虎嵐》だ。
その両腕は渦巻く魔力を纏い、螺旋を描いた小さな嵐の如く。

鍛え上げられた双腕が振るわれ、礫は腕に纏った嵐に遮られて肌に届くことすらなく、悉くが叩き落とされる。

危なげない立ち回りが頼もしい。夫婦になる前から共に戦場を駆けて来たというだけあって黄金パターンといえる連携が彼らの中で確立されているっぽい。

一番、一触即発に近い魔族領からの使者という立場上、そこまでガチになる必要の無い二人なのだが……リリィを背にした事が良い奮起の材料となってるみたいやな。娘に良いとこ見せようとする保護者参加型の運動会のとーちゃんかーちゃん的な。

その間にも放たれる嫁さんの方からのえげつない射撃に、思考できる様な知能が無い呪詛の群れが、魔力の爆発を避ける為に界樹の反対側へと移動しながら更に上を目指す。

そこに待ってましたとばかりに矢を撃ち込むのは、サルビアによって強化を施された開明派の戦士達だ。

一射ごとの威力と精度はシグジリアに大きく劣るとはいえ、人数と軽弓による速射性で勝る彼らは、的確に泥を撃ち抜き、浄化させてゆく。

大きな塊である呪詛塊には無言の連携で全員が集中的に狙いを定め、確実に屠るか、或いは削って弱体化を狙う。

長であるサルビアが『優れた資質に甘えて鍛錬を怠る事は怠惰である』と強く主張し

ている為か、見た感じ、開明派のエルフ達の練度は保守派のソレより上だ。
何より、士気の高さがやべぇ。いや、念願の界樹の除染だし、派閥関係なく大森林に住まうエルフとして気合が入るのは分かるっちゃ分かるんだけど。
全員、一っ言も口を開かないのに眼だけがギラギラと戦意の炎で燃え盛っている。なにあれ怖い。
自陣の者達に片っ端から全力の補助魔法（バフ）をかけまくるサルビアを筆頭に、後の事なんぞ知るかと言わんばかりの全力全開っぷりが傍目にも伝わってくる。
なんかたまーに俺を視界にいれる度に燃料追加した様に更に気合が入ってる様な……うん、気のせいだな、きのせいきのせい（白目
当然、苛烈に攻め立てる彼らにも泥の反撃が飛んで来るのだが、それを完璧に迎撃しているのはトニーだ。
「前から飛んで来る敵の攻撃より、後ろの味方の圧の方が怖いってどういうことなんスかね……」
ガンギマリな目付きで界樹の浄化に取り組むエルフ達の気炎で背中を炙られながら、どこか遠い目をして迎撃を受け持つトニー君ではあるが、ブツブツと愚痴を垂れながらも仕事は完璧だ。
飛来する呪詛混じりの礫を長剣を操って打ち払い、剣で捌ききれない分を盾でもって

受け流し、威力高めの、礫というより破片に近いものは器用に弾き(パリング)を用いて逸らす。
後衛陣の圧倒的な面制圧力で、細分化された無数の呪詛は大きく数を減らすが――それでも一定以上の数が矢をすり抜け、弓の有効射程を抜けて更に上にある幹の中心を目指す。
無数の黒い雲霞の如く樹表を這い登る姿は、粘液に濡れたゴキブリの群れみてーだ。ばっちいったらねぇや。
「根から叩きだしたら、後は殆ど鴨撃ちだな。数だけは多いけど」
「その量が問題だよ。これが全部纏まったら間違いなく上位眷属化しそうだし……中心に近づけさせないようにしないとね！」
でも残念、矢の雨を抜けた先に待ち受けるは連中の天敵だ。
樹高が２００を超えた辺りで、枝葉に咲き誇る花のように無数の魔法が乱舞し、這い登る多くの泥が一瞬で消し飛ぶ。
界樹の周りを巡回する衛星の如く飛び回りながら、圧倒的な魔力にものをいわせて広範囲に魔法を撃ち込むのは、我らが麗しの聖女様達である。
こちらも界樹を傷つけない様に魔法の種類を絞ってはいるものの、看板に偽りなしの聖性を以て他を引き離すスコアを叩きだしていた。
本来は前衛寄りの能力であるリアも、やる気になれば飛燕の機動力を持った爆撃機と

化すことが可能だ。相手が一定レベル以上だと範囲重視の魔法の乱打撃ちは割とあっさり対応されるのだが、今回みたいな数の多さにものを言わせてくるケースには打ってつけの戦術なので問題無い。

純後衛型といえるシアに至っては正に独壇場、まるで回転式弾倉（リボルバー）の如く背後に魔法を順次装填させ、無詠唱で延々途切れる事の無い魔法を雨あられと降り注がせる。

しかも一発ごとの狙いの精度がシグジリアの矢に迫るレベルっていうね。必要になったらこれにクッソ硬い障壁まで展開させて、火力は一切落とさないで戦闘を継続できるって、敵からしたらクソゲーにも程があると思うの。

そんなシアリアの絨毯爆撃を掻い潜り、尚もしぶとく残る呪詛群。

残ったそいつらを消し飛ばすのは、界樹を蹴ってときに駆け上がり、ときに周回し、ときに一気に駆け下りて縦横無尽に疾走する隊長ちゃん――と俺だ。

「先輩とこうして一緒に戦うのも久しぶりですね！」

うん、そうだね。やっぱりというかなんというか、強くなったなぁ隊長ちゃん。

「大喧嘩（あのとき）みたいな事があれば、今度こそ誰であっても止められるように、なんて思って訓練していたもの、で！」

シアとリアの魔法が咲き乱れる界樹の表面でも、一切怯む事無く隙間を縫う様に走り抜ける彼女の姿は、ともすれば魔力の炸裂光で足元に伸びる影すらをも置き去りにしそ

うなほど、速い。

先の言葉通り、肩を並べて戦うことは久しぶりだ。そのせいなのかは分からんが、テンション高くて御機嫌だった。

界樹を自在に駆け巡る疾風と化してる隊長ちゃんは、伸びた枝の端から幹へと一足飛びで飛び移り、着地と当時に神速の斬撃を以て周囲の泥を切り刻む。

他の面子と同じく、樹を傷つけないように刀身に纏わせた魔力のみを『中てる』様に立ち回っているみたいだけど……信じられるか？　この動きしながらさっき「刃を当てない様に振るからやりづらい」とか言ってたんやで（白目

いや、本当に強くなってるわ。前に喧嘩しちゃったときは完全起動で一撃で切って落とせたけど、今やったらそんなに簡単にはいかんだろうな。

そもそも喧嘩する気もないけど。開幕降参余裕ですわ。

というか、二年足らずで下手すりゃガンテスのオッサンに迫るレベルまで上がってるってどういうことやねん。副官ちゃんも強くなってたが、上司の方がもっとエグイ（戦慄

一人で槍衾みたいな突きの壁を作って片っ端から呪詛を突き散らしている隊長ちゃんに対して、同じ近接遊撃の俺はというと――。

ぶっちゃけ、隊長ちゃんどころか、遊撃四人のなかで、一番、役に立ってませぇん!!

言い訳になるかもしれんが、正直に言おう。

出力が上がり過ぎて思いっクソ持て余してるんだヨォ！

最初の根に届かせる為の一撃で、破裂しそうなくらいに身体に詰め込まれた聖気を全力でぶち込んだのに、まだ半分近く残ってるってどういうことなの。

大分力任せだったから、相当無駄に周囲にバラ撒いたのに。量が多すぎ問題（白目

いつもの感覚で樹の表面を踏み込んで駆けようとして、幹を粉砕しそうになったり。

ならばと、威力を絞って放った手刀から、金色の閃光が飛び出して延長上にある呪詛どころか周囲の泥まで蒸発したり。

さっきなんて、やや上の方にある枝に飛ぼうとして、視界がブレたと思ったら界樹の天辺――大森林を遥か上空から見下ろしてたんやぞ！　慌てて戻ろうと魔力吹かしたら幹にめり込むとこだったわ！

体感としては、切り札を運用したときの身体強化率の半分くらいまで強化幅が上昇してる。

ただ、切り札使用時と違って、今の状態は知覚や制御能力、諸々全般強化されてる訳じゃない。

普段の基礎性能（スペック）のまま、保有魔力と出力だけが馬鹿みたいに上がってる状態なので、俺と鎧ちゃんの制御が追っついてない。

元より《三曜の拳》は魔力全般の流れの操作――その精密性を以て真価を発揮するので、出力に振り回されてる今ではロクに使える気がしない。

最初にかました一撃みたいに、動かずに大出力をぶっ放すだけならともかく、今は界樹の表面を走り回りながら大量の呪詛塊を撃ち落としている最中だ。尚の事難易度は上がる。

見た目は金色のオーラばりばりで最終回限定の強化形態みたいな事になってるのに、総合的にみるとめっちゃ使い辛くて弱体化してるまであるってどういうことやねん！

根っこから呪詛を叩きだすのは確かに楽だったけどさ！　ぶっちゃけ渡してくれた聖気の二割もあれば事足りた気がするんですよ女神様。

なんとか出力を絞っておっかなびっくり繰り出した拳打で呪詛をまとめて消し飛ばす。

いつもと比べれば千鳥足みたいなヨタヨタした動きで界樹表面を走る俺に、飛行魔法で追随してきたシアが頭上から揶揄う様に声を掛けてくる。

「おーい、どうした。妙に動きづらそうにしてるけど、体調でも悪いのかー？」

分かってて言ってんだろお前。見ての通り女神様に貰った聖気に振り回されてんだ

よ！

今の俺の魔力と、界樹の宿してる聖性が同じ女神様印のものだから多少出力操作をミスっても傷が付かないってだけだ。

そうじゃなかったら最初の一撃以降、下手すりゃ皆が頑張ってるのを見ながら体育座りしてその辺で待ってるまであった。

想像するだけでいたたまれない、勘弁してください。

ぎこちない俺の動きをフォローする様に、シアが狙い辛い位置にいる呪詛を撃ち抜き、薙ぎ払う。

遠間になるほど制御がシビアになるのでいちいち至近距離に寄って泥を消し飛ばす俺に付いて来たまま、シアは「ふむ」なんて呟くと、思案する様なポーズをとった。

勿論、空飛んだまま、ボコスカ魔法を連射したままである。相変わらず出鱈目な魔力制御すぎて草も生えない——今の俺の状態だと特にな！

半分でいいからその制御力分けてくれぇ、ホント動きづらい。つらい（無いものねだり感

「……そうだな、この際ここで試しておくのも悪くない、か」

なにがですかぁ！

何やら意味深な事を呟くシアさんだったが、あんまり余裕の無い俺には発言について

深く考える事は出来ない。
走る加速のままに泥を蹴りつけると、何の手応えもないままに消滅し、勢い余ってつんのめりそうになる。くそっ、これでも力入り過ぎか、加減がマジでムズい。
お喋りの間にも、ファン○ルみたいに魔法をばら撒いてる聖女様は、何かを決心した様な表情を浮かべた。
次いで、ニヤリと笑うと「よかろう！」と、唐突に声を張り上げる。
「神様にちょっと有難迷惑な加護を注がれて四苦八苦してる君に、オレが少しばかり手を貸してやろうではないか！」
言い方ァ！　流石に不敬じゃないのそれ!?　自分の立場考えろよ聖女！
「まぁ、気にすんな――魔力の相性だの、魂にへばりついてる武装だの、そんなモンに遅れをとるつもりは無いし、いい機会だ」
そう言って、やや後方の上空を飛翔していたシアは俺の真後ろに回り込み、首に両手を廻してしがみついてきた。
おい、今はただでさえ動きがおぼつかないんだから、悪ふざけはやめなさい。一緒に巻き込んでスっ転んだら怪我するってばよ。
「……こ、これで良いんだよ、シチュとしてはアレだけど、それもオレ達らしい気もするしな」

なんのお話……って危なっ、おい、マジで一回離れた方がいいぞ。ほんとに転びそう。
俺の言葉もなんのその、シアの奴がくっついたまま何故か深呼吸を繰り返していると思った刹那だった。
その白魚の様な指先が伸びて、掌が俺の頬に触れ――鎧ちゃんの頭部装甲（サレット）が解呪され、引き剥がされる。
うぉい、何して――!?
流石に戦闘中に悪ふざけが過ぎると、文句を付けようとした次の瞬間だった。
首を真横にひん曲げて、首っ玉にしがみついたままのシアを睨みつけようとすると、真っ直ぐに俺を見つめる空色の瞳が、ぐん、と近づいて。
「――――ンッ」
――――!?!??
重なり合っていた感触が、離れる。
制御をトチって転倒しなかったのは奇跡に近い。
それくらい、今の俺は混乱していた。
……えっ、ちょっ、おまっ……うぇっ……!?
樹の側面を走ってる最中なので止まる訳にも行かずに走り続けたまま、シアの顔を見返す俺は、相当にアホ面を晒していたと思う。

そんな俺に向け――頬どころか耳まで薔薇色に染めた聖女様は、なんとも漢前に唇を親指の腹でピッと擦ると、再度、ニヤリと笑う。

何かを言葉にしようとしたけど、結局は出てこなかった。

ただ、パクパクと口だけを開閉させたまま、俺は友人と見つめ合って――。

飛来した魔力の斬撃を躱す為にシアはあっさりと俺から離れ、上空へと退避した。

「おぉっと！　いきなりご挨拶だなぁミヤコ」

「何してんだエ性女ォ！」

反対からぐるりと樹の外周を駆けて来たらしい隊長ちゃんが、羅刹の如き表情を浮かべながら吠える。こわい（白目

駆け抜けざまに、進路上の呪詛を全て切って捨てながら一直線に此方に向かってくる隊長ちゃんに、シアは頬の染まった顔のまま、悪戯っぽく笑いかける。

「わはは！　何もクソも、お前が『女神の猟犬』なんて言うから、いつだって誰がコイツが相棒なのか示しただけですけどー！」

「呪詛と一緒に駆除されたいみたいね……！」

酔っぱらったみたいにテンションの高いシアと、ドラゴンだって土下座して命乞いを始めそうな重圧を放つ隊長ちゃんはそのまま界樹を舞台にした鬼ごっこへと移行した。

片や飛翔して逃げ、片やそれを疾駆して追いかけながらも、道行く先にある泥を片っ

端から蹴散らして離れていく二人だったが、シアが思い出した様に動きを止め、くるりと此方を振りむいた。
「お前になら、特別だ！　貸してやるから感謝して使いたまえ！」
それだけ告げると再び追いかけっこを再開し、二人は伸びる界樹の枝葉の向こうへと消えていった。
あー……。
唖然としたままで黙してそれを見送るしかなかった俺だが、離れた箇所で呪詛を殲滅していたリアがやってきたことで我に返る。
「えぇ……大体除染も済んで来たのは確かだけど、なんであの二人は急に鬼ごっこ始めたの？」
……なんでやろうなぁ。
「……何かあったのにぃちゃん？　ちょっといつもと違うような気がするんだけど」
……いや！　なんでもない。なんもないですぞ！
訝し気に俺の表情を横から覗き込もうとするリアから顔を逸らし、剥がれたままだった頭部装甲（サレット）を再度展開させる。
「ふーん」と何処か不機嫌そうに言うリアの視線が横っ面に刺さるのを感じるが……なんとなく、今の茹ったツラを妹（おとうと）分に見られるのは憚られた。

――とりあえず、呪詛の駆除もあと一息だ。開幕の一撃以外は大して役に立ってない身であるし、もうちょい頑張ってみようかねっ……と！

誤魔化すように隣を平行に飛翔するリアの髪をかき混ぜてやると、しぶとく生き残って幹の中心部に近づこうとする泥の群れに向かい、一息に跳躍する。

そうして、気付いた。

――未だに身に宿る、莫大な聖気の制御が急にスムーズになってる。

着地までに周囲に散った泥の数を残らず知覚すると、俺は幹に掌を押し付け、身体に巡る聖気と界樹の内部のソレとを同調、励起させた。

瞬間、把握していた全ての呪詛塊どもが弾かれた様に樹の表面から浮き上がり、鋭敏化した感覚の導くままに、俺はそれらの動きを掌握する。

こちらの掌の動きに合わせて空中に跳ねあげられた泥が一塊に纏められる様は、どこぞのただ一つの変わらない吸引力で吸い集められた綿ゴミのようであった。

練りあげた聖気を拳に結び、軽く小突いてやると大きな塊になった泥は灼けた鉄板に落とした水滴みたいな音を立てて消し飛ぶ。

今度こそ呆気に取られ、俺は樹の側面に棒立ちになったまま、黄金の魔力導線走る己の拳をまじまじと眺め、開閉させた。

……やっぱり気のせいじゃないな。先程までは樹の表面を破壊したり抉ったりしな

い様に、走ることにすら四苦八苦していた聖気の制御が、めちゃくちゃ楽になってる。
ここに来て、漸く気付いた。
俺の内に掛けられた、シアとリアによって作られたと思われる錠（ロック）の様なもの。
おそらくは精神よりもっと深い部分――魂に施されたと思われるソレは、確かに存在するものの、何かしら干渉をしてくる訳でも無し。
単に、シアとリアが治療の観察と後々の無茶を監視する為に掛けたのであろうと思っていた『枷』が、まるで鎧ちゃんのごとく励起している。
起動したマイラブリーバディと俺が半ば融合する形で霊的に繋がるのと同じ様に、励起したソレが繋ぐ先は――おそらく、シアだ。
強引な例えだが……まるで外付けのＣＰＵの如く、シアの魔力制御が俺に貸し出されている。
世界中の強者――人外級に至った者達の中でも、おそらく魔力制御という一点に関しては最高性能を保有している金色の聖女様の処理能力が、疑似的にだが俺に搭載されているのだ。
俺ではあっぷあっぷ言っていた女神様印の莫大な聖性を持つ魔力も、アイツの制御・精度があれば凄まじく緻密な操作が可能になる、って事だな。聖女パねぇ。
……さっきのアレは『枷』を励起させる為に此方の体内にアイツの一部を送る必要が

あったって事か。

納得が行ったような、別に指先を切って、とかでもよかったやん、とか思わないでもないような……或いは……。

いやまて、力の制御に四苦八苦してた癖に、手助けしてもらって何を不満に思っとるんだ俺は。

折角制御が容易になったのだ、ここは感謝して借り物を使わせてもらうべきだろう。

シアの魔力制御に負ぶさる形で女神様の聖気を完全掌握した俺は、水を得た魚よろしく、一気呵成に呪詛の群れに向かって打って出た。

黄金の燐光を背後へと置き去りにしながら音も無く疾走し、足場である界樹に《地巡》で聖気を流しては励起させ、強制的に樹表からはじき出された泥を《流天》で一纏めにしては軽く引っぱたいて消滅させる。

なんだろうコレ。確かに嘗ての大戦と比べれば大分温い戦況ではあるんだが……曲がりなりにも邪神の呪詛を相手にしてるのに余裕が凄い。

女神様印の聖気と、それを完全に制御できる術が揃うとこんなに違うのか……ひょっとしたら、俺はこっちの世界に来て初めて俺ＴＵＥＥＥという奴をしているのではなかろうか……！

――まぁ、力も技術もよそ様からの借り物だし、そもそも何時もの戦いからして鎧

ちゃんありきだからね。俺ＴＵＥＥＥというか皆ＳＵＧＥＥＥな気がする（白目

初撃以降、ほぼ役立たずだった俺の、泥の駆除率が一気に上昇した事もあり、界樹の浄化は加速度的に進んだ。

そして、自身が界樹に張り巡らせていた呪詛がほぼ駆逐された事で、中心部に淀んでいた本体が動き出す。

「――っと。今更おいでなすったか……思ったよりデカいな」

「あれだけの数に呪詛を分裂させておきながら、眷属としての格を保ってるなんて……元がどれだけ高位だったのか、想像したくないわね」

先程までの塵掃除みたいなノリは出来そうにも無い、明確な敵の出現に、シアと隊長ちゃんも追いかけっこを辞めて幹の中心に視線を向ける。

界樹の全身に散らした己の身体を殆ど浄化され尽くした癖に、幹より出て来る呪詛の核――邪神の眷属は未だにその霊格を落とさず、脅威を保ったまま外部に顕現しようとしていた。

或いは、漸く天辺にいる女神様の存在を察知したのかもしれない――このまま幹の奥に閉じ籠っていても、何もできずに浄化される、ってな。

ウン十年も聖遺物を汚染しようと、自我を保って頑張っていたのかもしれんが……ご愁傷様だったなクソ野郎。

それこそ俺達が生まれるより前の話とはいえ、コイツの御蔭でエルフ達は森に引き籠り、そのせいで少なくない混乱が起きて、各方面に被害が出たことだろう。

保守派のオツムのヤバさも大概だったが……それを実害が出る形に掻きまわしたのはコイツだ――ツケは払ってもらうぞ。

後衛の面子も、遊撃の三人も、幹の中心から溢れ出て現界しようとする最後の大物の気配を感じ取り、警戒を露わにして注視する。

――が、俺は躊躇わずに界樹より半身を乗り出す眷属に向かって一直線に跳んだ。

登場シーンで隙だらけなのに最後まで見守ってもらえるとか甘え。ちんたら出て来るならその間に殴るんだよぉ！

残った聖気とシアと共鳴・励起して得た魔力制御、両者をフル稼働させて《三曜の拳》を以て練り上げ。

我が友人の出鱈目に高いレベルの感覚（センス）に引っ張られ、本来ならどうやっても俺では届かない領域に、引きずり上げられる。

常に無い感覚。界樹のみならず、周辺一帯の大気に含まれる魔力の粒子、一粒一粒まで捉えている様な全能感が湧き上がった。

――おー……なるほど、これがそうか。

歴史上、おそらくはお師匠と、ミラ婆ちゃんしか到達していないとされる《三曜》の真価、奥伝と言っても良い領域。

女神様の聖気と、聖女の魔力制御という、およそ世界中見渡しても他にはないであろう贅沢な補助を受けて、俺はそこに手を掛けようとしていた。

俺自身が到達したというより、身体の――魂の奥から掘り起こされた様な感覚のそれは、奇妙な程に馴染む感じがする。

ひょっとしたら、鎧ちゃんの嘗ての使用者が歴史に記される事のない三人目だったのかもね。

こんなに好条件が揃うことなんぞ、二度とないだろう。下手をしなくても今回限りの奇跡みたいなもんなのかもしれない。

それでも、生涯届く筈も無いと思っていた高みに、束の間の間ながらも至った事。

それにらしくもなく昂揚を覚え、黄金の燐光を更に輝かせて加速する。

長年、生きた聖遺物に寄生していたせいか、表面が融けた様に界樹と癒着している邪神の眷属は、間抜けにも全身を引っこ抜くのに苦労している。

なんでこれでタコ殴りにされないと思ったの？　馬鹿なの死ぬの？

雑に繰り出された迎撃の触腕を《流天》――否、《日昇》を以て捌き、ついでに完全に

受け流した触腕をUターンさせて放った本人の頭部に炸裂させてやる。
界樹の幹と周辺の大気から、《月輝》を用いて循環させた聖気が、唸りを上げて全身を巡り、光を放つ。
俺の練り上げる力が女神様のソレと同質であると気づいたんだろう。
硝子を擦り合わせる様な不快で甲高い悲鳴を上げて、なんとか逃れようとする間抜けな邪神の破片に向け、容赦なく腰溜めに構えた拳にて狙いを定める。
以前にも言ったが、俺が普段使っている・使えている技は基礎――言うなれば初伝に相当する《三曜の拳》の入口だ。
――三曜とは本来、天・地・命に非ず。
更なる深奥……日・月・星の三つの要素を指す。
日は昇り、月が輝き、星は瞬いて、やがて世界は一巡り。

日月星辰――是、三曜を結びて界を為す。
その全てを、己が拳に、掌に。
其れこそが、開祖《半龍姫》が悠久の時を以て練り上げた極意也――！

残った大部分の聖気を練り上げ、撓め、圧縮し、《星辰》を以て打ち込んだ。

かくして。
登場ムービー中に十割ゲージ技を当てられた残念なボスキャラの如く、数十年前からエルフ達と――そこから派生して様々な人類種を引っ掻き回していた元凶は、身動き一つ取れずに消滅したのであった。

この際、残った聖気も全部突っ込むつもりで放った一撃はオーバーキルにも程があったらしく、そのまま界樹の内部まで走り抜けた。
対邪神特攻を高めるために、女神様印のパワーを限界まで圧縮した代物だ。
界樹にとっては呪詛汚染の所為で長年栄養失調気味だった処に、特大の栄養剤をぶち込んだ様なものだったのかね。
根に溜まっていた泥も取り除かれ、本格的に大地との力の循環を再開した古の大樹は、先程にも増して青々と葉を茂らせ、枝の末端に至るまで聖気と生命力に満ち、なんならあちこちに蕾までつけていた。
シア達が精査する迄も無く、一目瞭然。
界樹の浄化・除染――完全完了のお知らせである。

幹を蹴り、軽く跳躍。

そのまま大地へと落下し、最後に身を捻って軽やかに着地を決めると、同じく仕事の終わりを確信した皆が集まってきた。

「よぉ、お疲れ。最後は派手に決めてみせたな」

真っ先に俺の側にやってきたシアが、笑いながら此方の胸元を拳でたたいてみせる。

いつも通りなその笑顔に、あのときのアレを蒸し返すのもなんだか無粋な気がして、俺も何でもない風に笑い返してみせた。

おう。フォロー助かった。貸してくれた感覚（モン）の御蔭で色々と得る物も多かったよ、マジで。

これに関しては掛け値なしにそう思う。女神様が預けてくれた力を無駄遣いせずに済んだ事も、本来見れる筈も無い武の領域ってヤツを体感できた事も。ぶっちゃけ、俺的には収穫だらけだ。

「……理由があっての事だというなら、これ以上、この場での追及はやめておきましょう。この場ではね」

「ふーん、そういう事ね……ボクに何も言わないで『試した』んだレティシアは」

冷えた口調の隊長ちゃんとリアに半眼で見つめられ、流石に居心地が悪くなったのか、シアは目を逸らして咳払いしている。

「やれやれ、戦力比で見れば当然かもしれないが……あのレベルの眷属相手に誰一人怪我すらせずに終わったのは僥倖だったな」
「……最後に、良き物を見た……我らが頭領の剣に匹敵する、至高の一撃……目の当たりに出来た己の幸運に感謝しよう」
ちびっ子を真ん中に、三人並んで仲良く手を繋いで発言したのはシグジリアと《虎嵐》だ。
リリィも良く頑張ったと思う。初めての鉄火場で、邪神の呪詛やら眷属やらを相手にして半狂乱にならんだけ立派だわ。大戦時の一般的な新兵の初陣は、ズボンに染み通り越して味噌つけるのは通過儀礼、みたいなトコあったし。
「そうだろう？　エルフとしては幼年と言っても良い年頃で、取り乱すこともなかった。まったく大したものだリリィは」
「然り」
なんでアンタら夫婦が鼻高々になっとんねん。もう完璧に親バカやんけ。
つーか何気に《虎嵐》の即答って初めて見たぞ。普段、言葉を吟味してるみたいに落ち着いた喋り方なのに、すげぇ反応早くて草。
「……黒髪の人は聖者様だったのですか？」
両の手を夫妻に握られたまま、リリィが小首を傾げて個人的にとても不穏に感じる

ワードで問いかけて来た。

おいやめろ、眼を逸らしてたのに急に現実を突き付けてくるのはＫＹやぞリリィ君。

不思議そうに、ただ事実を確認する様に此方をじっと見つめて来る大きな瞳から目を逸らし、我ながら酷い棒読みで否定の言葉を返した。

違います。ぼくはただのようへいで、せいじょのりょうけんです。

「……でも、さっきの光と、今も纏ってる黄金の聖気はエルフの言い伝えで……」

気のせいだから！　ただちょっと見た目が似てるだけだから！　ハイこの話終わり！

結局、最後の一撃でも女神様に注入された力は使い切ることが出来ず、未だに全身からは派手に黄金の聖気が立ち上っている。最初よりは大分控え目にはなったけど。

今は頭部装甲（サレット）だけを任意に解除した状態だ。全部解除すれば光量ももっと絞れるとは思うんだけど……元が呪物という特性上、女神様印の聖気を詰め込まれている状態はマイラブリーバディには窮屈らしく、なんとも言えない感覚が漠然と伝わってきている。

なので、もうちょっと消費したいところなのだが……どうしよう、何に使えばいいのコレ。

「旦那、いい加減諦めましょうよ。現実を見るついでにこっちも向いて下さい」

トニー君の声が背後から聞こえるが……嫌でござる！　振り向きたくないでござる！　お仕事終わったんだからあとは穏やかに帰りたいでござる！

「……聖者様、幾度となく尊顔を拝しておきながら、気付く事無く不敬を繰り返していた我らの蒙昧……どうか我が首一つで赦意して頂きたく……」

ヤメロォ！　穏やかに帰りたいって言ってんだろうが！

サルビアの深刻――を通り越して死を覚悟した静謐さすら宿した謝罪の声に、流石に無視する訳にも行かずに嫌々ながら振り返る。

そこには、大体予想通りの光景……膝を付いて祈りを捧げるサルビアと、開明派のエルフ達の姿があった（白目

あと完全な他人事みたいな感じで俺とエルフ達を見比べてるトニー君もな！　おかしい、胃痛で苦しむのは彼の担当ではなかったのか（失礼

俺的な視点だと開明派のエルフさん達は普通に『アリ』な輝きを放ってるので、罪悪感が酷いなんでもんじゃねぇ、ストレスで胃が削れるのでやめて。

この際ごり押しでもなんでもいいので、頭を上げさせて普通に会話出来るようにならんかと、気の利いた言葉を脳内で検索かけ始めると。

跪いたサルビア達の向こう――湖を挟んだ、界樹聳えるこの空間の入口が、俺達が入って来たときより更に大きく拓かれる。

さっきは数人が通れる程度の大きさだった入口は、魔法による効果なのか、より大きく枝葉が湾曲し、幅十メートルを超えそうなサイズにまで広がった。
そこから雪崩れ込んで来たのは、武装した大人数のエルフ達である。
わざわざ『視て』判別するまでなく、先頭には見知った顔――コニファがいることから、保守派の集団であることが窺い知れた。
彼女と並んで立つ老年に差し掛かった男のエルフは……初見だが他の長老衆か？
感じる魔力もコニファやサルビア程では無いが、他のエルフ達より一段抜けてるし。
鼻息も荒く、ドカドカと地を踏み鳴らしてやってきた連中は、先ずは何が無くとも御神木の無事を確認したかったみたいだ。
除染が終わって活性化した界樹を真っ先に見上げて安堵……からの感嘆と喜びの声を上げ、次にその根元にいる俺達を指さして怒鳴り声を上げようとして。
季節を問わずに狂い咲いている一面の花畑と――その中心に居る、八割方消費したというのに、未だアホみたいな量である黄金の聖気を纏ってる俺を見て、全員が石化したみたいに硬直した。
絶対めんどくさいことにしかならんヤツやん。
もうやだ、はやくおうちかえりたい（白目

聖者（笑）宣言する

よーし、終わり！　全部済んだし一回拠点に戻るぞー！
取り敢えず、勢いで誤魔化せないか試してみよう。
そんな風に思い至った俺は、両手を上にあげてパンパンと打ち鳴らしながら、解散かいさ～んと殊の外軽い口調で言ってみた。
掌を打ち鳴らした際に零れた光の粒子を吸った足元の花が、更にニョキニョキと伸びて美しい大輪の花を咲かせてるのは努めて見ないフリをして、サルビア達を半ば強引に立たせ、膝に付いた泥を軽く払ってやる。
「ま、待ってください、聖者様がそのような事をなさらなくても――」
いーからいーから……ほんっとにいいから（真顔
話があるなら拠点に帰ってから聞くから。先ずは帰ろう、なっ？
戸惑うサルビアの背を押し、他の面子にもおーし帰るぞー、おまえらー、と声を掛けながら凄まじい勢いでぶっ刺さる大量の視線を無視して、撤収の準備を進めた。

「強引だなぁ……にいちゃんが何考えてるのか想像が付くけど、無駄だと思うよ？」
え、何？　聞こえない。ワタシ、ニホンジン。イセカイゴ、フナレネ（唐突
一緒に戦った開明派のエルフ達は俺の言う事をめちゃくちゃ素直に受け入れて帰り支度を始め、他の皆も苦笑したり顔を見合わせて肩を竦めたりはするが、拠点に帰還する事に否は無いみたいだった。
つい先程やってきた大人数のエルフ達に比べれば十分の一以下の人数ではあるが、俺達はゾロゾロと連れ立って移動し、保守派の集団を迂回するようにやや遠回りに入口へと向かう。
とはいえ、連中は入口近くで纏めて石化の呪いを受けたみたいに固まってるので、出入りする為にはどうしても擦れ違う距離になる。
そのまま固まってて、出来ればあと一時間くらい！　なんて考えながら、皆の陰にきもち隠れる様にコソコソと足音を殺して入口に近づくが……やはり無理があったのか、どうも硬直が融けた様で慌てて声が掛けられた。
「……ま、待て。いや、お待ち下され、聖者よ」
呼んどるぞ、シア。
「いや、どう考えてもお前の事だろ。というか、そんなに派手に光っておいてなんで誤魔化せると思ったんだよ」

ですよねー……分かってたよ糞ァ！

俺の歩いた足跡だけすげー分かりやすくなってるしよぉ！　なんだよこれシシ○ミ様のお散歩跡かよ！　しかも枯れないで育ちっぱなしの！

くそっ、やはり鎧ちゃんを解除すべきだったのか……！　だが、大事な相棒がちょっと息苦しそうそうにしているというのに、それを無視できるだろうか？　いや出来ない（断言

「……相変わらず、自分の相棒にはすんごい甘いよね、にぃちゃん」

「待てアリア。相棒はオレな？　あれは武装。ルール適用外」

「……肉体を傷つけずに魂に宿った呪物だけを斬れる技ってないのかしら」

サラっと言う隊長ちゃんが怖い。どうしよう、可愛い癒し担当だった後輩の子を怖く感じる回数が最近とみに増えている件。

出来る事なら保守派の連中には視線を向けないで、三人のやり取りをずっと見ていたかったが……一度歩みを止めてしまった以上、無視するのも不自然だ。仕方なしに俺は声の主――コニファの方へと、首だけを向ける。

……なんか用ですかね？　一仕事終えたし、さっさと帰って飯食って寝たいんですけど。

殆ど敵対行為みたいな言動を繰り返してきた相手だ。煽り抜きで接するとなると、ど

うやったってつっけんどんな対応になるのは仕方ないと思うんだ。
別に高圧的だったり、露骨に敵意をみせたりした訳では無いんだが……隔意だけは伝わったのか。
先ずは隣の男が躊躇なく跪き、彼女もハッとした表情で思い出した様に膝を折って地につけ、両の手を組み合わせた。
長老の二人が跪いた事で、他のエルフ達も弾かれた様に平伏し、「聖者様……！」とか言いながら祈り始める。平伏てオイ（白目
コニファの側仕えなのか、初見や拉致られたときにも見た何人かの顔色は、蒼褪めるを通り越して死人みたいな事になってる。
まぁ、武器突きつけたり、囲んでボロ屋に追い立てた奴がなんかエラい人だったー、とか、とんだ後出しではあるよね。自業自得なので同情とかは全くしないが。
「……聖地に降臨なされた事、真に喜ばしく思う――界樹の浄化も貴方によって為されたと思って良いのであろうか？」
老年のエルフの言葉に、俺は見りゃ分かるだろ、と言わんばかりに投げやりに肩をすくめてみせた。
文字通り、天まで届くような女神様パワーをばんばか使いまくってたからね。離れた処からなら最初の光の柱も見えただろうし、見える場所に居なくとも、エルフなら大森

林の何処にいたって感じ取る事ができただろう。
　質問に関しては半分だけイエスね。俺だけじゃなくて此処に居る全員でやった事だから。全員ね、ここ大事よ。
　俺ごと排除しようとしていた《虎嵐》やトニーも浄化に貢献してるんやぞ、と暗に言ってやったつもりだったんだけど、コニファは微かに安堵した様に吐息を洩らし、深く頭を下げた。
「御身の手助けを、我らの同胞が為したというのならば幸いだ――我が孫、リリィが貴方に導かれ、界樹を癒す一助と成った事、氏族の誇りとしよう」
　違う、そうじゃない。
　何この……何？　話が通じてるようで通じないこのモヤっとした感じ。
　昨日までは保守派からは口も利きたくねぇ、視界にも入れたくねぇ！　って感じでそもそもコミュが断絶してたんだが……会話が出来るようになったらなったで、意思疎通が成り立ってない感が酷い。
　……シアとリアは連日コレに晒されてたのかぁ……そらフラストレーション溜まるわなぁ……。
　そもそも、ちょっと前まで穢れ者扱いしてた人間に対して態度変わり過ぎじゃない？
　大丈夫？　手首についたモーター悲鳴あげてない？　くるくる回し過ぎておててポ

ロっと取れない？

流石に数日前に排除しようとした人間のツラすら覚えてない、と言う事は無かったのか、初めて見る此方の顔色を伺う様な態度で、コニファは遠慮がちに切り出した。

「……貴方が女神に寵を受けた存在であると、改めて郷の者達に周知させよう。他の長老衆にも拝する機会を与えてもらえぬだろうか？　以降の暮らしも、聖者に相応しき住まいを手配せねばならぬ故、面通しをして頂きたいのだ」

……聞き違いかなぁ？　俺が大森林に永住するみたいに聞こえるんですけど。

長老衆の二人から、お天道様は東から昇って西に沈むじゃろ？　みたいな当たり前の事を言われたみたいに、凄い不思議そうな顔で見返された。マジで言ってんのかよ。

もう色々と呆れが過ぎて絶句してると、シアがちょいちょいと俺の腕をつつき、小声で伝えて来る。

（……会話が出来るようになったからって、通じる相手じゃないって体感出来ただろ？）

うん。傍から見てるより直接相手すると徒労感が凄いなコレ。普通にストレスだわ。

（なら、分かってんだろ？　このまま話を続けたって無意味だぞ――折角相手がこっちを上位者として見てるんだから、ガツンといけよ）

ええ……連中の言う、聖者様ムーヴをしろって？　それはそれで食い付きが良くなりそうで怖いんですけど。

（それこそ、後の事はサルビア達に任せりゃ良いだろ。要請のあった界樹の除染自体はもう終わってるんだし）

……そのサルビア達から向けられる目も怖い事になりそうなんだが……シアの言う事には一理も二理もある。

この際、この場限りのつもりでかましてやった方がいいのかもしれん。ついでに、明確に開明派の肩を持つ発言をしてやりゃ、サルビア達も後々動きやすくなるやろ。

その後はお任せで。丸投げというつもりはない、元よりエルフ達の問題だ。あとは当人達でなんとかして、どうぞ。

――おし、一丁やるか。

相変わらず全身に纏っている黄金の聖気を更に分かりやすく解放すると、俺は仁王立ちでふんぞり返る。

間近でそれを浴びたエルフ達が感嘆やら感激の声を上げて、更に祈りを深くするのを見てなんとも言えない気分になるが……それを押し殺して声を張り上げた。

はい、ちゅーもく！　顔を上げましょう！

跪いた全員が顔を上げたのを確認すると、咳払い一つ。

先ず、大きな問題となっていた界樹の異変と除染・浄化についてだけど、これは見ての通り。後ろにいるサルビア率いる開明派のエルフ達と、俺の仲間達が協力して解決し

ました！

騒めきは長老二人が率いて来たエルフの戦士達からだ。シアの本気モードは多くの者達が知る事となった筈なんだが、それでも外界の人類種が自分達がどうにも出来なかった難治を片付けた、というのは、にわかには信じ難いみたいだった。

それでも、聖者様の言う事ならば……といった感じで信じる空気になってるのが怖い。どういう眼で俺を見てんのアンタら。

えー、その際、俺は女神様と交信的なものを行うことになり……御当人から浄化の為の聖気と、頼まれ事を一つ、託されました！

元より大戦時は戦場で暴れるか、徹底的に裏に潜る方向でばっかり動いてたので、大勢相手に演説じみた真似なんてしたことが無い。それこそ、日本に居た頃に学校のイベントでくじ引きで負け、登壇させられたとき以来だ。変な汗出てきそう。

邪神の信奉者や眷属殴ってる方が楽やなぁ、とか思いつつも、頑張って頭カチコチ天狗鼻のエルフさん達に噛んで含める様に説明を続ける。

俺が女神様と直接話した、という時点で「おぉ、やはり……」だの「我らの森に聖者様が……」だの、歓びの声がざわざわと漏れるが……長老たちを筆頭に、脳内で都合よく未来を夢想していたらしき保守派のエルフ達は、次の俺の言葉で絶句する事となった。

『なるべく離れた土地に埋めること』そう言われて託された物がこちら――新　た　な　界　樹　の　種　になっておりまーす！

演説というより通販の商品説明みたいな喋りになったが……俺の話し方なんぞより語られた内容の方が遥かに重要だったのか、全員の眼がこぼれ落ちそうな程に見開かれ、顎も外れそうなくらいに口をカパっと開く。

ババーン！　と効果音すら付きそうな感じで俺が掲げたのは――宣言した通り、界樹の種だ。

受け取った直後は発光がキツくて光の塊にしか見えなかったが、後で確認したら光も収まり、分厚い殻に包まれた種がポーチにデデンと鎮座していなすった。

サイズ的には握り拳よりやや大きい、といった中々にビックサイズ。もとから膨大な聖気を押し固めた様な魔力を放っていたソレは、ポーチにしまってる間に俺が放出した聖性も存分に浴び、吸収したのか、黄金の燐光を纏って実に神々しい。

今の俺の姿も似たようなもんだという突っ込みはしてはいけない。やめて（懇願

全員が絶句したせいで、場が静まり返る。

五秒経ち、十秒経ち……十六を数えた辺りで一斉に驚愕にまみれた悲鳴が上がった。

ちなみに叫び声は後ろの身内や開明派からも上がっている。『そういうことは先に言っておけ』だって。

しゃーないやん、帰りに道すがら説明しようと思ってたんや。保守派とエンカウントするのが思ったより早かったのよ。

サルビア達も大概驚愕しているみたいだが……保守派はその比では無いのか、顔を見合わせて呆然としたり、頭を抱えて女神様に祈りだしたり、なんかしらんが泣き声っぽいものまで聞こえる。

端的にいって阿鼻叫喚というやつだった。なにこれ酷い。

「お、お待ちを、どうかお待ちを聖者よ！　まこと……まことにその聖遺物は界樹の種であるのか……!?」

跪いたままではあるが、必死な形相でじりじりとにじり寄ってくる老年のエルフ。目が血走ってるぞ、ロートこどもソ○ト使う？　いや持って無いけど。

俺に聞くまでも無いやろ、他に何にみえるっちゅーねん。　こんなエグい聖気溜め込んでる植物の種が界樹と関わりないとか、逆にアンタらにとって不味くない？

サルビアのものらしき「ソレ絞首台か断頭台の違いイ!!」という背後からの悲鳴は聞こえないフリをしつつ、でっかい種を両掌の間で手遊びさせながら保守派エルフ達の狂騒を眺めていると。

「……聖者よ、お聞きしたい。その種を我らの聖地で育むことは出来ぬであろうか!?」
ご尊顔を悲壮さすら滲ませた様子で歪ませるコニファが問いかけて来るが……知らんがな。
そもそも女神様が離れた場所にして欲しいって言っとるんやぞ。界樹自体が世界に力を巡らせるための中継点っぽいし、近場に二本あっても意味ねーっつうの。
「――ッ、女神と貴方との取り決めに口を挟む等、許されざる不敬……だが、伏してお願い申し上げる！　どうか、どうか新たなる界樹を育む大任、永く聖地を守護してきた我らに命じて頂きたい……！」
「遠き外界にエルフの郷があるとは限りませぬ、どうかこの地に新しき恩寵を賜る事を御許し頂きたい！」
コニファと老年のエルフ――長老二人が口々に言い募るが……話聞いてた？　種（コレ）に関してはエルフの都合とか関係無いの。ぶっちゃけこの場で教えた事だってサルビア――開明派のエルフ達に対する義理立て以外の意味は無いし。
寧ろ保守派（アンタら）だけなら相手もしないでさっさと家に帰ってた迄あるわ。
どうやら、界樹が唯一無二の存在で無くなる、というのは俺が思う以上に彼らの根幹を揺るがす大事件の様だ。だからと言って配慮だのなんだのしてやる必要性は微塵も感じないが。

……言っても無駄なんだろうけどさ、これを機に変な自尊心は捨てて、外界に眼を向けてみたら？　どんなに糞だと思ってた世界にだって――実際に視てみりゃ生き方を変えるような光景（モン）があったりするのよ。これ経験談ね。

ちらりと、後ろの金銀姉妹（ブラザーズ）を見ながら、らしくも無く説教を垂れてしまった。

というか、サルビアなんてまさにそんな体験をした良い例っぽいし。又聞きではあるが、件の恩人とやらについて知る機会がやってくると良いね。

さて、言いたい事というか、告げるべき事というか。

大体は言い終えた気がするので、そろそろ話を切り上げるとする。

当初の予定みたいに、聖者様とやらムーヴを決めてガツンとかます、なんてのはどうにも性に合わず、上手く行ったとは言い難いが。

案の定、俺の拙い説教なんぞ馬耳東風とばかりに聞き流され、捩じれた種族愛の下、尚も界樹の種の所在について主張する保守派のエルフ達。

いい加減相手にするのも面倒になった俺は、開明派のエルフ以外とはこれ以上話をしない、とばっさりぶった斬り、ある意味では哀れとすらいえる連中の哀願の言葉から背を向けて歩き出す。

……俺に対する態度が翻ったからといって、『視た』彼らの在り方が変わる訳じゃない。

それが悲しい、なんていうセンチメンタルな神経は持ってない。
ただ、もう見てて疲れる。その一言に尽きた。
いっそ最初の塩対応の方が、『視て』感じる残念なイメージと乖離する事が少なくてまだマシだった。
……好感を抱けない相手から過剰な敬意を向けられるってこんなにしんどいんやなぁ。一つ勉強になったわ（白目
「……お疲れ、まぁ、なんだ。今日は帰って飯くって寝ちまおうぜ？」
心から同意できるシアの言葉に頷きながら、俺達は連れ立って魔法によって拓かれたままの出入り口を潜り。
――界樹の聳える広場の直ぐ外で様子を伺っていたらしき、足止め役を務めていた開明派のエルフ達の跪いた姿に白目を剥く羽目になった。
ｏｈ……。
時間稼ぎに徹して、危なくなりそうなら通してしまって構わない。
そう提案したのは俺達だし、見た感じ、大きな怪我をしてる者もいないのできちんと言葉通りに仕事をこなしてくれたみたいだ。
――が、考えてみれば、彼らだってこの地に住まうエルフだ。御神木のある場所で天まで伸びるような聖気がぶっぱされたら、そりゃぁ気になるよね。

事の次第を確認する為――それと俺達が保守派連中に突っかかられたら割って入る為に、俺達を追う保守派の後を更に追う、という形でやって来たのだろう。

……で、さっきまでの俺と長老二人のやり取りを見ちゃったって感じかぁ……。

大名行列かよ、勘弁してくれ。

そんな胸中を言葉にする事も出来ずに、引き攣った顔のまま、道端の左右に伏せて祈りを捧げてくるエルフ達の間を進む。

無言で背を伸ばし、頭を撫でて来るリアに少しだけ癒されて。

拠点じゃなくて、はよ聖都に帰りたい。そんな切実な想いを抱いたまま、通って来た深い森を引き返す道を、歩きだしたのだった。

界樹の浄化が完了してから数日。

オレ達は、漸く大森林を出立して其々の国に帰還すべく、準備を進めていた。

いや本当の処、もっと早く帰る予定だったのだ。
こうまで予定がずれ込んだのは、言うまでもなく相棒が主な原因である。
とはいえ、本人に非がある訳じゃないし、元凶みたいにいうのはちょっと可哀想な気もするけど。
少し前までは連日、オレやアリアに接触を持とうとしてきた保守派ではあったが、ここ数日の相棒へのアプローチはその比じゃなかった。
まず、やってくるのが長老衆の親族だの一族じゃなくて長老達本人だからな。
長老衆の中では一番年若く、保有魔力も高いコニファが連中の顔として動く事が主で、他の奴らは郷の中央区から動くことは殆ど無い、とサルビアから聞いていたのだが……。
まぁ、来るわ来るわ。日も置かずに入れ代わり立ち代わり、”是非とも聖者様にお会いしたい”だの例の”種”についてなんだのと、実にマメに来訪してくる。
コニファが特別に若いというだけであって、他のメンバーは齢を重ねた老年のエルフ達で構成されている。
わざわざ訪ねて来た老人を速攻で叩きだすというのも躊躇われたのか、下手に断って集団で押しかけられるのを嫌がったのか、取り敢えず顔合わせだけはしたんだよ。言動はどいつもこいつも、コニファに輪をかけたような酷さだったので後悔先に立たずと

いった様子だったけどさ。
この数日で顔すら知ることの無かった長老衆ほぼ全員と会った気がするな。別に嬉しい出会いでもなんでもなかったけど。
それだけエルフにとって『始原の聖者』とやらが重要な存在だという事だろう。
彼らの閉鎖的な性質も相まって、エルフ達の神話や逸話というのは殆ど知られていない。
此処に来る前に、事前情報を仕入れておこうと大聖殿の書庫を漁ってもロクなモノが出てこなかった、という時点でその知名度の低さが分かると言うものである。
書庫で知れたのは、後に界樹と呼ばれる事になる若木の枝へと降臨した神様が腰を下ろした際、その場に立ち会い、加護を授かったエルフがいた、といった程度だった。
ここ数日でサルビアから聞いた話によって補完した内容によると、今ほど優れた魔力や聖性を有していなかったエルフが、創造神からの祝福によって優良種たる存在とやらに生まれ変わった。
その際に、神の手から一身に祝福を受け、それを当時のエルフ達に分け与えた、神様とエルフという種の橋渡しを担った存在。
『始原の聖者』とやらはそのように伝承される者――云わば、大森林のエルフにとっての現人神みたいな扱いなのだそうだ。

言い伝えによれば、創造神に直接祝福を施され、天まで昇る様な輝く黄金の聖気を身に纏っていたとかなんとか……うん、あのときの相棒そのまんまだな。そりゃ言い訳無用で認定される。

連日押しかけて来るのが保守派だけならいい加減、相棒の負担にしかならないから叩きだして終わりだったんだろうけど、開明派のエルフ達までキラキラした眼でアイツを一目見たいとやってくる者が後を絶たなかった。

開明派（かれら）の場合は、控え目に、だけど抑えきれない期待を堪えてるような表情で『会えないか、会って一言だけでも言葉を交わせないか？』と丁寧に頼み込んでくるので、なんだかんだいって相棒も断り辛かったみたいだ。

子供連れて来るのは反則やろ……とかブツブツ言いながら、結局は親子連れでやってきた小さな子供達の頭を撫でていた馬鹿たれを、アリアやミヤコはニコニコして眺めていたっけ。

表向きは文句を言いながらも、なんだかんだいってサルビア達には肩入れしてるんだよな。決定権はあくまでオレ達にってスタンスではあるけど。

とはいえ、相棒だけが帰国が遅れた理由じゃない。

まずは魔族領の夫妻。

彼らは、リリィをなんとかして引き取るべくあれこれと交渉を試みてるようだが、や

はり結果は芳しくないようで。

相棒に会いにやってくる長老達と、直談判できる機会を狙って色々と動き回っているみたいだ。

聖者様扱いされてる当人から、それとなく長老達に催促してやろうか？　と何度も聞かれていたけど今の処は二人とも首を縦に振っていない。

ただでさえ相棒の置かれた状況を半ば利用してるような形なのに、この上『娘』を迎え入れる為の労苦まで押し付ける訳には行かない、というのが夫婦の言だ。

どう考えてもリリィは彼らに引き取られた方が良い、というのがオレ達全員の総意なので、本当に帰る直前になったらシグジリア達がなんと言おうが相棒が長老衆に意見を捻じ込む事だろう。

サルビアも色々と手助けしているみたいだし、うまい形に軟着陸してくれる事を祈るばかりだ。

そしてオレ――と、アリアとミヤコ。

この面子に関しては、《虎嵐》とシグジリアみたいな真面目さというか、深刻な理由は無いというか……。

……えぇい、正直に言うぞ。

相棒が、かわいい。

……仕方ないだろ、他に言い様が無いんだよ！

慣れない偉人扱いで色々と気疲れしている上に、最低限に絞っているとはいえ、面倒な保守派（れんちゅう）の応対までしているせいか、奴は今、見た事がないレベルでげっそりした顔をしている。

それだけなら、ただ心配なだけだ。ここに滞在してるのが理由なんだから、諸々全部放り投げて、引き摺ってでもさっさと帰るだけの話である。

でも相棒は、自分で削れたメンタルを癒す方法を編み出した。

いや、何も特別な事はしていないんだ。

ただ、気が付くとオレ達をじーっと見てる。

あぁ～、癒されるんじゃぁ～、なんて声が聞こえてきそうな、何時もの目付きの悪さを何処かに置いてきたかのようなホニャっとした表情で、ずーっと此方を見てるのだ。

見つめていた相手が、席を立ったり移動して視界から消えてしまうと、途端に捨てられたワンコみたいに、しょぼくれた様子で項垂れる。

なんだよコレは。新感覚……！

これは……なんというか駄目だ。見てると押し倒して頬ずりしたくなる謎の吸引力がある。

一日中膝枕して延々おしゃべりしていたい、とアリアも真顔で言っていた。オレもミ

ヤコも同意しか無い。

相棒の行動に気付いてからは、オレ達の行動は早かった。

三人でローテーションを組み、大体半日くらいの回転でそれとなくあいつの側に張り付いていられるように立ち回る。

注視する対象は、一緒に来た仲間達や、サルビア達開明派でも良いみたいだが……近くにいれば自然と相棒の視線を独り占めできる様になるので、オレ達は固い結束の下、半日ずつ非常に素晴らしい時間を味わい尽くす事に全力を尽くした。

一番重症なのはアリアだ。

「あぁ……ボク、なんか変な趣味に目覚めそう……」

交代の時間になると、名残惜しそうにしながらも、恍惚とした表情で如何に『にいちゃんが可愛かった』のかを力説する妹（おとうと）の表情は、幼さの残る容姿には不釣り合いな程に艶っぽかった。

わざと視界から外れてみたり、アリアにしては少し意地の悪い行動が多かった様に思えたが……そのときの相棒の様子をうっとりと眺めていたのは気のせいじゃなかったのか……。

どうやら我が妹（おとうと）は危うく業の深い性癖に開眼しかけたらしい。アイツがショックで寝込みかねないからやめておけって。

一方、ミヤコは今の状況を利用するみたいな行為に後ろめたさを感じているらしく。
「先輩に負担が掛かってるのは事実なんだから、やっぱり早く帰った方がいいんじゃ……」
なーんて生真面目な事を言っていた。
でも、それも自分のローテが回ってくるまでの話だ。
日も落ちて来た時間、ログハウスの大広間で二人きりで話し込む事になったミヤコは、ずっと相棒に見つめられたまま、結局夜通しお喋りする事になったらしい。
「先輩とお話していれば、あと三徹くらいは出来ると思うの」
最初の意見は何処へやら、眼の下にうっすらと隈が出来てる癖に、徹夜のテンションというだけでは説明の付かない満ち足りた表情でポンコツな事を言っていた。
「隊長を三徹させたとか副長に知られたら、旦那がシバかれるッスよ。つーか自分まで巻き添えで怒られるんで寝て下さい。今すぐ」
皆揃っての朝食の後に、手隙の時間を使って広間の卓で報告書を書いていたトニーの言である。
オレに関しては言うまでもない。
浄化作業を行っていた時に相棒の『枷』を励起させる為にしたことを、忘れる筈も無いのだ。

思い出すだけで手足をバタバタさせたくなる程に恥ずかしく。
だけれど、当分の間は脳裏に焼き付いて離れそうにない、大切な瞬間。
あのときの気恥ずかしさと、それを遥かに上回る喜びは、今でも仄かな熱をもって胸の奥に留まっている。
アイツに関して、変な処でヘタレになっているのは、自分でも分かってた。
だから……不意打ちみたいな形とはいえ、正面から一歩、距離を詰められた事はオレ自身が驚いてる。
アイツの事を知らずに好き放題いう連中に腹が立ったせいか。
何を言われても大して気にもしてないアイツに焦れったくなったのか。
あるいは、神様にまで気に入られているらしき馬鹿野郎に、危機感を覚えたせいなのかもしれない。
そんな諸々、全部含めて。
当人であるこの馬鹿にも、その周囲を取り巻く全ての者達にも、分かりやすく行動で示してやりたくなったのだ。
ミヤコと徹夜で話し込んでたせいで、眠そうにしている相棒の頬をつつき、笑いかける。
お前が、オレをこの世界(戦)で生(う)きる意味(理由)にしてくれた様に。

オレは、お前が――。
今はまだ、この続きを言葉にすることも出来ないけれど。
でも、いつか、きっと。
願うのではなく、そうしてみせる、と。自分自身に強く誓って。
取り敢えず、今は自分に廻って来たローテの半日を満喫するのだった。

「――皆さんの御蔭で、界樹も完全に復活しましたし、開明派（わたしたち）に追い風となる事柄も数多く在りました……心からの感謝を」
「気にしないでくれよ、お役に立てたのなら幸いだ。エルフ達の意識改革、上手くいけば良いな？」
そして、帰還の当日。
オレ達は、逗留中にすっかり世話になった開明派――サルビア達に見送られ、大森林の入口へとやってきていた。
見送る側には、なんとシグジリアも混ざっている。
結局、数日では保守派からリリィに関する譲歩を引き出す事も出来ず、嫁さんのほう

だけ暫し留まり、交渉を続けるらしい。
《虎嵐》も出来る事なら残りたい様子だったが「筆頭補佐殿を早いとこ安心させてやってくれ」という嫁の言葉に従い、彼だけが帰国するみたいだ。
「……無理はするな、何かあれば、駆けつける」
「あぁ、逗留中は伯母上の世話になるし、そうそう妙なことにもならんさ――帰ってくるときはリリィも一緒だ、約束する」
「……」
「そんな不安そうな顔をするなよ、私の旦那様は強い雄(おとこ)だろう？」
今にも首に手を廻して睦言を囁きそうな距離で、夫妻が一時の別れの挨拶を交わしている。
――トニー君、お茶ある？
「用意してあるッスよ。冷やしてないからちと苦味が強いッスけど……まぁ丁度良いッスね……サルビアさんもどうぞ」
「ありがとうございます、レイザー殿……あー、姪の新婚空気に抉られる独身の胸の痛みに染み入るぅ……」
なんで帰る側と見送る側が三人並んで茶を啜りだしてんだよ。何気に仲良しかお前ら。

ここ数日の本人による粘り強い話し合いの御蔭で、サルビアや交流を深めたエルフ達は、表面上以前のような気安いやり取りが相棒と出来る様になったみたいだ。

ま、それでときたま敬うというか、キラキラした瞳になったりするのは仕方ない事だろう。種族的な根っこの部分にある信仰の話だしな。

リリィに関する話も、オレはそこまで心配はしていない。

界樹の浄化を終えた次の日から、長老衆に呼び出されて連中の下へと戻ってしまったリリィではあるが、味気ない食事に戻る事と《虎嵐》達と離れること、両方に酷く落胆していたからな。

あの手この手で撒いた感情の種は、順調に根付いている。少なくとも、都合よく保守派の思想に染め上げられる可能性はぐんと減った。

前日に話し合った際に、心苦しいと遠慮する夫妻に対し、自分達の心情じゃなくてリリィの将来を考えろ、とピシャリと言い切った相棒が保守派に書いたらしき手紙をシグジリアに握らせていたので、いよいよともなればそれを有効活用する事だろう。

何、本当にいざとなれば、強引に攫って来れば良いんだ。なんなら聖女と聖者が自重無しで手助けしちゃうのである。

そんな風に、穏やかに別れの時間が近づいていたんだけど。

「……どうしても、我らの聖地へと留まっては頂けぬのか、聖者よ」
最後の最後まで絡まれるのも勘弁して欲しかったのだが……やはりというかなんというか、保守派の連中もやってきた。
一応、界樹のもとへと強行軍で移動したときの様に、こっそりと予定と段取りを立てたのにも関わらず、今度は殆ど遅れる事すらなく見送りの場所に現れる。
「貴方は地上唯一、女神の使徒というべき存在ですぞ……本来ならば……」
「よせ。御方には女神に託された使命があるのだ、是非もあるまいよ……出来る事ならこの地を選んで頂きたかったのは、確かではあるが」
どれだけ会話しても根本的な意思疎通が出来たとはいえない連中だったが……オレ達――とりわけ、エルフにとっての偉人である相棒が、決して自分達を良い目で見てはいないという事だけは理解できたみたいだ。
多くの護衛らしき戦士達に囲まれた老人達が、見送りにきたのかいちゃもんを付けにきたのか判断に困る会話を続けているが……これでもマシになったと思えるのが凄いよな。
長老衆、と呼ばれる老人達ではあるが、周囲にイエスマンしかおらず、且つ自分達を最良・最上の種であると妄信し続けながら狭い世界で生き続けた結果なのだろうか。
彼ら自身が、上位者あると認める相棒ですら半ば置き去りにしたまま、自分達だけで

会話を廻し始める様は、永い時を生きている長命種が多く持ち合わせている、威風や切れ者の空気というやつを感じられない。

ダルそうに耳の穴をほじりだした相棒を筆頭に、オレ達や開明派の者達まで「早く帰んねーかなコイツら……」みたいな目で残念な爺婆を見つめだしたときだった。

「……聖者よ、最早貴方の使命を止めることはすまい……だが、せめて聖地から供を付ける事を許して頂きたいのだ」

老人達の井戸端会議に加わっていなかったコニファが進み出て、連れていた一人の少女の肩に手を置き、そっと前に押し出す。

「……お世話になります、聖者様」

そういって、ペコリと頭を下げたのは――ピンクブロンドの髪を後ろに纏めた、オレ達も良く知る娘……リリィだった。

難しい顔でリリィを見下ろしたまま、黙する相棒とは対照的に、これに強く反応したのはシグジリアである。

「おい、どういうことだ……！　私や伯母上が散々リリィの処遇について交渉したのに、リリィのこの扱いは……！」

「……お前達が何を言おうが、この事は長老衆の合議で決定された。覆る事など無く、氏族のはぐれ者であるお前に教える意味も無い」

「ふざけるな！　貴様自分の孫をなんだと思っている！」

シグジリアの激昂も尤もだ。傍目には相棒の御機嫌取りの為の人身御供にしか見えない。

言うまでも無く、オレ達にとっても不愉快な話だ。

実際に引き取ってしまえば、あとはこっちで普通の従者として扱うなり、シグジリア達に預けるなりは出来るのだろうが……感情が薄いといっても、リリィは聡い子だ。どう言い繕ったところで、自分が家族である祖母から切り捨てられた・売り飛ばされたといった立ち位置に近いことを理解しているだろう。

険悪な空気になってきたが、そこに相棒の静かな声が響いた。

――リリィ。

「はい、なんですか聖者様」

――その呼び方やめ……まぁ、それは後でいい。お前さんは俺に付いてきて何をしろと言われた？

「リリィは、聖者様の従者として御傍で役に立つようにと――」

――それも言われただろうが……最終的には『何』をする様に言われたのか教えてちょーだい。

「……困りました。御祖母様や長老様には秘密にしろと」

――それは俺が頼んでも？　……じゃぁ、聖者様お願いしちゃう。
相棒とリリィの意外とテンポの噛み合う会話に、咄嗟にコニファが静止の声をあげようとしたが、それも遅かった。
「分かりました――リリィは、聖者様の御子を宿したあと、郷に戻ってくるように言いつけられています」
空気が、凍った。
「どういう、ことだ」
曲がりなりにも嘗ては身内であった人物へと、冷え切り、明確に敵意を滲ませた視線を向けるシグジリア。
それに……意外と言ってよいのか、コニファは顔を歪めて目を逸らした。
今までの言動からすると本当に意外な反応だな。少なくとも、顔を逸らした一瞬、そこにあったのは後ろめたさや――不本意そうな表情であったように見えたから。
「……コニファ様、今のリリィの言は聞き逃せません。あの子を道具と見做してる事も、聖者たる猟犬殿を謀ろうとした事も」
姪と並んで詰め寄るサルビアの声と表情も、また硬い。

血縁の二人に、殺意に近い意志を向けられた長老殿が、暫しの躊躇いのあとに口を開いた。
「……我らの、エルフの未来の為だ」
「……！　この糞婆っ……！」
その言葉を聞いたシグジリアが、コニファへと手を伸ばして胸倉を掴み上げた瞬間だった。
「黙らぬか！　この愚か者が!!」
「シグジリア、元はと言えばお前がはぐれ者などにならねば、聖者に捧げる花嫁として不足無く御役目を果たせたのだぞ……！」
「然り、コニファ殿を責める前に、己の軽挙を振り返るが良い！」
口々に気色ばんで叫んだのは、他の長老衆の爺婆共だった。
リリィを捧げ物同然に扱ってる事にはなんら疑問を覚えていなくとも、聖者である相棒を騙くらかしてハニトラ染みた真似をしようとした事はマズいと思ったみたいだ。
口早に叫ぶその姿は、なんとも見苦しく、不快ですらあった。
……使者のオレ達は置き去り気味な展開ではあるが、いい加減反吐が出る様な内容の会話を聞かされ続けるのも限界だ。いっそ手をだすか？
ちらりと、そんな考えが頭に浮かぶ。

他の皆を見てみれば、なんとなく近い考えであろうことが知れた。そりゃそうだ、初邂逅から終わりまで、隙無く不愉快な気分にしかさせられてないってある意味凄いぞ。

その間にも、自分達の教えに反し、現存する大森林出身のエルフで最も強い加護を持ちながらも野良となったシグジリアへの糾弾は続く。

「お前ならば、より優れた聖者の御子を宿す事も可能だったであろうに、よりにもよって穢れ者の獣混じりとの間に子を成すなど、愚かにも程がある!!」

それを聞いた瞬間。

コニファの胸倉を掴んでいた手を離し、シグジリアは躊躇なく背中の大弓を構えると矢をつがえ、先の発言をした長老の一人へと向ける。

「殺されたいのか、もう一度言ってみろ老害ッ……!」

凄まじい形相で、今にも同族に向けて魔力を凝縮させた一矢を放とうとする彼女を押し留めたのは、《虎嵐》だった。

「……待て……先程の言葉、事実なのか……」

真っ直ぐに、或いは戦いのときに見せたものより更に真剣な表情で、嫁さんの細腕をそっと掴み上げて顔を覗き込む旦那に、当の激昂した嫁の方も頭が冷えた様だ。

少しバツが悪そうに口の中でもごもごと、上目遣いでシグジリアは答えた。

「……出来てると知れたのは、一昨日の話だ……伯母上が気付いて、魔力で精査してくれ

た」

「……何故、言わなかった？」

「言えば、一人で此処に残ることを反対すると思って……」

「当然だろう……！」

先程までの本気の怒りも何処へやら、珍しく彼女に対して怒った様子を見せる《虎嵐》に、ちいさくなって大人しく叱られているシグジリア。

パッと見、腹部が大きくなっている兆候も全くない。

妊娠したといっても、本当につい最近――それこそ今回の使者としての任に付く直前に授かった、といった処か。

長老共がそれに気付いていたのは……単なる年の功か、それともシグジリアを氏族に戻して連中の企みに利用しようと、遠目からこっそり身体を精査したのか。

どちらにせよ、あわや血生臭いことになる一歩手前という状況から、一転して夫婦の甘ったるいイチャつき時間にすり替わった訳だが……ここで空気を読まずに割り込む人物がいた。

長老衆の老害共でも無く。

サルビア達、開明派でも無く。

いざとなればシグジリアに加勢しようと構えていたオレ達でも無く。

リリィの頭を撫でながら、何時もの騒がしい言動と比べればひどく静かなままであった、相棒である。

その顔は――ものすごーくイイ笑顔だった。

あー……踏んだか。まぁ、当然だよな。

オレもアリアも、当然ミヤコも、その笑顔を見て察し。

先程まで並んで茶を飲んでたせいで、近くでそのスマイルを直視したトニーとサルビアの口から「ゥヒィッ!?」と短い悲鳴が漏れる。

相棒は先ず、サルビアにリリィを預けると、そのまま《虎嵐》夫妻の側に歩み寄った。

二人は気配を感じて振り返り――悲鳴こそ上げなかったが、相棒の顔を見て顔を揃って引き攣らせる。

しゃきーん。

そんな音と共に、奴は魔鎧を起動させて身に纏う。

装甲が展開されたのは手足のみではあるが、相変わらず使いきれていない神様印の加護のせいで、未だ黄金の聖気を纏った姿だ。

それには頓着せず、相棒は無造作にその手を挙げ――シグジリアの腹部へと掌を翳した。

戦闘用に練り上げられたものではない、純粋にただの力の波動である聖気が、大量に

放射される。

ゆっくりと、優しく注がれた聖気は、シグジリアの腹部に染み入るように消えてゆき……おそらくは彼女の内に宿った新たな生命を包み、守護する力となった。

「な……！」

「聖者よ、何故そのような穢れ混じりに祝福など……!?」

聞くに堪えない言葉を次々に垂れる保守派の頭共に対し、ゆっくりと相棒は振り返り。

――一番手近にいた、唖然とした表情のコニファの顔面に向け、いきなりドロップキックを叩き込んだ。

「ホベァ!?」

冷徹、硬質といったイメージしか他者に与えなかった彼女の口から素っ頓狂な呻き声が洩れ、仰け反ってダウンする。

鼻血を垂らしながら、混乱した様子でなんとか身を起こしたコニファが見たのは、高々と手刀を振り上げた相棒の姿だ。

――呀（カ）アッ！

口から蒸気吐き出しながら、手刀を振り下ろす顔には既に笑顔は無く――代わりに鬼の様な形相で鋭い呼気が吐き出される。

コニファの脳天からピッ、と朱線が奔り、それが脳天から股間まで一直線に一気に斬り開かれた様に見え――。

彼女はそのまま、最初のドロップキック以外の傷を一切負う事もなくその場で泡を吹いて失神した。

――宮〇武蔵式、エア斬撃……唐竹、首、胴……斬り放題だ。

見ていたオレ達でも一瞬誤認する程の殺気や戦意を込めて振るった一撃は、当てずとも実際に両断された様な確信を相手に与えたのか。

両の鼻の孔から鼻血を垂らしたまま、ビクビクと痙攣して意識を失ったコニファの顔は、血の気を失って白目を剥いていた。

当然というか、彼女だけで終わる訳も無い。

シィィィィッ、と、蛇の威嚇音みたいな呼気と共にその視線が睨めつけた先には――驚愕で固まっている長老衆の姿がある。

――ウン百、ウン千年生きてそのＫＹっぷりだってんなら、そのまま一億年ＲＯＭってろやボケ老人共がぁぁぁぁっ!!

雄叫びと共に、蹂躙が始まった。

「ま、待て、聖者よ、このような狼藉はいくろぎょおおおおおっ!?」
ラリアットを喰らい、薙ぎ倒された長老の一人が抗議の声を上げようとした瞬間、ヘッドロックを掛けられて身も世もない悲鳴を上げる。
激痛のあまり失神した爺をペイっとゴミをポイ捨てするように放り投げると。別の長老にフライングボディプレスで強襲。
圧し潰されて呻き声をあげる年寄りを引きずり起こし、情け容赦の無いオクトパスホールドが掛けられる。
「まっ……エルフの身体はその様な方向には曲がらっ……お”ぐえ”え”え”え”!?」
慌てて背を向けて逃げようとした婆に躊躇なく追い縋り、アルゼンチン・バックブリーカーで泡を吹くまで背骨を締め上げた。
流石に止めに入ろうとした護衛の戦士達は、コニファが喰らったエア斬撃で輪切りにされたり袈裟懸けに両断されたりで、早々に意識を失って地に転がっている。
――死ねぇぇぇぇぇっ!!
「うぎぇぁぁぁぁぁっ!?」

見た目腰の曲がった老人達に、切れ散らかした様子でプロレス技を仕掛ける相棒の姿は、どう控えめに言っても聖者というより老人虐待の現行犯で逮捕されそうな凶悪犯だった。

とはいえ、明らかに相棒の地雷を踏んだらしき相手に対して、初めて見るレベルの温さではある。

少なくとも、オレの知ってる限りではあそこまで踏み抜いた相手を、失神程度で済ませる、なんていうのは見た事が無かった。

完全に壊すか、完全に仕留めるか。

いつもだったら一切躊躇わずにそこまでやってしまうのだが……。

……多分、リリィの前で血を見せないようにとか、スプラッタ劇場はお腹の子に良くないとか、そんな事を考えてるんだろう。

どんなに糞ったれのロクデナシでも、リリィや、まだ見ぬシグジリアの子にとって、大森林のエルフは同族や血縁だからな。

今はまだ分からなくとも、将来、自分達が切欠で、多くのエルフ達が真っ二つになって土に還りました、なんて知ったら気に病むかもしれない。

そう考えてのプロレス技だろうな……ひょっとしたら、この場ではこの程度で済ませるってだけで、そのうち何人か……或いは長老衆の全員が行方不明になるかもしれない

けど。
まぁ、可能性としては低い。
地雷を踏み抜いた他にも、我慢の限界を超えた、という面もあるみたいだし……何より、オレとアリアに危害が及んでないからな。
これは完全に自慢だが、相棒はオレ達を護る為の最大効率の為なら、諸々煩雑な事情とかも全て無視して行動する。
逆を言えば、オレ達に危害が及びさえしなければ、意外と常識に沿った判断をする奴なのである。
……今も爺婆の一人をチョークで締め上げている姿を見ると、説得力が薄いかもしれないが、本当なんだぞ？
そんな事を考えてる間に、締めからＤＤＴに移行した相棒は地面へと長老の顔面を叩きつけ、素早くフォールの体勢を取った。
――カウントォ！
叫ぶ馬鹿の声に、即座に反応したのは《虎嵐》だ。
「……ワン！　トゥー！　スリィ……！」
すかさず駆け寄ると、地面を堂に入った体勢で叩きながら、妙にソレっぽいイントネーションでスリーカウントを数え、勝者とばかりに相棒の片腕を取って天に掲げる。

カンカンカーン！　とか口頭で叫んでる馬鹿を眺めながら、シグジリアがポツリと疑問の声を洩らした。
「……なんでレフェリーが出来るんだ？」
「あー。《虎嵐》サンと自分に旦那が『ぷろれす談義』ってやつをしてくれたからッスね。異世界の興行を兼ねた格闘技って事で、《虎嵐》サンは特に興味深そうに聞いてたッスよ」
「私の夫に何吹き込んでるんだ猟犬殿は!?」
すいません、ウチの駄犬が本当に申し訳ない。
胸中でオレが謝罪してると、長老衆とその護衛の保守派を全てマット……じゃなくて地面に沈め終えた相棒が、気付けだオラァ！　なんて叫びながら、身体の内に残った黄金の聖気を派手に噴き上げる。
それに影響され、動けないまでも意識は取り戻した保守派連中を確認すると、奴はぎゅるりと首をこちらに向け――サルビアを真っ直ぐに見つめた。
「あ。なにか嫌な予感……待っ――」
顔を盛大に引き攣らせて制止の声を上げようとした彼女に向け、先程、シグジリアの腹部に向けられたものと同じ……いや、量だけでいえば遥かに上回る、残った神様パワーをありったけ込めた黄金の光が注がれる。

相棒の身体に残るのは、微かに灯る燐光の名残だけとなり。

代わりに、一時的にだろうがサルビアへと神様の聖気――祝福が施される。

あんぐりと口を開けて自身に宿った黄金の輝きを見下ろす彼女を力強く指さし、相棒は宣言した。

――彼女、サルビア＝エルダを大森林に住まうエルフ達の最長老に推薦する！　以後は彼女をここのトップとしてその方針に従う様に！　文句がある奴ぁ今の内に手を挙げろやオラァン!?

反対の声も、手も挙がらなかった。

というか、かろうじて意識を取り戻しただけで、身体はロクに動かない保守派の連中に、それが出来る筈もないんだが。

「い、イヤァァッ!?　下手したらあと百年は森から出られなくなるぅぅぅ!?　終わったらあの方を探しに行こうと思ってたのにぃぃぃ！」

白目を剥いて天に向かって叫ぶサルビアと、紛れもなくめでたい事なのだが、当人の切実な叫びのせいで素直に喜べない開明派のエルフ達。

姉妹揃って、色々な意味を込めて両派閥のエルフ達に南無～と手を合わせるオレとアリア。

皇帝への報告が最後に面白愉快な事になった、どう伝えようかと相談を始める《刃衆》

の二人。
レフェリー役を終えて何処か満足気な《虎嵐》と、夫がプオタに染まらないか心配なシグジリア。
そんな従姉に掌で眼を塞がれ、泡吹いたり痙攣したり、酷いのになると失禁したりしてる長老衆の惨状から視界を庇われて、「またまた真っ暗です」なんて呟いてるリリィ。
もう散々にしっちゃかめっちゃかな酷いことになってる大森林の入口にて、大体の元凶である相棒は、死屍累々と横たわる保守派エルフ達の真ん中で、すっきりした様子で両手を上げ、パン！　と一際大きく掌を打ち鳴らした。
――よーし！　終わり！　全部済んだし、さっさと帰るぞ！　解散！

「いやぁ、愉快な事になったねぇ。やはり報告書なんかより、実体験した人間の口から顛末を聞くとリアリティが違うよ」

カラカラと、機嫌のよい快活な笑い声が奥ノ院に響く。

聖都大聖殿、その深奥にて。

将棋盤を挟み、揺り椅子に揺られた老人と椅子に腰かけた目付きの悪い黒髪の青年が、盤上遊戯に興じながら最近起きた一件について語り合っていた。

老人の後ろには同じ年頃である老年のシスターが静かに佇み、鉄の棒を呑み込んだかの様に伸びた背筋のまま控えている。

パチンと、盤上の駒を小気味良い音を立てて移動させながら、老人は首を傾げて青年に問いかけた。

「ふむ。そういえば、件の人身御供染みた立場となった少女はどうしたのかな？　君達が帰って来たときに、同行はしていなかったみたいだけど」

――魔族領の夫婦が引き取ったに決まっとるやろ……当人が従者のお役目を完全に投げ捨てちまうのを気にしてたから、偶に来て一日従者とかやればいい、って事になったけど。

「実質、遊びにくるようなものだね。まぁ、そうなったら一度、奥ノ院に連れてきなさい。

挨拶くらいはしておきたいからね」
――良いけど……変な事は吹き込まないで下さいよ？　生い立ちのせいでまだまだ純粋培養な気がある子なんだから。
パチィン！　と快音を響かせて返しの一手を打つ青年に、「おや、これは厳しいね」と返す老人の言葉は、話に上がった少女との面通しについてか、単に盤上の戦局を見て零れたものなのか。
「帝国の方でも、僕より余程楽しく話を聞いているだろうねぇ……魔族領の方は、穏やかに話が付きそうで幹部の方達が不満を溜め込みそうだけどね」
――あの連中は溜まったら溜まったで、身内で大喧嘩はじめて勝手に発散するでしょ。物理的距離さえ空いてりゃ巻き込まれる事も無し、ほっときゃえぇねん。
「ははっ、違いないね」
代わりに彼らの内で、数少ない常識枠であるＮＯ．２の地位にいる御仁の胃壁が、鮫肌で摺り下ろしたような状態になりかねないのだが……老人と青年は、そこは気付かないフリをして会話を続ける。
「――そういえば、エルフ達の君に対する扱い……『始原の聖者』とやらについては、此方でも公表はせずに秘匿する方向になったよ。トイル達も納得してくれた」
――まじで？　いやぁ助かります……これでこっちでまで持ち上げられ始めたら、ア

イツら攫って諸国漫遊の旅に出るのも選択肢に入る処だったわ。
「それは洒落にならないから辞めて欲しいなぁ」
実際にやられたら、市井の間では大人気間違い無し――吟遊詩人の大定番として永く謳われる逸話となるだろうが……国の威信がガッタガタに揺らぐので、老人としては勘弁して欲しい処であった。
再び、駒を交互に打つ音だけが奥ノ院に響き、合間にシスターの淹れてくれた紅茶の満たされたカップを、ソーサーから持ち上げる音が微かに混ざる。
「一応聞いておきたいのだけど……例の『種』についてはどうするつもりなのかな？　かの女神が君に一任された以上、どこの国だろうが文句を言わせるつもりは無いけど」
――怖い事言わなくても、ちゃんと考えてますって……まぁ、最終的に大森林の一本目と同等のサイズになる、と考えると下手な都市内とかは難しそうだけど。
「……まぁ、樹の成長に合わせた区画整理が必須になってしまうからねぇ……日照時間の問題も発生するだろうし」
――というか、ぶっちゃけ教国内はあんまりよろしくないでしょ？　長い目で見ると。
「そうだね。戦争も終わった今、後々の事を考えるとウチの権威が強まり過ぎるのはよろしくない、とは思うよ」

戦時中は人類種の中でもとりわけ数の多い人間を、無理矢理にでも一枚岩とする為、教国の威はあればあるだけ良い、といった状態であったが……これから訪れる穏やかな時代を長続きさせる為には、宗教国家に極端な一極集中の権威を持たせるのは良い事ではない。

老人を始め、彼の部下にあたる者達も概ねそのような意見であった。

故に、件の『種』の所在はどこに在っても各国のパワーバランスが傾きかねない、文字通り悩みの種であると言えるのだが……。

青年はそんな危惧を察していたのか、ふふん、と笑いながら先程の盤上の攻防で手に入れた駒を、掌で弄ぶ。

――そんなに悩まんでも、あるでしょ？　何処の国からも文句や軋轢が生まれず、象徴としても充分で、かつ人類種の権力関係からは切り離された不可侵な場所が。

「……ソコを選択肢に入れられるのは、君と、僕の後ろにいる君の姉弟子の二人だけだよ」

ドヤ顔で胸を逸らす青年に、苦笑いで老人が答える。

話題に上げられたシスターは鉄面皮の如き表情をピクリとも動かさぬまま、静かに空になったティーカップを回収すると、紅茶のお代わりを注ぎ、再びソーサーに戻して自身も定位置へと収まった。

――まぁ、結果的にどうなろうと、個人的に教国は無い、とは思ってるから安心して下さいな。
「ほう。して、その心は？」
――エルフが巡礼がてら、俺のとこにも押しかけてきそう。嫌どす。
「フフッ、そりゃ大変だ。確かに同じ立場なら僕もゴメンだねぇ」
お互いに顔を見合わせて、気楽に笑いながら、青年と老人は香り豊かな紅茶に舌鼓を打ち。

――あ、ちなみにソコ、王手ね。
「――え？　あっ！」

パッシーン！　と良い音を立てて盤に置かれた三手詰みの歩を見て、老人は慌てた様に待ったの声を上げた。

「――やれやれ、今日も負け越しか。なんともまぁ、年長の威厳もなにもあったものじゃ

ないね」

　青年が奥ノ院から退出した後、溜息を付きながら棋譜を確認している老人に、背後に控えていたシスターが表情を崩さぬまま、口を開く。

「肝心の聞きたかった『話題』については、お話にならなかった様ですが……よろしかったのですか？」

「うん？　まぁ、直接聞いても良かったのだけどねぇ……」

　棋譜を一通り見終えたのか、ジャラジャラと駒を片付け始めた老人は、シスターの方へと振り返るとニヤリと悪戯っぽく笑って見せる。

『『彼』が彼女とあった一件を語りたがらない、という時点で望み通りの結果は得られたような物だよ――話すのを躊躇う時点で、あの子をようやっとそういう眼で見る可能性が生まれたという事だろう？」

　いやいや、回りくどい真似をした甲斐があったというものだよ、などど言って好々爺然とした笑みに切り替える老人の背に、流石に鉄面皮を崩したシスターが呆れた様子で呟いた。

「エルフとの問題、新たな界樹――挙句に『彼』の聖人認定。ここまで大きな事柄を絡ませながら、その実、あの子達の関係進展が真の目的など――創造神が知れば、どんな未来視（加護）の無駄遣いだと絶句なさるのでは？」

「はっはっは。最後の聖人云々については、後の布石でもあるよ――『彼』が、各国の知り合いの子と良い仲になったとき、周囲のつまらないやっかみを黙らせる札が必要だろう？　基本、一夫一妻の教国で例外を作るとなれば、猶更にね」

将棋盤の片付けを終え、再び揺り椅子に背を預けた老人は、友人が淹れ直してくれた紅茶を嗜みながら何でもない事のように嘯いた。

「それに……以前にも言ったじゃないか。折角平和な世の中になったんだ、未来視の加護なんて、若者の恋路に茶々を入れる程度の使い方が、一番お似合いだってね」

大戦・老兵編（過去編）

老兵の残照　出会い

大陸北方――激戦区である中央から離れた、散発的な小競り合いが主であるとされた北の大地は今、大きな戦火に呑み込まれようとしていた。

剛剣が振るわれ、後衛の魔導士達の手によって足止めされた邪神の下位眷属が両断される。

体液と思わしき黒い飛沫をまき散らし、周囲の草木や大地を穢しながらグズグズと崩れ征く呪詛が人型を為した様な存在に、ソレを叩き斬った当人である騎士が忌々しそうに舌打ちした。

「クソが。なんで眷属が複数出て来るような戦線が北方（ココ）で発生するってんだよ……！」

「――若！　御無事ですか!?」

慌てた様子で駆け寄ってくる老年の魔導士の安否の声に、若と呼ばれた騎士は「応、大した怪我もない」と応じ、先程まで眷属と斬り結んでいたせいで破損した兜を脱ぎ、地

に放り捨てる。
　自身が初陣のときから愛用している魔装処理を施した板金鎧（プレートメイル）一式であったが、下位とはいえ邪神の眷属と正面から打ち合うなどという無茶をしたせいか、今までの鎧傷とは比較にならないほどボロボロになっていた。魔力導線が未だに機能しているのが救いではあるが。
「こっちは何とか片付いたが……他の戦況はどうなってる？　親父殿は無事か？」
「……あちらでも眷属級の呪詛が発生したらしく、御当主はこれを撃破。ですが、負傷の為に一時戦線を離脱したそうです」
「――チッ、傷の具合はどうなんだ？　くたばったりはしないだろうな？」
「軽くはないようですが、御命がどうこう、という程では無いようで」
　最悪は免れたかよ、と苦々しい表情で呟く騎士であったが、直ぐに切り替え、周囲に残った戦力……部下たちに声を張り上げて指示を下す。
「ここの信奉者共は眷属の顕現にほぼ消費された！　残敵の掃討を行う戦力を残し、他領の軍に助太刀しに行くぞ！　誰か馬牽いてこい！」
「若!?　お待ちを！　御自身も今しがた眷属を一体討滅したばかりでしょう！　一度御当主と合流して……」
「アホか。俺と親父殿の処だけババ引いたなんて事があるわけ無いだろうが。他にも複

数眷属級が湧いてると考えるのが妥当だ」
　連中と戦り合える奴なんざ近辺の領軍に何人もいないだろうが。と、吐き捨てる様に愚痴り、部下が引いて来た馬の手綱を握る。
「なりませんぞ若！　次期当主として此処は堪える処です！」
「他の戦線が食い破られて近隣の領土に雪崩れ込まれてみろ！　被害がデカいのはウチだぞ！　民が食い散らかされ、瓦礫となった街で領主を名乗るなぞ、道化ですらないわ！」
　押し問答を繰り返す騎士と魔導士に、馬を牽いて来た部下――黒髪の男が割って入る。
「坊ちゃんも導師殿も一旦落ち着きましょうや――俺が坊ちゃんの脇に付きます。いざとなったら引き摺ってでも退却させますんで、今は他んトコに応援に行くべきかと」
　突発的に始まったと思われた今回の戦いは、邪神の軍勢側からは予想以上に大規模な戦力が動員されている。
　対して、小競り合いに悪い意味で慣れてしまった北方の軍勢は、今回もその類であろう、という楽観的な初動のせいで戦力の厚みが足りない。
　援軍が到着する前にどこかの戦線で穴を空けられてしまえば、そこから一気に瓦解する可能性があった。

「俺と坊ちゃんの二人がかりなら、現場にいる戦力も加味すりゃ、もう何体かは眷属級も相手に出来るでしょうよ――まぁ、俺も死にたくないんで、ヤバくなったら素直に引きましょう」

「ハッ、邪神の眷属相手でも喧嘩上等の戦闘狂擬きが、随分とまっとうな事を言う様になった。例の騎士爵の娘か？」

「分かってんなら野暮は言わないで下さいよ、この戦が終わったら良い店に飲みに行こうって約束してんですから。マジで今回は死ねないんですよ」

騎士にとっては、目の前の部下は傭兵団から手ずから引き抜いた、大当たりの拾い物だ。将来は己の右に置く予定の人物なので、当然死なせる予定は無い。

老年の男――自領のお抱えである筆頭魔導士も、女神の加護篤いとされる転移者――黒髪の男が護衛に付くとなれば、ある程度は騎士の安全も担保されると判断したようだ。

土埃と血の匂いが漂う戦場の中、居住まいを正して魔導士は黒髪の男へと念押しの言葉を掛ける。

「……分かりました、儂は一度御当主様の元に戻ります故――再び合流する迄、くれぐれも若を頼むぞ」

「あいよ、任されました……そんな訳で、申し訳ないですが坊ちゃんの馬に二ケツしても

いいですかね？」

「……後回しにしていたが、お前はいい加減、馬術を覚えるべきだな。そんな事では例のお嬢ちゃんと遠乗りも出来んだろうに」

あっちじゃ、馬に乗るのなんざ極々一部の人間だけだったんですよ、と苦笑いしながら抗弁し、男がひらりと騎士の跨った馬へと飛び乗った。

魔導士が自身の指揮する部隊の過半を騎士に預け、この場の残存戦力を狩る人員以外が移動を開始しようとした直後。

彼らの居る平原の向こう、おそらくは近隣の領主が展開している領軍が戦っている方角から、大きな魔法が空に向かって数発、打ち上げられる。

魔法の種類と、打った数によって簡易な信号とする、昔からある手法だ。

聖教国や帝国ならば遠話の魔道具や念話の魔法を扱える人材も多数抱えている為、廃れ気味ではあるが、小国が群を為す北方においては、未だにポピュラーな戦場での連絡手段として使われている。

安易に乱用が過ぎれば敵勢力の魔導士に利用されかねない、という声もあるが、微小であっても聖性を用いた魔法を使用することで、それらを全く扱えぬ信奉者達には偽装は行えなくなる為、区別は比較的容易であった。

平原の奥、小高い丘向こうの空に咲いたのは、限りなく白色に調整された魔法。

日が傾きかけ、斜陽に照らされた戦場の空に一際目立つ様、煌々とした光が昇った。
白は聖職者・聖性を表し、放たれた数は対象である色の求められる急用性を指す。
白色の場合、一～二発は治療・回復の為の要員を望む場合に上げられ。
三発以降は戦力として求められる状況――即ち、聖気による護りが必要とされる、邪神の加護を持つ信奉者や眷属を相手にする戦場での危急の合図だ。
最悪な事に、上がった魔法は五発。騎士も初めて見る数であった。
「……おいおい、なんだありゃぁ。まさか上位の眷属でも出て来たってのか」
「だとしたら最悪ですね。北方で現れたのは……確か大戦の最初期に一回、でしたっけ？」
「記録にある限りではな」
馬に跨った男二人が空に撃ち上げられた魔法の光を眺め、顔を引き攣らせてボヤく。
だが、騎士は即座に表情を引き締めると、同じく丘の方角を見上げて絶句している魔導士へと問いかけた。
「ウチでは高位の聖職者は何人行軍している？」
「……仮にあの救援要請の下で顕現しているのが上位眷属であった場合、有効な護りを発揮できるのは御当主に付いている司祭殿のみでしょうな」
「成程、確かに最悪だな」

こうなると、すぐ様救援に駆けつける、という訳にはいかなかった。
邪神の眷属を相手にする以上、高位の聖職者による聖性の護りが無い場合は常に心身――取り分け精神を削られながら対峙せねばならなくなる。
相手が上位眷属ならば、あらゆる意味で今まで相対してきた者達の比では無いだろう。
おそらく相対して、近距離でまともに戦えるのは自分と、後ろに乗せた部下のみ。
魔導士の部隊も遠距離からの砲兵として運用すればある程度は立ち回れるだろうが、壁となるべき兵達が敵と対峙すら出来ずに呪詛に汚染される可能性が高い。
そうなれば、壁役の居ない魔導士部隊など、本領を発揮する前に潰されて終わる。
この地を守護する騎士として、貴族として、死地へと挑む事に躊躇いは無い。
だが、敵を道連れにすら出来ずに敗れて死ねば、あとは後ろにある街々やそこに住む民が惨たらしい死を与えられることだろう。
最悪でも相討ちにもっていけるように場と、戦力を整える必要があった。
そして、他の領軍に高位の聖職者が在籍しているか不明である以上、無いものとして自分達の戦力でやり繰りするしか無い。
「チッ、業腹だが仕方ない。一旦、親父殿の陣まで退くぞ。司祭殿には申し訳ないが、地獄に付き合ってもらわねばならん」

全く以て最悪であった。他所の領地の者達であるとはいえ、友軍を僅かな間の足止め役として見捨てる――最悪、全滅も有り得るだろう選択をせねばならないのだ。

胸糞悪い事この上無かったが、他に手段を選べる状況では無いのも事実。

残敵を掃討する予定だった人員も含め、総員で一時退却する旨を騎士は声を張り上げて伝える。

「とにかく移動する！　残兵狩りも中断だ！　歩けん奴は兵装を積んで来た荷台にでもなんでも無理矢理乗せろ！　最悪馬に括りつけても構わん、道中、生きてる味方は全員拾っていくぞ！」

号に従い、部下達が慌ただしく行動を開始すると。

「若！」

筆頭魔導士が緊迫した声と共に、手にした杖で頭上を指し示し――振り返る前に既に怖気が奔るような魔力の胎動を感じ取って騎士……否、その場にいる全員が空を見上げた。

宙に一点、握り拳程の黒い染みが滲む。

瞬く間に大きくなったソレは縁から溢れ出た泥の如き呪詛を滴らせ、真下にある草木

と大地を腐らせて穢しながら、まるで脈打つ様に膨らんだ。
凄まじい威圧と嫌悪感に総毛立ちながらも、騎士の判断は早い。
「総員、頭上の『穴』を中心に散開しろ！　魔導士部隊は有効射程ギリギリまで後退し、最大火力を同時に叩きこめ！」
雷鳴の鋭さを伴った一喝に、呆然と空に穿たれた黒穴を見上げていた兵達が弾かれた様に動き出した。
壁役の重装歩兵が前へと進み、騎士と同じ最前列へと並び立つ。
中距離に軽弓を主とした弓隊が配置され、後衛に魔導士部隊と、少数ではあるが魔装の大弓を用いた部隊が展開され、簡易ながらも黒穴を中心とした包囲陣を構築する。
「早々に敵を片付けたのが仇になるたぁ、皮肉ですね」
馬から飛び降りて、腰に佩いた幅広のショートソードを抜き放つ黒髪の部下の言葉に、苦虫を噛み潰した様な表情で騎士は応じた。
「見捨てる側から見捨てられる側になったって訳だ――まぁ、役割の交代に文句をいっても始まらん、やれるだけやるぞ」
殆どの信奉者と、顕現した下位の眷属が打倒された彼らの戦場。
即座に強力な浄化結界などで大気中に散った呪詛混じりの魔力を祓えれば良かったのだろうが、それが可能な余力を残した聖職者がこの場には足りなかった。

救援要請の出た丘向こうでは無く、先程までの戦いで眷属の泥が染み付いた大地と糧となる信奉者達の死体が既に大量に存在するこの場が、より相応しい『上位眷属の顕現の場』として選ばれた、という事だろう。

黒穴の縁に、同色の粘液を滴らせた指先が掛けられる。

顔――と言って良いのか分からないが、とにかくソレが頭部と思わしき部位を黒穴の向こうから潜らせた瞬間。

「――撃て!!」

騎士が抜剣と同時に切っ先でソレを指し示し、後衛の部隊から渾身の魔力を込めた無数の魔法が放たれる。

宙に穿たれた黒穴に向かい、様々な魔法が殺到・炸裂し、爆炎と魔力の爆発が躍って戦場を照らす。

先手必勝、完全な顕現の前に痛手を与えようという、初手から最大火力を以て差し込まれた一撃は、タイミングとしては完璧だったのだが……騎士と部下は揃って舌打ちした。

「ご丁寧に下位の眷属までセットか……いよいよ腹を括らねばならんな」

「……やれやれ、良い店を予約したんですがねぇ」

魔法の集中砲火で焼け焦げ、黒穴より落下する様にして大地にべしゃりと落ちたの

は、先程彼らが討滅した下位の眷属と同種であろう人型の呪詛――数体。
顕現前の上位眷属の盾となるが如く、一足先に顕現したソレらは先の此方の猛攻で手傷を負ってはいるが……全てが未だ健在だった。
騎士は愛馬の背より飛び降りる。
並みの軍馬ならとうに狂乱し、暴れ馬と化して逃げ出すか泡を吹いて倒れているであろう邪気を前にしても、健気に己に付き従ってくれている葦毛の友の首を撫でた。
部隊の指揮を次席に任せ、己の側に控えていた筆頭魔導士へと、愛馬の手綱を向ける。
「お前は親父殿の処へ行け。後の事は頼む……親父殿には、さっさと後妻を迎えて新しく跡継ぎをこさえるように言っとけ」
静かな表情で告げる騎士の言葉に、老いた魔導士は怒りすら滲ませた表情で気色ばんだ。
「馬鹿な事を仰りますな！　この場で落ち延びるべきはどう考えても若でしょう！」
「連中の戦力に対して、前衛が足りん。　俺がいなければ即座に瓦解する――聞き分けてくれ、爺」
「聞けませぬ！　退くのであれば若もご一緒です！　でなければ儂は梃子でも動きませんぞ！」
顔を真っ赤にして、いい年をして地団太を踏む魔導士に黒髪の男が苦笑いしながら語

り掛けた。
「あー……まぁ、こうなっちまったら必ず坊ちゃんを生かして返す、とは胸張って言い切れませんが……まぁ、一番最後まで残らせて見せますよ。導師殿と御当主が必死こいて援軍引っ張って来てくれたなら、生き延びる可能性は上がるんで早く行って下さい」
おそらくは自身の生存は度外視しているであろう男の台詞に、筆頭魔導士は唇を噛みしめ、自身より先に死地に向かおうとしている自身の半分も生きていない若者の顔を睨みつける。
「お主こそ、それで良いのか。あのお嬢さん……カッツバルゲル嬢になんと申し開きするつもりだ」
「……平手打ちで済めば安いんじゃないですかねぇ」
お道化た様に肩を竦めた言葉を最後に前へと進み出て、身を起こした下位眷属の群れに向き直る男。
「ま、謝っていたと伝えて貰えると助かりますわ……早く行って下さい、離脱が遅れる程に援軍も遅れる——坊ちゃんの生存率も下がります」
筆頭魔導士とて、理屈の上では分かっているのだ。
この場に己が留まれば多少は戦いも楽になるだろう。
だが——遅かれ早かれ、全滅するのは避けられない。

ならば、単騎でこの場を離脱して……仮に伏兵があったとしても後方の本陣へと辿り着ける可能性が高い己が、御当主への援軍を要請する為に馬で駆けるべきなのだと。

二人がどうしても戦線から離脱できぬ以上、それが最適解なのだと。

だが、本来であれば若い者達より真っ先に死ぬべきであろう老兵の己が、恥知らずにも死地より背を向ける。それがどうしても躊躇われた。

将来の主君であり、口には出せずとも孫の様に思っている若君と、その右腕たる将来有望な若者を差し置いて、自身が最も生き延びる可能性が高い役を担う。

それに、納得が出来ない。己を身代わりになんとか、どうにか彼らを生かす方法は無いものなのか。

黒髪の男の隣に並び立ち、抜刀した長剣を同じく構えながら先頭にて敵と対峙する騎士が吠える。

騎士の身を案じるが故に躊躇い、動けない老人の迷いを、断ち切る様に。

「征け！　爺！　俺の最後の命令だ！」

「――ッ、ぐ、ぅぅぅぅっ！　ご、御武運を！」

唇を噛み千切って口元の白髭を赤く染めた魔導士が、歯を食いしばって馬の鞍へと手を掛けた瞬間であった。

――突如、包囲の外より飛来した棒状の物体が、黒穴へと突き刺さる。

一見しただけで業物と分かる精緻な魔力導線の刻まれた、魔装処理の施されている鋼棍は、攻城用の弩弓（バリスタ）にも劣らぬ貫通力で以て、黒穴より這い出ようとしていた上位眷属を縫い留めた。

硝子板を爪で引っ掻いた様な、聴覚を貫く不快な悲鳴が上がる。

圧倒的な存在感と絶望的な邪気を放って戦場を支配しようとしていた存在の、紛れもない苦鳴の叫びに、人類側の兵だけではなく、先に地へと降り立った下位の眷属の群れまでもが呆気に取られたかのように宙に浮く黒穴を凝視して――。

その隙を縫うかの如く、再び包囲の外より――今度は人影が飛び出した。

騎士達の対面、眷属の群れを挟んだ反対側から高く跳躍し、後衛から前衛までの人の壁を一気に飛び越え、敵の背面を付く位置に着地したのは一人の女聖職者（シスター）である。

年の頃は二十代半ば程だろうか。

美しいアッシュブロンドの髪を馬の尾の様に後ろで括り、たなびかせた女性は、動きやすさを優先しているのか深めの切れ込（スリット）みが入った僧衣を翻し、一直線に黒穴の真下――下位眷属の群れへと突進を開始した。

「ちょっ――!?」

思わず上げた声は、騎士のものか、はたまた部下の男か、それとも他の誰かであったのか。

その声のせい、という訳でも無いだろうが、シスターの接近に気付いた眷属の内一体が、無造作に触手の如き腕を振るう。

毒性の呪詛が濃厚に宿った触腕が鞭のようにしなり、音の壁を叩きながら凄まじい速度で伸縮する。

騎士にとって幾度となく、嫌になる程見た一撃。

何人もの部下が一撃で身体を貫かれ、粉砕され、自身も何度も肝が冷える思いをさせられた、その脅威に対し。

女性は完全に見えてる、といわんばかりにそっと手を差し出し、自身の身体に届く前に、掌で撫でるように触腕の側面に触れた。

そして――ただ、それだけの動作で、まるで大人と全力の綱引きをした幼子の様に攻撃を繰り出した眷属の身体が前方へと引っ張られ、宙に投げ出される。

その頭部を出迎えるのは、僧衣の裾を跳ね上げて飛び出した膝だ。

すらりと伸びた黒の長脚絆（レギンス）に包まれた脚線美が披露され、その優美な曲線とは裏腹に彼女の放った飛び膝蹴りは凶悪極まりない威力を発揮した。

直撃を喰らった眷属の頭部が一瞬おいて風船の様に膨らみ――ついでに胴体の方ま

で膨張して破裂する。
散々に魔法を撃ち込み、何度も削り、消耗させた末にようやっと討滅した邪神の下位眷属……その同種が一撃で地面に落とした水風船みたいな事になったのを目の当たりにし、騎士を筆頭にその場に居た全員の目が限界まで見開かれ、顎が外れそうになるほど下に落ちた。
突如として乱入してきた謎のシスターの猛攻は、それで終わらない。
線の細い見かけからは想像もつかない豪快なジャンピング・ニーを決めた彼女は、地へと着地する際を狙って放たれた他の眷属達の攻撃を両の掌を以て完璧に捌いてみせる。
凄まじい速度で槍の如く一直線に突き出された無数の黒い触手が、根こそぎ直角にひん曲がって地面に突き刺さる様はいっそシュールですらあった。
攻撃の波が途切れた瞬間、再び女性は跳躍する。
放たれた矢の如く、瞬きする間に眷属の一体へと肉薄した彼女は、その頭部を鷲掴みにし、それを支点に頭上へと飛び上がると――数瞬、片手倒立の体勢となった。
「――《命結》」
静かに、なれど鋭く囁かれた声が騎士の耳朶を打った瞬間。
水気を含んだ生肉を圧し潰すような音が戦場に響き渡り、眷属の黒い身体が縦に圧縮

される。
　真上から巨人の掌で叩き潰されたかの如く、限りなく地面と平行になるまで平たくなった邪神の尖兵は、滅ぶ間際に呪詛を撒き散らすことすら出来ず日に照らされた影の様に消し飛んだ。
　脳に叩き込まれる出鱈目に過ぎる光景にその場に居た人間全てが硬直しているのを尻目に、シスターは眷属を消滅させた一撃の反動を利用して空中でとんぼを切り、騎士の眼前へと鮮やかに着地した。
　切れ長の瞳が静かに騎士を見据え……先程までの圧倒的な武威も在って、彼が黙り込んで見つめ返していると。
　その頭が軽く下げられ、女性はそっと自身の胸元に手を当てて名乗りを上げた。
「――子爵の御子息ですね？　聖教会所属ミラ＝ヒッチン。教国、北方諸国間の約定と要請に従い、此度の戦に参戦する事となりました。助太刀致します」
　端的な紹介を終えると、ミラと名乗ったシスターは騎士が何かを口にする前に再び飛び出してゆき、残った下位眷属を殲滅しにかかる。
　半ば呆然としていた騎士はその背を見て思わず、といった様子で呟いていた。
「……ふつくしい……」
「あー……坊ちゃん？」

「若？」
部下二人の声にハッとした様子で我に返ると、彼は慌てて状況を確認し、周囲の兵達へと指示を開始した。
「彼女――ミラさ……殿への支援を主軸に立ち回れ！　無理はせんでいい！　兎に角彼女が戦い易いように『機』を作る事を優先しろ！」
声を張り上げ、この場で最も最適に近いであろう戦い方を即座に包囲を敷く味方へと周知させると、自身もミラを援護すべく、剣を片手に飛び込んでゆく。
つい先刻までの絶望的な戦場の雰囲気はどこへやら、勝機と、それに続く希望に意気を燃やした兵達が慌ただしくも戦意高く動き出す。
同じく、降って湧いた生存と勝利の空気に昂揚は覚えつつも、半歩出遅れた感がある黒髪の男と筆頭魔導士が揃って顔を見合わせた。

「……浮いた話をあんまり聞かんと思ってましたが、あぁいう女傑が坊ちゃんの好みだったんですかねぇ」
「いや、あれは彼女の武力に対する憧れも半々という処であろう……お主的にはどうなのだ？」
『薔薇の棘を愛でるのも、男の甲斐性』ってアイツも言ってはいましたが……棘どころ

じゃなく魔装の槍が生えてるのはＮＧで」
　玉も縮み上がりますよありゃ、と気の抜けた表情でボヤく男に、まぁ、気持ちは分かる、と言わんばかりに魔導士も無言で頷いた。
　正直、もう見てるだけでも良い気がしなくもないが……御当主の嫡子である騎士が気炎を吐いて戦いに加わっている中、その右腕と領内の筆頭魔導士がボケっと突っ立っているだけという訳にもいかないだろう。
　老人はその場で魔力を練り上げ、詠唱を開始し、黒髪の男は騎士と同じく、愛剣片手に恐ろしくも頼もしい助っ人を援護する形で戦線へと躍り出る。
　彼女を中心とした戦いを行うことで、極めて少ない犠牲で瞬く間に下位眷属の群れは掃討されていった。
「――そろそろ上の大物が出てきますね」
　騎士のサポートを受け、最後の眷属の胴体へと掌底を叩き込んで消滅させたミラが、鋭い視線を上空――黒穴へと向ける。
　先程、彼女のものと思われる投擲を受け、昆虫標本の様に穴の内部で磔されていた上位眷属が強引に顕現しようとしていた。
　如何なる力か、聖気とは似て非なる魔力の込められた鋼棍は、未だ深くその胴体へと食い込んでいたが……白煙を噴き上げて自らを灼くそれをものともせず、巨体が黒穴よ

り這い出ようとする。
周囲一帯に呪詛がまき散らされ、後衛の聖職者達から身を護る聖気の加護が兵達へと放たれるが――それが在って尚、心身を蝕む邪神の欠片、その脅威よ。
最初の状況と比べれば格段に有利になったとはいえ、それでも気を抜いて当たれる相手では無い。
ミラを先頭に騎士と黒髪の男が彼女の左右を固め、包囲を敷く子爵の領軍が息を呑んで上位眷属の巨体が顕現する様を待ち受け――。

「喝アアアアアアアアッ!!」

天を割るかのような野太い一声と共に、先程の鋼棍の焼き直しの如く、空より何かが飛来した。
棍と比べれば、余りに大きく、分厚く、そして太いソレは、そもそも無機物ではなく人であり――更に言うなれば、人というより巨大な筋肉であった。
僧服を風圧ではためかせながら隕石の様に落下してきたのは、先に述べた通り、筋骨隆々の体躯を誇る青年である。
剃り上げた禿頭を戦場を照らす夕日の光でキラリと反射させながら、青年はそのまま

上位眷属が這い出る瞬間であった黒穴へと着弾した。
後衛の魔導士達による一斉砲火に匹敵――否、凌駕する炸裂音が響き渡り、未だに黒穴から出る事すら出来ない上位眷属が再度悲鳴を上げる。
硝子を軋ませる様なその音は、およそ人語からかけ離れ、理解の及ぶものでは無かったが……気のせいか『またかよ！』と言ってる様に聞こえた。
「……眷属の顕現してくる『穴』って、物理で潰せるもんなんですねぇ……」
本日何度めかの唖然とした様子で呟く黒髪の男の視線の先には、真上から押し潰され、拉げて円環から横に潰れたハートの様な形になった黒穴がある。
ちなみに、魔法的な視点からいうのなら『黒穴』は邪神が居を構えているとされる空間から、直接出現場所へと己の欠片を送り込む、文字通り虚空に空いた穴だ。本来は物理現象に左右されるような代物では無い。断じて。
人間砲弾と化して黒穴と、其処から顕現しようとしていた上位眷属に激突した青年は、着弾の反動を空中で回転する事で殺しながら地響きを立てて大地へと着地する。
「――ガンテスですか。あちらの戦域は片付いたようですね」
「然り！　故に拙僧も助太刀いたしますぞミラ殿！」
ミラの言葉に、並外れた体躯を誇る巨漢の青年――ガンテスがニッコリと笑って返し、先程の激突の際に上位眷属の胴体からむしり取ってきた鋼棍を彼女へと差し出す。

それを受け取り、掌の中でくるりと廻すとミラは後ろ手に棍を構え――力強い震脚を以て大地を深く踏み込んだ。

如何なる神技か、浄化の性質を持つ魔法を使った痕跡も無く、だと言うのに地にめり込んだ彼女の足を中心として、辺り一帯の呪詛混じりの邪気が吹き払われる。

最早、常識外れにも程がある光景を連続で見せられて言葉も無い周囲を置き去りに、シスターと巨漢はようやっと穴から身を捻り出し、地上に顕現を終えた上位眷属を前に怯むことなく並び立つ。

「ふむ。多腕型ですか……では私が右。貴方が左で」

「競争ですな！　腕いだ数が少ない方が此度の報告書を纏めるというのは如何でしょう！」

「不謹慎ですよ、戦いに興を挟むのはお止しなさい」

後輩の茶目っ気を見せた言葉に手厳しく応え……ミラは最後に付け足す様、不敵に笑って見せる。

「――そもそも、私が勝つと決まりきった賭け事など、意味が無いでしょう？」

「ハッハッハ！　これは辛辣！　なれば、此度こそ連敗記録を止めるとしましょう！」

顕現前に散々に痛めつけられた事を不快に感じているのか、周囲の空気を軋ませる様な圧を放ち、無数の腕を以て大地を踏み鳴らしながら邪気と呪詛を振りまく巨大な怪物

を相手に、女傑と筋肉は自然体で構えを取ったのであった。

大陸最大の宗教組織である聖教会本拠、聖都は大聖殿。
北方で開かれた大きな戦端を無事に収めたミラとガンテスは、戦後処理を済ませて漸く拠点へと帰還していた。
大聖堂が建造された中央区へと足を進める二人に、擦れ違う他の神官やシスター達が口々に労いと、無事を喜ぶ挨拶の声を掛ける。
「お帰りなさいませ、ミラ様、グラッブス助祭。お怪我も無いようで何よりです」
「ミラ様、北方の状況は如何でしたか？　あぁいえ、先ずはゆっくりとお休み下さい」
次々に向けらえる言葉に、頷きを以て返すミラと愛想良く返答するガンテスであったが、ミラの方は言葉以上に態度に込められた敬意や憧憬の気配に、やや食傷気味な様子であった。

「……ただのシスター……腕が立つだけの一兵力に、過分な評価を向けるのは如何なものかと思うのですが」

「その様に申されては、そのいちシスターに武に於いて遥か後塵を拝している拙僧の身の置き所がありませんな。過ぎた謙遜は美徳とは言えませんぞ？」

顰めっ面のミラの言葉に、ガンテスが苦笑しながら諌める様に応じる。

返す言葉を持たず、溜息を溢しながら歩を進める彼女だったが、大聖堂の壁面に寄り掛かっていた知人を見つけると、ガンテスと揃って足を止めた。

他の聖殿に住まう者・勤める者達とは違い、僧衣ではなく、冒険者や傭兵が好む戦闘用の軽装に身を包んだ仏頂面の疵面（スカーフェイス）の男は、二人の姿を視界に収めるとミラ以上の顰め面を僅かばかり和らげる。

「――戻ったか。少し遅かったな」

「おお、ラック殿。そちらも北方へと援軍として派遣されたと伺っておりましたが……御無事で何より！」

ラック＝ライン。

本人が偽名であると憚りなく宣言してはいるものの、それが男の名として定着している呼称であった。

元は帝国の特級冒険者という、栄光を約束された身の上だったが、組合の上層部と折

り合いが悪く、現在は冒険者を廃業して聖殿に傭兵として雇われている。
「ラック。貴方は私達より更に北上した地点の迎撃を受け持ったという話でしたが……何かあったのですか？」
何時も機嫌の悪そうな顔をしている眼前の戦友ではあるが、今は殊更に眉間の皺が深い。
他人から見れば気付くはずも無い微かな差異ではあったが、ミラは見逃す事無く、ラックへと問いかけた。
「……別に、ありふれた事さ。手遅れだった――それだけだ」
「……」
「むぅ……」
吐き捨てる様に呟かれた言葉に、ミラは沈黙を以て返し、ガンテスは無念そうに口元を歪める。
如何に突き抜けた武や戦力を持とうと、個人である以上、どうやっても覆せない悲劇は生まれるものだ。
今回彼らが派遣された北方の戦線――ミラとガンテスは間に合う事が出来たが、ラックはそうではなかった……言ってしまえば、ただ、それだけの話である。
誇張抜きで、今は人類の存亡をかけた大戦の最中だ。その中に身を置き続ける以上、

どうしたって届かず、取り零す者達は現れる。
教会最高戦力、等と持て囃されるミラやガンテスにしても、それは同じ事であった。
「……戦端が拓かれた直ぐ先に、村があった。俺がクソ共を残らずブチ殺して見に行った時には……殆ど生き残りは居なかったよ」
「……救えなかった者だけを見つめるのではなく、救えた者をこそ見るべきです。貴方が戦ったからこそ、生き残った者達がいたのでしょう？」
目の前の強面、という言葉では足りない程の凶悪な人相をした傭兵が、その実、情に篤い一面を持っているのはミラとガンテスも知る処だ。
頑なに語ろうとはしないが……冒険者を辞めた理由も、特級冒険者という金看板を大事にしたい組合が、その為に多くの下位の冒険者達の犠牲を容認する動きを見せ、それに反発した結果であると噂されている。
おそらく、此処に居るのもそのわずかに生き残った者達を連れ、現在、救護院として機能している大聖堂で治療を受けさせる為だろう。
「――大聖堂内で待っていれば良いものを、相も変わらず臍曲がりですね」
「フン。ただでさえお堅い坊主共に囲まれた生活をしているんだ、この上、神様の家になぞ長時間尻を下ろしていたら、ケツが火脹れを起こしそうでな」
「ラック殿の慈悲篤い在り方なれば、かの創造神も閉ざす扉を持ち合わせぬ筈ですぞ！

件の村の方々が御心配ならば、素直に聖堂内で見守るが最善かと！」
「うるせぇ、黙れ筋肉馬鹿」
重くなりかけていた空気を、友人同士の何時ものやり取りである程度は払拭できた。そう思われた矢先であった。
大聖堂の正面扉が勢いよく開け放たれ、内から小柄な白い人影が飛び出してくる。
次いで、慌てた様に追いかけて扉を潜った僧――建物内部で負傷者の治療にあたっていた者の静止の声を振り切り、その人物は一直線に聖殿の出入り口に向けて走りだして――。
一瞬で追いついたミラにその襟首を掴み上げられ、子猫の様に持ち上げられた。
「――ッ、何すんだよ！　離せこのババア！」
ジタバタと宙に浮いた足で藻掻く人物――年若い少女が振り向きざまに罵り、次の瞬間、その脳天に硬い拳骨が炸裂する。
「痛ったぁーっ!?　なにすんっ」
「誰がババアだ糞餓鬼」
痛みに怯んだのも一瞬、直ぐに歯を剥いて威嚇しようとした少女は、恐ろしくドスの利いた低い声に接着されたかの如く、ピタリと口を真一文字に閉ざした。
ミラの手によってぶら下げられている少女に、大聖堂で治療を行っていた僧が慌てて

近寄り、その状態を確認し始め。
「も、申し訳ありませんミラ様、お手数をおかけしました……聖堂に連れてこられた際には眠っていたのですが、眼を覚ました途端に飛び起きて「此処はどこだ」と騒ぎ始めまして……」
治療途中で走り出したので、傷が開いたらどうしようかと思いました、と。安堵した様子で胸を撫で下ろす僧に、ミラは「ご苦労様です」と返すと、改めて己が片手で吊り下げた少女を眺めた。
飛び出してきた瞬間、白い、と咄嗟に認識したのも当然である。
雪の様な純白の髪に、宝石を思わせる紅い瞳。
不貞腐れた様子でぶら下げられた儘の少女は、俗にいう白子（アルビノ）であった。
「……何をやってるんだお前は」
「あっ!?　おじさん！　此処どこなの！　なんでわたしは寝てたの！　あとこの怖い人だれ!?」
ラックの呆れた様な声に、パッと顔を上げた少女は勢いを取り戻した様子で手足を再起動させ、ジタバタと動き出す。
頭痛を堪える様に掌を額に当てて天を仰いでいる戦友に変わり、ミラが咳払い一つして騒がしく暴れる少女を高く摘まみ上げ、自身の目線と合わせるように対面の形へと襟

首を吊り下げた。
「落ち着きなさい――ここは大陸中央にある、聖都と呼ばれる宗教国家の中枢です。貴女や、貴女の村の人達は、ここで傷の治療を受けていたのですよ」
「怪我……あれ、そういえば痛くない？　治った？」
「そこの彼が癒したのです。何はともあれ、貴女が走り回った大聖堂は、多くの怪我人が現在治療を受けている場所――埃を立てて場を荒らすような真似は感心できませんよ？」
言い含める様に告げられた言葉に、少女は遅ればせながら自分の行為に気付いたようだ。
ハッとした表情で、自身を治療してくれた僧と、その背後に建つ聖堂を見てちいさく「ごめんなさい……」と呟く。
最初の口の悪さは何処へやら、しょぼくれた様子で素直に謝罪の言葉を口にする少女に、ミラは溜息一つ零して頷くと、静かに襟首を離して彼女を地に下ろした。
「よろしい。素直に謝れる子は将来立派な大人になりますよ――では、改めて自己紹介をしましょう」
膝を折り、俯く少女の目線に合わせるようにして、名乗る。
「私はミラ＝ヒッチン。ここのいちシスターです……貴女の名を教えてくれますか？」

穏やかなミラの言葉に紅い瞳の少女は少しの間、視線を虚空に彷徨わせ、やがて躊躇いがちに口を開いた。

「……スノウ――スノウ＝カレンデュラ……よろしく、ミラ」

老兵の残照　白い少女

大聖殿中央区、半ば練武場と化している中庭にて。
朝霧がうっすらと満ちる早朝、早々に起床したミラは朝食前の朝の鍛錬に独り、打ち込んでいた。
未だ辺りは薄暗く、朝焼けの太陽すら昇らぬ時間帯。当直や早番の人員以外は殆ど人もおらず、中庭には微かな小鳥の囀りが殊更に大きく響き渡っている。
そんな中、ゆっくりと、吸い込んだ空気を肺に留める。
呼吸による血液の循環――それを意識し、同時にその流れに合わせて魔力を身体に巡らせて、再び身の中心、心臓へ。
身体強化の魔法における基礎ともいえる行為であるが、彼女の扱う《三曜の拳》とはその基礎を極限まで昇華させた延長の技術だ。
身の内にある力の流れを知覚し、己を取り巻く周囲の環境や相対する者の流れを知覚し、更にその先へ。

個人の感覚がものをいう部分もあるが、やはり技の精度を上げるのは地道な土台の積み重ねである。

練り上げ、固めた強固な基礎であればある程、ギリギリの状況や窮地において揺らがぬ芯となる。彼女の持論というより、経験則だった。

基本に通ずる者こそが、真髄に至る。

その上で、至った先に得た力を奮う先を、決して見誤る事が無い様に己を律する必要があった。

今はこのような時代だ。平時ならば力を持て余して揉め事を起こしそうな荒くれ者や粗野に過ぎる者達も、取り敢えず邪神の軍勢殴ってるなら問題無い、という風潮がある。

それが悪いと主張する気も、問題視する気も無いが、ミラの求める戦士の理念とは趣が異なるのも事実であった。

意、無き威に、真の威は宿らず。

律した意思の下、強固な一念を通して望む道を貫き、選んだもの、己が手で護りたいものを手繰り寄せる。これこそが戦武の道に生きる者の本懐である。

師にですら「ちょっと石頭が過ぎますね」と苦笑いされた生き方ではあるが、それこそ彼女が好きで選んだ道だ。進路を変える予定は死ぬ迄無い。

そんな思いと共に、戦地に派遣される事の無い日はこうして修練に精を出すミラだったが……どうやら本日の朝稽古は中断せねばならないようだ。
意識を集中させ、大きく広がった知覚の中に、コソコソと忍び足で聖殿の壁際を歩く気配を拾い、彼女は瞳を閉じて溜息をついた。
音を殺して背後から近づくと、白靄の中、抜き足差し足と言った様子で移動するその背中に声を掛ける。
「随分と朝の早いことですね、スノウ」
「うぴ?」
敢えて平坦に押し殺したトーンで放った言葉に、兎が悲鳴をあげればこうなるのでは、といった感じの甲高い声をあげて声の主――スノウがその場で小さく飛び上がる。
「お、おはようミラ……そっちも凄い早起きだね」
「はい、おはよう。で、何をしていたのか聞いても良いですか?」
さも分からない、といった風に問いかけるミラであったが、その眼は少女の手にした縄付きの三又鉤をスーッと細めた眼で見つめている。
どうやら園芸や庭仕事に使うらしき片手の三又鍬を弄って拵えた物らしい。器用な事だ。
慌てて背中に鉤縄を隠すスノウを眺めていると、再び溜息が漏れた。

視線を泳がせるを通り越して溺れているのではないかと言う位に、忙しく目を左右に逸らしまくる白い少女が、言葉を詰まらせながら苦し過ぎる言い訳を絞り出す。
「ちょ、ちょっと唐突に、朝日を浴びながら庭仕事をしたくなりまして……」
「私の目にはそれを使って壁を乗り越えようとしている様に見えましたが」
「最初から見てたのかよ！　意地悪ババアか!?　……ハッ!?」
勢いで言った自分の言葉に、「ヤベッ!?」っと言わんばかりに表情を引きつらせるが、時に既に遅し。
覚悟を決める間すらなく、スノウの頭頂部へと硬く握られた拳骨が炸裂した。

「やぁ、北方では大活躍だったみたいだね。その後の調子はどうだい?」
にこやかに微笑んでわざとらしく小首を傾げる、金髪癖毛の美青年。
街の娘達が見れば頬を染めて硬直するか、黄色い悲鳴を上げるであろう甘いマスクの

持ち主の親しみの籠った声に、ミラは露骨に顔を顰めて答えた。
「分かって言っているでしょう、ヴェティ。全く――とんだ怪獣を押し付けられたものです」
大聖殿、壱ノ院。
教皇を除けば聖教会における最高位である、枢機卿が管理を任される区画において、友人に呼び出された彼女はその当人を前に溜息混じりで吐息を付く。
執務室の机に肘をついて自分を眺め、一見人当たりの良さそうな柔和な笑みを浮かべている目の前の男が、外見通りの好青年などでは無い事は嫌になる程知っていた。
ヴェネディエ＝フューチ。若くして聖教会の大司教にまで昇りつめ、未来を見通すが如き采配を以て邪神大戦において様々な功績を打ち立てている、人類種の旗印とも呼べる人物だ。
最近になってこの壱ノ院における管理者から、後継者として推薦されているという話も聞くが……必要だと思えば管理者……枢機卿になる程度の事はあっさりとやってのけるのがこの男――ミラの可愛気の無い後輩であった。
ちなみに旗印、という点においては彼女も間違いなくその一人なのだが、あくまで己をただの一戦力と認識しているミラにその自覚は無い。
本人の糞真面目な気質も多分にあっての事だろうが、偏にそうと判断すれば簡単に意

見を曲げぬ頑固さが原因であると言える。
この点については彼女の師ですら匙を投げているので、矯正はほぼ不可能だろう。
珍しく愚痴のようなものを溢すミラに、青年――ヴェネディエは普段の彫刻の微笑（アルカイックスマイル）ではなく、愉快そうな感情を頬に浮かべて楽し気に問いかけた。
「怪獣ねぇ……かの《半龍姫》に最優とまで評された女傑も、子供の世話は苦手という事かな？」
「そもそも其処からして理解が出来ません。何故私があの娘を――スノウの面倒を見ることになったのです」
「いやいや……君だって分かっているだろうミラ？」
心なしか半眼になって見つめて来る友人の疑問に、ヴェネディエは笑みの質を苦笑のソレへと変えて大仰に首を振って見せる。
「前々から散々に言われているだろう？　君は少し働き過ぎだよ。朝起きて食事を摂って出撃して帰って来て寝て起きて食事摂って出撃して……空いた時間には訓練。絡繰りや魔法人形（ゴーレム）じゃないんだからさ、休暇を取りなよ」
「体調の管理は万全です。激戦区が年々増加しつつある昨今の戦況を考えれば、人外級（わたし）を遊ばせている余裕など無い筈ですが」
「君が身を粉にして働いてるのをみて、同じように休みを返上して働き詰めになる者が

出て来るようでは本末転倒というやつだ。上の者が休まないと、部下も休暇を取り辛いものだよ」

上も何も、自分は公的な立場を持たない只のいちシスターなのですが。

内心でそんな風に思うミラであったが、流石に言葉には出さなかった。幾度となく口にし、その度に「お前の様なただのシスターがいるか」と方々から突っ込まれている過去を顧みれば、言っても意味が無い事は容易に想像が付くので。

とはいえ、現状の改善を訴えるのを諦めるつもりは無かった。

「……休暇だというのなら、尚の事あの娘を世話するのはおかしいでしょう。この数日、スノウ絡みで私が呼び出された回数を知らないとは言わせませんよ」

「ふむ？　多少は耳に入って来てはいるけど……あの少女に相当手を焼いているようだね。見た目はか弱そうな娘だが？」

「普段は大聖堂で怪我人の看病を手伝っている様ですが、定期的に聖殿――というか聖都を脱出しようとします。この間など、あわや北方征きの乗り合い馬車に潜り込む直前でした」

いつもの胡散臭い笑みを引っ込めた友人が、この場に居ない少女を気遣う様に眉根を寄せる。

「……故郷に帰りたい、という事かな？」

「おそらくは」

邪神の軍勢によって滅ぼされた彼女の村は、重度の呪詛汚染によって現在は立ち入り禁止地域に指定されている。

現地の神官達の手で浄化が完了するまで、耐性や身を護る魔法的な術を持たない非戦闘員が近づくには危険過ぎる、という状態だ。

最初に抜け出そうとした際に、スノウにはその辺りを含め丁寧に説明したのだが……効果があったようには思えなかった。

自身も軽度とはいえ、数日前まで呪詛に侵されてその恐ろしさを骨身に染みている筈の彼女は、それでも村に戻ろうとするのを諦めていない。

だからこそ、だ。

少女の世話に手を焼いている——それもある。

休暇と言いつつ、実質気疲れしているだろう——そんな思いもある。

だが、何よりも。

スノウに必要なのは傍らで付き添ってやれる誰かと、故郷を喪った悲しみをどうにか希釈できるだけの時間だ。

無骨な武辺者であり、いざ大きな戦いが始まればどうしたって彼女の側にはいられない自分が適任だとは思えない。

ミラの考えを汲み取ったのか、ヴェネディエが軽く眉間を揉み解し、眉によった皺を伸ばしつつ言葉を続ける。
「そうなると、件の村の生き残りを近隣の領主に預ける、という話。彼女は省いた方が良いかもしれないね――聞いた話から察せる行動力からするに、一人で村に向かってしまいそうだ」
「距離が近くなる分、ますます自制も利かなくなるでしょう。その方が良いかと」
「君を聖殿で休ませる良い口実になると思ったが……まぁ、女の子の心身のケアを投げ捨てて行うものでもないからね。誰か他に適任を探すとしよう」
ちなみに、戦場の他には鍛錬鍛錬また鍛錬という、字面だけで見ればミラより酷いのがいるのだが……彼については例外なので二人は敢えて会話から除外していた。
同じ頃、鍛錬イコールこれ以上無い休暇だと、心底とっても楽しそうに筋トレしている推定人類の筋肉が、中庭で爆風のようなくしゃみをしていたがそれは余談である。
「あの娘の件はそれで良いとして……わざわざ壱ノ院に呼び出したのは、別件があったからでしょう?」
「うん、そうだね。これは一足先に帰還してきたラックや、昨日報告書を提出しにきたガンテスには既に話した事なんだけど……」
ミラの疑問の声に、頬杖を机の上に付き、何でもない事のように――だが何時も浮か

べている笑顔を消して、ヴェネディエは告げる。
「最近、特に『見え辛く』なった。明らかに僕を的に対策を掛けて来てる……近々、何か大きな動きがあるかもしれない」
彼が未来視の加護を授かっている事は、公には知られていない。
教会でも相当に上の地位の者と、各国の上層部が一部、といった処だ。
それでも、情報と言うのは何処から漏洩するのか分からないものだ。現にヴェネディエは自身の使い難い加護が、ここ数か月で更に使用が困難になっているのを自覚していた。
年齢や怪我による魔力の衰えなどから、加護の効力が減衰していく事はままある話だが……その兆候が彼に全く無い以上、外部からの干渉によるものだと考えるのが自然である。
故に、自身の加護の事を知悉し、現場でこの上なく頼りになる友人達に現状を周知しておくのは当然の流れであった。
「成程。何が起きようと対処できる様、心構えだけはしておくとしましょう」
ヴェネディエが期待する通り、未来視の使用が厳しくなった事を告げられても微塵も揺らがぬ様子で、目の前の友人は力強く頷く。
この頼もしい友人達がいれば、邪神とその信奉者達が何を企もうと食い破る事が出来

るだろう――そんな風に、らしくもなく個人的な情に傾いた希望を胸に、ヴェネディエも頷き返した。

「――では、加護による魔力の消耗を気にする必要はありませんね。ガンテスも中庭にいる事ですし、貴方も偶には外に出て身体を動かしなさい」

「う”ぇっ!?　いやちょっと待って。僕もこれから休みを摂ろうかと……」

「どうせ歓楽区に行くのでしょう?　大司教の身でありながら、異性との火遊びに興じるのも大概にしておけと言っているのです」

ミラは逃げようとした男性としては小柄な部類に入るヴェネディエの襟首を掴み、子猫の様に持ち上げる。

奇しくもその姿は、最近彼女が面倒を見ていた白髪の少女とおんなじであった。

日も傾き、全ての建物が斜陽で赤く染められる時間帯。
一日の予定を消化したミラは、この数日間だけ世話をしていた少女――スノウの姿を探して聖殿内を歩き回っていた。
暫くの間か、それとも年単位になるのかは分からないが。
彼女が此処に留まる以上、世話係の様な立場を辞めるにしても言葉を交わす事もあるだろう。
だからこそ後々ぎくしゃくとした関係にならない為に、前もってミラ自身の口から新たな人員が紹介される事を彼女に伝えねばならなかった。
先延ばしにした処で良いことなど一つもない。こういった話は即日に伝える事が肝要である。
そんな思いの下、夕焼け空の下でも一際目立つ、純白の髪の少女を探していたのだが……これが中々に見つからない。
ここ数日はこの時間帯になれば、食堂で栗鼠の様に頬を膨らませて聖都の食事に舌鼓を打っている最中だったのだが……どうした事か未だに食堂には現れていないと言う。
「ふむ……」
聖殿外から勤務している者達が帰宅し、人の気配もややまばらになってきた中央区の

廊下で腕を組むとミラは数秒、思案した。
嫌な予感を覚え、足早に大聖堂近くの大壁――防衛設備として機能する高い防壁、その側面へと向かう。
知覚範囲を限界まで高めながら歩みを進めていると……案の定、離れた場所に壁に張り付いた小さな気配を感じ取り、その足は自然と駆けだしていた。
「……あの娘は、また……っ」
悪ガキめ。内心で唸りながら、壁の頂へと手を掛けようとする少女の姿を見つけ、即座に両の脚に魔力を流す。
声はかけない。既に壁を乗り越えようとしている少女が驚いてしまえば、そのまま足を踏み外す可能性があった。
後ろから引っ捕まえるつもりで、軽やかに壁を蹴って駆けあがる。
シスター服の裾を翻し、あっさりと彼女の背後まで跳躍したミラは、壁に大きく延びて映った彼女の影にギョっとして此方を振り返ったスノウの襟首を、何時ものように掴み上げようと手を伸ばし――。
慌てた様に鉤縄を握った右手とは逆……左の掌が此方の手に触れ、力の流れを逸らされてミラの腕は大きく空を切った。
「ッ!?」

驚愕のあまり思考が停止しかけるも、日夜積み上げた鍛錬と――嘗て師との組手で同じような感覚に触れた際の強烈な痛打の記憶に突き動かされ、身体は自然と動いている。

捌かれた勢いに逆らわず、空中で身を捻って旋回。

裾が遠心力に振り回され、ふわりと浮き上がるが気にする事も無く、今度はスノウが伸ばしていた左腕に彼女の方から触れた。

そこで漸く、咄嗟に対応した相手がただの無力な少女であると思い出したのだが、時既に遅く。

「しまった……！　スノウ！」

「ふぎゃっ!?」

左腕を支点に上空に跳ね上げられたスノウの身体が半回転し、防壁の上に乗り上げる形でビターンと叩きつけられた。

「う……う〟う〟……こわいようかぃばばあがぁ……」

「……目が覚めましたか」

何やら悪夢でも見ていたのか、魘された様子のスノウが目を覚ますと。
いつも気難しそうな表情をしている、最近彼女の面倒を見てくれている女性が物凄い仏頂面で顔を覗き込んでいた。
「う……あれ……ミラ？　なんで……？」
「まだ寝ていなさい。診た限り怪我は無いし、回復魔法も掛けましたが念の為です」
ぎこちない手つきでスノウの額を撫でる女性の掌の冷たさで、さっきまで必死に壁を登攀していたせいで火照った顔が癒される様で。
暫しの間ぼんやりと、そのひんやりした感触を堪能していたスノウであったが……やがて此処が夕日照らす聖殿の防壁の上で、そこで自分が彼女に膝枕をされている事に気が付いた。
「……なんでわたしはこんなとこで寝てるの？」
「……私が気絶させました」
「きぜつ」
「予想外な事があったもので、つい」
バツが悪そうに目を逸らして呟くミラに、膝枕をされたままう～んと一頻り唸ったスノウは、やがて納得したのかうん、と一つ頷いた。
「……要はまた捕まっちゃって、そのときにって事か。なんかごめんね……」

「いえ、また脱走を試みたのは褒められた事ではありませんが、明らかにやり過ぎたのは私の落ち度です……ごめんなさい」

結構な勢いで投げ飛ばされたにも関わらず、スノウは特に目立った外傷も無く、精々が軽い擦り傷程度だった。

大聖堂に運び込まれた際も、他の村人に比べて怪我や呪詛汚染の深度が一番軽かった事を鑑みれば、おそらく無意識に魔力で身体強化を行っていると考えられる。

そもそも彼女の特徴である白子（アルビノ）は、祖先にエルフや魔族といった長命種が混じっていた場合に産まれやすい、と言われている。

一種の先祖返りなのか、肉体的に脆弱性があるがその分高い魔力を生まれ持って備えているケースが多いので、彼女がそうである可能性も十分にあった。

落ち着いたのか、スノウは手足の伸ばすとそのまま大きく伸びをし、ゆっくりと身を起こす。

「また迷惑かけちゃったね……ホントごめん。悪いとは思ってるんだ」

立ち上がることはせず、どこか消沈した様子で呟く彼女の言葉に、ミラは静かに頭を振った。

「……故郷に帰りたい、自身の居場所が失われたなどと他人に言われても、信じられない……当然の事です——まぁ、少々行動力が過ぎるとは思いますが」

最後にチクリと付け足された小さなトゲに、苦笑いして白い少女は「ごめんってば」と、再び謝罪の言葉を口にした。

何とはなしにお互い無言になり、夕焼けに色に染まる壁の上、静かに夕日を眺める。

「本当は、さ。全部分かってるんだ」

やがて、少女の口からポツリと、呟くように独白が漏れる。

「じいちゃんも、ばあちゃんも、わたしを庇って目の前で動かなくなった。隣のおばちゃんや、お向かいの悪ガキも、真っ黒になって燃える家に押し潰されて消えた……皆、みんな、いなく、なった」

膝を曲げて、その間に顔を埋めるように俯いて。

途切れ途切れに語る少女の言葉を、ミラはただ、黙して聞き続ける。

「……で、でも、さ。おじさんに助けられて、目を覚ましたらこんな離れた場所にいて……怪我だってあっという間に治って、あ、あのときのこと、ぜんぶ、夢だったんじゃないか、って」

声が震え、しゃくりあげるような嗚咽が混ざっても、胸に溜まった何かを吐き出さずにいられない。

そんな風に、何度も何度もつっかえながらも喋り続けるスノウの頭に、ミラは迷う様に手を伸ばし――悩んだ末に彷徨った指先は、結局は何に触れる事もなく下ろされた。

「わ、わたしがちゃんと家に帰ることができたら、じいちゃんも、ばあちゃんも元気で、い、いつもみたいに、おかえりって、言ってくれるんじゃない、かって……！」

そんなわけ、無いのにね、と。微かに首を上げてミラを見つめて。

自嘲する様に言葉を締めくくった白い少女の顔は涙と鼻水で濡れ、くしゃくしゃに歪んでいた。

瞳に溢れる水滴のせいで真っ赤に充血し、それでも尚、夕日を浴びて深紅に輝く宝石の様な瞳が、言葉に出来ぬ疑問と――怒りと、哀しみを嫌という程伝えて来る。

どうしてこんな事になったんだろう。

何故わたしは大切な人を、場所を全部壊されなければいけなかったんだろう。

会いたい。

もう会えない、大切な人達に、会いたい。

それは、ミラが戦場で、或いは戦いを終えた後に滞在した街で、常に聞き続けていた声であった。

理不尽に奪われ、蹂躙され、未来（あす）を真っ黒に塗り潰された、無辜の民の声なき悲鳴（こえ）だった。

胸の奥にちろりと、燃え上がる怒りの炎は、未だ世界を穢し、同じ様な悲劇を振りまき続ける邪神とその配下達にか。

或いは、それらを断ち切ると意気込んで戦士の道を選んだ筈が、目の前の少女一人救う事が出来ていない己の無力にか。

いずれにせよ、哀しみに暮れる少女の前で無様に漏らして良い感情では無い。

怒りを押し殺し、鉄面皮となったミラが、それでもなんとかスノウに言葉を掛けようと言葉を探す。

「……他の生き残りの方も居たのでしょう？　知り合いは居なかったのですか？」

「……分かんない、一緒に来たのは、あんまり仲の良い人達じゃなかったから」

ぐしぐしと、服の袖で顔を拭って。

目元を真っ赤に腫らしたまま、彼女はぎこちなく、けれど淋しそうに笑った。

「……怪我の手当を手伝ってるときに、「お前のせいだ、不吉の子め」って怒られちゃった。ずっと言い掛かりをつけて来る嫌な連中だと思ってたけど……本当にその通りなのかも」

白子（アルビノ）は不吉の象徴。

大陸中央部や魔族領ならば、そんな偏見など無いだろう。

だが、北方の小さな未開の村ともなれば、未だそういった迷信染みた考えを持つ者達も一定数は存在する。

怒りを押し殺して掛けた言葉は、帰って来た不愉快にも程がある内容の御蔭で、ます

ます胸の炎に薪を放り込む結果となった。

未開である事が罪となる訳も無し――だが、年若い少女に大人が掛ける言葉としては論外である。

偶然ではあったが、こうして胸の内を吐き出す形となったスノウは、哀しみは消えずとも多少はすっきりとした顔をしている様に見える。

今の彼女であれば、他の村人と共に近隣の領主の元へと預けられても、無謀な帰郷を試みることは無いだろう。

――だが。

「……行く宛てが無いのであれば、聖都に居なさい」

「……うん？　でも、ココはお坊様や兵隊さん達がいる場所でしょ？　わたし、なんにも出来ないよ？」

「戦えなければ価値が無い等と、それこそ我らが戦う邪神の軍勢共の理屈です。真っ当な勤労意欲があるのならば、人手はあるだけあった方が良い」

このままスノウを、彼女を快く思わない者達と共に遠く離れた北方へと送り出すなど、何が何でも認める事が出来そうに無かった。

元より、彼女だけは聖殿に留まらせる予定であったのだ。何の問題も無い。全部解決。文句があるなら教皇猊下であろうと直にお話をしに行くのみである。

それに、何もできない等と言う事は無かった。
それ処か、下手をすれば……。
「スノウ」
「……なぁに？」
最初に膝枕していた体勢のまま、防壁の上で正座をしていたミラであったが、彼女の居住まいを正した様子に白い少女もなんとなく背筋を伸ばし、向かいあって正座する。
「……貴女は、私が稽古をしている様子を見ていましたね？」
「う、うん……なんかこう、流れが綺麗だなぁって……駄目だった？」
「いえ、何も悪い事はありません。寧ろ僥倖でした」
やはり、そうだった。ミラは確信を深める。
ひどく粗く、力の流動操作も掌握もお粗末で歪であったが、先程己の手を払ってみせた彼女の動きは間違いなく《三曜》の基礎技術が一つ、《流天》であった。
ぞくぞくと背筋に湧き上がる感動にも似た感覚は、百戦錬磨の彼女をして初めての経験である。
まるで道端で、磨けば神器の素材にもなるであろう特大の宝玉の原石を拾ったかの様な。
嘗て見た、師の奮った戦技の極点。己では届かぬその圧倒的な高みに、限りなく近づ

ける翼を持った雛鳥を見つけたかの様な。
珍しく舞い上がっているのを自覚し、ミラは咳払い一つすると大きく深呼吸して気息を整えた。
どのみち、スノウが承諾しなければ意味の無い話だ。
先ずは本人の意思が大事――自己を練磨できるのは自己だけである。如何に超絶の才を有していようと、本人が望まなければこの事は胸にしまっておこう。
それは余りにも勿体ない。そう訴えて来る胸中の未練を捻じ伏せつつ、彼女は白い少女――その深紅の瞳を真っ直ぐに見据えて口を開いた。
「スノウ、貴女が望むのであればですが……私が貴女に戦う術を教えます」
ミラからすれば、割と一世一代の告白くらいのつもりで口にした言葉だったのだが。
「え!?　……と、いう事は、わたしもあの綺麗なの使えるようになるの!?　やる！」
至極あっさりと少女の首は縦に振られ、自然と肩に入っていた力が抜けてずっこけそうになる。
思ったより十倍ほど軽い感じで話が纏まったが……スノウが了承したのは確かだ。
何はともあれ、全てはこれから。
突如として吹き込んで来た、新たな空気を呼び込むであろう、白い風。
己の日常に、良い意味での変化が訪れそうな予感に、ほんの少しではあるがミラの表

情が緩む。
「……あれ？　ミラ、今ひょっとして笑った？」
「気のせいでしょう」
少女に――弟子に指摘され、一瞬でその顔がしかめっ面に戻る。
「ええ、でも今絶対……」
「いい加減、日も落ちてきましたし。此処から降りるとしましょう――貴女は先ず、涙と鼻水で汚れた顔を水場で洗いなさい」
「は、鼻水とか乙女は出さないし！　出たとしても鼻からでた涙だし！」
「それは結局、鼻水なのでは？」
――取り敢えず、明日の朝一番にあの可愛気の無い後輩に会いにいかねばなるまい。
スノウは引き続き自分が見ておくと、教えておかねばならないので。
あの悪戯好きの後輩が、眼を輝かせて面白そうに根掘り葉掘り聞いてくるの姿が目に浮かび、それに少しばかり憂鬱になりつつも。
正座から立ち上がり、「脚がしびれた――！」と悲鳴を上げている白い少女に手を貸してやりながら、それ以上に明日から始まる少女との時間に様々な期待を覚え。
空の端に輝きだした星々を背に、ミラは弟子に見えない様、少しだけ笑ったのであった。

老兵の残照　友人

少女は今、死に物狂いで走っていた。
聖都外周、城壁の縁にて必死に足を動かす。
既に呼吸は荒く、限界は近い。前へと踏み出す脚は重く、顎が自然とあがりそうになる。
それでも、止まることは出来ない。
持ち前の負けん気を発揮して、歯を食い縛って走り続ける。
「――うぁっ」
脚を動かす事ばかりに意識を取られたせいで、小石に蹴躓いた。
慌てて踏ん張り、なんとか転倒は免れるもののこれは非常によろしくない。何故なら――。
「ペースが落ちていますよ」
「あ”痛だぁっ!?」
常に背後から一定の速度でこちらを追ってきている鬼ババアが、追いつくたびに少女

の尻を容赦なく引っぱたくからだ。
バッシーン！　と実に良い音が城壁沿いの草原に響き渡り、それに倍するボリュームで少女の悲鳴が上がる。
結構なペースで長距離を走っている筈なのだが、後ろを追いかける修道服姿の妙齢の美人……少女のいう鬼ババアは息一つ乱さず、いつも通りの鉄面皮のままであった。
その手には日本語で『根性注入』とえらく達筆で書かれた平たい棒板――書かれた言語の国でいう処の警策と呼ばれる代物が握られているが、転移・転生者に知り合いがいる訳でもない少女にそれを知る由は無い。
足は止めぬ儘にヒリヒリと痛む尻を擦り、思わず背後を振り返って背後の女性――彼女の師となった人物に涙目で文句を垂れる。
「い、今のは仕方ないでしょ！　自分でペース落とした訳じゃ無いし!?」
「惰性で足を動かすのでは無く、走る際に最適な位置取りも意識しなさい――文句を言える余裕があるのなら、もう少しペースを上げても良さそうですね」
「ふざけんな!?　泣くぞこの鬼！　鬼畜ババア！　ミラー！」
「誰がババアだ」
再び少女――スノウの尻から快音が響き渡り、いい加減泣きの入って来た何度目かの悲鳴が快晴の空に吸い込まれて消えていった。

「ふむ、魔力強化無しでもそこそこ……貴女の体質も考えれば肉体的な虚弱さは仕方無し、と思っていましたが杞憂であったのは幸いでした」

城門前で地面に大の字になって転がるスノウを見下ろし、ミラが腕を組みながら思案を巡らせる。

訓練が始まりはや数日。

「先ずは何が無くとも基礎体力の確認です」

という師の御言葉と共に、少女は只ひたすらに聖都外周を走らされる毎日である。

日常的に無意識に行われていたスノウの微弱な魔力強化を、指先で軽く突いただけで封じてのけたミラがまず行ったのは、少女の素の体力の限界値を知る事だった。

結果は予想より遥かに良好。確かに同年代のよく身体を動かす少年少女と比べればやや劣るものの、白子（アルビノ）という先天的な虚弱性を持つ体質であることを考えれば破格のものがあった。

魔力の方は言うまでも無い。やはり白子（アルビノ）は限定的な先祖返り、という説は正しかったのか、平均的な人間のもつ魔力量より相当に高い資質を有している。

正しい魔力の運用法と効率の良い肉体強化を教えるだけで、肉体的な基礎能力はそこらの新兵をあっさり上回る事だろう。

ここ数日の走り込みで、根性や負けん気といった厳しい鍛錬に不可欠な精神的要素も中々に良い物を持っていると知れた。

初めての弟子をどう磨き上げてやろうかと、仏頂面なのにどこか楽し気であるミラだったが、当の弟子であるスノウはゲロ吐く寸前まで走らされて死んだように地面に転がっている。というか初日は普通に吐いた。

彼女に自覚は無かったものの、いつも行っていた魔力強化無しの素の限界を見極める地獄のマラソンは、体力精神力は勿論の事、初日から乙女の尊厳すら消耗させた様である。

ちなみに、間に強化有りの日も挟まれたがそれは彼女にとって何の慰めにもなっていない。枯渇するのが体力か魔力かという違いだけなので、地獄に変わりはないからだ。

「まぁ、取り敢えず今日はここまでにしておきましょう、立てますか？」

「……立てない」

「……限界まで走る様に言ったのは私ですが、実戦では最悪でも逃げられる程度のスタミナは確保しておかねばなりませんよ？」

今はお小言は聞きたく無い、と言わんばかりに地面に転がったまま顔を逸らすスノウ

であったが、拗ねた様な膨れっ面のまま、腕だけをミラに向かって伸ばす。
ここ数日の慣れたやり取りに、ミラも軽く溜息を吐くに留め――その腕を引っ張ってスノウを抱き起すと、そのまま自分の背に少女の小柄な身体を背負う。
疲労困憊ぶりを表す様に、ぐったりと体重を預けて来る弟子を背中で揺らし、ミラは城門を潜って聖殿への帰り道を歩き出した。
「帰ったら一休みして食事にしましょう。食べられそうですか？」
「……パンケーキならたべれる」
「最近食堂に入ったという若い料理人の品でしたか……気に入ったのですか？」
「うん……あまくてふわふわ……」
「食べないよりは良いですが……きちんと肉と野菜も摂りなさい」
取り止めの無い会話を繰り返しながら、急ぐこともなくゆっくりと歩いていくシスターと、その背に負われた小柄な少女。
道行く人はここ数日見るようになった微笑ましい光景に、少しばかり頬を緩めてそれを見送っている。
普段、畏敬や憧憬混じりの視線に晒される事が多く、害意以外の視線には鈍感になっているミラと体力を限界まで使い切ったスノウがそれに気づく事は無かったが。
未だ日も高い晴れ渡った空の下、穏やかな陽気に照らされ。

重なった二つの影が二人の足元に伸びるのであった。

「――そこの貴女、ちょっとよろしくて？」

そう声を掛けられたのは、スノウが中庭で自主訓練を行おうと身体をほぐしている最中である。

彼女が鬼バ――もとい、師に教えを乞うようになって半月。

師、ミラの立場を考えれば、長すぎる程であった休暇が終わり、彼女は帝国近辺で起こった大規模な戦闘に派遣される事となった。

始めにそう聞かされたとき、咄嗟に「ついていきたい」と考え無しに口にしてしまったが、それが叶う筈も無く。

「距離的にもそう長い間、留守にはなりません――この半月で教えた基礎的な動きと体力作りを欠かさず行っておくようになさい」

いつも通りの鉄面皮だったが何処か柔らかい口調でそう言い残し、ミラは戦場に行ってしまった。

同行していた自分を助けてくれた傭兵のおじさんと、でっかいお坊様が「手をうろうろさせてないでちゃんとのせてやったらどうか」なんて揶揄う様に言って、その直後に投げ飛ばされていたのはなんだったのか。

まぁ、それは今はいい。

とにかく、今は話しかけて来た目の前の二人組である。

どちらも女性――声を掛けて来た方はスノウと同じ位の年齢の少女で、彼女の背後に控えるように立っている少女は、その三つ四つ程、年上だろうか。

格好自体は二人ともここではよく見るシスター……修道服を身に纏っているが、前に出ている少女のソレは、まるで師の様に深めの切れ込み（スリット）が入っていた。

地面に伏せて柔軟運動を行っていたスノウを、ふんぞり返って仁王立ちで見下ろしている少女の首から上もまた、あまり聖殿（ここ）では見ないタイプである。

茶金（ゴールドブラウン）の前髪を左右に流して晒された、キラリと光りそうなおでこも特徴的ではあるが、白いリボンで左右に纏めた髪がぐるぐると渦を巻いている様は、お話で聞く貴族のお嬢様の様だ。

背後の少女は、栗色の髪に背中にかかる程度まで伸ばした長髪――美人ではあるが、

前に立つ少女のインパクトに比べるとごく普通のシスターといった感じだった。
栗色の髪のお姉さんはともかく、貴族っぽい顔立ちと髪型の少女はスノウ的にはシスターの恰好があんまりにもアンバランスである。似合ってないということは無いのだろうが、いやドレスでも着てろよ、と言いたくなる雰囲気を纏っているのが違和感を助長していた。
「えーと……なんか用？」
小首を傾げて問う白い少女に、貴族っぽい少女が大仰に肩を竦めて嘆く様に頭を振る。
「やれやれ、初対面の人間に随分なご挨拶ですわねぇ。此処は普通、挨拶から始まるものではなくて？」
不思議と悪意は感じないのだが、それでも小馬鹿にする様な口調にムッとしたスノウが唇を尖らせて反論した。
「アンタだって挨拶なんてしてないじゃん。そっちが話しかけてきたんだから、人にどうこう言う前に名前くらい名乗りなよ」
「んま！　なんとも口のわ「正論ですね、お嬢様が悪いと思います」ちょっ、ブラン。貴女どっちの味方ですの？」
口に手を当て、これまた大仰な仕草で嘆こうとした少女の言葉をばっさりと遮り、後

ろに従者の如く控えていた栗色の髪の少女がニッコリと笑う。
「勿論、私はお嬢様の味方です。ですので、お嬢様がやらかしたら腕付くでも止めるのが私の役割だと思っています――今は爵位も無いのですから、まずは初対面の方には自分から挨拶をしましょう。それが礼儀というものですよ?」
「分かりました！　分かりましたから腰のメイスに手を伸ばすのはお止めなさい！　貴女本当に遠慮が無くなりましたわね!?」
笑顔のままジリジリと威圧感を与えて来る栗色の髪の少女の言に、慌てた様に手を挙げて降参のポーズを取る――どうやら元は本当に貴族であったらしい少女。
両者のやりとりに呆気に取られていたスノウの視線に気付き、額に浮かぶ冷や汗を拭った少女が、咳払いして場を仕切り直す。
「オホン……では、名乗らせて頂きます。わたくしはエーデル＝ヴァリアン。嘗ては栄えある帝国に於いて子爵の位を授けられたヴァリアン家に連なる者ですわ――こちらはわたくしの従者であったブランと言いますの」
「ブランと申します、どうかお見知りおきを」
修道服のスカートの裾を摘まんで優雅に一礼するエーデルと、丁寧に頭を下げるその従者であった――今でも従者の様に振舞う少女、ブラン。
取り敢えず、座りっぱなしで挨拶というのもブランの言う礼儀に欠けると思ったスノ

ウは、軽く腰回りに付いた芝生の欠片を払いながら立ち上がる。
「ご丁寧にどーも。わたしはスノウ＝カレンデュラ、つい最近此処にやってきた新参者ですよー……それで、改めて聞くけど何か用なの？」
「そう、それですわ！」
テンションたっかいなー、疲れないのかなー、とか思っちゃってるスノウの胸中など知らぬとばかりに、エーデルがビシィッ！　と音が鳴りそうな勢いで指を突き付けて来る。
「わたくしの記憶が確かならば、貴女、ここ最近北方よりやってきた戦災に見舞われた方々の内の一人でしょう。皆さん、既に北方に帰還したと聞きましたが何故貴女は此処に残り、ミラ様のお世話になっていますの？」
「なんか戦い方を教えてくれるっていうから弟子になった」
「軽っ!?　ちょっと貴女！　あのミラ様に師事するなどという機会に恵まれておきながら、ちょっとご自身の立場に対する自覚が薄いのではなくて!?」
口角泡を飛ばしそうな勢いのエーデルの言葉に、困惑と苛立ちが半々になったスノウが顔を顰めて返す。
「声おっきいよ。で、結局何が言いたいのさ」
半眼になった白い少女の結論を急ぐ言葉に、おでこをキラリと光らせた少女は左右に

下がる特徴的な巻き毛を手の甲で払い、自信あり気に笑って見せた。
「ミラ様が戦地に向かわれ、軽い自主訓練が精々なのでしょう？　折角ですから、わたくしが貴女の腕前を見て差し上げますわ」

中庭の端に移動した二人は、壁際に下がって見守る態勢に入ったブランを残して対峙する。
「正直、意外でしたわ」
「何が？」
お互いの訓練用の得物――エーデルは長柄の戦槌、スノウは拳に、厚手の布を幾重も巻きつけながら会話を投げ合う。
「スノウ。いくらミラ様に師事していると言っても、貴女戦い方を学び始めて半月足らずでしょう？　いきなり組手に誘われてあっさり乗るのは少々軽率なのではなくて？」
「なんで誘ってきたエーデルが言うの、ソレ」
呆れた様子で向けられる言葉に、同じく呆れた様に返す。
最初は彼女が嫌味ったらしい口調で話しかけて来たことから、何かしら嫌がらせでも

仕掛けて来るのでは、なんて警戒したスノウであったが。

向けて来る言葉とは裏腹に奇妙な程に悪感情を感じないエーデルに、それなりに高かった警戒度は下がっている。

皮肉な話だが、故郷の一部の人間から『不吉の子』呼ばわりされて育ったが故に、少女はそういった感情に対して敏感なのだ。

理屈を伴った根拠は無いが、感覚的にスノウは目の前のおでこちゃんがそう悪い娘では無いと悟っていた。

――ミラがちゃんと帰ってくるのか、怪我なんてしていないか――じいちゃんやばあちゃんみたいに、自分の前から居なくなったりしないか。

そんな風に気を揉みながら、延々一人で基礎の繰り返しだけを行うのもいい加減気が滅入ってきたところだ。

エーデルの誘いは、渡りに船ですらあったといえる。

それに、村に近い年の女の子は居なかった。折角だ。

「――売られた喧嘩は買っておくのも良いかと思って」

「チンピラみたいな理由ですわね!?　ミラ様が知ったら嘆きますわよ!?」

内心を省いて結論だけを語ったせいか、エーデルが目を剥いて本気で注意してくるが……どうだろう、ミラなら本気の諍いならともかく、喧嘩くらいは普通に止めなさそう。

というかミラも売られたら買いそうだ。
鉄面皮とは裏腹に、意外と激情家というか、負けず嫌いな感じがする師の顔を思い浮かべ、布を巻きつけた拳を開閉させる。
「うん、良し。じゃ、やろうか」
「……まぁ、良いですわ。未だ見習いとはいえ、わたくしも戦人の一人。先達として一丁揉んで差し上げます」
「何かおっさん臭い言い回しだよね、ソレ」
「じゃかぁしぃですわ！」
特に開始の合図も無く、エーデルが勢いよく踏み込んでくる。
（うわっ、やっぱ早っ）
村の悪ガキ共……ともすれば自分より年上の兵士志望であった男の子相手ですら、喧嘩で負けた事が無かったスノウであるが、今ならば理解が及ぶ。
無意識だったとはいえ、白子（アルビノ）である自分の体力的なハンデを補うため、僅かながらでも魔力強化を行っていたのだ、そりゃあ子供の喧嘩くらいでは負け無しになる訳である。
自分と同じ土俵――否、自分より遥かに長い間、魔法による身体強化をきっちりと修め、戦う術を学んでいるエーデルが桁違いに早く感じるのは当然であった。

振り抜かれる戦槌をバックステップして躱すと、振り終わりを狙って懐に飛び込もうと試みるが……あっさりと切り返してきた返しの一撃に、再び距離を取る。
「一定以上の実力者ならばともかく、わたくし達戦士の卵程度では、間合いの差は絶対的ですわよっ！」
「みたいだ、ねっ！　嫌という程実感してるって！」
豪快に振り回される長柄と、自身の拳。
体格差があればまた違ったのかもしれないが、スノウとエーデルでは殆ど身長にも差が無い。武器によるリーチ差は露骨にエーデルの優位となって表れていた。
なんだかんだといって、同じ見習いとは言えエーデルが戦槌の扱いを心得ているのも大きいだろう。本当に基礎も基礎のみを齧っただけのスノウでは、土台からして差があり過ぎた。
間合いの差にものを言わせて繰り出される乱撃に、白い少女はかろうじて逃げ回るのが精一杯ではあるが……エーデルからすれば半月前までド素人だった少女が、ここまで逃げきれているというだけで驚愕だった。
（構えも周囲への配慮もガバッガバ。体術もたまに見せる動き以外は素人と大差無し……それで此処まで食い下がりますの……！）
現時点では技術的な面は見るべきところは無いが……白い少女の身体強化の魔法は、

聖殿にて何時か戦場に立つべき戦士として訓練を重ねるエーデルをして、瞠目に値した。

ロクに訓練を経ていないのにも関わらず、相当に高い魔力もそうだが……何よりその強化の滑らかさ。

咄嗟の回避や大きな動作が必要な箇所へと、流れる様に行われる魔力の流動は既に前線で戦う現役の戦士達のソレに近いのではないか。

（なるほど……聖教会の誇る英雄たるミラ様が目を掛けるだけの事はある、ということですわね）

まだまだ修行中の身の上である彼女であっても、その大器の片鱗を感じることが出来る眼前の白い少女。

とはいえ、如何な才覚があってもまだまだひよっこですらない卵のままでは、年単位で訓練を積んで来たエーデルの相手になる訳も無かった。

なんとか円を描く様に移動しているつもりだったのだろうが、段々と追い詰められ、スノウは後退するしか無い局面が多くなる。

そして、とうとう横殴りの戦槌の一撃を躱した際、その背中が壁へと触れた。

「終わり、ですわっ！」

〆の一撃を放とうとしたエーデルが戦槌を振りかぶると同時に、スノウが弾かれたよ

うに前にでる。

（壁際ならば長柄が引っ掛かる……良い発想ですが、対策済みですわよ！）

ほぼ素人が咄嗟に考えたにしては上出来な作戦であったが、壁に打ち付ける事が無い様に間合いは調節済み――おまけに万が一を考えて握りを変えて振りはコンパクトにしてある。

身を低くして突進してくるスノウの背に、厚手の布でぐるぐる巻きにされた戦槌の先端が打ち付けられようとして――。

大した力も籠ってない様に見える、白い少女のひっぱたく様な掌の一撃でその軌道が大きく逸らされた。

「ンなぁっ!?」

明らかにおかしい手応えと共に自身の一撃が明後日の方向にひん曲がった事に、エーデルが素っ頓狂な悲鳴を上げる。

「おりゃぁ！」

気合一声、スノウが魔力強化を施された拳で戦槌の柄――握りに近い部分をブン殴った。

典型的な喧嘩パンチであったが、フィニッシュのつもりで放った一撃を完全に予想外な形で無力化され、上体が泳いでいたエーデルには対応することが出来ず。

強化によって威力だけは中々のものである拳によって、戦槌が弾き飛ばされて宙を舞う。
「……よっしゃぅぁぁっ!?!?」
喝采を上げようとしたスノウであったが、最後まで言い切る前に叫びは悲鳴へと品変わりした。
得物を掌から弾き飛ばされた瞬間、エーデルが躊躇無くスノウの振り切った拳に飛びつき、脚を引っかけて地に転がしたのである。
「……おーっほっほっほ！　油断しましたわねぇ！　武器を失ったとて素手の組討ち術くらい嗜んでいましてよ！」
「う、ぐぎぎっ、このっ……！」
変則的な腕十字のアームロック態勢に入ったエーデルが、高笑いしながらぐりぐりとスノウの腕を伸ばし切ろうと体重を掛ける。
なんとかそれを外そうと藻掻く白い少女の姿に余裕の笑みを浮かべてみせるが、内心は割と冷や汗ものだった。
（……っぶねぇ、ギリギリでしたわ！　なんで素人丸出しのこの娘があんなえげつない捌きをしてきますの!?）
現状も完全に関節が極まっている訳では無く、単純な魔力強化率ではエーデルよりス

ノウの方が上な為、膂力で無理矢理にアームロックを外されそうになる。
「えぇい、往生際が悪いですわよ！　大人しく降参(タップ)なさい！」
「ぬぅぅぅっ、い・や・だぁぁっ！　……てか！　元お貴族様の癖に、なんで寝技なんて使うのさ……！」
「はっ、無知ですわねぇ！　女神より遣わされた戦士たる転生者の方々曰く、『関節技(サブミッション)こそ王者の技よ！』ですわ！　覚えておくとよろしくてよ！」
「王者ってなに!?　あんた元は子爵って言ってたじゃん……！」
　中庭の芝生を踵で削り、手足をばたつかせてなんとか極められかけた右腕を外そうとする白い少女と、おでこに光る汗を浮かべながらさせじと抱えた腕を伸ばし切ろうとするドリルツインテールの少女。
　最初の未熟ながらも互いの持ち札を生かした攻防とは打って変わり、組手はやや泥仕合の様相を呈してきた。
　壁際で動じる事無く観戦していたブランは、土と草まみれになる二人を見て「あらあら、あとでお洗濯しないといけませんね」などとコメントしている。
　とはいえ、寝技(グラウンド)は見た目こそ地味になりがちだが、その実、非常に体力を使う。
　スノウの奮闘によって暫くは拮抗した状態であったが……やがて圧倒的に有利な体勢であったエーデルに天秤が傾き始めた。

焦るスノウ。対し、会心の笑みを浮かべるエーデル。
「……ようやくですの！　その根性だけは褒めて差し上げますわ、ですが――」
「……ふんっ！」
「わたくしに勝つには少しょう”お”お”う”っ!?」
年頃の少女が上げるにはやや野太いというか、色々とひどい悲鳴をあげエーデルは硬直した。
その隙をついて、スノウがあっさりとアームロックを外して寝技から脱出する。
転がって間合いを離し、肩で息をしたまま片膝をつく白い少女へと、エーデルは尻を押さえたまま顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。
「あ、あ、貴女ねぇっ!?　何処に指ぶっ刺してやがりますの！　危うく痔を患う処でしたわよ!?　真面目に戦いなさい！」
「ハァ、ハッ……ケンカに真面目(キレー)も不真面目(きたない)も無いねっ……！　実戦でも同じこと言ってみなよ……！」
「こ、このガキャァ、人が淑女として対応していれば調子に乗りくさって……！　泣かしてやりますわこの白髪(しらが)ザルゥ!?」
「やってみろデコスケ……！」
!?　とか『ビキィッ』とか効果音付きそうな形相で立ち上がり、拳を握って前に構え

るエーデルに、スノウも負けじと立ってファイティングポーズを取って応じ――。
なんかもう組手とか関係ない口汚い罵り声をあげつつ、ノーガードの殴り合いが始まった。

「――ここまで、ですね」
互いの拳が交差し、同時に頬に突き刺さると。
限界を迎えたのか、両者糸が切れた様に膝が落ち、大の字になって芝生の上へとひっくり返る。
青痣と打撲痕だらけで酷い事になってる少女達のダブルノックダウンを見届けると、ブランが静かに宣言した。
「勝者無し、引き分け……スノウさんは予想より遥かに食い下がられましたね、お嬢様？」
「……判定に異議を申し立てますわ。わたくしのほうが四発は多く入れてましたわよ」
ちょっと他人に見せられないレベルでお顔が腫れあがってた年頃の乙女達であったが、ブランの回復魔法によって取り敢えず大きな腫れと青痣だけは大体引っ込んだ。

だが、精魂尽き果てるまで殴り合った体力が戻る訳ではなく、特に魔力抜き、素の体力で劣るスノウは完全なグロッキーと化している。
「私の目からみてもスノウさんはほぼ未経験者でした。それがお嬢様相手に武器を弾き飛ばし、寝技を脱してみせたのですから……これはもう実質お嬢様の判定負けでは？」
「……さっきも言いましたが、貴女どっちの味方ですの？」
「お嬢様ですよ？」
「わぁ、良い笑顔。嘘くせぇですわぁ」
億劫そうではあるものの、会話をする程度の余力はあったらしいエーデルが身を起こしてスノウの顔を覗き込む。
「……なによ？」
「ふん。多少はマシな顔になりましたわね」
「嫌味か。エーデルだってボコボコじゃん」
「……そういう意味ではありませんわ」
睨み付けてくるスノウの言葉に肩を竦め、治りきらないおでこのたんこぶを撫でながら少女が立ち上がる。
「今回の様な品に欠ける殴り合いはもう御免ですが……普通の組手や練習くらいならまた相手をして差し上げますわ、光栄に思ってもよろしくてよ？」

最後にそう言い残して、エーデルは若干ふらつく足を叱咤しつつ中庭から出てゆく。
あれだけ言いたい放題互いに罵り合い、殴り合ったというのに、怒りは見せても嫌悪や悪意は終ぞ表さなかった変なお嬢様に、スノウが困惑した様子でその背を見送る。
大の字で仰向けに転がったままである彼女へと、今度はブランが上から覗き込むようにして微笑みかけて来た。
「出来れば、お嬢様を嫌いにならないであげて下さいね？　貴女がここ数日、沈んだ表情で独り訓練を繰り返しているのを見てずーっと気を揉んでいたんです」
「……そうなの？」
「ハイ。それで、とうとう今日になって我慢が出来なくなったみたいですね」
かわいい処があるでしょう？　なんて悪戯っぽく笑うブランの容赦ないカミングアウトに、ちょっとエーデルが気の毒になる。
どうも、周りの大人達は『ミラの弟子』である自分に対して遠慮があるというか、言ってしまえば「ミラ様の育成に自分が口を差し挟むなど恐れ多い」みたいな様子が見受けられる。
なので、一人で訓練を続けるのに飽きて色々と他の人達にアドバイスを貰おうとしたり、参考に意見を聞こうとしてもどこか消極的なのだ。
もちろん、皆優しいし、自分の事を気に掛けてくれているのは伝わってくる。

それでも――ちょっと疎外感みたいなものを感じてしまっていたのは確かだった。

こんな感情（もの）、自分が弱いせいで感じる贅沢な我儘だと、そう思っていたのだが……。

ブランの言葉に自身を振り返ってみると、気が付けば奇妙にすっきりして胸のつかえがとれた気分になっていたのは確かだった。代わりに身体のあちこちが鈍痛を訴えて来るが。

最後にこちらに丁寧に一礼してお嬢様の後を追いかけるブランに、寝転がったままひらひらと手を振り返して。

「……ありがと」

聞こえる筈もない礼の言葉がなんとなく唇から零れ、見上げた空に吸われて消えていった。

「訓練中に考え事とは余裕ですね」

「あ痛だぁっ!?」
あっさりと無傷で帰って来た師に、再び指導されるようになり、数日。
型稽古中に心ここに在らずを指摘され、スノウは『乾坤一擲』と書かれた警策で額をバッシーンと叩かれる。
「……今日はどうしたのです、何か気がかりな事でもあるのですか？」
少女がここまで気を散らすのは、今迄に無かったことだ。
煙をあげそうになっている打たれた額を撫でながら、それでも何か考え事をしているらしき弟子へと、ミラは不思議そうに問いかけた。
深刻な様子などは見られないことから、そう悪い事ではないのだろうが……このまま修行に身が入らないというのはよろしくない。
やがて、悩んでいても仕方ない、と思ったのか。
額を撫でながら、少女は師へと遠慮がちに切り出した。
「……あの、さ。ミラ。たまにで良いからわたしとの訓練に、別の子達を混ぜてあげても良い？」
「ふむ？　というと、聖殿にいる見習いの者達の誰かですか……私が留守の間に交流でも？」
「うん。なんかお返しとかも色々考えたんだけど、あの子ミラに憧れているっぽいし、こ

れが一番良いかなぁって」
　あのド突き合い以降、何度か一緒に訓練した凸凹主従のおでこちゃんの方が、やたらと目を輝かせて少女の師がどれだけ凄いのか力説していたのを思い出し、スノウは上目遣いで師――ミラへと頼み込む。
「偶になら問題はありませんよ。とは言っても、扱う武器や戦法によってはあまり私の意見は参考にならないかもしれませんが」
「――！　それなら大丈夫だと思う。ありがと！」
　パァッと表情を明るくし、さぁー修行だー！　と気合を入れ始めた少女を見て、ミラが微かに目を細め、口角を緩めた。
「……良い出会いがあった様ですね」
「え？　あ、うん」
　師の言葉に少女は照れ臭そうに笑い、鼻の下を指の背でひと擦りして答えた。
「友達、かな？　うん。友達」

老兵の残照　師弟

二人の少女が、地を駆ける。
一人は、真っ直ぐに前へ。もう一人は、弧を描く様に。
相対するは一人の女性――アッシュブロンドの髪を後ろで束ねたシスターだ。
手に木棍を携えた彼女は、正面から突っ込んで来た白髪赤目の少女へと無造作に横薙ぎを放つ。
少女が身を屈めてそれを避けるが、シスターの手首の返しだけで棍の軌道が変わり、肩口に向かって一撃が翻る。
棒一本で様々に変化する多彩な攻撃パターンを嫌という程知っている少女は、横っ飛びに躱す事でこれを回避。
追尾する様に棍の軌道がほぼ直角に変わり、逆薙ぎとなって先端が強襲してくるが――少女はそれに掌を向け、接触の瞬間に上へと跳ね上げた。
木棍が意思を持ったかのように、不自然な程に勢いよく上方へと弾かれる。

急激に軌道を変化させられた事で、棍を握っていたシスターの片手も万歳をするように跳ね上げられ――その機を逃さず、白髪の少女ともう一人……白いリボンで特徴的な巻き髪を纏めた少女が同時に打って掛かった。

「――もらい」

「――ましたわ！」

正面から鋭い突きが、背面から振り上げられた戦槌が呼吸を合わせて繰り出され。

「粗い」

無慈悲に告げられた一言によってあっさりと蹴散らされる。

跳ね上がった棍と腕をそのまま後方の少女に突き出したシスターは、木棍の先端に巻き毛の少女の衣類を引っかけ、そのまま再度振り下ろす。

引っ張られて前方へと投げ飛ばされた形になった少女と、拳を突きだそうとしていた少女は互いに止まる事も出来よう筈も無く、正面衝突した。

「うぎゃっ！」

「ぐぇっ!?」

互いに蛙が潰れたような悲鳴を上げて、一塊になってもんどりうって倒れる少女達。

目を廻している二人を尻目に、シスターは今回の組手に参加していた最後の一人――二人に補助魔法（バフ）をかけていた栗色の髪の少女にむけて向き直った。

「さて、あとは貴女だけになりましたが……どうしますかブラン？」
「……お嬢様とスノウさんが倒れた以上、三対一の組手は終わったも同然です。降参、と言ってしまっても良いのですが……」
　仲良く地面に転がっている少女達……スノウとエーデルをちらりと横目で見ると、二人より幾つか年上であろう少女――ブランは微笑んで右手に握った片手鎚（メイス）を改めて握り直した。
「――折角ですので、一対一で続きをお願いできますかミラ様？」
「ええ、良い心がけです。来なさい」
「はい。では……参ります！」
　聖殿の中庭に穏やかな日差しを降らせる晴れた空の下、片手鎚（メイス）と木棍が打ち合う軽快な音が響き渡った。

「妖怪ババアすぎる」
　食堂で注文したサンドイッチを頬張りながら、スノウがやってらんねぇ、といわんばかりに愚痴を垂れた。

相席しているエーデルが紅茶のカップから唇を放し、呆れた様子で窘める。
「不敬ですわよスノウ。そもそもわたくし達戦士見習い程度、三人どころかその数十倍の人数であっても鎧袖一触にするのがミラ様――聖教国の四英雄筆頭ですわ。師事してたかだか数か月で勝ちの目を求めるとかどんだけ夢みてんですの」
「まぁまぁ、負けん気の強さは向上心の強さでもありますよ。少々無謀なのは確かですが」
なにおう、と唸りながら隣に座るドリルツインテールな少女を睨みつける白い少女に、二人の向かいに座ったブランが宥める様に紅茶を満たしたカップを差し出した。
飲み物が欲しかったのは確かなので、スノウは素直にそれを受け取って礼を言う。
「ありがと――でも、わたしとエーデルは直ぐにやられちゃうけど……ブランって大体最後まで残ってるよね？　組手でも殆ど勝てた事無いし、正直見習いってレベルじゃない気がするんだけど」
「ミラ様との稽古で私が最後まで立っているのは、単に支援に徹しているからだと思いますよ？　お二人より年上な分、より多く修練を積んでいる自負はありますが……正直、あの方にとっては誤差の範囲でしょうね」
「一人になった後、わたくし達より遥かに長い時間打ち合っている貴女が誤差とか言うと、わたくし達のメンタルが岩肌を磨いた雑巾みたいな事になりますわ。謙遜は程々に

なさい、ブラン」
実際、ミラがこのトリオを相手にする際には常に一定の上限を設けている。
スノウとエーデルがあっさりと蹴散らされる上限値では、ブランが相当に食い下がっている、という現状はそのまま彼女の実力の高さを表していると言えた。
単純な戦士としての技量であれば、ブランは既に前線で戦っている者達と遜色が無い。
そんな彼女が見習いとして聖殿に留まっているのは、後衛技能……聖職者として回復や浄化・結界の魔法に練熟する為であるが――本当の処は、彼女がお嬢様と呼ぶ少女の傍にいる為であろう事は察しがついた。
尤も、それを指摘するような無粋をスノウはしなかったが。
代わりに口の中のサンドイッチを紅茶で喉奥に流し込むと、最初に口をついて出た愚痴を再燃させる。
「う～ん、やっぱり延々やられっぱなしは悔しいな……勝つ、なんて無茶は言わなくても一発入れるくらいはしたい」
「負けず嫌いな点は戦士として間違いなく長所……しかし、流石に向こう見ずが過ぎますわよ。貴女の師が小細工小技の類で揺らぐ方では無いのは、貴女も良く知っているのではなくて？」

「まぁ、そうなんだけどさぁ……」

今は己の未熟を受け入れ、精進あるのみですわ。と楚々とした顔で紅茶を味わう友人の言に、正論であると感じながらも『一発いれる』という目標に未練たらたらなスノウ。

そんな彼女に対して一つ、意見を提示してみせたのはこの場の最年長たるブランであった。

「既に幾度も稽古をつけて頂いた事で、ミラ様に私達の手札や引き出しはほぼ知られていると言って良いでしょう……なので、ここは別の切り口を求めては？」

「……と、言うと？」

ピッと人差し指を立ててアドバイスしてくる年上の友人の言葉に、スノウは首を傾げ。

そんな彼女に対し、ブランはいつもの如く微笑んで見せた。

「何も難しい事はありません。私達以外の誰か――スノウさんの『ミラ様に組手で一発入れる』という目標に助言をくれそうな方に、話を聞いてみれば良いんです」

ブランの意見は至極当然のものではあるが、人選、という点において中々に限定される話なのも確かであった。

まず、聖殿に勤める大人達であれば十中八九、エーデルと同じ意見――今は地力を上げる事に注力すべき、と言うに決まっているからである。

やたらと英雄視されているスノウの師に対して畏敬もあるだろう。

が、それ以前にアドバイスを求められても、彼らも『ミラに一撃入れる』なんて真似はどうやったら可能になるのかイメージすら湧かない。というのが現実なのだ。

つまり、参考になるであろう意見が出てきそうな人は自然と限定される訳で。

昼食を終えたスノウは友人達と別れ、早速その数少ない一人のもとへと向かったのだった。

「――という訳なんだけど。助祭様、何か良い案は無いかなぁ？」

「うむ、あのミラ殿に一撃を入れる――中々に困難な目標ですな！」

一抱えどころでは無いサイズの岩を背負ってスクワットを繰り返す巨漢に、その岩の上から質問を浴びせる少女。

巨漢――ガンテスは快活に笑いながら、しかし決してスノウの目標を否定する事はせず、スクワットを続行しながら妙案は無いかと首を捻る。

ちなみに人選の基準は極めて簡潔である。スノウの『目標』を既に達成しているか、達

成できるだけの実力を持つ人物……条件としてはこれ一つだ。
現在聖殿に居る候補としては、壱ノ院にて書類仕事をしている腹黒美青年も含まれているのだが……彼に関しては師から「貴女の教育に悪いので、私の居ないときには会わないように」と念を押されているので、残念ながら除外対象であった。
「うぅむ。一撃……スノウ嬢はこの短い期間で見違える程に戦武を磨かれましたが、やはり相手が相手ですからな。どうしたものやら」
考え事に熱中すると筋トレのスピードが上がる性質なのか、スノウと、彼女より上背のある丸い巨岩を担いでいるとは思えないテンポで上下動が加速する。
ちなみに彼が背負っているいっそ不自然な程に見事な球体となった岩は、転移者から”打岩”と呼ばれる訓練を教わって拵えたガンテスお手製である。
良い筋トレの道具になると聖殿の中庭に持ち込んだは良いが、デカ過ぎて周りに迷惑だとミラから怒られた為、泣く泣く手ごろなサイズに削り直したという頭の悪い事情で生まれた一品であった。
既に残像が見えそうな速度でシャカシャカと高速スクワットを繰り返す筋肉であるが、なんとなく丸岩の上に乗ったスノウは後悔することしきりである。
ぶっちゃけ上下動が酷すぎて酔った。吐きそう。
口から乙女の尊厳を放射するまえに、慌てて岩の上から飛び降りる。

「む？　スノウ嬢、顔色が悪いですぞ。体調不良なれば拙僧が回復魔法を施します故、休息を摂っては如何か？」
「……い、いや大丈夫。今治すから」
即座に気付いたガンテスが心配そうに眉根を寄せるのを見たスノウは、《三曜》の基礎技術が一つ、《地巡》を以て大地の魔力と自身の魔力を接続。
魔力の流動に合わせて血流も操作し、揺さぶられた三半規管によって起きた酔いを軽減する。
落ち着いた、といわんばかりに一息つく少女を眺め、巨漢は感心した様子で頷いた。
「見事な《三曜の拳》の運用ですな。かの半龍の姫君が開祖となりし幻の拳――半年と掛からずに基礎技術を修めるとは、いやはや……」
「そうかな？　自分だとあんまり実感湧かないけど……ミラはもっともっと凄いし」
尚、少女とやり取りしながらもスクワットは続けたままである。
速度も一切下がっていないので、高速で縦にブレながら談笑する筋肉という意味の分からない光景が生まれていた。
同じく中庭で訓練に精を出す人間はギョッとした顔つきで思わず二度見している。
一瞬、怪異の類かと思ったのかもしれない。然もあらん。
「……助祭様がミラと模擬戦とか組手をしたときには、どうやって攻撃を当ててるの？

正直、助祭様の戦い方と《三曜》は相性が悪そうだけど」
「拙僧の場合は先ず、裸足となりますな」
「はだし」
「然り。そして、打撃を捌かれて投げを打たれた際に、足指で大地を掴むのです」
要は、ぶん投げられる瞬間に足を地面にめり込ませて無理矢理身体を固定しているらしい。想像以上に力技だった。
で、投げが不発に終わった際の隙を突く、という形の様だ。
もしくは投げ飛ばされた落下点がミラに近い間合いだった場合、態勢の修正や受け身を全部無視して地に叩きつけられながら掴みに行くのだとか。
同じ真似をスノウが行えば一瞬で失神するか、下手すれば大怪我を負いかねない。きんにくがたりない。むりです。
「明日にはラック殿が派遣された戦域より帰還します故、助言を求めてみるのも良いやも知れませぬぞ？　御仁は嘗て高名な冒険者でした。手札の多彩さや難敵を崩す手法といった点においては、近隣諸国で一、二を争う巧者でありますれば」
ガンテスの言葉に、少女は素直に頷いた。
正直な処、ラックが聖殿に居るのならば真っ先に聞きに行っただろう。彼が戦地へと派遣されている為、次点の候補であった筋肉助祭へと話を持って行ったが……体験談を

聞くだけでも参考になるかと思ったのだが、全くの空振りだった。参考にはならない処か、まず助祭以外に同じ事出来る奴がいない。
「……取り敢えず、明日おじさんが帰ってくるのも待つしかないかぁ」
「うむ、若い内は何事も挑戦ですぞ。ラック殿ならば何か妙案も浮かびましょう、拙僧も陰ながら応援しております」
「うん、ありがとう。でも、助祭様も年っていう点ではそんな台詞が出る程じゃないよね？」
「はっはっはっは、確かに！　拙僧も日々鍛錬にて己の限界に挑戦する身なれば！　スノウ嬢も本日は体に重きを置いた筋トレ（たんれん）など如何でしょう？」
実に良い笑顔で仰る助祭様に、スノウは同じく良い笑顔できっぱりと答えた。
「あ、それは結構です。というかわたしが助祭様の鍛錬やったら死にそう」
「むぅ……」
負荷空白（ブランク）のある筋肉がしぼむ様にガンテスの笑顔がしぼんだが、残念でも何でもなく当然の返答である。

で、次の日である。

「……それで俺に助言が欲しいって訳か」

「うん。おじさんが駄目ならもう他にアテも無いんだ。どうにかならない？」

「簡単に言ってくれるなオイ。相手はあのミラだぞ」

傭兵のおじさん――ラックはその怖い顔とは裏腹に、義理堅かったり面倒見が良かったりする人だ。

今回の相談も、彼の帰りを待つ間に訓練に勤しんでいたスノウの様子を、彼が帰還して直ぐに見に来た処に声を掛け、訓練後に中庭で相談と相成った訳で。

練武場（なかにわ）で待つスノウへと食堂から果実水を持って現れたラックがそれを手渡し、二人で壁際に移動して相談は始まった。

……普段はミラか、或いは凸凹主従の友人達がスノウの傍にいる為か、あまり関わってくることは無いのだが。

この強面の傭兵は自身が聖殿に滞在している間ならば、彼女が一人でいる時間が出来るとそれとなく様子を見に来る事が多い。

本人に指摘すれば不機嫌そうな顔を更に渋面にして「偶然だ」と宣うだろうが……どうも、彼はスノウが故郷を喪うことになった件で、後ろめたさの様なものを感じているみたいだった。

自分がもっと早く戦線に到着していれば――そんな風に思っているのかもしれない。
正直に言えば……家族や親しい人達がいなくなった事は、今でもよく頭をよぎる。
哀しさや辛さが、鉛を注がれた様に胸をふさぎ、身体を重くすることがあるけれど。
村を滅ぼし、皆を燃やした、嫌な気配を垂れ流しにした邪神の軍勢共を凄まじい形相で蹴散らしながら助けに駆けつけてくれたラックに、感謝こそあれ思う処なんて一つも無いのだ。
命以外は全部無くしてしまったけれど、それでもスノウはこうして生きていて。
生きていたからこそ、こうやって新たに師や友人が出来て、彼女達と過ごす日々を送れている。
だから、ラックが変に気負ったりする必要は無いのだと、スノウはそう思っているのだが。
多分、それを口にした処で「子供がしたり顔で言うことかよ」とか、鼻を鳴らして言われておしまいな気がするので黙っている。
そんな予想が付く位には交流があったし、そんな彼を見て苦笑するだけに留めている周りの大人達を見ると「なんか大人ってややこしくて面倒くさい」と少女は思うのだった。
閑話休題。

ともあれ『目標』の相談についてだ。
傭兵のおじさんで駄目となると、本格的にお手上げなのでスノウ的にはここで有用な意見を得たい処ではある。
コップに入った果実水をストローでズズーッと啜り、壁際でしゃがみこんだ少女は同じく壁に寄りかかって腕を組んでいる顔の怖いおじさんを見上げた。
「……俺が面倒な相手と戦るときにゃ、確かに突飛な手を選ぶ場合もある」
頭の中で組み立てた助言を、分かりやすく噛み砕く様にゆっくりと告げるラック。
「パターンは当然複数ある訳だが、共通しているのは打つ手が”付け焼刃”じゃクソの足しにもならんという事だ。自分の一番の強みですら上回ってくる相手に、それより更に劣るモノを唐突に突き付けた処で叩き潰されるのがオチってな」
「ふむふむ……下手に新しく武器や戦い方をかじっても意味は無いってことだね」
「一概にそうだとも言えんがな。俺も複数種の武器を使うが……もとは師匠の影響もあってのスタイルだ」
「え、おじさんの師匠とかすごい気になるんだけど。もうちょっと詳しく」
気になる単語が出て来たので思わずスノウが食い下がるが、強面の傭兵は肩を竦めて「まぁ、今は関係ない話だ」とばっさり打ち切ってしまった。
え～、なんて不服そうに頬を膨らませるスノウに顰め面を崩して苦笑いで応じると、

ラックは近くの植木から落ちたのであろう木の枝を拾い上げる。
「格上相手に隙を作りたいのなら、自分がきっちりと習得した手札の中で相手を『困惑』では無く『驚愕』させる必要がある。戦闘経験豊富な奴は前者程度じゃ動きも鈍らんからな」
　木の葉が無数にくっ付いた枝を、枝葉を千切って細い棒に変えると彼はスノウに向かって手招きした。
「どれ、偶には俺も一つ、手本をみせてやろう。好きに掛かって来いチビスケ」
「チビスケいうな――でも、良いの？　いくらおじさんでもそんな細っこい枝じゃ……」
「構わん。俺に触れるか、この枝に傷の一つでも付けられたらお前の勝ちだ」
　攻防には、今拾ったコイツしか使わん。とまで言うラックの言葉に、そこまでいうならやってみよう、とスノウも胸を借りる気持ちになった。
　馬鹿にしてる、とか舐められてる、なんて思う訳が無い。相手はミラと同じく聖教国の《四英雄》なんて呼ばれる人達の一人だ。
　此処に住み始めてからというもの、師を筆頭によく関わる人達なので今いち実感が薄いが、本来なら彼・彼女らに稽古をつけてもらうなんていうのは、物凄く幸運な事なのだろう。
　そのくらいは、ここ数か月でスノウも学んだのだ。

空になったコップをそっと地面に置くと、小走りに前に出てラックと向かい合う。
軽く呼吸を繰り返し、気息と共に意識を切り替えた。
「――じゃ、いきます」
「あぁ」
彼の短い返答が返ってくると共に、一気に飛び出す。
折角だ、その『手本』とやらを確認する為にも、正面から小細工抜きで行ってみる。
ここ数か月、師の容赦の無いしごきによって鍛えられている白い少女は、突進力も加速も、身体強化の為の魔力の流動も、既に下手な兵士も顔負けの領域に達していた。
風の様に駆け、一直線に向かってくる少女に向かって傭兵は泰然とした様子を崩さず、右手に持った枝をゆったりと握り直し――。
――スノウが間合いに入った瞬間、左手に握り込んでいた千切った小枝と葉を彼女の顔にぶちまけた。
（ッ！　目潰し……けどっ、ただの葉なら大して意味も……！」
馬鹿正直に目に喰らえば視界も遮られるだろうが、元が掌に握り込める程度の枝葉だ。
砂や液体ならば兎も角、額で受けるようにして突っ込めば殆ど無視できる、そう判断して彼女はそのまま拳を握り。

まるでちょっとしたサイズの石にぶつかった様な感触に、目から火花が飛びそうになった。
「いったぁ!?」
葉というより大粒の砂利を顔面にぶつけられた様な重みに、少女が思わず悲鳴を上げて立ち竦むと。
「ほれ、終わりだ」
小枝がスノウの頭にペチンと当てられ、あっさりと勝敗が決まってしまった。
ヒリヒリする額を擦りながら、スノウはラックを見上げて頬を膨らませる。
「……枝だけ、って言わなかったっけ?」
「使うと言ったのは拾ったコイツだ。元はついてたもんを毟っただけだな」
シレっとした顔で言う傭兵の言葉に、ぐうの音もでない。
ずるい、という事は出来たがこれもひょーほーってやつなんだろうな、という思いもあったが故に不機嫌そうに黙り込む少女に、傭兵は片頬を吊り上げて幼子がみたら泣き出しそうな顔で笑う。
「と、まぁこんな感じだな。お前さんのミスリードも含めて、札を晒す前に布石を打っておくのも有効ということだ」
「……ただの葉っぱがやたら固くて重さがあったのは?」

「魔力強化の一種だが、詳細は秘密だ。フリーの傭兵の飯の種なんでな」
なんだか煙に巻かれたような気がしなくもないが、実際の技術というより先の攻防の流れを体感させたかった、という事だろう。
スノウが問題ない、と判断した様に、一見脅威にならない行為や見慣れた動作の中にラックの言う『手札』を潜ませるのもまた有効、という訳だ。
なるほど、勉強になった。なったのだが……。
「……あれ？　ひょっとしたらこれ、おじさんの戦い方をよく知ってるミラは慣れてるんじゃ？」
「漸く気付いたか。言っただろう、付け焼刃じゃ意味が無いと」
助言はあくまで助言。
それを元に、スノウ自身が自分の得意とするものを主軸としたアレンジを加える必要がある。
「王道だろうが、詭道だろうが、強くなること、強さの引き出しを増やす事に手軽な近道なんぞ無いってことだ」
”それでもてっとり早く力を求めるってんなら、なんらかの代償が必要になる”
そう続く台詞を言葉にはせずに胸中に留め、傭兵は唸り声をあげて悩む少女を見下ろした。

ミラが監督している以上、自分がいちいち忠告するような内容でも無い。
あの女傑としか評し様の無い、鉄の女を師匠とした少女もそうだが、当の師の方も初めての弟子を導くことで得る物もあるだろう。
「まぁ、なんだ。師弟共々、精々切磋琢磨すると良いさ。お前さん達が強くなりゃ後々俺が楽になるんでな」
その過程で少女が喪った幸せに変わる物……いや、代替品など無いのかもしれないが、喪失によって出来た胸の空洞を埋めるに足る物を手に入れるのならば、更に言う事は無い。
そんな思いもやっぱり口に出す事は無く。
少ない友人に揃ってヒネていると評される強面の傭兵は、無精髭で覆われた顔で皮肉気に笑ってみせたのであった。

そうして、次の日。

友人達も交え、少女は恒例となった三対一の状況での模擬戦をすべく、師と対峙していた。

一晩考えたが、やはり自分の得意な事というと師――ミラによって鍛えられた技術しかない。

彼女に教わった技でその当人が驚くような真似をしてみせる……言葉にした時点でもうこれ無理なんじゃないかな、とか思ったりしたスノウだったが、取り敢えず試してみたい事は一つだけ出来た。

助祭様も言っていたではないか、まずは挑戦だ。

ちなみに、詳細こそ話していないが「昨日の目標について、試してみたい事がある」と友人達に伝えた処、協力はしてやるからやれるだけやってみろと言ってくれた。持つべきものは頼れる修行仲間である。

現在の布陣も、いつものとは違った『目標』の為の配置であった。

木棍を構えたミラが、少女達を見て少しだけ訝し気に眼を細める。

「ふむ……今日はブランが前に出ているのですか……何か作戦でも練ってきましたか？」

「作戦という程のものでは無いですが、少々考えがありまして。今日は最初から挑ませて頂きます」

「なるほど、試行錯誤は悪い事ではありません――では、来なさい」
（……ブランが前に出る。スノウ、貴女の言う試したい事とやらは本当にこれだけで良いんですの？）
（うん、あとはこっちでタイミングをみてやってみる）
（そ。ならやってみなさいな、骨は拾って差し上げますわ）
小声でエーデルとやり取りし、本日の訓練の〆である模擬戦は始まった。
先に自分が倒されてしまうので、じっくりと見る機会が無かったが……やはりブランは強い。
木棍相手にリーチで劣る片手鎚（メイス）を振るい、なんとか間合いを詰めては有効打を与えようと一撃を見舞う。
それをあっさりと防がれ、或いは躱され、再び仕切り直す。
スノウやエーデルでは対処しきれない棍の連撃にも反応し、ときには打ち落としすらしてみせる。
とはいえ、ミラが訓練の為に捌けるギリギリまで速度や威力を落としてこそだ。長時間はブランでも無理だろう。
彼女が一呼吸挟める、あるいは間合いを取って息を整える。
それを可能にするために攻撃を差し込むのがスノウとエーデルだ。

二人はタイミングを合わせ、同時に打ちかかる。
やや踏み込みは浅く、あくまでブランが退ける一瞬の時間を捻りだす為。
拳と戦槌を悉く棍の先で逸らされ、払われるが、普段と違い威力や鋭さよりも攻撃を捌かれたときの立て直しに重きを置いた二人は、先日までと比べて相当に長い時間、食らいついている。
しかし、長く保てば良いという訳でもない。訓練とはいえ、相手を打倒する意思の無い腑抜けた動きを繰り返せば、師であるミラは手厳しい対応を取ってくるだろう。
スノウはそう判断していたのだが、ミラ本人は寧ろちょっと楽し気だったりした。
伊達に数か月この三人を監督していない。
『勝てないが負けもしない』などと言う消極的な選択をするような娘達では無いのは、しっかり理解している。
（……何を狙っているのか、ブランが主軸になったのはそれが理由か、或いはブラフか。さて……）
スノウの足元に棍を突き込み、動きを止め。
横手から振り下ろされる戦槌を身を傾げて躱し、翻った木棍がエーデルを打ち据えようとすればブランが割って入り、その間にエーデルが後退する。
（地力が突出しているブランを中心に添えているとはいえ、ここまで食い下がるように

なりましたか……近い内に段階を一つ、いえ二つ程上げてみても良いかもしれませんね）

弟子が聞けば「ふざけんな!?」と悲鳴をあげそうな育成計画（プラン）を脳裏に巡らせつつ、三人の少女が狙っているであろう『何か』を待ち受けていると。

ミラを中心として三方に散った位置取りとなった少女達が、同時に踏み込む。

二人が攻撃、最低でも一人がそのフォロー、という形で食い下がっていた先程までの連携から一転攻勢、同時に最速を以て其々の武器を振るう。

（来ますか。では、何があるのか見せてみなさい）

弟子と、面倒をみている子が確かな成長を見せてくれる予感に、ウキウキと女傑は待ち構え。

三人同時と思われたタイミングに先んじる様に、白い少女が加速した。

踏み込んだ地面が小さく陥没し、強化された脚力が疾風の如き加速を生み出す。

（……！　今回の鬼札は貴女でしたか、スノウ）

速い。少々直線的ではあるが、その速度は先日までの少女のソレよりも二回り以上、上を行っている。

地面に与えた衝撃からするに、スノウは本来、攻撃や直接浄化を用途としている《命結》を踏み込む蹴り足で発動。ただの推進力として利用した。

（何れはこういった使い方もある、と教えようと思った方法ですが……独自に辿り着いてみせますか）

大地との接地面――多くの場合足裏は、同じ基礎技術の《地巡》の発動起点となりやすいが、その反面《命結》の発動起点としてはやや難易度が高い。

同じ理由で手掌は前述の基礎技術二種の使用難度が逆転するのだが……スノウにとって、それらは大した障害でも難事でも無かった様だ。

（つくづく、凄まじい天賦の才――私が師であって良いのか、悩む程に）

喜びと、少しの複雑さ。

胸中に湧き上がった二つの感情を押し殺し、ミラは弟子の繰り出した胴を狙う高速の突きを棍の先で巻き取り、逸らす。

ウッソやろお前!?　みたいな驚愕の表情を浮かべた愛弟子に、まだまだ甘いと声を掛ける代わりに払った木棍を跳ね上げ、体勢の崩れた少女の肩を打ち据えようとして――。

その瞬間、スノウが首を振る。

元より背にかかる程であった雪の様な純白の長い髪は、この数か月で腰まで届く程に伸びており、少女の動きに合わせて波打つようにうねった。

そして――白い波が棍を受けるように広がり、次の瞬間、スノウの髪を起点に発動さ

れた《流天》が木棍を叩き落とすような軌道で逸らしてのける。
「!?」
地にめりこんだ自身の武器の先端を見つめ、ミラは瞠目した。
紛れも無い驚愕に値する光景に、そういえば己が弟子の才を見出したときも彼女は《流天》を使っていた、と思い返し。
刹那の間も置かずに撃ち込まれる戦槌と片手鎚（メイス）の連撃に、常にあった感慨に浸る余裕すら剥ぎ取られ、咄嗟に回避行動に移る。
めり込んだ棍の先端を支点とし、棒高跳びの様に跳躍。スノウを跨ぎ、エーデルとブランの振るう武器の間合いの外へと、一瞬宙を舞う事で逃れ。
「ふんがーっ!?」
殆どつんのめる様に前のめりの体勢となっていたスノウが、強引に真上に向かってジャンプし、勢いのまま頭突きでミラの腹に激突した。

「……あたまがわれるかとおもった。ミラのおなか、かちこち」
「魔力強化した私に殆ど素の状態でぶつかれば当然でしょう、無茶が過ぎますよ」
「くびもいたい」
「……筋を痛めたのかも知れませんね、見せてみなさい」
模擬戦を終えて、その後。
一撃入れる、という目標を大分みっともない形ではあるが達成したスノウだが、歓びや満足感に浸る余裕も無く。
ミラですら驚かせた頭髪による《流天》の運用、などという離れ業を披露し、限界まで集中した直後で魔力強化すら途切れた状態で師の強固な腹筋に頭突きをかまし。
少し弾性のある石塀に頭たたきつけた様な手応えに、少女は即座に失神したのだ。
額にデカいタンコブをこさえて白目を剥いて芝生の上に転がる少女の姿に慌ててその場の全員が駆け寄るものの、色々と無茶をした割に大きな怪我は無く、気絶しているだけのスノウを見てその場に居た全員が胸を撫で下ろしていた。
尤もそのまま稽古を続行できる訳も無く、あえなく本日は解散となった訳だが。
「薄々分かっていた事ではありますが……この娘、天才だけどアホですわね」
呆れを隠さないエーデルの言に、彼女の従者も、そしてミラも反論の言葉を持たなかったのである。残当。

ともあれ、凸凹主従コンビと別れた後、二人は師弟水入らずで中庭――練武場と化している場とは対となった、本来の用途である休息や憩いの場として機能している箇所で、並んでベンチに腰かけていた。

首回りや頭部に念入りに回復魔法を掛けなおしたミラが、痛みに顔を顰めていた弟子の表情が和らいだのを見て一つ頷く。

そのまま再びスノウの頭に手を伸ばし――自身の一撃を受け流した少女の髪の状態をチェックする作業を再開する。

「……やはり、無理のある技のようですね。受け流した箇所が傷んでいます」

「う～ん、そっかぁ。使った後もすごい疲れたし、あんまり実用的じゃないのかもね」

「練度を上げればその限りでは無いのかもしれませんが……止めておきなさい、年頃の女の子が自分の髪を痛めつけるものではありませんよ」

大きな戦争中だ。ミラ自身も含め、戦場に出ている女性はごまんといる。

敵に掴まれる危険などもあるが、古来より女の髪には神秘が宿るとされ、願掛けも込めて伸ばす者は多い。

実際に優れた魔力資質を持った女性の髪を用いた呪法や魔具もある為、決して無意味では無いのだ。

何より、こんな時代だからこそ。

ミラは目の前の弟子に、年頃の少女の楽しみや喜びといったものを投げ出して欲しくはなかった。

「……別にいいよ、この髪のせいで不吉だーとか散々言われてるし、いっそばっさり切ったって」

「私には美しい髪だという感想しか出てきません」

ほんの少しだけ暗さを見せたスノウの横顔を見た瞬間、遮るように言葉が口をついて出る。

少しびっくりした様子で振り返って見つめて来る弟子に、しっかりと目を合わせ、言い聞かせる様に断言した。

「以前にも言いましたが白子(アルビノ)が不吉の象徴、などというのはただの迷信です。貴女の白雪の様な髪も、赤宝玉(ルビー)を思わせる瞳も、多くの人が綺麗だと思うことでしょう」

それでも人の弟子に不吉だなんだと文句を抜かす者が出てきたら、師として彼女が出るまでの話である。

己の渾身の《星辰》を打ち込んでも耐えられるのなら、意見を聞かないでも無い。もっとも、一撃耐えるのなら効く迄殴るだけだが。

実在するかも分からない不埒者へと謎の闘志を燃やしているミラに、スノウは面映ゆそうに「ありがと」とだけ口にした。

「にしても、やっとミラに一発当てる事が出来たと思ったんだけどなぁ……無我夢中だったけど、あんなみっともないオチじゃ駄目だよね」
「……負けず嫌いなのは戦士として長所に成り得ますが、今回はそこまで拘るような話だったのですか？」
負けん気の強い娘だとは知っているが、圧倒的な差がある相手に一発入れる事を固執するほど頑迷でも無い筈だ。
それだけに、今回は妙に拘るスノウが少しばかり奇異に見えた。
師の疑問に、少女は唇をとがらせてそっぽを向く。
「……めて……えると思ったんだもん」
「？」
ボソボソと、口の中だけで呟かれた言葉にミラが怪訝な顔をしていると、うがーっと叫んだスノウが何かを振り切るようにベンチから立ち上がる。
「あーもうっ、何でもない、この話終わり！　明日からまた頑張るぞーっ！」
「ふむ。よく分かりませんが、やる気や向上心に溢れているのは大変に良い事です」
「どーもっ！　じゃ、ご飯食べにいこうミラ！」
何処かやけくその様な、ちょっと怒っている様な謎のテンションで中庭を離れようとする少女の背に、ミラは珍しく少し悩み――そして声を掛けた。

「スノウ」
「――ん？　何？　早く行こうよ。お腹すいたし」
振り向いて首を傾げて来る彼女の前に立ち、見つめ返してくる深紅の瞳を見下ろして。
「乱用出来る様なものでは無いとは言え、頭髪を用いた《流天》の運用――見事なものでした」
数瞬、躊躇ったが、それでも師は思い切った様に弟子へと手を伸ばし……その柔らかな純白の髪を、ぎこちなく掌で撫でる。
「……頑張りましたね――誰がなんと言おうと、貴女は私の自慢の弟子です。それを忘れない様になさい」
少女の瞳が、大きく見開かれ。
その眼が、自分では無く背後を見ている事に気付いたミラが、残像すら見える凄まじい速度で振り返る。
「あっ」
「げっ」
「ぬぅ」
樹の陰から首だけ覗かせ、ニヤニヤして師弟を眺めていた馬鹿三人とばっちり眼が

合った。
「……そこで何をしているのです」
「い、いやぁミラ、偶然だねぇ」
やたら低い声で尋ねる……というか詰問してくる友人に、三者を代表して癖っ毛の金髪美青年――ヴェネディエが引き攣った顔で応える。
「た、たまたまそこで二人と一緒になってね、君とスノウの姿が見えたもので、つい様子を……」
「ガンテスと一緒にいる場合は中庭に近寄りすらしない貴方が、ですか？」
「い、いや、今回は本当に偶然なんだって！　二人も何か言ってやっておくれよ！」
ダラダラと顔から脂汗らしきものを垂らし始めたヴェネディエが、背後の友人達からも同意を得ようと振り向いて……そこに既に誰も居ない事に愕然とした。
「ちょ、ラック!?　ガンテス!?　何処に行ったんだい、冗談はやめっ」
悲鳴を上げかけた青年の整った顔面に、一瞬で問合いを詰めたミラの情け容赦無いアイアンクローが喰い込む。
「二人は逃がしましたか……まぁ、後でしっかり問い詰めるとしましょう」
「待って、待ってくれミラ！　別に悪気があったとかそういう訳じゃ……！」
青年の顔の骨格が軋むように音を立てた。

ついでに、その小柄な体躯が無表情になった女傑の右腕一本で吊り上げられる。
「言い訳は結構。本当の処はどうなのです？」
「ア痛ダダダッ!?　すいませんなんか面白そうな光景が『視えた』ので二人を誘って見に来ましたァ！　やめて折れちゃう寧ろ割れる砕けるぅ!?」
若き大司教を右手でぶら下げたミラは、背後で呆気に取られている弟子を振り返った。
「スノウ、私はコレを含む馬鹿者三人に折檻をせねばなりません。貴女は先に食事を済ませてしまいなさい」
「あ、うん……えーと、いってらっしゃい？」
殆ど反射的に頷いた少女へと「ええ、いってきます」と返し、師は顔面を鷲掴みにしたままの青年を引きずって歩き出す。
「あれだけ見え難い、と言っていたのに徒に使用する余裕があるのなら、遠慮は無用ですね。久しぶりに本気で稽古をつけてあげましょう」
「あ、これひょっとして僕死んだ？　女神の御許に強制出荷されるやつ？」
足早に歩を進め――おそらくは残りの二人を探しに向かったのであろう師と、ズルズルと引きずられながら悟りを得た賢者の様な声色で呟く青年。
二人の姿が見えなくなると、昼時を過ぎた中庭に再び穏やかな静寂が戻って来て。

なんとなく、先程のぎこちない、不器用な掌の感触を思い出して、頬が緩む。

「……へへっ」

ぬくもりが残る気のする自身の髪を撫でて、少女は喜びを噛みしめる様にはにかんだのであった。

老兵の残照　師弟の口論

「おのれ、偽りの神を頂く能無し共が！　我らの真なるか……」

趨勢の決した戦場において、その男が何を言おうとしたのか――興味を持つ者もいないだろう。

邪神の軍勢、その中でも特に強い加護を与えられたのであろう男は、掌底を胸板に捻じ込まれ、血反吐を吐きながら大地に転がる。

（なんなのだ、この女は。化け物か……！）

邪神に与えられし加護によって、並みの攻撃ではかすり傷ですら与えられぬ筈の己の身体を、素手でここまで破壊したシスターを理解不能の生き物を見る目付きで睨み付ける。

従えていた部下も、顕現した眷属も、忌々しい教会の者共……この女を中心としたごく少数の手勢によって滅ぼされてしまった。

よほど強力な聖気でも撃ち込まれない限り即座に復元する筈の肉体の損傷も、治るど

ころか白煙を吹き上げてじくじくと未だに身を侵食してくる。
こちらの攻撃は全て冗談の様に逸らされ、流され、無力化され。
返す刀で打たれる一撃によって、部下も、召喚した魔獣も、全てが滅ぼされる。
これだけの戦力を滅しておきながら、当の女は多少手傷を負った程度の軽傷であり。
対して、他の者とは比べ物にならぬ程の神の欠片を受容できる己ですら、先の打撃で既に身体が崩壊寸前になっている様は悪夢でも見ている心地であった。
おそらく、姿を見ない他の配下や同胞もこの女の仲間に打倒されている。
こと此処に至って、既に己の生存は絶望的。
ならば、真なる神の信徒としてこの蒙昧共に神の恩寵を示すのみ。
男は覚悟を決め、なんとか身を起こしながら吠える。
「……薄汚い教会の狗め……！　舐めるなよ、我らが神の恩寵、その腐れた目にしかと映すが良い！」
目の前の怪物シスターによって此方の主戦力は根こそぎ打倒されてしまった。
だが、だからこそ死した同胞や神の欠片たる眷属の破片がこの地に満ち、より強大な神の欠片を召喚する為の土壌は整っている。
それらを触媒とし、更に己の身を捧げる事で上位の眷属すら呼び込めることであろう。

魂の内にある神の加護を励起させ、男は避け得ぬ己の死とそれによって齎されるであろう敵の絶望に、引き攣る様な笑みを浮かべた。
自らの死を引き金に、戦場に満ちる全ての欠片を励起させんと、男が最後の祈りを自らの信奉する邪神に捧げようと口を開いた瞬間――。
対峙していたシスターが、僧衣の裾を蹴上げる様に脚を振り上げる。
大地を震わせるような凄まじい踏み込みを以て地面が割れ、円状のクレーターが発生した。
すらりと伸びた脚に踏み砕かれ、陥没した地点を中心に周囲の邪気が吹き払われる。
「――へぁ？」
男の最後の祈りの言葉は、間の抜けた吐息となって口の端から零れ落ちた。
あまりにも埒外、あまりにも想像の外にある光景に、呆然としたその口から言葉だけでなく涎まで垂れ下がる。
そんな男の様子には一切頓着せず、シスターは尻もちをついた男の脳天に無造作に拳を押し付けた。
「あ……待っ」
「《命結》」
忘我の状態から脱却出来ぬままに、のろのろと静止の声を上げようとした信奉者の言

葉を待つ事も無く。
極限まで練り上げた魔力が拳を伝ってさざ波の様にその身体に広がり――邪神の加護に満ちた五体は、血肉と泥の混じり合った赤黒い血煙となって消し飛んだ。
大陸中央部に近い今回の戦場での敵勢力の主力……その過半数を殲滅した女性――ミラは、暫しの間、構えを崩さず残心を保ち。
「――はぁ」
ややあって、珍しく……本当に珍しく、どこか憂鬱そうに溜息を吐いた。

派遣された戦域、近くにある街や貴族の領地などの領軍からの歓待や、領主などの面会。
事務的に必須であるもの以外は全てそういった誘いも断り、ミラは今回同行した巨漢の僧――ガンテスと馬車に揺られ、聖都への帰路に着いていた。
戦力、という点だけで見れば魔族領の最高幹部である《災禍の席》の面々もこの二人に劣らぬものなのであろうが、魔族領自体が帝国から遠く南下した場所にある事に加

え、トップの《魔王》を中心としてどいつもこいつも好きに暴れるのが大好きな問題児だらけの為、領地に近い大陸南部以外では殆ど名を知られていない。

対して、人類種において最多を誇る人間の最大宗教であり、人類種を一枚岩として纏める役割を果たす聖教会の看板戦士ともいえるミラ達《四英雄》は、様々な戦地に派遣され、行く先々で多くの戦功を打ち立てている為にその人気や知名度は非常に高い。

とはいえ、自身をただのいちシスターなどと宣うミラを筆頭に、凡その人間が思い浮かべる栄誉栄達といったものに関心の薄い面々ばかりなので、大抵は各地有力者からのお誘いなどはスルーしているのが実際の処であった。

ガタゴトと揺れる馬車の上で、ミラが再び溜息を漏らす。

「なんとも、ミラ殿らしからぬ覇気に欠けた御様子。何か胸に閊える心配事でもお有りですかな？」

向かいに座ったガンテスの声に反応して顔を上げる女傑の動作には、確かに何時もと違って鉄芯が通ったようなキビキビとした様子が感じられなかった。

彼らが移動に良く用いるドワーフ製の高級馬車は頑強さ第一ながらも、ある程度快適性も確保するように設計されているのだが……獣人などの大柄な種族と比べても尚巨体と言って良い筋肉修道僧が座るとやや狭そうにすら見える。

対面の座席に身を丸めて巨躯を納め、少しばかり眉根をよせて心配そうな表情をみせ

る後輩に、ミラは頭を振って応えた。
「……情けない処を見せてしまいましたね。貴方こそ、今回の戦線では顕現した上位眷属を単騎で相手にしたと聞きましたが……問題は無かったのですか？」
「いえ、確かに援軍として取り急ぎ駆けつけたのは拙僧のみでありましたが、現地で戦っていた方々の援護も多大にありましてな！　実に心強いものでありました！」
　喧しいと言ってしまえばそうなのだろうが、相も変わらず豪快だが人の良さが滲み出るガンテスの物言いに、少しばかり活気を分けて貰ったかのようにミラも調子を取り戻して相槌を打つ。
「確か、大森林近くの領軍とエルフの戦士達の合同軍だったのでしょう？　後者の方達はひどく排他的だと聞き及んでいましたが……その分だと心配する様な事は無かったようですね」
「む？　そういえばそのような話も聞いたことが……しかし拙僧が共に戦った方々は、友軍にも隔たり無く敬意を払う一角の戦士達ばかりでしたぞ？　代表者であったエルフの御婦人も、援軍として参った拙僧に丁寧に礼を述べて下さる気持ちの良い御方でした」
　また道が交わることあらば、共に戦いましょうと仰っておりました！　と、上機嫌に笑って言う筋肉の言葉に世辞や相手への配慮といったものは感じられず、どうやら本当

に良い戦友達との出会いがあったようだ。
大森林近辺の人類種の軍からは、腕は立つが高慢に過ぎる、などと手厳しい意見も多いエルフの戦士達だが……少なくとも彼が共に戦った者達は例外であるようだった。
「良き出会いがあったというのならば、何よりですね」
「このような時代ですからな。共に戦地を駆ける戦友が壮健であり続ける事、創造神に祈る日々であります」
「鍛錬しながらですか」
「鍛錬しながらですな！」
ニッカリ笑う巨漢の言葉に微かに苦笑らしきものを浮かべ、ミラは馬車の外の景色に眼を向ける。
僅かな間、車輪が轍を刻みながら地を進む音だけが馬車の中に響き。
「――悩みの種はスノウ嬢ですかな？」
ガンテスが唐突に向けた言葉に、無意識に吐き出そうとしていた吐息を詰まらせ……そこで己がまたもや溜息を洩らそうとしていた事に気付いた。
「……そこまで私は露骨でしたか？」
「というより、ミラ殿が戦地に向かう際に見送りを欠かさぬ彼女が、今回の出立時に限っては姿を見せませぬ故。何かしらあったとは思うておりました」

あぁ、そうだった。この後輩は鍛錬鍛錬筋肉鍛錬と一見シンプルな思考をしている様に見えて、意外と細やかに周囲を見ているのだ。

気にはしていたのだろうが、下手に指摘してこれから戦地へ向かうミラの意気や集中が殺がれる事を危惧したのだろう。帰りの馬車で話題として切り出そうと、機を伺っていたのかもしれない。

戦友に本格的に心配をかけていた事を自覚し、己の不甲斐無さに天を仰ぎたくなった。見上げた処で見えるのは馬車の天井なのだが。

この分だと聖都にいるヴェネディエは勿論の事、帝国方面に向かったラックにも気づかれているだろう。

ガンテスはともかく、この二人の方はニヤニヤと笑いながら指摘してくるのが目に浮かぶ。有難いが同時に腹の立つお節介を受けたくなければ、早々に問題を解決しておく必要があった。

「……どうにも理由が不明なのですが……あの子は怒っているようなのです」

「ふむ。師弟喧嘩、という訳でも無さそうですな」

「私は別段、腹を立てているという訳では無いですからね。ただ、スノウがあそこまで臍を曲げる理由が分からず……正直お手上げです」

「うぅむ。よろしければスノウ嬢が憤りをみせた際の前後の状況をお聞きしても？　愚

僧は年若い少女の思慮など察するに遠い無骨者ではありますが、当事者以外の者ならば気が付く事もあるやもしれませぬ」
いつものミラならば、友人といえど弟子との間に起きた問題を語る、などと言う事は軽々とは行えなかっただろう。
多少迷いはしたものの、結局は少女が怒りをみせた切欠となったであろう会話を語りだす辺り、相当に参っている事が伺えた。
「……あれは、今回の戦地派遣の数日前……稽古を終えた後の話なのですが……」

「貴女は一度、師に会うべきなのかもしれませんね」
「んぇ？」
切欠はなんだったのか。
その日の稽古を終え、中庭のベンチに座って師弟で語らってる最中、ふとミラは呟いた。

いつぞやの模擬戦以降、なんとなく習慣となった稽古後のおしゃべりの時間は、様々な事を互いに語る場となった。

今日のごはんが美味しかった、起き抜けに見た朝焼けが綺麗だった、といった他愛の無い事から。

かつてミラが潜り抜けた戦場の話や、スノウの村での生活や思い出といった、一言二言では語り尽くせない事まで。

いつもの様に色々な事を語り、聞き。

風に吹かれた風車のように、くるくると表情を変える弟子の少女を前に、師がひどく穏やかな面持ちで相槌を打つ。

以前のミラを知る者であれば、初見は間違いなく驚くであろう。

滅多に見る事の無い柔らかな雰囲気もそうだが、なによりも。

戦場に出撃して帰って来て寝て起きて出撃して帰って来て寝て起きて飯食って出撃して……常人なら過労死待った無しのワーカホリックにも程がある生活サイクルだった彼女が、まっとうな休息を摂るようになったのだから。

ひょっとしたら、困惑や驚きよりも「あのミラ様がやっと休みをとって下さるように！」と喜ぶ者の方が多いかもしれない。

尚、生活サイクルのおかしさと言えばどこぞの筋肉（以下略

とにかく、全く休む気配が無かった教会の最高戦力を、きちんと休息を摂らせることの出来る存在。

そんなポジションに収まったせいか、弟子であるという事を差し引いてもスノウは聖殿にいる者達から頗る評価が高かった。

尤も、当人にその自覚は無く、今も唐突に切り出された話の内容にキョトンとした表情を師に向けている。

「……ミラのお師匠様？　ってことは、え～と……龍の御姫様、って人だっけ？」

「ええ、そうですね。師は此処より遠く離れた大陸北端、最高位の神秘の地である霊峰に居を構えています」

ブランが作ったと言う焼き菓子――その御裾分けを頬張りながら首を傾げるスノウに、「行儀が悪いですよ」とやんわりと注意しながら、ミラは少女の口元をハンカチで拭ってやる。

ミラの師、《三曜の拳》の開祖である《半龍姫》。彼女とスノウを引き合わせる。

前々から考えていた事ではあった。

始めにその才能の片鱗を目の当たりにした際に感じた通り、スノウは驚異的な速度でミラの教える技術を吸収している。

あと一年も経てば、ミラやガンテス、ラックと言った教会最高戦力と呼ばれる者達の

戦場に随伴しても足手纏いにはならないだけの領域に到達するだろう。
それこそ五年……いや、三年もあれば、師であるミラに並ぶ……否、超えるのではないか。
そんな予感を抱いてしまう程に、その成長速度と才は圧倒的だった。
このまま修練を積めば、ほぼ確実に何れはミラを超えるであろう白い少女に、それが実現した際に新たな道を示せる人物――自分達の流派の開祖であり、戦武を修める者の頂点に立つ《半龍姫》を紹介しておくのは当然の選択であった。
とはいえ、もう少し先の話だ。師の住まう地……霊峰の特異性と其処に住まう者達の脅威を考えれば、今のスノウではまだまだ不安がある。
登頂の際にミラが同行する事を加味しても、霊峰の頂周辺に棲む主級の霊獣……その『値踏み』に適う領域（レベル）に到達する必要があった。
そんな将来の予定図を、簡潔にまとめて弟子に語るミラであったが……当の弟子の反応は芳しくない。
「……別にいいよ、霊峰ってアレでしょ？　わたしの村よりずーっと北の方にあるでっかい御山の事でしょ？　そんな遠くに行きたくないし」
先程まで和気藹々と会話していた様子から一転、不機嫌さすら滲ませて此方の提案に難色を示す少女に訝しさを覚えつつも、ミラは将来的には必要になる事だ、と重ねて言

い募った。
「我が身の未熟さを晒す様ですが、師ならば私よりも余程貴女の才を仔細に把握できる筈です。何れ技量において貴女に伍する者が居なくなったとき、あの方の導きは絶対に必要になります」
「いつの話してるのそれ。わたしがミラより強くなるとか、全然イメージ湧かないよ」
奇妙な事に、ミラが言葉を尽くす程にスノウの機嫌は悪くなっていった。
最初は少し面白くない、といった風であった表情も、今でははっきりと眉を顰めて唇をとがらせている。
「他の人になんて教わらなくてもいい。今のままでも強くなってると思うし」
「いえ、ですから。貴女の成長速度を考慮すれば――」
いよいよもって不機嫌を通り越し、いっそ険悪な雰囲気すら漂わせ始めたスノウに、ミラが困惑を覚えながらも説得を続けようとすると会話を打ち切る様に少女が大声を上げた。
「――とにかく行かないったら行かない！　意地悪ババアみたいな事いうミラの言う事なんて聞かないからね！」
「誰がババアだ」
ここ最近はめっきり減った弟子の悪罵に、反射的にお仕置き代わりのチョップをその

脳天に落とそうとして――手刀が空を切る。
手刀を予測していたのか、発言と同時にベンチからパッと腰をあげて飛び出していたスノウは、そのまま中庭を駆けだし、あっという間にミラと距離を取ってしまう。
色々な意味で呆気に取られ、珍しく硬直している女傑に対して最後に不機嫌そうな表情のまま振り返って。
「いーっだ！」
顰めっ面で歯を剥き出し、ちいさな子供の様に反抗の態度を示して。
少女は肩をいからせ、中庭から出て行ってしまったのであった。

「……と、言う様な事があったのです……それ以降、普段の訓練ですら逃げ回る有様でして……」
車輪の廻る音と馬の蹄が地を蹴る音が微かに響く馬車の中、悩まし気に溜息を洩らすミラに沈黙を以て返し、ガンテスは腕組みして暫し思考に耽る。

今はなんといっても戦時中だ。不和や仲違いを起こしたまま何方かが喪われてしまう、などという遣る瀬無い光景も何度か見た覚えがある。

そんな彼としては、長い事交流のある尊敬する先輩と、過酷な体験をしたというのにへこたれずに日々を過ごしている少女、両者の関係が拗れたりはしていないかと、内心ではそれなりに気を揉んでいたのだ。

だが、蓋を開ければ話はそう深刻なものでは無かった様で。

当人達からすれば大事な話なのだろうが、傍から聞けばなんともまぁ、微笑ましい話であった。

素直に自分の思いを言葉に出来ない少女もそうだが、ミラ迄こういった機微に疎いのは予想外で少しばかり笑みが零れそうになる。

或いは、誰しも自分が当事者となればこんなものなのかもしれない。

うっかり笑ってしまえば目の前の女傑が不機嫌になるのは明白なので、如何にも考えてます、といった風に渋面を作りながら頷く。

「スノウ嬢がそこまで立腹された理由、拙僧の考えをこの場で申すことも出来ますが……おそらく正解であると思うております。なればこそ、言う事は出来ませぬ」

「……私が気付かねばならない、ということですか」

「もしくはスノウ嬢と話合って彼女の口から聞く事、ですな。強いて言うなれば、件の話

題を振った理由――修練の進捗ではなく、ミラ殿の心情を以て語ってみるのは如何でしょう?」

大口を叩いた身でありながら、確たる助言も出来ずに申し訳なく、と続ける巨漢の言葉をミラは首を振って否定した。

「いえ、御蔭で大分気が楽になりました……そうですね、帰ったら多少強引にでも捕まえてもう一度スノウと話をしてみるとしましょう」

悩みを他者に話す事で楽になる場合もある。今回の自分のケースは正にその典型であった様だ。

言葉の通り、憂鬱であった胸の内が多少晴れた様子で、ミラは再び馬車の外へと目を向ける。

何時もの己であれば、この様な煮え切らない半端な真似はしないのだが……どうにも弟子が絡む事では知らなかった自身の一面を知る場合が多い。

良くも悪くも、あの子と関わる事で新たな発見や新感覚を覚えることばかりだ。

思わず、そして今度ははっきりと頬に苦笑が浮かび、けれど決して嫌な感覚では無くて。

帰ったらこちらの姿を見るたびに頬を膨らませて逃げ出す、強情っ張りな弟子をどう捕まえてやろうか、どう話を切り出そうか、思いを馳せながらミラは窓の外から覗く秋

の空を見上げる。
溜息はもう零れなかった。

時間は少し戻り、聖都は大聖殿。中央区にある食堂にて。
紅茶を口にしていた、渦を巻いた特徴的な髪を白いリボンでまとめた少女――エーデルが、カップをソーサーに戻すと鼻を鳴らして口を開いた。
「それで、結局ミラ様が戦地に向かうときに見送りすらしなかったと。ガキですわねぇ」
「うぐっ」
呆れを隠さずに、言葉通り小さな子供を見る様にぬるーい温度の瞳で見つめて来る友人に、白い髪と紅目の少女……スノウは反論出来ずに唸り声を上げた。
彼女が師と喧嘩――というより、一方的に怒って避けて廻っている事はエーデルも直ぐに気付いた。
というか、スノウとエーデル、ブランによる三人組でのミラとの模擬戦は今も続いて

いるのだ。数日ごとであるとはいえ、ミラが戦地に赴いたとき以外はその間隔が乱れたことは無かった。

本来は模擬戦が行われるであろう日がお流れになり、友人間の普通の訓練すら白い少女が顔を出さないとくれば、何かあったと思うのは当然だろう。

「貴女を思っての提案だということくらい、分からない程あんぽんたんでは無いでしょうに。いつまで子供のような意地を張っていますの」

「だって……」

長卓を挟んで向かい合うように座り、腕を組んで言う友人の言に、スノウは唇をとがらせながら小声で抗弁する。

エーデルに言われるまでもなく、スノウだって分かってはいるのだ。

他に比較対象がいる訳でも無いので自分ではさっぱり分からないが、どうやら覚えが早いらしいスノウの為に、ミラがあれこれと将来的な事を考えている事くらいは、理解している。

でも、それでも。

師の口から、『弟子が自分の手から離れたとき』の話をされるのが、嫌だった。物凄く。

子供だと笑われるのも仕方ないのかもしれない。

けれど、ミラの口からまるで自分を別の人に預けるかの様な発言が出たときに、彼女

が感じたのは強烈な拒否感で。
スノウ自身も持て余す様な強い感情は抑えようもなく、半ば喧嘩腰に師の言葉を遮る結果になってしまった。
なんでそんなこと言うの。
組手だって全然勝てないし、ミラのつくる綺麗な流れに比べたら全然うまく出来てないのに。
まだまだ一杯、教わることだってあるのに。
……うまく出来たら、頑張ったら褒めてくれるのが嬉しかったのに。
わたしがミラより強くなるなんて全然思えない。
もし、そうなったら……わたしを別の人に預けるの？
ぐるぐると、どこか重苦しさを伴った色んな思考が渦を巻き、気が付いたらご覧の有様である。
数日経って多少は頭が冷えたと思っても、本人を前にするとついつい逃げ出してしまう辺り、中々に重症であった。
ミラだって自分を思って口にした発言なのだ。いい加減、何日も日を跨いで怒り続けるのもどうかと思う。
本当はスノウだって謝りたい。何時もの時間に、何時もの関係に戻りたい。

――でも、ここまで引っ張ってしまうと言葉にしづらかった。自業自得なのだが。
「……全く、この半年でわたくしに勝ち越す程に腕を上げた癖に、肝心要のハートの方はおこちゃまのままとか、世話の焼ける子ですこと」
スノウが暗い表情になったのを見て取ったエーデルが、苦笑いしながら友人の額へと手を伸ばし、人差し指で弾いた。
「痛っ、なにすんのさ、おでこちゃんめ」
「お黙り、おさる。素直になれないお子様に謝れる切欠になるものを教授して差し上げますわ」
デコピンされた額を撫で、抗議の視線を向けて来る白い少女の言葉にぴしゃりと切り返すと、そのまま弾いた指を突き付ける。
「そのままではどうにも謝り辛いというのなら、謝罪を兼ねた贈り物でもしてメッセージでも忍ばせなさいな。尤も、きちんと言葉に出来るのならその方が良いのですけど」
「贈り物……ミラに貰ったお小遣いでミラに謝る為の物を買うの……？　なんか違くないそれ？」
「チッチッチ。物品を購入するだけが手段ではないですわよ？　貴女、北方の出でしょう。季節柄、豊穣祭に因んだ贈り物などが良いのではなくて？」
突き付けた指を左右に振りながらドヤ顔を見せる友人の言葉に、スノウも思い当たる

物があったのか「あ、そっか」と関心の声を上げた。

豊穣の日。或いは豊穣の祭りの日。

そう呼ばれる一日は、創造神……女神が最も自然の実り多くなる日、と定めたとされるもので、秋のもっとも大地が肥ゆる時期に訪れるとされている。

戦時中の今であっても――否、こんな時代だからこそ、大きな街などでは控え目ながらも祭日として催し物を開く場合も多く、ここ聖都でも区画ごとに小規模なお祝いをするのが例年のお約束となっていた。

スノウの出身地である北方の小さな村では祭りらしい祭りなど望むべくもなかったが、それでも豊穣の日が訪れれば小さな装飾を拵えて家を飾り、その日の夕食も少し豪華になったりと、ささやかながら特別な時間を楽しんだものだ。

そんな北方の村々に伝わる、豊穣の日に作る習わしの品があった。

決まった手順や図で木板や紙などに浅く彫り込みを入れ、微小ながら魔力を籠める事が出来るようした小さな護り札。

大抵は親が子の安全と成長を願って拵え、渡すのが主流だったが、スノウは祖父や祖母が彫ってくれた木札に仕上げの御祈りをする係だったので、朧気ながら作り方も知っている。

家族や恋人、友人といった親しい人間に渡すものとされているので、確かに今の彼女

の現状にはうってつけの品かもしれない。
　謝罪云々は勿論、いつも戦地に出掛けるミラを見送るしかない自分にも、お守りを作って渡す事くらいは出来る。
　そう思い至ったスノウは、目を輝かせながら席を蹴って立ち上がった。
「……いいね、時期的にもぴったりかも！　ありがとエーデル！」
「どういたしまして。まぁ、先程までのショボくれた顔よりは随分とマシですわね」
　ヒラヒラと軽い調子で手を振る友人に礼を述べ、早速材料を集めようと食堂を出ようとして……そこでスノウはふと疑問を思いついた。
「……そういえば、よくエーデルは護り札の事知ってたね？　帝国にも似たような風習とかあったの？」
「わたくしも詳しい訳じゃありませんわよ。ただ、ブランが北方で育ったもので、その関係で知っていただけですわ」
　なるほど、普段から嘗ての主従という範疇に留まらず、親しい二人だ。互いの事を話す際にそんな話題も出てくるものだろう。
　流石に長年の付き合いの二人には及ばないが、自分も結構仲良くやれていると思うし、今度もっと色々と話をしてもいいかもしれない。
　だが、取り敢えず今は材料集めだ。

改めてエーデルに礼を言うと、白い少女は慌ただしく食堂を後にする。
その背を見送り、ドリルなツインテールとキラリと光るおでこが特徴的な少女は温くなってしまった紅茶を一口啜り、カップに揺れるそれを眺めながら一言呟いた。
「――ブラン」
「はい。ここに」
名を呼ぶと同時に、何処からともなくスゥッと現れた栗色の髪の少女に憮然とした表情を向ける。
「……やっぱり居ましたの。というか、どっから出て来てるのか未だにさっぱり分かりませんわ……貴女、本当はＮＩＮＪＹＡとかではなくて？」
「斥候や隠密の技能を習得した記憶はありませんね。強いて言うのなら、従者としての嗜みです」
「え、マジですの？　わたくしが知らないだけで、世のメイドや執事ってこんなんばっかりですの？　怖っ」
ニコニコと笑顔のままで、謎の隠形を嗜みと言い切るブランにやや引いた様な雰囲気で頬を引きつらせた。
咳払い一つして、場を仕切り直す。
「オホン！　……話は聞いていたのでしょう？　時間があるのなら、あのおさるにそれ

となく助力してあげなさいな――あの子、才を見せる面とアホの子の面のふり幅が極端ですし」

件の護り札作りとやらが得意分野で無かった場合、苦戦するのが目に見えている。

助言した身としては、みっともない失敗をされて仲直りが上手くいきませんでした、などというオチは勘弁して欲しかった。

「私は勿論かまいませんが……お嬢様も大概素直ではないですよね？」

「喧しいですわよ。それに、指示したわたくしが言うのもなんですが貴女の方はどうなんですの？　ヴァリアン家の再興を諦めたつもりはありませんが、もうわたくしに従者の様に付き従う必要は……」

「必要、不必要は関係ありませんね。好きでやっている事ですので」

従者を名乗るのであればあるまじき行為ではあるが、強引に遮る様に言葉を被せたブランに、主人である少女は思わず口を噤む。

笑顔のままではあるが、『それ以上は断固として言わせない』と言わんばかりの雰囲気を放つ栗色の髪の少女から目を逸らし、敢えて気の無い風を装って返す。

「そ。なら好きになさいな……貴女も大概物好きですわね」

「ええ、そうさせて頂きます。好きですからね……おや、お耳が赤いですよお嬢様？」

「喧しいですわよ!?　早いとこ護り札の資料でも材料でも集めにお行きなさい！」

口に手を当ててオホホホ～なんて此方を揶揄って笑う従者に、卓に置いてある布巾を投げつけたくなる。流石に品が無いのでそれは堪えたが。

熱の残る頬や耳元から熱さを逃がすように、エーデルは手の甲で軽く髪を払う。

主の言葉に従いブランが食堂を退出すると、人気の少ない食堂に自然と静けさが戻った。

今日は良い天気だ。壁際の大きな窓は開け放たれ、穏やかな秋口の陽気と空気が緩やかに少女の髪を揺らす。

……白い少女の師たる御仁は、今は戦場だろうか。

或いは、あの女傑の事だ。もう片付けて帰路に着いているのかもしれない。

だとしたら、彼女が帰ってくる迄に精々あと一日か二日。それまでにスノウが例の物を形に出来ると良いのだが。

なんにせよ、万事上手く行ってとっとと仲直りして欲しいものである。

最近では、師弟というより家族の様に見えて来た二人の姿に、嘗ての両親が存命していた頃の自分を思い出してちょっぴり感傷に浸るエーデルではあったが、それは決して悪い感情では無く。

寧ろ、友と尊敬する人物の穏やかな時間を護れる戦士になる。そんな風に思える自分がちょっと誇らしかったり。

なので、今の状況は歓迎出来なかったりするのだ。
「……見習いでいるのもあと僅か。出来れば、このまま戦士として立つ日を迎えたいですわね」
以前は、一刻も早く戦士として戦場に立てる様、功を上げていつの日か亡き両親に代わり、御家を再興出来る様にと、少しばかり焦っていたと、今では思う。
少なくとも、今は新たに出来た友人の御蔭で、焦燥感・停滞感とは無縁の忙くも充実した日々を送れている。
あんまりにもシケた顔をしていた少女を見かねて声を掛けたのが始まりであったが、今ではこの出会いを女神に感謝してすらいた。
だから、エーデルとしてはスノウ（あの二人）とミラには何時も通り、仲睦まじくいてもらいたいのだ。
大切な者、護るべき者の幸せの為に、意思と誇りを以て戦武を振るう。それが彼女の貴族としての在り方であると、そう定義しているが故に。
窓から覗ける、秋晴れの空を眺める。
偶然にも、遠く離れた戦地からの帰り道、ミラが同じく眺めている空を、彼女も見上げ。
やはり同じ様に、白い少女がこれからも笑顔である事を祈りつつ、帰りを待つ者と帰

る者――両者の時間は過ぎてゆくのであった。

老兵の残照　御守り

薄い木板に、慎重に小刀を当てる。
記憶にある図柄を思い出しながら、ゆっくりと木目を削り、ときに指で擦り、嘗て祖父が作った物と差異が無いか、指先の感触で確かめる様に。
元より、そう凝ったり複雑なデザインでは無い。作業自体はあっという間に終わった。
そうして、簡素な紋様を彫り終えた木札を両の手に持って宙に翳す。
豊穣の日にはこうして女神様にお祈りするのだと、祖父母が教えてくれた通りの所作で、ゆっくりと札に魔力と通そうとして。
「――あっ」
乾いた音を立て、木札の真ん中に大きな罅が走った。
破損箇所や規模こそ違うが、同様の結果になってこれで三枚目である。
「うぐぐ……む、難しい。じいちゃんとばあちゃんはあんなに簡単に作ってたのに……

！」

壊れた木札を前に、ぐったりと作業を行っていた机の上に突っ伏す。

自室で作業を開始して既に小一時間。

友人が危惧した通り、スノウの護り札を作る作業は絶賛難航中であった。

材料自体は薪や木工家具の端材なので、聖殿内だけでも食堂を筆頭に様々な場所で手に入る。

太めの枝や古くなって壊れた家具の切れ端でも祖父は器用に紋様を彫っていたが、流石にそれは難易度が高いので一番簡単そうな小札での作成を選んだ訳だが……これが中々に難しい。

いや、彫って紋様を入れる作業自体はそう大変でも無いのだ。

彫り込む線は精々数本。それほど深さも必要ないし、難しい形でも無い。多少歪ではあるが、大体は記憶通りの物が出来たと思う。

だが、最後の御祈りで壊れる。

祖母が言うには、女神様に感謝を捧げながら渡したい人に為に御祈りすると、護り札

が完成するらしい。

実際、家にいた頃はその通りにやれば出来ていた。彫った紋様が淡く光を放って綺麗なのだ。

幼かったスノウが初めてそれを見たときは、興奮してわざわざベッドに潜り込み、微かに発光する札がまっくらなシーツの中を照らすのを確認して喜んでいた記憶がある。

「うーん……なんで壊れちゃうんだろ？……魔力を籠め過ぎなのかな」

当時は分からなかったが、この彫った溝に薄っすらと魔力を通していたのだと思う。

豊穣の日に村中の家の玄関や柵に掛けられた札の中では、スノウの家の物が一番綺麗に光っていたし、それが密かな自慢だったりした。

魔力の操作や意識的な放出なんて無縁だったあの頃でも、村で一番の光り具合だったのだ。

今ならきっと凄く輝いたりするんじゃないかと、気合を入れて魔力を通したのが一枚目。ちなみに木目に沿って真っ二つになった。

ならば、と。先程よりも慎重に、半分以下の量と流動速度でリトライしたのが二枚目。やっぱり真っ二つになった。

取り敢えず、出来はともかく最後まで魔力を通したいと思ったので、細心の注意を払って微量を流したのがつい先ほどの三枚目だ。結果はご覧の有様だが。

「……何か原因があるのかなぁ……材料も無限って訳じゃ無いし、どうしよ」
家の扉に掛けていたようなサイズだと流石に嵩張りそうなので、スノウが拵えているのは掌に乗る様な小さなものだ。祖父が紐を通して首飾りにしてくれた物と同じくらいの大きさである。
「……毎年作ってもらった小札を紐に通して段々と増やしていったっけ……」
何枚もの護り札が連なった、あの首飾りはどうなっただろうか。
……おそらく、燃えてしまったのだろう。最後に村で見た光景が、ごうごうと火を上げるスノウと家族の住む家だったのだから。
「やめやめ、暗い事ばっかり考えても仕方ないよね」
渡す人の無事を祈る物を沈んだ表情で作ってどうするんだと、少女は勢い良く首を振って嫌な方向に傾いた思考を追い出す。
取り敢えず、あと二、三個ほど作って更に流す魔力を調整してみよう。
それでも駄目なら、聖殿にある書庫――難解な言葉で埋め尽くされた本を見ると頭痛がするスノウは、滅多に近寄らないが――に向かい、北方の風習なんかについて書かれた本を探してみよう、参考になる事が書かれているかもしれない。
そう思い立ち、再び小さな木札を手に取ると部屋の扉がノックされる。
「スノウさん、今よろしいですか？」

「あれ、その声はブラン？　珍しいね、どうしたの？」
ノックの後に聞こえたのは友人の声だった。
今開けるよー、と扉越しの声に応えながら席を立ち、自室のドアを開ける。
「ちょっとした作業をするなら、中庭もあるかと思ったのですが……自室の方だったんですね」
開けた先に待っていたのは、何時もの修道服姿である栗色の髪の少女である。
ただし、その両手は荷物で塞がっていた。
見た処、スノウが部屋に持ち込んだ木の端材と同じような物と、何某かの本、だろうか。
ブランが持ってきた品を見て、なんとなく察する。
「……あー、エーデルが手伝う様に言ってくれた、とか？」
「正解です。もの凄く分かりやすいでしょうけど、気付かないフリをしてあげて下さいね？」
相変わらず、お嬢様のちょっと捻くれた好意を容赦なくバラしていく従者スタイルである。これに関しては素で同情しちゃうスノウであった。
バレたらバレたで照れるお嬢様が可愛いので問題ないですが、とか言い切るブランに、とりあえず部屋に上がるように促す。

「正直、ちょっと煮詰まりかけてたから手伝って貰えるなら助かるかな。ミラも何時帰ってくるか分からないし」
「お任せを、と言い切りたい処ですが、私も護り札作りなんて久しぶりですからね。参考になりそうな本を書庫から借りて来たので、一応目を通しておきましょう」
そんなこんなで、頼もしい助っ人と共に作業は再開された。

元々、この護り札作りというのは、魔装に施された魔力導線を刻む作業を極めて簡略化させたものらしい。
強力な武器にも防具にもなる魔力を通した装甲を模した飾りを御守りとするのは、霊峰に近い強力な魔獣が生息する地方からの発祥だとか。
ブランが持ってきた本は何気に二人も知らなかった故郷の風習について、その起こりが詳細に記されていた。
当然、彫り込む紋様についてもある程度書かれている訳で。
なんでも、ある程度決まったパターンが存在しているようで、深さや幅、線ごとの間隔が理想とされるものに近ければ近い程、通せる魔力の量も増えるとの事。この辺りは

本家の魔装と同じ理屈だった。
　スノウが先程作ったものは、やはり諸々が荒く、歪だったということだろう。ロクに力を蓄える事が出来ない導線に許容量を飽和する魔力を流し込んだ結果、札本体に負荷が掛かって破損した、という事だ。
「……うわぁ、こんなに繊細な作業だったんだ……じいちゃんはこう、ササーッと彫ってわたしに渡してきたんだけどなぁ」
「私も北方にいた頃に何度か作りましたけど、最初はまともな物を一つ彫るだけでも結構な時間が掛かった記憶がありますね。スノウさんのお祖父さんは余程作り慣れていたのか……或いは過去に魔装処理を行える職人だったのかもしれません」
「わたしが覚えてる限りでは、じいちゃんの仕事といえばもっぱら畑の世話だったけどね」
　お喋りを挟みつつ、二人とも視線は机の上に広げた木札に集中し、本に描かれた図面を参考にしながら慎重に紋様を彫り進めてゆく。
「と、出来た。お手本の御蔭でさっきよりはマシになったけど、やっぱりちょっと曲がってるかも……」
　スノウは彫り終えた小札をくるくると廻して角度を変えて眺めてみるも、図面と比べればやはり少し歪だ。

理想とされる図面があるのは大きいのか、先程よりは出来自体は良くなっているのだが。

隣に座って同じく作業していたブランが身を乗り出し、白い少女の手にある作品を眺めて記憶にある護り札と比べてみた。

「この位ならば最低限の魔力は通ると思いますよ？　北方で伝わる御守りとしては大体これくらいの出来が殆どだと思います」

一応、成功作ではあるらしい。とはいえ、もっと上のクオリティを目指せそうではあるので仕上げは保留とする。

「わたしの中では、じいちゃんの作ってた物が基準なんだよね。出来れば人に渡すならあの位にはしたい」

「スノウさんのお祖父さんの作った品の精度がどれ程の物か、私には知る由もありませんが……ミラ様が聖都に帰還なさる迄に間に合いそうですか？」

「うん。がんばる」

可能不可能ではなく、帰って来た答えが単なる根性論の主張であった事に、ブランが苦笑した。

まぁ、最後の御祈り――魔力を通す作業はそう時間が掛かるものでもない。彼女の師が帰ってくるまでの間、ひたすら数を作って紋様の精度を上げるというのもアリだろ

う。
「そうなると、もう少し材料になる端材があった方が良いですね。追加で頂いて来ます」
「うん、ありがとう。助かる」
自身の作業を一旦止めて席を立つブランに礼を言いつつも、スノウの視点は小札から逸らされなかった。どうやら集中状態に入ったらしい。
一旦友人が席を外し、一人に戻った自室の中、木を削る音だけが静かに響く。
幾つか、段々と出来の良くなってきた物を削り終えた辺りで、ブランは再び戻って来た。
顔をあげたスノウの鼻腔を、茶葉の良い香りがくすぐる。
その手には木片の端材……ではなく、紅茶の香りが立ち上るティーセットが乗ったカートを押している。
端材の方はカートの下段に籠に入って載せられていた。どうやら材料集めのついでにお茶も淹れて来てくれた様だ。
「お茶を用意しましたが……キリの良い処で休憩にしませんか？　長丁場になるのなら根を詰めるのはよくありませんよ？」
「もらうもらう、喉はかわいてたんだ。いやー、ありがとう」
木札を脇に寄せると軽く木屑を払い、机の上にティーセットが置かれる。

カップと一緒に小皿に乗った焼き菓子も添えられ、スノウは先ず最初にそれに齧りついた。
「んまーい！　これ、この間もらったやつと同じだね。また食べたいと思ってたからありがたいや」
「気に入って頂けたのなら嬉しいですね。お嬢様もお好きな様なので、定期的に作っているんです」
上機嫌に笑ってパクパクと口に焼き菓子を放り込む白い少女の食べっぷりに、栗色の髪の少女もニコニコと微笑みながらほんの少しだけ自慢気に胸を張る。
休憩がてらのちょっとしたお茶会。紅茶と菓子に舌鼓を打ちながら、スノウはふと思い出した事をブランへと尋ねた。
「……そういえば、エーデルがブランは北方出身だって言ってたと思うんだけど、どの辺りなの？　意外とわたしの村と近かったりするかな？」
「正確には私の出身は帝国らしいですね。物心つく前に北方に移り住む事になり、六年程前にお嬢様に出会って従者となった形です」
場所的には北方入口にある小国の孤児院の出らしい。そこで余り豊かとは言えないながらも、院長や同じ孤児達と力を合わせて暮らして居たそうだ。
そこにやって来たのが、当時はまだ爵位を保持していたヴァリアン家の御息女……

エーデルという訳だ。
「へぇ……六年の付き合いかぁ。専属の従者になった位だし、その頃から仲が良かったんだねぇ」
「いえ、寧ろ出会った当初は嫌いでしたよ？　華やかな帝国の御貴族様が、一昨日来やがれ。なんて思ってました」
「――ブファ!?」
笑顔のままで「開幕バケツの水をぶっかけて中指立てましたね」とか仰るブランさんの言に、スノウは口にしていた紅茶を気管に詰まらせ、悶絶する。
それがどうして今ではエーデルにべったりなのか、とかそこまで嫌っていた理由はなんなのか、とか色々と思う処はあったがそれよりなにより。
孤児が貴族のお嬢様に水ぶっかけるというのは怖い物知らずにも程がある。下手をすればその場で従者に斬り殺されかねない。
今の穏やかな振る舞いからは想像が付きにくいが、以前の彼女は相当ロックな娘だった様だ。
咳き込むスノウの背を少し慌てて撫でてやりながらも、ブランはどこか懐かしそうに過去を振り返った。
「ただの貴族の娘というのならそこまで毛嫌いはしませんでしたが、ヴァリアン家とい

うのが私的に引っ掛かりまして。私も子供でしたし、あのときはつい感情的な対応になってしまいましたね」
「けほっ……元は帝国産まれって言ってたっけ。何か因縁があったとか？」
「えぇ。私、当時の御当主であったヴァリアン子爵の娘らしいんですよね――お嬢様とは所謂腹違いの姉妹というやつです」
「おっふ……」
極めて軽い調子でサラリと告げられた内容が、予想の五倍くらい激重だった。
口をあんぐりと開けて絶句するスノウに、栗色の髪の少女は唇の前に人差し指を立てて「スノウさんにだから話したんです。他の人には内緒ですよ？」なんて言って笑う。
「い、いや誰にも言ったりしないけど……それわたしに話して良い事なの？」
「もうヴァリアン家自体が戦でお嬢様以外の血縁は亡くなっていますので。お嬢様もスノウさんなら問題とは思わないでしょう」
なんでも、ブランの母は帝国でも弓の名手として知られたハーフエルフの戦士だったらしい。
そんな彼女が、戦場で轡を並べたヴァリアン子爵とどの様な交流があったのか。既に当人達が亡くなっている為、真相は知る由も無いが。
結果として彼女は子爵の子を身籠り、生まれたばかりの赤子を連れて帝国を去った。

遠く離れた北方の地で、まだまだ幼いブランを残して病で逝去した彼女の胸中は如何ほどのものであったのか。
「『父を恨まないで欲しい』母にはそうお願いされたので、憎しみは持たないように心がけてはいましたが……それはそれとして『嫌う』のはいいよね、ということで本人が目の前に現れたら唾でも吐いてやろうと思っていました」
「それブランのお母さん的にはオッケーだったのかな?!」
「さぁ?　私も聖人君子では無いですから、母の思いと自分の気持ちの折衷案として出した結論ですので」
母の友人でもあった孤児院の院長に引き取られ、カツカツの運営を少しでもマシに回す為に大人も子供も一丸となって過ごす日々。
そんな中でやってきたのが、自分の腹違いの妹――人類最大国家で貴族として何不自由なく暮らすお嬢様だと知れば、塩対応も宜なるかな。
「初日に水ぶっかけて追い返して以降、御供の方々も待たせて一人で何度もやってくるもので、流石に根負けして話を聞く事にしたんです」
六年前、といえばブランもエーデルも本当に子供だった筈だ。特にエーデルなんて下手をすれば年齢一桁だったのでは無いだろうか。
貴族相手に水濡れにさせて中指立てるブランも大概だが、その妹も幼い頃から相当に

肝が据わっていたらしい。
聞いていると中々にハラハラするエピソードなのだが、語るブランの表情は酷く穏やかで、懐かしそうで。
門前払いを繰り返していたエーデルをとうとう招き入れ、院長と一緒に三人で話をしたときの事を思い返す彼女の瞳に、見て分かる程に暖かな光が灯る。
まず最初に、エーデルが行ったのは深々と頭を下げる事だったらしい。
父の不貞。責を負う事もせずにブラン達母子を放置していた事。
今日に至るまでそれを知らず、帝国で呑気に暮らしていた自分の不甲斐なさ。
諸々を含めて、本当に心苦しそうに幼い少女は謝罪を繰り返したのだそうだ。
どう聞いても十歳前後の子供の発言では無い気がする。
少なくとも自分が同じ年頃だったときは、近所の悪ガキ相手に取っ組み合いのケンカしたり一緒になって悪戯したりと、もっとアホだったなぁ、とスノウが思うのも仕方がない。
「いくら隔意がある一族の娘といっても、自分より年下の女の子ですからね。そこまで真剣に謝られては、嫌いなままでいるのは難しかったんです」
とはいえ、ブランとしてはその時点ではエーデル個人に向ける感情が負に傾いたものでは無くなった、程度のものだったらしい。

明確な変化があったのは、その後。

特徴的な巻き髪の少女が、かわいいおでこの下にある眉根を寄せ、深刻な表情で懺悔する様に御家のこれからの対応について語ったときだった。

この期に及んで、ヴァリアン家はブランの血筋を表立って認める事はしないと。

そして、そんな事こそ認められない。いつか自分が父の後を継いで当主となった暁には、絶対にブランを直系の血筋であると一族全員に認めさせ、帝国で周知させてみせると。

必死な形相で、当時のエーデルの立場では口約束にしか出来ない言葉を紡ぎながら。

それでも縋るように、願うように。彼女はブランを見つめたまま、懇願する様に呟いたのだそうだ。

――その血筋を公にも出来ず、確たる証も立てられない。

そんな無力で愚かな小娘が、心の中だけでも貴女を姉と思う事を、どうか赦して欲しい。

「……泣きそうな顔で、私の返答を待つお嬢様を――あの娘を見たときに、なんというかストンと胸に落ちたんです。〝ああ、この娘は私の妹なんだな〟って」

ブランにとって、その瞬間の光景と感じた想いは何にも代えがたい大切な記憶(モノ)なのだろう。

お嬢様の――妹の当時の様子を語る彼女の声は、気恥ずかしさと少しの誇らしさ、何より溢れんばかりに家族(エーデル)への愛情に満ちていた。

それからの事は殊更に特筆する様なものではない。

エーデルの言葉を受け入れ、そして彼女と共に在る事を望んだブランは従者という形で家族の――妹(エーデル)の隣に寄り添い続けた。

ブランにとって、既にヴァリアン家は大して重要でもなければ興味を惹くものでも無い。

ただ妹が望むから、その再興を手伝っているに過ぎない。彼女にとって真に重要なのはその過程においても結果においても、エーデルの傍に自分が居続ける事だった。

「……そっかぁ。ブランはエーデルのお姉ちゃんなんだね」

スノウの胸に、暖かな感情と共に微かに羨望の様な想いが湧く。

肝心の御家が無くなったというのに、それでも二人が共にいるのは、主従ではなく家族――姉妹だから。

シンプルだがこれ以上無く納得できる理由だった。

物心ついたときには両親はおらず、家族は祖父と祖母だけだった白い少女にとって、

兄弟姉妹という家族の在り方は馴染みが薄く……それ故に二人の関係がとても眩しく見える。

「……ん？　もう貴族じゃないんだよね？　それなら身分とか気にしないで普通に姉妹って大っぴらに言えるんじゃない？」

「えぇ、ですがお嬢様はヴァリアン家の再興を諦めてはいませんので。一応主従としての体裁は保つ様にしています」

今なら普通に姉妹と名乗れるのではないか？　そう首を傾げるスノウに対し、ブランは澄ました顔で応えて――最後に悪戯っぽく笑って付け足した。

「……なので、二人だけのときに不意打ちで家族として対応したりしてますね。これがまた……ふふっ、可愛いんですよ？」

「うわー、意外と意地が悪いなぁ……それはそれとして、わたしもそのときのエーデルの反応は見てみたい」

「残念ながら秘密です。あの娘が顔を真っ赤にして慌てる姿は、当分は私だけの宝物なので」

そこで互いに目を見合わせ、二人は同時に吹き出す。

「あはははっ、残念！　でも、それじゃ仕方ないね。あとでそれをネタにからかうだけで我慢しよっと」

「私がいるときにやって下さいね？　照れながら怒るお嬢様も見て愛でたいので」
　揃って割と酷い予定を立てながら、空になったカップを片付ける。後で存分に弄り倒されるであろうデコロールちゃんに幸あれ、といった処だ。
　お茶と焼き菓子の皿を片付け終えると、スノウは気合を入れて腕まくり。
「さて、良い話も聞けたし。続きをがんばるとしよう！　なんかアガって来たし、この際だから豊穣の日に併せてお世話になった人に配れるくらいに作るぞぉっ」
「折角ですから、私も聖殿内の知人に渡せる様に幾つか拵えてみましょうか。頑張りましょうスノウさん」
「おうさ、ミラが帰ってきたら驚く位に出来が良いのを作る！」
　改めて気合を入れ直し、少女二人は小刀を手に取って無数にある木札へと立ち向かうのであった。

「――で、結局あのおさるは目的の品を満足いく出来で作れましたの？」

次の日、食堂で朝食を終えて中庭へと向かう傍ら、エーデルは傍を歩くブランへと問いかけた。
「はい。スノウさん曰く『じいちゃんが作ったのに近い感じがする』小札は、私がお暇する時点で数点は作れていた様なので。ミラ様の帰還に間に合わないという事は無いと思います」
「それは重畳。助言した上に従者まで貸し出したのですから、これで間に合いませんでしたなんて言ったらわたくしが一番の道化ですもの」
気の無い素振りで従者（姉）の言葉に応じる御嬢（妹）様であるが、もっともらしく顰めていた眉が微かに開かれ、表情が柔らかくなったのを当然ブランは見逃さない。
さて、指摘して慌てる主人を愛でるか、沈黙を選んでこのまま御機嫌な主人を愛でるか。
一瞬悩んで――今回は後者にしたようだ。微笑んだまま、少しだけ前を歩くエーデルの背を見つめている。
「しかし、その割には食堂に姿を見せませんでしたわね……訓練に関しては、この際ミラ様との仲違いが解消されるまで目を瞑るにしても、日々の食事まで疎かにするのは感心出来ませんわ」
「心配なようでしたら、後でスノウさんのお部屋に様子を見に行ってみますか？」

「別に心配なんざしてませんわよ――ですがまぁ、あの子の事ですから徹夜して机で寝こけている、なんて事は有り得そうですわね。そうだとしたら叩き起こしてやるのも悪かないですわ」

振り向いてブランを見つめ、今日の訓練を始める前に部屋に突撃しますわよ、と即座に予定を変更したエーデルの顔にはでかでかと『スノウが心配』と書いてあるようで。

あぁ、今日もお嬢様が可愛い。と、実に良い空気を吸っているブランが、笑み崩れそうになる表情筋を引き締めて微笑みに留まるように努力していると。

「あーっ！　いた！　エーデル、ブラン、おはよう！」

廊下の向こう側から、話題にしていた当人が姿を現した。

朝っぱらから妙に元気良く、小走りに駆け寄ってくると二人の前で急停止する。

「良かった、行き違いとかになったらどうしようかと思ったよ！」

「ちょ、近い近い。近いですわスノウ。貴女ひょっとして寝てないんですの？　ただでさえ目が紅いのに充血してるせいでエラいことになってますわよ」

徹夜明けのテンションというやつか。いつもより数段騒がしい白い少女が、目の前でぴょんぴょん跳ねそうな勢いでエーデルに詰め寄る。

「大丈夫だよ、作業に集中してたらなんか気が付いたら朝だったし、多分少しは寝たと思うから」

「それは睡眠とは言いませんわ。今すぐ回れ右してベッドに向かいなさいお馬鹿」
「いーからいーから、それよりコレ！」
お嬢様に額をペシンと叩かれるもなんのその。
その手を取るとスノウは掌に自分の持っていた物を押し付ける。
訝し気に渡されたものを確認したエーデルの目に飛び込んで来たのは、丁寧に彫り込まれた紋様が淡い光を放つ小さな護り札だった。
「まずはエーデルにあげる！　アドバイスくれた御礼ね！」
「……貴女ねぇ、大方他の方の分も作ったのでしょうが、ミラ様以外は後回しにしても良いでしょうに。それで睡眠を削るというのは――」
「あとこれ、ブランにも。昨日は色々とありがとう！」
「あら？　私にもですか。ありがとうございます」
「聞けや」
今更気が付いたが、スノウの手には小振りな籠がある。エーデルに渡した物と同じ様な小札が結構な数で入っているのが見て取れた。
聖殿（ココ）の知人に片っ端から渡すつもりなのだろうか、このおさるは。
和気藹々と自分の従者と話している友人を、エーデルは呆れを隠さない視線で眺める。

「よし、次は食堂の人達に渡してくる！　じゃぁ後でね！」
「いや、渡し終えたら寝床にお行きなさ……聞いちゃいねぇですわ」
既に踵を返して食堂に向けて走りだした白い少女の背を見て、溜息を一つ。
「やれやれ……朝っぱらから嵐の様でしたわ」
「お嬢様、頬が緩んでいますよ」
「おだまり」
首ごと顔を逸らすおでこちゃんに、笑いを堪えながらブランは懐に手を入れて。
「スノウさんも目標通りの品を用意できたみたいですし、豊穣の日には少し早いですけど……私もお渡ししておきますね」
そう言って差し出されたのは、スノウが作った物とよく似た、小札の御守りだった。
目をぱちくりとさせて、エーデルは従者の――姉の顔を見上げる。
「……貴女も作りましたの？」
「はい。スノウさんのようにお世話になった方全員、とはいきませんでしたが」
手の中にある二つの護り札を暫し眺め。
唐突に、エーデルはその特徴的な巻き髪を纏めている白いリボンを解く。
下ろした髪を再び手早く纏め、リボンを結び直す過程で小さな札を髪に挟み込む様にして。

片方のソレを終えると、反対側のリボンも解いて同じように護り札を髪の間に忍ばせるように纏め直した。
通路の真ん中に鏡がある訳でも無く、全体像をチェックすることは出来ないが、白い飾紐の傍に添えられた簡素な札に触れて満足そうに鼻を鳴らす。
「……ま、悪くないですわね」
「お望みなら、小札を色合いが映えるように染色しますが？」
「このままで。この札も、リボンも、友人と姉が贈ってくれた物ですもの。手なんて加えるのは勿体ないですわ」
はにかむのを堪える様な、そんな表情で言葉を溢す妹を、姉はあやうくその場で抱き締めそうになるのを我慢して。
そんな家族にそっと腕を伸ばして、掌で触れるように手を繋ぐとエーデルは今度こそ嬉しそうに微笑んだ。
「小札を挟んだ髪を纏めるのって、難しいみたいですの。だから――明日はお姉さまに朝の髪のお手入れ、手伝って頂きたいです」
「……えぇ、明日と言わず。これからも、何時でも。私は御嬢様の従者で、エーデルのお姉ちゃんですからね」
お互いに笑い合って。

少しだけ名残惜しさを感じながらも、繋いだ掌を放し、主従（姉妹）は歩き出したのであった。

聖都に帰還後、手早く報告書を作成した女傑は壱ノ院にいる後輩へと書類を提出しに来ていた。

「ご苦労様……にしても、今回も上位眷属が出て来たか……やはり頻度が上がっているね」

「ええ、以前貴方が言っていた大きな動き。本当に近々起こるかもしれませんね」

執務室の机の上で難しい表情で腕を組むヴェネディエの言葉に、ミラも重々しく頷く。

「現状では連中の出方待ちしか選べないか……元々が世界規模の防衛戦と言っても良い戦争だからね。後手に回るのは仕方ない面もあるが……中々に歯がゆい」

「なんにせよ、覚悟だけは決めておきましょう――あたら無辜の民が犠牲になるような

事は断じて防がねばなりません」
　ここ最近では、極々直近の未来以外は視る事が困難になってきた自身の加護の事もある。なんとか十分な兵力と物資をいつでも動かせる様に整えておきたい処だ。
　とはいえ、それは自分の仕事。現場で戦う友人に心労を掛ける事も無い。
　重くなった空気を入れ替える様に、若き大司教は掌をパン、と打ち合わせて話題を切り替えた。
「そうそう、聞いたかい？　君の弟子――スノウが北方での豊穣の日の特産物を拵えて色んな人に配り歩いた件は？」
　僕も貰ったんだよ。と、執務机の脇に置かれていた木札を取り上げて見せる後輩に、ミラは頷いた。
「ええ、知っています。私もスノウから渡されましたからね」
　そう言って懐から取り出した護り札を軽く掲げる彼女はヴェネディエも初めてみる表情――ドヤ顔だった。
　なんとも、スノウが関わる事ではこの女傑の知られざる一面を見る事が多い。
　彼としては愉快なので大変に結構、いいぞもっとやれと白い少女に喝采を送りたい処だ。
「ふむ。確かに良い出来だね。僕達にプレゼントしてくれた物も手作りの御守りとして

は中々良い品だが……ミラの物はちょっとした民芸品として売りにだせそうだ」
「あげませんよ?」
「いや、流石に強請ったりしないよ。あの娘が関わると本当に面白くなるね君」
大事そうに小札を懐にしまいなおすミラに、揶揄う様に……いや、完全に揶揄う気満々でニヤリと笑って問いかける。
「まぁ、仲直りできた様で何よりだよ。背筋が微妙に丸まった君というのも新鮮で、見てて面白くはあったけどね」
「……やはり知っていましたか。相変わらず意地が悪いですね」
嫌そうに顔を顰める彼女に向かい、椅子の背もたれに背を預けて大仰に肩を竦める。
「君の師が関わる話となると、立場上嫌でも耳が大きくならざるを得ないんだよ……で、結果的にはどうなったのか聞いても?」
「……スノウと話し合った結果、彼女が私に技量で迫る領域に至った後、改めてどうするか決めれば良い、と」
「先延ばしか。君らしくもないね」
ばっさりと言ってのけるヴェネディエの言葉に、沈黙を以て返すしかない。
ミラとて弟子の育成計画において妥協を許しているようで、よろしくないとは思っているのだ。

だが、本人が乗り気で無い事を強制したところで今回の一件の様な事が起こるだけである。

それに……弟子の成長を願わなくてはならない立場の者としてはあるまじき事ではあるが。

『――教わるならミラが良い。他の人は嫌だ』

唇をとがらせて、そっぽを向きながら言われた言葉がひどく効いたのも事実である。

それでも、先延ばしという形でもスノウを師の元へ送ることを諦めきれないのは、彼女ならば届き得る師の領域――そこに彼女が手を伸ばす瞬間を見てみたいと思う、己の未練か、それとも――。

「始まりは才覚に惚れ込んだ、という形だったとはいえ、君が今抱いている望みは別におかしなものでは無いよ。親しい者に向ける想いとしてはごく真っ当なものさ」

「……ヴェティ、貴方は本当に意地が悪いですね」

飄々とした普段とは打って変わり、いっそ優し気ですらある後輩の声に、心からやり辛そうに女傑は唸り声を洩らした。

あぁ、そうだ。

まだまだ己に及ばないとは言っても、現時点で既にスノウの技量は戦士見習い、などという立場にあるべきではない領域にある。

此処から先は、鍛錬も勿論だが実戦を経験した方が伸びも良い。丁度同じ時期に見習いを卒業出来そうな少女達もいる。

だから師に会わないかと、持ちかけたのだ。

師の元で鍛錬するならば、実戦を未経験であってもお釣りが来る程に得る物が多いだろう。

なにより、如何にスノウの才であっても師の高みに手を伸ばそうとすれば、ミラを超えるよりも更なる年月を必要とする筈だ。

だから、そうすれば。

師のもとに送れば、スノウが戦場に立つことになる時期を、大きく先延ばしにできるのではないか。

仮に彼女が戦う事になっても、師によって十分にその才を開花・研磨された後ならば、怪我や、万が一の事だって無くなるだろうと。

弟子の育成だなんだと謳っておきながら、脳裏にはそんな考えがいつも張り付いていた。

彼女とそう変わらぬ年で戦場に立ち、帰らぬ身となる少年少女など、大勢いるというのに。

その中に、喪われる若い命の中にスノウが加わる――そう考えたときに、ミラの胸中

に過ったのは恐れや脅えにも似た感情だったのだ。
何たる惰弱。何たる臆病。
師を名乗っておきながら弟子の力を信じる事が出来ず、鳥籠の鳥の様に安全な檻へと囲おうとする――このような情けない一面が己にあったのかと、愕然としたものだ。
そして、其処まで自覚しておきながらも、その考えを今も払拭出来ずにいる。
この様な腑抜けた己を、友人であり厄介な後輩でもある人物に悟られたというのは、ミラ＝ヒッチン、一生ものの不覚であった。
自身への怒り八割、態々指摘してきた友人への八つ当たりが二割で、急速に不機嫌になってゆくミラに、ヴェネディエが苦笑いする。
これ以上つつけば友人が本気で怒りかねない、そう判断して残りの事務的な連絡を済ませ、速やかに退出してゆく彼女を黙って見送る事にした。
執務室のドアこそいつも通りに静かに閉めたものの、気持ちいつもより荒々しい歩調で遠ざかっていく靴音に、独白するように言葉をかける。
「戦人としては、君の思っている通り良くない事なんだろうさ――でも、母が子を贔屓する、なんていうのは極々真っ当で、当たり前の話だよ」
当人達にどれだけ自覚があるかは知らないけど。と、そんな風に独り言ちて。
若き大司教は手の中にある小さな護り札を眺めて、再び肩を竦めたのであった。

老兵の残照　悲嘆（カレンデュラ）

「納得が行かない」
ブスっとした表情で白髪紅眼の少女――スノウが呟く。
「まだブーたれてやがりますの、いい加減諦めなさいな」
呆れを滲ませた声色で特徴的な髪型の少女、エーデルが応え、プクーっと膨らんだスノウの頬を指先でつつく。
そんな二人を何時もの様に微笑みながら見つめる、二人より少しだけ年上の栗色の髪の少女、ブラン。
スノウが大聖殿で暮らす様になり、そろそろ一年。
彼女の友人である凸凹主従（しまい）は一足先に見習いを卒業し、戦場へ向かおうとしていた。
エーデルとブランが向かうのは大陸中央、大森林付近で発生した小さな戦闘――所謂小競り合いと言って良い小規模の戦線だ。

一度は上位眷属が顕現した程の激戦区となったのだが、現在別の戦場で大暴れしている女傑と筋肉が敵方の主力を叩き潰して以降、散発的に小さな戦闘が起こるのみとなっている。

危険度も低く、初陣としてはうってつけといって良いだろう。

だが、スノウにとってそこは重要では無かった。

聖都城門前にて出立の準備を進める者達とそれを見送る者――後者としてやってきた少女は、昨日も幾度となく言い募った不満を口にする。

「なんで二人が実戦に出るのにわたしは無理なのさー。理由を聞く前にミラはまた戦いに出ちゃったし」

「何回同じ話をしていますの。見送りくらい快く送り出しなさい」

「だってさー、わたしに負け越してるエーデルが初陣に出れるならわたしだって良くない？」

「オーケー、そこになおりなさい。信奉者共の前にボコって差し上げますわおさる」

ゴキゴキと拳を鳴らして一歩前に出ようとしたエーデルを押さえ、ブランがとりなす様に割って入った。

「まぁまぁ。確かにスノウさんは驚異的な速度で腕をあげましたが、まだ訓練を初めて一年も経っていないでしょう？　いくら実力があるといっても、極端に短い訓練期間で

戦場に出る前例が出来てしまうのは良くないのでは？」
年齢的な問題もあるだろう。これが成人でならある程度のリスクは自己責任という事で戦地に向かう事も出来ただろうが、年若く、師兼後見人であるミラの監督下にあるスノウが戦場に出ることになるのはもう暫く先の話になる。
新兵の低年齢化や訓練の簡略化といった、よろしくない措置の悪しき前例となりかねない、と言われてしまえばスノウとしては黙るしかない。
「模擬戦で負け越しているのは事実ですわ。ですが、実戦でしか得られない貴重な経験もあるでしょう――そうなったら直ぐに戦績も逆転しますわねぇ、オーッホッホッホ！」
「ウギギギギ……勝ち誇るには早いぞおでこちゃん！　今の段階で勝ってるのはわたしなんだからね！」
まだ見習い卒業出来ないならその分ガッツリ訓練してやらぁ！　後で吠え面かくなよぉ！　なんて威嚇するように叫ぶ白い少女。寧ろ彼女の方がキャンキャンと吠える小犬の如き様相である。
未だに不満です、といった膨れっ面をしているスノウに向け、エーデルは先程までの煽るような態度を引っ込めて代わりに苦笑を浮かべた。
「まったく……派遣先の戦地はミラ様の御蔭で危険度の下がった地域であると、この間

も話したでしょう。心配されて悪い気はしませんが、今回はラック様も同地域に出ていますのよ？　危険どころか下手すりゃ後方で待機してる間に終わる可能性もありますわ」

「……し、心配とかしてないし！　た、ただ、ちょっと二人が怪我とかしたら嫌だなーって思っただけだし！」

「語るに落ちてますわよ」

先程と同じ様に唸りながら、しかし頬を赤らめて押し黙ったスノウに、エーデルとブランの生暖かい視線が注がれる。

三人の少女の間に満ちた暖かい空気――約一名にとっては居た堪れない空気だが――を、切り替えるように今回派遣される教会関係者を乗せる馬車から、集合するように声が上がる。

肩を竦めると、エーデルは背負った戦鎚を固定している肩紐を指先で位置調整した。

「時間ですわね。ま、貴女が見習いを卒業した際には先達として引率して差し上げますわ」

「訳すると『そのときまで待ってるから一緒に戦おう』ですね。それまでスノウさんは私達の武運を祈って下さると助かります」

「いらん翻訳を掛けるんじゃありませんわよっ」

「……うん、分かった。御祈りしとくよ。あと訳さなくても分かってるから大丈夫」
「二人ともおだまりっ！」
今度はドリルツインテールな少女が赤面し、攻守交代とばかりに生暖かい視線に晒される。
馬車に乗り込む様、再度上がる声にこれ幸いと、まだ頬に赤みの残るエーデルが二人の視線を振り切るようにズカズカと幌馬車の一つに向かう。
唯一、ずっと攻める側だった栗色の髪の少女が微笑んで一礼し、それに続いた。
この場に残る見送りの者達の一人となったスノウは、最後に幌の最後尾に乗り込んだ二人に向けて声を上げる。
「――二人ともいってらっしゃい！　無事に帰ってきてね！」
その言葉に、友人達は振り返って。
「……ったりめぇですわ！　帰ったらパインサラダを食べるので用意しておいて下さる？」
「それ言っちゃ駄目なやつって大司教様が言ってなかったっけ!?」
「ヴェネディエ様は『理解った上で敢えて言う事で効果が逆転する場合もある』とも言ってましたわ！　要は気合ということですわね！」
「もう、お嬢様ったら。力瘤なんてはしたないですよ？　……では、いってきますねスノ

ウさん」
不敵に笑って腕に力を込めるポーズで応えるエーデルに、目を剥いてスノウがツッコミを入れる。
その隣で相変わらず淡い微笑みを浮かべながらブランが手を振って出発の挨拶を返した。
そして、馬車が動き出す。
スノウがぶんぶんと手を振るのに、律儀に手を振り返してくれる友人達。
お互いに少しばかり気恥ずかしかったが、でも悪い気はしなくて。
少女はいつも師を見送るときと同じように、馬車が見えなくなるまで手を振り続けた。

さて、早くも次の日である。
エーデルに訓練をしっかりやっておくと啖呵を切った以上、一人であろうと自主訓練に打ち込むのみだ。
「……皆いないって何気に初めてだなぁ」

この聖殿の近い年齢の者達の中では、一番交流のある友人達は昨日見送りをしたばかり。ラックも同じ地に一足先に向かっているらしい。
ミラとガンテスは別の戦場で戦っている最中だ。
前述した者達の次点となるのが、本来なら雲の上の立場と言って良い大司教様ことヴェネディエなのだが、いつぞやも言った通り一対一は教育に悪いので駄目と師に言い含められているので、除外である。
彼自身はミラの弟子であり、彼女の面白い面を引き出してくれるスノウの事は思いの外気に入っている様なのだが。
基礎技術の《地巡》によって魔力の循環を行い、巡らせた力を五体に滑らかに行き渡らせつつも、久しぶりの完全な一人での訓練に何処か上の空になってしまう。
なんだかんだとスノウが一人で居れば理由をつけて会いに来てくれる者達がいた事を、今更ながら彼女は強く意識した。
「……今更だけど、わたしって結構恵まれた立場だよね」
最初は軽い気持ちで弟子入りしたおっかない女の人は、今では天涯孤独になってしまったスノウにとって唯一の家族みたいな人になって。
その人を起点にして、色んな出会いがあって、仲の良い友達や頼りになる沢山の優しい人達と関りを持つことが出来た。

例えば、あのまま生き残った村の者達と故郷の近くの領主様に難民として引き取られたとして、今の様な気持ちで日々を過ごすことが出来ただろうか。

……おそらくは無理だろう。陰鬱とした気持ちを抱えたまま、いずれは我慢できずに村に飛び出して行きそうだ。

だからこの環境に、自分を取り巻く今にスノウは感謝している。

なので、たかだか数日、一人になる時間が多いからといって『淋しい』なんて甘ったれた考えを抱いてはいけないのだ。

「――ッ、だめだめ、漫然と技をなぞるだけじゃ意味が無いってミラも言ってたし」

様々に胸中に浮かぶ思いに、集中しているとは言い難い自分を自覚して頭を振る。

フンス、と鼻息も荒く気合を入れ直し、中庭の片隅で少女は集中力を高めて最初から型を打ち始めた。

それから更に数日後。

「やぁ、おはようスノウ。自主訓練を頑張ってるみたいだね」

少女が朝の走り込みから帰ってくると、食堂前で一人で会話するなと言われている人

物と遭遇した。
とはいえ、向こうが挨拶をしてきてくれたのに挨拶を返さないというのも人として駄目な気がするので、普通に対応する。
「あ、おはようございますもやし（ヴェネディエ様）。こんな朝早くに珍しいですね」
「ちょっと待って、今凄い呼び方しなかった？」
顔を引き攣らせる若き大司教様にスノウは不思議そうに小首を傾げる。
別になにかおかしな事は言ってないと思うのだが。そもそもミラが『彼は大司教になって益々部屋に籠りがちになりました。あのままでは昔のもやし小僧に戻ってしまうでしょう』とか言ってたし。
なので心の中で目の前の青年は常にもやし扱いのスノウであった。立場上、戦士見習い兼シスター見習いの様になっている少女が大司教を呼ぶ呼称としてはぶっ飛んでいるのにも程があるが。
「……偶には僕も運動したほうがいいのかなぁ」
「よく分からないけど、身体を動かすのは良い事だと思いますよ」
持ち前の頭の回転でなんとなく察したのか、若干遠い目をして中庭の方に視線を飛ばすヴェネディエの言葉に頷いて同意を示す。
彼も朝食を摂りにきたのか、スノウに並んで歩き出すと二人は食堂の扉を開けて中に

入った。
「まぁ、今日は流石に止めておくよ。実の処、早起きではなくて、ついさっき抱えていた書類を片付け終えたばかりでね」
「あ、徹夜だったんだ？　お疲れ様です。寝ないと駄目ですよ、わたしはそれでこの前、友達に怒られました」
　なんとなく流れで二人連れ立って、厨房にメニューを注文し、席につく。
　てっきり途中で別れると思ったのだが、対面の席にニコニコと笑ったまま腰を下ろした青年に少女は再び首を傾げる。
「？　わたしに用があるんですか？」
「いやいや、特段用って訳じゃないんだけどね。寝る前に軽く何か胃にいれておくにしても、壁を眺めて食事するより可愛い女の子を眺めて食べた方が身体に良さそうだろう？」
「ミラに教育に悪いから一対一で話すなって言われてたんですけど、今すごく納得しました」
「師弟揃って辛辣だなぁ……！」
　卓の上に突っ伏して呻くヴェネディエを尻目に、サラダとハムエッグ、パンケーキとよく頼むメニューを前にスノウは手早く祈りを言葉を捧げ、フォークとナイフを手に

取った。
再三言うようだが、本来は雲の上と言っても良い立場の青年相手に、白い少女は全く委縮もせずに普通に会話している。
まぁ、そもそも彼女の師が自称いちシスターを名乗る聖教会決戦兵器みたいな女傑なので、今更だと思っているのかもしれない。単純に物怖じしない性格というのもあるだろうが。
しっかり走り込んでお腹を空かせて来た御蔭か、みるみるうちに朝食を平らげてゆく少女の健啖っぷりを眺めて、ヴェネディエは自身も注文したサンドイッチの皿を手元に引き寄せた。
「良い食べっぷりだねぇ……ミラやいつも一緒にいる娘達も居ないし、気を落としているんじゃないかと思ったけど、これは杞憂だったかな？」
「ふぁ？　ひんはいひてふゅれるんふぇふか？」
「うん。呑み込んでから喋ろうね。後でバレたら行儀が悪いってこわーい師匠に怒られるよ？」
そうだった。一人の時間が久しぶり過ぎてへんな処で気が緩んでいたらしい。
スノウは慌てて頷きだけで応じると急いで口を動かし、サラダを嚥下する。
水を一口飲んで一旦落ち着くと、苦笑している青年に向かって軽く頭を下げた。

「……ヴェネディエ様が心配してくれるのは、正直ちょっと意外でした。ありがとうございます」

「まぁ、ガラじゃないのは分かっているよ。でも、君の師は君が一人になる期間が長い、ということに大層気を揉みながら出撃していったからねぇ。時間があれば様子を見るくらいはするさ」

友人として、それくらいはね。　と言葉を結んで、苦笑から微笑みにシフトする大司教様ではあるが、スノウとしては師が自分を心配していたのが嬉しいやらくすぐったいやら恥ずかしいやらで、どうにも居心地が悪そうだ。

ミラを筆頭に揃って留守である普段少女が関わる大人達の代わりに、ちょっとだけ様子を伺いに来たらしい青年は、彼の友人達が危惧するような教育に悪い言動を取ることも無く。

暫くの間、穏やかに会話を続けると、皿の上のサンドイッチが空になると同時に席を立った。軽く食べたことでいよいよ眠気がきつくなってきたらしい。

「うん、流石に眠くなってきたから戻って仮眠を摂る事にするよ。君も無理しない範囲で訓練頑張ってね」

軽く手を振りながら食堂から出てゆくヴェネディエに、スノウも『おやすみなさい』とだけ返して座ったまま一礼する。

一人になって残ったパンケーキをもぐもぐと咀嚼しながら、彼女は不思議そうに呟いた。

「凄い普通の会話しかしなかったけど……どこが教育に悪いんだろ。皆心配し過ぎじゃないかなぁ」

少女は知る由も無い事だが、彼が素を出して話すと後で弟子が師にそのときの事を話した場合、高確率で女傑、筋肉、傭兵に三人がかりで組手（強制）させられる恐れがあったのでがっつり猫を被っていただけである。

そういったリスクを考慮した上で尚、女傑の弟子の様子を見に来る辺り、実は中々に友人想いではあるようだが……飄々とした青年の様子からスノウがそこまで汲み取るのは無理な話なのであった。

――次の日。

前日と同じように聖都外周を走り込みしていたスノウが、周回を終えて一息つく。

「大分慣れたもんだなぁ」

軽く息を切らせたまま、最初の頃は同じ距離を走って立つことも出来ない程に疲労困

憊になっていた事を思い出して苦笑いを浮かべた。
基礎体力を高める為に素の状態で走り込んでいるが、今の彼女なら魔力強化有りならば半分以下の時間で息一つ切らさずに同じ距離を走り抜ける事も可能だろう。
一歩進むごとに踏みしめる地から魔力を循環させ、途切れる事無く身体に巡らせながら、いざという時には瞬時の攻防に用いる事も可能だ。
比較対象が師である為、いまいち自覚の薄いスノウであったが、単純な《三曜》の精度という点で見れば、既に歴史上に存在した使い手の中でも上位と言って良い領域（レベル）に到達しようとしている。
肉体的な基礎性能はあくまで訓練を初めて一年弱の十代半ばの少女のものである為、総合的な戦力という意味では未だ嘗ての使い手達には及ばないのだろうが、それでも驚異的な成長速度であった。
自身の現在の力量――それには大して頓着する事も無く、少女は空を見上げて眉を顰めた。
「……嫌な天気だな……」
村が燃えてしまったあの日も、こんな曇天だった。
分厚い雲にお日様が隠され、どことなく薄暗くて重たく感じる空気のせいだろうか。
いつもより思考が暗くなっている気がして、気分を入れ替える様に軽く自分の頬をた

たく。

「よしっ、縁起でも無い事は考えないっ」

声に出して気合を入れてみるものの、それでもスノウの表情は何処か影が差したままである。

こんな風に負に偏った考えや雰囲気になるのは、先日、日が落ちる頃に聖殿にいる知人に嫌な話を聞いたせいだ。

大陸中央部――エーデル達が向かった戦線より更に先の、エルフ達の住む森で何かあった、とかなんとか。

現地に近い都市でも情報が錯綜している為、正確な内容が入って来てはいないが、それで酷くバタバタしていると知人――大聖堂で怪我人の治療を行っている人達から聞いた。

友人達が向かった戦場と、ある程度距離も近い場所の話だ。頭から追い払おうとはしても、どうしたって不安になってしまう。

「はぁ……とりあえず、帰ろ」

入れたはずの気合は直ぐに萎み、僅かに肩を落としてスノウは聖殿への道を歩き出した。

城門をくぐる際、すっかり顔馴染みになった門番の男性二人と言葉を交わす。

「よう、お嬢ちゃん。今日の走り込みは終わりかい？　いつも頑張ってるねぇ」
「うん。おじさんたちもいつも門番お疲れ。今日も頑張ってね」
「昨日、上司から連絡が回って来たんだけど、ミラ様は明日か明後日くらいには帰還なさるらしいよ。良かったねスノウちゃん」
何時もの様に、警備の人達と挨拶がてらの雑談交わしていたときであった。

凄まじい魔力の奔流が、聖殿の方角から立ち昇る。

この場からでも容易に知覚できる巨大なソレに、少女も、門番の二人も驚愕のままに瞬時にそちらへと首を向けた。
「な、なにあれ。聖殿（あそこ）であんな魔力が発動したの見た事ないよ！　何があったの!?」
「――ッ、ありゃ転移の魔法だ……！　聖殿内に座標を開けるっつー事は相当なお偉いさんに何かあったって事だぞ……！」
狼狽えたスノウの言葉に、苦虫を噛み潰した様な顔で応える壮年の門番へと、若い方が狼狽えた声を上げる。
「う、うぇぇ!?　それマズくないですか!?　ど、どうしましょう先輩、俺達此処で警備したままで良いんですか!?」

「馬鹿たれ、こんな時だからこそだ！　緊急性のある問題が発生した以上、都市外から情報を持った誰かがやってくるかもしれん――俺が待機しておくから、お前は一応上に確認を取りに行け、急げよ！　お嬢ちゃん、お前さんは急いで聖殿に戻れ！　場合によっちゃ大門閉じて締め出されちまうぞ！」

「わ、分かった！」

切羽詰まった様子で後輩に指示する門番の言葉に、スノウも慌てて走り出す。

一気に大きくなって広がる胸の不安を押し殺す様に、全開の魔力強化を施した脚で都市を駆ける。

（……ッ、エーデル、ブラン……ミラ！　大丈夫だよね？　違うよね？）

祈る様に、或いは、縋る様に。

ともすれば泣き出しそうになってしまう自分を叱咤しながら、白い少女は必死に聖殿への道を最短で走り続けた。

「――浄化結界の多重展開を急げ！　開いた《門》から敵性が乱入してくるかもしれん！」

「治療に必要な聖水が足りない！　酒保の在庫もあるだけ吐き出させろ！」
「包帯と清潔な布を！　裏手に乾したシーツを使って構いません！　急いで持ってきて！」
少女が聖殿内に飛び込んだとき、既に其処は戦場と見紛うばかりの怒号と喧噪、足音荒く移動する人々でごったがえしていた。
広大な敷地を誇る大聖殿中央区――その中心に聳える大聖堂の真ん前に、先程の莫大な魔力の源と思われる虚空に空いた穴……転移魔法によって開けられた《門》が鎮座している。
その傍には、赤いカソックを来た壮年の男性の姿があった。
顔を蒼白にしながらも、《門》に向けて魔力を注ぎ続ける男性の足元には、点々と赤い染み――血痕が落ちており、時間と共にそれは少しずつ増えていた。
「枢機卿（カーディナル）、《門》の維持は我々が行います！　先ず治療を受けて下さい！」
「駄目だ、君達では向こう側からの干渉があった際に保持が出来ん。味方の避難が終わるまで私が維持する……！」
服の色合いのせいで判別がし辛いが、足元だけでなく身体のあちこちからカソック越しに赤い染みを滲ませる男性――壱ノ院の枢機卿は、体力魔力の枯渇で飛びそうになる意識を無理やり繋ぎ止め、転移の魔法を展開し続ける。

腰を下ろせば気を失う、そう言って満身創痍をおして立ったままの彼の負担を軽減しようと、周囲には複数の神官達がついて全身に回復魔法を施していた。

開かれたままの《門》から現れるのは、剣士、兵士、騎士、弓兵、聖職者、魔導士。職業問わず、何人もの負傷した戦士達が肩を貸し合い、或いは背負われて聖殿の地を踏み、そこで力尽きた様にくずれ落ちる。

大小差はあれど、無事な者は一人としておらず、皆、傷を負っていた。

「何があった!?　あちらの戦線はどうなってるんだ!?」

「……分からんっ、エルフが急に戦力を引き上げて、空いた穴を埋める為の編成が終わる前に大規模な攻勢が始まった……！　枢機卿（カーディナル）が無茶をして《門》を開いてくれねば、我々も全滅していたかもしれん……！」

掴み掛からんばかりに問い詰める神官の言葉に、血に染まった肩を押さえて座り込んだ騎士が苦々しく応える。

「エルフが……!?　大森林の一件と何か関係があるのか？　都市はどうなった、近辺の領軍は!?」

「分からんのだ！　情報が入り乱れ過ぎていた！　野良の魔族が関わっているという話もあったが、確認を取る余裕なぞ無かった！」

知り合い同士なのか、神官と騎士が怒鳴り合っている間にも次々と負傷者が《門》を

通って運び込まれる。

「道を開けてくれ、重傷者だ！　早く浄化と癒しを！」

そんな声と共に、新たに《門》を潜った怪我人のもとへ、大量の医薬品やシーツ、聖水を抱えた治療の為の人員が駆け寄る。

血濡れで担がれ、または背負われてやってきた、特に重度の呪詛汚染や傷を負った者達。

――その中に、見知った顔を見つけて。

呆然と立ち尽くした儘だったスノウの喉から、引き攣った様な声が洩れた。

「――ッ、ヒ、あ」

真っ白なシーツの上に寝かされ、みるみるうちにそれを赤く染めてしまった傷だらけの修道服姿の少女。

普段はシスターの僧衣である帽子（ウィンプル）の下に隠れている、母親譲りの少しだけ尖った耳は、抉れて途中で欠け落ち。

治療を行う神官の手によって必死に抑えられている腹部には、大きな裂傷。

怖気が走る程の呪詛によって汚染されているそこは、負傷部位を黒く染めて侵食しな

がら内臓にまで達しているのが見て取れた。
いつもは優しい微笑みを浮かべて、スノウや――彼女の大切な家族を見つめている瞳は、今は力無く閉じられ、か細い擦過音が喉から漏れるばかりだった。
「……ブ、ら……ッ！」
栓をされたみたいに声の出ない喉から、裏返りそうになった悲鳴の破片だけが零れ落ち、スノウは転げる様に友人の――ブランの傍へと走り寄る。
「――この娘の知り合いですか!?　呼びかけて！　意識を留めさせるのです！」
治療にあたる神官の切羽詰まった声に、咄嗟に友人の手を取ろうとして――その腕が無残に捩じれ折れていることに気付いて、息を呑んで硬直した。
こえを、声をかけないと。寝たら駄目だ、起きて、ブラン。
必死に呼びかけようとするも、腫れあがった様に鈍痛を訴える喉はまともに動いてくれない。
どうして、嫌だ、なんで――千々に乱れた思考は纏まらず、役立たずの木偶みたいになった身体は勝手に制御を離れ、動かない友人を映した視界を滲ませる。
偶然か、それとも頬に注ぐ滴に刺激を受けたのか。
スノウの涙で濡れたブランの表情が僅かに顰められ、瞳がゆっくりと開かれた。
「……ア……スノ……さ……」

「――ッ、ブラン!!」
ひび割れた唇から自分を呼ぶ声が零れると、ようやっとスノウは叫ぶ様に彼女の名を呼ぶことが出来た。
意識を取り戻してくれた事に、ほんの微かに安堵を感じた瞬間――。
凄まじい勢いでブランの腕が跳ね上がり、スノウの二の腕を掴む。
折れている筈の腕の何処にそんな力があるのか。指先が喰い込む程の力を込めながら、意識を取り戻した栗色の髪の少女は鬼気迫る形相で身を起こそうとする。
「何をしているの!?　動いては駄目です！」
「誰か沈静効果のある魔法を！」
治療を行う神官達の言葉にも耳を貸さず、ブランはスノウだけを見つめて震える声を絞り出した。
「お、願いです……お嬢様、を……エーデルを……!!」
言葉を紡ぐ口の端から、赤黒い血が溢れたのを見てスノウの首筋が総毛立つ。
「ブラン！　今は動いちゃダメだよ！　傷が……！」
「……お願い、です……！　あの娘を……！」
本来なら意識を保つことさえ困難な状態で、だが、スノウの腕を掴む力は全く緩む事無く。

力無く掠れ、今にも泣き出しそうな、懇願を滲ませた震える声色で、ブランはひたすらに繰り返す。

「……お願い……！　おねがい……!!」

どうすればいいのか。

少女は迷った。

今も《門》からは、続々と大陸中央部より撤退してきた者達が現れている。

当然、スノウだって友人の片割れ――エーデルの事は凄く心配なので、ブランが出てくるまではずっと《門》を見ていた。

それまでにあのおでこの可愛い友人の姿は見ていない……ブランを見てる間に別の場所に運ばれた可能性がある。

それを正直に伝えるのか。伝えた処で、今も死に物狂いで自分の腕を掴んでくる、彼女の姉が、無理やり身を起こそうとするのを止めてくれるのか。

迷ったのは僅かな間だけだった。

小さく咳き込んだ友人の口から、再び血が溢れたのを見た瞬間、少女は咄嗟に嘘をついた。

「――ッ、エーデルなら大丈夫、ちょっと離れた処で治療を受けてるよ！　後でわたしが様子を見に行くから、だから……！」

「――――――ぁ」

その言葉に。

一瞬、呆然とした表情を見せたブランは、安堵した様に吐息を一つ、吐き出して。

スノウの腕を掴んでいた指先から力が喪われ、滑る様に地へ落ちた。

「ブラン!!」

声を上げるスノウを押し退ける様にして、神官達が意識を失った栗色の髪の少女を数人がかりで囲む。

「傷口が深い！　先ずは呪詛を取り除かねば！」

「聖水の追加を！　洗浄しながら止血を試みます！」

「こちらは腕の処置を行います！　放置していては切断せねばならなくなる、そうなれば彼女の体力がもたない……！」

喧々囂々と指示が飛び交い、しかして適切にそれを聞き分ける者達によって次々と処置が施されてゆく。

回復魔法は手習い程度にしか学んでいないスノウでは、この場で出来る事は無い。

さりとて、目を離す事など出来る筈も無く。祈るような気持ちで治療の様を見つめていると。

《門》の向こうから凶悪な呪詛を湛えた触腕が飛び出し――既に多重展開されていた浄

化結界に阻まれてヘドロが焦げ付く様な悪臭を放ちながら弾かれる。
「――眷属だ！」
「此方に来させるな、押し返せ！」
全身を結界に阻まれ、焼き焦がされながらも無理矢理に《門》を通り抜けようとする怪物に、大人達が怒号を上げて武器を手に取り、立ち上がる。
しかし、それも直ぐに無意味となった――この場に限り、良い意味で。
邪神の眷属――大きさや呪詛の強さからして下位のものであろうソレの頭部から、剣の刀身が生える。
肉眼で魔力を確認出来る程に強化を施された刃はそのまま眷属の腰まで一気に斬り下ろし、捻りを加えながら引かれ、そのまま《門》の向こう側へと眷属の身体を引きずり戻した。
入れ替わる様に飛び込んで来たのは、眷属を切り裂いた剣を手にした、軽装鎧を纏う大柄な男である。
「――おじさん！」
スノウが上げた叫びに一瞬だけ視線を向けるものの、男――ラックは直ぐに《門》を維持している枢機卿へと目を向け、大きく頷いた。
安堵した様に枢機卿の全身から力が抜け、彼は意識を失う。

傍で治療に当たっていた者が慌ててそれを支えるのを尻目に、魔力供給を断たれて徐々に縮小してゆく《門》を、ラックは油断なく見据えて剣を構える。

平然と立っているが、彼もまた相当に傷だらけだ。肩から背にかけて大型の魔獣のものらしき牙が何本か喰い込んでいるのにも関わらず、一撃で眷属を両断した先程の手並みは凄まじいの一言に尽きた。

「下がってろ。《門》が閉じるまで俺が見ておく」

駆け寄るスノウに、振り向く事無く告げる強面の傭兵の声は硬い。

「閉じる……他にも逃げ遅れた人がいるんじゃ」

「……俺が殿だ」

端的に、そして残酷な事実を語るラックの言葉に、少女は声を詰まらせる。

彼の言葉は実際真実であった。

生き残った者達をどうにか纏め上げ、転移魔法を発動させた枢機卿が聖殿内に《門》を作り、それを維持する。

そうして怪我人を優先して《門》をくぐらせ、ラックを中核として戦える僅かな手勢でもって、味方の避難が終わるまでの時間を稼いだ。

殿を受け持った者達の中で、生き残ったのは彼だけである。

振り向く事のないラックに、スノウは不安を押し殺して更に言葉を絞り出す。

「……おじさん、エーデルを……わたしの友達を知らない？　こう怪我した人が多いと、何処にいるのか分からなくて」

言葉は、無い。

「……おじさん？」

何か言ってよ。

そう、続けようとした口が動かなくなったのは、或いは少女にも予感があったのか。

――それとも、聞く事で決定的な言葉が彼の口から出て来ることを、恐れたのか。

長い、長い――少なくともスノウにはそう感じた、数秒の沈黙の後に。

「……すまない」

やはり振り向く事無く、だが血を吐くような声色で告げられたのはその一言のみだった。

それを聞いた瞬間。

スノウの意識は真っ白になり、全ての思考が吹き飛んで。

――気が付けば、今も段々とその大きさを狭めている《門》へと飛び出していた。

「駄目だ……！」

当然、彼女の前にいたラックがその腕を掴んで押し留める。
掴まれた腕を起点に、少女は一瞬で《流天》を発動。
力の流れを操作された傭兵の身体は投げ飛ばされる様に宙に浮き――その技のキレに驚愕しながらも空中で身を捻って着地する。
その間にも、スノウは《門》に向けて走り出していた。
「とめろ!!」
叫ぶラックの声に、咄嗟にその場の誰もが反応出来ず。
今にも閉じられようとする《門》へと、スノウの手が伸ばされ――。
少女と《門》の間に、一瞬で強固な障壁が展開され、彼女の指先は無情にも弾かれた。
「……間に合ったか」
安堵する様に息をついたのは、高位の僧服を纏った金髪癖毛の青年――ヴェネディエだ。
その言葉に反応する事もなく、スノウは即座に障壁へと《命結》の拳を打ち込んで一撃で叩き割る。
だが、破壊した瞬間に数倍の枚数の障壁が眼前に展開され、否が応でも脚を止めざるを得なくなった。
「――ッ!」

ならば飛び越える、そう切り替えて足に魔力を装填し、脚力を強化しようとして――背後から飛びついたラックによって抑え込まれる。
「落ち着け！　行っても死ぬだけだぞ！」
耳元で怒鳴る傭兵の言葉にも耳を貸さず、完全に制圧された体勢で、尚も藻掻く。
「放して！」
目の前で閉じられていく転移魔法の名残りを前に、スノウは喉も枯れよといわんばかりに絶叫を上げた。
「放してよぉ……っ！　はなせぇぇぇぇぇっ!!!」

分厚い雲に太陽を隠された暗い空の下、白い少女の慟哭が響く。
生き残った者達の治療の為に今も多くの人々が行き交い、慌ただしい大聖堂前の芝生に、小さな木札が転がっている。
泥と血に汚れ、様々な靴底で踏みしめられてしまったソレは、今も懸命な治療を施されている栗色の髪の少女のものか。
――或いは、還ってくる事が出来なかった、もう一人の少女のものなのか。
淡い光を放っていた筈の護り札は、今はくすみ、輝きを失って土に埋もれていた。

まるで、こんな物に意味は無いのだと、冷たく告げる様に。

この世界で、こんな悲劇は一山いくらのありふれた物なのだと、突き付けるように。

老兵の残照　わたしのともだち

大森林方面で起きた、邪神の軍勢の大規模な攻勢から二日後。
転移魔法によって撤退してきた一部の生き残りを治療する為、多くの人員が行き交い、慌ただしく喧噪に包まれていた大聖殿は一先ずの落ち着きを見せていた。
とはいえ、未だ多くの者達は治療の最中であるし、重傷者の中には助からなかった者も数多くいる。
負傷者の受け入れと最低限の処置が一段落したというだけだ。治療に当たる者、治療を受ける者――双方ともに気力を振り絞って臨まねばならないのはこれからであった。
静けさを取り戻した大聖堂の前。
夕闇が夜の帳を引き連れ、斜陽が西の空に沈みながらも周囲を緋色に染めている。
大勢の負傷者と、それを癒すべく奮闘しているであろう者達が詰めている荘厳な建造物を見上げ、ミラは立ち尽くしていた。
唇を噛みしめ、睨み付ける様に聖堂のシンボルを眺めていた視線が力を失ったように

伏せられ――そこで芝生に埋もれた小さな木札を目に留める。
そっと拾い上げたソレは、彼女の弟子が知人に配り歩いた物であると一目で知れた。
血と泥で汚れた護り札を手で優しく拭い、暫しの間ジッと見つめ。
取り出したハンカチで丁寧に包むと、懐にそれをしまって歩き出した。

件の大攻勢から一日遅れで、別の戦地より帰還したミラとガンテスは直ぐ様事の次第をヴェネディエより聞かされた。
問題の地域の戦線が崩壊した所為で、詳細な情報は入って来てはいないが、少なくとも近隣の都市に邪神の軍勢が雪崩れ込んで来た、という事態には陥ってはいないらしい。
だが、それも時間の問題であると思われた。
圧し潰された戦線を前進拠点として、その地に満ちた犠牲者の骸を用いた眷属の回復や新たなる召喚を行っている筈だ。
邪神の軍勢は指揮能力という点では人類種の平均より大きく劣るが、それを補って余りある眷属の召喚という鬼札がある。

顕現した眷属の脇を固めるのは加護(呪い)によって力を底上げされた信奉者達と、呪詛に侵されて在り方を歪められた魔獣。

それらによる雑な物量によるごり押しで、大陸に住まう人類種と一進一退の攻防を繰り広げていたのだが……今回の一件は予想外に大きな搦め手を打たれた、という事だろう。

工作や攪乱が無かったとは言わないが、種族間の連携を断つ程の大掛かりな物は長く続く戦役の中でも初めての行動と言ってもよいものだった。

おそらく、今回の侵攻で奪った土地を大規模な橋頭堡として、更なる攻勢が予想される。

効率の良い反撃・迎撃の骨子であった未来視の加護を封じられた件から始まり、事、此処に至るまで完全に敵方に流れを掌握されていた。

その事に、各国首脳部や主力の戦士達――事前に警戒を促されていた者達は皆、忸怩たる思いを抱えたまま、次の激戦に備えて準備を進めている。

その手始めとして、現在ヴェネディエは大森林に近い都市群に向けた大規模な援軍を組織する為、帝国を主軸とした各国と遠話の魔道具で以て連絡を密とし、壱ノ院に詰めているのだ。

『……此処から先は、事の経緯から擦り合わせた推察になるけど』

感情を押し殺して淡々と述べる友人の表情を、女傑は思い返す。
人類種側としては大きな痛手を被ったが、実の処、邪神の側としても全てが思惑通り、という訳でも無いらしい。
自陣に付いたはぐれの魔族の多くを投入し、犠牲とした今回の作戦は――恐らくは、本来なら一気呵成に近隣の都市群を呑み干す予定であったからだ。
その為に、人類種側の防衛網に穴を空けんとエルフの聖地を強襲し、神木たる界樹を呪詛で穢したのだろう。聖地に兵を引かせる為に、敢えてエルフ達の郷を破壊しなかった可能性すらあった。
大森林に住まうエルフ達の気質を考えれば、即座に全戦力を聖地に戻すであろうと判断しての作戦だったが、此処で邪神の軍勢側にも予想外な出来事が発生する。
聖地のエルフ――その主導者たる長老衆は、確かに狙い通り外に派遣した全戦力の撤退を命じた。
その命に即座に従うと思われたエルフの戦士達だったが……帰還を躊躇う者の数が予想を超えて多かったのだ。
最終的にほぼ全ての戦士団が大森林に兵を引いたとはいえ、想定より遥かに時間が掛かった。
その間に人類種側の防衛線の再構築が進んでいた為、結果として戦線を一つ攻略する

に留まったのである。
これはミラは勿論の事、推論を立てたヴェネディエにすら知る由も無い事ではあるが。
嘗てガンテスが共に肩を並べたエルフの戦士達――派遣された戦士団の中で実力・地位ともに最も高い者が率いていた集団が、聖地の長老衆達から再三の強硬な要請があるまで戦場に留まり続けた為、芋づる式に他の戦士達が帰還の先延ばしを選んだ、という背景があった。
それでも、多くの犠牲が出た事に変わりは無い。
喪われた命が戻ることは無く、残された者の心に刻まれた痛みが変わることもまた、無い。

ミラは目的の部屋のドアの前に立つと、躊躇いがちにそれをノックした。
「……スノウ、入りますよ」
返事は無いが、扉越しに息を殺す様にして動かない気配は感じ取れている。
ノブを廻すと、鍵は掛かっていなかった。

そっと扉を開け、室内へと足を踏み入れる。
まだ此処を使い始めて一年足らずのせいだろうか。生活感はあれど机の上に置かれた小物の他は殆ど私物の無い空間で、その部屋の主である少女はベッドの隅に膝を抱えて座り込んでいた。
いつもは師が帰還すれば飛びつく様に迎えに行くスノウであるが、今は膝の間に押し付けられた顔が上がることは無く、両者の間には痛い程の沈黙が横たわっている。
部屋の入口から、少女のもとまで、精々数歩。
その数歩を進めるのがひどく重く、困難に感じながらも、表面上はそれをおくびにも出さずにミラは弟子の傍へと歩み寄った。
「……」
膝を抱え、俯いたままの少女にどんな言葉を掛ければ良いのかも分からず。
ただ、無言で彼女を見下ろして女傑は沈黙する。
どれ程そうしていただろうか。
相変わらず動くことは無かったが、少女の口から叫び尽くしてしわがれた様な声で呟きがこぼれ落ちた。
「……ブランは、どうなったの」
「……峠は越えました。まだ小康状態ではありますが、負傷による命の危機は脱したよ

うです」
声を向けられた事にらしくも無く安堵を感じながら、ミラは先程まで自身も治療に加わっていた栗色の髪の少女の容態を端的に伝える。
ほんの微かにではあるが、スノウの纏った陰鬱な空気が柔らかくなった。
それが切欠、という訳でも無いだろうが、師は弟子の隣へと寄り添う様にベッドへと腰を下ろす。
「聖堂の僧達の他にも、今はガンテスが診ていてくれています……あの娘が呪詛に打ち克つ事を、今は信じましょう」
「うん……」
気休めだと言ってしまえば、そうなのだろう。
それでも、この一年で最も頼りとする人物となった師の言葉に、スノウは静かに頷いて……少しだけ顔を上げた。
「なんで、こんな事になったの……？」
ずっと、泣きはらしていたのだろうか。
あの日、彼女達が師弟の関係になった外壁の上での会話のときの様にその顔には涙の跡が残り、紅い瞳は真っ赤に充血している。
今のスノウに話しても良いものか……ミラは僅かに逡巡したが――どの道、大まかな

話は聖殿の多くの者達が知る処だ。
噂話に戸口は立てられない。今はぐらかしても時期に少女の耳にも事の経緯は届くだろう。
ヴェネディエの推論までは語らずとも、話すべきであろう。そう判断して、実際に起きた一連の件をミラは極力感情を挟まずに語る。
「……なに、それ」
はたして、少女の反応は至極当然のものであった。
「皆、おんなじ人類種ってやつでしょ。なんでそんな事になったの……」
唇を噛みしめ、此処にはいない誰かを睨みつけるように、部屋の壁面に向かって強い視線が注がれる。
「……元より、はぐれの魔族は殆どが《魔王》陛下の庇護を拒絶した者同士が徒党を組むか、人相書きが廻って魔族領を筆頭に各国から弾かれた罪人が多いのです……そういった者達を時間を掛けて集めたのでしょう」
「そんなの、殆ど魔族同士の問題じゃんか！　なんでそんな事に、そんな連中のやった事の為に皆……！」
師の言葉に激昂して叫び返し、少女はベッドの上で立ち上がった。
「エルフだってそうだ！　どうしてこっちになんにも言わずに全員帰って来い、なんて

言えるの！　他の種族の偉い人と話すらしないで勝手に決めるなんて、わたしにだっておかしいって分かるよ！」

湧き上がる怒りの感情のままに怒鳴りつけ――目の前の女傑にそれを言った処で意味が無い、と気付いたのか。

激昂によって荒らげられた声は急速に萎み、怒りの名残りだけを残して言葉は途切れる。

スノウは壁に寄りかかると、再びずるずると腰を落として座り込んだ。

「……魔族も、エルフも、だいっきらい……!!」

やり場の無い感情を持て余し、苦し気に呟かれた一言に、ミラは静かに諌める言葉を以て応える。

「怒りを覚えるのも、或いは嫌悪を感じるのも仕方ない事なのかもしれません――ですが、それを種族で括ってしまうのは止しなさい」

そもそもの諸悪の根源は邪神の軍勢だ。

種族ごとの人口の母数もあるのだろうが、その大多数は人間である。今回の件が偶々はぐれの魔族を利用した、というだけなのだ。

自身の大切な者を傷つけた相手に、怒りや憎しみを覚えるのは真っ当な感情の動きではあるが……そこに種族間での隔意を挟んでしまえば、後々に永く冷たい遺恨が残るだ

けだ。それこそかの悪神の信奉者共の思うつぼである。
何より――。
「聖殿(ここ)にも、他国にも、皆と手を取り合って戦う魔族やエルフはいます。そして、あの娘――ブランにもその血は流れている」
おそらくはスノウ、白子(アルビノ)である貴女にも。
あくまで可能性が高い、というだけの最後の言葉は口の中で転がすに留め……それでもミラは己が出来うる限りの真摯な想いを込めて、言葉を紡ぐ。
弟子が誤った偏見や見識を他種族に抱いてしまうのを危惧した、というのは勿論あったが、それよりも。
彼女に自分自身の血筋(ルーツ)や、友人の内にも確かに流れる他種族の血――それを否定して欲しくは無かった。きっと、それをしてしまえば苦しむのはスノウ自身の筈だから。
そんな思いが通じたのか。
少女は師の言葉に俯き、再び顔を膝の間に埋めてしまって――けれども小さな声を洩らす。
「……ごめんなさい」
「……何も悪い事はありません、貴女が道に迷ったならば、行き先を示すのが師(わたし)の責務です」

師としての義務、そう言い切るには聊か以上に目の前の少女に入れ込んでいる自覚はあった。

が、それを当人の前で口にするのにはミラ自身もまた若すぎたのであろう。

口に出したのは、いつも通りの師として尤もらしい言葉であった。

その言葉に、スノウはどんな想いを抱いたのか。

膝の間に隠された表情は窺い知ることは出来なかったが、それでも彼女はこの二日間で胸に堰き止めていた様々な感情を吐露するように、少しずつ言葉を零し始めた。

「……村には男の子が多くて……初めての、同じくらいの年齢(とし)の女の子の友達だったんだ」

「――そうですか」

少女は語る。出会って一年と経っていない、だけど、とても大切な友人の事を。

「初めて会ったとき、思いっきり喧嘩して、村にいた頃に戻ったみたいだった」

「……年頃の女子がノーガードの殴り合いもどうかとは思いますが」

けれど、もう会えない娘の事を。

「おでこちゃんは悪口なんかじゃないって、かわいいって思ってるって素直に言えば良かった」

「彼女も分かっていたでしょう、貴女を『おさる』扱いしているときの表情は、貴女のソ

レと同じでしたから」
　やがて、堰を切った様に溢れ出す。
「妙に自信満々で、なんか偉そうで――だけどそれが格好良くて、いつか御家を再興するんだって……！」
「……えぇ」
「すごく、優しいのに……！　恥ずかしがってそれを隠すぶきっちょで、家族の、お姉ちゃんのことがだいすきで……！」
「……えぇ」
　言葉が溢れ、思い出があふれて。
　胸の奥から突き上げるような痛みと共に、枯れる程に流した筈の涙も溢れ出す。
「……ともだちだった！」
　叫んだ言葉は、喪った者を悼む声だった。
　あるいは、スノウはようやっと、この瞬間に実感したのかもしれない。
　あの変な髪型のお嬢様には――あの優しい友人には、もう会えないのだと。
「……わたしのともだちだった!!　大好きだった！　もっと一緒にいられると思ってたのに！　もっと一緒にいたかったのに！」
　どうして。

じいちゃんも、ばあちゃんも、村の皆も、みんなみんな、自分をおいて逝った。
一年前、全部わたしから取り上げたじゃないか、やっともう一度手に入れたのに、どうして。
嗚咽と共に次々と吐き出される少女の嘆きは、何に向けたものだったのだろう。
元凶たる邪神とその軍勢か、それとも創造神たる女神か――或いはもっと漠然とした、運命や時代といったものであったのか。
神ならぬ身であるミラには、少女の痛みを想像することしか出来ないが。
それでも、慟哭と共に友人の――エーデルへの想いを吐露し続けるスノウの髪をぎこちなく撫で、少しでもその苦しみが和らぐように祈りながら。
やがて少女が泣き疲れて眠ってしまうまで、ただ、静かにその傍に寄り添い続けた。

涙で目を腫らしたまま寝入ってしまったスノウの顔をタオルで拭いてやり、しっかりと毛布をかけてやるとミラは音を立てないように少女の部屋を後にした。
既に日は落ちた。月明かりが地上を優しく照らし、星が空に瞬いている。
こちらの抱えた想いや悩みなど知った事では無いと言わんばかりに、晴れた夜空で美

しく輝く星々を見上げてなんとも言えない気持ちになったが、気候相手に愚痴を垂れても詮無い事だと思い直す。

弟子が心配で一度は中座したが、あとは大聖殿に戻って夜を徹して重傷者達の治療に当たる予定であった。

ガンテスも戦地より戻ってそのまま聖堂での治療に参加した身だ。魔力の消耗を考えても、一度交代して休息と摂らせる必要があるだろう。

休めと言ってるのに不安で落ち着かないと筋トレを始めそうな後輩を、どう眠らせるか。そんな考えを巡らせつつ、足早に大聖堂へと向かう。

その途中、いつかのように聖堂の外壁に寄りかかって腕を組んでいる友人の姿を見つけ、静かに声を掛けた。

「……貴方も重症でしょう。まだ横になっていた方が良いのではないですか」

「この程度は冒険者時代から慣れたモンだ」

心底面白くなさそうに――それこそ吐き捨てるように返されたラックの言葉には、己の不甲斐無さに対する怒りが満ち満ちている様であった。

「お前や筋肉馬鹿と違って、俺は回復魔法はロクに修めてないからな。治癒の手助けも出来ん奴が聖堂内に居座っていても邪魔なだけだろう。自分で立って歩けるなら猶更だ」

「殿を務めた者がその様に自身を卑下しては、治療を受ける者も心安らかに傷を癒す事が出来ないでしょう」
「ハッ、偶々生き残った奴らの最後尾にいたってだけだ……チビスケの手前、殿だとは言ったが、本当の殿と言える奴らは今もあそこにいる。糞みたいな呪詛塗れの地で、埋葬すらされずにな」
そう言ったきり、黙り込んだ傭兵にミラも返す言葉を持たず、両者の間に沈黙が降りる。
十秒か、二十秒か。ややあって沈黙を破ったのは傭兵の方であった。
「……あの従者のお嬢ちゃんはどうなった？　一度抜けた様だが、診てたんだろう？」
腕を組んだまま、足元の芝生を睨みつけているラックの呟くような声に、ミラは極力抑揚を押さえた声で応える。
「ブランの事でしたら、一命は取り留めました――ただ、呪詛が身体の奥深くまで喰い込んでいます」
「……浄化は難しいのか」
「ええ……呪詛をどうにか取り除かない限り、意識を取り戻す可能性も低いそうです」
これ以上負担にならぬ様、スノウには敢えて話さなかった事ではあるが、ブランの状態は決して良いものとは言えない。

皮肉にも意識が無いが故に避ける事が出来ているが、今も邪神の呪いに蝕まれている少女の身体は本来は相当な苦痛を覚えている筈だ。

ミラが《三曜》の技をもってある程度散らしたものの、臓腑にまで喰い込んだ呪は深く、根本的な治癒には至っていない。

例え肉体的な傷が癒えたとしても、定期的な浄化魔法による除染が無ければ、傷痕から溢れ出した呪は短期間でブランの身を消耗させ、死に追いやるだろう。

現状では生命を繋ぎ止めるだけで精一杯。

それこそ、上位眷属の齎す呪詛であろうと問答無用で浄化出来る程の聖気――大規模な儀式か、現世において最も女神の加護厚いとされた聖女の癒しでも無い限り根治は不可能である。

前者は人員や総合的なリソースの問題でとてもでは無いが実行など出来ず、後者が最後に現れたのは二百年以上も昔の話だ。

故に……『戦場において致命的な呪詛汚染を受けた者は、慈悲を以て女神の御許へ送る』という選択はこの世界、この時代では決して有り得ない話では無かった。

勿論、可能ならば助けたい、助けるべきだ。

そう思う者が多いのは当然であり、ブランを始めとした同様の重傷者は今も懸命な治療が続けられている。

「……クソったれが」
傭兵の喉から低く、唸る様に捻りだされた声は拭い様の無い悔恨に濡れていた。
「……ラック」
「分かってる、ペーペーの新米やガキじゃ無いんだ、分かってるさ」
自分達は万能でも無敵でも無い。
どれほど腕が立っても、どれほど強くとも、それだけで眼前の困難全てを打破出来る筈も無いのだ。
ラックとて一度は冒険者として最高位に到達した身だ。高みに登る過程において、そんな事は嫌という程身に染みている。
だが。
だが、それでも、だ。
ばりばりと指先で頭を掻きながら仏頂面を更に顰め、ひどく陰鬱な気分で傭兵は星空を見上げる。
今回の一件で帰って来なかった多くの知人の顔が、脳裏にチラつく。
『門』を前にして、己が抑え込んだ少女の悲鳴の様な泣き声が、耳にこびりついて離れない。
初めて会ったのも、家族を目の前で失った彼女が慟哭の叫びをあげた最中であった。

――これで何度目だ。

自身の不甲斐無さを呪う様に、どうしたってそんな事を考えてしまう。

強い自責の念を抱える戦友に、ミラは緩々と頭を振った。

「真に不甲斐無いのは私の方でしょう。肝心な時にまんまと違う戦場へと釣り出され……多くの者達を死なせ、あの娘の傍にいる事も出来なかった」

「おい、そりゃぁ……」

違うだろう。と言いかけ、それが意味が無い言葉であるとラックは気づいて、口にすること無く？み込んだ。

理屈では無いのだろう、互いに。

否。二人だけでなく、生き残った者、残された者全てが。

隣に居た誰かが居なくなる度に腹に淀み、重く溜まった悲嘆を。

時間と共に薄れたと、或いは乗り越えたと思っていたそれを、また誰かが居なくなる度に思い出して。

それでも、と。

ともすれば止まってしまいそうになる手足を叱咤して、胸の痛みを戦いへの気炎に変える。

この世界では、多くの者がそうやって進んで来た。そうやって生きて来た。

だから、この遣る瀬無さも、自分の不甲斐無さに覚える怒りも、それでも再び立ち上がって歩き出す為には必要な感情なのだと。

そんな風に、纏まりの無い思考が脳裏を巡り……ほんの僅かではあるが苦笑が漏れる。

類い稀な強者であるが故に、何度も何度も……嫌になるくらいに彼は、彼らは『見送る側』だった。

独りで抱え込んで、この想いを消化する事にもすっかり慣れてしまった――そうでは無かった頃を、思い出せない位に。

だからこそ、今回そうなってしまった少女にどう声をかければ良かったのか、アレで良かったのか、分からない。

そんな風に考えているのであろう、目の前の女傑の懊悩に気が付いたが故の苦笑いであった。

全く、教会の英雄だの最終兵器だのなんだのと恐ろしい逸話ばかりの怖い女が、随分と新たな一面を見せてくれるものだ。

何時ものミラならば、相手に拒絶される事も覚悟の上でド正面・ド正論を以て諌めるなり諭すなりするだろう。友人間で『最上級の魔装もびっくりの鉄の女』と称されるのは伊達では無い。

それがスノウ相手にはひどく慎重に――ともすれば臆病にすら思えるほどに悩んで、言葉を選んで対応しているのは、少女に嫌われる事と――なにより傷つけることを恐れているからに他ならない。

少なくともラックはそう判断していた。

こんな状況でなければ、存分に弄って揶揄ってやる処なのだが……これから大勢の負傷者の治療に関わる人物の気を削ぐ訳にもいかないだろう。

急に含み笑いを始めた傭兵に、訝し気な視線を向けるミラ。

それには構わず、彼はヒラヒラと手を振った。

「まぁ、いい。治療に戻るんだろう？　癒やし手が必要な状況だから仕方ないが、お前が倒れちゃ本末転倒になるのは忘れるなよ」

「……ベッドから抜け出してこのような場所にいる貴方に言われると腹が立ちますね」

「分かった分かった、もう暫くしたら戻るとするさ……」

そんな風に、何時ものようにやり取りをして二人は別れる。

だが……表面上はおくびにも出さずとも、両者ともやはり怪我や疲労の影響はあったのだろう。

二人の会話を植木の陰に隠れて聞いていた小柄な人影に、気付かなかったのだから。

寝入る直前まで傍に居てくれたぬくもりが離れていった事で、直ぐに目を覚ました少女は、心細さのままに師の後を追いかけ――偶然ではあるがミラとラックの話を聞いた。

聞いて、しまった。

或いは、スノウがもう少し一緒に居て欲しいと、我儘を言えば。

或いは、ミラがもう少し弟子と一緒に居ようと、私情を優先させれば。

また、違った結末があったのかもしれない。

だが杯より零れた葡萄酒が戻ることは無く、時がさかしまに戻る事も無い。

夜が明け、ミラが再び部屋を訪れたそのとき、部屋は既にもぬけの殻で。

――否、部屋だけでは無く。

スノウの姿は、聖殿の何処にも無かった。

老兵の残照　魔鎧

スノウが行方不明となり、半月以上が経過した。
話は直ぐにミラからヴェネディエへと伝わり、迅速に聖都内へと人をやって捜索が行われたが、当然見つかる事も無く、おそらくは都市外へと出てしまったのだろうと思われた。
それを知らされたミラは、そのまま都市の外へと飛び出して行きそうになったが、今の状況が状況だ。
件の崩壊した戦線から信奉者の大攻勢が行われる可能性を考慮すれば、最大戦力である彼女をこの時期にあても無くフラつかせるというのは不可能であり、ヴェネディエの部下の中で捜索に秀でた技能を持つ者の幾人かがスノウの足取りを追う、という形で女傑を納得させる形になった。
それでも、本当は今すぐ聖都を飛び出して自身の足で探して回りたいというのが本音なのだろう。

師としての責務、教会の戦力としての立場、個人としての情。
様々なものに雁字搦めにされ、結果として身動きの取れなくなったミラは、普段の彼女からすれば想像もつかない程に消沈し、精彩を欠いていた。

来るべき大攻勢に備え、慌ただしく迎撃の準備が進められる大聖殿において、筋骨隆々の巨漢の僧と凶悪な面構えの傭兵が、お互いに渋い顔をしながらベンチに座って話し込んでいる。
「今朝もヴェネディエ殿に捜索状況をお聞きしましたが、目だった進展は無いようです」
「そうか……現状、ヴェティの奴も帝国と連携しての援軍編成で忙しいだろうしな。家出娘を探すのに注力は難しいだろうよ」
二人並んでいるのを見れば邪神の眷属であっても回れ右しそうな男共は、どこか力無い様子で同時に溜息を吐き出した。
「で……ミラの方はどうなってるんだ?」
「表面上は普段の如く毅然とした立ち振る舞いです。が、やはりスノウ嬢が心配なようで。眠りも浅く、食も細くなっている御様子」
体調管理などはほぼ完璧であった女傑が、薄っすらと眼の下に隈を作っていたのを思い出して巨漢――ガンテスは憂いのままに眼を閉じて頭を振った。

「もどかしいものですな。こういった事態においては磨いた戦武がなんら益にならぬ事、無力感に胸を抉られる思いです」
「……俺の冒険者時代のツテが生きてれば、帝国方面になら情報を仕入れる事も出来たんだがな」
「ラック殿も傷が塞がったばかりでしょう。スノウ嬢を案じる気持ちは察するに余りありますが、先ずは来るべき激戦に備え、身を癒すことが先決ですぞ」
それはお前もだろうが、と言いかけたラックであったが、いや、コイツに限ってそれは無いか、と思い直して口を閉ざす。
目の前の筋肉馬鹿はことタフネスという点では人類種全体でも比肩出来る者の方が少ない。
スノウの姿が見えなくなってからというもの、ミラに劣らず不安な様子を見せ、焦燥に追い立てられる様に何時にも増して筋トレに励んでいる癖に、肉体的には全く消耗している様子が無いので心配するだけ無駄である。
それでも、普段と比べればどことなくその巨体が萎んでいるように見えなくも無いのは、何時もであれば鬱陶しいくらいに溢れ出る快活な空気が感じられないからであろう。
あの師弟に関して気を揉んで、それでも何も出来ない事を歯がゆく感じている――こ

の点においては同類という事だ。むさくるしい野郎二人でなんとも華の無い話ではあるが。

両者共に黙り込み、なんとなく同時に空を見上げた。

やがて、先に傭兵の方が独白するように呟く。

「さっきはツテ云々言ったが……チビスケは――スノウは帝国方面には行かんだろう」

「拙僧も同感です。例の一件以来、相当に消沈していたらしきスノウ嬢の様子からすれば、向かう先は……」

彼女の育った北方の村か、或いは……例の崩壊した戦線――現在は邪神の軍勢の進撃拠点となっている地か。

故郷であればまだ良い。一年近くが経ち、人の手による浄化作業こそ始まってはいないが邪気自体は薄まっている筈だ。

だが、後者のほうがあまりにも危険過ぎる。

その辺りはヴェネディエも危惧しているのか、拠点周辺に潜ませた監視員には敵方の動きだけでなく、近づく者がいないか注意を払うように伝達していると聞いたが……。

現時点では監視の者から敵方の動きの報告も、白い少女の報告も無い。自分達にも待機の命が出ている以上、結局傭兵と筋肉に出来るのはこうして埒も無い話を垂れるくらいだった。

「……儘ならんものだ」
「全く以て、己の未熟を痛感する事しきりです」
白塗りの小さなベンチが死ぬほど似合わないむくつけき男二人は、再度揃って嘆息を洩らした。

――数日後。
「例の場所を監視させている者から連絡があった――やはり信奉者達はあの地を拠点化させているみたいだね」
「……そうですか、ならば近い内に侵攻があるのは確実となりましたね」
壱ノ院の執務室にて、大量の書類に埋もれたヴェネディエが淡々と告げた言葉に、これまた平坦な口調でミラが応じる。
件の戦線が崩壊した際、派遣先の軍を率いる領主との会談を行っていた壱ノ院の枢機卿は、味方が大打撃を受けたと報を聞くや否や領主に協力を要請して最低限の援軍を組織。
潰走する味方を拾い集める為の陣頭指揮を執り、最終的には高位の魔導士のみが使え

る転移の魔法を用いてある程度の生き残りを帰還させる事に成功した。
状況を考えれば、紛れも無いウルトラC難度の救助活動だ。その立役者たる枢機卿は、負傷に加えて体力魔力共に枯渇した状態で最高位の魔法である転移の為の《門》の維持を行った事も駄目押しとなり、未だにベッドの上から起き上がる事が出来ない状況である。
現在は壱ノ院の後継者と目されていたヴェネディエが代理となって一時的に職務を引き継いでいる為、若き大司教の整った顔立ちには隠せぬ疲労の色が濃い。
一方、向かい合うミラは単純に待機している身ではあるが――行方の知れなくなった少女の事が余程精神を削っているらしい。
僅かに隈の浮いた目元以外は、一見すると普段の彼女と大して変わりないように見える。
だが、それなりに長い付き合いの者からすると、普段と比べてミラが精彩を欠いた状態であるのは一目瞭然であった。
上位眷属と戦った当日でも平然と食事と睡眠をしっかり摂れる筈の女傑は、ヴェネディエも初めて見るレベルで憔悴している。
故に、青年は少しばかり逡巡した。
果たして……今の彼女に、今から口にする情報を告げても良いものか。

では黙っているのか。と考えて――それが余りにも不義理であり、不誠実であると判断して、結局は選択肢が無いな。と、寝不足で頭痛のする頭を抱えたくなった。

というか今更な話ではある。只の経過報告ならばわざわざ執務室にミラを呼び出して話をする必要はないのだから。

彼女だって、呼ばれた理由には見当がついているだろう。現に、こうやって黙り込んでいる自分を見る眼には焦れたような、話の続きを促す強い光が宿っているようにも見える。

「……ヴェティ、本題があるのでしょう？」

眼力で要求するだけでは足りなくなったのか、とうとう口に出してきた女傑にヴェネディエも腹を括った。

こっそりと魔力を練りながら、覚悟を決めて監視員から報告された追加の情報を口にする。

「――連中が拠点を構築している場の近辺で、白い髪の女性を見たという報告があった」

言い終えるかどうか、その瞬間には――。

ミラはその場で踵を返し、足早に執務室の扉に向けて歩き出していた。

その手がドアノブを掴む瞬間、眼前に展開された魔力障壁によって阻まれる。

「まだスノウと確定した訳ではないよ」

やっぱりこうなったか、という思いは口と表情には登らせずに胸中で押し留め、障壁を発動させたヴェネディエは極力平然とした様子を保って女傑の背に言葉を掛ける。
「遠見の魔法で、姿を見かけたのは数秒――しかも後ろ姿のみだったそうだ。背格好は同じだったみたいだけど、それでも顔を確認した訳では――」
「銀髪ではなく、白。そして体格が同じだというのなら、十中八九間違いないでしょう。現場に向かいます」
青年の言葉をぶった切って、ついでに彼が展開した魔力障壁も無造作に伸ばした指先でぶった斬ったミラは、再びノブに手を伸ばす。
追加の障壁を五枚ほど連続で展開しながら、ヴェネディエは以前スノウにも同じ様にして行く手を遮った事を思い出して――やはり師弟だな、などと益体もない事を考えた。
目の前に広がった魔力の壁を眉を顰めて眺め、今にも叩き壊しそうな友人に向けて、宥める様に声を掛ける。
「いやいや、待とうよミラ。君、一応待機の命が出てた筈だよね？」
「叱責はあとで幾らでも受けます――私は行かねばならない」
硬い声のまま、だが、強烈な意思の籠った言葉を呟く女傑の姿に、青年は苦笑と安堵がない交ぜになった笑いで口の端を微かに持ち上げた。

ああ、やはりか。こうなればミラは止まらないだろう。
半ば予想していた反応ではある。教会の上役としては困った話だが……個人としては悪い気はしなかった。
生真面目な彼女が上からの指示を無視して飛び出して行くのは驚き以上に頭の痛い話ではあるが、消沈していた友人が気力を取り戻した事自体は嬉しくもあるのだ。
何より、ヴェネディエとてスノウを心配していない訳では無い。何処ぞに飛び出して行ってしまった少女を師が首根っこひっ捕まえて連れ戻してくるというのなら、それが一番だとは思っている。
「ま、君ならそう言うだろうとは思ってたよ」
なので、後は彼女が憂いなく現地に向かえる様に『整える』。元より根回しや前準備は自分の仕事だ。
執務用の机の引き出しを開け、取り出したのは二つの宝玉。
掌に収まるサイズのそれを、彼女に向けて無造作に放る。
危なげなくキャッチしたそれを、ミラは手の中でぐるりと廻して確認した。
「これは……遠話の魔道具と……？」
「もう一つは僕のお手製。転移の魔法が組み込んである。とは言っても《門》が開くのは精々数秒だけどね」

座標は聖都付近の平原。ヴェネディエの権限では流石に都市内に設定したものは作成許可が下りなかった。

机の上で肘をついて腕を組むとその上に顎を乗せ、いつもの調子を崩さぬ様に青年は飄々とした笑みを維持して告げる。

「ミラ、君には例の場所――邪神の軍勢の新たな拠点となった場所の偵察に行ってもらう、場合によっては威力偵察に切り替える事も許可しよう」

こちらの思惑に気付いたのか、居住まいを正して話を聞く態勢になった女傑に若き大司教は尤もらしく命を下す。

「ただし、教国の最大戦力たる君を徒に失ったり消耗させたりする訳にはいかない。あくまで偵察。身の危険が高まったなら即座に宝珠を用いて《門》を開き、離脱する事。いいね？」

「――感謝します、ヴェティ」

遠話の魔道具の方はともかく、《門》の魔法が込められた宝珠はおそらくこうなる事を見越して、此処半月の間に激務の合間を縫って作成したものだろう。

タイミングにしろ、理屈にしろ強引にも程がある任を……おそらくは転移の魔具を含めて存分に職権乱用して用意してくれた友人に、ミラは深く頭を下げた。

大陸中央部――大森林にほど近い都市群へと、馬を走らせる。
今回はあくまでミラの単騎偵察……という体を取ったスノウの捜索だ。速度を優先して荷は最小限、逸る気持ちを押し殺し、無理をさせない程度に馬に鞭を入れる。
予定としては先ずは都市に到着後、物資の補給を済ませてその先にある敵方の拠点に向かう。
既に監視の任についている者と合流して、スノウに関して追加の情報は無いかなどを確認し――場合によっては本当に敵の領域内に踏み入る事も考慮に入れていた。
道すがら、やはり考えるのは弟子である白い少女の事だ。
（……スノウ）
やはり、自分の対応は間違っていたのか。
己が器用とは言い難く、無骨な武辺者であることなど嫌という程自覚している。
或いは――聖殿にいる多くのシスター達がそうであるように、己が優しさや慈愛で以て他者の傷を癒すことが出来る様な女性であれば、あの子は今も傍にいたのであろうか。
どうすれば良かったのか。

どうしてあげれば、あの子が一人で飛び出して行く、などという危険な真似を思い留まってくれたのか。
考えても、悩んでも、明確な答えなど出なかった。
だが、それでも。
それでも、スノウが今も独り、危険な場所を彷徨い歩いているかもしれない、という現状をミラは認めることが出来ない。
彼女がどういった考えで聖都を出たのかは分からない。
ひょっとすればミラに対して隔意を抱いてしまったのかもしれない。
そう考えるだけでひどく暗澹とした気分になるが……少女が目の届かない場所で危険に晒される事の方が、遥かに許容し難い。
件の戦場跡地で少女が今この瞬間も危機にあるかもしれない。
到着した頃には時既に遅く、最悪も有り得るのかもしれない。
そんな不安が胃を下に引っ張るような感覚を与え、邪神の眷属と対峙するときよりも明確な恐怖が心臓を鷲掴みにするようだった。
移動の最中、胸中に湧き上がり続けるそれを、その度に強く意思を以て押し退け、握り潰す。
多少強引になっても、連れ戻す。

その上で、話をしよう。今度はもっと時間を掛けて。何日がかりでも、スノウが納得してくれるまで。

このペースならば翌日には街に到着、目的地まではあと二日といった処だ。馬には少し無理をさせてしまうがペースを上げようかと考えた処で、肩に掛けた鞄の中にある魔道具が魔力を放つ。

遠話の繋がる先は当然、彼女を送り出してくれた友人――ヴェネディエだ。定時連絡以外での発動ということは、何某かの緊急の案件かもしれない。

「――どうどう、止まりなさい……！　そのまま少し待つように」

手綱を引いて馬の走りを止めると軽くその首を撫で、ミラは馬上のままで鞄から魔道具を取り出した。

手の中で軽く魔力を通すと、既に発信元から十分な魔力を注がれていた宝玉は即座に発動し、遠く離れた友人の声をこの場に届ける。

『――ミラ、緊急だ。拠点化した例の戦線で動きがあった』

声が繋がると同時、前口上は抜きでヴェネディエの硬い声が魔道具越しに響く。

「――ッ！　攻勢が始まったという事ですか？」

『いや、そうじゃない。監視員も安全な距離を取らせているから詳細は不明なんだけど、どうも連中の拠点内部で大規模な戦闘が発生したらしい。相当な威力であろう爆音や

戦闘による魔力の胎動を感知したそうだ』
感情を殺して告げる青年の声は、端的な報告の裏で暗に問うていた。
経緯や何者の仕業なのかは不明。だが、戦闘が既に始まっているのなら、危険度は一気に上がる。
それでも、行くのか？　と。
聞かれるまでも無く、答えは決まっていた。
魔道具を手にしたまま、馬の背より飛び降りる。
最低限の食糧と水だけを鞄に移し、馬の鞍より垂れた布地を裏返して聖教国のシンボルマークが刻まれた面を表にした。
「此処からは自身の脚で進みます。出来れば馬を回収する人員を出して下さい」
『やっぱり行くみたいだね……分かった、近くにいる者に連絡をつけよう』
手綱を牽いて街道脇の小さな草原に馬を移動させると、ミラは再度その首を優しく撫でる。
「遅くとも明日には教国の者がやってくる筈です。あまり街道から離れてはいけませんよ？」
魔獣に襲われる可能性を考慮し、縄での固定はしない。街道から離れ過ぎなければこの場から多少移動しても回収に来た者が道を辿って見つける事は容易だろう。

早馬にも使われる駿馬を選んで来たのだが、脚だけでなく頭の方も中々に良いのか、まるでミラの言う事を聞き分けたかのように一鳴きし、街道近くの草をのんびりと食み始めたのを見て一つ頷く。

街道に再び戻るとその場で軽く屈伸を始め、膝を曲げ伸ばし。

『今の君は正真正銘の単騎だ。引き際は重々弁えてくれ――気を付けて』

「ええ、後ほどまた連絡します」

最後にそう付け足す友人の声に力強く返答し、沈黙した魔道具を鞄に戻すと、ミラは何度か深呼吸を繰り返して。

全開の魔力強化を施した脚力を以て、放たれた矢より早く駆けだした。

多少の消耗を割り切り、全力で走りだす事、数時間。

卓抜した技量にばかり目を奪われがちになるが、ミラとて人外級に数えられる戦士の一人だ。

強化された身体能力を存分に発揮し、桁外れの速力をもって馬で二日かかる距離を走破した彼女は、最寄りの街にも入ることなく突っ切り、邪神の軍勢が拠点を構築してい

る場所――それを監視している人員が潜伏している場所へと辿り着こうとしていた。
一時間ほど前から感知網に掛かり始めた散発的に巨大な魔力の膨れ上がる様は、先程の緊急連絡の通り、敵方の拠点での大規模な戦闘が発生していることを意味している。
どんな者達が、何の目的で強襲を仕掛けたのかは不明だが、急がねばならない。
スノウが本当にあの地に居るのならば、戦闘に巻き込まれている可能性は高い。焦燥のままに更に加速してゆく。
常ならば行わない、《地巡》を用いた強引な魔力回復による全開の肉体強化を維持したまま、地を奔る流星の如く駆け続ける。
「ミラ様！　御無事でしたか！」
駆け抜けようとした岩場の陰より上がった声に、踵で地を抉りながら急制動を掛けた。
岩場より飛び出すように現れた男は、聖殿で見た事のある顔だ――ヴェネディエの言っていた監視員に相違無かった。
「……指定されていた場所はまだ先だった筈ですが」
「は。先程から奴らの拠点で発生している戦闘から、幾人かが逃げ出すように此方に向かって来まして……こちらの隠蔽を抜いてくる者もいたので、突発的に戦闘になって後退を」

「そうですか。監視を行っていた者達の中で負傷者は？」
全員軽傷です、と男が返すと同時に数人の同僚と思わしき者達が潜伏していたらしき岩場より現れ、ミラに黙礼を行う。
拠点から逃げ出す者達とカチ合う形で戦いはしたが、連中は自分達に時間を割くのすら惜しいといわんばかりに兎に角拠点から離れる事を優先していた為、損害は極軽微であったとの事だ。
「……逃げ出して来た者達の中には、明らかに雑兵ではない腕利きも混ざっていました――それが、あの様に何かに追い立てられて逃走に移るなど……あの地で何が起こっているのでしょう」
監視を続けていた半月の間、それこそ無数の眷属が入り乱れているのであろう禍々しき魔力が立ち昇っていた拠点のある方向を見つめ、男がうすら寒そうに身を震わせて呟く。
ミラは男と同じく、先程までと比べて爆発音や魔力の蠢動が減って来たかの地の方角へと目を向け……今はそれよりも重要な事があると直ぐに視線を戻した。
「……スノウらしき人物を見たという者は、この場にいるのですか？」
「それでしたら、私です。報告に上げた通り、顔を確認した訳では無いのですが……私見では、背格好や服装から見るに彼女で間違いないと思います。私もスノウ嬢とは何度か

言葉を交わしたことがあるので」
彼によると、遠視の魔法を用いて拠点の監視を行っていた際、敵の敷いた陣にかなり近い場所で何かを確認しながら移動している白い髪の小柄な女性の姿を見つけたのだとか。
岩や樹々に隠れるように直ぐに死角に入ってしまい、それ以降は見かける事も無かったとの事だが……監視員の男の断言も合わさり、女傑はそれがスノウであるとの確信を強めた。
「分かりました、私はこのままあの地に突入します」
「お気をつけて……スノウ嬢と二人で聖都に帰還なさる事を祈っております」
指で聖印を切り、創造神へと祈りを捧げながら送り出してくれる者達へと頷き、ミラは再び走り出した。

数十分後、邪神の軍勢が構築した拠点であった地を注意深く進む女傑の姿があった。
この場に足を踏み入れる際、監視の者達の様に逃亡途中の信奉者と幾度か遭遇したが、逃亡兵――怯懦の感情に身を竦ませている者など物の数では無い。

全て一撃で打ち倒し、凄まじい戦闘痕も生々しい戦場へと飛び込んだ。
この地が奪われた際に起こった戦いに加え、つい先程まで何者かが激しい戦闘を行っていた為か、地には無数の抉れた痕や巨大な穴が穿たれ、燃え上がった樹々の焼け残りが乾いた音を立てながら崩れる音があちこちから聞こえる。
道中、無造作に積み上げられた味方の遺体を何度か見かけ、その度に腹が煮える様な憤怒と――その中に彼女が探す少女の姿が無いかと、凍る様な恐怖に身を炙られ、その特徴的な色の髪が見当たらないことに安堵し。
折り重なる友軍の骸達に、直ぐに埋葬してやれない事を心中で詫びながら、静けさに包まれた戦場の中を進む。
いや、もう戦場跡、と表現すべきなのかもしれない。
突入直前までは響いていた爆音や大魔力の炸裂は既に鳴りを潜め、動く者がいなくなった戦場は、ミラが数えきれない程に体感してきた『戦いの終わり』の匂いを色濃く放っている。
戦いが終わった――その上で、邪神の軍勢の拠点となったこの地で、見かけるのは既に事切れた信奉者達の姿ばかり。
それは……どういう形にせよ、強襲をかけた側が勝利した事を意味する。
（……この規模の敵軍相手に……相当な戦力が無ければ不可能な筈）

一体どんな勢力がこれだけの真似をやってのけたというのか。

「……《災禍の席》、或いは《魔王》が直接動いた……？」

漏れた呟きは、確証の無い消去法から出た予測であった。

同族の行ったエルフの聖地への襲撃が原因で、この短期間で周辺国家から孤立した状態に陥っているらしい魔族領の事が思い浮かぶ。

かの地の筆頭や幹部達の気性を考えれば、有り得ない話では無いが……風当りの強くなってきた各地の魔族を保護する為に手を割いている現状、魔族領（かれら）が独自に襲撃を掛けるというのは無理がある様にも思える。

何であれ、邪神の軍勢に戦いを仕掛けている以上、少なくとも敵では無いと思いたいが……正体が知れない以上は警戒する必要があった。

焼け焦げ、破壊された戦場跡を、ミラは進み続ける。

やがて戦闘の行われた中心地に近づいてきたのか、地に転がる信奉者達の骸の数が急激に増えて来た。

同時に大地に蔓延していた呪詛も濃くなっていくのを感じ取り、身に回す魔力に聖性を宿して呪を防ぐ。

残滓だけでこの濃度――下手をすれば上位眷属が複数顕現していたのかもしれない。

眉を顰めながら、地に転がる敵の破片を眺めた。

過剰なまでの破壊を受けたのか、多くの信奉者や使役された魔獣はバラバラに千切れ飛び、無数に散らばって大地を赤黒く染めている。
その中でも比較的マシな損壊具合の骸には、皆一様に同じ断末魔の感情が顔に張り付いているようであった。
引き攣り、歪んだ表情から読み取れるソレは――おそらく『恐怖』。
死をも恐れぬ狂人が数多く存在する邪神の信奉者達……その多くが恐れ、怯え、叫び声をあげながら息絶えている。
命乞いでもしたのか、両膝を付いて祈るような体勢のまま、頭部だけが消失した躯。
逃げ出そうと背を向けた処を、背骨ごと胴を抉り取られたのであろう死体もある。
散らばる骸、その一つ一つに、凄まじい憎悪を以て殺意を結実させた。
そんな確信が抱ける様な戦い方――否、殺し方であった。
邪神の配下に憐憫の情など感じる筈も無いが、惨たらしいと評するべき殺戮の跡に、ミラは益々警戒を強めて拠点の中心へと進み。
――一際巨大な、おそらくは上位眷属の依り代となっていたのであろう、竜（ドラゴン）の骸を背に座り込んでいる白い少女の姿を見て、全ての疑問も警戒も吹き飛んだ。

「スノウ!!」

咄嗟に駆けだそうとして、竜の死体に宿る強烈な呪いの残滓に肌が粟立つ。

近付いただけでこれだ。背を預けて寄りかかっている少女がどれだけの呪詛を浴びているのか。

そう思い至った瞬間、渾身の力を込めて地に靴底を叩きつけて《三曜の拳》を発動。《日昇》で周囲の大気ごと呪詛を巻き取るように集め、《月輝》で呪詛を地の下へと押し込み、再度叩き込んだ震脚に《星辰》を乗せて押し込んだ呪詛を半ば強引に消し飛ばす。

溜めも無しに大技を連続で行使したせいで、少なくない魔力を消耗するが――知った事では無かった。

駆け寄り、肩を掴んで。そのちいさな身体がボロボロである事に慄き、けれど、しっかりと暖かい事に泣きたくなる程の安堵を覚える。

「スノウ!」

再び、名を呼ぶ。

奇妙な事に、あれだけの呪詛の近くに居たのにも関わらず、少女に汚染を受けた様子は診受けられない。

だが、それを差し引いてもスノウは傷だらけだった。

まるで全身に刃物が喰い込んだかの様に、身体中に無数の裂傷とそれに伴う出血の痕

がある。
全力で回復魔法を発動させて少女の傷を癒しながら、ミラはもう一度呼びかけた。
「スノウ、私です、分かりますか？」
「……ミラ？」
茫洋と虚空を見ていた紅い瞳が焦点を取り戻し、少女の口から不思議そうな、師を呼ぶ声が零れ落ちた。
久しぶりのその声を聞いて、ミラの胸中に溢れたのは安堵、心配、歓び、申し訳なさ、そしてほんの僅かな怒り。
言いたかった事も、伝えたかった事も全て開いた唇から滑り落ち。
何も言葉にすることが出来ず、代わりに師は弟子の傷だらけの身体をそっと抱きしめた。
回復魔法は発動させ続けたまま、無言でスノウを頭部を抱え込み続けるミラに、抱きすくめられた当人も感じるものがあったのか。
「……ごめんなさい」
俯いて、ただそう返し――そして思い出した様に顔を上げて、血が滲んだ自らの衣服のポケットの中を漁った。
「これ、ミラが持ってて」

「……これは」
そう言って、掌に乗せられた物を見つめ、ミラは絶句する。
赤黒く変色した血と泥で薄汚れているそれは、嘗ては純白だったであろう絹のリボンだった。
「これしか、これだけしか見つからなかったけど……ブランに渡してあげて」
傷だらけの身体では無い、もっと深い処の痛みを堪えるように、その声は微かに震えていた。
力無く笑って告げられる少女の願いに、ミラは頭を振る。
「渡すのであれば、貴女の手であった方が彼女も喜ぶでしょう」
「……無理だよ」
即座に帰って来た否定の言葉は力無い儘ではあったが、強い拒絶が籠っていた。
「わたしに、それを――エーデルの形見をブランに渡す資格なんて無いんだ……だってわたしは、ブランに酷い嘘をついたんだから」
だからお願い、と。再度懇願するスノウに、ミラも折れた様に頷く。
仔細は分からないが、今も治療を受けているであろう栗色の髪の少女に対し、スノウは強い後悔と後ろめたさを抱えている様だ。
なんとかしてやりたいとは思うが……先ずは聖都に帰り、スノウの傷を癒してからの

話だ。
「……では、これは私が必ずブランに渡します……兎に角、この場を離れましょう。貴女の傷の治療もきちんと行わなければなりません」
「うぅん、まだだよ」
再びの即答。
だが、今度の言葉には先程までとは打って変わり……強い、それこそ激情と呼んでも良い程の感情が込められていた。
自身を包んでいたミラの腕を優しく振りほどくと、少女は立ち上がる。
「わたしはずっと守られていた。最初はじいちゃんと、ばあちゃんに。二人がいなくなってからはミラに」
「……スノウ？」
「エーデルもいなくなって、ブランは目を覚まさなくて、どうして、って。なんでわたしの大切な人ばっかりって思った――けど、そうじゃなかった」
困惑と……漠然とした不安を感じて少女の名を呼ぶ師の言葉には答えず、彼女は振り向いて小山の様な竜の死骸を睨みつける。
その表情に、その瞳に。
ミラは今まで少女に見る事の無かった感情を感じ取って息を呑んだ。

「守られているままで、だから気付かないだけだった。理解してるつもりなだけだった……わたしだけじゃない。ずっと昔から、今だって。邪神は誰かの大切な人を奪い続けてる、虫を踏み潰すみたいに、なんの躊躇いも心の呵責も無く」

それは、その感情は。

「だから、そのツケを、わたしが。わたし達が払わせてやる。わたし達が喪ったものの価値を、痛みを、何万分の一でも、アイツらに教えてやる——その為の”力”なら手に入れた」

自身の身を焼きかねない程の、嚇怒と——憎悪だった。

《起動（イグニッション）》

少女を中心として、凄まじい魔力が吹き荒れる。

顕れたのは、漆黒の全身鎧。

既存の魔力を宿した武装の概念からすれば有り得ない――狂気すら感じる量の魔力導線が彫りこまれた装甲はどこまでも攻撃的で禍々しく、ともすれば死神か悪魔の様にすら映った。

深紅の魔力光を放つそれは、全身を巡る鮮血を思わせる不吉な輝きを宿し、脈動する様に明滅している。

その姿に、文献の上ではあるがミラは見覚えがあった。

驚愕に罅割れた声で、絞り出すように。

けれど必死の想いと、懇願すら込めてもう一度。少女へと呼びかけようとして。

「スノ……」

「……傷、治してくれてありがとう――ごめんね」

フルフェイスの装甲越しに、くぐもった声が遮る様に発せられ。

伸ばされた師の手を振り切る様に背を向けて、魔鎧を纏ったスノウは全身から爆発的な魔力噴射を行い、一瞬でその場から姿を消した。

己の知覚すら振り切る程の超加速に、ミラは咄嗟に後を追う様に立ち上がり……とうに気配も魔力も感じられない事に気が付いて、力を失ったかの如く膝からくずれ落ちた。

「……な、ぜ……」

届かなかった手が、行き場を失ったまま虚空だけを指先で抉り。
「どうして……スノウ……！」
弟子に置いていかれてしまった師の――否、家族に拒まれてしまった一人の女性の嘆く声が、血に染まった戦場跡に吹いた風に浚われ、消えていった。

老兵の残照　頂点の片割れ

浅い眠りの中、『見えた』光景は、ありふれたモノだった。
小さな一軒家。
卓を囲み、お腹が空いたと騒がしくする小さな子供達。
椅子の上に乗り上がる幼子を行儀が悪いと窘める年長らしき兄弟と、そんな子供達に優しい笑顔でもうちょっと待ってね、と笑いかける母親らしき女性。
何処にでもありそうな、小さな幸せを享受する見覚えの無い家族。
この光景を本来見ていたのであろう、自分では無い”誰か”の想いが流れ込んでくるかの様に。
その笑顔に、その声に、仕草の一つ一つに。
狂おしい程の愛しさと郷愁の念が胸に満ちる。
――けれど。
いつもと同じ様に、そんな暖かな”誰か”の記憶は、最後は視界を埋め尽くす血と炎で

塗り潰された。
染まる。
鮮血で、炎で。空も、大地も、真っ赤に染まる。
全てが朱く染め上げられた視界の中で、地を這いずって伸ばした手の先には、一つだけ奇妙な程に目を引く……赤ではない黒いナニカがあった。
それは、真っ黒に炭化した誰かの――。
それが何であったのか理解した事で、血反吐混じりの絶叫が”誰か”の喉を割って飛び出して。

――そうして、焼け焦げ、半ば倒壊しかけた家屋の中で身を横たえていた少女は、目を覚ました。
「――ッ！」
荒くなっていた息を整える為、喘ぐように肺に空気を取り込む。
汗で布地が肌に張り付く不快感と、身体中に刻まれた裂傷の痕がじくじくと痛みを訴えて来た。

夢見た名残か、胸に溜まった儘のドス黒い感情を――吐き出すのでも無く、追い出すのでも無く。

むしろ胸の裡に抱え込むかの様に、両の腕で自身を抱き締める。

「……うん、分かってる。分かるよ、わたし達は同じなんだから」

深紅の両の瞳に夢に見た光景と同じ、劫火の如き光を宿して少女は呟く。

「行こう。奴らを、邪神やその手下を一人でも多く、あのときと同じ炎の中に焚べてやるんだ」

魔鎧《報復（ヴェンジェンス）》。

正式な銘を持たず、邪神とそれに類するものに対する負の感情を凝り固めたかの如きソレは、何時からかそう呼ばれ始めた。

在り方からして、造りだされたのは邪神がこの世界にて蠢動を始めて以降の事であるのは確かだが、正確な時期は定かでは無い。
その存在が公に確認されたのは大戦初期、とある小さな街での防衛線だと言われている。
所持者となったのは、街の防衛を担った兵でもなければ援軍としてやってきた他国の戦士でも無い、極普通の一般人であった青年。
固めた守りを食い破られ、無数の信奉者と魔獣が雪崩れ込む事で惨劇の場となった戦火に包まれた街の中。
故郷を焼かれ、友人や家族を目の前で食い散らかされた青年の慟哭に応え、魔鎧は怨嗟の咆哮と共にその力を解放した。
なんら戦う術を持たなかった筈の若者に、絶大な魔力とそれを源にした身体強化による”力”を与えたその呪物は、その場にいた邪神の軍勢に甚大な被害を齎し。
装着者の身を一切顧みない呪物としての特性故に、負荷に耐え切れずに青年が自壊すると同時に依り代を失い、かろうじて生き残った敵勢力によって破壊される。
――だが、その十数年後。
当時の信奉者達の手によって粉砕された筈の魔鎧は、再び姿を現した。
その際にかの鎧を身に纏っていたのは、冒険者の組合にも登録記録が残っていた魔導

士。
共にパーティーを組んでいた仲間達が大戦で亡くなり、以降、行方不明となっていた彼は魔鎧を携えて戦場に度々姿を現し、異常な迄に強化された魔法と身体能力によって無数の邪神の信奉者達に凄惨な死を与え。
最期はやはり負荷に耐え切れずに半ば自滅する様に力尽き、魔鎧も再度破壊された。
それでも尚、時を経て魔鎧は顕れる。
如何な損傷を受けようと、粉々になるまで破砕されようと。
邪神への報復を、奪われた命への贖いを渇望する歴代の所有者達の嘆きや憎しみに応える様に、或いは喚ばれるように復活し、その度に邪神の軍勢に大きな損耗を与え、時として人類種側も余波を受ける形で僅かに被害を被った。
何を以てかの魔鎧に『選ばれる』のか。これもまた明確な条件は分かっていない。
先にあげた街の青年の様に何一つ戦う術を持たない者から、冒険者、国仕えの兵士、歴戦の魔族の戦士まで。
種族・出身問わず、様々な者の下に魔鎧は顕れ――担い手の報復の意思と共にその力を振るってきたのだから。
推測ではあるが、その特性が故に邪神とそれに類する存在に対する強い憎悪を抱き、戦う力を渇望する者が選ばれるのではないか、とされていた。

《報復(ヴェンジェンス)》が戦場に現れた際、目撃した者の証言や後の調査によって判明した断片的な情報によれば、魔鎧は歴代の所有者達の技術を一部取り込み、現使用者が行使できる様にする機能を有している。

以上の事から武具型の呪物としては最悪の部類に入る、使用者の魂を喰らう侵食武装であると推測される。

また、物理的に幾度破壊されようと邪神に対する負の精神を糧とし、時間を経て復元されるというその不滅性も合わさり、歴史上数える程しか存在しない特級の呪物として指定されるのに時間は掛からなかった。

――公的な記録によれば、魔鎧が当時の所有者と共に最後にその姿を見せたのは既に数十年以上前の話だ。

だが、少女と彼女の師が袂を分かつ事となったあの日。

新たな宿主(あるじ)を得、邪神への憎悪と殺意が形を為した呪いの魔装は、嘗て幾度となくそうしてきた様に呪わしき慟哭(うぶごえ)の咆哮を上げた。

「……よりにもよって、あの《報復(ヴェンジェンス)》が今代の依り代としてスノウを選ぶとはね」

部下より上げられた報告書に眼を通し終えると執務机の上にそれを放り投げ、ヴェネディエは独り、呟く。

書かれていた内容は南方方面の戦線での結末だ。

敵戦力は規模としてはそこまで大きいものでは無かったのだが、南方広域をカバーしていた魔族領が動けない現状だ。

教国と帝国も援軍の派遣予定は立てていたが、何分現地まで距離がある。暫くは膠着状態が続くと思われたのだが……戦場に乱入してきたかの魔鎧の使い手によって、敵戦力は完全に壊滅。

邪神の信奉者達も、彼らの使役する魔獣・召喚獣も、全て尽く鏖殺した少女は、戦いが終わるとそのまま姿を消したらしく、未だに行方を補足する事は叶っていない。

「歴代の使い手達と違って、現時点では此方に被害が出ていないのが救いではあるが……」

それもいつまで続くか。

骨子となっているのが憎悪や殺意といった負の感情である呪物だ。

ましてや特級に指定される程の物ともなれば、使い手にどれ程の精神侵食が発生するのか、想像に難く無い。

書庫から引っ張り出してきた資料にも、時間経過――というより、おそらくは使用頻

度によって魔鎧との融合深度が深まり、それによって性能と精神を呪が蝕む度合いが変化すると記されていた。

記録にある限りでは、歴代の使用者達は誰一人例外無く、最期には敵味方の区別も付かない程に精神を摩耗させた状態で狂った様に戦いを続けていた、とある。

――つまり。

「あの娘を止めるつもりなら、そうなる前に魔鎧を引き剥がす必要があるという訳だ」

思考を纏める為か、敢えて考えを口にしながらヴェネディエは机上に地図を広げた。

「……中央都市群から帝国北部、教国圏に戻った後に南下している……」

書庫にあった資料を基に印が付けられた地図を指先でなぞり、再度資料と見比べて丁寧に確認してゆく。

付けられた印は《報復（ヴェンジェンス）》――スノウがこれまでに姿を現した戦場を示していた。

「やはり歴代の所有者が確認された地を順に巡っている、と考えるのが妥当か？」

その割には資料よりも様々な地域に移動している様だが、教国も魔鎧の歴代所持者について全員分の詳細な記録を持っている訳では無い。

呪物からの精神侵食や干渉を受けている少女が、こちらの把握していない者も含めた嘗ての使い手達の記憶に引き摺られる形であちこちに移動している、という可能性は十分に有り得そうだ。

ならば、次に現れる場所も自ずと推測出来る。
「少々待たせてしまったが……これでミラを具体的な場所へ送り出してやる事が出来そうだ」
あの日以降、意気消沈こそしなかったものの、何かに追い立てられる様に鬼気迫る様子で出撃と鍛錬を繰り返している友人の顔を思い浮かべ、ヴェネディエは眉間を指先で揉み解した。
尤も、聖都に帰ることすらせずにそのままスノウの捜索を続けようとした彼女を説き伏せ、帰還する様に促したのは彼自身だ。
だからこそ、説得した責任も兼ねて未だ再会叶わぬ少女への手掛かりとなる情報を集めていたのだが……漸く目処が立った。
最悪、腕づくで《報復（ヴェンジェンス）》を取り押さえる、等と言う難事をこなさねばならない以上、最低でもミラ以外にもう一人――出来ればガンテスかラックによる助力が必要になる。
彼女達が教国の最高戦力であるが故に、それとなく同時期に近い戦場に派遣するのにも他の地での戦況との兼ね合いや擦り合わせが必要だ。
皮肉な事に件の大攻勢を行うと思われた敵の拠点は、スノウの手によって壊滅させられている。なので、その防衛に集めた戦力は一時的に宙に浮いた状態だ。
あの一件以降、人手不足で相当に苦労しているらしいマイン氏族のドワーフに追加の

応援を送る事を加味しても、十分にミラを望む場に送り出してやれるだろう。
地図から視線を離し、次は派遣可能な人員のリストと睨めっこを始めるヴェネディエ。
執務机の上に広げられたままの地図には、南方――魔族領近くの地へと、新たな印が書き加えられていた。

その青年は、最近特に魔族への対応が悪化してきていた中央都市群から、魔族領へと移住を希望する同胞達を護衛している最中であった。
魔族領、最高幹部《災禍の席》の第十席、《不死身》。
いつ聞いても我が事ながら強烈に違和感のある大層な肩書ではあるが、それでも青年が故郷での代表者の一人である事に変わりは無い。

脳筋の多い魔族の中にあって比較的他種族に近い感性を持っている青年――《不死身》は、不当な風評被害で住処を変えざるを得なくなった同族を迎え入れるという任にも意気高く当たっていたのだが。

どうやら、邪神は余程魔族が目障りらしい。

規模こそ大きく無いものの邪神の手勢が、殆どが非戦闘員である（あくまで魔族の基準で、だが）此方の集団に、強襲を掛けて来たのだ。

だが、邪神というよりも、襲撃してきた者達の独断の可能性もあった。

なにせ襲ってきた連中には、魔族領に属さないはぐれ――嘗て領内から叩きだされた者や、各国に手配状の廻っている御尋ね者などが多く混ざっていたのだから。

「……ひょっとして、エルフの住む森を襲ったのもこいつらって事かぁ!?」

だとすれば、この軍勢とも言えない中途半端な数も納得が行く話だ。

伝え聞いた情報によれば、その襲撃の際に殆どがエルフの手によって打ち倒されたという話なので、その生き残りといった処か。

攻城用の弩弓に重装甲を付け足して半ば鈍器化させた得物で敵を撃ち抜き、射撃を抜けて来る者は装甲部分で撲殺した。

同族とはいえ、邪神に尻尾を振った痴れ者……おまけにこいつらのせいで無関係の同胞が現在進行形で迷惑を被っている。容赦をする必要性は感じなかった。

先程も言った通り敵は小規模。時間さえかければ《不死身》単独でも返り討ちに出来る兵力だ。《災禍》の中で最弱の身とはいえ、元より、持久戦や泥仕合の類は彼の得意分野であるが故に。

だが今現在、彼と僅かな手勢は避難民となった同胞の護送任務中だ。

彼らの頭領――《魔王》に直接相対する事を恐れ、嫌がらせの様に非戦闘員に襲撃をかけるなどという真似を行う小物連中は、当然の如く護衛対象である魔族の民を集中的に狙った。

「くそっ、鬱陶しい真似を……！」

数人纏めて弩弓の大矢（ボルト）で串団子に変え、地に縫い留めながらも毒づく。

「《不死身》殿！　このままではじり貧です！　避難民の脚では連中を振り切るのは難しい！」

前衛を務める部下の叫びに、次の矢を装填しながら怒鳴り返す。

「僕が殿を務める！　あと少しで領内だ、そうすればこの小物共はウチの頭領に察知されるのを恐れて追って来れないだろう！　皆には荷を捨てて身一つで走らせろ！　後で可能な限り回収するから！」

「御一人で殿とか大丈夫ですか!?　さっきも脳天に矢ぁぶっ刺さってましたが!?」

「大丈夫な訳ねーだろ滅茶苦茶痛い！　あぁ、もう……普通に一人で殲滅するより残機

減りそうだなぁ……！　でもこれが仕事なんだよなぁ……！」

切羽詰まっている筈なのだが、どこか間抜けなやり取りをしつつ。

部下に避難民を任せ、《不死身》自身は殿となって只管に迎撃と肉壁に精を出す。

「あの様な薄汚い性癖を持つ愚か者を王と呼ぶ蒙昧め！　死ね!!」

「邪神の配下の癖に反論し辛い罵倒してくるのやめてくれない!?」

高い脚力を以て一気に間合いを詰めて来た獣人が、罵声と共に槍を繰り出してきた。

防ぐのも避けるのも難しくは無いが、その隙に後続が自分を無視して避難民に向かうであろう事は容易に察せる。

《不死身》は敢えて前に出た。

――灼熱感。

鋭い穂先が腹を突き破り、背に抜ける。

「あ”あ”あ”あ”もう”っ、痛ってぇぇぇっ!?」

口から血反吐を吐きつつ、泣き言の混じった悲鳴を上げ。

驚愕の表情のまま刹那の間だけ固まった獣人の首に一瞬で照準。

魔装処理の施された個人携行の大型弩弓という頭の悪い武装は、取り回しこそ余り良くは無いが一撃の破壊力は一級品だ。

発射された大矢（ボルト）は相手の首から顎下を引き千切る様に消滅させ、後続の敵の腹を抉り

飛ばした。
「奴は死にかけだ！」
「囲んで殺せ！」
（はい狙い通り！　こっちを仕留めに来てくれた！）
どてっ腹を槍で貫かれた《不死身》を仕留めてしまおうと、避難民では無く彼を優先して敵の狙いが変わる。
生憎と腹に穴が空いた程度で終わる様な身ではない。伊達にこんな通り名では無いのだ。痛いけど。凄く痛いけど。
（……とはいえ、そのうちこっちの死に体が擬態（ブラフ）だと気付く。そうすれば元の木阿弥だけど……どうしようか）
現時点では避難民に死者は出ていないが、速力や広域攻撃の手段に乏しい自分ではいずれ迎撃漏れが出る可能性が高い。
腹を突き抜けた槍を心底ウザったそうに引っこ抜き、投槍にして突撃を仕掛けて来た信奉者の脳天に生やしてやりつつ、内心で《不死身》は歯噛みする。
（敵が全て自分に向かってきてくれたのなら、話は楽だったけど……果たして領内まで犠牲無しで行けるか？）
脳裏を掠める嫌な思考を振り払い、しつこく追撃してくる裏切者の同族達に向け、弩

弓を構え――。

空から降って来た赤光の尾を引く黒い流星が敵軍の中心に直撃し、悲鳴と怒号、血飛沫と肉片が同時に宙へと飛び散った。

同時に爆発的に膨れ上がる攻性を伴った魔力に、その場にいた全ての者が一時的に動きを止めて硬直する。

唯一の例外であった《不死身》は即座に狙いをずらし、照準越しにその着弾地点を注視した。

落下して来たのは、漆黒の全身鎧だ。

脈動する深紅の魔力導線は狂気の沙汰としか思えない程の量が全身に刻まれ、遠目からだと赤黒い姿にすら見える。

「う、ぁ、ギ、あＡＡＡＡＡＡぁＡＡＡＡＡッ!!」

右手に敵方の指揮官らしき魔族の首を掴んだまま、粉塵けぶる着弾痕（クレーター）から進み出た鎧姿の何者かは、そのまま無造作に掴んだ首を握り潰してへし折ると、殺意を剥き出しにして咆哮した。

ビリビリと、空気が震えるような……どこか悲鳴にも聞こえる雄叫びが南方の大地に響き渡り。

蹂躙――否、殺戮が始まった。

立ち塞がる敵を、叩き潰す。背を向けて逃げ出す敵を、踏み砕く。

飛び込んだ小さな戦場での結末は、此処一月足らずで経験したものとそう変わる事が無かった。

口々に聞くに堪えない雑音を垂れ流して襲い来る邪神の信奉者達を、極限まで強化された身体能力と《三曜》の技を以て屠る。

抉り、引き裂き、潰し、貫き、砕き、殺す。

少しだけ周りの連中より強かった――魔鎧を纏った自分と三合程打ち合ってみせた魔族の男の胴を貫手で貫くと、少女はその顎を掴んで首を捩じり折った。

脊髄ごと首を引き抜かれた自軍の将を見て、多くが恐慌状態に陥り。

それを為した血濡れの死神から距離を取ろうと我先にと逃げ出す者が現れると、恐慌はたちまちに伝搬し――邪神に頭を垂れた魔族達の生き残りは、数足らずではあったが、それでもかろうじて維持していた軍勢としての秩序を崩壊させた。

そして、戦意を失ったからといって追撃の手を緩める様な存在であれば、魔鎧は

《報　復（ヴェンジェンス）》などという忌み混じりの通称を与えられてはいない。
膨大な魔力を推進力として利用する魔力噴射機構。
全身各所に備えられたその機能は、静止状態からの超加速や高速旋回を可能とする。
本気で使用すれば瞬きの間に音の壁を突き破るソレを以て、少女は纏まりを失って四方に逃散する信奉者達に容易に追い縋り、躊躇なく背後からその穢れた命を刈り取ってゆく。
背に向けて手刀を突き入れ、捻りながら胸に抜ける。
後頭部へ向けて縦拳を振り下ろし、頭蓋を砕くと潰れた中身が耳から押し出された。
死に際の馬鹿力か、邪神の加護を暴走させようとした者には、魔鎧から溢れる魔力を練った《命結》を撃ち込み、発動の機会すら与えずに滅する。
恐怖に顔を歪めながら、或いは、命乞いの言葉を叫びながら、生き残った者達はその数を減らして行き。
程なくして、動く者はいなくなった。
紅く染まった視界の中、動く信奉者達が一人もいなくなると、スノウは霞掛かった思考のまま周囲を見回す。
（……ここにいたのは全部、倒した……後は……）
ゆっくりと首を巡らせた先に、離れた場所から此方を見つめて来る青年の姿を目に留

める。

先程、自分が仕留めた連中を相手に、一人で戦っていた魔族の若者だ。

この場にいた邪神の手下共とは同族だが……おそらく魔族領の者だろう、とぼんやり考えた。

（ああ、それなら後は放っておいても良いよね）

あれ？　と。思考が分裂したかのような、別人と重なったかのような感覚に少女は困惑する。

その間にも、まるで首から下は自動で動く絡繰りの様に動き……。

気が付いたときには、青年の首を掴んで締め上げている最中だった。

（なん、で……駄目なの、に）

赤一色のままな視界、どこか現実味の無い感覚。

全身に励起した魔力導線から漏れ出る魔力が喰い込む事で、身体中に刃を刺し込まれた様な痛みが走る最中、朦朧としながらも青年の首から手を離そうとして。

――なんで駄目なの？

憎悪で焼け焦げ、しかし同時に冷え切った自分の声が聞こえた気がした。

――此処で殺した奴らと同じ、魔族だ。なら、同じ様に殺してしまっても良いじゃな

いか。
良い訳が無い。この人は邪神の手下じゃない、奴らと戦う戦士だ。
――エーデルだって戦士だった。でも死んだ。魔族とエルフのせいで。
違う。それこそ邪神のせいだ。そこに種族は関係無い。
――自分から離れた癖に、教わった考えにしがみ付くのか。ブランだって、もう目を覚まさないかもしれないのに。自分だけは大事な思い出を、手放さずにとっておけると思っているのか。

魔鎧の放つ呪い混じりの魔力にあてられ、少女の考えと相反する様に大きくなる声。
それは、どれだけ頭で違うと理解していても、どうしようもなく心の隅に澱んでいた感情だった。
間違ってもそれが少女の本心、という訳では無い。
だが、憎悪に薪をくべるが如き魔鎧の精神侵食によって大きくなったその声は、疲弊した心身に深く絡みつく。
弱々しく抵抗を続ける思考を裏切り、身体は憎しみの感情に突き動かされる様に動いた。
青年へと力を込めた指先が突き立てられようとして――。

強化された知覚や反応速度、その全てをすり抜けて、横手から衝撃が叩きこまれる。
困惑、驚愕、安堵――そして警戒。
吹き飛ぶ一瞬に無数の思考と感情が入り乱れ、身を捻って着地すると。
そこには何故知覚出来なかったのか不思議な程に、見た事も無い巨大な魔力を背負って立つ、魔族の戦士がいた。

敵の血肉を頭から引っ被った様な有様の魔鎧を、少しずつ距離を取りながら注意深く観察していた《不死身》は顔を顰める。
戦場で容赦が無い事自体は魔族の価値観的に全く結構な事なのだが、そのあまりにも凄惨な戦い方を見てしまうと、結果として助力されたという感謝の気持ちよりも、警戒の方が圧倒的に先に立つ。
（何者か知らないけど……万が一戦いになったら、勝負にもならないな……最低でも《狂槍》さん……第五席以上でもないと多少の勝ちの目もなさそうだ）
幸いな事に、殺戮の限りを尽くしていた鎧の人物は、全ての敵を殺し終えて赤く染まった大地の中心に立ち尽くしている。
部下と受け入れ予定の避難民達には、自分を置いていく事になっても兎に角進めと指

示してある。今頃、領内に入ったことだろう。
……鎧の戦士が味方だった場合、礼の一つも言わないのは心苦しいが……この場はこのまま離脱すべきだと青年は考えて。
――瞬き一つする間に、親指サイズに見えるまで離れていた筈の赤黒い姿が、眼前へと移動していた。
「ッ!?」
無造作に伸ばされた手を躱して距離を取れたのは、半ば偶然だ。
つい武器を向けそうになるが、咄嗟に発射口が持ち上がる弩弓を意識的に押さえつける。
先程も言ったが、戦えば勝ちの目は無いも同然。《不死身》の方から決定的な敵対行動は取りなく無かったが故の行動だったのだが。
離した筈の間合いを再び一瞬で潰され、今度こそ反射で放ったほぼゼロ距離の射撃は手の甲で撫でる様に逸らされると、明後日の方角へと飛んで行った。
喉笛を握りつぶさんばかりの力で首を掴まれると、宙に持ち上げられる。
「っ、ガッ……！　速、すぎでしょ……！」
なんとも奇妙な事に、こんな真似をしておいて目の前の鎧の人物はさっきまでの戦いの様な強烈な殺気を放っていない。

寧ろどこか夢現というか……茫とした空気すら感じ取れた。
だが、そんな当人の纏う気配とは裏腹に行動の方は極めて明確だ。
首を締め上げ続ける掌とは逆の腕が、胴の脇へと引き絞る様に添えられ、鉤爪の如く開かれて指先に力が籠る。
（あぁクソッ、せめて残機が尽きない様に立ち回るしかないか……！）
無駄とは思いつつも、《不死身》は喉を掴み上げる黒い装甲に包まれた腕を引き剥がそうと爪を立て、腕の先にある凶悪な形状の頭部装甲（サレット）を睨みつける。
繰り出される鉤手の一撃が齎すであろう痛みに、辟易とした気分で歯を食いしばって耐える覚悟を決めるが……その機会は訪れなかった。
「――おい、俺の舎弟（ぶか）に何してくれてんだテメェ」
そんな声が聞こえると同時に、目の前の鎧の人物は横手から巨大な鉄槌でブン殴られたかの如く吹き飛ぶ。
空中でネコ科の獣の様に軽やかに身を捻って着地する黒鎧には目を向けず、《不死身》は突如投げ出されて尻もちを着いた体勢のまま、肩の力が抜けた様子で溜息をついた。
「ハァ……ゲホッ、助かりました、頭領（ボス）」

「おう、仕事ご苦労だったな」
端的に返してニヤリと不敵に笑ったのは、魔装の鎧姿に深紅の腰布を巻きつけた鳶色の髪の男だ。
適当に伸ばした髪も、部下を見据える瞳もありふれた暗褐色の色合いだが、その眼光は猛禽を思わせる程に鋭く、全身から旺盛な生命力と覇気が満ち満ちている様であった。
背には一見簡素な意匠だが、纏う魔力からして凄まじい業物である事が伺える大剣。
何より、当人から放たれる魔力は遥かに背負う武器を上回る。
押さえつけているのであろうソレは、敵として相対する者からすれば噴火口に蓋をされた活火山を思わせる圧を垂れ流していた。
「――で、そこのなんか赤くて黒いのは……あぁ、確か《報復（ヴェンジェンス）》だったか？　魔族領（ウチ）に喧嘩売ってくるってんならこの場で殺すが？」
特に気負う様子も無く、男――魔族領筆頭《魔王》は、肩をすくめて魔鎧の少女へと問い掛けた。

老兵の残照　決意

「うわぁ、《報復（ヴェンジェンス）》……そうか、アレが……」
「うん？　お前は見た事無いんだったか？」
　弩弓を担いだ青年――《不死身》の納得と自身の不運への嘆きがブレンドされた声に、隣の《魔王》が怪訝そうに反応した。
「無いですよ……確か前に出たときって僕が赤ん坊くらいの頃じゃないですか。ってか知ってたら見た瞬間に回れ右して全力で後退してます……その様子だと頭領（ボス）は知ってるみたいだけど」
「あぁ、前に一度だけ戦（や）った事がある……戦いっていうよりは殆ど介錯みたいなモンだったけどな」
　部下の言葉に面白くも無い記憶が掘り起こされたのか、顔を顰めてつまらなそうに言い捨てる。
　背に負った大剣の柄を握り、ゆっくりと抜き放つと《魔王》は剣先を眼前の魔鎧へと向けて顎をしゃくった。

「そんな訳でな。個人的に魔鎧（オマエ）と戦るのは辛気臭い事ばかり思い出すから気が乗らないんだが……俺の縄張（シマ）りの連中に手ぇ出すなら話は別だ」

圧倒的な強者を前に霞掛かった思考が晴れたのか、それとも先程の《魔王》の一撃に何某かの効果でもあったのか。

自身の纏う鎧に匹敵するであろう霊剣の切っ先を油断無く見据えながら、少女は思わず、といった様子で呟く。

「……《魔王》……魔族領のトップで、世界に二人しかいない超越者……」

「へぇ？　それだけ『呑まれてる』のにまだ会話出来るのか」

片眉を上げて意外そうな表情を見せる魔族の長であったが、一秒後には頭を振って大仰に嘆く仕草をしてみせた。

「声からして、人間で言えば十代半ばって処か？　あと二、三も若けりゃ俺的にドストライクな感じがするんだがなぁ」

「頭領（ボス）、魔族の恥部だから性癖を公言するのやめよう？　なんなら一生黙ろう？」

唐突に頭の悪い会話を始めた二人の魔族に、馬鹿にされているのかとスノウの目が眉庇（バイザー）越しに冷たさを伴って細められる。

一度は収まった少女の胸に蟠る憎悪の波が、悪感情に反応して再び鎌首を擡げたのを《魔王》も気付いたのか。

軽く咳払いすると、再び肩をすくめて見せた。
「冗談だよ。いや、幼女は世の宝ではあるが……魔族領(ウチ)の領民(ガキ)共に手ェだすなら例外適用ってやつだ――誰であろうとぶち殺す」
瞬間、スノウがイメージしたのは巨大な溶岩溜まりが破裂し、津波の如く押し寄せる光景だった。
真紅の布地が赤い残像を残し、翻り。
魔鎧によって人外級の域にまで強化された知覚領域や反応速度――その全てを凌駕して凄まじい踏み込みと共に超速の剣閃が肩口へと撃ち下ろされる。
(！　速っ……!?)
それでも、剣撃自体は至極シンプルな太刀筋だ。咄嗟に掌を剣の腹へと触れる様に合わせ、《流天》を発動。
斬撃に込められた威力と魔力を逸らすように操作しながら、半身を傾けてを身を捌こうとして。
――まるで天から堕ちる流星を受け止めた様な衝撃に《流天》ごと圧し潰され、左腕の装甲を容易く切り裂いて刃が深く喰い込む。
「……ぐ、っぁぁぁぁぁっ！」
気迫と悲鳴の入り混じった叫びと鮮血が、南方の大地に飛び散った。

腕を半ばまで縦割りにされながらも、発動を切らなかった《流天》の御蔭もあって一撃の威力の大半は受け流す事に成功する。

響き渡る轟音。

無理矢理に逸らした剣の切っ先が大地を抉り、高位の魔法による爆撃でも行ったかのように大地が馬鹿げた範囲で吹き飛んだ。

抉れ、巨大な爪痕が穿たれた地面が焦げ臭い匂いを発する。

魔鎧の機能によって鈍化した痛覚――その感覚越しでも燃えるような痛みを発する裂かれた左腕を押さえ、少女は驚愕と共に戦慄した。

聖都で訓練に励んでいた際、基礎的な座学の一環として世の強者の事も学んではいた。

だが実際に身を以て体験すると、その知識があくまで上辺のものでしかなかったと、痛感する。

人類・人外問わず、現存する強大な力を持つ者達の中でも極点と言える存在、少女の学んだ《三曜の拳》の開祖にして世界に残る唯一の”龍”の末裔――《半龍姫》。

遥かいにしえより並ぶもの無き生命の頂点、戦武の極みとされている龍の姫君だ。

そんな自然の、世界の代弁者とも言われる超越者に、個としての性能と磨いた才覚のみで限りなく近い領域に迫った突然変異の規格外（データフメ）。

それが魔族の王。
嘗ては《猛禽》の字名で呼ばれ、後に《魔王》と称されるようになった闘争の概念を人の形に押し込めた怪物であった。
「ぁん？　今の妙な手応えは……龍の姐さんの技か？　新しく弟子とったなんて話は聞かねぇんだけどな」
大地を爆砕した切っ先を持ち上げると大剣を一振りし、肩に担ぎ直して珍しい物を眺めるような視線を向けて来る《魔王》。
緊張感とは無縁の軽快さを滲ませた言動とは裏腹に、探るような光を灯す眼光に気圧され、スノウは後方に跳躍して距離を取った。
断たれた装甲は金属が軋む音と共に復元を始めているが……斬撃自体に復元を阻害する効果でもあったのか、常と比べれば時間が掛かっている。
同時に、本来なら大きく負傷すればそれを補う様に装甲が血肉に喰い込んで、損壊した箇所を補う機能も働きが鈍い。
左腕の出血こそ止まったが、戦闘に使用するにはまだ暫くかかりそうだ。
今の状態で同じレベルの攻撃が来れば……おそらく防げない。
少女に人外級との戦闘経験があれば、初撃は回避一択であると判断も可能だったのであろうが……戦場を彷徨い始めて一月足らずの彼女に、強者との実戦経験が不足してい

るのはどうしようも無い事であった。
焦燥に歯噛みする魔鎧の主とは対照的に、肩に乗せていた大剣を小枝の様に手首だけで一振りすると、平坦な口調で《魔王》は言葉を続ける。
「こっちに死人は出てないし、今の一撃で手打ちにしても良かったんだが……姐さんとの誼だ、せめて完全に呑まれる前に介錯してやるよ」
言い終えるや否や、その姿が残像を残して消えた。
（消えっ……いや、右っ！）
限界まで強化率を上げた五感や《三曜》を用いた魔力の流れへの知覚、その全てを総動員して、今度こそ横手に音も無く現れたその姿を捉える。
とはいえ片腕が利かないままでは、まともな反撃など望むべくも無い。
横殴りの斬撃を身体を傾けて躱し、魔力噴射を利用して回避と同時に牽制がてら相手の脚を蹴りで刈る。
大型の魔獣の四肢ですらへし折り、砕く威力の蹴撃――だが《魔王》は小動もせず、寧ろ感心した様子で「おぉ？」と目を見開くだけだった。
「本当に大したもんだな。その侵食度合いで会話だけでなく、技の方もちゃんとキレてる」
再び距離を取るスノウを視線だけで追い、剣を無造作に片手にぶら下げたまま鳶色の

瞳がひどく惜しいものを見る様に細められた。
「なんでそんな呪物(モノ)に手を出した？　長ずれば《災禍(ウチ)》の連中と比べても見劣りしない腕になるだろうに」
「……長ずれば、って何さ」
それが彼女にとって、どんなに胸を抉る言葉であったのか。
低い声で応じる魔鎧の少女は、装甲に包まれた姿であっても激発を堪えている様が感じとれる程の怒りを見せ。
その感情に呼応したかの様に、魔鎧の装甲がぎちぎちと音を立てて破損した箇所の復元速度を上げ、魔力導線がより深く、強く明滅する。
「そうなる為に、どれだけ待たなきゃいけないの？　この瞬間、今だって私達(わたし)から奪って、壊した奴らが同じように誰かの大事な人を奪っているのに」
裂けた左の掌を見つめ――少女は其処に、血濡れて薄汚れたリボンを幻視した。
「それを放って、この気持ちにも蓋をして、安全な場所でのんびり修行でもしてろっていうの？」
此方の二の腕を掴み、重症の身の上でありながら死に物狂いで妹の身を案じていた友人の、震える手の感触を思い出す。
「そんなのは、嫌だ……！　”いつか”なんかじゃない。今、このときに戦えなきゃ意味

が無い……！」

紅く染まった記憶にあるのは、嘗て故郷で失われた家族の亡骸だった。

わたしが強ければ――今の力があれば、皆、大事な人は今も傍にいたのかもしれないのに。

それは有り得ない前提であり、意味の無いＩＦだ。

それでも、少女の胸中に深く刻まれた後悔であり、嘆きであった。

悲嘆と苦しみを噛み潰した様に零れ落ちる少女の言葉に、魔族の王の顔が何処か懐かしそうに――本人のいう処の辛気臭い色の感情に染まる。

「……そうか。お前もそんな感じか……分かっちゃいたが」

「……そうだよ、だからアンタが幾ら脅かしたって、わたしは魔鎧（コレ）を手放さない――アンタが看取った人と、同じ様に」

「チッ、精神侵食の影響かよ、やり辛いなオイ」

少女の脳裏に浮かんだのは、《報復（ヴェンジェンス）》を纏う様になってから夜毎夢に見る”誰か”の記憶。

その中の一つにあった、”誰か”を自らの手で斬って、その終わりを見届けた《魔王》の姿であった。

一連の攻防に殺す気が全く無かった、という訳では無いだろう。先の言動の通り、場

合によっては介錯してしまおうという意思も《魔王》にはあった筈だ。
だがそれ以上に、此方を脅えさせる示威行為の面が強かった事を、少女はなんとなく察していた。
嘗て、”誰か”にそうした様に。
そして、実現出来なかったそれを、今度こそ為す様に。
可能なら自身の武力を以て魔鎧を手放させようと――そんな風に考えて、この男は自分に刃を向けたのだと。
少女の意思と《魔王》の意思。
両者のそれに聞き入っていた、この場にいる残った一人である《不死身》は、気遣う様に自らの上司に向かって声を掛ける。
「頭領（ボス）、彼女は……」
「お前はもうちょい下がってろ」
平然とした、だが有無を言わせぬ口調で部下に退避するよう口にすると、世界に現存する超越者二名、その片割れは先程まであった軽い調子を消し去り、静謐さすら宿した声で少女に問いかけた。
「最後にもう一度だけ聞いとく。その物騒な鎧を手放す気は無いんだな？」
「……無い。絶対に」

「そうかい。じゃ、仕方ねぇ」
《魔王》が下げていた大剣を握り直すと、それがゆるりと持ち上げられ――次の瞬間には先程を上回る速度で少女の間合いに踏み込んでいた。
驚愕する暇すら無い。
落雷を思わせる一閃が、空気を裂く音を遥か彼方に置き去りにして振り抜かれる。
先程までの比類無き速度と威力の斬撃ですら『仕留める』為のものでは無かったのだと、スノウは走馬灯の様に高速で思考を巡らせ。
それでも、その一撃の齎す結末より何とか逃れようと全力でその剣閃を迎え撃とうとして。

飛び込んで来た人影に、不可避と思われた絶殺の剣が逸らされた。

先刻と同じように霧散した力の余波が轟音と共に大地に巨大な爪痕を刻み、地を奔る。
スノウの《三曜》では流し切れずに腕を抉り裂かれた超越者の一撃を、僅かに掌から出血する程度で捌いてみせたその人物は――。
「……ミラ……！」

少女が別れを告げ、袂を分かつ事になった筈の彼女の師、ミラ＝ヒッチンであった。

なんとか間に合った。

ミラの胸中にあったのは、緊張と安堵という、相反する二つの感覚だった。

ヴェネディエによって弟子の出現場所を予測した地図を渡され、飛び出す様に聖都から南方へと移動すること数日。

以前、単騎で偵察という名の少女の捜索に向かったときの様に、速度優先で自身の脚で走り抜けてきた御蔭でなんとかこの場に飛び込むことが出来た。

先刻まで行われていた信奉者と魔鎧の戦闘による魔力の爆発。

近場まで来ていたミラはそれを探知し、即座に其処に向かって駆けつけようと全速で移動を開始したのだが……後から割り込んで来た絶大な魔力に総毛立つ事になった。

灼熱を吹き上げる巨大な火山を思わせる魔力。

彼女が知る限り、それを個で放てる存在など世に二人しかいないからだ。

そして、その片方である己の師が住処の霊峰より動く事が無い以上、該当するのは一人。

魔族領の筆頭《魔王》。それが、スノウと相対している。
其処まで思い至れば、なりふり構ってなどいられなかった。
隠形や気殺をかなぐり捨て、全力で向かった先には予想通りの光景。
魔鎧を纏った少女に向け、かの地の王がその比類なき剣撃を叩きつけようとしている瞬間であった。
渾身の力を持って跳躍し、一足飛びで両者の合間に入る。
迫る刃に向け、躊躇なく《日昇》を発動。一撃で超大型の魔獣や竜ですら容易く両断する斬撃を、纏う魔力ごと絡め取り、逸らすことに成功した。
受け流した切っ先が地を抉ると、凄まじい力の奔流が荒れ狂い、大地を存分に削り取る。
流した力の余波が齎した破壊の痕跡に、表情は変えぬままにじっとりと背に汗が浮かんだ。
師より学んだ《三曜の拳》。その奥伝を以てしても僅かに腕に痺れるような衝撃が残り、少量ではあるが掌を削り取られて出血している。
同等の破壊力に経験が無い、という訳では無い。
彼女の同僚である巨漢の全力の打撃や、或いは邪神の上位眷属の攻撃など、ミラの技量を以てしても正面から捌き切るのは容易では無い一撃は確かにある。

だが、眼前の魔族の長である男は、それだけの威が込められた斬撃を逸らされてもまるで体勢を崩した様子が無い。
文字通り、人間離れした体幹の強さもあるのだろうが……おそらく彼にとって、ある程度本気ではあっても渾身とは程遠い一撃だったという事なのだろう。
――力の上限が見えない。
師の下で修業していた頃に感じたものと同じ感覚を、ミラは《魔王》からひしひしと感じていた。
その当人は、彼女の姿を視止めるとあっさりと間合いから一歩引いてニヤリと笑う。
「よう、久しぶりだなミラ」
「ええ、お久しぶりです《魔王》陛下」
大剣を持ち上げて肩に刀身を乗せた姿を見て、取り敢えずは即座に敵対、という形にならなかった事に微かに息をついた。
「そうか、龍の姐さんじゃなくてお前の弟子か。通りで技に少しばかり同じ癖があった筈だ」
「はい。私の……私にとっての宝です」
《魔王》に対し、明確に自分の立ち位置を示す為に断言したミラの言葉に、背後から息を呑む気配が伝わってくる。

女傑の言葉を聞いた魔族の王は、片眉を上げて面白い事を聞いた、と言わんばかりの表情を見せるが……直ぐにそれを意地が悪そうな笑みに切り替えた。
「宝、か。で、その自慢の弟子は俺の部下に手を出そうとしたんだが……それを庇うって事は、俺と戦り合う事も覚悟の上って事でいいのか？」
「お望みとあらば」
言葉少なに、だが揺ぎ無い意志を込めて真っ直ぐに見据えて来るミラに、《魔王》は直ぐに顔を顰めて「相変わらず冗談の通じねぇ奴だ」と呟く。
「例の一件以降、風当りの強い魔族に対してお前の処は対応を変えてこない数少ない国だからな。そこの主力をボコる気はねぇよ」
「というか、ミラさんをどうこうしたら最悪、《半龍姫》様が怒る可能性があるじゃないですか。冗談でもやめて下さいよ頭領（ボス）」
近寄って来た《不死身》が片手を上げてお久しぶりですー、と軽い調子で頭を下げるのに対し、ミラも軽く黙礼する。
その気は無い筈、なのだが……《魔王》は不敵に笑って少々物騒な言葉を吐く。
「俺個人としては、本気になった姐さんと戦れるってのは一生であるかないかの幸運なんだがな」
「絶対やめた方がいいですよ、後悔するんで」

「……ンだよ、俺が負けるとでも思ってんのか？」

部下のにべも無い即答に《魔王》が何処か拗ねたような面持ちで唇を尖らせるが、《不死身》は極めて真顔で頭を振った。

「いえ、以前《亡霊》さんが『かの龍姫なら、あの鳥頭（アホウドリ）の不死身っぷりを捻じ伏せて生殖機能を完全破壊出来ないだろうか』とか真剣に検討してたんで、下手すると頭領（ボス）の去勢計画が持ち上がるんじゃないかなー、と」

「よし、帰るぞー！　やっぱり何事も無いのが一番だからな！」

一瞬で意見を翻した《魔王》が大剣を一振りして背に負い直す。

同時に、これまでの気の抜けたやり取りの間にも微かに漏れていた灼熱の戦意も、完全に霧散した。

それを待っていたのだろうか。

師の背後で黙したままであった魔鎧の少女が、魔力噴射を用いて一瞬で間合いを離す。

即座に反応したミラが振り向き、背を向けて駆けだす漆黒の鎧姿に向けて叫んだ。

「――待ちなさい、スノウ！　……待って!!」

「……！」

手を伸ばして、何時かの様に必死さと懇願を滲ませて上げられるその声に、一瞬、装甲に包まれた背面が震え――それでも止まる事無く、鎧の超加速を用いて少女はこの場を離脱した。

「……ッ」

またしても拒絶された事に、伸ばした手が力無く下ろされ、ミラは俯く。

「見事な逃げっぷりだな」

「……ちょっと頭領（ボス）、やめましょうよ、身内の事で落ち込んでる人がいるのに」

感心した様子で呟く《魔王》に《不死身》が真剣な口調で諌めにかかるが、当人はどこ吹く風と言わんばかりに言葉を続けた。

「なんでだ？　むしろ朗報だろ。追いかけて来た師匠と話をしたくないから逃げたってんだからよ」

不思議そうに首を傾げる魔族の頭領の台詞に、部下も同じ様に首を傾げ、女傑は伏せていた顔をのろのろと上げる。

説明が面倒なのか、後頭部を乱雑に掻きながら《魔王》は気の無い素振りで口を開いた。

「あいつは俺が散々にビビらせてやっても、少しもブレずに『鎧は手放さない』と断言し

てきやがった」
そこで言葉を切り、ミラを見て鼻を鳴らす。
「……だが、お前が来た途端に、親に悪さを咎められたガキみたいに背を丸めてケツをまくった――お前と話せば揺らぐからじゃ無いのか？」
「……」
ミラは、無言のままにわずかに眼を見開いた。
そうして発言した本人と、納得が行ったように頷いている《不死身》を交互に見やると……数秒、目を瞑り。
両の手を持ち上げると、気合を入れる為に勢いよく自分の両頬に掌を打ち付ける。
バチンッ、と良い音が響き、同時に心持ち丸まっていた背筋が伸びて。
目を開いたときには何時もの彼女であった。
「情けない処をお見せしました――感謝します、《魔王》陛下」
「礼を言われるような事はした覚えがねぇな」
ひらひらと手を振って肩を竦める自身の上司を眺めて、《不死身》が切なそうに「これで性癖がまともならなぁ……」などと呟いているのが聞こえたが、この場にいる他二人からスルーされた事で諦めた様子で溜息を洩らす。
「久方ぶりに御姿を拝見しておきながら、直ぐにこの場を離れる事を御許し下さい。為

さねばならない事がありますので」
　戦いの爪痕激しい戦場跡において、丁寧に一礼する女傑に、礼と謝罪を受けた当人はぞんざいな調子で手を振って背を向ける。
　いいからはよ行け。そんな言葉がありありと浮かびそうなその背に向け、再び深く一礼すると《魔王》の横に並んだ部下の青年にも会釈を返し、ミラは少女の後を追うように走り出した。

　互いに振り向く事無く、魔族領と聖教国の最高戦力達は自分達の行くべき場所へと歩みを進める。
「上手く行くかな……確か《報復（ヴェンジェンス）》の使い手に途中で鎧を手放せた人っていないですよね？」
「知らね。別に今までがそうだったからといって、これからもそうだとは限らないだろ」
　自身は危うく魔鎧の少女にえらい目に合わされかけたというのに、《不死身》は心配そうに眉をひそめて師弟の未来を憂いた。
　対して《魔王》はそんなもんはアイツら次第だろ、とあっさり言い切ってズカズカと大股で歩き出す。
「素直じゃないなぁ。何時もだったら剣を向けた相手にあんな温い対応しないじゃない

ですか」

「いや別に。考えてみたら、お前って段差に蹴躓いて残機とやらを減らしてるイメージあるし。落とし前としてはアレで十分だろ」

「そこまで貧弱じゃ無いんですけど!?　いや、他の《災禍(面子)》に比べたらそりゃ脆いんでしょうけど！」

ツッコミから始まり、ここぞとばかりに常日頃の自分の言動に対する文句を垂れて来る部下を適当にあしらいながら《魔王》は先程まで相対していた魔鎧の主について思いを馳せた。

少女の腕には己の斬撃(魔力)が刻まれている――ならば、暫くは『呑まれる』のを防ぐ気付け代わりにはなる筈だ。

これは師であるミラにとっては朗報なのだろう。少女にとってはどうなのかは分からないが。

……防ぐと言っても本人にその気が無ければ効果が充分に発揮されるとは言い難い。

先程相対した感じからして相当に精神侵食は進んでいるように見えた。

おそらくは、歴代の使用者と比べても融合深度が深まるのが格段に早い。

余程魔鎧との相性や波長が合ったのか――或いは、少女自身が侵食を拒んでいないのか。

どうであれ、導かれる結論は一つだった。
「……なるべく早く決着付けるこったな。手遅れになる前に」
嘗て己が斬った誰かの姿を、その結末を思い出したのか。
一瞬、懐古と苦々しさの混じった表情を浮かべたが直ぐに舌打ち一つしてそれを打ち消し、この世界における頂点の片割れは、分厚い雲に覆われた空を見上げたのだった。

――半月後。
夜も更けた時間、ミラは大聖殿中央区にある、症状の安定した傷病者の治療を行う施設……その最奥にある重傷者用の一室へと訪れていた。
窓から差し込む月明かりに照らされ、その個室では一人の患者が眠りについている。
白いシンプルな貫頭衣に着せ替えさせられ、清潔な寝台の上に寝かされた病室の主――意識の無い栗色の髪の少女。
その静かな寝顔を、寝台の脇に備えられた椅子の上で身じろぎすらせずに見守り続ける。
各国の上層部は数十年ぶりの《報復（ヴェンジェンス）》出現の報を受け、過去の資料に従って対処法を

周知させた。

即ち、かの魔鎧が今代の持ち主を喰い潰すまで、距離を置いての静観である。

これは今回に限らず、これまでに魔鎧が出現した際の経験則より導かれた、単純にして尤も効果的な対処法とされていた。

解呪などまず不可能であると言われる特級呪物。その危険性は言う迄も無いことではあるが――直接的な危険の大半は人類種共通の怨敵である邪神とその軍勢へと向けられている。

嘗て人類側に出た被害というのも、乱戦状態となった戦場に飛び込んで来た《報復（ヴェンジェンス）》の戦いに巻き込まれる、或いは解呪を試みようとした者などが魔鎧の持ち主に拒絶された結果、といった偶発的・若しくは消極的な反撃の要素が強い。

永らく続く大戦……その戦史において定期的に発生する一種の災害扱いされている呪いの魔鎧は、邪神への憎念で形作られるその特性故に他者との協調がほぼ不可能である。

故に出現した際には装着者の自壊、及びそこからの魔鎧自体の破壊が確定するまで即座に距離をとって放置、というのが定石となっていた。

巻き込まれぬ様に注意さえ払っておけば、相当数の敵戦力を削ってくれる益も厄も齎す災害。直接的な関りの無い者達からすれば、そういった認識である。

大多数の者からすれば、そんなものなのだろう。
だが、そうでは無い……歴代の使い手達と親交があった者達からすれば、家族や友人、戦友の命を喰い潰して憎悪と死を撒き散らす、忌まわしき呪いの象徴であったのは想像に難くない。
そしてそれは、教国上層部だけでなく、人類種の旗印足る戦力の損失を危惧した各国――それらによってかの魔鎧の追跡を中止せよと通達がやってきた女傑にとっても。
どれ程の間、病床にある少女を見つめていただろうか。
その目元に掛かる髪を指先で梳いてやると、ミラは静かに意識の無い少女へと語り掛ける。
「ここ最近は、余り顔を出せていませんでしたね……今日はその謝罪と、少々厚かましいお願いがあって来ました」
穏やかな口調のまま、ベッドの背の部分――彼女の枕元へと吊り下げられた二つの小さな木彫りの護り札へと視線を向けた。
「勝手な願いだとは重々承知していますが、あの娘（こ）が貴女達に贈った品を借り受けたいのです」
手首に白いリボンが優しく巻かれたその手をとり、そっと握る。
「必ず返却すると、誓いましょう。ですからどうか、貴女達の想い出（カ）を貸してください」

祈る様に、懺悔する様に。
握った少女の手を自らの額に押し当てて、瞳を閉じた。
力無く、だが確かに血の通った暖かなその手の温度を、暫くの間、確かめ続け。
――不意に、ミラの手によって握られたままであった掌が、握り返された気がした。
ハッとした表情で伏せていた面を上げ、少女――ブランの顔を注視するが、その眼は閉じられたまま変わる事無く、緩やかな呼吸によって胸元が微かに上下している。
先程の感触も幻であったかの様に、少女の指も力無いままであった。
それでも。
「……ありがとう、ブラン」
背を押してもらった様な感覚を覚え、ミラは再び目を閉じて女神と眼前の眠り続ける少女へと祈りを捧げ、護り札を括られた紐から外した。
それらを丁寧にハンカチに包んで懐にしまうと、音も無く――だが力強く立ち上がる。
迷いの無い足取りで病室の出入り口へと向かい、静かにドアノブを廻す。
扉を開けて部屋を出ようとして……そこで一度だけ、立ち止まった。
「また顔を見に来ます――今度は、あの娘と二人で」
振り向かずに、だが確かな意思を込めて独り、呟くと。

今度こそ立ち止まる事無く、ミラは真っ直ぐに歩き出す。
ドアが閉じられ、再び病室には完全な静寂の帳が降りた。
月光だけが静かに降り注ぐその一室で、少女は眠り続ける。
深い眠りの中、嘗ての思い出を夢見ているのか。
或いは、目覚める事無くとも確かに通じた想いがあったのか。
蒼く、柔らかな光に照らされたその頬に一筋の涙が流れ、枕に小さな染みを作った。

全ての準備を整えたミラは、聖都正面の城門を越えようとしていた。
既に時刻は深夜。門は閉じられ、門脇の守衛が泊まり込む施設から漏れる灯り以外は、殆どの光源が消えている。
変わらず降り注ぐのは月の光のみであった。
夜を照らす月光を避けて気配を殺し、暗がりの中、一瞬だけ脚に魔力を装填すると跳躍。
二度、三度と壁を軽く蹴ると、高く聳えた壁を越え、あっさりと門の向こうへと着地する。

再び月明かりに照らされたその姿は、先程病室へと向かった際の姿とは一変していた。

戦闘用に調整したシスター服自体はそのままに、普段は紐で軽く纏めらている髪は丁寧に編み込まれ、左サイドへと垂らすように形を変えている。

四肢には軽量化を図った魔装の手甲と脚甲――逸品であろう魔装の胴当てに、背には同じく、嘗てドワーフの名工の手で鍛えられた魔装の鋼棍。

身軽さの優先と、何より手入れや調整に時間や資金を多く取られる為にあまり身に着ける事のない、彼女の完全武装であった。

保存食と水の詰め込まれた革袋の紐を引き、肩に掛けなおすと。ミラは一度だけ城門の方を振り向き、丁寧に一礼した。

そうして、確かな足取りで月夜の道を歩き出す。

だが、幾らも進まぬ内に足を止める事となった。

「よう、良い夜だな」

「……ラック」

街道脇に転がる岩に寄りかかる様にして彼女を待っていたのは、友人の一人である強面の傭兵だ。

その姿は彼女と同じ完全武装。魔獣の革と鋼板を組み合わせた軽装の鎧姿に、腰と背

には長剣や短槍といった無数の武装が固定されている。
胴鎧には投擲用と思われるナイフケースも帯になって連なっていた。
「何故、此処に？」
わずかに硬い声で問う女傑の言葉に、ラックは実にあっさりとした様子で肩を竦める。
「ちと遠くに散歩だ――お前と同じくな」
「それは……」
彼は正確には教国の民という訳では無く、あくまで雇われた長期契約の傭兵だ。
それだけに、今回の様に上から厳命された指令――《報復（ヴェンジェンス）》への不接触を破れば重い罰則（ペナルティ）が課せられる可能性がある。
そういった危惧をラックが理解していない筈も無いが、それでも指摘せざるを得ないと、ミラは口を開こうとして。
「二度だ」
有無を言わせぬ強い口調で吐き出された言葉に、遮られる。
「俺は二度、チビスケの身内を取り零した。一度目はアイツの祖父母、二度目はアイツの友人……この上、チビスケ本人まで取り零すつもりは無い」
「……そう、ですか」

お前が同道を許可しないと言っても、勝手に着いて行くぞ。
暗にそう言っているのが分かる友人の態度に、ミラは僅かばかり苦笑して、軽く頭を下げた。
「ありがとう、貴方が協力してくれるというのなら心強い」
「ハッ、早合点するな。俺だけとは限らんぞ?」
鼻を鳴らして、傭兵は暗い夜道の先、街道沿いに並ぶ木立へと顎をしゃくった。
「まさか、貴方達もですか……」
はたして、樹の陰より現れたのは女傑の予想通りの二人であった。
「いやはや、ミラ殿もうら若き女性。一人の夜歩きは危険であると、未熟な身ながら供を申し出ようと思っていたのですが……ラック殿に全て持っていかれた形となりましたなぁ!」
「僕は立場上、一応止めに来たんだけどねぇ」
なんともお恥ずかしい! と日中に比べれば多少抑えた声量で大笑するガンテスと、苦笑いを浮かべたヴェネディエである。
女傑と傭兵、筋肉と腹黒は互いに歩み寄ると、月夜の下で静かな対話が始まる。
「まぁ、聞く迄も無いとは思うけど……ミラは勿論、君達二人も止まる気は無いんだよね?」

「えぇ。叱責にしろ、罰則にしろ、あとで如何様にも受けます」
即答して頷くミラを筆頭に、ラックとガンテスも各々力強く断言する。
「違約金どうこうってんなら後で一括で全額叩きつけてやる。元特級冒険者の貯蓄を舐めるなよ？」
「敬意を払うべき先達にして戦友が、最愛の教え子を取り戻さんと奮起しているのです。組織の意見に迎合し、これに合力せねば何の為の修練、何の為の信仰であるのか」
三者三様の答えであり、しかして意見を翻す気は揃ってゼロ。
分かり切った答え合わせを終えたヴェネディエは、一つ頷いて踵を返した。
「うん、そうなるよね。じゃ、行こうか？　あちらに馬を人数分用意してあるよ」
「結局お前も行くのかよ」
呆れた調子を隠さない傭兵の声に、不良大司教（坊主）はシレっとした表情で返答する。
「僕はここ最近、徹夜続きの仕事漬けだったからね。今の問答で最後の残業も終了だよ――明日からは久しぶりに休暇というだけの話さ」
「チッ、お前一人だけ正当な手続きで街を出た形か。ちゃっかりしてやがる」
「心外だなぁ、最初から僕に相談してくれていれば、書類上はなんとでも出来たんだよ？」
忌々しそうに舌打ちするラックと楽し気に笑うヴェネディエであるが、体重的な問題

で馬を長時間走らせることが困難なガンテスが「むぅ……」と唸り声を上げた。
「皆様が乗馬を得手としている中、拙僧が原因で道行きが遅れる様では申し訳が立ちませんな……ここは拙僧は割りてられた馬を背負って並走すべきですな！」
「やめろ筋肉馬鹿。どんな珍百景だ」
「百歩譲って徒歩で並走するのは分かるけど、背負うって選択肢は何処から出て来たのかな」
　三馬鹿と化した男三人に、何時もなら溜息の一つでも漏らす処ではあったが……。
　独り、己の全てを賭けてでも弟子である少女を取り戻そうと決意していたミラには、何時もの友人達やり取りが常に無く頼もしく、そして有難かった。
「ガンテス、ラック、ヴェネディエ……貴方達に感謝を」
　一歩退いて、喧しいやり取りを続ける三人に丁寧に頭を下げると、礼を言われた側の者達は揃って苦笑し、代表してヴェネディエがその言葉に応じる。
「礼はあの娘を取り戻してから受け取るさ。それで、次の具体的な出現地に心当たりはあるのかい？　以前渡した地図の印……次の予測地点は確か、北方方面だったと思うんだけど」
「ええ。根拠、という程のものではありませんが」
　頭を上げ、言葉とは裏腹に確信を抱いている様子で、ミラは断言した。

「おそらく北方中部よりやや北――嘗て故郷の村があった地に、スノウは居る筈です」

その双眸は、遥か先の北の大地に居るであろう白い少女を見据えているようであった。

老兵の残照　母と娘

北方のとある小さな村……いや、村であった場所にて。
嘗ては小さなレンガ造りの家だった、焼け落ちた廃墟の中で少女は目を覚ます。
この二ヵ月足らずの間で、こういった場所で夜を明かすことにもすっかり慣れてしまった。
最初の内は鎧を使った反動で刻まれた全身の傷がズキズキと痛みを訴え、殆ど眠る事も出来なかったのだが……今は痛覚自体がひどく鈍化しているのもあり、そう気にならなくなっている。
日が経つにつれ、どこか感覚が曖昧になっている自覚はあった。
その代わりと言わんばかりに”誰か”の……自分と同じく魔鎧を使っていた人達の記憶が流れ込んで、それに同調する度に身体の奥に燻り続ける感情は薪を放り込まれた炎の様に燃え盛る。
その結果、鎧との融合深度は加速し、日ごとに力を増していた。

これなら、もっと戦える。わたし達から数えきれない位に奪った連中を――邪神とその信奉者達を、もっと。

暗い意思を滾らせながら、半ば焦げて崩れ落ちた天井に向けて翳した掌を握りしめる。

此処、彼女の故郷である村の跡地で眠る様になってはや数日。

村の中に残っていた僅かな無事な物資を利用して、思ったよりはマシな状態で休息を摂れている。

寝床代わりの藁に、毛布、罅の無い水瓶。

井戸の水が呪詛に殆ど汚染されていないのも有難かった。この程度なら自分の《三曜》で問題無く散らせる。

軋む身体を起こして、顔を洗おうと水瓶を覗き込んで……そこに映った自分に苦笑いが漏れた。

（……ひどい顔だな）

少し？せた頬に、目の下には濃い隈。

紅い瞳だけが、暗い熱を持ち続ける負の感情に熱された様に、爛々と光を放っている。

伸ばしたまま手入れもせずに放置してある白い髪も手伝って、暗がりで見たら幽鬼の類に見える事だろう。

『せっかく珍しくて綺麗な髪をしているのに、なんでこんなに手入れが適当なんですの！　アホか⁉　ブラン！』

『了解です、お嬢様。はい、ここに座って動かないで下さいねースノウさん。お手入れの道具持ってきますので』

大切な友達とのやり取りが、ほんの数か月前なのに随分と昔の事のように感じる。

あの二人に綺麗にしてもらった自分の白い髪は、今は薄汚れてみる影も無い。

（……いたい、な）

殆ど機能しなくなった筈の痛覚が、不意に胸に痛みを伝えてきた気がした。

それでも。

それでも、これはわたしが、わたしの心（憎悪）が望んだ事だ。

《魔王》と戦った直後は、彼女が夢を見るたび、憎しみの感情に一際強く胸を焦がされるたび、まるで熱を放つ様に切り裂かれた腕が痛みを持った。

鈍くなった痛覚を無視するように、魔鎧の侵食に反応して発生するソレに。最初は煩わしさを覚えたが。

この痛みがあれば、意識が霞むこと無く深く魔鎧に刻まれた記憶達と同調する事が出来る。そう気付いてからは、寧ろそれを利用した部分すらある。

短期間での連続使用に加え、歴代の魔鎧の使い手――そのほぼ全ての記憶を夢という

形で追体験する事で、限界まで融合深度は深まった。
今の自分であれば、魔鎧の力をもっと引き出せる筈だ……多分、今までの誰よりも。
自身と歴代の使い手達の憎悪。その両方に背を押され、或いは引きずられて。
少女は嘗て師に導かれて手を伸ばした強さとは真逆の、無窮の暗闇を堕ちるが如き”力”を以て更なる領域に手をかけようとしていた。
事実、直近で襲撃を行った戦場においても戦いを始めた当初と比べ、遥かに短い時間での殲滅が可能になっている。
なら、あとはこの力で少しでも、一匹でも多く、邪神の軍勢を冥府に送ってやると、改めて決意する。最期の、そのときが来るまで。
……此処にはもう来ない。多分、来れない。
だから、此処を出る前に村の共同墓地に埋葬されていた、祖父母や村の皆に会いに行こう、と。考えを巡らせる。
もし手つかずのままであれば、自分がお墓を作ってあげないと――そんな風に思っていたのだが、教会の人達は村全体の浄化は無理でも、犠牲者の埋葬と墓地の浄化は優先して行ってくれた様だ。これに関しては素直に感謝しかない。
顔を洗って、水を飲んで。魔鎧を纏わない状態ではひどく重く感じる様になった身体を引き摺るようにして村の端――共同墓地へと向かう。

そして、ゆっくりと進んだ先。その途中で道を塞ぐように立ち塞がる人を見つけて、少女は立ち竦んだ。

「やはり、此処にいましたね」

何時も聞いていた、凛とした声だ。

知ってる。声の通りに厳しい人である事を。

知っている。声の主が、厳しくて、だけどそれ以上に不器用で、とても優しい人だと。

それは、多くを喪った彼女に残された、一番大切になった人だった。

それは、彼女が一番に会いたくて――けれど、会えば自分の中の憎悪(ほのお)を弱めてしまう、会ってはいけない人だった。

今の自分を見られたくなくて。

それでも、何度振り切ってもこうやって追いかけて来てくれる事が、どうしようも無く嬉しくて。

そんなグシャグシャに混乱した感情を抱く事すら、魔鎧を手に取る事を選んだ彼女には、自身と同じ嘗ての”誰か”への裏切りになるのではないかという思いがあった。

その人は薄汚れた傷だらけの少女を見て、まるで自分が斬り付けられた様に苦し気に唇を噛みしめて。

けれど、瞳に浮かんだ様々な感情を全て意思で押さえつけて飲み込み、迷いの無い、強い口調で告げる。

「迎えに来ました――一緒に帰りましょう、スノウ」

「……み、ら……」

少女の師、ミラ＝ヒッチンがそこにいた。

正面から師弟が相対すると同時、周辺を囲む様に高度な結界が展開される。

明らかにスノウをこの場から離脱させない為の代物であった。

とはいえ、如何に優れた結界でも人外級の戦力が一点突破を狙えば苦も無く突き破られる。当然、《報復（ヴェンジェンス）》を扱う彼女にも突破は容易だ――それが通常の結界であるなら。

鈍化した五感の代わりに魔力や生命力への探知・感知が異様に鋭敏化している少女には、展開された結界がとんでもない数の結界魔法を圧縮した多重構造である事が感じ取れた。

この多重展開と……何より行使された魔力には覚えがある。
「やぁ、暫くぶりだねスノウ」
「……！」
少女の高まった探知能力を潜り抜ける精度の隠蔽の魔法を行使していたのか、ミラの背後の景色が揺らぎ――其処から現れたのは師の次に交流があった大人達だ。
「……随分と、ボロっちい形（ナリ）になったな……飯は食えてるのか？」
仏頂面を更に顰めて、不機嫌そうにスノウの姿を見回す傭兵のおじさん――ラック。
「……報告よりも傷が増えておりますな」
何時もは快活に笑っている顔を沈痛の表情で陰らせ、言葉少なに聖印を切る助祭様――ガンテス。
「かの鎧の性質を考えれば、仕方ない事だよ――尤も、これ以上増えるのは看過出来ないけどね」
そして、結界を展開した当人。こんな状況でも飄々とした態度の、運動嫌いの大司教様のヴェネディエ。
聖教国、最高戦力の四英雄……その全員が、この場に集っていた。
聖都から遠く離れた、こんな北方の小さな村の跡地にこの四人が揃う。
それが如何におかしくて、難しいことかは少女にも分かる。

「ど……し、て……」

「……先程も言ったでしょう。貴女を迎えにきました」

融合深度が深まり過ぎた弊害か、この半月足らずで不自由になった舌を苦労して動かす少女に、女傑が硬い口調で先程も述べた言葉を繰り返す。

僅かなやり取りでも弟子の状態に気が付いたのか、己や魔鎧への激怒や心痛、嘆きを押し殺して能面の如き無表情となったミラの拳から、肉と骨が軋む音が漏れて血が滴った。

「彼らは、私の我儘に付き合ってくれた形です――それに甘える様ですが、この一件に関しては私も自重する事はやめました」

始めに拒絶された事で迷い、躊躇い、その結果。

スノウは、家族同然に思う様になった唯一の弟子は、こうして傷だらけになって独り、破滅同然の道を突き進み続けている。

だから、ミラも腹を括ったのだ。

己が為すべき道だと選んだ戦士としての使命も、教会の最高戦力などという過分な立場も。

全部、一度放り投げる。後にやって来るであろう諸々の皺寄せの事はそのときになって考える。

この我儘で何処かの戦線で被害が発生したというのなら――叱責も、処罰も、全て甘んじて受け入れよう。

その上で、譲らない。

各国上層部が不接触を命じて来ようが、当人であるスノウが拒絶しようが、己の我儘を通す――その為に此処迄やってきた。

殊更に少女に向けて威嚇している訳ではないのだが、それでもミラが激情を堪えているのは察したのか、少しばかり腰が引けた様子のスノウに向けて常の通り……いや、何時もより遥かに強固な決意を漲らせた言葉を紡いだ。

「私は、私の弟子を呪いの魔鎧などにくれてやるつもりは無い――《報復（ヴェンジェンス）》は引き剥がして封印に叩き込み、貴女を取り戻す」

宣言する様に告げると、何処か怯んだ様子だった少女の態度が目に見えて硬化する。

だが、ミラにとってそれも想定の内だ。

基本、邪神の軍勢以外には蓄積させた負の感情を向けない――言ってしまえば他は眼中に無い《報復（ヴェンジェンス）》とその使い手が、明確に人類種側へと牙を剥いた事例。

資料にも残されている数少ないソレは、全て同じ理由だった。

即ち、使い手と引き離す、封印処置を以て以降の主を見出せない様にするといった行動に対する反撃である。

根幹である憎悪を向ける対象への報復――それを大きく妨げる相手には、当然の如く魔鎧も対処を行う、という事であろう。

そしてそれは、魔鎧の精神侵食を著しく受けた使い手にも同じ事が言える。

「……」

無言の儘に、少女が半歩だけ後ろに退く。

その紅い瞳には、動揺、哀しみ、微かな怒り――そして何より、強い拒絶があった。

或いは、彼女が言葉に不自由する様になっていなければ、先ずは対話によるやり取りもあったのかもしれない。

だが、碌に話せなくなっている自分では、会話で師を翻意させる事は出来ないと判断したのか。

これまでそうしてきた様に、魔鎧の機動力を用いた離脱を考えるスノウだが……それを行うにはヴェネディエが展開している多重の結界が邪魔をしている。

今の彼女であれば、突破自体は不可能では無い。

無いが、多少なりとも時間が掛かる。背を向けて結界をこじ開けようとすれば、当然無防備になった処を師や他の大人達は見逃さないだろう。

既に先手を打たれて逃亡を封じられた状況だ。それでも師の告げた言葉に抵抗しようというのなら……どうしたって力尽くにならざるを得ない。

（……それは、ダメ）

過去にそうであった様に、魔鎧は使い手から引き剥がそうとする者達への敵意を表す。

その感情が流入してくる感覚にスノウは胸元に掌を当て、それを押さえ込んだ。

ミラを、この場にいる人達を傷つける。

それは少女にとって最も忌避すべき行為だ。

だがこのまま何もせずにいれば、心底本気の眼をしている師はそのまま《報復（ヴェンジェンス）》をスノウから引っぺがし、二度と現世に顕現出来ない様に厳重な封印を施してしまうだろう。

どうしよう。

どうすればいいの。

皆を、ミラを傷つけたくない。

でも、鎧を手放すなんて事はもっと出来ない。

もう、もう放っておいてよ。わたしは。

わたしは、選んだんだから。

ミラの傍で護られ続ける事を拒んで、自分の中の憎悪を燃やす事を選んだんだから。

混ざり合い、絡まり、混沌とした胸の裡をさりとて言葉にも出来ず。

魔鎧を手に取って以降、常にその精神侵食を拒む事無く同調すらしていたスノウの精神は、此処に来て初めて鎧との齟齬を見せた。
自身の感情と魔鎧の防衛反応の齎す敵意に板挟みになり、更に思考は千々に乱れてゆく。
今にも泣きだしそうな表情で顔を歪める少女に、既に覚悟の決まりきった師の静かな声が掛けられた。
「スノウ。この場で貴女がどんな選択をしても、それは貴女のせいではありません」
「――ッ」
「再三言うようですが、これは私情、私の我儘です」
師の言葉が切欠、という訳でも無いだろうが。
必死に自身の胸を掴んで、何かを押さえつける様な素振りを見せていた少女から空気が焦げ付く様な魔力の胎動を感じ取り、師弟の会話を黙して聞いていたガンテス達が後に訪れる展開を察したのか、静かに身構える。
「貴女が悩み、苦しみ、その末に。今までの全てを振り切って報復の為の力を求めたのだとしても」
正面からその強烈な攻性を伴った魔力の波動に炙られながら、それでも一切怯むこと無く、ミラは続ける。

彼女の言う我儘を――想いを、目の前の少女に伝える為に。
「貴女がそんな自身の選択に巻き込まない様にと、私を拒絶したのだとしても」
「――う、ぁっ」
よろよろと、覚束ない足取りで後退り、距離を取る少女の瞳には既に涙の粒が溢れんばかりに溜まっていた。
放射されている魔力は更に膨れ上がり、爆発寸前の炸薬を思わせる危険な圧を発している。
正と負。両方の感情が精神の臨界まで満ち、苦し気に呻くスノウへ。もう一度だけ、告げた。
「――それでも、私は貴女と一緒にいたい。師としての責務ではなく、私がそうしたいと望み、それを為す為に此処に来たのです」
真っ直ぐに、迷いなく断言された言葉を受け。
「――――ぁ」
涙が限界を越えて頬をつたい、同時に溢れた魔力も決壊を迎えた。
「う、あぁぁぁぁぁぁＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡッ!!!」

溢れ出す。
憎悪で蓋をしていた筈の、憎悪以外の感情が。
憎しみに灼かれたスノウという少女の心に、それでも確かに在り続けたそれらは哀切であり、郷愁であり、歓びであり、親愛でもあった。
師と相対し、そして言葉を交わせばこうなってしまうと。
どうしようも無く、閉じ込めた感情が暴れ出してしまうと。
或いは無意識にでも、少女は理解していたのかもしれない。
そして、それらを振り切る様に、目を逸らす様に。
憎悪で焼き付いた筈の心に染み入ろうとするその感情達を、叫びと共に吐き出そうとする。
それはまるで、癇癪を起こした赤子の泣き声の様な。
帰る場所も分らずに、泣きじゃくる幼子の様な。
壊れてしまった宝物の欠片を大切にしまって――けれどそれが二度と元に戻る事が無いのだと泣き叫ぶ少女の慟哭だった。
悲鳴の様な叫びが小さな村の跡地に響き、感情を暴発させた主に応える様に魔鎧が起動する。
爆発的に膨れ上がった魔力が漆黒の装甲の形を取り、少女の全身を覆って。

その全身を深紅の魔力導線が奔り抜け、最後に頭部装甲の頬の部分に、涙の跡を思わせる新たな線が刻まれる。
血涙を思わせるソレを睨み据え……ミラは背に負っていた鋼棍を手に取り、一振りした。
「スノウは魔鎧（お前）には渡さない――私の弟子を返してもらうぞ、《報復（ヴェンジェンス）》」

起動した《報復（ヴェンジェンス）》は、以前ミラが《魔王》との戦いに割って入った際に見た物とは姿を変えていた。
全身鎧としては細身な印象はそのままに、手足の装甲がより重厚に――だが獣の爪牙を思わせる鋭利さを宿し。
肩部は肥大化し、新たな装甲が追加されていた。
そして何より、脊椎から枝分かれして伸びる、長い鋼の尾。
背から覗く、ゆらりと揺れるソレは威嚇するかの様に尖った先端で地を抉る。
推測になるが、歴代の所有者達が最期に至った果ての力――それらを発現させた物であると、ミラは判断した。

やや前傾姿勢のまま、凶悪さを増した手足の装甲を軋ませて此方を伺うそれは、魔鎧というよりは、獣。

大戦の黎明より受け継がれる憎悪の炎で鍛造された、漆黒に深紅を宿した鋼の”獣”だった。

その”獣”が、地を揺さぶり、天を突く様な咆哮を上げる。

負の感情を叫びに変えたソレに、使い手である少女の理性は感じ取る事が出来ない。

だがミラは動じなかった。スノウの意識があろうと無かろうと、やる事は変わらない。

文字通り、獣の如く低い姿勢で漆黒の鎧が弾丸の如く飛び出した。

突撃の速度を載せた鉤手の形に開いた掌が女傑の身に届く前に、割って入る様に飛び出した人物が正面からそれを受け止める。

「――師弟の拳の語らいにて無粋を失礼。ですが、スノウ嬢をミラ殿のもとへと返すのが我らの今回の目的ですからな！」

両の腕を用いてがっちり魔鎧と組み合ってみせたのはガンテスだ。

その桁外れの膂力を生かし、”獣”の動きを止めようと試みる。

――だが、驚嘆すべき事に”獣”は同じく膂力で以てそれに拮抗した。

「ぬぅっ!?」

予想を遥かに超える手応えに、口を真一文字に引き結んだ巨漢が唸り声を洩らす。
単純なパワーという点では、おそらく彼の方が上だ。
だが、”獣”は装甲の各部に備わっている魔力噴射を用いて、静止状態からの爆発的な瞬発力を発揮する。
怯まず押し返さんと、ガンテスの両腕が力瘤で盛り上がり、その単純な膂力同士の鬩ぎ合いに耐え切れずに両者の足元の大地が陥没し、亀裂が生じた。
剛力の極点の如き力同士の拮抗は、数瞬。
崩されたのはガンテスであった。
全力を振り絞った互いの四肢――其処に、彼には無い代物が差し込まれる。
”獣”の背の陰から凄まじい速度で振るわれたのは、鋼の靭尾。
無数の節が連なったそれは鞭の様にしなり、同時に刃の鋭さを以て巨漢の肩口を狙う。
膂力も然ることながら、人外の領域に至った戦士の中でも桁外れの耐久と防御を誇る修道僧の筋肉を、”獣”の尾は浅くではあるが切り裂いた。
僅かに身体をぐらつかせたガンテスに向け、翻った尾の先端が音速を越えて突き込まれる。
それを手にした長剣で撃ち落としたのはラックだ。

可視化する程の魔力強化を施した剣は、ガンテスの頑強さを貫く程の一撃を危なげなく防ぎ切る。

「……重いな」

大型の魔獣による突撃を受け止めた様な感覚に、傭兵は厳を思わせる面を歪めた。

高硬度の金属同士が擦れ合い、甲高い音と火花を散らす。

巨漢と傭兵によって四肢と尾――五体の動きを止められた”獣”の横腹に、するりと伸びた棍の先端が軽く当てられ。

「――《命結》」

短く呟かれたミラの一言と共に、魔鎧の表面を練り上げた魔力が走り抜ける。

打点を中心として装甲に亀裂が走り、衝撃で弾かれた”獣”が飛び退る様に背後へと跳躍した。

油断無く距離を詰めようとする三人へと、再び咆哮する。

今度は只の叫びでは無かった。

”獣”の背後――その上空に、数えるのも馬鹿らしくなる程の無数の魔力弾が一瞬で形成される。

細長く、先端を尖らせたシンプルな形状のそれは、弾というよりは針か、錐の先端に近い。

脚を止め、瞬時に迎撃の態勢へと切り替えたミラ達に、豪雨の如き魔力の錐が降り注ぐ。
「それは視えてるよ」
それが彼女達へと届く前に対応してみせたのは、これまで沈黙を保っていたヴェネディエだ。
刹那の間に、障壁が魔力錐と三人を分かつように展開される。
高い貫通力と圧倒的な物量で魔力障壁が破壊される僅かな間に、直線的な錐の射線に対して斜めに受ける角度で追加展開した障壁が、爆撃じみた魔力の雨を凌ぎ切った。
「……助かりました、ヴェティ」
「まぁ、これ位はね。とはいえ、スノウがこの場から離脱するのを防ぐ為にも多重結界は切れない。悪いけど、いつもみたいな支援は出来ないと思ってくれ」
魔力錐を降り注がせる間に破損した装甲を復元させた”獣”から視線は切らぬまま、ミラが友人へと礼を述べると、その当人は普段の飄々とした態度を潜めた真剣な声色で応じる。
「流石に特級呪物扱いされるだけの事はあるな……まだ伏せた札も持ってそうだ」
「然り。先のミラ殿の一撃を容易く復元させた回復力も考慮すれば、やはり拙僧とラック殿が動きを止める役割に注力すべきかと」

互いの得物――長剣と岩塊の如き拳をそれぞれ構えて”獣”の眼前へと進み出るラックとガンテス。

今回の目的は、魔鎧の打倒ではなくあくまで使い手であるスノウの保護。

極力彼女を傷付けず、魔鎧を一時的に休眠状態にさせる為の大破を狙うには、装甲の防御を貫く威力とそれを内部に伝えない繊細な技量の両立が求められる。

《報復（ヴェンジェンス）》を相手にそれを行うのは、四英雄と称された彼らでも容易では無い。

安定して魔鎧のみに損耗を与える事が可能なのは、こと技量という一点においては人類種の上澄みの中でも更に突出しているミラだけであった。

故に、この布陣だ。

前衛に二名、壁役として最前列にガンテス。そのフォローとしてラック。

後衛にヴェネディエ――結界にリソースを割いている彼は、魔法による支援より未来視の加護を用いた危険な攻撃の察知と対処を主とし。

遊撃……目的達成の主力としてミラ。彼女は《三曜》を用いた技で早々に魔鎧を停止状態に追い込む火力役だ。

元より、教会の最高戦力などと呼ばれ始める前はこの四人で様々な局面を打破して来た。言葉や打ち合わせが無くとも、ある程度の連携は自然と熟せる。

互いに完全に態勢を整え直した四名と”獣”は、改めて対峙する。

動きの無い時間は五秒か、十秒か。
張り詰めた空気が空間を軋ませて音すら立てる様であった。
先に動いたのは、漆黒の鎧姿だ。
魔力噴射による超加速で、一瞬と掛からずに己の影すら振り切る速度に達する。
狙いは最後列のヴェネディエ。
五指に凶悪なまでの力を漲らせ、小柄な青年を引き裂こうと鉤型に開かれた指先が天に振り上げられる。
「――させません」
圧倒的な速力にものをいわせて前衛を振り切ろうとした”獣”は、しかし差し込まれた鋼棍により絶妙なタイミングで脛を払われ、斜め前方へと吹き飛ぶ様に宙を舞った。
しかし空中で再度魔力を噴射。身を丸めて回転すると瞬時に体勢を立て直し、大地に爪を立てて削りながら減速を行う。
「ぬん!!」
四肢を使って着地を終えた”獣”が顔を上げると、間髪入れずに追撃に入っていたガンテスの剛腕が振り下ろされる。
咄嗟に両腕を交差させ、”獣”は鉄槌の如き拳を受け止めるが、それは悪手であった。
スノウに打撃の威力が通らぬ様に加減された一撃ではあったが、それでもその威力を

受け止めきれぬ大地が悲鳴を上げ、周囲の地面ごと大きく陥没すると踏みしめていた脚が深く地へとめり込む。
立て直そうとする〝獣〟の知覚に、高速で左から飛び込んでくるラックの姿が認識された。
鋼の尾が持ち上がり、意思を持った個別の生き物の如く迎撃を行う。
最初の激突と同じく、長剣と尾が打ち合わされて火花を散らした。
「厄介だな」
瞬時に弧を描いて右、返しの左薙ぎ、弾かれてからの正面への突き。
瞬きより短い間に剣と尾が交差し、残像を残して鋼の軌跡が虚空に描かれる。
一際大きく打ち合い、鍔迫り合いに近い状態になるとラックは不敵に笑った。
「――だが、尾一本で止めようなんざ、幾ら何でも俺を舐めすぎだ」
剣の柄が軋む程に握り込まれると、既に高密度の魔力が通っていた刀身が淡く輝き、更に強化される。
高く、何処か涼やかですらある音が鳴り、〝獣〟の尾が半ばから斬り飛ばされた。
「チビスケに尻尾は生えてないからな。中身が無いってんなら遠慮なく斬れる」
質は良いものの数打ちの鋼で呪いの魔装を断ち切ってみせた剣技は凄まじいものがあったが、やはり武器への負荷は大きい。

背後へと跳躍して距離を取りながら刀身に罅の入った剣を打ち捨てると、背に負った短槍を握って構え直す。

入れ替わるように間合いに踏み込んだのは、充分に魔力を練り上げたミラだ。

尾を落とされ、更にはガンテスに上から抑え込まれた状況を〝獣〟は強引に魔力噴射で突破しようとする。

その漆黒の鎧姿が加速される前に、棍の鋭い横薙ぎが背を打った。

そして、再度叩き込まれる《三曜》の一撃。

衝撃がさざ波の様に伝わり、背面の装甲に蜘蛛の巣状の罅が走る。

一瞬遅れ、魔力噴射によって魔鎧が一気に間合いを離す。砕けた装甲の破片が宙を舞った。

両手両足を使って四足の獣の如き動作で地に着地するその背から、ベキベキと鈍い音が響く。

既に尾と装甲の復元が始まっているが――破損した状態で強引な加速を行った事もあり、装甲の回復には相当な魔力を消費するだろう。

このまま消耗させていけば、一時的にだが機能停止に追い込む事が出来る筈であった。

人外級の戦士四人を相手に、単騎でこれ程に食い下がる――邪神戦役の負の遺産とま

で呼ばれるその力に偽り無し、といった処だが……それでも戦いはミラ達に優位に進んでいる。

それも当然と言えば当然の話ではあった。単純な戦力比で見ても差は明確だが、この場にいる四人が四人とも、油断や慢心とは縁遠い気質である。連携も取れている以上、相対する者は勝機への僅かな綻びを見つける事も難しい。

だが、これで終わる様ならば永きに渡って邪神の軍勢を鏖殺せんとする『災害』、等と称されはしない。

変化は幾度目かの激突にて表れた。

ガンテスが繰り出した打撃が、”獣”の掌で無造作に捌かれる。

「――ぬ!?」

覚えのある手応えに巨漢が咄嗟に足腰に力を入れて踏ん張り、上体が泳ぐのを堪えた。

受け流しの動作から流れる様に肘が撃ち込まれ、自身の骨肉を貫いて身体の奥にある氣脈を打ち抜かんとする一撃に、巨漢はたたらを踏む。

（これは、スノウ嬢の《三曜》……よもやこれ程の練度に達しているとは……！）

即座に圧縮した魔力を氣脈に押し通し、”獣”によって打ち込まれた《命結》の打効を相殺する。

全身から魔力噴射を行った鎧姿がかき消え、次の瞬間にはガンテスの背後に現れた。
振り向き様に大気に穴を穿ちながら放たれる裏拳を先程と同じく《流天》で受け流すと、”獣”はそのまま丸太の如き腕を取り、関節を極めながら背負い投げを打つ。
ガンテスの巨躯が宙を舞い、破城槌を地面に打ち込んだ様な衝撃を撒き散らしながら地に叩きつけられた。
追撃を加えようとする”獣”に向け、ミラとラックが前後からの挟撃を行おうと間合いを詰める。
対して、”獣”は後方のミラへと振り向く事もせずに先に見せた魔力の錐を生成・展開した。
咆哮すらない完全な無詠唱であった為か、先程の半分以下の数ではあったが……それでも人ひとりに向ける魔法としては圧倒的と評して良い物量の錐が女傑へと殺到する。
近距離で一斉に放たれたソレをヴェネディエが展開した障壁が阻み――秒に届くかどうかの時間で砕かれた。
だが、その刹那の間に迎撃の態勢をとったミラが、《流天》と手にした棍を用いて魔力錐の雨を悉く叩き落とす。
その間にも、叩きつけたガンテスの手首と肩を極めたままの魔鎧は靭尾を振るい、ラックと切り結ぶ。

一呼吸の間に十は突き込んだ短槍の穂先が全て尾の側面で捌かれ、そこに武器を強化した魔力ごと力の流れを変えられた感触を感じ取り、傭兵は舌打ちした。
「尾でも《流天》を使ってくるかよ！」
二人が攻めあぐねていると、地に大穴を開けてめり込んでいたガンテスが動いた。
「ふんぬっ！」
関節を極められた腕とは逆の腕で大地をブン殴り、地中を拳で抉りながらその体躯が寝返りを打つ様に一回転する。
地面を掘り抜いて飛び出した拳が開かれ、”獣”の足首をむんずと掴むとそのまま畑の野菜を引っこ抜くように空に放り投げた。
宙に放られ、あっさりと姿勢を制御して地に着地する”獣”。だが、巨漢の方も全身のバネを使って一瞬で跳ね起きている。
土まみれになった身体を払う巨漢の傍にミラとラックが並び、ヴェネディエが後衛の位置取りを保持して後方に着いた。
「……無事ですか、ガンテス？」
「問題ありませんぞ。余程特異な例を除き、拙僧に投げの技は通りませぬ故」
「関節も効いて無いだろうが。マジで人間なのか疑わしいなお前」
「まぁ、鉄の塊を土に叩きつけた処で傷む筈も無いっていうのは道理だよね……関節の

方はもう僕には意味分からないけど」

大体筋肉でなんとかしたらしい人型肉弾戦車に、呆れた友人達の視線が突き刺さる。

眼前の”獣”にスノウの意識が残っているのかは疑わしいが……それでも、極めた腕をへし折ろうとしたら、継ぎ目の無い鋼の柱を抱え込んだ様な感触が返って来た事には困惑したことだろう。

将来、とある霊獣から種族誤認を受けそうな漢の事はさておき。

”獣”が今の主の技能である《三曜の拳》を扱いだした事で、優性だった戦いはやや膠着気味になりつつあった。

だが厳密にはそれだけが理由では無い。

従来からの圧倒的な性能と、嘗て無く拡張された機能を用いて邪神の軍勢を蹴散らしていた今代の魔鎧は、それ故にその全てを使いこなす局面に遭遇せず、必要にも駆られなかった。

だが、その能力を十全に振るわねばならない相手が現れた事で、急速に力の扱い方を学習しつつある。

これが《報復（ヴェンジェンス）》の持つ学習能力なのか、それとも担い手たる少女の才覚（センス）によるものなのか迄は判別が付かないが……より厄介になった事だけは確かであった。

長引かせればそれだけ脅威は高まる。

ミラ達は誰が言う迄も無くそれを察し、視線だけを交じり合わせると頷く。
早々に決着をつけるべく、各々十分に身体に魔力を巡らせると眼前の魔鎧へと向けて地を蹴った。
”獣”も応じるように咆哮し、野を駆ける四足の如き低い姿勢で疾走を開始する。
そして、何度目かの両者の激突が始まった。
剛腕が地を割り、それを捌いた”獣”が爪牙となる四肢を振るい。
漆黒の鎧の加速を止めんと、槍が影すら置き去りにする高速機動を正確に捉えて突き込まれた。
仲間の窮地に絶妙のタイミングで差し込まれる魔力障壁が、”獣”の四肢や尾から繰り出される致命の痛打を受け止め。
多彩な猛攻を全て潜り抜けて捻じ込まれる鋼の棍が装甲を砕き、細かな破片を舞い散らせる。
目まぐるしく一瞬で変わる立ち位置。息も付かせぬ攻防。
飛び交う豪打剛撃、超速と精緻の極みの応酬。それに時折魔法の光が混じり、戦いは更に加速してゆく。
その最中、ミラは気付いた。
――”獣”の振るう《三曜》の精度が向上している。

気のせいでは無い。
ミラの一撃をその身に受ける度。或いは彼女が”獣”の攻撃を捌き、受け流す度に。
まるで見取り稽古の様に、”獣”の技が洗練されてゆく。
構えも型もあったものではない、文字通り人型の獣が爪を振るうが如き動きであるにも関わらず。
天地に、自身に在る魔力の流れ。
それを掌握する速度はより速く、五体と地に巡らせるはより滑らかに、体内で撓め、結ぶのはより強固に力強く。
先にも述べた通り、今の《報復（ヴェンジェンス）》にスノウのしっかりとした意識があるかは疑わしい。
精神侵食を強く受けた影響で、防衛反応に引き摺られる形で一時的に魔鎧に呑まれている可能性の方が余程高かった。
それでも、魔鎧の主は白い少女であり、依り代となるその身は彼女のものだ。
ミラが見出した、珠玉の才。
長ずれば開祖たる《半龍姫》の領域へと歴史上最も近付くであろう天才は、この状況下にあってもその才覚を曇らせることは欠片も無く。
本気の師と、師に並ぶ強者。それらと相対する事で、少女は師によって磨かれていた才を開花させようとしていた。

（――ッ、なんという……！　スノウ、これが貴女の……！）

”獣”の《地巡》による魔力補充……その妨害も難度を増して行き、つい先程まで余力を以て捌き切れていた筈の一撃が重く、鋭くなってゆく。

攻防の難易度が上がっていると感じたのは、当然ミラだけでは無い。

前衛役である二人は勿論の事、唯一の後衛であるヴェネディエも気付いたのか、その表情は険しい。

ガンテスとラックが左右から同時に攻めかかった。

小さな滝程度なら拳圧だけで両断してのける拳と、音の壁を容易く超える無数の刺突。

相対するのが邪神の上位眷属であっても押し勝てるソレを、”獣”は両の腕と尾による《流天》で捌き切る。

二人が本当の意味で本気を出せば、こうも容易く凌げはしないだろう。

だが、少しでも加減を誤ればスノウに致命傷を与えかねない以上、前衛の二人はこれ以上の威力を伴った攻撃を撃ち込む事が出来ない。

受け流されるのは承知の上。有効打を与えられるミラの為に隙を作らんと、巨漢と傭兵は更に速度と回転を上げ、手数で以て”獣”をその場に縛り付けようとする。

面制圧も出来そうな拳の弾幕、手首や肘、膝、足首と可動箇所を狙いすました槍の刺

突と薙ぎ払い。

狙い通りに”獣”は脚を止めて迎撃に注力し、その間隙を狙わんと《命結》で魔力を練り上げたミラが一気に間合いを詰めた。

――それに違和感を覚えたのはヴェネディエだった。

如何に《三曜》によって攻撃を受け流す事が可能だと言っても、強みである圧倒的な機動力を生かさず、足を止めての迎撃。

今もそうだ。現状、ダメージ源になっているミラが間合いに踏み込もうとしているにも関わらず、迎え撃つのに適した魔法錐を展開すらしていない。

違和感は予感に変わり、魔鎧の肩の装甲がバクン、と音を立てて開いた瞬間に確信に変わった。

大気を呑み込む様な音を立てて、大量の空気が開いた装甲へと吸い込まれると同時――《視えた》光景に、ヴェネディエは総毛立つ。

新たな機能を用いた攻撃が来る――そう判断して守りと迎撃の態勢に入ったミラ達に向けて、殆ど怒鳴る様に叫んだ。

「受けるな！　退け!!」

その声に、ミラとラックは弾かれた様に後方へと跳躍し。

魔鎧と至近距離にいたガンテスは、咄嗟に後退した二人をその背に隠すように立ち塞

がり、文字通りその巨躯を壁とした。
かろうじてヴェネディエの展開した魔力障壁が巨漢の眼前に広がり――。
――放たれたのは、音。
開いた肩部より飛び出したのは、圧縮された大気と”獣”の咆哮に桁外れの増幅を掛けた音の槍だった。
一瞬で魔力障壁が粉砕されると凄まじい轟音が響き渡り、北方の大地が震動で揺れる。
指向性を以て放たれたそれは、距離を取ったミラとラック――更には有効射程の外にいたヴェネディエの鼓膜にまで衝撃を伝え、耳孔で乱反射した音に揺さぶられて視界が揺れた。
一方、壁役を全うし、至近距離でその大半を受け止めたガンテスだが。
物理的な衝撃を伴った音圧で上衣が引き裂かれ、圧縮空気の壁を叩きつけられた事で発生した摩擦熱によって全身が白煙を吹き上げていたが、煙の下の肉体そのものは無傷。
だが、他の三名がそうであったように音を受け止めた鼓膜は無事では済まなかった。
「ぐ……お……っ!!」
ブシュ、という小さな音と共に、彼の両耳から血が噴き出る。

耳孔だけでなく鼻腔や両の眼からも赤い筋を垂らした巨漢は、短い呻き声を上げながら身体を折り曲げ、片膝を付いた。
そこに間髪入れずに”獣”による蹴撃が叩きこまれる。
存分に《命結》を練り上げ、魔力噴射を併用して打ち出された突き蹴りはくずれ落ちたガンテスの鳩尾へと突き刺さり、その巨躯を水平に吹き飛ばした。
「ガンテス!!」
壁となってくれた友人程では無いとはいえ、未だ轟音のダメージが残るミラが叫ぶ。
「……ちぃっ！　ヴェティ、そこの筋肉馬鹿を！」
舌打ち一つして、僅かに揺れの残る視界を叱咤し、ラックが治療の時間を稼ぐ為に”獣”へと突撃した。
幾度目かの咆哮を”獣”が上げると、この戦闘における最大量と言ってよい魔力錐が展開される。
もう一度舌打ちを重ね、ラックは右手で短槍を握り直すと左手で腰のショートソードを抜き放った。
迎撃の手数を増やすために二つの武器を器用に駆使しながら、射出される錐を叩き落とす。
降り注ぐ魔力の豪雨を前にも脚は止めず、多少の被弾は覚悟で尚も前に出る傭兵に対

し、”獣”は脚を振り上げ、激烈な踏み込みで以て大地を震わせた。

「――まさか?!」

知覚した魔力の動きに、ミラが驚愕の声を上げる。

上空から直線的に撃ち出されていた錐の軌道が、弧を描く。

その数ゆえに狙いの精度よりも攻撃範囲による制圧力を重視していた筈の魔力の雨は、大きな流れに絡め取られる様に曲線を描き、或いは旋回してその全てがラックに向けて殺到した。

「ッソがぁっ……容赦ねぇなチビスケ……!!」

前後左右、視界一杯に広がる死すら予感させる光景に、凄絶な笑みを浮かべながら傭兵は武器を振るう。

叩き落とす。肩を掠める。

叩き落とす。左の二の腕に錐が突き立った。

叩き落とす。右の腿と脇腹を抉られ、血が噴き出る。

神速で奔る剣と槍の二閃は、だが単純な物量に押し潰されて圧殺されようとしていた。

血に塗れたラックが針鼠になる直前、ミラの干渉が間に合う。

「《日昇》……!」

螺旋を描く動作で翳された両の手掌が、錐の軌道を掌握して巻き取る。
軌道を明後日の方向に逸らされた魔力錐の全てが地面に突き刺さると同時、限界を超えた様にラックの握る武器から魔力の輝きが喪われ、砕け散る。
身体のあちこちから錐を生やして全身を朱に染めた傭兵は、息を切らしながら穂先の割れた槍を地に突き立て、折れそうになる膝を支えた。
その眼前、一瞬で距離を潰した”獣”が腕を振り上げる。
鋭利な装甲に包まれた五指がラックを引き裂こうとするが、割って入ったミラの棍によって爪撃は受け流され、警戒する様に”獣”は即座に間合いを離した。
「……悪い、助かった」
「動けますか？　ヴェティの処まで下がって治療を受けて下さい」
荒い息のまま、顔を顰めて礼を述べる友人に、ミラは”獣”から目を逸らす事なく硬い声で応じる。
先程、魔鎧が自身の行使した魔法の軌道を操作してみせたのは、術の構成や魔法自体の精度によるものではない。
あれは間違いなく《三曜》の技――完成したあの規模の魔法に対し、周囲の空間に満ちた魔力ごと干渉した事も鑑みれば、奥伝にも相当するであろう難度の技術であった。
「……チビスケ……いや、魔鎧のヤバさは想像以上だった。一人じゃ危険だぞ」

躊躇いがちに呟かれる友人の言葉には、暗に撤退も視野にいれるべきだ、という意味も込められていた。
それは、きっと正しい判断なのだろう。
元より、此方がスノウと魔鎧を引き剥がそうとしているからこそ苛烈な反撃を行ってくるのだ。
ヴェネディエに結界を解いてもらい、全員で速やかに退けば”獣”はおそらく追っては来ない。
だが、正しい選択が必ずしも望む選択とは限らない。
「……申し訳ありません、私は退けない。此処で退けば――あの娘に向かった伸ばした手を引いてしまえば、二度と届かなくなる。手を伸ばす資格を失う」
それは師として。
そして、あの娘の……叶うなら家族として。
どれほど愚かな答えなのだとしても、どれ程に困難な選択なのだとしても。
退かない。退けない。
あの娘に、独りぼっちで憎しみに身を焦がす事を選んだ意地っ張りの少女に届くまで、手を伸ばし続ける。
そう、決めたのだ。

「先ずは傷を癒して下さい……私が倒れたら、直ぐに撤退に移れるように」
前を向いて、”獣”を……その漆黒の装甲の奥に隠されたスノウを見つめて。
ミラは一歩、踏み出した。
後方からガンテスを支えたヴェネディエがやって来て、ラックに回復魔法を施す気配を感じ取りながら、振り向く事無く、前へ。
魔鎧に向けてゆっくりと歩む途中、手にした棍を大地に突き刺し、無手となって進む。
奇妙な事に、”獣”は緩やかに歩み寄る彼女に対して行動を起こすこと無く。寧ろ待ち受ける様に、静かにその場に留まり続けていた。
そして両者の距離が一挙手一投足の間合いにまで縮まり、手を伸ばせば直ぐにでも触れ合う様な距離で、魔鎧と女傑――弟子と師は対峙する。
力を込めた指先を音を立てて鳴らし。
ミラは眉庇越しに己を見ている筈の紅い瞳を想起して、不敵に微笑んだ。
「さぁ、来なさいスノウ――何時かの稽古の続きをしましょう」

静かに構えをとり、緩やかに伸ばした手に。

やはり型も何も無い、前傾の姿勢から伸ばされた漆黒の装甲に包まれた指先が触れ、手の甲がそっと重なり合う。
教えた筈の構えも、より集中を増す為の呼気も、目の前の強烈な威圧を放つ”獣”からは何一つ見いだせず、また感じ取れもしない。
だが、それでも。
それでもミラは、魔鎧の向こうに白い少女の姿を、あの穏やかな日々を視た気がした。
彼女と、彼女の弟子がいて。
弟子の友人達が稽古に加わり、賑やかに――だが真剣に対峙し。研鑽を積み、共に過ごした時間は絆を深めて。
初めての弟子に四苦八苦して、自身にとっても未知の体験や感覚を数多く知り。
それに振り回される己を、昔からの付き合いである友人達が時たま揶揄いにやって来る。
時間にして一年足らず。
けれど大切な――暖かな日溜りの様なあのときを、感じた気がした。
重なっていた手が離れ、両者は動き出す。
”獣”の貫手が喉を狙って突き込まれ、身を傾けて躱す。
その腕を取り、《流天》で体幹を崩そうとして、同じく《流天》で相殺され、だが掴ん

だ手首と肘を返して脚を払う。
足元を刈られた”獣”が魔力噴射で瞬時に体勢を立て直し、お返しとばかりに低い軌道から蹴りが飛んだ。
水平に振り抜かれる蹴り足を跳躍して避け――一瞬だけ振り抜かれた足へとつま先と乗せる。
間を置かず跳ね上げたつま先は、”獣”の蹴りから半瞬遅れてやってきた鋼の尾の強襲を天へとカチ上げた。
互いに半歩、踏み込む。
至近距離でこめかみを狙って振り上げられた魔鎧の肘を手掌で受け流しながら、逆の手で掌底を捩じり込み。
極一瞬の魔力噴射で拳一つ分だけ下がると、空いた隙間に掌が差し込まれ掌底が受け止められる。
そのまま此方の手を握り潰さんと力を込める”獣”の手を引き寄せ、最速で練った《命結》を膝に載せて横腹に叩き込んだ。
腹部の装甲に罅が入り、衝撃で漆黒の鎧姿が一歩、退がる。
靭尾を地に突き刺し、強引に踏み止まった”獣”は下がった一歩を取り戻すように深く、踏み込んだ。

それを見て取ったミラもまた、一歩、踏み込み。
互いに振り上げられた脚が交差する間合いで、《地巡》を行使した震脚は大地を穿ち、揺らして、両者の足裏が沈み込む。
同時に繰り出したのは、中段――胴への突きだった。
ミラの一撃が魔鎧の腹腔に、魔鎧の一撃はミラの胸元に。
地から巡った力を拳に結び、存分に練り上げて打った《三曜の拳》。
この戦いで魔鎧の主の技は限りなく高まったとはいえ、純粋な技量では未だ師が半歩上をゆく。
練った魔力の量も、質も、ミラが上回る。
ほぼ密着距離での《三曜》を用いた打撃戦ならば、速さと膂力で上回る”獣”のアドバンテージも十全には生かせない筈であった。
――だが。
「――ゴ、ふッ……！」
血を吐いて崩れ落ち、地に膝着いたのはミラであり。
立っていたのは《報復（ヴェンジェンス）》だ。
《命結》を乗せた打撃を、互いに叩き込んだ瞬間。
”獣”は自身の尾を用いて、同じく《命結》の打効を乗せた一撃を、自身の背に打ち

込んでいた。
狙ったのは、打撃の相殺――厳密には《三曜の拳》同士の同種の攻撃による、打効の減衰である。
一歩……否、半歩間違えば減衰どころか相乗となり、大破する可能性もあった筈だ。
だが、土壇場で打ったその手は成功した。成功させた。
「……み、ごとです、スノウ。私では思いもつかない……ゴホッ、実行しても成功させる自信はありません……」
意識が、或いは理性が無くとも。
過去に頭髪を用いた《三曜》の行使などという離れ業をやってのけた才覚（センス）と発想は、間違いなく今回のソレと同質のものだ。
こんな状況だというのに、女傑の胸中にあったのは弟子への賞賛、そして師としての誇らしさであった。
血に染まった口元を緩め、容赦なくとどめの拳を振り上げる魔鎧の姿を見上げ、微笑む。
「――それだけに、残念です。出来れば私の技を以て、貴女を止めたかった」

漆黒の拳が、振り下ろされる。
勝敗を確かなものとする、無造作に打ち下ろされた一撃がミラの頭部へと吸い込まれ――。
――瞬間、頭を振った女傑の編み込まれた髪が拳を受け止め、明後日の方向に”獣”の打撃は逸らされた。
完全に予測の外であったのか、盛大に空振りした漆黒の鎧姿の上体が僅かに泳ぐ。
彼女が行ったのは、頭髪によって発動させた《流天》による受け流し。
魔鎧の一撃を受け流すには練度が不足していたのか、衝撃で纏めた髪は千切れ、半ばから弾けて舞い散る。バラけて広がる金灰の髪から、鋼線と共に編み込まれた小さな木札が数枚、零れ落ちた。
空を切って振り抜かれた拳、微かに隙を晒す漆黒の鎧姿。
金灰の髪毛が光を反射して宙に散る向こう、その光景を捉えた、刹那。
ミラは片膝を着いた体勢から、渾身の力を以て跳ねる様に”獣”へと踏み込んだ。
胸部から広がる激痛も、喉からせり上がる鉄の味も、全て意思一つで捻じ伏せ、己の最速で肩からぶつかる様に黒鎧の懐へと飛び込む。
逃さぬ様に片腕を背に廻し、重なり合った姿はまるで師が弟子を抱擁する様で。
反撃か離脱か。何れかを選ぶと思われた魔鎧は、何故か呆とした様を見せてそれを受

け入れる。
黒い装甲に覆われた腹部へと、そっと押し当てた拳に力が込められ。
残った魔力も体力も、全てを注ぎ込み、紛れも無く人生最高の速度と精度を以て其れは練り上げられた。
「――《星辰》」
静かに、いっそ優し気に囁かれた言葉が、”獣”の耳朶を打った瞬間。
衝撃と魔力が漆黒の装甲、その全身を隈なく走り抜け、粉砕する。
文字通り、魔鎧を頭部からつま先まで粉々に弾き飛ばした極撃は、しかし使い手たる少女に傷一つ付ける事は無く。
意識を失って膝からくずれ落ちる白い少女を。
師は今度こそ、その両腕で受け止め、抱きしめた。

四英雄と呪いの魔鎧。
その戦いは、前者の勝利という形で収束した。
滅びた小さな村の跡地に響いていた闘争の喧噪は収まり、再び土地は静けさを取り戻

す。
魔鎧を一時的に停止させるのは成功したが、まだ気を抜くことは出来ない。
ミラは意識の無いスノウをその場に寝かせ、尽きかけた魔力を絞り出して回復魔法を発動させた。
此方の攻撃で一切ダメージを与えてなくとも、そもそもが使用するだけで肉体に著しい負担を齎す呪物だ。
鎧を使った反動で新たに全身から出血している少女は、これまで各地を転々としながら戦いを続けていた負荷が溜り続けている筈。
可能なら《地巡》で自身の魔力も補填したかったが、体力の方も限界に近い今、《三曜》を行使すれば意識が飛ぶかもしれない。
何より、そんな時間すら惜しい。
目を覚まさない少女の傷ついた身体を、丁寧に、そして迅速に魔法で癒してゆく。
「――ミラ」
背後から掛けられた声に、振り向く事無く応える。
「ヴェティ、二人の治療は終わりましたか？　なら申し訳ないですが此方も手伝って下さい」
己の枯渇しかけた魔力では十分な治療は施せない。多重の結界を保持し続けていた

友人に無理を言う様だが、単純な魔力量ならこの場で最も多いヴェネディエならばまだ幾らかは余力がある筈だ。

「……あぁ、二人とも無事だよ」

「ならば、お願いします。思ったより傷が多い。早急な手当が必要です」

何か言いたげな青年の言葉を遮る様に言葉を被せると、魔力枯渇で酷く怠い身体を無視して、特に酷い裂傷のある左腕に回復魔法を集中させる。

じりじりとではあるが、少女に刻まれた全身の傷は癒されている……だが、少女は目を覚まさない。

「ミラ」

再び名を呼ばれるが、悪いがこれ以上は返答をする余裕も無い。ただ、無心になって魔力を注ぎ続ける。

「ミラ、もう分かってる筈だ」

静かに掛けられる言葉に、らしくも無く苛立ちを覚える。

今は問答をしている時間など無いのだ。話なら後で聞くので早く少女の治療に加わって欲しいというのが本音であった。

少女は目を覚まさない。

「僕が見ただけで分かるんだ、君が気が付かない筈が無いだろう」

言い募る言葉は、静かで、優し気で。けれど耳を塞ぎたくなる様な響きを伴っている。
「君も、戦闘中に最悪のケースの一つとして予想はしただろう」
うるさい、聞きたくない。手伝う気が無いのならもう黙っていてくれ。
ミラは返答も反応もせず、ヴェネディエの言葉を拒絶する様にひたすらに回復魔法の維持に注力した。
少女は目を覚まさない。
「――遅すぎた……いや、スノウが早すぎたんだ」
それは、魔鎧が姿を変えて起動した際にほんの僅かだがミラの脳裏に過り。
目を逸らして、気付かないフリをして頭から打ち消した可能性だった。

侵食武装――それは、最終的には使い手の肉体・精神のみならず魂まで取り込む呪物の中でも特に忌まれる武具だ。
本来ならば長い使用期間を経てゆっくりと血肉に喰い込み、融合し、最後に使い手の魂を喰らう。
魔剣や妖刀などと呼ばれるものは、程度の差こそあるがこれに該当する物が多い。
スノウが魔鎧を手にして精々が二ヵ月と少し。
或いは、今代の主となった少女が歴代の使い手達と同等の資質であれば、間に合った

のであろう。

だが、白い少女の資質――《報復（ヴェンジェンス）》の精神侵食を受け入れ、魔鎧の性能を引き出す適正・気質は、今までの主と比して群を抜いていた。

それ故に、既に彼女はどうしようもなく心身を魔鎧に侵食されている。

適正とは、相性では無くその精神性。

自身を呑み込もうとする憎悪の呪い――その根源となる自身と同じく奪われた者達の慟哭の記憶。

魂を侵されるその感覚に、無意識にでも拒絶を覚えていれば此処まで侵食が加速する事は無かったのだろう。

だが、少女は拒絶よりも共感を覚えてしまった。

喪われた者への嘆きに、手から零れた大切な存在への哀切に、一緒に行こう、この憎悪をぶつけてやろうと。そんな風に思ってしまった。

それは、憎悪を象徴する存在に選ばれ、自身も憎悪に灼かれながらも――同じ境遇の、嘗ての誰かに向けた優しさが齎した想いだったのだ。

「……残念だ、ミラ」

沈痛さを押し殺した声と共に、ヴェネディエの手が肩に置かれ。

それを振り払って、ミラはその言葉を否定して叫ぶ。
「――まだです、まだ間に合う筈だ！　まだ……!!」
体内に残った魔力の絞り滓を掻き集め、種火として生命力を燃やす。
疑似的に魔力暴走（オーバーロード）を発生させて回復魔法の効果を増大させようとすると、少女に翳していた掌が弱々しく止められた。
「もういいよ、ミラ……いみ、ないから……」
「ッ、スノウ！」
薄っすらと開かれた紅い瞳と目が合う。
傷だらけのその手を取り、辛うじて意識を取り戻した弟子の身体を、師はそっと抱き起す。
力無く握り返されるちいさな掌の感触に、思考を滅茶苦茶に乱されたミラは何も言葉に出来ずに沈黙する。
暫しの沈黙が降りると、やがてスノウの唇から小さく、震える声で言葉が零れ落ちた。
「……ごめんなさい」
堰を切った様に、溢れ出す。
「……ミラに怪我をさせちゃった……！　助祭様にも……おじさんにも……！　ごめんなさい……っ」

違う、と。ミラは言葉にならない声で即座にそれを否定した。

これは私の我儘だ。皆は私情に付き合ってくれた――ならば責は私にある。貴女が謝る事など無い。

直ぐにでもそう言ってやりたいのに、今だって伝えたい言葉は胸から溢れかえって止まらないというのに。

喉が腫れ上がった様に鈍痛を訴え、それに塞がれたみたいに言葉がつかえて出てこなかった。

「……こんなに迷惑かけたのに……それなのに、わたしは邪神共（アイツら）が許せないままだ……！　今だって身体が動くなら、一匹でも多く殺してやりたいって思ってる……！」

そんな事、この世界に生きる誰もが大なり小なり思っている。

決して異常でも悪い事でも無い。やり方を少し間違えただけだ。

幾ら思おうとも、ミラの口と舌は相変わらず仕事を放棄して役立たずの儘だ。

懺悔する様に独白を続ける少女の瞳には、大粒の涙が浮かんでいた。

小さく咳き込むと、ゴボッと音を立ててその小さな口から血塊が吐き出される。

それを見たミラの背筋が粟立ち、もう喋らない様にと、なんとか出てこない言葉を捻りだそうとして。

今にも消えそうな、そっと握り返されている手に微かに力が籠った気がして、制止さ

れた様に再び舌が動かなくなる。
「……ブランの、ことだってそう、だ……わたしは、あの子にひどい嘘をついて……なのに、あの子は目を覚まさなくて……ゲホッ……なのにわたしは……ほんとのことを、教え無くて、すむって……どこかでおもってた……!!」
ぼろぼろと、涙の粒が零れて傷だらけの頬をつたう。
身体の痛みでは無い、もっと深くに刻まれたそれに顔を歪めてる少女の声色は、罪悪感と後悔で押し潰された者のソレだった。
「わたしが、居なければ……ミラだって、怪我をしなかった……！　わたしが、出会わなければ……エーデルと、ブランだって……！」
違う。
違う、そんな訳が無い。
「……やっぱりわたしは、『不吉の子』だったんだ……！」
違う――違う！　絶対に！
「――違う！　貴女は不吉の子などでは無い!!」
胸にせり上がって来た熱が、ミラの喉に詰まった言葉を溶かして口へと押し出す。
殆ど怒鳴り声の様になって放たれた叫びに、瞳を閉じて涙を流し続けていた少女が、驚いた様子で目を見開いた。

その手を、抱き起した身体を、しっかりと己の腕で包み、腹の底から突き上がる衝動に任せて女傑は絶叫した。

「貴女を見出したのは私だ！　責があるとすれば私にだ！　貴女が――スノウが不吉であるなどと、言わせない！　誰にも、何にも!!」

感情の儘に、そのちいさな身体を抱きすくめて。

改めて宝石の様な紅い瞳を見つめて、言葉に出来なかった思いを、何時か言葉にしたかったものを。

「貴女は……！　あなたは、私の……!!」

詰まらせたその先を、必死に告げようとするミラに。

少女は涙を零したまま、泣き笑いの表情で、少しだけ微笑んで。

「……ありが、とう、おかあ――」

言葉の途中でもう一度、咳き込み――スノウはそのまま、動かなくなった。

「……スノウ?」

呆然と。

何が起きたのか、分からない。そんな表情で、ミラは腕の中の少女に呼びかける。

彼女は待った。白い少女が、返事をしてくれるのを。

その美しい紅い瞳を、また自分に向けてくれるのを。

待って、その薄く閉じられた瞳が、もう一度開くのを望んで、祈って。
「――――――――あ」
やがて、どうしようもなく叩きつけられる現実に、打ちのめされる。
嘗て、少女が育った彼女の故郷の地に。
少女の『母』が、喉を涸らして叫ぶ慟哭が響き渡り、空に吸われて消えていった。

――数ヵ月後。
ミラは再び、北方の村跡を訪れていた。
既に土地の呪詛汚染、その浄化は完了し、損壊した建物の撤去が進められる其処は、将来的には北方にある教会の拠点の一つとして新たな村――場合によっては小さな街にもなるであろう計画が持ち上がっている。
「……！　これは、ミラ様！　連絡頂ければ迎えの者をやりましたものを」
「お疲れ様です――今回は私用で顔を出したので、大仰なやりとりは必要ありません。

此処の責任者(司祭殿)にも連絡は不要ですよ？」

作業を行っていた人員が馬に揺られるミラに気付いて駆け寄り、頭を下げて来るのを掌で押し留め、彼女は馬を下りた。

馬に載せていた荷――丁寧に包まれた花束を手に取ると、恐縮した様子の作業員に手綱を渡し、馬舎に繋いでくれる様に頼む。

向かう先は村外れ……以前より少し拡張したらしき共同墓地だ。

道の途中、激しい戦闘痕の残る場所に差し掛かり、彼女はそこで一旦歩みを止めた。

飛び散った瓦礫などは片付けられているが、穿たれた大地などは未だに手つかずである周囲を見渡し……その中に、向かい合って強烈に踏み込んだ足跡を二つ見つけ、暫しの間それを眺める。

僅かに細めた目に様々な感情が過ったようにも見えるが、やがて数秒、瞼を閉じると再び開き、歩き出す。

辿り着いた墓地は、以前に訪れた時よりも手入れが行き届き、整然とした状態になっている。

此処に派遣された教会の者達は、こうした死者を悼む場をきちんと整えるように心掛けている様だ。僧職に在る者としては非常に良い事である。

定期的に掃除もされているのか、足を踏み入れた墓地はゴミ一つ落ちていない。

この分なら、掃除用具を借りて来る必要は無さそうだ。そう判断して、ミラは目的の墓石を見つけるとその前に花を供え、黙して跪いた。

嘗て、此処にあった村で最年長であった老夫婦が埋葬されているというその墓に向け、静かに手を組んで祈りを捧げる。

もし存命であるなら、この下で眠っている夫婦には語りたい事、謝らなければならない事が山とあった。

今も胸を締め付ける悔恨の情に、自然と祈りの時間も長くなる。

どれ程そうしていたのか。

微動だにしなかった女傑は、閉じていた眼を開くと音も無く立ち上がった。

本来の目的である場所は別だ。無理を言って遠出の許可を貰ってきた以上、時間を掛け過ぎるのも宜しくない。

拡張された墓地に、ここ数ヵ月で新たに作られた其処へと、目を向ける。

石造りの、質素だが丁寧な作りの霊廟。

地下を刳り貫き、掘り抜かれた後に石畳と石壁で整えられ作られた其処は、彼女の訪れた目的である呪物を封じた場所だった。

あの日、スノウを取り戻す事が叶わなかった、あの場所で。
動かなくなった少女を抱きかかえたまま、呆然としていたミラの前で、それは起きた。
少女の胸元から突如として広がった漆黒の闇。
それはあっと言う間に彼女の全身を覆い尽くし、ミラが何某かの反応を取る暇すら無く、魔鎧の形となって地へと顕現する。
再起動した魔鎧は侵食し尽くした主の骸を即座に魂ごと取り込み、だが依り代を失った事で力を失い、その場に鎮座する事となったのだ。
『ふざけるなぁっ!!　あの娘を、スノウを返せっ……!!』
目の前で少女を失ったばかりか、その亡骸すら奪い取られたミラは、激昂のままに魔鎧を破壊しようとし。
『――なりませぬ、ミラ殿!』
応急処置を終えたとはいえ、自身も未だに重症であったガンテスに抑え込まれる事となった。
怒りの儘に荒れ狂うミラを必死に押さえつけ、巨漢は唇を噛みしめて『娘』を喪った友人へと諌めの言葉を掛ける。
『過去の記録からみても、此処で魔鎧を打ち壊した処で意味はありませぬ！　何れ時を

経て別の主を見つけ、報復の牙を振るうでしょう！　スノウ嬢と同じ結末を後の者にも辿らせるおつもりか!?』

『……ッ！』

その言葉に、冷水を浴びせられた様に思考は冷えるものの、腸は煮えくり返った儘で。

振り上げた拳を下ろすのに、多大な気力と時間を必要とした。

最期の攻防で打たれた胸が、思い出したように痛みを訴え――ミラは力無く項垂れる。

『私は……どうすれば……』

『……先ずは、何は無くとも魔鎧の封印を行う必要がありますれば――ヴェネディエ殿、この土地の浄化計画とその後の予定を御存知で？』

『そうだね……人を廻して、可能なら此処を《報復（ヴェンジェンス）》の封印地とする様に、上に掛け合ってみよう』

両膝を着いて、座り込んでしまったミラを気遣う様に、巨漢と金髪の青年が、消耗をおして今後の大まかな予定を口にする。

それを少し離れた場所で聞いていた傭兵は、千切れて散った金灰の髪が散らばる場所に、小さな木板が落ちているのを見つけて拾い上げた。

『……クソったれが』

手の中の板――少女の遺品になってしまった護り札を見つめ、やり切れない思いを抱えて。

痛みを吐き出すに呟かれた一言が、その口から零れて大地に転がった。

「久しぶりですね、スノウ」

霊廟の最奥、強固な封印処理の施された玄室にて。

転移の阻害や、微弱だが継続的な浄化効果のある魔法陣が十重二十重に張り巡らされたその部屋に、幾重にも鎖で拘束された魔鎧は安置されていた。

完全に封じられ、依り代を得たときの威圧感も完璧に抑え込まれているソレに向け、ミラは数ヵ月前の怒り狂った様子とは程遠い表情で、静かに声を掛ける。

彼女が話しかけているのは正確には魔鎧では無く、その内にある彼女の弟子である少女だ。

少女――スノウは、魔鎧の力を完全に引き出す代償として、その身と魂を取り込まれてしまった。

死して後、その魂は創造主たる女神のもとへは還れない。白い少女は死後も尚、数多

の憎悪の念、呪いと共に鎧へと縛られ続ける。
あの娘が何をしたと言うのか。其処までの許されざる罪を犯したとでも言うのか。
怒り、嘆き。答えなど帰ってくる筈の無い問いを、天上におわす女神に問いかけすらした。
そうして、散々に悩んで……ようやっと出した結論がある。
それを少女に伝える為の今回の来訪でもあった。
「……ブランは、未だ目を覚ます気配はありません……ですが、何年掛かっても介抱を続けます、いつか、彼女が目を覚ますまで」
少女の友人――その容態を告げる声は、静かな決意に満ちていた。
結局の処、どのように悩んでも、己は戦士だ。
戦う事しか得手が無い以上、少女に報いる方法など、一つしか無いのだ。
「……私は、貴女と出会うべきでは無かったのかもしれません」
少女は自身を不吉の子、などと卑下したが、ミラには自身との出会いこそが少女にとっての新たな不幸の始まりだったのでは無いか、という思いがあった。
もし少女を弟子に取る事なく、彼女が村の生き残りと故郷の近隣へと移り住んでいれば……苦労や苦しみはあっても、命を落とすような結果にはならなかっただろう。
また彼女の友人達も、戦士として初陣に出るのはもう少し遅れ、あの大攻勢に巻き込

まれる事は無かっただろう。
だが現実として彼女達は出会い、こうしてミラは少女を喪う事となった。
事の元凶は邪神の軍勢とはいえ、切欠となったのが己であるというのなら。
きっと、己は師などと名乗るべきでは無いのだろう。
或いは、恨まれる事すら当然の事であると、そうミラは思っていた。
だから、せめて。
「贖いにもなりませんが……せめて戦い続けましょう。貴女の様に優しい子が、一人でも多く救われる様に」
いつかブランが目を覚まし、スノウが、彼女と同じく魔鎧に括られてしまった者達が、解放される事を祈って。
戦い続けよう、己が出来る事を、出来る限り。
そして、その先に戦場に倒れる日が来たとしても。
或いは、戦う力を失い、戦場に出ることが出来なくなったとしても。
命の限り、為すべきことを為すのだ。
「……今日は、それだけを伝えに来ました……機会があれば、また来ます」
そうして、女傑は封じられた魔鎧へと背を向け、力強い足取りで歩き出す。
あの日、あの場所で心と身体に刻まれた、消えない傷痕を、その痛みを――スノウと

いう不世出の少女が居た確かな証であると。そんな風に思いを馳せて。
振り向く事無く霊廟を後にすると、晴天の空の下を真っ直ぐに進みだしたのだった。

長い、長い――懐かしい夢の果てに、老兵は目を覚ます。
目を開いた視界に映ったのは、見慣れた天井だった。
「……ふむ」
昔から寝起きは良い方だ。
若い頃から変わる事無く続く目覚めの良さなのだが……ここ最近は、ほんの少しであるが身体に重さを感じるようになった。
とはいえ、己も良い年だ。昔散々に無茶をした事も省みれば、多少の怠さなどで済むのであれば御の字と言っても良いだろう。
窓から差し込む光をみれば、夜が明けたばかり、といった処か。

夢見が聊か特殊だった割には、何時もの時間に起床した様だ。そう判断して、寝台から身を起こす。

窓を開け、朝の空気を部屋へ取り込んで。

静かに深呼吸して、わずかに冷えてきた新鮮な朝露の香りを胸に吸い込む。

「――けほっ」

胸に走った痛みに、少しばかり咳き込んだ。

もう数十年にもなる付き合いなのだが、最近、朝方は強く主張してくる事が多くなった。

まぁ、これも仕方の無い事だろう。先程も言ったが、この年まで色々と好きに生きて来たのだ。

多くのものを取り零して――けれど、それ以上に手に入れ、或いは取り戻してもらった。今になって調子を崩す位、なんだと言うのか。

桶に張った水で顔を手早く洗い、いつもの僧服をクローゼットから取り出して袖を通す。

先ずは朝食。その後に歯を磨く為、ミラは歯刷子のセットを片手に部屋を出た。

「――げっ」

「朝から人の顔を見るなり『げっ』は無いでしょう」

朝食と後の歯磨きを終え、聖殿中央区の廊下を歩いていると、銀髪をサイドで纏めた騎士服の少女と遭遇した。

「し、失礼しました。おはようございます、シスター・ヒッチン」

「はい、おはようございます……昨日の件でしたら御説教も終えましたし、もう気にする必要はありませんよ」

先日、中庭で正座して行われた二時間の説教が尾を引いているのか、微妙に腰の引けた様子で挨拶をしてくる銀髪の少女――アンナに、ミラは苦笑しそうになる頬を引き締めて鉄面皮のまま挨拶を返す。

既に怒ってはいない、そう告げるシスターの言葉に、帝国有数の騎士である少女は露骨に肩の力が抜けた様子を見せた。

「……長時間の御説教が嫌であれば、聖殿内で追いかけっこなどしなければよいでしょうに」

「いや、だって！　あれはあの馬鹿が悪いじゃないですか！　司祭様のガチなブートキャンプに私まで巻き込まれるハメになったんですよ!?」

「干したばかりで落ちて踏みつけられ、泥だらけになったシーツが三枚と蹴り飛ばされて粉砕された鉢植えが四つ、後は参ノ院の司教殿のカツラが犠牲になったようですが」
「鉢植え二つと司教様のヅラは私です、本当にすみませんでした」
若い二人の自重しない追いかけっこの末、紆余曲折を経て頭髪の隠蔽が暴かれた司教の哀しそうな顔を思い出したのか、アンナはその場に土下座せんばかりの勢いで腰を直角に折り曲げる。
「謝罪するならば当人に……と言いたい処ですが、繊細な話ですからね。騎士アンナ、貴女が司教殿と顔を会わせるのは暫く避けた方が良いでしょう」
下手をしなくても死体に鞭打つ様な結果になりかねないので、当然の処置である。
まぁ、それは兎も角として、だ。
アンナの手にした、簡単な植物学に関する本に気付いたミラは、ちらりとそれに目を向けた。
「珍しい、と言って良いのでしょうか。貴女が本を抱えている姿は初めて見ますね」
「まぁ、あんまり自分で読む方じゃないですね。寝る前に眺めていると気持ちよく意識が飛ぶんで、定期的に書庫から適当な本を借りてるんです」
「……貸出品に涎など垂らす事の無いようになさい」
堂々と睡眠導入代わりに使ってますと宣言する少女に、ミラは少々呆れた様子で最後

にお小言を付け足す。
「察するに、本を返却しに行く最中でしたか。引き留めてしまいましたね」
「あ、いえ。貸出期限はまだ先なんですけど――アイツが朝から書庫に籠るって言ってたんですよ、なんかこの本も必要らしいんで、渡しにいってやろうかと」
意外と言えば意外な言葉に、ミラは「ふむ？」と思案する様に鉄面皮の片眉を上げた。
「彼が書庫ですか……見た目より書物に眼を通す性質（たち）であるのは知っていますが……自室以外というのは珍しいですね」
「でしょ？　ついでに様子でも見にいこうって事で書庫に向かってました」
じゃ、行ってきます、と続けて軽く会釈をするアンナ。
書庫に向かうその背を暫し見つめ……ミラはもう一度「ふむ」と呟くと、歩みを再開させ――少女の隣に並んだ。
「私も書庫に向かうとしましょう。彼には用があったのを思い出しました」
「あ、そうなんですか。それじゃ、二人であの馬鹿が苦労して調べものしてる顔を拝みに行きましょう」
最初こそ怪訝そうに立ち止まったが、あっさりと納得して歩き出すアンナに、一つ頷く。
実際には、特に彼に――弟弟子に用があるという訳でも無かった。

だた、懐かしい夢をみたせいか……何となく、顔を見たくなったのだ。
勿論、そんな本音はおくびにも出すことは無く。
ミラは騎士の少女と連れ立って、書庫への道を歩き出した。

金色の聖女たるレティシアに連れられた、その黒髪の青年を初めて見たとき。
ミラが感じたのは、何故か懐かしさを伴った既視感だった。
転移者の知人が他にいない訳では無いが、青年だけに感じたその感覚に、訝しさを覚えたのは今でも記憶にある。
その感覚が、強烈な拒否感と、そして怒りと哀しみに変わったのは、彼があの魔鎧の使い手であると知ったときだった。
封じられたアレを、解放したのか。
貴方の傍にはレティシア様とアリア様がいるだろう。それを置き去りにして、破滅の約束された報復の道を歩むのか。
私に、またあのときの様な光景を見ろと、繰り返せと、そう言うのか。
煮えくり返る感情と共に、事と次第によっては腕尽くで――今度こそ、己の命を賭け

てでも魔鎧を取り上げようと、青年に詰め寄って。
――えぇ……アイツとその周りのモンをフォローする為に手に入れたのに、なんで離れる事になんの？　ちょっと何言ってるか分からない。
そんな風に、とぼけた、だが心底困惑している表情で応えるその姿に、唖然としたのを覚えている。
そして、その言葉に偽りは無かった。
青年は聖女の傍に在り続けた。
後に《聖女の猟犬》と、畏怖と敬意を込めて呼ばれるようになった、その後も。
憎悪や復讐では無く、彼女達の守護とより多くの人々を救う為に、呪われた魔鎧の力を振るい続けた。
それでも、彼の扱うソレは、今までの全ての使用者に破滅を齎してきた特級の呪物だ。
如何に精神の侵食を跳ねのけることが出来ようとも、その身に掛かる負担が変わらぬ以上、手放すべきだと、そう思っていた。
だが、青年の戦う姿にミラは重ねてしまった。
嘗て、己が見出した少女を。何れは彼と同じように多くの人々を護り、救う事が可能だったであろう、最愛の弟子を。
だって、青年が振るう《三曜の拳》はあの娘の――スノウの拳だった。

粗だらけで、不格好で、およそ才という物を到底感じられなくて。
資質という点では、あらゆる面で正反対と言って良いのに、それでも、彼の拳は確かにスノウから受け継がれたものだったのだ。
魔鎧の技能継承機能が齎したものだというのは、複雑処では無い感情を覚えたが。それでも。
あの娘が磨いた技を、あの娘が生きた証を。
何一つ報いてやれなかった己の代わりに、まるで青年が、人々の記憶に、歴史に、刻み込んでくれている様で。
そう思ってしまった時点で、ミラには彼を――弟弟子の歩みを止める事など出来なくなっていた。
人類種の総力戦となった戦線。
大一番と言って良い戦いで、大功を以て人類側の大勝利をもぎ取って見せた青年を見て。
誇らしさと感謝で満ち溢れたあのときの感情は、なんと表してよいのか未だに分からない。
そして、浮かれた気分を突き落とす様に彼の訃報が届いたときの感情も。
憎悪でも復讐でも無く。

ただ只管に聖女の為に戦った青年は、己の意思を存分に貫き通して最後の最後に自身の全てを賭けて邪神へと挑み、遥か昔より続く悲劇の螺旋を断ち切った。
喜ぶべきことなのだろう、戦士として敬意を以て称えるべき偉業なのだろう。
だが、聖女の二人は勿論の事、他国に所属する彼と親交のあった少女達も。ミラも、ガンテスも、教皇の座がすっかり板についてしまったヴェネディエだって。
皆、誰一人だって。心からそう思う事なんて、出来やしなかったのだ。
だから、彼と深く関わった誰もが、渇望した筈の平和を心から享受出来ぬままに過ごして、二年。
以前と変わらぬ、とぼけた様子で彼が帰って来たとき、肩に背負っていた全ての重荷が消えたような、そんな大きな安堵を感じて。
そのときに漸く、ミラに――そしておそらく、レティシアとアリアにとっても、本当の意味での平和の時代が、始まったのだ。

アンナとミラが並んで書庫に足を踏み入れると、其処には話の通り青年と――彼を挟んでやり取りする聖女姉妹の姿があった。

「はーい、これお願いされてた資料ね。ここに置いとくね、にぃちゃん」
青年の調べ物に沿う書物を探していたらしき銀髪の聖女――アリアが、数冊の本を机の上に積み重ねる。
おう、ありがとー。と、現在目を通している本の頁から顔を上げずに返答する青年を見て、彼の隣の席で頬杖を付く金糸の髪を持つ聖女――レティシアが、何処か面白く無さそうな表情で自身の髪を指先で弄んでいた。
「別にさー、今になってあの鎧に名前なんて付けなくても良いんじゃね？　今更だろ」
いや、ラブリーマイバディへの命名は重要事項これ確定。と相変わらず頁から顔を上げずに即答する青年に、益々面白く無さそうに金色の聖女は唇を尖らせる。
「相棒はオレだろー……前から思ってたけど、無機物相手にラブリーだの愛しのだの持ち上げる位なら、もっと他に言うべき相手がいると思うぞ？」
「もー、いい加減諦めなよレティシア……あ、でも確かに言うべき相手が云々っていうのはボクも賛成かも」
「なー？」「ねー？」と、顔を見合わせて頷き合う姉妹に、なんで急に責められてんの俺。解せぬ。などと返して顰めっ面を晒す青年。
和気藹々と軽口を交えて調べ物――どうやらかの魔鎧の銘名に関する資料集めをしているらしき三名に、アンナが借りていた本を片手に近付いてゆく。

「おーっす、おはよー。朝っぱらから美少女二人に挟まれて調べ物してるタラシ野郎の為に、アンナちゃんが本を持ってきてあげたわよー」

人聞きィ!?　と叫んで書庫の管理をしている司書に注意されている青年と、そんな彼を見て笑う少女達を見て。

ミラはひどく穏やかな気持ちで目を閉じ、思いを馳せた。

自分は、彼に――弟弟子に貰ってばかりだ。

青年が霊峰から帰って来た後、事の経緯を聞いたミラは淡い期待と予感が現実となった歓びに、胸を押さえる事となった。

魔鎧の変化――呪物としての在り方すら変えたソレは、憎悪の根源である仇敵……即ち邪神を、その手で討ち滅ぼした事による自己浄化に依るもの。

それは、つまり……魔鎧に取り込まれた者達の思念や魂が、憎しみの呪縛から解放された事を意味している。

当人にその自覚は無いだろうが、それでも。

彼は――《聖女の猟犬》は、この世界だけでなく、自分達師弟を、救ってくれたのだ。

「……感謝しています、心から」

誰にも聞き取れぬであろう言葉を口の中でだけ転がして、ミラは再び目を開くと目の前に広がる騒がしくも尊い光景を見つめようとして――。

――青年の肩に乗って、楽し気に笑う紅い瞳の少女の姿に、息を呑んだ。

ブラブラと足を揺らし、彼が読む本を肩の上から覗き込むその少女は、青年と同じような真っ黒な髪に、一房だけ真っ白な髪が混ざっていて。

本と青年の顔を見比べて、本当に嬉しそうに、幸せそうに微笑むその顔と、紅い宝玉の様なその瞳は――。

「――ス、ノ……ッ！」

思わず、一歩踏み出し。

驚愕に固まった舌が、胸にしまった大切なその名を紡ごうとする。

手を伸ばし……だが瞬き一つすると、まるで幻であったかの様に、その場にいた四人目の少女の姿は消えていた。

あぁ……。

どうやら、己もいよいよ耄碌して来ているらしい。

これ以上無いくらいに、救われ、貰ったもので両の手は溢れかえっているというのに。

この期に及んで、こんな――都合の良すぎる優しい幻を見るなど、本当に度し難い。

苦笑いを零しながら、ミラはそっと伸ばした手を下ろした。

「――あれ？　ヒッチンさん、どうしたんだこんなトコで？」
「あ、そういえばなんかコイツに用があるって言ってたっけ――あんた今度はなにやったの？」
レティシアの疑問の声にアンナが思い出した様に手をポンと打ち。
俺がやらかしたっていう前提やめてくれない!?　と叫ぶ青年へと据わった目付きで笑顔を向ける司書に、申し訳なさそうに頭を下げるアリア。
そんな四人に、ミラは珍しく相好を崩して微笑みかけ。
青年から贈られた伊達眼鏡を軽く指先で押し上げると、彼らの傍に歩み寄る。
「見た処、貴方の相棒の名付けに関する話のようですね――よければ私も手伝いましょう」
思わぬ申し出に、目を丸くする青年と少女達の姿に、吹き出しそうになりながら。
僧服の下にある首から掛けた古ぼけた木札へと、そっと手を添えて。女傑は自身の意見を口にしたのだった。

幕間・閑話
銀麗と白百合と時々駄犬（前編）

唐突だが、リアの機嫌が悪い。
いや、理由は分かってんのよ。
大森林に向かう折、隊長ちゃんに渡した簪が発端だ。
正確に言うと、渡す事こそしなかったがシアの分は買っておいた――けどリアの分は無い、という事を昨日、ふとした会話の流れでゲロして以降、我が妹（おとうと）分はご立腹なのである。
基本、人当たりが良くてよく笑う奴なだけに、ツーンとした表情で顔を逸らされるのは心に刺さるそうだ屋上に行こうあいきゃんのっとふらい（錯乱
これには困った。素で困った。あそこまで不機嫌になるとはちょっと予想外だった。
――そんな訳でどうしたら良いですかねぇレティシアさん！
「そこでオレに聞いてくるのかよ」

本日のお仕事を終えて自室で寛いでいたシアの処へと突撃し、直球でアドバイスを求めたのだが……馬鹿を見る目付きで見られた、解せぬ。

いや、まぁ、確かに簪を渡した二人の内の片方である人物へと助言を求めるっていうのは大分アレだとは思うけど……仕方ないやろ、リア絡みで一番的確な事言ってくれるのは姉貴（アニキ）であるシアなんだから。

「まぁ、言わんとしてる事は分からないでもないけどさ」

そう言って、シアは掌の中にある銀細工に空色の玉飾りがあしらわれた簪――つい昨日まで俺の部屋の机の肥やしになってた例のやつね――を、目を細めて眺めている。

部屋に入ったときにもじっくりと鑑賞していたらしきソレを指先で一撫ですると、専用のケースにしまい直して俺の方へと向き直った。

「オレの分まできちんと確保してあったのは正直意外だったけど……そこでアリアの分に気が廻らないってのはお前らしくも無いな？」

いや、うん。考えなかった訳では無いんです、ハイ。

ただ――普通に良いお値段なので二つ購入した時点でそのときの手持ちが無くなりました。

言い訳にしかならんが、渡す機会が巡って来る様なら後でリアの分も買いに行こうとは考えていたんです、マジで。

そのあと、結局ずるずると店に向かうのが先延ばしになったのは言い訳のしようもないけどな！（白目

「ま、そんな処だろうな」

俺の行動の経緯なんぞ大体予想済みであったのか、軽い調子で肩を竦める聖女様。

「とは言っても、今回の件はそんなにきちんとした助言なんて無いぞ？　精々が御機嫌取りにあの店に二人で行ってこい、位だな」

む、やっぱりそうなるか……だが、今のプチおこプンプン丸のアリア君がそれを素直に聞いてくれるかどうか、ちょい不安なんだけど。

我ながらなんとも情けない声色で不安要素を口にすると、シアは通り名の由来であるサラッサラの淡い金髪をかき上げて断言してきた。

「いや、お前が二人で出掛けようって食い下がれば絶対断らないから。というか、仲直りしたいならアリアが首を縦に振るまで誘うくらいの気概は見せろよ。男だろ？」

ご尤も過ぎてぐうの音もでない。正論でブン殴って来るのはやめようレティシア君！　ぼくはとてもつらい！　自業自得なだけに猶更！

……だが、俺としてもさっさと仲直りしたい。マジで。

可愛い妹（おとうと）分に、不平等な真似をしてしまったのは事実だしな。此処はシアの言う通り、食い下がってみるか。

ちょうど明日は殆どフリーらしいし、頑張ってお誘いしてみよう。
俺の表情から大体は察したのか。
我が友人も満足気に頷いて――「まぁ、それはそれとして、だ」なんてちょっと声色を変えて切り出した。
腰掛けていた寝台から立ち上がると俺の前まで歩み寄り……とっても良い笑顔を浮かべる金色の聖女様。
「オレと二人で出掛けて、オレが紹介した店で別の女（ヤツ）に贈る品を黙って見繕う――これに関する不義理はどう清算する気なのかな君は？」
ｏｈ……。
言われて見ればその通りであった事実を遅まきながらも指摘され、思わず固まる。
その白く細い指先が伸ばされ、嫋やかな動作とは裏腹にぐわしっ、っと音がなりそうな力強さで両の掌で俺の頭が固定された。
綺麗な笑顔の儘で、その指先にじりじりと更なる力が込められる。
「その上なー、アリアとの仲直りのアドバイスまで頼まれちゃってなー。君はちょぉっとオレに対する配慮ってやつが足りてない気がするんだよなー」
息が掛かる様な距離まで顔を近づけたシアは相変わらず良い笑顔の儘で、ちょっと額に変な汗が滲んできた俺は視線を逸らして必死こいて謝罪の言葉を捻りだした。

そ、その件に関しましては、ご指摘を受けるまで終ぞ思い至らなかった事と共に大変申し訳なく……。

シアはニコニコと満面の笑みを浮かべている。こわい（白目

心なしか俺の頭を鷲掴みにしている指先に更なる圧力が追加された気がした。

こ、今回のリアの件が無事に終わったら、改めて何かしらの謝罪――挽回の機会を頂けたら嬉しいなーとか愚考いたします！　すいませんでしたぁ！

「……ま、良いだろ」

笑ってるのに笑ってない笑顔と半端無い圧を引っ込めたシアは、再び肩を竦めて俺の顔を挟み込んでいた両手を離す。

「それじゃアリアの御機嫌伺いが終わったら、次はオレと出かけよう。あー、何処に行こうかなぁ……ちょっと良い値段のレストランでも予約しようかなぁ！」

これはアレやな、そのときは奢れって事やな。そんくらいは聞かんでも流石に察せられた。

聖女様がお高めとか言っちゃう店とか、どんだけの出費になるのかちょっと怖いが……まぁ、エルフの一件で教皇の爺さんから正式な依頼料として結構な額を頂いてるので貯蓄は大分増えた。問題なかろ。

なので、奢り自体に否は無いのだが……あれだ。なんだか最近はシアリアのどっちか

と出かける事が多い代わりに、前みたいに三人で、っていう機会があんまり無い気がする。

別にそれが不満って訳じゃないが、たまには以前みたいな感じも良いと思うんだが……うーむ、こいつは贅沢な望みってやつなんだろうか？　二人とも俺と違って立場ってモンがあるから時間を好きに捻りだせるものでも無いからね。

先ずはアリア君のお怒りを鎮めて、その次にシアと礼と謝罪を兼ねて出掛けて――少々先の話になってしまうが、更にその後の話として目の前の聖女様に話してみると。

「ん……そうだな。確かに三人で出掛ける回数はめっきり減ったし……今度はそうしてみるか」

さっき浮かべていたものとは違う普通の笑顔を浮かべて、シアも楽しそうに頷いてくれたのだった。

と、いう訳で。次の日の朝である。

俺は大聖堂での朝の御祈り当番だったリアを出待ちして、裏口から出て来た処を単刀直入に切り出した。

アリア君アリア君、良ければ今日は俺とお出掛けしない？　ぶっちゃけ昨日の一件のお詫びも兼ねてプレゼントとかしたいんですけど！

「え！　うん！　行こ……」

笑顔で即答しかけた妹分は、ハッとした表情になると慌てた様にそっぽを向いた。ぬぅ、やはりいつもより手強くなっておるわ。

「……ふーんだ。御機嫌とりしたってそんな簡単に許さないからね、今回、ボクはちょっと怒ってるんだ」

重々承知しておりまする。なので御許しの機会を頂く為にお誘い申し上げているのであります。

昨日と同じく、ツンとした態度で腕組みとかしちゃってる銀の聖女様に対し、なるべく神妙な表情で俺は食い下がる。

勿論、表情だけでなく真摯に自分の心情も伝える。ぶっちゃけゴマ擦りの側面が無いとは言わんが、やっぱり大事な奴とギスギスしたまんまというのはしんどいのだ。

シアにプレゼントして、お前だけをハブろうとかそういう意図は無かった。言い訳にしかならないが、財布の中身を貯蓄から補充して後で買いに行く予定だったんだ。

エルフの一件を挟んで随分と後回しになったのは、もう完全に俺の見通しの甘さのせいだ。ごめんな。

組んでいる手を取ってずずいっと顔を近付けると、リアは驚いたのか「うふぇっ!?」と妙な声を上げて仰け反る。

何故か挙動不審になって俺が握った手とは逆の、空いた指先で自身の銀の髪を指先でくりくりと弄びだした妹分へとぐいぐいと距離を詰めて言い募った。

なんで、今日はアリア君を誘って例の店に一緒に行こうと思いました。出来れば仲直りのチャンスをくれると嬉しいです、ハイ。

昨日のシアではないが、息が掛かりそうな程の距離で正面から綺麗な空色の瞳をガン見して望みを伝える。

……意図した訳じゃないが、手を取って壁に追い詰めるような感じになってしまった。

うん、やっちまったＺｅ。イケメンでもなんでも無いのに壁ドン擬きな行動とっても黒歴史にしかならんわ、次があるとも思えんが気を付けとこ。

とはいえ、常になく強引にお誘いした甲斐はあったのか。

そっぽを向くのをやめてくれたリアは、相変わらず空いた手の方の指先で忙しなく髪を弄りながら「……はい」とちいさな声で応えてくれた。

あれだけ怒った素振りを見せていたのに、直ぐに前言を翻したのが恥ずかしかったのか、ちょっと俯いて顔を赤らめていたが――元はと言えば俺の迂闊な言動が原因なので

そう気にすることは無いんやで？

あー、えがった。取り敢えず最初の一歩は成功した。

そんじゃ、朝飯食ったら一緒に街に出ようず。先ずは食堂行くとしよう。

怒った気配は無くなったが、代わりになんだかちょっと静かになったリアと連れ立って、二人で食堂に向かう。

飯も重要だが、一旦部屋に戻ったら軍資金のチェックをせんとな。また手持ち不足にならんように多めに持っていこう。

「よーし、早く行こうにいちゃん！」

朝食を摂って、互いに一旦部屋に戻って。

ささっと準備を終えて聖殿の門前にで合流すると、リアはすっかりいつも通りの様子に戻っていた。

肝心の詫びを兼ねた買い物はこれからだが、機嫌が直ったなら良い事だ――なんならいつもより若干テンション高くて御機嫌な感じすらする。

それならそれで、妹分（おとうと）に喜んでもらえる様に拙いながらもエスコートに精を出すだ

けや。リアが喜ぶなら俺も普通に嬉しい。誰も損をしない素晴らしい正の循環である（断言

以前にも見た事のある髪の色を変える幻惑系の魔法を使用したリアは、栗色へと変わった髪を手の甲でかき上げ、空いた手で俺の腕を掴んでぐいぐいと引っ張りながら意気揚々と歩き出す。

まぁまぁ、落ち着き給えアリア君。朝飯食って直ぐに出て来たから、下手をすると店はまだ開いてないかもしれん。

シアに開店時間を聞いておけば良かったのかもしれんが、今更だ。

店の前で待ちぼうけもアレだし、ゆっくりと行こう。

ここ数ヵ月で、一人だったり連れがいたりと状況は様々ではあるが、すっかり平和になった聖都各所での色々な店を開拓できた。

目的の服飾店と同じで、この時間ではまだ開店前の店が殆どだろうが……行く道にある店舗をリアと吟味して、帰りに寄る予定を立てるのも悪くない。

「そっか……そうだね、じゃ、のんびりいこう！」

歩みは緩やかになったが、それでも俺の手を引く銀の聖女様の御機嫌はとっても上向きな儘で。

店の場所を知ってるのは俺だというのに、変わらず此方の手を引くその顔には輝く様

な笑顔が宿っていて、なんとも心癒される。
じゃれ合いながら歩く先、目についた店をチェックしながら急ぐ事も無くゆっくりと進む。
お、あそこのパン屋が前にお土産買って来た店ね。割とお勧めよ。
「へー。総菜パンとか菓子パンみたいなのが置いてあるっていうお店かぁ。今は朝ごはん食べて来たばかりだからなぁ……」
うむ、此処は前に来た時も早朝から開いてたし、朝飯はここで買っても良かったかもなぁ。
「そうだねぇ……あとでお昼の時間に寄ってみようよ。ボク、あんぱんかメロンパンを久しぶりに食べてみたい」
流石にメロンパンは無いと思うぞ？　あんぱんは……餡子さえ作ればイケるから、無かったらいっそ店のおばちゃんに言ってみるのはどうじゃろ。
白餡やうぐいす餡なら類似品の豆があるからいけるしな。小豆らしきものは俺は見た事無いが。
簡単な餡の作り方くらいは知ってるし、いっそ普通のパン買って餡子は自作もアリか？
「良いね、レティシアやアンナも誘って作ってみよう！　……あ、にぃちゃんはこしあん

とつぶあん、どっち派？　ボクはこしあんなんだけど」
　こしあん。ゆーても品によるけどな。大福とか餅系に合わせるならつぶあんの方が良いと思う。この世界じゃ米が普及してないから餅も無いけど。
「そっかぁ、レティシアはつぶあん派らしいんだよね――他の皆はどっち派になるかなぁ」
　元いた世界でも、『豆を甘く煮て食う』っていうのがイメージ出来ない外国の人とかは結構いたみたいだからなぁ、そういう人達には豆の食感が残るつぶあんは受けが良くないらしいぞ？
　それならこしあん派が多数だ、と笑うリアに、食い物の嗜好に関する争いは不毛な上にガチ論争になるからやめておきんさい、と軽く注意しておく。
　以前にも言った気がするが、唐揚げにレモン、きのこたけのこ戦争、焼き鳥シェアの串外し等、人によっては些細だったり重要だったり判定がそれぞれ違うからね。きのこ派は許すがアル●オートに日和った奴は吊るせ（たけのこ穏健派感
　まーこんな感じで、開拓したといっても俺のジャンルなんて専ら飯関連と糞の役にも立たない変な魔法具とかそんなんばっかりなんだが……馬鹿話として話題に上げるには丁度良い。
　リアとふらふら歩きながらこの店はこんなのが売ってた、この辺りに出る露店で面白

グッズをみつけた、とお喋りしながら、街の中央区画にある富裕層向けの店が並ぶエリアへと足を踏み入れた。

んで、少し歩けば目的のお店に到着だ。

白い石造りの上品な建物は、一見するだけでちょっとお高めな感じがする雰囲気を感じ取れる。

「ここがそうかぁ……前に見た振袖とかもこのお店の品なのかな？」

シックなデザインの看板を見上げて小首を傾げる妹（おとうと）分にかもなー、と返して二人並んで店のドアを押し開けた。

店の入り口には用心棒を兼任していると思われる、武装した店員さんが扉脇に控えていて、落ち着いた様子で「いらっしゃいませ」と声を掛けてくる。

うーむ、やはり高級店だよな。これ、前はシアに連れられて入ったから問題無かったけど、一人で来たら入口で止められそうや。

この手の店は商品を購入した客の事はしっかり把握してる場合が多いので、既に『お客様』になった今なら大丈夫だろうけど。

リアが興味深そうに店内を見回しているが……一見さんと言ってもこの街での聖職者といえば聖殿勤務のエリートみたいな人達が多いので、冷やかしと判断される心配は無い。

ましてや変装しているとはいえ聖女様やぞ。魔力や聖気を抑え込んでいても、ある程度魔法に達者な奴が見ればただの美少女でないのは何となく察せられる。

アリアさんや、一階はこの世界由来のスタンダードなデザインのがメインだから二階に上がろう。俺が買った簪とかも売り場は二階だし。

「あ、うん。そうだね。凄い品質なのは分かるけど、日本由来の物とかは一階には無いみたいだし」

そうは言っても展示されてる商品にはリアが着たら超似合いそうなドレスとかもあるんだが……まぁ、当人の興味が薄いからどうしようもない。個人的には着てる処を見てみたいとか思ったりするけど。

これに関してはシアもそうだったが、やっぱりヒラヒラのドレスとかは着るのに抵抗があるのか、各国の催し物とかに招かれたときでも一貫して聖女の僧服で通してるからな。

背とか胸元がエグいくらいに開いてるデザインのドレス用意してきて僧服はダメとかほざいてきたアホ貴族もいたが……目付きが露骨だったんでその場で鎧ちゃんフル起動からのＯＨＡＮＡＳＨＩしてからはそういった連中も殆ど出なくなった。

まぁ、昔の話ってやつだ。

二階に上がると、展示されている商品はガラっと変わる。

日本の和装に関係するものもそうだが、もといた世界の大陸風のデザインのものもちらほら見える。この辺はお師匠の服装やお屋敷なんかもそうだったし、ひょっとしたらこの世界の別大陸に近い文化形態の国とかがあるのかもしれんね。浪漫溢れる話だ。

「おぉ〜、凄い。あの奥のやつ、前にボクが見た事ある振袖だ。色がちょっと違うけど」

感嘆の声を洩らしながら首を巡らせるリアを眺めていると、凄い近く……それこそ耳元と言っても良い距離で声を掛けられた。

「いらっしゃいませお客様――また御来店して頂けたようで何よりです」

うぉっ、びっくりした！　全く気配を感じなかった!?

衣料店の従業員とは思えない程の見事な気殺で俺の背後をとったのは、以前来た時に簪の一件でお世話になった店員さんだった。

ピシッとしたパンツスーツっぽいデザインの制服を着こなした美人で、エルフか魔族の血でも入ってるのか、耳がちょっと尖っている。

「いやぁ、以前のお連れ様も凄まじい美少女でしたが今回のお嬢さんもまた素晴らしい。正直爆ぜろとか思わなくもないですが超一級の素材を当店に導いて下さる事を考えると、感謝の気持ちが上回りますね、ウフフフ」

テンション高い上にこれ以上なくぶっちゃけてきた。あと客相手に凄い事言わなかったかこのお姉さん。

締まりの無い顔でリアを凝視していた店員さんだが、俺の物言いたげな視線に気付いたのか、口元に垂れた涎を拭う動作をするとキリッとした表情を作った。

「今回も装飾品の類を御入用ですか？　それなら私が「店長ぉー。発注してた糸の新素材届いたんですけどー」……今ちょっと同率一位で最推しになりそうなお客様が来たから後で！　数だけチェックして縫製室にまとめておいてね！」

店員さんじゃなくて店長かい。しかもなんか言動が転生者っぽいぞこの人。

前に来た時もシアを見て大分テンション高かったが……今回は輪を掛けて酷い。前はアレでも猫被ってたんやなぁ。

少し先の小物が並んだショーケースを見ていたリアだったが、俺が着いてきてない事に気が付いたのか、振り返って小走りに戻って来る。

見た目は普通に美人な店長が俺の横にぴったりと張り付いているのを見て、何故か少しムッとした顔を見せるが……その当人がリアのそんな表情を見て「うひょぉおぉっ、これは良い！　推せるっ」とかボリュームを絞って叫ぶという器用な真似をしてみせたのを見て、毒気を抜かれた様に目をぱちくりさせた。

「えぇと……店員さん、かな？」

「初めましてお客様。ようこそ当店へ。私は立場上、この店の経営者に当たる者でして、どうか気軽に店長さんとお呼び下さい。是非に、今みたいに小首を傾げる感じで！」

アンタ絶対転生者やろ。

律儀にリクエスト通りの動作で店長さん呼びするリアを見て、興奮してイナバウアーみたいな体勢で身を仰け反らせる残念美人に思わずツッコミを入れる。

櫛やら簪やらの知識を持っていたのも、そもそもあっちの世界の服飾を再現出来てるのも納得だよ。元居た世界でも同系統の職業に就いてた人がこっちで店開いたパターンやコレ。

「……ん”ん”っ、失礼しました。以前、こちらのお客様が贈り物を購入する際に、少しばかりお手伝いをさせて頂いた事がございまして……よろしければ、今回もっ、こちらのお嬢様に相応しい品をご紹介させて頂ければとっ！」

あ、今回は大丈夫です。もう買う品は決めてあるんで。

「(・・ω・、)」

即答したら鼻息荒くアゲアゲだった店長が、茹でて水気を絞った菜っ葉みたいになった。

その場で萎れたこの店の経営者を放置して、俺はリアを連れて目的の品が展示されている棚へと移動する。

「……店長さん凄いがっかりしてたけど、いいのかな？」

ええやろ。悪意とかは微塵も感じないし、個人的には嫌いじゃないけど、高級店の接

客としては普通に頭おかしいぞアレ。

「うわ、辛辣だぁ……あれ？　なんか女の人の声で『鏡ィ！』って聞こえた様な……？」

何処かで聞いた声だなぁ、なんて言いながらキョロキョロと辺りを見回して不思議そうに謎の声の主を探すリアだが……俺には何も聞こえなかったぞ？　何か変な電波拾ったのかとにいちゃん心配になっちゃう。

まぁ、それはさておき、目的の品が在庫切れになったりはしてないのを確認すると、萎れた店長とは別の店員さんを呼んでショーケースの鍵を開けて貰った。

一緒に来た以上、リアの意見が最優先ではあるが……これが俺のチョイスした妹（おとうと）分への贈り物だ。

どうでしょうアリアさん、折角店に来てるんだから、これ以外に良さげな物があるか探してみるのも手だとは思うが。

店員さんにリアに渡してくれる様に頼んだら、笑いながら首を横に振って此方に差し出してきたので、俺から再度、リアに手渡す。

「……わぁ」

受け取った品をしげしげと見回した聖女様は、色白の頬を薔薇色に染めて少しだけ興奮した様に色付いた吐息を洩らした。

おぉ、リアクションからして気に入ってもらえたっぽいな。一発ＯＫだったら正直嬉

しいわ。

保護布に包まれたそれは、シアに贈った物とデザイン自体はほぼ同じ――けれど、リアの銀髪に映える様、本体は細工をあしらった金で出来ている簪だ。

先端に付いた飾り玉は二人の瞳の色と同じ空色――対になる様な品、という点も含めて、ぶっちゃけ俺的にはコレ以上にピタリとハマる感じの物は見当たらなかった。

――で、どうでしょう。取り敢えず本決まり迄キープしておく感じでしょうか？

「これで良いよ――うぅん、これが良い。にいちゃんが選んでくれたコレじゃなきゃ、ヤだ」

胸元に抱きしめるようにして簪を布ごと抱えるリアは、嬉しそうに微笑む。

そっか。なら、お前さんに贈る品はそいつにしようか。

なんか背後で「あぁぁぁぁぁもぉぉ推しがてぇてぇぇぇえ」とか言う唸り声と共に、萎びた店長が水を与えられたサボテンみたいに復活してダンシングフラワーみたいな動きをしているが、それは努めて無視した。

二人で一階に降りて会計場所に向かうと、ケースの鍵を開けてくれた店員さんがそのまま付いてきて支払いを受け取る。

金貨で一括払いした俺に、お釣りを渡しながら申し訳なさそうに頭を下げて来た。

「ウチの店長が申し訳ありません……普段は副店長が目を光らせているのでもう少し大

人しいのですが、今日は所用で出ていまして」
あー……成程、この間はその副店長さんとやらが居た御蔭で今みたいな変人ムーヴは自重してたのね。
いやまぁ、見てて面白いのは確かだから、俺としてはそう悪い気はしない。リアの方はどうか分からんが。
「ボクも別に嫌じゃ無いよ？　ほんのちょっとだけど、店長さんってにぃちゃんと似てる感じがするし」
おい待て、それは流石に聞き咎めるぞアリア君！　俺はあそこまで愉快にぶっ飛んだ言動してないでしょ！
じゃれ合いを始めた俺達を見て、店員さんが微笑ましい物を見る視線を向けているのに気付き、咳ばらいを一つ。
ウォッホン！　――取り敢えず、今購入した簪は後で受け取るので取っておいて下さい。これから二人で店をじっくり見て回るので。
「え、そうなの？　にぃちゃんも何か欲しいのあったりするんだ？」
かしこまりました、と頭を下げる店員さんだが、対して隣の妹（おとうと）分はきょとんとした顔で俺を見上げて来た。
いや、折角来たんだし、もうちょっと品揃えを確認してもええやろ。

というか、お前さんに贈る品は買ったが今回の件のお詫びの品はまた別だから。なんか良いの見つけたら遠慮せずに言い給へよ。

「うーん……ボクはさっきのだけで十分なんだけどなぁ」

もう満足、といった表情で、いまいち芳しくない反応を示すリアではあるが……基本、控え目な我が妹（おとうと）分の事だ、遠慮してる面も多分にあると容易に察せられるので、頭に手を置いてそのサラッサラの銀糸の髪を掻き混ぜてやる。

いーからいーから。こんな時くらい、にいちゃんにドーンとおねだりしてみなさい。あんまり遠慮する様ならアリア君に似合いそうなドレスとか勝手に買っちゃうぞぉ。

「ど、ドレスとかボクには似合わないって――分かった、取り敢えずお店を見てみようよ」

やはり抵抗があるのか、照れた様子でドレスを拒んだリアが頭に載せられた俺の手をとった処で、背後から声が掛けられる。

「……どれす、というのは絵本に出て来るお姫（ひい）様が着ている服の事ですか？　銀の愛し子様ならとても似合いそうです」

「いや、ボクはお姫様じゃないから……で、でもにいちゃんが見たいっていうなら……うえっ？」

反射的に返答したリアと、その声を聞いた俺が揃って驚愕して振り返る。

それも当然だ。その声は、この土地、この場所で聞く筈も無いと思ってた声だった。
視線の先に居たのは、見た目リアより三、四歳ほど年下の少女だ。
長旅用の丈夫な旅人の服に、荷物で膨らんだ肩掛け鞄。
以前に見たときはポニーテールだったピンクブロンドは、旅装に併せたのか、動きやすい様に結い上げられてシニヨンに変わっている。
綺麗に纏められた髪から覗く耳はこの店の店長のソレよりはっきりと大きく尖っていて、身に宿す聖気も合わさって彼女が純粋なエルフである事を示していた。
「お久しぶりです、聖者様、愛し子様。リリィ＝エルダ、御傍に控えるお役目を果たす為にやって参りました」
以前と比べて格段に感情豊かになったそのちびっ子エルフは、表情こそ動かないものの、心なしか自慢気にフンス、と鼻息を洩らして胸を張ったのだった。

銀麗と白百合と時々駄犬（後編）

胸を張って無表情でドヤってみせたリリィに、呆気に取られていた俺達は我に返った。

「――いや、ちょっと待って!? なんで聖都にいるのリリィ！ シグジリアさんや《虎嵐》さんは!?」

保護者の姿が見えない事に、驚きと心配が半々の声色でエルフの少女を問い詰めるリア。

「義父様（とと）と義母様（かか）はお家です。リリィは一人で聖者様のもとにやって来れました」

えっへん。なんて言う擬音が聞こえてきそうな、ちょっと自慢気な感じで再度胸を反らすリリィを見て、俺とリアは思わず顔を見合わせる。

色々と疑問はあるが……先ずシグジリア達がこの娘を一人で遠出――ちょっとした旅と言って良い距離を移動させるとか絶対無いやろ。一体どういうことだってばよ？

というか、そもそもなんでこの店に俺達がいるって分かったんや。あと一応、この

店って高級店扱いだからエルフといえど小さな子供一人を入店させないと思うんだが。

「リリィも始めは聖者様のお家に向かおうと思っていましたが、この建物から聖者様と愛し子様の魔力を感じたので。扉を開けたら、あそこの方が快く招き入れてくれました」

普段は押さえてるリアの魔力をきっちり感知したのか。魔法全般に秀でているエルフとはいえ、子供であることを考慮すれば普通に凄くね？

ちなみに俺の魔力は大した量でもないのでわざわざ抑える必要もない（白目

で、店の出入りの方に関してだが。

子供らしい遠慮の無さでビシっと指さした先には、すんごいイイ笑顔の店長がいた。

ウチの聖女とリリィが並んでいる姿を見て、満ち足りて成仏する浮幽霊みたいな笑顔でサムズアップしている。

うぉーい、防犯大丈夫なのかこの店。美少女はどんな身形でも無条件許可とか入店基準がガバガバじゃねーか。

以前来たときには気付かなかったのか、それとも今日は副店長とやらが不在ないせいなのか。

転生者らしき残念美人が経営する元の世界の服飾を扱うこの店は、中々に色物臭が強い場所だったみたいだ。

色物感だしてる原因は九割九分九厘店長だが。
「……そうでした、義母様からお手紙を預かっています」
思い出した様に鞄を開けてごそごそと中を漁ると、リリィは一通の手紙を差し出してくる。
その場で開けて、覗き込んでくる隣のリアと共に紙面に眼を通す。
「うわ……量、多いね」
うむ、多いな。
結構な枚数の便箋が入ってるが、その全てにびっしりと丁寧な文字が綴られている。
売り場の真ん中で気軽に読める量でもないので、取り敢えず店の端っこにある長椅子まで移動した。
真ん中に俺、右にリア、左にリリィ、その隣に何故か店長が座る。
――ってなんでやねん、シレっと付いてくるなよ店長。
「あ、お客様のプライベートに踏み込むつもりは毛頭ありませんのでご安心を。ただ、私はエルフの美少女と最推しの片割れが並んでいる光景からしか摂取出来ない栄養を補充しているだけですので、お気になさらず」
笑顔で言い切った。良い空気吸ってんなこの人。
「今日だけで滅多に見ない素晴らしい美少女が二名も私の店にやってきてくれたのは紛

れも無い慶事なんですが、以前に来店して最推しとなったお嬢さんといい、連れて来る男性が共通してるのだけはどうかと思いますけどね。何股だよもげろ！」

すげぇ笑顔で言い切った！　マジで良い空気吸ってんなこの人!?

落ち着いた雰囲気の店内だが、肝心の経営者が静かな空気をぶち壊すハイテンションで欲望その他諸々に正直すぎる発言を繰り返していると、さっきお会計してくれた店員さんが血相変えてすっ飛んできた。

「何してるんですか店長！　お客様に迷惑をかけちゃダメじゃないですか！　申し訳ありません皆様、直ぐに引き取りますので！」

「あっ、ちょっ、待って、折角新たな推しが出来たんだからあと一時間……いや二時間だけ！」

「お客様がお帰りになるまで付きまとうつもりですか!?　良いから縫製室に行きますよ！　副店長にも後で言いつけますからね！」

あ”～、待ってぇえ、という声が遠ざかり、プリプリと怒った店員さんに襟首掴んで引き摺られた店長が、店の奥へと消えていく。

よし！　取り敢えず手紙読もうか。

「やっぱりちょっと似てると思うけどなぁ」

「……?　聖者様は男の人で、さっきの方は女の人ですが……?」

「いや、見た目じゃなくてね？　うーん……もう少し外界で過ごしたらリリィも分かる様になると思うよ？」

ええい、その評価は不本意だというとろーがアリア君。

俺を挟んでやり取りする二人であるが、なるべく気にしないことにして再度便箋へと視線を落とした。

手紙は丁寧な挨拶から始まり、リリィを引き取ってからの近況が……いや細かいな!?物凄い詳細に書いてあるぞこれ！

「どれどれ……わ、本当だ。これひょっとして、入ってた便箋の殆どがリリィとお腹の赤ちゃんについて書かれてない？」

再び横から手紙を覗いたリアの声も、流石に少しばかり苦笑が混じっている。

そらそうやろ。転移・転生者同士ってことで日本語で書かれた文だが、娘（リリィ）の可愛さについて気合をいれた文章が延々続いていた。原稿用紙にしたら何枚分やねんコレ。

ざっと見た感じ、七割くらいはそんな感じだ。リリィの情緒面での成長や妊娠中の赤ん坊について、事細かに喜びや感動の感想と共に記されている。

ちなみに二割くらいは《虎嵐》に関する惚気だ。シグジリアには悪いが、正直目がクッソ滑る（白目

残り一割――リリィが聖都にやってきた経緯は、最後の一枚の後半にやっとこ書かれ

ていた。
要は、実際には殆ど建前だけの形になった『聖者の従者』というお役目を少しも果たしていない事を、当人が気にした結果らしい。
シグジリアの体調も考えるとこの時期に旅に同行するのは難しく、身重の嫁さんを一人に出来る筈もなく《虎嵐》も動けない。
一年くらいは外界の常識等を学んで、それからでも良いんじゃないかと話し合ったが……その言葉自体には頷いてくれたものの、やはり気に病んだままのリリィに我慢を強いるのは心苦しく、泣く泣く聖都への旅に出す事になったそうだ。
やはり本心では行かせたくなかったのか、心配する様子が文面からでもありありと伝わってくる。まぁ、以前に見た親馬鹿ムーブから判断すれば当然だわな。
まるで初めてのお使いだが、リリィとしては初めての一人旅、気合も十分で聖都へやってきたみたいだ。
――とはいえ、それはあくまでリリィの認識だ。実際には、魔族領の知人がこっそり護衛に付いていたらしい。
うん、マジで初めてのお使いだこれ。
日本語で書かれていて良かったな……今もリアの反対側から真似をするようにリリィも文面を覗いているし。

「……知らない言葉です、義母様がいたという世界の文字でしょうか？」

見た事の無い文字列を不思議そうに眺めて首を傾げている。

うむ。一人で来れたってことで調子に乗る様な子でも無いし、頑張って一人旅してきたっていう思い出に水を差す必要も無いやろ。

隣のリアに視線をやると心得てるとばかりに頷き、刹那の間だけ探知・感知の魔法を発動させ、すぐに展開した魔力ごと消してみせる。

店外に魔力で出来た知覚の網を一瞬だけ広げた妹分は、俺の耳元に顔を寄せてこしょこしょと耳打ちしてきた。

（お店の外で結構な魔力を持った人が待機してる、多分その人が護衛だよ――ボクの探知に反応して一瞬で気配を殺してきたから、相当な腕利きだと思う）

ええ……聖女の魔法の展開速度に反応するのかよ。

どう考えても子供のお使いに張り付く様な人材じゃ無い件。人選がガチ過ぎるだろあの夫婦……。

具体的な日数はまだ未定だが、長くても十日から半月もあればリリィも最低限、従者として働いたと思える経験が出来るだろう。

そうなる様になるべく配慮するつもりだし、やっとこ真っ当な家族が出来た少女を長々とその家族と引き離すつもりも無い。

となると、帰りの護衛も行うというその知人とやらと面通しはしておきたい処だ。
俺は長椅子から立ち上がると、リリィへと向き直った。
リリィ隊員、従者としてやってきた君に早速お仕事を与える！
「――！　分かりました、リリィは頑張ってお仕事します」
尤もらしく頷いてエルフのちびっ子の肩へと手を置いてやると、長旅の疲れもなんのその、気合も十分にふんす、と唇をへの字口にして両拳を胸元で握る。
うん、良いお返事。して、俺はこれから店の外に用事があるので、少しだけこの場を離れなければならない。
――なので、俺が戻って来るまでの間、この店で自分とリアに似合いそうな服を探してみる事！　服選びで困った事があるなら、お店の人達に助言を求めるのも良いぞ！
「お任せください、お店の人の助力を仰ぎつつ、リリィは愛し子様に合うどれすを探してみせます」
「え、ボクもなの？　そこはリリィの服だけで良い気が……っていうかドレスだけに絞って来るのは止めようリリィ!?」
えいえいおー、ってなもんで拳を天に突き上げる俺に合わせ、意外とノリ良く「おー、です」と同じく拳を握って上に突き出すちびっ子に、リアが困った顔でツッコミを入れている。

うむ。そんな感じで、一旦任せたぞ妹(おとうと)分よ。

ちょっとまって、せめてリリィの言うドレス云々は訂正してから、なんて言って此方を引き留めるリアに、健闘を祈る意味も込めてサムズアップで応じると、俺は踵を返して店の出入り口へと向かった。

すると、「推しのドレス選びと聞いて！」と叫びながら奥の従業員エリアに連行された筈の店長が華麗なダッシュフォームで戻って来る。

……まぁ、店の経営者なだけあって、以前に簪を選んだときもアドバイスは的確だったし、ドレスじゃないにしろ良い感じのものを紹介してくれるやろ。

興奮気味にリアに詰め寄っているらしき残念美人の声と、困惑しながらそれに応じている我らが聖女様の声を背に聞きながら、扉を押し開ける。

店の外に出ると軽く左右を見回し、隣の店との間にある狭い路地を曲がった。

角を曲がると直ぐの場所で壁に背を預け、長槍を抱えていた痩身の魔族の男とばっちり眼が合う。

「……あぁ？　なんであのガキんちょを置いてこっちに来てんだよ猟犬」

こっちの世界の人類種としては非常に珍しい、俺達日本の転移者と同じ黒髪を長く伸ばし、その隙間から覗く目付きは非常に悪い。

どこか螳螂染みた物騒な顔つきに肉食獣の獰猛さを同居させたその人物は、この場で

再会するとは思ってもみなかった顔見知りだった。
マジかよ。リリィの護衛ってアンタだったのか《狂槍》。
魔族領、最高幹部《災禍の席》。その第五席に位置する槍使い。
基本喧嘩っ早い集団である連中の中でも、一、二を争う程に好戦的な半戦闘狂（バトルジャンキー）な困った男だ。
いや、正直滅茶苦茶驚いた。国の重鎮や何某かの重要人物って訳でもない、一介のエルフの少女の小旅行みたいな旅路に《災禍》の一人が護衛に付くというだけでも大概ぶっ飛んだ話だが……。
その中でも一番『子供の護衛』が似合いそうに無い奴が、こっそりリリィの護衛を務めているってのは予想外にも程があった。他の《災禍》だったらシグジリア達の全力すぎる護衛のチョイスに呆れはしただろうが、此処まで衝撃は受けなかっただろう。
「久しぶりに会ったと思ったら発言の端から端まで失礼な野郎だなコラ。護衛なんざやってなけりゃこの場で肩に穴開けてやってる処だぞ犬っコロが」
発達した犬歯を剥きだして不機嫌丸出しで威嚇してくる《狂槍》。相変わらずめっちゃ口が悪くてワロタ。
挨拶代わりみたいなノリで殺気やら戦意やらを叩きつけて来るので、そんな部分も血の気の多い戦闘狂扱いされる一因になっているのだろうが……話してみると意外と思

慮深い面もあったりするのよ、この人。

高濃度の殺気混じりの気当たりによって人体の生理的な反応レベルで肌が粟立つが、そこにさえ目を瞑れば寧ろ普通の会話が成り立つんだよね。口はすげー悪いけど。

「チッ……俺を相手に素でその反応かよ、相変わらず螺子が外れてやがるな」

いうてアンタも大概失礼だと思うんですけど（正論

まぁ、そりゃえぇねん。でも、マジで予想外だったわ。《不死身》とか《赤剣》あたりなら普通にこんな仕事もやりそうだけど、おたくも護衛なんてするんだね。

基本、自身の威嚇という名のコミュニケーションが通じない相手には不機嫌になりがちなめんどくせー男だが、さっきも言った通り会話自体は普通に応じてくれる。

なので、何で似合いもしない護衛の仕事をやってるのか直球で聞いてみた。

槍を担いだままチンピラみたいにう○こ座りした《狂槍》は、鬱陶しそうに眉を顰めながら口をへの字にして答える。

「……俺の部下が、嫁が身重でテメェも動きが取れないってのに、娘を遠出させなきゃならんと辛気臭い顔で悩んでたんでな……ただの暇潰しがてらだ」

あー、《虎嵐》ってあんたの部下だったんか。なるほど、同じ愛妻家としては黙って見ていられなかったって事ね。

「殺すぞクソ犬」

愛妻家、の辺りで割と本気の殺気が飛んできた。ははっ、このツンデレさんめ（煽り今更取り繕うのも誤魔化すのも無理やろ、そもそも《災禍》全員に嫁さんと子供大事にしてるのバレバレやんけ。

「部外者のテメェにべらべらと喋った馬鹿は何処のどいつだってんだよ……！」

え、《魔王》だけど？

「あのアホウドリがぁっ！　帰ったら串刺しにしてやらぁ糞が!!」

声を荒げた《狂槍》が苛立ち紛れに槍の石突を地に叩きつける。石畳が砕けて衝撃で壁に罅が走った。

おーい、おちょくった俺が言うのもなんだが、道路と建造物破壊はやめーや。魔族領と違ってそうそう他の国は建物が消し飛んだり更地に変わったりしないんだぞ。

大股開きで座った体勢のまま、激発を抑え込む様に顔を片手で覆って凄い歯軋り音を立てていた《狂槍》だったが、やがて無理矢理にクールダウンしたのか大きく息を吐きだした。

そのまますっくと立ちあがると、彼にしては珍しく疲れの滲んだ声色で投げやりに呟く。

「……あのガキがお前と合流出来たなら、帰りの時間まで俺はフリーだ。考えてみればこれ以上此処にいる理由もねぇ」

ふむ、リリィの滞在が終わるまであんたも聖都に居るんだろ？　俺から言えば聖殿で寝泊まりも出来ると思うけど？

「いらん。ダチの弟子が宿屋を経営してるからな、ついでに顔を見に行く」

何日かしたら聖殿に顔を出すから、そんときに日程を教えろ、と言い捨てて《狂槍》はどこか気怠そうな足取りで振り返らずに去っていった。

仕事に関しては見た目のイメージよりずっと真面目な奴だし、フリーといっても帰りの護衛も完遂するまでは自重した行動を取るだろう。

大聖殿に招いても、ガンテスやミラ婆ちゃんがいるのに手合わせを我慢せにゃいかん状況は辛いだろうし。

そもそもこっそり護衛してる以上、リリィと顔を会わせる確率が跳ね上がる聖殿は避けるに決まってるやん……迂闊な質問だったなこれ。

とりあえず、ちびっこの滞在に関して大まかな予定を立てたら、聖殿の門の守衛さんに言伝を頼んでおこう。

内心でそんな事を考えながら、用も済んだので店の中にとって返すことにしたのだった。

にいちゃんが一旦店の外に出てしまうと、『お仕事』を頼まれて気合十分なリリィとそれ以上に気合の入った店長さんが謎の勢いで意気投合してしまった。
「リリィは外界の装いに関しては知識がありません。なので、愛し子様のどれすに関して助言を頂きたいです」
「お任せ下さい小さなお客様ぁ！　私の持ちうる知識を総動員してこちらのお嬢様に似合う最高の一品を示してご覧にいれましょう！」
どうしよう、リリィだけなら兎も角、店長さんの勢いはボクでは止められそうに無いよ。
あーもー……なんでこんな事に……にいちゃんはボクを放って外で待機してるリリィの護衛の人と話をしに行っちゃったし……。
「淡色でも鮮烈な色合でも似合いそうですが、此処はやはりご本人の儚げで清楚な佇まいに合わせたドレスが良いですね！　こちらに見本が展示してあるのでどうぞ！」
儚げで清楚って何さ。何処のお嬢様の事を言ってるのか分からないよ。
店長さんに手を引かれ、リリィには背を押されて、逃げる事も難しい状態でドナドナ

されながらも抵抗を試みた。

「ぼ、ボクは後でいいから、リリィの服を先に選ばない？　ほら、こっちに滞在するなら替えの服もあるに越した事は無いし」

「聖者様が自分の分も選べと仰られたとは言え、先に品を選ぶ様では従者としてだめだめです。リリィは後で良いの先ずは愛し子様のどれすを選びましょう」

「――勿論、エルフのお嬢様の方も後でたっっっぷりと愛で――ゲッフン、ゲフン。お似合いの服を探す手伝いをさせて頂きますとも！　なんか愛し子とか聖者とかハーフとはいえエルフ的に聞き逃せない単語も聞こえる気もしますがそんなの関係ねぇ！　推しは全てに優先する！」

リリィも意外に強情というか押しが強いことが判明したけど、それ以上に店長さんが強すぎる……。

勘弁してよ、このままだと本当にあちこちの国で招待される度にやり過ごしてきたドレスをこの場で着る羽目になる……！

何が何でも嫌って訳じゃないんだよ？　けど、やっぱり抵抗があるというかなんというか……。

以前に他国で招待側が用意したドレスも、大抵は何処のお姫様だよってくらいに凄いのばっかりだったし、いきなりハードルが高すぎると思うんだ。

うー……やっぱり遠慮したい。早く戻って来てよ。
内心でにいちゃんに助けを求めていると、さっき出て行ったときみたいに笑顔でサムズアップしているイメージが脳裏を過った。
――いいかい、アリア君。ハードルは高ければ高い程……下を潜りやすい！
……だから何!?　上手い事言った感出してるけどこの場で役に立たないよね!?
想像の中ですらにいちゃんはにいちゃんな事に、ちょっとだけ頭が痛くなった。
ボクが渋い顔をしたままなので、流石に強引なのは良くないと思ったのか。
店長さんが手を引くのを止めると、振り向いて考える様な仕草を見せる。
「うぅむ、折角の極上の美少女とはいえ、お客様に無理強いはすべきでは無い……ですが……」
言葉を切ると、何か思いついた様子で表情を明るくし、ツツーっとボクの傍に寄って来てこそっと耳打ちしてきた。
「当店は『あちら』に寄せた経営スタイルとして、試着が可能となっているのですが……幾つか試してお客様が一番良いと思ったものを、お連れの男性に見て頂くのはどうでしょう?　どういうチョイスになるにせよ、そこらの男性ならイチコロだというのは私が保証します。お連れ様が何股もしてるすけこま……ゲェッフン！　……女性慣れした方でも、ドレスで着飾ったお客様を見てクラっとくるかもしれません」

我ながら現金な事だと思う。
それを言われた瞬間、思わず間近の店長さんを見上げたボクの顔を見て、彼女は「ふぐぅ！　眩い！」と変な声を上げて仰け反った。
自分でも分かりやすい反応をしてしまった自覚はあったので、頬が少し熱くなる。
「……？　愛し子様、御耳が赤いです」
「な、なんでもないよ？　うん、気のせい気のせい」
後ろから聞こえて来たリリィの声に、上擦りかけた声でなんともないと強調して。
店長さんの言葉を噛みしめて、反芻して――悩んだ末に、ボクは気恥ずかしさで目を逸らしながら、小声で彼女に告げる。
「……それじゃ、あんまり派手過ぎない感じので、お願いできますか？」
「フヒッ、お任せください」
もの凄いだらしない感じに店長さんの顔がニヤけたけど、それも一瞬。
あっと言う間にキリッとした表情になると、再びボク達を先導して歩き出す。
向こうの方でさっきの店員さんがハラハラした様子でこっちのやり取りを見ていたけど、ボクが同意を示したのを見て胸を撫で下ろしていた。
本当に嫌がっていたらさっきみたいに割って入ってくれるつもりだったのかな？
お手数御掛けします。

再び二階に上がると、店長さんが大きめのショーウインドウの前で止まる。
っていうか、今更だけど凄い透明度の板ガラスだよね。日本のお店とかにあるのと遜色ない――多分、硝子職人のドワーフに頼んだ高級品だ。強度も相当ありそう。
でも、当然だけど今見るべきはガラスの方じゃない。
リリィと並んで見上げた視線の先――ガラスの奥に飾られた品は、《半龍姫》様が着ていた旗袍（チーパオ）に近いデザインの服だった。
……いや、もうこれそのまんまチャイナドレスだよ！　まさかドレスと言われてこのチョイスが来るとは予想外……！
「わぁ……義父（とと）様が買ってきてくれた絵本に描かれたどれすと全然ちがいます……形はすっきりしていますが、縫い込まれた刺繍が綺麗ですね」
「展示しているのは王道の赤ですが、お客様ならば白か黒地に金糸の刺繍を入れたものが良いかと――御髪（おぐし）が淡い色や薄い色ならば白が良いと思いますが」
リリィの感嘆の声に自信ありげに頷くと、店長さんはちらりとボクを……正確にはボクの魔法で染色している栗色の髪を見る。
正確な正体まではバレて無いと思うけど、髪の色が本来のものとは違う、魔法に依るものだとは気付いてるみたいだ。
こういったお店にはお忍びで身分のある人が来る場合も多いし、隠してある部分に触

れるのは無粋扱いされて嫌がられる場合も多いんだけど……そういった店としての暗黙の規則よりも、ボクに一番合う品を選ぶ、という宣言を彼女は優先したみたいだった。

あぁ、そっか。

経営者ではあるんだろうけど、その前にこの人は職人なんだろう。

推しだ、美少女だとテンション高く喜んでいるのに嘘は無いんだろうけど、その対象には自分の渾身の作品を、一番似合う物を手に取って欲しい。後悔はさせない。

そんな自負と――自身の仕事への矜持が、その瞳からは垣間見えた。

うん。衣類全般に関しては姉(あに)であるレティシア共々、大して知識も無いし興味も薄いボクが、この人の作った服に袖を通して良いものか。

正直、そんな気後れを感じないでもないけど。

「……白にします、試着、出来るんですよね？」

「そちらの突き当りの角に並んだボックスが試着室です、では品をお持ちしますので！」

再びサムズアップすると、店長さんは意気揚々と従業員エリアの方へとスキップで消えていった。

「……リリィはこういったお店に入るのは初めてですが、服の大きさがぴったりのものがちゃんと用意されているものなのですか？」

「店舗によるとは思うけど、普通は完全な注文制(オーダーメイド)か、量販店でも幾つか大まかなサイズに

分けて在庫を用意して、購入したら手直しする感じじゃないかな――というか、コレ、ただの服じゃないっぽいよ？」

待っている間、リリィと一緒に展示されている真紅のチャイナドレスをしげしげと覗き込む。

ほら、ここ。刺繍の中に薄っすらとだけど魔力導線らしきものが描かれてる。

凄いな、普通の魔装みたいに彫り込むんじゃなくて、縫製の段階で針と糸を使って導線を再現する形で縫い込んであるよ。

間違いない、これ、帝国の首都の工房でしか作れない筈の布製の魔装だ。

ボクやレティシアの着ている聖女の僧服も帝国に発注して用意されたものだし、《刃衆（エッジス）》の人達が着ている隊服もそうだった筈。

……そういえば、国営指定されたときに引退したっていう先代の工房長がハーフエルフだったって聞いた気が……まさかね？

ちょっと無作法だけど、硝子越しに魔力でチャイナドレスを精査してみる。

……衣類としての頑丈さ――言ってしまえば防御力なんかじゃなくて、重視してるのは柔軟性や伸縮性、かな？

ほんとに凄い。着てる人に併せてある程度は調整要らずでフィットするんじゃないかな、これ。

「外界の装いはすごいです……最長老様が世界の広さを見てきなさい、と仰った意味がわかりました」

「いや、これは上澄みの上澄みだと思うよ？　これと同等の衣類を販売してる店とか早々無いって」

にいちゃんに貰った装飾品も良い品だけど、衣服はその比じゃない。

こんなの買ったらにいちゃんの財布の中身が消し飛ぶんじゃないかと心配になるけど、ショーウィンドウの端っこに小さく示してある金額は、確かに良いお値段だけどあくまで普通の高級店レベルに収まってる。

……これ、教国の上――トイルさん辺りに報告した方がいいのかなぁ……技術料と値段の比率が合ってないのもそうだけど、放置してると下手すれば帝国からの技術漏洩云々でゴタゴタ起きない？

折角にいちゃんと買い物に来たのに、面倒事の種をボクの方が発見してしまった。此処はボクも解せぬ、って言っておいた方が良いんだろうか。

ドレスを見上げてうんうん唸ってるボクを、リリィが不思議そうに眺めて――そうこうしている内に店長さんが白い布地の服を抱えて戻って来た。

「お待たせしました！　さぁ、此方になっております、本式より簡略化して着替えやすさを優先してはいますが、よろしけばお着換えをてつだ――」

「あ、それは結構です。ありがとうございます、早速試着してみますね」
「（・・ω・、）」
　そんなー、なんて聞こえてきそうなしょんぼりした顔になった店長さんだったけど、肩を落として項垂れた処をリリィが背伸びして頭を撫でて、一瞬で復活する。
「義母様にこうして貰えるとリリィは元気になるのです。魔法のおまじないだって教わりました」
「天使っ……！　圧倒的天使っ……！　お客様の親御さん最高ですありがとうございます！」
　むふー、と再会のときにも見たドヤ顔っぽさを感じる無表情で胸を張る少女と、それを凄い勢いで拝んでる女性を眺めて苦笑して、試着室に向かう。
　個室に入ると変装用の普通の修道服を手早く脱いで、渡されたチャイナドレスを手に取って。
　白地に赤い縁取り、控え目にアクセントになってる金の刺繍が、素人目にも綺麗だな、と思う。
「ふむ……ここを、こうで、あ、こっちからか……」
　チャイナドレスの着方なんて知らないけど、簡略化した、と言っていた店長さんの言に偽りなし。

ちょっと時間は掛かったけど一人でも普通に着替える事が出来た。
「……あとは、髪かぁ……」
流石に悩むけど……どうしよう。
……良いかな、見せちゃっても。店長さんなら言いふらしたりしないだろうし。この店自体も高級店だ、お客のプライバシーは守るだろうしね。
思い切って髪に掛けた魔法を解除する。
視界の端に映る栗色が見慣れた銀色に変わったのを指先で摘まみ上げて確認していると、試着室の仕切りの向こうから店長さんの声が聞こえて来た。
「脱いだブーツのお隣に合わせた靴も置いておきますねー」
「あ、はーい」
返事をしながら仕切りから出て確認すると、ストラップシューズみたいなデザインの白い靴がボクのブーツの隣にちょこんと置いてある。
こっちも用意してくれたのかぁ、至れり尽くせりでなんだか申し訳ないなぁ。
そんな風に考えながら、多分このデザインだと素足だろうと判断して靴下を脱いで白い靴に足を通す。
あ、流石に靴はサイズ調整機能なしか。少し大きいや。
まぁ、試着するだけだし、歩き回る訳じゃ無いからいっか。

うーん、どうだろ、少しは似合ってるのかな？　なんだか緊張してきたぞ……。
試着室から出て自分の身体を見回していると、正面にいた店長さんの喉から「ヒュッ」っという音が聞こえて動作が停止した。
えぇ……その反応は予想外だよ。本当に似合ってる？　やっぱりどこか変じゃない？
不安で眉根を寄せていると、店長さんの隣にいたリリィがほんの少しだけど興奮した様子でボクにずいっと詰め寄って来た。
「すごいです、愛し子様。とても綺麗でリリィは感動しました。本来の御髪（おぐし）だと想像してたよりずっとすごいです」
表情こそそんなに動いて無いけど、万歳でもしそうな雰囲気で似合うと言ってくれるリリィをみて少しだけ安心する。
「――ハッ!?　尊（てえてぇ）いの過剰摂取で意識が飛んでいた!?　良くお似合いですお客様眼福どころじゃねぇ光景をありがとうございます！」
あ、再起動した。
動き出した店長さんにも褒めちぎられ、気恥ずかしさは残るもののボクも満更でもない気分になった。
「あ、ありがとう。でも、ちょっとスリットが深すぎないですか、コレ」

「そんなことは無いです！　元よりこの手のドレスは脚線美で魅せる為に着られる方も多いので！　戦いでもお洒落でも、武器は生かしてこそですよ！」

……そうなのかなぁ、それを加味しても、やっぱりちょっと大胆過ぎる気がするけど。

腿の付け根近くまで入った深い切れ込みを摘まみ上げ、今更ながらかなり際どいデザインじゃないかと恥ずかしくなってくる。

「オッフ、白いおみ足が……なにこれ私今日しぬの？」

「あはは、店長さん大袈裟」

少し頬が熱いけど、なんだかにぃちゃんみたいなリアクションの多い店長さんに少しだけ羞恥や緊張が解されて、笑って応えた。

――うむ、凄い眼福。だけど、あんまり裾を持ち上げないようにね。無防備過ぎてにいちゃん心配になっちゃう。

そんな、聞きなれた、けど此処にはまだいない筈の声が聞こえて、ボクはピシリと固まった。

錆びついたブリキみたいになった首を動かして、ギギギと真横に視線を向ける。

言う迄もなく、そこに居たのはにいちゃんだった。

何時の間にやらリリィが居なくなっていたみたいだけど、どうやら店に入って来たにいちゃんを一階から引っ張って来ていたみたいだ。
「如何ですか、聖者様。お店の人に手伝って貰って愛し子様用のこんな素敵な服が見つかりました」
――うむ、素晴らしいぞリリィ隊員。花丸をあげよう！
「やりました、花丸です」
フンス、と幾度目かになる自慢気な様子での鼻息を洩らして、リリィが胸を張る――なんだかさっきからちょっと狡い位に可愛い。
これは良いものだ！　なんて尤もらしく頷いて、にいちゃんも似合う似合うと言って笑っていた。
一方で、ボクは軽くパニックになっている。
店長さんの提案を受けて……にいちゃんに見てもらいたい、そう、思ったのは事実だけど。
思ったより唐突にその機会が訪れたのと、なにより、予想よりずっと露出の多いチャイナドレスなんてものを着てるときにそうなったことに、一瞬で思考がオーバーヒートする。
我ながら間も悪かった――この場に店長さんとリリィしかいないと思って、気軽にド

レスの裾を持ち上げて――何もこのタイミングで来なくても良いじゃないか……！

見られてる、見られた。いつかの『治療』のときみたいな状態じゃない、ちゃんと起きてるにいちゃんに。

顔と身体が、カァッと熱を持って赤く染まるのが分かった。

――うぉ!? ちょっ、顔の紅さがヤバいぞリア！ 体調がおかしいならはよ自分に回復魔法を掛けなさい！

慌てた様子で傍に近寄って来て、ボクの額に手を当てて熱を測る彼の顔が、目の、前に。

「う、ひゃぁぁぁぁっ!?」

――ブホォア!?

羞恥と、混乱と――歓びと。

ごちゃごちゃになった感情が完全に思考の処理能力を超過してしまったボクは、なんとも情けない悲鳴を上げながらにいちゃんの顔面にバチーン、と平手を叩きつけてしまったのだった。

――おーい、アリアさんやぁ、いい加減機嫌を直して下さい。
「……怒ってないし」
ぬぅ、取り付く島もない。どうしてこうなった。
店から出てた後、無言で先を歩くリアの背に呼びかけるが、反応は芳しくない。
リリィに引っ張られて見る事が出来たチャイナドレス姿は、とても可愛らしくて俺的には即行で購入確定しちゃう代物だったのだが……「い、いらないから！　もう行こう！」と何時になく強い口調で断言したリアに慌ててついていく形で、三人揃って店を出る事となった。
いや、バタバタしてお店の人には申し訳なかった。リリィにも結局小物らしき物を一点、彼女が帰りがけに選んだものを買っただけになったし。
でもあのチャイナドレスは良かったな……出来るならもう一回見てみたいです。リアの反応からして難しそうだけど。
「……愛し子様は怒っているのですか？　……リリィのせいでお怒りに触れる様な事になってしまったのでしょうか？」
「リリィに悪かった処なんて無いよ、どっちかというとボクの自業自得というか……う

ん」

――こんなんでリリィが悪いとか言い出したら、俺なんて正座して膝が砕けるまでセルフで膝上に重石を乗せなきゃいけなくなるんですけど。

肩に掛けた旅行鞄の肩紐をギュウっと握りしめて俯くリリィに、俺とリアから即座に否定の言葉が飛ぶ。

俺達の言を聞いて、少しだけ安堵した様子でちびっ子の表情から硬さが取れるが……それも直ぐに心配そうな色に染まった。

「では、御二人はケンカをしているのですか？　仲睦まじい聖者様と愛し子様の方が、リリィは好きです」

「……うぅっ、良心に刺さる……ご、ごめんねリリィ？　喧嘩って訳でも無いんだよ……ちょっと説明し辛いけど」

非常に心苦しそうに呻き声を洩らすリアであるが……喧嘩というか、ホントに怒ってる訳ではないのかコレ？

情けない話だが、発端はおそらく本人が恥ずかしいと思っているのにリリィや店長に押されて着替えたのであろう事を知らず、呑気に感想を述べた俺だ。

怒らせてしまった事の詫びも兼ねての今日の買い物だったというのに、更に別にやらかしてどうすんねん。我ながらアホ過ぎて泣けてくる。

間違っても険悪だったり、ギスギスした空気では無いのだが……なんとなくギクシャクした感じのまま歩みを進める俺達を、リリィは交互に見比べた。
そうして、暫し何かを考えるように腕を組んで……やがて妙案を閃いたかの如く、その変化の控え目な表情の瞳だけを輝かせた。
立ち止まると、いそいそと鞄の中を漁り――先程彼女が選んで購入した小物のケースを取り出す。
「それならこれが一番です。義母様がどんなときでも義父様と仲直り出来る魔法の道具だと言っていました」
自信満々、といった様子でケースから取り出したるは――なんぞこれ、口紅？
「はい。あのお店に義母様が使っているのと同じ物が置いてあったので。身に着ける衣のお店だと思いましたが、魔法の道具も売っていて驚きました」
「魔法のアイテム……では無いと思うんだけど……」
うん。リアの言う通り、ただの口紅やな。
意図がいまいち分からずに訝し気な顔になる俺達二人であるが、手にしたソレを高々と掲げたエルフのちびっ子は『教える』という行為が新鮮なのか、心なしか嬉しそうだ。
「では、従者としてリリィはお仕事をします――先ずは愛し子様がこれをお使い下さい」
「え、ボク？　口紅とかさしたこと無いんだけどなぁ……」

「それならリリィがして差し上げます。何度か強請って義母様のお口に塗った事がありますので」

「……外界に出たばかりのリリィでもお化粧出来るのかぁ……ボクも覚えた方がいいのかなぁ」

従者の本懐やぁといった感じで、生き生きとスティックタイプの口紅の蓋をキュポッと抜くちびっ子を見て、リアが何処か遠い目でされるが儘になっている。

特に何も指示されていない俺がその場で突っ立っていると、手早く聖女様の桜色の唇に朱を差し終えたリリィから「では、聖者様は腰を下ろしてください」と言われたのでその場に素早く正座する。丁度人通りも無いし、えぇやろ。

向かい合っていたちびっ子が横に逸れると、控え目な色合いの紅が唇に乗った、いつもよりちょっと大人っぽい感じになったリアの姿が現れた。

「ど、どうかな……って、なんで地面に正座してるの？」

いや、なんとなく。腰下ろせって言われたし。

照れた様子から一転、呆れた視線になった妹分の肩を後ろから押して、リリィが次なる指示を出す。

「では、愛し子様は聖者様の斜め後ろに回り込みましょう――はい、それで良いと思います、義母様も、狙うときは真後ろより角度がある方が良いと言っていました」

「いや、狙うって何するのさ。というか、これ一体なんの儀式な「はいドーン、です」ちょっ、うぇぇっ？」

先に聞こえた指示通り、俺の死角に廻った二人であるが……リアの言葉をリリィが遮ると同時、慌てたような妹（おとうと）分の悲鳴が聞こえて俺は思わず振り返る。

振り向いた先に、目を見開いたリアの顔と、お日様の陽気を受けてきらきらと輝く銀髪の輝きが視界一杯に映り――。

頬に、なんだか柔らかなものが吸いついた感触があった。

「！　△※○×■※◇◎～～!?!!?」

言語化させ辛いなんとも滅茶苦茶な悲鳴をあげた妹（おとうと）分が、物凄い勢いで後ろに飛び退る。

あ、あー……口紅を使った仲直りってそういう……。

我ながら遅いにも程がある理解で以て、ようやっとリリィの意図に気が付いた。

その当人は、一仕事終えたぜ！　と言わんばかりのやりきった表情でフンスフンスと鼻息も荒く可愛らしくガッツポーズを取っている。

「成功です、我ながら完璧な再現率でした。いぇーい」

「……小さな子供に何教えてるんだよう、あの夫婦は……!!」

俺に向かってピースサインを向けるちびっ子を見て、リアが顔を真っ赤にしながら乱

暴に唇を拭う。
うむ……シグジリアと《虎風》は子供の眼も憚らずにイチャついてるみたいやな……夫婦仲が良いのはとても結構だが、リリィの情操教育的にはちょっと心配にもなる。
なんとも言えない顔をしている俺を見て、ちびっ子は不思議そうに首を傾げた。
「……効果がありませんでしたか？　頬だとダメなのでしょうか？」
あー、いや。そういう事じゃなくてね。
なんというか、リリィが教わった……のか見て覚えたのかは知らんけど、とにかく一連の『おまじない』は、両者の合意が無いと意味が無くてだな。
「――ッ」
頬の赤みが抜けないまま顔を俯かせていたリアが何かを言いかけたのを横目で捉えたエルフの少女は、申し訳なさそうにおそるおそる、と言った様子で上目遣いに立ち上がった俺を見上げてくる。
「……もしかして御二方にとって、先の行為は不本意だったのでしょうか？　だとしたら、リリィは大変申し訳ない事をしてしまいました」
いや、こっちは嫌な事は全然無い。無いけど、やっぱり唐突にあぁする羽目になったリアの気持ちは――。
「――嫌じゃ無いよ！」

遮る様に、リアの紅を落とした唇から否定の言葉が飛び出した。
珍しく強い口調で叫んだ妹分に、呆気に取られた気分でリリィと二人でその顔を見つめる。
リアは口紅を落としたと言うのに、代わりと言わんばかりに頬と耳を真っ赤に染めたままで。
胸に詰まった言葉を絞り出すように口に載せる様は、どこか一生懸命にすら見えて、俺を真っ直ぐに見据える瞳は少し潤んでいた。
「嫌なんかじゃ、無いよ。いやな訳、ない」
……お、おう、そうか。
なんだか俺も猛烈に気恥ずかしくなって、二人揃ってお見合い状態から顔を伏せて逸らしてしまう。
なんなのこれ、妹分がクッソ可愛いんですけど。あの店長の台詞じゃないけどマジ尊死しそうなんですけど。
先程より更にぎこちない空気になった気もしなくもないが――そこに満たされた暖かな感情を、リリィも汲み取ったのか。
「良かった、魔法の道具は効果があったのですね。御二人のお役に立てたみたいでリリィは誇らしいです」

安堵に胸を撫で下ろして――やっぱりフンスフンスしているちびっ子を見て、俺とリアは逸らしていた目を合わせて同時に吹き出した。

「うん、気まずい感じだったから助かったよ――ありがとうね、リリィ」

うむ、これは花丸を与えざるを得ない。ご褒美にリリィ君には聖殿の食堂で花丸ハンバーグを進呈しよう。

「ハンバーグ……！　義母様が作ってくれるお肉の料理です。リリィも義父様も大好きです……！」

はっはっはっは。順調に食いしん坊になっているようで何より、料理長も可愛いお嬢さん相手なら気合を入れて拵えてくれるさね。

すっかり日も昇った街中には、ちらほらと人通りも増えていて、その多くが俺達に微笑ましいものを見る視線を向けていたけど。

いつもならこっ恥ずかしくて仕方ないそれも、今は何故か気にならずに三人並んで歩き出す。

――ところで俺を聖者様って呼ぶの、いい加減やめない？　もっとフランクな感じで良いのよ？

「そうですか？　……うーん……では……兄さまとお呼びしてもよろしいでしょうか

？」

「そ、それはちょっと良くないんじゃないかな！　ほ、ホラ、それじゃにいちゃんまで《虎嵐》さん達の息子みたいに思われちゃうかもだし！」

全然かまへんで、と返そうとしたら凄い勢いでリアにカットされた。

いうても、知り合いのお兄さん的な呼称やろ。そこまで大袈裟に捉える必要も無いと思うんだが。

「う、う”ーっ、う”ーっ！　でも、でもさ、にいちゃんはボクのにいちゃんなのに……!!」

「……ひょっとして、愛し子様も姉様（あね）と呼んだ方がよろしいのでしょうか？」

「ぐぅっ……!?　ぼ、ボクがお姉ちゃん!?　なんて悪魔の囁き……！　ど、どうすれば良いんだこれ……！」

アリア君、きみ、あの店長のテンション感染してない？

とりあえず、リリィ君御所望の花丸ハンバーグを食べる昼飯の時間までは、まだ余裕がある。

大聖殿に戻る前に三人で何処に寄ろうか、なんて話し合いながら。

小さな少女を真ん中に、手を繋いで横一列になった俺達はのんびりと歩き出したのであった。

ぽんこつ聖女の日記

○月×日　晴れ時々曇り

日記、というより記録と言ったほうが良いのか？　そう大仰なものでも無い気もするけど。

内容的に毎日つけるような物でもないだろうけど、他にどう言い表すのかも悩むので便宜上日記ということで良いだろう。

早いもので、アイツが帰って来てから半年以上の月日が経過している。

……その間に起こった出来事を考えれば、『もう』では無く『まだ』と言うべきなのかもしれないけどな。

治療中の大小様々なトラブルに始まり、オレは留守番だったとはいえ霊峰でのゴタゴタ、最近だとエルフの聖地に関する問題。

大枠で三つに並べてみたけど、実際に起きた事を細かに並べるとキリが無い。イベント目白押し過ぎるだろ。

平和な時代が訪れたというのに、アイツが帰って来てから短期間で色々な事が起こり過ぎな気もする。大戦時並みの過密スケジュールだ。
良い意味で退屈しない、といえばその通りなんだけどな。
少し話の趣旨が逸れてるので、軌道修正しよう。
今回、オレが日記をつけようと思い至った経緯は、言う迄も無く昨日アリアと一緒に風呂に入った際に受けた衝撃が原因だ。
本人は気付いているのかいないのか、それは分からないけど。
間違いない、妹と入浴するのは久しぶりだったけど、見間違う筈も無い。
――アリアの胸部が、成長、している。
明確にカップが変動したって程じゃない。
けど、以前より育っているのは確実だ。
気付いた瞬間に本人に問い詰めたい衝動に駆られたけど、なんとか堪える事が出来たのは我が自制心ながら良く仕事をしたと思う。
元が相当小柄だったというのもあるが、単純な背丈だけでもアリアはこの二年で結構伸びた。
体格が変わった以上、色々な処が育つのは当然なのかもしれない。
……じゃぁオレは？

身長は妹程(おとうと)じゃないが、確かに伸びたと思う。
しっかり測った事が無いからなんとも言えないけど、腰つきや全体的な身体のラインだって性別に準じたものになっている、とは思う。
だがバストだけフラットのままだ。もうこれに至っては測るまでも無い。着替えや入浴の際に見ただけで分かる……。
なんでだよ!? 妹(おとうと)が緩やかながらも成長してるのに姉(アニキ)のオレが状態固定って納得いくかコラ!
おかしい　こんなりふじんは　ゆるされない。

○月△日　雨のち晴れ
昨日は取り乱してそのまま日記を閉じて不貞寝してしまった。
……そもそも、以前は胸の大小なんて気にして無かったんだよな。
デカいと肩が凝るとか聞くし、転生前の性別を考えれば寧ろ小さい方が精神的にも楽でいいや、なんて思ってたし。
気にするようになったのは、まぁ……言う迄も無いというか、うん。
大きさに貴賤は無い、なんて言ってもそれはそれとして大きいとやっぱり目を惹かれ

るのは、男の性だ。これに関しては俺も元は男だったから否定はし辛い。
あくまで理屈ではな！　実際にあの馬鹿がミヤコあたりの胸部に視線を向けて気不味そうに視線を逸らすの見ると、どうしたって感情の面でこう、納得のいかない、腹立たしい気持ちが湧き上がって止まらなくなる。
このままでは良くない。
これでもしアリアが成長を続けて――もし万が一、穏やかなる平原から富める丘になってしまえば、並んだ時の絵面が想像するだけで恐ろしいことになる。
それで将来、まな板聖女なんて呼ばれて見ろ、オレは呼んだ奴を消し炭に変えない自信はないぞ。
やはり、どうにかしてバストアップを目指すしかない。
元よりそのつもりでこの日記をつけ始めたのだ。
誰も見ない文章の中だけの話とはいえ、我ながら頭の悪い決意表明だとは思うが……姉（あに）としての沽券もあるしな。
それに、それに、だ。
やっぱり、大きくなればアイツとこう、良い感じになったときに色々と便利そうというか、喜んでもらえそうというか……。
まだまだそんな関係には遠いとはいえ、そうなったときに前世のオレの性別が今と逆

なのはいっそ強みだと思う。
男なら感じるであろう浪漫とか、されたら喜ぶ事とか、こればっかりは嘗て同じ視点を持っていたからこそ理解(わか)る事があるものなのだよ。
も、もし将来きょ、巨乳になれちゃったりしたら、アイツのをはさんじゃったりして

○月◎日　晴れ
自分で書いた妄想で鼻血出すとか中学生かオレは。
昨日、日記に垂らしてしまった部分は赤く滲んでしまっている。後で頁(ページ)同士がくっついたり擦れたりするようなら、浄化魔法で落としてしまおう。
浄化したらインクも消えるだろうからな。おかしなテンションのままで書いた部分を改めて書き直すのもアレだし、可能ならそのままってことでいこう。
さて、三日目にしてやっと本題というか、主旨に触れる訳だが。
世の穏やかなる平原の持ち主たる女性が共通してもつ悩みを、そんな簡単にパパッと解決するような夢の様な方法なぞある訳も無い。
……魔法があるこの世界なら、ワンチャンそういった都合の良い方法が存在する可能性もゼロでは無いと思うけど、ついこの間まで生存競争に近い戦争やっていたのだ。

魔法に限らず、こういった『余裕』があるからこそ生まれる悩みに関する事はこれから様々な手法が模索・発見されていくものなんだろう。

なので、現状出来る事は昔から言われている豊胸に繋がる行いを地道に実践していくことだ。

結果が出るのに時間が掛かりそうなのはなんとも歯がゆいが、この際だ、贅沢は言えない。

そう大したものでもないが、オレには前世の世界の知識もある。この世界の他の悩める淑女の皆様に比べればまだ選べる手段も多いだろう。

差し当っては……女性ホルモンの分泌を意識するのが良いだろうか？

所詮は聞きかじりではあるが、胸のみならず女性らしい肉体的成長にはこれが不可欠であるという事くらいは知っている。

食事や運動、方法も多岐に渡るとは思うのだが……前世ではそれが必要な年齢でも性別でも無かったせいで詳細はさっぱりなんだけど。

……まぁ、うん。

とりあえず、知ってる方法で今から自室でも出来る事も無くはない。ちょっと実践してみよう。

……アイツのシャツでもこっそりかっぱらってくれれば良かったな……。

○月※日　曇り
思ったより捗った。本来の目的を忘れそうで怖い。
……この世界にも写真とかあればなお良いんだけど。

○月§日　快晴
今日は陽も高い内から、相棒の元気な悲鳴が中庭に響いていた。
どうやら、グラッブス司祭に捕まって鍛錬に付き合う羽目になったみたいだ。
普段からそれを嫌がって、今日だって”嫌ァァァァァッ!?　死ぬぅぅぅぅっ!?”なんて悲鳴を上げながら組手と筋トレでひぃひぃ言ってた癖に、司祭に何度も誘われると結局断り切れないんだよな、アイツ。
お人好しというより、なんだかんだ言ってグラッブス司祭を尊敬してるからこそ、って事なんだろう。普段はゴリラだ脳筋だと言いたい放題に言ってる癖にその辺は分かりやすい奴だ。
ちなみにアンナも巻き込まれる形で鍛錬していた。といっても、アイツみたいにがっ

つり稽古付けられる形じゃなくて、普段やってる訓練の延長みたいな感じだったが。
汗だくで白目を剥きながら大の字になってひっくり返ってた相棒と違い、いい汗かいた、といった表情で充実した様子だった。
……この日記をつけているせいか、普段は気に留めない友人のお胸の膨らみに目が行ってしまう。
訓練用の動きやすいシャツとハーフズボンといった服装だったが、シャツを押し上げる中々にご立派な双丘である。汗をかいて上気した頬と相まって健康的な色気、というやつを感じた。
真に遺憾ではあるが、今のオレでは胸部装甲の厚みが足りないので再現は難しいと言わざるを得ない。やはり胸か。ふぁっきん。
で、結局その日は丸一日グラッブス司祭の鍛錬に付き合った相棒は、疲れ切ってゾンビみたいになった足取りでロクに飯も食わずに部屋に戻っていた。
……問題は、今オレの手の中にある相棒のシャツである。
司祭と共に滝の様な汗を流していたせいで、途中から二人揃って上半身裸で鍛錬に精を出していたみたいだが、慣れてる司祭と違って途中で脱ぎ捨てたシャツの事なんて頭から抜け落ちてたみたいだ。
どうしよう、図らずも以前の日記に書いた事が実現してしまった。

……いやいや、流石に汗臭い使用済みを持ち帰るとかないわ、変態じゃねーか。
浄化魔法でパパっと洗浄するか、大聖堂裏手の洗濯スペースに放り投げておこう、そうしよう。

○月ω日　曇り……だと思う
……お、オレは変態じゃないし、ちょっと興味があっただけだし！
折角の休日だというのに、一日中部屋から出ないで終わった。
正直、こうやって日記を書いてる今も色々と茹ってる。

○月▪日　晴れ
昨日は『治療』のとき並に捗ってしまった……。
なんなら初めてアイツで勤しんだときくらい……自覚は無いけど、オレって匂いフェチとかだったんだろうか？
もう完全に当初の目的そっちのけになってるぞコレ。自分でいうのもなんだが、夢中になりすぎだ。

……別の方法を探す事にしよう、暫くはこっちの方法は封印で。ハマりすぎて猿になる未来しか見えない。

と、取り敢えずシャツの方は浄化魔法で完璧に綺麗にしたし、そのうち返すことにしよう、うん、そのうち。

●月※日　曇りのち晴れ

やや日が空いてしまったが、進展が無かったんだから仕方ないよな。

いや、今回もあったとは言い難いんだけど。

理想の体型を手に入れられる魔法薬とかいう非常に胡散臭い触れ込みで商売をしている商人の元に、ダメ元で向かってみたんだけど……案の定、口からでまかせで魔法薬ですらない味付きの水を売ってる連中だった。

平和な時代になったことで、そういった悩みを抱える女性――いや、極少数だけど男もいたけど――を騙して阿漕な商売をする様な奴らも出て来たってことか。

良くも悪くも人の心に余裕が出来たが故、って事なんだろうな。

ちなみにその商人共だが、大勢の客の目の前で指摘してやったら、どうみてもゴロツキにしか見えない従業員とやらを嗾けてきたので普通にぶっ飛ばして警邏隊に突き出

した。
魔法で念入りに変装して行って良かったよ、オレの身元がバレたら大騒ぎだもんな。
徒労に終わったと言ってしまえばその通りなんだけど、元から大して期待もしていなかったし、騙された人達がこれ以上の被害を受けずに済んだ事で良しとしておこう。

●月Θ日　晴れ
男のチラ見は女のガン見、という言葉が『あちら』にあるけど、どうやらこの世界でも意味は伝わるらしい。
具体的には、アンナと話してるときに聞いた……対象は以前のオレだけど。
曰く、「前はたまーに胸に向けて来る視線が男連中と同じで色々と分かりやすかった」との事。黒歴史、という程でも無いが恥ずかしい過去を躊躇なく抉って来るのは止めてくれ。
しかし、アンナの言が事実ならオレもそういった視線を感じても良い筈だよな。一応、聖女なんていう人気職みたいな看板背負ってるし。
その辺りは、前世が男だったせいでそういった視線に鈍いという事なんだろうか？
……あぁ、アレか。単にオレの胸元を注視するような奴もいないってことか、ハハハ

（ここからペン先が潰れた様にインクが飛び散っている）

●月Π日　雨

うむ、昨日は取り乱した。

替えのペンは頑丈なやつに変えたし、柄ごとへし折れるなんてことはもう無いだろう。

しかし、なんだ。

なんだか読み返すと自分がダメージを受ける様な内容ばかりというか、日記を記す意味をあんまり感じなくなってきた。

肝心の目的も空振りだったりいまいち成果が出なかったりと芳しくないし。

なんて、ちょっとヘコんだ気分で今日を過ごしていたら、相棒がいつもの謎センサーでオレの気分の低調を察したらしく、ずっと一緒にいてくれた。

外は生憎の天気で、どこかに出掛ける事こそ出来なかったけど……気晴らしになる話を振ってきたり、くだらない事を言い合って二人で悪ふざけをしたりして。

我が事ながら現金が過ぎるが、こうやって一日の〆に日記を書いてる今の時点で悪くない気分になってる。

今日のアイツの話によると、オレが最近ちょっと悩んだり考え事をしているとアリアも気にしていた、と言っていたので明日になったら謝りにいかないとな。
オレが勝手に悩んでいる――しかも内容的には切実でも深刻でも無い事で、だ。それで妹(おとうと)に心配をかけるなんてのは姉(アニキ)にあるまじき事だ。少し反省せねば。

●月Φ日　曇りのち快晴
アリアだけじゃなくてアンナのおっぱいもおおきくなってた。
今までのだとしたぎがきついから、ふたりでよいさいずのをさがしにでかけよう、ってはなしてた。
おかしい、こんなふじょうりは　ゆるされない。ふぁっく。

今日は予定も無いので聖殿内を適当にフラフラと散歩していると、食堂裏の水場の近

くでシアが焚火をしているのを見つけた。
なんだなんだ、珍しいなおい。
確かに豊穣祭も近いこの季節、たまに冷たい秋風が吹きすさぶようになってきたから、時期的なイベントとしては間違っちゃいないんだけどね。
なんだかスン……とした表情で枯葉と落ちた枝で出来た小山を見つめている聖女様に、声を掛けてみる。
「……あぁ、お前か。うん、ちょっと要らない物を処分がてら、焼き芋でもしてみようと思ってな」
そう答えてシアが手にした枝で煙を上げる落ち葉の小山をつつくと、さつまいもやら栗やらが熱された葉の奥に見える。
おー、いいね。良ければ俺もご相伴に預かっても？
「うん、元から一人で食うには多い量だからさ。余る様なら食堂の厨房スタッフにお裾分けするつもりだったし」
そっか、なら遠慮なく。
こういった時の為か、食堂の外に置きっぱなしになってる椅子に腰かけて小さく上がる火の粉を眺めているシアの隣に、しゃがみ込む。
今更気づいたけど、これ、枯葉だけじゃないな。なんかちょっとインクと紙が焦げる

匂いもする。

ついでに古本でも処分したのか？　要らない書なら書庫に寄付しちゃえば良いだろうに。

「あー……良いんだよ、これで。うん、下手な考え休むに似たり、ってやつだ」

気にし過ぎは良く無いよな、なんて呟いて、我が友人は何か妙に凪いだ笑みを浮かべる。

なんだろうこれ、落ち込んでる……訳じゃ無いな。かといって平時のテンションとも程遠い……何かあったのか？

この間も少し元気が無かったし、心配になって問いかけてみるが……シアは笑って頭を振ると、枝を使って破かれた本の頁に包まれている芋をかきだした。

「……なんでもない！　さ、そろそろ良い具合だし、食おうぜ。こうして秋の味覚を楽しむのに使ってやれば、日記（コイツ）にも少しは意味があったってモンだ」

お、おう？　それじゃ、まぁ……頂きます。

何かを吹っ切った様にいつもの調子に戻った聖女様が、よーく火の通ったさつまいも——正確にはソレっぽい異世界産の芋だが——を、二つに割って片方を差し出してくる。

シアの笑顔と、美味そうな黄金色の芋の断面を見比べて。

なんとなく釈然としない思いを抱きつつも、俺はソレを受け取ってかぶりついたのだった。

嘗ての邂逅　魔族領（前編）

大陸南方、魔族領。
その中でも、特に吸血鬼（ヴァンパイア）達が主に居を構える領域へと俺達はやって来ていた。
現状、邪神の軍勢との戦いは人類種優勢で推移している。
この間の大きな戦線を攻略した際に数名の信奉者の幹部らしき連中を討ち取れた事を考えれば、近い将来、自分が辿り着いた事の無い『決戦』に近い大きな戦いも訪れるかもしれない。
今までのループでも経験の無い未知の領域に対する少しの不安と、それを遥かに上回るやる気やら希望やら決意やらで目が潰れそうな輝きを放ってる我らが聖女様の言だ。
ここ最近ではそのピカピカっぷりも顕著になってきた。傍にいるだけでとても眼福で俺としても非常に嬉しいです、ハイ。
将来、来るべき大一番に向け、シアはこれまでの経験からこの時期ならば協力の要請――即ち此方の戦力の拡充が可能である、と判断した魔族領へとやって来たのだ。

今回、我が友人の立場は特使とかそんな感じになる。
無事協力が得られれば大々的に発表し、帝国と教国で魔族領も立派な人類種の戦力やで、と太鼓判を押すことで現状、孤立しがちな魔族達へのマイナス感情をどうにかプラスに持っていく、というのが副次的な狙いだ。主目的は純粋に戦力の確保だけどね。
ちなみに俺は言う迄も無く護衛ね。《聖女の猟犬》なんつー大層な呼び名が広まりだしてる御蔭で、護衛が俺一人でも文句が出てこないのは正直助かる。
護衛を大人数ぞろぞろ引き連れなくて済むのは有難い、というのはシアも同意見みたいだしな。
形式通りの使節団染みた集団になると、道中で信奉者達の襲撃を受けた際に死傷者を出さない様に立ち回らなければならないので、寧ろ面倒まである。
実際に被害が出たら面倒じゃ済まないしね。シアに関わる案件での無駄な人的損耗は当人のメンタル負担になるのでNGです。
その点、俺とシアだけなら互いの背中だけ気にしていればいいので楽なもんだ。ぶっちゃけ、俺達二人なら襲撃してくる戦力に眷属が混じってても問題無い。
というか実際問題無かった。全員膾斬りにしたった後で聖女様パワーな浄化でキレイキレイしてくれたので、今頃襲ってきた阿呆共は野生の獣やら魔獣の腹を満たしていることだろう。

とにかく、今日この場を訪れたのは戦力拡充の最初の一歩――魔族の中では性質的に一番邪神に魅入られやすい、なんて風評被害染みた風聞が流れてる吸血鬼（ヴァンパイア）達に協力を仰ぐためだった。

にしても、だ。

なんというか、この地域だけ教国や帝国みたいな洗練された――或いは洗練させようという意志を感じる建物が多い。

通過してきた魔族領の他の地域の建物を見ると、質実剛健というか、実用性一点張りみたいな感じの建物が多かったんやけどな。

街中の家々や並ぶ店なんかも、この地域だけは帝国の皇帝陛下のお膝元である帝都みたいなイメージを受ける。デザインや配色など、要所要所で南部独自のスタイルが上手く融合してる感があって真似って感じは全くしないが。

この地の主――吸血鬼（ヴァンパイア）達の主である公爵様の居城を見上げながら、そんな事を考える。

今更ではあるが、当然の疑問を聞いていなかった事を思い出して隣に並ぶシアに声を掛けた。

「うん、どうした？　別に礼法とかは教国式ので構わないぞ。此処の主はとんでもなく女王様気質な女だけど、礼さえ守ればそこら辺は意外とおおらかだしな」

うんまぁ、それも気にはなっていたんだけど、もっと根本的な事を聞いて無かったって思ってな。

ここさ、魔族領の中では西寄りやん？

ぶっちゃけ、領内の中央――ここのトップである《魔王》陛下がいる王都外周部を迂回する様な形で来てる訳だが。

これっていいの？　吸血鬼達（ヴァンパイア）だけじゃなくて、魔族領全体に正式な協力要請――同盟に近い申し出をしに来たんだからさ、先に王都行かないと不味くない？　《魔王（むこう）》のメンツ的に。

「あー……普通ならそうなんだけどな。でも、魔族領（こ）に限ってはこれで良いんだよ」

頭をかきながら、シアはちょっと面倒くさそうな顔をして語りだす。

その口調は説明自体が面倒というよりは、これから自身が口にする内容に関して厄介さを覚えている、といった感じだった。

「まず、《魔王》はそういうの全く気にしない。宰相みたいな立場の《亡霊》は場合によっては良い顔をしないかもしれないけど、吸血鬼達（ヴァンパイア）の主――女公爵が絡むとなれば仕方ない事だってスルーしてくれる筈だ」

そこで言葉を切り、ピッと人差し指を立てて断言してくる。

「対して、その女公爵だけど……《魔王》の後で挨拶に向かったって知ったら絶対臍を曲

げる。最悪、協力要請を突っぱねる可能性すらある」

ええ……。

場合によっては大戦の行く末が決まるっつー局面なのに？（困惑

「……脳筋が多い魔族だけど、吸血鬼（ヴァンパイア）だけはこう、貴族主義というか、高貴な者こそ徳高くを好むというか……基本、理性的な連中なんだよ。女公爵も根っこの部分では、そこに違いはないんだ」

何処か疲れたような、呆れた様な面持ちで金色の聖女様は大きく溜息を吐き出した。

「……でも、《魔王》が絡むとなると話は別だ――あの二人、めっっっちゃくちゃ仲が悪いんだよなぁ」

ええ……（二度目

魔族のトップと、そこの領内で自治権与えられた、半分大公みたいな立場の公爵が？

俺の言葉に「うん」と言葉短かにシアはこっくりと頷いた。

「うっかり顔を会わせるとその場で煽り合いになって、一分後には殺し合いが始まる位には仲が悪いらしい。お前もあの女の前では《魔王》の話題は避けるようにしてくれよ？」

いうて、俺はその《魔王》陛下とまだ会った事がないからなぁ……話題に出そうにも杓子定規な会話の中で単語として出るかも、程度のもんやろ。

にしても、ただでさえ散発的に信奉者連中にテロ行為引き起こされてるってのに、お偉いさん同士がそんな関係でよく国としての体裁が保つな。周りの人達がその分凄い苦労してるのかね？

「実際に政務を仕切ってるのは筆頭補佐の《亡霊》だし、そっちに対しては寧ろ同情的なんじゃないか？　オレも立場上、そんなに深く関わった事は無いんだけど……女公爵も《魔王》をトップに据えて置くこと自体には文句が無い、って感じだったし」

レベルの高いツンデレか何かでしょうかねぇソレ。

個としての戦士の力量を評価する、力！　暴力！　パワー！　つよいがえらい！　な冒険者とかを十割増しくらいに脳筋＆野蛮にしたようなイメージがあった魔族だけど、集団となるとやっぱり面倒な組織構造とかあるんやね。まぁ当たり前っちゃ当たり前なんだけど。

俺がアホっぽく口を開けて相槌を打っていると、シアさんは苦笑いして少し顔を寄せて追加情報を口にしてくる。

「そこまで大層なモンじゃないと思うぞ……あの二人、古馴染みというか、幼馴染みたいな間柄らしくてな？　昔からの付き合いの分、気安さとかもあると思う」

はぇ～……《魔王》陛下と女公爵が？　でも殺し合いまでする間柄を幼馴染と呼ぶにはちょっと関係がデンジャー過ぎると思うんですが。

「ちなみにコレ、何回か前のときに女公爵から直接聞いた話だから。今回は当然、聞かされてないから迂闊に知ってるってことを話さないようにな？」

おい、じゃあ何で今話したんですかねぇ!?　公爵様相手に腹芸せにゃならん要素を増やすの止めてくれない!?

「今更だろ。オレとお前、後はアリアとしか共有できない情報が幾つあると思ってんだよ――お前なら、お前がいれば、良い方向に転がしてくれるだろ？　何時もみたいに」

どこか悪戯っぽく笑いながら、しかし目を細めて俺を見つめているシアの表情は、とても楽しそうで良い笑顔だ。

最近よく見せる様になった、なんというかこう……良い意味で色々な感情が満ちて溢れんばかりなそのスマイルをされてしまうと、俺としては何も言えなくなる。その顔ズルくね？　魂の輝きをそのまま笑顔に搭載したようなの胸に響くってレベルじゃないんですけど。

見る度に最期に向けての覚悟が良い具合に決まるので、気合が入るっちゃー入るけどね。

……強いて言うなら、もっと見ていたかったって欲が出るのが難点だが……。

でもまぁ、そう言ってくれるのは嬉しい。俺なりに頑張ってはいるしな……なんか過大評価されてる気もするが。

胸に湧いた未練にも似た感情をスルーして肩を竦める俺に、此方の腹に隠した思惑なぞ知る由も無い聖女様はもう一度、今度はニヤリとした笑顔を浮かべた。
「よし、じゃぁ行こうぜ。遠話で話は通ってるから待たされるって事も無い筈だ、今のうちに腹括っておけよ」
あいよ、しっかし教国の教皇やら枢機卿連中といい、帝国の皇帝様のときといい、お偉いさんとの初顔合わせは何回やっても慣れそうにねぇなぁ。
ボヤく此方に発破をかける様に、俺の背中を一つたたいて城門へと進むシアの後ろにくっついて行く形で歩き出した。

「よく来た、神子の小娘――いや、今は金色の聖女と呼んだ方が良いか？」
吸血鬼らしい日光の入り辛い作りの居城を内部の者に案内され、めっちゃ豪華な客室で待たされること暫し。
先のシアの言葉通り向こうさんも俺達を待っていたのか、出された紅茶を飲み干す時間すら無く、早々に此処の主――女公爵に御目通り叶う事となった。
通されたのは、まるで王族との謁見を行う様な玉座の間。

長命種でも更に不死性の高い種族なので、吸血鬼（ヴァンパイア）は個体数自体はそう多くないのだが……それでも、城に勤める多くの者がその広間に集まっている。

その最奥、脇に相当に高位であろう同族の美青年を侍らせたその女性は、宵闇色の玉座に肘をつき、ドレスから覗く艶めかしい長い脚を組んで俺達を待ち受けていた。

傲然という言葉を体現した様と、それを虚栄とは思わせないだけの自負と威風。

艶やかな濃藍の髪は立ち上がれば脚まで届きそうな程に長く、人間にはやや光量が足りないこの場所でも僅かな光を反射して輝いている。

下手なモデルくらいでは裸足で逃げ出しそうな見事な肢体を包むのは、肩と胸元が大きく出たドレス……何処か血を思わせるダークレッドの装いだ。

首の上に乗っかった、これまたとんでもなく整った顔と――何よりこの暗がりの中で一際妖しく輝く真紅の瞳。

全く抑える気の無い垂れ流したままのふざけた量の魔力も相まって、正しく人外の美、という言葉がピタリとはまる。

吸血鬼達（ヴァンパイア）を束ねる、爵位級吸血鬼（ハイ・ブラッド）。

その頂点に君臨する、彼らの始まりたる始祖の血を引き継ぐとされる王位級吸血鬼（オリジン・ブラッド）。

魔族領、唯一の公爵位の持ち主にして、領内西部を統括する《宵闇の君》――彼女は、多くの者に女公爵と呼ばれている。

うん、散々っぱらシアに事前に言われていた通り、一目見ただけで分かるめちゃくちゃ尊大な女王様ムーブだわ。

対するウチの聖女様も、完全に余所行きの顔と所作で形式的な挨拶を淡々と返す。

「お久しぶりです公爵閣下。この度は――」

「あぁ、よい。今日は気分が良いでな。格式ばった挨拶は略し、以前と同じ振る舞いをする事を許そう」

あっさりとシアの言葉を遮ると、女公爵は発言の通りに機嫌の良さそうな表情で艶然と笑みを浮かべた。

「元より、嗜好はやや異なれど我らも魔族の一員――強者には相応の敬意を払うが性よ。目に余る阿呆の類でも無ければな」

頬杖をついて、くつくつと喉の奥で笑いを零す様は実に絵になっている。

「その目に余る阿呆は後に置いて、先んじて我が身に謁見を申し出た判断、上出来であると褒めてやろう」

「……そりゃどーも」

先方の許可という名の要望の通り、早々に余所行きの猫被りをやめたシアがぞんざいな口調で礼を言う。

目に余るアホウって《魔王》陛下の事かコレ。マジで仲悪いんやなぁ……。

事前に教えてもらってよかったー、とか思いながら二人のやり取りを眺めていると、ある程度気安い挨拶を改めて交し終えた処で女公爵の眼が俺に向いた。

「――して、貴様の後ろに控えるのは従者か？　見た処転移者の類だが……いや待て、今回は護衛と二人で来たと聞いたな」

「あぁ、従者じゃ無い。オレの友達（ダチ）で、相棒だ――《猟犬》って言えば分かるか？」

「ふむ、そうか。こやつが」

女公爵の眼が僅かに見開かれ、同時に広間に詰める吸血鬼（ヴァンパイア）達から、微かに騒めきの声が上がった。

「おぉ」とか「あれが……」とか聞こえるけど、ガッカリさせたらごめんなさいねぇ、鎧ちゃんの中の人はこんなんよ。

臣下だけでなく、此処の主も興味を惹かれたようで、玉座の上から真紅の視線が突き刺さる。

とんでもねぇ美人の遠慮ない居丈高な目付きに晒され、居心地が悪いってもんじゃなかったが……一応、聖女様の金魚の糞としての立場もあるので丁寧に腰を折ってお初にお目に掛かります、と最低限の挨拶だけはしておく。

俺がちょっと尻込みしてるのを察したのか、シアがさり気なく女公爵の視線を遮る様に前に出てくれた。

「顔合わせは終わっただろ公爵。そろそろ今回の件について話を始めたい」
「――ほう？」
シアの顔を見て一瞬怪訝な顔をして見せた公爵様だったが、すぐに何かに気付いたかの様ににんまりと朱色の唇が弧を描く。
背後に控えている俺ではシアの表情を見ることが出来ないので予想するにしても判断要素に欠けるが……。
相手は長命種の中でも相当に古株の為政者だ、海千山千なんて言葉じゃ足りん位のやり手だろう。
洞察力や探り合いで勝てるとも思ってないが――さて、向こうさんは我が友人の顔を見て何に気付いたのやら……。
視線が俺に戻されると、向けられていた品定めの眼がどこか背筋の寒くなる、舐め回す様なものに変わった。
え、なにこの目付き。こわい。
シアの言葉は無視して、吸血鬼（ヴァンパイア）の女王は玉座に頬杖ついた尊大な態度のままで、空いた手の方をゆるりと持ち上げる。
その白磁の如き白さの指先が俺を指し示し、小さく折り曲げられた。
「興味が湧いた。そこな者――《聖女の猟犬》よ、許す。近う寄れ」

なんで？（真顔

俺の顔は困惑を通り越して馬鹿面だったと思う。

対して、スルーされた聖女様の方が少し苛立った様子で俺を庇う様に片手を翳し、女公爵に向かって一歩進み出た。

「おい……特使を無視してその護衛にちょっかい出そうとするなよ公爵様。いい加減本題を――」

「それは後で良い。《猟犬》よ、近くで顔を見せよ。二度目の呼びかけを拒むは、この身を侮っていると判断するぞ？」

再び適当に流された事によってシアの視線が益々剣呑なものに変わるが……いや待て待て、確かに困惑はしてるが、近くで顔見せるくらいなら何てこたぁないやろ。

この人が凄いゴーイングマイウェイな女王様気質だって教えてくれたのはお前さんだろうに、なんでいきなり煽り耐性の低下を引き起こしてんねん。

慌ててシアを宥めると、何が面白いのか口の端を笑みの形に歪めたままの公爵様のもとまで歩み寄る。

俺が大人しく彼女の言う事を聞いたせいなのか、背にした気配の不機嫌度合いが増した。なんでやねん、どうすればええねん。

正直、女公爵の嬲りがいのある鼠を見つけた猫みたいな眼は怖かったが、いつになく

急速に不機嫌なったシアにも今までと違う感じを覚える。
この手の嗜虐性の強い相手に感情を荒げるのは悪手だ。その位の事はウチの聖女様が理解して無い筈がないんだが……。
ごちゃごちゃと頭の中で考えるものの、何時までも此処の主を待たせる訳にもいかん。取り敢えず玉座直ぐ前まで向かうとその場で跪いた。
ぶっちゃけ、教国の特使とその護衛という立場からすれば、幾ら相手が公爵様とはいえへりくだった態度が過ぎるとは思うのだが……多分、このおねーちゃんはこうした方が機嫌が良くなる。
この世界の美人は怒らせると怖いなんてレベルじゃねー人ばっかりだからね！　流石に靴舐めるのはゴメンだが頭低くする程度で機嫌とれるなら幾らでもやるわ！
「ふむ……」
何かを思案……或いは見定める様な女公爵の呟きが漏れ聞こえると、玉座から身を乗り出した彼女の手が伸ばされ、俺の顎を掴んでクイッと顔を上に向けた。
間近で覗き込んでくる妖艶な美貌。
うむ、近距離で見るとやべーな。シアリアとは全く別ベクトルの妖しい魅力がある。
血の様な紅い瞳に見つめられて吸い込まれそうな気分になるが、瞳に自分のすっとぼけたツラが映って苦笑いが漏れそうになった。

「……おい、いつまで……！」

「凡庸だな」

シアが焦れた様な声を上げるがそれを遮り、あっさりとした口調で公爵様は品定めの結果を口にした。

「よく鍛えられてはいる。が、それも特筆する程の物では無く、転移者としては魔力も貧相――まぁ、これは与えられた加護が魔力の増幅に関わりの無い類い、耐性や知覚に関するものであるせいか？　ともあれ、見目も才覚も、突出したものは何一つ感じられんな」

わぉ、辛辣ぅ。

とはいえ、大体的を射ている評価だ。特に大雑把ではあるが俺の転生特典についてアタリをつけてくるのは予想外。

何某かの看破の技能か単に経験による推測か――どちらにしても精度がえげつないな。

そんな風に顎クイされたまま感心していると、背後からバチッっと放電するような音と共に魔力の波動が放射された。

当然というか、俺のすぐ後ろには聖女様しかいない訳で。

「……」

無言なのが怖い。アカン、これ相当苛立ってるやつや。無意識に魔力が攻性を帯びて洩れとる。

なんだかんだと仲間想いな奴だからね。散々っぱら無視されたりスルーされた上に友達が酷評されたのを聞いてかなりお冠みたいだ。

玉座の間に集まっている吸血鬼（ヴァンパイア）達も顔色が悪い――のは種族的に元からだが、とにかく、漏れた分だけでも容易に計り知れる圧倒的な魔力量と聖性を感じ取ってちょっとビビってる人が多い。

物騒な魔力に背中をじりじりと炙られて肝を冷やしている俺や、聖女の怒り混じりの聖気に怯んでいる臣下とは対照的に、女公爵は面白い物を見た、と言わんばかりにシアを眺めて蠱惑的な笑みを浮かべている。

こちとら背中越しでもおっかなくて仕方ないってのに豪胆な事だ。公爵様っつーより女王様ですねぇこれは（確信

ひょっとして、本当にちょっかいを掛けたかったのはシアに対してであって、俺は当て馬代わりだったのかもしれんね。

そんな予測を立てつつ、現実逃避も兼ねて目の前のおそろしく整った御顔を眺めていたのだが、楽し気にシアを見ていた女公爵はもう一度眼前の俺に視線を戻して、最後に囁くように耳元で一言付け足す。

「それだけに歪――いや、異質であるな。何を見、何を経験すればこの様な在り方になるのやら」

吐息がかかる程の距離で、俺にだけ聞こえる様に呟かれた声は、ひどく楽し気ではあるが同時に呆れと感心も含まれている様に思えた。

……すげぇな、マジで。

色々と生き方を変えるレベルの衝撃的なものを『視た』のは確かだが……それを初見で此処まで言い当ててくるのか。今まで具体的に指摘して来たのはお師匠だけだったんだけど。

一頻り俺を見定め、シアからの反応にも満足したのか。

女公爵は俺の顔から手を離すと、再び玉座に背を預けて頬杖をついた。

ドレスのスリットから伸びた白く艶めかしい脚が、これ見よがしにゆっくりと組み替えられる。

折角近くにいるんだから眼福極まりない光景をガン見したい処ではあるが、相変わらず剣呑な雰囲気の友人にフォローを入れる方が優先だ。軽く頭を下げるとそそくさとシアの側に戻る。

ヘイヘイ、聖女様。何事も無く終わったからいい加減その物騒な魔力を引っ込めなさい。向こうさんの故意的言動が原因とはいえ、一応特使として来た人間が威嚇染みた真

似してどーするんだってばよ。
小声で告げた言葉にシアは何故か半眼になって此方を見返すと、目を瞑ってふーっと息を吐きだした。
同時、僅かに漏れて出ていた魔力もピタリと放出が止まる。
怒りを収めてくれたみたいで俺がホッとしていると、次の瞬間、伸ばされた掌に顔面を鷲掴みにされ、一瞬だけ魔法が発動された。
……今のは浄化魔法か？　なんで急に顔をキレイキレイされたの俺。
「……なんとなくだ。それより、いくら外交先の相手とはいえ吸血鬼（ヴァンパイア）の顔を耳元や首筋に近付けさせるなよ、不用心過ぎるぞ」
む、そうなのか。でも、当の女公爵様は俺に食指を動かすような素振りは全く無いから杞憂だと思うんだが……。
「猟犬の言葉に誤りは無い。中々に面白い男であるようだが、その身に流れる血と魔力自体は先の評価通りのものだ。我が喉を潤すには不足が過ぎる」
玉座から見下ろす本人が断言したのを聞いて、それはそれで面白くない言葉だ、と言わんばかりにシアは顔を顰めた。
そんな反応もいちいち楽しそうに眺めていらっしゃる吸血鬼（ヴァンパイア）の女王様は、「さて、此度のそちらの要求についてだが」と言って、頬杖を外して両の手を胸の下で組み合わせる。

「盤面が大きく動いた際の助力――あの汚泥共との戦もようやっと終わりが見えるというのならば、それについて否は無い」

大分寄り道というか、本題と関係の無い事で時間をくったが……やっとこ聞けた今回の来訪に付いての色好い返事に俺とシアは顔を見合わせて小さく安堵の息をついた。

そんな此方を玉座から見下ろしていた女公爵は、組んだ手を解くと自身の濃藍の髪をかき上げ、思案するように視線を宙に彷徨わせる。

「ふむ……この場で細部を詰めるというのもつまらんな……一旦ここまでとするか。貴賓室に案内させる、そこで待つが良い」

ひどく簡単に結論を出したと思ったら、この場の解散を宣言するのもまた唐突。

いきなりに過ぎる主の言葉にも異論は全く無いのか、特使がやってくると言う事で集められたのであろう城勤めの者達は静かに、そして一斉に頭を垂れた。

もう確定事項、といった感じで女公爵はさっさと席を立って玉座の裏に下ろされた帳の奥へと引っ込んでしまう。

ええ……妙な”遊び”でこっち散々にを引っ掻き回したと思ったら、肝心要の外交の話は凄いあっさり片付けたぞあのねーちゃん……。

俺が思わず零した感想に、シアが「そういう奴なんだよ、あの女は」と、心底面倒くさそうに嘆息したのだった。

――で、十分後。

「こちらが中庭になっている。主は薔薇がお好きでね、戯れに食事を薔薇の精気で済まされる場合もあるので、中庭の敷地の半分は薔薇園となっているよ」

シアと一旦別行動になった俺は、玉座の間にて公爵の側に侍っていた線の細い金髪の美青年に案内されて城を散策していた。

特使と吸血鬼（ヴァンパイア）のトップによる一対一の対談、という形を女公爵が希望した為に、省かれて暇になった俺に彼が声を掛けて来てくれたのだ。

「対談が終わるまでの間、用意された客室に案内せよと言われたが……遥々教国より来訪したお客人だ、良ければ城内を軽く案内しようか？」

爽やかに笑ってそう提案してくるイケメンの言葉に、お部屋でボーっとお茶飲んで待つよりは良いかと乗っかった形である。聖女様と公爵様の話がどれだけ時間かかるかも分らんしね。

薔薇園は公爵の居城でも指折りのお勧めスポットらしく、特使としてやってきた人物なら立ち入りも可能だから是非見て欲しいと言う青年だが……中庭って事は陽がモロ

に入るんじゃないんか？　日没前の今の時間だと、案内してくれるおたくがしんどそうだが。

「ははっ、気遣いをありがとう。だが問題ないよ、確かに草花の生育もあるから中庭は日差しがよく入る作りになってはいるが……僕は日光への耐性が高くてね。真昼でも余程日差しが強い日でも無い限り、大した苦では無いのさ」

へぇ、マジか。聞いた話だと日光にほぼ完全な耐性があるのは此処の主様だけだって記憶していたが……。

「うん、純血の吸血鬼（ヴァンパイア）では、陽光を完全に克服しているのは主だけだね。僕は正確には他種族とのハーフ――半吸血鬼（ダンピール）だから」

ほほぉ、半吸血鬼（ダンピール）。実力主義が魔族の基本姿勢とはいえ、貴族社会の側面が強い吸血鬼（ヴァンパイア）の中でハーフの身でトップの側仕えしてるって凄いやん。クソ有能そう。

「それは買い被り過ぎかな。主は将来性を見越した、といって僕を抜擢して下さったし、それに関しては心底感謝しているけれどね……」

白い頬を少し赤らめてはにかむ青年であるが、先程までの爽やか王子様風の気配が薄れたせいで同性の俺からみても非常に可愛らしく見える。なんというか、下手な奴が交流したら性癖が歪みそうやなこのイケメン君は（失礼

下世話な話かもしれんが、そっち方面の意味での側仕えなのかもね。別に本人が嫌

がってないなら問題視する様な事でも無いけど。
雑談がてら、互いの事を語ったりしながら歩を進めると、程なくして女公爵御自慢の薔薇園へと到着する。
……こりゃ凄いな。花を愛でるなんでいう雅な趣味とはおよそ縁遠い身ではあるが……こいつは素直に感動するわ。
その庭園には、吸血鬼（ヴァンパイア）達の瞳を思わせる紅い薔薇をメインに、白、薄桃、黄と、様々な色の薔薇が色とりどりに咲き誇っていた。
ガーデニングの知識なんぞ全くないが、咲く場所や薔薇の種類の位置配分など庭師が技巧と知識を凝らしているのだろう。なんというか、全体像で見た感じ嫌味のない綺麗な統一感がある。
敷地内に満ちる薔薇の香りも、強くはあるが不快な事は全く無い。なんだろうこれ、庭園内の空気の流れとかまで考えて手入れしてあんのかね？　はぇー、すっご（語彙力
これも一種の職人の技って奴なんやろなぁ……大聖殿の練兵場みてーな中庭と比べたら失礼なやつだなこれ。
「見事なものだろう？　僕も城勤めになって初めて見たときは、らしくもなく感動したものさ」
青年の言葉に頷きを返す。こら凄いわ。写真がこの世界に無いのが悔やまれるね。

「そう言ってくれると、手入れをしている庭師も喜ぶだろう。外からのお客人はこの地には滅多にない事だからね、来たとしても大抵は領内の中央からだし……」

ああ、吸血鬼（ヴァンパイア）以外の魔族の感性じゃ、植物鑑賞なんていうのは縁が無さそうだしなぁ……。

それにしてもまぁ、なんだ。野郎二人で薔薇園というのも何とも片手落ち感がある な。とはいえ、片方が女性と見間違うばかりの美人系イケメンなのでかろうじてセーフで。

「ふふっ、なんだいソレ。主も仰っていたが君は中々面白い人だね」

いやー、お前さんの言ってる意味と女公爵が言ってた意味は多分全然違うと思うよ。

柔らかく笑う青年に先導されながら、美しい庭園の中を益体もない話をして歩く。

中庭の中央にある小さな噴水の前までやってくると、そこで彼は歩みを止めた。

「唐突かもしれないが、僕が君の案内を買って出たのには、個人的な理由があってね」

うん？　個人的な理由とな。お前さんとは間違いなく初対面だと思うんだが……。

「あぁ、そうだ。こうして互いに顔を合わせるのは今日が初めてだよ……その上で、不躾だとは思うが一つ、頼まれて欲しい」

一瞬、どこか迷うような素振りも見せたが……結局青年は俺の方へと向き直ると、纏っているケープを翻し――軽く腰を落として身構える。

「失礼は重々承知――一手で良いので、御手合わせを願いたい。《聖女の猟犬》よ」

敵意などは全く感じられない……だが奇妙な程に熱の籠った瞳で、彼は俺を真っ直ぐに見据えてそう告げたのだった。

嘗ての邂逅　魔族領（後編）

「――まぁ、条件としてはこんなものでよかろう。件のはぐれ共とエルフの争乱以降、教国には一貫した友好国の立場を表明されていたでな。魔族領（我ら）としてもお前達には借りがある」

貴賓室で向かい合わせに座った女公爵が自身の長い髪を指先で弄びながら出した結論に、オレは内心で胸を撫で下ろした。

正直に言ってしまえば、オレはこの女が苦手だ。

流石に昨今の状勢での友好国の協力要請に対して、えげつない対価を吹っかけて来るような悪辣な奴では無い、と『知っている』とはいえ、それでも相手は長い事為政者をやってる長命種だ。

正直、交渉事で一対一では良い様に翻弄される未来しか見えないので、変な条件やこいつの好きな”お遊び”を挟んだ内容に発展しなかったのは幸いである。

「あとで配下に書面に起こさせる。夜が明ける前には終わるだろうが、お前達人間には

眠りの時間であろう。今宵は城に留まれ」
「ああ、予定としても一泊なら全然問題無い。世話になるよ」
これで公的な時間は終了、とでも言わんばかりに女公爵は手を打ち合わせた。
すると貴賓室の扉が静かに開かれ、ワインボトルとグラスの載ったカートを押した給仕が入室して来る。
「……酒の用意させてたのかよ、さっさと仕事終わらせて飲む気満々じゃねーかアンタ」
「教国と歩調を合わせる事は既に結が出ていた。ならば対外的な交渉（つまらん事）は早々に終わらせるに限る」
オレが呆れを隠さずに言ってやると、悪びれもせずに先の交渉を些事であると嘯いた女公爵は、良い酒の肴もある事だしな、と持ち上げたグラスに葡萄酒を注がせて薄っすらと笑う。
……言う迄も無く、肴ってのはオレの事なんだろうな。二重の意味で。
「では、献上せよ」
「やっぱり血を御所望かよ……まさかとは思うが、この為に広間から貴賓室に移動したんじゃないだろうな？」
当然の様に此方にグラスを傾けて、中に満たされた芳醇な香りのする酒をオレに向けて突き出すのを見て、思わず溜息が漏れた。

一瞬だけ風の魔法を発動させて、自分の親指の先に針でつついた程度の傷をつける。
拳を握る様にして軽く指に圧を掛けてやると傷から小さな赤い滴が膨らみ、差し出されたグラスに一滴だけ落ちた。
女公爵はそれを見て満足気に頷くと、軽くグラスを廻す。
美酒の類なんて飲み飽きる程に飲んでいるだろうに、まるで幻の銘酒を鑑賞するみたいに杯を照明に透かして目を細め……やがて勿体付けた仕草で口をつけた。
たっぷりと時間を掛けて口内に含んだソレを味わい、ゆっくりと喉に落とし込むと、ほう、と熱っぽい感嘆混じりの吐息を洩らす。
「――うむ、良き哉。飲み慣れた銘柄ではあるが、貴様の一滴が加わるだけでこうも変わるのはいっそ愉快ですらある」
「あぁそうかい、喜んでもらえて何よりだ」
我ながら適当にも程がある返答だったのだが、上機嫌に笑う目の前の女王様はグラスの中身に舌鼓を打つのに忙しいらしく、気にした様子も無い。
赤い液体をそれ以上に赤い唇が含み、嚥下する様を眺めておかわりとか言われないだろうな、なんて考えていると、公爵に酒を注いでからは彼女の座るソファーの後ろに控えていた給仕から小さく喉が鳴る音が聞こえた。
オレの視線に気付いたのか、上品なデザインのメイド服を来た給仕さんはハッとした

表情になると頬を染め、「申し訳ありません」と深々と頭を下げる。
　そんな部下の言葉にも振り向く事無く、グラスの中身を見つめたまま彼女の主は珍しく苦笑らしきものを浮かべた。
「あぁ、お前を下がらせずにいたのは我が身の落ち度であったな……久方ぶりの稀少な美酒を味わう機会に、少々気が急いていたようだ、許せ」
「勿体ない御言葉です、主様」
　再び頭を下げる給仕に手振りだけで退出を促すと、公爵はグラスに残った僅かな葡萄酒の残りを飲み干した。
「……吸血鬼（ヴァンパイア）にとって高い魔力持ちの血は御馳走なのは知ってるけど、一滴でそんなに変わるもんなのか？」
「優れている、程度ならばこうまで劇的に変わりはせぬ。貴様のふざけた魔力量と莫大な聖性あってこそよ」
　オレの疑問の声に褒めてるのか貶しているのか分からない言葉が帰ってくる。
　一杯で満足したのか特にお代わりを要求する事も無く、腹立つくらいにスラリと長い脚を組んで女公爵はソファーの上でふんぞり返った。
「尤も、貴様の神子としての性質は日輪。有した聖気の量も考慮すれば多くの吸血鬼（ヴァンパイア）にとっては並ぶ物無き至高の美酒と毒酒を兼ねる劇物であろうな。憂い無く嗜めるのは

この身だけであろう」

そこで言葉を切ると、何かを思案する様子で「ふむ」と呟きが漏れる。

「或いは、貴様の妹が対極――月の性質を有しているのやもな。元より今代の神子は異例の二名。創造神の陰陽二面を其々に司っていると考えた方が自然か」

「色々と気になる単語が出て来た処ではあるけど……だからってアリアの血を寄越せなんて要求は認められないぞ？　断固拒否するからな」

神子――聖女としての性質か。何気に今までの『繰り返し』の中でも聞いた事の無い話だ。

今の言葉から推測するに、妹の血液が吸血鬼（ヴァンパイア）にとってリスクの低い最上級な逸品である可能性は高い。

だからといって、文字通り食い物にさせる気なんてゼロだけどな。この女が頭目である限りそんな未来はほぼ確実に来ないだろうが、もしそうなったら同盟・友好関係を投げ捨てる事も辞さない。

そんな決意と、少しの警戒を込めて言ってやると、女公爵はそれで機嫌を損ねる処か楽しそうに喉の奥で笑う。

「戯けめ、その様な物乞い染みた真似などするか――何より、この場でソレを要求すればあの男が黙ってはおるまいよ」

あの男――言う迄も無く、アイツの事だろう。
先程の初対面のやり取りでも思い出しているのか、紅い双眸を細めて足を組み替える。
「アレは一種の狂人――貴様ら神子に害を為そうとすれば、そうと知れた瞬間にこの身とて駆除の対象に入れるであろう。アレはそういう男だ……よくもまぁ、あの様に螺子の外れた人間を拾ったものよ」
「……ついさっき会ったばかりだろ、随分と分かった様に言うじゃねーか」
何でもない風に皮肉ろうとしたけど、無理だった。意図せずに声が低くなっていたと思う。
広間で押さえた苛立ちが、公爵の発言によってぶり返した様に胸の裡に湧いてくる。
凡庸だの狂人だの、随分な言い様だなオイ。アンタがアイツの何をそんなに知ってるってんだよ。
……どうにも最近、アイツの――前の最後に出会ったあの同郷の友人の事に関する事となると、自分の感情の制御が覚束なくなってるな。
入れ込んでいる自覚はある。何せオレにとってやっと出来た『繰り返し』の知識や記憶を共有出来る相手なのだ。
アリアだってアイツの御蔭で助かった……いや、アリアの件を皮切りとして三人で始

めた『今回』は、突如紛れ込んで来た変わり者の友人が色々とやらかしてくれた結果、記憶にあるモノと比べて冗談みたいな被害の少なさで済んでいる。

今までだったら、オレがどう立ち回っても状況はもっと悪かった。

それがどうだ。現在、帝国は首都に痛打を受けておらず、教国も聖都を始めとして各都市が健在。現在も奮戦して皆、士気も高く気炎を吐いて戦っている。

『繰り返し』の初めの頃だと、この時期、手遅れになる前に聖都を脱する様にとシスター・ヒッチンや教皇の爺さんに説得された事だってあったのだ。

そんな最悪の状況がまるでただの質の悪い悪夢か何かだったみたいに、多くの事が上手く進んだ状況が続いている。

アイツだ。

アイツがこの、奇跡みたいな”今”を引っ張り寄せてくれたんだ。

この世界で出来た、立場とか出自とか置かれてる現状とか、そういうのを全て込みで、世界を回帰させても傍にいてくれる、オレの友達。

あんな滅茶苦茶なヤバい呪物を使って、その度に毎回傷だらけになって。

それでもいつもヘラヘラと笑って、何でもない事みたいに茶化して、オレが何度『繰り返し』てでも望んだ未来を届けてくれる大馬鹿野郎。

ああ、そうだ。感謝してる。恩人だと、親友だと思ってる。

執着？　してるよ。それの何が悪い。これで入れ込まない奴の方がおかしいだろ。

色々と溢れ返りそうになる感情を、開き直りにも似た結論で補強した蓋で丁寧に押し込める。

オレとしたことが迂闊だった。他国のお偉いさん――しかもよりによって女公爵の前でこんな個人的な感情を発露させるのは不味い。

とはいえ、この女も伊達に長生きしていない。先程うっかり出てしまった低い声から、多くを汲み取られてしまったみたいだ。

顔を会わせてから終始機嫌の良いその表情に、更に愉悦の成分が混ざる。

「くくっ、気に障ったか？　なんともらしくなったものよ」

「……なんだよ、らしくって」

「ふむ、さりとて自覚は無し、か」

人の面白くなさそうな表情を肴にして手酌でワインを注ぎ足した公爵は、オレの血なんて無くとも相当な高級品であろうソレを安酒を呷るみたいに一気に飲み干す。

「――ふぅ……秀麗な見目、圧倒的な魔力量、そして年の頃を考えればいっそ不自然な程に練磨された魔力制御。成程、貴様は聖女となるべくしてなった器だが……以前会ったときには、その身に宿る精神（在り方）は夢の様な未来を追い求める、尻の青い小僧の其れであった」

魔力制御の下りの辺りで、一瞬探る様な真紅の視線が向けられて少しだけ心臓が跳ねた。

……確信を抱いてる、って訳でも無さそうだけど……この女の事だ、ひょっとしたらオレが『繰り返してる』事をなんとなく察しているのかもしれない。

いっそ明言出来れば楽なのかもしれないけれど、それをやって起こった混乱とか、変動し過ぎて未来が変わる――最悪、邪神側から『繰り返し』への妨害をされる事を考えると迂闊に他人に話せないんだよな……昔、教皇（ジイさん）もジャミング染みた真似をされたことがあるって言ってたし。

やっぱりこの女王様気質な公爵は油断出来ない奴なのである。けど、一応は味方な事が頼もしくもあった。

でも、そんな風に多少は余裕を取り戻して考えていられたのも、次の発言を聞くまでだ。

「其れが一番に適する形とはいえ、異なる性に転生させるとは女神も中々に愉快な真似をなさると思うていたが……久方ぶりに顔を見てみれば、番（つがい）を見つけて外身と内の整合も取れているではないか。偉大なる創造神の先見の明たるや、といった処か？」

……ぅえ？

「……何だって？」

多分、オレの顔はキョトンとしたものになっていたと思う。
向けられた言葉の意味が分からなくて、呆気に取られて目の前の腹黒い美女の顔を見てついつい聞き返すと、当の本人は堪えきれない、といった感じでとうとう声を上げて笑い出した。
「く、はははは。なんだ、此処迄言われて尚気付かぬか――先の謁見でもそうだったが、貴様が己の猟犬に関する事で剥き出す感情は、友愛やそれに類する執着などでは無い。番うと定めた雄(あいて)を奪われる事は勿論、侮られるすら拒む雌の情念(オンナソレ)よ」
……え。
つが……お、ん……。
……。
……は、
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?　な、なに、なにナニ何言ってんだアンタそんな事ある訳ねーだろバカじゃねーの!?!?!!」
「ほほ、語るに落ちるとはこの事よ。頬が熟れた林檎の様に色付いておるぞ」
半ば裏返ったみっともない怒鳴り声をあげてしまう。
思わずソファーを蹴倒す様に立ち上がるけど、女公爵はオレの怒りもどこ吹く風と言わんばかりの余裕の表情だ。

逆に腹を抱えて上品に笑うという器用な真似をしながら指摘されて、思わずバッと両掌を上げて自分の頬っぺたを隠すように覆う。

あぁクソっ、本当に熱くなってやがる……！　なんだよコレ、熱病じゃあるまいし、どんだけ真っ赤になってんだオレは……!!

鏡を見るまでもなく、顔が熱を持っているのが分かる。思考が変な風に暴走を起こして上手く纏まってくれない。

なにいきなり妙な事口走ってくれてんだよこの女は……！

そもそも公爵自身が今さっき口にしたばかりだろ！

オレの前世は、男だったんだぞ！

そりゃ、『繰り返し』も含めた主観的な年数を考えればこの身体になった月日の方がもう長くなってるけど……。

でも、それでも、最初に培った自己認識は簡単に崩れるようなもんじゃない、無い筈、だ。

アイツは仲間で、恩人で……そして友達だ。

いつも一緒にいるし、家族であるアリアを除けば単に傍にいて一番居心地が良いっていうだけだ。

馬鹿な事だって言い合えるし、なんならしょーもない猥談だってした事もある。

最近になってちょっとシモの話題はこう、気恥ずかしいというかどうかと思ってしてないだけだし、傷だらけですっかり歴戦の猛者みたいになった身体とか見ると何かムラっとする気がしないでもないけどそれは多分気のせいだし以前にその手の店に行ったときのアイツの締まりのない馬鹿面を思い出すとなんかムカつくから二度と行かないって決めたばかりだけどそれはそれで何もおかしい事は無いし普通だフツー。

……うん、良し。やっぱり女公爵が言う様な事は無いよな。

全く、変な事言いやがって。今回は流石に性質（タチ）が悪いぞ。

「く、は、ふ、ふふっ……！　成程、腹が捩れるというのは此の様な感触なのだな。腹に痛みを感じるなどあのアホウドリに穴を空けられたとき以来よ」

「ふん、御機嫌なとこ悪いけど、今回ばかりはアンタの大層な観察眼もスカを引いたって言わせてもらうからな。オレの友達（ダチ）を揶揄いのネタにするのも程々にしろ、いい加減怒るぞ」

もう惑わされない。そんな意思を込めて、腕を組みながら語気を強めて忠告してやったというのに、笑いの吐息を吐き出し過ぎて苦しそうな目の前の女はニヤニヤとした愉悦の顔を崩さない。ホンっとイイ性格してるよなアンタ。

「くふっ、そうか。まぁ当人が否定するというのであれば、それが真実なのであろうな――ならば今の流れは渡りに船という事よ」

珍しくあっさりと自分の意見を引っ込めたと思ったら、意地の悪さが透けて見える表情でなにやら不穏な事を言い出した。
身構えるオレに対し「何、そう大したことでも無い」と、言って彼女はその濃藍の髪をゆったりとかき上げた。
「貴様と対談している間、あの男も暇を持て余すだろうと思うてな。側仕えに相手をしてやる様に命じておったのよ」
「……広間でアンタの側に控えてた、あのイケメンか？」
「いけめん、と言う異界の言葉は知らんが、まぁそやつよ。アレも中々に苦労人でな、半吸血鬼（ダンピール）ということで母と肩身の狭い思いをしながら北方で暮らしていたらしい」
……それが、今じゃ女公爵の側仕えか。
大抜擢じゃねーか。そんな苦労人で頑張り屋なのであろう青年なら、アイツとの相性だって悪くないだろ。余程明確に喧嘩を売られない限り、問題は起こらなそうだけど……。
「拾ったのはつい一年程前でな。故郷の村が汚泥共に焼かれたと言う事で、母共々難民として魔族領に流れて来たのを見出したのよ。我が事ながら、良い拾い物をしたと思うている」
そこで言葉を一旦切ると、女公爵はさっきの意見と共にひっこめた笑顔を取り出し

て、ニヤリとした形で口の端に乗せた。
「素養も高いが、それよりも意気の強さが良い。曰く、『母と己を救ってくれた英雄と、何れ肩を並べて戦いたい――叶うのなら、寵を授かりたい』だ、そうだ。健気であろう？」
……おい、おい。
ちょっと待て。話の流れからして不穏な予感がしてきたぞ。
「猟犬の相手を命じたのは確かだが、それ以前に当人からの強い希望があってこそよ。恋焦がれる英雄が目の前に現れたのだ、それもまた当然の反応だとは思わんか、なぁ？」
待てって言ってるだろ！　つまり、なんだ――！
「――あのイケメンは男装……女の子だったって事か!?」
「我が側仕えが男であると明言した記憶は無いな」
白々しい事言いやがって、ふざっけんなよお前……!!
ということは、今、アイツはそういう感情を向けてくる女と二人っきりって事だ。
なんだ、それ。
駄目だ。
そう思う理由なんて知らない、相手の経緯もこの際どうでもいい。
とにかく駄目だ、嫌だ。
くそ、なんだよコレ。なんで此処までイラついてんだオレは。

「アレも己の出自や身体の面で悩んでいるでな、貴様の友人に受け入れるだけの度量があるというならば、この身としても側仕えの番となるのを認めるに吝かでは無い」

自分の感情に困惑していた処に耳朶へと滑り込んで来た、その言葉に。

思考が一瞬で白熱した。

カッとなって、先程よりも荒々しく立ち上がる。激情に伴って漏れ出た魔力は、先の広間で放出されたものの比じゃない。

「駄目に決まってんだろ！　アンタが認めてもオレは良くねーんだよ!!」

「ほう、何故だ？　よもや『友人』の慶事を祝福出来ぬほど狭量ではあるまいに」

……ッ！　此処でさっきのやり取りを言質として取り出してくるのかよ、本当に厄介な女だな……!!

聖女の聖気混じりの魔力の放射を間近で受けても、微風を受ける様に涼し気に眼を細めた吸血鬼（ヴァンパイア）の女王には欠片も動揺した気配は無い。

苛立ち混じりの感情に押され、抗弁を続けたくなるが……今はそれよりも、アイツの処に向かうべきだ。

女公爵とこうやって話している間にも、アイツがあの側仕えの娘と良い感じになってるかもしれない。そう思うと、腹の底から経験した事の無い焦燥感とドロっとした何がが溢れそうになる。

オレは無言で公爵に背を向けた。
自分でも制御できない苛立ちに、自然と歩みも荒々しくなる。
特使として交渉すべき相手に対して悪手にも程がある対応だけど、この女の事だ、全部理解した上でやってる事だろう。なら、こっちも相応の態度で返しても問題無い筈だ。
ジリジリと色々な感情で焦げ付いた頭で、屁理屈にもならない理論武装で行動を正当化して。
足取りに負けない位に荒っぽく貴賓室の扉を開けたオレの背に、最後まで楽しそうな女公爵の声が掛けられた。
「アレはこの城に勤め始めた際、中庭の薔薇園を見て酷く感激してな――自身の英雄にも是非見て貰いたいと夢見心地で語っておった」
何でもない事の様に、シレっとした声色で告げられた言葉には反応せず、ドアに八つ当たりする様にして扉を閉める。
――やっぱり、オレはあの女が苦手だ。
言わずもがなの結論を出して、以前の記憶を頼りに足早に中庭へと歩き出したのだった。

――《起動（イグニッション）》

相棒を戦闘レベルまで起動すると、両腕に漆黒の装甲が展開され、その表面を魔力導線が赤光を伴って走り抜ける。

「ああ、その恐ろしき呪装……！　やはり、君は……！」

構えを取った青年と静かに向かい合うと、酷く感激した様子の視線が鎧ちゃん――だけでなく俺にも突き刺さって若干困惑する。

初対面って話なんだが……マジで俺達って会ったことないの？　明らか見知ったモンを見た反応なんですけど。

実際、俺には見覚えが無いし、彼が嘘を付く意味も無いだろう。俺の外聞とか鎧ちゃんの逸話だけ知ってる感じなのかも。

しっかし、シアやリアにこの類の視線が向けられてるのはしょっちゅう見かけるが、自分にこう、キラキラした眼を向けられるのは新鮮な体験だ。ちょっとむず痒い物があ

るねコレ。
　悪い気はしないが、はよ始めるとしよう。鎧ちゃん使うと地味に出血系スリップダメージが入るので、長く使えば使う程、後でシアに怒られる時間が伸びるの（白目
「そ、そうだね、強請った身でありながら待たせてしまった」
　構えも解いてしまって乙女みたいに両の手を組み合わせていたイケメンは、我に返った様子で慌てて再度構えた。
　向かい合った状態で、最後に確認を行う。
　互いに攻防一手のみ、広範囲や貫通力のある攻撃は中庭が荒れかねないので無し。以上でおk？
「うん、それで構わない……かの猟犬に挑む身だ、僕から行かせてもらうよ」
　どこか緩んだ表情で此方を見ていた先程と違い、貴公子然としたキリッとした感じになると青年は僅かに前傾姿勢になり――放たれた矢の如く向かってきた。
　身に纏うケープが翻り、足元に長く伸びる影と一体化して曲線を描いた軌道で強襲してくる。
　影使いか。吸血鬼（ヴァンパイア）としてはスタンダートな能力だわな。
　影の刃が此方の肩口を狙って伸び、半テンポずらす様に伸ばした指先が手刀の形を作って槍の如く撃ち込まれた。

おぉ？　影の方も結構な鋭さだけど、肉弾戦の方は更にキレてるな。

自慢じゃないが、普段ガンテスやミラ婆ちゃんの技をしょっちゅう見てるので、技の練度・精度を見る眼だけは無駄に肥えている。その俺から見ても丁寧に積み上げた修練が伺える一撃だ。

でも、ちょっと粗いな。勢いが良いのは買いだが、多分、本格的な訓練を初めて何年も経って無いんじゃね？

まぁ戦力の殆どが鎧ちゃん頼りの借り物野郎が何偉そうに能書き垂れてんだ、って言われると全くその通りで反論不可能なんですがね！

そんな自虐を挟みつつ、強化された知覚で捉えた影を《流天》で捌き、彼の手刀の軌道の前に置いてやる感じで逸らす。

青年は驚愕の表情を浮かべるも、ギリギリのタイミングで逸らしてやった影を咄嗟に切り返す事も出来ず、二種の時間差攻撃は互いに激突する結果となった。

彼が自身のケープに一瞬視界を塞がれたのを見逃さず、潜り抜ける様にして斜め下から踏み込む。

後方に跳躍して距離を取ろうとした様だが、一瞬だけ加速用に両肘から魔力噴射してその跳躍にピタリと張り付いていくと、その細く、白い頤（おとがい）に向けてコンパクトに右のフックを打った。

――ホイ、終わり。

驚いた儘の顔に触れる直前で拳を止めて、終了だ。

きっちり当てる必要も無いので寸止めで済ませたけど……えぇやろ？　このイケメン君、穏やかで良い奴っぽいし、しっかり振り抜いてないからノーカンとか言い出す戦闘民族じゃ無いだろうし。

あっさりと決着がついてしまった事が余程ショックだったのか、青年は呆気に取られた様子だ。内股でペタンと座り込んでしまった。

「――やっぱりだ、あのときと、同じ……僕の……」

……大丈夫か？　俯いてなんか呟いてるし、ひょっとしてガチで落ち込んでたりする？

顔を覗き込みながら装甲を纏ったままの手を差し出しだしてやると、我に返った様子で慌てて俺の手を掴んでくる。

「だ、大丈夫だよ。すまない、少し呆けてしまったみたいだ」

おう、そうか。それなら良いんだが。

もうちょいお前さんが弱かったら少しは手加減できて、良い勝負が出来たのかもしれんけど……基本、俺ってば素だと雑魚なので手を抜くっていう行為が苦手でなぁ。

鎧ちゃんの起動率などを絞って出力に制限を掛ける事自体は可能だが、実際に動くと

きはその範囲で全力だったり本気になりがちだ。油断と縁遠いという点だけは数少ない長所だとは思うんだが。

青年を引っ張り起こして、手を引いて噴水の縁に二人で腰掛けた。

涼やかな水音に耳を傾けながら、穏やかに会話は進む――といっても、青年のほうが少し興奮した様子だ。

「いや見事だったよ、主に仕える様になって一年、僕なりに鍛錬を積んで来たつもりだったが……やはり教国の誇る英雄殿が相手では手合わせの体にもなっていないね……少々歯がゆいよ」

英雄って誰やねん、一緒に来た聖女様の事やろソレ……っていうか訓練初めて一年かよ、それであの腕前とか女公爵様が目を掛けるだけあるな。隊長ちゃん――知り合いの転移者に匹敵するレベルの才能かもしれん。

将来性も加味すれば、大きな戦いが起こった際に頼もしい味方になってくれそうだ。そんときゃ宜しく頼むよ。

「――ッ、あぁ、そのとき迄にもっともっと強くなっておくよ、そうなったら共に戦おう！」

おうおう、良いね。一緒に邪神とその腰巾着共をぶっ飛ばしてやろうず。

相手は半吸血鬼（ダンピール）――半分とはいえ、長命種だ。見た目は同年代だが、実際の処、年齢

的に同じとは限らないだろう。
それでも、外見と話した感じからして年の近い世代に感じるのは確かだ。考えてみると、この世界じゃ同性の友人は年上の奴が結構多いんだよね。ウチの聖女様達は色々と例外なので除くとして。
同年代（と感じる）男友達は貴重だ、多少所属してる御国が離れてはいるが、これからも仲良くやりたいものである。
「そ、そうかい？　君がそう言ってくれるなら僕としても嬉しいよ」
蜂蜜色の髪の一房をくるくると指先で弄び、頬を染めてはにかむ青年は、先刻も思ったが貴公子風のイケメンっぷりとのギャップでえらく可愛らしい。元の世界の高校（ガッコ）にいたら女子の人気を総ナメにしそうやな……一部男からも人気出そうだけど。
噴水を背景に、互いについて軽く語り合う。
出来たばかりの友人との会話は、終始和やかに進み――ややあって、青年の方が思い切った様子で切り出してきた。
「……その、良ければ僕の事はクイン、と呼んでくれないか？　魔族の一員として通称は主から与えられたのだけれど、どうにもそちらは慣れていなくてね」
……いや、ええんか？　魔族って本名めっちゃ重視してるやん。親と兄弟姉妹以外だと、余程親しい奴以外には教えないって聞いてるんだけど。

「君になら構わないよ――それに、今しがた語ったばかりだろう？　以前は魔族領では無く北方に住んでいたんだ。その頃は魔族の名に関する風習には馴染みが薄くてね、今更さ」

そっか。まぁ、本人がそう言うなら俺に否は無いわ――よろしく、クイン。

「――うん！　よろしく！」

半吸血鬼（ダンピール）の彼をこう評するのもなんだが……まるで向日葵みたいな笑顔を咲かせて、クインが改めて掌を差し出して握手を求めて来る。

俺はそれに快く応じて、互いにしっかりと握手を交わし――そこで未だに俺が両の手に魔鎧の装甲を纏わせたままなのを、新たな友人は訝し気に問いかけて来た。

「……君の武装は召喚型だろう？　どうして身に着けたままなんだい？」

あ、これね。

うん、最初に言ったけど、鎧ちゃん使うと出血がデフォルトだからさ、解除するとその場を結構な量の血で汚しかねないのよ。

後でシアに合流して回復&浄化してもらうまで、このままでいいかなーって。魔力導線の励起は切ってるし、装甲展開してるだけならダメージの悪化は無いから。

「……つまり怪我を放置してるって事じゃないか、駄目だよそれは！　今すぐ解除しておくれよ、止血くらいなら僕がするから！」

む？　クインは半吸血鬼（ダンピール）なのに治癒系の魔法を修めてたりするのか？　種族的に相性が悪くて消耗デカそうだが……。

「回復魔法は習得していないけど、”血”に関する事なら吸血鬼（ヴァンパイア）に連なるものなら色々と小技が利くものさ――とにかく、早く傷を見せて」

心配そうに眉根を寄せて、グイグイと押してくる彼に押される形で。

俺は一つ頷くと、鎧ちゃんの装甲を解除したのだった。

中庭にある薔薇園に向かう途中、抑え目ではあるが攻性に特化した魔力の波動を感じ取ったオレは、急ぎ足を小走りに変えて城内を急いでいた。

なんで外交相手のお膝元であの鎧を使ってんだよあの馬鹿は……！

目を離すと直ぐにこれだ。無茶をしない様に見張るという意味でも、トラブルを招き寄せない様に監視するという意味でも、やっぱりオレが見ててやらないと駄目だわアイ

ツ。

ともあれ、アレを使ったのなら何時もみたいに装甲を纏った部位は傷だらけだろう。さっさと合流して癒してやらないと……。

そんな風に考えながら、擦れ違う城の者達と会釈を交わしつつ進み……見事な庭園となっている中庭へと辿り着いた。

……前にも何度か見た事があるけど、見事なもんだよな。練武場染みた聖殿（ウチ）の中庭とは大違いだ。

あとで改めてじっくりと鑑賞したいけど、今は後回しだ。色とりどりの薔薇が咲き誇る美しい園の中を、見慣れた姿を探しながら歩く。

やがて薔薇園の中心にある小さな噴水が見えてくると同時、そこの縁に腰掛けた何だか仲睦まじい様子のアイツと男装の麗人――女公爵の従者の姿が見える。

……ッ、ちょっと近くないか、なんであんなにくっ付いて……って、何してんだオイ!?

アイツが差し出した腕に、従者の娘が静かに顔を、唇を寄せる。

向かい合って座っているとはいえ、まるで貴公子が貴人の手の甲に口付ける様な光景だったが、相手はウチの駄犬である。

従者の唇とアイツの指の間で、何かを舐めとる様に彼女の舌が蠢いたのを見て、ここ

に来る間に多少は冷えた筈の感情に再び火が付いた。
「――おい、もう会談は終わったんだ、部屋に戻るぞ！」
この場での自然な会話の切り出しも、従者の娘への挨拶もすっ飛ばして、何はともあれ二人を引き剥がす様に馬鹿たれを引っ張る。
おぉ？　何時の間に来たんだお前、なんていうすっとぼけた友人の言葉と、「あ……」なんて呆けた声を出して名残惜しそうに唇に指を這わせる従者の姿に、なんとも言い辛いモヤっとした気持ちが募った。
広間のときにも注意したけど、吸血鬼（ヴァンパイア）の口周りに対してもっと注意して対応しろよお前は!?　腕からとはいえ、なんであっさり直に血を飲ませてんだ！
「悪いけど、コイツの腕の治療をしなきゃならないんだ、後でまた挨拶させてもらうよ」
「あ、はい……分かりました聖女殿……じゃ、また後でね？」
どこか夢心地、といった風情で柔らかく笑う彼女に、おう、後でな。なんて呑気に返答する馬鹿を引き摺って、さっさと中庭を後にする。
「……随分と仲良くなったな……此処であの鎧を使った件も含めて、色々と聞きたい話があるんだが？」
気持ち低くなったオレの声に、やや怪訝そうな顔をしつつも馬鹿野郎は朗らかに応えてきた。

――おう、ちょとだけ手合わせをな……まぁアレよ、新たな友人って奴よ。お前が来るまでに腕の傷も止血してもらったし、イケメンだけど良い奴だから仲良くできそう。元の世界で見かけたら腹立つくらいのイケメンだけど。

……距離が近いとは思ったけど、案の定、相手が女の子だって気付いてねーのかよコイツは。

さっきまでの行為も止血の為だって疑っていないみたいだけど、あの娘の様子からしてどう見てもそれだけじゃ無かっただろうに。

勝手に苛立って引き離した立場ではあるが、未だオレとは自己紹介も済ませていない彼女の事が気の毒になった。

いやでも、逆にこれは好都合なのか……？

って待て、そもそも何の都合が良いってんだ、女公爵が変なことを言うから思考が妙な方向に引き摺られてるぞオレ、しっかりしろ。

胸のモヤモヤは薄れても、結局別の悩みで煩悶しながら、朴念仁で馬鹿ったれで――けれど頼りになる友達の腕を引っ張って進む。

繋いだ掌は、転生前の自分と比べても厚くて、ゴツゴツしていて……なにより傷痕だらけだった。

止血してもらったと言っていたが、処置の終わっていない傷を一つ見つけ……なんと

なく、回復魔法をかける前に、かみつく様にして唇を這わせてみる。
「……別に美味くもなんともないな、当たり前だけど」
いや、何してんのお前。なんて呆れた様子で聞いてくる鈍ちんに、「良いだろ別に。なんとなくだよ、なんとなく」なんて、オレは笑い返した。
今度こそ魔法で傷を癒すと、唇に微かに残る血の味を一舐めして。
繋いだままの手を再び引いて、歩き出したのだった。

帝国編
祭りに向けて

「――此方には居なかった。そっちはどうだ?」
「こっちも見つかりませんでした。猟犬殿にも困ったものですねぇ、子供じゃないんだから……」
「彼らしいと言えばらしいがな……一応、弐ノ院の方も確認しに行くぞ」
声の主である二人の僧の姿が視界から消え、その足音が遠ざかっていくのを聞くと、俺は天井の隅に張り付いていた状態から静かに床へと着地した。
うむ、此処はもう駄目だな。他の人も探しにくるかもしれん。
……聖殿から出る事が出来れば一番手っ取り早いんだが、出口はがっつり見張られてたしなぁ……壁を越えるにしても人目が有り過ぎる。やるとしたら最低でも日暮れまで待たないとアカン。
食堂の厨房にでも行ってみるか。芋の皮むきと薪割りを交換条件に、料理長に匿って

貰えるように交渉してみよう。
天井に移動する際に通路の隅っこに置いておいた木箱を回収し、頭からすっぽりと被って身を隠すと、周囲に気を配りながら移動を開始する。
やっぱり木箱だと嵩張るな……地味に重いから被ったままの中腰移動も疲れるし。
置いていくべきだろうか。これが段ボールだったら携帯性も高くて完璧だったんだが。
そんな事を考えつつ、気配を殺してコソコソと中央区の渡り廊下――の、裏手を進んでいたのだが。
「……なにやってんのよアンタは」
心底呆れた様な声が背後から掛けられ、暫し硬直した後、恐る恐る振り返った。
銀髪の髪をサイドで括った騎士服の少女……副官ちゃんは、腰に手を当てて完全なる馬鹿を見る目付きで中腰の俺を見下ろしている。
お、俺のスニーキング技術を容易く見破って来るだと……!?
「ただ木箱被って中腰移動するのが隠形法なワケがあるか。世の斥候系の技能持ちに土下座しなさい」
ばっさりと此方の驚愕をぶった切ると、副官ちゃんは俺から木箱を取り上げ、襟首をむんずと掴んで来た。

「ほら、さっさと行くよ。全く、アンタ以外はとっくに全員集まってるっての」
手間かけさせないでよねー、と面倒くさそうに言う彼女にずるずると引きずられながら、必死こいて手近な柱にしがみついて抵抗し、抗弁を試みる。
嫌でござる！　行きたくないでござる!!　外交担当のシルヴィーさんと各国調停役だったトイルのおっさんが同時に呼び出してくるとか絶対国絡みの厄介事に決まっとるやん！
「そんなの言われるまでも無く分かっとるわ。私は立場上、無視なんて出来る訳無いでしょ――アンタだけ逃げるとかムカつくからふん捕まえに来たのよ」
オイィ！　良い笑顔で堂々と道連れ宣言したよこの娘!?
「なんとでも言いなさい。そもそもレティシアとアリア様も呼び出されてる以上、二人が国外に行く可能性だってあるでしょう。そうなればアンタもどうせ付いて行くでしょうに」
そらね、行きますよ当然。でもそれはこう、アイツら専属の傭兵――ひいては護衛として同行するって形でしょ。
トイルに呼び出された時点で俺に国に関わる何かをやらせる気なのは確定じゃないですかヤダー！
駄々をこねて柱に齧りつくが、副官ちゃんは無情にも力づくでそれを引き剥がして再

び俺を引き摺って歩き出す。
「ほら、いい加減自分の足で立って歩きなさい。私、参ノ院には殆ど出入りした事ないからあんまり中の道順とか詳しくないのよ」
必死になって行きたくないと主張してる人間に道案内させるとか、アンナさんは鬼か何かでいらっしゃる？（真顔
やかましい駄犬、と半眼の副官ちゃんに後頭部をチョップされつつ、流石にこの状況ではどうしようもないと観念した俺は、ぶちぶちと文句を垂れながらも参ノ院へと足を向ける事になった。
……行きたくねぇなぁ、本当によぉ！

「ふむ、思ったより大分早く捕まったな……騎士アンナ、見事なお手並みだ」
参ノ院、共同執務室。
枢機卿が集まって意見交換をしつつ、議題に上がった書類などを同時進行で処理する為に作られた部屋に入室すると、全員揃ってる、と聞かされた通りに部屋には数人の先客がいた。

コの字に配置された執務机の中央奥部分、そこに陣取った神経質そうに顰めっ面をした片眼鏡（モノクル）の壮年男性の言葉に、副官ちゃんが「恐縮です」と軽く頭を下げる。

最高位を示す赤いカソックに身を包んだその人物は……まぁ今更言う迄もないが、枢機卿の一人、トイル＝ストラグルその人だ。

最近、次代の教皇の話をさりげなく現教皇（ジイさん）から振られることが増えて、それを死ぬほど嫌がってる苦労人でもある。

俺がいうのもなんだけど、それって前に爺さんとオセロで勝負したときボッコボコに負かした事への意趣返しだと思うぞ。

最初は何時もみたいに奥ノ院で俺と教皇の爺さんで遊んでたんだけど、偶々トイルがその場に書類片手にやってきたんだよね。

そんで、爺が気紛れに彼を誘い、珍しい事にトイルもそれに乗った。

……あとはまぁ、言うまでもない。そこから始まったのは盤上遊戯の場を借りた蹂躙である。

普段ストレス掛けられてる分、発散するように容赦ない打ち筋だったからなぁ……盤面を真っ白にされて爺も燃え尽きた灰みたいに真っ白になっとったし。

いやぁ、アレは酷かった。なんて思い出してしみじみとした気分になっていると、執務室の先客である聖女二人の姉（あに）の方が何故か唇をとがらせて副官ちゃんに面白く無さ

そうな眼を向けていた。
「……他の探してる人達が空振りに終わってるのに、なんでお前はそんなに早くコイツを見つけられるんだよ」
「よく訓練から逃げ回ってる隠密行動が得意な部下がいたから、見つけるのに慣れてるってだけよ。しょーもない事で嫉妬しないの」
「し、嫉妬とかじゃねーし」
「もー、レティシアはちょっと余裕無さ過ぎ。ここはこんなに早くにいちゃんを見つけて来たアンナに感謝しておこうよ、下手すると日没まで見つからないなんて可能性だってあったし」
　妹の方（リア）も加わって三人が仲良くそんなやり取りをしていると、この場の最後の一人であるマゼンタの髪を伸ばした派手目の美女――三枢機卿の紅一点であるシルヴィーさんが揶揄いをたっぷり含んだ声色で混ぜっ返す。
「さり気なく隠れてそうな場所にアタリをつけるアンナちゃんも、慣れてるってだけじゃなく何気に彼の事分かってるわよねぇ……あー、やだやだ、若いコの青春模様を見せられてお姉さんお酒飲みたくなっちゃうわぁ」
　トイルの左手側の執務机から飛んだ言葉に、副官ちゃんが欠片も動揺を見せずに否定を返した。

「勘弁して下さいよ枢機卿(カーディナル)……というか、普段から何しなくても飲んでるじゃないですか」
「酒は百薬の長にして命の水よぉ、飲むために存在しているものを飲まないのは摂理に反するわぁ」
何気に仲が良いらしいシルヴィーさんと副官ちゃんが、互いの立場に比べれば遥かに気安いやり取りをしていると、参ノ院の主が仏頂面を崩さずに同僚に釘を刺して来た。
「仕事中くらいは自重し給え、トランカード枢機卿……そろそろ本題に入って良いかね？」
最後の一言にシルヴィーさんが肩を竦め、他の面子は自然と居住まいを正し。
場の空気が幾分か真面目なものになったのを確認したトイルは、今回このメンバーを集めた本題を語り出す。
「さて、其処の酔っ払いは勿論だが、聖女の御二方も断片的には聞き及んでいると思われる——前々から帝国と協議していた、大規模な戦勝記念祭の開催がいよいよ近づいている」
尤も、開催地である帝国は既に随分と前から準備に余念が無かったようだがね、と珍しく眉間に寄せた皺を苦笑の類で緩めて彼は手元の分厚い書類の束を指先で叩いて見せた。

この場にいない枢機卿最後の一人であるスカラは、既に少数の使者と共に帝国入りして共同開催の為の会議を現地で行っているらしい。

大森林から帰還後、お土産に界樹周辺の土を渡したら大喜びで調査するってはしゃいでたのに、即行で国外行きか。不憫やなぁ。

しかし、戦勝記念のお祭りとな。そういえば以前、副官ちゃんがそんなことを言っていたような……。

月日を考えると記念日、と言うにはやや間が空いてる気もするが、トイル曰く、戦後処理と各地の一定ラインの復興を優先した結果、開催が今となったという事らしい。

そりゃそうか。都会やデカい都市でお祭り騒ぎの一方で、僻地じゃ復興物資が足りなくて日々の暮らしにも困窮してます、じゃ反対する奴だって大勢出て来るだろうしね。

この二年、小さなお祭りや祝い事、パレードなんかは世界各地で各々に開催していたみたいだが、大々的に周知してぶっちぎりの最大規模の祭りにするみたいだ。

「あー……そういえばそんな話もあったな……アリア達が霊峰に向かう前くらいだっけ？　オレ達にも話が届いたの」

「概要だけ聞いた話だと、規模が大きいから準備期間も相当に長くなりそうだったけど……帝国側が前もって準備してたってどれくらい前からなんだろうね」

金銀（シアリア）が顔を見合わせて小首を傾げ合っていると、疑問に答えたのは書類を片手にした

シルヴィーさんだった。
「本腰入れた準備を始めたのは猟犬クンが帰って来て少し経った辺りからじゃないかしらぁ。帝国としても、自国で開催する戦勝祭に人類種の旗印だったレティシアちゃんとアリアちゃんは絶対に招きたかったでしょうけど、教国的には以前は突っぱねる気だったのよねぇ……現状なら、問題無く承諾を貰えるっていう皇帝陛下の判断だと思うわぁ」
「あ、私が本国にコイツが帰って来たのを報告した後、陛下が『これで幾つかの案件が片付いた』って笑ってたので、今回の件も間違いなくそれに含まれていると思います」
副官ちゃんの追加情報を切欠に、俺に視線が集まる。
注目されたのはタイミングが重なっただけだろうが、折角なので俺のほうからも疑問をあげてみた。
以前は突っぱねる気だったと仰ってますが、なんぞ問題でもあったんですかね？　二人の体調でも思わしくなかったとか？
俺的には気になって当然の部分を質問すると、珍しくシルヴィーさんがなんだか意地悪気な表情を浮かべて片頬を吊り上げた。
「そんなの決まってるわぁ。貴方g「そ、それはもう解決したから！　今は話に上げなくても良いんじゃないかなうん！」

おぉっと、リアに割り込まれてカットされてしまった。
俺との間に飛び出す様にして話を遮られ、口を噤む酔いどれ枢機卿殿。
その御顔は強引に言葉を中断させられたというのに妙に楽しそうだ。珍しく素面なのに良い肴を見つけた、と言わんばかりの表情はどうかと思う。
ともあれ、主題は分かった。トイルが軽く咳払い一つして、皆の言葉を纏めるように引き継ぐ。
「うむ……時期的な難しさと招待必須の賓客、両方の問題がこの二年という歳月を経て一気に片付いたことで、戦勝祭開催と相成った訳だ。時期的にも豊穣祭と被るので、併せて行うと考えれば差し詰め《大豊穣祭》といった処かもしれん――正式な名称は帝国と協議して数日後に決まるがね」
片眼鏡（モノクル）の位置を指先で調整すると、次期教皇――本人クソ程嫌がってるけど――と各国から目されている男は、眉間に皺の入った表情のまま、呼びつけた四名の内、聖女様二人に視点を当てる。
「主導は開催地である帝国だが、聖教国（こちら）も少なくない人手と資金を出資している――故に、猊下を筆頭に我ら枢機卿も日程をずらして順に出席する予定だ。聖女の号を持つ貴女方にも帝国に顔を出して頂きたい」
今回の帝国での大祭が成功すれば、年度ごとの一大イベントとして定着する可能性も

ある。

その場合は帝国と教国、交互に開催地を変える事になるので、そこら辺を踏まえて是非ともシアとリアには両国の友好アピールの一助となって欲しいと彼は言葉を結んだ。

要は開催の挨拶とかの式典に参加しつつ、適度にお祭りを楽しんでその様を民に見せてやってくれ、という話だ。

「了解、ストラグル枢機卿。帝国に向かうのも久々だし、折角だからその祭りとやらも楽しんでくるとします」

「戦争とか関係のない、もっと和やかな目的で行ってみたいとはボクも思ってました！二年で帝都がどう変わってるのかも楽しみだなぁ」

二人が特に悩む事もなく快諾すると、トイルは「うむ、よろしくお願いする」と顰めっ面のまま、どこか満足そうな声色で応え……いよいよ俺と、隣の副官ちゃんに視線を向けた。

遂に俺の番が来ちゃったかー……何を言われるのやら。あぁ、聞きたくねぇなぁ……！

警戒しながら彼の言葉を待っていると、俺の緊張など知らんと言わんばかりにトイルは淡々と口を開く。

「さて、猟犬殿。実質教国所属とはいえ、正式な役職を持たない君をこの場に呼びつけた

のは他でもない――大祭で幾つか開かれる予定の催し物、騎士アンナもそうだが、その一つへと関わって欲しいと帝国の方から要望があったのだ」

帝国からのアプローチか……皇帝陛下からの差し金か、はたまた隊長ちゃんあたりが推薦なんてしちゃったりしてくれたのか……。

内容にもよるが、どっちかだろうと適当にアタリをつける。一体何やらせるつもりなんや。

「うむ、一種の武道大会――」

全速離脱ぅ!!

不吉過ぎる単語が聞こえた瞬間、俺は全力で共同執務室の扉へと跳躍した。

「逃がすかぁ駄犬!」

俺の動きを読んでいたのか、即座に反応した副官ちゃんのキレの良すぎる低空タックルで足を捉えられる。

やめろぉ！　ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ!!　絶対関わらねーぞ！　参加なんてしないからな!!

「そんなん私だって出たく無いわぁ！　でもこれ絶対陛下の案だから断れないのよ！死なば諸共だぁっ！」

冗談じゃねぇぞ！　これ下手したら魔族領あたりから《災禍》の連中がウキウキで参

加してくる奴やん！　一人でも御免なのに連戦とか絶対にノゥ！

唯一自由な上半身を使って必死に這いずり、扉という名の平穏への入口へと進もうとする俺と、行かせまいと此方の腰に抱き着く様にして動きを封じようとする副官ちゃん。

後から思い出すと我ながらアホ極まりない光景だったと思うんだが、今現在はそんな事を思う余裕なんぞ無かった。

「死ぬほど見苦しいなオイ」

「うーん、にぃちゃんはやっぱり嫌がるよね、そういう力試し的なの」

ギャーギャーと叫びながら執務室の床の上でドッタンバッタン大騒ぎを続ける俺達を見降ろして、シアとリアの口からめっちゃ他人事です、と言った感じの無情な感想が零れる。

そらお前さん達は今回のメインＶＩＰだもんな！　聖女という肩書も加味すれば寧ろ出ようとしても止められる側ですよね糞ァ！

シルヴィーさんは執務机に突っ伏して無言の爆笑中。トイルは頭痛を堪えるように指先でこめかみを撫で擦っていた。

「……両人とも、早合点をし過ぎだ。今回、猟犬殿に求められているのは大会開催時の警備役と実況解説のゲスト出演――そもそも、大会規定的に君が出場出来るとは思えん」

呆れと疲れが半々で滲んだ声に、俺と副官ちゃんの動きがピタリと止まる。
なんでも、武闘大会とやらの開催場所は、帝都にある旧闘技場（コロッセオ）跡地。
邪神がこの地にやってくる前は盛況であった闘争に関する見世物、催し物が行われていたその建物を修繕・改修して使うらしい。
戦後初めての試みというのもあり、安全に配慮して舞台となる場所と客席を結界で隔てるにしても、どれだけの人員や魔道具が必要になるのか未知数な部分がある。
なので、戦人達のカテゴリでいう人外級――早い話が想定や見積もりを容易くぶっちぎって来そうなヤベー奴らは基本、今回は除外。各地の将来期待の戦力達のアピールの場、という形にしたいのだそうだ。
当然、鎧ちゃんがメインウェポンの俺は出場不可――教国だと嬉々として修練になると言って参加しそうなガンテスなんかも駄目だな。ミラ婆ちゃんはそもそも絶対出ないだろうし。
帝国も隊長ちゃんはアカンし、なんなら《刃衆（エッジス）》顧問やってるネイトも引っ掛かりそう。
魔族領なんて幹部連中は全滅だ。これ、当の《災禍の席》から凄いクレーム来そうだな。帝国と身内の間に挟まれた《亡霊》の胃がまたお労しいことになってしまう（確信
明確な数値とかがある訳では無いので、その辺りの判定は魔力を感知したり実際の動

きを見てみるしかないのだが……副官ちゃんならギリッギリのグレーゾーンでＯＫになるんだろうか？　正直怪しい気もするが。

まぁ、帝国も開催地である以上、自国の者を優勝させたいだろうからね。規定にある限界ギリギリ引っ掛からない処で彼女に白羽の矢が立ったのかもしれん。

単純だけど有効な手だよな。ちゃんと規定内に収まった出場者で開催出来るのなら、自然と副官ちゃんが優勝候補になるし。

自分が出場しなくて済むと聞かされて安堵し、冷静になった頭で聞かされた内容を反芻していると。

気の毒な事に出場が確定してしまっている副官ちゃんが、同じく考え込んでいた様子からふと顔を上げた。

「――よし、このアホ犬も鎧抜きで出場させましょう。私が推薦します」

第一声がそれかコラァ!?　人外級を除いても世の一流処が集まるのは分かり切ってるでしょ！　死ぬわ!?

というか、俺を何が何でも巻き込む必要は消えたやん。そっちの隊長ちゃんを筆頭に、教国（ウチ）の筋肉ゴリラやら最悪、《魔王》やらと試合する可能性は無くなったんだからさぁ。

「それはそうなんだけど……なんか納得が行かないわ……陛下と一度お話してみようか

な」

髭はやめたれよ、下手するとエルフの一件以降、また剃り落されてる可能性があるし。いい加減皇帝陛下の威厳が目減りするわ。

不満そうにぶーたれる副官ちゃんと一緒にいい加減床から立ち上がると、咳払いと共にトイルが返答を求めて来た。

「それで、どうなのかね。あくまで向こうも要望の一つとして出してきた案件だ。断るとしても特に問題は無いが」

んー……あちらの皇帝の事だから、傭兵を雇うっていう形で報酬も出してくれますよね、多分。

俺のそんな言葉に、笑いの波から解放されたらしいシルヴィーさんが反応する。

手元の書類に丁度情報が記載されていたのか、目を通しながら報酬内容について軽く教えてくれた。

「それなら、この間やり取りした書簡に載ってたわぁ。結構な枚数の金貨と、猟犬クン用の公式の場での服装を仕立ててくれるって話よぉ――礼服とかじゃなくて、《刃衆（エッジス）》の隊服みたいな戦闘衣裳も兼ねた物らしいから、お姉さん的には受けるのはアリだと思うけどぉ」

おぉ、《刃衆（エッジス）》の外套（コート）と鎧の組み合わせみたいなやつかな？

アレいいよね。機能も文句なしに高いんだろうけど、それでいてカッコイイし。

隊員によって外套下の装備は個人差があるみたいだが……俺的には副官ちゃんやトニー君みたいな軽装型が良いかなぁ。やっぱ重厚な金属鎧だと鎧ちゃんを使うのに不便そうだしね。

ちょっと興味を惹かれる報酬内容に食い付いていると、何故かシアの目付きがスゥッと細まって「なんだか嫌な予感がする」なんて言い出した。

なんやねん、予感って。服を仕立ててもらうだけでなんぞ面倒事でも起きるってのか？　皇帝の紹介ともなれば、面子もあるから変な事にはならんと思うんだが……。

「いや、そういうんじゃなくてな。なんかこう、オレの勘に引っかかるというか……受けるのは構わないけど、仕立てのときにはオレかアリアも同席するぞ。スケジュール的に両方は難しいかもしれないけど、なんとかどっちかの予定は空けるから」

ええ……聖女の勘とか馬鹿にならんからちょっと不安になって来たな……。まぁ、一緒に行く事自体に否は無いんですけど。

姉貴(アニキ)はこう言ってるけど、アリア君的にはどうなのよ？

「ボクは別に変な予感なんてしないけどなぁ……でも、にいちゃんと一緒に帝都観光はしたいな。時間が合えば一緒に出てみようよ」

「ちょっ、オレも行くぞ！　その仕立ての一件は別としてじっくり観光はしてみたいか

らな！」
「うん、でも先約はボクだから。言い出したのはこっちが先だしね！」
「最近、妹が抜け目なさ過ぎる……！」
俺と副官ちゃんの大騒ぎが終わったと思ったら、今度はこっちの二人がきゃいきゃいと騒ぎ出してしまった。
あー……とりあえず、裏方というか警備員の方は受けます。ただ、解説の方は鎧ちゃん無しの俺だと普通に試合内容が眼で追えない場合もあるので、遠慮させて下さい。
話が中座しまくるのも申し訳ないので、トイルに手早く返答だけはしておく。
片方しか受けられない分、それで報酬が差っ引かれるのはしゃーない。そこら辺は向こうさんが良い塩梅に調整してくれるやろ。そこは無条件で信用できる。
解説の方は……そうだな、俺ならガンテスのおっさんを推すね。
実力的にも一瞬の攻防をしっかり捉えられるだろうし、アレで周囲をよく観察してるタイプなので試合運びに関しても良い実況をしてくれそうだ。なにより、筋肉関係を除けば至極真面で社交性も高い。
「ふむ、確かに言われて見ると中々に適材適所な人選ではある……分かった、グラッブス司祭には私の方から話をしてみるとしよう」
「猟犬クンが警備に関して受けるって話は、私の方から帝国に書簡を送っておくわぁ。

実況に司祭様を推薦するって話も通しておきたいから、早めにお願いねぇストラグル枢機卿」

二人の枢機卿が互いに手元の書類に目を落としながら、細々とした祭りに向けた決め事の優先順位を付けてゆく。

大規模な祭りだ。今回は試験的な要素も多いので、開催期間は相当長くなるって話だ。

出来る事なら、成功させて。

どんちゃん騒ぎの楽しい祭りが毎年行われるような、そんな平和な時代を長続きさせる事が、これからを生きていく俺達の共通したお仕事、ってやつなんだろう。

未だ来たらぬ、イベント目白押しのお祭り本番に思いを馳せて。

同じ様な事を考えていたのか、どこか共通した表情を浮かべたシアやリア、副官ちゃんと目が合って、俺達は楽し気に笑い合ったのだった。

各国各々（教国、帝国）

聖都西区画。

主に冒険者や傭兵などといった、国家に所属しない武力を持った荒っぽい者達が主に集う様な場所は、聖教会お膝元であるこの都市にも存在していた。

とはいえ、他国のソレと比べれば聖都の冒険者達は相当に『お上品』な部類に入る、というのは同業者の共通認識ではある。

半分は皮肉ではあるが、それが腕力・武力をリスペクトする傾向にある彼らをして侮りには至らないのは、此処を拠点とする冒険者には帝国首都に次ぐレベルで腕の良い者達が揃っている事が、理由として挙げられるだろう。

宗教国家とはいえ、そうガチガチの教義では無い事、なんだかんだ言って大都市である事などもあって、一定数の有望株が聖都の冒険者組合には流入して来る。

更に組合の歴史上、二十にも満たない特級冒険者であった者が、引退後に宿を構えているというのも大きな要素ではあったりするのだ。

何分、昔の話だ。知らない者も多くなってきたが、逆を言えば少し調べれば分かる事ではある。

情報収集などを確り行う者や将来性の高い新人などには、元とは言え自分達の最高位にあった人物の宿を拠点にするというのは、中々に心惹かれる話なのだろう。

そんな宿屋、《武器掛け棚亭（ウェポンズ・ラック）》では現在、店主の古馴染みが訪れ、バーカウンターを挟んで雑談に興じていた。

「……祭りだと？」

厳めしい面相に古傷が幾つも走った強面の店主が、訝し気に聞き返す。ついでに、磨き終わったグラスを静かに奥の棚へと並べ直した。

「うん、帝国との共同でね。戦後は勿論だけど、多分戦前でも見なかったであろう規模になる筈だ」

手の中のグラスに満たされた琥珀色の液体をちびちびと舐めながら返したのは、小柄な男性だ。

この街ではよく見かける僧服を身に纏い、真っ白な顎髭を伸ばした老年に差し掛かっている男は、聖職者の身でありながら実に慣れた様子で冒険者達が好んで飲む酒精の強い酒を味わっている。

荒くれ者が集う冒険者酒場でグラスを傾けていれば即行で絡まれそうな人物では

あったが、この宿を拠点とする冒険者達にはある意味で馴染みの人物だ。
時折ふらりとやって来ては店主と昔話に花を咲かせて酒を嗜み、満足したら帰っていくこの不良坊主が、おっかない店主にとっての『友人』にカテゴライズされる人物であるという事を、彼らは骨身に染みて知っている。
絡もうとした馬鹿が容赦なく畳まれ、宿から放り出されて一ヵ月出禁になった事もあるのだ。
友人との語らいに水を差された店主が暫くの間不機嫌になるので、誰かが同じ馬鹿をやろうとしたらその場にいる奴が全員で制止にかかるのが暗黙の了解であった。
幸いな事に今日はそういった困った新顔の類もおらず、年経た男達の静かな会話は中断される事なく進む。
「開催地は帝国か……ウチの客も足を延ばす奴が出てきそうだな」
「そうだね、あと数日もしたら大々的に告知されるから、開催期間の間は仕入れを絞った方が良いと思うよ」
空になったグラスを静かにカウンターに置く友人を見て、店主は無言で中身を注ぎ足してやる。
なみなみと満たされたソレを、少し慌てた様子で老人が啜った。
「おっとっと……ふぅ。まぁ、今回は試験的な部分も多いけどね。恙無く終われば年毎

の行事化して、来年か再来年には教国(ウチ)が開催国になるかもねぇ」
「そうなれば今年とは逆に、俺は忙しくなる訳か。帝国程人手が多い訳でもないだろうに、祭りの間の治安はどうするんだ」
「帝国は催し物の警備に『彼』を使う事で血気の多い子達を押さえる腹積もりみたいだよ。こっちも真似をしたい処ではあるけど……」
「お前の処の聖女が御執心の相手だろう。示威の為に延々警備員なんぞやらせていたら臍を曲げるんじゃないのか？」
　下手をすれば彼らの共通の友人である女性も良い顔をしない可能性がある。
　そう指摘され、全く以て悩ましいと言わんばかりに老人は溜息をついた。
「そうなんだよねぇ……元から彼とあの娘達には甘い処があったけど、彼に関しては最近は特にそうだよ。ちょっと揶揄ったり男の夜遊びについて助言してあげただけでスッ飛んで来るのには困ったものさ」
「……ハッ、アイツがそんな過保護っぷりを見せるとはな。アレ以来か」
　奇妙な事にかたや困り顔、かたや皮肉気な表情であるにも関わらず、彼らの間には安堵にも似た穏やかな空気が漂う。
　――長年の付き合いある友人が、生涯背負い続ける筈であった重荷を下ろす事が出来た。

言葉にはせずとも、男達もなんとなくそれを察していたのかもしれない。
少々しんみりとした空気を入れ替える様に、店主がカウンター下から小さなショットグラスを取り出し、老人の杯に注いだ酒を満たすと自身も一息に呷る。
そこそこに酒に強い老人が少しずつ干しているソレを、水を飲む様に胃に流し込んだ彼は平然とした顔で一息ついた。
「――で、その当人は今回の祭りとやらには関わるのか？　アイツの性格からして留守を預かる、なんて言い出しそうなモンだが」
「それがねぇ、意外な事に帝国に行く予定を立ててるみたいなんだよ――ほら、共同開催国の教国（ウチ）の関係者からは、祭りの期間中、帝国も入国や通行諸々で税を取らないって聞いてね。子供達を祭りに連れて行けそうだって」
「あぁ、例の孤児院の……アイツの懐具合なら、ガキの十人やそこら、いつでも旅行くらい連れて行けるだろうに」
口ではそう言っても大体経緯は察しているのか。
店主の声色は呆れと――僅かにではあるが笑いを含んでいた。
老人の方もどことなく楽し気に頷き、何かを思い出す様に目を細める。
「そこは運営に携わっているあの娘が固辞していたらしいよ。過度に自分の院ばかり贔屓されるのは道理が通らない、だそうだ。僕の方でも、何度か運営資金について融通を

利かせられるって話も出したんだけどねぇ……その度に正論で突っぱねられてしまう」
「アイツの薫陶が生きてるな。そのせいで何くれと構っても断られる様になったのは皮肉だが」
　二人の脳裏を過ったのは、彼らの友人である女傑と特に親交のある孤児院の運営者――エルフの血を引くシスターの女性だった。
「全くね。この間も、『天は自ら助くる者を助く』なんて言われてしまった位さ、いやはや……」
「ほう？　中々含蓄のある言葉だな。聞き覚えは無いが……」
「あちらの言葉らしいねぇ。最近出来た友人に教わったと言っていたよ」
　時折グラスを傾けると、互いの言葉に耳を傾け、相槌を打ち。
　大戦を生き抜いた古強者達は、嘗て望み、夢にすら見た穏やかな時間を噛みしめる様に、現在（いま）と過去（むかし）、両方から溢れる思い出話に華を咲かせる。
　じきに開かれるであろう大きな祭りの話を皮切りに、嘗ての思い出に触れ、近況について語り。
　今此処には居ない、もう一人の巨漢の友人が、その大祭で少しばかり変わった仕事を引き受けた事などについても触れる。
　どれ程そうしていただろうか。

やがてグラスの中身が何度目かの底を見せると、老人が少々億劫そうに立ち上がった。
「さて、今日はこの辺にしておくよ……いや、ここ最近は楽しい話が多くて困るね。つい杯が進んでしまう」
「酒を出してる側の俺が言うのもなんだが、程々にしておけ。頻繁に抜け出してばかりだと、トイル坊がまた発狂するぞ」
「嫌な事を言わないでおくれよ。どうにも、最近のトイルは怖くてねぇ……ルヴィならお酒を飲みに行ったって言えば大目に見てくれるんだけど」
「比較対象がおかしいだろうが」
嘗て彼らが青年であった頃、そうした様に。
各々の立場が変わっても、決して短くはない年を経ても、その関係だけは変わる事無く。
男達は、其々に何処か人を食った様な、ニヤリとした笑みを交わし合う。
「――それじゃぁまた、ラック。今度はミラとガンテスも誘って来るよ」
「ふん。それなら次は営業時間外に来いヴェティ。客には出さんとっておきを飲ませてやる」
今ではこの世界最大の宗教組織の教皇などという立場に収まってしまった戦友に向

け、店主はそんな言葉を掛け。
それは楽しみだね、と。飄々とした態度で応えた老人は、少しばかり酔いの廻った足取りで宿を後にしたのだった。

大陸最大の国家である帝国の首都。
この世界における最も洗練さえた街並み、と称されるその都市において、一際目を惹くのはやはり帝国の主たる皇帝スヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルが居を構える王城であろう。
都市内ではやや古い作りの建造物ではあるものの、荘厳さと威容を兼ね備え聳えて立つそれは、帝国という国の強大さと盤石さを表している様であった。
その城内を軽い足取りで進む女性が、一人。
特徴的な金髪の巻き毛をした美しい少女だ。
少々着慣れない様子の帝国騎士服を身に纏った彼女は、何か喜ばしい事でもあったのか、はたまた機嫌が良いのか。

小さく鼻歌など歌いながら、陽気が差し込む長い石作りの廊下を進む。
少女の名はローレッタ＝カッツバルゲル。
北方の小国において男爵位を持つカッツバルゲル家の当主であったが、紆余曲折を経て念願叶い、憧れの帝国生え抜きの部隊に所属する事となった腕利きの拳士だ。
とは言ってもまだまだ見習い。先任の者達と比べればあらゆる意味でひよっこもいい処である。
自分を招き入れる為に母国と交渉を行ってくれた皇帝陛下に恩を返す為にも、将来、良人（おっと）となる恩師の為にも、只管に精進あるのみ。とローレッタは意気込みを新たにした。
とはいえ、外は秋口とは思えぬ小春日和。
訓練の成果も良く、恩師との関係も非常に順調である彼女としては、やはり浮き立つ様な気分になるのは抑え難い訳で。
緩んでいる、等と言われてしまうと否定はし辛い、ほわほわとした花が飛びそうな雰囲気のまま、ローレッタは今回自分を呼び出した上司の仕事部屋の前へと辿り着いた。
流石に今の調子では不味いと思ったか、軽く頬を叩いて気合を入れ直す。
深呼吸一つして、改めて目の前の扉を見据えると控え目にノックを行った。
「失礼します、隊長。お呼びと聞いて伺いました」

扉の向こうから穏やかな声で「ええ、入って頂戴」と返って来たのを確認し、ローレッタは静かにノブを捻るとそのまま入室した。
「お待たせ致しましたミヤコ隊長。ローレッタ＝カッツバルゲル、参上いたしましたわ」
「いらっしゃい、ローレッタさん。時間通りだから待たせた、なんて事はないわよ」
「来ましたか。時間に正確なのは良いことですね」
扉の向こう――少女が所属する部隊に割り当てられた執務室には、二人の人物が彼女を待っていた。
執務机に座る一人は、この部屋の主である、美しい黒髪黒瞳の女性。
帝国最強との呼び声高い、嘗ては対邪神部隊として名を馳せた《刃衆（エッジス）》の長であり、個人としても帝国三指に入ると言われる武力を誇るミヤコ＝タナヅカ。
諸国からは《黒髪の戦乙女》などと称される、ローレッタが故郷に居た頃からの憧れの人物である。
もう一人、ミヤコの脇に控える形の穏やかな雰囲気の男性はネイト＝サリッサ。
嘗ては帝国所属の冒険者で、その等級はなんと、現役では大陸に数人もいないとされる特級。
現在は《刃衆（エッジス）》の特別顧問を務めている練達の槍使いだ。
ローレッタはそこまで詳しい話を聞かされていないのだが、同僚になった先輩方の話

によれば、なんでも彼女の恩師と同じ転移者であるミヤコが、初めてこの世界に降り立った際に世話をしてくれたのが、この元・冒険者らしからぬ柔らかな物腰の男性らしい。

後にミヤコが皇帝にその剣才を見出され、直属の護衛として帝国騎士となり、更にその後《刃衆（エッジス）》を創設する話が上がった際に、ネイトの事を隊長として推したとかなんとか。

結果的にはミヤコが隊長となり、ネイトは顧問という形に落ち着いたが……ローレッタとしてはどちらも上司として敬意を払うに不足無く、戦士としても遥か高みにある尊敬すべき先達だ。細かな事情や詳細はそこまで気になる程のものでもない。

現在教国に出向している副隊長を除けば、実質部隊のトップが揃っているという状況である。

はて、この二方が見習いに過ぎない自分を呼びつける用件とはなんであろうか？

と、彼女としては首を捻らざるを得ない話であった。

そんなローレッタの心情を察したのか、処理している最中であった手元の書類に手早く判を押し、ミヤコはそれを机の脇に寄せて少しばかり身を乗り出した。

「訓練の最中に呼び出してごめんなさいね？　でも、ちょっと急ぎで伝えておきたい話があって」

「いえ、見習いといえど私(わたくし)も部隊の一人。隊長のお呼びに不満を覚える筈もありませんわ」
「ローレッタ君は訓練に対してもとても熱心に打ち込んでいますからね。戦後直ぐにこれだけの有望株が入って来るのは嬉しい誤算だ」
「恐縮ですわ、サリッサ顧問」
　挨拶代わりの形式的な会話ではあるが、お互いに言葉に嘘は無く、社交辞令だけではない穏やかな雰囲気で話は続く。
「それで、本題なのだけれど……再来月に行われるお祭りの話は聞いてるわよね？」
「はい、勿論。《大豊穣祭》……戦後最大の戦勝記念を兼ねた慶事、つい二日前に公式に告知されたばかりですが、私(わたくし)も今から楽しみにしていますの！」
「騎士団と協力してローテを組む予定ではありますが、《刃衆(ウチ)》も警備に駆りだされるでしょう。なんとか開催期間中に全員に休日を取れるようにしたい処です」
　人類種の二大国家が協力して開く催しだ。大祭の名に相応しい壮大で華やかなものになるだろう。
　其々に思い描く過ごし方はあるだろうが、多くの者が大なり小なり楽しみにしている一大イベントである事は確かであった。
「それで、その《大豊穣祭》だけど……闘技大会――要は勝ち抜き式の腕比べね。それが

催しの一つとして開催されるの。出場者が多すぎても少なすぎても問題だから、一般参加枠の処理をどうするか今もゴタついている最中だけど、大会自体は開くのが確定みたい」

ミヤコの言葉に、当然の事ながらローレッタは目を輝かせて食い付いた。

闘技大会！　なんと心躍る響きだろう。これに興味を示さねば彼女の生家たるカッツバルゲルの者では無い。

「そのような催しがありますの……！　それでは、隊長やサリッサ顧問、各国精鋭や益荒男の戦武の競い合いを間近で見る機会がありますのね！　俄然楽しみになってきましたわ！」

大戦で武名を馳せた一騎当千の猛者。

人類種の到達点たる彼・彼女らの戦いにまかり間違っても自分如きが加われるとは思わないが、それだけにその武力を眼前にする事が出来ると聞かされれば、否が応でもボルテージは上がる。

鼻息も荒く胸元で拳を揃えて握るローレッタなのだが、話の中の一人として挙げられたネイトが苦笑して頭を横に振った。

「ローレッタ君の期待を肩透かしさせる様ですが、今回の闘技大会は試験的な意味合いも強い。会場の保全や観客の安全も考慮して、各国最高戦力やそれに準ずる実力者は規

定として参加不可になっているんですよ」
「あ、そうなんですの……早とちりでしたわね、お恥ずかしいですわ」
見るからにしょんぼりとした顔になった見習い隊員の少女に、顧問と同じくその面差しに苦笑を浮かべながら、ミヤコは肝心の『本題』を切り出した。
「ネイトさんの言う通り、私達には参加資格が無いけど……ローレッタさん、闘技会に出場してみない？」
「……ふぇ？　わ、私(わたくし)が、ですか？」
呆気に取られた表情で自身の顔を指さす少女に、《刃衆(エッジス)》の長と顧問は揃って頷く。
「ウチの部隊から二、三人出場者を選ぶようにと通達が来たの。多分陛下の案だから、拒否は難しいのよね」
「特段無茶な命令でも無いですからね。資料を見た限りでは待機している医療班も充実させているようですし、出場者の治療や安全面にも配慮しています。なので、隊長殿と協議した結果、ローレッタ君が候補に挙がりました」
二人から交互に説明を受けて、驚きの余り困惑していたローレッタの顔にも理解の色が浮かぶ。
そして、理解が及べば掛けられた言葉に喜びと闘志が湧いてくるのは、彼女の気質的に至極当然の事であった。

「優勝しろ、なんて無茶は言わないわ。新米の隊員として予選だけは勝ち抜いて本戦に出てくれれば、見習いっていう扱いも早々に卒業できると思うし……どうかしら？」

とはいえ全くのノーリスク、という訳でも無い。

ミヤコが言及した通り、本戦に出る程度の実力を示せば、《刃衆（エッジス）》見習いという現在のローレッタの立場としては妥当以上の結果を残した形になるだろう。

だが、逆を言えば予選落ちなどしてしまえば彼女の後々の評価にも響くし、最悪、《刃衆（エッジス）》自体が侮られる事になりかねなかった。

尤も、ミヤコもネイトも後者については問題視していない。仮にそういった声が上がっても実力と成果で黙らせれば良い、と思っているが故に。

そうなると、受ける事によってリスク＆リターンの可能性を負う事になるのはあくまでローレッタ本人のみ、ということになるのだが……当然というか、その当人はそれで怯む様な根性の持ち主では無かった。

「――分かりましたわ。その話、お受け致します。各国の真の強者たる方々が不参加の中、殊更に威を張るのも少々情けないですが……どうせなら気合と根性で優勝目指してみますの！」

意気高く気炎と共に天井に向かって拳を突き上げる少女に、彼女の上司二名もその心意気を評価して笑顔で頷く。

「その意気です。大会までの間、出来うる限り部隊の皆でローレッタ君をサポートしますよ。なるべく時間を見つけて指導も行うので、頑張って下さい」
「アンナちゃんも承諾したみたいだし、大会当日が楽しみね。ひょっとしたら、決勝は《刃衆(エッジス)》隊員同士の対決、なんてことになるのかしら？　フフッ」
ネイトが発破をかけ、次にミヤコが冗談めかした発言をして笑いを零した瞬間。
闘志の炎を燃やしていたローレッタの表情が一瞬で真顔になり、凍り付いた闘志の欠片がバラバラと砕け散って床に落ちた。
「……お待ちを。アンナ副隊長も出場なさるんですの？」
「……えぇ、そうよ？　二、三名って話ですもの。といっても、アンナちゃんについてはほぼ名指しでの指名だったのだけれど」
「」
なんだか唐突に静かになった部下に黒髪の戦乙女は怪訝な顔をして、僅かに俯いてしまったその表情を伺おうとする。
「えーと……ローレッタさん？」
「む、これは……」
同じく少女の態度の変化に訝し気な顔をしていたネイトが、何かに気付いた様子で彼女の側に歩み寄った。

眼前に立つと、その長身を折り曲げてローレッタの表情を下から覗き込み、顔の前で掌を振ってみる。
やがて一つの確信を抱いた彼は、一つ頷いて真顔のままでミヤコの方へと振り返った。
「――気絶してます」
「ええっ何故!?　しかも立ったまま!?」
顧問の言葉通り、少女は立ったまま意識を飛ばしていた。しかも白目を剥いて。
慌てたミヤコは席を立ち、急ぎローレッタの側に駆け寄ると、その華奢な肩を掴んで強く揺さぶる。
「ちょっ、ローレッタさん!?　どうしたの急に！　何があったの!?」
「……ハッ!?」
心配そうな――いや、実際心配しているのだろう。困惑と驚きがブレンドされた表情で眉根を寄せるミヤコの声に、ローレッタの意識が再起動を果たす。
意識を取り戻して直ぐ、上司二人に気遣いを向けられながら顔を覗き込まれている事に気付いた彼女は、慌てた様に居住まいを正した。
「も、申し訳ありません、お騒がせ致しましたわ――ちょっと最近の恐怖体験が刺激されたみたいですの」

「アンナちゃん絡みで何があったの……？」

額に浮いた脂汗を拭う部下の言葉に、ミヤコが困惑のままに呟く。

そんな二人の様子を見て、ネイトが「そういえば」と、何かを思い出した様に手をポンと打ち合わせた。

「ローレッタ君が《刃衆（ウチ）》に入ったばかりの頃、隊長殿は他国の方々と大森林に遠征任務で出掛けたでしょう。入れ替わりで副長殿が戻って来ていましたが……どうもその際に隊員達を相当きつくしごいたようで。酷い日には何人かが次の日まで白目を剥いて使い物にならなくなったので、流石に顧問として少しばかり注意した記憶があります」

先任ですらあぁなったのだから、新入りのローレッタにはさぞかし堪えただろう。と宣う顧問殿の言を裏付けるように、体験とやらを刺激されたらしき少女が再度白目を剥いてプルプルと震えだす。

「あっあっあっ……やめっ、やめてくださいまし、副長。にんげんはいわをせおってうまよりはやくはしったりできませんの……あ、おとうさまとおかあさま……」

「か、完全にトラウマになってる……何したのアンナちゃん……」

ミヤコの知る副官の少女は、確かに訓練に関してはストイックな処がある。特に二年前からはその傾向が強くなった。

だが、仮にも帝国最精鋭たる《刃衆（エッジス）》の隊員達が揃って白目を剥いたり精神的ダメー

ジを負ったりする様なドギツい訓練を普通に行う程ぶっ飛んではいなかった……はずだ。

　そんな疑問に答えたのは、この場の最年長にして元腕利きの冒険者――様々な知識・経験共に豊富なネイトである。

「副長殿は既に一年以上、大聖殿にお世話になっていますからね。あそこにはシスター・ミラやグラッブス司祭がおられますし、特に後者の御仁の訓練に頻度高く付き合っていれば、色々と基準がぶっ壊れる可能性は高いかと」

「……司祭様とは何度か肩を並べて戦った事があるけれど、そんなにおかしい人だったかしら？　物凄く紳士的で気さくな方だと記憶してるんだけど……」

「その認識で間違っていないと思いますよ？　実際とても温厚で人柄良い方です――鍛錬に関して頭おかしいだけで」

　基本、その話題にあがった司祭様に負けず劣らず人当たりの良い筈のネイトが、真顔で『頭おかしい』と評する時点で相当だ。

　そういえば自身が先輩と呼び慕う青年も、似たような事を愚痴っていた事がある、と、ミヤコは今更ながらに思い出した。

「いやぁ、副長殿の成長が頼もしくも恐ろしくありますね。私もうかうかしてはいられないかもしれません」

「それに関しては同感だけど……ローレッタさんの闘技会出場に関しては、別の人員にした方が良い気がしてきたわ……」

ミヤコとネイト以外が全員アンナのしごきで恐怖体験している以上、誰に変わっても同じかもしれないが。

そんな嫌な予想からは目を逸らしつつ、さてどうしたものかと思案していると、意識が父母のいる彼岸から帰還を果たしたらしいローレッタが、己の肩に乗せられたままであった上司の手をぐわしっとばかりに掴んだ。

「――お待ちを！　少々取り乱しましたが、私ならば問題ありませんわ！　人員の再考は無しにして頂きたいですの！」

立ったまま気絶するのは少々とは言わないとミヤコは思うのだが、何やら最初の気合の入りっぷりを上回る気迫で瞳を燃え上がらせるローレッタに気圧され、思わずこくこくと頷いてしまう。

「考えてみれば、私達を拷……しごく傍ら、副長も同じ訓練を熟して平然としておられましたわ！　己が未熟を棚に上げて真摯に鍛錬に臨む方に畏れを抱くなど、カッツバルゲルの女にあるまじき惰弱！　お母さまにも叱られてしまいましたの！」

「それ恐怖体験を通り越して臨死体験してない!?」

以前、両親は他界していると聞かされている。

にも関わらずローレッタの口から飛び出た発言に、流石に堪え切れずに叫んでしまった。

どう考えても大丈夫ではない筈なのだが、寧ろこの金髪縦ロールの少女は、意識を飛ばした先で両親から掛けられたらしき発破で心身共に好調となっているっぽい。

ちょっと疲労感を覚えて、ミヤコは小さく溜息をついた。

「うん……取り敢えず、人選の変更は無しで。それじゃ、当日まで体調管理には気を配るようにしてね？」

「了解ですわ！　折角推薦して頂いたというのに、怪我や風邪の類で不戦敗になどなれば笑えもしませんもの！」

医務室に向かえと言った処で、肝心の医官の方から「忙しいのに冷やかしにくんな」と叩きだされそうな位には元気なローレッタに、遠回しに一回診て貰えと告げてみるのだが、正直伝わった様には見えない。

用件は済んでしまったので、これ以上留める事も不自然だ。激励の言葉と共に退出を促すと、彼女は一礼して来た時より軽い足取りで去っていった。

なんだか疲れた。

そんな端的な想いと共に、ミヤコは身体から力を抜いて執務机の上に突っ伏す。

「お疲れ様です、隊長殿。いや、ただの報告と確認で予想外に騒がしくなりましたね」

「……こういうのって、先輩がよく巻き込まれてるパターンだと思うの」

机にぐったりと体重を預けたまま、割と自身の慕う相手に対して遠慮のない事を言っている《刃衆(エッジス)》の長に対し、現在他国に出向している副官の代わりに補佐についてる顧問が笑いを堪えた声を掛けた。

「その先輩――猟犬殿に関しては、なんとか同日に休暇を捻じ込める様に予定を調整しておきますよ。例の報酬の件、上手く行くと良いですね？」

先程までは部下の手前、一定の距離と敬意を持った態度で接していたネイトであったが、今は口調こそ変わらないが声にたっぷりと揶揄いが籠っている。同じ程度に、親しみも。

この世界に転移してきた当初、家族ぐるみで世話を焼いてくれた恩人の言葉に、ミヤコは机に突っ伏したままの無言で応じた。

――せっかく先輩が帝都に来てくれるのだから、デートがしたい。あわよくば同じ装い(ペアルック)とかを揃えてみたい。

そんな、企みというには余りにもささやかな計画を気付かれていた事に羞恥は覚えていたのか。

俯せたままの姿から覗ける耳元や首筋は赤らんでいる。

そのままの体勢で、なんとなく以前から気になっていた事を聞いてみた。

「――ネイトさんは」
「うん、なんですか？」
「ネイトさんは、以前から私の事を応援してくれますよね。レティシアから……救世の聖女から彼女の猟犬を奪おうとしている、私を」
　普段は零す事の無い、どこか自虐的な言い回しを含んだミヤコの言葉に、ネイトは笑いながらあっさりと答える。
「奪うも何も、知り合ったのは君が先で――好きになったのだって君が先でしょう？こういった事は先着順という訳でもないですが、私と妻は君が彼の事をこの世界に来る前から気にしていたと、何度も話を聞いていますからね」
　交流が深い分、そりゃあ君を応援する方を選びますよ。と肩を竦める彼に、色々とぶっちゃけた指摘をされて更に顔の赤みが増したミヤコが視線を逸らしたままのろのろと顔を上げ、小さな声で礼を言う。
「……ありがとう、ございます。この世界に来て、初めにお世話になったのがネイトさんで、本当に幸運でした」
「どういたしまして、と言いたい処ですが、それならば今度礼代わりに家に遊びに来て下さい。ついこの間、娘に暫く君と会えていないと、文句を言われてしまったので」
「はい、是非」

未だ頬は熱く、照れ臭さも相まって少々目を合わせづらい。
そんな、何とも言えない気恥ずかしさと面映ゆさを堪えながら、それでもしっかりと顔を見合わせて、ミヤコは笑顔を浮かべたのだった。

「――お祭り、絶対に成功させましょうね」
「そうですね、頑張りましょうか。トラブルが起きればデートも儘ならないでしょうし、ね？」
「それは今言わなくても良いんですっ」

――《大豊穣祭》まで、あと二ヵ月弱。

各国各々（大森林）

大陸中央部に広がる大森林。
その更に中心部に聳える創造神が齎した生ける聖遺物たる界樹。
其処に拡がるは、界樹近辺を聖地と定めた種族――即ちエルフ達の郷だ。
神木たる界樹の異変と、数十年前より続く内部分裂同然の同族同士での派閥争い。
最近になってそれらが一気に片付いた御蔭か、随分とヒリついた空気が減り、緑深い静かな土地らしい穏やかな気配を放つ様になったその地にて。
大樹を刳り貫いて建てられたとある屋敷の中、一人のエルフが一枚の書状を前に唸り声を上げていた。
エルフらしい薄い金の髪に整った容貌、この地の植物由来の緑の衣に身を包んだその女性は、眉を寄せ、頭を抱える様にして机に突っ伏しながら分かりやすく懊悩している。
大森林において、つい最近までは貴重であった大量の羊皮紙や紙の書類に埋もれ、延々と終わらぬ煩悶を繰り返している彼女の名はサルビア＝エルダ。

彼らエルフにとって最も尊ぶべき偉人といえる――だが非常に困った人物に推薦を受けて以降、エルフの中でそう年嵩、という程の年齢でもないのに最長老などという役職に就くことになった苦労人である。

厄介な派閥問題は一応の解決を見せたとはいえ、その根底にあったのは思想の違い。

彼女が元から纏めていた、外界との融和を唱える開明派については、現状について齟齬や反発などはほぼ無い。まぁ、派閥争いの勝者側といって良いのだから当たり前だが。

だが、従来通りのエルフの生き方……大森林を生にして終の住処とし、そこに住まうエルフ以外を劣った存在として拒絶する保守派の者達については、万事解決した訳では無い。

一口に保守派と言っても其処には様々な者達がおり、数が多い方だからなんとなく所属していた、程度の消極的なハト派から、古くからの慣習の為ならば同族を贄とし、謀る事も厭わない超タカ派も存在する。

当然というか、保守派の中心たる長老衆は殆どが後者であったのだが……界樹の一件以降、サルビアが最長老という明確なトップの座に就いたことで大分大人しくなってはいる。

とはいえ、サルビアが抱く『学習しない老人達』というイメージそのままに、何かと

言えば嘴を突っ込もうとする者も居るので、正直相当に煩わしい。
ぶっちゃけて言えば、意見を述べる、出し合う程度なら独裁とならぬ様に必要であるのだが、長年最上位の立場に居てすっかりそれが当たり前となっていた年寄り連中には譲歩や擦り合わせといった概念が脳の中から削除されている様だ。
界樹を巡る一件の顛末で相当に痛い目を見たというのに、最長老相手にすら過去の言動がそのまま通じると思っているのは「ボケけてんのか爺婆」と罵りたくなる有様だった。
彼らの言動は言う迄もなく問題だ。今はもう微かな名残りが身体の内に残るのみとなったが、エルフにとって現人神同然である『始原の聖者』に直接祝福を施され、同胞を率いる様にと直に言葉を賜ったサルビアを軽んじる行いである。
自分達の時代がこれ以上無く綺麗さっぱり終わった事を受け入れられないが故の、哀れな悪あがきの類なのであろうが……流石に不遜が過ぎると、開明派処か嘗ては保守派であった者達でさえ、一部の長老衆を見る目は厳しい。
聖者の降臨からの、サルビアの最長老就任及び開明派の台頭。
諦観混じりとはいえそれを受け入れた老人達と、実権を殆ど失ったというのに未だにゴネている老人達。
以前より遥かにマシとはいえ、実質、今度は保守派が分裂を起こした状態に近い。な

んとも頭の痛い話である。

「……猟犬殿に一報入れれば、いつの間にかあの老害共が行方不明になったりしないでしょうか……いや、顎で使う様な真似は不敬ですし……」

机に上体を伏せたまま、ともすればやや物騒な解決方法を口にする最長老ではあるが、彼女の置かれている立場を考慮すれば致し方なし、といった処か。

ちなみに余談であるが、口にした内容を実行した場合、猟犬と呼ばれる青年は他に予定が無ければ普通にやって来て存分にやらかしてくれるだろう。

政治や国絡みのゴタゴタに関わる事を苦手としている男ではあるが、サルビアに関しては流石に自分が推薦した人物ということで任命責任的なものは感じている。

なので、愚痴の様に呟かれたその一言は、実は有効な一手だったりはするのだ。

代わりに以前、彼が帰り際に我慢の限界を超えて爆発した際に比べ、聖地がやや血生臭い事になるかもしれないが。

そんな事実を知る由も無い以上、サルビアとしては外界基準でも極めて真っ当に近い判断で以て、自身の愚痴をただの愚痴として終わらせる他無い。

一歩間違えば大森林が焼け野原になるかも、という洒落にならない重圧を感じていた以前と比べれば胃が痛くなる頻度は格段に減ったが、気苦労が多い立場なのは変わらない最長老殿である。

「これもなぁ……我らに隔意のあった筈の帝国の主が、一応は文を出してくれた事自体は喜ばしいのでしょうが……」

先程から唸り声を上げる原因となっている帝国の蝋印で封されていた書状を、矯めつ眇めつ眺める。

文の内容は、サルビア――というか開明派による聖地の意識改革が軌道に乗り出した事への祝辞の言葉と、同封されていた一枚の招待状に関する説明書き。

帝国を主催として行われる、戦勝記念や復興をアピールする為の、大規模な祝祭に関するものであった。

「……個人的には開催地が教国であれば尚良かった……まぁ、これは私欲が過ぎますか」

彼女が個人的に思い入れのある人物は聖教国出身である可能性が高いので、そこでの祭りの開催となれば出席がてら、人探しを行う事も出来ただろう。

最長老としての立場もあるので私用にばかりかまけていられないのは、なんとも歯がゆい事ではあるが。

兎も角、悩ましいのはこの祝祭――《大豊穣祭》と銘打たれた祭事に関してである。

後々の外界との交流も考えれば、出席した方が良いに決まっている。

というか、下手すれば百年近くは森を出られないと思っていた身の上からすれば数少ない大手を振って外界に出られるチャンスである。

――だが。

「……行き帰りも含めて一ヵ月以上も留守……絶対老人達が余計な事してくる……」

ホントもう何なのあの爺婆。本気で猟犬殿を嗾けたい。

何気に不敬カウントされそうな思考をする程度には、サルビアも精神的に疲弊していた。

机に突っ伏していた身を起こし、ぅあ”〜、と呻き声を上げながら椅子の背もたれに力無く体重を預けて仰け反る。

文が届けられはや数日。いつまでも結論を先延ばしにする訳にも行かない。出席するならするで、事前の準備や留守の間の指示をせねばならない。ないのだが。

「……安心して郷を預けられる人材が育ってない……」

留守を預けようにも、信頼できる者は基本開明派の者達だ。比較的若いエルフで構成されていた派閥故に、最長老代理などという看板を背負わせても、長老たちが何かやらかした際に制止しきれるかは……正直、少々怪しい処である。

そういった若手を何年か自分の補佐に就ける事で、将来的にはエルフの年功序列の気質が強過ぎる部分も改善して行きたかったのだが、流石に数ヵ月も経っていない状況では人材が育つも糞も無い。

――結局はそこで思考が詰まり、堂々巡りとなってしまう。

いっそ全て投げ出して姪のシグジリアの様に郷を飛び出し、自分も意中の人物を探しに行きたくなる。

責任感の強さや生来の生真面目さ故に出来る筈も無い選択を頭の中で転がすだけ転がし、サルビアは深く溜息を吐き出して指先で眉間をそっと揉み解した。

気分転換に散歩でもしようか、などと考えていると、最近は外界で言う処の執務室と化してしまった自宅の広間の扉が控え目に叩かれる。

扉ごしに掛けられた声は、最長老となった事で自宅前に常駐する様になった護衛のエルフのものだ。

以前から付き従ってくれる信頼のおける部下なので、気軽に入室を促すと「失礼します」と軽い断りの一言と共に彼は扉を開け、真っ直ぐにサルビアの前へとやってきた。

「サルビア様、来客がありましたが如何なさいますか」

「……確認を取りに来たという事は、また老人達の誰かですか。取り合う気は無いといい加減学習して欲しいものですが」

「いえ、その……長老衆の一人である事は違いないのですが……今回目通りを願ってきたのは、コニファ様なのです」

「コニファさ……殿が？」

歯切れの悪い護衛の青年の言葉に、同じく予想外の来客を告げられたサルビアが怪訝

な顔で問い返す。
長老連中の内で一番の若手にして、エルダの氏族の長であるコニファ＝エルダ。
派閥争いをしていた間は、長老衆の中でも能動的に動く役割ということで、度々サルビア達開明派とは衝突していた人物だ。
……なのだが、最近は大人しいというか、憑き物が落ちた様に現状を静観する事を選んだ長老衆の内の一人でもある。
界樹の一件からサルビアの最長老就任以降、今に至るまで特に何かをやらかす事も無く、強硬な保守派としての言動も抑えて粛々と氏族の代表として責務をこなしている。
未だに喧しい老人達とは違い、最長老たる自分の元に訪れたの事の無かった人物の来訪に、サルビアが困惑を覚えるのも当然の流れであった。
その事実を護衛の青年も知っているだけに、問答無用で追い払う事無く伺いを立てに来たのであろう。
「……取り敢えず、今回は会うだけ会ってみましょうか。他の老人達の様な世迷言を言えば即座に話は終了、という事で」
「心得ております。いざとなれば拘束して放り出す為に同席すればよいのですね？」
コニファがどういった目的で訪れたのかは、現状だと予想が立てづらいが……老人達と同じ『聖者に例の”種”をこの地に戻して頂くように嘆願せよ』等の妄言と似た言葉

を吐くようであれば、即行で放り出そう。
すっかり手慣れた対処を部下と確認し合い、サルビアはやってきた客人を通す様にと、結論を出したのだった。

「先ずは目通りを許可してくれた事、感謝しよう、最長老よ」
「えぇ。こうやってまともに話すのはお久しぶりな事ですね、コニファ殿」
久方ぶりとなった対面は、サルビアにとって予想外な程に真っ当な始まりであった。
彼女は最長老という立場ではあるが、コニファは同じエルダ氏族の長であるので、その辺りの関係性が少しややこしいことになっている。
最悪、その部分から意見をゴリ押してくる屁理屈でもこねてくるかと警戒していたのだが、そんな事も無く。
以前と変わらぬ硬質さを湛えた美貌や立ち振る舞いはそのままに、彼女の遠縁でもあるエルダの長は淡々と切り出した。
「互いに時間を持て余す身の上ではあるまい、端的に言おう――外界の大祭とやらに出席するのであれば、私が長老衆の方々を押さえておく故、代理の選出だけは行っておく

がいい」
正直に言えば、「お前に茶なんぞ出さねぇぞ」という態度を示す為に飲み物を用意しなかったのは正解だった。
告げられたあまりにも予想外の言葉に、サルビアも背後に控えた護衛の青年も「ベフッ!?」と妙な声をあげて思いっきり噴く事になったからだ。
祭りの事自体は、現在でも僅かに始まっている外界との交流を考えれば、コニファが知っていてもおかしくはない。
だが、これまでの彼女の在り方を振り返れば、出て来た台詞が不自然に過ぎた。
「……御自身を代理にしろ、とは仰らないので?」
「互いにそれが通じる立場ではあるまい」
警戒を込めて敢えて危惧していた事を口にしてみるが、帰って来た言葉はやはり特に含むもののない、真っ当な反応であった。
「特に便宜や融通を利かせる必要も無い。代理を立てた後は常の通りそちらの人員で事を廻せば良い。私が独断で他の御老体を制肘しておく、というだけの話だ」
有り得ない、誰だコイツ。偽物か。
眉一筋動かさず述べられた言葉に、思わずそんな考えが脳裏を巡る。
これまで閉鎖的だった為か、聖地のエルフはそれほど腹芸が得意では無い。

ポーカーフェイスがあっさり剥がれ落ちて驚愕しているサルビアと護衛の青年を順繰りに眺め、コニファはそこで初めて表情を崩した。

彼女は瞳を閉じると、くたびれた老人を思わせる、長い溜息をつく。

「……唯一無二であった筈の界樹が他の地で育まれ、時が過ぎれば更に其れは増えるやもしれぬ……しかもそれを為したのが始原の聖者であるのだ、女神の加護深き我らエルフが、それを認めぬでどうする」

エルフが聖者と呼ぶ青年――彼とその一団が聖地から帰還する際に起きた悶着を思い出したのか、とうに癒えた筈の鼻っ柱を撫でるように白い指先がなぞった。

「ましてや我らは一度、その聖者を謀り……幼き同胞を御供とした。かの御方の赦意無き限り、我ら長老衆に同胞を導く資格は無い」

もうそんな言葉がコニファの口から出て来た時点でサルビアとしては予想外に過ぎるが、何より意外だったのは台詞に含まれた悔恨だ。

それは、始原の聖者である青年の胤を得ようと謀りを掛けた事よりも。

その為に同胞――今は魔族領で暮らしているであろう、幼い少女を差し出した事に対する苦悩であるように感じられたから。

（……いえ、思い返してみれば、リリィを胤を受ける役目とした事についてだけは、不本意そうにしていましたね）

聖者によるお仕置きレスリングが執行される前の僅かなやり取りではあったが、これまた意外な反応であった為に記憶に残っている。

コニファが抱いていたその感情が、どういったものであったのか。サルビアには知る由も無い。

自らが赤子の頃より相応しい『教育』を施していた、次代の長老衆の一人となり得る逸材を手放す事になる反感であったのか。

それとも――自らが疎み、拒絶している外界に、幼い孫を送り出す事への心配であったのか。

どういった形であろうと、例えそれが古い慣習としきたりで縛られ尽くした歪なモノだったにせよ。

コニファはコニファなりに、孫であるリリィに対して情を注いでいた、という事だけは――きっと事実なのだろう。

だからといって、リリィにしてきた事が正当化されるなどとはこれっぽちも思わない。あの無垢な少女は、姪であるシグジリアとその夫である《虎嵐》のもとで暮らす方が幸せに決まっている。

……だが、まぁ。

（先程の発言に嘘が無い、くらいの事は信じてみても良いのかもしれませんね）

甘い判断、と言ってしまえばそうなのだろうが、今更だ。
本当に切り捨てる気であれば外界の三国の使者がやってきた際、保守派の中でも更にタカ派に位置する者達を、諸悪の根源として差し出す選択とてあったのだから。
それに、あの御方……サルビアが今も仄かに思いを寄せる、名も知れぬ巨漢の御仁も言っていたではないか。
外界で共に戦った戦士達を戦友として思う気持ちと、幼き頃より信じていた故郷の教え。
相反すると言っても良いソレ……過酷な戦場での実体験により生まれた余りにも大きな齟齬に悩み、苦悩する自分に、彼は教えてくれたのだ。
何かを赦し、或いは受け入れること、信ずることは時として打ち倒す事よりも困難である――故にこの時代、それを為そうとする者もまた、心力猛き強者と言えるであろう、と。
「尤も、かの邪悪なる神とその配下はまた別でありましょうが！」と呵々大笑する朗らかな笑顔は、数十年経っても彼女の胸を心地よく騒がせる。
聖地に戻って以降、自己の練磨を怠るは怠惰、という開明派立ち上げた際の主張の一つを実践し、魔法の修練は怠ったことは無いが……それでも、あの御仁の魅せてくれた戦武には未だ遠く及ばない。

ならば、せめて。
その心根くらいは、あの御方の言う強者でありたいと思ったりするのだ。
「……分かりました、では留守の間、暴走しそうな老人達の歯止め役はお任せします」
「任されよう。何時までも、とはいかぬ故、なるべく早くの帰還を勧めるがな」
互いの立場もある。二人は表情を緩める事無く、淡々とやり取りをするが……それでも、幾つもある壁、その一つが取り払われた感触を、両者ともに感じていた。
これも自身が目指す新たなエルフとしての在り方、その一歩だ――そんな風に小さな達成感を覚えつつ、半ば冗談交じりでサルビアは小さな釘を刺す。
「とはいえ、完全にコニファ殿に老人達の抑え込みをお任せする訳にもゆきません……もし、何某かの密事が練られているようであれば、今度こそ猟犬殿――聖者様に処断を願う事になりますので、留意願います」
心底そう思って出た台詞、という訳では無い。
繰り返す様だが、彼女もあくまで立場上、言わねばならない忠告を形の上だけでも発言した、というだけだ。
だと言うのに、コニファの反応は劇的であった。
目を見開き、一瞬雷に打たれた様にビクンッと大きく震える。
硬質な表情が崩れ、困惑を乗せた感情が浮かび上がっているのを見て取り、サルビア

は呆気に取られて護衛の青年と顔を見合わせた。
「あー……コニファ殿？　大丈夫ですか？」
「……う、む。大事、ない」
いや、そんな強張った声と表情で何ともない事はないでしょ。
おそらく、最長老とその護衛の思考は、この瞬間に違わず一致したと思われる。
どこか落ち着きの無くなった長老を眺めていると、残った二人は直ぐに原因に思い至った。
（……そういえば彼女は一度、猟犬殿に折檻されていましたね）
（確かに。えあ斬撃？　と仰っていましたか。殺気や戦意のみで斬られたと錯覚させる技があるなど、アレで初めて知りました）
ヒソヒソとそこまでやり取りすれば、後はもう答えが分かり切った話だった。
おそらくコニファは、聖者のお仕置きにトラウマ染みた感覚を覚えてしまっているのだろう。
それまでの言動が周り巡った末の自業自得、と言ってしまえばその通りなのだが、気の毒な話ではある。
二人が目の前で小声でやり取りしていると言うのに、それ処では無いのか長老殿はどこか落ち着き無い様子で身体を――特に左右から測った中心線に該当する部分を撫で

擦っている。
　先程までの気を張ったやり取りは何処へやら、温さを伴った視線を向けて来る最長老に気付いたのか、咳払いして珍しく気不味そうに言い訳じみた言葉を捻りだした。
「……仕方あるまい、何分、唐竹にされる経験など初めてだった……傷一つ無いのに視界が左右に割れる感覚なぞ、早々体験するものではあるまい」
「まぁ、あぁいった特殊な技でもない限り、普通は脳天から両断されたらそれが最期になりますからね、人生的な意味で」
「あぁ、なんとも奇妙で凄惨な感覚ではあったが……あの痛みと熱さ、貴重といえば貴重な体験なのだろう」
　それは貴重と言うには無理のある体験なのでは？
　当然すぎる感想は胸中に丁寧に畳んで、何処か様子がおかしいままのコニファに首を傾げる思いで、彼女が続ける言葉を無言で聞く。
「そうだな……確かに貴重であった。かの聖者の仕置きという事も鑑みれば、おそらくソレを味わった我が身は幸運なのだろう……奇妙な感覚ではあるが」
　ちょっと待って、今味わうって言わなかった？
　困惑した様に再三奇妙だと言い張りながら、自身の身体――今は下腹の辺りを撫でている長老殿に、彼女に負けない位に困惑しながらサルビアは畳み損ねてツッコミとして

飛び出そうな言葉を噛み殺す。
チラリと護衛の方に視線をやれば、彼は「よほど衝撃的な経験だったのでしょうなぁ」なんて、のほほんとした様子で呟いていた。
なんだろうコレ、何か変だと思うのは自分だけなのだろうか。
それとも、護衛の彼が違和感を覚えていないのは、二百にも満たない若年である事が関係しているのだろうか。
自分がいい年齢（トシ）だと自虐する様な推論にセルフダメージを受けつつも、エルフの最長老はすっきりしないモヤっとした感覚を言葉にする事無く飲み下す。
代わりに舌に乗せたのは、本題を語り終えて〆に入る無難な言葉だった。
「――では数日中に代理の者を選出しますので、コニファ殿は老人達の抑え役をお願いします。今から同道する護衛なども考えねばならないので、今回はこれで御開き、という形で宜しいですか？」
「……うむ、それも道理か。最長老よ、時間を取らせた。これで失礼する」
困惑を振り切れぬままの様子ではあるが、気を取り直して返事を返したコニファが、そのまま退出する。
その背を見送ると、護衛の青年が肩の力が抜けた、といった感じで軽く笑った。
「……仮にも長老衆の一人であるあの方から、あの様な言葉と助力が引き出せたのは喜

ばしい限りですね。件の祭りまでそう時間も無い事ですし、早速護衛の選出を？」
「うーん……」
「……サルビア様？」
「あ、いえ。なんでもありません。そうですね……武力も重要ですが、大きな交流の第一歩です。他種族と親交を深める事に興味を示してくれる者を優先して選抜しましょう」
相も変わらず、何か引っかかる様な感覚を覚えていたサルビアではあったが。
当面の大きな問題が解決した事と、そこからの流れで第一希望であった教国では無いものの、外界にて外遊する機会が巡って来た事に対してじわじわと喜びが湧き上がり、そちらに意識を割くことにした。
折角、帝国側からの招待だ。
あちらの住人――とりわけ、聖地のエルフに良いイメージを抱いていなかったであろうに招待状を送ってくれた皇帝と、新しい関係を築くための第一歩を踏み出したい。
――それに、だ。
「もしかしたら、祭りという事で観光に来ているかもしれませんし」
その小さな呟きは、少し前に世話になった恩人達の事であり、彼女が再会を願う名すら知らない想い人の事でもある。
一応、準備だけはしていた護衛のリストを机の引き出しから取り出して。

最長老としての不安と、個人としての期待を胸に同居させながら、サルビアは初めて尽くしになるであろうお祭りへと思いを馳せるのであった。

各国各々（魔族領）

魔族領は人口の少なさに反し、その面積は広大だ。
正確には、南部に点在する小さな集落や村など、殆ど領地としての管理からも外れた地域も一括りで領内としてカウントされているので、対外的にはそうなっている、というだけの話だったりする。
当然、そういった場所には税なぞ殆どあってない様なものだ。その分、大陸北端にある霊峰に次ぐレベルで危険な魔獣やらが跋扈している土地も多いのだが。
他の人類種の運営する国家であれば、身も蓋も無い話、税を徴収する代わりに安全な暮らしを約束する、という関係が国と人との基本にある。
だが、元々独立独歩の気質が強く、戦闘民族な気質を持つ魔族の民は自助努力に余念の無い者が多い。特に南部の辺境域に住む土着の魔族の民は。
例えば、村の近くで危険な魔獣が出たとしよう。
本来ならその土地を治める領主などに嘆願し、討伐の為の騎士を派遣してもらう、と

言った方法を選ぶ。

村にある程度以上の蓄えがあり、また近くに街があるのならば、冒険者に依頼を出すという手もあるだろう。

だが南部の集落などでは、住民が自力でなんとかしてしまう場合が多い。

「ばっかおめぇ自分でやった方が早ぇべ！　行ぐど！」

などと言って、普段は畑を耕してる腰の曲がった老人が鍬を担いで意気揚々と出掛け、普通に魔獣をぶっ殺して帰って来るのは割とよくある光景だ。

民からしてそんな感じなので、行政側――《魔王》率いる領軍や筆頭補佐が管理する政務機関各種も、辺境に対しては良くも悪くも大らか……ぶっちゃけ他国と比べれば相当に緩い。

危険も多いが、その分肥沃で広大な大地が広がり、そんな地で生きてゆけるだけの逞しい者達が多く住む。

南部における辺境、と呼べる地域は概ねその様な場所であった。

逆に、魔族領の本拠たる南部中央――王都にあたる場所は南部を縄張りとして纏めた当代最強の魔族……即ち《魔王》の庇護を頼りに集まった者も少なからずいるので、辺境と比べれば随分と穏やかな気質の者が多い。

彼らの多くは他の地方から流れて来た者であったり、魔族としては少数派ではあるが

争いを苦手としている者であったり……雑な言い方をすれば南部の流儀に『染まっていない』者が中心だ。

それも数年も経てば、ある程度は図太く生きていける様になる場合が殆どだったりするが。

中央は住民に非戦闘員が多い反面、戦いを生業としている者は総じて腕利きが多い。《魔王》の武威に惹かれて兵士・戦士を志した者達が中心な故か、実力の平均値は間違いなく人類種で最も高いと言って良いだろう。

先にも触れたが、長命種の為に個体数――人口が少ないので、頭領たる《魔王》を除けば総戦力としてはそこまで突出している訳では無いのだが、それでも人類種でも有数の戦力を誇ると言って良い。

そんな戦力の中核たる、魔族領における最高幹部の集まり《災禍の席》。

普段は広大な土地に対して少ない人員で巡回や視察を行っている為、一堂に会する機会の少ない彼らは、珍しく半数ほどの人数が王城へと集っていた。

国主の城というより、巨大な城塞といった風情の剛健な建物の中、幹部会議を行う為の円卓が設けられた部屋にて。

黒塗りの鎧に身を纏ったフルフェイス……身内ですら素顔を知る者が殆ど居ない男――魔族領筆頭補佐である《亡霊》が、卓に着いた同僚達をぐるりと見渡す。

「さて、取り敢えずは皆、集まってくれてありがとう。今日の会議に過半数が集まる事が出来ただけでも僥倖です」
「俺は医務室のベッドから引きずり出されて出席するハメになったんだが？」
　皮肉をたっぷりと染み込ませた口調で混ぜっ返したのは、転移者以外では珍しい黒髪の長髪を伸ばした男だ。
　細身ではあるが獰猛な肉食獣を彷彿とさせる雰囲気を放つ彼の言葉に、《亡霊》は怯む処か呆れた声色でピシャリと返答した。
「いや《狂槍》、元はと言えばその怪我も君が頭領との喧嘩で食い下がったせいでしょう。普段なら踏み止まれるだろうに、今回は熱くなり過ぎですよ」
「……チッ、少しばかり事情があったんだよ」
「奥さんと子供が大好きマンな事なんて今更じゃないですか、なんで猟犬殿に知られてる位でそこまでキレたのやら」
　何処かバツが悪そうに舌打ちする《狂槍》に対し、補佐と同じく呆れを含んだ声で横やりを入れたのは、この場で一番年若いであろう青年だ。
　円卓に用意された緑茶を片手に、お茶請けの漬物を摘まんでいる青年は《不死身》という通称で呼ばれており、実際、比較的古参の面子が集まったこの場では年若い部類に入る。

《災禍》に名を連ねる前からつるんでいるので、彼自身もそれなりに付き合いは長いのだが……席次的に末席である事も手伝って苦労を背負いこむ事も多く、何気に《亡霊》とは苦労話を語り合ったりと仲が良かったりした。
「あ”？　何か言ったかよ《不死身》くぅん」
「――って《赤剣》さんが言ってました！」
「え？　俺？」
　チンピラみたいなウザ絡みをしてきた《狂槍》の機嫌が常より一段荒れていると一瞬で判断した《不死身》は、即座に隣に座る同僚へと発言を擦り付ける。
　一方で、擦り付けられた同僚――赤毛の髪をバックに撫でつけた軽装鎧の青年――《赤剣》は、きょとんとした顔で漬物に伸ばしていた手を止めた。
　自身に集まる視線に対して首を傾げながら、茶では無く自前の瓢箪に口を付ける彼から漂って来る香りに、《狂槍》が顔を顰める。
「一応幹部が集まった会議だろうが。なんで酒飲んでんだテメェはよ」
「え？　いや、だってほら。今日は休肝日だし」
「おい、誰か通訳呼んで来い。意味が分からねぇ」
　真顔で宣う赤毛の同僚の言葉に、同じく真顔になって円卓の他の面子にヘルプを求めるチンピラ。

だが、水を向けられた《亡霊》と《不死身》の常識人コンビの反応は無情だった。
「酒絡みで《赤剣》さんの言動を翻訳できるのって教国の枢機卿（紅紫の薔薇）殿くらいですって。少なくとも領内での心当たりは僕には無いです」
「酔っぱらってるのは何時もの事だし、もうこの際出席してくれてるだけでも良いかなって」
肩を竦めて苦笑いする《不死身》は兎も角、フルフェイス越しでも凪いだ表情が透けて見えるような筆頭補佐の声色は、慣れというよりは諦観が染み付いている様であった。
そんな哀愁漂う補佐殿の様子にも「やっぱ補佐って大変そうだよね」と他人事みたいに笑いながら漬物をツマミにして瓢箪を呷る《赤剣》を改めて見ると、《狂槍》も何処か疲れた様子で溜息を吐き出して卓に頬杖をついた。
「そもそもなんで漬物なんだよ。緑茶はまだ分かるが普通は茶菓子だろうが」
「いや、どうせこの面子では長話にはならないと思ったので、茶請け自体を用意してませんでしたよ。《万器》殿の持ち込みです」
《亡霊》の言葉に、他三名が「え、そうなの？」と言わんばかりの表情でこの場にいる最後の一人を注視する。
視線の先にいるのは白灰色の短髪に同じ色の顎髭を伸ばした壮年の男だ。

この場に居る者達の中で最も大柄であり、その五体は本人の陽気な雰囲気が無ければ酷く威圧的に見える程に鍛え上げらている。

自身の持ち込み品であるという漬物を丼に盛ってボリボリと頬張っていた男は、注目されている事に気が付くと茶を飲み干して口の中の物を流し込んだ。

「うはは、槍のは相変わらず仕事に関しちゃ真面目だのう。家庭円満の秘訣も見た目に反した細やかさ故かもしれんなぁ！」

会話自体は聞いていたのか、ゲラゲラと大笑しながらその男――《万器》は再び漬物に箸を伸ばす。

魔族領最高幹部、《災禍の席》、総勢九名。

筆頭である《魔王》の元に集う形で、今回の会議の為に招集されたのはその内の五名であった。

力、技、速さ、或いは持ち得る何某かの能力。

其々に得手とするものは違えど、各々が人類種の壁を越えたとされる人外級の武力の持ち主である。

とはいえ、それらしい威風や威厳と言ったものはこの場には微粒子すら存在せず、鉄火場でもない日常においてはどいつもこいつも癖とアクの強さしか無い駄目な大人の集団と言った風情であった。

「……《万器》さんよ、その手に持ったドンブリは何なんだよ」
「んぁ？　メシだが」
「見れば分かるんだよンなこたぁ！　なんで普通に飯食ってんだアンタはよぉ？」
「まぁ、落ち着け。ホレ、以前猟犬のが力説しとっただろ――米と漬物、あとミソシルなるものは黄金に勝る組み合わせだと」
「おい、通訳要る奴が身内に二人もいるぞ。どうなってんだ」
会議中だというのに飯食ってるオッサンと、それに絡むチンピラ。
そんな二人を眺めていた筆頭補佐であるが、《万器》の手にある丼――そこに山と盛られた湯気を上げる薄茶色の米を見て当然の疑問が湧く。
「転移してきた者の多くは、ライスが主食の国出身であるという話は聞いた事がありますが……《万器》殿、食品として適う米なぞ、一体何処から入手してきたのですか？」
「いや何、ちぃーとばかり霊峰に行って自生してるやつをな？」
「「「何やってんだアンタ!?」」」
悲鳴に怒声、種類こそ違えと心は一つとなって他四人の叫びが円卓の間に木霊する。
「この間の長期休暇はそれが理由ですか!?　って言うか普通に国際問題ィ!!」
「食道楽にも限度があるだろうがオッサン！」
「流石に《半龍姫》様絡みで問題起こすのは不味くない!?」

「あ、僕なんだかお腹痛くなって来たんで帰って良いですか？」
国家間で取り決められた霊峰への不可侵条約。
例外である一部の者でなければ、前持った許可が必要となる禁足地へと出入りしたとほざく最古参の《災禍》に向け、容赦の無い同僚達の叱責が飛ぶ。
年の功、と表現出来る様な褒められた事では無いが、見ていて腹が立つほど泰然とした様子で《万器》は米と漬物を再び口に掻き込んだ。
「んぐ……大丈夫だって。あそこの姫さんに侍っとる霊獣とは顔見知りの奴がいてな？
流石に頂上は近寄れんが、そやつらの監視下で稲をちょいちょいと頂く位は目溢ししてもらったからの」
「かの龍姫が穏やかな方であった事をこれ程天に感謝した事は無い……とにかく、以降は控えて下さい、絶対に」
「ぇー……思ったより美味かったからもうちょい量を採って来たいんだがのぅ……」
「自重しろっつってんだよ食い倒れオヤジ」
基本穏やかな口調の筆頭補佐から罵倒が飛び出したのを聞いて、流石にマズイと思ったのか食い倒れオヤジは「あ、ハイ」と呟くと丼に残った米を噛みしめるように味わい始めた。
会議の本題を話題として挙げる前から疲労感に襲われた《亡霊》は、深い——それは

もう深い嘆息を肺腑から絞り出して、手元の湯呑に口をつけて喉を潤す。
「……取り敢えず話を進めましょう。今回集まってもらったのは他でもない――帝国で開催されるという大規模な祝祭についてです。全員、というのは現実的ではありませんが、頭領を始めとした幾人かには出席してもらいたいと思いまして」
余計な茶々が入ってまたもや会話が寸断されるのを嫌ったのか、招集を掛けた理由を一息で語る。
《亡霊》の言葉に対し、フリーダムに過ぎる友人共の反応は芳しくないを通り越して露骨に嫌そうであった。
「ワシぁ遠慮したいのぅ」
「俺もだ。闘技会とやらも俺達揃って出禁だしな」
「あ、俺もパスで。帝国の酒には興味あるけど……面倒さが勝るというか」
「お腹痛い事にして帰って良いですか」
大方予想通りの反応だよ、畜生。
悪罵を内心で留めつつ、黒塗りの面兜（ヘルムキャップ）に包まれた頭部が円卓の間の天井を仰ぐ。
内容に関わらず、お祭り騒ぎを好む何時までも子供の様な男共が此処まで渋い反応を示す原因なぞ、一つしか無かった。
――頭領（ボス）の手綱を握るのが面倒くせぇ。

単純明快至極当然。「ですよねー」としか返せない理由である。
今回、《亡霊》は帝都の開催式にのみ出席して、後は魔族領にとんぼ返りする予定だ。
行きも帰りも転移魔法による《門》を使う事を、帝国の皇帝から承諾を得ている。
対戦が終結し、平和が訪れてからは趣味嗜好に走る言動が加速した《魔王》が暫くの間帝国に留まるので、同じく留まって何かやらかさないか目を光らせるか、或いはこれ幸いと帰って仕事を進めるか悩んだのだが……最近になって他種族との交流が活発化したせいで捌かねばならない書類が増えた為、後者を選ぶ事となった。
当然、その間に《魔王》の面倒を見なければいけないのは出席した他の幹部だ。
普段はほぼ《亡霊》に任せている、およそ魔族領において一番めんどくさい仕事を引き受ける事に、誰もが難色を示していた。
だが、妥協する気は《亡霊》にも無い。
というか此処で譲れば、近い将来自分は書類に埋もれて過労死する。魔族が頑丈だと言っても限度はあるのだ。
なので即座に切り札を切る事にした。
「では、残る方には私の仕事を手伝って頂きましょうか。ちなみに拒否は二席の権限で却下します」
「マジかい。滅多に使わん序列まで持ち出してくるとはガチ過ぎる……しゃーない

のぅ」

　この場で唯一、《亡霊》より古参であるが故に拒否も不可能では無い《万器》が髭に覆われた顎を指先で撫でながら嘆息する。

　普段は使いもしない序列を絡めた話を振れば、この男ならば妥協してくれるだろうという筆頭補佐の予想は見事に的中した様であった。

「槍の。今回はお前さんが行っとけ。ホレ、この前の虎坊主のトコの嬢ちゃん、祭りを体験させたいと坊主も悩んどっただろ。折角だから自分の息子も連れて遊んでくりゃえぇ」

「……チッ、《魔王（ボケナス）》の面倒見ながらガキ連れて観光してる時間なんぞ取れるかよ……だがまぁ、仕方ねぇか」

　面倒だ、という表情を隠しもせず舌打ち一つして《狂槍》が帝国行きを承諾する。

　当人はそう評される事が不満な様だが、なんだかんだといって誠実な男なのでこれもまた《亡霊》が望んだ通りの人選であった。

「じゃ、俺は書類仕事かな。魔族領（こっちゃ）なら飲みながら仕事出来るけど、外交だとそうも行かないからなぁ」

「そうなると消去法で僕が帝国行きなんですね……まぁ、一人で頭領（ボス）の相手するよりはずっとマシか」

《赤剣》が相変わらず瓢箪を傾けながら軽く手を挙げて発言し、残った《不死身》も不承不承ながら首を縦に振った。

一人決まれば後はトントン拍子というやつだ。

面倒だというのは本心なのだろうが、件の祭りは各国との絡みも発生する大仕事でもある。彼らもその重要性は理解していた。

先程までのアホなやり取りはなんだったのかと思う程、スムーズ且つ穏やかに会議は進む。

「《万器》殿、ありがとうございます。貴方が最初に折れて下さった御蔭でスムーズに人選が決まりました」

「うはは、ぬかせ、此処迄の流れなんぞ予測済みだろうに――あ、来年以降に教国に開催地が変わるならば、そんときゃぁワシが行くぞ。久しぶりに顔を見たい奴らも多いしのぅ」

「えぇ、そのときはお願いします」

細かい取り決めや予定の擦り合わせが終わり、最後に《災禍》の筆頭補佐と最古参の両名が、互いに笑いを含んだ声色で視線を交わし合うと、同時に部屋の奥席――円卓の一席目へと同時に首を向けた。

「――そういう事になりましたので、当日は行儀良く各国皆様の相手をして下さい、頭

領」

いやぁ特に揉める事無く出席する面子が決まって良かった、と。朗らかに呟いて、フルフェイスなのに普通に茶を飲むという不可思議な真似をしている《亡霊》の視線の先。

そこには椅子の上にギチギチに拘束されて座らせされた魔族領の主……《魔王》が白目を剥いて鎮座していた。

大型の魔獣や竜であっても繋ぎ止める特注の鎖で十重二十重に全身ぐるぐる巻きにされ、およそ医療用とは思えないぶっとい点滴針が首に直接突き刺さり、ドス黒い斑模様の混じった赤褐色のやべー液体がゴボゴボ音を立ててその体内に流し込まれている。

偶にビクンビクンと小さく震えてる自分達のボスの姿に、《狂槍》が感心した様子でしげしげと点滴されている液体を眺めまわした。

「どうせ意識はあるんだろうが……スゲェな、会議の最後まで抑え込める毒って何気に初めてじゃねぇのか？」

「おう、そいつもワシのだ。霊峰に行ったついでに麻痺や弛緩効果のある毒草と毒茸も拾ってきてな」

「霊峰産かよ、どおりで……問題起こす癖にメリットも発生する様に動くから性質（タチ）がワリいんだよ、アンタは」

得意気に胸を逸らす《万器》に、顔を顰めて嫌そうに吐き捨てる。

”幹部達が揃う会議において、賛成者多数で本決まりした内容は後でゴネたり引っ繰り返したりしない”

後になって異議あり！　されると我が強く、喧嘩っ早い面子ばかりなので、その度に城の何処かが壊れる。

故にこれだけは絶対に遵守すべし、と定めた《災禍》のルールの一つであった。

つまり本決まりの前にゴネて押し通せば良いんだな！　腕づくで！　というジャイアン過ぎる理屈をよく振りかざすのは、言う迄も無く今も痙攣してるこの特殊性癖持ちの似非不死鳥である。

今回の会議でも、先ず間違いなく『闘技会に変装して出場しようぜ』とか、『魔族領（ウチ）の参考にしたいから帝国の孤児院を視察に行こう』とかクソみたいな発言をして場を引っ掻き回すのは分かり切っていたので、先手を打って一時的に無力化・拘束し、出席している『だけ』という状態を作り出したのだ。

ちなみに流れとしてはこうだ。

先ず、今回集まった面子を前に《魔王》が軽く挨拶をしようと口を開く。

其処に、後頭部に向け《亡霊》がゼロ距離から弩弓（バリスタ）を撃ち込む。

ほんの一瞬だけ意識が飛んだ隙に、他の《災禍》が躊躇なく追撃を入れ、一時的に無力化。

あとは拘束して席に座らせ、会議の間だけでも大人しくしておく様に魔獣でも数滴で重篤になる麻痺毒の類をジャブジャブと点滴で流し込み続ける。

ここまでやっても、大抵は途中で耐毒性能が麻痺を上回って元気に復活してくるのだが、今回は滅多に経験の無い霊峰の猛毒という事で解毒に時間が掛かっている様だ。

それでもあと数分もすれば動ける様になるだろうが。

更に補足すると、今回《亡霊》は他の誰とも無力化について打ち合わせていない。

精々が事前に麻痺毒を用意する際、《万器》から良い品があると効果の高い麻痺毒を渡されたくらいである。蓋を開ければ霊峰に勝手に行ってとってきた品という特大のやらかしの証拠だった訳だが。

《魔王》の後頭部に不意打ちで一撃ぶち込んだ瞬間、一瞬の停滞すら無く流れる様に袋叩きに移行したのは各々の判断が全く同じだったというだけの話だ。

部下に嫌われてるのか、それとも、これだけやっても全然大丈夫！　という一種の信頼なのか。

自分達の頭領に対する彼らの容赦の無さは、他所の者が見れば判断が分かれる処ではあるだろう。

早くも理不尽なまでの耐久力で毒を捻じ伏せつつあるのか、白目を剥いた儘の《魔王》から断片的に呟きが漏れる。

「……お、オオオオオ……オレ、ヨウジョ、メデル。ショウゴロリ、サトリ……」
「毒を追加しておきましょう。《万器》殿、霊峰産の土産はまだありますか？」
「一応持って来とるが、加工しとらんから茸とかそのまんまだぞ？　食わせりゃええのか？」
「口に押し込んで俺の酒で流し込めば入るっしょ。はい頭領（ボス）～口開けて～」
　留守番組がノリノリで追撃を始めるのを横目に、今回帝国に向かう事になった《狂槍》と《不死身》は早々に席を立つ。
「先ずは俺ンとこの部下と顔合わせしに行くぞ。今回も道行きはガキのお守りを兼ねることになるからな」
「あぁ、リリィちゃん、でしたっけ？　あの子のお母さんのシグジリアさん、ウチの隊に欲しかったんですけどねぇ……おめでたも含めて、お子さん二人じゃもう無理だろうなぁ」
「……今回は遠話の魔道具をあのガキに預けておけないか、後で《亡霊》に聞いとくか。前ンときは俺が持ってたせいであの夫婦への定時連絡までするハメになったしよ」
「御両親と好きな時に話が出来るようにしてあげられないか、って事ですね。万が一の紛失や破損時の補填を《狂槍》さんが負担するなら、許可も下りるかと」
　ざけんな、折半だ。という声に、そんな殺生な。と、嘆く声が返る。

ともあれ、帝国で開かれるお祭りに参加と相成った二名は、同行するであろう少女の養父が勤務している練兵場へと足を向けるのであった。

ちなみに十分後。

急速に毒に適応したロ○コンが拘束をぶち壊して暴れ出した為、会議室は吹き飛んだ。

魔族領、西部。

一口に魔族と言っても、種族様々に混然とした中央とは違い、此処は吸血鬼（ヴァンパイア）を主としたより”魔”の側面が強い者達が住む領域である。

実用性一点張りの剛健な王都とは異なり、西部は何処か帝国を思わせる洗練された街並みが立ち並び、そこに住まう者達も吸血鬼（ヴァンパイア）を筆頭として品の良い者達が多い。

とはいえ、気質としては正反対に近い中央の兵や辺境の民と折り合いが悪いという訳

でも無く。

互いに「なんかお高くとまってるけど面白くて良い奴ら」「粗野に過ぎるけど力強くて頼れる同胞」と、ややふわっとした友好的な距離感を保って上手く付き合っている。

吸血鬼(ヴァンパイア)達の貴族主義は、ともすれば血筋や地位を重要視し過ぎて『下』を作る事で自尊心を満たす下地が作られかねないのだが、そこは長命種。

その在り方を示し続けて来た彼らの頂点たる《宵闇の君》――女公爵が今も尚バリバリの現役として君臨している為、世代を経て歪む、腐敗するなどと言ったお約束を辿ることも無く。

帝国のとある騎士が彼らをして評した、「人の十倍偉そうでその倍くらい責任・責務を果たす事が大好きな奴ら」と言う生き方を日々実践しているなんとも腹の決まりきった者達が多かった。

そんな吸血鬼(ヴァンパイア)を纏める女公爵は、本日は早々に仕事を片付けて寝室で身を休めている。

自室で美酒を片手に寛ぎながら、未だ日の高い日中であるせいか、少々気怠げな様子で手の中の杯を乾す。

薄手の寝間着姿のまま柔らかな絹で包まれたクッションに身を投げ出し、濃藍の髪が寝台に広がる様は正しく人外の妖艶さであった。

「祝祭か。戦の終結より少々間が空いたが、二年足らずでこの規模の催しに漕ぎつけたのは、寧ろ上出来と言って良いであろうな」

ワインボトルが載せられたカート……そこに置かれている数日前に届いた招待状を指先で摘まみ上げ、女公爵は薄っすらと笑みを浮かべる。

「スヴェリア坊――皇帝も中々に律儀よ。あのアホウドリと我が身……どちらの顔も立てる為に態々同日に書状が届く様に日を整えたか」

賢しい、と言ってしまえば其れ迄だが、人類種最大の国家の主としては中々に可愛らしい心遣いだ、と上機嫌から笑みが深くなった。

どこか謡いあげる様な、少しばかり態とらしさを滲ませた独白は続く。

「とはいえ、あの慮外者と出先で関わるなど御免被る。折角の祭りを、煮ても焼いても食えぬ鶏の血で汚すも無粋であろうしな」

彼女が、慮外者と称した《魔王》と仲が悪いのは周知の事実であるが……その口ぶりから察するに、賓客として招待された他国であっても、顔を合わせれば堪えが利かずに手が出る、と彼女自身が確信している様子であった。

ある意味では唯一と言って良い、貴族としての責務より私情が前に出てしまう相手……他者がイメージするより三倍は物騒な間柄である腐れ縁の幼馴染の事は一旦頭から追い出し――女公爵はそこで初めて言葉を切り、部屋の扉脇で控えていた従者に眼を

向ける。

「――故に我が従者よ、皇帝への謝辞の文を貴様に預ける。一時的にだが名代としての権も与えよう。彼方が望むのであれば、この身の代わりに責務を果たしてくるがよい」

文を渡して終わりであれば、大祭にて見聞を広めよ。と続ける主の言葉に、従者である吸血鬼（ヴァンパイア）――男装の麗人は前に進み出ると跪き、深く、本当に深く、頭を垂れた。

女公爵が彼女を見出した際、肩口に届く程度で切り揃えられていた蜂蜜色の癖っ毛は、今では背にかかる程に伸ばされている。

「……私の我儘を叶えて頂く為に、この様な形を整えて下さった事、感謝いたします、主よ……！」

欠席を伝える書状を手ずから渡され、それを恭しく受け取る従者の少女の声は、焦がれた機会が巡って来た歓喜によって微かに震えていた。

この二年、多大な喪失を味わったにも関わらず、腐る事無く精進してきた側仕えの感激の様を見て、彼女の主は上機嫌に声を上げて笑う。

「ククッ、よい。貴様がこの二年あまり、心痛堪えて貴種足らんと過ごしてきた事は知れておる。健気な従僕に褒美を与えるも我が身の責務の一つよ」

手酌で葡萄酒を注ぎ、慌てて酌をしようと立ち上がる従者を手振りだけで押し留め、女公爵はそう遠くない未来に帝国で繰り広げられるであろう光景を想起し、愉悦に片頬

を吊り上げた。
「なに、相手は当の神子共にすら秘して事を為した、こと色情に関しては木石の如き愚鈍よ。存分に貴様の成長を叩きつけてやる程度で丁度良い。精々己が英雄に思いの丈と猛りをぶつけてくるが良い」
「……は、はい……今度は、必ず」
焚き付けるを通り越してニトログリセリンを放り込む主の言葉に、この二年で随分と物理的な重みの増した自身の胸部を押さえて従者の少女――クインは頬を染めてはにかむ。
嘗て、彼女の太陽（英雄）に向日葵の様だ、と評されたその笑顔はその太陽を喪ったことで、咲かなくなってしまっていたが。
二年の時を経て再び大輪の花を咲かせたその笑顔は、焦がれる英雄との再会を夢見て輝いているようであった。

祭りの準備　帝国へ

トイルから祭りについて聞かされて数日後。
送られる人材や物資に混じる形で、俺とシアも早々に帝国へと向かう事となった。
当然というか、あちらの騎士である副官ちゃんもね。
なんでも、既に現地で開催時の総合的な警備に関わる大規模な魔法を構築しているズィオロ枢機卿――スカラのおっさんに協力する為に、その手の魔法にぶっちぎりで強い金色の聖女様に最初にお呼びが掛かったらしい。
この辺りは帝国と教国の其々の人材の方向性の差ってやつだ。大戦中もそうだったが、互いの得意な分野で補完し合うというか、差異が良い具合に噛み合うんだよな。
ちなみに俺はシアの護衛。それと雑用その他諸々係だ。帝国から受けた仕事の方は開催されてからだからね。
ぶっちゃけ祭りの準備を皆でワイワイやるのも面白そうだというのもあって手を挙げたというのもある。

少し遅れてリアやガンテス、シルヴィーさんなんかも帝国入りしてくるだろうし、帝国(あっち)の知り合いも含めて激励会とかやりてぇなぁ。大手を振って酒飲めるし、話題として出せば酔いどれ枢機卿殿が協力してくれねーかしら。

今回は聖女様が同行するって事で、対外的なものもあってシアと護衛の俺は貴人用の豪華な馬車に乗り込んでいる。っていうか俺は元から馬には乗れないんだけど。鎧ちゃん的な意味で。

貴族とかも乗るような代物だからこれはこれで乗り心地は悪くないんだが、ぶっちゃけ界樹に向かったときの馬車のほうが快適性は上なんだよな。あっちはデザインこそシンプルだったけどリクライニング機能とかもあったし。

懸架装置(サスペンション)に似た機構がある時点で上等――おそらくドワーフ製なんだろうが、流石にマイン氏族監修のものと比べると振動緩和とかが甘い。

贅沢を言い出せばキリが無いんだろうが、長旅で馬車に揺られるならケツに負担が掛からない方が良いに決まってるやろ（確信

とはいえ、乗り合い馬車なんかと比べれば雲泥の差な訳で。

幾ら見た目分かり易く色んな物資を満載しているといっても、フル武装の教国の僧と帝国の騎士が多数いる集団なんかを襲って来る自殺志願者みたいな野盗なぞいる訳も無く、道行きは実に平和だった。

両国の間に敷かれた大街道を、和やかですらある空気でガタゴトと馬車は進む。
順調ではある。あるが、結構な人数プラス各種物資を積んだ馬車群でえっちらおっちら移動しているので、到着するまでそれなりの日数が掛かる。
なので多少なりとも暇を潰せるように、トランプだの盤上遊戯だの何かしらの本だの、シアは色々と馬車内に持ち込んでいた。
まぁ立場のせいで暇になったから外にでて徒歩やら騎馬で移動する、とか出来ないしな。少人数での任務とかならともかく、今回みたいに外交の側面が強いときは特に。
副官ちゃんなんて本来は馬に騎乗して移動なんだが、長い移動時間で暇を持て余すのは目に見えてるので、しょっちゅうシアが馬車に招いて話相手にしている。
呼ばれた当人も馬車にいる間は楽に過ごせるので、特に否は無いみたいだ。元よりこの団体における有事の際の最優先護衛対象がウチの聖女様なので、実力者が近くにいるって事自体も護衛の観点から言えば悪いこっちゃ無いし。
ちなみに今も副官ちゃんが馬車内に居る。なにやら帝国首都の名所や良い店なんかが載ってる帝都案内みたいな本を広げて、二人であれこれとお喋りに興じていた。
「おー……流石は帝国。こうやって文章だけの情報を見ても教国にもない施設や店が結構あるな」
「ちょっと、何時までも最初の方の頁見てないで後ろの方をチェックしなさいって。私

も知らない店が増えてるかもしれないし」
「ん、後ろな。まぁ、これ今年発行された最新版だからな。出向中のアンナが知らない情報も載ってそうだ……って後ろの方は飲食関連ばっかりじゃねーか、後でいいだろ後で」
国で発行されてるらしい上等な革張りのソレを顔を並べて覗き込み、あーだこーだと仲良く帝国の名所名店を調べている。
女の子って情報誌とかでお勧めの店とか調べるの好きよね――非モテ特有の偏見とか思った奴はちょっと前に出ろ。
俺としてもただ馬車に揺られてるだけというのは退屈なので、座ったままでも出来る《三曜》の訓練――主に周囲の魔力の知覚と流動への干渉なんかを行っていたのだが、目の前の二人には不評で中断せざるを得なかった。
「同じく暇を味わうオレを放って訓練に集中とかひどいぞー、お前はもう少しオレに構えー」
「こんな美少女二人と同席しておいて修行とかないわー。アンタどんだけ贅沢な状況にいるか少しは自覚しなさいよね」
なんて口々に言ってた癖に、発言からいくらもしない内に俺そっちのけで二人で本を広げてきゃいきゃいと観光予定を立てだした。おう、同性だったら即行でヘッドロック

の刑だぞ君たち。
釈然としない気持ちが無い訳でも無いが……まぁシアも副官ちゃんも楽しそうだから良いか。
そんな風に考えつつ、緩やかに流れていく窓からの景色を眺める。
街道脇には大きな運河が広がり、そこから南部に向けての道を繋ぐように石造りの大橋が掛かっているのが見えた。
……あー、もう直ったのかあの橋。
俺が思わず呟いてしまった一言を拾い、副官ちゃんの視線が本の頁から上がる。
「あぁ、ここね。大戦が佳境に入った辺りで壊されたんだっけ……少し前にやっと修復作業が終わったみたいだね。派手に落とされた御蔭で修復というより殆ど最初から橋を掛けなおしたらしいけど」
《刃衆(ウチ)》からも何人か作業中の警備に駆り出されたのよねー、なんて愚痴っぽく零しながら、彼女はロングブーツに包まれた脚を組んで膝の上で頬杖を付く。
修復作業とやらが戦後に着手されたのだとしても、どう考えても《刃衆(エッジス)》がやるような仕事じゃない。
なので、副官ちゃんがちょっと不服そうな反応なのも仕方ないっちゃ仕方ないんだが……許したって、多分、君の上司が請け負った話だから。

――言う迄も無く、窓越しに見える石造りの橋はあの雨の日、俺と隊長ちゃんが大喧嘩してぶっ壊したやつである。

かつて輪切りにされて運河にド派手な水柱をぶち上げた事が幻であったかの様に、以前と変わらぬ見目で堅牢なる大橋は運河を跨いで岸と岸を繋いでいた。

正直、下手人の片割れである俺としては話題を振られるだけで変な汗が出て来るので、なるべく淡泊な反応でそうなのかー、と返すことしか出来ない。

隊長ちゃんが事の経緯を皇帝陛下に一切話してない、とは考えづらいので、多分陛下の判断で信奉者連中のテロ行為で破壊されたとかそんな感じになったんだろう。でなきゃ副官ちゃんが知らない筈が無いし。

邪神との戦いも大詰めに近づいている、という予感を各国人類種がひしひしと予感している最中、帝国と教国の主戦力がガチ目の私闘をやらかしました、なんて外聞悪い通り越して士気にも影響が出かねないからね、仕方ないね――その節は大変ご迷惑を御掛けしましたぁ！（迫真

一方で、俺が大体の経緯を話してあるシアさんはなんとなく察したのか、呆れを含んだ視線で窓から顔を逸らした俺を眺めている。

此処で副官ちゃんに真相をぶちまけないだけまだありがたいので、馬鹿を見る目付きで見られるくらいは甘受しよう、うん。

相変わらず何が起こるという事も無く、一定の落ち着いたペースで馬車は進む。
過去に何度も足早に駆け抜けた街道を、急ぐ事無く、ゆっくりと。
或いは、こういう時間を何の気負いも無く過ごせるようになったのも、平和になった証の一つってやつなのかもなー、なんて思いながら。
帝国へと続く道もまだ半ば――目的地に到着するその間、どう過ごそうかと、のんびりと考えたりするのだった。

道中、何事も無く、オレ達は帝国の領内へと無事に入国を果たしていた。
精々はぐれの魔獣が食料を狙って襲ってきた、程度の事はあったけど、同行している人員が多い上に皆、実戦経験も豊富な腕利き揃いだ。
馬車に居たオレ達に話が伝わる頃にはほぼ片付け終わっていた、という状況だったし、怪我人すらいないので有事にカウントしなくてもいいだろ。
楽と言えば楽だったんだけど、流石に数日間もそんな感じだと、暇過ぎて時間を持て

余していた。
食事ですら馬車の中、なんて事にもなりかけたけど、流石に到着までの間それでは逆に身体に良くない、と相棒とアンナが主張してくれた事で、飯時だけは外の空気を吸えたのには感謝だ。
平和になったからといって、今になってお姫様よろしく過保護な移動方法をチョイスされてもなぁ。少人数であちこち飛び回って戦場を駆けずり回ったりしてた身としては、窮屈さしか感じないんだよ。
遠話の魔道具も持ってきてあるし、後続のアリアが同じような目に合わない様に、同行するシルヴィーさんやグラッブス司祭に頼んでおこうかな。
そんな訳で、だ。
もう首都も目前。馬車の窓から覗いてみれば、遠目ではあるが発展した美しい街並みが見えて来た。
あと一時間もしない内に帝都に到着するともなれば、やっと半ば馬車での缶詰状態から解放される事も相まって否が応でも気分が高揚する。
聖女としての立場上、完全に遊興目的とはいかないけど……戦時中に訪れたときと比べれば、目的自体が和やかだからな。
終戦後は初めての帝都――この世界で最も発展してる国の首都に来た訳だし、祭りの

間は是非ともあちこち見て回りたい処である。
移動中に一通り目を通した帝都案内書は、お堅い施設や歴史ある名所ばかりじゃなくて最近出来た娯楽関連の店なんかも紹介してたので非常に参考になった。
杓子定規な役人やコッテコテの伝統派貴族が手を入れてる本だと、内容も画一的で正直読んでてあんまり興味をそそられないんだけど……編纂者が柔軟だったのかセンスあるのか、読んでいて実際にその場に訪れたくなる書物だったな。良いお値段だったけど、その価値はあったってやつだ。
チラリと、向かいの席に座る相棒の顔を見やる。
うん、コイツが気に入りそうな店なんかも記載されてたし、なんとか時間を捻りだして城下に出たいな。出来れば二人で。
でも、アリアも直ぐに合流してくる上に、あちらにはミヤコもいる。
祭りが始まってしまえばイベント目白押しで、二人で出掛ける機会なんて早々訪れないだろう。
やっぱりチャンスがあるとすれば準備期間の間だな。お互いの休みが合う様に調整したい処だ。
あれこれと到着後の予定を考えている間に、帝都に大分近づいてきた。
結局は護衛という名目で大半馬車の中に居ることになったアンナが、窓から身を乗り

出して大きく深呼吸する。
「んーー！　やっと着いたぁ。のんびりした移動も悪くないって思ってたけど、やっぱ早馬や走って行く方が性に合ってるって再確認したわ……素晴らしきかな我が故郷、麗しの帝都よただいま！　って感じ？」
それなー、と相棒がしみじみとした口調で同意を示して頷く。
アンナは性格的に見てもまぁそうだろうな、と思うが、忙しない時間もゆったりとした時間も満遍なく楽しむタイプのこいつが今回大分暇を持て余してたのは、過去に何度も自身の最速で駆け抜けた道行きだからだろう。景色なんかも散々見慣れてる訳だ。
「戦争終盤、お前は伝令と言うか飛脚というか、しょっちゅう脚を使って帝国と教国の間を行き来してたもんなぁ」
オレの言葉に、猟犬印の宅急便。常時速達で敵に凶報、味方に吉報をお届けしてました。なんて相棒は戯けて言うけれど、実際そう的外れでも無いんだよな、その台詞。
あの鎧を使用した際の機動力と速度を生かした情報伝達は、邪神の信奉者達が遠話の魔法や魔具をジャミングしても極めて短い時間で直接情報を届ける事が可能だった為、オレ達人類側には相当に有用だった。
逆に敵方には凄まじく目障りだったろう――が、そのときには既に信奉者達から死神扱いされてた相棒を腕づくでどうこうするのは、向こうからしたら不可能に近かった訳

で。

連中をおちょくる為なのか、単に何時もの悪ふざけなのか。配達に行ってくる！　なんて言いながら、元居た世界のポストをそのまま引っこ抜いた様なデザインの鈍器を担いで伝令先へと赴いたときもあった。

色だけは普通の鍛造された鋼そのまんまの色だったけど、帰ってきたら赤黒くなってたな。曰く、”塗料が向こうからやって来たので染色した”らしい。

傭兵という形で一緒に居た為に、アホみたいな量の功績に伴って相当な量の報酬も貰っていたのは分かるけど……定期的に意味の分からない悪ノリみたいな事に金を突っ込むのだけは今でもどうかと思う。

見た目は完全にポストだったけど、丁寧に鍛えられた鉄鎚としても中々の良品だったのは一目で分かったしな。無駄遣いしないで普通に貯蓄しとけよ。

今思えばコイツが《聖女の猟犬》として過剰に恐れられたりしたのはそういう一面のせいなんだと思う。

普段と変わらないふざけた言動の中にも、邪神とその配下関連に対する殺意の高さが透けて見えるというか……そのせいであまり親しくない人間はドン引きしてしまうのである。

そういった人達には魔鎧の影響を受けているのかも、なんて勘ぐられていたのかもし

れないけど……完全に素でやってんだよなぁコイツ……。
そうと理解してるオレとしても、最初は呆れと頼もしさが半々だったんだけど。
その殺意の高さ、容赦の無さの理由――その根底にある感情が、オレを、オレとアリアを苦しめている元凶に対する怒りだと気づいてからは、こう、なんというか、うん……。
我ながら現金なもので、その容赦ない戦いぶりにも胸が高鳴るというか、普通に恰好いいと思ってしまうときがあるというか。
べ、別にオレだけじゃねーし！　アリアなんて眼を輝かせて熱っぽく溜息ついてたりしてたし！　いいだろ別に！
って、誰に言い訳してるんだオレは。
流石に頭の中だけで盛り上がり過ぎだと我に返る。

既に帝国の中心地である帝都は目前。堅牢さと威風を兼ね備えた首都入口の城門が、オレ達の到着に併せてゆっくりと開門していくのが見て取れる。
先行した人員が一足先に諸々の入国手続きは済ませている筈だ。
なので、開いた門をそのまま馬車の集団は通過してゆく。
うん、やっぱ門の規模や広さ一つとっても流石の最大国家、といった感じだ。大型の

馬車同士がすれ違っても余裕の横幅って聖都の城門より更に一回りはデカいぞ。
巨大な城門を抜けた先に広がるのは、整然とした――だけど活気に溢れた、石造りの美しい街並みだ。
城門から続く大通りの先には見事な彫刻が彫りこまれた噴水が緩やかに水音を立てているのが見え、中央の広場らしき憩いの空間に清涼感を齎している。
更にその奥の景色に見えるのは、街中から見ても未だ霞んで見える荘厳かつ剛健な王城。今回の終点でもある。
大通りを進む教国の馬車の集団に道行く人々が歓声を上げ、通りに面した家々や店舗の上階からは可愛らしい薄桃の花びらが撒かれ、風に乗ってひらひらと舞い踊った。
「いらっしゃーい、聖女さまー！」
「帝都へようこそー！」
老若男女、様々な人達が笑顔で歓迎の声を馬車に向かって掛けて来る。
分かっちゃいたが、やっぱりオレを呼ぶ声が圧倒的に多い。分かり易い教国の看板の自覚はあるので、それなりに慣れたもんではあるんだが……うーん、やっぱり気恥ずかしさや面映ゆさと言ったものは完全には無くならないものだ。
「窓から顔出して手でも振ってあげたら？　聖女様？」
「楽しそうに言いやがって……行動としては間違っちゃいないのがまた腹立つなぁ！」

ニヤニヤと揶揄いを含んだ悪い笑顔でアンナが小首を傾げる。

両国の友好をアピールするのも今回の目的だ。業腹だが、ここはアンナの言う通りにしておくべきだろう。

これが面倒な貴族や他国のお偉いさん相手なら、完全に割り切って営業スマイルで対応も出来るんだが……キラキラした眼で見て来る一般の人達相手だと作り笑いも少し申し訳ない気がしてなぁ。どうにも引き攣りがちになってしまうのだ。

窓から顔を覗かせ、口角を上に向けながら民衆に向かってぎこちなく手を振る。

オレの下手糞な愛想笑いでも、帝都の人達は『聖女を近くで見る事が出来た』という事実を以て満足してくれたのか、歓声は益々大きくなった。

ゆっくりとしたペースで馬車の一団が進む中、ひたすらに笑顔を振りまいて手を振る仕事に従事していると、相棒がフラワーシャワー役、孤児が多くね？　と、ボソリと呟く。

言われて見れば建物の屋上や大通りから一生懸命に花びらを撒いている子供達は、少しばかり服がボロっちかったり汚れてたり、或いは着ている当人が痩せ気味だったりと、孤児と思わしき要素が多い。

これに関してはアンナが肩を竦めてあっさりと答えてくれた。

「へんな処で目敏いわねアンタ――お察しの通り、こういった子供向きのサクラ（盛り上げ役）みたい

なのは、国の方で身寄りの無い子に斡旋する場合が多いのよ。孤児院の子ならちょっとしたお小遣いや院での費用の足しになるし、孤児院に入りたがらない、路地裏なんかでグループ作ってる悪ガキの類には貴重な銅貨を稼ぐ機会ってワケ」

祭事の頻度や規模、後は資金なんかの問題で、実践出来ているのは帝都だけらしいが、戦災孤児を保護・支援する政策の一環らしい。

特にアンナのいう『悪ガキ』――無事に大人になれたとしてもゴロツキの類になりかねない日陰暮らしの子供達が、まともな仕事で食い扶持を稼ぐ為のさわりにでもなればよい、という事だ。

仕事ではあるが、楽しそうにフラワーシャワーを舞い散らせる孤児達を見つめるその碧眼が、懐かしいものを見る様に細められる。

「お金を稼げるってだけじゃなくて……こういった行事に自分達でも胸を張って参加できる、っていう特別感が嬉しいのよ――私も孤児だったからね、あの子達の今の気分は何となく分かる」

「……うん、そっか」

珍しく静かな、だけれど決して暗いモノでは無い懐古の情を滲ませて呟く友人の姿に、オレもなんとなくしんみりとした気分になって、言葉短かに返す。

そんな馬車内の空気を変えようとしたのか、相棒がうんうんと頷きながら腕を組んで

笑った。

――それが今じゃ帝国精鋭部隊の副隊長だもんなー、凄い立身出世じゃね？

何も考えて無さそうな感心顔で発言する馬鹿に、アンナも常の態度を取り戻して軽く笑い返して肩を竦める。

「ま、その辺りは陛下の実力重視な采配に素直に感謝、って感じよねー。一昔前の帝国だったら有り得ない抜擢だって話は、年配の人達からはよく聞く話だし」

一昔前――現皇帝であるスヴェリア陛下が実権を握る前の時代の話、って事だろう。

彼が帝国をきっちり掌握したからこそ人類種の覇権国家といえる今の立ち位置を手に入れた、ってのは間違いないだろうしな。《刃衆（エッジス）》もその前提あってこそ創設されたんだろうし。

人に歴史あり。

誰にだって言える事だ。それは、目の前の友人だってそうなのだろう。

そんな風に想いを馳せて、笑顔で花びらを降らせる子供達へと、自然と浮かんだ笑みを向けて手を振るオレなのであった。

城下町を抜けて馬車の一団が王城入りすると、オレと相棒は早々に来客用の貴賓室に

通される事となった。

長距離の移動の後だ。先ずは旅の埃を落として皇帝への謁見は後日、というのが本来の流れなんだろうけど……案内してくれる文官曰く、皇帝自身が「午後には時間取れそうだからちょっと待っとけ」と言い出した事でオレ達二人はそのまま顔合わせの為に客間で待機する事となったらしい。

「急に言い出したのは陛下の方ですので、気にせずお寛ぎ下さい」

そう言って申し訳なさそうに頭を下げる彼もまた、振り回された側なのだろう。付けてくれた使用人（メイド）だけでなく、人員を采配したであろう当人も来て直接説明してくれたのはこちらへの誠意というやつだ。

有能だけどフリーダムな偉い人に仕えるってのは大変だよな。教国（ウチ）もトップがあの昼行燈気取りの爺さんだから良く分かるよ、うん。

今は昼に差し掛かる時間帯だ、午後と言う事は昼食の時間を跨いで待つことになるので、軽食にサンドイッチが用意された。

これから皇帝陛下と顔を合わせるというのに、食事が喉を通る訳も無い――なんていう繊細な神経はオレも相棒も持ち合わせていないので、一緒に出された紅茶と共に美味しくいただく事にする。

――うん、美味い美味い。流石は帝国の宮廷料理人、馴染みの薄い具材もあるけどこ

れはこれで良いね！

早速サンドイッチに手を付けると、メイドさんの完璧な作法（ゴールデンルール）によって淹れられた紅茶に知ったこっちゃねぇぜといわんばかりに備え付けのミルクをドバドバ継ぎ足した相棒が満足そうに笑う。

お世辞にも品のある飲み方とは言えないんだけど、全く動じずに恐縮です、と微笑むメイドさんの瀟洒な事よ……まぁ、お持て成し側は相手が満足してくれるのが第一の目的だ。この程度の事で眉を顰めるような人材は王城の使用人なんて出来ないだろうけどさ。

オレはというと、聖殿で飲んでるものと飲み比べる意味もあって、そのままいただく――うん、普段飲み慣れてるやつとは茶葉の種類も違うけど、やっぱり『技能』って言えるレベルまで磨いた人の品は凄いな。

香りの芳醇さとか、その他色々と素人が淹れるものとは段違いなんだろうけど、蘊蓄を捻りだせるほど茶に詳しい訳でも無い。素直にただ美味いと喜んでおこう。

「陛下も昼飯食ってから来るのかねぇ……急遽捻じ込まれた顔合わせだから、そう長い話にはならないだろうけど」

――どうやろなぁ、正直今日は逗留先の屋敷に案内されて終わりだと思ってたし、はよふかふかのベッドにダイヴしたい。その前に水浴びだけど。

オレ達の会話を耳にして、御二人が滞在なさるお屋敷には大きめの浴場がありますよ、と教えてくれるメイドさん。

その言葉に、マジで!?　と目を輝かせる相棒を眺めつつ、新たなサンドイッチに手を伸ばしたときだった。

何やら貴賓室に向けて荒々しい足音が近づいて来たと思えば、扉の前でそれは止まり、今度は何かを言い争うような囁き声が微かにドア越しに届く。

「――――！　――ッ、――――!!」

「……、……！」

僅かに聞こえる声のトーンからして、やってきた誰かは貴賓室前に立つ衛兵と口論している様だ。

扉越しでも容易に察せる穏やかとは言い難い雰囲気に、オレと相棒が顔を見合わせて互いに首を傾げていると、足音に劣らぬ荒々しさで以て唐突に貴賓室の扉が開かれる。

大股でズカスカと部屋に入って来たのは、重装の騎士鎧を着こんだ若者だった。

ストロベリーブロンド、というには赤みの強い豪奢な金髪に、彫りの深い整った顔立ち。

白色の板金鎧は金の縁取りで装飾され、その質の高さからしても中々に高位の騎士である事が伺える。

突然の闖入者は部屋にいる人間をぐるりと見回して、まず真っ先にオレに視線を留めると胸に手を当てて簡易な騎士の礼をとった。

「お初にお目に掛かります、金色の聖女よ――この様な形での顔合わせとなりました事、真に心苦しく思いますが、どうかご容赦を」

真摯に、ともすればその場に跪きそうなくらいの生真面目さで一礼した彼は、次に相棒に眼を向けて……烈火の如き強い感情をその青い目に灯した。

「……君が聖女殿と同郷ということ託け、付きまとっているという傭兵か……！　よもやこの国の王城にまで付いてくるとは厚顔も甚だしい――だが、此処で私と遭遇したのが運の尽きだ！」

……あ”ぁ”?

なんだよコレ。どこの世間知らずのボンボンだ?

初遭遇から二十秒弱で印象最悪となった騎士の小僧は、怒りに燃える視線で相棒を睨み付け、今にも腰の得物を抜剣しそうな空気のまま、切っ先の代わりとばかりに伸ばした指先を突き付ける。

「外(おもて)に出るがいい卑劣漢！　救世の聖女の威光に縋りついてその栄光を食む輩に、帝国の土を踏む資格など無いと教えてやる!!」

――祭りのときくらい変なトラブルが舞い込んでくるのはヤメロォ!?

男二人の、怒声と悲鳴が帝都王城の一角に響き渡ったのだった。

祭りの準備　侯爵親子

――突然部屋にやってきた闖入者が突っかかってきた事で、俺が着いて早々かよ！とばかりに悲鳴をあげた直後。

再び部屋の扉が勢いよく開け放たれ、室内にいた全員がそちらを注視する事となった。

そこに居たのは、俺の顔に指先を突き付けている少年騎士によく似た少女だ。

少し長めの赤毛に近い金髪に、青い瞳も同じ。男女の差はあるが目鼻立ちなども非常に似通っている。

服装は真逆というか、純後衛仕様――何かの保護の魔法が掛かった質の良いローブに、これまた中々の逸品であろう魔装の杖が片手に握られていた。

少女は少年騎士より更に荒々しい足取りでズンズンと進むと、躊躇うことなく彼の前に立ってやや上の位置にあるそっくりな顔を見上げる。

自身と同じ青い瞳に睨み上げられて、つい先程までの怒りも忘れて呆気に取られた顔

のまま、少年騎士の口が開かれた。

「――イ……」

「ぬぅわにをしてくれやがってるんですかこの愚兄はぁぁぁっ!!」

その口から少女の名前、だろうか？　ソレが零れ落ちる前に怒声をあげた当人の雄叫びによって遮られ、両の手でしっかりと握り直された杖がフルスイングされる。

ゴギンッと首と顎辺りから出ちゃうとマズい音を発生させた少年は、そのまま白目を剥いて一瞬で意識を飛ばした。

膝を折って崩れ落ちようとする彼を、鈍器として使用した杖をペイッと放り捨てた少女が胸倉を掴み上げて力づくで立たせる。

「友好国から国賓として招いた方々に無礼を通り越して気狂いみたいな真似をして！　猪だの脳筋だの呼ばれているからと言って本当の猪以下の行動を取る必要は無いでしょう!?　寝てる間に耳から脳味噌が流れ落ちでもしたんですかこの馬鹿!!」

髪色に負けない位、怒りで顔を真っ赤に染めた魔導士姿の少女は、白目を剥いた鎧姿の騎士一人を吊り上げたままガクガクと掴んだ首元を揺さぶって吠え立てる。

おぉう……ヒートアップするあまり、最初の一発で綺麗に意識を刈った事にも気づいてないみたいや。顎に罅でも入ったのか、意識がお空の彼方へ飛んだままの少年の口から一筋のドロっとした赤い液体が伝っとる。

唖然として血縁らしき少年少女を見つめる俺とシアの視線に気付いたのか、彼女はハッとした表情になって慌てて頭を下げて来た。
「も、申し訳ありません！　身内の無礼のみならず、聖女様方にご挨拶すら欠くなんて……って何立ってるんですか早く頭下げてください兄さん！　深く！　膝を着いて！」
いや、さっきからそこの彼……君のお兄さん意識無いから。君が腕力で吊ってるだけだからね？
兄を下ろして膝裏にやたらとキレの良い蹴りを叩き込んで強引に膝を曲げて床に着けさせると、その頭を鷲掴みにして下げさせると言うより床に叩きつけ、赤金の髪の少女は自身も深々と膝を着いて頭を垂れた。
「重ね重ね申し訳ありません！　私の名は……」
あー。
――イヴ。イヴ＝ケントゥリオやろ。
俺の言葉に、驚いた様子で顔を上げ、「御存知でしたか」とバツが悪そうに呟く少女、イヴ。
レッドブロンドとでもいうべき特徴的な髪に、双子っぽい男女つーたらそらね。
帝国の武力の象徴といえば、対邪神を想定して組織された少数精鋭の《刃衆（エッジス）》の他にもう一つ。

軍部を統括する将軍にして、《赤獅子》と名高いレーヴェ＝ケントゥリオ侯爵が率いる帝国騎士団だ。

なんか厳密には《刃衆（エッジス）》も帝国騎士団の部隊の一つ、って扱いらしいんだが、括りとしてはレーヴェ将軍の纏める騎士団の中に入りつつ、彼の頭を飛び越して皇帝の命を直に受けて動く直属部隊でもあるとかなんとか。

帝国の組織図にはそんなに明るい訳では無いので、詳しい事は良く分からんが。

まぁ、とにかく。今話題に上げた将軍閣下とは戦場と帝国での軍議の場で何度か顔を合わせた事がある訳で。

あの人に双子の兄妹のお子さんがいる事は割と有名だし、なんなら本人と会話したときに話題に出た事だってある。

ノエル＝ケントゥリオ。

イヴ＝ケントゥリオ。

少々猪武者のきらいがあるが、帝国三指に入ると謳われる父親の剣才をしっかり受け継いだとされる兄と、優れた魔力資質とそれを磨く事を惜しまぬ気質によって、若くして宮廷魔導士の見習いになった妹。

先程の発言からして、イヴが今も貴賓室の絨毯にゴリゴリと頭を押し付けているこの少年が、ノエル＝ケントゥリオという事なのだろう。

「あぁ、言われて見れば特徴的だもんな、レーヴェ将軍の髪色って。そうか、この二人が……」

俺の発言に、隣に座っていたシアが得心が行った、と言った感じで頷く。

だが、二人の素性に納得は言っても先の発言については全く納得してないようで、たちまちその顔が厳しくなる。

「そこの小僧は曲がりなりにも侯爵家の後継ぎだろ。それが教国からの国賓に対して暴言ってのは割と深刻な問題なんだがな？」

「はい……仰る通りです、返す言葉もありません」

表情に負けず劣らず厳しい声色に、イヴが力無く項垂れてそのまま深々と頭を下げる。

体勢的にはもう殆ど土下座に近い。相変わらず意識の無いお兄ちゃんの頭を鷲掴みで床に押し付けたままなんだが、そのノエル君の額が更に深く絨毯に埋まり、ゴリッと痛そうな音を立てた。

シアは表面的な態度こそ厳しいままだが、間に合いこそしなかったものの兄貴の狼藉を止めに来て、その後の態度もしっかりと弁えたものである少女にはそう悪い感情を抱いていない。

それでも互いの立場ってものがある。不機嫌です、というポーズを分かり易く見せる

為か、座ったまま腕組みして軽く脚なんて組んじゃったりする聖女様。僧服姿でそれは品が無いからやめんさい。

直ぐにイヴが飛び込んできてノエル少年の顎を割って鎮圧した事もあって、さっき見せていた個人的な怒りは鎮火したみたいだが……今回は聖女としての立場からの公式な来訪やねん、流石にこれで無かった事にってのは難しいだろう。

正確にはノエルが突っかかって来たのは国賓待遇のシアでは無く、あくまで護衛でしかない俺ではあるんだが……それにしたって発言・行動共に問題が多すぎた。口だけじゃなくて手も出す気満々だったし。

両国の関係や今回は招待されたのを受けた側である事とか諸々加味すれば、ぶっちゃけこの後やってくる皇帝陛下に「お宅のトコの侯爵の倅が馬鹿やらかしたぞ、どういうことやねん、お？」と詰問しても許されるレベルのやらかしやぞ。

当事者の俺としては、何か勝手に入って来て喚いたと思ったらそっこーで気絶させられるという出オチ芸を見た様な気分なので、其処まで大袈裟にはして欲しくないのだが……発言は問題だったが『視た』感じ父親である将軍に似てるのでどうにも悪感情を抱き辛いしなぁ。

さて、どうするか、どうなるのか。

悩む俺と難しい顔で腕組みしたままのシア。沙汰を待つ罪人の如きイヴ嬢に、事の元

凶なのに失神したまんまのノエル少年。
　気まずいってレベルじゃねぇ重い空気が貴賓室に満ち始めると、その空気を入れ替えに掛かったのは兄妹が登場してから黙したままであったメイドさんだった。
「おそれながら、ノエル様の今回の行動はどう言い繕っても国際問題レベルです――この場限りで収めるのは不可能ですので、もう直ぐいらっしゃる陛下にお話を通すべきだと思われます」
「……ま、そうなるよな」
　彼女の言葉に、大体同じ結論に達していたらしきシアが吐息一つ漏らして肩を竦める。
　そのまま組んでいた腕を解いてソファーの背もたれに体重を預けると、床に正座したままのイヴに少しだけ柔らかくなったトーンで告げた。
「イヴ、取り敢えず兄貴を医務官に見せてやったらどうだ？　オレがこの場で治療して一緒に陛下を待つって選択肢もない訳じゃ無いが……正直、目を覚ましてまたこっちに噛みついてくる可能性もあると思うし、やらかした事の沙汰は陛下からレーヴェ将軍経由で伝わるだろうから、此処はキミとそこの小僧は退席すべきだと思う」
「はい……兄にはよく言って聞かせたあと、改めて謝罪に伺わせて頂きます」
　元よりこちらの意見には全面的に従うつもりだったのだろう。項垂れて悄然とした

様子で立ち上がると、少女はもう一度深く頭を下げた。
「本当に申し訳ありませんでした……ほら、行きますよ兄さん」
此方に対するしおらしい態度とは裏腹に、イヴは兄の足首を雑に掴んで芋袋みたいにずるずると引きずって部屋を出てゆく。
残当ではあるけどね。再三言う様だがやった事が事だ、話がでかくなってしまえば帝国の屋台骨の一つたるケントゥリオ侯爵家の長男とはいえ、下手すりゃ将来の当主の座が妹さんの方にスライド移動するかもしれん。
「……挨拶だけして終わりだと思ってたんだけどなぁ……何時になったらオレ達は逗留先の屋敷に入れるんだかな」
ソファに身を預けて天井を仰ぎ、ボヤく我が友人のお言葉には全く以て同感である。
二人揃って天井を見上げ、次に何とは無しに顔を見合わせると……揃って溜息が漏れた。
メイドさんがもう一度淹れてくれた紅茶が変わらず美味しかったのがせめてもの慰めだ……何事も無ければもっと美味かったというのは言ってはいけない（白目

「あー……久しぶりだな。色々と言いたい事もあるが……先ず正式なものは後日としても、この場で謝罪しておこう。余としても挨拶して軽く雑談だけして終わらせるつもりだったんだが、こうなるとは予想外に過ぎた」

「……いえ、つい先程起こった問題にこうして即座に対応・謝罪して頂けている時点で、そちらの誠意は充分に。苦労してますね、陛下」

台風の如き騒動と火種を起こしていった双子――厳密にはその兄の方だけどね――が、貴賓室を退出してから暫し後。

やってきた豪奢な衣裳と円套を纏った、灰色の髪の偉丈夫……帝国の主たるスヴェリア＝ヴィアード＝アーセナル皇帝陛下は、対面の席について挨拶もそこそこに謝罪を切り出した。

それを受けて、ウチの聖女様の方も取り敢えずの謝罪を受け取る。

どうやらノエル少年のアレは、小一時間も経っていないというのに早々に陛下の耳に入ったらしい。なんでも、貴賓室の守衛が血相変えて執務室に飛び込んで来たそうだ。

察するに、扉前に立ってる衛兵さんも力尽くで侯爵家の跡取りを押さえるのは立場的に難しかったんだろう。というか、ノエルが評判通りに親父さんばりの才能の持ち主だ

としたら衛兵一人じゃどうやっても止められんだろうし。代わりに即座に報告に走ったのはまぁ、悪くない判断だと思う。

なので、事の経緯を把握している以上、皇帝が取り敢えず謝罪から入るのは別段おかしな事ではないんだが……俺とシアとしては、彼が連れて来たもう一人の御仁の方が気になっている処ではあった。

年の頃は陛下と同じくらいの壮年の男性だ。

先程見ていたものと同じ、赤金の髪に鍛え上げられた大柄な体躯。特に髪と髭は豊かに蓄えられ、さながら獅子のたてがみを思わせる。

流石に教国製肉弾戦車のガンテス程では無いが、少なくとも比較対象に出来るくらいには見事な恵体だ。サイズや立場など諸々から、当然の如く特注であろう軍服に包まれたその上からでも、凄まじく練磨された肉体である事が見て取れた。

最後に顔を合わせて会話したのは三年近く前になるが……元気そうで何よりやね。

尤も、以前見た豪放磊落なその雰囲気は鳴りを潜め、少しばかり肩身が狭そうにして皇帝の座るソファの後ろに控えているが。

「お久しぶりですな、金色の聖女殿。猟犬殿も女神の御許より帰還為されたと聞き及んでいたが、こうして再び言葉を交わす事が出来るとは喜ばしい……本来なら再会の折には喝采を上げたい処ではあったのだが」

自分がこの場にいる理由を考えると、それも憚られる。
何処かしょんぼりとした空気を背負って、彼は普段と比べれば格段に大人しい声量で以て挨拶の言葉を述べて来た。
帝国軍部統括する将軍、《赤獅子》レーヴェ＝ケントゥリオ。
隊長ちゃん率いる《刃衆（エッジス）》が皇帝の懐剣だとするならば、こちらは帝国という大陸最大国家の軍事的な象徴と言える人物だ。
最前線で切った張ったは滅多に出来ない地位ではあるが、個人としての武勇も間違いなくこの国で三指に入るであろう超一流の剣士だったりする。
というかぶっちゃけ、二年前までならこの人か《刃衆（エッジス）》顧問のネイトが帝国で最強だろうとは個人的に思ってた。今だと三番手にいたであろう隊長ちゃんがトップに躍り出てる可能性が大だけど。
まぁ俺の勝手な脳内ランキングなんぞこの際どうでもえぇねん、気になるのは今この場にレーヴェ将軍が同席してるって事だ。
当たり前だが、なんぼ相手が皇帝だといってもただの護衛や付き添いで後ろに控えるような立場の人間じゃない――間違いなく、つい先程起こった身内のやらかしのせいでこの場に急遽同席する事になったんだろう。
俺達の視線が頻繁に自分の背後の人物に向けられている事は皇帝も気付いていたの

か、ちらりと後ろに視線をやるとメイドさんが用意した紅茶を怠そうに啜る。
「この場にレーヴェがいるのは大体察しの通りの理由だ。というか、執務室で《大豊穣祭》の警備についての確認がてらこいつと話をしていたら……まぁ、一報飛び込んで来てな」
お前達とこの場で会話するのは休憩も兼ねてたんだがなぁ、と少しばかり疲れの見える様子でボヤく自国の王の言葉に、将軍がその巨体を益々縮こまらせながら申し訳なさそうに頭を下げた。
「は……陛下のお手を煩わせる事となった今回の愚息の蛮行、聖女殿と猟犬殿になんとお詫びすれば良いのやら……」
「本当にな。お前の家の長男は若い頃のお前に輪を掛けて猪気味な処もあるとは思ってたが……帝国と教国の共同で行う最大規模の祝祭の一歩目で、初手から外交問題を起こしてくれるとは思わなかったぞオイ」
長い、ながぁい溜息を肺から吐き出し尽くすと、あっという間に飲み干したカップの中身をメイドさんに再び淹れさせながら、ソファの上でふんぞり返る……というにはやや脱力した感じで身を反らす皇帝陛下。
実際、寝耳に水だったのだろう。俺達との挨拶は気晴らし・休憩時間も兼ねていたというのに、強制的に今回の一件のせいでひどく面倒な厄介事に早変わり、という訳だ。

お疲れさんですマジで。

「正直、本来の大祭に向けての準備に注力したいからな、腹芸は抜きで行くぞ――先ず、そこらの木っ端貴族なら兎も角、軍部を纏めているケントゥリオ侯爵家自体に責任を問わせるのは、現状、余としては難しいと思っている。あくまで侯爵家嫡子のノエル＝ケントゥリオ個人の暴走に依るものだという形にしたい」

勿論、正式に帝国として謝罪も行うし、不足分は別の対価を用意する。とはっきりと言い切ってこちらの反応を待つ彼に、シアも大枠では不満は無いのか軽く頷いた。

「まぁ、将軍閣下には教国としても何度も戦場でお世話になってますから。過去の恩義を考えても御家自体に責を問う事はあまりしたくないです……けど、肝心の暴走した当人については”どこまで”の処罰をお考えで？」

「最低でも、嫡男としての家督相続の立場は一時的に取り上げる。当然、永続になる可能性も十分にありだ。幸い、妹の方も将来有望だしな。そのまま嫡子に移し替えても問題あるまい――それだけで済むのか、或いは侯爵家から放逐するのか、それとも葡萄酒（ワイン）を呷らせるのか、そこら辺はお前達と話して今から決める」

要は正式な謝罪とそれに伴う責任の取り方や賠償、何より問題起こした張本人の処遇をこの場でざっくり決めてしまいたい、という事なんだろう。

双子は見た感じ、リアより少し下くらい――年齢的には帝国の法でも成人したばかり

かギリギリ未成年かといった処だが……こちらとの話し合いが拗れる様ならノエル君に末期の酒を飲ませると断言する皇帝の言葉に、レーヴェ将軍の顔が暗澹とした色に染まった。

不満は無い、どう考えても息子が悪い。そんな感情はあってはいけない。だが、それはそれとして最悪の場合は息子が女神の御許へ若くして旅立つ事となるのは身を裂かれる思いである。

極力感情を殺しているであろう状態でも、そんな想いがありありと伝わってくる表情だった。

ちょっと待って、一ついい？

なんか　はなしが　おおげさに　なっとる　（白目

なんやねん、侯爵家に責を問うだの、成人したかも怪しい小僧に自裁させるだの。

ぶっちゃけ当事者側の俺としてはそういう重いの求めてないんですけど。そういうの嫌だから未だにフリーの傭兵とかやってるですけど。

そう主張すると、隣に座るシアが半眼になってこっちを見ながら口を開こうとして――それより先に皇帝が言い聞かせる様なトーンで言葉を被せて来た。

「猟犬。お前のそういう処は余的にも嫌いじゃないが――お前がどれだけ自身をただの傭兵だと主張した処で、それが通る段階は二年前にぶっちぎりで過ぎてると自覚しろ。

お前の功績と、何よりお前の周囲の人間が、お前が只の無位無官の無頼である事を許さんのだ」

とはいえ、背後に控える自身の右腕と言って良い男の心痛を、見る事もなく察していたのか。

皇帝陛下は膝の上に肘を乗せて頬杖をつくと、普段の不敵な笑い顔を浮かべて最後に付け足す。

「――なんでな？　余としてはお前達が結論を出すに当たって、参考になるであろう情報を幾つか用意してきた」

「……というと？」

打って変わって悪い笑みを浮かべて言われたその言葉に、シアは訝し気に問い返し、レーヴェ将軍は自らが仕える王の発した予想だにしない台詞に、驚いた様子でその横顔を注視する。

「そうだな、まず大前提として……ノエル＝ケントゥリオはお前達二人共に、悪い感情は抱いていない」

「いや、流石にそれは無理があるでしょう陛下。実際にうちの犬は見当違いにも程がある言い掛かりを付けられてます――イヴが飛び込んでこなければそのまま実力行使に及んでもおかしくない位には敵意バリバリでしたって」

シアさんシアさん、どうでいいけどうちの犬って呼び方やめてくれない？

普通に我が家のペット、みたいな扱いで呼ばれた事に横から異議を申し立てるが、二人からは視線すら向けられずにスルーされた。なにこれ泣きたい。

とはいえ、我が麗しの聖女様の御言葉もご尤も。あれで悪感情無いです、ってのはあんまり重い処分は止めて欲しい俺でも素直に頷きづらい話だ。

だが皇帝陛下は、頬杖をついたまま平然と言葉を続ける。どうやら根拠というか明確な理由がある模様。

「まぁ、実際の言動を向けられたお前達からすれば納得はし難い話だろう。だが、事実だ。《金色の聖女》と《聖女の猟犬》。この両名に対して、件の小僧に悪意隔意の類は無い――ただ、見当違いという点においては間違いないだろうよ、二重の意味で、だが」

そうだな、レーヴェ。と、水を向けられると、息子の進退が掛かっている将軍は力強く頷いて同意を示した。

上司であるこの国のトップがノエル君を擁護する様なポジに回ってくれた事が余程心強かったのだろう。

先程までのしょぼくれた様子から一転、なんとか息子の末期の酒（ワイン一気飲み）を回避すべしと、ここぞとばかりに前のめりに語りだす。

「はい、この場で発言しても言い訳にもならんと飲み下しておりましたが……以前、御二

人について倅はこう評しておりました――曰く、『姫君に忠を尽くす騎士』その理想形であると」

過大評価ァ！

いや待って、それ本当にノエル君が言ったの？　さっきの態度と違い過ぎて人物像が端っこすら重ならないんですけど！

実際に言われた言葉とレーヴェ将軍が聞いたと言う高評価。あんまりにも乖離してるので思わずツッコミを入れてしまうのも宜なるかな。

けれど、俺の隣で同じく？くせぇ！　といわんばかりの表情だったシアは直ぐに何かに気付いてハッとした顔になった。

「……ひょっとして、あの小僧――ノエルは、相棒が……《猟犬》が帰って来た事を知らない？」

「まぁ、帝国では一応緘口令を敷いてある話だからな――今回の祭りでそれも解禁する予定ではあったんだが」

「陛下から息子達には一足早く話す許可を頂いたので、今回の登城に併せて御二人に紹介しようと連れて来たのですが……それがこの様な結果になってしまい、我が子への監督の甘さを恥じ入るばかりです」

我が友人の呟きに、あっさりと頷く皇帝と、それに追従して更なる経緯の補足を入れ

る将軍。

あー……うん、そういう事ね。

此処まで来ると流石に全体の流れというか真相が把握できるぞ。

実際の処はどうであれ、ノエル君にとって理想の『姫とその騎士』だったシアと俺だが、俺の方は公の発表では二年前、聖女を筆頭とした各国主力で挑んだ邪神との戦いで戦死、もしくは生死不明・行方不明という扱いになっていたらしい。

で、現在。世界を救い、代わりに騎士を喪ったお姫様の隣には転移者らしき来歴不明の男がひょっこり現れて、何故か騎士が居た場所に収まっていた、と。

それが面白くなかったっつー事なんだろうかね？

俺が現在、聖殿で暮らしてる事自体は把握しているけど、それが正真正銘、ノエル君のいう処の『騎士』であるという事までは知らなかった、みたいな。

なので、彼からして見れば最後の最期までお姫様に仕えた騎士の後釜に、碌に名も知られてないぽっと出が我が物顔で居座ってる様に見えたのかもしれない。

情報がひどく断片的な上に、直接の面識が無い事も今回の騒動に拍車を掛けたんだろう。

二年前では彼の立場と年齢的にも戦場に出させてもらえるとは思えんし、遠目から見る機会すら無かったのなら猶更だ。

更に言うなら、将軍がサプライズのつもりだったのか、紹介するそのときになるまで俺の事を伏せていたのも要因の一つだろう。登城の前に軽く説明だけでもしておけば起こらなかった話なワケだし、息子を良い意味で驚かせてやりたい、という心遣いが裏目に出た形だ。

正直に言えば、それにしたって今回の彼の態度は敵意過剰だろう、と思わなくもないけどね。

仮に俺がくたばったまんまで、シアの護衛に知らん奴がついていたとしても、そいつに悪意が無くてシアリアも傍に居る事に納得してるなら他人がどうこういう様な話でも無いだろうし。

いや、マジでノエル君が言ってたような奴が二人の側でうろちょろしてんなら亡者でも亡霊にでもなって現世に戻ってナイナイしに行くが、そもそもそんな奴を侍らせるような奴らじゃないし。当人も、周りの連中も。

まぁ、とにかくだ。蓋を開ければ間の悪さ、すれ違い、勘違いの重なりで起こった話だった訳で。

なんかもう俺としては、責任取って丸坊主にでもさせてそれで終わりでいいんじゃね？　くらいの気分にはなってる。

でも外交って視点で見ると、ノエル君がとんでもない無礼を友好国の来賓に働いたっ

て事実だけは変わらんのだよなぁ。

酌量の余地あり、という形には出来るだろうが、今後も彼が家族関係に変な亀裂を生まずに過ごしていくには、教国側――正確には現場に居合わせているシアの妥協というか、口裏合わせがある程度必要になってくる。

ノエル君の乱入の理由が俺達への敵意処かその逆に類する感情が故だった、という事を知ってシアの態度も大分軟化しているので不可能では無いだろう。

皇帝陛下とレーヴェ将軍は、死罪コースを回避出来ただろうからもう十分、これ以上は友好国に対して不義理、といった様子だったが、俺的にはあと一押し欲しい処だ。

――先にも言ったが、将軍とその息子の『視た』在り方は非常によく似ている。

だから、変に拗らせたり歪んだりしなければ、彼もまた父親みたいにその魂を輝かせる漢となるだろうと期待感を抱いたりするのだ。フェチ的には是非ともそうなって欲しいですハイ。

なので追加情報があるなら、もっと出して良いのよ？

そんな期待と目力を込めて皇帝陛下をじーっと見つめると、大体察してくれたのか苦笑を浮かべて顎をしゃくる。

その先に居たのは――皇帝と聖女の対談が始まってからも静かに、影の如く控えていたメイドさんである。

彼女は皇帝の合図を受けて音も立てずに卓の側に歩み寄り、後ろに手を廻してニュッとばかりに唐突に一冊の本を取り出した。

それをシアに手渡すと、一礼して定位置に戻る。

……って、ちょっと待って。今どっからその本出したの？　背中や懐に隠しておけるサイズじゃないと思うんですけど。

「メイドの嗜みです」

アッ、ハイ。

上品かつ完璧なアルカイックスマイルで対応されてしまい、即座に疑問を引っ込める俺。

いやだってさぁ、これ追及したらアカン笑顔やぞ。おれはくわしいんだ（白目

「――！　これは……」

む、なんだシア。どうした？

驚きと――気のせいでなければ僅かに喜色の混ざったその声に。

メイドさんへの消えない疑問は押さえつけて、友人が食い入るように見ている本の表紙を、俺も脇から覗き込む。

サイズとしては大判に近いが、本の質としてはそう上等なものではない。

厚手の頑丈な紙で綴られたソレは、格調高い王城にある書物としては異色の、大衆向

けの絵本だった。

表紙には可愛らしい絵柄で、白い衣をまとった淡い金髪の女の子と黒い鎧姿の騎士が描かれている。

互いに手を伸ばして触れるか触れないか、といったもどかしい距離を子供向けながらに感じさせる気合の入った表紙絵の上部には、絵本らしくデカデカと分かり易いタイトルが印字されていた。

『金色の少女と黒い騎士』

ｏｈ……。

色々な意味でそのまんま過ぎるそれを見て、絶句していると。

「ノエルのやつが個人的に出資者（パトロン）となっている作家と絵師の作だ。というか、城下でこの本を見つけて小遣いをはたいて支援をするようになったらしい」

アウトォォッ！

笑いを多く含んだ陛下の台詞に、思わず叫んでしまう。

どう見てもシアと俺じゃねーか！　ふざけんな意義を申し立てるぞ！　肖像権の侵害だルルォ！

回収だ！　かーいっしゅう！　かーいっしゅう！　と強く遺憾の意を示すが、こっちの気も知らずに滅茶苦茶楽しそうな笑顔の皇帝様はニヤニヤと笑みを深くして肩を竦

めた。
「そうは言っても、国内の施設……孤児院なんかを中心に既に結構な量が出回っているぞ？　主な読者層である子供を中心に、中々に評判が良いらしい。余としては多くの幼子の笑顔を取り上げるのは心が痛むんだがなぁ？」
「……陛下、吾輩はこの様な話は倅から聞いておらんのですが……」
「商売っ気も何もない、ただドハマりしてる趣味を採算度外視で布教してるだけだからな。父親には言い辛かろうよ――別件の調査で偶々引っ掛かった話でなければ、余とて把握しとらんわこんな情報（モン）」
よし、レーヴェ将軍！　今回のやらかしの罰として息子へのお小遣いやら彼の使用できる資産を凍結しよう、全部！　資金源が絶たれれば本が増刷される事も無いやろ！
「帝都の中でも大手の商会が目を付けたらしくてな。近々教国や北方にも輸出される話が出てるから、余程の大ゴケをするまでは増刷と各国への流入は止まらんと思うぞ？」
嫌（イーヤ）ァ”ァ”ァ”ァァァ”ッ!?
頭を抱えて叫ぶ俺、事のついでに本来の目的であった気晴らしが出来た御蔭でご満悦な皇帝、なんか今回の件を振り返って、ムスッコと色々コミュ不足だったと思い悩む将軍。
男三人の会話を悉くスルーして、子供向けであるが故に大してページ数も多くない筈

の絵本をじっくり丁寧に読み終えたシアがパタン、と静かに本を閉じる。
「――うん、どうやらオレはノエル君の事を見誤っていたみたいだ。彼には見所がある」
チョッツロ!?　いや、厳罰とかにならんように融通利かせるのは俺としても望む処ではあるんだけど、それでええんか聖女!?
良く分からんが、今のシアはなんだか凄い機嫌が良い。厳しい対応をする、という建前上のポーズすら崩れ去る位には。
絵本の出来がそんなに良かったんだろうか？　もしくは意外と自分をモデルにした本とか出ちゃうと、こそばゆいながらも喜ぶタイプ？
「完全に無かった事に、ってのは流石に出来ませんけど、オレの裁量の範囲ではノエル＝ケントゥリオの問題行動についてある程度酌量するとここで約束しますよ――それはそれとして、この本は何処で売ってるのかお聞きしても？」
「あぁ、帝国としても侯爵家の跡取りを処刑だの追放だのにするよりは余程有難い。今回の一件は必ず別の形で対価を払うと余も約束しておこう――絵本に関してはそのままくれてやる、以前に調査の一環で参考資料として部下が持って来たもんだしな」
「我が息子の愚かな行動、重ね重ね謝罪致します聖女殿に猟犬殿……そして、寛大な処置に感謝を」
話聞けや、そろそろ泣くぞ。いい年した男が恥も外聞も無く泣き喚いて回収回収連呼

しだすぞオイ。
我ながら情けない脅しの言葉に、シアは悪い悪い、なんて言って軽く笑いながら、手の中の絵本をこっちに向けて翳して見せる。
「目を通してみて良く分かったよ。これを大枚はたいて色んな人に広めようとする奴が、オレとお前に悪い感情を持ってるとは思えない――お前もちょっと読んでみたらどうだ？」
お前さんがそこまでいう内容か。
興味が無い訳じゃないが……やっぱやめとくわ。読んでる途中でぜったいはずかしさでもんぜつするみらいしかみえない（断言
「ははっ。ま、お前ならそう言うだろうとは思った」
精神的ダメージが確約された読書のお誘いを固辞する俺に、シアは楽しそうに笑い返して……両手に持った絵本を大切そうに抱きしめたのだった。

教国の賓客たる聖女と、その相棒たる青年が退出した貴賓室にて。
幾つか予想していたよりは遥かに穏便な形で問題が決着した事で、帝国の主たるスヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルは安堵と疲労が混ぜ込まれた溜息を大きく吐き出し、改めてソファの背もたれへと体重を預けた。
魔獣の素材もふんだんに使用した最高級の家具が自身の身を受け止める心地よい感触を暫し楽しむと、ややあって天井を見上げてボソリと呟く。
「やれやれ、最初に報告を聞いたときはどうなるかと思ったが……なんとかなったか」
「……今回はまことに申し訳ありませんでした陛下。全ては吾輩の監督不行き届きに依るものです」
背後に控えたままの己が右腕――即位する以前から、帝国を強固に纏め上げるまで共に駆け抜けて来た二十年来の部下の謝罪に、軽くひらひらと手を振って返すだけに留める。
「お前もこの一時間程度で随分と心労が嵩んだだろう――この場には余しか居ない、座っとけ」
「む……では、御言葉に甘えて」
王と臣下という関係ではあるが、同時に若い頃からの友人でもある。

言外に休憩がてらオフの時間扱いにしろというスヴェリアの意を汲んで、《赤獅子》レーヴェ＝ケントゥリオは先程よりは多少砕けた所作で客人たちが座っていた対面の席へと腰を下ろした。

人目のある場所では到底出来そうにない、だらけた態勢で深く、ゆっくりと息を吐き出す帝国の主と重鎮。

「――お茶のお代わりはご用意致しますか？」

「いや、余はいい。あいつらと対談中に結構な量を飲んだからな。後ろに立ちっぱなしだったレーヴェにだけ淹れてやれ」

「うむ、お気遣い、感謝しますぞ」

この場に唯一控える使用人の女性――スヴェリアがこういった私的な場においても侍ることを許している唯一のメイドが、手早く準備を整えているのを横目で眺めつつ、彼は再び呟く様な声量で言葉を洩らした。

「ノエルの処遇については、悪かったと思っている――が、あれが最適解だった。教国との関係が悪化する可能性があるのなら、死んでもらうつもりだったのは本当だ」

「いえ、教国の御両人との話の最中、再三にも渡って申し上げましたが……愚息の短絡的な行動が齎した結果です。アレ一人の身の上のみで話が済むのであれば、ケントゥリオ侯爵家の当主として異議を唱える筈もありませぬ」

責められるべき者がいるとすれば、息子を諌められぬ不出来な父親でしょう、と。自虐を織り交ぜて語られるレーヴェの言葉に、身を乗り出して「それだ」と返すスヴェリア。

「今回の一件、確かにノエルの短慮によって起こった事ではあるが……少々前後の状況が不自然だ」

「……と、申されますと？」

「行動に移す前に、その根拠となったノエルのもとに届いた情報に、作為的なモノがあるように思えてな」

聖女の相棒――猟犬と呼ばれる青年が再度転生し、再び聖殿で過ごす様になって数ヵ月。

国内では緘口令を敷いたとはいえ、教国が特に秘匿などを行っていない以上、耳聡い者なら情報を得ていても不思議ではない。

今回、国賓として最初にやってきたあの二人に対し、並々ならぬ憧れや敬意を向けているノエルならばなるほど、既に何らかの形で聖女の現状を断片的にでも手に入れていても不自然ではなかった。

だが実際にはどうだ。彼が得ていた情報は、数か月前から転移者の男が聖女達の周りをうろちょろとして行動を共にしている、という酷くフィルターの掛かった内容であ

る。
　彼女達が満更でも無い態度である、などというのは一目見れば分かる話ではあるし、先程も言ったが《聖女の猟犬》の正体の周知が薄いというだけであって、その帰還自体は特に教国では秘匿されてはいないのだ。
　スヴェリアが引っ掛かるのはそこだ。どういう伝手にしろ、ノエルに届いた情報に意図的な選出があるように感じてならなかった。
「……倅が短慮を起こすように糸を引いたものがいる、と？」
「まぁいたとしても、此処まで大事になりかけるとは流石に予想の外だろうが、な」
　帝国と教国の関係に罅が入って喜ぶ者など、それこそ邪神の信奉者の残党くらいのものだろう。
　或いは平和な時代が永く続けば、安定した北方諸国などが強大な二大国家の強固な友好関係を疎ましく感じる様になる可能性は高いが……各地に復興支援を行う両国間に緊張が走る事は、現状、小国群にとっては寧ろ悪報でしかない。
　最悪の場合、息子を失っていたであろう帝国でも最強の一角である武人が、獅子の威嚇の如き低い唸り声で喉を鳴らす。
　物騒な威圧混じりの空気を垂れ流し始めた将軍の前に、鼻腔を擽る茶葉の香りと共に満たされたカップの乗ったソーサーが置かれた。

「む、これは忝い……淑女(レディ)の前で頭に血を昇らせるとは、吾輩もまだまだ未熟」
「いえ、お気になさらず。閣下がノエル様とイヴ様を大層大事に思っていらっしゃる事は存じ上げております」
顔を顰めて自戒と共に口をへの字に曲げるレーヴェとそれを見て微笑むメイドの女性を眺めながら、スヴェリアは一人黙して更に思考を続ける。
少なくとも、国内に帝国と教国の関係悪化を望む者は、現状ではいない。
――だが、皇帝たる己と教国の関係、という事であれば、また話は別だ。
嘗てこの国を纏め上げた際、度を越した害悪や愚物の類は苛烈な粛清で以て切り捨てたが、それに怖気づいて慌てて頭を垂れた者や上辺だけの忠誠を謡い、極力大戦へと関わらぬように立ち回った者。
人類種側が勝利を収めた今となっては、帝国内でも所領や影響力を削られて肩身の狭い思いをしているであろう者達。
スヴェリアが即位する以前の、旧態依然とした纏まりの無い大国であった時代にこそ幅を利かせていた『旧貴族派』とでもいうべき連中にとっては、彼の求心力や国内の支持が低下する事はさぞ喜ばしいことだろう。
証拠や確信がある訳では無いが、現状で王党派筆頭たるケントゥリオ侯爵家にちょっかいを掛けて来るとすれば、彼らである可能性が高かった。

「国の威信をかけた催しの準備期間に、随分と舐めた真似をしてくれる……旧黴共の頭とは大祭の最中は協力し合うと話を纏めた筈なんだがな」
「おそれながら陛下、あの三枚舌がこちらの示した条件を唯々諾々と飲むとは思えませんぞ。ましてや、あれの下にいる連中ならば尚の事です」
心底嫌そうに眉を顰めるレーヴェに対して、同じく渋面を作ってスヴェリアが「分かっている」と吐き捨てる。
旧い貴族達を言葉巧みに得意の口八丁で纏め上げ、だがそれを理由に粛清や排除という選択を取らせない程度には国に益を齎し――それ以上に自身の懐と領地を富ませる。
なまじその辺りのバランス感覚に秀でているだけに、部下や臣下としては最悪に厄介な蛇の様な男の顔を思い出して、帝国最高位の権力者達の顔が揃って素足で犬の糞でも踏んづけた様な面構えになった。
「……取り敢えず、お前の家と最近接触した者の中で古黴共と繋がりのありそうな者を洗い出せ。特にノエルとイヴの近辺は重点的にな」
「心得ました――吾輩としても、息子達にこれ以上の害が及ぶともなれば堪えが利くか怪しいですからな、全力を尽くすとしましょう」
「いやそこは我慢しろよ、お前にまでミヤコや猟犬みたいな若い連中と同じハジけ方をされたらいい加減禿げ上がるわ」

終戦以降、大陸最大規模となるであろう祭典、《大豊穣祭》。
各国様々な者達が集い、同時に同じ数だけの思惑も入り乱れるであろう祭りの時間は、刻一刻と近づいているのであった。

祭りの準備　闘技会予選のお手伝い

はてさて、到着早々面倒なトラブルもあったが無事……無事？　片付いて逗留先の屋敷に宿泊するようになってはや数日。

手隙の時間に繰り出した城下で早速例の本を見つけて人知れずダメージを受けたり、ケントゥリオ侯爵家は彼の妹へと御家の後継ぎの座が移ったと聞かされたり、長男でありながら一切継承権を持たない部屋住みになってしまった当人は不満処か受け入れて頭を丸めたと聞かされたりとお腹いっぱいな追加情報もあるが無事だ、無事なんだよそういう事にしとけ（白目

で、案内された屋敷の方なんだけど。

高位の貴族が来た場合にも使われる屋敷な事もあってか、中々に豪華で広いんだが……ぶっちゃけ後でリアやガンテスが合流してくる事を考えても数人で使うには広過ぎる感はある。

なので、俺達はもっぱら小さ目な客間を食事やらダベる為の場所として扱っている。

今朝もその客間で派遣されているメイドさんが用意してくれた朝食を二人でつついていると、俺達が滞在してる間、ここの管理を任されいるナイスミドルな執事さんがやってきた。

屋敷の人材は皇帝が直に選出しただけあって、めちゃんこ優秀な人達が多い。

他人にプライベート空間に居座られると落ち着かない小市民な俺でも、二日目には彼らが部屋の隅に控えていても気にならなくなった、と言えば凄さが分かるだろうか？

なんというか、単なる職業的な能力の高さとは違う一流の執事（バトラー）やハウスメイドの心遣いが感じられる立ち振る舞いだ。なんでもそうだけど、専門職の人ってしゅごいよね。

俺とシアが食事の手を止めて軽く挨拶すると、執事さんは衣擦れの音一つ立てずに一礼して、穏やかに「おはようございます」と返してくる。

「お食事中失礼致します、来客があるのですが如何なさいましょう？」

「客？　この朝っぱらから？」

フレンチトーストっぽい品を口に運んで、気に入ったのか少し緩んだ頬になっていたシアの顔が不思議そうに傾げられる。

初日に挨拶した際に、執事さんからは「聖女様との会談を望む方は相当に多いと思われますが、面識の無い方々は基本お断りほうがよろしいでしょうか？」と単刀直入に聞かれている。

実際、結構な爵位の帝国貴族やら大手の商会の頭取やら、かなりの数の面会申し入れがあったみたいだ。大人気だねぇシアは。

でも来る奴来る奴全員相手をしていたらキリがない。祭りの開催まで準備の手伝いがメインなんだから、基本屋敷は空ける時間が多いし、折角空いた時間は観光だってしたい。

「何が悲しくて、なんとか捻りだした自由時間に知らんおっさん共相手に延々営業スマイルでお喋りしなきゃならないんだよ」

うんざりした顔を隠しもしない当の聖女様の言である。

あんまり多い様なら自分の名前を出して良いと皇帝陛下も言ってたので、遠慮なくお断りさせてもらってるのが現状だ。

当然、執事さんの判断で弾ける奴は全部弾いて貰ってるわけだが……朝もはよからの急な訪問にも関わらず、こうして話を持ってくるって事は知り合いが来たっつー事やろか？

「はい、帝国騎士のエンハウンス様がおいでになられております」

副官ちゃんか。こんな早くに何の用じゃろ？

俺の疑問に対して微笑みと共に返って来た答えに、シアと一瞬顔を見合わせると同時に頷く。

「アンナなら問題ない、通してやってくれ。あと、この時間じゃあいつも朝飯を食べてないかもしれないし、軽いモノでいいから用意してやってくれないか？」
「かしこまりました――では応接間では無く、この部屋に直接お通ししても？」
それでよろしくオナシャス。あと昨日出た燻製肉下さい、厚切りで。
ついでにおかわりのリクエストを出すと、執事さんは「ではお客様の軽食と同時にお持ちします」と、やはり音一つ立てずに一礼したのだった。

「要は、今日一日だけこいつを貸してもらいたいのよ」
朝飯は軽く食ってきたけど、それはそれとして軽食は頂く、と仰ってもりもりサンドイッチを頬張っている副官ちゃんから、そんなお言葉と共に親指で指し示された。
えー、今日はシアがズィオロ枢機卿こと地質オタのスカラのお仕事を手伝いに行くんだけど。
「ンなことは知ってるわよ、隊長を筆頭に《刃衆》からも何人か護衛に出てるし。帝都周辺に地脈と接続する形で浄化結界の基点を設置するんでしょ？」
いや、だから。俺も着いて行くんだってばよ。ぼく、護衛。聖女の側、いるの当然。O

K？

当然と言うか、今回スカラのおっさんが主導して行っているこれらの作業は、邪神の信奉者――その残党への対策だ。

既に奴らの崇める対象は消滅し、散り散りになってこの二年間で容赦なく狩られ尽くしているものの、今回行う戦勝祭も兼ねた一大イベントに無謀な横やりを入れようとしてくる可能性もゼロじゃない。

なので、スカラが専門に研究している大地の自浄作用と魔法を組み合わせた理論を用いる事で、広域の浄化結界でぐるりと帝都を囲む予定なのだ。

邪神の加護……という名の呪を身体に注がれている連中にとっては、浄化の性質を持った魔法は毒に等しい。

ましてやそれが聖女の聖気を用いたものであるなら猶更だ。苦痛を堪えて帝都に侵入しようにも、日がな一日二十四時間、口とケツからガンガンに灼けた鉄の棒を突っ込まれて腸（はらわた）を焼かれ続ける様な痛みを味わう羽目になるだろう。

万が一にも信奉者達が《大豊穣祭》の妨害を企んでいた場合、今日から祭りの終日まで帝都を囲む事になるこの広域結界が張られると、その瞬間に全てが頓挫する。

つまり、連中にとっては本日の結界構築作業が終わるまでが正念場という訳だ。何かしてくるとしたら今日をおいて他に無いとも言える。

いや、散々に最悪のケースを想定して並べたてたけど、可能性としては本当の本当に低いのは分かっとるんよ？

必死こいて逃げ散った奴らが自分達にとっての最悪の殺し屋集団である《刃衆（エッジス）》のお膝元に戻って来るとか、万が一どころか億か兆かはたまた那由多の彼方か、みたいな可能性ではあるんだよ。

おそらくは幹部に相当するであろう、残った数少ない実力者ですら、大陸の果てにある霊峰で隠れ潜んでコソコソしてたくらいだし。

でもさ、ゼロじゃ無いならこう……やっぱ心配になるじゃん？

動員される護衛の数と質を考えたら、杞憂を通り越して妄想だと言われても仕方ないけど、先に上げた様に、霊峰で戦った屍使（ネクロマンサー）いみたいな鬼札を持ってる奴が生き残ってる可能性だってある訳だし。

いや、シアの援護を受けた隊長ちゃんならあの手の切り札は発動する前に相手の首どころか四肢も飛ばして胴も四分割くらいに出来そうではあるけど。

「隊長とレティシアが揃ってる時点で何を警戒するんだか。騎士団からも護衛の人員が出てるし、邪神の上位眷属相手でも余裕で討滅可能な戦力だっての。レティシアとアリア様に関してはアンタほんっとう過保護ね」

こちらの予想を肯定する様な発言をしつつ、タマゴサンドを飲み込んだ銀髪サイド

テールの少女が、呆れた目線をこっちに向けながら俺と自分との間にあった皿を引き寄せる――ってオイ。それ俺の燻製肉なんですけど。

この場の面子では一番小食なので、一足先に朝食を終えて優雅に食後のお茶を楽しんでいたシアが「ふむ」なんて呟きながら、思案している顔で視線を宙に彷徨わせた。

「貸してもらいたい、とは言うけど一体何をさせるつもりなんだ？　色々と小器用だから雑用全般に地味に強い奴ではあるけど……態々朝から来て頼み込むくらいだ、何かコイツじゃないと駄目な事でもあるんだろ？」

「私が今日担当する場所でちょっとね――ぶっちゃけ、闘技大会の予選関係が少しゴタついてるの。ある程度参加条件を付けた筈なんだけど、それでも予定人数を大分超過してるらしくて」

聖女様の疑問に、言葉通りぶっちゃけて答えた副官ちゃんが分厚い豚の肩肉にフォークをぶっ刺して豪快にかぶりつく。俺の燻製肉は一口で三分の一ほどが無くなった。

頬を膨らませてもっきゅもっきゅと口の中のものを咀嚼した彼女は、嚥下の後に手元のコップに満たされた果実水で口内の脂を洗い流すと、満足そうに一息つく。

「ふー……まぁ、そんな訳でね。ゴロツキ紛いな連中や血の気の多すぎる奴が大勢予選に押しかけてるせいで、周辺の治安維持に人手がかかり過ぎてるのよ。勝手にそこかしこで乱闘騒ぎ起こされるのも困るし、近隣住民とのトラブルなんてもっと駄目。だから

今日と明日で殆どを篩いにかける予定なの。こいつにそれを手伝ってもらおうと思って」

「片っ端からぶっ飛ばしでもするのかよ？　相手が下級の冒険者やそれに毛が生えた程度の奴らなら、別に相棒じゃなくても《刃衆(エッジス)》の誰かにやらせりゃいいだろ」

「ンなワケあるか。聖女の癖になんでその辺りの思考が脳筋仕様なのよアンタは」

シアの割と物騒な疑問に、半眼になってビシッとツッコミを入れる副官ちゃん。

「もっとスマートに片付ける予定よ、だからアンタの相棒が必要になったの」

そう言って、彼女は再び口を開けて燻製肉(ベーコン)を噛み切った……もう半分も残ってないんですけどぉ！

「さっきからしつこい駄犬。こっちは日の出から仕事漬けでパンをミルクで流し込むだけで済ませてるの。朝に必要な活力(エネルギー)の足りないアンナちゃんに、お肉を分けるくらいの甲斐性は見せなさいよね」

七割方食っておいて分けるって言葉はおかしいだルルォ!?　比率を考えろ！

「あーもう、仕方ないわねぇ……ほれ、返すわよ」

面倒くさそうに溜息をついた副官ちゃんは、フォークで突き刺したまんまの燻製肉(ベーコン)をそのまま俺に向けて来る。

なんで自分の飯を食われた側の俺がこんな扱いを受けねばならんのだ、解せぬ。

くそう、端の焼き目のついたパリっとした部分は全部食われちゃってるじゃねーかよ。

シアに同行するにしろ副官ちゃんの要望に応えるにしろ、今日の手伝いが終わったら晩飯にもう一回だしてもらおうと心に決めつつ、燻製肉（ベーコン）の残りを大口開けて一気に頬張ろうとして。

――横手からシアの手が突然伸びて、副官ちゃんの手からフォークを奪い取るとそのまま先に刺さった肉を自分の口に放り込んでしまった。

あ”ー！　俺の燻製肉（ベーコン）ちゃんが!?　何してくれてんのシアさん！

抗議の声もなんのその。朝から重たい食い物は好まない筈の聖女様は、凄い速さで口内の肉を噛み砕くとそのままの勢いで呑み込む。

口の端についた脂をナプキンで拭いながら、何故かシアは副官ちゃんに向かってギン！　と音を立てそうな程の目付きでガン飛ばした。

その強烈な視線を受けて鼻白んだ様に仰け反る副官ちゃんではあるが、口が少しばかり開いて「あ」と小さく声が漏れた処から察するに、メンチ切られる理由に心当たりがあるみたいだが……。

「……あー、はいはい。そういえばそうね。悪かったわ、以後気を付ける」

「……本当だろうな？　前にもサラっと二人で飯食ってたし、なんとなく油断ならない

んだよお前は」

えぇ……なに、何の話？　唐突に二人だけで通じる会話始めるのは疎外感で心にクるからやめて欲しいんですけど。

割と切実な俺の言葉をスルーして、更に二人は声を潜めて目の前でコソコソ話を始めてしまった。そういうのは誰かが目の前にいるときにやるもんじゃないと思うんですけどねぇ！

（帝国に戻ってくる前に枢機卿（カーディナル）にも揶揄われたけど、勘弁してよ。戦場でだって水が足りなかったら回し飲みなんて普通にするでしょうに）

（今は戦いの最中でもなんでもないだろ、偶に一緒に食い歩きしてるのは知ってるんだぞ。友達っていうには距離が近いんだよお前達二人は）

（いや、友人ならそれくらいするでしょ……あと交際相手に定期的収入の無い傭兵という名の無職はちょっと……）

（そ、それは大した問題じゃねーだろ。いざとなったらオレが養うからいいんだよ、教会の看板職の収入舐めんな）

（手遅れ感がひでぇこの聖女）

蚊帳の外感半端ない。泣くぞコラ。

よろしい、ならばこちらも今を好機と判断してやる……！　執事さーん、俺の口に一

欠けらも入らなかった燻製肉（ベーコン）ちゃんのお代わり下さい。

「私見となりますが、こういった女性（レディ）の密やかなお話がなされている場合は、間違っても内容を耳に入れる事無く、且つ最後まで静かに待つ事が肝要かと――それが所謂、男の甲斐性というやつなのではないでしょうか」

む、そう言われてしまうと一理ある気がするぞ。

控え目に告げられた言葉に、ちょっと考え込む。

そっかー。甲斐性かー……執事さんがそういうのなら大人しく待つかなぁ。さらば俺の燻製肉（ベーコン）、夕食になったらまた会おう。

分を弁えぬ言葉を聞き届けて頂き、感謝致しますと微笑んで一礼するナイスミドルに、いえいえ、逗留中助かってますと手をひらひらと振って返して。

俺はシアと副官ちゃんの内緒話が終わるのを、卓に頬杖ついて待つ事にしたのだった。

友人達の逗留する屋敷に訪れ、無事予定していた人材の確保に成功したアンナは、本日の業務――闘技会予選が行われる区画での巡回へと向かっていた。

闘技会の予選は、祭りの開催に合わせて開かれる本戦の場……即ち闘技場（コロッセオ）の周辺で行われる。

本来なら本戦の出場者である彼女は闘技会の警備関連については除外される筈であったのだが、予想以上に参加者が多いのと、多数の荒くれ者が集った事で起こる大小様々なトラブルに人手が足りなくなったと言う事で、急遽彼女も巡回のメンバーへと捻じ込まれる運びとなった。

いきなりな話ではあったが、特に不満は無い。

何分、今回の祭り自体が初めて尽くしだ。様々なイベント各種、手探りで進行を確かめている点も多い。

他所の国の人間が大量に出入りするということで、治安維持の為に駆けずり回っている騎士団を筆頭に、武官も文官も全員大車輪で稼働中だ。大変なのには違いないが、この程度のトラブルは予定の内である。

取り敢えず、確保した人材――聖女大好きなワン公には一旦所定の場所に待機してもらって、後は予選参加者を集めてその場に連れて行くだけだ。人数が人数なので半数程

度になるだろうが、どのみち明日も同様の篩いにかける予定なので問題無い。
レティシアにはなんとか納得してもらえたものの、当のワン公――アンナの友人でもある青年に交換条件を出されたのは意外ではあったが。
「……マイン氏族の工房ねぇ……あれだけ嫌がってた癖に、何しに行くんだか」
提示された条件を思い出し、思わず呟きが漏れる。
予選の会場へと向かう道すがら、青年が出した条件――というより個人的なお願いは、本日の仕事が一段落ついた後、現在帝国に腰を落ち着けているドワーフの纏め役、ファーネス＝マインの取り仕切る工房へと同行して欲しい、というものだった。
ファーネスとその氏族達が、彼の武装である魔鎧にドン引きするレベルで興味深々なのはアンナも承知している。どういう理由で顔を出すにせよ、一人で向かうというのは青年的に避けたいのだろう、その程度は予想が付く。
――が、しかしである。
『いや、私の必要ないでしょ、それこそレティシアと一緒に行きなさいよ』
当然の如くそう言ったアンナに向け、首を横に振った青年曰く――今回の用事はレティシアと……あとミヤコ隊長も良い顔をしないから、現状だとファーネスにブレーキを掛けてくれそうな人材はアンナ一択なのだそうだ。
引き受けてくれそうな他の誰か……聖女の片割れであるアリア様や護衛兼お目付け

役のグラッブス司祭も後に帝都にやってくる予定とはいえ、祭りには直接関係の無い話なので早々に片付けてしまいたいとの事。

……聖女姉妹と心置きなく帝都観光をする為だとぬかしていたが、それを自分に言ってどうするというのだろう、本人達に言ってやれ駄犬。

良い意味でも悪い意味でもブレないアホ犬（ゆうじん）の言動を思い返し、心なしか頭痛を覚えてアンナは軽く額に手を当てる。

その間にも脚は止めなかった御蔭で、目的地である闘技場（コロッセオ）の独特の形状をした外壁が見えて来た。

同時に、大祭の準備で賑わっている街中と比べても更に大きな喧噪が秋風に乗って耳に届く。

喧噪というよりは半ば怒号であり、同時にそれらを囃し立てる様な声でもあるが。

簡易な支柱にロープを張って、床代わりに木板を敷いた拳闘の舞台の様な仕切りが複数設置されているその場所では、武装した多くの冒険者や傭兵、果てはゴロツキにしか見えない連中まで、様々な荒事を生業にする連中が舞台上で武器を打ち合わせ、或いはその周囲で声援や野次の声を上げていた。

（ここだけ見るとただの野蛮な乱痴気騒ぎよね……）

冒険者にせよ、傭兵にせよ、下位の等級に在る者は参加を非推奨としているが、こう

数が多いのをみるといっそ禁止にした方が良かったのでは無いだろうか。
とはいえ、それ以外の特定の組合や組織に所属していない者には特に制限を設けていないので、そっち方面でも問題があった。
チンピラ紛いの者達がこっそりと行う賭け事の為に参加しているのも如何ともし難い。こういった連中はそもそも本戦に出る気も無く、あくまで賭けによるあぶく銭が目的だからだ。
定員割れを危惧して制限を緩くしたが故に、予想より参加者の人数が膨れ上がったのは重要な経験だ――が、来年からはもっと参加条件を絞ると城の文官達も決意している事だろう。
審判や場外乱闘などを防止する為の警備である騎士達がこちらに気付き、軽く礼をしてくるのに手を振って返して、アンナはさて、どう告知するかと思案を巡らせる。
騎士達に協力してもらって一旦現行の予選を中止、その後、青年に待機してもらっている闘技場（コロッセオ）へとこの予選区域の者を移動させる、そんな感じで良いかと手近な警備の者に声を掛けようとして――。
「――ですから！　順番というものがありますでしょう！　貴方は先程試合が終わったばかり、後にも大勢の方がつかえているのですから、他の方に譲りなさいな！」

「はっ、貴族のお嬢様はお上品なこったなぁ。お綺麗な事言ってないで舞台(リング)に上がれよ、精鋭部隊だかなんだか知らんが腕前を見せてくれや」
「何回同じ事を言わせますの、そもそも貴方とは当面試合の予定はありませんわ！　いいからおどきなさい、これ以上は予選進行の妨害と見做しますわよ！」

様々な喧噪でごった返した予選会場で尚、よく通る部下の声を耳に拾い、再度頭痛を感じて額を押さえる。
軽く首を巡らせると声の主は直ぐに見つかった。この予選に参加している為、自身と同じ部隊の外套(コート)は着ていないものの、特徴的な金髪の巻き毛だ。遠目に見ても直ぐに判別はついた。
「何やってんの、ローレッタ」
「あ、これは副長……見苦しい処を見せてしまい、申し訳ないですわ」
何やら参加者と言い争いをしている少女――最近《刃衆(エッジス)》へと入隊した北方からやってきた新入り、ローレッタ＝カッツバルゲルの背へと声をかける。
口論に白熱していたせいか、アンナが背後に近づいた事に気が付かなかったらしいローレッタはバツが悪そうに首を竦めて一礼する。
「で、何があったのよ？」

「少々こちらの参加者とトラブルになりまして……私(わたくし)はこの場では参加する側ですので、強引な真似も憚られるため、どうしたものかと……」

「おいおい、金髪のお嬢様の次は銀髪の小娘かよ！　帝国騎士ってのは随分と見た目ばかり重視した連中なんだなぁ！」

二人の会話に割り込んだ声――ローレッタと言い争っていた大柄な男の侮りの込められた大音声に、周囲の反応は二つに別れた。

先ず、声の主とその傍にいる二人の少女……特にアンナを見てギョっとした後、顔を青褪めさせてそそくさと距離を取った者達と、男の言葉に釣られて笑い声を上げようとしたが、周囲の反応に気付いて口を噤んで困惑している者である。

特に、その場で警備や審判としての仕事に従事している騎士達はなんとも奇妙な反応であった。

男の発した言葉は帝国の騎士、ひいてはそれを率いる将軍を侮るものだ。

本来なら厳重に注意――を通り越して叩きのめして失格扱いで放り出してもおかしくないのだが……その場にいる騎士全員が顔を引き攣らせ、男を憐みを込めた視線で眺めている。有り体に言って屠殺場の牛か豚を見る眼だった。

当の銀髪の少女はサイドに垂らした自身の髪の先端を弄りながら、詰まらない物を見る視線で男をじろじろと見回す。ちなみに彼女と男の間に挟まれた金髪の方の少女は、

騎士達とおんなじ表情になって即座に右に三歩分ほどスライド移動していた。
「その恰好からするに、北方の冒険者ね。他国まで来て随分と品のない発言をしてるって自覚はある？」
「品だぁ？　腕っぷしを競う大会で温い事言うじゃねえか、そこのお嬢様といい、精鋭部隊だのなんだの言う触れ込みも胡散臭ぇもんだ！」
「お、おい、止せよ。そこの銀髪……のお人は多分、《銀牙》だぞ」
　特に感情を見せずに淡々と問いかけるアンナの言葉に、侮りを嘲りに変えて敢えて周りに聞かせるが如く声を張り上げる男に、知り合いらしき他の参加者が諌めの言葉を掛けるが……男としては良い気分で地位だけの小娘を罵倒している処に水を差された、という認識なのか、その顔が不本意そうに顰められる。
「ハッ、こんな見てくれだけで皇帝の近衛の地位に取り入った連中の何にビビるってんだよ、俺は実力で北方で二級の地位を手に入れた！　次はこの国だ！　お飾りの連中なんざ目じゃ――」
「あぁ、もういいわ――取り敢えず防御しなさい、腹よ」
　聞くに堪えない濁声を遮ると、やはりアンナは淡々とした口調のまま告げる。
　これみよがしにゆるりと持ち上がったロングブーツに包まれた脚を見て、鼻で笑おうとした男だったが――次の瞬間、その足に装填された凄まじい密度の魔力に眼を剥い

た。

咄嗟に両の腕を腹部に差し込んだ反応速度は、確かに二級――上位相当の冒険者か傭兵の実力を持ち合わせていたのだろう。結果は何も変わらないが。

空気の壁をぶち抜く音と共に、ロングブーツの靴裏が男の腹に叩き込まれる。

枯れ木が折れる様な音と共に男の両腕がへし曲がって関節を増やし、その体躯が血反吐混じりの吐瀉物と共に弩弓から放たれた矢の如く吹き飛ぶ。

放物線すら描かずに一直線に地面と平行移動した男は、先月改修が済んだばかりの闘技場（コロッセオ）の壁に叩きつけられ、めり込んで漸く止まった。

外壁の砕ける轟音が鳴り響き、それが空に吸われて虚空に消えると代わりに痛い程の静けさが降りて来る。

「あ、やばっ」

壁に穿たれてしまった人間大の穴を見て、それを為した少女の表情が崩れてやっちまった、と言わんばかりに少々慌てたものとなった。

これ、後で自分の給金から天引きとかされないかな、等と心配するアンナであったが、先程までの喧噪が嘘のように静まり返った予選会場の中、殆どの視線が自分に集まっていると気付き、丁度良いから仕事の続きと行こう、と開き直る事にする。

「――そこの壁に埋まった田舎者のゴロツキは失格で。あと、人品に著しく問題アリ、二

級冒険者としての再審査を要求すると組合に伝えておいて」
　些事の後片付けについて、近くにいた騎士へとお願いしておくと、そのまま両の手を上に向けて上げてパン、と打ち鳴らして。
「ハイ、ちゅーもく！　闘技大会に向けて集まった皆さん、予選は勝ち抜き式の試合から変更になったわ。正午になる前には新たな方式の予選を開催するので闘技場（コロッセオ）の入口に集合しておくように！　後で係の騎士が集まった参加者を先導しに向かいます！」
　なにぶん、荒っぽい連中の集まりだ。こういった唐突なルール変更には苛立ち混じりの不満の声が上がるものと思われたが――少なくともこの場においては一切のブーイングの類は上がらず、非常にスムーズに事は進んだ。
　アンナ的には結果オーライである。

「――肝が冷えましたわ」
　闘技会予選参加者の一人として、闘技場（コロッセオ）内へと先導役の騎士に導かれるまま移動するローレッタは、さきほどの上司の一撃を思い返して呟く。
　壁にめり込んで生きたオブジェみたいになったあの参加者は、おそらく北方でも特に

内陸北部に近い出身だったのだろう。
一口に北方といっても、小さな諸国が連なって出来たその地域範囲は魔族領のある南部に劣らぬ程に広い。
激戦区である大陸中央部と比べれば比較的、邪神の軍勢の進行も穏やかであり、更に北部ともなれば禁足地たる龍の住まう霊峰にも近いため、戦線と呼べるものは数える程しか発生していないと聞く。
その分、何と言うか……身も蓋も無く言ってしまえば未開のド田舎であり、良くも悪くも中央の情報が入って来ない。
そのせいか、戦時中であるというのにひどく穏やかというかのんびりした人柄の者達が多い、という話なのだが……逆にあぁいった狭い世界の中で偏屈になったり、増長する者もいる、という事なのだろう。
ローレッタとしては、帝国にやってくるまでに巡り合った冒険者達が人品実力共に優れた者達だった為、自然と彼らを基準にしていた部分もあるだけに、二級冒険者でありながらあのような者もいるという事が少なからず衝撃だったのだが。
土地が変われば品も変わる。冒険者や傭兵の所属する組合の規範や規律への基準もまた、そうであると実感を以て経験出来たと思い直した。
にしても、アンナ副長の蹴りは凄まじかった。

技も糞も無い、その場で足を持ち上げて靴底を叩きつけただけの喧嘩キックだというのに、圧倒的な練度の魔力強化と足腰のバネを生かして放たれたそれは、ローレッタをして戦慄を覚える程の速度と威力である。

あんな適当に蹴りつけました、みたいな動作であの一撃だ。戦いともなればそこにどれ程のキレや巧さが加わるのか。

訓練の際に味わった悪鬼の如きしごきも併せて思い返せば、冷や汗と共に全身が震えそうなものだが――カッツバルゲルの血筋故か、ローレッタの身体に走ったそれは武者震いに近いものであった。

そうでなければ。

そうであるからこそ、己は《刃衆（エッジス）》に憧れた。そうであるからこそ、こうして彼女達の下で拳を振るう事を選んだ。

闘技会で副長と戦うかもしれない、と聞かされた際にはトラウマレベルの訓練を思い出して意識を飛ばす等という醜態を晒したが、敬愛する上司にして憧れの戦士である《銀牙》の実力の一端をこうして直に目の当たりにすれば、恐れや緊張よりも先に血が滾るというものである。

かの大戦で武勇を馳せた英傑達の一人に、己の拳が何処まで通じるのか、何処まで食い下がれるのか。

勝てるとは正直、思ってはいない。だが、叶うことなら全身全霊を叩きつけて挑んでみたい、と。少女は大会本戦に向けて意気を燃やす。

その為にも、先ずはこの予選を突破せねばならない。

予選免除（シード権）を得ている副長とは違い、ローレッタは自身の他にも数多くいる参加者を打倒して勝ち上がらねば、彼女と同じ舞台にも上がれぬのだ。

推薦してくれた隊長や顧問に報いる為、応援してくれる恩師の為、自身の将来の為――そして憧れる目標の人物、その一人へと挑む為。

素手ゴロ令嬢の勝利への気炎はこれ以上ない程に高まっていた。

他の多くの参加者――他の予選区域からも集められた、百名を優に超える様々な戦武を生業とする者達が、ゾロゾロと連れ立って闘技場（コロッセオ）内の通路を進む。

改修されたとはいえ、歴史ある建物だ。一般公開は武闘会開催までされていないため、これを機に先んじて内部を歩けるのはちょっとしたお得感がある。

そんな風に考える少女と同じ気持ちの者も多いのか、皆、興味深そうに周囲を見回していた。

やがて、長い石造りの通路を大人数の集団で抜けると、屋根の無い開けた中心部――即ち本選を行うであろう舞台が設置された場へと辿り着く。

見事な造りだ。元より思い思いに知人同士で喋りながら移動していた一団であった

が、開けた空間から見回せる光景に騒めきが大きくなった。
予選が行われていた拳闘の野試合用に作られる様な簡易な舞台では無く、頑強な土台に石畳を敷いて作られた武舞台。
ローレッタ達が入って来た入口の向かいには別の入口――其処には見事な竜の彫刻が設置されており、振り向けばこちらの側には獅子の彫刻が鎮座していた。
階段状に作られた膨大な数の観客席が円形に中心を囲む様は、否が応でもこの場で戦うことでの高い注目性を予感させる。
「おぉ……凄いな、こんな場所で試合するのか……！」
「こりゃスゲェぞ、予想以上だ。本選で良い処見せられりゃ、一気に名を馳せるのも夢じゃねぇ」
観客席が埋め尽くされ、大量の視線と歓声が舞台へと降り注ぐ様を想像したのか、他の参加者達から興奮した様子でそんな声が漏れ聞こえる。
（同感ですわ、これは……戦場とはまた違った種の高揚感を誘われますわね）
金髪巻き毛の少女も内心でそれに同意し、深く頷いていると。
カツン、というブーツの踵が石畳をたたく音が奇妙ほどに響き、武舞台に上がった一人の人影に全員がそれを注視する。

はたしてそれは、先程この場に集まる様に指示を出した彼女の上司――《刃衆(エッジス)》副隊長ことアンナ＝エンハウンスであった。

「はい、再度ちゅーもく！　割とスピーディーに集まってくれて感謝します。早速だけど簡単に説明するわね」

つい先刻もそうであったように両の手を頭上にあげてパン、と打ち鳴らすと、アンナはこの場に集まった予選参加者達を舞台の上から見下ろした。

「本来なら参加者同士で既定の人数になるまで勝ち抜き戦を行う……っていうかさっきまではそうだったんだけど……参加してる皆さんも感じている通り、予想以上に参加者が多いです。このままだと進行に問題が出ると言う事で、急遽、違った方式での簡易な”選抜”を行うことになりました」

そこで一旦言葉を切り、ニッコリと浮かべるその笑顔に。

何故だかローレッタは既視感と共に嫌な予感を覚えて、一人、顔を引き攣らせる。

舞台の上に立つ上司が説明を続ける中、此処迄の先導役だった騎士や最後尾で集団を見張る役目を担っていた騎士達がそそくさとその場から離れるのが見えて、益々その予感は強くなった。

あぁ、そうだ。この笑顔は以前、地獄のしごきで石を抱えたまま走らされた際、副長が自分の倍のサイズの石を担いで後ろから追い立てて来たときのスマイルであった。

（参加者の一人として公正を期す為、新たな予選方式についての事前情報はお断りしていましたが……これ絶対ダメな奴ですわぁ）

天を仰いでいる部下の心情など露知らず、彼女の上司は実に良い笑顔のままで説明を続ける。

「選抜を残った者が本選にそのまま出るかもしれないし、予想以上に多いのならその面子で本来の勝ち抜き戦を行って本選出場者を決める事になります――じゃ、皆、覚悟は良いかしら？」

不敵に笑いかけて問われる言葉に、その場の参加者達から応！　と気合も新たに声が上がる。

ちょっと待って、あと五分くらい心の準備をさせて下さいまし。なんて言える空気でも無く。

ローレッタも下っ腹に力を入れて、覚悟を決めて次のアンナの言葉を待ち受ける。

冒険者、傭兵、流浪の戦士、只の流れ者――人種職種様々ではあるが、皆、戦意に満ちた頼もしい返事が返ってきたことに、銀髪の少女も満足そうに一つ頷いて。

「その意気や良し、って処ね。じゃ、早速始めますか――おーい、始めるから降りて来てー！」

そんな風に、闘技場（コロッセオ）の空に向かって声を張り上げた。

間を置かずに、中天に近い位置にあった太陽が、一瞬陰る。

陽光を遮ったのは、雲でもなく、鳥でも無く、上空から降って来た人影であった。

ローレッタ達が背を向けている観客席側の上方から、彼女達の頭上を越える形でとんでもない距離を跳躍してきたその人物は、相当な高度からアンナの隣へと着地したというのに石畳に罅一つ入れず、音すら立てずに着地してのける。

立ち上がったその姿は、漆黒の鎧姿だった。

既存のソレと比べれば細身といえる形状のその全身武装は、ひどく攻撃的で禍々しい。特に頭部など、悪鬼を思わせる程に凶悪なデザインである。

何より、装甲に魔力を流す為に掘り込まれた魔力導線――そのふざけた量と深さは絶句の一言であった。控え目にいっても狂っているとしか思えない。

導線から深紅の光を明滅させる様に洩らし、ただ立っているだけで周囲の者達の肌を刺すような凄まじい攻性を伴った魔力。

その姿に、伝聞のみではあるがローレッタは覚えがあった。

というか、この場にいる殆どの人間はそうであった。

数少ない、全く知らないという者であっても一見しただけで滅茶苦茶ヤベー奴が来

た、というのは察せられたし、目の前の全身鎧が誰であるのか、正確に把握している者に至っては既に白目を剥いて失神しかけている者すらいる。

やや離れた位置にいるローレッタの肌が粟立つような魔力を放つ漆黒鎧――その直ぐ隣にいるというのに、平然とした様子で副長がかの人物の肩をたたいた。

「大体は知ってそうだけど、一応紹介しておくわね。こちら、教国の聖女姉妹の守護者という事で名の知られている《聖女の猟犬》さんでーす」

ざけんな、知っとるわ！　という視線が少なからず銀髪の少女の顔へと抗議を込めて突き刺さるが、声に出せる胆力……というか無謀な怖いもの知らずはこの場には居なかった。

視線だけで不満が届く筈も無く、肩を竦めてローレッタの上司は今回の”選抜”について詳細を語る。

「別にコレと戦えとは言わないわ――ただ、これから数分間、立っていれば選抜は通過です。じゃ、早速始めますよー」

よーい、スタート。という、上司の気の抜けた声と共に、棒立ちだった鎧姿――《聖女の猟犬》が軽く腰を落とした。

「……ははっ、俺の眼がおかしいのか……黒い鬼の隣に銀髪の鬼が立ってる様に見える……」

参加者の一人から漏れた、乾いた笑いを伴ったその声に。

ローレッタのみならず、その場に居るほぼ全ての人間が一斉に頷いて。

――邪神の眷属すら怯ませる、凄まじい威圧と魔力が豪風の様に叩きつけられ、百人以上いる参加者の内、六割が一秒で意識を飛ばした。

（……当人である《猟犬》様まで頷いている様に見えたのは、私（わたくし）の気のせいなのでしょうか）

周囲と同じように半ば白目を剥きそうになりながらも、なんとか耐えきって現実逃避気味にそんな事を考えていたローレッタである。

気分は完全にＦ．Ｏ．Ｅ――どうも、本日は延々、意気揚々と大陸各地から武闘会参加目指してやってきた人達にガン飛ばす作業に従事していた《聖女の猟犬》です（白目

結局、人数が多いと言う事で数回に分けて集められた参加者達に向け、全開モードの

鎧ちゃんで威嚇するという畜生ムーヴを繰り返した俺だが、その甲斐あって予選の人数は大分絞れたらしい。

最初に連れてこられた面子に知り合いの娘が混ざっていたが……彼女は無事、最後まで立っていたので予選通過はほぼ確定だろう。ちょっと顔色悪くて脚がプルプルしてたのには申し訳無さが半端ないが。

我がラヴリーバディは伊達に災害レベルの特級呪物扱いされてはいない。

実際の戦闘機能もさることながら、未起動状態でも使い手が騎乗動物全般に嫌われる程度には物騒な空気を垂れ流す代物だ。

こと威圧・威嚇や気当たり的なものに関しては、人外級の中でも更に群を抜く。故に、今回の件は鎧ちゃんの特性を充分に生かした仕事ではあるんだが……この方法を思いついたアンナ先生はやはり鬼か何かでいらっしゃる（確信

「失礼ね、普通に予選試合をやるより怪我人も出ないし、寧ろスマートな解決方法でしょ」

メンタル面を考慮してあげて、予選登録した人達もそうだけど俺も。顔面蒼白になってる人とか泡吹いてる人相手に全力威嚇とか心が痛いんですけど！

一仕事終えた帰りの道を、副官ちゃんと連れ立って歩く。

思ったより早く済んだので、時間的にはまだ日も傾き始める前だ。この分なら、今か

らファーネスの処に顔を出しても夕飯前には屋敷に帰れそうである。
　隣を歩く副官ちゃんが、軽く伸びをして上機嫌に頷いた。
「ま、今回は助かったわ。今日で半数は片付いたし、明日に終わらせられれば大分人員的に余裕も生まれそうだし。これからマイン氏族の工房に付き添うくらいはしてあげるわよ」
　おう、ありがとさん。しかし、明日も、って事は俺、また手伝う事になってんの？初耳なんですけど。
　首を傾げて問い掛けると、パタパタと軽く手を横に振って彼女は否定を返してくる。
「いや、明日は大丈夫。別の人が名乗りを上げてくれたから。アンタはいつも通りレティシアの仕事にくっついて行くなり、休みがとれるなら一緒に観光するなりしときなさい」
　隊長と出かけろ、と言いたいけど、私以上に予定が詰まってるのよねぇ、と。悩ましそうに続けるその台詞に、新たに疑問が生まれたのでついでに聞いてみた。
　別の人って……はて、誰じゃろ？　同じ様な真似を同じ様なペースで出来そうなのは……立場的に無理であろうレーヴェ将軍くらいしか思いつかんぞ。隊長ちゃんやネイトは単純に大勢に威圧をバラまくタイプじゃないし。
「あぁ、《魔王》陛下よ」

一応国賓じゃないのあの鳥!?　大丈夫なのかそれ!?

「偶々耳に入ったらしくてねぇ……当人が「面白そうだからやらせろ」って食い付いて来たんで断る方が難しかったのよ。御付きの《災禍》の人達も顎で使ってくれて構わないって言ってくれたから、問題無い、と思いたいわ……」

相変わらず自重しねぇなぁあのロリ○ンはよぉ！　今回は珍しく役に立つ方向ではっちゃけてるけど！

ファーネスの工房――ドワーフが主に居を構える区画へと足を向けながら、二人であれこれと今後の予定について語る。

今日の仕事内容もあってか、自然と武道会とそれに参加する彼女に関しての話となった。

「今日、アンタに付き合って工房に行くのも渡りに船ってやつではあるのよね。折角だから武器（エモノ）の方も本選前に見て貰っておきたいし」

腰に吊るされた二刀に手を当てて言う副官ちゃんに、特に気負った様子は無い。

頼もしい限りだ、流石は暫定優勝候補だね。

「そりゃ各国のトップクラスが軒並み出場しない状況じゃぁねぇ……油断するつもりは無いけど、下馬評としては自分が一番人気程度の自覚はあるわよ」

部下も出場するし、あんまり情けない処は見せられないのよね、と、不敵に笑って見

せる横顔がクソ格好良い。見た目は線の細い美少女なのに、歯を剥いて唇を吊り上げる笑いが似合うって不思議やねんな。

「……だから、そういうのはレティシア達やウチの隊長に言ってあげなさいっての」

なんか急に半眼になったと思ったら、溜息交じりでそんな言葉を吐き出されてしまった。解せぬ。

そこは理解しなさいよ駄犬、なんて額にチョップされつつ。

まだまだやる事の多い祭りの準備と、開催されてからの予定に思いを馳せて、俺達は帝都の街中を並んで歩みを進めるのであった。

迷子の白百合

「……困りました……これはいわゆる、迷子というものでしょうか」

不覚です。十秒も目を離していない筈なのですが、あっという間に人込みに呑まれて皆さんを見失ってしまいました。

申し遅れました、リリィはリリィ＝エルダと申します。

大陸中央は大森林、エルフの聖地で産まれた大氏族エルダの子です。

身寄りの無いリリィはそこで祖母様に引き取られ、長老様方に、『次代のエルフに相応しき教育』というものを受けて育ってきました。

ところがなんと、少し前に聖地に降臨なされた聖者様のとりなしで、外界で暮らす従姉様ご夫婦のもとに引き取られる事となったのです。びっくりですね。

故郷である聖地の暮らしに不満はありませんでしたが、今なら何となく理解できます。

そうである事が長老様方の言う『教育』だったのでしょう。

従姉様――今は義母様と呼んでいます――と、その旦那様である義父様と魔族の方々の国で暮らす様になってからは、たくさんの知らなかった事を知る機会に恵まれ、毎日新鮮な日々を送っています。

そんなリリィですが、なんとなんと、現在は家族と離れて外国に来ているのです。

大陸で一番大きい国であるという帝国で開かれる『お祭り』というものを体験する為に、義父様が送り出してくれたのでした。

……正直に言えば、『お祭り』を体験するならば義父様と義母様と一緒が良い、というのが本音です。

ですが、現在義母様は身重の体です。あんていき、というものに移るまでは国外旅行など以ての外というお話でした。

『お祭り』は一年か二年ごとに行われるだろう、というお話なので、リリィとしては義母様が動けるようになってから家族みんなで行けば良い、と思ったのですが義父様はこう言ったのです。

「……お前には、今まで体験する事の出来なかったものの多くに、触れてもらいたい……そして叶うのなら、生まれて来る子に、お前自身の言葉でそれを教えてやって欲しい」

いつものように、ぎこちない手つきで頭を撫でてくれながら伝えてくれた言葉に、頭に乗せられた暖かい感触にふわふわしていたリリィは衝撃を受けました。

考えてみれば当然の事です。
そうです、身重ということはもう一人、家族が増えると言うことなのです。
男の子か、女の子か、どちらなのかはまだ分かりませんが、それはつまり――リリィがおねぇちゃんになるという事を意味していました。
おねぇちゃんである以上、リリィには新たに出来る家族をお世話したり、色々と教えてあげる使命があるのです。
ですが、リリィは外界にやってきて数ヵ月と経っていません。お勉強する事も多いのは自覚しています。
外界の一般的な教養にすら穴がある状態です。そんな中、来年には生まれているであろう新たな家族に対して、おねぇちゃんとして立派に務めを果たすことが可能でしょうか？
答えは否です。その結論に至ったとき、自身の不甲斐無さにリリィは愕然としました。
よくよく思い返せば、聖者様のいらっしゃる国に半月ばかり滞在して従者としての務めを果たした際も、リリィの知識不足によってお手を煩わせた記憶があります。
このままではいけません。
おねぇちゃんとしても、兄様の従者としても、リリィは成長が求められていました。

そんな訳で見聞を広めるべく、この度帝国へと招かれた魔族領の幹部の皆さんに同行する形で、リリィも『お祭り』を体験しにやってきたのです。

兄様のもとから帰って来たリリィが直ぐに帝国へと向かう事に難色を示していた義母様でしたが、義父様に説き伏せられる形で最後には快く送り出して下さいました。

『お小遣いとは別に何かあったときの為に金貨を一枚、巾着に入れておくから隠し持っておきなさい。あと祭りは屋台や出店の類が大量に出る。食べ過ぎない様にな。それともし何かあったら《狂槍》殿か《不死身》殿に直ぐに言うこと。《魔王》様に何時ものように構われるとは思うが、一人の時は相手をしないように。あぁ、遠話の魔道具も貸し出してもらえたし、日に二回は連絡するんだぞ？　それと……』

『……シグジリア、その様に一度に言われても、リリィも覚えきれないだろう……一番大事な事を先ず伝えるべきだ』

出発直前、リリィの肩に手を置いて気を付けるべき事を教えて下さる義母様と、何故かそれを見て少し笑っている義父様。

嗜める様に言われた言葉に義母様は言葉を切ると、此方の頬を優しく両の掌で挟み込んで、優しく微笑みかけてくれました。

『あぁ、もう。兎に角、怪我をしたり危ない目に合わない様に気をつけてな――いってらっしゃい、リリィ』

『うむ……未知に触れる事も重要だが、一番はお前の心身の健康だ……それを忘れずに行動しなさい』

『はい、義父様、義母様。行って参ります。』

そんな風に、リリィは送り出してもらえたのです。

思い出すだけで胸がぽかぽかしてくる記憶ですが……現実は非情です。迷子となった状況が解決する訳ではありません。

事前に概要は教えてもらいましたが、やはり知識はあくまで知識、という事なのでしょうか。リリィは『お祭り』というものを侮っていました。

まさか開催前の準備の段階でこれ程の人の多さ、活気だとは予想以上です。人の多さに関しては一番大きな国の首都、というのもあるのかもしれませんが。

人の数もそうですが……何より、本番に向けて忙しく準備をする街の方々の、楽しそうな表情。

なんというか、これから楽しい事をするのだ、とこれ以上なく感じ取れるうきうきとした空気を多くの人達が纏っているおかげか、こちらの気持ちまで浮足立ってきます。

その結果、あちこちに視線を奪われて魔族領の皆さんとはぐれてしまったのですから、自身の未熟を痛感しますが。

「……確か、はぐれた際は何か目立つ物の側で待つか、そうでなければ手近なお店に入る

ように、と仰っていましたか」

今回同行する事となった魔族領の方々――その中でも、義父様の直接の上役にあたる《狂槍》様の言です。

リリィも魔力の感知に関しては聖地にいる頃から得意な分野だと思っていたのですが、幹部の方々にとっては高い領域で修めていて当然な技能の一つな様です。エルフの聖気混じりの魔力は独特なので、直ぐに分かるからはぐれても慌てない様に、との事でした。

特に、同行者の中で一番偉い方である《魔王》様は、その気になればこの街全域くらいなら個人の魔力を個別に認識可能である、と仰っていました。スケールが違い過ぎて想像が付きづらいです。

『――万が一はぐれてもご安心を、姫！　立ち塞がる全てを薙ぎ払って一直線（物理）に駆けつけますので！』

『そこのオツムも常識も女の好みの年齢も足りてないアホウドリの言う事は聞き流せ――だが、まぁ……迷子になってもビビんなってのは確かだ。直ぐに拾いにいってやるから精々大人しく待っとけ』

何故かリリィの前に跪いて力説する《魔王》様のお言葉に対して、《狂槍》様が付け足す形で仰って肩を竦めていたのを思い出します。

……以前から何度も疑問に思っていたのですが、何故《魔王》様はリリィを姫と呼ぶのでしょう？　大氏族エルダの血族ではありますが、祖母様に引き取られたとはいえ、リリィは血筋的には特に長老筋の近親という訳ではなかったのですが。

そんな事を考えつつ、『お祭り』の準備に追われて多くの人達が忙しく歩き回る街中を見回します。

リリィにとっては色々な目新しい物に溢れている帝都ですが、おそらく目立つ物――シンボルマークというべき物は不幸にもこの周辺には見当たりません。

ただ、不幸中の幸いな事にお店の類はそれなりに多いです。《狂槍》様曰く、妙な店だと面倒なので分かり易い飲食店などが待つ場所としては望ましい、との事でしたので、すぐ目の前にある看板にシンプルに”飯処”と書かれているお店に入るとしましょう。

義母様からの贈り物でもある肩掛け鞄の紐をしっかりと掴み、気合を入れていざ入店です。

あまり見た事のない、引き戸の様な扉を開けると、お腹を刺激する良い匂いが店内から漂って来ました。

席数は少ないですがお掃除の行き届いた店内は、何処となく兄様のもとで従者をしていた際に利用していた聖殿の食堂が思い出されます。広さなどは全然違うというのに

不思議ですね。
先程も述べましたが、お店の良し悪しを判別できる程にリリィは外界での経験を積んでいません。
ですが、何故でしょう。勘が告げていました、この店は良いお店であると。
「いらっしゃい――おや、可愛らしいお客さんだ。お嬢ちゃん、一人かな？　お父さんかお母さんは？」
「こんにちわ。保護者の方と待ち合わせをしているので、待たせて頂いてもよろしいでしょうか？」
お昼の時間には少し早いのですが、既に半分程の席がお客で埋まっている店内から、年嵩の柔和な雰囲気の男性が出迎えてくれます。
挨拶を返して一礼。お店に入った目的を告げたのですが……とっさに見栄を張って迷子では無く待ち合わせであると言ってしまいました。
不覚です……迎えに来て下さる方と合流すれば、直ぐにでも真実が明らかになるというのに。
”おねぇちゃんとしての沽券に関わる”などと頭を過ってしまったが故の軽率な行為です。真に胸を張っておねぇちゃん足らんとするのならば、反省せねばなりません。
お店の方は少し驚いた様な顔を見せたあと、笑いながら空いてる角の席へと案内して

くれました。

「そうかい、混みだすにはまだ早いからゆっくり待ってると良い――その間に何か食べるかい？　字が読めるならそこの壁にメニューが貼ってあるよ」

ごはんを食べる場所で席を利用させてもらうのに何も注文しないというのは、多分あまり良い事では無いのでしょう。

幸いにしてお小遣いは義母様から頂いています。『お祭り』本番前に使うのは好ましくないのですが、今回は必要けいひ、というものなのでリリィはこっくりと頷きました。

以前、兄様のもとへと向かった旅でも、こういったお店に入って一人で食事を摂る行為も経験済みです。まだまだ未熟とはいえ、リリィも少しずつ成長しているのです、ふふん。

壁に貼ってあるお品書きをじーっと眺めて、注文する品を吟味します。

むぅ……今まで食べた事のある品から、リリィにとって未知である品まで、品目は様々です。パスタ一つとっても、掛かっているソースによって複数の種類があります。

そして何より、ハンバーグがあるのです……！　一番は義母様の作ってくれたものなのですが、大聖殿の料理長様のはなまるハンバーグもとてもとても美味しかったので、非常に興味をそそられてしまいます。

本音としては、是非とも食べてみたいです。

ですが、リリィは絶賛迷子のエルフなのです。
今もリリィの魔力を辿って探しに来てくださっている《災禍》の方々の事を考えれば、自分だけしっかりと美味しいごはんを頂くのは、不義理が過ぎるというものでしょう。
なので、断腸の思いで特製ハンバーグの文字から視線を引き剥がし、お値段も手頃なスープだけを注文します。
魔族領の方々に対しての礼を失わないため、というのもありますが、お財布の中身を減らしたくないという判断もあっての事でした。
貨幣の価値基準は未だお勉強中な部分もあるのですが……お小遣いは多めに持たせてくれた事は分かります。それでも、無駄遣いは極力避けねばなりません。
なぜなら、お小遣いの半分は家族のお土産に使う予定なのです。
残り半分の使い道はきちんと吟味しなければ、あっという間にお財布は空になってしまうでしょう。
ちなみに『お祭り』本番の前ではありますが、まだ義母様のお腹でおねむの最中である新たな家族には、既にバッチリのお土産を購入済みです。
あの絵本はよい物です。おねぇちゃんが読んであげれば、喜ぶこと間違いなしなのです。
我ながら良い買い物をしたと、こればかりは自画自賛します、ふふん。

などと考えていると、直ぐにスープがやってきました。
お店の方がリリィの座る卓に置いてくれた品は、幾つかの野菜を煮込んだ中に、燻製肉（ベーコン）の切れ端が浮かんでいます。
値段としてはお店のなかでも安いものを選んだのですが、良い香りで美味しそうです。
ただ――。
「申し訳ありません、お小遣いの問題でパンは頼んでいないのです」
「ははっ、子供がそんな事を気にしなさんな、パン一つくらいはおまけしといてあげるよ」
「おまけ、ですか……では、頂きますね。ありがとうございます」
スープの器の脇にある、小皿におかれた小さ目のパンと店員さんの顔を見比べて。
しばし悩みましたが、ご厚意に甘える事にしたリリィは座ったままですが丁寧に頭を下げて御礼を述べました。
手をひらひらと振って厨房の奥へと戻っていく店員さんを見送ると、手を合わせてお食事の挨拶をします。
「いただきます」
義母（かか）様もそうですが、兄（あに）様もこの挨拶に関しては欠かした処を見た事がありません。

”いただきます”と”ごちそうさま”は、食べ物への命を頂く事への感謝と、お料理を作ってくれる人への感謝、二つの礼を込めるものだというお話です。

御祈りの言葉としては短いのでしょうが、そこに込められた意味についてはとっても説得力がある、とリリィは感じました。

まだ見ぬ弟か妹にも、普通のごはんが食べられるようになったら教えてあげたいですね。義母様がいるので、おねえちゃんが教える必要性が無いのは少々残念ですが。

少し硬いパンを指先で千切るとスープに浸して、柔らかくします。

ついでに匙でスープをひと掬いしてお口に含むと、リリィでも理解できる位には、良い意味でお値段不相応であろう豊かな旨みが口内に広がりました。

舌で感じた限りでは、そう変わった食材を使っている訳ではありません。

ただ、あり触れた材料でも切り方一つ、煮込みの時間一つとっても入っている食材に合わせた丁寧が仕事が伺えます。

お野菜の旨みを丁寧に引き出している為、塩気が控え目でもこれ程に豊かな味わいになるのでしょう。

以前、別のお店で飲んだスープは材料は似たり寄ったりだったのですが、具材の火の通り方にもばらつきがあり、もっと塩辛かった記憶があります。

勘働きなどしたことが無かったのですが……最初に感じた『この店は当たりである』

という予感は正解でした。

あぁ、それだけに……本当に食べたいものを選べないこの状況がうらめしいです。元はと言えば迷子になったリリィの自業ではあるのですが。

美味しいスープによって急速に空腹感を訴えて来たお腹は努めて意識しない様にしつつ、噛みしめる様にスープを味わっていると、お店の入口である引き戸が開いて、新たなお客さんがやってきました。

「あー、お腹空いた……おじさーん、久しぶりー」

「おやおや、こりゃ副隊長さん。とんとお見限りだったじゃないか、また来てくれて嬉しいよ」

お腹を擦りながら、慣れた様子で店内に足を踏み入れて来たのは、騎士の装いをした銀髪の女性でした。

年の頃は愛し子御姉妹の姉君の方と同じか少し上、くらいでしょうか。魔力による何某かの処理が為された黒地の外套を羽織り、相当に業物であろう二種の短めの剣を腰に佩いています。

以前は顔馴染み――常連客というものだったのでしょう。

店員さんとお互いに気安い口調で挨拶を交わす様は、一見客のリリィよりもずっとお店に馴染んでいるように見受けられます。

「いやぁ、ここ一、二年くらいは主に国外にいたのよ。久しぶりに長めに戻って来れたから、やっぱりこの店に来ないとね」
「嬉しい事言ってくれるねぇ。それじゃ、注文はいつもので良いのかい？」
「うん、お願い――ただし二人前でね」
スラリとした、義母にも負けないくらいの美人さんなのですが、見かけによらず健啖家なのでしょうか。
店員さんから水の入った杯を受け取りながら、銀髪の人はリリィから見て斜め前の席に腰を下ろしました。
「あいよ、いつもの二人前ね。にしても、この後も仕事なんだろう？　そんなに食って動きづらくないのかい？　ウチとしちゃ沢山注文してくれるのは有難い話なんだが」
「二人前くらいなら問題ないない。それに……来月と再来月はちょっと懐具合がピンチになりそうなの……だから、今の内に美味しい物を食い溜めしておこうかなって」
「なんだい、散財でもしたのかい？　それとも何かやらかして減給でも喰らったとか？」
「あー……後者よ。ちょっと仕事の最中に公共の建物の壁をぶっ壊しちゃって……」
そりゃ大変だ、と相槌を打って笑いながら手早く調理を始める店員さんと、腹を蹴るんじゃなくて股でも蹴り上げてやればよかったわ、とボヤいて杯に口を付ける銀髪の人ですが、お給金が減らされるというのなら今から節制した方が良いのでは、と思うのは

リリィだけでしょうか？

そう大きくは無いお店です。他のお客さんとの会話が聞こえて来るのは仕方ない面もありますが……聞き耳を立てるような真似も良い事では無いでしょう。

そんな風に考えて、取り敢えず目の前のスープとパンに集中しようと思ったリリィですが、それも長くは続きませんでした。

「ほいよ、おまちどうさま。御注文の当店特製ハンバーグセットだよ――おかわりは最初のが減ってきたら出すからね」

「きたきた。やっぱこの店にきたらコレよね」

……！

店員さんの言葉と銀髪の人の嬉々とした声に、思わずリリィは顔を上げてそちらを注視してしまいます。

じゅうじゅうと美味しそうな音と湯気を立ててお皿に乗っているのは、今まで見て来た物と違ってやや平たいハンバーグです。

上にかかっているのは赤茄子をベースとしたソースでしょうか。香味野菜や薬味を含む、主張が強めですが香ばしい香りがこちらにまで届いてくるようでした。

付け合わせのお芋と人参も美味しそうです。義父様は人参が甘い味付けなのが苦手らしく、おうちでのハンバーグでもそれを食べる時だけ少し尻尾が垂れて元気が無いの

を思い出しました。リリィは普通に甘くて美味しいと思うのですが。
何時も最後までお残ししているので、貰って良いかと聞いたときは目を輝かせて頭を撫でてくれたのです。
義父様が喜んでくれたので良い事をした、と内心で胸を張ったものでした。
けれどその後、義母様に二人揃って怒られてしまいます。
特に義父様は、「次やったらニンジン丸々一本、グラッセにして食わせるからな」と笑顔の義母様に言われて消沈して項垂れていました。
勿論、リリィもお咎め無しという訳にはゆかず、次に義父様の人参を食べてあげたら、ハンバーグをお夕飯に出す頻度を減らすと宣告を受けています。
綺麗で優しくて、自慢の義母様ですが、あのときばかりは怖かったのです……。義父様と「二度とやらないようにしよう」と、二人で固く誓い合ったのも当然の帰結でした。
漂って来る、お肉とソースの暴力的なまでの食欲をそそる香りから意識を逸らす為に、過去の苦い記憶に思いを馳せますが……成功しているとは言い難く、リリィの視線は銀髪の人がナイフとフォークを使って切れ込みを入れているハンバーグに張り付けられたままです。
「いっただきまーす……んーっ、んまいっ！　久しぶりに食べると美味しさも一入ってやつだね」

その口に切り分けられた挽肉の塊が放り込まれると、分かり易い位に銀髪の人の表情が笑み崩れました。

本当は食べたいけれど食べれない物を前にして、スープを啜る。

これは一体、何の罰……否、拷問なのでしょうか。

迷子になったのはリリィの責であって、間違っても《災禍》の皆さんに悪い点は無いのですが……それにしたってこれはあんまりな気がします。

少し平たい形状ですが、お肉はどんな味と食感なのか、ソースは甘めなのか塩気が強いのか。

それらをリリィがじっくり一口一口を吟味して味わいたいと思える品を、バクバクとあっという間に平らげている方が目の前にいると、その想いも更に強くなろうというものです。

八つ当たりに近い思考なのですが、スープによって空腹感を刺激され、更に届いてくるハンバーグの香りでお腹がきゅうきゅうと鳴っているリリィは、それらの感情を押さえ込むのに苦労しました。

その間にも、銀髪の人はセットのパンとスープもあっという間に食べ尽くしてしまい、二つ目のパンにも手を伸ばしています。

健啖なのは騎士として良い事なのでしょうが、主食であるパンをああも早いペースで

消費しては、ハンバーグが丸々一つ余ってしまいそうですね。
　リリィとしては、お肉そのものも大好きですが兄様（あに）に教わった口内調味の妙、というものも楽しみたい派です。
　この世界にも漠然と一緒に食べると美味しい、程度の概念はあるのでしょうが、明確な知識としては転生・転移していた方々の世界のものらしいので、おそらく銀髪の人はそれらを知らないのでしょう。
　少々意地が悪いとは思うのですが、目の前でハンバーグセットをもりもりと食べている方に対し、そのお決まりになる程の好きな品に、別の楽しみ方がある。リリィだけがそれを知っているという状況に、少しだけ胸がすく思いです。お腹の方ははさっきから空いてるのですが。
　案の定、こっそりと盗み見ている間にも二人前のパンを消費してしまった銀髪の人ですが、ここで彼女はリリィの予想外の行動にでました。
「はーっ、相変わらず美味しい……あ、おじさん、パンのおかわりお願い。次は丸パンにしてくれる？　あと次のハンバーグはソースじゃなくて乾酪（チーズ）で」
「はいよ。珍しいね、副隊長さんは前っからソース派だったのに」
　……おかわり……！　そういう手段もありましたか……！
　更には二皿目をソースから乾酪（チーズ）に変えて味の変化を楽しむ、という手まで打ってきた

銀髪の人に、リリィは人知れず戦慄を覚えました。

流石に常連なだけはありますね、侮れません。

このお店のみならず、外界のお食事に関してはまだまだ初心者のリリィでは知り得なかった方法です。

お小遣いに余裕があるのが前提の手段ではありますが、覚えておきましょう。

今更ですが、店員さん――この場合は店長さんと言った方が良いのでしょうか。彼のお手並みも相当なものです。

それほど席数の多くないお店とはいえ、一人で切り盛りしながら時折、銀髪の人や他のお客さんとも気軽に談笑しています。

その間にも、手は止まらずに注文された品をてきぱきと作り上げていく様は、熟練の職人芸と言い替えても良いのではないでしょうか。

その様に考えている間にも、二つ目のハンバーグのお皿を受け取った銀髪の人は、おもむろにおかわりの丸パンにナイフで切れ込みを入れました。

そして、二つに割ったパンの断面に、セットのサラダに入っている葉物野菜を乗せると、更にその上に乾酪（チーズ）がトロリと糸をひくハンバーグを乗せたのです……！

最後に一つ目のお皿に残っていたソースを匙で掬い、その上にかけるとそれらをパンで挟み込みました。

――空のお皿を下げようとした店長さんを止めたのはこれが理由ですか、益々侮れませんね銀髪の人……！

「テリヤキもいいけどやっぱりダブチは正義、だったっけ。アイツに力説されてからちょっと気になってたのよね……それじゃ、先ずは一口……」

あーん、と、音を聞こえてきそうな程に口を大きく開けると、彼女はハンバーグをサンドした丸パンにかぶりつきました。

口いっぱいに頬張った為に、声に出した感想こそありませんでしたが……その満足気な表情をみれば結果は一目瞭然です。

想像に過ぎませんが、普通に食べるだけとはまた違った美味しさがある筈なのです。

パンとお肉の相性は言うに及ばず、そこに乾酪（チーズ）の濃厚さに野菜のシャキシャキ感、全ての要素を控え目に垂らされていたソースが纏める。

それらを一度に口にする事で得られる美味しさ――サンドイッチに代表される口内調味の妙を、注文した品を利用して自らの手で作りだした銀髪の人に対して、リリィは謎の敗北感を覚えました。

とうに空になった自身のスープの器に眼を落して、未熟さによる敗北を受け入れていると。

「――これ、あっちの常連のお姉さんからね。遠慮しないで食っておくれよ」

やってきた店長さんが、そう言ってリリィの前に置いたのは……蜂蜜のかかったパンケーキでした。

「ウチは基本飯屋だから、甘味なんてこれしか無いけどね。まぁ、その分出来は悪くないと思うから」

そう柔らかく笑いかけると、直ぐに厨房に戻っていた店長さんの背を目で追い――次に、彼が先程指さした相手である銀髪の人へと視線を転じます。

注文した品をあらかた食べ終えた彼女は、リリィが見ていることに気付いたのか、口元をハンカチで拭ってヒラヒラと手を振ってきました。

ふ、ふふ、そうですか。リリィの様な未熟者の子供はお肉では無く甘味を食べているのが相応しい、という事ですか。

もちろんパンケーキも好きなのですが、只でさえ敗北感に打ちひしがれている処に、それを感じさせてくれた当人からの謎の施しです。

スープによって食欲を増進され、他人がお肉を食べる様に空腹をこれ以上無く刺激され、最後に目の前に甘味を置かれたリリィのお腹と口の具合は、控え目にいって大混乱でした。湧き上がる色々な感情の波を併せれば猶の事です。

――良いでしょう、貴女の善意は感謝して頂くことにします、銀髪の人。

その上で、リリィは貴女を好敵手として認定します。今は”食”に関する事で後塵を

拝していますが、何れは貴女を凌駕してみせましょう。

甘くて柔らかいパンケーキにフォークを突き刺しながら、そんな風に決意して。

リリィは目の前の好敵手（ライバル）を真っ直ぐに見つめたのでした。

祭りの準備　悪縁奇縁、転じて良縁（前編）

帝都に滞在を始めて一週間程度が経過した。
本日は教国の方からの人員及び物資の第二陣が到着する予定だ。
特に遅延が発生したという事も無く、午前中には到着した馬車群がかっぽかっぽと王城に行列作って進んでいったのが俺達の寝泊まりしている屋敷からでも見えた。
で、現在の時刻は昼がちょい過ぎたあたりなんだが。
「とうちゃーく！　しばらくぶりだね二人とも！」
「いやはや、実に平穏平和な道行でありました。しかしこうも長い間、馬車に揺られるばかりは最近では無かった事ゆえ、些か身が鈍っておらぬか不安を覚えてしまいます」
王城で皇帝陛下との挨拶を終えたリアと護衛のガンテスが、こっちに合流してきた。
どうやら俺達のときとは違って何事も無くスムーズに謁見まで済んだらしい。素で羨ましいんですけど。
馬車から降りてニコニコと元気よく手を振る妹（おとうと）分と、重すぎて座席の真ん中以外に座ると馬車が傾く人型岩ゴリラを、屋敷の前で待っていたシアと俺とで出迎える。

「よぉ、アリアも司祭も長時間お疲れ。陛下が用意してくれた屋敷だけあって、風呂付きで寝具なんかもすごいふかふかだぞ。先ずは旅の疲れを取ると良い」
「うん、ありがとうレティシア――そっちが到着したときに、ちょっとひと悶着あったって聞いたけど……大丈夫だったの？」
「あぁ、その件か。陛下か将軍あたりに聞いたのか？　全然問題無いし、少なくともこっちには後引くような問題は残らないから安心しろよ。なんなら、後でその件絡みで手に入れた良い物を見せてやろうではないか妹よ」
姉妹で和気藹々とやり取りしているのを横目で見ながら、俺の方は軽く肩を揉み解しているガンテスと言葉を交わす。
なんも起こらんのは良かったけど、それはそれで大変というか、窮屈そうだね。貴族用の大型馬車つーても、おたくの体格じゃそう大して広くも感じないでしょうに。
「なんの、確かにゆるりと身体をのばせるとは少々言い難い旅路でしたが……拙僧とて馬車の長時間移動は戦地派遣にて昔から経験しておりますからな！　本格的な修練こそ行えませぬが、座席より尻を上げて座する姿勢を保持しておれば、足腰が萎えるということもありませぬ故！」
ごめん、ちょっと何言ってるか分からない。
バシンと自身の禿頭を叩いて、相も変わらず空気をビリビリと震わせる様な声量で快

活に笑うオッサンの台詞に真顔で応える。
エコノミークラス通り越してエアークラス――まさかの移動中空気椅子発言である。絶対一日に決められた時間とかじゃねえだろ、馬車にいる限りはずっとやってただろ。
ガンテスと話している間にも、リアが姉貴(アニキ)に向かって「レティシアを補充！」とか言ってふざけて抱き着き、シアも笑いながら抱き締め返している。うむ、見ていて非常に心癒される光景なのでもっとやって下さい。
「うん、よし。補充完了だ――じゃぁ次はにいちゃんね！」
おおっと、俺もですか。
おめめをキラッキラさせてハグの体勢を取る妹(おとうと)分のリクエストにお応えして、両の腕を広げてやると「どーんっ！」なんっつって楽しそうに笑いながら今度は俺に向かって飛び込んできた。
いや、アリア君テンションめっちゃ高いね。お祭りがそんなに楽しみなんだろうか？
シアも滅多に見ない妹(おとうと)のはしゃぎっぷりに嬉しそうだけどちょっと苦笑いしとるわ。
そんなリアの様子に、ガンテスも相好を崩しながら頷いている。
「うむ。アリア様は道中、こちらで何をしようか、姉君や猟犬殿と何処を見て廻ろうかと、此度の祭りをそれは楽しみにしておいでしたからな。かく言う拙僧も、帝都の活気に充てられて少々浮足立つ気持ちが湧いておる処です」

珍しく僅かに揶揄いを含んでいる、浮足どころか到着するまで尻を座席から浮かしっぱなしだった鍛錬キチの台詞に、俺に抱き着いたままのリアが「し、仕方ないじゃんか、楽しみだったんだもん」と少しだけ恥ずかしそうに唇を尖らせた。

俺の傍らにやってきたシアが、すごい自然に妹の襟首を掴み上げてひょいっと持ち上げると、自分の隣にストンと落とす。

「えー……まだ充填終わってないんだけどなぁ」

「十分過ぎるだろ、長いわ」

リアはちと不満そうだが、シアの言もご尤も。

屋敷の前とはいえ一応お外ですからね。聖女様が野郎に抱き着いたまんまというのも、外聞が良くないからしゃーない。

「ま、今日の処は屋敷でゆっくりしとけよ。確かアリアは予定が組んであるのは明後日からだろ？」

「うん、ズィオロ枢機卿の仕事の手伝いって聞いたけど……レティシアは？」

「オレは明日に構築した範囲結界の基点のチェック。半分片付けて明後日にお前に引き継ぐ感じだな」

手近な日程について話し合っている聖女様達であるが、此処で二人の反対隣にいる二足歩行型筋肉要塞が一つ頷き、なにやら思いついたのか顔を輝かせてバァンと掌を打ち

合わせた。日常の動作で衝撃波を撒き散らすのはいい加減ヤメロォ！

「アリア様の仰る補充――友や家族と親交の抱擁というのも、また良きものですな。拙僧も帝国に居を構える戦友と再会の”はぐ”なるものを試みたくなりますれば」

大型の魔獣やら岩人形（ロック・ゴーレム）を鯖折りでへし折れる人のハグとかノーセンキューで（即答

物理的な肉体強度の問題で、このおっさんの熱烈ハグを耐えきれるのなんてレーヴェ将軍くらいしかおらんやろ。

２メートル越えのゴリゴリのマッチョ同士の暑苦しい抱擁とか、目の前の姉妹（きょうだい）のソレと比べてあんまり見たくない光景なんですけど。

「将軍閣下とは何時か力比べをしようと光栄なお誘いを頂いておりますからな！　此度の祭りの間にその機会が巡るなれば、拙僧としても正に僥倖です！」

力比べて……あぁ、この場合は戦力武力じゃなくて純粋に腕力――腕相撲の類か。ちょいと見てみたくはあるが……アンタら二人の腕相撲とか、決着の前に下手な台座だとぶっ壊れるやろ。やるなら特注の鋼鉄製でも用意したらどうでしょう？

「む……何処で行うにせよ、家財の破壊などは避けねばなりませぬ故、考慮すべきですな。閣下が適した物を所有していらっしゃればよいのですが」

両の手を片方ずつ聖女様達に捕獲されて引っ張られつつ、隣を歩くガンテスとしょーもない話をして屋敷の玄関へと歩を進める。

大戦中は幾ら馬鹿話をしようと結局はこれからの戦局が頭を過ったり、会話の方もなんだかんだ言ってそっち方面に流れたりしていたが、今は一から十まで気の抜けたお話が可能なんだよね。

良い時代になったもんだと、つくづくそう思う。

ウチのシアリアも揃った事だし、このまま終始、ゆるーい感じで楽しく祭りの時間を過ごしたいもんである。

次の日、ボクは皆が普段使いしているという客間の扉を開けると、先に食事を始めていた二人に向かって元気よく朝の挨拶を告げた。

「おはよー、二人とも！　にいちゃん、そんな訳で今日はボクと遊びに行こう！」

いや、どういう訳よ。なんて言って、朝食を口に運んでいた手を止めるにいちゃんの隣の席に座ると、すかさずボクの前に食器やナイフ・フォークをセットしてくれる給仕のメイドさんに軽くお礼を言う。

「そのまんまだよ、一緒に城下町を歩いてみようよ。明日はレティシアが休みだから、今日はボク」

昨日、寝る前に取り決めた順番について口にして、にいちゃんの向かいの席に座る姉(あに)へと視線を向けると、その当人は水を一口飲んで頷いた。

「まぁ、そういうこった。結界基点の確認作業、と言っても同行するメンバーは構築のときと同じ面子だし、護衛としちゃ過剰なくらいの戦力が揃ってるからな。安心してアリアに付き合ってやれよ」

鷹揚に言ってるけど、ボクとしてはその余裕がちょっと腹立つなぁ……例の絵本が帝都で売れているせいか、レティシアに変な余裕が生まれている気がする。

昨日散々に自慢されたからね。この分だとミヤコさんとかにも同じことしてそうだよ。いつかみたいに部屋一つ吹き飛ばすような喧嘩をしてないと良いけど。

凄いドヤ顔で見せてきた上に内容まで朗読してくれた絵本……『金色の少女と黒い騎士』は、子供向けの読み物としては良い品なんだと思う。

でも絵本は絵本だろ！　現実にはにいちゃんはレティシアの手を取って口づけたりなんてしたことないし、レティシアだってにいちゃんのおでこに祝福のキスなんてしたことないし！

……羨ましくなんかないもんね！　ホントだぞ！

正直に言えば、ほんのちょっとだけ、金って書いてある部分を銀に差し替えたり挿絵の女の子の髪の色を変えれば済む話でしょ、別版だしてよ、なんて思ったりしなくもないけど。

まさかツテも無い出版元へと意見をねじ込むなんて出来る訳も無いし……ていうかレティシアと違って羞恥心で精神ダメージを受けているであろうにいちゃんの事を考えると、流石にちょっとね。

そんな訳で、散々自慢された絵本の件に関してはスルーして、当初の予定通りにぃちゃんと帝都散策を楽しむのが最善だ。

シアに付き添わないなら、適当に誰かの雑用手伝うつもりだったから問題無いなー、じゃぁ二人で出掛けるかー。なんて言ってくれるその言葉が嬉しくて、昨日みたいに抱き着きたくなる。

レティシアは長いとか言ってたけど、一週間以上会ってなかったんだから丸二日くらいは抱き着いたままでも良いと思うんだよね。

時間と状況が許すなら一回くらいはやってみたいな……お願いしたら聞いてくれないかなぁ。

ふと、朝から幸せ気分で我ながら変な方向に思考が飛んでいるのを自覚する。

《大豊穣祭》……この世界に転生して初めてと言って良い、気兼ねなく楽しめる一大イベ

ントが近づいてるせいか、気が緩んでるよ。気を付けないと。
そもそも朝食だってまだ食べて無いし、ここでくっついたってレティシアが直ぐに引っぺがしに来る。にいちゃんとは今日一日はずっと一緒なんだ、機会を待とう。
「……そういえば先生は？　てっきり庭で朝の鍛錬とかしてるものと思ってたけど」
「グラッブス司祭は王城に行くってよ。知り合いに挨拶しに行くのと、例の闘技会の解説だかの仕事について、向こうとの擦り合わせもしてくるってさ」
「こんな朝早くからかぁ……この時間からでも打ち合わせ出来るってことは、王城勤めの人達は殆ど徹夜みたいになってそうだね」
ボクの疑問にレティシアが応え、既に先生が不在な事を知る。
朝の挨拶くらいはしておきたかったな、もう少し早く起きれば良かった……何日も馬車に閉じ籠っての移動も意外と疲労が溜まるみたいで、ちょっと寝過ごしちゃったんだよなぁ。
前に大森林に向かったときみたいに、馬車に飽きたら外を歩いたり、御者をしてみたり、馬車の屋根に上がって《虎嵐》さんやにいちゃんと一緒になって空を眺めてみたりと、そういった気分転換が全然出来ない移動時間だったからね。
今回の帝都への移動で思ったけど、食事と寝る時の天幕以外はずっと馬車で缶詰って苦行のレベルだよ。貴族のお嬢様とかはこれが普通とか凄いな。

飛行魔法で飛ぶ気楽さや、飛竜便での移動の快適さを知ってる人間の贅沢な意見なんだろうけどさ。徒歩よりはずっと楽なんだろうし。

――そういえば副官ちゃんも夜明けと同時に仕事とか言っとったな。手伝いに来たとはいえ、客分でもあるからゆったりスケジュールのこっちは何だか申し訳なくなる。

思い出した様に言うにいちゃんの言葉には同意出来るけど、その御蔭で祭りが始まる前から帝都観光が出来るのも確かだ。

来年か再来年、開催地が交換されて教国になれば忙しくなるのはボク達の方だし。そのときの分って事で。

給仕さんが暖かいパンとスープを運んできてくれたので、スプーンを手に取って食前の祈りの言葉を口にする。

「それじゃ、いただきまーす……あ、にいちゃん燻製肉（ベーコン）食べてる。一口もらっていい？」

「おいっ、お前もかアリア。なんでどいつもこいつも気軽にこう……！」

なんだかレティシアが文句を言って来るけど気にしない。昨日のドヤ顔の自慢は忘れてないもんね。

あいよー、一口なら全然おｋ、なんて言って、香ばしく焼けた豚肉を切り分けてフォークに刺して向けてくれるにいちゃんに。

ボクはとびきりの笑顔でお礼を言うと、雛鳥みたいに大きく口を開けて燻製肉（ベーコン）を入れ

てもらったのだった。あーん。

さて、朝食を終えると今日はお仕事であるレティシアと別れて、ボクとにいちゃんで帝都の観光……というか散策に繰り出した。

戦争中はすぐに王城入りしてそのまま会議やら合同作戦の戦力の顔合わせやらで、城下は全然見て廻ってない。回数だけなら結構訪れてるんだけど、土地勘やお店の知識なんて殆ど無いに等しい。

にいちゃんが地図を、ボクが最新の観光案内書をそれぞれ片手に、祭りに向けて旗や花の飾り付けなんかで華やかさが増している街中を歩く。

「流石にお店の数とかは多いねー。帝都中を見て回るのは一日二日じゃ不可能だよこれ」

大まかに方角で区切りを入れるとして、今日は一旦中央広場に向かった後に、東区の方を見て廻るのはどうじゃろ？　という言葉に、特に反対意見も無いので頷く。

ボクは手元の案内書をめくって、帝都東区の頁の概要を改めて確認した。

えーと、東区は……王城方面とその周辺だからお店とかは少ないけど、歴史的な名所

とか、昔から帝都に居を構える貴族様のお屋敷とかが多くある地区みたいだ。
その貴族様が古い屋敷から移り住んで、残されたそこを美術館とか歴史博物館みたいな形で一般に開放してる場所なんかもあるみたい。
うん、良いんじゃないかな。お腹が減ってきたら中央に戻って屋台を物色すればいいしね。
今日の行動範囲をざっくりと決めると、まずは中央区にある噴水広場に二人並んで移動する事にした。
直接東区に向かうより、中央から向かった方が地理の把握がしやすいんだよね。土地勘が無いボクらは特に。
万が一迷っても、取り敢えず街の中心部分に戻ればこんがらがった方向感覚もリセットできる。その辺りは聖都と変わらない。
それに、広場は充分に観光名所の一つとして挙げることの出来る場所だ。
大きな女神様の像が噴水の真ん中に置かれ、その掌から清涼感のある音と共に水が零れ落ちている様は……なんというか、流石帝国って感じだよ。
像の大きさといい、見事な出来栄えといい、分かり易い名所兼、街の中心部分のシンボルマークとして惜しみなく資金を掛けました、っていう感じがする。
一応、清貧を良しとしている教国（ウチ）では中々出来ないお金の掛け方だ。教会関連の施設

の中でも、この広場の女神像に匹敵する立派なものってなると限られてくると思う。
って、折角観光してるのに風情の無い事を考えちゃ駄目だよね。そんな事に思考を割くより楽しまなきゃ。
「立派な像だねぇ。奥ノ院にあるやつの方がサイズ的には大きいけど、噴水も兼ねてるのがいいね。水音も併せて綺麗だし」
――だな。女神様の像って結構デザインに地域差があるイメージだが、これは聖殿にあるのとよく似とるな。教国の比較的偉い人が監修したのかもしれん。
二人並んで、水を溢れさせる像を関心して見上げる。
デザイン的には正解に近いが、流石に本物には及ばんな……なんてボソッと呟くにぃちゃんだけど、無茶を言いなさる、ってやつだ。
多分この世界でそれを確認できたのは、にいちゃんだけだよ。ボクも転生のときに見たのは真っ白な空間に浮かぶ人型の発光体だったし。
そういう意味では、各地にある女神様の像を一番正確に採点出来るのはにぃちゃんなのかもしれない。
でもさぁ……あとおっぱいが小さい、本物は2カップは上だったっていう情報いる？
本物の女神様と会って一体何処を見てたのさ？
ボクが隣にいるのに、神様とはいえ別の女の人の身体について語るとかちょっとデリ

カシーに欠けると思うんだ。
そっと隣のにいちゃんの手をとって、腕を絡める。
それだけで少し胸の鼓動が跳ねて、くすぐったさを伴った暖かさが湧き上がるけど……取り敢えず今はその感覚には蓋をして、そのまま腕を捻って締め上げた。
――オイイ、なんでアームロックされてるんですかねぇ！　つーかこのやり取りなんか既視感！
言われて見ればそうかもしれない。けど、いつかのときとは違って敢えてやってるからね、止めてあげない。
……ボクだって成長してるんだぞ。この間だって、アンナと一緒に下着を新調しにいったんだからな。
ぐりぐりと腕を極める傍ら、成長の証を思い切って押し付けてやる。
ア痛ダダダダ!?　ちょっ、やめっ、なんて悲鳴混じりの声をあげて身を捩ってるにいちゃんだけど……単に痛みを堪えてる以外にも、腕から伝わる感触に困っているが故の大袈裟なリアクションだっていうのはボクには簡単に分かった。
正直に言えば、かなり恥ずかしい。顔から火が出そうだ。
でも、動揺して百面相を晒している彼の顔が可笑しくて。
そしてそれ以上に嬉しくて、ついつい意地悪な気分が湧いて続けてしまう。

もうとっくにアームロックなんてしてない。ただ、にぃちゃんの腕を抱え込んで自分の望むままにくっついた。

街の中央広場は待ち合わせなんかにも使われるのはお約束だ。同時に色んな人の憩いの場でもあるので、多くの人達が行き交っている。

いつもの白い僧服じゃなくて、ボク個人の私服だから聖女だってことは気付かれていないとは思うけど……それでもこうやって二人で仲良くしてるせいか、結構な視線を集めてしまっていた。

大半は微笑ましいものを見る視線だけど、中には舌打ちなんかしてくる人もいる。

「チッ、リア充が爆発しろ」とか呪詛でも籠ってそうな声色で呟く人は転生者なのかな。帝国は結構昔から転移・転生者を国に取り入れたりしてるので、その子供とか孫っていう可能性もありそうだけど。

……こうやってにぃちゃんと二人でいると、ボクと見比べて『釣り合ってない』といわんばかりの嫌な眼でにぃちゃんを見る人もいるけど、見る眼が無い気の毒な人なんだな、って思えば腹も立たない。

ボクは知ってるもんね。優しいトコも、格好良いトコも。かわいいところだって。

なので、周囲の眼はあんまり気にしないようにしてるのだ。

わぁ、腕の痛みが無くなったのに今度は視線がイターイ。と、天を仰いで嘆くにぃ

ちゃんを引っ張って、二人で噴水の説明が刻まれているプレートを覗き込む。ほらほら、最初の名所なんだから、ちゃんと眼を通しておこうよ。

「……えーと、後ろ向きに銅貨を投げて、女神像の掌に乗ると良い事があるっていうジンクスがあるみたいだね」

――元の世界でたまに見る、硬貨が沈んでる噴水とかと同じやな。掌オンリーとか難易度がちと高い気もするが。

ちなみに銅貨の方は定期的に回収して噴水の修繕費用に充てている、と明記してあった。ちょっと風情が無い様な気がするけど、使い道に関してきちんと周知しておくのは良い事だよね。

そして、こういった投げ物――言ってしまえば投擲に近い行為はにいちゃんの得意分野だ。

お財布から銅貨を一枚取り出して、にいちゃんに手渡す。

「はい、ボクの分。お願いね」

――あいよ。代理でやるのはＯＫなんかねコレ？

軽く肩を竦めて請け負ってくれたにいちゃんは、噴水の縁に腰掛けた。

女神様の像に背を向けて座る形になると、自分の分も含めた両掌の硬貨を軽く握り、そのままあっさりと親指で弾く。

同時に弾かれた二枚の銅貨は悠々とにいちゃんの頭を飛び越え、女神像の頭部よりさらに高く舞う。
空中でくるくると回って陽光を鈍く反射させながら山なりの軌道を描いて飛んで――そのまま水を溢れさせる像の掌に、二つとも小さな飛沫を上げて飛び込んだ。
「うん、流石！」
はしゃいで拍手するボクに、ま、これくらいはな。なんて、何でもない事の様に笑いかけてくるにいちゃん。
あーもう、偶に見せるかっこいい処がズルい。
あとボクに幸運が訪れるって部分をボクより喜んでるのがもっとズルい。なんだよボクのにいちゃん最高かよ。ちゅーしたくなっちゃうぞ。いや、したくても出来ないけど。
……やっぱり浮かれた気分になっちゃうなぁ。
お祭りが楽しみで、今のこの時間も楽しくて、抑えるのが難しいや。
少し前に気を付けよう、なんて思ったばかりだというのに、自分が相当ハッピーな思考になってるのに気が付いて苦笑が漏れた。
ちょっと羽目を外すくらいならいいかな、と思わなくも無いけど、帝国外からも色んな人間が流入してくる以上、完全に気を抜くのは駄目だよね。

曲芸染みたコインシュートを噴水周辺の人達も見ていたのか、視線が集まっている。
にぃちゃんが感嘆や関心の眼で見られていてボクも少し良い気分だ。ふふん、どうだ、ボクのにぃちゃんは本当はもっともっと凄いんだぞ。
自分でも自慢気だと思う表情のまま、座るにぃちゃんの隣に腰掛けようとした処で、広場に出ている屋台のおじさんがこっちを手招きしているのに気が付いた。
「そこのお二人さん、俺の奢りだからこいつを飲んでいきな！」
ニコニコと笑顔でそう言ったおじさんは、木のコップに満たされた飲み物――屋台の看板からしてフルーツジュースかな？　それを両手に持って差し出している。
唐突な申し出に、目をぱちくりさせてにぃちゃんと顔を見合わせた。
「……くれるって言ってるけど、どうしようか？」
――押し売りって訳でも無いだろうし、いいんじゃね？
あっさりと結論を出して、二人で屋台に歩み寄る。
おじさんは笑顔のまま、ボク達にコップを手渡してきた。
「一発で像の御手にお布施を乗せた奴にゃ、ウチの商品を一杯御馳走する事にしてんのさ。これぞ女神様の齎した幸運ってな？」
ここで店出してるときだけではあるけどな、と愛想良く理由を語ってくれるおじさんの台詞に、納得が行く。

「そうなんだ、ありがとうおじさん。御馳走になるね！」
「おう、飲み終わったらコップだけ返してくれよ――良い一日を、おふたりさん！」
お礼を言うと屋台から離れて、元の場所へと戻る。
「ジュース、得したねー。最初の観光場所から幸先が良いや」
――少なくとも、一発成功させた奴にはジュース一杯分の幸運は約束されてる訳だ。こういうジンクスを嘘にしない気配りは良いね。
「うん、そうだね――あ、ボクのはリンゴジュースだ」
――俺のはブドウ。本業は果物売りとかなのかもしれんな。
二人でジュースの味見をしながら噴水の側に戻るけど、離れた僅かな間にさっきにいちゃんが座っていた場所には別の人が腰を下ろしてしまっていた。
ありゃりゃ、残念……でもないか。噴水は大きくて、必然その外周縁部分も広い。ちょっと横にずれて座れば良いだけだし。
にいちゃんと一緒に先客の隣にずれて腰を下ろす。
座っているのは年配のお婆さんだ。こっちに背を向けてお婆さんとやり取りをしているのは、髪を剃り上げた騎士の人だった。
「ここが噴水広場ですよ御婦人。確認しますが、迷った際はこの場で落ち合う、と御家族も言っていたという事でしたが、間違いないでしょうか？」

「えぇ、街の真ん中にある女神様の像のある場所、と息子も言ってましたからねぇ。ここで合ってると思いますよぉ……助かりました騎士様、何分、帝都に来るのは初めての田舎者でしてねぇ」

「いえ、お役に立てたのなら幸いです。本来なら御家族と合流出来るまでお付き合いするのが筋なのでしょうが――申し訳ありません、早く戻らねばなりませんので自分はこれで」

どうやら、白い鎧の彼は迷ったお婆さんに道案内をしていた帝国騎士らしい。こういった迷う人は観光客の数に比例して増えるだろうし、大変だね。お勤めご苦労様です。

声からして、まだまだ若手であろう騎士の人が足元の荷を拾い上げると肩に掛け、お婆さんに丁寧に一礼して踵を返す。

そして、ジュースを飲みながらそれを眺めていたボク達――正確には、何故かお隣の会話を聞いて首をひねっていたにいちゃんと、ばっちり目が合った。

「あ」

――あ。

赤毛を赤いごましお頭になるまできっちり剃り上げた、ボクより年下らしき少年騎士と、にいちゃんの口から異口同音で言葉が漏れる。

え、なに？　知り合いなの？
驚愕に見開かれる青い瞳と、絶妙な気不味さに染まった黒い瞳。
両方を見比べて、ボクは首を傾げる事となったのだった。

祭りの準備　悪縁奇縁、転じて良縁（後編）

……わーお、なんてこったい。

予想だにしない場所で予想だにしない人物と顔を合わせる事になった俺の、率直な胸中である。

それは父親譲りの見事な赤毛を綺麗さっぱり剃った少年騎士――ノエル君にとっても同じだろう。

これまた親譲りの青い眼をこれでもかと見開いた驚愕の表情は、分かり易いくらいに強張っていた。

まー仕方ない。あの一件以降の経過は大雑把に把握しとるが、本人相当に悔やんでるらしいし。

……とりあえず、このままお見合い状態を続けてるのもなんだし、どう声をかけたものか。

俺の隣で不思議そうに小首を傾げているリアへの説明もあるし、ただの観光の筈がいきなり面倒くさい事になってしまった感があるなオイ。

そんなことを考えている間にも、ノエル君の表情は段階変化を起こしていた。
驚愕からハッとした表情へ、更にそこから凪いだ穏やかな――なんかガン決まりした感じの顔へ。
彼はその場に両膝を着くと正座に近い姿勢となり、腰の裏にある短剣を鞘ごと外して顔の前に持って来た。
「首から下は野の獣に食わせようが肥溜めに捨てようが御随意に。ですが、首だけは家の者が拾いに来ますのでこの場に転がしておいて頂きたい」
一体何の話をしてんの!?
オイ馬鹿やめろ、鎧を脱ぐんじゃない、なんで街のど真ん中でエクストリーム切腹しようとしてんねんこの子！　ちょっ、待て、マジでやめて!?　人目が酷いことになってるから！
リア！　アリアさーん！　呆気に取られる気持ちはスゴい分かるけど止めるの手伝って！　抑えとくから短剣を取り上げて！
「わ、分かった！　後で説明してね？」
そんなこんなで、俺達はまた変な暴走してる少年騎士を取り押さえる為に動き出した。

「……場所も弁えず、御迷惑を。腹を切るにしても、御両人に無用の注目を集めぬ様に人気の無い場所を選ぶべきでした」

うん、まずは選択肢から切腹を消そう。マジで。

なんとかノエル君を止めて、半ば引き摺る様にして人気の無い路地に移動させ、暫し後。

ほっといたらまた腹切ろうとするか首吊りそうな沈んだ顔色で項垂れて正座する彼を前に、俺はリアに簡単な事の経緯を説明していた。

「そっかぁ……髪を綺麗さっぱり剃り上げてるから気付かなかった。レーヴェ将軍の息子さんなんだ」

「……この様な形での顔合わせになったこと、姉君との件も併せて本当に申し訳なく」

侯爵家の御令息は、納得した様子で頷く我が妹（おとうと）分に死にそうな顔色のままで応じている。

つーか、一部の貴族――多分に武闘派の間で、切腹の概念が浸透してるのはどういうことやねん。

転移・転生者ゆーても比較的近い時代の人間ばかりの筈なんだが……戦国時代のお武

家様がこっちに来た事でもあんの？　ンな話は聞いた事無いんですけど。
「とりあえずさ、切腹は止めようよ。レティシアからの又聞きだけど、双方の落としどころはとっくに見つけてあるんでしょ？　自刃なんてされても喜ぶ人は帝国側にも教国側にもいないって」
「……僕……あ、いえ、私の行為は本来、嫡男としての立場の剥奪と謹慎で済まされる様なものでは無い筈。猟犬殿と聖女殿、陛下の温情に縋って過ちを償う事を怠っている己が、どうにも許し難く……」
自責の念を溜め込んで、俺の顔をみた途端に暴発した感じね。
猪の上に真面目か。美点にもなり得るけど一連の件に関しては悉くマイナスに作用しとるやんけ。
まぁ、とにかく。リアの言う通り基本的には決着してる話だ。
言ってしまえば被害者側と言って良い俺達が終わった事と認識してる以上、問題起こした側のノエル君が減刑ならぬ加刑を欲していたとしても、声を上げる事自体が各方面にいらん手間を発生させるだけなのよ。
罰が軽くて逆にモヤモヤして苦しいってんならそれが償いの一環だ。悪いが飲み下して粛々と受け入れてくれ、腹とか切られても素で困る。
「はい、肝に銘じておきます……」

石畳の上に正座したまま、ヘコんではいるが今にも自分の腹を掻っ捌きそうな雰囲気は消えた少年を前にしてホッと一息つく。

お偉いさんの息子で、一般人より背負う義務や立場が少しばかり重いとはいえ、リアより年下の……それこそ日本人的な基準で言えばまだガキんちょやぞ。

終わってるレベルの悪童とかならともかく、普通に根は良い子――以前にも述べたが将来が楽しみな少年だ。一回のやらかしで残念無念のまた来世は俺のメンタルにもよろしくない。

場の空気を切り替える意味も込めて、パン！　と掌を打ち合わせて話題の転換を図る。

んじゃ、まぁアレだ。落ち着いた処で、改めて自己紹介してください。

「……自己紹介、ですか？」

うん、そう。

面食らった様子のノエル君に向け、こっくりと頷く。

勿論、互いの事はとっくに知ってるけどね。こう、あるやん？

顔を合わせて、相手見て自分の口からちゃんと名乗って。友好関係ってそういう手順を踏んで構築していくものやろ。例外はあるけど。

別に敵対関係って訳でも無いんだからさ、これを機に変に拗れたものじゃなくて真っ

当な関係を築こうではないか若人よ。
「若人扱い出来る程にいちゃんも年上じゃないでしょ――でも、その意見には賛成かな。ありきたりだけどさ、悪い縁を結んじゃったっていうのなら、これを機会に結び直せばいいんだよ」
俺達二人の言葉に、戸惑った様子だった少年騎士の顔に徐々に理解の色が浮かび。
彼は、唐突に両の掌を持ち上げると自身の両頬に叩きつける。バチィン！　と良い音が鳴った。
「……失礼しました、銀麗の聖女殿に聖女の猟犬殿。では改めて挨拶を。僕はノエル＝ケントゥリオ、侯爵家の出ではありますが……今は一人の帝国騎士として陛下に仕えております」
お会い出来て光栄です、と鯱張った態度で胸を張り一礼するノエル君に、リアが苦笑して応える。
「ボクはアリア＝ディズリング。聖教国で聖女なんてやってます……気合入れたのは分かるけど、ちょっと見てて痛そうだから治すね？」
まぁ、掌とはいえ、手甲に覆われた手で顔を全力で打ったらそうなるわな。
紅葉の痕を通り越して段々と頬が腫れあがって来た少年に向かって、軽い回復魔法が飛んだのであった。

「へぇ、叔父さんの家に引っ越すんだ？」
「引っ越しというより……その、御迷惑をお掛けした件でまだ謹慎中の身でありまして。宿舎の同僚や先輩方は気遣ってくれますが、部屋に帰っても廃嫡になる程の問題を起こした者が謹慎している状態では彼らも気が休まらない様子なので、どうしたものかと悩んでいたのです。叔父が声を掛けてくれて助かりました」
向かう先が同じ方向という事で、三人で連れ立って歩く。
どうやら、ノエル君は東区にある叔父さんの屋敷に向かう途中だったらしい。
謹慎中に寝泊まりの場所を変えるってのも中々聞かない話ではあるが、祭りに向けて連日激務の騎士団が、宿舎でじっくり休めないのも不味い、という事で許可が下りたのだそうだ。
そもそも侯爵家の坊ちゃんが同期・同僚の騎士達と同じ場所で寝泊まりしてたってのは、まぁレーヴェ将軍の方針なんだろう。自分は侯爵家当主なんつーエリート中のエリートなのに叩き上げの人材とか好きだしな、あの人。
で、そのやり方で上手い事行ってたが、今回の件で居辛くなった、と。

監督役である上司の眼もある宿舎での謹慎は条件としては合致してるが、それで同僚に負担を掛けている状況は如何ともし難いとノエル君も悩んでいた模様。

そこで声を掛けてくれたのが彼の叔父――レーヴェ将軍の弟さんだ。

自分が監督役を務めるので謹慎期間が明けるまで一時的に住まいを移してはどうか、という提案を受けて、引っ越すになった、という訳である。

肩に掛けているそれなりのサイズの荷物はその為だったのね。仮にも侯爵家長男の私物としてはめっちゃ少ない気がするが。

質実剛健な将軍の薫陶が生きてるって事なんやろな、馬車じゃなくてわざわざ徒歩で移動してるし。やっぱり性根が真面目な子なんだろう。

本来なら自宅が一番良いのかもしれんが、お家での監督役を務める将軍閣下が《大豊穣祭》に向けて連日王城に泊まり込みで仕事漬けらしいからね。叔父さんもその辺りを把握してるから代わりに名乗りを上げたということか。

廃嫡された侯爵家長男と侯爵家の当主の弟、なんて言うと如何にも何か企みがありそうな組み合わせだと思うかもしれんが、レーヴェ将軍と弟さんとの兄弟仲が滅茶苦茶良いってのは割と知られてる話だ。

病弱であんまり外に出られない人らしいが、相当な切れ者らしいぞ。体調の良いときは皇帝陛下の相談役みたいな事をしてるって聞いた。

ちなみにこれ、戦時中に将軍閣下御本人から聞いた話ね。息子と娘の話と一緒に自慢話として聞かされたわい。

ケントゥリオ侯爵家は家族仲が良好な様でなによりだ。身内で骨肉の争いなんてのは貴族ではよくある話なんだろうが、やっぱり仲良くやれるならその方が良いってばよ。

まぁ、他所様の家庭環境を延々評するのもなんだ。話題を変えよう。

ノエルくんや、謹慎はどれくらいで解けるのかね。

「は。期日的にはあと十日程度――《大豊穣祭》が開催する直前には解ける事になっています。警備や巡回の人手が足りない現状で迷惑をかけたので、せめて開催期間中は粉骨砕身で騎士としての任に当たるつもりです」

十日か。長いか短いかは帝国の法の基準を知らんからなんとも言えんな。

にしてもさぁ……硬い、硬いよ少年。もうちょっとくだけてくれて良いのよ？

リアと会話するときも大概緊張してる感が出てるが、俺が話しかけるとそれ以上ってどういうことやねん。いちいち背筋伸びてるし、今にも敬礼とかしそうだし、新兵が雲の上の立場な上官と会話するみたいなノリじゃないですかヤダー。

やっぱまだ後ろめたさみたいなものが強いのかねぇ、なんて思ったりしてると、当のノエルは「いえ！」と下っ腹に力の入った声でやわらかいトークを固辞する。

「たとえ公式には官位の類を持たずとも、猟犬殿は救世の聖女御姉妹の守護騎士たる御方です！　家柄以外に誇るもの無く、己で打ち立てた武勲の一つすら無い小僧など、本来こうして御声を掛けて頂くことすらおこがましい身の上であります！　この上、礼を欠いた会話を行うなど出来よう筈もありません、何卒ご容赦を！」

お、おう。そうですか……。

すげー鼻息荒くまくし立てたと思ったら深々と一礼されてしまった。

遠慮してるのは確かなんだろうが、それにしたって言葉に込められた熱量高いな。ついつい押され気味になってしまう。

「騎士ケントゥリオは……」

「聖女殿、どうかぼ……私の事は名で呼び棄てて頂きたい。御身に敬称で以て呼ばれるなど、若輩者には過ぎた栄誉です」

「あ、うん……えーと、じゃぁノエル？　は、にいちゃんに憧れてるんだね。さっきから会話する度にテンションが違うし」

「はい！　戦人として、陛下に忠を捧げる騎士として、畏敬を払うにはこれ以上無い方だと。御身を守護する猟犬殿の在り方は騎士の一つの理想像であると常々思っています！」

ものっそい力強く断言する少年騎士の言葉は、リアに良い意味で刺さったみたいだ。

目に見えて機嫌が上昇している。
誰だその凄い騎士様とやらは。それなりの年数シアリアの側にいるけどそんな奴見た事ねーぞ。
鏡見ろって？　見たくない現実は直視しない事もときに有効なんだよ、分かれよ（白目
「――そっか！　うん。良いね！　なんというか、ちょっと上から目線になっちゃうけど……見る目あると思うよ、ボク的には高得点だ」
うぉーい、姉貴とおんなじような事言ってますよアリアさん！
「光栄です！」なんつって、とうとうその場で最敬礼まで決めてしまうノエル少年と、ご満悦の表情で何度も頷く銀の聖女様。
勘弁してくれよ……どういう流れやねん、話題に上げられてる当人は現在進行形で居たたまれなさが半端無いんですけど。
……まぁ、最初の景気悪い顔よりは良いか。この分ならまた溜め込んで自刃だの切腹だの危ない方向に暴走はせんやろ。
あんまりにも引き摺ってる場合、ガラじゃないが軽く稽古にでも付き合って気分を変えさせよう、なんて手も考えてたからね。
ノエル君、モロに体育会系っぽいし、憧れてるっていう人間が稽古つけるのとか効果

高そうではあるからな。

結果的には指導だの稽古だのキャラに合わない真似をせずに済んだ訳だし、このむず痒い会話だって東区にある彼の引っ越し先に近づいたら終わりだ。平和にお別れして後は普通の観光に戻るだけですしおすし。

「こうして御二方にお言葉を掛けて頂いた時間は、私には過ぎた価値あるものでした――個人的に出資している物があるのですが、そちらも非常に捗りそうです……謹慎中は自戒も込めて一切手をつけておりませんが」

「出資？　ちょっと意外な単語が出て来たなぁ。何かのパトロンでもしてるの？」

「はい、嗜好の面で意気投合した作家がいるのですが、これが中々に才気ある者でして。最近になって新作の相談が……」

よーし、急ごうか二人ともぉ！　お喋りで時間を浪費するのも勿体ないぞぉ！　一日は二十四時間しか無いからな！

リアとノエルの言葉を遮り、俺は二人を引っ張る様にしてずんずんと先に進みだした。

不穏過ぎる単語を耳に拾ってしまった。絶対にその先は言わせんぞ（決意

「にぃちゃん、手を繋いでくれるのは良いけど……何か誤魔化そうとしてない？　なんとなーく今回は問い詰めた方が良い気がするんだよね」

聖女様の勘はおそろしい。いつもなら苦笑いしてスルーしてくれるリアが今回は妙に食い付いてくる。

ノエル君の方も急に引っ張られて目を白黒させながらも、眉根を寄せて頭を下げてきた。

「確か御二人は帝都の観光中でしたか。お時間を取らせてしまって申し訳ありません、そろそろ叔父の屋敷も近いのでここで御暇させて頂きます――今日の事を教えてやらないと……良い参考になるかもしれないし……」

おい待て、だから不穏な言葉を最後にボソッと付け足すんじゃない。

大した事は言ってないでしょ！　もっとこう、悪縁を結びなおせたなーくらいのふわっとした感じで記憶にだけ留めておいてくれれば良いんだよ！

此処で件の絵本について触れるのはマジで勘弁してくれ。

そんな割と切実な願いは胸中へと丁寧に畳んで、ノエル君へと訴え掛けるのだが、糞真面目で猪突猛進な少年騎士は鼻息も荒く首を横に振ってくれた。

「とんでもない！　元を辿れば私の愚かな行為が原因であるにも関わらず、関係改善を申し出て下さった慈悲深さ――聖女の守護騎士たる御仁は戦武のみならず、人品も見事であると改めて確信できました！　この喜びは同好の士と分かち合わねば！」

「同好の士ってさっき言ってた作家さんの事？　……何を書いてる人なのか聞いても良

い？」

アリアさーん!?　マジで今回は突っ込んで聞いて来ますねぇ！

これ、ひょっとして何か勘付いて無いか……まさかとは思うがシアの奴、自分が絵本に載ったからって妹に自慢しちゃったりしてねーだろうな？

「はい！　最近では中々に名も売れて、新進気鋭の若手扱いされているようで。主に――」

嫌ァァァァァッ!?　ヤメロォ!!

よし分かった！　折角だから俺達もノエル君の叔父さんの家にお邪魔しよう！　なんなら稽古とか組手なんかしてあげるから！

だから急ごう！　素早く！　口を閉じて移動しよう！

同好の士とやらの成果が余程嬉しいのか。

ハキハキと何処か誇らし気ですらある表情で語り出そうとした彼の言葉を遮って、俺は悲鳴染みた声でやけくそ気味の提案をしたのだった。

――リアの呆れた視線が痛い。が、観光の予定が大幅に変わってしまったので残当である。

どうしてこうなった（白目

いや、その場しのぎで適当な事言って話題を逸らした自分のせいなんですけどね。

立派なお屋敷の裏手――派手さは無いが丁寧に手入れがされている庭で、赤い坊主頭の少年騎士と対峙する。

色々と経緯をすっ飛ばして現状を語ったが、当のノエルはさっきからどこか上の空というか、呆気にとられたままだった。

「……僕は夢でも見ているのか……自業自得で謹慎中の筈が、猟犬殿に稽古をつけてもらえるなんて……」

ブツブツと独白しながら、手にした木剣をどこか現実感に欠ける様子で呆然と眺めている。

彼の叔父上宅にお邪魔したは良いが、肝心の屋敷の主は午前中に体調をくずして寝てしまったとの事だ。

同じ様に体調不良を起こしても、大抵は昼過ぎには目を覚ますとの事なので、それまで時間を潰しがてら、早々にノエル君との稽古をする事になったんだが……。

「ノエルー、急展開についていけない気持ちは解かるけど、にいちゃんといると大体こんな感じのパターン多いからね。これからも関わるつもりなら慣れておいた方が良いよ

？」

「……ハッ!?　し、失礼しました。助言、ありがたく」

肝心の本人が挙動不審というか、さっきから夢見心地で忘我と再起動を繰り返している。

今もやや離れた場所で見学しているリアの言葉に我に返って頭を下げたが、やはりどこか呆とした空気は抜けていなかった。

ちなみにリアの隣には同じく見学に来た屋敷のメイドさんやら執事さんやら、使用人の人達が何人か同席中。皆、ハラハラした様子で稽古を見守っている。

もうこれに関しては稽古相手が《聖女の猟犬》って聞いたが故の反応だと諦めてますよ。ハハッ（諦観

彼らにしても、廃嫡されたとはいえ当主の長男だ。

レーヴェ将軍の弟さんこそ病欠だったが、立派な門構えを抜けて屋敷に入るとおそらくはほぼ全ての使用人たちが玄関に集まり、一糸乱れぬ歓迎の挨拶と礼を見せてくれた。

謹慎期間中だけ寝泊まりしにきたノエル君が見覚えのないお客人を二人連れてきたことに面食らった屋敷の人達だったが、そこは侯爵家に連なる御家の使用人。即座に丁寧な対応をしてくれたよ。

リアを紹介されて歓声の混じった驚きの声をあげ、次に俺を紹介されて石を飲み込んだみたいに黙り込んだけどな！

猟犬の悪名もそうだが、何よりノエル君はその悪名の持ち主相手に特大の失礼をぶっこいて謹慎喰らった、というのは屋敷の住人も把握していたみたいだ。

なんか成り行きで訓練を見てやることになった、って話したら、責任者らしき執事さんに土下座せんばかりに頭を下げられました（白目

「この期に及んで言い訳にしか聞こえぬ事は重々承知しております……ですが坊ちゃまは、金の聖女様と貴方様の御二人を、かねてより尊敬していらっしゃるのです……！どうか、寛大な処分をお願い申し上げます……!!」

嘆願が通るなら自身の首くらいなら躊躇わず差し出す、といわんばかりの決死の表情だった。

その後ろで、祈る様に両腕を組んで事の成り行きを見守るメイドさん達とか固唾を飲む庭師さんとかね……うん、ノエル君は好かれてるし大事にもされとるんやなぁ……。

なんもせんから、別に稽古にかこつけて私刑だの処刑だのしに来た訳じゃ無いから。本当にただ訓練に付き合うだけだから。

そう説明する俺だったが、ちょっと遥か彼方のお空を見たくなって遠い目付きになったのは仕方ないと思うんです。

――まぁ、えぇわい。国問わず、貴族関係の人達から近づくと首を狩られる殺戮マシーンみたいな扱いなのは今更だし。

慣れたもんだし、全然気になら……なら……ごめん、ちょっと見栄張ったわ。普通に心にクるわ。後でシアかリアに愚痴を聞いてもらおう（逃避感

うーむ……これから訓練だというのに、片方は夢見心地で片方は凹んで項垂れてるという妙なお見合い状態になってしまった。

が、何時までもこのままというのも此処に来た意味が無い。ここの主人が目を覚ます時間とやらまでの稽古だが、やるなら身になる様にやりたいしね。

しゃーない、ガラじゃないがこの場にいる時点で今更だ。発破かけるか。

鎧ちゃんを励起状態で起動。装甲こそ展開しないが、マイバディの魔力を身体に奔らせて身体強化する。

震脚を庭の地面にたたきこんで《地巡》で魔力を循環させると、僅かに揺れた大地に漸くノエル君の呆とした青い双眸が像を結び、眼前の稽古相手である俺を直視した。

――んじゃ、まぁ……来い、《赤獅子》の倅。父ちゃん譲りだっていう剣腕を見せてみんしゃい。

腰を落として軽く手招きしてやると、年若くとも流石は帝国騎士。スイッチが切り替わった様に真剣な眼差しとなり、木剣を正眼に構える。

「――胸を借ります」

あいよ、精々失望させんように頑張りますよい。

なんか稽古とは思えない程緩々だった空気が一瞬で張り詰め、今度こそ俺と少年騎士はしっかりと対峙した。

こっちが待ち受ける形になったが、待つ時間はそう長くも無い。

足裏の感触を確かめるように、じりっとブーツの靴底で地を抉ると、ノエルは力強い雄叫びと共に踏み込んで来る。

「おおっ!!」

鋭い呼気と共に吐き出された気合と同時、正面から真っ直ぐに木剣が打ち下ろされる。

なるほど、こりゃ速い。愚直だが迷いの無い真っ直ぐな一撃――レーヴェ将軍の剣に似てるな、やっぱ。

年齢も考えるとマジで良い一撃だ。最近見た比較対象としては……そうだな、踏み込みの鋭さは縦ロールちゃんに匹敵するかもしれん。

ただ、これまた年齢（とし）を考えれば仕方ない事なのかもしれんが、青い。

並みの相手なら反応が間に合わず、仮にガードが間に合ってもそれごと叩き潰さんとする一撃ではあるが、それだけに読み易い。これが将軍本人になると、読めても反応が難しいふざけた速度の一撃を叩き込んでくるだろう。

ノエルの踏み込みに併せて、半歩前に出る。

超至近距離になった事で切っ先の加速、その大半を殺された形になった木剣を、柄を握る手を掌底で打って完全に止めるとそのまま懐に入って背を向けた。

咄嗟に弾き飛ばされまいと硬く握られた木剣を掴み、そのまま変則的な一本背負いを極める。

実戦なら投げの際には身体の軸を丸めて短い軌道で頭から叩き落とすのがセオリーだが、今は訓練だ。腰を跳ね上げて打った背負い投げでふわりと浮かび上がるように鎧姿の少年が一回転し、比較的緩やかな速度で背中から落ちる。

この為に鎧着たまま稽古してるし、ダメージはほぼゼロだろう。とはいえ、自身の渾身だったであろう一撃を綺麗に捌かれてブン投げられたのは衝撃だったのか、今度は驚きで呆然モードに入ってしまっているが。

実際、良い一撃ではあったが対応する側としては余裕があったのも事実だった。最初の強化以外に《三曜》も使ってないしな。

シンプルな一撃に専心するのは確かに強力な攻撃だが、対応された瞬間に咄嗟にでも

動きを変えられる位に自力が付いてからの方が良いかもね。相手が格上だと普通にカモられるってばよ。

一応、訓練をみるという約束に従ってアドバイスらしきものをしてみる。

倒れたノエル君に手を差し伸べてやると、彼はその手を取って「感服しました……！」なんて大袈裟に何度も頷きながら身を起こした。

再会した直後の景気が悪いにも程がある空気はどこへやら、今では最高にハイってやつだぜ！　といわんばかりにその表情は興奮と喜びに溢れている。

「先程の様に剣の間合いを殺された場合は、どう立ち回るのが正解なのでしょうか？」

うん？　俺と君とじゃ戦い方や得物も違い過ぎるからなぁ……親父さんの戦闘スタイルを踏襲してるんやろ？

あの人なら間合いを潰される前に振り切って相手をブッた斬るくらいはしそうではあるが……やるとしたら打ち下ろしを柄打ちに変えて、踏み込んで来た相手の脳天を狙うとかじゃね？

「成程……やはり僕では、父の様には行きませんね……父ならば小技小細工の類などなくとも、並み居る敵を斬り伏せる事も可能ですし」

それに関しては否定せんが……小技や詭道の類を使えないのと、使えるけどそれでも尚、正面から叩き潰す戦い方を選ぶのは全然違うぞ？

そもそも君の親父さん、搦手が使えない訳が無いでしょ。軍団を指揮する立場よ？まぁ性に合わないのは確かなんだろうが。

策を練り、小技を振るう方法を学び、詭道を修め――その上で王道で以てそれら全てを踏み砕いて小細工抜きで正面から敵を打ち倒す。

そういった脇道を知らない人間が、それらを軽視し、正面撃破に拘るのは只の張りぼて・増上慢でしか無いが。

それらを知った上で、それでも真正面から勝利することを選び、目指すのならば、それは克己の意思となる。

レーヴェ将軍は間違いなく後者で、それを極めた人だよ。人類種最大国家の将軍という役職としてもだが、そうで無ければ戦士として人外級に到達できる筈も無い。

個人の武力、という方向でなら教国（ウチ）の二足歩行型筋肉要塞もその類だな――逆に俺なんて、自力がお粗末だから使えるもんはなんでも使う派やぞ。

らしくもなく、助言というより説教染みた御高説を垂れてしまった訳だが、どっか刺さるものがあったのか、ノエル君は目をキラキラさせて聞き入っている。

いや凄い良い事聞いた、みたいな反応してるけど、マジで大したこと言ってないからね？　一定以上の実戦経験ある人間なら大抵は同じこと言うと思うし。

それこそ、そこで見てるリアも戦闘経験に関しては豊富ってレベルじゃない。下手を

しなくとも俺よかよっぽど的確なアドバイスが――って……何で貴女までお目々キラッキラで聞いてるんですかアリアさん。

「うん、にぃちゃんが格好いいから！」

いや、格好よくは無いでしょ、別に。繰り返すけど大したこと言ってないし。

「えー、そんな事無いよ、ね、ノエル？」

「はい！　まさか謹慎中にこのような幸運が訪れるとは想像の外でした！　頂いた言葉は忘れる事無く胸に刻みたいと思います！　あぁ、悩んでいるという新作、最高の助言をしてやれそうだぞ……!!」

それは止めろ。やめてください（震え声

とりあえず、昼まで時間はまだある。

ノエルに稽古の続行するか否か問うと、めちゃくちゃ気合の入った声で続けると返って来た。

この際だ、良い感じに打ち解けてきてるし、リアのいう縁を結び直す意味も含めて、しっかり付き合ってやるか。

そんな風に考えつつ、俺は再び構えを取ったのだった。

屋敷の裏庭で、和やかに訓練を続ける青年と少年。それに声援を送る少女と屋敷の使用人達。
それを二階にある私室の窓から眺めていた男は、暫しの後にその騒がしい光景から視線を外した。
身を横たえていた寝台の脇に置かれた宝玉――遠話の魔道具に向け、穏やかな声色で語り掛ける。
「……どうやら、甥は教国の賓客の方々と良い関係を再構築できた様です。懸念が杞憂となって何よりでしたね、陛下」
『あぁ、全くだ。お前がこの時間に連絡を取って来るなぞ何事かと思ったが……まさかあの二人が街中でノエルと遭遇するとはな』
どんな偶然だ、と愚痴る様に届く声に、声の主がしかめっ面で執務室でこめかみを押さえている様子がありありと思い浮かび、男――赤みの強い金髪を伸ばした、庭で訓練に精を出す少年の叔父である彼は笑いを堪えて肩を震わせる。
『まぁ、何事も起こらないというのならそれで良い……また体調を崩したと聞いたが、起

きていて平気なのかティグル？』
「ええ、少しばかり眩暈がしただけですよ。我が家の家人達は心配性が多くて困ります」
『それなら後でレーヴェに連絡を入れてやれ。お前が寝込んだと聞いて気が気でないようだ、朝からそわそわと鬱陶しくて叶わん』
「それでしたら、陛下が伝えておいてくださいよ。僕はこれからお客人の相手をせねばならないんですから」
『おいコラ、自国の皇帝を顎で使おうとするな』
　ケントゥリオ侯爵家の次男、ティグル＝ケントゥリオ。
　幼いころに大病を患い、以来殆ど外を出歩く事も出来なくなった彼は、しかして病身の身で大量の家の蔵書を読み漁り、蓄えた知識と培った見識を以て皇帝たるスヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルに仕える事を選んだ。
　どこぞの青年の如く公式の役職、というものを持たない身ではあるが、即位以前から兄であるレーヴェと共にスヴェリアを支え続けた、長い付き合いのある臣下である。
　兄弟共々、皇帝の友人、と呼んで差し支えないであろうケントゥリオの片割れは、日に焼けていない色白の顔でおどけた表情を作る。
「僕だって、急にやってきたお客の相手なんかより兄上と話す方が良いですよ。ですが、相手は教国からの国賓でしょう。体調を理由に挨拶すらしないというのは悪手ですか

らね」
『……その物言いからすると、また例の悪癖が出たか。〝どっち〟だ？』
「〝彼〟の方ですよ――兄上と何度も戦場を共にして肩を並べて戦ったことすらあるんでしょう？　僕には出来ない事ですからね、普通に羨ましいので嫌いです」
『お前それ本人の前ではマジで言うなよ』
　アイツ自身は気にせんかもしれんが、行動を共にしてる聖女が着火しかねないんだよ、と頭痛を堪える様な声色でボヤく自身の主――皇帝の声に、ティグルはおどけた表情を苦笑いで上書きした。
「今回問題を起こしてしまった甥を詰るようで気が引けますが――普通は面と向かって他国の客人を悪し様には言わないものでしょう、個人的な感情に依るものなら猶更ですよ」
『嫌いっていう発言自体を余に聞かせるなってんだよ、このブラコンが』
　長く皇帝の相談役を務めるティグルではあるが、先程も述べた様に公式の役職という訳では無い。
　そのせいだろうか。専用の遠話の魔道具を持たされ、皇帝とのホットラインを所有している身ではあるが、重要視されている扱いとは裏腹に仕える君主との会話は非常に気安いものであった。

そんなティグルだが、楽し気であった表情を引き締め、咳ばらいを一つ行う。
皇帝からの相談事を受ける際には声のみを届ける簡易の遠話で会話を行う事の多い彼の、話題の切り替えの所作であった。
「その甥……ノエルについてですが、兄上から頼まれていた調査は一通り。きな臭い鼠が一匹、かかりました」
『そうか、何処産だ？』
「数年前に北方の小国より入り婿として入って来た男爵ですね。他国から来たと言う事で、海外の情勢・情報の入手に関してツテがあると主張してノエルに近づいた様です」
『ふん、北方か……で、黴は生えてるのか？』
「婿として入った男爵家の方が、あの三枚舌の世話になっているようで」
以前、レーヴェ将軍との会話で上がった旧貴族派の関与。
未だ物的証拠は無いが、旧貴族派のまとめ役と繋がりのある貴族がノエルの件に関わっているという情報に、皇帝の声も自然と厳しいものになる。
『嫌疑として挙げるには不十分だが……問い詰める程度の材料にはなるか。あの三枚舌も祭りの開催前には城に顔を出す事になっている――ティグル、悪いがそのときは多少体調が悪かろうが遠話で同席してもらうぞ』
「えぇ、心得ていますよ。それまで体調管理には殊更気を配っておくとしましょう……

問題は、兄上があの男と相対して激怒しないかですが」
『今回の件関係なく、もう性質からして水と油だからなあいつら。余の方からも釘は刺しておくが、お前の方からも一応言っとけ』

来るべき《大豊穣祭》に向け、各人の予定、期待、或いは思惑や企みが転がり、交差する。

そんな中、騒動が起こったとしておそらくは高確率でその中心に居座ることになりそうなトラブル誘因体質の青年は。
密談交わされる屋敷の裏庭で、結局例の絵本の話を妹分にぶちまけられ、白目を剥いて悲鳴を上げている最中なのであった。

再会　筋肉の場合（前編）

屋敷の中を、一人の少女が小走りで駆けていた。

淡い金糸の髪を翻し、白を基調とした僧衣に包まれた両の脚を慌ただしく交互に動かす彼女の顔は、焦燥に染まっている。

この半月足らずの逗留で、それなりに過ごし慣れて来た建物の中を最短ルートで駆け抜けると、少女――巷では金色の聖女とも呼ばれるレティシア＝ディズリングは自身が寝泊まりしている部屋の扉を勢いよく開け放ち、中へと飛び込んだ。

その慌ただしい動作からしても相当に焦りに駆られている事が伺えるが、奇妙な事に深刻さは感じられない。

彼女が寝台の脇に置いてある自身の鞄を引っ繰り返し、中から取り出したのは真球の宝珠――緊急の連絡用として聖都へと繋がる遠話の魔道具であった。

何があったのか、動揺も大きいせいで起動の為の手順にもややモタつくが……なんとか発動の準備を終え、待ってる時間も惜しいとばかりにその身の莫大な魔力を叩き込む。

宝珠が明滅し、気が急いているときの電話のコール音の如きもどかしさを感じながらも、待つこと十数秒。

起動した魔道具が、聖殿の奥ノ院にある宝珠の片割れへと魔力的な繋がりを発生。無事に通話の機能を確立させた。

『おはよう、まだ朝も早いが……何かあったのかな？』

「教皇猊下、オレだ！　とんでもない事が起こった！」

聞こえて来た声が望んでいた人物であったことに少しだけホッとしつつ、それでも収まらぬ焦りのままにレティシアは口早に告げる。

宝珠の向こうから聞こえる声の主は、一応は聖教会のトップに立つ人物だ。

普段は完全なプライベートでも無い限りは、多少は取り繕った態度で応対しているのだが……今はその余裕も無いのか、初っ端から素のままである。

『落ち着きなさい。何があったにせよ、平常心を欠いたままでは正確な情報は伝わらないよ』

そんな諌めの言葉と共に、僅かに食器が擦れる音が聞こえる。どうやら声の主はモーニングティーの最中であった様だ。

聖女たるレティシアがこれ程露骨に焦りを見せる緊急の連絡を寄越してきたのにも関わらず、泰然とした声色を崩さない。

年の功か、或いは当人の気質か。教会の最大権力者たる教皇としての貫禄を感じる対応ではあったのだが――。

「グラッブス司祭がプロポーズされた！　しかもエルフのお偉いさんに!!」

『――――ブッフゥゥゥゥゥッ!?!?!』

放たれたとんでもない発言に、教皇――ヴェネディエ＝フューチ＝ヘイロウは口に含んだ紅茶を全力で噴き出し、アーチを描いて宝珠に降り注いだ液体はビチャビチャとあまり聞きたくない音を立てた。

事の発端は一時間程前に遡る。

今日も朝から元気に鍛錬に精を出す肉弾戦車が時折大地を震わせる微かな振動を感じつつ、レティシアは妹のアリアと相棒たる青年と共に、屋敷の客間にて寛いでいた。

本日の予定は全員揃ってフリー。とはいえ、本番である《大豊穣祭》前から仕事の合間を縫って全力で遊び倒していては、肝心の祭りの際にスタミナ切れを起こしてしま

う。

レティシアとしては青年と二人きりで買い物など行ければ最も満足いく休日となるのだが、遅れてやって来た妹も合流した現状、彼を独り占めというのも難しく……なにより肝心の青年が何やら気疲れする事でもあったのか、少々精彩を欠いている。

本人は自覚も無い程度の微かなものだろうが、レティシアからすれば直ぐに気付く。伊達に何年も相棒として傍にいないのだ。

厄介な事に自覚症状が出る程に不調ならば、誰にも気付かれないように慎重に立ち回る男ではあるが、今回は本当に精神的にちょっと疲れた、程度なのだろう。

……更に非常に不満な事に、当の本人は使っている武装を相棒呼びして憚らないが、それはこの場では関係ない事なので割愛するとして。

折角の休みではあるが、休養も大事だ。夕方までのんびりと屋敷内で過ごし、夕飯は皆で何処かに食べにいこうかと、三人で談笑しながら大雑把に今日の予定を決めていると。

「御歓談中、失礼します。お客様がお見えですが、お通し致しますか？」

「客？　こんな朝……って、前もやったなこのやり取り。誰が来たんだ？」

逗留中、屋敷の管理を任されている執事さんの言葉に、以前朝早くやってきた友人の事を思い出しつつ、誰が訪ねて来たのかを問いかける。

相棒の青年がナイスミドル！　名前はセバスチャンに違いない間違いない等と常々言っている、いつもピシッと燕尾服を着こなした壮年の男性は、柔和な笑顔で音無く一礼した。

「大陸中央、大森林より来賓として招かれました、エルフの一団の方々でございます。代表の最長老様曰く、以前、交流があったと伺っておりますが……」

「わ、サルビアさん来たんだ。よく陛下が招待状だしたなぁ、あんなにエルフと関わるの嫌そうだったのに……」

意外、という表情と言葉を隠しもせずに大きな瞳をぱちくりとさせる妹に、レティシアとしても同感である。

大森林のエルフの御神木たる界樹に関する一件で関わった、サルビア＝エルダを筆頭とするエルフ達の派閥の一つである開明派。

今はそのサルビアが最長老としてエルフのトップに就任した為、名称等は変わっているかもしれないが、半ば敵対状態に近かったもう片方の派閥の保守派と比べ、非常に良好な関係を結べた者達である。

同行した帝国側の人員――ミヤコやトニーも同じように開明派とは友好的に過ごした仲なので、彼女達が渋る皇帝陛下に進言したのだろう。

――思ったより早い再会になったな……いや、百年森から出られねぇ！　とか嘆いて

たから良かったわ、マジで。
「だな。サルビア達なら問題ないから通してやってくれ。森のエルフは朝早いから食事とかは済ませてるだろうし、お茶だけ用意してもらえるかな？」
「かしこまりました、それではそのように」
その場のノリと勢いでサルビアを最長老に推薦した青年も、任命した責任的なものは感じていたのか、彼女と外界で再会できる事を素直に喜んでいる。
やって来た人数によってはここの客間では手狭になるだろう、という事で広間に移動しようと聖女姉妹と青年が腰を上げようとしたときであった。

「ヒョ、ひょえええええええっ!?!!?」

甲高い、素っ頓狂な叫びがその場にいた者達の耳に届く。
おそらくは屋敷の玄関口の方から聞こえて来たソレは、大層な驚愕と混乱、そして何故か、微かに喜色の混じった黄色い悲鳴であった。
「……今のって、サルビアさんの声だよね？」
「……多分な。大森林（あっち）じゃ何回もあの人の叫び声を聞いたが、全く聞いた事の無い妙な感じの悲鳴だったけど」

――取り敢えず行ってみるべ。声の感じからして荒事ではなさそうだし。
熾烈な戦いを経験してきた戦士の勘、というやつであろうか。
なんとなく、深刻だったり血を見る様な類のトラブルでは無いと感じとった三名は、それほど慌てる事も無く顔を見合わせて、今度こそ揃って立ち上がる。
「聖女様方が御自らお出迎えですか？　では、僭越ですが私共は広間にてお客様をもてなす準備をさせて頂きます」
同じく、動揺を見せる事無く執事の男性が、やはり音も無く一礼した。

聖女一行が客人達を出迎える為、屋敷の玄関へと向かうと。
そこには話に聞いていた通り、共に汚染された界樹の除染にあたった開明派のエルフ達の姿が見える。
それと、もう一人。
来客があった事を察して鍛錬を切り上げたのか、それとも一通り筋トレを終えて戻って来る最中に偶然遭遇したのか、一際目立つ巨躯の姿があった。
人類種でも最高峰の剛力剛体の持ち主――聖教会司祭、ガンテス＝グラッブスであ

る。

毎朝、自前で遮音の結界が必要になる様な轟音や振動が轟く鍛錬を欠かさない鋼の如き筋骨隆々の武僧は、滝の様な汗を流して濡れそぼった上衣を小脇に抱え、全身から暑苦しい熱波を放出しながら来客への対応を行っていた。

「いや、まっこと申し訳なく。お客人が参られたにも関わらず、この様な姿での不調法。拙僧とした事が迂闊でありました」

「いえ、唐突に伺った此方に非がありますので、お気になさらず……我ら聖地住まいのエルフは、火や灯りを多用する暮らしに疎いので日の出・日の入りを基準とした生活なのですが……この時間帯は街に暮らす方々にとって、やや非常識な来客時間なのですね。お恥ずかしい限りです」

「なんの、拙僧も太陽が顔を覗かせる時刻には起床し、鍛錬を始めるように心掛けておりますれば！　確かに人里にて暮らす場合は未だ就寝中の方もいらっしゃるでしょうが、お気になされる程のものではありませんぞ！」

ガンテスの声量こそ何時も通り大きいが、実に和気藹々と和やかな雰囲気で会話を交わしている。

相手をしているのは、レティシア達が界樹の浄化を行った際にも肩を並べて戦ったエルフの若者だ。実質的にサルビアの右腕に近い役割を担っていた人物であると、三人と

も記憶している。
　そして、本来前に出てこういった挨拶や交流を積極的に行うべきであろう、新米最長老殿はというと。
「あ、あわ。あわわわっあっばばばっはわああわばばばばb」
　処理落ちした動画みたいに延々とはわあわ言いながら顔を真っ赤にして硬直している。
　両手で顔を隠す様は、一見、突如として遭遇した上半身裸のゴリッゴリの筋肉の塊を直視しないように目を塞いでいる様に見えるが……指の隙間から見える瞳は瞬き一つせずに食い入る様にガンテスを凝視している。なんなら半ば隠されているというのに物理的な圧すら発生しそうな眼力の強さであった。
　明らかに挙動不審なサルビアに気付かぬ筈も無い。
　視線を向けられている武僧が困った様に、或いは申し訳なさそうに眉根を寄せ、心なしかその逞し過ぎる肩を落として自身の禿頭を後ろ手に掻く。
「むぅ……後ろの御婦人には見苦しいものをお見せしてしまい、心苦しいですな。屋敷を管理する方々に後はお任せします故、拙僧は汗を落として衣を変えて参ります」
「いえ、先程も言いましたがお気になさらず。ほら、サルビア様っ、司祭殿が行ってしまいますよ、折角の再か「見苦しい等という事はありません!!　全然っまったく！　こ

れっぽっちも!!」す、から……」

自戒を込めた言葉に対し、エルフの若者が何某かの言葉を返そうとした瞬間、処理落ちしていた最長老が再起動して食い気味にガンテスの言を否定する。

「ま、まともにご挨拶も返せずに申し訳ありません……な、慣れぬ外界で、少々疲労が溜まっているようでして……」

「む、そうでありましたか。いや、永く森に住まう暮らしを続けていた皆々様が、新たなる一歩を踏み出す為に力を振り絞るは察するに余りありますれば。どうか御自愛ください」

前に出たは良いが、今度はまともに眼を合わせられずに視線を忙しなく泳がせてボソボソと呟くサルビアに、ガンテスは角張った厳つい顔に人好きのする笑みを浮かべて両の掌を合わせ、目の前の女性の壮健を願って祈りを捧げる仕草を見せる。

「では、改めましてご挨拶を。拙僧はガンテス＝グラッブスと申します。聖教会にて過分ながら司祭の位を頂いておりまする――以前お会いした際に、名乗る事すらせずに戦地を後にした不義理、どうかご容赦をば」

穏やかに告げられた名乗りに対し、エルフの最長老の反応は劇的であった。

有り体にいって酷くキョドっていた仕草がピタリと止まり、大きく見開かれた瞳が漸く眼前の人型筋肉要塞とはっきりしっかりと見つめ合う。

「お、覚えていらっしゃったのですか……？」
「ええ、勿論ですとも！　愚僧は戦地にて戦武を奮うばかりの無骨者ではありますが、戦場にて肩を並べた方々は敬意と共にこの胸に刻み込む様、心掛けております」
見目麗しきエルフの御婦人ともなれば、脳裏より忘却する事こそが難事でありますな！　と笑って続けられた言葉は、彼なりのジョークを交えた社交辞令のつもりだったのだろう。
だが、何か大いに刺さるものがあったのか、向かい合うサルビアは瞳を潤ませて両の手を組み合わせ、ひどく感激した面持ちで絞り出すように名乗りを返す事となった。
「う、うるわ……！　こ、光栄でしゅ！　わ、私はサルビア＝エルダと申します！　エルダの氏族の出身にて、現在は聖地のエルフにおける最長老の役職に就いています……！」
名を交わす事に、特別な思い入れでもあったのか。
エルフの最長老は、まるで長年の念願叶ったといわんばかりに、噛みしめる様に口の中でちいさくガンテスの名を反芻する。
この時点でレティシアやその隣のアリア、そしてこういった機微に関してはクソ雑魚にも程がある青年ですら、サルビアの態度に何かしら察するものがあったのか、互いに顔を見合わせた後、信じられないものを見る様に筋肉と最長老の二人を眺めていた。

なのだが、当人達の片割れであるガンテスはその空気に気付く事もなく、快活に笑って利き腕を差し出す。

「うむ。件の御神木に関する経緯はレティシア様やアリア様よりお聞きしております。お若い身で種族をまとめるは、さぞ心労多き事でしょう。政には役にも立たぬ身でありますが、サルビア殿が望むエルフと外界の新たな交わりの成就、そして戦場(いくさば)にて結んだ交誼を平和となった世でも紡いでゆける事、女神に願うばかりです」

差し出された分厚く、厳つい掌を、その角張った顔と交互に見つめ。

なにやら感極まった様子のサルビアは、両の手で包み込む様にして筋肉武僧の掌を握り返し、瞳を潤ませて上擦った声で応える。

「はい、はい……！　私もそう願っています、ずっとそう思っていました……!!　ふ、ふちゅちゅかものですが、す、すえながく！　ガンテス様とおちゅきあいを続けられる事を、界樹と女神にお誓いしたいと……!!」

すげー噛んでるけど、なんだかちょっと告白みたいな事言ってんなコレ、と思ったのは、周囲のほぼ全ての人間であり。

彼女に同行していたエルフ達は、界樹と女神に誓う、という言葉に心底驚いた様子であんぐりと口を開けて自分達の最長老の顔を注視する。

おそらくは大森林のエルフ達特有の、特別な誓いや約束言葉の様なものなのだろう。

つい口から転がり出た、といった風情であったが、直ぐに自分が何を言ったのか自覚したサルビアの顔からサァッと血の気が退き、一拍置いて最初の状態に輪を掛けて真っ赤に染まる。

茹で上げた蛸か、はたまたよく熟した林檎の如く鮮やかに、その長い耳の先端まで血をのぼらせたエルフの最長老は、傍目にもパニックになっていると分かるグルグルと目を廻した様相で小さく悲鳴をあげた。

「ウヒェッ……う、あ、あばばばっばばばばばば」

左右を見回し、部下の呆気に取られた顔を見。

眼前の巨漢の背後にいるレティシア達に今更ながら気が付いて、更に混乱と羞恥に拍車を掛け。

最後に、顔色が赤くなったり青くなったりと忙しいサルビアを心配してか、握手を交わしたまま半歩近づいて、覗き込んでくる再会叶った御仁を見て。

大部分の思考が茹った中、かろうじて残った冷静な部分が、深呼吸して気を落ち着けよう、と脳裏で囁いたのに従い、深く、勢いよく空気を吸い込んで――その途中で「あ、でもこれ目の前に鍛錬で汗を流したガンテス様がいるじゃん」と気が付いた。

――が、時既に遅し。

結果、どうなったかというと。

「――――――――エ゛ン゛ッ゛!!」

長命種であるが故、人間と比すればおよそ遥かに長い時間を生き――ここ数十年になるまで浮いた話の一つも無かったエルフの最長老は、唯一その対象と定めた相手の放つ空気を胸いっぱいに吸い込み、鼻血を吹いて失神した。

「ちょぉぉぉっ、サ、サルビア様ぁぁぁッ!?」

「おい、漫画みたいな鼻血の噴き方したぞ!?　回復魔法回復魔法！」

「ぬぅっ、よもやサルビア殿は何某かの病に罹っておいでか!?　急ぎ寝台に運びますれば！」

「……先生が運んだら悪化しそうな気がするなぁ、なんとなく」

当然といえば当然だが、その場でぶっ倒れた彼女を見て騒然となる周囲の者達。

焦った様子のガンテスに抱き上げられ、手近なベッドのある部屋に運び込まれるサルビアであったが。

鼻から下が赤く染まったその顔は、なんかトべるお薬を危険な量まで吸入したかのような幸せそうな表情であった。

尚、珍しく今までの流れで大体全てを察した、聖女の猟犬たる黒髪の青年はと言うと。

――よし、取り敢えず空から雹とか槍とか邪神の眷属とかは降って来てないな……油断は出来んが。

近くの窓から顔を出すと、まるで異常気象か天変地異が起こる前触れを感じたとばかりに、晴れ渡る晴天の空を警戒感バリバリで見上げ、額の汗を拭っていた。然もあらん。

大聖殿、聖教会の秘儀の数々が眠る奥ノ院。

限られた者だけしか足を踏み入れることが許されない其処は、普段はその場所柄故に静謐に包まれた空間となっている。

偶にフラリと遊びにくる顔パスの自称・フリーの傭兵の青年がやってきた場合などは、やや賑やかになる場合も多いのだが、現在彼は遠い国の空の下。

故に、奥ノ院に勤める者達は静かな、そして少し退屈に感じる様になってしまった時間を粛々と過ごしていたのだが。

参ノ院へと繋がる回廊への大扉がドバァン！　と音を立てて開け放たれ、扉の両脇で警護を行っていた僧兵達は何事かと警戒を露わにした。

が、そこから飛び出て来た人物を視認した瞬間、警戒は混乱へと変わり、彼らは互いに顔を見合わせる。

「げ、猊下？　一体どうなされたのです!?」

「急用が出来た！　ちょっと出て来るよ！」

問答してる時間も惜しいとばかりに、見た事もない焦った表情で走り去っていく教皇の背を見て呆気にとられ、二人は再度顔を見合わせた。

「……一体何があったというのだ……」

「……また何かの悪戯をミラ様かストラグル枢機卿に咎められたのではないか？　慌てて釈明に向かったのだとすれば説明もつく。次にやれば吊るすとミラ様も冷えた口調で仰られていた、必死にもなるだろう」

「そうか、ならばいつもの事だな」

「うむ、我らは務めに戻るとしよう」

うんうんと頷き合うと、平静を取り戻した僧兵達は開けっ放しであった大扉をそっと

閉め直し、再び不動の体勢での警護に戻った。

運動嫌いを自認する当代教皇のヴェネディエであるが、今はそんな事言ってる場合じゃねぇ！　と言わんばかりに走る、走る。

普段は揺り椅子と同化してるとトイルやルヴィ、スカラといった枢機卿達に半眼で揶揄されている老人は、普段全く気にせずに椅子に揺られている泰然とした態度を何処ぞに放り投げ、年齢にそぐわない程の華麗なダッシュフォームで回廊を走り抜ける。

最近では滅多に行わなくなった魔力強化で身体能力を底上げし、下手な兵士も顔負けの速度で爆走する爺を見て擦れ違う聖殿の者達は目を見開き、更にそれが聖教会の頂点たる教皇猊下である事に気付いて、皆、顎が外れんばかりに口を開くと二度見した。

参ノ院をあっと言う前に走り抜けると、息一つ切らさずにそのまま大聖堂方面へと駆け続け、その足は聖殿入口の門へと向かっている。

ヴェネディエは動揺しながらも声を掛けて来る者達を最低限の返答であしらって全て振り切ると、そのまま聖殿の外へと飛び出そうとして――。

「この糞忙しい時期に、何処に出掛けるおつもりなのかしら糞爺（猊下）ぁ」

「ヘブォ!?」

無造作に差し込まれた長い脚に引っかかり、加速の勢いもそのままにスッ転んで顔面からヘッドスライディングを決めた。

引っかけた足をブラブラと揺らし、不機嫌丸出しで鼻を鳴らしたのは、赤いカソックを身に纏った妙齢の美女――三枢機卿の一人、シルヴィー＝トランカードである。

「本来なら私もアリアちゃん達と一緒に帝国に向かってる筈なんですよぉ、予定が遅れている以上、外で遊んでる時間なんか無いのがお分かりにならないのかしらぁ、この爺様はぁ」

自身の豪奢なマゼンタ色の髪を乱雑に払いながら、地面に転がった教皇を睥睨するその顔は、寝不足気味で隈が浮かんでいる。

そんな状態でも仮眠前や束の間の休息には酒を欠かさないシルヴィーも大概だったりするのだが、彼女の場合は下手にアルコールを断つと逆に仕事の能率が下がるという事が判明している。なので同僚であるトイル・スカラの両名も匙を投げていた。

部下の手――この場合は脚と言った方がよいか――によって、聖殿の石畳と情熱的な口づけを交わす羽目になった老人は、しかし直ぐに跳ね起きると走り出したときの勢いを全く途切れさせないまま、口早にシルヴィーへと理由を語り始める。

「今はそんなことを言っている場合じゃないんだよ、ルヴィ！　一刻も早くミラに伝え

なければないけない事があるんだ！」
「また何かしょうもない悪巧みでもバレたんですかぁ？　いい機会だから吊るされると良いのではぁ？」
「僕の周りの子達は皆辛辣だなぁ!?」
　テンションたっけぇなこの爺、と言わんばかりに顔を顰めて応じる美女の素っ気ない対応に、流石に少しばかり冷静さを取り戻したヴェネディエは、軽く咳払い一つすると正面から彼女を見つめて告げる。
「いいかい、落ち着いて聞いてくれ、ルヴィ」
「落ち着くべきなのは猊下の方だと思いますけどぉ。急激に無茶な運動してポックリ逝っても知りませんよぉ」
「ガンテスに、春が、来た」
　区切る様に、だがヴェネディエ自身も現実感に欠ける、といった様子で吐かれた言葉に、シルヴィーは石化の呪を喰らったが如く硬直した。
　シ～ン。とばかりに、両者の間に痛い程の沈黙が降りる。
　ややあって、自力で硬直状態から脱した酔いどれ枢機卿が、酒気なぞ消し飛んだ様子で真顔になって問い返す。
「……申し訳ありません猊下ぁ、ちょっと聞き違いをしてしまった様なので、もう一度よ

ろしいですかぁ？」
「ガンテスがプロポーズされた」
「……何処産の岩人形（ロック・ゴーレム）にぃ？　それとも何処かの霊石に宿った精霊の類かしらぁ？」
「御相手はエルフの最長老殿。美人で苦労人、気立ても良いという話だ」
　三枢機卿の紅一点は、今度こそ完全に石化した。
　目と口を限界まで開いて、驚愕のあまり動作不良を起こしたシルヴィーに向け、立ち上がったヴェネディエは聞こえていないだろうとは思いつつも伝言を残して行く。
「とにかく、これから急いでミラに事の次第を伝えて来る。今日は間が悪い事に孤児院の手伝いに出てしまっているからね、早く行って教えてやらないと……！」
　誰か人員（ひと）を使えや教皇。という至極真っ当なツッコミを入れられる者が不在な空間に背を向け、老人は再び走り出す。
　一人残された状態になっても復帰出来ないまま固まっていたシルヴィーであったが……暫くの後、その肩をたたかれ我に返った。
「どうかしたのかね、このような場所でへたり込んで」
　のろのろと彼女が視線をあげた先には、相も変わらずしかめっ面の片眼鏡（モノクル）の男性――同僚の枢機卿、トイル＝ストラグルの顔がある。
「ジジ……猊下が聖殿内を全力疾走しているという、意味の分からない報告が届いたの

だが……君のその様子と何か関係あるのかね、トランカード枢機卿？」
「……トイルぅ、私、暫く禁酒するわぁ」
「本当に何があった!?」
　同僚の口から何があっても聞く事が無いと思っていた言葉が出てきたことに、驚愕のあまり目を引ん？いて仰け反るトイルに向け、力無い様子でシルヴィーはゆっくりと首を振る。
「いや、ちょっと変な幻聴を聞いちゃったのよぉ……流石にコレは駄目だと思うから、帝国に出発するまでは断酒してみるわぁ……」
「……一体何を聞いたらその結論に至るのかね？　いや短い間とはいえ、酒を断つ事自体には賛成するが」
「司祭様が美人にプロポーズされたってぇ」
「成程、重症だ。帝国に行く迄と言わず、半年ほどかけてじっくりと頭から酒を抜き給え」
　アホらしい戯言を聞いた、といわんばかりに肩を竦めたトイルは、何処かぐったりしたままの同僚を引っ張り起こし、とりあえず朝食を摂りに行こうと食堂へと足を向けるのであった。

ちなみに余談ではあるが、後日シルヴィーの妄言が真実であったと知らされたトイルは真顔になり、その場で「流石に働き詰めだったか……」と呟いて急遽休みを取る事となる。

仮にもしこれが邪神の信奉者達……その残党による攪乱情報の類であったのなら、大成功を収めたと言えるだろう。

なにせ、教会のトップが揃って驚愕のあまり惑乱した行動を取る羽目になったのだから。実際にはただの事実なのだが。

ともあれ、現地である帝国のとある屋敷の一角と教国上層部に多大な混乱を齎しつつも、数十年越しのエルフの最長老の恋路は漸く幕を開けたのであった。

再会　筋肉の場合（後編）

聖都外壁沿いにある居住区。
当初は故郷を焼かれた者達や、激しい戦闘が多い地域から避難してきた者の疎開先として急遽用意された、大戦中に増築された無数の簡易住宅が立ち並ぶ其処は、追加の避難民などを受け入れてゆく内に正式な区画となった経緯を持っている。
その内の一つ、やや年季の入った長屋を思わせる建物である孤児院、その敷地内にて。
ややくたびれた犬のぬいぐるみを抱えたちいさな少女が、しゃがみこんだ体勢で地面にぐりぐりと木の枝で絵を描きながら鼻歌を歌っていた。
「ふんふんふ～ん、ふふふんふ～ん♪」
少女は上機嫌な様子で、夢中になって枝で地面を浅く削る。
「おねぇちゃんとー、わんわんとー、しすたー、あとは……ぺとらとおふぃー！」
傍目には歪な丸と曲線が並んでいる様にしか見えないが、彼女としては満足ゆく出来の様である。
地面に並んで描かれた会心の作である似顔絵を、ニコニコと笑顔で眺め、一つ頷いて。

今は院内でシスターの手伝いをしている兄の様な少年に、早速これを見て貰おう。
そう思い立った少女は、ぬいぐるみを小脇に抱えて、砂で汚れた掌をぱんぱんとはたいて払う。
立ち上がってぬいるぐみを抱きしめ直すと、顔をあげ――そこで院の入口に飛び込んで来た人影を見つけて表情を輝かせた。
「あ！　べてぃーのおじいちゃ――」
「ミラァァァァァァッ！　大変だぁぁぁぁっ!!」
「ひぅっ!?」
ときたま沢山のお菓子をもって遊びに来てくれる老人は、いつもの様にのんびりと子供達と昼寝を楽しむ穏やかな空気など1ミリグラムも纏っておらず、心なしか目を血走らせて咆哮する。
その普段とあまりに違う様相に、少女が怯えて立ち竦み、腕の中のぬいぐるみを一層強く強く抱きしめ――。
「あらあら、どうか落ち着いて下さい猊……ヴェティ様」
「ヘブォァ!?」
ノーブレーキで爆走する爺は、横手にスゥっと音も無く現れた栗色の髪のシスターによって強制的に止められる事となった。

割と容赦の無い地を削る様な軌道の蹴りによって足首を狩られ、その場で顔面から地面にたたきつけられる。

なんかもう明らかにヤバい感じのコケ方だったのだが、砂埃が舞いあがったきっかり三秒後に老人はバネ仕掛けの人形の如く跳ね起きた。年齢から考えると随分と耐久力の高い爺である。

妙に高いままのテンションを全く切らさずに詰め寄る老人ではあるが、微笑みながら対応するシスターは小動もしない。

「あぁブラン、ミラは何処だい!?　急いで伝えたい事が――」

「まぁ、嫌ですわ。その様な険しい雰囲気では子供達が怯えてしまいます、先ずは落ち着いて下さいませ」

「それは済まなかった、でも本当に緊急なんだ。とにかくミラを……」

「まぁ、嫌ですわ。その様な険しい雰囲気では子供達が怯えてしまいます、先ずは落ち着いて下さいませ」

「いや、だから……」

「まぁ、嫌ですわ。その様な険しい雰囲気では子供達が怯えてしまいます、先ずは落ち着いて下さいませ」

ジャキッ。

そんな音と共に、柄が軋む程の音を立てて握り込まれる黒鉄の鈍器。
一言一句違わぬ台詞が三度目となる際、シスターの手には年季の入った片手鎚（メイス）があった。
小振りながらも確かな重量感を感じさせる鉄塊が陽光を反射して鈍く輝くのを見て取り、老人――聖殿から爆走を続けて来たヴェネディエの頭も強制的に冷却される。
「あ、ハイ。すいません」
「いえ、御理解頂けた様で何よりですわ」
大人しく頭を下げる老人へとニッコリと笑みを深くして一礼すると、孤児院の責任者であるシスター・ブランは背後を振り返り、幼い少女へと声を掛けた。
「オフィリ、ヴェティ様が来たとミラ様に伝えて来てくれませんか？　それが終わったらお絵描きに戻って良いですから」
「どうも驚かせてしまった様だね、ごめんよ……これはお詫びだ、他の子には内緒にね？」
ブランの言葉に付け加える様にして少女……オフィリへと謝罪し、ヴェネディエはその小さな掌に紙に包まれた飴玉をいくつか握らせる。
現金なもので、飴をいそいそとポケットにしまいこんだオフィリは元気よく頷く。
「わかった、おばーちゃんのとこにいってくる！　べてぃーおじいちゃんアメありが

と――！」

まだまだ歩幅の少ない両足をパタパタと動かして院の中へと駆けてゆく少女の背を眺め、ブランは困った様に溜息をついた。

「もう……猊下、来て下さるのは大変に光栄ですが、あまり頻繁に子供達にお菓子を与えないで下さい。虫歯なんかも心配ですし、最近では下の子達の中には猊下の事を『お菓子のおじいちゃん』で覚えてる子もいるんですよ？」

「いやぁ、あまり頻度が高いのは良くないとは分かってはいるんだけどねぇ……強請られてしまうとつい……やはり子供というのは難敵だ、下手な他国の要請なんかよりよほど突っぱねるのが難しいよ」

本日二度目のヘッドスライディングを決めていい加減汚れの目立ってきた僧衣――奥ノ院を飛び出してくる前に大慌てで着替えて来たお忍び用のソレに浄化魔法をかけつつ、取り敢えず表面上は落ち着いたヴェネディエはブランと並んで歩き出す。

「急に押しかけてすまないね。急いでミラに直接伝えたい事があったんだ」

「まぁ……お仕事を枢機卿の方々に押し付けたのが発見されましたか？　トイルさんやシルヴィーさんに負担をかけるばかりなのは如何なものかと思いますが？」

「やっぱり僕の周りの子達は辛辣だなぁ……！」

唐突な来院の理由をざっくりと語りながら歩を進めれば、来客があったとオフィリよ

り伝えられた院内の子供達がわらわらと窓際に集まり、「おかしのじいちゃんだ！」などと叫んで目を輝かせている。
「……持って来た菓子類はキミに預けておくとするよ。傷みやすいものだけ、明日中には食べる様にしておくれ」
「はい、ではお預かりしますね。いつもありがとうございます」
苦笑いしてブランに向けて懐から出した袋を渡すヴェネディエは、着替えだけでなく孤児院へのお土産も引っ掴んで聖殿を飛び出して来た様だ。何気にマメな老人である。『お菓子のおじいちゃん』の何時ものお土産を受け取りつつ、ブランは笑いを堪えて一礼したのであった。

「……それで、大祭前の大詰めの仕事を投げ出してまで此処に駆け込んで来た理由とは何ですか、ヴェティ」
仕事をサボる口実とかだったら吊るすし、しょーもない悪戯への言い訳でもやっぱり吊るす。
応接間を兼ねた事務仕事用の部屋で、ヴェネディエと向かい合って座る彼と同年代の

シスター……自称・只のいちシスター、他称・元教会決戦兵器な女傑のミラ＝ヒッチンは分かり易く警告を込めた声色で問い掛けた。

ここ最近、平和になったからといって彼女の弟弟子に悪い遊びを吹き込もうとしていた友人に向けるミラの態度は……有り体に言って塩対応である。

だが、ヴェネディエとしては彼女の弟弟子である青年は、自己の評価や採点が辛過ぎるが故にどうにも自分自身に関しては脇が甘い部分がある。と思っての事なのだ。

異性との適切な『遊び方』を教えようとしたのも、聖女やその他複数の女性陣の不評が発生するのを考慮した上で尚、必要だと判断しての事である。

ぶっちゃけて言ってしまえば一種のハニトラ対策だ。先にも言ったが、彼は自身を低く見がちなせいで周辺国家やら或いは何某かの組織やらからそういったものを仕掛けられることもある立場である、という自覚が薄い。下手をすれば薄い処か全く無い。

戦時中は当人が”そんなもんに時間を割いてる余裕はねぇ”といわんばかりのスケジュールで動いていた上、当時は彼の下半身事情は不全（気の毒な事）になっていたらしいので心配の必要は無かった訳だが……《大豊穣祭》を皮切りとして青年の存在が改めて注目される事となれば、その手の方法で接触しようとする者も増えるかもしれない。

以上の推測を以て、将来的に発生するかもしれない問題を予防する意味も兼ねて『女の子との遊び方』の話を彼に振った訳だが……彼の傍にいる金銀姉妹より先に、ミラの

方が過剰反応を示したのはヴェネディエとしても予想外であった。
とはいえ、過保護とも言えるミラの反応が懐かしいものだったのは確かだ。
老人が知る限り、彼女がここまで感情的になって保護しようとしたのは彼女の唯一の弟子である少女のみであったから。
世話をした教え子、という点ではシルヴィーやスカラもそうなのだが……最初の『弟子』であった少女以降、しっかりと線引きをした態度を崩さなかったミラが青年に対してはひどく入れ込んでいる様は、愉快であり、同時に喜ばしい事でもある。
だが、今回に限ってはミラの事より別の友人の話をすべきだ。
さて、どう伝えても混乱は必至だろうがどうしたものか。
ヴェネディエが内心で話題の切り出し方を悩んでいると、向かい合って座る卓の上にそっと紅茶のカップが置かれる。
「……ブラン、仕事をサボりがてらやって来る不良坊主に茶など出す必要はありませんよ」
「まぁミラ様ったら、そういう訳にも参りません」
女傑の言葉に、トレイを抱えたシスターが少し困った様な、苦笑交じりの微笑みを浮かべた。
ミラにしては珍しい事ではあるが、ちょっとした軽口のようなものなのだろう。ヴェ

ネディエの前に置かれた紅茶にそれ以上言及することは無く、自身の前に置かれたカップを摘まんで持ち上げる。

「――絵本の修繕は先程済ませましたが、やはり傷んでいる物が多いですね。絵や文字が大きく掠れてしまっている本が何冊かあったので、そちらは処分してしまうしかないと思います」

「……やはりそろそろ駄目になってしまう物は出てきますね。寄付品なので丁寧に扱う様に言い含めてはいるのですが」

「擦り切れる程に読み込まれたのであれば絵本も本望というものでしょう。丁度帝国に行く事ですし、良い品が無いか探してみるとしましょう」

シスター二人の会話を聞く限り、どうやらミラは子供達の面倒の他にも細々とした事を手伝っている様だ。

現役時代、「戦う事しか得手が無い」とひたすらに戦地と聖都を往復する日々であった頃に比べれば、友人としては安心できる話ではある。

そんな風にしみじみと老人が思いを馳せていると、茶を一口含み、喉を湿らせたミラはカップをソーサーに戻して対面のヴェネディエへと視線を固定させた。

「さて、私達も帝国への旅行の準備で忙しい。長くお茶の時間は取れません、用件とやらを早く言いなさい」

じろり、という擬音が聞こえてきそうな目付きで見据えられ、老人はやはりどう伝えたものかと頭を捻り――結局はそのまま伝えるしかないな、と思考を投げ出した。

自身の前に置かれた紅茶で喉を潤し、ヴェネディエは何度口にしても現実感の薄い一大事件を友人に報告する。

「いいかいミラ、驚かない……のは多分無理だろうが、落ち着いて聞いてくれ」

「前置きは結構。早く本題に入りなさい」

「帝国に向かったガンテスが、大森林から来たエルフにプロポーズされたらしい」

聴覚がその発言を拾った瞬間、ミラは紅茶のカップを口に運ぼうとした動作のまま硬直した。

聖殿で話を聞いたシルヴィーと同じく、石化の呪を喰らったが如く完全に動きを停止させる。急停止に唯一ついてこれないカップの中身がビシャーっとテーブルの上にぶちまけられた。

ミラの隣に控える様にして話を聞いていたブランも、目を見開いて唖然としてる。

やっぱりこうなったか、と思いつつ老人が手を伸ばして卓の上に飛び散った紅茶を布巾で拭いていると、ややあって我に返ったらしき女傑は無言で席を立った。

唐突に立ち上がったミラを不思議そうに眺める他二名を他所に、ズカズカと大股の急ぎ足で応接間の窓辺へと向かう。

そのまま格子状の雨戸部分を押し上げると、彼女は晴れ渡った空を警戒する様に睨め上げた。
「……何してるんだい？」
「いえ。雹か槍でも降ってくるのでは、と」
訂正。我に返ったと思ったのは気のせいだった。現在進行形で混乱中の様だ。
どうでもいいがこの女傑、現在は遠く異国の地にいる弟弟子と反応が同じである。
まだ油断はできねぇ！　と言わんばかりに上空を警戒し続けるミラに対して、ヴェネディエがその気持ちは理解出来ると厳かに頷いた。
「うん、天変地異を見張るのも良いんだけどね、ミラ」
全く良くないのだが、寝耳に水を通り越して脳の処理能力を超過する濁流（情報）を流し込まれて混乱＋テンションが妙な事になっている老人と女傑は、それをおかしいと思う事も無い。
「僕はこの報を聞いて真っ先に此処へ来た……つまり、だ――ラックはまだこの事を知らないんだよ」
「直ぐに宿屋へ向かいましょう」
ミラから返って来た反応は清々しい程の即断即決である。互いに忙しい筈だと最初にヴェネディエに刺した釘は、濁流に流されてどっかにいったらしい。

現教皇と元教会最高戦力は、自分のカップに残った紅茶を一息に飲み干すとこの場所の運営者に向けて揃って頭を下げる。
「申し訳ありませんブラン。二、三時間ほど出てきます――絵本を読む約束をしていた子供達には、帝国旅行の際に新たな本を買うので許して欲しいと伝えて下さい」
「慌ただしくしてごめんよ、次に来るときには菓子以外に詫びの品を持ってくるからね」
単に伝えるだけならば、二人で行く意味も無ければそもそも自分達が直接伝えに行く必要すら無いのだが、そんな尤もな結論に思い至らない程度には二人とも惑乱しているようであった。
自身の口から伝えねば収まらず、単に分かっていても他人に任せる選択を却下した可能性もあるが。
ヴェネディエから語られた話にはブランも中々に衝撃を受けていた。
――が、普段は泰然とした立ち振る舞いであったり、滅多な事では動揺の欠片すら見せない鉄面皮であったりする老兵達が、混乱著しい見た事無いテンションになってるのを目の当たりにした事で、一周廻ってある程度の冷静さを取り戻す。
「ええ、お気になさらず。お時間が掛かるようでしたら、そのまま帰宅なさって大丈夫ですよ。子供達には言って聞かせますので」
「感謝します、それでは」

言葉短かに礼をすると、老人と女傑は慌ただしく移動を開始した。
あーでもないこーでもないと、もう一人の友人である宿屋の主人にどう話題を切り出すかと話し合って、急ぎ足で孤児院を後にする向かう二人を見送る為、ブランも院の門前まで同行する。
子供達としては、偶にやって来ては遊んでくれたり本を読んでくれるおじいちゃんとおばあちゃんが揃って早々に帰ってしまった事を不満に思うだろうが、今回は仕方ないだろう。何せ二人にとっては数十年来の戦友に関するとんでもない大事件だ。
院を出た途端に魔力強化を用いて自重なく走り出した教国の嘗ての英雄達を、何となく、微笑ましい気分で見送る。
「あー、シスター・ヒッチン行っちゃったか……昼寝の時間の寝かしつけが大変になるな」
「う～……おばあちゃん、えほんよんでくれなかった……」
背後から聞こえた声に振り返ると、其処には子供達のまとめ役である少年――ペトラと、彼に手を繋いで連れられたオフィリの姿があった。
「御二人に応対してる間、子供達を見てくれてありがとうペトラ。何かありましたか？」
「そろそろ年長組だけじゃ騒いでるチビ達を押さえきれないよシスター。戻って来てって言いに来た」

いつの間にかそれなりに時間が経っていた様だ。色々と受けた衝撃も加味すれば嵐の如き時間だったと、ブランは微笑を苦笑で上塗りした。

では戻りましょうか、と子供達に応えて、老人達が急遽帰ってしまったことで若干不機嫌なオフィリの頭を撫でる。

「ミラ様達を許してあげて下さいねオフィリ。御二人の御友達にとても驚く事が起こったらしいの。だから別の御友達にそれを伝えに行くって」

母代わりのシスターの言葉に、少しだけ不安そうに眉根を寄せたのは年長のペトラの方だ。

「……ひょっとして、司祭様の事？　帝国に行くって聞いたけど……何かあったの？」

「いえ、悪い事ではありませんよ――色々と衝撃的な話ではありましたが、寧ろ吉報……良い話？　だと思います」

戦時を経験している孤児であるが故に、両親や、或いは面識のある大人達がある日唐突にいなくなる、というしたくもない経験をしている少年の危惧を笑って否定する。

当の少年は「なんで疑問形なんだよ……」などと言って照れ隠しに不貞腐れた顔をしていたが。

兄代わりと繋いだ手とは逆の手で、不機嫌さを表す様に犬のぬいぐるみを締め上げていた少女は、二人の会話を聞いてきょとんとした顔でブランを見上げた。

「……おともだちにいいことがあったの？」
「ええ、そうみたいですね……周囲に大混乱を齎す吉報というのも中々聞かない話ではありますが」
「ふーん……そっか。だからおばーちゃんたち、帰るときにうれしそうだったんだ」
「嬉しそう、ですか？」
今度は聞き返す形となったブランの言葉に、オフィリは「うん」と深く頷く。
違うのか？　と見上げる眼で不思議そうに問いかけて来る声なき疑問に、少しばかり考え込んで――。
「そう、ですね。少々分かり辛かったですが、きっと御二人とも喜んでいたのでしょう」
ちいさな少女の言葉を肯定した孤児院のシスターは何処となく楽しそうに笑みを深くし、再び少女の頭を優しく撫でたのであった。

――冒険者を主な客層とする宿屋《武器掛け棚亭（ウェポンズ・ラック）》。
引退しているとは思えない巌の如き鍛えた体躯と、これまた巌の如き厳めしい面構えの店主は、訝し気な表情で眼前の友人二人に聞き返した。

「……誰が、なんだって？」
「いや、だから。ガンテスがプロポーズされたんだよ」
「私も聞かされたのはヴェティからの又聞きではありますが、事実の様です。遠話の魔道具を用いて直に伝えられた話らしいので」
非常に珍しいことに、日も高い午前様から突撃して来た旧友二人。
何時もより奇妙に浮足立っている彼らをカウンター席に座らせ、落ち着かせる意味も込めてかけつけ一杯とばかりに酒を出したのだが。
教皇などという立場に似合わず稚気に溢れたヴェネディエの方は兎も角、生真面目と堅物を足して二を掛けた様なミラまで躊躇わず飲み干してしてグラスの底をカウンターに叩きつけた光景に、店主は目を剥いて驚愕する事となった。
だが、そこから聞かされた話はその驚きを容易く上回る。
プロポーズ……肉体美の類を競う者達の、プロフェッショナルなポージングの略だろうか。転移者達の故郷にはそのような催し物があると聞きかじりで耳にした記憶がある。
「混乱する気持ちは痛い程解かるけど、言葉としてはそのままの意味だよ。お相手は過去に彼が共闘した大森林のエルフだそうだ」
「エルフの戦士達と共に上位眷属を相手にした話は、私がガンテス本人から聞いた事が

あります――十中八九その際に関わった者かと」
「正気か、そのエルフは」
半ば現実逃避染みた思考に走ろうとするものの、無情にも友人達から追加情報を脳にインプットされた店主――ラック＝ラインは頭痛を堪える様に目元を揉み解し、呻いた。
話を聞かされた今では、ミラがノータイムで酒に手を付けたのも理解できようというものだ。衝撃が強すぎる、気付け代わりに飲まなければやってられない。
二人に出した酒をつい先ほどまで磨いていたグラスに注ぎ――いや一杯で足りるかボケ、と言わんばかりにグラスではなく瓶から直接ラッパ飲みを始める。
一気に瓶の中身を半分程空にした処でやっと一息つき、ラックは酒臭い吐息を吐き出した。
「……そのエルフ、何処その国の紐付き、って訳では無いんだな？」
「紐付き処か、エルフの最高指導者らしいよ。その地位に就いたのは教国（ウチ）が関わった最近の件以降だけど」
「何があればそんな女があの筋肉馬鹿に熱を上げる様になるんだ」
「そもそも、その手の背後がある者達ならばレティシア様やアリア様、あるいは『彼』を標的とするでしょう――過去に英雄だ最高戦力だと持て囃されたと言っても、所詮私達

は大戦を終わらせる事叶わず、後進に託してしまった人間です」
ミラの言う事も尤もであった。
四英雄、などと持ち上げられていた彼らであるが、大戦終結まで現役として戦場に立っていたのはガンテス一人。
勿論、友人たる筋肉武僧の戦武は古参の兵だけでなく戦場を共にした多くの者達から絶大な信頼を以て称えられてはいるが……教会の大看板たるかの聖女姉妹と、戦場の首狩りなまはげみたいな扱いで半ば伝説になっている『彼』と比べると対外的な知名度はやや控えめだ。
時代が変わったという事だろう。先のミラの言葉通り、後の者達に戦いの趨勢を託した世代の人間が今更ハニートラップの対象となる筈も無い。
……それだけに、ガンテスにプロポーズしたというそのエルフの女性の『ガチ』っぷりを薄々と感じ取り、三人は言葉に出す事無くとも戦慄を感じでいた。
「くそ、このときばかりは店を持ってる自分の身が恨めしいな。現役時代なら帝国にすっ飛んでいって根掘り葉掘り聞いてやるんだが」
「僕は件の祭りの件もあるから、帝国に一度顔を出せるからね。いや、正直祭りそのものより楽しみかもしれないよコレは」
「私も孤児院の引率で、ブランと共に帝国に行く予定ですね。タイミングとしては渡り

に船と言える」
「……チッ、奴の帰国を待たなきゃいけないのは俺だけかよ。儘ならんな」
心なしか、ドヤ顔で帝国へ向かうと宣う老人と女傑を見て、舌打ちを一つ。
だが、直ぐに気を取り直した様子で不機嫌そうに鼻を鳴らすと、ラックはカウンター下に身を屈め、新たな酒瓶を取り出した。
封を開けると、琥珀色の液体を友人達の空のグラスへと注ぐ。
明らかに高級品であろう蒸留酒の芳醇な香りに、ヴェネディエが鼻腔をヒクつかせて片眉を上げた。
「おや、これは良い品だね……一足先に祝い酒、といった処かな？」
「ウチで二番目に値の張る品だ。精々味わって飲め」
「ふむ、この香り高さで二番、ですか。一番の品を開封する機会が気になりますね」
普段は滅多に酒を嗜まないミラであっても、相当な上物である事が伺える品。
それを二番と言い切ったラックの秘蔵の一品は、酒飲みでなくとも気になる処ではある。
店主は自身のグラスに同じく酒を注ぐと、その強面にニヤリとした――子供が見たら泣き出しそうな凄味のある笑みを浮かべた。
「ハッ、そいつは勿論――あの筋肉馬鹿の年貢の納め時の日だろうよ。俺の一番のとっ

ておきを飲みたきゃ、精々そのエルフが上手い事やるように祈っておくんだな」

グラスを掲げ、皮肉る様に告げられるそれは捻くれた……だが紛れも無く、初めて浮いた話が出て来た友人の将来を祝し、応援する言葉であり。

相も変わらず妙な処でヒネた友人の言に、ミラとヴェネディエも苦笑してグラスを掲げる。

「――戦友(とも)に訪れた春に」

「その末を楽しみと出来る、平和(この時代)に」

祈りと、歓びと、そして祝福を込めて。

老兵達は静かにグラスを打ち合わせ、祝杯を挙げたのであった。

「――まぁ、散々に言っておいて俺達も独り身なんだがな」

「ラック、それは言ってはいけません」

――場所は戻り、帝国の賓客を逗留させる屋敷の一角。
「いや、驚いたなぁ……まさかサルビアの言っていた『あの御方』ってのがグラッブス司祭だったとはなぁ……」
「凄い偶然だよねぇ……聞いた内容を思い返してみると、確かに先生の言動と合致する部分もあるけど」
普段使いしている客間では無い、先程までエルフの客人達に応対していた広間でしみじみとした口調で互いに頷き合っているのは、レティシアとアリアの聖女姉妹である。
挨拶にやってきたサルビアが鼻血を噴いて昏倒して、暫し後。
ざっと魔力で精査した限り、興奮やら羞恥やらが限界を超えて意識が飛んだだけであろう、という結果が出た。
という訳で、倒れた本人は空いた部屋のベッドで寝かせ、随伴してきたエルフ達を引き連れて広間に移動する事となった。鼻から血を噴射して倒れるのを『だけ』と表するのも如何なものかとは思うが。
ちなみにサルビアが意識が無いにも関わらず、彼女を寝台まで運んだガンテスの指を掴んで離さなかった為、目を覚ますまで傍で看病すると申し出たかの筋肉武僧この場に

は居ない。
ぶっ倒れた最長老の代理として改めて挨拶と迷惑を掛けた謝罪を行ったエルフの若者は、形式としてのソレらが終わると同時、土下座せんばかりに頭を低くして懇願を始めた。
「……不躾にも程があるとは理解しております……！　ですが、どうかサルビア様と司祭殿の仲を取り持つ――いえ、そこまでは無くとも、我らの最長老が想い人と深く交流を持とうとする事、御目溢しして頂きたいのです……!!」
レティシア達が聞いた話によれば、彼もサルビアが開明派を立ち上げるに至った切欠となった件の戦場にて戦っていたらしい。
共に生命を賭けて戦った他種族の戦友達、その中でも一際彼女の内に深く刻み込まれた巨躯の益荒男。
エルフからすれば瞬きと言ってもいい、ほんの僅かな間だけ交わった道。
その記憶を、想い出を支えとして数十年。開明派の長としてエルフの未来を憂いて立ち回って来たサルビアに、ガンテスとの交流の機会だけでも与えてやって欲しい。
必死の形相でそう訴えかける青年は、彼女が胃を痛めたり吐血したりする様を同じ年月だけ見て来たという事だろう。
ウチの最長老にもそろそろ人生のボーナスタイムがあっても良いだろいい加減にし

ろ！　と、運命か、天命か。何か大きな流れ的なものに噛みつかんばかりの勢いであった。

勿論、レティシア達にも否は無い。

低頭する若者を宥め、力強く快諾するに至ったのであった。

正直、事の次第を把握した際には驚いた、などというレベルでは無かったが。

聖女姉妹やその守護者たる青年にとっても、ガンテス＝グラッブスという僧は偉大な先達であり、世話になっている恩人でもあり、尊敬に値する大人なのだ。普段の鍛錬キチっぷりとぶっとんだ筋肉っぷりのせいで、どうにも口にする機会は少ないが。

当人にその手の欲が薄いどころか皆無なせいで、男女の話など生涯無縁だと思われたかの御仁にそういった話が降って湧いたとなれば、その芽を摘む事などとんでもない。寧ろ積極的に応援したいまである。

相手が問題ありそうな人物であればまた話は違ったのであろうが、サルビアであれば人品に文句など無い――強いて挙げれば、その立場が色々と面倒を付随させてきそうではあるが……本人達が良い関係になる意思があるのなら、その辺りは聖女としての権限で存分にフォローする腹積もりだ。

なんなら教国（くに）の教皇やご意見番、枢機卿達を巻き込んでも良い。というか、教皇辺りは嬉々として全力で嘴を突っ込んで来そうな話であった。

「まぁ、そうは言っても、サルビアさんが先生を捕まえる事が出来るかどうか、って言うのは大前提ではあるんだよね」

「言ってやるなよアリア……道は険しい処じゃないだろうけど、これまで登頂ルートはおろか、登る山すら見つかってなかったんだ。サルビアの攻略力に期待、ってとこだろ」

攻略難度、という点においては負けず劣らずの駄犬山を一着争いしている少女達としては、難敵に挑むサルビアに同情と共感を覚えることしきりである。競争相手が皆無な事についてだけは羨ましい、と思わなくも無いが。

――何れにせよ、これを逃せばオッサンに春はやって来ない！　全力で応援するぞお前らぁ!!

気合の籠った叫びと共に広間の扉を叩き開けて飛び込んで来たのは、つい先刻まで空から雹とか槍とか邪神の眷属が降って来ないかと警戒を続けていた駄犬（せいねん）である。

どうやら上空を睨み続ける間に混乱した精神状態も落ち着いたらしい。単に空を眺め続けるのに飽きただけかもしれないが。

「おかえり、にぃちゃん。槍は降って来た？」

――降って来ませんでした！　あと雹も！　気温も４０度になったり氷点下になっ

たりしてません！

「するわけねーだろ。どんだけ動揺してんだよお前は」

姉妹からたっぷりと呆れを含んだ視線で頬を抉られるものの、青年は怯みもせずにそれはいいんだ、今は重要じゃない、とあっさり自分の混乱していた時間を切って捨てる。

妙に乗り気でサルビアの恋路に助力しようとする青年に、アリアが不思議そうに小首を傾げた。

「なんか珍しいね。この手の話って本人達の意思が重要、ってにいちゃんなら言いそうだなぁ、なんて思ってたけど」

――いや、それは確かに思ってる……だが、俺は気付いたんだよアリア君！

掌で顔半分を覆い、絶妙な角度で背を仰け反らせる青年のテンションは若干ウザく感じる程高い。

だが、得意分野とは言い難い恋愛事について、積極的に支援を表明する彼の理由は割と切実なものだった。

――サルビアがガンテスとくっ付けば……そうでなくともあの二人が一緒にいる時間が増えれば……俺が筋肉ゴリラのブートキャンプに巻き込まれる回数が減る!!

「目が血走ってやがる……必死か」

レティシアの感想通り、必死である。勿論、推せる友人達が結婚まで行っちゃうとか

最高かよ、その瞬間どんだけ輝くのか見てみたいぞオラァン！　という青年独特の趣味（フェチ）も多分に関係しているが。

そんな彼の言葉を聞くと、座っていたソファの背もたれに寄りかかり、金の髪をかき上げた聖女が悪戯っぽく笑いかけた。

「それなら、いっそサルビアの復調を待ってる客間のエルフ達に伝えて来るか？　お前が応援するって宣言してやったら感涙のあまり泣き崩れるかもしれないぞ、聖者様？」

――あ、それはやめて下さい……ちょっとはしゃぎ過ぎました、マジスンマセンレティシアさん。

自分にとって黒歴史に近い聖者様呼びされて、青年はスン……とばかりにテンションを鎮火させる。

そんな彼の手をレティシアとアリアは引っ張ると、それぞれが腰を下ろすソファの間に座らせた。

幾らか落ち着いた青年を真ん中に、聖女達とその猟犬は祭りを前に芽吹いたおめでたい話題に、楽しそうに花を咲かせる。

「そうだなぁ……闘技会の解説だっけ？　司祭が請け負った仕事って。それにサルビアも巻き込むってのはどうだ？」

「あ、いいねそれ！　打ち合わせって事で二人で話す時間なんかも増えそう！」

――あー……なら、一応陛下かレーヴェ将軍に話を通しておかんとな。本選出場者の資料とかオッサンだけじゃなくサルビアにも廻してもらわんと。

賑やかに話し合い、話題を楽しみつつも、レティシアとアリアは姉妹故か全く同じことを考えていた。

応援はしたいし、どういう形になるにせよ、幸せになって欲しいとは思う。

けれど……叶う事なら、話題に上げる筋肉とエルフの最長老の二人より早く、自分達の方が関係成就させたい。

そんな、実は何気に青年のブートキャンプ回避と同等か、それ以上に切実な内心の聖女達なのであった。

「う……うぅん……あれ、なんで私、寝て……」

「おぉ、お気づきになられましたか」

寝台の上で小さく呻くと、サルビアは若干フラつく頭を押さえながら身を起こす。

寝起き……というか実際は気絶だったのだが、とにかく起き抜けで呆とする頭に届いた声に、直ぐ隣に視線を転じて――寝台の脇に置かれた椅子へと腰掛ける巨漢を視認し

て硬直した。
「いや、唐突に意識を失われたので、大層気を揉む事となりました――ですが、何事も無く目を覚まされたというのなら何よりですな」
「うぴぇ!?　が、ガンテスしゃま!?　な、なんっ……ヒョッ、手っ……!?　も、申し訳ありません……！」
自分が眼前の武僧の太く、節くれだった指をしっかりがっちり握りしめていた事に気が付き、サルビアは慌てて手を離す。
昏倒し、そこから目を覚ましたばかりの者の傍に居る為か、普段より格段に抑えた――穏やかさがより感じられる声量で、ガンテスが笑う。
「はっはっはっ、お気になさらず。病身にある際には、平時において気丈である人物も心細さを感じる、と聞き及んでおります。いや、父母より少しばかり頑健な身を賜った拙僧は、物心ついてより風邪というものを引いたことがありませぬが」
一頻り、快活に笑った後。
ふと真面目な表情となり、巨漢は挙動不審なエルフの最長老へと真摯に語り掛ける。
「レティシア様の精査では、これまでの生活の疲労の蓄積、及び此度の外界への遠出による疲れがまとめて噴き出たのであろう、との事。サルビア殿の御立場からして、存分に身を休める機会など早々は訪れぬでありましょうが……どうかくれぐれもご自愛下さ

い」

実際には好いた男から立ち昇る熱と匂いを力いっぱい吸い込んで興奮してぶっ倒れたのだが、恋する乙女（四桁歳）としては自殺ものの醜態である為、レティシアが気を利かせた診断結果をガンテスに伝えていた、という形だ。

時間経過ではっきりとしてきた頭で、倒れるまでの経緯を思い出したサルビアは普通に死にたくなった。

「……まともに挨拶も出来ない処か、とんだご迷惑を掛けた様で……本当に申し訳ないです……」

「なんの、お気になさらず。悪漢共を打ち倒すのみが能であるこの手が、病身の御婦人の眉間を緩ませる一助となれた事、大変に光栄な経験でありました」

「……打ち倒すのみであるなどと、その様な事はありません」

鍛錬の結晶の如き、見事な肉体と聖気。

凄まじい練度を誇るそれらと相反する様に、その本質は穏やかで他者に慮する在り方である。

サルビアが惹かれたあの頃より、なんら変わらぬ――ともすればより練磨され、より惹かれる様になった御仁だが、それだけにその言に頷き難い部分があった。

そうだ、そんな訳が無い。

あの日、あの戦場で。
あの絶望的な戦況で足掻いていた自分達は、この御仁の手によって、九死に一生を得たのだから。
あのとき、僅かに交わすことのできた言葉の御蔭で、今の自分はあるのだから。
意識した訳でもなく、自然と離した筈の手が伸ばされ、その分厚い掌に、白く、華奢な掌が重ねられる。
「どうか、御自身を卑下なさらないで下さい――ガンテス様は多くのエルフの、ひいてはあの戦場で生き残った者達の恩人なのです。おそらくはそれ以外の、多くの戦場でも」
「……む。これは何とも……面映ゆいものですな」
ポリポリと自身の禿頭の登頂を指先で掻いて、少しばかり気恥ずかしそうに角張った顔に照れ笑いを浮かべる巨漢に対し、ひどく暖かな――けれど少しだけ胸が苦しくなる感情を、明確に覚える。
自身の中にあった淡い感覚が、確かなものに変わったのをサルビアは改めて自覚して。
「……よろしければ、もう少しだけこのままお話をしても構わないでしょうか？　お伝えしたい事が沢山あるのです」
「勿論です、聖女様方や猟犬殿に他のお客人を持て成して頂いておりますれば、此度の拙

僧の役目はサルビア殿の看病である、と定めていますゆえ」

エルフの最長老は――再会した初恋の人物と、柔らかく微笑み合ったのであった。

再会　駄犬の場合（前編）

いやぁ、この間はビックリした。ほんとに、マジで。

サルビアとガンテスのおっさんの意外な関りが判明して更に数日。

いよいよ以てお祭り開催が近づく中、帝国所属の隊長ちゃん達が忙しいのは勿論の事、ウチの聖女様達も最後のお仕事として準備に関わった多くのお偉いさんやら騎士達と面通し――というか半分慰撫だな――したりと、手伝いも詰めに入っている。

こうなってくると俺に手伝えることは余り無い。精々が雑用程度だが……単独だと一介の傭兵でしかない身ではマジで一労働力以上の事は出来そうにない。

じゃぁ普通に護衛としてシアとリアに着いて行くか、と思ってたんだが……当の二人に却下されてしまった。

いや、一応文句というか理由は聞いたよ？

なんでも今回お呼ばれした会場が帝国貴族の御令嬢も多く集まる場であるらしく、二人は特別ゲストとして招かれているらしい。前夜祭と社交パーティーを足して二で割った様な感じなんやろか？　知らんけど。

そんな場所なら尚の事護衛の一人や二人は居た方が良いだろ、と主張したのだが、華やか淑やかなお嬢様方が集まる場所でも躊躇なく鎧ちゃんを起動する様な真似をされたら、数多くの御令嬢達に消えないトラウマを植え付けかねないと逆に叱られてしまった。

どんだけ信用ないねん、泣くぞコラ。

そういった場で毎回問題起こしてる訳じゃ無いでしょ！

どっちかというとお前らに絡んできて問題起こそうとした貴族のぼんぼんとかを諌める側だったでしょ！

鎧ちゃんを起動するレベルまで話が拗れたのなんて二、三……五……とにかく毎回じゃないでしょ！

だがまぁ、そういった場に同行した回数はそれなりにあれど、鉄火場の経験が全く無い人間が多く集まる種類のパーティって、あんまり参加した事ないんだよな、俺。

シア達に護衛として同行するときも、そこの戦域で勝利を収めた後の祝勝会だったり、戦地で関わった人間からの招待を受けたりっていう、パーティーだの催しだの言っても戦争が絡むものばっかりだったし。

そもそも『聖女と繋がりを得たい』だの『聖女を招く事で箔が付く』だの、御貴族様の面子や見栄、権威権益争いのアレコレが主旨の催しなんぞ、ンな暇はねぇと、ウチの

金銀もお断りしてた訳で。

そういう意味では、今回ゲストで招かれたぱーちーとやらが本当の意味での聖女様社交界デビューって事なのか？

……それでも、俺がハブられる理由ってのが弱い気がするがなぁ。鎧ちゃん云々とか今更やろ。

二人でボソボソと「下手なファン」だの「これ以上増えるのは」だの、変なのに絡まれるのを危惧してるなら尚の事護衛を連れて行けよ。最悪、俺じゃなくてガンテスとかでも良いから……その場合はサルビアも誘ったれよ？

とはいえ、本人達にノーセンキューされてしまった現状が変わる訳も無く。

一応、スカラにも連絡を取ってみて、なんか仕事無いかと聞いてみたんだけど、大枠は片付いてるから教国からの人員は半数がお休みになってる、と何とも頼もしい仕事っぷりを示すお返事が帰って来た。

なので、最近では珍しいことに完全に一人で丸一日暇になってしまったのである。

いっそ一日中ゴロ寝して過ごそうかとも考えたが、ここ数日はカラっとした秋晴れだ。

流石に勿体ないので、外出することにした。

あちこちに飾られた旗やら花輪、建物に掛かる横断幕やらカラフルなのぼりなんかで、すっかりお祭りカラーとなった帝都をブラブラと歩く。

いいお天気だからお散歩にいってくりゅ！　と屋敷の執事さんに言ったら「お弁当などお持ちになられますか？」なんて笑顔で提案してくれたので、お願いしたらサンドイッチを持たせてくれた。

まだほんのりパンが暖かい出来立てのサンドイッチの誘惑に負け、散策開始１０分で即行で食い始めたのは仕方ないね。

お、ＢＬＴサンドだ。この間何の気無しに話したやつを早速作ってくれるとか有能かよ。

そういえばホットサンドってこっちでは見ないな。似通った物が無いわけじゃないが。帰ったらホットサンドメーカーとか探して……いや待て、帝都なら普通にありそうだ。探してみるか？

モッシャモッシャとサンドイッチを喰いながら、適当に今日の散策の目的を決めてみる。

なんなら二つ買って、片方は聖殿の料理長にプレゼントしても良い。あの人、料理関連の器具なら自分の持ってないやつはなんでも喜ぶし。

とりあえず、露店が出てる通りなんかで金物を出してるとこなんかを覗いてみるか。無かったら鍛冶屋にでも行ってみるべ。

サンドイッチを食いきると、そのまま中央広場に向かった。

数日前にはリアと一緒に来た、女神様の噴水像が設置された場所に到着すると、厚手の紙箱を潰して通りすがりの屋台の屑かごに放り込む。ただゴミを捨てるだけも悪いので、レモネードっぽい飲み物を売ってるその店で一杯購入し、水分補給。

何気に製紙技術ひとつ取っても、流石帝国って感じだよな。流石にある程度裕福な家だけだろうが、紙の箱が普及してるんだから。

大ぶりの木の杯に満たされたレモネード擬きで喉を潤しながら、この前と同じように噴水の縁へとどっかり腰を下ろした。

さて、この半月ばかりの帝都散策で、大まかに区画ごとの特色の把握は出来ている。

露店の類は東区以外なら結構あちこちで見るが、ここは北区――各職業の工房やそれに関係する店舗が多く並ぶ方面に言ってみるべきだろう。

いうて、ホットサンドメーカーって構造自体はシンプルだから、いざとなったら普通に鍛冶屋に注文すれば手に入りそうだけどな……帝都（ココ）にも知り合いの鍛冶師――なんなら大陸最高クラスの腕の持ち主がいるし。

こいつに関しては今更言う迄も無いだろう、現在は帝国の工房に腰を落ち着けている

ドワーフ……ファーネス＝マイン率いるマイン氏族の事だ。
問題は、そんな超一流の鍛冶職人にフライパンの改造品みたいな品を作らせる訳にもいかんという事です。
いや、多分だけど俺が頼めば普通に作ってくれるとは思う。それ処かタダでやってくれるまである。
ただし、金の代替とされるものがおそろしい。なので選択肢からは外したいです、ハイ。
この間、どうしても彼らの力が必要となる用事を片付ける為に、副官ちゃんにお願いして一緒にマイン氏族の工房に向かったときの記憶を思い出して、俺は一人身震いした。
冷たい飲み物を口にしてる時に、背筋が震える記憶を反芻するもんじゃないね、うん。
ややペースを落としてコップの中身をちびちびと啜っていると、隣に観光客らしき人が座って小さく唸り声をあげだした。
「うぅん……あれ？　王城がこっちだから……あ、ひょっとして北……？」
大きな日除けの帽子を被ったその人物は、きょろきょろと周囲を見回しながら現在地と、おそらくは目的地の場所について頭の中で情報整理している。
なんとも悩ましそうだ。まぁデカい街って最初はやっぱ迷うよね。多少手間でも地

図を手元にしっかり確認しながら移動した方が、結果的には時間が掛からないもんよ。
横目でチラ見した処、お隣のお嬢さんは地図をもっていないようだ。
これは大変に良くない。帝都は他国の都市と比べればぶっちぎりで治安が良いとはいえ、それでも悪所の類が無い訳じゃ無いからな。
うっかりそういった場所に迷い込んだ一般人がどうなるのか、なんてあんまり聞きたくない話だ。年若い女の子なら猶更に。
……しゃーない、見て見ぬフリして何かあったらケツの座りが悪いなんてもんじゃねーし、声掛けてみるか。
野郎が見知らぬ困ってる女の子に声を掛ける場合、柔らかく対応してもらえるのはイケメンと子供だけの特権なのでちょっと遠慮したかったのだが（非モテ特有の僻み思考
巡回中の衛兵さんや騎士が居れば彼らに丸投げできたのだが、ざっと周囲を見てもそう都合よく見つかる筈も無かった。
あー、そこのお嬢さん。道に迷ってる感じですか？　時間に余裕があるなら街の入口で販売してる帝都案内を買いに行くというのも一つの手ですよ？
なるべく平坦な口調で、変な下心なんかがあると取られない様に事務的に助言してみる。
自分の目付きがあまりよくない事くらいは自覚しているので、露骨に警戒されたり脅

えられたりなんてパターンも考慮してたのだが、幸いにもそういった事は無く。

「あ、そうなんですか。ありがとうございます……地元もそれなり以上に大きな街なので、慣れてると思ってたんですけど……ちょっと甘く見てたみたいで」

つば広の白い帽子を指先で押し上げ、困った様に微笑んだ顔が此方を振りむく。

――帽子から覗くやや癖っ毛の蜂蜜色の髪と、そのはにかむ顔に、俺は見覚えがあった。

向こうも同じだったのか、此方の顔をみて軽く目を見開く。

白いブラウスと黒のロングスカートに淡い色合いのケープという、普通の町娘みたいな格好のそのお嬢さんは。

何年か前に魔族領で知り合い、そこで友誼を結び、戦場で何度か一緒に戦った事もある同性――の、筈だった友人。

魔族領の大家、女公爵の側役を務める半吸血鬼（ダンピール）クインに違いなかった。

前回のノエル君といい、この場所での思いもよらないエンカウントが多すぎる。どんな確率だこれ。

実は中に降りて来てこっそり眺めてたりしてません？　女神様。
思わず背後の噴水へと振り向き、その中心に立っている像をじーっと注視したのも仕方ない事だと思うんだ（白目

お互い、思いもよらぬタイミングでの再会に固まる事暫し。
「……えーと、その地図、というのは帝都入り口の案内処で買えるものなのかな？」
え、なにこの反応、と一瞬面食らったものの、直ぐに思い直す。
どうやらクインは俺が彼……いや、もうこれどう見ても違うな……彼女、の、事に気が付いてないと思っているみたいだ。
普通に指摘した方がいいんやろか？
だが、クインが気付かれたくない、と考えていた場合、不用意にツッコミいれるのは友人を傷付ける結果となりかねない。
顔を見て、直ぐに眼前の美人さんが元から中性的な容姿ではあった友人だと気が付いた瞬間は、すわ女装趣味があったのかと二重の驚愕を受けたが……身体ごとこっちを向いたクインを見て、直ぐにその考えは霧散した。

いや、だってなぁ……。

どたぷーん。

そんな音が聞こえてきそうというかなんというか。

ケープから覗く彼女のブラウスは、ショルダーオフで肩から胸元がやや開いているんだが……そこには大変にご立派かつ深い峡谷が存在している。

記憶にある友人の体型とはあまりにもかけ離れたソレを見て、驚愕のあまり二度見しそうになった。下手をしなくてもセクハラになりかねないので咄嗟に顔にむけて視線を固定したのは我ながらナイス判断だと思う。

どういう　ことなの　ほんと（白目

確かにちょっと華奢に過ぎるくらいだったクインだが、それでも骨格という点から見ても男である事を疑った事なんぞ無かった。

それがどうだ。今となってはじろじろと注視する訳にもいかんが、少なくともパッと見では間違いなく肉付きも骨格も女性のソレである。

こんな目の毒なモンだって付いて無かった筈やろ。布の類で隠してたにしても限度があるわ、というか絶対隠し切れるサイズじゃねぇだろコレ。

……この二年で成長した、という事だろうか？

成長期ってレベルじゃねぇぞ。何があったらシアと大差ないであろうサイズから彼

女の主である女公爵にも迫るレベルに育ってんだ。

骨格にしてもそうだ。かろうじて、という注釈は付くが、一応は男と言っても良い体格だったのにそれすら変わるってどういう変化なんだよ。

半吸血鬼（ダンピール）と獣人――魔族同士のハーフだから、人間の成長基準を参考にするのが間違い、と言われたらそれまでなんだが。

ちょっとクセっ毛の蜂蜜色の髪がすっかり伸びてるのも見目のイメージがガラっと変わる要因だ。

前はベリーショートに近いくらいで、それが本人の中性的な雰囲気と相まって如何にも貴公子然とした感じだったんだが……今はセミロングくらいはある。美形なのは据え置きだけど、なんかもう普通に隊長ちゃんや副官ちゃんといった美少女カテゴリに入る方々と同じ、立派なレディにしか見えません。

……まぁ、なんだ。長々と友人の変化について語りはしたが。

大事なのは、男だろうが女だろうがクインはクインで――そんな少しばかり女性らしくなった友人の性別を、今の今まで誤認したまま気付きもしなかったアホがいるという点である。

脳内で議論する必要すらない、誰に聞いても満場一致の有罪判決が出そうなやらかしなんですけど（白目

どうしよう、土下座したほうがいい？　それとも腹切った方がいい？

「あの……大丈夫かい？　顔色が良くないような気がするけど」

いつぞやのノエル君をどうこう言えない程度には罪悪感やら申し訳なさでエラい事になってる俺だったが、無言になった此方をみて心配そうに眉根をよせたクインを見て気持ちを切り替える。

取り敢えずこうして再会出来た訳だし、彼――じゃねぇ、彼女だ、何時まで間違えてんだ俺は。とにかく、クインが困っている様なら手を貸してやろう。

その上で、本来の性別を隠したがっている、と判断出来ればこのまま気付かないフリをして、単に俺が気付かなかっただけなら五体投地して謝罪しよう。

そんな風に決意しつつ、美人さんなんでちょっとビックリしただけだ、と誤魔化しではあるが嘘では無い言葉で彼女に応えたのであった。

話を聞いた限りだと、どうやらクインは北区方面に用事があったらしい。

正確には其処に居を構えている工房を覗いてみたかった、という事らしいが、本人が最初に言った通り、地図無しでも行けると思ったら普通に道を間違えて、中央の噴水広

場に戻って来た処を、俺と顔を合わせるに至った、という訳だ。
偶然ではあるが、俺も本日は北区に足を延ばしてみようと思っていた処だ。
それほど帝都を知悉している訳でも無いが、よければ地図代わりに同行すると申し出た処、クインさんは御顔を輝かせて喜んで下さった。まぶしい、浄化されそう。相も変わらず半分は吸血鬼（ヴァンパイア）とは思えない聖属性な笑顔や。
「では早速行こう！　ほらほら、時間は有限だ！　一人で過ごす休日に逢び……同行者が出来たんだ、楽しむとしようよ！」
こちらの手とってご機嫌な様子の友人に引っ張られながら、噴水広場を早速移動する事になったが……ちょっとだけ待ってくれ、このレモネード擬きをやっつけて杯を屋台に返さないと。
正直、精神的におなかいっぱいになったせいで飲む気は失せていたのだが、残すのも勿体ない。
まだ半分程残っているコップの中身を、多少無理にでも飲み干そうとして……なにやらジーッと見ているクインに気付いた。
あー……ひょっとして、いる？
「！　き、キミが良いなら、欲しいな」
いや、ちょっとだけ喉が渇いていてね！　なんて慌てた様に付け足すが、別にいやし

んぼめ、なんて思ったりはしねーよマイフレンド。

まぁ、お値段の割には結構な量だしなコレ。新しいの奢ってもいいんだが女性が一杯飲むにはちと多い。そこそこに貴重である砂糖はあんまり入ってないので、甘さ控えめで個人的には飲みやすいんだが。

戦場でも無いのに女の子と飲み物のシェアというのもどうなんだ、なんて思わなくも無かったが……考えてみればクインとは過去に散々回し飲みだの食い物の分け合いだのはしてる。今更に過ぎるわその節は大変デリカシーに欠けていましたすいません（低頭

俺が差し出したコップを妙に神妙な手つきで受け取ると、彼女は「では」と、気合を入れる様に前置きし、両の手でもったソレを一気に呷った。

よっぽど喉が渇いてたんやろか？　ぐーっと中身をイッキして、残さず喉に落とし込むと大変満足気に一息つく。

「――ッ、はぁ。御馳走様でした」

おぉい、クインさんや、ただのレモネードを飲むのに変に艶っぽい感じ出すのやめてくれない？　非常に眼の毒なんですよ。

ちょっと口から零れたのが谷間に落ちて吸い込まれてんだよぉ！　俺の目まで吸い寄せられそうになるわ！　勘弁してくださいマジで！

別に彼女からすれば、以前と変わらない挙動のつもりなんだろう。実際、過去の俺の記憶と比べても大きな差異は無い。

だが、今のクインには男の浪漫を刺激してやまない凶悪な凶器が搭載されている。視線を集める、という点においては嘗ての比では無いのだ。

広場周辺にいる男連中も、ちらちらと視線を向けているのが多いこと多いこと――俺と会う前に変な男にナンパとかされなかったのは奇跡に近いだろコレ。

過去に男装してたときは、他国の御婦人や御令嬢の類から黄色い声を一身に集めていたイケメンだったというのに、この変わり様よ……いや、見る目を勝手に変えるのは周囲な訳で、それを本人のせいみたいに言うのは筋違いではあるんだけど。

その当人は豊かな双丘に落ちた滴を慌てて拭っている。

自身の谷間に乱雑にハンカチを突っ込んでぐにぐにと水気を拭き取ろうとしているのを見て、俺は即座に首を九十度にひん曲げた。

この手の眼福な光景に対して瞬時に視線を外すのは、もう条件反射で染み付いた性だ。

この世界の美人はおっかない人が多すぎるからね、下手にガン見して不興を買おうものなら、どんな惨劇が身に降り注ぐか分かったもんじゃねぇんだよぉ！

「あぁもうっ……！　やっぱりさらし布が無いと不便だなぁ……！　っと、ご、ごめんよ

みっともない処を見せて。キミと会う前に、胸元を押さえていた布が真ん中から切れてしまってね、今まで伸びて千切れるなんてことは無かったんだけど……」

多少恥ずかしそうではあるが、それでも女の子が野郎に話すにはあんまりな内容をあっけらかんと告げるクインさん。

……あまり説教の類はしたくないが、それでもここは友達として言わせてもらいたい。

実際には言える筈も無いんだが、それでも声を大にして言いたい。

お前さんはとんでもない凶器をぶら下げていると、少し自覚しろコラァ！

――っていうか今スゲェ事聞いちゃった気がするぞ、そのサイズでさらしってのも問題あるが、それが切れたって言ってなかったか!?

「え、う、うん。参ったよ、無いとこんなにも動きづらいとは思わなくてね。いっそ一度宿に戻ろうかと思った位さ」

お前、アホだろ（真顔

俺は手を伸ばし、彼女の羽織るケープの前をしっかりと閉じる。

引っかけて出て来た旅行用の外套を脱ぐと、当惑しているクインに半ば無理矢理袖を通させた。

北区に用事があるって言っとったな、急いで向かうぞ。互いの目的の前に真っ先に行

く場所が出来た。
「どうしたんだい、急に？　いや、キミに危急の用事が出来たというなら、そちらを優先してくれて構わないけど」
何故か嬉しそうな表情で着せた外套を見回していた友人が、不思議そうに首を傾げる。
ンなもん決まってるやろがい――先ずは服飾関係の工房か店舗に行くんだよ！
急激に成長というか、変化した身体に自覚が追っついて無いのか、とにかくクインは無防備に過ぎる。
彼女の実力を考えれば杞憂であるというのは分かっているのだが、なんか悪漢の類にいきなり路地裏に引きずり込まれそうで心配になるわ。
なんで俺がこんな事を言い出したのかも分かって無い、と言った表情でやはり不思議そうな儘の友人の手を引っ掴むと、そのまま足早に北区へ向けて歩き出した。

北区に近づくと、道行く人に最寄りの服飾店――特に女性向けの品が充実している店舗を場所を聞く。

幸いにして近場に人気の店があるとの事なので、クインを引っ張って真っ直ぐにそこに向かうと、正に渡りに船。

服飾店というより、そこは下着販売店――所謂ランジェリーショップだった。

まぁ、言う迄も無く転移・転生者の知識でテコ入れして出来た店だろうな。

最大国家である帝国なら当然、流行も再先端を走る場合が多い。が、女性用の下着に絞ったジャンルというのは競合相手もまだまだ少ないだろうし、良い着眼点なんじゃなかろうか。

足を止める事無く店の扉を押し開けると、即行でそこに彼女を放り込む。

ひたすらに困惑している巨乳でノーブラで無自覚という属性過積載過ぎる娘にそこで待ってろ！　とピシャリと言いつけると、女性向けの店に勢い良く入り込んで来た闖入者（俺）を警戒する様に声を掛けて来た店員さんに、口早に簡単な経緯を告げる。

こういった店に入った経験も無いのか、興味深そうに周囲を見回すクインを指さし、そんな訳で彼女の体型に合わせた下着をオナシャス！　と勢いを殺さずに店員さんに注文した。

つーか勢いが無いとこんなん出来るか！　つい先日まで男だと思ってたとはいえ、今では完全にナイスバディな美人になってる友達の下着を本人の代わりに注文しとるんやぞ。意味が分らんわ糞ァ！（逆ギレ感

羞恥やら葛藤やら意味不明な流れに対する理不尽感やらで割とあっぷあっぷしている俺の苦悩を、なんとなく店員さんも察してくれたのか。

最初の警戒感は何処へやら、俺の肩をたたいて「お任せ下さい」と、力強く頷いて請け負ってくれた。やだ、頼もし過ぎて涙出てきそう。

「……なんでこんな事になってるんだろう？　ちょっと展開が急すぎて理解が追い付かないよ」

あれよあれよという間にお店の人達に囲まれて外套とケープを脱がされ、採寸の始まったクインが呆然とそんな言葉を洩らしていたが……だまらっしゃい、マイフレンド。今回に限り、文句も拒否も受け付けんぞ。

これに関してはお前さんの主である女公爵も文句なんか言ってこないっていう確信があるからな。寧ろ腹抱えて笑いそうでまである。

なんか「あ、ちょっ」だの「ひゃん!?」だのと、可愛らしく上がる声に背を向け、外で待ってる、と端的に言い残して俺は店の外に出た。

本来ならこっ恥ずかしさが勝って出来そうにもない難事を、勢い任せで終わらせた事になんともいない疲労感がこみあげて来る。

……成し遂げたぜ……やったよ俺ァよ……クッソ疲れた……。

頑張ったよな俺……なんかもう色々と我慢して頑張ったよ……誰か褒めて……。

ショップの壁に寄りかかり、ずるずると腰を落とす。

……改めて思い返すと、マジで何やってんだろうなぁ、俺は……。

二年ぶりに友達と再会して、男だと思っていた友達は女の子で。

正体を隠す友達に付き合って、一緒に観光に繰り出そうと思ったら、何の因果かその友達の下着を買い揃える羽目になっている。

本気で意味が分からねぇ。なぁにこれぇ（白目

出掛ける前の自分に教えたら、妄想乙ｗｗｗと指さして笑われそうなシチュエーションが今も続く中。

それでも、二年前にこれが最後で、もう会う事も無いのだろう、と。そう寂寥を覚えながらも別れた友人に、図らずとも再会出来た喜びを噛みしめて。

浮かんで来る苦笑を堪えながら、俺は秋晴れの空を見上げたのであった。

再会　駄犬の場合（後編）

店の外で待つこと小一時間。
決まりが悪そうな、恥ずかしそうな表情でクインが手に小さな布袋を抱えて出て来た。
「お、おまたせ……」
……おう、お帰り。
服飾に限らず、一部のガチの大商会が直営してる店だと俺達転移者が居た世界の販売システムを真似てる処が結構ある。
衣類関係の既定のサイズを複数種用意しておいて、試着可能、なんていうのもその一つだ。
いうて、この手の売り方は縫製作業の大部分が手作業か簡易な裁縫機械（ミシン）であろうこの世界じゃ人手も金もかかる。
なので資本力と固定の太客――ざっくりいえば貴族とかの後押しがある様な高級店

オンリーなんだろうけど……ざっと店内を見た限りではこの店はその高級店に該当する、するんだが。

特にクインの場合、こう、ね？

サイズがサイズなので既製品手直しじゃなくて完全オーダーメイドになるから数日掛かります、なんつーオチも有り得たのだが……。

「と、とりあえず胸元は落ち着いたよ……でも、今のはピッタリとはいかないから後日、きちんとした品を受け取りに来て欲しいって……」

とりあえず代用品くらいはあったって事か。良かったよかった……マジで良かった（迫真

一安心で胸を撫で下ろしている俺を、眼前の友人は申し訳なさそうに上目遣いで見上げて来る。

「お金まで出してもらったみたいで、本当にごめんよ。後日の品は僕が払うし、あとで支払いした分も返すから」

いらん心配ですわよ。店を出る前に店員さんに釣りはいらねぇ！　一番いいのを頼む！　と金貨を渡してきたので後に出来る品も余裕っすわ。

この手の高級店の相場周りは以前、シアやリアと行った変な店長が経営してる高級店で学んだ。渡した額なら確実に足りんという事は無い筈だ。

金を返してもらう必要も無いぞ。高い買い物ではあったが、引っ張って強引に連れて来たのは俺だし……数年ぶりに会った友人に贈る品が下着ってのはアレだが……まぁ、再会祝いってやつだ、黙って奢られてくれ。

そんな風に肩を竦めて言ってやると、クインは袋を抱いた腕にギュッと力を込める、やはり上目遣いのまま――今度は悪戯のバレた子供みたいな顔になった。

「あはは……やっぱり、気付いてる？」

そらね。というか気付かねー訳ないでしょ。顔合わせ一秒で把握余裕ですわ。

顔を合わせるのが二年ぶりとはいえ、戦場でも肩を並べた事のあるダチやぞ。女神様の加護（下駄）を使って『視る』迄もないわ。

雰囲気やぱっと見の身体つきは確かに変わったけど、その程度で俺がクインに気付かない筈も無い。

本人が隠したがってるのかも、と思って配慮しようとはしたが……ランジェリーショップに放り込んだ時点で気付かないフリは無理やろ、ということで互いにカミングアウトとなった。

つーか気付いてないとしたら、俺が初対面の女の子をちょっとアダルトなお店に引きずり込んで下着プレゼントするやべーやつになるでしょ！

……まぁ、あれです。友人面しておいて再会するまで性別を勘違いしていたせめても

の詫びも兼ねてる、って事にして頂きたいです――マジで今までスンマセンでしたぁ！

身体を直角に折り曲げて深々と頭を下げる俺の後頭部に、クインの慌てた声が降ってくる。

「待って、待ってよ！　それに関しては気にしてない……というか、僕も敢えて口にしなかった部分があるんだ！　同性の友人、っていう事で接して来るキミの距離感が心地よくて、つい……」

場合によってはそのまま土下座からの五体投地コンボに移行する構えであったのだが、男友達のノリで接していた過去の経験故か「土下座とかはやめてくれよ本当に！」と、こっちの行動を先読みして俺の肩を掴み、上体を起こさせようとしてくる。

いや気付かなかった俺が、いやいや黙っていた僕が、と二人揃ってやいのやいのと自分に責があると不毛な謝罪合戦を一分ほど繰り返したが、ここはランジェリーショップの目の前である。

道行く人から見れば痴話喧嘩ですらない微笑ましいやり取りにでも映ったのか、ぬるーい視線が向けられている事に気付いて、俺もクインも同時に咳払いして一旦ストップした。

……とりあえず、お互いに非があったということで。

「……うん、そうだね」

そそくさと店の前から離れ、移動を開始する。
ややあって気恥しさも薄れたのか、同行スタートした時の上機嫌に戻ったクインが自身の蜂蜜色の髪を指先でくるくると弄りながら笑う。
「店の人達にも怒られてしまったよ。正直、肌着の類にはあまり頓着していなかったから、あんなに洗練された品があるというのは驚きだった」
あー……あぁいう店で働いてるプロ意識高い人達からしたら、めちゃくちゃ上等な素材の持ち主が使い古したさらし巻いてるっていうのは歯がゆく感じるだろうしなぁ。
「うん。その……『見えないところのお洒落』というのもあるんだね、目から鱗というやつだったよ」
まずクインくんさぁ、下着とか見えないところのお洒落とか、友達っつっても男相手に気軽にその手の話題を振ってくるのやめよう?
気不味くて反応しづれぇんですよぉ！　男だと思ってた頃の絡み方は流石に厳しいんですよぉ！　偶にノリでやっちゃいそうだけど！
大変にご立派なメロンもやばいがその下のくびれもやばい。上にデカいもんついてる分、メリハリがえげつない事になってるから視覚の暴力になってる。
二年前は常時賢者モードみたいなもんだったし――何より、最終的に自分が辿る末路を考えると誰かにそういった眼を向ける、そういった感情を抱くという事も不毛な気が

して、その手の話題はふざけて語ることはあっても何処か自分を切り離してる部分があったのだが……。

今では再度の転生アフターライフを満喫中。年単位で引き籠っていた我がジョンも一部放棄していた役目を再び粛々とこなす様になってきた。

過去の姿からのギャップも手伝って、クインのガバガバな距離感はこう、非常によろしくない。男同士だと思ってた頃はそう気にもならんかったが、今はヤバい。

正直言えばシアやリアにもキミタチ自分の容姿を自覚した距離感にしてくれない？って思うときが無いでもないが、アイツらの場合は元の性別が性別なのでしゃーない。色々とよろしくないのは確かだが。

無防備が過ぎるのは将来的にも色々と心配になる。やんわりとその辺りの事を注意してやると……それに気を悪くする処か、寧ろ嬉しそうにして。

彼女は一緒にいるときによく見せていた、はにかむ様な笑顔を浮かべる。

「髪も伸ばしてるし、職務の時間以外はあんまり男の子っぽい恰好はしなくなったし……見た目はそれなりに変わったとは思ってるよ」

でも君は直ぐに気付くんだね、と穏やかに眼を細めて言って来るが……いやさっきも言ったやろ、戦地を共にした友達（タチ）やぞ。寧ろ気付かない訳が無い。

一目みてクインだと確信した分、とんでもねぇスタイルの美人さんになってた衝撃も

緩和されずにダイレクトに脳天に届いたんですけどね！（白目

「あははっ、やっぱりキミはキミだなぁ……でも、そっか。急に大きくなって邪魔だ、くらいにしか思ってなかったけど……役に立ってるんだなぁ、コレ」

役に、って何の話……ってオイ、嬉しそうに掌で持ち上げるな!?　話聞いてたのかそういうとこだぞお前ェ！

はいこっそり《地巡》《地巡》！　足裏を通じて大地に巡らせる魔力の流動に併せ、血流も引っ張る様にして操作する……お師匠とミラ婆ちゃんにバレたら怒られそうな使い方してんなぁ我ながら！

……とにかく！　こうして再会して、そんで互いに初対面のフリもやめたんだ、先ずはすべき事があるだろう。

「……！　そうだね、僕とした事が浮かれて一番大事なことを忘れていたよ」

名案だと言わんばかりにパァッと笑顔を咲かせて頷く友人と揃って足を止め、俺達は向かい合う。

――ただいま、クイン。色々とあったけど、こうして戻って来れたよ、またよろしく。

「うんっ……！　おかえり！　またよろしく！」

そう笑い合って、俺は右手を差し出して――それをスルーしたクインは両腕を広げて満面の笑みのまま熱烈なハグを決めて来た。

うわー、かおがちかい、いいにおい。そしてそれいじょうにいろいろとやわらかい（白目

お前ホンマいい加減にしろよ。そういうトコだぞ（二度目

再会の挨拶も終え、改めて友人の用事を聞いた処……どうやらクインは彼女の主たる女公爵の命で、帝国の兵装――特に上位の騎士や精鋭が使用する魔装関連を扱う工房へと見学に来たらしい。

「僕達は種族からくる生来の魔力の高さや耐久・再生力もあって、武装を必要としない者も多い。その分、各国に比べて武具全般の水準が低くなりがちだからね。主もその辺りを改善したいとは思ってるみたいだよ」

魔族領でも《魔王》がケツを下ろしてる中央の方は、魔装と強力な魔獣の甲殻や骨格なんかを組み合わせたどっかの狩猟ゲームみたいな独自の武具製法が発展してるみたいだが……性能優先で見た目などは洗練されているとは言い難く、貴族主義の吸血鬼（ヴァンパイア）達

の嗜好からは大きく外れている。
出来ることなら帝国の魔装関連の技術を参考としたい、って事だろう。
後は、単に女公爵が《魔王》に頭下げて技術者を招聘するのを嫌がった、という可能性もあるが。
本当に必要になればあのおねーちゃんは躊躇わないだろうが、邪神との戦争も一段落ついた現在、急速な安定期に入りつつある人類種国家群では軍事力の維持・拡張ってのは大戦期と比べて大きく優先順位を下げている。
今回のクインの工房見学も、技術を見る云々というより顔見せと繋ぎを得る為の一歩って事だろう。
《魔王》が嘴を突っ込んでくるであろう魔族領の王都に交渉するより、多少遠回りな手段になっても帝国から同等の成果が得られるならそうする、って事なのかもね。
頼んだら頼んだで、《魔王(アホウドリ)》が調子にのって「ヘイ、土・下・座！　どーげーざ！」とか煽って女公爵が普通にブン殴り、そのまま大喧嘩が始まるのが目に見えるし（確信
うん、ちと脇道に逸れ過ぎたな、話を戻そう。
帝国の方から発行された紹介状は何枚かあって、今日はその内の一つ、一番大手の工房へとお邪魔しに行く予定なのだそうだ。
……で、帝国で今現在一番の大手かつ腕利きの職人集団といえば、当然決まっている

訳で。
クインが見せてくれた紹介状には案の定、ドワーフ族の代表たるファーネス率いる、マイン氏族の武具工房の名が記されていた。
言う迄も無く俺は彼女達とは見知った間柄だし、工房のほうにもこの間顔を出したばかりなので道案内するにはうってつけの場所だ。
いうて、ファーネス自身は丁度留守にしてたので、工房にいた他のドワーフに用件を頼む事になったんだけどね。
しかしなぁ……あの場所にもう一度か。
紆余曲折あったが、今日は再会した友人に付き合うと決めた。
彼女と一緒にファーネスの処に行く事に否は無い。無いのだが。
正直、しょぉーじきっ、気は、進まない。
前回で済んだと思ったのに、また行く事になるとは思ってなかったわ……。
俺のテンションが露骨に下降したのを察したのか。
クインが心配そうに眉根を寄せると、下から覗き込む様に様子を伺って来る。
「大丈夫かい？　キミが嫌な事に付き合わせるのは本意では無いんだ、何か問題があるっていうのなら……」
いや、大丈夫だいじょーぶ、一緒に行くよ。

嫌って訳では無いのよ。なんだかんだいってあそこのドワーフ達は良い奴らだし、俺は使わないけど高性能でかっちょよい武器がずらーっと並んでる工房は見ていて飽きない。男の子なら丸一日くらいは余裕で入り浸ってられる空間やぞ。

ただ……俺が行くとファーネス達の反応が”怖い”のだ。

あと心配してくれるのは嬉しいけど、その身を屈めて上目遣いするのをやめなさい。アングルのせいで谷間がヤバいくらいに見えるんだよ、そろそろワザとやってんじゃねーかって勘ぐっちゃうぞマイフレンド……！

抗議の意味も込めてデコピンしてやると、「あ痛っ……え、なんで額を弾かれたんだい僕は？」なんつって何も分かって無さそうに首を傾げる友人を先導し、俺は帝都の北区を進む。

マイン氏族の工房は、北区の端——外壁沿いの角地を一際大きく使った土地に建てられている。

地図上では帝都の隅っこにあるが、当然冷遇されてこの配置、なんて訳もなく、寧ろドワーフ達の要望を最大限に応えた工房にする為にこの場所になったんだとか。

間違いなく大陸でも最大規模の鍛冶場は、超大型の炉とそれを日夜可動させる為の機構で中々に喧しい。それこそ、住民区の中に存在したら騒音クレーム待った無しな程度には。

通常の鍛冶だけでなく、機械的な構造の絡繰りなんかを実験的に作る施設もあるため、中には国の依頼を受けて手掛けているであろう国家機密に掠ってそうな物も混ざっている。といっても、見た目からは用途とかサッパリ分からない物ばっかだけど。

長い戦争の間、高品質な武具や兵器の開発を担ってきたマイン氏族を中心としたドワーフは、既に鍛冶職として盤石にして不動の地位を確立している。

ドワーフという種族からして鉄ぶっ叩いたり石削ったりして何か作ってるのが生き甲斐みたいな連中なので、地位や立場にかまけて腐るなんて事もほぼ有り得ない上に、持ち得る政治的な発言力なんかも自分達の領分に嘴を突っ込まれない限りは基本、行使する事が無い。

存分に腕を振るえる環境を整備してやれば、文句の声も殆ど上がらず成果はきっちり上げて来る超一級の職人集団……そら便宜を図りまくりになりますわ。

いうても、工房に勤めるドワーフ達が艶々した良い笑顔になる様な、とんでもねぇ設備を揃えられる国は帝国くらいのもんだろうが。

本日、クインが見学に向かう工房はそんな場所なので、立地的な不便さなどものともせずに色んな客がやってくる。

優れた武具を求める戦士、一級の魔法発動体を欲する魔導士、実験に必要な複雑な絡繰りなんかを作って欲しい研究者、国の依頼を持ってくる役人。

数多く来る客も求められる仕事も玉石混交。全員を相手に出来る筈もないので、基本工房に入るには紹介状ありき――そうでなければ、余程ドワーフ達の興味を惹く仕事を持ってくるか、だ。

武装を欲しい、っていう場合には、腕利きだと紹介状無しでも通るケースが多いみたいだけどね。

極論、人外級やそれに近い領域の戦士や魔導士ならドワーフの方で「俺が作る！」「いや儂が!!」って担当の奪い合いが始まるらしい。隊長ちゃんの湾刀なんかも喧々囂々すったもんだの末に結局ファーネスが族長権限まで利用して打ったみたいだし。

まぁ、なんだ。

長々と説明したが、要は物見遊山や気軽な一見客が入れるような処では無い、という事なのよ。

だというのに、先日訪れた俺はノーアポな上に頼む仕事は半分相談みたいなもん、残った時間で工房見学なんかもしたいなーとかも考えていたので普通に舐めた客だった。

本来なら相手にもされないか、下手に食い下がっても叩きだされて塩撒かれても可笑しくない筈だったんだが――。

「おぉ！　また来てくれたのか坊！　さぁさぁさぁ遠慮するな！　上がれ上がれ！」
「今茶を淹れてやろう！　そちらの嬢ちゃんはお前さんの連れか？　ならかまわんかまわん！　一緒に待っとれ、この間王城のモンが届けに来た菓子があった筈だから出しちゃる！」
「この間は土産の一つも受け取ってくれんかったからのう！　今日はなんぞ持ってけ！　ワシの作った剣と鎚なんぞどうじゃ？　他の武具でもえぇが」
「あ、ズルいよ！　ちょっとちょっと坊や！　コイツのじゃなくてあたしの！　あたしのにしときなって！　この間話してた火薬を使った杭打ちの試作が――」

工房前にある門に近づいた途端、俺に気付いたドワーフが凄い勢いでスッ飛んできてあれよあれよという間に囲まれ、気が付いたら内部の食堂っぽい場所で大勢の職人連中に茶だの菓子だのと散々に進められている。
この間来た時と全く同じ流れに笑うしかない。クインなんて紹介状を出す前に工房に引きずり込まれて唖然としとるし。
前回同行してもらった副官ちゃんはこの展開を予想していたのか、開き直って出されたお茶菓子もりもり食べていたけどな！
髭面で小柄なムキムキのおっさん共（一部女性もいるけど）が愛想よく出してくれる

お茶を啜りながら、彼らが食事を摂る場所なのであろうこの場をぐるりと見渡す。
俺とクインが並んで座っている席周辺は、此処に勤めているドワーフ達にすし詰めで囲まれていた。
なんなら食堂中のドワーフ達の視線がぶっ刺さってる気すらする。おい、今新しく食堂に入って来た奴、何でこっちを指さしてワクワクした顔で同僚に手招きしてんの？　絶対飯食いに来てねーだろアンタら。
比喩抜きで工房に勤務してるドワーフがこの場に集結しつつあるので、収拾がつかなくなる前に用件を告げようと口を開いたときだった。
「えぇい、道を塞ぐでないわ馬鹿もん共が！　坊主は儂の客じゃぞ！　ほれ、散った散った！」
音割れしてるマイクから出てるような大音声が響き渡り、人垣を掻きわける様にして進み出て来たのは老齢のドワーフだ。
マイン氏族共通の赤銅色の肌に、種族的には大柄であろう人間と然して変わらない体躯。年経て白く染まった長い髭は適当に剃られた髪と違って丁寧に手入れがされ、幾つもの三つ編みとなって揺れている。
のっしのっしと重量感のある歩みで俺達の前にやって来た老人は、此方の向かいの席に座っているドワーフから席を奪い取るとドカッと腰を下ろした。

当然の如く、周囲からブーイングの声があがる。
「そりゃないじゃろう先代！　アンタはこの間、坊の相談を受けたばっかりだろうに！」
「後からやってきて客の相手役を奪うとか横暴じゃないか！　職権乱用は反対さね！」
「というか、王城からの依頼はどうしたんじゃ！　姐御はそっちに掛かり切りじゃろ！　なんで補佐しとるアンタがこっちに来た!?」
ギャーギャーと上がる抗議の声に、先代、と呼ばれる老ドワーフはギョロリと周囲を睨みつけて唾を飛ばして怒鳴りつけた。
「喧しいわぁ！　こやつの求める事に儂以上の仕事が出来るようになってから文句を言え小童共が!!」
ビリビリと空気が震えるような大喝にも全く怯まず「ざけんなこの爺!?」「おい、誰か姐御にチクってこんかい！」と更にヒートアップして上がる怒声を無視し、老人――マイン氏族の先代族長は卓に肘をついて此方に笑いかけて来る。
「おう、数日振りじゃのう猟犬の坊主――例の件になんぞ進展か変化でもあったか？」
どうも、この間はお世話になりました先代……あー、実は今日の俺はただの付き添いでして。
「なんじゃ、つまらんのう。折角だからお前さんの相棒の整備くらいしていけ、復元機能があるっちゅーても一回くらいはじっくり腰を据えて確認すべきじゃぞ？　ん？」

軽い口調だが、相棒の整備、と口に出した瞬間の目付きがヤバい。控え目にいっても凄いギラギラした眼光で身の危険を覚える（白目

先代だけでは無い。周囲の食堂に押し寄せたドワーフ達も我が相棒――鎧ちゃんの事が話題に出た途端、愛想良い表情をポイしてギラリとした目付きに変わった。

――珍しい事に……本当に珍しい事に、マイラヴリーバディから明確に嫌そうな感情が伝わって来て草も生えない。気持ちは解かるよ鎧ちゃん、だってコイツらこえぇもん。

以前にも述べたと思うが、ドワーフ――取り分け武具の鍛冶に秀でるマイン氏族にとって、特級呪物にして魔装としては史上有数の性能を誇る鎧ちゃんは琴線に触れるどころかぶっ刺さりまくる武装らしく、俺が工房に現れると見せろ嗅がせろ触らせろ齧らせろと揃って同じ反応を示すのだ。

その様はさながら、長年追い求めた宝物を目の前にした冒険者の如く……というのはまだ上品な表現で、実際の視線はもっとギラギラしつつもネットリしてるという非常に寒気を覚える代物である。

鎧ちゃんの整備自体は、どうせやるなら最高の鍛冶師である彼らにやってもらった方が良い、というのは分かるんだが……前のめり過ぎて怖いんだよぉ！

あくまで使い手の俺ですらコレやぞ、当事者であるマイラヴリーバディが嫌がるのも

当然だ。

どうにかやんわりとお断りしたい、が、今回はぐいぐい来る先代や他のドワーフ達を何度も宥めてくれた副官ちゃんが不在だ。

自身の得物のメンテとかでここの工房の面々とは面識のある副官ちゃんならともかく、今回初めて工房を訪れたクインにそれを求めるのは酷だろう。

というか、元から今日のメインは彼女で俺はオマケだ。その辺りも含めてどうしたもんか。

悩まし気に腕を組む俺と、紹介状を出すタイミングを完全に見失って大人しく出された茶をちびちびと飲んでいるクイン。

期待でギラついたり輝いたりしてる眼に囲まれてにっちもさっちも行かなくなってる俺達を救ったのは、鼻息も荒く食堂の扉を蹴り開けて飛び込んで来た新たな人物だった。

肌の色はここの大多数と同じ赤銅色だが、その髪は炎のような赤。

二の腕に魔力導線を模した刺青を入れたそのドワーフの女性は、マイン氏族の長、ファーネス＝マインその人である。

彼女は直ぐに俺達を見つけると、ものも言わずに一直線に走り寄って来て――。

「――ふんっ！」

目の前に座ってる先代の頭を鷲掴みにすると、そのまま渾身の力を込めて卓に叩きつけた。
砕けるテーブル。飛び散る木片。
大体予想してた俺はお茶と菓子の器を持ち上げて避難させており、クインは目を白黒させて「ぅえぇっ!?」なんて叫んで俺の片腕に取りすがっている。腕に素敵な感触が伝わってくるのでやめたまえマイフレンド（白目
「うぉい！　なにするんじゃ馬鹿孫がぁっ!?」
「こっちの台詞だよ爺ぃ！　人が王城に呼ばれてる隙に坊の魔鎧を精査するなんつー抜け駆けをかました癖に、今回も似たような真似をしようたぁいい度胸じゃないか!!」
頑丈な樫の卓を強制頭突きで爆砕した先代だったが、特に痛痒を覚えていないのか直ぐに背後を振り返ってファーネスに向かって怒鳴りつける。
対するファーネスも負けていない。怒りと興奮で燃え盛る瞳で自身の祖父を睨み付けると、ついさっき蹴り開けた扉を勢いよく指さして吠えたてる。
「ここからはアタイが客人の相手をする！　年寄りは引っ込んで残った仕事を片付けてな！」
「ハッ、待望の機会がやってきたというに留守にしとったお前が迂闊なんじゃ！　そもそも坊主が帝国に滞在しとる間、同じ様に何度も留守で相手を出来んのでは意味が無い

わい！　族長は大変じゃのう！　ざまぁ！」
「まだまだ現役の癖にアタイに族長の座を押し付けたのはアンタだろうがぁぁぁっ！　ぶち殺すぞクソ爺ィッ!!」
　煽りちらかして中指立てて笑うという、孫にやるには余りにも根性悪な糞爺ムーヴを決める先代に対し、完全にキレたファーネスが雄叫びを上げて飛びかかる。
　眼前で始まったドワーフのお偉いさんの大喧嘩に、俺の顔と目の前のド突き合いを交互に見比べてクインがおずおずと口を開いた。
「こ、これは止めなくて良いのかい？　族長殿、壊れたテーブルの脚を使って先代殿の頭をブン殴っているけど……」
　この程度なら大丈夫やろ。肉体の頑強性って面ではドワーフは魔族にも劣らんし。
　というか、魔族領だともっと派手な喧嘩が日常茶飯事だろうに。主に《災禍》の連中絡みで。
「僕は主の側仕えだからね、あまり王都方面には近づく機会がないんだよ……今のキミの台詞で、外聞でしか聞かない《災禍の席》の方々の乱闘の酷さは、なんとなく理解出来たけど」
　腕に抱えたままの袋を抱き締めて苦笑いする友人に、避難させたお茶のカップを手渡す。

……そういえば、結局その袋は何が入ってるのか聞いても？　あ、いや。あの店で何か自分で買ったってんなら不躾な質問か、忘れてくれ。
「いや、何か購入した訳では無いよ、単に代用の下着を付ける前に身に着けていた上下さ――野暮ったい品だけど、見るかい？」
いや見ねーよ、チミは俺をなんだと思ってるのかね？
これぱっかりは揶揄うつもりで言ったのであろう、悪戯っぽく笑って上目遣いで見上げて来るクインに、再度デコピンしてやる俺であった。

「――いや、待たせたね。この爺、沈むならとっとと沈めば良いものを、往生際が悪くて困るよ」
数分間の殴り合いの結果、先代を床に沈めたファーネスは動けない祖父を無造作に横へと蹴り転がして俺達の対面の椅子に腰を下ろした。
「……ぐぬぬっ……初手から卓(凶器)の脚使用は反則じゃろ……！」
「知るか――おい、誰かこの負け犬を仕事場に捨ててきな」
ウーッス。なんていう気の抜けた返事と共に比較的若いドワーフ達が動き出し、二人

がかりで未練たっぷりに呻く先代の脚を掴んでずるずると引きずって退場していく。
同じく若手が砕けたテーブルの代わりに新しい物を設置し、何事も無かった様にファーネスは新しいテーブルに肘を付いた。いや、流石にノーダメとは行かなかったので彼女も少しボロっちくなってるけど。
「さて、何時ぞやの会議以来かね？　猟犬の。元気そうで何よりだよ！」
祖父とのド突き合いに関しては即行で記憶の隅に追いやったのか、スッパリと空気を切り替えて笑う。
お久しぶりー。やー、何か今更言い出すのは申し訳ない気がしなくもないけど、今回は俺はただの付き添いなんですよ、うん。
こっちの彼女が工房見学に来たのがメインの目的です、とクインを掌で示すと、ファーネスは苦笑いして肩を竦めた。
「ありゃ、そうだったのかい。そいつは残念――だが、それなら猶の事アタイが変わって良かったね、爺さんじゃ途端に興味を失って誰かに押し付けるなんて真似をやりかねないし」
あー、先代はそんな感じがするね。
良くも悪くも鍛冶に人生を全振りしたドワーフらしい人だ。興味の無い事にはマジで視線すら向けなさそう。

族長の座をさっさとファーネスに譲ったのも、種族を纏める、という点において彼女の方が遥かに適正があると判断しての事なんやろなぁ。

まぁ、それはそれとして俺の友人にその対応されちゃうと、次からは鎧ちゃん関連のお話は先代に頼むのをご遠慮する事になるんですが。

「あっはっはっは！　そりゃ良い！　それならもうちょいと我慢して様子を見ているべきだったかねぇ！」

一頻り愉快そうに笑い声を上げた後、ドワーフの族長殿は俺の隣のクインへと視線を転じた。

「さて……見た処、獣人……いや、吸血鬼（ヴァンパイア）かい？　ちと分かり辛いが、魔族領からお客人なのは確かみたいだね。名を聞いても？」

「あ、はい。魔族領西部を治める《宵闇の君》に仕える《陽影》と申します。今回は帝国の皇帝陛下より紹介を受けてこの工房へお邪魔しました」

軽く頭を下げると懐から紹介状を取り出してファーネスへと差し出すクイン。

ふむ、俺は本名の方を最初に教えられたから何気にクインの通称を知らなかったのだが……ひかげ……《陽影》か。吸血鬼（ヴァンパイア）らしからぬ明るいイメージを他者に与えるクインには中々合ってるんじゃなかろうか。読み方自体は彼女の所属を示唆するものだし。

クインは少しばかり慌てて書状を渡したせいか、他の工房の紹介状まで渡してしまっ

てファーネスが笑ってそれを返している。
「落ち着きなって、別に緊張する必要もないさね。紹介状は確かに受け取ったよ、炉と奥の区画（エリア）は流石に見せられないけど、それ以外は好きに見ていきな」
「は、はい、お手数をお掛けします」
「なに、気にしなくてもいいよ。ついでだ、他の工房にゃアタイの方から口添えしといてやろう。紹介状だけじゃ最低限の対応しかしてこない連中も少しは真面目に相手をしてくるだろうさ」
おぉ、なにやら至れり尽くせり。クインもファーネスの気遣いは有難かったのか、表情を明るくして礼を言っている。
とはいえ、無償の善意、って訳でもないんだろう。鷹揚に頷く赤毛の美人がチラチラと俺の方を見ているのに気付いて、内心で彼女が何を求めているのか察しがついてしまった。
あー……うん。まぁ、仕方ないか。先代に相談した事も、魔装の魔力導線の取り扱いについて特に優れているファーネスなら別の切り口でアドバイスを貰えるかもしれんし。
――そんじゃ、友達が工房見学してる間、ちょっと相談に乗ってもらって良いデスカー、相棒……鎧ちゃんに関する事でもあるんで、ドワーフの鍛冶師の意見が欲しい処

なんスよ。

「――！　あぁ、任せときな！　いやー悪いねぇ、なんだか催促したみたいで！」

物凄い勢いで力強く頷いて、目をキラキラ……というかギラギラさせて早速とばかりに族長殿が席を立つ。

同時に、マイラヴリーバディからちょっと抗議する様な不服そうな感覚が伝わって来た。

スマン鎧ちゃん。なんとか頑張って舐めたり齧ったりはさせないようにするから堪えてくれ。必要な事ではある訳だし。

――結局、俺とクインがお暇したときには陽は既に傾き、辺りは夕焼けの赤に染まっていた。

いや大分長居しちゃったよ、今日はほぼ一日工房で過ごした感じだな。食堂で昼飯も頂いちゃったし。

「色々と貴重な技術や武具を目にすることが出来て貴重な時間だったよ――用途や実用性諸々で、ちょっと意味の分からないものもあったけど」

確かに。いや、小型のパイルバンカーとかドリルっぽい槍とか、個人的には浪漫溢れていて大変に心惹かれるものもありましたが。

後半は俺も混ざって二人で工房見学と洒落込んだのだが、やっぱ一人よりは二人で見て回った方が面白いよね。

少し疲れた様子だったが、友人にとっては概ね満足できる時間だった様だ。

俺の方も相談した内容についてはファーネスから先代とはまた違った意見を頂いたことだし、なんとか鎧ちゃんを舐めたり齧ったりされるのも阻止できたし、悪くない結果と言えるだろう……正直結構疲れたけど。

夕日が照らす帝都に、昼の暖かさを残した秋風が吹く。

風に乱される蜂蜜色の髪を押さえて、クインは目を細めて微笑んだ。

「うん、楽しかったな――今回は半分仕事だったけど、機会があったらまた二人で遊びたいね」

おう、そうやな。今度はもうちょい気疲れする要素の少ない場所とかどうでしょう。

「あははっ、それに同意してしまうと歓迎してくれたドワーフの方達に申し訳ないから、黙秘するよ」

夕焼け沈む街並みを背景にこちらを振り向いて朗らかに笑う美人は大変に絵になる光景なのだが……それを見た俺は、なんとなく引っ掛かるものを覚えた。

いや、悪い意味とか予感がするって訳では無いのよ。

ただ、なんだろう……こう、今日再会したこの友人に関して、何かを思い出しそうというか……うーむ、出てきそうで出てこないな、もどかしいぞ。

「一度くらいは母さんも帝都に連れて来てあげたいなぁ……母は魔族領での暮らしに満足してるのはいいけど、その分、遠出には積極的じゃないんだよね」

あー、おふくろさん獣人なんだっけ。

北方にいたときに苦労した分、安定・安心な今の環境が大事ってのもあるだろうし、獣人は住処から距離をとると落ち着かない気質の人もいるらしいからな……ん？　獣人……母……親子……。

断片的なワードから、唐突に閃いたのは過去の記憶――何年か前に北方で戦った際の一瞬の映像だった。

あれは確か、お師匠のもとで短期師事した後の帰りだ。

自らの陣営が《半龍姫》の住まう地を人類種と同じく不可侵としている事が不満だったのか、なんの戦略的価値もない小さな寒村……それこそお師匠の縄張りから少し外れる、程度の場所をこれみよがしに襲撃をかけた信奉者連中（バカども）と帰りがけにカチ合う事と

なったのだ。
まぁ、奴らの御本尊である邪神の下した決定にすら不服を示すような出涸らしだ、数も質もお察しだったので普通に全員縦スパーンして地面の染みに変えてやったんだが。
人的被害こそ少なかったものの、家屋や家畜を焼かれた住民達は散り散りになって別の場所に引っ越すなりなんなりしたらしく、そのまま村自体は無くなってしまったと後から聞いた。
俺の脳裏に思い浮かんだのは、そのときの――。
「どうしたんだい、急に黙り込んで？　お腹が空いたのなら、工房で夕食も御馳走になってもよかったんじゃないのかい？」
不思議そうに小首を傾げて俺の顔を覗き込んでくるクインに、過去の記憶が重なる。
今更な話だ。これをクインに確認した処で何が変わる、という訳でも無いのだが……。
――ヘイ、そこの美人なおぜうさん。
「なんだい？　そこな素敵なおにいさん」
女の子だと知った今でも、嘗ての男友達だと思っていた頃のノリで会話に応じてくれる彼女に、ついつい吹き出しそうになる。
いやね、お前さんが女子（おなご）だと知って、改めて今、しっかりと姿を見直して思ったんだ

けど……。

「うん？　どうしたの？」

なんつーかさ、俺とお前さんって、魔族領で顔を合わせる前に会った事無い？　具体的には北方の更に北部の小さな村で。

「……え……？」

瞳を見開いて、クインは固まった。

あまりに予想外の言葉を聞いた、とばかりに硬直したその手から、抱えたままだった小さな袋がストンっと落ちる。

いやそんなに驚く様な事言ったかね？

俺の記憶が確か……というには少々怪しいが、件の寒村――そこで助けた獣人の母親らしき女性と寄り添っていた女の子が、クインとそっくりだったんだが。

元からうろ覚えの記憶な上に、つい先日まで友人の性別を誤認していたせいで、その記憶とクインの姿が連結する事は無かったんだが……いや、こうして思い返すと普通にクインだわ、なんで思いつかなかったんだ俺は。

……しかし聞いた当人の反応が悪い。まさか勘違いだった？　世の中似た顔が三人

はいるとは言うし。

俺は、あー、忘れてくれ、勘違いだ。と、口にしようとして――詰め寄って俺の手をとった友人の勢いにそれを飲み込む事となった。

「ち、ちがっ、いや、違くなくてっ！　そうっ、そうだよ……！　それは僕だ！　あの日、あのとき、僕はキミにっ……！」

眼を見開いたまま、興奮した様子でぐいぐいと距離を詰めてくるクインの迫力に思わず後退りして、出たばかりの工房の門扉へと押し付けられる。

お、おう？　勘違いじゃないのか、そっか。疑問は融けたよ、ありがとうマイフレンド。

「……覚えていて、くれたんだね」

いうて、あのときの子とお前さんが繋がったのは今さっきなんですけどね（白目

あんときゃそんなにしっかり見た訳じゃ無いけど、痩せっぽっちであんなにか弱そうだった女の子が立派になったなぁ……。

ちと偉そうな物言いになってしまうが……それでも感慨深いものがある。

「～～～～～ッ!!」

しみじみと頷く俺だったが、何か不味い対応をしてしまったのか、クインは唇を噛みしめて俯いてしまった。

え、何か嫌な事言っちゃったか？　……ちょ、ちょっと何が悪かったのかわからんぞマジで。ごめんなさい、後学の為にも何が駄目だったか教えてくれるとありがたいんですけど。

そんな言い訳染みた俺の言葉をスルーして、彼女は包む様に握っていた俺の手を一際強く――それこそ痛い程に強く握った。

五秒経ち、十秒経ち……やがて唐突に顔をあげる。

「――行こう」

いや本当に唐突ぅ!?

此方の手を握ったまま、速足で歩き出すクイン。

男装しているときでも見ない、大股の急ぎ足でズンズンと進むその歩みは迷いが無いが……行くってどちらにでしょうか？

「……大丈夫、二、三時間で済むから！　本当は二十時間くらいにしたいけどそれで終わる様に頑張るから！」

いや何のお話!?

というかもう日暮れなのに三時間て、普通に夜になってまうやん。お夕飯前に帰らないとシアに怒られるんですけど！

「大丈夫だいじょうぶ！　僕も一緒に怒られてあげるから！　イこう！　はやくシよう

!!」

おいちょっと待て、何かイントネーションに不穏なものを感じたぞ!?

思わずブレーキをかけて踏ん張ろうとするが――ちから強っ!?　獣人との半吸血鬼（ダンピール）だもんな、そりゃそうだわっておいちょっと落ち着け止まれマジで！

抵抗する俺の方へと振り向いたクインは何と言うか、一目見て分かる位には錯乱――というか暴走していた。

妙に息も荒く、大きなお目々とかぐるぐると渦を巻いている様にすら見える。相変わらず華奢な身体からは想像付きづらい腕力で此方をぐいぐいと引っ張りながらも、よくみると少しへっぴり腰という意味の分からない状態だった。

絶対普通の状態じゃねぇ、よく分からんが今のクインに素直に従うのは危険だと俺の勘が告げている……！

おい落ち着けぇ！　ほんとお願いしますクインさん！　まず手を離そう！　深呼吸しよう、なっ!?

「僕は落ちついてる、あぁ冷静だとも冷静だから我慢できてる内に移動しようキミが外がいいならそこの路地裏でいいから入ろう」

冷静な奴が魔力強化までして相手を引っ張る訳ねーだろ!?　ちょっ、素だと魔力込みでも普通に力負けするぅ！

夕暮れどきで人の気配が無くて助かった……！　こんなアホな綱引きごっこを大勢に見られたら、俺も正気に戻ったクインもメンタルダメージが酷い事になるわ……！

必死こいて踏ん張りながらも、ズリズリと引きずられて段々と路地裏に近付いていたのだが……クイン有利で進む綱引き状態は唐突に終わりを告げた。

「あぁもうキミのせいだぞ二年だ二年耐えてそのあとも何ヵ月も我慢したんだからもういいよねもうゴールしてもいいよねとりあえず終わってから考えれば――あっ」

やっぱり冷静とは程遠い状態だったんだろう。

俺を引っ張っていた彼女は、足元の小石に普通に躓躓いて前のめりに身体を傾かせた。

当然、引っ張られていた俺も巻き添えになる訳で。

地面に倒れ込もうとするクインの上に倒れ込みそうになり――その瞬間、脳内に電流の如く思考が閃く。

これはっ……倒れ込んだときに彼女の育ったってレベルじゃねぇ谷間に顔面ダイヴする流れっ……！

判断は一瞬だった。

ラッキースケベや破廉恥体質が許されるのは○トさんだけなんだよぉ！　一般人がやったら普通に社会的生命がダストシュートされるんじゃボケェ!?

クインの手を引っ張り、素の状態からかろうじて《流天》の発動に成功。彼女の崩れた体勢からついた勢いだけは掌握する事に成功する。

倒れ掛かった身体が減速されたクインを追い抜く様に身を捻って倒れ込み、即座に身を翻して友人の細身（一部豊満）な身体を受け止める。

――セーフッ……！　ふっ、唐突に訪れた死地を見事に潜り抜けてやったぜ……！

額に浮いた汗を拭い、我ながらファインプレーだったと一息つく。

まぁ友人とはいえ、女の子をお姫様だっこも大概だとは思うが、倒れかけた上に覆いかぶさって乳に顔を埋めるなんていう人生終了しそうなやらかしよりは遥かにマシだ。転ぶのを助けたっていうのもあるしね。

あー危なかった……頭は冷えたかよマイフレンド。やっぱ冷静じゃなかったって自覚出来た？

腕の中のクインを少しだけ叱る様に目を細めて覗き込んでやると――。

「――――ひ、うっ……ぁっ……！」

至近距離で目を合わせた彼女は、何故かビクンッと大きく身を震わせて数秒ほど身を硬直させた。

虚脱するように呆、となった瞳が直ぐに像を結び、その顔がみるみるうちに真っ赤に色付く。

どうやら変な暴走も収まって我に返った様だ、一安心である。
俺が何か言葉を次ぐ前に、その身体がバネ仕掛けの如く跳ね起きて立ち上がった。
「ご、ごごごめん、ちょっと取り乱したというか頭がおかしくなっていたみたいだ！」
頭て。自分の事ながら凄い言い様やな。まぁ、暴走を自覚して羞恥を感じている当人としてはそう言いたくもなるか。
立ち上がった彼女は、そのままギクシャクとした動きで後退るようにして俺から身を離す。
「ほ、ほんとうにごめん！　きょ、今日はここで解散にしよう！　最後にかけた迷惑の埋め合わせは必ずするから！」
え、あ、そう？　そろそろ陽も落ちるけど……送っていかなくて大丈夫？
「だ、大丈夫だよ！　ほら！　僕半吸血鬼（ダンピール）だし！　夜は寧ろ得意だし強いし！」
そういえばそうだな。じゃ、今日は此処で。良かったら帝国滞在中にまた一緒に遊ぼうず。
「う、うん、またね……そ、それじゃ、僕はこれで……！」
正気に戻ったが、何故かへっぴり腰はさっきより酷くなったクインが、ぎこちない――だが物凄い速さで背を向けて帝都中央に向けて歩き出す。

――ぶっちゃけ、中央広場の噴水くらいまでは同じ道な訳だし、一緒に帰ればいいとは思うんだが。

なんとなく、今それを口にするのはマズいんだろーなーと察した俺は、なんかへこへことちょっと情けない歩き方をしている友人の背を見送り、夕闇迫る帝都の空の下、手を振ったのであった。

……あ、クインの奴落としたまんまの袋忘れとる……どうしようコレ（白目

斯くして少女達は一堂に会する

帝都王城近くの屋敷――その門前にて。

本日の仕事であった祭りの運営に携わった者達への激励会――その顔だしを終え、帰りの馬車より降りたレティシアが肩を揉み解してぐるぐると廻す。

「あー、終わった終わった！　これでオレ達の祭り前の業務は終了だな――あとは開催日まで羽をのばせるってもんだ」

「なんだかんだ言って慰撫会っていうより普通のパーティーだったよね、予定日数も増えたし……やっぱりにぃちゃんが居ないと家に招こうとする人とかって多いなぁ……」

前もってその手のお誘いはお断り、って宣言してるのにねぇ、とボヤく妹（アリア）に向けて肩を竦め、仕事から解放された若干高いテンションのままにレティシアは上機嫌に笑う。

「ま、仕方ない。有名税の一部ってやつだな。アイツがいればその手の面倒は激減してたけど……今回は参加させないで良かっただろ？」

「そうだね。にぃちゃんの事を聞いてくる人も予想以上に多かったし」

戦場で共に戦った騎士などが「猟犬殿は御一緒では無いのですか？」と聞いてくるの

は、まぁ当然だ。
一部の国の上層部を除き、かの青年が女神の手による復活を遂げて帰還した事は機密として伏せられている。
彼が帰って来た事自体は周知される様になっても、その経緯が隠されているせいで、情報が錯綜している状態だ。
”人類種の最高戦力のみを集めて挑んだ決戦時、邪神の最後の悪足掻きに巻き込まれ、永らく行方知れずとなっていた”
”実はこの二年間、生死の境を彷徨って聖殿で懸命な治療が続けられていたが、やっと表に出てこられる程度に回復した”
そんな感じで、噂に尾ひれ背びれが付いて複数の顛末が語られているが、一部事実に近い要素も含まれているだけにただの噂だと切って捨てる事もしづらい。
事実を知っている二人としても苦笑いが漏れる話であるが、彼の戦友達が彼を案じて安否を問いかけて来る事自体は喜ばしい事なので文句などあろう筈も無かった。
……パーティーに参加してきた貴族の御令嬢やら御婦人が興味津々で「御二方の騎士様はどちらに？」と聞いてくるのには辟易としたが。
殆どは興味本位、といった感じだったが、中には頬を染めてこれを騎士様に渡して欲しい、などといってリボンの巻かれたプレゼントを彼の主たる（と周知されている）聖

女に渡してくると言う、肝の太い剛の者までいたのだ。
全ての品を箱越しに魔力で精査した結果、明らかに食物以外の物が入ってる菓子が二つ程見つかったので、それらは開封すらせずに焼却処分したが。
問題の無さそうな物は、姉妹としては少々不本意ではあるが後で青年に渡す事になっている。不本意ではあるが。大事な事なので二度言った。
「何はともあれ、片付いたことだろ？　パーティーも《刃衆（エッジス）》の面子が護衛に出て来てくれた御蔭で、あんまりしつこい連中とかは追っ払ってくれたしな」
「うん。ネイトさんとかに久々に会えたのは良かったよね――そういえばボク、娘さんにサイン書いて欲しいって頼まれたけど、レティシアは？」
「オレも頼まれた。まぁ、ネイトには戦場でも世話になってるしな、あとで相棒の分も頼んでみようか？　って聞いたら喜んでたぞ」
「あ、それなら三人で書いたやつを贈ろうよ！　……えーと娘さんの名前は確か……」
二人で和気藹々と話しながらすっかり見慣れた逗留先の屋敷の門を潜ると、何時もの様に住人の帰宅を察した壮年の執事が出迎えてくれる。
「おかえりなさいませ。聖女様方におかれましては《大豊穣祭》に向けた数々の御勤めを全う頂いた事、帝国臣民の一人として心よりの感謝を申し上げます」
「あぁ、ありがとう。そしてただいま――アイツは屋敷にいるかい？　執事さん」

微笑んで一礼するナイスミドルな男性に、上機嫌を維持したままのレティシアも笑顔で返し、ついでに相棒である青年が在宅かどうかも問うた。

開催まで残すところあと三日となった大祭。その三日間はレティシアもアリアも完全にフリーだ。

なんだかんだといって、聖殿にいるときより一緒の時間が取れていない事は確かなので、この三日間はなんでもいいからずっと一緒に行動しよう、と二人がウキウキと楽しい皮算用を脳内で弾いていると、残念ながら肩透かしとなる答えが返って来た。

「御二方が本日の御予定である慰撫会に出席するために出発して直ぐ、お出掛けになられています」

「ありゃ、マジか。なんだよあんにゃろう、今日は早めに帰って来るって言っといたのに待っててくれなかったのかよ」

「まぁまぁ、にいちゃんも予定があったんだよ――それで、どうしようかレティシア。追いかける？　それとも帰ってくるのを待つ？」

ちょっと面白く無さそうに唇を尖らせる姉に向け、アリアが宥める様に応じ。

待つか、自分達も出掛けて合流するか、少々悩んだ後に執事の男性へと再び問いかけた。

「うーん……どうするべきか……何処に出掛けたか、何時頃帰って来るとかは聞いてる

か？」
「お時間の方は、何時も通り夕飯前には帰って来る、とだけ。場所の方は中央広場で待ち合わせの後、北区方面へ向かう、と仰っておりました」
ピクリ、と。
なんだか嫌な単語を聞いた気がして、少しばかり身じろぎすると、レティシアの表情が顰められた。
「……待ちあわせだって？」
「はい。先日、御二方が御勤めに出た後、当屋敷にいらっしゃったお客様と御約束なさっていたようです」
「……ちなみに誰か聞いても？」
「勿論でございます――帝国騎士ミヤコ＝タナヅカ様が、お仕事に関する報酬の前払いの為にお誘いに来た、と」
その言葉に、姉である金の聖女は今度こそピシリと固まり。
妹の銀の聖女は「あ、例の武闘大会絡みの……」と思い出したように呟いた。
「ミ……」
《大豊穣祭》の準備期間の間、件の報酬――青年の公式用の服装も兼ねた装備の仕立てに関して何の音沙汰も無かったが故に。

あれ程警戒を覚えていたこの件に関して、すっかり忘却の彼方であったことを今更ながらにレティシアは自覚し。

同時に自身の友人にして恋敵がこのタイミングを狙っていたのだという事も、察して――。

「ミヤコォォォォォォォッ!!」

まんまと出し抜かれた事を理解した聖女の怒りの咆哮が、帝都の一角に響き渡った。

――ところ変わって、帝都王城。

太陽が中天に昇るであろう時刻にあって、帝国皇帝スヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルは領地より参じたその男の謁見に応じ、玉座の上でふんぞり返っていた。

「お久しぶりでございます、陛下。益々以て壮健な御様子で臣として誠に喜ばしく」

「あぁ」

人払いを済ませた、最低限の人数且つ口の硬い者達だけが控えた謁見の間にて。
形式的な謁見の挨拶を終えた後、改めて自身の言葉で皇帝の健在を歓ぶ彼の言に、面白くもなさそうに端的に応じる。
この痩せぎすの初老の男が、よく回る舌で弄する言葉の裏で腹に一物も二物も抱えていることなど今更語るまでも無い。
何せ当人が此方にそういった腹の下の黒さを把握されているのを全て理解した上で、その言動を変える気が全く無いのだ。上っ面だけの美辞麗句の類は立場上腐る程聞いて来たが、ここまで外面の礼節と内面の真摯さが反比例してる男はスヴェリアをして他に記憶が無かった。
シュランタン＝サーリング伯爵。
現在、帝国では影響力を著しく落としている先帝時代からの貴族派を纏める立場にある男である。
嘗て辺境伯の所領であった帝国南部の肥沃な地を治めている身で、彼自身も遠縁ではあるが辺境伯の血縁であった。
伯爵家としての歴史も古く、血筋としては間違いなく帝国の中でも指折りの名家。領地運営の方も調べた限りでは殊更に穿り返せるような疵も無い。
寧ろ落ち目となって領民に負担を掛けがちになっている旧貴族派の中では、数少ない

名君と言っても良い領地運営っぷりである。
スヴェリアの即位前の地固めと後ろ盾の確保、即位後の速やかな国内掌握と他国との協力体制の構築に奔走する際にも手を変え品を変え、ときとして政敵としての立場すら変えて、綱渡り染みた立ち回りで自領を富ませて来た、蛇の如き印象を抱かせる人物であった。
皇帝を支持する王党派、ともいえる者達に協力した事も一度や二度では無いにも関わらず、変わらず貴族派のトップについている手腕と面の皮の厚さは凄まじいものがある。
腹に一物あるなぞ貴族ならば当然ではあるが……その程度では済まない位には立場も言動もキナ臭い男。
慇懃尾籠と無礼を適時切り替えて来る、クソ程胡散臭い三枚舌。
忌憚のない正直な評価だ。なまじ有能である分、スヴェリアとしても激烈に面倒臭い相手である。
当然、そんな人物であるが故に、質実剛健を良しとするレーヴェ将軍とは水と油、炎と氷の間柄だ。
謁見の間にて同席しているケントゥリオ侯爵家の当主は、控え目に言って物凄くブッ殺したそうにシュランを睨みつけている。

元より反りの合わない相手ではあるが……今回此処までレーヴェが敵意を露わにするのは、少し前に彼の息子が起こした国賓への問題行動に端を発していた。

――息子の短慮によって引き起こされた事。レーヴェとしてもそう判断して、長男である少年を嫡男の座から下ろしたのだが、そこに別の何者かの意思が介在していたのやもしれぬ、とくれば心中穏やかな筈も無し。

状況証拠にすらやや乏しい段階ではあるが、主である皇帝とその相談役である彼の弟が揃って『第一容疑者』と判断している男へ向けるレーヴェの表情は、大蛇の頭を噛み砕かんとする獅子の如きであった。

「……ふぅむ」

戦士としても帝国で三指に入る将軍の怒気混じりの威圧に、シュランタンも気付かぬ筈も無く。

彼は再度皇帝に一礼し、その横手に控えている男へと身体ごと向き直った。

「同じくお久しぶりですねぇ、将軍閣下。相も変わらず私と対面なさる際は眉間の皺が深い御様子ですが、帝国の武力の象徴たる御方が心身気炎に溢れているというのは非常に頼もしいことです」

「……卿も変わらぬようだな、相も変わらず弁舌が立つようだ」

今にも噛み砕くのを堪えんとする獅子の口内に頭を突っ込んで、平然と舌を廻す様な

真似をする蛇に怯えは微塵も感じ取れない。少なくとも表面上は。
怒れる人外級の戦士に皮肉交じりの社交辞令を飛ばせる肝の太さは兎も角として、伯爵自体は戦武の心得なぞ最低限しか無い、と知っている皇帝はとっとと話に入ることにした。
このまま好きに会話させて、万が一我慢の限界を迎えたレーヴェがシュランタンをぶん殴ったら、謁見の間に赤黒い染みが派手にぶちまけられる事となる。
流石に我慢してくれるとは思うが、息子であるノエルの一件以来、彼を意識誘導した黒幕に対してジリジリと怒りを溜め込んでいる将軍の忍耐をこれ以上削る必要も無い。
「伯爵、祭りの間は珍しく終盤まで滞在する予定らしいな。お前の事だからとっとと領地に戻って、祭り終了後の帝都の観光客がそのまま自領に流れて来る様に催しでもやるかと思ったが」
「流石の御慧眼……ですが、今回は大祭も初回。観光客の流入自体は歓迎ですが、其処に混じった良からぬ者が領地に紛れ込んでくる可能性もありますからねぇ。今回は《大豊穣祭》にて評判の良い店や催しの物の下調べも兼ねて、陛下のお膝元で女神の齎す恵みに感謝を捧げようと思っております、ハイ」
「ハッ、要はこっちの祭りを試験台にするって事だろうが。余を前にしてよくもまぁシレっと言ってのける」

「御戯れを仰る。全ては陛下の御威光あってこそ――御身によって齎される平和・富と恵みに少しばかり肖ろうという臣のささやかな浅知恵に過ぎません」

直球の皮肉にも欠片も動揺する事無く、胸に掌を当てて慇懃さを強調した動作で静かに頭を下げる伯爵に対し、スヴェリアが鼻を鳴らして玉座に肘をついた。

「ふん……ま、それはいい。話は変わるが――お前が口利きをした事もある男爵家……そこの入り婿の当主がレーヴェの倅と接触していた様だが、心当たりは？」

「ふむ？」

皇帝の言葉と共に、レーヴェ将軍から発せられる圧が音を立てそうな程に増した事を感じ取ったシュランタンは、その蛇を思わせる容貌の眼を細め、思案に耽る。

とはいえ、仕える王に問いかけられて長々と考え込む等という、不敬な真似をこの男が迂闊に行う訳も無く、応えはあっさりと返って来た。

「存じ上げませんなぁ――閣下の御子息が少々問題を起こした、というのは聞き及んではいますが……御二人の様子から察するに、私と関りのあるその者が原因に関与している、という事でしょうか？」

肩でも竦めそうな調子の声に、将軍の視線が益々剣呑となり「ホラ吹いてんじゃねぇブチ殺すぞ蛇野郎」と言わんばかりに目付きだけでなく低い唸り声まで喉から漏れ出て来る。

物理的な圧すら発生し始めた《赤獅子》の怒りをたたきつけられ、伯爵は迷惑そうに微かに眉を顰めた。

「成程、御子息をたぶらかしたとの疑いがある者を前にしては、閣下の眉間の皺も常にもまして深くなろうというもの――ですが、騎士団に拘束もさせず、こうして謁見後に陛下御自らお聞きになるという事は、物的証拠の類は一切無い……どころか状況証拠としても『私が一番怪しい』程度のものなのでは？」

かの《赤獅子》の怒りを、その程度の薄い嫌疑で一身に受けるのはたまったものではませんなぁ、と笑う男の顔は、表面上こそにこやかではあったが良い具合に皮肉という毒に濡れている。

先にも述べた通り水と油の相性である獅子と蛇は、以前顔を合わせたときに比べ六割増しに剣呑な空気で視線をぶつけあった。

穏やかならぬ両者を、暫しの間ジッと注視すると――一度目を閉じて小さく嘆息した皇帝は、玉座に体重を預けてつまらなそうに顎をしゃくった。

「そうか。まぁ、知らんというのであればそうなんだろう……今回もあくまで確認を取っただけだ、特に何かを言い含めるつもりも無い――もう行っていいぞ、お前と長話するのは疲れる」

雑に手を振って退出を促すスヴェリアに、将軍が驚きと少しばかりの不服を。伯爵が

にんまりとした、爬虫類が浮かべそうな笑みの如き表情と探る様な視線を、それぞれに向けて。
「……それでは、これにて失礼を。此度の大祭の成功と、それによって陛下の御威光が益々もって遍く帝国に行き渡る事、臣下として祈っております」
やはり腹が立つ程に慇懃に頭を下げ、慌てる事も無くゆっくりと退出していくその背を、レーヴェが厳しい視線で追い続ける。
やがてその姿が謁見の間から完全に見えなくなると、彼は自身の主君へと訝し気に向きなった。
「陛下、刺すのがあの程度の小さな釘でよろしかったのですか？　あの蛇めがアレで自重を覚える、とも思えませぬが」
「まぁ、そうだろうな。余もそこは全く以て同意だが……奴の反応、どう思った？」
「……吾輩はあの三枚舌を個人的に好いておりませんので、どう転ぼうが肯定的な見方は出来ません……が、そうですな。相も変わらず頭頂から爪先まで全ての立ち振る舞いが胡散臭い男であるかと」
全身これ全てで胡散臭いせいで、逆に観察し辛い。
そう告げる将軍に、皇帝も半笑いで同意を示した。
「其れに関しても同意だ……現状、物的証拠には欠けるがお前の息子にちょっかいを出

す様に指示したのは奴である可能性は、変わらず高い」

――だが、と。そこで言葉を切って、なんともややこしそうな表情で皇帝は後頭部をガリガリと掻いた。

「疑わしい事には違いない。当人の知らぬ存ぜぬも安い誤魔化しだと断じた方が自然だ――なんだが……余の勘は奴は『外れ』だと言っている」

お前はどうだ、と首を振り向かせてスヴェリアが問いかけると。

彼が腰掛ける玉座の裏――其処に設置されている真球の宝玉から、声が響いた。

『そうですね……聞いていた限りでは、相も変わらず胡散臭い御仁なのは確かでしたが……少なくとも今回の件に関しては嘘を言っていない様に思えます。僕に陛下の様な勘働きは無いので、声色や抑揚からの判断になりますが』

遠話の魔道具より穏やかに流れるその声は、レーヴェ将軍の実弟にして皇帝の相談役でもあるティグル＝ケントゥリオのものであった。

事前の打ち合わせの通り、魔道具を用いて一連の会話を聞いていたティグルの言葉に、兄であるレーヴェも流石に頭が冷えたのか、唸り声を洩らして考えを巡らせ、悩ましい気に腕を組んだ。

「ううむ……陛下とお前が揃ってそう言うのか。吾輩としてはいつも通りのキナ臭い蛇の様な面構えにしか思えなかったが……」

「まぁ、所詮は勘だ。過去に助けられたからといって、これからも百発百中な筈もないが――ティグルの読み取りでもこういった答えが出るとなると、まったく別の奴が関わってる可能性も否定できなくなってきたな」

面倒な事になってきた、とボヤく皇帝の表情は控え目にいって辟易としている。

シュランタンが関わっているというのも厄介な話だが、関わっていないのならばいないで、帝国の侯爵家相手に妙な干渉を行おうとするアホは何処のどいつだという話になる。

一気に振り出しに戻った感のある一連の件に関し、どうしたものかと皇帝、将軍、相談役の其々が頭を捻った。

『コホッ……取り敢えず、僕の方で兄上の部下を借りてもう少し伯爵と男爵の繋がりを洗ってみましょう。隠蔽がなされていたとしても繋がりを断った痕跡くらいは拾えるかもしれませんし』

「それは構わんが……お前は少し前に寝込んだばかりだろう。無茶をして体調を悪化させるなど、陛下も吾輩も望んではいない。先ずは数日休め」

少し咳き込みながら次の指針を立てるティグルに対し、レーヴェが眉根を寄せて弟の身を案じる。

幸い、弟の邸宅で謹慎中の息子は当初の首を括りそうな落ち込みっぷりから一転、謹

慎明けには迷惑と心配を掛けた者達に報いようとあれこれと弟の蔵書を読み漁っているらしい。

実直というか、若い頃の己と同じく猪突が過ぎるきらいがあった息子であるが、これを機に落ち着いた行動を心掛けるようになるというのであれば、多少なりとも今回の一件にもプラスの価値があったというものだ。

息子ノエルに干渉してきた男爵――その背後に居る者を調べる事は勿論重要だが、弟が療養の傍ら、息子の勉強を見てくれるだけでもレーヴェとしては充分に有難い。

「件の男爵――三枚舌が知らんと抜かすのなら、直接聞き取りを行っても問題無かろう。余の方でもトニーの奴あたりを動かしたい処だが……生憎、前々から別件を探らせていてな。もう暫くは掛かり切りだ」

『この盤面で騎士レイザーを動かせないのは痛いですね……例の孤児の保護政策絡みの件ですか？』

「あぁ、やはり人口から予想される人数と比べ、保護出来た孤児の数が少なすぎる。取り敢えずは帝都内での戦災孤児の人数をもう少し正確に算出せねばならん」

「人口集計となると、各区画での調査の為に文官武官併せた人海戦術となるでしょうな。祭りの開催期間中に人員を捻りだすのは聊か厳しいかと」

三名の内、スヴェリアとレーヴェは時間に余裕の無い身だ。今回の謁見ついでに顔を

突き合わせて行うべき情報の交換を、矢継ぎ早に済ませてゆく。
それらをあらかた終えた後、将軍はふと思い出した様子で主君に問いかけた。
「そういえば、騎士レイザーのくだりで思い出したのですが……今日は城内で《刃衆(エッジス)》の者達を見かけませんな？　常に数名は陛下の急な呼び出しに備えて待機していると記憶していたのですが」
実質は皇帝の近衛に近い部隊とはいえ、大枠では自身の管理する騎士団の内に入るので気になったのだろう。
レーヴェの疑問に、皇帝はニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。
「あぁ、今日から開催日にかけて、アイツらの殆どは街の巡回を中心に予定を組ませてる――開催日直前となって、各国貴族から商人、流れ者まで我が国の諸々を品定めに来ている様々なお客人が来ているからな、部隊ごと衆目がある場所で行動させれば示威には丁度よかろう」
街中で怪しい動きをしている旅行者・観光客、祭りの空気にあてられて問題行動を起こしている者やそれに便乗する者、帝国首都で自国の権威が通じると思って横暴な真似をしているおのぼり貴族。
そういった連中をまとめて黙らせる為に《刃衆(エッジス)》を完全装備で練り歩かせているらしい。

かの部隊は人数的には小隊規模――文字通りの精鋭だけの集まりなので、少ない人員の武威で以て治安維持を行うというのなら、確かに最適ではある。
数では無く戦力、という視点でみれば、オーバーキルというか過剰にも程がある方法なのだが、その分有効な手法であるのも確かだった。

――まぁ、尤も。その部隊の長である少女は、本日に限っては別の任務を捻じ込んで来た為に現在は北区のとある工房に向かっている最中だろうが。

「大祭の準備期間に入ってからというもの、毎日毎日しっかり激務を熟しているウチの隊長殿に便宜を図って下さいますよね陛下？」
そんな言葉と共に、作成した申請書を皇帝である己のもとへと直に持って来た《刃衆（エッジス）》顧問の、目だけは笑ってない笑顔を思い出して。
「また髭が左右非対称になってはたまらんからなぁ……余ってば一応この国で一番偉い人間なんだが」
そんな風にボヤいて、スヴェリアは遠くを見やる目付きで苦笑いを浮かべたのであった。

色とりどりの様々な飾り付けによって一層華やかになった帝都の街中を、完全武装の黒を基調とした外套（コート）の一団が歩みを進める。

数名程度に分けて其々に割り当てられた区画を巡回しているのは、帝国最精鋭の呼び声高い騎士達――《刃衆（エッジス）》の一団だ。

その内、中央から西区に向けて移動している者達――銀髪サイドテールの少女に率いられている者達の最後尾から、不満そうな声が上がった。

「ちょーダルいんですけどー。陛下もなんであたし達に巡回なんてさせるのか意味わかんなーい」

両の手を後頭部で組んで、言葉の通りにに退屈そうな表情でブーたれるのは、先頭を行く銀髪の少女より少しばかり年上の娘だ。

褐色の肌に微かに色付いた金髪という、遥か大昔に大陸外からやってきた流民の特徴を色濃く継ぐ彼女の両腕には、細身の身体には少々不似合いな程に頑強そうな一対の籠手が装備されている。

「これも仕事の内よ。文句ばっかり言ってないでちゃんと周囲を見なさいシャマ」

「でもさぁふくちょー、《刃衆(あたし達)》がこーやって歩き回ってんのに目の届く範囲で馬鹿やる奴なんていなくないですかー？」

振り向きもせずに部下の文句を切って捨てる銀髪の少女――アンナだが、シャマと呼ばれた娘は益々やる気なさそうに右に左に身を揺らして石畳の街路に転がる小石を蹴り飛ばした。

シャマの前を歩いている特徴的な金髪の巻き毛をした少女が振り向いて、呆れた様子で声をあげる。

「今朝方、巡回の令が出た際にサリッサ顧問から説明を受けましたでしょうに。あの場には部隊の全員――シャマダハルさんもいらっしゃった筈ですが」

「やだなぁローレッタちゃん。あんな早い時間に呼び出されてさぁ、その上ネイトさんのちょーながい説明とか眠くなるに決まってるっしょー」

「珍しくしっかり話を聞いてると思ったら居眠りしてましたの……いえ、ちょっとお待ちになって。私(わたくし)の記憶違いでなければ、貴女眼を開いて話に頷いていた様に見えたのですが……」

「眼を開けたまま寝るとかよゆーだしー。頷いてたのは船漕いでただけじゃね？」

「あれで寝てましたの⁉　怖っ⁉」

年若い少女達がきゃいきゃいと年相応に会話をする声を背に、アンナの直ぐ後方に追

従していたこの集団における唯一の黒一点――ダークブラウンの髪を短く刈り上げた男がしみじみと呟いた。
「今日は延々街中を歩かにゃならんってのに、お前らは元気だねぇ……俺ぁ終わった頃には足が棒になってそうで今から不安だってのに」
軽装に類される装備の少女達とは違い、外套（コート）の下にハードレザーの鎧と帷子を着込んだ男の背では、幅広の両手剣が鞘に納められている。
懐から紙巻き煙草を取り出した男は、掌に小さな魔法の火を生み出すと咥えた煙草に火をつけ、深々と煙を吸い込んだ。
漂って来る紫煙に、シャマが露骨に嫌そうに手を振って煙を払う仕草を見せる。
「ちょっとそこのおじさーん？　周りが淑女（レディ）しかいない仕事場でヤニ吸うとか有り得ないんですけどー？」
「嫌なら後ろをちんたら歩いてないで副長の隣にでも行きなさい。そもそも煙の美味さも知らん小娘が淑女（レディ）とか説得力が無いね」
「うわー、堂々と最悪な事いってるんですけどーこの人」
暫くはそのまま煙の美味さとやらを堪能していた男だったが、ローレッタと呼ばれた金髪の少女からも控え目に「髪に臭いが付くので……」と嫌がられ、先頭を行く上司からは「そもそも歩き煙草は感心出来ないよ、ローガス」と注意まで受けてしまい、肩を

落としてすごすごと最後尾に移動した。それでも咥えた煙草の火を消す事は無かったが。

なんとも気の抜けたやり取りをしている様に見えるが、実は四人が四人ともそれなりに周囲に気を払って巡回の任を果たしている。

先のシャマの言葉通り、道の端に屯していたガラの悪そうな青年達が四人の姿を視界に入れた途端、微妙に背筋を伸ばしてさり気なく壁際に寄った。

先程からバリエーションはあれど何度も見た光景だ。

それも当然である。他の騎士達でも同様の結果になるだろうに、自分達がフル装備且つ集団で歩いているのだ。

一応は周囲を見て知覚を広げているものの、シャマからすればこの結果は当然過ぎて退屈に過ぎた。

「あーもー。つまんなーい。今日は半上がりの予定だったからカレぴとデートでもしようと思ってたのにご破算だしー」

「あらまぁ……それは災難でしたわね。御相手の方にはきちんと連絡はなさいましたの？」

先輩の発言を自身の身に当て嵌めて想像し、気の毒そうな表情をするローレッタだったが、最後尾を歩く男――ローガスが鼻を鳴らして笑う。

「ブフッ……！　お前この間もそんな事言っといて、実際の休みの日には芋っぽい麻の上下と履物（サンダル）で屋台の串焼き買い込んでたじゃ……」

次の瞬間、ローガスの眼前を銀光が奔り、咥えていた煙草が半ばから斬り落とされる。

「うおぉっ!?　ちょっ、あぶねぇ！」

「喉から直に煙吸いてぇなら続きを言ってみろ、ヤニカス」

反射的に慌てて身を引くが、ドスの利いた低い声と共に喉仏に押しあてられた冷たい感触に、ローガスはピタリと口を閉ざした。

降参といわんばかりに両手を上げる同僚の姿に、シャマがお返しの様に鼻を鳴らして籠手から飛び出した剣刃（ブレード）を引く。

「まったくもー、女の子のプライベート情報をべらべら喋るとか、デリカシーが足りなくない？　ちょーありえなーい」

「街中でしょーもない理由で得物を抜くな」

「ぐげっ!?」

別人の如き低音ボイスから直ぐに元のキャピッ☆とした声のトーンに戻ったシャマの頭頂に、間髪入れず上司の拳骨が突き刺さった。

頭を押さえて蹲るシャマを半眼で見下ろしたアンナは、変わらぬ目付きのままじろりとローガスを睨め付ける。

「シャマの味方をする訳じゃないけど、アンタの発言も迂闊よ。この娘がそっち方面で見栄っぱりな事なんて今更言うまでも無いでしょうに」
「あー……すいません、確かにちっと配慮に欠けてました」
「ちょっとお！　二人してひどくない!?　っていうか見栄っ張りとかいうなし！それを知らない娘だっているのに！」
　頭のたんこぶを押さえ、褐色の少女が抗議の声で二人の言葉を遮るが、時既に遅し。
　年上の学者先生と順調に良い仲となっている金髪巻き毛の少女は、非常に生ぬるい温度の目付きで先輩にあたる同僚を見つめ、その肩にそっと掌を置く。
「その、頑張ってくださいシャマダハルさん。貴女ならばきっと良い殿方と巡り合えますわ」
「ローレッタちゃんまで!?　ちょっとお、これあたしの立ち位置じゃないっしょー！弄られて喚くのはトニーの奴の担当だしー！」
　先輩としての威厳が明らかに目減りしたのを感じ取り、シャマが悲鳴の混じった嘆きの声を上げた。

　巡回といっても、今回彼らが行うのは祭りで増えた荒事の芽――それらの原因となる者達への示威行為の側面が強い。

昼時に差し掛かると休憩がてら、手近なカフェに寄り――その際にも敢えて人目を惹く様に一行は外のテラス席へと腰を落ち着けた。
「さて、西区の方は往復したし、次は北側ですかね？」
早速パンに腸詰を挟んで赤茄子のソースをかけた品を頬張り、後の予定を確認するローガスにアンナも頷く。
「一応ね。北区はトラブルを起こしそうな層の観光客は殆どいないと思うけど、最低限は見て回るわ」
「あ、副長。それならファーネスさんの工房によってもよろしいでしょうか？　私、本来なら今日中に整備して頂いた武具を受け取りに行く予定でしたの」
「今日の話自体、結構急だったもんねぇ……アンタは私と同じく闘技会に出る予定だし、整備後の武具の使い心地をチェックする時間も要るか……」
本当に受け取るだけになっちゃうけど、良いわよ。と上司の御許しが出た事で、ドワーフの名工に拵えてもらった己の新たな武装が帰って来る事に、ローレッタが御機嫌な調子で礼を述べた。
同僚達の会話を紅茶片手にマフィンを齧りながら聞いていたシャマが、思い出したように顔を上げる。
「そういえばふくちょー、闘技大会の解説の人ってー、わんこくんじゃなくてグラッブス

司祭になったってマジですかー？」
「ああ、そういえばシャマ、アンタは解説役に立候補したっていってたっけ。交代の話はマジみたいよ、アイツはピーク時の警備の方に廻ったって聞いてるわ」
「あちゃー……マジかぁ、ざんねーん。久々に一緒に仕事するチャンスだったのになー」
　大盛りのパスタをもりもりと片付けながら答える上司の言葉に、言う程残念そうでは無い表情でマフィンを紅茶で喉奥に流し込む褐色の少女。
　そんな彼女に対し、ローガスが呆れを隠さない視線を向けた。
「お前……いくら付き合う相手が欲しいからって猟犬の奴は駄目だろ……隊長と鞘当て（物理）する自信とかあるのか？　死ぬぞ、マジで」
「恋愛に武力を絡ませるとかその時点でおかしいっしょー。ほら、わんこくん今は傭兵擬きだけど将来性とかは馬鹿みたいに高いしー、貯金も前に聞いた感じだと相当あるみたいだしー、ここは可愛いあたしちゃんの魅力でクラー、みたいな？」
　冗談ではあるのだろう。ケラケラと笑ってお代わりの紅茶を啜る褐色肌の少女の表情には、”わんこくん”に対する友愛以上の感情は見受けられない。
　ただ、おふざけにしても対象が不味い。件の青年に向けて、彼・彼女達の部隊の長が只ならぬ重さの感情を向けているというのは新入りのローレッタ以外には周知の事実だ。

懲りずに「ここだけの話、何気に優良物件ではあるよねーわんこくん」と呟いて二つ目のマフィンに手を伸ばすシャマに、ローレッタが新たに知り得た愉快な情報も合わさって興味深そうな顔を、ローガスは怖いもの知らずを見るような戦々恐々とした顔を、其々に向けた。

ちなみにアンナは我関せずとばかりに黙々とパスタを咀嚼している。

「まぁ、そんな訳でさぁ？　今回の闘技会での共同のお仕事で、わんこくんと良い感じになる予定があったって事よー」

「そりゃまた糞度胸が過ぎるな――シャマの奴はこう言ってますが、どうですか、隊長？」

彼女の背後に向け、ローガスが視線を向けて問いかけた瞬間。

ドンッ！　という空気の壁に強固な物を叩きつけた様な鈍い音が響き、褐色肌の少女の姿はカフェテラスから一瞬で掻き消えた。

「……そこまでビビるならそんな危険なネタで一席打とうとするなよ」

「見事な身のこなしと速さですわね！　……技を行使した理由が聊か以上にアレですけど」

「……冗談にしても性質（タチ）が悪ィんだよヤニカスゥ！　心臓が止まるかと思ったんですけどー！」

同僚二人が見上げた先――陽が落ちれば魔力の光を灯す街灯の天辺にしがみつくようにして、シャマが避難している。

ローガスの冗談を聞いた瞬間の驚愕と恐れが残っているのか、髪の毛を逆立ててフシャーッっと猫の如く眼下の同僚を威嚇している少女に向け、パスタを片付けて口元をナプキンで拭っていたアンナが無情にも追撃を入れた。

「なんでもいいけど、今アンタがそこに跳ぶ為に踏み込んだ石畳、修理費は給料から天引きしておくから」

「ちょっ、ええーっ!?　そりゃないですよふくちょー！」

「あるわい。かくいう私も来月と再来月の給料、闘技場の壁ぶっ壊したせいで天引きだからね」

アンタも道連れよ、と実に良い笑顔でニッコリする上司と、最悪ぅー！　と叫んで天を仰ぐ部下。

ぐったりと項垂れたシャマが、ややあってノロノロと街灯から降りようとして――途中で何かに気付いた様子で動きを止めた。

掌で庇を作り、目を細める。

その視線はカフェから離れた街路に向けられていた。

「……どうかなさいましたの？　シャマダハルさん」

小首を傾げるローレッタの疑問の声に、端的に答える。
「絡まれてる娘、はっけーん」
言うや否や、くるりと街灯の天辺部分を掴んで半回転した。
鉄棒の車輪運動の如く身体を廻して爪先を街灯に乗せると、一瞬で全身を魔力強化。足元の街灯を蹴りつける様にして跳躍する。
上空に跳んで近くの建物の屋上に着地。屋根伝いに走り出してあっという間に小さくなってゆく背中を見て、金髪巻き毛の少女が慌てて立ち上がり、同僚の行動に慣れている他二人は泰然と席を立った。
「ちょっ、前々から思っていましたが、猫みたいな方ですわね!?」
「追うわよ――ローガス、ここの支払いしといて。後で経費で落とすから」
「了解。まぁ、シャマの奴だけで問題無いとは思いますが、お気をつけて」
装備と戦闘スタイルの関係でこの面子では一番足の遅いローガスに店の支払いを任せ、身軽な二人が即座に跳躍した褐色の少女を追跡する。
流石に何百メートルも離れている訳でも無い。見慣れたその姿は直ぐに見つかった。その傍にはシャマ曰く絡まれていたらしい女性の姿もある。
更にその向こうには、慌てた様子で駆けていく複数の男達の姿があった。
ローガスを除けば見目の良い美少女の集団ではあるが、帝国の紋章が刻まれた黒の

外套（コート）――《刃衆（エッジス）》の隊服を見てか弱い小娘、と判断するお花畑は滅多にいない。上空から降ってきてスーパーヒーロー着地を決めたシャマを見て、そそくさと逃げ散った様だ。

仮に侮る輩が居たとしても、いつぞやの闘技会予選会場のごとく壁に埋まるか顎を割られて地面に這うかの二択である。

男達を逃がしたのは少々片手落ち感があるが、女性からは特に怯えてる様子も感じられ無い。少し強引なナンパ程度なら追う必要もないだろう。

そう判断したアンナは、ローレッタと共に走り寄る速度を落として部下と女性のもとに歩み寄った。

「助かりました。道を知りたかっただけなんだけど、一緒に遊ぼうとしつこくて」

「全然だいじょーぶだって、これも騎士の仕事ってやつだしー……それより、お姉さん凄くない？　スゴいっていうかヤバくない？」

つば広の帽子を被り、ケープを羽織った女性と向かい合い、どこか興奮した様子で話しかけるシャマ。

彼女は追いついて来た二人に気が付くと、手招きして声を張り上げた。

「あっ、ふくちょー！　ローレッタちゃん！　見てよコレ！　このお姉さん……めっちゃオッパイデカいんですけど！」

「ふぇぁっ!?」

女性から素っ頓狂な声が上がる。

何故だかすげー嬉しそう且つ興奮した面持ちで、対面の女性の脇下に手を入れ、下からその豊かな双丘を掬い上げておっぱいとか叫び出した部下を、アンナは普通にブン殴った。

「なるほど、北区の工房に……」

「うん、ちょ、ちょっと個人的な事情があってね、此処の通りは少し歩き辛いというか、まだ記憶に新し過ぎるというか……」

地図を片手に目的地への道を探す女性に、その隣で同じくその地図を覗き込んだアンナが一つ頷く。

どうやら、シャマがセクハラ行為を行ってしまった女性は北区にある帝国認可のとある工房へと用事があったらしい。

地理的には北区最奥にあるマイン氏族の工房へと続く通りを進めば良いのだが、個人的な事情があってその道を避けたかったのだとか。

後から追いついて合流したローガスが、地図についた印を見てアンナに耳打ちする。
「副長……この店、確か今日……」
「ええ、隊長がアイツと一緒に向かった店ね」
奇妙な縁というか、渡りに船というか。
彼女達の部隊の長である少女が、なんとか予定をつけて自身の想い人である青年と一緒に向かった工房であった。
「このお嬢さんをエスコートするのにゃ、文句も問題も無いですが……図らずとも出歯亀になっちまいそうで怖いですね」
「まぁ、そうね。正直、あの駄犬が隊長にやらかしてないか気にはなっていたけど」
「それに関しちゃ同感です、バレたら後が怖いですがね」
返答に同意を示したこの場における唯一の男は、無意識に胸元のポケットから紙巻き煙草を取り出そうとして――流石に一般の女性の前で火を付けて一服するのは躊躇ったのか、何も手にする事無く手を下ろして肩を竦める。
ちなみに、同性とはいえ通りすがりの一般人に盛大にセクハラしたシャマは、アンナに鉄拳制裁された後にローレッタに正座させられ、石畳の街路の上で懇々と淑女（レディ）の扱いについて説教を受けている。先輩としての威厳は既に目減りを通り越して底値をついた様子だった。

その光景を眺めながら、妙な既視感を覚えてアンナが首を傾げていると。
「えぇと……無理を言うつもりはないよ、この時期、帝国騎士(きみたち)も忙しいだろうからね、地図もあるし、時間さえかければ――」
遠慮がちに切り出されたその声に、我に返る。
脳裏に浮かんだ、苦手な人物――三角眼鏡をギュピィィンと光らせて御説教してくる鬼の様なシスターの顔を頭を振って追い出して、なんとか一人で向かってみるという女性の言葉を否定した。
「いえ、大丈夫……この店はウチの隊の外套(コート)なんかも手掛けてるの。何度も行った事があるし、貴女が嫌がるルートも避けて向かえる筈よ」
巡回のついでに、送っていくわ。と、安心させる様に笑顔を向けるアンナに、女性――蜂蜜色の髪をした、シャマと同年代に見える彼女はホッとした様子で胸を撫で下ろし、微笑む。
「ありがとう。案内してもらえるというなら、正直助かるよ――僕は《陽影》。工房までの短い間だけど、よろしくね騎士様」
「あ、魔族領からのお客さんだったんだ？　私はアンナ＝エンハウンス、ようこそ帝国へ。これから向かう工房もそうだけど、お祭りも楽しんで行ってね」
軽く握手を交わして、自己紹介を終えると。

アンナは未だ地面に正座させられている部下とそれを御説教している部下に声を掛け。次いで、口寂しそうにしている部下にも行くよ、と促して。

道案内する事となった《陽影》と共に北区の道を進む事となる。

奇縁の成せる業か、或いは只の偶然か、はたまた天にまします女神の悪戯か。

一人の駄犬(せいねん)を中心として、彼に様々な想いを寄せる少女達が、一所に集結しようとしていた。

その頃、猟犬と戦乙女

なんだかここ数日は、北区――職人の工房やそれに関連する店舗が多く立ち並ぶ区域に用や縁が発生している気がする。

帝国にやってきてからというもの、ちょいちょいと挨拶したり王城内で軽く話す程度しか出来ていなかった隊長ちゃんから先日お誘いがあった。

彼女曰く、闘技大会で頼んだ仕事の報酬――それの先払いの準備がやっと出来た、との事。

「《大豊穣祭》が始まる前には済ませる予定だったんですけど……こんなにギリギリになってしまって申し訳ないです」

申し訳なさそうに首を竦ませて言う隊長ちゃんだったが、騎士団を筆頭に帝都中の文官武官が忙しく準備に奔走してるのは見てりゃ分かる事だ。

副官ちゃんも大概忙しそうにしてたし、その上官である隊長ちゃんが輪を掛けて激務なのは分かり切った話よ。文句なんぞ出る筈も無い。

そんな訳で、今日は隊長ちゃんの案内で服飾から鎧下まで、布製品をメインに取り

扱っている工房にお邪魔する事となった。
ファーネスのトコの工房ほど大きくないが、それでも帝国でも指折りの職人達が務めている場所らしい。
鍛冶師が金属の表面に魔力を通す為に刻む魔力導線。
それを刺繍――というか、針と糸を使って一種の魔法の構築陣を作り出す事で布製品に魔装処理を施す技術は、帝国が現皇帝陛下の代になってから開発したものだ。
当然、その技術は今も開発元である帝国の独壇場。
出回った品を元に再現しようとしてる国も多いみたいだが、粗悪な劣化品とすら呼べないパチモンが関の山って感じみたいね。
生産量は職人個人の突き抜けた技量に頼る部分が未だ大きいのか、量産は現段階でも難しいみたいで、魔装処理された服と鎧のフル装備なんていうのは騎士団の将官クラスとか、《刃衆（エッジス）》みたいな一部の精鋭だけみたいだが。
ちなみにウチの聖女様達が着てらっしゃる白を基調とした僧服も、帝国に依頼して作った同製品の最上級らしいです。
今は普段から見慣れてる服装なんで感覚が半ば麻痺しとるが、初めて金額を聞かされた際には服を汚したり破損させたりするのが怖くなってね。あんまり触らない様にビクビクと距離を取ってたら中身であるシアリアにめたくそ怒られた。

「たかが服のせいでいきなり友達(ダチ)に距離とられたオレの気持ち、解かるかね？」
「昨日変に離れようとした分……今日のにいちゃんの膝はボクの椅子だからね！」
ニッコリ笑ったシアに頬をつねられた後、慣れろといわんばかりに負ぶさってチョークを決められ、リアには膨れっ面で丸一日膝上を占拠され、その日はひたすらに二人の御機嫌取りをしていたのは今でも記憶に鮮やかだ。あれはたいへんでした（白目
まぁ、とにかく。金属製、布製併せて帝国の誇る魔装技術は人類種で二番目に優れた防具を生み出すと世界各国が認める処だ。
じゃぁ一番は何かって？　教国(ウチ)のゴリラの筋肉だよ。初めて聞いたときは草生え散らかしたわ。
実際、ファーネス達マイン氏族も魔装に関する当面の目標は『ガンテスの防御力を超える事』らしいからね。
「アタイ達がご先祖様から受け継ぎ、発展させて来た武具の技法が、人体の強度に劣るってのは中々に衝撃的な話さ……ガン坊が現役の間に実現したいもんだねぇ」
初めて見たときにゃ、人生で一番に驚いたよ……と、何だか遠い眼をして呟いていたドワーフの代表殿の御顔が思い出される。
普段、あのおっさんと割と関わる事が多い身からすると頑張ってください、としか言えない……。

すいません、あの筋肉（ゴリラ）未だ成長中なんですよ。流石に成長率はもう極々緩やかなんだろうけど。

つらつらとそんな事を考えつつ、すっかり行き慣れた中央の噴水広場までの道程を歩く。

今回の報酬支払――俺用の布製魔装の仕立てにはシアも同行したい、って言ってたが、生憎と姉妹（きょうだい）揃って最後のお仕事である慰撫会（パーティー）に出席中だ。

あくまで特別にゲスト参加してちょっと声掛けして会場廻っておしまい、といった体なので、帰って来る時間自体はそう遅くは無いんだが……隊長ちゃんとは割と早い時間に約束しちゃったし……悪いが今回は俺一人で向かわせてもらおう。なんか詫び代わりに件の工房でお土産でも買っていくかね。

広場に到着すると、辺りを見回すまでも無く隊長ちゃんの姿は直ぐに見つかった。

清涼感のある水音を響かせる女神像の前に立つ、黒を基調とした外套（コート）――《刃衆（エッジス）》の隊服を纏った黒髪の少女。

こちらに背を向けて噴水像を見上げる腰に刀を佩いた長身は、後ろ姿だというのに凛としていて実に様になっている。

うーむ、やはりかっちょいいなこの娘。穏やかな雰囲気だからイメージ的には柔らかい印象なんだけど、見た目的にはキリっとした美人だしね。

近付きながらその背を見つめてしょーもない事を考えてる俺の視線を感じ取ったのか、彼女が振り返る。
今さっき述べた様に、一見するとクールな印象を与えるお人形さんの様な整ったお顔が、パァっと柔らかく笑顔を花開かせた。
やぁ、スマンね。待たせちまったみたいで。
「いえっ、私もついさっき来た処ですよ――それでは、今日一日よろしくお願いしますね、先輩」
片手を上げて軽く挨拶すると、隊長ちゃんは御機嫌な様子で返してくれる。
なんだか男女逆な台詞を互いに口にしつつ、本日の予定は始まった。

どうも隊長ちゃんは本来はお休みの日だったらしい。
私服で来ることも考えたけど、俺への報酬支払が今回のお出かけの主旨。
職務の一環と言う事で結局はいつもの隊服と装備でやって来たのだとか。
真面目やなぁ……実質俺の為に休日勤務してくれてる状態だ、私服で来ても気にしないのに。というか寧ろちょっと見てみたいぞ。

そう言ってみたのだが、彼女はちょっと悪戯っぽく笑って耳元の髪をかき上げて見せる。

「部隊の皆が休みを取れと言ってくれましたけど、その皆は今も急な陛下の命で帝都中を巡回中ですから。私も隊服で過ごせば少しは見回りの一助になると思ったんです――それに、ほら」

隊長ちゃんは少しだけ頭を傾けて、横を向いて見せた。

再会してから数ヵ月立って、肩口の辺りまでばっさりと切ってあったその綺麗な黒髪は、セミロングくらいの長さになって今はショートポニーテールの形で纏められている。

髪型の由来通り、馬の尻尾の様になっている髪留めで止められた部分には一本の銀の輝きを放つ簪が刺してあった。

あー、俺が贈ったやつやん。付けてくれたのか……うん、似合う似合う。この手の品の審美眼なんて欠片も無い我が身ではあるが、こればかりは結構良いチョイスだったんじゃなかろうか。

「ふふっ、ありがとうございます。本当はお休みの日だし、これくらいはいいかなって――出来れば贈ってくれた人に刺して貰いたかったんですけどね？」

おぉっと、そいつは申し訳ない事をした。機会があればお嬢さんの御髪に触れる栄誉

を授けて頂きたく。

「はい、そのときが来たら改めてお願いしますね」

やっぱり悪戯っぽい笑顔のままで、クスクスと小さく笑いを零し、揶揄う様に小首を傾げる彼女に、同じくお道化て一礼して見せる。

祭り前にやっとこ取れた折角の休日だってのに、俺のせいで潰れた様なもんだからね。隊長ちゃん本人は良い娘だからそんなの気にしないだろうが、せめて楽しめる時間になるように努力は惜しまんよ。

件の工房に向かうのに正確な時間指定は無いってって話だし、ここはちょっと寄り道して《刃衆(エッジス)》の長殿を接待してもよろしかろう。

言葉にしてしまうと遠慮してしまうかもしれないので、あくまで俺が一緒にブラつきたい、という形で隊長ちゃんに提案すると、彼女はとても嬉しそうにＯＫを出してくれた。

よっしゃ、それじゃ行くとしよう！

「ええ、行きましょう！」

軽く拳を振り上げて出発じゃぁ、と気合を入れると、控え目ながら胸元で拳を握ってノってくれる。ちょっと恥ずかしそうだけどそれも可愛いからヨシ！

何度か言ったと思うが、帝都の北区は職人の工房とそれに関連する店舗が集中している区画だ。
契約を結んだ商会に卸してる品なんかはそっちの店に行かないと無いが、試作品や工房の特色が強く出てる品みたいな面白アイテムやら掘り出し物なんかはこっちの方が断然多い。
あと、意外と露店も結構ある。
これは職人のお弟子さんとか、或いは北区以外の区画から来た職人なんかが品を広げてるんだとか。
掘り出し物や珍しい物を目的に北区に来てる人なんかが、結構足を止めて露店を物色するので客入りも悪くないらしい。
――かく言う俺もその一人。隊長ちゃんとお喋りしながら歩く中、通り過ぎようとした露店で纏め売りされてるシャツらしき品を発見して足を止めた。
……おぉ！　Ｔシャツかコレ、悪く無いぞ！
どっかの工房の若い衆らしきあんちゃんが石畳に敷物を敷いてその上に品を広げた簡易な店。

そこで売りに出されている丸首のシャツは黒地と白地、二種のシンプルな品だ。
胴の真ん中には荒々しい筆書きで『鳥かわ』だの『鳥もも』だの『ねぎま』だの、日本語で焼き鳥のメニューが書かれている。
こっちで日本語のダサTがあるとは思わなんだ、これは買わねば（使命感
「あら、本当……珍しいのもありますけど、これはなんと言うか、先輩が好きそうなデザインですね」
隊長ちゃんが苦笑しながら後ろから覗き込んでくる。
えぇやんダサTシャツ。戦いが終わった後、鎧ちゃん完全起動状態から解除したときに着てると周囲の緊張や警戒が一発で霧散するんやぞ。見える様なコーデにせんといかんっていう前提あるが。
……ん？　過去にシアからは手持ちの品で爆笑を頂いた記憶があるが、隊長ちゃんにはやったこと無い様な……前にこの手のやつ持ってるって話した事あったっけ？
俺が首を捻ると、彼女は少し慌てた様子でパタパタと手を振る。
「あっ、いえ。単純に先輩はこういうの好きそうだなーって……実際、その通りみたいですし」
うむ、正解です。とりあえずメニュー別に全種買っておこう。
五種類くらいある焼き鳥メニューの書かれたシャツを購入すると、まとめ買いしてく

れたサービスに露店のあんちゃんが手提げの袋を付けてくれた。
「このペースだと帰るまでに手荷物が一杯になっちゃいますよ?」
この区画入って即行で買い込んじゃったからね。気を付けます。
単に俺が欲しかったというのもあるが、楽しそうな隊長ちゃんの笑顔も見れたので購入自体に後悔は無い。帰りに新しい服か外套も一着追加される事を考慮して買い物せんと、後でエラい事になりそうなのは確かだが。
二人してゆったりしたペースで再び歩きだす。
そういえば、副官ちゃん経由で”《刃衆(エッジス)》に入隊希望の有望な娘が帝国に向かってる”って手紙送ったと思うんだけど……この間、闘技会予選手伝ったときに見たよ。予選も突破したみたいだね。
「ローレッタさんの事ですか?　確かに先輩が良い腕だと仰るだけあって、簡易的に行った入隊試験にも一発合格してみせましたね。私としてはそろそろ見習い、って肩書を外しても良いと思ってます」
お、そりゃ良かった。憧れの部隊に入隊出来た上に、上手くやれてる様で何よりだわ。
――そうだ!　縦ロールちゃんといえば彼女の先生であるマメイさん!　あの人の研究って進捗がどうなってるか何か聞いてない?　めっちゃ気になるんだけど!
「お味噌とお醤油の事ですね、勿論私も偶にローレッタさんに尋ねたりしてますっ。帝

都内の醸造所にお味噌の量産に向けたスペースを借りたみたいで――」

隊長ちゃんと二人でじっくりと話すってのも久しぶりだ。そのせいか、会話も弾む。

戦争中は特殊部隊トップと聖女の護衛っていう互いの立場もあって、どうやっても合間合間に殺伐としていたり、暗い内容の話を挟まざるを得なかったが……そういった気の滅入る要素が一切ない『これから』を語るのは、やっぱり気分がアガる。

これに関しちゃ誰と会話していても、しみじみと噛みしめる事になるんだけどね。二年程死んでたせいで、俺個人の主観的には最後の戦いが終わって数ヵ月くらいだし。

にしても、話題が尽きないせいもあるが、やはり会話自体が楽しいせいもあってかなり話し込んでしまっているな。

――そんな訳で、喉と舌にも休憩という名の潤いを与えたくなったんだが、どうでしょうかお嬢さん。

遠回しにどっか適当なお店に入って何か飲もーぜ、と提案すると、隊長ちゃんも夢中になってお喋りしてた分、水分が欲しくなったのか「そうですね、時間にも余裕がありますし」と頷いてくれた。

「それなら、この先にお勧めの喫茶がありますよ。ファーネスさんの処で装備のメンテナンスをしてもらったあと、偶に寄るんです」

隊長ちゃん曰く、お店の人とも顔馴染みらしく、品も含めて中々良い店なのだとか。

立地的に客層は北区の職人連中だろうしね。どういうジャンルであれ、雑な『仕事』には手厳しい人種なので、自然、成功してるお店のクオリティは一定以上が保障されている。

客としても助かる話だ。この世界、やっぱ元の世界――日本と比べると店の当たり外れは結構多い上に落差が激しいので、取り敢えずどこ入っても大丈夫っていう安心感は貴重っすわ。

歩き出してからこっち、ずっと御機嫌な隊長ちゃんが「こっちですよ、行きましょう」と言ってニコニコと嬉しそうに俺の手を取って軽く引っ張るのに合わせ、少し歩くペースをあげて彼女のお勧めの喫茶店に向かう事となった。

――で、だ。

今現在、向かい合わせで座る二人の間には、一つの大型のグラスが置かれている。

透明度の高い硝子に見事な細工が入ったソレは、この北区の工房に注文した品なのかもしれない。

グラスには綺麗な薄桃色の液体が満たされ、漂う香りからして新鮮な果汁をたっぷり

と使ったフルーツジュースである事が伺えた。
氷と一緒に浮かんでいるのはミントか何かの小さな葉と、チェリーみたいな小粒の果物だ。飲み物としても良い品らしいが見た目も可愛らしい一品である。
――問題は、そこに刺さった麦わらのストローだ。なんで二本刺さってんねんオイ。
しかもこのストロー、ぐるりと曲線を描いてハートっぽい形状になっとる。プラ製でもないのによくこんな形に加工できたな。地味に凄くないか？
流石に知ってるぞ。これアレやろ、カップルデーとかアベック限定とかそういう感じのサービスのある喫茶店で見るやつや。
どうやら此処にも転移・転生者の無駄知識（ミーム）に影響を受けた店があったらしい。北区の客層で需要があるのかコレ。
ちらりと対面の隊長ちゃんに眼をやってみれば、注文したものが予想の二十倍くらいコッテコテのバカップル仕様な恥ずかしい品だった事に驚愕し、固まっている。

いや、発端は大したことじゃないのよ。
隊長ちゃんに案内されて、二人で彼女のお勧めだという喫茶にやって来て。
いざ入店してみると、店内は全体的に落ち着いた雰囲気と色合いで、なるほど、隊長ちゃんが気に入りそうな良い感じの店だというのがパッと見の評価だった。

「いらっしゃいませー、御注文の方は……あ、ミヤコさん！　しばらくぶりですね！」
「ええ、お久しぶり。最近はちょっとバタバタしていたの。久しぶりに時間が取れたから、来ちゃった」
偶に来ているというだけあって、店員とも見知った仲らしい。
彼女が注文を聞きに来た従業員と気軽に挨拶を交わして、さて、じゃぁ何を注文するかというタイミングで、その従業員――可愛らしいウェイトレス姿の店員さんがオススメしてきたのだ。
「ただいま《大豊穣祭》の開催記念として、男女のカップルでいらっしゃったお客様用のサービスメニューが販売してまーす、よろしければお試しくださーい！」
ハキハキとした笑顔のセールストークに促され、メニュー表の最後尾を見てみれば――確かに急遽書き足したと思われる何種かの食べ物や飲み物が説明付きで並んで書かれていた。
別に一人でも注文自体は出来るみたいだが……サービスとやらが利くとかなり値引きされるみたいで、軽い興味も手伝って隊長ちゃんがドリンクを、俺がお茶と菓子類っぽい軽食を頼んだのだが……。
「あ、割引サービス適用の為にはどちらの品もお二人で消費してくださいね！　明らかにカップルでも何でもないのに値引き目的で注文されるお客様もいらっしゃるのでそ

の防止策って事で！」

注文した品を持って来たウェイトレスさんは、テヘペロ、と聞こえてきそうな片目を瞑った茶目っ気たっぷりの笑顔でサムズアップして来た。可愛いけどなんか腹立つなぁオイ！

ウェイトレスの彼女はその場から離れる気配が無い――これは、アレか。一口か二口くらいは本来の飲み方食い方するのを見届けるって事か。

とんだ羞恥プレイじゃねーか（白目

本当のカップルだってンな目の前でガン見されたら羞恥の方が先に立つ人だっているだろうに。いや、思いっきり割引目的の俺達にそれを言う権利は無いんだが。

うむ。”ヒャァ、この瞬間が毎度楽しみだぜぇ！” と言わんばかりにワクワクと眼を輝かせているウェイトレスさんには悪いが、此処は割引きは諦めて普通の注文という形にするべきだな。

隊長ちゃんはその役職上、大層な高給取りだし、俺だって現在はプー太郎に近いとはいえ、大戦中に傭兵としてそれなりに稼いでいる。喫茶店でちょっとお高めの品を飲み食いする程度、全然問題無いのだよ。

ふはは、目論見は外れたなぁ！　従業員のお嬢さん！　ってなもんで、軽く手を挙げて割引無しで、と告げようとすると。

ギクシャクとした動きでグラスに刺さったストローに顔を近付けた隊長ちゃんが、目を瞑ってえいやっ、とばかりにそれを口に含んだ。

余程恥ずかしいのか、その整ったお顔どころか耳まで熱が灯って赤らんでいる。

ギュッと目を閉じてストローを咥える彼女は、控え目に言ってももクソ程可愛くて眼福ではあるのだが……いや、ちょっと落ち着き給えキミ、その場の空気に流されて羞恥プレイする必要はないんやぞ。一旦冷静になれってばよ。

通常価格で注文すれば問題無いんやで、と声を掛けようとしたら凄い興奮したウェイトレスさんの声がそれを遮った。

「キェェェァァーッ!!　ヤバいミヤコさん可愛い！　ホラお客さん早く！　早く一緒にやってあげて下さいよホラ！　どうみてもオッケーでしょコレ待ってますよ男でしょ今こそ甲斐性をみせるときですよホラハリーハリー!!」

えぇい、やかましいなこの娘!?

途中から息継ぎを忘れてるマシンガントークも酷いが、音声ボリュームも大概デカい。というか最初の叫びなんか黄色い悲鳴通り越してまんま猿叫だったんですけど。チェストされそう。

ちょいと前にシアやリアと行った聖都の高級店の店長といい、このウェイトレスの娘といい、俺が行く店の従業員はテンション上がるとネジ外れる系の連中が多過ぎる（白

目

天井を仰いで溜息を堪え――上を向いた首を戻すと、いつの間にか閉じていた瞳を開き、上目遣いでこちらを見上げていた隊長ちゃんと眼が合う。

「――――っ！」

彼女の口はストロー咥えたままなので、何かを言葉にする、って訳でもなかったのだが。

相も変わらず真っ赤になった頬のまま、目が合うと慌てた様に再びギュッと瞼を閉じた隊長ちゃんは、なんだかちょっとだけ不安そうにも見えた。

――うむ、可愛い。が、そんな眼で見ないでくれぇ、なんだか自分が酷い事――ご褒美を今か今かと待ってるワンコかニャンコにお預けをしているような錯覚に陥るから！

ウェイトレスさんに言われる迄も無く、流石にこの状況と彼女の態度から、望まれていることは察しが付く。

もう一度、天を仰ぎ。空の変わりに清掃の行き届いた店の照明と天井を眺めて。

照れ臭さを隠すようにガリガリと後頭部を掻いた俺は、意を決してストローに顔を近付けた。

――三十分後。

体感的にはその数倍くらいの長さに感じた時間を乗り越え、俺と隊長ちゃんは喫茶店を後にする。

軽く喉を潤してお菓子を摘まむ程度のつもりで入ったのに、なんで店出る時に激闘を終えた後みたいなフラついた足取りになってんねん、解せぬ。

あの後、ドリンクだけでも色々な意味でお腹いっぱいになりそうだったのに、俺の注文した品――果物を練り込んだ焼き菓子にホイップらしきクリームが乗ったものだ――まで、ちゃんと二人で食べないと割引が利きません、とか笑顔でほざくウェイトレスの娘に押され、結局はそっちでもこっ恥ずかしい真似をする羽目になった。

そこまで行くともうヤケクソで、二人してアーンして食べさせ合いっこしたわい。副官ちゃんあたりにバレたら普通にブン殴られそう（白目

ジュースも美味かったし、菓子もお高い筈の砂糖をしっかり使っているのもあって甘味としては相当な物だったが……正直に言おう、多分二度と行かねぇ。もっかい同じことやったら悶死する自信しかない。

「……な、なんだか休憩がてら入ったのに、余計に疲れると言うか、暑くなっちゃいまし

たね」

未だ顔が火照った状態で、言葉の通りに手でパタパタと顔を扇ぎながら隊長ちゃんが困った顔で笑う。

まぁ、確かに休憩を取ったとは言い難い気分だが……俺としては役得の時間と言っても良かったんだろう。

そらね、隊長ちゃんと一緒にカップルドリンク決めて喜ばない男の方が少数派よ。実際、間近でひたすらに恥ずかしがってる彼女を眺めるのは実に眼の保養になった……俺の方も恥ずかしかったのでじっくり見て愛でる余裕なんぞ欠片も無かったけど。

重ねて言うが、精神的に疲れはしたが不満や不服なんて無い。ある訳が無い。

問題は——喜びや楽しさよりも羞恥と、何より後の怖さの方が遥かに大きいって点なんですよね！　具体的にはシアとか副官ちゃんとか副官ちゃんとかあと副官ちゃんとか！

隊長ちゃんにアーンしてもらったとか話そうもんなら、笑顔で直火で炙った砂利を口開けろや駄犬(アー)してきそうなミヤコニウム中毒者の顔を思い出して身震いする。

後の未来を思い浮かべて戦々恐々としている俺ではあったが、隊長ちゃんの方は逆にホッとした様子だった。

「先輩が不本意で無いのなら、良かったです。ちょっとあの娘とはお喋りの中で先輩を

話題にした事もあって……あんなに悪ノリしてたのもそのせいだと思います」
ごめんなさい、と頭を下げる彼女に、ヒラヒラと軽く手を振って気にするなと意思表示。
まぁ落ち着いた感じの店なのに、普段からあんな奇天烈なテンションのウェイトレスが居たら雰囲気台無しだろうしね。久しぶりに店に来てくれた友達をちょっと揶揄ったって事か。
まぁ、なんだ。
大分恥ずかしい思いもしたが……飲み食いした物は美味かったし、隊長ちゃんは普段見ない感じで可愛かったし、収支はプラスって事で。
俺の方も揶揄う様にニヤリと笑って言ってやると彼女は一瞬、きょとんとした表情になって。
「……か、かわっ……もうっ、先輩は本当にもうっ……！」
やっとこいつもの白い肌に戻った頬を再び染め、再び困った様に笑ってこちらの肩を力無くポカッと叩いてきたのだった。

露店でシャツ買ったり、茶店で羞恥プレイする羽目になったりと目的地に着くまでにそれなりに濃い内容の道行きではあったが、以降は特に問題無く辿り着いた。
いや、あんまり遅い時間に行っても帰る時間が遅くなりそうだし、喫茶店出た後は寄り道せずに真っ直ぐ向かったってだけなんだけど。
工房と言っても、やはり鍛冶仕事と服飾全般では仕事内容が全く違う為か、今回訪れた場所はファーネス達ドワーフのソレとは大分趣が異なっていた。
炉の稼働音と鉄をぶったたく音が延々聞こえてたあっちと比べて、環境音なんかは殆どしないし。働いてる人達の活気と熱気、という点ではそう変わらないんだけどね。
そんで、入口受付で隊長ちゃんが何やらやり取りすると彼女が連れて来る客、という事で工房的にも大事なお客様扱いなのか、責任者の人――工房長がわざわざ挨拶にやってきてくれたんだが。
「――お待ちしておりました、王城の方よりお話は伺っています。かの《聖女の猟犬》が袖を通す一着を手掛ける事、工房を預かる身として非常に光栄です」
丁寧な一礼をすると、眼鏡のつるを指先で持ち上げてそんな台詞を述べたのは、パンツスーツっぽいデザインの制服に身を包んだ美人だった。
……なんだか知ってるハーフエルフに非常に似ている気がする、耳も同じようにちょっと尖ってるし。

具体的には、以前シア達と一緒に行ったことのある聖都の高級衣料店の店長ね。眼鏡かけてるのと生真面目そうな雰囲気以外はそっくりだ。

「……おそらく、お客様が仰っているのは私の姉です。腕は良い……処か天才の類に入る人ですが……ちょっと性癖がアレでして……姉の店に行ったのでしょうか？　ご迷惑を掛けていないと良いのですが」

彼女が言うには二人は双子の姉妹らしい。

元はといえば此処の責任者もお姉さん――あの店の店長が就いていたらしいが、当人が「もう延々と厳つい外套だの鎧下のジャケットだの作るのは嫌や！　私は美人と美少女に着せる可愛いお洋服が作りたいんや!!」と発狂して、終戦と同時に皇帝陛下の顔面に辞表をスローイングシュートして帝国から飛び出してしまったらしい。

中々ファンキーな生き方をしてると思うが、更に衝撃的な事に現行の布製魔装の技術は彼女のアイデアと技術が基幹になっているっぽい。腕の良い変態職人じゃなくてめちゃくちゃ腕の良い天才変態職人って事ですね分かります。

当たり前だが帝国的にはおいそれと他国に放流出来る人材では無いので、ガッツリとスクラム組んでる友好国の教国に預ける形で店を持たせたのだとか。

で、第一人者が抜けはしたものの、現在は魔法も絡めた縫製技術ならば姉と肩を並べる妹が工房の責任者となった、って訳だ。

「……現在では魔装の縫製に関しては姉が在籍していた頃の水準を取り戻しているので、その点はご安心を――あの人が居れば二年あれば更なる技術的発展を見せていた可能性は否定できませんが」

会ったばかりの俺でも、彼女の言葉の端々から天才肌の姉に対するコンプレックスが感じ取れるが……見た感じ、転生者じゃない妹さんがおそらく適した生産系の加護持ちの姉に技術的に並んでるって時点でなぁ……他人からみたらどっちもブッ飛んでるよ。

そもそも国から精鋭や将校の装備の発注を受けてる工房で、そこに勤めてる腕利きの職人達が認めてるって時点で彼女の腕前は保障されている様なもんだし。

そういった点から判断しても、俺個人としては一張羅を拵えて貰う事に不安も不満も無い。

期待してるので今日はよろしくお願いします、と軽く頭を下げておくと、ＶＩＰ客を迎えるつもりで肩に力の入っていたハーフエルフの工房長（いもうと）さんから少しばかり力みが抜けた。

「では、此方へ――外套の方はタナヅカ様の事前の要望の通り《刃衆（エッジス）》の制式装備の物をご用意していますが……」

「ええ、そのままという訳にも行かないでしょうから、先輩の意見を聞いて手直しを加えて下さい」

あいよ、流石に自分の装備に関する事だからそれなりに口出しはさせてもらうよ。
美人二人とのやり取りの後、工房奥に案内される形で俺は歩き出した。

予約時間待ちや、簡単な修繕待ちの客を通す応接間。
複数のお客を待機させる事もあってかなり広く作られたそこは、隅に仕切りで区切られた空間があり、そこが試着の為の着替えエリアにもなっているらしい。
俺と隊長ちゃんはそこに通され、工房長さんが手ずから俺の要望を聞き取って手元の用紙に色々と書き込んでいる。
結論から言うと、外套（コート）の仕立て案自体はあっさりと決まった。
素の状態だと投擲も頻繁に使用するので、腕部や腰回りに投擲具を入れておけるポーチを追加注文。ウチの聖女様の御供で公的な場に出るとき外しておけるように着脱式だ。
その際は武装は内ポケットに仕込むことになるので、そこの拡張と位置調整。咄嗟の抜き打ちの投擲は自分のマストポジションにポケットがあるか無いかで速度が大分変わる。なのでここだけは拘らせてもらった。

デザインは隊長ちゃんの外套（コート）から金属補強した部分をとっぱらって革（レザー）と布だけになった感じだ。

そんでもパッと見は結構似てるけど。《刃衆（エッジス）》の中でも彼女のものは隊長仕様で赤いラインが入ってるんだが、俺のも鎧ちゃんをイメージさせる赤ライン入ってるし。

はっきりと違うのは俺の外套（コート）には背や肩部に帝国の紋章が無い事くらいか。個人用なので当たり前っちゃ当たり前だが。

これで本決まりでええやろ、とGOサインを出したときに隊長ちゃんが「よしっ……！」とか小さくガッツポーズとってるのが見えたんやが、あれはどういう意味なんじゃろな？

まぁ、とにかく。後は俺の要望通りの手直しを加えて、後日受け渡しって事になったんだが……此処で隊長ちゃんが両の掌を打ち合わせて、良い事思いついた、とばかりに提案してきた。

「折角なので、外套（コート）に合わせたお洋服も選んでみましょう――前々から思っていましたが、先輩は服装に関しては実用一点張り過ぎますっ」

彼女の力説する処によると、煌びやかなドレスやアクセ、なんてものは一部の富裕層だけなのかもしれないが、ちょっとした小物や拘りあるマークなど、普段の行動の邪魔にならない範囲で自分のカラーを出すのは普通の街人から戦場で戦う戦士まで、大なり

小なり皆やってる事らしい。はぇー……ぜんぜんしりませんでした（素

いうて、坊主の国である教国に住んでると他国よりそういったお洒落事情に疎くなるのはしゃーないと思うんだ。

俺の周りだと特にね。シアやリアはそもそも下手なお洒落なんぞいらん位には反則級の美少女だし、ガンテスやミラ婆ちゃん至っては若い頃からそういうのとは無縁やろ、絶対。

俺と隊長ちゃん、それぞれの言い分に工房長さんがどちらも一理ある、と頷いて補足を入れる。

「新たな技術や発想の最先端を担う帝国と、伝統的に清貧を旨とする教国では基準そのものが異なって然るべき、という事ではないでしょうか……とはいえ、私としては当工房にお越しいただいた以上、帝国最先端の流行に存分に触れて頂きたいとは思っておりますが」

「ですよね！　さぁ先輩、この際ですから色々とお試ししてみましょう！」

眼鏡をキラーンと光らせて主張する工房長と、目を輝かせていそいそと何時の間にやら手にしていたカタログらしき見本の頁をめくっている隊長ちゃん。

……あー……これは、あれだな、うん。男は逆らっちゃダメなやつ。

正直な処、イケメンでもなければ男の娘とかの特殊な属性持ちでもない、ただの一般

的成人野郎を着せ替え人形にして面白いのか？　とは思うんだが。
むっちゃ楽しそうな隊長ちゃんを前にそれを言うのも野暮だと判断して、俺は成り行きに身を委ねる事にした。
なんかはしゃいでる二人に乗っかる形ではあるが、よさげな物があったら自費で買っても良いだろうしね。

「……とりあえず、先ずは帝都での一般的な普段着からお持ちしましたが……」
「わぁ、先輩のこういう恰好はなんだか新鮮ですね……ちょっと違和感ありますけど」
渡されたモンに素直に袖通してこの評価である。泣いて良い？
まぁ、姿見で自分で見た感じでもあまり似合ってないとは思う。目付きの悪さとか顔や首、腕なんかから見える大小の傷のせいで、変装してるヤのつく自由業とか、良くて偶の休暇を取ってる荒っぽい冒険者にしか見えない。
他の地方と比べて、普段着であっても小奇麗というか品の良さがあるのも似合わない要因だと思う。ぶっちゃけ郊外の野良仕事やってる人の服なら、元の世界でも見るオーバーオールとかだから違和感なんか出ないだろうし。
尚、一般的といっても此処の工房製なので着心地とかは凄く良かった。けどやっぱり

似合ってはいないので没で。

「次は思い切って騎士団の鎧一式をお持ちしてみました。此方は導線修繕用の見本ですが、帝国の紋章刻印以外は基本同じデザインです」

「これは似合いますね、素敵です……！」

一気にパターン変えて来たな。

つーかもう、外套に合わせた衣裳でも何でもないやんけ。ただの着せ替え大会だこれ。今更だけどさ。

まぁ戦衣裳というかモロに戦闘用装備ではあるので、着た感じそんなに違和感は無かった。

何気に普通の鎧一式って初めて着たな……重装の騎士鎧だというのに見た目ほどの重さを感じないのは、重量を軽減する魔法でも掛かってるんだろうか。

あとは重みを上手い事分散する様にデザインされてるんやろうな、その分ちょっと着込むのが面倒だが。

うむ、しかしこういったスタンダートな鎧もやっぱりファンタジーの王道を征く感じでカッコイイな。良い体験ができt……ア痛ダダダダッ!?　ちょっ、何これ地味痛ぇ

!?

姿見でしげしげと騎士鎧を着こんだ自分を眺めていたら、背中というか体の内側からビリビリと軽く痺れる様な痛みが走る。

同時にラヴリーマイバディからひどく不満気な感覚が伝わって来た。

明確に言語化出来る様なものとは違う、魂まで融合してるが故に伝わるふわっとしたイメージ的なものではあるんだが、強いて言葉にするなら「さっさと騎士鎧（ソレ）を脱げ」だろうか。

お、落ち着き給えマイバディ、脱ぐから！　あくまで着せ替え遊びみたいなもんだから！　実戦で使うのは鎧ちゃんだけだから！

「次っ、次は《刃衆（ウチ）》の部隊用の装備にしてみましょうっ。絶対に似合いますよ先輩！」

「では仕立て直す前ですが外套（コート）の方もお持ちしましょう。下の衣裳は騎士服で宜しかったでしょうか？」

ちょっとお二人さん!?　ウキウキと次の相談してないで鎧脱ぐの手伝ってくれない!?　あと金属鎧はウチ（いろい）の相棒的（ろと）によろしくないっぽいんて服系でオナシャス！

まるで頭の上にいる誰かから髪の毛を引っ張られる様な痛みに悲鳴をあげつつ、危険要素のありそうな物は省いてくれる様に頼んだり。

「騎士服も良いのですが、猟犬殿は精悍な目元をしていらっしゃるので、雰囲気に合わせて別の切り口に変えてみたのですが……どうやら最適解だった様ですね」

精悍な目元＝目付き悪い。物は言い様って事ですね分かります。

工房長さんが持って来たのは意外や意外。日本でもよく見かける服――黒地のスーツだった。

いや、服の型的に燕尾服とかだってあるし、目の前の工房長さん自身もパンツスーツらしき恰好だし、そりゃビジネススーツもあるんだろうけど。

「姉が責任者だった時期に、一通りのニホンにあるものを再現した形となっています。普及率は低めですが、既に公的な場で着用なさっている方もいらっしゃるので外套（コート）の下に着る装備としては適切かと。こちらにも魔装処理は施してありますので」

彼女的にはもうこれで決まりやろ、といった気持ちなのか、眼鏡を指先で持ち上げつつ商品説明に入っている。

ノリ気な処を申し訳ないが、型はシングルのスリーピース、サイドベンツとなっております。とか言われても向こうじゃ学生だったからスーツの種類なんてさっぱり分からんです。

最適解、という程度には似合ってると思ってくれてるみたいだが……自分ではよく分

からんなぁ……変では無い、位には思うが。
黒地のスーツに渋い色合いの暗赤色のネクタイ、赤いラインの入った黒コートという、これでサングラスでもかければ殺し屋にしか見えない自分の姿を見下ろして首を捻る。
隊長ちゃん的にはどうよ、この恰好？
今までの着せ替えでは真っ先に感想を述べていたのに、今回は未だ無反応な《刃衆（エッジス）》の長殿の方へと意見を求めて振り返り――。
振り返った瞬間、両の手をガシッとばかりに掴まれた。
「――先輩」
お、おう？
頬を染めた真顔という、ちょっと意味の分からない表情になってる隊長ちゃんに詰め寄られて、思わず少し仰け反る。
「《刃衆（ウチ）》の子になりましょう――いえ、先輩が隊長になりましょう。素敵だし格好いいしこんなに似合ってるんだからこれはきっと神様の思し召しですそうしましょう」
ごめん、本気でちょっと何言ってるか分からない。どうした急に。
「大丈夫ですっ、反対する隊員なんていませんから！　私とアンナちゃんで先輩を支えますから！」

た、隊長ちゃんの鼻息が荒い。

なんやこれ、マジで見た事無いテンションしてる。何が彼女の琴線に触れたんや。

すすーっと近づいて来た工房長さんが、手元のボードを使って書き込んでいた注文に関する用紙を掲げて見せる。

「――では、外套（コート）と併せて現在試着なさっている魔装処理を施した品をお渡しする、という事でよろしいでしょうか？　スーツの方は王城からの依頼指定から外れているのでご購入して頂くことになってしまいますが」

「はい、大丈夫です！　不足分は私が支払うので是非ともお願いします！」

いや待って、俺の意見を――って流石にこんな上物のスーツ奢ってもらうのは気が引けるってレベルじゃねぇ！　いや、実用性やスーツ故の汎用性からみても、正直買ってもいいかなとは思うけど金は自分で出すから！　落ち着け隊長ちゃん！

「ちなみにこちらがお見積りになっております」

そんな台詞と共に注文用紙に書かれた一点を指さした工房長の指先を眼で追うと……うぉ、やっぱ高ぇ……。

スーツ自体も最高級品で良いお値段なんだろうが、やはり魔装処理の金額がえげつない。使われてる技術が帝国の独占に近いだけあって、間違いなくこの世界に来て一番に高い買い物と言える。

いや、全然払えない額って訳じゃないのよ？　ただ、なんぼ貯金に余裕があるとは言っても馬車くらいなら馬ごと一括で買えそうな金額をポンと出すのには抵抗を覚えるというか……。

これでも外套（コート）よりは処理する魔力導線量の関係でお安いってんだからおそろしい。シアとリアの僧服ほどじゃないとはいえ、戦闘用の衣裳なのに破損させるのが怖すぎるって本末転倒じゃねーかコレ。

「手掛けた品を大事に扱って下さるのは大変に光栄ですが……身に纏い、ときとして身を保護する事が衣の本懐です。クローゼットの肥やしになるよりは常用して着潰す、位の方が服も喜ぶかと」

いや、その通りなんだけどさぁ……修繕費はお高いんでしょう？

「そこは私どもも商売なので――ですが、御安心を。猟犬殿が此方で購入された品は、姉にロハで修繕させる事で話が纏まっています。帝国を出て好きな店を好きに経営している分、その位はやれと脅し付けて呑ませましたので」

初見は生真面目そうに見えたが、眼鏡の位置を直しながらシレっと言う工房長さんは大変に茶目っ気に溢れている。やっぱあの店長と姉妹なんやなぁ。

「スーツの方は私が出しますから安心してください、これくらいならへっちゃらですから！　あぁもう、なんでこの世界にはカメラが無いのかしら……！」

うん、隊長ちゃんはちょっと落ち着こう。テンションバグっておかしなことになってるからね？

なんだかはしゃいでる彼女もいつもよりちょっと幼い感じがして大層可愛らしい。

が、代わりに払うと言ってる金額は全然可愛くないゼロが一杯ついてる額なので却下で。流石にこれを後輩みたいな女の子に奢らせたら只でさえ不足気味な俺の沽券に関わる。

祭りを楽しむ為の軍資金は多めに持って来たとはいえ、流石にこんな高額品を一括で払える額は持ってきてない。手付金だけ払って残りは後日送金、という形になった。

工房長さんが「よろしければスーツは着衣のままお持ち帰りください」と言い残し、これまでに試着していた品を片付ける為に部下らしき人と一緒に一旦奥――多分、縫製室だ――に引っ込むのを見送り、一息つく。

うむ、この際だ……出来れば合わせた帽子なんかも後でゲットしたい処ではあるな！

折角スーツが手に入ったんだし、将来は通りすがりの単身赴任のサラリーマンムーヴとかしたい。今の俺では風格も渋さも実力も足りて無いが。

高い買い物ではあったが、個人的には満足してる。

でも俺が自腹を切った事に隊長ちゃんは不満そうだ。いや何でやねん。自分の服を自分で買うって当たり前でしょうに。

「でも……私が強く勧めたのも一因ですし。私が支払いするのが問題なら、お話さえ通せば王城の方でスーツの支払いも受け持つくらいはする筈です」

かの《猟犬》を聖女に関わらない事で働かせるんですから、それ位は通って当たり前なんですよ？　と、言い聞かせる様な、少し複雑そうな、なんとも言えない口調と表情でこちらを見上げて来る。

その拗ねている、とも言える様子に苦笑が漏れそうになった。

なんだかな。この娘がこういった表情を俺に向けるときは――大抵、俺の事を案じるときばかりだね。

身の安全だったり、周囲と自分の評価・立ち位置に関する事だったりと、ときと場合によって様々ではあるが。

俺の無頓着さに対して、それを指摘して、でも効果が薄い事は多分わかっていて……それでもこうやって口にして、聞き入れてもらえない事に拗ねている。

うん、やっぱ良い娘だよな、と再確認。

よくもまぁ、こんな面倒くさい拗らせ方してる男を見捨てないで付き合いを続けてくれてるもんだ――本当にありがたい話だよ、俺には過ぎた後輩だ。

我ながら緩んでいると分かる顔で隊長ちゃんをじーっと眺めていたら、恥ずかしそうに視線を彷徨わせた彼女は、何かに気付いた様子で俺の首元に眼を留めた。

「あ……先輩、ネクタイがずれてます。もう、せっかく素敵な恰好をしているんですから、キチンとしないと駄目ですよ？」

え、あ、ホントだ。ピンの位置が悪かったか？

手を伸ばしてネクタイを軽く締め直し、位置を整えてくれる隊長ちゃんの頭部を見下ろして礼を言う。

いや、すまんね。向こうでネクタイ締めるなんていう経験を殆どした事がなくてさ。正直結べただけでも我ながら頑張った方なんだわ。

「ブレザーなら機会もあったのでしょうけど、詰襟の学生服でしたからね。仕方ないと思いますよ――はい、できました」

微笑む彼女におう、ありがとね。と返そうとして、そこでふと気が付いた。

……あれ？　俺って隊長ちゃんに元の世界にいた頃の制服関連の話なんてしたっけ？

いや、向こうにいた頃は年の近い学生だったって知って、互いに懐かしんでポツポツと話をする事もあったから、そのときか？

隊長ちゃん相手に限らず、故郷に関する事での会話は機会自体が少なかったせいか、大体は覚えてると思うけど……流石に細部まで全部記憶してるって訳でも無いしな。

「――え……あっ」

俺の些細な疑問に対して、ネクタイに手を添えていた儘だった彼女は少しだけ目を見開いて、ちょっと考え込むような仕草をみせた。
なんだろう、何かを口にしようとして、躊躇してる様に見えるが……。
こっちの勘違いでなければ、それは決して悪い感情から来る躊躇いでは無く。
隊長ちゃんは、その黒曜石みたいな瞳に昔を懐かしむ――どこか郷愁を感じさせる色合いと、幾らかの照れ臭さの混じった感情を乗せた。
首元とネクタイに触れていた手が離れ、少しばかり上の位置にある俺の頬に両の掌が添えられ。
「……あのっ、先輩。私は――」
思い切った様子で、『何か』を告げようとその桜色の唇が開かれた瞬間だった。
俺達が現在いる、大型のドレッサーや姿見が設置されている試着室も兼ねた応接間の扉。
広い工房内のどこからでもお客を案内出来るように、東西それぞれに別の渡り廊下へと繋がっているソレらが、全く同時に開かれる。

「ここかぁっ!?　おいミヤコォッ!　狡すっからい真似してくれやがって覚悟は出来て

んのかゴルァァッ!?」
「わー……ウチの姉が聖女という名のチンピラと化してる件」
「いや、助かったよ。此処までの道程もそうだけど、ここの工房は内部もちょっと入り組んでるんだね。僕一人だったらどれだけ時間を無駄にしていたのやら」
「気にしなくていいって、これも仕事だし――ま、案内も終わったし、私はこれで……」

片や扉の蝶番が弾け飛びそうになる勢いで荒々しく。
片やごく普通に、会話に興じながら穏やかに。
正反対の方法で入室してきた連中は――全員が全員、見知った顔だった。
皆揃って熟練の戦士や魔導士揃いなせいか、部屋に居た者、同時に入って来た者、互いに互いを一瞬で認識し――。
「「「……えっ？」」」
「――――あっ（察し）」
隊長ちゃんを含む、部屋に集った女子四名の困惑の声が重なった。
ちなみに最後の唯一被らなかった声は、思いもよらない組み合わせで現れた二人の内

の片方――副官ちゃんの声である。

この場の面子を見渡した彼女の顔は引き攣り、白目を剥いていた。

なんとも既視感というか、親近感を覚えるその表情からは、何を考えているのか読み取るのは容易だ。

――なぁにこれぇ。

多分、そんな感じだと思う。俺と同じで。

Q：何が始まるんです？

「……え、エライ事になってやがる……」

マイン氏族のものと並ぶ、部隊に所属する者の行き付けともいえる工房――その応接間。

何の変哲も無い扉一枚を隔てたその向こう側が、嘗て自身が潜り抜けて来た戦場と比べても更に危険な死地（しゅらば）である事を察したローガスは、額から流れ落ちる汗を拭って呻いた。

「うわぁ……これ以上は近づきたくないかなー」

ローガスを盾にする様に彼の背後から応接室への入口を眺めたシャマが、引き攣った顔でじりじりと後退を始める。

「おい、俺を盾にするのやめろよシャマ……！　そもそも副長とあの魔族のお嬢さんを外で待つって俺が言わなきゃ、今頃お前もあの部屋の中に居たんたぞ、ちったぁ感謝した対応をしたらどうなんだ……！」

「そんなの単におじさんが面倒くさがっただけでしょー……！　こういうときこそ壁役

の役目を全うしなよ……！」

「ざけんな。上位眷属と一対一（サシ）で向かい合う方がまだ楽だろうが死ぬわ……!!」

ヒソヒソと小声で罵り合う二人の更に背後から、新人という事で三人の最後尾に位置していたローレッタが、恐る恐るといった風に応接間から放たれる重圧――それを辛うじて外と隔てている扉を見つめる。

「……この尋常ではない威圧と魔力……やはり、先程私（わたくし）達の前を凄まじい速さで走り抜けていったのは教国の聖女様方でしたのね……」

遠目から土煙を上げながら爆走してきたと思いきや、あっという間に走り抜けていって自分達に眼もくれずに工房内に突撃していった金糸の髪の美しい少女。

その彼女に子猫のように襟首を掴まれて引っ張られ、加速のせいで半ば宙に浮いていた銀髪の少女の方とローレッタは知己である。

思い返せば走る少女と引っ張られていた少女、二人は何処か似た顔立ちであった……姉妹、つまりはそういう事なのだろう。

ただならぬ様子の金色の聖女が工房に飛び込んで行ったのを目撃し、こうして後を追う形で応接間へと繋がる渡り廊下までやってきた三名であったが……戦士として鍛えた危機察知能力が「やめろ死ぬぞ、フリじゃねーぞマジで死ぬからやめとけ」と全力で訴えかけて来る状況に足を留めざるを得なかった。

かの大戦にて、伝説扱いされる程の活躍をした戦士とそれを慕う少女達の恋の鞘当て。

一人の年頃の乙女としては好奇心を掻き立てられる話だ。実際ローレッタもここまで来る道すがら、シャマに簡単に聞かされた話には思い切り食い付いて聞き入った。

自分達の隊長がかの《聖女の猟犬》に執心である、という話だけでもこれ以上無く興味深いというのに、猟犬の守護する聖女姉妹も同様の感情を己が騎士に向けている――歌劇作家が知れば狂喜して筆を執りそうな話題だ。実際の処、劇にするには主要人物の向ける情が少しばかり重いというかドロっとしてるので脚色は必須なのだが。

――だが、扉越しに感じるこの重圧（プレッシャー）を感じ取れば、そういった野次馬根性の類など一瞬で消し飛ぶというものである。

複数の人外級やそれに近い領域の戦士・魔導士が揃って物騒な気配を放つ応接間は、下手な戦場などより余程危険な空気を放つ魔境と化している。帝国最精鋭の騎士たる《刃衆（エッジス）》の三名をして入室はおろか、近付くのすらお断りの危険地帯であった。

「どーすんだよコレ……中にいるお歴々も流石になんも考えないで暴れるような事はないだろうが……」

「たいちょーと聖女様が自重しないで喧嘩始めたら此処の工房が更地……程度で済めば良いよねー……とりあえず、おじさんが外から障壁張って万が一に備えるしかないん

じゃね？」

「魔法剣士にそんな強度の結界や魔力障壁が張れるわけないだろう……！　というか本職の魔導士だって、隊長たちの激突の衝撃を押さえ込める腕前のやつなんぞ大陸に何人もいないだろうが」

「とはいえ、私やシャマダハルさんは魔法自体を得手としておりませんし……いっそ周囲から民間人を退避させた方が良いのでは？」

ローガスとシャマ、ローレッタもそれが確実に出来そうな人物に二人程心当たりがあるが……その両名――聖女姉妹は現在応接間にて修羅場に参加してる側である。世は無情であった。

どうしたものか、と三人が深刻な表情で退くも進むも出来ずに渡り廊下で額を突き合わせていると。

「おや皆様、御揃いで。タナヅカ様以外は本日いらっしゃるという話は聞いていませんが……」

書類の束を抱えて現れたのは工房の責任者であるハーフエルフの女性であった。

「あ、妹ちゃんだ。これで幾らかはマシな状況になったかもー」

「あー……防御系統の魔法に関しちゃ俺よかよほど優秀だしな――考えて見りゃ此処の責任者なんだから、真っ先に話を持っていきゃ良かったか」

良い処に応援が来た、といわんばかりに顔を輝かせる二名と、それに困惑する工房長。
「えぇと……なんのお話でしょう?」
「工房に勤める方々には非常に理不尽な状況と感じるかもしれませんが、落ち着いて聞いて下さいませ。実は……」
申し訳なさそうに経緯を語るローレッタの言葉を受け、工房長は「ふむ……」と一言漏らすと眼鏡の位置を指で調節し、今にも魔境から爆心地へと変わるやもしれぬ部屋へと視線を転じた。
「なるほど……確かに戦いを生業としていない私でも感じる圧迫感……これは酷い修羅場ですね――まるで迫る納期に向けて完徹三日目を迎えた日の空気です」
脅威は感じているのだろうが、それでも動じる事無く呑気に感想を述べる彼女に、帝国最精鋭の騎士達から「マジかよコイツ」みたいな感嘆と戦慄半々の視線が注がれる。
「えー……コレと比較対象になる空気が生まれる職場とか、あたしの知ってる職人工房とイメージがちょー乖離してるんですけど」
「ちなみにそのときの納期の難易度が『悪夢(ナ)? 見(イ)てもいいから寝(ト)させ(メ)ろ(ア)』となった原因は《刃衆(皆様)》の部隊発足の折、隊服一式を突貫で揃えろ、という陛下の無茶振りだったのですが」
「あ、はい。その節はすいませんでした」

姉と私を筆頭に魔装処理が行える者が全員死んだ魚の目付きで黙々と針と糸を動かす装置になっていました、と言葉を結ぶ女性に対し、常の口調を封じて平坦なトーンで丁寧に謝罪するシャマ。

なんかもうどちらが騎士なのか分からなくなる程度には落ち着いた様子で、ハーフエルフの工房長殿は再び眼鏡の縁を指で押し上げた。

「此方としても痴話喧嘩で職場を破壊されては堪ったものではありません。取り敢えず、万が一に備えて私とローガス様で応接間を障壁で覆いましょう。その上で、他の御二人には部下に言伝をお願いします」

どういう状況なんだよコレは！

色々と思う処は多い――どころか多すぎて状況がゴチャゴチャしすぎだろ、というのが嘘偽りのないオレの本音だ。

なんというか、この場に揃った面子に予定に無かった人物や予想だにしない人物が多

い。
まずウチの駄犬とミヤコ。
これは当然だ。元よりコイツらの魔力を辿ってこの工房までやってきたのだから。
オレ達がパーティーという名の気疲れする仕事をこなしてる間に、相棒を連れ出すなんていう小狡い真似をしてくれやがったミヤコにはたっぷりと問い詰めたい事があるが……誘われたからってオレに何にも云わないでホイホイついていった馬鹿たれにも文句がある。
……ある、のだが。
何でこいつ、スーツなんて着てるんだよ……!
ミヤコの仕業か?　クソッ、オレのいない間に相棒を着せ替え人形にするとか羨ま……ゲッフンゲフン!　けしからん事しやがって!
勿論腹は立つ、立つけど。
相棒の黒スーツ姿が思いの外似合っているせいで怒りが持続し辛い……!
あまり良いとは言えない目付きもこうしたピシッとしたスーツに身を包んでいると、目付きが悪いというより鋭い、という印象に変わって仕事の出来るＳＰみたいだ。
正直、この状況でなければもっと頭悪い感じにはしゃいでいたと思う。
あぁもう、場合によってはお仕置きしちゃる、位のつもりで来たのに見てると幸福

ゲージがあがって怒りゲージが低下しそうになる。なんだこれ、新種の精神干渉かよ。
仕事先のパーティー会場で貴族のお坊ちゃん達を筆頭に、いろんな奴に踊らないか、一緒に見て回らないかと声を掛けられて断るのに難儀したけど……こいつがこの恰好で出て来てダンスのお誘いなんかしてきてみろ、オレは脳であれこれ思考するより先に、気が付けば手を取ってる自信しか無いぞ……！
「うわ……にぃちゃん、イイ……」
オレも大概な精神状態だが、アリアの方が先に故障した。
引っ張って此処まで来る間、ずっと呆れを含みつつも悟った様な顔をしてた癖に、今は熱に浮かされた様子でフラフラと相棒に向かって近づいてゆく。
未だ状況に面食らっている馬鹿の右手を取る妹（おとうと）だったが――同じタイミングで左の手を取った人物と全く同時に其々に口を開いた。
「良いよソレ、凄く良い！　にぃちゃんスーツとか似合うタイプなんだね！　イメージしてたよりずっと格好良い！」
「あぁ……これは素敵だね……！　確かキミの元居た世界の正装かい？　主の配下で同じ装いの御仁がいたけど……なんだろう、キミが着てると僕の心臓に良くない……！」
さり気なく相棒のスーツ姿を妄想したことあります、とカミングアウトしてるアリアだが、そこは驚く事でも無いので別にいい。オレもしてるしな、なんならスーツだけ

じゃなくて色々と。

問題なのは左手を取った人物の方だ。

アンナと一緒にやってきた、この場において予想外の人物。

ちょっと良い処のお嬢さんみたいな恰好をしたその女の子は、オレの勘違いでなければ面識のある人物である。

魔族領の吸血鬼(ヴァンパイア)達のトップである女公爵――その側仕えをしていた娘だ、確か……《陽影》だったか?

前に最後に会ったときより髪も伸ばしていて、全体的にこう……柔らかな感じになって受ける印象は大分変わってるが、間違いないと思う。

彼女に関しては、そりゃ疑問は尽きない。

なんで此処に居るのかに始まり、いつもの男装はどうしたのかとか、明らかに相棒と最近会ったかの様な言動だけど何時顔を合わせたんだとか、本当に色々と気になる点は多いんだが……それらを全て置き去りにして余りある光景があった。

――興奮した様子で相棒の手をとって詰め寄る彼女が一歩動く度、或いは身を揺する度、たゆん、と音を立てんばかりに柔らかく揺れるソレ。

オレと同じく、それほど交流は無かったが一応の面識はあるアリアが直ぐ隣の《陽影》を見上げて……その視線が自分より頭一つ上の位置にある彼女の顔に行き付く前に、と

ある一点で固定される。

うぉ……はしゃいで喜色に溢れていた笑顔が一瞬で真顔になった……まぁ、気持ちは理解できるぞ妹(おとうと)よ。

最近ちょっと育ったことを喜んでたもんな。オレに配慮していたみたいだけど、沐浴のときに緩んだ顔でこっそり確認してたのは気付いてるよ、ふぁっきん。

だが、所詮オレ達は穏やかなる平原。

アリアの涙ぐましい努力も所詮は富める者の前では誤差の範囲に過ぎないと、無情な現実を叩きつけんばかりの圧倒的なボリュームの丘――否、雄大なる巨峰がそこには広がっていた。

……もうここまで差があると笑うしかないな、ハハッ。

苦笑したつもりだったのだが、何故か妙に力の入ってしまった口元からギリィッっと歯が軋む音が漏れた。

同時に相棒とアンナがヒエッ、なんて短い悲鳴を上げる。人の顔見て失礼な奴らだな。

そもそもアンナ、お前この部屋に入って一秒後にすぐ気配を殺して息を潜めだしたけど、目の前にいるのにそれは無理があるだろ。いや、微妙に認識しづらくなってるのは流石の技量だとは思うけどさ。

けれど、その隠形も今上げた悲鳴で意味が無くなった。
「アンナ」
「アンナちゃん」
「「説明」」
オレとミヤコの口から、端的な異口同音が飛び出る。意図せず低い声になったのはご愛敬というやつだ。
分かり易く顔から血の気が引いたアンナが、助けを求める様に視線を彷徨わせ――唯一フォローしてくれそうなアリアまで話を聞きたそうな顔をしているのを見て白目を剥いた。
ちなみにその前に一瞬だけ相棒にも目を向けたが、未だにこの状況に戸惑って馬鹿面をしている奴を見て「こいつ頼りにならねぇ」と判断したみたいだ。即座に視線は外されている。
自身で切り抜けるしかないと悟ったのか、アンナは背筋を伸ばすとブーツの踵を合わせ、ビシッとした敬礼を決めてみせた。
上官であるミヤコに向けて報告――と評するには割と必死さの溢れた表情で、はきはきと求められた事の経緯について語りだす。
「いえすまむ！　こちらの魔族領から来たお嬢さんがこの工房に向かいたいが道が分か

らないという話でしたので、見回りがてら送り届けた次第です！」
「道……ってそんなに難しい場所でも無いと思うのだけど。大通りに面してるし」
「個人的な事情から大通りは可能ならば避けて向かいたい、との話でしたので一本逸れた街路から案内しました！　あくまで！　道案内です！　他意はまっったくありません！」
オレ達……というか主にミヤコに向けてあくまでこの状況になったのは偶然である、と主張する。
確認の意味もあって《陽影》に向けて視線を転じると、何故か彼女は頬を赤らめて目を泳がせた。
……おいコラ、一瞬相棒と眼を合わせてちょっとお互い気不味そうに眼を逸らしたろ、見てたぞ。どういう事だ。
色々と説明を求める視線が複数突き刺さったのには彼女も気付いたのか、コホン、なんて小さく咳払いを一つして、帽子を取ると一礼する。
「まず、《刃衆（エッジス）》の長殿はお初にお目に掛かります――魔族領西方にて領地を預かる《宵闇の君》、その従者として仕える《陽影》と申します。今回は《大豊穣祭》における主の名代として帝国にやって来ました」
聖女の御二方も、御姉妹壮健なようで何よりです、と最後に付け足し、以前に見た貴

公子然とした立ち振る舞いを思い出させる、スマートだが嫌味の無い所作で自己紹介と再会の挨拶を一気にしてのける。

恰好自体はブラウスとスカートにケープを羽織るというまんま女性の服装なのに、それでも違和感が少ないのは彼女にとって普段からの染み付いた動きだからだろう。

……二年前と違って胸元にやたらとデカいもんが付いてるせいで、王子様ムーブ自体は流石に綻びが出て来てるけどな！

弾力のあるメロンサイズの双丘が《陽影》の一礼に合わせて揺れるのを見て自分の表情が引き攣りそうになるのが分かる。

「二年でこんな……ふ、不公平過ぎる……」

思わず、といった様子で小声で呟かれた妹（おとうと）の言葉には同意しかない。成長期とかそういう次元の話じゃないだろこれ……！

こういった方面で妬んだり羨んだりといった事の少ないアリアも、流石にこんな短い期間に男性特攻なスタイルに進化を遂げた知人に思う処があるみたいだ。

挨拶されたミヤコはというと……色々と疑問や困惑はあるのだろうが、友好的な態度である魔族の娘っ子に対して塩対応を取る様な奴じゃない。普通に自己紹介を返して握手を交わしている。

取り敢えず、これでこの場に居る面子は一通り知己になった訳だ。

じゃぁ本題だな、うん。
「よし、先ずお前は着替えてこい」
え、俺？　なんて怪訝そうに自分の顔を指さす相棒に向け、部屋の端にある衝立で仕切られた試着用の着替えエリアを指さしてはよいけ、と指示する。
場合によってはこいつをこの場で正座させるコースも有り得る。ただの試着なのか購入済みの品なのかは分からないが、スーツを汚したり皺をつけたりするのは止しておいた方が良いだろうしな。
滅多に見ないコイツのフォーマルスタイルだ、もっと近くでじっくりたっぷり見ていたいけど……周りに余計な奴らが多すぎる。
ここは我慢するところ……未購入ならオレが買って、屋敷に帰ったら着させて鑑賞会するけどな。
なんならオレも同系統の品を買って二人で御揃いっぽくしたって良い……考えただけで夢が広がるな！　この世界にカメラが無いのが悔やまれるぞ。
このタイミングで着替える事が解せないのか、首を傾げて仕切りの方へと向かう相棒の背を見送り――ちゃっかり付いていこうとしたアリアの襟首をふん捕まえた。
「おい、なんでナチュラルに一緒に衝立の向こうに消えようとしてんだお前は」
「いや、にぃちゃん服の畳み方とかちょっと適当だし、スーツに皺が付かない様に手伝お

うかと……」

「却下に決まってんだろうが！　サラっとそれらしく着替えを覗く理由をつけんな！」

「の、覗いたりしないし！　それに着替えなら前に見た事あるし！　今更だよ！」

初耳だぞコラァ!?　何時の話だ！　オレに黙っていつそんな羨まけしからん真似をした!?

アリアが最近抜け目ないのは分かり切った話ではあったが、入れ込んでる男の生着替えの拝見を妹に先を越されたとか、姉貴的にはスルーし難いぞ……！

『治療』をしてきた時期に、色々と見てるだろうとかもっとスゴい事をしてるだろう、なんていう意見もあるかもしれないが、それとこれとは別なのだ。

前世の性別――男だった頃の視点で言うなれば、エロ本や１８歳未満お断りな映像作品を所持してるからと言って、自分の好きな娘の着替えシーンと聞いてプレミア感を感じない奴はいるだろうか？　つまりはそういう話である。

「少し前だよ。《半龍姫》様がにいちゃんの身体を精査したときにちょっと……」

「霊峰に行ってた時期かよ……」

あのときはジャンケンで負けた身ではあったし、アリアを代わりに留守番させる、なんてのも気が引けたから結果的にはアレでよかったとは思ってるけど……五右衛門風呂の件といい、随分と嬉し恥ずかしなイベントを楽しんで来たみたいだな。大陸最高の

秘境兼危険領域に行ったってのに殆どバカンスみたいなノリじゃねーか。
折角戦争も終わったんだし、小難しい事は抜きでオレもあの龍の御姫様ともう一度話くらいはしてみたい。
アリアの話じゃ向こうも仲良くしたいとは思ってくれてるみたいだし、何時になるか分からないけど、機会が巡ってきたら霊峰に行ってみたいもんだ。勿論、相棒も一緒に。
ちょっと思考が逸れたが、気を取り直してこの場にいる面子をぐるりと見渡す。
オレ達二人の会話を興味深そうに聞いていたミヤコと《陽影》、それと少しずつじりじりと応接間の扉に向かって移動しているアンナに、にっこりと微笑みかけてやる。
「オホン。初対面同士の挨拶も終えたし、あの馬鹿は一度引っ込んだ――じゃ、すこーしお話を始めようか、特にミヤコ」
「いや！　私はもう仕事に戻らないといけないんで。あとは皆さんでどうぞほんとマジで」
殆ど言い被せる様にしてオレの言葉を早口で遮ったアンナが素早い動作で扉を開けようとするが、ガチャガチャとドアノブを捻ってからその手応えに悲鳴をあげた。
「って開かない!?　これひょっとして外側から障壁――この魔力はアンタかローガスゥ！　隔離作業はせめて私が離脱してからやれぇ！」
ふむ？　経緯はよく分からないが、どうやら部下が外から魔力障壁でこの部屋を隔離

してるらしい。
　オレにしろミヤコにしろ、ちょーっとだけ尖った空気を出してたからそのせいかもしれない。
「まぁ、折角だ。アンナも同席すれば良いさ……お前もちょっと怪しいしな、こう、色々と」
「そうね、ローガスさんがこの部屋を障壁で覆ったのは危険物扱いされてるみたいでちょっとアレだけど……この際丁度良いと思っておきましょう」
　二人で同時に頷き、改めて向かい合って対峙する。
　予想外の事が多くて大分会話が遠回りしたが、そもそもはこっちが本来の目的だ。
「――さて、こっちの言いたい事は分かってるよな?」
「分からない、と言ってあげた方がいいのかしら?　何も疚しいことはした記憶がないもの」
　ほう、この期に及んで言うじゃないか――イイ根性してんなコラ。
　腕を組んで自分より高い位置にある顔を睨み付けるオレと、腰に手を当ててそれを負けじと見下ろしてくるミヤコ。
　自分にとって何よりも大切なモンを取り合ってる、という間柄ではあるが……これが普通の一般人や並みの騎士だったりしたら、オレが威嚇したらイジメみたいになってし

まう。

そういう意味では遠慮や手加減の必要が無い分、やり易い一面はあるのかもしれない。

絶対本人には言ってやらないし、ましてや相棒に関して何かを譲ってやる気なんてものは更々無いんだけどな。

「……姉君と隊長殿は、その、あまり仲が良くないのかな？」

「いや、友達ではあるんだよ？　なんというか、ト○とジェリーというか……まぁ猫と鼠というよりは竜と虎なんだけど……」

互いに無言で威圧（プレッシャー）を相手に与え続けていると、アリアと《陽影》がそんな会話をしているのが耳に届く。誰が仲良く喧嘩してるってんだ。そもそもこっち生まれの奴にはそのネタは通じないだろうに。

ちなみにアンナは開かない扉に張り付いて「ひぃん、なんで私ばっかり」なんて半泣きで呻いている。

「他の隊員が見回りやらパーティー会場の護衛に精を出してるのに、隊長殿がお休みってのはどうなんだ？　もう祭りの開催日も目前だろうに」

「交代で休日を取得していったら私が最後になった、というだけよ――報酬の先渡しは前々から決まっていたから、先輩に一緒に来てくれるようにお願いしたの」

「ふぅーん……なら折角の休みだ、半分仕事みたいな事してないで自室でゆっくり休んでろよ」
「お気遣いどうも、でも心配はいらないわ。確かに半分は仕事だったけどもう半分は……で、デートみたいなものだし」
最後に少しばかり照れた様子で抜かすミヤコに、思わず口元が引き攣る。
相手が平然としているのにこっちが動揺丸出しにするのも負けたみたいでムカつくので、極力平静を装って引き攣った口の端を皮肉の笑いで誤魔化した。
「デート、ねぇ。アイツにその認識があるかは疑わしいよなぁ。独り相撲は空しいオチになりかねないぞ？　友人としてそこは忠告しておいてやるよ」
「男女二人で、互いに楽しんで同じ時間を共有する事がデートでは無い、というのならその通りなのかもね――私としては素晴らしい思い出ができたと思っているけど」
チッ！　真っ直ぐ工房に来たって訳じゃないのか？　案の定だ。
北区には歓楽街の類は無いし、観光客向けの施設なんかもめぼしいものは別の区画がメインだ。
この辺りの店や名所の立地条件からしても、ミヤコの性格からしても、そんなに積極的な事はしてないとは思うんだが……面白くない事には違いない。
「お、思い出か……何をしたのか気になる処だなぁ、えぇ、オイ?」

「それは秘密よ――でも、そうね。カップルフェアなんてものがこの世界の喫茶にもあるみたいなの、ちょっと驚いちゃった」
「カッ……!?　ッ、さ、参考までに何処でやってるのか聞いちゃったりしても良いでしょうかミヤコさん？」
　カップルフェアと聞いて驚愕と妬ましさで胸中が酷い事になるが、即座に考え直して精神状態を立て直す。
　単純な話だ。場所さえ分かれば後でオレも相棒を連れて向かえばいい。というか行きたい。その為ならば、眼前の恋敵に多少へりくだることも厭わない。
　そんな想いと共に殊勝な態度で問い掛けた言葉に対し、ミヤコの奴はニッコリと満面の笑顔で応じてきた。
「フフッ、勿論嫌よ」
「ハハッ、ですよねー……ぶっ飛ばすぞエ清楚ォ！」
　咆哮し、意図せず魔力放出しながら思い切り背伸びをして目の前の根性悪を睨み付ける。同じく魔力を漏らしながら負けじと鋭い目つきで見下ろしてくるミヤコ。
　額をぶつけ合うように至近距離でメンチを切り合い、接触した互いの攻性を伴った魔力が弾けて小さなスパークを撒き散らす。
「うわぁ。絨毯の焦げる匂いが……あとで弁償しないと駄目だねコレ」

「ちょっ、こ、これはそんな風に悠長に構えていて良い状況なのかい!?　貴女の姉君と隊長殿が武力で争ったら外交的にも物理的被害も洒落にならない気が……」

「おぉめがみよ、ねておられるのですか」

アリアの呆れた声と《陽影》の慌てた声、それとどっかの馬鹿みたいに白目を剥いてそうな片言のアンナの嘆きが聞こえるが、今は気にもならない。

聖都では途中でグラッブス司祭とシスター・ヒッチンに止められたせいで、決着も有耶無耶になったが……良い機会だ。ここで泥棒黒猫をＫＯして相棒の一番は誰かを示しておくのも悪くは無い。

ミヤコの方も考えは同じだったのか、いよいよ以て互いの魔力の放射量が激しくなってきた。

視界の端に、アリアが残りの二人を庇う様に前に出るのが映り、これで周りを気にせずやり易くなった、なんて考えていると。

「困ったなぁ……まさか出先でこんな状況に遭遇するなんて……彼と会えたのはいいけど、忘れ物の事も聞けていないし」

「道案内した先でこんな目にあうのは私も予想外よ……で、忘れ物って?」

アリアの背後に避難した《陽影》とアンナが、恐々とした様子で肩を寄せ合ってボヤいているのが聞こえ――。

「うん。この間、彼と再会したときにね。事が済んだ帰りに、下着を忘れたのに気付いて」
「そっか、大変ね。下着を……え”っ」

何の気無しに放たれた発言に、その場の全員が凍り付いた。
オレとミヤコは魔力の放出をピタリと収め、二人を背にしたアリアは硬直して瞳だけを見開き、会話を振ったアンナは唖然とした顔で固まる。
激突寸前の空気から一転、時が止まった様な静寂と沈黙が暫し降りた後、やがてギギギ、と錆の浮いたブリキ人形みたいな動きで皆の視線が《陽影》に集中した。
場の空気が急激に変化したことに戸惑いの表情を浮かべていた魔族の少女は、ややあって自身の言葉を振り返ったのか、一瞬で顔を赤くしてバタバタと忙しなく顔の前で手を振りだす。

「あっ、その、違うんだ！　いや、忘れたというか落としたのは事実だけどなんというか……」

――おぉい、なんか凄い魔力バチバチいわしてたけど何があったんや、大丈夫なのか？

彼女が釈明を始めようとした矢先、慌てて着替えて来たのかやや乱れてはいるが、何時もの旅装姿の相棒が戻って来る。

流石に場の異様な雰囲気を察したのか軽く息を呑んで、え、なにこの空気。こわい。なんてとぼけた顔でほざく馬鹿に。

「――にいちゃん、座って」

綺麗な……本当に綺麗な笑顔を浮かべたアリアが、床を指さして言う。

滅多に見ない威圧感を漂わせる様相の妹に、唖然とした相棒が何か反応を示す前に、同様の笑顔となったミヤコが同じ場所を指さす。

「座って下さい先輩。直ぐに」

基本、自分に対して当たりの柔らかい二人から放たれた言葉に、呆気を通り越して混乱した馬鹿がどういうことだってばよ、なんて呟いて目を白黒させていたが。

オレとアンナが同時に、そして無言で片足を持ち上げる。

全く同じタイミングで魔力強化と共に床に叩きつけた靴底は、ズドォ！　という床板

を破砕する音を立てて下の石床部分にまでめり込んだ。
「「座れ、駄犬」」
――はい座ります、駄犬でごめんなさい。
そうして《陽影》以外の、極上の笑顔を浮かべた四人から囲まれた馬鹿犬は、実に無駄のない滑らかな所作でその場に正座したのである。

見て分かる位にはあったまってるシアとそれに引っ張られたリア。
俺の知る限りでは面識は無かった筈の副官ちゃんとクイン。
四人が応接間に同時にやってきたと思ったら、わちゃわちゃとした会話が繰り広げられた末、シアに着替えてこいと言われ――戻ってきたらほぼ全員に囲まれて正座させられているでござる。
はしょりすぎて意味分からんって？　安心しろ、俺が一番意味が分からねーよ（白目

何時ぞやの聖殿で行われた中庭裁判の如く、同じ面子、同じ様なシチュで四人の女傑に囲まれている。

違うのは場所と……あとなんかおろおろしてるクインが居る位か。

あのときの様に腕を組んで仁王立ちになったシアが、不機嫌丸出しなのに笑顔という恐ろしい表情で見下ろしてくる。小声でボソっと「……石畳も石板も無いか」とか呟くのをやめて下さい（震え声

何故か分からんがお怒りの聖女様が言う通り、此処は遠く離れた外国の工房だ。あのときみたいに膝に重石を乗せられるような事は無い。

そういう意味ではマシな状況……と言いたい処だが、世の中そんなに甘くは無い訳で。

隊長ちゃんは言うに及ばず、あんときはそんなに怒ってる訳でもなったリアや、割とどうでも良さそうだった副官ちゃんまで機嫌が悪いので、総合的には中庭裁判より悪化してる。

最初はシアに匹敵するレベルで激おこだった副官ちゃんが、今では若干クールダウンして怪訝そうに首を捻っているのが救いと言えば救いか。

いや、機嫌の悪さ自体は継続中っぽいんだけど、それ以上に「解せぬ」と顔に書いてある程度には困惑しとる――この状況が解せないのは俺の方なんですけどねぇアンナ

さん！
正座しながら逃避気味に益体も無い事を考えていると、いよいよ以て過去の裁判擬きと酷似した空気で聖女の姉の方が口を開いた。
「さて。お前の魔族領の友人について、色々と聞きたい事は多いんだが……本っ当に多いんだが、先ずは何よりも確認しなきゃならない事がある」
そう切り出して、半吸血鬼（ダンピール）の友人の方を視やる。
「い、いや、待ってくれ金の聖女殿。本当に、さっきのは僕の言い方が悪かっただけで変な意味じゃ……」
「それを確認する意味も兼ねて、今の状況だ。悪いがコイツの弁護は一通り尋問が終わってからにしてくれ」
わぁ、空耳かなぁ。今思いっきり尋問って言わなかった？
視線を受けてクインが気後れしながらも何かを言い募ろうとするが……それをピシャリと遮って、シアは再びこっちに向き直った。
その白い指先が伸ばされ、見かけに反したやたらと力強い動作でがっしりと俺の頭を挟んで固定する。
「とりあえず、聞くべきことは一つだけだ――お前、《陽影》の下着を持ってるのか？」

ｏｈ……。

その超絶美少女と評しても良いであろう顔(かんぼせ)に、既に張り付けた笑顔は無い。

代わりあるのは、よく見れば薄っすらと口角が上がってるかの様な無表情。

個人的にはその魂を除けば一番綺麗だと思ってる空色の瞳は、光を吸い込みそうな位に見開かれている。

正直に言おう。

瞳孔開いててめっちゃ怖い。悲鳴を上げなかったのは奇跡に近い。

思わず目を逸らしてシアの背後にいる他のおこな面々を見るが……相変わらず、なんか複雑そうだけど不機嫌な副官ちゃんのお顔が一番怖くないって酷いと思うの（白目

隊長ちゃんは完全な能面。感情が抜け落ちたみたいな虚無顔だし、リアは……笑顔だった。床を指して座れといったときから、ずっと。

普段の楽しい、嬉しい、といった感情が溢れている明るいソレではなく、精緻な彫刻が浮かべている様な完璧な笑顔(アルカイックスマイル)――普段の笑顔との差もあってなんなら一番怖い。

何処を見てもおそろしい表情になってる美少女とか、どんな特殊な拷問なんですかねぇ！

「沈黙は肯定と見做すぞ」

痛ダダダダダッ!? ちょっ、やめて顔面が割れちゃうぅぅ。

おそろしく平坦な声と共に、俺の顔を鷲掴みにしたシアの指先がギリギリと食い込む。

これは不味い――なにが問題かって、実際に俺の部屋にはクインが別れ際に落として言った下着入りの袋が置いてあるのが不味い。

待ちたまえレティシア君！ 質問、質問させて！ 何でそんな質問が飛んで来るのか経緯を聞きたいんですけど！

殆ど両手使ったアイアンクローみたいにな状態で締め上げられている頭を回転させ、必死こいて現状について思考する。

本当の処はただの忘れ物を回収したってだけなんだが……状況から察するにクインが言い回しをトチってシア達が勘違いしたとかそんな感じだろうか？

幸い……でもなんでもないが、答え合わせは直ぐに行われた。

アイアンクローの威力が怒らせたときのミラ婆ちゃんと同等かそれ以上の領域に突入している聖女様が、噛み潰すような口調で質問に応じる。

「事が、済んだ、帰りにっ、下着を忘れたっ――どぉいう意味なんだろうなぁ、これはぁっ……！」

力が入り過ぎて区切って吐き出された言葉は、予想の五倍くらいぶっとんだ内容だっ

た。なにしてくれはるんクインさん（白目

言葉だけ取り上げてみるとどう見ても事後です、本当にありがとうございました。

その台詞をクイン当人から聞かされたシア達からすれば、俺の行動は以下の通りになる。

・友達と再会する。

・男だと思っていたその人物は実は女の子で、ナイスバディな美人に変貌を遂げていた。

・女だと分かった途端、再会したその日のうちに即行でアレな行為に及ぶ。

ついでに言うなら、下着をついつい現場に忘れるくらいに夢中になった、とかそんな風にも聞こえるな。

……アウトオオオオオオッ!?　論ずる迄も無く駄目なやつだこれ!?　傍から聞くと女の子だまくらかして宿に連れ込む屑野郎ムーブゥ!!

俺だって友達（ダチ）がそんな真似したら尋問くらいするわ！　というか普通に制裁としてラリアットキメる（確信

クインさん！　言葉のチョイスをミスるにしても全部丁寧に火薬たっぷりの地雷みたいなのを選ぶのは勘弁してくださいクインさん！

俺が言い淀んでいる間にも、クインの天然成分高めな発言を真実なのかもしれない、

と判断したのか皆の目付きが益々ヤバい事になってくる。
ちょっと待とうか！　誤解！　本気で誤解だぞ！　いや、下着の入った袋を拾ったのは事実だけど！
誤魔化したり虚偽を述べるのは悪手――というか不誠実に過ぎるので、正直にぶっちゃけつつ勘違いを訂正しようと声を張り上げた。
アイアンクローから両の掌での頬っぺたプレスに移行した金色の聖女様が、ギリギリと俺の顔を挟み込みながら眦を吊り上げる。
「やっぱり持ってんじゃねーか!!　証拠のブツを所持しておいて誤解も六階もあるか!!」
エラい迫力で怒鳴りつけられるが、それでもさっきまでのハイライトオフした目付きよりかはマシだ。怒り方がいつものシアに戻った事に内心で安堵しながら抗弁を続ける。
だからさ、クインが帰り際に落として行った忘れ物を拾っただけなんだって！
そもそも帰る直前までマイン氏族の工房にいたんやぞ。あそこに俺が行ったら、常にドワーフ達にべったりと張り付かれる事になるんだから、クインに対して妙な真似なんぞ出来る訳も無い。
これに関しちゃファーネス達に確認とってもらったって構わんぞ。

この場の面子の共通の知人であるドワーフの名を出して、証人代わりの人間なら山ほどいる、という事を強調したのか効いたのか、聖女二人と《刃衆（エッジス）》のトップ二人の放っておっかない空気が大分軽減された。

ここでやっと意見を聞かれるタイミングが回って来たのか、俺を含む全員の視線が、原因となる爆弾発言を火種付きで溢したクインに注がれる。

自身の発言が原因で、あわや応接間を爆心地として工房が吹き飛びかねなかった、と理解したのだろう。

反省の意を示すつもりか、俺の隣にちょこんと腰を下ろして並んで正座した彼女は、申し訳なさそうに丁寧に頭を下げた。

「うん、概ね彼の言う通りだよ。元からドワーフの方々の運営する工房に用事があったのは僕の方で、再会がてら彼に案内してもらった形さ――紛らわしい言い方をしてしまって本当にごめんよ」

「……そっかぁ、てっきりボクは、もうにいちゃんとの初めての交か……ゲホゲホ！　んんっ！　と、とにかくこっちの誤解だったみたいだし、頭をあげてよ《陽影》さん」

「そうね、勘違いで先輩にも《陽影》さんにも、ちょっとキツイ当たりをしてしまったし……此方こそおあいこという事で許してもらえるかしら？」

クインの謝罪を受け、激おこだった面々から少々バツの悪そうな空気が漂う。

別に元から仲違いしてたって訳じゃないんだが、とにかく互いに謝罪しあって、それを受け入れたことで一気に場の雰囲気は柔らかくなった様に思えた。

ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ……！　窮地を見事突破した……！　いやちょっと頑張ったぞ俺、グッジョブ……！

「あー……二人とも正座したまんまなのも何だし、そろそろ立ったら？　……アンタにも何と言うか、悪いことしたわね、ごめん」

何故か一番バツの悪い顔をしていた副官ちゃんが、頭をかきながら起立を勧めて来るのに甘え、よっこらせっとばかりに立ち上がろうとする。

そこで先程から無言のまま、考え込むように顎に手をあてて俯いていたシアが顔をあげた。

「勘違いだって言うのなら良かったよ――ところで、さっきのスーツはもう購入済みの品なのか？」

え？　おう。魔装処理してるらしくて結構なお値段だったけど、良い品なのは確かだからね。つい奮発しちゃったよ。

唐突な質問に、戸惑いながらも応えると、シアは「そうか」とだけ呟いて、何でも無さそうに言葉を続ける。

「祭りもまだ本番前だってのに、高いスーツ買ったり女物の質の良い下着買ったり、財布

の中身は大丈夫なのかよ?　肝心なときに手持ちが尽きました、なんて事になりそうだけど」

いやー、大丈夫よ。多めに持って来たし、ぶっちぎりでお高い買い物のスーツは取り敢えず頭金だけだし、それに比べりゃク、じゃなくて《陽影》の下着、は、ま……だ……。

「――間抜けは見つかったようだな」

ｏｈ……（二度目

再びのニッコリ笑顔となった聖女様が、俺の両肩に手を置く。

立ち上がりかけていた此方を、力を込めた腕で押し返して正座の体勢へと強制的に戻したシアは、今にも額か、さもなくば唇が触れそうな距離で更に笑みを深くする。

「この際だ。色々と聞きたい事まとめて聞くとしよう。ひとつひとつ、全部、な」

掴まれた肩が軋んで悲鳴を上げているのと、場の空気が振り出しに戻った事。

両方を感じ取った俺は、肝の冷える質疑応答がまだまだ続くと確信して白目を剥いた。

――数十分後。

何時の間にやら応接間を覆う魔力障壁が解除されていたらしく、ノックの音と共に扉が開かれた。

「失礼します――どうやら皆様、ある程度は落ち着いた御様子ですね。大陸最高峰の騎士や術者の方々の集う修羅場でこの程度の被害で済んだのは僥倖、と言って良いのでしょう」

入って来たのは、オレやアリアが聖都で買い物をした事もある衣類関係の高級店――そこのハーフエルフの店長にそっくりなお姉さんだ。

唯一はっきりとした相違点である眼鏡を指先で持ち上げ、焦げた絨毯や穴の空いた床を眺めて宣うその女性の言葉に、ミヤコとアンナの帝国騎士コンビがバツが悪そうな顔をする。

察するに此処の責任者か何かであろう彼女に、先ずミヤコが頭を下げ、その後ろに控える形でアンナも深々と礼をして謝罪の意を示した。

「その……ごめんなさい。部屋の修繕費はちゃんとお支払いします」

「そうして頂けると助かります。貴族のお客様にもお使い頂けるように整えた調度品も

多いので少々値が嵩みますが、そこはご了承下さい」

今回、聖女としての立場を使ってごり押しで工房内に入ったのでオレとアリアには面識が無いが、やはりあの店長そっくりだ。性格は大分差異があるが魔力の波形も似てるし、姉妹か何かだろうな。

……つい勢いで行動してしまったが、一旦落ち着いて思考も冷えれば罪悪感が湧いてくる。

応接間のアレコレを破損させたのは半分以上はオレだし、修理費用はこっちが出しとくか。アンナなんて只でさえ来月再来月は減給食らってるって話だから、流石に気の毒だ。

聖殿内ならともかく、流石に帝国で暴れる寸前だったのは不味かった。反省と謝意を込めてアリア共々、頭を下げておく。

「急に押しかけて部屋壊して、本当に申し訳ない。修繕費以外でも応接間が使えない事で発生した損失があったら教国の方に連絡してくれ。可能な限り弁償するよ」

「御迷惑をおかけしました、ホントごめんなさい」

「いえ、こう言ってはなんですが、想定より遥かに少ない被害でしたので。ただ、そうですね……聖女様方に当工房で手掛けた品に金貨を落として頂ければ、広告効果は修繕費を優に超えることでしょう」

生真面目そうな顔だが、言う事は中々商売人だ。とはいえ、何が詫びをしたいこちらとしては有難い提案だった。

それくらいなら喜んで、ってやつだ。相棒の来ていたスーツを見ても期待値が高いし、折角だからここで買い物していくとしよう。

姉妹(きょうだい)で彼女――工房長さんの提案を快諾し、そのついでにチラリと背後を見やった。

……そこには正座の体勢から横倒しになり、口から魂的なものがはみ出そうな位にぐったりした馬鹿たれの姿がある。

鈍感と朴念仁を足して二で割らない鈍ちん野郎ではあるが、流石に四人がかりでお仕置きを兼ねて口頭で絞り上げてやったのは堪えたみたいだ。

途中でその隣に正座する流れとなった《陽影》が、陸に打ち上げられたタコみたいにぐったりしてる相棒に心配そうに声を掛けている。

「だ、大丈夫かい？　その、僕の迂闊な発言のせいでごめんよ」

――いや、うん……シア達に帝国(こっち)でク……《陽影》と会った事をなんも話して無かったのは俺の落ち度だし、お前さんはあんま気に病まんでええよ。あ、落し物は預かってるから、そのうち取りに来て……。

過去にオレが想定していたよりもずっと距離が近いというか、親しい空気を出している二人に、再びムッとした気分がこみあげて来る。

……何気にコイツ《陽影》から本名を教えてもらってるっぽいんだよな。

下着うんぬんについては一応納得というか、事情を把握したが……チッ、そっちに関しても突っ込んで聞いてやればよかった。

魔族が自身の『名』を教えるのは、家族以外では余程親しくなった者か、特別な相手だけだ。

過去に女公爵が言ってた事を嘘や大袈裟の類と思った訳でもないが、こうやって実際にソレを見せられると腹立たしいやら頭が痛いやら。

二年前に見た分には、当人が相棒に女の子である事を明かそうとしてなかったし、魔族領在住という距離と交流頻度の点から見てもそこまで警戒する必要は無いだろう、なんて高を括っていたんだけど……我ながら見通しが甘かった、とんでもない伏兵が現れたもんだ、全く。

……流石にこれ以上増えたりしないよな？

不安に過ぎる危惧を抱えつつ、応接間の直ぐ外で待機していたらしい《刃衆（エッジス）》の面々がこっちと合流するのを眺める。

「いや、被害がこの程度で済んで良かった……副長もお疲れ様でした、一応聞きますがお

怪我は？」
「ローガス、次の訓練は覚悟しときなさい」
「何で!?　周辺被害を考慮して割と最適解に近い対応したと思うんですがね!?」
「おー……わんこ君が屍になってる。おひさー、生きてるー？」
「……もしやと思ってはおりましたが、やはり猟犬様は貴方でしたのね、スケさん。思い返せばあの街での一件、聖女様と四英雄の御一人と《聖女の猟犬》が相手だったとか、流石に豚野郎（バフナリー）に同情しますわ」
　人数も増えて一段と騒がしくなった集団を、一歩離れて見つめ――その多くが相棒との繋がりが齎したものである事に、少しの独占欲（ふまん）と大きな自慢（よろこび）を覚えて。
「レティシアー、工房の人がオススメの服を幾つか持ってきてくれたみたい。凄いよ、なんか水着っぽいのもある！　こっち来て見てみなよ！」
「お、マジか。どれどれ……」
　アリアのはしゃいだ声に応え、オレもその騒がしい輪に加わったのであった。

大豊穣祭

秋晴れの帝都の空に、軽快な火薬の破裂音と共に花火が上がる。

実際には打たれているのは空砲で、空にあがる光の華は幻惑魔法で再現したものらしい。日の高い内に本物を打ち上げても夜に比べて映えないからね。一方、魔法による再現なら日中でも結構綺麗なので良い采配だと思う。

陽が落ちたら本物を打ち上げるらしい。これまでは大砲や爆薬に全振りジャブジャブで注ぎ込まれていた火薬だが、こういった平和な使い方にもリソースが割かれるようになったってのは感慨深いものがある。

大豊穣祭、開催当日。

城下を見渡せる王城のバルコニーから、皇帝陛下を筆頭に教国（ウチ）の教皇やら各国や各種族のお偉いさんやらが一同に集まり、開催宣言をするということで、それを眼にしようと王城近くの区画には大勢の人達が詰めかけていた。

元から人口という点では人類種国家においてぶっちぎりだった帝国の首都だが、今は観光客も合わさってどっから湧いて出て来たんだと思う程に街中がごった返しとるな。どこぞの夢の国みたい。

当然と言うか、我らが聖女様二人もお偉いさん達と一緒に開催宣言の場に出席する。

大勢の要人が集まる場だ。邪神の信奉者達は勿論の事、普通の人間相手にだってテロの類を警戒せにゃならん。

そういう点では、参加者にシアとリアが混じってるのは多くの人間にとって安心要素の一つとなるだろう。聖女の護りの硬さと圧倒的な回復魔法は、邪神の上位眷属にだって容易に崩せるものじゃないしね。

何かあった場合のガードもそうだが、反撃の攻め手も問題無い。

だってお偉いさんの中には《魔王》と《亡霊》まで混じってるし。《亡霊》の方は今日中に魔族領に帰るって言ってたけど。

ウチの聖女二人とあの鳥と兜が揃ってる時点で信奉者でも「クソゲー乙」つって踵を返しそうな戦力ではあるが……アイツらはゲスト側であるし、お偉方の警護を任せる、なんてことをする筈も無く。

王城では騎士達が厳戒態勢で警護に当たってるし、俺も現在進行形で警備に参加中だ。

と言っても、俺が現在待機してるのはバルコニーどころか王城ですらない。

じゃぁ何処か、と言うと……王城にほど近い位置に建てられた大きな聖堂――そこにある尖塔の天辺に鎧ちゃんを完全起動した状態でお座り中であります。

聖都の大聖堂ほどでは無いとはいえ、ここの教会施設も相当に大規模だ。そこのいっちゃん高い塔の先端なんだから、そら見晴らしも良い。王城やその周辺を警戒するのにはうってつけの場所だ。

直線距離ならシア達が出て来るバルコニーとそう距離も無いし、完全起動状態なら跳躍して秒で駆けつける事が出来るだろう。

此処を待機場所に指定されたときはテクニカルないじめかと思ったが、鎧ちゃん込みの俺の能力を加味してみれば中々良いポジションではなかろうか。

難点を上げるとすれば、人目につきやすいって事だな！

尖塔のてっぺんに人が立ってりゃそら目立つ。平時ならそこまででも無いかもしれんが、祭りの開催を報せる花火が上がってる今、空を見上げる人は多いし。

今も眼下にいる大勢の民衆や観光客――こっちを指さして声をあげてる人達の多いこと多いこと。

俺だけだったらやっぱり羞恥プレイ目的のイジメじゃねーのこれ、と思う処だが、やや離れた位置に建つ、別の建物の尖塔には隊長ちゃんの姿がある。

腰に佩いた湾刀に手を当てて静かに佇み、凛とした表情で王城を見据えるその姿は、尖塔の上なんていう藁の上にダイブする暗殺者くらいしか縁の無い場所の特異性もあって、強キャラ感半端無い。

名の知れた自国の英雄というのもあって、足元の民衆の中には歓声やら黄色い声を上げて隊長ちゃんの名を叫んでいる奴もいた。

一切が耳に入らない、と言わんばかりに、キリッとした表情でバルコニーから視線を外さず、待機を続ける隊長ちゃんであるが……うん、あれは恥ずかしさを職務に集中して誤魔化してるだけやな！

ガワこそ凛々しさを保ってるが、俺的には非常に可愛らしい。眼福眼福。

ぐるりと周囲を見回してみれば、王城周辺に存在する高さのある建物の頂上部分には、俺達みたいに何人かの人間が待機してるのが見えた。

お、あそこに居るのはネイトかな？　更にその向こう……ありゃ《狂槍》か。こっからじゃ遠すぎて表情までは分からんが、死ぬほど不本意そうでワロス。屋上の縁でダルそうにウンコ座りしとるわ。

位置と距離的な問題で他に誰がいるのかは把握しきれんが、ひょっとしたら副官ちゃんとか他の《災禍》もいるのかもしれん。

まぁー、此処まで露骨だと帝国……というより皇帝陛下の意図も分かる。

護衛というより、示威行為――この《大豊穣祭》には、これだけの面子、これだけの戦力が常駐してるんだぞ、というアピールだ。

開催国である帝国を筆頭に、各国の人外級やそれに近いレベルの名の知れた強者がこの祭りに関わっている。

邪神の軍勢の残党にしろ、何某かの反意を抱く人間の集団にしろ、妙な真似してくるなら友好関係にある国の、これだけの面子が総出で潰しに行くぞコラ、という分かり易い脅しだった。

わざわざ高い場所で強キャラムーヴさせてるのは……なんじゃろ、民衆への受けが良いのもあるだろうが……意外と陛下の茶目っ気とかかもしれんな。あの人、ちゃんとメリットがある提案ならば、面白そうだから採用、とかノリの良い一面もあるし。

実際、ここからバルコニーとその周辺を見張るってのは位置的にも結構悪くないんだよな。人外級の実力者なら方法は個々に違えど、この程度の距離は即座に潰せるか、そもそも攻撃の射程圏内だったりするし。

ちなみにガンテスは現在教皇の爺さんの後ろに控えてる。すぐ傍で侍る護衛も必要だろうし、そもそもあのおっさんでは尖塔の上とかには立てない。重量的な問題で。

後は……開催式の場にはサルビアも参加している、というのもあるだろう。帝都（こっち）に到着するなり、二人の出会いを根掘り葉掘りウキウキ顔で聞いていた教皇（ジジイ）が気を廻したの

であろうことは容易に知れる。
午後にパレードの予定もあるけど、そっちは個人の武力に依らない軍事力や兵力のアピール、って事なんだろう。というか、現在高所に待機してる面々だとパレードへの参加とかは普通に嫌がる奴も多そうだしね。俺もそうだけど魔族領の面々とかは特に。
暇つぶしも兼ねてつらつらとそんな事を考えていると、その間にも広げていた知覚の網に異色の感覚が掛かった気がして、そちらに視線を向ける。
大まかな方向へ適当に送った視線が、彷徨う事無くその人物を捉えたのは、単なる偶然だったのか、それとも――。
地上にいる民衆……尖塔の頂上にて鎧ちゃんフル装備で待機する俺を発見して、騒ぐ人々の一人と眼が合う。
旅人が好むフード付きの地味なマントを羽織ったその人物は、あり触れたブラウンの髪と青みがかった瞳をした、一見してただの旅してきた観光客、といった出で立ちの男だ。
周囲と違うのは、此方を見るその目付き。
その双眸は他の大勢――珍しいポ○モン見つけたみたいなノリで興奮した様子だったり、はしゃいでいたりする多くの面々とは違い、何かを品定めするような、探るような光を灯していた。

敵意や悪意とは違う、興味深い、面白い物を観察するようなその目付きに、俺が反応して見返している事に気付いたのか。

男は自然な動作で目を逸らすと、フードを深くかぶり直し、ごった返す民衆の隙間を縫う様に進んで人込みに紛れ、姿を消す。

過去にもあまり向けられた事の無い類いの視線――それを向けた男が奇妙な位に引っかかり、人の波の中に消えたその姿を探そうと、その周辺を意識して探知しようとした処で――王城前から大きな歓声があがり、そちらに視線を送った。

どうやら皇帝陛下による開催宣言が始まるようだ。直ぐ後ろにレーヴェ将軍を控えさせ、バルコニーへと進み出るその背後には、教皇の爺さんと三枢機卿代表としてシルヴィーさん、更にシアにリア、サルビアに《魔王》やら《亡霊》やらと、その他にも各国の重鎮が続々と続く。

繰り返すが敵意・悪意の類は感じなかったし、一旦置いておくか。

とりあえず先程の男の事は頭の隅に追いやり、警備に集中する。

バルコニーとその周辺へと意識を戻すと、開催宣言前の軽い演説が行われている最中みたいだ。

「……二年前まで、我らは戦争という名の種としての存続を掛けた戦いにひたすらに身を投じていた。父や祖父、更にその前の父祖より続く凄惨な戦いに終止符を打つことが

出来たのは、身分・出自を問わず、あの戦いにおいて身を粉にして己が為すべき事を為していた、全ての兵、全ての民、全ての者達のたゆまぬ努力あっての事だ」

魔法を使った拡声効果を抜きにしても、陛下の声はよく通る。

しかも今回は帝都全域に声が届く様、魔道具や魔導士を各区画や郊外にまで配備して拡声された演説が届く様に取り計らっているのだとか。

間の取り方、声の抑揚、身振り手振り、警護に集中せんといかんと思ってもついつい目が引き寄せられるそれらは、スヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルという男の才覚と、それを活かさんとする計算された立ち振る舞いが齎す、王の威風とでもいうべきカリスマ性があった。

こうやって演説を聞いてると、髭の長さがちゃんと生え揃って左右均等になったか気にしてる面白おじさんな一面はあれど、やはり人類種最大国家を自身の代でまとめあげた傑物なのだとしみじみ思うね。

「未だ戦いの爪痕は深く、その傷跡癒えぬ地もあろう。或いは、生涯癒えぬ傷を心身に抱えるものもいるだろう――だが、それでも……それでも我らには明日がある！　薄氷のごとき、いつ砕けるかも知れぬものではない、当たり前に続く未来が！　忌まわしき呪詛や汚泥を吹き払った、確かな先がある！」

皇帝陛下の演説に引き込まれた民衆は、黙して聞き入りながらも静かにそのボルテー

ジを上げているのが見て取れる。
　こら〆に入った時の爆発っぷりが凄い事になりそうだ。城下で人の波を整理してる衛兵さん達は大変そうだね。その衛兵も今は陛下の言葉にめっちゃ集中してる人が多いけど。
「此度の大祭はただの催しでは無い！　帝国の、大陸中の人類種国家の、勝利を告げる雄叫びなのだ！　傷を負っても、喪っても、それでも耐え……戦い抜いた末に掴み取った未来と、より強く齎されるであろう世界の恵みを享受し、その感謝と祈りを女神に奉る！　それを高らかに謳いあげる場なのだ――故に!!」
　最後に、ニヤリと笑った陛下は拳を天に突き上げ、開いた掌で振り下ろす様に横へと宙を切ると、高らかに宣言する。
「存分に楽しみ、歓び、騒げ！　余が許す！　――これより《大豊穣祭》を開催する!!」
　――瞬間、帝都中が水を打ったように静まり返り。
　一拍おいて、怒号の如き歓声と歓喜の叫びが爆発した。
　うおぉ……こりゃスゲェ。文字通り街中、国中がお祭り騒ぎってか。
　終戦直後にも喜んで大騒ぎは大陸中で起こった事なんだろうが、そのときは普通に死

んでた我が身としては今回のコレが初体験である。
膨れ上がる歓声と熱気の波が、尖塔のてっぺんである此処にまで伝わって来る様だ。
演説が終わると、バルコニーの縁周には招かれた各国代表が進み出て並び立ち、歓声を上げる帝国臣民や観光客達に向けて手を振っている。
教国を筆頭に今回の《大豊穣祭》に協賛した国々の面々だ。面識や見覚えの無い顔も結構いるが、そういった御仁にも少なからず歓声が届けられ、賞賛の声と共に名が叫ばれていた。
まぁ、一際大きな歓声を集めているのはウチの聖女様達なんですけどね！（自慢
二人とも、伊達に教国の看板兼人気職をやってない。
業務用スマイルではあるが、微笑んで手を振るその姿に絶叫染みた喝采を上げる奴も多い。
自身に向けられる視線と熱狂、その数と熱量に姉の方が若干押され気味みたいだが……皮肉無しで人気者の宿命、というやつだ。頑張ってくれレティシア君。
何度も『繰り返してる』割に、シアはこの手の笑って手を振る作業とかが苦手なんだよね。終わった後は大抵、頬が疲れた、とか言って自分の頬っぺたグニグニしてるし。
何気にリアの方がそつなくこなしてる感はある。あいつもあいつで別に得意って訳では無いんだろうけど。

意外と言えば意外なのは《魔王》だ。

戦時中は各国からハブられ気味だった魔族領ではあるが、影響力の強い南部においては何だかんだと魔族の保持している武力に世話になっていた小国も多い。

なので、魔族を中心に南部出身の者から歓声の声が上がるのは別段、不思議なことではないんだが……凄い大人しくしとるな。ふざけてバルコニーから民衆に向けてダイブする、手すりに立って変なポーズ決める、くらいはやるかもと思ってたんだが。

背後に控えてる《亡霊》が理由かね？　やらかしたら自分と一緒に強制帰還だ、くらいには脅し付けてるのかもしれん。お疲れさんです、マジで。

あ……《狂槍》が武器に手を掛けてる。此処からでも分かる殺気立った様子からして、あの鳥がなんかやろうとしたら躊躇なく槍を投擲する気だコレ。一応は護衛や警護の立場なのに自分トコの頭領を串刺しにする気満々すぎて草生える。

ちょっと気の毒なのはエルフの最長老殿――サルビアだった。

眼下を埋め尽くす大勢の民衆……これだけの広い場に密集する程の人の数自体、経験が無いだろうに、それが熱狂的な歓声を上げて一斉にその熱量を叩きつけて来るのだ。

普通に気圧された様子でキョドっている。振ってる手もぎこちない。

それでも悪い眼で見られないのは、見目麗しいエルフの女性という強みもあるからだろう。ちょっとでも帝国外の情勢を知ってる人なら、大森林のエルフが外界と交流を開

始したばかり、という事も理解してるだろうし。

まぁ、なんだ。何とか手を振りながらもチラチラとガンテスの方を見てるのが此処からだと丸分かりだが、そこはご愛敬、という事で。

バルコニーの方に民衆の視線が集中してる御蔭で、こっちに向けられる眼はほぼ無い。正直、そっちの方がやり易いので助かった。

城下の人々が落ち着いたら、次は手を振ってるお偉方が順繰りに簡単な挨拶をする予定だった筈だ。

それが終わったら、とりあえず開催式は終了。それまでは警備に精を出すとしよう。

なんとなく隊長ちゃんの方を見ると、彼女も偶々こっちに視線向けていたので軽く手を振っておく。

軽く会釈で返してくる彼女は、仕事中の凛々しい表情のままではあったが……祭りの空気に中てられたのか、少しだけ高揚してるようにも見えた。

「よぉーし、終わったぁ！　早速城下に遊びに行くぞ！」

大きな問題が発生する事も無く開催の宣言は終わり、王城でシア達と合流。

開催式で聖女御二人に、という事で宛がわれた一室にて、公的な場での聖女としての正装である繊細な刺繍の施されたヴェールを脱ぎ捨てると、シアは元気よく宣言した。

数日前になにやら知り合いが大勢集まる事となった北区の工房でのごたごた以降、ちょっと機嫌が悪いというか、難しい顔で考え込む事の多かった金色の聖女様だが……悩みは解決したのか、一旦忘れて切り替える事にしたのか。

今ではようやっと始まったお祭りに、軽い足取りを隠す事も無くウキウキとした様子だ。

ふむ。あのときの女性陣を集めた女子会的なものを一昨日の夜にやったみたいだが、それが切欠だろうかね？

そのときの俺はと言うと、行われるのが年頃の女子ばかりのパジャマパーティーの類だと聞いたので、野郎が同じ屋敷にもいるのもアレだと思ってガンテスを誘って魔族領の連中と夜通し飲みに行ってた。

なので、一堂に介したあの面々がどういうやり取りをしたのかは分からんのだが……シアだけでなくリアも機嫌は悪くない――寧ろ女子会の次の日は、上機嫌だけど挙動不審という訳の分からん状態だった――ので、まー悪い結果では無いのだろう。

姉と同じくヴェールを脱ぐと、リアが手荷物の中から真新しい厚い本……帝都案内書を引っ張り出して笑顔で掲げる。

「じゃーん！　これ見てよ、お祭りに併せて限定で特別発行された帝都案内書！　概要とか協賛国について以外にも、見所とかイベント日程とかが分かり易く纏めてあるんだ！　限定品らしくてちょっとお高めだったけどすごく参考になるよ！」
「おぉ、この間、文官の人が言ってたやつか。でかしたぞアリア」
ほう、そんなモンがあるのか。
本を手にしたリアを中心に、三人で長椅子に座って帝都案内特装版を覗き込む。
「やっぱり催し物としては、一番デカい闘技大会が大きく扱われてるな……混雑する、とは言うけどオレ達はゲスト枠の貴賓室から観戦するから、その辺は全然心配はいらないんだけどな」
俺も大会中の警備があるからなぁ……あ、でも、交代時間に観客の中に知り合いを見掛けたら、そっちで見るかもしれん。
「先生も解説実況するって話だし、ボクも皆でワイワイ観戦する方が良いなぁ……立場的に無理なんだけどね」
額を突き合わせて本の頁をめくっていくと、中央の噴水広場を中心として構成される屋台街についての記述が目に留まった。
「ふむふむ……祭りの前から結構レベル高い屋台が多かったけど、やっぱり本番となると気合が違うな……ってオイ、これ！　これ見てみろ！　レシピ提供の処に聖殿（ウチ）の料理

長の名前があるぞ！」

なんですと？

シアの叫びに反応して、俺とリアが指さされた部分の記述に眼を通すと――マジだわ。なんだよ、内緒でこんな事やってたのかよあの人。

「うわ！　メニューも凄いよ。日本のお祭りの定番が結構ある！」

続いてリアが上げた驚きの言葉に、シアと二人で何ィ!?　と叫んで提供レシピ一覧を食い入るように見つめた。

うおぉ、マジだよ！　タコ焼き、お好み焼き、アメリカンドックにかき氷……流石にわたあめは作り方以前に材料の砂糖が高額なので無いが、お祭りに沿うメニューは全ブッパって感じで名を連ねている。

料理長本人は美味けりゃ正義！　みたいなスタンスだけど、流石に聖殿の食堂で出してるメニューはある程度場所柄に合わせてるからな。粉もの系はあんまり出ないのよ……それだけに期待が高まる。

俺達とって何年ぶりになるかも分からん懐かし過ぎるラインナップを眺めたシアが、感嘆混じりの唸り声を上げた。

「ううむ……ここまで大っぴらにレシピを放出したって事は……ソースやマヨネーズの作り方は既に帝国に投げてあるんだろうな」

……全力で協力する代わりに、マメイさんの味噌と醤油を融通してもらうのを条件にしたとか？　料理長ならやるやろ、それくらい。

「かもな。だとするとグッジョブと言わざるを得ない」

三人でうんうんと頷き合う。

ちなみにその味噌であるが、屋台街で使用される事は無いみたいだ。まだ量産の準備に入ったばかりとか聞いたし、来年以降の祭りに期待か。その前に聖殿に届いて欲しいが。

「こうしちゃいられない。物珍しさで売り切れるって可能性も十分にあるぞ」

「そうだね、お祭りの期間、ずっと料理長の提供したメニューが出てるって保障もないし」

うむ、善は急げというやつだ。

シアとリアが立ち上がり、俺も同意を示して席を立ち。

互いに顔を見合わせ、一つ頷き――以心伝心、心を通わせて目的の品を叫ぶ。

「お好み焼き！」

「かき氷！」

――タコ焼きぃ！

……なんか心通わせた割には全員バラバラな答えだったが、ともかく！

取り敢えずは初日は食い気に走るぜヒャッハー！　とばかりに、俺達は足早に部屋を飛び出した。

さぁ、祭りの始まりだ！

不穏の影・其々の邂逅

帝都王城――皇帝の執務室にて。

「やられたな」

届いた報告書を机の上に放り投げ、部屋の主であるスヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルは苦虫を噛み潰したが如き表情で腕を組んだ。

部下より届けられた報告書を手ずから己の君主に渡した赤髪の偉丈夫――レーヴェ将軍が同じく苦々しい様子で頷く。

「件の男爵、やはり行方が知れぬ儘のようです……念の為、現場での捜索は行っておりますが」

「一応は続けろ。が、人手は減らせ。見つかったとしてもどうせ生きてはおらん」

ケントゥリオ侯爵家の長男であるノエルに、改竄した情報を渡す事で彼の行動を操作しようとしていたと思わしき、貴族の男。

外遊先に出掛けているという事だったが、《大豊穣祭》に間に合う日程で帝都に戻る筈

であった件の男爵は、帰路において行方不明となっていた。
乗り込んだ馬車は凄惨な破壊痕が刻まれており、一見して野の魔獣に襲われたかの様にも見えるが……定期的に兵が巡回を行い、危険な魔獣や野盗の類は間引かれている整備された街道で起こる事故にしては不自然に過ぎる。
タイミング的にも、何某かの作為が存在すると判断するのは当然だろう。
男爵が何者かによって消されたのは間違いない……問題は。
「木っ端とはいえ、こうもあっさりと切り捨てる、か」
曲がりなりにも帝国貴族。立場や縁、派閥と言った面から切り捨てるのではなく、物理的に消す、という時点で相当な面倒が発生する筈だ。
それを苦にもしない程度には強い影響力――武・財・権の何れかを有しているのか。
或いは無理矢理に消してでも男爵の口を塞ぎたかったのか。
事前の人物調査では典型的な小物、といった風情の男だ。侯爵家の嫡男に接触して良い様に転がそう、等という胆力があるとは思えない。
それだけに、ソレを指示していたと思われる背後の人物がいる、と推測がされるのだが……此処まで直接的かつ短絡的に情報源を消しにかかってくるのは予想外だった。
「外遊先があの三枚舌の領地の一つである街、というのも出来過ぎだな」
「露骨な程にあやつに疑いの目が向く流れですからな……どういう方法にせよ、魔獣が

襲った様に見せかけた工作だというのなら痕跡が残る筈です。現在はそちらを中心に調査を進めさせております」

あの三枚舌伯爵……シュランタンが行う工作にしては杜撰が過ぎる。

状況的にも己が真っ先に疑われるだろうに、このような安易な殺しを行う様な男であれば、スヴェリアとて厄介な政敵、と認識する筈も無かった。

「そもそもシュランタンは余程有害でも無い限り、無闇に人的資源を削る事を嫌う――其処だけはまぁ、奴の数少ない美点と言っても良いだろうよ」

「……賢には賢の、愚には愚の使い道がある、でしたかな。それも結局は己が儲ける為の理屈なのでしょうが……此度の男爵の件があの蛇めのやり口とは違う、とは吾輩も感じておる処です」

レーヴェにとっては相性という面でとことんまで合わない男ではあるが、それだけに普段と異なる行動を取れば違和感には気付くもの。

今回の一連の出来事に関しては君主であるスヴェリア、実弟のティグルの両名から”伯爵は疑わしいが下手人では無いかもしれない”と言われていたが……ここに来てレーヴェ自身もそれを強く感じる事となっている。

入り婿の男爵とはいえ、爵位持ちから死人が出たという時点で面倒な話になるのは確定したようなものだ。

入念に準備を進めていた祭りがようやっと始まったばかりだというのに、厄介な問題が浮上した事にスヴェリアは頭痛を堪える様に額を押さえ、しかめっ面で唸り声を上げる。

「表向きには事故と見えるのと、現時点では国内の派閥争いの域を出ない話なだけマシか……各国から賓客を迎えているというのに、そちらに飛び火しては堪ったものではないからな」

実際の処、このゴタゴタの初手は教国の聖女とその守護者に特大の火の粉を浴びせる処だったのだから笑えない。

これ以上のトラブルはスヴェリアとしても御免だ。可能なら速やかに片付けたい話ではあるが……下手人の尻尾を掴めていない現状、それが困難であるのも事実だった。

「とにかく、だ。《大豊穣祭》の間に片付けるのは無理でも、問題が悪化して祭りに影響が出るのは避けねばならん。一度、トニーの奴を今の案件から引かせて此方に当たらせるか」

「では、一時的に引き継ぎの処理を行います。弟ならば人員の選出も速やかに終わるでしょう」

今回の問題に関する対応――何度目かになるソレを端的なやり取りで決めると、皇帝とその右腕である将軍は、他にも大量に積み重なった互いの職務を全うすべく、速やか

に動き出した。

「いいですか？　こういった土地勘の無い場所では、迂闊に動いてはいけないのです。リリィはそれを身をもって体感しました」
「ふーん……おねーちゃんもまいごなの？」
「迷子ではありません。だた、ちょっと道が分からなくなっただけです。おねえちゃんは迷ったりしないのです」
　多くの人々が待ちに待った《大豊穣祭》が開催され、観光客や地元の者で溢れ返った街中。
　その喧噪から少し離れた場所にある、やや奥まった路地裏の一つ。
　二人の少女が路地に積まれた木箱に並んで腰掛け、細い棒の先端についた飴を舐めていた。
　一人はピンクブロンドの髪を結い上げた、幼いエルフの少女。
　しっかりとした旅装に大きな肩掛け鞄を下げた彼女は、鞄から取り出し、自身と隣の

少女に渡した飴……所謂ペロペロキャンディーと言われる大ぶりの品を攻略している。
　もう一人は、少しばかりくたびれた犬のぬいぐるみを抱えた少女――年の頃からして幼女といってもよいであろう小さな子供だ。
　髪をリボンでまとめ、少々着慣れない様子の余所行きの服に身を包んだその恰好は、精一杯のおめかしをして帝都にやってきた観光客である事が伺えた。
「む、葡萄味ですか」
「おふぃーのはれもんー」
　会話からしてちびっ子二人が迷子である事は明白なのだが、保護者とはぐれた子供の不安や悲壮感、といったものは特に感じさせず、のんびりと飴を味わっている。
「はぐれちゃだめだよってシスターが言ってたのに、おふぃーはまいごになっちゃったの。ぺとらはおこりんぼだからぜったいおこる」
「……何度もはぐれる様ならお尻ペンペンして良いと、連絡をとった義母様が《狂槍》様に告げていました。なのでリリィは迷子になる訳にはいかないのです」
「……？　おねえちゃんもまいごでしょ？」
「迷子ではありません。ちょっと不覚をとっただけです」
　コテン、と首を倒して不思議そうに下から覗き込んでくる幼女から目を逸らしたエルフの少女がキャンディーに歯を立て、その固さに少しだけ眉をひそめた。

「硬いですね……舐める分には良いですが、小さくなってきたら噛む派のリリィには少々合いません」

「歯がとれちゃうから、アメはかんだらダメなんだよ？」

風味からして蜂蜜などではなく、果汁と砂糖を贅沢に使った品だ。大きさも加味すればお菓子としては中々良いお値段がしそうではあるが、少女――リリィとしては故郷の大森林で帝国の騎士様からもらっていた蜂蜜飴の方が好みであった。

ちなみにこのキャンディー、元は一緒に帝国にやってきた大人達の一人……その一番でも一番偉い人物から「姫！　献上品です！　出来れば食する際はワタクシめの目の前でペロペロしてください！」というセリフと共に渡された品である。

お願いを無視してしまった形だが、迷子になって泣きそうになっていたちいさな女の子とわけっこしたと言えば、怒ったりがっかりするどころか喜ぶであろうことはリリィにも何となく予想がついた。なので問題無し。

「とにかく。待っていればリリィを引率してくれている方が迎えに来てくれます。その方達にお願いして、オフィリの保護者の方々を探すとしましょう」

「はぁーい」

年長（おねえちゃん）ムーヴが出来る事が新鮮なのか、ちょっとドヤ顔で提案するリリィの言葉に、幼女（オフィリ）も素直に返事をして、再び二人でキャンディーに集中する。

一人で泣きそうになっていたオフィリを見つけ、宥めながら一緒お菓子を食べる時間は、将来はパーフェクトおねえちゃんを目指すエルフの少女としてはご満悦のひとときなのだが……その実、彼女も絶賛迷ってる最中である。本人がどう否定しようが迷子である。

迎えにきた保護者に叱られる事はほぼ確実だろう。現実は非情なのであった。

それから幾ばくも時が経たない内、リリィがまだまだ残るキャンディーから顔を上げる。

「むむっ……オフィリ、こちらに来てください」

「んー？　どうしたのおねーちゃん？」

「誰か来ます。複数人で、かなり荒っぽい足音です……入り組んだ路地裏ですし、悪い人達かもしれません」

弓の名手が多い事からも解かる事だが、五感の内、特に視力と聴力が優れたエルフ故か。

リリィは、路地の奥の方から慌ただしい無数の足音が自分達の居る場所へと近づいているのを感知し、オフィリを抱えて木箱の上から下ろす。

万が一に備えてさり気なく魔力を練りつつ、自身より小さな女の子を護らんとフンス、と鼻息も荒く気合を入れると。

慌ただしい足音がオフィリにも分る程にドタドタと路地裏に響き――そこから十秒もしない内に幼女を背に庇うエルフの少女の前に飛び出して来たのは、外見上の年齢はリリィと大差ない、薄汚れた身形の勝気そうな少年であった。

つんのめり、転がる様に走り出てきた彼は、目の前で身構えている二人の少女を見て目を丸くする。

「――ッ!?　なんでこんなトコにエルッ……いや、それはいい！　お前ら、後で訳は話すから付いてこい！　観光客か他所のグループの奴かは知らないけど、ここにいたらダメだ！」

慌てているというより、焦燥に駆られている様子で少年がリリィの腕を掴んだ。

少々荒っぽいが、その眼には少女達を案じる色がある。なんとなくそれを察した二人は、はて、どういう事かと顔を見合わせて首を傾げた。

「出来れば事情を説明して頂けると助かるのですが……あ、リリィはリリィ＝エルダと申します」

「自己紹介なんてしてる場合じゃないんだよ!?　と、とにかく来いって！　もう追いついて……！」

少年が律儀にツッコミを入れると同時、リリィが耳に拾った荒っぽい足音――その本命が少年の背後から現れた。

「ようやく追いついたぜガキィ！　ったく、ちょこまかと逃げ回りやがって！　こっちはノルマが押してんだよ！」
「無駄口はいい、さっさと連れて行くぞ――っと……お仲間のガキか……追加が入るとは運が良いな」
「おい、こいつエルフだぞ！　確か他種族のガキにはハーフでもボーナスが出るって話だったよな？　こいつはツイてるぜ」
路地に放置された木箱やゴミの類を蹴り飛ばしながら足音荒く雪崩れ込んで来たのは、数人の男達だ。
服装といい、顔つきや立ち振る舞いといい、有り体に言ってゴロツキ、といった体の連中である。
男達は追っていたらしき少年と――更には彼が庇う様に後ろ手を翳したリリィ達を見て、喜悦に顔を歪める。
「クソ、しつこいんだよ！　近寄るんじゃねぇよクズ共！」
手近な棒きれを拾い上げて突き付ける少年に対し、嘲る様に品の無い笑いを浮かべた男達は好き勝手に語りだす。
「口の悪いガキだな……暴れられても面倒だ、引き渡す前に軽く躾けとくか」
「路地裏に住んでる親無しなんてこんなモンだろ。せめて俺達が有効活用してやらねぇ

とな」
「エルフのガキは傷付けるなよ？　無傷の方が査定が上がるかもしれん」
「だな。じゃ、早速……」
最後に頷いたゴロツキが、健気に少女二人を庇って棒切れを構える少年の腹を無造作に蹴り上げようとして――。
唸りを上げて飛来したキャンディーが眉間に直撃し、「ブゲァ!?」と短い悲鳴を上げて男は仰向けにブッ倒れた。
「すとらーいく、です。やっぱり硬いですね、投擲具としては有効でした」
「わぁー……すごいすごい！　おねーちゃんかっこいい！」
特段表情を崩すことなく、グッとガッツポーズをしてのけたのはエルフの少女である。
魔力強化を用いた大人顔負けの投擲を見せた彼女は、「兄(あに)さま直伝、さいどすろー投法です。いぇーい」とドヤ顔で背後を振り返り、幼女に向かってピースして見せた。
無邪気に拍手するオフィリとフンス、と鼻息を洩らして自慢げに胸を張るリリィ。それと呻き声を上げて額を押さえる倒れたままの男を見比べ、他のゴロツキと少年は唖然とした顔を晒して硬直する。
奇妙に弛緩した空気が流れる路地裏で、いち早く我に返ったのは少年だ。

手にした棒切れを放り捨てると、右手でリリィの腕を引っ掴み、左手でオフィリを抱え上げて一目散に表通りの方向へと走り出した。
数秒おいて、慌てて追跡を始めたゴロツキ達の怒号を背に、少年は表通りまで息が続けばよい、とばかりに全力で足を動かす。
「急げ！　通りに出ちまえば連中もおおっぴらに攫うなんて真似は出来ない！」
「成程、これが兄さまの言う”三十六けーにげるにしかず”というものですね」
「知らねぇよ!?　さっきから誰なんだよそのアニサマってやつは！」
「わーっ、はやーい！」
「このチビもチビで余裕だな!?」
僅かな体力や息も惜しいだろうに、ツッコミを押さえきれないのは彼の性格だろうか？
とはいえ、必死の逃走が功を奏してか、はたまた男達の言う様に路地裏に住む孤児であるが故に、ここらの地理を知悉している為か。
狭く、大人にとっては走り難い――そしてなるべく距離の短いルートの路地を選んで走り続ける少年の目に、祭りでごった返した表の通りが、立ち並ぶ建物の隙間同士から見えて来た。
「よしっ、もう一息でっ――！」

焦燥で強張った顔を明るくし、最後のラストスパートとばかりに走る速度を上げる。
だが、好事魔多しと言うべきか。
加速した瞬間に横手の曲がり角から飛び出て来た人影――革鎧を着た男にぶつかりそうになり、少年は慌てて急制動を掛けた。
「ちょっ、うわぁっ!?」
「うぉ――っとっと!?」
あわや激突、といった処で男――青年の方が反応し、少年と少女二人は彼の懐に飛び込む形でキャッチされた。
「くそっ、放せよ!」
「おいおい、なんだか知らんが暴れるなよ」
あと少しだったのに、と歯噛みしながら必死に男を振りほどこうとする少年に、青年の方は困惑した様子で振り回される腕を押さえ込む。
ゴロツキというより冒険者らしきその男は、この辺りでは見た事の無い顔だ。
少年からすれば、わざわざこんな路地裏をうろついている見覚えの無い荒事慣れしてそうな大人など、自分達を追って来ている連中の仲間か、同類だと判断しても無理からぬ事であった。
「おい、お前らだけでも走れ！　通りまでもう直ぐだ！　行け！」

必死になって抑えられた腕を振りほどこうと藻掻く少年だったが、男の背後から聞こえて来た声に動きを止めた。
「ちょっと、何があったのよアザル……って、もしかしてカイル？　ウチのリーダーと取っ組み合って何やってんの？」
「イルルァねーちゃん!?」
互いの顔を凝視した後、指を差し合って名を呼び合う二人――少年と、弓を背負った斥候職（スカウト）らしき女性に、アザルと呼ばれた青年が首を傾げた。
「知り合いか？」
「……あたしの古巣――孤児のグループに居た当時、一番年下だった悪ガキよ。こんな表通りに近い場所でどうしたの？　オルカンは？　いつもセットで行動してるでしょアンタ達」
懐かしそうに、だが訝し気に問いかけるイルルァに、カイルと呼ばれた少年が何かを応える前に、後続のゴロツキ連中が追い付いて来た。
「このガキ共、舐めた真似しやがって……！　痛い目にっ……！」
「なんだ、アンタらは」
額、というか眉間が腫れあがって赤い瘤の出来ている男が、ナイフを片手に目を血走らせて場に飛び込んできて……武装した冒険者――アザルを見て慌てて立ち止まり、背

に刃物を隠した。
　男達の身形や雰囲気から、少し前に北方で相手にした悪徳貴族の私兵連中と同じものを感じ取ったアザルとイルルァが、警戒感も露わに少年少女の前に出る。
「こんな子供を相手に穏やかじゃないな。刃物まで出して何をするつもりだった？」
「……おいおい、そいつは誤解ってモンだぜ、若いの」
　五、六人程の明らかに真っ当な類の人種では無い男共は、薄ら笑いを浮かべてアザル達の背後の子供達に向け、手招きする。
「俺達は西区にある商会の従業員さ。こいつらは店の丁稚でね、店の金を持ち逃げするなんていうオイタが過ぎる真似をしたんで、俺達が連れ戻しにきたって訳よ」
「嘘ね。ホラを吹くにしても、もっとマシなものにしなさいよ」
　取って付けた様なゴロツキの言葉を一刀両断すると、イルルァが躊躇なく腰のダガーを抜く。
「後ろのおチビちゃん二人は明らかに観光客って感じだし――何より、こいつ（カイル）はあたしの身内よ。そんな真似をする位なら、命がけで魔獣の素材を手に入れる為に郊外に出る位はする奴だって知ってるっつーの」
「一応聞くが、コイツらの言う事は本当なのか？」
　背後を振り返ってアザルが問いかけると、子供達の首が一斉に横に振られる。

だよな、と苦笑い一つ浮かべると、彼は腰の剣を鞘ごと外して構えた。
「まぁ、どう見てもお前らは街のゴロツキで、子供を誘拐しようとしてる悪漢にしか見えないな。怪我したく無いならその場に膝を着きな――気絶した人間を何人も屯所に引き摺って行くのは骨が折れるんだよ」
戦闘態勢を取る冒険者二人に、荒事に慣れているとはいえ、一見して街でくだを巻いている程度の男達は怯んで後退る……筈だった。
彼らは怯むどころか薄ら笑いを浮かべたまま、ニヤニヤと顔を見合わせ合て小馬鹿にするように鼻を鳴らす。
「分かっちゃいねぇなぁ……そういう事にしておく方がお互いに損が無いし、利口だって言ってんだよ。屯所に連れてくだぁ？　やってみろよ、後悔するのはお前さん達だぜ？」
猫が鼠を嬲る、と表現するには聊か以上に可愛げも品も足りてない顔つきで、余裕綽々で顎をしゃくり「分かったら見なかった事にして回れ右しな」等と吐き捨てる男連中。
だがアザルとイルルァからすれば、これもまた見た覚えのある態度であった。
有り体に言えば、虎の威を借る狐――自身の背後にある組織や権力者を笠に、他者を嬲って喜ぶ小物のソレ。

言葉から察するに、彼らに強力な後ろ盾（バック）があるのは想像に難くない。
貴族か、何かの犯罪組織か、はたまた先の虚言の通りの大きな商会の類か。どうであれ、一介の冒険者にとっては敵に回すにはあまりにも無謀が過ぎる相手なのは確かだ。
自分達の優位を疑っていない男達に対し、二人の反応は実に端的である。
「イルルァ」
「りょーかい」
頭目に名を呼ばれた斥候（スカウト）が腰の鞘にダガーを戻し――次の瞬間、一瞬で背から外した弓を番える。
エルフの戦士に劣らぬ程の練度を誇る早射ちで、先頭にいた額の腫れた男の脳天に矢をぶっぱなした。
近距離でのそれに反応出来る筈も無く、矢じりを潰された非殺傷の矢が直撃した男は、呻き声すら上げずに後方に倒れ込んで昏倒する。
「なっ、て、てめえっ……！」
「生憎、貴族だの大商会だの、その類に絡まれるのは経験済みなんでな。ここで退く様ならあのときにそうしてるし――戦友だといってくれたあの人達に面目が立たないんだよ」
即座に次の矢を番えるイルルァと並び立ち、涼しい顔でアザルが告げて見せると、二

ヤついていた男達の表情が初めて焦りに上塗りされた。
「クソがっ……！　正義気取りのお上品な冒険者って訳かよ……おいっ」
「あぁ、分かってる。たった二人で馬鹿な選択をしたな、後悔するなよ」
舌打ちすると、仲間内で目配せを受けたゴロツキの一人が懐から小さな笛を取り出し、力いっぱいに息を吹き込む。
路地裏を吹き抜ける様に鳴り響く甲高い音に、冒険者二人は特に動じる事無く改めて武器を握り直した。
「呼子か。即座にお仲間を呼ぶとか小物っぷりもここまで来ると清々しいな」
「問題無いでしょ。この場所なら応援来るにも時間も掛かるだろうし、その前に全員ぶちのめせば」
口汚く罵りながらナイフやショートソードを抜き放つ悪漢共に対し、一気に踏み込もうとしたアザルの隣に並ぶ小さな影が一つ。
「お手伝いします」
「……いや、気持ちは嬉しいけどな、お嬢ちゃん。子供がこんな荒事に加わるのは駄目だ」
「ちょっとちょっと、危ないから下がってなさいって。カイル、この娘抑えときなさい」
「む、これでもリリィは実戦を経験済みです。義父様（とと）と義母様（かか）も上手に出来たと褒めて

下さいました」

「マジかよ、エルフって思ってたより物騒な種族なのか……」

急に始まった冒険者達とエルフの少女との押し問答に、相対する男達は焦れた様子を見せつつも静観する。

時間が経てばこの辺り一帯で『仕事』をしている仲間が駆けつけてくるが故に、珍妙なやり取りで時を浪費する冒険者と子供達を嘲笑いながら。

だが、幸運の女神――も、兼任する創造主は彼らに微笑まなかった様だ。女神としても好みはあるだろうから当然なのかもしれないが。

「此処にいましたか、オフィリ。探しましたよ」

冒険者二人が庇う少年少女――更にその背後、表通りの方角から声が掛けられる。

先ず相対する悪漢共がアザル達の肩越しにそちらを注視し、警戒しつつアザルとイルルァ、子供達も背後を振り返った。

表れた第三の闖入者は、老年のシスターだ。

スマートなデザインの眼鏡を掛けたその人物は、鉄の棒でも飲み込んだ様に真っ直ぐに伸びた背筋のまま、その場に居る者達を鉄面の如き表情で見渡す。

特に睨み付けている訳でも無いのだが、謎の圧迫感――幼い頃に激怒した親を前にしたときの様な感覚を覚え、全員が全員、背筋が伸びたり首を竦めた。
「あ、おばーちゃんだ！」
「全く……怪我の類は無いのは安心しましたが、あれほどペトラと手を離しては駄目だと言っておいたでしょう――ブランも大層心配していました、後でしっかりと叱られる様に」
「!?」
唯一、シスターの姿を目に留めて眼を輝かせたこの場の最年少――オフィリであったが、続く”おばーちゃん”の言葉にこの世の終わりと言わんばかりに顔が青褪める。
抱えた犬のぬいぐるみを締め上げて涙目になる幼女の傍まで歩み寄ると、シスターはそこで別の顔見知りがこの場にいる事に気が付いた。
「……リリィ、でしたね？　何故このような場所に？」
「お久しぶりです、ミラ様。リリィは魔族領の方々の御供という形でお祭りを体験しにやって参りました」
「ふむ……」
目の前のシスターはつい最近、リリィが兄(あに)さまと呼ぶ青年の従者を務める為に教国の本拠地――聖都大聖殿に逗留する際に面識を得た人物だ。

嘗ての教会最高戦力にして現御意見番、ミラ＝ヒッチンはエルフの少女の言葉を受け、腕を組み、黙したまま思案した。
もう一度、ぐるりとこの場の面子を見回して軽く目を瞑る。
「凡その状況は把握しましたが、一応の確認をしましょう……リリィ、この場に居る他の大人達について端的に述べる事は出来ますか？」
「了解しました。端的に、ですね」
ミラの言葉に頷いたリリィは先ずはアザル達を指さした。
「助けて頂いた恩人で、立派な冒険者さん達です」
「お、おう……」
「直球過ぎて照れるわね……」
少女としては忌憚のない意見だったのだが、少しばかり気恥ずかしそうに二人の冒険者が目を泳がせる。
それには頓着せず、次いで、相対する男達を指さした。
「児童誘拐犯、です」
先をも上回るドストレートな言葉に、児童誘拐犯共の顔が一斉に引き攣る。
身も蓋も無いがこの上なく分かり易いリリィの言に、ミラはもう一度「ふむ」と呟き――一歩、前にでた。

「大方は予想の範囲内でしたね……冒険者の御二人には、私と親交ある子供達がお世話になったようで。礼を述べさせて頂きたい」
「あ、いえ。成り行きみたいなものですし……」
「身内を庇うついでだし、気にしないでもらえると……」
静かな、それこそ湖面の如き静けさを保つ鉄面皮に真顔で見つめられ、軽く頭を下げられ、アザルとイルルァはなんだかとんでもない事をされてる様な気分になって借りて来た猫の如く振舞わざるを得なかった。
二人の言葉に頷きを以て返すと、ミラは更に歩を進め、武器を抜いたままである男達の前に立つ。
「――さて、貴方達には幾つか聞きたい事があります」
「な、なんだってんだ、このババアは」
「ふむ、同じ品位に欠けた発言でもあの子のそれと比べ……非常に腹が立ちますね」
「だ、だかっ――」
眼前にて冷えた目付きで見つめて来る女傑に、気圧されている自身を誤魔化す様に更なる悪罵を放とうとした男の言葉が強制的に途切れる。
傍目には軽く脳天に向けて落としたようにしか見えない手刀は、突如、男の頭部が重量百倍になったかのような動きで一直線に地面へとめり込ませた。

鈍い音が路地裏に轟き、真っ直ぐに起立したポーズのまま頭から逆さに地へと突き刺さった男のオブジェが出来上がる。
素人目では意味の分からない凄まじい技を前に、どうやっても抗うことすら不可能である事を理解したゴロツキ連中が目を剥き――その口から必死さに溢れる静止の言葉が飛んだ。

「ま、待て！　俺達に手を出すと後で後悔する事になるぞ！　なんせこっちには……！」
「知りません。そんな物は殴ってから考えれば宜しい」
轟音が響き、オブジェが増える。
「わ、分かった！　そこのガキ共は諦める！　いや、金輪際手を出さないから待っ――！」
「知りません。言いたい事があるなら殴ってから聞きましょう」
轟音が響き、オブジェが追加される。
「待って、お願い待ってください!?　さっき聞きたい事があるって言ってブッ!?」
「知りません。そんな物は殴り倒してから聞けば良いのです」
轟音が響き、オブジェが更に並ぶ。

地面に前衛芸術（アート）の如く生える人体の群れを眺め、イルルァがポツリと呟いた。
「なんだか既視感があるわ、この光景……」
「お前もか。俺もちょっとそんな感じだ……」
アザルも恐々とした様子で、深く、ふかぁーく頷いて同意を示す。
状況も、相手も、戦い方も、性別すらも、何もかも違うが。
蹂躙、と呼んでも差し支えないであろう圧倒的な無双劇場は、嘗て彼らが北方から聖都へと向かう街道で見た、とある筋肉武僧の大暴れを思い起こさせた。
「……俺、二度と焚きだしのシスター相手に悪戯したり悪態ついたりしないよ」
顔を青褪めさせたカイル少年が、イルルァの背中に隠れる様にしてオブジェと化していく男達を眺め。
「リリィも既視感です。またまたまた真っ暗です」
「おふぃーもまっくらー」
小さな女の子には刺激が強い、と判断されたのか、大人二人に掌で視界を塞がれた少女と幼女の暢気な感想が轟音響く路地裏に零れ落ちる。
ほどなくして、その場のゴロツキを地面に突き刺し終えた女傑が、路地の奥へと視線を向け、目を細めた。
「――応援を呼んでいましたか。では、悪漢への仕置きを続けるとしましょう」

呼子に応えて駆けつけたは良いが、眼前で繰り広げられる鬼の様なシスターによる折檻に完全に腰の引けていた人攫い連中の顔から、一斉に血の気が引く。

力を漲らせた五指をゴキリ、と鳴らすと、何処か生き生きとした様子でミラは更なる一歩を踏み出したのだった。

裏方仕事はツラいよ。

トニーがその少年について報告を受けたのは、《大豊穣祭》が開催されて二日目の朝だった。

皇帝によって命じられた、戦災孤児を中心とした身寄りの無い未成年の保護政策、その実態調査。

教会の運営する孤児院などを廻って聞き取りなどを行うものの、求められているのは推定される孤児の数に対して、保護出来ている人数が少なすぎるその理由・原因である。

調査しようにも取っ掛かりすら無い上に、そもそも孤児の実数もしっかりと算出できていない。始める前からやや手詰まり感があった。

それでも地道な情報収集の結果、かろうじて分かったのは路地裏などで集団を形成している孤児のグループが、国からの保護を拒んでいる場合が多い、という事だ。

定期的に行われる教会の炊き出しには結構な数の子供達が集まる、という話なのだが、ソレらを行う聖職者達が保護施設の話を切りだすと、途端に態度を硬化させる子が多いのだとか。

比較的平均年齢の高い、アウトロー染みた集団だと国の保護下に入る事を拒む場合も多々あるので、そういった声がある事自体は特段おかしいものではないのだが……ちいさな子供が文字通り身を寄せ合って出来たグループまで反応が芳しくない、というのは少しばかり腑に落ちない話である。

ある程度の年齢ならば、ちょっとした雑事や簡単な仕事で日銭を稼ぐ事も出来るだろう。

国に仕える身としては看過する訳には行かないのだが、市場での盗みやスリなどといった違法行為によって生計を立てている場合もある。

だが、それら全てが難しいであろう小さな幼子では、国の保護を受けねばその日の食事や寝床にも困る場合とてあるのだ。

そういった子供達を多く抱えるグループでさえ保護を拒むというのは、その判断をせざるを得ない”何か”があるという事。

或いはそれが『取っ掛かり』になるかもしれない、と判断したトニーは、路地裏に住む孤児達に聞き取りを行おうと接触を試みたのだが……現時点では芳しい結果が出ているとは言い難かった。

警戒させない様、充分に距離を取って会話を試みたにも関わらず、トニーが話しかけた瞬間に蜘蛛の子を散らす様に遁走する子供達。

迷いも躊躇も無い実にスピーディーな動きは、予め見ず知らずの大人が接触してきた際に取る行動を仲間内で周知させている事が伺える。

また、トニーの人相が孤児達の間で広まるのも早かった。考え無しに路地裏に踏み入ろうものなら、それを目撃していた孤児が別の子供達にも言い広め、皆で早々に隠れてしまう。

入り組んだ路地を文字通り庭としている土地勘の高さ。

子供であるが故に、その小さな身体は無数の隠れ場所や大人では通れない狭い場の移動を可能とする。

それらを存分に駆使して、接触を持とうとする度に上手い事躱されるのには内心で舌を巻かざるを得なかった。

勿論、本気になれば捕縛は難しくないであろうが……トニーとしては、自分の姿を見て逃げ出す子供達の表情を見ると、僅かなりとでも乱暴な手段に出るのは躊躇ってしまう。

顔を強張らせ、必死になって走るその姿には、単なる大人に対する反発や不信感以上の何かが見える。

その様な顔を見てしまえば、裏方とはいえ騎士の端くれとして、力づくの手段など取れよう筈も無かった。

それでもなんとか有用な情報を手に入れようと帝都中の路地裏を廻る内、ガラの悪い連中が子供を相手に人攫いの様な真似をして路地裏に出入りしているという情報が入って来たのは、ここ数日の事だ。

路地裏の子供達以外からの情報収集も怠っていない。その様な連中が以前からのさばっているのなら、もっと早く耳に入る筈だ。

つまり、子供を攫い、集めるなどというふざけた真似をしている連中が出て来たのはつい最近、という事になるが……。

過剰に大人――特にその路地の近辺の住民では無い者を警戒している子供達の怯えた表情と、その人攫い共が繋がった気がした。

攫うという事は、それを欲する者がいるという事。

その黒幕にどの様な背景があるにしろ、あっさりと行動を把握される様な質の低い連中を数雇いしたのは近日の事なのだろうが……ひょっとしたら、路地裏に住む孤児達の誘拐――それ自体は、もっとずっと前から、密やかに行われていたのではないか？

華やかなる帝都にも僅かながら存在する悪所。

そういった陰に位置する場所の話とはいえ、行政側に気取られる事無く誘拐行為を行ってきたのだとすれば、それは相当に手慣れた……事を荒立てず、且つ効率的な手法によって行われたものだろう。

――そう、例えば。

「……戦後に国の方針として打ち出した、戦災孤児の保護。それらを行う行政側の人間を名乗って接触し、子供達を一所に集めて、纏めて出荷、って処ッスかね」

呟いた自身の言葉に「胸糞悪ぃ」と、吐き捨ててトニーは顔を顰めた。

現時点では多分に予想や勘によって補足された推論でしかないが……皮肉な事に「外れていて欲しい」という個人的な心情とは別に、おそらくはそう的外れな考えでも無いだろう、という嫌な確信も抱いている。

調査を命じられた、戦災孤児の保護数とその実態。

保護を受けるべき子供達がそれを拒み、常であれば不自然な程に大人を警戒している事――しかもこれが、見知らぬ大人では無く行政側の人間――騎士であるトニーを殊更に警戒していたのだとすれば、先の嫌な推論の辻褄が合ってしまうのだ。

何より、この一件からは嫌な気配――邪神の信奉者達を相手にするのとはまた別の『人の悪意』とでも言うべき匂いを、彼は感じ取っていた。

この様な悪事が皇帝の膝元である帝都で行われている、というだけでも問題だが……トニーとしては自身の上司である黒髪の少女と銀髪の少女が、これを知れば怒り狂うと同時にひどく心を痛めるであろう、という事のほうが気がかりであった。

「折角のお祭りなんスから、出来れば隊長たちにはこのままそっちに集中して楽しんで

欲しいッスねぇ……」

可能なら、自分とレーヴェ将軍の廻してくれた人員だけで片をつけてしまいたい話だ。

隊長にしろ、副隊長にしろ、ほんの数か月前――トニーが”旦那”と呼ぶ青年がひょっこり女神の御許より帰還してくるまで（これも大概出鱈目な話ではある）は、隠し切れない陰を見せる事があった。

傍目に分かり易い・分かり辛いと、それぞれに違いはあったが……生き残った多くの者達と同じく、二人が心の裡に癒えぬ『傷』を負っていたのは察するに余りある。

大戦において多くの敵を討ち取り……そしてそれ以上に多くの人間を救った彼女達が二年もの間、勝ち取った平和を心底楽しむ事の出来ない日々を過ごしていたのだ。

トニーとしては、もう暫くはようやっと巡って来た楽しい日々を、二人の上司に満喫して欲しいのである。

とはいえ、攫われた先で孤児達が現在も無事であり、一刻も早い奪還・保護が必要であるのならばそうも言ってはいられないだろうが。

そんな訳で、皇帝からの命ではあるが個人的にもやる気を見せて任務に当たっていたトニーだったが、今日になって別件の調査で帝都外へと出る様にと新たな命令が下ってしまった。

期限は三日後。代わりの人員への引継ぎを考えれば実質あと二日である。
彼の所属する部隊の特異性からするに、急な任務先の変更などザラだ。三日もあるならまだマシな部類ではあるのだが……自身の推論を確かな事実へと変える為の証拠や証言を集める為の日数としては、甚だ心許ない時間だった。
そこで重要となるのが、冒頭でも述べた少年だ。
件の誘拐犯共から逃げおおせた孤児を保護した者達から、騎士団に通報があったというのだ。
被害者の少年にとっては紛れも無く災難なので、手放しに喜ぶ事は出来ないが……交代要員への引継ぎまで期日が差し迫っている現状、非常に有難い情報源となってくれるかもしれない。
また、保護した観光客が中々に腕っぷしの立つ者だったのか、誘拐犯共を数多くひっ捕らえて騎士団に突き出したのも朗報である。
子供達に下衆共の手が伸びなくなったというのが一番重要だが、連中もまた貴重な情報源となる――無駄に数だけは多いし、何人か壊しても予備があると考えれば、迅速な情報収集が期待できそうだ。
善は急げとばかりに、トニーは少年を保護している旅行者達が宿泊している宿屋へと向かった。

本来なら被害者の少年は騎士団が責任を以て預かるべきなのだが、当の少年がそれを拒否しているらしい――推測を後押しする要素がまた追加されてしまった。

とはいえ、結論を出すにはまだ早い。先ずは聞き取りを行ってからである。

間違っても被害者の少年や善意の協力者である観光客に警戒されたり、ましてや脅えさせない様に、細心の注意を払った態度を心掛けで宿を訪れたトニーであったが。

「……だからよぉ、別に帝国(テメエら)に責任を問うなんてかったるい真似をするつもりはサラサラねぇんだ――ただ、最近この街の路地裏に大量に出てるっつー蠅共をプチッとするのに眼ぇ瞑れって言ってんだよ」

「《狂槍》殿、街の治安を守る為に日々奔走している職の方に向けて、それは無体な願いだと思いますが」

「うるせぇぞミラ。いいよなテメェは、糞共を叩き潰して多少なりとも憂さ晴らしが出来たんだからよ。こっちは連れてるガキに舐めた真似された上、報せを聞いて剣担いでその場に向かおうとしたウチの頭領(アホ鳥)を押さえ込む羽目になったんだぞコラ」

宿の一室を借りて行った聴取の場。

そこにはトニーと向かい合う形で宿の備品である木造りの椅子に腰かけた男女二名。

その女性の方の背後に隠れる様にしてこちらを睨み付けているのが、件の被害者――カイルという名の、今回聴取を行う筈の少年だ。

先程から苛立ちを隠そうともせず、原因になったクズを一匹残らず潰すくらいはしねぇと溜飲が下がらねぇんだよ、と吐き捨てたのは、転移者以外では珍しい黒髪を伸ばした魔族の男である。

凶悪と評しても良い面相は不機嫌を剥き出しにして歪み、腕に抱える己の痩身を越える程の長槍は、持ち主の苛立ちを表わす様に石突部分で宿の床を乱れたリズムで叩いていた。

そんな男を諌めているのは、教会の僧服を身に纏った老年のシスターだ。

老いなど微塵も感じさせない、椅子に腰かけていても分る背筋の伸びた立ち姿からは、生真面目さや実直さと言ったものがこれ以上ない位に見て取れる。

トニーですら気圧される程の物騒な空気を纏う魔族の男性に睨み付けられているというのに、鼻梁に乗ったやや細いデザインの眼鏡を指先で調節する彼女の表情には欠片の動揺や怯みも見当たらない。

そんな二人を視界に収めつつ、難航している間に交代の時間が迫る任務に対し、やっと大きな進展があるかもしれないと意気込んでやってきた《刃衆(エッジス)》の隠し裏方(刃たる青年は——。

(帰りてぇ……)

ここ最近は落ち着いていた筈の胃がシクシクと痛みを訴えて来たのを感じて、早くも

回れ右して宿を出たくなっていた。

聴取や交渉など可能な限りは避けたい人物二名に挟まれ、トニーは胃の辺りを擦りながら改めて眼前の両名について脳内で情報整理する。

魔族領最高幹部《災禍の席》の第五位、《狂槍》。

頭領たる《魔王》を抜きにすれば、その好戦的な言動と凄まじい戦闘能力で有名な人物だ。

というか、魔族の戦いに関する凶悪な逸話の何割かはこの御仁の武功が元となっている。

とある戦線の邪神の信奉者達の四肢を残らず潰して、地を這いずって逃げる連中を嗤いながらじっくり時間を掛けて串刺しにしただの、邪気によって狂暴化し、敵の手駒となった魔獣を力づくでぶちのめして隷属させ、飼い主である信奉者を喰い殺させただの、残虐ファイト上等なエピソードの枚挙に暇がない。

作業的に、最大限効率的に信奉者連中を『処分』していった結果、血生臭い戦場伝説を打ち立てた《聖女の猟犬》とは同種にして真逆――敵対する相手に対しての嗜虐性に

よって過分に恐れられている男であった。

不確定な情報だが、自身の上役……部隊の顧問であるネイトと師弟関係にある、なんて話も聞いた事がある。この話題を振ると顧問殿の柔和な笑顔の質が反転するので、おそろしくて詳細は聞けていないが。

実際の処はどうであれ、顧問殿が嘗て世話になった御仁、という時点でトニーとしては頭が上がらなくなるのは確定だ。

物騒な逸話も加味すれば絶対に関わりたくない人なのは確かである。今現在目の前に居るが。

年配の女性の方は、もう言うまでもない。

嘗て聖教会最高戦力とまで謳われ、邪神大戦における《四英雄》の一人――その筆頭として称えられたシスター・ミラ＝ヒッチンその人である。

トニーが子供の頃に引退したものの、長年人類種の兵士・戦士達の旗印として戦い続けて来た、今現在も多くの畏敬を集める人類種女傑ランキングで最上位に位置するであろう御方だった。

もうこの時点で挨拶には最敬礼で以て弁えた態度を示すべき御仁なのだが、当人は現役時代から一貫して「自分はただのいちシスター」と主張してるらしい。そんな理屈が通る訳ないだろいい加減にしろ！

妙な処で自己評価が辛いのは、弟弟子である《聖女の猟犬》と似通った点である。
そう、弟弟子。弟弟子、だ。
トニーが”旦那”と呼ぶ青年の、姉弟子でもあるのだ、この方は。
更にいうなれば、こちらもまた部隊の上役……副隊長であるアンナが「絶対に怒らせたり逆らっちゃダメな人」と真顔で言っちゃう人物でもある。
先に述べた戦人として、英雄としての打ち立てた武功と、”旦那”と副長が揃って頭が上がらないという立ち位置。
総合すると、トニーからすればある意味では自国の皇帝陛下と相対するよりも緊張を強いられる人だった。
面識を得るのはおそろしく光栄なのだが、同時に可能ならなんかもうずっと会う事がなくても良かったと思うくらいには胃にクる。今現在目の前に居るが。
（マジで帰りてぇ……）
腹の痛みが強くなった気がして、トニーは呻き声をもらしそうになった。
本格的な聴取はまだ始まってすらいないが、大雑把な経緯は屯所からの報告で把握している。
直接的な手段で誘拐を試みる連中から逃走していたカイル少年が、迷子の女の子二人と偶然に遭遇。

そのままでは彼女達にまで被害が及ぶと判断して、三人で逃げていた処を知人の冒険者に出会って庇われる。

当然、それで引き下がる様な連中では無かったのだが、女の子達の保護者が助太刀に入る形で割って入り、誘拐犯達の鎮圧に成功した、という話だ。

報告自体に誤りは無いのだろう――女児二人の保護者がそれぞれ《四英雄》筆頭と魔族領の幹部だったというだけで。

そんな事を知る由も無く、いざ宿を訪れてみればコレである。

巻き添えになりかけた子供達の保護者としてこの二人が聴取の場に同席していたのを見た瞬間、回れ右して帰りたくなったのを誰が責められるだろうか。

「貴方からすれば不愉快な気分になるのは当然ですが、その物騒な気配は押さえて頂きたい。此処には粗暴な輩に拐かされる処だった子供もいるのですから」

「チッ……」

ミラの尤もな指摘と、彼女の背後に隠れた少年の表情を見て取り、《狂槍》は舌打ち一つして撒き散らしていた威圧混じりの不機嫌な空気を引っ込めた。

取り敢えずは黙り込む形で大人しくなった彼を見て内心で胸を撫で下ろしつつ、トニーは意識を切り替えた。

改めてこの場に居る面子を見回し、聴取を開始する。

「では、先ずは……我が国の民を護って頂いた事と、胡乱な連中によってそちらのお子様方に危険が及んだ件、帝国騎士として感謝と謝罪を」

丁寧に頭を下げる騎士の青年の言葉に、《狂槍》は興味無さげに椅子の上で足を組み、ミラはただ静かに頷く。

謝罪ついでに、報告にあった関係者がこの場において少々足りない事についても聞いてみた。

「……少年と知り合いだという冒険者達がどうしているのか、お聞きしても？」

「彼らはカイルから事情を聞いた後、仲間と共に調べ物があると言って街に出ました。乗り掛かった舟という事で、私が聴取への同席を変わった形になります――この子は国側の人間を警戒しているので、乱暴な態度を取るような方であれば私が追い返す、と約束して今回の事情聴取にも同意してくれたのです」

暗に「貴方がそういった類の人間でなくて何よりでした」と言われてる気がして、背筋が寒くなる。

人類種国家全体で見ても実力・規律共に高い水準にある帝国騎士団だが、数は僅かなれど横柄な態度の問題児がいない訳では無い。それが身寄りの無い孤児や国外の観光客相手ならば尚更に。

罷り間違ってその類がこの場にやってくる事が無くて良かったと、トニーは再度、内

心で胸を撫で下ろした。贅沢を言えばこの場に居るのが自分でなければ更に良かったのだが。

（にしても……調べ物っスか）

孤児と交流を持ち、屯所の牢にぶち込まれた誘拐犯達が喚きたてていた「自分達には後ろ盾がある」という言葉にも怯まず子供達を助けようとした者達だ。その気質が善性に依ったものである事は予想がつく。

おそらくは、カイル少年から今回の一件について説明を受けて自分達で独自の調査に乗り出したのでは無いだろうか？

腕前の程までは報告にあった内容からでは分からないのでなんとも言えないが、彼らからも聴取を行い、場合によっては協力する事も視野にいれるべきかもしれない。

選択肢の一つとしてそのような事を考えつつ、トニーは先程から一言も口を開かない少年へと眼を向け、穏やかなトーンを心掛けて口を開く。

「こんにちは、名前を聞いても良いッスか？」

「……とっくに知ってるんだろ、今更聞く必要あるのかよ」

皮肉を込めた、だが警戒感マシマシで露骨に距離を取ろうとする少年の言葉に、苦笑が浮かびそうになる。

幼い頃からグループを形成して生きて来た孤児達は、下手な大人より頭が回るし、た

くましい。
この少年もそんな類なのだろうと、少しばかり遣る瀬無い気分になりながら頭を振った。
「報告書にあった被害者の名前ってことで勿論知ってはいるッスよ。けど、君から名乗られた訳じゃない――名を呼びたいなら当人にそれを聞くのは対人関係における礼儀ってやつッス」
「礼儀……」
意味は知っていても、生きていく上で馴染みの薄いものであった言葉を向けられて、カイルが少しばかり困惑した様子でそれを反芻する。
そんな彼に向け、傍に居るミラが穏やかな口調で補足を入れた。
「目の前の騎士殿は貴方を礼儀を尽くして対話すべき相手だと、そう言っているのです――過去の経験からくる警戒を捨てろとは言いません。ただ、礼には礼を以て返しなさい」
彼女とカイル少年は今回の件が初対面だった筈だが、目の前で自分を攫おうとした悪党共を蹴散らしたシスターを、少年は少なからず信頼しているらしい。
躊躇いはあるものの、彼は一歩前に出ると自らの名を口にした。
「……カイル、ただのカイルだ。家名とかはあるのかもないのかも分からない」

「はいどうも。自分はトニー＝レイザーッス。家名に関しちゃ無い人だっているし、気にする意味は無いっスよ。自分だって、昔世話になった人に餞別がわりに貰って名乗ってるだけッスからね」
「……アンタも孤児だったのかよ」
「まぁそうみたいッスね。親無しになったのは小さな時分なんで詳細なんざ覚えちゃいねーッスけど」
　軽い口調で肩を竦める騎士に対し、少年は言葉の真偽を探る視線を向け……なんとなく、その言葉に嘘は無いのだと判断した様だ。
　僅かではあるが身体から強張りが取れたカイルに対し、トニーは膝をついて目線を合わせた。
「答えられる限りの事で良いんで、君に教えて欲しい事があるンスよ。正直、手詰まり感があって困ってたんで、助けてもらえると嬉しいッスね」
　聴取といっても少年は対等以上の情報提供者であり、あくまで自分は情報を提供してもらう側である。
　一環してそんな態度を崩さない『警戒すべき大人』である筈の青年に対し、何かしら思う処があったのか。
　カイルはぎこちなく頷き、ゆっくりと、躊躇いがちのままではあったが事の経緯を語

りだした。

当たって欲しくもない予想の類程、しっかりと的中するのはお約束らしい。

少年がポツリ、ポツリと零し始めた言葉の内容は、トニーが立てていた推測とそう大きく乖離するものではなかった。

「最初は、皆で喜んだんだ……ウチのグループはチビだって多かったし、国の施設ってやつに入れるなら窮屈でも飯や冬場の寝る場所に困ることなんてないって……」

戦時中は今ほど戦災孤児の保護に注力出来ていなかったせいか、彼らも相当に苦労したらしい。

大戦が終結し、教国を中心として強く打ち出した子供達への保護政策を、カイル達も当初は歓迎したのだそうだ。

「すぐに施設の人間だっていう大人がやってきて、同じ様な子供達にも声を掛けてあげてくれって言われて……でも友達が……オルカンが、言い出したんだ『国単位の仕事なのに早すぎる、アイツらは信用できない』って……」

俯きながら少しずつ、遡った過去の話を口にするカイルの声は、だんだんと震え始め

ていた。

「オルカン、頭が良くてさ……最初は、自分や他のグループでも、逃げ足の速いやつらや字の書けるやつで行くって言い出したんだ……帝都内なら、必ず抜け出して施設の様子を伝えるし、帝都の外でも、手紙位は直ぐに出せる様に用意して行くからってさ……」

いよいよ声の震えが大きくなり、一度止めた方が良いと判断したトニーが肩に手を乗せ――だが、少年は首を横に振ってそれを固辞する。

話を途切れさせてしまえば再び語りだすのは難しいと思ったのか……それとも、本当は孤児達だけで抱え込んでいたであろうそれを、誰か――信用できる大人に聞いて欲しかったのか。

子供達だけで生きていく為に押さえつけていたであろう、不安や弱音を伴ったソレを振り絞る様に言葉にする少年を、ミラと《狂槍》も黙して見つめ続ける。

「て、帝国の騎士や役人だっていうやつらが迎えに来て、変な処じゃなかったら、直ぐに教えに来るってオルカンは約束してて……でも、あいつも！　他の奴らも！　誰も戻って来なくて……！」

悲痛を伴った叫びが零れ……続く台詞は、子供らしからぬ酷く諦観の混ざったものであった。

「……俺達だけじゃどうしようもなくて、信用できる大人にも話したんだ……市場で余

り物をくれるおっちゃんやおばちゃん……古い毛布なんかを、ゴミを捨ててるだけだって言って置いていってくれる衛兵のあんちゃん……」

その場に力無く尻もちを着き、両の掌で顔を覆ってしまった少年は後悔に打ちのめされた者のソレだ。

「皆、役人に話を聞いてくれたりしたけど……急に市場の店を畳む事になったりして……『何も分からなくてゴメン』って、謝ってた……『調べてやる』って言ってた衛兵のあんちゃんは、帝都で見なくなった」

八方ふさがりとなり、子供達で話し合って『外国の人――教会で炊き出しなどを行う聖職者に助けを求めてみては？』という声もあったらしいが……万が一、炊き出しを行っているシスターや神父様まで先の衛兵の若者の様に居無くなれば、子供達は勿論、その日の宿や日銭を稼ぐにも苦労している者が食うに困る事になる。

最悪、事の原因扱いでそういった者達からの恨みを買うリスクも考えれば、取れる選択肢では無かった。

詰みに近い状況に追いやられながらも、子供ながらに精一杯の抵抗として選んだのが『声を掛けて来る見知らぬ大人達からの逃走』だった、という事なのだろう。

「……よく話してくれたッスね。協力に感謝するッス……そんでもって、必死に生き延びて来たきた、小さな戦士達に、敬意を」

項垂れ、小さく嗚咽を洩らしているカイル少年の背をミラが優しく撫でているのを暫し見つめ……トニーは静かに立ち上がった。

予想以上に有益で、想像以上に胸糞悪い話だった。

語るには辛い話だったろうに勇気を振り絞って話してくれた少年に、掛け値の無い感謝と敬意を払いつつ、次の自身の行動を思索する。

本来ならば騎士団が解決するべき仕事ではあるのだが……おそらくこの一件の絵図を描いた輩は、《大豊穣祭》の開催で衛兵や騎士の巡回の眼や人手が足りなくなることを見越して、その隙に短期間で多くの孤児達を手に入れようと、人攫いの仕事でも受けるゴロツキを大量に雇ったのだろう。

雇われた連中は自分達にも黒幕の組織力の恩恵があると思っているようだが……まぁ、コレはブラフ――ただの口約束か何かと思って良い。ハナから切り捨て可能な使い捨ての駒として雇われているのを理解出来ないからこそ、このような雑な犯罪に手を染めるのだ。

とはいえ、路地裏にて孤児狩りを行っているその悪漢共もまだ残っているであろう現状、手をこまねいている内に新たな被害者が生まれる可能性があった。

只でさえ人手不足……のんびりと警備や捜索の人員を申請してる時間は無い。

そう考え……トニーは幾つかの独断行為に踏み切る事を決意する。

腕を組んで益々不機嫌そうな表情のまま、事の成り行きを眺めていた魔族領の幹部へと眼を向けた。
「《狂槍》殿」
「あン？」
「先程の要望、表通りに面さない『裏』に限った話であれば、帝国側は魔族領に追及を行わない事を御約束するッス」
「ほぉ……口にした俺が言うのもなんだが、随分と思い切ったな、てめぇの独断だろそりゃ？」
試すような口ぶりと、ジロリ、と音が聞こえてきそうな目付きで以て品定めの眼を向けて来るチンピラみたいな男に対し、今度は怯むことなく正面からその視線を受け止める。
「構いません、これでも皇帝直属なんで多少の無理は利くんで。この件で帝国の兵や騎士とゴタつくようなら、自分の――トニー・レイザーの名を出して頂いて結構です」
螳螂を思わせる狂相と、狐を思わせる感情の伺えない面貌が向かい合い、ややあって。
不機嫌そうであった《狂槍》の口の端が持ち上がり、非常に凶悪な、だが面白そうに歪んだ笑みの形をとった。
「こっちの要望にかこつけて、俺を使うつもりか。いい根性してやがるな」

「なんとでも。自分も騎士の端くれッスからね――ガキんちょが必死に踏ん張っているのを見て、ケツに火も付かないような生き方は選んでねーって事で」
「ク、カカッ、いいな、お前。割と気に入ったぜ」
打って変わって上機嫌となった《狂槍》が、得物を片手に意気揚々と立ち上がる。
そこらのゴロツキなぞ比較にもならない凶悪極まりない双眸がギロリと横に転じられ。
その眼は二人の物騒な空気すら纏ったやり取りを、ミラに庇われながら見つめていたカイルに向けられた。
「おい、ガキ。今日明日中に知り合いのガキ共に伝えて廻れ。『明日以降の朝と夕は、血の苦手なチビ共は隠れ場所に引っ込んでろ』ってな」
「……もう少し言葉を選ぶようにして下さい《狂槍》殿。貴方の義侠は他者から見て非常に分かり辛い。そのような言動だから物騒な逸話ばかりが付いて回るのです」
「あぁ、義侠だぁ？　寝呆けた事言ってんなよミラ。連日ごちゃごちゃと鬱陶しい人込みにゃ気が滅入ってたんだ。単に人気の少ねぇ路地裏を朝夕に散歩するってだけだ」
後半の台詞はテメェの弟弟子に言ってやれ、と鼻を鳴らすチンピラの言葉に、珍しく反論出来ずに黙り込むミラ。
一方で、同じ様な暴力の匂い（質は桁違いだが）を色濃く漂わせる男達に誘拐されか

けたというのに、顔合わせの段階から《狂槍》に対して不思議なほどに脅えを見せないカイルが真剣な表情で頷く。
「……分かった、朝と夕方だな。なぁ、騎士様。俺はもう外を出歩いて大丈夫なのか？」
「カイル少年は別に悪い事したって訳じゃ無いッスからね。出歩くの自体は問題無いッスよ――ただ、一応安全の為に後ろのシスターさんに付いて行ってもらうべきかな、と」
「承りましょう」
少年への返答。その言葉の結びに視線だけでミラに問いかけるトニーであったが、皆迄言うなと言わんばかりに力強い快諾が返って来る。
それらを聞き終えた《狂槍》が一つ頷いて槍を一振りし、肩へと担ぎ直した。
「話は纏まったか？　なら俺は自分の宿に戻る。部下の子供（ガキ）より手間の掛かる頭領（クソガキ）の世話があるんでな」
「ええ、今回は御足労の程、ありがとうございました」
「ぬかせ、狐野郎」
ククッ、っと口内だけで笑いを転がすと悠然と歩きだし……部屋の扉を開けた処で、魔族領の幹部である男は最後にもう一度だけ、帝国の《刃衆（やいば）》たる青年へと眼を向ける。
「……帝国で職を失くしたら魔族領（ウチ）に来い。てめぇは使えそうだ、扱き使ってやる」
「お気遣いどうも。ですが、自分は隊長・副隊長（今上司）以外の下に就く気は無いんで」

これぱかりはきっぱりと――挑む様な目付きですら以て即答したトニーに、「そうかよ」と一言漏らして肩を竦めると、今度こそ《狂槍》は振り向かずに宿の部屋を後にした。

その足音が遠ざかっていくのを聞き届け……スイッチが切り替わった様にトニーの顔から力が抜ける。

「オッフ……腹痛ぇ……また胃薬処方してもらわないと……」

「……お疲れ様です、騎士レイザー」

情けない表情で胃の辺りをさする青年に、流石に少しばかり同情した様子でミラが労いの言葉を掛けるが……トニーの胃に多大なストレスを掛けている一因は彼女にもあるのは何とも皮肉な話であった。当人にその自覚は無いのがまた、涙を誘う。

大人も大変なんだな、といった目付きでそれを眺めていたカイル少年だったが、直ぐに切り替えて隣の女傑の服の裾を引っ張った。

「なぁ、シスター。今からでも外出できる？　今から回れば、日が落ちる前にはこの辺の孤児（なかま）には魔族のおっちゃんの言ってたことを広められると思うんだ」

「ふむ、そうですね……流石に貴方を元の場所に返すのはまだ許可できませんが、御友達も心配しているでしょうし、顔見せも兼ねて《狂槍》殿の”散歩”について伝えにゆくとしましょうか」

「よしっ、じゃ、直ぐに行こう。イルルァ姉ちゃん達が帰ってきたら手伝ってもらえば……大体の場所は明日までに回れると思うし！」
「では、ブランに伝言を残して行きましょう……しかし、貴方は《狂槍》殿を怖がりませんでしたね？　こちらの子供達はオフィリ以外は皆、彼の御仁を見て腰が引けていましたが……」
　些細な疑問ではあるが、気になる、と言った風情でミラが不思議そうに尋ねる。
　それに対し、少年は懐かしそうにあぁ、と口を開いた。
「別に大した事じゃないよ……さっきも話した衛兵のあんちゃんも、あんな感じだったからさ……ずっと不機嫌だったのも、多分俺達の為に怒ってたんだろうなーって」
「ほう。中々に良い観察眼ですね――ただ、本人に指摘するのだけはやめておきなさい」
「分かってるよ、怒り出すんだろ？　……そういう処も似てるし」
　二人は会話を交わしながら、席を立って。
　ミラが騎士の青年へ向けて黙礼すると、カイルもぎこちなくはあったが頭を下げ、対するトニーも敬礼でもって返礼し、部屋を出る二人に「ご協力、感謝します」とだけ述べてその背を見送る。
　そのまま出ていくと思われたカイルだったが、先程の《狂槍》の様に脚を止め、振り向いた。

「なぁ、騎士様……オルカン達は見つかると思う？」
「……見つけるッスよ、どういう形であれ、絶対に」
有り得るかもしれない結末――それを示す残酷さと、だけど誤魔化す事をしない誠実さが込められた、その返答に。
あの大戦で親を失った多くの子供達……その一人である少年は、顔をくしゃりと歪めて、もう一度、丁寧に頭を下げた。
「――ッ、あいつらと……俺のともだちと、もう一度、会わせてください。お願い、します」
「皇帝陛下と、掲げた刃に誓って」
進展こそあったが、今回の任への引継ぎ時間は迫り、時間的余裕は無い。
今、自分にカイル少年の不安を取り払う事は出来ず、この場で誓いを立てるのみであったが。
それでも、せめてその誓いは果たしてみせようと、トニーは力強く頷いて見せたのであった。

闘技大会・不穏の胎動

空には頻繁に花火が打ち上がり、国の認可を受けた大規模なものから商会や個人といった大小様々な規模の催しがそこかしこで開かれ。

帝都の住人も、やってきた観光客も、大戦以降初と言って良い大規模な祝祭と訪れた平和を改めて噛みしめ、満喫していた。

日が落ちても夜を徹して開かれる店も多く、開催期間中、帝都は比喩抜きで眠らない街と化している。

かくいう俺やシア達も、昨日は初日って事でとにかくあちこち駆け回って祭りの空気ってやつを味わった。

プランも予定も無く、屋台で馬鹿みたいに買い込んだ懐かしいお祭り定番の品々を抱え、興味を惹かれた催しや店なんかに突撃する。

リアも大概はしゃいでいたが、シアが思ってたよりずっとテンション高かったな。ちょっとびっくりする位に。

まー、祭りなんて俺としても何年ぶりだよって感じだし、楽しいのは当然なんだが

……シアの場合は『繰り返し』の主観時間も含めるとほんっとうに久しぶりの平和な大イベントだ。

そういった感慨も含めれば、歓びも一入だろう。お顔も魂も非常に輝いていらっしゃるので、傍で見ている俺的には初日からクライマックスなくらいに満足感が高い。

こっちの世界じゃ、何事もない日は割と早めの就寝が基本だったんだが……昨日は夜にやってる催しとか店も見て回った御蔭でちょいと寝不足だ。シアとリアも少し眠そうだった。

そんな感じで、夜明けまで一日中遊び倒して。仮眠をとってまた街に繰り出し、今度は綺麗に飾られた街の名所や、花火が映えるスポットなんかを見て廻って、開催期間の序盤で寝不足ダウンも勿体ないので、日が落ちるとちょっとだけ早めに就寝して。

――で、三日目の今日。

現在俺は、《大豊穣祭》開催式の際に尖塔の上に立ってたときの様に、帝国の旗が翻るポールの上で待機していた。

見晴らしの良い高所特有の、やや冷たさを伴った強い風が吹き抜ける。

いや、別に高い処で腕組強者ムーヴするのが気に入ったって訳じゃ無いのよ、別に。

ナントカと煙じゃあるまいし、特段高所が好きって訳でも無い。あれよ、お仕事の一環ってやつだ。

眼下に見下ろすは人、人、人の群れ。
《大豊穣祭》最大の催し物である、闘技大会を見に来た人達だ。
喧嘩と花火は祭りの華、なんて言葉もあるくらいだし、やはりこの手のイベントの人気度は高い。
大会規定として殺しは御法度だというのも見る側からして安心できる要素だろうしね。
それを『温い』とか言う奴もいそうなもんだが、今の処は聞かないな。というか、つい二年前まで殺伐とした戦争を大陸全土でやってた訳だし、皆そういうのはお腹いっぱいなんだろう。
こうやってある程度の高所から入場客を見下ろしているのは、普通に依頼主側――帝国からの指示だ。
俺が依頼されたのは会場の警備だし、てっきり闘技場(コロッセオ)内で見回りでもするのかと思ってたんだけど……お行儀の悪い連中に、《猟犬》が見張ってますよーという事を分かり易く周知させる為にこんな場所で待機する事になっている。
実際、入場客の中には大分出来上がって赤ら顔で騒いでる連中とかもいるので、有効ではあった。
……っと、言ってる側から酔っ払い集団が順番待ちの行列に割り込もうとして、騒ぎ

になっとるな。
警備の兵の一人が駆け寄って険悪な雰囲気になってる割り込んだ側と割り込まれた側の間に割って入ってるが……酔っ払い連中の方は酒と人数のせいで気が大きくなってるのか、注意もまともに聞こうとしない。
赤ら顔の集団の一人が唾を飛ばしながら警備の兵隊さんに詰めより、瓶を振り上げた――はい、アウトー。
微量の魔力、そこに鎧ちゃんの魔鎧としての威圧を込める形で集団に向けて飛ばす。所謂気当たり……闘技会の予選代わりに行ったガン飛ばしのアレだ。
流石にあの場で行った威嚇より大分控え目ではあるものの、相手はただの酔っ払いだ。瞬時に顔色が悪くなってへたり込むか、その場にバタバタとぶっ倒れて気絶する。
応援に駆け付けた他の警備兵や巡回の騎士が、動けなくなった酔客達をふん捕まえて回収していく。
皆さん最後に一斉にポールの上の俺に敬礼をして、速やかに酔っ払いを運んで行った。こっちも仕事だから気にしなくて良いのよ？
先程から何度か同じ事をしたせいか、闘技場（コロッセオ）の入口へと並ぶ人々は実にお行儀よく整理券を受け取り、綺麗に列を作って警備の人の誘導通りに進んでいる。
まぁ、ゆうても見に来てる人間の数が数だ。暫くすると後からやってきた奴がトラブ

ルを起こして、度が過ぎたら俺がガン飛ばして……さっきから基本、これの繰り返しである。

幸いなことに、今日は一番バタバタしている最初の入場客ラッシュが終われば捌けて良いらしいので、大会の開会式と選手紹介は見る事が出来そうだ。

あと一時間とちょいって処か。それまで真面目にお仕事しますかね。

こっちを指さして「すげぇ」だの「本物だ」だの、ツチノコ見た様な反応してる大勢の観光客は努めてスルーして。

開会式までに屋台に寄る時間があるといいなーとか頭の端で考えつつも、眼下の人波にしっかりと眼を光らせるのだった。

時刻は昼前、予想以上に観客の入りが多かったのか、闘技大会の開会式は予定より少々遅れた時間帯に始まった。

元いた世界の下手なドーム球場なんかより収容人数の多そうな闘技場（コロッセオ）だが、席はとうに埋まり尽くし、階段状の観客エリアは立ち見客でごった返している。

オレ達は最前列に頑丈な仕切りを作られた来賓用の特別席でゆったりと寛いでいるので、少々申し訳なく感じてしまうな。

『さぁさ、やって参りましたー！　《大豊穣祭》最大の催しにして我が国的に一番金掛けたんだから一番の収益を期待したい闘技大会！』

『はっはっはっは！　これは歯に衣着せぬ御意見！　率直が過ぎて皇帝陛下に叱られてしまいそうですが、拙僧の杞憂ですかな？』

座席を超過して人で溢れ返った闘技場（コロッセオ）。

快晴の空が仰げる会場の下、出場者がその武を奮う舞台に最も近い、此方と同じ最前列の観客席――そこに誂えられた実況席で、知り合い二人が並んで拡声の魔道具を使って声を張り上げている。

『初の試みって事で色々と規約や制限もあるけど、本戦出場者は皆腕利きだからねー、期待してもいいと思うし――あ、本日の実況解説は、可愛いあたしちゃんことシャマダハル＝パタとー』

『聖教会にて司祭の位を頂いております、ガンテス＝グラッブスと申します！　いやはや、かくいう拙僧もこの催しを楽しみとしていた身でありまして。出場者たる皆々様の

戦武に眼を惹かれ、お役目たる試合運びの語りが疎かにならぬよう心掛けたい処であります！』

『この二名でお送りしまーす――ちなみにあたしは絶賛彼氏募集中だゾ☆　我こそはと思う腕っぷしと甲斐性に自信のあるイケメン、声を掛けてねー！』

お道化たシャマダハル――シャマの声が拡声されて闘技場（コロッセオ）に響くと、笑いと共に歓声の混じった声がそこかしこから上がる。

相変わらずだな、あいつも……しかし、彼氏募集という発言に食い付いてる男性諸君には気の毒だが、シャマは《刃衆（エッジス）》所属だ。

彼女の言う腕っぷしと甲斐性とは、世間一般の基準とは著しく乖離していると思われる。

派手系ではあるが美人だし、本人も付き合う相手が欲しいと口にしてるのを何度か聞いたこともあるからな。難易度を知っても挑む気概がある奴が現れる事を祈っておこう。

「帝国側の解説の人ってシャマダハルさんだったのかぁ……なんというか、相変わらずギャルっぽい感じの人だね」

「褐色肌で金髪な上、あの言動だからな。どっからあの手の喋りを知ったんだろうなぁ……」

隣に座ったアリアと顔を寄せ合って首を傾げる。
まさかあのトークが天然由来という事はあるまい。初めて会った段階で既にあんな感じだったし、平成の渋谷あたりから転移してきた女性でも知り合いに居るんだろうか？
この間、ちょっとゴタゴタが起こった北区の工房にて、久しぶりに顔を合わせた知人の来歴について妹（おとうと）と語り合っていると、同じく来賓用の特別席……その左右から声が上がった。
「うわ……凄い人数……これだけの人達の前できちんとガンテス様の御手伝いとか出来るんでしょうか……い、今から緊張が……」
「おい、《不死身》。この出場者一覧のコイツ、魔族領（ウチ）のやつか？　流石に名前だけじゃ分からん」
「え、どれですか頭領（ボス）……あー、確か《万器》さんの処の新入りの子だった様な……ちょっと前に見なくなったと思ったんですが、帝国に来てたのか」
オレ達の左側に腹の辺りを手で撫でさすっている妙齢のエルフの御婦人と、その御付きの同じくエルフの若者。
右側には鳶色の髪と眼をした魔族と、その背後に控える年若い魔族。
言う迄もなく、どちらとも知り合いである。エルフと魔族、それぞれの代表と言って

良い立場にある連中だ。
オレとアリアを挟んだ席に座った両者、右端に座る魔族の方――《魔王》が席から身を乗り出して、左端の席を覗き込む。
「エルフの最長老さんよ。腹痛いなら開会式が始まる前に厠に行ってきたらどうだ？　単に調子が悪いってんなら隣の聖女に回復魔法の一つでも掛けてもらえよ」
「い、いえ、大丈夫ですよ《魔王》陛下。お気遣い感謝します」
特に含むものも無く掛けられる気遣いの言葉に、エルフ――サルビアがひどく恐縮した様子で応じる。
まぁ、現在の関係とこれまでの両種族の確執……というかエルフが魔族を一方的に毛嫌いしていた歴史的背景を顧みれば、サルビアの反応の方が普通だよな。
この場で顔合わせとしたときから、普通に挨拶して席に座った《魔王》がおかしいんだよ。
とはいえ、何となく理由は予想は出来る。
このバグキャラからすれば、人外級――自身の遊び相手になれる実力者すらいない今のエルフ達は、良くも悪くも界樹の一件が起こるまでは眼中にすら無かったんだろう。
あの件で送られてきたエルフ保守派からの怪文書で「舐められたから潰しとくか」位の認識になっただけで、その問題も片付いた現在、当人からすれば再びエルフへの扱い

はフラットに戻ったという事か。
「そう硬くなるなって。魔族領（ウチ）としてはそっちが友好的な態度に切り替えるってんなら過去の事は蒸し返さない、って方針に決まってるからな」
「……そう言って頂けると、正直こちらとしても助かります――こうしてお会いしてつくづく思いましたが、なんで貴殿相手に喧嘩売ってどうにか出来ると思ったんでしょうね聖地（こっち）の老人達は……」
軽い調子で肩を竦める《魔王》を、改めてじっくりと見つめ、サルビアが深々と溜息を吐き出した。
多くの非戦闘員・一般人が周囲にいる環境なので、地元である魔族領に居るときより数段丁寧に全身の魔力を制御しているが……魔法に秀でた者や優れた探知能力を有する者なら、その身に押し込めたふざけた魔力量を察する事は容易だ。
完全に制御されて尚、煮え立つ溶岩を想起させるそれは、言ってしまえば本人の意思一つで鎮火も大噴火も可能な、霊峰級の活火山である。これが敵意を持って向かって来るなど悪夢以外の何物でも無いだろう。
そうでもなければ、大戦時に邪神からあの龍の御姫様と並んで最警戒対象としてマークされ続けるはずも無い。
そういえば、サルビアは無事、グラッブス司祭に付き添って実況解説に参加する事に

はなった。皆であれこれと根回ししたりして骨を折った甲斐があったな、うん。
で、決まりはしたが、まともに外界に出てきていきなり難易度の高い仕事ではある、と言う事で初日はその仕事ぶりをこの席から観察する事になったみたいだ。
何にせよ、ある意味ではオレ達よりよほど困難な人物に懸想している最長老殿には是非とも頑張ってもらいたい処である。
「少なくとも、アンタが頭にいる間は仲良くやる予定だから安心しろよ――なんせ姫の御身内だからな！　あの御顔が曇るなんて想像したくもねぇぜ！」
「は、はぁ……姫、ですか……？」
「すいません、ウチの頭領は性癖（ポス持病）のせいで偶に気持ち悪い妄言を吐き出す生物なんです。本当にすいません、聞き流してください」
「え、舎弟（ぶか）が辛辣……ひどくね？」
ひどくねーよ、残当だよロリ○ン野郎。
「あー……そっか、リリィが丁度”刺さっちゃう”のか……シグジリアさん達が苦労しそうだなぁ……」
「おいアリア、反応しなくていいぞ。《不死身》の奴が言う通り、戦いが絡む事以外は《魔王（この男）》の発言は九割妄言だと思って聞き流しとけ」
小声でのやり取りだったのだが席が隣合った距離でこの男が聞き逃す筈もなく、サル

ビアに向けられていた視線が俺達に転じられてしまった。シッシッ、こっち見んな。
「おい聖女姉。お前もさぁ……もう三年以上は前か？　猟犬と結託してやたらと妹と接触させない様にしてたが……何でそんな酷いことするの？　あの頃に出会ってれば俺の中のランキングに変動が起こってたのは確実だったのに」
　頑張って手に入れた若返りの薬は捨てちまうしよぉ。と、嘆きやらなんやらを込めた双眸でアリアを見つめる変態野郎の視線を遮る様に手を翳す。何のランキングだってんだよ全く。
「アンタがそんなんだからアリアと会わせなかったんだろうが。リリィの事もそうだが、あんまりにも目に余るようなら《亡霊》の奴にチクるからな」
「なんとかもう一回……今度は二人分手に入れるからよ、やっぱちょっと若返ってみねぇ？」
「話聞けや、変態」
　くそ、割と本気で威嚇しても平然としてやがる。なんて性質の悪いロ○コンだ。
　変態ではあるが、ドン引きはしても嫌悪感なんかは不思議と感じないのがまた厄介なのだ。
　伊達に魔族領のトップじゃないって事だろう……折角の人誑しの才、カリスマと言い替えても良いであろうその身に纏う空気を、性癖の絡む言動でほぼ相殺してる事に関し

ては既に指摘する気すら起きない。

こっちに向けて身を乗り出して尚も言い募ろうとする《魔王》だったが、背後から唐突に伸ばされた掌に頭を鷲掴みにされる。

――はいはーい、リアの教育に悪いので半径二キロ以内ではお口にチャックして呼吸も止めましょうねー、クソ焼き鳥様ー。

ごぎゅり、という鈍い音を立てて魔族の長の首を１８０度半回転させたのは相棒である。

「おかえり、警備の仕事はもう良いのか？」

――おう、ただいま。無事に終わったぞい。ついでにダッシュで屋台街に行って色々と買うてきたで。やっぱ焼きそばは無かったけど。

「お疲れ様にいちゃん。中華麺だもんねぇ……あったらラーメンにも転用出来そうだったのにね」

依頼されていた仕事終えた相棒をアリアと二人で労っていると、首が真後ろに向いて背後の相棒と顔面が向かい合わせとなった《魔王》が半眼になって文句を飛ばしてきた。

「おいコラ、人様の頸椎外して捻っておいて和気藹々と会話を始めんなよお前ら。一応俺は魔族領のアタマなんだが？」

――魔族領の性癖オワコン鳥アタマが何かほざいていらっしゃるんですが、その辺ど

うなんですかねぇ《不死身》サン？

相棒の問いかけに、《魔王》の背後に控えた青年――《不死身》が厳かに、真顔で一つ頷く。

「もう一回捻って一回転させると静かになると思います」

「舎弟（ぶか）と戦友（ダチ）が揃って辛辣ってレベルじゃねぇ」

ぶちぶちと愚痴らしきものを零しながらボキゴキと無造作に自身の首を逆方向に捻って元に戻す変態に、相棒は買い込んで来た屋台の品を一つ、押し付けた。

――ホレ、たこ焼きあげるから大人しく開会式を見てなさいってば《魔王》様。次、シアとリアにおたくの趣味の絡んだ発言したら、半径二キロ以内では鼓動も止めてもらうからな。

「流石に心臓止めるのはしんどいんだが？」

忠告に対して嫌そうに顔を顰める《魔王》だったが、たこ焼き自体は普通に受け取ってさっさと食い始める。というかしんどいで済むのかよ。本当に生身の生き物かアンタは。

ちなみに暫く無言なサルビアだが、あんまりにも出鱈目な《魔王》の生態に、従者の若者ともどもドン引きしていた。

気持ちは理解できる。オレも初めてみたときは意味分からなくて困惑したし。

この場にいる全員分、飯や飲み物を買って来た相棒が適当に品を配り終えてオレ達の背後の席に座ると、丁度選手一同の入場が始まったみたいだ。
『いよいよ始まる闘技大会！　今回は初回って事で捻りも無いネーミングだけど、将来的にはきちんとした名称を決めるらしいからねー！　そこら辺は次回以降に乞うご期待！』
『うむ、一般の方から名称を募るという案も伺っております。次の大祭ともなれば必然、年を跨ぐ故、じっくりと吟味する事も可能でしょう。大陸中の皆様の見識溢るる御意見、帝国と教国の共同でお待ちしておりますれば！』
シャマのぶっちゃけが過ぎるトークと真面目で筋肉なグラッブス司祭では、相性的にどうなるのかと思ったりもしたが、意外と息が合ってるな。
というか、これは司祭が相槌の形で合わせてる感じか。この辺は人生の先輩の年季って奴を感じるなぁ、何気にコミュ力も高いのは流石である。
『それでは先ずは予選突破した強者共の紹介からいってみよー！　……選手、入場ぉーっ!!』
楽士隊によるドラムロールが打ち鳴らされ、勇壮な音楽が鳴り響く。
竜と獅子の彫刻が鎮座する東西の入口から交互に選手が入場してくると、会場内に詰めかけた犇めく観客達から、津波の如き歓声があがる。

『さぁ、最初に現れたのはブラウィン＝リヴハム！　帝国では名の知れた冒険者パーティーの剣士だー！　今回はチームを代表して個人戦の一番得意な彼が参加、見事に予選を勝ち残ってきた感じ！』

『熟練の冒険者は手札の多彩さが強みですからな。単なる剣士だと油断出来ぬ札があるかと――拙僧の古くからの友人もそういった”怖さ”を有する御仁でしたぞ！』

魔装の鎧を着こんだ戦士――ブラウィンが観客の歓声に応えて手を振りながら、武舞台の中心に立つ。

次いで、既に反対の方角から出て来ていた軽装の女剣士が紹介された。

『お次は北方からの刺客！　ヘザー＝バーコイド！　こっちも冒険者だけどソロメインで活動してる事で結構有名！　本人曰く「本選に残れば後の仕事の実入りが良くなる」だって！　ちょー実利的だけどあたし的にはそのクールさ、嫌いじゃないしー！』

『個人で活動する冒険者は独りで多種多様な難事をこなさねばならぬ故、様々な魔道具で取れぬ選択肢を補う場合が多いと聞き及んでおります。中には消耗品の類も少なくは無いでしょう、実利も省みるなれば、一戦ごとにどこまで魔道具の消費を抑えられるかが肝となるかと』

その後も、次々と予選を勝ち残った選手が紹介されてゆく。

今回の大会規定として、各国のトップクラスは参加不可となってはいるが……それで

も本選の面子は十分に一流処と言っても良い。直接の面識は無いけど、名前は聞いた事のある選手も多かった。

『次！　聖教国中枢は大聖殿からやってきた！　チェルシー＝ミンスタ！　聖職者の若きエリートがこんな喧嘩大会に参加して良いのかシスター！　……ちなみに司祭様と面識は？』

『ありますな。いやはや、この手の催しにチェルシー殿が参加なさるとは予想外でありました』

『選手コメントは「すいませんなんか成り行きでこうなりました、出来心ですらありません許してください」だそうです！　ちょー切実感に溢れてるぅー！』

物凄い勢いでペコペコと頭を下げながら身を縮こまらせて進み出て来た年若いシスターは、確かに聖殿で見た覚えがある。

オレと彼女……シスター・ミンスタとは偶に挨拶を交わす程度の間柄だが、その記憶を振り返っても確かにこういった衆目を集めるイベントに自分から参加するタイプには思えないな。どういう流れで大会に出場する事になったんだか。

少しばかり気の毒そうな笑いの混じる声援を受けつつ、シスターが本戦参加者の列へと並ぶと、次に獅子の方角より進み出て来た選手の姿に一際大きな歓声が上がる。

『さぁー、やってきた！　あたしちゃんの可愛い後輩！　我が国が誇る最精鋭、《刃衆（エッジス）》の

新たなメンバー！　鉄拳御嬢様ことローレッタ＝カッツバルゲルゥ！』
『おぉ、かの御令嬢も今大会の本戦出場者でありましたか！　しかも《刃衆》の隊員とは！　私事となりますが、この場で祝いの言葉を述べさせて頂きたく！』
『ちなみに滅茶苦茶美人だけど既に将来有望な年上彼氏持ちだー！　黄色い悲鳴上げた奴らは陛下に直で声掛けされるレベルになってから出直せー！』
喜色に溢れた解説二人の言葉と、闘技場から降り注ぐ歓声に応える様に魔装の甲拳に包まれた両拳を打ち合わせたのは、こっちの世界でも中々見ないレベルの見事な金髪縦ロールのお嬢様だった。
観客のボルテージが一段高い。舞台に向けられる声援がビリビリと空気を震わせているのを感じる。
《刃衆》は大戦終盤に創設されたにも関わらず、その数年で数えきれない程の武功を打ち立てた帝国騎士の”顔”とも呼べる連中だ。
帝国の民からすれば、分かり易い自国の英雄達だもんな。そりゃ人気も出る。
「あ、ローレッタさんだ！　見てみて、にいちゃん、ローレッタさんやっぱり《刃衆》の隊服も似合ってるねっ」
眼を輝かせたアリアが、相棒と一緒になってぶんぶんと手を振っている。
オレが彼女を見かけたのは、北区の工房で他の《刃衆》隊員と一緒に行動してるとき

だったんだが……そうか、あのときのお嬢さんが例の味噌と醤油を作ってる学者さんの関係者だったのか。

何分、特徴的な髪型なので早々忘れる事も無いと思うが、一応彼女の顔をじーっと見てよく覚えておく。

日本の二大調味料の再現を可能とした例の学者さんは、転移・転生者にとってかなりの重要人物だ。相棒とアリアが既に十分な友好関係を築いてはいるが、出来ればオレも繋がりを持っておきたい処である。

醤油ラーメンなんていう一足飛びな贅沢は望まないから、せめてすまし汁が飲みたい。あと刺身。

個人的には味噌の量産も良いが醤油にも力を入れて欲しいな。

とはいえ、それは彼女の恩師への話だ。今は妹達と同じく、この大会に臨む彼女自身を応援しておこう。

『選手紹介も後半になって漸く現れた、喧嘩大好き戦闘種族！　魔族領より《風兎》が参戦だ――！』

『名の如く、獣人の戦士の御様子。拙僧の記憶によれば、瞬発力や跳躍力が獣人の中でも群を抜く種族の方々であった筈です。見目の小柄さや愛らしさで侮るは、手痛い教訓となって身に返って来ることでしょう』

『《風兎》選手のコメントによると「この大会での優勝は足掛かり。こいつを看板にして故郷に凱旋して《災禍》に挑む」だそうでーす！　可愛い見た目に反してギラついたハングリー精神！　下馬評を覆してダークホースと成り得るのか！　あたし的には高ポイントなのでアリじゃね？　応援したい！』

舞台へと集結してゆく参加者達をワクワクした顔で眺めつつ、たこ焼きを貪っていた《魔王》が背後の《不死身》の方へと振り向いた。

「だとよ。血の気の多い若いのに狙われる身は大変だな？」

「なんで僕が相手をする前提なんですか……」

相棒に渡された棒に巻かれたお好み焼きを齧っている《不死身》が、上司の言葉に顔を顰めて返している。

ちなみに俺とアリアもたこ焼きなんだが、ここのは量が多くて二人でシェアしてる。初日も食いきれなくて結局相棒が片付けてくれたからな。

あんまりにも懐かしくてついつい前世と同じ量……食い盛りだった男の基準で色々と買い込んだけど、やっぱ今同じ量を食うのは無理があったな、うん。

ま、まぁでも？　残った品を片付けるのに、たっぷりと相棒にあーんとか出来たし？

無駄にはならなかったというか寧ろお値段を圧倒的に上回るプラス収支だったというか。

「いや、こういうのは順番ってモンがあるだろうよ。立場的には末席（オマエ）が最初に挑まれるべきだろ――それもあの小僧が優勝出来れば、だが」

「《風兎（かれ）》のやる気は買いますけど……流石に優勝は厳しいんじゃないですかね？　明確な格上が複数いるし」

魔力量や立ち振舞いからしても、あの獣人の若者が相当に腕が立つのは確かだ。

一口に獣人と言っても、《風兎》は先祖返りの要素が強い――相棒風に言えばケモ度が高いタイプなので、種族的な長所は同族の中でも更に優れている事だろう。

それでも、オレの眼から見ても彼より総合力は上であろう選手は何人かいる。

単純な性能比較だけで勝敗が決まるほど、戦いというやつは単純では無いが、優勝となると厳しそうなのは同感だ。

ボリュームたっぷりのたこ焼きを食いつくした《魔王》が、口の端についたソースを舐めとりながら「そういえば」と切り出して相棒の方に視線を向ける。

「格上云々で思い出したんだが、予選のときに俺とお前がやった『篩い』で、中々面白そうな奴を見つけてな。ダークホースってんなら、案外そいつがそうなるかもしれねぇぞ」

言葉の通りに愉快そうに片頬を吊り上げて言い放たれた内容に、水を向けられた相棒は勿論の事、その場の面々は揃って怪訝な顔をした。

面白そう、ってのはまた具体性に欠ける評価だな。性格や気質じゃなくて武力を表わす指標としては尚更に。

で、それはあの場にいる誰なんだよ？　という相棒の当然の疑問には答えず《魔王》は「折角だ、当てて見ろよ」とだけ返して椅子の上で胡坐をかいて頬杖をつく。

気になることを言い出した本人が武舞台へと視線を移してしまったので、オレ達も自然とそちらに意識を戻す事になった。

シャマとグラッブス司祭がノリノリで進行役を務めていた選手紹介も、佳境に入った様だ。

『――お次の選手はちょっと趣向を変えて二人同時に紹介！　ブライシオとボルドの名傭兵コンビ！　どっちもきっちり予選を突破してきた凄腕だけど、今回はちょっぴり運が悪かった！　一回戦からかち合う羽目になった二人がどう立ち回るのか、乞うご期待！』

『先のジャック選手と同じく、御二方とも帝国領の南部からの参加の御様子。帝国が誇る騎士の皆様のみならず、冒険者や傭兵といった国家に所属せぬ戦力の層の厚さも垣間見た思いですな！』

先程から更に数名の選手紹介を終え、場内の観客も良い具合にあったまってるのが見て取れる。

それに影響されたのか、シャマの奴もいつもより割り増しで高いテンションのまま、いよいよシード枠――優勝候補の紹介に移った。

『さぁ、いよいよ来ますは優勝候補の片割れ！　予選免除でシード権も得ている参加者だしー！』

竜の彫刻が聳える方角から、颯爽とその選手が進み出る。

自信に満ち溢れた所作と、それを張りぼてにしないだけの高い魔力をその身に宿し、その背には相当な業物――おそらくはドワーフ製であろう両手剣。

こっちの世界でも十分に美男子、と言っても通じるであろう甘いマスクの青年は、黒髪黒瞳の転移者だった。

『ぶちのめした邪神の軍勢、落とした女の子の数は共に数知れず！　冒険者組合期待の星にして、今最も特級冒険者に近い男！　《水剣》シンヤ＝アイミヤ、満を持しての登場だぁーっ!!』

様々な人が犇めく闘技場（コロッセオ）にて、本日最大の歓声が上がる。

声量の主力となっているのは、年若い女の子が多い。

逆に男からはちょっと受けが良くないみたいだ。中にはブーイングを飛ばしてる奴もいる。皆、近くに居る女性客に睨み付けられて直ぐに大人しくなってるが。

でも、野次を飛ばしてる男連中も心底本気で言ってる奴なんて極一部みたいだ。殆ど

の声はどっちかというと口の悪い激励、といった感じだろうか？

そこら辺はアイミヤ選手自身も理解しているのか、苦笑交じりで場内の声に応えて手を振っていた。

――ヘイ、掩げ爆ぜろイケメン！　決勝まで勝ち上がって副官ちゃんにボコボコにされるがいい！

「お前も野次ンのかよ」

楽しそうに口笛付きで舞台上の同郷へと声を張り上げる相棒に、ロ○コン野郎が呆れた声色でツッコミを入れている。

――ちょっと話した事ある、位だけど、シンヤ君が異性に黄色い声を上げられて、同性には笑顔で中指立てられるキャラなのは知っとる！　本人以外は女の子しかいないハーレムＰＴ野郎だからね！　仕方ないね！　モッゲーロ、モゲロ、モッゲーロッ、ヘイッ!!

変なリズムに乗って手拍子する《聖女の猟犬（バカたれ）》に便乗して「そうなのか……じゃぁ俺もやるか！」とか言って、手拍子に乗り始める《魔王（へんたい）》という地獄みたいな光景が出来上がった。

これはひどい。公にはなっていないとはいえ、これが邪神を倒した奴と倒す事の出来る奴だってんだから更に酷い。

よくある英雄像とかでこいつら二人をイメージしてる奴が見たら、発狂するか真っ白になるだろこんなん。

手拍子して今にも躍り出しそうなあんぽんたん共を、仕切り内の席にいる全員が馬鹿をみる目付きで眺めているのだが……すっかり悪ノリしてる学生みたいなテンションになってる二人はどこ吹く風といった様子だ。

……でもまぁ、なんだ。うん。

馬鹿だとは思うし、呆れもしてるが。

屈託なく笑って、楽しんでいる相棒を見ていると悪い気はしない。

きっと、オレやアリアが初日にはしゃいでいたときは、相棒の方がこんな気分だったんだろう。

オレたち三人だけにしか分からない、一種のシンパシーにも近い感情。それに、小さな歓びが胸に湧き上がる。

我ながら拗らせてると思うが、今更だ。

こっそりとそんな事を考えていると、アリアも似たような事を考えていたらしく、眼が合い――オレ達はちょっとだけ笑い合った。

その間にも拡声の魔法で音量アップした相槌の声が、テンポよく選手に関する補足を入れる。

マジで初実況とは思えない位に板についてるなぁ……ちょっと失礼な物言いだが、司祭の筋肉方面以外での活躍とかなんだか新鮮だ。

『アイミヤ殿は”後一年も戦争が続けば、特級に昇進するのは確実だった”と、まことしやかに囁かれる程の腕前ですからな！　今大会最強の一角とされるのも妥当かと！』

解説内容から察するに、グラッブス司祭もアイミヤと知り合いみたいだ。オレと相棒も彼とは戦場で面識を得たし、オレ達が参加してる戦線に加わってたってことはバリバリの最前線で戦えるだけの実力の持ち主って事だろうし。確かにこの大会の規定（レギュレーション）の中では、最高レベル――優勝候補と言って良いだろう。

実況の二人からの太鼓判を聞いた他の参加者達から闘志・戦意に溢れたギラギラした視線を叩きつけられるも、爽やかに笑ってそれを受け流した彼が出場者たちの列に加わる。

九割方出そろった本戦出場者達を眺め、海産物系の串焼きを興味深そうに齧っていたサルビアがしみじみと呟いた。

「……こうして見ると、やはり前衛職の方が花形となる大会なのでしょうね。弓使いか魔導士の多いエルフは、本戦に出たとしても勝ち残るのは厳しそうです」

「まあ、種族単位での適正とかはあるからなぁ……開催地が教国になった場合は、帝国との催しのジャンルの棲み分けも兼ねて中衛・後衛が活躍できるような大会をやるのもい

いかもな」
「あ、それならいっそ、闘技大会じゃなくて距離や数で加点方式の的当てとかでも良いかもね」
「おぉ、それならば我らエルフの得意とする勝負が出来そうです……次回以降、教国で大祭が開かれる際には、腕自慢の同胞が外界に出る事も増えるやも知れませんな」
アリアや御付きの若者も加えて、次回以降の《大豊穣祭》について意見を交わしていると、選手紹介はいよいよ最後の一人――この大会のド本命の番がやってきた。
拡声の魔道具を鷲掴みにして、すっかりボルテージのあがりきったシャマがノリノリで叫ぶ。
『次で最後！　お出でますはもう一人のシード選手にして優勝候補！　っていうかこの人の参加は規定違反じゃね？　とかしょーじき誰もが思ってる！　開催国の強みを活かし過ぎたグレーゾーンにも程があるぞ帝国ぅ！』
『はっはっはっは！　実に率直！　此処よりお見えになる関係者各位が揃って額を押さえておりますれば、シャマダハル殿が後でお叱りを受けぬか心配になりますな！』
ただでさえ大音声なのに、拡声されて爆音みたいになったグラッブス司祭の大笑が闘技場内に響き渡るが、その音すら打ち消すほどに観客席の喧噪と熱気は高まっている。

選手の一同紹介――言ってしまえば前置きの段階でこれだ。試合が実際に始まったらどれだけヒートアップするのやら。

勿論オレもこの空気を楽しんでいる側なのだが、立ち見の観客達は興奮し過ぎて集団転倒とかにはならない様に気を付けて欲しい処だ。騎士と魔導士が一定間隔で配置されてるから、最悪でも大怪我や死人は出ないとは思うけどさ。

『泣く子も黙り、敵対者は泣き喚き！　怒る姿に部下は白目を剥く！　《刃衆（エッジス）》の鬼の副長、邪神の信奉者にとっての死神の一人！』

言葉と共に吐き出し切った吐息を再び音を立てて吸い込み、実況解説を行う褐色美人が一拍、溜めを作った。

『――知らねぇ奴（モグリ）はしっかり見て覚えとけ！　《銀牙》アンナ＝エンハウンス!!』

ビシィッ！　っと音が鳴りそうな勢いで獅子の彫刻が座する選手入場口が指し示される。

そして現れた、銀髪をサイドに纏めた少女の姿に。

先のアイミヤ選手を上回る、爆発的な歓声が上がった。

真っ直ぐに正面を見て歩を進めるアンナは、出向中は羽織る事の少なかった黒い外套（コート）――《刃衆（エッジス）》の隊服を普段の騎士服の上から身に着け、腰には愛用の二振りの剣をぶら下げていた。

愛想良く、という程では無いが、割れんばかりの拍手歓声が降り注ぐ中、軽く手を振ってそれに応えている。

正面を向いていた眼が実況席に向けられ、何事かを呟いた。

――えーと……あ・と・で・お・ぼ・え・て・ろ、か……テンションに任せてやっちまったなぁダハルさん！

いち早く唇の動きを読み取った相棒が、両手を合わせてナンマンダブーと祈る仕草を見せる。

実際、読唇はほぼ当たっているんだろう。シャマの顔が目に見えて引き攣ったしな。調子に乗ってぶっ飛んだ実況を続けてるからだぞー。

選手入場口からそう長くも無い武舞台までの間、これでもかと拍手やら声援の雨を浴びたアンナが居並ぶ参加者達に加わり、これで闘技大会の出場者が出揃った。

『い、以上十四名で優勝の座が争われるし！　どれも見応えのある勝負になるから一試合たりとも見逃すなー！』

『うむ、こうして腕に覚えある方々が集う様は壮観ですな！　戦場に永く身を置いていた者として、血潮が滾るのを押さえきれませぬ』

動揺の為か、シャマがやや震えた声だったが……幸いして興奮しきった観客がそれに気づく事は無かった様だ。

選手紹介を〆る司祭の言葉に、《魔王》の奴が深々と頷いている。
「完全同意する。俺も参加したかったなー」
「大会自体も会場も滅茶苦茶になるから絶対にやめて下さい頭領（ボス）」
「わぁーってるよ。ちょっとした愚痴みてぇなもんだ、本気にするな」
「愚痴や冗談に聞こえないんだよなぁ……！」
一緒に来ている他の《災禍の席》……《狂槍》はリリィが一般席で観戦する為、そっちに付き添っているらしい。
確か帝国に来てから出来た友達に、一緒に観戦しようと誘われたんだったか？　あの娘も順調に外界に馴染んできてる様で何よりである。
その分、一人で自分の処の頭領を押さえる羽目になっている《不死身》だが……それでもリリィと離してある方がまだマシだと判断したんだろうな。
とはいえ、困った上司の面倒を見るという厄介な仕事は変わらない。虚空を見上げてボヤく《不死身》の表情と声は、なんというか切実だった。
ひどく疲れた表情で、ちょっと冷めてしまったお好み焼きの残りをモソモソと口にしている。
お疲れ様だな。酷な事を言う様だが、そのまま《大豊穣祭》が終わるまでなんとか抑えきってもらいたいものだ。

この変態不死鳥擬きがはっちゃけるととにかく規模がデカくなりがちだし、何より、派手に色々と壊れる。

魔族領内だとそんな騒ぎも半ば風物詩と化しているが、流石に国外では不味いだろうし……頑張ってくれ、うん。

《大豊穣祭》に併せて刷られた帝都案内書を捲りながら、アリアが闘技大会の日程を確認する。

「えーと、日を跨いで、数試合に分けて進行していく感じだね。今日は一回戦の前半までの予定、って書いてあるよ」

大会日程まで書かれてるのかよ。ここ数日で大分お世話になった本ではあるが、本当に祭り用に特化してるというか、実質分厚いパンフレットみたいなもんだな。

その言葉通り、選手紹介と大会開始の宣言を終えた武舞台上では出場者達が一時的に撤収を始めていた。

『二十分後には早速第一回戦が始まるから、観客の皆さんは今のうちに飲み食いするモノ用意するなりなんなりすると良いしー。試合が佳境に入ったタイミングで厠に行きたくなったりしたら最悪だぞ☆』

『会場内では巡回販売も行われております、飲食物が入用なれば、近くを通った販売員の方に声を御掛けすると良いでしょう！』

グラッブス司祭の声を受け、相棒が片手をあげる。
――なんか飲み物買って来るわー、欲しいもんある人おるー？
確かに。屋台の食い物全般、味が濃いからな。試合が終わるまでの間、何か一つくらいは飲み物が欲しい処だ。
「じゃ、オレはお茶系が良いかな」
「ボクはレモネード！　あったらで良いよ」
「酒。麦酒（エール）飲みてぇ」
「自重しろ頭領（ボス）。あ、僕はなんでもいいです」
「あー……私もお茶系統で……エルフ的には聖者様を顎で使うとか普通に胃痛案件なんですけどね、本当は」
「何ぶん、御本人が望まぬお話です、我らも倣って常の通りを心がけましょう……水でお願いします」
――バラバラかよワロタ。まぁいいや、ひとっ走り行って来る。
浮足立った喧噪に満たされた闘技場（コロッセオ）。
二十分後には、再び熱気と歓声が唸りを上げて天にも昇るのであろう。
その中心にある、腕利きの猛者が武勇を交わす事になる、今は無人の武舞台を眺める。
それぞれに注目する点や愉しみ方は違うだろうが、何処かワクワクとする気分だけ

は、きっと皆に共通している感覚なんだろう。
そんな風に、大事な奴らが欠けずに隣にいる平和の時代ってやつを、何度噛みしめても飽きない歓びを、もう一度しっかりと噛みしめて。
自分でも少し緩んでいると分かる表情のまま、オレは晴れ渡った青い空を見上げたのだった。

夜も更けた帝都。
本来ならばとうに夜の帳が降り、酒を出す一部店を除けば僅かな街灯の光と月と星だけが静かに輝く時間。
そんな時間となっても、昼と比べれば賑やかさは減れど少なくない光源が灯され、未だ街は活気に包まれている。
《大豊穣祭》の間は眠らぬ街となった帝国首都であるが、その喧噪と輝きから少々外れた

場所、城壁の直ぐ外である郊外にて。

「初日の闘技会は大盛り上がりだったみたいッスねぇ……ローレッタ嬢にはバフナリーの一件で迷惑をかけたし、副長と合わせて、応援くらいはしたかったんスけど……」

ま、こっちの仕事も大事だから仕方ねーッスね、と肩を竦めたのは、狐を思わせる面貌の男だ。

黒い外套（コート）を羽織った騎士の青年――トニーは、現在自身が追いかけている事件と関係があると思われる場所へと訪れていた。

今日から始まった《狂槍》の『散歩』によって、数多く拿捕された人攫いを行っていたゴロツキ連中。

彼らの万倍凶悪な魔族領のチンピラの手によって、その四肢だけでなく、精神の方まで丁寧にきっちりと折られた男達は、屯所の兵やトニーの尋問にも実に素直に答えてくれた。

力尽くで捕らえるのが楽であるから孤児を中心に狙っていた事。

ある程度の健康状態が維持されていれば、〝仕事〟自体は老若男女、種族問わずに行っていた事。

聞けば聞くほど不愉快な話ではあったが、ゴロツキの中でも集めた〝商品〟を引き渡すまとめ役の様な者達が早々に捕まったのは朗報だった。

情報の欺瞞を警戒して、複数のそういった立場の悪漢共に、しっかりと尋問を行い――辿り着いたのが此処、帝都に繋がる水路近くに建てられた廃屋である。

元は城壁外にて水路を管理・清掃する者の為に作られた小屋らしいが、実際に見ると廃屋というほど傷んではいない。

水路を挟んだ反対側にもっと設備の整ったものが建てられた為、放置されているらしい。

灯りの類も少なく、夜ともなれば人の気配など無いも同然の場所だ。後ろ暗い取引を行う場としては適した場所なのだろう。

尋問の結果、得られた情報によれば、こういった〝商品〟を取引する場所は複数存在し、時期や天候によって指定される場所は様々に変わるらしいが……祭りの準備期間からこっち、昼も夜も騒がしい都市内は避けられ、こういった郊外にある場所での取引が主となっているらしい。

トニーが訪れたのは、今夜、その取引相手が訪れる可能性が高いと思われる場所だった。

路地裏などの悪所での話とは言え、陽も高いうちから子供達を攫っているゴロツキ共と比べ、金を出している雇い主の方は随分と慎重な立ち回りだ。

或いは、この慎重さが今までの基本姿勢だったのかもしれない。今回の粗雑な連中を

数ばかり雇った行動で、事が明るみになった、という事か。

だが、幾ら慎重だとしても帝国の兵が細目に巡回している都市内部でそういった取引を行っていた、というのは少々解せない点もある。

いくつか聞き出した取引場所は、確かに人目を避けた悪所・暗所の類ばかりであった。

だが、広い水路に繋がる下水道などは、頻度が高くないとはいえ衛兵の巡回も行われている。そういった場所に孤児や浮浪者が住み着く程度なら可愛いもので、犯罪者が潜伏場所に利用する、などといった可能性もあるからだ。

前言の通り兵の巡回頻度自体は高くないが、ある程度の不規則性を以て行われるソレにかち合う可能性を考慮すれば、都市内での”商品”の取引はどう考えてもリスクが大きい筈。

魔法か斥候技術か。巡回の兵を完全に避けて立ち回れるだけの探知系統の技能持ちがいるのか、或いは……。

（見回りや巡回の任に就いてる騎士や兵の、勤務の日取りや担当区域を把握してる……？）

そこまで考えて、流石に思考を飛躍させすぎたかと苦笑いが漏れた。

個人単位の物ならば、誰がどういった任に当たっているか、知ることも不可能では無い。

例えば、酒場で同僚と酒を飲む際に「次は何処其処の見回りだ」と愚痴を溢す者だっているだろう。

だが、勤務状況全体となると管理は王城のものだ。どうやっても犯罪組織の類に入手出来る情報ではない。

それこそ、王城内にある程度自由に出入り出来る者が定期的に情報提供を行ってでもいなければ、この方法は成り立たないのだ。

これでは推論というより悲観的な妄想だ。最悪を想定し過ぎて思考が斜め下に滑るのは、裏方を長くやってる人間にありがちな悪癖である。

自省の念と共にトニーは頭を振った。

（此処にくる連中も黒幕本人って訳じゃないだろうし、出来れば尾行……無理なら捕縛して尋問――なんとか尻尾を掴みたい処ッスね）

あの孤児の少年……カイルとの約束もある。

なんとか交代無しで自身がこの任を続けられるよう、上に伺いを立ててはいるが……新たに引っ張られた任務の方も中々に厄介事らしく、難しいかもしれない。

せめて引継ぎまでの期間を数日でも延ばしてくれる事を祈っておこう、とそこまで考えて、一旦その事は頭から締め出す。

少々思考に意識を割き過ぎた。今は任務に集中すべし、と気配を殺し、廃屋の側にあ

る樹の陰へと身を隠す事、小一時間。
　複数の気配が廃屋の近くに出現し、それを察したのか、草木や植え込みから響いていた虫達の涼やかな鳴き声が途絶える。
（――お、ココが当たりだったッスか）
　現れたのは、ありふれた旅用の外套――そのフードを目深に被った集団。
　それほど強力なものでは無いとはいえ、隠蔽の魔法まで使ってのご登場であった。
　雇ったゴロツキ連中がまだやってこない事に、苛立った様子で何人かの者達が声を潜めてやりとりしている。
　折角の黒幕に繋がる手掛かりだ、先ずは些細なことでも情報を集めようとトニーは耳を澄ました。
「……やはりおらんでは無いか。どうやら纏めて兵に捕らえられたというのはガセでは無いらしい」
「面倒な事になったな……一人二人ならともかく、あの人数を牢から出す様に働きかけるのは不可能だ。《赤獅子》の耳に入らぬ筈が無い」
「となると、あの連中はそのまま切り捨てか……それ自体は良いとしても、”素材”の取引場所も全て破棄せねばならんのは痛いですな」
「そもそもあの様な連中など雇うべきでは無かった。孤児などよりあの手の連中を余程

”素材”に用いるべきだろうに。あの御方もらしくもない……何を焦っておられるのやら」

男達は声を抑えてはいるが、不満や不安を洩らすその語気は荒い。

色々と気になる単語がチラホラと聞こえ、彼らの背後にあるのが予想より一段上の組織図であると、脳内の情報に一部修正を加える。

（そうなるってーと、この場で連中をとっ捕まえても、こいつらも蜥蜴の尻尾切りされる可能性は高いッスね……当初の予定通り、このまま尾行して背後関係を掴むのが最善か）

さっさと移動を開始して欲しいのが本音ではあるが、フードの集団が無駄口をたたいてくれるほど、此方の得る情報は増える。

どうせなら”あの御方”とやらの名前をポロっと口にしてくれねーかな、などと考えながら、隠形を保ったまま耳を傾けていると。

「――昨日の今日でもう此処を嗅ぎ付けたのか。なんとも仕事が早いねぇ」

そんな、聞き覚えの無い声が直ぐ背後から届いた。

背筋を電流の様な怖気が奔り、咄嗟に前方へと身を投げ出す。

同時に身を捻りながら腰の剣を抜刀。自身の背に向かって突きこまれた刃が防具を貫き、浅く肉を抉るが、かろうじて身を貫かれる事は避け、鋼同士が打ち合わされる音を立てて相手の剣を弾く事に成功した。

背中に感じる灼熱感は無視し、そのまま剣を構えて距離を取る。

トニーの背後を容易くとったのは、廃屋前に屯する集団と同じく目深にフードを被った男だ。

「ッ、何事だ!?」

「曲者か!?　どこの所属だ！」

静かな郊外で剣を打ち合えば派手に音が鳴り響く。ローブ姿の男達が気付かぬ訳もなかった。

曲者はお前らの方だろーが、などと思いつつ舌打ち一つ漏らすトニーであったが、相対した男は泰然とした様子でフードから覗く無精髭に覆われた顎先を撫でる。

「このおにいちゃん、相当やるぞ――捕まって盾にでもされたら面倒だ。それが嫌なら下がってな」

軽い口調ではあるが、男からは邪魔になるなら仲間ごと斬り捨てる、という意志がありありと透けて見えた。

顔を青褪めさせて距離を取るローブ姿の男達を尻目に、見える口元を笑みの形に吊り

上げて、男はいっそ気さくな空気すら感じさせて口を開く。
「完全に殺ったと思ったんだがな……装備が硬かったってのもあるが、良い反応だ――うん、やっぱ奇襲の類は苦手だな。性に合わん」
「わざわざ刺す前に声を出しておいて言う台詞ッスかね、ソレ？」
（動脈は無事、出血はあるが許容範囲。肩、動く。腕、動く。戦闘に支障なし――問題は）
男の軽口に皮肉で応じつつ、摺り足で間合いを図りながら負傷の具合を自己診断。
痛みはあるが、戦闘能力の低下はほぼ無し。このローブの集団がどういった者達なのか、未だに判断出来る要素が足りないが……少なくともこの場にいる戦闘員はこの男一人のみ。
一瞬で判断を終えると、トニーは躊躇せずに懐に手を入れた。
「お？」
首を傾げた男に向けて、小さな暗褐色をした、球状の物体を放る。
一瞬の後、帝都にで上がる花火の音に紛れるようにして火薬の炸裂音が響き渡り、凄まじい光量が珠を割って飛び出した。
幻惑魔法を用いて作られた疑似花火を再調整して作られたそれは、美しさや鮮やかさとは無縁の、瞬間光量だけを上げた視覚を突き刺す極光の炸裂だ。
道具の発動と同時に目を伏せ、地を蹴って背後へと跳び下がったトニーだったが、膨

れ上がった光を切り裂いて鋼の刃が強襲する。
「――ッぅ！」
「驚いたな、こっちにも閃光手榴弾（フラッシュ・バン）の類があるとはねぇ」
かろうじて受け止めた剣と鍔競り合うと、楽しそうに笑う男を至近距離で睨み付けた。
「あんな実力も糞も無い不意討（スタブ）ちで正確に実力差を把握。即時撤退を選択か――厄介だねぇ、おたく」
「……その髪、転移者ッスか」
「……さっきの光の効果か。やっぱり怖いねぇ……帝国最精鋭に偽り無しってわけだ」
フードから覗く自身の髪の色が、ブラウンから黒に変わっている事に気付いた男が、感心と驚きを織り交ぜた表情で苦笑いする。
鍔競りを押し切られそうになりながらも強引に膝を跳ね上げ、相手の脇腹を蹴りつけるとトニーは再度男との間合いを広げた。
だが、それもあくまで相手がこちらの出方を伺っている故に成功したのだと理解している。
そう、身体は動く。隠形は破られたが戦闘に支障はない。問題なのは――。
（俺じゃ、どうやっても勝てねぇ……！）

表情は変えず、内心で歯噛みする。
間違いない――目の前の男は自身の上司である黒髪の少女や部隊の顧問、そしてここ数ヵ月で急速に増えたおっかない知り合い達と同レベルの実力者だ。
こんな人攫いやってる犯罪者集団に、何故こんなとんでもないのが混じっているのか。
当然の疑問が胸中に湧くが、聞いた処でまともな答えが返って来るとは思えなかった。
じりじりと後退しながら離脱の機を伺うトニーに向け、幻惑魔法による変装を？がされた男が剣の切っ先を持ち上げて突き付ける。
「知られちゃ色々と面倒になる事を、あんたは知り過ぎた。《刃衆（エッジス）》である事を差し引いても――悪いが、この場から帰せないねぇ」
「最初っから逃がす気なんて無いだろうに、よく言うッスね」
「ははっ――違いない」
肩を竦めて男が笑い、次の瞬間には眼前から消えた。
視覚では追い切れないその踏み込みを、トニーは靴底が地を抉った音の響きと刀身が空気を裂く気配、死線を感じ取って鋭敏化した五感全てで以て予測を立て、己の身体と男の一撃の間に剣を差し込む。

先程までと同じくかろうじて――だが完全には逸らし切れずに刃に身を削られて、月明かりの下、帝都城壁外にて幾つもの赤い滴が宙を舞う。

大きく後退しながらなんとか四肢や首が切り飛ばされるのだけは凌ぐトニーだったが……打ち合って何合目かに武器の方が先に音を上げた。

マイン氏族のドワーフの手によって鍛えられた魔装の剣が、ただの数打ちの鋼で以て半ばから斬り落とされる。

それに瞠目する暇もなく、腰の投擲（スローイングナイフ）刃を抜いて投擲。だが、当然の様に打ち落された。

「終わりだな」

短く告げ、正面から凄まじい速度で踏み込んで来た男が剣を一閃させ。

（――此処っ！）

全力で後方に跳躍しながら、男の一撃を折れた剣で受けたトニーの身体が、剣身とそれを握った右腕ごと切り裂かれる。

だが、それが彼の狙いだった。

本来なら魔装の防具すら容易く突破し、胴を両断するであろう威力の一撃を、残った剣身と背後に跳んだ身体を介して鋭利な斬撃（スラッシュ）ではなく相手を吹き飛ばす剛撃（ノックバック）として受け止める。

鮮血を撒き散らしながら叩き飛ばされたトニーの背後には――帝都と繋がる水路があった。
返り血で半身を朱に染めた男が瞬時にそれを察し、躊躇なく追撃に移る。
――が、次の瞬間、血に染まって裂けたトニーの懐から先程の物と同じ、暗褐色の球体が数個、零れ落ち。
「あ」と、呆れた様な、感心した様な男の呟きが零れ。
ぶった斬られ、血まみれになって宙を舞うトニーが、動く左腕を使って男に向かって中指をおっ立てた。
耳をつんざく爆音と、周囲一帯を白く染める光の爆発が両者の間にて炸裂する。
その光に呑まれ、視覚と聴覚を乱打されながらも、若き騎士の身体は水路へと落下し、派手に水柱を上げた。
「……やれやれ、本当におっかないねぇ……」
流石に多少は効果があったのか、両の眼を眇めた男が水路に広がる波紋を覗き込む。
確かにあの最後っ屁には面食らったが、それでも男からすれば追撃自体は不可能では無かった。
だが、あの一瞬、あの状況で騎士の青年に刃を届かせようとすれば、攻撃は刺突一択に絞られる。

あの閃光手榴弾（フラッシュ・バン）擬きで視覚と聴覚を封じられた瞬間だ。その刺突にしても急所を外される可能性があった。

そして、最後に見せたあの眼。

あれは、男が突きを打っていれば、ぶっ刺されても反撃を試みるであろう眼である。

野郎相手に刺して刺されて、冷たい水底に仲良くドボン、なんていうのは男としても遠慮したいオチだ。

結果的には逃がした形となったが……彼としては先の事はそれほど心配していなかった。

「夜は冷え込む秋口、あの深手、あの出血で流れのある水路に飛び込むなんぞ、よくやる」

しかも落下の直前、自身も眼と耳を一時的に潰されていた筈だ。

十中八九、失血死か、直ぐに意識を失って溺死だろう。

それに万が一、あの狐顔の青年が生き延びたとしても――。

「それはそれで面白い事になりそう、か」

どう転んでも自分に損はない。

そんな風に確信を抱いた男は、近い将来帝都に訪れるであろう騒乱の予感に無精髭に包まれた顎をひと撫でし――愉快そうに笑った。

――感じたのは冷たい水の感触。

確実な離脱の為とはいえ、一時的に五感の内ふたつ――視覚と聴覚を麻痺させた状態での入水は、一瞬で前後左右不覚となり、本来ならそう苦労する事もない水流が全身を絡め取った。

水の冷たさと、身体から流れ出てゆく熱と血液の感触を殊更に強く感じながら、トニーは必死に動く片腕で水を掻き、水路の側面に手を付こうと藻掻く。

（ま……ず……っ！）

暗闇の中、上下すら曖昧な状態で、水路を流されて何処に居る最中なのかも解からず、意識だけが遠のいている事に焦る。

上司や仲間の顔、友人の顔、自分を斬った男の顔――そして最後に、泣きそうな顔で頭を下げる幼い少年の顔が脳裏を巡り。

（く……そ……）

ゴボリ、と。口から血の混じった大きな気泡を吐き出して、トニーの意識は暗転した。

道交わる各々　1

《大豊穣祭》四日目。
最大の催しである闘技大会も開かれ、いよいよ盛り上がって来た大祭に、朝も早くから帝都は喧噪と活気で溢れ返っていた。
そんな賑やかさから少々離れた、裏通りに面した――言ってしまえば治安のあまりよろしくない区画にて。
武装した四人の男女……身形からして冒険者の一党であろう者達が、周囲に気を配りながら歩みを進めている。
「例の居なくなった子供達らしき目撃情報はここで最後だよな？　昨日と一昨日は完全に空振りだったし、此処で何か痕跡だけでも見つかると良いんだが……」
行く道や建物同士の間の狭い道、そういった場所を意識的に選びながら移動する一行だったが、その中の一人――ブラウンの髪を短く刈り込んだ剣士、アザルが難し気な顔で呟く。
「……ごめんね、皆。折角帝都まで観光に来たのにこんな事に付き合わせちゃって」

四名の中でも一際集中して周囲を見ていた、弓を担いだ斥候役らしき女性が表情を陰らせて仲間達に頭を下げた。
「頭を上げて下さいイルルァ。仲間の知人――家族にも近い間柄であった子供達が悪漢共に攫われたという話を聞いて、手掛かりを探しもせずに祭りを満喫できるほど私達は薄情では無いつもりですよ」
「まぁ、残念といえば残念だけど、来年以降も帝国教国で交互に開催予定、って話ではあるみたいだしね。次の《大豊穣祭》を楽しむためにも、此処できっちりアンタの身内を助け出しておきましょ」
神妙な様子の弓手――イルルァに対して、聖職者の若者が生真面目に応え、気負わせない為か、敢えて軽い調子で女魔導士が肩をすくめる。
イルルァは仲間二人の言葉に、何処かくすぐったそうに苦笑を浮かべて後頭部をかいた。
「ありがと、エクソン、ウェンディ。今度なんか奢るから」
「おいおい、俺は除け者か？　流石にそれは寂しいものがあるな」
「はいはい、リーダーにも感謝してるってば」
混ぜっ返す様にアザルが問いかけるとそれに適当に返され、「ひでぇ」と態とらしく嘆いて笑う。

釣られる形で、他の面々も苦笑や笑顔を見せて顔を見合わせる。
身内である孤児の少年……カイルから、他の子ども達が妙な連中に攫われたと聞いてから張り詰めた表情で帝都内で情報を集め出したイルルァであったが、数日振りに少しだけ笑顔を見せた事に他の三人は内心で安堵を覚えていた。
なにぶん、家族の関わる事だ。力が入るのも無理からぬことではあるが、何事も肩の力が入り過ぎた状態では十全に力を発揮できるものでは無い。
ましてやイルルァは弓手兼斥候。探知・感知も求められる役割だ。敵や罠を見落とす事の無いよう、集中力を維持したまま適度に脱力して視野を広く保つという、中々に慣れを必要とする状態を求められる。
自身が気負い過ぎていた事を自覚して、彼女は気合を入れ直すように軽く両頬をたたく。
「よし。それじゃ続けるとしますか……この辺りでオルカン達を見たっていう路地住みの連中の話が確かなら、他の目撃情報もあるかもしれないし」
「そうだな、痕跡調査（トラッキング）だけじゃなくて路地裏の住人達にも聞き込みをしてみるか」
「そういった連中にイルルァの顔が広いのは不幸中の幸いだったわね。御蔭で断片的にでも子供達の情報が手に入ったんだから」
「良い形で結んだ縁が巡り巡って己の助けとなる。如何な出自や立場であろうとも、こ

ればかりは当人の努力無くして成り立つものではありませんからね。良き事です」
一党が口々に今回の捜索方針などをを語り、水路に掛かった小さな石橋を渡る。
最初に気付いたのは、やはり斥候職でもあるイルルァだった。
仲間達と会話しながらも、視界の端に映ったソレに気付いて、歩みを止める。
「どうしたイルルァ。何か見つけたか？」
「……あれ、見てよアザル」
「……なんだありゃ？　不法投棄された粗大ごみか何かか？」
弓手が指さした先にあったのは、橋下の水路に引っかかっている黒い布の包み……の、様な何かだった。
一抱え以上はありそうなそれはひどく汚れ、パッと見にはアザルの言う通り、水に流れる内に塊になった投棄物に見えなくもない。
今にも流されて再び水路に沈みそうな黒い布の塊を、弓使いや野伏特有の優れた視力でジッと注視したイルルァが、顔を強張らせると同時に駆けだす。
「ちょっと、何だっていうのソレ！」
「指先が見えた――あれ人間よ！」
ウェンディがあげた疑問の声に端的に答え、時間が惜しいとばかりに石橋から飛び降りる。

穏やかとは言い難い答えに、仲間達も一瞬だけ視線を交差させ、直ぐに後を追う様に走り出した。

斥候職ほど身軽では無いアザル達が石橋を渡って橋下へと降りて来る間に、イルルァが黒い塊――水を吸って重くなった黒い外套（コート）を着た人間を水路からひっぱり上げようと試みる。

「うぐぐ……重い以上に足場がっ……！」

「待たせた！　手を貸す！」

「お願いリーダー、足元滑るから気を付けて！」

ぐったりと脱力してるその身体をなんとか引っ張り上げようと四苦八苦していると、追いついたアザルが直ぐにフォローに入った。

二人掛かり且つ片方が鍛えた前衛職という事もあり、水路にひっかかる形でかろうじて浮かんでいたその人物はすぐに陸へと引き上げられる。

やや遅れてきた後衛二人に、頭目の青年が振り返って指示を飛ばす。

「エクソン、回復と治癒の準備を！　ウェンディは奴（やつこ）さんの魔力精査を頼む！」

「お任せを」

「了解――折角見つけたんだから水死体でしたなんてオチは勘弁してよ……！」

力無くうつ伏せになっている……若い男性らしき人物を引っ繰り返し、脈拍や呼吸の

確認をしようと冒険者達が一斉にその顔を覗き込んで――全員が驚きで固まった。
「――ッ！　こいつ、あの悪徳貴族の!?　なんでこんな処で……！」
「……いえ、お待ちを。彼の着ている外套、これは……！」
「派手に切り裂かれてるけど……これ、帝国の紋章ね。おまけに外套（コート）自体も魔装処理されてるわ」
「《刃衆（エッジス）》の隊服……マジかよ、一体どういう事だ……？」
明らかに息をしていない青年だったが、その何処か狐を思わせる顔が知己――あまり良いとはいえない関わり方をした人物で合った事と、着込んでいる装備の事も合わさり、咄嗟の処置も忘れて困惑した様子でアザル達は顔を見合わせる。
だが、何某かの反応を示す前に土左衛門……の割には、蒼白の顔色以外は溺死した者特有の水分で膨れ上がった状態でもなかった青年の身体に変化があった。
仰向けに転がされた彼の口からゴボッと水音がしたかと思うと、ピューッとばかりに勢いよく水が噴き出る。
小さな噴水のごとく真上に噴き上がったそれは、勢いを失って本人の顔にビチャビチャと降り注いだ。
セルフで顔に水をぶっかけた青年は小さく咳き込みながら呼吸を開始し、顔色こそ蒼白のままだが明確に表情を顰め、掠れ声で呻く。

「う、う……ぐ……や、やめ……ふくちょ……もう……しごき……かんべ……」
意識の無いまま、魘されているらしい。
胴と右腕には相当に深い裂傷が刻まれ、死体と見紛うばかりに青白い顔でありながらやけに余裕のありそうな寝言を零す青年に、我に返ったエクソンがとりあえず回復魔法を発動させる。
柔らかな魔力光に照らされるその横顔を眺め、難しい顔をして黙り込んでいるアザルへと、イルルァが同じく眉根を寄せた顔で問い掛けた。
「……予想外に程がある拾い物をした感じだけど、どうするのアザル？」
「そのままにしとく、って訳にも行かないだろう。あの外套（コート）があいつ本人のものだっていうのなら猶更にな」
唸り声を上げて悩まし気な様子を見せる一党の頭目へと、魔力による精査を終えた女魔導士が軽く診断結果を告げる。
「脈も呼吸も弱いし、傷からの出血も多量で体温も低い。普通だったらとっくに死んでるんだろうけど……かなり強力な魔法か霊薬を予め体内に仕込んであったのかもね。この場で出来る処置で十分に持ち直すと思うわ」
彼女の魔力精査によれば、青年は身体のコンディションが一定値を割った場合に効果が発動する霊薬の類でも摂取していたのか、仮死に近い状態まで身体機能を落とすこと

で死を遠ざけているらしい。
その効果の御蔭か、重症には違いないが安定しているのは確かなので、回復や浄化の魔法による処置を行えば問題無く一命は取り留めるとの事だった。
「そうか……それなら、決まりだな」
それを聞いたアザルが厳しい表情でひとつ頷く。
一刻を争う容体だというのなら、最寄りの教会に担ぎ込む必要もあったが……子供達への手掛かりを探しに来た場所で、この遭遇である。全くの無関係だとは思えない。
幸いと言うようなものでもないが、今は大きな祭りの真っ最中だ。夜通し飲み明かして道端でダウンした酔っぱらいが、家族や友人に担がれたり背負われて家路につく様は、そこかしこで見られる光景だ。
有名過ぎる帝国の精鋭部隊の外套（コート）さえ脱がしてしまえば、宿に連れ帰ったとしても特に人目を惹く事もないだろう。
「正直、混乱してる部分もあるが……こいつの本来の立場がどういうものであれ、今回の一件と関ってる可能性は高い。一先ずは宿に連れ帰って治療を続けてやろう」
青年が人攫い・人買い共と繋がりがあるというのなら、無力化されている今が尋問のチャンスであるし、身に纏った隊服が彼本人のものであるのなら自分達は命の恩人、という事になる。

どちらだとしても、目を覚ました彼との会話でこの件に関しての情報を手に入れる――尤も、全然全く関係が無かった、という可能性もゼロでは無いが、人命救助という点で見れば労力が無駄になる事もないだろう。

頭目がその様に纏めると仲間達も異存は無かったのか、一斉に頷いたのであった。

――さて、闘技大会も二日目、初日に一回戦の前半を消化したので、本日は後半である。

試合の進行がスムーズに進めば二回戦の初戦まで進める予定ではあるらしいが、実力伯仲の選手同士がぶつかれば長引く事もあるだろう。予定は未定というやつかね。

人外級お断りな大会とはいえ、出場者達は間違いなく一流処だ。

殺伐とした殺し合いの類なぞ、戦時中に腐る程見たし聞いたし体験したので見ていてなんも面白くない、というのが俺の個人的な感想なんだが……こういった殺し御法度のクリーンな試合はいいね、うん。

安心して観戦できるというのもデカいが、素直に感心できる技術なんかも見れるし。なんなら非常に勉強になる時間だった。

実戦形式に近いとはいえ、スポーツの試合を見ている気分で応援できる。ゆーても、贔屓するような知り合いが試合するのは今日からなんだけど。

まぁ、なんだ。昨日の試合は顔見知りは確かにいなかったが、それでも十分に見応えはあった。折角だし、勝ち抜き戦の一巡目――三戦行われたソレをちと振り返ってみよう。

初戦は冒険者同士の対決。

名の知れた一党の斬り込み役であるブラウィン＝リヴハムと、最近頭角を現してきたという女冒険者ヘザー＝バーコイドの試合だった。

内容的には、オーソドックス且つ全体的に高い水準でまとまった剣士であるブラウィン選手が終始優勢。

ヘザー選手は基本受けに回りがちだが、小盾とショートソードという軽戦士御用達の武器を巧みに使いこなし、合間合間に刺し込む鋭い反撃で相手の一気呵成を許さない。

ソロメインの冒険者はパーティーと違って手札や戦力が不足する場面も多く、その分、機を読み取る勘やソレが訪れるまで耐え忍ぶ我慢強さも培われる。

舞台四方を隅々まで使って距離を取るのも上手かった。身軽さではヘザーの方が上なだけに、ブラウィンは攻めつつも詰め切る事が出来ないという嫌な空気に晒されていた筈だ。

とはいえ、流石は経験豊富なベテラン冒険者。あそこまで我慢を強いられたら焦りが出てしまいそうなもんだが、終始崩れなかった。

おそらくは何某かの魔道具を伏せ札として、ブラウィンが強引に攻めてくるのを狙っていたらしいヘザーだったが、丁寧に立ち回って体力・気力を削りにくる相手に根負けし、最後は場外に落とされた。

「若いのに粘り強い、良い立ち回りだ……ソロにしとくのが惜しいぜ」

「……そいつはどうも。私も勉強になったよ……まぁ、負けはしたが観客の反応も上々だし、次からの仕事は実入りが良くなりそうだ」

試合が終わればノーサイド、と言った感じで両者握手を交わして健闘を称え合う様は、やっぱりスポーツの如き一種の爽やかさを感じさせてくれたね。

ヘザー選手が言っていた通り、両者ともにやや派手さにかける玄人向けの試合運びだったにも関わらず、観客は非常に白熱していた。

初戦で開会式で盛り上がった熱を引き継いだ状態だったというのもあるが、実況のシャマダハル嬢とガンテスのおっさんが二人の試合巧者っぷりを上手く解説してくれたというのも大きいだろう。

一見地味な攻防にも後から丁寧な説明が付けられれば、なるほど、と頷く者達も多かった。

単純な剣腕は勿論の事、試合運びの上手さで観客の賞賛を集めた試合だったって感じやね。既に冒険者として大成してるブラウィンは勿論の事、この分ならヘザーも仕事にあぶれるなんて事はなさそうである。

二戦目の試合はファルシオンとウェイロン＝カーク。

かたや冒険者や傭兵としての活動歴もない、自己申告では国外からの旅行者であるお嬢さんと、かたや帝都在住の教会関係者という、この大会ならではの異色の組み合わせだった。

「では、戦闘行動を開始。よろしくお願いします」

「……えぇ、こちらこそ」

ファルシオン選手はなんとなく知り合いのエルフのちびっ子――リリィの出会った頃を思わせる、感情の起伏が少ない娘だ。

淡々と、だが律儀に一礼する彼女に、カーク神父は少々やり辛そうだった。
開会式の選手紹介の際に語られた事だが、そもそも神父の出場理由は優勝者及び準優勝、三位の選手に与えられる賞金の為らしい。
どうやらこの神父様、帝都の戦災孤児や他都市からの避難民を相手に炊き出しなどを行って廻っている人らしく、賞金使って炊き出しの頻度や品質を向上させたいのだとか。
そんな御仁であるからして、荒事に関連する職に就いてる訳でもない、年若いお嬢さんに得物の棍を向けるのにやや躊躇いがあるのはしゃーない。
シアとリアも「神父を応援したいけど、その為に女の子をぶっ飛ばせとも言えない」と唸りつつ、なんとも悩ましそうに試合を見てたし。
しかし、そのファルシオンも紛れも無く予選を通過してきた実力者だ。
実際に試合が始まると、大人しそうな見た目や言動からは想像つきにくい、見事な動きを見せた。
片刃の曲剣と体術を用いる戦闘スタイルは、彼女がかなりの高い技術を有していることを伺わせる。
動作や技の一つ一つは速く、鋭く、いっそ機械的な程に正確。
その分、なんというか動きの繋ぎや咄嗟の判断がやや硬い気がしたが……これは実況

の二人も同じ意見だったのか、指摘してたな。
比較的安全な地域のどっかの道場やら、或いは元後方支援の軍属とかで、修業や訓練はしっかり積んでいた類なんやろか？　要所要所のぎこちなさは実戦や対人戦の経験が少ない奴がよく見せる感じそのまんまだし。
基礎能力は高いがそういった脇の甘さがある以上、歴戦の武僧らしきカーク神父が隙を突く事は難しくない筈なんだが……彼女の実戦経験の少なさが、堅気の娘さんというイメージを神父の中でより助長してしまったのか、流麗とすら言って良い棍捌きも、攻撃に転ずる際に一転してキレが鈍くなってしまうという状態に。
流石にそんな消極的な立ち回りが長く続く筈も無く、最後はファルシオンの振るった剣に棍を弾き飛ばされ、カーク神父が降参して終了、という形に終わった。
やや盛り上がりに欠ける試合内容になってしまったが、帝都の人達からは神父は中々に高評価な人物であるらしく、ファルシオン嬢相手に動きが鈍ったというのも彼らしい、と多くの人々が好意的に捉えていたのが幸いか。
まぁ、他国からの観光客なんかにはブーイング飛ばした奴も少しはいたんだけど《魔王》が「無粋だな」とか言ってウザそうに視線を向けた瞬間にバタバタとぶっ倒れて直ぐに静かになった。
気持ちは解かるが一般ぴーぽーに向けてアンタの威嚇はやめたまへ焼き鳥。気絶だ

けならまだしも心不全とか起こったら洒落にならんから。
「……半ば勝利を譲られた形ですが、非常に良い経験を蓄積できました。ありがとうございます」
「はは、譲ったなんてとんでもない、負けたのは私の未熟が故だよ。二回戦以降も頑張っておくれお嬢さん」
表情は崩れないままだったが、思う処はあったのかほんのり複雑そうな気配を漂わせるファルシオン選手に対し、「平和になって腑抜けていたようだ、鍛え直すとするよ」と苦笑で応じた神父様の言である。
やっぱりこの世界の坊主はストイックな修羅擬きが多すぎるやろ。時代背景的には当然なのかもしれんが。

んで、三戦目。これは個人的に初日の試合で一番見応えがあった。
初日最後の対戦カードは、大森林に近い都市群の方からやってきた武芸者ラン＝オーチェンと、大聖殿所属のシスター、チェルシー＝ミンスタである。
「教会の本拠地の聖職者か……腕利き揃いなのは知ってるぜ！　よろしく！」
「あ、はい。どうもよろしくお願いします。ご期待に沿える様に頑張ります」
快活に笑うラン選手に対し、ペコペコと物凄い腰の低い態度で何度も頭を下げるシス

ター・ミンスタという、これから腕を競い合うというよりミスをして平謝りする部下と鷹揚に許す上司みたいな光景から、三戦目は始まった。

俺はシスター・ミンスタに関しては聖殿で見た事があるかもしれない、程度の認識なんだが、シアは顔を合わせればちょっと話をする程度には交流があるらしく、のんびりと応援の声を上げていた。

「チェルシーさんは普段からあんな感じだし、人見知りするタイプだからこういった大会に出るってのは予想外過ぎるけどな」

周りの歓声に気圧されまくって挙動不審になってるシスターを見るに、シアの言葉は説得力しかない。

とはいえ、聖殿勤務の彼女は一応は俺にとっても同僚に近い立場のお人だ。応援する事に異議があろうはずもなしってな。シアと一緒に声援を送っとこう。

見た目は気弱そうな美人のシスターって事で、少し笑い交じりの応援の声もあちこちから上がっていたんだが、そんな声にいちいち反応して全方位にお辞儀を繰り返している彼女を対戦相手と実況が揃って試合に集中する様に窘めるという、なんとも珍妙な流れで試合が開始される。

……正直、あんまりにもオドオドしてる感じで、試合どころかそもそも戦えるのか、みたいな危惧を抱いていた人達は多数いたと思うのだが……いざ戦いが始まると、そんな

心配は一瞬で消し飛んだね。

頑丈そうな脚甲の爪先で足元を軽く蹴りながらリズムを取るランに対し、シスターが腰帯に吊るしていた二本の棒――横手に握りの付いた卜型の武器、旋棍（トンファー）を構えると空気が変わる。

最初に強烈な震脚で武舞台が踏み鳴らされ、石畳が罅割れて彼女の靴裏が沈み込む。

表情こそ相変わらずめたくそ不安気で、まるで初陣の新兵みたいな顔をしてるってのに、首から下の構えは迷いなく、ピタリと得物を構えたまま静止した様は堂に入るってレベルじゃない。

言動からして荒事に向いて無さそうなキャラしてる癖に、中身はしっかりこの世界の聖職者（修羅勢）仕様とか詐欺やろ。ギャップがエグ過ぎて吹きそうになったわ。

相対してるラン選手は、誰よりもそれを強く感じた事だろう。

軽く口笛を吹いて「こいつはスゲェ」と笑って見せる胆力は大したもんだったが、彼我の実力差をはっきりと感じてしまったのか、その額には一筋の汗が浮かんでいるのが見て取れた。

それでも、彼も本選に残るだけの実力を持った強者だ。武を交える前から諦めるという選択を取る筈も無く、練度の高い魔力強化で脚力を高め、シスター・ミンスタを中心として武舞台を廻りだす。

緩急をつけてステップを踏み、小刻みに間合いを詰めては離し。
合間にその長い手足を活かして打撃を繰り出す様は、お手本の様なヒットアンドアウェイだったのだが……中心のシスターは軸足の位置を変える事無く、舞台の中心にどっしりと根を生やしたまま、攻撃の全てに対応してみせた。
側面からの拳打は丁寧に魔力強化された腕や肩で受けられ、背後に廻っての蹴りは体捌きだけで躱される。
長丁場になれば、体力もそうだがそれより先に精神(こころ)が折れそうになる実力差を改めて実感したランの決断は速かった。
「こりゃ勝てねぇ、な――だが、一矢報いるくらいはさせてもらう！」
言うや否や、舞台のギリギリ端まで跳躍し、距離を取って。
あくまで受けて立つ構えのシスターに対し、全開の魔力強化と共に突撃を開始。一直線に吹き抜ける疾風と化した。
気合の入った雄叫びを上げながら、加速の乗った――半ば体当たりにも近い突きを叩き込んでくるランに向け、シスター・ミンスタは手にした旋棍(トンファー)をしっかりと握り直し。
両者の間合いが重なった瞬間に僧衣の裾が跳ね上がり、白いオーバーニーソックスに包まれた脚線美が披露されたと思いきや、若き武芸者の胴へと強烈な突き蹴りがカウンター気味に突き刺さった。

壁に投げて跳ね返ったゴムボールみたいに再び武舞台の端まで吹っ飛んだランの意識は、その時点で遥か彼方に飛び去っていたらしく、受け身も取れずに石畳の床の上を滑って転がり、最後は大の字になってダウン。

シスターの見事な守りを見せた技巧派な立ち回りから一転、豪快かつ鋭い体術による一撃に、観客達が唖然として沈黙した。

「あっ、す、すすすみません、凄い速かったので手加減とか全然出来なくて！　大丈夫ですか!?」

そんな空気など気付かないとばかりにぶっ飛ばした張本人が物凄い慌てた様子で駆け寄り、意識の無い相手選手に回復魔法をかけるという意味の分からない状況の中、盛大なノックアウト決着に一拍遅れて賞賛の歓声が爆発する。

キョドりながらも抱き起したラン選手に回復魔法を行使し続け、且つ全方位に再びお辞儀を繰り出すシスター・ミンスタ。

本人の性格と実際の武力のギャップがひでぇのなんの。いや、見た目や気性にそぐわない実力者ってのが居ない訳じゃ無いが、彼女の落差は俺の知り得る限りではぶっちぎりである。

やっぱりこの世界の聖職者ってどっかおかしい奴多いわとか、蹴りも見事だったが白ニーソ＆白ガーターとか大変に素晴らしいかったですとか。

初日の最後の試合に相応しく、色々と言いたい事やら感想やらの多い試合ではあったが……敢えてどれかを選んで述べるとしたら一つだけだ。

これに関してはシアとリアも同感だったのか、俺達は顔を見合わせ、力強く頷く。

まぁ、なんだ、うん。

「得物使えや（よ）!!」

攻防には結局武器を使わず、最後の〆はまんまトン〇ァーキックだからね、仕方ないね。

――そんな感じで、闘技大会のスタートは順調な滑り出しだったと言って良い筈だ。

試合も盛り上がってるし、観客も大入り、まだまだ序盤とはいえ、大きな怪我を負った選手もなし。

入場や試合開始前の警備を手伝っている身としては、会場となっている闘技場内で幾つか行われていた今回のトーナメントを対象にした賭け事なんかは取り締まって良いものか悩んだけど……良くは無いがグレーゾーンってことで御目溢しするのが国側としての判断らしい。額にせよ、金銭トラブルにせよ、話がでかくなってきたら別み

たいだけどね。

……そうだな、昨日の試合もざっくりと反芻したし、いい加減話を現在へと戻そう――

――現実逃避しても状況は好転しないし。

闘技場（コロッセオ）の観客席、武舞台を中心として階段状に拡がる、その中程にある席の一つに、俺は腰を下ろしている。

ちらりと左隣に視線を向ければ、そこには最近再会した魔族領の友人――クインが座っていた。

「ん、どうしたんだい？」

眼が合うと屈託のない顔で笑い、小首を傾げる彼女に、何でもないぞい、と返して右隣に視線を向ける。

「今更ですが、先日のチェルシーさんの立ち回りは良かったですね。彼女とは久しく模擬戦をしていませんが、今戦えば少々厳しいかもしれません」

「謙遜はおよしなさいブラン。あの子もこの二年、修練は欠かしていませんが……それでも現時点では貴女にはまだ届かないでしょう」

沢山の子供達に囲まれて座っているのは、二人のシスターだ。言う迄も無く、二人とも見知った顔な訳で。

ちなみにお子様共はシスター二人だけでなく、俺とクインの方にまで群がって来てい

る。

「あんちゃんもおまつりにきてたんだなー、おれたちといっしょにこればよかったのに！」

「ねーねー、まえのおねえちゃんは？　あたらしいコイビトなの？」

「すげー、ねーちゃんおっぱいでけー！」

「はい、おっきいわんわんにアメあげるね！」

クインの方は精々隣に座って話しかけられたり、小さな子が膝に乗り上がる程度だが、俺の方はなんかもう膝に乗られ頭に登られ、耳を引っ張られ、おかしあげるー、とか言われて頬っぺたに飴をぐりぐりと押し付けられ……鏡でみたらさぞかし変顔になっとるやろなぁ（諦観

何時ぞやの孤児院での時間と同様に、元気過ぎるキッズ達に集られながらも、更に前方――舞台を挟んで向かいの観客席の最前列に設けられた、前日は俺も座っていた仕切りのある特別席に眼を向ける。

今日もそこに並んで座ってる聖女様二人は、どっちも笑いを堪えた表情で俺を見て手を振っていた。

おいコラ、リアはまだイイとしてシア。お前さん俺がクインとここで遭遇して相席したら直ぐに席立ってこっちに移動しようとしてたやろ、見てたぞ。

知り合いとエンカウントしたらそっちで観戦するかも、とは予め言ってあったが、それでも不機嫌丸出しで隣のリアに宥められていたレティシアさんなのだが。

後からやって来たミラ婆ちゃん達がここに座った途端、普通にその場に腰を落ち着けましたよねぇ！

ウチの聖女様が楽しそうなのは大変に結構なんですが……クインとミラ婆ちゃん達に挟まれてなんとなく居心地の悪い俺を見て、ってのは素直によころべない！　ふくざつ！

席の肘掛けに頬杖ついてニヤニヤと笑ってるシアに露骨に顰め面を向けてやる。お前あとで覚えてろよ、次に買って来るお好み焼きはお前の分だけ辛子たっぷりマヨになると思え。ふははは。

辛いのが得意ではない金の聖女様が好物を頬張って悶えるシーンを想像して溜飲を下げていると、右隣――ミラ婆ちゃんが「さて」と、場の空気を改める様に切り出した。

「子供達も一旦落ち着いてきた事ですし……少々遅れましたが互いに自己紹介を行うとしましょう――レティシア様とアリア様があちらの席におられ、貴方がそこのお嬢さんと此処で相席している理由も聞きたい処ですね」

あ、はい。分かりました……で、では僭越ながら。

この場の淑女三名、互いに互いを知った関係、知らなかった関係が大分ややこしいが

……共通の知り合いである俺が音頭を取るべきなんだろう、この場合。

なんやろ、この謎の緊張感。

こう、なんというか、変な例えになるが……かあちゃんに色々と複雑な複数の異性との友人関係について説明せねばならんような、この感じ。

クインは状況が掴めていないのか、不思議そうに再度小首を傾げ。

なんだか眼鏡をギュピーンと光らせて「虚偽や誤魔化しは許しまへんでぇ」と言わんばかりに俺の顔に視線をぶっ刺してくるミラ婆ちゃん。

以前、シアと一緒に遊んだときに知り合った孤児院の運営者――シスター・ブランが「あらあら」なんて言って口元に手を当てて笑っている。

シアとリアは相変わらずこっちを見て指さしたりして楽しそうだし、なんなら何故か我が相棒、鎧ちゃんの調子まで変になってきた。いや、『悪い』感じじゃなくてあくまでなんか『変』な感じなんだが。

どういうことなの、マジでどういうことなの。誰か説明して、本気で（白目

早く一回戦後半が開始される事を祈りつつ、闘技場（コロッセオ）の上に開けた空を見上げる。

「ぼくしってるー、これしゅらばってやつでしょ！」

わー、よくしってるなー、ぼうずー。でもそれ以上言うとおにいさんちょっと泣いちゃうかもしれないからやめとこうなー。

肩に登って来て肩車の体勢となったお子様の一人が、ものっそい無邪気に色々と抉りに来たのを為す術なく受け止め、俺は深々と溜息をついたのだった。

道交わる各々　2

帝都闘技場（コロッセオ）、本日の試合が始まる僅かな隙間時間にて。
俺とクイン、ミラ婆ちゃんにシスター・ブランと孤児院の子供達という、少々予想だにしなかった面子で相席することになった訳だが……女性陣が皆、礼儀もしっかりした真面目な方々というのもあって説明や挨拶は極々穏やか且つスムーズに進んだ。
「なるほど、魔族領の……かの公爵殿の名代とは、お若い身でありながらとても優秀なようですね」
「いえ、帝国に向かえない主の代わりに、あくまで代理で皇帝陛下にご挨拶した、というだけですので……僕のほうこそ、あの四英雄筆頭にお会いできて光栄です」
「私はそう持ち上げられる様な身の上ではありません。為した功績、という点でみればレティシア様やアリア様、この子の方が余程大きいでしょう」
「……っ、ふふっ……あっと、笑ってしまって申し訳ない。なんというか、彼の姉弟子というのはやはり本当なんだな、と実感してしまって」

えー……そらどういう意味やねんクインさんや。
にしても、まーた出たよ、ミラ婆ちゃんの自称・いちシスターアッピル。
お前のようなただのシスターがいるか！　と散々に色んな人に言われてるでしょうに。若い頃からこんなんだったって話だし、付き合いの長い教皇様やガンテスなんかは大変だったやろうなぁ。
流石に後が怖いので、口には出さんけどな！
姉弟子と友人に挟まれ、時折会話のネタにされつつ両者が親交を深めているのを黙って聞き入る。
とりあえず、この場にいる人達が俺の視点からどういった知り合いなのかだけ大雑把に説明し、あとは当人同士が軽く自己紹介する流れになって。
クインなんかは一応は女公爵に命じられる形で仕事としてやってきているので、帝国に来てからも色んな工房にお邪魔して技術交流のお誘いや見学に精を出している。
彼女の気質も含めて生真面目なミラ婆ちゃんには中々に高ポイントだったらしく、それなりに両者の会話は弾んでいた。
んで、俺の方も姉弟子殿の隣に座るシスターと意外な繋がりがあった事を知って、彼女とちょいちょいその事について語り合う。
「あの時、オフィリを連れて来て下さった方が《聖女の猟犬》……ミラ様の弟弟子だった

とは……奇妙な縁を感じますね」
「わんわんとおねえちゃんは、すごくなかよしだったんだよ？　オフィーもいっしょにごはんたべたの！」
「そうですね、仲良しなのは良い事です……それはそれとして、貴女はここ最近、はぐれて迷子になる事が多いですからね。気を付けないと駄目よオフィリ？」
ちょこちょこと動き回ろうとする子供達を手際良く抑えて席に着かせながら、俺の膝の上に座った幼女の言葉にシスター・ブランは苦笑する。
まー、俺も俺で結構驚きましたよ。前に偶然保護した迷子の保護者さんが、ミラ婆ちゃんの教え子的な人だったとはなぁ。
実は婆ちゃん、休日とかはあの孤児院に顔をだしてたりするらしい。なんつうか、お互い凄いニアミスだな。まさしく奇縁ってやつだ。
「それで……貴方がかの《猟犬》だと言う事は、あのときご一緒していた彼女は……？」
此方を伺うように問いかけてくるシスター・ブランに、今度は俺が苦笑して向かいの観客席へと顎をしゃくる。
視線の先には最前列にある来賓用の特別席――そこには何やら俺と膝上のオフィリを見て手拭い咥えて引き千切ってる《魔王》と、それを呆れて見てるシアとリアの姿があった。

ちなみに昨日はいなかった《狂槍》とリリィもあっちに同席してる。《魔王》が引き千切った手拭いを咀嚼しながら立ち上がろうとして、後ろの席にいる《狂槍》に膝裏へと槍の石突をぶちこまれ、強制的に着席させられていた。

人目もあるだろうに、何をやっとんねん魔族領の連中は……まぁ、衆目の眼を気にして生きてる様な奴らじゃないのは今更なんだけどさ。

シスターもその光景――特にリリィを自分と妹の間に座らせて変態不死鳥から庇う様な位置に移動させてるシアを注視して、悪戯っぽく笑った。

あんときゃシアは髪の色を変えて伊達眼鏡なんて掛けていたが……まぁ、こうやって見直せば気付くわな。変装してようがしていまいがとんでもねー美少女なのには変わりない訳だし。

騙したって程大袈裟な話でもないだろうか、お忍びだったって事で許して欲しいです、ハイ。

「いえ、他にも変装していらっしゃる教皇猊下はいらっしゃいますし、特に問題はありませんので、気になさらないで下さいね」

そう言ってニコニコと笑顔のままだった彼女の双眸が、改めて俺をじーっと見て穏やかに細められる。

「今になって思えば、初めてお会いしたときに奇妙な既視感……懐かしさを感じたので

すが……そういう事だったのですね、納得が行きました」
こちらに向かって語り掛けるというより、殆ど独白の様に零れ落ちた言葉。
何処か噛みしめる様な響きを伴った声色は、ひどく懐かしい、そして大切な記憶を思い返した者のそれだった。
何時の間にやらクインとの会話を止めて俺達の会話に聞き入っていたミラ婆ちゃんが、シスターと顔を見合わせて同じように眼を細め、穏やかに頷く。
ふむ、言葉の内容は気になる処ではあるが……彼女もあの大戦で戦い、生き残った身だ。
多くの人がそうであるように、シスター・ブランにも相応の過去がある、という事なんだろう。
指摘して根掘り葉掘り聞くのも無粋ってレベルじゃねぇし、ここは口を閉じておくとしようか。世の中、沈黙と多弁では前者の方が多分に金足り得るってな。
迂闊な発言で怒られることが多い奴が言っても説得力にかける、というツッコミはしてはいけない。イイネ？
「……不躾とは思いますが、一つ、お願いが」
俺の膝上にいるオフィリをひょいっと持ち上げると、自身の膝に移動させて抱き締め、シスターは丁寧に頭を下げる。

「聖都に戻ってからで構いません、一度貴方の魔鎧を――貴方の相棒を、間近で見せて頂けませんか？」

うん？　鎧ちゃんを？

ドワーフみたいな特殊武装大好きな連中と同類って訳でもないだろうし、なんでやろ？

正直、ただの興味本位ならお断りする話なんだが……目の前のお姉さんはそういった礼節には厳しい人だというのは、短い付き合いのなかでも十分に察せられる。教会御意見番の薫陶篤いのはもう雰囲気からして感じ取れるしね。

何より、遊びや気紛れでの発言、なんて欠片も思えない程度には、その表情は真剣だった。

「――私からもお願いします。一度、ブランに貴方の相棒を見せてやってください」

うーん、ミラ婆ちゃんまでそう言ってくるか、なら俺に否は無いな。いや、まぁ、真面目なお願いっぽいから元から断るつもりはなかったんだけど。

おkよ～、じゃ、約束ということで。と敢えて気軽に返答してみせると、シスター・ブランはなんだかホッとした様子で少しばかり強張っていた肩から力を抜いた。

シスター二人が礼を言うのに対して、軽く手を振って気にしない様にと返して、肩車してる子を下ろして膝の上に移動させる。

俺が別の子を膝に載せたのが御不満なオフィリから抗議の声があがるが、そっちはシスター・ブランに宥めて貰って――そこで隣に座るクインからちょいちょいと服の袖を引っ張られた。

「ねえ、あれ……レティシア殿が物凄いアピールしてるけど、どうしたのかな？」

ちょっと困惑してる様子の友人に言葉に、向かいの観客席へと視線を向け直す。

クインの言う通り、そこには席から立ち上がって身を乗り出し、親指で自身をビシィッ！　っと指さしてものっそいアピールしてる聖女（姉）の姿があった。

流石に声は届かないが、きっぱりと言い放っているソレを唇の動きから読み取るのは容易だ。

えーと……あ　い　ぼ　う　は　オ　レ　だ　ろ　う　が、か。

いや、こっちの会話聞こえてるんかい、地獄耳かお前さんは。

この話題になるとエラい超反応を示すシアに、隣のクインと顔を見合わせて苦笑いした俺である。

『どもー、解説のシャマだよー。さぁー、今日も快晴！　絶好のお祭り日和！　闘技大会第一回戦の後半の始まりぃーっ！　――この仕事終わったら今日はフリーだし、ちょーアガるぅ！』

『はっはっはっは！　実に率直ですな！　拙僧も空いた時間に有名各所を見て廻っておりますが、帝都の広大さと各所の催しの数を考えるに、どうあっても時間は足りなくなるは必定。皆々様も巡る場と催しは吟味する事をお勧めいたしますぞ』

『ちなみに今回の解説には、引き続きグラッブス司祭様と、もう一人の特別ゲストをよんでるからねー！』

拡声の魔具を用いた実況解説二人の声が、大会二日目の開始を告げる。

聖女や《魔王》といった錚々たる面々が座る、来賓用の席とはまた別方角に設置された最前列の実況用の席は、シャマの言葉通り今日は三名が腰を下ろしていた。

『ど、どうも。大陸中央部の大森林よりやって参りました、サルビア＝エルダと申します』

『サルビア様はエルフの最長老様――ぶっちゃけ一番エラい人だからねー。しょーじきこんな仕事頼んでいいのかって気はするけどおもしろそーだから問題無し！』

『うむ！　拙僧もサルビア殿とはここ帝都で再会しましたが、魔法全般に対する知見と

考察は流石の一言。我らでは見逃すやもしれぬ試合の機微を語って頂くのに、実に適した御方であるかと！』

『い、いえ！　その様に大したものでは！　あくまで後衛型の魔導士の視点で語るべき部分が出れば、補足を入れる、程度だと思って下さい！』

『ってゆーか再会ってことは司祭様とサルビア様は顔見知りなん？　そっちはそっちで気になるんですけどー』

慌てた様子で顔の前で手を振っているのは、先日まで来賓席にいたサルビアである。

初日は来賓席で観戦に徹していた彼女であるが、本日から実況解説に参加するようだ。森から出てきたばっかでこれ程の大規模な祭り――その中でも最大規模の催しでの解説とは、聊かハードル高いとは思われる。

が、緊張はあれど、積年の想い人たる筋肉司祭の隣に座って共同作業ってことでご満悦らしい。恋する乙女は強し、というやつのかもしれない。

『ゲストの二人の関係は気になる処だけど予定時間だし、先ずは第一回戦の後半、いってみよー！』

魔道具によって拡声されたシャマの宣言に、観客席から待ってましたとばかりに歓声が上がった。

武舞台脇に設置された巨大な銅鑼が打ち鳴らされ、竜の方角から小さな――おそらく

は今大会の中で最も小柄であろう選手が入場してくる。

『本日の初戦、その片割れは魔族領の若手の戦士！《風兎》選手だー！　めっちゃ可愛いけどかの《災禍の席》の直属にまでのし上がった実力派だぞ！　めっちゃ可愛いけどー！』

前のめりで可愛い可愛いと連呼する実況の声に、ムスっとした不機嫌さが丸分かりな雰囲気で歩を進める《風兎》であるが……確かにその姿は世間一般でいう処の愛らしい容姿であった。

とはいえ、この場合は美醜的な意味ではなく、小動物的な意味で、だ。

祖となる獣の特徴を引き継ぐ獣人であるが、その因子の強さには個体差がある。

耳や手足にその特徴が少し残る、程度の者もいれば、限りなく先祖返りに近いレベルで因子を強く発言させた者もおり、《風兎》は後者――ほぼ最高深度の因子を有しているのが一見して見て取れた。

端的に言ってしまえば、彼の姿は少しだけ人間的なフォルムをした二足歩行のウサギである。

子供の背丈程度の大きさのウサギが、服を着てのっしのっしと二本足で歩いているのだ。どう言い繕おうが見目が愛らしいのは否定のしようが無かった。本人は凄まじく不本意そうだったが。

己の内の獣としての因子をある程度抑える事が可能な者であれば、獣寄りか人寄りか、その外見と身体性能を随時切り替え可能なのだが……獣人にとって極めて高難度の技術である為か、習得者は少ない。

おそらくは《風兎》もまだ習得には至っていないのだろう。魔族の中でも若手に類されるのであれば、それも仕方の無い事ではあった。

年若い女性や小さな子供といった、小動物を好む観客層から一際大きな声援が上がり、「かわいい！」「ウサギさんがんばって！」と舞台に向けてやや黄色い声が飛ぶ。

降り注ぐマスコットを愛でるかの如き声援に、限りなくウサギな顔であるというのに明確に怒りを感じさせる面相となった《風兎》が咆哮した。

「……うるせぇぇぇぇっ!?　誰がカワイイってんだコラ！　そこのオイラの描かれた団扇持ってる奴！　いつそんなモン作った!?　ぶっ飛ばすぞぉ!!」

童話に出てきそうな姿をしたウサギさんが、頭に乗せていた革の帽子をむしり取って石畳にたたきつける。

彼の怒り自体は紛れも無く本心であり、本物なのだろうが……耳をピコピコと立て、高い声で上げる怒鳴り声の合間に本物のウサギの如くプゥプゥと鼻を鳴らす様は、残念ながら迫力というものが一切ない。

益々可愛いと、特に子供を中心に歓声を浴びせられ、地団駄を踏んでいる獣人の若者

を眺め、来賓席の《狂槍》が珍しく気の毒そうに呟いた。
「あの小僧、《万器》の部下だったか……あの性格であのオヤジが上司じゃ噛みつく事も多くなりそうだ、馬鹿笑いしてイジってるのが目に浮かぶしよ……」
「魔族領（ウチ）を飛び出して帝国に来たっぽいですからねぇ……頭領（ボス）、彼が戻って来るなら所属を移してあげたらどうですか？　《赤剣》さんの処なら空いてるでしょ？」
「俺もウサギに生まれたかった……」
「ガチ泣きしてる!?　キモッ!?」
　小さな観客達から大人気の《風兎》を見つめ、心底から羨望の瞳を向けて落涙している《魔王》を見てドン引きした《不死身》が嫌そうに距離を取る。
「《魔王》様は何故泣いていらっしゃるのでしょう……慰めた方が良いのでしょうか？」
「気にしなくていいぞーリリィ。アレはただの持病の発作みたいなもんだからな。それより、ほら。《風兎》選手を応援するんだろ？」
「はい。聖地でも、ウサギさんは小さくて可愛くて好きでした。あの大きなウサギさんが勝ち進めるように、リリィは応援します」
　同じく来賓席に座る聖女とエルフの少女のやりとりを聞いて、《魔王》が落涙を血涙に変えて「ゲフゥ！」と呻きながら吐血した。
　図らずも最近の推したる『姫』にトドメを刺された形の魔族の頭領を横目に、聖女の

片割れであるアリアが困った様に微笑む。

「うーん……確かにモフモフしてそうだし、可愛いし、リリィが応援したくなるのも分かるけど……ボクとしては複雑だなぁ――《風兎》選手の対戦相手が友達だし、個人的にはそっちを応援したいんだよね」

銀麗の聖女がそう呟いたのと同時、解説のシャマがもう一人の選手の紹介に入った。

『さぁ、お待たせしました！　魔族領のキュートな戦士に相対するは、我が国最精鋭の一人！　《刃衆（エッジス）》ローレッタ＝カッツバルゲルだぁーっ！』

今度は老若男女関係なく、観客が客層問わず一斉に歓声を上げる。

怒号のごとき声援――取り分け地元である帝国民からの熱烈な応援を受けながら、獅子の方角より現れたのは豪奢な金髪巻き毛の少女だ。

魔装処理の施された布製の騎士服に、これまた隊の正式装備たる魔装処理された黒い外套（コート）。

攻防を兼ねた魔装の手甲に包まれた両拳を打ち合わせ、その瞳には闘志の炎が燃え上がっている。

か弱く、見目麗しい御令嬢。といった容姿ではあるが、意気揚々と進む姿は揺らぎや迷いなど無く、纏った装備に相応しい一廉以上の戦士である事が見て取れた。

観客のカワイイコールに憤慨していた《風兎》だったが、真っ直ぐに自身を見据えて

武舞台に上がって来る少女を見て直ぐに意識を切り替える。
「いい面構えしてる……流石は帝国で一番つぇー奴らの一人って事か」
腕を組んで不敵に笑う獣人の若者の言葉に、少女――ローレッタは無言で頷くと拳を構えた。
「まずは語るなら拳で、ってかい？　いいね。オイラもそういうのは嫌いじゃないぜ」
戦士としての本能を刺激され、益々笑みを深める《風兎》であったが。
（……滅茶苦茶愛らしいですわね……お部屋に置いてあるジェームズ君とそっくりですの。殴り難くて困りますわ）
腕組みして見上げて来る、自室に置いてあるぬいぐるみとそっくりなウサギの青年。
それを見つめ返すローレッタは、今まで体験したことのない種の苦戦の予感に、内心で困惑を覚えていたのだった。

『何はともあれ、試合開始！　さぁーて、かたや拳、かたや脚と、どちらも五体を武器とした戦闘スタイルの両者！　必然、至近距離（クロスレンジ）の攻防が多くなりそうだけど……ゲストの御二人はどうみますー？』

『そうですな……確かに両選手、有効打の間合いが近距離でありましょう。が、兎人である《風兎》選手の脚に追いつくは至難。必然、御令嬢は迎撃を以て打倒を図る機会が増える事になるかと』

『保有魔力的には《風兎》選手の方がやや上ですが、全選手でもっとも小柄な彼はリーチで不利が生まれそうですね。相手が長柄とかなら潜り込めばいいですが、ローレッタ選手も徒手ですし、切り返しは速いでしょうし』

実況の三人がそれぞれに試合展開を予測しているのを聞き流しながら、《風兎》がその場で軽く地を蹴って舞台の硬さや感触を確かめる。

「さて、出し惜しみするガラでもない。初っ端からいく――ッ!?」

いざ、その自慢の脚力を披露しようとした矢先、向かい合う少女が弾かれた様に突進を開始した。

「ッシャオラァッ!!」

年頃の乙女が叫ぶには聊か以上に豪快な気合の叫びと共に拳が繰り出され、《風兎》はそれをかろうじて回避する。

不発に終わった”真っ直ぐいってぶっ飛ばす”であったが、獣人の若者は楽しそうにピスピスと小鼻を鳴らした。

「へへッ、いいね！　正面から全力でぶっ飛ばしにくるか！」

「どうも！　こちとら二重の意味でやり辛くて四苦八苦してますわ！」

ローレッタの言葉に嘘はない。眼前の対戦相手がお気に入りのぬいぐるみとそっくりで全力で殴るのに躊躇いを覚えるのも事実だが――それ以上に、自身より小さく、小柄な相手というのが思ったより厄介であった。

これまで戦ってきた相手が基本、体格で上回る男性や魔獣といった見上げる相手であったのに対し、《風兎》は子供と然して変わらぬ背丈。

必然、ローレッタの攻撃の軌道は殆どが打ち下ろしになる。

それが苦手、というような温い訓練は積んできてはいないが、これまでの戦いの定石（セオリー）や連撃パターンが活用できないのは、少々問題だった。

（小兵相手の経験不足……ならこの試合で慣れるだけですわ！）

だからといって、それで気後れを見せる様な娘ではない。

徒手の間合いで軽業士の如く彼女の拳を回避する《風兎》だったが、横殴りの一撃を屈んで避けると同時にローレッタの脚が跳ね上がり、顔面に向けて膝蹴りが飛ぶ。

だが、ローレッタが不慣れであるのとは逆に、この兎人の若者にとって現在の状況は数多く経験してきたもの。

膝や蹴り上げる軌道の爪先は、対処に慣れているといっても過言ではない。《風兎》は少女の膝を更に身を低くして躱すと、地を刈る水面蹴りを打った。

彼は獣人の中でも脚力自慢の種だ。受ければ足を刈られて転倒どころか足首をへし折られかねない。

相手は咄嗟の回避に前に出した脚を強引に引っ込めるか、思い切って飛び上がるか。

これまでの経験から、それを狙い打ちにする算段を立てて《風兎》が蹴り足を振り抜こうとすると――。

「ふんぬっ！」

これまた下っ腹に力の籠ってそうな気合の声と共に、ローレッタが体重を掛けていた筈の軸足を足腰の強さに任せて強引に振り上げ、モフモフしたライトブラウンの毛皮に覆われた足を踏みつける。

「痛ッ!?」

「くぅっ!?」

予想外、といった驚きを伴った苦鳴をあげたのは両者同時であった。

石畳とブーツの靴裏に蹴り足を挟み込まれるも、その脚力で足を振り切ってみせた《風兎》。

咄嗟に相手の水面蹴りを踏みつけた筈が、相手の脚の強さに乗せた靴裏ごと持ち上げられ、宙に蹴り飛ばされたローレッタ。

かたや脚へのダメージの確認の為に咄嗟に後方に転がり、かたや蹴り飛ばされた状態

から身を捻って着地し、二人の距離が大きく離れる。
　息も付かせぬ攻防が一時止まり、闘技場（コロッセオ）に二人の戦士の技量を称える歓声が湧き上がった。
　実況席から身を乗り出したシャマが、やや興奮した様子で声を上げる。
『おぉー、これは良い試合！　互いに慣れ不慣れの要素がある戦いだけど、ローレッタちゃんが無理矢理それを引っ繰り返した形か!?』
『咄嗟に相手の蹴り足を靴裏にて挟んだのは良い判断ですな。《風兎》選手は己の武器たる脚に痛手を受けた御様子。負傷の度合いによっては苦しい戦いになるでしょう』
　続くガンテスの言葉に、《風兎》が足を宙に持ち上げてプラプラと揺らし、笑って見せた。
「だとさ。チャンスだぜお嬢さん、打って出てきたらどうだい？」
「……手応えはありましたが、まだまだ動けるでしょう。魔族の方の頑丈さ、ある程度は聞き及んでいますわ」
　油断無く拳を構えるローレッタに対し、「バレたか」と軽く肩を竦めてその場で軽く跳ねて見せる。
　全くダメージが無い、という事は無いのだろう。互いに魔力強化を用いたガチガチの接近戦を行っている最中に踏みつけたのだ、それこそ現在実況席に居る筋骨隆々の岩み

たいな司祭でもない限り、脚の負傷は確実である。
だが、この可愛らしい兎人の若者が痛みを恐れて戦いに類する行動を鈍らせる事がないのは、短いやり取りと攻防の中でも容易に察せられた。
蹴り飛ばされたと言っても靴裏を乗せた状態から吹っ飛ばされたローレッタにダメージは無い。
状況はやや少女の優勢へと傾いたが、まだまだ油断出来るような相手でも無いのは確かだった。
「さっきも言いかけたけど……出し惜しみは好きじゃないんだ、本気でいくからな」
トーン、トーン、と。その場で跳ねながら《風兎》が小さく、何事かを呟く。
おそらくは魔法の詠唱である、と判断したローレッタが警戒を高めていると、魔力が彼の両の手に集まり、生み出されたのは圧縮された風の塊だった。
『む、拙僧の見立てでは、《風兎》選手は近接特化だと判断しておりましたが……どうやら魔法も併用して扱う御様子』
『術の構成としてはシンプルですね。迎撃として扱うのなら圧縮された風の塊は便利ですが、攻撃に用いるのには風の魔法の強みである速さが落ちてしまう筈なんですけど』
解説席のゲスト二人から疑問の声が上がるも、それには頓着する事無く《風兎》は右手のソレを構えた。

「そいじゃ、行くぜぇっ！」
叫びと共に放たれる風の魔法。
だが、サルビアが言った通り、圧縮した風の塊は同系統の風の刃や衝撃などより威力はあれど速度に劣る。
魔法は矢の如き速度で飛来するが、それでも《刃衆（エッジス）》クラスの使い手を捉えるのには不足に過ぎた。
ローレッタも身を傾げて余裕をもって躱し――次の瞬間、放った風の魔法に倍する速度で飛び込んできた《風兎》に瞠目する。
「あーらよっとぉ！」
「ぐっ!?」
駆け抜けざまに蹴りが放たれ、咄嗟に受けた腕に少なくない衝撃が走った。
手甲で受けても伝わる蹴撃の威力に押され、武舞台の石畳を滑りながらローレッタは後退する。否、させられた。
ブーツの踵で石畳を抉りながら停止し、すぐさま凄まじい跳躍力で一足飛びに背後に跳んでいった対戦者の方へと振り向こうとして――。
首筋が総毛立ち、湧き上がる戦慄に押される形で、振り向く事無くその場に転がる様に身を投げ出す。

身を伏せた彼女の頭部があった場所を、先程と劣らぬ速度と威力の蹴りが空気を抉りながら駆け抜ける。

どうやったのか、殆どタイムラグを見せずに同等の跳躍、そこからの強襲をみせた《風兎》が舞台の端へと着地した。

「――っとっと。あぶね、危うく場外になるところだ。使うにゃやっぱりギリギリだな、ここの広さは」

「……魔法の用途は攻撃ではなく”足場”、そういう事ですのね」

「御明察。実際には見てないだろうに一発で理解するのはすげーよ」

即座に跳ね起きたローレッタが警戒も露わに左手に残された《風兎》の魔法を注視して、それに対して彼はウサギそのものな顔で器用にニヤリと笑ってみせる。

種としてはそこまで複雑なものでもない。

圧縮した風の魔法を発射、その後に魔法のあとを追う様に跳躍。

魔法を避けるなり迎撃するなりした相手に向け、その爆発的な脚力を以て追撃をしかける。

相手が魔法を回避した場合は、そのまますっ飛んで自らが放った魔法に追いつき――それを足場として蹴りつけ、圧縮空気の破裂も利用して再度跳躍。背後から間を置かずに強襲、という訳だ。

速度で劣る代わりに威力を高めた風の魔法だ、初見は殆どの者が回避を選ぶのもこの三段構えの攻撃を組み立てる一因となっていた。
中々にトリッキーな技だが、相手の心理状態も加味して実行されたソレは、肝の冷える見事な攻撃だ。
最後の強襲を躱せたのは偶然に近い。内心では冷や汗を拭う心地のローレッタである。
何やら観客席の方からテンション高く、空圧〇拳だ！　と叫ぶ知り合いの青年の声が聞こえたが……何処ぞの流派で正式な技術として伝わる技なのだろうか？
「さて、続きといこうぜ――この場所の広さの感覚も掴んだ、もうちょい厳しくなるから覚悟しろよ」
「上等ですわ」
空いた右の掌にも再び魔法を生み出す《風兎》に対し、不敵に笑い返して腰を深く落とし、迎え撃つ構えを取るローレッタ。
実の処、闘技大会のルール上ならば彼の技への対処方法は幾つか思いつく。
リングアウトが存在する以上、極論、舞台の端近くに陣取り、繰り出される飛び蹴りに対し回避に専念するだけで相手に場外負けを意識させる事も可能だろう。
尤も、《風兎》自身もその可能性は考慮しているだろうし、対処も心得ている可能性は

あるが。

――だが、これはお祭りで、腕試しの舞台だ。

その様な尻切れトンボの如き消極的な方法での勝利など、観客も、運営側である帝国も望んではいないだろう。

何より、ローレッタ自身がそのようなやり方で勝ちを拾うなど、御免被る。

（私（わたくし）はカッツバルゲル――障害と困難は正面からぶち破って進むのが我が家の流儀）

無論、騎士であり、同時に貴族の端くれである以上、護るべき民を背にする戦いで迄ゴリ押す流儀ではない。

だが、試し合い……純粋に己が戦武をぶつけ合うこの場においては、存分に貫くべき彼女の誇りであった。

何より――。

「これは間違っても侮りや侮辱ではありません――が、私（わたくし）、貴方より速い方を知っていますの。此処で貴方を正面から捻じ伏せられぬと言うのなら、挑む事すら烏滸がましい、という事になってしまいますわ」

自身が登場した獅子の彫刻が鎮座する方角へと、目を向ける少女。

その隙を突く事もなく、彼女の視線の先を眼で追う兎人の戦士。

二人の視線の先には、部下の奮戦を見に来たのであろう少女の上司の姿があった。

選手出入り口の壁に背を預け、静かに試合の様子を見つめる銀髪の少女の姿を見て、ローレッタと《風兎》は――楽しそうに笑った。
「なるほど、脚でオイラよりも、か――そいつは素敵だ」
「えぇ、そうでしょう？」
事此処に至れば、可愛いからド突き辛い、などという日和った感覚は遠い彼方に置き去りだ。
比武するに相応しい強敵同士、互いに同種の笑みを浮かべ、両者は燃え上がる闘志に瞳をギラつかせる。
張り詰める空気に、観客が固唾を呑んで勝負の行く末を見届ける中、二人は足裏で地を擦り、ジリジリと間合いを図り。
「なら、それも超えてオイラはオイラの《災禍の席（もくひょう）》に挑む。アンタはここで一回休みだ、ローレッタ」
「殿方なら淑女（レディ）に譲るべきですわよ、ミスタ・《風兎》――退かないのであれば押し通るまでですわ」
――瞬間。
先程よりも多くの魔力を練り込んだ風の魔法を、《風兎》が投げ放つようにして打ち込む。

軌道上の大気を巻き込んで回転しながら突き進むそれに向け、ローレッタは前に出た。

紙一重では逆巻く風に巻き取られ、体幹を崩される。体勢を保持できるギリギリの範囲を見極め、自慢の髪の先端や装備、白い肌が削られるのも無視して上体を横に振るダッキングで迫る魔法を躱す。

そして、風の塊を追う様に飛び込んでくる小柄な身体。

先のソレを上回る渾身の跳躍を以て繰り出された飛び蹴りは、弾丸の如き速度と砲弾の威力を併せ持つ凶悪極まりない必殺の一撃だ。

先程と同じ様に防ぐ――無理だ、下手をしなくとも受けた腕がへし折られる。

躱す――この速度相手にはこれも不可能に近い。何より、無理に避けた処で体勢が崩れ切り、風塊を踏みつけた追撃で狙い撃ちにされる。

が、元よりローレッタはこの二つを選ぶ気は無かった。

握る。己の武器を、己の征く道を切り開いて来た拳(相棒)を、強く、強く。

全開の魔力強化と共に、闘志を、強敵への敬意を、目標へと挑む意気を、そして何より、必勝への意思を握ったグーに込め。

「オラァァァァァァッ!!」

鉄拳と化した拳で以て、ローレッタは《風兎》の蹴りを正面からブン殴った。

互いの纏う魔力がぶつかり合い、炸裂する。
拮抗はほんの刹那の間のみ。
渾身の、満身の力を込めて打ち込んだ蹴撃と拳撃が、同時に大きく弾かれる。
必殺の一撃を相殺され、空中で一瞬の停滞を見せた《風兎》だが、次の瞬間にはぎゅるりとその場で身を丸めて回転し、逆の足で踵を打ち下ろし。
砲撃を殴りつけるのと大差ない真似をしたローレッタは、己の拳――特に手首の骨に亀裂が入った感触を感じながらも、一切怯まずに逆の拳を握り、更に踏み込んだ。
天より落ちる踵と、地より昇る拳が交差し、そして。
全身を使って跳び上がったローレッタ渾身のアッパーが、《風兎》の小さな顎を打ち抜いた。

『決まったぁぁぁぁっ!!　両者譲らず、最後の一瞬まで全力全開を振り絞った先、辛うじて勝利を掴み取ったのは……ローレッタ＝カッツバルゲルゥゥッ!!』
『お見事！　互いに己が戦武と志を貫いた素晴らしき戦いでありました！　いやはや、若さとはかくあれかし！　拙僧も中てられ、気が昂ってしまいそうです！』

『!?　が、ガンテス様がたかっ――ウォッホン、オホン！　とても見応えのある試合でした！　ただ、御二人とも結構なダメージが心配されますね、特にローレッタ選手は次の試合に持ち越さない様、しっかりと治療を受けて頂きたい処です』

実況のシャマが「うぉぉぉぉっ、あたしちゃんの後輩は最高ッしょ皆！」と、自重を投げ捨てて大はしゃぎするも、それをやんわりと諌める筈のガンテスも先程までの名勝負にテンションが上がっているせいか、止める気配が無い。

二人よりは幾分冷静なサルビアであったが、妙に挙動不審な上に両選手の負傷具合を気にして、場合によっては自分も治療を手伝った方が良いかと会場内のスタッフに連絡を取り出し、実況席は実に混沌とした様子であった。

現行の試合の中で間違いなく一番と言って良い名勝負を繰り広げた両名。

それを証明する様、両者を称える大歓声が降り注ぐ中。

戦いの結末。その勝敗が示すが如く、敗れた戦士は武舞台上で大の字になってひっくり返り、勝利を収めた戦士は真っ直ぐに立ってそれを見下ろしている。

「……負けちまったか……」

「紙一重でしたわ。先に与えていた貴方の脚へのダメージがなければ、結果は逆でした」

「……それもアンタにやられたモンだろ――ったく、ぐうの音も出ない完敗だよ」

鍛え直しだよクソッ、とボヤく《風兎》に向け、良い事を思いついた、といわんばか

りの表情でローレッタが両の掌を打ち合わせて――片腕の骨があちこち不味い事になっているのを思い出して悶絶した。
「うぐぐ……おててがクッソ痛いですわぁ……そ、それはそれとして、手っ取り早く鍛えたいというのならミスタも《刃衆》入りを目指すのはどうでしょう？　見た処、《災禍》の方々の下に戻るのには躊躇いがある御様子ですし」
「……帝国の部隊に魔族のオイラが入るのか、それって難しく……いや、問題が出ないか？」
「いえ、全く。かくいう私も北方の出ですし、なんなら故郷で爵位も頂いてましてよ？」
「お嬢様っぽいなと思ってたけど、マジで良いトコのお嬢様だったのかよ」
　問題なんかねーですわよ、と小首を傾げる金髪巻き毛の少女の言葉に、寝転んだまま《風兎》は来賓席にいる自国の頭領へと眼を向ける。
「……ウサギさんが負けてしまいました……」
「ひ、姫、あぁ、そんなお顔を曇らせて！　クッソ、俺が出場できてれば姫に全戦全勝を捧げるのに!!」
「「自重しろや焼き鳥」」
　なにやらしょんぼりと肩を落としているエルフの幼女と、それを見て酷く狼狽えている《魔王》を暫し眺め……溜息一つ漏らして正面――快晴広がる青空を眺めた。

「まぁ、大見得切った割に一回戦負けしちまったし、戻り辛いのは確かだしなー……仮に今戻っても、あの馬鹿上司が馬鹿笑いしてイジってくるのも目に見えるし、考えとくよ」

「期待して待つとしますわ――万事恙無く進めば私にも後輩が出来ますわね！」

悪戯っぽく、だが瞳をキラキラとさせて楽しそうに笑うローレッタに、それが狙いかよ、と小さく苦笑する獣人の戦士。

『なんだか楽しそうな会話が聞こえるぞー！　これはアレか、キュートなウサギ君の参入フラグってやつ？　ナイスだローレッタちゃん！　ちょー最高な後輩だぜ！』

実況席から飛んで来た揶揄いを含んだ声に、《風兎》の耳が萎れて鼻が不満げにプウプウと鳴らされる。

「あの実況のねーちゃん喧しいな。最初っから最後まで人をカワイイカワイイ連呼しやがって……アレも《刃衆》だってんなら、入隊できたら意趣返ししてやるのも悪かない」

「あの方、私の先任ですわよ。ぶっちゃけ訓練でも勝った事ありませんの」

「マジかよ!?　あんな馬鹿っぽそうな女なのにか!?」

ローレッタに無事な方の手を差し出され、引っ張り起こされながら。

あっさりと告げられた衝撃の真実に、再び天を仰いだウサギさんは「世界って広いわ……」とボヤいたのであった。

道交わる各々　3

「良い勝負でしたね。個人的にはこういった場所での比武はあまり良い印象を受けなかったのですが……このような場での試し合いだからこそ生まれる交流もある、という事ですか」

縦ロールちゃんの手を借りて立ち上がる《風兎》選手を見ながら、ミラ婆ちゃんが満足気に頷いた。

実際、すげー良い試合だった。終わってからの穏やかな空気も含めて、お祭りに相応しいド派手で気持ちの良い勝負を見れたわ。

会場に居る多くの人達が俺と同じ考えなのか、両選手には惜しみない拍手が送られている。

試合を振り返って補足や見所を振り返っている実況解説の三人へと視線を送り、我が姉弟子は何処か感慨深い口調で呟く。

「ガンテスが解説役を問題無くこなしている、というのも、なんというか……愉快な光景

ですね。となりにいる御婦人――サルビア殿の事も含めると尚更に」

それな。やっぱり婆ちゃんも最初に聞いたときは驚いた？

「えぇ、正直最初に猊下から話を聞かされた際には、相当に混乱しました」

ですよね！　俺なんて槍でも降ってくるんじゃないかと本気で心配して三十分くらい上空を警戒しちゃったよ。

お道化て言ってみせるとクインが吹き出し、一緒に観戦してるちびっ子達も何人かがキャッキャと笑い出す。

「あははっ、流石に槍は無いんじゃないかなぁ。グラッブス司祭くらいに高名な方なら、そういった話も一つや二つありそうなものだし」

「おそらからふってくるのはアメとユキなんだよ？　アメはにじのざいりょーになるんだって」

左右から友人と幼女に笑いながら言われてしまう。

しゃーないでしょ！　あのおっさんに春が来たとか青天の霹靂ってレベルじゃなかったんだよ！　俺はおかしくねぇ！　天変地異を警戒するのは真っ当な判断だった！（迫真

敢えて大真面目なツラを作って反論したら爆笑を頂いた。クインにもお子様共にも大うけである。

意外にもシスター・ブランにも刺さったらしく、口元を押さえて肩を震わせていた。何故かミラ婆ちゃんは目を逸らして明後日の方を見ていたが。

縦ロールちゃん達が退場して、試合で破損した武舞台の石畳が手早く交換される。

観客の立場からすると丁度良いブレイクタイムだ。闘技場（コロッセオ）内を廻ってる移動販売員の人に声を掛け、この場にいる全員分の飲み物を適当に注文する。

シスター二人が子供達の分まで奢られることに難色を示していたが、気にせんでええねん。ジュースを手に持ってた方がおちび連中の動きも大人しくなるからね、相手をするのも楽になるので半分は自分の為だ。

子供達も声を張り上げてはしゃいで応援していたから喉が乾いたのだろう。喜んで受け取った後、年長のペトラ少年が音頭を取って皆で揃って礼を言って来る。

うむ、小さい子も多いのに感心。シスター・ブランの教育が活きてるね。

皆で茶やら果実水やらで口を湿らせていると、程なくして舞台の応急修復が終わり、飴を口内で転がして喉を潤していたダハルさんが飴を噛み砕きながら実況の仕事を再開する。

『さーて、それじゃ次ね！　二戦目は帝国領南部からやって来た冒険者、ジャック＝ドウ選手と、北方で武具装飾に関する店を営むドワーフ、ダン＝チャロープ選手だ！　って

いうかダン選手有名な宝飾職人なんですけど！　あたしもこの人のアクセ何個か持ってるんですけど！』

なんでこんな大会出てるのー!?　手とか指に怪我とかマジやめて！　と私情全開の実況と共に、降り注ぐ歓声を浴びて竜と獅子の彫像が其々に聳える入口から二人の男達が進み出て来る。

ジャックはありふれたブラウンの髪に青みがかった瞳の壮年の男性で、頬や額に傷痕の走る疵面（スカーフェイス）――だがまぁ、これは冒険者や傭兵には珍しいもんでもない。というか俺もそうだし。

武装もこれまたよくある普通の長剣に革鎧といった感じで、特徴が無いのが特徴、といわんばかりに戦士のスタンダートを押さえた人物だった。

対するダンも、ドワーフと聞いて万人がイメージする姿だ。

年の頃はジャックより一回り上程度……と言っても、モッサリした髭面だからパッと見は老けて見えるし、なにより長命種だから実年齢はもっと上だろうけど。

小柄ではあるが、がっしりと骨太の骨格。肩には大ぶりな戦斧を担いでいる。

伸びた顎髭を撫でながらしげしげと相手選手を眺めたドワーフの御仁は、ややあって憤慨した様子でジャック選手へと人差し指を突き付ける。

「おう、アンタ。結構な腕前だっちゅーに、なんじゃいそのヘボの打った様な剣は。身の

丈に合わん剣を振り回す未熟者もアカンが、その逆もまた同じじゃぞ！　腕利きなら自身の剣腕に相応しいだけの得物を持たんかい！」

「……なんでこれから試合する相手に、装備について駄目だしされてんだろうねぇ、俺は」

如何にもドワーフらしい発言に、苦笑いしながら自身の腰に佩いた長剣（ロングソード）を撫でる剣士。

ちなみにダン選手の台詞は鎧ちゃん頼りの俺にクリティカルだったりする。ゲフッ、こころがいたーい（白目

まぁ、なにはともあれ……実況の『頼むから無事に終わってぇぇっ！　試合開始！』というやっぱり私情全開な叫びと共に、勝負は始まった。

「そいじゃぁ、いくぞい！」

「あいよ、よろしく」

気合一声、戦斧が振り上げられ、それに応えて長剣が構えられる。

重量のある鋼が打ち合う響きが闘技場（コロッセオ）に響き渡り、舞台上で火花が散った。

短躯であるドワーフだが、種族の特性として腕力に優れ、同時に器用でもあるという戦いに関しては分かり易い強みがある。

小柄だがそれに見合わぬ剛力は、リーチこそ他種族と比べて短いが攻撃の回転数や切

り返しの速さという点では厄介だ。勿論、一発の重みは言うまでもない。
ダンの豪快な連撃を剣で弾くジャックは、刀身と腕に響く衝撃に顔を顰めていた。
「露骨に武器狙いとはね、容赦ないな」
「だから言ったじゃろう、相応の武器を持てとな！」
有効打を与えるのではなく武器破壊を狙っているらしいダン。
ジャックの武器も悪い品では無いが、見た処数打ち品らしい剣はドワーフの斧と剛力相手に打ち合うには少しばかり荷が重そうだ。
とはいえ、圧に押されず、距離をとって回避に専念するでもなく、舞台の中心から退く事無く打ち合うジャックも相当な技量だ。
派手に響く剣戟の音に、観客もボルテージを上げて沸き立つ。
『おぉっとぉ！　これは良い勝負！　リーチで劣るダン選手の猛攻に対し、敢えて間合いに踏み止まって負けじと打ち合うジャック選手！　その分、剣にかかる負荷は大きそうだが何か考えがあるのかー!?』
『ドワーフは魔力の質が火と土に寄っているので、単純な魔力強化は他種族より苦手な筈なんですが……普通にお上手ですね。相手の方が技量的に上手のようですが、強化した身体能力で押し切る感じでしょうか？』
『ジャック選手もおそらくはそう見ているでしょうな！　ダン選手の小細工を廃した闘

法は、単純ですがその分、近距離では不得手となる要素が殆どありませぬ――ジャック選手は伏せ札を切るのか、それとも……っと、仔細を語るは選手への妨害行為になります故、ご容赦をば』

実況解説の三名がそれぞれに試合の展開を語る中、最後におっさんがちょっと気になる事を口にする。

続きを聞きたいと不満の声もそこかしこから上がるが、まぁこればっかりはしゃーない。

何が狙いか、どんな手札を伏せてあるのか。

あんまり具体的な事を実況の席で言っても、今戦っている当人達にとって公平性に欠ける話になるからね。

ジャックが何かを狙ってる、程度の事は俺にも分かるが……。

「おそらく、あの剣士は左利きですね――現在は逆手で戦っているという事になります」

ガンテス達と違い、あくまで観客の一人でしかないミラ婆ちゃんが、あっさりと俺達にネタばらしをする。

マジか、その割にはぎこちなさとかは特に見えないけど……。

「ある程度は両の手どちらでも扱えるのでしょう。腕の方は不自然が無い程度に剣を振れる様ですが……歩の取り方に微かに乱れがある」

武器を扱う手が変われば攻防の際に使う軸足や腰の捻りも変わりますからね、と何でもない事の様に言う姉弟子である。

それを聞いたクインが、横目で俺を見ながらちょいちょいと袖を引いて来た。

「利き腕が逆って……キミは分かったかい？」

俺が？　わかる訳ねーだろ（真顔

本来の利き腕でどれだけ振れるのか知ってるなら比較も出来るだろうが、あの技量で実は逆の手で剣使ってますとか言われても気付く訳ねーわ。両利きって言われても普通に信じると思う。

ミラ婆ちゃんの隣に座るシスター・ブランにも目を向けてみるが、試合を見て興奮しているちびっ子達を宥めながらも、彼女もまた苦笑して首を横に振るのみである。

実際に相手どってるダンも気付いた様子は無いし、普通に一流以上の戦士でも気付かないくらいには、今の状態のジャックの剣技も優れている。

年の功、というよりこればっかりは経験・年季の差という奴かね。そこらのベテラン冒険者ですら小僧っ子扱いできそうな戦歴を積み重ねた二人だからこそ、あっさりと看破できたって事なんだろう。

「おそらくは、利き腕に関しては伏せたまま勝ち進むつもりでしょう。切るとすれば別の手札になる筈です」

実況解説という役柄上、下手なネタバレが出来ないガンテスと違ってズバズバと自身の読みを語る我が姉弟子。見透かされてるジャック選手は泣いて良い。

その読みが正解か否か、それほど待つ事も無く結果は訪れた。

「どりゃぁ！」

「うぉ……っと！」

舞台の中心から互いに一歩も引かずに続いて来た剣戟は、ダン選手の気合の籠った攻撃と共に均衡を崩す。

一段上の威力を持つ横殴りの一撃。その威力に押し退けられて後退しながらも、攻撃自体は弾いて見せたジャック選手だが、その技量に対して剣が着いて行かなかった。

折れこそしなかったが、段々と傷や欠けの増えて来た刀身に、はっきりと亀裂が走る。限界を超えたのか、遠目からでも剣が歪んだのが見えた。

大多数の人間が「決着だ」と思ったが……ここでジャックは大方の予想を裏切る行動にでる。

ボロボロになってひん曲がった剣を、躊躇なくダンに向かって投げつけたのだ。

これには面食らったドワーフの戦士だが、元より戦場では投剣術の類は普通に有り得る一手だ。瞬時に切り替えて握った戦斧で飛んで来る剣を叩き落とす。

その僅かな一瞬の間に、ジャックはスルリと相手の懐に踏み込んでいる。

先の《風兎》選手と比べれば眼で追うのは容易な速度――だが、投擲して縦回転で飛ぶ剣に身体の軸を重ねる様に半身となって進む歩は、速さを補って余りある巧さがあった。

向かい合ったダンからすれば、飛んで来た剣の影からいきなりジャックが現れた様に見えたんじゃなかろうか？　実際、その髭モジャの顔には隠せない驚愕が浮かんでいた。

それでも至近距離で斧は振れないと瞬時に判断して、武器を握る手とは逆の拳を叩きつけたのは流石の反応だ。

威力も速度も十分。とはいえ、第一試合の二人のような徒手の専門家では無い一撃は、その二人に匹敵する無手の体術によって容易く捌かれた。

ほぼ密着距離で、ジャックが受け流したドワーフの剛腕と襟首を掴み、竜巻の如く旋回する。

引っ張られる感触に咄嗟に踏ん張ろうとしたダンだったが、相手は廻ると同時にその軸足を足払いで刈った。

変則的な払い腰みたいな投げ技で、ドワーフの戦士の短躯は高速で半回転し、石畳へと叩きつけられる。ついでに実況席の方から『ギャアアアアッ!?　秋の新作がぁぁ!?』という自分が地面に叩きつけられたかような悲鳴が上がった。

「カッ……!?　ぬ、ぐぉ……!」
「――まだやるかい？　職人さん」
肺の空気をまとめて絞り出した様な苦鳴の呻きを上げるダンに、ジャックが笑いかける。
投げを打った際に掴んだ腕と襟首はそのままだ。相手の反応によってはそのまま絞めなり関節技になり移行するのだろう。
背を打った衝撃で呼吸がし辛いのか、荒い息をついた儘のダンが苦笑いの混じった声色で降参を告げた。
一見すると窮地からの鮮やかな逆転――その劇的な決着に観客席の反応も上々だ。先の試合に劣る事の無い拍手が武舞台へと降り注ぐ。
実際には詰め将棋の様な手順を踏んだ決着だ。ミラ婆ちゃんの言葉も加味すれば、ジャック選手は多くの手札を伏せたまま勝ち進んだ様に見える。
後の試合も見据えた実に戦上手な立ち回りやな。こういうタイプって強い弱い以前に相対すると怖いんだよなぁ……。
「おー、いちち……えぇい、参ったわい……確かに本職では無いが、大戦でもそれなりに場数はつんどったんだがのぅ」
「確かに良い腕だったが……流石に勝つのが目的じゃ無い相手に負けてやるわけには、

ねぇ？」

　ようやっと動けるようになったのか、なんとか身を起こして背中を擦りながらボヤく敗者を見下ろし、勝者が肩を竦めた。

　その言葉を受け、ダンがバツが悪そうに伸ばした顎髭に指先を突っ込んで掻きまわす。

「そこまで読まれとったか……まぁ、ええわい。一回戦負けしたのは悔しいが、お前さんと仕合って良い具合に閃きも得た。早速知り合いの工房にお邪魔して形にしてみようかのう！」

「そいつぁ良かった、仕事も出来ない位に怪我させたらあそこの実況のお嬢ちゃんがおっかない」

「うむ……あの投げまでの流れは見事じゃったし、それに敗れた身ではあるが……それはそれとしてあのへボみたいな剣を握っとるのは感心できんぞ！　武器を選ばん使い手っちゅうんは確かにおるが、それでも普段腰に下げるもんくらいはもっとマシなもんにせんかい！」

「おぉっとぉ？　ここで会話が最初に戻るのかよ、勘弁して欲しいね」

「言いたくもなるわい！　古馴染みに馬鹿みたいに腕が立つのに持っとる武器が全部数打ちじゃったアホウがおるんじゃが、お前さんもまさかそのクチか!?」

試合が終わったというのに何故かその場で説教を始める負けた側と、それを苦笑いして聞く勝った側という、なんとも可笑しな光景が広がる。

武舞台の補修と選手の治療を行うスタッフが「さっさと降りてくれねーかな……」みたいな眼を向けつつ舞台脇で待機しているのだが、ちょっとした寸劇みたいな会話に観客側はから箸休めみたいな感覚で軽い笑いが起きていた。

「なんならワシが打ってやろうか？　ウチの氏族は細工物を得意にしとるが、武具の方もそこそこに手を付けていての。数打ちの鈍らよりは余程マシなモンが用意できるぞい」

「あー……そうしたいが金が無くてね。入賞出来たら考えておくさ」

そんな口約束を交わし、負けたのに意気揚々と退場したダンと、余力を残して勝った筈なのに妙に疲れた様子で舞台を後にしたジャックである。なんつーか、お疲れさんだ。

さて、同じ様に舞台の修復を挟み、次の試合だが――これは迫力、という点ではこれ

までの試合で一番かもしれない。
轟音に近い剣戟が闘技場（コロッセオ）に響く。
本日初戦の縦ロールちゃんと獣人の若者の名勝負――それとはまた別ベクトルで、第三試合は見応えがあった。
かたや身の丈に迫る程の特大剣（グレートソード）、かたやそれに劣らぬ巨大な鋼鎚。
超重量武器同士の豪快な戦いは、正面から打ち合わせれば鋼と大気が軋む轟音を、掠れば火花を上げながら甲高い音を、舞台上に鳴り響かせる。
先にも言った通り、迫力満点の試合に興奮した観客（ギャラリー）が好き好きに応援の歓声をあげる中、当人同士が攻防の最中、言葉を交わす。
「おう、やるな兄弟」
「うむ、楽しいな兄弟」
言葉通り、何処か楽し気な様子で武器を振るうのは、両者とも相当な長身と巨躯の男達だ。
武器も重量級なら鎧もまた重量級。魔族領産だと思われる、魔獣の素材と組み合わせた威圧感半端無い鎧に身を包んだ彼らは、どちらも先の《風兎》と同じ、獣人の戦士である。
傭兵ブライシオ&ボルド。

帝国領の小さな寒村出身の彼らは、クインと同じように魔族達の持つ通り名というものを持たないまま育ち、そのまま世に出て傭兵コンビとして名を馳せたという、変わり種と言って良い連中だ。

ちなみにどっちもイヌ科の獣人らしいが、血縁ではなく、あくまでコンビを組む義兄弟的な関係らしい。

まぁ、その辺は見れば一目瞭然ではある。《風兎》選手ほどじゃないにしても二人ともケモ度高めの獣人なのだが、ブライシオはハスキー系、ボルドはニューファン系だし。

『これは凄い迫力だーっ！　疾さと技巧を駆使したさっきの試合とは真逆の、剛力同士の激突！　だが決して力だけではないのもポイント！　長年コンビを組んで来ただけあって互いの手の内は知り尽くしてるみたいだけど、互角の膠着を破るのはどちらになるのかーっ!?』

『この打ち合いは暫し続くやもしれませんな。どうやら御二方とも真剣に戦武を比するのは久方ぶりの御様子。最終的な勝利は欲しているでしょうが、今は友との戦いを楽しんでおられる様、見受けられます』

実況のシャマ嬢とガンテスが言う通り、良い勝負且つ選手同士が楽しんでる。ちょい長引くかもね。

一回戦後半に他種族の選手がやや固まってる感があるし、この二人に至っては一回戦

からコンビ同士での激突……しかも勝ち抜いても次はシード枠のアイミヤ選手――シンヤ君との試合だ。

トーナメントの組み合わせに作為があるんじゃなかろうかと、クレームの一つくらい入れても仕方ない位には悪い当たりなんだが……本人達はケロリとしている。

「くじ運が悪いのいつもの事だからな」

「うむ、何時も通りだな」

多分、そんな事を言ってるのが目に浮かぶ、と評したのは俺の隣に座るクインだ。

「彼らは魔族領で仕事をしていた時期もあってね。今の装備なんかもその時期に手に入れたものだと聞いてるよ」

なんでも、クインが母と共に他の難民達と避難してくる際、魔族領からの依頼でその護衛を受け持ったのがあの二人らしい。

戦争が最大にまで激化する直前くらいの時期だ。シアを筆頭に教国が周辺国家からの魔族領の孤立を改善させようと本格的に動き始めたあたりなので、魔族への風当たりは多少マシになった、程度だった筈。

非戦闘員の魔族の護送を安心して任せられる人材、ということで同族の彼らは結構重宝されていたみたいだ。

「主も評価していてね、配下というのは彼らの気質的に無理があるけど、食客として招い

た事もあったんだ」
　ブライシオ達は《魔王》側の仕事も受けていたので、そっちからは普通にヘッドハンティングを受けていたらしい。
　人材の取り合いになって女公爵と《魔王》の綱引きみたいなったのもあって、結局は二人とも両者の顔を立てて傭兵を続ける事になった様だ。
　目を細めて語るクインは、懐かしさだけでなく多分に苦笑の成分を滲ませた笑顔である。
「形の上ではそうなってるけど……彼ら自身が『宮仕えは無理』って断言してたし、そういう意味では主の食客扱いの方が妥当だったとは思うけどね」
　魔族ではあるが、普通に帝国領で育った二人に通り名は無い。
　正式に魔族領に仕えることになれば、自分で名乗るなり上役から与えられるなりするだろうが……本人達が「普通に忘れて本名言ってしまう」と断言してたらしい。
　そもそも既に傭兵としてそこそこ以上に売れているからね、本名の方が浸透しすぎてるから名を隠すための通り名の意味が無いやろ。
「ふむ。確かに彼らならば今まで通り本名を名乗りそうですね……」
「確かに。今更だ、と言って名乗らず、そのうち自分の通り名を忘れてしまいそうです」
　顎に手を当てて頷いたのはミラ婆ちゃん、その言葉に同じく頷いて同意したのはシス

ター・ブランだ。
意外……って程のものでもないが、二人もあの傭兵コンビと知り合いだったらしい。
なんでも婆ちゃんは現役時代に、シスターは大戦終盤の戦地で其々に関わる事があったとか。まぁ、腕利き且つ職歴も長いってんなら同じ戦場で肩を並べる機会もありそうだし、そうおかしな話でもないか。
しかし、三人の話を聞いてると面白そうな奴らなのは充分に分かるが……こう、なんというか馬鹿っぽいというか、あんまり難しい事考えないで生きてるタイプみたいだな。
いや直接の交流が無いのに随分な言い様だと思うかもしれんが、根拠はクイン達の話だけじゃないのよ？
興奮して声を上げているチビっ子達を宥めつつ、暴風の如き大剣と巨鎚の激突と、それを引き起こしているブライシオとボルドを改めて眺める。
試合開始前、武舞台上で対峙した二人は、最初は妙な事を口にしていたのだ。
「打ち合わせは覚えてるか兄弟」
「勿論だとも兄弟。最初は強く当たって、あとは流れで、だな」
「あぁ、どっちが勝っても次の相手はシンヤだからな」
「うむ、シンヤは強いからな」

「消耗も抑えたいし、新技も隠しておきたい。兄弟の提案は妙案だった」
「案を出したのは俺なのに、シンヤと戦えないのは残念だ」
「ジャンケンに弱いのにジャンケンで決めようと言い出したのは兄弟だ。勝ちたいならクジ引きにすべきだった」
「……む、俺はジャンケン弱かったのか？」
「うむ、弱いぞ」
と、こんな感じだ。
二人がちょっと声を潜めていた上、降り注ぐ観客からの声援に紛れて聞き取り辛かったが、モロに犬顔の割には口元の動きは読唇である程度読める感じだったので、大体あってると思う。
どうやら、ある程度余力を残してブライシオが勝ち進む様に事前に打ち合わせていたらしい。
八百長、と言ってしまえばその通りなのだろうが、金を賭けてる訳でも無し。単に次の試合でぶつかる優勝候補のシンヤ君相手に、幾らかでも勝率をあげるための戦術だったのだろう。
……過去系で語ってるのは、眼前で繰り広げられる試合が、どう考えてもお互いに本気でやってるからである。

一際大振りの一撃が激突し、衝撃と共に舞台の石畳が割れ、或いはめくれ上がる。パワーファイター同士の攻防なだけあって、舞台の損壊具合も一番酷い。次の試合出来るのかねこれ。

それを機に、という訳でもないだろうが、傭兵コンビは嵐の様な剣戟を一旦止めて軽く距離を取り、武器を構え直した。

「喝采というのも偶には悪くないな」

「そうだな。この空気は戦場とは違う昂りを与えてくれる」

ブライシオもボルドもケモ度高いせいで表情、というものがいまいち判別しづらいのだが、それでもウキウキとした様子が伝わって来る。

「では、続きといこう兄弟」

「おう――処で、何か忘れてる気もするが思い出せん。なんだったか？」

「知らん。思い出せんという事は重要では無いのだろう」

「道理だな、流石は兄弟だ。問題は解決した。では戦ろう」

一個も解決してないと思うんですがそれは（断言

うん、これはアレだな。いざ戦い始めたら楽しくなって、二人揃って事前の打ち合わせについて脳から削除してるわ。やっぱこいつら洋犬というより柴犬っぽい（偏見

再び得物を振るって、鋼のぶつかり合う音と石畳が砕ける音をＢＧＭに剛力チャンバ

ラをおっぱじめる傭兵二人。
楽しそうに武器を振り、ついでに尻尾もバタバタと振り、非常にハイレベルな接近戦を繰り広げているってのに、何処となくフリスビーで遊んでる犬みたいなイメージが湧く。
シスター・ブランに抱きかかえられているオフィリなんて「すごくおっきいわんわん！」と興奮してはしゃいでいる。オフィリ君、俺と彼らを交互に見比べておめめをキラキラさせるのはやめ給え。俺は見た目も生物学的にも普通の人間やぞ。
さて、ここまでの攻防を見た処、力はボルドが少し上だが、速さはブライシオが一段上。
ただ、身に纏う鎧がどちらも重装ではあるものの、ボルドの方が更に分厚く、頑強そうな装備だ。受け方と受ける場所によってはブライシオの特大剣（グレートソード）の一撃でも持ちこたえて見せるだろう。
ブライシオは速度で明確に上回るので小さな隙を突くのは容易だが、その程度では仕留めきれずに手痛い反撃を確定で喰らう。
一方のボルドは力で押し切ろうにも相棒の方もほぼ同等に近い剛力な上、速さで上を行かれているので大鎚をクリーンヒットさせるのが難しい。
ガコン、ズドンと鋼の軋む重低音を響かせながら、両者、打ち合いつつ機を伺ってい

る状況だ。

いや、言葉にするのは簡単だけど二人とも普通にめっちゃつえーわ。あんなクソデカい武器振ってんのに、この距離から見てても偶に切っ先とか鎚の先端とかが目で追えない速度になるんやぞ（白目

単純な基礎能力（スペック）の高さもそうだが、立ち回りや戦いの嗅覚とでもいうべき勘働き、そういった面も含めて長年戦ってきた者特有の凄味がある。

頭使って戦うタイプとは真逆の、本能と経験で身体を動かす系やな。この手のタイプで強い人達って、心理戦とか搦手も「知らん、ぶっ潰す」で切って捨てて言葉通りに小細工を叩き潰して来るから厄介なんだよ。味方だとそのまま厄介さが頼もしさにシフトするんだけど。

《風兎》選手の動きも大概速くてラン選手の完全上位互換だな、とか正直思ったんだが……この二人、マジでシンヤ君や副官ちゃんと良い勝負できるレベルでつおい。大会規定（レギュレーション）が殆ど仕事してねぇぞ、大丈夫かこの大会。

何十合目かの打ち合いを経て、二人が再度距離を取る。

どうやら久しぶりの相棒同士の戦いには満足したらしく、決着をつけるつもりみたいだ。

互いに全身を撓めるように身を低く、立幅（スタンス）を大きく取ると、ボルドは上体を捻りなが

ら大鎚を石畳に着く程低く構え、ブライシオは剣を肩に担いだ体勢のまま柄を両手で握りしめる。
「頃合いだな、兄弟」
「うむ、久しぶりに本気で戦り合うのは楽しかったな、兄弟」
二人は構えたままうんうんと頷くと、アホっぽい柴犬みたいなとぼけた表情を引っ込めて獰猛に笑う。
捲れ上がった口元から牙が覗き、一変した雰囲気と共に空気がギシリと軋んだ。
『……わーお、こりゃ凄い。医療スタッフは飛び出せるように待機しといてー』
『次で幕ですな。どちらも剛撃の使い手故、激突の際は相当な衝撃が起こるでしょう。最前列の席の方は飲食の手は一度お止めになった方が宜しいかと』
『両選手とも凄い魔力の練りですね……まるで十人張りの強弓を向け合ってる様な』
次の一手で繰り出される攻撃が、下手をしなくともどちらかが無事では済まないと判断したシャマ嬢が普段のノリを押さえて治療用の人員に指示を出しておく。
観客受けし易いド派手で豪快なチャンバラだったが、戦りあってる当人達がじゃれ合ってる大型犬の雰囲気そのまんまだったので、お祭り騒ぎに相応しく歓声と喝采飛ぶ試合だったのだが……切り替わった空気を察したのか、観客も武舞台で対峙する二人を固唾を呑んで見守る。

そのまま五秒経ち、十秒経ち……両者、飛び出すタイミングを伺って、ジリジリと摺り足で間合いを図り、空気が張り詰めてゆく。

単なるお見合い状態、というにはあまりにも重厚な戦意に満ち満ちた空間と化した舞台は、大部分の観客達とって注視を続ければ気力を削られるであろう戦場の空気を放っていた。

一応客席と武舞台は結界の類で隔てられてはいるのだが、物理的衝撃や攻性魔力での被害が出ないように強度優先だ。威圧や気当たりの類を遮断する効果はちと弱い。

実際、二人が構えた途端にシスターとミラ婆ちゃんが即行で薄っすらと聖気を用いた障壁を張って子供達をガードし始めたからね。

それを宜しくないと判断したのか、単に膠着状態を眺めているのに飽きたのか。

一戦目はガチ泣きしたり狼狽えたりと騒がしかったが、この試合は普通に楽しそうに観戦していた《魔王》が、膝に肘乗せて頬杖をついたまま、無造作に逆の空いた手を挙げて――指を鳴らした。

パチィン！　と軽快な、指先の空気が弾ける音が静かになった闘技場（コロッセオ）に響き渡る。

――楔を打ち込まれた静寂に罅が入り、壊れた静けさを踏み砕く様に二人が同時に踏み込んだ。

全身のバネを使って撃ち込まれる斜め下から振り上げる大鎚を、身を低くした儘のブ

ライシオが潜り抜けるようにして躱す。
だが、ボルドの攻撃はそれで終わらなかった。
振り上げた鎚の勢いに逆らわず、その重厚な巨体が跳び上がって宙を舞う。
本来なら良い的の筈だが、纏う鎧の分厚い防御と、両の手に確り握られ大上段に高々と振り上げられた鉄槌の威圧が、半端な対空攻撃など叩き潰さんとばかりに存在感を主張する。
「……ぬぉぉぉぉぉぉぉっ!!」
咆哮と共に大鎚が振り下ろされた。
直撃すればそれこそガンテスであってもダメージを受けるであろう一撃を、ブライシオは背負う様に担いだ特大剣（グレートソード）の腹で受け止める。
受けた瞬間、彼の足元が爆発したように陥没し、亀裂だらけになった石畳へと脛まで埋まった。
牙を剥き出し、奥歯が砕けんばかりに噛みしめられる音が、俺達の席にまで届き――。
そのまま圧し潰されて武舞台に叩きつけられるかと思いきや、ブライシオは強靭にも程がある足腰の強さで踏ん張って見せる。
「――ぐ、ルァァァァァッ!!」
喉奥から捻りだした唸りは裂帛の気合に変わり、背負った剣とその腹に押し付けられ

た大鎚が擦れて火花を上げ。
低い体勢のまま、埋まった足を無理矢理に旋回させ、全身の力を使って特大剣（グレートソード）が振り抜かれた。

『き、決まったぁーっ！　圧倒的な剛撃の応酬の末、ブライシオ選手が最後の一撃でボルド選手を場外に叩き飛ばしたぁっ！』
続く言葉で医療スタッフゥ！　と叫ぶシャマ嬢に応じ、場外の地面へと砲弾の如く突き刺さったボルドへと慌てて何人かの聖職者達が駆け寄る。
一級のパワーファイター同士の戦いは、ブライシオの勝利となった。
――が、負けた方の容態が気になるのか、観客からの拍手と喝采はあれど、少々不安気な、ざわついた空気だ。
そんな中、平然と「問題無いでしょう」と口にしたのはミラ婆ちゃんである。
「直撃する際、手首を返して剣の腹で殴り飛ばしていました。勢いこそ強かったですが、おそらく負傷は軽微です――寧ろ、ブライシオの方が重症でしょう」
まぁ、そうだよね。あんだけの勢いで振り抜かれたらボルドの胴体は両断か、そうで

なくともガッツリ刃が喰い込んで吹き飛ぶなんてことは無かっただろうし。
　実際、ボルドは気絶していたようだが直ぐに意識を取り戻したようだ。地面から生えた下半身をバタつかせ、どうにか地中から胴体を脱出させようと悪戦苦闘している。
　負けた側が元気一杯なのを確認した医療スタッフと観客から安堵の空気が漂い……剣を背に収め、足が埋まったまま仁王立ちで腕組みしているブライシオに、武舞台を補修する人員が近づいているのが見えた。
「お見事でした、ブライシオ選手――申し訳ないですが、舞台の損傷が激しいので直ぐに修復に掛かりたい。降りて頂けますか？」
「うむ、尤もだ。だが、難しいな」
　訝し気な顔をするスタッフに向け、真面目くさった声色でブライシオは自身の足を指さした。
「何せ両方とも折れている。流石は兄弟だ、とんでもない一撃だった」
「アンタの方が重症オ!?　ちょっと治療班！　こっち来て下さい!!」
　半ば悲鳴の様な叫びをあげてボルドの側の聖職者を呼びつける修繕担当のスタッフ。
　慌てて舞台にあがる治療担当と、相も変わらず腕組んで仁王立ちのままのブライシオ。
　埋まったまま、土の中からのくぐもった声で「む、怪我か兄弟。今ゆくぞ」とか言い

ながら益々バタバタと暴れ出すボルド。いや、誰か掘り返したれよ。
なんやろこれ、今日の試合って終わったあとに寸劇やらなきゃいけないルールとか追加されてるん？
元気な獣人傭兵二人（片方は両足折れてるけど）を見てご満悦なオフィリが、シスター・ブランに抱きかかえられながら自身も腕の中の犬のぬいぐるみをしっかりと抱き直して。
「わんわんいっぱいたのしいな～、ちいさいわんわん、おっきいわんわん、すっごくおっきいわんわんふたりー♪」
即興で謎の歌を口ずさみだした幼女は、ぬいぐるみ、俺、わんわんコンビと順繰りに指さして楽しそうにセルフ拍手してる。
待ちたまえオフィリ君（二度目）
彼らはともかく、俺は完全にただの人間でホモサピエンスでしょ、何処に犬要素あるの、ないでしょ（迫真
最初に会った日から思ってたが、一体何処を見て俺はおっきいわんわん判定を頂いたのだろう、解せぬ。
二番に入ったらしい謎の歌を何とも言えない気分で聞いていると、隣のクインから笑いを堪える様な声が掛かる。

「……ふ、く、フフッ……キミには悪いと思うけど……オフィリの眼は確かだと思うよ？」

えぇー……クインさんまでンな事いうのー……って、オイ！　シスター・ブランにミラ婆ちゃんまで頷くんかい！　特にそこの姉弟子！　アンタ今、顔背けてちょっと笑っただろ！　普段滅多に笑わない癖にこんな時にレア度高い事するの止めてくれない!?

心に刺さるんですけど！

「気のせいです」

一瞬で鉄面皮に戻った!?　怖っ！

武舞台上だけでなく、こっちでまで発生した寸劇染みた空気に、色々とツッコミを堪え切れない俺は白目を剥いて叫んだのだった。

『さぁーて、本日の最後の試合だよー！　ぶっちゃけ舞台壊れすぎて後日にずれ込むと思ったけど、修繕班はよく頑張った！　しょーじき特別手当だしてあげた方が良いと思うし！』

『大戦時にも人類種随一と謳われた帝国工兵の皆様の技術、やはりお見事ですな！　丹

念に積み上げた熟練の技術というものは、どんな種であっても敬意を引き起こされると強く実感しましたぞ！』

『あんなに派手に壊れてたのにあっと言う間でしたね……工兵という概念自体、エルフには馴染みが薄いのですが、正直下手な魔法よりもよっぽど魔法に見えました……』

すっかり実況にも慣れた様子のギャル、筋肉、エルフのトリオが一時間と掛けずに半壊した武舞台を修復した修復班――帝国工兵部隊の匠の技について口々に感想を述べる。

実際、見ていて飽きない程度には凄い手際良い仕事っぷりだった。こういった裏方に近い兵種の練度もバチクソに高いのは流石の帝国って感じだわ。

さて、次の試合だが……全選手の一回戦が終了し、次からは二回戦である。

こっからはシード権のある選手、即ち副官ちゃんやシンヤ君も出て来るので見応えは更に上がる事だろう。

シャマ嬢が拡声の魔道具を掴み、縦ロールちゃんの試合のときに匹敵するテンションの高さで叫ぶ。

『じゃー本日最後の試合、第二回戦の初戦の始まりいーっ！　竜の方角からは堅実な戦いと自力の高さで順調に勝ち上がったブラウィン＝リヴハム選手！』

観客も手に汗握る試合を見続けて、いい加減気疲れしそうなもんだが……お祭りに

よって底上げされたテンションはそんなモンで鎮火しねぇぜ！　と言わんばかりにでっかい歓声があがり、魔装の鎧に身を包んだ戦士――ブラウィンが選手入場口より進み出て来る。

本選に残り、ここまで勝ち上がったブラウィンは紛れも無く一流の冒険者であり、戦士だ。

実際、一回戦では後輩のヘザー相手に貫禄を見せつける形で危なげなく勝利している。

そんな腕利きの彼であるが……一回戦のときと比べ、その表情は緊張でやや強張っていた。

まぁ、それも仕方と言えばその通りだ、なにせ――。

『続いて獅子の方角、いよいよ出番がやって来た！　刮目せよ皆のしゅー！　竜より鬼より怖いマイ上司、帝国最優の刃、その一振り！　アンナ＝エンハウンスの入場だーっ！』

相手が相手だからなぁ……そら緊張の一つや二つするでしょ。

ブラウィンには気の毒な事だが、彼の入場時を遥かに上回る瀑布の如き歓声があがり、見慣れた銀髪サイドテールの騎士服姿が反対の入場口から現れる。

「来ましたね。さて、聖殿での鍛錬の成果を見せてもらいましょう」

武舞台へと進み出る副官ちゃんを見て何処となく楽しそうな感じで呟くと、ミラ婆ちゃんは眼鏡の位置を指先でくいっと直した。

なんだかんだ言って副官ちゃんの事気に入ってるよね。説教が頻繁なのも、そんだけ普段からよく見てるって事だろうし。

クインもこの間、副官ちゃんとは見知った仲になったばかりだ。声を上げて応援している。

俺も応援しとくか。お手製でメガホンでも拵えて来れば良かったかね？

友人や姉弟子と並んでのんびりと声援を上げていると、向かい合った二名が静かに構えるのが見て取れた。

「あんたが戦ってる処は何度か見た事がある。あのときはこうやって自分が相対する機会があるとは思ってもみなかったよ――折角の機会だ、全力で挑ませてもらう」

「ん、そうね。よろしく」

選手二人のやり取りを耳に拾って、俺は感じた違和感に眉をひそめた。

んん？　なんというか、お仕事モードだとしてもちょっと副官ちゃんが大人しいな。

素っ気ないというか、少しばかり気が逸れてる様な……。

この席からだと、やや距離があるので表情をじっくり見て取れるって訳でも無いのだが……何かあったのかね？　いや、単に仕事がクソ程忙しくて気疲れしてるとか身も蓋

も無い理由の可能性も高そうだけど。

「……気が散っていますね」

隣の姉弟子から、そんな台詞がポツリと漏れた。

ミラ婆ちゃんまでそう言うって事は、やっぱ俺の気のせいじゃないか。どうしたのやら。

なんにせよ、これから試合開始ってときに良い状態では無い。副官ちゃんの方がブラウィンより格上ではあるが、油断したり集中できてない相手から一気に勝利をもぎ取る為の手札くらい、この大会の出場者なら皆持ってる筈だ。

試合が始まってもそのままだってんなら、大番狂わせの類が起こらんとも限らんな……そうはなって欲しくないが……。

『……何はともあれ、しっかり集中して見とけよー皆！　二回戦第一試合、開始ぃっ！』

彼女の部下であるシャマ嬢も、ちょっと訝しそうだ。

だが、ここまで来て変に先延ばしにする訳にも行かないのか、そのまま試合開始の合図を叫んで――。

次の瞬間、副官ちゃんの足元――無傷のものに交換されたばかりの石畳が砕けて吹き飛んだ。

姿がブレたと思った途端、映画のコマ落とし見たいに既にブラウィン選手の懐……密

着距離に飛び込んでいる。
助走も無し、魔力強化の為の時間も一瞬以下のノータイム。
それでいて《風兎》選手の全力跳躍以上の速度の踏み込みだ。そのまま容赦なくぶち込まれた膝蹴りに反応して見せたのは、ブラウィンが一流の前衛である証である。
構えた剣では間に合わないと判断したか、腰に下げた鞘を空いた手で掴んで引き上げ、蹴りと自身の腹の間に差し込む。
砕ける鞘、威力を殺し切れずに衝撃で浮かぶブラウィンの体躯。
いつの間にか右手に握っていたショートソードの柄を口に咥えていた副官ちゃんは、無手となった右腕で空中の彼の胴に向け、掌底を叩き込んだ。
宙に打ち上げられて身動きの取れない状態で、それでも追撃の掌底を腕でブロックしたブラウィンは本当に優秀だと思う。
だが、踏ん張りの利かない状態で喰らった一撃は、容易く彼の身体を叩き飛ばし――そのまま無情にも場外へと落下した。
得物である二刀すらまともに振らず、試合開始から十秒も経って無い、文字通りの鮮やか過ぎる秒殺劇である。
呆然、唖然。
見ていた多くの観客達も、俺の隣のクインも、解説のシャマ嬢とサルビアも、なんな

ら場外負けになったブラウィン自身すら呆気に取られた様子で沈黙しとる。
一方でガンテスやミラ婆ちゃん、来賓席に座ったウチの聖女や魔族領の面々は別段驚く事も無く「ほう」とか「おー、流石」とか軽い調子で感心してた。これだから人外級はおかしい奴しかいねぇとか言われるねん（白目
『は、速ええぇっ!?　なんとも鮮やか過ぎる決着ゥ！　流石副長、容赦無い怒涛の体術で熟練の冒険者を見事打ち破ったぁー!?』
我に返った天然パツキンギャルなお嬢さんの言葉に、遅れて大歓声が爆発する。
特に帝国臣民のテンションの上がり方は他国の観光客のそれと比べて一段上だ。どうも優勝候補である自国の英雄の一人、その桁違いっぷりをまざまざと見せつけられて歓びと興奮が半端無い事になった模様。
『今大会でも最速の決着となりましたが、アンナ殿の武力は言うに及ばず、ブラウィン選手の反応や守りも素晴らしいものでしたな。負けはしましたが彼も殆ど無傷と言って良い。実戦ならばまだまだ戦いは続いていたと思われますぞ』
おっさんの補足説明は確かにその通りだ。
場外負けのあるルール上、秒殺された形になったブラウィンだが、鞘を壊された以外は目立ったダメージは無い。
追撃を喰らった時も受ける負傷を減らす為に素直に吹っ飛んだ感じがしたしね。実

戦経験豊富且つ、あくまで試合だからこそ起こる敗北パターンってやつだ。
事実、あっさりと起き上がって自分の足で武舞台に上がり直したブラウィンは、自嘲がない交ぜになった苦笑いを浮かべて副官ちゃんと握手を交わしていた。
「完敗だ。まさかこうもあっさり負けるとは思ってなかった」
「あー……なんか、ちょっと申し訳ないわね」
「気遣われて手加減されるよりずっとマシさ。咄嗟の判断で場外負けに関して度外視したのはこっちのミスだしな」
バツが悪そうな副官ちゃんに向け、肩を竦めてみせるブラウィン。
あまりにも短い、だが衝撃的な本日最後の試合を終え、興奮と熱気、歓声に満ちた冷めやらぬ空気の中、俺は立ち上がる。
「凄い試合ばかりだったね、単なる催しとしても、同じ戦う者としても見応えたっぷりだ……って、どうしたんだい？」
周囲の空気に中てられてか、白い肌をやや上気させているクインが不思議そうにこっちを見上げた。
うむ、ちょーっとヤボ用が出来たので席を外します。時間は掛からないから直ぐに戻って来るとは思う。
先に帰っちゃっても良いし、時間があるならシア達と合流してこのあと飯でも食いに

行こうず。
分かった、じゃぁ待ってるよ。と、微笑む友人に頷き返し、試合中も俺に纏わりついていたお子様達をシスター・ブランとミラ婆ちゃんに受け渡すと、二人に軽く一礼してその場を離れる。
「貴方らしいといえばその通りですが……半分でも良いので、日常生活においてもその細やかさを発揮なさい」
背に向けて、俺が何しに行くかなんてお見通しらしい姉弟子殿の御言葉が掛かった。
いつぞやの様に、その口調には幾らかの呆れが籠っている。それじゃまるで普段の俺が鈍いみたいじゃないですかヤダー。
ゲッセーヌ・ナンディヤネンを脳内に降臨させつつ、そそくさとその場を後にする。

向かったのは、獅子の方角と呼ばれる選手入場口だ。
関係者以外は立ち入り禁止の区域ではあるんだが、俺は入場時間の警備を手伝っているので、外注警備員みたいな扱いで問題無く通れるのよ。受けてて良かった帝国の依頼。
選手が控えている部屋から、闘技場（コロッセオ）の中心である武舞台に繋がる選手入場口まで伸びる石造りの通路、そこを歩いていると、向こうからお目当ての人物――試合を終えた副

官ちゃんがやって来る。
オッスオッス、お疲れ。いやー圧勝でしたねアンナさん！
「……なーんでこんな処に来て出待ちしてんのよ、アンタは」
半眼になってビシっとツッコミを入れて来る彼女に、俺はいや、大したこっちゃなんですけどね、と返して。
なんつーか、随分とらしくない立ち回りだったからさ、ちょーっと気になったと言うか心配になったというか……。
自分で言ってて余計なお世話感が半端無いので、少しばかり決まりが悪い心地で後頭部を掻く俺を見て、副官ちゃんはキョトンとした表情になった。
いやだって、実際そうじゃん？
なんだかんだいって《刃衆（エッジス）》の№2なんて立場やってるだけあって、副官ちゃんは公式の場とか肩書を前に出さなきゃいけない状況だと、結構空気読んだ行動を取る娘（コ）だ。
お国から推薦受けて出場してる闘技大会なんて、その最たるものと言って良い。
舐めプや接待試合なんてものは間違ってもやらないだろうが、自国の祭りで開かれる催し物がある程度盛り上がる様な試合を、位のことは普段の彼女なら意識してる筈なのだ。
だってのに、先の試合は自分にも相手選手にも見せ場がロクに無い、ルール上最も効

率の良い問答無用の場外ぶっ飛ばしアタックで終了である。
偶々観客ウケが良かったものの、副官ちゃんにしてはなんだか雑な立ち回りだった。
なんか集中し切れてなかったみたいだし、何かあったのかなー、なんて愚考した次第でして、ハイ。
いや、繰り返すけど余計なお世話なのは分かってるんですよ。
俺も協賛してる教国からの人員とはいえ、今回は帝国主導のお祭りだし、精鋭部隊の副隊長なんてやってりゃ他国の人間に話せないトラブルの情報なんかも入って来るだろう。
でもこう、あるやん？　友達がちょっと深刻そうな顔してたら、話聞きたくなるやん？
長々と、半分言い訳みたいな主張をする俺を見て、彼女はキョトンとしていたお顔を再び半眼に戻し、深々と――それはもう深々と溜息をついた。
「だからさぁ……そーいうのはレティシアとか隊長にしてあげなさいっての。ホンッとこの駄犬は……」
何故かいきなりの駄犬扱いである。ゲッセーヌ・ナンディヤネン（二世
顔を掌で覆って横に逸らした副官ちゃんは、そのまま眼を閉じて――ややあって気分を切り替えた様に鼻を鳴らした。

「ハァ……何でも無い、って言うのは流石に無理があるけど……お察しの通り、出来るだけ帝国の人員で解決すべき話よ、アンタにこの場で話すこっちゃないわ」

む、やっぱりそんな感じか。なら根掘り葉掘りって訳にもいかんな……心配ではあるが、ここは副官ちゃんや彼女の部隊の連中を信用して引き下がるべきだろう。

「うん、そうしなさい――でも、まぁ……ありがと」

いらんお節介を焼こうとしてそれも出来なかったので、こっちこそ礼を言われるようなこっちゃ無いんだが。

副官ちゃんは俺の真ん前までやってくると、軽く握った拳を此方の胸元にポンと押し当て、何時も通りの笑顔を浮かべたのだった。

動き出す者達　1

「どういう事よ副長！」
朝一番に、王城内の一室――《刃衆（エッジス）》に割り当てられた執務室にて怒声が響き渡る。
扉を乱暴に開け放ち、そのまま執務机の前まで鼻息も荒く詰め寄ったシャマは叫ぶと同時に机に両の掌を叩きつけた。
鍛え上げた最精鋭、しかも前衛型の彼女が自重も躊躇も無くブッ叩いた分厚いマホガニーの机は、悲鳴の如く軋みを上げる。
日の出と共に執務室に入り、《大豊穣祭》における都市内各所での警備の配置予定と隊員の派遣が求められる箇所をチェックしていたアンナは、部下のせいで机の上から弾け飛んで散らばった書類を眺めて溜息をついた。
「ノック……は今更だけど、少し落ち着きなさいシャマ。アンタの足元に落ちたの、将軍閣下の印も入ってる重要書類なのよ」
普段なら「うげっ!?」と短い悲鳴を上げながら慌て、かつ恐る恐る拾い上げているで

あろうレーヴェ将軍の判が押されたソレを、金髪・褐色肌の少女は無言で引っ掴むと、乱暴に机の上に叩きつける。書類に皺が寄り、執務机は再び抗議の悲鳴を上げる羽目になった。

そのまま身を乗り出し、彼女は机を挟んで向かい合う上司へと怒りを滲ませた口調で詰め寄る。

「トニーの馬鹿と連絡が取れなくなってるって事、なんで言わなかったの」

「……私も知ったのは昨日の自分の試合前よ。というか、一応伏せてた筈の話なんだけど何処から知ったの」

「昨日の半休はあいつが都市外の任務に切り替わる前に、飲みに行く約束してた」

トニーがその手の約束を無断ですっぽかす事など無かった為、王城内で最近彼の就いていた任に関わりのある人員を問い詰めたらしい。

シャマの相当に苛立った様子からして、話を洩らした者を責める事は出来そうに無い。元より同部隊の人間という事もあって秘匿度合いは最低限のものだし、《刃衆(エッジス)》の隊員に本気で詰め寄られる、或いは締め上げられても口を閉ざし続けろ、というのは中々に気の毒な無茶振りではある。

再び溜息が漏れそうになるのを堪え、アンナは書類を回収して一纏めにすると執務机の端に寄せた。

「――で、朝から執務室に飛び込んできて、私を問い詰めるのが目的じゃないんでしょう？」
「決まってる。捜索隊を組むから人を廻して」
「先ず隊長に話を通しなさい」
「その隊長が陛下の気紛れで引っ張られていないの！　ネイトさんも同じく見ないし、現状で許可を出せるのが副長だけなんだって！」
　三度、机が叩かれて軋む。アンナとしても仕事中に執務机の脚がへし折れるのは御免なので、あとで傷んでないか確認が必要になりそうだ。
　とはいえ、今は目の前の荒れる部下の対応が先である。
　アンナは極力感情を押さえた、淡々とした口調でシャマの要請を突っぱねた。
「却下よ。不測の事態に巻き込まれたにせよ、《刃衆（エッジス）》が都市内でのトラブルで不覚を取ったとは考えづらい。もう数日は様子見、っていうのが上の判断なの」
「――ッ、アンナ!!」
　眦を吊り上げ、今にも此方の胸倉に手を伸ばしそうなシャマに向け、やはり淡々と「副隊長と呼びなさい」と返すアンナ。
　普段の言動がかなり独特というか、ともすれば初対面の人間には軽薄そうなイメージすら与える部下ではあるが……その実、シャマダハル＝パタという娘がひどく仲間意識

が強く、部隊の人間を家族にも近しい『身内』であると認識しているというのは、隊に所属する者なら誰しも分かっている事だ。

大戦中、最前線での遊撃役を担う事が多かった《刃衆(エッジス)》だが、如何に最精鋭とはいえ、その任の危険度もあって人的損耗も皆無とはいかなかった。

全員の消耗が激しい中、上位のモノも混じる複数の邪神の眷属と相対する羽目になり、壊滅の危険がある状況に陥りかけた事すらある……まぁ、そのときはヘラヘラとした態度で横入りしてきたどこぞの駄犬が普通に眷属をぶっ殺して帰っていたのだが。

そんな風に、危機的状況になるとまるで未来を知っていたかのように湧いて出て来るアホ犬の助力もあって、従事する任務の難易度や危険度からすれば奇跡的とすら言える程に低い損耗率ではあったが……それでも犠牲がゼロという訳では無い。

隊に欠員が出ると、戦いを終えたあとにシャマは必ず引き籠っていた。

陣に張られた天幕の中であったり、帝都に帰還した後に自室であったりと、場所と状況は様々であったが……危急の任務でもない限りは一日か二日、飲まず食わずで閉じ籠る。

アンナとて部下――部隊の仲間が殉職した事に心を痛めぬ筈も無い。せめて生涯忘れる事が無いよう、彼らの名、彼らの勇姿、彼らの強さは全員、確りと記憶に、心に刻み込んである。

隊長を含め、他の隊員とてそうだろう。それも断言できる。
だが……デートと称して、今も頻繁に彼らの眠る場所へと通っているのはおそらくシャマくらいのものだ。
そんな娘であるからして、身内の一人が都市内とはいえ行方知れずとなっている事に過剰反応を示すのは分り切った事であった。
立場上、彼女を諌めなければならないアンナは椅子に座ったまま腕を組んで、現在進行形で睨み付けて来る部下を静かに見つめ返す。
「……トニーが本気で逃げを打ったら、それこそ隊長や顧問でも詰め切るのは難しい。何かに巻き込まれたにせよ、それでそのままどうこうなるような奴じゃないのはアンタも分かってるでしょう?」
「例え無事でも負傷はしてるかもしれない、一刻を争う様な深手だったらどうするのさ……!」
「それこそあいつが自身に仕込んだ保険――霊薬やら魔法やらが幾つあると思ってるの。こと生存能力だけでみれば、トニーはウチの隊の中でも頭一つ抜けてるわ」
これは慰めや希望的観測では無く、事実だ。元より単独での情報収集や密偵などに従事する事の多かったトニーは、とにかく生存して情報を持って帰る為に事前の準備や予防策に余念が無い男であった。

単独行動が多い役柄故に現状、彼が就いていた任に関する何かでトラブルが起こったのか、それとも全く別の問題に巻き込まれたのか、それすら定かでは無いが……最悪のケースだけは無い、アンナはそう確信している。

「万が一の事があった場合、自分が死んだって事が素早く確実に伝わる様にその場で大爆発くらいは起こしてから死ぬ奴よ――それが無い以上、無事に決まってる。信じなさい、あいつを」

「……」

努めて冷静に紡がれる言葉の裏に、部下への信頼と……それでも完全には消えない焦燥が押し殺されているのを、シャマも感じ取ったのか。

無言のままゆっくりと息を吐き出し、上司に倣って腹に溜まった怒りや焦りを幾らかでも押し込めた。

だが《刃衆(エッジス)》の中でも問題児に分類される彼女は、それで完全に引き下がる選択を選ばなかった様だ。

「……体調悪くなったから暫く休む」

「あんたね……そんな表情で言う言葉を鵜呑みに出来る訳ないでしょう。明日から再開する闘技会の実況解説(しごと)はどうするの」

「知らない。そんなの他の喋るの得意な奴に押し付ければ良いし」

滅茶苦茶に不機嫌そうな――それこそ吐き捨てる様な口調で言い捨てて、やって来たときと劣らぬ荒々しい足取りで執務室を出てゆくシャマ。

こうなると言っても聞かないのは嫌と言う程知っている。故に黙ってその背を見送ったアンナは、部下の靴音が遠ざかると勢いよく開け放たれたままの扉に向かって声を掛けた。

「ローガス、悪いけどあの娘に付いてやって。トニーが何に巻き込まれたのかは確定してないけど……単独でこの件を調べるのは危険な気がする」

「あー……まぁ、了解です。あいつのお守り役もトニーでしたからね、見つかるまでは代役くらいはやっときますよ」

執務室の扉脇でこっそりと待機して様子を伺っていた年長の部下は、壁越しでも苦笑いしているのが感じ取れる声色で上司の声に応える。

そのままシャマの後を追う様に靴音が遠ざかっていくのを聞き届けたアンナは、開けっ放しの扉を眺めて再びの嘆息を吐き出した。

「ハァ……あ～、ガラじゃないわぁ……」

机の上にぐったりと突っ伏すと、意識せずに愚痴の様な言葉が漏れる。

実際、こういった役柄が性に合ってないのは事実だ。役職上仕方ないのだが。

以前――《刃衆（エッジス）》が創設される前、一介の騎士でしか無かった頃は、シャマと一緒に

なって上司に噛みつくのが自分のポジションだった筈だ。
「儘ならないもんね」
先ず第一に部下の安否。そしてそれに伴う行方不明の孤児達の一件、そんな中、帝国の『顔』として闘技大会で結果を出さねばならない事。
考えるべき事は多く、同時にやらなければならない事も、また多い。
今の立場に不満などあろう筈もないが、こういったときに思うがままに飛び出せる身軽さが無いのは、正直歯痒く感じる事もある。
ここ最近は教国に出向していたので、個人で動く機会も多かったせいか、より強く感じる思いであった。
脱力して執務机に上体を預けたまま、首だけを傾けて部屋の端にある本棚に眼を向ける。
「……アンタだったら、それこそやりたい様にやるんでしょうね」
報告書や過去の隊の関係書類、形式として上級騎士の執務室には大抵揃ってる蔵書が並ぶ本棚の中、一つだけ混じっている子供向けの絵本の背表紙を見て。
「ま、あの馬鹿がまたお節介を焼いてくる前に、なるべく早く解決するとしますか」
先日の試合後の友人とのやり取りを思い出して、アンナは身を起こすと鼻を鳴らしたのであった。

――帝都城下、とある酒場にて。

大衆から冒険者迄、幅広い客層を相手にする其処は、祭りの効果もあって陽も高い内から様々な人々でごったがえしていた。

祭り価格と称して普段より割高に設定する店もあるのだが、この店はその逆――大祭中の売り上げ増加よりも後の固定客の確保を狙ったのか、常よりも少しばかり値引きをした金額設定で営業を行っている。

どちらも場合によりにけり、といったものだろうが、店内の混みっぷりを見る限りでは店の目論見は成功しているようだった。

そんな酒場の、大勢出入りする客の一人。

外套を羽織った、上品な商人風の装いの男が入口を潜ると同時に周囲を見渡す。

活気に溢れた喧噪に満ちる店内で、男が目に留めたのは角にある丸卓（テーブル）だ。

その席に座る人物を暫し注視すると、丸卓（テーブル）へ向かって店内を行き交う多くの客や店員の間をゆっくりと縫う様に進む。

大きな酒場ではあるが、屋敷や城の如き、という訳もない。直ぐに目的の卓へと辿り着くと静かに椅子を引いて腰を下ろした。

男は最初に近くを通った店員に麦酒（エール）と煮込み料理を注文すると、何処か蛇を思わせる双眸を更に細め、この場において不自然にならぬ程度に先に座っていた人物へと頭を下げる。

「数日ぶり、でございますねぇ、陛下。いやはや、この《大豊穣祭》において、この様な形で尊顔を拝謁する事になろうとは思いもしませんでした」

「抜かせ。昔、最初の密会で此処を指定してきたのはお前の方だろうが」

嘗て、同じ様にこの酒場を秘密裏の会合の場として、若かりし皇帝を呼びつけた男……シュランタン＝サーリング伯爵はにんまりと、やはり蛇が浮かべるが如き笑みで口の端を吊り上げ。

豪快に麦酒（エール）を呷り、蓄えた豊かな顎髭に泡を付けていた人物――帝国皇帝たるスヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルは、本来なら会いたくもない目的の人物がやってきた事に嫌そうに顔をしかめた。

傍目からみれば、どちらも旅の商人といった装いの二人。

髪型もそれらしく変え、本来の髪色なども魔法で隠した帝国の皇帝と大貴族は、丸卓（テーブル）

を囲む席に隣合って座りつつ、早速の軽い応酬を始める。
「にしても……本日は護衛として閣下を連れていらっしゃらない御様子。いけませんなぁ、臣が陛下に仇為す筈もありませんが、万が一の事を考えれば腕利きの供も連れずにやってくるのは感心できません」
「ハッ、慎重な事だ。自分がやってくる随分と前から少しずつ部下を酒場に客として配置してる奴が言うと説得力がある」
「おや、御存知でしたか」
「レーヴェの代わりに連れて来た奴らにな。頼りにならんか試してみるか？」
　同じ卓に座った、フード付きの外套を羽織った護衛の冒険者、といった格好の二人――レーヴェ将軍では無いと判断した瞬間に視界から外していた者達をシュランタンはしっかりと凝視し、それが誰であるかを認識して微かに口元を引き攣らせ、苦笑いを浮かべた。
「御冗談を。ええ、私も部下は優秀な者を揃えていると自負しておりますが、《刃衆（エッジス）》の筆頭殿と顧問殿に並べるのは彼らに対して無体が過ぎるというものです」
　主であるスヴェリアと同じく簡単な変装を行っているものの、よくよく見れば帝国三指に入る戦士の内二人が護衛である。単純に武力という点でみれば同格であろうレーヴェが二人いる様なものだ。

シュランタンがちらりと周囲に眼を配れば、部下の中でも、この喧噪の最中あってこちらの声を拾える者は顔を引き攣らせて首を横に振っている。
元より妙な真似をする気もないが、それを理解していて尚、此方に向かって『やめてくれ』という懇願の視線を向けて来る護衛を見れば、皇帝側の護衛――その人選のガチっぷりは戦いの方面に適性の無い伯爵にも理解できるというものだった。
「どうやら見誤っていたのは此方のようで。臣たる者の見識の甘さ、陛下にはどうかご容赦を願いたく」
「構わん、この場にレーヴェ以外を連れて来るのがそもそも初めてだからな。流石にお前も予想外だったか」
ニヤリと笑って、スヴェリアは麦酒（エール）の満たされた杯へと再び口を付ける。
やはり酒場において不自然に映らぬ程度に頭を下げたシュランタンが、改めて護衛の二人――ミヤコとネイトへと眼を向けてそちらにも挨拶を交わす。
「御二方には挨拶が遅れまして。私が言う事でもないですが、陛下の護衛、しっかりとお頼みしますよ」
元より護衛に専念し、今回の会合には口を挟む資格も意思も無い二人は、丁寧な黙礼を以て返した。
卓に着く者達の顔合わせが終わると、ほどなくしてシュランタンが注文した品が運ば

れてくる。
態とらしい交渉用の笑みを常に張り付けている男にしては珍しく、僅かに頬を緩めて匙を手に取るのを見て、帝国の主たる男は麦酒(エール)を啜りながらなんとも言えない表情を浮かべた。
「お前は初めての会合のときからモツの煮込(レ)みだな。世の美食の類なぞ殆ど手に入れる事が出来るだろうに」
「金額というものはあらゆる事柄の重要な目安ですが、高価であれば美味いなどと嘯くのは聊か以上に品も頭も欠けている証左でしょうなぁ。私はこの店で食事をする際は、脳ではなく舌を満足させると決めています故」
要は高価(たか)いモン食ったという情報で満足するのと、美味いと思った物を食った場合の満足は別だ、という事らしい。言わんとしてる事は分かるが言い回しといい、嗜好の示し方といい、激烈に面倒くさい奴だ、とスヴェリアは再び顔を顰める。
湯気を立てる熱々のモツ煮込みを食う蛇の如き三枚舌伯爵という、文字に起こすと中々に珍妙な光景を眺めていると、何度か匙を口へと運んだシュランタンがポツリと呟いた。
「我らのこれまでの会合……閣下をお連れしない、というのは今までにはなかった事。陛下には己の右腕に対する懸念がおありでしょうか？」

匙で掬った肉片を眺めながら言うその表情は、非常に楽しそうににんまりと歪んでいた。

もしそうなら色々とやり易い。そんな態度を隠しもしない伯爵に向け、下らん事を聞くなと言わんばかりに皇帝は鼻を鳴らす。

「アホか。単にレーヴェの奴が忙し過ぎてどうやっても引っ張れなかったのと――この場にアイツが居たら絶対にお前が話さん事を聞きたいが為だ」

王城での謁見では、如何に人払いをしようと顔を合わせ、何某かのやり取りをした、という事実が残る。

公式な記録にも残される為、政敵に近い互いの立場上、本当の意味での密談を行うにはこうした場を用意する必要があったのは確かだ。

当時、国内を速やかに統一して一枚岩とする為には、実質的な貴族派のトップだったシュランタンと余計な目や耳の無い環境で交渉するのは絶対に必要な事だった。

そんな中、邪神の軍勢との戦争中だというのに、派閥争いという名の内輪揉めで国力を無駄に削る行為をスヴェリア、シュランタン共に問題視した事で、この奇妙な秘密の会合が初めて行われたのである。

それにしたって場所を指定する際に皇帝と将軍を大衆酒場に呼びつける、などという真似をしてのけたシュランタンの肝の太さ――というより面の皮の厚さは凄まじいも

のがあるのだが。
この酒場での密会の始まりは、そんな処だ。
少々話を戻すが……立場的に政敵というだけでなく、性質からして根本的に合わない、険悪な仲のレーヴェとシュランタンは、とにかく互いに弱みや突かれるであろう点を晒すことを嫌う。
実直なレーヴェはまだしも、利が上回るなら個人的な好悪の情など犬にでも食わせておけ、というスタンスのシュランタンまで同じような態度なのだ。
何から何まで正反対の癖に妙な処で共通点のある二人である。スヴェリアが以前その事を指摘した際には、両者共にゲロでも吐きそうな面構えになって揃って抗議してきたが。
とにかく、会合が始まった当時は皇帝自身の手足・懐刀ともいえる《刃衆（エッジス）》も創設されていなかった事もあり、最高レベルの護衛と絶対的に信頼できる臣下という要素を両立出来るのがレーヴェのみだったのだ。その為、獅子と蛇の睨み合いで交渉が難航する事になろうが他に選択肢は無かった。
「お前が今回帝都にやってきた理由――謁見の場で口にしていないものがあるだろう、それを確認しに来た」
なのでスヴェリアとしては、護衛をミヤコとネイトにする事で今回の様に交渉の難易

度が幾らか下がるケースも出て来た、という認識だ……レーヴェには悪いと思うが。
互いに《大豊穣祭》開催期間の忙しい中、時間を捻りだしてこの場に居る身だ。単刀直入に切り込む皇帝の言に、伯爵は「ふむ」と呟いて束の間の思案に入る。
「……そうですねぇ、事あるごとに牙を剥いて唸る物騒な獅子がおらぬこの場、陛下にならば臣の胸の裡を晒すのも吝かではございませんが……後の配慮はして頂ける、という確約が欲しい処ですなぁ」
「帝都内の問題も絡む都合上、レーヴェに全く話さんというのは無理だが、お前が奴に知られて嫌がる内容に関しては伏せると約束する」
元より証文の類など残せぬ会合だ。出来るのは口約束のみではあるのだが……だからこそ、この場で交す契約・約束事の重要性は両者とも熟知している。
シュランタンが思案を続けたのは数秒足らずだった。
「では、この場に限り我が身の恥を晒すとしましょう……今回、私が直に帝都を訪れたのは我が領地で行われている領民の誘拐・人身売買についての調査も兼ねておりました」
「……やはりそうか」
語られた内容は、果たしてスヴェリアが予測を立てていたものとそう乖離しないものであった。
伯爵領で起こっているというソレは、帝都で起きている孤児の行方不明者が頻発して

いる件――その背後にあった人身売買事件と酷似した内容だ。
領内で調べを進めたシュランタンは、金の流れや売買を行った者達の痕跡から元凶が帝国中央……帝都か、或いはその周辺都市にあると判断して、今回の祭りに併せて元凶に大きな動きがあるやもしれぬ、と睨んで調査を行っていたのだそうだ。
「私の可愛い財産（領民）を横から掠めとる盗人など、存在させておくのも許し難いですからねぇ……陛下の膝元たる帝都においてまで蠢動する程の者達だったというのは厄介な話ですが……高度に組織だった集団であると知れたのは収穫ではありました」
内容的に相当飯が不味くなる話をしている筈なのだが、会話と食事は完全に切り離して愉しんでいるのか、煮込み料理を掬う匙の速度は落ちない。
売買を行っているのは帝都と伯爵領のみ、という事はあるまい。人口比率に併せて、目立たぬ様に帝国各地で行っている筈だ。
いち早くそれを察し、更にその中心が帝都近辺であると嗅ぎ当てたシュランタン――その彼が帝都にやって来るのとほぼ同時に、彼と関りのある男爵がケントゥリオ侯爵家の嫡男、ノエルを唆かす形で教国からの賓客に対して問題が起こった。
その件について問い詰める予定であった男爵当人は、伯爵領からの外遊帰りに魔獣に襲われ生死不明ときたものだ。どう考えても偶然では無い。
「チッ……外れてくれた方が良かった予想だが……忌々しい事に大当たりか」

「その様ですなぁ。どうやら我らが立てていた当初の見積もりよりも病巣は大きいようで」

このときばかりはスヴェリアもシュランタンも、互いに顔を見合わせて同感だとばかりに同時に口の端を歪める。

ノエルの一件と、孤児を中心とした帝都臣民の誘拐・人身売買――奇しくも今回の会合で、一つに繋がった形だ。

ケントゥリオ侯爵家にちょっかいを出したのはシュランタンへの妨害工作、と考えるのが妥当だろう。

彼と関りのある貴族がソレを行うことで、皇帝とその右腕たる将軍に睨まれ、帝都での調査が滞るならば良し。可能ならばレーヴェ将軍……ケントゥリオ侯爵家と明確な敵対関係にまで関係悪化するならば更に良し。

少々迂遠だが成功すれば効果的であり、厄介な手口だ。あくまで黒幕は一切の矢面に立たないというのも輪を掛けて面倒臭い。

更に厄介なのが企んだ者は木っ端の男爵位といえど、帝国貴族相手に指示を行い、実行させ……用済みになれば実行者である男爵を消す事も厭わず、且つ容易にソレを実行出来るという事である。

以上の事を踏まえれば、この件の背後にあるのがちんけな犯罪組織の類では無い、と

いう事だ。
シュランタンはこの会合で明確に確信を抱いた様子であるが……先程の言の通り、スヴェリアは既にそれを予想していた。
それも当然だ。元はと言えばこの密会を行うと決めた理由が、信頼する部下の一人である青年からの定時連絡が途切れた、という報せがあったからなのだから。
相手は予想以上に厄介。そうでもなければトニーが――己の揃えた名剣たる《刃衆（エッジス）》の一振りが下手を打つ筈も無い。
会話を黙して聞くのみであった護衛の二人……特にミヤコの方から、自身の部下が消息不明となっている理由と元凶を知った事で物騒な気配が漏れ始める。
ネイトの方も決して穏やかとは言い難い雰囲気なのだが、それでもミヤコよりは多少冷静なのか、じりじりと放射される剣呑な魔力を遮る様に小さな障壁で卓の周辺を覆う。
料理が盛られていた器を空にした伯爵が、口元をハンカチで拭いながら張られた魔力障壁に眼を向けた。
「ふむ……此度の急な陛下のお呼び出しといい、騎士タナヅカの御様子といい……成程、どうやら件の人買い共は保有する戦力、という点でも侮れないようですねぇ」
「――ッ、失礼しました、サーリング伯爵」

人外級の威圧に晒されながらも、表面上は平然と事の次第を察した発言をする男に、ミヤコがハッとした様子で漏れ出た魔力を引っ込めて小さな声で謝罪した。

自身の娘程の年齢の少女の素直な謝意に、普段の胡散臭さを多少なりとも控え目にした笑顔でシュランタンは謝罪を受け取る。

「お気になさらず。お若い身で凄まじい威をお持ちなのは存じ上げていましたが、この場にてよく浴びていた暑苦しい獅子の吐息と比べれば怜悧で涼やかな分、幾分と心地よさすら感じましたとも」

若き帝国最強の一角を程よく持ち上げつつも、嫌いな奴をディスるのに余念が無い男である。

褒められたのは確かなのだろうが、同時に全ての騎士の上役に当たるレーヴェを扱き下ろす発言に礼を言う訳にもゆかず、ミヤコは曖昧な笑みを浮かべた。

年若い騎士に平常運転である皮肉気な調子で絡むつもりも無いのか、伯爵は直ぐにスヴェリアの方へと顔を向けた。

「陛下、今回の交渉にて融通していただくのは、我が領地からの追加の戦力を帝都近辺に送る事の目溢し、というのは如何でしょう?」

「ふん、そう来たか。お前の処もこちら側の派閥も周囲の声が喧しいことになるだろうが……」

何度目になるのか、眉を顰めて嫌そうな顔を見せた皇帝は、だが暫しの黙考の後、直ぐに答えを返す。

「……良かろう。厳選した手勢をあくまで伏せた形でならば認めてやる……ただし、規模と配置箇所の情報はレーヴェに提出してもらうぞ」

「まぁ、それは当然ですなぁ。ご配慮に感謝致します」

帝国皇帝と貴族派の首魁は、話はこれで終わりだといわんばかりに自分の杯に残る麦酒（エール）の残りを一気に飲み干す。

「予定が押しておりますので、それでは」と、非公式の場とはいえごくあっさりとした態度で席を立って酒場を出てゆくシュランタンの背を見送ると、スヴェリアは髭に付着した麦酒（エール）の泡を指の腹で擦り落とし、護衛の両名へと視線を転じる。

「――まぁ、そんな訳だ。大々的に動くと人買い共も深く潜ってしまうかもしれん、トニーの奴の捜索隊を組むのはもう少し後になる、すまんな」

「……はい、それに関しては重々承知しています」

「ですが、隊の中には知れば飛び出して探し始めるであろう者も幾人かいます。その辺りは目溢しして頂けるでしょうか？」

ミヤコとネイトが其々に返す言葉に、彼らの主はニヤリと鷹揚に笑って見せた。

「シャマダハルあたりは確かに仕事を放り投げて捜索に出そうだな……まぁ、構わん。

連中の眼に大事になったと映らなければ良いだけの話だ、部隊の問題児の独断専行、という体なら隠れ蓑には丁度良かろう」

トニーを探しに飛び出した者達をこっそりと支援するのならば構わない、と暗に告げ、ついでに帰ったら飛び出した部下の仕事の代役くらいは用意しとけ、と掌をひらひらと振る皇帝に《刃衆(エッジス)》の長と顧問は揃って静かに頭を下げる。

かくして帝都――否、帝国の影に蠢く悪意は、国の支配者と守護者にしかとその存在を見据えられ、捉えられんとしていた。

――尚、下手を打つという形ではあったが、その切欠となった現在行方不明の青年はというと。

「……知らない天井ッス」

帝都にある冒険者を主な客層とした宿屋の一室にて、ベッドの上で眼を覚ました処であった。

動き出す者達　2

「……知らない天井ッス……」

ひび割れた唇から掠れた声が零れ落ち、トニーは反射的に身じろぎを行おうとして――身体中に走る激痛に呻き声を上げた。

（痛ってぇ……とはいえ、あの状況から生きてるだけでも運が良い方、か……）

先ずは身体状態のチェック。

斬られた胴――これは保険として服用している霊薬の効果と……この部屋に自分を寝かせたであろう誰かが治療を行ったのか、思ったよりマシな状態だ。流石に派手に動けば傷口は直ぐ開くだろうが。

自分を斬ったあの転移者の男の技量を考えれば、傷口には相当な攻性魔力が残っていた筈だ。普通の魔導士や聖職者では治癒は困難を極めるだろうが……治療してくれた者は回復魔法以外にも医学の心得を持っているらしい。血管や神経周りに回復魔法を注力させ、他は縫合止血諸々の医療的処置も並行することで上手い事傷を塞いでくれた

様だった。
右腕にしても同様だ。かなり深く裂かれたので切断も覚悟していたのだが、これまた丁寧な治療によって傷を塞がれ、きちんと胴とくっついている。
流石に殆ど動かないが、まぁこれに関しては仕方ない。繰り返すが生きているだけでも御の字だ。
重症には違いないが生命活動の維持には支障なし、無理をすればある程度は動けない事も無い、といった処か。
次は周囲の状況だ。
痛みを堪えながら首を巡らせて、自身が寝かされている部屋と、窓から見える景色を確認。
見た処、よくある宿屋の一室だ。高級宿では無いが掃除の行き届いた良い部屋である。
切り裂かれたままではあるものの、洗濯されたのか汚れの無い己の隊服が壁に掛けられ、吊るされていた。
ベッドに寝ている状態からでも見える窓の景色は、見慣れた石造りの建物群に祭りに併せた旗や飾りがぶら下っているのが見て取れる。
聞こえてくる陽気な喧噪も加味すれば、帝都内――祭りも開催中なので、時間も数日

と経っていないのは間違いないだろう。
自身の状態、特に拘束や監視の眼も無い状況で寝かされていた事。
あまり楽観視はすべきでは無いが、どうやらそう悪い状況でも無いらしい。
（……親切な観光客が拾ってくれたって感じッスかね？　出来れば直ぐに移動を開始したいけど……）
礼の一言でも述べるか、最低でも書置きくらいは残して行きたい処だ。左手でも文字を書けなくはないが、肝心のペンと紙は見える範囲には無い。隊服に仕込んでいたものは水に浸って全滅だろうし。
宿の名と場所さえ把握しておけば後から礼をする事も不可能では無い。が、観光客であれば何時までこの宿に居るのかも分からない。
助けてくれた相手に礼も返せないままという不義理はトニーとしても避けたいのだが、さて、どうするか。
取り敢えず身体を起こし、軋む全身に鞭打ってベッドから抜け出そうとする。
そこでようやっと、衰弱して鈍くなった五感が部屋に近づいてくる足音と話し声を捉え、トニーは部屋のドアへと眼を向けた。
そして、数秒と経たずに扉が開かれる。
「今日も成果があるとは言い難いですね……やはり彼が一番の情報源となりそうです」

「そうは言っても、あの糸目も相当に重症よ？　もう暫くは起きそうにないんじゃないの？」

会話しながらドアを開けて入って来たのは、年若い男女二名であった。

旅装を兼ねた装いの、聖職者の男と女魔導士――一見して冒険者であると察せられる格好の二人だ。

両手に食料の入った袋を抱えた二人は、ベッドの上で起き上がったトニーを見て軽く眼を見開く。

が、トニーとしても結構な衝撃具合だった。

なにせ、男女両方とも見覚えのある顔である。しかも、以前就いていた任務の都合上、あまり良い関わり方をしなかった者達だった。

「……これは……驚きましたね。目を覚ますにしても、最低でもあと二日は掛かると思ったのですが」

「……確かに驚いたけど、まぁ、早い分には良いんじゃない？」

言葉の通り、驚きと――同時に僅かな警戒を滲ませて重症の自分を見つめる二人……嘗て、北方での潜入任務に従事していた際に、仮初の立場にて敵対関係にあった冒険者達の顔を見て。

「あー……どうも。とりあえず……お水を頂けないッスかね？」

なんとなく経緯や状況を察したトニーは、直ぐには王城に戻れそうにもないと判断して動く左手で頭を抱えた。

処変わって、帝都王城。
最上階にある、皇帝の居室にて。
「過去の亡霊、ですと？」
「あぁ。あの三枚舌――シュランタンの奴も戯言の域を出ない流言だとは言っていたがな」
政敵といえる旧貴族派の首魁との秘密の会合を終え、帝国皇帝たるスヴェリアは知り得た情報を元に己の右腕であるレーヴェ将軍と意見の擦り合わせを行っていた。
伯爵との約束故に、彼が個人的に嫌がる部分についてはレーヴェを相手に話す事は出来ないが、それでも得た情報は多い。
今上げた話題もその一つ――シュランタンの領地にて静かに広まっている噂話についてであった。

嘗ては辺境伯が治めていたサーリング伯爵領。

戦争が終わった今、その地に本来の正しき主が――スターディン辺境伯が還って来ると。

スターディン家は元より武名高い帝国の名家であったが、女神の加護厚き異界の者――転移者を血筋に迎え入れる事で更にその功績を伸ばし、最終的には辺境伯の位を得るまでに至った一族だ。

元より転移・転生者を積極的に受け入れている帝国ではあったが、武闘派であるスターディン家は特にその傾向が強い家の一つだった。

事実、当時の……最後の当主は過去に迎え入れた転移者の血筋が強く出たのか、黒髪であったという。

昇爵の後、嘗ては南部の広大な領地――現在はサーリング伯爵領となっている地を拝領し、土地の肥沃さもあって順調に領地を運営していた辺境伯。

それが没落……否、貴族としては完全に断絶したのは、スヴェリアが即位する遥か前、二代前の先帝時代の出来事が原因である。

当時の邪神の軍勢は散発的な小競り合いを各地で起こす、程度が主であり、極稀に大きな戦いを引き起こすが、戦争の火種は大陸全体で見ても小康状態、と評して良いものであった。

後の時代になって、連中が攻勢を強める為の準備期間であったと言われる事になるが……当時の者達からすると休戦期のような認識であったと思われる。

そんな中、統率の取れた士気高い兵を有するスターディン辺境伯は自身の領地の防衛は勿論の事、近隣の領への援軍なども精力的に派遣し、名声と貴族の支持――取り分け南部周辺の地方領主達の信頼を集めていた。

それが隠れ蓑であったのか。

或いは――当時の皇帝や有力貴族に危険視されたが故だったのか。

辺境伯に、一つの嫌疑が上がる。

内容としてはシンプルであり、そして帝国貴族……否、この地に生きる者全てにとっての重罪。

即ち、邪神の軍勢との内通である。

スヴェリアも当時の資料を漁った事があるが、辺境伯が信奉者と思わしき者達と接触した事自体は、どうも事実であるらしい。

とはいえ自身から行ったものではなく、あくまで信奉者側からのコンタクトであり、そこで何某かの密約が結ばれたという確たる証拠は無い。

当時のスターディン家の評判や領民からの評価、記録に残る辺境伯当人の人品・気質から考えるに、寧ろ接触を図って来た邪神の配下達の取引や要求を突っぱねた可能性の

方が高かった。
だが、結果として嫌疑は晴れず、辺境伯は質疑応答の為に帝都に召喚され――不自然な程のスピード裁判を経て、そのまま売国奴と人類種の裏切者の烙印を押され、爵位と領地を失った。
ぶっちゃけ、傍から見ればどうみても謀略で辺境伯を失脚させた様にしか見えない。
当時の調書などを見ても不自然な点が多すぎる。確信を抱けるレベルの資料を閲覧できるのは皇族たるスヴェリアだからこそ、というのはあるのだが。
正直に言えば、悪手としか言いようが無い、というのが感想であった。
過去に貴族としての疵も無く、休戦期に入っていたとはいえ、自国にて特に高い防衛力を誇っていた優れた領地経営を行っている辺境伯を、強引にも程があるやり口で失脚させる。
南部全域が辺境伯の派閥化する事を危惧したのだとしても、方法が性急かつ杜撰に過ぎた。
そこにはスターディン家の功績を妬む者、危険視する者、かの領地の肥沃な土地を欲深い眼で見る者――様々な貴族と……恐らくは先帝の意思が介在し、その思惑が絡まった結果なのだろう。
普通ならブチ切れて反乱待ったなしであるが、良くも悪くも古いタイプの武人気質で

あった辺境伯は『家族の命と名誉が保証されるならば』と、その結末を受け入れたという。

それが彼なりの仕えた国への最後の奉公であったのか、母国への失望故の失意の選択だったのか、残された資料からは読み取れることは無かったが。

興味を惹かれ、当時の資料に眼を通した若き皇太子であったスヴェリアに「駄目だこの国。俺が纏めねーと将来空中分解待ったなしだわ」と、流血・粛清も覚悟の大改革を決意させる一因となったのは確かだった。

レーヴェも辺境伯に纏わる一件は軍部を預かる者として聞き及んでいるのか、「ふぅむ」と一つ唸ると腕を組んで思案に耽る。

「……確か、辺境伯の御家族は僅かな私財のみを手に、帝国を出たのでしたかな？」

「実質追放だろうが、まぁそうだ。流石に爺様もでっち上げで失脚させた臣下の最後の嘆願を無碍には出来なかったらしいな。ここまでやっておいて半端な事だ」

ならば最初から馬鹿な真似は思い留まれば良かっただろうに、と。現皇帝は先帝の煮え切らぬ選択を苦々しい表情で切って捨てる。

元より道理から外れた方法・思惑で臣を切り捨てたのならば、その選択を以て徹頭徹尾、後の禍根を残さぬ様に振舞うべき――それこそスターディン家は一族郎党ごと処刑すべきであった。

事の成否や善悪の問題ではない。
どういう経緯にせよ、仮にも大国の王がそうと決めたのなら、自身の罪悪感や良心の棘など脇に置くべきであったのだ。
新たな派閥の台頭を恐れた貴族共の声を押さえつける事も出来ず、漠然とした不安要素のみで有能な家臣を危険視して失脚させておきながら、非情に徹した決断も出来ない。
スヴェリアからすれば正道から外れ、外道にも徹せぬただの臆病さの生んだ愚行でしかなかった。
「ま、だからこそ、早々に引退してもらった訳だが」
私人としては、家族としてはそう悪い人ではなかったと思う。
だが、人類種最大国家たる帝国の玉座に座り続けるのには、足りぬものが多すぎる人物だったのだ。祖父にしろ……その後を継いだ父にしろ。
だからその座より引きずり下ろした。外なる世界からやってきた悪辣極まる神との戦い――その最中にあって国を纏められぬ様では、皺寄せを喰うのは帝国全土の民であるが故に。
過去に触れた事で少しばかり感傷的な気分になるが、すぐに切り替えてスヴェリアは後の辺境伯についての情報を脳内で整理し、己の右腕に語る。

「現状では例の誘拐・人身売買と関りがありそうな話では無いが……シュランタンが言うには噂の発生時期が『態とらしい』らしくてな。一応はお前と共有しておこうと思った」
「……と、仰ると？」
「時期が被るらしい。それまで全く耳にしなかったというのに、唐突に生えて来た噂らしいからな。広めた奴の作為を感じるのは確かだ」
蛇の如きかの伯爵が言うには、調査の開始に合わせて意図的に広め始めた様な噂の広がりであるという。
そもそもこの様な噂が立つ土壌が現伯爵領には無い。
嘗て土地を治めていた領主が不当に国を追われ、再び還って来て奪われた土地を取り戻す――歌劇などで題材に上がりそうな話ではあるが、この手の話が広がるのは民衆にとっての『希望』となるからだ。
現実でそれが可能かどうかは別として、悪政に喘ぐ民にとってはそういった話は心折れぬために縋る、か細い光ともなりえるのだろう。
だからこそ皆、口に登らせる、広まる。
だが、その前提――悪政や重税に喘ぐ民、というのがサーリング伯爵領には縁遠い話だ。

以前にも言ったが、シュランタンは自領の統治に関しては名君と評しても良い。
自身の領地――その土地は勿論の事、そこに暮らす民とは、須く自身の資源であり、財産であると公言して憚らない男は、だからこそ自分の財産の見栄えが粗末である事を良しとしない。
『薄汚れてくすんだ金貨など、貴族として扱いはしないでしょう？　民も同じことです。私の財産である以上、身嗜みを整える程度の余裕は持たせて然るべきですからねぇ』
下々の豊かさとは、即ち領主の統治能力の証明であり、磨かれた金銀銅貨の輝きと同じく、財産としての価値の指標でもある。
そう嘯く伯爵の領地は、生活水準の高さという点では帝都に次ぐものであり、例外――下限である悪所や其処に住む孤児や難民に関しては、その数の少なさはおそらく帝国一だ。
認めるのは業腹だが、その領地経営の手腕は帝国皇帝たるスヴェリアをして見事、と評する他ないもの。
先に述べた辺境伯が戻って来る、という噂自体が広まる余地が存在しないのである。
にも関わらず噂話として定着しているということは、やはり意図を以て広める者がいる、という事だ。おそらくは。
タイミング的に件の誘拐事件と無関係とは思い難い、と会合の場でシュランタンが切

り出した話ではあったのだが……。
「そうだとしても、意図が読めませんな」
「まぁ、そうだな。調査の攪乱の為だとしても露骨過ぎる――そもそも何故今更スターディンの名を使うのかも分からん」
帝国の皇帝とその右腕たる重鎮は、揃って腕を組んで頭を悩ませる事となった。
帝位に就いたスヴェリアが国内を纏め上げる際、スターディン家の者達を呼び戻せぬかと、帝国を出た後の彼らの足取りを調べた事がある。
今回の噂話ではないが、過去に不当に領主としての地位を追いやられた事を理由に、サーリング伯爵領を一部割譲させて宛がう事で、自身の派閥に返り咲いたスターディン家を取り込みつつ、シュランタンの力を削ぐつもりだったのだが……北方入りしたという情報以降、彼らの一族の情報は殆ど入って来ていないのが現状だ。
スターディン家の復興は祖父のやらかしに対する詫びも兼ねていたので、最後には貴族派に気取られる事も構わずに国として正式に呼びかけを行ったのだが……今現在になっても、辺境伯の血族たる者達は現れていない。
散り散りになり、完全に民の中に溶け込んでいったのか、もしくは二度と帝国に仕える気が無いのか。
以上の事をふまえても、とにかく噂話とやらには不自然で意図の読めない――それこ

そ無意味にしか思えない点が多かった。
「すっきりしないが……現状では一旦棚上げするしかないな。どのみちシュランタンの領地の話だ、此方では情報が手に入れ難い以上、推察を組み立てるだけの材料が足りん」
「一応、弟（ティグル）にも話はしておきましょう。アレの知見ならばまた違った意見も出るやもしれませぬ」
「また熱を出して臥せっていると聞いたぞ？　奴の助言は有難いが無理はさせるな。この件のみならず、まだまだティグルの頭が必要になる事は多い、本格的に倒れられでもしたらたまらん」
　トニーが行方知れずな事も含め、問題と疑問が増えるばかりで進展が見られない状況に辟易としつつも。
　責務を果たすべく、人類種最大国家の皇帝と将軍は次なる話題に移るのであった。

　帝都の入り組んだ路地裏を、二人の騎士が足早に歩く。
　一人は苛立った様子も隠さず、荒々しく足早に。

それを追うもう一人は、先に歩く騎士を追う様にやや速足ではあるが、落ち着いた歩みで。
「少し落ち着け、シャマ。そんな物騒な表情してたら孤児どころか物盗りの類だって寄ってこないぞ」
「うっさい。誰が副長みたいな顔してるってのさ」
「お前サラっと副長本人に聞かれたらヤバい事言ってるって自覚ある？」
《刃衆（エッジス）》の二名――シャマとローガスは、現在行方不明となっている同僚（トニー）が巡っていたと思われる場所を、順番に虱潰しで調べていた。
就いていた任の内容からして、場は自然と都市各所の悪所に当たる場所だ。
トニーを目撃した者がいないか聞き込みを行うのがもっとも単純かつ手っ取り早いのだが……苛立ちを隠せていないシャマの放つ空気を感じ取ったのか、こういった場所の住人達は隠れるか、距離を取ってしまって出てこない。
靴音高く荒れた様子で先を歩く若い同僚の背を眺め、ローガスはこっそりと溜息をついた。
仕事を放り投げて仲間の捜索の為に飛び出して来た形なので、二人とも隊服の外套（コート）は着ていないのだが……《刃衆（エッジス）》である事を知らずとも、今のシャマを見て格好ばかりの女騎士などと判断するのは、鈍いを通り越して危機管理能力の欠如した馬鹿の類と言っ

て良いだろう。
　このような場所で、年若く見目の良い女性と連れ立って歩いていてもゴロツキの類に全く絡まれる事が無いのは面倒が無くて良いのだが……肝心のトニーを目撃したであろう、孤児を筆頭とした路地裏の住人達まで全力で離れて遠巻きでこちらの様子を伺っているので、捜索は初っ端から難航してる。
　シャマとてそれは分かっているのだろう。だが、仲間（みうち）が絡む事に関しては喜怒哀楽問わず感情の起伏の激しい彼女は、完全に激情を押さえつけるのは難しい様だ。
　腕っぷしは一流でもやはりまだまだ若い。シャマの場合は本人の気質も多分にあるのだろうが。
　ローガスも行方の知れないトニーの事は心配ではあるが……今朝、執務室で上司（アンナ）が言っていた様に最悪のパターンまで行ったとは思ってない。
　元・冒険者の自分から見ても、あの狐を思わせる同僚の丁寧な事前準備やリスクの取捨選択は呆れと感心を抱くレベルだ。
　決して安くは無い霊薬や魔法を仕込める道具などを経費で落とし切れずに自腹を切ってでも用意している様は、ちゃんとプライベートを楽しむ時間と給金をとってあるのかと心配になる程である。
　溜息の代わりに苦笑いを零して、ローガスは懐から取り出した煙草を咥えた。

火を付けようとした処で、咥えた紙巻き煙草に褐色の指先が伸ばされ、摘まみ取られてしまう。
「いい加減吸うのやめろし。臭いし煙いし、キライなの」
先を歩いていた筈のシャマが、戻ってきて取り上げた煙草をクシャッと折り曲げてしまった。
「あぁ、勿体ねぇ……紙巻きは意外と良いお値段だってのに」
「なら尚のこと禁煙しなよ。何度言っても聞きやしないヤニカスおじさんとかちょーウザいんですけど」
只でさえ機嫌が悪いのに、更に半眼になってローガスの胸元――煙草を入れたケースの入ったポケットを見て嫌そうに顔を顰める金髪褐色肌の少女。
煙草が苦手と言うが……彼女は元は特定の国に居付かない放浪の民の出だ。
確か、放浪の民の間では水煙草が多く普及していたと聞く。実際、最初にローガスが吸っている葉巻や紙巻きを見たシャマも珍しそうに「へー。小さくて持ち歩きやすそう」などと含み無く言っていた。
口喧しく喫煙を咎めるようになったのは、以前ローガスが自身の祖父が肺を悪くしてぽっくり逝ったと、酒の席で話してからである。
祖父も自分と同じく愛煙家だったが、酒と煙草の無い人生なんぞ生きてる間に食べる

肉を一切塩を使わんで食うのと同じだと嘯いていた爺だった。
少なからず生活習慣が原因だったのだろうが、悔いなど無いだろう。クソジジイではあったがそこは自分も肖りたい、と。そんな風に語った記憶がある。
まぁ、それからだ。眼前の同僚がこちらの一服をいちいち見咎めるようになったのは。
なんというか……天涯孤独の身軽な独り者を謳歌している身の上でありながら、偶に姪か娘に嗜好品について注意されている様な気分になるローガスであった。
「……なんで笑ってんの？　意味わかんない」
益々不機嫌そうに眉根を寄せる同僚の言葉に、自覚なく苦笑が漏れていた事に気付いてローガスは誤魔化す様に咳払いを一つ。
「まぁ、それは置いといてだ」
「置くなよ、煙草やめろって言ってんだよ。そんなんだからネイトさんと違って未だに独り身なんだよ」
「失敬な、独身貴族と言え――とにかく、住人が怯えて話を聞けてないだろ。俺が前に出て話を聞いて回るから、一旦下がってなさいって」
その間に煮えた腹を冷ましておけ、言外にそう含みながら頭一つ以上低い場所にある金髪の頭頂部を掌で掻きまぜる。

今の自分では埒が明かないとは思っていたのだろう。鬱陶しそうにローガスの掌を押し退けながらも、シャマは不承不承ではあるが頷いた。
「……それは分かったけど、いい年齢（トシ）したおじさんが気軽に女の子の頭撫でるのやめろし。ふっつーに衛兵案件なんですけどー」
「そりゃ失敬。飲みに行った先の娘は喜んでくれるんだがなぁ」
「どうせ娼館でしょ。客相手なんだから当たり前じゃん。商売抜きで喜ばれたいなら、十年若返って酒も煙草もやめて骨格単位で美形になってからにして欲しいんですけどー」
「生まれ変われと言ってるのと同じレベルだろ、それ」
敢えて何時もの調子で会話をするローガスの意図を汲んだのか、シャマも幾分か普段の調子を取り戻す。
――が、直ぐにその顔は何かに気付いた様に眉が跳ね上がり、次の瞬間には厳しい表情となった。
「血の匂いがする」
「――！　そうか、距離は？」
「けっこー近い」
微かな風に乗って流れて来たのは、錆びた鉄の臭い。

眼に見える範囲にはそれらしきものは無いが……それでも臭いが届くという事は、近場で結構な量の血が流れていると言う事。

端的にやり取りすると、アイコンタクトすら無く二人は駆けだした。

シャマの先導で慣れぬ路地裏を静かに、だが素早く走り抜け、それぞれの得物に手をかけながら血臭の発生源へと向かう。

なにぶん、表の人間は出入りする事の無い路地裏だ。ここらの地理に詳しい訳でも無く最短距離とは行かなかったが、それでも幾つかの角を曲がり、狭い道を抜けると少しばかり開けた空間――血の臭いの発生源へと辿り着いた。

五感の鋭いシャマだけでなく、ローガスにもはっきりと感じる様になった血臭に、警戒を強めながら《刃衆（エッジス）》の二人は現場へと飛び込んで――。

「オラ、てめぇらのお仲間は他に居ねぇのかって聞いてんだよ。汚ねぇ悲鳴ばかりあげてんじゃねぇ、殺すぞ」

「ヒィィィッ!?　ま、まって、待ってください！　お、俺達が知ってるのはこの辺りの奴らだけなんです！　それも多分アンタが潰しちまったから他には知ってる奴は残ってないんです！　し、信じて下さい!!」

ガラの悪い、如何にもゴロツキといった風情の男の頭を鷲掴みにして持ち上げているのは、それ以上にガラの悪そうな痩身の魔族の男だった。
転移者以外では非常に珍しい黒髪の魔族は、舌打ちするとゴミを捨てる様にゴロツキを放り捨てる。
軽く放った様に見えたが、ちょっとした投擲具並みの速度で手近の建物の壁に激突した男は、潰れた蛙の如き悲鳴を上げて血反吐を吐きながら地に転がった。
周辺には他に何人もの……これまた如何にもゴロツキ、といった面構えの連中が死屍累々と転がっている。殆どがゲロか血を吐いて手足が明後日の方にひん曲がっていた。
そして男の背後――おそらくはこれが血臭の原因だろう。
其処には、多少開けているとはいえ、路地裏にあるには少々不釣り合いなサイズの歪な球体が鎮座している。
「う……あぁ……痛ぇ、痛ぇよぉ……」
「た、助けて、たすけてくれ……も、う、足を、洗う、から……」
「ひぃ……あぁ……足、俺のあしぃ……」
球体から、様々な苦痛交じりの呻きが上がる。
結構な人数の人体を適当に一纏めにし、へし折った其々の手足を固結びするように絡み合わせて作ったひでぇオブジェは、吐いた血反吐や四肢を捩じり折られて噴き出た血

のせいでなんか全体的に赤かった。
巨大な呪いのアイテムみたいな不気味な球体を制作したらしき張本人――黒髪の魔族は、振り向いてその近くまで歩み寄ると無造作に球体を蹴りつける。
折れた四肢を強引に絡み合わせているせいか、軽く蹴っただけで全員に激痛が走るらしい。身も世もない呻きと叫びが路地裏に響き渡った。
魔族の男はオブジェの中心部となっているゴロツキの髪を掴むと、乱雑に引っ張ってその顔を覗き込む。
「おい、笑えよ。弱っちいガキや雑魚を売っ払うついでに遊ぶのは良い娯楽なんだろ？」
「うぎっ!?」
「その意見にゃ一部同意してやる。俺もテメェらみたいなカスに悲鳴を上げさせるのは気分が良い――珍しく娯楽を提供する側に廻れるんだ、もう少し嬉しそうにしろや」
「や、やめ……許し……！」
絡まった無数の四肢、その内の飛び出ている一つを掴むと、魔族の男はその先端――指先を実に気軽に握り潰した。
ペキポキと重なった小枝を踏み折ったときの様な音が響き、髪を掴まれていたゴロツキが白目を剥いて泡を吹きだす。
「あぁ、なんだぁ……楽しくねぇってのかよ？　ガキを囲んでボコってたときはあんな

に楽しそうだっただろうが」

そう言って男が横目で見た先には、ゴロツキの服を剥いで作ったらしき敷物の上に寝かされた、顔の腫れあがった子供の姿がある。

男の放つ尋常では無い威圧に押され、最大限に警戒して足を止めていたシャマだったが、無数に転がる街のゴロツキの群れの中に混じる気を失った子供の姿に気付くと、躊躇なく飛び出して駆け寄った。

突然の闖入者である《刃衆(エッジス)》の二人には気付いているのだろうが、それには頓着せず、痩身の魔族はこれが見本だと言わんばかりに嗤う。

「――笑えよ。それとも、笑わせて欲しいのか？」

耳まで裂けたと錯覚する様な笑顔を見せる男の、怒気混じりの凄まじい殺気に中てられ、地べたに転がった者や球体を構成している者の口から、必死さの混じる――引き攣った悲鳴にしか聞こえない笑いが漏れる。

無理矢理に笑いながら泣き出し、嘔吐するゴロツキまで出始める始末だ。元より清潔感とは無縁の場所ではあるが、血臭と共にすっぱい臭いとアンモニア臭まで漂い出し、一応は街中だというのに戦場みたいな地獄絵図っぷりである。

先の台詞からするに、子供……孤児に暴行が加えられていた処を助けに入った様だが、それにしたって過剰ともいえる対応だ。

本来なら詰め所に御同行願い待ったなしなのであるが……ローガスは眼前の魔族に非常に見覚えがあった。

一応は有名人な上、他国の要人でもあるのでシャマも知っている筈なのだが……トニーに関する事であっぷあっぷしている上、今は怪我をした子供を診ている彼女は普通に気付いていない様だ。

自然、相手をするのはローガスという事になる。

転がるゴロツキ連中と同じように引き攣りそうになる口元を堪えながら、彼は意を決して進み出た。

「……お久しぶりです《狂槍》の大将。なんというか、お変わりないようで」

「あン？　……お前、ローガスか？　なんでこんな処にいやがる」

「いや、それは俺の台詞なんですけどね」

男はネイトの――隊の顧問の師と言える人であり、自身も冒険者時代に世話になった人物でもあり、同時に魔族領の最高幹部でもあった。

咥え煙草で対面出来る様な相手でも無い為、さきほどシャマが己の煙草を取り上げた偶然に感謝しつつ。

（やれやれ……こう言った胃の痛くなりそうなパターンの出会いや再会は、トニーの奴の受け持ちだったんだがね）

現在必死こいて命の恩人達に説明と釈明を行っている同僚が聞けば、全力で異議を申し立てて来そうな愚痴を内心でこぼして、ローガスは奇妙な再会を果たした知人へ向けて、口火を切ったのであった。

犬と子獅子とイケメンと

「あ」
「ん？」
おぉ？
その場で俺達が遭遇したのは全くの偶然だった。

《大豊穣祭》も開催から数日目、観光や新たな商売の種を求めての人入りはピークを迎えていると言って良い。
一方で大盛り上がりの闘技大会の方は今日は一旦休み。まー、お祭りの中でも最大の催しなので、祭り終盤まで引っ張りたいってのと、あんまり連日やっても客の流れが闘技大会に取られちまって他の催し物がワリを食う、っていうのもあるんだと思う。
明日からまた二回戦の続きが行われるらしいので、そうなったら警備の仕事を手伝いつつ、観戦させてもらうとしよう。

なんだかんだいって見応えがあるのは確かだしね。自分で参加とかはゴメンだけど。絶対ゴメンだけど。大事な事だから二度言いました。

今の処、全試合を観戦してる闘技大会が本日は無し、という事で、シアとリアは逗留中の屋敷で休んでる。

休んでるっつーより、普通に寝てる感じだ。起きて来るのは昼頃になるんじゃなかろうか。

祭りが開催されてから数日、昼は勿論の事、陽が落ちてからも上がる花火を眺めに高い場所へと繰り出したり、明々と照らされて並ぶ夜店を見て廻ったりと、睡眠時間を削って遊びまくったからなぁ。

そろそろがっつり休んで残りの祭りの日程も満喫する、という予定のもと、聖女様二人は爆睡中である。

昨日の夜店巡りの時点で、リアなんかめっちゃ楽しそうだけど同時にすげー眠そうだった。終盤は限界を超えたのか、頭が船を漕ぎだして手に持った屋台料理の皿に顔面からベシャっと行きそうになってたので、結局俺が背負って帰ったし。

リアもそうだが、シアもね。

聖殿の料理長が監修に関わったというだけあって、元居た世界で食ってたような品を出す店が数多く立ち並ぶ《大豊穣祭》期間中の屋台街。

祭りの空気に浮かれて様々な品を買い込む金の聖女様は、特に初日にお好み焼きを売ってる店を見つけてからほぼ毎日、豚玉と海鮮玉を交互に食しておられる。
ただまぁ……品自体は日本の出店でよく見ていたものだが、サイズやら量は海外のソレというか……全体的にかなりボリューミーだ。
転生前だったらペロリだったんだがなぁ、とかボヤきながら結局は余してしまうので残りは俺が食うパターンが殆どなんだよね。
基本、シアとリアが持て余したもんを食ってるので、夜店巡りではほぼ無出費の俺である。勿論、棄てるなんぞ論外。屋台飯だろうがなんだろうが、食い物は粗末にしてはいけません。
毎度毎度そのパターンなので、もーちょい考えて買いなさい、とは言ったんだが……二人ともめっちゃ楽しそうなのでまぁいいか、なんて思ったりしてしまう。
昨日の帰り道でも半分夢の世界に旅立ったリアを背負いながら、左手にリンゴ飴、右手にはしまきのお好み焼きを装備したシアにアーンされながらえっちらおっちら屋敷までの道を歩いて帰ったのだが……シアの奴、これがまぁ良い笑顔でなぁ。
上機嫌で俺にお好み焼きを食わせつつ、自分はリンゴ飴を齧っているその表情は本っ当にお祭りを心から楽しんでるのが分かる、歓びに満ち溢れた友人のお顔を見てると、俺の方も非常に満たされた心地になりました。魂嗜好フェチ的な意味で。

そんな聖女様達だったが、流石にはしゃぎ通しで疲れたのか、今日は屋敷でゆったりと過ごすらしい。俺の方は体力的に問題無い――正確には《三曜》を用いた体内外の魔力循環で体力の回復が早いので、普通に朝起きてそのまま散歩に繰り出した次第である。

で、だ。

朝もはよからフラフラと帝都を散策していると、女神像の広場で見知った顔二人にばったり遭遇した。

片方は赤金の坊主頭の少年……何気にこの場での偶然のエンカウント率が高いノエル君だ。

今日はお休みなんだろうか？　いつも着こんでいる白を基調とした全身鎧（フルプレートアーマー）ではなく、良い仕立ての上品な私服を着ている。剣は腰に下げたままなんだけどね。

意外なのはもう一人の方だ。

格好はノエル君に似てる。私服に帯剣、といったスタイルなんだが、もうちょい活動的……というより実用性高めの動きやすい工夫がされてる。

急所には防刃素材なんかも使ってるんだろう。普段着ではあるが、突発的な戦闘にも対応してる中々の一張羅と見た。

首からタオルを掛け、小脇に抱えてるのは……桶か？　なんでまた？
男では中々見ないレベルのサラッサラの黒髪と、女の子受けしそうな甘いマスク。
いつもは爽やかな笑顔を浮かべてそうなソレは、今回ばかりは俺とノエル君と同じくちょっと驚いた表情を浮かべている。
シンヤ＝アイミヤ。本人に聞いた処によると愛宮　真也。
大陸各地を股にかける一級冒険者であり、新たな特級に最も近いと言われる、現役の中では最も優秀な冒険者であると目される青年だ。
言う迄も無く転移者であり、《水剣》なんていう呼び名の通りに水の魔法に関する加護を得てる。戦場で何度か見た事もあるが、魔法と剣を組み合わせた鉄板の魔法剣士スタイルは『強い』の一言だ。
近くに水源がある場所だと更にえげつない事になるらしい。なので、彼のパーティーは沿岸に面した地方とか河に近い戦地をメインに戦っていたので、実は一緒に戦った回数自体はそんなに多くないんだよね。
完全に予想してない、噴水広場を通り過ぎる際にすれ違おうとして互いに気が付いた俺達は、暫しの間、無言で顔を見合わせた。
おそらく、ノエル君とシンヤ君の二人は特段知り合い、という訳では無いんだろう。二人とも咄嗟に声を上げたのは俺の顔を見てな訳だし。

一応、この三人の中では俺が年長だ――ゆーてもシンヤ君とは精々1コ上くらいだろうけど……取り敢えず、ここは俺から口火を切るべきだろう。
そう思って口を開いたんだけど、二人の方が一歩早かった。
「これは猟犬殿！　先日はお時間を割いて頂き、ありがとうございます！」
「久しぶりですね先輩。祭りの開催宣言や大会の警備で見かけてはいたので、その内挨拶に行こうと思ってたんですよ、この場で会えたのは丁度良かった」
かたやビシッとした敬礼で。
かたや柔和な笑顔と共に丁寧に一礼して。
全く同じタイミングで俺に挨拶してきた子獅子とイケメンは、そこで「ん？」とばかりに顔を見合わせて首を傾げた。
あー……うん。とりあえず、自己紹介といこうか。
やや遅きに失した感はあるが、軽く手を挙げて提案したのである。

三人で噴水像前まで移動し、そこの縁に腰掛けて互いの自己紹介を行う。
「レーヴェ将軍の御子息かぁ……丸刈りだからちょっとわかり辛いけど、確かに同じ髪

の色だ」
「かの《水剣》とお会い出来て光栄です――にしても、猟犬殿はやはり各地の実力者と多く知己を得ているのですね。強者は強者を知るという事ですか！」
「そうだね、先輩の顔の広さは僕としてもちょっと意味分からないよ。幾ら聖女の専属護衛で大陸中を廻ったって言っても、各国の最高戦力のほぼ全員と知り合いか友人ってどういう事なんだか」
猪気味な気質だけど真面目なノエル君と、物腰の柔らかいシンヤ君の初顔合わせは特に問題も無く穏やかに進んだ。
より正確に言えば、侯爵家御子息の方はこのイケメン君の方の冒険者としての高名と共に、あまりよくない噂も聞いてはいたらしいのだが……。
「少し前に精査されていない情報を鵜呑みにして醜態を晒したばかりですので……あくまで噂は噂として、実際にお会いする機会があるまでは先入観を捨てる様に心掛けています――実際、それが正解でした」
「……先輩、この子めちゃくちゃ良い子ですね！　騎士じゃなくて冒険者だったら僕のパーティーに誘ってたのに……！」
弄りから妬みまで感情の種類は様々だが、大抵の同性から『すけこましイケメン』だの『ハーレム野郎』だのと常々言われているシンヤ君は、含み無く敬意を以て接して来

るノエル君の言動に物凄く嬉しそうである。
　気持ちは分からんでもないが、君のハーレムパーティーに自分の推薦で同性を入れるとか、ノエル君じゃなくても絶対やめとけよ。ド修羅場になる未来しか見えん。
　最悪、巻き込まれて刺されるか、下手をすれば新たなハーレムの一員なんていう噂が広がりかねん。特に後者は社会的にも当人たちのメンタル的にもダメージが酷いなんてもんじゃねぇ。
「知り合ったばかりの子より先輩の方が辛辣!?　幾ら何でもそんな噂が広がる筈が無いでしょう！」
　本当に？　今まで不本意かつ予想外の噂が広まってるパターンっていくらでもあったやろ？
　自分が幾ら否定しても、これまでの噂が加味されると荒唐無稽でも『ありえる』と判断される事は多いんやで？
　突っ込んで聞いてやると、シンヤ君は黙り込んで腕組みし……十秒後には頭を抱えて項垂れた。どうやら脳内で結論が出た模様。
　前者の巻き込まれる云々については否定すらしなかったのは草。無意識でもそれこそ『ありえる』って自分でも思ってるやろ。

荒っぽく、厳つい連中の多い冒険者やら傭兵やらの中でも、線の細い自称フツメンのイケメンで物腰柔らかく、困った人を放っておけないお人好し、というラノベの主人公みたいなシンヤ君はそりゃもうモテる。

そうだな……パッと見のイメージとしては以前のクインをもうちょい庶民派にした感じか。貴公子系じゃなくてアイドル系、みたいな？

高名ではあるが立場的には市井の冒険者の一人、というのもとっつきやすさの一因なんだろう。

そんな諸々の要因も重なって、見た目と評判で群がって来る女性も相当な数にのぼるのだが……そうではない、彼にピンチを颯爽と助けられた、だの、進退窮まってにっちもさっちも行かなくなった処を救われた、だの、より『ハマる』関り方をした女の子なんてそらもう凄い。

何が凄いってこう……濃度というか粘性というか、好感度の煮凝りみたいなものがドロっと溢れてる。というかシンヤ君のパーティーメンバーは大体そんな感じだ。

そのせいか、恋の鞘当てという名の修羅場なんぞ日常茶飯事——俺と初めて会った頃なんて、仲間同士でいつガチの血生臭い話になるか分かったもんじゃない状態だった。

それが今みたいにある程度落ち着いたのは、まぁ……俺がちょっと口を挟んだのも関係あったりする。

仲間が好意を寄せてくれるのは嬉しい。
が、それが原因でギスギスした空気がパーティー内で続いていた事に大層疲弊していたシンヤ君はそれはもう喜んだ。
男同士の酒の席、という事で一緒に戦った冒険者やらと一緒に飲んだ酒場で、心底本気で御礼を述べながらのまさかのガチ泣きである。
御蔭で多くの男性冒険者から良い眼で見られてなかった当時の彼の現状も、同情交じりの温いものやイジりの対象みたいな扱いになったのは、当人にとっても幸い……怪我の功名と言って良いだろう。
そんなシンヤ君なのだが……その一件以降、割と仲良くなったというか、ちょっと懐かれた感があるのだ。
前程ギスギスしなくなった仲間達が俺が関わると更に大人しくなるせいか、一時期は教国を拠点にしたいとか言ってた事もあった。彼の加護とシナジーの高い土地ではないので泣く泣く諦めたみたいだが。
先輩と呼ばれ出したのもこの頃だ。なんでも隊長ちゃんが俺をそう読んでるのを聞いて真似し始めたらしい。
ちなみにその隊長ちゃんは、シンヤ君に対して態度が若干塩入ってる。
これは彼のハーレムメンバー候補として、一時期隊長ちゃんの名前が挙がったのが原

因だ。

そのまま噂が継続して広まる様ならシンヤ君を公衆の面前でぶちのめしてでも噂の火を鎮火させる気だったみたいだが、これに関してはシンヤ君が死に物狂いで火消しに走って未遂に終わった。

というか、俺の周りの年頃の女性陣は基本、シンヤ君と少し距離があるんだよね。

まぁ、ある程度親交があるってだけで新たなハーレム要員扱いされるから、彼にそういった感情が無い人からすると苦手に思うのはしゃーない。実際に話して見ると、女性関係に関してやや優柔不断だけど普通に真面目な好青年なんだけど。

俺がシンヤ君と彼を取り巻く女の子達の問題に対して口を挟む事になったのもその辺が理由だ。

流れとしてはそうややこしいモンでもない。

シアと俺、シンヤ君の一党と出会う。

←

同じ転移・転生者ということで少しばかり交流を持った処、今度は金の聖女様がすわ新たにハーレム入りか!?　とか噂が出て来る。

←

シアさん、ガチで嫌がる。実力・知名度共にぶっちぎりの聖女のハーレム入りを危惧

したシンヤ君パーティーも嫌がる。

←

一党の中でも特にシアを危険視した娘が、暴走してやらかそうとする。

←

はい、ちょっかいの内容的にも俺的にアウトです。残念無念のまた来世！

いや、殺ってはいないよ？　流石に。

ただ、主犯だった斥候職（シーフ）系の娘がシア相手に一服盛るつもりでお薬を調合してた場所に忍び込んでお話をしただけだ。彼女の口車に乗せられた娘に関しても同様である。

毒の類だったら完全にアウトだったのだが、ちょっと特殊なお通じの薬……下剤の類だったので、駆除して埋めるまでは止めといた。

生来の加護や耐性に弾かれて効きやしないとはいえ、聖女に薬盛るとか教国的にも普通に粛清案件なんだけど、という指摘にも「人目に付く場所で恥を掻いてもらうだけだ、死んで欲しいとまでは思ってない」とかお花畑な主張しとったが……いやいや、一方的に危険視した恋敵を社会的に致命傷なレベルで貶めようとするってやべーだろ。

ちょっと省みれば、如何に自分の言動がヤバいのかなんて分かりそうなモンだが……これがスイーツ脳ってやつなのか、と人知れず戦慄を覚えたものだ（偏見

まぁ、シアの側にもシンヤ君の側にもふつーに居て欲しくない系の地雷だったので、

丁寧に『説得』した。少し後に彼らの一党からメンバーが何人か抜けた様で、頑張ってお話した甲斐があったというものである。

百年単位で戦争やってるような世界でも、あぁいう重篤な恋愛脳な人種っておるんやな……と、人の業の深さを垣間見た気分でしたハイ。

残ったハーレム要員の間で話が広まったのか、俺が関わると大人しくなるのはそのせいだ。

俺のやり方も決して穏やかとは言い難いので、シンヤ君には話してはいないが……まぁ、聞かれたら素直に喋るつもりではある。

多分、彼もなんとなく察しているとは思うけどね。「勝ち取るならともかく、他人を貶めるやり方で欲しい物を手に入れようとする人は軽蔑する」とか、一党に対して珍しくばっさりはっきり言ったみたいだし。

残った娘達は俺が『視た』感じからしても良い子っぽいので一安心だ。全員、俺に対して怯えてるけど（白目

さて、そんなレディコミみたいなドロドロした奪い合いから、少年漫画のハーレムものみたいな関係へと無事進化したシンヤ君達ではあるが……戦争も終わって、仲間の女の子達からの攻勢が強まって苦労しているらしい。

今朝も早朝の鍛錬を終えて、汗を流そうと宿の浴場を使おうとしたところ、背中を流してあげると乱入してきたパーティーメンバーとラブにコメった展開になりかけて慌てて逃げ出してきたのだとか。

うむ、健全な……健全……？　……とにかく、ハーレム生活を満喫してるようで何よりだ。もげろ！

「何故だろう、他の誰に言われても腹が立つなんて事は無かったのに、先輩に女性関連で弄られるとすごく反発したくなる……!!」

頭を抱えたまま、普段の爽やかスマイルを何処かに置き忘れたみたいに苦虫を噛み潰した表情で唸るイケメン君。はっはっは、哀しい事を言うなよ後輩。反抗期か？

話を聞いていたノエル君が、シンヤ君の脇に置かれた桶を見て何やら察したのか、ポンと掌を打った。

「成程、行水や入浴は鍛錬でたっぷり汗をかいたあとには必要ですからね。察するに、アイミヤ殿は公衆浴場に向かう最中でしたか」

「え、あぁ……正解。流石に汗だくのままはアレだから浄化魔法で洗浄はしたけどね……野外や依頼の最中ならともかく、都市内ならやっぱりちゃんと身体を洗いたいというか……」

「ええ、お気持ちは理解できます。訓練で汗と泥に塗れたあとに頭から浴びる井戸の水

は、爽快さと共に染み入るものがありますから」
「おぉ、騎士ノエルは分かってるね。清潔さ保つ意味もあるだけど、風呂ってやっぱり大事だよ、僕達の故郷では”風呂は命の洗濯”、なんて言葉があるくらいだし」
和気藹々とやり取りする二人ではあるが、俺的には非常に気になる単語が出て来たぞ――公衆浴場ってマジか。そんなのあるん？
俺の疑問に対し、帝都在住であるノエル君が補足を兼ねて説明してくれた。
「はい。北区の鍛冶工房などから出る、質の悪い、工房では使わない石炭や帝都全域の可燃ゴミの焼却に使われる炉が西区に設置されているのですが、その排熱を利用して浴場が開かれています。僕は利用した事はないのですが、中々に盛況だという話です」
貴族は勿論の事、裕福な家とかだと魔法を用いた給湯は割と普及してるので、規模に差はあれど風呂はそこそこ帝都内で普及している。
とはいえ、やはり多くの一般家庭や宿暮らしの冒険者なんかは浴場なんてものには縁遠い。なので、そういった層をメインにそれなり以上に客の入りがあるとかなんとか。
マジかー。正直一回くらいは行ってみたいぞ……帝都案内書に書かれてないとは思えないし、なんでシア達は言ってくれなかったんや。
……よし、シンヤ君がこれから向かうって話だし、俺も一緒に行くべ！　ノエル君もどうだ？　三人で朝風呂と洒落込もうぜ（提案

「いいですね！　先輩の言う通り、偶には男同士でのんびり湯に浸かるのも心安らぎそうだ――うん、本気で……！」

「あ、いや……お誘いは大変に光栄なのですが、自分は叔父の邸宅で勉強をしようかと……ただでさえ多方に迷惑を掛けておきながら、休暇を頂いている身ですので」

ノリノリ……と言うにはやや切実さのある賛同を示すイケメンだが、一方の少年騎士は恐縮してる、といった感じで首を竦めて申し訳なさそうに頭を振る。

うぅむ、どうやら初邂逅での問題行動以降、ノエル君は冷静さや思慮深さと言ったものを培おうと頑張っているようだ。

それ自体は良い事だと思うし、応援したいのだが……頑張り過ぎて疲労を溜め込んでも効率は落ちるぞ？　実際、騎士団の上司だって必要だと思うから休みを取らせたんだろうし。

何時間も長居するって訳でもないし、ちょっとくらい俺達に付き合わんか？　湯に浸かるのは疲労回復にも良いんだぞ。まぁ、本当なら寝る前とかが一番なんだろうけど。

「会ったばかりの僕が言うのもなんだけど……根を詰め過ぎるのは良くないと思うよ、騎士ノエル。見た処、君は真面目で頑張り屋だ。勉強や鍛錬の仕方は多くの先達が教えてくれるだろうから、この際、肩の力の抜き方を学ぶべきだと思う」

シンヤ君の言う通りやな。

肩の力を抜く、って言い方に気が乗らないなら、効率的な心身の休め方を学ぶ、って言い替えても良い。

「……そう、でしょうか？　御二人がそう仰るなら……そうですね、市井の浴場というものを体験するのも興味がありますし、同行させて頂けますか？」

やや消極的な態度ではあるが、一応は参加肯定の意を示してくれたこの場での最年少に対し、俺達はグッと親指を立てて同時に「ウェルカム！」と口にする。

よっしゃ、それじゃ早速行ってみるとするか――あ、ねぇねぇシンヤ君、着替え入れとく籠とか桶って用意した方がいいん？

「有料ですけど、浴場で借りる事も出来ますよ。朝の時間は郊外の農場から配達されてきた牛乳（ミルク）もあるんですよねー。搾りたてな御蔭か、これがまた美味しくて」

最高かよ。フルーツ牛乳は？

「帝都は転移者の知識を取り入れてる処が多いから、その辺もばっちりでした。魔法でキンッキンに冷やしておくので最初に買っておきましょう」

うひょー、流石は《水剣》！　氷系統に属する魔法もお手の物ってか！　風呂上がりの楽しみが出来ちゃったぜ！

魔導士なんかには、自身の得意とする魔法に対してプライドがある人も結構多いんだが、その辺の意識は転移者には殆どない。

冒険中も保存食とか飲み水なんかを低温保存しとくのはシンヤ君の担当らしいし、寧ろちょっと自慢気だった。

「組合に登録したての駆け出しの頃なんて、屋台でアイスキャンデー作って売ったりしてましたからね。慣れたものですよ――あ、お代は闘技大会について何かアドバイスをくれる、というのはどうでしょう?」

ありゃ、ちゃっかりしてんなぁ……でも要望聞いちゃう、良く冷えたフルーツ牛乳の為だからね、仕方ないね!

そんなに良い物なのかと首を傾げるノエル君に、元・日本人の二人掛かりで風呂上がりの冷えた牛乳の美味さを力説しつつ、野郎三人で西区の端っこへと足を向けるのであった。

「……公衆浴場?　い、行ったのか、誰と!?」

連日、祭りで遊び倒して疲労が溜まっていたので、午前中はひたすら爆睡して起きて来た昼過ぎ。

寝過ぎたのか、やや重い瞼を擦りながら実質昼食と言える遅い朝飯を食べようと、何時も食事を摂っている客間に向かったオレとアリアは、そこでなにやらホクホクした顔で白乳色のシャーベットの様な物を食っている相棒を見つける事となった。

食べてるソレは、外で売ってたフルーツ牛乳を凍らせたものらしい。オレ達の分の土産としてあるらしいので、そこは素直に嬉しいし、礼も言っておいた。

――だが、土産自体は良くても相棒が朝に向かったという場所が問題だ。

お前、なんで外に出てわざわざ風呂入りに西区に行ってんだよ！　この屋敷にだってそこそこ広い浴室があるだろうが……！

まさかミヤコ辺りと行ったんじゃあるまいなと、一瞬で眠気も吹き飛んで焦燥のままに問いかけたのだが……幸いにして帰って来た答えは偶々出会った知り合い――アイミヤとノエルの男三人で一緒に向かったというものだった。

脳裏を駆け巡った最悪のパターンよりは遥かにマシな答えだ。オレもアリアも、内心で胸を撫で下ろした。

本当はしっかり朝風呂を堪能したかったんだけどなー、と残念そうにシャーベットを口に運ぶ奴の話によると、本日の朝の公衆浴場は中々の客入りだったらしく、鍛錬を終

えて汗をかいたアイミヤはしっかり湯に浸かったらしいが、相棒とノエルは比較的空いていた足湯に浸かるだけで終ってしまったらしい。

まぁ、あれはあれで良かった、と笑う相棒を見て、色々と安心することしきりである。

元・日本人としての性か、一般的なこの世界の人間と比べると風呂好きに分類される相棒が、帝都の公衆浴場の話を聞けば食い付くのは予想が出来ていた。

……だから黙ってたんだけどな！

オレ達は肩書きや立場上、大勢の前で肌を晒すなんて真似は出来ないし、そうなると当然、相棒一人か、或いは別の誰かが同伴する事になる。

流石に混浴って訳でも無く、男女別に分けられてはいるらしい。

それでもミヤコやアンナ、最近になって現れた強力な伏兵である《陽影》あたりとアイツが一緒に風呂入りに行くなんてのは非常に面白くない話だ。

なので黙っていたのだが……足湯があるならオレ達も一緒に行けるかもな、考えておこう。

とはいえ、オレ個人としてはあまり気の進まない話なので、可能性は低いのだが。

足湯だったら自分も行けるかも、という結論は同じだったのか、相棒の話を聞いて自分も行ってみたいと笑うアリアを横目に、執事さんが用意してくれた紅茶を口に含んで表情を隠す。

……いや、我ながらちょっと拘りが過ぎるというか、変な独占欲だとは思うけんだけどさ。

足湯くらいなら、まぁ全然良い。

けど、アイツが公衆浴場で湯に浸かるということは、不特定多数にアイツの身体が見られる、という訳で。

今回の朝風呂が不発に終わった為、おそらく、という前提はつくけど……オレやアリアも未だ知らない、見た事も無いアイツの身体の部分を、ただの浴場での同性相手とはいえ、誰かに先を越されて見られてしまうというのは、なんというか、モニョモニョするというか……。

流石に拗らせた考えであるという自覚はあるので、公衆浴場に行くなとも言い辛い。

それでも、何か嫌なんだよ……こればっかりは純粋に感情の問題なので、如何ともし難いのだ。

一緒に向かったのがシンヤ――アイミヤの奴というのもあまり面白くない。

あの頃は自覚なんて無かったけど……単純にあのモテ男の侍らせてる女の子達の一人扱いされるのが不本意だった、というだけでなく、コイツがそれを聞いても特段反応を示さなかったのが、無自覚ながらに不満だったんだと思う。

……こんな風に面倒くさくなったのは、お前が原因でもあるんだぞー、分かってんの

かよー。
奴に落ち度がある話は無いので文句を言う訳にも行かず、さりとて燻る不満を完全に押し殺すのも難しく。
なんとなく、隣に座ってシャーベットを食う相棒の頬を指先でつつく。
む、欲しいのか？　冷たいデザートだからちゃんと飯食ってからにしないとお腹冷やすぞ。なんて、とぼけた顔でいう奴を見て。
「ばっか、ちげーよ。お前は母親か何かか」
今回に限った話ではなく、まるで湯舟に浸かったみたいに、胸にじんわりと広がる暖かい気持ちを覚えて、オレは相棒に笑いかけたのだった。

動き出す者達　3・拳士と剣士

「散歩……ですか？」
「あぁ」
魔族領幹部の身でありながら、何故街の路地裏にいるのか。
ローガスの当然の疑問に《狂槍》が応えたのは内容は実に端的だった。
「ウチのアホ頭領の面倒を見ながらの国外逗留だ、いい加減ストレスも溜まるんでな。朝と夕に適当に帝都を歩き回ってンだよ」
散歩はストレス発散に良いんだ。と実に凶悪な笑みを浮かべるチンピラに、古馴染みが変わらない事に苦笑いを浮かべつつもローガスは後頭部をガリガリと掻く。
「あー……色々と気疲れしているのはお察ししますけどね。一応、此処は帝国首都なワケでして。相手がロクな連中じゃないにしても、地元と同じノリで大勢の人間を半殺しにされると流石に困ると言いますか……」
「許可なら貰ってる。お前の部隊にいる下っ端じみた語尾の狐みてぇな面した奴だ」

トニーの奴、何やってんだオイ。
よりにもよって《災禍の席》で一番血の気が多いとされる男に物騒なフリーハンドを与えた同僚に、内心で愚痴る。
「ねぇ、今言ったのってトニーの馬鹿の事？」
背後で聞こえた声に振り向けば、シャマが気絶した子供を背負って傍にやってきた処であった。
最初に見せていた警戒は何処へやら、探している仲間の情報が手に入りそうと判断するや、物怖じせずに詰め寄る騎士の少女に《狂槍》が腕を組んで首を縦に振る。
「あぁ、確かそんな名前だったな――で、そのガキは問題ねぇのか？　一応、手持ちの霊薬（くすり）を使っておいたから重症じゃねぇとは思うが」
「打撲が残ってるけど、深刻な怪我は無いと思う。一応、この国の騎士として礼を言っておくし」
「……まぁ、そうだな。やり過ぎではあるが、本来なら俺達の仕事な訳だし」
簡易ではあるが敬礼と共に礼を述べる《刃衆（エッジス）》の二名に対し、魔族領の最高戦力の一角たる男はどうでも良さげにヒラヒラと手を振って応じる。
「ガキを助けたのは只の成り行きだ……そろそろ散歩がてらの塵掃除も片付いて来たしな、あとはそっちで勝手にやっとけ」

会話を打ち切ってさっさと踵を返そうとする《狂槍》の前に、シャマが回り込む様に立ち塞がった。
「待ってってば。おにーさんがトニーから『散歩の許可』について話されたのっていつ頃の事なのか聞かせて」
「あぁ？」
怪訝そうに眉根を寄せ、頭一つ分以上低い場所にある褐色肌の少女の真剣な顔を見返し、更にその背後のローガスが頷いたのを見て察した様に舌打ちを洩らした。
「チッ、あの狐野郎、下手打ちやがったのか？　都市内でゴロ巻いてるクズなんぞに遅れを取る奴には見えなかったが……」
彼の態度と台詞から察するに、トニーが就いていた、帝都の戦災孤児を中心とした未成年の保護実態の調査についても知っている様だ。
「何か知ってるなら教えて。アイツは何処で何してるの？　怪我は？」
「落ち着けシャマ――だが、そうですね。出来る事ならそちらの情報を聞いて擦り合わせをしたい処なんですわ。お願いできませんかね？」
勢い込んで前のめりになるシャマを制止こそしたが、ローガスも彼女の言葉自体には同意であった。
「……仕方ねぇな、先ずはそのガキを教会の治療院に放り込みに行くぞ。その道すがら

話してやる」

「ありがとうございます。あー……処で、ここいらに転がって連中と、その、後ろの前衛芸術みたいになってる人体の塊みたいなのは……」

「昨日までは俺が自分で屯所に引き摺っていったが、そっちでどうにか出来るなら好きにしろ」

人体を絡ませて作った形の悪い球体はどう見てもサイズ的に道幅よりデカいのだが、《狂槍》は「引っ掛かるなら力づくで引っ張りゃいい」と何でもない事の様に宣う。球体の素材であるゴロツキの百倍は物騒なチンピラである。

曰く、１０メートルほど狭い路地を引き摺ってやると、摺り下ろされた部分に近い連中が小鳥みたいに色々と囀る様になるらしい。

屯所に着く頃にはすっかり素直になっているらしいので、取り調べを行う側としてはさぞスムーズに聴取が進む事だろう。

俺なりの親切心だ、と頬についた血痕を拭いもせずに嘯くその様は、どうみてもこの男の方が凶悪極まりない加害者にしか見えない。

首を竦めて「えっぐ……」とボソリと呟くシャマには全く以て同意であったが、ぱっと見の外見や言動から誤解を受けやすい、という点に関してはお前も同類だよ、とローガスは内心で突っ込んだ。

本人に面と向かって指摘しようものなら、不機嫌を通り越して本気の殺気が飛んで来るので絶対に言えないが、この戦闘狂じみた男が殊更に嗜虐性を発揮するのは弱者を嬲る相手や外道を働く輩に対してが殆どである。

発露させる方法が物騒に過ぎるとはいえ、その根底にあるのは義憤に近い感情と言って良いだろう。繰り返す様だが本人には言わないし、言えないが。

冒険者時代、会う度に態々指摘しては「はいはい、師匠は拗らせたツンギレですからね」とか煽って周辺被害が甚大な師弟喧嘩を毎回繰り広げていた部隊の顧問――ネイトの顔を思い浮かべ。

次に二人が顔を合わせるときには絶対同席しねぇ、と固く誓い直し、溜息が漏れない様に口に蓋をすべく、懐を漁る。

取り出した紙巻煙草を片手に、ローガスは思案した。

魔族領の幹部である《狂槍》が同郷の面子と帝国入りした時期、それとトニーとの連絡が取れなくなったタイミングを考えても、おそらく両者が会って会話をしたのはトニーが行方不明になる少し前だろう。

どういう話にせよ、それが同僚を無事見つけだす切欠となれば良いのだが。

(引率役なんぞ俺のガラじゃないんだよねぇ……シャマのお守りといい、他に飛び出しそうな面子の抑えといい、普段担当してる奴が行方不明ってのは勘弁して欲しいぜホン

ト）

《刃衆（エッジス）》内でも年長ではあるが、あくまでさり気なく若い連中のフォローに廻る事を好む男は、事の進展を願いつつ、煙草を咥えて。

「だから吸うなって言ってんでしょ」

「ちょ、おまっ、それ最後の一本……あっ」

一回りは年下の同僚に残った最後の煙草を取り上げられ、目の前で握りつぶされて情けない声を上げた。

「――なんだかもの申したい評価を受けてる気がするッス」

「……何言ってんの？　やっぱり怪我の後遺症あった？」

唐突に虚空を見て呟いたトニーの言葉に、斥候（スカウト）に類する軽装に身を包んだ冒険者の女性が訝し気に問いかける。

一応は重傷者であるトニーが使用している寝台の前には、以前に北方での別件で関わった四人の冒険者達が全員揃っていた。

帰国後に提出した報告書にも、彼らの事は記載してある。任務で関わることになった簡単な経緯と冒険者組合に記録のある情報程度ではあるが、トニー自身が調べて書き上げたものなので記憶に新しい。

確か、剣士のアザルを頭目に、斥候兼弓使いのイルルァ、魔導士のウェンディ、聖職者のエクソン、だったか。

バランスの取れたパーティーであり、中々に実力と人品の揃った冒険者達だったので、立場上敵対する形となって非常にやり辛い思いをしたものだ。

万事解決済みとはいえ、仮にも国から命じられた潜入任務だ。一介の冒険者達に対してのネタ晴らしはあまり関心できる行為では無い。

――が、相手は命の恩人である。おまけに助けられた状況を聞いてみれば、殆ど身バレしてる様なものだった。

流石に北方での一件については事細かに語る気は無いが、自身の本当の所属くらいは明言してしまってもよいだろう。此処に至って惚けるのは今更に過ぎる。

そんな判断と共に、トニーは所属部隊と都市内で追っていた任で下手を打った事をざっくりと彼らに語っていた。

裂けてボロボロになっているとはいえ、《刃衆(エッジス)》の隊服を着ていた事から察してはいたのだろう。本来の所属自体はあっさりと信じて貰えた。

こんな形で再会したのは驚きだったが、それよりも驚いたのは現在トニーが追っている一件――孤児を中心に行われている人身売買を行っている組織について、彼らも調べている最中だと言う事だ。

「というか、カイル少年を助けに入った冒険者ってのは皆サンの事だったんスねぇ……えらい偶然もあったもんで」

「全くだ。誘拐の一件で聴取に来た騎士が《刃衆(エッジス)》だったってのも驚きだが、それがアンタとはな」

何処かしみじみとした口調のトニーの言葉にアザルが腕を組んで頷き、互いに奇妙な偶然の妙を噛みしめる。

「それよりも、トニー、だっけ？　オルカン――子供達の行方について調べてるんでしょ？　そっちの方では何か有益な情報は無いの？」

少しばかり焦れた様子で単刀直入に切り込んで来たのはイルルァだ。

互いの状況については既に軽く説明済み。そこから聞いた話によれば、どうやら人身売買を行っている連中に攫われた子の中には彼女の身内がいるらしい。

……本来ならば幾ら命の恩人といえど、軽々しく任務の内容や情報について話す事は

出来ない。
だが、話さなければ話さないで、彼らは独自に調査を進めるだろう。
トニーの脳裏を過ったのは、自分がこうやって半死半生となった原因の転移者の男である。
万が一、目の前の冒険者達がこの件を調べ進める間にアレとかち合う羽目になれば……全滅は免れない。おそらく退く事すら出来ないだろう。
「……危険ッスよ？　自分のこのザマを見りゃ想像は付くと思うッスけど」
「でしょうね。傷口に残るえげつない攻性魔力を見れば分かるわよ」
「貴方を治療する際、その傷の下手人が相手が並みならぬ相手であるとは既に全員に。此処でこうして話し合っている時点で、結論は出ていると思って頂きたい」
警告に対して動じること無く応えたのは後衛の二人――トニーの治療にあたったウェンディとエクソンだった。
この一件、現在、闘技大会に出場している《水剣》が率いるような超一流に近いパーティーならばともかく、一介の冒険者には手に余る連中が相手だというのはアザル達も察している。
それを踏まえて尚、引き下がる事はない。トニーにもそれが伺える程度には彼らは善良で、未知や大きな何かに挑む事を生業とする”冒険者”であった。

（ま、そうでなけりゃローレッタ嬢の一件で彼女に力を貸したりしない、か）

言わずもがな、というやつだ。

トニーは動く左手で顎先を撫で、どうしたものかと思案する。

自分のこの状態では何時もの様に単独で動き回る、というのも厳しいだろう。

正確にはやってやれなくはないが、それには準備が必要だ。

本来なら別の任務に割り当てられる時間が迫っているのだが、下手を打った現状、その辺りの引継ぎ事情がどうなっているのかも分からない。

ざっくり言ってしまえば互いの立場は公僕と一般人。トニーの立場上、無条件で全面協力、とは行かないが、例の転移者という危険要素がある以上、彼らの安全の為にもある程度は情報を渡した方が良さそうだ。

頭の中で纏め終えると、一つ頷いて顔を上げた。

「……よし。んじゃ、都市内の地図はあるッスか？　あとは紙とペンをお願いするッス」

はしゃぎ疲れた身体をしっかりと休めたあくる日。
闘技大会も再開されると言う事で、オレ達は闘技場（コロッセオ）へと入場していた。
ちなみに今回は来賓席には座らず、アリアと二人で変装して一般席での観戦である。
一般席で試合を観ようというのは相棒の発案だ。
一昨日の試合はブランとヒッチンさんのシスター二人と、彼女達に引率された子供達と共に観戦していたウチの猟犬であるが、今回はオレ達も一緒にそっちに混ざるって観る事にしたのだ。
まぁ、なんだ。コイツが顔が広い奴なのは今更な事ではあるが、いい加減オレ達も一緒に観戦したくなったというかなんというか。
ミヤコやアンナといった帝国組は勿論の事、《陽影》も今回はいないからな。独り占め出来ればそれが理想ではあるが、強力なライバルが増えた今、妹（おとうと）と二人で相棒の隣を確保出来る状況は中々に悪くない。ヒッチンさんの試合への補足説明というのも聞いてはみたかったし。
そんな訳で、子供達も含めれば結構な大所帯となって観客席の一角に固まったオレ達であったのだが。
「その節はお世話になりました、レティシア様。知らぬ事とはいえ、聖女たる御方に子供

達の世話や皿洗いなどさせてしまった当時の不敬、お詫びいたします」
「いやいやいや、あのときは変装してた訳だし、気にしないでもらえると。こっちこそ正体を隠して接してた訳だし、申し訳ない」
なんとも間抜けな事に、シスター・ブランと初めて会ったときにも変装していた事を失念していた。思い出したのは彼女の言葉を聞いてからである。
あのときと同じ様な恰好と髪色に変えてるとはいえ、相棒やヒッチンさんが聖女二人が同席するという話は既に通してしまっているし、そりゃ気付くよな。間近で見れば猶更だ。
頭を下げる栗色の髪のシスターに、慌てて相手と同じように謝罪する事となった。
元からそう深刻な話でもない。オレとシスター・ブランとの改まった挨拶はそれで済んだ。
話を聞く限り、孤児院には教皇(じいさん)まで出入りしてるらしいし、オレやアリアも縁が出来たということで帰ったらお邪魔してみるのも良いかもしれない。
で、あの日のもう一人の当事者である相棒だが……相も変わらず子供達に群がられている。
ぶら下られたり乗られたり、引っ張られたり。以前に本人が言ったようにその様は公園の遊具宛らだ。シスター・ブラン達も注意はしているのだが、相棒本人があんまり気

にしてないのもあってへばりつく子供達は中々減らない。
アリアはそんな相棒を見て楽しそうにしている……よじ登って肩車体勢になった子にだけは少し羨ましそうにしてたのはご愛敬というやつだ。
体格的にかなり小柄な妹だが、以前でも流石に肩に乗せるのはギリギリだった。今やったら絵面的に色々と無理があるだろ、諦めろ。
時刻は昼にはまだ届かず、やや曇りがちではあるが気温は低くはないので過ごしやすい。
本日の初戦――二回戦第二試合は既に終え、現在は次の試合までの僅かな隙間時間となっているのだが。
「貴女らしいと言えばその通りですが、公の比武の場で指導じみた真似をするのは少々軽率でしたね、チェルシー。相手によっては侮辱であると取られかねませんよ」
「は、はいぃぃ……も、申し訳ないですぅ……」
その初戦を行った選手の片割れである、チェルシーさん……シスター・ミンスタが、ヒッチンさんの隣で身を縮こまらせて座っている。
スタイルの良い気弱そうな美人、といった如何にも男に絡まれそうな彼女であるが、中身はしっかりこの世界の武闘派聖職者仕様だ。しかも相当に上澄みの。
案の定というか、我らが教会御意見番と顔見知りだったらしい。相棒曰く、体術の基

礎動作がミラ婆ちゃんと似てる。との事なので指導を受けた事があるのだろう。
聖殿でオレやアリアと話すときも緊張気味だったが、今は更にガチガチだ。元から引っ込み思案な気質なのもそうだが、聖女二人と御意見番と同席という状況がそれを助長してるらしい。
「チェルシーちゃんまたきんちょーしてるー」
「おながいたい？　あっためてあげる？」
「あ、いえ。大丈夫ですよ、ありがとうございます」
子供達とも顔見知りなのか、笑顔で声を掛けられて小さな掌で腹部を擦られ、気が解れた様子で少しだけ笑うシスター・ミンスタ。
つい先程まで試合を行っていた彼女であるが、どうもヒッチンさんが御説教というか小言というか、一言あって呼んだらしい。
無視なんて出来る訳ないしな。教皇の爺さんを筆頭にオレ達や枢機卿だって呼び出されたら素直に出頭する。
”忙しいからまた今度!”とか言って堂々とブッチしていたのは隣にいる馬鹿くらいのものだ。やらかしたのは流石に本当に予定びっしりで行動していたときだけみたいだが。
さて、亀の如く首を竦めて小さくなっているシスター・ミンスタであるが、相手をし

たのは一回戦でも聖職者のカーク神父と戦ったファルシオン選手。
観戦している他の選手や腕の立つ奴ら、目の肥えた観客なんかは普通にシスター・ミンスタが勝つと思ってたんだけど……結果は凡その予想を覆し、ファルシオン選手が勝利した。
「……その、ズィオロ枢機卿は許可して下さいましたが、私もお祭りの為の人員として送られた一人な訳ですし。勝ち残ればその分、お仕事を他の方にお任せする事になってしまいますし」
話を聞いてみると、どうも友人に悪ノリみたいな感じで闘技大会に出場登録されてしまったらしく、勝ち負け自体にはそれほど拘っていない――どころか試合自体に積極的とは言えないシスターだったが……それでも実力的にははっきりと格上である彼女が負けたのは、先にヒッチンさんが注意していた様にファルシオン相手に指導じみた真似をしたのが原因だ。
「じ、実際相対すると分かるのですが、まるで砂山が水を吸う様にこちらの動きを学ぶんです、彼女。本人も勝敗より技術の吸収が目的の様に見えたので、つい……」
大戦時は参戦希望者の教導なんかもしていたらしいので、当時の感覚でやってしまったとの事。
実際、ファルシオンの動きは第一回戦で感じたぎこちなさがかなり取れ、洗練されて

いた。部分的にではあるけど、カーク神父の体捌きが取り入れられていた様に思う。
そこから更に自分の動きを学ばせつつ、彼女の戦闘スタイルである曲剣と体術の組み合わせに適したブラッシュアップを行った結果――。
「場外へと落とされて敗退という訳ですか。教導であれば短時間で其処まで導いた事をも含めて満点に近いですが、他国の催しの場で行うのは感心出来ません」
「うぅ……おっしゃる通りですぅ……」
手厳しいヒッチンさんの指摘に、自覚はあるのか項垂れて頭を抱えるシスター・ミンスタ。
血生臭さ無しのクリーンな真剣勝負を見に来た観客達からすれば、目的とは違う物を見せられたようなモンだろうしなぁ。
素人目には激しい攻防に見えただろうから、大部分の観客には好評だったのは幸いか。
実況のグラッブス司祭も其処らへんは空気を読んだのか指摘しなかったし。別件の仕事が入ったとかで、今日は実況席にいないシャマあたりなら容赦なく突っ込んでただろうけど。
自省激しい性格もあってか、死にそうな顔色になってヘコんでる気弱美人にシスター・ブランが取り成すように声を掛けている。

「チェルシーさんは初陣前の子達への教導に非常に熱心でしたからね。年若い子達が生き残れる様に力を尽くしていたのは、天上におわす女神も御存知の筈です。勿論、私やミラ様も」

場を少しばかり間違えたのは確かだが、根幹となっている思いに間違いは無い。

そう告げる彼女の言葉には、この場にいる全員が同意する処だ。ヒッチンさんが呼び出したのも、咎める為というより、場を違えた行為をしてシスター・ミンスタが野次の声でも喰らう可能性があった事を危惧しての事だろうし。

この場にいる三人のシスター達を見比べ、アリアが首を傾げて疑問の声をあげた。

「えーと、ボクはブランさんとは会ったばかりなんだけど……彼女が孤児院の運営をしてて、シスターとチェルシーさんはそこを手伝ったりしてる、って事で良いんだっけ？」

「そうなりますね。休日を頂いた折には、院を訪れて傷んだ壁や床、あとは絵本の修繕などを行っています」

「は、はい。ブラン先輩とミラ様にはお世話になってるので……手が空いたときにはお手伝いをしに伺っています」

趣味の無い年寄りのちょっとした憩いの時間というものです、と伊達眼鏡を指先で押し上げてヒッチンさんが頷いて、シスター・ミンスタも同意する。

子供達に集られたままアリアと同じくシスター三人を順繰りに見ていた相棒が、頬を

引っ張られて変顔を晒しながらほえーと、気の抜けた声を上げた。

――二人はミラ婆ちゃんのお弟子さんだったりするんで？　なんか体術とかちょっとした雰囲気とかで似通った処あるし。

それはオレも思ったな。

勝ち上がった一回戦も、そして敗退した二回戦も得物である旋棍（トンファー）を一切使わずに終わったシスター・ミンスタだったが、相棒の言う通り、その体捌きの基礎的な部分はヒッチンさんの動きと似てる気がする。

ヒッチンさんも教会で最古参に近い人だし、昔はバリバリ最前線で戦ってたらしいから教会内で指導を受けた人は結構多そうだ。枢機卿の御三方もちょっとした教え子みたいな関係らしいし。

相棒が気軽に聞いた質問だったが、シスター二人の内、片方は慌てた様子でブンブンと首と手を横に振り、もう片方は微笑んで柔らかにそれを否定する。

「お、おおお弟子なんてとんでもない！　少しだけ修練の際に動きを見て頂いたりしただけですぅ！　私が勝手に憧れて参考にしてるだけというか……！」

「……そうですね。私やチェルシーさん、あとは枢機卿の方々も広義の意味では『教え子』と言えなくもないですが……『弟子』とは言えませんし、言う気もありません」

何故か穏やかな口調とは裏腹に妙にきっぱりはっきりと断言するシスター・ブランに

オレとアリア、相棒は顔を見合わせて首を捻る。
「……言葉遊びって訳じゃ無いよな？」
「はい。単純に事実であり、そうであるべきというだけですね」
うぅむ、益々分からないが……『弟子』という言葉に何か拘りがあるという事か。
淡く微笑むシスターと、何処か穏やかな雰囲気で黙するヒッチンさん見て、なんとなくそれ以上は突っ込んで聞くのも野暮な気がした。
アリアもオレと同意見なのか、相槌を打つに留めたのだが……何故か相棒が自分の胸元をペタペタと掌で触診する様に触って不思議そうにしている。
「……？　どうしたのにいちゃん？」
――いや、なんだかじんわりとした様な、冬場に腹にホッカイロを貼ったような……なんぞコレ。
「絶妙に分かり辛い例えだなオイ」
表情からして身体に異常が起こったという訳でも無いみたいだが……何故だろうな、妙に気になるというかモヤっとするぞ。相棒の台詞では無いがなんだコレ。
アリアの奴が相棒の胸元に軽く触れ、魔力を奔らせて「うん、別に何か悪い処は無いね」と頷き、便乗して子供達が同じようにベタっと頬や腹に掌を押し付けて「わるいとこはなーし！」と唱和して笑う。

十人くらいから元気印のお墨付きを頂いた相棒は、マジかよ俺健康すぎワロタ。と真顔でほざいて更なる笑いを誘っている。
年長のシスター三人もひどく穏やかな表情でそれを眺めて、何とも和やかな空気が流れた。

それからややあって。
『さぁー、そろそろ次の試合となります！　場内での飲食物の購入の為に席を立っている方はお急ぎ下さい！』
おー、もうそんな時間か。大勢で話し込んでるとあっという間だったな。
実況席から拡声された声が響き渡り、皆で武舞台の方へと視線を転じる。
拡声効果のある魔道具をマイクみたいに握りしめて声を張り上げているのは、シャマの代わりに急遽代打で実況解説に捻じ込まれた文官の女性だ。
シャマの欠員は唐突だったのか、さっきの試合はグラッブス司祭とサルビアだけっていう主催国の人員がいない状態だったからな。慌てて代役を立てたらしい。二人っきりで仕事、という状況にサルビアはちょっと嬉しそうだったけど。
オレ達も彼女とは祭りの準備期間中に何度か顔を合わせた事がある。現場と王城で

の企画・計画の擦り合わせを行う中央管理職みたいな人だったと思う。
知的な感じの眼鏡美人なんだが……分厚い束になった書類を抱えて王城内を忙しそうに走り回り、開催日が近づくにつれて目の下の隈が濃くなって人を呪い殺せそうな目付きになっていくのがちょっと怖かった記憶があった。
少しだけ話をした際に「お祭り期間中のお勧めの場所ですか？　ふかふかのベッドですね」と力強く断言していた彼女は、なんだかやけくその様にテンションが高い。
『本日の第二試合より、実況解説はワタクシ、キャリーラ＝ハブリクと教国と大森林からのゲストの御二方でお送りします！　あと二日は丸っとベッドで眠れると思ってたのに覚えてろよシャマダハルゥ!!』
王城で見た仕事の出来るキャリアウーマン、といった風な言動はどこかに放り投げ、「ファァァ〇ク！　これだから《刃衆》（問題児共）の尻拭いは嫌なんですよ糞がっ！」と叫びながら実況席の前に置かれた長卓の上に拡声の魔道具を叩きつけている。
お姉さんの身も蓋も無い罵倒に運営側である闘技場（コロッセオ）のスタッフは頭を抱えているが、観客からのウケは良いみたいだ。キレ芸染みた絶叫に多くの爆笑を頂いている。一部、物凄く同情した顔で頷いてる人もいるが。
『フーッ、ハァ……文官の私では目に追える状況を後追いする実況に終始すると思われます、ゲストの御二人に頼らせていただく事になりそうです』

どうか本日はよろしくお願いします、と頭を下げるお姉さん――キャリーラさんに、ゲスト席に座る二人が穏やかに応じていた。

『いやはや、身を休める最中の突然の代役、お気持ちは察するに余りあります。拙僧も是より一層気を入れて解説にあたります故、御無理をなさらぬよう』

『えーと……郷から持って来たハーブ茶があるのですが、よろしければこの仕事が終わったあとお持ちになりますか？　胃に優しくて疲労回復にも良いんです』

『なにこれ優しがさ染みる。転職して大森林……は無理でも教国に引っ越したい』

真顔で宣うキャリーラさんの声色は、拡声の魔道具越しでも分かる程には真剣だった。

教国はウチで優秀な文官は年中募集中なのでバッチコイといった感じなのだが……何故だろう。結局は枢機卿の誰かの下で教皇に振り回されてる未来しか見えない。

なまじ有能な分、何処いっても仕事背負いこんでキレ散らかしてるイメージがあるな、あの人。と、子供達に集られたままの相棒がポツリと呟くのが聞こえた。全く以て同感である。

大分個人的な語りになっていると気が付いたのか、当人の新実況役が大きく咳払い一つして仕切り直した。

『うぉっほん！　では本日の第二試合、早速の選手入場となります！』

掌で指し示す東――竜の方角から、ブラウンの髪を無造作に後ろで括った疵面（スカーフェイス）の剣士が進み出て来る。

『一回戦は確かな技量で豪快なパワーファイターを下して来た、ジャック＝ドゥ選手！』

歓声の降り注ぐ中、飄々とした態度で武舞台に上がったのジャック選手の腰には、先の試合で折れた剣の代わりに真新しい剣が佩かれていた。

見た処、前の試合と同じく数打ちに見えるな。彼の腕前的にもうちょっと良い武器を使うべきだと思うが……拘りでもあるんだろうか？

続いて、獅子の方角である西が指し示される。

『相対するは、一回戦指折りの激闘を制して勝ち上がった帝国の期待の新人騎士！　個人的には先任連中のノリに染まらず成長して欲しい！　ローレッタ＝カッツバルゲル選手！』

贔屓目無しでも相手より大きな拍手と歓声で迎えられるは、金髪巻き毛の少女騎士だ。

結構な負傷具合だった腕もしっかりと魔法で完治したのか、手甲に包まれた両拳が力強く握られ、打ち合わされる。

「良かった、ちゃんと怪我も治ってるみたいだ。がんばれーっ、ローレッタさーん！」

拳を天に突き上げてエールを送るアリアに合わせ、相棒ものんびりと応援の声をあげ

ている。
　オレとしてもこの試合どちらかを応援するとなれば、そりゃぁ彼女の方に決まってる。直接的にはまだ深い関りは無いが、妹(おとうと)や相棒と仲が良い上に例の学者さんとの繋がりもあるしな。
「ふむ、確かガンテスも彼女の事を評価していましたね。実際、《風兎》選手との試合は粗削りながらも見事でした」
「司祭様ともお知り合いなんですね。では、ここはローレッタ選手を応援させてもらいましょう」
「そ、そうですね。ジャック選手にはちょっと申し訳ない気もしますが……」
　オレ達三人が令嬢騎士を推してるのもあって、同席してるシスター達も基本、彼女を応援する空気になっている。
　ジャック選手も帝国所属の冒険者らしいので殊更にアウェー感のある空気、って訳でも無いのだろうが、やはり《刃衆(エッジス)》の看板効果は強い。ローレッタを応援する声の方が大きいのは仕方ないだろう。
『どちらも技巧派ではありますが、御令嬢が動に寄った武ならばジャック選手は静寄りの武。噛み合う局面は多そうですな。拳と剣、基本は自身の得意な間合いの押し付け合いになるかと』

『手札はジャック選手の方が多そうですが、ローレッタ選手の爆発力は先の試合で見た通りですし、この試合も名勝負になりそうな予感がしますね』

ゲスト解説の二人の言葉は大体的を射ていると思う。一回戦の動きを見た限りでは経験や年季はジャックの方が上だろうけど、ローレッタはそれを食い破るだけの突進力・勢いがあった。

優雅に屈膝礼（カーテシー）で以て一礼する金髪巻き毛の少女に対し、やはり飄々とした態度のまま、軽く頭を下げて礼を返す壮年の剣士。

手甲包まれた拳が持ち上がり、鞘から剣が抜き払われる。

勝負の始まり直前のヒリつく空気が舞台に満ちて、観客席も一気に静かになった。

『それでは……二回戦、第二試合……開始っ！』

キャリーラさんの宣言と共に、両者は同時に前に飛び出した。

間合いは剣士であるジャックの方が広い。

小手調べとばかりに横薙ぎの一閃がローレッタの胴を襲うが、彼女の手甲は魔装の一品だ。ガードを下げて腕で受けるだけで刃は火花を上げて止まった。

ローレッタが一歩、踏み込む。拳の――彼女の間合いだ。

「――シィッ！」

鋭い呼気と共に左の拳打が撃ち込まれ、顔面を狙ったそれをジャックが首を傾けて躱す。

一歩下がって剣の間合いを保とうとする彼に、令嬢騎士の追撃は執拗だ。

逃がさないとばかりに張り付き、踏み込んで返しの胴打ちを捩じり込む。

「……っと！」

片手に握った剣の柄でそれを叩き落としたジャックが、空いた手でローレッタの肩を掴もうと手を伸ばした。

一回戦でダン選手を投げ飛ばした柔道じみた手管は彼女も警戒しているのか、掴まれるのを嫌って拳で伸ばされた指先を払う。

その僅かな間に半歩だけ下がったジャック。剣の間合いとしてはまだ近すぎると思ったが、上半身の捻りとバネだけで突きを打った。

距離を離し切れないが為の苦し紛れじゃない、確立した技術で振るわれた一撃だ。

吸い込まれる様に少女の華奢な胴体に突き込まれた切っ先は、寸前で魔装の鋼に阻まれて再び火花を上げる。

手甲に包まれた腕を差し込んで防いだローレッタだけど、咄嗟に伝わる衝撃までは殺しきれなかったのか、踏ん張り切れずにたたらを踏んで数歩後退した。

息も付かせぬ攻防が一旦止まり、一拍置いて観客席から興奮の歓声があがる。

「ふぅー……やるねぇ、お嬢さん」
「そちらも。ですが、見事な技術に対し、武器が少々見劣りするようにお見受けしますわ」
「同じ事を一回戦でも言われたよ。値段の割には悪くないのを選んでるんだがねぇ」
その場で軽くステップを踏むローレッタの言葉に、苦笑いして剣を構え直すジャック。
実際、腕の立つ戦士が魔装の武器を振るえば、その破壊力・殺傷力は通常の鋼のソレを遥かに上回る。
そしてローレッタも最精鋭の部隊に入れるだけの実力の持ち主だ。数打ちの武器ではただ打ち合うだけで相当に刀身に負担が掛かるだろう。
互いの実力差によほど大きな隔たりがなければ、やはり武装の質の差はデカい。一回戦は上手い事技でカバーしたジャックだが、《刃衆(エッジス)》クラスを相手にそれも何処までやれるか……彼にとっては中々厳しい戦いと言えるだろう。
――このまんまだと厳しいだろうから、伏せた札を切って来るやろなぁ……さて、伏せてあるのは名の通りにジャックか、はたまたクイーンかキングか……。
そんな台詞を真面目な声色で言ってみせたのは相棒だ。
キリッとした表情を作って珍しくカッコつけてるのだが、子供達に集られて頬や耳を

引っ張られている状態ではどう控え目にみても馬鹿面にしか見えない。いや、コイツの事だから分かっててキメ顔してるんだろうけどさ。

ウケを狙える局面でしか格好つけないのはらしいと言えばらしいんだけど……折角戦争も終わった事だし、危険の無いシチュエーションでオレの相棒（ヒーロー）の格好良い処を見てみたいと思うのは我儘なんだろうか？

……うむ、次回以降の《大豊穣祭》でも闘技大会があるのなら、なんとか相棒を参加できるように持っていくべきかもしれない。本人は思いっきり嫌がるだろうけど。

相棒の真剣な表情を堪能する為だと言えば、アリアも賛成に回ってくれる可能性はある。オレ達二人で拝み倒せばワンチャンあるんじゃなかろうか？

でも、こいつ基本的に戦い自体を好まないしなぁ……無理強いは出来ないのが悩みどころだ。

なんか寒気がする！　とか騒ぎ出した相棒を他所に、先に挙げた武装の差――それを殆ど問題にしない例外その1、ヒッチンさんがなにやら難しい顔をして試合を見つめている。

「逆手なのは間違いない……ですが、この違和感……」

僅かに俯き、珍しく迷う様に呟く彼女に、シスター・ブランが首を傾げて「ミラ様？」と覗き込む様に問いかけた。

オレ達の視線が集中している事に気がづいたヒッチンさんは、咳払いを一つして居住まいを正す。
「失礼しました。この試合、予想よりも少々読めない部分が多いもので」
「……読めない？」
引退して尚、グラッブス司祭相手の組手であの剛力を受け流してぶん投げ、地に転がす絶技の持ち主の言葉に、呆気に取られて聞き返したのは誰だったか。
その視線の先では、再び激突したローレッタとジャックが拳と剣を打ち合わせている。
釣られる様に、オレ達も試合の続きへと眼を向けた。
試合はやはりというか、鉄拳お嬢様が優勢の流れだ。
丁寧に間合いを図って攻防を行うジャックだが、至近距離が本領のローレッタがゴリゴリと前に出る。
先に挙げた様に、やはり武装の差が大きい。一級品の魔装処理のされた手甲は、牽制として繰り出される剣の一撃をあっさりと防ぐ。
「っとぉ！　華奢なナリして猛牛みたいな圧だね、オイ！」
「誉め言葉として受け取っておきますわ！」
上体を振って飛び込む令嬢騎士に対して、ジャックが迎え撃つ為に打った突き。

頭を振って躱されたソレは直ぐに切っ先が引かれ、連続して突き込まれる。
「――オラァッ！」
「うおっ、なんつー無茶苦茶を……！」
だが、突きを正面からブン殴るという割と無茶な真似によって、流れる様な連続突きは強引に弾かれた。
あれはオレにも分かるな、明らかに切っ先を『見て』殴っていた。
動体視力が良いと言うのもあるんだろうが、剣先に拳を合わせに行くとかクソ度胸にも程がある。いくら魔装の手甲と言っても指抜（オープンフィンガー）きである以上、肝心の装甲部分からズレて当たったら指が千切れ飛ぶぞ。
そのまま懐に潜り込んで、ローレッタは怒涛の如く攻め掛かる。
牽制の左から右、更に足を狙って蹴りが飛び、密着する程に距離が詰まれば振り切った拳の切り返しに肘が撃ち込まれ。
クリーンヒットこそないものの、繰り出されるコンビネーションに圧され、退く事無く打ち合っていたジャックも堪らず後退する。
一足飛びに距離を取った彼に、逃がさないとばかりに金髪の巻き毛を靡かせて少女が猛追した。
ローレッタは波に乗っている。徒に後退すると、そのまま押し切られるだけの勢いが

あった。
弾丸の如く突っ込んでくる彼女を正面から見据え――ジャックなんとも奇妙な、苦笑いを含んだ楽し気な笑みを口の端に乗せて笑う。
切っ先が殴られて潰れた剣を確りと両手で握り直し、振り上げる。
ドンッ！　という音は、拳撃ではなく、剣撃でもなく。
滑る様な足取りで踏み込んだ剣士の足元から鳴り響く、石畳を踏み砕いた音だった。
上段から打ち込まれる一撃は、速さ一つとっても先程までの比ではない。
先程まで見せていたのは、練度こそ高いが冒険者や傭兵によく見る我流混じりの喧嘩剣法。
それとは明らかに違う洗練されたその動きは、この世界には馴染みが無いかもしれないが……剣道の面打ちにも似た無骨にして鋭い一撃だった。
咄嗟にローレッタが行ったのは、防御――しかも、これまでの様に腕を掲げて剣を受けるのではなく、両腕を交差させて確りと受け止める。
手甲と剣が激突した音は、剣というより鉄槌を受け止めた様な轟音だった。
「っ、ぐっ!?」
「今のを正面から受け止めるのかよ」
受けた衝撃で足元の石畳が割れ、彼女のブーツの底が武舞台にめり込む。

魔装の武具とローレッタ自身の体幹の強さ。どちらが欠けていても受けた部位ごと叩き斬られ、あるいは押し潰されて床に叩きつけられていただろう。

カウンター気味で更に威力の増した一撃だった剛撃を受けて見せた彼女に、打った当人から呆れ混じりの賞賛の視線が注がれる。

『おぉっとぉ!?　優勢だったと思われたローレッタ選手の勢いを、初めて見せる力強い一撃で断ち切ったジャック選手！　これが彼の伏せていた札、という事でしょうか!?』

『むぅっ……！　利き腕と逆の手によって剣を振るっている、というのは予想しておりましたが……どうやら何某かの剣術を修めている御様子！』

実況席からキャリーラさんとグラッブス司祭の驚きの声が上がり、闘技場（コロッセオ）の観客席も変転する試合内容に沸き立つ。

司祭も驚いてる処からするに、これがジャックの伏せていた実力（札）という事か。

「成程、逆の手で振っていたのは自身の剣の術理を消す為でしたか」

「消す……って、随分と念入りだな」

得心が行った、といった表情で頷くヒッチンさんの言葉に、オレと相棒も感心と呆れが混じった視線で舞台上のジャック選手を見つめる。

きっちりとした流派を修めてるなら、どう隠そうとしても端々の動きにその名残が出てしまう。身体に染み付く程に技を鍛え上げているなら猶更にだ。

だが利き腕、軸足まで変えれば、逆手の違和感もあってそれも殆ど消せる。
周到、と言ってしまえばそうなのだが、こんな大勢の眼に触れる大会に出てるのにえらく慎重な事だ。
「うわ、まずいなアレ……！　ローレッタさーん！　一旦距離を取って！」
流れが変わった事を察したアリアが一生懸命に声を張り上げて友人に応援を飛ばすが、流石にこの歓声の中で届く筈も無い。
相手が伏せていた技術を解禁したというのなら、距離を取って様子を見るのは間違った選択じゃないが……。
――縦ロールちゃんの性格からするに、退かないやろなぁ。
「だよな。そんなに付き合いの無いオレでも、あの娘が此処で退くようなタマじゃないのは分かる」
相棒の言葉に、オレとしても頷くしかない。
どの道、観客側に出来るのは応援する事だけだ。
一回戦で見せたローレッタの爆発力がジャックの隠していた技量を上回るのを信じるしかない。妹(おとうと)に倣って声援を送るとしよう。
先の一撃を受け止めたまま競り合いを行う金髪縦ロールな少女の背を見つめ、声を張る事にした。

籠手越しに受けた衝撃に痺れの残る両腕を叱咤し、ローレッタは眼前の男に不敵に笑いかける。
「……淑女（レディ）との舞踏で手を抜いていたのは感心できませんわね、真摯さに欠ける殿方は良い眼では見られなくてよ？」
「こりゃ耳が痛い――本当は次の試合まで隠し通すつもりだったんだが、お嬢さんの踊りが巧みなモンでつい、ね」
この様な状況でもなければ肩でも竦めそうな調子で、ジャックが笑い返す。
鋼同士が擦れ合い、互いの手甲と剣に込められた魔力が鎬を削って微かな火花を上げた。
言葉を交わす最中にも、ローレッタは手甲に押し付けられた刃を押し退けようと力を込めているのだが……剣と籠手で組み合う様なこの体勢、身体の使い方か、或いは力の

込め方か、聳え立つ壁を押す様な感触が返って来るばかりでビクともしない。
間違いなく、技量という一点では目の前の剣士は己の格上だった。
（魔力量や身体強化の幅は此方が上……有利な点があるだけまだマシですわね）
それもこの男がこれ以上、力を隠していなければ、だが。
正直に言えば、試合前は自身がやや有利、程度の見積もりだったのだが、なんと甘い考えであったのか。
一転して不利となった戦況。
しかしローレッタは、怯む処か逆に闘志を燃え上がらせる。
（上等ですわ……！　どの道、勝ち進めば格上とぶつかるのは必定！）
準決勝となる三回戦は、副長を筆頭にほぼ全員が己より遥か上の猛者揃い。
その中で、目の前の剣士がどれほどの位置にいるのか、未だ判然とはしないが……此処を超えねばその猛者達と戦う資格を手に出来ぬのもまた事実。
ならばそれが己の限界であれ、眼前の男であれ、超えるのみである。
勝利への意気に押され、少女の四肢に気合と魔力が漲った。
押し合いの均衡が崩れて、ほんの僅かではあるが剣が押し退けられる。
手甲と咬み合わせた刀身越しにそれを感じ取ったジャックが僅かに眉を跳ね上げて
――やはり楽しそうに笑った。

「ははっ、凄いな。気合や根性ってのは案外馬鹿にできないが、こうも分かり易く反映させてくるか」
「限界は超えるかぶち壊してなんぼ、カッツバルゲル家の伝統的スタイルですの」
「ストロングスタイルにも程があるねぇ、お嬢さん（レディ）」
互いに軽口をたたき合いながら、至近距離での力比べを続ける。
とはいえ、膠着が長く続くのも性に合わない。
なんとかもう少しだけ押し退け、頭突きの一つでもかましてやろうとローレッタが考えていると、相対する剣士の握る柄から軋む様な音が漏れた。
「この距離で美人とお見合いってのも悪くないんだが、次の連中の眼もあるんでね」
男はほんの刹那、少女の螺旋を描いた金髪越しに選手入場口へと視線を向ける。
そこには黒髪の見目整った青年――アイミヤ選手が真剣な眼差しでこちらを観察している姿があった。
流石に振り向くことはしないが、反対方向――背と後頭部に突き刺さる視線は獣人の傭兵のものだろう。
……金髪巻き毛の少女と疵面の剣士。どちらが勝ち進んだとしても、次に当たるのはこの両名の何れかとなる。
実力を明かした剣士を見て、少女が闘志を昂らせた様に。

「悪いが、これ以上手の内は見せられんよ――直ぐに終わりだ」
剣士もまた、次に戦う強者の姿を眼にし、気炎を高めて打って出た。
背筋を電流の如く奔った悪寒に、ローレッタが瞬時に腕を引くのと同時。
剣を握る腕が残像を残して振り切られる。
甲高い音、一際強く散る火花。
微かに、だが確かに走る腕の痛みに、少女は戦慄した。
（――ッ!?　密着した状態から魔装を!?）
咄嗟に腕を引かなければ深く肉を裂かれていたかもしれない。
しかもジャックの握る武器は、良品ではあるがただの鋼の剣である。
彼の魔力の波長や強弱も変動は無い。身体強化は試合当初から変わらず、冒険者や傭兵としては平均的な練度だ。
つまり、純粋な技で以て最高品質の魔装の装甲を貫いたと言う事。
技量は格上、どころではない。
下手をすれば、眼前の剣士は技術のみならば己の上司――この大会の規定上、参加不可となっている黒髪の少女に迫るかもしれなかった。
驚愕、困惑、敬意、畏怖。様々な感情が一瞬で脳裏を駆け巡り。
――その全てを燃え盛る闘志で戦意へと塗り替えて、ローレッタは前に出た。

此処で躊躇なく踏み込んでくるのは予想外だったのか、剣士の双眸が僅かに見開かれ、少なからず驚きの色を浮かべる。
だが、その口元は楽しそうに笑っていた。
釣られる様に、少女の唇の端も吊り上がる。
ぞくぞくと背中に走るのは、先と同じ悪寒と、それに匹敵するほどの歓喜だ。
これ程の剣士の名が世に轟いていない事に、驚きもある。疑問だってある。
けれど、今はそんな些末事は二の次だ。
第二回戦で戦うとは思いもしなかった、死力尽くして尚、届くかも分からぬ強者。
降って湧いたこの機会、怯むも竦むも以ての外。
存分に昂り、存分に挑まねば――カッツバルゲルの名が廃る！
正面から、真っ直ぐに踏み込む。
迎撃の剣が閃き、受けた左の手甲に刃が浅く喰い込み、抜けた。
血の尾を引きながら振り抜かれた一閃が切り返される前に、懐に飛び込む。
少しばかり腕が裂かれたが問題無い。拳は握れる、殴れる。
赤く染まった左腕を振るう。速度を優先した手打ち(ジャブ)であるにも関わらず、首を捻ってスカされた。
すぐ様返しの右。胴を狙った横振り(スイング)は、跳ね戻って来た剣先に弾かれ。

弾くと同時に刃が弧を描き、少女の華奢な肩口へと剣が打ち込まれる。
まともに受けては防具ごと切り裂かれる――故に、身を低くし、更に前へ。
振り切られる前に、剣の根本に近い部分へと自ら一撃を受けに行く。
布製魔装の外套（コート）を裂き、刀身が僅かに肩に喰い込むが、流石に加速途中の剣の根本ではそこ止まりだ。
ほぼ密着距離。身を傾げて捻り、地を擦るように拳を跳ね上げる。
剣で弾くのはこの間合いでは困難。そうでなくとも、刃は浅くではあるが彼女の肩に喰いこんでいる。
一瞬の迷いすら無く、ジャックが剣を手放して一歩後退。顎を狙う左アッパーを回避した。
（……勝機！）
身を反らし、僅かにではあるが上体が伸びた剣士を見て。
此処が勝負所、とばかりにローレッタは打撃の打ち終わりよりも先に強引に半歩踏み込もうとする。
無理矢理にアッパーのモーションを止めた事で、打撃に用いた関節や筋肉が嫌な音を立てて軋むのが聞こえた。
無茶な動きにも付いてきてくれた四肢――とりわけ足腰が悲鳴を上げ、だが望みに応

えて。
　五体を軋ませながらも前へと踏み出し、ブーツの靴裏が石畳に叩きつけられると同時、肩に食い込んだ剣が零れ落ち、拳が振り上げられる。
　左腕を力尽くで引き戻し、踏み込んだ勢いを乗せて右の打ち下ろしが剣士の頬へと捩じり込まれる。
　――直撃。
　ローレッタ渾身の一撃は、確かに格上たる剣士の頬を捉え、そのまま地面に叩きつけんと拳は振り抜かれた。
　試合を見守る多くの者達。
　闘技場（コロッセオ）に詰めかける観客達が。
　好敵手の試合の行く末を見届ける出場者達が。
　或いは、友人へと声を張り上げて声援を送る、聖女とその守護者の青年も。
　金髪巻き毛の少女が、力を振り絞った先に確かに剣士へとその拳を届かせた、と確信し。
「――見事」
　会場内の僅か数名。
　多くの者とは真逆の確信を抱いた者の内の一人、聖教会最古参たる女傑が、掛け値な

しの賞賛を呟く。
同じ意味合いの言葉を胸中で溢した者は、来賓用特別席の《魔王》と実況席に座る筋肉――そして当のローレッタであった。
（……手応えが、軽いっ!?）
拳を振り抜く刹那の間。
まるでひらひらと宙を舞う薄布を殴った様な感触に、致命的な予感と戦慄、相手への賛辞が脳裏を駆け抜ける。
頬に拳が突き刺さり、横倒しになって石畳に叩きつけられる筈の剣士は。
その両足が地を離れ、全身が床と平行になった瞬間、独楽の如く旋回した。
曲芸の如き体勢から腕が伸ばされ、床へと落ちる途中であった剣が掴まれる。
掬い上げる様な軌道から振り抜かれた刃は、振り下ろす最中であった少女の拳を過たず捉え、斬り裂く。
断つのではなく、弾くを目的とした一撃の傷は浅く――だが、完璧に入った其れに、ローレッタの右腕は万歳する様に跳ね上げられた。
バネ仕掛けの如く一瞬で体勢を立て直した男の手の中で、剣がくるりと回って翻るのを、彼女はいっそ穏やかですらある気分で見つめる。
（あぁ……届きませんでしたか）

悔いは無い――いや、決勝で当たるであろう副長に挑めなかったのは心残りではあるが、それでも全力を尽くし、昨日までの己を半歩超えたという確信があった。
それでも届かなかったというのであれば、もうこれは単純に自身の実力不足……未熟が故である。
明日から益々以て鍛錬に励むしかあるまい。次の《大豊穣祭》にて自分がこの大会に出場できるかは分からないが、リベンジの機会は是非とも欲しい処だ。
……この場での敗北は、甘んじて受け入れようではないか。うん。
そのような思考が刹那の内に脳裏を駆け巡り――最後にローレッタは噛みしめる様に呟く。
「それはそれとしてクッソ悔しいですわね」
次の瞬間、脳天に剣の柄が打ち付けられ、綺麗に意識を飛ばされた少女は仰向け大の字となってぶっ倒れた。

「……最後の最後までロックなお嬢ちゃんだ」
残心を保った体勢のまま、打ち倒した少女を見下ろしてジャックが呟く。

「最後に一発もらっちまったか」
赤く汚れた右の脇腹を擦り、笑う。
彼の出血ではない。彼女の左腕から拳にかけてを濡らす血が付着したものだ。
トドメとなる脳天への柄打ち。
それを喰らうと同時に、繰り出された胴打ちに依るものであった。
体勢崩れ切り、腰も入らぬ手打ちではあったが……あの”詰んだ”状況で尚、一発ぶち込もうとしてくる負けん気の強さは天晴(あっぱれ)としか言いようが無い。
ダメージこそないが、一撃を許し、剣は切っ先が潰れてあちこちにガタが来ている。
……自身の剣技を見せてこれだ、予想より遥かに食い下がられた。これで新人だというのだから、帝国最精鋭の看板に偽りなし、といった処か。
とはいえ、後悔や苛立ちなどある筈も無い。
「結構楽しかったぜ、おじょ……ローレッタ」
機会があったらまた戦ろうや、と意識の無い少女へと笑いかけ。
降り注ぐ歓声の中、やはり飄々とした様子で剣士は肩を竦めたのだった。

Q：イヌ科に属する傭兵の駄犬率を求めよ

『勝者はジャック＝ドゥ選手！　見慣れない、だが見事な剣技で準決勝へと勝ち進みました！』

『あれ程の技術を握り手を変える事で巧みに隠していた手腕といい、お見事ですな。拙僧としては、技量的に明確に上手であった相手にあれ程に食い下がってみせた御令嬢の健闘も称えたい処です』

『深手では無いとはいえ、あちこち斬られながら全く怯んでませんでしたからね。華奢なお嬢さんなのに物凄い気迫でした』

今しがた終わった試合の熱が、未だ名残りを残す闘技場（コロッセオ）。

実況席の三人がコメントしているのを聞きつつ、俺は席から腰を浮かせる。

隣を見れば、案の定リアも席を立った処だった。

「ローレッタさんのお見舞いに行って来る。治療スタッフに手当は受けてたけど、流石に治り切って無いみたいだったし」

おう。まぁ、お前さんならそう言うだろうと思った。
負けた直後に誰かと会うのは嫌がる場合もあるが、実況でサルビアが言ってる通りに腕やら肩やら斬られたせいで半身真っ赤っかだったしな、大丈夫だとは思うんだがやっぱ心配になるわ。
今までの試合にはあんまりなかった出血目立つ戦いだったので、子供達に見せるのは如何なものか……とか思ったりもしたんだが、怪我を心配してる子はおれど、気分が悪くなった子とかは居ないみたいやね。
孤児院とかだと手に入れた鶏や食肉用の小動物を自前で絞めたりする処も結構あるし、なによりつい最近まで生存戦争やってた世界の子供達だ。タフなのも当然か。
そんな事を考えつつ一緒に行こうと提案すると、妹分(おとうと)も「うん！」と笑顔で了承してくれる。
「見舞いか……折角だからオレも行っておくか。負けはしたけど健闘したのは確かだし、後の試合も無いからオレ達が治療に関わっても問題ないだろうし」
で、俺とリアが立てば、当然シアも反応する訳で。
大体予想通りに、いつもの三人で縦ロールちゃんの様子を見に行く事となった。
肩やら膝上やら、あちこちに乗っていたお子様達を順番に下ろすと、ミラ婆ちゃん達にパスしてゆく。

そんな訳でちょっくら友達のお見舞いに行ってきます。なるべく次の試合までに戻って来る様にはするんで。

手をシュタッと挙げて宣言すると、我が姉弟子は軽く頷いて子供達を俺達が座っていた席に座らせた。

「敗戦直後です、知り合いとは顔を合わせたくないかもしれません。彼女の様子を見て辛そうなら早々に戻って来るように」

まぁ、その辺はね。流石に心得ておりますよ。

シアリアもおるし、残った負傷自体は一瞬で治るだろうけど……危険域ではないだろうが、結構出血してたからね。傷が治っても暫く安静にしてた方が良いのは確かだ。

ミラ婆ちゃんが言う通り、縦ロールちゃんの体調も考慮すれば早めに切り上げた方が良いだろう。

お子様連中にもちょっと行って来るぜ！　と挨拶しておくと元気に「いってらっしゃーい！」という唱和が返って来る。

うむ、元気も良いが礼儀もきちんとしておる。流石はシスター・ブランが運営して、ミラ婆ちゃんが懇意にしてる孤児院なだけあるな。

白熱した試合だったが、舞台の損壊は割と控え目なので次の試合までの間はそう長くはないと思われる。

俺達は早速、闘技場（コロッセオ）の下部エリアにある選手控室へと移動を開始した。
下部エリアは関係者以外は立ち入り禁止なのだが、そこは教国来賓たる聖女様。
外注ではあるが俺が警備関係者なのも手伝って、警備の騎士はあっさりと控室への扉が幾つか並ぶ廊下へと通してくれた。
「えーと……ローレッタさんの控室は……あった、ここだね」
扉が並んでいると言っても十も二十も部屋がある訳でも無し――リアを先頭に、順繰りに扉を巡って見ていくと直ぐに縦ロールちゃんの名前が書かれたプレートの掛かったドアを発見。
観客席からパッと見た感じでも、彼女に深刻な負傷は無かった。
それでも隊服である外套（コート）の下に来ていた白地の服が中々派手に赤く染まっていたので、リアは内心で結構な心配具合だったみたいだ。
実際、ここまで来るのにも少し速足だったし、それに合わせる形で俺とシアもちょい急ぎ足になったしね。
基本優しい子な妹（おとうと）分らしいので、ほっこりすれど悪い気になんぞなる筈もない。
でもまぁ、心配で気が急いていたのか……リアはちょっとだけやらかした。
「ローレッタさーん、怪我は大丈夫？　ちょっと治しにきたよー」
軽くノックすると、そのまま扉の向こうからの反応も待たずにドアノブを捻って開け

る。

控室は広さの割には端っこに長椅子と机、その上に水差しが置いてあるだけの簡素な部屋だった。

待ってる間に武器を抜いて軽く素振りできるスペースを作った、って事なんだろう。その代わり、長椅子は結構なサイズだ。肝の太い奴なら試合開始まで昼寝でも出来そうなくらいには大きい。

その長椅子に、あちこち包帯だらけの縦ロールちゃんは寝転んでいた。

――ただし、膝枕されて。

膝の主は、俺達も交友のあるひょろりとした壮年の日本人男性――我ら転移・転生者の食事事情の希望の星、コウジ＝マメイ氏である。

「う”ぅう”う”う”う”ぅ”ぅ”ぅ”……負けてしまいましたわぁ……決勝にてアンナ副隊長と武を交すと大見得切っていたというのにダメダメですのぉぉぉ……」

「気を落とすものじゃないよローレッタ。最低ライン、と言っていた本戦出場はクリアしてる訳だし……負けはしたけど凄い試合だったじゃないか。正直、僕としてはあちこち血滲れになる君を見るのはしんどかったけど……それと同じ位には誇らしいよ」

「先生ぇ……」

特徴的な巻毛の金髪を優しく手で梳かれ、縦ロールちゃんはゴロゴロと喉を鳴らしな

がら猫みたいにマメイさんの膝に頬を摺り寄せる。
口調こそ落ち込んだトーンだが、その顔は幸せそうに緩んでいた。
というか、多分これ俺達は見ちゃだめな表情や。紅潮した頬にとろんとした瞳は、特定の『誰か』だけに見せる類のものであると一目で知れた。
やっちまったなぁ……どーすんだこれ（白目
イチャイチャするのに夢中なのか、リアの軽いノックには全く気が付いていないみたいだ。
相手がマメイさんだというのは驚きだが、それよりも意図せずして無粋な闖入者となってしまったこの状況が問題である。
ちらりと隣に眼を向ければ、リアは唖然とした顔で固まり、シアは「おぉぅ……」とか小さく漏らしながら同じように硬直中。
濡れ場とまではいかないが、明らかに部外者お断りな甘味の強いプライベート空間を目撃して、聖女様二人の顔はちょっと赤らんでいた。
んで、だ。
ドアを開けて正面の光景がこれだ。三人も入って来て棒立ちになってりゃ、真正面の長椅子でイチャコラしてる二人も流石に延々気付かない筈も無い訳で。
恩師の膝にスリスリしていた縦ロールちゃんの瞳にアホ面晒してる俺達が映り――

桃色に霞んで茫とした双眸が焦点を取り戻す。
僅かに顔を上げた彼女の視線を辿り、マメイさんもこっちに漸く気付いた様で……二人揃って此方を見つめ、妙なお見合い状態になった。
「……」
「……」
重苦しい訳では無いが、ただ只管に気不味い沈黙が俺達の間に降りる。
シーン、と静まり返った控室の空気をぶち破ったのは、縦ロールちゃんだった。
眼を見開いてウチの聖女様と同じく固まっていたお顔からブワっと汗が噴き出て、色付いていた頬が桃色を通り越して真っ赤に染まる。
「……ほ、ホアアアアアアアッ!?」
「お、お邪魔しましたー!!」
相変わらず良い意味で貴族の御令嬢らしくない、面白素っ頓狂な叫び声が上がると同時、慌てたシアリアが俺の襟首を引っ掴んで回れ右をして部屋から飛び出した。
引き摺られて部屋を出る直前、耳を塞いでいるマメイ氏と視線が交わる。
以前に出会った旅の道中、彼が教え子に対して娘の様な感情を抱いているという話は聞いた。
――が、先程の空気は親子のソレとは聊か以上に類が異なるものであるのは言うまで

もない。

マメイさんの気質やカッツバルゲル家の先代当主へ向ける忠義・義理堅さを考えれば、彼がどうこうと言うより、おそらくは縦ロールちゃんがこうなる事を望んだ、という事なんだろう。

どうあれ、以前出会った頃より関係が変わったのは確かなんだろうが……きっとそれは悪いモンではなく、祝福できるものの筈だ。

それを証明する様に。

慌てたリアの手によってドアが勢いよく閉められる直前、俺が無言で学者先生へとサムズアップを贈ると――マメイさんは照れ臭そうに後頭部を掻いたのだった。

『さぁ、第二回戦も大詰め、最終試合となりました、この試合の結果によって準決勝進出の選手――ベスト4が決まる事となります！』

今日から急遽代役で実況解説に就いているキャリーラ女史の宣言と共に、試合合間の小休止程度では下がらないボルテージのままに観客席からワァァァッっとデカい歓声

が上がる。

「戻って来ましたか……レティシア様とアリア様はどうなさったのです？」

試合開始前には戻ってこれた俺達を見て、ミラ婆ちゃんが訝し気に鉄面皮を崩して片眉を上げた。

未だに動揺抜け切らない聖女二人――特に不用意にドアを開けるという直接的なうっかりをやらかしたリアの、頭を抱えそうな雰囲気を見ればその疑問も当然だ。

あー……まぁ、ちょーっと手違いがあったというか……問題ってレベルでは無いんで、まぁ気にしないでもらえると。

子供達も居る手前、下手をすればそのままＲ指定シーンに突入する直前だった部屋に乱入しました、とぶっちゃける事も出来ないので姉弟子の質問には言葉を濁して答える。

「うぅっ……気まずい……次にローレッタさんと顔を合わせるときにどんな顔をして会えば良いんだろ……」

席に座ると、本当に頭を抱えて項垂れてしまったアリア君であるが……まぁ、しゃーない。珍しくやらかしたからな、後で時間とってきちんと謝るしかあるめぇよ。

「お前らはまだ良いだろ、明確に友好関係があるんだから。オレなんて現状、かろうじて顔見知り程度のレベルだぞ、どーすんだよコレ」

そうえいえばそうだったな。シアと縦ロールちゃんは前に北区の工房でちょっと挨拶した程度だったか。

当然、マメイさんとはさっきが完全な初対面。ファーストコンタクトとしては割と酷い部類になる。

……少なくとも次に会うときは俺かリアと一緒の方が良いだろうな。シア単独で謝罪&仕切り直しとか罰ゲームレベルの気不味さやろ。

「……だな。正直に言えば、あの学者さん――マメイ氏とは良い関係を構築しておきたいし、三人揃って後で謝りに行くのが無難か」

元・日本人全員が渇望する代物を、現状で唯一生産成功してる人だからね。世の中、胃袋を掴む者は強い（確信

ちなみに確認はしてないが、縦ロールちゃんの怪我自体は多分完治してる筈だ。部屋から飛び出してダッシュで離れる際に、シアが部屋丸ごと包む範囲で回復魔法をぶち込んで来たので。

傷の箇所や深さなんかを把握して癒した方が効率が良いのは確かだろうが、よほど洒落にならない重症でも無い限りは膨大な魔力と聖気のごり押しで綺麗さっぱり治せてしまう聖女様パワー、おそるべし。

席に戻った事でやっぱりちょろちょろと集まって来た子供達を相手にしつつ、気分を

切り替える。
　次の試合も縦ロールちゃんに引き続き、知り合いが出て来る。しっかり応援しようかね。
　他の子には譲らんとばかりに真っ先に膝によじ登って、満足気に鼻を鳴らしているオフィリの頭を撫でてやりつつ武舞台へと視線を向けると、本日最後の試合の出場者達が東西の入口より進み出て来た処だった。
『さぁ、先に現れたのは名の知れた傭兵コンビの片割れ、ブライシオ選手！　初戦から相方とぶつかる不運を発揮した彼ですが、御本人としては楽しかったので特に問題は無いとの事！　参加者側としてお祭りを楽しんでいる様で、運営側としては有難い話です！』
『両の脚の負傷は無事に治癒した様で何よりですな。ブライシオ殿の回復力もあってのものでしょうが』
『私も試合の後に治療をお手伝いしたんですが、魔法の効きが物凄く良くて驚きました。再生力の高い種族の方に回復魔法かけるとあんな風になるんですね……』
　実況トリオの言葉通り、特大剣（グレートソード）を背負った獣人の折れていた両脚は既に完治してるっぽい。
　サルビアの言葉に心なしかドヤ顔で胸を反らすと、その場で何度もジャンプして二本

のあんよの健康っぷりをアピールしている。子供か。
ぴょんぴょんと上下動する傭兵を見て、膝の上のオフィリが座ったままその動きを真似して喜んでいる。ヘイちびっこ、危ないからやめなさい。
「……一回戦のときから思ってたけど、なんとなく似てるよなぁ」
「あ、レティシアもそう思った？　ボクも。なんだろ、犬系の獣人だからかな？」
キミたち、今なんで俺を見たの？　聞こえて来る台詞が不本意すぎて物申したいんですけど。
……オイ、今ミラ婆ちゃんまで小声で「確かに」って言わなかった!?　ブライシオには悪いけど俺あそこまでアホっぽくないでしょ!?
聖女二人は顔を見合わせて笑ってるし、姉弟子は眼鏡の位置を指先で調節して表情を隠してしまう。もうそのリアクションで返答してるも同然なんですがねぇ！
解せぬ。犬で傭兵っていう肩書のキーワードが似通ってるだけやろ。そもそも直接の面識すらないんやぞ。
残るシスター二人が気の毒そうに見てくるだけで留めてくれたのが救いか。いや、シスター・ブランの方はちょっと笑ってたけど。
『対するは今大会シード枠の一人！　優勝候補と謳われる一級冒険者、シンヤ＝アイミヤ選手！』

『アイミヤ殿は極めて高い練度の魔法剣士ですからな。接近戦に特化したブライシオ殿をどう捌くかが勝利の鍵となるでしょう』

『水に特化した加護を得ているとお聞きしています。風と水に依った種族（エルフ）としてはその運用法が気になる処ですね』

獣人の戦士とは逆方向から入場してきたのは、剣を背負った黒髪黒瞳の爽やかな雰囲気を纏うイケメン――シンヤ君である。

一回戦で見せた強さと愉快な言動の御蔭か、ブライシオの登場時も中々の歓声が降り注いでいたのだが……はっきりと上回る量の声援が観客席から滝の如く武舞台へと降り注ぐ。

いやー相変わらず大人気だね。声援の内、何割かが彼のハーレム体質を弄る声なのは草生えるけど。

舞台上で相対した二人は、割と気安い感じで会話を交わしている。

「今日はよろしくお願いします、ブライシオさん」

「うむ、楽しみにしていた。良い戦いをしよう――処で、水は足りているのか？　無いなら樽を担いで持ってくるぞ」

「あはは、お気遣いなく。準備はしてありますよ」

至極真面目な声色で敵に塩ならぬ水を贈ろうと提案する相手の言葉を、シンヤ君はや

んわりと固辞する。

ブライシオに他意は無い――多分、全力を出せる環境のシンヤ君相手の方が戦ってて手強いし、楽しい、というだけなのだろうが……。

まぁ、なんだかんだいって負けず嫌いなトコあるからな、あのイケメン君は。これから喧嘩する相手に全力を出す為のお膳立てをしてもらうとか、絶対領かんだろ。

「わんわん！　がんばれー！」

一回戦以降、選手の中でブライシオが一番の推しとなったらしいオフィリがいつも抱いている犬のぬいぐるみを掲げて声を張り上げる。

うぅむ……年少組の幼女の一生懸命な応援に、周囲の子供達は勿論、大人の方もブライシオを応援する空気になってしまった。

ミラ婆ちゃん達はあの獣人傭兵と知り合いみたいだし、まぁ分からなくはないんだが……シアとリアまでそれにあっさり乗っかっててワロス。隊長ちゃんもそうだったが、相変わらずシンヤ君に対して微妙に対応が塩いね君ら。

嫌いとか苦手って訳では無いんだろう。

ただ、下手に交流持ったり歩み寄った姿勢を見せると、シンヤ君のハーレム体質の御蔭であっという間に新たなメンバー扱いされるからね。

そこらへんを回避する為にしっかり線を引いた態度を意識的に取ってるって事なん

だろうが……彼にとっては自分に特に好意を向けない、完全に肩の力を抜いて会話できる女性こそ希少なので、そういう相手にこそ距離を取られるってのはちと気の毒ではある。

……まぁ、その分ハーレム満喫してるだろうから別にいいか！　もげろ！（無慈悲

そんなアホな事をつらつらと考えている間に、試合が始まるようだ。

『それでは、第二回戦、最終試合――始めっ！』

初手の私情だらけの愚痴みたいな挨拶以降は、なんだかんだ真面目に実況解説やってるキャリーラ女史の号令と共に、両選手が背に負った剣の柄を握り、抜き放った。

ブライシオが身の丈に迫る程の大剣を肩に担ぐ様にして腰を落とし、シンヤ君が両手剣の刃を寝かせて水平に構える。

即座に手を打ったのは後者だ。

軽く地を蹴って距離を離しつつ、魔力を練り上げて詠唱を開始する。

『おぉっと!?　アイミヤ選手、試合開始と同時に魔法の詠唱に入りました！　一方のブライシオ選手は……動きませんね？』

『魔法の完成を待っているみたいですね。お知り合いみたいですし、どんな魔法を使うのか既に知っているのではないでしょうか』

おそらくはサルビアの推測は正解だ。

魔導士・魔法剣士のセオリー通りに先ずは魔法の発動から入るシンヤ君に対し、見た目ハスキー犬な獣人の戦士はワクワクと楽しそうな雰囲気を隠しもせずに相手の術の完成を待ち受けている。

下手をすれば舐められてる、虚仮にされてると取られかねないブライシオの行動であるが、めちゃくちゃ期待に満ち溢れた表情で尻尾をバタバタと振っているのを見れば、悪意や侮りの類が一切無いのは馬鹿でも分かる。

苦笑いしながらそれでもきっちり詠唱を終えたシンヤ君が、魔法を発動させた。

魔力が迸り、小さなスパークと共に幾つもの魔法陣が虚空に浮かび上がる。

「召喚系か」

「喚ぶのは魔獣や霊獣以外……というか生き物じゃないね。武器でも取り出したのかな？」

瞬時に魔法の詳細を見て取ったウチの聖女様方から、端的な感想兼説明が語られた。

その言葉通り、召喚されたのはセオリー通りの共闘する召喚獣の類では無く――大きな無数の水球だ。

直径1メートル程の何の変哲も水の塊。ふよふよと球体を維持して浮かぶその数は、七つ。

以前にも見た事あるな。リアの言う通り武器――水源か。

シンヤ君は球体の一つに無造作に剣をぶっ刺すと、軽く捻りながら引っこ抜く。
水球が少しばかり縮み……代わりに引き抜かれた刀身は、先程より二回りは大きく、そして長くなっていた。
陽光を乱反射させて輝くのは、眼も覚める様な冷気を放つ、氷の刃だ。
冷たい蒸気を吹き出すソレを再度構えつつ、常の柔らかなイケメンスマイルとは違う、どこか不敵さを滲ませた表情で彼は笑う。
「お待たせしました、と行った方が良いのかな？」
「うむ、待った。待ったが、俺が勝手にそうしただけなので問題は無い」
「ブライシオさんらしいですね……待たせた分、退屈はさせないと思いますよ？」
「シンヤとの戦いに退屈する時間があるとは最初から思っていない――では、戦ろう」
冷静に言葉を紡ぎながら、しかしその雰囲気は待てを解除された犬（わんこ）の如く。
もう我慢できねぇぜヤッホゥ！　と言わんばかりに、獣人の戦士は投げられたボールを追いかける様な軽快な足取りで正面から突撃した。
馬鹿でっかい剣を担いだまま身は低く、疾風の如く駆けるその様は、正に地を走る獣だ。
対するシンヤ君は肉薄するブライシオへと向け、氷の刃を指揮棒の様に振るった。
武舞台上に浮かぶ水球――その幾つかが、微かに波打ち、圧縮された水を撃ちだす。

鉄砲水の如く吐き出されたソレは、殺傷力こそ低いが当たればその水圧で抜群のストッピングパワーを発揮する。当たれば、ね。

正面と左右の三方向から発射された水弾を、長大な剣を担いだ巨躯が軽やかに跳ね、躱し。

そのまま獣人の身体能力を如何なく発揮して一足飛びに間合いを詰めたブライシオの剣が、水弾の指揮者を間合いに捉える。

迎え撃つシンヤ君。鋼の刃と氷の刃が激突し、やや甲高い音を立てて氷の粒が砕け、宙を舞う。

罅の入った冷たい刀身を見て、持ち主が苦笑いを浮かべた。

「――ッ、下手な魔装より硬度は上の筈なんですけどねっ……！」

「確かに硬い――が、砕けない程では無い。グラッブスの腕なぞはもっと硬いのに弾力もあって殆ど刃が入らんぞ」

「先輩とか司祭様とか、あの辺りの人達を比較対象にしないでもらえます!?」

流石に力比べをするつもりは無いのか、抗議の叫びをあげたイケメンは振るわれる剛剣を受け流しながら距離を取る。

その間にも断続的に水弾が発射され、回避に移るブライシオには追撃を行う余裕は無いようだ。

「うむ、水球の数も以前より増えている。やはり厄介だな、シンヤは」
「楽しそうに言われても反応に困ります、よ！」
シンヤ君の制御の下、四方八方から放たれる水弾と彼自身の手によって振るわれる氷の刃。
圧倒的な制圧力を以て襲い来るそれらを、野生動物みたいな身のこなしと振り回す特大剣（グレートソード）によって受け止め、叩き落とす獣人の戦士。
武舞台を囲む様に浮遊する水球に遠距離から撃たれまくってるというのに、指摘通りにブライシオは楽しそうだ。
出身は帝国らしいが、その喧嘩大好きな気質は紛れも無く純度の高い魔族のソレである。
《災禍》の連中とはウマが合いそうだな……実力も加味すれば、そら勧誘もされますわ。
『これは凄い！　本職の魔導士顔負けの魔力制御！　見た処ブライシオ選手は回避で手一杯に見えますが……！』
『試合ということで圧縮した水弾のみに種を絞っているみたいですね……実戦ならもっと殺傷力の高い攻撃方法を多用すると思われます』
『なるほど、ではアイミヤ選手は手加減をした状態で圧倒していると？』
『底を見せぬは両者ともに、でしょうな。ブライシオ殿もアイミヤ殿の手腕を満喫して

いる様に見受けられます』

キャリーラさんがそうと判断した様に、素人目には魔法で周囲を囲んだシンヤ君が押してるように見える。

が、その優位性は薄氷の如き脆さだ。というか、わんこ(ブライシオ)が水遊びを楽しむのを止めてからが本番といって良いだろう。

サルビアが述べた通り、シンヤ君が試合用の戦闘方法という自身に課してる枷を外せば流石に今の様な余裕は無くなるんだろうが……まぁ、お祭りの催し物だからね。

二人に限らず、出場者には戦士のプライド的なものもあるだろうが、個人的には互いにこのスタイルのまま決着まで行くというのもそれはそれで正解な気がする。

浮遊する水塊の数を減らしてみようと思ったのか、舞台を縦横無尽に駆け回っていたブライシオが手近な一つに肉薄し、剣を叩き込む。

魔法で浮いているとはいえ、それ自体はただの水だ。右から食い込んだ刃は抵抗なく潜り込み――普通に左側から抜けた。

当然ながら水塊には傷一つ付いてない。というか水だから付く訳が無い。

「――む?」

「水は斬れもしないし、砕けもしない。簡単に壊せはしませんよ」

戸惑う獣人に対して水弾と剣での波状攻撃を一旦止め、ちょっと自慢げにシンヤ君が

笑う。

返答の代わりにブライシオは手首を返し――刃ではなく、分厚く幅広な特大剣（グレートソード）の腹で水塊をぶん殴った。

パァン！　と風船が割れる様な音を立てて弾け飛ぶ飛沫。斬れも砕けもしないが破裂はした模様。

一撃で破壊、とまではいかなかったが、ビチャビチャと石畳の上に飛び散った分、水塊の大きさは半分程にまで小さくなっていた。

「うむ、良し」

「良しじゃないが!?　何この先輩相手に訓練してるときみたいな理不尽感……!!」

おう、言ってくれるね後輩。

そもそも会って間もない頃、手合わせしたいとか言い出したのはチミの方だろうに。

しゃーないやろ、近くに大量の水源があるなら話は別だろうが、今回みたいに水塊を召喚してそれを運用する戦い方は《三曜の拳》のカモなんだってばよ。

水塊を召喚した直後に《流天》で全部掌握して地面にバッシャーンってしたらシンヤ君白目剥いてたっけ……俺は悪くねぇ！　ちゃんとリクエスト通りに実戦に近いノリでやっただけだし！

水塊を破裂させるのが思いの外楽しかったのか、斬り結びながらブライシオが手近な

水源を破壊しに掛かる。
徐々に浮遊する水塊達が吹き飛ばされて小さくなっていくが――やられる側が、どうせ壊されるなら一気に使い切ろう、と考えるのは当然だった。
激しく移動を繰り返し、氷の刃との剣戟音を響かせる傍ら、獣人の戦士が何度目かになる近く水塊への一撃を加えようとした、そのときだ。
剣が届く前に、水球が自ら破裂する。
弾け飛ぶ飛沫――ただし、その全てがこれまで放たれて来た水弾とほぼ同等の威力を持っていた。
咄嗟に剣を翳して盾とし、受け止めるブライシオ。槍衾か、はたまた矢雨の絨毯爆撃を受け止めたみたいな連続した着弾音が刀身から響く。
大量の散弾じみた攻撃をきっちり防いでみせたのは流石だが、動きが止まったその一瞬をシンヤ君は見逃さなかった。
膂力が遥か上の相手と幾度も打ち合ったことであちこちが欠けた氷の刃が、飛沫の一部を浴びて瞬時に復元する。
飛沫を防いだ事で身体に掛かる衝撃を捻じ伏せ、ブライシオが強引に身を翻すが、流石にこのタイミングだと完全な回避は無理があった。
斜め下から切り上げられた斬撃が、獣人傭兵の肩を抉る。

「――む？」

傷としては浅い……魔族の頑丈さを考慮すれば大した痛痒にはならないであろう一撃だったが、喰らった本人から困惑した声が漏れる。

「……肩と肘が鈍い。まるで雪の日にうっかり外で昼寝をしたときの様だ」

「人間だったら凍死してるんですけどそれ。というか、僕の剣の冷気が入ってそれで済むんですか」

ツッコミをいれる側まで困惑してて草。

だが、言葉の通り、ブライシオの肩口は出血が無く……代わりに霜がおりて白く染まっていた。

「へぇ……相手の馬鹿デカい剣と打ち合う為の手段だと思ってたけど……冷気の付与効果（エンチャント）も兼ねた代物だったか。器用だな」

隣のシアが、感心した様子で呟いている。

刀身に自身の魔力を通した氷を纏わせることで武器の強度自体を上げ、更に力負けしてしまう相手と打ち合っても氷が砕けることで腕に返って来る負担を軽減する事が出来る。

ブライシオみたいな剛剣の使い手と正面切って戦う為の対策だと思われた氷の刃だが、見た目通りの冷気による付与効果もあったみたいだ。

実質、一つの魔法に二つの付与効果(エンチャント)を乗せてる様なモンだ。水属性に関してはマジで得意ってレベルじゃねーなシンヤ君。

ぐりぐりと動かし辛そうに肩を廻したブライシオが、ノってきたとばかりに獰猛に笑う。

「やはり強いな、シンヤは。後に控える者達も強者揃い――帝都まで脚を伸ばした甲斐があった」

傷を負った事で遅まきながらスイッチが入ったのか、初戦の最後の打ち合いの時と同じ、ビリビリとした闘争心を露わにする獣人の戦士。

それを正面から受け止めながら氷を纏った両手剣をしっかりと握り直し、普段は女の子受けする柔和な笑顔がデフォルトのイケメン君は、凛々しさと不敵さの入り混じった笑みで以て応える。

「後の人達も強そうだって言うのは同感ですけど……ブライシオさんが戦えるのはこの試合までですよ？　準決勝に進むのは僕なので」

わぉ、流石ハーレム主人公。発言までイケメンや。

両者を称える歓声が降り注ぐ中、年若い女性の黄色い悲鳴が殊更に多く混じる様になる。

ミーハーというなかれ。実際、今のシンヤ君は普通にかっこいいぞ。普段は弄りがて

ら野次を飛ばす同業者ですら、素直に彼の勝利を応援しとるし。
普段はあんまり見せない自信有り気な表情のまま、彼は数と大きさを減らした水塊全てを武舞台の真上に移動させた。
「本気になった貴方と思いっきり戦ってみるのも悪くないんですが……勝っても消耗しすぎて途中棄権になりそうですし、そろそろ決めさせてもらいます」
「秘策あり、といった表情だな？」
「ええ、まぁ。この間、変わってるけれど試す価値はありそうなアドバイスを貰ったんですよ、絶対変だけど」
「うむ、楽しみだ――では、手並みを拝見といこう」
穏やかな問答はそこまでだった。
凍り付いたままの肩をものともせず、ブライシオが身を低くし、全身を撓め――一気に前へと飛び出した。
同時にシンヤ君の剣が掲げられると頭上の水球が全部破裂し、武舞台にバケツを引っ繰り返した様な豪雨が降り注ぐ。
――その全てが先の如く水の弾丸であっても、突き進み、突き破る。
おそらく獣人の戦士はそんな覚悟を以て、止まる事なく前へ出た。
だが、術者ごと巻き込む勢いで降り注いだソレは石畳に当たっても食い込むこともな

く弾け、舞台全体を満遍なく濡らすのみ。
この局面で水源全てを使って降らせたのが只の雨――その事実に、普通なら警戒か困惑を抱いて動きを止めるか、鈍らせそうなものだが――。
「喰い破る――！」
なんであれ、全て捻じ伏せて見せる。
そんな気概を感じさせる声色で牙を剥き出して吠えると、刹那の躊躇も無くブライシオは更に加速。
瞬きの間に両者の間合いは詰まり、特大剣（グレートソード）が渾身の打ち下ろしに備えて掲げられ。
それを支える強靭な脚が石畳を砕いて踏み込まれんとした、その瞬間。
「”凍（コールド）れ”」
シンヤ君の静かな声が響くと同時、ずぶ濡れとなった武舞台の全てが凍り付いた。
当然、剣を振り上げたブライシオもその対象――だが、濡れた鎧や毛皮に包まれた体表が凍った程度で、この獣人の戦士が止まる筈も無い。
一瞬の停滞すらなく、攻撃の動作は実行される。
――そう、不自然な程綺麗に凍り付いた地面に、スケートリンクばりにツルツルの路面凍結（アイスバーン）状態となった石畳に、ブライシオは踏み込んだのである。
「ぬぉぉぉぉっ!?」

慌てた様な素っ頓狂な叫び声が上がり、巨剣を構えた長躯がジャックナイフみたいな軌道で吹っ飛んだ。

相対していたシンヤ君を飛び越し、明後日の方向に宙を舞う。

それでも空中でぎゅるんと一回転すると、瞬時に体勢を立て直して着地したのは流石の身体能力だ。

だが着地した先でも待ち受けるは、いい具合に摩擦係数が減少した石畳である。

カーリングのストーンかホッケーのパックみたいに、場外へ向けて容赦なく滑るブライシオ。踏ん張り自体が利かない足場では埒が明かないと判断したか、握った得物をブレーキ代わりに突き立てようとして――。

「そーれ、とってこーい！」

「ワフッ！　――――ハッ!!?」

シンヤ君が場外へ向かってぶん投げた……骨付き肉を丸ごとジャーキーにした様な物体に気をとられ、そのまま武舞台から落っこちた。

『……勝負あり――って、えええええっ!?　ちょっ、えええええっ!?　ありなんですかコレ!?』

『はっはっはっはっは!!　アリですな!　戦場では通じぬでしょうが、場外ありき、祭りの催したる試し合いなればこその勝利への手法!　お見事!』

『予想外の決着の付き方でしたね……見逃しそうになりますが、ブライシオ選手を滑らせた氷の生成も凄い精度ですよ。鏡として使えるレベルじゃないですかアレ』

キャリーラ女史の困惑甚だしい叫びに、余程ウケたのか爆笑しながら手を打ち鳴らして答えるガンテス。

そんなおっさんを見てご満悦な表情のサルビアが、一応の補足とばかりにシンヤ君の魔法について解説を入れている。

観客席の反応も似たり寄ったりだ。予想外にも程がある結末に唖然としている者もいるが……笑劇(コント)みたいなオチに爆笑してる奴も多い。

相変わらず来賓用の特別席に座ってる魔族領の連中とか特にな!　《魔王》なんて腹抱えて笑って……あ、笑い過ぎてえずいとる。

いやー……勝っちゃったなシンヤ君。

うん、まぁ、勝敗自体はどっちが勝っても可笑しくない実力者同士だし、不満も問題

もある筈も無いんだけど。

頭から落っこちた体勢のまま、流石に釈然としない顔で――だが投げられたジャーキーはしっかりと手にして齧っているブライシオを見て、なんとも言えない気分になった俺は武舞台からそっと目を逸らす。

「――最後のアレ、お前の仕込みだろ」

ギクッ。

半眼でこちらを見つめて断言なさる聖女様の言に、思わず反射的に首を竦めてしまった。

……なんのことでしょう、ぼくはここでおうえんしてただけのいちかんきゃくですけど。

「いや、あのアホな方法はどう考えてもアイミヤの奴が考える作戦じゃないだろ。あんな斜め上な入れ知恵しそうなのはお前くらいだし」

「というか、にいちゃんこの間アイミヤさんと足湯に行ったばっかりじゃん。絶対そのときにアドバイスとかしたでしょ」

シアの追及にリアまで加わり、更に俺達の会話を聞いたミラ婆ちゃん達、膝の上で「わんわん負けちゃった……」としょぼくれていたオフィリの視線まで加わって、いよいよ以て逃げ場が無くなる。

……俺だってマジで実行するとは思わなかったんだってばよ！

氷でこかす、或いは滑らせて場外落ちを狙う、位までは割と真面目に考えてアドバイスしたんやぞ！

シンヤ君が「場外狙いならもう一手欲しいですね……」とか真剣に検討してた脇で、足湯につかってふやけた思考でポロっと漏らした言葉まで真に受けるとか思わねーだろ！

ブライシオさん犬っぽいしアホっぽいし、めっちゃ美味しそうな骨投げたら咄嗟に反応しそう、とかその程度の考えで口にしたモンが実際に起用され――あまつさえ完全に的中するとか予想出来るやつおるか!?　いやいない！（反語

「うーん……やっぱり似てる気が……」

「それな。同類の思考を予想した感がある」

おい、犬と傭兵繋がりで似てるってのはこじつけが過ぎるだろ、さっきも言ったが物申すぞ、その評価には。

一生懸命自己弁護する俺をひっじょーに温い目付きで見て来る姉妹（きょうだい）に、不服を申し立てようと身を乗り出すと。

下から伸ばされたちいさな掌にべちんと顎をたたかれ、視線を下げてみればそこにはふくれっ面のオフィリ嬢。

「わんわんなのにわんわんをおうえんしないの、ダメなんだよ、めっ！」
あ、はい。すいません。
聞き分けの悪い子を叱るようにぷんすかとお怒りになる幼女に、気勢を殺がれて思わず謝ってしまう。
なんか全体的にブライシオ推しとなっていた子供達にも続けざまにお叱りを受けて――空を見たくなって天を仰いだ。
……曇ってるなぁちくしょう。こんな気分のときくらい青空を見せてくれ。
愚痴を垂れた処で空が晴れる訳でも無し。
溜息をついて視線を外していた武舞台に再び目を向けると、ブライシオがやってきた相棒――ボルドの手を借りて身を起こす処だった。
「流石にアレは無いんじゃないか、兄弟」
「面目無い。負けた事に言い訳はしない――だが、これを見てくれ兄弟」
「む……これは、まさか……竜の腿か？」
「うむ。燻すのは軽くに留め、風味と旨みを閉じ込めている。逸品だ」
「成程、これは眼を奪われるな――処で兄弟、ものは相談だが……」
「断る。敗北の代わりに得た品だ、今日一日、負けと共に噛みしめるとする」
「ケチくさいぞ、兄弟」

うん、絶対似てないだろ（確信

やっぱりアホっぽい会話を繰り広げている傭兵コンビを見て、俺はひとり、静かに頷いたのだった。

隠し刃の一手

「……これで何カ所目だ？」
「廻った箇所はこれで最後。前のは外れだったけど……此処は二つ目と同じく当たりみたい」
帝都に拡がる水路。
その中でも特に入り組んだ下水路を注意深く進むアザルとイルルアが、下水道には不釣り合いな装飾や魔力導線が彫り込まれた壁を発見したのは数分前の事だった。
「そうか――で、ここにあるのも？」
「うん、転移魔法……《門》の起動に関するものだと思う。二つ目と同じだし、あの糸目に渡されたメモとも一致する」
「あー……いい加減名前で呼んでやれよ。北方の一件は向こうも不本意な仕事だったって言ってただろ？」
「そのうちね。オルカン達を取り戻せたなら、直ぐにでも敬称だろうが様付けだろうがしてやるわよ」

彼らの一党が拾い、協力する事となった《刃衆(エッジス)》の青年、トニー＝レイザー。
以前に関わった際には敵と称しても良い間柄だったのだが、彼の立場を考えれば潜入任務の類だったのは想像が付く。
とはいえ、当時の依頼人――北方の小さな男爵家の当主であった少女が被った被害を事を考えると、少女と恋バナをする程度には友誼を結んだイルルァからすれば塩対応になるのは宜なるかな。
ちなみに少女――ローレッタ当人は《刃衆(エッジス)》入りを果たした際に既にトニーと顔合わせをし、彼の謝罪を受け入れていたりするのだが……トニーが話さない以上、アザル達一党がそれを知る筈も無い。
石造りの壁面……正確には壁面の中に隠す様に埋め込まれた転移魔法の発動体をしげしげと眺め、アザルが呟いた。
「転移の魔道具か……普通に考えたら一介の冒険者にゃ縁の無い代物なんだがな」
使える術者、発動を可能とする魔道具、共に貴重な最高位魔法の一つだ。
莫大な魔力消費量や転移先の座標設定の難易度など、扱い辛い点は多々あれど、その有用性と危険性、そして希少性故に基本、国の管理下にある場合が殆どである。
本来は市井にある者はお目にかかる事など無いのだが……。
「ただの人攫い連中が使う様なものじゃない、よな」

「……」

苦々しさを多分に感じさせる頭目の言葉に、イルルァも黙して頷く。

数日前に路地裏で相対した、直接的な行動を担っていたゴロツキ共――連中が囀っていた”後ろ盾”。

少なくとも、人身売買を行う組織の背後にある”何か”が、ゴロツキ連中の言う通りに相当に大きな権力・財力を持つであろう事が証明されてしまった。

とはいえ、とうに腹は括っている。今更手を引くという選択肢などある筈も無い。仲間（イルルァ）の身内が巻き込まれているというのなら猶更だ。

食い入るように《門》の魔道具を睨み付けているパーティーの斥候（スカウト）担当の肩に手を置くと、アザルは極力冷静さを表に出した声色で言い聞かせる。

「一旦退くぞ。戦力が足りないのもそうだが……どの道、魔導士じゃない俺達じゃ発動出来ない。ここが当たりだってんなら、外に出て周辺の聞き込みをしてみよう」

トニーに渡された情報、人身売買の取引が行われていた場所は合計で五つ。

一つはトニーが調査済みであり、アザル達が調べた残り四カ所の内、《門》が確認されたのは二ヵ所。

行方不明となった孤児は、どう隠そうが都市外に出る際に検問で引っ掛かるであろう人数だ。

帝都の外に出たという記録が無い以上、この《門》を使って移動した可能性が高い。
先に発見した場所では、それらしき目撃情報は得られなかった――つまり、子供達が《門》を経由して連れていかれたのなら、此処のものである可能性は高い。
「レイザーの奴が言っていた転移者らしき男ってのも警戒しなきゃいけない。焦るのは分かる、だけど今は退く時だ。ここら一帯で情報収集した後、エクソン達と合流するぞ」
「……分かってる」
焦燥やもどかしさを押し殺して頷く仲間にアザルは頷き返し、二人は速やかに下水道からの撤収を開始した。

協力関係となった冒険者達が外での調査や物資入手に出掛けている中、トニーは彼らの泊まる宿の中で細々とした作業に励んでいた。
乳鉢（モルタル）に入った数種の植物を丹念に磨り潰す。
片腕がロクに動かない状態というのは、意外に厄介だ。辛うじて器を固定する程度の事ならば出来るのは不幸中の幸いだった。
いつもと逆の手で調合作業を行っている為、うっかり力加減を間違えて乳鉢（モルタル）を引っ繰

り返さぬ様に注意を払って工程を進める。
水と薬品を適量加え、練り続けること数分。粘り気が出てきた緑色のペーストに更に計量しておいた植物の種を数種投下。
磨り潰して粉末化させたそれらを混ぜ続けると窓を開けて換気した室内に、それでも中々に刺激的な香りが満ちて来た。
「……まぁ、こんなモンっスかねぇ。このザマじゃ量も作れないし、一本あるだけでもマシか」
微量の魔力を籠めながら練ったソレを、手近な場所に置いてあった小瓶――アザル達に頼んで購入してきてもらった霊薬の中に匙で掬い取って放り込む。
霊薬に込められた魔力と今しがた練った薬品の魔力、それらが混ざり合って小瓶の中で淡い光を放つのを確認し、軽く振って混ぜながら壁に掛けてある自身の外套（コート）のポケットにしまう。
取り敢えず、作業はそれで終わりらしい。青年は最低限だけ机の上に広げられた調合道具一式を片付けて机の木箱にしまった。
部屋に滞留してしまった薬品の臭いを逃がす為、作業台代わりに机の上に置いてある木板で扇ぐ様にして、室内の空気を窓に追い出す。
暫くパタパタと扇いでいると廊下越しに足音が聞こえ、部屋の前で止まり……程なく

して扉の向こう側から声が掛けられた。
「ちょっと、悪いけどドア開けてくれない？　両手が塞がってるのよ」
「その声はウェンディさんッスか。今開けますよっと」
　トニーとしては元より足音を聞き分けるのは得意なので分かってはいたが、一応は声に応えてドアノブを捻る。
「買い出しお疲れさんッス。エクソンさんは？」
「帝都の治療院に知り合いがいるから、少しだけ顔を出してくるそうよ。顔が広い人だから子供達についても何か見聞きしてるかもしれないんだって」
　両手いっぱいに食料品を筆頭に雑多な品々を抱えた女魔導士が、荷物を机の上に置いて一息ついたとばかりに大きく息を吐きだした。
「教会関係者なら孤児の子達も警戒してなかったって話ッスからね。良い着眼点だと思うッス……何か些細な事でも情報が入れば良いんスけどねぇ」
「まぁ、言いだしたエクソン本人も思い出したから念の為、程度の感じだったけどね」
　狐顔の青年の言葉に、肩を竦めて答え――部屋に残る微かな匂いを捉えて、ウェンディは眉を顰めた。
「……薬の調合でもやってたの？」
「あー……臭かったッスか？　いや申し訳ない、ちょいとウェンディさんの道具もお借

りしてたッスよ」
「許可を出したのは私だし、それは良いんだけど……」
少しばかり躊躇いがちな様子で視線を彷徨わせていたウェンディだったが、やがて言葉を濁すのも面倒だと思ったのか、再度大きく息を吐き出して単刀直入に切り出した。
「アンタさ……あんまり強力な霊薬をぽんぽん使うのは控えた方が良いわよ」
「おぉう……マジっすか。結構複雑な手順の品だと思うんスけど……匂いだけで分かるんで？」
「薬学に関しては師匠の影響でそれなりにね――って、私の話は良いの。今はアンタの事よ、レイザー」
女魔導士は腕を組み、椅子に座っているトニーの顔をなんとも言えない表情で見下ろす。
「アンタを拾った時に身体の中に残留してた霊薬も大概だったけど……エクソンと私に買い出しを頼んだ霊薬と幾つかの錬金材料……特定の手順で調合すれば薬効が強く出るやつでしょ？」
回復効果は高いけど、半分劇薬じゃないの。と、呆れの中に憂慮を滲ませる彼女の言葉に、青年は苦笑いを零した。
「いやぁ、転ばぬ先の杖、ってやつっスよ。何事も無ければポッケの中で薬効切れ起こす

まで眠ってるだけッス」

万が一を考えて用意しておかないと落ち着かないんスよねぇ、などとシレっとした顔で吐かれるトニーの言葉は「中毒じゃないの、心理的な」と手厳しくぶった切られる。

三度目の溜息を洩らすと、ウェンディはその豊かな胸の下で腕を組んで、眼前の狐を思わせる風貌の青年へと探る様な視線を向ける。

「……私達に協力してくれるのは、正直有難いわ。けど、そっちの立場からすれば最低限の情報だけ渡してさっさと王城に戻った方が良い筈でしょう？　戻ればもっと高度な治療だって出来る筈だし」

言葉を続ける事無く……だが、そうしない理由があるのか？　と眼だけで問いかけられて。

無言の疑問を受けとったトニーは、動く左腕で後頭部をガリガリと掻いた。

「いやまぁ、助けてもらった恩を返すとか、色々と理由はあるんスけど……ぶっちゃけ今までに得た情報（モノ）を整理すると、今は戻らない方が良いと言うか悲観的な妄想が現実味を帯びてきたというか……」

どうにも煮え切らない態度で言い淀む青年に女魔導士が訝し気な顔で首を傾げていると、二人は話し声が複数の足音と共に近づいてくるのを耳に拾った。

「あの馬鹿、ほんとーに怪我は大丈夫なワケ？」

「えぇ。お世辞にも軽傷とは言えませんが、容態は完全に安定していますよ。我々だけではこれ以上の治療は難しいので、後はそちらの方で高位の術者による回復を行って頂いた方が良いかと」
「やれやれ、早々に見つかったのもそうだが……拾ってくれた人達がアンタらだったのも悪運が強いトニーらしいね。心配性の問題児も落ち着いたし、肩の荷が下りるってモンだ」
「ちょっとお？　誰が問題児だってのさー」
声の主は三名。内二名の声にウェンディは聞き覚えが無く――だがトニーには聞き慣れた声である。
やっべ、と言わんばかりにその顔が引き攣るが、何かを言葉にする前にドアが開かれ、室内の二人は直ぐに声の主達と対面する事となった。
最初にドアを潜ったのは、この部屋を借りている冒険者一党の聖職者、エクソン。
後に続く様に入室してきたのは、一組の男女だ。
色素の薄い金髪に褐色の肌を持つ女性と、彼女より一回り程年上のブラウンの髪の男性。
どちらも独自に気崩してはいるものの、騎士装備に身をまとっており――何より、現在壁に掛かっているトニーの外套（コート）と同じ物を羽織っていた。

「……知り合い、というか同僚よね？　当然」
「おっふ……」
男女の格好を見て直ぐ様に察したウェンディの言に、トニーは彼が『旦那』と呼ぶ青年を倣うが如く白目を剥いて呻き声を洩らした。
部屋に入って来た男女は椅子に腰を下ろしたトニーを見て、軽く目を見開き……沈黙する。
特に女性の方は反応が顕著だ。
数秒、黙り込む間に顔に浮かぶ感情が目まぐるしく変わり、安堵、心配、怒り、最後にそれらを押し殺す我慢の表情となり、大きく息を吐き出す。
金髪に褐色の肌の女性――シャマことシャマダハルは、無言のままズカズカとトニーの眼前へと歩みを進め。
その背をやはり黙して見送る男性二人……エクソンの心配そうな視線を受け、ローガスは言葉の代わりに大仰に肩を竦める。
「……あのー、シャマ……さん？」
無言・無表情で自分の頭部や首元などをぺたぺたと触診するシャマにちょっとビビった様子のトニーが躊躇いがちに声を掛けるが、彼女はそれには応えず。
同僚の頭部や首まわりに負傷が無い事を確認し終えたシャマは一つ頷き――その脳

天に手刀を叩き込んだ。
「ア痛ぁ”!?」
「この馬鹿トニー！　都市内の任務で下手打って大怪我するとか新兵かっつーの！」
悲鳴をあげる同僚を一喝し、そのままベシッ、ベシッっと手刀を繰り出して額へと追撃を行う。
「ちょっ、待っ、シャマ!?　自分怪我人ッスよ!?」
「怪我人なら怪我人らしくベッドで寝とけ！　なんで普通に起きて調合なんてやってんだこの馬鹿！」
僅かな残り香から、トニーが個人的に調合している霊薬を今しがたも作成していた事を察したらしい。
重症である右腕と胴には間違っても衝撃が伝わらない様にしつつも、無傷の額に的確に痛みを与えるという何気に洗練された技術が披露されるが、打たれているトニー以外に気付く者がいない無駄な技巧である。
「ちょっとちょっと、落ち着いてよ騎士様。そっちからすれば怒って当然かもしれないけど、私達からすれば貴重な情報を提供してくれた恩人だし、何よりこいつ、一応怪我人よ?」
「……あたし達がっ、必死こいて探してる間にっ、こんな美人のおねーさんに看病されて

たとかっ、ちょー腹立つぅ！」
　なので、流石に見かねたウェンディが慌てて静止の声を掛けたのだが……マジマジとその顔を見つめたシャマは火に油を注がれた勢いでヒートアップする。
　興奮した様子でペチンペチンとチョップを繰り返すシャマを背後からローガスが抑え込んだ。
「どうどう、落ち着けって」
「は？　落ち着いてるんですけど。落ち着いて目の前の馬鹿に折檻してるだけだし」
「髪の毛逆立てそうな位に興奮してるだろうが。負傷箇所を避けてるとはいえ、重傷者をひっぱたくのはやめとけ」
　猫の首根っこを掴むノリでギャル系騎士の襟首を掴んで持ち上げると、後方にストンと落とす。
　自身の眼で無事を確認出来たのと、一頻り心配を掛けた事に対して怒りをぶつけた事で溜飲が下がったのか、シャマは若干不貞腐れた様子ではあるがされるが儘だ。
　不機嫌ではあるがようやっと何時もの調子を取り戻した問題児をトニーとローガスが若干生暖かい目で見つめ、次いで互いに目を合わせて口を開く。
「よう、生きてたみたいで何より。お前さんにしちゃ、珍しくドジを踏んだな」
「いやぁ、申し訳無いッス。それに関しちゃ言い訳の仕様も無いんですが……」

揶揄いを含んだ同僚の言葉に、青年は少しばかり苦笑し――だが直ぐに表情を引き締めて事の経緯を語りだした。

彼が追っていた一件とその際に遭遇した連中……特に自身をあちこち斬ってくれた黒髪の男について、警戒を注意を添えて。

「隊長達の同郷か。お前さんの怪我を見る限り、相当に使うのは分かるが……」

「……ふーん、ソイツがアンタを刻んだ直接的な下手人なんだ」

難しい顔をして唸るローガスと、冷えた声色でまだ見ぬ転移者に対して敵意を露わにするシャマ。

包帯を幾重にも巻かれて固定された右腕を撫でながら、トニーは虚空を見上げ……短い時間だが件の転移者と戦闘を行った記憶を掘り返して、厳しい口調で断言する。

「流石にアレと同レベルのが何人もいるとは思えないッスけど……捕縛にしろ、倒すにしろ、《刃衆（ウチら）》でも単騎で当たって良いのは隊長とネイトさん……あとは副長くらいッスね。他の面子は三人一組（スリーマンセル）で対処しないと退くのにも犠牲者が出る可能性が高いっス」

「お前がそこまで断言するレベルか……そんな奴がちんけな人買い連中の用心棒やってるってのは、なんとも腑に落ちない話だな」

「要は二人以下で戦らなきゃ良いってだけでしょ。三人一組（スリーマンセル）と言わずに全員で囲んでボコってやれば良いだけだし」

個々の武勇が突出している《刃衆(エッジス)》ではあるが、元より大戦時代は邪神の眷属――とりわけ上位の存在を相手にする際には部隊の連携を以て確実に討滅を果たしてきた。

件の転移者の脅威度が上位眷属に匹敵するものだとしても、問題は無い。これまで行ってきた様に、場を整えて狩ればよい。

そう主張するシャマの言葉に異論は無いのか、残る二人も頷いた。

「――それで、騎士レイザーをはじめ、皆さんはこれから王城に帰還する、という事で良いのでしょうか？」

会話が一旦落ち着いたのを見計らったのか、エクソンが軽く片手を上げて述べた質問にローガスが代表して首肯する。

「あぁ、今回は本当に助かった。同僚を保護してくれて感謝する。全部片付いたら正式に謝礼をしたいから、可能なら――」

「あ、自分はもうちょい此処で冒険者の皆サンと行動するんで、二人で帰ってもらって良いっスか？」

のほほんとした、だがきっぱりはっきりとした口調でローガスの台詞を遮ってみせたのはトニーだ。

言い終えるや否や、シャマが「はぁ!?」と語尾を荒げて叫び、残った三名は呆気に取られて発言した当人の顔をマジマジと見つめる。

「この馬鹿トニーッ、自分の状態を考えろ！　さっさと王城に戻ってレティシア様かアリア様に頭下げて診てもらうの！」
「まぁ、大丈夫ッスよ。基本、よっぽどの非常時でもない限りはこの部屋で情報の提供と整理をお手伝いするだけなんで――動かなきゃいけないときの保険も用意したし、何かあってもここの皆サンと一緒に逃げ出す位は出来るッス」
「そういう事を言ってるんじゃない！　アンタが怪我を無視して此処に踏みとどまる理由が無いだろ！」
　とっとと戻って療養に入れ半病人！　と。言葉遣いこそ乱暴だが仲間の身を案じるが故の怒りを見せる金髪褐色肌の女騎士の剣幕にも、動ずることなく。
　放っておけば襟首掴んで王城まで強制的に引っ張っていきそうな同僚に対して、淡々と応じる狐顔の青年。
　彼の提案自体は有難いが、その意図が読めない冒険者二人が困惑して顔を見合わせていると、やはりというか、荒ぶるシャマと冷静なトニーの間に割って入ったのはこの場の最年長たるローガスであった。
「落ち着けシャマ。理由が無いとは言ったが……トニーが理由も無しにこの手の提案をする事こそ無いだろう」
「……ッ」

その言葉には頷けるがトニーの意見自体には賛同出来ないのか、シャマが不満を圧し殺しているのがありありと伝わる表情で押し黙る。
一回りは年下の同僚が本気で怒っているのを察し、ローガスは漏れ出そうになる嘆息を、これまた幾度目になるのか胸中で無理矢理に留めた。
（やれやれ……一服したくなってきたね、どうにも）
全く以てガラじゃない。こういうのはネイトの役目の筈だ。
自分普段の立ち位置を顧みて、内心で愚痴るが……遮った以上、話を聞かない訳にもゆくまい。
「……で、トニー。妙な事を言い出した理由は幾つか予想出来るが……此処にいるべき理由があるのか、それとも城に帰れない理由があるのか、どっちだ？」
「後者っスよ。多分、ローガスさんが考えてるパターンで一番タチの悪いやつだと思うッス」
「マジかよ……あークソッ、家帰って酒飲んで寝ちまいたくなってきた」
嫌な予感や予想ほど的中するものである。
露骨に顔を顰めると、ローガスは今度こそ耐え切れずに心底本気で嫌そうに嘆息した。
「おいこら、そこの野郎二人。二人だけで会話を完結させるとかちょー有り得ないんで

すけど。説明しろ」
「分かった分かった、後でな。今は駄目だ」
面倒臭そうに返事をするローガスであったが、ほんの一瞬、この部屋にいる冒険者二人へと視線を向けた事にシャマも気付いたのか。不満気な表情は敢えて隠さず、表面上は不承不承といった様子で首を縦に振る。
直情的な娘ではあるが、冷静であればこの程度の腹芸はやってくれるのだ。エクソン達はトニーの恩人ではあるが、流石に部外者――帝国に所属する者以外には軽々と聞かせられる話でもなかった。
……現状、トニーは行方不明・生死不明の扱いである。
《刃衆（エッジス）》の実績と向けられる信頼故に、多少遅れたとしても無事に帰還してくるという意見も多く、実際に上はそう判断して捜索の為の人員を動かしていない。
だが、今考えるとそれも不自然なのだ。
どうであれ、都市内での犯罪行為に対する調査をしていた騎士と連絡が取れなくなった以上、最低限足取りを追う調査くらいは行って然るべきである。
だが、実際にはトニーを捜索しているのは無理矢理仕事を休んで飛び出したシャマと、それに付き合う自分だけだ。隊長達がそれとなく自分達の仕事の穴埋めの人員を手配したりと、こっそりと支援してくれている様ではあるが。

――はっきり言ってしまおう。

自分達の部隊の名声と信頼性――それを逆手に取る形で、捜索隊を組まないという流れに持っていった者がいる。

少なくともその可能性がある、そうローガスは判断していた。

薄々と感じていた、程度のもので確信とは程遠かった予想なのだが……トニーも同様の結論に至って王城への帰還を拒んでいるのだとすれば、非常に、ひっじょーに面倒くさい話になってくる。

今回の一件の発端である、孤児や身寄りの無い難民などの拉致。それを組織的に売買する連中。

その息の掛かった者か、或いはもっと直接的に、組織の一員である者が王城内にいるという事になるからだ。

実際にトニーの捜索を不自然さを極力排除した流れで妨害してみせた事を考えると、ただの文官や騎士という可能性は薄い。

自然、ある程度の裁量や決定権を持った立場の人間、という事になるだろう。

流石にごく少数、精々数名の筈だ。もっと大人数で、平和になった途端に所属してる国家・組織の腐敗が始まっていた、などとは考えたく無い。

無いが、現状で内通者の存在を肯定する要素はあれど逆は無いのもまた事実。

――だからこそ、トニーと彼が協力している冒険者達は、強力な鬼札となる。
隠されたトニーの生存と、彼が得た情報。それを元に冒険者達が独自に行う調査は、人買い連中を追い詰める強力な一手と成り得るだろう。
当然、内通者に気取られてはならず、王城内の誰が疑わしいのか候補すら立てられない現状、表立ってのトニーの帰還は悪手である。
確実に隠すなら現状を維持し、部隊内――《刃衆(エッジス)》でのみ情報をやりとりすべき。
そこまでローガスは思考し、おそらくは同じ結論に至ったが故にこの場に残ると言い出したトニーを見据え――彼もまた、その考えを肯定する様に頷いた。
「……分かった、取り敢えずお前さんが無事って事だけを部隊内のみで周知って事で良いな？」
「ええ、それでお願いするッス。他との遮断を徹底して貰えると」
「陛下には？」
「問題無く。ですが、先ずは陛下御一人でお願いします」
レーヴェ将軍すら情報共有の対象から省け、という事らしい。
流石にかの御仁が内通者だとはトニーもローガスも欠片たりとも思っていないが、何処から話が漏れるか分からない以上、上への報告は帝国の主たる皇帝のみに絞るという判断は妥当だった。

言葉少なに、だがその裏に押し隠した多量の情報の交換を終えると、二人はこの一手の中核となる冒険者達へと身体ごと向き直る。
「あー、そんな訳で。出来ればもう暫くの間、トニー（こいっ）の面倒を見て貰えると助かる。謝礼はするし、別途で掛かった諸経費も出すんで、引き受けて貰えないか？」
「御存知の通り、身体はあちこちポンコツなんで実働面では殆ど役立たずなんスけど……自分の部隊からの情報追加も期待できるし、このまま協力体制を維持させて欲しいッス」
揃って丁寧に頭を下げる《刃衆（エッジス）》隊員二名を見つめ、聖職者と女魔導士はもう一度顔を見合わせ――そう間も置かずに頷いた。
「ええ、これまで通り手を貸して頂けるなら、私達としても助かります」
「ま、一応はウチのリーダーや斥候に話を通したい処だけどね。反対はしないと思うけど」
帝国の内情や調査している相手の規模までは察する事が出来なくとも、これまでの会話を聞けばトニー達に幾つかの思惑があると判断するのは容易だ。
だが、それは冒険者達（かれら）も同じ――被害者の救助という大きな括りでは目的が一致している以上、互いに手を取る事に躊躇いは無かった。
此処まで話が進んで尚、トニーが残ることに反対する気は流石に無いのか、シャマが

切り替える様に息を一つ吐き出し、提案する。
「それじゃ、いちおーお仲間さんに挨拶くらいはしておきたいかなー」
「そうね、レイザーの奴の案で、安全性を重視して日の出てる内の調査に絞ってるからそろそろ帰って来る筈よ」
「なら待たせてもらうとするか。頻繁に会うのはリスクがあるから、今日の内に面通し位はしておきたいしな」
「では、お茶を淹れるとしましょう。この様な有事ではありますが、帝国の精鋭たる方々と良縁を築けるのは光栄ですね」
一旦小休止だ、と言わんばかりに少しばかり緩んだ空気となった宿の一室で、改めて互いの紹介が為される。
トニーとしては、このまま冒険者達に協力することで局面を変えたいと思っていたが……こうして部隊の仲間と連絡が取れ、連携出来たのは僥倖だった。
未だ全容掴めぬ悪党共。
影に蠢くそれらへと、明確に一手打ち出した手応えに、包帯だらけの青年はその狐を思わせる容貌に笑みを浮かべ、意気揚々と手を挙げる。
「空き時間があるならちょいと調合の続きをしても良いっスか？　保険が一個しか用意出来ないのはどうにも――」

「「大人しくベッドで寝てろ馬鹿」」
「アッ、ハイ。すいません」
折角だから作業の続きを、と思い、上げた声は女性陣から異口同音でピシャリと切って捨てられ。
トニーは肩を落としてすごすごと寝台に潜り込んだのであった。

準決勝・第一試合

闘技大会、準決勝。

予定通り二回戦から数日空けて行われるそれを観ようと、初日より増え続けた観客が闘技場（コロッセオ）に大勢詰めかけている。

立ち見となった多くの者達の間でトラブルが起こらぬよう、急遽警備の人数を増やす事で対応にあたっている程だ。騎士や衛兵達は大変だろうが盛況なのは催し的には良い事だろう。

本日の試合を待ちわびる多くの人間で溢れた観客席と、それによって齎される熱気。

会場内でそんな喧噪から唯一離れた場所である選手控室で、アンナは腰に下げた革帯（ベルト）とそこに取り付けられた愛剣二刀の鞘をチェックしていた。

「……うん、良し」

不備は無し。最後の装備の確認を終え、長い銀髪をサイドで括った騎士の少女は頷く。

体調は悪くない。本来なら部下達の様にあちこちに駆り出されて帝都中を駆けずり

回る事になる立場ではあるが、この大会への出場――可能なら優勝を期待されている身という事で、祭りが始まってからは仕事量が抑え気味。寧ろ身体的には好調と言っても良かった。

尤も、開催早々に問題が発生したせいでメンタル面では色々と疲労していた自覚はあったが……最大の懸念であった行方不明の部下の安否は二回戦の全試合が終了した日に確認出来た。

問題が全て解決した訳ではない、トニーからの伝言を預かったローガス達からの情報と、そこから導かれる推論……孤児や難民の人口調査だった筈の一件は、より厄介な面倒事へと変わったのは確定だ。

だが、部下が、仲間が欠けていない。この一点のみで十分に朗報である。

情報の機密性を維持したまま、《刃衆》のみで独自に動くというトニーの案に陛下もGOサインを出した。ならば、あとは表立って動けるだけの材料を集めて敵を一気に蹴散らすのみだ。

（と言っても、現状だと私に出来るのは囮擬きだけなんだけど）

鞘から抜いた刀身を見つめ、そこに映る自身と眼が合って肩を竦める。

闘技大会の花形選手の様な役割を宛がわれた身だ。トニーの無事も確認出来た今、これを放り投げて件の人身売買組織を叩き潰しに行く訳にもいかない。

当初の目的通り勝ち進み、大会を盛り上げ――多くの人の目を集めれば多少は部隊の皆も動きやすくなるだろう。
「なんにせよ、やる事は変わらない、ってワケね」
それじゃ、一丁やってやりますか。
そんな風に内心で気合をいれ、アンナは不敵に笑うと剣を鞘に納めたのだった。

試合開始は間近。控え室にやって来た係の者に出番を告げられ、部屋を出る。
アンナが武舞台へと繋がる石造りの廊下を進むと、通路の奥から割れんばかりの歓声が聞こえてきた。
『さぁ、いよいよ始まります準決勝第一試合！　過酷な予選を越えて本戦に残った十四名の猛者、そのベスト４が激突するお時間がやって参りました！』
歓声に負けぬ様に拡声の魔道具を用いて声を張り上げているのは、確か文官のキャリーラだ。
主に現場の武官と王城勤めの文官の意見の取りまとめや均衡を取る為の仕事に従事している彼女だが、その役柄上、両方から信用厚く、顔も広い。

今回は解説役だったシャマが急遽抜けた穴を無理を言って埋めて貰った形だ。アンナ――というより《刃衆（エッジス）》全体でそれを黙認したのも確かなので、後で何か礼をした方が良いだろう。

そんな事を考えながら歩を進め、通路を抜ける。

『先ずは獅子の方角！　言わずと知れた優勝候補！　二回戦の鮮やか過ぎる秒殺劇は強烈な光景でしたが今回はどうなるか、アンナ＝エンハウンス！』

武舞台上空に拡がる空は良い天気だ。本選が始まってから一度も雨天に当たってないというのは天候に恵まれていると言えるだろう。

大歓声、と言って良いであろう観客の声と降り注ぐ秋の日差しを浴びながら、アンナは眩しさに目を細める。

愛想良く振舞う、なんていうのはガラでは無いが、帝国騎士の看板を背負って出場している以上はある程度は観客の声に応えなければならない。

軽く手を挙げて振りながら、武舞台へと進む。

闘技、という種の催しなので愛想笑いまではしなくとも良いのは助かる。これが友人のレティシアあたりであれば、背負っている聖女という肩書の御蔭で笑顔を振りまかなくてはならないだろう。

その友人だが、今日は姉妹で来賓用の席での観戦になる様だ。

隣には《魔王》陛下やその部下の人達の姿も見える。闘技という時点で魔族領の面々が全試合欠かさず観に来ているのは当然なので、これは特筆すべき事でも無いが。

意外なのは、レティシアや妹御のアリア様の側にあの駄犬の姿が無い事であった。

軽く周囲を見回すが、周辺の観客席にも姿は無い。

今日は観客の人数が多すぎて警備の増員を行ったというのは先程述べた通りだ。奴も煽りを受けて未だに警備に精を出しているのかもしれない。若しくは他に予定があるのか。

……レティシア達にくっついて全試合欠かさず観戦してた癖に、自分の試合は観に来ないつもりだろうか。

いや、別に強制する様なものでもないが、なんかムカつく。

そんな思考が頭を掠めたりもするが、普段駄犬扱いしている友人の姿を探して武舞台上でキョロキョロとするのもなんだか癪なので、アンナは対面の選手入場口――竜の方角を見据えて静かに対戦相手の登場を待つ。

『対するは竜の方角！　教会の腕利きの聖職者達と連続で当たるという引きの悪さを見せながらも、見事勝ち上がって来たファルシオン選手です！』

キャリーラの紹介によって上がる歓声にも特に反応は示さず、真っ直ぐに進んで舞台に上がったのは年若い少女だ。

身体にフィットするタイプの軽装に身を包んだファルシオンは、年齢的にはアンナより少し下に見える。年齢的にはローレッタと同じ、出場者中最年少と言っても良いのではないだろうか。

眼前の対戦相手を、改めてアンナはマジマジと見つめた。

亜麻色、というにはやや色味の薄いショートカットの髪に整った容姿……間違いなく美少女だ、それもかなりの。

肌もまた白い。よく見れば自分と同じ碧色の瞳も色が淡いので、そういう体質なのだろう。

纏う装備以外は全体的に淡い色合いのせいか、儚げな雰囲気なのも良い。アンナちゃんポイントを高得点付けたくなる娘だった。

選手登録の際に記入されたプロフィールによれば、何某かの戦闘職に就いてる訳ではなく、ただの旅行者という話だが……表情が乏しい所為か、何処か人形的というか、浮世離れした印象がある。

「よろしくお願いします」

「あ、うん。よろしくね」

丁寧に頭を下げるファルシオンに、軽く礼を返して応じるアンナ。

対戦相手の観察――というか半分鑑賞だったが――を打ち切り、意識を切り替える。

亜麻色の髪の少女が腰に吊った鞘からスラリと曲剣を抜き放つのに合わせ、銀髪の少女がダガーとショートソードの二刀を抜いて両の手にぶら下げた。

静かに対峙したのは、数秒だ。

『では、準決勝第一試合……始めっ！』

実況の女史が号砲代わりの声を上げると同時、間髪入れずにファルシオンが動き出す。

――実際の処、現在闘技場（コロッセオ）にいる殆どの者達は、アンナが圧勝する、と判断していた。

それは、大部分の観客達だけでなく、これまでの試合を観て来た実力者達や大会に参加した者達もそうだ。

《刃衆（エッジス）》副隊長の肩書は伊達では無い。二回戦で見せた圧倒的な地力の高さにものを言わせた秒殺劇も併せれば、多くの者が同じ結論を出すのは無理からぬ事であった。

特に目の肥えた者や腕の立つ者からすれば、ファルシオンの試合は……言い方は悪いがパッとしないものであったのがそれを助長する。

一回戦のカーク神父は相手が一般の旅行者の少女という事で本気を出せず。

二回戦のシスター・ミンスタことチェルシーは殆ど稽古の様な試合内容であった。

身も蓋も無く言えば、二試合とも勝ちを譲られた様な決着であり、特に二回戦はチェルシーが初っ端から倒す気で掛かればあっさりと逆の結果で試合が終わっていた、とい

うのが会場の強者達の認識だ。
それだけに、次の瞬間の光景は多くの者にとって瞠目に値した。
強烈な踏み込みによって石畳が砕け散る。
アンナのお株を奪う様な素早い魔力強化からの高速移動。
瞬き一つの間に眼前に現れた相手に、騎士の少女の眼が見開かれ。
その眼前で亜麻色の髪がふわりと広がり、加速の勢いを乗せた蹴りが空気の壁を突き破って打ち込まれる。
それはチェルシーが試合で見せた一撃に酷似しており。
動きだけではない、鋭さと重さもただの猿真似と言えないものがあった。
――だが。
「びっくりした。チェルシーさんの蹴りにそっくりだね」
驚きと感嘆が半々になった声色で、アンナが呟く。
開幕に放たれた強襲の一撃はあっさりと躱され、空を貫くに留まった。
胴の中心を狙って放たれた突き蹴りを半身になって紙一重で回避した銀髪の少女は、相手の蹴り足に握った剣の柄を叩きつけようとする。
が、躱されたとみるや即座に脚を畳んで戻したファルシオンは地を蹴って後退し、柄を用いた反撃は空を切った。

「戦闘開始直後の奇襲は失敗。通常の戦闘に切り替えます」
「前の試合で私がやった事の再現って感じ？　確かに意表は突かれたけど」
それで終ったら流石に間抜けが過ぎる。立場的にも個人的にも遠慮したい負け方であった。
肩を一つ竦めると、曲剣を片手に間合いを詰めて来るファルシオンをアンナは迎え撃つ。
互いの剣が陽光を反射して閃き、火花を散らして打ち合わされた。
両者ともに剣と体術を組み合わせた戦い方を主とするスピードスタイルだ。
近距離での刃の交差に至近では肘や膝が加わり、間合いを仕切り直すように魔力強化された脚力を以て目まぐるしく立ち位置が変わる。
ともすれば二回戦のブラウィンの様に秒殺も有り得ると思っていた観客からすれば、アンナの土俵で喰らい付いてゆくファルシオンに驚きと賞賛の歓声があがった。
特に一定以上の実力者からすれば驚きの度合いは大きい。何故なら――。
『これは凄い打ち合い！　というか私には早すぎて目に追えないのでどちらが優勢劣勢なのかもよく分かりません！　司祭様解説よろしくお願いします！』
『開始直後の蹴り技もそうでしたが、ファルシオン選手の攻防にはこれまでの対戦相手の技が一部取り入れられている御様子。完全、とは言い難いですがこの短期間で実戦に

耐える領域に仕上げてくるとは驚異的な吸収力ですな』
『成程。素人目にも彼女が強くなっている様に思えたのですが、それは勘違いでは無いと？』
『体術だけでなく、魔力強化の方も滑らかというか……前回の試合よりはっきりと質が上がっていますね。偶に私も追い切れなくなりますし、明らかに強さの上限が上がっていると思いますよ』
前衛（ガンテス）と後衛（サルビア）、両名がそれぞれの視点から断言する通り、亜麻色の髪の少女は総合的な戦力を劇的に向上させている。
そしてそれは、現在打ち合っているアンナが一番に感じている事でもあった。
（いや、ホント強くなってるわコレ。二回戦までとは別モノじゃない）
幾度目かの剣閃を身を傾げて回避しながら、内心で舌を巻く。
主に攻めはチェルシーの体術、守りはカーク神父の武器術を取り入れているのだろうか。
体術は回避主体であった戦い方に両者の闘法が上手く落とし込まれているせいで、隙が無くなっている。
忌憚なく言ってしまえば、本戦出場者の中では下から数えた方がずっと早い、位の実力だった筈の眼前の少女は、別人ですと言われてしまえば信じてしまいそうな程には強

くなっていた。
例えば二回戦で敗退してしまった部下――ローレッタでは今のファルシオンを崩すのは難しいだろう。
或いはあの娘なら気合と根性でこの守りも抜けるかもしれないが、チェルシーは交差法（カウンター）に秀でていた。ならば彼女の攻め手を学んだこの少女も、同様の手を使う可能性が高い。
守りを崩して一撃入れようとした相手にカウンター。技巧派としては王道のスタイルだが正面突破を得意とする者には天敵と言って良い。
まぁ、それでもあの娘の爆発力ならワンチャンあるんじゃなかろうか、と思ってしまうのは身内贔屓抜きでの素直な評価である。あの負けん気で《刃衆（ウチ）》入隊試験も一発で通った訳だし。
斜め下から弧を描いて振り上げられる曲剣の切っ先。
軸足を回転させて身を捌くと、剣を振り抜いた勢いもそのままにファルシオンの身体が翻り、旋回する。
それを見たアンナも瞬時に腰を捻って脚を跳ね上げた。
地から上段へと昇る後ろ回し蹴りと、それを迎撃する回し蹴り。
互いの一撃が交差し、すらりと伸びた少女達の長い脚が×の字を描いてぶつかり合

う。
練り上げられた攻性を伴う魔力が蹴撃と共にぶつかり合い、紫電の如き光を放って武舞台上で弾ける。
拮抗は数瞬――反発する魔力に圧される様、二人同時に後方へと軽く跳躍して距離を取った。
当初、多くの者が抱いていた予想を上回る戦いに、沸き立つ観客席。
惜しみなく降り注ぐ歓声と賞賛の中心に立つ両名は、片や表情を変える事無く剣を構え直し、片や軽く息をついて蹴り合った脚の爪先でトントンと石畳を蹴る。
「ふー……こう言っちゃなんだけど、予想以上過ぎてびっくりしてるわ。何やったら数日でこんなに変わるのやら」
「先の試合で私（ファルシオン）の技術は大幅な改善と進歩を行いました。現状、貴女と比べてもそう変わらぬ戦闘性能（スペック）を有していると思われます」
淡々と応じる中にも微かな自信を滲ませる亜麻色の髪の少女の言葉に、それを挑発と受け取る様子も無く。
アンナは寧ろきょとんとした表情を浮かべて――ややあって納得した顔に変わって頷いた。
「あぁ、確かに神父様とチェルシーさんの強さが上乗せされるっていうのなら、その自信

もそんなに的外れじゃないかも」

けどね、と。口の中で続く言葉を短く転がして。

《刃衆(エッジス)》の№2である少女は、そこで初めて明確に構えを取った。

「貴女が手に入れたのは二人の”技”であって”強さ”じゃない。様になってはいるけど、覚えたての技(ソレ)にはあの二人の”重み(こわさ)”がない」

「……？　その言葉は不可解です。技術の模倣・再現率は一定値以上。魔力量とそれに依る強化率を加味すれば、現在の私(ファルシオン)がカーク様とチェルシー様……対戦した御二方を上回っているのは確実と思われます」

ダガーを逆手に持ち替え、半身となって低く構える対戦相手に向け、同じく剣を構えたまま不思議そうに僅かに首を傾げるファルシオン。

人形染みた受け答えでありながら、どこか幼さも感じさせる亜麻色の髪の少女の言葉に、アンナはちょっと和んだ気分になって僅かに口角を上げる。

なんとなく、チェルシーが試合の場で教導染みた真似をしていた理由が理解出来た。

凄まじい学習能力の高さだが、それ故に本来その強さに至るまでの経験が希薄なのか……なんというかチグハグなのだ、この娘は。見ていて少しお節介を焼きたくなる。

「ま、こればっかりはある程度積み上げた奴にしか分からない感覚ってね――少し、空気を体験してみましょうか、お嬢さん」

だからといってこの場で優しく教え導く、等という真似は自分には似合わないし、立場的にも選ぶつもりは無い。

元より部下との訓練でも鬼扱いされるやり方のアンナだ――なので、取る方法は決まっていた。

瞬時に脚に魔力を廻し、地を蹴る。

試合の度に石畳を交換する羽目になっている工兵部隊には申し訳ないが、少々派手にやると決めた。後で差し入れでも送るとしよう。

足元の石床を砕きながら二歩でファルシオンとの間合いを詰める。

待ち受ける彼女がこちらが曲剣の間合いに入った瞬間、横薙ぎに刃を振るうのに合わせ、急制動。

踏み込んだ爪先に回転を掛け、旋回。曲剣が振り抜かれる方向から背後へと回り込む。

「――!?」

表情に乏しいファルシオンの整った面差しに、少なからず驚きの色が浮かんだ。

まぁ、気持ちは分かる。自分が剣を振る速度よりこちらの移動速度が速くなければ成立しない回避方法なのだから。

だが驚いて動きが遅れるのはいただけない。

彼女が振り向くより早く、アンナは無防備になったその横腹へと膝を叩き込んだ。
「ぐっー」
短い苦鳴を洩らし、ファルシオンが吹き飛ばされながら身を捩る。
だが、両脚が宙に浮いた状態では覚えた守りの技も十全には発揮できない。
カーク神父にしろ、チェルシーにしろ、しっかりと地に脚つけた技が主だ。二人から得た技術を生かしたいのなら、ダメージが増えるのも覚悟であの場で踏ん張るべきだった。
実際、あの二人ならば横腹を膝で抉られながら肘で蹴り足を潰しにくる位はしただろう。それ以前にこちらの旋回に反応して背後など取らせないだろうが。
吹き飛ぶファルシオンに、アンナは容赦なく追撃を加えた。
近寄らせまいと振るわれた曲剣の切っ先を逆手に握ったダガーで払って叩き落とし、亜麻色の髪が掛かる肩口へとショートソードを振り下ろす。
銀光の尾を引き、鋼が吸い込まれ――浅くめり込んで止まった。
「お？　硬い」
間違っても致命傷や大怪我にならぬ様、威力を調整した一撃ではあったが……それでも魔装の防具を斬り裂き得る斬撃を受けとめた防具に、少しばかり感心する。
その間に、衝撃と痛みに動きの乏しい表情を微かに歪めながらもファルシオンは後退

して体勢を立て直した。

膝蹴りの方も思ったよりはダメージが無いようだ。

並みの魔装ならば肋骨に罅くらいは入っている筈なのだが……少なくとも眼前の少女にその素振りは見られない。

肩への一撃も硬度で受けるというより弾性で威力を緩和した様な手応えだった。従来の金属魔装と、自分達の隊服にも使用されている布製魔装――両方の性質を併せ持っている防具なのかもしれない。分類的には駄犬（ゆうじん）の使う魔鎧の装甲が近いだろうか？

かなり有用そうなので出所を聞いてみたいが……まぁ、試合が終わったら話を持っていくとしよう。

先の攻防から、待ちの姿勢では圧し潰されると判断したか、ファルシオンが打って出た。

加速の勢いを乗せた曲剣の打ち下ろしが弧を描き、お返しの様に肩口を狙う。

アンナが半歩横にズレて躱すと、なんとファルシオンは振り下ろす最中であった剣を一瞬手放し、空いていた逆の手で掴み取って横薙ぎに切り替えて来た。

剣技というより曲芸の類だ。二回戦でローレッタを下したジャックも似たような真似をしていたが……何気に流行っているのだろうか？

とはいえ、片腕で肩を入れて振るうソレはリーチも長く、威力も十分。

軽く後退し、身を反らして回避するアンナに対し、亜麻色の髪を靡かせて少女は更に踏み込んだ。
斬撃の動作を身体の回転につなげ、頭部を狙った蹴りが放たれる。
こちらは僅かに上体が傾いた体勢。受けるには少々踏ん張りが利かず、避けるにしても更に不安定な体勢になるだろう。
なので、アンナはそのまま後ろに倒れ込んだ。
鋭い蹴りが空気を穿って頭上を通過して行くのを眺めながら、剣を握ったままの拳を床に付き、両脚を蹴り上げる。
変則的なバク転から顎を狙っての爪先が強襲し、咄嗟に身を反らして避けた事で自身が仰け反る体勢となったファルシオン。
意図せず曲芸じみた体術でやり返した形となったアンナだったが――意表を突くというのならこれ位はやれ、と言わんばかりに更なる追撃を行う。
軽やかに縦に回った身体が一回転し、ブーツの先が床に着地した瞬間、鋼板入りの爪先が石畳を抉って継ぎ目にめり込む。
そのまま強引に脚を振り上げると、蹴り剥がされた石板が回転しながらファルシオンに向かって吹き飛んだ。
「――ッ！」

魔力強化を行える前衛にとっては然程脅威にならない。
が、縦横1メートルはあろうサイズの物体が視界一杯に広がった事でファルシオンは咄嗟の判断に迷った。
回避か、迎撃か。兎に角動きを止める事こそが悪手であると、瞬時に動揺を押し込めて前者を選ぼうとして。
――眼前に迫った石畳が爆砕され、その向こうからブーツの靴底が叩きつけられた。
蹴りと言うより破城鎚の如き重低音を響かせ、ブーツとの間に差し込まれた曲剣に亀裂が走る。
殆ど反応出来ず、ファルシオンは後方へと弾き飛ばされた。
直撃しなかったのは単なる偶然……偶々構えていた剣の位置がアンナの突き蹴りの軌道上にあったというだけの話である。
予測を上回る速度、意表を突かれ続ける対応――そして、今の蹴りで思い知らされた、大きな差は無いと思っていた筈の身体強化の練度の差。
此処に至り、漸く少女は眼前の銀髪の騎士と自分との明確な差を認識したが、やや遅きに失した。
凄まじい衝撃を食らい、吹っ飛んでたたらを踏んだ自身の身体。
その奥の、砕けた石塊が舞い散る、更に向こう。

蹴り足を引いたアンナが、二刀を逆手に握って身を低く構えるのが見える。
ぎりぎりと全身の力を撓めて解放の瞬間に備えるその様は、攻城用の弩か、発射直前の大砲か。
両者とも同じ碧の瞳――その視線が交差し、アンナの唇が動いて何事かを口にした。
届く筈もない小さな呟きは、しかしファルシオンの耳にはハッキリと聞こえる。
”――歯ァ食いしばりなさい”
真っ直ぐに自分を見据える瞳と不思議と伝わる言葉に、総毛立つ様な戦慄を覚えて。
無意識の内に顔を強張らせたファルシオンは、チェルシーとの戦いで学んだ交差法（カウンター）――ではなく、反射的に剣を掲げての防御を選択した。
――瞬間、黒い外套（コート）を纏った流星が、銀の尾を引いて発射される。
音の壁を突き破って衝撃派を撒き散らしながら一直線に突き進んだ地上の流れ星は、直線状にいた亜麻色の髪の少女を直撃。
硝子が割れる様な音を立てて、彼女の手にした魔装の曲剣が粉砕される。
武器を破壊して尚、勢いを緩める事無く胴へとめり込んだ二刀の柄から伝わる衝撃に、少女の意識が一瞬で飛び。
暴走する馬車に跳ね飛ばされたってこうはならないだろう、という勢いでファルシオンの身体は錐もみして宙を舞い――武舞台と観客席とを隔てる魔力の障壁に叩きつけ

られた。
　そのまま場外の地面へと落下した彼女に慌てて大会のスタッフが駆け寄り……派手にやられはしたが、重大な負傷は無い事に胸を撫で下ろす。
　残心を保ったまま、一撃を叩き込んだままの体勢であったアンナが、ややあって長い吐息を肺より吐き出した。
「……怖さを知らない奴の技には同じ物が足りなくなる――知れたなら、あとは乗り越えるだけよ、ファルシオン」
『け、決着ぅーっ！　やはり優勝候補は強かった！　後半は圧倒的な実力を見せつけての貫禄の勝利！　アンナ＝エンハウンス、見事、決勝進出ですっ！』
　二刀を鞘に納め、回復魔法を施されている気絶した少女に口の中だけで激励を呟く銀髪の騎士へと、実況席からの勝者宣言が贈られる。
　豪雨の如く降り注ぐ興奮と賞賛の歓声・拍手の中、なんとなく勝ちを殊更にアピールする気になれなかったアンナは静かに踵を返し武舞台を去ろうとして。
　後から駆け付けたのか、観客席の最も上段の端っこで他の観客に混じって呑気に声援を上げている馬鹿の姿を発見して、ちょっと笑うと――結局は拳を突き上げて周囲の声に応えたのだった。

「……やっぱりアンナさんが勝ったか。まぁ、順当かな」

獅子の方角、選手控室にて。

次の試合に備えて会場入りし、黙々とウォームアップを行っていた黒髪黒瞳の美青年――シンヤは聞こえてきた歓声と実況の声に当然とばかりに頷いた。

途中までは彼も彼女達の戦いを観ていたのだが、早々に結果が見えたので控室に戻り、こうして自身の試合に向けて準備を行っている。

ファルシオンの急激な成長は確かに驚いたが、それでもアンナには一歩どころか五歩も六歩も及ばない。

出来ればアンナの手札――というか底を見ておきたかったが、あの亜麻色の髪の少女がそれを引き出すのは難しいだろう。

何より――。

「次の相手が相手だからなぁ……決勝の前に、確実にこの試合を勝ちにいかないと」

準決勝第二試合、シンヤの対戦相手である疵面（スカーフェイス）の剣士。

底を見せていない、という点ではアンナと同じだが……なんとなく、この大会の出場

者の中で一番に”怖い”のはあの男であると彼は判断していた。
まぁ、どれだけ強くなっても、強面な相手や粗暴な輩を見ると最初は苦手意識が出てしまう自分の性格もあっての事なのかもしれないが。
アンナもファルシオンも速さと技量を持ち味とする戦い方だが、それでも舞台の破損はある程度出るだろう。
武舞台修繕の間、先の二回戦より更に入念な準備を行うシンヤの耳に、苛立った――なんともヒステリックな怒鳴り声が聞こえて来る。
「……なんだろう？　関係者以外は立ち入り禁止の筈だけど……」
声の主は控室の並ぶ通路にいる様だ。男性のものらしき、ひどく喧しいソレに眉を顰めて立ち上がる。
注意したいけど、試合直前に変なトラブルは御免だなぁ……などと意外とドライな事を考えつつ、シンヤはそっとドアを開けて通路の様子を伺った。
「ま、全く、なんて様だ！　お前の調整に数日掛かりっきりだったんだぞ！　か、勝てなかったのは目を瞑るにしても、ま、まともな有効打すら入れられてないじゃないか!!」
「……申し訳ありません」
先に述べた様に、ひどく耳障りな怒鳴り声を上げているのは、痩せぎすの男だった。
年の頃は中年ほどか。陽に焼けていない、不健康そうな顔色に全く手入れされていな

い乱れた頭髪。
叫ぶ傍ら、苛立ちを押さえきれずに頭を掻きむしるその表情は、眼ばかりがぎょろぎょろと神経質そうに蠢き、口元は噛みしめられて落ち着きが無い。
そんな男に怒鳴り付けられているのは、先程試合を行ったばかりの少女、ファルシオンだった。
試合後に医療スタッフに手当を受けたのか、身体の各所に包帯が巻かれ、頬にはガーゼが当てられている。
「あの人の保有魔力量は把握していましたが、そこから概算される身体強化率は予想を超えていました。何より、彼女が言うには私（ファルシオン）の技には――」
「言い訳はいい！　お、お前の現在の戦闘性能であぁまでいい様にやられる事はありえないんだ！」
淡々と、だが何処か懸命に試合の経緯らしきものを訴えかける少女の言葉は、癇癪の度合いを増した男の声に遮られる。
苛立ち紛れに男が包帯の巻かれたファルシオンの肩を強く突き飛ばしたのを見て、思わずシンヤは控室から飛び出しそうになるが――微動だにしない彼女と突き出した掌と手首を抑えて顔を歪めた男を見て、辛うじて声を上げるのを押さえた。
その間にも、男は俯いて何やら独り言を零し続けている。

「くそっ……ど、どうする。試験代わりに、こ、この催しに出したというのに……こんな結果では、あ、あの方がなんと言われるか」
「……先生、私（ドク）は（ファルシオン）……」
「う、うるさい!! お、お前は黙ってろ!」
挙動不審になって爪まで噛みだした男に躊躇いがちに少女が声を掛けるが、癇癪を爆発させた男が再び怒声を上げてそれを遮り――とうとう手を振り上げた。
「――ッ、おい、何してるんだ!」
それを見たシンヤも、我慢しきれずにドアを押し開けて声を上げ、飛び出して。
「――やっぱこうなってたか。八つ当たりは良くないな」
振り下ろそうとした男を手を背後から現れた人物が掴み取って制止する。
気配も感じさせず、唐突に現れたその人物を見て男が顔を歪め、ファルシオンが意表を突かれたように軽く目を見開いた。
「き、貴様……!」
「……ジャック様」
シンヤにとって、そしておそらくは通路の二人にとっても意外であろう剣士の登場

に、当人以外の全員が硬直する。
　男の手を掴んだまま、肩を竦めたジャックは噛んで含める様にゆっくりと口を開いた。
「お嬢ちゃんを試合に出すと言い出したのはお前さんで、今のお嬢ちゃんなら、あの副隊長さんとも互角に戦えると太鼓判を押したのもお前さんだ――自分の目論見や皮算用が外れたから当たり散らすってのは、少しみっともないんじゃぁないかね？」
「……っ、ぶ、無頼者が、な、なにを偉そうにっ……！」
　もう完璧に子供に言い聞かせるトーンのジャックの言に、ドクと呼ばれた男が怒りに顔を赤黒くして歯軋りするが、それには頓着せずに疵面の剣士は顎をしゃくり――控室から飛び出した体勢のまま、所在無さげに立ち尽くすシンヤへと眼を向ける。
「ほれ、こんな場所で喚き散らしてるから、女泣かせの王子様が飛び出してきちまった。人払いするにしても限度があるんだ。いい加減、癇癪は引っ込めろって」
　シンヤとしては物申したい言われ様だが、流石に他人の目がある場所でこれ以上喚き散らす気は無いのか、男が苦々しい顔つきで手を下ろした。
「……ふん、も、元から貴様の遊びに便乗しての試験だったんだ。き、貴様がそこの《水剣》や《銀牙》にぶ、無様に負けたら、あの方はなんというか、た、楽しみだよ」
「はいよ、叱られない様に精々真面目に戦らせてもらうさ。いいから早く帰れって――

お嬢ちゃんも、帰ったら傷の治療を優先しろよ？」
適当感溢れる仕草で手を振るジャックに、男がギョロリと苛立ちを込めて一睨みし……足音荒く踵を返して上階の通路へと続く方向に向けて歩き出す。
その後に続いた亜麻色の髪の少女は、一度だけ此方を振り向くと丁寧に頭を下げ――男の後を追って通路の奥へと消えていった。
残された男二人、なんとなく沈黙したまま、横目で視線を交し合う。
「……ま、とりあえずは丸く収まったって事で」
「僕なんにもしてないですけどね」
「ははっ、流石の女誑しも今回ばかりは出遅れたって事かね？」
「その評価には全力で異議を申し立てたいです――今はそれよりも聞きたい事がありますけど」
物言いたげなシンヤの視線に、再び肩を竦めたジャックが別に大した事じゃないさ、と応じる。
「お察しの通り、あの二人とは知り合いでね。あのドクって男は見ての通り、あぁいう奴だからな……嬢ちゃんに当たり散らすんじゃないかと思ってね、様子を見に来たのさ」
無精髭の生える顎を撫でて「ガラじゃないんだけどな」と呟く剣士に、シンヤも取り敢えずは納得して頷いた。

「まぁ、他所様の事情に軽々しく首を突っ込むのもアレなんで、詳しくは聞きませんけど……あんまり放置して良い類いの人じゃない様に見えましたけどね、あの男性」
「返す言葉も無い」
　三度肩を竦めたジャックの台詞には、何処かしみじみとした同意の感情が滲んでいる。
　あと数十分もしない内に準決勝の舞台で武威を比べる男達は、互いの間に温い空気が漂っているのを自覚して切り替えを図った。
「騒がしくして悪かったな、《水剣》の。俺は竜の方角の控室に戻るとする」
「いえ、女の子への無体を止める為に来た人を咎めようなんて思いませんよ……まぁ、だからって試合で勝ちを譲ってあげるまでは出来ませんけど」
「ハハッ、言うねぇ。何だかんだ言ってもお前さんも男の子ってことかい？　――良い面で笑うじゃないか」
　決勝に残るはどちらか一人。
　どちらであっても、一足先に優勝に王手を掛けた銀髪の少女と比武にするに相応しい強さを備えた両名は、今度は口の端を吊り上げて不敵な笑みを交し合う。
　慌てることは無い。どうせ少し待てば、どちらが勝ち残るのか結果が出るのだから。
「じゃぁ、後でな」

「ええ、後で」

そんな風に、短なやり取りをして。

疵面の剣士と黒髪の魔法剣士は、互いに背を向けて自身の控室へと歩き出した。

準決勝・第二試合

『さぁ、闘技大会も残す処あと二戦、もう一つの準決勝と決勝を残すのみとなりました！』

メイン実況を務めるキャリーラの言葉に、しみじみと頷いたのは巨漢の僧――ガンテスだ。

『腕に覚え有る方々が磨いた戦武を存分に競い合う時間、まっこと素晴らしきものでありました。終わりが見えて来るのは少々名残惜しいものがありますな』

実況席は通常の観客席よりも広く幅が取られているとはいえ、彼が座るとやはり少々窮屈そうである。

流石に座席のサイズがこの武僧にとっては小さすぎる、という事で初日以降は専用サイズのものが運営側から用意されたのだが……本人が恐縮しつつ「別段このままでも問題無いし、なんなら空気椅子でも良い」と発言して闘技大会の役員に「ちょっと何言ってるか分からないです」と真顔で言わせたのは余談である。

『私としても良い貴重な経験が出来た、と思っています。先日も他国の来賓の方と交流させて頂いたのですが、此処でのお仕事がこう……会話の取っ掛かりになり易いんですよね』

ガンテスの言葉に同意したのはゲスト解説役の片割れ、サルビアである。

外界との交流を始めたエルフの最長老として闘技大会の時間以外はそれなりに各国の来賓と関わることの多い彼女なのだが、その言葉通り、実況解説の仕事をネタに気軽に会話に入れるパターンを何度か経験している。

只でさえこれまで目立った種族的関りのなかったエルフ――しかもそのトップと言える立場で、黙っているとクールというより冷たさすら感じる美人である。

いざ話す機会があったとしても、場合によっては委縮したり構えてしまう者もいるだろう。

エルフという種自体の理解はまだまだ遠くとも、この大会での実況を行っているサルビア個人の為人が事前に知られている、というのは今回の他国・他種族との交流という目的において大きな助けとなっているようであった。

ぶっちゃけ種族の代表としてではなく、サルビア個人としては隣の筋肉と一定の時間、大手を振って一緒に居られる上に物理的距離も近いのでそっちの方が重要だったりするのだが、そこは気苦労の多い最長老殿の数少ない役得、というものだ。

寧ろそれが目的で実況解説の仕事を彼女に廻した聖女とその忠犬もニッコリである。

『……まぁ、私は急遽代役で入った身ですが、仕事込みとはいえこれだけ見応えのある催しを間近で観戦できたのは役得と言えました――残る二試合がこれまで以上に盛り上がる様に頑張って参りましょう！』

『うむ、全く以てその通りですな。後日の決勝まで含め、今は勝ち上がった選手の方々に声援送る事としましょう！』

試合が始まる前から実況がしんみりした空気を作ってもアレだと判断したのか、空気を切り替える様に声のトーンを一つ上げるキャリーラの声に、ガンテスとサルビアの両名も頷いた。

頃合いを図っていた訳でもないが、そこで刻限となり、準決勝第二試合の選手の入場が始まる。

『では、先ずは竜の方角！　二回戦にて巧みに伏せた技を解禁し、我が国最精鋭の一人を下して勝ち上がって来た剣士！　その技の冴えは決勝の舞台へと届くのか!?　ジャック＝ドゥ！』

大歓声と共に、オーソドックスな軽装の革鎧に身を包んだ剣士が竜の像が鎮座した入場口より進み出て来た。

帝国南部で冒険者をやっている、という自己申告以外は目立った情報が無く、ほぼ無

名と言ってよいジャックだったが、これまでの試合――特にローレッタとの戦いで見せた凄まじい技量が目の肥えた者達には高く評価されたらしく、ダークホースとして期待と注目を浴びている。

腰に佩いた剣はまたもや新しい物となっていたが、これまでそうであった様に、おそらくは数打ちであった。

本人は金があれば良い品を買う事も考えると一回戦で述べていたが、大会ベスト４入りともなれば実績は十分。買う迄も無く、宣伝も兼ねて自分の打った武器を使って欲しいと言い出す職人は多いだろう。

『続いては獅子の方角！　優勝候補に相応しい魔法と剣技を見せつけながらも、最後は冒険者らしい搦手で強敵相手に勝利した、シンヤ＝アイミヤ！』

これまた怒号の如き声援と共に迎えられたのは、黒髪黒瞳の美青年だ。

《刃衆（エッジス）》の隊服である外套と同様の布製魔装と、防具に劣らぬ質の両手剣を背に負ったシンヤが、巨大な獅子の像の陰より現れた。

彼の初戦となった第二回戦。

キャリーラも搦手と称したが、勝利した方法が中々にぶっ飛んだ方法だったのもあってその勝ち方に賛否のあったシンヤであるが、大会規定的には全く問題なく、実戦を経験する多くの者からは「相手の嗜好や性格、大会ルールを存分に活用した上で過剰な怪

我もさせない勝利方法」という事で寧ろ高い評価を得ている。
特に戦いで生き残る為に、使えるものは何でも使うのは当たり前の冒険者達からの評判が良く、異性は元より同性の同業からの評判が上がったのは、彼にとって大会優勝以上の価値がある結果だったりした。
さて、そんなシンヤであるが……前回と違い、大きな荷物を一つ、担いでいた。
体積・質量ともに剣より遥かに大きなソレが何であるかは一目瞭然――ぶっちゃけ樽である。
酒場や酒蔵にある特大サイズのアレである。既に魔力強化までして担いでいる事から、その中がしっかりと満たされている事は容易に察せられた。
『こ、これはまた凄い物を持ってきましたアイミヤ選手。前の試合の腿肉などがＯＫだった以上、これも問題無い、という事なのでしょうか……』
え、コレ本当に大丈夫？　みたいな表情で大会スタッフへと視線を飛ばすキャリーラであったが、当のスタッフは特に顔色も変えずに両腕を掲げて頭上で大きな丸を作る。
『あれが全て火薬や毒物の類であれば流石に反則かと。ですが、おそらく中身は”水”でありましょう』
『自身の魔法の基点となるものを持ち込んだみたいですね――前回は水源を召喚していましたが、今回はある程度の量を事前に用意した、という事になりますが……』

補足を入れるゲスト二名の言葉は正解である。
困惑やちょっとした笑い、僅かではあるが野次の類もあがる観客席からの声を物ともせず、シンヤは武舞台へと上ると大樽を自分の傍らへと勢いよく下ろした。
どぷん、という重い水音を耳に拾い、相対したジャックが苦笑する。
「事前に準備するにしても限度があるだろ、おい。イメージダウンになるんじゃないのか？」
「何のイメージですか。僕は冒険者なんで求められるのは実力と実績ですよ」
自身の顔面偏差値が相当に高い事くらいは自覚のあるシンヤだが、それを売りにした商売をやってる訳でも無い以上、容姿でついたイメージなぞ崩れようが大して気にもならない。
手で持てる範囲までならルール上ＯＫらしいので、限界サイズの樽を選んできましたよ、と堂々と言ってのける態度はいっそ清々しく――戦士である前に冒険者である、という彼の明確なスタンスが感じられた。
「貴方が戦いを楽しむタイプなのは何となく察しが付きますけど……ブライシオさんと違って待たないでしょう？」
「……ま、そうだな」
試合が始まって二回戦のときの様に詠唱を始めたら、一気に攻め切って圧し潰す予定

であった剣士が苦笑を深くする。
魔法剣士である眼前の青年の準備が終わるまで待つのも一興ではあるが、明確な魔法の発動までの隙という時間をどう潰してくるのかも興味があった。
まさかの大量の水の持ち込みで、スタートダッシュの体勢を整えて来るという方法でその辺りの前提は引っ繰り返された訳だが。
「事前の準備も兵法ってやつだしな、楽しくやろうや」
「楽しく戦うより楽に勝てる方が良いんですけどね……僕の試合相手全員、そういう意味だと大外れしかいないんですけど」
ボルテージを上げる大勢の観客と、彼・彼女らから放たれる熱気と声援の中。
鋼の直剣と魔装の大剣が鞘より抜かれ、試合が始まった。

魔法にも秀でたシンヤには苦手な距離、というものが殆ど無いが、ジャックにとっては剣の間合いこそが必勝の距離だ。
これまでの相手は自ら前に出て来る者達であった為に待ちの姿勢であった剣士だが、今回は自ら間合いを詰めに掛かる。

対してシンヤは、手に持った剣の柄を大樽の上蓋に打ち付けて壊し、背後に跳んで間合いを取る。
事前に樽一つ分の水を準備したとはいえ、その量は精々がブライシオとの試合で見せた水塊一つ分程度だ。
魔力を練りだした黒髪の若者を見て、ジャックは地を蹴って更に加速。
（さて、無策の筈も無いが……どう出るのか見せてもらうかね）
追加の水源はやはり召喚魔法で呼ぶことになるだろう。それまでに樽一つ分の水でどうしのぐのか。
割られた樽から噴き出した水が、蛇の如くうねって一塊となった。
二人の間に立ち塞がる水塊を前に、ジャックが刃を立てて刀身の腹で殴りつけるように剣を振るう。
二回戦でブライシオが見せたものと同じ、水塊の破壊方法だ。
武器のサイズや膂力が違うので、同様の方法での破壊は回数を必要とするだろうが、有効な手段であるのは確かだった。
だが、振るった鋼は硬い音を立てて弾かれる。
「――氷か」
剣と接触するその瞬間、水塊が一瞬で氷結したのだ。

岩を打ったような感触に、剣士が眉を顰める。
次の瞬間、水塊ならぬ氷塊が回転した。
どうやら氷結したのは塊の前面一部だけだったらしい、背面の水部分から液体の散弾が放たれ、ジャックを襲う。
体捌きと剣でそれらを回避、或いは叩き落としながら、横手に跳躍。
一旦水源を無視して術者たるシンヤとの距離を詰めようと試みるも、宙に浮いたそれはピタリとジャックに張り付いて追走してくる。
流石に煩わしく感じたのか、軽い舌打ちと共に再度水塊へと向け、剣が一閃された。
氷結した面が其れを受け止めるが、今度は斬撃として振るった一撃は難なくそれを断つ――が、下手な金属より硬度のある氷を断つ為に研ぎ澄ませた一撃では、大本たる水塊への損傷は極軽微だ。
面で打とうとすれば硬度のある氷で受け止められ、氷を断とうとすれば水源を削ることが出来ず。
「厄介だな、前回の弱点をしっかり対策してきたか」
「当然」
楽しそうに唇の端を釣り上げる疵面（スカーフェイス）へと再び水弾が発射され、剣士が身を躱すと同時に背後からシンヤ自身が強襲する。

刀身には分厚い水の幕が張られ、術者が剣を振るえばそれは意思を持つようにうねり、鞭となって遠間から振るわれた。

その背後には既に水塊が二つ、宙に浮いており、追加の水源の召喚を終えている。

術者自身と三つの魔法の基点から放つ水の鞭と弾丸、胴、肩、背、腿と、幾つも襲い来る同時攻撃を、凄まじい反応速度で全て弾き、回避するジャック。

弾幕、と呼んでも差し支えないであろう怒涛の攻撃を捌きながら、その瞳は冷静に黒髪の魔法剣士の姿を観察していた。

水源の破壊に対して対策を打ったが、代わりに浮かぶ水塊の数は半減。

手数と制圧力が減ったが、代わりに例の氷結面を盾とする手法に加え、水塊自体が今も頻繁に移動を繰り返してジャックの剣が切り返し辛い角度からの射撃を行って来る。

水と魔力、両方の消耗も早いだろうが、用意した水源を破壊されるよりはマシ、という事だろう。丁寧にこちらの動きを制限しにくる手腕からして、水の消耗に関しても随時の召喚（おかわり）で火力を維持する腹積もりか。

「……参ったね、鈍器（メイス）でも持ってくりゃ良かった」

兎に角、水塊の前面にでた氷が厄介だ。

例えばブライシオであれば持ち前の膂力、武器の大きさと強度によって強引に破壊も可能なのだろうが、力よりは技、武器は通常の鋼の剣であるジャックにとっては対応す

る手段が極めて絞られる”盾”である。
「貴方の間合いでやり合うのは相当厳しいですからね。手の中の得物がへし折れるまでは、近寄りません」
「お前さんも武器狙いかよ。しかもやり方が一番えげつねぇ」
油断なく相手を見据えながら多量の水を制御し続ける魔法剣士と、辟易した表情で愚痴る剣士。
互いの鋼の刃と魔力がぶつかり合って甲高い音を立て、中天の下、陽光に照らされて無数の水と氷の粒が弾け、躍る様は視覚的にも中々に美しい。
『これは凄い！　素人目にも分かるとんでもないレベルの魔法と剣の技比べです！　一見して互角に見えますが……』
『ジャック選手の剣技も大概おかしい領域ですけど、アイミヤ選手の方も凄いですね。というか、これでも戦い方が試合用であって戦闘用ではないって……よく参加ＯＫが出ましたねぇ』
『うむ、長丁場となればアイミヤ殿に優勢の目があり、といった処かと。元よりアンナ殿を筆頭に、規定から踏み出した方々が複数おられました故。基準の明確化なども次回以降の大会では気を配るべきでしょう……いや、憂慮なく未来の祭事について語れるというのはやはり良い物ですな！』

実況席の三名も、其々に注目する視点は異なれど、感嘆を込めて水と氷、そして鋼によって生み出される剣舞を称える。

宛ら楽士隊の指揮者の如く、精緻に水を操るシンヤの見事な魔法運用、及び魔力制御。

それらを卓抜した技量のみでしのぎ切り、或いは捻じ伏せようとするジャックの剣技。

先の少女達の試合に劣らぬ、準決勝に相応しい高度な技の応酬に、闘技場（コロッセオ）内の興奮と熱気も益々高まっていった。

激しい攻防の最中、最初に微かな変化に気付いたのはシンヤ――と、来賓の席に座る《魔王》だ。

一進一退に見えつつ、その実、段々とジャックの武器へと負担を蓄積させていた水魔法の乱舞。

聖女をして「水属性に関してはマジで器用」と太鼓判を押される精度によって丁寧に動きを制限されていた剣士が、微かにではあるが先んじた反応を示す瞬間があった。

（……ッ、また……！　見間違いじゃないな、これは）

違和感を認識した魔法剣士は、確認を兼ねて彼に最も近い距離にある水塊を操る。

自身が回り込ませた水塊の軌道を予測するように、ジャックが身を旋回させた。

軸足を使って身を捌かれ、放たれる水弾が剣によって弾かれる事無く全て回避され

る。
動揺を表に出す事無く、だが人知れず息を呑んだシンヤに、剣士が不敵に笑いかけた。
「やっと掴んだ――どうにも、本人から何かを経由した”意”ってのは読み辛くていかんね」
その言葉の意味を正確に理解した訳では無い。
だが、ソレを推察する事は出来た魔法剣士が、湧き上がる戦慄と共に三つの水塊を同時に操作。
近距離、中距離、遠距離と、三方向から距離もバラバラに発射される無数の水弾に加え、自身も刀身に施した付与効果（エンチャント）を利用して遠間から超射程の突き――水の槍を繰り出す。
その攻撃密度の前には間合いを詰める事はほぼ不可能に近く、事実、ジャックもこれまでは後方へと距離を取ることで回避と弾きを成功させていた。
――が。
目を伏せ、疵面に極度の意識の集中を見せた剣士が、一歩踏み込む。
その身が脱力した様にゆらりと揺らぐと、次の瞬間には竜巻の如く旋回した。
身を伏せながら振るわれる横薙ぎの一閃。
シンヤをして見切る事が困難な見事な一撃は、攻撃の中でも最速で到達した水の槍を

容易く打ち払い。
伏せて尚、剣士の身に届く低い軌道の水弾は、円を描く剣身へと吸い込まれる様に当たり、弾け飛ぶ。
残像すら残して行われた高速の迎撃に、弾かれた水の音が一瞬の遅れと共に闘技場（コロッセオ）に響き渡る。
今度こそ目を見開き、驚愕を露わにする黒髪の青年（イケメン）に、してやったり、と会心の笑みを浮かべる剣士。
頭抜けた技量でカバーしようと、やはり数打ちである事が祟り、僅かずつではあるが刀身に刻まれていた傷。
――それが、今の攻防では一切増えていない。
それはつまり……一連の面制圧染みた攻撃全てを、ジャックが完全に見切って無理なく捌いたという事に他ならない。
単純に、観客席からでは距離があるという点も手伝い、その事実に気付いた者が会場に何人居たか。
相対してジャックの剣の状態をこまめに観察していたシンヤは、真っ先にそれに気が付き、口の端を引き攣らせた。
おそらく、眼前の剣士はシンヤが操る水の動き――それこそ移動方向や攻撃のタイミ

ング、種類まで先読みしている。
魔力の大まかな方向性の把握や高い練度の身体強化によって鋭敏化した知覚、或いは何某かの加護などで同様の真似が出来る者は確かにいるが……それにしたって精度の高さが異常だ。これではまるで噂に聞いた未来視の加護である。
そして、シンヤが見逃したのでなければ、剣士は平均的なレベルの身体強化以外は特に魔力を使っていない。
あまり当たって欲しくない予測であるが、この男は魔法や魔力、加護に関係の無い、純然たる武の技術でソレを行ったのではないだろうか。
「漫画じゃないんだから……!!」
「やれる奴は他にもいるさ――ま、数は多くないだろうがね」
それをやれる人はそもそもこの大会に参加禁止だ、と内心で毒づく青年（イケメン）であるが、それを言うならコイツも大概である。
殺しが御法度の健全な催しである以上、参加選手は大なり小なり殺傷力の高すぎる手札や攻撃を控えているのだが、シンヤの制限の大きさはその中でも最大と言って良い。
その辺りのさじ加減も強制という訳では無く、あくまで選手自身の自己判断に依る部分が大きいのだが……何でもありとなった場合の彼本来の殲滅力からすれば、現状の戦い方はぶっちゃけ温いにも程があった。

ブライシオと戦った際には、純粋な戦闘方面からは斜め上に滑った攻略法を彼が先輩と呼ぶ青年からアドバイスされ、それが上手く嵌まった形だ。

対策が取れていない――おそらく決勝で当たるであろうアンナには、この縛りの中で勝つのは不可能に近い、とは大会当初から予想していたのだが……此処に来て目の前の剣士にも同様の感覚を抱く羽目となっている。

睨み合いとなって、一時的に静かになった武舞台上。

どう立ち回るかと悩むシンヤに対し、ジャックが剣を突き付ける。

「手詰まりかい？　《水剣》の。なら話は簡単だ……余計な気遣いは外しちまえば良い」

後半の台詞……囁く様に呟かれた誘いに、シンヤは軽く息を呑み――次いで、顔を顰めた。

「生憎と、よっぽど救いようのない悪党やら信奉者でも無い限り、そっち方面のやり方で戦う気は無いんですよ」

「……そりゃ随分と甘い……いや、真面目だねぇ。同格以上が相手なら本気でやっても事故の類は早々に起こらないだろうに」

「今だって本気ですよ――ただ、これはお祭りの試合であって、戦争や殺し合いじゃないってだけです」

それは拘り、というより彼の信条と言って良いのだろう。

簡単な会話くらいでは青年が自身に課した制限を緩める気すら無い、と判断した剣士は、切っ先を向けたまま肩を竦める。
「俺としちゃ、お前さんの底が見てみたいんだが――そうだな、少しキツくなりゃ枷も緩むか？」
「……ッ!!」
その言葉を聞いた瞬間、背筋が粟立つ感覚に押され、シンヤは操作する水源から一斉に散弾を放った。
先程まで、直撃なくともその動きを大きく制限出来ていた範囲攻撃は、剣で弾く事すら無く体術のみで躱される。
水面を滑る様な足さばきでスルスルと近づくその速度は、肉眼で容易に追える……筈であるのに、あっと言う間に距離を詰められた。
驚く時間も惜しいとばかりに、石畳を蹴飛ばすようにして跳躍。
近距離戦を嫌って距離を取ろうとする魔法剣士に、水の弾幕を突破した剣士は容易く追い縋る。
剣の間合いに入った瞬間、脇構えからジャックの肘が上げられ、車の構えに移行。
突き出された肘によってシンヤの視界から一瞬剣身が隠された瞬間、上げた肘を伸ばす様に腕が振り切られ、掬い上げる様な軌道で真下から刃が跳ね上がった。

柄尻を握り、半身を前に傾げて放たれた斬撃は、視覚情報からは想像出来ないほどに伸びる。

後退に使った脚を両断せんとするその一撃を、シンヤは辛うじて手にした両手剣で防いだ。

ありふれた直剣から繰り出されたとは到底思えぬ重い一撃――なにより、握った腕に伝わるソレ――金属同士が打ち合って弾かれる感触ではなく、相手の刃が僅かにこちらの剣に食い込む感触に「理不尽だ！」と文句の声を上げたくなる。というか上げた。

「大枚叩いて買ったマイン氏族製なんですけどね、この剣！」

「だろうな。今ので斬れないって時点で分かってたさ」

「魔装の武器を斬れる前提で話するのおかしいでしょ!?」

しかも発言した当人の手に握られているのは数打ちだ。

幸い、こちらの剣も少々欠けた、位で済んではいるが……剣に纏わせた水の付与効果（エンチャント）が無ければこの程度では済まなかっただろう。

それだけの斬撃を打ったにも関わらず、アホみたいな手首の強さで剣が切り返され、瞬時に振り上げた剣が打ち下ろされる。

シンヤはこれも何とか掲げた剣で防御。受け流す事も出来ずに正面から止めた為、今度はハッキリと直剣の刃が刀身に食い込む。

そのまま競り合えば武器を両断されてもおかしくなかったが、突破された水塊を操作して左右からの同時射撃。即座に対応されるが、その間に距離をとる事に成功した。
膠着気味、ややシンヤが有利といった状況から一転、苛烈な攻めで彼を追い詰めるジャックに、どよめきの声があがり、直ぐにそれは歓声へと変化する。
『な、なんとぉーっ!?　水の波状攻撃への迎撃に注力していたジャック選手、一転攻勢！　アイミヤ選手、なんとかしのいでいますが表情が険しい！』
実況のキャリーラの声に、隣に座る筋肉が高揚を隠せぬ声色で応じた。
『なんとも凄まじい技の冴え……！　振るう武器は違えど、古き友人達の若かりし頃を彷彿とさせますな』
『私の外界での経験が浅いせいでしょうか……見た事の無い剣の術理です。当てた瞬間の、引きの所作が美しいというか……』
『然り。今大会に参加なさった選手でも同様の剣技を扱う方はおりませぬ。おそらくは反りのある剣――本来は湾刀などで用いられる斬術かと』
感嘆の籠った声で剣士の技を未知であると口にするサルビアに、彼女と観客、両方への説明を兼ねてガンテスが自身の見識を語る。
実況席にて筋肉司祭の口から語られる言葉は気になるのだが、必死こいて直剣の範囲から逃れようとするシンヤには耳を澄ます余裕は無い。

鋭すぎる突きが頬を掠め、軌道を逸らす為に用いた両手剣に新たに深い傷が追加される。

武器破壊を狙っていた筈が、そろそろ自分の剣の破損を危惧しなければならなくなってきた。折れたり真ん中から斬られでもしたら、仮に優勝しても修理費だけで賞金が殆ど吹っ飛ぶだろう。

大赤字だ畜生、と内心で泣き言を垂れながらも、魔法による牽制も併用してなんとかジャックの剣を捌き続ける。

「いい加減、本気で――試合じゃなくて本番のつもりで来いって」

「……ッ、だ、がっ、断るっ……!!」

再びの誘いを突っぱねると、口の中で短く詠唱を紡ぐ。

付与効果（エンチャント）を再度行い、今度は長大な氷の刃を纏わせて斬りかかるが、伸びた氷刃があっさりと斬り飛ばされて宙を舞う。

何度も袖にされているのにも関わらず、ジャックは楽しそうだ。

（多分、バレてる……けど、泳がせてくれるなら好都合……！）

先の付与効果（エンチャント）にしろ、これまでの攻防に使用した水の操作や召喚にしろ、シンヤは全て無詠唱で魔法を行使していた。

今までの詠唱は、全てこの試合における最後の切り札――その下準備の為である。

操る水塊の数を半分以下にまで減らしたのもこの為だ。氷結を含めた水魔法全般の精度を上げるだけなら、あと二つは水源を用意しても問題無かった。

相対する剣士が予想より難敵であった場合に、起死回生の手段として密かに配置していた伏せ札だったが――案の定、使う機会が巡って来た事を嘆けば良いのか、笑えば良いのか。

幾度目かになる剣の間合い。

放たれる水の散弾を飽きたとばかりにあっさりと弾き散らすと、直剣と両手剣が噛み合い、やはり後者の方が刃を欠けさせた。

容赦なくシンヤの剣と気力を削り取りながら、剣士は相手の隠した一手を楽し気に待ち受ける。

”何か手があるなら、早くやってみせろ”

目は口ほどにものを言う、を体現したかの如き表情に、不敵に笑い返して。

体力・魔力を消耗して乱れて来た呼吸を押し殺し、全ての準備を終えたシンヤは自身の近くに水塊を移動させた。

「なら、遠慮なく――泳がせてくれたお礼です、たっぷりと泳いでください」

瞬間、晴れ渡っている筈の上空が陰る。

唐突に武舞台を覆った影に、ジャックだけでなく試合を観戦していた多くの者達が頭

上を振り仰ぐと――。

遥か上空に召喚されていた凄まじい量の水が降り注ぎ――否、雪崩れ込み、洪水となって武舞台上の全てを押し流した。

水浸しを通り越し、一時的に水没した武舞台。

観客席の保護の為、場外周辺ごと結界・障壁で覆っていたが故の結果だ。

自身は滴一つ浴びなかったとはいえ、豪雨を越えた大瀑布の如き水量が弾けるのを間近で見た観客達は、呆気に取られて水に沈んだ其処を眺めている。

警備の仕事を終え、第二試合が始まる前に聖女二人と合流出来たどっかの犬が、障壁に向かって押し寄せる波濤を見てスプ●ッシュマウンテン！　などと喜んでいたがそれは余談である。

大会スタッフの判断で少しの間だけ障壁が解除されると、しっかりとした排水も考慮

して設計された闘技場（コロッセオ）の構造上、そう時間を掛けずに水は退いた。
先ず見えたのは、石畳が殆ど押し流され、土台が剥き出しとなった武舞台。
その中心――シンヤが立っていた場所に屹立する、氷の柱であった。
馬鹿げた水量を受け止めたそれは、罅割れ、亀裂が走っており――程なくして涼やかな音を立てて砕け散る。
内部には、剣を地に突き立て、膝を着いていた魔法剣士の姿。
あの一瞬、試合に用いていた水源全てを使って、瀑布に耐える為の氷のシェルターを生成したらしき彼の姿に、水面に拡がるさざ波の様に驚きと賞賛の歓声が上がった。
その声に応える様、自分以外の全てが押し流された舞台の上で、シンヤは立ち上がり――。
「ハァ……アンナさん用に準備してた奥の手、だったんだけどなぁ」
嘆く様な、愚痴る様な声と言葉と共に嘆息して、天候に相応しい陽気へと戻った空を見上げる。
再び、空が陰った。
先と同じ――だが遥かに小さな人一人分の陰が差し、剥き出しとなった舞台の上に泥を跳ねながら着地する。
「理不尽過ぎる。アンタ絶対にこの大会に出場したら駄目な人でしょうに」

「いや、流石に焦ったさ。大滝を斬るなんてのは終ぞ試した事が無かったが……なんとかなるモンだ」

疲れと呆れのせいか、半眼になって口調までぞんざいになっているシンヤの言に、肩を竦めて応えるは疵面の剣士――ジャックである。

『嘘ぉ!?　な、なんとジャック選手、無事です！　あの洪水の中、場外落ち処かまるで何事も無かったかのように空より降って来ました!?』

『お見事！　あの刹那、天を覆う水の帳を見て怯む事無く上空へと跳ぶ胆力！　それを断つを可能とする剣技！　感服以外の意がありませぬ！』

驚愕の余り、眼鏡がずり落ちているキャリーラと賛辞と共に柏手を打つ筋肉の拡声された声が響く中、単独で洪水を起こした加護持ちと、その洪水を文字通り剣一本で斬り抜けたイカれポンチが再び対峙する。

「決勝用の対策だったらしいが……俺の見立てじゃ、あの副隊長さんも似たような真似は出来ると思うがね。少々やり方は変わるだろうが」

「破った当人から断言されるのはキツいなぁ……！　心が折れそう……！」

何処となく緩んだ空気で会話が続くものの、笑いを含んだ剣士の言葉には別の意味合いも含まれていた。

――今の戦い方では、自分にも、アンナにも届かない。

もういいだろう。冒険者シンヤ＝アイミヤではなく、大戦で猛威を奮った《水剣》として戦え。

再三となる、声なき熱望にシンヤは溜息を洩らす。

「ハァ……仕方ない、か」

息を吸い、吐き出し。数秒目を閉じる。

再び開かれた黒瞳は揺るがぬ意思を宿しており、その意思を示すかの様に、右腕が掲げられ。

「降参します。どの道さっきので魔力も空に近いんで」

あっけらかんと告げられた言葉に、ジャックを含む闘技場（コロッセオ）内の多くの人間がその場でスッ転びそうになった。

急転

「……やれやれ、フラれちまったね」

興奮冷めやらぬ大歓声と共に見送られ、武舞台を後にしたジャックが苦笑いして一人ごちる。

徹底して己の魔法を不殺・非殺傷に偏らせてその天秤を動かす事の無かった魔法剣士。

本人は魔力が底をついた、と申告していたが、おそらくはまだ余力があった。

本当の意味で空っぽになれば、日常においてトラブルに沙汰が起こった際に対応する事も出来なくなる、それを嫌ったのだろう。

自らを冒険者として定義している割には、随分と用心深いというか、常在戦場に近い心構えが染み付いている。或いは、その辺りの感覚は戦時中に培われたのかもしれない。

「貴方の生き方を否定する気はないですけど、それは僕の選ぶべき道ではないので」

唐突なギブアップ宣言に物言いたげな視線を送るジャックに対して、揺らぐ事無く平然と答えていたのを思い出す。
お互いに全てを出し切ったとはリップサービスでも言えはしないが、それでもある程度は本気で戦ったせいか――なんとなく、互いの性質というか気質的なものを二人は感じ取るに至っていた。
お互いに冒険者であり、同時に戦士であり。
だが、どちらに重きを置くか、そこに違いがあった。
端的に言えば、そういう事なのだろう。
あれはあれで、一端の男が出した一つの結論、一つの生き方だ。
敗北を受け入れてでもそれを通すというのであれば、感心こそすれ不満など抱ける筈も無い。消化不良感がある事自体はまぁ、否めないが。
「ま、それはそれとして、次か……また買い替えないと駄目だなこりゃ」
気分を切り替える様に、鞘に納めていた剣を抜いて様々な角度から刀身を眺める。
芯は歪んでおらず、大きな欠けも無いが……それでも先の試合を超えた影響は大きい。
次の試合――決勝までには新しい剣に替えた方が無難だろう。
結局は試合の度に買い替えてる気もするが、これもまた仕方のない事だ。

大会において”使うつもりの無い手札”の多さ、という点では己もシンヤと大差無い。それが原因で武器を新調してばかりだというのなら、甘んじで受け入れるべきだろう。

その様な事を考えつつ、今日予定されていた準決勝を終えて人の気配が捌けつつある闘技場（コロッセオ）の下部エリアを進む。

歩を進め、一息付こうかとエリア内にある植樹された開けた場所――簡易な椅子や丸卓が設置された休憩所に向かうと、そこで会う筈も無いと思っていた人物と鉢合わせた。

「お」

「……うん？」

其処に居たのは、美しい銀髪をサイドで纏めた騎士の少女。

数日後には決勝で雌雄を決する事となる勝ち残った二人が、お互いにとって全く予想外の場所で遭遇する。

「あー……どうもご苦労様、か？」

「あ、うん。試合お疲れ様？」
決勝で戦う以上、無関係な相手な筈も無いが、個人的に親交がある訳でも無い。
無視は出来ず、かといって試合前の対戦相手と仲良く交流というのも妙なものがある。
そんな心情なのか、揃って気不味そうな顔で、微妙にズレた挨拶を交わす。
「……なんだって竜の方角の休憩所に？　おたくは向こう側からの入退場だったろうに」
「まぁ、仕事よ」
訝し気に首を傾げる剣士に向け、騎士の少女がめんどくさそうに鼻を鳴らして腕を組んだ。
「下部エリアに女の子相手に喚き散らして手を挙げようとしていた男がいる、って通報があってね。一応は他にも不審者の類がいないか巡回中。試合が終って手隙の私も手伝ってるの」
ま、居たとしてもとっくに移動した後みたいだけどね、と呟く少女――アンナの言葉に、心当たりがあり過ぎるジャックの頬が微かに引き攣る。
「……そうかい。試合直後に大変だこと」
「これも仕事の内ってね。さて、粗方見て回ったし、私はそろそろ……」

一呼吸の間に動揺を腹の下に押し込めて返答するジャックに、アンナが肩を竦めて軽い口調で応じ――そこで彼女はピタリと動きを止めた。
「……？　どうしたね、副隊長さん」
疑問の声にも応えず、眼を閉じて何かに集中する銀髪の少女騎士。
良く見れば、その形の良い鼻が何かを嗅ぎ取るかのように僅かに動いている。
それを見てとり、ジャックは本気で意味が分からなくて困惑した。
「……なんだかよく分からんが、年頃の娘が外で小鼻を膨らませるもんじゃ……」
「ねえ、ちょっと聞きたいんだけど」
一回り以上は年上の剣士の、取り敢えず言葉の上では至極真っ当なツッコミが強引に遮られ。
「――ジャック＝ドゥ。なんでアンタから、私の部下の血の匂いがするのかしら？」

空気が、一瞬で凍結する。
絶句、ほんの僅かな動揺――そして疑問。
様々な感情が双眸に渦巻き、しかし瞬きの間に眼前の剣士から消え去ったのを確認したアンナの眼が、冷たく細められた。
「ウチの部下（トニー）は毒や劇物に対して抵抗の強い体質らしくてね。特定の薬なら薬効はそのままに、副作用を最低限に抑える事が出来るらしいの」
ゆっくりとその手が背後に回り、腰の二刀の柄を握る。
「完全耐性、って訳でもないらしいから、乱用は控える様に注意はしてるんだけど――聞きやしなくてね。馬鹿みたいに強い霊薬を頻繁に摂取するせいで、特定の魔力波長に反応して、偶に身体に残り香が出るの。血なんて特にそう」
抜き放たれた刃は、持ち主の心象を表わすように冴え冴えと冷たい銀光を灯していた。
両の手に愛用の武器をぶら下げ、答え合わせを行う様に言葉が続けられる。
「霊薬由来の魔力反応よ――大量に浴びたのなら、ちょっと湯浴みしたくらいじゃ落ちやしないわ」
「……成程、ファンタジー版ルミノール反応、って処か？　そいつは知らなかった」
苦笑して聞き覚えの無い言葉を吐く剣士に向け、アンナは静かに持ち上げた二刀の

切っ先を突き付けた。
「武器を捨てて大人しく捕縛されなさい。現段階だとまだ容疑者扱いだから、抵抗しないなら優しく扱ってあげる」
「断る、と言ったら？」
「ぶっ飛ばす」
言い終えるや否や、その姿が残像を残して前方に飛び出す。
美しい銀の尾を引きながら瞬きより早く互いの間合いを消失させた少女の両腕が、踏み込みを遥かに上回る勢いで振るわれる。
闘技大会におけるどの選手であっても、比肩出来る者の居ない、凄まじい速度。
ジャックが先の試合で見せた先読みの技術を駆使して尚、それを単純なスピードでねじ伏せんとする一撃であった。
捕縛を目的としている為に手加減があっても尚、音速に迫る剣撃。
それを純然たる技で以てしのぐ剣士もまた、少女と同じく人から外れた領域にある。
鍛えた鋼が擦れ、軋み、悲鳴を上げる音と共に、両者の姿が交差した。
突撃と共に繰り出した二刀を捌かれるも、その強靭な足腰で以て体勢崩すことなく急制動をかけ、踏み止まるアンナ。
一方で振るわれた双剣を見事受け流したジャックであるが、手にした剣に音を立てて

亀裂が走る。
舌打ち一つして軽く後方へと跳ぶ剣士と、それを慌てる事無く目で追い、向き直る少女。
「きっついね、オイ。一撃でこれか」
「どの道、ここで戦りあってれば人も集まって来るわ――もう一回だけ言ってあげる、大人しく捕まりなさい」
厳しい表情で再度の投降を促され、ジャックは仕方なし、といった様子で頭を振り……楽しそうに笑う。
「確かに時間も無さそうだ……それじゃ、解禁といこうかね」
瞬間。凍り付いた空気が更なる威圧で軋み。
アンナには眼前の男の姿が、一回り以上大きくなった様に見えた。
「――ッ!?」
勿論、ただの錯覚である。
単に、明確に増した圧――その身から迸る魔力が爆発的に増大した為に視覚的にそう誤認した、というだけ。
腰を落とし、摺り足で間合いを図りながら、警戒を高めてアンナは相対する剣士を睨み付けた。

「……伏せていたのは剣技だけじゃなかった、ってワケ？　性格悪いね、アンタ」
「こっちは最後まで披露するつもりは無かったんだがねぇ……お前さん相手じゃそれも難しそうなんでな、《銀牙》」
亀裂走る剣を片手に、肩を竦めて嘯く男の態度はどこまでも飄々としている。
単純な技量であれば、確実にアンナを上回る剣技。そして今しがた当人が解禁した――転移・転生者の多くが有するであろう膨大な魔力量。
おそらくは魔力強化も量に相応しい練度だろう。
（トニーの報告を疑う訳じゃなかったけど、コイツは本物ね）
今度はアンナの方が小さく舌打ちする番となった。
認めるのは業腹だが、目の前の男は間違いなくミヤコ隊長や顧問のネイト、或いはレーヴェ将軍の同類だ。
つまりは、自分が一歩、及ばぬ相手であるということ。
闘技場（コロッセオ）で人の出入り自体が少ない下部エリアとはいえ、互いに攻性魔力を垂れ流した状態だ。時間さえ稼げば、応援は直ぐに来るだろう。
だが、この剣士相手には生半可な者ではアンナの足枷にしかならず――なにより、剣士本人の目的はこの場の離脱だ。こちらが時間稼ぎに徹すれば、その消極的な行動の隙をついて即座に遁走するだろう。

ではどうするか――結論を出すのにそう時間は掛からない。
両の手に握る剣を、逆手に持ち替える。
身を低く、さながらネコ科の猛獣の如く構えたアンナを見て、ジャックは口笛つきで感嘆の声をあげた。
「果断、そして正解だ。やっぱりおっかないねぇ、《刃衆（アンタら）》は」
「喧しい、悪党」
剣士の掛け値なしの賞賛は、向けた当人によってにべもなく切って捨てられる。
一歩及ばないならば、その一歩を埋めるまで。
敬愛する隊長、お世話になっている顧問。友人である聖女や頭の上がらない教国の古強者、魔族領の幹部達。
――そして、二年前に一度。取り巻く全てを、自分達を置いて勝手に逝った大馬鹿野郎。
人類種の最高戦力たる、人の理を超えた領域にある者達。
すぐ後ろを追随するだけではなく、何れは肩を並べ――何時かは自分が彼・彼女らを助けられる程に。
好き放題やっていなくなった大馬鹿が、レティシアやアリア様、ミヤコ隊長を残して旅立った戦友の魂が、安心して女神の御許へ辿り着ける様に。

そう思って、戦争が終わっても鍛錬を続けてきた。その為に費やした二年だった。
……まぁ、その馬鹿は最近になってひょっこり墓の下から這い出てきたのだが、とにかく。
当初の志が予想外の形で空振って終わったとしても、積み上げた修練の時間は確かにアンナに宿っている。
ならば、その二年を。容赦も遠慮もなく叩きつけられる眼前の相手に見せてやろう。
魔力と四肢が、撓められる。
ギリギリと張力の限界まで引き絞られる弦の如く、闘志はより鋭く。
際限なく高められていくそれらを見れば、ジャックで無くとも気付くであろう。
――少女の次の一撃。それは、間違いなく人外級（自分達）に届き得るものである、と。
伏せていた魔力（ちから）を隠す事の無くなった己に対し、怯むどころか喰い破らんばかりの強烈な〝意〟を向けて来る若き騎士に対し、剣士はこれまでに無い程に笑みを深めた。
腰を落とし、霞の構えを取って気息を整える。
改めて《刃衆（エッジス）》の№2と無頼の転移者が対峙し、満ちる戦意と魔力に空間が軋みを上げる。
「殺（と）るつもりで行く。死んでも恨むな」
「望外だねぇ――来な、《銀牙》」

一秒、時が止まった様に静寂が降り。
アンナの足元が陥没――否、爆発し、土くれと砕けた小石が飛沫の様に飛び散った。
それらを後方へと置き去りに、瞬きの間に剣士との間合いが消失する。
準決勝でファルシオン相手に見せた突撃と同じ、だが遥かに上をゆく超高速の踏み込み。
音速に到達・凌駕したその速さは、彼女の上司たるミヤコに迫るものであり、ゼロからほぼトップスピードへ一瞬で到達する加速力は、彼女の戦友が扱う魔鎧の高速移動を思わせた。
強化された動体視力を振り切るその速度に対し、ジャックは攻撃より先に到達する戦意の行き付く先を読み取ることで反応してみせる。
加速の勢いを乗せた二刀が交差し、神速の二閃が十字の銀光を描き。
罅割れた刀身が、それを迎え撃つように突き込まれ。
鋼の打ち合う甲高い音と共に両者の身体が再び交差し――擦れ違う。
背を向け合った騎士と剣士。攻防の結果は一瞬遅れて訪れる。
亀裂の入った直剣――それが根本から折れ、粉砕された。
柄にまで走った破損の波は剣だけに留まらず、それを握る腕にまで到達し、血飛沫を上げるという結果を齎す。

左腕を赤く染め、砕けた柄を取り落とすジャックにアンナは振り向く事無く。
「……くそったれ」
唇を噛みしめ、毒付いて――そのまま膝から崩れ落ちた。

地に伏せた少女を見下ろし、ジャックが大きく息を付く。
「予想以上だった……本当に大したもんだ」
ただの鉄くずになった剣の破片と、痺れの残る血濡れの腕を交互に眺め、口から零れ落ちるのは心底からの賛辞だ。
アンナがそうであった様に、彼もまた仕留めるつもりで剣を振るった。
それでも剣を完膚なきまでに破壊され、結果として壊れかけた柄で彼女の胴を抉るのみとなったのは、銀髪の少女の実力の高さ故に他ならない。
勝ったのは己だが、ダメージは寧ろアンナのほうが軽いだろう。
試合で剣が傷んでいなければこちらも無傷だったかもしれないが、どの道、先の攻防でこの少女を仕留めきる事は出来なかったと思われる。

「さて、トドメ……という訳にもいかんが、どうしようかねぇ」
これだけ派手に戦えば直ぐに他の騎士もやってくるだろう。
これ以上騒ぎが大きくなる前にさっさと姿を消すべきか、と踵を返すと、剣士は何かが聞こえたかの様にその場で動きを止めた。
「よう、聞いていただろう？　あぁ、バレた。お楽しみの時間は終わりだ、暫くは潜る……何？」
遠話の魔法か、魔道具か。
耳元に手を当て、離れた”誰か”と会話するその顔が、はっきりと困惑に染まる。
「いやいや待てって。連れ帰る？　今から？　無茶を言いなさんな、下手すりゃこの場で殺すよりも他の連中を焚き付ける結果になるだろ、そりゃ」
聞き分けの無い子供に言い聞かせる様に、呆れの感情を抑えて言い募る男であるが――会話している相手が余程喧しかったのか、耳元を押さえる手が強く耳を塞ぎ、顔が嫌そうに顰められた。
「あぁ、分かった分かった……許可は得てるんだな？　なら従いますよ、上役殿」
とっとと話を終わらせたい、そんな気持ちがありありと浮かんだ表情で、不承不承、首を縦に振る。
遠話が途切れたのか、ようやっと耳元から手を離したジャックは「やってられんな」と

気怠そうにボヤいた。
「斬り合いは望む処だが……こんな仕事は契約外だと思うんだがねぇ」
文句を垂れながら気絶したアンナの側に歩みより――その身体を担いで己の右肩に乗せる。
「さて、流石に人を担いで脚で逃げるってのは無理があるな……使うか」
身に着けた衣服と革鎧が汚れるのも構わず、血塗れの左手を懐に突っ込んで何かを取り出そうとして――。
背後から首筋を撫で挙げた強烈な悪寒に、咄嗟に身を反らして横っ飛びに跳躍する。
解放した魔力を惜しげも無く使って強化した身体能力で、一瞬でその場から距離を取る――が、死の予感……背後からジャックの首を狙って強襲してきた人物は、その動きにも実にあっさりと追随してきた。
こちらが肩に乗せている少女を気遣っているのか、斬撃では無く突きがジャックの喉を狙って打ち込まれる。
それでもその鋭さ、速さは素手で捌けるようなレベルではない。剣士は咄嗟に近くに落ちている二刀――アンナの得物の片方を爪先で蹴り上げ、キャッチすると剣の腹で相手の切っ先を受け、逸らす。
火花を上げ、魔装のショートソードとそれに匹敵する逸品であろう湾刀で鍔迫り合い

となった。
「……その剣も、その娘も、貴方が気安く触れていいものじゃない。置いていきなさい、首と一緒に」
「……連戦、しかも今度はアンタかよ《戦乙女》」
硬質な、冷たい声と底冷えする視線で己を貫いてくる黒髪の騎士の少女を正面から見据え。
流石に今日は腹一杯だぜ、と。ジャックは辟易とした表情で呻き声を上げた。

色々と問題が詰み上がってはいるが、流石に準決勝、決勝くらいは部下（アンナ）の活躍を応援……それが無理でも激励くらいはしたい。
その様な心積もりであったミヤコが、警備を担当する騎士団との打ち合わせも兼ねて闘技場（コロッセオ）を訪れたのは、全くの偶然だった。
見事準決勝を勝ち進んだアンナへと祝いの言葉を贈ろうと、隙間時間を縫って彼女の姿を探し、強い魔力のぶつかり合いを探知して。

――駆けつけた先にあったのが、意識を失った部下が参加選手の一人に連れ去られようとしている光景である。

確認を取るまでも無い。アンナを担いだ男の魔力は、先程迄ぶつかり合っていたものと同一だ。

現在《刃衆(エッジス)》が秘密裏に調査を進める事となった人身売買組織のソレと、男が関係あるのかは駆けつけたばかりのミヤコには分かる筈も無い。

だが、眼前で大切な部下を、仲間を攫おうとしている不埒者がいるという時点で、彼女に躊躇い迷いは生まれなかった。

競り合っていた剣を、鍔元で引っかける様にして跳ね上げる。

男とミヤコ、腕が互いに持ち上がり、黒髪の少女は即座に空いた胴に向かって蹴りを放った。

一歩下がってそれを躱す男。だが、彼の握るアンナの剣はショートソード。ミヤコの湾刀よりリーチは短く、距離を取れば攻めに転じることは難しい。

引き戻した剣を男の左足に向けて斬り払う。軸足を入れ替える動作でこれも躱され、返す刀で打った左胴への一撃はショートソードで弾かれる。

アンナを無力化しただけあって、男の剣技は相当なものだ。ミヤコをして決して油断できる相手では無い。

それでも、慣れぬ得物、右肩に乗せた意識の無い人間一人。これらの条件も重なって、少女は着実に男を追い詰めてゆく。

男もアンナを盾にする程の外道では無いようだが、だからといって手心を加えてやる必要性は感じなかった。

剣が交差し、離れ。銀光が閃き、弾き合い。それらが際限なく加速してゆく。

「っとと……！　待て待て、肩のお嬢さん（レディ）を下ろすから、一旦止まらんかね？　アンタも気になって右を狙えてないだろう」

「えぇ、下ろしなさい、直ぐに」

「……止まる処か、下ろした瞬間に首を刎ねる気満々か。おっかないってレベルじゃねぇ」

男は肩に荷物を担ぐ故に、片腕しか使えず。ミヤコは担がれた意識の無い部下を気遣い、男の左半身を中心に狙うので攻め手が限られ。

それでも並みの戦士どころか闘技大会の参加者達ですら、迂闊に立ち入ればたちまち斬り伏せられるであろう、神速の剣戟の応酬が繰り広げられる。

防戦に徹する男だが、何かを狙っているのは明白だった。

この状況でミヤコに、《刃衆（エッジス）》の長を相手に勝ちを狙いに来るとは思えない。

故に、警戒すべきはその”狙い”がこの場の離脱を可能とする一手である事。

（得た情報によれば……例の組織は、転移魔法――《門》を移動手段として多く用いてる）

五月雨の如き連続突きを放ち、妙な動きを取れぬ様に牽制しながらミヤコは思考する。

最初に首を狙って背後から強襲した際にも、男は何かを懐から取り出そうとしていた。

もし件の人攫い連中の関係者であるなら、それが《門》を開く魔道具である可能性は高い。だとすれば、断じて使わせる訳にはいかなかった。

これだけ攻め立てているのにも関わらず、未だに刃が掠りもしていない男の技量は凄まじいものがある。

痺れを切らして強引に攻めれば、手痛い反撃――それこそ魔道具を使用する隙を与えかねない。

だが、こうして目の前で、意識の無いアンナの身が悪漢の手の中にある状況は、否が応でもミヤコを焦燥させる。

元より親しい者が関わる事に関しては、部下であるシャマ程では無いが直情的な少女だ。

冷静さで蓋をしているものの、瞳の奥に灯るその焦りを、或いは剣士も看破していたのかもしれない。

しかし、ここは闘技場(コロッセオ)――彼女達以外にも、多くの騎士や兵、多くの客が詰める、催し物の会場である。

その様な場所でトラブルを起こし、ましてや連続で戦闘を続ければ彼女達以外にも気付く者が現れるのは必然であり。

自らの推しの一人があわや攫われかけている、そんな状況をその青年が嗅ぎ付けるのは、至極当然の帰結であった。

――《起動(イグニッション)》

短文の詠唱と共に、男の――ジャックの背後で爆発的な魔力が膨れ上がる。

「!?　う、おおおっ!!」

背後から肝臓を狙って突きこまれた手刀を、正面の剣戟を捌きながらもかろうじて回避する剣士。

流石に余裕の気配も剥ぎ取られ、必死の表情を見せて距離を取る。

「……先輩!」

植樹された木立の陰からゆらりと現れた黒髪の青年の姿に、ミヤコが顔を輝かせて喝采を上げた。

一見して転移者と分かる容姿と、深紅の魔力導線走る漆黒の装甲を手足に纏った青年の姿に、ジャックが渇いた笑い混じりの唸り声を洩らす。
「ハ――此処にきて《猟犬》か……！　今日は厄日が過ぎるね……！」
――うるせぇ、はよ死ね。
割と切実な響きを伴う男の声も一顧だにせず、青年が完全に据わった目付きで一歩を踏み出した。
当然の如く、ミヤコもその隣へと並び立つ。
《聖女の猟犬》と《黒髪の戦乙女》。邪神の上位眷属であっても「もう嫌おうち帰るぅ！」と悲鳴を上げて回れ右しそうな敵対者絶殺コンビが各々に拳と剣を構えるのを見て取り、ジャックは深い……それはもう深い溜息を長々と吐き出した。
「やれやれ……余計な注文が入らなけりゃ、とっとと逃げ出せていたものを」
駄目だこりゃ、とボヤいて剣士は手の中のショートソードを構え。
刃を自らの革鎧の継ぎ目に中てると、一気に斬り裂いた。
唐突な行為に、ミヤコが訝し気に眉を顰め、青年の方は知った事では無いと剣士の隙を伺い。
その間にも留め具や固定用の革帯（ベルト）にまで刃を滑らせたジャックは、魔力強化した指先を引っかけ、自身の身体から革鎧を引き剥がしてしまう。

わざわざ声を掛けるような真似はしないが、それでも不審はあるのだろう。
転移者の男女の警戒混じりの疑問の視線に、肩に銀髪の少女を担いだままの男は肩を竦め――再び飄々とした笑みを浮かべた。
「あぁ、悪い。武装解除だと思ったかい？　生憎そのつもりは無くてね」
身軽な衣服のみとなり、律儀に手にした刃をアンナの腰に下がる鞘へと収め、続ける。
「流石にこの状況で《刃衆（エッジス）》の長と《猟犬》を相手に、出し惜しみは無理だ――使えるものは全部使うさ」
無手となった左手を胸元に中てた男を中心に、魔力が渦を巻いて膨れ上がった。
何かを仕出かす。その前に仕留めてしまおうと、青年が動き出す。
だが、次の瞬間には動きを止める事となった、ジャックの口から紡がれた言葉が、青年にとってあまりにも予想外であった故に。
「《起動（イグニッション）》」
渦を巻いた魔力が男を覆い尽くし――吸いつく様にその身体に沈み込んだ後には、その装いは一変していた。
身に纏うは純白の全身鎧。

勇壮でありながら、何処か有機的なイメージを覚えるスマートな外見の装甲には、多数の深紅の魔力導線が刻まれ、脈動するように明滅している。

何より、人外級の優れた魔力量を有していた男の魔力を、更に増大させたその威風・威圧。

あまりにも見覚えがあり、同時にあまりにも正反対な、その姿に。

愕然と、或いは呆然と、青年が立ち竦む。

自身の手足に纏った黒い装甲に走る脈動――それが、微かに共鳴した様な反応を見せた事も、青年の動揺に一役買っていた。

彼ほどでは無いが、ミヤコもまた驚愕を露わにして眼前の白い魔鎧を見つめている。

そして、その隙を白の魔鎧の主――ジャックは見逃さない。

圧縮した魔力がその背面装甲より噴射され、静止状態からの超加速により一瞬で姿がかき消えた。

それを見て即座に忘我より帰還し、意識を切り替えた青年。だが、既に白い魔鎧は眼前で軸足を回転させ、蹴りの動作に入っている。

咄嗟に発動させた《流天》も、一手、遅い。

直撃の瞬間、辛うじて己が胴と蹴りの間に片腕を差し込むも、爆発的な身体強化を齎す魔鎧の蹴りを受け、その身体が叩き飛ばされた。

轟音が轟き、闘技場（コロッセオ）の壁を粉砕して青年が砕けた壁と湧き上がる粉塵の向こうに消える。

「――！　先ぱ……！」

切迫した声色で壁に空いた大穴に向けて叫ぶミヤコだが、一瞬で横手に現れた純白の鎧姿に、反射的に剣を振るう。

多少の動揺はあれど、彼女もまた幾多の戦場を超えた人外級の剣士。

魔鎧の装甲であっても十分に両断可能な神速の斬撃が、左方から首を狙い、銀の残光と共に閃く。

一連の攻防に至るまで、その右肩に銀髪の少女を乗せ続けていた白き魔鎧は、意識の無い彼女の身体を支えていた右の手を、一瞬離し。

自由になった両の掌を用いて、ミヤコの振るう湾刀を挟み込んで止める。

ひと一人を担いだ状態での、超高速の斬撃に対する白刃取り。

瞠目に値する絶技に、驚愕する暇も無い。

そのまま湾刀の刀身が握られ、柄を握るミヤコごと投げ飛ばされる。

「くっ!?」

投げる、というより放る、に近い放物線を描く軌道で長い滞空時間を強制されるミヤコだが、一瞬で風の魔法を発動。

足場代わりに蹴り付け、空中で体勢を立て直して地へと着地した。
が、距離が強制的に空けられ――その間にジャックは次の一手の準備を終えている。
「ここまでだ――ま、次の機会があれば、きちんと戦りあうとしようか」
その手には拳程の大きさの魔道具と思しき宝珠が握られ、魔力を籠められた事で今にも発動しそうだ。
「《門》っ……！　アンナちゃん……!!」
そうはさせじと、ミヤコが剣を構えてジャックに向けて跳躍しようとした瞬間。
《起動（イグニッション）》
短文の起動詠唱と共に、ミヤコの背後――壁に空いた大穴が爆砕され、積もった瓦礫が吹き飛ぶ。
凄まじい勢いで飛び出して来たのは、漆黒の魔鎧を全身に纏った青年だった。
先の一撃を受けて無傷とはいかなかったのか、魔力導線によるものだけではない赤をあちこちから噴き出し、瞬きの間にミヤコの脇を駆け抜ける。
ジャックが瞬時に手の中の《門》を開く魔道具を庇う様、背後に放り投げるが、その動作が終わる前には黒い魔鎧は眼前で拳を叩きつけていた。
音速を遥かに超える打撃が空気の壁をぶち破り、衝撃波を撒き散らしながら純白の頭部装甲（サレット）へと打ち込まれ――しかし寸での処で掌で受け止められる。

交差する白と黒。全身鎧でなければ互いの息遣いすら聞き取れそうな距離で、二つの魔鎧――その主達が視線を交わし合う。
拳を受け止めた掌の肉が弾け、血が噴き出る感触を装甲越しに感じながら、しかしそんな痛みなど気にもならない程の凄絶な敵意を全身に浴び。
ジャックは腹の底から突き上がる戦慄と歓喜を口の端に乗せ、嗤った。
「く、は、はははははっ！　それがアンタの素――いや、地金か？　とぼけた面をしてなんてモンを腹の中に飼ってやがる！」
魔鎧の持つ威圧だけでは説明の付かない、どうしようもなく〝死〟を予感させる不吉な意。
それが漆黒の装甲の奥、鎧と同じ黒い瞳から放たれる、凍える様な冷たさを伴った灼熱の殺意であると理解して。
「あぁ、名残惜しいな。――次、会うことがあれば今度は最後まで戦ろう《報復（オリジナル）》……いや、猟犬の」
自身の白い魔鎧の魔力噴射を利用し、至近距離の青年の腹部へと膝を捻じ込む。
吹き飛ぶ彼を、直ぐ背後へと迫っていたミヤコが咄嗟に受け止める。
数歩、たたらを踏んで。だが直ぐに踏み止まり、手を伸ばす黒い魔鎧。
その指先が伸ばし切られる前に、ジャックが背後に放った宝珠が光を溢れさせて発動

した。
時間にして一秒弱、ほんの僅かな間に開いた転移魔法の《門》。
そこに跳び下がる様にして飛び込む白い魔鎧にでははなく、抱えられた少女にこそ伸ばされた手は、届かずに空を切る。

――アンナ!!

叫んだ青年の声に、気絶している筈の銀髪の少女の瞳がうっすらと開かれ、だが彼が飛び込む前に、無情にも《門》は閉じられた。
光が収まった後に残るは、破壊痕著しい芝生と植木のみ。
焦燥と怒りを噛み潰して漏れた唸り声と歯軋りは、ミヤコと青年、どちらのものであったのか。
帝国に巣を張る、大規模な人身売買組織。
その下にいるであろう、来歴不明の転移者にして、もう一つの魔鎧を纏う男、ジャック=ドウ。
仲間であり、友人である少女を目の前で攫われるという、青年達には最悪の形で以て、その正体は暴かれ――事態は大きく動き出したのであった。

キチ〇イ、起動。

途切れた意識が辛うじて繋がった中で、思った事はシンプルだった。
お腹――というか胴というか、めっちゃ痛い。
朦朧とする意識の中、アンナは自分が肩に乗せられ、揺られているのにも気付かず、辛うじてそんな事を考える。
剣の柄で強打された事で打撲状態となっている胴を担がれているが故の痛みなのだが、殆ど飛んでいる意識ではまともな考察や思考など出来る筈も無く。
痛みによって辛うじて維持されていた意識の糸も、やがては切れて完全に暗闇へと沈み込む。
が、そのときだ。
誰かに自分の名前を呼ばれた気がして、沈む意識が僅かに浮上した。
眼を開けることすら億劫な鈍い意識を叱咤して、閉じた瞼を薄っすらと開いた、その先に。
誰かに担がれ、逆さまとなった視界の中で、此方に手を伸ばして叫ぶ駄犬(ゆうじん)の姿が見え

た。
魔鎧の装甲に覆われているにも関わらず、必死な表情が透けて見えるような、その切羽詰まった声色に。
なんだか少しおかしくなって、口の端をほんの微かに緩ませる。
（……なまえで呼べるなら、普段からそうしろっての、ばーか）
舌を動かす事も出来ず、口の中で掠れて消えた言葉を胸中で呟いて。
今度こそアンナの意識は途切れ、再び暗闇へと沈み込んだ。

光と共に開かれた《門》を抜け、それが完全に閉じた事を確認したジャックは魔鎧の装甲を解除する。
急場をしのいだ事に、溜息を一つ。鎧の起動と同時、施した幻惑魔法の効果を消し飛ばされ、本来の色である黒へと戻った頭髪を左手で掻こうとして――掌の肉が裂けて赤く染まっている事を思い出して止めた。
転移した先にあるのは、石造りのやや薄暗い部屋であった。

《門》による転移先として設定された場所だ。肩に乗せた意識の無い少女の体勢を微調整すると、直ぐに部屋のドアを開け、続く長い石作りの廊下を歩き出す。

「ふん。も、戻ったか」

一定間隔で魔法を光源とする証明の灯された廊下を進むと、通路の奥からやって来た、白衣にも似た研究衣を羽織った？せぎすの男に声を掛けられた。

「随分と無茶を言ってくれたもんだな、博士（ドクトル）。アンタの御注文の御蔭でえらく苦労したんだがね」

「お、音声はある程度此方でも、は、把握していた。《栄光（グローリアス）》をき、起動したらしいな」

剣士の愚痴とも皮肉とも取れる言葉には反応すらせず、博士と呼ばれた眼ばかりがギラギラとした生気を放つその男は、滑舌がよろしいとは言えない口周りに分かり易く興奮の色合いを乗せて言い募る。

「お、《報復（オリジナル）》と交戦したというのも非常に興味深い。い、一度しっかりとした戦闘情報（データ）を取りたいと、お、思っていた」

「……一手交わしただけだ、大した情報にはならんと思うがね……何より、少しばかり解析した処で意味が無い――あれは、模造品（コピー）とは格が違う」

完全起動した漆黒の魔鎧は、単純な魔力強化の幅一つとってもジャックの扱う魔鎧――《栄光（グローリアス）》とは比べ物にならなかった。

性能比較などいちいちするまでもない。長い戦争で”災害”扱いされるだけの物ではあるということだ。

愚痴をスルーされた意趣返しもあって気の無い返事を返す剣士に、博士（ドクトル）は鼻を鳴らした。

「そ、そんな事は、り、理解している。も、元より特級の呪物をい、一級相当にまで規格化（デチューン）させ、使用反動を抑えての量産化が、ほ、本来の《栄光（グローリアス）》の用途だ」

それについてはジャックに《栄光（グローリアス）》を渡した際に説明した筈なのだが、自身の研究成果を語る事に飽きぬは研究者の性らしい。

不本意そうな口調とは裏腹に、何処か嬉々とした様子で男は自らの作りだした白い魔鎧について繰り返し語る。

大戦によって絶える事の無かった大量の死者。

その中でも特に無惨な死を迎えた者……それこそ、人類種側のソレは勿論の事、邪神の軍勢であった信奉者達のものまで、遺体に残留する程の強い負の思念を残した大量の骸を素材とした。

抽出した思念を疑似的に再現した魔鎧の装甲に押し込め、死霊術の一種である儀式を用いて定着させる。

そこから更に無数の加工と調整を経て産まれたのが、魔鎧《栄光（グローリアス）》であった。

剣士には魔法の知識など相対した際の対応法以外は殆ど無い。
だが、改めて簡略化した手順を聞くだけでも邪道・外法と呼ぶに相応しい製法であるのは明らかだ。
これを量産化――即ち、戦争に終止符を打ち、人類種に勝利を齎す栄光の牙であると嘯いたらしい、剣士や博士の雇い主。
そのネジの外れっぷりには、ジャックをして絶句の一言である。
試作段階でありながら、わざわざ手間暇をかけて装甲を純白へと調整したのも、彼個人としては薄ら寒い虚飾を感じでいた。
量産・配備の構想があったからこそ、見目を整えたという事だろうが……一皮剥けば敵味方の怨念渦巻く醜悪な呪のごった煮だ。これを栄光（グローリー）と称するのだから酷い皮肉にすら聞こえる。
（いや、実際皮肉だったのかもしれんな……）
明らかに倫理に反する代物を戦時中という大義名分で欲し、組織を支援し――戦の終わった今尚、研究成果を求める各国の”顧客”か。
もしくは邪神との戦いに勝利し、平和を取り戻す為という建前を謳いながら、反吐の出る様な実験・研究をひっそりと進行させていた己に対してか。
或いは両方なのかもしれない。

そう思い直し、ジャックは血に濡れた指先で自身の顎を撫でる。
彼の雇い主は自分が外道に堕ちていることなど、とうに理解している。
その上で、止まらない男だ。止まれない、と行った方がより正確か。
そういう意味では己の同類と言える。だからこそ興味を惹かれ、雇われる事を良しとした。
同じ様に自覚して、其れを飲み下すか、それとも目を逸らすか――そもそも気付く事すら無いか。
度合いに差はあれど、組織の中核に近い者は須らく頭の螺子が行方不明となった外道か狂人の類である。
眼前の骨ばった男も、とびっきりの後者……研究者としての才覚をオツムの中に詰め込んだ代わりに、倫理観や共感性といったモノを母親の腹の中に置き忘れてきた類だ。
「――よ、予定より高い魔力値を示せはしたが……せ、千を超える最上の”素材”を使って、や、やっと一つだ。た、たとえ戦争が続いていたとしても、そ、素材の確保にな、難があり過ぎる……つ、つくづく《報復》（オリジナル）の、と、特異性が気になる結果だ」
量産性がどうやっても向上出来ない。そんなオチで以て、ジャックが主となった試作品（プロトタイプ）が最初で最後となった《栄光》（グローリアス）だが……博士（ドクトル）としては、自身の手掛けた魔鎧より遥かに少ないであろう数の負の思念を元に構成され、それでいて桁外れの出力と無数の

機能を誇る《報復（オリジナル）》にはまだまだ未練染みた興味が尽きないらしい。
ブツブツと魔鎧に対する考察を口の中で呟きだした狂人を前に、辟易とした表情を隠さずに剣士がその独白を遮る。
「……で、俺が担いだままの博士（ドクトル）御所望の土産はどうすれば良いのかね？　そろそろ目を覚ますんじゃないかと気が気でないんだが」
「――！　そ、そうだった。と、取り敢えずはぶ、武装を剥いで牢に入れておけ」
思考を邪魔されると何時もは不機嫌になる男だが、今は珍しく上機嫌であった。
予算の追加や欲しかった研究材料が手に入った際にはこうなる。どうやら、この銀髪の少女は相当に欲されていた様だ。当人からしてみれば迷惑処の話では無いだろうが。
了解、と空いた方の肩を竦めたジャックは歩き出そうとして――ふと気になった事を問おうと、再び博士（ドクトル）の方へと振り向く。
「許可は得てる、と言ったが……何で《銀牙（このお嬢さん）》なんだ？　素体やら素材やらにしても、良質なものが欲しいなら大会参加者や……それこそ他の《刃衆（エッジス）》でも良いだろうに」
「ふん。な、何故もなにも、い、以前からその娘はマークしている。ね、年齢と、エンハウンスという名からして、ちょ、調査の対象だった」
剣士の疑問に再び鼻を鳴らし、ギョロリとした目で肩に担がれた少女を眺める目付きは、実験対象を見る研究者のソレであった。

「片刃（エンハンス）シリーズ……げ、現行の『超人兵計画』の、さ、最初期ロットの総称だ。その娘は、其の廃棄漏れの可能性が、高い」

「アンナ、ちゃん……！」

自らの不甲斐無さと、大切な友人を攫った下手人への怒りに猛る胸中。

それらを押し殺す様に友人の名前だけを呟き、ミヤコは歯噛みした。

とんでもない失態だ。自分がいながら、目の前でみすみすアンナを悪漢の手に渡してしまった。

戦時以来の腹の中を掻きまわす焦燥感に、だが決して取り乱す事無く少女は次の行動について思索する。

こと此処に至っては、裏で動く、影で動くといったまだるっこしい手段を取る段階では無くなった。

アンナを攫った男――ジャックが《門》の魔道具を用いてこの場を離脱したと言う時点で、件の人身売買を行う組織と繋がっているのは明らかだ。

現状ではトニーとその協力者から得た情報は、まだ騎士団や軍そのものを動かす程の量ではないが……逆を言えば自分達の部隊が独自に動く分には問題無い程度には集まっている。

強襲だ。今から《刃衆（エッジス）》の隊員を全員招集。編成を行って現在判明している《門》を強制起動して速攻を掛ける。

帝国最精鋭の部隊としての面子、個人としての情、両方の面からみても此処は迷わず行動すべきだと判断した。

王城内に内通者がいる可能性があるらしいが――グダグダと抜かして邪魔する輩がいるのなら、内通者だろうが派閥争いの嫌がらせをしてくる貴族派だろうが力づくで黙らせるのみ。

各所の《門》を起動し、且つ転移先の干渉で閉じられない様に維持する為には腕の立つ魔導士も必須――こちらは宮廷魔導士から人員を借りる必要があるだろう。

そこまで考えた時点で、《門》の消えた場所をジッと見つめていた漆黒の魔鎧……ミヤコが先輩と呼び慕う青年が、静かに魔鎧を解除して彼女の方へと向き直る。

「先輩、怪我が……先ずは治療を――」

――隊長ちゃん。

身体のあちこちを朱に染めた彼を見て、反射的に出た言葉は怪我人自身に遮られ。

その、何ということは無い自分を呼ぶ声に、息を呑む。

眼前で友人を攫われたというのに、青年は非常にフラットなテンションであった。

怒るでもなく、嘆くでもなく、焦燥に駆られるのでもなく。

傍目にはまるで、これから飯でも食いに行かない？　とでも言い出しそうな、平坦な声色。

だが、彼を見て来た――ずっと見て来たミヤコには、青年が激怒しているのが容易に理解できる。

一見平穏を保っている様に見える黒瞳に浮かぶ光は、まるで、冷たい炎の様で。

魔鎧を行使しない彼は、お世辞にも一流の強者とは到底呼べぬ実力である筈なのに、ミヤコをして背筋を走るものがある眼力を湛えている。

こと青年への観察眼という点に関しては、普段から彼の傍に居る聖女二人よりも一歩先を行く、という自負のある少女であるが……今の彼に関しては、一定以上の親交がある者ならばその内心の状態を察する事は難しく無いだろう。

何故なら、そこに居るのはとぼけた言動で大騒ぎしては白目を剥く、騒がしくも優しい”先輩”ではなく。

二年前、邪神の信奉者達から不吉の象徴として忌み嫌われ――そしてそれ以上に恐れられた《聖女の猟犬》であったから。

（もう、見る事もないと思っていた……先輩がそんな表情を見せる必要は無くなったと、思っていたのに……）

普段の彼とあまりにも乖離した戦場での貌を久しぶりに目撃した事で、ミヤコの胸に忸怩たる思いが湧く。

だが、こうなった彼がこの上なく頼もしい味方であるのもまた事実である。同時に制御が極めて困難な炸薬である事も否定し辛いが。

――経緯とか、事の次第とか……諸々教えてくれ、頼む。

そう言って静かに頭を下げる青年を見て、黙考した時間は数秒にも満たない。

ミヤコが断れば彼は無理に聞く事をしないだろう。

だが、情報が無いなら無いで即座に独自に動き出すのは目に見えている。

完全に手を離れた場所で大量の行方不明者が出るようなオチになるよりは、情報を共有して動いた方が遥かに良いのだ。

と、まぁ色々と脳内で理論武装する少女であるが、実の処、最初から説明を拒むつもりは無い。

繰り返すが、彼が知らない場所で滅茶苦茶したり無茶をしたり、ましてや大きな怪我

をされるよりは合同で戦った方がずっと安心できる。
何より……ミヤコだって部下を――トニーを半死半生に追いやり、アンナを攫った男とその背後の組織に対して、腹に据えかねているのだ。
「……全部、は少し情報量が多いので、要点をかいつまんで説明します。それで良いですか？」
青年が頷くのを見て取ると、先ずは原因となる孤児の保護実態について、ミヤコは語りだした。

黒髪の少女との会話を終えた青年は、戦闘痕残る闘技場（コロッセオ）下部エリアを見回す。
既に激しい戦いの音や発生した魔力を感知した騎士や衛兵が複数やって来ていて、直ぐに現場の保存が始まっていた。
ミヤコは騎士達に簡単な状況説明と指示を出すと、急ぎ王城に戻っていった。これから《刃衆（エッジス）》に緊急招集を掛けるらしい。
芝生の上に落ちているダガー……アンナの愛剣の片割れを見つけ、それを拾い上げると、抜身のままの刀身にハンカチを巻きつけて保護する。そのままそれを腰の革帯（ベルト）に挟

み込んだ。
傷の手当を申し出て来る騎士の言葉をやんわりと固辞すると、そのまま上部エリアに繋がる階段へと足早に歩き出す。
ミヤコも先ずは傷の手当てを、と言ってくれたが、やるべき事は多く、会わねばならない者も多い。
どうせならば、最初に話をする相手についでに治してもらった方が手っ取り早い。
そんな判断で身体のあちこちに残る生傷を放置して歩き出した青年であったが、階段から駆け下りて来た見慣れた白い僧服姿の二人に、歩みを止める事となる。
「ッ、オイ！　なんで怪我してんだよお前は!?」
「にぃちゃん！」
人外級が激突した魔力――特に魔鎧のソレを感じ取って慌ててやってきたのだろうか。
金と銀。其々に美しいその髪を振り乱さんばかりの勢いで駆け寄って来た聖女姉妹――レティシアとアリアは、衣服や肌に赤黒い染みをあちこち付けている青年の姿を見て、半ば悲鳴に近い叫び声を上げた。
二人の手から即座に飛ぶ回復魔法と浄化魔法。走り寄って来る間にも聖女の超高レベルの癒しの魔法が彼の全身へと怒涛の勢いで降り注ぐ。

死にかけであってもあっという間に完治しそうな魔法の連打だ。元より即処置が必要な重症の類は無く、腕の打撲を除けばそう深手ではない切り傷と擦り傷であった青年の怪我は一瞬で消えてなくなる。

浄化によって血糊や汚れも消し飛び、衣服に至ってはやや破損してほつれているのにおろしたての新品よりピッカピカという意味の分からない状態になった。

この世界の回復魔法にマホ〇ミ効果とか無くて良かった、とかアホな事を考える青年であるが、ワタワタと駆けて来る二人の姿にちょっと和んだのも一瞬、直ぐに厳しい表情を取り戻す。

「他に怪我は？　何があった？」

「痛いところ無い？　大丈夫にいちゃん！」

青年の懐にタックルする様に飛び込んで触診を始める姉妹を見下ろし、彼は先ずは礼の言葉と共にもう傷一つない、と答える。

そして、胸を撫で下ろす少女達に告げた。

――二人とも、頼みがある。

常にない……それこそレティシアにとっては二年振りであり、アリアにとっても霊峰での一件以来の心底真剣な声色に、二人の聖女はその空色の瞳を見開き、眼を見合わせた。

「頭領（ボス）、何時まで会場に残ってるんですか？　もう他のお客さんとか皆捌けちゃいましたよ？」
「暇か？　まぁ、もうちょい待ってろ。俺も暇だが待った方が良い予感がする」
部下の青年――《不死身》の訝し気な、同時に退屈そうでもある声に、闘技場（コロッセオ）特別席の上で胡坐を掻いた体勢の《魔王》が、暇という割には楽しそうな顔つきで応じる。
「また勘かよ。それでマジ当たりするから始末に負えねぇ……さっきの下の方で発生した魔力に関係あるのか？　聖女の娘っ子共は血相変えて行っちまったが」
「あぁ、多分な」
「えぇ……頭領（ボス）の勘……しかもわざわざリリィちゃんをミラさんに預けて先に宿に帰らせるって時点で、物騒な話になるの確定じゃないですか……」
《狂槍》が適当にも程がある癖に異様に的中率の高い上司の勘働きに呆れ、魔族の中では珍しく戦いをあまり好まない《不死身》が嫌そうに眉を顰めた。
部下二人の面倒くさいものを見る視線にもまるで頓着することなく、《魔王》は自身の直感が示す儘、修繕中の武舞台を眺めて待ち続ける。

やがて、そう長い時が経つまでもなく”そのとき”は訪れた。
突如上空に現れた魔力と気配に、《狂槍》と《不死身》が反射的に武器へと手を伸ばす。
だが、それも一瞬だ。空を振り仰いで見覚えがある姿を目に留め、二人は武器から手を離して落下して来る人物を見つめ、次いで訝し気に顔を見合わせた。
少々離れた場所……おそらくは闘技場（コロッセオ）外縁辺りから大跳躍し、音も無く己の側へと着地してきた漆黒の鎧姿に、《魔王》は泰然とした様子で首だけを向けて笑いかける。
「来たか、猟犬。で――俺は何をぶった斬れば良い？」
久方ぶりに戦場の空気を纏う戦友へと、魔族の長はその鳶色の瞳を楽し気に細め、問いかけた。

帝都王城、皇帝の執務室にて。
緊急で上がって来た報告書に眼を通した現皇帝、スヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルは、手にした紙束を豪奢な執務机の上へと放り投げ、抑揚に欠けた声色で呟いた。

「闘技会にも件の連中の手勢が混ざっていたか……よくもまぁ、余の膝元たる帝都で好き勝手やってくれる」

くつくつと喉の奥で笑う皇帝であるが、その裏に丁寧に畳まれた激情を感じ取っているのか、執務室に詰めた秘書官と、急ぎ報告書を届けに来た武官の顔色は悪い。

スヴェリア自身は自国・他国の有名処ほどの武を持たないが、彼は人類種最大国家の主権――バラバラだったそれを一代で纏めきった傑物である。

突出した為政者や集団の長のみが持つ、覇気やカリスマと言い替えても良い空気。

それに怒りという方向性を加えられ、静かに燃え上がる様は、武威による威圧とは別種の圧迫感を見る者に与える。

仕事の能率を上げる為に、実用的かつ最高品質の調度品に囲まれ、魔道具によって適温を保たれた筈の執務室は、その恩恵を全く感じられない程度には居心地の悪い空間と化していた。

平然としているのは皇帝本人と、彼の背後に控えるメイドの女性くらいのものだ。

暫しの間、無言で机の上の書類を睨み付けていたスヴェリアであったが、部屋の扉がノックされる音を耳に拾って顔を上げる。

本来なら扉前に待機する守衛に面通しを行い、その上で扉越しに守衛を挟んで入室許可を得るのだが――その様な手間も惜しいとばかりに直接ノックをする、スヴェリアが

其れを許す人物など何人もいない。
「陛下、吾輩です。お呼びと聞き、急ぎ参りました」
「来たか、入れレーヴェ」
帝国皇帝と将軍の交わす挨拶としては少々処ではない端的さなのだが、執務室への出入りを許されている者達は能力・人品・背後、全てにおいてスヴェリア自ら厳選している。格式や形式も持ち出す場面とそうでない局面の区別の付かない愚鈍は、この部屋には居なかった。
獅子の鬣のごとき赤金の髪を持つ偉丈夫が入室し、一礼する。
入って来た時点でレーヴェ将軍の方も普段より格段に物騒な気配を放っており、武官と秘書官が王と獅子の威に挟まれて遠い眼付きになった。
「む、お前が報告に来ていたか。ご苦労だった」
「あぁ、そうだな。レーヴェも来たし、戻って良いぞ」
前者の顔を見た将軍の言に皇帝も頷く。
「ハッ、それでは失礼いたします！」
完璧な敬礼を決めて、心なしか軽い足取りで即座に退出する武官の背を見送ると、残された秘書官の眼が死んだ。
それに少しばかり同情的な視線を向けるメイドさんであったが、原因となる空気を室

内にばら撒いている二人は気にする事も無く早速本題に入る。
「何処まで聞いている？」
「概ねは。ネイト殿から直接伝えられました故」
前置きを飛ばしてガンガン話を進めるスヴェリアであるが、どのような件で呼ばれたのかはレーヴェ将軍も予想が付いていたらしい。厳しい表情のまま、頷きを以て返す。
豪奢だが柔らかな椅子の背もたれへと体重を預けた帝国の主は、執務室の天上を仰いで独白の様に謳う。
「都市内各所への多数の《門》の設置――資金や人材の面から見ても、数年で出来る事では無い。連中は戦時中から帝都に、帝国に根を広げていた訳だ」
淡々と紡がれる言葉の下に、沸々と滾る感情の波を察するのはこの場の者達であれば容易であった。
「連中からすれば、余は膝元の帝都で長年活動しても勘付く事の無かった間抜けだ。各国賓客への対応や成功させる為の調整に追われる《大豊穣祭》は、さぞ好き放題に出来る機会に映ったのだろうな」
天上の照明を眺め、再び喉の奥で笑うスヴェリア。
執務室へと静かな笑いが響き、それが壁に染み入って消えて、暫し後。
「つまり、余は舐められている訳だ」

ボソリと、呟かれた言葉には紛れも無い憤怒が込められている。
「膝元で多くの民を攫われ、あまつさえ近衛たる騎士達を半殺しにされ、拐かされ、それでも祭りの失敗を恐れて亀の様に首を竦めたままであると、そう思われている訳だ」
握られた拳が、無造作に執務机に叩きつけられた。
「――潰すぞ。騎士団と宮廷魔導士団を動かす」
「「御意」」
打てば響く、を体現するが如く。
その場に居た帝国の臣たる者達は、一糸乱れぬ動作による最敬礼を以て皇帝の命に応えた。
「では、早速討伐隊の編成に移ります。二日あれば整えて見せましょう」
「いや、今日中――正確には陽が落ちるまでだ。代わりに動かすのはレーヴェ、お前が直轄の第一騎士団のみで良い」
「む？　であれば確かに日没までには間に合いますが……流石に第一のみでは帝都全域に対して数が足りませんぞ？」
「構わん。残りは引き続き都市内の治安維持に中てろ。《大豊穣祭》は成功させ、人買い共も潰す――不足分は、シュランタンが連れて来た兵力を使う」
予想外の名前が出てきた事に絶句する《赤獅子》に対して、皇帝はニヤリと片頬を持

ち上げて不敵に笑って見せた。

「奴とて自領で被害を受けている。協力要請に文句は言わせん。それと、王城内にいるかもしれん内通者だが……」

そこで言葉を切ると、彼は背後のメイドへと振り返った。

「宮廷魔導士団を、表向き実働組と待機組に分ける。お前は待機組を率いて動くであろう内通者を炙り出せ。捕縛が理想だが難しそうなら消して構わん」

「お任せを」

微笑んで瀟洒に一礼する女性に対して鷹揚に頷き、もう一度レーヴェの方へと視線を戻す。

「電撃戦、というやつになる。現地の情報を分析して再度割り振れる中継点が欲しいが……ティグルの奴は動かせそうか？」

来るべき『大掃除』に向けて覇気漲らせる皇帝であったが、このときばかりは多少の気遣いを感じさせる声色であった。

それに応える獅子もまた、憂いをその双眸に浮かべた、先程までと比べて少々落ちた声量だ。

「昨日から変わらず、調子を崩しております。間の悪い事に、先頃発作が悪化して寝込んでしまったと屋敷の者から連絡がありまして……」

「そうか……まぁ、仕方ない。体調が戻った後に事後処理で扱き使ってやるとしよう――参加できない事に気を病むなとだけ言っとけ」

スヴェリアも付き合いの長い相談役の病状を憂う様に瞳を閉じる。

が、一瞬後には切り替えて目を開き、その両掌を一つ、打ち合わせた。

「騎士団と魔導士団とは独立して《刃衆(エッジス)》も動かす――おそらくは幾らかの外部協力者の助力もある筈だ。それらを基軸として、陽が沈むと同時、帝都全域での強襲作戦を実行する。先ずはこの場の面子で摺り合わせをしとくぞ、地図を出せ」

帝都王城の最上階に近い執務室。

そこでやり取りされる、今夜にも始まる大捕り物についての作戦。

誰にも悟られず、それを聞き届ける者が、一人。

陽に照らされる白亜の城の外壁。

その日陰部分に紛れる様へばりつき、さながら台所の悪魔の如き体勢で極限まで強化

した聴力を用いて壁越しに会話を拾っていた漆黒の鎧姿は、満足気に頷いた。
――流石は陛下。俺の考えた手順くらいは織り込み済みか。
王様マジパネェ、などと呟きながら、カサカサと壁面を移動して誰にも気付かれていない事を確認し、１００メートル程先に見える物見の尖塔部分へと跳躍する。
そこに引っかけていた大きな風呂敷包みの様な物を覗き込むと、鎧の中の人たる青年は極めて平坦なトーンで包みの中身へと問い掛けた。
――で、待ってる間にちゃんと書けた？
震えながら頷いたのは、王城勤めの文官の衣に身を包んだ男性である。
全身の関節を外され、布一枚で包める程度に畳まれた彼は、唯一無事な右腕を使って一枚の小さな紙切れを差し出す。
それを受け取ると、青年はざっと目を通し――興味無さげに畳んで紙面から顔を離した。
――結構偉い人の名前まであるなー。これは予想以上ですわ……まぁ、そこら辺のお掃除は帝国の人達に頑張ってもらうか。
文字は震え、汗か涙と思わしき滴が滲んでやや読み辛いが、読み違える程では無い。
段々と傾いて来た陽を眺め、もうちょいペース上げるか、と独り言を呟く。
再び中身を覗き込むと、彼はまたもや平坦になった声で話しかけた。

――ちゃんと全員分書けてるか、後で確認しにくるから。後から捕縛された連中に書いてない名前が出てきたら……まぁ、なんだ、分かるやろ？

最後の台詞だけ、ほんのちょっぴり優し気となった青年の言葉に、文官の男性がイヤイヤと大きく首を振る。

猿轡などは特に噛まされていないのだが、声を出すことが出来ないのか、必死に首の動きだけで主張する男を見下ろし。

青年は握った拳の親指だけを立てると、無造作に男のこめかみに向かってぶっ刺した。

そのまま手首を捻って指を半回転させると、連動する様に文官の眼もぐるんと白目を剥く。

痙攣しながら意識を失った男の入った包みをよっこらせ、とばかりに担ぐと、結び目から見えるその額に、先程の紙切れを裏返してぺちんと張り付ける。

最後に男に握らせていたペンを使って、裏面に『ぼくはひとかいのないつうしゃです』と、適当に走り書きして。

――流石に陛下の部屋の前までは持っていけないし……《刃衆（エッジス）》の隊舎前にでも置いとくかー。

そんな台詞と共に、ちょっとアンモニア臭くなってきた包みを心持ち嫌そうに担ぎ直

し、一気に塔から飛び降りた。

闘技場(コロッセオ)から王城へ、そして再び城下へ。

魔鎧の機動力を存分に発揮して、人知れず数時間の間に帝都中を掛けずり回った青年は、次の目的地に向かって人気の無い路地裏を疾走する。

「やっと見つけた……仕事早すぎッスよ。単純にアホみたいな速度のせいで接触するのも一苦労とかどういう事っスか」

路地の角から掛けられた声に、彼が急制動を掛けて立ち止まると、物陰から進み出て来たのは知り合い――何処か狐を思わせる面差しの騎士、トニーだ。

「どーも、お疲れ様っス。今晩の別口の祭りなんスけど、お手伝(サポート)いの手はいりませんかね、旦那？」

――要らん、怪我人は寝てろ。

ヘラヘラと笑いながら提案される言葉に対し、青年はにべもなく一蹴する。

トニーが負傷したことはミヤコから聞かされている。それが無くとも彼の顔は少々血の気が足らず、魔鎧によって強化された五感は、修繕された外套(コート)の下から滲む血の匂

いを嗅ぎ取っていた。
隊長ちゃんとダハルさんにチクられたくなけりゃ大人しくしてろ、と言い捨てながら脇をすり抜けようとすると、突き出された手によって青年の行く手が遮ぎられる。
魔鎧を纏ったまま、静かに見据えて来る視線にも怯むことなく、トニーはもう一度へラリと笑った。
「いやいやいや、大丈夫ッスよ、怪我の事なら今夜一晩は問題無くなるんで」
言外に多分に含みを持たせた言葉に、青年は首を傾げ……ややあって嫌なものを見たかのように眉を顰める。
――なんつー身体に悪いモン使ってんの？　劇薬と大差ないでしょその霊薬（ソレ）。
「お、やっぱ旦那も残り香だけで分かるんスねぇ……というか、知ってるって事は旦那も使ったことあるでしょ、絶対」
正解、とばかりに僅かに魔力光の残滓が残る空の小瓶を取り出し、目の前で振るトニーの言葉に、青年は首を真横にひん曲げてノーコメント、と返した。
「ま、あとでレティシア様かアリア様にお願いして治療して頂けりゃ一発っスよ。その治療代って事で、お手伝いさせて欲しいっスね」
あくまで口調と態度は軽く。
だが、主張を譲る気は無いとばかりに食い下がるトニーに、青年は嘆息して宥める様

に声を掛ける。

――今回の件、たまたま最初に調査してたのがトニー君だったってだけやろ。お前さんが責任を感じるのは筋違いだぞ。

「旦那、アンタは同じことを言われて納得出来るんスか？」

間髪入れずに返って来た反論に、思わず押し黙るしかなかった。

「旦那が目の前で攫われた副長を奪い返す為に必死になる様に、事が動き出すタイミングを完全に読み違えた自分も、必死こいてるってだけッスよ――置いていくってんなら勝手について行くだけッスね」

《刃衆（エッジス）》に合流すれば、それこそ無理矢理にベッドに拘束されて出撃不許可の命を出されてしまうだろう。

だからこそ、トニーはこうして青年へと同行を願い出た。

急速に大詰めを迎えたこの局面、立ち回りによっては自分でも役立てる事がまだまだある筈だ。

だからこそ、身体に鞭打ってでも無理を通す。此処はベッドで安静にしている場面では無い。

子供達を助け出し、カイル少年との約束を果たす為に。

己の上司を――部下として命を張る事に悔いは無い、と思えた銀髪の少女の救出率

を、1パーセントでも上げる為に。
出来る事は全てやる。諸々の皺寄せは後になって考えれば良い。
そんな決意を漲らせて見つめて来るトニーに、青年は既視感染みたものを覚えて再び嘆息した。
――分かった。とはいえ、最速の手順で進めるから……ついて来れない様なら置いていく。
「足を引っ張るつもりは毛頭ないんで。そんときは容赦なくそうしてもらいたいッスね……次のご予定は？」
――西区。そこに宿を取ってる知り合いの冒険者に、依頼を出す。
陽が傾き、斜陽が街を染め抜く帝都。
その光差し込まぬ路地の狭間で、猟犬と狐が並んで歩き出し――その姿は路地裏の奥、暗がりへと消えた。
各々に、腹の下に決意を、意思を押し込めて。
今は只、静かに準備を整える。牙を剥く、そのときまで。

狩りの時間は、近い。

日没前、其々の時間

「なんという馬鹿な真似をしてくれたのだ！　よりにもよって皇帝直属の部隊の者を検体として連れて来るだと!?」
「あの皇帝の事だ、近衛を連れ去った事を挑戦や侮辱と判断しかねん。そうなれば如何に大祭の最中、来賓各国の眼が在れど、それらを無視してでも軍を動かしかねんぞ…！」
幾人ものひどく苛立った怒鳴り声が、薄暗い石室に響く。
お世辞にも耳に心地よいとは言い難いソレに、二日酔いの朝に銅鑼の音で叩き起こされた様な気分でアンナは目覚めた。
（うっさい……頭に響く……）
少々ボウッとする意識のまま、眼を開いて映るのは自室の天井――な訳もなく、暗く分厚い石造りの壁である。
それに戸惑ったのも一瞬。一秒後には自身があまりよろしくない状況に置かれていることを把握した。

（あー……そう言えば負けたんだっけ、私）

どてっ腹を剣の柄で思いっきりブン殴ってくれたスカし野郎の顔を思い出し、鈍っていた思考が一気に覚醒状態に復帰する。

反射的に跳び起きそうになるが、妙に身体が重く、そして肌寒い事に気付き――次いで、自分が装備を剥がれて下着姿で転がされていることを認識した。

思わず舌打ちが漏れそうになる。が、グッと堪えて現状を確認。

どうやらあのジャックとか言う男に倒された後、とっ捕まって何処ぞに連れてこられたらしい。

ぎゃあぎゃあと喧しく言い争いをしている声の方へと視線だけを向けると、太い鉄格子の向こうで数人の男達が一人の痩せぎすな男へと詰め寄っているのが見えた。

その背後には、薬品の入った瓶や調合器具が雑多に並んだ机。大量のメモが張られた木板（ボード）や中身がぎっしりと詰まった本棚がある。

（石牢……虜囚の身、って訳ね。屈辱だわー、コレ。腹立つ）

幸いにして拘束などはされていないが、身体の動きが鈍い。無力化の為に何かの薬を打たれているようだ。

アンナは目を瞑り、体内に微量の魔力を走らせて身体の状態をセルフチェックする。

投与されたのは鎮静剤の類か。肉体と魔力、特に後者に作用するタイプのものらし

い。

少なくとも自己診断した限りでは、それ以上の事はされていない。二の腕に包帯が巻かれているので、採血くらいはされたのかもしれないが。

結論――現時点でも動けないことは無いが、万全とは程遠いコンディションである。戦闘に関しては数段動きが鈍るだろう。

（十中八九、例の人攫い連中の拠点ね……装備も無いし、相手の規模も戦力も分からない以上、今の状態で動き出すのは悪手か）

目覚めた事を気取られぬ様、片目だけを半分開いて周囲を確認しながら、体内で魔力を回す。

取り敢えずは、このまま鎮静剤の効果を体内から押し出す事に注力すべきだろう。乙女の柔肌を晒して冷たい石牢に放り込んだ事に関しては、後できっちり礼をしてやるが。

そんな風に固く決意しつつも、気絶したフリを続けながら未だ続く言い争いに耳を傾ける。

口論をしている連中がどのような立場なのかは知る術も無いが、あれだけ興奮しているなら重要な事もポロっと漏らしてくれそうだ。此処からの脱出にしろ、後の反撃にしろ、何をするにしても情報は是非とも欲しい。

「あ、あの方に許可は得ている。わ、私は私の権限と計画のひ、必要性に則って、そ、それを行使したに過ぎない。せ、せ、責められる謂れはありませんな」
「権限!? 権限と言ったか!? この狂人が! 言い逃れの仕様の無い状況で近衛騎士の拉致を指示するなど、それ以前の問題だ! どんな貴重な素材や検体であれ、入手の有無より事の隠匿性を優先するのは基本であろうが!」
「許可、といっても貴公の権限は素材の選定と要望の優先、と言ったものだろう。この一件、下手をすれば拠点や施設を複数放棄する大事に発展する可能性がある。自身の権限の種をはき違えている様だが、実際に御方の前でその戯言が通ると思うなよ博士(ドクトル)」
怒りに顔を赤く染め、口角泡を飛ばす勢いで。
或いは冷徹に、だが隠しようも無い軽蔑を込めた声色で、男達は其々に博士(ドクトル)と呼ばれた研究者風の男を詰る。
感情と理屈、両方の面から罵詈雑言をたっぷりと浴びせられているにも関わらず、博士(ドクトル)は鬱陶しい、以上の感情をその顔に浮かべていない。
薄暗さのせいもあって、じっくりと男達の人相を確認できる訳では無いのだが、罵倒に対して平然としているというよりは、そもそも最初から相手の言葉そのものをロクに聞いていない。そんな様が透けて見える表情であった。
そこまで露骨な態度を取っていれば罵倒を向ける側も当然気付く。益々剣呑な雰囲

気となった男達だが、そこに割って入る声があった。
「随分と騒々しいな。我らは表沙汰には出来ぬ秘事を持つ身とはいえ、その表では立場ある者も多かろう。童の如き癇癪を起こすのは責任ある立場にそぐわぬとは思わんか？」
そんな言葉と共に、追加で現れたのは二人の男だった。
片方は見覚えのある――というか、おそらくはアンナをこんな場所に放り込んでくれた張本人、スカし野郎こと、ジャック＝ドゥ。
もう片方は、当然の如く初見。かなりの長身に堂々たる体躯を誇る、貴族風の出で立ちをした偉丈夫であった。
先の上役や上位者らしき発言といい、身に纏う空気といい、それなりの立場にいる者である事は分かる。
貌を見る事が出来れば良かったのだが、口元から上は洒落たデザインの仮面（マスク）で覆われ、素顔を窺い知ることは出来ない。
何より目立つのはその頭髪。その色は、背後に侍るジャックと同じ、艶やかな黒であった。
（……転移者？　でも、貴族らしい振る舞いが堂に入り過ぎてる）
相も変わらず意識の無いフリを続けながらも、アンナは気取られぬ様、注意深く観察

を続ける。
「おぉ、これは閣下。わざわざ研究区画にまでいらっしゃらずとも、お呼び頂ければ我ら一同、即御身の下に窺いましたものを」
「常であればそれも良いだろう――だが、此度はそれでは済まぬ厄介事が起こった様なのでな」
　男達の一人が畏まって礼をするのを鷹揚に手を振って止め、閣下と呼ばれた偉丈夫は仮面越しであってその表情が厳しく引き締められているであろう事が分かる、固い声と視線を以て博士（ドクトル）を貫く。
「愚かな真似をしたな、総主任。如何な『超人兵計画』の要となる研究者とはいえ、責任の追及は免れぬと思え」
「な……！　お、お、お待ちください閣下、わ、私は……」
「権限を行使しただけ、か？　素材の重要度に関わらず、調達の際には現地の回収実行者の状況判断が優先される――そう、周知させていた筈だ」
　痩せぎすの男が初めて慌てた様子で何やら言い募ろうとするが、仮面の男はにべもなく一刀両断した。
　押し黙る博士（ドクトル）に対し、此処ぞとばかりに先の男達が口々に追及を始める。
　それを横目に、仮面の男は背後のジャックへと振り向く。

「お前もお前だ。何故突っぱねなかった？」
　他の者への言葉に比べれば、格段に砕けた――言ってしまえば親しみすら感じさせる咎めの言葉に、当の剣士は大仰に肩を竦めてみせた。
「おいおい、俺は立場的にはしがない雇われなんだがね？　総主任殿に『許可なら得ている、お前は黙って検体を回収すればいい』と断言されたら従う他無いだろ？」
　組織内の発言力という点で見ればその言葉は尤もなのだが、当の総主任はそうは思わなかったようだ。
　忌々し気な視線が突き刺さるも、ジャックはどこ吹く風といった態度で「どうかしたかね、上役殿？」と白々しく宣い、笑う。
　そんな様子を黙して見つめる仮面の男は、やがて剣士を見据えたままポツリと呟く。
「……切欠のつもりか」
「さぁ？　それを決めるのは俺じゃない。機会を生かすか殺すか、進むか止まるか、選ぶのはお前さんだろうよ」
　特に含むものなく、飄々と告げられるその言葉に、仮面の男は深々と嘆息した。
「仕方の無い奴だ……まぁ、一度それは置くとしよう。して、件の検体として連れて来たという騎士殿だが……」
　そこで彼はアンナの捕らえられている石牢へと眼を向け……下着姿で冷たい床に放

り出されている彼女をみて絶句した。
（あ、眼は青い……転移者じゃなくて、その血縁の類なのかも）
視線を向けられ、慌てて狸寝入りを決め込む直前、照明を反射した瞳の色にアンナが暢気に考察していると。
「……これは、どういうことだ」
明らかに憤激した、険のある声色で”閣下”が唸り声を上げる。
「――ジャック？」
「剣だけじゃなく、着てる騎士服もあちこちを鋼で補強してあったんでね。念の為全部剥いだらこうなった――一応言っとくが、剥ぐのは嬢ちゃんにやってもらったし、その後に掛け布くらいは用意しようとしたぞ、俺は」
暗にそれを突っぱねた者がいる、と主張する剣士の言葉に、自然とその場の全員の視線が博士（ドクトル）へと集中した。
其れを受けて鼻白む――事も無く、寧ろ不満気な空気すら漂わせながら、彼はぎょろりと牢の中のアンナへと眼を向ける。
「お、お、恐れながら閣下。え、片刃（エンハンス）シリーズは微量とはいえ、ちょ、超人化への適応を見せた、け、検体の総称です。衣類無し、じょ、常温に近い気温で睡眠を摂った程度で、き、機能に影響が出る様な脆弱さは――」

みなまで言い終える前に、仮面の男が腰の剣の鍔を親指で押し上げた。
薄暗い室内に、僅かな光源を反射して銀光が一閃する。
「――ぇ、あ、熱っ……ひ、あああああぁぁっ!?」
呆けた表情で耳元に手を伸ばした博士（ドクトル）が、引き攣った声と表情で悲鳴をあげた。
彼の両の手が自身の側頭部――右耳のあった場所を押さえ、着けている白い手袋が真っ赤に染まり、しかしそれを気に掛ける余裕もなく。
その痩せぎすの身体が石作りの床の上をみっともなく転げまわる。
部下の耳を斬り飛ばした”閣下”は、先の糾弾よりも更に冷たい、吐いて捨てるような口調で床でのたうつ男へと告げた。
「こうなった以上、無事に返す事は出来ぬとはいえ……彼女はこれまでの素材となった、無辜ではあるが同時に無力であった者達とは違う。かの大戦で数え切れぬ功績を上げた英傑の一人だ。敬意を払えと迄は言わぬ。だが、粗略に扱うなど以ての外と知れ」
痛みと身体の一部を失った衝撃で、床を這ってひたすらに甲高い悲鳴を上げ続ける痩せぎすの男から視線を外し、仮面の男は他の者達を順繰りに見回した。
「現皇帝は果断な男だ。おそらくは二日と掛けずに準備を整えて、此方の施設を襲撃させるだろう。猶予を見て一日――その間に、帝国側に把握されているであろう《門》に繋がる研究所や施設から出来るだけ資料や素材を運び出すとしよう。急げ、時間との勝

負になる」
「承知しました……閣下のご予定は？」
「私は今回の大祭に乗じて視察に来た、出資者や顧客への説明がある。彼らも皇帝に眼を付けられる可能性があると知れば、不平不満で時間を潰すよりは先ず安全圏への退避を選ぶだろう」
運びきれない荷は施設ごと火を放て、と付け足された言葉に頷いた男達は、慌ただしく移動を開始する。
この場での用は済んだのか、ジャックを伴ってこの場を去る仮面の男の背を見送ったアンナは胸中で呟いた。
（一日、ね）
助けを待つ囚われのお姫様役など、柄でもない。
一日。それまでには脱出の為の算段を整えようと決めた彼女は、未だに響く嗚咽混じりの苦鳴を意図的に耳からシャットアウトし、身体を本調子に戻すべく眼を閉じて、体内の魔力操作に集中するのだった。

「――事のあらましは以上です……私が目の前にいながら、みすみす副隊長を奪われた件については、後ほど責任を取ります」

帝都王城の一角、《刃衆(エッジス)》の隊舎として割り当てられた敷地の広場にて。

剣、盾、槍、斧、はては徒手や弓。様々な得物を腰に下げ、或いは背負い。年齢や性別、種族もバラバラな者達が隊舎の入口前に集まっていた。

彼らに共通するは、帝国の紋章が刻印された黒の外套(コート)。帝国最精鋭の騎士達の証である。

集結した隊員達を前に、現状の説明を終えたミヤコは厳しい表情のまま、自らの失態を悔いる様に口元を固く引き結び、瞳を閉じた。

「悪党の腕前を認めるようで癪ですが、隊長殿で駄目なら俺達の誰であっても結果は同じだったでしょう――その白い魔鎧ってのも厄介処じゃなさそうですし、これで責を求める様な奴は《刃衆(ウチ)》の隊にゃいませんって」

「ローガスの言う通りですね。責任感の強さは隊長殿の美徳ですが、今回のケースは余りにも予想外の要素が多すぎた。不覚を取った事を嘆くより、状況の好転を狙っていきましょう」

隊の中でも年長の二人――ネイトとローガスの言葉を受け、他の隊員達も同意を示して頷いている。

そんな部下達の言葉に、黒髪の少女は小さな声で礼を述べると、再び目を開く。

磨かれた黒曜石の如き輝きを放つ瞳は、決然たる意志の光を放っていた。

「城下に残って調査を続けてくれたトニー君の御蔭で、敵方の拠点に繋がると思われる複数の《門》の設置個所が確認済みです――その全てに、強襲を掛けます」

「上等。トニーを刻んだ上にふくちょーまでかっさらっていた馬鹿共に、何処に喧嘩売ったのか教えてやるし」

「あれ程の剣士が相手だというのであれば、相手にとって不足はありませんわ。初の任務、死力を尽くして当たらせて頂きますの」

ミヤコの宣言に呼応し、シャマとローレッタが気炎を上げて両腕の手甲を打ち付ければ、周囲の隊員達にもその空気が伝搬し、今にも得物を天に掲げて咆哮すらあげそうな戦意が渦を巻く。

同じく意気を高めながらも、隊の顧問であるネイトが冷静さを努めて表に出した声色で注意事項を伝えるべく、口を開いた。

「件の転移者――ジャック＝ドゥは不明な点が多いですが、その危険度は折り紙付きです。各員、単独での戦闘は絶対に避け、常に三人一組（スリーマンセル）を維持する様に」

「ふむ、顧問殿がそこまで言う程か……隊長殿。実際の処、三対一ならばその転移者、殺(と)れると思うか？」

腰に一対の戦斧を下げた隊員の質問に、ミヤコは口元に拳を当てると数秒、考え込み……顔を上げて緩やかに首を横に振った。

「例の白い魔鎧がどれ程のものかはっきりしない以上、断言は出来ません。三人一組(スリーマンセル)は不意の遭遇戦から、最悪、確実に撤退する為のものだと思ってもらえれば。可能なら防戦に徹して――」

一度言葉を切り、軽く息を吸って。

一拍置いてその桜色の唇から放たれた言葉は、苛烈なまでの戦意に満ちている。

「私が交戦場所に到着するまで、時間を稼いでください。一対一に持ち込めれば、この手で斬ります」

凛とした、だが力強い断言。そしてそれを疑う者などいない。

人類種最大国家における最精鋭の戦闘集団《刃衆(エッジス)》。

その長にして、帝国三指――否、帝国最強の剣腕を持つであろう《黒髪の戦乙女》ミヤコ＝タナヅカ。

純粋な武力、という点において自分達の頂点に立つ少女の強さを、言葉を、信じぬ騎士がいる筈も無かった。

その傍に控えるネイトが、少々悪戯っぽい笑みを浮かべて頷く。
「頼もしい限りです。とはいえ、頼られる事がめっきり少なくなったのは少々寂しいですけどね」
「ずっと頼りにしてますよ？　ネイトさんも、部隊の皆も。ただ――相手が魔鎧を扱うのなら、練習台には丁度良いと思ったので」
顧問の言葉に、ミヤコは小首を傾げてちいさく微笑み。しかしそれは直ぐに不敵な笑みへと塗り替えられた。
件の転移者とその白き魔鎧を、巻き藁よろしく現在習得中の技で試し切りする気満々な上司の言に、隊員達は苦笑いしたりおっかなそうに首を竦めたり、まだ見ぬ敵に対して軽く祈ってあげたりと、反応は様々である。
膨れ上がり過ぎて破裂しそうな戦意が程よくガス抜きされた事を見て取り、ミヤコは軽く咳払いして本題へと話を戻す。
「決行は日没と同時、陛下にも話は通っています。別行動となりますが、第一騎士団と宮廷魔導士団も呼応してくれるので、騎士団の編成と準備が終わり次第、其々が担当する区画の割り当てが決まる予定です……おそらく《刃衆（わたしたち）》は東区になるでしょう」
東区は貴族の邸宅なども多いので、作戦決行時やその後に入るクレームの類を、皇帝直属としての強権で抑え込める《刃衆（エッジス）》が担当するのは妥当だった。

何か質問はありますか？　と隊員達を見渡す隊長の言葉に、刺剣（レイピア）を腰に下げ、弓を背に負ったハーフエルフらしき隊員が手を挙げる。
「宮廷の魔導士達が《門》の強制解放と維持を行うのは分かりますけど……正直、私達と第一だけじゃ数が足りない気がしません？　逃げ出さずに待ち構えてくれるなら問題ないですけど、信奉者連中と違って相手は人間ですし……」
不利になったら蜘蛛の子を散らす。只でさえ広大な都市である帝都だ、自分達の担当する区画以外でそうなれば取り逃す数は多いと危惧する声に対し、隊長である少女は問題無い、とばかりに目を閉じて頭を振った。
「陛下が都市外の領主の軍へと協力を取り付けました。魔導士団も《門》回りの処置ではなく、此方の戦力の補助として現地に投入される予定です。第一騎士団と合わせれば西と南――二区画分の強襲は安心してお任せできます」
戦力としては十分だが、騎士団として大人数で行動する分、速度が重要な強襲作戦においてやや不安が残るが……そこは直に指揮を執るレーヴェ将軍の腕の見せ処、というやつだろう。
東西南北に分けた帝都内各所に隠された《門》。三方までは攻めるだけの戦力が揃った形だ。
「残る北区も問題ありません。先輩が――《猟犬》が動いています。《門》に関してもア

テがあると」

続けて告げられたミヤコの言葉に、《刃衆》の隊員達は軽く目を見開き……次いで「あぁ……」とばかりに頷いて、納得と敵対組織への同情交じりの表情を一斉に浮かべた。

「隊長と一緒に現場に居たんでしたっけ……そりゃ参加してくるよな」

「とりあえず北区からの突入先での死者がぶっちぎりで最多になるのは確定しましたね」

「自業自得すぎてちょー笑える。でも、北区から行ける相手の拠点に重要参考人がいたら不味くない？　首から上が無けりゃ死霊術でだって喋れないし」

「っていうか、隊舎の前に置いてあった内通者の入った包み。アレ絶対あの人でしょ。相変わらず仕事早過ぎな上に頭おかしくて変な笑い出るんですけど」

キチ〇イに刃物。猟犬に地雷着火。

割とボロクソに言われてる意中の人物を擁護しようと思ったのか、ミヤコが「せ、先輩は一生懸命にアンナちゃんを助けようとしてるだけですよ？」とか涙ぐましいフォローを入れている。

そんな彼女を見る部下と顧問の眼は生温く、ひどく優しかった。

ガス抜きを通り越して緩い空気になりかけている隊舎前の広場であったが、駆け足で

やってきた武官――第一騎士団からの使いの姿を目に留め、全員の顔が一斉に引き締まる。

使いの武官はミヤコの前で立ち止まり、敬礼を行うと、動かせる戦力の編成が終わった事、今後の予定を告げた。

彼女はそれに頷き返すと、再び敬礼して駆け戻っていく後ろ姿を見送り――号令を待つ体勢となった部下達を改めて見渡す。

「事前の話の通り、私達は東を担当する事になりました。現時点で何か疑問や憂慮する点がある人はいますか？」

挙がる手や声は、無い。

戦う理由、戦う時刻（とき）、戦う場所、全て出揃った。

ならば、後は敵に存分に教えてやろうではないか。自分達が何者であるのか、誰の仲間に手を出したのか。

言葉にはせずとも、この場にいる全員がそう考えている事は明らかであった。

幾度となく共に戦い、共に死地を乗り越えた……或いはこれからそうなってゆくであろう、頼もしき部下達（せんゆう）の気勢を感じ取り、《刃衆（エッジス）》長たる少女は力強く頷く。

「最優先目標はアンナ＝エンハウンス副隊長の奪還、及び被害者の保護。次点で犯罪組織の構成員の打倒・拿捕です。補助に入ってくれる魔導士団の人員は、全員遠話を修め

ています。小隊間で連絡を密にし、共有すべき情報があれば即座に伝える様に」
最後の確認事項を唱え終えると共に、外套（コート）の裾を翻し、一歩踏み出した。
「征きましょう――立ち塞がる障害（モノ）は、全て蹴散らせ」

眼を閉じ、体内で魔力を回し始めてから一時間もしない内。
アンナは自分が閉じ込められている牢の前に誰かがやって来た気配を感じ取り、薄っすらと眼を開ける。
背を向け、横になったまま無反応（寝たぶり）を貫いていると、鉄格子越しに声が掛けられた。
「お姉様、少しよろしいですか？」
聞き覚えのある少女の声に、背を向けたまま眉を顰める。
試合の際には独特な空気の娘だな、とは思っていたが……当たって欲しくなかった予

感――彼女が人攫い連中の仲間であった予想が的中した事に、溜息が漏れそうになる。
黙して背を向け続けるアンナに、少女――ファルシオンは毛布とシーツを手に、牢の前で困惑した様子で背後を振り返った。
「ジャック様、どうすればよいでしょうか。お姉様が起きて下さいません」
「……意識はあるみたいだがな。まぁ、反応としては当然かねぇ」
肩を竦める疵面の剣士の言葉に、亜麻色の髪の少女は牢の中へともう一度、声を掛ける。
「お休みの処を申し訳ありません。ですが、お姉様が目を覚ましているのならば、牢の中には入るなと先生（ドク）から厳命されているのです。こちらの寝具だけでも受け取って頂けませんか？」
「……私にアンタみたいなでっかい妹がいた記憶は無いわ」
年齢的にはやや下だろうが、身長の方は自分より少し高いファルシオンへと、アンナは今度こそ溜息を吐いて応えた。
未だ薬が抜けきらず、少々動きの鈍い身体を起こして振り向く。
物心つく前から孤児であった自分に、兄弟姉妹は居ない。強いて言えば、嘗て自分を拾い上げてくれた孤児院の後輩の子達が、弟分・妹分と言えなくもないだろうか。
自分が在籍してた頃に院長を務めていた老齢のシスターが亡くなり、代替わりしてか

らはなんとなく疎遠になってしまったので、はっきりと断言は出来ないのだが。
寄付自体は変わらず続けているし、無事に帰れたら顔を出してみるのも良いかもしれない。などと思いつつ、頭をかきながら身を起こす。
仏頂面のままその場に胡坐を掻いた少女と、表情に乏しい顔に何処となくホッとした空気を漂わせている少女が、格子を挟んで見つめ合う。
「どうぞ、お使い下さい」
「……」
鉄格子の隙間から丁寧に差し出された毛布に、アンナの口からついつい礼の言葉が零れ出そうになった。
そもそもの原因……人様を拉致って、あまつさえ服までかっ剥いで牢にぶち込んでくれた連中の仲間にそれを言うのは、流石に間抜けが過ぎる。
結局は押し黙ったまま、無言で受け取っておく。
まぁ、流石に石牢に下着姿で転がってるのは、床が硬すぎる事や少々肌寒い事もあってどうかと思っていた。早速毛布を広げ、尻の下に敷く。シーツは肩から掛けて長いマントの様にして羽織ると、もう暫くは留まる羽目になる牢の環境は大分マシになった。
「てるてる坊主か」
「黙ってろスカシ」

こちらがシーツを羽織るまでは背を向けていたジャックの一言を両断し、アンナは再び胡坐をかいて腕を組んだ。

「――で、そのお姉様ってのはなんなの？」

「そのままの意味です。貴女は『超人兵計画』の初期検体。私（ファルシオン）は現行最新の検体です。関係性としては姉妹に近いとの事でしたので、お姉様と」

亜麻色の髪の少女から伝えられた『超人兵計画』とやらは、読んで字のごとく超人――人外級かそれに近い領域の人間を人工的に作り出し、兵器として運用する、というなんとも胸糞悪く、そして荒唐無稽なものだった。

アンナはその計画の最初期、実験的に強力な魔力的素養を埋め込んだ検体の一人だったらしい。

片刃（エンハンス）と名付けられた彼・彼女達は、適合に失敗して死亡しなかった、というだけで、殆ど要求された数値を満たせず早々に廃棄されたのだと。

アンナがそれを逃れ、戦時中に溢れていた戦災孤児という形で外部の人間に拾われたのは、単に組織側のミスであったのか。

片刃（エンハンス）シリーズでも一番幼い……生後一年と経っていない赤子であった彼女を処分する事を、当時の廃棄に関わった者が躊躇ったのか。

今となってはその辺りの経緯を知ることは出来ないが……ぶっちゃけアンナからす

れば「知らんがな」というのが素直な感想である。
多種多様な人類種が住み、果ては異世界人までやってくる世である。赤ん坊の頃の境遇がちょっと特殊だったから何だというのか。
更に言えば、乳飲み子の頃の記憶なぞ残っている訳もない。
ファルシオンが言うお姉様呼びも、理由を聞かされて納得するどころか、益々知ったこっちゃないわ、という気分になっただけである。
今のアンナの強さをその『超人化』への適応とやらの御蔭の様に言われるのは不快であったし、端々から聞き取れる実験とやらの非道性に怒りが募るだけの話だった。
「ジャック様、どうすればよいでしょうか。お姉様が気怠そうに耳をほじりだしてしまいました」
「と、言われてもね。拉致された側からすれば真っ当な反応だろうよ」
再び困った顔でジャックを振り仰ぐファルシオン。
大仰に肩を竦めた剣士は、少女の肩に手を置いて言い聞かせる様に言葉を紡いだ。
「博士(ドク)が提唱していた『超人化』の理想像――奴は女神様とやらによる加護の付与がそれに当たる、とは言っていたが……それだって与えられた下駄の歯が高くなるってだけだ」
本人の宿す才能であれ、授けられた加護であれ、磨き、鍛えあげねば真の意味で開花

する事は無い。
　そもそも魔力・魔法という、意思や想い、感情の動きでその出力を変化させる力を振るっているのだ。
　その不確かな揺らぎある力を極限まで鍛え、人の限界を超えたのが人外級である。科学や数学的な視点のみでは再現を試みても、片手落ちになるのは目に見えている。
「博士（ドク）の下駄を履かせる技術自体は大したもんだが、それだけじゃそこそこ止まりだ。原石と磨いて切り出（カッティング）しまでした宝石――その差を、嬢ちゃんもそこのお姉様との試合で体感した筈だぞ」
「随分と語るじゃない。アンタはその娘の教育係か何かってワケ？」
　皮肉を込めたアンナの言葉に口数が過ぎた己を自覚したのか、ジャックが渋面を浮かべた。
「……ちと喋り過ぎたな、忘れてくれて良いぜ」
「いえ、ジャック様のお話は身となるものも多いです。しっかりと記憶しています」
「はー、慕われてる事。これで女の子をブン殴って拉致った上、服を剥ぎ取る様な奴でなければ和やかな気分で見てられたんだけどねー」
　首を振って背後の男の言葉を否定したファルシオンの様子を見て、間髪入れずに追撃に入るアンナ。

なんとなく不味い流れになっている事を察し、ジャックの顔が引き攣る。
「おい、拉致までは否定できんがその後は……」
「……そういえば、最近雇われた方々には、検体として連れて来た女性の方に乱暴を働いていた男性もいました。ジャック様がその方を斬り捨てた際に『この手の輩は斬っても良い、柔らかいゴミだから』と仰っていた記憶が……」
「へぇ、分かってるじゃない。でも、そんな発言をしたなら自分の行いにも返って来る事を覚悟すべきよねー。さぁ、ファルシオン。そこの婦女子に暴力&拉致を決めたスカシを相応しい呼び方で呼んでやんなさい」
「了解しました、お姉様。では……生ゴミ様？　これからもご指導、ご鞭撻の程をよろしくお願いします」
「やっぱ姉妹だわ、お前ら」
ビシっと此方を指さす銀髪の少女と、彼女の言葉に素直に応じて丁寧に頭を下げる亜麻色の髪の少女のつむじを眺めつつ、ジャックは呻き声を漏らした。
「……そろそろ戻った方が良いんじゃないか？　博士（ドク）の耳の処置も終わっただろうしな――此処でゆっくりし過ぎてまたヒステリーでも起こされたら面倒だ」
「――！　そうでした。先生（ドク）は大丈夫でしょうか？　肩や襟元が真っ赤でしたが」
「人間、耳が落ちた程度じゃ死にはせんよ。ま、転げまわって落ちたモンを散々押し潰し

たからな。くっ付けたとしても歪むだろうが」
心配そうなファルシオンに対して、ジャックは少し楽しそうに研究班の総主任の醜態を語る。
ざまぁ、という文字が浮き出てきそうな表情からして、どうやらあまり仲は良くないようだ。尤も、アンナが先程こっそりと聞いていた会話から察するに、あの博士（ドク）という男は間違っても人に好かれる類の人間ではなさそうなのだが。
「ではお姉様、また後程……これからよろしくお願いします」
「生憎と実験動物に転職するつもりは無いっての。あとお姉様言うな」
丁寧に一礼するファルシオンに、アンナはつれない返事をして再び背を向け、寝転がった。
「……お姉様が塩対応です、どうすれば良いでしょうか生ゴミ様？」
「嬢ちゃん、先ずはそのネタを引っ張るのやめようか」
その様な会話をしつつ、背を向けて石牢から遠ざかっていく少女と剣士の足音。
それを聞きながら、再度溜息をつく。
（……やり辛いわ、二重の意味で）
牢を出たとしても、あの二人がいるのでは脱出するのに骨が折れそうだ。装備の無い今の状態では尚更に。

何より、ファルシオンは自身を検体だと言った。
幼い頃よりそうであったというのなら、彼女も連中の悪行の犠牲になった人間と言える。
見た処、特に自身の立場に不満や不安を抱いてはいないようだし、積極的に協力しているのであれば完全な被害者、とは言い難いのかもしれないが……遠慮なくぶちのめす、というのはちょっと出来そうにない。
だが、あの様子では説得して一緒に連れ出すのはほぼ無理だろう。脱出中に顔を合わせれば間違いなく戦闘になる。
（ハァ……ま、現状やることは変わらない、か）
どのみち、動き出すのはまともに身体が動かせる様になってからだ。
再び目を閉じると、少女は体内の魔力を全身に巡らせる作業に戻ったのであった。

――帝都中央、噴水広場。

本来ならば、祭り期間中の出店の一等地として人気の屋台などがずらりと並ぶその場所は、今日になって唐突に捻じ込まれたという特別な催しによって、騎士や衛兵によって交通の規制が行われている。

屋台を出店する者達から、稼ぎ時の機会を奪われたと言う事で不満の声もあがりそうなものだが、今日一日のみである、という事と金額の損失分は補填されるという行政側のお達しの御蔭か、目立つ問題は起こらなかった様だ。

補填される額が相当に気前の好いものだったというのもあるが、一番の理由は屋台の主達にその”イベント”を最前列で見る権利が与えられた事だろう。

広場をぐるっと囲む様、ロープを使って張られた規制線。その最も前に陣取った彼らは、家族や友人、恋人などを連れてホクホク顔で催しの開始を待っている。

当然、その後ろには多数の観光客や帝都の住民が多く押し寄せている。その数は相当数にのぼり、日没直前でありながらも規模としては闘技大会に匹敵する人の波であった。

最前列の観客用スペース程では無いが、広場を見下ろせる位置に建つ家も絶好のスポットだ。窓は大きく開け放たれ、家の住人達が眼下に広がる光景をワクワクとした表情で見つめている。

広場の中心、涼やかな水音を立てる女神像。

其の両脇の位置、一段低い場所に拵えられた二つの台座に、少女が一人ずつ上がり、待ちわびた民達から大きな歓声が上がった。
街の灯りとこの催しの為に灯された灯り。
その両方を受け、纏ったヴェール越しでも尚輝くは、穏やかな日輪の如き淡い金の髪と、柔らかな月の如き銀の髪。
「準備は出来たか？　アリア」
「うん、ばっちり。レティシアは？」
二年前、永く続いた大戦を終結に導いた立役者と言われる《金色の聖女》と《銀麗の聖女》。
この世界でも有数に名を知られている姉妹が、創造神たる女神の左右に侍るが如く並び立つ。
二人の立つ台座の側には、凄まじく筋骨隆々な体躯を誇る武僧――ガンテスが控えている。
また、そこから少し離れた場所には本日行われた闘技大会、その準決勝で名勝負を繰り広げた青年……《水剣》ことシンヤが、仲間の冒険者達と共に聖女の護衛にあたっていた。
「いやー……オレは正直、ちょっと不安だわ。祝祷の言紡ぎなんて、大聖堂で聖女の号を

授与されて以来だし」
「えぇ……立場的にそれはどうなのさ」
無詠唱じゃ駄目かねぇ、などとボヤく姉に、良い訳ないだろー、とツッコミを入れる妹。
小声でやり取りされたそれを耳に拾ったのか、傍に控えるガンテスが普段よりは少々声量を押さえて声を掛ける。
「此度の言紡ぎは、対外的には教国の公式行事では無く、あくまで催しの一種なれば。御二方の祝祷を一目見ようといらした方々の喧噪も加味すれば、多少詠み違えても問題はありますまい。本命は猟犬殿の要望を叶える事ですからな」
厳つい見た目にそぐわぬ茶目っ気を見せ、悪戯っぽく笑う巨漢の言葉に、聖女二人も頷いた。
「そうだね、先生の言う通りだよ。折角にいちゃんが頼ってくれたんだから、頑張ろう！」
「……だな。前と比べりゃ、良い傾向だ」
重要な局面になればなる程、或いはしんどい状況であればある程。
他人に頼る、という事を避けて、極力一人で立ち回ってばかりだった青年の行動パターンを思い出し、レティシアは感慨深さと小さな喜びと共にしみじみとした表情で腕

を組んだ。
それが、頼った人間の大きな負担になる、最悪、その誰かが喪われる事を危惧しての選択だった、という事は彼女も理解している。
その結果、レティシアが精神的にしんどくなったり傷ついたりするのを、徹底的に避けた結果なのだと、今では分かってる。
でも、それでも。
いや、だからこそ。
頼って欲しかった。黙って一人で戦って、自分をおいて逝くなんて馬鹿は、しないで欲しかった。
レティシアの為だというのならば、背負う難事の重さを、半分くらいは預けて欲しかったのだ。
自分は、彼の相棒なのだから。
妹であるアリアを除けば、世界を、時間を『繰り返して』も共に在った、相棒なのだから。
ずーっと前からそんな風に思っていた処で、今回の一件である。
単独ＲＴＡ染みた思考に染まった馬鹿が、力を貸してくれと言ってきた。
手が足りないと、どうしてもレティシアとアリアの力が要ると。

友人（アンナ）が攫われたと言う緊急の状況もあって、手放しに喜ぶことは出来ないが――それでも、相棒として凄まじく気合の注入される言葉であったのは間違いない。
手を貸すのに一片の迷いすら生まれる余地が無いのは当然であった。
強いて言えば、助力の形が彼の隣で共に戦う類のものでは無いのが残念と言えば残念だが……今回はアンナを、ひいては攫われたという人達を助けるのが最優先であるし、贅沢は言えない。
そのうちにまた、機会は巡ってくるだろう。何せあの青年はトラブルに巻き込まれる事に定評がある。
なにより、これからもずっと共にあるが故に。彼が聖女の側に在り続ける猟犬であるが故に。
「よし、やるか。流石に範囲が広いし、それで手一杯になると思うから……グラッブス司祭は護衛の方、よろしく」
「お任せを。猟犬殿に託された御二方の守護、拙僧の渾身を以てあたらせて頂きます」
「先生だけでも十分だと思うけど……にいちゃん、アイミヤさんにまで声掛けたみたいだからね、過剰な位だよ」
軽く笑みを浮かべ、視線を交わし合い。
二人の聖女は台座の上で深呼吸を繰り返し、気息を整える。

「オレは北と西」
「ボクは南と東」
最後に、確認する様に互いに呟いて。
深く一息吸うと、レティシアとアリアは謳い上げるように、聖句――女神へと捧げる祝(はふり)を唱えだした。

「流石に絵になるなぁ」
台座の上で、神事以外にも儀式魔法としての側面も持つ詠唱を紡ぐ二人を見て、シンヤが感心した表情で頷く。
「……物凄い綺麗だし、神秘的ね……けど、アタシ達が傍にいるのに他の娘を見て呆けた顔をするのはどうかと思うんだけど？」
長い金髪を両サイドで括り、槍を手にした戦士の装いの娘が一党の頭目たる黒髪の美青年をジトォっとした目付きで睨み付ける。
「聖女様の祝祷ともなれば、眼を惹かれるのは当然ですわ。とはいえ、目を奪われ続けるシンヤ様を見続ける私達の気持ちも、少々酌んで頂きたいというのも本音ですが」

両の腕を組み合わせ、台座の上で歌う様に詠唱を続ける二人へと祈りを捧げる年若いシスターも、戦士の娘の言葉に倣う。
仲間のやや湿度の高い視線に、慣れた様子でシンヤは慌てる事無く微笑んだ。
「言葉以上の意味は無いよ。あの二人が綺麗なのは確かだけど、じっくり見てたのはどっちかというと魔力の練りと魔法の構成だし」
元は同郷。女神に加護を与えられたという条件も同じとはいえ、聖女の行使する魔法の精度はシンヤをして瞠目に値するレベルである。
実戦と比べて大きな縛りがあったとはいえ、本日試合に負けたばかりの彼としては、格上の魔導士の大規模な魔法行使は是非とも参考にして己の糧にしたい光景だ。
「ただの観光客としてならずっと観察していられたんだろうけど……仕事だからね、僕らも衛兵さん達と協力して周囲の警戒に当たろうか」
「了解。でも、意外ね？　この手の会話ってあんたが真っ先に食い付いてくると思ったんだけど」
槍を手の中でくるりと廻したツインテールの娘の視線の先には、この一党の最後の一人――先程から無言で魔力探知による周囲の警戒を行っている魔導士の娘がいた。
とんがり帽子にローブという、最近ではあまり見なくなった古式豊かな魔女の装いをした彼女は、探知の魔法を切らす事無く視線だけを仲間の方へと向ける。

「シンヤの言う通り、これは仕事。貴女達も呆けてないで護衛に集中すべき。全力で、隙無く、ミスなく――私はまだ死にたくない」
「はぁ？　死ぬって……祭りの催しでの護衛よ？　実質通行人と観光客の整理みたいな仕事で何言ってんの？」
真面目に仕事に取り組む、と言うには聊か以上に必死な形相の魔導士の言葉に、戦士の少女が怪訝そうに首を傾げる。
「……そういえば、今回の仕事は直接宿に依頼を持ち込まれた、というお話でしたね。急な仕事でしたが、依頼元は帝国では無いのですか？」
常に無い仲間の様子に、シスターの娘がシンヤへと疑問を投げかける。
それに対し、彼は朗らかに笑って頷いた。
「あ、うん。先輩から頼まれたんだ。あの人が真面目にお願いして来るって滅多にないからさ、つい二つ返事で引き受けちゃった。《大豊穣祭》の間は仕事を受けないって皆で決めたのに……ごめんね？」
空気が、死んだ。
冒険者パーティー、《水剣》の一党。現在四名。
戦士は凄まじい勢いで頭目の方へと振り向き、聖職者は笑顔のままで硬直し、魔導士の方は我関せずと必死に護衛の仕事に励む。

　そんな見目麗しい仲間達に囲まれ、頭目たる魔法剣士の青年はきょとんとした顔になった。
「……先輩？」
「うん。大会でもアドバイスをもらったり、お世話になったからね。最悪、僕個人だけでも受けるつもりだったよ」
「シンヤ様の先輩と仰ると、あの方ですよね？」
「うん？　そうだね。というか先輩以外、同じ呼び方をする人がいないし」
　少しばかり動きがぎこちなくなった戦士の娘とシスターの交互の問いに、不思議そうな顔のまま応える。
　二人が殆ど会話に加わってこない魔導士へと、錆びついたブリキ人形の如くゆっくりと顔を向けると、魔導士の娘はとんがり帽子から覗く瞳に、死んだ魚みたいな空虚な光を浮かべて頷いた。
「……彼だった。仲間のやらかし事件みたいに武装してて、あのとき以上にヤバい雰囲気だった」
「……先に言えぇぇぇっ!?　なんで真っ先に依頼人が誰か言わないのよこの馬鹿二人！」
「おぉ、女神よ。豊穣を御恵みになるこの日、何故この様な試練をお与えになりますか」

戦士が絶叫し、シスターは半分白目を剥いて天に祈り始める。
頭を抱えて叫んだ方がハッとした表情となり、仲間の襟首をまとめて引っ掴む。
「もっと近い距離で護衛するわよ！　あたしが最前列！　二人は探知と有事の際の障壁！　シンヤが最後尾で最後の壁！」
「凄い気迫だなぁ……司祭様が傍についてる時点で、そこまで気合を入れなくても良い気はするけど……どうせ先輩の事だから、あの二人の護衛に関しては質も数も過剰に用意してそうだし」
ずるずると引きずられたシンヤが、広場周辺で一番の高さの建物……その屋上へと視線を向ける。
そこには身を伏せ、自身に隠蔽の魔法を掛けながら長大な弩弓を構えている魔族の青年――《不死身》の姿が見えた。
仮に聖女に害を為そうとする輩が飛び出してきても、出てきた瞬間に問答無用で狙撃されて手足を吹っ飛ばされる。
それをやり過ごしたとしても自分達がおり、更に本命の側には本物の要塞より頑丈であろう筋肉要塞が立ち塞がるのだ。
騎士や衛兵達を除いても、邪神の眷属相手に即時殲滅可能な戦力である。襲撃する側からすれば糞ゲーどころの話ではない。そもそも聖女を襲う様な奴が信奉者以外にい

るとも思えないが。
「万が一、億が一って可能性もあるでしょうが！　もし聖女様達が傷でも負ってみなさい！」
「……私達が六人から四人になったあの一件。あのとき以上に怒るのは明らか」
「でしょう!?　あたしはまだ死にたくないのよ……！」
仲間の暗澹たる表情での同意に、我が意を得たりと戦士が力強く頷く。
シンヤとしては苦笑いするしかない。
彼女達が過剰に恐れている”先輩”であるが、聖女二人が絡む事に関して色々と箍が外れやすい人物なのは確かだ。
だが、怒りと殺意を向けるにしてもそれは襲撃を行った者達にであり、真面目に仕事をしていれば理不尽にこちらに矛を向ける事は無いだろう。
自分達の一党がもっとギスギスして嫌な空気だった時期、先輩（かれ）がどの様な形で仲間達に”説教”を行ったのか、シンヤは知らない。
とはいえ機嫌を損ねたら死ぬ、位の恐れっぷりからするに、あんまり穏当な手段では無かったのだろう。
それに対して憤るなんて真似は出来る筈も無い。元はと言えば自分の優柔不断さと不甲斐無さが招いたパーティーの不和である。

このままだと刺されて死にそう、なんて思った事も、正直一度や二度では無い。
そんな空気を霧散させ、タラシハーレム野郎だの股座の乾く暇も無いすけこまし野郎だの、同業者から割とボロクソな評価を受けていたのを改善してくれる切欠となった人物だ。悪感情など抱く訳が無かった。
「……そうだね、仕事を真面目に熟すって事自体は賛成だ。今夜一晩、しっかり護衛に精を出すとしようか」
幸い、規制線のロープを固定する為、広場には水で満たされた樽が無数にある。
女神像の噴水も加えれば、有事の際にはそれなり以上に役に立つ事が出来るだろう。
頭目の青年の言葉に、《水剣》の一党が戦場みたいなガチめのテンションで頷く背後――聖女達の祝(はふり)がクライマックスを迎えていた。

謳う、詠う。
高く、美しい声が、伸びやかに噴水広場に響き、空へと昇る。
交互に、或いは重なって紡がれる言紡ぎは、女神へと捧げる祈りであり、民へと贈られる祝祷であり、平和を取り戻した世を謳歌する歓びの声であった。

儀式としての長文詠唱。
莫大な魔力と聖気を所有する聖女によって行われるそれは、その身に宿る魔力を色付け、日没の暗闇を押し退ける様な眩い光となって、彼女達の声と共に立ち昇る。
金の魔力光と、銀の魔力光。
日輪と月を想起させるそれらが、昇った空で螺旋を描き、絡み合い、その輝きを高めながら更に上空へ。
本来ならば、収束性を失って純粋な聖気として地上へと降り注ぐ筈のそれらは、大祭前に帝都を囲う様に敷かれた巨大な結界と励起した。
レティシアとアリアの魔力を基点として構築された結界は、天へと昇る二人の聖気を受けて活性化し、接続された地脈を伝って帝都中にその魔力が駆け巡る。
天と地。広場を中心として充溢した聖女の魔力。
結界と共鳴し、巨大な都市である帝都の何処から見ても目にする事が可能となったその輝きが、最高潮を迎えた瞬間。
地に満ちた膨大な魔力を吸収し、帝都中に隠された《門》――それが全て強制的に起動された。
トニー達の手によって調査され、判明していたものも、そうでないものも。或いはこれらを設置した蠢動する咎人共が、魔力（リソース）の問題で放置するに至ったものまで。

転移先、転移元の大地と密接な関係を持つ《門》の性質故に、オーバーフローを起こした様にその規模を大きく広げ、その先に帝都とは異なる景色を映し出す。
日没を迎え、夜の始まりを迎えた帝都。
その夜を照らす、燦然たる聖なる光を見上げ。
その光が齎した奇跡の如き光景を見届け、動き出す者達があった。
《刃衆(エッジス)》が。
第一騎士団と、サーリング伯爵領の領軍が。
魔族の長と、その配下たる戦士達が。
他にも、一人の青年の声を切欠として、今宵の祭りに集った幾多の強者達が、武器を手に己の戦場へと向かう。
そして、此処にもまた、一人。
帝都北区の路地裏。
天に昇り、地に満ちる聖女の魔力を、ひどく眩しいものを見つめる様に目を細め、眺めていた青年が、腰を上げた。
――《起動(イグニッション)》
厳かですらある声色と共に、青年は漆黒の鎧を纏う。
意思と、戦意に満ちて吐き出された言葉は短く。

それに応じる声もまた、力強く、短い。
――征くぞ。
「了解ッス」
そうして、一人の騎士を伴い。
青年は――《聖女の猟犬》は、戦場へと解き放たれた。

帝都の一番長い夜　1

「おい、聞いたか？　例の話」
「あぁ。研究班のお偉いさんが何かやらかした、ってやつだろう？　幾つかの施設の資材なんかがこっちに移されるかもって話だ」
帝国領の首都たる帝都。
その王城の背後に横たわる山脈の中に、苔むした岩場に隠れる様、ひっそりと作られた建物の入口にて。
歩哨か、はたまた門番の様な立場なのか、二人の男が武器を片手に会話をしている。
彼らの所属する組織以外には人の出入りなど無い場所ではあるが、野良の獣や魔獣が敷地内に入り込む事を警戒しているのか、男達の持つ装備はそれなりに良いものだ。山深い地域に生息する魔獣を相手に出来る、という点も見れば、そこそこに腕の立つ者達でもある事が窺い知れる。
「詳細は分からんが、〝素材〟の調達でちょっとマズい奴を選んだらしいぞ？　貴族でも標的にしちまったのかねぇ」

「俺は祭りの来賓と聞いたが……まぁ、俺達に確りとした情報が廻って来る筈もないしな。そのゴタゴタが原因で《門》経由の資材の搬入があるかもしれん、という事だけ覚えておけば良いさ」

大して興味も無さそうに言葉を結ぶ同僚に対して、もう片方の男は苦々しい表情で愚痴らしきものを零す。

「くっそ、貴族の御令嬢だったらなぁ……あの雇われが来る前までなら、此処に運ばれてくるなら味見の機会もあったかもしれないのによぉ」

「まだそんな事を言ってるのか。そもそも”素材”に手をつける事自体が、本来は厳禁だぞ？　前までが温すぎたんだ」

組織にある施設の中でも此処は最低限の設備しかない、素材・資材や実験済みの魔獣などを一時的に保管しておく、重要度の低い拠点だ。

それだけに詰めている人材も上澄みとは言い難く、特に防衛を担う者達が集められた”素材”にこっそりと手を出す悪習が常態化していた面もあったのだが……二年程前に大規模な人材の選別――粛清にも近い整理が行われた事で、そういった真似も出来なくなった。

「お前とはそれなりに長い付き合いだが、まだ馬鹿をやるつもりなら上に報告させてもらうぞ。巻き添えで俺まであの雇われに殺されるのは御免被る」

「わぁーってるよ、俺だってあの人斬り野郎に眼を付けられるのは御免だ。素直に休みの日に娼館にでも行くさ」

組織のトップである”閣下”が直に雇ったという疵面の剣士。

転移者らしき黒髪のその男は、”閣下”の命で抜き打ちの監査を謳ってこの施設にやって来た際に、見目の良い”素材”を味見していた連中の殆どを斬り捨ててしまった。

勿論、斬られた者達も無抵抗だった訳では無い。

元より脛に傷持つ、表社会での真っ当な生活など送れる筈も無い者達だ。逃げ果せた処でその未来は明るくないとはいえ、その場で大人しく殺される様な殊勝な人間性ならば、そもそもこの様な組織に属していないのだ。

だが、そんな抵抗など無意味とばかりに全て一刀の元に切り伏せられた。

飄々とした態度を崩さず、だがほんの少し口角を上げて同僚達を斬って回っていた剣士の姿を思い出し、男達は身震いする。

アレは敵対しては駄目な部類だ。

各国の有名処――英雄扱いされている化け物じみた連中の同類と言って良い腕前も、軽妙を気取る言動の底に潜ませる、命のやり取りを心底好む様も。

本来なら関わることすら遠慮したい人種である。

彼らの首が繋がっているのは、腐敗した人材の中でもまだ使える方――多少は腕が立つ、と判断されたからに過ぎない。

それこそ剣士の気紛れや匙加減一つで容易く傾く天秤であり、再び同じ真似を繰り返せば、その末路は言うまでもない。

今度こそ他の粛清された者達と同じように、山中に生息する野生動物達の栄養源に転職する羽目になるだろう。

「あの監査がもう一度行われないとも限らん。精々真面目に仕事をするとしよう」

「あぁ、ここ以上に払いの良い場所も早々ねぇしな」

拉致した者達を”素材”と称して非合法な実験に使う時点で、彼らの言動に正当性など皆無なのだが、それも今更。

他者を踏みつけ、弱者を食い物にする事に躊躇いの無い精神性でなければ、そもそもこの手の組織に長期雇われるなど出来る筈も無い。

弱い奴らは直ぐ死ぬし、不幸や理不尽な目に合うのも仕方ない――それを覆せるだけの力も無いのだから。

ならば、その無力で哀れな生と死を、少しばかり自分達の利益に変える事の何が悪いのか。弱肉強食、適者生存というやつだ。

明確に言語化出来る程に当人達に学がある訳でも無いが、彼らの主張を言葉にするな

らばそんな処か。

――故に、これからその身に起こる事も、彼らの主張に沿う事なのだろう。

ソレがどれ程に理不尽で、逃れようのない不幸なのだとしても。

或いは彼らが忌避した、剣士の監査以上に破滅が確約された、死神の振り下ろす鎌にも似た”不吉”なのだとしても、それを払い除ける事の出来ない彼らが悪いのだから。

「お、《門》が開いたな」

「何時もの様に深夜になってからと思ったが……思ったより早いな、上は相当泡を食ったのかもしれん」

施設よりやや離れた場所で溢れた魔力光を見つけ、男達は居住まいを正す。

”素材”や資源の搬入を行うのは基本、彼らと同じ下っ端に近い者達だが、監督役としてそれなりの地位の人物が付いている場合もある。

可能性は低いが、熱心に仕事に打ち込む様をアピール出来れば臨時ボーナスが出る可能性だってゼロでは無い。

何より、適当にやってる処を見られて二度目の監査が入るのは避けたい処であった。

最初に《門》の開いた方向から現れるのが、研究者か貴族の装いの者――上役であっ

た場合に備え、彼らは背筋を伸ばして転移してきた人物を待ち受ける。

「……なんだありゃ？」

男達の片割れが、陽の落ちて暗くなった山中でも薄っすらと光って見える赤い光を放つ人型を確認し、眉を顰めた。

見た事の無い姿だ。というか、全身鎧の奴など一度見れば忘れない。最近雇われた新入りだろうか？

後続に資材やそれを運ぶ者が現れる様子も無い。不審を覚え、男は隣の同僚へと首を向ける。

あの鎧は知ってる奴か。そうでないのなら、場合によっては警報を鳴らすべきか？

そう言葉を掛けようとして。

（……あれ？　なんだ、声が……）

喉から出るべき音が出ず、言葉の形に開閉した口だけがパクパクと動く感触に、首を傾げた。

夕飯に少しばかり火酒を飲んだのが不味かったのだろうか？　傍から見ればばさぞ間抜けな光景だろう。

そんな風に思ったのだが、眼前の同僚は眼球が零れ落ちんばかりに目を見開き、顎も外れそうな位に大口を開け、自分より遥かに間抜けな面を晒している。

あまりにも笑えるその顔に、男は一瞬仕事の事も忘れて吹き出しそうになり――。
ドサッ、という鈍い音と共に、同僚に向けて倒れ込んだ何かに、目を奪われた。
そこにあったのは、人の身体だ。
身に着けている防具も、手に握る槍も、よく知っている――毎日見ている、見慣れたものだ。
ただ、前のめりに倒れているせいか、俯せに倒れるその背中だけは馴染みの無いものだった。
それも当然だろう。自分の背中をまじまじと見る機会など、普通はある筈も無い。
更に不可解な事に、その首の上にはあるべきモノが無かった。本来あるべき其れは、今こうして自分を見下ろしている。
理解不能な光景に混乱し。
――次の瞬間、同僚の顔が視界一杯に拡がり、男の意識は消失した。

捩じ切った男の首を、もう一人の見張りの顔面へと叩きつけた青年――魔鎧を纏った猟犬は無造作に腕を振り、砕け散って掌に付着した赤黒い肉片を払い落した。

首から上を失った二つの身体から、思い出したように鮮血が噴き上がるのを一顧だにせず、強化された知覚を全開にして扉の向こうの気配を探る。

ハズレか、と無感動に呟くその言葉を拾ったのは、背後から追いついて来たトニーだ。

「旦那、此処に副長や他に捕まってる人達はいない感じッスかね？」

――多分な。代わりに魔獣らしき気配が幾つかあるけど……妙な感じだ。

「……人を攫ってる理由が人体実験の類だとするなら、当然人間以外も実験動物にしてるって事スか」

まさか魔獣を捕まえて実験するのが、家畜化だのペット化だの、穏やかな目的の筈もないだろう。

十中八九、何某かの強化を施していると考えるのが妥当だ。場合によってはそれらと戦闘になるかもしれないと、トニーは厳しい表情で眼前の鉄扉を見据える。

「それじゃ旦那、自分は追随しますんで、先ずは――」

――あぁ、いいわ。なんか此処、あんま広く無いみたいだし、人数もそんなにいないみたいだし。

淡々と騎士の言葉を遮ると、青年は手刀を振るう。

扉に赤光の残影が走ったかと思うと、耐火・耐爆仕様だったのであろう分厚い鉄扉は音も無く”ズレた”。

――１０分で終わらせるから待機しといて。戻ったら直ぐに別の《門》に行くから。

袈裟懸けに両断した扉を下から潜り、肩越しに振り向いて言われた言葉に、トニーは苦笑いで応じる。

「あー……じゃ、お任せするッス。ただ、放置して次に行くなら逃げられない様にだけしておいて欲しいッスね」

――霊峰で戦りあった死屍使い（ネクロマンサー）じゃあるまいし、死体になった自分を操作できる様な奴なんぞ早々おらんやろ。

「えっ？」

――えっ？

真顔になった狐と、フルフェイスで表情の伺えない猟犬が、異口同音と共に首を傾げ合う。

「……１０分で全員、無力化してくるって事ッスよね？」

――うん。ちゃんと皆殺し（むりょくか）にしてくるけど。

「なんか発音が不穏なんスけど!?　若干意思疎通に齟齬が生まれてる気がするの、自分だけッスか!?」

――？

「滅茶苦茶不思議そうな顔!?」

青年と共闘した事、それ自体はある。

彼とトニーが初めて関わった北方の一件……任務の最後の〆として、邪神の信奉者の隠れ家を襲撃した際に、機会があった。

その経験もあって、眼前の《聖女の猟犬》と呼ばれる彼が敵対者に対してドン引きするほど容赦の無い人物であるというのは、理解してるつもりだったのだが……。

（あ、コレ相手は信奉者じゃなくて、下衆、外道の類と言っても人間……とか言っても「だから？」で終わるやつッス）

此処に来て、漸く理解が正しく及ぶ。

彼にとって信奉者であるか、ただの人間であるか、それはあまり重要な尺度では無いのだろう。

要は、自身の身内――或いはそれに近い立場の人物や、その関係者を害する存在（もの）であるかどうか。

それが本当の意味で猟犬が牙剥く”基準”なのだ。

事の前後の状況や、組織や国の関わる問題。そういったものを全く考慮しない訳では無い。

が、それはあくまで二の次三の次。自らが守護すると決めた対象を害されれば、彼にとってそれらは容易く放り捨てられる程度の重要度（ウェイト）しか持たない。

戦力としてはこの上なく頼もしいが、帝国(ウチ)では飼えん、と皇帝が断言していたのも当然であった。

自らの見出した推し(誰か)を何より尊び、その牙は群れに依らず、国に依らず。あくまで自身の意志で以て振るわれる。

故に騎士では無く、猟犬。今の処、ある程度の手綱を握れる唯二人――聖女達の側に在る、守護者にして狩人。

奇妙な程に腑に落ちる感覚と共に、トニーは即座に意識を切り替えた。

「旦那、出来れば一人か二人、なるべく偉そうな立場の奴だけ『残して』頂けると。選ぶのは旦那の勘で良いんで」

元より、無理を言って彼の”狩り”に同行した立場だ。足を引っ張るつもりは無いと豪語した以上、基本はこっちで立ち回りを調整すべきだろう。

間違っても国や大きな集団に仕える事の出来る人物では無い、と改めて確信したが、トニーとしては彼の庇護対象に自分の上司たちが入っているという時点で、文句などあろう筈が無い。

唯一、問題というか、心配な点があるとすれば、だ。

(隊長が、将来旦那の手綱をレティシア様達から勝ち取ったとして……所属はどうするのやら、そこだけが怖いッス)

一人だけ達磨ね、了解。と頷いて、今度こそ扉を潜って施設内部へと侵入したその背を見送り、こんな状況だというのに場違いな思考を脳裏に走らせる。

隊長とくっついた青年が、罷り間違って《刃衆（エッジス）》入りでもしようものなら、将来陛下の御髪が抜け落ちそうである。

あと彼の影響を受けて、ただでさえ問題児の多い部隊が更に酷い事になりそうだ。事後処理でトニーの胃にもダメージが蓄積されそうだし。

（……ま、それもそれで面白そうなのは確かッスけど……先に副長をきっちりお助けしてからッスね）

狸ならぬ、獲らぬ猟犬のなんとやら。

面白愉快な――だが、まだまだ不確定な未来の為にも、今は為すべき事を為さんと。

万が一、討ち漏らしがこちらに逃げて来る可能性も考慮して、トニーは扉前で青年を待ちつつ、剣を抜いたのだった。

それからきっかり8分後。

逃げて来る者、どころかまともな戦闘すら発生すること無く、帝都に巣食う人攫い連中の拠点の一つは、静かに壊滅した。

侵入者の二人がさっさと《門》へと取って返し、別の《門》へと突入する最中。

人も魔獣も、動くモノがいなくなったその建物内部で唯一息をしていたのは、四肢を失い、芋虫の如く蠢く此処の責任者のみである。

全てが終わった後、トニーの要請を受けてやって来た帝国の騎士や兵が彼を見つけ、確保してくれるのが先か。

或いは、血の匂いに釣られて施設内に迷い込んで来た猛獣や魔獣が、死肉を食い散らかし、最後の新鮮な餌に喰らい付くのが先か。

これぱかりは女神のみぞ知る、といった処だろう。

聖女姉妹による中央広場での儀式魔法。

女神への祝(はふり)も兼ねたソレは、本来なら年初めに聖都の大聖殿でしかお目に掛かれない代物だ。一目見ようと、多くの人間が広場へと足を伸ばしている。

そんな中、アザル達は以前発見した下水路に隠された《門》のある場所へと訪れていた。

この場に急行しようと言い出したのは、一党の魔導士――ウェンディである。
魔法の知識の無い者には、聖女が行った儀式は神秘的で美しい神事であった。
ある程度の知識がある者であっても、儀式魔法を《大豊穣祭》の間に帝都を覆う結界と励起させた現象については、神事として縁起を担ぐ以外にも、催しとしての派手なパフォーマンスを兼ねているのだと判断するだろう。
だが、帝都各所に隠された《門》――人攫い共の移動手段として多数設置されたそれらの存在を知り、魔法に対する知識も深い者にとっては、別の推論が浮かぶ。
「大当たりね。やっぱり《門》も励起して発動してる」
聖女の魔力を大量に注がれた為か、下水道にはそぐわぬ程の輝きを放ちながら起動する転移の魔道具を見て、ウェンディは確信を深めた。
「この一件、帝国は聖女様に協力してもらったみたいね……結界との励起ありきとはいえ、大都市を丸々儀式魔法の範囲に入れるとか、私の中の魔道の常識がぶっ壊れそうだけど」
「偉大なる創造神が能えたもう加護。その寵が最も深き聖女様方のお力たるや、といった処ですね」
ちょっと遠い眼で呟く女魔導士の隣で、エクソンがしみじみと腕を組んでいる。
直接目にする事は出来なかったものの、聖女の齎す奇跡にも近い魔法行使に触れる機

会を得た事で、同じ僧職にある彼は感無量といった様子であった。
「……レイザーの奴が宿から動いたのはこれが理由か」
「あんの糸目、私達に説明くらいしろってーの」
納得のいった顔で頷くアザルに対し、イルルァは険のある表情と口調で唸る。
帝国の騎士であるトニーからすれば、彼らはあくまで情報収集の為に協力した冒険者。
助けてもらった恩とこの件に関わる動機に対しての共感や同情はあるものの、こと軍が動く段階となれば、アザル達自身の安全の為にも動かないでもらいたい、というのが彼の判断だったのだろう。
ここ数日、協力して調査に当たった事であの狐を思わせる青年が職務に関しては中々に生真面目な性質（タチ）であるというのは理解している。
今夜、大きな動きがある事も、アザル達の安全を配慮して黙っていたのだろうと予想は出来た。
――が、しかし、である。
「それで、どうするのリーダー？　動かそうと思ったら私かエクソンがごっそり消耗するリスクのあった《門》が、こうして目の前で全開で起動してるけど」
「決まってるだろ？　探してる子供達への直通ルートが開いてくれたんだ、行くさ」

彼らとて、退けぬ理由があって此処に居る。
ここ数日で得た情報で、これ以上首を突っ込む事の危険性は嫌というほど確認した。
その上で、この場にやってきたのだ。
「……やっぱり、さ」
「自分だけで《門》を潜るってのは無しだぞ」
退けない主な理由――身内に等しい者を攫われたイルルァが、躊躇いがちに何かを言葉にしようとして――あっさりと頭目に遮られる。
「っていうか、何回したのよこのやり取り。行くなら全員で、そう決めたでしょうが。蒸し返すんじゃないわよ」
「とうに仲間内で出た結論に異論を差し挟むのは、聊か往生際が悪いですよイルルァ。皆で向かい、皆で帰って来るとしましょう。勿論、子供達も一緒に」
呆れた声と穏やかな声。
正反対の声色で諭され、申し訳ないような、或いは面映ゆそうな表情で一党の斥候は黙って頷く。
そんな仲間達を見回して、アザルはニヤリと笑った。
「よし、それじゃ行くとしようぜ――俺達も、子供達も、皆なるべく怪我無く帰って来るとしよう。あの傭兵のにいさんが言う処の『いのちだいじに』ってやつだ」

「語用、それであってたっけ？」
「アリア様が帝国に居る以上、あの人も来てそうよね」
「そうですね。こちらにいらっしゃるのならば、アリア様や司祭様共々ご挨拶したい処です」
軽口をたたきあいながら、それぞれの武器を構える。
誰ともなく、深呼吸。場所が場所なので少々臭いがきついが、息を合わせてタイミングを計る。
《門》の向こうで水面の如く揺らぐ景色には、少なくとも見える限りでは伏兵の姿は無い。
子供達を救助した後、それを守りながら防戦に徹して移動する状況も考え、愛用の剣の他にも金属製のカイトシールドを装備したアザルが、盾を構えて最初に《門》へと飛び込む。
一拍置いて、次々と転移魔法の導く先へと続く仲間達。
飛び込んだ先に待ち受けていたのは、樹々高い森の中であった。
「森か……ここが何処か、分かりそうか？」
取り敢えず、周囲に人や危険な獣の気配はない事を確認しつつ、アザルがイルルァへと問いかける。

ちょっと待ってて、と応えた斥候は、構えていた弓を背に負い直すと手近な樹に飛びつき、するすると昇って樹上へと消えていった。

待っていた時間は僅かだ。一分もしない内、枝葉を掻きわけて隣の樹から滑り降りて来る。どうやら高さのある方へと途中で飛び移ったらしい。

「多分、帝都の北の方にある森だと思う。遠目にだけど帝都の灯りも見えたし」

「ま、距離的にみても妥当ね。設置されてたのは、《門》の魔道具としては其処まで高性能な品じゃ無いみたいだし」

ウェンディが杖を片手に頷き、探知の魔法を発動させて周囲の状況を探る。

記憶の糸を辿る様、こめかみに指先を当てたエクソンが少々自信なさげに声を上げた。

「……この森には随分と昔に完全踏破された遺跡があった筈です。確か、小さな渓谷沿いにあったと組合の資料で読んだ気が……うろ覚えで申し訳ありません」

「十分だ。《門》との距離も考えて……近くに渓谷があるなら、その遺跡を再利用してる可能性は高そうだしな」

「エクソンの記憶、当たりっぽいわ――水の音がする」

斥候が耳を澄ませて捉えた音の中には、陽の落ちかけた森で歌う虫の声に混じり、微かな水のせせらぎがあった。

彼らも経験豊富な冒険者とはいえ、流石に夜も近い森の中を移動した経験は殆ど無い。

逸る気持ちを抑え、やや慎重な足取りで進むが……幸いなことに、目的の遺跡は直ぐに見つかった。

鬱蒼とした森が開け、視界が広がった先には小さな谷間の様になった渓谷。

その底、水辺にほど近い場所に、明らかな人工物である石造りの建物が見える。

更に分かり易い事に、過去に踏破され、既に人の出入りなど無くなった筈のその入口には、小さな松明が固定されて光源となっていた。

「あそこだな」

「またまた大当たり、って訳ね。ウチの斥候は優秀だこと」

谷間の上から覗ける光景に、頭目と魔導士が小さな動作でハイタッチを交わす。

「子供達は我々の通って来た《門》を使って連れていかれた可能性が高い――即ち、あの遺跡に居る可能性も高いと言う事。やっと手の届く範囲に来れましたね」

気合十分、といった様子のエクソンが口の中で聖句を唱え、女神に祈りを捧げた。

「あそこに……行こう、皆。オルカン達を助けるのを手伝って」

当然、一番に士気が高いのはイルルァだ。

渓谷へと先導する為に先頭に立っていた彼女は、決意に燃える瞳で背後の仲間達へと

振り向いて小さく頭を下げる。
アザルが力強く頷き、ウェンディが何度も同じことを言わせるな、と鼻を鳴らし、エクソンが指で聖印を切りながら、子供達の無事と奪還の成功を祈り。

ちゅどーん。

擬音化すれば、そんな感じの音だろうか。
眼下に見える遺跡が吹っ飛んだ。
「「「……へ？」」」
唖然とした声が四つ重なるのも宜なるかな。
ド派手な爆発と共に古びた遺跡の入口は見事に倒壊し、もくもくと豪快に煙を上げている。
突如として発生したあんまりな光景に、冒険者達が硬直から復帰するのに数秒の時間を要した。
「……って、呆けてる場合じゃないって！　お、オルカン達が！」
「と、取り敢えず谷底に降りるぞ、急げいそげ！」
「……気のせいか、この唐突且つハチャメチャな展開に既視感があるんだけど」

「奇遇ですね、私もです」
四者四様の反応を示しつつ、アザル達は小さな渓谷の底へと続く坂を駆け降りる。
音からして、やはりただの崩落事故では無かったのだろう。崩れた遺跡跡から火の手があがり、派手に夜の森を照らしていた。
場所が川沿いの岩場だったのは幸いだ。これが樹々の生い茂る森のど真ん中であれば森林火災待ったなしである。
渓谷へと降り、一応は周囲への警戒を行いながら、冒険者達は目の前で吹っ飛んだ遺跡へと近付く。
ごうごうと燃え盛る炎を背景に、煙の中から人影が進み出て来たのは、イルルァが子供達の名を叫びながら飛び出そうとしたのと同時であった。
「ふむ。ラックに教わった破壊工作(発破)のコツ……現役時代には終ぞ使う事もありませんでしたが、意外と覚えているものですね」
「見事なお手並みでした。魔力の節約にもなりますし、私もラック様にご指導を仰ぐべきでしょうか？」
煤汚れ一つ無い姿で現れたのは、二人のシスターだ。年若い者と、老齢の者――だが、

両者とも背筋を伸ばした凛とした立ち姿であった。
いや、二人では無い。その背後から更に何人もの人影が続く。
「な、なぜ爆心地にいたのに御二人は汚れ一つ無いんでしょう……ケホッ」
「深く考えては負けだよチェルシー。私がミラ様やグラッブス司祭と関わる上で学んだ重要な処世術だ。覚えておくとよい」
後から現れた二人もまた聖職者――こちらは一人は妙齢のシスターで、もう一人は壮年の神父である。
両者ともやや煤や埃で汚れているが、神父の方は鉄棍を背負い、更に大きな荷車の様な物を曳いているのが目を惹く。
その荷車の上と、彼らの背後に大人しく続く無数の小さな影――中でも、チェルシーと呼ばれたシスターの直ぐ隣を歩く少年の姿に、イルルァの眼が見開かれる。
「オルカン!!」
「あ、イルルァねーちゃん」
飛び出し、駆け寄る斥候の女性に向かい、罅の入った伊達眼鏡を掛けた少年――オルカンがあっさりとした態度で片手を挙げた。
「この馬鹿っ、心配かけて！　怪我は無いの？　クズ共に何かされてない？」
「痛い痛い、痛いって。と、取り敢えずなんともないよ。体調もそんなに悪く無いし」

小柄な身体をあちこち撫でまわし、引っ張り、目立った負傷や異常の類が無い事を確認すると、イルルァは脱力した様に膝を着き、そのままオルカンを抱き締める。
そんな彼女を見て、この奇妙な聖職者集団の先頭を歩いていた人物――聖教会現御意見番にして元最高戦力のミラ＝ヒッチンが鉄面の如き表情を緩め、追いついて来たアザル達に視線を向けた。
「何時ぞやの冒険者の方々ですね。その節はオフィリとリリィ――私の関係者である子供達がお世話になりました」
「いえ、どうやらそりゃこっちの台詞みたいで……シスターや皆さんには、先を越されちまったみたいですね」
荷台に乗せられた小さな幼子や、足に怪我をした子供達。
更にはシスター達の後に続いて歩いて来た、自分の足で歩ける孤児達の姿を見て、アザルは安堵混じりの苦笑を浮かべた。
「危険を顧みず、子供達を救い出そうとした貴方がたの気概は敬意を払うに値する。多少の遅参を気に病む必要などありません」
「そうですね、私も聖都で孤児院を預かる身ですから気持ちは一入です。皆さんの様な冒険者がいて下さる事、女神様に感謝しなくては」
交互に言い募るミラと栗色の髪のシスター――ブランの言葉に、ウェンディが「私と

しては楽に片付いたし、結果オーライだけど」と肩を竦め、エクソンは丁寧に……それはもう深く、丁寧に眼前の女傑に向けて一礼し「光栄です」と一言だけ零した。

修羅勢と書いて僧と読む、そんな四人にきっちり丁寧に内部の人員ごと叩き潰された人攫い連中の拠点であったが、未だ火と煙を上げている遺跡を見て、チェルシーがおずおずと手を挙げる。

「あのぅ……な、内部の設備なんかをまとめて壊せたのは良いですが、このまま燃え続けると不味いような気が……あ、いえ、あくまで個人的な意見ですが……」

「ふむ……確かに。中に残るは悪漢共のみとはいえ、このままでは全員火と煙に巻かれてしまいますか」

遺跡を再利用して作った施設内にある火薬を集め、破壊工作に用いたのはミラだが、どうやら少し火力過多だった様だ。

珍しく、少しばかりバツの悪そうな表情となった彼女は、未だ入口から火を吐き出す遺跡へと向き直る。

そのまま足を持ち上げると、強烈な踏み込みと共に靴裏を地に叩きつけた。

靴底を捩じるように捻ると、ほんの数秒、強烈な風が渦を巻いて遺跡の入口で逆巻き――。

ボヒュ、と。空気が抜ける様な音を立てて炎が鎮火する。

「意味が分からないんだけど。どうやったのアレ」
「気にしたら負けだよお嬢さん。『ミラ様だから』で納得しておくと、色々と楽になる」
無詠唱魔法ですらない、謎の超技術を目の当たりにしたウェンディが呻き声を上げ、そんな彼女に向け、子供達を乗せた荷車をけん引する神父が遠い眼と優しい声色でアドバイスを贈った。
ちなみに、何気に発破のときも派手な光景にはしゃいでいた子供達だが、今度はミラの《三曜》の行使を見て歓声を上げている。
攫われ、監禁されていたというのに、意外と平然としてる子が多い様だ。心身がタフなのは孤児であるが故なのかもしれないが、何にせよ、元気なのは良い事である。
「――では、一旦戻って《門》を潜るとしましょう。チェルシーとカークは子供達を護衛し、そのまま『彼』の逗留していた屋敷へと送り届けて下さい。サルビア殿が治療を行ってくれる手筈となっています」
この場の面子をぐるりと見回し、ミラがこの後の行動の指針を語った。
殆どは問題無さそうに見える子供達だが、中には荷車の上で動けない子もいる。
また、採血の他にも妙な注射を受けた子供もいるとオルカンから説明を受けていた。
何は無くとも、先ずは優秀な魔導士による精査と治療を受けるべきだろう。
女傑の知る中でも、最高の癒し手であるレティシアとアリアが帝都内の《門》の起動

の維持に力を割いている現状、エルフの最長老の助力は子供達の容態を確認する為にも必須であった。

この辺りの流れも見越し、多くの者達の助力と各員の配置の指定までしてきた弟弟子に、人知れず誇らしい気持ちになる姉弟子である。態度には絶対ださないが。

子供達はチェルシー達に任せ、ミラとブランは引き続き別の《門》に突入。転移先にある悪漢共の拠点や施設を襲撃する予定だ。

久方ぶりの実戦であるが、女傑は心身共にノリノリであった。

何だかんだと言って、彼女が長年戦場で戦ってきた生粋の戦人であるのも心浮き立つ理由の一つではある。

が、気合充填１２０％となっているのは、やはり『彼』からの『お願い』であるからだろう。

何もかもを独りで成し遂げようとして無茶を続け、一度は見送る羽目になった自慢の弟弟子。

その単独ＲＴＡをやらかした当人からの、助力の嘆願である。これでテンション上げるなという方が無理な話であった。

「さぁ、時間は有限――一晩かけての帝都の大掃除です。行きますよ、ブラン」

「はい、ミラ様。ではチェルシーさん、カーク君。子供達の事をよろしくお願いします

ね」
　ともすれば、うっかりスキップしてしまいそうな程には足取りは軽く。
　唯一人の『弟子』を除けば、最も付き合いの長い教え子を連れ、意気揚々と女傑は歩き出した。

「ご、護衛と子供達の引率、手伝って下さってありがとうございます」
「いやいや、俺達は実働面でなんも出来てない訳だし、これくらいはやりますって」
　最後尾を歩くチェルシーが恐縮して肩を竦めるも、先頭のアザルが振り返り、苦笑して気にしないでくれ、と返す。
「……以前にグラッブス司祭と知己を得たのに留まらず、今度はミラ様とお言葉を交わせるとは思いませんでした。故郷に帰省した際には家族に自慢出来そうです」
「え、あのお婆さんそんな凄い人なの？」
「知らないのですかイルルァ!?　あの方は嘗て教国――否、人類種の英雄と呼ばれた方々の筆頭ですよ!?」
「お、おう……エクソンが見た事無い興奮の仕方してる……」

冒険者達の斥候が、普段とテンション違い過ぎる仲間の神官の様子にドン引きながらやり取りし。
「私としては、神父様を君付けしてたシスターの娘の事が気になるんだけど……」
「ブランさんとはちょっと話をしたけど、二人の先輩だって言ってた。多分、長命種の血を引いてるとかそんなんじゃないかな」
一行の道行きを照らす為、魔法の灯りを杖に灯して掲げたウェンディが、隣を歩く少年――オルカンと他愛も無い話に華を咲かせる。
何気ない、ましてや悪気などある筈も無い会話を続ける女魔導士と少年であるが……。
「なるほどねぇ……見た目は一番年下に見えたけど、教会でも古参勢なワケね。そりゃ只者じゃない感じもするわ」
「うん。神父様も結構な古株だって前の炊き出しのときに聞いたし、逆算すると――」
「それ以上は危険だ、オルカン少年。やめておきなさい死ぬぞマジで」
子供達を乗せた荷車を曳きながら、迫真の声色で口を挟んでくる当のカーク神父の表情を見て、二人は即座にお口にチャックを装着したのであった。然もありなん。

帝都の一番長い夜　2

眼を閉じ、体内で魔力を回し始めて数時間程は経過しただろうか。
アンナはゆっくりと眼を開き、石牢の天井を眼に映した。
ゆっくりと掌を開閉させ、握力を確認する様に拳に力を入れる。
（よし、薬効は抜けた。思ったより時間掛かったけど）
通常の鎮静剤の類なら一時間もあれば十分なのだが、特別に調合された品なのか予想以上に時間を食った。体内時計が狂っていないのであれば、時間的には夜になったかどうか、といった処だろう。
床に敷いた毛布の上から身を起こし、軽く伸びをする。
ファルシオンの持って来た毛布と掛け布の御蔭でマシになったとはいえ、床が硬かったのには違いが無い。首と肩を回すとポキポキと音が鳴った。
見張りだろうか？　石牢の前では三人の男が椅子に座ってカードゲームに興じている。

卓の上には札の他にも煙草の吸殻や酒瓶が見えた。どうやらあまり仕事熱心な連中では無いらしい。

犯罪組織の人員の質を問うた処で栓無い話だが、アンナ的には好都合だ。

「ねえ、ちょっと」

牢の格子を掴んで揺すりながら、見張りの男達に不満気な声を飛ばす。

ついでに軽く魔力強化して鉄格子を引っ張ってみるが、流石に素手でどうこう出来る様な柔な作りでは無かった。人目が無く、且つ時間かけても良いのならどうにかなるかもしれないが、少なくとも現状では無理な方法だ。

アンナが寝てるか、気絶でもしていると思ったのか、声を掛けられて少々驚いた様子で振り返る見張り連中に向けて、格子の前で仁王立ちになる。

「攫ってきた人間って言っても、水くらいは出しなさいよ。あと冷えてきたし、お手洗いに行きたいんだけど？」

下着の上にシーツ一枚を羽織った美少女がふんぞり返って告げた言葉に、男達は顔を見合わせ――お世辞にも穏やかとは言い難い顔つきを更に歪めると、下品な声と表情で笑う。

三人の内、一人が席を立ち、石牢の前までやってくると鉄格子越しにアンナを見下ろした。

残る二人が、囃し立てる様に声を上げる。
「しおらしくお願いするなら、水くらい出してやるぜ、騎士様！」
「その格好じゃ騎士とは言えねぇけどな、一晩銀貨何枚だ？」
ゲラゲラと笑う濁声を背に受け、牢の前に立つ男が呼応するようにニヤニヤと品の無い笑みで少女を嘲笑う。
「生憎と騎士様をエスコートするにゃ、ちぃと便所は遠くてな。我慢できなきゃそこの隅で用を足せよ」
目の前で見ててやる、と言わんばかりに黄色い歯を剥き出して更に格子へと顔を近付ける男を見て、アンナは鼻で笑って返した。
「いやー、見た目からしてチンピラだから行けると思ったけど……予想通りの反応で助かるわ――わざわざ寄ってきてくれるんだから」
「あ？　何を……」
笑みから一転、男が訝し気に眉を顰めた瞬間。
格子の隙間から伸ばされた手が、その襟首を引っ掴む。
反応する暇すら無く、凄まじい勢いで引かれた首元に引っ張られ、男の顔面が鉄格子に叩きつけられた。
「お”がっ……!?」

鼻が拉げ、へし折れた歯が飛ぶ。
一発で視界が明滅し、腰砕けになった男だが、突き離された襟首がもう一度牢に向けて引かれ激突。額に太い格子の痕をくっきり残して昏倒する。
「なっ……!?」
「こ、この女(アマ)!」
慌てて椅子を蹴倒して立ち上がる残りの見張り二人だが、アンナは既に牢にもたれかかって意識を飛ばした男の腰に手を伸ばし、鞘に納められた短剣を抜き放っていた。
手にした短剣をしげしげと眺めて品定めする彼女を見て、見張りの一人が咄嗟に近くの壁に掛けたままである牢の鍵束に飛びつき、懐に押し込んだ。
慌ててはいるが、それでも状況は変わっていないと判断したのか、張り上げる声はどこか勝ち誇った声色である。
「おいっ、誰か呼んで来いっ！　ふざけた真似しやがって、たかが短剣一本じゃ何も――」
「……ふっ！」
罵声は静かな、だが力強く呼気を吐き出す音と、鋼によって鋼が断たれる澄んだ音で遮られた。
キンッ、という甲高い音と共に牢の扉に掛けられた鉄の閂が両断され、石床に転がっ

て騒がしい音を立てる。
「……安物は駄目ね。数打ちにしても、もうちょっとマシなのがあるでしょうに」
一度の斬鉄で根本に亀裂の入った刀身を見て、渋面で手の中の短剣を評価。
そのまま悠々と扉を開けたアンナが、鉄格子に寄りかかる気絶した男の身体を脇に放り捨て、牢の外に出るのを、男達は唖然とした表情で見続ける事しか出来ない。
「さて……」
銀髪の少女が冷えた声色で呟いて視線を向ける段階になって、ようやっと弾かれた様に背を向け、走り出す。
当然、遅すぎた。
ガタの来た短剣が投擲され、一人の肩口に深々と突き刺さる。
空気を斬り裂いて飛来したソレは投擲というより鈍器で殴打された様な重さと衝撃を相手に与え、肺から絞り出すような短い呻き声を上げて見張りの男は転倒した。
「ひぃぃぃっ!?」
一歩先を走っていた男が肩を抉られて倒れたのを見て、裏返った悲鳴がもう片方の喉から上がる。
そのまま全力で駆け抜ければ良いものを、背後に迫る気配に脅え、ついつい男は振り返ってしまう。

眼に映ったのは、ふわりと広がり、翻るシーツの先端。
一歩踏み込み前方へと跳躍したアンナは、あっさりと男へと追いついて振り返った胴の脇へと足裏を捩じり込んだ。
「ぐげべっ!?」
身に着けていた革鎧（ハードレザーアーマー）が、少女の踵の形にべっこりと凹む。
肋骨を粉砕された上、内臓まで口から飛び出そうな衝撃を受けた男の口から、地面に力いっぱい叩きつけられた蛙の如き苦鳴が零れた。
飛び蹴りの勢いそのままにその身体が壁へと叩きつけられ、頑丈な石壁に罅を入れてめり込む。
「延髄狙ったんだけどなぁ……やっぱ投擲は苦手だわ。なんでシャマやあいつは何でもかんでもホイホイ狙った場所に中てられるんだか」
叩き込んだ足裏と石壁で見張りを挟み込んだまま、転倒した際に気絶したらしいもう片方の見張りへと刺さった短剣を眺めて、少女は嘆息した。
あの駄犬（ゆうじん）ならば、短剣どころかそこらで拾った歪な石ころであってもきっちり有効な急所に当ててみせるだろう。
自身を雑魚だ武装頼りだと普段から下げた評価をするヤツだが、同じ条件――大した身体強化もせずに同じ真似が出来る人間がどれだけいるのか分かってるのだろうか。

脳裏に惚けた奴の顔が浮かんでなんだか腹が立ってきたが、この状況で長々と愚痴を垂れるのも不毛だ。さっさと切り替える。

未だ意識があるらしい蹴り付けた方の男へと、アンナが軽い尋問を行おうとして――。

「……ゲ、フッ……あ”……れ”ーすの、し、ろ”……」

「記憶を失え」

半死半生になりながらも糞戯けたセクハラ発言を吐いた男に、瞬時に脚を引き戻して代わりに拳を五発ほど叩き込む。

一秒とかけずに鼻、頬骨、顎と順に砕かれて最後に側頭部（テンプル）を左右交互に打ち抜かれ、意識と――おそらくはここ最近の記憶の方も遥か彼方に発射されて行方不明となった男の姿は、口は災いの元を体現した者のソレであった。

「チッ、しまった。つい……」

舌打ち一つするが、乙女の尊厳（プライド）諸々を護るためには必要な行動だったと直ぐに思い直す。

アンナは手早く倒れた男達の懐や腰回りを探り、武器を奪う。

新たに短剣と長剣を一本ずつ手に入れ、これまた奪った革帯（ベルト）に鞘ごとぶら下げた。

やはりお世辞にも質が良いとは言えず、長剣も好みではないが……贅沢は言えない。

無手よりは遥かにマシだ。
（一応、武器は手に入れたけど……）
防具、というより服はどうするか。
倒れた見張り連中から剥ぐ事も考えたが、流石にサイズが違い過ぎる。ついでに言うのなら、あまり身形や清潔感に気を使ってなさそうな男共のズボンやブーツを履くというのも気持ち的に無理があった。
とはいえ、魔力強化を行うにしても素足よりは頑丈なブーツを履いていた方が蹴りの威力は上がるし、踏み込みだって足に負担が掛からない。
靴くらいは爪先に詰め物をして履くべきか、と顔を顰めながら手を伸ばすが――流石に物音を立て過ぎたのか、何人かの荒っぽい音が靴音高く近づいてくるのを耳に捉える。
「時間掛け過ぎたか……仕方ないわね」
丈の長いケープの様に羽織っているシーツを短剣で半分に裂き、片方を手早く腰回りに巻き付ける。
もう片方は肩から斜めに胴へと巻きつけ、胸元で固く結んだ。
格好・装備は心許ないが、体調は問題無い。
やってくる者達の突破は難しくないだろう。先程の見張りといい、連中はどうにも

飼っている人員の質が両極端だ。
ファルシオンやジャック（スカシ野郎）に匹敵する者は殆どいない。もしくは全くいないのかもしれない……少なくともこの拠点には。
逆を言えばあの二人……とりわけ後者レベルの相手だと、腹立たしい事に現状では逃げの一手が最善になってしまうのだが……意地を張る様な局面でも無い、退くべきときは素直に退くとしよう。それはそれとしてあのスカシに御礼参りはするが、絶対にするが。
そんな風に思考を纏めると、アンナは腰に下げた剣を抜き、右手に握った。
気息を整え、身を低く構えて近づいてくる無数の足音を待ち受ける。
「じゃ、脱出のついでに軽く逆襲（嫌がらせ）と行きますか」
特に気負いを見せる事も無く、不敵に笑い。
石牢と小さな研究スペースらしき空間が同居した部屋の扉が荒々しく開かれた瞬間、彼女は地を蹴った。

「おい、退け、退け！　俺達じゃ無理だ！　アレをぼっ!?」
「く、糞がっ、聞いてねぇぞ！　なんでこんな奴らガッ!?」
何かを喚き散らそうとした男の喉元へと、魔装の籠手がめり込む。
王都を囲む山々に隠された犯罪組織の拠点。
その一つである、山の中腹にある洞窟を加工して作られた施設は、現在《刃衆（エッジス）》の襲撃を受けていた。
今回の強襲作戦において徹底された三人一組（スリーマンセル）。
この場に割り当てられた最小単位である小隊の先陣を切るのは、薄い色合いの金髪を靡かせた褐色の肌の騎士――シャマダハル＝パタだ。
低い、それこそ這う様な姿勢。だが獣の如き速度と、洞窟内の照明を受けて伸びる影の様な静かな歩法で、地だけでは無く、壁――ときとして天井すら足場として駆け抜ける。
後に続くは、《刃衆（エッジス）》内の古株にして練達の魔法剣士、ローガス＝クレイと新入りの鉄拳お嬢様ことローレッタ＝カッツバルゲル。
洞窟内を縦横自在に駆け抜けるシャマが目に付く照明を潰し、退こうとする者を優先的に仕留め、後続の二人が迎撃せんと向かって来る者達を叩き潰す。

夜目が利くのか、光源が無くとも一切の陰りを見せないシャマの動きは、照明が無くなった洞窟内において凶悪の一言だ。
背後に続くローガス達が頭上に魔法の光源を浮かべているのも、その隠密性を高めるのに一役買っていた。
投擲や無造作な蹴りで真っ先に破壊される洞窟の照明。
降りてきた暗闇に紛れて駆け抜ける、暗殺者の如き軽快な動きの騎士の姿は隠れ、容易には視認できず――その分、後ろから魔法の照明を掲げて猛追してくる二名へと、どうしても注意が引きつけられる。
その意識の隙を縫う様に打ち込まれる籠手の一撃。
優れた戦士であっても防ぎ切るのは難しく、ましてや洞窟内の警備をしていた野盗くずれ、傭兵くずれでは、反応すら出来ずに意識を刈り取られるしかない。
先陣を切って駆けるシャマが遊撃、後ろに続くローガスとローレッタが実質敵の眼を惹く囮にも近い役割という、暗闇に満たされた洞窟だからこそ成り立つ変則的な連携で以て、一同は奥へと突き進む。
「雑魚ばっかで張り合いが無いし。トニーやふくちょーに手を出した転移者は何処にいるんだか」
警備らしき男達に指示とも言えぬ雑言を喚き散らしていたが、半数以上がサクっと蹴

散らされたのを見て背を向けて逃げ出した研究者風の男。
その足首――アキレス腱部分を投擲（スローイングダガー）刃で打ち抜いたシャマが、悲鳴を上げて倒れ込んだ研究者の背を踏んづけて不満そうに鼻を鳴らす。
「攫われたっていう被害者の姿も無し。そういう意味じゃ此処は二重の意味で外れなのかも、な！」
大振りの戦斧を持つ大男を迎え撃ったローガスが、あっさりと戦斧を弾いて男の横腹に蹴りを叩き込み、身を折って低くなった脳天へと両手剣の柄を打ち付けて意識を奪った。
その隣では、槍による突きを正面から拳で叩き折ったローレッタが、返しの左で相手の顎を打ち抜きながら会話に加わる。
「広い洞窟ですが、横道は殆どありませんでしたし……最奥に囚われているのでは？シャマダハルさんが足蹴にしている輩は研究者らしき装いです。此処がただの資材置き場という可能性は低そうですの」
「だね。人質なんかにされてもちょー厄介だし、さっさと奥にいこ」
投降するだの司法取引に応じるだの、喚き続けていた足元の男の側頭部を蹴り飛ばして静かにさせると、爪先で軽く地を蹴り、再びシャマが駆けだす。
向かって来る者やこちらの脇をすり抜けて逃げ出そうとする者は打ち倒すものの、即

行で尻尾を巻いて退却した連中は奥に引っ込んだままだ。
山中にある洞窟を利用した施設である以上、下手な拡張などは崩落に繋がる。奥に行けば行くほど別の抜け道などがある可能性は低い。
それでも躊躇なく退いたということは……何か隠し玉があるのかもしれない。
三人共、誰が口にするまでもなくその可能性に思い至り、一瞬の目配せと共に警戒を高めて突き進む。
そして、その予想は正解であった。
洞窟内でも更に開けた空間へと出る。
その奥には巨大な鉄の檻に取り縋り、焦った様子でガチャガチャと檻の扉を弄る者達の姿があった。
その内の一人が《刃衆(エッジス)》の面々に気付いて焦れた様子で叫び声を上げた。
「クソがっ、もう来やがったぞ！　まだ檻は開かないのかよ!?」
「時間を稼げ！　開ける事自体は出来るが時限式の設定をせねば危険が……」
「言ってる場合か!?　今開けなきゃ何もできずにやられるだけだろうが！」
研究者の服装をした男が檻を前に魔力を操作しているのを待っていられないとばかりに押し退け、戦闘から退却して来た男達が力づくで扉を開閉しようとする。
「馬鹿ッ！　よせ！」

「うるせぇ!!　開けたら直ぐに逃げちまえば良いだけだろうが！」
突き飛ばされ、尻もちを着いた研究者の悲鳴にも似た制止の声を怒鳴り返す事で遮り、重量も相当にありそうな扉を数人がかりで引っ張る。
錠が外れる音が異様な程に大きく響き、分厚い鋼鉄の扉が幾らか動いた瞬間。
洞窟内に重低音の咆哮が響き渡り、檻の奥から突撃してきた巨大な質量が扉へと激突する。
大の男が数人がかりで少しずつ動かしていた大扉は、冗談のように拉げて宙を舞った。
「なぁっ!?」
「ひいいいいっ!?」
上がった悲鳴は男達の誰かか、或いは身を丸めてその場に蹲った研究者のものであったのか。
確認はとれそうに無かった。
扉を吹き飛ばして檻から飛び出して来たソレは、その巨体と重量のままに檻の前に屯していた者達を跳ね飛ばしたからだ。
馬鹿げたサイズの鉄扉を吹き飛ばす威力の突進だ、進路上にいた者達の末路は悲惨である。

子供に放り捨てられた小さな人形の様に、人の身体が幾つにも千切れ飛びながら宙を舞った。
バラバラになった男達の体液を頭から被りながら真っ直ぐに突撃を続けたソレは、地響きを立てて壁に激突。少なくない衝撃に洞窟内に地震にも似た振動が走る。
「……コイツは……」
シャマとローレッタに下がるように手振りで伝え、前に出たローガスの口から呆れと感嘆の籠った呟きが漏れた。
洞窟の壁に巨大なクレーターを穿って止まったのは、巨大な魔獣であった。
ずんぐりとした体形に、太く、やや短い手足。
全身は生半可な刃など弾きそうな剛毛に覆われ、背や腕部、足などを覆うは装甲にも似た甲殻。
「《装甲熊（シェルム・ベア）》……ですの？」
「サイズがおかしいけど、多分……？」
困惑した声色のローレッタに応えるシャマの声も、やや自信無さげであった。
檻を破壊して現れた魔獣は、元は野生の熊だったものが魔力による強化と変質を起こしたと言われる、《装甲熊（シェルム・ベア）》の名で広く知られる獣である。
学名にて装甲扱いされる程の甲殻部分は硬く、腕利きの戦士でなければ傷をつける事

も困難であり、熊の持つ膂力やタフネスをそのまま強化した様な能力は魔獣の中でもかなり厄介な部類に入る。

戦うとなれば危険だが、生息域が深い森の奥や高度のある山林などの為、遭遇する機会自体が滅多に無い。

知識としてはローガス達が知るのはその程度である。

だが、目の前で壁にめり込んだ胴体を強引に引き抜く個体は、一目見て尋常では無い事が分かる程の巨体であった。

通常の熊よりも一回りか二回りは上の体躯を誇る《装甲熊（シェルム・ベア）》だが、これはそんなレベルでは無い。

洞窟としては相当に大きく、開けたこの空間を圧迫せんばかりの巨躯は、直立すれば二階建ての家屋に届く程の大きさだ。下手な竜並みのサイズである。

何より、眼を惹くのはその名の由来でもある身体の各部にある甲殻。

そこには魔力導線が彫り込まれ、魔獣の持つ魔力と励起して薄っすらと光を放っていた。

当然、この魔獣――というより、生物には外殻部分に魔力導線など存在しない。

「……実験動物って訳かよ、胸糞悪い」

心底反吐が出る、といわんばかりの表情でローガスは吐き捨てた。

力こそ強いが、魔獣の中では比較的大人しい気性であり、遭遇しても場合によっては穏便な離脱が可能である、とされる《装甲熊（シェルム・ベア）》。

だが、見て分かる程に眼球を血走らせ、口から血混じりの涎を滴らせた眼前の個体は、ただの興奮状態とは言い難い狂気にも似た凶暴性の発露が伺える。

「……どうしますの？」

相当な重圧（プレッシャー）を放つ魔獣を油断なく見据え、ローレッタが言葉少なに部隊の先任へと判断を仰ぐ。

本音を言えば、眼前の無惨にもその身を弄ばれた哀れな獣を、せめて安らかに眠らせてやりたい。

だが、今は攻略速度がものをいう強襲作戦の真っ只中だ。

副長や攫われた人々の救助も叶っていない現状、悪戯に時間を取られる戦闘は避けるべきなのも確かであった。

ローガスとしても考えはほぼ同じ――だからこそ、悩ましい。

今にも襲い掛かって来そうな《装甲熊（シェルム・ベア）》を前に、長々と考え込む時間はあまり無かった。

腰を入れて討伐か、受け流してやり過ごすか。

数秒にも満たない懊悩に、あっさりと終止符を打ったのはシャマだ。

「あたしが殺る。おじさんとローレッタちゃんは此処より奥の確認してきて」
腰に下げた、握りの付いた特徴的な刃――カタールの刃部分を籠手へと装着し、褐色の少女はローガスを押し退けて前に出る。
「おい、シャマ。一人は無茶だ、とは言わんが……なにも――」
「時間が惜しいのは分かってる。だから、あたしが葬送する。二人が戻ってくる前には終わらせとくから」
常と比べれば硬く、遊びの無い声色に、彼女が譲る気が無いのを確信し、ローガスは溜息をついた。
「却下だ。そもそも三人一組を崩すなと厳命されてるだろ」
「……ッ、でも！」
「ローレッタ、悪いがシャマの我儘に付き合ってやってくれ――最速で、なるべく苦しませずに終わらせるぞ」
「了解しましたわ！」
両手剣をその場で掲げ、早速の詠唱に入った魔法剣士の言葉に気合十分で応え、拳を打ち合わせて金髪巻き毛の少女が褐色の少女の隣に並ぶ。
普段のやたらと軽いノリと態度とは裏腹に、シャマダハルという少女は観察力に優れた戦士だ。

おそらくは、自分達が気付かない事に気付き――どうしてもこの魔獣を放っておく事が出来なくなったのだろう。
その理由が放置する事の危険性や、何某かの問題を引き起こす事への警戒ではなく。
眼前の魔獣への憐憫の情に依るものであるのは、なんとなくローレッタも察しが付いた。
甘いといえばその通りなのだろう。
作戦の最中に、騎士としての自覚が足りないといえば、そうなのだろう。
「だがそれが良い！　というヤツですの！」
隣に立つ先任へと、莞爾として笑いかける。
我儘を通すは強者の特権。
その甘さが、情が、我儘であるというのなら、実力を以て押し通せば良い。
それを可能とするが故の強者。甘さを貫き、それで尚、結果を叩き出せるが故の帝国最精鋭。
全てを言葉にせずとも、ローレッタの笑みから伝わるものがあったのか。
少し照れ臭そうに、だが嬉しそうに、シャマも笑顔を浮かべる。
「さんきゅー！　愛してるぜローレッタちゃん！　あとおじさんも褒めてあげなくもないし！」

「俺はついでかよ！」

詠唱を中断してまでツッコミを入れたローガスの叫びに呼応する様、《装甲熊（シェルム・ベア）》が咆哮を上げ、戦いは始まった。

巨大な剛腕が振り上げられ、大地に叩きつけられる。

破城槌の如き一撃に洞窟が揺れ、パラパラと天井より小石が降り落ちた。

それを三方に散って回避する《刃衆（エッジス）》の面々。魔獣の半ば飛び出た眼球がギョロリと動き、真っ直ぐに突進してくるローレッタへと視線が固定される。

掌だけで人間の上半身を握りつぶせそうな巨腕が、今度は下から掬い上げる軌道で少女を襲う。

剛毛に覆われた迫りくる壁の如き腕に対し、タイミングを計ったローレッタは自ら跳躍して飛び込んだ。

振り抜かれる剛腕に、揃えた両脚のブーツの底が乗せられる。

大きさに相応しい剛力へと合わせる形で《装甲熊（シェルム・ベア）》の腕が蹴り付けられ、剛腕の威力を殺し切れずに彼女の身体は天井に向かって高々と放られた。

本来ならそこで天井へと叩きつけられ、落ちた処を為す術無く引き裂かれるか押し潰される。

が、彼女達は《刃衆(エッジス)》。この程度は窮地の内にも入らない。
黒い外套(コート)が翻り、空中で身を丸めたローレッタの身体がぐるりと廻る。
天井へと両脚で着地した彼女は、次の瞬間、渾身の力で天地逆となった足場を蹴りつけた。
「オオオオッ……ラァァァッ!!」
魔獣の咆哮に負けじとばかりに、気合の入った叫びが洞窟へと響き渡る。
人間砲弾と化して突っ込んでくる上空のローレッタに向け、《装甲熊(シェルム・ベア)》が再度腕を振り上げ――。
「――ごめんね」
小さく呟かれる言葉と共に、その巨躯がガクンと傾く。
その巨大な身体の陰に隠れる様に回り込んだシャマが、両手に握ったカタールを振るっていた。
四肢に纏う甲殻の隙間を縫って突きこまれた二つの刃は、見事に魔獣の脚の腱を貫き、断っている。
片足を潰されて態勢を崩した《装甲熊(シェルム・ベア)》だが、迎撃は無理でも防御は間に合わせた。
腕が天に翳され、ローレッタの流星の如き落下攻撃が受け止められる。
発射された砲弾と、それを受け止めた城塞の壁の如き音が衝撃を伴って洞窟内を走り

抜け、大気を震わせた。
激突の衝撃で弾き飛ばされたローレッタが後方へと着地し、片腕の甲殻を砕かれた魔獣が血濡れた腕を地に着けて転倒を免れる。
（ああ、やっぱりか……）
魔法の詠唱を終え、大剣に付与効果（エンチャント）を施したローガスが巨躯の懐へと飛び込む光景を見ながら、シャマは《装甲熊（シェルム・ベア）》の身体を蹴って駆け上がった。
最初に檻を飛び出た時も、その後も攻防も、そして今も。
振り回される剛腕は脅威の一言であったが、交互に繰り出されるソレには、不自然な間隙があった。
帝国騎士団に所属する前は、野生の獣を狩って糧を得ていた事もあったシャマだからこそ、気付いた違和感。
《装甲熊（シェルム・ベア）》の凶悪な爪を有したその腕が振り抜かれる、その際。
攻めに用いるものと逆の手は、どんな体勢でも必ずと言ってよい程、胴の――腹部の前に翳される位置にあった。
それは、まるで何かを隠す様に。若しくは何かを庇う様に。
おそらく眼前の《装甲熊（シェルム・ベア）》は、身籠っていたのだろう。
だが、シャマの眼は強固な剛毛に隠されたその下腹部に僅かに見える、縫合の痕を捉

えていた。
犯罪組織に実験動物として捕らえられた魔獣。
その腹には、もうすぐ生まれるであろう赤ん坊が抱えられていたとなれば――そこから先はどうやっても不愉快な想像しか浮かばない。
その予測が当たっているのだとすれば。
この《装甲熊(シェルム・ベア)》は、きっと今も、腹の子を護ろうと戦っているのだ。
頭を、身体を弄られ、野生からはかけ離れた狂気の衝動に心身を侵され、それでも尚。
腹から抉りだされた、もう居ない我が子を庇って、とうに喪った事にも気付けずに。
ローレッタによって甲殻を砕かれた巨腕に、ローガスの剣が深々と突き刺さる。
「解放(リリース)」
突き刺した瞬間、短文詠唱と共に刀身に込めた魔力が解放され、魔獣の身体の内部を走り抜けた。
施されていた付与効果(エンチャント)は、氷の魔法。
かの《水剣》には及ばぬとはいえ、身体の裡から流し込まれたその魔力は《装甲熊(シェルム・ベア)》の巨大な身体を凍てつかせるにあまりある。
全身が凍てついた事で、動きと――恐らくは痛覚含めた様々な感覚が鈍化した母熊の眼前に、軽やかに跳び上がる影が、一つ。

「おやすみ――女神様の御許で、家族と会えると良いね」
悼む様な、願う様な、祈りにも似たその言葉と共に。
シャマの握るカタールの刃が《装甲熊》の眼球へと突き込まれ、その奥にある脳を貫いた。

「……と、いう経緯が我らの手掛けた合成獣の製造コンセプトにありまして、これは――」
話が長い、三行でおｋ（スパーン
直ぐ隣の男の首が宙を舞うと、並べて正座させていた研究者っぽい恰好の男達から短い悲鳴が上がった。
「ひぃぃぃぃっ!?　つ、つまりは私達の合成獣は既存の生物同士の掛け合わせでは無く、ま、魔鎧の複製品の製造過程で得た魔力導線の移植技術との融合に依るもの、ということです！」

うむ、纏まってる。だが話が不愉快なのでアウト（スパーン

「ま、待って！　待ってください！　ちゃんと説明してるじゃないですか!?　どうし――」

うん?　なんだって?（スパーン

「あ、あんまりだ！　幾ら何でもこの様な無法、罷り通る訳が無い！」

鏡見て言って、どうぞ（スパーン

淡々と、リズミカルに首を刎ねていく。気分は太○の達人だ。

当たり前だがひと一人につき首は一個しかない。なのでもう二度と遊べないドン！

既に結構な数の拠点を潰してるというのに、未だに副官ちゃん処か攫われた人達の誰ともエンカウントしていない。

そもそも北区自体がそういった施設や拠点に繋がった区域なのかもしれんと、トニー君が現在此処の所長らしき人物を尋問中だ。

最初は俺がやろうとしたのだが「旦那は直ぐにスパンするから駄目ッス」って却下されてしまった。

なので、彼が尋問してる間、俺も手慰みに残った連中を相手に情報収集を試みているのだが……。

いやー、自分一人でならもうちょっと丁寧にやるんだけど、自分より尋問とか得手な

仲間がいるからってちょっと適当になりすぎたわ。気が付いたら残りの首は一個しか残って無かった。反省反省。

床に転がった大量の仲間の生首を見て、残った首――じゃなくて研究員が涎垂らしながらヘラヘラと笑い出す。

「ふ、へ、ひひ、こんな……これは夢だ……こんな理不尽が……うひぇひぇひぇひひひ」

ありゃ、壊れた。１００均で買ったラジオじゃあるまいし、脆すぎんよー。

もう情報は取れそうにないので、壊れた奴の前に立って手刀を掲げる。

気付くのが遅いわ――そうとも、俺はお前らの不吉（りふじん）だよ。

お前達が副官ちゃんに手を出した時点で、そうなった。そうなると決めた。

誰も逃す気は無い、誰も許す気は無い。

信奉者（クソ共）と同じだ――死に絶えるその瞬間まで怯えて竦め。

壊れた敵を、縦に両断する。

斬首は血飛沫が飛び散り過ぎるとトニー君には不評だったので、今回も加速と同時に手刀を赤熱化させ、ちゃんと焼き斬った。

気を使った御蔭で、この場は綺麗なもんだ。血の染み一つ飛んで無いしね！

「旦那、終わりまし――なんスかこの地獄みたいな光景」

お隣の部屋で尋問に励んでいたトニー君がやってくるなり白目を剥いた。解せぬ。

ヘイヘイ、俺も尋問に励んでたんだぜ。トニー君は頬にちょっと血がついてるけど、見ろよ、こっちは一滴も床を汚しちゃいないぞ。
「じんもんの　ていぎが　くずれる」
処刑の間違いでしょ、と呻く彼の言葉は聞き流して、俺は肝心要の北区周りの《門》の情報について問うた。
――で、どうなんだ？　やっぱりこの辺りは実験用の魔獣と物資の貯蓄がメインなの？
「基本はそうみたいッスね。ただ、北区のとある一カ所――大分昔に没落した貴族が所有していた屋敷があるンスけど、そこの《門》は一部の幹部みたいな連中しか通れない、との話ッス。少なくとも此処の所長サンは通った事が無いと」
直ぐに真面目な顔に戻って告げられた情報は、中々に有益なものだった。
ビンゴ、とまでは言い切れんが、”当たり”の可能性はありそうだな。
此処の殲滅は終わった。次はその貴族の屋敷に向かってみるとしよう。
領き合い、俺達が踵を返して部屋を出ようとすると――。
「ま、待ってくれぇ、い、痛い、血が止まらんのだ、手当をして……」
トニーが尋問を行っていた部屋から、情けない哀願の声が上がる。
這いずる様にして出てきたのは一人の男――この研究施設の所長だ。

俺は振り向かずにその方向へと無造作に腕を振った。
腕部の装甲から切り離した破片が散弾となり、汚い呻き声を上げる男を物言わぬ肉塊へと変える。
――おし、次。
「うッス」
不愉快な合成獣（キメラ）を作り出していたという張本人の末路を、視界に入れる事すら無く。
俺とトニーは、そのまま施設の出口へと移動を開始したのであった。

帝都の一番長い夜　3

――時は少しばかり遡る。
陽が僅かに傾き始め、それでも尚祭りの灯りによって煌々と照らされた帝都。
数時間後には聖女の行う言紡ぎの儀式によって更なる神秘的な光に彩られ、輝くであろう都市から、ひっそりと抜け出す集団があった。
「街道は？」
「封鎖こそされていないが、やはり検問が敷かれた儘だ。通れたとしても所属を把握されたまま本国に戻れば、後々に帝国から追及を受けかねん」
「では、予定通り南の山脈から抜けるぞ――各員、行動開始」
リーダー格らしき男の静かな命に、一団は跨っていた馬をゆっくりと走らせ始め、街道から逸れた草原を進む。
身形こそ冒険者や傭兵、といった風情の者達だが、明らかに訓練された動きであり、装備の色も夜闇に紛れるような暗い色合いのもので統一されていた。

「皇帝は動くと思うか？」
「十中八九、な。おそらく〝閣下〟も終わりだ。せめて現時点での成果くらいは本国に届けねば、これまでの出資が丸損になる」
帝国でひっそりと行われていた人身売買――その背後にある、非合法な実験を繰り返す組織。
彼らは、その組織に支援を行っていた他国の人間だ。
永らく続いた生存競争という名の戦争が終結し、世は厭戦の空気が強い平和な時代へと移り始めている。
だが、十年、二十年後、或いは更にその先まで平和が続くとは限らない。
世代が変われば平和や平穏へ価値を見出す空気は薄れ、何れは何処かの国が騒乱の火種を生み出す可能性はあった。
そうなった場合、やはり警戒すべきは人類最大国家の帝国、及び人類種に遍く浸透した主教国家の聖教国である。
現状ではそういった気配・兆候は全くないとはいえ、実際に動き出せばその脅威度は下手な小国など比較対象にすらならない。
仮に両国が動かずとも、復興が終わった後の国家間の小競り合いを想定し、年々戦争で削れていた兵力を確保しておく必要があった。

その様な危惧を抱く国々の諜報員や外交官といった者達に接触したのが、件の”閣下”である。

『超人兵計画』。兵力の基本となる”数”とは真逆――個の質を極めた戦力である人外級の戦士の、人工的な再現と兵力化。

成功すれば、総人口が帝国の兵力の半分にも満たぬ彼らの祖国であっても、武力を以て周辺国家の外圧に対抗できる夢の様な計画だ。

男達――資金提供を行った国も、”閣下”が語った理想通りの計画が完成するとは思っていない。

だが、現時点で様々な技術――特級呪物の複製、及びそこから派生した魔装技術、強化した魔獣の使役など、取り込めば国家の大きな益となる研究が、既にある程度の形を為している。

将来を見越し、その技術を優先的に譲渡する事を条件に、”閣下”の率いる組織に出資した国は複数あった。

金銭面は勿論の事、戦争が終わった事で急激に入手困難になった”素材”の提供に関しても、だ。

当然ながら、帝国に知られれば大問題になるのは間違いない。というか、下手をすればそれが国が亡ぶ破滅への引き金となりかねない。

人道的な面からは勿論の事、単純にリスクが高すぎるとして反対する声は多くあった。

単に、男達は危険性を承知してでも組織の技術を手に入れるべきだと考えた者達……国内のタカ派にも近い派閥の所属というだけの話である。おそらくは他の国も似たようなものだろう。

資金・資源の提供者としてそこそこに良好な関係を続けていた組織と各国のタカ派であったが、それも今日で終わりだ。

『超人兵計画』はその存在を皇帝に察知された――しかも、明確に喧嘩を売る最悪の形で。

組織の瓦解は避けられないだろう。芋づる式に、関わった国々にも飛び火する。

故に、出資者達の選択は一つであった。

現時点で持ち出せるだけの技術を、本国に届ける。

資金や”素材”の提供は、ダミーの商会と帝国に実際に存在する商会を幾つか経由させて行っている。

いずれは彼らの国へと疑いが向けられるにしても、それなりに時間を稼げるだろう。

その上で、国内タカ派の暴走であったという体で本国が男達の派閥を切り捨てれば、有益な技術を手に入れつつも、帝国との明確な敵対は避けられる筈だ。

自分達は祖国へと手に入れた技術を送り届け――その後に、犯罪組織へと協力していた実行犯として処刑され、帝国への禊とされる。
本国のタカ派の首脳部はともかく、少なくとも男達はその腹積もりであった。
人道に背く行いと、それに依って開発された技術を求めた事は、どうあっても外道の所業である。
――が、それも疲弊した小さな祖国を憂うが故の選択ではあったのだろう。非道な実験の犠牲となった者達からすれば詭弁ですらない話だが。
”閣下”の話によれば、明日には皇帝が本格的に軍を動かす。
最低でも今日中に帝都を脱し、より本格的な検問が設置される前に帝国領を抜ける必要があった。
おそらく、街道の封鎖まではいかなくとも、通過した人間の徹底した身元確認くらいは既に通達されている事だろう。かの皇帝ならばその程度の対応は直ぐに行う。
人目を避け、万が一にも帝国兵に捕縛される事のないよう、帝都の周囲を囲む山脈――その南側を抜けるのが、彼らの帝都脱出経路（ルート）である。
距離的には北側の方が本国に近いが、既に秋も本格のこの時期、北の山脈は雪が降る日も多い。
同時に、気温が下がった事で寒冷地帯に生息する山の魔獣も活発化する。抜けるのは

不可能では無いが、運が悪ければ数日がかりとなる可能性があった。
以上の理由により、選ぶのは南だ。
馬を飛ばし、郊外の南端に拡がる森林へと、一行は辿り着く。
森を抜ければ、そのまま当面の目標である南の山脈だ。麓を超えれば直ぐに人の手の入っていない道無き道をゆくことになるだろう。
「ここからは獣や魔獣との戦闘も想定される。全員、装備の確認をしておけ。道の状態にもよるが、場合によっては森を抜ける前に馬を乗り捨てる」
リーダー格の男の言葉に、後に続く者達が無言で頷き――。
最後尾の男が上空から飛来した『何か』に射貫かれ、呻き声すら上げずに馬上から叩き落とされた。
「!?　――散か……！」
硬直は一瞬。
驚愕から即座に復帰したリーダー格の男は、即座に散開と、眼前の森に駆け込む命を叫ぼうとする。
――だが、その忘我の一瞬こそが明暗を分けた。
再び飛来した『何か』に右肩を貫かれ、男の身体は馬上より吹き飛ぶ。
そのまま宙を舞うと、背後の樹木へと叩きつけられた。

「ハ……ぐ、ぉ……!?」

衝撃と、遅れてやって来た肩からの激痛に視界が明滅する。

混乱収まらぬ思考で、自身を串刺しにしたまま樹へと磔にした代物へと眼をやって――その瞳が驚愕に見開かれた。

「投槍（スピアー）……だと……!?」

男の右肩から生えているのは、細身の総鉄製の槍。

質としてはそう良い物でも無い。柄こそ木製では無いが、武具を取り扱う鍛冶屋に行けばまとめ売りされている事もある、ごく普通の品だ。

この様な数打ちが、低級の品とはいえ魔装の鎧を身に着けた男の身体を容易く貫いたとは、俄かには信じ難い。

だが、信じようと信じまいと、目の前の光景は現実である。

天より飛来する投槍（スピアー）に、次々と貫かれて落馬してゆく仲間達。

男は肩で済んだが、胴や胸に直撃した者は即死だろう。そうでなくとも、落馬した際に頭から落ちて動かなくなった者もいた。

指示せずとも咄嗟に森へと駆けこんだ者達も居たが……それで助かるかどうかは微妙な処だ。

何せ、森の中にいち早く飛び込んだ部下は、幾らも進まぬ内に樹々によって作られた

緑の天井をぶち抜いて飛来した槍に頭を射貫かれ、地べたに転がっている。
前方には森林、背後には彼らの通って来た見晴らしの良い草原。
伏兵の気配は無い。というか、天より落ちてくる投槍（スピアー）は着弾の角度からして、相当な高度から落ちて来ているのが推測できる。目視できる範囲に撃手がいるとは思えなかった。
魔法にせよ、投擲にせよ、どれ程の距離からどれだけの魔力を籠めて射出すればこんな出鱈目が可能となるのか。
「こんな、莫迦な……一体、だれ、が……」
悪夢にも思える信じ難い光景と、これは現実であると無情にも告げる、肩から這い上がる激痛。
出血により青褪めた唇から、呆然とした言葉が零れて落ち、男の意識は暗転した。

彼らの目指していた帝都の南方にある山脈。
その裾野よりやや上部、切り立った崖の上に立つ、魔族の男がいた。
鳶色の髪に、身に纏うは年代物の魔装鎧。

腰には金の縁取りがされた真紅の布が巻かれ、傍らには歴戦の痕が刻まれたシンプルな意匠の大剣が地に突き刺さり、屹立している。
腕を組んで仁王立ちとなり、眼下に広がる山脈の麓より吹き付ける風を受ける様は、ある種の完成した戦士像、というイメージすら抱かせる武威を放っていた。
男……魔族領筆頭《魔王》は、何かに耳を澄ます様に、或いは感じ取る様に意識を研ぎ澄ませている。
やがて、その固く閉じられた両の瞳が薄っすらと開かれ――。
「やってらんねぇ」
不貞腐れた様に呟くと、その場に転がってぐでーっと脱力した。

『おいコラ、アホ頭領。きちんと当たったのかどうか報告しやがれ。森の向こうは大雑把に狙いを付ける事は出来ても、当たり外れまではこっちからだと確認できねぇんだよ』
「あー、当たってるあたってる。ゼンブアタッテルヨー。御新規さんはこれで全滅ダヨー」

山の麓から森林の入口に向けて超長距離の投擲を行った部下――《狂槍》の苛立ち紛れの声が耳に届くと、餌を食い過ぎたセイウチの様に仰け反って地面に伸びた《魔王》は、適当感溢れる言葉を返してその場をゴロゴロと転がる。

『……おい、公爵のトコの小娘。投槍（スピアー）の残り寄越せ。崖の上で転がってるあの鶏肉に串打ちしてやる』

『いやいやいや、ちょっと待って下さい五席殿。そんな殺気だった状態だと冗談に聞こえませんよ?』

『……』

『無言で催促しないで下さい!?　僕の影に格納できる数にも限りはあるし、無駄射ちは了承できませんってば!』

遠話の魔法越しに聞こえる、部下と腐れ縁のＢＢＡ（女）の従者の会話を聞き流しつつ、魔族領の長はその場で左右寝返り１００回タイムアタックを始めた。

ビタンビタンと地べたの上で身体を振って、高速で寝返りを打っている残念魔王へと、新たな遠話が届く。

『おーい、オイラんとこは終わったぜー。次の場所の指定は無いのかー?　無いなら此処で待機してるけど』

『うむ、こちらも終わった。相手の召喚した魔獣が四方に散ったので手古摺ったが、全部

仕留めた筈だ』

『そうだな。一応は打ち漏らしがないか、陛下に確認してもらいたい』

南の山脈前に方々に散って配置された者達の声に、「オッケー、ダイジョウブダヨー」と棒読みで返して２００回タイムアタックに突入した男の隣――突き立った儘の大剣から伸びる影が滲み、波打ったかと思うと、盛り上がって人の形をとった。

「……ンだよ《陽影》。つまらん仕事だが、きちんと索敵はやるから安心しろって。つまんねーけどな」

影を渡って現れた男装の麗人――魔族領に住む吸血鬼（ヴァンパイア）達の主の側仕えである少女を横目で見ると、《魔王》は寝返りを止めて唇を尖らせる。

今宵、帝都で行われる《大豊穣祭》とは別口の”祭り”。

剣戟と血が飛び乱れる鉄火場となるであろうソレの開催を、持ち前の勘で察知した迄は良かった。

だが、その切欠となるであろう青年の頼みを安請け合いした結果がコレである。

帝都で戦いの号砲が上がる前に、尻尾を巻いて逃げ出してきた連中の処理。

真っ当な祭りを楽しむ人々に気取られぬ様、国外逃亡の為の経路手前での殲滅。

それが、青年が魔族領の面々に任せた仕事であった。

単純な戦闘能力で見れば戦力の無駄遣いにも程がある人選なのだが、戦場となる場所

が南の山脈とその近辺、という広大さである事を考えれば、寧ろ妥当ではある。
南の山脈からの帝国外への離脱という、現状での最適解を選んだ各国の隠密に長けた集団。
分散してそれぞれのルートで山に入ろうとする彼らを、完全に察知・捕捉する程の範囲と精度を持つ《魔王》の探知能力。
森と山の裾野という広い範囲をある程度までなら自身の脚力でカバー可能で、相手が腕利きであっても、単騎やごく少数の人数で速やかな殲滅が可能な魔族の戦士達。
そして、遠話の魔法や吸血鬼（ヴァンパイア）固有の影を扱う能力を用いて円滑な長距離移動と情報のやり取りを可能とする《陽影》のサポート。
帝都より逃げ出す鼠を一匹たりとも逃がさない腹積もりならば、過剰ではあるが万全な布陣、と納得のいく配置ではある。
その程度の事は《魔王》にも分かってはいるのだ。
だが、肝心の”祭り”の会場から外れた場所で、派手に上がる花火を遠目に道端で跳ねた火花に水を掛ける様なこの現状。
不満を感じるのは彼の性格上、仕方の無い話であった。一度引き受けた以上、文句は言いつつもやるのだが。
無軌道と自由奔放を体現した様な男ではあるが、彼なりにここ最近は我慢を重ねてい

るのだ。
最近の推したる『姫』ことリリィが攫われかけた、と聞いたときには、下手人共を周辺区画ごと灰にしようとしたのだって最終的には諦めた。
というか《狂槍(ぶか)》がブン殴りながら止めて来た。
《大豊穣祭》の開催宣言も、格好よく空から降って登場しようかとかも考えたが、結局は自重した。
というか《亡霊(ぶか)》が得物を向けながら止めて来た。
一番楽しみにしてた闘技大会だって、何度も乱入したくなったが最後まで大人しく観戦した。
というか《不死身(ぶか)》に「やらかしたらリリイちゃんのお母さんにもう会わせない方が良いって報告します」と脅された。人の心とか無いんか？
そして今回の”祭り”である。
相手はリリィに手を出そうとした者達の背後にある組織。
この時点でやる気は十分だが、更に燃料となる要素もあった。
以前、教国の連中と一緒に観戦したときにも言った『面白い奴(ダークホース)』――己の気当たりを受けて白目を剥く予選参加者の中で、苦し気なフリをしながら瞳の奥にギラつく戦意の火を灯して此方を見ていた男。

あの疵面の剣士が、喧嘩相手の組織に属してると聞いたときには、内心で喝采をあげたものだ。

彼にとってある程度の真剣さで『遊べる』相手は貴重で――その上で、最期まで戦(や)ってもよい相手は、更に貴重であるが故に。

そんな条件も重なり、闘志とウキウキした気分の相乗効果で初っ端に「俺は何をぶった斬れば良い？」とか意気揚々とカッコつけちゃった《魔王》であるが、任された仕事は実質観測手(スポッター)兼広域レーダー係である。今の処、剣を振る機会すら無かった。

気分が乗らない処の話では無いのだが、まがりなりにも一度引き受けた以上、投げ出すのはもっと性に合わない。頼んで来たのがあの猟犬(せいねん)で無ければ、適度にサボるのも視野に入れたのだろうが。

『《魔王》陛下は機嫌が悪い様だな、兄弟』

『仕事の内容が、敵の探知と俺達の連絡用の中継点だ。それも当然だろう、兄弟』

『それについちゃ同情するけどさ。こっちは出向(てんしゅつ)先への点数稼ぎも兼ねてんだ、頼むから仕事はしてくれよ頭領(ボス)』

今回指揮下に入った闘技大会に参加した魔族――ブライシオ&ボルドの傭兵コンビと《風兎》が、雑談混じりの連絡を取り合うのを聞き流しつつ、《魔王》は眼下を見降ろし、意識の網を広げる。ただし寝転がった儘で。

「……敵影はねぇよ。今の処は落ち着いた。後続がありそうだけどな」
ふざけた体勢ではあるが、その程度でこの男の出鱈目な能力に陰りが生まれる筈も無し。
自らの居る崖の下に拡がる山の麓と、その奥に拡がる森にある人の気配を探り、数秒と掛けずに結果は出た。
『了解。んじゃ、位置も他の面子と程よく離れてるし、オイラは此処で待機するわ』
『我らはもう少し森の方に寄るか』
『うむ、裾野は足の速い《狂槍》殿と《風兎》に任せるとしよう』
各々返答して待機や移動の旨を告げて来る者達に、見える訳も無い掌をひらひらと振ると、影を伝って現れてから隣で待機し続ける《陽影》に向かって首を向ける。
「……で、なんか用あって来たんだろ?」
「はい。陛下の気性に沿わない仕事だとは『彼』も言っていましたので」
ゴロリと、再び寝返りを一つ。
未だに地べたに転がったままの残念不死鳥に、男装するには聊か以上に窮屈そうな立派な山脈を備えた少女は苦笑し、自身の影から折り畳まれた紙片を取り出す。
「報酬を用意したとの事です。後払いの予定でしたが、陛下のやる気が見るからに減っているようであれば、僕の判断で先に渡して欲しいと」

「あン？　報酬……？　この紙っぺらがか？」

差し出される、多少厚手ではあるが粗末な紙片。

流石の《魔王》も訝し気な表情を隠さずにそれを受け取る。しぶとく寝転んだままだが。

受け取った品をしげしげと眺めまわし、やはり只の紙切れである事を確認。ならば中身があるのかと、無造作に畳まれた紙を広げ――。

一秒後に目を見開き、二秒に跳ね起きて、三秒後には繊細な宝石細工を扱うが如く紙を両手にそっと抱えて正座した。

紙に書かれていたのは、端的に言って寄せ書き――っぽい形をとった子供のラクガキだ。

前衛芸術の様な中々に尖ったデザインの犬や鳥らしきものが描かれ、赤いクレヨンで描かれた鳥が火を吹いて黒い靄のようなものをやっつけている絵の上下左右には、たどたどしい字やミミズが渾身のヘッドバンキングを決めた様な字で「おしごとがんばってください」と書かれている。

猟犬と呼ばれる青年が、知り合いの運営する孤児院の子供達にお願いして描きあげて貰った一品であった。

新品のクレヨンをお土産に、孤児院のシスターとおばーちゃんに難しい話をしにきた

おっきいわんわんこと青年。

そんな彼の、お話している間にいっちょよろしく！　というお願いを快諾した孤児院の巨匠・オフィリ画伯による渾身の力作に、子供達がメッセージを書き記した形だ。制作時間一時間の大作である。

「お、おぉぉぉ……」

紙に皺の一つも付けぬ様、細心の注意を払って指先で挟み込んでいる《魔王》の腕が震える。

いっそ気持ち悪いくらいに抜きんでた彼の五感や魔力探知は、絵は勿論の事、書かれた激励の言葉にも少なからず幼女の手によるものが混ざっていることを嗅ぎ取っていた。

孤児院の年少組の合作――性別種族問わずに幼い子が好き放題に書きなぐった感のある、手作り感溢れる一枚を手にする彼は、至高の名画と巡り合った重度の収集家（コレクター）の如き表情である。

そのうち頭上に掲げて拝みだしそうな雰囲気すらあった。というか《陽影》が声を掛けようとしたら実際に拝みだした。

「えーと……陛下？」

「……」

《陽影》の言葉にも応えず、その様は女神の似姿を目の当たりにした敬虔な信者の如く。

一分程、そうしていただろうか。

丁寧に紙を折り畳んで胸に抱えた《魔王》が、正座をやめて立ちあがる。

仁王立ちとなったその総身が、なんかゴウッ、とかいう重々しい音を立てて発火した。イメージとかではなく、物理的に。

漏れ出た魔力と気合的なものが彼の肉体が持つ性質に引っ張られ、猛々しい炎となって身体に纏わりつき、渦を巻く。

遠目から見るとクソ程目立つ上に、立ち昇る魔力は膨大。離れた場所からでも容易に気付かれるであろうソレを見て、慌てて《陽影》が周囲を障壁で覆い、更に隠蔽の魔法を発動させて事無きを得る。

《魔王》の手にある寄せ書きなど一瞬で灰になりそうなものだが、無駄に洗練され尽くした魔力制御で火の粉一つ降りかかる事すら無い。

ついでにこの間にも一応は森林と山の麓一帯に広げていた知覚の網が、本人のやる気に引っ張られてぶわっと二割ぐらい広がった。

そーっと、細心の注意を払って渡された報酬を懐にしまいこんだ魔族の長は、先程までとは打って変わったやる気に満ち満ちた声色で咆哮をあげる。

「なにボーッとしてんだお仕事頑張るぞお前らぁっ！　草原の方から森に近づく集団二つ！　四人と六人、隠蔽の魔法持ちだ！　傭兵コンビは魔力探知じゃなくて鼻を使え！　あと《狂槍》！　お前もーちょい高度の取れるとこに移動しろ！　森の入口を狙うならそっからじゃ投擲の精度が下がるだろうが！」

（う　わ　ぁ……）

（うぜぇ……）

（うむ、うざいな）

（やる気がでたのは良いが、これはうざいぞ）

「うぜぇ。死ね」

各々、急にテンション爆上がりした《魔王》の矢継ぎ早の命に、心底鬱陶しそうに半眼となった。あと《狂槍》だけは直球で罵倒した。

ウザそうに眉を顰めてないのは《陽影》くらいのものである。そんな彼女も文字通りのやる気の炎を燃え上がらせているロ○コン不死鳥を見て、ドン引きしてはいるのだが。

指揮下にある魔族の戦士達の反応にも気付く事無く――というか、気付いていても気にならない程に絶好調な《魔王》陛下は、天に瞬きだした星空をビシっと指さして叫ぶ。

「完璧に片付けて、さっさと猟犬の奴に報告しに帰るぞ！　あとこの報酬を手掛けた小

さな淑女（レディ）達を是非とも紹介してもらいたい！」
『おい、お前ら。カス共の駆除が終わったらこの変態アホウドリを鎮圧するぞ。手伝え』
『りょーかい。ついでに筆頭補佐殿にチクっとこーぜ、槍の旦那ァ』
『やはり我らの伝説（レジェンド）の依頼を受けて正解だったな、兄弟。お楽しみが目白押しだ』
『うむ、陛下の鎮圧――難題だが、心躍る戦いが出来そうだ』
待ってろ俺の一番星！　等と戯言を叫び出した男を、本人にも聞こえるように堂々とボコる算段を立て始める指揮下にある部下達。
騒々しくやり取りしつつ、だが止まる事無く動き続ける頼もしき同胞達の声を魔法で繋ぎ続けながら、《陽影（クイン）》は《魔王》に倣って星が輝く夜空を見上げた。
当然というか、思うは彼女の英雄たる黒髪の青年の事である。
（……一緒の戦場を駆ける事が出来るなら、それが一番良かったけど）
思い出す。
こんな風に、真に憂い無く月を見上げる事が出来る様になったのは、つい最近……彼が還ってきてからの事なのだ。
二年前、彼の訃報がその比類なき戦果と共に届けられたあの日。
混乱し、届いた報せを否定し……だがそれが事実であると知り、打ちのめされ。

グシャグシャなって乱れた思考の中で、途切れる事の無かった悲嘆に濡れた疑問を思い出す。
青年の最後の戦い――となる筈だった戦場。
そこに、何故、自分を連れて行ってくれなかったのか、何故一緒に戦わせてくれなかったのか――何故、一緒に死なせてくれなかったのか。
分かっている。
当時の……否、今の自分であっても、大戦の元凶――邪神の相手は荷が重すぎる。
その場に居た処で何も出来はしない。それこそ命を賭けたとしても、かろうじて足を引っ張らない以上の事は出来ないだろう。
何より、彼は聖女姉妹――そこから広がって様々に関わる事となった多くの人達が欠ける事を強く厭うていた。
当の聖女達にすら秘して事に及んだのだ、自分(クイン)に打ち明ける筈も無かった。
そんな理屈は、分かっているのだ。
でも、それでも。
それでも、クインは彼と一緒に戦いたかった。
共に、いたかったのだ。
自分では力不足だと、この想いは只の我儘だと、理解していても。

力及ばぬ者が不相応な戦場に居れば、たちまちに其処は死地となるのだとしても。
きっと、後悔は無かった。彼と同じ場所に立って、共に戦えるのなら――ましてや、最期を共に出来るのなら、笑って逝ける確信があったから。
結果だけを見れば、彼は二年後に創造神による復活などという埒外の奇跡を以て還って来た。
結局、青年が単騎を選んだのは、色々な面から見ても正しかった、という事だろう。
だが、振り切ろうとして、結局は無理であると――下手をすれば一生引き摺り続けると理解して。
それなら、いつか女神の御許で再会したときに胸を張れるように、と。
彼が齎した、彼の居ない平和な世界を、前を向いて生きていこうと決意して、二年。
還って来た青年と再会して、その決意は前提からしてひっくり返ってしまい――代わりに別の望みが、クインの胸中には生まれた。
「――次は、一緒だ」
血で血を洗う様な生存戦争は終わった。
何かとトラブルの渦中に在る事の多い青年が、平穏無事な人生を歩み続けられるかは正直疑問だが……彼ほどの戦士が死地に追いやられる様な戦いは、この世界からごっそりと減った事だろう。

それならそれで構わない。
戦いの最中であっても、或いはずっと先の未来に、穏やかな時間の末のものであったとしても。
最期は彼の傍に居る。
これだけは誰であっても――彼が守護する聖女達であっても、譲らない。
その上で、”そのとき”が訪れるまでの間、沢山の思い出を作っていけるというのであれば、いう事なしだ。
「うん。だから先ずは、一歩目だ」
積極的に出れなかった最大の原因――自身の本当の性別に関しては、再会の際に知ってもらう事が出来た。
だから、焦らず、けれど素早く。一歩ずつ、確実に距離を詰める。
気安い友人ではなく、それ以上の関係を目指して。
取り敢えずは、手を貸して欲しいと言ってくれた彼の”お願い”を、完璧に熟そう。
そのお返しに、何かを”おねだり”してみるのも良いかもしれない。
決意も新たに、浮き立つ気持ちの儘に、一つ頷いて。
半吸血鬼（ダンピール）の少女は今宵の自身の役目を果たすべく、ケープを翻して己の足元に影を広げたのだった。

「よっ、と」
「ゲェ、ぶ……！」
軽い掛け声とは真逆の、とんでもなく重い膝蹴りが男の腹腔に突き刺さる。
肺の空気を残らず絞り出して白目を剥いて昏倒した相手を見下ろし、シーツを身体に巻き付けた、蛮地の女戦士（アマゾネス）の如き格好の少女――アンナは軽く息をついた。
「うーん……ほんと、人員の質が両極端ね。相手をする分には楽で良いけど」
背後から振り下ろされる刃を身を傾げて躱し、剣の持ち主に裏拳を叩き込む。
鼻柱が砕ける感触。声も上げずに崩れ落ちる男を尻目に、横手から突き込まれた槍の穂先を手にした長剣で無造作に打ち払い、剣の横腹で相手のこめかみをブン殴る。
「ぶへっ!?」
錐もみして吹っ飛び、槍を持った男は石造りの通路の壁に顔面から激突して意識を飛ばした。

何度目かになる蹴散らした集団を眺め、少女の口から思わず愚痴が零れる。
「ったく、手応えがなさ過ぎるのも考え物ね。直ぐに気絶するから道も聞けやしない」
アンナが捕らえられた施設は相当に規模の大きいものらしく、勘で進み続ける通路からは、外気を感じさせる様な空気の流れは未だ感じていない。
愚痴った通り、襲って来る連中をサクサク無力化しているせいで、尋問の類がしっかり出来ていないのもある。
ものは試しとばかりに、手近な奴の襟首を引っ掴んで持ち上げると、容赦なく連続で頬を張った。
「起きなさい。出口はどっちか教えろ」
ビシバシと手首のスナップを利かせた平手を振りかざし続けると、頬をパンパン且つ真っ赤に腫れさせた男が呻き声を上げる。
「う……あ……っ……!? ひぃ、お、鬼(オーガ)……!」
「誰が鬼(オーガ)だコラ」
反射的にヘッドバット。
ゴッ、という鈍い音と共に叩き込まれた頭突きは、折角目覚めさせた男の意識を遠い彼方へと追いやってしまった。
「またか。こんな美少女を捕まえて、失礼な連中だわホント」

脳天から煙を上げて失神した相手をポイっと放り捨てると、その場で軽く腕を組む。
碧眼が見据える先は、T字に別れた通路だ。どちらに進むべきか。
「うーん……さっきから右を選んでるし、次は左……全く、こんなに広いなら、地図くらいどっかに貼っておけっての」
「そうだな、そいつには少しばかり同意する」
多分に愚痴を含んだ独白へと、背後から相槌が打たれた瞬間。
アンナは石造りの床を蹴り飛ばして前方へと跳躍した。
飛び跳ね、身を捻って背後へと振り向きながら、元いた位置から十分に距離を取って着地する。
「よう、散歩かい？　代り映えのしない石の通路じゃ見るモンも無いだろうに」
「……出やがったわね、スカシ野郎」
飄々とした態度で片手を挙げて気軽に挨拶してくる剣士、ジャック＝ドウへ向け、武器を構えて唸り声を上げる。
あの”閣下”とやらに付き従ってこの拠点から移動してくれていれば話は楽だったのだが、どうやらそう都合良くはいかないらしい。
腹の立つ話だが、武器防具共に間に合わせの今の状態では、この男相手に勝機はほぼ無い。

借りを返すとすれば次だ――その前に、この場をどうにか突破しなくてはならないのだが。

見た処、ジャックは右手に大きな袋を持って肩に引っかけており、片腕が塞がった状態だ。

こちらが打って出れば、そのまま迎撃するにしろ、手にした袋を床に落とすにしろ、一手分は有利に動ける。

逆に、動かなければ別の人員が加勢にやってくるかもしれない。

相手にした限りだと、それこそ薬が効いていた状態であっても苦も無く一蹴できる程度の連中ではあったが、眼前の剣士を相手にして他に意識を散らすのはリスクが高すぎる。

即断即決。アンナは深く腰を落とす。

（一当てして……あとは全速力で離脱！）

剥き出しのままの色白な、だが健康的な脚線美を見せる脚に力を込め、一気に踏み出して加速しようとして――。

「忘れ物だ」

剣士は腰の剣を抜くでも無く、棒立ちのままで手にした布袋を無造作に放り投げて来た。

二人の間、丁度真ん中に落ちた袋の口から覗くのは、見慣れた騎士服と剣の柄。
やや薄暗い通路ではあるが、良く見る迄も無い。取り上げられたアンナの装備一式だった。
「……なんのつもり？」
「さて、なんのつもりだろうな？」
警戒は解かず、寧ろ集中を高めて一手一足を注視してくる銀髪の少女に向け、剣士は大仰に肩を竦めて笑い返す。
それ以上の行動を取るつもりは無いのか、軽く両手を挙げてそのまま数歩、後ろに下がるジャックを見て、アンナは注意深く床に落ちた袋に近づき、少なくとも外側に何も仕込まれていない事を確認して拾い上げた。
双眸に困惑と疑問を込めて見つめるも、脱走中の相手に装備を返す、という所属する組織への明確な裏切り行為をした当人はどこ吹く風と言った様子だ。
それだけに留まらず、彼は更にアンナにとって有益な情報を口にする。
「お前さんが此処に連れてこられたのを切欠に、帝国の方が本腰を入れたらしい。どうも、大規模な強襲作戦がもう始まってるみたいだぜ？　――まだ半日も経って無いってのに、随分と対応が早いこった」
怖い怖い、と笑ったまま今度は首を竦める剣士に、疑問を押さえきれなくなった少女

は胡散臭いものを見る様に目を細めて声を上げた。
「アンタ、一体何がしたいの？　これじゃまるで――」
自身の雇われている組織の、破滅への引き金。
それを引く為だけに、アンナを攫った様ではないか。
あの場でジャックが命令を拒んで一人で帰還してきたとしても、それを咎められ、処分される様な事態は起こらなかった筈だ。
博士（ドク）と呼ばれた研究者が他の者達や”閣下”から詰られていた様を見れば、容易にそれは想像できる。
余程の狂人か、真性の馬鹿でもない限り、その程度の事に思い至らない訳が無い。
だが、現状はコレだ。
先のジャックの発言が真実ならば、おそらく彼の所属する組織にとって、今夜の事は致命打となる。
攫われる前後の状況は、気絶していたので知る由も無いアンナだが……目の前の剣士は、こうなる事を見越して敢えて自分を此処に連れ去った様にしか思えない。
そんな疑問を言葉に乗せて問いかけるも……。
「まぁ、何でもいいだろ。お前さんは自分の職務と意思、どっちでも沿いたい方に沿って動けばいい――俺も好きにやる、それだけさ」

当然、明確な答えが返って来る筈も無く。
最後まで真意を悟らせぬ飄々とした態度のまま、疵面の剣士は少女に背を向け、通路の奥の暗がりへと消えていった。
「……」
釈然としない気分で、その背を見送るアンナ。
疑問は多く、困惑は消えたわけでは無い。
だが、状況を好転させる為の要素――装備と情報が両方手に入った事自体は、紛れも無く僥倖だ。
「……ま、次会ったら――御礼参りがてら、話を聞きだしてやるとしますか」
取り敢えずは、何処か落ち着いて着替えられる場所を探そう。
そう切り替えると、先のジャックの様に布袋を肩に引っかけ、少女は左右に別れた通路の左を選んで進みだしたのだった。

帝都の一番長い夜　4

「誰の許可を得て入って来た、この部屋は――」
「おい！　《門》の魔道具は何処だ！」
壁際にはぎっしりと詰め込まれた学術書と資料の紙束、机には様々な薬品や、それに漬け込まれた生物の一部が並ぶ、如何にも研究室、といった趣の部屋。
ドアを蹴破らんばかりの勢いで飛び込んできたのは、一人の男だ。
革鎧を身に着け、腰に剣を佩いた傭兵らしき装備のその人物は、目を血走らせて研究者らしき格好の男に詰め寄る。
「け、警備の傭兵風情が何を……さっさと持ち場に……！」
「んなことを言ってる場合じゃねぇんだ！　《刃衆（エッジス）》だ！　信奉者共をぶち殺しまくったあのイカれ集団が殴り込んで来やがった！　ここの警備や合成魔獣（キメラ）なんざ時間稼ぎにもならねぇ、とっとと逃げるんだよ！」
警備班のまとめ役でもあるその男は、組織内部においては明確な上役に当たるであろ

う研究者へと、今にも剣を突き付けんばかりの剣幕で怒鳴りつけた。
だが、その怒声に込められた焦燥と――なによりその口から飛び出て来た言葉に、室内に居た者達の顔色が変わる。
「馬鹿な！　まだ半日も経っていないんだぞ!?　早すぎる！」
「それより、王城内に居る者達は何故なんの連絡も寄越さない!?　あの連中の動きは特に警戒する様に命じていた筈だ!?」
「そ、そうだ、顧客用の合成魔獣（キメラ）を全て出してはどうです？　アレらならば時間稼ぎは十分……」
「――！　そうだな！　数は減るかもしれんがこの際止むを得ん！　《刃衆（エッジス）》を幾人かでも仕留めたという実績があれば後々の……！」
「いい加減にしやがれ！　のんびり相談してる時間なんざ無いんだよ！」
喧々囂々、と言えば聞こえは良いが、聊か以上に纏まりの無い意見をぶつけあうばかりの研究者達に、痺れを切らした警備の男が更なる怒声を上げた。
こんなおおっぴらな襲撃が行われているというのに、王城内の組織の人員からなんの音沙汰も無いという時点で気付けというのだ。
内通していた連中はとっくに捕まっている。そして、帝国は――あの皇帝はこちらを本気で潰しに来た。

研究資料の持ち出しなどしてる暇は無い。今すぐ身一つで《門》を使って拠点から逃げだし、その後は帝国圏内から死に物狂いで脱出する。

綱渡りの様な方法だが、それしか生き残る道は無いのだ。

おそらく、襲撃を受けているのは此処だけでは無い。組織の崩壊はもう始まっていると言っていい――が、あまりにも現実感が薄いのか、鉄火場の空気に耐性が無いのか、右往左往するばかりで行動に移さない研究者達に苛立ちが募る。

「言っただろうが！　時間稼ぎにもならねぇんだよ！　邪神の眷属を狩るような奴らだぞ!?　竜（ドラゴン）でもない弄った魔獣なんぞで止められる訳があるか！　さっさと緊急避難用の《門》を――」

これ以上もたつく様であれば、何人か斬り殺して無理矢理にでも《門》の魔道具を使用させる。

警備班の男が焦りの儘に腰の剣に手を掛け、三度目となる怒声を上げた瞬間だった。

研究室にいる全員の耳に、涼やかですらある金属音が鳴り響く。

高く、澄んだソレが、鞘を滑る刀身から生まれた音であると気付いた者はいない。

そして、次の瞬間――。

甲高い切断音と共に研究室の壁に無数の斬閃が走り、パズルのピースを思わせる無数のパーツへと分解された。

「んなっ!?」
「ひいいいいいっ!?」
室内から上がる驚愕の声と悲鳴は、バラバラになった壁であった物が床にぶち撒けられ、粉塵を上げて積もる音にかき消される。
偶然か、敢えて残したのか。研究室の扉だけが膾にされずに残り、ポツンと佇む光景はいっそシュールですらあった。
壁が斬り刻まれて倒壊したせいか、蝶番が緩み、微かに軋む音を立てて扉が勝手に、そしてゆっくりと開く。
ドアの向こうに佇んでいたのは、全身を魔装の武具で固めた、騎士の少女だ。
セミロング程の長さの美しい黒髪を後ろで結び、高めのポニーテールにした彼女は、羽織った黒外套（コート）の裾を翻しながら一歩を踏み出した。
その手には、神速の斬撃で壁を細切れにした武器――魔装の湾刀が握られている。
「お邪魔するわ」
皮肉のつもりか、既に扉としての意味が無くなったドア板を、通り抜け様に軽くノックする少女。
振り向いた警備班の男は、黒髪黒瞳の騎士の姿と――何より、彼女の後ろに続く幾つもの壁が、此処まで一直線に乱切りにされて瓦礫に変わっている様を見て取り、即座に

腰の剣を放り捨て、両手を上げて膝を着いた。
「《戦乙女》だと……!?」
「き、貴様、何を勝手に這い蹲っている！　さっさと立って時間を稼げ！」
「《門》の準備を、急げ！」
今になって漸く行動を開始した研究者連中の慌てた声を聞きながら、男は「馬鹿が」と、小さく口の中で毒づく。
強化した魔獣だ、人工的な超人だと大層な能書きを垂れる割には、彼らには致命的なまでに理解が足りない。
『超人兵計画』の理想像、最終到達点とも言える、人外級の戦士。
その一人である、帝国最強の戦人の一角、ミヤコ＝タナヅカ。
死体漁り目的で向かった戦場で、男は一度、この少女の戦いぶりを眼にしたことがある。
だからこそ、この場の誰よりも分かっていた。
無数の壁を隔て、一定以上の距離が空いたつい先刻までの状況なら逃げ遂せる目はあった。かろうじて、だが。
が、彼女がこうして眼前に立っているという時点で、何をどうやっても詰みだ。
バタバタと忙しない音と共に、男の背後で大きな魔力が膨れ上がる気配。

おそらくは《門》の魔道具を起動させようとしたのだろうが、武装解除して跪く男の眼前で、ミヤコの腕が一瞬ブレる。
抜刀から振り抜き、納刀する一連の動作は、その場の誰の眼にも映る事は無い。
「あ」
呆気に取られているのが良く分かる、間抜けな声が男の後頭部をたたいた。
ほぼ同時にくるくると回転して落ちて来たのは、魔力の光が零れる宝珠と――それをしっかりと握りしめる研究員の誰かの右腕だ。
トサっと、ひどく軽い音を立てて腕が床へと落ちるが、その掌から零れた宝珠は床へと転がる前に縦に四分割されてただの不燃ゴミへと変わる。
「う……？　あ”あ”あ”ぁ”ぁ”っ!?」
一拍遅れて、腕の持ち主であろう研究員から、罅割れた声で絶叫が上がった。
瓶や試験管の載った机を蹴倒し、のたうち廻る騒々しい音と気配。
それを振り向いて確認する度胸は、男には無い。おそらくは他の研究員達もそうだろう。
「動いてもいいですよ」
凍り付いた様に動作を停止させる男達に向かって、冷え切った声色でミヤコが告げる。

「ここに来るまでの道すがら、不快、どころでは無いものを散々に見たので。動いてくれるなら良い口実になります」

抑揚に欠けた言葉に込められた痛烈な皮肉と、沸々と滾る怒りを抑える為に無表情となった秀麗な美貌。

そして、喉元に刃を押し当てられた様な、おそろしくも冴え冴えとした鋭い殺気。

これらを目の当たりにして、その言葉通りに動きを見せる阿呆はいない。

腕を斬り飛ばされた研究員でさえ、荒れる息を噛み殺して背を丸め、その場に蹲って必死に動きを止めようとしていた。

早鐘を打つ心臓に鞭打ち、文字通り息を殺して呼吸にすら細心の注意を払う男達。

恐怖と緊張が高まり過ぎて、ミヤコ以外のこの場の全員が嘔吐感すら覚え始めた、そのときだった。

「ミヤコ、二班から連絡です！　要救助者を発見！　容態が悪い方もいるそうですが、とりあえずは全員、意識もしっかりあって会話も可能、だそうです！」

瓦礫となった壁の向こうから駆け寄って来たのは、宮廷魔導士の装束（ローブ）を身に纏う、眼鏡を掛けた女性だ。

その言葉を受け、能面のようであったミヤコの表情が少しだけ柔らかくなる。

「そうですか……キャリーラさん、二班に返信を。状態が悪い救助者は、治療班預かりで

は無く教国の聖女が逗留している屋敷へと搬送して下さい。彼女達は《門》に掛かり切りですが、代理と成り得る回復・補助の達人（スペシャリスト）が詰めているので」

現在、レティシア達が逗留している屋敷にはエルフの最長老であるサルビアが待機している、という情報はミヤコが猟犬（せんばい）から聞かされた話だ。

帝国側としては、一種族の代表・賓客という事で今回の大捕り物に関しては巻き込める訳も無い人物ではあったが、現在、自身の辞書から自重という字を一時的に削除している猟犬は普通にエルフ達にも声を掛けていた。

エルフ（かれら）にとっては現人神にも近い人物からの頼みだ。

郷に帰ったら普通に同胞にドヤ顔で自慢できる様な名誉事であり、人道にも沿った行いなので、現在サルビア以下、帝都にやって来たエルフ達は救助された被害者の治療と屋敷の護衛に士気高くあたっていたりする。

ミヤコもサルビアの魔法の腕は界樹の一件で把握していた。一刻も早い治療が必要な――それこそ聖女の癒しでなければ助ける事の難しい重篤者であっても、彼女ならばレティシア達がフリーになる夜明けまで安心して任せられる。

「おお、聖女様の代理ですか……それ程の方なら、重篤者は魔導士団（わたしたち）よりそちらにお任せした方が良いですね」

感心した様子で頷いた魔導士――キャリーラは、遠話の魔法を発動させて直ぐに別動

隊へと連絡を行う。
テキパキと一連の説明を終えた彼女は、軽く息をついてミヤコと――その奥で息を殺して固まったままの連中に改めて目を向けた。
「――で、この連中は如何しますか？　一番情報を持ってそうなの以外は、処分してしまって構わないと思いますが」
淡々と、黒髪の少女と会話していたときにあった気安さや好感など、微塵も存在しない冷たい視線で男達を睥睨する。
彼女も宮廷魔導士団に籍を置く実力者だ。流石にミヤコと比べるのは酷だが、眼前の研究者達と警備一人程度、相手にもならない。
全員一秒弱で首を刎ねられるか、二十秒で魔法によって消し飛ばされるか。違いと言えばその位か。
燻る怒りは消えず、だが腹に溜まった熱を吐き出す様に、ミヤコは深く息をついた。
「個人的にはそうしてしまいたいですが……やめておきましょう。拘束をお願いできますか？」
「そうですか。では、手足をへし折っておきましょう――オラ、利き腕を掲げなさい下衆共。牢で食事を摂るのに必要でしょうからそれだけは残してあげます」
騎士として、部隊を束ねる長として、激情を制御して勤めを果たそうとする少女。

そんな彼女より年上の筈のキャリーラは、全然我慢してない私情全開っぷりで男達を拘束にかかる。

罵声、悲鳴、哀願、様々な種の声をあげて逃げ出そうとする研究者達の背に、容赦なく魔法をたたきこんでゆく彼女の背を見て、ミヤコは苦笑した。

「荒れてますね」

「えぇ、それはもう。この馬鹿共が陛下を本気で怒らせた御蔭で、宮廷魔導士団はほぼ全戦力が出動になりましたからね！　そっちでの立場は非常勤の扱いの私までこうして出張って来る羽目になるわ、襲撃先では一般人が実験動物にされてる胸糞を見る羽目になるわ、有り体にいって最悪の気分ですとも！」

腕を斬り落とされた者の傷口を雑に焼くという、治療というより拷問染みた方法で止血を行っているキャリーラの眼は据わっている。

「ま、待て！　捕虜に対する過度な加害は帝国の法で禁じられていた筈だ！　わ、我らが大人しく縄を受ける以上、法に則った人道ある扱いを要求する！」

「馬鹿ですか。それは他国の戦争捕虜及び、第一級以下の犯罪行為を犯した者に対する法です――邪神の信奉者と皇帝に喧嘩売ったテロ集団には適用外なんだよタコ」

喚きたてる研究者の顔面に、吐き捨てられた言葉と共に切断面を焼いていた炎が叩きつけられた。

あくまで止血用に発動させた魔法だ、威力という点では然程のものではない。
逃げ出そうとした者を打ち据えた魔法も同様。殴打の性質を持つ簡易な魔力弾だが、無力化を目的とした殺傷力を押さえた代物である。
だが、捕らえた魔獣や人間を実験の過程で痛めつけ、苦しめる事には慣れていても、自身が傷を付けられる事には一切の耐性の無い連中だ。まるでこの世の苦痛を一身に受けたかのような身も世もない汚い悲鳴が上がる。
目の前の連中の所業を此処に来るまでに目撃したミヤコとキャリーラには、三倍増しで見苦しく、耳障りに聞こえる声。
それが切欠(トリガー)となったのか、キャリアウーマン然とした外面をかなぐり捨て、眦を吊り上げた魔導士が咆哮した。
「うるせぇぇぇっ!!　そもそもこっちはテメェらが馬鹿やってなきゃ《大豊穣祭》の本番中は半分が休暇だったんだよぉ!　それがどうだ!　いざ蓋を開けてみれば休日二日目から実況解説の代役に駆り出されるわ、あと一試合でそれも終わるかと思えば夜を徹した塵掃除の突入メンバーに組み込まれるわ!　お前ら何か私に恨みでもあんのかゴルァ!?　今日で何連勤になると思ってんだ○すぞ糞が!!」
手近にある机を何度も爪先で蹴りつけ、寝不足と苛立ちで眼を血走らせたまま叫ぶキャリーラ。

大分溜め込んでいたのか、突如着火した女史の怒り狂う様を見て、男連中は悲鳴を殺して身を縮こまらせる。というか、ミヤコも若干引いていた。

叫ぶだけ叫んで気が……全く晴れてない不機嫌な顔の儘で肩で息をしていたキャリーラだが、己に接続された遠話の魔法の感覚を感じ取る。

深呼吸を幾度か行い、意識を切り替えて連絡を受け取り。

告げられた内容に、表情を引き締めて《刃衆（エッジス）》の長へと振り向いて指示を乞うた。

「第七班――サリッサ氏から連絡です。東区の《門》の制圧は現時点で七割程度。夜明けまでには相当な時間の余裕を以て完全制圧可能。他の区画へと応援に向かうべきかどうか、だそうです」

連絡を受け、ミヤコは数瞬考え込む。

元より遠話による情報の共有によって、早い時間で東区にある《門》の制圧は完了すると踏んでいた。

なので、結論は直ぐに出る。

「八割を超えた時点で、二班から四班までを南区の応援に回しましょう。騎士団や伯爵の領軍と突入場所が被らない様、東区（こちら）に近い箇所から制圧に入ると将軍に連絡を」

万全を通り越してオーバーキルにも程がある戦力比で臨んだ、今回の強襲作戦。

ミヤコの唯一の懸念はあの来歴不明の転移者、ジャック＝ドウである。

今の処、かの人物と接敵したという報告はない。
北区の教国を主とした面子は突入班に同道する魔導士がいないので、制圧済みの施設や拠点に後詰で入った帝国の人員から連絡が送られてくる。
そのせいもあって、やや情報の更新が遅いのだが……攻略にあたっているメンバーがミヤコの”先輩”や彼の姉弟子とその教え子だ。
彼らならば、あの剣士と戦闘になっても早々にやられはしない。どころか普通に倒してしまう可能性もある。最悪でも、犠牲無しでの退却が可能だろう。
問題は西区か南区に現れた場合である。
ジャックに限らず、人外級の戦士を相手に数で当たるのは悪手だ。
圧殺可能なだけの戦力があれば討ち取る事自体は可能だが、その場合、発生する被害は相当なものになる。
相手が魔鎧の使い手であるというなら猶更だ。アレの機動力の前には、数頼みの包囲網は無意味に近い。
近くにレーヴェ将軍が居れば被害は最小限に抑えられるかもしれないが、騎士団全体の指揮を執っている以上、彼が現地で戦闘する可能性自体が低い。
《刃衆(エッジス)》の隊員を向かわせるのは、あの剣士との戦闘が西と南で起こった際に、最速で援軍として駆けつける為の措置も兼ねていた。

「……急ぎましょう。制圧が早ければ早い程、他の区画へと戦力を割けます」
「そうですね。では、こいつらは適当に半殺しにしておきましょう――素直に手足を差し出せば骨三本で済んだんですけどね」
帝国最強の一角たる黒髪の少女と、その補助として同行しているのに少女より殺意高い言動の魔導士。
半狂乱になって二人から距離を取ろうとする研究者達を尻目に、試合終了のお知らせが鳴り響いた現状をただしく把握した警備の男は、諦め混じりの乾いた笑みを浮かべて再度ホールドアップする。
（もうどうにもならねぇ……神よ、どうか命ばかりは助かります様に）
この男だけは、自分が関わって来た行いに対する自覚程度はあったのだろう。
最後に縋った神への祈りの言葉は、口に出す資格を持ち得無いと思ったか、胸中に留まるばかりで声とはならなかった。
なお、仮に言葉にしたとしても届く筈も無いのは当然である。お休み中であろうがそうでなかろうが、当の女神にも届く祈りの声を選り好みする権利はあるので。

先の研究所で聞きだした、貴族の邸宅に隠されたという《門》。
目的の場に辿り着いたは良いが、当然の事ながら頑丈そうな鉄の門構えは硬く施錠されている。
丁寧に門扉を開けて館の扉をどうにか開錠して、建物内の魔力の溢れる場所を目指して――なんてやってる暇は無いので、門扉は飛び越え、魔力噴射からのドロップキックでダイナミックお邪魔しますを敢行し、扉を爆砕して玄関へと飛び込む。
「おっふ……これ後で陛下に叱られないツスかねぇ」
走って追いついて来たトニーが、今日何度目かになる白目を剥いてボヤいてる。スマンな、時間短縮の為や。
入口周りの壁ごとぶっ壊して入った為、粉塵立ち込めている玄関ホールを見回す。
人の気配は無し。手入れはされている様だが、現在は見える窓にはカーテンが掛けられ、永らくまともに使われていないらしき館は、薄暗く物悲しい雰囲気となっている。
ふむ、元は没落だかした貴族の帝都用の別荘だっけ？
「二代前の先帝陛下の時代に、辺境伯だった方の邸宅ッス。確か、スターディン家、だったかと」

成程。んで、今は王城預かりで最低限の管理だけしてる、と。
「みたいッスね。露骨に分かり易い場所に《門》が設置されていれば、定期的に清掃に入ってる人達が気付かない訳も無し……って事は」
隠し部屋、だろうな。つーか励起した《門》の魔力も明らかに下から感じるし。
館のどっか……若しくは敷地内に部屋に通じる隠し道があるんだろうが……面倒だな、床ぶち抜くか。
「流石に今から探すのは時間が惜しいッスからね、お願いします旦那」
あいよ。先ずは魔力の発生源の真上に行こうか。
トニー君の同意も得たので、二人で移動を開始する。
大雑把ではあるが、場所は直ぐに知れた。《門》は館の厨房と使用人用の食堂の間にある廊下の真下――やっぱ地下にあるみたいやな。
剣の切っ先で床に張られた木板の一部を引っぺがしたトニーが、剥き出しになった床板部分を軽く叩く。
「……当たりッス。手応え的に、そんなに深くない場所に空洞がある感じッスねコレ」
深さはそれ程無しか。じゃ、一気にやっちまうとしよう。
身振り手振りで彼に下がる様に伝え、軽く魔力を練って手刀を振るう。
分厚い鉄製でもなけりゃ魔装でもない、ただの床板だ。大した手応えも無く廊下は四

方1メートル程のサイズに切り取られ、最後に真ん中に斜線を引かれて三角形二つになって地下の空洞――隠し部屋へと落っこちる。

上から覗き込むと、そこには暗い室内を明々と照らす、起動した転移の魔道具があった。

躊躇する理由も無し。俺とトニーは顔を見合わせて頷くと、そのまま廊下から《門》へと飛び込む。

光溢れる《門》を潜った先は、当然と言うか見覚えの無い場所だった。

緑深い山中。人気の無い路地裏であっても表通りの喧噪が届いていた帝都と違い、自然の中に息づく野生の生き物達の息遣いのみが、静寂を微かに色付けている。

《門》の転移距離は注がれる魔力に依存する。

シアとリアが以前に構築した帝都を覆う結界を利用し、儀式魔法まで併用して帝都中の《門》に注いだ魔力は膨大だが……これらを設置し、普段使いしていた連中が、そんな魔力を有している筈も無い。自然、設定してある転移先は帝都からそこまで離れていない筈だ。

トニー、場所の把握は可能か？

「星も出て来てるんで問題無く――多分、王城が背にした山脈の内の一つッスね。高所から見れば帝都も確認できるかと」

無理矢理ついて来た半病人であるトニー君だが、服用した霊薬の効果が出ているのか、なんだかんだ言って此処迄遅れずしっかりついてきた。

直ぐに空を見上げて大まかな現在地を割り出してくれる。こういった多芸な仲間が一人いると頼もしいね。

こんな山の中だ。誘拐した人間にしろ、拠点を維持する為の資源にしろ、《門》と拠点の距離が離れる程に運び込む際の労力と危険が増す。

近くにあるだろう、とアタリをつけていたが、案の定首を巡らせた先に石造りの建物を発見。しかも、近くに見張りらしき人間が二名。

他に光源の無い山の中で煌々と灯りを付ければ、遠目からでも相当に目立つ。それを避ける為か、建物は入口のみが地表に出ている形で殆どは地下に作られた様だ。

「地下……ここらは岩盤も厚かった筈なんスけど、よくまぁ……」

呆れと感心が半々の声が背後から聞こえるが、今は時間が惜しい。特に反応はせずに施設の入口へと歩き出す。

トニーの言う通りに地下の岩盤が厚いというのなら、入口以外の緊急用の脱出口が作られている可能性は低い。

けど、元からあるもの――例えば、国側に把握されてない未発見の遺跡なんかを拠点として利用しているのなら、岩盤工事の手間やリスクは省略出来る。

とはいえ、別の出入り口探して封鎖して、なんてまだるっこしい真似をするつもりは無いんだが。

歩を進める内、見張りが此方に気付いたのを確認して、一気に加速。

魔力噴射で０．２秒と掛けずに彼我の距離を潰し、片方見張りの頭を鷲掴みにすると、最初に襲撃した拠点のときよろしく捻りながら引っこ抜く。

頸椎の半ばまでを首と一緒に引き摺りだし、唖然としながらも武器を構えようとしたもう片方の見張りの剣を握る腕へと、引き抜いた頭部を叩きつけた。

頭蓋と肘がぶつかり合い、拉げて肉と骨を撒き散らしながら砕け散る。

悲鳴か苦鳴かは知らんが、大口を開けて叫ぼうとした男の顎を掌で掴みあげ、黙らせた。

『おい、どうした。資材の搬入は始まったのか？』

そのまま首をへし折ろうとしたのだが、拠点の入口脇に備えられた漏斗状の金属パーツから響いた声に、動きを止める。

メガホン擬きはパイプ状の管へと繋がり、それは扉脇を通って地下へと続いている。

伝声管の一種か。

俺は男の顎を掌で固定したまま、その顔を引き寄せて耳元で囁いた。

――誤魔化せ。失敗したら首を捩じ切る。

抵抗や躊躇いを見せればその瞬間に首を捩ぐつもりだったんだが、男は顔面蒼白のまま即座に頷いてくれた。
じゃ、よろしく。と顎から手を離すと、彼は必死の形相で深呼吸を繰り返す。
潰れた腕を抱えながらも出てきた声は、震えも抑えた、良い感じに不自然さの無い声色だった。
「あ、あぁ。いつもより早いが、その様だ。こっちで搬入も少し手伝うから、倉庫の空きを確認してもらって良いか？」
『なんだ、監視員にお偉いさんでも混ざってたか？　臨時収入が貰えたら奢れよ？』
「……気が、向いたらな。開錠を頼む」
『はいよ、了解』
会話が終わると同時、魔法で施錠されていたらしき鉄作りの重い扉から、ロックの外れる金属音が鳴り響く。
ご苦労さん。じゃ、さいなら。
やり切った様子で大きく息を吐きだした男が振り返る前に、手刀で首を飛ばした。
卑怯畜生というなかれ。相手は外道、その上俺の友人に手を出した連中のお仲間だ――全員狩るので、末路は変わらない。
「こんなモンがあるって事は……此処は相当広いみたいッスね」

そう言うトニーの眼は、伝声管に向けられている。
だろうな。少なくとも入口の開閉を行う奴は、こっから声を張り上げたくらいじゃ届かない場所にいるって事だろうし。
結構な数の拠点を潰したが、扉も魔法でがっつり施錠されてるタイプは初めてだ。相当な広さだと予想できる設備といい、手に入れた情報通り、ここは重要な場所らしい。ひょっとしたら当たりを引いたかもしれん。
金属の軋む音を響かせ、開錠された扉を押し開けば長く続く階段が暗闇に誘う様に地下へと伸びている。
さて、行くか。
「了解。もしかすると、此処が本拠地かもしれないッスね。気合入れて行きましょう旦那」
だな。取り敢えず初動は上手く誤魔化せたことだし、始めはなるべく気付かれない様に立ち回りつつ数を――。
俺が襲撃のプランを大まかに語ろうとした、その最中だ。
伝声管が震え、鉄の漏斗越しでも分かる焦りやら混乱に塗れた声を吐き出す。
『おい、資材の搬入は一旦中止だ！　急いで外側から入口を封鎖しろ！　ジャックさん

がとっ捕まえて来た銀髪の女が逃げ出しやがった!!』

俺達は二人揃ってアホ面で目をぱちくりとさせ、顔を見合わせ――次いで、ニヤリと同時に笑った。

「大当たり、ってやつッスか」

みたいだな。ついでに言うなら静かに行動するプランは無しになった。

おそらく――いや、ほぼ確実に副官ちゃんの事だ。

襲撃した各拠点・施設の中には、あちこち弄られた魔獣やら、薬品に漬け込まれた明らか人体っぽいパーツの入った瓶やら、胸糞悪いモンがそこかしこにあったので、正直、道中気が気じゃ無かった。

伝声管から伝わる声の調子から察するに、脱出も兼ねて元気に暴れている真っ最中ってとこだろう。

実際に無事を確認した訳では無いので、この判断はちと早計ではある。

あるんだけど……喜ばしい気持ちは抑えられなかった。

あぁクソッ……マジでホッとした。無事で良かった、本当に。

俺とトニーが交す笑みの裏には、二人とも安堵の情が滲んでいたが、それはお互い見ないフリをしつつ。

『戦える奴は封鎖の前に降りてこい！　あの女、好き放題に暴れてやがる！　空になった施設から応援をよb――』

攪乱と景気付けも兼ね、喧しく鳴り響く伝声管を握り潰すと、引き千切って階段へと放り捨てた。

派手な音を立て、反響激しい地下へと続く階段を転がり落ちていく鉄屑を追いかける様に、一歩を踏み出す。

「音量は十分ッスけど、開始のゴングとしちゃぁちっとばかり地味ッスね」

背後から聞こえる言葉に、肩を竦めてもう一度笑った。

号砲は副官ちゃんが上げたやろ――だが、そうだな。こっちでも派手にかましてやっても良いか。

友達の無事を知って、少しばかりアガったテンションの儘に、軽くつま先で地を蹴って。

――会いに行くぞ、一直線だ。

「合点承知」

俺達は、同時に地下へと続く暗闇の中へと飛び込んだ。

帝都の一番長い夜　5

「現在の制圧状況は？」
「ハッ、現時点で八割に到達しています――二時間前と比べて、制圧速度は相当に上昇しているかと」
腕を組み、仁王立ちした獅子の鬣の如き赤金の髪と髭の偉丈夫――レーヴェの問いに、彼の背後に控えている魔導士が淀みなく応じる。
南区にある《門》より渡れる敵方の拠点の一つ。
やや勾配のある坂の上、高所へと繋がっていた《門》の直ぐ傍にて、その青い瞳は現在進行形で自身の部下達の手により攻略されている最中の建物を厳しい眼で見下ろしていた。
彼の気性的に先陣を切って飛び込みたい処ではあったが、やはり立場が立場だ。
遠話を介した全体の指揮。何より、騎士団を幾つかに分けて複数同時の《門》へと強襲を行っている以上、彼が潜った《門》以外で大きな問題が発生した場合に、即座に取っ

て返してそちらに移動する為にも、こうして出入口である転移の魔道具の近くで待機する事になっている。

「良い状況だ、速やかに進むならば其れに越したことは無い」

「《刃衆(エッジス)》の方々が幾らか戦力を割いてくれたのも要因かと。聖女の御二方の御蔭で我らが未確認の《門》の場所まで把握出来たのは幸いでしたが……判明した南区の総数は予想以上でしたので」

将軍の護衛として侍る数名の騎士――その部下の中でも古参に位置する者の言葉に、厳めしい表情を少しばかり苦笑の形に歪めてレーヴェは笑った。

「あの蛇めが帝都周りに連れてきた兵力も馬鹿には出来んが……やはり東西南北全ての区画の中で、戦力的には一番に不安が残る。なんとか吾輩の側から応援を捻りだしてやらねばならん、と踏んでいたのだが……杞憂に終わったのも大きかったな」

「嘗ての英雄が引退した身を押して助力して下さったのです、当然の結果かと。かの女傑と轡を並べるなど、あの様な不誠実な男には過ぎたる栄誉ではありますが」

これればかりは不満を隠し切れぬ、と言わんばかりの顔をする部下に、苦笑いが深くなる。

聖女の儀式魔法によって暴かれた、帝都全土に蔓延る隠された《門》。

帝国側が把握しきれてなかったものまで強制的に発動した事によって把握可能と

なった其れの数は、当初の予測を超えていた。
軍勢で以て攻略に当たるが故に足回りの遅くなる南区と西区は、一晩での制圧は少々厳しいものがあったのだが……それも他の区画からの応援で事無きを得、強襲作戦は順調に推移している。
西区、シュランタン＝サーリング伯爵率いる彼の領軍には、北区からの戦力が。
此処、南区。レーヴェ率いる第一騎士団には東区から《刃衆（エッジス）》が。
その御蔭もあって、作戦の進行状況は何の問題も無い。繰り返す様だが順調そのものだ。
なのだが……騎士の中でも、先帝時代からあの大戦を戦い抜いた古株の者達が多い第一騎士団には、西区に向かったのが教国からの聖職者の一団である事に不満を抱いている者もちらほら居た。
その悪感情の矛先は聖職者達では無い、寧ろその逆だ。
――なんでかの四英雄筆頭と肩を並べる程に近い場所で戦ってんのが、あんな武人とは程遠い三枚舌の蛇野郎なの？　クソ面白くないんですけど。
遠話による情報共有で西区への援軍が判明した際、古株の騎士の多くが抱いた感想である。
彼らとほど近い年齢のレーヴェとしても、諌めるより先に共感の情が先に来てしまう

のがまた悩ましい。
若かりし頃、騎士見習い、若しくは騎士を目指して奮闘中の尻の青い小僧であった時分。
激化してゆく邪神の軍勢との戦いにおいて、人類種の勝利への道を切り拓かんと先頭に立ち続けた金灰の髪を靡かせたシスター。
当時、その怜悧な美貌と圧倒的な戦武に憧憬を覚えた者は多い。多感な年頃の若造であれば猶更に。
レーヴェと、彼の若い頃から付き合いのある第一騎士団の騎士達は、その直撃世代というやつだ。
だが、彼らが一端の騎士として危険な戦場にも出れるようになった頃には、彼女は一線を退いてしまっていた。
それだけに、今回降って湧いたかの女傑との共闘の機会に、いい年齢(とし)して内心でテンションあがっていたオッサン共であるが、現在一番近い場所で戦ってるのは自分達の将軍と険悪な仲で有名な、なまっちろい貴族派の首魁である。
「……思い出したら腹立ってきた。あの栄養失調の蛇みたいな野郎がミラ様と肩を並べて戦ったとか自慢して来やがったらブッ殺しても良いでしょうか閣下？」
「やめんか。気に入らん男ではあるが、今回は一応友軍だ」

軽口、なのだろうが……その割には真顔と真剣な声色で聞いてくる部下に、冗談でもＯＫを出したら洒落にならない事になりそうな気がしてレーヴェはきっぱりと却下の意を伝えておく。

ちなみに当のシュランタンにとって、実はかの女傑は”敬意を払うに値するが苦手な人物”といった部類に入る。

金銭、権威と言ったものに価値を見出さず、靡かず。

己の持つ武威のみで英雄と呼ばれ、自国のトップである教皇ですら、不義を為せばぶん殴る。

逸話や噂から伺える人物像だけでも、直立した鋼の芯棒の如き生き方が伝わる御仁だ。

貴族としての財力と権力、そして持って生まれた弁舌の才で人心や領地を掌握してきた、人生が模範的貴族（グレーソーン）そのものな男からすれば、近くにいれば何を切欠にぶっ飛ばされるか分かったものでは無い。

なので、援軍が彼女であると知った伯爵はちょっと胃の辺りを押さえながら自軍の指揮に当たっているのが実際の処である。冷や汗をかいたその面を皇帝が見れば、犯罪組織への怒りすら一時忘れて腹を抱えて爆笑する事だろう。

更に余談だが、最近《刃衆（エッジス）》の見習いとなった新入りの少女は、近頃の若者にしては

珍しく、教国の聖女姉妹より嘗ての四英雄の逸話に関して知識が深い為、第一に限らず、騎士団の古株連中から何気に評価が高かったりする。本当に余談だが。
「将軍閣下、第一分隊より連絡です。制圧完了、これより此方に合流して次の強襲先へ向かう。との事」
作戦がスムーズに進んでいる為か、少々時間を持て余してしょうもない会話を行っていた将軍とその部下であるが、連絡役の魔導士の言葉に気を引き締め直す。
第一分隊――つまりはレーヴェ達の眼下にある拠点を攻略中の者達だ。
「終わったか。我が部下ながら中々に良い手際だ」
「こちらの被害と要救助者は？」
「ともに数名。どちらも軽傷だそうです……囚われていた者達ですが、連中にとって貴重な検体である他種族の人々であった様ですね」
魔導士による補足の情報を聞いたレーヴェ以下、この場の者達の顔が渋面となる。
「……希少性の高さ故に早々に使い潰される前に救い出せた、という事か。僥倖ではあるが……」
「他の被害者達がその分、負担を被っていた、と考えると素直に喜べませんな」
「……元より帝国に巣を張っていた下郎共が元凶だ。今は一人でも多くの民を助け出せた事を喜ぶとしよう」

「あ、ちなみに要救助者は隠し部屋に監禁されていたらしいですが、将軍閣下の御子息が通路の違和感に気付いて発見したとの事です」

一転して苦々しい表情で被害者達の状況を憂慮する騎士達に明るい情報を提供しようと思ったのか、少しばかり軽い口調で付け足された魔導士の言葉にレーヴェが「……む？」と短い唸り声を上げる。

部下達も同様。こちらは皆、少しばかり感心した様子で表情を明るくした。

「ほう、ノエル坊……失礼、ノエル様が……」

「先頃の失態（やらかし）で頭を丸めて以降、言動が落ち着いた……というよりそれを心掛けているように見えましたが」

「日常で行う様になった周囲への配慮を、実戦の場での気付きに応用出来た、という事でしょうか？」

「若者の成長は著しいものですが、いやはや、これは中々に頼もしい」

古参の兵達からは『腕は良いけど猪』『剣才はあるが思い込みがちょっと激し過ぎる』『猪な処まで閣下の若い頃に似杉ワロタ』と期待値込みで比較的辛口な評価をされていたレーヴェの息子、ノエル。

散々に指摘されていたその猪突が過ぎる気質のせいで、あわや御家まで巻き込んだ自裁一歩手前の問題を起こした彼であったが、そこから得た経験や出会いは世間知らずの

少年騎士を成長させる切欠とはなった様だ。人生、何が転機となるか分からないものである。

「ウォッホン！　……詳細な情報の共有は重要だが、余分となる情報（モノ）の取捨選択は確りと行う様に」

「申し訳ありません、以後留意して任に当たります」

「閣下、頬が緩んでますよ」

「ぬぐっ……」

咳払い一つして、作戦においては蛇足ともいえる追加情報を告げてきた連絡役の魔導士に注意を促すが……当の部下からは笑いを含んだ返答を返され、周囲の部下からもツッコミを入れられ、再び唸り声を上げる将軍。

「えぇい、他の者達が敵の巣窟真っ只中で剣を振るっている最中だぞ！　戯れはやめんか！」

声を張って部下達を叱り飛ばすが、その結果を見届ける前にレーヴェと騎士達の表情が引き締まり、傍にある《門》へと向けられる。

光を放つ転移の魔導具を静かに潜って来たのは、帝国兵の装備とは違う、冒険者風の装いの女だ。

「何者だ」

誰何の声を上げる騎士の声は鋭く、固い。
瞬時に己を中心として少人数での陣形を組みなおす部下達を、レーヴェは片手を挙げて制す。
「止せ、吾輩の子飼いだ」
「……お得意様なのは否定しないけど、子飼いになった覚えは無いね」
女から間髪入れずに返って来たすげない返事に、苦笑する。
「其れに関してはまぁ、良い――頼んだ仕事はどうなった、バーコイド」
「済んだから此処に来てるんだよ。戦闘(ドンパチ)よりは潜入(こっち)が本分に近いけど……下調べも無しに貴族の邸宅に侵入させるなんて無茶はこれっきりにしてほしいね」
「……間取りや目的の部屋の位置は教えただろう?」
「自分で裏取りする時間すら無いのはストレスだって言ってるんだよ、将軍閣下」
急な、そして拒否の難しい依頼を押し付けられた事で見て分かる程度には不機嫌な冒険者――闘技大会の出場者の一人であるヘザー＝バーコイドは、懐から取り出した畳まれた紙片を、指先で挟んでレーヴェへと差し出した。
「御所望の調査結果は全部此処に書いてある」
「……そうか。ご苦労だった、依頼料の残りは後日、組合に届けさせよう」
「まぁ、急な話ではあったけど……受けたからには仕事はするさ――将軍閣下も職務熱

心は良いがほどほどにしなよ、無理して調子を崩したら元も子もない」
依頼主がメモを受け取ると、仕事完了だと言わんばかりにあっさりと身を翻すヘザー。
通って来た《門》を潜って姿を消す冒険者の背を見送りながらレーヴェは手の中の紙片を広げた。
「……やはり、か」
「……閣下。差し支えなければ、あの冒険者にどのような依頼をしたのかお聞きしても？」
珍しく、小さく呟く様な――陰鬱さすら滲ませた声で独り言ちる将軍の背に、疑問よりも彼を案じる気持ちの強い声色で騎士の一人が問い掛ける。
手の中の紙を握り潰しながら頭を振ったレーヴェは、やはりどこか覇気の無い、力強さに欠けた笑みを浮かべて部下に応えた。
「スマンが、まだ言えん。バーコイドの奴に一つ裏取りをさせたが、この調査は完全に吾輩の勘によるものなのだ。先ずは陛下にもお話して指示を仰がねば、な」
内容的に遠話――通信役となる魔導士を挟んだ会話は出来ないので、直接文を王城に居る皇帝に届ける者が必要となる。
第一分隊が戻ってきたらその中から足の速い者に使いを頼む、と部下達にざっくりと

した説明を終えると、数秒の間、レーヴェは両の眼を閉じ。
「――次の《門》への移動準備を始めよ。我らは帝国の盾にして陛下の剣……全ては己に課した役目を果たしてこそだ」
その瞳に浮かんでいた懊悩も憂いも全て押し込め、《赤獅子》は元の力強さを取り戻した青い瞳で前を見据えたのであった。

アホみたいに長い薄暗い石作りの通路を、俺とトニーは駆け抜ける。
「う、ひっ……く、来るなギェ!?」
剣を構えながらも及び腰になっている男の首を、構えた刀身ごと駆け抜けざまに刎ね。
「ひぃあああぁぁぁっ!?　ば、化け物めぇっ！」
恐怖で錯乱したのか、味方に当たるのも構わず雑な魔法を撒き散らす奴の放った氷の礫を《流天》で巻き取り、一纏めにして本人へと叩き返す。発動時の五倍くらいの速度

で跳ね返った魔法は、撃った当人の胸から上を潰した柘榴に変えた。
「じょ、冗談じゃねぇ、こんな奴相手に出来るか！」
「お、おい、待て！　ズラかるなら俺も”ッ!!?”」
背を向けて逃げたした連中には装甲を破片化させた散弾をぶち込み、痙攣する血達磨に変える。
「さっきから……てか、最初から通してまともに剣を振った記憶がねぇッス」
床に転がった人体の中でも、かろうじて死に損なった奴らにトドメという名の介錯を刺しながら後ろに付いてくるトニーがボヤくのが聞こえる。
自分の状態を考えろ、半病人。霊薬で無理矢理動かせるようになったってだけで、効果が切れたら散々動かした分の反動が来るのは確定やろ。多分傷口も開くだろうし、負担が少ないならその方が良いに決まってる。
「まぁ、そうなんスけど……症状の把握が細かいッスね、やっぱ旦那も使った事あるでしょ絶対」
……大戦時代の話だ。帰って来てからは使った事ないのでノーカン！　身体も新調されたから副作用だってもう残って無いしな！
「えぇー……なんかズルい……自分は服用がバレると副長やシャマにどやされるのに」
それに関しちゃ同情するが……俺も強めの霊薬愛飲してたって言っちゃ駄目よ？

今更な話とはいえ、シアとか絶対怒るし。
「ふりっスね、分かります」
ヤメロォ！　本気で言ってんだよぉ！　副官ちゃんに会えても無茶した事フォローしてやんねぇぞコラァ!?
一切脚と動きを止める事無く、走り続けたままギャアギャァと会話している俺達ではあるが、敵方の殲滅は順調だ。その逆に、単純な進行状況はあんまり思わしくないんだが。
……っと、言ってる側からまた十字路だ……やっぱり、此処の連中が工事して作った拠点（モン）じゃないな、この場所。
俺の言葉に、トニー君もこっくり頷く。剣でトドメを刺すより楽だと思ったのか、その手には倒れてる奴から拝借してきた槍がいつの間にか握られていた。
「長い壁の向こう側にも部屋が無いッスからね。普通の建築のセオリーから外れすぎてるし……」
うん。十中八九、未発見の遺跡、だろうな。
壁をぶち抜いて一直線が殆ど出来ない作りといい、普通の建物の壁と違って若干魔力全般への耐性というか、遮断効果っぽいものがある材質といい。
冒険者達が挑む古代の遺跡やら迷宮やらに共通する要素が多いのだ、この建物は。

無駄に入り組んだ、進む者を惑わす様な構造なのもそれだと納得がゆく。こんな無駄に長くてだだっぴろい場所を拠点にして逆に不便じゃねーかとか思わなくも無いが。案内見取り図でも通路に貼っとけよ。

道が入り組み過ぎて分からん以上、勘で進むしかない。流石にこれだけの人員が詰めてる場所なら分かり辛い罠なんかは撤去してあるだろうし、とにかく奥に進むことを優先しよう。副官ちゃんらしき魔力の主も、相当奥の方で暴れてるし。

進路上を斑に赤く染めながら突き進むと、T字に別れた通路の正面に扉らしきものが見える。

その向こうにある空間――結構な広さのある部屋には複数の気配。入って来た者を狙い打ちにするか、部屋に入る事無く通り過ぎるなら後ろから挟み撃ちにするつもりなのか。

詰んである木箱の影から飛び出して来た、戦斧を握った男の胸板を抜き手で抉り飛ばし、糸の切れた人形みたいになった身体を襟首掴んで引き摺っていく。

そのまま扉に向かってボウリングの球よろしく、アンダースローで投擲。

真っ直ぐに飛んだ男の身体が、後から取り付けたらしき急拵えの扉をぶち破った瞬間――。

「撃てぇぇぇっ!!」

悲鳴染みた号令と共に、幾つもの弩矢（ボルト）と魔法が部屋の入口に向けて殺到し、男の骸を滅多打ちにした。

一秒と掛からずにぼろ雑巾を通り越して四散する骸を尻目に、俺は扉横の壁に向かって跳び蹴りをぶちかます。ダイナミック・エ〇トリー！

砕ける壁、舞い散る粉塵。

石壁をぶち抜いて現れた俺の姿に、必死こいて扉に向かって一斉攻撃を行っていた連中の眼がひん剥かれた。

やぁ、こんにちわ。

僕猟犬、君達を狩りにきたよ。死ね（挨拶

挨拶と同時に左半身の各所から全力で魔力噴射。

左脚を軸足に独楽の様に高速旋回し、その勢いのまま手刀を振るう。

振り抜いた一閃は大気を灼熱化させ、長大な真空の刃を生み出した。

進路上の全てを両断した一撃は、向かいの壁幅一杯に横一文字の深い亀裂を走らせる。

待ち伏せしていた奴らの腰から上が一斉にズレて床に落ちるのは気にせず、俺は部屋の中を適当にぐるっと見渡した。

んん？　こいつは……。

亀裂の入った壁――正確にはそこに埋め込まれた物を目にして、空けた穴から部屋を覗き込んでいたトニーを手招きする。
「どうしたんスか？　旦那」
槍を担いだまま寄って来た彼の言葉には答えず、無言で壁の一部を指さす。
そこに見えるのは、彫り込まれた独特の模様。
大掛かりな《門》の装置に組み込まれるパーツに良く見られる、魔法的な意味を持つ紋様だ。
しげしげと見つめたトニーがとうに機能を停止したらしきソレを、指先でなぞる。
「随分と大掛かりな《門》ッスねぇ……こんなモンが壁に埋め込まれてる遺跡って事は……」
直ぐに俺と同じ結論に至ったのか、納得が行った様子で頷いていた。
本来、転移ってのは魔法自体の構成難易度と魔力の消費量から最高位の魔法に分類される。
後者こそ据え置きだが構成の方を省略できる魔道具の方も、どんなに質が低くても魔道具の格としては一級品扱いされる代物な訳よ。
だってのに、今回の大捕り物の対象となった連中は、帝都各所にアホみたいな数の《門》の魔導具を設置していた。

その総数は帝国と教国が保有する同種のアイテムを上回ると言って良い。繰り返すが、それだけ貴重な品なのである。

非合法な動物・人体実験をやらかす様な連中だ。何某かの新技術や理論で限定条件下での《門》の魔導具の量産化にでも成功したのか？　なんて思ってたんだが……話はもっと単純だったみたいだ。

多分、連中の所持・設置した《門》の多くはこの遺跡からの出土品だろう。

偶にあるらしいのよ、何か特定の品がめちゃくちゃ偏って出て来る遺跡が。

事実、この部屋に積んであった木箱――先の俺の一撃で真っ二つになったソレらには、掘り出したは良いが壊れて使えなかったのであろう転移の魔導具のパーツらしきものが幾つも放り込まれていた。

よりにもよって犯罪組織なんぞに最初に発見され、発掘されたのは運が悪かったとしか言いようが無い。戦時中にこの遺跡が帝国に発見されてりゃ色んな場所での大きな助けになっただろうに。

まぁ、今更に過ぎた話だ。

必要だった時期に手に入らんかった物に対して嘆いたり惜しんだりしても意味は無い。発見・発掘したのが信奉者連中じゃ無かっただけマシ、と思うしかないな。

本当に必要だった時期は逸したが、この一件が片付けば帝国は接収した相当数の転移

の魔導具を入手することになるだろう。
協力する形になった教国にも何割か流れるかもしれんね。まぁ、そこら辺は皇帝陛下と教皇様や枢機卿で話し合えばええねん。只の傭兵は外交周りの問題とかノータッチなんで。
何より、肝心の副官ちゃんと合流出来て無いのだ。後の皮算用なんぞしてる暇は無い。
そこら辺は同意見だったのか、トニー君も「ま、これは後回しッスね」とか言って手に取っていた《門》の部品を木箱に放り投げた。
おし、じゃ進もう。しかし、こうも分岐が多くて長いようじゃ、適当な奴を締め上げて道案内させる事も考慮した方が良いかもな。
「それも有りっスね。一応、施設の重要なモンがある場所なら防衛の人員が集中するって目安はあるッスけど……」
部屋を出ると再び駆けだす俺達。
既に結構な数の警備を地面に転がした筈なんだが、幾らも進まない内にワラワラと湧いて出て来る。ボウフラかよ。
数は結構多いが、質が低すぎる。精々が冒険者で言う処の三級程度。下手すりゃそれ以下の、街で管巻いてるゴロツキと大差無い。

帝都にこっそりと巣を広げてた手腕といい、この連中のトップは相当なやり手だ。
だってのに、人材の質が平均値で見て相当酷いのはどういう事なんやろな。あの転移者……ジャックとかいう男みたいな例外もいるにはいるみたいだが。
当然、士気だって高い訳じゃ無い。腰が引けてるのや嫌々ながら向かって来るの、なんなら背を向けて奥へと逃げ出すのも結構いる。逃がさんけど。
比喩でも何でもなく鎧袖一触で蹴散らしながら、石作りの長い通路を進む。
どれくらい進んだのか。
介錯係になりつつあるトニー君が、傷んできた粗末な槍を捨てて三本目に交換した辺りの事だった。
「……こっちで合ってるみたいッスね」
警備の人間に混じって使役された魔獣が襲ってきたのを確認し、呟かれる言葉に、俺も頷く。
種類は様々だが、その全てが此処に来るまでにも相手をした、無理矢理な強化を施された獣だろう。
推定本拠地なだけあって、出てくる数が他の場所より数段多い。
確かにこの数を防衛戦力として出せるなら、警備担当の質が低くても問題無い、と判断もするやろなぁ……まぁ、侵入側がただの冒険者とか迷い込んだ傭兵だったら、って

前提だが。

思考の間にも間合いを詰めて来ていた、突っ込んでくる狼系の魔獣の群れを迎え撃つ。

これまでに見て来た魔獣と同様、その姿はやはり一目見て分かる程度には異様だ。

体内を巡る強すぎる血流の勢いに押され、膨張して身体のあちこちから浮き出た血管。

眼を血走らせ、口から涎を垂らしながら牙を突き立てようとしてくる様は、ホラー映画に出て来るゾンビ犬みたいだった。

狼三匹は、タイミングをずらして其々別方向に跳躍する。

野生動物が魔獣化した種は、原種のそれより体躯や身体能力が数段上昇するんだが……その上、身体に掛かる負担を考えない強化を施されているのもあって、その速さは疾風を思わせる。

狂気を感じる変質した姿とは裏腹に、散開して軽やかに地や壁を蹴りながら正面と左右の三方から襲い来る様は、野生にあった頃の彼らの狩りでの動きを想像させるものだ。

だが残念――イヌ科に類する獣はこの世界における最上位と霊峰で遭遇済みである。

慣れてる、とまでは言わんが四足の獣の動きは最速のものを体験済みって訳だ。

この狼達も身体を弄られて基礎スペックは上がっているのだろうが、やはりあの辺りのトンデモ霊獣とかと比べると五枚六枚――或いはもっと格が落ちる。
体内で魔力を練りながら、先ずは正面から大口を開けて突っ込んでくる一匹の脳天へと、カウンター気味に掌底を撃ち込む。
軽い練りであるが《命結》の打効を乗せた一撃は、無理くりに強化されて歪になった生物の気脈には効果大だ。魔獣は加速した身体の勢いすら殺せず、俺と擦れ違う様にして力無く床を滑って転がっていった。
掌底を打ったと同時に真上に跳躍していた俺は、既に通路の天井へと脚を着けている。
左右から同時に跳びかかり、一瞬前まで俺の首と頭があった空間へと噛みついている二匹を見下ろし、足場となった天井を蹴った。
魔獣が着地するより先に降りたち、その首筋へと指先を突き立てる。
最初の一体と同じく、滅茶苦茶になった気脈を断たれた狼達は、その身を苛んでいたであろう苦痛から解放され、眠るようにその生を終えた。
俺が魔獣を片付ける間、警備の男達と斬り結んだトニーもあっさりと相手を斬り捨てている。
槍で相手を串刺しにした後、淀みなく抜刀してそのまま相手の喉を切っ先で斬り払う

と、彼は肩を竦めて此方に向き直った。
「お見事」
見事なのはそっちやろ。霊薬の効果があるとはいえ、よくその身体で普通に動けるもんだ。
俺の方はそう大したもんでもない。戦いというよりは、手遅れになるまで虐待を受けていた動物を介錯したに近いし。
それに、一息つくのはまだ早い――直ぐに後続の敵の応援のお出ましである。
こっからは明確に分担しよう。基本は俺が相手をするけど、危険度の高い魔獣から優先的に仕留める。打ち漏らしの人間が出たらトニー君がよろしく。
「了解。ここに来てやっとこまともな出番ッスからね、お任せを」
軽くこれからの動きを打ち合わせすると、俺達は人型と魔獣の混成集団という、戦時にはよく相手にした団体に向かって同時に地を蹴った。
俺が《三曜の拳》を用いて速やかに、なるべく苦しませずに改造魔獣達を葬り、トニーが魔獣を援護しようとする人攫い共を撫で切りにしていく。
この遺跡、道幅は結構あるのだが流石に大型の魔獣が通れる程では無い。
強化されていると言っても小型が殆ど、偶に中型のものが混じる程度の戦力では大した障害にはならず、二人で更に進む事暫し。

元気に暴れている副官ちゃんらしき魔力が段々と近付いてくる中、更に下へと続く階段を発見した。

うん、分かり易いフラグだな。ちょっと待ちたまへトニー君。

鎧ちゃんの知覚の強化倍率を上げ、周囲をチェック。

折り返し階段が続いた階下には、案の定待ち伏せの気配。芸が無いっつーかなんつーか。

視覚的に捉えてる訳ではないので詳細は分からんが、どうやら多くの戦力を集中させているその空間にはデカい扉がある様だ。

扉を背にして戦力固めてるってことは、その奥には余程重要な何かがあるのか、或いは重要な場所に繋がる道なのか。

今までの手応えからして正面突破も難しくなさそうだが……重要な場を守っているというのなら、遺跡由来の罠を仕掛けてる可能性もあるな。

じゃけん、直接とおせんぼしてる部屋に降りましょうねー。

階段からちょっと引き返し、階下に拡がる空間の真上であろう通路で腰を落として構える。

《門》の隠されていた貴族の邸宅のときと違い、石作りの古代遺跡だ。流石にさっくりと床を斬り落とせるような厚みと強度では無いので、深呼吸して気息を整えた。

生命……牽いては魔力の少ない地下の建物内は、《流天》で多量の魔力を収束させるのは少し手間取るのだが、これは難しいって程でもない。
問題は《地巡》の方だ。
俺の練度ではなるべく大地に近い接地した環境じゃないと、綺麗に魔力循環させるのは難しい。
建物内の最下層の床なら限りなく地に近いので問題無くなるんだが、下に別の階層があると上手い事魔力を巡らせられず、足元の床に霊地の魔力溜りみたいな感じで渦を巻いて溜まってしまうのだ。中量程度ならいけるんだが大量にはキツい。
これがミラ婆ちゃんなら、それこそ崖に無造作に掛けられた板橋の上でも普通に循環させるんだろうけどな！
とはいえ、何でも使い様だ。
この状況下で魔力による破壊に耐性のある分厚い床をぶち抜くというのなら、寧ろ俺の下手糞な《地巡》が良い塩梅に仕事をしてくれる。
《流天》で収束した魔力を足裏から足元の床へと巡らせ、循環が途中で引っ掛かって魔力が溜まる。
収束し、巡らせ、引っ掛かって詰まり、更に魔力が溜り、渦を巻き。
この繰り返しで遺跡の床にアホみたいな量の魔力が蓄積されていくのを見たトニー

が、俺が何をするのか察して慌てて距離を取った。いや、遠いて。其処まで離れなくても大丈夫やぞ？　多分。

幾度か繰り返すと、そろそろ目算ではいけそうな魔力が溜まった。流石にこの量だと階段下で待ち伏せてる連中に魔導士がいれば直ぐに気付くだろうし、さっさとやるか。

更に腰を落とし、掌を膝に着いて体重を預けると、腰割り――力士が四股を踏む体勢を取る。

……せーの、どす……こいっ、っとぉ!!

体重を片足にかけ、上体を傾ける事で高々と跳ね上がった逆の足を、そのまま渾身の力で床に叩きつけた。

溜りに溜まった上、半端に圧縮されてとぐろを巻いている純粋な魔力が、攻性魔力を上から無理くりに捻じ込まれて連鎖反応を起こす。

ベキベキベキィ！　っと地下で聞いたらめちゃくちゃ不安になる音と共に、見える範囲の床一面が罅と亀裂だらけになった。

「うぉぉっ!?　ちょっ、旦那！　大丈夫なんスかコレ!?」

自分の足元にまで走った亀裂に、トニー君が小さく悲鳴を上げて後退る。

だが、これはいうなれば起爆準備――純粋な魔力を攻性を持った炸薬に変えた状態だ。本命は次よ。

石床に踝まで深々と埋まった右脚へと体重を預け、今度は左足を高々とあげる。
最初の四股以上の魔力を脚に装填したのを見た戦友の顔から、何故か血の気が引くのが見えた。
「いやいやいや、一旦待って下さい旦那！　思いっきり威力過多――」
オ　ル　ァ　!!（渾身
「嫌ァァァッ!?」
俺が左の四股を床に叩き込むのと、トニー君が悲鳴を上げて壁に剣を突き立て、その柄にしがみ付いたのはほぼ同時だった。
ダムが決壊するような音を立てて、亀裂の隙間から魔力光が膨れ上がる。
四股をぶち込んだ箇所を基点に分厚い石の床が更なる悲鳴をあげ――耐久限界を超えた瞬間、一気に崩落した。
石が砕ける音、石材同士が叩きつけられて擦れる音、何処かに新たな亀裂が走る音。全てが混然一体となった崩壊音となり、大量の瓦礫に変わった半径数十メートルほどの範囲の石床は、本来なら長い階段が必要となる更なる地下の空間へと向けて雪崩れ込む。
強化した知覚に、トニー君の悲鳴の他に何人か別の人間の悲鳴も聞こえた。どうやら階段の方も崩落したらしく、下で待ち伏せてた連中が巻き込まれた模様。

ドンマイ、瓦礫の山から出てこれたらちゃんとトドメ刺しにいくから頑張ってね！

崩落による階下への土砂は1分程で収まった。

崩れる床の破片を蹴って滞空状態をキープしていた俺は、最期の大きな瓦礫が落ちると同時に天井がぶち抜かれてスッキリ高くなった下の階へと着地する。

――うむ、ちょーっとだけ予想より範囲が広かった。けど遺跡全体が崩落する様なダメージでは無いからセーフで。

「アウトッスよ!?　閉所で殲滅級の魔法ぶっぱなした様なもんじゃないスか！　どこら辺にセーフの要素あったんスか!?」

降って来る声に上を振り仰げば、ここからだと20メートル程上となった上階の壁に剣を突き刺し、壁面にへばりついているトニーの姿が見える。

おう、問題無くショトカ開通できたし、そっちも無事で何より。

「無事どころか危うく生き埋めになる処だったんスけど!?」

いや、あんな分かり易い溜めのある一撃に、お前さんが対応間に合わない訳が無いやろ。実際完璧に安全な位置をキープしてるやん。

「喜べばいいのか、そんな嫌な信頼はいらないと突っぱねればいいのか分からねぇ……！」

樹木に留まった蝉みたいな体勢で懊悩を垣間見せる戦友の事は一旦置いて、四分の一

程が瓦礫で埋まった自分が降り立った部屋を見渡す。
上階の床とこの階の天井が崩れて落ちたっていうのに、まだまだ広い――ってホントに広いなこの部屋。下手な家くらいなら数件すっぽり入りそうだ。
瓦礫で埋まった箇所以外を見ても何も置いて無いし……一体何に使っとるんや此処。
只々ひたすらにだだっ広くて天井の高い空間を見渡し、この場の使用用途が読めずに首を傾げる俺だったが……ふと思いついて真顔になった。
床をぶち抜いたので通って来なかったとはいえ、入口は人の背丈を優に超える頑丈で大きな扉。
遺跡内部でもおそらく最大に開けた、何も無い空間。
……これってアレじゃね？　元居た世界のゲームとかでよくあるマップの最奥とかその手前にあるやつ。
其処まで考えた瞬間だった。
先の崩落の続きかと思う様な、重低音の地鳴りが地下であるこの場所一帯に鳴り響く。
瓦礫が降り積もって埋まった部屋の一部、こんもりと小山の様になった土砂が鳴動し、盛り上がったのを見て、俺は頭上に向かって声を張り上げる。
――飛び降りろ、トニー！

叫んだ声色に切迫したものを感じ取ったのか、トニーは躊躇うことなく壁を蹴りつけて剣を引っこ抜き、そのまま落下して来た。

俺が落下中の彼に向かって跳躍するのと、盛り上がった土砂が吹き飛ぶのはほぼ同時だ。

凄まじい勢いで弾け飛んだ瓦礫が四方八方に飛び散り、壁に叩きつけられる。上階にまで飛んだ物は壁や天井にまでめり込み、拉げ、ベッコリとへこんだ。

向かって来る石片や瓦礫は全て叩き落とし、トニー君を空中キャッチ。そのまま部屋の奥――更に奥へと進むための扉の前へと放り投げる。

「ちょおおおおっ!?」

悲鳴を上げながらも空中でくるりと一回転して着地の体勢に入ったトニーに背を向けると、俺は飛んでくる瓦礫や石片を打ち落しながら着地した。

大量の土砂や瓦礫を吹っ飛ばして強引に出てきたのは、１０メートルは優に超えそうな巨体を誇る《岩人形（ゴーレム）》だった。

いうても、岩場や山岳地帯に自然発生した様な、自然石に自我の薄い精霊が宿ったような類では無い。

厳つく、ずんぐりむっくりした体型だが、その岩の体躯はキチンと左右対称な人の形状（フォルム）をしている。

胴に匹敵するくらい太い両腕には、盾としても槌としても機能しそうな分厚く、四角い装甲。その表面には魔力導線が走り、魔装処理が施されていた。

明らかに人工的なカスタマイズと強化が施された個体だ。《守護人形（ゴーレム）》、と呼んだ方が正解に近いやろな。

やっぱ此処はボス部屋かい。こんな処までお約束を踏襲しなくてもいいだろうに。

デザイン的にも、この遺跡を占拠してる連中の手駒じゃなくて遺跡の防衛機構っぽいな。こんなもんが鎮座してるってんなら、そらこの部屋に資材だの機材だのは運びこめる筈もねーわ。

少しボロっちいというか、細かな傷があちこちについてるし……多分、一度は無力化したものなんだろう。

完全に壊さなかったのは防衛戦力として再利用したかったのか、何かの研究に使いたかったのか。

部屋の隅に転がってたもんが、上から降り注ぐ土砂と瓦礫（目覚めのシャワー）で再起動しちゃった感じかもしれん……やらかしたわ（白目

しゃーない。俺のミスで寝た子を起こしたというのなら、責任もってもう一度寝かしつけるとしよう。

奥の扉の真ん前に着地成功したトニー君が、《守護人形（ゴーレム）》に気付いて此方に駆け寄って

来るのを手を突き出して制す。
――こっちは俺がやる！　そのまま奥へ進んで副官ちゃんと合流してくれ！
彼女の魔力はもう大分近い。この距離なら向こうも俺達に気付いてる可能性があるし、直ぐに再会できるだろう。
叫ぶついでに腰の後ろに下げていた、刀身を布で包んだ短剣（ダガー）――副官ちゃんの落とし物を手に取り、放り投げる。
危なげなくそれをキャッチするトニーだが、出てきた大物を俺に任せて先に進むのに躊躇いがある様子だった。
「旦那ならあのデカブツも問題無いでしょうが……どうせなら二人で戦った方が早くないスか？」
いんや、俺のせいで起きた可能性もあるしね。自分のケツは自分で拭くよ。
それに、入口の方は崩落したけど奥の扉はまだ健在だ。《守護人形（ゴーレム）》との戦闘中に奥から援軍が来て挟撃されるってのも面白くない。
なので、挟み撃ち防止も兼ねてトニー君には一足先に進んで欲しいのだ。
怪我の事もあるし、なるべく無理はさせないように立ち回って来たが……此処に来てガッツリ頼る事になっちまった、スマンね。
「物は言い様ッスね……けどまぁ、乗せられておくッスよ――御武運を」

あいよ、そっちもな。

おそらくは苦笑を交じりであろう言葉と共に、踵を返す気配。

俺のソレっぽい言葉に一応は同意を示してくれたが、本当の処はこっから先を独りで進むより、この《守護人形（ゴーレム）》を相手にする方がよっぽど身体に負担が掛かる事くらいは気付いているのだろう。

実際の処、床を抜かずに正面からこのボス部屋に入ったとしても、待ち伏せていた連中の手で再起動はされてたと思う。伝声管くらいはこの部屋にも通ってるみたいだし。

おそらく戦闘は避けられなかった。けど、ぶっちゃけ見た感じ、今のトニー君にはこのデッカい奴の相手は厳しい。

万全ならまた話は違うんだろうが……この場に限っては足手まといになってしまう、ってのが正直な処なのだ。

単独で先に進む方がずっと安全度的に上なので、理屈をつけて先に進ませた感じだ。ほぼ確実に向こうも気付いてるけど。

最奥エリアの防衛機構として存在している《守護人形（ゴーレム）》が、侵入者相手に様子見なんてする訳も無く、胸部にあるレンズっぽい部分に魔力が収束し、砲撃となってぶっ放される。

見た目レーザー砲みたいな浪漫溢れる攻撃やな。キミ、製造・監修に転移者が関わっ

てたりしない？

迫りくる魔力砲に向かって《流天》を発動。絡め取った魔力を逸らし、奥の扉に向けて矛先を変えてやる。

瞬きの間にトニー君を追い越した砲撃は直撃と同時に爆発。部屋の大きさに順じた頑強且つ巨大な扉は、吹き飛びこそしなかったものの、大きく拉げて歪に歪んだ。

施錠されてる可能性もあったんで、マスターキー代わりに利用させてもらった。丁度いい感じに隙間も空いたし、あれなら鍵とか関係なく通れるやろ。

トニー君が「産毛がチリッてしたッス」とかボヤきつつ、焦げた扉の隙間へと身を滑り込ませたのを横目で確認すると、俺は改めて巨大な《守護人形（ゴーレム）》へと向き直った。

――さて、折角起きて来た処を悪いけど、即行で寝て貰うぞ。というか、帰りは副官ちゃんも一緒だろうし、さっさと帰りたいからスクラップコースや。すまんな。

材質こそ遺跡と同系の岩だが、どっちかというと重量級のロボっぽいデザインな眼前の《守護人形（ゴーレム）》には心惹かれるものがあるのだが……安全には変えられないしね、仕方ないね。

腰を落とし、構えを取った瞬間だった。

岩で構成された巨体の背後で魔力が膨れ上がり、ここ数時間ですっかり見慣れた光が溢れると同時……転移の魔導具による《門》が起動する。

そのサイズたるや、今夜見たものの中でも最大。それこそ、規模の大きい軍隊を長距離移送するときに使う様な巨大なものだった。

そこから出て来たのは軍隊ばりの大人数では無く、たった一匹――だが、下手な軍に匹敵する存在だ。

太く、発達した前脚が、石床を叩くように《門》の向こう側から現れる。

鋭い爪で床を抉りながら、肩、頭、と順に姿を現したソレは、《守護人形（ゴーレム）》に匹敵する巨体をゆっくりと《門》に潜らせ、縦に割れた瞳孔で周囲を睥睨した。

額から伸びた角、突き出た口にズラリと並ぶは岩でも噛み砕きそうな牙。

そして全身には、鱗と呼ぶにはあまりにも分厚く、重い外骨格。

竜（ドラゴン）――それも、翼を持たない代わりに頑強さと地上での戦いに長けた《地竜（アースドラゴン）》だ。

しかも、その甲殻の表面には本来生物に存在する筈のない魔力導線がはしり、竜という種の持つ莫大な魔力に共鳴して明滅してる。

……こいつも改造されてるのかよ！　こんな平均点がゴロツキに毛が生えた程度の戦力しかいねー組織で、よく捕獲できたなこんな大物（モノ）！

この拠点での岩塊の番人と並ぶ切り札って処か。大きさ的にこの部屋でしか運用できそうにないし、そら使うわな。

下手な家よかデカいサイズの巨躯が二体も出てきたせいで、だだっ広いと感じだ空間

が一気に圧迫感を増す。

……いや、単にサイズの問題ってだけじゃないな。

眼前の二体は、遺跡の防衛機構と勝手に遺跡を根城にしてる連中の実験体――本来ならその場で怪獣大戦争が起こるであろう関係性だというのに、反目する事なく、俺だけを見据えている。

何か敵対認定を解除する様な処置を施してるのか、単に一番厄介だと判断した相手を優先的に潰そうとしてるのかは分からない。

確かなのは、この二体を同時に相手するってのは中々に厄介って事だ。少なくとも邪神の下位眷属よりは絶対にめんどくさい。

でもまぁ、なんだ。だからこそ良かった。

だってこれ、《刃衆（エッジス）》の三人一組（スリーマンセル）小隊や騎士団だと犠牲者が出る可能性があるし。

隊長ちゃんやネイトなら単騎でも問題ないし、なんなら副官ちゃんもきちんとフル装備で体調万全なら十分勝ちの目があるだろう。

でも、負傷くらいはする。可能性は低いが、最悪の事態だって無くはない。

だからこれで良い。相手をするのは俺で良い。

日夜、厳しい訓練を積んで民草の為に戦う騎士に対して、侮りにも近い発言なのかもしれないが……この上、更に怪我人とか出て欲しく無いのだ。

ただでさえトニー君が重症負ってるし、副官ちゃんは俺が下手打ったせいで攫われたしね――これ以上は誰もやらせねぇよ。

先ずはこいつらを狩る。

そうすれば、残る厄介な相手は多分一人だけだ。展開としては望んだパターンに近いだろう。

ゆーても、最後の一人――あの剣士がまだこの先にいる確率は低い、とは思ってるが。

《地竜（アースドラゴン）》が咆哮を上げ、そのぶっとい前脚を振り上げた。衝撃すら含まれた大音量に遺跡の壁が軋みを上げて振動する。

隣の《守護人形（ゴーレム）》は再度胸部へと魔力の収束を始めた。

並の戦士ならその光景だけで心折れ、一流処でも決死の戦いを予感するであろう威圧（プレッシャー）。

相対した俺は、怯むことなく前に出る。

俺自身はショボくとも、鎧ちゃんと一緒に超えて来た戦いの経験値だけは一丁前という自負くらいはある。今更この程度で竦むかよ。

――俺をビビらせたきゃ、岩の下に筋肉付けてこい！　もしくは繁殖期に幼体に求愛する特殊性癖に目覚めてみろオラァ!!

振り下ろされる凶悪な鉤爪の生えた前脚、放たれる魔力の砲撃。

開幕の一撃と共に突っ込んでくる二つの巨躯へと向け、気合を入れる代わりに啖呵を切り。

低い姿勢に構え、全開の身体強化と共に俺は前へと飛び出した。

夜明け前（前編）

なんとも胡散臭い立ち回りを見せる疵面の剣士から装備を返却され、いつもの騎士服姿を取り戻したアンナ。

愛用の二振りの内、片方が無いのは少しばかり落ち着かないが、それでもさっきまでの下着姿よりマシ、程度の格好と比べれば雲泥の差だ。

装備が整った事で更に手早く、あっさりと襲い来る連中を蹴散らす事が可能になった訳だが……肝心の脱出に関しては難航中であると言わざるを得ない。

代り映えのしない石造りの通路を進んだ先にも、やはり同じ光景が広がっている事に少女の顔がうんざりとしたものになる。

「……入り組み過ぎ。迷宮か」

定期的に湧いて出て来ては襲い掛かって来る人攫い共が床に転がっているので、来た道すら分からなくなる、という事は流石に無いが……いい加減に何かしら別の目印になるものが欲しい処だ。

行き止まりにすらぶつからないこの状況だと、出口に近づいているのか、遠ざかっているのかすら分からない。正直言って気が滅入る。

次に来た奴は多少手間でも丁寧に無力化して道案内させようかと、本気で考えてしまう。

望む道へと素直に案内するとも思えない。寧ろ道案内のフリをして罠に掛けて来る可能性の方が高そうなのだが……それを加味しても一人で闇雲に進むよりはマシな気がしてきた。

が、タイミングが良いというべきかなんというか。

「お、あれって扉？　しかもちょっと立派ね」

薄暗い道を進んだ先、薄っすらと見えてきたものを見てアンナの表情が明るくなった。

ようやっと見飽きた単調な道に変化が起きた事に、足取りまで軽くして扉の前に歩み寄る。

手を伸ばし、重厚な金属製の表面に触れようとした瞬間――背を向けた方角から膨れ上がった爆発的な魔力に気付いて動きを止めた。

距離的には少々離れているが、こんな強力な攻性魔力を勘違いする筈も無い。

「……あの馬鹿、案の定首を突っ込んできたか」

口調こそ呆れが滲んでいたが、アンナは何処となく機嫌の良くなった様子で背後を振り向く。

間違いない、魔力の主は彼女の友人である青年――正確にはその武装たる魔鎧のものだ。

後方から魔力を感知したということは、単純に考えれば正しい脱出への方向は逆だったという事だろう。

「うーん……露骨に立派な大扉だし、気にはなるけど……」

背を向けた扉を横目に、少しだけ悩む――が、結論は直ぐにでた。

先ずは魔力の発生した方向へと向かい、青年と合流する。

そうと決めたアンナは、早速魔力の発生源の方向へと駆けだす。

幸い、彼女の方は殆ど消耗してない。精々があのスカシ野郎に気絶させられたときに打たれた胴部分がちょっと打ち身になった程度だ。

一方で此処まで魔力が届くと言う事は、青年は中々派手に暴れているという事。

状況によっては合流してそのまま手を貸してやろう。互いに余力がある様なら改めて此処に戻ってきてこの扉の向こうを調査――もっといえばこの拠点を制圧してしまってもよい。

（……尤も、あの馬鹿が本気で殴り込みに来てるなら、もう大体の敵は片付いてそうだけ

ど）

駄犬の飼い主であるレティシア達程では無いが、伊達にアンナも付き合いが長い訳では無い。

青年の着火点やスイッチが入った時の行動は大雑把にではあるが、想像出来た。

おそらく、彼の侵入経路は相当に血生臭い事になっているだろう。敵の壊滅・殲滅が求められる仕事ではアテになる男だが、制圧となると途端に殺り過ぎ注意になる。

調書や重要な証言の為に必要な者まで真っ二つにしてない事を祈るのみだ。何せ、この場所に攫われた当人であるアンナも報告書や始末書の類はガッツリ書く事が確定しているので。

とはいえ正直な処、何と戦っているのかという疑問はある。

人攫い共の戦力を見る限りでは、青年が本腰を入れて戦う相手などあの剣士――ジャックくらいしか思い浮かばないのだが……。

多分、あの男はもうこの拠点には居ないだろう。先刻の僅かなやり取りから、アンナはそう確信していた。

駆け足のまま、先程自分が選んだ分かれ道を再び曲がろうとして、角の奥から聞こえてきた足音に舌打ちしそうになる。

（ったく、もう新手が来たって？　しつこいっての！）

止まる事無く飛び出し、取り戻した愛剣の片割れを振るう。
出会い頭に繰り出したショートソードの一撃は、角から走って来た相手の肩を打つ軌道で銀光を閃かせ――その途中に差し込まれた剣によって受け止められた。
（――！　コイツ、結構やる……！）
石牢を出てからというもの、何れも手加減した一撃で終わる相手ばかりであったが、此処に来て意外な実力者とカチあった。
多少驚きはしたが、それで怯むアンナでは無い。咄嗟に剣の柄を両手で握って鍔迫り合いに持ち込もうとして――。
「待った待った！　副長、自分ッスよ！」
薄暗い通路の中、慌てた様子で制止の声を上げた相手が、自分の部下である事に気が付いた。
「……なんでアンタまで此処にいるのトニー？」
「なんでって、そりゃ当然、今回の作戦に参加したからッスけど……って、なんで鍔競り合い続けるッスか!?　あ、ちょっ、ジリジリ押し込んでくるのやめて!?」
「私の記憶が確かなら、アンタ重症で碌に動けない筈だったと思うんだけど」
「……あっ」
あっ、じゃねぇ。

思い出した様に小さく声を上げ、顔を引きつらせるトニーを見て、そのままその額に頭突きを叩き込みたくなる。流石に怪我人相手なので自重したが。
「いい加減、あんな劇物擬きを飲むの止めろって言ったでしょうが」
「あ、いや……今回はやむにやまれぬと言うか、流石に部隊総動員の状況でベッドの上はちょっと心情的に無理だったというか……」
「その辺りの釈明は後で聞くわ。シャマ辺りも誘って一緒に」
「オッフ……」
鍔迫り合いの距離で半眼の上司に後の説教を約束され、白目を剥くトニー。
本人の手前、きっちりと釘を刺しも兼ねた対応をしたが……実はアンナ自身はそこまで怒っている訳でも無い。
というか、元はといえば負けてとっ捕まった自分の責任である、と認識していたので怒るに怒れないというのが正直な処か。
無茶をした部下への怒りや己の不甲斐無さ、諸々によって湧き上がって来た苦い思いを吐き出す様に。
少女は噛み合わせていた剣を離して、軽く溜息を一つ漏らした。
「――取り敢えず、外はどういう状況になってるのか説明して。手短にね」

説明自体はアンナの要望通り、極短いもので終った。
彼女が攫われた事が切欠となり、日没と同時に人攫い連中――その背後にある犯罪組織の施設・拠点へと一斉強襲作戦が開始。
本来は時間や《大豊穣祭》に割く人員などの兼ね合い、王城内の内通者など諸々の問題もあったのだが、大体駄犬のせいで解決。問題無く作戦決行と相成った。
「というか、戦力過剰過ぎるわ。《魔王》陛下まで顎で使うとか自重を忘れすぎでしょアイツ」
「そんだけ旦那もガチだったって事ッスよ。実際、副長が此処で暴れ出すときまで滅茶苦茶不機嫌でしたからね」
言動はそこまで大きく変わらないのだが、態度はフラットのまま敵対者への殺意だけが高くて肝が冷えたと、トニーが半笑いで続ける。
頭痛を感じたかの様に、掌を額に押し当てたままアンナは天を仰いだ。
（だからさぁ……そーいうのはレティシア達か隊長相手にやれってのあの駄犬は……）
なんだかんだといって、身内や親しい者判定を出した相手にはゲロ甘な男だ。
少なくとも、アンナが悪党に攫われると本気で怒って即行動に移る程度には判定内ら

しい。
正直に言えば、悪い気は……まぁ、しない。
しないのだが、他にもっとソレを向ける相手がいるだろうが、と思う次第である。
一方、現在の状況やそこに至るまでの経緯を上手い事まとめて語り終えたトニーだったが、ついでに何かを思い出したのか、両の手をポンと打ち合わせて口を開いた。
「そうだ、危うく忘れる処だったッスよ――副長、これ、旦那から預かったお届け物です」
そう言って手を後ろに廻し、腰のベルトに挟んでいた物を抜き取る。
眼の前に突き出されたのは丁寧に布が巻かれ、刀身が保護された短剣（ダガー）――てっきり今回のゴタゴタで紛失したと思っていたアンナの愛剣の片割れである。
「……」
部下の差し出した己が得物を、無言で受け取る上司。
巻かれていた布切れを外し、腰に下がった空の鞘に短剣（ダガー）を収めると、トニーに背を向けて少女は再び天を仰ぐ。
「……変なとこでマメなやつね、ホンッと」
何処となく疲労感すら感じさせる声色で呟かれる声。だが、その背から感じられる雰囲気は決して不機嫌なものでは無い。
（あ、頬が緩んでるッス）

持ち前の観察力で暗がりの中でもいらん事に気付くトニーであったが、決して口にも態度にも出さない。寡黙であることが必ずしも良い事であるとは限らないが、少なくともこの場においては沈黙は金であると確信があった。というか指摘したら絶対不機嫌になる。

敵地のど真ん中でありながら、なんとなく穏やかというか温いというか……何とも言えない空気になった、そのときだ。

二人の背後――少しばかり離れた場所から、再び強大な魔力の波動。

激しい戦闘によって放出されたのであろうソレに、二人の表情も場に相応しく真剣なものへと戻る。

「どうするッスか副長。このまま旦那と合流して此処を離脱ってのもアリだと思いますが」

部下の言葉に少女は顎先に指を這わせて俯き、数秒考え込む。

元よりそう熟考が必要な判断でも無い。伏せた顔は直ぐに上げられた。

「……アイツが戦ってるのは遺跡の防衛機構、って言ったわね？」

「ですね。情けない話ですが、体調を気遣われて先に行けと言われた形ッス」

「なら、このままこの施設の制圧に移るよ――《守護人形（ゴーレム）》程度ならあの馬鹿はどうやっても負けない。こっちはこっちで他の戦力を片付けましょう」

普段から馬鹿だ駄犬だと扱き下ろす機会の多い青年だが――戦友としては最上位の信用・信頼を寄せるに不足無い。調子に乗られるのもムカつくので絶対本人には言わないが。

奴がこの拠点内の最大戦力を引き受けるというのなら、その間に自分達もやるべき事をやる。

負けてみっともなく攫われた身ではあるが、自分は《刃衆（エッジス）》の副隊長だ。

部下が各地で奮闘してるというのに、五体満足で十分に戦える身でありながらお姫様よろしく救出されるだけ。

そんな情けない真似は、アンナの騎士としての矜持が許さなかった。

上司の言葉はある程度予想していたものだったのか、部下の青年は特に驚く事も気負う事も無く、軽く敬礼して見せる。

「了解ッス――しかし、そうなると副長を此処に連れてきた……ついでに言うなら自分を散々に刻んでくれた男の動向が気になる処ッスね」

「……多分、もう此処にはいないわ。ってか、居たとしても敵対するかも怪しいと思う」

怪訝そうに首を傾げるトニーへと向け、アンナは脱出後に遭遇した転移者の剣士の行動についてざっくりと語った。

当然、聞かされた側もその行動原理というか、底にある真意を理解する事は出来ない。

意図の読めないジャックの行動に、二人揃って困惑を抱える事となった。
「マジッスか……一体何が目的なんスかねぇ……」
「そんなの私が知りたいわよ――まぁ、それはそれとして色んな意味で借りは返したいけど」
会話を続けながら、アンナが駆け戻って来た通路――先の大扉がある場所まで歩みを進める。
二人が遭遇した場所からそう距離も無い場所だ、時間も掛からずに直ぐに辿り着いた。
扉を眺め回し、各所をチェックしながらトニーが頷く。
「確かに如何にも何かある、って感じッスね。《守護人形（ゴーレム）》のあった部屋の入口もそうでしたけど、あっちは旦那が上階ごと天井を崩落させたんでそもそも通ってねーし」
「地下に作られた遺跡で何やってんのよアイツは」
「待ち伏せの回避って点では効率的だったんスけどね……っと、取り敢えず、罠の類は無いようで」
確認を終え、ドアノブの類の無い大扉を掌で押すと僅かに動く感触があった。
「……鍵も掛かってないみたいッス」
「好都合ね。待ち伏せだけは警戒して進むよ」

扉の向こうから一斉攻撃がある場合に備え、アンナはトニーを下がらせる。
部下が壁に張り付いたのを確認すると一旦収めた二刀を再び鞘から抜き、彼女はそのまま足を振り上げ、大扉へと靴底を叩きつけた。
分厚く、重量ある金属製の扉が、酒場の小さな押扉（スイング・ドア）の様な速度で豪快に開け放たれる。急激に掛かる荷重に蝶番が軋んで悲鳴を上げた。
警戒した待ち伏せによる攻撃は無い。
――が、《守護人形（ゴーレム）》が配置されていた部屋と同じような広く殺風景な空間の中心には、アンナ達を待っていたかの様に一人、剣を片手に立ち尽くす者の姿があった。
魔装処理の施された片刃の曲剣に、身体にフィットした暗色の軽装鎧。
色白の肌と、やや色味の薄いショートカットの亜麻色の髪。
アンナと同じ碧眼は、今は両方とも閉じられた瞼の下に隠されている。
待ち受けていたのは闘技大会で一度剣を交え、数時間前にアンナを姉と呼んだ少女――ファルシオンであった。
『ふ、ふん、やっと来たか。帝国のさ、最精鋭を謳う割にはぞ、存外にもたついたものだ』
目を閉じた儘の亜麻色の髪の乙女は黙して動かず、代わりに室内に設置された伝声管が震えて滑舌のよろしくない男の声を吐き出す。
『ば、馬鹿な真似をしたな”片刃（エンハンス）”。お、大人しく検体としてのや、役目を果たせば”

曲剣(ファルシオン)”のよ、予備程度の扱いは――』
「誰ッスか？　この舌回らないのに語りが好きそうな声」
「博士(ドクトル)、だっけ？　ここで研究してる連中の中で上役にいるっぽい奴よ。ジャック(スカシ野郎)に私を連れて来るように指示したのもコイツ。ある意味今夜の作戦の切欠になった男ね」
「敵サンにとっちゃ大戦犯じゃないスか。普通に殺されそうなもんスけど何で生きてるんスか」
『う、煩いぞ貴様ら!!』
小指で耳でもほじりだしそうな態度の《刃衆(エッジス)》二名の会話に、伝声管から伝わる声が癇癪を滲ませて一段高くなる。
ファルシオンが微動だにしない分、伝わって来る声――博士(ドクトル)のヒステリー染みた甲高い声が対比で酷く喧しく感じるのだが、当の博士(ドク)は取り繕えていると思っているらしい。直ぐに無理矢理抑揚を押さえた様な奇妙なトーンで勝ち誇った声色となった。
『の、のこのことやってきた侵入者は、に、二名。ひ、一人を捨て駒にして此処まで来たようだが……あ、あの部屋には防衛機構のほ、他にも組織でも最大の魔装化獣を、は、配備させた』
散々に施設で大暴れした者達への意趣返しのつもりか、脱走者と侵入者へと向けられる言葉は癇癪の代わりに嗜虐性が滲みでている。

『ちょ、超人に匹敵する戦力でも無い限り、しょ、少数であの二体に勝つのはふ、不可能だ。お、お前達の同僚は、とうに潰されている。お、同じく、お前達も脱出は不可能なのだよ』

「あっ」（察し

『……な、なんだその反応は』

「いえ、別に」

博士（ドク）からすれば、侵入してきた者達の中に帝国内で最大に警戒せねばならない《刃衆（エッジス）》の長と顧問、騎士団のトップたる将軍……三名の人外級の姿が確認出来なかったが故の勝利宣言にも似た宣告だったのだが……驚愕に打ちのめされる筈の二人が上げた気の抜けた声に、逆に怪訝な反応となる。

「……他の場所も一斉にやべー面子にカチコミされてるって知らないんスかね？」

「聞かされてないんじゃない？　アンタの言う通り戦犯だし、言動のせいで人望とは無縁そうなタイプだし」

特に声を潜める事も無くやりとりするアンナとトニーだが、戯言だと判断したのか、ただのハッタリだと決めつけているのか、伝声管からは鼻で笑う様な音が伝わるのみだ。

実際、拠点同士での情報の伝達がお粗末である事を除けば組織の――博士（ドク）の判断はそ

う的外れなものではなかった。
動いたのが帝都の騎士団のみであるならば、その日の内に動かせる戦力では《門》全域を強襲など出来る筈も無く、人員を強引に掻き集めれば王城内の協力者から組織へと直ぐに密告が為される。
万が一、帝国にその存在を気取られたとしても、本格的に捜査の手が伸びる前に十分な人員、研究成果や資料を確保して帝国外に脱出できるだけの手段は整えてあったのだ。
暴力方面での人材こそ質が低かったが、組織の規模の大きさに相応しく、事前の仕込みや保険は十分だった。
彼らの致命的な失態はただ一点。
国家の枠などガン無視して”奪われた友人を取り戻す”その為に、多数の人外級に協力を仰いでジェノサイドパーティーを開催する猟犬(狂人)の存在。
それを他国の者である、という対外的な縛りが利くと判断して勘定に入れなかった事である。
『ふん、ま、まぁ良い。失敗作であった筈が、こ、後天的に性能を開花させた片刃(エンハンス)シリーズの生き残り……貴重な検体ではあるが、す、既に体組織の情報は採取した。い、いちいち逃げ出すような検体を時間を掛けて躾ける程、わ、私は暇ではない』

己の属する組織が大炎上を通り越して燃えカスになりかけている事に気付く事も無く、研究班の総主任は自らの手掛けた最新鋭の検体へと命を下す。
『”曲剣（ファルシオン）”、ちょ、調整後の性能試験代わり、だ。そいつらを処分しろ』
「……了解しました」
命令に応え、広い部屋の中心に立ち尽くした儘であった少女の双眸が開かれる。
「この様な事になってしまったのは残念です、お姉様」
「え、マジッスか。副長、妹さんいたんで？」
「ンな訳あるか。ファルシオン、アンタもお姉様呼びはやめなさいって言ったでしょうが」
博士（ドク）の台詞から上司の出自に関して色々と推察できる事は多かったが、些末事として気にしない事にしたトニー。
それよりに何より亜麻色の髪の乙女が口にした言葉の方に気を取られた彼に、当のアンナから裏拳でビシッとツッコミが入る。
何処か哀しそうな、沈痛な雰囲気すら感じらせるファルシオンに対し、悲壮感とは無縁の軽い調子でやり取りする《刃衆（エッジス）》二人と、中々に温度差がある状態で彼女達は対峙する。
軽口こそ叩いていたが、騎士二人は油断していた訳では無い。

１０メートル程の距離を置いて向かい合う少女の一挙手一投足、身に纏う魔力の動きにもしっかりと注意を払っていた。
それだけに瞬きの間に眼前より消え、一瞬で背後に移動したファルシオンに驚愕を覚える事となる。
「トニーッ！」
「――ッ、とぉ!?」
背後で突きの体勢を取った『超人兵計画』の実験体の少女に、アンナが瞬時に反応して部下との間に身を割り込ませ。
自身が狙われている事に気付いたトニーが、振り向く間も惜しいとばかりに前方へと身を投げ出して床の上を転がって距離を取る。
空を裂いて捻じ込まれる曲剣の切っ先と、迎え撃つ二刀が鋼の打ち合う音と共に火花を散らす。
魔力を通した魔装の刃同士が放電（スパーク）にも似た余波を散らす中、鍔迫り合いの距離で少女達の碧眼が睨み合う。
「初見でこれに反応するのは流石です、お姉様」
「影渡り……吸血鬼（ヴァンパイア）の能力を人間のアンタが使うとはね……！」
影を扱う能力全般は、吸血鬼（かれら）の種族特性に依るものだ。

魔法で似たような真似が出来ない訳では無いが、影を渡るような高位の技術は純血か、最低でも半吸血鬼（ダンピール）程の”種族としての血の濃さ”が必要になる。
見た目や魔力の波長からして通常の人間種であろうファルシオンが扱うには、余りにも異質な力だ。
アンナの眼に怒りに近い感情が灯った理由は、嘗て戦場を共にした戦友達の同胞までもが非道な実験に巻き込まれていた事に対してか。
或いは種族としての肉体規格からはみ出た、負担も大きいであろう能力を十代も半ばの少女に植え付けた博士（ドク）に対してか。
『と、闘技大会では使用可能な機能にせ、制限をかけていた。お、お前の血液から採取出来たちょ、超人の魔力因子も加えた今、”曲剣（ファルシオン）”がお前をう、う、上回ったのは明白だ』
「トニー！　室内にある入口以外の扉を探せ！　ペラペラ煩い外道の舌を引っこ抜いてこい！」
伝声管より垂れ流される喜悦を含んだ声を断ち切る様、アンナが叫ぶ。
魔力迸る鍔迫り合いを続ける上司の声に込められた本気の怒りを感じ取り、助勢しようと剣を構えたトニーは静かに切っ先を下ろした。
「……この場はお任せしても良いんで？」

「誰にモノ言ってる！　良いから行きなさい！」
「――了解、御武運を」
踵を返して室内の壁面へと向かう騎士の青年の背を、ファルシオンが一瞬目で追い――直ぐに視線は眼前の銀髪の少女へと引き戻される。
その視線の意味を正確に察したアンナが、ニヤリと口角を吊り上げた。
「やっぱり短距離限定ね――部下に手を出したいなら先に私を捻じ伏せてみなさい、ファルシオン」
「……ジャック様が仰っていた通り、怖い方ですねお姉様は」
影を操ると一口に言っても、適性自体が存在しない種族で使用する能力だ。何某かの能力的な劣化や制限があると踏んだアンナの予測は的中していた。
鍔迫り合いをしていたファルシオンの足元が己が影に沈み込み、一瞬で全身まで消える。
競り合っていた相手が消えた瞬間、アンナは短剣（ダガー）を手の中で回転させ、逆手に持ち替えると背後へと突き立てた。
背後に伸びた騎士の少女の影から腕が伸び、掌が翳され。
同時に飛び出して来た黒刃――魔力操作によって生み出された影の刃が、魔装の刃によって串刺しにされて空中で縫い留められる。

「――ふんッ！」

下っ腹に力を入れたアンナが、気合と共に貫いた影を強引に引っ張った。

大魚の一本釣りよろしく、影と同化して沈み込んでいた亜麻色の髪の乙女が表へと引きずり出される。

空中へと放り出されたその勢いを利用し、優美な弧を描いた刃が振るわれ、それをショートソードが迎撃。

再び魔力を散らして噛み合った得物越しに、少女達は油断なく視線を交わし合う。

「影を貫くまでは分かりますが、釣り上げられるのは予想外でした。理不尽です」

「知り合いの司祭様は影を素手で掴んで振り回して空に高々と放り投げる位はやるっての。この程度で理不尽とか甘えるな」

調整とやらの成果か、試合で戦ったときよりもファルシオンの基礎的な身体能力は更に上昇していた。

どんな技術や理論を用いたのかなど知りたくも無いが、試合から一日と掛けずにこれ程の上り幅だ。絶対にまともな方法では無い。

単純な魔力強化込みの膂力のみならば、自身に近い領域まで無理矢理押し上げられた少女の身体を憂う様に、アンナの眉根が下がった。

だが、今は戦闘の最中。ましてや憐憫にも近い情を向ける少女はその戦いの相手だ。

己の足を引く要因となる感情は一瞬で押し殺し、剣を振るう。
二刀が閃き、曲剣と影が銀光と黒のコントラストを生み出して踊り。
昼間の試合であれば確実に前者が押し切っていた筈の打ち合いを、後者の連携は退くことなく真っ向から凌ぎ切る。
連続する剣戟、加速する鋼の激突音。
そんな中、未だ傷を負っていない筈の亜麻色の髪の少女――その鼻腔から、赤い滴が滴ったのを見止めたアンナが舌打ちと共に唇を噛みしめた。
「……投降しなさい！　今の状態が身の丈に合ってないってのは分かってるでしょう、このまま続ければぶっ壊れるわよアンタ！」
「……？　博士（ドク）から投降や戦闘停止の命令は出ていません」
「素直か!?　純粋培養にしても度を越してるでしょうが！」
自立する様に主と合わせた動きを見せていた影の槍が、枝分かれして無数の鞭となり、高速で振るわれる。
視界一杯に拡がるソレを、神速で奔る二閃が悉く打ち落し、切り刻む。
やはり無理のある能力行使なのだろう。蹴散らされた影鞭の群れの向こうから横薙ぎの一撃を見舞うファルシオン顔は、痛みを堪えるように歪んでいた。
「試合のときも言ったでしょう、アンタの技は怖さが足りない――！」

限界までその身の性能を押し上げられ、その上で持ちうる全ての能力を駆使した少女の連撃。
闘技大会の本戦出場者達でも、対応できる者は何人もいないであろうソレは……それでも《刃衆（エッジス）》の次席たる騎士には届かない。
乾坤の一刃は余裕をもって弾かれ、体を崩して無防備となった少女の腹に蹴りが叩き込まれる。
「ぐ、ぁ……はっ……!?」
魔装の鎧越しでも腹腔を貫く衝撃に、呻きと共に肺の空気が残らず絞り出された。
石床を靴底で抉りながら後退し、かろうじて吹き飛ぶのを堪えたファルシオン。
口から血混じりの唾液を滴らせ、整った面差しに苦悶の表情を浮かべて――それでも剣を手放さない。
『こ、こ、この鈍間が！　何を遊んでいる！　こ、これだけ専用の調整を受けて最初期の検体相手に手間取るだと!?　な、何のために自分が存在していると、お、思っている！』
「――――ッ！」
伝声管から伝わる罵声を受け、実験体の少女が歯を喰いしばる。
苦痛に加えて何かに追い立てられる様に更に表情が歪み、鼻腔だけでは無く双眸からも赤い筋が溢れ、頬を伝い。

赤く染まったその瞳が、気迫の炎を灯して見開かれた。
直後、アンナの足元に伸びる影が膨れ上がり、無数の鋭い棘となって彼女を強襲する。
それは以前、アンナが教国圏の小さな村で戦った爵位級吸血鬼（ハイブラッド）の使った技に酷似していた。
違うのは規模と威力は劣る事、代わりに影への魔力干渉からの発生速度が速い事――何より。
（私の影に直接干渉して攻撃を発生させたっ……!?）
跳躍して距離を取ったが、自身の影から飛び出た棘であるが故に、ピタリと発生源が追尾してきた事である。
石床を穿ちながら天へと突き上がった棘は、茨の檻の如く捕らえた少女の黒い外套（コート）を引き裂いた。

「――!? 副長……!」
壁面に隠し扉――というより隔壁らしき継ぎ目の様なものを見つけたトニーだったが、亜麻色の髪の少女から膨れ上がった魔力に振り向けば、足元より飛び出た無数の棘

に呑まれ、上司の姿が見えなくなった瞬間だった。
心臓が跳ね、血の気が腹より下に引っ張られる様な感覚を覚えたのは数瞬の事だ。
棘に無数の斬線が走り、斬り裂かれて本来の完全なる平面へと戻る。
微塵に分割された棘の檻から飛び出て来たのは、隊服である外套（コート）を脱ぎ捨てたアンナだった。
棘によって抉られ、貫かれた穴だらけの外套（コート）が、持ち主の高速の斬撃によって生じた風圧にあおられたのか、ヒラヒラと宙を舞う。
影の攻撃範囲から逃れる事が難しいと瞬時に気付いたアンナは、咄嗟に隊服を自身の足元に放り捨て、石床より遥かに魔力的干渉の困難な魔装処理のされた外套（コート）の上に自身の影を映した。
結果として影から発生した棘の本数と威力は減衰。あとは速さにものを言わせて直撃コースの棘だけを斬り払ったのである。
言うは易し、というやつだ。少なくともトニーは負傷があろうが無かろうが、同じ真似をやったら何処かでトチって死ぬ確信しか無い。
流石に無傷、とはいかなかったのか、外套（コート）の下にあった騎士服は何カ所か裂け、赤い色が滲んでいた。
だがいずれも軽傷――かすり傷だ、戦闘に支障の出る負傷は一切ない。

大技を行使した反動か、動きの鈍いファルシオンへと向け、銀の髪を靡かせながら騎士が疾走する。
「――ッ！」
「遅い」
影を操ろうとして、だがそれが間に合わず。
ファルシオンは手にした剣を正面から突っ込んでくるアンナに振り下ろすが、加速の勢いを乗せて×の軌道で振り上げられた二振りの刃は、容易く曲剣を弾いてそれを握った腕を高々と跳ね上げさせる。
「……あっ……」
万歳する様な体勢で、呆然と眼前の騎士を見つめる亜麻色の髪の少女。
銀髪の少女は振り切った両の手にある剣を、くるりと廻して逆手に持ち替え。
「――歯ァ食いしばりなさい」
昼間の試合の焼き直しの如き、その台詞と共に。
二刀の柄が同時に叩き込まれ、ファルシオンの胴鎧を容赦なく抉った。

『な、な、なぁぁっ!?　ば、馬鹿な！　何故だ!?』

伝声管から垂れ流される動揺と驚愕が駄々洩れの悲鳴に、隔壁の傍で少女二人の戦いの行く末を見届けたトニーが肩を竦める。

「勝負アリ、っスね。御自慢の検体のお嬢サンは沈んだし、降参したらどうッスか？」

『う、う、煩い！　そんな筈があるか！　アレ自身の性能に加え、”片刃（エンハンス）”の超人因子までう、埋め込んだんだぞ!?　さ、最初期の廃棄品などに劣るなどありえない！』

裏返った声でヒステリックに喚き続ける声に、狐を思わせる面差しを珍しく嘲笑の形に歪めた青年は鼻で嗤った。

「こりゃ駄目だ、典型的な実地意見を聞かない研究者様ッスね――一応教えておいてやるが、《刃衆（ウチ）》の副長殿は努力家なんだよ」

因子とやらがどういったモノなのか、トニーが詳細を知る筈も無いが……結局の処、アンナの力は”鍛え上げた騎士の戦武”であり、”後天的に目覚めた兵器としての性能”では無いというだけだ。

或いは、その超人因子とやらも持って生まれた才能の土台、それを高める一要素とはなっているのかもしれない。

だがそれを育て、伸ばし、花開かせたのは紛れも無く本人の努力と、努力に費やした時間だ。

同種の種だけを取り出し、埋めた処で既に高々と伸びた大輪の花と同じ高さになる筈も無い。
育てる気が無ければ、埋めた器の嵩増し以上の意味はなさないだろう。
そういった本来当たり前の前提を、ある程度引っ繰り返せてしまうのが創造神の与える加護だったりするのだが……それとて磨く努力をせねば真の意味で力を発揮する事は無い。
神の与える加護でさえそうなのだ、ましてやそれが人の手に依るものであれば、結論は言う迄も無かった。
途切れない甲高い喚き声は無視し、トニーは壁に偽装した隔壁をどうにかこじ開けようと周囲を探る。
壁面に隠された開閉の為の装置の類が無いかを調べていたのだが……それを見つける前に重々しい音を立てて隔壁が上がった。
今も喚き散らす博士（ドク）の手によるものだろう――だが、当然諦めて投降する為、といった理由では無い。
「……この期に及んで改造魔獣の増援ッスか。見苦しさ此処に極まれり、って感じッスねぇ」
開け放たれた壁の向こうから現れたのは、これまでにも相手をした身体を弄られた魔

獣が数匹。
それらと相対したトニーはチラリと背後に視線をやると、地に倒れ伏した……だが立ち上がろうとするファルシオンと、それを見下ろすアンナを視界の端に収める。
「ま、あっちはお任せした分、自分の仕事くらいはするとしますか――後ろには行かせねぇッスよ」
彼は剣を握り直すと、突っ込んでくる魔獣の群れに向けて自身も踏み込んだのだった。

無理な能力行使に加えて凄まじい痛打を喰らった事で、亜麻色の髪の少女は文字通り血反吐を吐き散らして地に伏せる。
眼、鼻腔、口と、流血の痕を残し、額に脂汗を浮かべながらもそれでも立ち上がろうとする少女に、アンナは表情こそ厳しいままであったが、疑問と憐憫に揺れる瞳で問い掛けた。
「……まだ立つか……なんでそこまで必死になるのか、って聞いても良い？」
「……私（ファルシオン）は勝てと、命令されています。昼の試合では既に一度、命に反しているので

す」

だから、二度目は無い。

言葉を続ける事無くとも、裏に込められたものを察するには余りあった。

脅されている――或いは、不要と判断されれば此処の連中のいう処の”廃棄”の扱いになってしまう。

そんな恐怖を元にした感情によって突き動かされているのかとも思ったが……おそらくは違う。

怯えや助けを求める思いがあれば、その眼にはどうしたって縋る色が浮かぶものだ。

ファルシオンには、それが無い。希薄と思われた感情を確りと燃え上がらせ、剣を床に突きたてて立ち上がろうとする様には、自らの価値を証明せんとする必死の意思だけがあった。

「……貴女がそこまで必死になってアピールするだけの価値なんて、あの博士とか言う男には無い。”閣下”とやらにもね」

「……”あの方”や博士が、善い人では無い、事は、分かっています――そして、それに従う私も」

途切れ途切れになりながらも零される言葉には、少なからず苦渋の感情が混ざっている。

震える手足を叱咤して二本の足で立ったファルシオンは、ひどく重そうに曲剣を持ち上げ、切っ先をアンナへと向けた。

「――それでも、私を私（ファルシオン）にしてくれたのはあの方達でした。下水に打ち捨てられ、何の意味も価値も無く終わるだけだった名無しの孤児に、名と価値を与えてくれたのは、あの悪い人達だったのです」

その独白は少女の抱えた恩義、感謝、苦悩、罪悪感――全てをひっくるめた思いの吐露であり。

同時に、アンナ達……国の側に立つ者達にとっての罪の証であった。

最前線の戦場であれ、戦禍の齎す傷によって荒れ果てる後方であれ、どうやっても救えぬ者は出て来る。

大戦後期、聖女姉妹とその守護者たる《聖女の猟犬》の台頭を切欠に、段々と好転していった戦況に併せて戦災による死傷者は確かに減っていったが……それ以前、アンナが幼かった頃はここ帝都であっても、少なくない悪所やそこに住まう戦争被害者達がそこかしこに見られた。

そして、おそらく……いや、間違いなく。

彼女――ファルシオンの名を与えられた少女もその最たる者の一人であり、本来は国が……アンナ達騎士が真っ先に救わねばならぬ罪なき弱者であり、だが取りこぼした

者。
違法な実験の検体という形であれ、それを救いあげたのが今夜消滅するであろう犯罪組織であったのは、皮肉と言う他無い。
勿論、ファルシオンの様な”救われた”形で組織に属した者は極少数だろう。
大半は無理矢理に拐かされた者であり、彼女の様に貴重な検体として丁寧に扱われる事も無く、無惨に使い潰された者とて多い筈だ。
だが、それでも。
誰にも省みられることなく、知られる事すら無く、ただ街の悪所の片隅に転がる骸になる筈だった少女に。
自身の生に意味があると、価値があると告げてくれたのは、光さす場所の善き人々ではなく、影に蠢ぐ許し難い罪に濡れた外道であったのだ。
「……私には、此処しか無い。価値を示すことで、認めてくれるのは――褒めてくれるのはあの方達だけなのです」
ゆっくりと語る合間に、呼気を整える意味もあったのだろう。
手足の震えは止まり、幾分かはマシな顔色になったファルシオンが、それでも消耗激しいであろう身体を叱咤して剣を構え、腰を落とす。
（……しくったわ。聞くんじゃなかった）

アンナにとってはやり辛い、などというレベルでは無かった。話を聞いたことを後悔する程に。

目の前の少女は、子供だ。

年の頃や肉体的な成長の話では無い。

何も持ちえず、何も成し得ず、ただ終わるだけであった生に、降って湧いた様に与えられた意味に、時間に、価値に。

必死に縋りついて、それを与えてくれた者達の期待に応えたくて、褒めてもらいたくて。

その為に重ねられる罪に眼を瞑り、実験体としてやがて辿るであろう自身の行く末にすら眼を逸らし、ときたま与えられる肯定や賞賛の言葉を渇望して求め続ける。

そんな愚かな――けれども、どうしようもなく暖かな情に飢えた、子供なのだ。

それだけにこの亜麻色の髪の少女が一層哀れで――彼女を利用する者達に怒りが募る。

最新の検体扱いする程の貴重な実験体が必死に成果を出そうとし、協力を惜しまない状況は、研究を行う連中にとってさぞかし都合の良いものだっただろう。

始めから少女の思考を今の状態に誘導する意図があったのか、ただの偶然であったのか迄は定かでは無いが……どの道、彼女の抱く情を利用して良い様に実験とやらを進め

ていた事は容易に想像出来た。
先程までと比べ、見る影もなくなってしまった速度の曲剣が振り下ろされる。
回避は容易だ――そして、反撃も。
（……ベソかいて必死に向かって来るお子様を、これ以上痛めつけろって？　冗談、騎士である事を捨てる予定は無いっての……！）
だがアンナは身を躱すに留め、剣に振り回されて上体を泳がせるファルシオンへの説得を試みる。
「一応聞くけど、実験体なんて真っ黒な職にはサヨナラして国仕えに転職する気は無いわけ？　経緯はどうあれ、その腕前なら引く手数多なんだけど」
答える声は無く、持ち上げた切っ先が寝かされて横殴りに叩きつけられた。
やはり格段に速度の落ちているソレを、軽く身を傾げて回避する。
（聞く耳持たず……当然か）
国や行政は、彼女にとっては自分を存在する事にすら気付かずに切り捨てた、無慈悲で巨大な存在だ。
恨みなどが無いとしても、畏れや拒絶感があっても不思議では無い。
横薙ぎを躱されて傾いた身体を強引に旋回させ、回転斬りが放たれる。
ともすればよろけて転びそうな頼りない脚運びから繰り出された斬撃を、アンナは半

ば支える様にして剣で受け止めた。
眼前の少女は限界だ、無力化自体は容易――だが、その前にその胸中を幾らかでも心変わりさせたいというのが本音である。
組織の首魁や幹部、それに近い立場の研究者などは間違いなく極刑だ。というか、捕縛すらされずに即斬り捨てられる者が殆どだろう。
彼らに執着にも近い感情を向けるファルシオンは、下手をすればその後を追いかねない。
自分が、国側の人間がその命に価値を認めると言った処で彼女に届きはしないだろう。その前提――今の自分を作ったのが”閣下”や博士（ドク）である、と認識しているのだから。
（八方塞がりにも程があるでしょ……！　説法は騎士（わたし）の分野じゃないってのに！）
それでも、声を届ける事を諦める訳にはいかなかった。
アンナは騎士だ。外敵を打ち払う国家の剣であり、力無き民を護る盾だ。
その翳した盾より零れ落ちた果て、堕ちた底で罪という汚泥にどっぷり浸かる羽目になった迷子の少女。
彼女を引っぱり上げ、今度こそ掲げた盾の庇へと迎え入れる。
その為にも、向けるべきは剣では無い。言葉なのだ。

競り合っていた刃に更に身を寄せ、より近くで言い募る。
「……貴女を実験体――〝曲剣（ファルシオン）〟としてじゃなく、人間として見た奴はいなかったの？　性能だの、能力だの、とってつけたものじゃなくて、貴女自身を見た誰かは？」
口にしたアンナ自身が望み薄だと思ってしまう、安い言葉だ。
ファルシオンの周囲にいたのは実験体としての価値こそを求める者達であり、反吐が出る様な違法な人体実験を繰り返した連中だ。同情であれ、真に少女が望む言葉を掛ける者がいるとは思えなかった。
戦い始めて幾度目かの鍔迫り合いの中、騎士の少女が問うた言葉は――正直に言えば苦し紛れのものであり、同時にせめてそうであって欲しい、という希望混じりの願望でしかない。
――その筈、だった。
「その様な人はいません……居ない、筈です……」
即座に否定した筈のファルシオンの言葉が詰まり、荒げていた息が間えて止まった様に見えた。
痛みや疲労すら忘れたかの様な呆然とした表情は、まるで気付かなかった事実を、指摘を受けて初めて自覚した様な――。
その反応に、アンナは活路を見出し。

一方で、ファルシオンは戦いすら忘れた様子で立ち尽くし。
――しかし二人の少女が胸に湧いた感情を言葉に変える前に、最悪の横やりが入る。
『も、もういい！　き、期待外れの出来損ないめ！　最後の命令だ、私が脱出するまでそ、そ、そこで侵入者共の相手をしていろ！』
そんな、癇癪を爆発させた金切り声と共に。
実験体の少女は自らの身体の中で何かが弾け飛ぶ音を聞いた。
《森精（フォレストウロー）》の一種と思われる改造された魔獣の剛腕を回避し、トニーは咆哮を上げたその口へと剣を突き込む。
《邪精（トロル）》の近親種の持つ再生力の前には、半端な攻撃は意味が無い。口内を貫いて後頭部へと抜けた切っ先を捻り、横薙ぎに一閃させる。
「四つ目」
額から上を半分斬り飛ばされ、文字通り脳無しとなっても旺盛な生命力によって即死するは事無く。

狂った様に暴れる巨躯は放置し、騎士は背後に忍び寄っていた《飛眼（ゲイザー）》へと振り向き様に剣を投擲した。

何某かの魔眼を発動させようとした一つ目の巨眼蝙蝠の眼球に、投槍の如く一直線に飛んだ長剣が突き刺さる。

「五――これで最後」

地に落ちて痙攣する巨大な蝙蝠擬きを足蹴にして刀身半ばまで埋まった剣を引き抜くと、開いた隔壁――その向こうに続く通路へと視線を向けた。

「さて、この先にあの研究者サンが居ると良いんスけどね」

転倒して起き上がる事も出来ず、出鱈目に床を殴りつけて陥没させている《森精（フォレストウロー）》を迂回し、開けた新たな路へと足を踏み出しそうとした、そのときであった。

『も、もういい！　き、期待外れだ出来損ないめ！　最後の命令だ、私が脱出するまでそ、そこで侵入者共の相手をしていろ！』

「――あ、ぐ……ギ、ぁづ、ぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

不快な金切り声と、獣の断末魔にも似た悲鳴が上がると同時、背後――二人の少女が戦っていた地点で急速に魔力の波動が膨れ上がり、爆発する。

それと同時、解放された隔壁が再びゆっくりと下がり始めた。

「ちっ、忙しない……！」

舌打ち一つ漏らしながら、先ずは明らかな異常が発生したであろう背後へと素早く振り返る。

次の瞬間、トニーの瞳に映ったのは此方の壁面に向かって吹っ飛んでくるアンナの姿だった。

緩やかに閉ざされつつある隔壁と、二秒後には壁に叩きつけられる上司。

見比べる事すら無く、トニーはアンナを受け止めんと隔壁とは反対方向へ飛び出した。

騎士の青年が壁と少女の間に割って入った瞬間、宙を舞う少女の体躯が身を捻って勢いを殺す。

身体の軸を斜めに傾けて回転したアンナは、その身を受け止めようとしたトニーの頭上を飛び越えて壁面へと見事に着地した。

それでも、その勢いは宛ら砲弾の如くだ。爪先を着けたブーツは足首まで壁にめり込み、着地点には大きなクレーターが穿たれる。

「副長、御無事で!?」

駆け寄って来る部下の言葉に反応する事も無く、壁に半ばめり込んだ騎士の少女は口元の血を乱暴に拭う。

そのまま拭った手を握り込み、壁面に拳を叩きつけ、吠えた。

「……あンの腐れ外道がぁっ!!」

眦をつり上げ、浮かべるのは紛れも無い憤怒の表情。

碧眼に嚇怒を燃やしながら見据える先には、雑な腕の一振りで自分を叩き飛ばした亜麻色の髪の少女の姿がある。

「う”……あ”……あ”ぇ、ァ”……」

焦点の定まらない虚ろな表情のまま、フラフラと身を揺らす実験体の少女の姿は、眼を背けたくなる様な変化が起こっていた。

全身の血流が加速しているのか、肌の見える場所からは皮膚を押し上げて浮き出た血管が脈打ち、眼球や鼻腔、指先からは先程の出血など比較にならない量の血がボタボタと嫌な音を立てて垂れ流されている。

それすら比較にならない出血を齎すのは、全身に走った亀裂にも似た傷――その原因は血に染まった白い肌から覗く、魔装の輝きだった。

凄惨、そうとしか表せない状態とは裏腹に、歪に膨れ上がった魔力が全身から溢れ出し、只ならぬ圧を発している。

ここまでの道中、そして今しがたも相手をした改造魔獣に酷似した姿に、トニーが呻き声を漏らした。

「……あんなメチャクチャな改造を人間の女の子相手にやったんスか……!」

クソが、と吐き捨てて歯軋りする部下に、沸々と滾る激怒を抑えつけたアンナはクレーターの縁に手を掛けながら問いかける。
「トニー、アイツはあぁなった魔獣をどうやって止めてた？」
「……推測ですが、心臓回りにあの状態の鍵になる処置が施されてるみたいッス――旦那はそこから頭へと巡る魔力を断って介錯してました」
「ッ、そう……」
一縷の望みをかけた問いも、やはり帰って来た答えは無情であり。
唇を噛みしめ。騎士の少女は目を伏せる。
口元を真一文字に引き結び、眼を閉じた時間は数秒と無かった。
短い、だが静かなその時間は、或いは摂るべき選択の為の思考では無く。
引っ張り上げる事の出来なかった、届かなかった少女へ捧げた祈りだったのだろうか。
どうであれ、顔を上げ、前を向いたアンナの表情に、迷いは無い。
「降りた壁、五分で抉じ開けなさい。魔獣を片付けた途端に下ろしたって事は、先に続く路が正解の可能性は高い」
「了解。三分でやります――副長は？」
「あの娘を止める」

それ以上の言葉は不要であった。
アンナは壁にめり込んだ両の脚の力を撓め、一気に蹴り出す。
壁面が破砕され、爆発的な加速を生み出して彼女の身体は前方へと射出された。
急接近する魔力に反応したのか、血で汚れた亜麻色の髪の隙間から覗く瞳が、突っ込んでくる騎士の少女の姿を捉えて焦点を結ぶ。
踵を返して隔壁の下へと向かったトニーを遥か後方に置き去りに、吹き飛ばされた際の数倍の速度でアンナは暴走するファルシオンと激突した。
着弾音、次いで、衝撃。
高出力の魔力同士の衝突に、紫電が飛び散り、宙で弾け。
二刀と曲剣、歪な影の刃が其々に噛み合わされ、火花と共に鋼の擦れる音が殺風景な室内に響き渡る。
「ヒ、ぐ……ギ……ァ、オ、ネェ……さ……」
「……もう、眠りなさい。疲れたでしょう?」
喉から溢れる血泡のせいか、ゴボゴボと水音混じる不明瞭な声で呻き声を漏らすファルシオン。
先程までの激昂が嘘のように、静かな、いっそ優し気な声でアンナが語り掛ける。
或いは、その声を彼女達以外に聞く者がいれば。

まだ眠くないと、起きていられると、駄々をこねる小さな亜麻色の髪の少女と。
それを嗜め、優しく寝かしつけようとする銀髪の少女。
そんな何処にでもある、姉妹の団欒ような、有り得る筈も無かった光景を思い浮かべたのかもしれない。
少女達の足元――その影が、破裂したかの様に弾け飛ぶ。
まともな攻撃の形状すら取れずに広がった影は、単純な速度を凶器へと変えて周囲から押し潰す様にアンナを襲った。
曲剣と打ち合う剣を短剣（ダガー）へと一瞬でスイッチ。ショートソードが無数の銀光を走らせ、津波の如き影の範囲攻撃に穴を穿つ。
僅かに出来た安全地帯へと身を滑り込ませるアンナ。そこに振るわれる魔力導線走る血濡れの腕。
「……ぐっ……！」
実験体の魔獣とは比べ物にならない程の高密度で魔装化したファルシオンの全身は、今や疑似的な魔鎧にも等しい。
技も何も無い振り回されただけの細腕は、だが圧倒的な暴力を生み出して叩きつけられ、咄嗟に腕を掲げて受けたアンナの魔力防御を突破し、骨身を軋ませる。
乱雑に手足と影を振り回す少女の動きには、嘗て見せた様々な技術を吸収した技の冴

えは無い。
しかし、文字通り身を削り潰す程の強化状態にある彼女は、単純な基礎能力のゴリ押しでこれまで届く事の無かった騎士を上回ろうとしていた。
明確にアンナが不利と言える状況の中、凄まじい暴威の中心で剣戟が連続して鳴り響く。
音は止まる事無く、それどころか加速し。
やがて押されていた筈の二刀が、暴威を押し退けんと苛烈さを増してゆく。
一切怯まず、一歩も退かず。
捌き損ねた連撃が、躱し切れなかった影がその身を少しずつ削る中、アンナは不敵に笑って見せる。
「何度も言った筈よ――怖さが足りないってね……！」
そう嘯いて、暴風の如き暴力と戦武のぶつかり合いの中、押されている筈の騎士は一歩、歩を進め。
その逆に、押している筈の暴威を振るう理性無き少女は、気圧された様に一歩下がる。
「――！　う、ギ、い、アアアグ、ぁッアア!!」
悲鳴と叫びが入り混じった声に込められていたのは、只々苦痛か、それとも眼前の騎士への畏れか。

何れにしろ、再び二人の足元の影が膨れ上がる。
再び膨張し、弾けようとしたソレに――アンナは横薙ぎの一撃を身を屈めて回避すると同時、逆手に握った短剣（ダガー）を叩き込んだ。
高密度の攻性魔力に縫い留められ、風船が萎む様に影は平面へと沈み込む。
大技をスカされ、だが暴走同然であるが故、動揺や遅延無くファルシオンが曲剣を振り上げた。
影を縫い留めた短剣（ダガー）はそのままに、アンナは両の手でショートソードを握りしめ、振り下ろされる力任せの一撃を掬い上げるような軌道の斬撃で迎え撃つ。
捻り、撓め、伸び上がる様に振るった剣は、足裏から膝へ、更に腰から胴、肩、肘へと余す事無く力を伝え、握った剣へとその威力を集約させた。
鋼と鋼の激突。
互いの刃に込められた魔力が、衝突の衝撃で爆風の如く周囲に放出され、荒れ狂う。
膂力、破壊力という点では明確に上回った筈であった暴走した少女の力は、練り上げた技によって並ばれ、再び凌駕される。
強化された握力すら上回る負荷に、握った剣の柄がもぎ取られ、二人の少女の手から剣が弾け飛んだ。
だが、亜麻色の髪の少女は体幹乱れ、姿勢を崩し。

対して、銀の髪の少女は無手となった腕を引き絞り、腰溜めに次の一手を打つ構えへと移行している。

「――――ア」

全身を連動させて打突の動作に移るアンナを見つめる、赤く濁った碧眼には、僅かにだが理性の光が灯っており――そこには理解と敬意の色が垣間見え。

渾身の掌底が、過たずファルシオンの胸を打ち抜いた。

全身を駆け巡る激痛。

視界は真っ赤で、耳に聞こえるのは恐ろしい程に大きく、早く脈打つ自身の鼓動。

混濁した意識の中で、最後に聞こえた命令に引き摺られる繰り人形（マリオネット）の様に動いていた肉体が、糸が切れた様に自由を取り戻す。

だが、糸が断たれた人形が迎える結末は一つだ。

博士（ドク）が遠隔で発動した、意図的な暴走状態から解放されたファルシオンは、喉奥からせり上がって来た血塊を吐き出しながら膝からくずれ落ちる。

「……ッ、ゲホッ！　ゲェッ！　ハァ、ハ……」

薄暗く、そしてひどく赤い視界の中、膝と手を着いた彼女は赤黒い色の混じった血を口から溢れさせ、かろうじて動く首をあげて相対する”姉”の姿を瞳に映す。
掌底を突き出した姿勢のまま、肩で息をして此方を見下ろす銀の髪の少女は、傷だらけでありながら何処までも力強く……そして美しかった。
なんとなく、腑に落ちる。
数値化した能力値、という視点だけではどうやっても導き出す事の出来ない、”人”としての武力（つよさ）。
ファルシオンが相対していたのは、そんな力だった。多分、闘技大会の最初の試合から、ずっと。
実験体として――ひいては兵器としての性能を重視した実験（やりかた）では、取り込める筈もない力だったのだと、今なら理解できる。
検体としての自分の価値に固執しながら、その価値を以て”人”としての情を向けられる事を求めた矛盾。
それを、嘗ては自分と同じ検体だった身でありながら、人として此処まで強くなった少女（あね）に、力いっぱい突きつけられた気分だった。
実験体としての自分は全ての底を見せ――その上で完膚なきまでに敗れた。
兵器としての価値を与えてくれた博士（ドク）は、もう自分を必要ないと、失敗作だと、そう、

言った。

”曲剣（フォルシオン）”はその価値を失い、ここで終わる。この場の二人――それ以外にもいたであろう、多くの兄弟姉妹達と同じように。

――だから、最期に一つだけ。

検体としての価値を失った自分に、また、誰でも無くなってしまった自分に、まだ残ったものを。

それを気付く切欠をくれた彼女に――”人”として強くなった”姉”に、知っておいてもらいたかった。

多量の出血と、肉体の魔装化の影響で痙攣する手足を叱咤し、少女は立ち上がる。

それだけで視界が明滅し、チカチカと星が瞬く。

身体の方は言う迄も無い。まるで泥沼に首まで浸かっている様だ。

踏み出す一歩は重く、引き摺る脚は鈍く、一歩進めるだけで息が上がって鉄の味が強く口内に籠る。

「――っ、貴女、まだ……！」

酔っ払いの千鳥足の方がまだマシであろう歩みで、それでも取り落とした剣へと手を伸ばす少女に、アンナが驚きの声を上げる。

戦いの勝者であるというのに、ひどく苦し気な表情で自分を見つめて来る騎士に、”

曲剣（ファルシオン）”であった少女は申し訳なさすら覚えた。
おそらく、アンナは自分が力尽きるその瞬間まで博士（ドク）の命を実行しようとしていると、そう思ったのだろう。
でも、命令を果たす為に、剣に手を伸ばした訳では無いのだ。
そこだけは知っておいて欲しくて、罅割れた掠れ声を絞り出す。
「……ごめん、なさい。ど、しても……おねえさまに、見せたい……ものが……」
表情を変えるのは苦手だ――特に笑顔は難しい。
それでも、苦笑に近いものではあったが少女はぎこちなく笑って、震える手で床に突き立った剣の柄を握る。
「……」
べったりと顔に張り付いた血、その下にある肌……顔色は既に土気色に近い少女の言葉に、思う処があったのか。
アンナは同じ様に手から離れた剣へと歩み寄り、床に刺さったそれを引き抜く。
短剣（ダガー）はそのまま腰に収めると、ショートソードを片手に構え、彼女は少女へと向き直った。
「……見せてみなさい」
口をへの字にして、ぶっきらぼうな言葉で。

けれどひどく優しい眼で真っ直ぐに見つめて来る”姉”に、今度こそ少女は小さく微笑む。

この時間は、本来アンナにとってひどく無意味なものだろう。騎士としての責務があるだろうに、付き合ってくれる事に感謝しかない。

息をする度に傷む全身に喝を入れ、少女は確りと両手に握った剣をどうにか持ち上げ――正眼に構える。

呼気は深く、強く。吸う事より吐き出す事を意識して。

以前に教わった――博士（ドク）には無意味だからやめろ、と叱られてしまった――振り方を、思い返す。

（……握るのは、柄尻。雑巾を絞る様に）

手の震えを押し殺し、相手の顔の位置に合わせて切っ先の置き場を変える。

（蹴り出しは静かに、低きにつけ、水面を滑る様に）

静かな、少々ぎこちなさの残る踏み込みと共に、剣を構えて待ち受けるアンナ姿がグン、と一気に近くなった。

魔力強化すら切れた完全に素の状態でありながら、滑らかに詰められた間合いに、彼女の眼が少しばかり見開かれる。

（振り上げは肘と手首で。握りで一瞬、梃子を作る）

一手一足の間合いに入ると同時、切っ先が跳ね上がって天を差す。
（最後の一歩は力強く、踏み込んだ勢いと重さを――剣に乗せて……打つ！）
振り下ろされる一撃は、無骨にして愚直。
だが、確かな術理に裏打ちされた流れるような上段の打ち下ろしであった。
これまで室内に響いていた轟音にも近い剣戟とは違う、澄んだ音を立てて鋼同士が打ち合わされる。
見事な打ち込みだったが、あくまで魔力による強化無しにしては、という前提だ。実際、少女の最後の一撃を受け止めたアンナは、小動（こゆるぎ）もしていなかった。
一度の剣戟、その反響だけが微かに響く中、少女が荒れる息を押し殺して静かに問う。
「……どう、でした、か？」
「――四十点。それなりの回数振ったんでしょうけど、根本的な練りが甘いわ」
容赦の無い辛口採点に、もう一度苦笑しそうになった。
でも、仕方ない。モノにしたければ最低でも一日三百は振れ、と言われたが、検体としての役目を重視して、その半分もこなせなかったのは確かなのだから。
一抹の寂しさと共に、そんな風に納得しようとして。
「……でも、貴女の技の中で一番怖かった。全く、こんな打ち込みが出来るなら、最初から使えっての」

眼を見開く少女に向けて、肩を竦めて見せる〝姉（アンナ）〟の言葉は軽い調子で――けれど、やっぱり柔らかな優しさに溢れていた。

「ちゃんと、あったみたいだね。〝曲剣（ファルシオン）〟じゃない、貴女だけの意味」

最後に少女が見せた剣技。

そこには確かに積み上げられた時間――兵器では無い、〝人〟としての彼女の意思と技が宿っていた。

彼女自身にこそ伝えられたものがあったのだと、貴女だからこそ、伝えた者がいるのだと、そう、断言する言葉を受け。

欲しかった言葉を貰った幼子の様に、少女は血の気を失った顔に無邪気な微笑みを浮かべた。

「……はい、そうで、あったら……」

どんなに良いだろう。そうであってくれたら、きっと、自分は――。

そんな風に、淡い希望を抱いて。

出会ってから、二年。ただの一度も自分を〝曲剣（ファルシオン）〟と呼ばなかった男性（ひと）の顔を思い浮かべ、少女は今度こそ静かにくずれ落ちた。

「――っし、これで……」
鈍い音を立てて停止し、だが大人が身を伏せれば潜れる程度の隙間を空けた隔壁を前に、トニーが柏手を打つ。
時間は無い。この奥に伝声管で喚き散らしていた男がいるのならば、自分達が来たものとは別のルートで逃亡に移っている可能性がある――最悪、《門》の魔導具を用いてとっくにケツをまくってる可能性すらあった。
身を屈めて隔壁の下を潜る前に、背後を振り帰る。
上司の勝利を信じて只の一度も振り向かなかったトニーであるが、彼の部隊の副長はその信頼に応えてきっちり勝ってみせた様だ。
――だが、少女二人の戦いに、果たして勝ち負けはあったのだろうか。
そもそもあの亜麻色の髪の少女は、『敵』と言える相手だったのか？
力無く四肢を投げ出し、全身を血に染めて床に転がる少女。
その頭を膝に乗せ、ゆっくりと髪を手で梳いてやっているアンナを見ると、そんな思いが湧いてくる。
何処となく何時もより小さく見える上司の背に、声を掛けるのは躊躇われた。
「……元から副長も救出対象だったし、残りの仕事はこっちでやれば良いだけッスね」

そう一人ごちる騎士の青年も、大概上司二人に対して甘い。
部隊の隊長、副隊長両名は、尊敬する上官であり、格上の戦士であり――だが年下の少女である。
普段彼女達が背負っている看板や責務の重さを考えれば、ついつい身内贔屓になってしまうのは無理からぬ事なのかもしれない。
あと数分もしない内に女神の御許へ召されるであろう、亜麻色の髪の少女へと数秒、祈りを捧げると、トニーは抉じ開けた隔壁を前に身を屈め――。

――ダイナミックエ○トリィィィッ!!（二度目

そんな叫びと共に、隔壁の直ぐ隣の壁がぶち破られた衝撃で吹っ飛んだ。
「ふぅぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!?」
ゴロンゴロンとでんぐり返しの逆回転みたいな体勢で転がり、間抜けな悲鳴を上げて上下逆さまの体勢で壁にべちんと激突するトニー。
馬鹿みたいに分厚い遺跡の壁を、雑に作った雪のかまくらを砕くようなノリでぶち抜いて来たのは、深紅の魔力導線奔る漆黒の全身鎧。
先程《守護人形（ゴーレム）》の配置された部屋で別れた青年であった。

――おぉー。こっちに繋がるの感じなのか……必須じゃないボス部屋攻略したら最奥へ特殊ショトカ開通ってのはまぁ、偶にあるパターンだよな。

どうやら《守護人形（ゴーレム）》を倒した後にトニーが通った扉とは別の路を見つけたらしい。

強力な戦力に守らせている、という事は、本来はこの拠点の上役が使う様な通路だったのかもしれない。

キョロキョロと広い室内を見回しながら足を踏み入れた青年の手には、人の足らしきものが握られている。

「う……ぁ……い、痛いぃ……も、もう、や、や、やめ……」

足首を引っ掴んだまま走ってきたのか、全身を壁や床に擦られ、打ち付けられ、打撲塗れでぼろ雑巾の様になったその人物は、ゴミを放り捨てる様に部屋の中へと投げ入れられた。

「ひぎぃ!?　う、あ……な、何故だ。ど、ど、どうして《報復（ヴェンジェンス）》が此処に……」

顔面がボコボコに腫れあがり、打撲痕で青黒くなっている痩せぎすの研究者風の男が、ブツブツと現実逃避する様に床を見て独り言を零す。

聞いていて気分良いとは言えないその甲高い声に、トニーは聞き覚えがあった。

というか、さっきまで伝声管から嫌という程垂れ流されていた声だ。十中八九、博士（ドク）とかいう研究者はあの男なのだろう。

静かになったので逃亡準備に移ったのかと思っていたが、あの最後の罵声の後、直ぐに青年と鉢合わせた様だった。

――さて、なんか物騒な魔力を感じて急遽こっちに来た訳だが……。

青年の派手な登場には気付いているだろうに、反応せずに背を向けたまま、瀕死の少女を膝枕しているアンナへと眼を向ける。

暫しそれを眺めた後、彼はトニーの方へと首を向けた。

――あの娘は……確か闘技会で見た様な……どういった立ち位置なんや？　ってかなんでぐり返しの体勢で転がってんのトニー君。

「いや、アンタのせいッスよ旦那」

トニーが半眼でツッコミを入れたのは仕方ない事だろう。誰だってそーする。

溜息を噛み殺して立ち上がると、彼は立ち上がって外套（コート）についた埃を払う。

「一応、組織の関係者ではあったようで……同時に被害者でもあったみたいッスけど」

元々細目である眼を更に細め、憂いの情を乗せた視線を上司に向けるトニーに、青年は口の中でふむ、と呟いて頷く。

――ちなみに、あの娘があんなにボロボロな原因は？　いや、倒したのは副官ちゃんだってのは分かるんだけど。

「旦那が引き摺って来たそこの襤褸雑巾の仕業ッスね。捨て駒扱いで暴走させたッス」

――よし、何本か折っとくか。
即決した青年が、速足で博士（ドク）の下へと引き返す。
直ぐに塘蒿（セロリ）を捩じり折るような音と共に汚い悲鳴が上がった。
声がうるさかったのか、青年は普通に頬を張って黙らせる。魔鎧によるビンタなので博士（ドク）の首は捥げそうな程軋み、歯が吹っ飛んでバラバラと床に落ちたが。
ヒィヒィと半泣きになりながらその場に蹲った研究者という名の狂人をその場に放り捨て、青年は二人の少女のもとへと向かった。
――副官ちゃん。
「……相変わらず騒がしい奴ね、アンタは」
呼びかけには応じるものの、苦笑いするアンナの表情には、どこか力が無い。
か細い擦過音の様な浅い呼吸を繰り返す少女の髪を撫で続けたまま、言葉が続けられる。
「悪いけど、少しの間だけ静かにして――最期くらい、安らかに眠って欲しいの」
二人にどういう関りがあり、どういう繋がりが生まれたのか、青年は知らない。ついでにいうならそこまで重要視もしていない。
ただ、目の前のボロボロの女の子がこのまま逝けば、多少なりともアンナの傷になる。それだけは理解した。

ならば、彼のやる事は一つである。

青年は同じく此方に歩みを進めてきたトニーへ振り向き、掌を上に向けて突き出した。

――トニー君、予備の霊薬ちょーだい。

「……まさか、彼女の治療に使う気ッスか？　この状態じゃ薬効の前にショック症状が出るだけッスよ」

苦しませるだけだ、と主張する戦友の言葉に、キメ顔で大丈夫だ、問題無い。と力強く断言する。フルフェイスなので気付く者は居なかったが。

目の前でそんな会話をされれば、アンナも気になる――を通り越して不審な気分になろうというものだ。半眼になって青年を見つめ、庇う様に膝上の少女の頭を抱え込む。

「静かにしろって言ってんでしょうが。何するつもりよ駄犬」

――何て。そら勿論――どんでん返しよ。

魔鎧の頭部装甲（サレット）越しでも、ニヤリとした悪い笑顔を浮かべるのが透けて見えるような、そんな声。

トニーから霊薬を受け取った青年は少女達の傍へと跪き、満身創痍で意識の無い娘の罅割れた唇へと、霊薬の入った小瓶の口を押し込んだ。

当然、少女に口内の液体を嚥下できる体力など残っていない。だが、彼女の喉元へと

親指が押し当てられ、水道の蛇口を開ける様な動作でぐりんっと捻りが加えられる。
ごっきゅごっきゅと強制的に喉に流し込まれる霊薬。
仮にも瀕死の人間にやるにはあまりにも無茶な所業に、アンナとトニーが揃って抗議の声をあげようとした、そのときだった。
――――――。
青年が、小さく、何事かを呟く。
そして次の瞬間――膨大な魔力と共に白く、眩い光が彼を包んだ。
強い光量を前に、翳した腕で眼を庇いながら、アンナは絶句する。
「……アンタ、それ……」
かろうじて漏れた声には応える事無く、光に包まれた青年は傷ついた少女へと手を伸ばした。
両の手が触れるのは、額と左胸。
暫しの間、攻性を伴わない魔力が少女の身体に染み入り、ゆっくりと循環する。
次に触れるのは喉と腹下――丹田のあたりだ。こちらも同様の処置を行う。
やがて光が収まる頃、そこには魔鎧を解除した青年の姿が残り。
アンナの膝の上には、全身の外傷こそ癒えていないものの、明らかに安定した呼吸となった少女の姿があった。

流した血も戻る訳では無いので蒼白ではあったが……少なくとも顔色の方も先程迄の死人同然のソレでは無い。

――おし、内部の負傷は霊薬を調整してある程度カバーできたし、肝心のズッタズタになった気脈も最低限処置出来た……いやー、なんとかなるもんですねぇ！

唖然とした顔で自分を見つめる騎士二人に、成し遂げたぜ！　とかほざいて実に良い笑顔で親指を立てグッジョブする犬。

腹立つ程見事なドヤ顔だ。普段のアンナなら、感謝しつつ皮肉の一つも飛ばしていただろう。

……でも、今回だけは……そう、今回だけは、ちょっと色々重なり過ぎて、我慢できそうになかった。

膝を着いたまま、何が嬉しいのかニコニコ笑顔でアンナと少女を見比べているアホ犬の胸倉に手を伸ばし、掴んで引き寄せる。

色々と溢れそうな感情のままに、意外とがっしりしてるその身体を抱き寄せた。

――ファッ!?

眼を白黒させて素っ頓狂な叫び声を上げる友人の耳元へと、諸々万感の思いを込めて囁く。

「……ありがと」

五秒か、十秒か。
暫しの間、足元に伸びる重なった影はそのままで。
「お、おぉ……す、素晴らしい！　なんだ今の能力は!?　そ、そ、それも《報復（ヴェンジェンス）》の機能か!?　一体どういった――」
右の手足の関節が三つほど増えているというのに、眼を血走らせて興奮した様子で詰め寄ってくる博士（ドク）の声を切欠に、電光石火の勢いで影は離れた。
「や、や、やはり肉体の魔装化などより、ま、魔鎧の研究こそが計画のテーマに迫る事が、か、可能なのだ！　”曲剣（ファルシオン）”の様な失敗作ではなく、次わぎぇ!!?」
喚き続ける博士（ドク）の顔面へとアンナのグーがめり込み、鞘に収まった儘のトニーの剣が鳩尾を抉り、とどめに青年が股間を蹴り上げた。
鼻血と泡を吹いてぶっ倒れるマッドサイエンティストを見下ろし、青年が殺っちまったら駄目なんかコレ……と冷えた目付きで呟く。
「研究者の中では相当な上役っぽいッスからね。取れる情報も多いし、出来れば生かして捕らえたいッスよ――まぁ、司法取引無しで確実に極刑ッスけど」
拷問して情報を搾れるだけ搾り切ったらそのまま獄中死コースが濃厚、という事だ。

因果応報の度合いが重いか軽いか、判断の別れる処ではある。
「ま、これで本拠地らしきこの場所も制圧完了、って事ッスかね。後は――」
台詞の途中であったトニーの頭が、背後からぐわしっとばかりに鷲掴みにされた。
其処にいたのは、一命を取り留めた少女を青年に預け、仁王立ちとなったアンナである。
青年に背を向け、会話の内容を気取られ無い位置で彼女の口がパクパクと形だけ開かれた。
（さっき見たのは忘れろ。誰かに言ったらコロス）
（……イエス・マム！　墓まで持っていくと誓います！）
冗談の一切ない真顔でおそろしい脅しをかけてくる上司に対し、光の速さで屈してその場で渾身の敬礼を決める部下。
「――よし。それじゃ、残敵はどうなってるか分かる？」
めぼしいのはほぼ全部狩り終えたと思うでー、と手を挙げて応える青年の声に、アンナは一つ頷いた。
「なら、入口を簡単に封鎖だけして脱出しましょう。その娘の治療も急いだほうが良いし」
亜麻色の髪の少女は青年の手によって安定した状態にこそなったが、重症には違いな

い。
　出血量も相当なものだったので、出来ればレティシアかアリアに診てもらうべきだった。
「幸いといって良いのか、そろそろ夜明けも近いッスからね。聖女様方の儀式も終わりが近いでしょうし、どの道、時間的にも作戦終了間近ッス」
「決まりね。急ぐよ」
　善は急げとばかりに駆けだそうとするアンナに向け、青年がビシッと挙手して元気よく宣言する。
　――アンナ先生！　さっきの反動があるので鎧ちゃんの再展開にちょっと時間掛かります！　ぶっちゃけ先生の超ハイペースマラソンについて行ける気がしません！
「堂々と情けない宣言するな駄犬。ったく、しょうがない」
　青年から再び少女の身を預かると、アンナは自分のより上背のあるその身体を確りと背負い直す。
　――副官ちゃんもちょこちょこ怪我しとるけど、おんぶして大丈夫なん？
「普段の訓練で担いでる岩（おもり）と比べれば軽いモンよ――なんならアンタも運んであげましょうか？　お姫様だっこで」
　――羞恥心で死ぬのでやめて下さいお願いします！　ぼく頑張ってはしりゅ！

そんな、何時もの空気の会話を交わし、彼と彼女は少しだけ笑い合って。

「さて、凱旋、なんて言える程格好は付かないけど……帰りましょう、帝都に！」

銀髪の少女の明るい声と共に、凸凹トリオは足取り軽く帰路への道を走りだしたのだった。

夜明け前（後編）

光差し込まぬ地下……下水道の中を魔法の灯りを浮かべて進む一団がある。
丈の長いフード付きの円套（マント）を被る格好こそ共通しているが、その下に覗ける服装はこの様な場所には似つかわしくない、上等な仕立てや華美な衣裳の者達ばかりだ。
その先頭を行くのは黒髪に青い瞳の偉丈夫。
鼻梁より上を覆う仮面（マスク）によって顔を隠してはいるものの、何処か不安げな表情で暗がりを進む者達の中、背筋を伸ばして堂々と進む様は集団の中で際立つ威風を放っている。
今宵、帝国や教国、魔族領の最高クラスの戦力に強襲され、今や風前の灯火となった違法な人身売買・人体実験を行っていた組織。
その首魁たる”閣下”に連れらて下水道を歩く者達は、各国の顧客――その中でも《大豊穣祭》を期にやってきた者達である。
其々に名のある商人、軍属、果ては貴族と、所属国家や立場は様々だが、取引相手と

して組織の研究成果を直に観察・評価しに来た一団であった。
最悪の想定に備え、既に購入した技術を図面・書類化したもの持たせた者達は南の山脈から帝国領外に脱出済みである。
此処に居るのはその強行軍に同行するのが難しい――だが、直接的な出資者(パトロン)か、或いはそれに近しい立ち位置の者達であった。
仮面(マスク)の男の先導によって黙々と歩みを進めていた集団だが、沈黙に耐え切れなくなったか、胸中に湧き上がる不安を紛らわせたかったのか、一人の男が声を上げる。
「……閣下、此処を抜ければ……帝都外に問題無く脱出できる、との事でしたな?」
「ええ、かの姉妹の儀式の範囲は常識外れと言って良い程に広大ですが……流石に郊外の外れまではその力も届かぬのは確認済みです。この水路を抜け、少し進めば《門》の起動も阻害される事はないでしょう」
聖女の行った超広範囲の儀式魔法。
《大豊穣祭》の開催期間、地脈と接続される形で展開された結界と結びつく事で発動した超絶のソレは、帝都中に隠された《門》の強制起動だけでなく、聖女以外の魔力を用いた《門》の起動を阻害するという出鱈目な追加効果まで発揮していた。
これにより、持ち運び可能な《門》の魔導具を組織から融通されていた出資者達は自力での帝都脱出を余儀なくされ、こうして”閣下”に先導されて近寄った事すら無い下

水路を歩く羽目になったのである。
「入って来た水路は本来、都市外に通じる水路へと繋がるものでは無いのです。おそらく、過去に帝都にて居を構えていた貴族が、何某かの目的を以て非常用の脱出路として秘密裏に開通させたのでしょう」
故に、この脱出路の存在は誰にも知られてはいない。それこそ皇帝にさえも。
力強く断言する黒髪の男――”閣下”の言葉に、後に続く者達が安堵したように胸を撫で下ろし、或いは隣を歩く者と表情を明るくして頷き合う。
「おぉ……それでは、これで無事に本国に……」
「こういったケースに備えて《門》以外の脱出経路も計画済みとは、流石は閣下ですな」
「然り。一時はどうなることかと思ったが……」
組織は帝国皇帝にその蠢動を知られ、そう時を置かぬ内に襲撃を受ける。
そう説明した際に慌てふためき、詰め寄る者達を説き伏せ。
”閣下”と呼ばれた男は僅かな護衛を共に、こうして手ずから首都脱出の手筈を整え、案内を行っていた。
暗く、湿った悪臭籠る路をおっかなびっくり進んでいた男達は、先程の会話を皮斬りに口々にこの後の予定や現状の不満を語りだす。
ときたま話題を振られては鷹揚に返事を返し、頷く”閣下”であったが……何故だろ

うか、自身の運営する組織の出資者達を見るその眼は、何処か冷えたものが混じっている。

青い瞳に灯る冷たい光とは裏腹に紡がれる言葉は礼を欠く事無く、彼は後に続く者達へと注意を促した。

「……そろそろ出口も近い筈です。灯りも光量を絞る故、足元にご注意を」

時刻は既に深夜を過ぎ、そろそろ夜明けも近いとはいえ、出口は郊外の田園地帯にほど近い場所へと繋がっている。

念の為、遠目からでも目立つ魔法の灯りの出力は落とし、一行は見通しの悪くなった水路を慎重に進んだ。

暫しの後、格子のはめ込まれた水路の終わりが光と共に見えて来る。

「……あぁ、やっと着いたのか……！　全く、このような場所を歩くのはこれきりにしたいものだ」

「そうですな。都市に紛れる卑しい難民や下賤の者の如き真似、金輪際御免被りたい処です」

露骨にホッとした様子で軽口を躱す背後の者達には反応せず、”閣下”は護衛に命じて水路出口の鍵を開けさせた。

最初に護衛が開け放たれた格子状の扉を潜り、続々と後続が外へと出る。

その性質上、どうやっても悪臭満ちる水路から解放された反動か、夜明け前の朝露に濡れる空気を吸い込んで「空気がうまい」と感嘆の声を上げる者も多かった。

周囲を確認し、”閣下”は一つ頷く。

「さて、やはり此処まで来れば聖女の儀式魔法も範囲限界が近い……日が昇る前に急ぎ歩を進め、帝国領の外に秘して設置した《門》を繋ぐとしましょう」

そう言って、彼が懐にある魔道具を取り出そうとした、そのときである。

一団を――否、周囲の田園地帯の一部まで丸ごと囲む様に、強力な結界が展開される。

聖女の発動させた結界には劣るとはいえ、生半な事では破壊不可能な強度と転移の魔法への妨害性を併せ持った其れは、優れた魔導士が複数で発動させた一級の代物に相違なかった。

「なっ、なんだコレは?!」

「ど、どういう事だ、一体なぜ……!」

狼狽え、右往左往する出資者（パトロン）達を尻目に、”閣下”は眼を細めて自分達を覆う結界を見廻す。

彼らの前方――田園へと通じる拓けた道の景色が揺らぎ、魔力が散ると同時に上塗りする様に新たな光景が浮かび上がる。これもまた練度の高い者達によって行使された隠蔽の魔法であった。

広範囲の隠密が解かれ、長閑な郊外に現れたのは――軍勢。
戦時に用いられたような大規模なものでは無いとはいえ、軽装から重装の歩兵、騎馬、魔導士と、十分に軍と呼べる兵種と人数で構成された集団であった。
絶句し、或いはへたり込む帝都より逃亡しようとした者達の前に、帝都の騎士団と何処かの領軍との混成らしきその軍勢から、一際に見事な軍馬に跨った者達が二名、進み出て来る。
「おやおや、本当にこの様な場所から出て来るとは……将軍閣下の慧眼たるや、と言った処でしょうかねぇ」
「……小僧の時分、この水路はよく使っていた。教師や父の部下を撒いて森に出掛けるのに重宝してな」
「ほほう。いやはや帝国の剣と盾を司る《赤獅子》も、お若いときには中々に奔放であらせられた様で」
「ほざけ、その程度の事はとうに知っているだろうに」
かたや上質な魔装の鎧を纏った、獅子の鬣の如き赤金の髪を持つ、堂々たる体躯の偉丈夫。
かたや気品ある布製魔装の軍装を身に着けた、蛇の如き雰囲気を持つ細身の貴族。
「……ッ、《赤獅子》に、サーリング伯爵……」

呆然とした呟きが追い詰められた側の誰かの口から零れた。
狼狽、もしくは諦観を見せてざわつく集団の中で、先頭に立つ”閣下”のみが静かに軍の責任者たる両名を見据え、口を開く。
「……何故、此処を使うと……いや、そもそも都市内各所の《門》の制圧がこれ程に早く終わる筈が……」
「我々の軍のみであれば、その読みは正しかったでしょう――が、こちらには頼もしき英傑の方々の助力がありましてねぇ」
疑問に答えたのは眼を細め、にんまりと笑った貴族――シュランタンである。
「全く、かの女傑まで今宵の捕り物に引っ張り込むとは……流石は大戦時の生ける伝説。敵に回してはならぬ厄介な御仁だとつくづく強く認識しましたとも」
「……そうか、またあの男か」
伯爵の言葉に全てを理解した様子で、心底忌々しい、といわんばかりに”閣下”の表情が歪む。
一方で、仮面（マスク）越しでも分かる程に顰められたその表情を、馬上より見下ろすシュランタンの視線は冷え切っていた。
眼前の連中は自身の財産の一部――その中でも重要な”経済を回す為の根本的資源”である領民を攫った薄汚い盗人だ。

人的リソースを削る事を好まない彼をして、殺処分か、そうでなくとも犯罪奴隷などに宛がう鉱山での労役に従事させる以外に使い道の無い連中であった。

蛇の呼び名に相応しい獲物を捕捉した爬虫類じみた目付きのまま、伯爵はあくまで表面上は軽い調子で肩を竦める。

「これ以上は時間の浪費ですからねぇ。大人しく縛を受けなさい――他国の爵位持ちも混ざっている様ですが、帝国の威信に手垢を着けようとした罪、木っ端の立場程度で逃れられると思わない事です」

嘲りを隠さない声に、”閣下”の背後で怯えて縮こまっていた者達が気色ばむ。

「聞き捨てなりませんぞ、伯！」

「威信など……貴族派の首魁がそれを仰るか！」

「そもそも、貴様の領地そのものが本来は貴様が手にして良いものではない！　そう、本来は――！」

半ば自棄になったのか、口角泡を飛ばして場違いな糾弾を始める者達の言葉を鼻で嗤い、シュランタンは毒牙の如き鋭い一刺しを打ち込んだ。

「――本来はスターディン家の末裔……そこの黒髪の御仁のものであった、とでも？　生憎とスターディンであった方々とは領地を引き継いだ当初からお付き合いありましてねぇ……さて妙な話だ、自称かの辺境伯の血筋であるそちらの方は何者なのでしょう

か？」

「……な、に……!?」

猫ならぬ蛇が鼠を嬲るが如き表情で、たっぷりの揶揄が練り込まれた疑問を投げかけられた男達が絶句し、だが直ぐにそれを繰り言だと判断したか、罵声を上げようとする。

不毛な言い争いを断ち切ったのはシュランタンの隣で黙していたレーヴェだった。

その巨躯が跨るに相応しい桁外れの体躯を誇る軍馬の手綱を軽く引くと、長年共に戦場を駆けて来た愛馬は心得た、とばかりに脚を持ち上げ、蹄を地に叩きつける。

数世代前からじっくりと魔力を含んだ飼料や環境に馴らされ、半ば魔獣化している超一級の血統馬だ。その蹴り足は小さな地響きを立てて大地を穿ち、舌戦を強制的に終わらせるだけの轟音を響かせた。

「もうよかろう。欺瞞も此処までだ」

口元を引き結んだ厳しい表情で、将軍は馬上より真っ直ぐに黒髪の男――”閣下”を見据える。

「お前が何を思ってこの様な非道に手を染めたのかは分からんが……幕を引こう――ティグル、我が弟よ」

沈黙が、降りる。

レーヴェ率いる第一騎士団も、サーリング領の領軍も、此処まで逃げ遂せて来た組織の関係者達も。

全員が絶句して言葉無く将軍と黒髪の偉丈夫を見つめていた。

唯一、驚愕の表情を浮かべていないのはシュランタンくらいのものである。

常に浮かべている胡散臭い笑みを引っ込め、隣にある将軍の横顔を見上げるその瞳には、他者の思考を見透かそうとする海千山千の為政者としての眼光が灯っていた。

そんな伯爵の視線は無視し、レーヴェと”閣下”は静かに問答を続ける。

「……何故、そう思ったので？　打ち手としての癖は極力消していたつもりですが」

「確かに、謀り一つとってもお前を想像させる様な手は無かった――スターディン家の名を使った手管など、吾輩の知るお前ではまず選ばんやり口だ」

嘗て冤罪によって帝国より追い立てられた辺境伯。

過去に武名轟かせたかの一族の名を騙って行動していたのは、帝国側の攪乱というよりは身内――組織内の関係者や出資者にこそ、そうであると誤認させる為だったのだろう。

味方を的に掛けたペテンの類など、弟（テイグル）が摂る策では無かった――少なくとも、レー

ヴェが知る限りでは。
「普段のお前とは似ても似つかぬ策の打ち筋だったが……だからこそ、かもしれんな。どれほど頭で否定しようと、喧しい程に勘が告げていた。策謀の裏に潜む打ち手の――弟（お前）の気配を」
「勘、ですか……ハハッ、やはり敵わないなぁ兄上には」
朗らかさと苦みの入り混じった笑みを浮かべた”閣下”が、掌を無造作に自身の黒髪に乗せる。
浄化の魔法と思われる柔らかな光が彼の頭部を覆い――光が収まると相対する将軍と同じ、レッドブロンドとでも称すべき赤みの強い特徴的な金髪が現れた。
顔の上半分を覆う仮面（マスク）が外され、足元に適当に放り捨てられる。
露わになった将軍とよく似た面差しに、組織の出資者やその護衛に着いていた者達が驚愕の表情を浮かべて呻き声を上げた。
「ティグル＝ケントゥリオ……！　馬鹿な……!!」
「何故だ、貴方は私達を謀っていたというのか……!?」
”閣下”……否、ティグルの兄へと向けていた複雑な――だが親しみに満ちた声と表情が一瞬で凍り付き、平坦なものになる。
「五月蠅いなぁ……この期に及んでそんな様だから、こうして逃げ遅れたのだろうに」

非合法な人体実験を目的としていた犯罪組織とはいえ、曲がりなりにも同士や顧客であった筈の者達に向けるその視線は、まるで害虫か溝鼠でも見つめるかの様な温度であった。

「まぁ、そのおめでたい頭揃いの御蔭で、あの様なロクでもない半端な技術にでも眼の色を変えて喰い付いてくれた訳だ。其処だけは感謝しているよ――貴方達は実に良い金蔓（パトロン）だった」

「……き、貴様ぁっ!!」

「このペテン師がぁっ！」

吐き捨てる様な……紛れも無く侮蔑の籠った台詞に、激昂した何人かが掴みかかろうとする。

彼らにそれ以上視線を向ける事すら無く、ティグルは一息に抜剣して長剣を一閃させた。

鮮血と共に指が何本か飛び、あっという間に怒号は悲鳴に変わる。

「戦いの心得も無いのに、この状況でいきり立つのは愚かだね。死期が早まるだけだろうに」

辛辣ではあるが、痛みに蹲って動けなくなった者達の様を見れば正論であった。

一太刀で数人の指だけを狙って斬り落とした剣技を見て、レーヴェが小さく呟く。

「……それが、お前が行ってきた所業の成果、というやつか」
「ええ、本来は剣を振るのはおろか、走る事すら出来ない身でしたからね……あぁ、勿論技は自身で磨いたものですよ？　兄上相手に説くのは女神に説法でしょうが、上っ面だけの技術だけを身体に刷り込んだ処で、模倣（こけおどし）以上にはなれないですから」
そういう意味では、僕が『超人兵計画』の”完成品（ティグル）”に近いのでしょうね、と。
嬉しそうに笑って剣に付着した血を払い落す弟の言葉は、レーヴェにとって確かに言われる迄も無い話であった。
まだ、自分達が小僧ですらない、幼い子供であった頃。
未だ病を患っておらず、共に屋敷の庭を駆け回り、木剣を振り回していた弟。
彼と何度も何度も行った、子供ながらに真剣であった力比べは――圧倒的に自分の負け越しだったのだから。
――病さえなければ、きっと弟は自分より強くなっていた。
今になっても、時折感傷と共にそんな風に思いを馳せる程には、ティグルは剣の才に溢れていたのだ。
未練にも、寂寥にも似た思いで、何度も脳裏に思い描いた、成長し、開花した弟の剣。
それをこんな形で見る事となった兄の胸の裡は、どれ程に複雑であったのか。
（……学の方は言う迄も無い。剣を握れぬ身体となっても、蓄えたその知によってどれ

程に吾輩や陛下が助けられたか）

病にさえ罹らなければ、弟は武と知、両方の面において己の及ぶ処では無かった。

ケントゥリオ侯爵家の当主であれ、将軍の地位であれ、ティグルが健常のままであれば、レーヴェは心底納得してその座を譲ることが出来ただろう。

だからこそ、弟がこの様な凶行・外道に手を染めていた事を知り……帝国の大将軍たる男は恐れにも似た疑問を抱く。

「……ティグル、お前は……吾輩を、恨んでいたのか？」

剣才も学も自身に及ばぬ、若い頃は猪とさえ呼ばれた、馬鹿正直しか取り柄のなかった、兄を。

唯一、自分が持ちえなかった”健常な肉体”を持つが故に、帝国にて並ぶ者無き将、などと持て囃される様になった、兄を。

唯一つを持ちえなかった故に、表舞台に立つことすら出来なかった才気あふれる弟は、恨んでいたのではないか。

数日前までならば一笑に付して頭から振り払っていた筈の、そんな疑問を、喉に絡まって出てこない言葉を捻りだすようにして、レーヴェは吐露した。

普段の豪放磊落な雰囲気をすっかり潜めてしまった兄に対し――ティグルは何を言われているのか分からない、といった風情のキョトンとした表情になる。

「……恨む？　僕が？　兄上を？」
太陽って西から昇るよね、と親しい人間に真顔で聞かれたかの様な顔でひたすら訝し気に首を傾げた彼は、ややあって大袈裟な程に首を横に振って否定の意を示す。
「まさか！　そんな事は天地がひっくり返っても有り得ない！　そもそも僕がこの身体を手に入れたのは兄上の御傍で共に戦う為！　兄上が見ていた戦場の光景を何時か共有出来るようになる為です！」
泰然とした態度を何処ぞに放り投げ、慌てた口調で宣言するティグル。
兄へと向ける自身の感情を誤解される事が余程不本意であったのか、口早に語られる台詞には必死さすら滲んでいた。
「……尤も、それもかの大戦が急速に収束に向かったせいで儚い夢となりましたが……今回の件といい、つくづく忌々しい。盤面を引っ掻き回せる力を持ちながら、盤上のルールに従わない狂人ほど厄介なものはない」
全力での主張から一転、苦虫を口いっぱいに頬張ったような渋面となって吐き出された言葉には、強烈な拒否感と――口に上らせる”誰か”への幾ばくかの嫉妬が滲んでいる。
黙して話を聞き続ける兄より目線をズラすと、彼はその背後に並ぶ騎兵の内の一騎へと視線を当てた。

「――そういえば、君もあの男の影響を受けた一人か」
「お、叔父、上……」
動揺激しいまま、震える声で応えたのは同じ色の髪を坊主頭に刈り上げた少年騎士――ノエルである。
「……気に入らない男だが、君の意識改革を促した事についてだけは、良い仕事をしたというべきなのだろうね」
肩を竦める叔父――ティグルに、少年は堪え切れず先程から胸中に湧いて止まらなかった疑問を向けた。
「……僕が、教国の方々にご迷惑を御掛けした一件、叔父上が……叔父上が、男爵を通じて手引きを行なったのですか？」
「うん、そうだね。あそこまで大事になりかけたのは流石に予想外だったけれど」
至極あっさりと告げられた言葉に絶句する甥に、仲の良い家族であった筈の男は再び肩を竦めて見せる。
「折角兄上譲りの見目と剣才を持っているというのに、あの程度の虚偽も見抜けない馬鹿であるのは許されないよノエル。兄上も若い頃は少々向こう見ずな処があったけど、大事な場や重要な局面では決して愚かな選択をする様な事はなかった」
顔色を失くして俯き、握った拳を震わせるノエルに向けて掛けられる言葉は、まるで

書斎で彼に勉強を教えていたときのような柔らかな口調のままで。
だが口にしたその内容は、少年の知る叔父であるならば決して吐かない悪意なき棘が生えていた。
「でも、最近の君はとても良い。あの男が切欠というのは業腹だけど、益々兄上の若い頃に似て来た――うん、以前は少々兄上の息子としては不出来だったが、今はちゃんとらしくなっている。髪が戻れば更に似通うし、言う事は無いね」
にっこりと笑って告げられる言葉に、やはり嘘や虚飾、悪意の類は感じられない。
それだけに……何処までも父（レーヴェ）しか見ていないティグルの言動は、殊更にノエルの胸を抉った。
信頼していた叔父から向けられた言葉に打ちのめされる少年騎士の姿に、居並ぶ軍勢の中、後衛を担当する宮廷魔導士団の一人である少女――イヴが凄まじい形相で飛び出そうとして、同僚達に抑え込まれている。
そちらにも目を向け……おそらくは何かを口にしようとしたティグルだったが、それを遮ったのはこれまでの会話を興味の薄い表情で聞いていたシュランタンだ。
「身内同士の愁嘆場は、牢に入ってからの面会時間で行って欲しいものですねぇ。私も暇とは縁遠い身の上ですので、さっさと縄を受けなさい、ティグル＝ケントゥリオ」
「……そもそもこの場に居るべきでは無いのは貴方の方だよ、伯爵。あの男と同じく、貴

方の存在は今夜の一件において異物にも程がある」
会話を中断させられた事が不愉快だったのか、固い声と表情が向けられ……しかし威圧混じりのソレを鼻で嗤って受け流すと、多方面から三枚舌の蛇と揶揄される男は引っ込めていた胡散臭い笑みを再び顔に張り付けた。
「何を言い出すかと思えば……其方がどの様な絵図を描いて不揃いな言動を行うのか、私に酌めとでも?」
「……やはり貴方は厄介だよ。そしてそれ以上に、不快だ」
「結構な事ですなぁ。他者から寄せられる情、という点では貧者の部類である自覚はありますが、侯爵家の人間でありながら犯罪(汚濁)に首まで浸る人物の好意など願い下げです」
お前に自分の甥御を扱き下ろす資格なぞ無い、とばかりにたっぷりの皮肉と嘲弄を込めた眼で馬上より見下す伯爵に、ティグルの顔が今にも舌打ちでもしそうな程に歪む。皮肉なことに、その反応はレーヴェよりは主であった皇帝の方に似通っていた。
「汚濁、ね。清廉潔白とは真逆の人間の口から出る言葉としては皮肉が利いている。自虐も兼ねているのかな?」
「下らない。一点の曇りも無い真に潔白の人間など居る訳がないでしょう?」
シュランタンからすれば、ティグルの台詞はまさに戯言であった。
言語を介するだけの知能があり、喜怒哀楽の感情がある以上、その生物にはどうし

たって黒い面が浮き出て来るものだ。清廉潔白という言葉を強いて当て嵌めるのなら、生まれたての赤子のみがソレに近いだろう。

だからこそ、生きていく上で人は選ぶのだ。

どのように生きるかを。光と影、正しきか邪なるか、どちらに重きをおいて進むかを。

込められた皮肉の量はそのままに、若干の哀れみが混ぜ込まれた視線で以て蛇は眼前の咎人を見下ろし続ける。

「……真っ白な図に選択という名の色を落としてゆくが人の生。要はどの色に傾くか、でしょうに。鬱陶しい程に白地が目立つ御仁に焦がれておきながら、自身の絵図を黒で塗り潰す――それで何故、隣を征けるなどと夢を見たのやら」

白と黒、その生き方が明確に分かれてしまった兄弟を順に見つめ、灰色を選び続けてきた男はどこまでもブレずに再三となる同じ内容の言葉を口にした。

「まぁ、それはそれとして。さっさと終わらせるとしましょう。この件で忙殺されていた分、大祭の視察の予定が押していますからねぇ」

言い終えると同時に片手を挙げると、シュランタン配下の者達が静かに移動を始め、包囲網を狭める。

それに対し、ティグルは慌てる事無く己の懐を探り、一つの宝珠を取り出した。

「生憎と、蛇は嫌いなんだ。貴方に捕まるなど御免被る」

握り潰される宝珠。当然、この場は現在も聖女の発動させた超広域の儀式魔法の範囲内だ――故に、発動されたのは彼の作った組織の十八番である転移魔法の《門》ではない。

はたして、展開された魔法は召喚魔法の一種であった。

巨大な虎にも似た獣が構築された陣より飛び出し、召喚主であるティグルと眼前の軍を隔てる様に着地する。

当然の如く、顕れた獣にも組織の研究成果が施されていた。強靭でありながらしなやかさも併せ持つその四肢には少量ながら魔力導線の光が励起し、明滅している。

何より、これまで帝国側が相手取って来た実験体の魔獣とは違い、獣ながらに確かな意思と知性が垣間見えるその瞳。

文字通り虎の子、という事だろう。主と同じく、無数の命を犠牲にした実験の末に最新の強化・改造をその身に施されたその獣は、これまでの相手とは段違いの圧を発している。

彼らの本拠地に置かれた最大級の手駒には劣るものの、帝国の精鋭たる第一騎士団をして油断できる相手では無い。

即座に陣形を整えるべく、騎士団と領軍が動き出したそのときであった。

総大将を護る壁となるべく前に出た騎兵たちを半ば押し退けるようにして、帝国の武

力の象徴たる男が進み出る。
部下達の間から上がる制止の声には応える事無く、再び最前列に出たレーヴェは愛馬の背より飛び降りた。
静かな、だが陽炎すら立ち上りそうな気迫を発するその背中に、大人しく配下の壁の後ろへと下がったシュランタンから皮肉交じりの警告が突き刺さる。
「何をやっているのですか貴方は。御自身の立場を――」
「無茶は承知の上だ。この場は吾輩に任せてもらいたい」
「……閣下に万が一の事があれば、陛下に怒りを向けられるのは私なのですがねぇ？　その程度の事は理解して頂きたいものです」
普段ならばそのまま険悪な雰囲気の口論になるであろう蛇の軽口にも、獅子は振り向く事すらしなかった。
硬い――だが、決意を漲らせた声色で、レーヴェは自身と水と油の関係にある男へと言葉を返す。
「……それでもだ。卿には無駄な時間となるだろうが――頼む」
よもやレーヴェから自分に対してその様な言葉が向けられるとは想像の外であったのか、シュランタンの目が見開かれる。
驚き、呆れ、面白いものを見れた、と言わんばかりの表情になって。

最後にいつのもニンマリとした笑みを浮かべた蛇は、獅子に応えて兵に包囲に留めるように指示を送った。

「この局面で私情による戯れなど認められない、と言いたい処ですがねぇ……年のせいか、夜に慣れた眼に白む空の明かりが染みる故、暫し眼を閉じるとしましょう」

「感謝する」

振り向かずに簡潔な礼だけを口にし、腰に佩いた幅広の直剣を抜刀するレーヴェ。

彼の部下である騎士団もその意を酌んだのであろう。緩やかに包囲網を敷くに留め、陣形を維持したまま整然と自分達の総大将が巨大な魔獣に向かって進む様を見送る。

命に忠実である、というのも勿論そうだが……何より彼らは信じているのだ。

帝国騎士、その頂点に立つ男の力を。自分達が将と仰ぐ人物の武威を。

魔獣が地鳴りの如き唸り声を上げ、歩み寄る赤髪の偉丈夫を睥睨する。

その発達した牙と爪、巨躯は、虎というよりさながら剣歯虎（サーベルタイガー）か。心身を害さぬように細心の配分で以て施された魔装化処理は、獣を下手な竜をも凌駕する高位の存在へと押し上げていた。

精鋭たる騎士団でも犠牲無しでは討伐には至らず――それこそ《刃衆（エッジス）》の隊員であろうとも、単騎でこの獣を無理なく討ちとれるのは隊長クラスの三名だけであろう。

だが、剣虎が相対するは《赤獅子》レーヴェ＝ケントゥリオ。

聖教国の人型筋肉要塞ことガンテス＝グラッブスと正面から足を止めて打ち合える、剛剣の極みたる超絶の剣士である。

剣虎の喉から草木に浮かんだ朝露を吹き払う様な咆哮が轟き、ビリビリと大気が震え――しかして堂々と正面から歩み寄る将軍の巨躯には、欠片の怯みや動揺も与えることすら出来ず。

「退(の)け」

獅子より剣虎に、単純にして簡潔な一言が命じられる。

既に互いは目前。剣にしろ、爪牙にしろ、容易く届く距離である。

前脚を振り上げ、振り下ろせばそれで終わる。

ヒトという生き物は脆い。剣虎にとっては玩具未満の餌である筈だった。

――だというのに。

自身より遥かに小さな生物より発せられた声に獣は四つ足全てを地に磔にされたが如く、動く事が出来ない。

それでも牙を剥き、四肢に力を漲らせるは、人という力弱き種に臆する事を嫌った獣の矜持か、はたまた召喚魔法による条件付けか。

身体の奥底から湧く重石にも似た感覚を捻じ伏せ、剣虎は一気呵成に眼前の人間へと跳び掛かる。

結論からいうのならば、この魔獣の行動は致命的に誤りであったのだろう。
或いは、検体として強化処置を受けていなければ、己の本能が警告する儘に、即座に遁走か――若しくは腹でも見せて寝転がっていたのかもしれない。
野生の獣としては埒外の”力”を手に入れたが故に、喚きたてる生存本能に背を向ける愚を犯してしまったその負債は即座に支払われた。
「警告はした」
鋼以上の強度を誇り、質の悪い魔装ならば一撃で噛み砕く牙が、容易く両断される。
振るわれたのは横薙ぎのシンプルな一撃。
レーヴェの剛腕とそれを十全に生かす剣技によって繰り出されたそれは、彼を噛み砕かんと剥き出しにされた剣虎の牙を断ち、そのまま真っ直ぐに上顎を裂き、頸椎に到達し、強靭な肉と骨を紙の如く裂いて進み、背骨を裁断して臀部へと抜ける。
文字通り上下に分割された獣の巨躯の下半分が、鮮血を撒き散らしながら走り続けて魔導士隊の展開した障壁に激突し、くずれ落ちる。
取り残されてべしゃりと地に落ちる上部には互いに目もくれず、ケントゥリオの兄弟は相対した。
「投降せよティグル。拒むならばこの場で斬る」
「あぁ、素晴らしい！　力強く、真っ直ぐで美しい……やはり兄上の剣は見事だ！」

静かに、だが揺らぐことなく向けられる切っ先を恍惚とした表情で眺め、弟もまた剣を構える。
「何時振りでしょう、兄上と剣を交えることが出来るのは！　戦も終わり、共に戦う夢は破れましたがこれもまた至福の時間と言える！」
「……馬鹿者が」
かたや鉄火場には場違いな程に朗らかに、嬉しそうに。
かたや苦渋の表情を押し殺した顰め面で。
これより先は剣で語るとばかりに、獅子二匹は激突した。
両者共に握るは幅広の長剣――だが、振るう剣の質は対極である。
兄は無駄を削ぎ落し、実を突き詰めた剛の剣。
弟は受け、流し、翻弄しながら虚を突く柔の剣。
レーヴェの振るう剣は悉くが絡め取られ、受け流され。
だが、その剛剣を逸らすので精一杯なティグルも反撃までには至らない。
鋼が擦れ、軋み、火花を上げる。
逸らされた力の流れがレーヴェの上体を泳がそうとするが、それを単純な膂力でねじ伏せて一瞬で太刀筋を切り返す。
一方で、肉厚で繊細な扱いには向かない筈であろう剣を器用に駆使し、人外級の戦士

の剛撃を捌き続けるティグル。
幼い頃にも垣間見た、弟の天凛。
数十年越しに花開いたそれを体感し、瞠目しながらも兄は愚直に剣を振り、叩きつけ続ける。
――何故、この様な真似をした。
陛下が民に安寧を齎そうと腐心している様を、近くで見ていた筈だろう。助言を行う裏で何故こんな非道が働けた。
こんな、赦されざる行いに手を染める前に、どうして自分に話をしてくれなかったのだ。
迷い無き剣筋とは裏腹に、刃に込められた想いは慟哭にも近い。
しかし、それを受け止めるティグルの剣は真面に答えを返す気配を持たなかった。
あるのはただ只管に剣を交わせる歓びと、兄への賞賛。
庭で木剣を振り回していた頃と変わらぬ、幼子の様な敬慕の情である。
互いに一方通行にも似た、剣を介した意思の交換。
だが、それでもレーヴェはティグルの兄であり、帝国の軍部を取りまとめてきた将軍でもあった。
ティグルが自分へと向ける感情に嘘偽りは無いのだろう。全く、これっぽっちも。

だが、剣に込められた弟の溢れんばかりの情念が、それを帳として奥にある意思を押し隠しているのを彼は見抜いた。
そして……弟が帳の奥を晒す事は絶対に無いのだという事も。
剣戟の中、レーヴェは忸怩たる思いと共に奥歯を砕かんばかりに噛みしめる。
打ち込んだ横薙ぎが弾かれた勢いを利用し、切っ先を天へと跳ね上げて大上段の構えに移行。
強引な攻めだ。その刹那の隙を逃さず、受けに徹していたティグルの剣が電光の如く閃いて攻めに転じた。
最短距離で心臓に向けて突き込まれる切っ先。
対して、レーヴェの剣は振り上げられたばかり――彼我の攻撃タイミングは、完全にティグルが先んじている。
「父上ぇぇっ!!」
既にこの場の誰もが捉えられぬ速度となっていた獅子の兄弟の剣速。
それを唯一人、かろうじて眼で追う事が出来ていたノエルの口から悲鳴じみた叫びが上がる。
――瞬間。
「オオォォォォォッ!!」

裂帛の雄叫びが、大上段に構えた獅子の片割れの喉を割って飛び出した。
振り下ろされる両腕がノエルの――そしてティグルの眼すら振り切って霞んでブレる。
その先に握られた剣の速度は更にそれ以上。天より落ちる落雷の如く、音を遥か彼方に置き去りにして打ち下ろされた。
出遅れた筈の一撃は、だが単純な速度によって胸元に迫る切っ先を凌駕し、打ち据え――そして粉砕する。
己の剣を砕きながら迫る一撃を前にティグルがその顔に浮かべたのは、これまでと変わらぬ笑顔であった。
「あぁ――やっぱり兄上は凄いや」
魔装処理の施された衣裳を容易く斬り裂き、兄の剣が弟の肩を裂いて胸まで深々と埋まる。
へし折られて柄だけとなった剣を取り落とし、ティグルは――帝都に根を張り巡らせていた巨大な犯罪組織の長は、血塊を吐き出して前方へと倒れ込む。
力を失って傾く身体。それを一歩進み、受け止めたのは彼を斬った兄本人であった。
「ご……フッ……あぁ、いけ、ません。あにうえの、鎧、が……よごれて、しまう……」
「……家族(おまえ)を受け止める為に必要ならば、鎧など幾ら汚れようと構わん」

許し難い罪を犯した咎人である。
無辜の民も、野に生きる獣も、どれほどに屍を積み上げたのか分からぬ外道共の首魁でもあった。
騎士として、人として、許してはならない罪人であった。
それでも。
報いを与え、終わらせるのがこの手であったのだとしても。
それでも――彼らは兄弟であったのだ。
悲痛、憤怒、疑問、寂寥――そして、愛情。
あらゆる感情を押し殺し、無表情となった兄の顔を見て。
血に染まった土気色の顔で、弟は申し訳なさそうに微笑んだ。
「……すみませ……お手間、を……私の、書斎……隠し棚、が……後片付けに、ひつような、ものは、ぜんぶ、そこ……」
「ッ、片付け、だと？　お前は……」
己に寄り掛かり、途切れ途切れに呟かれた声に、咄嗟に兄は弟の肩を掴んで俯いたその顔を覗き込む。
「……ティグル？」
「……」

言葉が返って来る事は無く。
半ばに開かれたまま動かなくなった弟の青い瞳に指を這わせ、瞼をそっと下ろしてやると、兄は寂しそうに「馬鹿者が」と再び呟く。
仰いだ天は夜闇を押し退け、白んだ空は雲間から陽を覗かせようとしてる。
蔓延る悪意――そこに隠された真意こそ未だ明けぬままではあるが。
それでも、帝都の長い夜は明けようとしていた。

誰でもない男（ジャック＝ドゥ）

幼い頃から、己がどこか異質である自覚はあった。

明確にそうであると認識したのは学生（ガキ）の時分、見てくれの違う――所謂移民の子である己を標的にして、下らない真似を愉しそうにしている奴らを半殺しにしたときだったか。

下手に反撃して問題を起こせば、当時の己の預かり先であった施設にも連絡がゆく。

そうなれば面倒だと思って、極力相手にしないように努めていたのだが……出身、立場、財力――どんな形であれ、自身より”弱い”者を甚振って薄い自尊心を満足させたい類には逆効果であったらしい。

子供らしい可愛げのある嫌がらせ（オイタ）程度ならば我慢も効いたのだが……数人掛かりで囲み、ニヤついた顔で刃物を見せびらかした時点で、驚くほど冷静に、自然に、自分の中のスイッチが切り替わった。

眼前の連中は凶器を、人を殺しうるものを己に向けた。

ならば、それは悪戯だの、世間一般でいう処のイジメというものではない。
合図だ。
命を奪うという、或いは奪われるという、合図なのだと。
本格的な暴力沙汰なぞはそのときが初めてだったが……端的に言えば己は其方の方面の才能があったらしい。
殴られて痛みと共に走る熱も、相手の肉を打って潰す感触にも、なんら違和感を覚える事無く。
直ぐにそれは馴染み、楽しさすら覚えながら絡んで来た連中を叩き潰した。
結果的に言えばその後、停学になった。自分も、連中も。
相手は数人がかりで且つ刃物を持ち出し、実際にこちらは多少切りつけられて負傷もしたのだが、確実に無力化するために手足をへし折ったのが過剰防衛だと連中の保護者が訴え、それを学校側も正論だと判断した。
喧嘩両成敗だと言えば聞こえは良いが、それまでに連中が己に行ってきた行為に関しては都合よくスルーされたらしい。
親無しのハーフの餓鬼が社会的な弱者である事など、論ずる迄もない。一方的に加害者扱いされないだけマシだったというものだろう。
それ以降はまぁ、平和なものだ。

手足と一緒に薄い自尊心の方も折ったのが功を奏したのだろう。停学明けは面倒なのに絡まれる事もなく、穏やかに学生生活は過ぎていった。

学校側からは危険物扱いで腫物の様に扱われたが、それでも友人・知人の類がいなかった訳では無い。

己の本質が現代社会から見て不適合である事は理解したが、小動物を切り刻むだの、通りすがりの女子供をカッターで切りつけるだの、そういった方面の嗜好が湧く事も無く。穏便に過ごせていた様に思う。

今思い返せば、”向かってこない相手”や”同じ土台に無い相手”には嗜好が反応しないというだけだったのだろうが。

穏やかではあるが退屈な時間。

師と出会ったのはそんなある日の事である。

師は寂れた剣術道場――であった、古い屋敷に住んでいた偏屈な爺だった。

とうに道場も畳んだというのに、外しもせずに放置していた、文字もすっかり掠れて薄汚れた看板。

それを通りすがりに偶々見かけた己が、”戦う術”と”人を斬る技”というものに惹かれてぼんやりと看板を眺めていたときに、買い物帰りの師が後ろから長葱で頭を引っぱたいて来たのが出会いである。

「興味があるか。ならば試しに振っていけ、坊主」

はしより過ぎにも程がある勢いで、襟首掴まれて屋敷に引きずり込まれ、庭で素振りをさせられたのが始まりでもあった。相手が施設育ちの餓鬼とはいえ、時代が時代なら誘拐だ虐待だと外野が騒がしい事になっていただろう。

師事してからというもの、何処ぞの道場の経営者だの、警察関係者のお偉いさんらしい人物だのがやってくる度に、「とっくの昔に引退した」と嘯いて相手にしなかった老人。

それが何故、家の前で二、三言葉を交わしただけの餓鬼を半ば強引に弟子にしたのか。当時は理由が分からなくて困惑したものだ。

とはいえ、心惹かれる技術を無料(タダ)で学ぶ機会、というのもあって拒否する事無く流れに乗った己も大概である。

弟子が己一人、というのもあったせいか、漠然とイメージしていた回りくどい精神論や木刀や竹刀を握るまでに年単位かかるといった大層な前置きも無く。

二人で埃の積もった道場を数日掛けて掃除し、雑巾で必死に磨いた床と壁がピカピカになった事に感慨を覚える暇すら置かず、直ぐに修練は始まった。

ボコボコにされた。

次の日に、即施設や学校にまたもや暴力事件でも起こしたのかと問い詰められる程度

には。

幾つかの構えと、基礎的な振り方。受け方。

最初の半月ほどは只管それを反復する。

後は走り込み――流派や得物に関わらず、足腰の萎えた武術家など羽を挽がれた鳥と変わらん、という主張も理解できるので、こちらは道場外の時間でも意識して行う様にと言われた。

そして半月後。木刀を振る本人が随分とハイペースだと思う流れで試合形式の稽古が始まったのだ。

自称・引退した年寄りは当時の己からすれば意味が分からない程に強く、打ち込まれる竹刀に反応すら出来ずに意識を飛ばす事もしばしばあった。

我が事ながらなんとも救いの無い性分であるが……それに悔しさよりも歓びを覚える。

全力で打ちこんでも、考え得る限りの方法で隙を作りだそうとしても、なんら届かずに捻り潰され。

一撃一撃が、気を抜けば一瞬で意識を飛ばされる程の打ち込みを、全神経を集中して凌ぎ、躱そうと試みる。

あくまで修練であり試し合い――〝本番〟とは程遠い緊張感であろうが……それで

も楽しかった。生きていた中で、これまで無い程に。
床を舐め、攻防の問題点を問われ、考え、答え合わせに再び打ち合い、もう一度床に転がされ。
得た経験を咀嚼しながら反復稽古に反映させ、芯として在るべき型と実践時での実際の振り方、その擦り合わせを行う。
客としてやって来る警察関係のお偉いさんが頭を下げるだけあって、師は妙なコネがあったらしい。施設の門限を大幅に遅れてたり、ときたま泊りがけになっても特に注意や小言が飛んでくる事も無く、問題として話題に上がったことすら無かった。
剣を振り、走り、師に打たれ、学び、そして剣を振り、また走り。
繰り返す内に、教わる型や構え、脚運びが少しずつ増えてゆく。
ルーティーン化した、だがこれ以上無く充足した時間を過ごし、そのまま幾度かの季節が巡った。
義務教育にも終わりが近づき、同時にめでたく施設からもお払い箱になるであろう時期が近づいてくると、師はあっさりと自分に告げてきた。
「お前が望むなら身元の保証と引受人になってやろう。ただし、修練は本格化すると思え」
施設の紹介する職に就くにしても、どうにか道場（ココ）に通える時間を捻りだす為、場所や

勤務時間に都合の良いものはないか。
そう悩んでいた己にとっては天から垂らされた蜘蛛の糸であった。
同時に、こうまで自分に心をくだいてくれる初めての大人への申し訳無さを覚えたのだが――当の師はそれを笑い飛ばして「小僧が気にする事か」と切って捨てる。
どうしてそこまでしてくれるのか、とは、気恥ずかしさと幾らかの怖さがあって、そのときは聞けなかった。
師の紹介してくれたバイトはこれまた足腰の鍛錬に役立ちそうな職種であり、なんなら重りの類を着けていっても話が通っているのか何も言われる事は無い。
これ幸いとばかりに職場の時間も修練に利用し、帰れば剣を振り、打ち合い、打たれ、また剣を振る。
春を迎え、成長期真っ只中の背は伸び。
夏になり、いつの間にか分厚くなった掌は、幾度素振りを行なおうと皮がめくれ上がる事もなくなり。
秋が巡り、剣だけでなく、組討ち術も修練の内容に含まれる事になって。
冬が訪れ、瞬殺から秒殺程度には喰らい付ける様になった筈の師との試合が、無手の技まで織り込むようになって床に転がる頻度が振り出しに戻る。

そんな生活を続けて二、三年ほども経った頃であろうか。

「出掛けるぞ、支度をしろ」

飄々とした掴み処の無い爺である師が、珍しくむっつりとした顔で遠出を宣言した。

最低限の生活費は収めているとはいえ、衣食住を世話してもらっている身だ。供を命じられても否は無かったが、遠出の理由を聞かされたときは驚きと呆れを感じたのは覚えている。

「……孫を迎えに行く」

昔、大喧嘩の末に家を飛び出して行った、絶縁状態の一人息子がいたらしい。

いた……過去系の言葉が差す通り、数日前、交通事故で妻であった女性共々亡くなったと連絡が来たそうだ。

事故自体は既に先月の話らしい。苗字まで妻のものを名乗る等、比喩抜きの絶縁であった為、役所側も師が親族であると辿りつくのに手間取ったという。

息子夫婦には娘が一人いた――つまり、師の孫である。

最初はこっそりと墓参りだけを行い、他所の親戚に引き取られる孫に経済的な援助を密かに行うつもりだった、と移動中の車の中で師は愚痴っていた。

だが、母方の親戚筋も彼女を引き取ることに積極的ではないらしく、最悪、孫が盥回しにされる可能性がある、と判断して手をあげたそうだ。

なんだかんだと長い付き合いだ。本当は真っ先に立候補したかったであろうに、息子と没交渉であった自分がどの面下げて、と変に遠慮していたのは丸分かりである。

何より、喧嘩別れしてしまった息子が、和解もしないまま自分より先に逝ってしまった事がショックだったのだろう。

「……いつの日か、お前と倅を合わせたいと思っていた」

呟く師の背は、何時もより小さく、丸まって見えた。

師の孫は、己より一回り以上は年下の幼い少女だった。

迎えと墓参りを兼ねた出先で見た両親の遺影を見るに、母親似らしい。

体の色素自体が薄いのか、白い肌に亜麻色の髪の、将来は美人になりそうな中々の器量良しではあった。

だが、折角の愛らしい容姿も俯いてどんよりと曇りに曇った表情では真価を発揮できているとは言い難い。少女の現状を考えれば当たり前ではあったが。

「……これから、よろしくお願いします」

「……任せておけ」

初対面の祖父と孫の会話は、ぎこちないとかそういうレベルでは無かった。

礼儀正しいと同時に聡い子でもあるのか、自分が非常に不安定な立場である事を理解

していたのだろう。
両親を失った衝撃と心の傷、将来への不安、初めて会う祖父への緊張や恐れ。
それらで滅多打ちにされて、酷く憔悴した様子である孫に向けて、師は気難しい偏屈クソ爺ムーヴ全開でぶっきらぼうに返答していた。
――が、あくまで見てくれはそう見える、というだけだ。
実際の処は初めて会う傷心の孫を相手にどうすればよいのか、途方に暮れているのが透けて見えた。
剣腕においては未だ影すら踏めぬ妖怪じみた爺だが、この数日で意外とヘボな面が見えた事で、良くも悪くも師への幻想が崩れた感がある。
どうやら自分はこの場において、師の添え物、ただの置物ではいられないらしい。
全く以て性分では無いが、伝えたい言葉と表の態度に甚だ乖離のある老人のフォローをせねばならない様だった。
――そこから先はあまり思い出したくは無い。
棒振りに人生を全振りした家庭人としては赤点の師(偏屈爺)に、人間性の根っこの部分に問題のある弟子(若造)。
心傷ついた小さな少女のケアを行いつつ、柔らかな会話をするにはほとほと向いていない男二人で、悪戦苦闘して剣の代わりに舌を回す羽目になったのだ。

得意分野である剣と違って、無様で見苦しいものであったのは客観的に見なくとも明らかだった。

必死さだけは一丁前のみっともない慰めを試みる老人とその弟子に、最終的に少女が少しだけ笑ってくれた事だけは、せめてもの救いである。

そうして、師と己だけであった屋敷での生活に幼いながらも華やかな一輪が加わった。

どうやら己がバイトで屋敷を空けている時間、祖父と孫で語らう時間を設けたのか、日を追うごとに、月が巡るごとに老人と少女の間にあった硬さやぎこちなさは失われていった。良い事だ。

自分はというと、以前とそう変わらぬ生活サイクルであったが……バイトが休みの日は少女を送り迎えする様になり、修練終わりの夕方には道場の外で型と素振りを熟しつつ、彼女の学校での話を聞いて相槌を打つ、そんな変化が加わった。

後は……少女の為に、季節の行事や学校の保護者が関わるイベントに師が時間を割く様になり、極稀にその代理を押し付けられるようになった位か。

祖父と孫、弟子という名の居候という奇妙な関係ではあったが、過ごす時間は修練の御蔭で変わらず充実しており、各人の仲も良好。不満は無かった。

師も己も、少女絡みの話で四苦八苦する場面もあったが……それも後に振り返れば良い思い出と呼べる程度には、上手くやれていた様に思う。

そんな生活が続いたある日、夏の気配が近づいて来た季節に少女が突然言い出したのだ。

「義兄(にい)さん、今度家に学校の子達を連れて来ても良いですか？」

仕事の無い休日ではあったが、師が所用で出かけた為、庭で基礎鍛錬に精を出していた己は首を傾げる。

何時の間にやら己を義兄予呼びする様になった少女――此方にも義妹(いもうと)呼びを強制してきた――は、身内の贔屓目無しにしても華やかな雰囲気の美人に育った。

ついこの間までランドセルを背負っていたというのに、今ではブレザーの制服を行儀よく着こなした中学生である。子供の成長は早いものだ。

兎に角、そんな義妹であるからして、学友に囲まれた実りある青春を送っているのは理解できる。

友人を自宅に招く事も十分にあり得る事だろう。師に許可を得ているのなら、居候に過ぎない己が口を挟む事では無い。

「もう、またそんな事を言って……って、そうじゃなくて。夏休みに入ったら、剣道部の方で合宿をしようって話が出たんです。それで、家の道場を使えないかって」

そういう事かと得心がいった。

義妹は最初、師や己の真似て剣を振りたがったのだが、師が「これはお前が学ぶべき類では無い」と主張して譲らず、珍しく言い争いにまで発展した。

代替案として彼女が剣道を始めてからは、師も剣道に則した振りや鍛錬を見てくれるようになったので義妹の不満は消えた様だ。

思うに、義妹はあくまで師や己と共有できる話題・繋がりとして剣を求めたのだろう。

それ自体は特に問題では無いのだが……師と己の剣は古臭い、現代の倫理観から見れば不適格にも程がある由緒正しき人斬りの技である。

己の様にそちら方面に傾いた気質を持っているのならば兎も角、真っ当な感性と良識を持つ義妹が覚えるべきではないものばかりだ。師がやるなら学校の部活動にしろというのも当然の話であった。

……大分話が逸れた――兎にも角にも、そんな切っ掛けで始った義妹の剣道部ライフであるが、ミーティングで初の合宿話が上がる程度には順調らしい。

公式の記録としては大したものは無い、よくある弱小校のようだが……義妹が卒業するまでには全国進出を目指しているのだそうだ。青春を謳歌しているようで結構な事である。

合宿とやらを行うのであれば、在宅中は四六時中道場に居座っている己は邪魔になる

だろう。
要は、義妹は合宿中だけでも道場を空けてくれないかとお願いしに来た、という処か。
何度も言うが、師が許可を出しているのならば己に否は無い。だというのに態々頼み込むとは、我が義妹ながらなんとも律儀な気質（タチ）ある。
「……褒められたのは嬉しいですけど、全然違いますからね？　私がお願いしたいのは――」
しかし、そうなるとバイトを終えて帰宅しても時間を持て余してしまう。
泊まり込むであろう剣道部の少年少女達も、己の様な無骨な居候者が居ては何かと心休まらないだろう。
いっそ休みをとって山籠もりに行くというのはどうだろうか？
大抵は師と二人――ここ数年は義妹も加えて半ば行楽染みたキャンプと化していた行事であるが、偶には一人で山頂付近まで脚を伸ばし、厳しい自然の中で自身を研ぐのも悪くない。
山頂付近にある水場での滝行を思い浮かべると、柄にもなく浮き立つ様な気分になる。
義妹は学友達と道場で切磋琢磨し、己は雄大な自然を相手に自分の剣を見つめ直す――うむ、実に良いでは無いか。

一頻り考えを巡らせて結論を出すと、心惹かれる予定が待ち遠しく、なんとも良い気分であった。

笑顔で義妹のお願いを快諾しようと改めて向き直ると――。

「このっ馬鹿義兄っ……話をっ、聞けーっ！」

何やら顔を真っ赤にして憤慨した義妹に手拭いで面打ちを叩き込まれた。

濡れそぼった手拭いは、地味に痛い。

結論から言うと、義妹の願いとは部活仲間の学友達の剣を己にも見てやって欲しい、という事だった。

正直に言えば気が進まない――というより、師が保護者兼監督役として子供達の面倒を見るというのだ、己の出番があるとは思えない。

だというのに、当の師から合宿の監督役を補助するようにと命じられてしまった。

「他者に教える事で己が剣を見つめ直せる事もある。良い機会だ、同じ武でも術と道では見えるものが違う場合もあると知っておけ」

競技化した剣を下げて見る気など無い。

あれはあれで時代に則したものなのだろうし、スポーツ化した事で多くの者が触れる事によって研磨された技術というのもあるだろう。ただ、己の気質に沿うとは思えないだけだ。

――が、師の命だ。何より、この経験もまた自身の剣の糧になり得ると言われてしまえばやはり否は無い。

「何にしても、教える側が規範を理解しておらねば張子の虎よ。何はなくともお前は剣道――武道と競技としての剣の在り方、それとルールを覚えるのが先だ、手引書があるので眼を通せ」

ニヤリとしたその笑みは正に糞爺のソレであり、渡された入門～上級者用にまで分けられた数冊の本は、総合すると真剣の刺突も止められそうな厚みであった。

悪い笑みを浮かべる師の顔面に本を投げ返したくなった。師事して七、八年は経つが、何気に初めての経験である。

そして半月後。

普段の修練の時間を削ってまで手引書の内容を頭に叩き込んだ甲斐あって、義妹の学友達への監督――正確にはそれを行う師の手助けは、一応は大過なく終える事が出来た。

……その筈、なのだが。

何故か自分が義妹達の外部顧問になるだのならないだの、そんな話が持ち上がっているのは解せなかった。

あくまで己は師の補助に徹していた筈だ。何をどうすればそのような話になるのか。

義妹の級友である女生徒達に「あの娘があんなに自慢しているお義兄さんが、どんなに凄いのか見てみたい」な等とせがまれ、見世物よろしく鉄芯入りの巻き藁を斬らされたが……それとて師とは比べるべくも無い、粗だらけの一太刀であった。

生徒達に受けは良かったが……これは単に、真剣自体を見るのも、それが振るわれる処を見るのも初めてだった所為だろう。

己の拙い技でもすごいすごいと無邪気にはしゃぐ女生徒の中に気になる娘でもいたのか、男子部員の中でもいっとう勝気そうな少年に突っかかられもした。

見当違いの熱意に折れる形で試合もしたが……そもそも身体の出来上がっていない中学生相手では、技術の差以前に根本的な鍛え方が違う。

伊達に成人してまでフリーター擬きで鍛錬に全振りした生活をしていないのだ。世間的に見れば全く自慢にならないが。

弱小校の中ではエースである事など誤差にもならない。初手の面打ちで気絶させた事で、寧ろ子供相手に大人げない真似をした人物としてマイナス印象ですらあった筈だ。

……だというのに、気絶させた少年を筆頭に、剣道部の少年少女達は己を外部コーチとして招く事を熱望している。正直、意味が分からなかった。

愚痴混じりの見解を聞き入っていた義妹であったが、その反応は辛辣である。
「またそんな事言って。ストイックなのは義兄さんの長所ですけど、御祖父ちゃんだけを基準にするから自覚が出来ないんです。もう少し周囲と関わる様にして下さい」
呆れた声色でバイト先と家の道場を往復してるばかりじゃないですか、と言われてしまうとぐうの音も出ない。
だが、先にも述べたが己はよい年齢(とし)して定職にも着かずに剣ばかり振っている身だ。未成年を指導する人間としては甚だ落第点である、という認識はそう的外れではないと思うのだが。
そんな風に抗弁していると、やはりというか、反論や逃げ道を封じて来たのは師であった。
「ならば丁度良い。これを機に、お前のいう”まともな職”も兼ねてコーチとして雇われてみろ。どの道、あの子らが強くなるには腕の立つ者の指導は必須よ」
……確かに、義妹の所属する剣道部にはまともな指導者がいない。
合宿前に菓子折りもって挨拶に来た部活の顧問であった教師は、人柄としては生徒の意思を汲んで応援している、好感の持てる人物だった。
実際に合宿中にも頻繁に様子を見に来て差し入れなどを置いてゆき、生徒達からも慕われているようであったが……剣に関しては若い頃に多少部活でかじっていた、程度だ

と自己申告しているし、立ち振る舞いからみても実際にそうだろう。
公式の試合で勝ちあがっていくつもりならば、上達を促せる指導者が必須というのは間違ってはいない。いないが……剣腕以外の全てが不適格である己が選ばれるのは、子供達にとっても良い事であるとはどうしても思えなかった。
「喧しい。グチグチと尻込みした言葉ばかり吐くでないわ。お前の言う社会的云々は儂が最低限揃えてやる。先ずはやってみろ、師匠命令だ」
「わぁ、強引。流石御祖父ちゃんです。先にお話しておいて大正解でした！」
「ククッ、コネと立場はこういうときにこそ使うものよ。造作もないわ」
笑顔の孫に抱き着かれて自慢げに小鼻を膨らませる祖父。なんでもいいがその発言は義妹の教育によろしくないのでやめろ師。
そんな感じで、あれよあれよという間に外部からの雇われコーチとして就任してしまった。
「指導する立場で無位は恰好がつかんので、段位も並行して取れ」等と宣う師に、本気でぶちのめすつもりで試合を挑んだ己の行動を、誰が浅薄と言えるだろうか。
……後々考えてみれば、合宿前に大量の剣道関連の知識を詰め込ませたのもこうなることを見越しての事だったのだろう。最初から師の掌の上だったという訳だ。

そうして、気が付けば己の手の中には、常に握られていた剣以外にも抱え込んだものが増えていく。
握った剣の先にあったのは、斬り合う相手では無く、追いかけるべき師の背中であり。
直ぐ後ろには義妹の姿があり、更にその後ろに続くように己を過分にも〝先生〟と呼び慕う、子供達。
常に自身の裡にあった抜身の刃。
師によって導かれ、鍛えられたそれは、不定の狂気にも成り得た己の本性を律する術へと変わり。
いつしか切っ先を向ける先を探すのでは無く、背後にある者達に迫る陰があれば、それを斬り払う為に構え続けられるようになった。
そして、義妹が学生時代に巡り合い、過去に我が家にも連れてきた事のある青年と式を挙げた日に。
幸せそうに微笑む家族や、それを祝福し、笑顔で囃し立てる嘗ての教え子達を目の当たりにして――抜身の儘であった己の本性が、確かに鞘に納められた感覚を覚えたのだ。
「めでたい、というべきなのだろうな」
溺愛していた孫の挙式を複雑極まる表情で眺めていた師が、唐突に呟いた言葉。

それはきっと、ライスシャワーを浴びて隣の若者と笑い合う彼女だけに向けたものではなく――。

「ま、儂が剣を振れる内に収まったのは僥倖だった――道場はお前にやる。あの子らの為に中途に開いた儘であったが……これを機に正式に再開するも、完全に閉じるも好きにせえ」

今度こそ完全に楽隠居よ、と笑って此方の胸板を拳で叩いてくる老人の表情は、やり遂げた人間のソレであった。

偶々、自分の家の前で放置していた道場の看板を眺めていた子供。

その内にある剣才と、それ以上に闘争に餓えた人斬りとしての素質――それらを見抜き。

只、危ぶむのでは無く導く事を選択した老剣士は、放置すれば歪むであろうソレを矯正し、一振りの刀となるまで子供の心身を鍛え上げた。

その上で、本性が納まる『繋がり』まで作り上げ、見事剥き出しの刃を納めてみせたのだ。

十数年越しに、師が己に時間を割いてくれた理由を漸く察し。

完敗だと、そんな想いと共にどこか晴れ晴れとした気分で、笑いが零れた。

「まだまだ、並べたのは剣の腕程度だ。アンタには勝てる気がせんよ――親父殿」

「当然よ。年季が違うわ馬鹿息子が」

義妹の幸せな様子に中てられたのか。

素直に師をそう呼べたのは、その一度きりだ。

それから先は、殊更に語るべき事も無い。

家族や友人、慕ってくれる者達と共に生きてゆこう。

その為に生涯自身の本質に蓋をし続けようとした男の、特筆すべき事も無い終わり。

あの日、住む街は記録的な豪雨……所謂水害というやつに被災した。

家路を急ぐ途中、氾濫した河の水に呑まれようとする道場に通う子を見つけ。

無我夢中で飛び込んだは良いが、鍛えた剣技も荒れ狂う自然の前には意味を為さず――だが、剣の為に鍛えた身体はかろうじて溺れたその子を岸に放り捨てる事に成功して。

そのまま己は水底に沈んだ。

あちらで覚えているのは其処までだ。

やり残した事、残した者の事は気掛かりであったが……それでも、若い頃に予想していたものよりは上等な最期であると、それなりに満足して眼を瞑った筈だったのだ。

――だが、何の因果か、こうして自分は異なる世界に零れ落ちた。

己の家族(朝)の無い、この世界に。帰る事など出来ない、遠い世界に。

もう、二年以上前の話だ。

気が付けば野っ原に転がっていた己が、冒険者として活動を始める前……少しの間だけ世話になった、帝国領南部にある小さな教会。

そこの神父の御蔭で、この世界の事や近年の情勢などをおおまかに知ることが出来た。

当然、ほんの少し前まで続いていた生存競争にも近い、血みどろの大戦の事もだ。

家族(鞘)を失った刀(己)が行き付いた世界は、既に多くの剣が役目を終えた――これから穏やかになっていくであろう世界で。

元いた世界といい、つくづく自分に適した乱世(じだい)に縁が無いのだと苦笑いした記憶がある。

だが、それでも良かったのだ。

腕っぷしが生かせる職という事で冒険者となって。

この世界に来た際に宿った魔力とやらの御蔭で、およそ人間離れした身体能力を発揮出来た事もあり、生きてゆく為に糧を稼ぐ仕事は実に捗った。

自身の命すら危ぶまれる灼けつく様な戦いこそ無いが、”鞘”を失った己の性が渇きを覚える事も無い程度には、異世界(此処)は元いた世界より闘争に溢れている。

大きな戦が終わった直後、という事を加味してもだ。正直にいえば、元の場所で偶に感じていた窮屈さや息苦しさが無い分、生き易いのは確かだった。

人里に降りて来て人間や田畑に危害を与える野の獣を斬り。

土地調査の依頼と修練も兼ねて遠出した先の山中で、魔力に適応した獣――大型の魔獣と遭遇し、返り討ちにする形で斬り。

一度だけだが、同じ様な依頼を受けた先で邪神の信奉者、その残党を殲滅した事もある。

自身で選んだ道とはいえ、やはり鬱憤が溜まっていたのだろう。

押さえつけていた、命のやり取りを好む性分をある程度発散できる生活は、あちらでは得られぬ充足感があった。

繰り返すが、己にとってこの世界の方が元居た世界より生きていくのに楽であるのは確かだ。そこは否定しない。

だが、それでも胸を穿つ喪失感は其の儘で――それは分かり易い形で剣に顕れた。

何のことは無い、己は……普通の人間だけは斬れなかったのだ。

最初に相手をしたのは依頼を受けて潰しに行った野盗の集団だ。

長く続く戦で荒れた世――しかも負ければ種族単位での滅びが待った無しな状況で、自分達が一時の享楽に耽る為に安易に強奪や略奪を繰り返していた者達。

邪神の信奉者共よりはマシ、というだけで、この世界の法と照らし合わせても処刑か鉱山奴隷として使い潰される末路しかない塵芥。

躊躇いなど無かった。

この世界に住む戦いを生業にする者達は勿論の事、己の同郷である転移者であっても、こんな連中を斬り捨てるのに躊躇する者はいないだろう。

だというのに、どうしても己には斬れなかったのだ。

裡にある本能は、闘争を求める自身の性質は、間違いなく手にした刃を振り抜き、斬り裂く事を求めているというのに。

人を相手にすると師や義妹の声が、あちらで過ごした日々が――失くした筈の”鞘”がそれを引き留める様に、脳裏にチラつく。

結局、野盗共は手足を潰して全員生け捕りという形にした。

元より実力差を考えれば手間が多少増えると言うだけだ、労力的には大して変わりはしない。

人を斬る事の出来ない人斬り（剣士）。

元居た世界と比べれば格段に命の軽いこの世界で、なんとも間抜けな存在があったものだと自嘲の笑いが漏れたが、同時に安堵する気持ちもあった。

”鞘”を失っても、共に在った頃の記憶まで消える訳では無い。

例えもう会えなくとも、己の中に家族(かれら)の存在は、確かに残っているのだと。
そんな風に思えば、今の自分の状態もそう悪いものでは無い。そう、結論づけて。
自己の本質とこれまで培ってきた、大切だった者達との記憶。繋がり。
胸の裡より湧く二つの声が、擦れ合って小さな不協和音を発した事には気付かないフリをした。
この時点で己は剣を捨てるべきだったのかもしれない。
だが、それが無理な話である事も嫌になる程理解していた。
師と出会った日から、剣は常に己の傍らにあった。半身といっても過言では無い。
同時に、師と出会った切欠であり、義妹や教え子達と長く関わる事になった重要な要素でもある。
切り離せる筈も無かったのだ――例えそれが、後に自身へ致命的な矛盾と亀裂を突き付ける事になろうとも。
日毎、或いは立ち塞がる敵を斬り伏せる度、不協和音(ノイズ)にも似た雑音は少しずつ大きくなっていった。
幻聴として頭の中を掻き乱すそれは酷く不快で、心身にまで影響したのか、時折頭痛すら引き起こす。
戦いに没頭する間だけはそれも鳴りを潜め、だが、魔獣や獣を斬る度に益々雑音(ノイズ)が大

きくなる悪循環。
その頃になると、人を相手にした依頼は極力避ける様になっていた。
斬ろうとして――だが斬る事が出来なくて……頭痛がマシになる処か、悪化するばかりであったから。
恐ろしかった。
このまま音が大きくなる事が、ではない。
己がこれに耐え切れず、一歩踏み出した先。
その場所で、今度こそ全て手放すであろうものが、二度と戻ってこないソレを失ってしまう事が、怖くて堪らなかった。
剣を捨てる事も、己から振り切れる事も出来ず、ただ訪れるであろう結果を先延ばしにして身を苛む雑音（ノイズ）から目を逸らし、剣を振るう日々。
そんな中途な状態が長く続けられる筈も無い。
ごくあっさりと、何の盛り上がりも無く、『その日』はやって来る。
己は、人を斬った。
冒険者としての功績を買われ、大規模な賊の討伐を合同の指名依頼という形で受けた日の事だ。
終戦後、各地の兵力は治安維持に力を割く事が出来るようになり、それによって蹴散

らされた賊が一所に集まって大所帯を形成しつつあるのだという。
依頼主は滞在していた街の領主。断れる筈も無く参加し、同業者と共に古い砦跡に巣食った賊を叩き潰しに向かう。
頭の中を乱反射するような酷い雑音（ノイズ）の中、それでも不殺で切り抜けようと剣を振るい――伏兵に挟撃を受けた。
後で知った事だが、賊には基礎的な兵法の知識もある、何処ぞの国の逃亡兵も混ざっていたらしい。
地形を利用した簡易ではあるが効果的な敵の配置に、同じ依頼を受けた若手の冒険者達が窮地に陥っているのが見えて――加減や躊躇いをかなぐり捨てて剣を振った。
質は雑魚ばかりではあったが、とにかく数が多かった――言い訳だ。
囲まれた若者達の中に、嘗ての教え子に似た雰囲気の者が居た――言い訳だ。
己は人を斬った。
刃に絡みつく”鞘”との記憶を、一度踏み出してしまえば、止まらなくなる己の本性を律していた家族の声を振り払い、人に向けて致命の刃を振り抜いたのだ。
それまで多く斬って来た魔獣に比べれば脆く、柔く、だが同じ生命を断ち切る確かな感覚。
両断されて鮮血を噴き上げて転がる人であった骸達を前に覚えたのは、後悔では無

く、ついに訪れた時間への恐れですら無く。
枷か、或いは箍が外れる様な開放感であった。
そのとき、己はどんな顔をしていたのか。
喉から掠れて転げ落ちる声は、解放の齎す乾いた笑いであったのか、今度こそ失った事への啜り泣きであったのか。
今になっても、分からない。
雑音（ノイズ）はもう、聞こえなかった。

帝国領の北部へと掛かる山脈――その麓近くにて。
丘の上から、剣士は雲間から差し込む朝陽によって段々と照らされてゆく帝都を眺める。
「――斯くして堕ちた獅子の妄執は陽の下に暴かれ、強者に依って消えゆく朝露が如く泡沫へ。勧善懲悪、世は並べて事も無し……ってな」
眼を細めて見つめる先は偶然か否か、雇い主であった男の最期の場所である帝都郊外

の田園地帯であった。
「最期くらいは笑えたかよ？　ティグル」
疵面の剣士は、この場に居ない自らの行いに依って生まれた業――その全てを抱え込んで、破滅の見えた道を突き進んでいた男へと、問い掛ける。
独白にも近い問い掛けに、返事が返って来る筈も無く。
剣士は思い出す。妄執と信念と――何より兄への敬愛に溢れていた男との出会いを。

元はと言えば、彼に接触してきたのはティグルの方からだ。
転移して来てから腰を下ろしていた街を出て、アテも無くふらついていた剣士。
帝都に向かって北上していくついで、道中の魔獣や賊の類を片っ端から斬って捨てていた彼の泊まる宿に、ティグルは単身でやって来た。
酒場を兼ねた宿の一階にて軽食をつついていた剣士の座る卓――その向かいの席へと自然な動作で腰掛け、遮音効果のある魔道具を使用し。
「帝国に巣食う犯罪組織のトップをやっている」などと言う自白にも似た自己紹介を堂々と行って、勧誘を行ってきたのが出会いだ。
当然、鼻で嗤って突っぱねた。

酔っ払ったお忍びの貴族様の戯言であると断じるのが自然であったし――仮に話が本当だった場合、尚の事御免である。

話半分に聞いたとしても、どう扱った処で帝国側からは文句も出ないであろう外道共の集団だ。未だ表沙汰に知られていないというのであれば丁度良い。

巨大な犯罪組織の全員を、己一人で斬り伏せる。選んだ道の手始めとしては丁度良い。

そんな勘定を脳内で弾き、剣士は正面から勧誘して来た潔さに免じてこの場では斬らないでおく、とだけ伝えたのだが……。

『……君ならそう言ってくれると思っていた。だからこそ、是非とも雇われてもらいたい』

負の遺産を残さず、完全に終わらせる為に、と続けた男の顔は至極真剣であり。

下らない連中の首魁、という扱いで括るにはあまりにも腹の据わった表情（カオ）と眼力であった。

元々その組織とやらは、長く続く大戦の天秤を人類種側に傾ける為の一石として作られたものらしい。

戦局は一進一退――だがその実、種族間の連携を断たれる謀略を受けるなど、じりじりと後々の布石を打たれていた当時。

それに危機感を覚えた者達が、邪道を以てしてでも戦力の拡充を図ろうと立ち上げたのだとか。

「このままでは負ける――そう、思っていたのだけどね」

苦笑、の一言で表すには複雑に過ぎる感情が乗った声色と共に、卓を挟んで向かい合ったティグルは注文した杯を呷った。

軍略・戦略に長けた視点を持つ者からすると、当時の状況は相当に不味いものだったらしい――それこそ、外法に手を染めてでも戦力を確保しようとする程度には。

各国の志を同じくする者と連携し、戦地での死傷者や国で保護し切れない難民などを違法な実験の検体として使用し、組織の違法性を理解して尚、国家の為に戦力を欲する国へと話を持ち掛け、出資を募る。

外道に相応しく、影に潜み、蠢き――近い未来、払った犠牲以上のものを光に生きる者達に還元する為に、組織は段々と規模を増して行った。

だが、予想外にも程がある形で彼らの危機感と奮闘は無意味なものへと成り下がる。

聖教国における、聖女の台頭。

しかも確認される限りでは一時代に一人であった筈の女神の愛し子は、今代において二人現れるという異例の事態であったという。

勿論人類種側にとっては紛れも無い朗報――実際、ティグル達も吉兆であると、足掻

き続ける人類への女神の思し召しであると喝采を上げたものだ。
事実、彼女達が正式な称号を得てからの戦いにおいて、人類種は奇跡の連続としか言いようの無い連勝・大勝を重ねていった。
そう、奇跡だ。まさに出来過ぎといって良い。
それこそティグル達の作った組織が、必須では無くなる程の。
「……おそらく、かの姉妹だけではあそこ迄奇跡……いや、喜劇じみた快勝は続かなかった……盤面そのものを引っ繰り返すような埒外が、彼女達の傍にいたんだ」
フードを目深に被り、更に髪の色を魔法で変えた帝国の双獅子の片割れ。
唯一変わらぬその青い瞳には、嫉妬、羨望、否定、憧憬――目まぐるしい程に猛る感情が眩めいている。
聖女の齎す勝利の光。
その光が敗北という名の暗雲を切り裂くとき、光に紛れて雲を吹き散らす一人の男の影が常にあった。
《聖女の猟犬》と呼ばれたその男は、かの姉妹の守護者と戦場での特異な戦力として既に名を馳せていたが……大きな戦線が発生した各地での戦闘の収束やその経緯を俯瞰して観測したティグルは、重要な――或いは後々に重要となる要素を持つ局面において、殆どの戦場にその《猟犬》が出没している事に気付いていた。

まるで未来を知るかの様に、最速・最効率で敵の戦力や思惑を切り崩していったその手腕は、個人が覆せる戦況の範囲を容易く超過しているといって良い。

国や大きな機関が把握している戦い以外でも、大小様々な戦場で敵方に甚大な被害を与えているであろうその男は、ティグルが観測した限りでは間違いなく大戦における個として最大の――否、下手をすれば軍と比較して尚、それを上回りかねない功績の持ち主だった。

「――どうして、今になってあんな出鱈目な男が現れたんだろうね……」

握る杯に満ちる小さな水面を見つめ、ティグルの口からポツリとそんな言葉が漏れる。

聖女という輝かしい救世の光の傍に侍り、その陰で忌まわしいものである筈の呪物の力を振るいながら、人類種の勝利への道筋を切り拓いてゆく、その男に。

泥に濡れる覚悟であった、汚名と許されざる罪を負ってでも人類側の勝利の礎になるつもりであったティグルとその同士達が、複雑怪奇な感情を覚えるのは無理からぬ事であったのかもしれない。

とはいえ、その悲壮な覚悟とやらも剣士には関係の無い話だ――ついでに言えば、その理屈の犠牲にされ、非道な実験の検体にされた者達にも。

「で、俺に何をしろって？　御高説からの愚痴垂れを聞くのが仕事だってんなら御免被

るんだがね」
　皮肉気に肩を竦めた剣士の言葉に我に返ったのか、感傷混じりの複雑な想いを押し込め、ティグルは顔を上げて剣士を真っ直ぐに見据えた。
「人類種の勝利で終戦を迎えた以上、既に組織は不要――いや、開発した技術の違法性を考えれば、後の火種以外の何物でも無い……だが、複数の国を出資者（パトロン）とした時点で、即時の解体は不可能になった」
　強引に組織の解体を決行すれば、大なり小なり技術の持ち逃げや散逸が発生する。
　その為、性質の悪い真似をしそうな輩を押し留め、時期が来れば一気に掃除を行う為、段階的な縮小と部分的な解体を行っている最中なのだという。
　戦時中と比べれば実験体として手に入る遺体や難民の数が激減したのは確かなので、それを理由として既に幾つかの研究の縮小化を行っているらしい。
「なるほどねぇ……聞く限りじゃ、今の段階じゃ必要なのはオツムの労働と集団の運営手腕に思えるんだが……俺を雇うのは大詰め――最後の大掃除の為ってことかい？」
「それもある。けど、近々適当な理由を付けて組織内の荒事を担当する者達を幾らか間引く予定なんだ。悪い意味で目端の利きそうな奴なんかは特に優先してね」
　ティグル曰く、解体作業が終盤を迎える際、組織の当初の理念を知らず、単に犯罪組織の庇護を求めて一員となった悪党や破落戸の類も纏めて掃除する。

極力逃がす者の無い様、丁寧に段階を踏んで徐々に数と質を削っていくその手始めを、剣士に手伝って貰いたいとの事だった。
本来なら部外者をこれ以上引き入れるべきでは無いのだろうが、真に志を共にした者達は各国へのアドバイザー兼人質、或いは全くの別人として、出資を行う国々の中枢に喰い込んでいる。
此方の予期せぬ技術の流出が起こった際、渡った技術や知識を受け取り先の国々で処分する為だ。人手は欲しいが、万が一の保険でもある彼らを呼び戻す訳には行かない、という訳だ。
「……勝手に危惧を抱いた挙句、結果的には無意味に民を贄にして散々に手を汚した身だ。自業で幕を引くにしても、主君や兄には極力迷惑を掛けずに終わらせたいのさ」
戦争が終わり、組織の技術・知識も闇に葬る以上、共に戦う、という望みは潰えてしまったしね。と、自嘲に塗れた言葉を吐きだす男の瞳は、自虐の言葉とは裏腹に強い決意に満ちている。
「これまでの発言が全て真実である、と証明できる手段が僕には無い。ここまで仔細に語ったのは、真っ当な冒険者として活動しているキミに厄介事を持ちかけたせめてもの謝意と誠意だ」
耳にした内容を口外をしないと約束するならば、断ったとしても妙な干渉はしないと

告げるティグルの言葉を受け、剣士は腕を組んで暫しの黙考に入った。
勿論、これまで語った内容が出鱈目の可能性はゼロでは無い。
だが、妄言や虚言と切って捨てるにはティグルの纏う雰囲気はあまりにも真に迫っていた。
おそらく、この男は既に自らの”終わり方”を決めてしまっている。
自刃か、巨大な犯罪集団の首魁として裁かれるのか、そこまでは分からないが……組織の解体と自身の幕引きを同一のものと見做しているのは確かだろう。
破滅。そう言ってよいであろう末路を、それこそが自身の進むべき道である、と定めた男。
その行く末に、少しばかり興味が湧いた。
或いは、それは興味というよりは親近感だったのかもしれない。
何にせよ、答えを出した剣士は口の端を釣り上げて笑うと再び肩を竦めて見せる。
「一応言っとくが、ここまで聞いた話と実際の行動に矛盾が含まれてると判断したら――そんときゃアンタを斬るぜ？」
「――！　あぁ、そうしてくれて構わない。キミ程の腕前を持つ転移者を雇えるならば、その程度は安い担保だ」
安堵と喜色で表情を明るくし、これからよろしく頼むよ、と手を差しだしてくるティ

グルの掌を軽く握り返し、剣士は頷いた。
「では改めて名乗ろう。僕はティグル＝ケントゥリオ、一応は帝国の禄を食む侯爵家に連なる身分ではあるが、それは気にしなくて良い。外法に手を染めた――只の外道だ」
「そうかい、以後よろしく頼むぜ雇い主様。俺は――」
名乗り返そうとして、黙り込み。
瞳を閉じ、数秒の沈黙を挟むと……剣士は眼を開いて、告げる。
「……そうだな――名無しの権兵衛（ジャック・ドゥ）とでも呼べばいいさ」
「……それが今のキミ、という事かい？」
「あぁ」
自ら接触しにきたということは、ある程度は剣士の事も調査済みだろう。
当然、冒険者として組合に登録した剣士の名を知っている筈だ。
だが、剣士――ジャックの名乗りに対し、其処に込められた何かを汲んだのか、ティグルは明らかな偽名に対しても言及する事は無かった。
そう、それで良い。
引き留めていた家族の声が聞こえなくなったあの日に。
いや……或いはこの世界に来たときから。
嘗て師や義妹と過ごした男は、ただその記憶（想い出）の残骸だけを残して――戦いを求める人

斬りに成り下がった。
”鞘”を失った野晒しの刃に、名は必要ない。
ならば己はそれで良い。誰でも無くなった男でよい。
思うが儘に、闘争を求める本能の儘に。
只、斬れば良い。何時か、相応しい末路を迎えるそのときまで。
そうして、堕ちた獅子と剣士――否、剣鬼は出会った。そんな出会いだった。

時間的には二年程前の……だが随分と懐かしく感じる記憶を掘り返して、ジャックは胸中に浮かんだ憂いを苦笑いで押し潰す。
「……結局、自分で幕を引き切るにゃ、少しばかり時間が足りなかったよな、ティグルよう」
ティグルは病身であった。それも末期の。
幼い頃に大病を患い、それ以来、侯爵家の人間として手厚い治療を受け続け。
更には組織を作った後には、『超人兵計画』の検体としての処置を自身に施して――それでも尚、その生命の蝋燭は近々に燃え尽きんとする身であったのだ。

帝国に――兄と主君に要らぬ手間や心労を掛けさせる事を厭うていたティグルは、進行する病状を様々な方法で押し留めていたが、それにも限界が来ていた。

自らの罪を明るみにするにしても、全てを片付けてからにせねばならない。

その一心で組織の段階的解体を推し進めていた様だが……この二年で人斬りとしての質を肥えさせたジャックの眼は、処置の御蔭で一見では健常に見えるティグルの身に、微かに漂う死臭にも近い〝終わり〟の気配を捉えていた。

おそらく、自覚はあったのだろう。

だからこそ、尚の事止まれなくなった。

組織の主軸となる『超人兵計画』。

その縮小と凍結をなるべく後回しにしていたのは、多くの研究員が関わるメインプロジェクトであるが故に露骨な中止・中断が難しかったというのもあるのだろうが……実験が進めば組織の完全解体まで自身の身を保たせる事が出来るかもしれない、という淡い期待もあったのだろう。

だからまぁ……今回の件はお節介を焼くには良い機会だった、という訳だ。

現行のペースでは、どう考えてもティグルの時間は足りなかった。おそらく、残された時間は半年も無かっただろう。

兄であるレーヴェ将軍に迷惑を掛ける事を殊更に嫌がり、極力自身の手で全てを終わ

らせたがっていたティグルだが……自身の行状を闇に葬るならば兎も角、最終的には全部暴露する予定なのだ。

今バレるにしろ、後でバラすにしろ、愛しの兄上のメンタルをゴリゴリと削るのに変わりは無い。

ならば、大詰めと後片付け位は外部の者の手で派手に行われても良いだろう、というのがジャックの考えである。

逃走に使う水路の事は以前ティグルに聞いていた――過去にその路を使い、家の者に内緒で自分を背負って郊外の散歩に連れ出してくれた兄の自慢話込み込みで。

必要・不必要な状況に関わらず、この段階までくれば出資者（パトロン）連中を言い包めてその下水路を使用する筈だ。後で纏めて処分なり、捕縛なりをする為に。

レーヴェ将軍がこの時点でも弟に対して疑念を向けない頓馬であるなら、水路に注意は向けまい。

ティグルは近い将来、屋敷か、或いは独房のベッドの上で痩せ衰えて終わりを迎えるだろう。

だが、そうでないのなら……最期くらいは、幼い頃の様に兄とチャンバラに興じて、今のティグルの剣を兄に存分に見せて、逝ける可能性がある。

あくまで可能性だ。

つまる処、螺子の外れた人斬りに過ぎないジャックに出来るお節介など、その程度のものであった。
「ちいと想像とは違う終わりになったが……これで契約も終了、か。さて、これからどうするかね」
言葉の上では先行きに悩む剣鬼であるが、腹の中ではとうに結論は出ている。
今の己であっても、容易には勝利出来ぬ強者達。その存在と武威は今回の件でたっぷりと確認できた。
――ならば、後は人斬りの本分に、身の裡より湧き上がる欲求に、存分に溺れ、酔うとしよう。
「ま、帝国が後片付けをするとは思うが……仕事のアフターケア位は考えておくか」
ついでに、組織から漏れた技術や逃げ出した研究者が見つかるなら、その都度消しておこう、とサブの目標も立てておく。彼自身もおたずね者になったのは確定なので、暫くはほとぼりを冷ます必要はありそうだが。
折角だ、このまま山脈の奥地に入り、修練も兼ねて冬を越すまで山籠もりというのも悪くない。
何時かは大陸最大の霊地であるという、龍の住まう山脈で修練を行ってみたいものだ、などと考えつつ、剣鬼は眺め続けていた帝都より視線を切り――。

――早朝の散歩にしては随分と遠出やな。徹夜明けに長距離マラソンとかクッソだるかったんですけど。

そんな、この場で聞こえる筈も無い声を聞いて、驚きと共に振り返る。

其処に立っていたのは、一人の青年だった。

黒髪黒目の、転移者としてはよくみる特徴を備えたその若者は、あまり良いとは言えない目付きを更に半分に細めて気怠そうに首を捻り、パキポキと音を立てている。

「……よう、良い朝だな猟犬の」

驚愕を瞬時に押し殺し、飄々とした態度を取り戻した剣鬼は眼前の青年へと笑い掛け。

――良い朝も糞もこっちは徹夜明けだっつってんだろうが。相棒の肖像権侵害のツケ、回収しにきたぞパチモン侍。

鼻を鳴らして応えた青年は、今度は首ではなく指先に力を込め、ゴキリと音を鳴らす。

斯くして帝都の長い夜は明け、ただ一夜の”祭り”は終局に向かう。

薄っすらと白む空の下、秋風の吹く丘の上で。

名無しの剣鬼と聖女の猟犬は、二度目の対峙を果たしたのだった。

《報復》対《栄光》

「……ちと気になったんだが、どうやって此処まで追って来た？　隠形に関してはそれなりに自信があったんだがねぇ」

眼前の疵面の剣士の言葉に、俺は特に隠す事も無いので指を突き付けて応えてやる。

自分の使ってる武装の種を考えろよ――その魔鎧の装甲、構成の核部分はウチの鎧ちゃんの破片か何かを使ってるやろ。

確かに見事な隠形法だよ。痕跡の消し方といい、気配の断ち方といい、一度見失ったら再度の捕捉は困難だったんだろうが……使ってる武装にマイバディの一部だった物が使用されている以上、俺だけは例外だ。

初見でも魔鎧同士で微かな共鳴じみた感覚が起こってたしね。実際、その感覚を頼りにしての追跡は難しくなかった。

指摘を受け、ジャックが後頭部を掻きながら苦笑いを浮かべる。

「成程な。普段使わん得物は理解が浅くていかんね、どうも」

だろうな。大方、使う頻度は極稀、期間自体も一年あるかないか、って処やろ。
「御名答。アンタの使う《報復（オリジナル）》と違って、精神汚染だの侵食だのは相当控え目らしいがね。それでも安定して使える奴がいなかったって事で、俺にお鉢が廻って来たのさ」
《栄光（グローリアス）》だったか？
一定以上の戦力を容易に確保する為、とかいうコンセプトで作った癖に、結局は人外級か其れに近い実力の持ち主で無いと心身の反動を許容レベルに抑えられないとか本末転倒やんけ。作った奴は頭良い馬鹿の類なの？
「返す言葉も無い」
元々制作に関わった人間をフォローする気もないのか、全く以てその通り、と言わんばかりに肩を竦めた剣士は、苦笑したまま溜息交じりの吐息を吐き出した。
ついでに言うなら、ジャック本人も戦争が終わった後――女神様が一時的に他世界との繋がりを遮断するホントの直前に、この世界に落っこちて来たクチだろう。
そうでなければ、戦争中に全くの無名な訳も無い。この男からすれば、罪に問われる事もなく大手を振って強大な敵と戦える機会な訳だしね。人外級に到達してる以上、何処かの戦場で暴れていれば、絶対噂になる筈だし。
「そこまでお察しか……まぁ、そうさ。雇い主殿の調査の限りじゃ、俺が正真正銘、現行最後の転移者らしい――将来的にはどうかまでは知らんがね」

夜明け前特有の澄み切った空気の中、再び秋風が俺達の間を吹き抜ける。
数秒、僅かな沈黙が下り……それを破ったのはやはり剣士の方からだった。
「正直に言えば意外、だったな」
何が。
「アンタがこうして俺とのんべんだらりとお喋りに付き合ってくれる事が、さ。前評判じゃ――いや、闘技場で見せたアンタの地金からして、次は初手から奇襲で殺しにくると踏んでたんだが」
知った風に語ってくれるね――まぁ、合ってるが。
確かに、我ながらしくないとは思うが……まぁ、今回はそれだけ特殊なケースだった、という事だ。
鎧ちゃんの模造品らしき武装の使い手で。
副官ちゃんを目の前で掻っ攫い――だが、後で脱出の手助けをしたという事。
つい先程まで行われていた大捕り物で敵側として参戦する事もなく、こうして一人で離脱を図ろうとしている事。
ジャック＝ドゥという男は、個人的にちょいと話をしてみたくなる要素が多すぎた。
なにより、何気に俺にとっても初めてなのだ。
――見事だと。あの戦争で一緒に戦った奴らに近いと、そう思えた魂の持ち主を殺

す。そう決めたのは。
視覚レベルにまで認識を強化されている、とは言っても、俺の加護である魂の感知は実際に魂を視覚情報として捉えている訳じゃ無い。
多分だけど『視た』結果、俺の抱いたイメージが視覚という一番分かり易い情報で脳味噌に出力されてる様な感じなんだと思う。
眼前の男に抱いたイメージは、剣。
上質の玉鋼を丁寧に、丹念に鍛え、打ち上げられた一本の刀を思わせる魂だった。
分類的にはガンテスや《狂槍》に其々近い部分があるだろうか？
弛まぬ自己研鑽と、鍛えた技を自身と同等かそれ以上の強者にぶつける事に歓びを見出す、そんなタイプなんだと思う。
だが、その性質――『視た』イメージから感じ取った『色』が問題だった。
その刀身に斜陽を写したような、或いは乾かぬ血で化粧したかのような、妖しい朱。
収まるべき鞘の無い、剥き出しのそれは確かに美しい。
だけど、それは危険な輝きだ。
桜の花の美しさが、根元に埋まった骸の血を吸い上げたが故と言われた様に。
多くの剣士に握られ、振るわれてきた名刀が血に染まった逸話を持つ様に。
其処にある以上、無数の血の華を咲かせる事が当然の存在意義となるかの様な――妖

刀と呼ぶに相応しい、そんな魂の持ち主が、眼前の男だった。
戦いを求める、好む、という点では魔族の戦士なんかとは共通点も多いんだろう。
だが、このジャックという男の持つ『色』は、超えてはならない一線……隣か、近くにいる『誰か』が居る限り、行ってはいけない場所にあるものだった。
だから、これはあくまで念の為。
とうの昔に出たのであろう男の答えを、再び問うのはこの一度だけだ。
――ジャック＝ドゥ。あんたはそれを――自分の腹の中に飼ってる修羅を捨てる気は無いのか？
静かに問い掛けた……おそらくは答えの決まりきっているであろう問いに、ジャックはキョトンとした顔になり、次いで声を上げて笑った。
「はっ、ははははっ！　なんだ、そっちはそっちであんな本性を飼ってる割に随分と温い事を言う――答えなぞ、聞く迄も無いだろう？」
一頻り笑った後、剣士は……否、自身の裡にある修羅に呑まれる道を選んだ剣鬼は、腰に下げた得物の柄にゆるりと手を掛ける。
「征く道が血濡れている事など今更。狂気の沙汰であることなぞ最初から承知」
抜き放った剣は、おそらく本来の得物なのだろう。
優美な曲線を描いた湾刀――鍔や柄の拵えといい、正しく〝刀〟と呼ぶべき魔装の一

振りだった。
「それでも、これが俺だ。俺の選んだ道だ。魔獣に、人に、此の世界の強者達に挑み、斬り。其れを阻むならばその全てを斬り――征き着く先に、鳳凰や龍すらも斬ってみせよう」
……それが可能だと、実現出来ると思ってるのかよ、本気で。
「さあ？　出来るかどうかなぞ知らんね。俺がくたばるまでやる、それだけさ」
此方に向かって突きつけられた白刃が、昇って来た朝陽を受けて冴え冴えとした光を放つ。
名無しの剣鬼（ジャック）は飄々とした笑みの中に抑え込んでいた凶気を混ぜ込んだ、物騒な笑みを浮かべ、問い返してくる。
「アンタはどうなんだ《聖女の猟犬》。アンタの周りに居る奴らを斬る、そう宣言する男がこうして目の前にいるのに、その牙を突き立てるのを躊躇うのか？　認め難い”敵”にお涙頂戴のそれらしい理由でもあれば、其れは牙を鈍らせるに足るってのか？」
まさか。それこそ答えの分かり切った問い、ってやつだ。
この問答だって、結局の処は意味の無いものだってのは百も承知なんだよ。
単に一介の魂フェチとして納得して、万が一、億が一、ほんの微かにでも躊躇する理由を完全に消し去りたかっただけだ――お前を狩るのにな。

個人的に話をしたいと思ったのも嘘じゃない。
来る時期が、会う形が違えば、或いは別の関係があったのかもしれん、とも思う。
だが、それらも既に意味の無い仮定の話だ。
目の前の男は、俺の友達に――副官ちゃんに手を出した。
その上で、これからも大陸中の強者に、俺の戦友達にもその凶刃を向けると宣言している。
穏便だの、穏当だの、そんな言葉が使われる段階はとっくに過ぎ去ってるのだ。
賽は投げられた。この男自身が、投げた。
後の結末（ルール）は単純――出目の大きい方が残り、小さい方は潰れて消える。
丘の上に、三度目となる一迅の風が吹く。
連なる山脈の向こう、差し込む朝の光が暗い丘の上を照らし始め、黄金と緋色に染め上げてゆく中で、俺達は静かに構えを取った。
「俺は俺の選んだ道を征く――放っておけば其の先々で立ち塞がるであろう、アンタが邪魔だ」
――俺は俺の焦がれた奴らに、笑っていて欲しい。漸く平和になったってのに、アイツら相手の辻斬り宣言なぞかます、お前が邪魔だ。
「――故に」

――だから。

”此処で死ね”

同時に零れた、異口同音の言葉が風に浚われて飛び散り。

《起動（イグニッション）》

更に同時に紡がれた一言と共に。

朝焼け照らす丘の上で、戦いは始まった。

刀剣を八双に構えた白の魔鎧相手に、拳を向けて腰を落とす。

模造品（コピー）である《栄光（グローリアス）》が出力や強化率において鎧ちゃんに及ばないというのは、初見で交した一手でなんとなく把握した。

だが、その中身たる剣鬼は此方と違って超一流――正真正銘、地力で人外の領域に到達した男だ。

生身でもこちらと普通にやり合えるであろう相手……それがパチモンとはいえ、魔鎧を使っているのだ、その厄介さは言葉にするまでもないだろう。

肩と脚部から魔力噴射。

瞬時に音速に到達し、白の魔鎧の右側に回り込む形で間合いを詰める。
同格の人外級でも、対応自体は可能であっても多少なりとも姿勢が崩れるであろう高速機動に、ジャックはあっさりと追随して来た。
白い装甲の半身から魔力噴射が行われ、構えを乱す事無くその身体が高速で旋回する
――やっぱり鎧ちゃんの基礎的な機能くらいは搭載してあるか。
「――甘い」
どっちが。
肉薄する俺に向け、閃光の如き速度で突き込まれる切っ先。
受ければ装甲を貫き、躱せば一瞬で翻って怒涛の攻めに転じるであろうソレを《流天》で捌き、運動力と込められた魔力を絡め取る。
流石に《三曜》の技は初体験だろう。不自然に速度と内包魔力が減衰した刃を前に、フルフェイス越しにも瞠目の気配が伝わってきた。
受け流した腕とは逆の手で、コンパクトに裏拳を振り抜く。
狙いは喉。《命結》を乗せた打撃が入れば、魔鎧の装甲であっても比較的薄い場所なのもあって気脈に直接干渉できる。
そうなれば殆ど勝負は決まったようなものだが、そこは優れた戦士の勘というやつか、咄嗟に肩を入れて打撃は遮られた。

あくまで急所狙いの手打ちだ。装甲の厚い肩で受けられれば《三曜》の打効も流石に届かない。

お返しとばかりに、逸らされた刃が全身のバネを使って横薙ぎに加速した。

寒気が走る程の鋭い斬撃――だが、これは予測していた一手の内だ。瞬時に剣の振り抜かれる方向に併せて魔力噴射。

相手の刀の間合いは二尺四寸――７０センチちょい程度。腕の長さも考慮した間合いの分だけ、きっちり後退する。

水平に振り抜かれる刃。掠める様にこっちの胸部装甲が火花を散らすが、それだけだ。

剣を握る指を狙って、アッパー気味の軌道で拳を振るい、空を打つ。

拳の外の間合い――だが、切り離して破片化させた装甲が飛び、散弾となって白い装甲の右手首から指に掛けてを打ち据える。

流石にこれで剣を手放すとは思っちゃいない。だが、握りが緩むくらいはする筈だ。

追撃で柄に掌底をたたき込もうとし――次の瞬間、走った戦慄に躊躇なく後方へと跳び退く。

それに半瞬遅れて刀の柄が軋む音を耳が拾い、豪、と突風すら巻き起こす勢いで剣が切り返される。

踏み込んでいれば右腕が付け根から飛んでた。つーかアレだけ綺麗に入って剣を握る指が緩みもしないのかよ。魔鎧の強化込みにしてもどういう握力してんだ。

「狙いは悪くない処かえげつないが……俺の手から剣を捩ぎ獲りたいのなら、手首ごと落とすんだな」

そーかい。なら手首と言わず、腕ごと落としてやるよ。

頭部装甲（サレット）の下で不敵な笑みを浮かべているであろう、白い魔鎧の持ち主の言葉を受け、俺は再び加速する。

先程までが挨拶代わりの小技を多用した近距離戦なら、今度は全身の魔力噴射を多用しての超機動の高速戦闘だ。

同じ人外級でも後衛の動体視力なら振り切る事も可能な、鎧ちゃんの本気の速度に対して――劣るとは言え同じ魔鎧を纏ったジャックはきっちり反応してきた。

日の出眩しい静かな丘の上、風に混じって鋼が高速でぶつかり合う音が断続的に響き渡る。

繰り出される剣を手掌で逸らし、ときに極限まで圧縮した魔力を手刀に乗せて弾き。

だが反撃として打ち込む一打は、神速でありながらぬるりと滑り込む様な巧妙な太刀捌きと体術によって敵の身に届く事無く、悉くが遮られる。

「……ははっ！　こいつは凄い、これが本物か！　〝意〟を読んでも単純な速度差で押

されるなぞ初めてだ！」

おう、ならもうちょっとしんどそうにしろや。メタクソ楽しそうに笑いやがって。

鎧ちゃんの本気の速度に、同じ土俵で喰らい付いてくる相手、ってのは初めてかもな……いや、当然お師匠とか《魔王》は別だけど。

膂力や速度はこっちが上だ。

だが、《栄光（グローリアス）》によって明確であったその差はある程度縮められ、更に剣鬼自身の技量が残ったそれを埋め立てに掛かる。

幸いにして、魔鎧自体はあくまで外付け・召喚される高硬度の全身魔装の装甲と魔力噴射機構、身体強化がキモであり、うちの鎧ちゃんみたいな多機能っぷりは無いみたいだ。

あと、こっちの攻撃の意識や殺気を込めて狙う位置をとんでもねぇ精度で先読みしてくるのが糞ほど厄介。

反撃の要として《三曜》の技を連撃や防御に絡めて使うと、只の勘というには的確すぎる反応で攻撃や回避の動作を切り替えて来る。

魔力絡みの探知方法であるなら、鎧ちゃんからバリバリ垂れ流されている攻性魔力に邪魔されて上手い事働かない筈なんだが……速度にものを言わせての死角に回り込んでの一撃まで綺麗に反応してくる事も併せて考えると、経験と修行の賜物――純然たる

技術である、という可能性が高い。どこの戦国時代の剣豪やねん。

その御蔭でじり貧――って程でも無いが、流れが来てないのは良くないな。ちと強引にでも変えに行くか。

魔鎧同士という、本来有り得る筈も無い組み合わせによる、目まぐるしく立ち位置を変えながらの高速戦。

この短時間で数百を超える剣撃と体術の応酬を行なったが、互いに有効打は未だ無し。

膠着はこちら側に転がせる要素が無い場合は避けるに限る。イニシアチブを獲るのも兼ねて、少しばかりの無茶を試みた。

正面から装甲を飛ばした破片散弾を浴びせ、目元を狙った弾だけを綺麗に叩き落とされ――その一瞬で左に回り込み、腰溜めに構えた掌底を捻り込む。

《命結》を乗せた一撃に、魔力噴射の旋回と身の捻りを合わせた突きが迎撃として打ち込まれる。

互いにたっぷりと魔力を籠めた一撃だ。先程までの攻防の様に激突し、紫電を撒き散らしながら弾き合うかと思われたが……俺は直撃の瞬間、掌底にて練り上げた魔力を敢えて散らした。

当然の如く打ち勝った魔装の剣の切っ先が、黒い装甲に覆われた掌を貫く。

飛び散る鮮血と這い上がる痛みは無視し、俺は串刺しにされた掌を握り込んで最大速度で貫かれた装甲を復元する。

「ッ!?」

咄嗟に刀を引こうとしたジャックだが、貫通部分を覆い尽くすように広がった此方の装甲に引っかかり、引き抜くのが容易では無いと一瞬で判断。

この剣鬼の技量ならば、こっちの掌ごと装甲を裂いて斬り飛ばすのは容易だ。切っ先を上に跳ね上げようと剣の柄が握り直されるが――俺の方が一手早い。

鎧ちゃんの持つ呪物としての威圧、それを纏う俺自身の殺気、その全てを凝り固め、眼前の男へと雪崩の如く叩きつけた。

眉間、心臓、喉、脾腹、人中、右鎖骨――敢えて剥き出しにした敵意を、順番も場所もバラバラに連続で白い魔鎧へと押し付ける。

剣がこっちの掌に固定されている状況で、矢継ぎ早に先読みが報せる攻撃箇所への対応に、ほんの刹那、ジャックの動きに迷いが生まれ。

その意識の間隙を縫う形で、腕を捻って自分で掌から刃を引っこ抜きつつ、顔面に最速で蹴りを叩き込む。

「ぶへっ!?」

砕ける白い装甲、何処か間の抜けた悲鳴。

足で《命結》を使用するのは拳のソレより数段難易度が高い。俺の《三曜》の練度では咄嗟には難しい。

なので、ぶち込んだのはただの蹴りだが……流れを握るのと、鼻血噴かせる程度の効果はあったようだ。

「痛ってぇ……滅茶苦茶するな《猟犬》の」

ダメージ自体は大したことは無いんだろう。

瞬きより早く体勢を立て直したジャックが、割れた頭部装甲（サレット）から覗く顔もそのままに、鼻腔から垂れる赤い筋を拭って苦笑いする。

鼻っ柱は残念な事に無事だった様だ。とはいえ、顔面にスタンプキックが直撃したので若干目元に涙が滲んでいる。ワロス。

「いや、アンタの方がどうみても重症……って訳でも無いのか？　この場合」

風穴が空いたせいでボダボダと血が流れ落ちていたが、鎧ちゃんに掌の肉を縫い付ける形で装甲を復元してもらい、既に出血の収まりつつある俺の掌を見て、感心したように頷く。

「成程な。単純な装甲の復元以外にも外傷に対する強引な処置も可能なのか……流石は《報復（オリジナル）》って処かね」

流石に肉を切らせて骨を断つ、みたいなスタイルは大戦時代でも偶にしかやらんかっ

たぞ。あの頃は継戦能力に元から難があったし。
前までと違って、負傷した骨肉を装甲で強引に接ぐと鎧ちゃんが嫌そうというか、ひどく苦しそうな感覚を訴えて来るので、今でもどの道多用は出来ないんだけど。
「……くくっ、やっぱりアンタも怖いねぇ……ティグルの奴があぁまで意識する男だ、武装頼りだけな筈も無いとは思っていたが……」
砕けた頭部装甲（サレット）を復元させ、何が面白いのか喉の奥で笑いながら仕切り直しとばかりに剣鬼は刀を構える。
「あの”流れ”そのものを掌握する様な技も、《報復（オリジナル）》の持つ機能の一つ……なら、戦人としてのアンタは”何”であるのか」
知らんがな。興味も無い。
再び加速し、一気に間合いを詰める。
身を低くして振り抜いた低い軌道の蹴りを一歩踏み込んで威力を殺し、脚の装甲で受けたジャックは、詰まった距離からこちらが振るった手刀を弾くでもなく、逸らすでもなく。
刀身を以て受け止め、鎬を削る鋼と魔力が火花を散らす中、額を突きつけ合う様な距離で言葉を続ける。
「拳士では無く、魔導士などである筈も無く……持たざる者であるが故に、己の牙たる魔

鎧を十全に使い熟す事に特化した者」

ぎゃりん、と刀剣と手刀が一際強く擦れ合い、互いの込めた魔力が弾け飛んで衝撃を生み出す。

それに押され、両者共に背後へと跳躍して一旦距離を取った。

空いた間合いを前に剣鬼は吐息を一つ漏らして、片手で握った剣の切っ先を持ち上げて俺に突きつける。

「――〝魔鎧使い〟。それがアンタの戦人としての在り方か、《聖女の猟犬》」

正体みたり、とでも言いたいのかよ。別に鎧ちゃん頼りって事を隠した事も無いんですけど。

刀と打ち合わせた方の手刀を開いてプラプラと揺らし、痺れや装甲の破損が無い事を確認していると、俺がフルフェイス越しにもよっぽど興味の薄い表情をしている事に気付いたのか、ジャックは何度目かになる苦笑らしき気配を声色に浮かべた。

「自覚は無し――故に強者としての拘りや自負も無し、か。魔鎧込みとはいえ、人外級とやらに相当する戦力が〝弱者の戦い〟を行う事に躊躇いが無い事が、どれだけ厄介なのか……自業の末とは言え、アンタとこれ以上無い敵対関係だった邪神の信奉者とやらには同情するね」

褒めてんのか貶されてんのかいまいち分からない件。

真顔で返す俺に「褒めてるさ、心底な」と答えると、その言葉に偽りは無いのか剣鬼は高揚を感じさせる調子で独白を続け、剣を両手に握って正眼に構え直した。
「魔鎧に対する理解と練度では並べそうにないが……俺の本業は剣士だ。アンタの戦人としての形を捉えた今、後は剣でそれを超えてみるとするさ」
ここからが本番だ、と言わんばかりに戦意を高める白の魔鎧とその主。精神の昂りに応え、装甲に走る魔力導線がより深く、強く明滅して濃密な魔力を吐き出す。
テンション上げる相手を前に、折角引き寄せた筈の流れが再び散らされてる感覚を覚えるが……まぁ、ええわい。
本番が此処から、という点はこっちも同意だ。
早い段階……余力がある内に《栄光（グローリアス）》の基礎性能（スペック）を把握できたのは俺としても僥倖だったわ――そっちの魔鎧があくまで召喚型から発展しないのなら、万が一にも模倣される心配はなさそうだし。
「へぇ？　その口ぶりからすると、まだ隠し札があるみたいだな……今から見せてくれると思っても良いのかね？」
愉し気な問いに、らしくもなく、俺は不敵に笑う。
そのつもりだよ。ただまぁ……そうなると、おたくの望むタイマンの決闘とは聊か沿わなくなるけどな。そこは元から知ったこっちゃねーけど。

訝し気に「……何？」と呟かれる声には答えず、こちらも腰を落とし、低く構える。
魔鎧使い。さっきは俺をそう、呼んだな。
俺が真にそうであると言うのなら――悪いな、その名の通りの本領は此処からだ。
鎧ちゃんが放つものでもなく、《三曜》を用いて循環させたものでもなく。
俺の身に宿る、俺自身の魔力を練り上げ、腹の底で回し――その一言を唱えた。

――《銘名（リネーム）》。

お披露目だ。征こうか、相棒。

我は報復に非ず（Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｍｙ　ｓｕｎｓｈｉｎｅ）

時間は少し前――祭りの準備期間中にまで遡る。

具体的にはクインと一緒にマイン氏族の工房に訪れたときの事だ。

「こりゃ駄目だね。多分、《報復（ヴェンジェンス）》の方で制限を掛けてるよ」

赤髪と赤銅色の肌を持つドワーフの美人――ファーネスの言葉に、俺は特に驚きを感じることは無く。

あったのはやっぱりかー、といった諦観混じりの納得の感情だった。

此処を訪れた一回目、副官ちゃんと行ったときは前族長である先代に見てもらったんだが……その際もほぼ同じ意見だった事を見るに、他の要因は無し――これで確定と言ってよいだろう。

マイラヴリーバディこと鎧ちゃんの名付け。

聖殿で散々に参考になりそうな資料を掻き集め、シアやリア、副官ちゃんにミラ婆

ちゃんまで巻き込んでギャーギャーと騒いだ末、漸く本決めとなった其れは、肝心の高位の霊具や呪具への銘名の儀式の段階で躓き、そのまま棚上げになっていた。

ただでさえ呪物への銘名ともなると、儀式魔法には慎重かつ繊細な魔力運用が求められる上、鎧ちゃんは世界中見渡しても上が見つかるか怪しいレベルの特級の呪物だ。

儀式の完遂には使用する魔力だってとんでもねー量が求められる。

当然、俺がピンでどうにか出来る量じゃないので、リアに頼んで魔法の構築を手伝って貰い、魔力も借り受ける形で儀式は執り行われた。

ちなみにシアはものっそいブー垂れて嫌そうにしてたので、比較的説得の容易だった妹(おとうと)分に助力を頼んだ形だ。「いっそ解呪の儀式にしちまおーぜ」とかとっても綺麗な笑顔で言うのはやめようレティシア君！

で、難易度の高い魔法ではあるが、聖女であるリアの助力があれば特に問題無く済むと思われたんだが……これがまぁ見事に失敗した。

いや、妹(おとうと)分のサポートもあって、魔法の発動と銘名の入力待ち、って段階までマジでスムーズだったのよ？

ただ、現在の正式な銘を持たない『無銘の超級呪物』って状態の鎧ちゃんにきちんとした名を付けるには、前述の通り相当な量の魔力を一緒に注ぎ込まんとしっかり刻まれない訳で。

最初に一応は主である俺がなけなしの魔力を注いで取っ掛かりを作り、不足分をリアに補助してもらう形で儀式を続けようとした処で――肝心の鎧ちゃんが補助として注がれたリアの魔力を弾いてしまったのだ。

何回やっても注がれた補助の魔力をびしゃー、と音が聞こえそうな感じで垂れ流して内に留めてくれないマイバディに、リアと一緒に困惑して顔を見合わせたのを覚えている。

名付けの儀式には魔力の相性なんかも重要らしい。

なので、ひょっとしたらリアが鎧ちゃんとの魔力的相性があんまりよくなかったのかもしれん、という事で、渋るのを説き伏せて姉の方に御出陣いただいたのだが……リアが注いだときの三倍くらいの勢いで魔力が吐き出されてこれも失敗した。

専用の陣の上に召喚されて設置された鎧ちゃんに向けて、さっさと終わらせようとしたのか、シアがやや強引に注いだ膨大な量の魔力がものの数秒で圧縮されて頭部……というか口に近い部分からビシャっとばかりに放出されたからね。

なんとなく「カーッ、ペッ!!」とか聞こえたのは俺の気のせいだと思いたい……シアも同じようなイメージを抱いたのか、真顔のままで攻性魔力を練りだしたのを必死こいて止めたけど（白目

その後、丁寧に注いでもやっぱり駄目なので魔力を弾く原因があるのでは？　という

事で名付けは一時中断。

その間にも《大豊穣祭》の報せが届いて帝国に向かうことになったので、渡りに船とばかりにファーネス達の工房にお邪魔して相棒の精査を依頼。こうして原因を探ってもらっているという訳である。

状態確認も兼ねてファーネスに手伝って貰って再チャレンジしたが……やっぱり駄目だった。

聖殿でも、今回も儀式魔法の手順に間違いは無かったし、途中まではスムーズだったからもしやとは思ってたんだが……やっぱり鎧ちゃんの方から魔力を拒んでたのかー。なんでじゃろ。

首を捻る俺を他所に、ファーネスが手にした鍛冶鎚で肩を軽く叩きながら至近距離で陣の上に鎮座する漆黒の全身鎧を眺め廻す。近いってばよ、さっきみたいに味見とかいって齧ろうとしたらそっこーで鎧ちゃん送還するぞオイ。

「いけずだねぇ……まぁ、今回はこっちがお前さんの相棒見たさに強請った面もあるからね、無理強いはしないよ。で、肝心の銘名の方だけど、”自我持ち(インテリジェンス)”の呪具が主以外の魔力を受け入れないってのは偶にある事さね」

ただ、と少しばかり歯切れが悪そうに続けるのは、やはりマイバディの状態はあまり見た事のあるものでは無い為らしい。

「大抵は呪具の成り立ち自体が使い手に深く関わってたり、そもそもの制作コンセプトが特定の個人専用だった場合なのさ。過去に複数の使用者がいる《報復（ヴェンジェンス）》がこの手の反応を示すのはちと見ないケースだね」

マジっすか。おたくでも分からんとなると困った事になるな。

先代もファーネスもこの道での超一流――武具に関しては大陸最高峰の知識と技能を持った鍛冶師だ。彼らで正確な原因が絞り込めないとなると、ワンチャン可能性がありそうなのなんて後はお師匠くらいしか思いつかんぞ。どーすんだこれ。

俺の心配を他所にファーネスはその見事な赤髪をかき上げて「例が少ないってだけさ、魔鎧側からの制限って点は間違ってないよ」と補足を入れ、ついでに肩も竦める。

「だが……猟犬の坊。鍛冶屋なんてもんは長く鉄を叩いてるとね、なんとなく鋼の機嫌が分かる様になるもんさ。この子のソレは臍曲がりな質（タチ）の武具よりはよっぽど素直だよ」

つい先程まで至近距離で鎧ちゃんを見てた際の、涎を垂らさんばかりの恍惚とした表情は何処へやら。

マイン氏族の長は、まるで微笑ましいものを見る様な細めた視線と共に魔法陣の上に座する相棒の肩部に手を乗せ、優しい手つきでそれを撫でた。

「多分だけどね、魔鎧はアンタの魔力以外で名を刻まれる事を嫌がってるのさ。いやは

や、括りの上では呪物だってのに芯の部分の在り方は精霊の宿る霊具に近い。面白いねぇ。元の構造からしてそうなのか、それとも……アンタが主となってそうなったのか」

むぅ、そうなんか……いや、そうだとしたら悪い気はしない……というか普通に嬉しいが。

一緒くたに微笑ましいものを見る視線で見比べられて、なんとなく気恥ずかしさで居心地が悪くなる。

暫くはそのまま鎧ちゃんを眺めていたファーネスだったが、なんだか妙に悪戯っぽい顔付きになって半眼になり、意地悪気に笑う。

「……ま、後は単純に”拗ねてる”感じがするね。坊、アンタ最近、大量の魔力を流し込むような使い方をしたときに、この子が嫌がる真似でもしたんじゃないのかい？」

ええー。いうて《三曜の拳》で溜めのある技を使うときには大抵はデカい魔力を運用するし、そんな鎧ちゃんが臍を曲げる様な真似なんて記憶に……記憶に……あったわ、そういえば。

指摘を受けて記憶を撹拌すると、直ぐに浮き出て来たのはちょっと前の大森林での一件だ。

俺がエルフ達から聖者だなんだと呼ばれる様になった黒歴史にも近い出来事――そ

の原因となった女神様印の聖気を大量にぶち込まれた際、鎧ちゃんはちょっと息苦しそうにしていた。

苦痛とか機能障害が出るレベルの異常とか、そういった感じではないのだが……なんというか、美味いけど普段食い慣れないものをしこたま腹に詰め込んで胸やけを起こしたような……ゲップでもしそうな、そんな感じ。

呪物でありながら、この世界における至高や究極とも称せる質の聖なる力をみっちり詰め込まれたが故の反応だろう。

界樹の浄化に大体はブッ込んだのだが……結局、使い損ねた幾らかは無意味に放出するのも勿体なくて数日は鎧ちゃんの中に留めたままだったのだ。

最終的には大森林からの帰り際、シグジリアのお腹にいる赤さんとサルビアへの祝福にブッパしたんでもう殆ど残って無いけど……鎧ちゃんからすればあんまり留めておきたくない高純度が過ぎる聖気を、数日間は腹の中に入れっぱだった訳で。

……可能性としてはそれが一番高いな。というか他に思いつかん。

あのー、鎧ちゃーん？　今回の銘名に関して他者の魔力を拒むのは、エルフの聖地でのわたくしめの迂闊な運用も理由だったりしますかー？

当然ながら、言語的な意味で返答が返って来る訳では無い。

無いが、なんだろう。やっと気づいたか、と言わんばかりに腕を組んでツーンとそっ

ぽを向いてる様な、そんな感じのイメージが相棒から伝わって来た。
うむ、つまり俺のせいですね分かります（白目
「心当たりはあったみたいだねぇ」
白目を剥いて天を仰いだ俺を見て、ファーネスが笑いながら工房の床に描いた魔法陣を親指で指し示す。
「ま、そうと分かれば通常の銘名や契約に使う陣からちと弄る必要があるね。坊個人の魔力で名付けを最後まで終了させるってのは、簡単にはいきそうにないが……そうさね、魔法と陣の構成を調整すれば一時的な仮契約くらいには持っていける様になるだろうさ」
今の処はそれで精一杯だろうねぇ、と言葉を結び、後は視線だけでどうするか問うてくる彼女に、俺は力無くそれでお願いします、としか返せなかった。
自業自得なのでなんも言えん。直ぐには無理でも将来的には儀式を完遂させて名を刻み終えるトコまで持っていけるようにしたいが……。
単純に、要求される総魔力量が俺が五人いても足りんのよ。儀式魔法を専用にチューンして魔法陣も同じく改良しても、流石に消費魔力が八割減なんてなる筈も無い。
結局は俺が鍛錬で魔力を伸ばすのは必須という事になる。鎧ちゃんにちゃんと銘をあげられるの何時になるんやコレ……。

……戦争は終わってるのが救いだな。急務って訳でも無いから一歩ずつやっていくか。

極論、名前があろうが無かろうがマイバディとは一生モノの付き合いだ。

亀の歩みになるだろうが、必ず銘名儀式の終わりまで漕ぎ着けるからさ。嫌じゃなかったら気長に待っててくれよ。

そんな風に、正面に鎮座する相棒に語り掛けて。

気のせいか、それに応える様に装甲を走る魔力導線が柔らかく明滅した様に見えた。

――《銘名（リネーム）》”ガーヴェラ”。

そう、青年が唱えた次の瞬間。

光が溢れ、そして収束する。

相対する漆黒の魔鎧に生じた劇的な変容に、白の魔鎧を纏った男――ジャック＝ドウ

は眼を見開いて瞠目する事となった。
全身鎧としては細身である全体像はそのままに、手足の装甲はより重厚に、だが獣の爪牙を思わせる鋭利さとなり。
何かの機構が追加されたか、肩の装甲がより肥大化してより攻撃的なフォルムへと変わる。
ゆらりと背から伸び、姿を現したのは、無数の節が連なって出来た鋼の尾だ。
ピシリ、と音を立て頭部装甲（サレット）の面頬部分に涙を思わせる新たな魔力導線が刻まれると同時、其処を基点として全身を走る深紅の魔力に変化が訪れる。
呪いの魔装の象徴ともいえる鮮血の如き赤から、鮮やかな緋色――そしてこの場に降り注ぐ朝の光を思わせる黄金にも似た陽の色へ。
ジャックには知る由も無いが……それは嘗て、青年がエルフ達の聖地で纏った光にも似ていた。
変身と呼べる程に変化激しい姿、これまで以上に増大した魔力と威圧。
何より、眼前で行われたソレには、特級の呪物であった魔鎧が明確に”変わった”であろう事を確信させる何かがあった。
それはまるで、血の染み込んだ戦場の大地（どろ）の中で、それでも咲いてみせた純白の一輪の様な。

忌まれるべき、或いはそうであった筈の存在（モノ）から生まれた、侵し難い奇跡（ねがい）の様な。
魔鎧としての外殻はより力強く、凶々しくさえある変貌を遂げていながら、しかしてその裡から溢れる”意”は呪われた魔装というにはあまりにも――。
男は戦いの最中であるというのに、手を翳して眼前の相手の姿を視界より遮りたくなる。
根から絶つ為とはいえ外法の道に加担し、血生臭い生き方を選んだ身にとって、ひどく眩しいものを見せられた気分だった。
本家本元（オリジナル）の変化に影響されたか、《栄光（グローリアス）》の魔力導線が激しく明滅し、装甲が軋みを上げるように震える。
邪法によって無数に詰め込まれた怨念・思念から溢れ出た激情は、元となった魔鎧への妬みにも、或いは憧憬にも似ていた。
ごった煮同然の、酷く雑然とした思念が精神に侵食しようとしてくる感触に、微かに憐憫を覚えるも……剣鬼は其の感情を侵食ごと捻じ伏せて蓋をする。
自分は今更になって己の魔鎧に……否、誰に対してであっても、同情を向けられるような真っ当な人間では無い。手当たり次第に切り裂くだけの人斬り包丁だ。
此処からが本領だと、猟犬は宣言した。ならば本当の戦い――己の望む死闘も此処からだ。

剣鬼は正眼に構えた剣を、改めて強く握る……ある種の予感を抱いて。
対する青年は短文の詠唱を行なった低い構えの儘、生えた尾だけを静かに揺らめかせ、告げる。
――こっから先が本番だ。タコ殴りになっても文句を抜かすなよ。（抜かすなよ――！わたしと御主人の合体パワーでボコボコだぞぉ！）
「上等」
湧き上がる戦意に任せて唇の端を吊り上げ、堪え切れぬとばかりに剣鬼は打って出た。
草木生い茂る丘の上でありながら、水面を滑るが如き足捌きで間合いを詰める。
剣の間合いまであと二歩――その瞬間に《栄光（グローリアス）》の背面より魔力噴射が発生し、急加速した。
これ以上ないタイミングでの緩急を用いた歩。軽く跳ね上げた切っ先は次の瞬間、奔る紫雷の如き速度で上段からの打ち下ろしに変じ――。
黒い魔鎧の爆発的な超加速により刃を振り下ろすより先に懐に潜り込まれ、空いた胴へと強烈な体当たりを叩き込まれた。
（……ッ、これ程か！）
驚愕する暇も無い。

強かに胸部を打たれて白い魔鎧の胸板に亀裂が走り、打ち込まれた衝撃を殺す為に半ば自分の意思で後方に吹っ飛びながら、ジャックは装甲の下にある顔を警戒と歓喜が複雑に絡んだ感情で歪めた。

だが、その表情も次の瞬間には全身を撫で挙げる不吉な悪寒に完全に引き攣ったものとなる。

打ち据えられ、衝撃によりその両脚が宙に浮いたと同時。バクン、と音を立てて黒の魔鎧の肥大化した肩部装甲が開く。

周囲の空気が音を立てて其処に吸い込まれるのを見て取ったジャックは、白の魔鎧が胴の装甲の破損が治りきるのを待たず、地を削って吹き飛ぶ身体に急制動を掛けると湧き上がる戦慄と焦燥に押されて剣を構えた。

それと同時に、両肩の装甲に呑まれた大気が轟音と共に吐き出される。

ただ暴風を吹き付けたのでは無い。凄まじい圧縮を掛けた空気に物理的破壊力すら伴う音量を乗せ、指向性を持たせたそれは、正しく音の砲撃であった。

直撃すれば終わる。だが完全な回避も不可能。

瞬時にそう判断した剣鬼は、最速で剣を振るう。

選んだのは迎撃――迫る不可視の音撃に向け、自身と《栄光（グローリアス）》の魔力強化の出力を全開にして無数の斬撃を叩き込んだ。

音の壁と剣撃の壁がぶつかり合い、前者が切り刻まれて砕け散る。
だが、圧縮された空気ごと斬り裂かれた音は、その威力と量を減じながらも周囲にまき散らされた。
迎撃の瞬間、ジャックは身体強化の中でも聴覚に回していた魔力はカットしていたものの、それでも耳孔に飛び込んできた大音量は鼓膜を揺らして余りある。
（ぐ……こいつはっ……マズッ……!?）
視界が揺れ、僅かだが足元が覚束なくなる。
戦闘が不可能、という訳では無いが眼前の相手を前にこの状態は致命的なものとなりかねない。
回復まで数秒。この隙を見逃す事無く殺(と)りに来るであろう猟犬を迎撃せんと、剣鬼はフラつく視界を叱咤して剣を構え――。
――うぉおぉ……み、耳が……視界に星が廻るぅ……！（ご、ごしゅじーん!?）
「……ってアンタもダメージ受けるのかよ！」
動きを止め、頭を抑えて呻いている黒の魔鎧の姿に揺れる視界も無視してツッコミを入れる。
二人ともなんとか構えを取るものの、互いに自分と相手、どれだけ先の音撃での影響が大きかったのか判断が難しい状況、一転して間抜けなお見合い状態となりそのまま十

秒程が経過した。

奇しくも揺れる視界や耳鳴りが収まったのはほぼ同時。だが、命のやり取りをしているというのにアホなやり取りが混ざった所為か、両者ともに何となく気不味い空気で仕切り直しに間合いを図る。

摺り足でじっくりと距離を詰め、様子を伺うジャックだが……妙ちきりんな結果となった攻防で得た情報は彼の方が多かった。

僅かに交わした会話やこれまでの言動からして青年――《聖女の猟犬》は、その功績の大きさや立ち回りの速さによって隠れがちだが、相手を狩る為の入念な準備や下調べを軽視しない人種だと思われる。

少なくとも時間や機会が許すのならば、自己の武装の性能把握を怠って自爆する様な真似はしない筈。

だとすれば、答えは一つだ。

「……その姿、殆ど使った事が無いな？　使用時間か、或いは回数か、制限があると見た」

指摘を受け、青年は無言。

動揺など欠片も見せずにスルーされたが、おそらくは正解だろう。確信に近い感覚を以てジャックはそう判断した。

そして、その予想はほぼ当たりと言って良い。
動じてこそいないが、青年は魔鎧の頭部装甲（サレット）の下で渋面を浮かべていた。
あんな滑ったコントみたいなんで其処まで見当つけてくんのかよ、めんどくさっ。
と、内心と表情を一致させて胸中でのみ吐き捨てる。
《銘名（リネーム）》――それは名付けによる性質の強化と使い手への完全最適化である。
ファーネス……と言うよりマイン氏族の工房のドワーフ達が我も我もと総出で行った調整により、最終的に儀式魔法による銘名直前の状態を保持する事が可能となった《報復（ヴェンジェンス）》。
しかし、主である青年の魔力のみによって結ばれる名付けの儀式・契約は、哀しいかな完成の為に求められる持ち主の魔力が全く足りていない。
現状では彼の魔力を根こそぎ注ぎ込んでも一時的な仮契約状態が精一杯。忌憚なく言ってしまえば”仮でも契約状態に移行できるだけ上等”な魔力量の為、持続時間に換算すれば１０分もあれば良い方だった。
加えて言うなら、青年がこれを行うのは本日二度目だ。
一度目は死にかけていた女の子――ファルシオンと呼ばれていた少女の救命手段として使った。
霊薬と併用して《三曜の拳》による気脈の操作・治療の補助が必要だったのだが、普

段の彼の練度では治療に使うのは難しい為、使用に踏み切っている。
時間自体は1分にも満たなかったが、それも含めて日没から延々と魔鎧を使って戦っていた彼の魔力は、この場において万全とは言い難い。持続時間は更に短くなっているだろう。
とはいえ、青年に焦燥や不安――ましてや後悔は欠片も無い。
あの亜麻色の髪の娘を死なせてしまえば、戦友にして気の置けない友人でもある少女の心中に大なり小なり傷を残す可能性があった。
そんなロクでもない結末（オチ）は認められない。言葉にする事こそほぼ無いが、人生は一流の悲劇より三流の陳腐な喜劇（ご都合主義）によって彩られる方が良い、その為に打てる手は打つべし。というのは彼の行動基準の一つである。
時間制限あり――それがどうした。
手にした新たな力を使い慣れていない――それがどうした。
それでもやれると、青年は確信している。
だって彼の相棒である魔鎧が、その意思を明確に、真っ直ぐに伝えて来た。
自分達ならば勝てる、と。
だから自分の銘を呼んで、と。
ならば、それに応えるのは彼からすれば当然である。

初っ端にトチって間抜けを晒したが……その御蔭で大まかにだが今の相棒の使用感とでもいうべきものは掴んだ。

あとは勝つだけだ。

――行くぞ、相棒。（おっけー、気を取り直して仕切り直しっ！）

仕切り直しとばかりに再び力強く呼びかけ、猟犬は疾走を開始。眼前の剣鬼を狩るべく打ちかかった。

一方でその剣鬼――ジャックの方は、奇妙な睨み合いの間にも交した一手から新生した黒の魔鎧の性能を考察していた。

先の攻防、漆黒の流星が瞬きより早く密着距離にまで踏み込んで来た瞬間、咄嗟に柄打ちに切り替えて飛び込んできた肩口へと打ち付けたが装甲に罅すら入らず、幾らか突進の威力を減衰するに留まっている。どうやら単純な装甲の強度も上がっていると見てよさそうだ。

魔鎧の持つ魔力噴射機構は咄嗟の移動や体勢を問わない急加速を可能とするが、圧縮した魔力を狭い噴射口から吐き出す為に動作の入りはどうしても派手になる。

それ故に、敵意、戦意、或いは害意や殺意――闘争に置いて実際の攻撃よりも必ず先に届くであろうその意識の軌道を読む事に長けた彼には、その超高速に対応できるだけの先読みのアドバンテージがあった。先程までは。

”意”を読み取って尚、反応がギリギリとなる程の加速。
その上先程までの魔力噴射と比べ、放出が格段に滑らかになっている。端的に言えば、動作の予兆は数段読み辛くなっていた。
（元から性能差はあったが……魔鎧の機能が全面に出る部分で競うのは不可能に近いな）
只でさえ複製品であり、あくまでジャックにとっては装備の一つでしかない《栄光（グローリアス）》と、文字通り新生し、極限まで性能を引き出したらしき青年の魔鎧。
元より格差は明確。この上、《報復（オリジナル）》の方に更なる強化が為されたというのであれば、機能・性能の押し付け合いでは勝負にならないのは明白だった。
だが、それで良い。
男は剣士であり、剣こそが青年にとっての魔鎧だ。
これで漸く、本当の意味で互いに本身――ならば、後は存分に猛るのみ。
ジャックは嗤う。望んだ死闘――その最上のものであろう時間が訪れる確信に。
青年は笑わない。ただ己が纏う相棒への信頼を瞳に乗せ、勝利をもぎ取る為に真っ直ぐに敵を見据え、迫る。
そうして、名無しの修羅と聖女の猟犬の戦いは再開された。
低い姿勢で飛び込んでくる猟犬の追撃を、剣鬼は得物を構えて迎え撃つ。

最短距離で空を抉って繰り出される縦拳に刃を合わせて弾く。
切り返した切っ先が虚空に銀光を描き、胴を薙ごうとする。
全体で見れば装甲が重厚化したにも関わらず、黒の魔鎧は格段に速くなった魔力の圧縮と噴射を用い、魔装の鎧すら容易く切り裂く斬撃を手刀で打ち落とした。
大気を灼き焦がして獣の爪撃の如き蹴りが飛ぶ。刃が添えられ、軌道が逸らされる。
蹴りを捌けば拳のソレよりも格段に大きな隙が生まれる。返す刀で軸足を斬り飛ばさんと白刃が翻った。
鞭が空を打つような音と共に、鋼の靭尾が唸りを上げて刃を打ち据え、火花を散らす。
尾と剣が競り合った瞬間、刹那の動きの停滞を縫う様に猟犬が魔力噴射を使って右手に回り込む。
一瞬にも満たぬ間にその動きを読んだのか、剣鬼は尾を強引に弾くと同時に魔力噴射で旋回と無手の間合いからの離脱を図る。
再度踏み込む黒、八双の構えで再び迎え撃つ白。
魔装の鋼が打ち合い、微かに鉄の焦げる臭いと共に無数の甲高い音と火花が虚空に咲き乱れてゆく。
日の出の光照らす丘の上、加速してゆく白と黒の鎧姿はやがて流線の如くぶれ、目まぐるしく位置を変えながら両者は紅と陽色の魔力光の尾を引いた地上の流星と化す。

おそらく人外級の戦士であっても、これ程の超高速戦を経験したものは稀であろう。
そう断言できる程の戦い――魔鎧同士の激突は、地を抉り、砕き。宙を裂き、焦がし。それでも足りず。
二人だけの戦場で、その姿が、音が、更に加速してゆく。
拳が、刃が交差し、その度に流星を彩る様に飛び散るのは攻防によって破損した装甲の破片だ。
白と黒の星屑――両者の間に舞うその色は、白の方が圧倒的に多い。
「ッシィッ!!」
気炎を乗せた鋭い呼気が吐き出され。
猟犬の一撃を捌き、剣鬼が身を捻って打ち込んだ反撃の一刀が鋼の尾によって逸らされる。
斬撃のもつ物理・魔力両面でのエネルギーを柔らかに散らされ、流れる様に打ち込まれる拳打を魔力噴射と一寸の見切りを併用して躱す。
大気を穿つ打撃が、一瞬前まで白の魔鎧の頭部があった場所を貫き、火花と小さな破片を宙に散らし。
耳元を掠めた一撃の寒気すら感じさせる鋭さに、ジャックの背に何度目か分からぬ戦慄が走り抜けた。

（出力は上がり、基礎機能の扱いも向上した。あの尾も厄介だ――だが何より……！）

何より、青年の振るう技。

単純な体術は勿論の事、魔力を主軸として、相手や周囲の力の流れそのものを掌握するような絶技。

一手打つごとに、一手しのぐ度に、凄まじい速度でそれらの精度が向上している。

それは技量自体が上がるというより、元よりあった技術（モノ）が掘り起こされ、使い手たる青年の身体に馴染んでゆく様であった。

魔鎧によって脅威的な速度と威力を与えられているとはいえ、あくまで技自体は粗削りな面が目立つ――言ってしまえば才無き凡庸な者が数年丁寧に鍛えた、程度の練度でしかなかった筈の体術は、天賦の才を持つ者が無数の屍を積み上げた先に至る領域へ。

ジャックの言う処の絶技……即ち《三曜の拳》のソレに至っては、彼が一手でも対応を誤れば致命的な痛打か隙を齎すであろう超絶の域に近づきつつある。

技の冴え、キレ。全てにおいてまるで別人――それこそ、中身が入れ替わったかはたまた何かに憑かれたのかと思う程の変わりっぷりだった。

（原理は分からんが、この技の練度、何処まで上がる……!?）

これで何合目か。

一際鋭い剣の一閃と手刀の一閃が交わり、互いにすれ違う体勢で繰り出した一撃が弾

き合って二人の身体を一歩後方へと押しやる。
立て直しは両者ともに刹那。
だが、離れた二歩分の間合いは剣の距離であり、故に白の魔鎧が一手先んじた。
明確にあったの技量の差を埋められつつある剣鬼が、不利な流れを断ち切らんと瞬時に、だが深い集中状態に移行。
柄を硬く握りしめていた指が、剣を構えた腕がゆるりと脱力し――刹那、力を漲らせて加速する。
横溜めに剣を傾げた八相の構えより繰り出されたのは、初速の段階で音すら断ち切った神速の斬撃。
空を裂く剣閃は一息に三つ。二息でその倍となる。
単純な手数だけでみれば、同じ系統の剣士である《刃衆（エッジス）》の長たる少女にも同数以上の斬撃が繰り出せるであろうが、男の放った連撃はその全てが人外級の首に届き得る必殺の一撃であった。
瞬きよりも早く迫る銀光を、遅れも怯みも無く構えられた漆黒の魔鎧の両腕が迎え撃つ。
鋼同士の擦過音、飛び散る火の華、削れ飛ぶ僅かな黒の破片。
獣の爪が如き鋭利さを持つ腕は、絶死足り得る攻撃の全てを逸らし、弾く鉄壁の盾と

して剣鬼の連撃を悉く凌いで見せた。
袈裟斬り、左斬り上げ、翻って左薙ぎ――全て猟犬の翳す手掌によって捌かれ、叩き落とされる。
が、刃は止まらず、一撃凌がれるごとに更に加速。
打ち落とされた剣先を跳ね上げ、逆風――握った拳が手首の返しだけでそれを逸し、切っ先は天へと振り抜かれた。
間髪入れずに唐竹――落雷の如き一閃は、魔力噴射によって半身が傾けられた漆黒の魔鎧の、頭部装甲（サレット）にある角らしき部位を掠めて斬り飛ばす。
天から地へと落ちた切っ先は、それに匹敵する速度で引き戻されて喉への刺突となって奔り――今度こそ翳した両腕の護りを突破。
その手が防ぐより早く、逸らすより早く。喉元へと剣が迫る。
だが次の瞬間、脇下を潜って強襲した猟犬の尾が、寸での処で刺突を打ち据えて弾いてみせた。
「……ク、は、ハハハハッ！」
極限の集中、其処から繰り出した絶死の連撃。
同格の強者であっても無傷で凌ぎ切るのは容易では無い其れを、一つ残らず対処してのけた相手を前に、剣鬼は歓喜の哄笑を上げた。

やはりそうだ、先程感じた感覚は正しかった。

いや、闘技場（コロッセオ）で戦ったとき――或いは、《大豊穣祭》の開会式で、尖塔の上に立つ《聖女の猟犬》と眼が合ったときから、予感があった。

打ち合う。既に何合目か、数える事も億劫となった拳と剣を、飽きる事なく交わす。

打ち合う。一手ごとに僅かに、だが確かに天秤が傾いてゆく感触。それに益々の歓びを覚え、剣を振るう。

打ち合う。相手の速さに対してついに対応の遅れが出始めるが《栄光（グローリアス）》に魔力を叩き込み、無理矢理に追いつかせる。

裡にある、死闘を求める修羅の如き衝動が満たされる、これ以上無い充足感。

だが、それ以上に。

「いいねぇ！　最高だ《聖女の猟犬》！　やはりお前が、俺の――！」

攻防の最中、興奮の儘に叫ぼうとしたジャックの歓声を、興味無しとばかりに無反応を貫いて猟犬が断ち切る。

脇構えから脛を狙って払われた一刀が、足の側面を使って逸らされた。

動作としては攻撃を捌けるようなものではない。だが、接触した部分から完全に物理と魔力の流れを掌握され、攻撃自体が明後日の方向へと流された白の鎧姿の上体が僅かに泳ぐ。

それを魔力噴射で瞬時に立て直し――だがその一瞬すら隙と見做した強烈な一撃が叩き込まれた。
突き込まれた拳が、白の魔鎧の装甲を砕く。
喉を狙ったそれをジャックは身を捻って外し、逸れた打撃は左胸上部を打ち抜くに留まる。
致命打は避けたが受けた衝撃は凄まじい。装甲を破壊し、威力を貫通させた打撃が鎖骨に罅を入れる感触を感じながら、剣鬼は後方に弾き飛ばされた。
吹き飛び、だが空中で魔力噴射を用いて体勢を立て直す。地を抉りながら急制動を掛けて着地した。
致命こそ回避できたが痛手を負った。それでもまだ腕は上がる。剣は振れる――ならばまだ戦える。
魔鎧による痛覚の鈍化と身体中を駆け巡るアドレナリンの効果で、なんら動作を停滞させる事無く男は剣を握り直し、顔を上げ。
同時にギシリ、と亀裂の走るような音が響くのを耳に拾い、その発生源を見て絶句した。
「――――ッ！」
虚空を軋ませ、視界一杯に発生した馬鹿げた量の魔力弾を見て眼を見開き、空に瞬く

無数の星屑が地上に下りてきた様な圧倒的な光景に、息を呑む。
細く尖った、弾というよりは錐の如き形状のそれらを背負うは、腰を落とし、半身になって構えた《聖女の猟犬》。
緩やかに開かれた左の掌を前に突き出し、逆の腕は脇に畳み、胸元で握られた拳は弓の弦を引き絞るかの様に力を撓めている。
互いに言葉は、無い。
それでも、戦いの終わりが近い事を両者ともに感じ取った。
昂る闘志に呼応して二つの魔鎧から唸りを上げて魔力が立ち昇り、陽色と紅の光が明滅する。
（あぁ、やはり……！）
気息を整え、正眼に構え直し。
首筋を撫で上げる戦慄と怖気、胸に溢れる歓喜と充足に挟み込まれて剣鬼は笑う。
（猟犬。お前が俺の死（終わり）か）
渇望した死線の果て、齎されるであろうものがすぐ傍まで忍び寄ってきている感覚を覚え、それでも笑みを浮かべる男。
はたして男が真に望んだのは、戦いそのものか……それともその先の結末であったのか。

何もかも、今更だ。
今はただ、眼前にある死闘を制する。
その為に剣鬼は冷静さを保った儘、同時に本能に火を入れて血を滾らせた。
魔力と戦意だけが天井知らずに膨れ上がり、ぶつかり合い、渦を巻いて丘の上に満ち満ちて。
やがて永劫にも思える対峙は、唐突に終わりを告げる。
全身の噴射機構を用い、最大加速で前に出る剣鬼の纏う《栄光（グローリアス）》。
凄まじい速度でありながら、滑る様な歩を乱さぬそれを迎え撃つは、猟犬の展開した膨大な数の魔力弾。
一斉に放たれる流星群の如き魔力の錐――その一波を白い魔鎧が加速に任せて潜り抜ける。
だが、放たれる魔力の雨はそれで途切れる事は無い。視界を埋め尽くす魔法を急所を打つであろうものだけを選んで打ち落し、残りは限界まで魔力を流した装甲で受け止めた。
身体のあちこちに魔力錐が突き立ち、血飛沫を上げ――だが《栄光（グローリアス）》の装甲に阻まれ、表面の肉を抉るに留まる。
「お……お、お、お、オオオオッ!!」

魔力の瀑布を突破し、その向こうにいる猟犬へと渾身の一刀を振るうべく、剣鬼（ジャック）の喉から裂帛の気合を乗せた咆哮が上がった。

押し寄せる魔法、その最後の波を跳ね上げた切っ先で斬り砕き、弾き飛ばそうとした、その瞬間。

降り注ぐ魔力錐の雨を突き破り、漆黒の魔鎧の姿が眼前へと現れる。

剣鬼（ジャック）の意識が魔法の突破に専心した瞬間を狙っての突撃。

その為に自身の放った魔法に躊躇なく飛び込んで身を晒した黒の魔鎧は、向かい合う白の魔鎧と同じくあちこちに錐が突き刺さり、朱に濡れている。

拳を構えた儘、真っ直ぐに飛びこんで来たその姿を見た剣鬼（ジャック）が感じたのは驚愕と敬意、そして歓喜。

己を打倒せんと力を撓めた拳を解放しようとする猟犬を、魔法の迎撃を放り投げて全力で迎え撃つ。

後の事など一切考えない、文字通りありったけを込めた正真正銘の渾身の一太刀。

全身全霊を振り絞った正面からの一撃は、それ故に男の限界を超え、完全に出遅れた筈の一撃を間に合わせる。

何百合目かの、そして最後となるであろう拳と剣の激突。

間違いなく互いの最大威力の激突に、爆風の如き魔力が荒れ狂い、紫電を撒き散らし

て残る魔力錐を消し飛ばした。
凄まじい轟音と衝撃の中、打を放った黒の装甲、剣を握った白の装甲共に震え、軋み、ぶつかり合う拳と刀身が互いの攻性魔力に炙られて赤熱化する。
単純な出力ではオリジナルに劣る《栄光（グローリアス）》。
正面からのぶつかり合いにおいては不利な筈であったが、使い手たる剣鬼（ジャック）の、一撃に命諸共全てを掛けんとする意思により、その限界を超えた力を引きずり出され、この瞬間のみ、猟犬の魔鎧と拮抗してみせた。
――だが。
（……まだ、上がる……!?）
鬩ぎ合う力の奔流の中心、男は新たなる驚愕で上塗りされた表情で眼前の競り合う相手――黒き魔鎧を纏う青年を見つめる。
その驚きが示す通り、猟犬の――魔鎧（ガーヴェラ）の出力は更に上昇を続けていた。
陽色の光溢れる魔力導線は上がり続ける出力に影響され、その輝きを強める。
淡い朝陽より眩い陽光へ。
そして、更に白熱した先、陽の光を受けて輝く――白雪を思わせる純白へ。
その瞬間。
男は今も死力を尽くして競り合う青年の背に寄り添う、少女の姿を幻視した。

青年と同じく、真っ直ぐに此方を見つめる紅い瞳に宿るは、敵を打ち倒さんとする意思と青年への無上の信頼。

そして、更にその背後。

二人の背を押す様に続く何人もの”誰か”は、ごく普通の若者であり、古強者然とした魔族の戦士であり、年若い魔導士でもあり――。

「――あぁ、そうか。タコ殴り……そういう事かよ」

納得が行ったような、苦笑いを含んだ声色でその口から言葉が零れ落ちる。

「勝てねぇワケだ」

剣が弾かれ、跳ね上げられ。

すれ違いざまに一閃した猟犬の手刀が、剣鬼（ジャック）の胴を深々と貫き、切り裂いた。

噴き出た鮮血によって半身を朱く染め、男が膝を着く。

「ゴ、フ……ッハ、終わり、か」

吐血し、早くも死相の浮き出たその表情は、名残惜し気でありながらどこか安堵が滲んでいるようにも見えた。

――なんか言い残す事はあるか？
その位は聞いてやる、と続け。
薄い燐光に包まれ、元の姿に戻ってゆく黒の魔鎧が振り向き、問い掛けた。
殺すべくして殺した相手に、随分と優しい事だ。
霞む思考の中、そんな思いが掠め、男は再び苦笑する。
「ねぇ、よ、そんなモン……ちと早い終わりだったが、楽しかった。満足だ」
遺言なぞ、ある訳も無い。
剣に狂った人斬りとして進むと決め、寄り道がてら外道に加担し、いざ本道に戻らんとして最初の一人目に負けて死ぬ。
堕ちるとこまで堕ちた人間にお似合いの末路だ。その一人目がこの青年だというのなら、猶更に後悔は無い。
……ただ、まぁ。
望みがあるとすれば、それはくたばった後だ。
この世界の生命は、死後須らくその魂、創造神たる女神の下へ流れつくという。
所詮は人聞きの話だ。実際にそうであるかは知らないが、もし。
もし、叶う事なら、その神とやらには戦争が終わった後にノコノコとこの世界にやってきた間抜けの魂を、元居た場所へと放り捨てて欲しい。

戻ったところで箍の外れた人斬りが死後向かう先など、地獄以外の何処でも無いだろうが、それでも。

それでも、きっとこの異世界（此処）よりは、アイツらの居る場所に近い筈だから。

そんな、未練がましい願いは口にする事無く。

名無しの剣鬼であった男は、力を喪った身体で大地に転がり、朝焼けが夜闇を押し退け始めた空を見上げる。

そうして暗くなってゆく視界の中、ゆっくりと眼を瞑ろうとして――なんとなく、この世界で出会った義妹と同じ髪色をした少女の事が思い浮かんだ。

あの娘に剣の振り方を教えたのは、単なる気紛れだ。己の生き方には不要だと振り切っておいて何を今更。

この期に及んで言い訳じみた間抜けな事を考える己を鼻で嗤う。

それでも、その気紛れの理由が、あの娘が出会った頃の義妹の様な辛気臭い顔であったから、という事を思い出して。

「あぁ……ふり、か……た」

もう一度、見てやる。そんな口約束をしていた少女に、約束を破った事への謝罪を口の中で呟くと。

虚空に伸ばしたその手は何も掴む事無く、力を失くしてポトリと落ちる。

そのまま静かに、誰でも無い男は事切れたのだった。

明くる日

連日続く祭りの喧噪も、流石に日の出直後の早朝ともなれば相当に控え目である。
街の活気の中心から更に離れた、他国の賓客が逗留する為の屋敷は、柔らかな朝陽に小鳥の囀りまで加わり、実に穏やかな雰囲気と早朝の爽やかな空気に満ちていた。
「あー、終わったぁ……いやぁ、流石に一晩中都市一つ対象にした儀式魔法は少し疲れたな。久しぶりにガチで魔法行使に精を出した感がある」
「屋敷に運び込まれた人達の治療も一段落したし、午前中はじっくり休んでもいいかもね。ボク、流石にちょっと眠いや」
つい先刻まで、治療が必要とされる者にそれを癒す者、多くの人間が詰めていた屋敷の玄関広間。
既に今では人も捌けて静かになった其処に居るのは、かたや昇る朝日を浴びながら自身の肩を揉み解して腕をぐるぐると廻し、かたや生欠伸を堪えながら語り合う少女達だ。

一夜限りの物騒な祭りが明け、帝都は表面上、昨日までとなんら変わらぬ賑やかな《大豊穣祭》の喧噪に包まれた活気に満ちた朝を迎えた。
だが、もう一つの祭り――人外級入り乱れる魔境の大捕り物と言うべき騒乱に関わった者達にとっては、事後処理という名の煩雑な後片付けが待っている。
外部協力者やそれに近い立場の者はそうでもないだろうが、渦中の国たる帝国所属の者にとっては面倒なのはこれから、と言ってもよいだろう。
幸い、強襲した犯罪組織の施設は悉くが無力化、そこに所属していた人員もほぼ捕縛及び殲滅済みという状況だ。
各所に捕らえられていた拉致被害者や非道な実験の被験者なども、救助が可能な者は全て搬送を終えている。
強襲先であった各拠点・施設の調査や後片付けに限っては最早急務となるものはない。《大豊穣祭》に人手が割かれる現状、そこだけは救いと言えるだろう。
裏で事後処理に奔走する者達の二徹三徹上等の修羅場は表沙汰になることは無く、表面上は恙無く大祭の終盤へ向けて盛り上がっている帝都であった。
今回の大捕り物における他国の人間、外部協力者、という立場なので面倒な後片付けはほぼ無いであろう二人――レティシアとアリア。
とはいえ、鉄火場にこそ立たなかったが夜を徹しての大魔法の行使に加え、逗留先の

屋敷に戻ってからは救助された中でも身体に重篤な異常があった者の治療も行ったのだ。

彼女達の力が無ければ強襲作戦自体が成り立たず、救出された被害者達にも助からなかった者がそれなり以上に出たであろう事を思えば、間違いなく今回のＭＶＰと言って良いだろう。

久しぶりのシビアなスケジュールでの作戦行動に、流石に腹が減った、眠いとぼやき、と腹を押さえたり目を擦ったりしながら二人は玄関の長椅子に並んで腰かけ、背もたれに身を預けて脱力している。

ちなみに彼女達の警護を務めていたガンテスと屋敷で救助者の治療にあたっていたサルビアは、帝都内の教会関係の治療院に移される者達の移送を手伝う為に騎士達と行動を共にしている。現在、使用人達を除けば屋敷に居るのは姉妹のみであった。

屋敷の管理を任されている男性は一流の執事（バトラー）だ。昨夜の屋敷への大量の傷病者の搬入にもしっかり対応した上、徹夜明けのレティシア達の為に胃に優しい軽食を用意して今も普段使いしている客間で待機している。

当然、彼も徹夜明けだ。自分達が休まないと執事である男性も休息を摂らないであろう事は分かっているのだが、申し訳無く思いつつも二人は玄関広間で眠い瞼を擦り、他愛も無い会話で時間を潰している。

理由は当然、今回の件の発端となった、彼女達に助力を乞うてきた青年の帰りを待つ為であった。
「アイツめ、早く帰って来いってんだよー。こっちは眠気もそうだけどぶっ通しで魔法使ったから腹減ってるってのに」
「だねぇ。どうするレティシア？　客間でスープだけでも飲んでくる？」
「いや、もうちょい待つ。今腹に暖かい食いモン入れたら眠気に勝てなくなるし」
眠そうな姉の言葉にはアリアも同感だったのか、欠伸を噛み殺しながらのんびりと頷いた。
青年が帰ってきたらおかえりを言いたい、というのもある。
が、それ以上に自分達が先に寝てしまった場合、彼はそれを起こす事を嫌がって怪我をしていてもほったらかしにしてしまう可能性が高い。
放置すると危険な怪我でも、帝都内の治療院にお邪魔するか、起きてる知り合いに応急処置だけ頼んで済ませてしまうだろう。
帰って来た青年を真っ先に労うのも、負った傷を癒すのも、自分の役目。
そんなささやかな、けれどちょっと独占欲じみたものも混じる拘りもあって、こうして頑張って起きてる聖女二人である。
ともすればそのまま二人揃って長椅子の上で寝落ちしてしまいそうであったが、その

前に玄関の扉がそっと開かれた。
　静まり返った早朝の空気に蝶番が軋む音が思いの外大きく響き渡り、途端に眠気で半分呆けていた意識を覚醒させた姉妹が表情に喜色を滲ませて立ち上がる。
「お、やっと帰ってきたか……先ずは怪我の有無だな」
「うん。おかえりー、にいちゃん！　どこか痛いとこ、ろ……」
　浮かんだ笑顔が言葉と共に尻すぼみとなり、聖女両名、スンッとばかりにテンションが一気に平常に戻った。
「……いや、なんかすいません。自分もこの時間にお邪魔するのはどうかと思ったンスけど……」
　レティシア達の表情を見て本気で申し訳なさそうに頭を下げたのは、何処か狐を思わせる容貌の青年――トニーである。
　お邪魔しても？　と控えめに問いかける騎士に、何となく彼のやって来た理由を察した聖女二人は寧ろ労う様な視線を向けて頷く。
　それを受けて扉の隙間からするりと身を潜らせたトニーは、音を立てない様に静かに玄関扉を閉めた。
「夜明け前までは旦那と行動してたんですが、別れ際にコイツを御二方に届けておいて欲しいと渡されまして」

「やっぱそんな感じか。ウチの馬鹿が使い走りみたいな事させて悪いな」
彼が懐から取り出した畳まれた便箋をレティシアが受け取り、妹と一緒に広げた紙面を覗き込む。
走り書きされたであろう文面を眼で追い、ざっと目を通し終えた姉妹は顔を見合わせて嘆息した。
書かれていた事は大体予想通りである。
アンナの救出は無事終わった事――まぁ、これは救助した重症者を屋敷に送りにきた帝国騎士達から聞いていたが、一応は書いたのだろう。
仕事は大体片付いたが、まだやり残した事があるので、帰るのが少し遅くなること。
これを渡す時点では特に怪我らしい怪我はしてないこと。
あとは、手紙を渡したトニーが怪我をしているので診てやって欲しいとの事だった。
「大方想像した通りの内容だったねぇ……とりあえずトニー、怪我を見せてよ、治すから」
何はともあれ、眼前の騎士の負傷とやらを診ようとするアリアの手招きする。
トニーが恐縮した様子で再度頭を下げるのを横目に、レティシアが目を瞑った。
「……遠いな。帝都から出てちょい北の方か？」
過去の治療の際に青年に施した魔法的な”枷”を用いて彼の現在地を探るが、流石に

距離があるので都市外の更に北上した位置、程度のやや曖昧な位置把握が精々な事に眉を顰める。
　青年の居場所をあっさり把握した方法や原理こそ分からないトニーだったが、聖女の持つ魔力や魔導の技術があれば不可能ではないのだろう、と納得して傷の治療を受けながらレティシアの疑問に応えた。
「多分ですけど、北の山脈方面ッスね。追撃するにしても、危険度が上がるこの季節に北の山からわざわざ帝国領を抜ける相手ッスか……」
　具体的な根拠は無いのだが、青年が追ったのはおそらく、今現在癒してもらっている傷の原因となった剣士だろう。
　騎士がそう述べると、治療に当たっているアリアの顔色が変わる。
「え、この傷の？　多分、相当な腕利きでしょ？　な、なら今からでも……」
　それなりの時間が経っているであろうに、傷に残る鋭利さすら感じる攻性魔力と、見事な切り口であるが故に外科的な縫合は寧ろ楽であっただろう傷痕。
　治療の際に得た情報から判別して、間違いなく下手人が超一流である事を察した銀の聖女が腰掛けていた長椅子から慌てて腰を浮かす。
「そんなにか？」
「トニーの傷を見たボクの感覚だけど……最低でも、ミヤコさんに近いと思う」

「おい、ってことはアンナを攫ってアイツが闘技場で怪我した原因もソイツか？　とんだ大物じゃねーか……！　急ぐぞ！」

妹の言葉に同じく焦りの表情を浮かべて立ち上がるレティシア。

慌ただしい様子の二人に対し、あっさりと完治した腕と胴の具合を確かめながらトニーは口を挟む。

「念の為に、ってのも選択としては十分有りですし、御二人が旦那のトコに向かうのはお止めしませんが……多分、大丈夫かと」

「……根拠は？」

焦燥もあってやや棘のある口調で問う金色の聖女に、騎士は元通りに動く様になった右腕を使って後頭部を掻いた。

「旦那の性格的に珍しい事だと思うんスけど……あの男に関しては『次やったら勝てる』ってきっぱり断言してたんで。何か弱点でも見つけたのか、有効な札でも手に入れたんじゃないスかね？」

軽い口調とは裏腹に、”旦那”と呼ぶ青年への信用・信頼が伺えるその言葉に、レティシアは「むぅ」と短く唸ると黙り込み……ややあって難し気な顔をしながら腕を組んだ。

本音を言えば、今すぐ飛び出して相棒たる青年のもとに向かいたい。

だが、こと戦いに関しては自信や自負と言ったものをほぼ持たない彼が、断言する程

の勝機を見出したというのだ。
大戦時、彼は無茶がデフォルトだっただけに心配するなという方が無理なのだが……それでも、信頼のおける者に託す、或いは信じて待つ、といった選択もときには必要だというのは今更語るべき事でも無い。
付き合いの長さ、という点ではそれほどでもないトニーがこうして信じているというのに、自分が不安を抑えきれずに飛び出してしまうのは……なんというか、一番付き合いの長い自分が青年を信じ切れていないようではないか。
「うぐぐ……」
腕を組んだまま眼を閉じ、俯いて唸り続ける。
友人として、戦友として、相棒として――異性として。
なんもかんも青年の一番でありたいという欲張りな拗らせ方をしている聖女様が、頭から煙を吹きそうな様子で煩悶する。
それでも心配だ、怪我をされるのが嫌だ、といった感情が強いのは最後の部分の比率が大きいからなのだろう。恋は盲目……とまでは行かずとも、直情・視野狭窄になり易い側面があるのは確かである。
悩む。
悩んで、迷って、頭すら抱えそうになって――ようやっと捻りだした結論を以て、レ

ティシアは顔を上げた。
「……よし、オレも待つ」
「えっ!?　レティシアがそっちの結論に行くとか予想外……」
「おいコラ、どういう意味だ妹よ」
　心底びっくり、といった表情を隠しもせずにマジマジと見つめて来るアリアに対して、心外だといわんばかりに顔を顰めて見せる。
　しかし、アリアからすれば実に意外な判断だと言わざるを得ない。青年の相手がおそらくは人外級であろう事を加味すれば猶更だ。
　不安と心配がない交ぜになったその表情は、姉の判断に対する微かな不満が見え隠れしていた。
「でも……いいの？　にいちゃんがそこまで断言するなら勝つんだろうけど……怪我とか無茶は絶対するのに」
　確定事項だ、と言わんばかりに断言されるが、青年の過去の行動を顧みれば残念でもなんでもなく当然である。
　それに関してはレティシアも否定しない、というか出来ない。なにせ彼女自身が「あの馬鹿、無傷とは言ってないし、勝ちはしてもあちこち血だらけで帰って来そう」とか思っているので。

「良くはない。良くはないけど……アリア、あいつが戻って来てからオレ達は何回無茶をするな、怪我したら直ぐに言え、って言ったと思う？」
「ええ……覚えてないかなぁ……事あるごとに口を酸っぱくして、としか言えないや」
「うん、そうだな。ぶっちゃけオレも正確な回数なんて覚えちゃいない」
　戦争が終わったとはいえ、人里から少し離れれば野生動物・魔獣問わず、危険な生物が闊歩している。
　元居た世界よりは遥かに戦いや危険と言ったモノが身近にある世界だ。そこで生きていく以上、生涯無傷で怪我を一切するな、などと言う無茶を言うつもりは無い。
　青年本人がトラブルの渦中に巻き込まれやすい、という体質なのもある。半分以上は自分から飛び込んでいる気がするが、不可抗力の場合も多々あるのでこればかりはどうしようもなかった。
　だが、トラブルの最中に自分達を頼らない、ましてや怪我や不調を抱えたのにそれを黙ったまま、というのは言語道断だ。後からそれを知る身にもなれというのだ。
　それも自分達に余計な手間や負担を掛けなくない、という思考から来ているのだろうが……知らされない方が余程しんどい、いい加減学習しろ馬鹿、とレティシアは思っている。
（そういう意味では、今回の件はちょっと……いや結構……かなり……とにかく、嬉し

かったんだけど）

だから、まぁ。

今回、青年は自分を、自分達を頼ってくれた訳であるし。

レティシアも、彼が元気に帰って来てくれる事を信じて待つべきではないかと、思ったりしたのだ。

そんな考えを語って聞かせると、アリアも納得はしたのか静かに頷いて見せた。それでも心配は尽きないようだったが。

「怪我をしていても、真っ直ぐにオレ達の処に帰って来てくれれば直ぐに治せる――ただし、変な寄り道したりして自分の治療を後回しにする様なら、今度こそ容赦も遠慮も無しだ。部屋に押し込んでベッドに拘束してなんかもう分かるまで徹底的に分からせる」

「なるほど、後夜祭で王城に行く日まで缶詰だね……寧ろそっちの方がイイかも」

ちょっと頬を染めて決然とした表情で付け足された姉の言葉に、妹も似たような表情で力強く首肯した。

ちなみにトニーは「ただし」の辺りから持ち前の危機察知能力を発揮し、最速で耳を塞いで背を向けて「アーアー、キコエネーッスゥ！」と呟き続けている。耳に入らなければ後々この件で上司に問い詰められても聞いていないと言い張れるのだ、素晴らしき

処世術――というより生存戦略であった。
斯くして、”枷”を用いた青年の位置情報と魔力の観測は続けつつも、交代で休息を摂ることにした聖女姉妹。
尚、当の青年は決着を付けた後に独自の後片付けに奔走する気満々だったのだが、なんか妙な予感がする、と謎の嗅覚を発揮して一旦彼女達のもとに直帰した。
無事の帰還を喜ばれつつも、二人から「こういうときは勘が良いとか、こいつホンマ……」みたいな眼で見られて困惑したらしい。然もあらん。

長い一夜が明け、再び一日が始まった。
文官、騎士、衛兵――帝都にて国仕えの職に就く者達の尽力により、《大豊穣祭》の運営と大捕り物の事後処理が並行して進められる修羅場の一日目は、なんとか無事に過ぎようとしている。
目まぐるしい一夜から更に時は流れ、時刻は再びの夜。
忙しさと重責という点でランキング付けすれば間違いなくワンツーフィニッシュを決めるであろう二人が、王城最上階の一室にて向かい合っていた。

「御苦労だったな、レーヴェ」
「いえ……此度の作戦の成功は、陛下の御威光と部下達の奮戦によるものです」
部屋の主である灰色の髪をした浅黒い肌の男の言葉に、特徴的な赤金の髪をした偉丈夫が丁寧に腰を折って応じる。
贅を凝らしていながらも、快適さも計算し尽くされた部屋は、現皇帝、スヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルの私室だ。
豪奢な椅子に腰かけた皇帝と直立不動で向かい合うは、帝国将軍レーヴェ＝ケントゥリオ。
唯一皇帝の私室に控える事を許された側仕えのメイドを含めても、現在部屋に居るのはこの三名のみであった。
「……まぁ、なんだ。取り敢えず座れ」
「……いえ、吾輩は」
「お前、強襲作戦から不眠不休のままだろうが。いいから座れ」
つい小一時間前までは同じ様に休みなく執務室に籠り続けていた皇帝が、やや強引にレーヴェの言葉を遮って向かいのソファへと顎をしゃくる。
数秒、沈黙し……《赤獅子》は「失礼いたします」とだけ呟いて柔らかな長椅子にその巨躯を沈めた。

腰を下ろすと同時に、組み合わせた両拳を額に押し付け、俯くレーヴェ。
皇帝も黙して語らず、壁際にひっそりと控えるメイドも動かず、無人の部屋の如き沈黙が室内を満たす。
数十秒か、或いは数分か。
静寂を破ったのは、ひどく気疲れした様子の皇帝がソファの背もたれに身を預けて天井を仰いだ事で起きた、長椅子の布部分が擦れる音だった。
「……ティグルの、書斎だがな」
「は……」
常と比べれば精彩を欠いた様子で、帝国の主と第一の家臣は静かに言葉を交わし始める。
「奴の遺した言葉通り、事後処理に必要な大量の資料が保管してあった……それこそ、今回の件と完全に無関係だった国との摩擦も限りなくゼロにできる程度には、な」
「……陛下、それは」
「身体を妙な技術で弄った処で病床の身には変わりない。よくもまぁ一人であの量の情報を纏めたものだ」
幾つかの仕掛けを用いて秘された隠し棚。
そこを埋め尽くしていた書類、書簡、手紙や羊皮紙には、文字通りティグルの生み出

した組織の全てが記されていた。
時期ごとの人員、当初から現在に至る迄の配置や推移、研究内容の詳細、それに対し出資した他国の動きとその証拠。
そして、可能な限り収集したと思われる、犠牲となった被験者達の氏名と生い立ちを記した名簿。
この中でも、特に組織との繋がりの在った各国の情報は貴重だ。
ティグルの息の掛かった者がその国の中枢近くに喰い込んでいるらしく、出資額や被験者の供給人数など、ほぼ完璧な形の証拠と共に詳細に記録されている。
今回の件、膝元でこれ程の犯罪組織が活動していた事と、その首魁が侯爵家の人間であった事。
公表すれば、国際的に帝国への批判が集まる事は避けられない。
だが、これらの証拠を表にだせば、芋づる式に様々な国にも飛び火する。
中には小火では済まない、出資した国にとって大きな火種となり得る様な情報まであるのだ。
おそらく、各国に散ったティグルの同士ともいうべき者達の手によって、彼の死と同時にこれらの情報が帝国の手にある事が伝わっている。
これで組織に出資した国々は、知らぬ存ぜぬでほっかむりを決め込む事は不可能に

なった。
公表後、槍玉に上げられる帝国に対して全面的な味方につき、事後処理への協力や賠償を行わざるを得ないのだ。自国に飛ぶであろう火の粉の量を少しでも減らす為に。
元より帝国は人類種最大国家。不祥事によって国際的な名誉が損なわれたとしても、そこに十に届こうかという国々の必死のフォローが入るならば、国として受ける疵は極僅かで済むだろう。
既に犠牲となった者に家族がいる場合も、被験者名簿の情報によって国からの賠償や援助はスムーズに行える筈だ。
組織に所属した者、関わった者、余さず、残さず。
徹底的に表に曝け出し、闇に沈ませる事無く、明るみに引きずり出そうという執念すら感じる膨大にして詳細な記録の山が、ティグルの遺した物であった。
あの馬鹿め、と。皇帝が苦々しい表情で漏らす。
「此処まで事前の準備が済んでいるなら、素直に此方に全て話せば組織の解体も容易だったろうに」
「……」
ボヤき、と称するにはあまりにも重いものが滲んだ言葉に、レーヴェも再び黙して組んだままの両の手を額に押し付ける。

無数に浮かぶ『何故』という疑問の言葉。
今となっては全てとは言わずとも、幾つかは心当たりがあるが故に、二人はその言葉を容易に口にする事が出来なかった。
おそらく、ティグルには時間が無かったのだ。
一年ほど前から体調を崩す頻度が増えていた。
”閣下”として立ち回る為の仮病、という面もあったのだろうが、犯罪組織は戦中から存在しており、表裏の顔を使い分ける事は以前から行っていた筈。
それを踏まえれば、時間を捻りだす為というよりは、単純に病の進行が危険な域に達していたと考える方が自然だった。
帝国皇帝たるスヴェリアが選ぶ王道は、決断の末に少数を切り捨てる事はあれど、自ら進んで食い潰し、未来への布石に変える事を決して良しとしない。
真意がどうであれ、自らの相談役であった男が秘していた行いは、絶対に認める事が出来なかった。
そして、そんな王であるからこそ……ティグルは兄と共に忠を尽くした。
敬愛する王と兄が居る国を護る為に、決して許されない行いに手を染めた。
例え王や兄が望まず、掴み取った未来の先、王の手によって処断される事になろうとも。

だが、そんな想いも今となっては無為なばかりだ。
外法を以て祖国を、人類を勝利に導こうとした男は、結局は始めた行いによって成果を齎す事も無く、作り上げてしまった負の遺産を清算しきる事も無く、外道共の首魁としてその生涯に幕を下ろした。
一国の王として、スヴェリアはそれを憐れむことは出来ない。悼むなど以ての外だ。その情を向けるべきは、罪人（ティグル）によって”必要な犠牲”に選ばれた民であるが故に。
当然、それは軍部の長たるレーヴェも同じだろう。
――だが。
壁際に控えていた側仕えのメイドが、トレイに二つの杯と一本のボトルを乗せて静かに歩み寄る。
用意されていたのは、普段互いの私室で彼女が用意する紅茶ではなく、彼らにとっては飲み慣れない――病床にある者が暖めて口にする事が多い葡萄酒（ワイン）であった。
「御二人とも、僅かなりとでもお休みになるべきかと。仮眠の前の寝酒としてご用意させて頂きました」
テーブルの上に置かれたソレを無言で眺める皇帝と将軍に微笑んで一礼すると、彼女は音一つ立てずに下がって再び壁際に控える。
封すら切られていないボトルと、二つの空の杯。

沈黙が続く部屋の中、手を伸ばしたのはスヴェリアだった。
トレイの脇に置かれたナイフで、乱雑にボトルのトップラベルを引き剥がす。
やはり無言のまま、瓶の口をレーヴェへと向ける。
応じる彼もまた、何も言葉にすることは無い。
伸ばした指がボトルに栓をしたコルクを摘まみ、その強靭な指先で無造作に引っこ抜く。
帝国の皇帝と将軍が其々に手酌で杯を満たすと、どちらともなく、それを掲げた。
口には出来なくても。
言葉にする事は、立場が、選んだ道が、己自身が赦さなくとも。
それはきっと、最初で最後の、道を違えた『誰か』へと捧げた献杯だったのだろう。
杯が空になり、再び葡萄酒（ワイン）が注がれる。
明日からは更に忙しい日々が待っている。件の事後処理もそうだが、《大豊穣祭》が佳境を迎えたとなれば猶更だ。
だが、それでも。
この場、この時間（とき）だけは、未来を見据えるのではなく過去を偲ぶ男達は静かに杯を傾け、夜は更けていくのだった。

月明かりの下で

男は焦る気持ちを抱え、必死に馬を走らせていた。

「くそっ、一体全体、何がどうなってる……!?」

時刻は夕方。祭りの只中である帝都は半ば不夜の街と化しているとはいえ、ここまで離れれば既にその灯りも遠くにて空を照らすばかりだ。

曇天の空を見上げ、星明りは期待出来ないと判断した男が一度手綱を引き、速度を落とす。

腰に備え付けていたランタンに簡易な魔法で火を入れ、明かりを灯すと再び馬の腹を蹴りつけ、夕闇に包まれた街道の移動を再開する。

休日に祭りを堪能し、朝起きたら職場が壊滅していた。

男の陥っている状況を端的に述べるなら、その一言である。

職場への移動に使っていた《門》が解体され、騎士が検分を行っているのに気付けたのが不幸中の幸いだ。祭りを満喫したは良いが、出勤の時間まで浮かれた気分の儘であ

れば《門》の周辺に衛兵や騎士が多く配置されている事にも気付かずに近づき、捕縛されていただろう。

職場はお世辞にも真っ当とは言えない――処か、一度存在が明るみになれば討伐・殲滅の為の兵が差し向けられるであろう何処に出しても恥ずかしい、所謂犯罪組織というやつだ。

祭りにかこつけて派手に動いている、程度の情報は上の人間から聞いていたが、十中八九、それが原因で国側に気取られたのだろう。

それにしたって一晩で壊滅は無い。相当な規模であり、多数の《門》を経由せねばならない組織形態である男の職場を、どうやったら一夜で綺麗さっぱり潰せるというのか。

帝都の兵を全軍動員すれば不可能では無いだろうが、祭りにはトラブルの対処の為にいつも通り衛兵や騎士が巡回していた。というか、全軍動員したら先ず祭り自体が一時的にせよ中止になるだろう。

限られた兵力でどうやったのか、殲滅級の大魔法で各拠点を爆撃したとでも言うのだろうか？

未だに信じ難い話だったが、実際に壊滅しているものはどうしようもなかった。他の《門》の設置地点を何カ所か確認したが、近づくだけで明らかに衛兵の数が増えた事から

見て、既に制圧済みなのは間違いないだろう。
こうなれば、選択肢など無い。
最低限の荷物だけ掻き集め、帝国領を脱する。
今は、その逃避行の真っ最中であった。
捕まった同僚や部下、上役が構成員の情報についてゲロすれば、直ぐに面は割れる。
男の判断は早かった。
組織内においてそれほど重職には就いてなかったが、男はそれなりに古株であり、それなりに腕も立つ。
所属していた者達の御多分に漏れず、後ろ暗い経歴の持ち主ではあったが……捕らえて来た実験材料となる人間の中に見目の良い女がいても特に手を出したりはせず、警備や資材の搬入に関しても問題を起こさずこなしていた為、とある剣士の手によって行われた人員整理という名の粛清からも逃れた人間である。
とはいえ比較的マシ、というだけであって所詮は同じ穴の狢だ。
それなりに長い年数所属した事実と、普段の仕事振りで得た信用を用いて、男は密かに幾つかの研究資料をくすねていた。
勿論、重要度の高い物や最新の物は無理――というかリスクと利益を天秤に掛けて男自身が避けたし、資料自体も廃棄される予定だった物を一部、選んで懐に収めただけで

ある。

それでも目利き自体は悪く無かったのか、男の収集した資料は然るべき場所――他国の研究機関などに持っていけば、結構な枚数の金貨に化けるであろう物だ。

帝都を出る前に兵に荷を調べられる危険性も考慮し、逃げ出す前に宿の暖炉に放り込んでしまおうかとも思ったが、他所の国で裸一貫でやり直すのならば資金は欲しい。結局は身に着けた革鎧の内側に縫い付ける形で持ち出した。

違和感の無いように丁寧に細工したので脱出日は次の日にずれ込んだが、即日に帝都を出ようとした見覚えある顔が数多く都市の城門前で捕まっていたのを見れば、結果的にこの判断は正解だったようだ。

（前職の経験が活きたな……再出発の元手になりそうな物があるのは有難い）

組織に所属する以前、男は違法な物品の運び屋をしていた事もある。

軽く確認しただけでも、帝都に敷かれた警戒網は最大に近いレベルである事が伺えた。

祭りの警備に併せて上手く溶け込ませているのだろう。水路を辿る、都市を覆う壁を越える、といった非正規の手段を試みれば、おそらく何処であっても即座に気取られる。

一見リスクが最大に見えるが、都市の入口前の検問から堂々と出るのが一番マシな選択だ。

過去に得たノウハウも用いて施した偽装は功を奏し、検問が緩くなる、大量の馬車が出入りする時間を狙ってなんとか帝都を脱出したのであった。
他にも休暇や所用で強襲作戦の現場に居合わせる事を免れ、帝都を出ようと試みた組織の関係者はいた様だが……結果はお察しである。
他の者と違って男が完全な単独であり、同時に殆ど荷を持たない遠出とは程遠い格好に見えた点も、脱出成功の一因なのだろう。
既に帝都を照らす灯りは遠く、時間帯もあって街道に人の気配は無い。
獣に襲われるリスクはあるが、素性が割れて都市から追跡の手が伸びる前に街道から外れるべきか。
少し悩んだ末……男は先に小休止を取る事にした。
街道を進むにせよ、逸れるにせよ、帝国領を出るまでは馬も自分も強行軍になるのは確実だ。
近くの木立の下に馬を寄せ、自身も馬から降りて皮の水筒を腰から外し、水を飲む。
大きく息を付くと、そのまま木の根元に腰を下ろし、ランタンを足元に置いた。
身を休め、馬にも水を与えてやりながら、これからの行動を思案する。
（道行きの危険度は上がるが、やはり街道は外れるべきだろう。帝都の方から追手がこなくとも、連絡を受けた関所などから街道を巡回する人員が出るかもしれない）

そこまで考え、では北と南どちらのルートで進むかとすっかり暗くなった周囲を見回して――。

（……待て、静か過ぎないか……？）

人気の無い平原だというのに、周囲に虫の声一つ聞こえない事に気付いて動きを止める。

秋真っ只中の季節だ。旺盛に虫が鳴く時期はとっくに過ぎたが、それにしたって不自然な程に音が無い。

前職の経験もあって、気配には敏感な方である男の知覚であっても小動物の息遣いすら感じ取れないのは違和感があった。

まるで、無数の虫や動物達がこの周囲一帯から一斉に逃げ出したかの様な。

そう、思考すると同時、馬が突如として嘶きを上げてその前脚を持ち上げる。

ひどく興奮――いや、これは怯えているのだろうか？　とにかく尋常な様子では無い。尻を蜂に刺されたが如く激しく身を捻り、首を左右に振って鼻息荒く暴れ出す。

「ちょっ……おい、待てっ!?」

男が慌てて立ち上がり、宥めようとするも、木の幹に掛けた手綱を強引に首を振って幹から外した馬は、そのまま勢いよく走りだしてしまう。

一心不乱に駆けてゆく馬の背に手を伸ばすが、届く筈も無い。あっという間にその姿

は夜闇に呑まれて見えなくなる。
蹄が土を抉る音が遠ざかっていくのを為す術無く見送り……男は呆然として伸ばした手をダラリと地に向けて下ろした。
と、そのときだ。
秋の曇天、宵の口にしては生ぬるい風が男の頬を撫でる。
季節を感じる様な冷たさは無い筈のその感触に、何故か背筋が粟立ち、鳥肌が立つ。
樹の近くに置いたランタンが風に煽られたのか倒れて転がり、その衝撃で内部に灯った光が消えた。
あっと言う間に降りてくる夜の帳。
男も真っ当な人生、などというものとは縁遠い人間だ。暗闇には慣れていると言ってもよい生き方をしている。
その筈なのだが、どうにも背を撫で上げる不吉な予感に悪寒が止まらない。
まるで暗がりを恐れる小娘の様に、引き攣った悲鳴が喉からせり上がって来るのを必死に噛み殺す。
幸いにして夜目は多少利く方であった。月と星の明かりすら無い中、おそるおそる木の下へと戻ると手探りで倒れたランタンを掴む。
どうにも情けなく震える手で何とかランタンの蓋を開け、魔法で火種を生み出して再

び火を灯すと――。

――　や　ぁ　。

淡い光源に照らされ、眼前に浮き上がって来たのは夜に染み込む様な漆黒の死神の姿だった。

驚愕と恐怖で喉に栓をされ、「ヒュッ」という笛の音を思わせる間抜けな音だけが男の口から零れ落ちる。

死神に全身を巡る血が浮き出た様な深紅の光が灯ると、その手が伸ばされた。

（あぁ、なん、で、こんな……）

恐怖で強張り、石の様に固まった身体は動かない。

迫る漆黒の腕を前に、虚脱状態にも近い精神で考える。

どうすれば正解だったのだろう。

いっそ、帝都でそのまま自首でもすれば良かったのか。

後悔か嘆きか、今更に過ぎた想いが脳裏を掠めるが、時既に遅し。

抵抗も反応も出来ずに掌で顔面を鷲掴みにされ、男の意識は遠のいていった。

時は少しばかり遡る。
帝都を舞台とした混沌とした大捕り物が終わり、二日目を迎えた日の午後。
「此度は中々に刺激的な〝祭り〟を体験出来ました。ええ、鉄火場に立つなどかの大戦以来でしたとも――その上、我が領を含め国の裏に巣を張っていた害虫の駆除も一夜にて決着するとは……いやはや、これも全て陛下の御威光あっての事。その眩きたるや帝国に遍く届かんばかりですなぁ」
「第一声がそれか。絶好調だなお前」
帝国王城、謁見の間にて。
面会を申し出た貴族――シュランタンの開口一番の皮肉に濡れた美辞麗句に、うんざりとした表情を隠しもせずにスヴェリアが玉座の上で頬杖を付く。
「前にも言ったが、お前と話していると疲れる。さっさと本題に入れ」
立て板に皮肉を希釈した水を流し続ける様な言を遮り、要件を話せと告げる皇帝の言葉に伯爵も一旦言葉を切る。
「では陛下の御心の儘に……今日明日中には、帝都を離れ、領地に戻ろうかと考えており

ますので、そのご挨拶に」
「ふん。問題は片付いた上に、祭りの視察も済んだようだしな、当然か」
恭しく頭を下げる男の頭頂部をつまらなそうに眺め、頬杖をついた腕とは逆の指先で顎下に蓄えた髭を弄んでいたスヴェリアだが……ややあって小さく嘆息すると僅かに身を乗り出した。
「戻るのは構わんが、明日にしろ。今日は王城内での催しを捻じ込んだ」
軽く手を振って広間に控えた小姓を呼びつけると、指示を受けた者が静かにシュランタンの傍に歩み寄り、銀の盆に乗せた招待状を丁寧に差し出す。
言葉の通り、突貫で用意した物なのだろう。王城――即ち皇帝が主催する催しの招待状としては簡素な其れを手に取り、吟味する様に眺め廻す伯爵。
「ふむ、確かに唐突……察するに、本日行う予定であった闘技大会の穴埋め、といった処でしょうか？」
「貴族共への、という意味ではな。ついでだ、昨夜の件でお前とレーヴェが歩調を合わせた事で、其々の派閥内で騒ぎ出す連中を黙らせる」
「手綱を絞るのは帰宅してからと思うておりましたが、早い内に済むのなら僥倖ですなぁ――承知致しました、臣も今宵の宴に参じる事、この場にて誓いましょう」
胸元に手を当てて慇懃に一礼するシュランタンだが……それに応じる事もなく、皇帝

は黙したまま玉座よりその蛇の如き面相を見下ろす。
その視線を受け、貴族派の首魁たる男は再び「ふむ」と呟いて僅かに首を傾げた。
「何か懸念、あるいは疑問がお有りでしょうか？　なればなんなりと。臣たる者、陛下に向けて閉ざす口は――」
「何故、使わんのか。それを余が疑問に思う事など、容易に理解できるだろうに」
何時もの調子でその口から流れ出ようとする長台詞を遮って放たれた言葉に、シュランタンの口上がピタリと止まる。
何を、とは今更問う迄も無い。
彼が帝都に訪れた目的でもある、人買い・人攫いを行っていた組織の捕捉、叶うのならば壊滅。
それ自体は二日前の強襲作戦で成った訳だが、首魁がケントゥリオ侯爵――レーヴェの実弟であった事は、政敵であるシュランタンにとって絶好の交渉材料になる筈だ。
ひいてはレーヴェを擁する皇帝の痛点にも成り得る話であり、実際、ケントゥリオ侯爵家に責を問う、或いはその代替として貴族派に有利な条件を突きつけることは容易であった。
だが、日を跨いだにも関わらず、シュランタンがその情報を元に行動を起こした様子は無い。

それ処か配下の者達にも緘口令を敷き、情報自体の公表やそのタイミングなどは王城側に委ねている節があった。

断じて同情や憐憫の類で政治的な判断を鈍らせる様な男では無い。彼を知る多くの者達からすれば、腑に落ちない真似をしているのは確かである。

その疑問を解消すべく、この場にてスヴェリアが問うのは当然の帰結であった。

だが、挙げた疑問の声とは裏腹に帝国の主の顔には嫌そうな表情が張り付いている。

それは、既に答えの見当はついているといわんばかりのものであった。

シュランタンもそれを察したのだろう。蛇と揶揄される何処か爬虫類じみたにんまりとした笑みを浮かべ、これ見よがしに、だが無礼に当たらない程度に肩を竦めて見せた。

「そうですなぁ……帝国の主たる陛下に語るは汗顔ものの話ではありますが、先ずは前提として、私は今の己の立場を中々に気に入っているのですよ」

興味があるのか、単に相槌を返すのも嫌なのか。

無言で続きを促すスヴェリアに対し再び慇懃に一礼すると、三枚舌扱いされる事も多い滑らかな口周りを用いて答え合わせが続けられる。

「単なる外聞としてもそうですが、我が愛する領地を富ませる為に今の天秤は実に都合がよろしい。そうでなくとも、これ以上に均衡が傾いた状況は聊か以上に風情に欠ける

というものです」
　均衡。そう、均衡だ。
　人類種最大国家という看板に揺ぎ無く、不足無く、帝国が大戦を乗り越えたのはスヴェリア＝ヴィアード＝アーセナルという傑物があってこそ、というのは誰であっても理解している。
　その傑物たる皇帝が？栄させる国において、彼にあっさりと潰されない程度には影響力を持ち、何よりも自領を最優先出来る。
　謂わば敵対的中立に近い関係を維持できる今の自身の立ち位置は、名と実利、両方共に実にシュランタンにとって好ましい。
「薬も過ぎれば毒となるもの。ましてや、此度の一件の情報（ソレ）は劇薬に等しい。天秤に配する錘を弄ることに夢中になる余り、それら全てを乗せる台座自体に劇薬を溢して痛めるなど、愚の骨頂というものでしょう」
　徒にティグルの件を突き、ケントゥリオ侯爵家自体に大きな傷を与えれば現状の帝国の屋台骨自体が不安定に為りかねない。
　人類最大国家における指折りの名家、皇帝の政敵たる大派閥の首魁。
　その肩書を好み、その立ち位置を以て自身の領地を存分に富ませて来たシュランタンにとって、帝国の持つ国家としての『格』が落ちかねない今回の一件は、公にするより

は寧ろ封じてしまいたい類の話題という事だ。
存念語り終えた伯爵を前に、皇帝は顔を顰めて鼻を鳴らす。
「ふん、やはり行き付く先は自領か。つくづく変わらんな貴様は」
「自身の領地を護るに手一杯故の、臣の浅はかなる小知恵でございます。何卒陛下には赦意を御恵み頂きたく……」
三度目となる慇懃な礼。
深々と頭を下げたシュランタンは、そのまま首だけを上げてにんまりとした笑みの儘、思い出した様に付け足した。
「我が身とは水と油の関係にあるかの獅子に関わる醜聞――それに眼耳を塞いだ事が陛下の一助となるならば、是非も在りますまい。ですが、そうですなぁ……我が領の前任者と引継ぎ当初から親交があった事、どうか御目溢し頂けるのなら望外の喜びにございます」
ちゃっかり前任者――スターディン辺境伯の一族を先帝時代から援助し、取り込んだ上にそれを秘していた事を不問にしろと要求してくる。
以前、スヴェリアが正式にスターディンの捜索を行い、復権保障までして呼びかけた事を知っている上でこの発言である。
肝も神経も図太い蛇の要求に、中指おっ立てて「くたばれ爬虫類が」とか言えたら気

分良いだろーなー、なんて思いつつ、苦々しさをたっぷりと湛えた顔で皇帝は首を縦に振った。

その程度の便宜で済むなら安いものだ。シュランタン独自の価値基準が多分にあるとはいえ、貴族派からケントゥリオ侯爵家への突き上げが無いと保障された事が有難いのは確かなのだから。認めるのは実に業腹だが。すました作り笑いが最高にムカつくが。

舌戦、という程のものでは無いが、少なくともこの場においてのやり取りでは一枚上手を行かれたスヴェリアは、口内に溢れ返って零れ落ちそうな苦虫を吐き出す様な心地で愚痴る。

「……嘗ての若気の至りとはいえ、お前を一度でもレーヴェの隣に置こうとした事は余の人生最大の黒歴史だ」

「昔も同じ答えをお返し致しましたが、領地より離れた職場など御免被りたいものですなぁ。とはいえ、陛下御自ら宰相の位に臣を推して下さった事、生涯の誇りでございますとも」

「忘れろって言ってんだよ、分かれよ」

皮肉とツッコミだらけの言葉の応酬は、止まる気配を見せない。

謁見の間に控えた兵や小姓、文官の胃に地味にダメージを蓄積させる際どい会話は、

もう暫くの間続きそうであった。

やべぇ、遅刻した（白目

今日は陛下主催の王城の方で開催されるイベントがあったんだが……ふっつーに遅れちゃったよ、どうしよう。

いや、一応シア達には若干遅れるかもしれん、とは告げておいたんだけど正直に言えばあいつらが王城入りする直前位には合流できるだろう、と高を括っていたのだ。

俺はこの二日間、襲撃を行った当日に偶々帝都で休暇や休日だったらしき人攫い共の残党をとっ捕まえる手伝いをしていた。

と言っても、正式に連携したり協力を申し出た訳じゃ無い。一匹たりとも逃がさんとばかりに都市の各所で網を張っている兵隊さん達を、それでもすり抜けて帝都から脱してのけた連中に狙いを定めてたのよ。

ゆーても、国のデカさに負けない位には優秀な帝国の兵――しかも首都の精鋭兵だ。

警戒網のレベルの高さは伊達ではなく、ほぼ全ての残りカス共を捕縛する事に成功していた。

俺が手を出したのなんてこの二日で一人だけだった。なので、夕方近くになってそろそろ約束の時間に近いし、切り上げよーかなーなんて思ってたのだ。

ところがぎっちょん、その後直ぐに二人目――厳重化した帝都の検問を抜けて脱走した、件の組織の構成員らしき人物を発見。

確信が抱けるまでこっそり追跡し、人気の無い処で片付けたは良いが時刻は既に夜。既に催しは始まっている時間だった。

「あんまり遅くなる様なら、お前が会場入りするときに盛大に名乗り上げてくれるように案内の人にお願いしとくからな」

そんな風に悪戯っぽく笑ったシアに、はいよー、了解。とか軽く返して屋敷を出た朝の自分が恨めしい……！

俺が注目集めるのは嫌なのはアイツもよく分かってるので、本当に実行する可能性は低そうなのだが……ウチの聖女様は偶にちょっと悪ノリした悪戯を仕掛けてくる事もあるんですよねぇ！　主に俺限定で！

リアも居るし、止めてくれると思いたいが……王城で開くイベントなんて貴族だのガチの豪商だのしかいない場所で、声もデカデカと「《聖女の猟犬》のおなーりぃー」とか

されてみろ、俺はその場で回れ右して逃げ出す自信しかないぞ（断言

二人には顔を出すって約束してるし、ブッチする選択肢はハナから無い。

が、遅刻した後ろめたさと、仕掛けられているかもしれない恐ろしい羞恥の罠に足踏みして王城前でうろうろする俺。衛兵から見たら職質待ったなしの不審人物ですね分かります。

で、そろそろ本当に衛兵さんに声を掛けられるかもしれんと思っていた処、先に俺を見つけて声を掛けてきた人物がいた。

「あれー？　わんこ君じゃん。こんなトコで何してんの？　舞踏会出るなら城に入ればいーじゃん」

「あら本当……どうかなさったんですか先輩？」

ありゃ、隊長ちゃんにダハルさんことシャマダハル嬢やんけ。背を丸めてうんうん唸っていたので気付かんかった。

王城から出てきたらしき《刃衆（エッジス）》の二人。その後ろには彼女達の同僚である魔法剣士のローガスの姿も見える。

もう日も落ちたのに見回りか。分類的には騎士の中でも特上のエリートだろうに、大変だねぇ。

「今夜の王城の催しはアンナちゃんが参加必須ですからね。私は彼女の代理として見回

りの班に加わった形です」
「あたしも参加したかったなー。まー、ふくちょー以外は基本不参加なんでしょーがないし……で、わんこ君はなんで此処にいんのさ?」
いやまぁ……一応は俺も顔出す予定だったんですけどね?　ちょーっとだけ遅刻しちゃいまして。
片手を挙げて軽く挨拶してくるニコチン中毒者なローガスに同じく片手を挙げて返すと、不思議そうにしているお嬢さん方二人にちょっと情けない現状を説明してみる。
頭を掻いて目を逸らす俺を見て隊長ちゃんとローガスは苦笑し、ダハルさんはケラケラと声を上げて笑った。
「お前さんらしいっちゃらしいが……此処で悩んでいても時間が過ぎるばかりだろうに」
「相変わらず仕事中とそうでないときのギャップが酷くてちょー受けるんですけど」
くぅ……分かっとる。分かっとるがな。ここで時間潰してても ただの浪費だし、覚悟を決めてそろそろ行こうと思ってた処ですよ畜生。
一方、部下二人と俺の会話を何やら思案顔で聞いていた隊長ちゃんだったが、やがて何かを思いついた様子でポン、と掌を打ち合わせた。
「それでしたら、いっそ入口以外から会場に入ってしまうのはどうでしょう?　場所は

中階の大広間です、先輩なら中庭を見渡せるバルコニー部分に跳んでそこから広間に入れると思うんですが」

え、それってオッケーなの？　後で怒られたりしない？

「大丈夫ですよ、私が話を通しておきますので」

おぉ、頼もしい発言。流石は《刃衆（エッジス）》の隊長殿だ。

いやマジで助かるわ……じゃぁ、お願いしてもいいかな？

「はいっ、では少しだけ待ってもらえますか？」

笑顔の隊長ちゃんの言葉に頷くと、次の瞬間、彼女はトンッという軽く地を蹴る音と共にその場から消えた。

分かってたけど超はやーい。戦闘モードじゃなくてもこれかぁ。

二年前の時点で大概だったが、今ではもう素の状態だと距離があっても視認するのすら難しくなっとる（白目

「たいちょーったらわんこ君にちょーあまーい。普段はこの手の横紙破りは滅多にしないのにねー」

「言ってやるなよシャマ。実際入る場所を変えるだけだし、大した話でもないだろ。陛下は寧ろ面白がって許可しそうだしな」

「それに関しては同意するし」

ローガスとシャマ嬢の会話を聞く限り、やっぱりちょっと特別扱いになる話らしい。有難いやら申し訳ないやら。

ふーむ……後で何か礼でもするかねぇ。

「そうしてやってくれ。隊長殿も二日前の大捕り物からロクに休めてないからな。祭りが終わる前に、もう一度くらいは休みを取って貰いたいが……」

「てか、折角わんこ君いるんだし、たいちょーも舞踏会に参加すれば良かったのにねー。例の一件も片付いたし、ただの見回りならあたしちゃんとおじさんで充分っしょ」

ちょっと待ちなされダハルさんや。さっきも聞こえたが……舞踏会ってなんぞ？

俺の記憶が確かなら、今夜の催しは副官ちゃんの闘技大会優勝のお祝いも兼ねた、お貴族様相手の催しとしてはそこそこにカジュアルな立食パーティーだった筈だ。

首を捻って問いかけた疑問は、逆に「いや、新しい招待状届いてね？　ちゃんとそっちは読んだ？」と返されてしまう。

すいません、この二日間殆ど屋敷に居なかったんで、内容が更新された新たな招待状の存在すら知りませんでした。

俺の言葉を受け、装いこそ騎士のソレだが見た目まんまギャル系のお嬢さんが、肩を竦めて大雑把に説明してくれる。

「ほら、今日やる予定だった決勝戦。対戦相手がアレだったからふくちょーの不戦勝で、

催しとしては消化不良だったっしょ？」

あー……成程ね、そういう……。

今日、闘技大会の決勝戦を観戦する筈だった観客はものの見事に肩透かしを食った形だ。

後日に一般の観客に対しても席料の払い戻しなんかを行うのだろうが、試合を楽しみにしていた人達の中でも貴族やお偉いさんの立場にある面子に対しては、今夜のパーティーの格式（グレード）を上げる事で一先ずの詫びにするのだろう。

ぶっちゃけ、一番の人気や収益が見込めそうだった闘技大会が最後の最後でポシャったんで、ついたケチをある程度清算する意味合いもあるんだろうね。

思ってたより堅苦しそうな宴になりそうではあるが、基本、シアリアにくっついて飯食ってるだけの俺にはそこまで大幅な行動の変化はないと思われる。そもそも貴族絡みのイベントに興味の薄いウチの聖女様方が出席したのも、副官ちゃんのお祝いだからってのと陛下の顔を立てて、っつーだけだし。

大変なのは副官ちゃんやろなぁ……。

一番の候補だったとはいえ、優勝前提で祝勝の催しの予定まで組まれてた重圧（プレッシャー）は胃に悪そうだ。

それに見事応えたのは流石だし、舞踏会に内容変更されたとはいえ、彼女も変わらず

主賓の一人と言っても良いのだろうが……半端な形で優勝が転がり込んできたのを喜ぶ様な娘じゃないし、気分的には複雑だろう。

その辺を堪えて主賓として振舞わなくてはいけないというのは、中々にしんどそう。会場入りしたら様子は早く確認したい処よね。

本日の城内でのイベントに変更があった理由にも納得が行った。

変更理由を考えると参加者の数は増えてそうだが……どのみち皇帝陛下主催なのは変わらんし、シアとリアに変なちょっかい掛ける奴もおらんやろ。っていうかやったら陛下の顔面に泥団子を渾身のスローイングシュート決めるも同然だ。その程度の事も分かんない奴はそもそも弾いてるだろうし。

俺がアホ面でほへーと頷いていると、ダハルさんがなんだかちょっと悪戯っ気というか意地悪気というか、そんな表情になって口元に手をあてて笑う。

「わんこ君、この手のイベント嫌そうだから来ないと思ってたけど……いやー、出るなら面白い事になりそう。やっぱあたしも参加したかったー」

えぇ……まだ何かあるんですか。ちょっと面倒な要素大杉問題。

こちらがちょっと食傷気味の顔になったのに気付いたんだろう。彼女は「ちがうちがう」と口元に添えた手を横に振って俺の不安を否定する。

「むしろその逆、みたいな？　でもきっと見たら驚くし。なんせ――」

内緒話をするみたいに耳打ちしてくるダハルさんに、俺もふむふむと首肯しながら顔を近付けると、その瞬間に隊長ちゃんがシュバッと残像の尾を引いて戻って来た。
「お待たせしました先輩！　……内緒話ですか？」
こそこそ話の体勢だった俺達を見て、彼女は小首を傾げる。
それを見たダハルさんがちょっと考える様な仕草を見せると「やっぱやーめたっ」なんつってパッと俺から距離を取った。
「考えてみたらこーゆーのは黙ってた方が面白そうだし。ネタバレ厳禁ってやつっしょ。ね？」
最後の問いかけは隊長ちゃんに向けたものだ。
彼女もダハルさんが言わんとしていた事を把握しているのか、ちょっと苦笑しながら首を縦に振り、同意を示す。
寸止めっすかー、逆に気になるんですけど。
とはいえ、行けば分かる話だ。折角隊長ちゃんが裏口入場的な段取りを付けてくれた事だし、ありがたく向かうとするかね。
「そうしとけ。俺達も巡回に出ないといけないしな——会場で副長に会ったら優勝おめ……いや、お疲れ様ですと伝えといてくれ」
ローガスが煙草を取り出して咥えながら言う言葉に頷いて返し、互いに軽く手を振り

合って俺は三人と別れる。
ありがとなー、特に隊長ちゃん。後でお礼するってばよ。
そのまま城の門前に向かった。
話は通っているのか、門番の人から「では、中庭にお通りください」と言われる。うむ、では失礼します。
《大豊穣祭》開催前の準備期間中に王城内部を見学させてもらったので、中庭への行き方は把握してる。
特に迷ったりという事もなく辿り着くと、わざわざ中庭前にも人を配置してくれたらしくて文官の人から手招きされた。
「猟犬殿、こちらです」
陽も落ちて静かな、だけど相変わらず見事な造形の緑の園を連れ立って進むと彼は中庭の真ん中から見える、上階から大きくせり出たバルコニー部分を指さした。
「あそこが舞踏会の行われている大広間です。静かに入りたいのならば、先ずは近くの樹木を昇って其処から伝って入ると宜しいかと」
うっす、了解です。いやごめんなさいね？　こんなしょーもない悪戯じみた入り方の手伝いとか。
「いえ、二日前の一件にて、猟犬殿を筆頭に教国の方々には帝都の洗浄に大変寄与して頂

きましたからね。この程度の融通は些細な事です」
食事も王城の妙を凝らした物が出ているので、お楽しみ下さい。と笑って言うと、文官さんは一礼して来た道を戻ってゆく。
いや、ただ会場入りするだけだってのに、色んな人に助けられてるな俺。なんやこれ
（呆れ
我が事ながらアホやってんなーとか思わなくも無いが……まぁ、ここまで来て言ってもしゃーない、行くか。
パーチーに参加って事で、前に隊長ちゃんと行った工房で買ったスーツで来てるし……会場入る前から汚したらあかんな、気を付けんと。
軽く魔力で身体強化し、服に木屑が付かない様に注意しながらバルコニー近くの樹に飛びついて登る。
子供の頃の話ではあるが木登りは得意な方だった。スルスルっとてっぺん近くまで労せず登り切ると、位置的にちょっと見下ろす形になったバルコニーを観察する。
人が居ないならそのまま飛び移ってしまおうと思ったんだが……間の悪い事に、丁度誰かが会場となった広間からバルコニーへと出てきたところだった。
あらら、タイミングが悪かった……貴族の御令嬢かな。ちょっと外の空気でも吸いに来た感じだろうか？

肩の出たデザインの淡い青のドレスを着たお嬢さんは、なんだか疲れた様子でバルコニーの手摺へと体重を預けて深々と嘆息している。
舞踏会に気疲れするとかなんとも御令嬢らしくないが、ちょっと親近感が湧くね。
息を殺しつつ、樹の上から木の葉による帳に隠れる形で彼女の様子を伺うも、直ぐ中に戻る感じではなさそうだ。どうしたもんか。
ふと、手摺に半ば突っ伏す様にして俯いていた御令嬢が顔を上げる。
曇天だった筈の夜空はいつの間にか雲の量を減らし、差し込む月明かりに照らされて綺麗な銀髪とそれを飾る青い宝石で飾られた髪留めが視界に入った。
――正直に言おう。
滅茶苦茶驚いた。もし鏡を見たら、今の俺は間違いなく全力でアホ面である。
貴族の御令嬢かと思った淑女(レディ)は、よく知ってる娘だったのだ。
ドレス姿に加えて普段と違って薄く化粧でもしてるのか、常の快活さは鳴りを潜め、月光に照らされる様は御伽噺に出てきそうな妖精を思わせる。
いつもサイドテールにしてる髪もストレートに下ろされ、なんというかグッと大人っぽい雰囲気だ。
樹の上でかくれんぼ状態の俺に気付いたのか、真っ直ぐにこっちを見上げた碧眼が僅かに警戒する様に細められ――一秒後にそのまま半眼になって、その視線が呆れ一色に

染まった。
「……何やってんのよアンタは」
あー……いや、まぁ。色々と経緯がありまして。
目付きだけでなく、表情と声まで完全に馬鹿を見るときのソレで見つめて来る彼女――副官ちゃんに向け、俺は頭を掻いてきまり悪く答えたのだった。

樹上の不審者を見る目とただの馬鹿を見る目を合体させた様な視線に耐え切れず、俺はそそくさとバルコニーの上に降り立つ。
半眼のままな副官ちゃんは、腕を組んで少し高い位置にある俺の顔を見上げて来た。
へへ、すいません……正座した方がいいでしょうか（糞雑魚感
「……一応聞いておくけど、無許可で忍び込んだ訳じゃないでしょうね？」
あ、それは大丈夫です。招待状は前のバージョンのだけど持ってるし、ここから入るのもちゃんと許可を得てますハイ。
「他の参加者に見られたら賊と間違えられて捕縛待った無しじゃない。ったく、陛下の稚気にも困ったモンね」
発案は隊長ちゃんなんやで？
「なら問題無いわ。胸を張って堂々と入りなさい」

変わり身の速さァ！　相変わらずのミヤコニウム中毒者っぷりやでぇ……。

格好のせいか、一見すると儚げですらある雰囲気なのだが、口を開けばいつもの副官ちゃんでちょっと安心した。いや、正直めちゃめちゃ似合ってるし、綺麗だと思うけど。

「だからそう言うのは……」

何やら言い掛けた副官ちゃんだったが、何故かちょっと口をモゴモゴさせて言い淀んだ。

「ハァ……まぁ、いいわ」

疲れた様に溜息を吐かれてしまった。解せぬ。

しっかし、大分お疲れやね。やっぱりそのドレス姿が原因？

俺の問いに、彼女は更に盛大な嘆息を漏らして気怠そうに下ろした髪をかき上げる。

「まぁねぇ……何時もの装備で良いって話だったのに、舞踏会になった催しで主賓がそれじゃカッコ付かないだろう、って陛下のお達しでね」

副官ちゃん的には出来れば固辞したかったらしいが、決勝が不戦勝になって武威を示すにも画竜点睛を欠いた状態なので、それを埋め合わせる為に見目のインパクトも盛る為、と言われてしまったらしい。

ダハルさんや隊長ちゃんを始め、部隊内の同性の同僚達にも折角だからお洒落してみろと言われたのもあってなし崩しに、といった流れみたいだ。

「決勝無しで優勝した事に、貴族派の参加者から嫌味を言われないのは良かったけど……代わりに踊ってくれだの息子を紹介したいだの……勘弁して欲しいわ」

着慣れないドレス姿で飯も喉を通らない、と愚痴るその表情には、割と本気の疲労が滲んでいる。

彼女からすれば、実際の処は優勝処か決勝で戦う筈だった相手と一戦交えて倒された上、身柄をかっ攫われたのだ。

性格的にも優勝者でござい、と胸を張れるもんではないんだろう。そういう処は生真面目な娘だ。

元はと言えば自分が不覚をとったせいだとか考えて、忸怩たる思いを抱いているのは予想が付いた。

ローガスが言っていた言葉の意味がしみじみ理解出来た。そらしんどくもなるわ、お疲れさんですマジで。

「……ま、正直気疲れするのは眼に見えてたからね。レティシア達を巻き込んでやったのは我ながら良い仕事したわ」

むむ？　と、言うと？

気分を切り替える様に肩を竦めた副官ちゃんは、肩に掛かった髪をふぁっさーとこれ見よがしに再びかき上げ、ちょっとドヤ顔になった。

「ふっ、死なば諸共の精神ってやつよ――ゲストの聖女様二人にもドレスを着せてやったっての」

なん……だと……!?

驚愕のあまり劇画調になってそうな俺の顔を見て、彼女は実に悪い笑顔でニヤリと笑う。

「やー、流石は救世の聖女姉妹。あの二人が登場した瞬間に一気に会場中の視線を掻っ攫っていったわ。御蔭でこうして一息つけてるって訳」

そらそうやろ。元の知名度と人気もさることながら、アイツらが公式の場でドレス着用とか何気に初めてじゃね？　……アンナさんマジパねぇ。グッジョブ！

やんややんや、ってなモンで、「くるしゅうない、もっと褒めなさい」とかノってくる副官ちゃんにヒューヒューと口笛を吹いて小声で喝采を送る。

よっしゃ、こうしちゃいられねぇ。早速俺もシアとリアのドレス姿を拝みにいくぜ！

ウキウキ気分でスキップしながらバルコニーの扉へと手を伸ばした俺の背に、さり気ない感じで声が掛かった。

「あ、ちなみにあの二人を説得する為に『アイツが来たらドレスの見物料代わりに、何曲でもダンスに付き合わせてやれば良い』って言ったから。頑張って聖女様のパートナー役を務めてね」

なん……だと……（二度目

再び驚愕してギクシャクと振り返ると、さっきより更に意地の悪い笑顔になった銀髪の美少女の御姿があった。

お、俺まで巻き添えにするとか酷いぞ！　鬼！　悪魔！　アンナさんマジアンナさん！

「随分な言い様ねぇ。ならあの娘達のおめかし姿を見るのを諦めて、ここに引っ込んでるって？」

ぐぉぉ……なんつータチの悪い二択を強いてくるんじゃこのお嬢さん……！

折角のあいつらのドレス姿、見たいか見たくないかでいったらそら見たい。割とガチで見たい。

あと自分でもちょっとキモいとは思うのだが、ロクに交流も無かった貴族だの商人だの何処ぞのお偉いさんだのが今もシア達のドレス姿を見てるのに、俺が見れないというのはなんかモニョる。

だがっ、俺にっ、舞踏会のダンスは難易度が高い、高すぎるっ……！

俺の実際の踊りの経験値なんぞ元の世界の文化祭でやったフォークダンスが精々だぞ、どうしろっつーねん。

単純に自信が無い、躍るのが嫌だ、というのもあるが……ダンス中にドレスの裾を踏

んづけてあの二人に赤っ恥をかかせる可能性だってあるのだ。躊躇するなって方が無理やろ。

実の処、大戦時代に「聖女の御付きとして各国を廻るのだから」という周囲の声もあって、簡単なステップとかだけは聖殿でちょっと勉強した事がある。

けど、マジで最低限な上に結局は一度も使用する機会の無かった知識だ。錆びつく処か錆の塊になってるよ、錆落としたら何も残らねーよ。無だよ。

八方塞がりな状況、頭を抱えてう〇こ座りでしゃがみ込んだ俺の頭頂に、呆れた様な声が掛かる。

「……本っ当にダンスの知識すらおぼつかないんだね……レティシア達は経験ほぼ無いけど覚えてるステップはあるって言ってたけど」

死体蹴りはヤメロォ!?　誰にでも向き不向きはあるだルルォ!?

得意な事は特に無いけど苦手な事はいっぱいあるぞ俺は！　女の子と躍るダンスなんてモンはその最たるものなんだよ！　非モテの童貞なめんな！（キレ気味

「力強く情けない事を断言するなっての――まぁ、焚き付けた私にも責任はある、か」

しゃがんだ体勢のまま見上げると、副官ちゃんは広間の様子をガラス張りになってる部分から確認した処だった。

「次の曲が始まるまで少しは時間がありそうね……よしっ」

立ちなさい、と声を掛けられてしょぼくれた顔で渋々と立ち上がった俺に、彼女はさっきまでの悪戯顔ではない、普通の微笑みを浮かべて手を差し出す。
「ここで練習するよ。一番簡単なのだけ突貫で覚えなさい。この際付け焼刃でもいいから基礎のステップだけでも覚えれば、一曲くらいはあの娘達と踊れる筈よ」
出した結論がスパルタすぎるんですけどこの娘。
バルコニーの広さは十分だけど、音楽も無し、精々２０分も無いであろう時間で俺にダンスが覚えられるのか（白目
「多少もたついた足取りでも初心者って事で大目に見て貰える。要は開き直って楽しむのが大事、ってね。というか陛下が直接招待した賓客を笑う命知らずは居ないから」
むぅ、そっか……ならちょっと悪足掻きしてみますか。
自信は相変わらず無いが、それでも、俺がなんとかやる気になったのを察して副官ちゃんが一つ頷く。
そうして、軽く咳払いするとちょっと澄ました感じのお言葉と共に手の甲を向けて来た。
「よし……コホン――それでは、私と踊って頂けますか、騎士様」
――騎士、って程立派な身の上でもないですが、喜んで。
手を取り、うろ覚えにも程がある動作でぎこちなく腰を曲げて一礼する。

変な自虐は入れないの、なんて言って友人が笑い。何だか照れ臭くて俺も笑い。
人の気配も、煌びやかな照明も、音楽もない、月明かりだけが降り注ぐバルコニーの下で、静かに二人のダンス――の、練習は始まった。

手を取り、息を合わせ、ゆっくりとステップを踏む。
一番簡単なの、と副官ちゃんが言った様に、実際、覚える量だけでいえば簡単に暗記出来るものではあった。
あくまで基礎的な動きのみ、応用やアップテンポ無し、って前提だけどね。一夜漬けですらない一刻漬けでは俺にはこれが限界です（白目
「はいそこ、ゆっくりでいいから合わせる――レティシアやアリア様はアンタと私より身長差があるんだから、一歩の歩幅をもう少し狭くしなさい」
うっす、アンナ先生。こんな感じでしょうか？
「よろしい、それじゃこのまま。そう、ワン、ツー……」
ゆったりと、単調ではあるが真剣な時間が過ぎてゆく。
躍るにしても三、四分程度で済む曲を予定しているため、緩やかなステップを反復で

繰り返して少しでも身体に慣れさせる。
三巡目くらいに入った辺り、カチコチだった俺の動きが気持ち半解けくらいになった処で、踊りの練習なので自然と身を寄せ合う形になっている副官ちゃんがポツリと呟いた。
「……ありがとね」
唐突な礼の言葉に、慣れぬダンスに四苦八苦しながらも俺は面食らう。
どしたん？　礼を言うべきは、今まさに練習に付き合ってもらってるこっちの方だと思うんですけど。
「色々よ、色々。今回の件では借りが出来たわ――特に、アンタが居なかったらあの娘は助からなかった」
そっか……確かファルシオン、だっけ？
容態は《銘名（リネーム）》切って精度を爆上げした《三曜》で安定させたけど、それまでの出血量が既に結構な危険域だった筈だ。
その後どうなったのか、聞いても？
「一命は取り留めた。けど、やっぱり重症だからね。治療と並行して調書を取ってる最中よ」
それこそシアかリアに頼めば完治に時間は掛からないのかもしれない。

それを副官ちゃんが言い出さないのは――やはり彼女、ファルシオンと呼ばれていた少女が、完全な被害者とは言い難い立ち位置だからだろう。

副官ちゃん個人があの娘に危険は無い、と判断していても、対外的には例の組織に積極的に検体として協力していた人物だ。

《刃衆（エッジス）》の副隊長が傷だらけになって鎮圧した相手だというのも警戒感を煽るのに一役買っている。

下手に完治させて逃亡されたら捕縛は容易では無い、という意見が多方から上がるのは仕方ない話なんだろう。

幸い、副官ちゃんが立ち会った聞き取りによれば、ファルシオンは極めて素直……協力的な態度で取り調べに応じているらしい。負傷の具合がまだまだ酷いので少しずつ、という段階みたいだが。

全くの無罪や執行猶予あり、とは行かないだろう。なんぜ所属していた組織が第一級の犯罪組織として認定されている。

とはいえ情状酌量の余地はあるみたいだし、罪を裁かれるにしてもそこまで重いお勤めにはならないんじゃなかろうか。

何にせよ、彼女はまだまだ年若い女の子だ。

法に則って罪を償って――その後で、再出発してお天道様の下で幸せになる事だって

出来るだろう。
そう返すと、ゆっくりとしたステップを踏んだまま副官ちゃんも眼を閉じて、噛みしめる様に言葉を零した。
「そうね。そうなって欲しいと、私も思ってる」
お互いに少しだけ無言になって、ゆったりと――確か分類的にはブルースなんて呼ばれるダンスの歩を反復するのに集中する。
ややあって、再び口火を切ったのはやはり副官ちゃんだった。
「ねぇ」
なんでしょう、アンナ先生。
「あの男は、どうなったの――勝ったんでしょ？」
……お見通しか。まぁ、あの状況で別行動するって言ったら察するわな。
うん、勝ったよ――戦った場所の近くに埋めた。
「……そ、お疲れ」
素っ気ないが、どこか憂いが浮かぶ声色と表情になった友人に、敢えて調子を変えずに告げる。
俺が勝手にやるべきだと思ってやっただけだからね。礼も労いも不要だよ。
――あの娘の傷が癒えたら、俺が自分の口で伝える。

だから、副官ちゃんが気を揉む必要とかないのよ。オーケー？
「……アンタもこういう事には大概勘が良いわね」
そう応えた声には、苦笑に近い物が含まれていた。
まぁ、なんとなく、だけどね。
決着後、ジャックを丘の近くの樹の下に運ぶ際に、俺が胴ごと断ったらしき千切れたロケットペンダントがその懐から零れ落ちた。
多分、元居た世界から持ち込めた物なんだろう。あの位のサイズで、肌身離さず持っている物なら一緒くたに転移出来ると聞いたことがある。
家族か、恋人か分からんが……中に入っていた写真の二人の内片方――亜麻色の髪の女性は、何処かファルシオンに似てる気がしたのだ。
あの二人に何が繋がりがあるかも、なんて感じた根拠なんてそれだけだ。後は、それがついさっきの副官ちゃんの表情で確信になったってだけ。
どうであれ、ジャックを殺したのは俺だ。
それを告げるのも、或いは恨み節を向けられるのも、俺であるべきだろう――これぱっかりは誰に譲る気も擦る気も無い。
そんな諸々は全て呑んだ上で、俺はあの剣鬼を打倒したのだから。
暗に、副官ちゃんであってもファルシオン嬢にジャックの事を告げるのはノーセン

キュー、と主張すると、彼女は笑みとも溜息ともつかない、曖昧な短い吐息を漏らす。
「結局、アンタ任せか……今回はホント、負けるわ攫われるわ捕まるわ、良い処ないね、私」
ええ……（困惑
俺とトニー君が施設に突入する前から脱出済みで、中の連中の半数近くをぶっ飛ばしてた人が言う台詞なのそれ？
「犯罪組織に所属してたような無頼漢に負けた時点で、《刃衆（エッジス）》の看板に泥跳ね付けた様なモンよ。自分の未熟が恨めしいわ」
副官ちゃんが未熟とか、世の戦闘職にある方々の九割以上が「雑魚でスイマセン」って壁に向かって項垂れる羽目になると思うんですけど。
「どうだかね～……本当の処は決勝戦で負けたも同然だし、下手すれば副隊長の席も降りる事になったりして」
いや絶対ないって――っていうかちょっと口調がワザとらしいぞ。副官ちゃんだってそんな判断を陛下がするとか微塵も思ってないやろ！
俺が至極真っ当なツッコミを入れると、何故だか彼女はちょっとムッとした様子でダンスを中断して、こちらと組み合わせていた手を離し、そのままその手で俺の頬っぺたをガシッとばかりに挟み込んだ。

「……と・に・か・くっ、平の隊員に戻る可能性だって出てきたって事！　――アンタ、そうなったら何時までその呼び方を続ける気？」
話が明後日の方に音速でカッ飛んどるやないけ！　なんのお話ですかぁ！
「えぇい、鈍ちんかっての駄犬!?　……あんときは普通に呼んでたでしょうが！　呼べるなら普段からそうしてみろ！」
先程までの静かな――しんみりというか、しっとりとした空気すら感じさせた雰囲気から一転して、何時も通りギャーギャーと騒ぎ出す俺達。広いバルコニーとはいえ、よく大広間側から気付かれないなコレ！
両頬というか顔の両側面をギリギリとプレスされ、変顔を晒す俺と、折角の可愛いドレス姿なのに「ふぬぬぬっ」とか鼻息荒くして両腕に力を込める副官ちゃん。
おぶぼぼぼばばっ、か、顔が潰れるっ、ヤメロォ！　人の顔面骨格にゴム毬みたいな弾性は無いんやぞぉ！
分かった、呼ぶから！　よーぶーかーらーっ！　手を離して下さいアンナ先生！
「さんも先生もいらない！　普通に呼べっ！」
勝ったといわんばかりに鼻を鳴らしてパッと手を離し、彼女はそのまま腰に手を当てて近距離から睨め上げて来る。
くそう、逆ギレしてくる相手に負けた気分だ……。いや、別に呼ぶのが嫌って訳じゃ

無いんだけど、ちょっと悔しい。
縦に圧縮されていた顔を揉み解しながら、軽く深呼吸。
間近にある翠玉（エメラルド）みたいな碧眼を見つめて、瞳の持ち主の名前を気持ち恐る恐る呼ぶ。
――それじゃ、えーと……ア……アン、ナ。
「……なんで急に照れてんの、アンタは」
仏頂面の呆れ声――だけど、彼女も改まった感じが気恥ずかしかったのか、ちょっと頬が赤かった。
いやでもさぁ、こういうのってちょっと気不味くない？　ずっと苗字とかニックネームで呼んでた仲の良いクラスメイトとかを名前で呼ぶのとか、今更感あって恥ずかしいっていうアレよ。
「言わんとしてる事はまぁ、分かるわ」
だよね？　ゆーても副官ちゃ……アンナが綽名呼びはやめろっつーなら俺に否は無いけど。
即座に呼び直した瞬間、彼女はいきなり自分の口元を覆う様に右掌をバチン、と押し当てた。
結構いい音したけど大丈夫か。赤くなったりしたら場所が場所やし、ちょっと大変じゃない？

「……無しで」
うん？　何だって？
「やっぱさっきの無しで。いつも通りに呼んで」
理　不　尽　!?
……いや、まぁ、否は無いって言ったし、副官ちゃんがそれで良いならそうするけどさ。
暫くは自分の顔の下半分にセルフアイアンクローしていた副官ちゃんだが、ややあって顔に押し当てていた右の手を下げ――両の掌を使い、俺の胸元をトン、と軽く突いて、近かった互いの距離を離した。
「そろそろ時間ね。音楽始まってあの娘達にお誘いが殺到する前に、傍に行っておきなさい」
む？　もうそんな時間か。なんか後半は何時ものノリで騒いでたから気付かなかった。
うーむ。正直まだ不安はあるが……基礎のステップと前後の作法をおさらいできただけでも良しとしておこう。
「なら良いわ。私はもう少し此処で休むから――健闘を祈ってあげる」
おう、助かったよ、ありがとう。

それじゃ、今度こそ行って来るぞい。
ひらひらと手を振ってくる副官ちゃんに、軽くガッツポーズを向けて返し、ようやっとバルコニーの扉を開けて大広間へと足を踏み入れる。
幸いにして注目は大広間の奥――多分、陛下やシア達が座る場所に集まっているので、こっそり入った俺に怪訝な視線が向く事は無かった。
バルコニーへの扉を、音を立てない様に静かに閉めようと振り返って――。
「……バーカ」
月明かりを背に、楽しそうに、そしてちょっとだけ退屈そうに。
此方を見つめる友人と眼が合って、俺達はどちらともなく、笑い合ったのだった。

祭りの後に

開けっ放しだった窓から眩しい光が差し込み、意識が覚醒する。
連日続いた夜に上がる花火も見納めって事で、昨日は屋敷に戻ってからも暫く空を眺めてたからなぁ。そのまんまカーテン閉めるの忘れて寝ちまったか。
生欠伸しながらベッドから身を起こすと、軽く伸びをする。
寝台から降りて窓際に歩み寄ると、窓を全開にして換気し、部屋に朝の空気を取り入れる。
うむ、良い天気。今日も外に出っぱなしになるだろうし、天気が良いのは助かるわい。
雲も少なく、秋の早朝にしては気温も高めな晴れ模様である事に、ありがたやー、と天を拝む。
この数日で屋敷のメイドさんが修繕してくれた旅装を手に取り、着替え始めた。
再転生して来てからこっち、着慣れた一張羅ではあるが、この間の戦闘で細かなほつれや汚れ、小さな穴が幾つも出来たんで買い替えどきかなーとか思ってたんだけど……

いや完璧な仕事っぷり、どこが破損してたのかよーく見ても分からん。

袖を通し、修繕された各所の補強部分に違和感がないかをチェック。次に腰回りや胴部分の革帯（ベルト）を止めて、最後にブーツに両脚を突っ込む。

おっしゃ、先ずは顔洗って、次に飯だ飯。

軽く頬を叩いてちょと気合を入れると、なんかもう聖殿の自室と大差ない位に馴染んだ部屋を出る。

本日は《大豊穣祭》最終日。

最後だからこそ、予定は詰まっている。

先ずは腹ごしらえを済まそうと、俺は皆が集まる客間へと歩き出した。

この世界の暦上、秋の真っ只中に数日在るとされる豊穣の日。

その最後は女神様に感謝を捧げながら家族や友人と穏やかに過ごし、由来あるとされる葡萄酒（ワイン）や木の実なんかを使ったメニューを夕飯の食卓に出して、いつもより確り御祈りする、ってのがスタンダードだ。

なので、《大豊穣祭》の最終日も基本同じ様に〆るらしい。実質長く続いた祭りからい

つもの日常に戻る為の準備――後片付けタイムも兼ねてるって感じかね。
客間に入ると、そこには既に朝食をいただいてるリアとガンテスが居た。
おっす、二人ともおはようさん。
「おはよう、にぃちゃん」
「おはようございます。良き朝ですな。大祭の締め括りに相応しき、創造神の慈愛が如き柔らかな陽気です」
朝の挨拶を交わしつつ定位置の席に着くと、メイドさんからおしぼりを渡されるのでそれで手を拭きながら、使用人の人達が飯の準備をしてくれるのを待つ。
上げ膳据え膳にも慣れちゃった感があるなぁ……ゆーても、祭りの御蔭で外で買い食いとかしまくってるからね。元の生活に戻ると大変とかは無さそうだが。
なんにせよ、逗留中ほんとお世話になりました。いやマジで。
少しばかり気の早い言葉を掛けると、ナイスミドルの執事さんを筆頭に、客間にいるメイドさん達も「恐縮です」と小さく笑みを浮かべて静かに一礼する。
で、シアはまだ寝てるのか？
出されたお茶で口を湿らせながら改めて客間を見廻し、この場に居ない聖女様の姉君の方はどうしたのかと問いかける。
「逆だよ、ちょっと用事があるっていって先に外出したみたい――今日はレティシアの

番なのに、にぃちゃんと別行動って珍しいよね」
新鮮なサラダをつつきながら小首を傾げて教えてくれたのはリアだ。
シアの番、というのは別に変な話では無い。単に祭りを見て廻るときのメンバーローテーション的なもんや。
一昨日は俺とリア。昨日は後夜祭って事で三人一緒で、今日の我が同伴者は金色の聖女様、という感じ。
別にわざわざ日毎にメンバー決めなんてせんでも、基本皆で一緒に行動して、何か所用あるようなら抜ければえぇやん、とか思うのだが、シアリア的にはこれは必要な事らしい。理由は知らんけど。
だがまぁ、今日に限ってシアが居ないのはそんなに変な事じゃない。
なんせ、昼過ぎになったら合流しよう、と言い出して来たのは本人だからね。その当人がこんな朝早くから出掛けたのはちと意外だったが、何か用事があったって事なんだろう。
「あ、そうなんだ……外で改めて待ち合わせかぁ、確かに一回くらいはそんな感じでも良かったかも」
俺とお前さんが出掛けるときか？　まぁ、確かに基本、二人仲良く一緒に外出がデフォだったが……今回のシアみたいに何か野暮用アリってんならともかく、わざわざ出

る時間ずらして別行動して直ぐに合流ってあんま意味なくね？
「そうなんだけどね。こう、ちょっと憧れるシチュというか、ごめん待った？　みたいなやり取りがしてみたいというか……」
スープを啜りながら俺が言うと、妹分は何故かちょっと眼を伏せつつ、やたらとハムを細かく切り分けながら何やらモニョモニョと小声で呟く。なんでもいいけど、そこまで細かいと逆に食いづらくない？
たっぷりの豆が浮いたスープを匙で掬って口に運んでいたガンテスは、そんなリアの様子を微笑ましそうに眺めていたのだが……ふと、思い出したように俺に視線を転じた。
「ここ数日にかけ、猟犬殿は土産物というには幅の広い品々をこまめに買い集めていた御様子でしたが、帝都に滞在中に贈り物をする方々でもいらっしゃるのですかな？」
普段俺が買わなさそうな物まで買ってたからね。そら気付くか。
まー、そんな感じです。滞在中にお世話になったり、色々とお願いを利いてもらったりした相手にお礼の品をね？
そこそこ人数多いから、流石に今日だけだと無理なんで帰るまでに渡し終えれば良いかな、って感じだけど。
同じ聖都在住の面子も何人かいる。向こうさんの帰りの荷物を増やすのもなんだし、

そっちは帰ってからでもいいのかもしれんが……個人的には、この手の礼はあんまり間を置かずにしておきたいんだよね。

ぶっちゃけ、あの一夜のゴタゴタに協力してくれた目の前の二人も礼をしたい相手ではあるのだが……まず受け取らんし、無理に押し付けても逆に申し訳なさそうな顔されたり、好きでやったことだからいいのに、とか苦笑いされそうだし、何かしら別の形で返そうと思ってる。

それこそガンテスならば、偶に街の外まで出かけてやってる泊りがけの修練に付き合うだけで相当に喜んでくれそうだ。普段は理由付けて断る場合が殆どだし。

時間はあるんだし、二、三日くらいなら……いや、流石に長いな、一日……やっぱ無し。御礼は別の事にしよう。理由？　死にたくないからだよ察しろ（白目

それじゃ妹（おとうと）分の方はどうするか、なんて考えつつ、メイドさんが用意してくれたスクランブルエッグと腸詰の乗った皿を手元に引き寄せると、その当人がちょいちょいと俺の服の裾を引っ張ってくる。

「にいちゃんにいちゃん。これ、美味しいよ。ツナっぽい」

リアが柔らかなフレンチトーストの断面をこっちに向ける。確かに乾酪（チーズ）と一緒に挟んである具材は、見た感じツナのオイル漬けかフレークっぽい。大分長い事逗留してるけど、これは初めて見るな。

というか、この屋敷のコックさんはマジ有能。食事のメニューが豊富過ぎる。下手な店よりラインナップ豊富――聖殿の料理長並じゃね？　内陸なのにある程度は海の幸まで流通させてる帝国の伝手あってこそ、なんだろうけど。

切り分けたトーストをフォークに刺して味見しろとばかりにこちらに向けて来るので、一口いただく。

んむ、美味い。確かにツナみたいだなこれ。保存の利く缶詰とかで売ってるのなら普通に欲しいぞ。

お返しにスクランブルエッグをひと匙掬って差し出す。甘い卵焼きとか好きやろー、どうぞー。

「わーい、ありがとー」

ニコニコしながら差し出した匙を啄むリア。

聖殿では飯は基本食堂だし、周囲の目がある状況だったが……逗留先の屋敷なら殆ど身内みたいな面子しかいないせいか、随分と甘えん坊な行動が増えたねキミ。

こうしたちょっとした食べさせ合いっこなんて、その最たるもんだ。いや可愛いし、上機嫌の妹分が見れるので俺的には全然まったくこっぽっちも問題ないんだけど。

今はリアの甘えっ子ムーヴにブレーキをかけようとしてくるシアがいないから尚更にだ。ガンテスは基本、屋敷での俺達三人のやり取りをご満悦っぽい表情で見てるので

止めないし、なんなら給仕してる屋敷の使用人の人達も目の保養とばかりに微笑ましそうに見てる。

結局、何度も互いの皿に無い品をシェアしたり、一口交換して味見してみたり、この日の朝飯は何時もよりやや時間が掛かった。

この後の予定を考えるとちょいと時間がおしてしまったが、まぁ移動時間を急げばええやろ。妹分が可愛いからね、仕方ないね。

中央広場からその周辺にかけて、それぞれの区画に合わせた宿泊施設が集中している。

どの区画に寄せてるかで客層がおおまかに分けられているみたいだが、今回俺が向かったのは西区方面にある旅人や商人が利用する宿屋だった。

宿としてはそれほど大きくない、ややこじんまりとしたそこは、とある聖都からの観光客の一団で部屋が埋められており、現在は貸し切り状態に近い。

で、その観光客の一団は言う迄もなく知った顔――ミラ婆ちゃんやシスター・ブランが引率してきた孤児院の子供達、という訳だ。

「あ、わんわんだ！」
「ほんとだ！　あそびにきたの？」
「こっち、皆ですわってご飯たべるとこあるよ、すわろ」
「ぼくばーちゃんよんでくる！」
お土産持って訪れると、そっこーで子供達に気付かれ囲まれ、あれよあれよという間に一階にある食堂みたいな場所に連れられ手近な席に座らせられた。
そして何かリアクションを示す前にオフィリが素早く膝の上を占拠し、年少組の何人かが両隣の席を固めて包囲される。アッと言う間の流れる様な手順で草。
毎度同じく集られて遊具にされていると、程なくして何時ものシスター服の上にエプロン付けて頭に三角巾を巻いたミラ婆ちゃんがやってきた。
おはよーございます。お客なのにモロにお掃除中スタイルやん、何で？
「えぇ、おはよう。此方の宿を経営なさっている御夫婦は、現役時代に縁の出来た方々なのです。孤児院の全員での長期宿泊先として、結構な融通を利かせて頂きましたからね」
引き払う前に掃除くらいはしておくべき、という事か。ミラ婆ちゃんらしいお言葉だ。
シスター・ブランはどうしたのかと聞いたが、帰る準備を始める前にこっちの教会施

設の知人に挨拶して回ってるらしい。俺も挨拶くらいはしておきたかったが……まぁ、帰る場所は同じ聖都だ。改めて礼を言う機会はあるだろう。

お子ちゃま達が興味深々で見つめて来るも、なんとか死守していたお土産を向かい合った席に座る姉弟子へとお渡しする。

この間の一件、大変お世話になりました。これ、日持ちするお菓子とちょっと良さげな保存食なんで、帰りの馬車で子供達やシスターと一緒に食べて下さい。

クッキーの類は鉄板だが、干し肉も香辛料利かせた上等な部類を、蜂蜜やジャムなんかのお高い甘味もデカい瓶にたっぷり入ってるやつを買って来た。帰り道は長いし、飯の質は大事だろう。旅行の最後にケチがつくのは子供達の思い出としても良くないだろうしね。

分類としては保存食扱いとはいえ、この手の贅沢品に片足突っ込んだモンは婆ちゃんとシスターは受け取るのを渋る可能性もある。

だから見えない様に態々箱詰めセットで持って来たんですよぉ！　目の前で開封なんてしないだろうし、素直に我が感謝の気持ちを受け取るが良いわ。ふははは。

「他者への感謝を示す為の散財は美徳と言って良いのでしょうが、あの一件は私達教会の人間も積極的に解決にあたるべきものでした。一介の聖職にある者として、為すべき事を為したまで。この様な高額な礼は不要です」

即行でバレた。なんでや。

「何故も何も、幾ら保存食とはいえ、この大きさの箱が複数な時点で結構な金額でしょう。箱の重量感からしても、瓶詰の様な重い物が入っているのは想像がつきます」

テーブルの上に積み上げた箱を眺める表情は何時もの鉄面皮だが、声色には呆れが滲んでいる。

……言われて見れば確かにそうだ。どうして気付かなかったんや俺は。

そうだよな……ちょっと持ってくるの重かったし、っていうか此処で渡す品だけは量多くて店預かりしてもらってたのをさっき受け取って来たやつだし。

サクっと受け取ってもらう目論見が秒で見破られて白目を剥きそうになるも、まだ諦めるには早い。俺の周りには積まれた箱を見て眼を輝かせる子供達がいるのだ。この子らの食欲に訴えかければ、ミラ婆ちゃんもそれを無碍には出来まい。

そんな風に思い直すも、ミラ婆ちゃんは小さく溜息をついて――珍しい事に苦笑した。

「とはいえ、この品があれば帰りの旅路に子供達の楽しみが増えるのは確かですね――受け取りましょう、皆で味わって頂くとします」

俺が何か言う迄も無く、子供達の期待に満ちた視線には気付いていたのか。

先手を取られて「ありがとう」と、逆に礼を言われてしまう。ちびっ子連中も婆ちゃ

んに何か言われるでもなく、一斉にお礼の言葉を唱和させた。
いや行動全部読まれててワロタ――師姐にはなんもかんもお見通しって事ですかね？　まだまだ頭が上がりそうにない。
「当然でしょう。私は貴方の姉弟子ですから」
子供達に群がられて頬や髪を弄り廻されながらしみじみと呟くと、口の端を微かに緩めた姉弟子は、これまた珍しい事に少しだけ誇らしげに言ってのけたのだった。

お次は南区。こっちは冒険者組合がある区画なので、自然とそっち関連の施設が多くなる。北区にある工房の作品なんかを売りに出してる武具店とか、冒険者向けの宿とかね。
ちょっと荒っぽい連中の比率が多いのと、祭りの期間中はそんなに催しや区画としての特色が出るような場所では無いので、滞在中殆ど南区には来てないのだが……なんつーか酔っ払いの数が多いな。
正確には最終日前に全力で飲んで騒いで力尽きた連中が、道の端で酒瓶抱えて寝こけてたり、青い顔してゲロ吐きそうな面構えでフラフラと歩いてたり、そんな感じだ。

別に南区だけで見られる光景、という訳でも無いのだが、酒と喧嘩が付き物な冒険者連中が集まる区画だけあって、特にその数が多い。

治安が悪い、って感じはしないんだけどね。なんつーか、力いっぱい祭りをエンジョイして燃え尽きた感が凄い。

先にも言ったが、あまり来た事の無い区画なので、物珍しさも手伝ってあちこちを見廻しながら大通りを進む。

暫く進むと、反対方向から元気な子供の声が聞こえてきた。

南区（ココ）で子供の声を聞くとは思わなかったな。少なくとも、聖都の冒険者達が屯する場ではあまり見かけない。

そちらに視線をやると、大通りの反対側に比較的若い冒険者の一党と孤児らしき数人の子供達が一緒に連れ立って歩いてるのが見えた。

「早く行こうぜ姉ちゃん！　今日は炊き出しの日だから神父様も居るはずだし！」

「ちょっとカイル、前見て歩きなさい。他の人にぶつかるわよ」

「僕達の代わりに品を買ってくれてありがとうございます。やっぱり、家無しの孤児だとあぁいう店は入店を渋る場合が多くて」

「まぁ、これ位はな。しかし、神父様達に御礼の品を、ってのは感心だが……少しずつ貯めた銅貨だろう？　やっぱり半分は俺達が……」

「駄目ですよ、本当はアザルさん達にもお礼がしたいのに、この上お金まで出してもらうなんて筋が通りません」
「ウェンディ、大丈夫ですか?」
「……大丈夫じゃないわ……ザルな連中相手にムキになって飲み過ぎた……頭痛い……」
ぴょんぴょんと飛び跳ねる様に溌溂とした声と足取りで先頭を行く少年と、前方不注意な彼を諌める弓を背負った斥候(スカウト)らしき装備の女性。
その後ろには続くのは、革鎧を着て腰に剣を差した戦士と、罅の入った眼鏡を掛けた少年だ。何やら真面目な顔で話し合っている。
最後尾を歩くのは魔導士と僧職の青年。顔を顰めてふら付いて歩く女魔導士に、聖職者の方が解毒効果のある魔法を施していた。
子供達の方は見覚えが無いが、冒険者四人の方は知った顔だ。
彼らも《大豊穣祭》目当てに帝国に観光に来てたんか。既に最終日とはいえ、見た感じ祭りを満喫出来ている様で何よりである。
楽しそうにしてる処に、態々反対側の通りから声を張り上げるのも無粋だろう。和気藹々と会話して進む冒険者と孤児達を横目で見送ると、俺は再び目的の場所へと歩き出した。

「お礼の品ですか。マメだなぁ……依頼料はきちんと頂いてるし、先輩が恩を感じる必要とか無いのに」

黒髪に甘いマスクのイケメンが、感心が混ざった苦笑を浮かべて後ろ手で頭を掻く。

まーそうなんだけどね。組合には事後承諾で依頼通した形になるし、その辺りの事務的な手間を掛けさせちゃったし――なにより、本来なら祭りの期間中は依頼受ける予定無かったんちゃう？

「お見通しだったかぁ……此処まで来てくれたのに固辞するのも逆に失礼ですね、ありがたく受け取っておきます」

目的地である帝都の冒険者組合。

受付と仕事を張り出す依頼掲示板（クエストボード）、酒場が一体化した一階部分、二階が高ランクの宿泊施設、最上階が組合役員や支部長の詰める部屋となっているらしい。

大都市の支部は大体何処も同じ構造みたいなので、組合の方で支部建設の規格化がされてるのかもね。

現在俺が居るのは一階の酒場兼食堂。祭りも終わりが近づいた事で、ぼちぼち明日か

らの食い扶持稼ぎを始めようという冒険者達で賑わう空間の一角だ。
手近な卓を囲んで座った俺とイケメン＋三人の少女――シンヤ君の一党は、あの夜に依頼したシアとリアの護衛をきっちり完遂してくれた事に対しての礼を含めたやり取りを行っていた。
と言っても、依頼料自体は全額前払いだった。なので、今回は組合を通さないで急遽捻じ込んだ『儀式中の聖女護衛』という仕事を後から正式な依頼として処理したせいで起こった一手間に対する詫びと礼を兼ねた品を手渡しに来た感じです、ハイ。
ミラ婆ちゃんの処で茶を御馳走になったので、卓上の俺の前には特に何も置かれていないが、まだ午前様という事でシンヤ君達は遅めの朝食の最中だったらしい。いや変なタイミングで来ちゃって悪かったね、気にせず食事を続けてくれ。
「い、いえ、滅相もナイデス……」
女性陣三人を代表する様な形で、槍を背負って軽装の金属鎧を着た娘がガッチガチに強張った声で返事する。
俺がこの席で座る彼らを見つけて相席してからというもの、彼女達の朝食は一切量が減って無かった。
最年少らしき魔導士の女の子は死んだ魚みたいな生気の無い眼を伏せ、ひたすら卓の一点を見つめて絶対に顔を上げようとしないし、シスターの娘は最初から笑顔だったの

だが、声を掛けた俺の顔を見てからもずーっとそのままで微動だにしていない。これ、気絶してない？

うーむ、嫌われてる……と言うより怖がられてるなぁ。まぁ、この娘達からすれば、俺は仲間を脅し付ける形でパーティーから追い出した男だから仕方ないっちゃ仕方ないんだが……。

叩き出したメンヘラ擬きな二人は、勝手な勘違いでシンヤ君とシアの仲を警戒してウチの聖女様に嫌なちょっかいだそうとしてたから残当。俺としても反省も後悔も無いし、同じ状況になったら同じことやるだろう。

ただまぁ、鎧ちゃん完全起動で全開で威嚇してのお話をする上で、彼女達を巻き添えにしたのはちょっと申し訳なかった。

とはいえ、あの二人に引き摺られる形でこの娘達も大分ギスギスしてたし、そのせいでシンヤ君の胃とメンタルをゴリゴリ削ってたので結果オーライだとは思ってるのだが。

実際、足湯のときにシンヤ君本人から聞いた話では、今は彼を巡って鞘当てはしつつも、仲間としては上手くやってるみたいだしね。お節介も兼ねた地雷撤去作業は正解だった訳ですよ。

でも、それはあくまで俺の視点での話だ。

怯えられる事をした自覚はあるので、刺激すると致死性の呪を撒き散らして爆発する不発弾見る様な目付きで見られるのは甘受すべきだろう。心に刺さるけど（白目

「おぉ、日持ちする甘味の詰め合わせですか。僕も甘いものは嫌いじゃないですし、遠地の依頼のときに持っていくと良さそうですね」

一方のシンヤ君は仲間の目が揃って死んでるのにも関わらず、早速渡した品を開封して嬉しそうに笑っている。

俺が危険物扱いでビビられてるだけで、それ以外は特に何も無いし、実害が発生する事も無い。そう判断してスルーしてるみたいだ。

出会った頃ならこの空気をどうにかしようと右往左往してセルフで神経削ってただろうに、色んな意味で逞しくなってるなぁ……彼の置かれた環境的に、ある程度図太くならんとやってられんかったのかもしれんが。

何にせよ、この世界で生きていく以上、元居た世界の優良学生然としたメンタルから敏腕の冒険者のソレへと進化したのは良い事なんだろう。

ジャムの瓶を手に取って「次の遠征はパン多めだな」とか呟いていたシンヤ君であるが、開封した箱の裏に折り畳んだ紙が貼りつけられてるのに気が付いて、不思議そうにそれを手に取った。

「……メッセージカード？」

そんな洒落たモンじゃ無いよ。おまけだおまけ。
具体的にはファーネスのトコの工房に対する紹介状だ。
といっても、彼らは既に冒険者として大成してる一党なのでマイン氏族の工房には既に縁が出来てるだろう。シンヤ君の剣もあそこの工房の物っぽいし。
次に行ったときだけだが、それを見せればおまけや値引きなど、色々とサービスしてくれるやつね。ファーネスには既に話を通してある。
「本当ですか？　いやー助かります。闘技大会でちょっと剣が傷んじゃったので、明日にも向かおうとしてたんですよ」
おうおう、喜んでもらえたならおまけを付けた甲斐もあったもんですよ。
軽い調子で笑う俺達であるが、卓を囲む三人娘の方が凄い勢いで喰い付いて来た。
「……いや、ちょっと待って、マイン工房の紹介状!?」
槍使いの子が手を伸ばしてシンヤ君の掌からカードを取り上げ、シスターと魔女っ子と一緒になって覗き込む。
「……うわ、本当！　最低でも一割引き……品によっては二割?」
「下の項目も見るべき。買った品のメンテナンスも一回は無料と書いてある」
「こ、これならばシンヤ様以外の装備もあの工房製の物に一新出来るのではないでしょうか……!?」

彼女達は先程までの蝋人形みたいな硬直っぷりから一転、眼を輝かせてちょっと興奮した様子で今度の買い物の予定を口々に話し合い始めた。

現金なもの、とは言わない。戦いに関わる職をやってる以上、装備の質は生存率に直結するからね。

しかし、聞いてる限りだとファーネスは大盤振る舞いしてくれたみたいだな。基本、武装は全部鎧ちゃん一つで完結する俺にはいまいち分からんが。

「あの工房の武具って言ったら、低くて金貨三桁近くからですよ！　っていうかなんで紹介状書いてもらった当人がその内容を知らないんですか!?」

上がったテンションのせいか、槍の娘が物怖じせずに普通に突っ込んでくる。俺としてはさっきの爆発物扱いよりはこっちの方が気が楽なのでむしろ有難い。

紹介状の内容については知らんから、としか言いようが無いけどね。この間お願いしにいったときに、ファーネスが渡してくれたモンをそのまま箱の裏に張り付けただけやぞ。

「こ、こんなとんでもない物用意しておいて、全く自覚が無いこの人……!?」

「どう考えてもお礼の品が依頼料より高額。金貨の詰まった大袋で殴られるのと大差無い」

「……聖女様の守護者たる御方です。私達常人とは一線を画する意識をお持ちなので

しょう、多分、きっと、おそらく」

流れる様に口々にディスられた。仲良いな君ら。ハーレムメンバーの関係が良好そうで良かったじゃないのシンヤ君。

揶揄う様に言ってやると、目の前のイケメン君は照れ笑いと苦笑が半々の表情を浮かべて指先で頬を掻く。

ふむ、否定はしない、か。

彼に入れ込んでる女性は、互いの面識がある者からそうでない者まで結構な数がいると思われるが――どうやら今の仲間達についてはやはり特別らしい。少なくとも、ハーレム要員扱いで弄っても否定しない程度には。

こりゃ数年後とかにはマジで所帯持ちになってるかもね。帝国の法的に、シンヤ君の冒険者としての実績や収入なら普通に重婚の審査通るだろうし。

縦ロールちゃんとマメイさんの件もそうだが、式を挙げるなら是非とも招待して欲しい処だ。友人や親しい奴らの慶事なんてもんは何回あったって良い。

そのときは心の底から笑顔で爆発(お幸せに)しろと言ってやろう、うん。

祭りが終わっても、まだまだ楽しそうな祝い事が尽きそうにない事に笑みを堪えて席を立つ。

気分的にはもうちょっと話したかったが……まだまだ回る処も多い。そろそろお暇

させてもらうとしよう。

それじゃ、また縁があったら、と告げて俺が立ち上がると、シンヤ君も腰を上げて手を差し出してくる。

「近い内に聖都の方にも必ず寄ります。先輩もお元気で」

あいよ、そっちも元気でね。

俺達が握手を交わすと、三人娘――ハーレムというより、嫁さん候補と呼んでも良いのだろうお嬢さん達が、慌てた様子で同じく立ち上がった。

「あ、あの！　紹介状、ありがとうございました！　その……態度とか、以前の事とか……色々とごめんなさい！」

代表して槍使いの娘が礼を謝罪を述べると、三人揃って深々と頭を下げられる。

多分、露骨にビビった態度についてあんまり良くない事だとは思っていたのだろう。今回のやり取りが良い意味で切欠になった感じか。

うん。ちと上から目線になってしまうが……良い娘達やね。大事にしろよー？　後輩。

ニヤリと笑ってイケメンの肩を一つ叩いてやると、俺はヒラヒラと手を振ってその場を後にした。

冒険者組合を出た後は、更に南区の奥――殆ど外壁沿いに近い場所にある大きな屋敷が目的地だ。
元は最高位の冒険者が住居として建てたらしいそこは、俺達が使わせてもらってる屋敷と比べて、剛健な作りながらも中々に立派な佇まいである。
現在、《魔王》を筆頭に魔族領からやってきた面々が逗留しているのがここだった。
あの鳥は曲がりなりにも国主に相当する賓客なので、普通は王城で持て成すと思うんだが……筆頭補佐の方が「万が一破壊しても、一番問題が少なそうな場所と建物でお願いします」と切実な要望を入れたらしい。《魔王》自身も城で寝泊まりするより城下の方が良い、という意見なんでこんな感じに落ち着いたそうだ。
……で、用のある魔族の面々なんだが。
「ちくしょおおおおっ、離せぇぇぇっ！　そろそろ帰る日も近いんだぞオイ！　あの名画を描いた天使達を探す位はイイダルォ!?」
「うるせぇこの糞ダボ鳥がぁっ!?　あの夜から毎日毎日アホみてぇに騒ぎやがって、このまま帰る日まで地べたに埋めといてやろうか……！」
「《狂槍》さん、鋼縄（ワイヤ）の追加持ってきました！」

「よし、轡代わりに顔から巻くぞ、黙らせる」
「ちょっ、やめっ、フゴゴゴッ!?」
　こ　れ　は　酷　い　。
　縄だの鋼縄（ワイヤー）だの鎖だのでグルッグルに巻かれて拘束され、蓑虫みたいになってる魔族の頭領と、その上から更に拘束を追加しながら自分とこの頭領を踏みつけにしてる部下。
　区画の奥まった場所で、あまり人通りが無い場所とはいえ、屋敷の門前でコレやぞ。
　ちょっと頭痛を覚えた俺が無言でその光景を眺めていると、陸に打ち上げられた魚みたいにビチビチと地面で跳ねていた蓑虫魔王がこっちに気付いた。
「――！　ンガググッ……っと、おぉ、丁度良い処にきたな猟犬！」
　当たり前の様に鋼縄（ワイヤー）を噛み千切るな。意味分からんわ。
　鳶色の瞳に喜色を浮かべた《魔王》は、そのまま身体にも力を入れて拘束を破壊しようとしたが、《不死身》の「ソレ外したら即行で補佐に連絡しますよ」という言葉に一瞬で真顔となり、スンッとした表情で大人しくなった。
「お前か。南区の端（こんな処）まで何しに来やがった」
「おはようございます、猟犬さん。リリィちゃんに用事ですか？　さっき出掛ける用意してたんでそろそろ出て来ると思いますよ？」

おっす、おはようさん。
魔族領幹部二名に向けて軽く手を挙げて挨拶を返すと、なんだか取り込んでる様なのでさっさと要件を告げる。
あの一件では世話になりました。胸糞悪い連中の胸糞悪い技術が他所に流れなかったのはおたくらが協力してくれた御蔭だよ。ありがとう。
この面子が好む嗜好品とか分からんので、取り敢えず結構良いお値段のする蒸留酒を買って来た。晩酌のメインにでもしておくれやす。
荷物から布で保護された酒瓶が二本入ったケースを取り出すと、そのまま《不死身》に渡しておく。
「ご丁寧にありがとうございます。お、帝国産の上物……《赤剣》さんが飛びついて来そうだなぁ、帰る前に飲み切った方がいいですね」
「態々こんなモン持ってくるとはな。相変わらず妙な処で律儀な野郎だ」
ケースを快く受け取ってくれる《不死身》と、それを見て呆れた様に鼻を鳴らす《狂槍》。蓑虫状態でグリグリと踏み躙られてるその上司。
なんとも珍妙というか混沌とした光景だが、《災禍》の連中と関わると大体こんな感じなのでスルー安定である。
結局は無難な物を選んだが、何気に魔族領の連中への礼を選ぶのって、一番難航した

んだよね。

《災禍の席》複数名を酒二本で使ったと考えてしまうと、安上がりにも程がある。喜んでくれると良いんだが……さっきも言った通り彼らが個々に好む品がよー分からん。足元の変態不死鳥の好みは言う迄も無いが聞いてやる気は無いので除外で。

「おい、猟犬。テメェは細かい事を気にし過ぎだ。こっちはやる気があったからやったんだ、気に入らねぇ話なら荷馬車一杯の金貨を積まれようがそもそも引き受けてねぇんだよ」

俺のちょっとした不安を察したのか、踏みつけている《魔王》に体重を掛けながら、《狂槍》がニヤリと――それこそ子供が見たら泣き出しそうな凶悪な笑みを浮かべた。

「だが、そうだな……酒も悪くねぇが、今度魔族領に来たら付き合え。テメェとは一度、一対一で戦ってみてぇ」

オッフ……そう来たか……。

魔族の中でも、更に血の気の多い部類の男だ。それが《魔王》のお守りに加えて闘技大会で腕利きが競い合うのを連日見る事になって、相当に溜まるものがあったんだろう。

聞いた話では、頼んだ仕事はやっぱり単純な戦力としては過剰にも程があったらしいので、心ゆくまで戦って満足、なんていう事にはなる筈もなかった。

こっちは数日前に本気の戦闘で、なんとか勝ちをもぎ取ったばかりだ。正直言えば人外級との戦いなんて、たとえ試合形式であれ、当分無くて良い……というか一生無くて良い位なんだけど……。

……まぁ、うん。世話になったのは確かだし、魔族領に行く事があれば考慮します。

「あぁ、それでいい。元からテメェが喜んで首を縦に振るとも思っちゃいねーよ」

「あ、おい槍ちんズルいぞ！　おい猟犬！　俺も！　俺も遊びたい！　今度来たら戦ろうぜ！」

「誰が槍ちんだ、ブチ殺すぞ糞鳥」

「痛デデデッ、ちょっ、眉間に石突はやめて!?」

思いの外、話題があっさり終わった事にホッとしつつ、槍ちん（笑）が自領のトップの頭をゴリゴリと抉っているのを見やる。

ゆーても、当面は魔族領に行く予定なんてないし、今の約束の御蔭で行く気も無くなったけどな！

《災禍》の面々の他にも魔族の知り合いは大勢いるし、顔は見たいんだが……最低でも一年か二年は挟んで、口約束が有耶無耶になってからにしたい。

「僕はこのお酒で十分ですけどねー、聖女の護衛って言っても一晩平和なものだったし、やった事なんて二人の儀式を間近で見てただけだし」

蒸留酒の入ったケースを軽く叩いてのんびりと笑う《不死身》＝サンの穏やかさよ……《亡霊》と同じ、非戦闘気質の魔族なんていうレア系なだけはある。

何にせよ、これで午前中の予定は消化出来た。いやー良かった良かった。

「俺は良くないぞ猟犬！　せめてあの絵を描いてくれた子を紹介してくださいお願いします！」

腕を組んでうんうんと頷いていると、再びビチビチと縛られた身をくねらせて跳ねだした《魔王》が器用に俺の足元に飛び跳ねて懇願して来る。普通に動きがキモい。

どの辺が『せめて』やねん。そもそも、その要望の元となる絵自体がおたくへの今回の報酬でしょうが。

報酬の内容が不満だっつーなら回収させてもらうぞ……折角頑張って描いたのに子供達はがっかりするだろうなぁ！

「ヤメロォッ!?　人の心とか無いのかキサムァ!?」

悲鳴を上げる《魔王》様を程よく弄りつつ、門前で少しお喋りに興じていると、先程聞いた通りに屋敷から旅行用の肩掛け鞄を装備したリリィが出てきた。

彼女も俺に気付いたのか、軽快な足取りで小走りにこちらへと駆けて来る。

「おはようございます、兄様。《災禍》の皆様に何か御用だったのでしょうか？」

やぁ、おはようリリィ君。どっかに出掛けるって聞いたけど、道に迷わない様に気を

付けてな？

「問題ありません。始めのうちは不覚を取りましたが、リリィは帝都での滞在中に成長したのです。お祭りが始まってからは、なんと一度も迷子になっていません」

最初はやっぱりなったんだ、迷子。

フンス、と両手を腰にあてて胸を反らすちびっ子であるが、何気に台詞の中で迷子になっていたと自白している。

まぁ、今は大丈夫だというのなら俺がとやかく言う事ではないか。最終的にはそういった話も《虎嵐》とシグジリアに報告されるんだろうし。

どうやらリリィは滞在中に出来た友達の処に遊びに行くらしい。昨日も一緒にお祭りを巡ったのだとか。

「今日こそは俺が姫の護衛として付いて行こうと思ったのによぉ。ひょっとしたら探してる天使にも会えるかもしれねぇし……」

不満そうにブー垂れる足元の蓑虫。つーか、それが理由で縛られてんのかよ。残当過ぎて草も生えんわ。

「立場が逆だろうが。このガキは名目上は従者として帝都に来てるんだぞ」

「そうでなくとも、小さい子も大勢いる場所に頭領（ボス）を同行させる訳ないじゃないですか。諦めて留守番してて下さいよ」

「リリィは義母様から《魔王》様とお友達を会わせない様に、と力強く言いつけられています。なので、同行はお断りさせて頂きたいです」

「……グフっ!?」

《魔王》が白目を剥いて吐血した。

部下二人に辛辣なツッコミを入れられ、推してる幼女からばっさりと望みを断ち切られ、シクシクと顔面を地に押し付けて泣き出す魔族領筆頭。その姿は絶望的なまでに威厳と縁遠い。泣きたいのは今も魔族領で政務に励んでる筆頭補佐だと思うぞ。

まぁ、残念不死鳥さんの事はさておき、リリィも順調に外界に慣れてきているようで良かった。

特に同年代かそれに近い――人間とエルフなんで実年齢は差があるだろうが、種族年齢的な話だ――友達が出来たというのは喜ばしい。送り出したシグジリア達は心配も多いだろうが、今回の帝都での滞在はリリィにとって良い経験になった事だろう。

「兄様、兄様。リリィは従者としては勿論の事、お姉ちゃんとなる日に備え、修練を怠っていないのです。今日はその一環として、小さな子達に絵本を読み聞かせる為に本を持参して向かいます」

余程楽しみなんだろうね。リリィは何時もと比べればちょっとだけ早口になって、肩掛け鞄の肩紐を握って気合を入れている。

「あちらの引率であるシスターさんが孤児院で読む新しい絵本を探していると仰っていたので、リリィの見つけた良い本をお勧めする予定なのです、これは良い物ですから」
おうおう、それを子供達にも読んであげる感じか。確かにお姉ちゃんムーヴを磨くのに余念が無いみた……い……。
身振り手振りでは飽き足らず、リリィは心持ちドヤ顔になって鞄から取り出した本を掲げて見せ、それを見た俺は言葉を尻すぼみにさせて絶句した。
初見は王城で、それ以降は何度か城下の書店なんかで見かけたその絵本。タイトルは言わずもがな。
そう――『金色の少女と黒い騎士』である。
……嫌アアアアアアッ!?
ば、馬鹿な、何故この本をリリィが持っている!?
いや、書店で売ってるから可能性はゼロじゃないにせよ、近年出たばかりの絵本としてはじわ売れしてる、程度の筈じゃなかったの!?
帝都中の書店で扱ってる店舗の方がずっと少ないだろうに、どんな引きだよ!?
「へぇ、こんな本があるのかぁ……聖女とその騎士様の、有名税の一環、ってやつですかねー」
「クカカッ、ま、この手のガキ向けの本にしやすい題材ではあるんだろうよ」

おいコラそこの二人ぃ！　他人事だと思って何わろてんねん！

「御安心下さい兄様。オフィリとの約束もある事ですし、リリィは愛し子様と兄様の物語を皆にしっかりと読み聞かせてみせます。従者としてもお姉ちゃんとしてもばっちりです、一石二鳥なのです」

グフッ!?（吐血

一切の邪念の無い、敬意を元にした使命感を込めて宣言された言葉に、俺は先程の《魔王》よろしく、血を吐いて蹲りそうになる。

てか今、オフィリって……まさかリリィのお友達って、シスター・ブランの処の子供達か!?　あの子達相手に朗読すんの!?　その絵本を!?

下手をしなくともシスターにもミラ婆ちゃんにも絵本の事が知られるじゃねぇかぁぁぁっ!?

眼をキラキラと輝かせ、フンスフンス気合を入れているちびっ子相手に、まさか止めろと言ったり、ましてや絵本を取り上げるなんて真似が出来る筈も無い。

どうしてこうなった……！　女神様、俺なんか悪いことしましたっけ……!!（切実

「……あんまりだぁぁぁっ！」

――ちくしょう、あんまりだぁ……！

タイミングは奇しくも同時、天に向かって《魔王》と俺が上げた嘆きの声は、内容も大体同じだった。

あぁ……なんか疲れた……。

午前中の予定の最後に思わぬメンタルダメージを受け、昼になって若干重い足取りで向かったのは正反対の方向にある北区。

以前、隊長ちゃんと入ったは良いがカップルフェアだのなんだので、とんだ羞恥プレイを強いられた喫茶店だ。正直、再度店に入る機会がこんなに早く訪れるとは思ってなかった。

扉を押し開けると、客の来店を告げる軽やかなベルの音が鳴る。

「いらっしゃいませー」

ウェイトレスさんが挨拶してくるが、幸いと言って良いのか、以前に訪れたときの娘さんとは別人だった。

空いてる席に案内しようとしてくるのをやんわりと断り、待ち合わせの相手を探す。

首を巡らせて落ち着いた内装のお洒落な店内を見廻していると、俺が見つけるより先に声が掛かった。
「おーい、こっちだこっち」
テーブル席から身を乗り出して軽く手を振るその姿を見つけ、同じく軽く手を挙げて応じながら歩み寄る。
向かい合って座ると、俺の顔を見て小首を傾げて来た。
「……なんか疲れてないか？　またトラブルにでも巻き込まれたのかよ？」
あー……そういうのじゃないから大丈夫だ。ただ、ちょっと予想外な事が判明して気疲れしただけだから。
「そっか、まぁお前がそう言うのならいいけどさ」
俺の言葉に本日の午後からの待ち合わせ相手――シアは、軽く肩を竦めて微笑んだ。
互いにちょっとした軽食と季節のフルーツジュースを頼むと、俺は改めて目の前に座るシアをマジマジと見つめる。
「むぅ……フェアはやっぱり終わってるか……」
メニュー表を端から端まで見直して小さく唸る聖女様は、普段の白を基調とした僧服ではなく、ちょっとした変装――というか、普通の町娘みたいな服装をしていた。

以前と違って髪の色を魔法で変えたりはしていないが、軽く編み込んでサイドから垂らし、その頭の上には小さ目のベレー帽がちょこんと乗っている。
ベージュ色のシャツに大きめのストールを羽織り、濃緑色の丈の長いキュロットスカートにショートブーツと、後はこれで伊達眼鏡でも掛けてたら、元居た世界でも文学少女で通りそうな感じの恰好だった。
「……ふふん、お前の考えてる事は分かるとも――当然、用意してるんだなこれが」
俺の視線に気付いたシアが、ドヤ顔で取り出したのはすこし野暮ったいデザインの丸眼鏡だ。前に聖都で出掛けたときにも見た気がする。
スチャっとばかりに装着して完成したのは、とんでもなく容姿の整った文学美少女。本を片手にティーラウンジにでも座れば、それだけで雑誌の一ページにドカンと載りそうな完成度である。
いやー凄いな、めちゃくちゃ似合うやん。なんだって急にそんなお洒落な服装を？
「興味が全く無かった、って訳じゃないんだぞ？　ただ、如何にもな女の子っぽい服装は、オレ的にちょっと敷居が高くてな……まぁ、この恰好ならドレスに比べたら全然許容範囲だし、この際だから買い揃えてみた」
なるほど、スカートもキュロットだし、ぶっちゃけスラックスとかに履き替えれば中性的ではあるが男でもありそうな服装だしね。

この間のドレス姿も滅茶苦茶似合っていて眼福だったのだが、やはり本人からすると結構な恥ずかしさはあったらしい。会場中から視線が集まるのもあって、シアもリアもやっぱりドレスは苦手、という結論になったみたいだった。

「とは言っても、帝都の服飾店の場所もコーディネートの知識も無いからな。午前中はアンナに付き合って貰って、店選びと服選び、両方手伝ってもらった」

言い出しっぺというか、礼代わりにどうかと言って来たのは副官ちゃんの方からしい。

あの夜、シアとリアが儀式魔法を用いたサポート要員として動いたのは、俺が頼んだというのもあるだろうが……何より副官ちゃんの救出、という目的があればこそだ。

彼女的にも、それは帝国としてだけでなく、彼女個人としての『借り』という認識になるんだろう。後は、舞踏会で二人を巻き込んでドレスを着せた詫びも兼ねてると見た。

何にせよ、今のシアも普段とは雰囲気が違って非常に眼福です……やはり良い仕事しますねぇアンナ先生は！

「拝むな拝むな――けど、お、お前がそう言ってくれるなら良かったよ。自分でも割と似合ってるとは思ったけど、やっぱ他人の意見も気になるからな」

編み込んだおさげを指先で弄び、照れ笑い混じりで友人が悪戯っぽく笑う。

注文していた品が届いた。
品物を受け取ると、細工の入ったグラスに満たされたジュースをマドラーでかき混ぜながら、シアは伊達眼鏡越しに上目遣いで見上げて来る。
「ま、オレの方はそんな感じだ。お前はどうだったんだよ？」
俺は昨日言ってた通り、あの一件で力を貸してもらった連中に御礼行脚だったぞ――まぁ、今日だけで全員は無理だったんで、後半は明日に持ち越しだけど。
同じくフルーツジュースで糖分を補給すると、事前に教えておいた予定とそう変わらなかったと言っておく……まぁ、最後にちょっと予想外のダメージを予想外の相手から喰らったけど（白目
立場的には俺達の方が力を貸したに近いとはいえ、帝国側――隊長ちゃん達《刃衆（エッジス）》にも改めて挨拶くらいはしておきたい処だ。
闘技大会に参加した魔族の選手達も助力してくれたみたいなんで、そっちにも礼はしておきたいし、当然クイン――《陽影》にも帰る前に挨拶と御礼は必須だ。ついでに、二年前は破るの確定と思ってたから出来なかった再会の約束も。
「……何気にそういう処、マメだよなぁお前。あらためて聞いてると馬鹿みたいに交友関係も広いし」
なんかシンヤ君にも同じ事言われたよ、別に普通だと思うんだが。

ストローでジュースをちゅーっと吸引する聖女様の視線には、感心と呆れの両方が滲んでいたが……それこそ今更ってやつだ。

俺一人でなんとか出来れば良かったんだけど、今回は状況や相手の組織形態的に絶対手が回らんかったからなぁ……個人的なお願いで鉄火場に誘うってんだから、そら義理と筋は通しますよ。

それに交友関係うんぬんとは言うけど、お前だって大差ないやろ。俺の今の繋がりって、元を辿ればお前にくっついて大陸中を廻った結果だぞ。

そうだ、俺の顔が広いというのならば。

俺に力を貸してくれる奴らがいるというのならば。

それを齎してくれたのは、目の前にいる金色の聖女様だ。

俺の自慢の友人が、何度も何度も『繰り返して』、その度に色んなモンを喪って――それでも、と足掻いて積み重ねた記憶と知識の欠片あってこそなのだ。

これを自分だけの力だと自惚れる程、俺は頭ハッピーセットじゃない。菲才の身なりにやれることは精一杯やった、程度の自負はあるけどね。

言い終えると同時、何故か急に突っ伏したシアが自身の額でテーブルに頭突きを始める。

「お前っ……本当にさぁっ……！　マジでいい加減にしろよ、そういう処だよ……！」

ゴンッ、ゴンッとリズミカルに脳天でテーブルを叩く聖女様のお口から、何かを堪える声色で絞り出す様な声が漏れる。
俺なりに最大限に友人へのリスペクトを語ったつもりが、何故か怒られてしまった。解せぬ（白目
ややあって、シアは顔を上げた。
頭突きの衝撃でズレた伊達眼鏡とベレー帽を直し、ちょっと赤くなった額も回復魔法で一撫でして治す。少し痛かったんだろうか？　空色の瞳はなんだか潤んでいる様にも見えた。
まるで身体に溜まった熱を吐き出す様に、深く吸った息を吐き出して――一息つくと何時ものシアだ。
「ハァ……まぁ、なんだ。色々とゴタゴタもあったけど――祭り、楽しかったよな」
うん、そうだな。そこは断言できる、間違い無い。
友人の言葉に、俺は迷いなく頷く。
思い出、というには余りに物騒な事も起きた――忘れ難い、戦いの記憶も出来た。
起きた出来事の陰で、苦しんだ人、何かを喪った人も、きっと多くいるのだろう。
それでも。
それでも、俺達には未来（つぎ）がある。

祭りの開催時に陛下が言った言葉じゃないが、今回の《大豊穣祭》が完全な成功とは言い辛くとも、後年に開かれる祭りをより良く、より楽しく出来るであろう、『次』がある。

来年も、再来年も、そのまた次も、更にその先も、何年だって。

確かに繋いで行ける、それが当たり前になった時代が来たと、皆が実感できたお祭りだったんだと思う。

――だから。

次の開催地は教国か、帝国のままなのか、そもそも何年後にやるのか、現在（いま）の俺達には分からないけど。

また皆で集まって、こんな風にお祭り騒ぎが出来たら良いよな。

「……うん、そうだな。また何時か、きっと」

俺の独白にも近い言葉に、シアも目を瞑り、淡く微笑む。

明日からも続いてゆく日々に、やがて来るだろう未来の祭りに、思いを馳せて。

俺達はグラスを掲げ、小さく乾杯したのだった。

幕間・閑話
霊峰の日々（前編）

白狼は上機嫌であった。

以前やって来た三匹のヒトと、腐臭を放つ忌まわしき者共。

あれ以降は霊峰に妙な者達がやってくる事もなく、普段通りの日々が続いているのも理由の一つだが、僅かだが”母”から感じる匂い（けはい）が優し気というか、穏やかなものになったのが最も大きな要因だろう。

元より、激昂や憤怒といった意を抱く事はほぼ無いといってよい”母”であったが、あの三匹のヒト（なんかヒトっぽい岩の精霊らしき者も混ざっていたが）との交流以降、雲や雨、風や大地に近い――言ってしまえば肉の身を持たぬ精霊の如き気配であったその匂いが、少しだけ尋常の生物に近いものへと変わった。

以前は『穏やか』というよりは『平坦』とでもいうべき気配だった”母”に訪れた微細な変化。

それが良い事か悪い事なのかは分からないが、白狼にとっては好ましいものであるのは確かだった。

何せ、最近は撫でてくれる事が多くなった。これはとてもとても重要な事である。

先日、狩りで仕留めた獲物を届けた際にも”母”は以前よりずっと長い時間、己の背をその掌で梳いてくれた。

頻度高く、或いは長い時間、”母”の住処に滞在すると他の縄張り持ち(主級)がうるさいのだが……知った事では無い。

元より、一番喧しく噛みついて来る奴は己と一番反りの合わぬ奴でもある。やっかみ混じりの嫌味など記憶に留めておくにも値しない。

獲物は届けたばかりだ。狩りをするにしても”母”に届ける必要性は、今の処薄い。

――が、それは食糧(にく)に限ればの話だ。

冬が近づいてきたせいか、山の頂付近には既に雪も降り始めた。

己が”母”の住処で暮らしていた頃、冬場に使っていた毛皮の敷物はいい加減草臥れているだろう。新しい敷物になりそうな毛皮を持つ獲物を狩れば喜んでくれるかもしれない。

彼女にとって峻厳たる霊峰の厳しい寒さも、小春日和の平原の暖かさも、身体に齎す影響という点では大差ないが……ヒトに近しい形をしている以上、こういった物は必要

な筈だ。
それとなく”母”のもとに向かう口実――人間の言葉で言う理論武装と呼ばれるものを胸中で展開し、今日も今日とて白狼は狩りに勤しんでいた訳だが。

――お師匠ぉぉぉぉぉぉぉ!!

以前にも何度か見た事のある、真っ黒な甲殻のようなものを全身に纏ったヒトが、麓から凄まじい速度で山の頂上へと爆走してくるのを遠目に見つけ、その日の狩りは中断する事となった。
小さく漏らした唸り声は、おそらく人でいう処の溜息の類である。
物騒な魔力を撒き散らして一直線に山を登って来た真っ黒なヒトは、これで三回目の来訪という事もあって霊峰の上位に位置する存在にはほぼ周知されている。
というか、ちょっと前にも”母”の住処に滞在していた。季節が一巡りすらしていないのだから、忘れる筈もない。
本来なら迎撃待ったなしなのだが、今回も”母”の客分となるであろう事は容易に想像できる。
なので、白狼を始めとした霊峰内に縄張りを持つ主級は、揃って黒くて喧しいヒトの

雄をスルーした。
あの黒いのが来ると、”母”はアレに掛かり切りになる。住処を訪れても撫でてくれる時間だってごっそりと減る。
今、狩りの成果を見せにいっても、何時もの様な楽しい時間とはならないだろう。
白狼は巣に戻り、その日は不貞寝を決め込んだ。

この間訪れたときのように、日を何度か跨ぐ程度には”母”の住処に滞在すると思われた黒いのだが、どうやら今回は急ぎの用があったらしい。
翌日の早朝には再び凄まじい速度で爆走し、山を駆け下りていった。喧しい上に慌ただしい奴である。
とはいえ、帰ったのなら不貞寝も終わりだ。早速狩りに出て”母”に良い獲物を届けるとしよう。
求めるのは肉では無く毛皮――即ち、敷物に適した大きさと毛並みの獲物を、極力傷を付けずに仕留める必要がある。今日一日かけてじっくりと吟味し、狩ることにしよう。

仕留めた獲物は巣の近くにある洞穴に置けば、よく冷え込む場所なので夏場であろうとも早々には腐らない。今の時期なら猶更だ。臓だけ喰らい、明日にも”母”に届ければ良い。

そんな算段を立て、白狼は意気揚々と狩りに出た。

そして、翌日。

中々な大物を仕留めることが叶った白狼は、早速”母”のもとに訪れんと準備を整える。

狩ったのは、最初から目星を付けていた《装甲熊（シェルム・ベア）》と呼ばれる魔獣――が、霊峰の環境に適応した個体だ。

自身よりも大きな相手なので、狩っても中々喰いきれない。その上、他の獲物よりも少々肉の臭みが強いので、何時もなら積極的に狩る相手ではないのだが……良い毛皮を持っていたのと、おまけに自分の縄張りの近くで少々調子に乗って暴れ廻っている奴だったので、実に丁度良かった。

喰った臓は、やはり少しばかり臭いがきつかったが……食いごたえはあったのでトントンといった処だろう。何より、主目的は其処では無い。

どの道、これ以上無軌道に暴れる様なら狩る予定ではあったのだ。負けて骸を晒した以上、これからは”母”の住処を居心地良くする敷物となれ。

この熊は図体があるので、咥えて持って行ってはあちこちを引き摺って毛皮が傷む。
なので、白狼は霊峰ではそこら中に生息している小さな精霊達に呼びかけ、魔力と引き換えに背に負った獲物と己を頑丈な蔓で結んで固定して貰った。
背にかかるズシリとした重みもなんのその、足取りも軽く、”母”の住処へと向かう。
頂上に近づく気配を早々に察知していたのだろう。”母”の住処――屋敷まで近づくと、既に彼女は外に出て白狼を待っていた。
「――おはよう。この様な朝早くにどうしました？」
美しい紺碧の髪に、不思議な光彩を放つ、吸い込まれそうな程に輝く龍眼。
獣であるが故に美醜の感覚が希薄である筈の白狼をして、幾度見ても見事だと思える、何時もの”母”の姿であった。
白狼が鼻先を近付けると、彼女は柔らかな指先で頬から首元にかけてを梳いてくれる。
優しく、穏やかな匂いに包まれ、ついつい小さな幼子の様に甘える音が喉を鳴らしてしまった。
このまま動かず、撫でられ続ける誘惑に駆られるが……己は”母”へと冬に入用であろう新たな毛皮を届けに来たのだ、断腸の思いで身を離し、一声吠える。
「うん？　随分と大きいのを獲って来ましたね……食肉は前の分がまだまだありますが

……ふむ……」

”母”は白狼が背に負った大きな獲物に眼を向けると小首を傾げ……獣であるにも関わらず、気持ちドヤ顔に見えなくも無い白狼の顔と見比べ、ややあって納得した様に頷いた。

「……そろそろ冬も近い。察するに毛皮の贈り物ですか。屋敷に住んでいる私が忘れがちだというのに、良く気が付く仔ですね」

まるで家事を手伝った我が子を褒める様に、”母”が掌全体を使って白狼の顔廻りをわしわしと撫でる。

再び白狼の喉から子犬の如き高い鳴き声――甘える様なソレが漏れる。霊峰にて縄張りを持つ霊獣の一角として、獣なりの自負に近い意識を有する彼であるが、”母”の掌の感触にはどうにも抗い難い。

幼き頃、まだ自身が”母”の腕にすっぽりと収まる程度の大きさだった当時の記憶が、今でも色鮮やかに想起されてしまうのだ。現在に至るまで抵抗は極めて困難であり、成功した事もなかった。

喉を鳴らし、されるがままの彼に”母”は穏やかに微笑みかける。

「ありがとう、使わせてもらいます――剥ぎ取りと干しだけ済ませてしまいましょう。少しだけ待ってくれますか？」

勿論、白狼に否などある訳もなかった。

”母”がその繊手を一閃させると、持って来た獲物の肉と毛皮が綺麗に断たれる。脂一つ付かずに切り離された毛皮を近くの樹の枝にかけ、枝から落ちぬ様に軽く紐で結わえると、それで一旦は終わりらしい。

余った肉をどうしようかと”母”は少し悩んでいたようだったが、不要ならばそちらは己が持ち帰っても良い。

というか、量はあるが少々臭みの強い肉など彼女が口にする必要は無い。白狼が喰ってしまうか、最悪、彼の縄張りに置いておけば、腹を空かせた他の獣が小一時間と掛けずに骨だけに変えてくれるだろう。

服の袖を咥え、眼でその様に訴えかけたのが通じたのか、”母”は頷いた。

「では、そちらは木陰に移しておくとして……今日は、少々山中を巡らなくてはなりません。貴方の他にも、霊峰内で各所の守護を行っている仔達の領域に足を伸ばす必要があります」

どうやら、他の縄張り持ち(主級)の棲み処を巡るらしい。基本、頂きであるこの場所から滅

多に動かぬ彼女だが、珍しい事もあるものだ。
疑問という程ではない。が、少しばかり驚いている白狼の意を感じ取ったのだろう。
これまた珍しい、ちょっと困ったような――所謂苦笑に近い感情で口元に弧を描き、”母”は自身の懐を探ってある物を取り出した。
「かの女神の力の中継点足る聖遺物――これが、慌ててやって来た目的のおまけだと断ずるのですから、なんともあの子らしい」
そう言って、彼女が掌に握って見つめるのは、大きな何かの『種』だった。
大きさといい、宿る清廉かつ膨大な力といい、白狼の知識には無いものだ。
どうやらあの黒いのは、大慌てで霊峰（ここ）までやって来て何やら”母”に頼んだ上、おまけとしてこの奇妙な『種』をこの地の適した場所に植えてくれと彼女に丸投げしたらしい。
”母”がアレを気に掛けているのは何となく察せるが……ちょっと図々しいのではないだろうか。
白狼としては面白くない。同じ主級の連中にも、同意を示す者は多いだろう。
黒いのめ、今度やってきたら少し齧ってやろうか、などと白狼が考えていると、傍にやってきた”母”が彼の背を撫でて申し訳なさそうに見つめて来る。
「この世界における、万物の循環にも関わる事柄。優先して為すべき事なのですが……

もう大分顔を合わせていない仔の領域にも向かいます。以前と通じる道が変わっている可能性もありますし、道案内があると手早く事が進むと思うのです――貴方が良ければ、今日一日、私に付き添ってはもらえないでしょうか？」

――よくやった、黒いの。今度来たら獲物をちょっと分けてやろう。

降って湧いた”母”とのお散歩の機会に、白狼は元気よく一鳴きして尻尾をバタバタと振りたくった。

”母”を背に乗せた白狼が、軽やかに霊峰の大地を駆ける。

一人と一匹が先ず向かったのは、山の中腹であった。

霊峰における縄張り持ち――即ち主級の霊獣は、峰の中腹以降からをその棲み処としている。

白狼の領域である濃霧立ち込める渓谷と森林は凡そ六、七合目。四足の獣である彼の速さと種族柄の隠密性も加え、霊峰の半分を踏破してきた登山者を更に見定める役割を担っていた。

が、彼の縄張りより標高の低い地――五合目にも主級は存在している。今回の散歩――

―もとい、”母”による『種』を埋めるべき場所の見定めは、そこから初めて順繰りに上り、再び頂を目指してゆこう、という事になったのだ。

中腹の主級は白狼の縄張りが近い事もあり、偶にだが顔を合わせることもある。当然、根城としている場所も記憶にあるので、そう時間も掛けずに最短ルートで辿り着いた。

到着し、脚を止めたのは苔生した無数の巨岩が鎮座する岩場である。

魔力をたっぷりと吸った霊石や、霊峰の外では最高クラスの貴重な鉱石として扱われる鉱物がごろごろと転がるその場には、一見して生物の気配は無い。

”母”が己の背より降りたのを確認すると、白狼は身を反らし、天に向かって高々と遠吠えの声を上げた。

魔力を乗せた叫びは辺り一帯を駆け巡り、やがては霊峰の空へと上って消えてゆく。

ややあって居並ぶ巨岩の内、頂上に小さな花の咲いた、一際大きな小山の如きソレが微かに震え始めた。

凄まじい重量が動き始め、岩場全体が地震いが起きた様に重低音奏でて振動が起こる。

大量の土砂と共に巨岩が隆起――否、立ち上がるのを眺めながら、白狼は飛んでくる小石と砂埃から”母”を庇い、宙を見上げた。

「――――――オ、――――――ヴ――オオ……」

パラパラと石粒混じりの土くれが降り、固い岩同士が擦れ合うような『声』が上から響く。

舞い散る粉塵や土埃が流石に邪魔だったのだろう、”母”が掌を天に向けて翳し、軽く横に扇ぐ様な動作を見せる。

それだけで周囲一帯を舞う土や砂、埃の膜は静かに沈み始め、数秒とかけずにこの場にやってきた当初と同じ静けさを取り戻した。

白狼の毛皮に潜り込んだ粉塵も砂粒一つに至るまで地に落とされ、粉塵塗れでちょっと黄ばんでしまった彼の体躯も元の真っ白な毛並みを取り戻す。

”母”が「綺麗になりましたね」と首筋を撫でてくれたので、白狼的には寧ろ得をした気分であった。

改めて、土煙が消えて視界が明瞭になった岩場で、この辺り一帯を縄張りとする存在を見上げる。

動き出し、屹立した巨大な岩の塊は、大雑把なヒトの形をしていた。

頭一つに腕二本、脚二本。胴も頭も、四肢も、構成される全ての部位が太く、厳つく、何より超重量。

霊峰に古くから在る巨大な霊石――そこに大地の精が宿り、定着した巨大な岩の精。

彼（性別など無いが、便宜上そう呼ぶ）こそが霊峰の大地を司る、主級の一体、白狼の同輩であった。

「――――、――――ヌ、――――――――オ”……」

再び、石が擦れ合う様な音が岩精から発せられる。

ゆっくりと、下手な巨木よりも長く、太い腕が曲げられ、角張った頭部の脇に添えられた。

彼の言語は勿論の事、動作の意味も白狼には分からない。

が、込められた意思や動力となってる魔力から感じ取れる匂いから大まかな意思疎通は可能で、実際に白狼はこの岩精とのコミュニケーションで苦労した事は無い。

この様な巨大で威圧的な姿形（ナリ）だが、本人……本岩？　は、取っつきやすい性格をしている御蔭もあるだろう。

先の発声らしき音も、言語化するなら「すまん、寝てた。何か用？」と言った処か。

「久しぶりですね。起き抜けの処、悪いとは思いますが……少々話しておきたい事があります」

「――――オ、――――――ヴ、――――――――――ッ……」

一歩前に出て声を掛けた”母”に、その剛体を微かに軋ませて身体を傾げる岩精。どうやら頭を下げたらしい。

例の『種』を取り出して見せた”母”は、それを植える場を求めている事を語りだした。

「貴方の領域は草木が根を張るには少々適性の低い環境なので、おそらく違う場所になるとは思いますが……場合によっては植える場所自体を整える事になります。そうなった際、霊峰の大地と深く結びついた貴方にその土台の制作を頼む事になるかもしれません」

そういうことか、と白狼も得心が行った。

この辺りは土の下まで石と岩、砂利や鉱物で満ちている。

その殆どが豊潤な魔力を宿しているので、霊的な環境という面では不足無いが……あくまで植物である『種』を埋める候補地として条件が悪い。

それでも”母”が岩精の縄張りたる此処を訪れたのは、適した場所が見つからなかった場合、一からそれを作る事も考慮したからだ。

整地ならば”母”がいれば事足りる。

だが、育った『種』が霊峰の環境を大きく変えてしまう様な事態を避ける為の最適な場を作る、ともなれば、この地全域と深くつながる事の出来る大地の化身たる岩精の助力があった方が、事は楽に進むだろう。

「――オ、――――――オオ、――――ヴ……」

岩精が轟音を響かせながらゆっくりとしゃがみ込み、太すぎて胴といまいち見分けの付かない首を縦に傾ける。

岩石が擦れ、反響するような音はやはり言語としてはさっぱり分からないが、快諾の意だけは伝わって来た。

その点は”母”も同じなのだろう。古の巨人に匹敵する巨躯を持つ岩精であるが、その在り方は不動の大地に相応しく穏やかで揺ぎ無い。白狼が小型の同種と共闘したときも思ったことだが、助力を得られた時の頼もしさは一入である。

故に、その剛体を見上げる”母”も微かに微笑んで頷きを返した。

「ありがとう。では、その際には力を借ります――手隙な時間に、山の中腹以下に良い条件の土地が無いか、思い出してみてください」

「――――ヌ？　――――オ、――――ヴ、オ……」

”母”が最後に付け足した言葉を受け、岩精は首を僅かに傾げ――そのまま動作を停止させた。

頭頂部で風に揺られてピコピコと左右に揺れる白い一輪が、なんとなく彼の心情を表わしているようにも見える。

「……少し迂闊な発言でしたね」

考える様な仕草のまま、動きを止めてしまった巨躯を見た”母”が、今度は少し気不

味そうに苦笑する。

間違いない。この無骨で穏やかな同輩は大地の精特有の、吃驚する程の超長考に突入してしまった。

長命種の中でも更に長寿の精霊。

その中でも不変や不動の概念を多く含む地の精霊は、寿命などあってないようなその在り方故に、なんかもう凄まじくのんびりとした気質を有する者が多い。

この同輩にしてもそうだ。

意思疎通自体は可能なのだが、下手に考え込ませたり記憶を掘り起こさせたりするような言葉を掛けると、そこからとんでもない長さで思考に入る。

以前にやり取りした際も、更にその前――十は月日を跨いだ時と全く同じ位置のまま、微動だにしていなかった。

何かあったのかと聞いてみれば、「良い天気だった。だから空の雲を数えてた」的な答えが普通に帰って来る。六万と少しまで数えたらしい。

ちなみに、流石に有事ともなればのんびり屋の気質にも一旦蓋がされる。この前やってきたヒトに成りすました汚泥共も、小癪な隠れ身さえなければこの岩精によって一人残らず叩き潰されていた事だろう。

神代より在る霊峰でも最長の古株であり、持ち得る力の格もそれに準じ、主級に相応

しき存在なのは間違いないのだが……霊峰までやってくる者達の見定め役が彼では無く、白狼なのはこの気質が理由である。

兎に角、こうなってしまっては暫く動かないだろう。

白狼がそれなりに本気になって引っぱたけば意識も切り替わって我に返るかもしれないが、同じ主級の仲では友好的な関係にある岩精に対し、しょうもない理由で傷をつけるのは本意では無い。

それは”母”としても同じだったのだろう。少しの間、困った様に岩精の巨体を見上げていたが、結局は白狼に向き直って鼻先を撫でて来る。

「取り敢えず、伝えなければならない事は伝えました……次の仔の領域に向かう事にしましょう」

彼女がそう言うならば白狼に否は無い。そっと身を伏せ、”母”が己にひらりと飛び乗って横座りになるのを待って、しっかりと腰を落ち着けたのを確認してゆっくりと歩き出す。

”母”を相手にしても、その超絶なのんびり気質を如何なく発揮した岩精であるが、それを咎める気持ちは不思議と湧かなかった。

おそらくその理由は、白狼自身も他ならぬ”母”を相手に同じような体験をした事があるからだろう。

岩精と比べれば遥かに通常の生物寄りとはいえ、”母”もまた悠久の時を生きる”龍”だ。

長寿という点もだが、その華奢な身体に反し、耐久性や頑強さという点では岩精すら上回る存在であるが故に、彼女も時間や自身の状態に無頓着な面がある。

霊峰が特に寒さ厳しい、吹きすさぶ吹雪に覆われた冬であった年、なんとか母に肉を届けようと苦労して狩りを行い、届けに行った事があった。

一冬食を断った程度で、”母”がどうにかなるなどとは欠片も思っていなかったが、春がやってくる迄、寒さで萎びた葉だけを口にするよりは肉も喰らった方が彼女も嬉しかろう。

そんな考えの元、少々小振りではあったが良く肥えた獲物を持って行ったのだが……雪に半ば埋もれた屋敷に辿り着いた白狼は、そこで驚愕のあまり咥えて来た獲物を取り落とす羽目になった。

天気の良い日に、よく”母”が腰掛けて霊峰の空や景色を眺めていた、切り出した丸太。

雪が降り積もって元ある位置も見えなくなった其処に、彼女は全身雪に埋まったまま座っていたのだ。

真っ白に降り積もった雪の中に、僅かに紺碧の髪の一房が見えなければ、白狼とて気

付くのが遅れただろう。
慌てて飛びつき、キャンキャンと赤子の様な悲鳴をあげながら”母”を掘り起こし、彼女が目を開くまでおろおろウロウロと忙しなく狼狽えていた時間は、白狼にとっての黒歴史である。
穏やかな寝息を立てていた”母”であったが、程なくしてパッチリと眼を開き、雪に埋もれていた自分とそれを掘り起こした白狼を見比べ、直ぐに状況を把握した様子だった。
そして初めて見る、バツが悪そうな表情で呟かれた言葉は今でも覚えている。
曰く、「雪の降りだした景色が綺麗だったので、見ていたら眠ってしまった」との事。
白狼の記憶が今も確かならば、最初に雪が降りだしたのはその日より十は前の朝である。
どれだけ雪の降り積もる景色を眺めていたのか、雪に埋もれたままどれだけ眠っていたのか。
何れにせよ、それを聞いた白狼が嘗てない脱力感を覚えたのは確かであった。
そんな体験もあって、岩精の時間感覚のおかしいのんびり気質にも、腹が立つ処か既視感さえ覚えるのだ。
とはいえ、少し前からは”母”のそういった無頓着な面も鳴りを潜めて来た。

切欠となったのは何だったか――そう、確かあれは、鉄の棒を背負ったヒト……金灰の毛並みをした、やたらと厳しい顔つきをした若いメスが彼女のもとを訪れてからだ。

それからも何人かのヒトが”母”に会いにやってきて……最近になってあの黒いのが訪れる様になり、その頃には白狼からみても長大と言えるような時間の過ごし方は殆ど無くなった。

それが”龍”である彼女にとって、良い事なのか、はたまたその逆なのか、やはり彼には分からない。

だが、あの黒いのや一緒に来た銀の毛並みのメスと過ごす”母”は嬉しそうだった。

ならばそれで良いと、白狼は思うのだ。

「次は大滝に向かいましょう――貴方は彼女を苦手としている様ですが……構いませんか？」

言葉と共に首筋を撫でる優しい感触に、白狼は一声鳴いて快諾の意を示す。

何気ない霊峰での日々。

その中で訪れた、彼にとっての家族との散歩の時間は、まだまだ始まったばかりであった。

霊峰の日々（後編）

霊峰の裏側、見渡す限りに連なる山脈の合間には、外洋に通じるとされる広大且つ深い湖がある。

その湖の主な水源となっているのが、霊峰より降り注ぐ瀑布――大滝だ。

山頂に降り積もる雨雪を莫大な水流に変えたそれは正しく神秘、或いは絶景と称して差し支えない景観なのだが、場所が場所――禁足地の更に背面にあたる部分という事で、人間、獣問わず、この地にやってくる者達にとって眼にする処か存在すら気付かない場合が殆どである、所謂秘境の中における更なる隠しスポットとでもいうべき地点であった。

その大滝の裏に穿たれた、天然の洞窟。

翼を持つ鳥か、竜か、はたまた壁を這って自在に移動できる類でも無ければ訪れる事叶わぬ筈の其処へ、〝母〟を背に乗せた白狼は単純な速力で大滝の落ちる絶壁を駆けるという力業で以て飛び込んだ。

常に大量の飛沫に打たれて滑りやすくなった壁面をものともせず、だが同時に背中の”母”に加速や体勢の負担がいかぬように注意を払って洞窟の入口へと着地。

内部に入り、ごうごうと落ちる水音を背後にゆっくりと歩を進めると、直ぐに出迎えがやって来た。

岩肌から滲み出る様に現れたのは、ゆらゆらと揺れるヒトの形をした液体の塊――高純度の魔力を大量に含んだ水を用いた依り代である。

「あらあらあらまぁまぁまぁまぁ、お久しぶりでございますわ姫様。少し前にやってきた不埒者の件ではお役に立てず真に申し訳ありませんでした。いやですねぇ二百にもならない赤子のような術士に出し抜かれるとはワタクシも歳と言う事でしょうか。ですが考えてみれば白狼殿(坊や)以外の領域持ちは全員雁首揃えてかの者共の存在を察知できずに姫様のもとに通してしまった訳ですからこれは連帯責任として頭を丸めるべきなのかもしれませんわねぇ？　ワタクシにそもそも丸める頭もありませんが。あぁまったくそれにしても我が身を含め情けない。岩王殿はあの通りの気質でございますからかくれんぼの得意な相手を見逃すこともあろうというものですが、火竜殿まで気づけなかったのは頂けません。普段あれ程に姫様のお住まいに最も近い領域を守護している事を声高に誇るのであれば真っ先に気付いて然るべきでしょうに。結果的には何かと敵視する白狼殿(坊や)のみが姫様の為に尽力し、霊峰における主級のお役目を全うしたとなれ

ば彼も中々に堪えたのではないでしょうか？　どんな顔をしているのか実に見てみたいものですが今回に限ってはワタクシも同罪ですものねぇ、自重しておきましょう」

「……えぇと、はい。久しぶりですね」

怒涛、と言う表現がしっくりくる言葉の弾幕を浴びせられ、”母”が困った様に眉根を寄せてかろうじて返答した。

依り代とした水を、薄衣纏った若いヒトのメスの様な姿形へと変え、”母”へと嫋やかな所作で一礼した彼女こそ、大滝とその周辺の水場を縄張りとする主級……《貴婦人》を自称する水の精霊である。

相も変わらず口を開けば長口上――処では無い。立て板に大滝の水をぶち撒けたが如き語り口だった。あの黒いのとは別方向で喧しい。

《貴婦人》によって洞窟の奥へと誘われ、進んだ先にあったのは、少々広がった空間と”母”の屋敷で見た様な家具――卓と椅子であった。

洞窟内の壁面には、所々に微弱に光る苔が生えており、薄っすらとだが暗いこの場所を照らしている。

その仄かな光を反射する程に磨き上げられた家具は、見た処全て石作り――おそらくは洞窟の岩盤を削り出した物だった。

緩やかな曲線と丸みを付けられたそれらは、元が壁面と同質とは思えぬ程に滑らかな

作りであるが……圧縮した水を操って白狼ですら噛み砕くのに苦労する鉱石すら容易に両断するこの年寄りにかかれば、大した労力も掛けずに行える手慰みでしかないのだろう。

「お茶を淹れますので少々お待ちを。えぇ直ぐにでもお出し致しますので」

椅子に腰かけた”母”へとにっこり微笑みかけると、《貴婦人》はこれまた石を削り出したらしき器やらを自身の身体の中より取り出した。

茶、というもの自体は”母”が口にしているのを何度も目にしているので白狼も知っているが、肉身を持たぬ――ましてや水の精霊である彼女が茶の道具や葉を所持しているのは、正直解せない。飲まないだろ、アンタ。

……まぁ、お喋り好きで他者をかまうのが好きなこの精霊の事だ、百年単位で見ても訪れるかも怪しい客人の為に、わざわざ一式を常備(揃え)しているのかもしれない。

葉を入れた器に指を突っ込んで指先から直接沸いた湯を発生させてる《貴婦人》は上機嫌だ。

久方ぶりの来客に喜んでいるのは確かだろう。それに使う機会の無かった道具が日の目を見た事が嬉しいというのもあるか。

程なくして、卓の上に二つの茶が置かれる。

「白狼殿(坊や)も如何です？　姫様に倣って作ったものですが、中々に出来の良い葉になった

と自画自賛している品ですよ？　嗅覚鋭い貴方の種族であっても芳しいものとなる様に淹れてみせましょう。ええ、時間はありましたので暇に飽かせて練習した甲斐はあったものとだけ。好みはあるでしょうが不味いという結果にだけには為らないと断言出来ますのでどうですか？」

獣の己が飲む訳が無いだろう、という意志を込めて白狼は鼻を鳴らす。

そのまま石作りの椅子に座る”母”の傍に寄り添うと、我関せずとばかりに洞窟の床に寝そべって眼を瞑った。

この年寄りは兎に角、口数が多くて喧しい。

話す相手が複数いると会話の量を分割するのではなく、人数分だけ倍増させて喋り倒すのだ。真面に相手をしていると頭が痛くなってくるので、”母”の要件が済むまでは無言・無反応に徹するのが白狼の行動としては正解だろう。というか、迂闊に会話に付き合おうものならば日が暮れる。

他所の縄張り持ちの傍で眠る事など有り得ないのだが、見かけだけなら完全に寝る態勢に入った事で会話する気はないと察したのだろう。

《貴婦人》は「つれないですねぇ」と呟いて、水である筈の依り代に露骨に残念そうな表情を浮かべると、そのまま”母”の向かいの席へと腰を下ろした。

「何はともあれ歓迎いたしますわ姫様。久方ぶりのお客人が貴女様というのは実に素晴

らしい事でございます。あぁ、この様な喜ばしい来客があるというのなら甘味――せめて果実の類でも用意しておくべきでした。いっそ水場周りに適した樹の苗を植えるべきでしょうか？　しかし姫様の霊峰において自然に任せぬ植樹を行うというのも不敬でございますし、なんなら精霊的にも己の種族を鑑みてそれってちょっとどうなのかなーと悩む面もありますので悩ましい処ですね。あ、樹といえば最近大滝のすぐ傍から伸びた樹木の枝に可愛らしい鳥達が巣をつくったのですが、これがまた愛らしくて少々時間を持て余しているときにはよく観察するようになったのですよ。あまり入れ込むのはよろしくないとは思っているのですが日々の小さな潤いになっているのでちょっとした加護でも分け与えてしまおうかと悩んでいる処ですの。まぁ潤いとはいったものワタクシ生まれてこの方干からびた事などございませんが。というか乾いたら消滅しますし」

多い。一息に吐き出される情報の量が多い。

白狼の知る限りでは、”母”が《貴婦人》のもとを訪れるのは数十年ぶりだ。

互いに長命種の中でも一際長い時間を生きているので、そう長い年数という認識は無い筈なのだが……それでも数十年と言う月日の全てを言語化して雪崩のごとく浴びせかけようとすれば、それは凄まじい量になるという事は分かった。こんなアホらしい実感など体験したくもなかったが。

大半を聞き流している白狼ですらこの認識なのだ。正面から話し相手として言葉を向けられる上、あまり他者と交流する機会が無い”母”は茶に口を付けた動作のまま固まっていた。

おそらくは返答を思いつく段階で話題が三転くらいしてるので、言葉を差し挟む機会が掴めずひたすら長台詞でブン殴られるが儘なのだろう。”母”を困らせるな、大滝の水源近くに岩精をけしかけて水浴びさせて流れ塞ぐぞ婆。

無反応に徹しようと思ったものの、眼を開けてつい小さく唸り声をあげてしまった白狼に気付いた《貴婦人》の口が漸く止まった。

「あらあらまぁまぁ、ワタクシとした事が少々はしゃぎ過ぎた様で。何かしら御用があって訪れたのであろう姫様を前に一方的に話し続けるなど、淑女としても一帯の主級としても汗顔ものの行為でしたわね、大変な失礼を致しました」

「……いえ、私の出不精もあって貴女と顔を合わせるのも久しぶりですからね。積もる話の量が多くなるのも仕方無い事でしょう」

固まっていた動きを再動させた”母”が茶器を卓の上に戻し、苦笑の滲んだ声色で応じる。ついでに傍らで寝そべる白狼の背に掌を這わせ、そっと撫でてくれた。

小さな感謝の籠った優しい手つきである。機嫌が急上昇した白狼は小鼻をぴすぴすと膨らませ、再び薄く目を閉じて沈黙の態勢に入った。

瀑布の如きお喋りが再び始まる前に、早々に本題に入ろうと思ったのか、”母”は懐から文字通り話題の『種』を取り出す。
「今回、貴女……というより、霊峰内の各処を廻っているのはコレが理由です。見た事はありますか？」
「……ブホッ!?」
卓の上に転がされた淡く発光するソレを見て、《貴婦人》が首を真横にひん曲げて口に含んでいた茶を吹き出した。
依り代を構成しているのが水なので咽る様な事は無かったようだが、それでもその顔には驚愕が張り付いている。白狼としても初めて見る動揺っぷりだ。
「……本物、でございますねぇ……姫様、コレをどちらで？」
「弟子が持ち込んだものです――なんでも、御本人から直接渡されたので候補地として真っ先にこの地が思い浮かんだと」
「やはりそうですか……あの子、一応は人間ですよねぇ？　いやまぁ、邪神（アレ）を単騎で滅ぼすなど、本来ならば姫様か不死鳥殿のみが可能だと言うのにやってのけた様ですし、その時点で大分種族詐欺な子だとは思っておりましたが……」
おそるおそる、と言った様子で霊峰の水を司る精霊は『種』を指先でつつく。どうやら、どういった代物であるのか知っている様子だ。

大滝の落ちる先にある湖、延いてはその湖に繋がる海。途切れる事無く水が続く環境の御蔭で、この水精は自身から分けた一部をそれこそ外海にまで送り出す事も出来る。

霊峰内で唯一、この辺り一帯の地から遠く離れた場所について迄を知る事が可能な存在だ。蓄えた知識量、という点では”母”を除けば間違いなく随一だろう。白狼が知り得ない事も彼女にとって既知であるのは何ら不思議な事ではなかった。

「成程、御用の程は理解しましたが……中々に悩ましいお話ですわねぇ。最低でも大陸中央にある一本目と同等……この地の肥沃さもあって上回る可能性も有りともなれば――ぶっちゃけ、下手に高所に植えれば霊峰の何割かが年中日陰になりませんか？」

「えぇ。育ち切れば樹が放出する聖気によって、陽光の不足を補ってあまりある様になるのでしょうが……それまでに山に棲む者達に我慢を強いるのは私としても本意ではありません」

「麓に近い場所か、峰の先端に近い処に適した場を整える事になりそうですが……姫様の地たるこの霊峰の地形を弄ることも、流石にコレが関わることであれば止む無し、と言った処でございますねぇ……にしても、まさか人の子が手ずから界樹の種を受け渡されるとは……割りと前代未聞な出来事ですこと」

《貴婦人》が両手で丁寧に『種』を抱えて持ち上げると、”母”に恭しく掲げて返す。

そのついでに溢された台詞に”母”も同感だといわんばかりに微かに笑って頷いた

のだが、『種』を手に取ったと同時に続けられた言葉にピタリと動きを止めた。
「あの子、真っ当に輪廻に乗れるのでしょうかね？　死後にかの御方のもとに引っ張られそうな予感がひしひしと感じられますとも」
チリッ、と。背中の毛先に火の粉が散った様な感覚を覚えて白狼は眼を開き、顔を上げる。
一瞬の事であり、既にその気配は幻の様に消え失せていたが……少なからぬ驚きを覚えて彼はその発生源――”母”の横顔を見上げた。
しかし、当の”母”の方も自身の反応……不機嫌や不愉快、といったものに近い動きを示した感情に当惑を覚えたのか、その龍眼をぱちくりと瞬かせている。
その反応に対し、《貴婦人》の方は実に分かり易い態度であった。
水で構成されたその顔に驚きを浮かべ、次に喜色に溢れた楽し気な様子で両の掌を打ち合わせる。
「あら？　あらあらあらまぁまぁまぁ……姫様がむくれた御顔を見せるなど、いつ以来でしょうか。美しく涼やかな普段の立ち振る舞いも大変に良うございますが、懐かしくも愛らしい表情をお見せになって下さり大変に眼福ですわ。本来ならば不快を誘う失言をお赦し願わなければならぬ処、歓びを覚えてしまうワタクシの不出来をどうかご勘弁下さいまし」

「む、むくれた顔などしてはいません、見間違いでしょう」
依り代に満面の笑みを浮かべる水精に対し、霊峰の主が少しばかり動揺を堪えた声色で即答する。
とはいえ、白狼にも”母”の気配が一瞬尖ったものになったのは確りと感知出来た。彼女と向かい合わせで座る《貴婦人》がそれを見逃す筈も無いだろう。
「これまでに取った幾人かのお弟子に比べて、才覚と言う面ではややパッとしないものではありましたが……為した大業を筆頭に、色々な面で随分と風変わりな男子（おのこ）でしたものねぇ。えぇ、手のかかる子程可愛いという情は決して不自然でもおかしな事でもありませんわ。御安心くださいませ、相手がかの御方と言えども、ワタクシは姫様の味方ですとも」
「……だから、違うと言っているでしょうっ、貴女は昔から私の行動や反応について少々大袈裟に捉え過ぎです……！」
これ以上無い程に嬉しそうな《貴婦人》に対し、”母”は怒ったような、慌てた様な――だが先と違って威を発しない気配のまま、少しばかり語気荒い口調で言い募る。
卓の上に置かれた茶器を引っ掴むとぐびーっとばかりに一気に残りを飲み干して、息を一つ吐き出し。
彼女は空になった茶器の底を眺めて呟く。

それは、自身でも把握しきれていない感情を振り返って形にしている様で。
「私は、ただ……あの子は、あの二人の神子と共にあるべきだと思っただけです。あれ程に確りと魂の縁が繋がっているのですから、今生を終えても彼らは何れ再び廻る輪の中で巡り合うでしょう……そうなって欲しいと――叶うなら、遥か未来にあっても、そうなったあの子達とも出会えたらと、思っただけなのです」
胸中を吐露するように紡がれた言葉には、様々な感情が込められている様であった。感傷、懐古、羨望、慈愛。僅かずつ散りばめられたそれらを、白狼が全て汲み取る事は難しかったが……〝母〟と古くから付き合いのある《貴婦人》には幾らかなりとも理解が及んだ様だ。
大量の水がごうごうと落ちる音が微かに反響して届いてくる洞窟の最奥で、饒舌だった水精が口を噤ませた事で初めて沈黙が訪れる。
「そうですか……過ぎた言でした、お許しください」
再度開かれた口はらしくもなく回転が悪い。
珍しく神妙な態度となり、口数を減らして頭を下げる水精に〝母〟も穏やかに応じる。
「いえ、貴女が私の裡を慮るが故だというのは分かっています――お茶のお代わりを貰えますか？　久方ぶりなのですから、今回の用件以外にも少し話をしたい」

「……ええ、ええ。姫様がお望みとあらば、ワタクシでよろしければ三日三晩でも語り合わせて頂きますとも」

「それは勘弁して下さい。この後も別の仔の領域を訪れねばならないので」

穏やかに言葉を交わす両者に含むものやぎこちなさなどは生じておらず、白狼は安心して三度目の正直とばかりに眼を閉じて身を伏せた。

さて、彼女達が用件以外にも話に興じるとして、果たして何刻で終わるか――何せ、相手が話好きの水精である事に変わりは無い。

日が暮れる前に洞窟を出る事が出来れば良いが。

だがまぁ……仮に日を跨いだとしても構わなかった。

”母”の気配は凪いでいて、その瞳に浮かぶ光は、懐かしい記憶を思い出す様に細められ……けれど、決して悪いものでは無い。

ならば、白狼的には何も問題は無いのだ。

そんな事を考えながら、彼は眼を閉じたまま、”母”の声と洞窟に反響する滝音に耳を澄ませるのだった。

お喋りの時間が思ったよりも早く済んだ為、《貴婦人》に見送られながら洞窟から出発。大滝のある場所より更に高所へと移動を続ける白狼と彼の”母”。

頂上に程近い無数の大樹聳える地帯に脚を踏み入れると、水の精霊がそうであった様にこの一帯を縄張りとする主級が直ぐ様姿を現した。

大気が豪と音を立て、空が陰る。

力強い羽ばたきに打ち据えられた空気が巻き上げられ、木の葉や小枝が高々と舞い散った。

空より飛来し、地響きを立てて着地したのは巨大な体躯を誇る竜である。

濃淡のある黒灰色の鱗と甲殻の所々に、炎の如き赤の色合いが差し込む威容。

自在に天を飛翔する大きな翼と、それに劣らぬ程に発達した両の脚。

今も大地を掴む爪は大きく、力強く。威圧的な形相にずらりと生える牙もまた、鋭い。

一振りすれば霊峰の大樹ですら纏めて薙ぎ倒す尾をゆらりと一振りし、主級が一体である火の竜は深々と白狼――正確にはその背に乗る”母”に向け、頭を垂れた。

『お久しぶりです、主よ。変わらぬご壮健を誇るその御姿、間近でお目に掛かれた歓びで胸が満ちる想いです』

竜種に肉声で言語を発する機能は無い。代わりに届いたのは、表層意思を特定の方向に飛ばす意念の魔法だ。

随分と流暢――というより大層な麗句が板に付いたものだ、『サル（エサ）の言語（鳴き真似）』なぞの為に、竜が使う魔法を弄るなど有り得ない等と嘯いていたのが嘘の様である。

白狼は皮肉気に考える。ヒトであれば鼻で嗤うに近い表情を作っていた事だろう。

この火竜は、霊峰の主級の中では新参者だ。

何やら他所の地――それなりに豊かな霊脈を有する火の山で長年頂点として君臨していたらしいが、白狼としては最近喰った肉で一番臭かったもの並みに興味が無いので、詳細は覚えていない。ついでにいうならその山から離れた理由も同じ理由で知らない。

知っているのは、このトカゲが身の程知らずにも霊峰の主になろうと企み、手始めとして白狼を始めとした他の主級に喧嘩を売って来たということだけだ。

確かに火竜は当時から強かった。特に、相性が良いとはいえない己があのまま戦えば、文字通り決死の闘争となったであろう。

――が、所詮は其処止まり。己ら主級と互角かそれ以上、程度で”母”に挑み、取って代わろうなどと、思い上がりも甚だしい。

火竜の放つ吐息（ブレス）や火球によって、霊峰各処が火に包まれたのを見かねた母が直接相対したことで、愚か者の増上慢は一瞬で粉砕された。

空から偉そうに『この地に新たに君臨する王たる我に、頭を垂れるようであれば配下

として生かしてやろう』とか白狼に向けてほざいていたトカゲが、”母”を認識した瞬間に己が全力で頭から地面に突き刺さりにいった光景は、今思い出しても失笑物である。

その後、分を弁えたのは良いが、結局この駄竜は霊峰に棲みついてしまった。

あまつさえ”母”に心酔し、『我こそが龍の最も傍において侍る、主の安寧を御守りする爪牙にして炎である』などと寝言を垂れ馴染める始末である。足りてない頭を一生地に埋めていろトカゲ。

白狼の背より飛び降りた”母”が、頭を垂れた火竜の額を軽く撫でながら頷いて挨拶を返す。

「ええ、遠目に貴方が霊峰の空を舞う姿は日毎に見ていますが……考えてみれば、こうして言葉を交わすのは間が空きましたね。元気そうで何よりです」

『勿体ない御言葉……我に御用であれば、よろしければ巣までお越しになられますか？

この身は空舞う竜ゆえ、《貴婦人》程に小器用な身ではありませぬが……常日頃、最低限主に寛いで頂ける様に場を整えてあります――なに、主をお運びする栄誉を頂けるのであれば瞬きの間に着く事をお約束致しましょう。態々地べたを必死に走る四つ足と違い、移動で主のお時間を浪費する事など有り得ませんとも』

デカい図体で精一杯に格好つけた動きを表現し、背に乗るなら自分にして欲しい、と

いうみっともない要望を気取った言い回しで包んで吐き出す火竜に、白狼は今度こそ失笑に近い鼻息を漏らした。

『……今の鼻息はなんだ、犬』

誰がイヌだトカゲ。目まで耄碌したのなら”母”を背に乗せるなどという夢を見ずに、大人しく死ぬ迄巣に籠ってろ。

『前々から思っていたが、貴様の不敬は目に余る。我をトカゲ扱いする不遜も許し難いが……偉大なる主に対して馴れ馴れしいにも程があろう！　ただでさえ、幼少に主に拾われ手間をお掛けした時点で傲慢の極み！　なんと羨……不敬である事か！　弁えよ！』

どの口が抜かしているのやら。霊峰にやってきた際にあちこちを火の海に変えた奴の台詞としては、皮肉が利いている処では無い。

自身の過去の所業は自慢の炎で焼き払って無かった事にでもしたのだろうか？　だとすれば、竜というのは中々に面の皮も厚い種らしい。

『ぐ……こ、のっ……貴様といい、あの男といい、犬に類する者は余程焼けて死ぬが好みらしいな……！』

上等だ。やるか、駄竜。

互いの喉から威嚇の唸り声があがり、火竜の口元からは炎が漏れ、白狼は牙を剥き出

して低く構える。
「……そこまでにしておきなさい。相性が悪い者同士で仲良くしろとまでは言いませんが、貴方達の私闘は少なからず周囲の被害が大きい。流石に見過ごせませんよ」
が、溜息交じりで額に手を当てて吐かれた”母”の言葉に、両者揃って一瞬で戦意を鎮火させた。
叱られてしょんぼりと項垂れる主級二体の姿に、こういう処は似ている仔達だ、などと思いつつ苦笑する霊峰の主であるが、その胸中を知れば流石の忠狼と忠竜も、この場限りは揃って否の声を上げる事だろう。
見事な体躯を誇る狼と竜。その鼻先を交互に撫でると、彼女は懐から『種』を取り出した。本日四回目の動作も、これで最後である。
『むうっ……これは……!』
”母”の華奢な掌の上で光る『種』を目の当たりにし、火竜が珍しく瞠目の唸り声を上げるのを白狼も感心した気分で見つめる。《貴婦人》の反応もそうであったが、やはり相当に貴重な代物らしい。
「貴方は知っている様ですね」
『はい……おそらくは、大陸中央の古代種……エルフ共の神木と同種の聖遺物かと』
「その通りです。今回、新たに霊峰の地に二本目が育つ事となりました」

『この地が選ばれるは至極当然。遥か昔に神より微かな祝福を受けた程度の種族が、図に乗って一本目を抱え込んでおるのです。神が作り出した始まりの生命たる”龍”である主の方が、本来所持するに相応しき品である事は明白でしょう』

身を反らして満悦、と言わんばかりに断言する火竜。チラリと白狼に向けられる視線は、彼の知り得ない知識を語る事への優越感に満ちている。嫌そうに顔を顰め、白狼は眼だけで「こっち視んな」と返しておいた。

『此度、主が我らの領域を巡るのは、この地での遺物を育む場の選定でしょうか？』

「えぇ、そうなります。それと、貴方に関しては樹がある程度育つ迄は、その周辺での狩りを自重してもらう事になるかもしれません」

『道理ですな。如何な神由縁の聖遺物とはいえ、苗木のうちに我が炎を受けてはたちまちに燃え尽きてしまいましょう』

白狼的には反りの合わない相手ではあるが、火竜もまた霊峰に生きる者。自然の儘に、腹を満たす為に行う狩りを制限するというのは、”母”としても心苦しさを覚えるのだろう。

少々申し訳なさそうに向けられた彼女の言葉に、莞爾とした笑いの波動を乗せて応える火竜には、不平不満の情は一切見いだせない。

気に入らない奴ではある。が、”母”に向ける敬意の強さについてだけは白狼も認め

る処であった。
『相応しき大地の選別は地精めが、育むは《貴婦人》がお役に立ちましょう。我はか弱き苗木が一端の樹々として天に伸び上がるまで、空にて見守るお役目を頂戴したく思います』
「ええ、皆には手間を取らせますがお願いできますか？　私も定期的に様子を見に行く様、心掛けますので」
貴方もそのときは、また背に乗せてくれますか？　と背を撫でてくれる”母”に、白狼も力強く頷く。
途端、火竜の視線が苦々しさと忌々しさが半々のものに変わった。
いい加減諦めろ駄竜。そもそも、そんな尖りまくった硬そうな鱗と甲殻に覆われた背に、どうやって”母”を乗せる気だ。

秋晴れの空の下、日も傾き始めた夕暮れの中を、白狼はてくてくと歩く。
霊峰より見下ろせる眼下が緋色に染まり、斜陽によって照らされる光景はどこまでも雄大で美しい。

沈みゆく夕日を白狼の背に揺られながら見つめる”母”は、景色に見入っているのか無言であった。

白狼もまた、無言である。本気で駆ければ二分と掛からずに辿り着く屋敷への道程を、敢えてゆっくりと歩いて進む。

今日一日、朝から”母”を背に一緒に散歩が出来た。

最近は顔を合わせていなかった同輩連中とも、久方ぶりに言葉を交わしたのも、まぁ、悪く無かった。

端的にいうのなら、大満足である。例の『種』の件で再び似たような機会が巡ってくるやも、というのも加味すれば、今日は最高の一日と言っても過言では無いだろう。

――だが、それだけにこの一日の終わりが近づく事が、なんとも名残惜しい。

そんな想いが、白狼の歩の進みを緩めていた。

なんとも不思議な感覚だ。

白狼とて長命種たる霊獣の一種。過ぎる年月の体感という点では、他の生物よりは時間感覚が曖昧である。

……だというのに、ただ一日。

残り数刻も無いこの時間が、酷く貴重で変え難いものとして感じてしまうのだ。

それでも、歩み自体は止める事は無い。

龍の姫を乗せた真っ白な霊獣は、夕焼け照らす霊峰の路をゆっくりと歩く。
「今日は、良い一日でしたね」
帰りの路もあと僅かとなった処で、”母”が呟いた。
喉の奥でちいさく鳴いて同意を示す白狼に微笑みかけて、その首筋を優しく撫でる。
「永き時間を生きる私達に、一日、一日を大切に、精一杯に生きると言う感覚はどうしても馴染みが薄いものです……ですが」
其処で一旦言葉を切り、彼女は再び沈み往く夕陽に顔を向けた様であった。
「……やはり、良いものですね。忙しく、騒がしく――でも、楽しい時間というものは」
それは、同意を求めると言うよりは、独白に近いものであったのかもしれない。
やはり”母”はほんの少しだけ変わったのだと思う。
それが良い事なのか、白狼には分からない。これは散歩の始まりにも思った事だ。
――けれど。
「先ずは、何はなくとも『種』を植える場所の確定から。地精(あの仔)が適した立地を、思い出してくれているとよいのですが」
以前の”母”より、今の彼女の方が、笑うことが増えた。
良し悪しは分からずとも、それはきっと、幸せとは呼べる事なのだろう。
ならば、己の為すべき事は変わらない。”母”の笑みが陰ることの無い様、牙を振る

うのみである。
そんな風に、密かに誓いを新たにしつつも。
今は名残り惜しい時間の終わりに向け、白狼は首を撫でる暖かな感触を堪能するのであった。

いつかのあの日を、また。

えーんやこーらどっこいしょー、っとぉ。

聖殿の厨房裏手に、俺の適当な掛け声が思いの外大きく響く。

気の抜けた声とは反して、割と本気の身体強化を施した状態で手斧を振り上げ、切り株の上に置いた薪を叩き割った。

本日は快晴。秋も深まり、いよいよ以て空気も冷え込むようになって来たのだが、今日は陽がよく出ているせいか、中々に小春日和だ。

あれよ、空気は結構冷たいんだけど、日光当たる場所は暖かい……っていうか寧ろ若干暑いやつ。まぁ、寒い中薪割りするよか良いのでこの陽気はありがたい。

料理長に頼まれた量は七割方終わったかねぇ……いや、結構量多かったから割と魔力食う。良い鍛錬になるわい。

わざわざ強化を使って薪を割っているのは、自前の魔力量を鍛える為である。

言う間でも無く、ラブリーマイバディの銘名の為の地道な一歩という奴だ。

……問題は距離換算すると、千里の道どころかその倍くらいありそうな道程の一歩って点だけどな！　先は長ぇなぁオイ！

薪を置く、斧を振り下ろす。薪を置く、斧を振り下ろす。

何度も繰り返し、ある程度の量になったら壁際の保存用の木枠の中に並べてゆく。

精度も強化幅も周囲の知人・友人と比べるとへっぽこにも程があるが、それでも一応は全身を魔力強化しているので、薪は一発でぱっかーんと割れる。

最初はちょっと左右どっちかに寄ったりしたんだけど、流石にこれだけ延々やってると綺麗に割れるようになってきたなー。

はーどっこいしょー、と掛け声を上げながら、残りを片付けるべく気持ちペースを上げた途端。

「あ、ここに居たか！　おい、一大事だ！」

聞き慣れた声が背後から届き、肩越しに振り返ると……我らが聖女様の姉(あに)の方がバタバタと騒がしく駆け寄って来た処だった。

なんだなんだ、ちょっと声が切羽詰まってるな。何かトラブルでも発生したのか？

取り敢えず、話を聞く前に切り株の上に乗せたこの薪だけは割ってしまおうと、俺は斧を振り上げ――。

「薪割りしてる場合じゃないぞ！　ヒッチンさんが倒れた！」

……ファッ

耳に飛び込んできた余りにも唐突かつ衝撃的な言葉に、盛大に空振りした斧が木材の横面を引っぱたき、弾かれた薪が回転しながら高々と頭上を舞った。

「いやはや、報せを聞いたときは驚愕の余り我が耳を疑いましたが……お元気そうで何よりでしたな、安堵で胸の閊えが消える思いです」

「全くだねぇ。しかし、肝が冷えたのは確かだよ」

大聖殿内にある、女性用居住区――有り体に言ってしまえば女子寮にて。

多くのシスター達が寝起きする場ではあるが、その中の一室――古株の者や団体行動の際の監督役などに割り当てられる個室には、今現在複数の人間……それも立場ある者達ばかりが押しかけていた。

寝台の脇にある椅子に腰かけ、肩を竦めるのは真っ白な髭を伸ばした法衣姿の老人――聖教国教皇たるヴェネディエ＝フューチ＝ヘイロウ。

その直ぐ後ろで厳かに聖印を切るのは、天井に頭頂が擦らんばかりの筋骨隆々の巨漢の司祭、ガンテス＝グラッブスだ。

「先生が倒れたって聞いて酔いも吹っ飛んだわぁ……確かこういうのって異世界でオニノカクラン、とか言うんだったかしらぁ？　とにかく、連れて来てくれてありがとねぇブラン」

「いえ、ミラ様が調子を崩されたのは孤児院（こじいん）での作業中の事ですし、当然の事です――とはいえ、私も驚きました」

残る二人は女性、場所柄当然ではあるが、彼女達もまた聖職者であった。

赤いカソックを着た妙齢の美女と、一見年若いが見た目にそぐわぬ落ち着いた雰囲気を持つシスターの二人――枢機卿の紅一点たるシルヴィー＝トランカードと、聖都で孤児院の運営に携わるシスター・ブランだ。

以上四名に囲まれ、ベッドの上で半身を起こしているのは部屋の主であるミラ＝ヒッチンその人である。

この状況が不本意であるのか、普段は鉄面皮であるその表情は少しばかり眉根が寄って渋面気味だ。

「……少々眩暈を起こしただけです。大袈裟に騒ぎ立てて皆で押しかけて来るような事ではありません」

「トイルとスカラも今の仕事を片付けたら直ぐに向かうって言ってましたよぉ」
「年寄りが出先でよろけた程度で仕事を放りだすな、と言っているのです枢機卿(カーディナル)」
元・教え子の言葉に、体調云々とは全く別の理由で頭痛を覚えたらしい。
額を指先で抑えて益々顔を顰めるミラだったが……既に聖殿中に話が広まっており、彼女の身を案じたり、見舞いに行こうかとそわそわしている者は結構な数に上ると知れば、無言で溜息を洩らして天を仰ぐ事となるだろう。
「まぁ、それだけ君が慕われているという事だよミラ。僕なんてこの間は一日中ベッドから起き上がれなかったのに、皆で部屋にまで書類を持ってくるんだからねぇ……あまりの容赦の無さにちょっと涙が出て来そうになったよ」
「猊下がラックのおじ様の処で馬鹿みたいに痛飲して渾身の門限破(あさがえり)りを決めた上、先生に叱られて魔法での解毒を禁止されて二日酔いでのたうち廻ってた日の事ですかぁ？
自業自得って言葉、御存知ぃ？」
「本当に容赦無いなぁ……！」
教皇と枢機卿がアホなやり取りをしている傍らで、ガンテスが見舞いついでに持って来たらしき新たな水差しを部屋にあったものと交換する。
取り替えた水差し片手に、角張った厳つい顔を思案する様に上向かせて呟きが漏れた。

「ふむ、少々遅まきになれど……ラック殿にもお伝えしておいた方が良いかもしれませぬな」
「幾ら何でも私の知人全員に片端から伝える必要など無いでしょう……」
「ミラ様、事の次第をラック様御一人だけ知らなかった、という状況になってしまうのは聊か不義理かと。臍を曲げる程ではなくとも、良い気分はしない筈です」
　これ以上見舞客が詰めかけるのは御免なのか、ミラが再度の溜息をつきながら否の声を上げるが……ブランの極真っ当なツッコミに反論を封じられて黙り込む。
「はっはっはっは！　これを期にしっかりと休息を摂るのもよろしいのではないですかな？　現役時代の休暇も疎かであったミラ殿が身を休めるともなれば、異を唱える者はおりませんとも」
　ガンテスの言葉に、部屋主以外の全員が首肯する。
　そう広くも無い部屋に五人も居るせいで部屋は中々に窮屈だ、これでは休む処では無いだろうに。などとミラが珍しく愚痴染みた思考を脳裏に走らせた、その時であった。
　ドドドド……という、足取りも慌ただしく誰かが全力疾走して近づいている音を、室内の全員が耳に拾う。
　音はみるみる間に近づき、程なくしてブーツの靴底が床板を擦って急停止する音が部屋の直ぐ外で聞こえた。

――ミラ婆ちゃんが倒れたってマジかぁぁぁっ!?

ドバーン、とノックもなく扉を蹴破らんばかりの勢いで飛び込んで来たのは、ミラの弟弟子にしてお騒がせには定評のある男――《聖女の猟犬》こと黒髪の青年である。

彼の性格的に、事の次第を聞けば全力ダッシュで姉弟子のもとにやって来るのは予想が付く。なので、部屋に居る全員、青年の来訪自体に驚く事は無かったのだが……。

――大丈夫なんか!? 怪我!? 病気か!? もう治療は済んだのか!?

「人を気にするより先に貴方が治療を受けなさい、何故流血してるのですっ」

バタバタと慌ただしく近寄って来る青年を見て、ミラが間髪入れずに語気を強めて叱り飛ばす。

そう、何故か彼は額に大きめのコブをこしらえ、ちょっと割れているのか普通にデコからダラダラと流血しているのである。額の傷は出血量が少なくとも派手に見えるのもあって、中々に酷い見た目になっていた。

――ちょっと薪割りしてただけだっつーの! 俺の事はええねん、婆ちゃんは何も無いんか!?

普段は姉弟子の厳しい声を聞けば、反射的に背筋を伸ばして正座の態勢に入る男であ

るが……今は知ったこっちゃないとばかりにベッドの傍にズカズカと歩み寄る。
　呆れと疑問が混ざった声色で呟いたのはシルヴィーだ。
「聞き違いかしらぁ……薪の代わりに額が割れてる薪割りとか聞いた事無いんだけどぉ」
「此処近日、猟犬殿は魔力量を増加せんとする鍛錬に余念が無いようですからな！　部位鍛錬も兼ねて五体を用いた薪割りを行っていたのやもしれませぬぞ！」
「いやガンテス、それを鍛錬にするのは君だけだから。頭突きで杭を打ち込むだの指先で薪を二つに毟るだの、普通の人間はやらないからね？」
　枢機卿と司祭と教皇がトンチキな会話を繰り広げるのを他所に、顔にデカデカと『心配』と書いた青年は姉弟子に詰め寄り、その姉弟子当人とブランに血の垂れた顔面を左右から拭かれている。
　これで室内には六人――いい加減、キャパオーバーと言っても良いのだが、ここに来て更に追加がやって来た。
「っ、はぁ、結局追いつけなかったか……！　気持ちは分かるが全力疾走し過ぎだろ……！」
「にいちゃん、血出てるって！　おでこ！　その状態じゃシスターに逆に心配かけちゃうよ！」

先の青年程では無いものの、それでも慌ただしく駆けて来たのは教会の二枚看板たる聖女姉妹――レティシアとアリアである。

開けっ放しだった扉に飛び込んできた二人は、半ばすし詰めの様になった部屋を見て軽く目を見開き、顔を見合わせた。

「うわ。凄い人数……と、取り敢えずにいちゃんのおでこを治したいんですけど……」

「あと、ヒッチンさんの健診だな。皆、ちょっと通してもらって良いか？」

「もう好きにして下さい……」

非常に珍しい事に、なんだか諦めた様な、やや投げやりな口調になったミラが天井を仰いで三度目の溜息をつき、溢した声が過密状態となった室内へと静かに響いた。

女性の健診、おまけに男が長々と居座る場所でも無いという事で男衆は早々に部屋から追い出され、女子寮の外で待つ事暫し。

そう時間も掛けずにミラの身体を魔法で精査し終えたレティシアが、ちょっと所在無さげに待っていた男三人のもとへとやって来た。

聖女曰く「結論から言えば、疲労と、其処からくる体力低下が原因の風邪」というの

が教会御意見番の現在の体調である。
つい最近帝国で開催された《大豊穣祭》。
ブランの孤児院の子供達の監督役として帝国まで同行し、長い距離を馬車旅で過ごしたというのも原因――と、考えるのだろう。相手が普通の御老人ならば。
だが、体調を崩して孤児院で倒れたのは只の年配のシスターでは無い。
全盛期はとうに過ぎたとはいえ、嘗ての教会最高戦力にして今なお人外級の戦士足り得る百戦錬磨の女傑である。
体力及びそれに伴う継戦能力の低下、というのが主な引退理由ではあるが、子供達でも問題無く行える旅路で彼女が調子を崩す程に消耗するというのは、中々に首を傾げる話だ。
そこまで話を聞いて青年の顔色が変わった。
ただの旅の疲れで倒れるのは不自然――ならば、体力を消耗するような理由がある筈だ。
それが帝都で行われた大捕り物……一夜限りの大掃除に依るものではないか？　彼はそんな推論に至ったのである。
申し訳無さのあまり死にそうな顔色になりながら、青年は自身の推測をその場にいるガンテスとヴェネディエ、それと検査結果を伝えにきたレティシアに告げた。

　その内容に司祭と教皇は納得がいった、という様子で頷く。
「成程。助力を乞うた猟犬殿の御立場からすれば、心痛覚えるは必然ですが……神ならぬ身でこの様な事になるとは分かる筈もありますまい。消沈が過ぎれば却ってミラ殿に心労を掛けかねませんぞ？」
「そうだねぇ。幸いにして大事にはなっていない訳だし……厳しい事を言うのなら、久しぶりの現場仕事でミラにもはしゃぎ過ぎた面があったんだと思うよ？　本来、自分の体力や回復力と相談した立ち回りは戦士には必須なものだしねぇ」
　大人二人が道理の通った慰めの言葉を口にするが……この男、それで納得できるのなら魂フェチなどという独特かつ拗らせた性癖を基点にしたライフスタイルを送っていない。
　女子寮入口前の段差に腰掛け、がっくりと項垂れる彼であるが……続くレティシアの言葉にすぐ様顔を上げる事となった。
「早合点するなよ、あくまで現在の体調が確定したってだけだ――肝心の原因……かどうかは分からないけど、ちょっと気になる点があってな。お前に手伝って貰いたい」

シアとリアの魔力精査で引っ掛かる点があり、でも詳細な検査には俺の助力が必要。
こんな特殊なケースは滅多にない。そもそもシア達の精査で判別出来ない事の方が少ない訳だし。
必然、俺が唯一扱える希少技能――即ち《三曜の拳》が得意とする生物の気脈周りの云々に関してだろう。
が、そうなると不安やら疑問が幾つも湧いてくる。正直、想像もしたくないけど。
症状自体は風邪、という話だったが……聖女の魔法で精査しきれないとなると、婆ちゃんの不調の原因は相当複雑な部類なんじゃなかろうか、とかね……。
そもそも、俺の手が必要という時点でおかしな話なんだよ。
だってそうだろ？　なんせミラ婆ちゃん自身が俺の完全上位互換――《三曜》の奥伝到達者やぞ。俺が診て分かることなら婆ちゃんが気付かない筈が無い。自分の身体の事なら猶更に。
勿論、疑問への答えを予想することは出来る。
でも、正直当たって欲しくはない。
もしミラ婆ちゃん本人にその原因とやらに心当たりがあって、尚且つ自覚症状の類が

あり――それでも黙っていたのだとしたら。

「癒す必要はありません――この傷痕は、私にとっての忘れてはならない〝証〟なのです」

それは、本人に治す気が無い、という事に他ならないからだ。

ミラ婆ちゃんは症状を隠していた後ろめたさからか、少しばかり抵抗がある様子ではあったが結局はシアリアの精査、俺の《三曜》による気脈の観測を受け入れた。

二人の魔法による精査では、胸元――心臓に近い部分を中心に呼吸に併せて微かな魔力の乱れが発生してるという結果が出たみたいだ。

そこを重点的に、俺が婆ちゃんの気脈を診てみると……やはり胸部、特に呼吸器周りに気脈の乱れがある。

症状としてはかなり特異――というか、本来有り得ない状態だ。

乱れの発生源はおそらく古傷の類、しかも相当に昔に打たれたであろうモンなんだが……この古傷自体がちょっとおかしい。気脈に残った痕跡が、まるで《命結》の打効を乗せた一撃を喰らったような状態なのだ。

それによる影響を、婆ちゃんは自身の《三曜》で相殺し、乱れた気脈も地力で調整し

ていたみたいだが……それでも年齢による体力の低下は本来の下降線より大分大きくなる。

今回、体調を崩したのなんてモロにそれが原因だ。そして、年齢を重ねる事でこれから更に症状が悪化する可能性だってある。

早急に確りとした治療を行う必要があった。どんな怪我・病にせよ、症状が軽い内に早期治療を行う方が良いのは言う迄も無い。

単純な肉体の賦活や再生とはちょっとジャンルが違うので、ちょっとした準備や――場合によっては小規模だけど儀式魔法の必要性もあるけど、シア達ならば問題無く完治まで持っていける。

診断結果と共に、姉妹揃って力強く根治可能を断言して。

けれど、それを拒む台詞が治療を受けるべき当人の口から飛び出した、というのが現在の状況なのだ。

そう広くも無い、部屋の主の清貧っぷりがこれでもかと表れた質素な部屋に、痛い程の沈黙が下りる。

言うべき事は言った、といわんばかりに眼を閉じて口を真一文字に引き結ぶ、ベッドの上の姉弟子。

彼女の言葉を聞いて呆気に取られたものの、直ぐに我に返って厳しい表情となったシ

アとリア。
　室内に居る他の面子は、目を伏せたり真っ直ぐにミラ婆ちゃん見つめていたりと、反応は様々だが……口を挟む気は無いのか、静かに事の成り行きを見守っている。
「……もうちょっと具体的な理由を聞いても良い？　シスター」
「拘るだけの何かがあるんだろうけど……聖女（オレ達）を前に治せるもんを治さないって言う人をそのままにするのは、割と沽券に関わるんだけどな？　ヒッチンさん」
　普段だったらシア達もミラ婆ちゃん相手に詰問染みた真似なんて絶対にしない、というか出来ない。
　それでもこのときばかりは、こと誰かを癒す事が関わる話だけは別だ、とばかりに語気を強めて言い募る。
「傷痕を消したくないっていうなら、表面だけなら残す事も出来る。でも、内側の歪になった魔力循環は治すべきだって。このままだと年々悪化していく可能性だってあるんだ」
「今だって皆、心配してるよ。卑怯な言い方になるかもしれないけど、孤児院の子供達だってシスターはずっと元気で自分達の処に来てくれると思ってる、絶対」
　二人の言葉には、なんとか先の言葉を翻意させよう、という必死さが溢れていた。
　大戦中、シアとリアの癒しや浄化で助かった人は多い。下手をしなくとも数千……い

や、万にも届くだろう。
それでも、二人の聖女としての規格外の魔力、魔法精度があっても、助からなかった人間はいた。
その事実に囚われる事はなくとも、忘れ難い、忘れてはいけない記憶だと、二人とも思ってる筈だ。
だからこそ――お互いに手を伸ばせば届く、助かる人間が、その手を伸ばさないという事に納得が行かない。
何より、聖女としての沽券だの癒し手としての矜持だの、小難しい事を抜きに単純にシアもリアも、ミラ婆ちゃんに元気でいて欲しいのだ。
勿論俺だってそうだ。黙り込んでる他の面子だって、本音の部分では同じ意見だろう。
眼を閉じた儘の姉弟子殿は、口をへの字にしたまま黙して答えない。
ただ、その態度から頑として治療に関しては首を縦に振る気が無い、というのが見て取れた。
ミラ婆ちゃんは頭固いし、頑固だし、意外と負けず嫌いだし、何より自他共に厳しい。
けれど、仲間や友人に心配を掛けて、それでも尚、自身の拘りを押し通す様な頑迷な人じゃない――筈だった。

ましてや、シアやリアにあんな表情をさせる選択なんていつもなら絶対にしない。
つまりは、そういう事なんだろう。
婆ちゃんにとって、あの胸の傷痕は単なる古傷以上の意味を持つ、大切な過去(何か)なのだ。
それこそ、現在(いま)の大切な人達が向けてくれる想いと、自分の寿命(みらい)。それを秤にかけても傾きが生まれてしまう位には。
或いは黙したまま見守るガンテス達は、その理由を、傷痕の意味を知っているのからこそ、何も言えないのかもしれない。
一歩引いた処から室内の全員の顔を順繰りに見回して、そんな事を考える。
……さっきも言ったがミラ婆ちゃんは頑固だ。
一度こうと決めたら――ましてやそれが自身にとって譲れない類のモノだというのなら、梃子でも動かないだろう。

――なら梃子じゃなくて超大型の重機を用意してやれば良いんだヨォ！

我が姉弟子にとって、自分に刻まれたその古傷は大切な記憶に繋がるものなんだろう、それはなんとなく分かる。
パッと診ただけでも理解できた。胸に喰らった《命結》……或いはそれに近い性質を

もった打撃は、おそらく聖女の癒し無しに根治は不可能な練度の一撃だ。
それこそ現役時代から、自身の戦士としての寿命や、もっと単純に生命的な意味での寿命が削れる事も覚悟の上で、その傷を抱えて戦い、生きてきたんだろう。痛みや違和感だって当時からあった筈だ。
その想いを、知ったこっちゃねえ、いいから治せとは言えない。間違っても。
だが、その上でこっちの意見を押し通す。
何が何でもミラ婆ちゃんにはシア達の治療を受けてもらう。
理由？　そんなの俺が嫌だからだよ。決まってんだろ（真顔
ようやっと平和になったこの世界で、厳しいけど尊敬できる姉弟子と、まだまだ一緒にいたいんだよ。
身勝手な意見である事なんぞ承知の上だ。
が、それこそ今更だ。こちとら聖女様を筆頭に色んな奴をだまくらかして、こっそり一人で邪神の頭叩き割りに行った身やぞ。スタンドプレーは身に沁みついとるわ。
腹は決まった――故にこれより、最速でミラ婆ちゃんの首を縦に振らせる包囲網を構築する！
ゆーても、俺が何かせんでも周囲の人が現状を知れば勝手に説得する側になってくれるだろう。

過去の経緯を知る・知らないでの積極的・消極的の違いはあるだろうけど、治って欲しいと思う気持ちは共通してる訳だしね。

なので、俺がすべきは更なる応援要請――とりわけ、姉弟子殿がどうやっても話をしっかり聞かざるを得ない人を引っ張り出す。

善は急げだ。癒し手（シアとリア）、患者（婆ちゃん）が話し合う光景からそっと背を向け、人数超過が過ぎて狭いので開けっ放しだった部屋のドアから女子寮の廊下へと出る。

「……何方へ行くのですか？」

背後から声が掛けられ、振り向く。

普段より少し揺れた、何処か不安気な声色で問うてきたのは、俺の後を着いて廊下に出てきたシスター・ブランだった。

ちょっと入用なモンを掻き集めてこようかと。他の皆と一緒に引き続き婆ちゃんの説得、引き続きオナシャス。

それだけ言うと、踵を返して廊下を走り出そうとして……けれど身体を引っ張られる感触に動きが止まる。

咄嗟の行動だったんだろうか？　こちらの服の裾を弱々しく掴んだシスターは、自分のした行動にハッとした表情を見せていたが、同時にひどく苦しそうだった。

「私は……きっとミラ様を説得できません」

力無く俯いた顔と、其処から零れる声色は、暗い。
「私が同じ立場だとしたら……あの娘が、あの娘達が残したものが、例えそれが傷痕であったとしても、私もきっと……」
きっと、同じ選択をしてしまう。
眼前のシスターが、そう言葉にならない声で呟くのが、分かった。
いや、別にいいんじゃね？　今回は身体に障りがあるから問題になったけど、別にそれ自体は良いとか悪いとかって話でも無いでしょ。
間髪入れずに俺が答えると、何故かシスターは驚いた様に顔を上げる。
そんなおかしな事言ってないと思うんだが。
共感出来ちゃうから説得する側に回れない。
けど、元気でいて欲しい。
これらの気持ちは矛盾したり相反するようなモンでも無い。結局の処、どっちもその人やそれに関わる過去を大事に思うが故ってやつだ。
幸いにして、説得に回ってくれるであろう人はシアリアを筆頭に大勢いる。
シスターはミラ婆ちゃんがああも頑なに治療を拒む理由を知っとるんやろ？　なら、担当が違うってだけだ。
話をしてやってくれよ。過去を共有できる人にしか出来ない、思い出話を。

傷痕が無くても、痛みが無くても。
想い出は無くならないと、そう思えるくらいに。
俺の下手糞な激励っぽい言葉を受けて、シスター・ブランは掴みっぱなしだった服の裾を離し、ぎこちなく――けれど少しだけ笑った。
「……そう、ですね。それなら、得意分野です。ミラ様とのお茶会の話題は、いつもそうですから」
ありゃ、こいつは釈迦……もとい、女神様に説法ってやつだったか。まぁそらそうだよね。
そうお道化て返して、改めてミラ婆ちゃんの様子を気に掛けて欲しい、と告げて。
今度こそ廊下を走り出そうとした瞬間の事だった。
「……え？」
俺を見つめる、ある程度は暗い雰囲気が払拭された栗色の髪の美人さんのお顔が、きっぱりはっきりと驚きに染まる。
それに首を傾げる間も無く、唐突に片頬を伝った熱い感触に、驚いて指先を這わせてみた。
……おぉ？　濡れとる。涙かコレ？
流石は大聖殿の聖職者というか、教会御意見番が心配ではあっても、こっそり中の様

子を立ち聞き、なんて人は廊下には居ない。
なので、目撃者はシスター・ブランしかいないのだが……俺の方は唐突に頬を濡らす滴に困惑することしきりだ。
確かに姉弟子殿が抱え込んだものの為に自身を蔑ろにしてるのは、見ていてしんどかった。今だって心配もしてるし、不安だって感じてる。
でも、泣くのも嘆くのもまだ早い。ミラ婆ちゃんも直ぐにどうこうなるって段階では無いし、色々とやれることはある筈だ。
だというのに、人が泣くときには付き物の、嗚咽やせり上がる感情の波も特に無く、只々、片方の眼の涙腺だけがぶっ壊れたみたいに涙が頬を伝う。
あぁ……そっか。
なんとなく、腑に落ちた。
――こいつは、お前さんの涙(モン)か、相棒。
（う”ーっ”……ブラ”ン”～～ッ、ごじゅじ～ん”、ミ”ラが、ミラがぁ……）
内心での問いかけに、応じる様に伝わって来る感覚は、酷く揺らいで、漠然とした想い(もの)で。
なんとなく、寝込んだ母親を前にして不安で泣き出しそうな子供――そんなイメージが脳裏に浮かぶ。

こうなると、流石に鈍い俺でも気付く。
鎧ちゃん――正確には、鎧ちゃんに《三曜》を継承させた嘗ての使い手は、ミラ婆ちゃんと深く関わる人物だったんだろう。
ひょっとしたら、問題となってる傷痕にも関係あるのかもしれない。
一部か、全部かまでは分からないが……技術を丸っと継承させたと言う事はその身や魂を侵食され、取り込まれ――それは今でも魔鎧の中に存在している筈だ。
……うん、なら猶の事、ミラ婆ちゃんには元気になって貰わんといかんな。
ラヴリーマイバディがこれ程分かり易く――それこそ、俺の身体に涙という形で同調が起こる程に、哀しんで、苦しんでいる。
もうこれだけで俺が自重なく走り出す理由になった。元から自重する気もないけどな！
この事を姉弟子殿に告げてしまうのも有効な手段となる可能性はあるが……先ずは強力な味方への応援要請から熟すとしようか。
と、そのときだ。
涙はそのままに気合を入れる俺を見て、正面にいるシスター・ブランが「あぁ……」と、深く、とても深く息を吐きだした。
「やはり、そうでしたか。貴方は……」

その吐息は、溜息というよりは胸に満ちて溢れ返った感情が零れ落ちたようで。
彼女の腕が俺の目元へと伸ばされ、白い指先が流れ落ちる儘だった涙をそっと拭う。
「……貴方達に、お任せします。どうかミラ様を、あの方が背負う最後の荷を下ろせるよう、手伝ってあげて下さい」
……あいよ、お任せあれ。
泣き笑いにも似た表情で深く頭を下げるシスターに、俺は力強く首肯して。
善は急げとばかりに、女子寮の廊下を駆けだしたのであった。
とりあえず、最初に向かうは弐ノ院。次に参ノ院だな。魔道具の貸し出しはスカラが全般の権限を持ってるし、トイルには事前の根回しをお願いしないといかん。

ミラが倒れてから、数日が経過した。
レティシアとアリア、それに彼女達の必死な様子に説得する側に回ったガンテスなどが話を続けているものの、女傑は首を縦に振らない。

数年後には本当に危険な状態になるかもしれない、そう告げる聖女の言葉にも、彼女は動ずることなく。

「……これまでに何人も見送りました。私よりも若い者達を、大勢。年寄りにやっと来るべき時が訪れるというだけの話です。順番としては、寧ろ遅すぎる程でしょう」

覚悟の決まった、どころか、何処か晴々とすらした口調で言う始末である。

平和な時代が訪れ、自らが背負っていた、背負い続けるべきであった筈のものは、自慢の弟弟子がその殆どを解き放ってくれた。

未練が無い訳では無い。だが、もう十分過ぎる程に貰った。見たかった光景を見れた。

そう述懐する彼女は、酷く穏やかで、満足気で。

翻意を促そうとした者達――特に齢を重ねた者であるほど、納得は出来ないのに理解は出来てしまうので、なんとも歯がゆい思いを抱く羽目になっている。

彼女が嘗ての戦績や立場に相応しき地位にあれば、その辺りの職責をどうするのかと持ち前の責任感を刺激する事も可能だったのだろうが……未だに公的な立場はただのいちシスターという意味不明な立ち位置の教会御意見番であるからして、それも不可能だ。

「……難敵すぎる」

「骨が折れる、ってレベルじゃないけど……やっぱり諦めるなんて出来ないよ」
「そうだな、それはそうだ」
聖女姉妹は姉の自室にて、今日の説得が不発に終わった事にぐったりとしていた。
姉は僧衣のままで寝台の上に力無く寝転がり、妹は机の上に突っ伏して、其々に溜息をつく。
彼女達とて、漸く掴んだ平和な今が永遠と続くとは思っていない。
人は、命は老いる、巡る。何時かは等しく女神の御許へと還る。
それは、人外級へと到達したことで定命の其れより長い時間を生きるであろう者達であろうと、例外では無い。
ましてや、今回の相手は教会最古参の古株である女傑だ。嫌な話であるが、確かに年齢的な順番という点で見ればミラの言葉は的外れでは無いのである。
――的外れでは無い。けれども。
「それは今すぐって話じゃないだろ、ヒッチンさん……」
寝台に転がったまま、天井を眺めてレティシアが呟く。
何時か訪れる『そのとき』は、きっとまだまだ先の筈だ。
そうであって欲しい。そうでなければ、何のためにあの戦争を生き抜き、終わらせたのか。

順番とは言うが、古参の人達は自分達が転生してくる前からずっと戦い続けてきたのだ。

それと同じくらいに平和な時代を満喫して、良い思い出も楽しい思い出もたっぷり作って、沢山の土産話を手に入れてから旅立っても良い筈だ。

そんな事を考えていると、アリアが机から身を起こし、レティシアの方へと向き直る。

片方の手で自身の銀の髪の先端を弄り、少女ははにかんだ。

「ボクさぁ……もし、もし、教会でそういう式を挙げるとしたら……最初に隣を歩く役は、先生にお願いしたいなぁ、なんて思ってるんだ」

照れ臭そうに、頬を染めて未来を語る妹の言葉に、姉もベッドから身を起こして眼を合わせる。

「神父役はヴェティお爺ちゃんで……式の前の控室とかで、準備を手伝ってくれるなら……シスターかアンナが良いな、なんて思ってた」

「……そりゃ豪華にも程がある面子だな」

婚前の誓いを問う役が教皇という時点で相当だ。

だが、レティシアとしても特に反対意見は出ない。実際にその要望が通るかはさておき、仮に自分が同じ想像をしても面子は似通ったものになると思ったからだ。

「そうなるときまで――ううん、そういう日を迎えても、ずっと皆に元気でいて欲しい。

ずっと一緒にいたい、って思うのは我儘なのかなぁ……」
「かもな。けど、我儘である事と間違いである事はイコールじゃないだろ」
　極論、レティシアの『繰り返し』も、始まりは親しい人をあの戦争で失くしたくない、という強烈な意思がトリガーとなっていた。
　その結果が今だと、あの青年を引き寄せたというのであれば、自身の我儘を誇りすらしてみせよう。誰であれ間違いなどとは言わせない。
「まぁ、何にせよ、だ。ヒッチンさんに治療を受けさせる事を諦めるつもりは無い。そうだろ？」
「そうだね。にいちゃんも何かするつもりみたいだし、それで進展が生まれるかも」
「あぁ、いつもそうだったしな。今回も期待しておくか」
　この件が始まってから直ぐに用がある、と言って姿を消した青年の姿を思い浮かべ、二人は少しだけ表情を明るくして微かな笑みを交す。
「――それはそれとして、式は多分オレが挙げると思うんだよな。アイツがそーいうの嫌がらなければ、だけど」
「あははっ、ナイスジョーク。言い出したのはボクだし」

バチッ、っと。聖女の私室に火花が散ったように見えた。
普段は鞘当てともなれば聖女姉と某戦乙女の激突が主ではあるが、今回は珍しく姉妹で発生したらしい。
うふふー、あははー、と絵面だけ見れば非常に秀麗な美少女姉妹が微笑み合っている光景なのだが、この場に居合わせる者がいれば、見えざる圧で圧縮（プレス）されるハムの気分を生で体験できる事だろう。
とはいえ、これも姉妹のじゃれ合いの様なものだ。
親しい人間の今後を左右する一件の最中なので、半ば意図的に普段のやり取りを行ってメンタルを回復させている面もあった。逆を言えば二人とも半分は本気なワケだが。
表面上はニコニコと微笑み合う人外級のじゃれ合い空間を霧散させたのは、室内に響いたノック音だ。
「お休みのところを失礼します。枢機卿（カーディナル）・ストラグルより伝言をお持ちしました」
姉妹は威嚇混じりの笑顔を引っ込め、ベッドと椅子の上から即座に腰を上げる。
位置的に部屋の出入り口に近かったアリアが素早くドアを開けると、参ノ院からの使いである僧は丁寧に一礼した。
「――内容は？」
「はい。都市外に出ていた猟犬殿より連絡があったそうです。取り急ぎ、中央の大聖堂

にお越しいただきたいとの事で」
「大聖堂だな。ありがとう、直ぐに向かうよ」
一礼する僧の言葉に、レティシアが頷く。
てっきり向かう先は参ノ院かと思ったが、聖殿内の他の人間にも同じ伝言を送ったのかもしれない。
距離や集まる人数を考えて聖殿のど真ん中にある大聖堂を指定したのだとすれば、納得がいった。
「急ごうレティシア。にいちゃんの事だし、きっとシスターの事も何かとんでもない用意をしたに決まってるよ」
「だな。さっさと行くか」
顔を見合わせ、頷き合い。
伝言を持って来た僧に見送られ、聖女姉妹は急ぎ足で部屋を飛び出した。

大聖殿中央にある、大陸最大級の聖堂。
レティシアとアリアが到着すると、そこには既にトイルの呼び出しを受けたらしい複

数の人間が集まっていた。
先ずは聖教会のトップたる、教皇のヴェネディエ。
呼び出した当人であるトイル＝ストラグルを筆頭とした三枢機卿。
教会の人型筋肉要塞ことガンテスの姿もある。筋トレの途中だったのか、大聖堂の入口横に巨大な球体状の岩が置いてあったので姉妹も既に居るとは思っていた。
そして、気弱そうなシスター……チェルシー＝ミンスタに付き添われた、ミラ＝ヒッチンその人である。
「……とうに風邪は治ったというのに、何時までも付き添いに人手を割くのはどうなのですか」
「申し訳ないですが、この一件が決着するまでは付き添い人は必須です。我々の心の安寧の為にも、どうか受け入れて頂きたい」
納得が行かない様子で呟かれたミラの言葉を拾い、トイルがぴしゃりと言い切る。
何時もの如く眉間に皺の寄った顔つきで、彼は集まった一同を見渡した。
「では、声を掛けた方々は全員集まった様なので、話を始めたく思う」
「トイル殿、ラック殿とブラン嬢がお見えにならぬようですが……」
「先生の治療に関してならば、確かにその御二人も呼ぶべきではあるのだが……今回は状況が特殊なのです、司祭。内容的にも聖殿内の人間だけで完結させたい」

ガンテスとトイルの会話を聞きつつ、きょろきょろと周囲を見回していたアリアが手を挙げる。
「あの、にぃちゃんは？　戻って来たんですよね？」
今回集まる発端となったであろう青年の姿が見えない事に、当然の疑問が湧いた様である。
何名かも同じ考えだったのか、片眼鏡（モノクル）を掛けた顰め面に向けて視線が集中するが、その当人も疑問は当然とばかりに頷きを返した。
「アリア殿の問いも尤もではある。して、肝心の彼に関してだが……つい先程現地に到着したばかり、という状況らしい。帰還にはもう数日は掛かるとの事だ」
その言葉に、現地？　と首を捻る者が出るのは当然の話であった。
トイルが隣に目配せを行うと、その視線の先に居た弐ノ院枢機卿、スカラが前に進み出て小脇に抱えていた装飾の入った木箱を開ける。
「見ての通り、こちらは遠話用の魔導具です。性能的には以前にアリア殿に貸し出した物と同じですが、儀礼的な面も重視した装飾と、見栄えを重視した材質を使用した品ですな」
「猟犬殿には、こちらを貸し出して目的地へと向かってもらった――何分、使用する御方が御方だ。本来ならば簡易用の魔導具では無く、通信官を用いた大型を扱いたかったの

だが……「ンな嵩張る上にクソ重いモン担いでいけるか」と却下されてしまってね」

何やら意味ありげな事を言うトイルに、事情を知っているらしき教皇と枢機卿以外の全員が怪訝な表情となった、そのときであった。

木箱の中身――柔らかな絹に保護されて中心に鎮座する宝珠が、強い光を放って明滅する。

「む!?　も、もう始まってしまったか。説明の為に半刻は待ってくれと頼んだのだが……!」

スカラが慌てた様子で木箱を聖堂奥の台座に置くと、居住まい正して遠話の魔導具の発動を待つ枢機卿達。

他の面子が驚いたのは、ヴェネディエまで気持ち背筋を伸ばしたのを目撃して、だ。

本人の気質と教皇という立場故、大国の王相手であっても泰然とした態度を崩さぬ老人が、ちょっとだけ鯱張っているのである。なんかとんでもない事になってないか？と心配になるは当然の事だろう。

そして光の明滅が収まり、魔道具が起動する。

膨大な魔力を注ぎ込まれた最高品質の宝珠は、遠く離れた場所の声を極めて鮮明に大聖堂内に響き渡らせた。

『……これで良いのでしょうか？　こ、壊れていないとよいのですが』

鈴を鳴らす様な、年若い女性の声。

その直ぐ後に、そこの装飾の傷は元からです、大丈夫ですお師匠。という、聞き慣れた青年の声が続く。

「……ブッ!?」

「うえぇっ!?」

「ぬぅっ、なんと!?」

「……!?」

女性の声に聞き覚えのある者達から、唖然を通り越して驚愕した叫びや唸り声が一斉に上がる。

その中でもいち早く立ち直ったアリアが、思わず、といった様子で一歩踏み出して宝珠へ向けて声を張り上げた。

「ちょっ、えっ……《半龍姫》様ですよね!?」

『あら、この声は……久しぶりですね。貴女が此処を訪れて半年と経っていないのに、ひどく懐かしい気がします――この身は悠久たる龍であるというのに、なんとも不思議な事ですね』

柔らかな、嬉し気な声が返って来て、アリアもついつい「そ、そうですか？　……えへへ」なんて照れ笑いを返してしまう。

和やかな会話を行う宝珠の発動者と銀麗の聖女であるが、その周囲は阿鼻叫喚にも近い大騒ぎであった。

「うぉおい!?　マジで龍の姫様かよ！　なんつー人を引っ張り出してんだあの馬鹿は!?」

「あ、レティシアちゃんがその反応って事は本当にこの御声は《半龍姫》様のものなのねぇ……念入りにお酒抜いてきて良かったわぁ……」

「これはなんとも……猊下、猟犬殿からお話を伺っていらしたのですか？」

「僕が聞いたのはトイルから事後承諾的な形でだよ。もうその頃には聖都から飛び出していたみたいでねぇ……」

「全力稼働させた魔鎧で最速で霊峰に向かう、との話でしたので……あの短時間で進路上にある近隣の都市への事前通達や根回しは、少々骨が折れましたが」

「正直、私もトイルも霊峰に到着してもあの大慌て振りでは道中の霊獣の警戒対象になってしまう、と予想してたのでもう少し掛かると思ってたのですがねぇ……二日以上早くなるとか……」

「こ、これ私が同席しても良いのでしょうか!?　ひ、一人だけ場違いな気がしますぅ……

！」

皆混乱するのも当然だ。なにせ魔導具より響く声の主は、現存する最後の龍の血脈にして超越者。霊峰に住まいし龍の姫君である。

遠話越しとはいえ、もっとも神格に近い存在として不可侵の扱いとなっていた人物の登場（エントリー）に、事前に知らされていた者もそうでない者も騒然となってしまうのは仕方の無い話だった。

言う迄も無いが、どんな国の王族よりも敬意を払って相対せねばならぬとされる存在である。

先ずは教皇であるヴェネディエが挨拶の口火を切らんと、最初に声を上げてしまったアリアを下がらせて一歩、前へと出た。

「いや、お久しぶりです、姫君。お弟子の身とはいえ、今回は教国の人間である彼が――」

『今回は儀礼的な挨拶は不要ですよ。私は、師として姉弟子の不養生を叱ってやって下さいと末弟子に頼まれただけの身です』

その言葉を受け、大聖堂内の視線が一斉にミラへと向けられる。

色々と斜め上な無茶をやらかす弟弟子ではあるが、まさか自分の説得の為に霊峰にまで赴いて師を引っ張り出すとまでは思っていなかったのだろう。

驚愕やら動揺やらバツの悪さやらで、女傑はこれまで誰も見た事な無いような複雑怪

奇な凄い表情をしている。
一方で、形式的な言葉をやんわりと遮った龍の姫君の声は、少しだけ悪戯っぽいというか、茶目っ気の様な物を含んでいた。
曰く、あくまで龍という種族としてではなく、《三曜の拳》という一つの戦武の師として、弟子と話をする場に出てきた、という事らしい。
理屈は分からないでも無いが、少々無茶な話だ、と聖教国のトップである老人は苦笑した。
とはいえ、立場的に上位である彼女がそう明言した以上、多少無茶でも受け入れるのが無難というものだ。
元より、大人数と関わる事を避ける御仁である。
そんな彼女が、わざわざ魔道具を用いて声を届けてくれた事に対して礼を尽くす為に、彼女の知己や国内の代表格を集めた形としたが……ここは全員の挨拶などはすっ飛ばして本題に入った方が良いだろう。
そう判断したヴェネディエは、音声のみのやり取りではあるが宝珠へ向けて丁寧に一礼した。
「分かりました。では、その様に……我が友へ言葉を届ける為にこの場を設けて下さった事、感謝致します」

『えぇ。それでは早速ですが――ミラ、其処に居るのでしょう？』
穏やかに声を掛けられ、呼ばれた当人が僅かに緊張を浮かべた表情で進み出る。
拱手と共に片膝を地に着いて一礼すると、ミラは叱られる前の子供を思わせる、躊躇いがちな口調で声に応じた。
「……お久しぶりです、師よ」
『そうですね、時の流れを感じ取る事に不得手な身ですが……貴女の声を聞けば、やはり懐かしく感じるだけの月日は流れているのだと実感します』
叱る、とは最初に口にしたものの、竜の姫君の言葉は柔らかな儘であり、久方ぶりに話す弟子との会話に喜びを覚えている様であった。
『こうして声を交したのは貴女が一線を退く前でした……遠話越しですから、態々膝を着く必要は無いのですよ？』
「……お分かりになるのですか？」
『流石に見えはしませんが――実際、しているでしょう？　貴女は昔から生真面目が過ぎましたからね』
お見通しだ、とばかりに微笑む師の顔が脳裏に浮かび、弟子が恐縮した様子で再度一礼して立ち上がる。
『ふむ。おそらく、その場には多くの者が集まっているのでしょうが……弟子（この子）と二人で

話しがしたい。可能ですか？』

挨拶を交わしただけであるが、声色からミラの胸中を汲み取ったのか、それとも最初からそのつもりであったのか。

二人きりの会話を望む姫君の言葉に、問われたのであろうヴェネディエが問題は無いとばかりに頷く。

「ええ、御随意に。それじゃあミラ、そちらの魔導具を持って奥――聖処に移動してくれるかい？　僕達は此処で待たせてもらうとするよ」

「……分かりました――師をこの様な形で引っ張り出した事、後で話があります、ヴェティ」

「それは君の弟弟子に言って欲しいなぁ……さっきも言ったけど、僕は事後承諾しただけだし」

丁寧に木箱ごと宝珠を持ち上げ、ジロリと老人を横目で見据える女傑に、当の老人は飄々と笑ってその視線の圧を受け流す。

即座に魔道具越しに、俺に矛先逸らすのやめてくれません!?　いや確かに言い出しっぺも実行したのも俺だったわ！　駄目だコレ糞ァ!?　とか青年の騒がしい声が聞こえてきたが、かの《半龍姫》を説得要員として引っ張り出すなどという無茶苦茶をしたのは、実際彼自身である。残当なので全員にスルーされた。

『貴方もですよ、話が終わるまで客室で待つようになさい』
更に姫君にやんわり諭され、あ、ハイ。すいません。と返す言葉が続く。
すごすごと背を丸めて移動する様が目に浮かぶようで、レティシアとアリアが顔を見合わせてちょっと笑った。
声の発生源たる宝珠を手にした女傑も、師を相手にしても全く調子が変わっていない弟弟子の声に、苦笑の混じった微かな笑みを浮かべる。
「……やはり、私は貰い過ぎです」
そう呟くと、ミラは一度振り向いて、この場に集った――己の傷が癒える事を望む者達を見廻す。
案じてくれる者達に、大きな感謝と、それを今も突っぱねている申し訳無さを同居させた表情で一礼して。
遠話の魔導具片手に、さて、どうやって師のお叱りを乗り越えようかと考えながら、女傑は大聖堂の内陣仕切り奥へと足を向けたのだった。

さて、霊峰のお師匠のもとへと突撃して、ミラ婆ちゃんの説得を頼むという最重要案件を済ませて一泊して。

ついでと言ってはなんだが、彼女に渡す予定だった俺の黒歴史にも関わる遺物――界樹の種も預けて、帰路に着く事はや数日。

見事に姉弟子の説得に成功したらしきお師匠の言によれば、治療の用意自体は皆が既に万全に整えていたらしいので、もう始まっているだろうとの事。

ミラ婆ちゃんの翻意の切欠になってくれれば良い、とは思っていたのだが、しっかり首を縦に振らせたらしいお師匠は流石である。感謝喝采雨あられってなもんだ。

尤も、師匠からすれば大した事は言ってないらしい。

『叱る、とは言いましたが……私はそれとなく伝えただけです。あの子（ミラ）の拘りの根幹を――他ならぬあの子自身の選択で、泣かせてしまっている事を』

俺とマイバディの現在の状態をあっさり看破したのか、眼を細めて俺を見つめ、白く細い指先で軽くこっちの胸元を突いて微笑むお師匠に、なんともむず痒い気分になったり。

あ、ちなみに遠話の魔導具は置いてきた。

夕飯御馳走になってるときに「あの子達と話せるのは、とても良いですね」とか宝珠

を眺めてポツリと呟いてたんでね。仕方ないね。
品質的には最高級の一品だけど、貢物の類なんぞ基本眼中に無い《半龍姫》様がちょっと物欲しげにしていたとくれば、トイルやスカラもそのままプレゼントした事を咎めはしないだろう。寧ろ良い判断だと親指立てて来るまである。
万が一駄目だったとしてもそっくりそのまま弁償したるわい。とんでもない出費だろうけど、価値ある散財ってやつだ。迷う必要すら無い。
帰路は現在半分程度。行きはなりふり構わず全速力で向かったので同じ日数で到着したが、流石に帰り道もあのペースはしんどい。なのでもうちょい時間を掛けて帰る予定だ。
行きは俺が焦ってたってのもあるけど、鎧ちゃんの出力がいつもより高めだったしね。一刻も早く到着すべし、という意志がマイバディから伝わって来た。
速力アップ狙いで道中何回か《銘名（リネーム）》も切ったんだけど、ほぼ最初から完全最適化した状態だったと言えば、我が相棒のとんでもない気合の入りっぷりが分かるだろうか？
街道からやや外れた道なき道を走る。
流石にこの速度で人通りのある舗装された道は危ないからね。人でも馬でも馬車でも、轢いたら粉々にしてしまう。洒落にならん。
しかし、ミラ婆ちゃんは大丈夫かな……もう治療は終わったんだろうか？

シアとリアが治療さえ始めれば根治自体は可能だと断言していたので、行き道ほど焦燥や不安は無いが……まーそれでも気持ち的に心配なのは変わらんからね。あんまりゆっくり帰る気はしないから、少しペースアップしてもいいかもしれない。

鎧ちゃんの出力を上げてみると、ラヴリーマイバディも同感だったのか、思ったより速度が上昇した。

うむ、良いペース。この分なら二、三日後には聖都が見えて来るな。

帝都の一件でも思ったけど、定期的に《地巡》を挟めば完全起動の継続時間が上がったのは、やっぱ有難いよなー。

そんな事を考えつつ、お家への道程を走る俺である。

――で、更に二日後。

特に何事も無く聖都目前まで到着し、日も高いのでそのまま聖殿入りしようかと考えていた俺を待っていたのは、鍛錬がてら都市の外周を走っていたらしいガンテスだった。

「おぉ、御帰りになられましたか猟犬殿！　御無事の帰還何よりです！」

走るときに重りとして担いでいたらしい、アホみたいなサイズの岩を足元にズズン、と下ろす。地面揺れたんですけど。

今更けどさぁ……何メートルあるモン担いでんねんこの人。どっかの岩盤を丸ごとぶっこ抜いてきたのコレ？

「以前、聖殿にて同様の品を持ち込んだ際、中庭の敷地を圧迫するとお叱りを受けてしまいましてな！　都市外で鍛錬するに限り使わんと、城壁の傍に置かせて頂いておるのです！」

小屋みたいなサイズの岩塊をダンベルを隅っこに置かせてもらうみたいなノリで言うのやめよう（真顔

これは良い物ですぞ、じゃねーんですよ。アンタ以外にはただのクソデカい岩だよ。

厳つい角張った顔面に晴々とした笑顔を浮かべるオッサンには、憂いや心配事があるようには見られない。

もうこの表情を見ただけで分かる――婆ちゃんの治療は問題無く、完璧に終わったのだろう。

やれやれ、なんて偉そうに嘆息する様な身でも無いが……肩の荷が下りた気分になったのは確かだった。

「……では、聖殿に向かうとしましょう。皆々、猟犬殿の帰りを待っておられます故」

肩の力が抜けた俺の様子に気付いたのか、こちらの肩に分厚い掌を乗せ、オッサンは目尻を緩めて再び笑う。

うん、そうですね――でも、その岩はちゃんと城壁の傍に寄せておこう？　このまま置き忘れたら邪魔ってレベルじゃねーし。

「おお、確かに。危うく忘れる処でありました」

絶対忘れちゃ駄目なやつぅ！　衛兵さんとかじゃ誰も撤去出来ないでしょ！

御機嫌に大笑する筋肉要塞が岩を片付けるのを待って、二人並んで都市への門を潜る。

聖殿へと歩く道すがら、かいつまんで事の顛末を聞くが……やっぱり姉弟子様の治療はもうバッチリだそうだ。良かった良かった。

「ミラ殿も、かの傷を負ったまま戦った年数が相当にありますれば。それらが全て消え、急速に体調が回復してやや感覚にズレが生じておられる様です。喜ばしき苦労、と呼べるでしょうな」

へ～、そうなんかぁ……しかし、考えてみれば基礎部分に呼気法とかも含まれてる《三曜》で、胸にハンデ抱えておいてあの強さと戦歴だったんだよな……やっぱおっかねえなぁあの人は！

「はっはっはっは！　率直ですな！　拙僧もミラ殿のお怒りを買うは避けたいが故、返

答はご容赦をば！」
それもう答え言ってない？　まぁお互い黙ってれば良いか！
「ですな！」
オッサンが豪放磊落快活なのは今に始まったこっちゃないが、俺の方もミラ婆ちゃんの一件が一番良い形で終ったと聞かされて、気分がアガっている。
二人で馬鹿話をしながらゲラゲラ笑って歩を進めると、あっという間に懐かしの今の我が家、大聖殿が見えてきた。
入口の門構えを守護する人達に心軽やかに挨拶し、意気揚々と中に入る。ただいま我が家よ！
……さーて、やっと帰って来た事だし、早速ミラ婆ちゃんの様子を見に行こうかな！
その後はシア達にただいまも言って、久しぶりの食堂の飯も腹一杯食って、お部屋でのんびりするの！
今の時間だと、姉弟子殿は中庭で軽く身体を動かしてる最中かね？　なんか調子良くなりすぎて調整してるみたいな話だし。
「おぉ、そういえば言い忘れておりました」
俺の後ろを歩くガンテスが手をポン、と打ち合わせて、なにやら思い出したように声を上げる。

「先も申しましたが、ミラ殿は御身体の調子が非常に良好ゆえ、ここ数日は自主鍛錬の時間を増やして身と意識の一致合一を行っている最中でしてな。この時間ならば、中庭にいらっしゃるかと」

お、ドンピシャですねぇ！　ならこのまま中庭に向かおう。

心だけでなく足取りも軽くし、元気な姉弟子の姿を拝もうと慣れ親しんだ聖殿の中を進む。

ガンテスもついてくる気みたいだ。背後から後頭部に向かって投げ掛けられる、相も変わらずニコニコとしてそうな溌溂とした声で続けられる言葉に耳を傾ける。

「いや、技は言うに及ばず、御身体のキレも現役時代を彷彿とさせる健常ぶりでしてな！　拙僧も若かりし頃を思い出す様な心持になり、つい鍛錬(組)のお手伝(手)いのお誘いなどを申し出たのですが……いやはや「その気は無い」ときっぱりとお断りされてしまいました！」

わっはっはっは！　と爆音みたいな笑いで背中にビリビリと衝撃が来るが、このオッサンが御機嫌な時は何時も発生する現象なので気にしない。

へー、そうなのかー。とやや適当に返事しながら、中庭に足を踏み入れ、見慣れた背筋の伸びた姿を探し――。

「なんでも「身体を癒した後、最初に拳を交えるのは弟弟子達と決めている」との事……

これは割り込むは無粋と思いましてな！　何れ機会が巡ることを待ち侘びる事にしたのです！」

へー、そうな……何て??

不穏過ぎる言葉を耳に拾い、勢いよく背後を振り向こうとした瞬間だった。

キン！　という甲高い音を立てて、一瞬で中庭を包む様に魔力障壁が張り巡らされる。

強度も魔法の構成自体も注ぎ込んだ魔力も桁外れ……戦争中に嫌というほど見慣れたソレは、間違いない――シアとリアが扱う結界の一種だ。

障壁が中庭を覆うと同時、何時もの様に訓練鍛錬に励んでいた聖殿内の皆さんが、示し合わせた様に一斉に端っこに移動を始めた。

ご丁寧に置いてある器具の類まで片付けられ、だだっ広くなった荒れ気味な芝生を目の前にして、俺の背中にぶわっと嫌な汗が噴き出す。

振り向こうとした動作は錆びついた様に鈍くなり、ギギギギ、音を立てそうな動きで背後のガンテスの顔を見上げた。

「どうやら猟犬殿の帰還にお気づきであった御様子。レティシア様とアリア様に結界の御助力を願うとは、ミラ殿の本気が伺えますな！」

目の前の筋肉ゴリラは笑顔だった。物凄く。

羨ましいぜ！　今から観戦するのも将来自分が戦るのも楽しみ過ぎてテンション上がって来た！　と言わんばかりにメチャクチャ良い笑顔だった。

どうやら逃げ場は無いらしい。

……ならせめて紙とペンをくれ。当たり前だけど手元に無いんだよ。

「……む？　と仰ると？」

遺書書くに決まってんだろ、言わせんなよ分かれよ。

……嘘だよ書きたくねぇよ！　逃げ出したい！　さっきまであれ程顔を見たかった姉弟子だけど、今は視界に収める事すら無く全速力で脱兎の如く逃げ出したい!!

確かに今回、お師匠にヘルプするとか無茶苦茶やったけどさぁ！　帰って来て早々元気になったミラ婆ちゃんのＫＡＷＡＩＧＡＲＩとか鬼畜ってレベルじゃねぇぞ！

シアーっ！　リアーっ！　なんで協力したぁ!?　理由を言ってミロォ!?

鎧ちゃんを起動してもそうそう簡単にはぶち抜けないであろう、アホみたいに頑丈な魔力障壁を前に地団駄を踏む……見苦しいとか言う奴は俺の代わりにＫＡＷＡＩＧＡＲＩされてみろコラァ！

「拙僧は是非とも次に名乗りを上げたく思うておりますぞ！」

うるせぇぇぇっ！　人型要塞岩ゴリラは例外じゃぁ!?　つーかアンタが外に居たのって、俺が帰ってきたら逃がさない様にミラ婆ちゃんに頼まれてたからだろ！

「わっはっは！　御慧眼ですな！　拙僧もまた女神にお仕えせし者の一人なれば、同じ神を頂く戦友にして先達たる御仁の頼み、どうにも断るは忍びなく！」

少しは悪びれろゴルァッ!?

現実逃避代わりにガンテス相手にギャーギャーと叫んでいると、ついに恐れていたときが訪れてしまった。

「漸く帰ってきましたか。待ち侘びましたよ」

聞き慣れた――もう声からして鉄芯でも入ってそうなビシッとした声色。

反射的に背筋を伸ばした俺は、そのままの体勢でおそるおそる振り返って……振り返って……。

……。

……えーと、どちら様ですか？（困惑

混乱するのも宜なるかな。

中庭の真ん中へと進み出て来たのは三人の年若いシスターだった。

いや、両脇の二人はね、シアとリアなのよ。

俺の顔を見るなり両の掌を合わせ、申し訳なさそうに口をパクパクと動かしている。

……”すまん、許せ”、”ごめん、にいちゃん”、ね。後で覚えていたまえキミタチ。

猟犬印のウメボシをこめかみにお見舞いしてやろう（恨み節

まぁ多分、治療を受ける代わりに今回のＫＡＷＡＩＧＡＲＩ（組手では無い。断じて）に協力してくれ、とか言われたのかもな。そうでなくとも元気になった教会御意見番に迫られて断れるかっつーと、中々に難事であるのは否定出来ない。

……で、だ。

問題は真ん中を歩く女の人だ。いや、マジで誰？

年の頃は二十代半ばか、それよりちょい上、程度だろうか？

切れ長の眼をしたちょっとキツめの美人で、金灰（アッシュブロンド）の髪を後ろで括ってポニーテールにしてる。

背筋は伸び、胸を反らして真っ直ぐに立つ様は何故か非常に既視感があるが……。

「ふむ。混乱しているようですね――では」

これまた非常に聞き覚えのある声が謎のシスターの口から発せられ、懐から眼鏡ケースを取り出して中身をスチャっとばかりに掛ける。

見覚えのある三角型のデザインの細眼鏡が、キランと光って太陽光を反射した。

……。

あの、すいません。もし間違ってたら謝るんで、ちょっと質問良いですか？

「ええ、構いません」

……どうも。あのですね、その……お姉さんって、ひょっとしてミラ＝ヒッチンとか

いうお名前ではないでしょうか？

「お姉さん、などと言われる様な年齢ではありませんが、その通りですね」

……。

……はぁぁぁぁぁぁあっ!?!?

えええええええええっ!?　ちょっ、えええええっ!?

思わず背後にいるガンテスに向けて振り返る。凄いイイ笑顔で頷かれた。意味が分からん。

次いで、ミラ婆ちゃんを自称するねーちゃんの脇にいるシアとリアに視線を向けた。物凄い勢いで『気持ちは分かる』とばかりに頷かれた。意味が分からん。

宇宙猫どころの騒ぎじゃない。

寝転がって煎餅齧ってたら噛み砕いた煎餅の断面にこの世の真理を見つけた様な、超絶に意味不明な現象に俺の脳味噌は完全にフリーズした。

口から煙と魂を吹きそうになっている俺を見かねたのか、シアが後ろ手に頭を掻きながら説明らしきものを始める。

「いや、ヒッチンさんの治療なんだけどな？　乱れてる胸元の魔力とか気脈とか、患部諸々を賦活させて、オレ達が回復魔法をかけ続けた状態でヒッチンさん自身に《三曜》で矯正してもらう、って手法をとったんだよ。患者側が制御する部分が多くなるけど、こ

れが一番、身体に負担が掛からないと思ってさ」
眼鏡を外してケースにしまい直してる隣のシスターの顔を見上げ、金色の聖女様はいまいち自信無さげに語った。
「――で、治った結果。簡易儀式でオレ達が全力で発動させた、細胞を賦活させる魔力が、詰まった栓が抜けるみたいに全身を流れたらしくて……本来なら余剰（オーバーフロー）分は身体から抜けて終わりなのが、ヒッチンさんの《三曜》での魔力制御が高すぎてきっちり全身に馴染んだみたいでさ……なんか終わったら、その……若返ってた？」
ごめん、一個も理解できない。どういうことなの？（真顔
「オレだって分かってねーよ!?　結果起こった事をそれっぽく後から理屈付けしてるだけだっつーの！」
シアの方も謎過ぎる現象に理解が及んでいないのか、キレ気味に返されてしまった。
どうやらここ数日でリアと話し合って出した結論みたいだ。妹（おとうと）分の方も、姉（あね）の叫びに同意する様に深く頷いている。
「……正直に言えば、当事者である私にも理論立てた説明は出来ません」
眼鏡を外して再び懐に収めたシスター……ミラ婆ちゃんが、苦笑に近い形で微かに笑い、唇に緩やかな弧を描く。
「ですが……治療を終え、衰えたこの身にあの頃に近い力が宿ったと理解したとき、思っ

たのです」
同時に腰が深く落とされ、構えを取ると共に踏み出した脚が、深く地面を穿つ。
大地を揺らす震脚と共に、鋭く、深い呼気が吐き出され――姉弟子殿はふっつーに美人になった……というか戻った？　ご尊顔に、穏やかな表情を浮かべる。
「今度こそ、あの日の――いつかの稽古の続きを。終わらせる為では無く、貴方達と、これからも続けていく為に」
これで満願成就、と言わんばかりに満ち足りた表情で告げられたその言葉に、どれだけの願いが、積年の想い込められていたのか。
全部を汲み取る、なんて真似は俺には出来そうにも無かったが……それでも。
「これは、私の我儘です――受け止めて貰えますか？　我が自慢の弟弟子よ」
此処でノーと言えるほど、俺はタマ無しや畜生の類では無かったらしい。
無言で拱手を返して、鏡合わせの如く同じ構えを取った。
――胸を借ります、師姐。
静かに返した言葉に、真っ直ぐに俺を見つめる姉弟子の顔が、堪え切れぬとばかりに破顔する。
今回に限り、身内に戦闘用の全力を向けたくないだの、そういった主義主張は封印して……相棒を起動させた。

《起動（イグニッション）》

魔力が吹き荒れ、装甲が展開――展開……されなかった。

……なんで？（白目

一瞬、呆然とするものの、直ぐに我に返ってマイバディに呼びかける。

え、ちょ、鎧ちゃーん？　どうしましたー？　ここ格好良くシャキーン！　ってする処だぞー？

反応は、無い。

ただ、なんだろう……まるで白目を剥いて頭抱えて、プルプルしながら背を向けてしゃがみ込んでる様なイメージが、妙に強烈に伝わって来る。

（アババババ……せ、《星辰》はヤメッ、こ、粉々になっちゃ……くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；）

ど、どうした相棒!?　何があった!?　まるでトラウマを直撃された様な凄い怯えっぷりやぞ!?

なんか見た事無い反応してるんですけど！　邪神と相対したときすら、待ち望んだ怨敵との戦いって事で歓喜混じりの武者震いしか示さなかったのに!?

師姐！　師姐！　ミラ婆ちゃーん!?　一旦タンマ！　ちょっとだけタイムお願いします！（必死

主武装にして俺の戦力の根源である鎧ちゃんの調子が明らかにおかしいので、必死こいて一時中断のお願いを叫ぶ。

けど、なんかもう感極まったみたいな笑顔でウッキウキなミラ婆ちゃんには聞こえていないようで――。

「さぁ、行きますよ。貴方達二人の力、私に見せて下さい……！」

ちょっ、待っ……嫌アァァァァッ!?

姉弟子が力強く地を蹴り出し、踏み込む音と、俺の情けない悲鳴。

それらが同時に聖都の空に響き渡り、お天道様へ向かって吸われて消えていったのであった。どっとはらい（白目

ゆめみるせいじょとりゆう、ときどきゆき

眠ってる最中「あぁ、コレ夢だな」って自覚する事ってあるよな。
所謂『明晰夢』ってやつだけど……今回、オレが見たソレは始まりからして少々特殊だった。
眼を閉じ、夢現で微睡んでいる最中に耳が拾ったのは、水音。
とても静かで穏やかな水面に、一滴の滴が落ちる様な、そんな音だ。
まるで温(ぬる)めの風呂に浸かってリラックスしているときに聞くような、そんな水音に心地良さすら感じて寝返りを打つ。
そのまま微睡む意識が深く眠りへと沈み込もうとして――鼻先に水滴が落ちる感触に、思わず眼を開いた。
そこで漸く、自分が浅い温泉みたいな湯の中に半身を沈めていた事に気付く。
寝起きだと言うのに奇妙な程にハッキリとした意識を疑問に思う事すら無く、身を起して。

「……何処だ、ここ」
足元に拡がる湯のせいか、やたらと濃い湯気が立ち込める先の見えない……妙に白っちゃけた空間を見廻してオレは呆然と呟いた。

「――うん、夢だなこれ」
頬を抓ってみて、痛くもなんともない事を確認して頷く。
寝間着のまま湯に浸かっていたと言うのに、身を起こした部分も全く濡れてない。
夢……でいいんだよな？　明晰夢にしてもハッキリしすぎだろ。どうなってんだよこれ。
幻術の類にでも掛かったのかとも思ったが、自分にも周囲にも、魔法的な痕跡は感じられない。
寝てる間に無防備な状態で喰らったにしても、流石に違和感くらいは感じるはずだ。そもそも聖女の持つ加護で悪意ある精神への干渉はほぼ弾かれるしな。
湯自体はウトウトしていたときと同じく、実に良い湯加減で延々半身を浸していたくなるが……いくら何でもこの状況で寝直そう、なんて選択を取れる筈もなく、オレは立ち上がった。

湯気でけぶる視界の中、足首程度の深さのお湯を足先でかきわけながら歩き出す。
何か目印があるって訳でもない、湯気で曇った空間を適当に進む訳だけど……なんだろうな、不安とか警戒感は全く感じない。
寧ろ安心感――肩の力を抜いて身を委ねる事が出来る場所にいる様な、そんな感覚すら覚える。
勘の導くまま、ざぶざぶと湯を蹴って歩き続けると、程なくして進む方向に一つの人影を見つけた。人影の方も此方に気付いたのか、小走りで飛沫を跳ねさせながら駆けてくる。
「……やっぱりレティシアだ……えぇと……一応聞くけど、ボクの夢に出てきただけ、ではないよね？」
「お、アリアか。その言い様だと、やっぱただの夢じゃないみたいだな、この状況」
立ち込める湯気を掻きわけて現れたのは、見慣れた銀の髪とオレと同じ空色の瞳――我が妹（おとうと）、アリアである。
……言葉から察するに、どうやらアリアにとって、これは『自分の夢』という認識らしい。
勿論オレにとってもそうだ。つまり、意識は同一の空間にあって、それを互いの見る夢として共有してる、と。

お互い、見ている夢に自分の姉妹（きょうだい）が出てきただけでは無いと確信し、頷き合う。
オレもそうだけど、アリアも寝間着姿だった。寝る前に見た姿そのままだな。特殊ではあるが夢には違いないってのに、変な処で現実に寄せている。
「この状況、なんなんだろうねぇ……」
「さてなぁ……なんとなく、嫌なものでは無いっていう確信だけはあるんだけどな」
「あ、レティシアもそうなんだ？　ボクもだよ。なんかほわほわするっていうか……この足元のお湯も凄く塩梅が良いっていうか……」
それな。心から同意する。
完全に気を抜いてリラックスするにはあまりにも唐突で不自然な状況だっていうのに、このまま座るか寝転がるかして浅い湯の中で脱力したくなる。どういう事なんだろうな、ホント。
とはいえ、実際にその場に腰を下ろすにはやっぱりこの空間は奇妙に過ぎる。
夢見を利用した精神に作用する魔法も無い訳ではないが、そんなものが使われているならとうに俺達の感覚に引っかかってる筈だし……。
ともすればあっという間に緩んでしまいそうな気分を意識的に締め直し、警戒感を奮い起こして思考を走らせる。
姉妹（きょうだい）揃って腕を組み、二人でうむむ、なんて声を上げなら現状の解明に頭を捻ってい

た、そのときだった。
「――！　アリア」
「うん」
湯気の向こうに新たな人影が見えて、オレ達は揃ってそちらを注視する。
今度は誰か。また知った顔なのか、それとも全く知らない――この妙な夢と関りのある奴なのか。
気持ち身構えて待ち構えていると、新たに現れた人影もこっちに気が付いているのか、緩やかな足取りで真っ直ぐに近づいて来る。
足元の湯をまるで跳ねさせることもなく、滑る様な静かな歩で現れたのは――。
「あら……貴女達がいるという事は……やはりこの夢見はそういった空間なのですね」
「……えぇっ?!」
アリアが驚愕の声を上げるのも当然だ。先を越されて口を噤んだっていうだけで、オレも思わず叫ぶ処だった。
のんびりとした口調で納得した様に頷いたのは、予想外にも程がある人物だったのだ。
紺碧の髪に、不思議な光彩を宿す龍眼。
彼女の寝間着なのか、薄手の襦袢みたいな服を緩く纏っている。

ついこの間、我らが教会御意見番、ヒッチンさんの治療の際に声だけを聴く事になった人。

そう、湯けむりの向こうからやって来たのは、霊峰に住まう龍――《半龍姫》こと龍の御姫様だったのである。

龍の姫さん曰く、この状況は相棒の見ている夢の様なものらしい。

そこにオレ達――アイツの魂に自己の魔力で以て『枷』を填めて繋がりを作った者達が、その繋がり(パス)を通じて奴の夢と同調してしまったのだとか。

施した『枷』自体が最低でも聖女(オレ達)レベルの魔力とその制御能力ありきのものだし、更に月の満ち欠けや相棒の体調、眠りについた場所・土地の魔力的な流れなんかが奇跡的に噛み合った結果らしいので、『再現性は皆無の完全なる偶然』との話だ。

「尤も、明確に夢見と呼べるような浅い眠りでは無く、深い睡眠の最中に見る記憶に残らぬ類でしょう。そうでなければ、こうして私達の意識が紛れ込む間隙が生まれる筈もありませんからね」

「《半龍姫》様がこれはにいちゃんの夢だって言うなら、その通りだと信じられますけど

……」

姫さんの言葉を受け、俄然この状況に興味が湧いて来たのか、アリアは足元のぬるま湯以外は何もない謎空間をキョロキョロと見廻している。

まぁ、確かに彼女の判断って事なら信憑性はこれ以上無く高い。知識は言うに及ばず、魔力的な精査や探知・感知においてもこの世界でぶっちぎりのトップであろう人の言葉だ。

しかし、妙に安心した気分になるのも納得がいった。オレ達が一番信頼してる男の夢の中だもんな、そりゃ安心感だって覚える。

取り敢えず、こんな場所ではあるけど折角会えたんだ。挨拶はしっかりしておこうか

――アリアは少し前に会ったばかりだけど、オレとしては顔を合わせるのは久々だし。

彼女がちょっとオレに対して距離があるというか、変に遠慮しているというか……壁があるとは前々から感じでいる。

でもそれは、こちらの『繰り返し』を知っている事が関係していると、アリアが教えてくれた。

だとすれば、姫さんは回帰された世界線の情報まで知覚している可能性もある。実際、そうだとすると彼女の態度も色々と腑に落ちるんだよ。

要は自分が協力を突っぱねたせいで、オレが何度も『繰り返して』メンタルを擦り減

らしていた、なんていう後ろめたさを抱えているって事だろう。
そんなのお互い様なのにな。オレだって、姫さんが戦いを厭う理由をロクに知りもせずに直球で参戦要請しにいった訳だし。
何にせよ、今は片付いた話だ。
結果オーライ、なんて軽く言ってしまうのもどうかと思うけど、オレとしても妹（おとうと）みたいに彼女とは仲良くやりたいのだ。
「お久しぶりです、《半龍姫》様。妙な状況だけど、会えて嬉しいですよ。オレは――」
敢えて軽い感じで、もっと気軽に絡んでくれと、そう告げようとして。
とんでもない力を秘めているだろうに、白魚の様なほっそりとした指先がオレの唇に添えられ、言葉を封じる。
「貴女が言わんとしてくれた言葉は、出来れば実際に再会したときに聞きたいと思います――この空間であった出来事を、貴女達が覚えている可能性は高くない」
そう言って、姫さんはちょっとだけ困った様に、けれど嬉しさも湛えた表情で微笑む。
この場でソレを伝えられても、口にした側のオレが言った事を忘れてしまうのは、少し寂しい。
そう言われてしまえば、こちらも言葉を飲み込むしかない。
というか、完全に同感だしな。オレも伝えた事はきちんと覚えておきたいし、実際に

口にするのは現実での再会にまでとっておくとしよう。

「しかし、この夢ってどうやったら覚めるんだ？　いや、相棒が起きたら自然と終わるんだろうけど」

姫さんの登場＆説明で、危険や問題のある状況では無いと理解出来た御蔭で、もうすっかりリラックス状態に移行してしまったオレ達。

夢の中って事で姫さんが「現実の肩書を殊更に前に出すのも無粋だ」なんて言ってくれたのもあって、オレなんかはもう、生欠伸まで出て来る程に気を抜いていた。

皆で浸っても濡れもしない夢の湯に腰を下ろして、その絶妙な湯加減を堪能しながらのんびりと会話を行う。

アリアの奴なんて俯せに寝転んで水面に顔を沈め、「うわ、水中で呼吸出来る……面白いなコレ」なんて言って喜んでるしな。気持ちは分かるがこの状況で真っ先に試すのがそれか、妹よ。

どっかりと胡坐をかいたオレの疑問に応えたのは、上品な横座りで対面に座る姫さんだ。

「あの子の夢ですから、探せば休眠状態の無意識に近い本人の精神体が何処かにあるとは思いますよ？　目覚めを待つか、精神体に刺激を与えてあげれば、眠りが浅くなってこの夢見の接続も途切れるでしょう」
「成程……ちなみに場所は？」
「現世とは違う、個人の夢の世界ですからね。距離的な概念はあまり意味が無いので、近づこうという意志を強く持って移動を続ければ会える筈です」
相棒の精神と遭遇したら、起こす事自体は簡単らしい。
でもぐっすり寝てる状態だからまともな会話なんかは出来ないだろうし、そもそも起床を促す様な刺激以外には反応すら示さない可能性もあるって話だ。
「そっかぁ……残念。ここでのにいちゃんがどんな感じか、興味があったんだけどなぁ……」
言葉通り残念そうに呟いたのはアリアだ。大して深くも無い湯で遊ぶのはやめたのか、俯せの態勢から頬杖をつく。
確かに気にはなる。夢の中の相棒の姿も見てみたくはあるんだけど……会話も出来ないってんじゃなぁ。何より、見れたとしてもオレ達は起きたら覚えて無いっぽいし。
アイツが起きたら終わる、胡蝶の夢にも似た状況だ。滅多に会えない人も居る訳だし、いっそここで湯に浸かりながらお喋りに興じるのも悪くない気がしてきた。

オレ達が覚えてなくとも龍である姫さんはまた別だろうしな。再会したときにこんな事があった、こんな会話をした、って教えてもらうのも面白そうだ。
「あぁ。それも楽しそうですね」
姫さんがちょっと嬉しそうに微笑むのを見て、オレ達も相好を崩す。
でも、そこで彼女は何かを思い出した様に虚空を見上げ、少し気になることを口にした。
「……しかし、こうして夢見の当人以外が全員この場に留まっていると、少し騒がしい事になるかもしれませんね。害は無いと言えば無いので、興の一つと言ってしまえばそれまでなのですが」
「……？　それってどういう……」
アリアの奴が小首を傾げて問うと、姫さんはその見事な紺碧の髪を片手で軽くかきあげ、空いたもう片方の手でそっと上方を指さす。
見上げると、天井も空も無い、湯気だけが立ち上る白い空間に初めて見る色付いた物体があった。
「……シャボン玉？」
「に、見えるな。シャボンとしては結構デカいけど……」
相棒のものとはいえ、他者の夢の世界、なんていう特殊な環境だ。一般的な魔法知識

はアテにもならない。オレにしろアリアにしろ、目に映る物がどんな代物なのか正確に判断出来る自信は無かった。

ふよふよと漂いながらゆっくりと降り注ぐそれらは、パッと見は色の付いたシャボン玉に見える。

大きさは握り拳程度のものからバスケットボール位のサイズまで様々。透明のものも混じっているが、大抵は薄い青……空色を薄めて溶かしたような色に、薄っすらと金か銀の光を纏っていた。

……なんというか、色からしてオレとアリアに関係のあるものだよな、コレ。害は無いって話だけど……。

雨粒の如く、というにはほど遠いが、そこそこの数であろう落ちて来るシャボン玉を見上げ――次いで、姉妹揃って姫さんの方を見つめる。

出来れば説明して欲しい。相棒の夢の中に来てからというもの、初めてだらけの事ばかり。当然、あれが何なのかもさっぱりだ。

無言の催促が通じたのか彼女は一つ頷き、宙を見上げてその龍眼に空中のシャボンを映しながら説明を開始してくれた。

「あれは『枷』をあの子の内に創るときに、あの子の魂に触れていた貴女達の思念の欠片です。より正確にいうのなら、『枷』を構築した際に発した強い感情や想いの残留思念で

すね。本人の精神がこの場にあるので、引き寄せられてきたのでしょう」

綺麗なものですね、と。

宙を舞い落ちるそれらを眼を細めて眺める姫さんの言葉に、オレもアリアもほえー、なんて声をあげつつ感心してシャボン玉の群れを見上げた。

思念ねぇ……見た目も確かに結構綺麗だけど……。

なんというか、オレ達の……オレの心から零れた想いの欠片がアイツの中にある、っていうのは、なんか良いな。

くすぐったい様な、面映ゆい様な、そんな心地良さを感じて表情が緩むのを自覚する。

アリアも同じ気持ちなんだろう。ゆらりゆらりと降りて来るシャボン玉に手を伸ばし、嬉しそうに眼を輝かせていた。

やがて金の光の粒子が零れる透き通った球の一つが、目の前にゆっくりと落ちて来る。

アイツの中に漂う、自分の想いの一部を確認するように手を伸ばし、優しく一撫でして――。

『はぁ……さいこぉ……今はまだむりだけど、そのうちちゃんとパンツ下ろしたり【自主規制（ピー音）】とかしてみたい……』

「ぎゃぁあああああああっ!?」

シャボンに触れた瞬間、蕩けきった馬鹿っぽい自分の声が響いて、反射的に雄叫び染みた悲鳴を上げて叩き壊す。

パァン、と軽快な破裂音と共に消滅したシャボン玉の残滓から思わず距離を取り、ゼーハーと肩で息をした……な、なんだってんだよこれぇ!?

「ええ……レティシア……」

「待て待て待てアリア！　お、オレはこんな事言った覚えが無いぞマジで！」

ドン引きした、みたいな顔で見つめてくる妹（おとうと）の視線に耐え切れず、羞恥と混乱で熱が集まる頭を回して必死に思念の欠片（シャボン玉）の声を否定する。

……いや、『治療』中にふやけた頭でそんな事を考えた気もしなくはないような記憶がある事を肯定するに吝かではない感じはするのだが！

言葉にはしてないぞ、これは確信をもって言える……！　というか出来るか!?

百面相を晒しているであろうオレの顔を疑わし気に見ていたアリアだったが、ふよふよと漂って来た銀の光を纏うシャボン玉がその頭頂にふわりと乗った。

『――にい、ちゃん……【自主規制(大分長めのピー音)】ッ、【自主規制(ピー音)】……!』

「うきゃぁぁあああああっ!?」

先のオレと似たような悲鳴を上げ、両掌で挟み潰す様にシャボンを叩き割る我が妹(おとうと)である――って、お前も大概じゃねーか!

「な、ななんっ……なんなのさこれぇぇぇっ!?」

「こっちが聞きてーよ!?」

姉妹揃って気不味さやら恥ずかしさで顔を茹蛸みたいに真っ赤にしながら、ギャーギャーと騒ぎ立てる。

そして、ハタと気付いた。

姫さんは言った。このシャボン――思念玉とでもいうべきものは、オレ達が『枷』を相棒の魂に構築し、填める際に強く思った感情の残留思念であると。

おそらく、本来はもっと淡いというか、存在自体が漠然とした代物なんだろうけど……その感情の持ち主であったオレ達が接触することで、曖昧だった思念は明確な”声”という形を与えられたのだ、多分。

治って欲しい、元気になって欲しい……これ以上無茶をしたり、怪我をしないでほし

い。

根底はそんな想いが占めていたのは違いないが、『枷』自体は殆どは『治療』中に創り上げたものな訳で。

その、『治療』の最中はなんというか少し……いや結構……割と多めな比率でちょっとアレな思考というか、若干頭桃色だったかなー、なんて記憶があったりもする訳、で……。

アリアもその事に思い至ったのだろう。ハッとした表情になり、すぐに顔から血の気が引いた。

多分、オレもおんなじような顔になっていると思う――なにせ、見上げればそこにはまだまだ沢山の思念の玉が宙に浮いているのである。

咄嗟に二人で一個ずつ壊してしまったが、あくまで相棒の内に滞留してるだけのオレ達の残留思念だ。そのままだろうが壊れようが、良くも悪くもアイツに影響は及ぼさない。

が、この場にいるオレ達が触れる・もしくは近づくことで活性化し、さっきみたいに声という形で顕れるのであれば……こっちにとっては問題大ありだ。

ぶっちゃけ、オレ達にとってはゆっくりと近付いて来る浮遊型の機雷にも等しい。とんでもない羞恥ネタを暴露してくれる爆弾的な意味で。

この場にいるのがオレとアリアだけならそれによるダメージも少なくて済んだ。
お互いに『治療』してた時のアレなテンションは承知してるしな……改めて突きつけられると、かなり羞恥心を刺激してくれるけど。
だが、此処には第三者――龍の姫さんがいる。
彼女も『枷』の強化に一役買ってくれた身だ。決して無関係ではないとはいえ……だからと言ってオレ達のアレな声を晒すとか出来る訳も無い。
その姫さんは、オレ達が騒ぐのを見て不思議そうに小首を傾げている。
「……？　【自主規制】とはなんでしょう？」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
その桜色の唇からとんでもない言葉が復唱されたのを聞いて、オレとアリアの口から再び悲鳴混じりの叫びがあがった。
「な、なんでもないです！　忘れましょう、ねっ？　《半龍姫》様！」
「そうそう！　スラング的なアレだから！　言葉遣いとしては綺麗なものじゃないから！　わざわざ覚える必要は無いですって！」
こっちの勢いに押されたのか、姫さんは少し仰け反って眼をぱちくりとさせ、コクコクと頷いている。
と、取り敢えずはセーフ……だと思いたい……！　肝が冷えたってレベルじゃないぞ

……!?

（ど、どうするアリア？　よりにもよって姫さんに【自主規制】とか言わせちまったぞ？）

（《半龍姫》様がそのまま素直に忘れてくれる事を祈るしかないよ……うぅっ、シスターに知られたら絶対怒られるやつだこれ）

間近で額を突き合わせ、ヒソヒソとやり取りする。

意図したものでは無いとはいえ、姫さんにえらい言葉を覚えさせてしまった……！

自然主義者や教会宗派の中でも古代神話なんかを重視してる、源流派、とでも言うべき人々は、龍を”女神が創った始まりの生命”として特別視し、尊ぶ側面がある。

そんな龍の最後の末裔である彼女に、無知シチュからのセクハラまがいを働いた、なんてバレたら、如何に聖女といえど源流派の人達に殴り込みを掛けられかねない。

そうでなくともヒッチンさん辺りに知られたら御説教不可避である。実際、姫さんの尻を頭で押し上げるなんていう真似をやらかした馬鹿は即中庭行きだった。いや、それに関してはオレも説教する側で参加したんだけど。

とにかく、ここに留まるのは危険だ。

確信をもって姉妹（きょうだい）で頷き合う。大戦時、デカい戦いや山場を越えたとき並みに心一つにした瞬間だ。

頭上に漂う思念玉が更に降り注いで来る前に、二人で姫さんの手を取って移動しよう

と力説し。
彼女が戸惑いながらも頷いてくれると、善は急げとばかりにその場を離脱する。
オレ達と手を繋いで引っ張られている姫さんが、何だか少し楽しそうだったのがせめてもの救いだ。

踏み出す度、足元のぬるま湯が小さな飛沫をあげる。
水場と徒歩の移動ってのは少なからず足が疲労するものだけど、夢なせいか特に疲れは感じない。そこは助かるな。
だが、良い点ばかりでもない。
いっそ魔法で飛行しようかとも考えたのだが、どうやら魔法全般は殆ど使えないみたいだ。魔力自体はあるので体内で廻す――身体強化とかは出来るんだけどな。
まぁ精霊なんかと違って、生身を持つ種族は精神や魂が発する魔力を出力するのに肉体も必要だし、前準備も無しに別人の夢に接続（リンク）してるんだから当然か。
バシャバシャと小さな水音を立てるオレ達と対照的に、姫さんの歩は実に滑らかで静かである。

　これはもう身に着けた技術としか言いようが無いな。元々存在自体が反則級の龍という種なのに、一つの流派の開祖になるまで技も磨いてるんだ、そりゃ不可侵扱いにもなるだろう。
「へぇー……今はあの種を……なんかにいちゃんがごめんなさい。急にやってきて幾つも頼まれ事とか、御迷惑じゃないと良いんですけど……」
「いえ、いつもの日々に変化が加わったのは中々に新鮮です。久しぶりに山の仔らと話す切欠にもなりましたし、寧ろあの子には感謝しています」
　そんな姫さんではあるが、今はアリアと一緒に並んで歩きながらお喋りに興じている。一応は先頭を歩く形になってるオレも偶に相槌をうって、移動を開始してからはそれなりに和やかな時間が訪れていた。
「うーん、やっぱりこうやって色々と話せたのに忘れちゃうのは勿体ないなぁ……《半龍姫》様、明日の夜は魔道具でお話しませんか？　ボク達が話した事をおさらい出来たらなーって」
「ええ、構いません。ただ、この間の様に夜も深く更けるまではいけませんよ？　この身に毎夜の眠りは必須ではありませんが、貴女達はきちんと睡眠を摂らなければ」
「うっ、気を付けます……明日はレティシアも部屋に来るよね？　ここで聞いた話、忘れたままは嫌でしょ？」

「そうだな……じゃ、枕だけ持って行って明日はそっちの部屋で寝るか」

変則的なお泊り会にも近い感じだ。一人は遠い霊峰からの遠話越しではあるけど、元居た世界でスマホやケータイ使って友達と夜通し喋るのと似たようなもんだろ。

アリアのやつも予定を立てて今から楽しそうではあるが、姫さんにとっても中々無い経験なのか、ちょっとワクワクしてる様に見えなくもない。

というか今、一歩分だけ彼女の足元で小さく水音が立った。楽しみなせいでつい歩が跳ねたのだとしたら、オレ達としても嬉しいものである。

一カ所に留まっていると思念玉が引き寄せられて集まって来るので歩き出した訳だが……アテも無く彷徨っているという訳でもない。

折角だから深く寝こけているであろう相棒を探してみよう、って事で奴の姿を探しながらの移動である。

見つけても多分、目が覚めたらオレ達は覚えていられないんだけどな……そこはちょっと本気で悔しいので、ここでの出来事を問題無く記憶できるらしい姫さんに話を聞きたい処だ。明日の夜の楽しみが増えた。

つい最近あった、帝国での《大豊穣祭》についても語ったりしつつ、三人で進むこと暫し。

相棒の姿を求めて歩き続ければ、自分達が引き寄せられる形でその場に辿り着くだろ

うという姫さんの言は見事に的中していた。
　変わらず湯けむりで視界は良好とは言えないのだが、それを差し引いても唐突に、湯気の向こうに一つの建物が現れる。
　それは何というか……古い日本家屋の建築様式がごっちゃになったみたいな、ちょっと纏まりの無い代物だった。
　屋根の一面が茅葺なのに別の一角は瓦だったりな。ちゃんと見ると不自然なんだけど、全体像でみるとふわっとした感じで違和感があんまりないという、如何にも夢に出て来そうな建物である。
「どうやらこの夢に拡がる湯は、此処が水源のようですね」
　建物の塀越しから聞こえるざぁざぁという小さな滝みたいな水音を聞いて、姫さんが呟く。
「うわぁ、なんかゴチャゴチャしてるけど思いっきり日本の建物だ……にぃちゃんは此処にいるのかな？」
「多分な」
　大きめの庵を塀で囲む家屋を見上げ、夢とは言え懐かしいデザインにアリアが感嘆と呆れ混じりの声を上げ、オレも同意を示して頷いた。
　取り敢えず中に入ってみよう、という事で入口を探して塀の周りをぐるりと一周しよ

うと歩き出したんだけど……ここでちょっと問題が発生した。
幾らも進まないうちに大量のシャボン玉がワラワラと虚空に現れて、建物全体を覆う範囲で緩やかに降ってきたのだ。
皆で移動を開始する前に集って来た量より更に多い。簡単な身体強化程度しか使えない環境ではどうにもならない物量を前に、アリアが宙を見上げて引き攣った声を漏らした。
「か、数が多い……どれだけ頭ピンク色にして頑張ったのさレティシア……！」
「おい聞き捨てならんぞ妹よ。お前の分も大量にあるだろ。六割弱と四割強なんて比率としてはほぼ誤差だろうが」
ゆるゆると降る思念玉の全部が全部、オレ達の痴態から零れた思念という訳でも無いんだろうが……当たり外れの分からないロシアンルーレットなんて試す気にもなれない。
「ふむ……理由は分かりませんが……貴女達はアレに込められた残留思念をあまり発現させたくないのですね？」
怯んで立ち止まったオレとアリアとは対照的に、前に出たのは姫さんだ。
どうやら何とかしてくれるみたいだ。緩い襦袢姿に長い髪を揺らす様は儚げですらあるというのに、その背中はこれ以上無い程に頼もしい。

「壊しても影響は無いとはいえ……個人的には少々偲びないですね。一時的に散らすだけにしておきましょう」

上方の金と銀に光る玉の群れを見つめ、彼女の右手の五指が開かれる。

そのまま右腕を後ろに引き、軽い溜めの後に振り抜かれようとした、その瞬間だった。

瓦屋根の塀の上に、突如として人影が出現して着地する。

足場としては狭い塀の上を軽快に駆けだしたのは、パッと見はアリアより年下の小柄な女の子だった。聖殿の見習いの子達が着るような、簡素な修道衣に身を包んでいる。

綺麗な黒髪に一房の真っ白な髪がメッシュみたいに入ったその娘は、瓦を踏み割る事も無くトトトッと足音で歩幅を図って――上空へ向かって跳躍した。

そのまま繰り出されたのは、なんというか「ホアチャー！」とか聞こえてきそうな見事な飛び蹴りである。

塀の内側に落ちようとしていた無数の思念玉が情け容赦なく蹴散らされ、はじけ飛ぶ。

更に女の子は手近な玉を踏み割りながら足場にすると、構えた両の腕を駆使して建物に落ちようとする金銀の光を纏う空色のシャボンを叩き潰し始めた。いっそ清々しい程に躊躇が無い。

カンフー映画ばりの高速アクションで宙を跳ね飛ぶ小さな身体。某世紀末救世主の

如き拳の連打には、絶対敷地内には入れさせねぇ！　と言わんばかりの気迫を感じる。無言でありながら「アタタタタタタタ…ホワタァ!!」という叫びが聞こえてきそうな勢いだ。

「……アリア、知ってる顔か？」

「うぅん――その分だと、レティシアも知らないみたいだね……」

突如として現れ、更にはっちゃけた行動を始めた見覚えの無い娘の姿に、オレもアリアも唖然として顔を見合わせる。

姫さんだけは女の子の姿――というより動き、か？　それに感心を覚えたのか、「まぁ……上手ですね」なんて言って何度も頷いていたけど。

やがて大して時間も掛けずにオレとアリアの残留思念を消し飛ばし終えた少女は、猫みたいにくるりと空中で回転しながら再び塀の上に着地する。

一仕事してやったぜ！　といった表情で一息吐き出し、額の汗を拭う動作をして頷いて――。

――そこで足場にしている塀の直ぐ傍に居たオレ達に、漸く気付いた。

無言で交わる視線。向けられた瞳は、紅玉（ルビー）を思わせる綺麗な色合いだった。

気不味さ、とは違うのだが……なんとも言えない空気が少女とオレ達の間に流れる。

相変わらず声を発しない少女ではあるのだが、とても表情豊かだ。固まってこっちを

見下ろすその顔には「何故ここに!?」という驚愕が分かり易く張り付いていた。
一秒経ち、二秒経ち……五秒が経過したところで彼女は再起動する。
驚きを押し込めるとキリッとした表情を作り、ババッと音が鳴りそうな勢いで両腕と片足を上げて――所謂、荒ぶる鷹のポーズを取る。
分かり易くこちら……否、オレを真っ直ぐに見つめて「何しにきたオラァ！」と言わんばかりに威嚇して来るチビスケを見て、予感にも既視感にも似た確信を抱く。
オレはこいつとは仲良く出来ない、絶対にだ。どころか不倶戴天の宿敵と成り得る……！
出会ったばかりだというのに、何故か慣れ親しんだ感覚と共に湧き上がる敵愾心。
「……あのさぁ、相手は年下の女の子だよ？」
オレとチビスケの間に散る火花を察したのか、アリアの呆れた視線が頬に突き刺さるが……止めてくれるな妹(おとうと)よ、根拠は無いけど負けられないっぽい戦いが此処にはあるのだ……！
「なるほど、そういう事ですか」
一方で姫さんは何かを察した様で、先程のおチビの動きに感心してのものとは別種――納得の感情を以て一つ頷いた。
「私達はこの中にいる彼に用があるのです。あの子が目覚めるか、眠りが浅くなれば自

然と私達もこの夢より退去出来る事でしょう……通してはもらえませんか？」

塀の上を見上げて語り掛けられる言葉に、オレに対してメンチを切っていたチビスケは視線を外し、姫さんの方を見る。

無数の光彩を宿す龍眼と、真紅の瞳が見つめ合い……直ぐに小柄な身体が塀の上から飛び降りた。

そのままオレ達の傍に着地すると、奴は身長差もあって視点の高さが先程までとは逆転した姫さんを見上げ、ビシィッ！　っと音が鳴りそうな敬礼を決める。ワザとらしい生真面目なしかめっ面からは「押忍、お会い出来て光栄であります！」とでも言い出しそうな体育会系のノリが感じられた。

……なんというか、行動の端々が相棒と似ているというか、影響が感じられる。それがまた気に喰わない。

この場に居ると言う事は間違いなくアイツと関りがあるんだろうけど、マジで何者なんだよこのチビは。

ともあれ、この建物について細部を把握しているらしき案内役の少女に導かれ、オレ達は内部に入る事になった。

ちなみに入口だが、塀で囲われてる癖に正門の類は無く、壁と色も材質も同じな滅茶苦茶分かり辛い勝手口が一つあるだけである。素人の考えた忍者屋敷かよ。

内部は普通の庵、って感じだ。おチビを先頭に板張りの床を四人で進む。
「……夢の中の光景に対して詮無いことですが……珍しい様式ですね」
姫さんは庵の内装を見て興味深そうに周囲を見回している。
オレ達としてもちょっと色々混ざり気味とはいえ、純和風な建物なんて転生以来の光景だ。廊下から見た部屋の中には畳も見えたし、寝転がって感触を堪能したい処ではあるな。夢だからいぐさの香りとか感触がちゃんとあるのか怪しいものだけど。
ちょっと大きめとはいえ、あくまで建物は庵サイズ。そう時間も掛けずに先頭を歩いていた少女の足が止まる。
案内された場所は、『ゆ』とデカデカひらがなで書かれた暖簾の掛かる扉だ。
スライド式らしきそれは既に全開状態で、暖簾を持ち上げて中を見れば――案の定、そこには小さな脱衣所があった。
「うわぁ……テレビで見た昔の銭湯みたいな光景……にいちゃんこーゆーの好きそうだもんね」
アリアの言葉に俺も頷く。
そういえば、アイツ昨日、結局帝都の公衆浴場に行くの忘れてた！　とか騒いでたな……代わりにこんな夢を即日見るとかどんだけ広い風呂に入りたかったんだよ。
昭和感溢れるデザインの脱衣場の向こうには、曇りガラス張りの引き戸がある。

黒髪のちびっ子はやはり無言の儘でその戸を指さすと、脱衣所の端にあるロッカーを開けてなにやらごそごそと探し始めた。
どうやら案内はここで終りらしい。三人で顔を見合わせると、誰ともなく頷き合う。
「どうやら浴場の様ですが……私達も湯浴みの準備をして入ったほうが良いのでしょうか？」
「ぶっ……!?　いや、待った！　中にはアイツが居るしそれはマズいですって！」
着ている襦袢を軽く引っ張って、白い首筋を露わにしながら風呂場らしく服を脱いで突入するか、なんて聞いて来る姫さんを強く制止する。
そ、それは流石に……お、オレ達はあくまでアイツの姿を見に来ただけだし、早く目覚めたいなら寝てるのをちょっと揺すって起こしてやれば良いだけみたいだし？
相棒がこの先に居る状況で脱ぐのは不味いという指摘に、姫さんも今更ながらに気付いたのか、ほんのり頬を染めてバツが悪そうな表情を作る。
どうやら純粋に日本式の風呂に興味があって出てきた発言みたいだ。永きを生きる彼女にとってすら未知の文化、というものはとんでもなく新鮮なものだろうから、心惹かれるのは仕方ないのかもしれない。
「で、でもさ……にいちゃんがこの奥に居るって事は……お、お風呂に入ってる訳で……」

敢えて口に出してなかった事をアリアが言ってしまった。
そう、オレ達がこのまま入るにしても、アイツはこの奥にある浴場で素っ裸で風呂入って、あまつさえ無防備に寝落ちしてる可能性すらあるのだ。
だが、ここで怯むのは間違いだぞ妹よ。
こっ恥ずかしいのは確かだが……同時にこれはチャンスでもあるんだ。
所詮は夢の中で何言ってんだ、と思う奴もいるかもしれないが……逆にこう考えるのだ、『どうせ夢だし、色々見ちゃっても良いじゃないか』ってな……！
残留思念のシャボン玉は、壊せはしても時間が経てばまた形になって漂い始めるらしい。
つまり、だ。
今もロッカーに頭を突っ込んで何やら探しているチビスケが大半を蹴散らしたとはいえ、放置すればまたオレ達の周囲に集って来るだろう。
これ以上、オレ達の痴態を音声再現されない為にも、この奥にいる相棒と会うのは必須……！　眠りが深いというのなら、ちょっと色々触っちゃったりして刺激を与えるのも不可抗力という訳だ……！
我ながら隙の無い理論武装である。なので、オレ達は堂々とこの先へ進めばよいのだ。分かるかねアリア君？

「ごめん。今、回復魔法使えないんだ。この桶で頭叩くしか治療法が思いつかないや」
真顔のまま、脱衣所に置いてあった手桶を手に取って斜め４５度から振りかぶろうとするアリア。妹（おとうと）の反応が辛辣である。
ちなみに姫さんはオレ達の会話を眼を細めて穏やかに聞いているが、ロッカー漁ってるチビからは鼻で嗤うような吐息が聞こえてきた。おう、何か言いたい事があるならこっち見て言ってみろ、子ザル。
取り敢えずアリアの手を押さえ、手桶を元の場所に戻させる。
「さて……言い出しっぺな訳だし、オレが先陣を切らせてもらう」
引き戸に手を掛け、振り返ると……呆れと平常、二種の表情ではあるがアリアと姫さんも頷いてくれた。
軽い興奮で荒れる息を、数度の深呼吸で整えて――よし、いくぞ。
勢いよく、そして意気揚々と、引き戸を開け放つ。
カポーン、と。
オレ達を出迎える様に、浴場と言えばお約束である桶が鳴らす音が響き渡る。
曇りガラスの向こうは、ちょっとした露天風呂だった。
微かに香るのは檜だろうか？　石作りなのに木の香りがするのは相棒の風呂に対する記憶やイメージが混ざって作られた光景だからだろう。

個人用のひっそりとした和風の庵に、温泉露天風呂――相棒の好きそうなシチュのオンパレードである。無意識下でえらく良い夢みてるなオイ。

それで、肝心の相棒だが……確かにらしきものは、居た。

というか、間違いなくそうだ。『枷』だって反応してるし、それは断言出来る。

奴は湯舟には浸からず、竹づくりの管から降り注ぐ打たせ湯の下で、あたたかいお湯にビシャビシャと打たれて気持ちよさそうに高鼾をかいていた。

期待……ん”ん”っ！　予想通り、服は着ていなかったが……全て予想通りとは行かない。

湯に打たれて艶々と輝くのは、濡れそぼった黒と、僅かな白の毛並み。

起きていればピンと上を向いているのだろう両の耳は、全身が濡れているのと熟睡中の相乗効果で、ペタンと伏せられている。

本来より一回り以上は小さくなってしまった身体には、所々に痛々しい傷の痕が走っている……傷痕（そこ）は変わらないんだな。

もうお分かりだろう。相棒は――今の奴の姿はどうみても犬だった。

しかもバリッバリの日本犬、黒柴である。

……いや、夢だしな、うん。

ましてや本人寝てるし、混ざり込んで来たオレ達のイメージとかも影響してる可能性

はあるし、その辺も考慮して然るべきだった。

……別にこの状況なら、ただの夢だというのなら堂々と色々見れるかも、とか期待してねーし！

若干肩を落としたオレとは対照的に、アリアと姫さんは喜色を浮かべて寝こける相棒の傍へと近寄り、膝を着いて手を伸ばす。

「うわぁ……にいちゃんが可愛くなってる……!!　濡れて無かったらモフモフ出来るのになぁ……！」

「まぁ……これは確かに可愛らしくなりましたね。毛色は正反対ですが、あの仔が小さかった頃を思い出します」

今は文字通りの犬と化しているというのに、全力で気を抜いているのが丸分かりであるアホ面で爆睡を続ける相棒。その鼻がぴすぴすと動き、寝息に併せて鼻提灯が膨らむ……それを見て、オレも即座に気分を立て直した。

うん、確かに可愛いな。肩透かしを感じたのは否めないが、これはこれで十分に良いぞ。

特に獣人が好きとかケモナ―嗜好は無い筈なのだが――中身が相棒というだけでなんかもう普通にイケる。

オレも近寄ると、片膝を着いて濡れた背の毛並みを撫でた。

濡れてると毛並みよりもその下の傷痕が痛々しい。可愛いは可愛いが、先に庇護欲みたいなものが湧いてくる。

ついつい夢想してしまうな。黒柴と化した相棒と一緒に散歩したり、ご機嫌な奴に顔をペロペロされたり、一緒に風呂にはいって身体を洗ってやったり、同じベッドで寝たり……あれ？　マジで意外と悪くないな？

実際にそんな状況に陥ったら、困るどころか危険な性癖に開眼する自分が見えて来た。流石に我が事ながらどうなんだ……！

こと自分の相棒（ヒーロー）に関しては、なんとも業の深い拗らせ具合をしている自身に戦慄していると、入るときに閉めてきた引き戸がバッシーンとばかりに勢いよく開かれた。

仁王立ちでふんぞり返って現れたのは、さっきまでロッカーを漁っていたチビスケである。

修道衣の裾は捲って襷で固定され、両手で持つ桶はシャンプーボトルや石鹸にタオル、乾燥へちまやらブラシやらで溢れ返っていた。

頭にも一際大きな桶を引っかけるように被っている。今の相棒ならすっぽりと入れそうなサイズだ。

被った桶がデカすぎて前なんて見えないだろうに、迷いの無い足取りでズンズンとやってくると、チビスケはオレ達の間をすり抜けて相棒のとなりに大桶を置く。

そのままひょいっと黒柴ボディを持ち上げて、桶の中へと移してしまう。それでも起きない爆睡中の馬鹿は、脱力した四肢を揺らしながらされるが儘であった。

おチビは桶を押して再び相棒の身体を打たせ湯の下に移動させると、当惑して見ているオレ達を尻目にシャンプーボトルを豪快に押して中身を掌にぶっかけ、そのまま相棒の背中でわっしわっしと泡立て始める。

いきなり始まったシャンプータイムだが、チビスケは妙に手慣れていた。マジで何者なんだよお前……。

わっしゃわっしゃと背中や首回りなんかを丁寧に洗われて、たちまち泡塗れになった相棒。寝惚けたまま、その尻尾が御機嫌とばかりにブンブンと左右に振られる。

その様を見て、おチビ――謎多き黒髪紅眼の少女は、とても嬉しそうに笑った。

言葉を話さない分、オーバーアクションで表情豊かな娘だが……笑ったところを見たのは初めてだ。

自分も泡まみれになりながら、ぶんぶん振られる尻尾に負けない位に満面の笑顔で相棒の背をシャンプーしている。「お客さん、かゆいトコないですかー」なんてふざけて言い出しそうな楽し気な雰囲気だった。

「むう……」

隣のアリアから、何となく面白く無さそうな気配が伝わって来る。

傍目にはとてもほのぼのとした、心温まる光景ってやつなのだが……オレには妹（おとうと）の気持ちがよく分かった。

多分、感じているのは同じ――幾らかの嫉妬と、焦燥感だ。

今は片方が文字通りのワンコとなっているとはいえ、この二人が並び、仲睦まじくする光景は絵になり過ぎていた。

まるでパズルの大きな欠片（ピース）みたいに、ピタリとハマる。

――共にある事が当然。腹が立つ程に自然に、そんなイメージが湧いてくる位に。

「……」

そんなイメージを払拭すべく、オレは無言で一人と一匹の脇に置かれた桶へと手を伸ばした。

ハッ、負けるかよ。こちとら誰であろうと諦めたり譲ったりする気なんてサラサラ無いんだ。

くたくたになって柔らかいへちまのスポンジを手に取ろうとして――。

スッ、と。桶が引かれて伸ばした指先が空を切る。

桶ごと中身を手元に引き寄せたチビスケに視線を向けるが、素知らぬ顔でスルーされた。

再び手を伸ばす。

指先で引っ張られた桶が濡れた床を滑り、回避される。
……手を伸ばす。
今度は露骨に桶が大きく回り込むように移動し、おチビの後ろへと隠されてしまった。
こ、このガキャァ……！
思わず頬が引き攣る。というか、このやり取り気のせいか既視感があるぞ……!?
見た目年下の小娘に威嚇するのも大人げない。もうこの際、素手で相棒を洗ってやろうと、湯で掌を濡らして黒い毛並みに手を伸ばそうとして。
振り向きもせずに泡塗れの手が振るわれ、こんもりと掌に乗っていた大量の泡の塊がビシャっとばかりにオレの顔面に叩きつけられた。
「……」
無言のまま、顔面を覆った泡を掌で擦り落とす。
立ち上がったチビは、泡濡れの腕を組んで仁王立ちになると――超絶に腹の立つドヤ顔でふんぞり返った。
――お呼びじゃない。弁えろ。
眼は口ほどに、とはこの事だろう。言葉にせずとも一言一句違わず伝わって来る。
露骨に喧嘩を売って来るガキんちょを前に、淑女たる（なんせ聖女だ、否定出来る奴

はいない）オレも、流石にちょっと我慢が利きそうに無かった。
やはりコイツは相容れない宿敵だ……！　あのとき感じだ感覚に間違いは無い……！
「上等だコラァ……！　聖女なめんなよ、べそかいて逃げ出す前に大人しく相棒（ソイツ）を譲りやがれ!!」
顔面にぶつけられた泡を両手に装備し、飛び掛かるオレ。再びの荒ぶる鷹のポーズで迎え撃つチビスケ。
「これは、止めた方が良いのでしょうか……」
「手遅れなんで諦めましょう。もうオチが読めて来た……」
気持ち戸惑ったオロオロとした声と、何だか呆れた様な溜息交じりの声を背後に、桶に収まった相棒を取り返さんと突撃する。
負けられない戦いがここにある……！　覚悟しろドチビオラァ！

うーん……何だか今朝は変な夢をみたわい。
食堂で朝食を食う為に聖殿の廊下を歩く俺は、今朝方に見た奇妙な夢を反芻して首を捻る。
いや、途中までは普通に良い夢だったのよ？
イイ感じの露天風呂でのんびり湯に浸かったり打たせ湯を浴びたりして、心身共にリラックスする夢だ。
昨日、結局帝都での公衆浴場は足湯のみで湯舟には浸かれなかった事を思い出して、その事を未練がましくシアに愚痴ったせいかもしれない。
で、話したのがシアだったせいか、夢にアイツも出てきた。
ぼーっとお湯を浴びていたら、なんか夢なのにドッタンバッタン騒がしい気配がして眼を開けて――そこには唐突に登場してきた我が友人が居たのである。
何故か泡だらけだったシアは、若干眼を血走らせていてちょっと怖かった。そこで目は覚めたんだけど。
まぁ、所詮は夢だ。そもそも悪夢って程怖かったり悪かったりする内容でもないしね。
そんな風に結論づけて顔を上げると、丁度、廊下の向かい側からシアが歩いてくる処だった。

オッス、おはようさん……あれ、どうした？　なんか疲れてない？
「おはよう……いや、疲労は無い、と思う。なんだか夢見が悪くて……」
挨拶こそ返してくれるものの、シアはちょっと歯切れが悪いというか、さっきまでの俺みたいに首を傾げている。
なんやなんや、何か嫌な夢でも見たんか？　続くようなら気分の落ち着くお茶とかお香とか用意して寝た方がいいんじゃないのか？
「……ぶっちゃけ、内容は覚えて無いんだよな。ただ、惜しかったというか、不完全燃焼というか……こう、アレだ。『そこで目が覚めるなよ』って感じが凄い残っててさ……」
あー……あるある。良い夢とか見てるとよくある。
中々機会に恵まれないすげー美味いもんとか、食おうとした瞬間に眼が覚めたりな。アレ、勘弁して欲しいわぁ。凄い損した気分になるよね。
そういうのってお約束だよな、と力強く同意を示してやると、シアも「全くだ」と深く首肯して溜息を一つ吐き出す。
まぁ、なんだ。俺はこれから朝飯だけど、お前さんは？
「夢のせいか、いまいち食欲が無くてなぁ……先に、ちょっと朝風呂でも頂こうかと思って」
聖殿の浴場――は、流石に朝一は閉じてるだろうから、自室の浴室か。

体調が悪いなら長風呂とかはするなよ？　あと念の為にリアやミラ婆ちゃんにシャワー浴びるって伝えんしゃい。
流石に風呂場で倒れられると俺は易々とは踏み込めない。個人的には調子が良くないなら浴室よりベッドに直行して欲しい処だ。
ゆーても、シアも体調管理はしっかり出来る奴だ。というか出来ないと戦時中にあちこちを飛び回るとか不可能だったし。
本人が自己診断して問題無いと思うなら、身体的には本当に大丈夫なのだろう――一応、朝飯を摂ったら様子くらいは見に行くけど。
じゃ、後でな？　と告げて、取り合えずこの場では別れようとして。
不意に伸ばされた手に服の背中の生地を掴まれ、ぐぇ、と短く呻き声が漏れる。
レティシアくぅーん。この服一回ボロボロになったのを帝国で修繕してもらってるから、あまり無体な扱いはやめておくれやす。
「あ……いや、悪い」
咄嗟というか反射的な行動だったんだろうか？
服を掴んだ自身に驚いた様に眼を見張ったシアは、ちょっと慌てた様にパッと手を放す。
だが、数瞬だけ黙考したあと、再び手が伸ばされて今度はそっと裾の端っこを掴んで

来た。
「……なぁ」
んん？　なんぞ？
背中側に引っ張られた布生地を、前から軽く引っ張り直して調整しているとシアはなんとなく、と言った感じで提案してくる。
「――朝飯の前にさ、お前も風呂入らね？　一緒に」
何言ってんのレティシアさん？（素
「いや、なんだろう、深い意味は……無い、と思うんだけど。なんか唐突且つ猛烈にお前の背中を流してみたくなった」
マジで何言ってんのレティシアさん（二度目
照れるでもなく、揶揄う感じでもなく。
真顔で凄い事を言ってくる金色の聖女様に、ゼロセコンドでツッコミを入れる。
友達同士での裸の付き合い、ってシチュに浪漫を感じない訳じゃないが、御自分の現在の性別及び顔面偏差値を考えて言いましょうね！　マジで！
俺も再転生してお前らに治療してもらってからはすっかり健康体だし、その手の話題は色々とよろしくねぇんだよォ！　ミラ婆ちゃんに知られたら後がこえーし、聖殿の若い衆に闇討ちとかされそう！　きけんがあぶない（白目

如何に危険度の高い発言かを力説する俺に、シアはなんとも言えない――苦笑いとも照れ笑いとも取れる笑みを浮かべて肩を竦めた。

「ん、そうだな。幾ら何でも唐突過ぎたか……まぁ、なんだ。夢見が悪かったせいって事で」

そう言って、今度こそ俺の服を掴んでいた手を放して。

「それじゃ、一人寂しくひとっ風呂浴びて来るとしますか！　――今はな」

何時もの調子に戻ると、トレードマークの淡い金髪をかき上げて、ニッカリ笑ったのだった。

白百合と愉快な仲間達（前編）

それは、お日様が中天に昇る最中に見た光景でした。

「お受け取り下さい、巨匠よ」

鳶色の髪と瞳をした野性味のある風貌の男性が、跪いて綺麗な花束を捧げています。

普段は真紅の腰布が目を惹く戦装束を纏っている方なのですが、今日は普通のシャツとスラックスというごく普通の街の人の様な恰好です。

真摯さに溢れた所作で花を差し出すその先には、まだまだ幼い少女――彼女はいつも一緒にいる犬のぬいぐるみを抱き締め、向けられた花束を見てキョトンとしていました。

「おじちゃん、だぁれ？」

「貴女の生み出した名画に心洗われた只の男に過ぎません。敬愛を込めて花捧げることをお赦し願いたい」

時刻は昼前の聖都、表通りの真ん中で繰り広げられる光景に、リリィは一つ頷き――。

「――もしもし、義母様ですか？　お伝えしておきたい事があるのですが」
「お待ちを姫!?　暫く！　母君にノータイムで連絡は勘弁してくださいお願いします!!」

鞄から遠話の魔導具を取り出して起動させたリリィに向けて叫ぶ男性――《魔王》陛下の御声が響き渡ったのでした。

現在リリィは兄様の従者としてのお役目を果たすべく、聖都にやってきています。
本来ならばお家のある魔族領と教国は、頻繁に行き来が出来るような地理関係ではないのですが、色々と特別な事情があってリリィはそれが可能となる機会を頂きました。
なんでも、最近になって大量の転移魔法の魔導具が帝国の遺跡から出たようです……詳細までは分かりませんが、教国と魔族領にも結構な数が受け渡されたとか。
現在は三国で様々な運用が検討されている最中との事で、その一環――試験運用的な形で、リリィは魔族領より魔道具の《門》を用いて聖都への移動を許可されました。お

家から出た後、三十分後にはこうして聖都にいる訳ですから凄いものですね。
　これに関しては《魔王》様の発案あっての事と聞き及んでいます。なので、機会があれば是非とも御礼を述べたいと思っていたのですが……。
「御自分でこっそり聖都に遊びにくるためでもあったとは……」
「……てへっ☆」
　何故聖都にいらっしゃるのか、どうして往来であの様な目立つ真似をしていたのか。
　全部話してください、とお願いした処、正座して洗いざらいを告白した《魔王》様ですが、舌を出して片目を瞑る所作が普通に可愛くないです。反応に困ります。
　本来ならば義母様を通じて《災禍》の皆様に連絡をすべきでしょう。併せて教皇猊下を筆頭としたこの国の偉い方々にも。
《魔王》様が色々とお騒がせな方だというのは、この数ヵ月で理解したつもりです。何か大きな問題を起こす前に各所に報せておくのは必要な事と言えるでしょう。
　そうでなくとも、一国の主が誰にも言わずに外国の首都で遊んでいるという状況がおかしいというのはリリィにも分かります。
　そう、即連絡は必須、なのですが……。
「お願いします姫ぇ！《亡霊》のやつ次は小遣い九割九分カットとか言ってたんです！
　今でも八割カットなのにこれ以上削られたら迂闊に買い食いもできねぇ！」

「そもそもお小遣いを減らされる様な行いを避ければ良いのではないでしょうか？」
「グハァッ!?　姫に正論でブン殴られるのは堪える……！」
瞬時に土下座の態勢になった《魔王》様に押し負ける形で、結局は口を噤む事となってしまいました。
とはいえ兄様の従者として知らぬふりも出来ません。あくまで報告を数時間遅らせる、程度がギリギリの譲歩です。
そう告げると、《魔王》様は再び「へへーっ！　感謝致します！」と上体をべったりと石畳に付けて土下座の態勢になりました。人目もあるので正直やめて頂きたいです。
「だまっておウチをでるとシスターにおこられるんだよ？　おじちゃんもおウチの人にごめんなさいしようね」
「はい！　金言しかと胸に刻みます画伯よ！」
花を捧げようとしていた小さな少女――オフィリの言葉に、《魔王》様は正座したままビシッと音が鳴りそうな敬礼を決めて見せます。
こっそり聖都を訪れたのも、王城の謁見の間に額縁にいれて飾ろうとしていた絵（他の《災禍》の方々に却下されていました）の描き手を探す為だった様です。
顔も名前も知らない描き手をどうやって見つけ出したのか、という疑問はありますが……《魔王》様だから、で納得出来てしまうのはある意味凄いですね。

それに、言われてみればあの独特な絵柄はオフィリの描くものと一致する点が多かったのです。まだまだおねえちゃん力を高める修行の最中であるとはいえ、気付けなかったのは不覚としか言い様がありません。

自らの未熟を痛感していると、《魔王》様が敬礼から挙手に変えて問いかけてこられました。

「ところで姫……今更ですが、猟犬のやつを兄呼びするのは何故でしょう？」

「気軽な呼び方にして欲しいとの事でしたので」

聖者様に対して不敬では？　とも思いましたが……あの方を親しみを込めて呼ぶ場合、リリィ的に一番しっくりくる呼び方が兄様なのです。兄様いわく、ふぃーりんぐ、というものですね。

「――！　俺も是非ともくだけた感じで読んで欲しいなぁ！　ほら、同じ魔族領在住だし！　近所のお兄さん的な感じで！」

「……？　兄様は兄様だけですし、《魔王》様は《魔王》様ですが……？」

「オッフ……一点の曇りもない眼差しでの断言ナリィ……」

正座の態勢から横倒しになって脱力する《魔王》様の傍にしゃがみ込み、オフィリが不思議そうに拾った木の枝で突いています。

それも直ぐに飽きたのか、彼女は枝を捨てて立ち上がるとリリィのもとに駆け寄って

来ました。
「それじゃあいこ、おねえちゃん！」
「そうですね……シスターから渡されたメモはちゃんと持っていますか？」
「うん！　ある！」
　自慢げにポケットから取り出した紙片を受け取ります。
　なにをかくそう、本日はオフィリが大人の同伴無しでおつかいを行う記念すべき第一回目なのです。今日はお友達兼おねえちゃんであるリリィが彼女を監督するお役目を任されたのでした。ふふん。
　当初は兄様（あに）の御傍に控え、従者としての務めを果たそうとしたのですが……兄様（あに）によれば、これもよりぱーふぇくとな従者になる為の修行の一環だとか。友人と交流する事で得られる経験というものは大事だと、そう仰っていました。
「先ずはパン屋さんですか……む、このお店は以前、兄様（あに）方と訪れた事がありますね」
「そうなの？　パンのおばちゃんはね、あまったパンとかコムギをおウチに分けてくれるんだよ。ぎゅーってすると、やさしくていーにおいがするの」
　紙片（メモ）に書かれたお使い内容の一覧を確認するリリィの傍らで、オフィリは手の中のぬいぐるみを掲げてぐるぐると回り出します。おそらく同じ事をパンのおばちゃんなる方にしてもらっているのでしょう。

確か、パン屋の店主である女性は恰幅の良い、焼いたパンの香りが漂う方でした。兄様の背をバシバシと叩いて豪快に笑う姿は記憶にしっかり残っています。ジャムパンもおまけしてくれました。

あれもある種の包容力と言えるのでしょう。「また来ておくれ」と仰っていたので丁度良い機会ですね。

ざっと目を通し終えてメモを鞄にしまうと、萎れた草木のようになって地面に倒れていた《魔王》様が身を起こします。

「姫、姫！　もしかして画伯とお買い物ですか？　なら是非とも御供をさせて下さい！竜だろうが邪神の眷属だろうが立ち塞がる奴は二秒で潰してみせますヨ！」

「聖都内でのお使いで、そんな危険と遭遇はしないと思うのですが」

勢いよく手を挙げ、気炎を漲らせてアピールする《魔王》様ですが……正直な処、同行は御遠慮して頂きたいのです。

これはオフィリのお使いであり、同時にリリィが引率役としての経験を積む機会でもあります。《魔王》様に限らず、大人の方が付いてきては本末転倒というものでしょう。

しかしながら、まるで幼い少年の様に瞳を輝かせている方に対し、ばっさりとお断りの返事をするのは憚られます。

悩むリリィでしたが、お使い役であるオフィリが「だめーっ」と声を上げて頬を膨ら

ませました。
「おふぃーがおかいものするの！　しすたーもぺとらもおるすばん！　おじちゃんもついてきたらダメなんだよ！」
「……！　そ、そうか、これが『初めてのお使い』……！　幼女の貴重な初体験の機会だというのに、俺はなんて無粋な提案を……!!」
雷に打たれた様に身を震わせて目を見開き、《魔王》様がなにやら悔恨の表情で呟きます。
言葉の意味はよく分かりませんが、どうやら同行に関しては諦めてくれそうですね。お見事ですオフィリ。
「あっちにおふぃーのおウチがあるの。おじちゃんもちゃんとまっててね？」
「……分かりました！　姫と画伯が御戻りになるまで画伯の御家を守護させていただきます！」
「オフィリ？　流石にそれは……あぁ、もう見えなくなってしまいました……」
止める暇もありません。
勢いよく立ち上がると見事な敬礼を決め、《魔王》様はそのままオフィリの指し示した方へと走りだしました。土煙をあげてあっという間に曲がり角の向こうへと消えてゆきます。

……あの方をオフィリの家――即ち孤児院に行かせて良いものかと少し悩みましたが、なんだかんだといって子供達に害を為す行為は絶対に行わない方です。《災禍》の方々もその点だけは信頼に足ると仰っていました。

それに教国や魔族領の皆様への報告を先延ばしにするのですから、聖都内を奔放に散策されるより一カ所に留まって頂いた方がトラブルも起こり辛いのではないでしょうか？

色々と考慮すると、オフィリの指示は中々に妙手である気がします。むむむ……益々やりますねオフィリ。これはリリィも負けてはいられません。

手を振って《魔王》様の背を見送ったオフィリは片手にいつものぬいぐるみ、背には今日のお使い用にと準備した背負い鞄姿でこちらを見上げてきました。

「じゃ、いこ！　しゅっぱーつ！」

「……では、気を取り直して。最初はパン屋さんでしたね。早速向かいましょう」

ニコニコとした可愛らしい笑顔に、頷きで返します。

えいえいおー、と。気合を乗せたリリィ達の掛け声が住民区のお空に響いたのでした。

「いらっしゃい！　おや、なんだか見ない組み合わせだねぇ」
何事もなくパン屋さんに到着したリリィ達でしたが、店主さんが以前と変わらぬ様子で迎えてくれます。
……むっ、なにやら「よく迷子にならなかったね」とでも言いたげな気配を感じましたが、その意見は不本意ですね。
帝国では確かに何度か不覚を取りましたが、あれは全く見知らぬ土地と、お祭りの人込みあってのもの。本来ならばリリィはおねえちゃんなので迷子になどならないのです、ふふん。
以前に訪れたのは二ヵ月ほど前ですが、変わらず美味しそうな商品が棚に並ぶ、小さ目ながらも素敵なお店です。兄様いわく、転移・転生した方々の影響を受けた品が多いお店だとか。
他のパン屋さんを知らないリリィには比較が出来ないのが少し残念ですね。何れはそういった差異を楽しめる様にもなりたいものです。
目の前ではオフィリが「どーん！」とはしゃいだ声を上げて店主さんに抱き着き、彼女も笑いながらそれを受け止めています。
「おふぃーはおつかいにきたの。おねぇちゃんとふたりなんだよ」

「成程ねぇ、お友達だったって訳だ。茶でも出してやりたい処だけど、生憎仕事中でね。メモか何かはあるかい？」
「あるっ！」
　ふむ、どうやらリリィに渡された物以外にもオフィリ用の買い物リストがあったようですね。万が一、オフィリがメモを紛失した際の予備をおねえちゃんであるリリィが持つというのは理に適っています。
　彼女は店主さんの腕の中から元気に返答すると、身軽にそこから飛び降りて背負い鞄を床に下ろし、中を漁り。ちいさな身体を自慢げに反らして一枚の紙を誇らしげに取り出しました。
　差し出されたそれに目を通し、店主さんはやはり笑顔のままで「ブランらしいねぇ」と頷きます。おそらく、あちらのメモにはシスター・ブランの添え書きか何かがあったのでしょう。
「小麦と乾し葡萄だね。ちょっと待ってな」
　そういって店の奥に向かうと、直ぐに店主さんは小さな小麦袋と乾し葡萄の入っている布袋を手に戻って来ました。
「ほら、こいつだ。葡萄の方は帰ったら瓶に移しておくれよ――銅貨は数えられるかい？」

「……できるよっ」
「オフィリ、両手の指の数では流石に足りませんよ。支払いはリリィが行います」
十指を立て、自信あり気に両の手を突き出して見せるオフィリですが、店内には他のお客さんもいます。指折り立てて勘定にゆっくりと時間をかけては迷惑となってしまうのです。
自分で全てやりたい、と不満を露わにされると困ってしまうのですが……店やお客さんに迷惑となってはいけない、と言い含められているのでしょう。お店の中を見廻したオフィリはこっくり頷くと、鞄から銅貨の入った小さな革袋を出してリリィに差し出してきました。
手早く中身を摘まんで数えると、代金を店主さんに差し出します。
「では……これで丁度ですね。お願いします」
「はいよ、毎度あり。お嬢ちゃん、オフィリの事をよろしく頼むよ。ペトラ坊やブランがいないとあちこち目移りして直ぐにいなくなっちまうからねぇ」
「お任せください。リリィはおねぇちゃんですから」
先のオフィリの様に胸を張って応えると、店主さんは愉快そうに声をあげて笑いました。
「あっはっはっは！　そりゃ頼もしいね！　それじゃお使いを頑張るおチビちゃん達二

人にご褒美だ。一個ずつおまけしてあげるよ、丁度お試しの品を焼いてたんでね」

店主さんに見送られ、意気揚々とお店を出たリリィ達は軽く手を掲げてハイタッチを交わしました。

「ばっちり！」

「おまけまで頂いてしまいました。これは幸先良いですね」

買った品はオフィリの背負い鞄に、お互いの手には店主さんがおまけしてくれた小さめのパンがあります。

「むき出しで持ち歩く訳にもゆきません。早速食べてしまいましょう――こら、駄目ですよオフィリ。そこにベンチがあるので座ってからにしないと。お行儀が悪いのです」

リリィが言い出す前に、早速とばかりに小振りな丸パンにかぶりついている小さな友人を諌め、手を引いて店の外に備え付けられたベンチへと連れていきます。

「ふぁあ……ふぁまーひ」

目を輝かせてパンに齧りついているオフィリが何やら感嘆の声を上げていますが、小さな口を栗鼠（リス）の様にぱんぱんに膨らませているので聞き取れません。

品は同じなのですから、食べてみれば分かる事……リリィも倣って頂くとしましょう。

「いただきます」

パンを落とさない様に軽く手をあわせ、先ずは一口。

見た目はありふれた丸パンです。とはいえ、焼きたてなのもあってとても香ばしく、外はパリっとしながらも中はふっくらと柔らか……とっても美味しいのです。

牛酪（バター）やジャムがなくともそのまま食べきれる美味しさですが、食べ進めると中に何かが入っている事に気が付きました。

「むっ、これは……」

甘いです。何でしょうかこれは。

歯を立てた断面をじっくりと観察してみますが……リリィの知識には無いものです。

白いペースト状のそれは、ジャムよりは重めの口当たりですが実に滑らかです。何かを濾したものに、砂糖か糖蜜の類で優しい甘さを加えたのでしょうか？

とても上品な甘さで、それ単品でもお菓子として売りに出せそうな……なんとも不思議なお品です。

そして、この白い具材が香ばしい小麦薫るパンと組み合わさったときの完成度と来たら……！　これで試作品とは信じ難いですね。食した感じではデザートに近いので

しょうが、これは花丸級です。

「……！　ンむ……！」

隣に座るオフィリは夢中で頬張り、あっという間に食べ尽くそうとしています。服や頬に食べかすが付いてしまっていますよ。

小さな友人の口周りをハンカチで拭き取り、服についたパンくずを払ってあげながら、リリィもじっくりと未知なる味を吟味します。

むむっ……中の白いペースト……やはり食べた事のない品ですね。なんでしょうかこれは？　丁寧に濾してある分、とっても滑らかで良い口当たりなのですが、その分元の食材を予想するのが困難です。

あとで兄様に自慢……もとい、報告してみましょう。これがどういった物なのか御存知かもしれません。

秋晴れのお空の下、ベンチに座って美味しいパンに舌鼓を打っているリリィ達ですが、あとの買い物も控えています。

時間にはまだまだ余裕がありますが、そろそろ次のお店に向かうべきでしょう。

そう判断し、食べる速度をやや上げた途端の事です。

「――あ！」

「……んぐ。どうしました？」

リリィの持ち歩いている水筒で喉を潤していたオフィリが、びっくりした様子でベンチから身を乗り出し、真横を指さしました。
軽く背筋を伸ばして彼女の身体越しにその方向に首を向けると、直ぐにその理由は判明します。
パン屋さんとお隣の建物の隙間――狭い路地から顔を出したのは、小さな栗鼠にも狐にも似た小動物でした。
大きな耳に大きな瞳。まだ幼体なのでしょうか？　首だけを路地から出してじぃーっとこちらを見つめる様は、非常に愛らしいです。
「わぁ……きつねさん！」
パンを頬張っていたときと劣らぬ程に眼を輝かせ、オフィリがベンチから飛び降りました。
そのまま突撃しては子狐も怯えて引っ込んでしまいそうなものですが、意外にもオフィリは大きく距離を取り、手元に一口分だけ残ったパンを見せつけながらゆっくりと近付いて行きます。
「わんわんもねこさんも、きゅうにさわろうとするとビックリしちゃうんだよ？　とおくからゴハンをあげるの！」
眼をキラキラさせながら自慢気に語る友人の動作は、なるほど、確かに慣れたものを

感じさせます。街の犬猫で既にこの手の状況は経験済みという事ですか。
そーっと、ゆっくりとした静かな歩みで小さな獣に近寄るオフィリですが、肝心の子狐は警戒心が薄いのか、じりじりと後ろに退がるのですが逃げ出すような事はありません。
寧ろ興味深そうに、小首を傾げながらその動きをじっと見つめています。
一人と一匹の静かな間合いの測り合いを邪魔をしない様、リリィは黙して見つめるのみです。
真剣な顔で抜き足差し足間合いを詰めるオフィリと、少しずつ後退する子狐さんに併せて席を立ち、少々離れた位置から彼女達の攻防を見守ります。
あと数歩、と言った距離で立ち止まったオフィリはその場にしゃがみ込んでパンの残りを細かく千切り、石畳の上に撒いて一歩分だけ下がりました。
おそらく子狐はパン屋さんから立ち昇る香りに引き寄せられてきたのでしょう。
スンスンと小鼻を膨らませ、石畳に撒かれたパンから漂う香りが惹かれたものと同じであると気付いたのか、おそるおそる欠片の一つを咥えました。
「――！」
おぉ、尻尾と耳がピーンと伸びましたね。
そのまま夢中になって残りも食べ始めたのを見るに、悪い反応では無さそうです。

カフカフと小さな吐息を漏らしながら小さなパンの欠片を頬張っている子狐を見て、オフィリはニコニコと笑って腕の中のぬいぐるみを抱き締めています。

「かわいいねぇ」

「同意します。しかし、微かに青みがかった白の毛並みですか……」

友人の後ろに回り込み、正面から子狐の姿を眺めると、その神秘的な毛色には覚えがありました。

狭く、薄暗い路地の中でもうっすらと光を放つ、美しいホワイトブルーの毛並み。

リリィの勘違いでなければ、この子は《雪精狐（スノー・フェネック）》と呼ばれる霊獣です。

冬の訪れを告げるとされる雪精の一種で、秋が深まると自然豊かな環境で姿を現すのだとか。故郷である大森林の聖地で見かけた事もあります。

見た者は冬の寒さがもたらす苦難を避ける事が出来る、という言い伝えがあり、御利益ある霊獣として知られているのです。これに関しては聖地でも外界でも共通している様ですね。

問題なのは……《雪精狐（スノー・フェネック）》は間違っても都市内で見かける様な存在では無く、希少性や益獣扱いされている事から外界では捕らえたり狩ったりするのは基本、禁じられているという点なのです。

ましてや幼体です。迷子となって人里に紛れ込むというのは有り得ない種ですし、両

親の傍から人為的に引き離されたのだとしたら……普段は温厚で人に牙を向けない種族といえど、親は激昂して都市に襲撃を行う可能性があります。

これは……ひょっとしなくともトラブルの類でしょうか？

「うむむ……結果論ですが、《魔王》様に同伴して頂いたほうが良かったのかもしれません」

「……？　どうしたの、おねぇちゃん？」

どうやら思わず唸り声が漏れていた様です。

子狐を撫でるか否か、悩んでいたオフィリが不思議そうに振り返って問いかけてくるのに、リリィは説明を行なおうと口を開き――。

「あぁ！　良かった、こんな処にいたのか……！」

なにやら息を切らした安堵の声が背後から上がり、一旦口を閉ざして振り向きます。

そこに居たのは見知らぬ男性でした。

旅人か、商人さんによく見る、ありふれた旅装を身に纏っています。

兄様（あに）よりやや年上でしょうか？　走り回っていたのか息荒く膝に手をついて呼吸を整えており、少し気弱そうな面差しは息切れで眉根が寄り、更にその雰囲気を助長していました。

「はぁ……見つかって良かった……」

呟きながら一歩踏み出す男性は、こちらの背後――《雪精狐（スノー・フェネック）》しか目に入っていなかったのか、位置的に通せんぼする形になった事でやっとリリィ達に気づいたようです。

「……あぁ、すまない。もしかして君たちが見つけてくれたのかな？　その狐はこちらで……何と言うか、預かってる子でね。悪いけど引き取らせてもらって良いかな？」

愛想笑いらしきぎこちない笑みを浮かべる男性ですが、当の子狐は「キュ！」という警戒混じりの高い鳴き声を発して後退りを始めてしまいました。

……さて、どうするべきでしょうか？

男性の言葉をそのまま受け取るのならば、《雪精狐（スノー・フェネック）》を保護して親元なり自然になり返そうとしている方、という事になります。下手に口を挟まず、任せてしまった方が良いでしょう。

ですが、幼いとはいえ知能の高い霊獣がこうも露骨に警戒しているのを見ると、先の台詞を鵜呑みにするのは良くない選択な気もするのです。

逡巡するリリィですが、先に判断を下したのはオフィリでした。

毛を逆立てて可愛らしい威嚇を行う子狐の発する鳴き声を聞くと、彼女は男性に向かって眉根を寄せて問い掛けました。

「……きつねさん、嫌がってるよ？　せまいのもあついのもヤだって」

その言葉を聞くと、男性は分かり易く顔を強張らせました。
逆に、子狐の方はオフィリの顔を見上げ――唐突に飛びついて彼女の肩に飛び乗ります。
色々と疑問はありますが、一人と一匹の其々の反応を見ればリリィにも判断は容易でした。
「失礼ですが、そちらはこの狐さんの種族を理解している、という認識でよろしいでしょうか？」
「……」
「沈黙は肯定と受け取りますが」
前に一歩出て、オフィリと子狐を庇う様に手を翳します。
男性は困った表情のまま、自身の行動を決めあぐねている様です。暴力的な雰囲気は無いのが救いですが……彼の言動によってはオフィリの手を引いてこの場の離脱を図る必要が出てきます。
間の悪い事に人通りは無いですが、ここはお店が並ぶ通りです。すぐ傍にはついさっき出てきたパン屋さんもありますし、御迷惑をおかけしていまいますが飛び込むのも選択肢にいれるべきでしょう。
ゆっくりと気付かれない様に魔力を練りながら、背後の友人の手を取ろうとした瞬間

でした。

「こんな子供相手に、なに手古摺ってるの」

リリィ達の背後――狭い路地の暗がりから手が伸ばされ、オフィリが襟首を掴まれて持ち上げられてしまいます。

暗がりから現れたのは斥候らしき装いの若い女性でした。

整った容姿なのでしょうが、目の下に隈の浮いた、どこか危険な目付きの人です。

魔力探知には多少の心得があると自負しているリリィですが、全く気付きませんでした……間接的に自画自賛になってしまいますが、相当な腕利きの様ですね。

……下手に手を出しても簡単に対応されてしまいますね。オフィリを取り戻すのにはタイミングを計らねばなりません。

「お、おい、相手は子供だ。あまり乱暴な真似は……」

「なら貴方がさっさと商品を取り上げればよかったでしょう。子狐一匹見つけるのに何時間もかけた上、子供に邪魔されて立ち竦むなんて……とんだ愚図ね、やる気あるの？」

乱暴な口調で吐き捨て、女性はオフィリの肩に乗った《雪精狐（スノー・フェネック）》に手を伸ばします。

ちいさな牙を剥き出して噛みつこうとするのをあっさりと躱すと、その手は白い体毛に覆われた小さな身体を無造作に掴み上げてしまいました。

「あー！　きつねさんをイジメたらだめーっ！」

鷲掴みにされて苦し気な鳴き声をあげた子狐を見て、襟首を掴み上げられたままのオフィリが憤慨して声を張り上げます。

至近距離で子供特有の甲高い叫びを受けた女性が、眉を顰めました。

「……煩い子ね。静かになさい」

ここです。

オフィリを掴んだ腕を何の躊躇いもなく振り上げ、壁に叩きつけようとしたのを見て、リリィも躊躇なく魔法を発動させました。

「――！」

圧した風の塊を女性の肘に向けて放ちますが、やはり相当に腕が立つらしい彼女は咄嗟にオフィリを離して魔法を回避してみせます。

ですがリリィのターンはまだ終わっていません。魔法の発動と同時に鞄から取り出した硬い木の実を、魔力強化を用いて全力で投擲しました。

「チィッ、このガキ……ッ!?」

悪罵を吐きながらも、リリィの投擲はしっかり避けられてしまいます。不意を討ったとはいえ、やはり自力の差は如何ともし難いです。

とはいえ、背後へと軽く跳んだ女性からオフィリを離すことは出来ました。

半ば放り捨てられた形になった友人を、すかさず抱き留めます。おねえちゃんとして

怪我はさせられませんからね。
「おい!? 何やってるんだ、こんな小さな子に……!」
「黙ってなさい愚図。魔法を使った方はエルフよ、商品の価値について”知ってる”様だし、このまま帰せないわ」
声を荒げる男性の言葉を、それ以上に語気を強めた声で遮ると、斥候の女性は腰から短刀（ダガー）を抜き放ちました。
「……恨むなら安易に首を突っ込んだ自分を恨みなさいな――エルフなら十分に商品になるから、抵抗しないで付いてくるなら痛い思いはさせないであげる」
ギラギラとした、熾火の様な暗い熱を感じさせる瞳です。
人の情緒や機微を読み取る事はまだまだ未熟なリリイですが、眼前の女性が危険な人だというのは理解できました。
幸い男性の方は荒事自体を忌避している様子ですので、彼の脇をすり抜ける事自体は出来そうですが……このままパン屋さんや近くのお店に飛び込むのは悪手ですね。
先のオフィリへの暴力を見るに、この女性は店に居合わせた人達に刃を向ける事を躊躇しません。周囲を巻き込んでしまえば、最悪、衛兵さんが駆けつけてくるまでに死傷者が出る可能性があります。
そもそも身軽さを強みとする斥候職――それも一流であろう相手に、オフィリを連れ

たまま離脱するのは難しそうです。
「……お買い物の監督役は失敗ですね」
無念です。お友達のお使いも中断させてしまいます。身の安全には変えられないので、仕方ないのですが。
最終手段を発動させようと、友人を抱えた腕とは逆の手で懐を漁った、その時でした。
「うむ。状況はよく分からん。分からんが、幼子相手に刃物を抜くのは感心出来んな」
そんな声と同時に、唸りを上げて巨大な質量がリリィ達の脇を通過しました。
ぐるんぐるんと回転しながら女性の近くの壁へと深々と突き刺さり、ドォンという轟音を立てたのは、とっても大きな剣――一般に特大剣（グレートソード）と呼ばれる、戦士の扱う物としては最大級の重量武器です。
路地の入口に仁王立ちしていたのは、武器に負けない位に長身な獣人の男性でした。魔族領産の剛健な鎧に身を包んでいます。
義父（とと）様以上に獣としての要素が多い方です。相当に先祖の因子が強いのか、見えるお顔は完全に狼さんか犬さんのソレですね。
右手は振り切った投擲のポーズのままで、左手に大量のパンの入った袋を抱えていま

す。お口の周りには沢山の食べかすがついていました。
「とってもおっきいわんわんだぁ！」
「ッ、傭兵ブライシオ!?　何で聖都に!?」
オフィリの歓声と、女性の驚愕の叫びが薄暗い路地裏に響き。
「――む？　このマヨパンとやら、玉葱（オニオン）の量が少々多いな……兄弟には別の品を買っていってやるか」
それには全く頓着せずに、咀嚼中のパンに対する感想が呟かれます。
帝都のお祭りで、催しとして開かれた闘技大会。
そこで選手としてお見かけした獣人さん――ブライシオ様は、大きなお口をもごもごと動かして、口の中にあるパンを飲み込んだのでした。

白百合と愉快な仲間達（中編）

聖都住民区・孤児院にて。

秋晴れの天気の下、穏やかな風に吹かれて干したシーツが翻る。

洗濯物を干し終えたブランは一息ついたとばかりに軽く吐息をつくが、院を切り盛りする彼女の仕事はまだまだ終わらない。

直ぐに空になった洗濯籠を持ち上げると、干し場から踵を返した。

「ふぅ……さて、次はお昼の用意ですね」

そろそろ年長組が湯の準備と芋の皮むきを済ませてくれている筈だ。

空が快晴の御蔭で日の差す場所は温かいが、季節柄、室内や日陰は冷え込むようになってきた。なので、今日の昼食はシチューである。

あとはパンに果物。しかもメインのシチューはゴロっとした肉がたっぷり入った特別製だ。彼女の敬愛する女傑の差し入れにより、今月は食肉に困らないのは正直有難かった。

本来なら金銭的に高くなりそうな物は安易に受け取らない様にしているのだが、今回は少々事情が特殊だ。

可変式の若返りという意味の分からない特技を手に入れた女傑――ミラだが、現在の肉体的性能(スペック)をより実戦に近い空気で確認する為に、聖都より少々離れた場所にある森へと入ったらしい。

当然、奥へと進めば危険な野生動物なども居る訳で。

人外級の戦士ともなれば大抵の獣は近寄る事すらなく遁走するのだが、稀に縄張り意識が強すぎたり、凶暴性の高い個体が襲い掛かって来る事もある。

今回ミラが相手をしたのもそういった個体だった。軽くあしらっても退かずに牙を剥けてくるので、仕留めたのだとか。

「そのまま森に還すのも間違いではないのですが……食用に適している種ですし、血抜きだけして持ち帰って来ました」

鉄面皮のまま、結構なサイズである猪型の魔獣を軽々と担いで孤児院にやってきたミラの姿に、懐かしさとすっかり元気になったのだという喜びで、改めて目頭が熱くなったのは数日前の事である。

分厚く、生半可な鉄より頑強な頭蓋を抜き手でぶち抜かれたらしい猪を獲って来た本人とブランで解体し、後は院の子供達も総出で塩漬けや燻製に変えたりと、期せずして

中々に騒がしく、楽しいイベントとなった。
ちなみに昼食のデザートである果物は、同じ森で子供達の兄貴分であるペトラが手に入れた収穫物だ。
少し前から交流の出来たミラの弟弟子――黒髪の青年に連れられ、基礎的な森の歩き方や知識などを教わったついで、だそうだ。これは以前に約束していたのをブランも聞いていた。
実地での訓練は少々早いのではないかと思ったが……どうやらペトラは斥候（スカウト）や野伏（レンジャー）としての適性があるらしい。青年曰く、普通に自分より才能ある。との事。
院の年長として早くも独り立ちの準備を始めた少年が頼もしくもあり、少し寂しくもある。
そんな彼の努力に影響を受けたのか、オフィリが鼻息荒く主張したのが本日の大人抜きでのお使いであった。
「表通り以外は歩かない様に言い聞かせたし……都市内ならば滅多なことも無いとは思うけれど……」
それはそれとして、心配である。
ブランと青年とで上手く予定を擦り合わせ、彼の従者を名乗るエルフの少女と一緒に行動する事になったとはいえ……やはりオフィリが幼い事もあって心配の種は尽きな

い様だった。
物干しが設置してある庭から院内に戻る途中、子供達の母親代わりであるシスターは悩まし気な様子で少女達が買い物に向かう方角へと視線を向け、小さく溜息をつく。
と、そのときだ。
エルフの血を引く故に常人より聴覚に優れる彼女の五感が、遠くから凄まじい速度で走って来る何某かの足音を耳に捉える。
ドドドドド…という地鳴り染みた音は、真っ直ぐに孤児院のある場所を目指している様に感じられた。
「あら……お客様でしょうか？」
この手の騒がしい来訪者に心当たりが無い訳ではない――件の青年、或いはときたま訪れる筋肉司祭などは、元気に爆走してやってくる場合もある。
あの二人ならば、また何か大荷物を持って遊びに来てくれたのかもしれない。
固辞してもあの手この手で子供達の喜ぶ品を渡そうとしてくる客人達の顔を思い浮かべ、ブランの口の端に苦笑交じりの笑みが浮かぶ。
段々と近付いて来る足音の発生源を出迎えようと、洗濯籠を一旦置いて門構えの外に出て。

「――此処が画伯のお住まいかっ!!　ややっ、貴女がお義理母(か)(あ)さんですか初めまして娘さんを僕にください!!」

（あ、これは殴らないと駄目なやつですね）

目の前まで爆走してきたかと思いきや、ブーツから煙を上げて急停止するなりその場に渾身の土下座を始めた、非常に見覚えのあり過ぎる鳶色の髪と瞳の男。

その口から放たれた世迷言を聞いた瞬間、一点の曇りも躊躇いも無い心でブランは裾から取り出した鈍器(メイス)を振りかぶった。

トンテンカンテン。

リズミカルに金槌で板を打ち付ける音が、孤児院から響く。

「トリー、おんぶー」

「お前の家の壁を直してる最中なんだよ。大人しく絵本でも読んでろ」

「トリさーん、さっきのはなびみたいなまほーみせてー」

「もう少々お待ちをお嬢(レディ)さん。この作業が終わったら屋根の補修に移る前にお見せしま

すからネ！」
「うわー、さべつだー。そういうのよくないんだぞーとりー！　かたぐるまー！」
「馬鹿野郎、これは区別だ！　あと男なら高い景色は自力で見ろ！」
「ぼくしってるー！　そういうのキベンっていうんだよね！」
「えっ、幼児なのにツッコミの切れ味鋭くない……？」
　世界に只二人の超越者の片割れ、魔族領筆頭《魔王》。
　現在、きゃいきゃいと騒いで群がる子供達に囲まれながら、院の壁を修繕中である。《魔王》は初めましてと言ったが、当然、ブランの方は彼を見知っている。大戦時にその武威が振るわれる処を遠目にだが目撃した事もあった。
　殴打から始まった両者のファーストコンタクトだが、ド突かれても痛がりはするが大して痛痒にもなっていない異常な耐久力の前に、先にブランが諦め混じりで折れた形だ。コレを定期的にぶちのめして鎮圧している魔族領の《災禍の席》の面々には敬意やら同情やらで頭が下がる思いである。
　いきなりやって来た傍迷惑な男を客人としてもてなす程、彼女も暇では無い。何より、孤児院内を自由に行動させて子供達（特に女児）に癖の有り過ぎる言動を好き放題に向けさせるのを、ブランの良識と職業意識は看過出来ない。
　なので、容赦なく仕事を申し付けてそれを滞在の条件とした。

相手が人類種最強だろうが一国の王にも近い立場だろうが関係ない。母は強し、なのだ。

だが、子供達の中でも察しの良い子は《魔王》を”自分達を害さない安全な生物”だと認識したのか、建物の細かな修繕に励むその周囲にてちょっかいを掛けている。

幼女に対しての言動こそブレていないが、男の子に対しても割と律儀に反応してやりとりしてるので、どうやらその認識は的外れでも無いようだった。

それにしてもこの《魔王》、建物の修繕に関して妙に手際が良い。

器用さや身体能力の高さもあるのだろうが、下手な大工顔負けの仕事振りであった。

無駄に手慣れている理由は……ぶっちゃけ魔族領の王都に住む者なら誰でも知ってる事ではある。

なにせこの男、部下と派手に喧嘩して城や街をぶっ壊した後は人型重機から釘打ちまで幅広く役割を熟す超（スーパー）土木作業員として、先頭に立って壊した建物の修復を行っているのだ。

年中小遣いを七割以上はカットされている男なので、頑張って直すと貰える駄賃は貴重な収入源なのである。大抵は当人が修繕作業の原因でもあるのでややマッチポンプ感があるが、お駄賃渡す側である王都の民もその辺は理解した上で笑って出してるので問題は無かったりする。

筆頭やめて土木屋に転職したら？　と幹部全員に皮肉られてちょっと泣いた事もあるが、大体自業自得なので残当だった。

程なくして外壁部分の傷んだ箇所のおおまかな修繕は終わる。

約束通り子供達へと小さな花火の様に見える魔力の放出を見せ、その後は直ぐに屋根へと飛び上がった。

来た目的を忘れてそうな勤勉振りだが、実際集中しすぎて半分頭から抜けている。駄賃目的で修繕作業は至極真面目に行っているせいで身体に半ば染み付いたルーティーンに入った《魔王》であった。

とはいえ別事に集中して一時でも忘れる程度の性癖ならば、筆頭補佐たる《亡霊》の苦労はもう少し減った事だろう。

粘土と板を用いて屋根の傷んだ箇所・傷みそうな箇所を手際よく補強していた《魔王》の顔がふっと上がり、雲の少ない快晴の空を見上げる。

同時に秋風がその頬を撫で、風に運ばれてきたものを嗅ぎ取る様にスン、と鼻が鳴った。

「……雨の匂いがするな」

呟くのと軒先から声が掛けられたのは、ほぼ同時だ。

「《魔王》陛下、昼食をお持ちしたのですが……」

やや声を潜めてたブランの言葉は、『陛下』の部分を子供達に聞かせない為だろう。
手にしたトレイにはシチューとパン、果実が一つ、其々皿に載っていた。子供達の本日の昼食と同じ物である。
「此処は孤児院ですので、こういった物しかお出しできませんが……」
「いやいや、暖かい普通の飯ってだけで十分ですとも。ありがとうございますお義理母さん！」
「その呼び方、やめて頂けませんか？」
屋根から音も無く飛び降りると、賞状受け取る様な丁寧な仕草でトレイを手に取って頭を下げるロ○コンだが、言ってる事はリップサービスでもなんでもなかったりする。
先にも述べたがこの男、常に小遣いを大幅カットされているので買い食いすら碌に出来ず、更には王城を吹っ飛ばす度に飯抜きを言い渡されたりして、何気にきちんと調理された食事を摂る機会が少ないのだ。
カット率が九割を超えた時は、基本貰った駄賃で買うのは調味料である。自分で獲った獣の肉や植物に使って喰う為であった。
「塩気って大事だよな……知ってるか？　肉とか葉っぱって塩抜きで焼いたり煮炊きして食ってもあんまり美味く無いんだ……あ、美味いこのシチュー」
「はぁ……なるほど……？」

仮にも一国・一種族の頭領である癖に、ジビエ通り越してまんま野生児みたいな食生活を送っている阿呆鳥の噛みしめる様な発言に、素で困惑するブランである。

彼女が見ている目の前でみるみる内に皿は空になってゆき、普通に嬉しそうに昼食を平らげた《魔王》は満足気に小さくゲフッと息を吐きだした。

「あー、美味かった、御馳走様でした――それはそうと、お義理母(かあ)さん」

「その呼び方、やめて頂けませんか？　本気で」

「山脈のある方角から水の匂いがしたんで、午後の風向きによっちゃ一雨くるかもしれねぇ……傘とか届けた方が良いと思うんですが、お持ちでしょうか？」

懲りずに変な呼び方をする変態の頭にもう一発くらい片手鎚(メイス)をぶち込んでも許される気がしてきたブランであったが、続いた言葉についつい訝し気に空を見上げる。

今の処、雲も殆どない快晴だ。秋風は偶に吹くがそれもそれ程強くはない。

おそらく……というか間違いなくお使いに出掛けたオフィリ達の事を心配しての発言なのだろうが、本当に雨など降るのだろうか？

「曇るだけで終る可能性もある……が、姫や画伯が雨に濡れない様に予防線を張っておくのは大事だと思うんですヨ！」

鼻息荒く力説する様は忌憚なく言ってしまうと通報(衛兵さんこっちです)したくなる姿なのだが、言ってる事は同意出来るのでブランは少々考え込んだ。

というか、此処で「傘が無い」だの「大丈夫だろう」だの言ってしまえば、眼前の超越者は「なら俺が傘を買って届けてきますヨ！」とか言って飛び出して行きかねない。（雨云々が無くともオフィリの事が心配なのは確かですし、様子見がてら傘を届けてもらうのも良いかもしれませんね……）

そんな風に考えるブランであるが、彼女の予想はやや外れている――というか、未だまとも過ぎる尺度で《魔王》を図っている。

もし「雨は降らないんじゃないか？」と発言して、傘を届けなかったとしよう。

その後、山脈の向こうから雨雲が姿を現した場合「やっぱり降って来た、早く傘を届けに行ってあげよう」ではなく、先ず最初に「よし、アレ斬れば降らねぇな！」という発想に行き着く男なのである。

尤も、性癖が絡む事以外では行動パターンが予測し難い人種なので、今日面識を得たばかりのブランに其処までの理解を求めるのは酷な話だろうが。

だがまぁ幸いな事に、行動の予想は外れたが返した答え自体は正解であった。

「……そうですね。では、恐縮ですがお任せしてもよろしいですか？」

「お任せあれ！」

片目を瞑りながらドヤ顔スマイルでサムズアップしてくる《魔王》に若干ウザいものを感じつつも、おくびにも出さずに穏やかに微笑んで一礼するシスターは、大人である。

彼女から二本の傘を借り受け、「これで姫や画伯をこっそり見守る大義名分、ゲットだぜ！」とか声に出しちゃってる奴は、いい年齢(とし)してガキ丸出しである。

斯くして、花柄の小さ目の雨傘と子供用の可愛らしいピンクの傘を腰の両脇に装備した超越者――という名の不審者は、保護者からの頼みという大義名分を得、意気揚々と再び幼女達のもとへと向かう事になった。

「――ペトラ、年少の子達のお昼寝が始まったら、少し出掛けてきますね」

「分かった。シスターもオフィー達の様子を見に行くの？」

「いえ、少し聖殿に用事が出来ました。この時間なら、枢機卿の御三方かミラ様、何れかにお会いできますからね。手早く報告だけして、子供達が起きる前に帰って来ます」

尚、小遣いの九割九分カットはほぼ確実となった様である。同時に今月の御駄賃の使い道が塩と魚醤に全振りなのも確定した。

この状況での闖入者――ブライシオ様の登場に、リリィが対峙していた女性の方は即座に行動に移りました。

「退くわよ！　走れ！」

お仲間の男性に叫ぶと同時、右手が腰の後ろに回ったかと思うと、抜き打ちで小さな刃物が投擲されます。

一動作で投げ放たれたのは、三本。ブライシオ様の肩、下腹、喉へと鎧の隙間を狙って正確無比に飛ぶそれらは、先程のリリィのものとは比べ物にならない速度でした。

投擲物自体もおそらくは専用の投刃（スローイングダガー）です。持ち主の技術も併せれば、獣人であるブライシオ様の表皮も深々と貫く威力を有している筈。

ですが、その見事な投擲も通じません。

ブライシオ様は前に出ると同時に少しだけ身を捻り、投げつけられた刃は全て鎧に当たって弾けて宙を舞います。

そのまま彼は前進を開始しました。建物同士の隙間にある狭い路地です、巨躯と言って良い長身が完全に道を塞いで突撃して来る光景は、開けた場所での其れより圧が凄いですね。

リリィ達を掠める様に追い抜くと地面を蹴立てて迫る迫力満点のその姿に、怪しげな

二人組の男性の方から「ひぃ!?」という裏返った悲鳴が漏れました。
路地の奥へと転げる様に逃げ出す男性とは対照的に、女性は舌打ちしつつもその表情は冷静です。
左手に子狐さん――《雪精狐(スノー・フェネック)》をしっかりと拘束しなおすと、再度右手を振りかぶります。
「――む?」
全く怯まず、寧ろ加速しようとしたブライシオ様でしたが、突然身を翻し、リリィとオフィリの姿を遮る様にパンの入った袋ごと左腕を振り下ろしました。
袋がその大きな手の中で弾け、穴が空き、中から焼きたてのパンが覗きます。更にそのパンには数本のナイフが刺さっていました。
どうやら、女性はブライシオ様では無くリリィ達に向けて刃を投じていた様です。黒塗りで視認がし辛いとはいえ、認識すら出来ないとは……我が事ながら未熟を痛感しますね。
「嫌な臭いだ、毒か」
鼻先に皺を寄せ、渋面でナイフを見つめていたブライシオ様は、直ぐに前方へと視線を戻しますが……その僅かな時間の間に女性は路地奥へと姿を消していました。
「きつねさん、つれていかれちゃった……」

女性が消えた暗がりを見めたまま、オフィリが呟きます。
リリィの旅装の裾を握るその手は、ちいさな子供には精一杯であろう力が込められ、僅かに震えていました。
おそらく、恐怖によるものでは無いのでしょう。この小さな友人は、なんというか幼いながら肝が太いのです。もしくは鉄火場への耐性が高いと言えばいいのでしょうか？
それでも震えているのは彼女自身が溢した言葉通り、連れさられた《雪精狐（スノー・フェネック）》を案じているからなのでしょう。
彼女の震える手を握り、その小柄な身体を包み込む様に抱き締めます。リリィも義母（かか）様にこうしてもらうとぽかぽかして落ち着くのです。
残念ながらおねえちゃんパワーの足りない今のリリィでは、義母（かか）様やシスターの代役にはやや不足でしょうが、それでも握った手から強張りが取れたので良しとします。
「見事な遁走、と言いたい処だが……逃げを打つ為に幼子を毒で狙い撃つか。気に入らんな」
ブライシオ様の狼の様な面相の喉奥から、本物そっくりの威嚇の唸り声が上がり、彼は先程御自分で投げつけて壁にめり込ませた大きな剣を引き抜きました。
「逃がしはせん――こんな臭いをばら撒きながら、獣人（ら）の鼻から逃げられると思うな」

突撃の最中ですら何処かのんびりとした空気を放っていたブライシオ様ですが、その雰囲気を一変させて戦意も露わに剣を一振りし、路地の奥を睨み据えます。

そのまま特大剣（グレートソード）を肩に担いで駆けだそうとするその背を見送るか声を掛けるか、逡巡しました。正直、先程から展開が怒涛に過ぎて未熟なリリィ達ではついていけていません。

「待ちなよ。助けたお子様を放置して追撃ってのも片手落ちだろう――何より、この場であの二人だけをぶちのめされても困る」

そこにまたまた新たな声が掛けられます。

しかもそれは上――路地裏の側面部分である建物の屋根上から聞こえてきました。

これまでのやり取りを上から監視していたのでしょうか？　屋根から声を掛けてきた方は、そのまま飛び降りて猫さんの様な身軽さで着地しました。

膝を使って着地の衝撃を殺し、直ぐに立ち上がったのは冒険者らしき装いの女性です。

癖っ毛で菫色の光沢を放つブラウンの髪と、暗色で統一した軽戦士か斥候といった装備――近くで見ると、左頬から顎にかけて薄っすらと刀傷が走っています。

リリィが注視しているのに気付いたのか、さり気なく首に巻いたマフラーを鼻先まで引き上げて頬を隠してしまいました。

むむむ……女性のお顔にある傷をじろじろと見るのは確かに不躾でしたね。これは反省せねばなりません。

彼女と面と向かい合うのは初めてですが、ブライシオ様と同様、見覚え自体はある方なのです。

「む……確か……バーコイド、だったか？」

「……正直、覚えられてたのは意外だよ。こちとら一回戦で早々に消えた身だからな」

首を傾げて記憶を捻りだす仕草をして見せたブライシオ様に、癖毛の女性――ヘザー＝バーコイド様が苦笑いで応じます。

そう、彼女も帝都のお祭りで開催された闘技大会の出場者なのです。これは偶然なのでしょうか？　だとすれば中々の奇縁と言えますね。

ヘザー様は軽く肩を竦めると、親指で表通りの方を指し示しました。

「傭兵ブライシオ。アンタとは取り敢えずこの件に関しての仕事（ビジネス）の話がしたい……で、そうだな……お子様二人は、どうしたい？」

暗にそのまま忘れてお家に帰りなさい、と言われているのはなんとなく察しましたが、生憎とリリィ達のお返事は決まっています。

「巻き込まれた身としては、お話くらいは聞いておきたいですね」

「おふぃーも！」

「……了解。それじゃ、近くに私の隠れ家(セーフハウス)がある。話は其処でしようか」
お仕事が絡む以上、子供二人の主張など流してしまいそうなものですが……ヘザー様はそういった事もせず、嘆息して再度肩を竦めたのでした。

リリィ達が案内されたのは、住民区にある賃貸のお部屋です。
此処にやって来るまでの道中に、互いの自己紹介は済ませています。名乗りは勿論ですが、ブライシオ様に助けて頂いたお礼もきちんと忘れずにお伝え出来ました。
人と交流を持つ際に、自己紹介と各種挨拶は大事――義母(かか)様も兄(あに)様も仰っていたことです。リリィはきちんと覚えています。ふふん。
「椅子は二つしかなくてな。おチビちゃん達はベッドにでも座ってくれ」
隠れ家というだけあって簡素な寝台と椅子、大きめのチェストが一つだけ置いてある部屋に入ると、ヘザー様は部屋の隅に放り投げてあった荷袋から幾つかの道具を取り出して組み立て始めました。
「……ブライシオ様の体格ですと、その椅子は少々窮屈そうです。場所を交換しますか？」

「うむ、すまんなリリィ。クッションは悪くないが少々脚が細くてな。折れそうで体重を預けられん」
「わんわんのおひざ！　のっていい？」
「む、構わんが……鎧は外せんので硬いぞ？」
寝台を軋ませて大柄な身体が腰を下ろし、その傍らに特大剣（グレートソード）が立て掛けられます。
ブライシオ様の膝の上に友人が嬉々としてよじ登るのを横目に、リリィも椅子（スツール）の上に腰掛けました。
どうやらヘザー様はお茶の準備をしている様ですね。組み立てたのは魔力で発熱する小型の熱台（コンロ）です。リリィのお家にも大きい物があるので分かります。
「さて、何から話すべきか……取り敢えずブライシオには礼を言っておこうか。アンタが乱入してくれた御蔭で、私は未だ連中に気取られてない」
背を向けてチェストの上に置いた熱台（コンロ）で水の入った陶器を暖めながら、濃褐色の粉を匙で掬って木の杯に入れています。茶葉ではないですね、一体どういった飲み物なのでしょうか？
「うむ。建物の上から様子を伺う気配があるのは感じていた――が、それがどちら側か迄は分からなかったのでな、リリィ達の助太刀に入らせて貰った」
「……やっぱり気付いてたか。あの女の探知は上手い事すり抜けてたってのに、自信を

無くしそうだよ全く」

少々言葉を省略したお二人の会話に、オフィリが内容を把握出来ないのかキョトンとした顔で小首を傾げています。

なのでリリィが補足として説明を行うのです。これもおねぇちゃんの務めというものですね。

「ヘザー様はあの場で介入の機を伺っていた、という事です。結果的にはブライシオ様が先んじて割って入った形ですが、リリィとオフィリを助けようとしてくれていたのですよ」

「そうなの？　ありがとー！　へざーちゃん！」

「いや、結局は何もしてないから。というかヘザーちゃんって……」

元気よく告げられたお礼の言葉に、振り向いたヘザー様はなんとも言えないお顔で苦笑しています。

何故でしょう？　リリィは笑顔でお礼を言われると嬉しくなって胸がぽかぽかしてくるのですが。

四つの木杯にお茶が用意され、其々に手渡されます。

ヘザー様とブライシオ様の分はリリィもよく知る普通のお茶ですが……なんでしょう、リリィ達に渡された濃厚な茶褐色のお茶は見た事の無いものです。

透明度が無く、少しとろみがあるというか……これは植物性の油分が含まれているせいでしょうか？　漂って来る香りはとても香ばしくて良い匂いなのですが、馴染みの薄いものです。

「……うぇえ、にがーい」

あぁ、早速口をつけたオフィリが口を窄めて目をきつく瞑っています……苦いのはリリィも得意ではありません。しかし、出されたお茶を口にしないというのも礼儀に反します。どうしましょうか。

リリィ達を見つめていたヘザー様が、悪戯を成功させた子供の様な表情になって少しだけ笑いました。腕利きの仕事人、といった空気を纏う方ですが、笑えば一気に雰囲気が柔らかくなりますね。とても綺麗な笑顔です。

「そいつはカカオっていう豆茶。魔族領の南部で採れる品でな」

少し涙目になっているオフィリの木杯を取り上げると、手にした瓶から中身をたっぷりと匙で掬い、杯に加えて掻き混ぜます。

「滋養が高くて香りも良いが、その分苦味が強い。そのまま薬の一種として飲まれる場合もあるが……こいつに甘味を加えてやると、上質の菓子みたいな味わいになるのさ」

再び手渡された木杯をヘザー様を交互に見比べ、オフィリはおそるおそる豆茶を再び口にしました。

その大きな瞳が更に見開かれ、「わぁ……！」という驚きの声が漏れます。
「あまくておいしー！　ほんとにおかしみたい！」
「気に入ったか？　砂糖はこれより控え目が好みだが、私もこの味は好きでね。同好の士が出来るなら喜ばしいよ」
「うん！　ありがとへざーちゃん！」
「またちゃん付け……まぁ、いい……で、リリィだったか？　砂糖の量はこのおチビちゃんと同じで良いか？」
「はい、お願いします」
リリィの木杯を受け取ろうと差し出された手を前に、一口だけそのまま飲んでみます。
……むぅ、確かに苦いですね。香りは本当に良いのですが。
ですが、美味しい飲み方の種明かしをされた今となっては、この味は期待感を感じますね。
この香ばしい風味、普通のお茶とは全く異なる濃厚な口当たり……ここにお砂糖の素直な甘さが加われば、どうなるか。
ヘザー様が匙で掻き混ぜて下さった木杯を再び受け取り、ちょっとだけ温くなった分飲みやすくなったソレにもう一度口を付けます。

「……これは予想以上です」

期待通り――否、それ以上のお味でした。

舌に染み込むような強い苦味が砂糖の甘さによって柔らかなほろ苦さへと変化し、尚且つ加えられた甘味を包み込む様な一体感を感じさせます。

推測ですが、こうしてお湯に溶いて飲むだけではなく、様々なお菓子や甘味類の味付けに転用できるのではないでしょうか。このカカオという豆は、食材としてそれだけの力を持っていると思いました。

この豆茶にしても、湯の量を減らしてミルクを加えるだけでまろやかさが生まれ、更なる進化を遂げそうです。単純にパンと併せて頂いても良さそうですね。

カカオという美味との初めての出会いに感銘を受けているリリィ達を見て、ヘザー様はちょっと嬉しそうです。もしかして原産地が地元だったりするのでしょうか？

とはいえ、この場には来た目的はお茶ではありません。直ぐに彼女は表情を引き締めてオフィリを膝に乗せるブライシオ様へと視線を転じました。

「――そろそろ仕事の話といこう。先ず、あの二人組の事だが……なんでそんな表情（かお）になる？」

「カカオ茶……聞いた事はあるが飲んだ事が無い。俺も飲みたいのだが」

「個人差もあるが、犬や狼系の獣人は飲むと腹下す奴が多いらしいんだ。やめときな」

「む、そうか……」
「わんわんはのめないの？　とってもとってもおいしいのに」
「……そうか、美味いのか」
納得した様に頷いたブライシオ様ですが、心なしかしょんぼりとしたお顔になってしまいました。
それとオフィリ、それは兄様（あに）の言う処の『死体蹴り』というものに近いです。やめてあげましょう。

ヘザー様のお話によると、あの男女は霊獣や魔獣の違法な売買を行っている人達なのだそうです。
女性が雇われた護衛兼荒事担当。男性は彼女を雇った商人さんの関係者なのだとか。
彼らは捕まえた《雪精狐（スノーフォックス）》やその他の魔獣を、帝国に運び込むつもりらしいです。
ヘザー様は彼らを北方で発見後、追跡を続けながら他にも違法売買に関与している商人との関係が無いか、確認していたというお話でした。
話を聞き終えたブライシオ様が、難しい顔で腕を組んで唸り声をあげます。

「売り先は帝国か。もしやとは思うが……」
「あぁ、そういえばアンタも関わったらしいな――お察しの通り、例の件絡みさ。依頼主様も全力で後始末の最中らしくてね、払いが良くて助かるよ」
「うむ、やはりそうか。壊滅したと聞いたが」
「所属してた貴族を経由して品を運んでいた下っ端の商人連中は各地に散ったままって事だろ」
付け足す様に呟かれた「だから私みたいな動きやすい単独（ソロ）に仕事が廻って来る」という言葉に、「素直に歓迎できん話ではあるが……道理だな」と頷きが返されます。
むぅ……リリィ達には何のことか分かりませんが、腕利きの冒険者と傭兵である御二方は共通した情報をお持ちのようですね。
椅子（スツール）の上で脚を組んで頬杖を付くヘザー様の口元はマフラーで隠されていますが、その口調から皮肉気に吊り上がっているであろう事が伺えます。
「表向きにはあの一件は伏せられている。こんな商売に手を出す連中じゃ組合からも弾かれてるだろうし、遠国の情報を手に入れる伝手にも乏しいんだろうさ。売り込み先のお客様が残らず消し飛んでる事にも気付かず、遠路遥々配達ご苦労様だ」
言い終えると、彼女は大きく溜息を洩らしました。
「北方でマークしてから暫く動向を探っていたが……あの連中に横の繋がりは無い。い

い加減、カタを付けたい処だけど、フリーの傭兵や除籍された冒険者を数雇いして頭数だけは揃ってる。なにより――」
「あの毒使いが厄介、か？」
膝上のオフィリに鎧をぺたぺたと触られ、されるが儘となっているブライシオ様が独白を引き取ると、まさにその通りだと首が縦に振られます。
「雇われた面子でもあの女だけ突出している。腹立たしいが、私じゃ一対一でも厳しそうだ。他の奴らも相手にしながら連中全員を無力化ってのは現実的じゃないのさ」
「うむ、そうだろうな。単純な地力でもバーコイドは一歩及ぶまい。やり口は気に入らんが、腕は鈍っていないようだった」
むむっ、なにやら気になる言い回しですね。
気になった点は同じだったのか、リリィとヘザー様は何とは無しに顔を見合わせました。
ここはリリィが手を挙げて疑問を投じましょう――決して早々にカカオ茶を飲みつくして手持ち無沙汰になった訳ではありません。
「ひょっとして先の女性、ブライシオ様のお知り合いなのでしょうか？」
「あぁ、親しくは無いが知っている。以前見たときよりも顔つきや気配は大分荒んでいたが、あれはシンヤの一党にいた斥候だな」

「シンヤ……《水剣》か！　あのパーティーは以前に問題を起こして一人が組合の等級降格、一人が除名になったと聞いていたが……元一級の上澄みなら、あの腕も納得だ」

あっさりと帰って来た言葉に、ヘザー様のお顔が口いっぱいに苦い物を頬張った様に顰められました。

「……偶然とはいえ、アンタと会えたのは私にとって幸運だったな」

ですがそれも数瞬です。直ぐに気持ちを切り替えたのか、真剣な表情となって組んでいた脚を解くと少々前のめりに身を乗り出します。

「――傭兵ブライシオ、連中が商品を運び込んでいる倉庫への強襲同行を依頼したい。アンタとアンタの相棒の助力があれば、あの女込みでも逃亡を許さずに叩き潰すのは容易だ」

「兄弟は腹を壊しているので動けんぞ？」

「報酬は私の依頼料を折半と依頼元からの……なんて??」

「兄弟は今、宿で厠に籠っている。とてもではないが仕事は出来んだろう」

シ～ン、と。

室内に何とも言えない沈黙が下りました。

何となく次の発言を発し難い空気でしたが、そんな雰囲気など物ともせず、オフィリが不思議そうに頭上のブライシオ様のお顔を見上げます。

「もうかたほーのわんわんは、おなかイタくしちゃったの？」
「うむ。聖都にやって来る道中で保存食が切れてな――汁物でよく見る茸だと思って食ってみたのが駄目だったらしい」
誇らしげに言う事ではないのです、絶対。
これぱかりはリリィでも確信を持ってそう断言できます。
マフラーがずり落ち、隠していた口元が露わになったヘザー様ですが、その口の端は笑いか、はたまた呆れかで引き攣っていました。
「……おい、まさかとは思うが、その辺に生えてるキノコを拾い食いしたんじゃないだろうな？」
「味は良かったぞ？　ただ、兄弟は俺より五つほど多く食ったのでな」
「この辺りで食用茸に似ている物となると……普通に危険な毒があるやつなんだが。なんで平気なんだアンタは」
「我らは昔から、好き嫌いなく何でも食うのが自慢だ。木の根や皮までなら問題無い。流石に美味くはないが」
彼女はブライシオ様が自慢気に胸を反らすのを暫し見つめ……やがて頭痛を覚えたかの様に額を抑えて項垂れてしまいます。
ここで心労の類を和らげる言葉が咄嗟に出てこないのは、リリィの未熟さ故ですね。

元気を出して頂きたいです。
　先もそうでしたが、やはり切り替えは早い方の様です。額に拳を押し当てたまま、ヘザー様が思案を滲ませる声色で問いかけました。
「……アンタ単独なら、問題無く雇われてくれるんだな？」
「乗り掛かった舟だからな。引き受けよう」
「なら良い――多少手間を掛ける必要があるが、十分やり様はある。契約成立だ」
　お二人が同時に手を差し出し、握手が交わされます。
　ヘザー様は一つ頷いて立ち上がると、リリィに向けて視線が転じられました。
「そういう訳だ。後の事は大人に任せてお家に帰りな……あの女に関しては安心すると良い、そっちに何かしでかす前にケリをつけるから」
　む、そう来ましたか。
　子供扱いが不満という訳ではありません。実際、リリィ達は偶然巻き込まれた子供二人という立場なので。
　こうしてある程度の事情を説明し、これからの行動方針を決める場に連れて来てくれただけ、かなり配慮してくれていると言えるでしょう。
　――ですが。
「おふぃーもいく！　きつねさんをたすけるの！」

オフィリが、リリィのちいさな友人が、こう言い出すのは分かり切っていた事なのです。

手を勢いよく挙げ、鼻息も荒く主張する姿には幼いながらも気迫とやる気に満ち溢れていました。

……リリィとしてもあの《雪精狐（スノー・フェネック）》の事が気にならないといえば嘘になります。

しかしお二人の御仕事の邪魔をしてはいけませんし、何よりリリィは今回の監督役です。

おねぇちゃん的にも、お買い物を中断して危険な鉄火場にオフィリを連れて行くというのは駄目だめな選択肢だと思うのです。

何より、大人のお二人は揃って渋い顔となっています。当然と言えば当然の反応なのですが。

膝の上で元気よく挙手したオフィリの後ろ襟首を摘まみ、ブライシオ様が自身の目の前にぶら下げて困っている声色で語り掛けました。

「その意気や良し。だが初の実戦の場としては、相手側に少々厄介な手合いが混じっている。アレはお前達が戦いの場にいれば、躊躇なく狙って来るだろう」

「ブライシオの言う通りだ。連中が捕らえてる魔獣・霊獣に関しては、余程特殊なケースで無い限りはちゃんと野に戻す。この件は私達に任せて、パパとママの処に帰りな」

「や。おふぃーもいく」
にべもない、というのはこの事でしょう。
摘まみ上げられ、プラプラと揺られながらもオフィリはお二人の説得を切って捨てます。意思の硬さを示す様に何時も抱えているぬいぐるみはガッチリと締め上げられていますね。
処置なし。と判断されたのか、ヘザー様の視線がリリィに向けられ、頑固な友人を説得する様に視線だけで促されてしまいました。
「おふぃーのぱぱとままは、もうお空にいるの」
けれど、リリィが口を開く前に当たり前のように告げられた舌足らずな言葉に、意識せずに口が動かなくなります。
それは御二方も同じです。特にヘザー様は先程発した言葉もあって、やや気不味そうでした。
「でもおふぃーにはシスターとかぺとらとか、おねぇちゃんとか、いっぱいいるんだよ？きつねさんもぱぱとままがいるから、いっしょにいなきゃダメなの」
それは、決して理屈や筋道が通った言葉では無いのでしょう。
幼く、感情だけで語られた、要領を得ない幼子の主張なのでしょう。
でも、それでもそれは、両親を失った子が両親と引き離された仔を案じ、共に在るべ

き、在って欲しいと願う、優しい言葉でした。
「きつねさんもいってたんだよ、もうすぐままがおむかえにくるって！」
「……言っていた、だって？」
元気よく、嬉しそうに続けられた言葉に、ヘザー様が片眉を跳ね上げてオウム返しに問いかけます。
……そういえば最初にあの子狐さんとあの男性を見た時も、やけに具体的な指摘をしていましたね。これはもしや……。
「どうやら《獣使い（テイマー）》としての素質がある様だな。幼体とはいえ、《雪精狐（スノー・フェネック）》の霊獣としての格を考えれば《精霊術士（エレメンタル・ウィルド）》の方かもしれん」
「なんと……やはりそうですか」
ブライシオ様の言葉に、半ば予測していたとはいえやはり驚きの声が漏れてしまいました。
動物や魔獣を使役する《獣使い（テイマー）》もあまり見ない技能ですが、精霊と交信して直に力を借りる事の出来る《精霊術士（エレメンタル・ウィルド）》は更に希少です。エルフの郷でも大戦が始まる更に前に一人だけ、リリィ達の種族基準でも相当な老齢の方がそうであったと聞いています。
「よかろう、現場では俺かバーコイドの傍を離れんとを約束できるか？」

「――！　うんっ、できるっ」
「おい、ちょっと待てそこの駄犬（デカいの）。おチビちゃんの意気は買うが、流石に危険が過ぎるだろう。万が一の事があったらどうする」
おぉ、意外とあっさりとブライシオ様の意見が転びました。
とはいえ、ヘザー様の仰る事も尤もなのです。
希少な才があるとはいえ、オフィリが今現在、戦う力のない事には変わりありません。幼く、無力な女の子が争いの場、その真っ只中に飛び込むというのは、外界の経験が少ないリリィでも相当におかしな話だというのは理解できます。
ですがブライシオ様は、厳しい表情で反対するヘザー様に対し、余裕すら感じさせる態度で応じました。
「安全の確保に関しては一つ、手がある。あとは俺の傍から離さなければ、あの女と相対した状況でも傷一つ付けさせないと誓おう」
「安全度の話じゃない、子供を仕事に巻き込む事自体が問題だって言ってるんだよ。第一――」
「オフィリは子狐の母がもうすぐ迎えにくる、と言ったぞ」
言い募る最中に楔を打ち込まれ、オフィリを鉄火場に連れて行く事を拒む言葉が飲み込まれます。

「相手は子を奪われ、怒り狂った冬の霊獣だ。冷気や寒波の制御などせんだろう。この街には凄まじい戦士達が多数いる。迎撃にせよ、討伐せよ、いざ始まれば容易いだろうが……」

「近づかれただけでも都市周辺の田園地帯への影響は大きい……どのみちそこまでの大事になれば、私の仕事は失敗したも同然、って事か」

「うむ。素早く事を片付けたあと、親と子を再会させる際の仲立ちが要る」

なるほど。そこに霊獣との意思交換も可能な、当の子狐さんを助けて信頼を得た《獣使い（テイマー）》がいれば、より確実に母親である《雪精狐（スノー・フェネック）》の怒りを和らげる事も出来る、という事ですね。

俺はタダ働きは嫌だぞ、飯が喰えん。と結ばれる台詞に対して、ヘザー様は「私もだよ」と少々疲れた様な、ぐったりとした口調で呟いて肩を落としました。

自身の猫毛気味の髪の中に指を入れて掻きまわし、大きく溜息を洩らした彼女は、ブライシオ様の膝の上に座るオフィリへと目線を合わせてしゃがみ込みます。

難しい話は理解できなくとも、自分がついて行けるかどうかの話をしているとは分かっているのでしょう。

固唾を呑んでお二人の話に耳を傾けていたちいさな友人は、正面から見据えてくる大人の視線に対しても怯むことなく真っ直ぐに見つめ返しています。

「……どうやら私は反対する処か、協力を乞い願う立場らしい。オフィリ、狐さんを助け出してママの処に帰してあげるのを手伝ってくれないか？」
「はい！　いきます！　ありがとへざーちゃん！」
「また……あぁ、もう。ヘザーちゃんでいいさ」
　喜びに眼を輝かせて抱き着いて来る小さな身体を受け止め、苦笑いを浮かべたヘザー様は再び此方へと視線を向けました。
「……一応聞いておくが、リリィも参加、という事になるのか？」
「勿論です。リリィはおねぇちゃんなので」
　安全を優先するのならば止めるべきなのでしょう。
　ですが、妹分にも近い友人が幼いなりに考え、自身の意思で荒事の場に飛び込む事を決めたと言うのに、それに手を貸さないというのはおねぇちゃんの沽券に関わるのです。
「御安心下さい。リリィは既に初陣を経験しています。最低限の護身は可能です」
「ほう、その若さでか？　良いな、相手は何だった？」
「上位相当の邪神の眷属ですが」
「自分の胸元ほども無い子供相手に、これまで戦った敵手の格で負けている冒険者が居るらしい……ハハッ、私です」

「へざーちゃんどうしたの？　おめめイタい？」
何はともあれ、チーム結成ですね。
兄様的な言い回しをするならば「テンション上がって来た」というやつです。
聖者たる兄様の従者としては、少々はしたないというか、不謹慎なのかもしれませんが。
異国の地で得た友人と、新たに見知った頼りになる冒険者さんと傭兵さん。
そんな彼・彼女達と一緒に悪さを行う人達を懲らしめ、囚われた動物さん達を助け出す行為に、ちょっぴり高揚を覚えてしまいます。
いけませんね、戦いの場に向かうのは確かなのですから、浮ついた気分では足元を掬われてしまいます。気を付けましょう。
……それはそれとして、ここは上昇する気分のままに、掛け声の一つでも上げるべきなのかもしれませんね。
「勝利を願って。えいえい、おー、です」
「おー！」
「……え、唐突になんだ……これ、私もやらなきゃ駄目な流れか？　……分かった、分かったから全員で雨に濡れた子犬みたいな眼を向けるなって……お、おー……！」
拳を天に向かって突きあげ、皆の心が一つになりました。やって良かったですね、

えっへんです。
では、作戦開始（みっしょんすたーと）。頑張って参りましょう。

白百合と愉快な仲間達（後編）

聖都の商業区、その端にある貸倉庫の一つにて。
多くの人間――本来なら荷運びの仕事に従事する人夫の代わりに冒険者や傭兵らしき武装した者達が荷を馬車へと積み込み、出発の準備を整えている。
「もっとペースを上げる様に！　あと二時間前で終らせれば今回の支給額に色を付けましょう！」
音頭を取るのは壮年の商人だ。
やや恰幅の良い小奇麗な身形の男なのだが、慌ただしい空気の中、自身も倉庫内を忙しなく行き来しているせいか、その額は汗ばみ、服の襟も心なしかよれている。
（……クソッ、よりにもよって一番リスクの高い品を逃がした上、部外者に目撃されるとは……！）
雇った者達の中でも一番に腕の立つあの斥候の言によれば、内二人はどうとでもなる子供だが、最後の一人が腕ずくでどうにかするのは難しい腕利きだという。

よって、摂れる選択肢は一つ――即ち、目撃者の口から衛兵、ひいては聖教会本拠地たる大聖殿にまで話がいかぬ内に、即座に都市から移動を開始する事だ。

幸いにして問題の傭兵は名こそ知られているが、高位冒険者の様なしっかりとした身分保障は無い身の上らしい。ならば直ぐに聖殿へ話が通るといった事も無い筈であった。

帝国領に入ってさえしまえば誤魔化しは利く。なにせ、件の品は帝国の何人かの貴族が複数のルートで所望し、おそらくは自分のみが仕入れに成功しているのだから。

（落ち着け……まだ挽回は出来る。そうだ、私はまだ終わらない、終わって堪るものか……！）

今回は彼にとって初となる『商品』を扱う取引だ。

ラインギリギリを掠めることは何度もあれど、曲がりなりにも組合の規範に沿った商売をしてきたこれまでとは違い、明確に法を犯した文字通りのハイリスクハイリターン。故に想定外の事が起きる事など覚悟の上である。

発生した問題は予想以上のものであったが、まだ巻き返せる。というか巻き返せないと自分は終わりだ。

何が何でもこの商いは成功に漕ぎ着けねばならなかった。

そもそも順風満帆であった商売にケチが付き始めたのは、少し前に北方から聖都へ向

かう途中、とんでもない疫病神と出会ってからだ。
最初は寧ろ幸運だと、自分の商才とツキが呼び込んだ好機だと思ったのだ――なにせ、あの救世の聖女の片割れと偶然にせよ関りが持てたのだから。
どうやらお忍びで北方方面に向かっているらしい彼女と、なんとか懇意になろうと躍起になり、そして……彼女の傍に侍る死神の逆鱗に触れた。
あれは最悪にも程があった。
あの大戦の終局に於いて亡くなった、或いは消息不明になったと言われていた《聖女の猟犬》が、あぁして何食わぬ顔で聖女と共に旅をしているなど、誰が予想出来るものか。
主たる聖女に害為せば、邪神の軍勢はおろか大国の貴族相手ですら躊躇なく首を刈り取ると伝え聞く、戦場の生ける伝説。
逸話の数々が話半分以下であったとしても、培ってきた商人として財力や有力者とのツテなど、何の盾にも嵩にもならぬ相手である。
それどころか《猟犬》に眼を付けられたと知られれば、これまで上手く付き合えていた連中も潮が引くように周囲から消えていくのは明白だった。
何より、物理的に自分の首が危ない――故に、彼の忠告に従い、出会った契機となった一件を組合に報告した。自身が雇った冒険者達に半ば強要したグレーゾーンの行い

も偽りなく、全て。

虚偽の報告やコネを使った隠蔽を行なえば、死ぬ。

そんな勘というには余りにも確信に近い予感に従い、一切の誤魔化しなく冒険者・商人の両組合に報告した御蔭か、こうして自分は五体満足で生きている。

冒険者組合からは要注意人物としてリスト入りされ、商人組合からは小さくないペナルティを受けたが……思えば、この時点ではまだ巻き返しは可能だったのだ。

泣きっ面に蜂と言わんばかりに次に起こったのは、大口の顧客であった北方諸国のとある伯爵家が失脚。そのまま御家断絶で潰れた一件である。

取り潰す際に明るみになった罪状は多岐に渡り、その中でも最悪極まるのは、邪神の信奉者達を匿っていた事。

貴族どころか王族であっても一族郎党縛り首で、最終的には国の名前が変わりかねない大罪だ。

件の伯爵との取引では違法性のある品は扱っていなかったとはいえ、肝心の支払い金の出所に関しては素知らぬフリで受け取っていたのもまた事実。

上客としてそれなりに懇意にしていた関係もあって、男自身も後に取り調べを受ける羽目になった。

そこまで行くと、既に彼の商人としての評判には割と致命的な罅が入っている。

そうでなくとも、商人という生き物――ましてや行商の機会の多い商隊を率いる者は、それなりに運気や縁起も大事にするものだ。

短期間でこれだけ厄を浴びるが如き目に合い続ければ、商いの手腕以前に縁起の悪さを嫌って関りを断つ者も多かった。

もうまともなやり方では立ち行かず、後がない。

進退窮まった男が悩んだ挙句手を出したのが、今回の魔獣・霊獣を的にした密猟同然の取引である。

この取引を成功させ、それを切欠として『商品』を所望した貴族達と太いパイプを作り出す。

覚えが良くなれば、ゆくゆくは御用商人として帝都に店を構える可能性だって見えてくるだろう。

本来、商いを行う者として過ぎた皮算用を弾くのは好まない男であるが、人間追い詰められれば希望的観測に縋りたくなるものだ。

焦燥感を和らげる為に帝都での立身を夢想しつつ、運び終わった通常の商品とその中に紛れ込ませた『本命の品』の目録を確認していると、背後から苛立ち混じりの声が掛かった。

「まだ終わらないの？　必要な品以外は廃棄する事も考えるべきよ、時間が無いのは分

かってるでしょう？」

「……ある程度は破棄するとも。だが、帝国に辿り着くまで本命を隠すダミーは必要なのだよ」

振り向いた先に居たのは、問題を報告してきた斥候の女である。

見目は良い部類なのだろうが、目の下に浮いた隈と身に纏う空気……何処となく病的――或いは危険な雰囲気が、敬遠したくなる要素となっているのは相変わらずだ。

以前は冒険者だったが組合を除籍されたという眼前の若い女は、先に述べた通り距離を置きたくなる空気を放つ人物なのだが……それを差し引いても雇おうと思う程度には腕が良かった。

今はフリーの傭兵擬きだというのも旨みが大きい。このレベルの実力者を冒険者組合経由で雇おうとすれば、本来は相当な額を出さねばならない。男が要注意リスト入りしている今ならば猶更に。

「……それはそうとあの丁稚、何処かで処分した方が良いわ。後がない状況だっていうのに、『商品』をミスで逃がしたばかりか、子供相手に取り戻すことすら出来ないのよ？」

「逃がした件に関しては、『商品』を消耗させておく為に檻へ設置した熱台（コンロ）への魔力補充を怠った魔導士の所為だよ。アレは弱腰で大した商才も無いが、小間使いとしてはそこそこに優秀だ。育成費、という視点から見ても切り捨てるのは聊か無駄が多い」

彼が小間使いとして長年雇っている若者は、この女斥候から相当に嫌われている。

この取引自体に対し『リスクが大きすぎる』『手を引きましょう、今ならまだ引き返せる』と、反対意見ばかりを口にしているからだろう。

所詮は臆病故の保身から出た言葉だ。小僧の時分から面倒を見て来た商人からすれば、若者が口に出す程度が精一杯で何か余計な真似をする度胸が無いのは分かり切っている。

が、それを知らぬ彼女からすれば、その内衛兵へと密告でもしそうな裏切者予備軍に見えるのだろう。

角が立たぬ様にやんわりと提案を拒んで見せると、女は舌打ちして不機嫌そうに腕を組んだ。組んだ腕の指先で二の腕をたたく様は、彼女の荒れた心情をそのまま表している。

少々情緒不安定の気が見えるこの斥候は、私的にはお近づきになりたいとは思わないが……今回の商売に関してはビジネスパートナーにも近い関係である。

他の数雇いした二流・三流の元冒険者だの傭兵だのとは比べるべくもない、重要な人材だ。意識して丁寧な扱いをせねばならない。

なにせ、北方の雪山にある霊獣の巣より『商品』を捕らえて来たのは彼女の手柄なのだ。

調査の結果、巣の場所や到達ルートはある程度絞れていたとはいえ、現地に入って霊獣の仔を捕獲して帰還できる実行戦力を直ぐに雇用出来たのは、此処に来て漸くツキが巡って来た証だと思った程である。

そんな諸々もあって、この斥候とは後の事も考えれば単なる雇用関係というより、既に一蓮托生に近い間柄だ。気を払うのは当然だった。

「最低限の積み込みはあと二時間もあれば終わる。君は倉庫内を見回ってくれ給え。何時もならば聖都で雇う人夫の者達はともかく、傭兵共は直ぐに手を抜こうとするからね」

「……分かったわよ」

宥める意味合いも兼ねて指示した仕事に、女は一応は頷いて踵を返した。苛立ちは消えていない様子だが、無事に聖都から出られれば多少は機嫌も良くなるだろう。

「……早く出発する事ね。前にも言ったと思うけれど――私はこの街に長居したくないのよ」

「それに関しては同感だとも。地理的に立ち寄るのが必須でなければ、私も滞在したいとは思わない」

会話の最後、首だけ振り返って告げられた言葉に、男もこればかりは心からの同意を示して首肯する。

彼女が聖都を嫌がる理由は知らないが、彼にとっては、こうして違法な商売に手を出さざるを得なくなった疫病神（きつかけ）が住む街である。例え商売を抜きにしても、長期滞在は避けたいと思うのは当然であった。

女斥候は現在の雇い主である商人の指示に従い、荷運びを行う者達が忙しく歩き回る倉庫内を見て廻る。

彼女が監督役代わりに見回っているのを察した傭兵や冒険者崩れ――商人が雇った者達は、露骨に仕事が丁寧、または手早くなった。

眼の下に隈が浮き、やや不健康そうな印象を与えるが、美人の部類に入る若い冒険者くずれの女。

彼女を見た雇われ――荒くれ者やゴロツキと大差ない品性の者も多い自由契約の傭兵連中の中には、あわよくば帝都までの道程の間に何人かで囲んで……等と考えた愚か者もいた。

だが、それも最初にちょっかいを出した傭兵が半殺しにされて川に放り込まれるまでだ。

粗暴なその男が、無遠慮に伸ばした手で身体に触れた瞬間、徹底して無視を決め込んでいた女は凄まじい激昂を見せて執拗に男を切り刻んだ。
実力差を考えれば一撃で終わるであろう相手を、手にした短剣（ダガー）で時間を掛けて何度も何度も抉り、突き刺し。
急所だけは避けて、だが全身を刻まれ、出血とショック症状で痙攣を始めた男の身体は躊躇なく北方の冷たい川へと蹴り落とされた。
死にはしなかったが、それは偶々だ。そのままその男は治療院に入院と相成った。多分、今でもベッドの上だろう。
自分達にどうこう出来る相手では無い、と理解したのもあるが、それ以上に狂態とすら評せる異常な爆発っぷりに脅えを抱いたのか。
以降は雇われた面子の中でもリーダー的な立場に収まった女に、ちょっかいどころか文句を言い立てる者すらいなくなった。
尤も、女斥候当人からすればどうでも良い話だ。
静かになったのならば良い、精々真面目に仕事をしてろ、と思う程度である。
みだりに自分に触れた男に関しては、当然の報いを受けさせた、という認識でしかない。殺さなかっただけ温情である、とすら考えていた。
「クソが……私に触れて良いのは一人だけよ」

怨嗟すら滲ませて呟かれた声は、ドロリとした何かしらの感情の煮凝りが口から溢れ出た様である。

零した言葉だけでなく、その瞳にも粘性を湛えた執着の光を灯し、女は内心で独り言ちる。

もう少しだ。

この取引が成功すれば、顧客である帝国貴族との繋がりを得られる。

自分の実力があれば関心を買うのは難しくない、貴族の口添えがあれば組合に登録した正規の冒険者に戻れる筈だ。

それでも組合が渋る可能性があるのならば、名前や髪色を変えて別人として登録する事も厭わない。

その程度ならば、彼なら一目見れば自分だと気付いてくれる。またやり直せる。

きっと自分がいなくなって辛い思いをしているだろう。だって、自分がこんなにも辛いのだ、きっと彼も同じ気持ちの筈だ。

(あぁ、でもどうしようか。私が傍を離れている間に彼の周りで発情した臭い雌猫みたいな匂いをばら撒いている連中は)

まだ彼のパーティーに所属してた頃、それとなく雌猫同士で不和が起こる様に種を蒔いてやっていたというのに、結局は完全に芽が出る前に自分が除名になってしまった。

無事、彼のもとに戻れたらいっそまだるっこしい真似は止めて、冒険中の事故でも装って直接消してしまっても良いのかもしれない。

あの死神も、聖女と関わらない遠く離れた帝都での話なら腰を上げないだろう。

一党の人数は大幅に減ってしまうが、きっと彼も分かってくれる。自分達が結ばれる為には必要な事なのだ、邪魔者が居無くなれば、二人三脚で頑張っていけば良い。

ガリガリと親指の爪に歯を立てて齧りながら、何処か恍惚とした光を双眸に移して女は虚空を見上げる。

危うい――ともすれば狂気じみた雰囲気を纏う彼女であるが、今は一層それが助長されていた。

この状態のときに迂闊に話しかけると凄まじい眼付きで睨み付けられるので、雇われた傭兵や冒険者くずれ連中は女斥候を極力視界に入れない様に努めつつ、立ち尽くす彼女がさっさと我に返ることを祈って荷運びに精を出す。

大まかに仕事が終わる迄の二時間弱。下手をすればその間、神経をすり減らしながら荷物の運搬を行わねばならないかと思われた男達だが、幸か不幸か、直ぐに彼女が我に返る時間はやってきた。

倉庫内を反響し、響く轟音。

鍵を掛けて閉められていた大扉――馬車も出入り可能な大型のソレの隙間から巨大

な刀身が飛び出し、そのまま門が外側から強引に叩き斬られる。
「――ッ、な、なんだ!?　何があった!?」
ざわめきや小さな悲鳴に混じり、動揺するこの場の者達の雇い主の声が屋内にて反響し。

「わんわん号、しゅつじーん！」
「わふ。ヴォフフ。（うむ。出陣だ）」

ゆっくりと開け放たれた金属製の大扉の向こう、肩車の体勢で現れた幼女と獣人の宣言が、場違いな程陽気に響き渡った。

幼女――オフィリを肩車したブライシオが、得物である特大剣（グレートソード）を一振りして右手にぶら下げ、倉庫内へと足を踏み入れる。
「あっち！」
「ワウッ。（応）」

幼い少女の指し示す方向へと首を向け、そちらへと更に踏み出す獣人傭兵であるが、応じる声は少しくぐもっていて言葉になっていない。

理由は肩にバイルダーオンした幼女の装備にある。

先ずは背中。本日はお使いの為に持ってきていた鞄は外され、代わりに円形の小盾を背負っていた。

小盾といっても背中に装備してるのはちいさな女の子だ。ベルトで胴に固定されたソレは、肩車される彼女の背面をしっかりと覆っている。

更にその手が握るのは、短い手綱。

しっかりと握りしめた革製のそれはブライシオの顎周りに固定されており、騎乗用の馬具よろしく銜（はみ）まで存在している。彼の声がくぐもっているのはこれを噛んでいるからだ。

人馬一体ならぬ幼女わんわん一体。

肩車合体した二人が進む先には、未だ馬車に積み込まれていない幾つかの木箱が重ねられている。

――そしてその木箱の中にある『商品』は、商人の男にとって何が何でも顧客に届けねばならない最重要の品であった。

「止めろ！　商品に近づかせるな！」

悲鳴にも近い叫びに、呆気に取られていた倉庫内の者達が一斉に我に返る。
慌てて運びかけの荷物を置き、次々に武器が抜かれた。
「お、おい！　止まれテメェ！　近づいたらブッこべふ!?」
合体コンビの進路上で最初に接敵した傭兵が戸惑いながらも怒声を上げるが、特大剣（グレートソード）の腹でバチコーンとばかりに張り飛ばされて錐もみしながら宙を舞う。
「ちょ、滅茶苦茶強ぇぞコイツ!?　馬鹿みたいだけど！」
「なんでこんな馬鹿みたいに腕の立つ奴がいきなりカチ込んで来るんだよ!?　いや本当に馬鹿みたいだけど！」
「てかなんでガキ乗せて轡噛んで操縦されてんだよ!?　馬鹿か!?　馬鹿だわ！」
「ワォン、グルルッ。わふわふ、わふーん（失敬な連中だ。馬鹿と言う方が馬鹿なんだぞ、知らんのか）」
「「畜生マジで何言ってるか分からねぇ!?」」
至極真っ当なツッコミを入れつつ他の雇われも立ち塞がるが、馬鹿馬鹿連呼されたわんわんの怒りのスイングでベチーン、バチーンと引っぱたかれ、地に転がる。
当然、彼らも手を拱いて見ている訳では無い。
接近戦は無謀だと理解したのか、弓やクロスボウでの矢、魔導士による魔法が撃ち込まれるが、それすら手にした分厚く長大な大剣によって防がれ、甚だしいと籠手に包ま

れた腕ではたき落とされる。
無人の野を行くが如く、とまでは行かないものの、圧倒的な武力差による進撃がそこにはあった。
が、流石にそのままオフィリが指示した地点へゴール、とはいかない。
進む幼女と傭兵コンビに向かい、横手から投擲が投げ放たれる。
一息に放たれたのは六本。四本はブライシオに、二本がオフィリへと放たれたそれらは、下手な矢を遥かに上回る速度を有していた。
「ウォフッ（来たか）」
頭上――即ちオフィリへと放たれた二本は剣で叩き落とし、残りは体捌きで躱すか鎧の装甲部分で受け止めると、獣人の傭兵は足を止めて投擲の放たれた方向へと向き直る。
「……まさか即日、しかもあのときの子供を連れて殴り込んでくるなんてね。頭が弱いのはケダモノ混じりだからなのかしら？」
表面上は冷え冷えとした、だが激情の発露を感じさせる台詞と共に進み出て来たのは、言う迄も無く商人側の最大戦力である女斥候であった。
わんわんはおりこうさんなんだよ！　と憤慨する肩上の幼女の言葉に、気持ちドヤ顔になりながら獣人は胸を張ってみせた。

「バウッ、ワフフッわふん、わふバフッ（ふむ、聖女に害為そうとして除名処分を喰らうのは頭が良いのか？）」
「何を言ってるのかサッパリよ。付き合ってられないわね」
　本人にその気があるかは別として、ブライシオの言もきちんと発音できれば割と鋭い皮肉なのだが、銜のせいでわふわふ唸るだけなので通じる筈も無い。
　合体コンビの変なテンションに微妙にノせられていた他の雇われ達と違い、粘度高めのシリアスな空気の儘、唾でも吐きそうな口調で女斥候は言い捨てる。
「私と彼の――シンヤとの再会を邪魔するつもりなら、誰であろうと敵よ。私達の幸せを邪魔しようとした事、その子供と一緒に後悔させてあげる」
　左手には毒塗りの投擲刃、右に鋼線を束ねた鞭を手に、彼女は低く構えた。
「全員、上に乗せた子供を狙いなさい――お優しい傭兵（わんわん）は必死に庇う筈よ、そこから切り崩せ」
　手にした刃に劣らぬ程に毒に濡れた言葉を耳にし、ブライシオは少し考え込む様な仕草をして……空いた手で銜を引っ張って僅かな間、口元を自由にする。
「お前があの一党を抜けた後、何があったのかは知らんが……シンヤは特にお前の事を待ったりはしてないと思うぞ？」
「死ね、犬っころがぁっ！」

帝都でも仲間と祭りを満喫していたしな、と。
含みも皮肉も無く、ただ不思議そうに事実だけを告げた台詞に対して、眦を吊り上げた女が咆哮し、殺意満点で鋼鞭を振りかぶった。

「なんということだ……何故……！」
半ば呆然とした呟きが商人の口から零れて落ちる。
数名の護衛に守られて倉庫の端まで退避した彼は、今も木箱の壁の向こう側から聞こえる戦闘音が幻聴ではないのか、と手の甲を抓った。
商人にとっては残酷な事だが、強く捻られた皮膚から伝わる痛みは紛れもなく本物。否応なしにこれが現実であると告げている。
「ただの傭兵、では無かったのか……まさか私に眼を付けていた何処ぞの手勢だとでも……」
今現在暴れている獣人傭兵に関しては紛れもなくただの傭兵で、裏路地での遭遇時点では完璧な通りすがりだったのだが、それを察しろというのも無理な話だ。何より、現

時点ではがっつり首を突っ込んでいるので既に意味の無い前提である。
「……あの女、何がただの子供と野良の傭兵だ……！　どうする、どうすれば……？」
忌々し気に唇を噛みしめ、どうにか状況を好転させる手はないかと思考を走らせる。
「旦那様、もう止めましょう！　こんな荒事を聖都で起こした以上、例え何とか都市を出たとしても直ぐに追跡を受けます……！」
「……またそれか。あの女の台詞では無いが、逃げ出した『商品』を見つけるのに時間を掛け過ぎたお前にも、現状の責任がある事を自覚しろ！」
必死の形相を浮かべて二の腕を掴んでくる小間使いの若者を振り払い、ついつい苛立ちをぶつける様に怒鳴り散らす。
「旦那様！」
「くどい！　良案も出せずに喚くだけなら大人しく隅で伏せていなさい！」
ただでさえ組合から外れた仕事の関係上、信用や実力に欠ける自由契約傭兵なぞを数雇いしているのだ。逃げ腰の台詞ばかりを吐く若者のせいで低い士気が更に下がりかねない。
女斥候を除けば腕の立つ部類である、直の護衛を任せた者達に目配せすると、その内の二人が若者を引き剥がして壁際へと引き摺ってゆく。
主と同じく荒事には全く向いていない小間使いは為す術無く引き離されるが、それで

も必死に身を乗り出して言い募る。
「考え直してください！　今ならまだ間に合う！　間に合う筈なんです！」
「――待て、どういう意味だ？」
身を持ち崩しかけているとはいえ、商人も商いの世界でそれなり以上に経験を積んだ身だ。
無我夢中に吐き出された言葉が、その場の勢いや希望的観測で吐き出されたものではなく、何某かの根拠をもって口にしたものであると、すぐさま勘付く。
若者は自身が失言をした事に気付いた様に、息を呑んで顔を強張らせた。
「だ、旦那さ……」
「抑えなさい」
咄嗟に何かを口にしようとするが、主の低い声に応じた護衛が若者の肩を掴み、荒っぽく突き飛ばして壁に押し付ける。
壁に勢いよく背がぶつかり、苦し気に肺の空気を吐き出して呻く彼を見て、商人は眦を吊り上げてゆっくりと近付いた。
「お前っ、まさか……！」
憤激に声を震わせ、激情に任せて若者の胸倉を掴み上げる。
その双眸に浮かぶのは怒りと――幾ばくかの失望と、湧いた疑念を否定して欲しいと

いう僅かな希望だ。
激昂した主と、その背後で物騒な目付きで手にした武器を握る護衛達を前に、小間使いの顔が青褪め――。
ふわり、と。
微かに甘い香りが鼻腔を擽った気がした。
「……？　なんだ、甘いにお……」
呟いた声は護衛の一人のものだ。
だが、言い終える前にブツ切りにされた様に言葉は途切れる。
悲鳴も上げずに突如バタバタと倒れ伏す男達。壁際で若者を囲んだ中心――彼と商人だけがギョッとした表情で目を見開き、狼狽えて後退った。
「なっ、なんだ!?　一体なにが……！」
掴み上げた胸倉から手を放し、慌てて周囲を見渡す商人の前に、上から降って来た人影が音も無く着地。
誰何の声を上げる暇すらない。
あっと言う間に商人の腕を掴んで捻り上げ、倉庫の壁へと押し付けた人物は、手にしたナイフを彼の首筋へとピタリと当てる。
「動くな」

冷たい声色で告げたのは、暗色で纏めた軽装に身を包んだ女だ。
首に巻かれたマフラーで口元は覆い隠され、口調に劣らず冷えた眼光は油断なく商人の一挙手一投足を観察している。
「とうっ」
そんな小さな掛け声が、やはり上から降り注ぐ。
彼女からやや遅れて床へと着地したのは、年若い――それこそ幼い子供と言ってよいであろうエルフの少女である。
商人を拘束した女は冒険者か傭兵らしき装備を纏った戦装束だが、この子供に至っては旅行客や旅人が来ているごく普通の旅装だ。
エルフ、という事は女斥候の報告にあった『商品』を目撃した子なのだろうか？　ならばこの女は何だ？
（何者……いや、それ以前にどういう組み合わせだ、これは）
疑問、焦り、困惑、そして冷たい刃の感触。
それらでメンタルを滅多打ちにされ、著しい混乱状態に陥りながらも、商人はごく真っ当な疑問を内心で呟いた。

倉庫内で始まった大立ち回り。
ブライシオを迎撃する者達の中に、練度は高くないが遮音や隠蔽効果のある魔法を使える魔導士がいたのか、倉庫の外は思いの外静かだ。
それでも魔法自体の精度の関係で、内部での魔法の激突音や鋼の打ち合う音は微かに漏れる。
「始まったな。手筈通り行くぞ」
「はい。それでは行きましょう」
聞こえて来る戦闘音を合図に、バイオレットブラウンの髪色をした猫毛の斥候とピンクブロンドのエルフの少女――ヘザーとリリィは動き出す。
二人が待機しているのは倉庫の屋根の上だ。
密猟した魔獣・霊獣を捕らえている以上、それを乗せた馬車を屋外に停泊という訳もない。
ましてや生き物を運んでいるのだ。余程杜撰な管理しかしない三流でもなければ、一度は荷を下ろして『商品』の状態を確認する筈。
そう判断したヘザーは、前もって貸倉庫を使用するであろうと予想。

この密売を仕切る商人のこれまでの必要経費の使用感や率いている商隊規模から、空いている貸倉庫のどれが使われるか目星をつけ、馬車が搬入される前に倉庫の屋根に一部細工をしておいた。

といっても、そう大仰な物では無い。屋根板の極一部に切れ込みを入れ、外して内部に侵入できる様にしただけである。

「……今更ですが、ここを管理している方に怒られないのでしょうか」

「事後承諾になるが、屋根の修理代含めた賠償くらいは経費で出る――切断面を膠（にかわ）なり膠泥（モルタル）なりで固めれば済むように切ったしな」

そもそもそれを言うのなら、ブライシオが開幕ぶった斬った倉庫の扉の方が余程修理代が掛かる。

あそこ迄派手にやると経費では全額落ちないかもしれない。足が出た分はあの駄犬（デカいの）に払う報酬分から差っ引こうか、とか考えているヘザーであった。

空いた隙間は僅かなものだったが、細身な女性と小柄な子供である二人は滑り込むようにスルリと身を潜らせ、倉庫の内部に侵入した。

着地先は梁の上だ。それなりに高さのある建物なので、上から見下ろせば現在の倉庫内の状況はよく見渡せる。

「おぉ、オフィリとブライシオ様は頑張っていますね」

「おチビちゃんもあの小盾の力、問題無く発揮出来てるな――本当に《精霊術士（エレメンタル・ウィルド）》の素質持ちとはね……将来冒険者になる様なら、今後とも懇意にしておきたいもんだよ全く」

正面から乗り込んだ二人が気を引く間に、彼女達はこっそりと忍び込んだ形だ。

会話も声を潜めたやり取りとなるが、友人の活躍を目の当たりにするリリィの語調はすこしばかり跳ねていた。

多勢に無勢、四方八方を囲まれるもそれを物ともせずに暴れるブライシオであるが、やはり肩車したオフィリを明確な弱点と見做して狙って来る者はいる。

密売人側の主力である女斥候などはその筆頭だ。手にした鋼の鞭は生半可な鎧ごと身を抉り取る程の威力を有しているが、生き物の様にうねり、波打つそれは、獣人の剛剣と打ち合う最中にもその肩上の幼女を襲う。

本来、小盾では余程扱いに熟練した者でも無い限り受けきれない一撃だ。ヘザーも小盾を扱うが、鞭とは思えない重さを持つ打撃は凌げて数回だろうと判断している。

ましてやオフィリは背負っているだけ。側面や頭頂から襲い来る鋼の蛇に打たれれば、幼い少女の身体は無惨に引き裂かれる事必至、なのだが。

「……ッ、クソがぁっ！　なんで届かない!?　どうしてそんな子供に霊具が扱えるのっ!?」

小型の魔獣なら一撃で手足をへし折る自身の攻撃が通らず、苛立ちを吐き出すように叫ぶ女斥候。

それに対し、ムフーとばかりに小鼻を膨らませて自慢げな顔になるオフィリ――と、ブライシオ。肩車されて縦二つに並んだドヤ顔を見て、更に苛立ちが募るのか鞭の殴打が荒々しさを増す。

先の叫び通り、オフィリが背負った小盾はただの防具では無い。

魔装の武具とはまた別種の代物――精霊が宿る霊具の一種である。

特殊な条件や複雑な儀式を経て産まれるとされるソレらは、魔力を大量且つスムーズに通す事で武具としての基礎性能を高める魔装とは違い、何某かの魔法や特殊効果を発動させる物が多い。

その能力・効果は、宿る精霊の性質に依って大まかに決まり、分類的には魔道具の上位互換に近いと言える。

オフィリが背負っているのは、風の精霊の一種が宿った霊具である様だ。向けられる攻撃に対して圧縮された風を発生、相殺や減衰を行う効果を持っていた。

ちなみにこの道具、ブライシオとその相棒であるボルドの持ち物である。

霊具は内に宿る精霊が持ち主を選ぶ場合が多く、相性や魔力的性質が適応しなければその力を発揮しない。

獣人傭兵コンビも以前に手に入れたは良いが全く適正が無く、素寒貧になった時の非常用資金源として荷の底に眠りっぱなしであったとか。

だが、《精霊術士（エレメンタル・ウィルド）》――精霊やそれに類する霊獣との意思疎通し、心通わせる事を可能とするオフィリならば、殆どの霊具の精が力を貸してくれる。

そう判断して幼女へと小盾を貸し与えたブライシオの予測は見事的中していた。

オフィリの《精霊術士（エレメンタル・ウィルド）》としての才能がどれ程のものかは不明だが、風の精自体が彼女と相性の良い部類であったのか。

本来ならば霊具に選ばれた持ち主であっても、使いこなすにはそれなりの月日を要する筈の魔法効果は、現在進行形でガンガン仕事をしている。

幼女が背負っただけで霊具自体が積極的に力を発揮し、ほぼ全自動（フルオート）で風壁を発生させて攻撃を余さず弾く光景は……なんというか世間一般大多数の頑張って日々を生きている冒険者や傭兵、あるいは兵士の皆さんからすれば、正気が削れるレベルで理不尽な光景であった。

「むぅ……これはおねぇちゃんとして負けていられませんね」

精進です、と胸元で両拳を握って気合を入れているリリィの頭をポンと一つ叩き、ヘザーは最初にオフィリが指示した木箱へと眼を向ける。

「おチビちゃんが聞いた『声』が確かなら、《雪精狐（スノー・フェネック）》はあの辺りの木箱の中だ――他

の魔獣の幼体もな」
どうやら密売人達は冬や氷雪に属する種族に的を絞って集め、木箱内やその周辺に魔道具を用いた熱源を置く事で逃げ出さない様に体力を削っているらしい。
有効なのだろうが霊獣達への負担が大きい手法に、リリィの表情が憂慮で曇る。
「あれは寒い処に棲む仔達には辛い環境ですね……早く助けてあげましょう」
「焦るな。先ずは此処の連中を無力化してからでないと意味が無い」
流石に場慣れしているヘザーが、落ち着き払った声で諌める。
梁の上から戦闘の中心地と周囲の人間の位置取りを確認した彼女は、指先を軽く折り曲げて身振りだけでついてこいとリリィに示した。
大きな倉庫という性質上、天井を走る梁は普通の家屋より幅広ではあるが……音も無く、まるで平地を移動するかの様に身を低くしたまま小走りで梁上を駆けるのは流石の技量である。
一方でリリィも先を行く猫毛の冒険者程では無いが、中々に身軽な身のこなしだ。
故郷に居た頃はどちらかと言えばインドア派だったとはいえ、彼女も深き森の中で暮らしていたエルフだ。木登りや樹々を渡っての移動には心得があった。
二人は倉庫奥の壁際――積み上がった木箱の影に隠れ、大暴れするブライシオ達からなるべく距離をとって固まった者達の真上へと移動する。

何やら言い争いをしてる恰幅の良い商人らしい男とその小間使い、それを囲む護衛らしき男達の頭頂を見下ろし、ひそひそと小声でのやり取りを始めた。
「あの方が今回の主犯、という訳ですね」
「あぁ、先ずは周りを片付ける。あの商人を中心に、奴の周辺だけを除いて八……いや、九歩分だ。やれるか？」
「オフィリの扱う霊具の御蔭でこの辺りの風の精霊も活発化しています。楽ちんです」
軽く打ち合わせをすると、ヘザーが己の腰元へと手を廻し、小さな水筒を取り出す。
入っているのは水ではなく、きめ細やかな粉末だ。そっと商人たちの頭上より撒かれたソレは、リリィの風の魔法による繊細な微風で渦を巻き、外周へと膨れる螺旋を描いて静かに降り注ぐ。
「……？　なんだ、甘いにお……」
護衛の一人が小鼻をひくつかせて呟いた瞬間。
悲鳴も上げずに突如バタバタと倒れ伏す男達。その中で無事であった中心の商人だけがギョッとした表情で目を見開き、狼狽えて後退る。
粉末の正体は言わずもがな、麻痺毒の一種だ。
ヘザーも腕利きの斥候だ。あの女斥候に劣らず、こういった毒物に精通している様だった。

今回使用した物は即効性の高さもあって、辺境などでは麻酔代わりに医療で使われる事もある。濃縮して粉末化させたソレは、大した魔力強化も出来ない手合いならば一息吸い込めば即座の無力化が可能な代物であった。

「なっ、なんだ!?　一体なにが……！」

怯えて壁に周囲を見回す男の正面に、バイオレットブラウンの髪とマフラーを靡かせたヘザーが音も無く着地する。

「――！　なにも……」

「動くな」

誰何の声を上げて距離を取ろうとするも、背後は壁。

そうでなくとも荒事は雇った者達に任せている商人が、一流の冒険者の動きに反応出来る筈もなく、一瞬で腕を捻り上げられ、首筋に小さなナイフが突きつけられる。

護衛が倒れると同時、風の流れを操作して麻痺毒を無害な濃度になるまで散らしたリリイが、一拍遅れてシュタッとばかりに床へと着地した。

倉庫内の他の誰にも気付かれず、速やかな主犯の鎮圧・確保、完了である。

「成功ですね。ナイスコンビネーションでした」

「あぁ、子供とは思えない良い腕だ。近年の火力偏重な若い魔導士なんかよりよっぽど基礎が出来てるよ、お前さんは」

「リリィはおねぇちゃんですからね。いぇーい」
今もわんわんと一緒に暴れている友人そっくりのドヤ顔で、ムフーっとばかりにピースするリリィ。
ヘザーはそのピースサインを視界の端に収めて苦笑し――直ぐに表情を削ぎ落して手にしたナイフをほんの少し押し込む。
「詰みだ。あのイカれ女やまだ立ってる護衛共に投降する様に呼びかけろ」
「……ッ、待てっ。今回の商談は組合上層部にも働きかける事が出来る方達が望んだものだ……！　君が誰に雇われたにせよ、この取引の邪魔をしたとなれ――」
買収か、脅しか。
口早に紡がれた言葉は、更に数ミリ、刃先が喉へと押し込まれた事で強制的に中断される。
「安い脅しが通じる様なヘボに見えたか？　お前の喉をこの場で掻っ切らないのは、私なりの慈悲なんだがな。無下にされればその分だけ刃先の動きは軽くなるだけだと思え」
淡々と告げられる言葉は抑揚に欠けており、それだけに、首に押し当てられた冷たい刃物の感触が寒気を誘う。
ごくり、と慎重に唾を飲み込んだ商人は、眼前の冒険者らしき女の背後に佇むエルフ

の少女へと、慈悲を乞う様な眼を向けた。
――が、残念。リリィは既にでっかいわんわんと幼女コンビの活躍を木箱の影から伺い、小声で応援するのに夢中である。
事前にヘザーから「脅し付けるから何か言われても無視な」と言い付けられているので、どのみち商人の一縷の希望は断たれているのだが。
（リリィもいる手前、実際に始末するのは避けたいが……さて、どうするか）
ヘザーが思案をしていると、梁の下にいた男達の中で、商人を除けば唯一麻痺毒の効果範囲を逃れていた者が懇願の声を上げる。
「待て、待ってくれ……！　旦那様を殺さないでくれ……！」
それは、子供達が最初に《雪精狐（スノー・フェネック）》と出会った際に声を掛けてきた、商人の小間使いである若者だった。
必死の形相で詰め寄る彼が、勢いで凶行に走らないとは限らない。
ヘザーは咄嗟にリリィを引き寄せると、商人に突き付けたナイフはそのままに、逆の掌を若い男へと向ける。
服の裾から覗くのは、おそらくは射出型の暗器か。油断なく武器を向ける腕利きの冒険者を前に、男は怯えながらも言い募った。
「俺がなんとか説得する、そう言ったじゃないか……！　情報を渡す代わりに俺と旦那

様の命は保障する約束だろう！」
「……！　やはりそうだったか、この裏切者がぁっ……！」
「此処まで来たらもう無理ですよ、今からでも自首して協力しましょう！　そうすれば、まだ！」
「何がまだ、だ！　孤児上がりのお前にどれだけの教育と世話をしてやったと……それを、こんな……！」
若者と商人が、状況を忘れたかの様に言い争う。
ここまでの会話から察せられる通り、この若者はヘザーに協力して商人側の情報を流していた内通者である。
主に臆病と称された気性故か、この密猟取引に将来が無い、と判断しての英断であったのかは定かでは無いが、主にこの商いの取りやめを説く傍ら、外部の者に接触を持とうとしている事に気が付いたヘザーが取引を持ち掛けた形だ。
捕縛の際、或いは捕まえた後、協力した若者自身の生命は保障したが……主犯である商人の方は、密猟商売を翻意させる事が出来たら、という条件で情報を受け取ったのだが……。
既に捕り物は始まった。彼には気の毒だが、時間切れである。
正直ヘザーとしては、説得自体が望み薄であるとは思っていた。

会話を聞く限り、小間使いの方は分かり易く”旦那様”を心配しているが、どうやら商人の方も単なる丁稚以上の情は抱いていたらしい。

彼からすれば裏切られたも同然なのでその分憎さ倍増しだろうが……そのせいで頑なになられると面倒だ、と内心で舌打ちする。

降参を促す為に脅しこそしたが、実際の処は子供達に協力を頼んだ手前、安易に血生臭い方法は選びたくないのがヘザーの本音だ。

絵本の中のお話でもあるまいし、勧善懲悪めでたしめでたし、などと行く筈も無い。

無いが、幼子を鉄火場に巻き込んだ以上、出来る限り嫌な記憶や思い出にならない様に骨を折るべきだと、彼女の職業意識は訴えている。

（切り口にはなるか……）

或いは、この協力者を使えば、商人を穏便に折る切欠になるやもしれない。

そこまで考えた瞬間。

それこそ素人でも分かる、背筋が粟立つ様な膨大な魔力の胎動。

それを感じ取り、ヘザーのみならずその場の全員が倉庫の中心――今も続く戦闘の渦中へと眼を向ける。

詰まれた木箱に遮られる事でこちらの状況を気付かれにくい位置取りだが、逆を言えばあちら側の戦況も確認しづらい。

そんな中、種族的にも修めた技能的にも魔法的な探知に優れたリリィが焦った様に魔力を練り上げ、呟いた。
「これは……!? 不味いですっ……!」

「こ、の……! クソ餓鬼ィ! 調子に乗るなぁっ!」
「かきーん! ばーりあー!」
「あ”あ”あ”あ”あ”っ、クソがぁぁっ!?」
何度目かになる叩き込んだ鋼鞭の一撃が風の壁に遮られ、鈍い音と共に弾かれたのを見て、女斥候の喉からヒステリックな絶叫が上がる。
彼女の武装の中で最も威力のある武器でこれなのだ。毒を塗ってあるとはいえ、投擲用の小さな刃物など通じる筈もない。投げ尽くしてとうに残数ゼロである。
年端もいかない幼女が霊具を扱う事に驚愕こそしたが、女斥候も戦闘者として一流の域にある。
精霊を宿す武具は練熟には時間を要し、使用にも集中力を求められる上に、未熟な使

い手ならば直ぐに消耗してしまうのは当然知り得ていた。
所詮は子供。連続で霊具を使用させればたちまちに気力切れを起こして集中を欠く様になり、ただのお荷物に成り下がるだろう。
そう判断して、改めて周囲の雇われ連中にも幼女――オフィリを狙う様に指示したのだが。
（どいつもコイツも……！　半端物の出涸らし共っ……!!）
戦力・実力差を悟り、適当な牽制だけを繰り返す者。
獣人傭兵の武力に怯まず攻撃こそ加えるが、女斥候への反発か、単に子供狙いを嫌がったのか、幼女ではなくその下のブライシオに狙いを定める者。
命令通り幼い少女へと武器を向ける者もいるにはいるが……それも躊躇いがあるか、狙いも勢いも手ぬるいにも程があった。
密猟品を取り扱う商人に雇われておいて、子供に武器を向けられない……女斥候からすれば、この期に及んで覚悟の足りない、甘ったれな三流以下の愚図の群れにも等しい。
だが、そんな愚図でも数とそれなりの連携で獣人傭兵の動きを幾らかでも制限出来ているのは確かだ。
ならば、戦闘の難度は多少上がるが自分が幼女の集中力を削り切ってしまえばよいと、手持ちの投擲を織り交ぜて狙い続けていたのだが……。

「なんで息切れしない！　ただの子供の癖におかしいでしょうがぁっ!!」
「わふん。バフわうっ、ワォン（俺を忘れてもらっては困る）」
「――がっ!?　ぐっ……何いってるか分からないのよクソ犬……！」
手にした特大剣（グレートソード）で鋼鞭の打撃を打ち落しながら迫るブライシオが、身を翻しながら蹴りを叩き込んでくる。
空になった左手に近接用の短剣（ダガー）を握り、女斥候はかろうじて丸太を打ち付けて来るような蹴り足を受け止めた。
激烈に重たい衝撃に身体が後方に押しやられ、踏み留まるブーツの底が床を削って焦げ臭い匂いを発する。
小盾から発生する風の防壁は、まるで出力を弱めない。
それどころか最初は幼女に対する攻撃のみを弾いていたのが、今やその下の獣人の背中にまで護りの範囲が広がっていた。
「わふわふ。ウォン。バウウッ、バウッ（盾を渡して数刻後にはこれか。頼もしいな）」
「たてさんにね、ぎゅわーってしてーっておねがいするの！　そしたらわんわんもたすけてくれるって！」
「わふん（うむ、逸材という奴か。将来が楽しみだ）」
銜のせいでブライシオはまともに発音が出来てないのだが、何故か普通に会話が成り

立っている二人である。
獣人傭兵が余裕を見せている前提とはいえ、辛うじて拮抗状態に近いと言えた戦況。
それはオフィリの霊具の扱いが向上したことで、どうしようもなく傾き始めていた。
女斥候もそれは理解しているのだろう、益々苛立った表情となり、見開かれた瞳は血走っている。
隈の浮いた顔色も相まって一層恐ろし気な顔つきだった。
「くそっ……くそっ！　畜生……！　なんで邪魔するのよっ……！　シンヤが待ってるのにいっ……！」
怨嗟の込められた独白と共に、短剣（ダガー）を握ったままの左手で髪の毛を掻き毟る。
恨み骨髄の怨敵、と言わんばかりに幼女と獣人を睨み付けるその形相は、子供どころか大の大人――それこそ味方である周囲の雇われ傭兵や冒険者くずれであってもドン引きして怯む迫力があるのだが、視線をぶつけられている当人達はどこ吹く風と言わんばかりの余裕っぷりである。
「ウォフッ、バウワウッ、ワフフーン？（中々の眼力だな。大丈夫かオフィリ？）」
「……？　しすたーとおばーちゃんが、めっ！　ってしたときのほーがこわいんだよ？」
「ワッフ……（成程、納得だ）」
元より、超一流に近いゴリッゴリの前衛であるブライシオ相手では、中衛である斥候

は相性が悪い。
周囲にいる者達に一定の質があるか、霊具の護りを抜けるだけの火力を持つ後衛が一人でもいれば、それらを見せ札にした立ち回り方もあったが……それらが欠けた戦力では、勝ちの目は最初から無かったのだ。
或いは、女斥候がまだ正規の資格を持つ冒険者であった頃。
その頃の……《水剣》の一党であったときの仲間が一人でもいれば、それだけでブライシオはもっと苦しい戦いを強いられる事になっただろう。
だが、それも無意味な前提だ。
あの頃の仲間がこの場に居たとしても、誰であっても女斥候を止める側に回っていた。それこそ彼女が求める青年であっても、当然の如く。
何より彼女自身が、青年以外を只の邪魔者として認識していたのだから。
身から出た錆、因果応報、自業の末。
彼女の今の境遇は、そう評するに相応しい。
恋敵である事と、仲間である事、友人である事は、きっと両立できた。
ほんの少し歩み寄れば、ただ、それだけで……もっと違う現在(いま)もあった。
自身も他者も傷つける、毒にも近い恋か愛を謳い立て——今尚その毒に身を浸し続ける女は、その事に気が付けない。

「もう、いい……」

追い詰められ、煮詰まり、狂態を見せる者特有のギラついた眼が、相対する肩車コンビ以外の周囲まで憎々し気に睥睨する。

「……どいつもこいつも邪魔ばかりっ！　折角私がシンヤの隣に帰れるチャンスなのにいっ!!」

斥候としての技術を生かす為に必要な一握の冷静さすら放り投げ、髪を振り乱した女は腰のポーチから一つの筒を掴みだす。

保護性の高い硬質の筒から引きずり出されたのは、一枚の呪巻物（スクロール）だ。

規模や威力、効果の高い魔法である程、込めるのに掛かる時間や魔力、皮紙の素材価値が跳ね上がる為、基本流通しているのは低位から中位の物が殆どなのだが――振り回すように広げられ、発動した呪巻物（スクロール）から溢れる魔力は、紛れもなく最高位に近い、極大級のものであった。

どの様な属性であれ、こんな屋内で高精度の魔力制御技能の無い……即ち魔導士でも無い者が発動させれば、敵も味方も関係なく全員を吹っ飛ばしかねない代物だ。

下手をしなくとも使用者まで巻き込まれるのだが、発動させた当人は眼を血走らせて髪を振り乱し、口の端には涎まで垂らした状態だ。まともな判断の下使用した訳もない。

「――！　ヴァフ！（いかんな！）

周囲――それこそ倉庫を消し飛ばして周辺区画にまで被害が出るであろう魔力の胎動に、ブライシオは咄嗟に飛び出した。

被弾覚悟、ごり押しで女斥候を叩き斬ろうと剣の柄を握る腕に力を込める。

完全に発動する前に呪巻物（スクロール）を破壊すれば、暴発の規模も最小限で済む。至近距離であっても己なら死にはしない――そう判断しての瞬間的な選択だったが、そこで彼は自分が肩車している存在を思い出した。

迷いは一瞬。特大剣（グレートソード）を床に突き立て盾として翳し、防御の体勢に切り替え。

同時にオフィリを下ろして小脇に抱え込み、自身の背に隠し、数瞬後には放たれるであろう破壊力に備えて牙を噛みしめる。

「オフィリ！　ブライシオ様！」

「全員死ねぇっ！　シンヤが私にくれた愛の力で、死んでしまえぇぇっ!!」

リリィの切羽詰まった叫びと、狂気で裏返った女の叫びが、倉庫内の多くの者達が挙げた悲鳴に混じって大きく響き渡り――。

「――姫！　ここにおられましたか！」

そんな場違いな程に陽気な声がその場の全員の耳に届き、同時に極大クラスの魔法が発動した。

目を焼く強烈な魔法の光が、其処にいた全員の目を灼いて。

「……な、な……!?」

先程までの狂態がそれを上回る驚愕で塗り潰された様な、驚きで罅割れた女の声が、まず最初に耳に飛び込んでくる。

「びっくりした……ンだよいきなり。物騒なモンぶっ放そうとしやがって、姫と画伯が怪我したらどうすんだテメェ」

次いで、不機嫌そうな、だが軽い口調の男の声。

やがて光が収まると、全員の眼には魔法の発動地点であった空間に拳を突き出した、鳶色の髪と瞳をした男の姿が映った。

男の握った拳。

其処からまるで圧力に負けて上下に飛び出た様な形で、歪で巨大な氷の柱が屹立している。

下は床を突き破って深々と大地を穿ち、上は倉庫の天井を悠々とぶち抜いて空に向かって伸びる氷柱は、本来なら倉庫とその一帯を氷結・粉砕する筈であった超低温の魔法の名残であった。

倉庫の入口から文字通り瞬きの間に呪巻物（スクロール）の発動点に飛び込み、放たれた極大級の魔法を素手で握り潰した男――《魔王》は、微かに霜がへばり付いた自身の拳を開いてプラプラと振る。

「へぇ。俺に冷気を通すのか……良い魔法だな」

「……なんなのよアンタはぁぁぁっ!!」

不機嫌から一転、楽しそうな表情（カオ）で開いた掌を眺める《魔王》に向け、ヒステリックな声が向けられる。

認め難い、有り得ない光景を目の当たりにしたかの様に、口角泡を飛ばして女斥候は叫んだ。

「極大級の――シンヤがくれた、彼の本気の魔法よ!?　なのに、なのに……！」

「シンヤ？　あぁ、アイツの後輩の……大会じゃ縛ってた様だが、そうか。マジでやればこのレベルなのか。一回遊んでみてぇな」

益々楽しそうに笑うと開いた拳が再び握り込まれ、じゅっ、と音を立てて付着した氷が蒸発する。

大戦真っ只中に呪巻物（スクロール）を作成した本人――シンヤが聞けば「とばっちりじゃないですか!?」と、白目を剥いて悲鳴を上げそうなセリフを吐いた魔族領の長は、そこで漸く背後の知り合いへと首を向けた。

「――で、だ。なんでお前がいんだよブライシオ。それよりなにより画伯を小脇に抱えるとか羨ましいので変わって下さいお願いします！」

「うむ、今日も平常運転だな陛下は」

魔法の炸裂に備えて歯を食いしばった為、咥えた銜が砕けたブライシオが常のテンションに戻って頷く。

おじちゃんだーと手を振るオフィリに向けて、ニッコニコで手を振り返した男の後頭部に鋼鞭が叩きつけられた。

「そうだ画伯！　外はちょっと天気が怪しくなってきたので傘をお持ちしました！　良かったらお持ち下さい！」

「おそと？　あめふるの？」

「まだ確定じゃないですけどネ！　ちょーっと妙な匂いだったんで、お洋服が濡れるのが嫌なら後で俺が発生源を見てきますヨ！」

打ち付けられた衝撃ガン無視で平然と幼女との会話を続けるロ〇コンに向けて再び鞭が振るわれるが、今度は振り向きもせずに掴み取られる。

「そういえば陛下、何故聖都に？　補佐殿は知っているのか？」
「……あっ。いや、うん。これには深い訳があってだな……黙ってて下さいお願いします」
「む。そうか……補佐殿には世話になったので不義理はしたくないのだが……」
「お、俺も前に仕事の斡旋したり魔族領に来ないかって誘ったりしただろ！　黙っててくれたら塩分けてやるから！」
「塩」
「塩。肉とか焼いて喰うときに重要だろ」
「否定はせんが……」
　ブライシオと会話しながら無造作に引き千切った鞭を放り捨てると、今度は短剣が首の動脈を狙って突き込まれ――それを二本の指で挟み込んで止め、鬱陶しそうに《魔王》は振り返る。
「さっきから何なんだお前。構って欲しいなら後で遊んでやるから大人しく待ってろよ」
「糞、クソがっ！　ふざけるなっ！　……彼が、シンヤが私にくれた切り札が、アンタみたいな訳の分からない奴に……！」
「話が通じねー……なんなのコイツ？」

珍しく辟易とした表情になった《魔王》が幼女と獣人に向けて「誰なのコレ？」と視線だけで問い掛けると、二人はちょっと顔を見合わせた後、口々に答えを返す。
「元はシンヤの仲間だ。今は密猟者の一派だがな――街中でオフィリとリリィを襲っていたので、偶然俺が助太刀に入った」
「きつねさんにいじわるしてたひと。おふぃーはめっ、ってしにきたの！」
次の瞬間、《魔王》の腕がコマ落としの様に消え、短剣（ダガー）が粉砕されて細かな破片となって宙を舞う。
ベヂィ！　という平手で肉を打つ様な――だが異様に重みを感じさせる音と共に、女斥候が砲弾の如き速度で射出された。
悲鳴・苦鳴の類すら上がらない。
一直線に吹き飛んだその身体は進路上にあった荷の残りを粉砕しながら倉庫の壁を突き破り、轟音響かせて外へと飛び出し、隣の倉庫の外壁へとめり込んだ。
漫画みたいな人型の穴が空いた壁を見て、事の成り行きを呆けて眺めていた雇われ者達の顔が一斉に青褪める。
「一派っつー事は仲間がいるんだよな？　他は？」
「此処にいる連中は大半がそうだが」
不機嫌そうな問いにブライシオが即答した瞬間、まだ意識のある傭兵や冒険者くずれ

の男達は一斉に武器を放り捨てた。
「「降参します」」
一糸乱れぬホールドアップからの唱和である。
腕前はともかくとして、生存本能とそれに伴う状況判断は中々に優れた連中であった。
「……無事、と言って良いのか分からないが終わった様だな。随分と肝が冷えた上に、予想外な事が連発したが」
一気に片付いた状況を見て、遅ればせながら鳥・犬・幼女の下に歩み寄って来たのはヘザーだ。
その両手は、拘束して襟首を掴んだ人間を一人ずつ引き摺っている――言う迄も無く、今回の主犯である商人と、その小間使いである若者だ。
そんな彼女を追い抜いて、エルフの少女が前に飛び出してくる。
「お、姫！　傘をおｍ「オフィリ、無事ですか……！」
にこやかに手を挙げた《魔王》をスルーし、リリィは友人の傍へと駆け寄ってそのちいさな身体を抱きすくめた。
「ごめんなさい、リリィはお友達の危機を前に何も出来ませんでした……おねぇちゃん失格です」

「……？　おねぇちゃんはおねぇちゃんだよ？」

沈痛の表情で悔恨滲ませた呟きを発するリリィだが、オフィリは不思議そうに小首を傾げて”おねぇちゃん”の頭を背伸びをして撫でている。

ちなみに無視されてやや所在無さげにしていた《魔王》だが、一瞬で切り替えて「幼女同士の抱擁……これはこれで尊い……」とか感じ入った表情で頷いていた。

友人に頭をよしよしされて気落ちした精神を幾分か回復させたリリィが、その友人と手を繋いだまま、一度はスルーした《魔王》のもとへとやってくる。

「助けて下さり、感謝いたします」

噛みしめる様に呟かれた言葉は端的であったが、その分、心からの想いが籠っている。

一連の流れが一瞬過ぎて視認すら難しかったのだが、オフィリも先程の”こわいまほー”を潰してアート染みた氷柱に変えたのが《魔王》である事は理解しているのだろう。

リリィに倣って「ありがとーおじちゃん！」と元気よく感謝を告げると、ペコリと丁寧に頭を下げる。子供ながらに礼儀正しい一礼は保護者（ブラン）の教育が伺えた。

「えっ、なにこれ嬉しい……俺今日死ぬの？」

子供達から感謝と、ちょっと尊敬の混じったキラキラとした視線を向けられ真顔でアホな事を言い出す超越者。普段どういう扱いを受けているかが透けて見える反応であ

る。

「……まぁ、なんだ。とりあえず話の擦り合わせをしよう。倉庫はこんな状態だし、何故か《魔王》陛下はいるし……依頼失敗かもなこれ……一月がかりだったのになぁ……」

ヘザーが疲れた様子で長々と息を吐き出し、空の代わりに天井をぶち抜く氷柱を見上げる。

不発に終わったとはいえ、あんな規模の魔法行使があったのだ。もう少しすれば衛兵が駆けつけて来るだろう。

駄目押しとばかりに、この場には一応、一国の主たる男がいるのだ。何をどうやっても後日になって話がデカくなるのは確定だった。

「うむ、こういう事もあるだろう。そう気を落とすな」

「……言っとくがな駄犬(デカいの)。帝国から失敗判定出たらお前も今回タダ働きだからな?」

「――! そういえばそうだった……不味いぞ、霊具まで持ち出したのに兄弟に叱られてしまう」

ブライシオが肩を叩いてヘザーを慰めるも、タダ働きはお前もだと半眼で宣う彼女の言葉に愕然とした顔で硬直している。

ワイワイと仕事終わりの雑談を繰り広げる愉快な一団を眺め、拘束されてヘザーの足元に座らされている二人――商人とその小間使いがなんとなく目を見合わせた。

「……結果的にあの魔法は不発に終わったが……あんな真似をしなければお前は縄を受けなかっただろうに……何故だ？」

裏切られた、そう思って煮えていた感情がすっかり鎮火した様子で、商人が力無く呟く。

リリィが全力で魔力障壁を展開するのと同時、若者はヘザーに飛びついて突き飛ばし、商人の男を押し倒して身を伏せようとした。

当然そんな真似が成功する筈も無く、普通に避けられ、殴り倒されてこうして拘束を受けている。手加減はされたのだろうが、彼の頬は真っ赤になって腫れあがっていた。

「元から彼女に協力したのは、旦那様と俺自身の量刑を酌量してもらう為です……俺だけ無事でも意味がないんです」

「……牢屋入りしても構わない程に、この取引は受け入れられなかったか」

「……これは、旦那様が教えてくれた”商い”じゃない。阿漕な真似もする、汚い手だって使うけれど、それでも商人としての道筋だけは外れなかったアンタが、”犯罪”で金儲けをするのは我慢出来なかった、それだけですよ……」

恩義か、敬意か。はたまた言葉に出来ぬ別の感情があったのか。

やや投げやり気味ではあるが、胸の裡を吐露した若者の表情は、言いたい事は言えたとばかりにスッキリしたもので。

その顔は痛々しく腫れたままだが、何処か満足気ですらある。
臆病で行動力が足りず、幾らか教育こそ施したが肝心の商才にいまいち欠ける、孤児上がりの小間使い。
そんな風に思っていた若造が見せた言動と、今回見せた行動力。
それらを振り返った商人は、毒気を抜かれた表情で倉庫の天井を見上げ、溜息を洩らした。
「どうあれ、商人としての私は完全に終わりだ。密猟した霊獣の幼体を都市に持ち込んだ以上、牢から出てこれるのも何時になるか分からん」
「……」
「情報提供者のお前は、牢屋入りしたとしてもそう長く掛からんだろう――出たら、以前に寄った南部の問屋に向かえ。多少の資金を預けてある、好きに使うがいい」
素っ気なく告げられた言葉に、若者は眼を見開く。
驚きと、幾ばくかの喜び――けれど小さくない困惑を抱いて彼は眉根を寄せた。
「……これから旦那様の資産は全て没収されると思うんですが……」
「法的には独立させてある。調査はされるだろうが手は出せんよ……それをやれば、非常用のプールをしている全ての商会に喧嘩を売るも同義だ」
博打同然の真っ黒な商売に手を出し、賭けに負けて。

打ちひしがれ、くたびれた様子の商人――否、商人だった男は……若者に己の最後の財を託したそのときだけは、嘗てのやり手な商い人らしい、太々しい笑みを見せたのであった。

「っと、そういえばリリィ。落し物だ」
「……？　あ、落としていましたか。ありがとうございます、ヘザー様」
猫毛の女冒険者が差し出した小さな、やや厚みのある棒状の物を、エルフの少女は両の掌で受け取って大事そうに眺め廻す。
「見た感じ、呼子か？　あまり見ない意匠だが……」
「その様なものですね。これはリリィの最終兵器なのです」
「……その笛が、か？」
訝し気な問いにこっくり頷くと、リリィはしっかりと上下左右から掌サイズの笛を見廻し、どこも壊れてない事を確認して。
首から下げていた紐が切れてしまったソレを、ハンカチで丁寧に包んでポケットにしまう。

「先程、咄嗟に吹いてしまいましたが……結果的には《魔王》様の御蔭で事なきを得ていますし、必要の無い御足労をかけてしまいます。あとでごめんなさいしなければいけません」

己の不甲斐無さに忸怩たる想いを抱き、だからこそ次はこの経験を生かそうと、少女は自身に固く誓う。

「今回は赤点でした、おねぇちゃんとしても従者としても、次はしくじりません。目指すはぱーふぇくとおねぇちゃんな従者なのです」

明後日の方向をびしっと指さし、愉快な仲間達が「おー」とか言って小さく拍手する中、少女は誓いも新たにフンス、と鼻息荒く気合を入れた。

薄暗い路地裏を、ふら付く足を叱咤して女斥候が駆ける。

「ハァ……ッ、ハァ……。く、そ……！　薬の瓶まで割れてたらヤバかった……」

《魔王》の無造作な平手で胴を打たれ、人間砲弾となって倉庫の外壁に突き刺さった彼女だが、失神から直ぐに意識を取り戻したのは幸運だった。

ポーチや身体の各処に仕込んだ様々な道具は大半が破損していたが、無事であった物を使って最低限の処置を行い、こうして必死に逃げを打っている。

市販の物では最も優れた回復効果を持つ霊薬を服用してなお、じくじくと傷む全身の打撲に、自然と悪態が漏れた。

「あれが、魔族の王……とんだ化け物じゃない、なんで私ばかり……！」

圧倒的、という言葉ですら生ぬるい力の差を叩きつけられた事で、多少は頭が冷えた。

そうなれば、あの獣人傭兵が「陛下」と呼んでいた事も含め、乱入者の正体を察する事は容易い。

同時に、重要な――恋人である青年のもとに帰る為の仕事の最中に、あんな怪物と遭遇してしまった自身の不幸を嘆く。

もうどうしようもない。あの仕事から得られる貴族のコネは諦めるしかなかった。

だが、あくまで今回の件に関しては、だ。彼の――シンヤの傍に戻る事を諦める訳もない。

彼だってきっと待ってる。あの死神に無理矢理に一党を追い出され、正規の冒険者資格まで剥奪されてしまった自分を、きっと今でも待っていてくれている。

彼女の中ではそれが真実であり、揺ぎ無い確信なのだ――現実がどうであれ。

「とにかく、聖都を出ないと……後は傷を癒して、装備の修繕を……あぁ、シンヤぁ……」

一刻も早く冒険者として返り咲き、大切な青年の傍へと戻らねばならないというのに、今回の仕事が滅茶苦茶になった御蔭でやる事が山積みだ。実に忌々しい話である。

あの場にいた連中――特にノコノコと首を突っ込んできた獣人傭兵と子供二人をまとめて縊り殺してやりたくなるが、今の状況や身体のコンディションでは無謀な話だ。

なにより、愛する青年のもとへ帰る事の方が遥かに重要である。機会（チャンス）があれば消す、その程度に留めて頭の片隅に置いておくべきだろう。

ボロボロになった格好のまま、狭い路を進む。

「先ずは住民区に……難民が使ってた空き家を……日が暮れるまで身を隠して――」

痛みと体力の消耗で重くなる意識と身体。

それを動かす為、声に出してこれからの行動を呟きながら、走る。

何はなくとも人目を避けねばならない。その為に住民区への迂回路となる道順（ルート）を頭の中に書き起こそうとした、そのときであった。

――意外やな。聖都には絶対に近寄らないと踏んでたんだが。

そんな、何処からともなく聞こえてきた声に、女斥候は足に杭を打ち込まれたように動きを止めた。

同時に気配も何も無く、唐突に彼女の目の前に人影が舞い降りる。
屋根の上から飛び降りて来たらしきソレは、全身鎧であるというのに音一つ立てずに着地し、深く膝を曲げた姿勢からゆっくりと立ち上がった。
「あ、ぁ……ひ、ぁ……」
身体が、思考が、凍り付く。
全身を巡る血液まで凍え、冷え切る様な感覚。
だというのに、心臓の音だけは煩い。バクバクと脈打つ心音が耳に響く。
――いやー、知り合いから預かってる子がさぁ、もしもの時に渡した警笛を吹いたみたいでさー。
軽い、彼女の愛する青年と比べればいっそ軽薄にすら感じる口調の言葉も、耳に入らない。
薄暗い路地にカチカチと小さく鳴り響くのは、震えにより上下の歯がぶつかる音であった。
手足の指先は冷え切っているというのに、女の背中は冷たい汗でぐっしょりと濡れそぼっている。
――いや、悪戯で吹いたりはしない子でね？　こりゃいかんと慌てて笛音の場所に向かってたって訳よ。

暗がりに沈み込む様な漆黒の装甲とは正反対の、場違いな程に明るい独白は続く。
それを正面から見つめる女斥候の瞳には、涙が滲み始めていた。
――あ、ちなみにその子、エルフの女の子なんだけど。背丈はこんくらいの。
「――えっ……ぁ……ち、ちが……待っ……！」
――で、向かう途中で必死こいて走るボロボロなおたくを見掛けた訳だが……まさか関係あったりしないよな？
しょわー、と。
極小さな水音を立てて、女の内腿を液体が伝う。
精神的負荷が臨界を超え、ガクガクと身体が痙攣を始めるも、眼前の死神はそれにはなんら頓着する事無く。
答えは聞いた、と言わんばかりに、無言の儘、全身に深紅の魔力光が奔る。
死神がゆっくりと片手を挙げ、こちらに向けた光景を最後に、彼女は限界を迎えて視界が暗転――綺麗に意識を飛ばしたのだった。

「バイバーイ！　またねおねーちゃーん！」

元気に手を振るオフィリへと応えて手を振り返し、リリィは家路につきます。

陽が沈む前には終わる予定のお使いでしたが、予定外の冒険を挟んだ事で既に時刻は夕方に差し掛かろうとしていました。

リリィはおねぇちゃんなので問題ないですが……予定時刻より大幅に遅れた事で、オフィリを待つ孤児院の皆は大層心配している事でしょう。

幸い、ヘザー様がオフィリを送り、保護者であるシスター・ブランにも事情を説明するとの事でしたので、お任せした形です。

やはり今回の一件は事が大きくなったので、後日に冒険者組合と聖都の衛兵詰め所の両方に報告書を提出するのだとか。お疲れ様ですね。

ブライシオ様は「兄弟に消化の良い物を見繕ってやらねばならん」と仰って、倉庫前でお別れする事に。

相棒であるボルド様と共に、暫くは聖都で仕事を探すそうなので、また御一緒する機会があるやもしれません。

そして、今回窮地にて助けて頂いた《魔王》様ですが。

現在、聖都にはいらっしゃいません。

かといって、魔族領にお帰りになった訳でも無いのです。
切欠は、囚われていた《雪 精 狐(スノー・フェネック)》や他の魔獣の赤ちゃんなどをご覧になった際の話でした。
「あぁ、これの所為か」と頷く《魔王》様によると、聖都より北に見える山脈に、《雪 精 狐(スノー・フェネック)》――子狐さんのお母さんがやって来ているとの事です。
なんでも、このまま放置していれば二日もしない内に冷たい雨や雪を撒き散らしながら聖都に突撃してくるとか。
今回の一件、時間的に相当にギリギリのものであったのだと、皆で胸を撫で下ろした次第でした。
「ついでなんで、子供届けるから山で大人しく待ってる様に俺が言いつけてきますヨ！」
親指を立てて軽い口調で仰り、そのまま物凄い速さで北のお山へと走り去った《魔王》様には頭の下がる思いです。
今回は本当にお世話になったので、出来れば《亡霊》様や他の《災禍》の方々に《魔王》様を叱らない様にお願いしたい処ですね。あの方がいなければ、リリィもオフィリも少なからず怪我を負っていた可能性が高いのです。
あ、問題の霊獣・魔獣の仔達ですが、オフィリのお願いを聞いて、現在はあの倉庫内に留まっています。

水や氷、冬に関わる種族が殆どで、高温を保った木箱や檻に閉じ込められて衰弱している仔が多かった為、野に帰すにしても体力を回復させてからにするのだとか。

あの魔法を《魔王》様が強引に抑えつけた事で、今、倉庫内は彼らにとって濃密な氷結の魔力漂う非常に居心地の良い環境となっています。

それもあって、オフィリのお願いはあっさりと受け入れられました。種族問わず氷柱の周りに陣取って寝転がる様は、とっても可愛らしい光景でした。皆がお家に帰る前に、もう一度くらいは見ておきたいですね。

さて、この後は一旦大聖殿へと戻り、更に設置してある《門》を通ってお家に帰る予定です。

色々とあった今回のお使いですが、義母様は今日のお夕飯はハンバーグだと言ってしました。一日の〆に一番美味しいご飯が待ってると思えば、疲れも吹き飛ぶというものです。

「おや、あれは……」

ハンバーグと義母様のお顔を交互に思い浮かべて足取り軽く家路を急ぐリリィですが、向かう方角より歩いて来る方の姿に気付いて、小走りに駆け寄りました。

――リリィ。

「兄様。迎えに来てくださったのですか」

――笛が聞こえたからなぁ……まぁ、なんも無かったなら良かったよ。

「……申し訳ありません、鳴らした直後に解決したのです。お手数をおかけしました」

苦笑して頭を撫でて下さる兄様を見て、なんとも申し訳ない気分が湧き上がります。

従者の身でありながら御迷惑をかけてしまったリリィですが、特段気にした様子も見せず、兄様は掌を差し出してくれました。

聖者様たる御方に対して不敬では無いかと少々躊躇いましたが……以前にも経験があるので今更です。結局は自分の掌を重ね、聖殿までの道程を手を繋いで歩き出します。

兄様の手は大きくて暖かくて、ちょっとごつごつして、義父様の手と似ていました。

……むむっ、手を繋いで歩いていると、なんだかホワホワしてくるのもおんなじですね。これは重要な知識です、あとで忘れずにメモしておきましょう。

――御機嫌やなぁ。今日は楽しかったか？

隣を歩く兄様の言葉に、リリィはちょっとだけ考え込みました。

正直に言ってしまえば、色々と未熟を痛感した事も多いですが……。

「はい。とっても楽しかったのです」

こればかりは本当であると確信して、リリィは力強く断言したのでした。

アンナの受難・再び（ぜんはんせん）

特徴的な金髪巻毛の少女――ローレッタは、黙して眼前に聳える屋敷を見上げていた。

仕事帰りなのか、彼女は隊服である魔装処理が施された黒外套（コート）姿だ。その肩には何故か泊りがけの旅行などで使う鞄が掛けられている。

見上げる屋敷はデザインとしては近年の帝国の流行よりやや古い、だが歴史を感じさせる建物だ。

外壁や前庭、門構えも、落ち着いた意匠ながら威風を感じさせる作りとなっており、帝国が持て成すべき国賓が逗留するに相応しい風格である。

時刻は既に夜。夕焼けは既に沈み、夜の帳が落ちる時間だが……《大豊穣祭》も終盤を迎えた今、最後の大盛り上がりといわんばかりに帝都は活気づいていた。

そこかしこに明かりが灯り、耳を澄ませば様々な喧噪が聞こえてくる。残った時間で催しを堪能しようと、観光客や街の住人が帝都中を慌ただしく見て廻る光景も見られ、

最後にあっても今回の祭りの規模が伺えようというものだ。
街中の空気に併せて、という訳でもないだろうが目の前の屋敷も煌々と照明が灯され、夜の暗闇を押し退ける光が門の前に立ち尽くすローレッタを優しく照らしている。
「何突っ立ってんの？　早く入るよローレッタ」
声を掛けられ、屋敷を見上げる為に頤を上げていた首をゆっくりと元の位置に戻す。
戻した視線の先にいるのは、長い銀髪をサイドで結んだ騎士だ。
ローレッタより二、三年上であろう少女は同じく隊服の外套（コート）姿であり、これまた同じ様に肩に大きめのバックを引っかけ、不思議そうに小首を傾げている。
「……副長、お聞きしたい事が」
「ん？」
部下であるローレッタの静かな声に、首を傾けたポーズのまま続きを促す銀髪サイドテールの少女……《刃衆（エッジス）》副隊長アンナ＝エンハウンス。
屋敷の門構え脇にある、魔道具の一種であろう呼び鈴を押そうとしていた彼女は、真顔で問いかけを行ってきた部下の様子に怪訝な表情を向けた。
「なぜ、私（わたくし）は此処に……聖女様方の逗留先のお屋敷に居るのでしょう」
「私が誘ったからだね」
「同性の隊員同士での親睦会（お泊り会）、とお聞きしたのですが……」

「直ぐに隊長も来るし、間違ってないよ。やる場所がこの屋敷で、レティシアとアリア様も参加するってだけで」

ぶっちゃけ、それ自体に不満は無い。寧ろ光栄な事である。

尊敬する上司であるミヤコ・アンナの両名に加え、かの救世の聖女姉妹まで参加する女子会――即ち、憧憬抱く綺羅星の如き英傑達との交流を深める機会だ。ローレッタにしてもバッチコイなウキウキのイベントだった。

……が、タイミングと、何より参加メンバーが不穏だ。

《大豊穣祭》開催直前に北区の工房で起こった――人外級やそれに近い領域に達した一騎当千の乙女が偶発的に遭遇する事となったあの一件。

あれは肝が冷えた。集結場所であった応接間から感じた凄まじい威圧と魔力。下手をすれば工房とその周辺が吹っ飛ぶかもしれない、と先任の同僚と共に神経をすり減らした災難の記憶。

それらは大祭中の目白押しであったイベントやゴタゴタあれこれを挟んでも、まだまだ色鮮やかに脳裏に焼き付いている。

この面子は否が応でもあの時間を思い出させるのだ。これであの魔族領の公爵名代であるという少女まで加われば、まるであのときの焼き直しではないか。

「《陽影》――あの半吸血鬼（ダンピール）の娘も来るみたいだし、国際色豊かよねー。ぶっちゃけ陛下

が用意した屋敷なだけあって設備とか人員も最高級だし、女子会の場所としては上等にも程があるわ」
「あのとき応接間に居た方々が全員集合しているではありませんか！　なんで私(わたくし)まで呼ばれたんですの!?」
「ちゃんとシャマの奴にも声掛けたわよ――他に用があるって逃げられただけで」
「おふぁっきん!!」
　先任としての経験値か、単に危機回避能力の高さか。
　ちゃっかり今夜の女子会という名の危険地帯から逃げおおせた先任の顔を思い浮かべ、ローレッタの口から御嬢様らしからぬ罵声が飛び出る。
　頭を抱えて天を仰いだ部下を前に、アンナが優し気な表情となってそっとその肩を叩いた。
「大丈夫だよローレッタ。私はただ――道連(部下を)れが欲(労)しかっ(た)ただけだから」
「ぜってぇ嘘ですわ！　言葉尻に半端ねぇ不穏が見え隠れしてますの!?」
　副音声が透けて見える様な上司の台詞に、渾身のツッコミを入れる素手ゴロ令嬢。
　立ち塞がる壁や敵をその拳で粉砕して突き進んできた彼女だが、今回の親睦会と言う名の壁は分厚く、高い。
　なにせ参加者ほぼ全員が彼女の遥か格上だ。合計したら壁というより霊峰の如き標

高と直径である。
当然、目の前で凪いだ笑みを浮かべる上司もその一人だ。ローレッタの必死の抵抗という名のツッコミは無情にもあっさり受け流された。
「ここまで来て回れ右も出来ないでしょ。そもそもレティシア達にはアンタも参加するってもう伝えてあるし」
「オッフ……た、退路も断たれてる……ぽんぽん痛くなってきましたわぁ……」
彼女は腹を擦り、例の一件の中心というか発端というか……とにかく原因である青年よろしく、白目を剥いて仰け反り、呻く。
ちなみにその青年は同じく逗留する某司祭と共に街に繰り出している。屋敷で少女達が交流を深める様に、彼らもまた今回の滞在で交流の生まれた者達と飲みにいくらしい。使用人達を除けば、今晩のみ屋敷は完全に女の園、という訳だ。
尤もアンナからすればいざという時の肉盾――取り敢えずミヤコとレティシアに差し出しておけば、自身への飛び火を抑える事の出来る奴がいない、という事なのでそう歓迎出来る話では無いのだが。
「大丈夫だいじょーぶ。ちょっと前にもこんなことあったけど生き残れたし、今回もなんとかなる筈……きっと、多分、おそらく」
前回の経験とやらがよほど過酷なものであったのか。

段々と尻窄みに言葉弱くなる上司の姿は、端的に言って恐怖を煽る。
当時の記憶を思い出したのか、凪いだ表情のまま何処となく眼が死んでいるアンナの姿に、ローレッタもごくりと息を呑んだ。
そもそも、この親睦会とやら自体が唐突に過ぎた。
アンナ曰く、あの工房での一件のあと、既にこの屋敷ではお泊り会が一度開催されていたらしい。
参加者は聖女姉妹に《刃衆(エッジス)》隊長、公爵名代の半吸血鬼(ダンピール)の四名。
どういった主旨で開かれた会なのかは語る迄も無いだろう。十中八九あの駄犬(ゆうじん)絡みだと見当をつけるのは、アンナでなくとも容易である。
その日、レティシアにお誘いを受けたと言って仕事上がりにそのまま屋敷へと向かった隊長を見送った彼女だが……その夜も翌朝も、屋敷が吹っ飛んだだのあの辺りが更地になっただの、おそろしい報告が舞い込んでくる事も無かった。
半ば肩透かしにも近い結果に「あ、思ったより平穏な感じだった？」と、胸を撫で下ろしたものだ。
どんな会話が行われ、また約束が為されたとして、それはどんなものであったのか。
参加者では無く、無遠慮に聞くつもりも無いアンナには知る由もないのだが、これまたあの友人に関する事なのだろう。集まった顔ぶれからして間違いない。

そこで終われば「これを期に、アイツの鈍感（クソボケ）っぷりもマシになるかもね」と笑っておしまいな話だった。

だったのだが、現実は甘くない。祭りの終わりが見えて来た今夜、二回目の開催である。

しかも聖女姉妹＋敬愛する隊長からの御指名による、アンナの参加も義務付けられた、だ。

それこそ不参加だった一回目と同じく、後に報告書や始末書作成必須みたいな事は起こらない、穏やかな会となるのかもしれない。

だが、少なくとも彼女の勘は『絶対そうはならねぇ』と喧しく告げていた。

「あ〟〜もう……なんで私まで……」

これまでの流れを思い返し、思わず、といった様子で呟くアンナだったが……それは思いっ切り巻き込まれた立場である彼女の部下こそ言いたい台詞だろう。

事実、上司の嘆きを耳にしたローレッタは、このときばかりは畏敬を引っ込めて若干呆れた声色で言葉を拾い返す。

「前回、副長は参加していないからこそ、ではありませんの？　スケさん……かの猟犬様が関わる事であれば猶更に」

「いやなんでよ？　私があの駄犬絡みで集まった面子に混ざる理由が無いでしょうが」

「えっ」
「何、その反応」
何言ってんのこの人、え、素で言ってる？　みたいな眼で部下から見つめられ、憮然とした表情となるアンナ。
その反応を見て何か感ずるものがあったのか、ローレッタは難しい顔となって腕を組み、思案に入ってしまう。
（えぇー……あの距離感でそういう認識……意識的にではなく？　マジですの？）
無自覚が過ぎるというかなんというか……これは指摘した方が良いのだろうか。
少々悩むが、直ぐにやめておこうという結論に至る。
反応が予測出来ないので怖いというのもあるが、本当に無自覚だとすると鼻を鳴らして平然と流されて終わりそうだ。
ただでさえ今夜は人外魔境な親睦会に飛び込むのだ。これを無事に乗り越える為にも、事前の心身の消耗は避けるべきである。
ローレッタといい、アンナといい、女子会での心構えというより戦場での生存の為の布石みたいな思考なのだが、面子が面子なので大体間違っていない。
「……まぁ、いいわ。誘ったのは私だし、中に入る前に幾つか言っておく」
上官である少女も部下のなんとなく温い視線に気付いていない、という事は無いのだ

ろうが、一旦はスルーする事にしたらしい。
　人差し指を立て、自身の体験を元に特に注意すべき点を喚起する。
「先ず、何はなくとも窓に近い位置――もしくは一直線に飛びこめる場所に陣取る。出来れば一動作で離脱に移れる体勢が好ましいわ。間違っても椅子やソファに深く腰を下ろさないこと」
「……あの、親睦会のお話ではありませんの？」
「アリア様も参加するし……今回、部屋の空気は気絶するような域には行かないかもしれないけど……その分、決壊のタイミングが読み取り辛くなってる可能性もある。予兆を見逃さない様に集中しなさい」
「マジで戦場での立ち回りの助言にしか聞こえませんわ!?」
　至極真剣な顔で指折り立てて告げられる言葉に、ローレッタのツッコミ混じりの悲鳴が上がる。
　繰り返すが大体間違っていない。
　少なくともアンナは大真面目であった。前回、位置取りを意識して尚、脱出のタイミングがギリギリであった事を考えれば幾ら注意を払ってもやり過ぎという事は無い筈だ。
　言うべき事を語り終え、息を一つ吐き出し――改めて屋敷の門へと向き直る。

「それじゃ、言うべき事も言ったし……行くよ」
何時までも二人で門の前でお喋りしている訳にもいかないだろう。時間的にも頃合いだった。
助言を行ったは良いが、なんだか益々不安そうな表情になった部下を宥めつつ、アンナは鉄柵の門構えの脇に取り付けられた呼び鈴を鳴らそうとして――。
「――あっ、そうでしたわ！　私（わたくし）、最後に聖女様方と顔を合わせたのは……」
寸での処で動きを停止。焦った声色で呟かれた言葉に振り返った。
「ちょっと、此処に来て気になる事言い出さないでよ。何かあったの？」
「い、いえ……問題という程では無いのですが……少々気不味いというか……」
明朗快活な気質のローレッタにしては珍しい、もにょもにょとした口籠る語り口。
しかし、ここまで来て「やっぱ無し。帰りましょう」が出来る筈も無し。
何より、余りこの場でまごついていると隊長職故の残務処理で自分達より遅れてやってくるミヤコも到着してしまいそうだ。
ローレッタも同じ考えに至ったのか、軽く頭を振ると大きく息を吐き出し、気合を一つ入れた。
「……えぇい！　尻込みばかりで進むを躊躇うなどカッツバルゲル家の家訓に反しますわ！　往きましょう、副長！」

「おー、いい気合。アンタのそういう思い切りの良さ、結構な長所だと思うよ……じゃ、今夜を無事に乗り越えられる事を祈って――逝くとしましょうか」
「やっぱり語尾が不穏!?　早くも心挫けそうになりますので勘弁して下さいまし！」
騒がしいやり取りをしつつ呼び鈴が押され、涼やかな音が小さく鳴り響く。
《刃衆（エッジス）》二名は、今宵戦場にも劣らぬ危険地帯になりかねない屋敷へと、意を決して足を踏み入れたのである。
再三となるが、一応言っておこう。その危機感は多分大体間違ってない。

――それから約一時間後。
唐突だが、現在アンナは浴場にいる。
右を見た。
「ウギギギギ……どいつもこいつも丘の住人ばかり……だから入りたくなかったんだよ……！」
「レティシアー、頭流すよ?　眼閉じてー」

美しい金と銀の髪の姉妹。洗い場にて妹が姉の長い髪を洗い、お湯をかけて泡を洗い流していた。あと姉の方の眼が怖い。

左を見る。

「あら、この石鹸良い香りですわね。泡立ちも良いですし、どちらの品か後で聞きませんと」

「あ”あ”あ”あ”ぁ……染み入るなぁ……大きいお風呂ってこんなに良い物なんだね……」

同じく洗い場で手の中で泡立てている石鹸を見つめ、漂う香りを堪能している部下。その奥には、湯舟に浸かって液状化して風呂に溶けそうなほど脱力している、最近知り合った魔族領からのお客人の姿があった。

アンナは思い思いに命の洗濯タイムに勤しんでいる面子を眺め、次に湯場の天井を見上げて。

「どうしたこうなった」

湯けむりけぶる広々とした浴場で独り言ちた。

話が急にぶっ飛んだ様にも見えるが、実際の処はそう妙な事でもない。
夕飯は隊舎で済ませてある。後はお泊り会の名の通りに参加する面子で集まって話に興じるだけだ……アンナからすればその歓談の時間こそが恐ろしいのだが。
とにかく、何か食べるにしても、ちょっとした菓子を摘まむ程度だろう。
挨拶もそこそこに、先ずは仕事の疲れと汗を流すべくひとっ風呂浴びて、部屋着なり寝間着なりに着替えて来てはどうか、というレティシアの言葉に乗ったというだけだ。
「折角だから皆で入ろうよ！」
今回の親睦会の発起人である聖女達と、一足先に来ていたらしい半吸血鬼（ダンピール）の娘。
そこに《刃衆（エッジス）》の二人を加えた計五名が居る客間にて、ニッコニコで提案したのが聖女姉妹の片割れ、アリアである。
相変わらず笑顔から聖気が放射されいそうな聖属性な少女だ。聖女の看板に偽りなしなスマイルは、アンナちゃんポイント高得点である。
ちなみに姉の方のレティシアは「いや、オレはもう身体洗ったし」と渋っていたが、妹の「浄化魔法で汚れ落としただけじゃんか。横着してないでレティシアも来なよ」という至極真っ当なツッコミによって強制連行される事となった。
日によっては木枯らし吹くこの季節、アンナとしても暖かい湯に浸かって仕事の疲れ

を癒す事に否は無い。
部下や友人達と裸の付き合いというのも悪くないだろう。風呂というものはその用途故に一糸纏わぬ――即ち虚飾や隠し事は無しの交流の場として、友好を暖めるのに用いられてきた、と何処ぞの馬鹿も力説していた。
――が、現在の状況は彼女にとっては最重要のピースが欠けている。
転移・転生者達の元居た世界で云う処の『画竜点睛を欠く』というやつだ。これを見過ごして風呂に向かう事は出来そうに無かった。
スッと手を挙げ、出来る騎士の顔とはこれだ、と言わんばかりのキメ顔で謝辞を告げる。
「隊長と一緒に入りたいから私パスで（先に報告書の下書きを書き上げたいのよ、後で入るから皆で行って来て）」
「おい、そこの副隊長。欲望が駄々洩れ過ぎて本音と建て前が反転してんぞ」
敬愛する上官との混浴という、降って湧いたとんでもないチャンスに気が逸り過ぎた所為だろう。
仕事が出来る騎士処かとんだ凡ミスである。突き刺さる呆れの視線からアンナはそっと目を逸らした。
にしても人聞きの悪い事を言う聖女（姉）だ。隊長への愛に溢れていると言って欲し

いものである。
「広々とした湯場は実家以来ですわね……正直に言えば心惹かれるので、私としては是非とも使わせて頂きたいですわ」
「僕も興味が無い訳じゃないけど……申し訳ない、湯着はあるかな？　や、やっぱり同性でも、あまり肌を晒すのは恥ずかしくてね……」
残る二名――ローレッタと《陽影》もこれから浴場に向かう事には賛成の様だ。
先にも述べたがアンナも嫌という訳では無い――が、”待ち”を選んだ際に得られるものが魅力的過ぎる。
「あー……報告書の内容考えたいっていうのは本当だし、やっぱり私は……」
「ミヤコさん結構遅れるかもって言ってたよ？　そうなったら、さっきのレティシアじゃないけど浄化魔法で汚れ落すか、シャワーで終わりになっちゃうんじゃないかなぁ」
此処で草稿を練っている。と続けようとして、アリアから身も蓋も無い指摘を受けてしまう。
「アリア様……それでも人には、手を伸ばしたい光景があるんです」
「滅茶苦茶キメ顔で言う事か、それ」
先程からの呆れの眼を保持したまま、レティシアに混ぜっ返された。

さっきから失礼な聖女だ。では逆に聞くが、今のアンナの言動を自分のパターンに置き換えた場合、全く共感出来ないと断言できるのか。

そう反論すると、空色の瞳がハッとしたように見開かれて白い指先が思案するように顎先に添えられる。

「……確かに……」

「ええ……同意しちゃうんだソコ」

「一緒にお風呂か……確かに万難排して掴みたいチャンスではあるね」

「うん、《陽影》さんまでそっちいくのやめよう?」

姉と半吸血鬼（ダンピール）の少女が真剣な表情で其々に頷く。どうやらその光景を思い浮かべているらしく、直ぐに顔が締りの無いものに変わった。

アリアが二人の意識を引き戻そうと言葉を掛けるも、効果は薄い。

「入浴中に突撃すれば意外といけますわよ?」

そこに不思議そうな声色の――だが問答無用に強烈なパンチのある発言。

場の視線を一斉に集めたのはローレッタである。

そういえばそうだ。この金髪巻き毛の少女は今夜の面子でぶっちぎりの恋愛強者――年上の彼氏持ち（捕食済み）であった。

「い、いけるモンなのかそれで……?」

「タイミングとしては身体を洗い始めた辺りが狙い目ですわね！　石鹸で滑る可能性もあるので御相手も強く拒んで押し返す事も出来ず、あわよくば意図的に滑って嬉し恥ずかしハプニング狙いですわ！」
「め、めちゃくちゃ具体的……！」
　おそらく体験談であろうアドバイスを受け、思わず前のめりに傾かせた身を再び仰け反らせるレティシア。
　それに代わるように《陽影》がおずおずと……だが、隠し切れない興味を双眸に灯してやはり前のめりに問いかける。
「で、でもそこまで持っていくのに、やはり時間は必要なんじゃ？　一緒に過ごした時間が長い人はともかく、短かったり会う機会自体が少なかったりする場合もあるだろう？」
「私（わたくし）は子供の頃、想いを自覚したその日の晩に先生の入浴中に突撃しましたが」
「あ、ハイ。生意気な意見でしたすいません」
　そんな風に尻込みしてるから機会（チャンス）を逃すのだといわんばかりの圧倒的な速攻。その実績を前に、半吸血鬼（ダンピール）の少女の意見も一蹴された。
　というか、子供の頃でその行動力は肉食が過ぎる。彼女の先生――帝国で客分の研究者扱いとなってるマメイ氏も、当時の教え子の一見無邪気な「背中流してあげる！」と

いう好意の裏にギラついた捕食本能が隠されていたと知れば驚愕するだろう。

（やだ、私の部下（恋愛的な意味で）強すぎ……？）

まるで「私（わたくし）、何かやっちゃいました？」とでも言い出しそうな雰囲気で小首を傾げるローレッタに、上司たるアンナも戦慄を覚える。

出会った当時、そちら方面に関しての話に触れる機会の多かったアリアだけが「相変わらずロックな漢女（おとめ）だなぁ」と苦笑を洩らした。

「取り敢えずさ、続きはお風呂に入ってからにしようよ。ミヤコさんもまだ来てないし、お喋りに華を咲かせるのは皆が揃ってからって事で」

一旦話は中断させて、浴場に向かおうという彼女の言葉に反対の声は無かった。アンナもなし崩し的に向かう流れである。

まぁ、仕方ない。僅かにでも存在する隊長とのお風呂の可能性を諦めるのは惜しかったが……ここにきてまだゴネるのも空気を読めていない気がする。

未練の籠った溜息を、一度だけ吐き出して。

用意して来た着替えの入ったバック片手に、アンナも皆と連れ立って移動を開始したのであった。

――そして現在。

手早く身体を洗い終えたアンナは、片手にぶら下げたタオルを軽く振り上げ、バシン、と肩に当てて担ぐ様に持つ。

空いた方の手を腰に当て、そのまま仁王立ちで浴場を見渡した。

浴場は相当に広く、豪華な作りだ。

おそらくだが、貴族でもここまで力を入れた湯場を持っている家はあまり無いのではないか？

ちょっと位なら泳ぐことも出来そうな浴槽には、今も獅子の形をした蛇口からお湯が注がれ、湯面には良い香りのする花びらが入浴の邪魔にならない程度に浮いている。薬湯の元でも混ざっているのか、湯は白い濁り湯であった。

最大の友好国である教国からの国賓が逗留する屋敷としては、少々年代物な感じのする建物だと思ったが……この浴場もあって選ばれたのかもしれない。転生者や転移者の多くを占めるニホンジンは程度の差こそあれ、皆風呂好きであるというのは割と周知された知識だ。

浴槽の規模的にも普通に薪で沸かすタイプでは無く、魔道具を用いているのだろう。

というか、こうして見回すだけでも浴場内にはちらほらと魔道具を組み込んで作ったらしき物が見える。

建築費もそうだが、維持費も中々のお値段になっていそうだ。この屋敷を設計した人物の風呂への強烈な拘りが見て取れる。

「……アンナ副長、入りませんの？」

湯気の立ち込める浴場を観察していると、先に湯舟に浸かった部下から声が掛かった。

ローレッタは湯着を身に着けていない。貴族の婦女子は同性であっても大きく肌を晒すのを恥じらう娘も多いと聞くが、彼女の場合は祖父の「タオル付けて入浴はマナー違反だ」という主張に影響されて湯着は着ないらしい。

姉妹と半吸血鬼（ダンピール）の娘は身に着けているが、ぶっちゃけ必須という訳でもないので個人の好みの範疇、という事だろう。かく言うアンナも身体を洗うときに面倒、という理由で着けない派である。

「ま、風呂は眺めるものでも無いか。それじゃ、お邪魔するわ」

軽く肩を竦め、広々とした浴槽を跨いで湯舟に身をつける。

秋真っ只中の夜に浸かる湯は、身体に染み込む様であった。

「あぁ～……あんまり入る機会もないけど……悪くないね」

「全くですわ……湯に疲れが溶け出す様ですの」
なまじ優れた魔導士が周囲に多い環境だと、身の清潔さという点では浄化魔法一つで片付いてしまう場合も多い。
王城に勤務する騎士――しかも最精鋭部隊の所属である彼女達も、当然その恩恵を得られる立場だ。女性騎士であるが故に、男連中と違って鍛錬後に半裸になって井戸で水浴び等が気軽に行えない、というのもある。
連日の激務中や戦場ならば衛生を保てるというだけでも十分過ぎるのだが、やはり平時に何日も湯浴みをしないというのは、なんというか精神面での衛生的によろしくない。なので、入浴やシャワー自体は普通に行う者が殆どである。
――が、流石にこうやって全身を伸ばして肩まで浸かれる大きな風呂となると、中々機会が無い。帝都には公衆浴場もあるが、王城勤めではわざわざ足を伸ばすには距離があった。
アンナは湯舟の中で軽く掌でお湯を掬う。微かな薔薇の香りが鼻腔を擽った。
それを見ていた隣で湯に浸かるアリアが、香りの元である花びらを指先で摘まみ上げる。
「お風呂入る度に使われてる花とか果実が変わってるんだよねぇ……昨日は柚子っぽい香りがしたし」

「……毎回準備も大変そうだし、無理はしないで良いって執事さんやメイドさんにも言ってるんだけどな。仕事が早い上に完璧過ぎる」

気持ち不機嫌そうな半眼で鼻先まで浸かっていたレティシアが、思い出した様にボヤいた。

なんでも、夜に風呂に入って朝に起きると既に掃除を終えて湯も張り替えられた状態になっているらしい。その日のスケジュールによっては入浴せずに浄化魔法で済ませてしまう日だってあるので、なんだか申し訳ない気持ちになるそうだ。

「おそれながらレティシア様。彼らも陛下が直接行った人選でこの仕事を任される程の方々ですわ。己の仕事に矜持というものがございます」

貴族の令嬢である為、家人という職に在る者達と長く触れ合って来たローレッタが聖女へと諌めの言葉を向ける。

聖女の逗留する屋敷の完璧な管理――それが此処の使用人達の仕事だ。全員が国賓を持て成す任を受けるに相応しい、一流の仕事人である。

彼・彼女達からすれば日毎の浴場の用意などやって当然の水準なので、変に遠慮して手を抜け、という方がよほど困らせる事になる、という事らしい。

「申し訳無さでは無く、ありがとうと。毎日助かっていると伝えるのがよろしいかと。私(わたくし)の実家でも、家人達に感謝の言葉を伝えた際には喜んでくれた様に思います」

微笑んで両の掌で花薫る湯を掬い、その微かな芳香を堪能する様は華やかな美貌も相まって実に絵になっている。

年齢的にはこの場の面子の中でアリアの次に年若いローレッタであるが、やはり既に御相手がいるからだろうか？　しっとりとした穏やかな笑みと入浴の為に髪をあげた事で覗くうなじが非常に色っぽい。

更にこの部下、何気にスタイルも良いのである。まだ成長期である事も考えれば、将来は隊長に匹敵するプロポーションとなっているかもしれない。

「ウギギギギ……と、年上の威厳が……おかしい、こんなりふじんが、あってよいのか」

耳元の後れ毛をかき上げたローレッタの胸元――白く濁る湯面から半分だけ覗く豊かな双丘を見つめ、金色の聖女の口元から歯軋りっぽい音が聞こえた。

「まーた言ってるわこの聖女。そこまで気にするモンでもないでしょうに」

「知ってるか、アンナ。持つ者の悪意の無い慰めは、ときに罵声よりも持たざる者の胸を抉る――って誰の胸が抉れてるってんだオラァ!?」

「自爆でしょーが。知らんがな」

キレ気味に水面を叩いて水しぶきを跳ねさせる残念聖女であるが、その剣幕の原因たる胸囲云々の話もアンナからすれば『隣の芝は青い』という感想しか出てこない。ちなみにこれも元は転移者達の世界の用語らしい。

《金色の聖女》の通り名が示す、優しい陽の光を閉じ込めた様な美しい金の髪と、黄金比、という単語を顔面で表現した様な整った美貌。

染み一つない白い肌は、今は湯に浸かる事でうっすらと色付き、いっそ精緻精巧な人形染みたレベルで整った容姿に確かな命の脈動を感じさせる赤みが差していた。

儚げでありながら、纏う魔力は輝く陽光の如く。使う言葉が男勝りの荒っぽい口調である事すら、品が悪いより先に快活なイメージを他者に与える。

本人はバストサイズが貧相な事を気にしている様だが、逆を言えば胸以外は全てを持ち合わせている少女なのだ、レティシア＝ディズリングという娘は。

身も蓋もなく言うと「お前その見た目で持たざる者とかふざけてんじゃねーぞ」と言った感じである。

実際、容姿やスタイルと言った点ではレティシアと似通っているアリアは姉ほど気にしていない――お胸も同じく慎ましやかとはいえ、姉には勝っている事もあってなのかもしれないが。

そもそもこの場の面子自体、どうにも自覚が薄い者達ばかりだが見目麗しい美人揃いだ。

神秘の業たる魔法の源――魔力という”力”があるこの世界。

精霊種などの霊的な存在は例外として、本来、生物が生命活動を行う上では必須では無いその力を扱えば、自然とそれはその身に『あって当然のもの』として馴染んでゆく。

身体・精神との同調で様々な効果・恩恵を齎す魔力。

それは、扱える量や使用時の精度が高まれば高まる程、やがては使い手の肉体に『最適化』にも近い現象を引き起こす。

その行き付く先が人外級と呼ばれる、戦士・魔導士の最高峰に立つ者達だ。

肉体強化や魔法行使、魔力操作の精度において人類の枠を超えた高位精霊にも近い域に達したが故、魂の位階や強度と言ったものが一段上に上がり、それを収めるに相応しい器へと肉体が変質した存在。

彼・彼女らが同族の人類種よりも長命になるのはその辺りが理由である。副次的に『最適化』の過程で見目が良くなる場合も多い。

現在浴場に居るのはそんな者達――既に人外級にある者やその予備軍、或いは将来的にそこに近づける可能性がある少女達だ。自覚の有無に関わらず顔面偏差値がアホみたいに高いのは当然であった。

ちなみに例外中の例外ではあるが、肉体的素養や魔力への『馴染み』なぞほぼ無い癖に、無理矢理に魂の位階だけを一時的・一足飛びに神格の領域まで押し上げ、その所為で魂に引き摺られる形で肉体に『最適化』が起こった頭のおかしい奴もいる。何処の駄

犬とは言わないが。

閑話休題。

兎に角、世間一般と比べて十分に持つ者側である少女達ではあるが、やはり足りぬ部分を羨む人の性からは逃れられないらしい。

人類種の中でもほぼ最高レベルに近い『最適化』の深度を誇る金色の聖女様は、友人の胸部装甲を眺めて更に恨めし気な表情となる。

「……お前はいいよな、まだ成長期っぽくて。この間、アリアと下着を新調しに行ったのは知ってるんだぞ」

「僻んでも増えるもんじゃないでしょうに。それに、私相手にンな事言ってたらアレはどうするのよ」

そう言ってアンナが視線を転じた先には――この場において殆ど口を開いていない《陽影》の姿があった。

「ふぁぁぁ……喧嘩は良くないよ皆……折角のお風呂なんだから仲良く入ろうよ……」

頭に巻いたタオルはずり落ち、蜂蜜色の髪が零れ落ちてその先端が湯面に拡がっている。

複数人で入浴するという経験が無かったのか、単に肌を晒すのに慣れていないのか。

湯着を着けているにも関わらず、恥ずかしそうにそそくさと髪と身体を洗って湯舟に入ってしまった彼女であるが、最初の緊張は何処へやら。
心身共にリラックスして蕩け切った、脱力した声色で呟くその様は、本来の貴公子然とした立ち振る舞いからは程遠い。間違いなくこの場で最も風呂を堪能しているのが見て取れた。
そのほややんとした顔もギャップが激しくて中々に可愛らしいのだが、凄まじいのはその下だ。
お湯に浮かぶ、大きな……そう、とても大きな柔らかそうな二つの球体。
身に着けた湯着など、既に役にも立っていない。巨大な果実が並ぶ事で生み出される谷間の中に埋もれてしまっている。
「う、浮いてる……」
「確かに水中では軽くなると知ってはいましたが……これまた見事に浮いてますわねぇ……」
「グギギガギギッ……ガガッ、ピーッ!!」
巨峰の持ち主とアンナを除く面子から、三者三様の反応が漏れる。あとレティシアはなんか別の意味で凄い事になっていた。
「うん……こんなに胸が軽くなったの、ひさびさ……薔薇の香りも良いし、立派なお風

呂ってこんなに素晴らしいんだね……もってかえりたい……」
緩んだ顔に負けず劣らずな、ふやけた言葉が《陽影》の唇から流れ落ちる。
割とぽんこつな事を言っている様に思えるが、それだけ気持ち良いという事だろう。
軽くなった、そう聞いた辺りでとうとうレティシアが顔面を湯に着け、ブクブクと泡を吐き出しながら沈みだす。帰って来い聖女。
しかし、改めて見ても見事なお胸である。
単純なサイズという点では自身の敬愛する隊長ですら上回るたわわに実ったソレを前に、アンナは自然と手を合わていた。御参拝。
「副長、何故御祈りを……」
「いや、あんまりにも見事な光景なんでつい」
訝し気な部下の声に、真顔で応える。
アンナにとって最高の曲線美とは隊長のボディラインを差すものであるが、それはそれとしてストレートに大きい《陽影》の双丘にはいっそ感激すら覚える。大きい事は良い事だ、とは誰の言だったか。
「シャマの奴じゃないけど……ぶっちゃけちょっと持ち上げてみたいわ」
「うん……べつにいいよぉ……」
「マジか」

冗談で口にしたつもりが半分融けた口調の本人から許可が出てしまった。
チラッと横目を向けると、浴槽の底に沈没した姉を引き上げているアリアが悩まし気に唸る。
「う～ん……本人が許可出してるし、セクハラ……じゃないよね、うん」
この場で一番の良心担当からお赦しまで出た。
折角だ、ちょっと体験させてもらうとしよう。これも裸の付き合い故の無礼講というやつだ。
部下であるギャル系騎士が聞けば「マジで!?　あたしちゃんも参加すれば良かったー！」と悔しそうに叫ぶであろう機会を前に、わきわきと手を開閉させる副隊長（その上司）。
「では早速……おぉ、これは凄いわね、ちょっと感動する」
捏ね上げたパン生地を思わせる、きめ細やかな手触りと柔らかさ。
下からそっと掬い上げるように持ち上げたというのに、自重だけでアンナの掌に沈み込む様なその感触。
世のおっぱい好きの男共へと確かな共感を抱いてしまった瞬間である。
アンナ自身もトップとアンダーの差は平均以上の自覚はあるのだが、この圧倒的なボリュームは単純な大きさに依って生み出されるものだ。レティシアの言う処の、持つ者の極致というやつだった。

「うーむ、凄い。やわらかい……でも何でだろう、隊長への背徳感というか、罪悪感の様なものが……」
「浮気した殿方では無いのですから……とはいえ、素でこのサイズはやはり凄いですわね。私(わたくし)も先生とお付き合いを始めて少々大きくなった様な気はするのですが……」
「アリア、アイツかえってきたらおしたおそう。やっぱりもませたらおっぱいおおきくなるって」
「よし、正気に戻ろうレティシア。斜め四十五度チョーップ！」
「……ぁ、なんか、ねむ……すぴー……ムニャ……」
わいわいと、少女達の姦しいやり取りは続く。
未だ全員は集まり切らず、まだまだ本番ですらない今宵の集いではあるが。
波乱と、楽しさと、年相応の女子らしい騒がしさを予感させる夜は確かに始まっているのだろう。
その結末――それが喋り疲れて仲良く眠りにつく少女達か、はたまた屋敷もぶっ飛ぶ人外級とその予備軍だらけの乙女大戦となるのかは、女神のみぞ知る、と言った処か。
「――ふう、思ったより遅れちゃった……もう始まってるのかしら」
最後の参加者(ビース)たる黒髪の少女の到着を期に、後半戦へ続く。

アンナの受難・再び（はーふたいむ）

軽くなった財布を握りしめ、凶悪な面構えをした長身痩躯の魔族――《狂槍》が顔を顰めた。

「……無駄な出費が嵩んだじゃねぇか。テメェの所為だぞネイト」

「ははは、意味が分かりませんね。先に手を出して来たのは師匠の方でしょう？」

にこやかに返すはこちらも上背のある、だが柔和な雰囲気の男性……帝国最精鋭、《刃衆（エッジス）》顧問、ネイト＝サリッサだ。

面貌や放つ空気は対極にあると言って良い男達だが、目立つ共通点が一つ。両者の背には似通った長大な槍が背負われている。

共通の知人である教国の筋肉武僧と黒髪の青年の誘いを受け、集った面々。

国籍も種族も問わず、その顔ぶれは様々であったが……どうやら穏当とは言い難い関係の者達も揃った様である。

それがこの二人――魔族領の幹部と帝国精鋭部隊の顧問であった。

「煽って来たのはテメェの方だろうが。屋台ぶち壊したのを嫁と娘にチクってやろうか？」
「おや、では私も師匠の奥方に久しぶりに手紙でも送りましょうか。ええ、別に深い意味はありませんとも。偶のご挨拶くらいはするべきですからね」
「ふざけろコラ。そもそも何で俺だけが弁償金出してんだ。テメェも同罪だろうが、半分だせ糞餓鬼が」
「本来なら器物損壊で詰め所に連行待ったなしですよ？　弁償金をその場払いで解放されたのは刃衆顧問の取り成しあっての事なんですから、金銭くらいは気持ちよく出して欲しいものですね」
　どうやら師弟の関係にあるらしき男達は、片方は露骨に不機嫌な顔、もう片方は笑顔という名の威嚇の面相で火花散る会話を行う。
　どちらも音に聞こえた人外級の戦士だ。本気とは程遠いとはいえ、物騒な気配を垂れ流して睨み合う空気に割って入れる者などそうはいない。
「はっはっは！　久方ぶりの師弟の再会に心が沸き立つは自然な成り行きですな！　――が、祭りを楽しむ道行く方々を竦ませるは無粋。御二方共に気を抑えるべきかと！」
「同感。折角頭領の面倒みないで観光できる時間なんですから、もっと穏便に楽しみましょう。また何か壊して素寒貧になっても僕はお金貸しませんよ？」

――故に、止めに入るのが、同じ様な出鱈目な者達であるのも必然であった。
同行者である筋骨隆々の巨漢、ガンテスと、折り畳み式の特異な弩を背負った魔族の若者、《不死身》が口々に発した言葉に、バチバチに不穏な空気をばら撒いていた師弟も押し黙る。
「チッ……」
「……そうですね、少しばかりはしゃぎ過ぎました」
当人達からすればじゃれ合いレベルではあるものの、その結果として手近な屋台を一つぶっ壊してしまったのは確かだ。
相場よりかなり多めの額を詫びとして渡しはしたが、それでも屋台の店主に迷惑を掛けたバツの悪さは残っているらしい。仲裁の声に二人とも威嚇にも近い気配を引っ込める。
軽く咳払いして普段の柔和な雰囲気を取り戻したネイトが、気遣う様に巨漢――正確にはその肩に担がれた、気絶した黒髪の青年へと眼を向けた。
「グラッブス司祭、彼は大丈夫ですか？　師匠の振り回した看板が直撃していましたが」
「コイツが屋台に突き刺さったのは、吹っ飛んだ先にいたテメェが躊躇なく避けたのもあるだろうが。心配するなら最初から受け止めてやれ」
「ははっ、それをやったら師匠は隙ありとばかりに追撃を入れて来るでしょう？」

再びギスった空気になりかけるノッポな師弟であるが、その空気ごと吹き飛ばす様にガンテスが快活に笑う。

「猟犬殿の事でしたら御心配には及びませぬぞ！　どうやら気絶というよりは半ば寝入っておられる御様子！　先頃の屋台で見つけた品の酒精が廻ったのでしょう！」

その言葉通り、肩に麦袋よろしく担がれた青年には大した怪我も無い。

少しだけ赤らんだ顔は酒気が上った者のソレだ。喧嘩に巻き込まれた挙句、吹っ飛ばされて屋台に頭からブッ刺さったのは確かなので若干魘されているが。

普段、自身の事を素だと雑魚だ才能無しだと発言している青年であるが、越えてきた戦いの数と質――とりわけ後者の方は比肩出来る者の方が少ない。

それによって培われた咄嗟の防御・回避行動の瞬間的な選択は何気に優秀である。酔いの廻った状態でも魔力によるガードはしっかり行ったらしい。

本人は気付いていないが、その判断力の早さのせいで喧嘩っ早い多数の知人から「大抵は巻き込んでも大丈夫な奴」と嫌な方面で信頼されているのは皮肉であった。というか知ったら割と本気で咽び泣くだろう。

「あー、何か妙に飲んでましたからね。そんなに良い酒じゃなさそうだったのにあんなに空けるから……」

香りはちょっと珍しかったけど、と呟いて、先程自分も口にした酒の味を反芻する《不

死身》。
　同じく舐める程度に留めていたネイトが、苦笑に近い笑みを浮かべながら首肯して同意を示した。
「確かライスを使った酒、でしたか。転移者達の世界では普及しているという話ですが、こちらには食材として叶うものが流通していないですからね。異世界人から話を聞いて再現しようにも、品質が粗いものになってしまうのでしょう」
　香りも弱く、半端な蒸留酒と混ぜた様な度数ばかりが高い品ではあったが……僅かに日本酒に近い風味を感じさせる品を前に、青年はついつい杯を進めてしまった様だ。
　あまり褒められた酔い方では無いのだが、魘されながらも寝言で聖女の名を呟いている彼を肩に乗せるガンテスの表情は柔らかである。
「界すら隔てた遠き故郷を思わせる酒ともなれば、少々過ごしてしまうのも道理。とはいえ、聊か酔いの入りが重い様ですな。水を飲んで頂いた後、拙僧が酒精の解毒を行います」
「そうしとけ。なんで飲み歩きが始まって二時間もしねぇで潰れてんだコイツは」
　全員が人外級という、戦場でも滅多にお目に掛かれないひっでぇ顔ぶれの一団は、そのまま屋台巡りを再開させた。
「ふむ……《魔王》陛下は今宵一晩、屋敷より出歩く事が出来ぬというお話でしたな？」

「あぁ。《亡霊》の奴が一応は筆頭の認可がいる書類が溜まってるってんで、遠話で張り付いてる。夜明けまでは缶詰だとよ、ククッ」
筋肉の問いかけに応え、「ザマァ」と顔にデカデカと書いてある表情で《狂槍》が心底愉し気に笑う。
隣を歩く《不死身》も腕を組み、しみじみとした様子で深く頷いた。
「リリィちゃんもサルビアさんの処で一晩お泊りする事になったのはタイミング良かったですよ。御蔭で完全にフリーになれる時間が出来たし……今夜は楽しくいきましょう！」
「ええ、良いですね。もう少し屋台巡りをしたら、私の行き付けの店に行くのはどうですか？　おそらくローガスや他の同僚も何人かそこに飲みに来る筈です」
「わっはっはっは！　それは楽しみですな！　今宵はレティシア様方も御友人と『女子会』なるものを楽しむ御予定なれば、我ら男衆も集いて会合と致しましょう！」
ネイトの提案に、ガンテスが空いた掌でバシンと己の禿頭を叩いて大笑する。
《大豊穣祭》もいよいよ終日が近づくが、帝都を賑わす人の波は未だ衰えない。
その中でも一際目立つ戦力過多な集団は、しかし道行く人々と何ら変わる事無く。
ただ、祭りを堪能せんと夜の帝都へと繰り出すのであった。

場所変わって、筋肉武僧が言う処の『女子会』の会場たる屋敷にて。

「いよいよ、か……」

入浴を終えて、寝室として案内された部屋で着替え。

他の女性陣が集っているであろう客間へと続く扉を前に、アンナは神妙な顔で呟いた。

風呂上がりという事もあって普段はサイドテールで纏めてある髪は下ろされ、緩い二つ結びで左右から胸元へと垂らされている。

その恰好はシンプルなキャミソールとショートパンツ……要は普段、寝巻代わりに使っている服装だ。

流石に今の季節にそれだけでは肌寒いので、寝室のクローゼットにあったフード付きのガウンを借りて羽織っている。

……正直、この後に起こるかもしれない危険地帯の発生を考えれば来た時の恰好――即ちフル装備が望ましい。

が、「明日の起床前にはお届けします」という言葉と共に騎士服と隊服（コート）は屋敷のメイド

さん達に回収されてしまった。
翌日もここから王城へと出勤するので、洗濯して綺麗にしてもらえるならばその方がありがたいのは確かなのだが、その前に今夜を乗り切らねばならない。
「無いもの強請りしても仕方ないね」
どの道、親睦会だのお泊り会だのにバリバリの戦闘用装備で参加というのも不自然過ぎる話だろう。他の面子から総ツッコミ不可避である。
レティシア達は勿論、少し前に到着したらしい隊長も寝間着の類に着替えている筈……なので、前回と比べても条件が悪化している訳ではない、と思いたい。
あれこれと思考を巡らせるが、室内には既に自分以外の全員の気配が感じられる。何時までも扉前で立ち尽くしている訳にも行かないだろう。
アンナは腹を括ってドアノブを回し、扉を開けた。
「お、来たか。遅いぞー」
真っ先に声を掛けて来たのは、暖炉の傍にある柔らかそうなソファに身を預けているレティシアだ。
うつ伏せに寝転んで本を広げ、脚を交互にパタパタ上げ下げしている様子から見るに、風呂場でのメンタルダメージは上手い事お湯と一緒に流して来たらしい。
ゆったりとしたデザインのシャツとズボンはどちらかというと男性が好みそうなシ

ンプルな寝間着であるが、そこは聖女様仕様というやつか。使われている素材や縫製からして下手なドレスより高そうな代物である。

その向こう側にある椅子に腰かけて、髪をタオルで拭いているのはミヤコ隊長だ。微笑みかけてくる整った面差しに、アンナもニッコリと満面の笑みで以て返す。

二時間ほど前に隊舎で別れた彼女であったが、どうやらやや遅れて到着してもシャワーを浴びる時間位はとれた様だ。湯上りでしっとりとした濡れ羽色の髪が実に美しい。

更に、普段は寝起きするのが隊舎な事もあって就寝の際はレティシアと大差無い恰好なのだが、今回はお泊り会という事で黒のネグリジェ姿であった。

（素晴らしい……！　そしてやっぱり一緒にお風呂入りたかった……！）

いつもよりちょっとオトナっぽい姿の黒髪の少女を見て、その部下である銀髪の少女が脳内でアンナちゃんポイントを加算するボタンを連打していると、奥にあるテーブルで茶の用意をしていた二人――アリアとローレッタが其々にトレイを手にやってきた。

「おまたせー。夜中だし、メイドさんには紅茶じゃなくてハーブティー準備して貰ったんだけど……」

「加密列（カモミール）と野薔薇（ローズヒップ）の実の二種ですわ、お好みでどうぞ」

焼き菓子とお茶のセットを分担して運んで来る二人の姿は、よく見るタイプの白地の

ネグリジェである。アリアの方は就寝用のナイトキャップを被っており、小柄な体躯もあってとても愛らしい。

ちなみにローレッタの方の寝着は、鞄に詰め込んでいるのを偶々見かけたアンナが別の物に変えさせた、という経緯がある。

件の学者先生と共寝する際に使おうとしていた物らしいが……ぶっちゃけ隊長の着ているちょっぴりセクシーなネグリジェとは比較にならないくらいにエグかった。

上にストールやガウンを羽織る前提にしても妙に透けていたし、そもそもなんであんな処が開いたデザインなのか。

彼氏いない歴＝年齢な女子ばかりのお泊り会に、御相手への勝負下着じみた装備を持ち込むのは過剰火力が過ぎるのである。自重しろ彼氏持ち。

「あ、それじゃ後者を頂こうかな」

そう言ってアリアが手ずから茶を注いだカップを受け取ったのは《陽影》だ。

立ち昇る香りを吸い込み、次いで口に含んだ彼女は世辞では無い柔らかな笑みを浮かべる。

「……うん、いい香りだ。流石に良い品を使ってる」

吸血鬼（ヴァンパイア）の中には食事として薔薇の精気を吸う者もいるらしい。浴場の香りも気に入っていた様だし、彼女も薔薇に関する物を好むのかもしれない。

そんな《陽影》の寝巻は胸元を開けたYシャツと柔らかな生地の黒ズボンである。
本人の所作もあって、何処ぞの貴公子の就寝前のひと時にすら見えた。正面から見ると全然王子様じゃない二つの膨らみが谷間を作っているのだが。
アンナ自身を含めて計六名。
其々にタイプは違えど、美しい少女達の湯上りからのパジャマスタイルは非常に華やかで眼福な光景だ。
完全に他人事か、或いは遠目から見るばかりであるなら、アンナも無邪気に手を合わせて拝み、眼前の景色を堪能した事だろう。
――が、そう事は簡単では無い。
戦士として鍛えられた危機感知能力が、若しくは単なる生存本能が、今も喧しく喚起している。
気を抜けばこの華やいだ空間は部屋が軋み、空間が捩じれる様な修羅場に変わると、一切気を抜くなと訴えかけてくるのだ。
誰かの小さく喉が鳴る音が耳に届いた。おそらくはローレッタのものだろう。引っ張り込んだアンナ自身が言うのもなんだが、部下も同じ感覚を抱いている様だ。
「さて、全員揃った。茶も用意した」
手に持っていた本――なんだか見た事のある絵本をパタンと閉じたレティシアが、ソ

ファから身を起こす。
「二回目のお泊り会、始めるとしようか」
宣言された言葉はありふれたもので、声色も特段含むものは無い。
だというのに、何時かの大聖殿応接間で聞いた様な、カーンというゴングの音が鳴った気がした。

「さて……何から話すか――って、なんでそこの二人はそんな場所に固まってるんだ？」
一応はこの会の主催的な立場である聖女（姉）が、訝し気な目付きでアンナとローレッタを見つめ、小首を傾げる。
「いや、なんとなくだからお構いなく」
「同じくなんとなくですわ。お構いなく」
窓際に近い位置に置かれた長椅子、その更に端へと並んで座った《刃衆（エッジス）》副隊長と隊員に、他四人の不思議そうな視線が注がれる。
当の二人は決然とした表情で此処が良い、この場所がベストポジションであると断言し、動かない。

言う迄もなく、万が一の際には窓をぶち破って屋外へと離脱する為の位置取りである。速度・瞬発力に於いて上のアンナが先行し、後にローレッタが続く形だ。

思い思いに寛いだ体勢となった四名と違い、微妙に座りが浅い上、妙に四肢へと力が入っている二人を暫く眺めていたレティシアが、軽く息を吐き出して肩を竦めた。

「まぁ、それで良いってんなら構わないけどさ」

淡い金髪をかき上げる様にして頭を掻き、その視線がローレッタ一人に固定される。

向けられた表情な何故か気不味そうというかなんというか……なんだか申し訳なさそうなものだった。

「挨拶したときも一応謝罪したけど、改めて言っとくよ。闘技場（コロッセオ）の控室じゃ、お邪魔したみたいでごめん、ローレッタ」

「ボクも。態とじゃ無かったんだけど、ごめんなさい」

軽い調子ではあるが、それでも丁寧に腰が折られる。

聖女姉妹に揃って頭を下げられ、当のローレッタが恐縮した表情で顔の前で両掌を振った。

「頭を上げてください。傷も癒して頂きましたし、元はといえば此方が少々場所を弁えるべきでしたわ。先生も『申し訳ない事をした』と仰っていましたの」

オレ達が、いえいえ私（わたくし）が、と互いに謝罪合戦になりそうな三人を見て、アンナはなん

となく察する。
おそらく闘技大会の試合直後に何かあったのだろう。屋敷に入る直前のローレッタの台詞を思い出すに深刻な話では無さそうなので、顔を見に行ったタイミングが悪かった、と言った感じだろうか？
同じくなんとなく察したらしい隊長が、横から言葉を差し込んで会話にカットをかける。
「詳細は知らないけれど、其々に少し不注意があった、という事で良いんじゃないかしら。後はお互い水に流して親睦会の主旨に戻りましょう？」
少しだけ苦笑の含まれた笑顔での提案を受け、レティシア達は顔を見合わせた後、同時に少しばかり照れた様子で首肯した。
改めて腰を落ち着け、皆でハーブティーを口にし。
一息ついた処で、仕切り直しとばかりに再びレティシアが口火を切る。
「よし、それじゃ始めようか」
空色の瞳が参加メンバーを順繰りに見回し、三名が自然体で、二名がやや緊張して頷く。
「まず、前回だな。祭り中の順番とか協定とか、その辺りを決めるのに体力も時間も使ったせいで、普通の話って点ではロクに出来て無かった――だから、今回は改めて話をし

ようって事になった訳だ」

何の順番やら協定なのか、というのは考えるまでもないだろう。数日前の帝都全域を巻き込んだ大捕り物で予定も崩れはしただろうが、あの駄犬絡みの話であるのは明らかだ。

流れからするに、今回はそういった話を除いた正真正銘、ただの親睦会という事だろうか？　だとするならアンナとローレッタにとっては安堵出来る話だ。主に身の安全的な意味で。

進行役となった金色の聖女様は大皿に並んだ焼菓子に手を伸ばし、一枚口に放り込んで噛み砕くと、水気の足りなくなった舌を再びお茶で湿らせる。

「そういう訳で、前回は出来なかった事を語るぞ――最初のお題は『アイツと出会った頃のエピソード』だ！　他人に話したくない部分があるなら代替の話でも良し！」

「いや結局あの馬鹿の話なんかい！」

ティーカップを掲げてババーンとばかりに宣言されたその言葉に、アンナは反射レベルで突っ込んだ。

とはいえ、これは彼女の見通しが甘い――というより、やや希望的観測が過ぎた。

参加メンバーの内、巻き込まれた二人以外はあの駄犬に只ならぬ重いを向けているであろう面子ばかり。たとえ違う趣旨で始まろうと、結局はその手の話題にシフトするで

あろう事は容易に想像できるのだ。
ちなみに駄犬と関わった時間や時期的にお題のクリアが難しいローレッタは、件のマメイ氏との話を語る事になった。アリアと約束もしていた、と言う事で地味にやる気が高い。
自分もお題を免除して欲しい、手を挙げたアンナだったが、ほぼ全員から「いや、お前はあるだろ、それらしい話」みたいな眼で見られて却下された。理不尽である。

一番槍は言い出しっぺであるレティシアだ。
「まぁ、順当だよな。オレが一番最初に会ったし、オレの相棒の話だからな」
胸を張って最後の部分を強調する聖女様。言葉の端々から溢れ出るマウント感――と、いうよりは独占欲の方が近いか。
初手から挑発的な言動で早速火花が散るかと冷や冷やするアンナだが、苦笑したり若干冷ややかな半眼になったりと周囲の反応は比較的穏やかであり、アンナは内心胸を撫で下ろす。
こほん、と軽く咳払いすると、レティシアは記憶を巡らせる様に視線を上げて天井の

照明を見つめた。
「出会ったばかりの頃、アイツと一緒にちょっと旅をした時期があったんだけど……そのときは事情があってさ、食料も街で買うんじゃなくて、狩りで手に入れたりする場合も多かったんだ」
懐かしそうに眼を細めるその表情は穏やかで、大切な記憶を反芻する様に噛みしめる者のソレだ。
「で、そのときに『美味い肉の焼き方』について語り合った事があってな。前にエルフの里でも見せた肉焼き魔法はそのときの論争から産まれた代物だったりする」
「なにその魔法。詳しく」
美味しいご飯は隊長の笑顔に次ぐレベルで、人生に必須な項目であると考えるアンナにとって聞き逃せない単語が出てきた。
是非とも詳細を知りたい。可能なら自分で習得するまで選択肢に入るのだが……消費魔力こそ少ないが、細かい制御に宮廷魔導士レベルの精度を求めるらしい。分類的には生活に用いる魔法の一種だろうに、習得難易度が高すぎる。どれだけ自重しない構成を組んだのか。
当然、前衛として身体強化に特化している者には基本習得不可能だった。がっくりと肩を落とすアンナである。

少々話が逸れたが再び軌道修正。レティシアは自身の思い出を語り出す。

今の手遅れにも程があるレベルの入れ込みっぷりからは想像もできないが、出会った当初は一緒に旅をしているにも関わらず、レティシアと青年は距離のある付き合いをしていたらしい。

というかレティシアが青年を『胡散臭い奴』という認識でやや警戒･敬遠しており、彼の方も『まぁそう思われるのもしゃーない』といった感じで一定のラインから踏み込まない様な態度をとっていたのだとか。

そんな中、肉はミディアムレアが王道だの、筋の多い野生の肉ならウェル寄りの方が喰いやすいだの、しょうもない論争から新たな魔法を一つ生み出すに至った一件は、レティシアが青年に対して付き合い方を変える最初の切欠だった、との事。

「……これまた色々と事情があって詳細は言えないんだけどさ。あの頃のオレは色々と精神的に弱ってたというか……そのせいでアイツにも壁を作って接してたんだけど、あの下らないやり取りが、それを取っ払う小さな一歩になった感じはあるんだよ」

道すがら語り合ったバカバカしいやり取りは、今となってはレティシアにとって大切な思い出なのだろう。

出会いを経て、これまで確かに積み重ねてきた記憶と感情、想い。

それ故に、彼女の言葉には自負が感じられた。

あの大戦で勝利を勝ち取る為、青年が踏み出した歩みを始めから見ていたのは自分だと。一緒に歩み始めたのは自分が最初なのだと。だからこそ、レティシア＝ディズリングは彼を相棒と呼ぶのだと。

或いはそれは単純な友愛や異性愛ではなく、様々な情を丸ごと含めた、青年という存在そのものに向けた執着なのかもしれない。

とどのつまり、今と性別や種族が違おうが、向ける感情の比率は変われど大きさには殆ど変動が無いという事だ。激重である。

（……ま、分かってた事ではあるけど）

アンナから――否、この場の殆どの面子からすれば、今更だ。

特にアンナの場合はあの駄犬が聖女のもとに帰還（ハウス）するまでの二年間、一年は帝都で隊長の様子を、もう一年は出向した聖都で姉妹の様子を見て来た。

彼女達が情を向けていた対象――ぽっくり逝った本人がシレっと還って来た事で、以降の関係や態度も以前の延長の様な形に落ち着いたが、それはあくまで表面上。

本来なら長い年月をかけて希釈されていく筈だった喪失感や哀しみまで、一切薄れない状態で丸ごと感情の再燃への燃料に変わったという事でもある。その拗らせ具合は推して知るべし。

「……まぁ、なんだ。他にも色々語れることはあるけど、オレとアイツには二人だけで共

有した話が幾つもあるってこと――なにせこんな本が出る位の間柄だしな！」

「結局ソレが言いたかっただけでしょう」

過去を反芻する表情から一転して勝ち誇った表情となる拗ら聖女様。

小脇に抱えていた絵本が優勝トロフィーの如く掲げられると、冷たさと呆れが半々になった隊長の声が間髪入れずに差し込まれる。

「はっはっはー、羨ましいかねミヤコ君？　だが残念。この本の売れ行きの好調さから見ても、大衆がイメージするオレと相棒の関係性は概ねコレという事なのだよ！」

「うわぁ……レティシアのこんなドヤ顔見たこと無いよ……」

表紙を掌で叩き、如何にも惹かれ合う騎士と少女といった構図の絵を指し示す姉を見て妹の目付きもジトっとしたものとなった。

絵本へと興味深そうな視線を向けているのは《陽影》とローレッタのみ。他の面子は滅茶苦茶に自慢気な聖女（姉）の顔を若干ウザそうに見ている。

気のせいか《刃衆（エッジス）》の長たる少女の口元から小さく舌打ちする様な音が聞こえた気がしたが、部下の二人は首の向きを一切変えず、眼球だけで動かせる限度角度まで視界を横にずらして気付かないフリをした。

にしても中々しっかりとした装丁の絵本だ。

勿論、革張りのソレとは比べるべくもないが、子供向けの読み物としてはかなり上質

な作りではないだろうか？
　アンナは自身の仕事部屋の本棚にひっそりと置いてある絵本を思い浮かべ、レティシアの手にしている物と比べて粗雑な製本であった事に内心で首を捻る。
「……児童書としてはかなり丁寧な作りですわね。副長の執務室にある物とは出版元が違うのでしょムぐっ？」
「おいコラ、ローレッタ」
　内心だけで留めていた疑問を隣に座る部下があっさりと口にしてしまい、思わずその口を掌で塞ぐ。
　が、時既に遅し。レティシアに集中していた視線は、その当人のモノも含めてアンナに向けて転じられてしまった。
「なんだ、お前も持ってたのかよアンナ。人が悪いなぁ、それなら教えてくれても良かっただろ？」
「執務室の棚に置いてるの？　私が前にアンナちゃんの処にいったときは見なかったけど……」
「いや、その……前は机の引き出しの肥しになっていたというか……」
　友人と上司の疑問を受け、微妙にお茶を濁した返答をしつつハーブティーを啜る。
　そもそも絵本を取り出して見える位置に置くのは、出向先である聖都から一旦帝都に

戻って来たときのみ。要はここ最近の話である。

アンナが例の絵本……『金色の少女と黒い騎士』を見つけたのは本当にただの偶然だった。

城下にある書店で、余り質の良くない紙と製本であるソレを購入したのは、もう二年以上前――あの駄犬（バカ）が死んで少し経った時期だったりするのだ。

子供向けの絵本とはいえ、初めて書なんて物を買って……一回だけ読んで。

レティシアと駄犬（バカ）の熱心なファンらしき人物が書いたのであろうソレは、実際の二人のやり取りや人物像とはかけ離れていて、思わず「誰よコイツ」と、ちょっと笑ってしまった記憶がある。

それでも。

あの大馬鹿野郎が抱いていた願いは、レティシアやアリアに向けていた想いはきっと、この本の騎士様と――いや、それ以上に強く、確固としたもので。

そこだけは、きっと同じものだった。

誰も居ない執務室で、大して厚くも無い絵本をゆっくりと読み進めて。

頁を開いた先にいた聖女（ともだち）の猟犬は、もう頁の中にしかいないのだと、改めて突きつけられた気がして……そのときは、こう……不覚にも、少しだけ取り乱したのだ。

もう一度読む気にはなれなくて、けれど捨てる事も出来ず。

結局一度目を通しただけの絵本は、ずっと机の奥底にしまいっ放しだったのである。

――が、あのアホ犬はすっとぼけた面をして帰って来た。

二年経って現れた瓜二つの転移者が、紛れもなく本人であると気付いたときの気分は、一言では言い表す事が出来ない。

まさか本当に？　という疑問は、あ、本物だこれマジで女神様の処から還って来やがったコイツ、という確信に変わり。

帰って来たなら直ぐに言えこの馬鹿とかあのときの私の不覚（なみだ）を返せコラとか早く隊長に教えてあげなきゃとか――おかえり、とか。

色々ごっちゃになった頭で考えた挙句、なんかもう色々籠った腹立ち紛れの腹パン叩き込んだのを誰が責められるだろう？

……話が逸れた。まぁ、とにかく。

アンナが所持している絵本はそんな経緯もある品であるからして、おおっぴらには持っていることを吹聴し辛かったのだ。

「大分前に買った粗い製本……ひょっとして、初版って事かな？」

「ノエルが出資する前に出てたバージョンって事か？　別にプレミアが付いてるって訳でもないだろうけど……何気に貴重そうだな」

僅かな情報からほぼ正解であろう答えを手繰り寄せたアリアと、納得顔で頷くレティ

シア。
興味深そうに口々に反応を示す金銀姉妹の顔には「ちょっと現物見てみたい」と書いてある。
《陽影》とローレッタも気にはなる様だ。こちらの二人はそもそも現行版の方も未読らしいので、自分で買うなりレティシアから後で借りるなりして欲しいが。
ちなみに隊長が「ノエル……まさかね？」なんて呟いているのだが、その名に該当するのは周囲の人間だと、第一騎士団に所属している将軍の御子息しかいない。流石に別人だろう。
「えー……まぁ、その内に機会があれば、という事で」
なんにせよ、アンナとしては玉虫色の返答で誤魔化すしかない。
先にも言ったが、そんなに紙質の良くない品なので濡らしてしまった箇所は今でも絵や文字が滲んでいるし、点々と染みにもなっている。
茶でも零したと言えば済む話なのだろうが……個人的には黒歴史の痕にも近いソレを人目に触れさせるのは勘弁して欲しかった。
王城に戻ったら鍵の掛かった引き出しに封印してしまおう、とか考えているのが表情に出てしまったのか。
「……よし。じゃ、それはおいおいで良い。次に行こうぜ」

少なくとも乗り気ではない、というのは直ぐに気付いた様で、レティシアが軽く手を叩いて話題の転換を図る。男勝りな口調に隠れたさり気ない気遣いは、この友人の美点の一つだ。

「次は誰が話す？　順当にいけばアリアか？」

「んー……もっと後が良いかな。ほら、ボクがにぃちゃんと会ったときって、レティシアと同じかそれ以上に、この場で話せない状況だったし。ちょっと内容を考えたい」

「それもそうか……それじゃ、アリアは最後の方な」

軽いやり取りと共に順番が飛ばされ、ではお次は誰か、と少女達が視線を交わし合う。

語れる事は多いが、順番に拘りは無いので先に話したい人がいるなら譲る――そんな感じの譲り合いが発生して数秒の沈黙が下りたのだが……やがてあっさりと挙げられた手の主に皆の視線が集まる。

「それなら、二番手は僕で良いかな？　この中ではある意味新顔にも近いし、語るにしてもトリは相応しくないだろう？」

立候補したのは蜂蜜色の髪をした半吸血鬼（ダンピール）の少女――《陽影》であった。

特に反対の声は上がらず、皆から「別にトリでも良いと思うけど」といった視線や言葉を受けた彼女は柔らかく微笑む。

「ありがとう。それじゃ、先ずは……そうだな、僕が住んでいた村なんだけど――」

気に入ったのか、ハーブティーのおかわりを頂いて唇を湿らせると、過去の記憶を辿る様視線を彷徨わせ、《陽影》はゆっくりと語りだした。

彼女の育った村は、北方にある小さな寒村。

大陸北端にある霊峰に最も近い人里から少し外れた地にひっそりとあった村は、厳しい寒さと野生の獣や魔獣にこそ注意が必要だが、不可侵たる霊峰の近くという事で大戦の影響も殆ど無く。

元は爵位持ち――爵位級吸血鬼（ハイブラッド）であった父を早くに亡くし、《陽影》と彼女の母は、そこで親子二人で静かに暮らしていたらしい。

未開とすら言ってよい田舎の村においては魔族自体が珍しく、村人からはやや距離をおかれてはいたものの、迫害や虐めという程のものでは無く、少し寂しい思いはしたが概ね平和に過ごせていたのだそうだ。

だが、そんな日常も唐突に終わりを告げる。

霊峰に住まう龍の姫君のお膝元――其処に限りなく近い地であるにも関わらず、邪神の信奉者が襲撃を仕掛けてきたのだ。

「思えば、数も質も本当に最低限――今ならそう労せずに撃退できる程度の連中ではあったけど……当時の僕は、同年代の子との喧嘩の経験すら無い子供だったからね。母に抱き締められて震える事しか出来なかったよ」

当時の自身の無力・未熟を恥じているのか、半吸血鬼（ダンピール）の少女の眉間には微かに皺が寄っていた。

だがその後に続く、彼女にとってあまりに価値ある出会いの記憶を思い出した事によって、その表情はひどく柔らかなものへと変わる。

襲撃してきた連中は従来の信奉者達とは違い、即座に襲った者を呪詛で穢し、侵す事をもせず、まるで嬲る様に村人たちを狩り出して一カ所に集めていたらしい。

納屋に隠れていた彼女達親子も引きずり出され、自分を庇いながら髪を掴んで引き摺り廻される母の苦痛の呻きを聞いて、《陽影》も涙混じりの悲鳴を上げて。

次の瞬間、前触れも、音すら無く。

いきなり現れた漆黒の全身鎧を纏う戦士によって、母の髪を掴んでいた男の腕が斬り飛ばされた。

誰何の声処かまともな発声すら出来ず、更に一瞬後にはその場にいた信奉者達の首や上半身が回転しながら宙を舞ったという。

腕を手刀として振り切った鎧の戦士は、油断なく残心を保ちながら振り返り、怪我は

？　と一言だけ親子に問いかけ。

呆けた頭で、かろうじて大した怪我は無い、とだけ告げる《陽影》の母を見て、鎧の戦士――邪神の信奉者達の死神たる《聖女の猟犬》は一つ頷き。即座に村の中心へと疾走を開始した。

後はまぁ、お察しというやつだ。

戦力としては出涸らしと言ってもよい、下っ端木っ端の集団に人外級の戦力を相手に出来る筈も無い。

蹂躙ですら無い、素早く淡々とした『処分』は一分と掛からずに終わった。

集めていた村の者達を人質にしようとした者もいたが、村人の身体を盾にした瞬間には背後に回り込まれて首を刎ねられていたらしい。くるくると空中で回る首が「動くな！　こいつラ、らララＲＡ」と、壊れた楽器の様に鳴りながらボトっと地に落ちるのを見て、彼女の母は腰を抜かしてしまったとか。なんならそれが一番の重症ですらあった。

敵味方問わず、見ている人間へのウケが頗る悪い残虐ファイトっぷりは実にあの駄犬らしい。ドン引きされて後で落ち込むのなら少しは殺り方を気にしろ馬鹿、なんて毎度思うアンナである。

血飛沫噴き上がる斬首祭りを開催したせいで、助けた筈の村人に盛大に怯えられてい

たらしい馬鹿たれであるが、半分は吸血鬼（ヴァンパイア）でもある《陽影》は他の者よりその手の光景に生来耐性があるので、そこまで怖くはなかった様だ。

寧ろ、母と自分の危機に颯爽と現れて邪悪な信奉者達を蹴散らした戦士に、強い敬意や感謝を覚えた。

で、肝心の駄犬は戦闘自体ではかすり傷すら負わなかった訳だが……魔鎧の使用による反動が健在だった頃の話だ。

発生した自傷・出血の効果によって漂って来る微かな血の香り――信奉者のヘドロを煮詰めた様な呪詛交じりの血液とは全く違うソレが鼻腔へと届いた瞬間、《陽影》の心臓が跳ね上がり、胸と、腹の底に熱が宿って――。

「そのとき、僕は初めて父の血に――吸血鬼（ヴァンパイア）としての吸血欲求（しょうどう）と能力に目覚めた。あの衝撃と感覚は今でも覚えているよ……」

思い出を語り出した際の、照れの混じった初々しい様子は何処へやら。

当時の感覚を思い出したのか、ソファに身を預けながら薔薇色に染まった頬に手を当てて述懐する《陽影》の表情は、恍惚と色付いていた。

熱の籠った吐息を悩まし気に吐き出す姿はぶっちゃけエロい。ただでさえご立派に過ぎる双丘が、持ち主の僅かな身悶えに併せて微妙に形を変える。

「……最初に霊峰に行った時の帰り道にそんな事があったのか……あんにゃろう、話く

らいはしろってんだ」

話を聞いてレティシアが思わず、といった感じで呟くが、柔らかそうなソレ――アンナが風呂場で実際に持ち上げたときには極上の柔らかさだった《陽影》の胸元を見た瞬間、スンッと真顔となった。

なんでもいいがこの聖女、浴場の時点から彼女のおっぱいに眼を向ける度に故障している。

いい加減諦めろ……とは思うのだが流石に酷なので口には出さない。アリアも自分の胸元と《陽影》を見比べてなんとも言えない顔をしているので猶更に。

少々意識が記憶の彼方にトンでいた半吸血鬼（ダンピール）の少女は、一通り語り終えた処で我に返ったらしい。

軽く咳払いすると、纏める様に言葉を結んだ。

「コホン……そんな訳で、僕にとっても彼は特別、という訳だよ。もっと直接的に言ってしまえば、懇ろな関係になりたい御相手という訳さ」

「も、物凄く直球……」

これ以上無い位に剛速球な表現をする《陽影》に、隊長がやや怯んだ様に身を仰け反らせる。

ローレッタなどは「その意気や良しですわね！」と評価している様だが、彼女はこと

恋愛観に関しては超肉食なので、判定材料としてはアテにならない。
そして、自身の想いをはっきりと明言した《陽影》の言葉を受け、レティシアが即座に復帰した。
「……成程な。下手に誤魔化さないのは好感が持てるけど……」
お茶の入ったカップをテーブルに置くと、掌で膝を叩いて勢いよく立ち上がる。
「アイツはオレの相棒だ。オレのだ。悪いが、渡せないぞ」
「勝手なにぃちゃんの所有権主張は無効」
「そもそも先輩に直接言えてない時点で張りぼてよね」
「やかましいぞお前ら!?」
ソファの上で腰に手を当て、仁王立ちで繰り出した宣言。だが一瞬で混ぜっ返されて気色ばむ。
巷では救世の聖女とまで言われる少女に明確に恋敵認定されたにも関わらず、当の《陽影》は狼狽えるでもなく、反発を見せたり闘志を燃やすでも無く。
「うん、分かってる――元から結構な後発の身だし、僕は順番はそんなに気にならないからね。最悪、愛妾でも構わない」

なんか笑顔で凄い事を言い出した。
聖女姉は「う”ぇ!?」と変な鳴き声を上げて固まり。
妹の方は半眼で齧っていた焼菓子をポロリと落とし。
隊長は表情を崩さない儘、だが口に含んでいたカモミールティーを霧状に散布する。
一方で発言した本人は小首を傾げて「そんなに変な事を言った?」といった表情であり、ローレッタも姉妹と上司の反応に怪訝な顔をしていた。
……互いの反応に関しては、各々の出身や種族が関係しているのだろう。
先ず、隊長達は言う迄も無く転移・転生者――元は異なる世界の出身である。
国によって差異があるのはあちらも同じなのだろうが、彼女達の出身国ニホンでは、基本一夫一妻だったらしい。
成人と見做される年齢もこちらよりは遅めの様だし、そこで培った価値観からすると、自分からお妾さんを目指す発言は中々に驚愕に値するものなのが予想できる。
対して、生まれも育ちもこの世界である《陽影》とローレッタ。
教国を筆頭に、一般家庭にならばいくらか隊長達の価値観に近い国も多いのだが、種族的に「優れた奴や強い奴が複数異性を囲うのは普通」という認識の強い魔族と、故郷では貴族階級にある令嬢だ。第一、第二婦人だの愛妾といったものは身近にある概念だろう。

かく言うアンナも「まぁ甲斐性あるなら良いんじゃない？　よく知らんけど」程度の認識ではある。というか帝国が認可制とはいえ一夫多妻アリなので当然だった。
「いや、いやいやいや、うん……まぁ、そういう話や可能性も無くはないけど……ほら、アイツ別に貴族や大金持ちの商人って訳じゃないし、何気にその辺の身持ちは固そうだし……」
「そうなのかい？　かの大戦を人類種（ぼくたち）の勝利に導いた英雄の一人だ。一般の人達と同じ扱いは、寧ろ国としての信賞必罰に悖ると思うのだけど……」
「ぐっ……ド正論……！」
抗弁を試みるも、正論でブン殴られてあっさり粉砕される聖女。
隊長が噴き出したお茶を布巾と浄化魔法で処理しているアリアを横目で見つつ、半吸血鬼（ダンピール）の少女は自然体で焼菓子を指先で摘まみ上げて小さく齧り取る。
咀嚼したそれをお茶で喉奥に流し込むと、彼女は再びにっこりと向日葵の如き明るい笑みを浮かべた。
「第一婦人になるレティシア殿が許してくれるのなら、どうか末席に置いて欲しい。戦う彼の姿を見て惹かれたのが切欠だけど――僕が一番好きなのは、貴女や妹さんを語るときの彼の表情（カオ）だから」
「うん本当に良い奴だな《陽影》！　オレは君とはもの凄く仲良くできそうだ！」

「チョッッロッ!?　即行で言い包められてるよこの姉！」
「《陽影》さん、別にそこの残念聖女は一番と確定している訳では無いのよ？」
……《陽影》は中々に強かな娘なのかもしれない。
第一婦人、という単語にレティシア達が反応した御蔭で、多妻制とそこに《陽影》が収まること自体についてはなし崩しでオッケーな流れになった様に思える。少なくとも、この場では。
「ふーん……アイツが多妻、ねぇ」
なんとは無しに、呟きが漏れる。
きゃいきゃいと姦しく騒ぎ出す女子達を眺め、女子会二回目から追加された面子であるアンナとローレッタは、ボリボリと焼菓子を頬張りながら茶のお代わりを淹れた。
「お、この塩クッキー結構美味しい」
「御爺様はセンベイ擬きと仰っていましたわ。帝国にもありますのね」
「へぇ……お爺さん転移者だっけ？　って事は向こうの食べ物か……」
甘味では無く、塩気のある菓子というのも乙なものだ。大聖殿の食堂で偶に作られるポテチなる物も美味かった。腹には溜まらないが。
帝都内でも売られてないかなー、なんてアンナが考えていると、少しばかり声量を落としたローレッタが何故かひそひそ話をする様に口元に掌を翳す。

「……吉報、と言って良いのでは？」
「ん、何が？」
　まだまだ夜は長い。今の内にエネルギー補給しておこうとクッキーを口に放り込む上司の少女に向け、部下である少女が珍しく悪戯っぽい輝きを瞳に宿らせて語る。
「《陽影》さんのお話ですわ。実現するならば順番はあれど、席は複数できたという事ですし」
「あー……まぁ、そうだね。あそこの面子が全員アイツとくっ付くなら修羅場に巻き込まれる事もなくなるだろうし？」
「ｏｈ……また無自覚……まぁ、今更ですわね」
　なんだか意味深な事を呟いて一人で納得しているローレッタを尻目に、アンナは微かに胡椒の利いた塩味のクッキーをもう一枚口に放り込む。
　表面上は何時も通りの彼女だが、半吸血鬼（ダンピール）の少女の過去が語られた際に自分に話が振られなかった事に、実は内心で安堵していたのだ。
（前に、アイツに聞いた事あるんだよねー……まぁ、そのときに助けた娘が《陽影》だったのは初耳だけど）
　一緒に食い歩きなんかをしていれば、しょーもない話や無駄話、ちょっとした思い出話を聞く機会もある。

今回のエピソードも、嘗て駄犬(ゆうじん)の口から語られたものと同じだった、というだけだ。

とはいえ、「アイツから聞いた事ある」なんてうっかり洩らせば、レティシアは間違いなく臍を曲げる。「なんでオレが聞いてないのに」とかむくれる。

拗らせた金の聖女様は勿論として、下手をすればアリアや隊長にまで色々と突っ込まれる可能性もあるので、気取られるのは避けたい。

見ている限り、どうやら無事に別の話題に移りそうだ。ホッとして、ついついお菓子に手を伸ばす頻度も高くなろうというもの。

始まったばかりのお泊り会は、今の処はそれなりに平穏に進んでいる。

願わくば、このまま何事もなく終わります様に。なんて女神様に祈りつつ、アンナは噛み砕いた焼菓子を飲み込んだのであった。

アンナの受難・再び（こうはんせん）

どうやら順番争いは取り敢えずの決着を見せたらしい。
内訳としては暫定一位レティシア、暫定一位アリア、暫定一位ミヤコ隊長、未定《陽影》と言った形に落ち着いた様だ。
なんかもうそれ順位決める意味あった？　と聞きたくなる内容ではあるのだが、素直に口に出せば「じゃぁどういった順番が良いと思う？」なんて聞かれるリスクがある。
なので、湧いて当然の疑問は飲み込むアンナとローレッタであった。
「――次は私の番で良いかしら？」
先程口から噴霧してしまったお茶を入れ直し、再度味わいながら隊長が周囲を見渡す。
当然、反対意見は無い。アンナとしても敬愛してやまない隊長の過去が聞けるとくれば、否がある筈も無かった。
興味や期待の視線で促されると、隊長は一つ頷いてカップをソーサーの上に戻し、思

考に埋没する様に瞳を半ば閉じる。

（うわー、睫毛ながい、横顔も超綺麗）

何を話すか、一旦頭の中で纏めているのだろう。

その様をそれなりに近い距離でじっくりと眺められるこの状況を堪能するアンナ。ミヤコニウムを摂取しながら食う飯は美味いといわんばかりに、焼菓子に手を伸ばすペースが上がる。この場に話題の中心たる青年がいれば、いや鰻の蒲焼きの煙で飯食う人オ！　と指さして叫ぶ事間違いなしであった。

《刃衆（エッジス）》の長たる少女は数秒して再び眼を開き、ぐるりと全員に視線を巡らせ――最後にレティシアの顔に固定させるとフッと小さく笑みを浮かべる。

「……なんだよ、その顔は？」

「いえ、別に。ただ……このお題を振ったのは、貴女自身よね？」

思わせぶりな言動に警戒した様子で身構える金色の聖女様であるが、当の隊長は余裕の態度だ。

最初に挙げられたお題――駄犬との出会いやその前後のエピソードに、余程の自信があるらしい。

さて、どんな内容なのか。願わくばレティシアが着火する様な話でなければ良いのだが……興味と恐れが入り混じる複雑な気分でアンナも耳を傾ける。

ネグリジェの上からロングガウンを羽織った隊長は滅多に見ない挑発的な表情となり、ソファに体重を預け、すらりとした長い脚を組んで見せた。

通り名の由来である美しい黒髪をゆっくりとかき上げる様は……何故だろうか、妙な既視感を覚える。

口角を上に傾け、艶然とした笑みを浮かべて。その桜色の唇が開かれ。

「今まで言わなかったけれど――この中で先輩と先に出会ったのは私、刀塚　京よ。自信満々に語ったレティシアには悪いけどね」

大変に御立派かつ形の良い胸を反らして自慢気に宣言するその姿を見て、「あ、これ何時ぞやの意趣返しだ」とアンナは遅ればせながら気付いた。

ついに不穏な火花が散り始めた今夜のお泊り会であるが、それも一旦は気にならなくなる程度には、発言者――即ち隊長の言葉は衝撃的である。

ローレッタや《陽影》はそうなの？　位の反応だが、聖女姉妹――特に姉の方の驚愕っ

ぷりは顕著だった。
空色の瞳が見開かれ、口の方もパクパクと開閉して言葉にならない呼気だけを吐き出す。
たっぷり十秒近くは絶句したレティシアは、やがて唐突に眼を閉じ、頭を振った。
「……いや、それは無いって。アイツと出会ったのはオレが最初だ、絶対に。ミヤコが先んじるってのは不可能なんだよ」
落ち着きを取り戻した声色と、迷いの無い力強い断言。どうやら余人の知らない彼女だけの根拠があるらしい。
しょーもない見栄を張るなよ、とばかりにジロリと強い視線が向けられるが、隊長は涼しい顔でそれを受け止める。
「そうまで言い切るからには、この世界で先輩と出会ったのはレティシアが最初なんでしょうね。ええ、この世界では」
最後に念押しするが如く強調された台詞に、全員が直ぐにその意味を察した。
再び眼を見開いたレティシアの口元が引き攣る。
「……おい、ちょっと待ておい。ミヤコ、おまっ、まさか……」
動転した声に答え合わせをする様に、再びにっこりと微笑む隊長。
「この世界に来る前から、あの人は私の”先輩”なの。元は同じ学校の生徒だし、当然よ

ね？」

「……ンなっ……！」

　返された言葉の齎した驚愕の感情の儘にソファから腰を浮かし、聖女姉妹の姉は咆哮した。

「なにいいいいいっ!?」

「祭りの期間中だとしても、夜中に大声で叫んだら駄目よ？」

　驚愕と動揺と混乱のごちゃ混ぜで叫ぶ《金色の聖女》。あくまで余裕を保ちつつ、上品な仕草でお茶を味わう《黒髪の戦乙女》。

　対照的な二人ではあるが、傍で聞いているアリアとアンナの驚き具合も結構なものだ。二人共に唖然とした表情で隊長の横顔を見つめていた。

　事前の情報量の多さというか、付き合いの長さ、という点ではまだそれ程では無い鉄拳令嬢と半吸血鬼（ダンピール）の少女は、寧ろレティシアの取り乱しっぷりの方に驚いている位である。

「いきなり何言い出してんだよ！　今までそんな素振り見せた事も無かったじゃねーか!?」

「さっきの言葉通りよ。言ってなかっただけ」

　間にあるテーブルを蹴倒す勢いで詰め寄られるも、やはり余裕ある態度は崩さずに隊

長は語り始めた。
あの駄犬もそうだが、ミヤコ隊長も元いた世界――ニホンで学生をやっていたらしい。まぁ、これはそれらしき話を何度か聞いた事もあるので、知っている者は多いだろう。
だが、同じ学び舎に通っていたというのは結構な付き合いの長さであるアンナをして新情報である。
何か理由があって黙っていたのだろうか？　それにしてはカミングアウトが女子会のお題話というのは唐突且つ妙な気もするが。
「本当は先輩に最初に話すか……出来れば気付いてもらいたかったけど……こっちで再会して大分経つのに伝わらない儘だし、先に周りの人達に周知しておいた方が良いかも、って思ったの」
なるほど。流石のミヤコ隊長もいい加減痺れを切らしたという事か。
とはいえ、この場で話す事自体が妥協案ではあるのだろう。ちょっとだけ残念そうなのは気のせいではあるまい。
微かに憂いの浮かんだお顔も素敵である――が、聞き捨て為らない事を聞いた。
あの駄犬、こんなとんでもない美人である隊長が同じ場所で学生をやっていたというのに、未だその事に気付いていないとはどういう了見だ。鈍いとかそういう次元ではな

いだろう、今度会ったら一発しばいておくべきか。

「……騎士アンナ？　急に腕を曲げて振り子みたいに振り出して何をしてるんだい？」

「ヒェッ……副長のデトロイトスタイル……ひ、左の軌道が見えな……懐……右……目の前ぁッアッアッアッアッ……」

半吸血鬼（ダンピール）の少女と部下が、不思議そうな視線と半分白眼向いた視線をそれぞれ向けて来る。そこでついつい無意識に拳を握って構えていた事に気が付いた。

座ったままで拳闘の構えというのも何処か間抜けだ。「おっと」とだけ呟いて拳を開いて膝の上に置くアンナであった。

そんな部下の様子を見て、憂い顔を苦笑で上書きした隊長が、少し慌てた様に顔の前でパタパタと手を振る。

「先輩が悪い事なんて無いわ。学校では変に目立ったりしない様、振舞っていたし……顔見知りではあるけど、そんなに親しい関係じゃなかったの」

話を聞くに、どうやら隊長は悪目立ちを避ける為、学校では格好や立ち振る舞いを地味なものにして行動していたらしい。

敬愛してやまない人物がそんな窮屈な思いをしながら学生生活を送っていた事に、思わないものが無い訳では無いが……野暮ったい伊達眼鏡をかけて二つ結びのおさげにしていたと聞けば、寧ろ見てみたいという気持ちが湧いて来る。

アンナがいかにも本の虫っぽい文学少女の姿をイメージするも、どうやらそれは的外れな想像ではなかった様だ。

なんでも隊長は図書イイン――生徒が一時的に行う司書の代行の様な役を担っていたらしい。

あの駄犬（ゆうじん）は、偶に書庫（図書室、と言うらしい）にやってきて本を読み、或いは借りて、隊長はその貸し出しや返却を受け付ける。

当時の関係として貸し借りの際に少し話す程度で、ぶっちゃけ自己紹介すらしたことが無いのだとか。貸し出しに必要な記入事項の御蔭で、隊長の方は奴の名前や学年、所属する組なんかを知っていた様だが。

「……滅茶苦茶思わせぶりな事言ってたけど殆ど他人じゃねーか！　てっきり向こうで同じ部活や委員だったとか、レギュラーな先輩とマネージャーの後輩だったとか、色々想像しちまっただろ！」

「それは貴女の体験したいシチュエーションでしょう」

驚き、安堵、――そして幾ばくかの羨望と嫉妬。

ごった煮にした複雑極まる感情を吐き出す様にあがるレティシアの叫びを、隊長は呆れた声色でばっさりぶった斬った。

彼女はソーサーに戻したカップを再び手に取り、口を付ける。満たされたハーブ

ティーを見つめる瞳は、過去の思い出を反芻しているのかひどく懐かしそうな、柔らかな光が灯っていた。

「……確かに親しい間柄ではなかったけど……あの頃から、私は先輩を見ていた。それだけは確かだし、それで良いの」

そうして束の間、眼を閉じて。

次に開かれた磨き抜いた黒曜石の如き瞳には、普段は見せない悪戯っぽい光が浮かんでいた。

同じくして滅多に見ない意地の悪い笑みで口角を上げて、一言。

「そんな訳で、会ったのは私の方が早いの――この中で先輩と最初に出会ったのがレティシアなら、転移してくる前の先輩を知ってるこの世界唯一の人間が私よ」

「ま、前の世界とかノーカンだし！　そもそも総合的にはオレの方が一緒にいる時間ずっと長いし！」

今にも歯軋りでもしそうな表情で、どう聞いても負け惜しみにしか思えない台詞を吐く聖女（姉）である。

対して明確に主導権を取れている確信があるのだろう。隊長は非常に楽しそうな顔と声色であった。

「あらそう？　先輩の学生服姿とか、今より寡黙だったけどちょっと子供っぽい処も

あったとか、知ってるの？」
「ぐうっ……転移前に同じ学校通ってたとかどんな確率だよ、反則だろうが……！　あと出来ればその辺の話を詳しく教えて下さいミヤコさん！」
「ふふっ、嫌♪」
「くっそ、腹立つ笑顔しやがってエ清楚め……！」
　ミヤコ＝タナヅカという少女は基本、人当たりの柔らかくて礼儀正しい人物なのだが、戦友兼恋敵というポジションであるレティシアにだけは中々に遠慮が無い。
　これもあの駄犬相手とは別ベクトルで親しい、対等な友人であるが故だろう。歯に衣着せぬ会話や皮肉の応酬程度では、一切崩れないだけの信頼や友好関係があるという事だ。
　その点に関してはレティシアが素直に羨ましいと思うアンナである。今の様にバチバチに火花散らすやり取りは絶対にゴメンだが。
「にいちゃんの学生服姿かぁ……詰襟？　それともブレザー？」
「男子生徒の制服は詰襟ね。イメージ的にブレザーより合ってると思ってたけれど……先輩、スーツ姿も似合ってたわ」
「だよね、舞踏会のときも格好良かった！　……学ランって元は軍装だった服だし、オーダーすれば再現って簡単そうだよね。ボクがお願いしたら着てくれないかなぁ」

「おいコラ、アリア相手にはあっさり話してんじゃねーよ」
アリアの期待に満ちた質問に隊長があっさりと答え、間髪入れずにレティシアが突っ込み。幾度目かの賑やかなやり取りが始まる。
元いた世界の知識や体験前提の会話である為、漠然としたイメージが湧くのみの他三名――とりわけ《陽影》は、少々羨ましそうに話しに聞き入っていた。
「やはり同じ世界の出身じゃないと分からない話もあるね。あぁ、もどかしいなぁ……彼の故郷について話を聞いた事もあるけど、会話だけではどうにも具体的な想像が難しいものもあるし」
片頬に掌を当てて嘆息する彼女へと、深く頷きを返して同意を示したのはローレッタだ。
「私（わたくし）にも経験がありますわね。祖父との会話は大切な想い出深いものばかりですが、やはり部分的にどうしても『よく分からないもの』が混ざる場合もありましたの」
そういえば、この部下の祖父にあたる御仁は転移者だったと聞いた事がある。
その薫陶や教育が行き届いている為か、あちらの世界の物や用句、概念などに割と理解の深いローレッタだが、その彼女をして今でも理解が及ばぬものは多いらしい。
「御爺様の事は今でも大好きですし、尊敬していますが……絵心は絶望的に才能が無いのに、やたら説明に用いるのだけは正直どうかと思ってましたわ」

曰く、「こんなのだこんなの」と紙とペンで書かれた異世界の乗り物だの食べ物だのを見せられても「新種の邪神の眷属ですの？」みたいな出来なので余計にイメージがしづらくなった事も多いとか。

それを補填する為にマメイ氏に話を聞き、説明を受ける中で彼の多芸さを知った事も惹かれる一因となったというのだから、結果的には祖父の邪神召喚じみた画伯っぷりはローレッタにとって良い方向に働いたという事だろう。人生何が吉と転じるか分からないものである。

――で、アンナとしても今回の隊長の話で明らかとなった、彼女と駄犬との過去の繋がりについて、一つ思い出した事がある。

「たいちょー」

「？　なぁに、アンナちゃん」

ハーイ、とばかりに手を挙げ、可愛らしく小首を傾げる隊長に向かって、質問を切り出す。

「ひょっとして、あの駄犬が学校の書庫に顔出すようになったのって、隊長がオススメした児童書が始まりだったりしますか？」

「え……どうして知っ……まさか？」

「あ、やっぱり。聞いた事あるんですよ、アイツから」

黒髪黒瞳の少女の訝し気な表情が――おそらくは期待や喜びといった感情を含んだ驚きの顔に変わる。

それを否定する事無く、アンナも大きく頷いた。

あれは少し前――奇しくも、と言えばいいのか。

聖殿で地獄の様な修羅場に巻き込まれた直後、奴の奢りでご飯を食べていたときに聞いた話だ。

普段の馬鹿っぽい言動が与えてくるイメージとは違い、意外と本を読むタイプであるあの駄犬（ゆうじん）が、読書を好む様になったという切欠。

その日、下校途中の食糧品店で行われる特売の為に夕方まで時間を潰そうと図書室で昼寝をしていた奴は、当然だが司書――イインとかいう役職の娘に注意され、追い出されこそしなかったが何か読んでみてはどうかと本をお勧めされたという。

勧められたのはあちらの世界では有名な本らしく、魔法を教える学園で少年少女達が様々なトラブルに巻き込まれ、乗り越えては成長し、やがては彼らが住まう世界の平和を掛けた大きな戦いに立ち向かっていくという冒険活劇。

ス〇イプ先生陰キャ気質なのにマジ主人公、とか奴は言っていた、お気に入りの登場人物らしい。

まぁ、お気に入りが出来ている、という時点で話のオチは分かるだろう。軽い気持ち

で読んでみて、普通に面白くてハマり、その日の内に続きを借りたり、後日帰る前に図書室読んだりで全巻読破したそうだ。
以降、読書に目覚めたということで偶に図書室に足を向けるようになった。その始まりとなった図書イインの女の子というのが――。
「……ミヤコ、って事か」
「まぁ、アイツの頭の中では未だに隊長とそのときの女の子が繋がってないっぽいけど」
御執心の男と恋敵との追加エピソードを聞いてレティシアが唸り声をあげ、特に隊長については言及していなかったアホ面を思い出しながらアンナが補足を入れる。
先の《陽影》の話にしても、彼女の事を以前助けた娘であると気付いたのはここ最近の話らしい。変な処は鋭かったり察しが良い癖に、なんで肝心の処だけ鈍いのだろうか、あの駄犬は。
「やっぱ馬鹿だわあの馬鹿」
再確認してしみじみと呟いた言葉に、飼い主である聖女姉妹が頷く……処かこの場の全員が否定出来ずに苦笑したり目を逸らしたりとアンナの言葉を肯定する反応である。残当であった。
「ちなみに”一見野暮ったい格好した地味目な娘だったけど、凄い隠れ美人だった”とか力説してたんで、当時の隊長にも結構良い印象持ってると思います」

なんだかんだ言って合わない、と感じた人間に関しては、どれだけ見目や周囲の評判が優れていようと殆ど興味も見せず、話題にも出さない男だ。

転移してくる以前から同じ様な気質だというのなら、逆説的に図書イインことミヤコ隊長にはそれなりに好感情を持っていたという事だろう。奴からすれば読書の面白さを教えてくれた相手だから当然か。

「そ、そう？　そっか、先輩が……」

そんな根拠の元に発せられたアンナの言葉を聞いて、隊長は恥じらう様に僅かに俯き、両頬に手を当てて身悶えする。

眼福。その一言に尽きる。

歓びで紅潮した頬も、照れ隠しに身体を左右に捻ったことでネグリジェの隙間から形を変えて覗く谷間も、アンナちゃんポイント四桁級の破壊力であった。あの駄犬絡みのリアクションというのは少々業腹だが。

「お前さぁ……ミヤコのときだけ情報付け足してくるの止めろよ。贔屓だぞー、そういうの」

「私は何時でも隊長の味方よ」

「分かり切った事ではあるけど、即答かよ」

カップの中身を啜りながら半眼で告げられるレティシアの文句を、言わずもがなの事

実で切って捨てる。
あの駄犬を気にしている周囲の娘達を、基本それとなく応援しているアンナであるが……やはり一番に優先となると自身の一押し兼直属の上司たる隊長だ。今も見せてくれている、彼女の喜びの笑顔からしか取れない栄養がある。
断言すると、焼菓子を片手にハーブティーを嚥下したアリアが少し笑った。
「ブレないなぁ……そういう処、アンナってちょっとにいちゃんと似てるよね」
「ちょっと待って下さいアリア様。それは流石に否定したいです」
あの馬鹿犬と同類扱いは不本意を通り越してあり得ない。
私あそこまで螺子外れてないです、と不満を露わにして主張するも、ローレッタを除く四名からの反応は肩を竦めたり曖昧な笑いであったりと不可解な反応であった。納得がいかないアンナである。

何人かの語りが終わり、場も良い具合にあったまってきた処でお茶と焼菓子が切れた。
この場で一番健啖なのはアンナだろうが、年若く、戦いを生業とした職に就いている

娘も多いのでやはり普通の女子会よりお茶請けの消費は早い。
――が、その程度の事は予想済みであったのか、菓子が切れると同時にメイドさんの一人が追加を持って来た。
流石の配慮である。追加の品には先程アンナが食べたいと思った薄く切った揚げ芋――ポテチなる菓子まであった。
お茶の他に葡萄酒（ワイン）まで準備されている。寝酒を嗜む事もあるレティシアやローレッタは早速手をつけ、帝国産の銘柄に興味を示した《陽影》も一杯頂く様だ。
「ポテチと酒とか悪魔的な組み合わせだよなぁ……手が止まらないぞ」
「良い食感ですが、揚げ物ですものねぇ……明日明後日は空いた時間に自主鍛錬ですわね」
罪深い味だ、なんて言いながらポテチをパリパリと早いペースで食うレティシアにローレッタが同意し、変わらずハーブティを口にしているミヤコ隊長が呆れた声色で口を挟む。
「兵職と違って非戦時下の聖女なんて運動とは縁遠い立場でしょう……増えても知らないわよ？」
「んー……聖女（オレら）って魔力の限界貯蔵量が自然生成量よりかなりデカいからさ。基本、平時は容量が満タンになるって事が無いんだ。だからよっぽど滅茶苦茶に暴飲暴食しな

い限りは、余分に食った分って魔力の生成に回されるんだよな。なんで、体重に関してはあんまり気にした事ない」

「……それ、他の場では言わない様にした方が良いわ」

聖女の魔法的生態とでもいうべき情報を聞かされ、理不尽な生き物だと言わんばかりに隊長の顔が少しばかり引き攣る。

レティシアは気の無い素振りで指先についた揚げ芋の食べかすを舐め取り、首をかしげて見せた。

「そんなにか？　体質的に太り辛い人なんて他にもいるだろ」

「それも極少数派ではあると思うよ」

「世の女性の八割を敵に回す発言ですわね」

不思議そうですらあるその言葉に、間髪入れずに《陽影》とローレッタが応じる。その顔は両者共に真顔であった。

一方でその当事者である聖女――レティシアとアリアの金銀姉妹は「一概に良い点ばかりじゃないよな……」「だよねぇ」なんて言って頷き合っている。その視線は顔からやや下がり、互いの胸元を見ていた。

……その膨大な魔力貯蔵量と生成効率故に、少しばかり身体の発育に影響が出たりするのだろうか？　バスト云々は置いておくにしても確かに二人とも小柄であり、華奢で

もある。

というか、一定以上の力量を持つ戦士は男女問わずに一般人の平均体重よりやや重い筈だ。

鍛えているので骨格や筋量が違うというのもあるが、先に述べた魔力的な『最適化』の過程で肉体の品質自体が上がっている所為だというのが通説である。

その極みにあるのが聖殿の司祭様――ガンテス＝グラッブス氏だ。あの人はやや重い処か身体の密度が骨肉というより鉱石か金属のソレに近いので、どうやっても水に浮けないと聞いた。泳ぐ事自体は力づくで可能だし、なんなら水面も走れるらしいが。

要は、今夜のお泊り会に参加している面子も数値上の体重はあまりアテにならないと言う事だ。

アンナも一時期気にした事はあったが、単純な体重では無くスリーサイズ……主にウエストや手足の肉付きに気を配っておけば良い、という結論に達している。

そもそも彼女は鍛錬訓練にストイックな気質（タチ）なので、騎士となってからは体型など訓練で自然と維持され続けている。運動量を考えれば普段の食事量も妥当か少々不足ですらあった。

（……まぁ、だからといって好んで体重を詳細に計測したいとも思わないけど）

一般人と比べても意味が無いというのは頭では分かっているが、明確な数字という名

の重さを叩きつけられるのはやはりクるものがあるのだ。
人体の重さを計測する為の秤――所謂体重計なんて物を考え付いた輩は、よほど根性悪か邪悪な性根をしていたに違いない。あれは悪魔の装置である。
「取り敢えず、それの話は置いといてもいいだろ。次はアリアとアンナ、どっちだ？」
ティーカップに代わって葡萄酒（ワイン）の満たされたグラスを掲げたレティシアが隣の妹とアンナを交互に見やる。
どうやらローレッタはトリで決定しているらしい。唯一交際相手がいる女子としての体験談なので、真打ち扱いということか。
しかし、アンナとしては自分の番だと言われてもやはり困ってしまう。
「一応記憶を掘り起こしてみたけど……やっぱアイツと出会った前後って特に語る事が無いわ」
そも、彼女が駄犬（ゆうじん）が初顔合わせしたのは戦場である。
混戦に近い状況の中で部隊単位で動いていたので、当然隊長含む他の隊員達ともその場にいた。
なんならレティシアもアリアも居た。奴の引いた荷車に乗って戦場中を爆走して回って回復魔法乱れ打ちする役で。
もう見た目からして馬鹿っぽい光景だったのだが、後から見れば味方の損耗率が異様

に低かったので有効ではあったのだろう。初見は「聖女様がご乱心してる!?」とか思ったが。

戦線を押し上げて状況が安定した後も事後処理やら残敵掃討で忙しく、向こうも予定ぎっしりで動いてる感があったので改めて行った挨拶も端的且つ簡易に終った記憶があった。まともな交流をしたのはそれ以降の事なのだ。

奴との出会いはそんな感じだ。特に物珍しくもなければヤマもオチも無い。おまけに六人中四人が既に十分知っている話をするというのも、主旨と違う気がする。

当時の状況を思い出したのか、レティシアも納得した様子で頷いてくれた。

「そういえばアンナとアイツが会ったのってそのタイミングか……確かにバタバタしてたもんな」

「でしょ？　あの状況から部隊の死者無しで終ったって事で、シャマの方がよっぽどアイツに興味津々だった記憶があるわ」

最前線に近い場所で挟撃される形で眷属が顕現した事で部隊が孤立気味になり、完全に退路が遮断される前に人的損耗覚悟の敵中突破を試みようとしていた状況。そこからのまさかの欠員ゼロである。

大はしゃぎして喜ぶ部下の気持ちは分かるが、それはそれとしてアンナが必死こいて報告書を作成しているときに隣の天幕で酒盛りおっぱじめたのは腹が立った。

戦地にまで酒を持ち込んだローガスと、それを好き放題に飲みまくって出来上がっていたシャマに、夜が明けるまで残敵掃討に参加してこいと命じたのは今でも覚えている。

二人ともブーたれていたが、今思えばシャマの方は寧ろ助けてやったと言っても良い位だろう。

あぁもベロンベロンな上機嫌の浮かれっぷりでは、小一時間後に挨拶にだけやってきたレティシアと駄犬に抱き着いてキスの雨でも降らせかねない。

当時のレティシアならば、酒臭いキスマークを付けられた奴を見てもちょっと不機嫌になる、程度で済んだかもしれないが……挨拶の場には隊長も居たのだ。

やらかしていれば帝都に帰還後、特別訓練と言う名の彼女と延々模擬戦コースの予定を組まれるのは必至であった。

……こうして振り返ってみると、間接的にならばあの駄犬が絡む話も結構あった様だ。直接的には先の主張の通りにあっさりとしたものだったので、どの道今回の話の主旨には沿わないが。

「そういう事なら飛ばすか？　となると次はアリア、お前だけど……」

寝巻きに包まれた肩をすくめてあっさりと妹へと視線を向けるレティシア。

主催者の判断もあって反対意見は出ず、そのままアンナの要望通りに順番は飛ばされ

る――と、思われた。
「……」
「……アリア？」
何やら考え込む様な仕草で俯いている銀の聖女様に向け、姉が不思議そうに再度名を呼ぶ。
二度目の呼びかけにパッと顔を上げたアリアは、「あ、ごめん」と呟きながら手にしていたティーカップをソーサーに戻す。
彼女はそのまま空いた手の人差し指を額に当てて、小さく唸った。
「うーん……いや、なんとなく気になったんだけど」
基本、これまで皆の話を楽しそうに聞いていた少女の何とも言えない表情に、この場の全員が訝しさや疑問を覚えて注目する。
「何だか……自分の話は無いって言ったけどさ――アンナってこれまでの全員の話、にいちゃんから聞いてたり既に知ってたりしてない？」
「――うぅ、え？」
思わぬ形で話題を振られ、レティシアに劣らぬペースでポテチ喰ってた銀髪碧眼の少女が、三枚ほど纏めて摘まんでいたソレを取り落とす。
アリアに向けていた視線が転じられ、都合五つの視線が自分に突き刺さるを感じて、

アンナは額に嫌な汗が湧くのを感じた。
「い、いやぁ……そんな事は無い、と思うん……です、けど……」
しどろもどろになりながら、これまで各人から語られた話を思い返す。
アリアの考え過ぎ――な、筈だ。
各々が秘めていたあの馬鹿との思い出を全部馬鹿当人から聞いてるとか、流石にある筈も無い。
実際レティシアの過去については、今日聞いたのが初だった――その後に続いた絵本に関してはどうやら初版らしき物を所持しているが。
次の《陽影》の話については……確かに知っていたが、これは偶々である。あの駄犬から聞いていたという事自体黙っているので、この場ではノーカンの筈。
隊長の話については、ついつい既知である事を話してしまったが、仕方ないではないか。敬愛してやまない彼女が喜ぶ様を想像してしまうと、知りませんでしたという態度は取れなかった。
一通り振り返り、そこではたと気付く。
（……あれ？　アリア様の指摘ってそう的外れじゃ、ない？）
そんな思考が脳裏を過った瞬間、背中にぶわっと冷たい汗が噴き出す。
これは、良くない。何がどうとは言語化し難いのだが、とにかく良くない。不味い気

がする。
「多分だけど、《陽影》さんの話も知ってたよね？」
言い訳――もとい、身の潔白を訴える為の切り口まで即座に潰されて白目を剥きたくなるアンナ。
心なしか隊長とレティシアの視線も若干物言いたげなものに変わっている様な気がしてきた。いよいよ以て良くない兆候である。
普段の穏やかで愛らしい振る舞いを一時しまい込んでしまったアリアは、名探偵ばりの指摘で逃げ道を塞いでゆく。
「……ちなみにボクが話そうと思ってたネタって、時期的にはお題からちょっとズレてるんだ――にぃちゃんをにぃちゃんって呼ぶ様になったときの話なんだけど、これも知ってる？」
「……イエ、キイタコトモナイデス。楽シミダナー」
ダラダラと冷や汗をかきながら目を逸らして知らない、と主張するアンナであるが、その言葉をそのまま飲み込んでくれるお花畑はこの場にいなかった。
「「ダウト」」
（神は死んだ）
異口同音で聖女姉妹と戦乙女の三名から即行で虚偽判定を喰らい、今度こそ白目を剥

いて天を仰ぐ。

が、直ぐに精神を立て直して天井を貫通してお空へと飛ばしたくなる意識を強引に引き戻す。座して待てば地獄の入口が待っていると確信がある故に。

「やっぱり教国(あっち)に出向してる所為かしら……アンナちゃん、先輩と沢山お話してるのね？」

「はい、いいえ。隊長殿。あくまで食事ついでの他愛ない話ばかりであります……！」

一見、含むものは無い――無い筈、の笑顔で問い掛けて来る上司に向け、直立こそしないが背筋を伸ばしてはきはきと答える。

この状況では逃げ出すのは論外。何せアンナ自身に疑念が向けられているのだ。この場は逃げおおせたとしても、後日詰め寄られるだけである。

かといって、これ以上は誤魔化しは勿論のこと、躊躇いや言い淀む事すら己の首を絞める事になりかねない。

三人に妙な危惧を抱かれる事に対して、毅然とした反応と否定を行うことこそが突破口であると、アンナは本能的に察していた。

こうなれば腹を括るしかない。何を問われても真摯に答えつつ、駄犬(あのバカ)に関する邪推はしっかりと訂正する事でこの状況を切り抜ける。

云わば正面突破だ、ならば得意分野である。

さぁ、来い。と内心で気合を入れ直すと、手にするグラスを満たしていた葡萄酒（ワイン）を味わいもせずに一気飲みしたレティシアが、酒臭い息を吐き出しながら若干据わった目付きで見つめてきた。

「なるほど……こうなると、アンナだけ『話題がありません』は通用しないよなぁ……出会ったときの話が特に無いってんなら、逆にここ最近で特にネタになりそうなアイツの話を語ってもらおうか？」

「」

神は死んだ。

内心で二度目となる悲嘆の叫びである。ひょっとしたら短時間で二度の死亡判定を喰らった何処ぞの神格がくしゃみでもしているかもしれない。

アンナが絶句した……するしか無かったのは、当然レティシアから振られたお題が厄ネタである、という自覚があるからだ。

最近のネタと言われて、真っ先に思い浮かんだのは二つ。

あの事件の終盤、敵の本拠地であの馬鹿が亜麻色の髪の少女の命を救いあげて見せたこと。

もう一つは……バルコニーでちょっとだけ奴のダンスの練習に付き合ってやったこと。

真摯に答えるしかない、という結論をだした途端に返って来たお題が即死級の爆弾だった。理不尽である。

此処で話すのを躊躇えば「何かあります」と主張しているのと大差ない。後に死地が待つのは確実。

だが話してしまえば、巨大な爆弾に着火するイメージが拭えない。

どっちを選んでも待ってるのは致死レベルの窮地とか、幅も救いも無い嫌すぎる二択であった。

（あぁ、なんでこんなアホな苦労してんだろ私……）

思わず遠くを見やる目付きとなって、窓から見える夜空を見上げる。

今頃、話題の中心兼事の元凶は他の男連中と気安い飲み会でも楽しんでいるのだろうか？　そう思うとなんだか腹立ってきた。

（ふ、副長……）

（アンタは生き残りなさい）

窮地に立たされているアンナを見て腰が引けている部下に、アイコンタクトだけで健闘を祈っておく。

現状、自分は詰みに近い。半ば道連れとばかりに今夜の女子会に参加させたローレッタであるが、この流れなら彼女は無事に明日の朝を迎えられるだろう。流石にこの状況

をどうにかしろなんて無茶振りをするつもりは無い。
深く息を吸い、吐き出す。
さて、ファルシオンの一件についてか、バルコニーでの事か。どちらを選ぶかだが。
正直どちらを選んでも着火不可避な気はするが、それでも話すとなればアンナの中ではファルシオン絡みの一件で決まっていた。
火種としてはまだマシな小さそうな方を選んだ、というのは勿論なのだが――まぁ、なんとなく。
隊長も、レティシアもアリアも、《陽影》だって、きっと本当に大切なアイツとの思い出は、誰にも話さず自分の中にだけとってある。
彼女達ほど大仰なものでは無いにしても――自分も一個くらいなら、アイツ（ともだち）とそういうのがあっても、まぁ良いんじゃないかなー、なんて、ちょっと思ったりしたというか。
繰り返すがあくまでなんとなく、である。深い意味とかは無い。
そんな事を考えつつ、アンナは覚悟を決めて口を開こうとする。宛ら死刑執行の書類にサインする気分であった。
――が、ここで予想外の声が上がる。
「……お待ちを！　それならば副長を最後として先に私（わたくし）が語らせて頂きたいですの！」
決然とした声色で宣言し、立ち上がったのはローレッタだ。

勢いよく挙手したものの、その場の全員の視線を一斉に浴びてちょっと怯んだ彼女は、だが直ぐに瞳に強固な意志を宿して胸を張る。

景気づけといわんばかりに、手にしたグラスに満たされた葡萄酒（ワイン）を一息で飲み干すと、唇の端についた赤色の滴を親指の腹で擦って漢前に摺り落とし、続けた。

「元よりアリア様とは、先生とのその後についてお話すると約束していましたわ。話せる状況である内にソレを果たしたく思います」

すげぇ。なんだこの娘、勇者か。

掛け値なしの賞賛と共に、唖然として仁王立ちとなった隣の部下を見上げるアンナ。

まだ表面に出て来る程では無いとはいえ、既に隊長達からは何処となく不穏な空気が漏れていた。

どういう種の感情であれ、機嫌が良くなかったのは確かである。それに気づかない程鈍くはないだろうに、ローレッタはその空気の中に敢えて飛び込んで見せた。

聖女や戦乙女の鞘当てに巻き込まれた者同士（ローレッタを巻き込んだのはアンナなのだが）黙して死地へと見送るのを彼女は良しとしなかったらしい。大した胆力である。

（……借りが出来たわね）

鉄拳令嬢の勢いに押され、ぱちくりと眼を瞬かせているレティシアを見て、苦笑する。

アリアも約束とやらを前面に出された事で、どちらかというとローレッタの意見を肯定する空気であり、聖女二人がそんな感じなので、ミヤコ隊長も特に異論無く頷いていた。

ローレッタの話が終わるまで先延ばしになっただけかもしれないが、首の皮一枚繋がった感がある。一旦間を置く事で着火するにしても勢いが減じる可能性だって、なくは無い。

あとでお礼を言っておこう、と部下への感謝を今は胸の内だけで留め、アンナは知らずの内に緊張で干からびていた喉へとお茶を流し込む。

「……まぁ、そこまで乗り気ならローレッタの話を聞いてからでも良いだろ。皆もそれでいいよな？」

「感謝しますわ！」

決を採るように全員の顔を見廻したレティシアが、反対意見は無しと判断して一つ頷く。

それを受け、ローレッタが気合十分とばかりに力強く礼を述べた。親睦会の類でのお喋りというより闘技大会での試合時の如き気迫である。

――取り敢えずは窮地を脱した事で他の面子と同じく、すっかり聞く態勢に入ったアンナであるが……彼女は一つ失念していた。

ローレッタ＝カッツバルゲルという少女は猪突猛進、正面粉砕突破を旨とした戦士であり――惚れた男を逃がさず喰らい付き、見事ご馳走様した超肉食系女子である。

尊敬する上司（アンナ）の危地を断ち切らんとし、更にはアリアとの約束も果たさんという二重の奮起を促すこの状況。

彼女は気合が入っていた。物凄く。

そのノーブレーキ感たるや、当のアリアが気付けば「そこまで全力じゃなくていいよ!?」と即座に突っ込みが入りそうな位にはエンジン全開である。

「コホン――では、僭越ながら語らせて頂きますわ……あれは、先生と共に帝都に到着したその日の夕方の事です」

軽い咳払いと共に、金髪巻き毛のお嬢様はいよいよ口火を切った。

幾つもの条件が揃った故に、これから彼女の口から語られるのは、おぼこい小娘達が想像する『年上の彼氏と結ばれた、ちょっと桃色な甘酸っぱい経緯』などでは無く。

「夜になったらキメるつもりでしたので、先生には宿で荷ほどきをして頂き、私（わたくし）は一服盛る為のお酒と避妊のお薬を花街に購入しに向かいましたの！　流石は帝都だと感心しましたわ、その手の商品も品揃えからしてダンチというやつでしたわね！」

生々しいにも程がある、臭い立ちそうなエグめの猥談であった。

「以前に入浴へと乱入した際に先生の身体は視姦……失礼、チェック済みでしたので、○

×※した際も考慮して◆□を幾つか選んで――」

聖女姉の手からワイングラスが滑り落ち、中身をぶちまけて絨毯の上に転がり。

妹の方は食ってた菓子を喉に詰まらせて目を白黒させ。

帝国最強の騎士たる少女は先程の三倍くらいの威力で茶を噴いたせいで、鼻と気管に入って悶絶。

同じく噴き出しそうになった半吸血鬼（ダンピール）の少女は、口元を抑えて思いっきり仰け反ったせいでソファの上から転げてひっくり返った。

「出来れば初回に×?●も試してみたかったので、▽▲▽♡○は必須だったのですが……全て問題無く手に入ったのは正に女神様の思し召しでしたわね、御蔭でそのときは確信できましたの！　ヤるなら今夜であると！」

ひでぇ思し召しがあったもんである。この世界の全ての生命の母ではあるが、単独での生命創造が可能な故にカテゴリ的には処女神であるとされる女神への熱い風評被害であった。

ヤケクソか、はたまた単にノリノリなだけなのか。

一度口火を切っちまえば止まらねぇぜ！　とばかりに、ローレッタの赤裸々を通り越した逆○の詳細報告は続く。

「理想は正○×でしたが先生の抵抗が激しかったので一回戦は※乗◇でしたわね。少々

雅に欠ける○×ですがアレはアレで♣に先生が◇♡♠感じで実に甘美……！　ぶっちゃけクッソ興奮しましたわ！」

（おぉ……もう……）

既に場はローレッタの独壇場。湯あたりした様な顔色で死屍累々となっている一騎当千な少女達を眺めつつ、アンナもソファの肘掛け部分に横倒しになって突っ伏した。

戦場で兵士達が猥談する事なぞ多々ある。そういったものを聞き流せるようにならなければ女だてらに騎士などやってられないのは確かだ。

が、それなり以上に交流のある同性の情緒たっぷりなその手の語りは、中々にキツい事が分かった。後から効いて来る胴打ちの様な胃もたれ感にも近い重さがある。

蜂蜜を煮詰めた様なドロッドロの甘さと同時に、生臭さすら感じそうなリアルな猥談の御蔭で、現在強烈な胸やけが発生中だ。ついさっきまで手が伸びていた茶菓子は今では全く食べる気がしない。

……マメイ氏が最初に顔合わせした頃より疲れている――というか若干干からびてる様に見えるのは、ひょっとしてコレの所為ではないだろうか？

新入りとはいえ、帝国最精鋭の騎士たるローレッタと非戦闘員の研究者である彼とでは、基礎的な体力に差があるのは当然だ。積年の想い叶って猿になるのは仕方ないのかもしれないが、愛しの先生を吸い殺す前に自重を覚えろと言いたくなる。

「奮発した御蔭で気が付けば朝になるまで効果があったのは予想外でしたが……その分甘美な想い出が積み重なったと考えれば寧ろバッチコイでしたわね！　あれは確か6回戦目でしょうか？　その辺りで先生も私の想いを受け入れて下さいましたし、そこからは♠♡♦♣も使って×※×などを試してみたり――」

「しょ、初回で×●とか無理、絶対無理……！　ボクぜったいしぬ……！」

「そもそも初めてで一晩中ってなんだよ……なんで四回戦で世界戦フルラウンドで戦い抜いてんだ……！」

「♠♡♦♣って……×※×って……」

ぐったりしている様で話自体はしっかり聞いているレティシア達から、うわ言じみた呻き声が聞こえる。

本当に聞きたくないなら耳でも塞ぐか話を遮れば良いのだろうが……なんか色々ダメージを受けつつもローレッタの話を聞く事は止められないらしい。ムッツリか聖女。

ちなみに唯一無言の《陽影》であるが、顔にハンカチを押し当てて貧乏ゆすりよろしく身を揺らしている。ダメージは深そうだが此方も話そのものはしっかり聞いているらしかった。

室内の空気的にも、もうすっかりアンナの話に関してはどっかに吹っ飛んだ感じだ。

ある意味ではローレッタの狙い通りであり、またある意味ではアンナの望み通りの展

開でもある。
だが、それを踏まえてもコラテラルダメージがデカい。デカすぎる。
先のフォローで助けられた身としては、横から口を挟んで止める事も出来ない。
自分が巻きこみ、そして助けてくれた部下までドギツい桃色の煙を撒き散らす爆弾であったというオチは、現在進行形で疲労感を加速度的に増やしてくれていた。
「今ではすっかり慣れたものですが、π凸×凹というのも当初は新鮮でしたの！　これはあまり〇×△※なのですが、視覚的に私(わたくし)も先生も――」
（もう勘弁して下さいローレッタさん）
この場において桁外れの経験値を誇る部下を、内心でさん付けなんてしちゃいながら、アンナも他四人の様に呻き声を洩らす。
熱を持っている頬や耳たぶを極力意識しない様にして、開封済みのワインボトルへと手を伸ばして。
「もーやだ、おへやかえってねたい」
当分は叶いそうにない願いを口にしつつ、飲まなきゃやってられるかとばかりにグラスになみなみと注いだ酒を呷ったのだった。

魔族領編

魔族領幹部会議（物理）

大陸南方、魔族領。

北方にある霊峰近辺ほどでは無いとはいえ、豊潤な魔力が大地を巡るその土地は、肥沃というには少々旺盛に過ぎる生物や植生が跋扈する地域だ。

南に位置するので比較的温暖であるという事も理由の一つだろう。実際、領の南端にある一部地域には限りなく常夏に近いレベルで気温の高い場所もある。

ともあれ、土地も環境も其処に住まう者もタフなものだらけの地である事には疑いが無い。

そんな魔族領の中心部が他国の区分的には王都と呼ばれる都市である。

宰相にも近い立ち位置の筆頭補佐の努力もあって近年は多少は区画整理も進んで来た街ではあるが、もとをただせばその始まりは、魔族領筆頭である男の単純な武威に惹き寄せられ、集まった者達によって出来た村擬き。

無秩序に肥大化して非常に雑然とした作りとなってしまった都市構造は、まだまだ各所にその名残を色濃く残していた。

そもそも長期的な計画も練り込んだ本格的な街の整頓に着手出来たのが邪神大戦の終結後である。寧ろ二年と少しでじわじわとでも整理された区画が生まれてきた事を賞賛すべきだろう。

長命種によって興された街、ひいては国であるので、歴史と言う点で実は相当に長い。ならば何故長い間、歴史ある国の首都としての見栄えが整えられなかったのか。

領内の西部に纏まっている吸血鬼達（ヴァンパイア）を除けば、実用一点主義というか質実剛健というか……魔族（かれら）の種族的気性に依るものも理由の一つではあるのだが、それよりも。

「死ねやこの糞鳥がぁっ!!」

「ハッハァ！　まだまだ元気一杯だな、よっしゃ来い！」

――ぶっちゃけ定期的に王城の一角やその周辺が吹っ飛ぶ為、お上品な街作りに割いてる時間的余裕なぞ殆ど無いのである！

魔族領王都中心部……白亜の城というより頑強な大規模砦か城塞にも近い其処は、現在一部が瓦礫の山に変わっていた。

長身痩躯の魔族――《狂槍》が振りかぶった投槍が、音速を遥かに超える速度で投擲される。
凄まじい魔力が練り込まれたそれは、直撃すれば迫撃砲の如き破壊力を以て分厚い城壁を粉砕し、竜の鱗すら貫く必殺の一撃だ。
――が、それを嬉々として迎え撃った鳶色の髪と眼をした男は、迫りくる穂先を手にした大剣で事も無げに叩き落とす。
本来ならば接触の瞬間に大爆発を起こす筈の投槍は、宿る攻性魔力ごと捻じ伏せられて男の足元に小さな陥没痕を穿つのみで沈黙した。
男――《魔王》が迎撃の剣を振り切った瞬間、《狂槍》は２０メートルはあった距離を一瞬で潰し、手にした槍で体重を乗せた刺突を叩き込む。
「おお、何時もよりちょっと重い！　突きの捻り変えた？」
「素手で逸らしてんじゃねぇクソッタレが！」
先の投擲を上回る超高速の突きを、横から拳で引っぱたいて軌道をズラす変態。凶悪な面相を苛立ちで更に歪めて毒付くチンピラ。
弾かれた穂先が一瞬で引かれ、怒涛の連続突きへ転ずる。
間断なく打ち込まれる突きの壁が面制圧を生み出し、津波の如く《魔王》に向けて押し寄せた。

が、それを打ち落す剣閃もまた神速。細かな振りには向かぬ筈の大剣が小枝の様な気軽さで振り回され、魔装の槍が生み出す瀑布の如き突きの嵐を真っ向から弾き散らす。

打ち合い、擦れ、軋みを上げる鋼同士が甲高い音を立て、瓦礫の山となった周囲に激突音を響かせる。

途切れる事の無い鋼の衝突が奏でるは、協奏曲か狂騒曲か。並の手合いはおろか、邪神の眷属であっても飛び込めば即座に千切れ飛んで消滅するであろう超速の刺突と斬撃の打ち合いは延々と続くと思われたが――。

「――うらぁっ！」

打ち合う《魔王》の横手の瓦礫が吹き飛ばされ、粉塵と埃を撒き散らしながら擦り傷だらけになった赤毛の魔族が飛び出した。

手にしたバスタードソードが閃き、《魔王》の横腹へと鋭い斬撃が吸い込まれる。

人外級の戦士であっても回避困難な強襲。だが、それを打ち込まれた超越者たる男は更に剣速を上げて斬撃を打ち落すという、単純だが出鱈目に過ぎる方法で対処してみせた。

「アレで気絶しねぇのは流石だな！　けど素面のお前じゃ攻めの圧が足りねぇよ！」

「最初に速攻で酒瓶割ってくれたのはアンタでしょーが！　今日は上物の蒸留酒（ラム）を持ってきてたってのに……弁償しろやゴルァ!!」

常時ほろ酔いでのらりくらりとした態度の赤毛の戦士――《赤剣》は、今ばかりは容器を粉砕されて地面の染みに変わった酒を悼むが如く、眦を吊り上げて咆哮すると斬りかかる。

怒りの籠った剣が叩き込まれ、酒を台無しにされた酔っ払いの剣戟に合わせる様に《狂槍》の刺突による連撃も激しさを増す。

長い付き合いのある幹部同士、咄嗟に行われる連携はレベルが高い。そうでなくとも両名共に人外級の戦士だ。

個々で見ても二人の振るう武器は勿論の事、それらを握る腕の動きすら人類種でも最高峰の戦士達以外には視認すら難しいであろう速度に達している。

それを正面から迎え撃って捌き続ける奴がおかしいのだ。超速で鋼のぶつかり合う音は、既に剣戟というより重火器――それこそ兵器に搭載する大型の掃射を鋼塊にぶちまけた様な轟音に変わっていた。

「はっはっは――！　どうしたオラ、手数にかまけ過ぎて一発が軽くなってんぞ！」

「ちぃっ……！　舐めンなよアホウドリ！」

「毎度毎度、理不尽な生き物過ぎる……!!」

ゲラゲラと楽しそうに笑いながら前に出る《魔王》の暴風の如き剣に圧され、《狂槍》と《赤剣》が押し退けられる様にジリジリと後退する。

更に歩を進めようとしたロ〇コンだが、その後頭部に大きな、それこそ短槍の如きサイズの矢が撃ち込まれ、振り向きもせずに首を傾げて躱した。
片手に握る剣で長槍とバスタードソードの連撃を捌きつつ、矢の飛んで来た方向に向けて魔力を練り上げた拳を振り抜こうとして――その動作を中断する。
矢を放った人物――《不死身》は、やや離れた位置にある倒壊や破壊を免れた物見塔の上で次弾を弩に装填しつつ、ニヤリと笑う。
「今年、物見塔（ココ）を壊した数は既に三回――次やったら問答無用で小遣い9割カットでしたねぇ、塔ごと狙えるならやってみて下さいよ頭領（ボス）……！」
「ちょっ……きったねーぞお前?」
ニチャァ……と嫌な笑みを浮かべる部下の青年に向け、憤慨して攻撃の代わりに文句を飛ばす《魔王》だが、同意してくれる者は誰もいない。
「カカッ、自業自得だろうが！」
「ざまぁぁぁぁっ！　そのまま延々背中撃たれとけぇっ!!」
どころか切り結ぶ二人は滅茶苦茶楽しそうに煽り散らかす始末である。
追撃で放たれた弩矢（ボルト）を打ち落とし、勢いを増してねじ込まれる槍と剣の切っ先を捌きつつ、《魔王》は思考する。
一旦《狂槍》達を放って《不死身》を直接殴りにいこうかと考えるも、迂闊に背を向

ければ怒涛の追撃が叩き込まれるのは確実。
何より「オラッ、背ぇ向けて見ろよその瞬間ぶった斬ってやるよ」と視線だけで伝えて来る舎弟共の思惑通りに動くのはなんかムカつくので、このままなんとかしようと結論を出す。
「次、十七秒ください！」
「えっ、溜め射ちは酷くない？」
物見塔からの叫びに出した結論は即行で棚上げされた。
返答はせずとも、《狂槍》と《赤剣》の武器を振るう速度が更に上がり、任せろとばかりに《魔王》をその場に張り付けにする。
数十メートル先の塔の上で、伏射の体勢になった《不死身》の構える大型の弩――その砲口に紫電を撒き散らして魔力が圧縮・装填されているのを見てとり、部下達による微塵の容赦も躊躇もない必殺連携を前に思わず頬が引き攣りそうになった。
「流石に直撃は遠慮してぇな……！」
あの密度の攻性魔力で身体に穴が空けられると結構痛い。なんてトンチキな事を考える変態不死鳥。痛いで済むのがおかしい事はもはや言う迄も無い。
ギアを一段上げながら、《魔王》は動きを封じようと左右から繰り出される剣と槍の連撃を止めるべく身を捻った。

魔装の槍による刺突を踏み込みながら紙一重で回避しつつ、身体を捻ったことで生み出した勢いを利用して打ち合ったバスタードソードを大きく弾き。

間を置かず引かれ、再度突き込まれた穂先を切り返した剣先で柔らかく巻き取る様に受け、天へと跳ね上げる。

馬鹿げた魔力量と出力、それによる身体強化率と、精密・繊細ですらある体捌きと剣技を両立させた動き――相対する者にとっては理不尽としか言い様が無い。

が、正確な回数など覚えていない程に喧嘩してる魔族領幹部の連中からすれば慣れた理不尽（モノ）だ。

この程度はやってくる、という認識は全員が持っているので動揺は無い。舌打ち一つ漏らすのみで瞬時に立て直す。

それでも相手が相手だ。刹那にも満たない間に《魔王》は横っ飛びに跳躍し、一時的に二人の間合いから外れていた。

《不死身》の弩に魔力を蓄積させた砲撃は、その超高の圧縮率故に殆ど留めおく事が出来ない。限界まで溜り切れば直ぐに放たれる。

数秒後にはぶっ放されるだろうその一撃に、余裕をもって対応しようとして――。

《魔王》の直ぐ横手、倒壊した元・会議室だった場所から手甲（ガントレット）に包まれた腕が飛び出す。

「貴方なら、塔からの射線に対して此処に跳ぶと思ってましたよ」
「ゲェッ!?　《亡霊》!?」
突如として伸ばされた手によって襟首を掴まれた《魔王》が悲鳴混じりの呻き声を上げる。
粉塵と埃に塗れながらも平然と瓦礫を突き破って現れたのは、今回の喧嘩の序盤にて倒壊前の会議室で天井にめり込んだ筈の魔族領筆頭補佐であった。
超越者たる男の探知・知覚すら潜り抜け、今の今まで瓦礫の中で息を潜めていた黒塗りの鉄仮面（フルフェイス）マンは、眉庇（バイザー）の奥にある瞳をギラリと光らせる。
表情の伺えない仮面……だが底光りする眼力を前に、長い付き合いである《魔王》は腹心たる部下が静かにキレている事を察し、今度こそ顔を引き攣らせた。
「……嫌っ、離して！　変な事するつもりでしょ！　春本みたいに！　薄い春本みたいに！」
だがこの男、全く自重しない。
気色悪いしなを作って吐き出された戯言に、《亡霊》の兜の内でこめかみに血管が浮かぶ。
返答として彼が行ったのは、無言の顔面殴打。
襟首掴んだ手とは逆の腕が、握られる拉げた盾ごと殺意満点で叩きつけられる。

一級の魔装の鎧だろうがベッコリと陥没させるであろう渾身のシールドスマイトを頬に捻じ込まれ、「ブッ!?」と口内の空気を絞り出しながら《魔王》の頭部が派手に仰け反った。

次の瞬間、物見塔より放たれる魔力の極光。

砲撃の媒体となった弩矢(ボルト)が、焼き溶けながら一条の光となって一直線に飛ぶ。超加圧状態で射ち出された魔力砲はレーザーの如き弾速に相応しい貫通力を発揮した。

「あ”痛ぇ”っ!?」

左肩の付け根を抉り飛ばされ、僧帽筋と鎖骨の一部が消し飛んだ《魔王》が箪笥の角に小指をぶつけた様な表情で悲鳴をあげる。

「シャぁッ！　畳みかけンぞ！」

「りょーかいっ！　さぁ、俺のラム酒と同じだけの血をぶち撒けろ頭領(ボス)ウウウッ!!」

普通に考えれば彼らの頭領のダメージ度合いは重症――下手をすれば致命傷に近いのだが、傷を負った本人も周りにいる奴らも当たり前の様に喧嘩を続行する様だ。寧ろ絶好の好機であるとばかりに《狂槍》達は一気呵成に打ちかかった。

実際、その判断は過剰でも何でもなかったりする。

練度や圧縮率の高い攻性魔力を打ち込まれた場合、本来ならば再生・復元能力を有した種族であっても、それらを阻害されて暫くは止血すら儘ならない。

ましてや今回の撃手である《不死身》は人外級。種族的に最も高い回復力を持つとされる吸血鬼（ヴァンパイア）であっても再生は容易では無い……筈だった。

だが《魔王》の左肩は白煙を吹き上げながら傷口が泡立ち、既に肉が盛り上がって抉れた骨も繋がりつつある。奇妙奇天烈を通り越して異常極まる回復速度であった。

ちなみにこの再生力を始めて見知った際の某猟犬は、プラナリアだってもうちょっと慎ましい治り方するやろ!?　とドン引きして叫んでいる。然もありなん。

「チッ……楽しくなって来たなオイ！」

小さく舌打ちしつつも言葉通りに何処か楽し気な表情（カオ）となり、片手で剣を握り直す《魔王》。

先程その顔面に一発良いのを入れる事に成功した《亡霊》は、追撃とばかりに腰の鞘に納めていた肉厚の片刃剣を抜き払い、上司の再生中である左肩に向かって振り下ろしの一撃を捩じり込んだ。

火花と鋼の打ち合う音が上がり、霊具の大剣と魔装の片刃が魔力を迸らせて鎬を削り合う。

片腕が上がらない状態でも危なげなく攻撃を防いだ《魔王》だが、いつもよりちょっと殺意の高い部下に対して若干及び腰になって問いかけた。

「……あの、いつもより当たりがキツくない？」

「ええ、急遽会議なんて言い出したので嫌な予感はしていましたが……予想の三倍くらい阿呆な発案を聞かされましたからねぇ……！」

鍔迫り合いとなった状態で、フルフェイスの奥から凄まじく冷えた低い声が漏れ出る。

《魔王》が素っ頓狂な思いつきで会議を開くのはいつもの事なのだが、どうも今回は輪を掛けてぶっ飛んだ内容だったらしい。

また、すっかり恒例行事と化した部下達による力づくの説得タイムに対しても何時もと反応が違っていた。

この男からすれば、部下達とのド突き合いも定期的に行う楽しみの一つだ。

なので普段はその場のノリや愉しみを優先にして対応した対応を取る。興を挟み過ぎて結果的に鎮圧されてしまう事もしばしばあるのだが、それすら楽しい『遊び』の内という事なのだろう。行動基準がまんま傍迷惑な悪ガキのそれである。

だというのに、今回は《赤剣》を酔わせない様にしたり、司令塔の《亡霊》、壁役の要である《万器》を真っ先に倒しにかかるなど、鎮圧行為を返り討ちにして意見をゴリ押しする気満々だった。

「別にいいだろ。絶対楽しいからやろうぜ」

「ついこの間、《大豊穣祭》が終わったばかりでしょう！　自重しろって言ってんだよ焼

き鳥ィ！」

剣を挟んだまま至近距離であっけらかんとほざく自国の筆頭の言葉に、筆頭補佐が怒りと切実さが複雑に入り混じった咆哮を上げる。

同じ《災禍の席》に所属する幹部達であっても大抵は大人しくなる《亡霊》の一喝にも怯まず、《魔王》は胸を張って応えた。

「だが断る！　あとこれに勝ったら色々入用になるので、小遣いのカット率を半額にまでまけてください！」

「勝敗関係なく九割九分九厘カットじゃボケェェェッ!!?」

全額と言わないだけ慈悲はあるのだろう。多分。

怒りに任せて《亡霊》が自身の剣の背を盾でブン殴り、その衝撃で互いの剣が弾かれて距離が一歩拡がる。

そこに差し込まれるは、飛び込んで来た他の《災禍》の絶撃。

瓦礫の山に響き渡った叫びに同調する様に、二人の左右から長槍の刺突とバスタードソードの打ち下ろしが繰り出され、物見塔から通常の射撃に戻った弩矢（ボルト）が撃ち込まれた。

邪神の最上位眷属だろうが「あ、死んだわコレ」と諦めて目を瞑る人外級四人の連携攻撃を前に、しかして世界にただ二人の超越者の片割れは慣れた様子で迎撃の剣を振り

上げる。

「馬鹿野郎今回は勝つぞ俺はやるぞマジで野郎オブクラッシャー！」

駄犬経由で知った意味の分かってない気合の掛け声を張り上げつつ、とりあえず動く程度に再生を終えた左腕も使い、しっかりと両手で剣を握り直して《魔王》は吠えたのだった。

ちなみに元ネタ的にその台詞は負けフラグである。

――そして、二十分後。

「よっしゃ、小遣い半額、ゲットだぜ！」

フラグをへし折り、天に拳を突き上げる《魔王》の姿があった。

「……死ね……糞が……」

「……なんかもう疲れた、とにかく酒飲みたい……」

瓦礫の上で大の字にひっくり返り、ズタボロになりながらも毒を吐く《狂槍》。

壁に上半身が突き刺さって埋まった状態で足をプラプラさせながらボヤく《赤剣》。

ちなみに城の倒壊・破損率は二割に到達していた。一時間後には修繕の人員が慣れた

様子で片付けを始めるだろう。魔族領の嫌過ぎる風物詩であった。

勝利を収めた《魔王》であるが、流石に無傷では無い。着ていた鎧も服も破損し尽くし、上半身裸のその姿は普通の生き物なら満身創痍と言える負傷具合だ。

腹を槍でぶち抜かれ、右肩にはバスタードソードが深々と埋まり、尻と右腿にも弩矢（ボルト）がぶっ刺さったまんまである。

そんな状態でも陽気にヤッホゥ！　とか叫んで元気に飛び跳ねる不条理生物を前に、城の壁面に巨大なクレーターを穿ってその中心にめり込んだ《亡霊》がうんざりした声色で呻く。

「……九割九分九厘だと言ってるでしょう……年が明けるまでこのままです。絶対にだ」

「……ちょっと位はカット率下がったりしない？」

「しねぇよボケ」

そもそもこの男、「どうせ九割九分九厘ならぶっ壊しても同じだな！」とかほざいて物見塔を真っ二つにし、《不死身》を生き埋めにしている。

塔ごと一緒に斬られたので当分自力では出てこれないだろう。死に辛さ、壊れ辛さという点では《魔王》に次ぐので、瓦礫の下で休息を兼ねた不貞寝でもしている最中だと思われる。

先刻までの激しい戦闘音が収まり、晴れた空の下で穏やかな空気が戻って来た空間。
そこに無数にある崩れた瓦礫の山の一つが力づくで押し退けられると、崩れた城の一画に大きな笑い声が響き渡った。
「うははは！　いや今回は見事にしてやられたのぅ！」
崩壊した建物から無理矢理に出てきたのは、浅黒い肌に白灰色の短髪と同色の髭を生やした壮年の魔族――《万器》だ。
喧嘩が始まった初っ端に突撃してきた《魔王》のちょっと本気の一撃を喰らい、部屋の壁どころか城壁をぶち抜いて吹き飛んで最初に戦闘不能になったと思われたが……どうやら普通に歩ける程度には余力があるらしい。
袈裟懸けに斬られ、胴に灼け焦げた様な斜め傷が派手に走っている《万器》だが、埃塗れの身体を軽く払うと傷の下手人に負けず劣らずゲラゲラと陽気に大笑する。
「ま、ルールはルールっちゅー事だわな。今回は頭領の思い付きを受け入れる方向でええか？　《亡霊》の」
「結果は不本意ではありますが、力で物事を押し通すもまた魔族（我ら）の流儀の一つ。負けた身で異議を唱える気はありませんよ。腹は立ちますが」
会議で上げたお題は、会議（物理）による成否選択可能。一度勝敗が決まれば覆す事はしない。

問題児だらけの《災禍の席》が行う会議にて、これだけはと定められた数少ないルールだ。規範や秩序を重んじる良識担当の筆頭補佐に、それを覆す気は無い。

クレーターに半ば埋まったまま、溜息を吐き出して不承不承、といった様子で首を縦に振る《亡霊》だが、フルフェイスの兜の奥から覗く瞳が若干恨めし気に三席（万器）を睨めつける。

「……《万器》殿が早々に落ちなければ結果は別だったのでしょうがね」

「すまんて。初っ端潰しに掛かられるとはワシも思わなんだ」

「嘘ですね――ぶっちゃけ、頭領の提案をちょっと面白そうだと思っているでしょう？」

断言された言葉に《万器》が「なんのことかのう」なんて言いながら明後日の方向を向く。

やっぱりか、といわんばかりに筆頭補佐は再度溜息をついた。

幹部――ひいては領内でも最古参に近いとされる《万器（この男）》は、魔族領が国として成る以前から《魔王》と付き合いがある。

それこそ最初期……今は西部で公爵として吸血鬼（ヴァンパイア）達を纏めている《宵闇の君》が、嘗て《災禍》の席次を有していた時期、既に彼女の先任として所属していたという。

傍迷惑な変態不死鳥の思考や行動パターンを、おそらく一番正確に把握しているであろう人物なのだ。全く攻め手を読めなかった、などと言う事がある筈も無い。

百歩譲って《魔王》の行動が予想外であったとしても、《万器》の戦闘技術――特に格上相手の防衛戦に関しては、人外級の中でも更に頭一つ抜けている。
これに関しては戦闘狂の気がある《狂槍》でさえ素直に認めている程だ。例外の極みたる超越者級二名を除けば、その防戦能力は大陸随一の可能性すらあった。
相対するのが超越者（れいがい）そのものであっても、殺す気の無い『お遊び』の一撃で戦闘不能になるのは聊か以上に不自然なのである。
一応はこの時期の忙しさや帝国で大きな祭りが終わったばかりな事を考慮して、何時も通り止める側に廻ったのだろうが……提案が面白そうだと感じた事もあって、やる気は余り無かった、という事だろう。そうした精神面から来る隙を見逃す《魔王》では無い。
「だっはっはっは！　全部お見通しかい！　こりゃ参ったわ！」
開き直った様にバシンと自身の頭を叩いて《万器》が再度大笑いする。
「いやな？　帝国じゃ色々と面白そうな事もあったと聞いてな？　こんな事ならワシも行っときゃ良かった、とか思っとった処に今回の頭領の思い付きを聞いてなぁ！」
今回は勝ってくれた方が色々と楽しそうだと思った、と、胸を張ってぶっちゃける最古参の《災禍》を前に、壁にめり込んだまま筆頭補佐は三度目の溜息を漏らした。
「それなら最初から素直に頭領に賛成して下さい……貴方が抜けていれば渋々ながら了

承する幹部もいたでしょうに」
　不本意な結果に変わりはないが、今回の喧嘩が無かった分だけ収支的にはマシな部分もあっただろう。
　そう愚痴る《亡霊》に向け、《万器》はあっけらかんと返す。
「まぁ、それでも良かったんだがの。今日は単に喧嘩したい日和だった」
「はっ倒すぞオッサン」
　想像以上にアホな答えが返って来た。しかも喧嘩したいとか言っておいて早々にぶっ飛ばされて退場している。
　《魔王》がフリーダムに過ぎるせいで隠れがちだが、このオヤジも古くからそれに付き合ってるだけあって相当に自由人だ。それを失念していたのは迂闊だったと内心で悔いる《亡霊》である。
「何はともあれ、これで本決まりだ。そんじゃ、早速このメモに書いてある連中に手紙だそうぜ！」
《災禍》の二席と三席の会話を聞きながら身体中に刺さった剣やら槍やら矢やらを引っこ抜いていた《魔王》が、ズボンのポケットから取り出した紙片を掲げる。自分で書いたらしいソレは、意外にもそれなりに小綺麗な文字で結構な数の人名や地名が書き連ねられていた。

どうやら人名の方は教国と帝国の人間が殆どの様だ。上は教皇や皇帝といった国家元首から、下はいちシスターや一介の騎士や傭兵まで様々である。

「折角《門》を開ける魔道具を数貰ったんだし、有効活用しねぇとな！　期間中、日帰りなら来れる奴らも結構多い筈だろ！」

余程楽しみなのか、夏の終業式を終えた小学生の様なテンションの《魔王》。血で汚れたボロボロな格好の上に虫採り網の代わりに担いでいるのは大剣――だが、鼻歌すら歌い出しそうな上機嫌な表情は子供の浮かべるソレと大差無い。

そんな彼の手にするメモには、今回の”思い付き”の内容が詳細に書き記されているらしい。何気にマメな処もある様だ。

先の喧嘩でややボロっちくなっている紙片の始まり部分は『魔族領南部、冬の避寒旅行計画（バカンス）』と書かれ、赤丸で囲まれていたのだった。

いざ、南方へ

「と、いう訳でね。《魔王》殿から各国の知人・友人に向けて文が送られたらしい」
教皇のみが座る事を許された座――では無く、プライベートでもっぱら愛用している揺り椅子に揺られながら、爺さんが苦笑する。
急過ぎて意味が分からんねん。何やってんのあの鳥は。
聖都大聖殿は奥ノ院。教皇の爺様に呼び出された俺とシアリアは、いきなり渡された手紙について一通り説明を受けて絶賛困惑中だ。
「あー……つまり、『《門》を開く魔道具が複数手に入ったし、皆で集まって遊ぶのに使おう』って事か？」
自身の淡い金髪をくしゃくしゃと指でかき混ぜながら、呆れを隠さない声色でシアが確認とばかりに問いかける。
公的なお話や任に繋がる場であればもーちょいＴＰＯを弁えた口調にもなるのだろうが、爺様から「ほぼ私用・私情の手紙だから」というお言葉を頂いている。そのせいもあって手にした手紙の扱いも態度も雑というか適当だった。

あのロ〇コンの思い付きから送られた手紙とか、もうそれだけでめんどくせー話にしか思えないからね、仕方ないね。

気持ちは分かるとばかりに教皇(じいさん)が頷き、左手で伸ばした真っ白な顎髭をしごきながら逆の手で自分の分らしき手紙をひらひらと振る。

「まぁ、そうなるかな。発案はかの国の筆頭殿だが、補佐殿が各国に手紙を送る前に体裁を整えたらしくてねぇ……形式上では、あの一件で三国に分配された転移の魔導具の運用試験、という体になった様だよ」

前にリリィが来た時の《門》の使い方を大規模にした感じか。

アレも発案は《魔王》らしいし、流れとしちゃ不自然じゃないんだろうが……それにしたって始まり方が強引かつ残念過ぎて建前が息してないやんけ。

《亡霊》にしてはちょい仕事が粗いので、話が出たのが唐突過ぎたのかもしれん。

一応はその建前を説明する手紙も届いたらしい。爺さんが「見るかい?」なんて差し出して来たので、代表してリアが受け取り、三人で手紙を広げて紙面を覗き込む。

……うん、大体聞いた通りの事が書いてあるな。

発案は《魔王》だが、予定やプラン自体のブラッシュアップは《亡霊》や文官が行ったらしい。文面を見る限りではそこそこ普通な観光・小旅行的な感じに思える。

尤も、あの鳥を知ってる奴ならこれを鵜呑みにするのが何人いるんだよ、って話だが

な！

あとやっぱり時間がなかったのか、直接的な表現は避けてるけど建前に関しては”そーゆー事にしといてください”的なお願い感が文面から滲んどる。平和になったのに相変わらず苦労してるな筆頭補佐。

説明文自体は書面に起こしたのは部下なんだろうが、最後に《亡霊》の直筆と思われる文字で謝罪が書いてあった。

曰く、『止められませんでした、申し訳ない』だそうだ。マジでお労しくて草も生えない。

あのフルフェイスマンは、ワープロかタイプライターでも使ってんじゃねーかって位に滅茶苦茶綺麗な字を書く。

なので、本来なら見れば一発で誰の字か分かるんだが……今回は妙に歪んでのたくり気味な文字なので最初、書いた人物が分からなかった。最後に本人のサインがなきゃ他の《災禍》が書いたと勘違いしたかもしれん。

なんつーか、微妙にペンが震えた状態で書いた様な字というか……例えばだけど、腕や指が何カ所も折れてんのに無理くりに頑張って文字書いたらこんな感じになるんじゃね？

「……なんか《亡霊》さんに回復魔法かけるためだけに行ってみても良い気がしてきた

……」

同じ推論に至ったのか、めっちゃ同情してる表情（カオ）でリアが呟く。

他の幹部連中にも出会い頭に辻ヒールしたれよ。多分いつもの喧嘩だろうから、同程度の負傷はしてるだろうし……まぁ、予定してある日付は十日近く先だから、俺達が向かった頃にはほぼ完治してるだろうけど。

「猊下（ジイさん）、各国って言ってたけど他の面子は？」

「教国と帝国、大森林――要はあの一件で解決に協力した国だねぇ。教国（ウチ）だとトイル達とミラ、ガンテス。後はブランやチェルシーなんかにも届いたらしい」

シアの質問に応じる爺様の言によると、他は帝国の皇帝陛下やレーヴェ将軍、第一騎士団や宮廷魔導士団の一部、《刃衆（エッジス）》の面々。

サルビアを筆頭とした何人かのエルフにも送られたとの事。そーいや一個だけ教国の分をあの最長老殿にも渡したって話だっけ……全部合わせりゃ合計で何十人になんねん。

「全員参加、というのは現実的ではないだろうが……《門》を経由する事で移動時間なんかは極力削れるだろうからねぇ。日をずらして日帰りの予定で参加するという事も可能だと思うよ。実際、スヴェリア殿はそれで予定を組んでいるらしい」

一応、僕も一日だけ参加する予定ではあるよ。と楽しそうな顔で続ける爺様。どうや

ら唐突に送られてきた文の事で帝国の皇帝陛下と遠話で連絡を取り合った模様。
にしても、陛下も参加するってマジか。予想外だな。
あの人も面白い事とか好きな人種なんだろうけど……あの大捕り物の事後処理もあって相当に忙しい筈だ。《大豊穣祭》は終えたとはいえ、他国に休暇とって遊びに行くとか難しそうだが……。
「遠話の際も捻り出せた時間は数分だけだったよ。忙しいのは確かなのだろうが……『自分が休まないとレーヴェが休まない』と苦笑いしていたからね。参加は其れが理由だろう」
あー……そういう……。
あの一件の真相やら黒幕に関しては、現段階だと緘口令が敷かれている。
とはいえ、一応俺もあちこち奔走して問題の解決に多少なりとも貢献した身だ。真相に関しては口外しない事を条件に聞いとる。
レーヴェ将軍にとっては身内の特大のやらかしと不始末だ。あの人の性格的に、後始末には粉骨砕身の心持で当たっているのは簡単に想像がつく。
陛下が《魔王》の思い付きに乗ったのは将軍に気晴らしさせる為って訳やね。まぁ、自分も祭りの運営とその間のゴタゴタへの対応で忙しかっただろうし、リフレッシュしたいってのもあるのかもしれんが。

爺さんの話を聞く限りでは、どうやら陛下を筆頭に、帝国側もぼちぼち乗り気な面子が多い様だ。所属とか役職の忙しさとかで日帰りか泊りがけか、個々に違うみたいだが。

彼らは《大豊穣祭》を楽しむより開催・運営側として仕事してる時間の方が圧倒的に長かったし、ご褒美的な扱いで参加許可出したのかもしれんね。

「魔族領……南方の更に南部ってボク行ったこと無いなぁ……にいちゃんは？」

場所のイメージが上手い事湧かないのか、銀の聖女様が手紙を眺めて首を傾げる。

そもそもリアは魔族領自体に殆ど馴染みが無い。いや、俺とシアが妹分が《魔王》にロックオンされるのを危惧して連れて行くの渋ってたせいなんだけど。

てか、南部に関しては俺も足を踏み入れた事無いぞ。魔族領に関しては王都と西部の女公爵の根城以外は滞在してないし……シアはどうなん？

「あぁ、オレはちょっとだけなら……まぁ、なんだ。場所柄としてはファンタジー版の沖縄かハワイか、って感じだな。大陸でも南端に近いし、周囲に火山に繋がる地脈が多いのもあって年中気温が高い場所なんだ」

若干言い淀んだのを見るに、前……何度目かは知らんが以前のループでの話なんだろう。

単独でループしてた頃は行楽や余暇に時間を割く余裕なんてなかったらしいし、当時

の状況をなんとか変えようと試行錯誤の一環で足を伸ばしたって事があるっつー感じか。

現在は結果オーライな形に収まってるとはいえ、シアにとっちゃしんどかった時期の話だ。過去の記憶を脳裏から掘り返しているその姿は、いつもより若干テンションが低い。

俺的にはスルーは難しいお顔だ。なので手を伸ばし、金の聖女様の柔らかな両ほっぺを指先で挟む。

うむ、見た通りの流石の手触り。すべすべしていて柔らかい。こう、なんというか……良い感じに素晴らしい（語彙力

「なんで急に人の頬っぺたムニってんだよお前」

表情が硬かったからね。ついね。

頬を弄られるが儘、シアがジト目で見つめてくる……が、テンションは平常に戻ったようだ。何よりですハイ。

……どういう過去（きおく）があるのか、話してくれるなら聞くし、嫌なら聞かん。

が、折角だ。どうであれ、ループ前よりは確実に良い状況であろう魔族領南部で、新しい体験や記憶を追加していく方が良いと思う訳ですよ。

南部には沿岸地域もあるんやろ？　気候的にも聞くだけで心躍るやん？

「海で遊べるかも、って事だよね！　期待感あがる！」
俺の言葉に元気よくノって来たのはリアだ。
何時の間にやらこちらの背後に回り込み、おんぶする様な体勢をとった。なんだなんだ？　珍しく甘えん坊テンションかねアリア君。
妹分（おとうと）は俺がシアにしている様に俺の頬を両手を使ってムニムニしている。なにこの光景、傍から見たら珍妙過ぎワロス。
副官ちゃん辺りが見たら「まーたイチャついてるわこのトリオ」みたいな目を向けてくるんだろうけど、シアもリアも結構昔からこんなもんなので、これが身内相手の平常運転って事やろ。なので気にしない。
まー、それは置いといて――実際、楽しみなのは確かだ。海が近いなら新鮮な海産物なんかにもお目にかかれるだろうし、久しぶりに釣りとかしてみたい。磯釣りは転移（むこう）前でも偶にやってたのよ。
敢えて能天気な空気を前面に出して言い募る俺とリアを見て、シアもようやっと笑みを浮かべた。
「……そうだな。確認がてら思い切って遊びに行くのも悪くないよな」
頷きつつ、さりげない動作でリアの両手を取って俺の頬から外し、代わりに自分の手で挟み込んでムニりだす。いや、何してんのお前。

「なんかオレもやり返したくなった。先に始めたのはお前だろ、甘んじて受けろ」
あ、ハイ。すんません。
反論不可能なのでアホみたいに棒立ちになり、大人しくその両手を受け入れる。
大して柔らかくもなけりゃ傷痕もある俺の頬なんぞ弄り回しても楽しくはないと思うんだが、当のシアはなんか嬉しそうだ。
ならば良し。ウチの聖女様が笑顔である、ならば全くそれで良いのだ（思考放棄
「なんだよー、横取り反対だぞー」
「えぇい、お前はおんぶされてるだろうが。頬くらいオレに譲れ」
俺を挟み、軽い笑い混じりで姉妹が和気藹々とした文句を飛ばし合う。
訳の分からん取り合いやめーや、爺さんも見とるんやぞ。
シアもリアも同世代、或いは年下の仲間や友人がいるときは幾らか周囲を気にしてるのか、もーちょい大人な態度なんだが……自分達だけだったり、年の離れた大人しかいない状況だとこうしたじゃれた絡みになる事が多い。
良い意味で気が抜けてる、って事なのかもね。特に聖殿の年上連中には何故かこのパターンで怒られたことねーし。
今も俺達のアホなじゃれ合いを爺様がやたらニコニコしながら眺めてるが……ミラ婆ちゃんやガンテスといい、眼前の教皇様といい、じゃれ合いで話の腰を折る様な形に

なっても絶対に止めないのは何でなん？

後ろは首に腕を回して背にしがみ付かれ、前は頬を挟まれてグニュグニュ揉みしだかれ、今の俺は相当変な状態になってると思う。話が進まないので流石にそろそろやめたまへチミタチ。

「ふむ、それでは君たちも参加予定、という事でいいのかな？」

珍しく好々爺然とした感じの空気だしてる老人の言葉に、子供みたいなスキンシップを中断して三人で頷いた。

「取り敢えず参加するって方向で。少し前に帝国から帰って来たばかりだし、頻繁に国外に遊びに行ってるみたいで申し訳無さがあるけど……」

代表してそんな事を言うシアの言葉に対し、爺さんは髭を弄りながら朗らかに笑ってみせる。

「《大豊穣祭》は仕事も兼ねていたし、気にすることは無いよ。それに――君達が行ってくれると、僕も後から大手を振って参加できるからねぇ」

俺らは自分が遊びに行く為の口実かい。まぁ、それだけじゃないんだろうけど。

帝国の皇帝陛下とは真逆な発言をしつつ、教国の教皇猊下は悪戯っぽく笑って肩を竦めたのだった。

――で、あっという間に出掛ける当日がやってきた。
天気は朝から快晴。場所は大聖堂前の広場。
出発よりやや早い時間だ。初日から参加予定のシアとリアはまだやって来てない。まぁ、最後の荷物チェックとかしてるんやろ。あっちは暑いらしいから着替えも嵩むしな。
俺の方は早々に来てなにやってるのかというと……待ち合わせというか予定がある――って言ってる傍から来たな。
「お、久しぶりー。またよろしく」
あいよー、引っ越しお疲れ。
広場に試験的に設置された魔道具が発動し、《門》の向こうからやって来た銀髪サイドテールな少女騎士――副官ちゃんの軽い挨拶に応じて、俺も片手をあげる。
挨拶は軽かったが彼女の持ってる荷物は重い。なんせ小型とはいえ荷車を引いてるからね。
遠い外国とはいえ、旅行に行くには大荷物過ぎるってもんだが……これ、再びこっち

に出向してくる副官ちゃんが自室に置く為の私物も含んでいるらしい。
「やー、助かったわ。飛竜便は重量増やすと高くつくから、経費で済むもの以外はそんなに持ってきてなかったし」
そのまま荷車を引き、渡り廊下の傍に車体を横付けする副官ちゃんは上機嫌だった。
帝国では今回の魔族領への接続が、大量に手に入った転移の魔導具の運用試験の手始めらしい。当然、教国にはまだ繋いでない。
なので、副官ちゃんは最初に帝国から魔族領に《門》を使って移動。その後に、俺達が魔族領に行く為の《門》を通って荷物を運び込んだとの事。
ちょっと手間というか回りくどい感じもするが、《魔王》の雑な思いつきが罷り通る魔族領が特殊なのであって、本来は国と国との間に転移魔法の《門》を設置するのは細々とした許可や手続きが必要とされるもんなのよ。下手すればこの前潰した違法組織みたいに悪どい事に使いたい放題になるしね。
実際、普通の移動と比べりゃ遥かに楽なのは確かだし、接続される転移魔法の規模にもよるが縦横幅が通れるサイズなら重量制限なんて無い。
そんな訳で本日、魔族領に繋がる《門》経由で帝国と教国にルートが出来るのをこれ幸いと、副官ちゃんも色々持ち込んだらしい。
ちょっと出発前に《門》借ります、と飛竜便（そくたつ）の手紙が聖殿に届いたのは知っていたの

で、手伝ってあげようとこの時間に待機してたって訳よ。
　ブーツやら服の関節部に中てるレザーやらの革製品を纏めた荷を抱えつつ、彼女と並んで廊下を歩き出す。
「旅行先は沿岸部なんだっけ？　実は私、海って見た事無いんだよねぇ……ちょっと楽しみ」
　お、そうなのか。俺もこっちだと遠目に外洋を見た事がある位だな。元居た世界じゃ偶に遊びに行く機会もあったんだが。
「マジか。やっぱり海ってしょっぱいの？」
　こっちの海もそうだとは聞くね。というか、潮の香りがやっぱ独特だよ。慣れない内は鼻につく人もいるみたいだけど、大抵は一日二日で気にならなくなるらしいから安心汁。
　そっちは後から隊長ちゃんとかも来れるんだっけ？　珍しく隊長・副隊長揃って数日泊りがけで行けそうとか聞いたけど。
「あー……それね。ちょっと雀が騒いでるらしくて」
　めんどくさい記憶を呼び起こされたのか、上機嫌から一転して若干渋面になる副官ちゃん。ちょっと指先に力が入ったのか、片手で抱えてる枕らしき物に皺が寄る。
　雀っちゅーと……王城勤務の貴族とかその辺りか。この間の一件、《刃衆（エッジス）》は帝都でも

貴族の邸宅が多い東区を受け持った訳だし、後からいちゃもんでも付けてきたとか？
「今回は貴族派閥の偉い人が陛下と同じ意見らしくてね。そういうのは無かったんだけど……まぁ、アレよ。ほら、舞踏会で私が疲れてた理由」
んん？　というと……息子を紹介したいとか言って来た人がいたってやつ？
バルコニーでの会話は覚えていたので確認を取ると、あのときとおんなじ疲れた表情で彼女は一つ頷く。
「あれを切欠に、皇帝陛下の直属の騎士を家に迎えれば後々有用、なんて馬鹿な話が王都内の貴族間で再燃したらしくてね……私の巻き添えで隊長にまでそういった話が出て来そうなんで、二人揃って長めの休暇で一時避難って感じ。というか陛下がそうしろって」
なるほど……以前にその手の話が持ち上がったときは隊長ちゃんクッソ不機嫌になったみたいだし、そもそもあの舞踏会で副官ちゃんにドレス着ろゆーたんは陛下らしいし。
そら配慮もするわな。なんならまた自分の髭が掛かってるし。
最終的にはシアとリアのドレス姿のインパクトが強すぎたせいで注目は逸れたみたいだが、副官ちゃんだって十二分に美人だし似合ってたしね。普段は華やかさよりも実績と武勇伝が先行してる女性騎士のギャップある姿とか刺さる奴は多い（確信

「だから、そーいう……」

唸る様な声で何か言いかけた副官ちゃんは、次は疲れた様子をなんかモニョっとした感じの表情に変え、深々と溜息をついてしまった。解せぬ。

しかし、部隊のツートップが揃って抜けるとか相当だと思うんだが……よっぽど声を上げてる数が多いのか声自体がデカいのか。

「前者は面倒だから『私と正面から戦って勝ったら考えてやる』って言ったらほぼいなくなったわ。問題は後者の方だね」

条件鬼過ぎワロタ。未婚の男でクリアできる奴、帝国にいないやろ。

達成できそうな二人――《刃衆（エッジス）》顧問と将軍閣下はどっちも身持ちの固い既婚者である。

後者が問題って事は、前線で戦う騎士とは畑違い……政治方面から干渉してくる連中か。二人が休暇でいなくなる間に、陛下がその辺りに釘を刺しておくって事かね。

帝国最精鋭と名高い彼女達の部隊だが、所属してるのは我が強くて問題児気味の騎士・兵士だったり、元は国内の傭兵や冒険者だったりという面子が多い。

国や陛下への忠誠心が無い訳ではないんだろうが、根っこの部分は隊長ちゃんや副官ちゃんの若さに見合わぬ腕っぷしで纏まってる感はある。

貴族の干渉とかで二人が迷惑して、それに陛下側が何のフォローもしなかった場合、

迷惑を被ってる本人の怒りもおっかないが、隊員達の着火具合も恐ろしい。
国外からみるとレーヴェ将軍とは別種の武力の象徴だし、万が一出奔とかされたら国の損失・赤っ恥ってレベルじゃない。
外面と実利の両面から見ても、陛下が《刃衆(かのじょたち)》を大事にしてるのは当然やね。自分が一から作った近衛騎士隊も同然だから思い入れもあるだろうし。
二人で近況をくっちゃべりつつ、荷車から荷を取っては彼女の部屋に運んで荷物を下ろす。家具なんかは既にあるし、大型の荷物は無いので幸いにして往復二回で運搬は終わった。
おーい、これ入口に置いといていいの？　装備の補助パーツっぽいの多いけど。
「装備が破損したときの予備……修繕素材だからそこに纏めて置いといて。この旅行が終わったらそのまま教国入りで再出向だし、帰ってきたら荷解きするから」
そのまま部屋の奥に行ってベッドの上に枕やら着替えやらを置いて来たらしい副官ちゃんは、肩をぐるぐる回しながら直ぐに戻って来た。
帰ってきたらきたで忙しいわー、なんて言う割にその表情は明るい。前に一回お邪魔したときは殺風景って程でも無いが、大分質素な室内だったからね。物もあんまりなかったし、今回の事は渡りに船だったんだろう。
「二人でやるとあっさりだね。助かったわ、ありがと」

大して重いのは無かったし、気にせんといて。
この後に一応外交関係全般の仕事を受け持ってるシルヴィーさんに挨拶だけはしにいくみたいだし、バタバタするよりは時間に余裕もたせて終わらせた方がえぇでしょ。
「うん。時間があったら茶でも出したんだけど、このあと直ぐに枢機卿（カーディナル）に再着任を報告しにいくから――」
と、そこでハタと思い付いた顔になり、副官ちゃんは動きを止める。
軽く手を挙げて此方に待ってろ、示すと、部屋の奥にとって返して……なんか小さな壺というか瓢箪みたいな容器を片手に即行で戻って来た。
「あっぶなぁ……忘れるトコだった。はいこれ」
そのまま瓢箪擬きを俺に向けて差し出してくる。なんぞこれ？
訝しさは感じたけど、取り敢えず受け取って軽く揺らしてみる。
瓢箪らしきブツの用途通り、何かの液体が入ってるな。チャプンと水音がした。
「ローレッタ……というか、その御相手の学者先生からアンタにだって。量産前だから今渡せるのはそれだけ。アリア様の分も兼ねてるから二人で使ってくれ、だそうよ」
そんな風に付け足される副官ちゃんの言葉に、俺は思わず瓢箪擬きをマジマジと見つめる。
……おい、おいおいおいおい、まさか……ひょっとしたらひょっとしちゃうのか？

きつめの封となっている栓を、中身が零れない様に慎重に引っこ抜く。
顔を近付ければ――匂いを嗅ぐまでも無かった。
鼻腔に向けて漂って来るのは、嘗ては嗅ぎ慣れていた、けど涙が出そうなくらいに懐かしい香り。
う、うお。うおおおおおおおお……!!
間違いない、せうゆ。醤油だ。完成しちゃったのか……！　すげぇよマメイさん……！
海のある地方に行くと聞いて出発前に副官ちゃん経由で渡る様に用意してくれたのか。やべぇ、マジで良い仕事してるじゃないですか。
「故郷の味ってやつか。良かったわね」
俺が割と本気で感動している事に気付いたのだろう。副官ちゃんは興味深そうではあるが、それ以上に嬉しそうだった。
なんだかんだいって誰かが喜んだり笑っているのを見て、その光景を自身のやる気や喜びに変えられる娘だ。ミヤコニウム中毒者としての面も強かったりするが、俺の友達は民を守護する騎士、っていう適正はやっぱ高いのである。
ありがとうマメイさん、ありがとう副官ちゃん……！　テンション上がってきたぜイヤッホゥ！

アガりすぎてちょっと頭お花畑になってしまった俺は、そのまま勢いで副官ちゃんにハグをきめた。
「……ひょっ!?」
あ、やっべ。ついやっちまった。
素っ頓狂な声が最接近した少女の喉から上がり、一瞬で我に返る。
慌てて身を離し、セクハラ扱いで拳骨が飛んで来るかもと反射的に首を竦めたが……当の彼女は咳払い一つして終わりだった。
どうやら変な声を上げた事がこっ恥ずかしかったらしい。無かった事にしたいのか、頬をちょっと染めつつ睨み付けるだけで済ませてくれました。いやマジですんません。
「……いいから部屋から出なさい。私もこれから壱ノ院に行くんだから」
俺は流れる様にその場に膝をついて土下座の体勢に移行しようとしたが、出発まで忙しいからやめろと言われ、それは止められる。
いやもうほんとごめんなさい。久しぶりにガッツリやらかしたのは事実なので、なんぞご要望があればお申しつけ下さい。可能な限り配慮させて頂きます（低頭
「ハア……それじゃ、そのショーユ？　っていうのを使うとき、私も同席させる事。美味しいなら興味あるし、隊長の故郷の味ってちょっと知りたかったんだよね」
うっす。量がそこまで多くないんで、消費量の多い鍋や煮込みの味付けとかの使用は

避けたいけど……海産系の食材にならシナジー高いのは沢山ある。期待してくれて良いですぞアンナ先生！

「ハイハイ。分かったから早く出る。折角だからレティシアとアリア様にも故郷の調味料が手に入ったって教えてきたら？」

……！　そりゃそうだ、元々リアの分も含めて渡された物だしな！

よっしゃ、早速行かねば。きっと驚くぞ。

呆れの混ざった視線でシッシッと手振りで追い払う仕草をしてくる副官ちゃんに見送られ、俺は立ち上がる。

最後にもう一回だけ頭を下げると、そのままシア達の部屋のある方角へと小走りに駆けだした。

アンナは足取り軽く駆けてゆく青年の背を見送ると、静かに自室への扉を閉める。

ドアに鍵をかけ、しっかりと施錠された事を殊更にゆっくりと確認して——盛大に溜

息をついた。
「あーもう……何してくれてんだかあの馬鹿は」
パタパタと掌で扇いで顔と首元に風を送り、独りボヤく。
程なくして、離れた此処にまで届く「うぉぉぉぉっ」なんていうレティシアの叫びが聞こえてきた。どうやら彼女の部屋に向かう途中で遭遇してあの調味料を見せる事になったらしい。
何気に反応と叫びが同じな聖女と駄犬である。妙な処で共通点がある二人が並んではしゃいでいる様子が脳裏に思い浮かび、自然と苦笑が漏れた。
旅行用の荷物は荷台に乗せた儘だ。再出向の挨拶を終えたら回収しにいかなくてはならない。
歩みを進め、再び渡り廊下へと出る。
明日には隊長も合流してくるし、楽しめる休暇となれば良いのだが……あの《魔王》の発案で、場所はそのお膝元たる魔族領で、同行者の中に駄犬がいるのである。どう考えてもお騒がせなドタバタ旅行になりそうな予感しかしない。
「……ま、それも先ずは行ってみてのお楽しみってね」
先にも会話で出したが、内陸の大国である帝国出身のアンナは、実は海というものを見た事が無い。

自然、海産物なども干物か魔法で冷凍された値の張る食材が多いので、新鮮な海の幸というやつは楽しみだったりするのだ。三度の飯を重要視する彼女にとっては当然の事である。

今度は「うわぁぁぁぁっ」というアリアの歓声まで聞こえて来て、再度の苦笑の波が頬を勝手に緩ませた。

どうやら青年は部屋に向かう途中で姉妹二人共に合流したらしい。このまま進めばすぐにショーユとやらが入った容器を抱えて騒いでいる三人の姿を見る事になるだろう。

なんとなく、その前に頬に集まった熱が抜けるまで待とうか、なんて考えて。

アンナは廊下から見える空を見上げ、遥か南にある旅行先へと思いを馳せるのであった。

濃すぎる奴らの挨拶

「じゃ、点呼とるぞ。オレが一！」
醤油が手に入って上がったテンションを引き摺ったまま、シアが溌溂と手を挙げて宣言する。
「ボクがにーっ！」
「では拙僧が三ですな！」
同じくテンション高いままでリアが続き、普段から身体に劣らず声のボリュームもデカいガンテスが倣う。
二人並んで拳を元気よく天に突きあげる様になんか既視感。そういえばいつぞやも三人でやったなコレ。あ、俺は今回四でオナシャス！
「ごー。出発前から元気全開ねぇ」
平常寄りではあるが、ちょっと楽しみなのは確かなんだろう。副官ちゃんも軽く手を挙げてノってくれる。こういうのは皆でやるのが大事だからね！

はてさて、出発前に転移・転生組にとって懐かしの調味料をゲットするという喜ばしいサプライズを体験した俺達であるが、いよいよ魔族領に出発のお時間がやってまいりました。

教国の先発組はシアリアと俺。あとお目付け役でガンテス。途中で一時的に抜ける事もあるかもしれんが、基本最初っから最後まで参加する事になってる。

総合で十日くらいの日程だが、《門》を用いた日帰りコースなんかの後発組もぼちぼち後から合流する予定との事。

帝国組も似た様なモンらしい。帝都王城からの一時的な避難も兼ねている隊長ちゃんと副官ちゃんに関しては、今日明日から最終日までほぼ泊りがけで滞在するそうだ。実質長めの休暇やね。

シアの魔力を注がれて起動した転移の魔導具は、煌々とした光を放ちながら空間を繋げる《門》を開いて俺達の通過を待っている。

大聖殿に《門》が開かれるなぞ、よっぽど危急の事態でもなければ普通は無い。これまでは、だけど。

そんな訳で珍しい光景なのは確かだ。通りすがる聖殿内で勤務してる人達は興味深そうに見てる人も多い。

物見遊山で近寄って来ないのは、見送りとしてミラ婆ちゃんがいるからだろう。

「数日後には猊下が向かう予定ですので、私はお目付けとして同行します。ガンテス、お二人と彼の監督を頼みましたよ」
「お任せを！　しかし、ミラ殿も招待状を受け取った身なれば、猊下の目付ではなく参加者として向かってもよろしかったのでは？」
「異世界の言語で言う処のバカンス、でしたか。正直、性に合いません」
相も変わらず鉄面皮な我が姉弟子殿は、眼鏡を指先でクイッとして、眉一筋動かさずに個人としての参加を「ガラじゃない」と切って捨てた。
「そもそも私は現役時代、魔族領の方々に顔が知られ過ぎています。道行く人々に頻繁に手合わせを挑まれては、休暇も何もあったものではないでしょう」
「あー……そういう……」
シアが理解したとばかりに頷き、俺とリアも納得がいって顔を見合わせて苦笑い。
住んでる連中がほぼ長命種なので、婆ちゃんが前線で大暴れしてた頃を良く知ってる奴も大勢いるだろうし、確かに注目度は高そうだ。
シアやリア、ガンテスもそういう意味では大差ないのだが、教会の聖女と司祭っつー偉い肩書がある三人と違って姉弟子様は公的には只のいちシスター（笑）だからね。喧嘩売る為のハードルが低いのだ。
戦場で戦う一介の戦士、という立場への拘りが魔族領では厄介の種になってる感じ

か。エンジョイバトル勢にニッコニコで絡まれて、内心で辟易するミラ婆ちゃんとか想像するだけで草。怖いので絶対口にしないけど。

「レティシア様とアリア様におかれましては、あちらの人々の気質に中てられて羽目を外し過ぎぬ様。騎士アンナ、南方は内陸の人間にとって新鮮な驚きと魅力に溢れているでしょうが、同様に面食らう物も多い。注意なさい」

順繰りに小言を飛ばす婆ちゃんの視線が、最後に俺で固定された。

「貴方が一番心配です。妙な事に巻き込まれたり血の気の多い方々に絡まれない様、注意を払う様に。何かあれば姉妹の御二方かガンテスに報告する事。私がそちらにいる日ならば対応するので直ぐに報せなさい。それと、故郷の調味料を手に入れたからといって食べ過ぎるのにも気を付ける事です。魔族の一部の方達にしか食用に適さない物もありますからね。肥沃ですが危険も多い土地です、興味本位や勢いでの行動は控え目になさい。あとは――」

ちょっと待って、俺にだけ多くない？（白目

もう後半になってくるとご飯食べる前にしっかり手を洗えとか、宿に帰ったら手洗いうがいしろとか、既にお泊りに出掛けるお子様への注意事項やんそれ。

なんか最近、ミラ婆ちゃんがちょっと過保護というか、俺に対するお小言の内容が低年齢向けになってる気がするんですけど。どんだけ信用ないの俺。泣くぞコラ。

そしてそこの姉妹と騎士、なに笑い堪えてんねん。魔族領にいる間、飲み物口に含んだの見たら即座に変顔芸仕掛け続けるぞオイ。

ガンテスのおっさんはおっさんで、物凄いニコニコして見てるしょぉ。前に俺が婆ちゃんにＫＡＷＡＩＧＡＲＩされたとき並みの満面の笑みだよ、見てて何がそんなに楽しいんですかねぇ！

「ハッハッハッハ！　ミラ殿、時間に余裕はあれど、諸注意の喚起はそれ程で留めておいては如何でしょう？　猟犬殿も嘗ては伝令・伝達役として各国間を駆け抜けた事がある身。風土の違う土地における心身を保つ立ち回りはとうに身に着けておられるかと！」

「……確かにそうですね、出発前から気を殺ぐのもよろしくない」

お、それでも流石に長いとは思ってたみたいだ。

ガンテスの御蔭で婆ちゃんの長い注意喚起が終わったし、漸く出発できそうだ。

つーか姉弟子殿自身も、振り返ってみればちょっと話長いとは思ったのだろう。びみょーにバツが悪そうである。

それを誤魔化すか、或いは切り替える様に、彼女は軽く咳払い一つして。

「では、行ってらっしゃい。本当に色々と気を付けるのですよ」

ええ……いうてミラ婆ちゃんも数日後には来るやん。

でもまぁ――分かりました。ほんじゃ、行ってきます。

見送りの姉弟子に、代表して俺が返事して片手を挙げ。皆も手を挙げたり頷いたりして「行ってきます」を告げる。
そうして、俺達は光輝く《門》へと歩き出し、その向こうに拡がる遠い地へと足を踏み出したのだった。

あの《魔王》の発案だし、《門》を潜った途端にいきなりトンチキな場所にドーン！なんてパターンも考慮してたんだが……意外や意外。
光を潜った先に待っていたのはそれなりに立派な建物――おそらくは応接間であろう大部屋だった。
「……ちょっと警戒してたんだけど、流石に招待して妙な事はしなかったか」
拍子抜けした様に呟くシアの言葉も宜なるかな。あの鳥の普段の言動が言動だからね、仕方ないね。
「もう南方なんだよね？　この部屋の様式もボクは見た事ないし」
珍しそうに室内を見渡すリアの言葉に、俺も首肯した。
魔族領内なのは間違いなさそうやね。部屋の内装や家具がそれっぽいし。

柱時計の上にハンティングトロフィーとしてバカでかい牙が飾られてるし、暖炉の前に敷いてある毛皮は耐火性の高い大型魔獣のソレだ。

他にもチラホラと高位の魔獣から取れる素材を用いた物が見える。家具や建築資材にその手の素材を多用してるのは南方方面の特徴だ。特に最初に挙げた牙は竜のやろ、多分。

サイズからして最上級の品なのはほぼ確定。ファーネス辺りが見たら涎垂らしながら金貨の大袋叩きつけて買い取ろうとする、と言えば多少は素材としての価値が分かるだろうか？

ただのインテリアとして置いとくとか普通の国はやらん。《災禍の席》の誰かが個人的に狩って深く考えずに飾ったんやろな。

「お、教国の第一陣も来たー」

「お久しぶりです、先輩」

おんや、この声は。

俺達が出てきた《門》を挟んだ反対側から言葉を掛けられ、振り返ってみるとそこには既に先客がいた。

まぁ、言う迄も無いってやつだ。応接間にコの字型に設置されたソファに座っているのは、隊長ちゃんを始めとした《刃衆（エッジス）》の面々である。

「そっちも来てたか。今回はよろしくな」
「お久しぶりです。皆で楽しくやろうねっ」
シアリアの挨拶を皮切りに、教国と帝国、其々の現行メンバーが口々に挨拶を交わした。
副官ちゃんもそうだが皆、見慣れた隊服姿だ。まぁ、最初は《災禍》の連中に挨拶から始まるだろうし、正装でって事だろう。
実際俺達もいつもの格好だし。遊ぶときの着替えは当然持ってきてるけど。
「隊長、こっちに来るのは明日って……」
「代理業務をしてくれてるネイトさんの補佐に、トニー君が入ってくれたの。『気にせず今日行って下さい』って」
喜色を浮かべつつも不思議そうな副官ちゃんの疑問に、席を立ってこちらに歩み寄って来る隊長ちゃんが応えた。
それを聞いたアンナ先生、訝し気な表情になって首を捻り。次いで半眼になってソファに座る部下の一人――見た目ギャルっぽいパツキン褐色肌な女騎士へと、じろりと音が聞こえてきそうな視線を向ける。
「トニーの奴は明日隊長と一緒に来る予定だったと思うんだけど……なんで中日から参加予定のアンタが初っ端からいるのかしらねぇ、シャマ？」

「仕事押しつ――変わってもらったから！」
「おいコラ、私と隊長の目を見てもう一回言ってみろ」
　圧のある上司の言葉に怯みもせず、いっそ清々しい程に堂々と胸を張る女騎士ことシャマダハル嬢。肝太過ぎワロタ。
「ちゃんと交換条件出してトニーの奴には了承もらってるし！　御蔭で年越しと年明けの夜間警備を代わりにやる羽目になったけど……後悔はねぇ！　常夏の海があたしを呼んでいるっ！」
　啜っていた紅茶のカップを中身が零れんばかりに勢いよく掲げる彼女は、べらぼうにテンションが高い。
　余程今回のバカンス擬きが楽しみらしいね。まぁ《魔王》主導っつー時点で不安はあるが、俺も楽しみにしてる事は多いので気持ちは分かる。
「若い連中は元気だねぇ……冬も近いし、寒いよりは良いのはまぁ確かだわな」
　暖かいお茶をチビチビと飲みながらしみじみと呟いたのは無精髭生やした壮年の魔法戦士――ローガスだ。
　結構意外な人が来たな。アンタ任務以外では帝都からあんまり出ないタイプだと思ってたんだけど。
　これはローガスが出不精というより、彼らのお膝元である帝都が大陸中の都市で一番

の都会だからだ。
特に飲む・打つ・買うの真ん中以外をこよなく愛する独身満喫おじさんとっては、地元が一番その手の品や店が充実しているのである。
「こっちにゃ珍しい葉巻とかもあるからな。どっちかってぇと土産物を買い込むのが目的だよ、俺は」
「まーたケムリ目的かよこのヤニカスおじさんはー。そろそろ一回くらいレティシア様達に肺を浄化してもらったらー？」
「お前ね？　平時に聖女様に癒しをお願いするとか喜捨に幾ら掛かると思ってんだよ。貯金が根こそぎ吹っ飛ぶわ」
嫌そうに顔を顰めて文句を飛ばすシャマ嬢に対し、もっと顔を顰めて返すローガス。
ありがたいことに、俺自身は聖女本人が普段からぽんぽんベホ〇ズンしてくれる身なので馴染みが薄いんだが……確か喜捨の額自体は普通よりちょい上、程度やで？　代わりに一定以上の高位僧の推薦状とか認可状とか、必要なモンが滅茶苦茶多いらしいけど。
それも本人が自発的に診るって言い出したら要らんみたいだしな。どっちかっつーと、不特定大多数の人間が我も我もと聖女様の癒しを求めて押しかけてこない為――要は建前にも近い規則だ。

しかし土産ねぇ……多分、買うのは別のモンもあるんやろなぁ。

遠い異国――しかも他種族国家の風俗とか、娼館通いが好きな人間には興味津々な話だろう。この場の面子は女性陣の比率が高いので口には出さないし、出せんけど。

就いてる職的にもそこそこ以上に金持ってるだろうし、安くて変な店とかには行かないだろうが……行くにしてもちゃんとしたトコ選びたまへよ？　旅行先で街歩いてたら身包み剥がされた知り合いがパンツ一丁でゴミの中に埋もれてたとか草も生えんし。

俺もなぁ、もし一緒に行こうぜとか誘われちゃったらなぁ……正直興味ないとは言えねぇからどうしようかなぁ！（皮算用

やっとこ平和になったし、身体も健康に戻った事だし、そろそろ童〇という名の呪いの装備外しても良いと思うんだ。彼女いない歴＝年齢の男がこれを解呪するのは大変なんだよ察しろ。

まぁ、いうて皆と遊ぶ方が優先なのでしょうもない冗談というやつだ。

いや、呪いの装備自体はマジで外したいけど。呪装はラヴリーマイバディだけで十分どす。

二人のやり取りを眺めつつそんな事を考えていたら、隣のシアがいきなり手を伸ばして頬を抓んで来た。なんやいきなり。

大した力は籠ってない軽く引っ張る程度のものだが、唐突なのもまた事実。

なので理由を聞いてみるも、我らが聖女様は半眼で人の頬をむにーっと引っ張る。
「なんだかこうした方が良い気がした。お前今、なんか変な事考えただろ？」
やだ、この聖女ちょうするどい（戦慄
や、やっぱりシアさん的には友人が抜け駆けして卒業するのは許し難いんでしょうか？　身体的な性別が変わった以上、ジョンの卒業式は物理的に不可能なので流石に諦めて欲しいんですが！
そういや、酒の席で馬鹿話として平和になったら生やす魔法を探してみるか、なんて言ってた事あったっけなぁ……。
とか過去に思いを馳せつつ、頬を伸ばされるが儘の俺である。
立ったまんま話もなんだと言う事で、隊長ちゃん達が座っていたソファに俺達もケツを下ろそうとしたが……《門》の起動を感知した魔族領の出迎えは直ぐに部屋にやって来た。
「……すまない、補佐殿に定時連絡をする為に場を抜けていた。ようこそ、我らの国へ」
おぉ、迎えは《虎嵐》だったのか。オッスオッス、お久しぶり。
現れたのは鍛え上げた体躯の獣人の戦士――以前、界樹絡みの一件で大陸中央の大森林まで向かった際に共に行動した人物である。
寡黙で無骨、けど嫁さんのシグジリアと義理の娘のリリィを滅茶苦茶大事にしてる良

い漢だ。こっちには彼と顔見知りの面子も多いし、今回の案内役として抜擢されたんだろう。

いやー、元気そうで何よりだ。嫁さんとそのお腹のお子さんはその後のどうなのよ？

「あぁ、医者の見立てでは母子ともに健康、だそうだ」

口元を引き結んだ厳めしい表情を幾らか緩ませ、嫁と子供について語る彼と再会の握手を交わす。

シグジリアは流石にはっきりと身重な状態になってきたので、現在は産休って事で魔族領の戦士としてのお仕事も完全にお休み中らしい。まぁ当然だわな。

ダハルさんの代わりに帝都に残ったトニーがこっちに来れるのかは分からんが、可能ならあの時の男三人で飲みにでも行きたいもんだ。

俺達の会話を聞いていたリアも満足そうに頷く。大森林から帰るギリギリでシグジリアの妊娠が発覚したので、帰り道は彼女の体調をいっとう心配して気い揉んでたもんなぁ。そーゆー分かりやすい優しいところ、にいちゃん好きよ？

「リリィから近況を聞いてはいたけど、良かったぁ……あ、でも、こっちにいる間に一回くらいは健診しても良い？」

「勿論だ……聖女殿の診断と癒し、こちらから頭を下げて願いでたい」

妹（おとうと）分の言葉を力強く頷き返して快諾する《虎嵐》。聖女様のＣＴスキャンばりの精査

と回復魔法なら並の術者なら見逃す箇所もばっちり癒せるしな。旦那・父親としては有難い話だろう。

先に挙げたトニー君以外はあの時の面子も揃ってるし、一回くらいはシグジリアの顔を見に行きたいとこではあるね。母子に負担掛かりそうなら自重した方が良いだろうけど。

「問題は無い。猟犬殿には娘(リリィ)が世話になっている、シグジリアも会って改めて礼くらいはしたいと言っていた」

微かにだが口角を上げて《虎嵐》が言ってくれる。嬉しいやら面映ゆいやら。

俺も半ばその場の勢いで、シグジリアの赤さんに女神様印の聖気をぶっぱしちゃったからなぁ。

将来、下手な聖職者以上にそっち方面に適正が生まれるのはほぼ確定してるし、気にはなっていたのよ。エルフの老害連中がいちゃもん付ける隙を欠片も与えない為もあったんで、後悔とかは一切ないんだけどね。

なんといってもこの世界を作った神様印の祝福だ。普通の子より頑丈になったり回復力も高まったりしてる筈なので、悪い事は無い筈。

何はともあれ、といった感じで《虎嵐》は再度頷き、教国の面々＋副官ちゃん――要は今やって来たばかりの面子をぐるりと見回した。

「……先ずは、上階の大広間に来てもらいたい。我らの頭領もそこで皆を待っている」

大体予想はしていたが、やはり《門》の接続先は魔族領にある王城の一室だったらしい。

直接王城に繋ぐとか警備上の安全的に問題ないんだろーかとか思ったが、《魔王》は最初、自分の部屋に繋ごうとした模様。

なんで国家元首の私室に、下手すりゃ狼藉者が飛び込んでくるかもしれないリスクもある《門》を設置すんねん、って話だが、あの出鱈目バードからすれば「襲撃者がいても自分が相手すれば一番早く被害無く終わる」って認識なんやろな。

実際本人が熟睡中だろうが油断してようが、《門》から飛び出て初っ端の不意討ち一発で《魔王》に深刻な痛打を与えられそうなのって、多分世界にお師匠しかいねーし。そもそも不意討ち自体を成立可能なのが最低でも人外級からやぞ。

外観は以前に訪れた記憶とそう変わる事無く、魔族領の中心たる王城は白亜の城というより頑強・剛健な城塞といった風情だ。

石壁が所々真新しいのは……まぁ、お察しと言うやつだ。毎回幹部連中の喧嘩でぶっ

壊れてりゃそらそうなる。
多分、修繕に関わる人達って城壁の修復とか建物の建築に関しては、帝国の工兵部隊以上に練度高そう。長命種だから大工歴三桁年の人とかゴロゴロいそうだし。
やっぱり城というより砦っぽい螺旋階段を上り、今回の発起人が待つ上階へと俺達は向かう。
先頭に立って案内してくれる《虎嵐》によれば、《刃衆（エッジス）》の面々は既に挨拶を終えたとの事。
自分の部隊がもう面通しを終えてると聞いて副官ちゃんが焦っていたが、《虎嵐》はそれも「頭領が唐突に言い出した事」と言って逆に申し訳なさそうだった。
フォローとかじゃなくて、多分マジな話だから副官ちゃんは気にせんでも良いと思うぞ。実際、隊長ちゃんだって何も言ってなかったやろ？
詳細を《虎嵐》から聞くに、どうやら《魔王》が直接応接間にやってきて、そのまま軽い調子で挨拶を済ませてしまったらしい。
公的なものではないとはいえ、帝国側としてはちゃんとした場所で挨拶したかっただろうに。いきなりやって来た国主にめっちゃバタバタする羽目になった隊長ちゃんの苦労が偲ばれる。
幾ら平和になったからって、思い付きで行動するパターンが増えすぎやねんあの鳥。

《亡霊》はマジでお疲れ様ですとしか言い様がない。

「《魔王》陛下も長きを生きる御方ですからな！　かの大戦が大陸に戦火を拡げる以前から、蠢動する邪神の信奉者の影に憂いや憤りを抱いていた御様子。久方ぶりにそれらから解放され、浮き立つ心持となっておられるのでしょう！」

わっはっはっはと、相変わらずなデカい声量で大笑するガンテスだが、語る視点自体は生来の人の好さが滲み出ている。あのロ〇コンバードに関してはもうちょい辛辣でも良いと思うの。

フリーダムが過ぎるので、多少雑に扱う位が丁度良い。まぁ、本人がそういう立ち位置になる様に意識してる部分もあるのかもしれんが。

「あのバグキャラがそこまで気を廻してるか？　本能の儘に生きてる様に見えるけどなぁ」

シアの台詞も御尤も。実際、好きに生きてるのは確かだと思うよ。

ただ、自分がストレスない振る舞いをするにしても、そのやり方を心得てるんだと思う。

超越者としての処世術、とでも言うべきか。

並び立つ存在がいない為、《魔王》は本来ならお師匠みたいな孤高・不可侵といった扱いになってもおかしくない出鱈目野郎だ。

だけど、本人がくだけてるを通り越して粉砕されてつくして粉になってるような言動の為、周囲の連中との距離は近いし、持ってる力に対して抱かれてる警戒感は異様に低い。

半分以上は素なんだろうが……要は敢えてやってる面もあるにはあるんだろうって事よ。

生まれついての超越種って訳でも無く、只々アホみたいに才に溢れた突然変異が後天的に超越者に至った、というケースなんで、龍であるお師匠と比べて対人経験が豊富だ。

自分を押し殺さず、自身の情動一つで洒落にならない甚大な被害を周囲に齎す事もなく、傍迷惑だが頼りになる頭領、という位置で魔族領という群れに混じって今も生きてゆけている。

この匙加減は結構絶妙だと思う。自発的に霊峰に引き籠ってるお師匠と違ってふっつーに外国に出掛けたりとフットワークも軽いのに、諸国で《魔王》を危険視する声が出てないのがその証拠だ。

そういう意味では、あの鳥はお師匠に霊峰以外での生き方、過ごし方を教える事が可能な唯一の存在ではあるんだよなぁ……罷り間違って二人が喧嘩とかおっぱじめると被害が洒落にならんので周囲が絶対にさせないだろうけど。

左右を歩くシアリアに対し、俺なりの超越者二名への考察を頭の中でこねくり回しつ

つ語る。
「そんなモンかねぇ……それにしたってあの性癖は無い気がするけどな」
「にぃちゃんの予想が当たってても、小さい子が好きって時点で全部台無しになってる気がするんだよなぁ」
それもまた御尤も。だから扱いは雑でいいっていう最初の結論になるんだよ。要は今までと同じでええねん。
最後尾で話は聞いていたんだろう、副官ちゃんがちょっと不思議そうに声を上げた。
「……なんというか、妙に《魔王》陛下の事に詳しいね。アンタそんなに仲良かったっけ？」
そこまで仲良しこよしって訳では無いよ。ちょーっと個人的に話をする機会を作った事がある感じです。
二年前、当時の俺が一番始末したいと思ってた邪神（やつ）に単騎で勝ちうる、なんて言われてた男だ。知り会う前から気にはなっていた。
目的達成までの予定進行（チャート）を組むに当たって、最期の詰めの為の手札を欲していた俺にとって、お師匠と《魔王》――超越者二名と話をするのは必須項目だったのだ。
結果的には収穫はあったってね。《魔王》本人からでは無いが、話した事を切欠として邪神（クソ）に届く切り札を手に入れる事ができた訳だし。

これから遊び倒すってときに話す内容でもないので、そこら辺の事は思い返すに留めておいたんだが……シア達は何か察したのか、ちょっと不機嫌になってしまった。
「……いつかきちんと話せよ」
「過ぎた事だから怒ったりはしないけど……だんまりは駄目だよにぃちゃん？」
ムスっとした顔のシアと、怒ってないという割にはなんだか怖い笑顔なリア。
サーセン、他人のプライバシーな話題もあるので全部は無理です。
けど、機会があったら話せる部分は話すよ……そのときは正座とかおしおきとかは勘弁してくれると嬉しいですねぇ！（切実
わちゃわちゃと話していれば到着はあっという間だ。
上階の中心部に到着すると、其処には鋼鉄製の立派な大扉があった。
此処が大広間――所謂謁見の間、というやつだ。以前と同じやな、あっちこっち立て直してるとはいえ、部屋の位置自体は流石に変わってないらしい。
扉脇で番をしている衛兵が《虎嵐》に敬礼し、頷きが返されると重厚な扉を開きに掛かる。
重い金属が軋む音と共に大扉が解放され、その向こうにある景色が露わになった。
「……己の案内は此処迄だ。このまま進んで欲しい」
一礼して脇に避ける《虎嵐》に皆で口々に礼を言いつつ、扉を潜って進む。

大広間、謁見の間、とは言ったものの、やはり普通の城と比べるとそこまで広々とはしていない。
左右の壁にある幾つかの窓の御蔭で光源はある程度確保されているが、外壁自体が分厚いのでやや薄暗い。その為か、石壁に沿う様に篝火が焚かれていた。
分厚く、大きな石材によって形作られた壁と天井に金の縁取りがされた真紅の垂れ幕が掛かり、その全てに魔族領の印章が刻印されている。
再三言うが、やっぱ王城というより前線にある城塞を雑に飾り付けた感があるわ。個人的には荘厳だったり煌びやかだったりする空間より落ち着くけど。
俺達の足元――即ち入口から一直線に続く、これまた真紅の絨毯。
その先にある、玉座というには適当に過ぎる、その辺の部屋から持って来たっぽいゴツくて重量感だけはある椅子に《魔王》は片膝立てて身を預けていた。
脇を固めるのは魔族領最高幹部、《災禍の席》の戦士達――流石に全員では無く半数程だ。最も傍、頭領たる男の右隣には、筆頭補佐の《亡霊》が控えている。
てっきり遊びに行くって事で準備万端な格好かと思っていたが、全員がしっかり武装してるな。どいつもこいつも人外級なので圧が酷い。
玉座（笑）から立ち上がった《魔王》が、生き生きとした表情で声を張り上げる。
「よくぞ此処まで来た！　勇者達よ！」

誰が勇者やねん。アホか。

その台詞と本人のメッチャ楽しそうな表情で大体察して、ガンテスを除いた全員が半眼になった。

気付いてないのか、或いは気付いていても気にしてないのか。

《魔王》はノリノリで謳いあげるように言葉を続ける。

「その勇気に敬意を表し、歓迎しよう！　盛大にな！　――さぁ、戦ろうぜ！」

玉座の脇に立てかけてあった愛用の大剣を手にし、その切っ先を此方に突き付けた、その瞬間。

無言の儘、《亡霊》がその後頭部に向けて手にした弩を向けた。

下部に妙な機構が付いてると思ったが、どうやら弩じゃなくて魔力を圧縮して炸薬代わりにし、小型の杭を打ち出す代物だったらしい。

ドンッ、という大鎚を叩きつけた様な短い轟音を響き渡らせて、射出された戦杭（バイル）が《魔王》の頭に炸裂する。発生した衝撃がビリビリと大広間の空気を揺らした。

攻撃までの予備動作は無音にして限りなくゼロ。意も完全に殺した、完璧なる不意討ちだ。呻き声すら上げず、アホウ鳥は前のめりにぶっ倒れた。

どうやらポンプアクションを取り込んだ連填式らしい。ジャコン、という音と共に魔力を貯めていた薬莢が排出される。浪漫の塊かよ、普通に欲しいんですけどその武器（ソレ）。

薬莢が澄んだ音を立てて床に転がり、《亡霊》が咳払い一つする。
後頭部から煙を上げて倒れ伏している自分達のボスには目もくれず、何時も通りの黒塗りフルフェイスを此方に向け、柔らかな言葉が兜より零れ落ちた。
「お久しぶりですね、皆さん。ようこそ魔族領へ、今回はお忙しい中、唐突な誘いを受けて下さり感謝します」
胸に手を当て、優雅な一礼。補佐の方がよっぽど貴族的なマナーを弁えてて草。
一連の光景にリアは唖然とし、副官ちゃんは絶句している。そういやこの二人、地元での《災禍(コイツら)》のノリは初見か。
一方で俺とシアは体験済みなので特に動じてない。ガンテスも既知だった様で、驚いた様子も無く《亡霊》に丁寧な一礼を返していた。
ややあって、むっくりと《魔王》が身を起こす。大型の魔獣の頭蓋でも粉々になる様な一撃だったと思うんだけど、なんで普通に立ってくんのコイツ。
「……なぁ、《亡霊》」
「はい？　何ですか頭領」
未だに煙を上げている後頭部を擦りながら、魔族の頭領たる男は自身の補佐に向けてのろのろと振り返る。
「いや、何ですかじゃなくて。今、凄い事しなかったお前？」

「気のせいですよ。それより招いた皆さんにキチンと挨拶をして下さい」
抑揚に欠けた、凍った鉄柱が震動してる様な声色で即答され、「あ、ハイ」と即座に首を前に向け直す《魔王》。普段の力関係が透けて見えるやり取りで草。
「……じゃ、最初からやるか――よくぞ此処まで来た！　勇者たちヨ”ッ”!?」
天丼ネタは許さねぇとばかりに、今度は側頭部に押し付けられたパイルバンカーが再度炸裂した。
ズドォン！　という着弾の轟音と共に、直立姿勢のまま横倒しにぶっ倒れる《魔王》。
ジャコォン！　と片手でリロードアクションを行う《亡霊》。
「頭領、私は『キチンとした』挨拶をして下さいと言ったんです」
ズドォン！　ジャコン！　と再び音が続く。
「この短期間で各地の皆さんを呼びつけたのですから、それ位の礼儀は通して頂きたい」
三度目のズドォ！　ジャコン！　合間に薬莢が石床を転がる音が、軽やかに鳴る。
「頭領の思い付きを羅列したメモを実際の予定とすり合わせ、実現可能な日程を組んだ私と部下の苦労を汲むと思って。お願いしますから」
コイツがテメーに”お願い”する態度だぜぇ！　と言わんばかりに四回目のズドン。
流れる様な排莢からの再装填（リロード）。
（ちょっと、アレ大丈夫なの!?　《魔王》陛下の頭、物凄い勢いで跳ねてるんだけど!?）

俺の服の袖をちょいちょいと引っ張り、ヒソヒソ声で聞いて来る副官ちゃん。
確かに床に叩きつけたゴム毬みたいな挙動してんなぁ。胴と繋がって無かったらさぞかし高々と宙へ跳ね上がる事だろう。
普通の生き物だったらとっくに首が捩げて爆散してるだろうに、意味分からんわあの耐久度。
まぁ全然余裕なんじゃね？　頑丈さも大概だけど、あの鳥の一番エグいところって再生・復元・適応の能力が高すぎて致命傷って概念がほぼ無い事らしいし。
つーか、これが魔族領における《災禍》の連中の平常運転ですよアンナ先生。いちいち気にしてたら疲れちゃうので慣れましょう。
他の《災禍》を見てみたまえ。ダルそうに耳ほじって《魔王》がメッタ撃ちにされてるのを眺めてたり、「あれ鍛冶屋の新作？」「いんや、帝国のドワーフの工房で買ってきたらしいぞ」とかのほほんと話してたりと、これが日常の一部ですと言わんばかりの態度やぞ。
俺に促され、副官ちゃんとリアは眼前のバイオレンス劇場と玉座の後ろで突っ立ってる幹部連中を見比べて、大体言った通りである事に戦慄の表情を浮かべた。
（こ、これが平常……外国の風習とか文化が違うとかそういうレベルじゃない……！）
（レティシアとにいちゃんから話は聞いてたけど、実際に見ると凄い光景だなぁ……正

気が削れそう）

見てる分にはドエラい暴行現場……というより公開処刑と大差ない絵面だからね。そら初見は衝撃も受けるわ。

ドン引きしている二人を見ると、自分達が慣れちゃいけないものに慣れてる様な気がしてきて、俺とシアは顔を見合わせて二人でちょっと遠い目付きになった。

年の功ありきなのかもしれんが、これを眺めながら「ハッハッハッハ！　稚気に溢れつつも壮健な御様子で何よりですな！」とか普通に言えちゃうガンテスのメンタルが強すぎる。無敵かよ。

で、それから一分ほど経過して。

何度目かの戦杭（パイル）の発射と排莢が終わると、漸く《亡霊》は自国のトップの頭に向けていた砲口を下げた。

「皆さん、大変お待たせしました――さぁ、頭領。今度こそ真面な挨拶をして下さい。流石に三度目は看過できませんよ？」

「ここまでやっといてこれまでは見逃してたみたいな台詞やめない？」

再度挨拶を促す《亡霊》の言葉に、当たり前の様に反応があった。

後半になると床にめり込んで半分埋まってた頭をボコッと地面から引っこ抜き、普通に起き上がる《魔王》。

流石に無傷とはいかなかったのか、顔のあちこちに擦り傷が出来て鼻血が出ている。それも顔面から煙が吹きあがって一秒で同時に元に戻ったが。

ほんま理不尽な身体しとるなコイツ。常時秒間5パーセントリジェネみたいな回復能力とか、多分お師匠だって持ってねーよ。

よっこらせ、と玉座に座り直した《魔王》は、露骨に残念そうな顔をしながら頬杖をつく。

「前に猟犬から聞いた魔王ロールってやつをやってみたかったんだがなぁ……折角皆でフル装備で待ってたのに……」

おいちょっと待て、何言ってくれてんのアンタ。

弁明や誤魔化しを行う暇すら無い。

ボヤきにも近い呟きが聞こえた途端、こっちの面子の視線が一斉に俺に向けて突き刺さった。

左右と背後から「元凶お前じゃねーか」みたいな目付きで凝視されるが……冤罪でござる！　以前本人の前で、ちょっとこっちの世界の《魔王》って俺の知ってる魔王っぽくないなーとかポロっと零した事があるだけでござる！

そもそも何年も前にした他愛ない与太話を今になって実行しようとするとか思わねーだろ!?　俺は悪くねぇ！　俺は悪くぬぅぇいっ！（巻き舌

「アホ犬はこう言ってるけど……レティシア、判定は？」
「有罪（ギルティ）で」
即決かよォ！　再審を要求する！
副官ちゃんとシアの無慈悲な判定を覆さんと弁護してくれそうなリアに眼を向けるが、妹分（おとうと）は無言でそっと目を逸らす。ノゾミガタタレター！（白目
魔族領の連中を尻目にギャーギャーワイワイと騒ぎ出した俺達だが、向こうも向こうで《魔王》の言葉に反応した《亡霊》が発言者当人に詰め寄っている。
「ちょっと待ってください。戦装束で出迎える様に言い出したのは、これが我らの正装が故――各国来賓への礼の為では無かったと？」
「え、うん」
「お前マジでふざけんなよ」
当然じゃん？　みたいな顔で不思議そうに頷いた自国の筆頭へ向け、筆頭補佐からマジトーン罵倒が飛び出た。その指先は背負った杭撃ち機（パイル）に再び伸びている。
二人のやり取りを見て、他の《災禍》も肩を竦めたり笑ったりと反応は其々だ。
「ぶわっはっはっは！　ウチの大将がそんな殊勝なタマかい！　流石に楽観が過ぎるぞ《亡霊》の！」
「ぶっちゃけ俺は予想がついてたけどな」

「あ、終わったんなら着替えても良いですか？　地元とはいえ、折角遊びに行くんだからもっとラフな格好にしたいんですけど」
「なんでもいいから早く現地に《門》開こう。あっちで売ってる麦酒（エール）の為に昨日から禁酒してるんだよあくしろよ」
「貴方達も分かってたなら言って下さいよ!?」
　好き勝手なことをほざく同僚連中の言葉を聞いて、割とお労し度高めな《亡霊》の抗議の叫びが大広間に響き渡る。
「畜生、なんで魔族領（ウチ）は問題児ばっかりなんだ！　人の胃に負担ばっかりかけやがって！　潰瘍で穴が空く前にお前らの額に穴あけてやろうかゴルァ!?」
「お！　なんだ喧嘩か！　いいぜ、出発前の景気付けだ！　戦ろうぜ！」
「いいからお前は大人しく座ってろ頭領（アホウ鳥）!!」
　キレ気味で叫ぶ筆頭補佐殿は、客人である俺達そっちのけで背に負った得物を手に取った。
　俺は俺で有罪判決を翻すべく悪足掻きの最中だし、シア達はそんな俺に対して呆れながらも楽しそうだ。
　そんな混沌とした場を眺めて、最初っから最後まで平常運転なガンテスが、うんうんと頷きながらバカでかい声量で笑う。

「旅行序盤にして前途多難ですな！　ですが、これもまた長き行楽の醍醐味なれば、実に良き哉！　憂いなく友人と戯れる時間は年齢や種族、立場が違えど、同じく輝かしきものであると身に染み入る思いです！」

このグダグダな状況を見て、心底朗らかな笑みでそう言えるのはマジで凄いと思うの（真顔

――が、正直俺の方はそれどころではない。

「《災禍》の連中が落ち着くまで暫くかかるだろうし、こっちもこっちで済ませるか。アリア――、左抑えろー」

「分かったー、にいちゃん、動かないでねー」

「ふふん。騎士見習いだった頃から『お前のデコピンは洒落にならん』とまで言われたアンナちゃんフィンガーをお披露目するときが来たようね」

ちょっ、やめっ……ヤメロォ！　せめてお手柔らかにお願いします！

判決は覆らず、副官ちゃんによるマジデコピンの刑を言い渡されて。

悪戯っぽく笑うシアとリアに左右から頭を挟まれて固定され、これまた楽しそう――というか意地悪気に笑う副官ちゃんが、中指を親指で引っかけてギリギリと力を撓め始める。

――手配したっつー魔族領の南部に行けるのは何時になるんやこれ。

そんな事を考えつつ。
数秒後に痛撃をもたらすであろうその指先を見つめ、次いで広間の天井を仰いで、俺は白目を剥いたのだった。

夏だ、海だ、水着だ！（前編）

「よっしゃ、それじゃ行くか！　先ずは点呼とｒ「あ、それオレ達が先にやってるから省略で」あ、そう……」

勢い込んで拳を振り上げた《魔王》の発言をオレがさっくりと却下すると、膨らみきって破裂しそうに高いテンションだった奴の調子が少しだけトーンダウンした。

挨拶、というにはやたらとドタバタとバイオレンスが混じっていた顔合わせが漸く終わり、初日のメンバーが集って現地に出発する時間がやってきた。

教国、帝国、魔族領の各面子は、城の門前へ移動して各々の荷物を手にすっかり準備を終えている。

大森林――サルビア達からも一応参加するという旨は届いたらしいが、流石に初日からは無理らしい。予定を組んで数名が順次日替わりになるそうだ。

魔族領からは言い出しっぺの《魔王》は勿論、《災禍の席》からブレーキ役として《万器》と《赤剣》も同行するらしい。

確か《亡霊》や《狂槍》みたいな比較的常識枠とは違って、この二人は《魔王》寄りの我が道を行くタイプだったと記憶してる。ブレーキ役として機能するのかよこれ。

せめて《不死身》が居ればまだマシだったのかもしれないけど、参加は午後から。しかも現地周辺を巡回してる幹部と連絡を取りに行くという事で、単独行動との事だ。

あとは、何人かの彼らの部下にあたる人達が参加するんだけど……。

「わ、義父様。この水筒、お水が殆ど凍ったままです。冬にこの冷たさはお腹が冷えてしまいます」

「南部はこの時期でも気温はほぼ夏に近い……あちらではこれが適温だろう。飲むのもそうだが、日差しがきつい様であれば水筒を首筋にあてるようにしなさい」

その中に《虎嵐》とリリィまで含まれているのは、まぁお察しというやつだ。あの変態不死鳥がリリィを誘わない訳が無い。

魔法瓶――こっちの世界の場合は本当に魔法で中身の温度保護がされてる物だな――を、父親から手渡されたエルフの少女は、その冷たさにびっくりして水筒を眺め廻している。

そんな彼女の頭部に、《虎嵐》はそっと麦わら帽子を被せてやっていた。寡黙で顰めっ面、厳の様な戦士、というイメージの強い男なんだが、義娘を見るその目はひどく柔らかく、優し気だ。

以前に行動を共にしたときは、見た事が無かったくらいに目尻も下がってる。良い親子関係を築けているみたいで何よりだよ。

そんな《虎嵐》だが、流石に今回の義娘の泊りがけ旅行は嫁のシグジリアと共に却下したみたいだ。

そうでなくともリリィはついこの間まで祭り中の帝国に滞在してたし、定期的に教国（ウチ）にだって来てる。義娘を目に入れても痛くないレベルで可愛がってる二人からすれば、外泊ばかりさせている状況は不本意なのかもな。

当たり前だが、今から普通に移動では南部に着く前に日が暮れる。現地へは《門》を使って移動する事になっていた。

泊まり組は向こうにある宿泊施設に、日帰り組は夕方にもう一度《門》を起動させるので其々の出身都市に帰還する事になっているらしい。

初手の挨拶も相当にグダったし、最初から現地に繋いどけ、と思わなくも無かったけど……相棒から聞いたっていう”由緒正しい魔王ごっこ”をやってみたかったんだろうな。

詳細を聞かなくてもなんとなく想像はつく。『玉座の間で勇者を待ち受ける』『決死を予感させる圧倒的な戦力を見せつける』『世界の半分をやるから手を組めとか言う』――相棒が言いそうなのはこの辺りか。

それを自分なりのスタイルに弄ってごっこ遊びに転用したという処だろう。戦争終わってから本当にフリーダム過ぎるだろこの鳥。

何はともあれ、ようやっと目的地に出発だ。

「忘れ物はねぇな？　小遣いは持ったか？　――ちなみに俺はカットされすぎて銅貨三枚しかねぇ！　誰か向こうで飯奢ってくれても良いのヨ！」

堂々とタカるなよ、魔族領筆頭。

切実だが情けない宣言に「ヤなこった」「えぇからはよ《門》開け」といった笑い交じりの野次が飛び、声を上げない面々も苦笑したり肩を竦めたりと反応は芳しくない。

奢ってくれそうな反応が誰からも返ってこない事にもめげず、元気一杯の《魔王》が城の前に設置した魔道具に向けて魔力を注ぎ込む。

――って、多いわ！　量が多すぎてオーバーフローしかけてる。あんな雑に注いでおいて、なんで魔力を馬鹿喰いする《門》に過剰供給現象が起こるんだよ。

使用されてるのは転移の魔導具のタイプとしては一番多い、縦横の幅が2メートル程度の《門》が展開される物だ。今はその5割増しぐらいのデカさになってるが。

過剰供給は魔導具自体に負荷が掛かるから、次からは気を付けて欲しいものである。数回でどうこうなるような強度はしてないだろうが、もし貴重な代物を雑な使い方で壊したら《亡霊》が怒るぞ。

「いよいよかぁ……向こうに行ったらビーチバレーとかしようね、にぃちゃん。ボク、革張りのボール買ったんだ！」

肩に引っかけた荷物の入った袋を掌で叩きながら、アリアが笑う。

こっちの世界にも、本格的なサッカーやバレーに使えそうな品質のボールがあるにはある。大量生産品じゃなくて革製の手作りだから大分値が張るけどな。

普段はほぼ散財する事の無い妹であるが、珍しく奮発して良い物を買ったらしい。それだけ楽しみって事なんだろう。

――バレーも良いけど釣りもな。大物が俺を呼んでいる……！

うんうんと頷きながらまだ見ぬ海を夢想しているのは相棒だ。

内陸部じゃ需要の関係で海釣り用の竿なんて見掛けないから、向こうで一式揃えると息巻いている。

はしゃぎ過ぎるな、と普段なら釘を刺すところなんだけど……今回は出発直前に醤油が手に入ったからな！

是非とも相棒には刺身に適した大物をゲットしてもらいたい。生で喰う文化が無い土地だと、店売りは加熱が前提なので鮮度が心配なのだ。漁場が近いなら捕れたてを買い取るなんて事も出来そうだけどさ。

こうなると知ってたら、せめて山わさび位は買っておきたかったな……本山葵は見た

事ないから無理だが、代替品くらいは欲しい……あっちで売ってるだろうか？
玉葱（オニオン）や生姜（ジンジャー）といった他の薬味になり得る食材は普通にこの世界にも普及してるし、容易に手に入るだろう。それで今回は妥協しておくか。
「もうちょっと量があれば色々な料理に使えたんだけどねー」
「まぁ、マメイ氏も突貫で用意してくれたみたいだし、届けてくれただけでも心底感謝しないとな」
――だな。今回の旅行に縦ロールちゃんと一緒に来たりしないのかねぇ。
相棒とアリアも交えてこれからの食事情について語り合いつつ、光溢れる《門》を潜る。
白んだ光がオレ達を包み、一瞬眩しさに眼を閉じて。
通り抜けた先にあったのは、青い空と、刷毛で佩いた様な白い雲――そして、久しぶりに鼻腔を擽る潮の香り。
季節柄、そろそろ冬も近いというのに《門》を越えた途端にカラリとした強い日差しが全員に等しく降り注ぐ。
ほぼ常夏と言ってよい気候の御蔭か、暑さに強い植生が青々と生い茂り、ヤシ科らしき樹々があちこちで旺盛に背を伸ばしていて。
綺麗な砂浜に押し寄せるのは白い波と、空に負けない程に青く、美しい海。

ざざーん、と穏やかな水しぶきを上げる広大な海と、その圧倒的なスケールに初見の連中から感嘆混じりの歓声が上がったのであった。
今回の目的地、魔族領南部に到着である。

この世界の自然やそこに棲む生物は旺盛な生命力に満ちている。
その所為か、眼前の海は転生前に肉眼で見たそれより遥かに綺麗で透明度が高い。
単純に環境汚染なんかとは無縁というのもあるんだろうな。将来的には流石になんとも言えないけど、少なくとも今の時代では。
――うーみいいいいっ！
「うーみいいいいー」
相棒とアリアが手を取り合って青い海に向かって万歳しつつ叫んでいる。どういうノリだよ。
「む、御二人が行うは何かの作法ですかな？　で、あれば拙僧も……」
「いや、アレはしゃいでるだけだから。グラッブス司祭は真似しなくていいから」
万歳しようと荷物を下ろした司祭を止める。
というか、こんな近距離でこの人の渾身の叫びとか聞きたくない。耳が痛くなるとい

うのもあるけど下手すりゃ音圧で吹っ飛ぶ。
偶に自前で障壁張って、大音声の叫びでそれを叩き割る訓練とかしてるんだよなぁ司祭。相棒じゃないけど、初見は意味が分からんと唖然としたものだ。
遮音性を高めた障壁でも普通に声が貫通するレベルなので、あんまり頻繁だとヒッチンさんに怒られるから頻度は高くないんだけどな。
なんでも昔、音を利用した攻撃で痛打を受けた事があるらしい。それで仲間の足を引っ張った事があるので、今でも対処法を鍛錬してるんだそうだ。
同種の攻撃を相殺する為に編み出した方法が只の全力咆哮ってのは、実にグラップス司祭らしいけど……やっぱり意味が分からない。普通魔法とかで防ぐだろ。
ちょっと話が逸れたな。教国（ウチ）のメンバーはこんな感じだが、帝国のミヤコ以下《刃衆（エッジス）》の面々も、殆どが初めて見る広大な海原に呆気に取られていた。
「うわぁ……これが海かぁ……なんというか、自然の景色で感動するのって久しぶりな気がする」
「凄い……レティシアが沖縄かハワイか、なんて言うのも納得したわ。昔テレビで見た様なブルーオーシャンそのものだし」
アンナとミヤコの隊長格コンビも、海を見た事ある無しに関係なく眼前の空と海の青に圧倒されている。

「うっひょおおおっ！　砂浜もちょー綺麗で砂金みたいだし、海の青さもヤッバ！　北方とかだともうちょっと暗かったり黒っぽいのに！　ここで暫く遊べるとかマジ凄くない!?」

「落ち着けシャマ。海を見たことあるお前が、なんで《刃衆》で一番はしゃいでんだ」

「あたしもワンコ君とアリア様と一緒に叫んで来る！　――うーみぃぃぃぃぃっ！」

「聞けよ」

同僚の諌めの言葉もなんのその。

ひゃっほーいとばかりにシャマの奴が万歳してる二人の元に飛び込み、間を置かず海に向かって叫んでるのがトリオに変わった。

子供っぽいと言ってしまえばそれまでだが、旅行なんて楽しんだもの勝ちなんだからある意味ではアレも正しいのかもしれない。

あっ！　あの馬鹿テンション上がり過ぎてアリアを抱き上げてぐるぐる回り出しやがった！　ズルいぞ、オレも混ざっておけばよかった……！

楽しそうに回る奴と、それを上回る満面の笑顔で抱き上げられて回転している妹。

シャマが背後から相棒の両肩を掴んで、奴の生み出す遠心力を利用して同じくグルグルと回っている……最初にちょっと恥ずかしがらずに一緒にやっておけば、最低でもあそこのポジションはオレだったのに。不覚だ……！

「いや、まるっきりはしゃいでる子供でしょうが。アレに嫉妬するとかやべぇこの聖女」
「拗ら聖女」
　ええい喧しいぞ、そこの騎士共！　特にミヤコ、お前今鼻で笑っただろ!?
　ギャーギャーと騒ぐオレ達を尻目に、ある程度の歳か長命種の面々はそれなりに落ち着いた様子でこれからの予定を語り合ってるみたいだった。
「流石にこっちゃぁ暑いのぅ。なんで常夏地方にフル装備で来てんのワシら」
「頭領（ボス）の思い付きに付き合ったらコレだよ。無視しておけば良かった……」
「それな。ごっこ遊びが終わったら流石に着替える時間くらいは欲しかったっちゅーの」
　首筋や顎下に早くも浮かんできた汗を拭いつつ、《万器》と《赤剣》がボヤいている。
「ふむ。先の顔合わせもあり、皆々様共に正装に近い出で立ちです――先ずは着替えと荷物を置く為に、宿へ向かうのですかな？」
　顎先に拳を添えて思案するグラッブス司祭の言葉に、この場で一、二を争う年長の癖に唯一全然落ち着いてない男が元気よく手を挙げた。
「宿も勿論手配してるが、このまま遊ぶ為に一旦荷物置く休憩所みたいな場所も当然あるぜ！　さぁさ、俺について来な皆の衆！」

自信有り気に先頭を歩く《魔王》だけど、基本どんなアホな言動でも自信満々で発する男なので皆微妙に警戒して後を着いていく。

直ぐそこ、という言葉自体に偽りは無かったらしい。程なくして『休憩所』とやらが見えてきた。

「……ええ？」

「まぁ……」

アリアとミヤコの口から呆れと――だけど紛れも無く感嘆も含まれた呟きが漏れる。

設置された《門》のある砂浜から少しだけ歩いた場所。

元より手つかずの南国の海、といった感じの場所ではあったが、そこは岩や流木なんかも殆ど無く、広々とした砂浜の背後にはちょっとした密林にも見える樹々が広がる、絶好のロケーションだった。

けれど、驚くべきはそこじゃない。

アリア達だけじゃない、オレと相棒――即ち転移・転生組の受けた衝撃は結構なものだった。

一際大きなヤシの木が庇を作るその下に、一軒の建物があったのだ。

建物自体は風通しの良さそうな木造り。荷物を置くだけじゃなくてちょっとした飲食が可能なスペースなんかもあるみたいだ。

嘗て元居た世界でよーく見た事のある、赤で『氷』と書かれた青と白ののぼりや垂れ幕が掛かっている。

時折吹く潮風に揺られ、ちりーんと鳴る涼やかな音は――間違いない、風鈴だ。

ここまで言えば、もう大体分かると思う。

眼前の建物は、オレたち日本人がイメージする海水浴には付き物な場所――所謂『海の家』、そのまんまだったのである。

いやどういう事だよ。《魔王》の思い付きで作ったにしても時間が足りなすぎるだろ？

何より再現度が地味に高い。元日本人の監修がなければ不可能なレベルだ。

「ようこそいらっしゃいました皆様ぁ！　この日を一日千秋の思いで待ち侘びていましたとも！」

唖然として海の家を見上げていると、店の奥から《魔王》に匹敵するテンションの高さでスキップしながら出てきた人物が、一人。

それを見て、オレ達は更なる衝撃を受ける事となった。

「「店長さん!?」」

「「工房長!?」」

二種の叫びは前者がオレとアリア、後者がミヤコとアンナだ。

そう、既視感激しい海の家から出てきたのは、聖都にある日本由来の品も扱う高級服飾店――そこの経営者であるハーフエルフの女性だったのである。

確か元は帝国で一番デカい服飾系工房で責任者やってたんだったか？　今は双子の妹だという人が後を引き継いでいたみたいだけど……ミヤコ達は工房時代に面識があったって事か。

流石に場所が場所なので店で見た様なパンツスーツは着ていない。上はシンプルな黒のビキニらしきものに、丈の短いYシャツみたいなトップス。下はゆったり目のハーフパンツにサンダルを履いていた。

「――って、ちょっと待った！　ビキニ……水着だって!?」

「そこに直ぐ気付くとはお目が高い！　流石は我が店に燦然と輝く一位の推したるお客様です!!」

驚愕して再び叫んだオレに、店長さんが顔に掌を押し当てながら腰に捻りと角度を付けてビシィッ！　と指を突きつけて来る。

「以前から、美女と美少女に着せるありとあらゆる服を作り続けていた私ですが、残念ながらご時世も手伝って水着の類は売れ行き絶無。泣く泣く保管庫の肥しにするばかり

でした」

「帝国の服飾工房にあった水着みたいなのって、やっぱり店長さんの作った物だったんだ……」

荷物を両の手に抱えて呟いたアリアの声を聞き逃さず、謎ポーズから更に身を仰け反らせて今度はそちらに向けて指が向けられた。

首の角度とかちょっとおかしいレベルで回ってないかアレ……アリアもそう思ったのか、僅かに頬を引き攣らせてビクリと震えて一歩下がる。

「いぐざくとりぃ！　戦争が終わり、聖都で店を構えてからも文化の違いからやはり販売数は伸びず……そこで私は考えたのです！　”なら需要のある場所で布教すれば良いじゃない”と!!」

クワッ、とばかりに見開かれた眼は、若干血走っていた。

元が美人せいか、形相の齎す迫力が酷い。オレもあの眼を直に向けられたらビビると思う。

そんな事を考えてる間にも、店長の独白じみた語りは続く。

「偶の休みにはこの地方を訪れ、海水浴と言えば基本全裸！　漁は褌擬きを締めているだけな魔族領の皆さん――その中でも美人な方々をたっぷりと視か――ゲッフン！　ゲェッフン!!　目の保養をしつつ、地道に水着の布教を行う日々っ……ついに転機は訪

れました……！」

ここは店長の布教の拠点なんか……という相棒の台詞に納得がいった。

なるほど、今回のバカンスに併せて急遽拵えたものではなく、水着の布教とやらの為に前々から此処に造られていた建物だったのか。

身も蓋も無く言えば行動力のある変人って感じだしな店長……。

そこまで交流がある訳でもないので失礼な物言いかもしれないが、変態と言わないだけまだオブラートに包んでいるのではないだろうか。

そんな彼女の視線が再度、首の向きごと転じられる。

その先にいたのは、何だか後方理解者面で腕組みして頷いているロ〇コンだった。

「こんな美女美少女だらけの一団をねっとり鑑賞――もとい、各国でも著名な皆様に水着というものに触れて頂ける機会を頂けたこと、感謝します同志よ！」

「気にすることはねぇよ店長。なんか面白そうだったしな！　何より、俺も姫や画伯の可愛らしい水着姿は見てみたい。脳髄と魂に焼き込みたいっ……！」

「その糞みたいな欲望、実にイエスですね！」

グッ、ガシッ、パシーン。と。

互いにサムズアップから腕を軽くぶつけ、最後に高々と掲げた掌をイェーイとばかりに打ち付け合う。

どう考えても水面下でひっそり事を進められるような二人じゃない。出会ったのは最近――《魔王》の奴がこっそり聖都に遊びにきていたときに出会ったんだろう。

――混ぜちゃいけない連中が出会っちまった……変態と変態の価値観悪魔合体っ……！

戦慄を滲ませて呟く相棒の言も宜なるかな。

眼前の二人を知る者達が同感だとばかりに一斉に頷く。なんでこんなどうでもいい処で心を一つにしてんだよオレ達は。

完全に危険物を見られる目付きを向けられているのだが、それを物ともせず、店長さんは生き生きと眼を輝かせて胸を張った。

「そんな訳で！　さぁ皆様、よろしければ私の手掛けた水着（こども）達を是非ご利用ください。常夏のアバンチュールを彩る華々を更に美しく！　正しく服屋の本懐ですとも！」

店長は間違いなく《魔王》の同類に近い人種だけど、その仕事が超一流の職人のものである事も疑いが無い。

水着の販売兼レンタルなんかもやってるらしい海の家擬き。

その店奥から引っ張り出されたハンガーラックとそこに下がった水着や夏服の数は相当なものだ。ラックの数は優に十を超えていた。

男用のはラック二つ分で、あとは全部女性用だったけどな。店長の嗜好が透けて見える比率である。

とはいえ実際、この場の男連中にも細かなデザインを気にする様な奴はいなかった。皆、適当に好みの色の水着やアロハシャツなんかを選んで荷物だけ置いて外に出てゆく。女性陣が店内で試着と着替えを行うので、外で着替えて待つのだそうだ。

ちなみにリリィは一旦保留。本人は興味ありそうだし、《魔王》が是非にと推していたが、保護者である《虎嵐》が水着に関して知識が無いので、OKを出して良い物か一旦嫁（シャグジリア）さんに連絡を取るらしい。

店長と《魔王》――特に後者が露骨に肩を落としていたのを見る限り、その判断は正解だろうと言わざるを得ない。大変そうだがオレ達もリリィのガードには協力するので頑張って欲しいところだ。

店の貸し出し品だというビーチパラソルを数本担いで海辺に向かう男衆＋エルフの少女を見送りつつ、オレ達はオレ達で大量にある水着や海辺に適した衣類を物色する事にした。

「品揃えは流石だねぇ……こんなにあるなら着替え持ってこなくても良かったかもね」

「《門》で移動距離は最低限とはいえ、手荷物が増えすぎるのもな。先に言っとけよこういうのは」

サプライズ優先なのは生きたビックリ箱な《魔王》らしいので、今更な話ではあるんだけどな。

アリアと一緒に適当なハンガーラックから水着を選んで手に取る。

うーむ……しかし水着、か。

女の子女の子した可愛らしい格好、というのには今でもちょっと抵抗があるのだが……帝国でドレスだの文学少女風の私服だのに袖を通す機会があった事で、昔より心理的な敷居が下がった自覚はある。

それでも、流石にあんまり派手だったり際どいのはな。なんせ水着だ、単純な露出面積は普通の衣類よりずっと多いし。

いや、ここで良い感じのを選んで相棒にアピールするのは良いんだよ、全然。寧ろバッチコイというやつだ。

ただ、やっぱり見るのはアイツだけじゃないからさ。アイツ以外の衆目に触れる以上、やっぱり塩梅というものは大事なのだ。

手に取ったのはパレオが付いてるタイプだ。というか、今更だけどこれ全部が布製魔装か？　相変わらず店長の作る衣類は品質がバグってる。

「市場価格はさておき、作る側としては同種で各サイズを揃えるよりも、魔力による伸縮である程度のサイズ調整を自動で行える布製魔装一着の方が楽なんですよねー。それを言ったら妹と陛下は頭を抱えていましたが」
「うぉっ、ビックリした!?」
ニュッと背後から突然湧いて出てきた作り手本人に、思わず仰け反って叫ぶ。
教国の店でもそうだったけど、なんでか全く気配を感じ取れないんだよな……どうやってるんだか。
「どの様な水着が良いか、お悩みですかお客様。よろしければ私めが全霊を以て選ばせて頂きますが。フヒッ」
キリッとした顔で言う店長さんだが、最後まで保てていない。語尾に漏れちゃ駄目な気配が表情と一緒に緩んで垂れ下がった。
それでもドン引きする程では無いのは元が美人だからだろうか？　エルフの血を引く整った容姿を言動の相殺に使うというのも中々酷い話だが。
「……それじゃ、アドバイスだけもらおうかな」
「そうだね。参考だけ聞いて、もうちょっと自分で選んでみます」
アリアと顔を見合わせ、取り敢えずは店長の意見を聞いてみる事にする。
言動はアレだが、聖都の一等地で店を構えてるだけあってその目利きはこれ以上無い

程に頼りになる。何より此処にある水着や夏服の制作者だ、お勧めがあるなら聞いておくのも良いだろう。

二人でお願いすると、彼女は何故かその場でクルッと一回転してキメ顔で謎の構えを取る。

「お任せ下さい！　では先ず――基本的にお二人共に肌も白く、髪の色も美しく淡い色合いです。濃色の生地でお肌とのコントラストを狙うのもよろしいですが、その場合はスタイルを強調するのがセオリーになります。お客様方の儚げな雰囲気を生かす為に、此処は淡色系がよろしいかと」

さり気なくスタイル――胸元を強調するのは不可能だと言われた気もしたが、一切の含みないソレはあくまで似合うものを選ぶ為の選別・区別として語られたものだ。なのでオレもアリアも頷くに留め、それに対しては特に反応を示す事は無い。

要は持ち味を生かせ、って事だよな。聞く側としては参考になるアドバイスなので有難く耳を傾け続ける。

「パレオに関してはある無しは好みですが、付けるのならば膝上程度のこちらがオススメです」

隣のハンガーラックから店長さんが取り上げたのは、薄手のやや丈が短めの織布だった。

「裾に近い部分や腿の辺りは生地を薄く仕上げていまして。水着ですので元来パレオの下を見られても問題は無く、ですが腰に巻いた生地越しにうっすら透ける太腿。どうしても目が吸い寄せられてしまう……！」

そんなコンセプトで作りました。という彼女の言葉に、感心した顔で店長からパレオを受け取り、しげしげと眺めるアリア。

「へぇ～……そう言われるとなんだか凄そうな品に見えてくるから不思議だなぁ……」

しかし肝心の発言者が「あとシースルーって良いですよね！　心のジョンに栄養が注がれる！」なんて続けたせいで台無しである。

なんというか、癖は《魔王》に近いと感じる店長だけど……所々、相棒に似た部分もあるな。とぼけてたりアホっぽかったりする言葉のチョイスが特に。

「まぁ、なんだ。アドバイス自体は本当にためになるよ、参考にさせてもらいます」

「だね。ありがとう店長さん！」

「あ”ぁ”～、推しの眩い笑顔から豊潤な滋養が供給されるんじゃぁ～」

そのキャラの濃さはともかくとして、彼女の助言が非常に有用だったのは確かだ。

姉妹（きょうだい）で礼を言うと、変なお薬をキメた様な恍惚とした表情で宙を見上げてビクビクと震え始める店長。

水着の布教、その為の販売と貸し出しという目的があるとはいえ、趣味丸出しの半ば

プライベートという状況の所為もあるんだろう。
聖都の店舗での言動も高級店の経営・責任者としては大概だったが、今は輪を掛けてぶっ飛んでいる。開放的な土地で弾けてるというより、箍が外れてる感があるな……。
取り敢えずは助言の通りにパレオ付きの淡色系から選んでみよう、という事でアリアと二人で色とりどりの水着達を再度物色していると……少し離れた場所で別のハンガーラックを漁っていた《刃衆（エッジス）》女性陣から、なにやら悲鳴やら笑い声やらが同時に上がる。
「ンほーっ！　あちらでも素晴らしい光景が見れそうな気配！」
オレ達がそっちに視線を向けるのと、店長が奇声を上げながら華麗なダッシュフォームで走り出すのは同時だった。
声からするに、悲鳴っぽいのはアンナだな。笑ってるのはシャマか？
見てみれば、スタンダードなタイプのビキニを手にぐいぐいと迫るシャマと、その顔面を掌で押し退けているアンナの姿がある。
珍しい事に普段の二人の力関係とは真逆――ニヤニヤとめちゃくちゃ楽しそうに笑っているのは金髪褐色肌の部下の方で、銀髪サイドテールな上司は引き攣った顔で後退りしていた。
ミヤコは傍観……というより、焦ってるアンナを見て少し楽しんでるなあれ。珍しく

自分の右腕である副隊長に対して悪戯っぽい笑顔を向けている。
「これとか良くない？　ふくちょー結構スタイル良いし、絶対映えるっしょ！」
「いや無理無理ムリむり！　こんなの着れるか!?」
「アンナちゃんの髪と肌ならこっちのターコイズカラーの方が良いんじゃないかしら？　瞳の色との併せにもなるし」
「隊長まで!?」
敬愛してやまない上司ですら味方では無い事を知り、アンナの喉から再度悲鳴染みた声が飛び出た。
一瞬その碧色の視線を彷徨わせ、直ぐにオレ達に固定されて「助けてくれ」と眼力だけで訴えて来る。
しかし、助けると言ってもなぁ……正直、状況が良く分からないぞ？
アリアも同感だったのか、小首を傾げて不思議そうだ。
「見た感じ、普通の水着に見えるけど……アンナは何がそんなに嫌なのさ？　変な処に切れ目でも入ってるとか？」
「アリア、それはもう水着というより特定の状況でしか使わない特殊な衣裳だぞ」
オレの言葉に、アリアの奴は益々不思議そうな顔になった。
どうやら適当な冗談だったみたいで、分かっていて口にした訳では無いようだ。妹

がソッチ方面の知識については初心（ピュアッピュア）過ぎて眩しい。なのに以前の『治療』の際とのギャップが酷い。

今のやり取りを聞いて、なんとかシャマを押し返している最中のアンナが迫る相手の手の中にあるビキニを指さして叫ぶ。

「いやいやいやちょっと待って下さいアリア様！　そもそもこれが普通ってのがおかしいですよ!?　この水着とやら、デザイン的には殆ど下着と同じじゃないですか！」

「あー……そういう……」

オレもアリアも納得がいって、思わずといった感じで頷く。ミヤコは気付いていたらしく、口元に手を当てて小さく笑っていた。

異世界（カルチャー）ギャップ、というやつか。こっちでも元の世界由来の文化や物品は結構見るし、何だかんだとそれも馴染んでる場合が多いし。すっかり失念していたな。

質に差こそあるが、衣類のデザインなんかは結構日本（あっち）のものが浸透していると思うんだけど……最近まで海水浴や水遊びが流行る様な状況じゃなかったこの世界では、水着の概念は流石に馴染み難いものだった様である。

「下着姿で人前に出るのと大差ないっての！　ドレスなんかよりよっぽどでしょ!?　アリア様もレティシアもなんで普通に選び始めてるんですか!?」

「なんで、と言われても……」

「水着ってそういう物だしなぁ」
「あ、駄目だコレ文化が違う……これが異世界の価値観……!!」
　可愛らしい水着を着る事に少しばかり躊躇いがあっても、水着自体に特に思う処は無いオレ達の台詞に、アンナが空いた手で頭を抱えて天を仰ぐ。
「ひっひっひ。さぁ、観念してふくちょーも水着デビューするのだ！　大丈夫、あたしちゃんも初めてだから！」
「逆になんでシャマは普通に着ようとしてるの。アンタ生まれも育ちもこの世界でしょーが！」
　頬に掌でつっかえ棒をされながらもアンナへとにじり寄るシャマは、普段とは立場が逆な事にご満悦だ。現状、アンナに共感する奴がいない事が更に拍車をかけている。
「別にこの位の衣裳ならアリじゃね？　てか、あたしの古巣の座長とか、若い頃は踊り子だったからいつもこんな感じの恰好だったし」
「そういえばアンタ元は流浪の民の出だっけ……み、味方がホントにいない」
　再度周りの面子を見廻し、途方に暮れた様子でジリジリと後退してゆくアンナ。そのうち壁に背が付くのも時間の問題だろう。
　登場時から常時イイ空気吸ってる店長なんて、その様子を見て恍惚とした顔で小刻みに痙攣している。

「普段は勝ち気な少女騎士が未知の文化に面食らって羞恥に頬を染める……これもまた素晴らしい光景ですね本当にありがとうございます！」

漸く戦争が終わり、やっと望む道や生き方を歩み始めた人達も大勢見て来たけど……その中でもぶっちぎりで人生エンジョイしてる感があるなこの人。

身をくねらせてシャマに追い詰められるアンナを見つめ続ける店長は、絶好調といわんばかりのテンション最大値である。

自分の店でやらかしたらそれだけで客足が三割減しそうな動きを続ける彼女の言に、一部ではあるが賛同を示したのはミヤコだ。

「工房長……今は店長、って呼んだ方が良いのかしら？　とにかく、彼女の言葉も一理あるとは思うわ――今の恥ずかしがってるアンナちゃんは可愛いもの」

「否定はしないけどさ……お前意外とＳっ気あるよな」

うんうんと頷く最近はまたロングヘアーに戻りつつある恋敵に向かい、オレは呆れた目を向けてやった。

ミヤコが仲の良い相手が困ってるのを見て、助け舟を出さないのは珍しいと思っていたが……コイツ、実は結構いい性格してる部分もあるんだよ。今回は珍しくその面が出てきた様だ。

相棒を相手にしてるときはめちゃくちゃしおらしいけどな！　そんなんだからエ清

楚だのエ清純派だの言いたくなるんだよ。
　そんなやり取りをしている間にも、シャマとアンナの攻防は続いている。
「ふはははは！　良いではないか良いではないかー！」
「良くないっての!?　ちょ、やめっ……ってどさくさに紛れて何処触ってんだコラ！」
「あ”痛デででッ!?」
　悪代官みたいな台詞を吐いて上司の服を剥ぎ取ろうとするシャマだが、悪ノリで胸を鷲掴みにしたせいで、押し退けるだけだったアンナの掌がアイアンクローに変化して悲鳴を上げていた。
　ぶっちゃけ強引に服を脱がせようとしても、アンナが本気になって抵抗を始めたら上手くいく訳も無い――シャマの奴だけなら、という前提だけど。
　見てるだけだったミヤコがツツーッと滑る様な動作で二人に近づいてゆく。手にした青緑系の水着からして、どちらに味方するつもりなのかは一目瞭然だ。
　彼女達の部隊の長が動いたことでほぼほぼ確定したであろう結末を最後まで見届ける事もなく、アリアとオレは互いに顔を見合わせて肩を竦める。
「アンナは御愁傷様……って程でも無いか。海で泳ぐなら普通の服より絶対水着の方が良いし」
「ま、そうだな。あんまり相棒たちを待たせるのもなんだし、さっさと自分のを選ぶとし

よう」

姦しいやり取りを続ける《刃衆》女性陣から視線を切って、手近な水着のつるされたラックへと視線を戻す。

またアンナの悲鳴が上がった気もするが、後だ後。先ずはこう……相棒にクリティカルヒットする感じで且つそんなに大胆じゃない水着をチョイスせねば。

姉妹揃ってそれなり以上に真剣な気持ちで色とりどりの水着を手に取り、眺めていると店の中に小走りで駆けこんでくる小柄な影が一つ。

「条件付きですが、義母様から許可が出ました。リリィもこちらでお着換えするのです。イェーイ」

ふんす、と自慢気に吐息を漏らして胸を張り、ピースサインを決めたのはリリィだ。

遠話でシグジリアと連絡とるとは言っていたが、思ったより早く結論が出たみたいだな。先にも言ったが本人が興味ある素振りだし、悪い事じゃないだろう。

あのロ〇コンバードに関しては、皆でスクラム組んでがっちりガードしてやるさ――ぶっちゃけ《魔王》は幼女好きではあるけど、同時に子供に無体を働く奴でもないので、深刻な警戒とかは必要ないしな。言動がひたすらにリリィの情操教育に悪そうっていうだけで。

何はともあれ、先ずはリリィも加わって水着選びだ。

「ＯＫでたか。なら丁度良い、オレ達もまだ選んでる途中だから、一緒に見るとしようか」
「うん。こっちにおいでリリィ。あ、でも子供用はこれとは別のハンガーラックかな？
……店長さーん、この娘に合う水着ってどれくらいありそうですかー？」
オレが手招きして幼いエルフの少女を傍に来させ、アリアが喜色混じりの奇声を上げている店長を再度召喚する。
海の家、という性質上、それ大きな店では無いとはいえ、シュバッと瞬きの間に眼前にやってきた店長が両手の指を胸元で絡み合わせて鼻息も荒く咆哮した。
「お任せくださいちいさなお客様ぁッ！　同志の最推しでもある以上、手抜かりなく様々な水着や夏服を用意してございますとも！」
感極まった様に天を仰いだ彼女の顔から、透明な雫が零れ落ちる。歓喜の涙だったらまだ良かったが、口の端から垂れた涎だ。台無しである。
「あぁ、右も見ても左を見ても美女と美少女……！　しかも帝国の推しと教国の推しが居並ぶ天国っ……！　やっべアガり過ぎて暫く下がらないですコレ!!」
……今更だけど、何気にこの人もハーフとはいえエルフにあるまじきスタイルの持ち主だ。
胸前で組んだ腕にぐにぐにと潰されて割とボリュームのあるバストが変形している

のだが――凄いな、言動のせいか全く羨ましくもなければ妬む気持ちも起きないぞ。実際、この段階になるまで気づきもしなかった。

「みずぎ、という物を着用するにあたって、義母様が選んでは駄目な物がある、と。それらに沿った品を選びたいのですが……」

「では、先ずお母様から提示された条件の細部を！　完璧にクリアしつつも、ちいさなお客様の魅力をしっかり引き出す組み合わせを導き出してみせましょう！　いちお針子としての誇りに掛けて！」

「あ、これ同じデザインで色違いだ……レティシア、カラー違いの御揃いにしても良さそうじゃない？」

「ふむ、それも有りだな。富める丘が多い以上、姉妹という点も活かしたツープラトンも考慮にいれるべきか？」

そんな感じで、和気藹々とこの旅行の手始め、急遽始まった買い物の時間は続く。

背後でとうとう剥かれ始めたアンナの何度目かの悲鳴が響くが、リリィの教育に悪いので後ろは見ない様に言い含めつつ。

あーでもないこーでもないと、オレ達はこの旅行で着る機会が多くなるであろう品の吟味を行うのであった。

夏だ、海だ、水着だ！（中編）

「さて、全員着替えたし。そろそろ行こうぜ、あんまり男連中を待たせるのもなんだしな」
「そうね。全日程でみれば長い旅行だけど、日帰りの人達もいる訳だし」
オレの言葉に自分の鞄の傍に屈みこんでいたミヤコも首肯し、手荷物の中から浜辺で使用しそうな物だけを取り出して立ち上がった。
「リリィ、これ。店長さんが浮き輪貸してくれたよ。確かしっかり泳いだ経験はないよね？」
「水浴びの際に湖で浮いていた程度でした。泳法の類は未収得ですので、リリィは今回の旅行でしっかりと泳げるようになるのが目標なのです」
アリアの奴がリリィの胴に浮き輪を通してやり、水着姿に麦わら帽子、浮き輪と完全装備になったエルフの少女は、気合も十分とばかりにフンス、と両拳を胸元で握っている。
転移・転生組のオレ達は言うに及ばす、軍属のアンナ達も河で水練くらいは経験した

事がある。泳ぎを教えられる人は多いだろうし、頑張れよリリィ。
「よっしゃー、いよいよ本格的なバカンスの開始ってやつ？　ちょー楽しみ！　あとふくちょーはいい加減あきらめろし」
「無理。ぜったいむり。なんで皆そんなに平然としてるの……」
まぁ、泳ぐところか、水着に着替えてから頑なに大きなタオルを肩から被って頑として脱がない奴もいるが。
本人の価値観とかもあるしな。水着を着ただけでもアンナとしては限界まで譲歩したのだろう。ミヤコとシャマの手による半ば強引なお着換えではあったが。
各々、選んだ水着を身に着け、必要な小物だけを持って相棒たちの待つ砂浜へと向かう。
いや、アンナじゃないけど、やっぱり実際に着てみると少し恥ずかしいものがあるな。デザインとしてはそんなに際どいものじゃないんだけど、やっぱり前世の意識が羞恥心を喚起してくるのだ。
下着なんかはとっくに割り切ってるんだけど、見えない部分だしな。こうして人目につきやすい形となると未だに完全には開き直れないらしい。
帝都の舞踏会でノリと勢いのままドレス着たときも、アリアと二人でちょっと後悔したもんなぁ……その後に相棒が本当にダンスに付き合ってくれた御蔭で、メンタルの収

支的には圧倒的にプラスだったんだけど。

大きな木陰の下に建てられた店から出ると、やはり冬とは思えない強い日差しと気温が出迎えて来る。

普通なら日焼けなんかも心配しなきゃいけないんだろうけど、あれも大きな枠でみれば肌の火傷みたいなもんだ。ぶっちゃけちょっとした回復魔法が使えるなら、数時間に一回行使しとけば気にしなくて良い。

……いや、うん。こう、お約束というか、アイツにサンオイルとか塗ってもらうシチュに心惹かれるものはあるんだけど……。

今さっき言った通り『回復魔法使えよ』で終わる話だからな。こればっかりは仕方ない。塗った後に海に入るのもあまり良くないと元の世界でも言われていたし、そこら辺の問題をクリアしてる分良しとしておこうか。

女性の服選びは時間が掛かる――今更だけど、自分達もその御多分に漏れなかったらしい。

アリアとどんな水着を選ぶか話し合ったのもそうだけど、リリィの物も選んでやったりしたせいで思ったより時間を食ってしまった。

五分と掛からずサイズだけ調べて適当な品を購入していった男連中は暇を持て余しているかと思ったけど、意外とそうでもなかった様だ。

等間隔に並べられた数本のビーチパラソルの下に、魔法で防水処理をしたシートが拡げられている。
更にグラッブス司祭が其々のシートの隣に一つずつビーチチェアを設置している最中だった。その脇には小さなサイドテーブルまである。
「うわ、凄い。準備バッチリになってる……」
隣でアリアが驚きと感嘆混じりの呟きを漏らすのが聞こえた。
だな。相棒と二人で店から色々レンタルしていたのは見たが、予想以上にきっちりと場を整えていて驚いた。
アイツはこういうの意外とマメだし、司祭もこういった方面では細やかな気遣いが出来る人だからなぁ……二人揃って準備したらそりゃこうなるか。一番凄いのはコレを事前に用意してる店長なんだけど。
どうやらビーチチェアで全てのセットが完了らしい。相棒の方は既に手遊びとして《魔王》と一緒になって砂の城を作成していた。
「右の塔作仕上げとくぞ。そっちは?」
――門のアーチやるわ。曲線ムズいからちょっと掛かり切りになる。
「おう。じゃ、窓部分の削り出しは俺がやっとく」
二人は砂で出来た城を挟んで真剣な顔でやり取りしつつ、合作の完成に励んでいる。

相棒が小器用な奴であるのは既に言うまでもないが、《魔王》がこの手の細やかな作業が得意なのは意外だな。素人目に見る限りだと二人とも相当に手際が良い。

にしても地味に上手いなおい。既に砂遊びのレベルじゃないぞ。

サイズはそうでもないが、その細かさと精巧さは既にサンドアートの一種と言えるのではないだろうか？

ディティールの細かさも凄いが、早さもおかしい。ほぼ完成間近じゃねーか。

水着選びに時間を掛けたとはいえ、流石に一時間も二時間も掛かった訳じゃない。数十分でこのレベルの砂の城を作るとか普通にそっち方面の才能ないか？

「わぁ……凄いです、砂で出来たお城なのです」

「あー、リリィ。今は話しかけない方が良いよ。《魔王》陛下が今のリリィを見たら興奮して手元が狂いかねないし」

瞳をキラキラと輝かせたリリィが早速傍に行こうとするも、アリアに止められていた。

実際、詰めというか最後の仕上げに入ったのか、二人とも結構な集中具合だ。下手に声を掛けたらグシャっとやってしまう可能性はありそうだな。

他の皆も、アートにも近いレベルのガチの”砂遊び”を見て感嘆の表情をしている。そりゃそうだ、普通に写真とかにとっておきたいぞコレ。

初っ端は女性陣の水着のお披露目になるかと思いきや、ウチの犬と《魔王》によるちょっとした芸術作品のお披露目になってしまった。

とはいえ、文句のある奴はいないみたいだ。もうちょっとで完成しそうなので皆その瞬間をジッと注視している。

「え、アレマジで全部砂なの？　ヤバくない？」

「普通に精巧な模型に見える……器用だね、《魔王》陛下もアイツも」

「うむ。猟犬殿が砂山を削り始めた際、陛下が興味を示されましてな。簡単な説明と手法の見取りを経て、後はあれよあれよという間でありました」

シャマとアンナが小声でやり取りし、各種レジャーアイテムの設置を終えたグラッブス司祭も常より声量を抑えて会話に加わり、深く頷いていた。

《災禍の席》の二名も素直に感心し、茶々を入れる事なく眺めてる、といえば凄さが伝わるだろうか？

時代背景や最近までの情勢もあって、砂遊びといえば子供が砂山にトンネル開通させる、位のものだしな、この世界。

サンドアートの概念自体が無いので、初見の衝撃は相当なものだったらしい。生まれも育ちもこの世界の奴にとっては、立派な模型にしか見えない城が全部砂、というのはちょっとした感動を覚える新鮮な体験だったみたいだ。

一方で、ある程度はそういった物への知識のある転移・転生組――オレ、アリア、ミヤコであるが、それでも生でこうった物が見れる機会はそうそう無いし、十分に感嘆に値した。

が、オレ達にとって重要なのはそこじゃない。

物作りには集中する性質（タチ）なのか、相棒がとても真剣な顔をしている事が大事なのだ。

普段はあんな感じの奴だし、偶にこの表情を見る機会があるのは、戦場とか戦いに関する事柄ばかりだった。

命の危険や差し迫った状況の無い――有り体に言えば、じっくりたっぷり心置きなくその表情を眺める事ができる機会は極稀、レアなのである。

流石に有事の際とは真剣の度合いが違うとはいえ、いつものとぼけた表情を引き締めて砂山と向かい合う横顔は、大変に結構なお点前というやつなのだ。もう直ぐ城が完成してしまうのが残念なくらいに。

オレ達三人は誰ともなく頷き合い、相棒の邪魔にならない程度に距離をとりつつもその横顔がバッチリ眺められる位置に並んで陣取る。

うん、良いな。いつもの騒がしいのも相棒らしくて良いが、真面目な顔はレア度も手伝って更に良い。何より心配や杞憂もなくそれを眺められるこの状況が良い。

……あー、なんかもうまだるっこしいのは抜きにして押し倒してーな、コイツ。

砂浜か……汚れるのもそうだけど、砂入ると痛いとか聞いた事あるしな……シチュとしては良いんだけど。

ジッと見てるとこの日差しにやられたのか、思考の方も大分茹って来る。

……『水着姿で悩殺しちゃったりして！』なんてアホな想像もしてたんだけどな。予定外に良い物が見れているせいで、悩殺どころかカウンターを喰らった気分だぞ。

とはいえ、内心で文句を飛ばしても、自分の顔がちょっと締りのないものになっているのが分かる。

うん、相棒の格好が下は長丈トランクスタイプの水着と、上は帝国で買ったらしい”とりかわ”とデカデカ書かれたダッサいTシャツ姿で良かった。

これで水着一丁、上半身裸とかだったら色々と危険なのだ。店長風に言うなれば『心のジョンへの栄養過多』というやつである。

もう暫く眺めていても良かったのだが、さっき言った通りもう砂の城は出来上がる寸前だ。

数分とかからず最後の仕上げを終えて完成した作品を前に、《魔王》と相棒が満足気に一息ついて立ち上がる。

バカンス始まって早々に、やり切った様な顔で額の汗を腕で拭った馬鹿たれは、鼻歌混じりでこっちを振り向いて――そこで漸く全員の視線が集まってる事に気付いて、ビ

クリと身じろぎして仰け反った。
——うぉっ……ビックリした！　なんだよ、来たなら声掛けておくれやす！
何時も通りのすっ呆けた表情に戻ってそんな事をいう奴に、緩んだ表情を悟られない様に敢えて意地悪そうに口の端を吊り上げ、答える。
「誰かさんが全力で砂遊びに没頭してるから、完成まで待とうと思って見てたんだよ。それより、デコが砂でコーティングされてるぞ？」
オレが見てたのは、作ってるもんじゃなくてお前だけどな——別に今回に限らず。
砂まみれの手で汗を拭って額が横一文字で愉快な事になってる相棒に向け、笑いかける。
さて、相棒と《魔王》の合作の完成を待ったせいでちょっと変なタイミングとなったが、いよいよ皆の水着のお披露目となりそうだ。
男連中も着替えてはいるんだよな。帝国と魔族領の面々は思い思いにアロハを着たりサングラスなんかを掛けていて、鍛えた体躯も相まってその筋の集団に見える。皆、中身はその百倍超えの武闘派なんだけど。
逆に教国——相棒は先に挙げた焼き鳥ダサTと海パンだし、グラッブス司祭に至っては普段の僧服の上衣をはだけて腰で結んでいるだけだ。
尤も司祭の場合は単純にサイズが無かったのかもしれない。店長も魔族は大柄な種

族が多い事を考慮して品を作ってはいるんだろうけど、１０Ｌとか１２Ｌなんてサイズは流石に拵えてないだろう。と言うか、そのサイズは既製品じゃなくて特注品の域だ。布製魔装がある程度の自動サイズ調整可能だとは言っても、やはり限度はある。

「はっはっはっは！　お気になさらず！　元より拙僧はレティシア様とアリア様の警護兼目付ですからな！　旅の良き想い出となる皆様の装い、眼に映すは既に過分な程の光栄と喜びを頂いておりますとも！」

相も変わらず豪快な声量で「あろは、とやらも少々鍛錬には不向きな衣裳ですからな！」なんて付け足しながら自身の禿頭をバシンと叩いて大笑するグラップス司祭。やっぱりこっちでも筋トレを欠かす気はないらしい。

「いやはや、しかし女衆の皆様がたは実に華やか！　此度の”ばかんす”なるを彩るに相応しき可憐さかと！」

そのままさり気なく相棒の方を見ながら「何か感想を述べてはどうか？」と言った感じに首を傾げる。ナイスパスです司祭。

水を向けられた当人は、え、俺？　女の子の水着褒めるとかハードルが……なんて尻込みしてるが、他の男連中はニヤニヤしたり苦笑するばかりで助け舟を出す気は無いみたいだ。

「なら俺が最初に言うぞ！　姫ぇ！　大変におうぐぶふっ!?」

「うははっ、まーワシらも礼儀として感想は言うべきなんだろうが……こっちはあくまでおまけよ、最初に口火を切るのはお前さんっちゅーこっちゃ」

「そうそう、着飾った女子を褒める甲斐性くらいは見せなってね。終わったら遊び始める前に麦酒(エール)買いに行くから、はよ」

空気読まずに真っ先にリリィに向けて超反応を示した変態を抑え込みながら、《万器》と《赤剣》が口々に言い募る。

ちなみに《虎嵐》は即座に義娘の傍に寄り添ってガード。動作こそさり気ないが、その双眸は自国の頭領だろうがいざとなればブン殴るという気迫に満ちている。なんとも頼もしい父親だ。

で、口を塞がれて当然の様に抵抗する《魔王》だが、抑えてる二人が無言で銅貨を一枚ずつ渡すと、いそいそとそれを着ているアロハのポケットにしまって一旦は大人しくなった。素寒貧に近いのは出発前に聞いたが、それでいいのか魔族領筆頭。

この場で発言しなかったローガスは、素知らぬ顔で煙草をふかしている。口にこそ出さないだけで、その眼は「さっさと隊長達にリアクションしてやれよ」と相棒に訴えかけていた。

オレ達にとってはナイスアシストなんだけど、自分にとっては薄情であろう態度な男達をみて、鈍ちん野郎は唸り声を上げる。

サラっと似合う、可愛いくらいは言う奴だけど、やはり水着となると勝手が違うらしい。なんというか、こっちをじっくり見る事への気不味さみたいなものを感じた。
それだけ視覚効果はあった、という事だ。
勿論、それは嬉しい。なんならガッツポーズしたくなる位に嬉しい――でも、折角こっちも転生してからの初水着だ。もうひとこえ欲しい。
そんな我儘と期待を込めて奴の顔を見つめてやると、相棒は若干眼を泳がせながら後頭部をボリボリとかいて、躊躇いがちではあるが口を開いた。

おっふ……シアさんの期待の眼がプレッシャーナリィ……。
白眼を剥いて天を仰ぎたいところではあるが、金色の聖女様を筆頭に、水着に着替えた女性陣は殆どが俺の方をみてリアクションを求めているっぽい。
なんで俺が男性陣代表で感想述べるみたいなポジになってんですかねぇ！　女の子の水着を的確に褒めるべき部分をピックアップして賞賛する、なんて高等技能は脳みそに搭載してねぇんだよぉ！　シンヤ君連れてこい！（偏見

似合ってる、可愛い。

俺に言えるのなんぞ、その程度だ。馬鹿でも脳死で出力される言葉くらいしか出て来ないんですけど。どーすんのこれ。

とはいえ、ウチの聖女様が感想を御所望である。精々足りない語彙を絞って求めているであろう言葉を捻り出すしかない。

「……で、どうだ！　自分で言うのもなんだけど、結構似合ってるだろ」

「ちょっとだけ恥ずかしいけど……折角の海だしね！　どうかな、にいちゃん？」

……まぁ、なんだ。皆、美人さんで更に華やかな装いになったのは確かなんだが、やっぱり俺が最初に眼を惹かれたのはシアとリアなんですよねぇ。

腰に手を当てて仁王立ちになる姉と、持って来たボールを両手に抱えて上目遣いで見て来る妹は、やはりこの集団の中でも特に目立つ。

ドレスのときもそうだったが、二人とも戦争が終わってちょっとした女の子らしいお洒落な格好にも手を出す様になってきた。御蔭様で視覚情報からの幸福度合いは最近上がりっぱなしである。

強い陽の下で見る二人の髪はそれ自体が淡く光を放っているようで、もうそれだけで滅茶苦茶目を惹く上にドエラい神秘的だ。でも日差しの強さが気になるので、後で二人にもリリィみたいな麦わら帽子を買わねば（使命感

あと姉妹（きょうだい）で併せたのか、水着が同じデザインやね。上はホルタートップ、下はパレオを巻いている。

シアがライトブルー系でリアが薄いオレンジ――蜜柑色だ。イメージカラー的には逆な気もするが、髪色とのコントラストで寧ろ見栄えしとる……気がする。素人意見だけどな！

ハイビスカスっぽい花の髪留めも南国、って感じで良い。流石にこれは生花じゃなくて造花みたいだけど、これから海で遊ぶことを考えればその方がええやろ。

うむ、写真に一枚くらいは残したいな、マジで。味噌も醤油も水着も出来たんだからカメラ誰か作ってくれよ、金なら出すぞ！　貯金の四割くらいまでなら大放出してやらぁ！（他力本願

「ははっ、服や食い物みたいな文化方面とは別ジャンルだろー、それ」

「でもあったら良いよね。思い出の記念撮影とか、出来るならしたいし」

眼福過ぎて割と真剣にカメラ欲しい……と無い物強請りしただけなんだが、シアとリアは顔を見合わせてハイタッチしている。何処に喜ぶ要素があったのかはさっぱり分からんが、ご機嫌なのは確かだから失敗ではなかった模様。

で、その隣にいる《刃衆（エッジス）》の女性陣なんだが……先頭に立つ隊長ちゃんはワンピースタイプ――ただし、競泳用に近いシルエットの水着だった。

デザイン自体もエッジが利いてるというか、鋭い流線みたいなデザインが模様として入っとる感じだ。

少しだけ照れの入った表情で耳元に掛かる髪をかき上げる彼女の声色には、何処となく懐古が滲んでいる。

「泳ぎは昔から得意なんです……転移前に持っていた水着に似ていたし、懐かしくてこれにしました」

大分以前に近い長さになってきた黒髪をアップにして纏めた隊長ちゃんは、首にはゴーグルらしきものも下げていた。

なるほど、確かに砂浜や波打ち際で遊ぶというよりバリバリ泳ぐ気満々なスタイルだ。女性としては長身なのもあって実にかっちょいい。

あと、身体のシルエットラインがモロに出るから、別のスタイルの良さが際立っとる。近距離で見上げられると実によろしくない。こっそり《地巡》使わなきゃ（隠密感

こればかりは聖女様二人に無いものだ。隊長ちゃん本人にもシア達にもセクハラになるので絶対言わないけど。

しかし、水泳か。浜辺でわいわい遊ぶイメージが漠然とあったが、そういう事なら一回隊長ちゃんとガチで泳ぐのもいいかもな。

魔力強化ありだと開始一秒でぶっちぎられる未来しか見えないが、素なら俺も泳ぎは

得意な部類なのよ。ゆーても競泳じゃくて遠泳――距離を泳ぐ方だけど。
「良いですね。それなら波の穏やかなときに一緒に遠泳してみませんか？」
おー、それもええね。ぶっちゃけ、波荒れたり途中でトラブルおこったら魔力強化解禁すればいいだけだし。
その時は是非、と笑顔になる隊長ちゃんに頷きを返す。個人的に釣りもしたいし、いやぁ、やりたい事目白押しで日程が忙しいことになりそうだ！
同じ過密スケジュールでも戦時と違って神経削る要素が全くないけどな！　やっぱり平和って素晴らしいですハイ。
「兄様、兄様、リリィもお着替えしました。このうきわ、という遊泳用の道具も早く試してみたいです」
ピシッと手を挙げて背伸びまでしてアピールしたのはリリィだ。
青地に白い水玉模様のワンピースか。うむ、似合ってる。あしらわれた小さなフリルも相まって実に可愛らしい。
水着もそうだが麦わら帽子と浮き輪、水筒や各種小物を入れたちいさな肩掛け鞄と海辺のフル装備。隙がないな、花丸をやろうリリィ君。
「やりました義父様、花丸です」
「……うむ、今のお前は大変に愛らしい。それも当然だ」

力強く頷く《虎嵐》が義娘の頭に手を伸ばし、褒める様に帽子ごと頭を撫でてやっている。

親バカムーヴがすっかり板についとるなぁ……とはいえ、見ていて和むので悪いことは全くない。寧ろガンガンやってくれてよいぞ。

「大変にお似合いです姫！　全くイイ仕事をしてくれるぜ店長（同志）も！　控え目にいって最高かよ！」

あー、変態（ロリコン）がとうとう我慢できなくなったか。

《万器》のオッサンと《赤剣》の拘束を振り切った《魔王》が、リリィの前にスライディング土下座で滑り込む。

そのまま眼前にあるちびっこの脚に手でも伸ばせばこの場の全員で袋叩きが始まるのだが、変態という名の紳士を地で行く男なのでそこら辺の一線は越えないという信用はあった。

それはそれとしてお子様の教育に悪い言動なのは確かなので、監視も必須だけどな！

感動と興奮でキッショいテンションになってる《魔王》を見て、保護者である《虎嵐》は勿論の事、《万器》達も奴の吐き出す台詞によっては再度拘束を試みようと微妙に重心が低くなっている。

「あの興奮の仕方を見るに、リリィの水着を選び直したのは正解だったな……」

うん？　最初は別のやつだったんか？

ポツリと呟かれたシアの言葉に、首を捻って聞き返す。

自身の髪をかき上げる我が友人の声色には、多分に苦笑の色が滲んでいた。

「店長がオススメした水着は幾つかあったけど……リリィが手に取ったのってスク水だったんだよ」

「素っ気ないデザインだけど機能美を感じる、って言ってたね、リリィ。流石にアレを着させるのは不味い気がしてレティシアと一緒に今の水着を勧めたんだ」

続く妹分の台詞も苦笑い混じりだった。そら正解だわ、お疲れさんだな二人とも。

シアによると旧スク水だったらしい。胸の部分にもしっかり白地の氏名記載する布地がついてたとか。《魔王》とジャンルは違えど、やっぱあの店長も変態だわ（確信

ちなみにその店長だが、流石に店を無人にするつもりはないのか憑いてきてはいない。いや、店自体がすぐそこだし、今もオペラグラスみたいなの使ってこっちガン見してるけど。

「……わぁ、本当に全部砂ですね。どうやったらお砂でこんなに立派な模型が造れるのでしょう。魔法より魔法です」

リリィは俺と鳥の合作である砂の城に興味があるみたいで、近くでマジマジと見つめている。含みの無い素直な賞賛は嬉しいね。

ゆーても短時間でこさえる為、砂を固めるのにちょっとだけ《三曜》を使ったりしたので純粋なサンドアートって訳でもなかったりする。物としては反則品って感じだ。

推しの幼女からキラキラした敬意の視線を向けられた《魔王》は昇天しそうな表情で喜んでるけどな。アロハに海パンの筋肉質の男が歓喜で身を捩っている姿は普通にキッショ！　ってなるからやめて欲しい。

さて、お次は副官ちゃんとダハルさんなんだが……。

うん、何で君はてるてる坊主なん？

「やかましい駄犬」

かなり大きめのタオルを肩からしっかり被ってがっちり前を閉じている副官ちゃんが、半眼で唸り声をあげる。

「せめてリリィちゃんや隊長みたいな臍が出ないタイプならまだマシだったのに……」

「ふくちょーも往生際がわるーい。男連中も皆普通に水着穿いてるじゃん、この場じゃ普通だってフツー」

「無理だって言ってんでしょーが。手をわきわきさせんな、それ以上近寄ったら本気でぶっ飛ばすわよ」

ケラケラと笑いながらタオルを剥ぎ取りたそうにしてるダハルさんに対し、副官ちゃんはマジトーンで警告して一歩後退る。

あー……察するに水着が無理って事か。

まぁ、普及率から見てもそう考える人の方が多いわな。バリバリこの世界育ちなのに普通に着てるダハルさんの方が順応性高すぎってのはあるかも。

副官ちゃんは先にも述べた通り、タオルで膝まで隠したてるてる坊主だが、ノリノリで楽しそうなパツキンギャル騎士様の方は白のビキニで腰に長丈のパレオだ。褐色の肌に白地の水着が映えてこちらも非常に似合っている。

「このパレオっていうのも最初はいらないかなー、って思ったんだけどね。昔めんどー見てくれてた人がこんな感じのをよく腰に巻いてたから付けた感じ」

ほう、成程。流浪の民の民族衣装的なもんかね？　思い出に寄せたってんなら水着に抵抗がないのも納得だわ。

あんまり関わった事ないから詳しくはないんだよね。大分昔に大陸外から来た人達の子孫だっつーのは聞いた事あるんだけど。

ちなみに聞いた処によれば、流浪の民の踊り子衣裳なんかはこの世界基準では結構過激なデザインらしい。各地の劇場とかで見れる場合もあるらしいので、機会があればちょっと一回見て見たくは、ある……！

「やめた方が良いし。最高級になるとお貴族様相手の娼妃みたいな位置に収まる娘もいるけど、地位とか財力とか住んでる地域の社会的な信用とか、そーゆーの高い男も十分

狙い目にされるよ？」

なら俺には関係ないじゃないですか。なんでその話題だしたんですか（真顔

何故か急に呆れた目付きになったダハルさんだったが、ちょっと思案する様に視線を彷徨わせ――直ぐにニヤリと悪戯っぽい笑顔になった。

なんとなく嫌な予感を覚えたが、俺が何かリアクションを取る前に彼女は腰に巻いたパレオを摘まみ上げ、その下にある脚の膝を曲げて突き出す。

褐色の健康的な脚線美が腿の付け根まで露わになり、下の水着もチラ見えしてしまう。

……あ、結構レッグカットの角度が凄いの着とる。

隊長ちゃんの水着も競泳用っぽいデザインなので少し大胆な腰回りだったが、こっちは更に際どかった。

ぶっちゃけ男としては非常に嬉しい光景ではある。それは否定できない。

――が、それに何かの反応をする前に俺の背筋に電流が如き寒気が走る。アカンやつやこれ（白目

判断は一瞬、電光石火で首を真横にひん曲げようとしたが、隣にいたシアの方が早い。

ベチィン！　という掌というより鞭の打撃みたいな良い音と共に、俺の視界が聖女様の平手で塞がれた。

ほ、ホアアアアッ!?　め、眼がぁぁっ!?
め、眼に火花が散った気がした……！
地味に痛いやつを喰らい、思わず悲鳴をあげて顔面抑えて仰け反る。
「あっ……わ、悪い。つい反射的に」
幸いな事にシアの慌てた声と共に俺の顔面に回復魔法が飛び、痛みは直ぐに消えてなくなった。
何してくれはるんダハルさん！　やめてよこういうの！　おめめどころかいのちのきけんがあぶないでしょ!!（錯乱
迂闊に眼を開くと同じ事の繰り返しな可能性があるので、顔を掌で抑えたまま抗議の声を上げる。
それに対し、声からして悪びれてないギャル系騎士様はやはりケラケラと笑いながら言葉を返して来た。
「ほれこうなったー。もし行ったら行ったで今より痛い目見るのは確実だゾ☆　やめとけーワンコくん」
「おまっ、それなら口で言えばいいだろシャマ！　なんでわざわざ下を見せてんだよ！
　っーかハイレグかよ!?　なんてもん穿いてんだ！」
「フッ……実はあたしちゃん、何をかくそう脚にはちょっと自身がある！」

「開き直んな!?　この手のエグいのを躊躇なく着れるとか本気で順応性高いなコイツ！」

掌で封じた視界の中、シアが詰め寄り、けどダハルさんにサラっと流されてる声が耳に届く。

ちょっと長引きそうなのでそのまま右脚の踵を回転させて身体を反転。身体ごと視界を逸らしてようやっと顔を覆っていた手を下ろす。

そうなると自然、俺達のやり取りを眺めていた連中と眼が合うことになる。なんか皆、全体的に視線が温かった。《万器》のおっさんだけは腹を抱えて爆笑してるけど。

「ぶっはははは、はははは！　うははっ！　ゲホッ、ヒー……ブフゥッ!!　いやぁ青春っちゅーやつだのう！　ウチの大将とは別種に見てて飽きんわ！」

おいコラおっさん、笑い過ぎやろ。どこにえずくほどツボに入る要素あった。

奇妙に柔らかいトーンな隊長ちゃんの声と、彼女の声を聴いてさっきまでの余裕が剥ぎ取られたダハルさんの声をＢＧＭにしながら笑い上戸みたいにゲラゲラと声を上げ続けるおっさんにツッコむ。

リリイに砂で像や建物を作るコツを教え始めた《魔王》と、それを見張っている《虎嵐》は置いておくとして……他の連中もなんでそんな目やねん、そんな視線を向けてくれるなら最初からフォロー入れて、どうぞ。

「まぁ頭領（ボス）と違って主に自分で被害を被ってるしね。笑って見ていられるのは良い事だよ――辛口の酒が欲しくなるけど」

「実に穏やか、心温まる光景ですな！　この様な時間が永く続かんと、創造神への祈りと鍛錬に益々熱が入る思いです！」

ブレないアル中と楽しそうと言うより嬉しそうな筋肉ゴリラ。こちらも二人並んで妙に生暖かい視線と共に頷いている。顔面に鞭打喰らうのは穏やかと言わないと思うんですけど！

ローガスだけは魔法で生成したらしき氷をタオルで包み、俺に手渡してくれた。

「ホレ、一応やるよ。レティシア様が癒したみたいだが……」

うん、痛みとかヒリヒリ感は綺麗さっぱり消えたけど、その心遣いは嬉しい。ありがたく受け取っておきます。

「おう、持っとけ持っとけ。なんとなく、この一回で終わらない気がするしな」

うぉい、不吉な事言うのやめてくれません!?

実は俺もちょっとそんな予感がしてるけどね！　杞憂で済ませたいのに予感を補強してくるのやめてくだしぁ!!

実際、何時の間にやら自分以外の女性陣に囲まれ、もう完璧に引き攣った感じになってるダハルさんの声が背後から聞こえてくる。

絶対振り向かんぞ、迂闊に振り返ろうものなら予感が現実になる未来しか見えん（確信

だが、この手の予感というのは、何をどうしようが向こうの方から強引に視界に入って来るものらしい。

「――ほう？　この時期に観光客の類などなんとも珍しいと思うたが……随分と愉快な一団よ、各国剛の者が揃い踏みではないか」

妙にヒートアップしてる女性陣が一旦落ち着くまで、極力そっちを見ないようにして会話をしていた俺含む男共は、海の家の方向から唐突にかけられた声に驚く事となった。

砂浜を優雅に歩いて来たのは、従者に大きな日傘を翳させた長身の女性だ。

従者の娘の方は、その役柄のせいか、このクソ暑い中でも正装に近い格好をしている。流石に上着は脱いで白い襟高のシャツではあるけど。

以前に見た時にも陽の下が似合うと思った蜂蜜色の髪は、快晴の日差しの下だと思った通りにキラキラと輝いて綺麗だ。とはいえ、彼女の種族的にこの陽光の強さは大丈夫なのかとちょっと心配になる。

――で、主である女性の方だが……その服装は以前に見たワインレッドの豪奢なドレスじゃ無い。場に合わせたのか、身軽そうな白いサマードレスだった。

濃藍の髪は足首に届きそうな程に長く、豊かで、同時にこの日差しですら吸い込みそうな程に色濃く、艶やか。

肌は白い。いっそ病的な程に。だというのに不健康なイメージは全く受けず、髪色とのコントラストが鮮烈ですらあった。

切れ長の紅い瞳と、黄金比という単語をそのまま顔面に変えたような白皙の美貌――と、蠱惑的な笑みを浮かべる口の端から覗く牙。

人外染みたレベルで整った容姿と、それに見合うだけの傲然とした女王の如き立ち振る舞い。

まぁ、此処まで言えば分かるだろう。唐突に現れたやべぇレベルの美人とその従者の少女は、俺の知り合いだ――そしてほぼ間違いなく、魔族領の面々にとっても。

「久方ぶり、と言うべきであろうな《聖女の猟犬》よ。我が従僕から壮健であったとは聞いたが、死出の旅の終着先より還った者を見るは、此の身をして初めての経験よ」

ゆっくりと見せつける様に片手で長髪をかき上げ、女性――吸血鬼（ヴァンパイア）の長にして魔族領西部を統括する公爵様は、空いた手を腰に当ててふんぞり返ったのである。

夏だ、海だ、水着だ！（後編）

晴れた空の下に、暗褐色のボールが高く浮かび上がる。
って言うと、何かちょっと変だな。革張りのボールだからこういう色になるのは当然なんだけど、やっぱり白とかの方が海遊びには良いなぁ。
でも、塗装なんてしても用途的に直ぐ剥げちゃいそうだしね。使用感重視で選んだのは間違ってないと思う。
「そっち行ったぞー、アリア」
「おっけー！」
波音をバックに、レティシアの声に応えて落ちて来る球をレシーブ。
上手く数歩手前に落ちてきたソレに向けて、レティシアが軽く駆けて跳び上がる。
「アターック、ってな！」
魔力による身体強化抜きでも、姉(あね)は普通に運動神経が優れた部類だ。
タイミングばっちりで打たれたボールは小気味良い音と共に打ち下ろす軌道で真っ

直ぐに飛ぶ。
「ふっー！」
結構な速さだと思うんだけど、低い体勢から鋭い呼気と共に危なげなくそれをレシーブするミヤコさん。
真上に跳ね上がったボールに対し、彼女はすかさず背後に下がり、位置をスイッチする様にシャマダハルさんが前に出る。
「よっしゃー！　そぉ……れっ！」
褐色の肢体が高く跳躍。
そのままスパイクしてくると思ったら、彼女は身体を捻って空中で上下逆さまになり、さっき自信があるって言っていた長い脚を勢いよく振り抜いた。
オーバーヘッドキックみたいなシュートを決められ、ボクもレティシアも反応しきれずにボールが砂浜へと突き刺さる。
「隊長チームに1ポイント」
審判役を買って出たローガスさんが、手にした小石を自分の足元右側――ミヤコさんチーム側の方へと置く。石の数は五個目、こっちに置いてあるのはまだ一個だ。
「おいシャマ、手を使えよ手を。セパタクローじゃないんだから」
「えーっ、ボールを地に着けなきゃ良いって言ってたじゃないですかー？」

「レティシア、バレーはサーブ以外は足を使っても反則じゃないのよ？」
「えっ、マジで？　それじゃヘディングとかも？」
ミヤコさんが言うには、昔は駄目だったらしいけど現行ルールだとＯＫらしい。
そうなると魔力強化抜きで普通に遊んだ場合、サーカスの軽業みたいな事が出来るシャマダハルさんが強すぎるなコレ。足でスパイクされるとボクもレティシアも球威を捌き切れない。
「ひっひっひ。良いねこのビーチバレーって遊び。あたしちゃん大活躍じゃね？」
「まぁ、素直に凄いとは思うけど……ゲームとして成り立たないぞ。ハンデくれハンデ」
口元に手をあてて得意げに笑う褐色肌の騎士様を見て、姉(あに)が手を挙げてルール変更を申し出ている。
まぁ、あくまで遊びの一環で、別に本気で試合してる訳じゃないしね。
ボクが近接寄りではあるけど、本来タイプとしては後衛の聖女二人と純前衛の騎士二人相手じゃ確かにパワーバランスが悪いよ。ここはテコ入れするべきだと思うな。
そんな訳で、ボクも挙手して意見を出してみた。
「それなら、メンバーシャッフルでもする？」
ローガスさんは審判役から動く気は無いみたいだしね。「いい年した男一人で、若い娘達に混じって球遊びとか勘弁してください」だって。

「メンバー変えも良いけど……アンナちゃんがそっちに加わわればバランスとしては良いんじゃないかしら？」
ミヤコさんの言葉に、ビーチバレーに興じる皆の視線が一斉に転じられる。
パラソルの下に敷かれたシートとビーチチェア。
それぞれ３セットずつ並んだその真ん中……シートの上に、相変わらずタオルを肩からがっちり被ったままのアンナが三角座りで待機していた。
実際、彼女が加われればチームバランスとしては丁度良い気がする。多分、アンナならシャマダハルさんのシュート（ビーチバレーでシュートって時点でおかしいけど）を普通に止められるだろうし。
でも、当人がなぁ……。
ふるふると勢い強めに横に振られる首。サイドテールの銀髪が併せて馬の尻尾みたいに揺れる。
「無理です。こんな格好で思いっきり飛んだり跳ねたりとか本気で無理」
「意外と恥ずかしがり屋だったんだなぁ、お前……」
ちょっと呆れた様に言うレティシアだけど、こればっかりは個人の感覚もあるしね。
流石にここまで恥ずかしがるとは思ってなかったんだろう。半ば強引にアンナに水着を着せた立場のミヤコさんとシャマダハルさんは、ちょっとバツが悪そうに苦笑して

いる。
心なしかグッタリしているアンナだけど……水着に着替えたばかりが理由じゃない。
その原因であろう彼女の左右へと視線を巡らせ、再度レティシアが呆れた様に――けど、幾らか同情交じりの声をかけた。
「いや、でもさぁ……お前ずっとソコにいるつもりか？　確かに動かない方がタオルもズレたり取れたりはしないだろうけど……なんというか、そのままで大丈夫か？」
「大丈夫じゃない……タスケテ……」
ハッキリと指摘され、アンナの顔色が暗澹たるものに染まる。
眼が死んでるってこういうのを言うんだろうなぁ、なんて思う位に彼女がどんよりとした雰囲気になると、その原因である左右のビーチチェアから同時に声が上がった。
「おい、客の一人が具合悪そうにしてんじゃねぇか。空気悪くしてる原因はさっさと帰れよ」
「ほざけ、普段阿呆丸出しの緩んだ顔を殊更に顰めているのはそちらであろう。貴様が消えよ、なんなら現世から消滅しろ」
どっちも尖りに尖った不機嫌丸出しの声色で、発言と同時に物理的に火花が上がりそうな強烈な睨み合いが発生した――アンナを挟んで。
ボク達から向かって右側のビーチチェアに身を横たえているのは、つい先程出会った

吸血鬼（ヴァンパイア）の長である女公爵様。

季節的には冬に近いし、一年の中では穏やかではあるんだろうけど……なんで日差しの強い南部（ココ）にいるんだろう……？

その傍にあるサイドテーブルには、付き従っている《陽影》さんが影から取り出した透明なグラス――中はトロピカルジュースみたいなカラフルな液体で満たされている。

公爵様はサマードレスの裾が捲れ上がるのも構わず、その白く長い脚を組み替えて、グラスに刺されたストローを軽く吸い込む。

うーん……相変わらず怖い位に美人で、それ以上に妖艶だなぁ。

同性であっても視線が吸い寄せられそうになる美貌と仕草は、まさしく魔性の美というやつだ。今は不機嫌そうに眉根が寄ってるけど。

スタイルもやばい。なんだよアレ、《陽影》さんより大きいのに腰とか細すぎる……にいちゃんが３ＤＣＧでしか存在しないレベルのモデル体型って言ってたけど、本当に比喩抜きでその通りだ。

そんな彼女を横目で見て「ケッ」なんて嫌そうに舌打ちしたのは、左側のビーチチェアの上で胡坐をかいた《魔王》様だ。

アロハの胸ポケットに刺していたサングラスを取り上げ、不機嫌な表情を隠す様に装着する。

ついでにサイドテーブルに置いた干し肉らしきものに手を伸ばし、ガジガジと齧り始めた。
ボクはそんなにこの人と交流がある訳じゃないんだけど、記憶にある限りでは会う度にいつも楽しそうにしてたイメージがある。戦場で遠目に見た時は流石に別だけどね。
人生エンジョイしてる！　って感じの人だと思ってたので、こうも露骨に不機嫌なのは初めて見るよ。
……レティシアから「あの二人が揃ったら気を付けろ」なんて何度も言われてたけど、本当に仲が悪いんだな……。
で……繰り返すけど、そんな二人に挟まれる形となっているのがアンナだ。
その碧の瞳からは既に光が消えかけてる。唇だけが動いて「タスケテ……」って言った気がした。

どうしてこうなったのか。
その疑問は、今も二人に挟まれてるアンナが一番に感じてる事だと思う。
公爵様が登場して直ぐ、当然気付いた《魔王》様が文句をつけて、それに公爵様も反撃の皮肉を飛ばして。

最初は向かい合って口論してた二人なんだけど、お互いに舌打ち一つしてビーチチェアに移動したんだよね。

二人とも互いに隣り合って腰を落ち着けるのは嫌だったのか、一個間を空けたチェアに身を預けたんだけど……運が悪い事に、真ん中のシートには既にアンナが座ってた訳で。

あとは見ての通りだ。こうなったのは本当に場の流れと運が悪かっただけなので、アンナには心底同情する。

本当は今すぐにでも移動したいんだろうけど、迂闊に動けないんだろうな……。

それが切欠でまたギスギスした口論が始まるのが目に見えてるし、万が一どっちが原因だ、なんて聞かれる流れになったら嫌過ぎる。ボクだったらもうなりふり構わず飛行魔法使って離れた場所に全速離脱するしか思い浮かばないよ。

レティシアが声をかけたのも、半分救助を兼ねてたんじゃないかな？　ボクらがビーチバレーしてるのは楽しむ為もあるけど、二人が本格的に着火したときに備えて距離を取っておく為もあるし。

アンナからすると誘いに乗れば水着姿を御披露目する羽目になるので、悩んだ末に断ったみたいだけど……ローガスさんが真っ先に「あの空間から離れたいんで審判やらせて下さい」って言って審判役に収まっちゃったからね。今、自然に参加できるのはプ

レイヤー側だけなんだ。
現在勤務中――公爵様の側仕えという役目に徹している《陽影》さんなんて、離脱出来る機会が訪れたのに結局は固辞してシートに座ったままのアンナを横目で心配そうに見ている。
あの二人が睨み合いを始めて直ぐ、にいちゃんは先生に耳打ちして二人で急いで買い物にいっちゃったし……何か頼まれたらしい《万器》さんと《赤剣》さんも同じく不在だ。
特に《赤剣》さんの方は、最初は「畜生ゴタゴタも修羅場も後にしろってんだいい加減酒を買いに行かせろオラァ!?」なんて叫んでたけど、にいちゃんに何か頼まれて嬉々として出掛けて行った。
にいちゃんと先生は店長さんのお店に、《災禍の席》の二人はちょっと離れた市場に行ったらしい。どうやら、この浜辺から少し内陸方向に進んだ先にちょっとした町があるみたい。ボクらの宿も其処にあるとか。
ちなみにリリィは《虎嵐》さんと一緒に砂でずんぐりむっくりした何かの動物を作っている。
「むう、兎さんのお耳は難しいです……」
「……後で樹木から葉を何枚か貰うとしよう……それを耳にしてあげなさい」

「……！　流石は義父様です。では、この子に兄弟とお父さんとお母さんを作ってあげましょう。これで兎さんは家族がいっぱいですね」

どうやらアレは兎らしい。うん、まぁ……縦長の葉っぱで耳をつければ、うん。見える見える。

夢中なその姿を見て、その度に《魔王》様が幾らかでも機嫌を回復させてるのがせめてもの救いかな――主にアンナにとって。

まぁでも、ボクらが現場に居るのに、にぃちゃんがこの状況を放っておく筈もない。なので、何か空気が穏やかな方向に行くような物を買いに行ったのかもしれない。取り敢えずはそれを待つ感じだ。

「そもそもお前に招待状は出してねぇ。なんで来てるの？　お呼びじゃないんですけど」

「ハッ、阿呆め。元よりこの季節になれば、この近辺に遊興に出向いている。貴様の下らん思い付きなど知った事では無い」

「はーっ、自分が太陽に耐性あるからって常夏の陽の下に部下を連れてくんなよ。女王様気質女に振り回されるとか気の毒だわー」

「今の側仕えになるまでは身一つで来ていたわ、戯けが。あと後半の戯言は鏡でも用意して己の面に向けて吐け鳥頭」

……それまでアンナのメンタルが保てばいいんだけど。

何度目かの皮肉と敵意に塗れた応酬が始まって、間に居るアンナがそろそろ白目を剥き始めた。うん、にいちゃん。割と真剣に急いで。

その間にも、仲の悪すぎる二人の舌戦は続く。

「なら混ざってくんなよ。このチェアとかデカい日傘だって借りたのはこっちだぞ。なんで普通に使ってんだお前」

「ふん、ならば貴様こそ感謝して頭を垂れよ――二年前、あの針子と出会い、この地における出店や品作りに出資したのは我が身よ」

え、なんだか今、唐突に驚きの情報が出なかった？

思わず彼女を見てしまったのはボクだけじゃない、皆の視線が一斉に公爵様へと注がれる。

そんな周囲の反応には一切頓着せず、彼女は手にしたグラスを傾けて中身を乾すと《魔王》様だけを見据え、心底楽しそうな――有り体に言って猫が鼠か小鳥を嬲って遊ぶ様な笑みを浮かべた。

「貴様が今使っている椅子も卓も、日除けの傘も、我が財を元に揃えた物なのだがぁ？こうして潤沢な器具を揃えて遊興を楽しめているのは、はて誰の御蔭になるのであろうなぁ？」

「オイィィィッ、店長（同志）イィッ!?　頼る相手は選ぼうぜ！　なんでよりにもよってこの女をパトロンにしちゃったの!?」

殆ど悲鳴みたいなトーンで、海の家の方へと首を向けて絶叫する《魔王》様。

釣られる様にそっちを見てみれば、オペラグラスを使ってこっちをしっかり見ている店長さんが親指をグッと立てて腕を突き出しているのが見えた。

「怖い程の超絶美人でボン、キュッ、ボンの優良出資者とか契約一択！　舐めろと言われれば脚だって舐めますよ！　寧ろ　な”　め”　だ　い”　!!」

ついでに、こっちにまでバッチリ届く大音声の雄叫びも返って来る。

聖都の店と違って従業員なんかも居ない完全に趣味の店なせいか、今の店長さんにはブレーキが全く無い。叫びの内容が欲望に忠実過ぎるよ……。

にしても、本業もあるのに、店長さん個人でよくここまで出来たなーなんて思ってはいたけど……公爵様が出資してるなんてね。魔族領の中では間違いなく最上位のコネって言っても良い。

でも考えてみれば、店長さんは日本の衣服とかを再現できる上、布製魔装の発案・開発者だ。実績と能力で見れば寧ろ公爵様の方が取り込もうとして接触を持ってもおかしくないのかも。

「おっ？　アイツ、買い物終わったのか」

ボクが思考を巡らせていると、隣のレティシアが手で庇を作って店長さん――の、背後に眼を向けた。

あ、ホントだ。にいちゃんと先生が店の奥から出てきた。去り際に店長さんに代金を渡してこっちに急ぎ足で戻って来る。

――すまん、待たせた。

「唐突の中座、ご勘弁を。公爵閣下が同席なさるという事で追加の座を用意した次第です」

二人は簡潔に謝ると、てきぱきと言葉通りにパラソルとシート、ビーチチェアをもうワンセット設置し始めた。

公爵様の隣、つまりは右端に新たに各種レジャーアイテムをセットし終えると、にいちゃんはアンナの座るシートの傍まで向かう。

何か調子悪そうやな？　生きとるかー、副官ちゃん。という問いに、アンナはのろのろと顔を上げた。

「……あー……かろうじて」

ぐったりしながら返された答えに、にいちゃんは一つ頷いて設置したばかりの右端のチェアを指さす。

――ちょーっとここで作業したいねん。しんどそうな処を悪いけど、あっちの端に移

動してくれるか？

その言葉に、頼まれた側のアンナはババッと顔を上げる。

半分死んだ様な目付きになっていた碧の双眸には、安堵と感謝の光が灯っていた。

「……正直ありがたいわ。私的に１００ポ……９０ポイントで」

錯乱、とまでは行かなくても、やっぱり相当ギリギリだったみたいだ。アンナが変な事を言い出した。

なんのポイントか知らんがやったぜ、なんて喜ぶにぃちゃんに向けて深く頷き、誰憚ることの無い口実を得て彼女は意気揚々と立ち上がる。

地獄に仏、と言わんばかりの反応だけど、さっきまで物騒な空気にサンドイッチされてた人間からすればそれも当然なのかもしれない。

そそくさと移動を開始するアンナを横目に、再び脚を組み替えて伸びをした公爵様がにぃちゃんを見て愉快そうに唇の端を吊り上げた。

「今の状況を見越していたか。随分とまぁ気の廻る男よ」

いや、アンタら絶対に仲良く隣にケツ下ろすとかしないでしょう。誰かしら挟まれる奴がいたら罰ゲームやんけ、なんて言って苦笑いするにぃちゃん。応じる間にもお店から買ってきたものをサイドテーブルに広げる。

何か始める気みたいだ。皆が興味を持って眺めていると、その当人がちょいちょいと

こっちをみて手招きした。

――ヘイ、ローガス氏。これ凍らせておくれＹＯ！

「俺を御指名か。まぁ、構わんが……」

掲げられたのは縦長の寸胴鍋みたいなフォルムの容器。

中になみなみと満たされているのは……うん、水だね。普通の。

水魔法の使い手は多いけれど、その発展系である氷結系魔法の使い手は実はそんなにいない。単純に魔力の消費量や魔法自体の難易度が上がるからだ。

でも、武器に魔法を付与（エンチャント）するタイプの魔法剣士のローガスさんは、殆どの属性魔法を網羅してるらしい。

どんなタイプの敵でも安定して特効持ちになれる前衛って凄い貴重なんだよね。今回にいちゃんが頼んだ仕事は冷凍庫代わりだけど。

ローガスさんがにいちゃんの傍に行くのに着いて行く形で、ボクらも近くに寄る。

「……何となく予想がついてきたな」

テーブルの上に幾つも並んだお椀くらいのサイズの容器を見て、レティシアが呟いて。

ボクとミヤコさんも同意見だったので、二人揃って頷いた。

「ひょっとして氷菓ってやつ？　確かにこういう場所で食べたらおいしそーだし」

シャマダハルさんも察したのか、ボールを人差し指の上で回転させながら興味深そうににいちゃんの手元を覗き込んでる。

正確には日本の『かき氷』だと思うけどね。以前にこの世界で氷菓を食べたとき、にいちゃんは氷がザクザク過ぎやろ……これじゃカチ割氷やん……とか言って微妙な顔してたし。

その手の不満を残した品を皆に出す人じゃないので、記憶にある自分が満足する品に寄せて来ると思うよ。

そこでタイミング良く、《災禍》の二人も戻って来る。

《万器》さんは大きめの壺を抱えてる……中には果物を中心に色々と入ってるみたいだ。

一方の《赤剣》さんは、色んな種類の瓶や小さな樽を両手に抱えていた。多分、全部お酒だねあれ。出掛ける前の不本意そうな顔から一転して満面の笑みだよ。

買い物の内容からして、二人は氷の上にかけるシロップを買いに行ってたみたい。南部特有の、あんまり馴染みのないデッカい果物とかも見えるけど。

「おうおう、御所望の品を買ってきたぞ猟犬の」

壺をそのままにいちゃんの陣取るテーブルの脇に置くと、《万器》さんがアロハの胸元を引っ張って中に風を送りながら、逆の手で額の汗を手の甲で拭う。

「やれやれ、急ぎだっつーからこの暑い中、割と本気で走るハメになったわい――ワシら

がこうして骨を折っとるのは、お前さんらが会う度喧嘩しとるからだぞ？」

台詞の後半は、今も険悪な雰囲気の二人に向かってだ。怒られた《魔王》様と公爵様は互いにそっぽを向いて頭ごと視線を逸らす。

やっぱりそうなるよね。にぃちゃんの発案で二人の気を逸らす様な物を急遽買ってきた、って事だろう。

《魔王》様はなんというか、子供っぽい部分がある人なのでその反応も分かるんだけど……公爵様の方まで叱られた子供みたいなリアクションを取るのはちょっと意外だなぁ。かなり珍しい物を見た気がする。

「仲良くしろと迄は言わんが、この場くらいはバチバチした空気は引っ込めんかい。大将は旅行に誘った面子に通すスジっちゅーもんがあるし、お嬢の方はどういう形にせよ飛び入りじゃろ。先にいる者にちいと配慮くらいはせんとな？」

「……わーったよ、ちっとだけ我慢してやるさ」

「……貴兄が言うのなら、幾らかは聞き入れよう。幾らかは、な」

不承不承、といった感じではあるけど《魔王》様と公爵様が御説教されて同時に首を縦に振るって凄い光景だな。

ボクの中では《万器》さんって《魔王》様の次くらいにフリーダムな人のイメージがあったんだけど……こういう年長者然とした役回りも出来るんだなぁ……ある意味で

はさっきの公爵様より更に珍しい物を見た気分だ。
サイドテーブルの脇に買い込んで来た酒を並べていた《赤剣》さんが、自分用らしき小振りな樽を手に取って呟く。
「いつもそうして欲しいんだけど。頭領（ボス）と《宵闇》の姐さんの喧嘩止められるの《万器（アンタ）》だけなんだから」
――おい、それ初情報やぞ。それならおっさんがそこの二人を諌めれば済む話だったやん。
呆れた声色の、ボヤきにも近い声ににいちゃんが反応した。
かき氷を作る手を止めて抗議の視線を《万器》さんに送るけど、それを向けられた当人は肩を竦めてどこ吹く風、って感じだ。
「バッカ、大将にしろお嬢にしろ、そうそう人の言う事を聞くタマかい。毎回ワシだけで仲裁しとったら身がもたんわ。今回だって《亡霊》の奴に、何度も何度も”頭領の面倒を見てくれ”と念押しされたからやっとるだけだっちゅーの」
つーか、やらんと給料差っ引かれる。と付け足された言葉に、さっき感じた年長者としての威厳みたいなものは気のせいだったのかも、なんて思うボクである。

何はともあれ、にいちゃんは取り敢えず作業を続けることにしたらしい。
材料も既に買っちゃってるからね。《魔王》様達のケンカを抜きにしても、常夏の浜辺で食べるかき氷とか皆喜ぶには違いないし。
シロップの方は先生が担当だった。現在進行形で色んな種類を作ってる最中。
作り方は単純。頑丈な容器に果物と蜂蜜と一緒に入れて、「奮ッ」って掛け声一発。
高速で容器を振ったと思ったら、数秒後には中身は果肉たっぷりの濃厚な果実のソースになってる、という寸法だ。
「徒手の方が手早く作れるのですが、皆様の口に入る品ですからな！　少々手間を頂きますがご容赦をば！」
先生的には、素手で握り潰して圧縮した方が楽に作れるらしいけど、衛生的な視点からみて道具を使ってるらしい。
相変わらず下手な魔法より魔法してる筋肉だよね。自分で言っててちょっと意味分からなくなるけどさ。
でも、にいちゃんの方はもっと自重してない。
だって籠手部分だけとはいえ、魔鎧を起動させてかき氷作ってるし。
今もそうだ。掌底で氷の塊を叩いて振動と衝撃を徹して、限界まで細かく粉砕された

ソレは柔らかな粉雪みたいになって吹き上がる。
飛び散るそれらを《三曜の拳》を使って大気ごと流れを操作、キラキラと輝く雪の粒がそおっと優しく纏まって器に盛りつけられた。
演出という面だけで見ても相当派手なパフォーマンスだよ。芸事にうるさいらしい公爵様が「見世物としても上出来な部類」って評価する位には。実際、ボクも皆も思わず拍手しちゃったし。
本人は”前々からやれそうだと思ってたから、丁度良いのでやってみた”なんて言ってるけど……大丈夫かなコレ……シスター・ヒッチンや《半龍姫》様に知られたらにいちゃん怒られない？
ボクの心配も他所に、にいちゃんはリリィのかき氷にウサギさんカットの林檎を乗せてあげている。
楽しそうだなぁ……《大豊穣祭》で色んな屋台や店を巡ってるときも十分に楽しんでた様に見えたけど、なんというか今は生き生きしてる感じだ。
イベントでは提供側として参加する方が、にいちゃんの性に合ってるのかもね。見ていてボクも嬉しいし、お手伝いして最後に一緒にかき氷食べれば良かった。
「……で、今更だけど、なんでアンタはココに居るんだよ公爵」
そのときだ。ふわふわの粉氷にブルーベリーのソースを掛けたかき氷を口に運びな

がら、レティシアが本当に今更ながら疑問の声を上げる。
ちなみにボクはオレンジソース。口当たりがとっても軽い雪みたいな氷と、濃厚な柑橘のソースとの相性が凄い。コレを食べようと思ったら日本でもちょっと良いお値段すると思う。
「ふむ……あの阿呆鳥相手にも少々溢したが、元より我が身はこの季節、南部を視察と遊興を兼ねて訪れてる事があってな」
公爵様が少し気の無い素振りなのは、手にした器――かき氷に集中してるせいなのかな。
葡萄酒（ワイン）を凍らせた氷の上に葡萄のソースを垂らした品を匙で一掬いした彼女は、紅い舌先を使ってそれを舐め取っている。
「うむ、悪くない。香りは流石に飛ぶが、この陽気の下で口にする氷菓は中々に風情がある」
上機嫌に一つ頷いて――けど視界に《魔王》様の姿を捉えてしかめっ面になった。
嫌そうに眼を逸らした公爵様は、再び手にした器に盛られたかき氷に視線を落とす。
「あの汚泥共が跋扈していた間は滅多に行えぬ道楽の類ではあったが……戦が収束してからは毎年の行いよ――要は、この場でお前達と顔を合わせたのは偶然だ」
「本当かよ……」

レティシアはなんだか疑わしいものを見る目付きだ。

確かに図った様なタイミングでの登場だったから、公爵様を『苦手な女』扱いしてる姉からすると、色々と勘繰りたくなるのかもしれない。

ジトーっとした疑いの視線を受けて喉の奥で笑った公爵様は、再度匙を使って凍った葡萄酒を掬う。

「信じられぬか？　だが、この場で虚言を弄した処で意味など無い。何より――ククッ、貴様と猟犬が行楽に来ていると知っておれば、我が従僕にも海辺に相応しき装いをさせていたとも」

ニヤリと笑うその表情には、口元を歪めて舌打ちするレティシアの反応……それに対する愉悦が滲んでいる。

うわー……悪い笑顔だぁ……でも、それも様になってるから凄いな。美人は何やっても美人を地で行くような人だ。

（嗜虐的な笑みが似合う美人ってのは怖いもんだな……）

（実際、苛烈な人でもあるみたいだね。一緒に戦った吸血鬼も、この人の手で怠惰な同胞が何人も粛清されたり放逐されまくった、って言ってたし）

（こっわ……あたしが見て来た中で一番の御霊峰だから、一回で良いから揉ませてくれないかなー、とか思ってたのに……流石に無理かぁ）

シャクシャクとかき氷を頬張りながら小声で会話する《刃衆(エッジス)》の皆。
その声がちょっと怖がってる様に聞こえるのは、多分気のせいじゃないと思う。
あとシャマダハルさんは勇者過ぎるでしょ。公爵様を間近で見て出て来る感想がソレって肝が太すぎるよ。
そんな会話の間にも、話題のネタにされた《陽影》さんが流石に困った顔で口を開いた。
「主……この場において私は御身の傍に侍る為にいますので……」
「我が身が良いと言うている。いっそ今からでも、お前にあの針子のもとで水着を選んで来いと命じるか迷っている処よ」
そこで一旦言葉を切ると、公爵様はちょっと考える様な仕草をとって……直ぐに形の良い真紅の唇が再びの深い弧を描いた。
「ふむ……そうだな、其れが良い。主として命ずる、今すぐに針子の店へと向かい、場に相応しい衣裳となるがいい」
「あるじ!?」
「良い機会だ、執心の雄(おとこ)に〝欲〟を向けさせる程度の策は打て」
悲鳴染みた声を上げる《陽影》さんに、当の彼女の主はかき氷を口に運ぶ動作を再開させつつ、呆れた声で告げる。

「あれほど再会に向けて気を滾らせていたと言うに、褥に引きずり込む処か口付けすらしておらぬ様ではな。事が進むのは何時になるやら、分かったものでは無いわ」
うぐっ……何となく身に刺さる台詞……！
っていうか、今のってボクらに対してもだよね。明らかにこっち見ながら言ってたし……！
一瞬、『治療』のときに色々凄い事してるし、なんて言い訳みたいな考えも頭を過った。
でも、にぃちゃんがちゃんと起きてる間に何か出来たか、と言われちゃうと……ハイすいません、ボクなりに頑張ったり勇気を出したりしてるつもりなんですが、大したことは出来てないです……。
レティシアとミヤコさんも似た様な結論に至ったみたいだ。
その証拠に、褥云々に反応して口を挟もうとした二人は怯んだ様に沈黙してしまう。
それでもレティシアだけは直ぐに復帰して抗議の声を上げた。
「《陽影》の意見くらいは聞けよ。無理に着替えさせても意味ないだろ。実際、そこのアンナは今でもてるてる坊主のまんまだし」
「おいコラ、私を引き合いに出すなっての」
うん。抗議の声に対してあがる抗議のツッコミっていうも何か変だね。
でも、そんな声に対しての公爵様の反応は、言葉の内容というよりレティシアの切り

返しの早さに注目したものだった。
「ほう？　その返しの早さからするに、貴様だけは多少は進展があるか。察するに唇てい――」
「うぉぁぁぁぁぁっ!?　やめろぉ!?　大勢いる場所で何してくれてんだアンタ！」
愉し気な言葉を手足をみっともなくバタつかせて大声を上げて遮る姉を見て、自分の表情がスッと抜け落ちるのが分かる。
多分レティシアは、大森林――界樹の浄化での件をカウントしてるんだろうけど……アレはノーカンだよ。
だってアレ、有事の際の『枷』の性能チェックみたいなものも兼ねてたし。
なんならボクがシても良かった筈の事を、レティシアが勝手にやっただけだし。
事前の相談抜きのフライング――つまり反則・ルール違反みたいなものだ。
うん、結論は出たね。ハイ証明終了。
「アレはノーカン。異論は認めない」
「アリアちゃんの言う通りね。アレはカウント外よ」
我ながら隙の無い理論だ。ニッコリ笑って断言する。
何故かアンナやシャマダハルさんが「ヒェッ」なんて声を上げた気がしたけど、気のせいだ。

だって当たり前の事を言っただけだし、ミヤコさんだって笑顔で同意してくれてる。
「成程な。神子共を筆頭に、一騎当千の強者同士で牽制し合えば、遅々として事が進まぬのも道理か。あの男も難儀な鞘当ての当事者にされたものよ」
公爵様は納得と呆れが半々の表情となり、《赤剣》さんに混成酒（リキュール）を使ったかき氷について教えてあげてるにいちゃんを横目で見て……続いて後ろに控えたままの《陽影》さんへと振り返った。
「とはいえ、だからこそ。と言うべきであろうな。後発のお前が座る程度の”場”はあるだろう――我が側仕えならば、渇望するモノをその手に握る為の努めを怠るな」
従者が戸惑いながらも頷くのを見届けるより先に、彼女はサイドテーブルに手を伸ばし、置いてある小さなハンドベルを手に取る。
摘まみ上げられたソレが一度だけ振られ、リィンと涼やかな音が浜辺に響き渡った。
「お呼びでしょうか公爵様（パトロン）ァ!」
「うおっ!?」
次の瞬間、ボク達の背後にニュッと生えた――唐突過ぎてなんかもう、そう表現するしかない――店長がビシッと敬礼を決めて叫び、位置的に殆ど隣だったローガスさんが心底驚いてビクリと仰け反る。
「あ、相変わらず気配も何も感じない……」

「つか、《刃衆(アタシ達)》からするとホイホイ後ろ取られるの割と沽券に関わるんですけど。マジでどうやってるし」
「聞いても『お針子の嗜みです』で片付けられてしまうものね……」
アンナとシャマダハルさんも戦慄を覚えた、みたいな表情で顔を引き攣らせてる。
どうやら帝都の工房時代から店長の神出鬼没ぶりは色んな人を驚かせているみたい。ミヤコさんですら近距離に詰められても気付かないって、ホントにどうやってるんだ……。
「従者が海の装いに着替える。そやつの身に最も適するものを選べ」
「ウッヒョーッ！　いえすまむ！　粉骨砕身の心持で選ばせて頂きます！」
命じる側、命を受け取った側、どっちもノリノリだ。戸惑っているのは着替える当人ばかり、って感じだよ……あ、それでも最後の抵抗とばかりに、《陽影》さんがおずおずと手を挙げた。
「あ、あの、出来ればリリィ嬢の着てる様なワンピース型が……」
「それ以上抗弁する様であれば、我が身と同じ水着(モノ)を着せるぞ」
「申し訳ありません黙ります」
脅しなのかよく分からない公爵様の切り返しによって、一瞬で抵抗は握り潰される。
そのまま大人しく店長と連れ立って海の家(おみせ)に向かう《陽影》さんを見送りつつ、レティ

シアが溶けたかき氷の残りを口に流し込んで、ボソッと呟いた。
「てか、アンタも水着とか着るんだな」
「場に適した装いという物はあろう。その衣裳が、纏うに相応しい良き仕事をしているともなれば猶更よ」
ニヤリと頬を吊り上げて、公爵様は着ているサマードレスの肩紐部分を軽く引っ張る。台詞から察するに、どうやら下に水着を着てるみたいだね。
「貴様らに披露してやるのも吝かでは無いが、その前に片付けるべき些事があるでな」
「水着姿をお披露目するのに条件あるってなんだよ」
そっちの方が気になるわ、なんて言う姉の言葉も御尤もだ。
疑問に対して答えが返される前に、一通りかき氷を作り終えたにいちゃんが声をあげた。
――お代わり欲しい人は言って、どうぞ。ただしお腹冷やすから量は最初の半分なー。次はスイカ割りしようず！
そう言って持ち上げられたのは、《万器》さんが買ってきた品の中でも一際大きい楕円形の果物だ。ウリ科っぽいから野菜かもしれないけど。
「お、ならお代わりはやめとくか」
「スイカは当然食べた事あるけど……スイカ割りは初めてだよ、やろうやろう！」

「懐かしいわね、子供の頃にやった記憶があるわ」

初日からかき氷にスイカ割り……《魔王》様と公爵様の気を逸らす為もあるんだろうけど、イベント目白押しだ。正直テンションあがるね！

真っ先に反応したのは、転移・転生組のレティシア、ボク、ミヤコさん。

そもそも類似品はあれど、”西瓜（スイカ）”という品自体を知らない人達は首を傾げてた。

そんな皆に、にいちゃんと、にいちゃんから事前に説明を受けていたらしい先生がざっくりと概要を語る。

スイカ割り自体は単純なレクリエーションみたいなものだしね。直ぐに全員が内容を把握した。

使うのはさっき言った通り類似品――地元の人達には単に甘瓜とかデカ瓜なんて呼ばれてる品だ。

魔族領……とりわけ南部は、気候的にも魔法的な視点からみても肥沃が過ぎる土地だ。

なので、作物全般、ちゃんと吟味した場所なら大きさも品質も極端に良い物が出来る、らしい。流石にほぼ全ての植生が魔力を帯びる霊峰ほどじゃないみたいだけど。

このスイカ擬きもその一つだ。こんなにデッカくて瑞々しいのに、凄く甘いんだって。

これだけ聞くとあらゆる国が羨む土地条件だけど……その分、中型の魔獣なんかが人里にまで頻繁に現れる。それこそ、小さな国なら騎士隊を派遣しなきゃいけない様な危険度の、だ。

それを普通に倒せる人達が農家だったり市場の物売りだったりする魔族領だからこそ、土地の有効活用も可能なんだろうね。

……邪神の軍勢が魔族を孤立させたのは、《魔王》様を自国に縛り付ける為だった、っていうのが一番の理由だと言われてる。

けど、別の理由として、街や村なんかでテロを行っても、道行く通行人が普通に強かったりしてその実行犯を倒しちゃう魔族領の人達を心底煙たがった、っていうのもあるんだと思う――そんな風ににぃちゃんが言ってたっけ。

……ちょっと思考が逸れた。旅行中に変に難しい事を考えちゃ駄目だよね、もっと楽しまないと！

軽く頭を振って、ワイワイと甘瓜を囲んで話し合う皆の輪に加わる。

といっても、皆実戦経験豊富な一流の戦士や魔導士ばかりだ。普通のスイカ割りをやったら目隠ししたくらいじゃ障害にもならない。

なので、ビーチバレーと同じく本来のルールにプラスして魔力強化全般禁止。特に人外級に相当するメンバーはボクかレティシアが幻惑魔法による方向感覚の阻害を行う

事になった。
「では、先陣は誰が切りますかな？」
新たなシートを拡げて甘瓜を設置する先生の言に、二つの手が勢いよく上がる。
シュバッと音が聞こえてきそうな挙手は、リリィと《魔王》様のものだった。
「最初はリリィか。頑張れよ」
「上手く割ったら皆でいただくし、最初に成功させちゃっても全然問題無いの。頑張ってねリリィちゃん」
にこやかに応援するレティシアとミヤコさん。皆も口々に軽い激励を送る。
自然に一番手と見做されたリリィだけど、本人は首を横に振った。
「いえ、リリィより《魔王》様の挙手が早かったのです。ですから「どうぞ姫！　こちらをお使い下さい！」ま……そうですか」
固辞の発言が終わる前に《魔王》様が跪いてリリィに向けて木剣を差しだす。
まぁ、そうなるよね。この人がちいさな女の子と順番被りをしたら、譲らない訳がない。というか子供相手なんだから《魔王》様じゃなくても譲るんだけどさ。
「……では、不肖の身ですが一番手を頂きます。美味しい瓜を皆で頂きましょう」
木剣を受け取り、むん！　とばかりに細い腕で力瘤のポーズをとって、気合のハチマキ代わりに目隠しをして頭の後ろで結ぶリリィ。

スタート位置に移動すると、《虎嵐》さんに支えてもらいながらぐるぐると回り出す。
決めたルールだと二十回転だけど、十回でイイんじゃね？　と言うにいちゃんの言葉は今度こそしっかり固辞された。なるべく皆と同じ条件で挑みたいらしい。
「１９……２０っ……おぉぉ、ぐらぐらします……」これは、思ったより難しそうですね」
「……うむ、足元に気を付ける様に。応援の声をよく聞いて、甘瓜の位置を探りあててみなさい」
「らじゃー、です義父様」
お父さんの声を聴いて、彼女は敬礼してみせた。二十回転が効いてるみたいで、明後日の方向にだけど。
にしても、リリィは語彙というか語録というか……段々とにいちゃんの影響を受けてる感じがするなぁ。
大丈夫だとは思うけど、あんまり変な言葉を教えないようにね、にいちゃん。シグジリアさん達に怒られるよ？
「転ぶなよー」とか「そこもうちょい右回転」とか「左に一歩ずれて真っ直ぐー」とか、皆で応援兼アドバイスを送っていると、ひっそりと、息を殺す様にして《陽影》さんが戻って来た。
「おかえり、《陽影》さん」

「何かの遊戯の最中かい？　正直、ちょっと助かったよ……」
注目を集めたくないらしい彼女は、殆どの視線がリリィに向けて注がれている状況にホッとしている。
それでも真っ先に気付いたらしい彼女の主人――公爵様は、チェアの肘掛けの上で頬杖を突きながら楽しそうに笑った。
「来たか。此の身の側仕えたる者が何を縮こまっている？　見せるを躊躇う程に貧相な身ではあるまい」
「本当に勘弁して下さい主。僕の基準だと、この水着とやらは肌着の類と大差無いんです」
困った顔で身を隠す様に自分の肩を抱いている《陽影》さんの台詞に、アンナが物凄い勢いで何度も頷いてる。水着に対して近い反応の人が現れたのが嬉しいみたいだ。
そんな《陽影》さんの水着は、シンプルな黒のビキニ。ただし、精一杯の抵抗なのか下はボクらと似た様なパレオを着けている。
それでも、彼女を上回るスタイルの持ち主である公爵様が未だサマードレス姿なので、現時点で一番目に毒な映え姿だ。
トップスはもう言う迄も無い。圧倒的なボリュームを誇るバスト。水着によって自己主張度を増している。

隣でゴッ、って鈍い音がしたので見てみれば、レティシアが無表情になって自分の額に拳を押し付けていた。また故障する前に自分で叩いて直したらしい。

大袈裟だとは思うけど……正直、姉の気持ちも分からなくはない。こうまで差を見せつけられると、世の中って不平等だと感じてしまう。

パレオも一見脚が隠れてるけど、ちゃんと見ればトップスとは逆ベクトルで攻めてる。

裾部分がめくれ上がらない様に、スリットがある方の太腿に付けたバンドと繋がってるみたいだけど……これ、逆に妖しい感じになってない？

パレオ自体も黒のレースっぽいデザインだし、スリットから見えるバンドもなんかガーターベルトっぽく見えなくもないし……うん、間違いなく店長さんのチョイスだコレ。

と言うか公爵様が命じてたしね。《陽影》さんにメチャクチャ似合ってるのは確かだ。確か、なんだけどさぁ……！

うぐぐ……！　正直、にぃちゃんには見せたくない。色々ダメでしょコレ。

水着――というか衣類のコンセプトとして、可愛い系とか美人系とか、種類はあると思うけど……公爵様のテコ入れもあって《陽影》さんの水着姿は……ぶっちゃけて言うとエッチ系なのだ。そういう露骨なのは良くないと思います……！

本人は相当に恥ずかしいのか、可能ならアンナに倣ってタオルを被ってしまいたそうにしているけど、彼女の主がそれを許さない。
無情にも公爵様は、親指を立ててクイッとリリィを応援してるにいちゃんを指し示した。
その顔はやはり満面の笑みだ。「行け」っていう端的な命令が無言で――けど、これ以上無く明確に伝わって来る。
諦めた様な……けど羞恥で頬どころか顔全体を赤くして、ギクシャクとにいちゃんのもとに進む《陽影》さんの後ろ姿に、モヤっとした気持ちより先に同情の方が湧き上がって来た。我が事ながら複雑すぎる心境だよ、胸やけしそう。
「……公爵閣下、流石に御自身の側仕えに無体が過ぎるのでは？」
「同感だ。パワハラって知ってるかアンタ」
ボクと同じ気持ちなのか、《陽影》さんへの同情と警戒が入り混じった複雑怪奇な表情で、ミヤコさんとレティシアが公爵様に詰め寄っている。
溶けてしまったかき氷を器に口をつけて飲み干した彼女は、唇に残った葡萄酒（ワイン）の名残を舐め取りながら、やっぱり余裕の笑みを浮かべたままだった。
「ほほっ。二の足を踏んだままの小娘共が吠えよるわ。番う前の雄に独占欲を向けて進展が生まれるとでも？　あの男が己の所有（モノ）であると刻みつけてから、相応の口を叩くの

だな」
「ぐっ……相変わらずこの女は……！」
「レティシアが苦手だと言う理由が分かった気がするわ……」
《陽影》さんを案じる言葉――その奥にある複雑な感情を見透かされて、二人の顔が苦々しいものに変わる。
あの二人の圧のある視線を同時に向けられて、愉しそうにそれを受け止めるとか肝が据わってるってレベルじゃない。実際、アンナ達は平然としてる公爵様を見て驚愕してるし。
そして案の定、にいちゃんは《陽影》さんの水着姿を至近距離でお披露目されて、挙動不審になっている。
視線を彼女の胸元や腰回りに向けない様にしたせいで、自然と顔――つまりは見つめ合う形になった二人。
当然、そのままにしておくのはモヤっとするので、ボクはさり気なく傍に向かった。
「にぃちゃーん？　公爵様に着替えさせられて恥ずかしがってる人をあんまりじろじろ見たらダメだよ？」
――ご、ごごご誤解でござる！　谷間とかガーターっぽいの付けたおみ足とか見てないでござる！

「うん、語るに落ちてるよ？」

視線を上と左右に激しく泳がせて更に挙動不審になるにぃちゃんを、少しだけ意地悪な気分になったボクはジトーっとした目で下から見つめる。

この自爆みたいな言動も、半分はワザとなんだろうけどね。《陽影》さんの格好の大胆すぎる部分を遠回しに指摘しつつ、ついつい見ちゃった事も正直に告げてるんだから。

他人に分かり辛い、気づかれにくい形で紳士さを見せるのはにぃちゃんの悪癖だ――ボクは気付いてるし、そういう処も良いと思ってるけどな！

……問題は、にぃちゃんになら見られても寧ろオッケーだと思ってそうな《陽影》さんが、その分かり辛い紳士ムーヴの対象な訳で。

頬は相変わらず赤く、モジモジとしながら自分の蜂蜜色の髪を指先で弄んでいる彼女の瞳には、紛れも無い歓びの色が灯っている。

今の格好もあって破壊力が凄い。常夏の空気は人を解放的にさせるって言うし、視覚的に分かりやすい巨乳（つょみ）を持つ《陽影》さんは、侮れない強敵だ。

本人が二番、三番でも構わないっていうスタンスだって聞いたとき、正直ホッとしたのは記憶に新しい。

「ククッ、同じ神子でも月の方は中々に抜け目がない――そうと気付かず網を抜け、獲物を咥えかねん猫といい、銀の毛並みは強かの証なのか？」

なんだか背後から揶揄を含んだ声が聞こえるけど、気づかないフリ。
声の主が弁が立つどころじゃないのは嫌と言う程理解したし、下手に反応したり反論を試みても愉悦の為の燃料を与えるだけだ。レティシアみたいについつい反応して玩具にされるのは遠慮したい。
「――捉えました、ここです」
そんな中、皆の声援を受けて最後の位置調整を終えたリリィが木剣を振り上げ、えいやっとばかりに振り下ろす。
振り上げた時点での位置はほぼ正解。足元にはきちんと甘瓜が鎮座している。
でも、魔力強化無しだとリリィに木剣は重かったみたいだ。
重さに負けて泳いだ切っ先は、大きな甘瓜を掠める様にして敷かれたシートを叩くに留まったのだった。

「……駄目でした。あれ程皆様に応援して頂いたのに、未熟を痛感します」
「いや、惜しかったぞ嬢ちゃん。子供用の木剣を用意せなんだワシらのミスだわな」
「……三席殿の言う通りだ。振り上げた時点では直撃の軌道だった」

がっかりした表情で目隠しを外すリリィ。その肩を優しく《虎嵐》さんが抱き、《万器》さんが笑いながら頭を撫でている。

「確かに惜しかったけど、スイカ割りは遊びの一種だ。そんなに気負う必要は無いぞリリィ」

レティシアの言う通りだね。

失敗しちゃったら笑って次の人にバトンタッチ、一生懸命応援すれば良いんだよ。

「むむっ……そうですか。では、リリィは次の方を全力で応援させて頂きます」

消沈した表情が消え、リリィがふんす、と両拳を胸元で握って気合を入れたと当時。

砂浜に突き立てられた木剣を引き抜き、一振りして肩に担いだのは《魔王》様だった。

「後はお任せを姫！　無念は俺が晴らしてみせましょう！　きっちり当てて一発で粉々にしてやるのでどうかご覧下さい！」

――粉々はやめろや鳥。後で皆で食うんやぞ、砂まみれの破片食わせる気か。

気合の入り過ぎてる《魔王》様に対して、にいちゃんが即座にツッコミを入れている。

実際、魔力強化抜きでもこの人がちょっと力んで叩いたら、ただの瓜とか文字通り消滅するだけだ。鼻息も荒い今のテンションでちゃんと加減出来るのかな……？

大丈夫かコイツ、みたいな目で皆が気合満タンな《魔王》様を見ていると、《赤剣》さんが買い物で果物を入れていた壺――中身がカラになったソレを抱えて持って来た。

「まぁ、最初に手ェ挙げてたし、二番手に異論は無いかな――ハイ、頭領。これどうぞ」
そうして、ごく自然な動作で壺を《魔王》様の頭に被せる。
壺頭になった本人から、当惑した様な声が漏れた。
「……え、なにこれ」
「いや、アンタは普通のハンデじゃ全然足りないでしょ。頭領はこれ被って」
「ちょっと酷くない？　あと声出すと中で反響してスゲェ煩いんだがコレ」
「酒の。壺の前に目隠しと耳栓を忘れとるぞ」
「あ、そうだった。じゃ、これもちゃんと付けて下さい」
「酷くない？」
「回転数も二百でよろしく。ちなみに１０秒以内で回り切って、どうぞ」
「ひどくない？」
文句は悉くスルーされ、更に目隠しと耳栓を手渡されて、スンッと平常のテンションに戻る《魔王》様。
ブチブチと文句を零して目と耳を塞いでるけど、言われたハンデ自体はしっかり守る気みたいだ。よーいドン、という《赤剣》さんの声と同時に、片足で爪先立ちになって竜巻みたいな勢いで回転を始める。
砂煙を吹き上げながらドリルみたいに足元を穿って埋まっていく《魔王》様を見て―

—公爵様が薄っすらと嗤った。
「ふむ、そろそろ頃合いか。まぁ、機会としては丁度良い」
そう独り言ちて、ゆっくりとビーチチェアから身を起こして立ち上がる。
意味深だけど真意の伺えない言葉に、不穏なものを覚えたのはボクだけじゃない筈だ。
発言の意味を聞きたい。けど、浮かべた笑みが恐ろしく綺麗で——それ以上に怖くて聞けない。
（あれ、不味くない？　何をするつもりなのか聞いた方が良い様な……）
（いや、無理だろ。あの笑顔はヤバい、聞いたらダメなやつだ）
姉妹（きょうだい）でヒソヒソとやり取りするも、解決策は出なかった。
ボクらの中では一番気安い会話が出来るレティシアですらちょっと怯んでいたんだけど……先生が穏やかな口調で、ごく普通に公爵様へと問いかける。
「公爵閣下は何やら思い至った御様子。愚僧にその深慮を慮るが可能な筈もありませぬが……穏やかならぬ結果を呼び寄せるは、どうか御容赦を願いたく」
すげぇ……と、にいちゃんが先生を見て呟くのが聞こえた。
いや、でも実際凄いよ先生。あの笑みを浮かべた公爵様に、柔らかめとはいえ説法みたいな事が言えるんだから。

教国と帝国のメンバー全員が、先生に向けて少なからず尊敬の視線を向ける中、やんわりと御説教された公爵様は気分を害する処か「ほう？」なんて言って面白そうに頭四つ分くらい上にある先生の顔を見上げる。
「貴様が年長に向けて説法とは、中々に珍しいなグラッブス――そこまであやつらの遊興の時間が大事か」
「拙僧は御二方の目付であります故。普遍的な旅行の妙とは縁遠い、無骨者の我が身ではありますが、今回の旅行、お若い方々が憂いなく楽しめる時間となる事を強く願っております」
「過保護、と言ってしまえばその通りだが……終戦後の二年と貴様やあの堅物娘の性根を併せてみれば、そうなるも止む無しと言った処か」
先生に対してすらクツクツと愉しそうに笑う公爵様。もう何ならこの愉悦の笑みが崩れるんだろう、ある意味無敵すぎるよこの人。
結局、何をするのか語る気は無いらしい公爵様は濃藍の髪をゆっくりとかき上げた。
二百回転を終えて砂浜に埋まった足を引き抜き、改めて壺を被り直した《魔王》様を道端を移動するゲジゲジを見る様な目で眺めている。
「ウェップ……流石に酔った……あ、でもなんか治って来た」
「相変わらず復帰が早すぎるんだよなぁ」

「金銀の嬢ちゃん達、二人で幻惑魔法頼むぞ。回転酔いは大して意味がなさそうだわい」
不安は残るけど……公爵様が話さない以上どうしようもない。
《万器》さんのリクエストに応えて、取り敢えずボクとレティシアは《魔王》様の頭部に向けて魔法を飛ばした。
聖女は魔法全般に強いけど、その中でもデバフ系だけははあんまり得意なジャンルじゃないんだけどね。
それでも二人掛かりなら相手が人外級でもそれなりに……って手応えが硬い。
ボクらの魔力が浸透しない。なんというか、ゴムの塊に水を染み込ませようとするかのような、そもそも無理だろって感じの感触が返って来る。
「おい《魔王》、耐性緩めてくれ。普通に耐魔（レジスト）されて通らないって」
「待てって、今やってるから。頑張って下げてるんだよこれでも」
「頑張って下げてるのにこの魔法耐性（かたさ）かよ……」
なんつー出鱈目な生き物だ、とボヤいたレティシアの台詞を、ボクは否定できない。現在進行形でその理不尽な魔法耐性を体感してるので特に。
壺頭な《魔王》様が壺ごと頭を抑えて唸り声を上げると、ようやく、ほんのちょっとだけ幻惑魔法が通る手応えがあった。
「おぉ……？　なんか酒に酔ったような……酩酊感とか久しぶりだな。なんか感動す

る」
「分かったから早く始めてくれ。今にも耐魔（レジスト）されそうで維持が地味に面倒くさい」
心なしか嬉しそうな《魔王》様に向け、ぞんざいに手を振ってスイカ割りを開始しろと訴える姉（あに）。ちょっと申し訳無いけど、これにも同意見だ。
微妙に千鳥足になった《魔王》様が、その場で更に十回転くらいした後に砂浜を歩き始める。
足取りが少し覚束ないとはいえ、これだけ五感に制限を掛けた状態なのに進む方向自体は間違ってないのは流石だ。ゆらりゆらりと、確実に甘瓜の方へと近付いている。
そんな姿を見て「割るだけだぞー、吹き飛ばすなよー」とか「失敗（ミス）ったら他の同僚達に話したいから空振りよろしく」とか、応援というより野次に近い声が多く上がってるよ。
それを受ける本人は楽しそうなんだけどね。いや、頭に壺被ってるし、表情は分からないんだけど雰囲気でなんとなく。
「そのまま真っ直ぐなのです……あ、今ので右にズレました。一歩分修正を」
そんな中でも、リリィだけはしっかりと声援と助言を送っていた。
《魔王》様もそれは聞こえているのか、決して声量が大きいとは言えないリリィの声をしっかり拾って「了解しました姫！」なんて言って木剣を元気に振り回してる。

更なる応援の為に、リリィが手でメガホンを作って声を上げようとして――そこで彼女の肩に手を置いて制止する人が現れた。
「……？　何か御用でしょ――」
振り向いて、不思議そうに小首を傾げるリリィ。疑問の声が唐突に途切れる。
小さな唇にそっと指先を添えて、動作だけで静かにする様に促したのは公爵様だった。
いきなり義娘の傍に現れた人物を見て《虎嵐》さんがちょっと身構えるけど、少し笑って首を横に振る公爵様。身振りだけではあるけど「リリィには何もしない」と示す。
……何をするつもりなんだろう。《魔王》様のお気に入りだからって何かするような人では無いのは分かってるけど。
ボクらの視線が集中してる事は一切気にせず、彼女は両膝を砂につけてリリィと目線の高さを合わせ、軽く自分の喉に手を当てた。
微かに「んんっ」と声が漏れ、まるで喉の調整を行うように深呼吸が行われる。
「――少しズレています。身体の軸を左斜めに」
紅い唇から流れ出た声は、リリィのものとそっくりだった。
皆の眼が軽く見開かれ、唖然として公爵様を見つめる。《災禍の席》の二人は既知だったのか、顔を見合わせて肩を竦めてるけど。

魔力の流動は一切無い。つまり、魔法の絡まない純粋な技術って事だ。
声真似……というより声帯模写って言うべきかな。いや、普通に凄いよ。確かによーく聞けば元の声が公爵様のものだって分かるけど……それはこうして目の前で見てるからだ。
この声で後ろから呼ばれたりしたら普通に気付かずにリリィだと勘違いすると思う。少なくともボクは引っ掛かる。
耳栓やら目隠しやら壺やらに加え、自分で基礎能力や耐性を限界まで縛り、更にボク達の幻惑魔法で五感の精度を落としてる《魔王》様も、流石に気付いてないみたいだ。公爵様の声に従い、素直に進路変更した。
「もう少し左です――そう、そのまま真っ直ぐ」
「こっちですか姫！」
「良いですね。そのまま進んで下さい」
「姫！　なんか足元に波が当たってる気がしますが！」
「気のせいです、真っ直ぐなのです」
誘導されるがまま、砂浜を進む《魔王》様。
もう足首まで海に入っちゃってるよ……素直過ぎる。リリィの言う事ならどれだけ脊髄反射で聞き入れてるんだ……。

ざぶざぶと進んで普通に海の中に進んで行って、深さが腰まで行った辺りで公爵様が無造作に腕を掲げ、指先を擦り合わせて打ち鳴らした。
パチィン！　という快音。
一拍おいて、《魔王》様の直ぐ目の前（目は塞がれてるけど）の海面が、爆発したみたいに膨れ上がる。
「え」
呆けた声は、浜辺の誰かのものだったのか、それとも《魔王》様のものだったのか。
「ＧＹＵＩＩＩＩＩＩＩＩＩ!!」
固い肉が擦れ合う様な、なんとも言えない鳴き声と共に波が豪快に弾ける。
海面から飛び出して来たのは、物凄くでっかい、無数の吸盤の付いた触手だった。
見た目からして巨大なタコの足にしか見えないソレは、《魔王》様に向かって一瞬で絡みつき、海に引きずり込もうとする。
「うおぉぉぉっ!?　ちょっ、何だオイ!?」
流石に焦ったのか、慌てて被っていた壺に手を掛けて頭から引っこ抜こうとする《魔王》様だけど、その直前に二度目の指を打ち鳴らす音が響き渡った。
「……!　ぬ、抜けねぇ!?　こいつは影の固着……オイコラてめぇかぁぁぁっ!?　何してくれてんだＢＢＡァァッ!!」

幅だけでも牛の胴より太いタコ足に拘束されながらも、壺頭から反響する様な怒声が上がる。

視界が塞がれたまま触手を外そうとする《魔王》様だけど……何故か手間取ってる感じだ。彼がその気になれば、引き千切る位は簡単に出来る筈なのに。

再び上がる咆哮じみた鳴き声――多分、あのタコ足の持ち主のものなんだろう。

「ＧＹＵＩ！　ＧＹＵＵＵ♪　ＧＹＵ！」

……なんだろ、本体は海の中で見えないし、見えてる足だってちょっとグロテスクな蛸の足なんだけど……海面から響いて来るその鳴き声はちょっと楽しそうというか、見た目に反して邪気を感じない。

「あやつは去年の遊興にてこの地を訪れた際に、近隣の海を荒らしていた魔獣よ」

リリィの頭を一撫でして、公爵様が立ち上がる。

「といっても、普段は深海で苔と小魚を食って過ごしておる小僧でな。地上の腐臭――あの汚泥共の気配が薄れたのを機に好奇心で海上に昇り、遊泳していたらしい。図体と、それに見合わぬ移動速度の御蔭で幾つもの漁船と衝突を起こしていた故、気紛れに我が身が叱りつけてやったのよ」

バシャバシャと水飛沫を上げて、徐々に海に引きずり込まれている《魔王》様を見るその顔は、ものすっごく愉しそうな笑顔だった。

どうやら公爵様は去年海に遊びに来た時に、悪気無く近隣の漁業海域を荒らしていた魔獣をお仕置きした、って事らしい。
それ以降は使い魔というか、舎弟（ペット）というか……とにかく、ちょっと懐かれて呼べば現れるようになったとか。
「種族年齢は若年の部類ではあるが、魔獣としての格は周辺海域の主級に相当する小僧よ――遊戯の相手に飢えている故、たっぷりと付き合ってやるがいい」
「てめぇ後で覚えてろ!?　直ぐにオボァガボボボボボッ!?」
「ＧＹＵＩＩ～☆」
巨大な触手による爆音みたいな水飛沫に、怒声と楽しそうな鳴き声が重なり、そして――。
トプン、と。
最後に小さな飛沫を一つ上げて、《魔王》様と蛸足は海へと消えた。
「――さて、これで騒がしい上に目障りなモノは消えたな。スイカ割りとやらを続けるが良い」
「あんなド派手にやらかしておいて第一声がソレかよ」
上機嫌にビーチチェアへと座り直した公爵様に向けて、レティシアがビシッとツッコミを入れる。

平然とかき氷に使った葡萄酒（ワイン）の残りをグラスに注ぎ始める彼女に向けて、《万器》さんが無言で近づいて――なんとその頭に向けて拳骨を落とした。
「あ痛ッ」
小さく、短い声ではあったけど、泰然とした女王様みたいな人の口から飛び出るには可愛らしい悲鳴が上がる。
「痛い様にやっとるんだっつーの。――まったく、珍しく大将が我慢しとったのに、お前さんの方からやらかしてどうする」
「……アレにはそこのエルフの娘という、機嫌を上向かせる源があったではないか。我が身ばかりがアレを視界に入れる度に我慢を強いられるのは不本意だ」
拳骨された頭頂部を撫でながら、公爵様が抗弁。
チェアから身を起こして《万器》さんを見上げるその表情は、驚いた事に拗ねた様に唇を尖らせていた。
なんだかさっきから怒涛の展開で情報過多になりつつあるけど……更なる驚愕の追加が来たな。そろそろボクはお腹いっぱいだよ。
隣のにぃちゃんも同意見みたいだ。頷きながら、スイカ割りしても食えるかねコレ……なんて言ってお腹を擦っている。
でも、驚くのも仕方ないと思う。公爵様があんな表情するとか予想外だよ。

そういえば、最初に《万器》さんに叱られたときも、素直に彼の言葉を聞き入れてたっけ。《魔王》様とは幼馴染って話だし、《万器》さんとも昔馴染みなのかもしれない。

その間にも件の二人は、叱る側と言い逃れようとする側で会話を続けていた。

「元より、今日は針子の新作を着て遊泳する予定であった。あの阿呆鳥がのさばっていては、おちおち水着姿にもなれん」

「別に水着姿を見せる位ええじゃろが。初心な小娘でもあるまいに」

「無論、此の身の肢体に恥じるべき点など何一つ無い。だが、アレの居る場で肌を晒すなど御免被る」

「小娘どころかガキんちょか、お前さんは」

嫌なものは嫌だ、そう主張して譲らない公爵様を前に、珍しく《万器》さんが疲れた顔で空を仰いだ。

そのままグリッと首を真横に向け、まるっきり他人事な顔で小さな酒樽から麦酒（エール）を直飲みしてる《赤剣》さんに視線を向ける。

「……な？　大人しくしとる様に見えていきなりコレだぞ。毎回仲裁しとったら身がもたんだろ？」

「うんまぁ……偶には苦労しても良いんじゃないかな。《亡霊》さんの代理だと思えば」

「かーっ、他人事だと思って気軽に言ってくれるのぅ」

バリバリと頭を掻きむしって、嘆息して。
それで切り替えた《万器》さんは、一応の確認とばかりに公爵様へと再度問いかけた。
「あのタコ坊主、お嬢の言う通りに大分若い様だが……この辺りの主級なんじゃろ？大将と遊んで怪我でもしたら、縄張りに関わるゴタゴタが起きんか？」
「問題無い。アレ――オクトは、あやつの基準でじゃれついているだけよ。あの阿呆鳥は、敵意も悪意もなく戯れて来る小僧に傷を負わせる真似はすまい」
通りで拘束を抜けられない筈だよ。怪我させない様にしてたって事か。
仲の悪い二人けど、彼女も《魔王》様のそういう部分は信用してるみたいだ。
だからこそ躊躇なくあのでっかいタコをけしかけたって考えると、嫌な信用の仕方だなぁとは思うけどね、正直。
「名前まで付けてんのかよ、完全にペットじゃねーか」
「案を出したのはあの針子だがな」
レティシアの再びのツッコミに端的に返し、グラスに注いだ葡萄酒（ワイン）を一気に飲み干して公爵様はもう一度立ち上がった。
「さて……折角だ、砂浜の遊戯を体験するも一興よ」
サマードレスの肩紐に手を掛け、ボタンを外して無造作に脱ぎ捨てる。
清楚なデザインですらあったドレスの下に隠されていたのは、艶めかしい白い肌と、

ワインレッドの水着だった。
――あ、なんか嫌な予感――ホアアアアアッ!?　首がぁぁぁぁっ!?
「あ、ご、ごめんねにいちゃん。つい……」
ボクは慌てて謝りつつ、にいちゃんに向けて回復魔法を発動させる。
つい反射的に身体が動いてしまった。にいちゃんの首を横に曲げて、公爵様を視界に入れない様に。
……けどさ！　それも仕方ないと思うんだよ！
なんだよアレ！　水着なのアレ!?
公爵様の水着は、なんというか凄かった。
シャマダハルさんのパレオの下とか、《陽影》さんのビキニなんて目じゃない。というか布地が少なすぎる！　紐!?
上も下もかろうじて大事なところが隠れてるだけじゃん！　グラビア雑誌とか、グラビアアイドルのイメージビデオとか、そーゆー業界でしか見ない様なやつだよ！
スタイルがぶっちぎりなのは最早言う迄も無い。
女性陣で一番の長身な上、《陽影》さん以上のバストサイズで、それなのに全然重力に負けてない。
ウエストはシャマダハルさん並みに細くて、お尻はミヤコさんより大きくて同じ位に

引き締まってる。皆が合体して生まれた無敵超人かな?

「あぁ、とうとう見せてしまった……城の者達がみたら揃って悲鳴を上げて服を着せようとするだろうなぁ」

頭痛を堪える様な仕草で指を額にあて、《陽影》さんが溜息を漏らしている。

さっき同じ水着を着せるぞ、なんて脅されて秒で屈した彼女だけど……今となっては納得だよ。あの水着を着るくらいなら、そりゃ普通のビキニの方が遥かにマシだもん。

先生と《虎嵐》さんは直ぐに眼を瞑ったみたい。特に先生の方は目隠しして鍛錬とか偶にやってるので、全然問題無さそうにかき氷用のシロップを片付けている。

リリィは眼を閉じて動かないお義父さんを見上げて困惑してるね。ちょんちょんと指で腕を突いて、虎毛に包まれた手をそっと握った。

「……義父(とと)様、何故おめめを閉じているのですか?」

「……他の娘達はまだ衣類と呼べる装いだが、あれは駄目だ。女人の肌は、見るも触れるも生涯妻のみと決めている」

「むむっ、義母(かか)様とお風呂に入ったという事ですか?　二人だけでズルいのです。リリィも一緒に入りたいです」

「……うむ、そうだな。機会があれば、それも良い」

苦笑いしながら、リリィと小指を絡めて約束を交わす《虎嵐》さん。

見ていてほっこりする光景だけど、突如として砂浜に発生したスーパーモデル級のR指定姿は他の人達にも混乱を齎している。
「うっわ……エッロ……で、なんでおじさんは背を向けてるのさー？　助平の癖に」
「目の保養を通り越して毒だありゃ。下手にアレに見慣れると、後の生活に障りが出そうなんでな」
「どーせ娼館行っても比べちゃって興奮しなくなるとかそんなんっしょ。サイテー、《虎嵐》さんを見習えー」
「妻子持ちと一緒にするなよ……こちとら堂々たる独身貴族だぞ」
「私は隊長一筋私は隊長一筋私は隊長一筋……それはそれとしてあのくびれのラインはアンナちゃんポイント四桁の破壊りょぐふぅっ……！」
「アンナちゃん!?　大丈夫!?」
帝国の人達も喧々囂々、死屍累々って感じだ。謎ダメージを受けて屍みたいになってるのはアンナだけだけど。
レティシアもサマードレスがチェアの上に放られると同時に眼を剥いてた――直ぐにいちゃんの方を見たけど、安心してよ。ボクが首を曲げた方角を見たまま、ずっと目を閉じてるから。
護身完了……！　とか呟いてるにいちゃんを見て安心したのか、姉(あに)は公爵様へと視線

を戻す。
「アンタなんつー格好してるんだよ！　露出度が高いって言っても限度があるだろ!?」
「先にも述べたが、我が身に晒して恥ずる点など一つとして在りはしない。精々眼福を噛みしめて仰ぎ見るがいい」
「その姿で胸を張るんじゃねー！　嫌味かコラ!?」
　圧倒的なプロポーションを惜しげもなく陽の下に晒し、公爵様は歩を進めた。
　スイカ割りが始まったので、ちょっと砂を掘った窪みに置いたボールを掴み上げると、軽く宙に放り、キャッチする。
「びーちばれー、だったか？　貴様らの住んでいた異界は、球遊び一つとっても技や規則が洗練されている。遊興の一環としては中々に悪くない」
　五指でボールを掴んで顔の横まで持ち上げると、妖艶な美貌に愉悦とは別種の――不敵な笑みが浮かんだ。
「どれ、我が身と我が側仕えが相手をしてやろう。畏れぬ者は挑み来るが良い」
　えぇ……また唐突な。
　そうと言われて意気揚々と手を挙げる空気でもない。
　驚きと困惑がない交ぜになった表情で、ボク達は近い面子で視線を交わし合う。
「ふむ、気が乗らんか？　ならば、そうさな……」

鮮血を思わせる真紅の視線が、首を真横に向けたままのにぃちゃんを捉えた。
「猟犬よ、貴様はスイカ割りとやらの続きを進行させよ。あの幼子に再び挑ませるも良いであろうよ――それとも」
貴様が我が身と戯れてみるか？　なんて言葉と共に、チロリと紅い舌が同じく紅い唇の上を這う。
にぃちゃんの反応は早かった。
いえすまむ！　命に従います！　なんて叫んで敬礼。そのまま回れ右してリリィのもとへ向かう。
それを妖しい笑みを浮かべたまま見送った公爵様は、にぃちゃんがあっちでスイカ割りの続行を言い出すのを確認してボク達へと視線を転じる。
「さて……尻込みしている小娘共に、気炎を灯す為の餌をぶら下げてやろう――びーちばれーとやらで我が身に勝利すれば、我が血族に伝わりし褥に用いる魔導を幾つか伝授してやる」
ざわり、と。
声こそ上がらなかったけど、何人かの雰囲気が変わって、空気が動いた気がした。
分り易く目の色が変わったのはレティシアだ――多分、ボクもだけど。
それでも警戒感が先立つのか、少し疑わしい視線を公爵様に向けている。

「血族、って事は吸血鬼（ヴァンパイア）固有の魔法か……そもそも人間が覚えられるモンなのかそれ」
種族由来、となると確かにその疑問は出て来るよ。習得自体が困難か、そもそも習得しても他の人類種に対しては使用が向かない可能性だってある。
いち魔導士としては抱いて当然の疑問だけど、公爵様はレティシアにボールを放ってパスすると、軽く肩を竦めた。
「先達や同胞達が体系化した事により、初歩の術は純然たる魔法技術へと転換された。確かに応用や秘奥は人間ではほぼ習得不可能だが……元より生娘でも獣の様に乱れる呪や、枯れた雄が三晩猛り続ける香の生成といった、性に奔放な者共が作り出した冗句の類よ。貴様らには十年早いわ」
み、三日三晩……しかも枯れてる人でもと来た。
普通に健康的な人なら、どうなるんだろう……に、にいちゃんはちょっと前に不調も治ったみたいだし、凄い事になるんじゃ……。
いや待て、落ち着けボク。そもそもそれは応用・秘奥だって言ってるじゃないか。教えてくれるのは初歩っぽいし、そこまでとんでもな魔法でもないだろう。
ぐるぐると色んな思考が脳内を駆け巡る。顔がなんだか熱い。
初歩なら前衛型の戦士系の人でも十分習得可能、という言葉を聞いて、ちいさく唾を飲み込む音が聞こえた。多分、ミヤコさんだ。

生存戦争真っ只中の世界に転移・転生したボク達が真っ先に触れた魔法は、戦いに関するものばかりだった。

この世界の人達が最初に覚えるのは、火種を生み出すとか、少量の飲み水の生成とか、日々の生活に使えるちょっとした魔法なんだけど……ボクとレティシアは確か初っ端に回復魔法と浄化、次いで普遍的な属性攻撃系の魔法だったと思う。

多分、ミヤコさんも似た様なものだろう。そうでなくとも早々に身体強化を習得する為に、色々と段飛ばしだった筈だ。

それだけに生活に根差した魔法（モノ）は、後々に覚えてもなんとなく馴染みが薄いままで……だからこそ、夜の生活に特化した魔法、なんていうのはちょっと衝撃的だった。

「……教国だと、エロ系魔法なんて幾ら資料文献探しても見当たらなかったんだけどな……おそるべし魔族領」

渡されたボールを手に、戦慄を滲ませた口調でレティシアが呟く。

というか、探した事あるんだ。図書室でエロ本探す小学生みたいな事する聖女ってどうなのさ……。

いつもだったらその辺りをミヤコさんも指摘して、ちょっとした口喧嘩が始まったりするんだろうけど、今はそんな空気も生まれない。

主にボクとレティシア、ミヤコさんで「どうする？」とばかりに視線を交わし合い―

―躊躇いながらも、少しずつ公爵様の誘いに乗る雰囲気になって来ている。
そこに、更なる爆弾が落とされた。
公爵様はビーチバレーに強制参加させるらしい《陽影》さんに向けて振り返り、笑みを深める。
「当然、お前にも飴はあって然るべきよな。この戯れで小娘共を全て下した暁には、同じ術を手ほどきしてやろう――ククッ、お前であれば、秘奥まで習得できるやもしれんなぁ」
「……ふぁっ!?」
水を向けられた《陽影》さんは不思議そうに首を傾げた後……一拍置いて驚愕の表情になると、素っ頓狂な声を上げた。
「あ、主!?　元をただせば、秘奥は長寿故に出生率が低い爵位級吸血鬼（ハイ・ブラット）の方々の為の魔法なのでは!?」
「そういった側面も無くはない――が、先にも言うたであろう。秘奥などと謳った処で、その実同胞の戯れ混じりよ、殊更に秘匿するものでもないわ」
アワアワと手をバタつかせて言い募る従者を見て、公爵様は物凄く愉しそうにニヤニヤしながら煽る様に――否、色々諸々煽る気満々で続ける。
「秘奥を修めた後にあの男と懇ろになれば、元来他種と子を為すのが困難な吸血種（われら）で

あっても障り無いであろうよ。初の伽で懐妊というのも中々に浪漫があるではないか、ん？」

ミシリ、と革が軋むと共に、レティシアの手の中にあるボールが縦長に変形した。

能面みたいに表情が抜け落ちた姉(あに)は、素の腕力で革張りの球を押し潰しながら抑揚に欠けた声で問いかける。

「……一応聞くが、オレ達がアンタの遊びに付き合わないと、どうなる？」

「当然、我らの不戦勝だな」

その場合、自分の側仕えに件の魔法を余さず教える事になる。

公爵様の顔は、言葉にはしなくともそのつもりである事が確信できる、愉悦に満ちた笑顔だった。

返って来る言葉は予想がついていたのか、レティシアは特に反応する事も無く静かに目を閉じる。

――数秒後。再び双眸が開かれると、その顔は一変した。

眼前の濃藍の髪の美女を見据える表情は気迫漲り、燃え上がる闘志に満ち満ちている。

顔だけじゃない。ボクと同じ空色の瞳は、焦燥とか決意とか欲望とか嫉妬とか、なんかもう後半聖女らしからぬ感じの気炎でギラつき、揺らめいてすら見えた。

「ミヤコ、手伝え」
「ええ。呉越同舟というやつね」
端的な誘いの言葉に、同等の気迫を垂れ流し始めたミヤコさんが頷く。
教会最高戦力の《金色の聖女》と帝国最強の騎士である《黒髪の戦乙女》が並び立ち、眼前の強敵に対して手を携えて立ち塞がった。
「アリア。公爵と《陽影》の動きや連携によっては、オレよりお前の方が相性が良い可能性も有る。準備しといてくれ」
「分かった」
肩越しに振り返って告げられた言葉に、ボクも動じることなく頷く。
発火しそうなやる気の炎を背に負う二人だけど、それを見て何を思う事も無い――だって、ボクも今、おんなじ様な状態の筈だから。
微妙に距離をとり始めた他の《刃衆（エッジス）》の皆の隣に向かい、相手の動きの観察を兼ねた観戦をするつもりで腰を下ろした。
「……皆も座ったら？」
「「アッ、ハイ」」
奇妙に鯱張ったアンナ達が、ギクシャクとした動きでボクに倣ってその場に座る。なんで緊張してるんだろうね？　変なの。

砂浜に突き立てられた二本の木製ポールと、網型（ポールネット）ですらない一本のロープ――それらを挟んで、レティシアとミヤコさん、公爵様と《陽影》さんが対峙する。
「――勝つ。ぶっ倒す」
「……こちらが勝ったら、先の言葉を履行してもらいます。公爵閣下」
「フッ、その意気や良し。来るがいい」
「なんでこんな事に……あぁでも、秘奥……僕はどうしたら……！」
四者四様、それぞれの胸中を強く、言葉にして。
レクリエーションでやるビーチバレーとは思えない戦意が渦を巻き、負けられない戦いの火蓋が切って落とされようとした、そのときだった。
「オラァァァァァッ！　高いたかぁぁぁぁぁいっ!!」
「ＧＹＵＵＵＵ！　ＧＹＵＩＩＩＩ♪」
沖の方角から変な叫び声が上がり、此処から見ても巨大だと分かる水柱が上がる。
海面を突き破って現れ、高々と空を舞ったのは、全長が３０メートルを超えてそうな怪獣みたいなサイズのタコだった。
八本ある手足をわちゃわちゃとバタつかせ、海で泳ぐみたいに空気を掻こうとするそ

の姿は、遠目に見ても「たーのしー！」という主張・感情が伝わって来る。
そのままドッボーン、という魚雷が爆発したみたいな音と共に着水する巨体。あ、でもまた空に跳んだ。
今もレティシアが手にしてる、ビーチバレーに使っているボール。
それを放り投げました、みたいな気軽さで宙を舞う、大型船を上回るサイズのタコさん――確かオクト、だっけ？――の姿。
皆が呆気に取られてその馬鹿げた光景に魅入る。
当然ボクも視線が釘付けだったけど……大きな舌打ちの音が聞こえて思わずそちらの方へと目を向けた。
「……チッ。悪戯好きの小僧同士、意気投合もするか。にしても、この短時間で友誼を結ぶのは流石に予想の外であったわ」
忌々しい、とばかりに顔を歪めて唸るのは公爵様だ。
そんな彼女に対してボクが何か反応を返す前に、海で三度目の水柱が上がる。
でも、それはさっきみたいにオクトが空を舞い、着水して発生したものじゃなかった。
その本人……本蛸？　は海面から半分だけ姿を覗かせて、水柱に向けて触手を一本、フリフリと振っている。
まるで「バイバーイ」ってしてる様なジェスチャーの理由は、直ぐに分かった。

水柱から飛び出て来たのは、オクトと比べれば遥かに小さな、人影だ。
沿岸からここまで、パッと見でも数百メートルはありそうな距離をひとっ飛びで大跳躍してきた人物は、頭や肩に海藻を引っかけた姿で砂浜を蹴立てて着地する。
「……へっ！　やっぱりあの位の坊主には高い高いが良く効くぜ！」
膝を屈めた着地態勢から身を起こし、鼻の下を親指で擦って得意げに笑ってみせたのは、言う迄もなく《魔王》様だった。
流石に壺はもう被ってない。公爵様が魔法で脱げない様にしてたみたいだし、叩き割ったんだろうね。
「あ、頭領（ボス）。思ったより早い御帰りで。麦酒（エール）飲む？」
「おう、くれくれ。いやーあのタコ坊主、まだガキなのにけっこー力強ぇわ。あと二百年くらいしたらもうちょっと楽しく遊べそうだ。今の内に舎弟（ぶか）にしてぇな」
「うははは、城に呼ぶにはちぃと図体がデカすぎだっちゅーの。寝床になりそうな湖も、あの坊主が飛び込んだら水がごっそり溢れ出ちまうわい」
皆、度肝を抜かれたと思ったけど……どうやらさっきのトンデモたかいたかいは、《災禍》の人達にとって特に驚く事もない光景だったみたいだ。
あの光景に対して、会話のトーンが平常過ぎる……こっちの頭が変になりそうだよ。
「ぬぅっ……あれ程の巨体、拙僧では精々が半分の高さに放るが限度でしょう……！

《魔王》陛下の御力の一端を垣間見た思いです、まだまだ精進が足りませぬな！」

――おいやめろオッサン。只でさえ魔族領以外の面子は脳がバグりかけてんのに、これ以上ＳＡＮ値を削る発言をするんじゃない。

先生が瞳を輝かせて楽しそうにバァンと柏手を打ち、その発言を拾ったにいちゃんが、こめかみを指で揉み解しながら真顔でツッコミを入れてる。先生には悪いけど、にいちゃんの発言は教国・帝国メンバーの総意だと思うよ……。

駆けつけ一杯とばかりに小樽に入った麦酒（エール）を飲み干している《魔王》様に、リリィが小走りで駆け寄った。

「《魔王》様、リリィは再度スイカ割りに挑戦させて頂きました。兄（あに）様と義父（とと）様の助言を力に、今度はばっちり木剣を当てたのです」

そう言って彼女が差し出した小皿には、木剣で砕かれたことで少し歪な形の甘瓜が乗せられている。

心なしか自慢する様に胸を反らしているリリィと小皿を見比べて、《魔王》様は直ぐにニッコニコの笑顔になって皿を受け取る。

「おぉ、お見事です姫！　きっちりリベンジを果たした姫の勇姿、是非とも拝見したかった……！」

シャクシャクと大振りの瓜の欠片を齧り、上機嫌で頬を膨らませていた《魔王》様だ

けど……ふと何かを思い出した様に首を巡らせた。
「あ、そうだ。あの女にきっちり礼をしてやらねぇと……」
呟きと共に、この場にいる人達を、鳶色の瞳がぐるりと見渡して――。
不機嫌丸出し、むっつりとした顔で腕を組んだ公爵様を見つけて固定された。
何度見ても凄い格好の彼女を、上から下までしっかり眺めて。
甘瓜を咀嚼していた口が、身体と一緒にフリーズする。
「なんだ、そのアホ面は」
軽く目を見開いて動作を停止させた《魔王》様を見て、心底嫌そうな表情で公爵様が吐き捨てた。
きっかり五秒後。再度動き出した口が、甘瓜を強引に嚥下して飲み下す。
瑞々しい瓜を摂取したばかりの舌で、滑らかに、躊躇なく、ただ一言。

「キッツｗ　無理すんなＢＢＡｗ」
「死ね」

次の瞬間、公爵様のグーパンチがデリカシーゼロ発言をした人の顔面に炸裂した。
吸血鬼（ヴァンパイア）の能力を使ったのか、砲弾みたいな威力の拳は顔面にめり込むと同時に鮮血を

思わせる紅い爆発を引き起こす。
縦回転して吹っ飛び、１０メートルくらい砂浜をヘッドスライディングする《魔王》様。
邪神の眷属だって一発で粉砕するであろう拳を受けて――けれど直ぐに彼は飛び起きた。
「痛ってぇな!?　てめぇ今本気で殴っただろ!?」
「戯けが。殺す気で殴ったわ」
「なお悪ィわ!?　姫の声真似までするし、キツイのは事実だろーが！　年齢（トシ）を考えろバーカ！」
「はぁーっ!?　我が身は王位級（オリジン・ブラッド）だし！　老いとか無いし歳とか関係なくいつもピチピチだし！　貴様こそ糞みたいな性癖を改めろこの変態焼き鳥が！」
う　わ　ぁ　。
なんだかとんでもない事になっちゃったぞ……。
《魔王》様の方はまだしも、公爵様までいきなり同レベルな感じの罵り合いを始め、先のたかいたかい以上の驚愕がボク達を襲う。
「あー……今回は無事に終わるかと思ったんだけど……無理だったか」
「こりゃイカンな。何時もの流れになっとるわい」

あ、《万器》さんと《赤剣》さんがジリジリと距離を取ってる。
あの二人の喧嘩を見慣れてる人達がこの反応って事は……つまりそういう事だよね。
嫌過ぎる予感……というより確信をこの場の全員が抱きつつある中、ギャンギャンとした子供みたいな怒鳴り合いを続ける二人から物騒な魔力が膨れ上がった。
「こンのボケ鳥がぁっ！　今度という今度こそ、黄泉路に生ごみとして出荷してやるわぁっ!!」
「上等だＢＢＡァァッ！　そのキッツイ水着見なくて済む様に砂に埋めてやるオラァァァ!!」
公爵様の周囲――砂地から虚空まで、あらゆる場所から紅い刃が大量発生し、その切っ先が一斉に同じ方向を向き。
対する《魔王》様はスイカ割りに使った木剣を一振りして、その剣身に灼熱の炎を纏わせる。
とんでもない魔力を秘めた血刃と炎剣――その使い手が同時に腕を振り上げた。
――総員、退避ィィィィッ!!
喉も枯れよとばかりのにぃちゃんの叫びが砂浜に響き渡り、渦中の二人を除く全員がなりふり構わず離脱を開始する。
「走れ走れ！　とにかく走れ！　最低でもあいつらが見えなくなるまで距離取れ！」

「はっはっは！　いやぁこれは災難！　ですが突発の出来事もまた旅行の醍醐味と言えるでしょう！」
「各員、全速で離脱！　事の収束後に近場で落ち合いましょう！」
「りょーかい！　浜がぶっ壊れて遊べない、なんて事になりませんよーにっ！」
「待っ……今走ったら――ちょ、あ”ーっ!?　タオルがぁーっ!?」
「今は走りましょう副長！　そんなモン気にしてたら死にますって！」
魔力強化を全開で行使し、とにかく各々が出せる最速で四方八方に散るボク達。
レティシアと並んで全力疾走しながら首を巡らせれば、死に物狂いで走り出す皆の姿が見える。
あ、《虎嵐》さんが完全獣化しながらリリィを咥えて風みたいな速度で駆け抜けていく。獣化した処は初めて見たけど、完全に虎だね。カッコイイや。
その後を追う様に走るのは、魔鎧を起動させたにいちゃんだ。近くにいたタオルが外れかけて動きの鈍いアンナを担いで、陸上選手みたいなフォームでスタコラダッシュしてる。
周囲に気を配れたのはそこまでだった。
剣戟音、激突音。弾け飛んで衝撃波を撒き散らす魔力と、ミサイルが近場で炸裂したみたいな爆風が背後から押し寄せる。

「ぎゃあああああっ!? 旅行先でくらい自重しろよアイツらぁ!?」
「本当にね！ いや本当にね!?」
咄嗟の魔力障壁。けど、全力疾走中の不安定な障壁ごと、爆風はボクらを包み込んで強く押し出して。
隣を走っていた姉(あに)の悲鳴混じりの叫びに心からの同意を示しつつ、姉妹(きょうだい)仲良く宙を舞ったのだった。
……この場合、爆発オチなんてサイテー！ って言った方がいいのかな？

アホ過ぎる喧嘩に巻き込まれ、散り散りになってはや小一時間。
俺は同じ離脱ルートを走ることになった面子と一緒に、先の浜辺から離れた海岸で時間を潰していた。
直径４０センチくらいの、イイ感じに平らな断面の石を焚火で炙りつつ、ボケーっと思考を巡らせる。

本当はシアとリアの二人の後ろに付きたかったんだがなぁ……互いに《魔王》と女公爵を挟んだ位置関係だったので、どうやっても無理だったのだ。

一瞬、《銘名（リネーム）》を切って二人の激突をやり過ごしながらシア達の処に行こうかとも考えたんだが……ふっつーに捌き切れずに空を舞う可能性もあったし、何より近くには被ったタオルを気にしてモタついてる副官ちゃんがいた。

あの状況で見捨てるのは流石に気の毒過ぎるので、彼女を担いで《虎嵐》に追従するので精一杯だったのよ……。

あぁ、心配だ。シアとリアなら《魔王》達のケンカとはいえ、余波程度じゃ怪我なんてしないだろうと分かっていても……やっぱり心配だぁ。

あいつらの安全が確定確認出来ないので、なんだかポンポン痛くなってくる。

過保護と言うなかれ。本来あの鳥と女公爵のケンカとか、邪神の下位眷属くらいなら巻き添え余裕で消滅するんやぞ。

危険度という点では下手な戦場よりよっぽど上だ。その状況下であいつらの傍に居ない・居れなかったっていうのは、俺的に結構なストレスなんだよ。

「……あの二人ならば、障壁を張っているのが見えた……展開は間に合っていたので、衝撃で飛ばされはしても負傷の類はないだろう」

近場を散策して戻って来た《虎嵐》が、俺の不安を汲んだのか良い事を教えてくれた。

それだけでもありがたいんだが、父ちゃんについていったリリィが更なる朗報を齎してくれる。
「兄様、御二方から遠話が届きました。リリィでは受信出来るのは短文だけでしたが、御二人とも怪我一つ無いそうです」
……おぉ、そいつは良かった！　いやー安心したマジで！
肩の荷が下りた様な気分になって、深い吐息が漏れる。
現金なモンで、アイツらが元気だと分かった途端に調子が上がって来た。
よーし。じゃ、さっさと始めるか！　あと少ししたら砂浜に戻るしな！
「……うむ、頭領と公爵も浜辺や店長殿の店を破壊せぬよう、沖合に移動した様だ……そろそろ戻っても良い頃合いだ」
《虎嵐》が頷き、丁度良いタイミングで副官ちゃんも散策から戻って来る。
「ただいまー。一応、聞いた通りの特徴の貝とか拾って来たけど……これで合ってる？」
おうおう、おかえり。うん……あ、コレだけはちょっと駄目なやつ。他は全部食えるやつやで！　やりますねぇアンナ先生！
流石は魔族領、というべきか。肥沃過ぎる土地もあって、食用に適する貝類なんかも海辺の岩場を探すとゴロゴロ出て来る。
俺達が避難してきた場所が、お誂え向きにそういった岩場に囲まれた場所なので、

ちょっとだけね、こう、四人で海の幸を抓もうか、なんてね。そんな話になった訳よ。
俺が鉄板代わりの石を熱して火の番をしている間、皆には旅行に来る前に調べた知識を元に、この世界で食える貝や甲殻類なんかを探してきてもらったのだ。
《虎嵐》がちょっと素潜りしてくれたらしく、海老を獲って来てくれたのは嬉しいサプライズだった。
見た目クルマエビっぽいけど……世界が違うせいか、かなりの大振りやね。
リリィと副官ちゃんが拾って来た貝もそうだ、見た目ハマグリとかアサリに近いけど、相当なビックサイズの物が多い。素敵やん？
……では、これより海の幸のつまみ食いを行う！　各員、他の連中には内緒にするように！
先ずはリリィの鞄にあった小刀を借りて、軽く下拵え。
海老なんかは適当にだけど背ワタを取って、貝も開いて砂を取る為にリリィに水の魔法で洗い流してもらう。
あんまりジャリジャリする様なら、ちょっと勿体ないが貝柱だけにしとこう。極論、海に蒔けば魚の餌になるから無駄にはならないし。
「結構手慣れてるわね。さっきのかき氷とやらも美味しかったし……アンタ結構料理出来るよね」

下処理を終えた海老と貝を焼き石に並べていると、俺の手元を覗き込んだ副官ちゃんが呟く。

いうて、隊長ちゃんみたいな丁寧な仕事は出来んよ？　アウトドア系が若干得意っつーだけですしおすし。

あ、ちなみに副官ちゃんだけど、別に水着姿で無理に動いてもらってる訳じゃないぞ。

なんかに引っかかったのか、馬鹿喧嘩の余波で裂けたのか、彼女の被ってたタオルの丈が半分くらいになっちゃったみたいでね。

担いでた肩から下ろした途端、岩陰に隠れて「近づいたらころす」とか言って出てこなくなったので、間に合わせとして俺のシャツを貸したってワケよ。

上はそれで隠れるし、下だけなら半分になったタオルでも腰に巻けば余裕でスカート代わりになる。

斯くして水着姿から逃れて元気を取り戻した副官ちゃんは、海の幸の捜索に出てくれたのだ。

代わりに上着は『とりかわ』って日本語で書かれたダサTだけどな！

帝国で隊長ちゃんと一緒にいるときに買ったやつだけど、他にもあるから一個くらいあげちゃっても構わんわ。

つーか、折を見て《魔王》に着せてみたい。シアとか隊長ちゃんに見せたら絶対噴き

出すぞ（畜生感

熱した石は板状に近くて結構良い形をしてるので、鉄板代わりとして上等な仕事をしてくれる。

火が通って来たのか、パチパチと薪が爆ぜる音と共に段々と香ばしい魚介の香りが漂いだした。

こういう場所での醍醐味として、軽く海水つけて塩味でも野趣あふれる感じで悪くは無いのだが……今の俺にはコレがある！

懐から取り出しますは、本来は霊薬なんかを保存する頑丈な小瓶。

中を満たすは黒に近い暗褐色の液体……即ち、醤油である！

「小分けにしてずっと持ってたんだ……どんだけ早く使いたかったんだか」

「ほう……それが……シグジリアにも教えてやりたいものだ……」

呆れた声と感心した声は一旦スルーして、熱石の傍にしゃがみ込んで食い入るように海老と貝を見つめているリリィを少し下がらせる。ちょっと跳ねるからね。

ちゃちゃっと醤油を振りかけると、実に良い音を立てて煙が上がり、香ばしい香りが数倍に膨れ上がって全員の鼻腔を直撃した。

ごくり、と。副官ちゃんとリリィが同時に唾を飲み込む。

「うわぁ、匂いヤバぁ……これは凄いね」

「兄様、まだでしょうか？　この端の貝はもういける気がします」
ふはははは、まぁ待ちたまえ、そこの腹ぺこコンビ。
鉄板から立ち昇る香りから見ても分かる通り、醤油は少し焦がして表面に付けると更に美味いのだよ。
どれ、先ずは無難にこのでっかい貝柱からにしよう。海老は引っ繰り返しておこうか。デカいからまだ火も通り切ってないだろうし。
大振りの貝柱二つを半分に切って、四等分する。
追加で醤油を数滴たらし、じゅうじゅうと音を立てる海の幸を前に俺は厳かに掌を合わせた。
――いただきます。
「「いただきます」」
俺に合わせてくれたのか、三人も手を合わせて日本式の食事の挨拶を唱和する。
箸やフォークもない、指を使った文字通りの摘まみ食い。
だけど、口内に放り込んで噛みしめ、広がった美味と香りは、どうしようもなく感動と郷愁を掻き立てる。
あぁ……うめぇなぁ……。
そして、それ以上に懐かしい。

今となってはこの世界に来たことに微塵の後悔も無いが、それはそれとして久しぶりの醤油と魚介の合わせ技は、心へと訴えかけてくるものがあった。

俺一人で抜け駆けしたのが申し訳ないな。後でシアとリア、隊長ちゃんとも一緒に食おう。

なんならシグジリアにも味わってもらう為、ちょっと醤油を分けても良い。彼女は現在妊婦さんなので、魚介じゃなくてもっと食いやすい物になるだろうけど。

「うつま……魚醤は口にした事あるけど、香りの鮮烈さがダンチだわ……」

「これは良い物です。塩辛いのに、貝柱の旨みを殺さず高める豊潤な香り……お肉にも魚介にもお野菜にも卵にすら調和するであろう、無限の可能性を感じます」

「……これが、猟犬殿やシグジリア達の故郷の味か……拘るのも頷ける」

三人の反応も上々だ。気に入って貰えたようで何よりですハイ。

というかリリィがちょっと饒舌になってて草。グルメリポーターばりの食レポやんけ。

量的には大したことの無い、ちょっとしたつまみ食いの時間は和気藹々と続く。

「あ、このエビの頭の中のやつ……かなり癖があるけど濃厚で美味しい。なんかお酒と合いそう」

おぉ、あっちの世界でも苦手な人は結構いるのに、海老味噌の味が分かるとはやるね、

副官ちゃん。
　じゃ、次はカニだな。味噌の量はあっちのほうがずっと多いし、タラバ系がこっちにもいるなら脚だけでもかなり食いでもある。無言になるレベルで美味いんやぞ。
「へぇ、カニ……沢蟹なら見た事あるけど、海のは無いわ」
「……む。ひょっとして銀髪の人は、エビを食べるのは初めてではないのですか？」
「帝都の行きつけの食堂にエビフライがあるのよ。店主のおじさんが冷凍したエビの仕入れに成功したときだけなんで本当に偶にしかでないけど……っていうかリリィちゃん、私、自己紹介したよね？」
「はい。ですが、銀髪の人は銀髪の人なので」
　三個目の貝柱をモグモグと噛みしめながら、キリッとした表情で断言するリリィ。
　いや何でやねん。杓子定規な呼び方ってんならともなく、銀髪の人て。
　思わず副官ちゃんと顔を見合わせ、小声でやり取りする。
　……副官ちゃん、リリィに何かしたん？　この娘がこういう呼称するの初めて見たんですけど。
（知らないわよ。前にさっき言った食堂で一回だけ顔を見た事があるけど、そのときはただの観光客の女の子だと思ってたし、会話だってしてないっての）
　俺達が顔を寄せ合ってこそこそ話してる横で、義娘の副官ちゃんへの呼び方を流石に

どうかと思ったのか、《虎嵐》がやんわりとリリィを嗜めた。
「……リリィ。きちんと挨拶と名乗りを上げた御仁に、その様な呼び方は失礼にあたる」
「申し訳ありません、義父様。ですが、リリィは好敵手として安易に彼女の名を呼ぶ訳にはいかないのです」
好敵手て。ホント何やったの副官ちゃん。
「私が聞きたい。割とマジで」
ちびちびと貝とエビの身をつつき、他愛もない話に華を咲かせる。
そろそろ他の皆も砂浜に戻る頃合いだろうし、俺達も後片付けをして向かった方が良いだろう。
置きっぱなしの荷物とか、吹き飛んでなけりゃ良いんだがなぁ……まぁ、荷に関しては聖女様印の結界で保護してあるから無事だとは思うが。
あと、店長と彼女の店は無事なんやろか。距離的にも大分近い場所にあったし、屋根くらいは吹っ飛んでどっかにいってそう。
ちょっと小粒の貝の身を摘まみ、口に放り込んで。
豊かな旨みと、けれどジャリっとした砂の感触も同時に感じて、俺は眉をしかめたのであった。